

学戦都市の☒元☒ボッチ

生焼け肉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校1年比企谷八幡。学校のイジメに耐えきれなくなり、眠っていた星脈世代の力を無意識に暴走させる。その事もあり学戦都市アスタリスクに移り住む。これはボッチとアスタリスクの物語。

俺ガイルとアスタリスクのクロスです。

初投稿です。文才もなければアニメで見た程度の知識しかありません。それでもよければどうぞ！

2021/9/21に貼り付けました。【元ボッチ】の短編続編版の【黄昏星武祭】です。

<https://syosetu.org/novel/186167/>

こちらは、【あり得ない六花生活】です。

<https://syosetu.org/novel/178264/>

目次

キャラ設定	1
1章 始動	
悪意	4
目覚めと選択	12
決意	18
修行と声	22
搜索と興味	27
事実と現実	32
後日談	38
2章 界龍での新生活	
到着と紹介と友達？	44
挨拶と意外な再会	48
案内……そして慰労	56
食事と久しぶりの感情	62
語りましょう！	66
木派	71
水派	75
案内？ 前編	79
案内？ 後編	82
乱闘からの出会い	88
お礼のつもりが……	93
約束	100
クラスの顔合わせと嘆き	110

何故こうなった……	116
純星煌式武装 前編	122
純星煌式武装 中編	127
純星煌式武装 後編	132
ハシル劇場 デート編	
彼から……	139
やっぱり……	148
それでも……	155
私の……	165
3章 覇軍と月影	
序列2位 覇軍星君	175
怒りと頼み	183
衿々切丸	192
鵜切丸① ※完全に別作品。	197
鵜切丸② ※完全に別作品。	202
修行と一方……	207
修行① 剣術	214
修行② 星辰力&星仙術	218
飲食店にて	225
追われる少女と悲しき少女	230
前日の仕上げ	240
決戦の時	244
覇軍VSボッチ ①	252
覇軍VSボッチ ②	257
覇軍VSボッチ ③	262

霊獣・八咫鳥	274
なんてことに……	279
夢幻月影	287
爆誕!!	
閑話	
お得と勝手な約束	294
お主が欲しいっ!	298
お節介という名のお礼	308
枯れない花	314
ハシル劇場 ライブ編	
無茶なお願い	322
ハイスペック八幡くん	327
歌えない理由と歌詞の意味	334
波乱ライブの始まり	342
技量と大きな器	351
着替えとお嬢様の我が儘	360
この歌は君のために……	366
緊急握手会と涙	372
打ち上げ……そして	380
2人きりの秋夜	387
事件	398
夢と恥じらいとこの気持ち	405
4章 竜覇凱旋	
変化	413
※六花園会議とその後	419
お夕飯と会議	429

一本の電話と優しさ	437
彼らの感情	447
始まり、六花見学会	452
それぞれの反応	457
秘密の話	465
報告会	471
理由と予防線と【○○○】	478
行動会議とお願い	484
お泊まりするだけなのに？	490
準決勝と師の教示（きょうじ）	495
本命！デー……買い物！！	507
彼との試合？	513
模擬戦後の夕飯に？	519
夜のティータイムとバスタイム	529
近くにいないとダメ	535
雑談と温もり	543
八幡からの贈り物	550
おはようと小会議	555
※始動	562
君の気持ちは？	568
※ついに……	572
覇竜決戦 ①	577
覇竜決戦 ②	582
覇竜決戦 ③	589
反応と表彰とプチ修羅場	598

※願いと誘い	607
君と共に……	611
技 設定	621
閑話 ②	
ガールズトーク？	624
※カキツバタと鈴蘭水仙	629
八幡の居ない話し合い	635
非常勤調理師 比企谷八幡くん	639
ハシル劇場 恒例イベント編	
2人の聖夜	646
2人で過ごす1年の終わり	652
2人の初詣	660
君とのバレンタイン	665
※俺が渡すものは	673
原作前のちよい話	
年始の六花園会議	685
失礼な奴ら	693
会議終了と新しい先生？	699
5章 再び動く歯車	
キャラ設定 ②	705
入学	708
再会……なのだが	714
半年振りの会話	723
鳳凰星武祭に向けて	728
※彼女（彼氏）との連絡	732

発覚と容赦の無い警告	737
変わらない思いと変わった思い	743
それでも彼女たちは	748
偶然とイジリ	754
不安な距離	760
第6章 鳳凰星武祭	
鳳凰星武祭前日	763
開会式と尊師の鼓舞	768
勝負にもならない	773
反省なしと半年振り	778
血の滾り	783
この瞬間……	789
2人の休日 その①	793
2人の休日 その②	798
2人の休日 その③	806
再会と真実と〇〇	811
理由と修復	818
その後……	824
彼に対する感情	828
放たれた魔将	834
ついに始まるHブロック2回戦！	839
試合開始と界龍の掟	843
天翔ける狼の刃	848
2人の筆頭とのご対面	856
※大技の使用にはご注意ください	860

本選前の休日	865
◎今後の見通しとお願い事	870
対策と悪口雑言	874
◎ここからの星武祭	880
大金星	883
影からの警告と食い意地	890
君と歩みたいから	896
◎忍び寄る悪意	902
※抜ける緊張感	906
準々決勝最終試合	911
準々決勝 ①	915
◎準々決勝 八幡VS綺凜	920
●準々決勝 陽乃VS紗夜 そして……	926
激情の理由と覚悟の足りなさ	931
偶然の対面と謝罪	936
※邪悪な囁き	942
影と騎士からの報告	946
新事実と気持ち	952
◎準決勝の幕開け	957
約束の時	961
※驚愕の成長	965
激闘準決勝	970
相性は大事	976
決着と誇り	981
試合終了後	987

前夜は彼女と	①
前夜は彼女と	②
朝もやっぱり……	
◎動き出す者たち	
界龍 全員集合！	
視線と因縁	
作戦失敗＆不発	
肅清	
乙女の本気＆暴走	
※鳳凰最後の戦い	
◎覇凰決戦①	
覇凰決戦②	
覇凰決戦③	
※もう一試合	
※表彰と行く先	
本当の肅清	
※必要不可欠な存在	
帰還と八幡の本音	
俺の思い、私の願い	
技 設定2	
生肉と黒猫星のコラボレーション	
突然の来訪者	
こっちとあっちの違い	
※平行の世界へ	
幻想郷	

似た者同士

八幡VS八幡

元いた世界へ

白髪赤眼の初デート

※約束の前日と頼み事

1年ぶりの再会とショッピング

※説明は大事

初のお出かけ(デート)

手作り教室とお花の魅力

違い過ぎる私

今度は2人で

この日と貴方に感謝

恋の記者会見編

一時帰宅

大人数での食事と師

※師と弟子

新たな仲間とご褒美?

※神憑り

いざっ!

会見 ①

会見 ②

会見 ③

惚気と勧誘と脱出大作戦

再び家(界龍)へ

飯騒動とドツキリ

※嬉し恥ずかしの昼食

しつもん（尋問）と師からの感謝

これからは2人で

ハシル劇場 ライブ編2nd

依頼

謎の感情

人の口に戸は立てられぬ

遅過ぎた激しい後悔

※ライブに向けて

移動、千葉へ！

上陸！

千葉到着とりハーサル

ホテルで火照る？

食事と理想的

影と歌

※霊たちの会話

変わらない朝

ライブの準備

ライブ!! ①

※ライブ!! ②

憩いのひと時

ライブ!! ③

ライブ!! ④

ライブ!! ⑤

握手会と再会

※解放と微睡みの世界へ

微睡みの中で

寝顔と本当の睡眠

デートに向けて！

朝食と心の声

行き先

1年ぶりの登校

見学とドツキリ？

クラスと先輩

2―F組

彼のいない所で

久々の校内昼食

明かされる真実

※車内で

1年間の空白とただいま

親子のケジメと我慢

お手伝いと夕食

雑談とフラグ

迷いと子への愛情

調べ物と妄想

明日の予定と誕生日

決心つかず

朝の夫婦風景

彼との出会いと親公認？

出会い、見送り、そして……

※金刀比羅宮へ

ついて……きていいよ。

徳の高い人

ヘッドホン選び

浅草の旅

喫茶店へ

甘いお菓子と甘い2人

のんびり静かな時間

我が家へ

閑話 ③

テスト

あの時の約束

親子水入らずで

※名誉ある傷

第7章 学園祭

驚きの会議

2人の助っ人

倒すは特大パフェ！ 前編

倒すは特大パフェ！ 後編

尊師からのお願い

ご飯と水派

師になったからには……

服選び

1日試着

直での再会

直での再会	2
彼女の愛は	
彼氏（旦那）の元へ	
耐え難い辛さ	
気持ちと頼み	
正直な想い	
騎士の「ほうれんそう」	
楽しみとは裏腹に	
不可解な理由	
※学園祭 準備	
注目の的	
学園祭 星導館編①	
学園祭 星導館編②	
学園祭 星導館編③	
学園祭 レヴォルフ編①	
学園祭 レヴォルフ編②	
学園祭 ガラードワース編①	
学園祭 ガラードワース編②	
学園祭 ガラードワース編③	
1日目の終了	
今日のスケジュール	
※学園祭 アルルカント編①	
学園祭 アルルカント編②	
学園祭 クインヴェール編①	
学園祭 クインヴェール編②	

学園祭 クインヴェール編③	1769
今までになかった目線	1775
学園ライブ！	1779
学園祭 クインヴェール編④	1784
2日目の終了	1789
明日の事で	1792
準備	1798
※講習会直前	1803
開門！	1806
学園祭 界龍編①	1813
学園祭 界龍編②	1819
休憩	1825
子の成長	1831
午後の小会話	1834
動けない男	1838
午後もやっぱり……	1841
開門！②	1845
2人の密談	1849
講習会直前	1854
学園祭 界龍編③	1860
学園祭 界龍編④	1864
歪な再会	1868
失いたくないから	1874
界龍のイベント終了	1878
※一方的な約束	1883

締まらぬ夕食

変化

気逸らし

協力と密談

良い夢を

第8章 獅鷲星武祭

獅鷲星武祭と願い

各チームの様子

明日の事と未来の事

獅鷲星武祭 開幕

挨拶とお話

深まる謎

お手並み拝見

予想に反して

速報ニュースと2人の時間

変わらない幸せな日常

控室での一時

界龍の初戦

※勝利後の心情

他人からの目線

ガラードワースの2チーム

待ち時間

予選最終試合

予選最終試合②

予選最終試合③

予選最終試合④	1989
予選最終試合⑤	1996
試合後	2001
奮い立つ騎士たち	2004
4人の意志	2010
明日の予定	2014
2人の日常	2018
君にも休みを	2021
※起きた後のデートプラン	2026
初秋デート①	2030
初秋デート②	2034
初秋デート③	2040
初秋デート④	2046
素顔	2052
デートの続き?	2055
霊たちからの依頼	2060
引き返せない条件	2065
昼寝?後の夕食	2069
※出来るだけの事は!	2074
料理の大切さ	2078
モーニングトーク	2082
憑霊試運転①	2089
憑霊試運転②	2095
憑霊試運転③	2101
大会結果と大公開	2108

拭えない恥ずかしさ

早朝の目覚め

対戦相手決定！

※チームの信頼

本戦開始と応援

漫才戦闘？

試合後のまつたり

散る

突然の邂逅

共に戦う為に

喜びの朝

八幡と索冥の過去

舞台へ

ついに始まる戦い

衝突と……

変化と祈り

届いた弾丸

夢幻の怒り

雷の槍と過去暴露

処罰と挨拶

試合後の時間潰し

表彰式と閉会

※祝福と2人の願い

《獅鷲星武祭》後の報告

技 設定 3

ハシル劇場（＋α） ホテル・エルナト編

始まった宿泊旅行？

この一週間で

明日と明後日の予定

※エルナトのディナー

嫁の許可を得るために

最高級の朝

※水着選び

プール！水着！プチ嫉妬！

偶然の出会い

イベントスタート！

水の中で

お昼とナンパ

夕飯の支度

暖かい気持ち

お酒と痕の意味

2日目 終了

変わらない朝

まったりとレヴォルフの近況

師のいない学院

再来店と花の名前

未来の予定と創作開始！

あの時から今まで

彼女の行方とお昼の場所

ラーメンと冗談

ゲームセンターで遊ぼう！

※お決まりのパターン

匂いと本物

界龍に行こう！

ご指導

昼ご飯と故郷への想い

星武祭に向けてと練習再開

指導終了！

お風呂と作戦

突入大作戦！！

※2人のお寝坊さん

朝食、移動、現状

元生徒会長

レヴォルフ生徒会事変

ヘルシーな昼食

街歩きと騒動

星武祭に向けて

※逆もありなの？

入校許可？

クインヴェール巡り

ハチライブ！

口は災いの元

ファンの大切さ

次のライブ対策

突然の依頼

新たな才能

パーティの始まり

驚きサプライズと八幡ソング

シルヴィアの追憶&願望ソング

オーフエリアの絶望&希望ソング

パーティ終了

※最終日の朝

最終日には……

メイドカフェ メイド編

メイドカフェ 執事編

旅行の終わり

閑話 ④

界龍の入学式 ①

界龍の入学式 ②

懺悔 ①

懺悔 ②

変わらぬ野望

崩壊

第9章 継承

※動く月影

穴の空いた界龍

八幡の考え

2度目の本格修行

修行中でも

八幡のいない夕飯

風紀の改善と予言？

修行の終わり

限界を超えたら

やってきた朝

励まし

宣戦布告

前代未聞の知らせ

始まる戦い

触れてしまった逆鱗

本来の能力

末路と捕縛者

もう1つの

誠心誠意の感謝

終わった1日

八幡の影響

見舞いと再戦予告

※初代と2代目の密談

もう1人の功労者

一応の報告

再開する戦い

天羅VS月影

天羅VS月影 ②

天羅VS月影 ③

天羅VS月影 ④

同じ風景

条件と朝ご飯	277
継承と新称号	742
閑話⑤	276
出世した彼	827
反応 聖ガロードワース学園	278
※反応 アルルカント・アカデミー	279
反応 レヴォルフ黒学院	279
反応 クインヴェール女学園	280
反応 星導館学園	280
反応 界龍第七学院	281
反応番外編 星導館学園	281
第10章 王竜星武祭	281
対戦カード	282
※心の落ち着かせ方？	282
王竜星武祭 開幕	282
愚行を改めた賢者	283
第1ブロックの空論と正論	284
第1、第2ブロック終了	284
無意味な嘘と脅嚇	285
※再びまったりTime	285
始動、比企谷八幡	286
遅咲きの成長	286
2人の噂話	287
順位戦 ①	287
◇妖怪恐怖症？	288

姉妹の会話	2891
一層の主従	12895
準決勝の幕開け	2901
とっておきの模倣技	2906
準決勝の幕開け ②	2912
作戦勝ち	2916
3つ目の願いは？	2920
真実を告げるも……	2925
※夫婦の会話	2930
六花街へ	2933
お買い物？	2937
最終日前夜	2941
2つの霊	2947
※対決前	2953
最初で最後の……	2957
夫婦喧嘩 ①	2962
夫婦喧嘩 ②	2967
夫婦喧嘩 ③	2974
夫婦喧嘩 ④	2982
夫婦喧嘩 ⑤	2989
激闘の末に	3000
2人の最後の表彰式	3004
拒絶と決別	3008
※食材が多い時はこれだ！	3014
愛着と過去の自分たち	3018

平穏な朝

お出迎え？

ゲーム 前編

ゲーム 後編

※一足早い打ち上げ

祝勝会（本番）

取り憑いてる？取り憑かれてる？

学習は大事

開催の理由

閉会

閑話 ⑥

戦いの後の戦い

※シルヴィ、獣人化？

狐の部分がなくなっても

これからの人生

家族

外見良し、性格良し、能力エゲツない

ハシル劇場 引退ライブ編

最後の依頼

涙の意味

チケットの為に

言えた秘密と言えない秘密

近くライブ

昔の私たちと横浜の観光地

色々な前準備

それぞれの……

それぞれの……②

防犯対策

仕事終わりの膝枕

入場開始

最後の打ち合わせ

ライブ開始！の前に……

無謀で無駄な足掻き

秒殺試合とライブスタート!!

引退ライブ ①

引退ライブ ②

引退ライブ ③

引退ライブ ④

引退ライブ ⑤

握手会とお約束

ニュースになるの早くね？

お疲れ様でした会

眠気は強し

よくわからない朝の光景

デート日和

横浜中華街

師の転職？

襲来？

家族の食卓

家族の痴話

久しぶりの	3263
家族の朝	3268
千葉観光へ	3273
始まりの場所	3277
シルヴィの過去と2人の境遇	3282
記念写真と愛	3288
最終章 卒業式編	
※卒業式のイメージ	3295
卒業式 ①	3298
卒業式 ②	3303
それぞれの卒業式	3309
エピローグ	
永遠の愛	3313
10年後……	3318

キャラ設定

比企谷八幡

総武高校1年↓界龍第七学院高等部1年

序列：序列外

二つ名：無し

本作の主人公。

1年中期に特待生として転入してきた。何故か制服は黒。原作よりも性格は素直。

木脈・水脈の派閥には興味を示していない。汪小苑の修行のおかげで星仙術の扱いが上手い。

休みの日には、寮部屋でのんびりしたり、商業エリアに行って暇を潰したりしている。

能力：夢や幻を見せること。星辰力の影での攻防。自身の存在を見えなくしたり、認識をずらす。（ステルスヒッキーじゃないよ。ホントだよ、）

ファン・シンル
范星露

界龍第七学院初等部

序列：1位

二つ名：万有天羅

当学院の生徒会長にして、序列1位。八幡を弟子入りさせようとするが、断られ続けている。その際に八幡の寮部屋に忍び込み勧誘するも断られ、手料理を食べてから部屋に出入りするようになる。八幡の前では結構というよりかなり駄々っ子になる。八幡のチビ扱いされるのが大嫌い。

セシリー・ウォン

界龍第七学院高等部1年

序列：5位

二つ名：雷戟千花

八幡とは食堂で知り合う。練習相手や話し相手をしていることが多い。姉御肌がとても強く、過去に辛い出来事があった人に対しては驚く程お姉さんぶる。

ジャオ・フーフォン
趙虎峰

界龍第七学院高等部1年

序列：6位

二つ名：天苛武葬

学院に送る際に八幡としりあつた。

女性のような顔付きからか八幡は最初は女だと思っていた。今は男として見ているので、そこは大丈夫。

熱狂的なシルヴィアのファン。

八幡の部屋には星辰力の扱いや武術のアドバイスを聞きに良く出入りすることがある。

リー・シエンユン
黎沈雲

界龍第七学院高等部1年

序列：10位

二つ名：幻映創起

原作より少し歪みのない性格だが、罵倒しない訳ではない。八幡が入学してからは少し柔らかくなっている。妹の沈華と共に八幡の部屋によく行くことがある。

リー・シエンファ
黎沈華

界龍第七学院高等部1年

序列：11位

二つ名：幻映霧散

沈雲と同じで八幡が入学してからは性格が柔らかくなっている。八幡によくイタズラをしている。沈雲同様人を見下す傾向があったが、それもなくなってきたている。

ウー・シャオフェイ
武曉曄

界龍第七学院高等部2年

序列：2位

二つ名：覇軍星君

界龍最強の男。入学以来負け知らずで六花最強の男と世間からも有名で名高い。お茶を淹れるのが得意。

梅小路冬香

界龍第七学院高等部2年

序列：4位

二つ名：神呪の魔女

日本人故に、八幡とは気が合う。学年が違うが、八幡の寮で話をする機会が多い。八幡からは『言葉遣いや見た目からして界龍の生徒とは思えない。』と思われる。

雪ノ下陽乃

界龍第七学院大学部

序列：3位

二つ名：魔将天閣

原作よりも性格がかなり良い。というよりも悪が無いくらい良い。自分が文化祭でした事を悔いており、八幡と再会した際に理由を聞くと、真っ先に慰めた人物。八幡のことは『強くて面白い子』という認識。

1章 始動 悪意

八幡 side

文化祭や修学旅行の件で、俺の学校の評判は最底辺と言ってもいいだろう。むしろあれだけの事をして何も無い方がおかしいというものだ。現に周りは俺を見ながらヒソヒソと呟き合っている。前までの俺なら耐えられたが、今では相当きいている。当然のこととは言え、耐え難いものがあるのは事実だ。

男1 「おい、あいつだろ文化祭の時の。」

男2 「ああ。確か女子泣かしたんだってな。最低だな。」

男3 「しかも、あの眼見ろよ。ヤベエってアレ。」

男2 「おいバカ見るなって！お前も腐るぞ。」

男1 「うわっ！マジかよ……」

女1 「ねえあの人でしょ。修学旅行で告白の邪魔したって男子って。」

女2 「そうそう。気持ち悪いよね〜。」

女3 「しかも本読みながらニヤニヤしてる奴でしょ？キモいよね〜。」

……何て会話が聞こえてくるのも日常茶飯事だ。

今までは聞き流したりしてきたが、こんなに長く続くとそんな事しなくても頭の中にまで話し声が聞こえてくるようになる。別に気にはしてないが思うところもある。

それに……あの時の……

雪乃『貴方のそのやり方、嫌いだわ。』
結衣『人の気持ちををもっと考えてよ!』

そんな事まで、思い出してしまう。

何で………何で俺だけこんな目に遭うんだ……

戸塚「八幡ー!!おはよう!!」

八幡「お、おお、戸塚か……」

戸塚「どうしたの八幡?なんか元気無いよ?具合でも悪いの?」

……戸塚が心配してくれているが、今はどんな言葉を掛けられても全然気分は良くなる自信がない。

八幡「いや、別に大丈夫だ。ありがとな。」

戸塚「良いけどあんまり無理しないでね。そろそろ戻るからね!」

八幡「おう……………」

こんな優しい言葉を掛けられても全く気分が上がらない。大天使トツカエルの力でもダメだった。今の俺の状態は、自分でも分かるほど最悪だった。どんな事でもどうでもよく思えてくる。

……………高校を卒業するまでこれが続くのだろうか。

八幡 s i d e o u t

雪乃 s i d e

この前の文化祭と修学旅行の件で彼の眼は以前よりも腐ったように思えるわ。当然の事だけれど、彼は余りいい行動をしていないとはいえ、少し同情したくもなるわ。

私としては、彼の気持ちを少しでも和らげようと思うけれど、感情とは真逆の事を言ってしまう。

何故かは分からないけれど、彼の前だと落ち着かない。以前なら平気だったのに、今はとても思う言葉が出ない。

……………本当に……………何故かしら。

私がそう思っていると……

八幡「……………うす」

雪乃「あら、来たのね。告白谷くん。」

八幡「なあ、傷つくからもうそれやめてくんない？」

雪乃「あら、ゾンビが傷つくとは思えないのだけれど。」

八幡「……………もういいわ。」

……………またやってしまった。何故こうも裏目に出してしまうのかしら。思ってもないことを口に出してしまう。さっきから思い通りにいかない。こんな自分が嫌になるわ。

ガラガラ

結衣「やつはろー!」

雪乃「こんにちは、由比ヶ浜さん。」

結衣「ヒツキーも、やつはろー!」

雪乃「由比ヶ浜さん、無駄よ。彼はもう碌に挨拶も出来ないのだから。」

結衣「ええ!? そうなの!? ちゃんとあいさつするし! ヒツキーマジキモい!!」

八幡「俺まだ何も言っていないんだけど……」

結衣「それでもするし!!」

八幡「わーったよ。」

……またやってしまった。何故こうなってしまうの? 彼は今もまた傷ついているかもしれないのに、どうして私はまともな事を言えないのかしら。こうしてまた由比ヶ浜さんを誤解させてしまった。

……考えるのは、もうやめましょう。また自分の頭の中が整理出来なくなるだけだわ。

雪乃 side out

結衣 side

雪乃「……今日はこのくらいにしましょう。」

結衣「そーだねー! ゆきのん一緒に帰ろー!」

雪乃「なら、少しだけ待っててもらえるかしら? 鍵を返しに行くから。」

結衣「うん! いいよー!」

八幡「……じゃあな。」

結衣「え? ヒツキー、一緒に帰らないの?」

八幡「あ? 帰るわけねーだろ。」

結衣「そ、そっか……」

ガラガラパタンツ

結衣「……………」

雪乃「……………」

結衣「なんかヒツキー、変わったよね。なんてゆーか暗くなっただけかな。」

雪乃「そうね。でも仕方の無いことよ、それだけのことをしてしまっただけから。」

結衣「う、うん……でも……」

雪乃「そつとしておいてあげましょう。私達に出来ることはないのだから。」

結衣「……うん、そうだね……」

結衣 side out

八幡 side

その後、下駄箱に向かい靴を取り出す。だが中からは、悪口の書いてある大量の紙くずと、キズついた靴があった。

……物に当たるなよ。

そう思いつつ、下駄箱から取り出し上履きを戻してから靴を履く。そして自転車のある駐輪場に向かう。日常だが非日常だった。そう思いながら向かってみると、自転車のチェーンが外されていた。またかよ……よく飽きねえな。

そう思いながら自転車を押して帰る途中、展望台のある坂に辿り着いた。

ちよつと寄ってくか……

そう自分に言いつけ、坂を登っていく。

まだ少し晴れてはいるが、いい景色だった。少しだけ気分が良くなる。ほのかに香る潮の匂い。心地いい風。

……このままこの時間が続けば良いのに。そう思っていると、徐々に日が暮れはじめてきた。まるで自分の心の中を表しているかのように。

八幡「はあ、帰るか……」

そう思っただけで歩き出そうとした時……

男1『おい、あいつだろ。文化祭の時の。』

八幡「!？」

男2『ああ。確か女子泣かしたんだって。最低だな。』

男3 『しかも、あの眼見ろよ。ヤベエってアレ。』

八幡 「…………やめろ。」

男2 『おいバカ見るなって！お前も腐るぞ。』

男1 『うわっ！マジかよ……』

八幡 「…………やめてくれ。」

女1 『ねえあの人でしょ。修学旅行で告白の邪魔したって男子って。』

女2 『そうそう。気持ち悪いよね〜。』

女3 『しかも本読みながらニヤニヤしてる奴でしょ？』

八幡 「やめてくれ!!!」

雪乃 『貴方のそのやり方、嫌いだよ。』

結衣 『人の気持ちをもっと考えてよ!』

八幡「やめろおおおおおおおおお
!!!!!!」

そして、突然身体から大量の光と黒い物体が出て来た。自分にも何が起きているのか分からなかった。だがこれだけは分かった。

俺は何か特別な力を持っている………

そう思いながら俺は気を失った。

目覚めと選択

八幡 side

八幡「ん……」

俺は目が覚めると、あの夕暮れのことを思い出した。溜まりに溜まった負の感情。それがあの時、全部出て来たんだよな……俺でも分かる。あの時聴こえた声がそういうものだという事ぐらい。だが、まず俺が言いたいのは……

八幡「ここ………何処？」

俺でも分かる。ここは来たこともなければ、見たこともない。そして、何と言っても中華街風の建物の中だった。

え？何？俺中国まで来ちゃったの？拉致られちゃったの？このまま売り飛ばされちゃうの？

そう思った矢先、扉が開いて女性が入って来た。

???「おお、起きたのかえ？」

目の前に中華服を着た女性が立っていた。見た目からして20代だろうか。そう思つてふと気が付いた。彼女は日本語を話していた。それもかなり流暢に。

八幡「あ、えと、はい。」

???「随分と苦しんでいたようじゃが、大丈夫かえ？」

八幡「まあ、はい。」

???「そうかそうか、それは良いことを聞いた。ほれ、ワカメとシソの実の和え物じゃ。少しは不安が消えるじやろう。食べるがよい。」
八幡「は、はあ、どうも。」

久しぶりな気がする、こんなに親切にされたのは。そう思いながら一口食べてみると、不思議な事に身体が軽くなった気がする。驚きながら一切手を止める事はなかった。

八幡「あの、ありがとうございます。」

???「礼には及ばん、当たり前の事をしただけじゃ。」

八幡「それで、あの……ここは何処なんですか?」

???「む? 何故そんな事を聞く?」

八幡「いや、此処って中国の何処かですよね?」

俺は至極当たり前の事を聞いたと思う。だが、帰ってきた答えは
……

???「お主も変な事を聞くのう。此処は日本じゃぞ?」

八幡「え? いや、でも、この建物見た感じ中華っぽかったんで……」

???「ふむ、それもそうか。安心せい、ここは日本の横浜にある中華街の中じゃ。中国ではない。」

八幡「横浜?! どうやって運んだんですか?」

??? 「おぶったに決まっておろう。」
八幡「あ、そうっすか。」

なんだか少し複雑な気分だったが、ひとまず安心した。本当に中国だっただろうかと思った。よし、次の疑問だ。

八幡「あの、貴方は誰なんすか？」
??? 「人の名を尋ねる前に自分からと教わらなかったか？」

あつ、それもそうだよな。

八幡「……すみません、比企谷八幡です。」
??? 「八幡か、良い名じやのう。儂は汪ワン・シャオエン小苑じや。好きに呼ぶかい。」

八幡「じ、じゃあ小苑さんと……」
小苑「うむ、儂も八幡と呼ぶぞ。」

こうして自己紹介も終わった事だし、そろそろ行くか。いつまでもここにいる訳にはいかない。

八幡「色々どうも。もう大丈夫なんで、それじや。」

小苑「おい、何処に行く気じや。話は終わっとらんぞ。」

八幡「え？」

小苑『え？』ではないわい。お主、何があつたのじや？儂に話してみよ。」

八幡「いや、でm「話すのじや。そのまま抱え込んだままでは身体がいくつあっても持たんぞ。」………はい。」

妙な威圧感に抗えず、俺は最初の作文の事から修学旅行の事、今まで起こってきた事を全て話した。

小苑「そうか……お主も大変じゃったのう。」

八幡「……あの、嘘だとか思わないんですか？」

小苑「逆に聞ぐが、お主は儂に嘘を吐くのか？」

八幡「……………」

何も言わなかった。いや、言えなかった。俺の事を全て見透かしているような眼をしていた。

小苑「今のお主に嘘は吐けまい。そのような状態で嘘が吐けるとは、到底思えんからのう。」

八幡「は、はあ……」

小苑「……お主、もうこんな生活は嫌か？」

八幡「……そりや嫌ですよ。でもどうしようもないですよ。あと2年頑張っていくしかないですよ。」

小苑「お主が望むなら、1つだけ方法があるぞ？」

……………え？

八幡「……………え？」

小苑「どうじゃ？聞るか？」

俺は少し考えた後に……………決めた。

八幡「聞かせてください、その方法を。」

小苑「うむ、良い返事じゃ。では説明するでしょう。八幡よ。お主、アスタリスクは知っておるか？」

八幡「アスタリスク……学戦都市アスタリスクの事ですか？」

小苑「そうじゃ。儂はその界龍第七学院の卒業生で、う、序列も上の方じゃったから、今でも割と融通が効くんじゃよ。」

八幡「は、はあ……」

小苑「そこでじゃ、お主を儂のいた界龍第七学院に特待生として転入させてやろうという訳じゃ。どうじゃ？悪くない提案であろう。」

八幡「で、ですが、俺なんかが行っても意味無いんじゃ……何も出来ませんし。」

小苑「お主、忘れたとは言わせんぞ？儂も見ておるんじゃからな。お主の力を。」

八幡「……………」

小苑「あれだけの星辰力ブラーナを出しておいてよく言うわ、普通ではないのじゃぞ？あの量は。」

八幡「……………星辰力？」

小苑「む？まさか知らんのか？」

八幡「は、はい。俺も初めて聞きました。」

小苑「呆れた奴じやのう。初めてであれ程とは……まあ良い。それで、お主はどうする？行くか？行かぬか？」

八幡「……………」

おそらく、俺は今選択をしろと言われたのだろう。ここに残って、暗い人生を送っていくか……アスタリスクに行き、新しい人生を歩むか……まあ答えは決まっているけどな。

八幡「俺は……」

決意

八幡 side

八幡「俺は……………」

八幡「アスタリスクに行きます。」

小苑「……………本当にそれで良いんじゃない?」

八幡「もう決めた事です。それにあんなところでイジメを受け続けて腐ってくくらいなら、アスタリスクに行ってボコボコにされる方がマシです。」

小苑「はあ……………最初はカッコいい台詞じゃったのに、後の方で全てが台無しになったと思うのじゃが、お主の想いは変わらん?」

八幡「何度聞かれても答えは同じですし、もう決めた事です。俺はアスタリスクに行きます、行かせてください!」

小苑「うむ、良い返事じゃ!では転校の手続きをするからのう。2週間程度は此処に居るがよい。その方が都合も良いし、やりたい事もあるしのう。」

八幡「あの……………俺の学校はいいんですか?」

小苑「逆に聞くんが、お主はイジメを受けている所に行きたいと言う

のか？行きたいのなら僕は止める事はせんが？」

八幡「……お心遣い感謝します。」

ヤベエ……小苑さん良い人過ぎんだろ。初対面の人にここまでするか普通？にしても2週間か、結構長いな……

一応、家族には電話を入れておくか。いや、親父とおふくろは仕事で家にはいねえだろうし……面倒だが小町でいいか。別に向こうは心配も何もないと思うが、一応な。

八幡「小苑さん、家族に連絡取ってもいいですか？」

小苑「うむ、今のうちにやっておくが良い。お主は明日から僕は修行するんじゃないから。厳しく行くつもりじゃから、家族と連絡は一切取れなくなると思った方がよいぞ。」

八幡「……そうなんすか？」

小苑「今のお主では何も出来んからのう。2週間で出来ることは、しておかねばな。故に修行じゃ！僕は見立てではお主は中々に鍛え甲斐がありそうじゃしのう。」

……俺、アスタリスク行く前に鍛錬で死んじゃうかも。

そう思いつつ携帯を取り出して小町の番号を打つ。

八幡「出るかな……」

pipiッ！

はやっ……ワンコールで出るとか、暇なのか？

小町『……あのさ、今何処にいるのさ？』

八幡「……ああ、ちよつとな。」

小町『ちよつとな』じゃないよ。とにかく早く帰ってきて。晩御飯もあるんだから。』

一緒に食ってないのに晩ご飯も何もないだろ。まあ、もうその必要もないからいいか。

八幡「……小町、その事で電話してんだけど、俺これから家を空ける事になったから飯はもう作らなくていい。」

小町『……何言ってるの兄ちゃん？とうとう頭まで腐っちゃったの？お兄ちゃんを泊めてくれる友達も居ないのにどうやって暮らしてるのさ？ホームレスにでもなる気なの？』

……随分な言われようだが、まあ、普通はそう思うよな。けど俺は本気だ。帰るつもりはない。

八幡「今言ったのは本当の事だ、俺は今日から家には帰らない。やりたい事が出来たからな。」

小町『……なんで？なんで!!教えてよ!!意味分かんない!!どうして帰ってこないの!?!』

八幡「言えない訳じゃないが、別にお前に言う必要ないからな。そういう事だから、今後一切電話もメールもよこすなよ。俺は集中したいから。余計な事で集中を切らしたくない。」

小町『ちよつと待ってよゴミいち』ブツツ

よし、これで良い。俺の居場所は教えてないし、目的も教えてない。これで邪魔は来ないだろう。あつ、携帯の電源切つとけば良かったんだ。そしたら向こうから電話とかメールが来ても着信音が鳴る事なんてねえし。ハチマンウツカリ。

小苑「……それでよいのか？個々の場所くらいは教えても良かったのじゃぞ？お主の家族じゃろうに。それも家に帰らない宣言までしておって……本当に大丈夫なのかえ？」

八幡「俺の家族は俺の事を家族だなんて思ってませんよ、そんな連

中ですから。俺みたいな奴が俺が居なくなつたところで心配はおろか、生活に変化なんてありませんよ。1週間経とうが1ヶ月経とうが気持ちは同じだと思いますし。」

小苑「……そうか。では、明日から修行を開始するからの。ビシバシ行くから、そのつもりでの。じゃから取り敢えず今日は休むのじゃ、よいな八幡?」

八幡「はい、分かりました。」

……俺、死なないよね? ○剣山の王○じゃないから痛いのはヤダよ? ドMじゃないから攻撃受けまくるとかそういう鍛錬とかマジで御免ですからね?

そう思いながらも俺は、明日に向けて寝ることにした。けど本当は、明日からの修行が少しだけ楽しみでもあった。

修行と声

八幡 side

あの夕暮れの日から3日が過ぎた。小苑さんと出会ってから、とても身体が軽い上に調子すら良い。3日前までの時間がまるで嘘のようだった。ちなみに俺は、小苑さんの言った通り修行をしている。どんな修行かって？肉体的なものもあれば精神的なものもあるとだけ言っておこう。あれから小苑さんから大体の事は教わった。

俺は星脈世代で《魔術師》^{ダナンテ}といい、アスタリスクでは少ないらしい。この前俺が出した光は星辰力^{プラナ}と言うらしく、そして、界龍ではこの星辰力を応用したものを星仙術^{せいせんじゆつ}と言う。この星仙術は《魔女》^{ストレガ}と《魔術師》^{ダナンテ}の才能がなければ習得出来ないみたいだ。

星辰力くらいなら出せるが、あの時見た黒い物体は出てこない。あれはなんなのか、俺にはさっぱりだ。

だが、小苑さん曰くこういう事らしい。

小苑『あれはお主の星辰力から生成されたお主自身の能力じゃろう。儂もあのようなものは初めて見たぞ？本当に鍛え甲斐のある奴じゃな、お主はっ！』

……………らしいです。不本意ながらも、あの人を楽しませてしまったという事だろう。だが別段、気にしてはいない。それはそれ、これはこれだ。そして現在進行形で俺は……………

八幡「……………」

はい、皆さん予想通り修行をしています。今回の修行は、俺の体内にある星辰力をコントロールしながら、膝や肩、頭に乗った皿を割らないようにする修行である。この皿は、星辰力に反応しやすく、乱れるとすぐに割れてしまう。なので、これは繊細な集中力と器用さが必要

という訳だ。

八幡「……………」

柄にも無く俺は結構真面目にやっていた。今まではそうだとしてみ、これから行く所は強さが全ての実力主義の世界。弱い自分では相手にもされない。今回ばかりはマジでやらないとって思ってる。

意識を高め集中すると、やはり揺れる皿。なんとか修正しようと星辰力を僅かに高める。さつきよりは安定したが、揺れは収まっていな。これをひたすら続けていた。

八幡 s i d e o u t

小苑 s i d e

……楽しい。こんなに愉快的気持ちになったのはいつ振りじゃろうか。恐らくは八幡のおかげじゃな。あれは、暁彗と同等……………いや、それ以上じゃろうな。星辰力の量に対してあの冷静さ。儂の用意した項目は今の所1日で修了しておる。

磨き上げれば確実に冒頭^{ペー}の十二人^{ジ・ワ}には入るじゃろう。実に面白い。同じ学生としてやっていけんのが残念じゃなく。何故もつと早く生まれてくれなかったんじゃろうか？

とにかく、今は八幡を鍛え上げねばな。あやつも期待に込えておる。まだ10日ある。じっくりやりつつより早く仕上げねばな。

小苑「帰ったぞ、はちま……………!？」

何じゃ!?この星辰力の量は!?ついに暴走してしまったのじゃろうか!?急がねば!!

八幡「……あ、小苑さん、お帰りなさい。」

星辰力の量とは対極に星辰力と乗せられた皿を完全に制御しながら平然と挨拶を返す八幡がいた。

小苑「………お主、これはどういう事じゃ?」

八幡「え?何がですか?」

小苑「この星辰力の量じゃ!何を考えておるのじゃ!しかも平然と制御しおってからに!修行してからまだ3日じゃぞ!」

八幡「えと、その事も含めてちよつと話があるんすけど、いいつすか?」

小苑「………分かった、聞こう。」

小苑 side out

八幡 side

遡る事1時間前………

八幡「……あー上手くいかん。」

あれから何時間が経過したがあまり進展はない。皿は割れなくなつたが、揺れは全く収まらなかった。

八幡「……しょうがねえ、もつかいだ。」

再度挑戦するもやはり結果は同じ。揺れは止まらない。何か足りないのだろうか……

そう思っていると……

『ダメだよそれじゃあ。なつてないよ。』

急に何処からか声が聞こえた。だが小苑さんは留守だから誰かがいるわけがない。

『常に冷静でいても、心では熱く!』っだよ!』

そんな茶目つ気たつぷりの澄んだ女の声が聞こえた。物は試しとやってみると……

揺れが止まっていた。ピクリとも動いていない。

『おお!すぐに出来た!有言実行とはこの事だね!』

また声が聞こえる。こいつは一体誰なのか。

『僕待ってるからね。早く来てよ、アデュー!』

そう言つてまた声は聞こえなくなつてしまった。奇妙に思いつつ

修行を再開するとやはり揺れは無く、ピタリと止まっている。コツは掴んだしもつと星辰力出してやってみるか。
ホントに誰だったんだろう？

回想終了!!

八幡「ていう事があったんすけど……小苑さん？」
小苑「……………」

小苑（まさかあれが反応する程か……信じられん。あれに気に入られた者などいないというのに。）

八幡「小苑さん？」

小苑「っ！…………う、うむ。今は大丈夫じやろう。界龍に行けば分かるわい。」

八幡「はあ、そうっすか。」

小苑「さあ、昼時じゃ。飯にしようぞ。」

いいように誤魔化された気もするが、まあいいだろう。まだ早いという事か。

そう思いながら、昼食を食べていた。

搜索と興味

小町 side

お兄ちゃんから電話があつて数日が経った。あれから本当に帰つて来てない。もしかしたら奉仕部の雪乃さんと結衣さんならと思つて2人を呼んだ。けど結果は……………

小町「そうなんですか……結衣さんと雪乃さんも知らないんですね。どうもです。」

結衣「ううん、気にしないで。でもヒツキー、本当に何処行っちゃったんだろ……」

現在サイゼリヤで兄の行方を知らないか3人で話し合っていたが、皆目検討がつかないようだった。

雪乃「本当に彼は、人を心配させなければ気が済まないのかしら？」

結衣「まあまあ、ゆきのん。」

小町「学校はどんな感じ何ですか？」

結衣「うちのクラスは……何てゆーか、みんな清々してる感じがなあ。」

雪乃「そうね。私のクラスでも、彼の悪口や噂話が絶えないわ。」

小町「そうですか。ホント何処行っちゃったのか、あのゴミいちゃん……」

雪乃「分からないわ……………取り敢えず今後も捜してみしよう。手掛かりがあるかもしれないのだし。」

小町・結衣「雪乃さん（ゆきのん）……」

結衣「うん、そうだね！さいちゃんや川崎さんに中二も探してくれてるし、諦めるわけにはいかないもんね！」

小町「結衣さん……………はいっ！ありがとうございます！」

そうだよね。諦められないもんね！早くゴミいちゃん見つけて、問
いたださなきや！

小町 side out

戸塚 side

あの日から1週間が過ぎた。あの日、八幡は何処か様子が変わった。声は掛けてみたけど、本人が何でもないって言ったから深くは追求しなかった。

もうちょつと突っ込むべきだったのかな……

そんな事を考えていると、一緒に探してくれている川崎さんと材木座くんが先に着いていた。

沙希「あ、戸塚。どう？いた比企谷？」

戸塚「ううん、こつちにはいなかったよ。2人の方はどうだった？」
沙希「こつちもダメ。大志にも探してもらってるけど、まだ連絡来ないって事は見つけてないんだと思う。」

材木座「私も八幡の行きそうな場所はしらみ潰しにしてみたが、何処にもおらぬ。」

戸塚「今日もだめかあ……これでもう6日連続で成果なしだよ。
はあ……」

僕達3人は小町ちゃんから連絡を受けた6日前から八幡を探している。八幡は、家には帰らないとしか言っていなかったようで、掴めるようなものは何もない。

沙希「もしもだけど、他県に行ったとかは？ウチらは千葉しか捜してないから見つからないのかもしれないし。」

材木座「だが、八幡が意味も無くそんな事をするとは考えにくい。」
戸塚「それに、小町ちゃんが連絡貰ったのは18時半頃で、奉仕部の終わった時間が17時半、間が1時間しかない事を考えると、そん

なに遠くには行けないよ。」

材木座「行けるとしても、横浜か東京くらいだろう。」

沙希「そっかあ……他県の可能性は低いなあ。」

3人「……………」

正直に言うと言いき止まりだった。僕が八幡と行った場所は全部行つて捜したが、影すら見えなかった。

材木座「だが諦めるのはまだ早い!!勝負はここからである!!この剣豪將軍義輝が見つけて見せるぞおお!!はちまああん!!」

2人「……………」

戸塚「うん!まだ時間はあるんだもん!八幡を早く見つけるないとね!!」

沙希「そうだね。でも今日はこれくらいにしてまた明日にしよう。これ以上はちよつと危険だし。」

2人「うん(うむ!)」

待っててね八幡!絶対見つけるから!!

戸塚 side out

界龍 side

此処は界龍第七学院の黄辰殿。

曉彗「……………師父。我が師の汪小苑から連絡が入りました。何でも、転入させたい者がいるとか。」

星露「ほう。あやつが。奇妙なものじやのう。それで?それはどんな奴じゃ?面白いのかのう。」

曉彗「……………その者のデータはこちらです。」

星露「…ふむ、比企谷八幡か。眼は腐っておるが、それ以外は全部普通に見えるがのう……あやつもボケたかのう。」

暁彗「……………いえ、師の話によりますと、彼はあの純星煌式武装オーガルクスの声を聴いたと言っていました。師父はご存知なのですか？」

すると一瞬にして、星露の眼の色が変わった。

星露「ほう……………それは誠か？」

暁彗「ツ……………はい。飄々とした喋り方だったそうです。そしてその者は、とてつもない星辰力の持ち主だと。」

星露「そうかそうか！それは楽しみじゃえ！今すぐにでも来てはくれんかのう？」

暁彗「……………いえ、彼は今、師の元で修業中だとか。」

星露「そうか…それは残念じゃのう。それはそうと気をつけい暁彗。」

暁彗「……………？」

星露「今あやつの元で修行を積んでいるということは、お主と同等もしくは超えるかもしれんと、受け取れなくもないぞ？」

暁彗「……………」

星露「まあ、あの者の世迷言かもしれんがの。そろそろ飯時じゃのう。妾は行くぞ。」

暁彗「……………比企谷八幡、か。」

界龍side out

???side

『あく退屈だなあく。待ちくたびれたよあく。』

『彼、早く来てくれないかなあく。』

『早くしないと……………』

また誰か狂っちゃうよ♪』

事実と現実

八幡 side

2週間……短かった感じがする。あの日から今日まで、ずっと身体を鍛えていた。これなら少しはやっていけるだろう。そう思っている……

小苑「準備は出来ておるか？港に行くぞい。」

八幡「はい、いつでも大丈夫です。」

小苑「お主も成長したものじゃのう。いや、最初からお主はずば抜けておったわ。たった2週間で儂の修行を全部こなしおつて。じゃが、友に別れは告げんで良いのか？」

八幡「……俺に友達なんていませんよ。もう手続きは全て終わってるんすか？」

小苑「うむ、もう済ませておる。後は、アスタリスクへ行くだけじゃ。」

八幡「分かりました。」

小苑「では、行くとするかのう……じゃが八幡よ。お主、本当に何も言わずにゆくのか？お主の知り合いや妹、両親にも。」

八幡「……この前も言いましたが、両親はもう俺なんて見てないですよ。妹にも、言ったら言ったでうるさくなりそうなんです。まあ、知り合いには言うかもです。多分。」

小苑「くえん男よのう、八幡は。まあ良い、ゆくぞ。」

八幡「はい。」

そんな話をしながら、俺達は港に向かった。

八幡 side out

—————

戸塚「結局、昨日も八幡見つからなかったな……」

結衣「さいちゃん……やっはろー。」

戸塚「ああ、由比ヶ浜さん。おはよう。」

結衣「ヒッキー見つからないね……」

戸塚「うん……そうだね……」

沙希「ホントに、アイツ何処行っただろう?」

戸塚「川崎さん。」

結衣「川崎さん、やっはろー。」

沙希「おはよ……でもアイツ、2週間経っても現れないってどういう事なの? 小町もあんなに心配してたのに。」

戸塚「でも小町ちゃん、八幡は何も言っていないって事しか言っていなかったし……」

結衣「でも心配だよ。今日も捜しに行くよね?」

戸塚「うん! 勿論だよ!」

沙希「当たり前だよ、比企谷がいないと京華も寂しがるしね。」

結衣「うん! 今日放課後に奉仕部でね!!」

そして3人が席に戻ろうとすると、話しかけてくる人物がいた。葉山隼人である。

葉山「やあ、おはよう。何を話していたんだい?」

結衣「え?……ヒッキーの事だけど。」

葉山「ああ……そういえば、2週間前から不登校だったね。」

戸塚「そうだ。葉山くんは何か知ってる? 八幡の事なら何でもいいからさ。」

葉山「いや、俺もその日以来ヒキタニ君の姿は見えてないな。力になれなくてすまない。」

戸塚「ううん、ありがとう葉山くん。」

葉山「ああ、また何かあったら言ってくれ。」

キーンコーンカーンコーン

そう言った所で丁度予鈴が鳴った。

戸塚「それじゃあ、席に戻ろつか。」

その一言で解散した。

雪乃 side

今日も奉仕部の部室に彼らが集まる事になっているけれど、正直に言うとはこの千葉県には彼はいないと思う。おそらくは千葉県外
の他県が予測出来るわ。海外は通話にお金がかかるから無いわね。

ガラガラ

結衣「やつはろー、ゆきのん。」

戸塚「こんには、雪ノ下さん。」

沙希「邪魔するよ、雪ノ下。」

材木座「たのもーう!!」

雪乃「こんにちは。由比ヶ浜さん、戸塚くん、川崎さん、ぎ、ぎい、
材木くん。」

彼の名前は今の所覚えられていない。何故覚えられないのかしら
? まあいいわ。それよりも早速…………

平塚「し、失礼するぞ……」

雪乃「平塚先生、ノックをして下さい。」

平塚「あ、ああ。すまない……」

何か様子が可笑しいわね、何かあったのかしら？

雪乃「平塚先生。様子が可笑しいですが、何かあったのですか？」

平塚「い、いや、そんなことはないぞ？」

結衣「もしかして……ヒツキーの事ですか？」

平塚「っ……………」

結衣「やつぱり！そうなんだ！平塚先生教えてください！ヒツキーは何処にいるんですか!？」

戸塚「僕からもお願いします、平塚先生！八幡は何処ですか!？」

川崎「あたしも比企谷のいる所が知りたいです。先生、教えて下さい。」

材木座「平塚教諭！我等は2週間八幡を捜し回ったのだ！もうなりふり構っていられん！教えてくだされ！八幡の居場所を!!」

雪乃「平塚先生。私は別に彼の居場所は期待してませんが、それに繋がる情報ならとても有効になります。ですので、教えて下さい。」

平塚「……………」

平塚「……………分かった、言おう。」

全員「「「!!」」」」

平塚「私が知っているのは1つだけだ。比企谷は

転校した。」

部室に沈黙が続く。私も今驚いているのだから。

結衣「せ、先生。嘘ですよネ? ヒ、ヒツキーが転校なんて、嘘なんですよネ?」

平塚「私だつて、嘘だと言いたいさ……………だが、4時の職員会議で発表された。信じる他あるまい……………」

戸塚「でも何で八幡が転校しなきゃいけないんですか!? 八幡が転校する理由なんて無いはずですよ!」

平塚「雪ノ下、由比ヶ浜……………君達なら知っているだろう。私ももう

知っている。」

2人「「え？」」

そこには、一冊のノートがあった。

平塚「手掛かりがないか昨日奴の机を調べたら出てきたんだ。中身は文化祭と修学旅行のことが書かれてあった。」

2人「「!!」」

平塚「中に記されている事が本当かどうか私には分からん。君達が見て全て本当ならこの学校の生徒には、本当の事を教えねばなるまい。」

私達はおそろおそろのノートを開き、全て確認した。相模さんの依頼、戸部くんの依頼。だが、2つ知らない依頼があった。それは……

海老名さんが、彼に告白を阻止してほしいという依頼と、葉山くんが、比企谷くんに頼んだ依頼だった。私は驚いたけれど、このノートに書かれている事は……

雪乃「全て事実です。間違いありません。文化祭の事については、城廻先輩にも聞いてみて下さい。」

平塚「由比ヶ浜、君もかね？」

結衣「……はい、全部本当です。」

平塚「……分かった、では後日城廻にも聞いておこう。君達はもう帰りたいまえ。」

そしてそのまま全員会話もせずの下校した。

後日談

結衣 side

ヒッキーが転校してから5日が経った。それからというものの、クラスの雰囲気はがらんと変わった。理由はヒッキーの残したノートが先生経由で学校中に知れ渡っていたから。

さがみんは文化祭でのことが公になり、遙ちゃんやゆっこは、さがみんから離れていった。

隼人くんも、修学旅行のことがバレて、グループは解散。サッカー部も強制退部。隼人くん自身も立場がなくなり、1人での。

2人共、クラスから完全に孤立していた。

グループだった皆は、男女に分かれている。話す事はもうほとんどなくなってる。私達は私達でぎくしゃくしていた。

姫菜に対して優美子が、なぜ相談に來なかつたとか、何で言つてくれなかつたのかとか、毎日のように続いている。

さいちゃんは明るく振舞つてるつもりだけど、心の中では辛いはず。川崎さんもういつもと変わらない氣がするけど、なんだか雰囲気が悪くなつたように見える。中二もあの日以来、原稿を持つてこなくなつた。

何だか、今の学校は楽しくない。溜息しか出て來ない。3人でいた奉仕部が、一番楽しかつたかもしれない。

ヒッキーはいつも、こんな感じだつたのかな？

結衣 side out

雪乃 side

比企谷くんの転校から5日が経った今、私のいるクラスでは特に何かあった訳ではないのだけど、強いて言えば、由比ヶ浜さんのクラスの噂だった。

葉山くんと相模さんは自業自得としか言えないけど、

比企谷くんは……………もういない。

私はその喪失感がとても大きかった。部室へ行って依頼人を待つだけだった筈が、比企谷くんと由比ヶ浜さんが来てからは、部活がとても楽しかった。

最初は、捻くれている腐った眼のゾンビが部員になったという認識だったが、彼の存在は、いつの間にか大きくなっていた。今更だけど、彼ともう一度会いたい。

そう思いながら、部室の鍵を開け、今日も部活を開く。これが前まで当たり前だったのに、とても寂しく感じる。

私って意外と寂しがり屋なのね…………

雪乃 s i d e o u t

—————

結衣「やつはろー、ゆきのん。」

雪乃「こんにちは。由比ヶ浜さん。」

いつもの挨拶。いつもの風景。だが、やはり何か足りないと感じてしまう。そこには、誰も座る筈が無いのに置いてある一脚の椅子がある。椅子をしまっても問題ないのだろうが、2人はそうしようとはしなかった。

そんな時…………

ガラガラ

戸塚「こんにちは。雪ノ下さん、由比ヶ浜さん。」

沙希「また邪魔するよ。雪ノ下、由比ヶ浜。」

材木座「我も失礼する。」

八幡を捜していた3人が、突然部室に来たのだ。

雪乃「それで、どうしたのかしら？」

戸塚「うん、なんかテニスしててもあんまり身が入らなくて……」

沙希「ウチも、なんか家にいても落ち着かないから。」

材木座「我も最近は何事か出なくてな……」

三者三様の答えだが、全員一致しているのが、自分の不調を隠し切れていなかった。少なからず、八幡とよく接していた3人は此処の所気分も調子もあり良いとはいえなかった。

ガラガラ

平塚「邪魔するぞ。ん？今回は多いな。」

雪乃「平塚先生、ノックを。」

平塚「すまんすまん。雪ノ下、由比ヶ浜。比企谷の残したノートだが、どうする？」

雪乃「奉仕部で保管します。」

結衣「うん！その方がいいよね！」

平塚「ではこのノートは君達に任せる。用件はそれだけだ、ではな。」

そう言って平塚静は、部室から去った。

戸塚「ねえ、雪ノ下さん。そのノート僕にも見せてくれないかな？僕、見てみたいな。」

雪乃「ええ、構わないわよ。どうぞ。」

戸塚「ありがと。」

戸塚はそう言って、八幡の書いたノートをまじまじと見ていた。一文一文を噛みしめるように。

――30分後――

戸塚「……ふう、やっぱりすごいなあ八幡は。こんな事をして来たなんて。僕には出来ないや。」

沙希「いやいや戸塚。比企谷のする事は、誰にも真似できないと思うけど。」

結衣「あはは……確かにそうだね。」

雪乃「ええ、確かにその通りね。」

材木座「うむ！であるな!!」

戸塚「あ、あはは……雪ノ下さん、ノートありが……あれ？」

雪乃「どうかしたの？戸塚くん？」

戸塚「ううん、ただこのマーク何かなって。」

結衣「え？何々？」

沙希「六角形の角に六角形が6つ？何これ？」

材木座「それは、おそらくアスタリスクであるな。」

3人「「アスタリスク？」」

雪乃「……ああ、姉さんが今行っている所ね。」

結衣「ゆきのん知ってるの？」

雪乃「名前だけなら知ってるわ。でもそれだけよ。」

材木座「ならば我が教授しよう!!」

結衣「中二、なるべく簡単にね。」

材木座「う、うむ……簡単に言えば戦の都市であるな。生徒が己の願いを叶える為に行く場所である。その中に6つの学校があり、毎年競い合っているそうなのだ。」

戸塚「へえ……材木座くん、詳しいんだね。」

材木座「ま、まあ、懂れなのでな。」

雪乃「それはいいとして、何故こんなものが書いてあるのかしら？意味も無く書くとは思えないわ。」

暫くの沈黙。そして沙希が呟いた。

沙希「……もしかして、此处に行つたとか？」

4人「」「え？」「」

沙希「いやだから比企谷が転校したのは、このアスタリスクなんじゃないかって言つただけだ。」

雪乃「……あり得るわね。」

沙希「……え？」

結衣「確かにヒツキーならこういう事しそう！」

戸塚「うん！このマークがあるなら可能性は充分だよ！」

材木座「しかしリスクも高いぞ。もしもここに八幡がいなかったらどうするのだ？只の落書きかも知れんのだぞ。」

沙希「あたしは行くよ。言つたのはあたしだしね。」

戸塚「僕も行くよ！少しでも希望があるならそれに賭けてみたい！」

雪乃「彼に会えるのなら、リスクなんて怖くないわ……それに、い

ざとなれば姉さんがいるわ。」

結衣「ウ、ウチも行くし！みんなが行くのに私だけ行かないのってなんかバカみたいだし！」

材木座「止めても無駄なようだな。あいわかった！ならば我も覚悟を決める!!」

雪乃「決まりね。では早速そのアスタリスクについて調べましょう。可及的速やかに！」

4人「」「」「おお!!」「」

こうして5人は、1人の少年の為に、一致団結する。

やはり私達がアスタリスクを目指すのは間違っていない。

2章 界龍での新生活 到着と紹介と友達？

八幡 side

飛行機から降りてようやく水上都市アスタリスクについた。ここからまた、俺の新しい人生が始まるんだよな。

小苑「着いたぞ、八幡。ここがアスタリスクじゃ。」

八幡「……………」

正直、言葉が出なかった。東京と同じくらい…………いや、それ以上の建造物と人口。それよりも文明のレベルが違いすぎる。こつちが現在だとしたら、おそらく日本は江戸時代だろう。俺にも分かるくらいの差があり、圧倒的だった。

小苑「ほれ、呆けている場合ではないぞ。まずは、界龍第七学院の生徒会長と挨拶してから、都市を廻ろうぞ。」

八幡「あ、はい。」

すると、右の道路の車の側に立っていた中華服を着た女性が、こつちに向かってきた。使者だろうか。

???「汪小苑様に比企谷八幡様でしょうか？」

小苑「うむ、そうじゃ。こつちが比企谷八幡じゃ。」

八幡「ど、どうも……………」

???「そうでしたか…………あつ！失礼致しました。この度は我が校、界龍第七学院に入校して頂き、ありがとうございます。私、当校の高等部1年所属の趙虎峰ジャオ・フーフォンと申します。以後、お見知り置きを。」

なんかあんな女って感じの名前じゃないな……

小苑「言っておくが八幡よ、こやつは男じゃぞ。」

八幡「え、え？マジっすか？すいません。」

虎峰「よく間違われるので気にしてません。では早速、我が校に向かいましょう。こちらの車にお乗りください。」

そう虎峰さんに言われて車に乗り込み、学院に向かう。

虎峰「では比企谷さん、到着する前に界龍第七学院の簡単な説明をさせていただきます。界龍はこのアスタリスクの六学園中最大の規模を誇っております。それは特に学年などの区分けはなく、才能さえあれば年齢を問わず受け入れるようにしているからです。そして我が校には星仙術という独自の万応素感応能力普遍化技術を持ち、武術においても他学園に比べてもレベルが高い方だと言えます。さらに校内には、『派閥』が存在します。」

八幡「派閥？」

虎峰「はい。武術を主体とする木派チェンシーの拳士。もう一つは星仙術を活用した戦術をする水派タオシーの道士。このこの2つの派閥は決して仲が良いとは言えません。衝突し合っていると云ってもいいでしょう。」

八幡「は、はあ……そうなんですか。」

虎峰「比企谷さんはどちらが得意なのですか？武術・格闘術に優れた木派か、星仙術と頭脳を使う水派か。」

八幡「俺はどっちでもいいですけど、水派だと思いますよ。星仙術使えますし。ねえ？小苑さん。」

小苑「いや、そうとも限らんど？お主、儂とも武術を通したであろう。此奴は少なからず武術も出来るぞ。」

虎峰「本当ですか比企谷さん!?武術を通していたとは!?是非、詳しくお願いします!!」

え？何この子？急に人が変わったよ？あ、多分この人木派の人だ

な。まあ別に隠す必要もないか。

八幡「詠春拳という拳法です。重心の崩さない精密で最小限の動きで相手の動きを捌いたり、受け流したりするのが特徴です。攻撃は拳・肘・蹴り・膝押し・肩による体当りが主です。」

……と、簡潔に説明を終えると、めっちゃキラキラした眼でこっち見てるよ。何？どしたの？

虎峰「比企谷さん!!」

八幡「え、は、はい。」

虎峰「僕、比企谷さんとは良い友人になれそうです!!これ程武術に精通してる方がいたなんて……八幡と呼ばせてもらってもいいですか？僕の事も呼び捨てで構いませんから！それと、敬語も結構です。同じ高等部1年なので！」

……友人、か。こんなにも嬉しそうに言われたのは初めてだな。ここにきて初めて良かったって思ったかもしれないな。

八幡「お、おう分かった。虎峰さ……虎峰。」

虎峰「はい！よろしくお願いします！あ、もう直ぐ学院に着きますね。」

談笑？を終えるとそこには、如何にも武術屋敷といった建物があった……確か6つある中で最大の規模とか言ってたよな。最大なんてもんじゃねーよあれ。デカすぎるよ。

……とそんな事を思いながらも、俺はこう思った。

やっと、俺の新しい学院居場所に着いた。

挨拶と意外な再会

八幡 side

――界龍第七学院校門前――

虎峰「着きました。八幡、小苑様。こちらが界龍第七学院です。」

小苑「ほほう、懐かしいのう……昔を思い出すわい。」

八幡「……やっぱデケエ。」

虎峰「まあそのうち慣れます。僕も最初そうでしたが、もう慣れました。さあ、行きましょう。」

そうして学院に入ろうとしたのだが……

生徒1「師兄！ここは界龍第七学院学生しか入れません。後ろの方々は許可を貰ってからお入り願いたい。」

と言ってピンク色の中華服を着た門番2人が棒を斜めに立てて道を塞ぐ。ちゃんと仕事してるな。偉い偉い。

虎峰「後ろの男子は特待転入生です。師父より言伝を貰ってませんか？そして無礼ですよ！此方の御方は先代の『万有天羅』ばんゆうてんら、汪小苑様です！控えて下さい！」

生徒1「っ!!?……ははっ！大変失礼致しました!!」

八幡「あー、えと、お気になさらず。」

小苑「よいよい、お主は職務を全うしただけじゃろう？ならばそれを咎めるのは筋違いというものじゃ。」

虎峰「門の者が失礼を致しました、すみません。では、こちらです。付いて来てください。」

そう言つて虎峰は歩き出した。

八幡 side out

小苑 side

おおっ！黄辰殿じゃ、ここも懐かしいのう。やはりあの時と変わつておらんのう。

虎峰「こちらに生徒会長がいます。少々お待ち下さい。」

恐らくあのチビ助の所じやろう。それ以外におらんじやろうしな。

八幡「あの、小苑さん？」

小苑「ん？なんじゃ？」

八幡「小苑さんは今の生徒会長にあつた事あるんすか？」

小苑「む？当たり前じやろう。それがなんじゃ？」

八幡「いや、どんな人なんだろうなつて。」

そうか……八幡はチビ助のことを知らなんだか。ムッ！いい事を思いついたのじゃ！

小苑「そうじやのうー、身体が丸太のように大きい奴だな。あんな巨漢が三代目の『万有天羅』とは思わなかったわい。」

八幡「そ、そんなに大きいんですか？」

小苑「うむ、世にあれを『ごりら』と言うんじやろ？」

八幡「俺に言われても……俺大丈夫ですかね？」

小苑「そこは大丈夫じや、人間じやからの。」

八幡「……なんか一気に不安になってきた。」

虎峰「許可が降りました……どうかしたのですか？」

八幡「いや、ちよつと不安になっただけだ。」

虎峰「大丈夫ですよ。八幡が考えているより、ずっと子供っぽいですから。」

八幡（子供っぽい!?ゴリラみたいで子供っぽい!?どんな生徒会長だよ……）

ふふふつ、楽しみじやのう。

小苑 side out

八幡 side

あーやべー……すっげー不安。一体どんな人なんだ？なんか会う前から胃がキリキリする。

虎峰「師父。比企谷八幡、並びに先代・汪小苑様を連れて参りました。」

星露「うむ、通すがよい。」

声でもう分かる。ガタイよくて声高い奴だ。ここの生徒会長は絶対ワン〇ースのピ〇カみたいな人だ。

星露「妾の名は茫星露じや、ここの生徒会長をしておる。よろしく

頼むぞ。」

下を俯きながら考えていたから会長の姿は見えなかったが、慌てて自己紹介をした。

八幡「は、は、初めまして。比企谷八幡と言いましゅ！よ、宜しく願います！」

噛みつかみのガチツガチだった。恥っず!!

星露「緊張しているのかえ？まあ、頭を上げい。」

俺はおそるおそる頭を上げた。

あれ？

そこにはゴリラではなく、少女が座っていた。

八幡「……………なあ、虎峰。」

虎峰「はい？なんでしよう？」

八幡「生徒会長は？」

虎峰「はい？目の前にいるじゃないですか？」

八幡「あれ!? あんなちっこいのが!？」

星露「ちっこいのは何じゃ！ちっこいのは!」

八幡「いやだって小苑さんが…………小苑さん？」

ピクピク震えていた。そして…………

小苑「ブー!!アツーハッハッハッハッ!!アツーヒヤッヒヤッ
ヒヤッヒヤ!!ヒーヒー…………アツハッハッハ!!」ハラカカエ

……スゲー大爆笑し始めた。

小苑「クフフフ……こ、こやつ、ホントに信じおった！ププツククツ！冗談に、決まっておろう！フフフ……」

八幡「……え？あれ冗談だったんすか？マジかよ。」

星露「……どんな冗談じゃ？」

八幡「い、いや、それはいわん」どういう冗談じゃ？妾に正直に言ってみよ。」……丸太のような身体をしたゴリラだと。」メソラシ

星露「!!っくお主!!また妾で遊びおって!!この前といい今回といい、いい加減にせんか!!」

――数十分後――

小苑「ふう、やつと落ち着いたのじゃ。今回のとはびきり笑えたのじゃ。いつもすまんの。」

星露「妾はお主のおもちやではないわい！全く、転入生を前にとんだ赤っ恥じゃ。」

八幡「あの、俺は別に気にしてないんで……」
星露「妾が気にしておるのじゃ……」

何とも言えない空気になってしまったな……虎峰もポカンとしてる。なんかもう気まずいから終わらせちまおう。

八幡「まあ、よろしくお願いします。会長。」

星露「うむ、共に切磋琢磨しようぞ……それと星露で良いぞ。」

八幡「おい虎峰、もう行こう。これ以上ここにはいられない。なんか色々可哀想に思えてきた。」

虎峰「そ、そうですね。では師父、失礼致しました。」

そう言つて黄辰殿から出た。

虎峰「…八幡、正直助かりました。僕にはどうしたらいいか分からなくて……」

八幡「いや、俺も同じだ。どうしていいか分かなかったから、早く出て行きたかっただけだ。」

虎峰「それはそれで酷い気はしますが、今回くらいはいいでしょう。そういえば、汪小苑様はどちらに？」

八幡「ああ、あの人なら『遊びも終わった事じゃし、そろそろ儂は行く。まあ気ままにやる事じゃな。』だってよ。」

虎峰「師父を相手に遊びとは……」

まあ確かにそうだが、一応先代の「万有天羅」だからな。遊ばれても不思議じゃないとも言えないが、ちっちゃいからな……あつ、そういえば案内してもらった話だったのに、先帰っちゃったな……仕方ない、1人で探索するか。

虎峰「そ、それでは気を取り直して、八幡の部屋まで案内します。八幡の部屋は転入という事なので、1人部屋なんです……」

八幡「別に問題ねーよ、気にすんな。」

虎峰「そう言つて頂けると幸いです。こっちです。」

付いて行こうとすると、1人の女性が通りかかった。それを見て驚いた。俺も知ってる人物だったからだ。

陽乃「……………比企谷……………くん？」

その人は前の高校の同級生の姉、雪ノ下陽乃だった。

案内……そして慰労

陽乃 side

私は今、目の前の光景が信じられなかった。妹の同級生で猫背で頭の上にはピヨコンッと立ったアホ毛が立っていて、目が濁っていて捻くれた性格に加え、私の本性を初見で見抜いた面白い男の子、比企谷くんがいたからだ。

どうして？何故彼がここにいるの？

今すぐ聞き出したい。でもここは人目につくし、何より虎峰くんもいる。ここは抑えなきゃ！

虎峰「雪ノ下師姉？先程八幡の苗字を言われたと思うのですが、彼とお知り合いなのですか？」

陽乃「うん、まあ色々ね……それで？比企谷くんはどうしてここに
いるのかな？お姉さん興味あるなあ。」

八幡「……今日からここに転入したんですよ。さつき生徒会長に挨拶済ませたばかりです。」

陽乃「えーホントに？なんか嘘くさいな。だってこの学院、比企谷くんに合ってないもの。」

虎峰「雪ノ下師姉、八幡は正式な手続きをしての転入です。それに師姉もご存知の先代の【万有天羅】汪小苑様の推薦なのです。」

陽乃「ふうん……まあ、そういう事にしといてあげるよ。」

虎峰「事実なのですが……まあ今は案内が先です。師姉、失礼いたしました、では。」

陽乃「ちよつと待って、何処行くの？」

虎峰「八幡の部屋の案内です。校内の案内もしたい所ですが、幸い明日は休みなので持ち越そうと思ってます。」

……これは比企谷くんに訳を聞くチャンスかも。

陽乃「それ、私もついていい？最近修行だけだったから、終わった後がつまなくてさ。」

虎峰「はあ……まあ師姉がそう言うのなら僕は構いませんが、八幡はどうします？」

八幡「……まあ、いいんじゃないの。部屋行くだけだしな。」

八幡（それにこの人のことだ、断つても絶対についてくるだろうしな。）

虎峰「分かりました。八幡、師姉、こちらです。」

2人「おう（はい）。」

よし、比企谷くんの部屋までは順調にきてる。絶対に聞き出してやるんだから！

……それにもう、分かてるだろうしね。

陽乃 side out

八幡 side

それから俺たちはまた歩き出した。会話（雪ノ下さんと虎峰だけ）しながら廊下を歩く、階段を上がる、また歩く。そして、ドアの続く廊下を歩いていると一番端の最後のドアで虎峰は止まった。

虎峰「ここが八幡の部屋になります。鍵も外してありますので、入ってみてください。制服も中にあります。」

陽乃「最上階で一番奥って……一番疲れるじゃない。」

八幡「……まあ、住めば都って言うじゃないっすか。」

俺はそう言いながら、ドアノブを捻りながら押した。内装は……う

ん中華でした。最近こういう部屋で過ごしてたからかもう見慣れてしまった。

これが制服か……ん？なんで黒？

八幡「虎峰、何で黒なんだ？まさか俺だけ？」

虎峰「その事なんですが、僕も気になって理由を師父に聞いてみたら、『その者は目が腐っておるからのう。そっちの方が似合いそうじゃ。それにこうした方が面白そうじゃしの。』……だそうです。」

あのチビっ子め……

八幡「あのチビっ子め……俺だけ違う色って。これじゃ俺目立つちまうじゃねえか。」

陽乃「ふふふ、まあ良いじゃない。比企谷くんがピンクって想像つかない上に似合わないそうだしね！そっちの方がいいよ。」

虎峰「あはは……では、今日はここで休んで下さい。僕はこれで失礼しますね。」

そう言つて虎峰は去っていったが雪ノ下さんは残っていた。

八幡「何となく想像はつきますが、一応聞きます。雪ノ下さんは行かないんですか？それに……」

陽乃「分かってるよ、君のいう仮面が外れている事くらい。ここではすぐ見破られちゃったから。そんな事よりも……どうしてここに？総武高は？もしかして雪乃ちゃん達と何かあった？」

八幡「転校しただけですよ。それだけ「そんなのはいいから！お願い、教えて！ここに來た理由が転校だけな訳がないでしょっ!!」……っ!？」

………違う。

俺の知ってる雪ノ下さんじゃない。俺の見てきた笑いながらこつちを見透かしてくるような目ではなく、本気で心配するような目だった。

俺はこんな雪ノ下さん………初めて見る。

八幡「……ちよつと長くなるかもしれませんが、それでもいいですか？」

陽乃「うん、何時間でも聞くから私に話して。」

それから俺は文化祭の事から修学旅行までの事、なぜ界龍に転入し

て来たのかを説明した。今思ってもあんな時はかなり辛かったな。マジで。

陽乃「……そっか、そんな事があつたんだね。」

ダキッ!!

突然、雪ノ下さんに抱き締められた。

八幡「え、ちよ、雪ノ下さん?」

陽乃「……そっか、文化祭が終わった後そんな事があつたんだね。……そもそも文実をあんな風にしたのは私なのにな。」

八幡「い、いや、別に雪ノ下さんは「そうじゃないって言えるの? 実際、文化祭で君をあんな目に合わせたのは私みたいなものだよ?」……」

陽乃「こんな事言う資格なんてないって分かってる……でも、言わせて?」

陽乃「本当に、本当にごめんなさい。君を、あんな目に、合わせて。あと、よく頑張ったね。もう大丈夫だよ。」ポロポロ

八幡「……………っ」

と、雪ノ下さんは泣きながら謝った。俺も目頭が段々熱くなるのを感じた。何故だ？何ともないはずなのに……………

陽乃「泣いたっていいよ。私にこんな事されたくないと思うけど、君の弱みを握ろうなんて、もうこれっぽっちも考えてないから。」

八幡「……………別に、雪ノ下さんの事は気にしてませんよ。それと……………少し、肩借ります。」ツ―

陽乃「…うん、いいよ。後、ありがと。」

そうして俺は静かに泣いた。

食事と久しぶりの感情

八幡 side

八幡「あの、なんか……すみません。なんか長い間……／＼／」

陽乃「いいよ、気にしないで。このくらいならいつでもしてあげるよ。」

あああああああ……やっちまった。

よりにもよってこの人に見られるなんて……ん？でも待てよ？さつきから雪ノ下さんは、いつもの外面をつけてないな。そういやさつきここでは見破られたって言ってたな……

なら大丈夫……なのか？

陽乃「でも、本当にごめんね。私、そうなってるとは全く知らなくて……」

八幡「もう謝ってくれたんでいいっすよ。」

陽乃「比企谷くんはホントに優しいよね。うん、分かった。もう言わないね。でも、私に出来る事って何かないかな？このままじゃ気が収まらないよ。」

八幡「いや、でも、そんな急には浮かばないっすよ。」

陽乃「うーん……あつ！じゃあ明日の案内私がやってあげるよ！それならいいでしょ！」

八幡「……ま、まあ、その、お願いします。」

陽乃「はい。それじゃあ、行こっか。」

八幡「……え？何処にですか？」

陽乃「食堂だよ。お腹減ってるでしょ？もう夕方の6時だぞー。」

そう思っ外を見てみたら、もう夕方だった。ここは日本なんだ

が、何故か外国に思えてくる。

八幡「確かにもう夕暮れっスね……じゃあ、案内してもらってもいいっすか？」

陽乃「うん、お姉さんに任せなさい！」

と言つて食堂へ向かう。

――食堂――

【自助餐？】

……おそらく飯を食う場所だろう、多分。

陽乃「着いたよ。ここが君の部屋から一番近い食堂だよ。早速入ろっか。」

八幡「は、はい。」

そう言いながら中に入ると……

星露「今日の青椒肉絲チンジャオロースも絶品じやのう！」

虎峰「師父……もう少し他の料理を食べてはいかがですか？」

???「ねえ師父ー、毎日それ食べてて飽きないんですかー？」

………チビっ子と虎峰ともう1人、自分の髪をいじくりまわしている女子がいた。

陽乃「おやおや？皆さんお揃いで食事？私達も混ぜてー！」グイグイ

八幡「あつ、ちよつ……」

俺の手を引っ張るが、そんな事は御構いなしだった。まあこれが雪ノ下さんだからな…………

虎峰「っ！八幡！それに、雪ノ下姉姉！」

星露「ふ^{おお}お、ひ^きふ^{おつ}ふ^たあ^かか。」モグモグ

???「あ、こんにちはー陽姐ー。あれ？後ろの男は誰ー？あたしは、セシリー・ウオン。よろしくねー。」ギョツ！

と、普通に手を握ってくる。ボツチの俺には結構厳しいな……

八幡「比企谷八幡です。まあ、よろしくお願いします、ウオンさん。」
セシリー「セシリーでいいよー。それでこの男は誰なのー？、もしかして陽姐の彼氏ー？」

陽乃「お、鋭いねーセシリー。」

星露「む？ひ^そよ^うに^なに^のよ^かえ^え？」モグモグ

虎峰「そ、そうなのですか八幡!?」クワツ!!

何故こつちを見る？そんなの分かりきった事だろうに。

八幡「違う、彼女じゃない。考えてもみろ、こんな眼の濁った奴に彼女なんていると思うか？後チビっ子、口に物入れながら喋るのやめろ、行儀悪い。」

自分で言つて、泣きたくなってくる。まさか自分で自分を傷つけることになるとは…………

セシリー「まあ、そりやそうだよねー。」

虎峰「ビ、ビックリさせないで下さいよ。」

星露「んっ！八幡、お主また言いよったなっ!!チビと言うな!!妾の名は茫星露じゃー!!」ウガー!!

陽乃「ちえー、本気にしてくれてもいいのになあ。」

……三者三様ならぬ、四者四様だった。

陽乃「まあとにかく、私達も混ぜてよー。」

虎峰「僕は構いませんよ。セシリーと師父はいかがですか？」

セシリー「私もいーよー。」

星露「……まあよい、許可しようぞ。」ジトオ

陽乃「ありがとー！早速注文して来るねー！ほら、比企谷くんも！注文のやり方教えてあげるからっ！」

八幡「あ、はい。」

その後、セシリーが虎峰をからかったり、雪ノ下さんが俺をからかったりと色々な事があったが、久しぶりに楽しい食事が出来た。

語りましょう！

八幡 side

あれから飯を食い終わった後は、風呂に入って楽な服装（横浜で買った普通の服）に着替えて、ベッドの上で横になってくつろいでいた。ここんとこ慌しかったからな、こんな風にのんびりしたのは久しぶりかもしれない。

p i p i p i : : p i p i p i :

ゆつくりのんびりしていたところ、突然呼び出し音が部屋に鳴り響いた。しかしこんな時間に誰だ？

八幡「はい、どちら様ですか？」

虎峰『八幡、虎峰です。少しお話したい事があって来たのですが、上からせてもらってもいいでしょうか？』

……何か伝え忘れてもあつたのか？授業の事なら後日書類で来るって聞いているんだが、一体何の用なんだ？

八幡「おう、いいぞ。俺も話があつたから丁度よかった。」

そして俺は扉のOPENボタンを押して、ロックを解除した。

虎峰『なら良かったです、失礼します。』

ガチャッ

入ってくると、虎峰はまだ制服姿のままだった。此处に来る時でも

制服なのか、やっぱ真面目だなあ。

八幡「まあ、適当に座ってくれ。」

虎峰「はい、ありがとうございます。ところで、八幡のお話とは何なのですか？そちらから先に聞いておきます。」

と、座りながら俺に話してきた。

八幡「おう。明日の案内なんだが、雪ノ下さんがやりたいって言うてな。もしかしたらお前が頼みに来るかもしれないと思ってたから、行こうと思ってたんだ。」

まあ、思ってただけで行くかどうかは分からなかったけど。思いついたのだって、今だし。

虎峰「雪ノ下姉姉がですか？そういうことでしたら僕は構いませんよ、分かりました。」

八幡「ありがとな、後で雪ノ下さんに連絡しとく。俺の話ってのはこれだけだ。んで、そっちの話ってのは？」

虎峰「ええ。実はその事について話そうと思ってたんですが、それはもう不要のようですね。」アハハ

そうだったのか……なんか悪いことしたな。

八幡「あー……なんか悪いな。晩飯の時に言おうとしてたんだが、濃い時間を過ごしたもんだから忘れてた。」

虎峰「いえ、大丈夫ですよ。僕も久し振りにあんなに楽しい夕食時間をごせましたので。」

この子、メツチャええ子や。こんなええ子はそんないないぞ？戸塚くらいええ子や。

…………戸塚、か。今更思うことでも無いが、元気にしていると良いが…………気にはあるまい。

虎峰「それに、僕からの話はもう1つあるんですよ。」

え、そうなの？なんかあつたつけ？そう思つてると虎峰の目がキラキラ輝いていた。何でそんな目で俺を見てくるんだ？

八幡「それで、お前の言うもう1つの話ってのは？」

虎峰「車ではあれくらいしか話せなかったのも、八幡の学んだ武術をもっと教えていただけませんか!?僕、あれから聞きたくて聞きたくて仕方なかったんです!!食堂では師父とセシリーと雪ノ下姉姉がからかってくるから聞けなかったのも、今この時間では是非教えていたいただきたいと思っていました!」キラキラ

この子……キャラブレすぎじゃね?武術の話になるとこうなるのか?なんかスゲーな。

八幡「ま、まあそれくらい構わないぞ?別に秘密って訳でもねーしな。」

虎峰「はい、お願いしますっ!!」

八幡「詠春拳は中国南派武術の1つで特徴としては……………」

こんな感じの会話が約1時間くらい続いた。しかも虎峰の奴、色々聞いてくるから全然逃がしてくれねえんだ。

虎峰「成る程…………とても勉強になりました。八幡は説明上手なのですね、聞いてて凄く分かりやすかったです。」

八幡「そ、そうか?俺は普通に説明しているだけなんだが……………」

虎峰「いえ、この界龍の中でも八幡のように説明できるのは殆どいないですよ。精々、雪ノ下師姉くらいですよ。」

八幡「まあ、確かにあの人は教えるの上手そうだな。」

虎峰「僕にも剣術や棍術こんじゆつを教えてくださいましたが、僕には武器術とというのはどうも合わなくて…………なので僕は武器を一切使っていません。」

棍術かあ…………俺も小苑さんに教え込まれてやってたな。刀術とか双刀とか。そーいやこの学院には棍とか刀ってあんのかな……………」

虎峰「八幡、今の話も本当ですか?」ギラギラ

八幡「…………え?な、何がだ?」

虎峰「武術だけではなく、剣術や棍術にも精通しているのですか!?詳しく教えて下さい!!」ズイッ!!

…………この子、武術の事になると人変わりずきでしよ…………しかも近いし。ていうか俺も口に出てたのかよ…………それよりも近い近い。

八幡「分かった分かった、説明するから落ち着け。そんな嬉々として迫って来られても困る。」

虎峰「あっ!す、すみません…………つい興奮してしまつて…………っ!!という事は、聞かせてくれるのですね!」

八幡「ああ、俺が理解してて説明出来る範囲だな。」

その後も1時間くらい続いたところでお開きとなった。まさかこんなに長引くとは思っても無かった……そう思っ
て俺はベッドに入った瞬間にこう思った。

虎峰とは夜中に武術の話は絶対にしない、と。夜更かし確定だから。

木派

陽乃 side

皆さん、おはようございます。雪ノ下陽乃だよー！今日は比企谷くんと学院案内と都市案内のデートなんだーいやー、虎峰くんも良い事するなあ。私達を2人つきりにしてくれるなんて。お姉さんうれしいぞー。今度ご褒美に何かしてあげないといけないかな？それにしても、あぁー楽しみ♪

……あつ、比企谷くんだつ……つて、ありや？でもなんか眠そうだなあ。もしかして今日が楽しみ過ぎて眠れなかったとか？でも比企谷くんってそんなタイプの人じゃないし……まあ、それは本人に聞いてみればいいか。

陽乃「おはよー比企谷くん。どうしたの？なんか凄く眠そうに見えるんだけど……なんかあったの？」

八幡「……おはようございます、雪ノ下さん。実は昨日、虎峰と話してたら長引いちゃって。おかげで寝不足ですよ……」

陽乃「お話してただけで？それだけで寝不足になるとは、とても思えないんだけどなー。」

それに虎峰くんが人の邪魔するとは思えないけどなー。私やセシリーはよくからかってるけど。

八幡「……今のは少し言い方が悪かったです。虎峰に俺が教わった武術の事を教えてたら、思ってた以上に時間かかっちゃって……俺が寝る頃には日付変わってました。」

陽乃「そ、そうなんだ……だから目がいつも以上に濁ってるんだー。私が目を覚まさせてあげようか？」

八幡「目は余計です。後、今の一言で覚めました。ありがとうございます」

います。」

陽乃「もー、つれないなー。」ブーブーでも安心したよ。もう大丈夫みたい。私もあんな事はもう2度としないし、

誰だろうとそんな真似、絶対にさせない。これ以上比企谷くんを傷つけさせるものか……私はそう心に決めたから。

陽乃「ふふ。それじゃ行こっか♪」

八幡「あ、はい。よろしくお願いします。」

――鍛錬場――

陽乃「此処は木派の鍛錬場と闘技場。まあ私達の出身地の日本と言う道場だね。虎峰くんみたいな拳士チエンシーが身体や技を磨くところだね。」

八幡「あー、だから虎峰はあんなに武術に熱心なんですかね?」

陽乃「まあ、そうかもね。それに虎峰くんは星仙術が使えないからねー、彼は拳一筋だから。」

八幡「そういや、雪ノ下さんはこういう身体を鍛えるってのはやる

んすか？」

陽乃「おっ？お姉さんに興味があるのかなあ？嬉しいねえ♪」

八幡「……まあ、今後の参考にする為に。」

陽乃「素直じゃないなあ……そうだね、私は木派と水派、どっちも行くかなー。どっちも結構楽しいよ？」

八幡「……そうなんですか。（楽しい、のか？）」

陽乃「あっ！じゃあ今度さ、一緒に稽古しようよ！色々教えちゃうぞー。一応私、星露の4番弟子なんだから。」

八幡「まあ、稽古の件は検討することにしておき……ん？星露の4番弟子？」

陽乃「あれ、知らなかったの？ああ見えて星露は凄く強いんだよー。何せこの学院の序列1位だしね。私なんて足元にも及ばないよ。」

八幡「そういや小苑さんがそんな事を言ってたような……ずっとただの子供だと思ってた。」

陽乃「ちなみに私は序列3位なの！2つ名は【魔将天閣】ましようてんかくていうんだ！どう、凄いでしょ？」

八幡「マジっスか……雪ノ下さんってこの学院で3番目に強いって事ですか？」

陽乃「そうそう♪お姉さん、意外と強いんだよ♪」

八幡「……」

おっ！驚いてる驚いてるっ！いいね♪初めてじゃないけど、その顔やつぱりいいなあ！

陽乃「ねえ比企谷くん、私の弟子になる？なっちゃう？私って自分の弟子がいらないから、今なら手取り足取りねっとりたつぷり教えられるよー？」

八幡「いえ、すみませんが遠慮します。後、言い方がやらしいのでやめて下さい。」

陽乃「ありやりや、即答だね。どうしてか聞いてもいいかな？ひよっとして私の弟子になるのは嫌？」

八幡「いや、そういう訳ではないですけど……なんて言うか、自分の力が何処まで通用するかやってみたいんですよ。」

陽乃「へえ……随分前向きなんだね。前の学校の時に何か心境の變化でもあったのかな？」

……あつ、総武高の事は言わない方が良かったかなあ？

八幡「まあ、前までの俺だったら卑屈になつてるところですが、あのままじゃダメだと思つてるので。この世界に入つたからには、自分を試そうつて思つてるんです。どこまで自分の力が通用するのか、試してみたいんです。」

陽乃「……ふうん、そつか／＼／」

知らない間に随分と遅くなつちやつて……これがギャップっていうのかな？前の比企谷くんのイメージが残ってるから、こういうのを見るとちよつとかつこいいつて思つちやうなあゝ。

八幡「どうかしましたか？なんか顔赤いつスよ？」

陽乃「い、いやあゝ別になんでもないよ。さあ、次行ってみよーか

！次は水派の鍛錬場に案内するよー！」ダキッ！

八幡「……あの、何で抱き着くんですか？」

陽乃「んふふ、教えなーい！ほら行くよ！」グイグイッ！

八幡「ちよつ、そんな引つ張らないでくださいよ。」

だつて言えないもん！かつこいいなんて／＼／

水派

八幡 side

その後、客間や他の食堂に行った。界龍って同じ構造物しかないのか？これだと迷子になりそうだ……

そうして暫く廊下を歩いていると、今度は札がたくさん貼られている門の前に着いた。ひよつとしてここか？目的の場所って？見るからに不気味そのものの雰囲気なんだが？

陽乃「はい、到着。ここが水派の鍛錬場。木派は武術みたいに身体を使った派閥だけど、水派はその逆の星仙術タオシーを使った技を戦術とする道士タオシーがいるところだね。だから呪符を使った戦い方が基本スタイルだよ。」

八幡「そうなんですか……でもこの扉に貼られた札の数、流石に多過ぎませんか？いや、門どころかそれ以外の場所にもかなりの量が貼られているせいで不気味っスよ。」

正直、開けたくない……だって怖いもん。何でこんな怪しさマックスにしちまったんだよ。新入生とか俺みたいな転校生、絶対近寄らないぞ。

陽乃「まあ確かに雰囲気は木派に比べたら圧倒的に良くないよね。今はもう慣れたけど、私も最初はちよつと近寄りがたかったかなー。」
八幡「でも、この水派にもやっぱ強い奴はいるんですよね？木派にいる虎峰みたいな奴が。」

陽乃「そうだね。比企谷くんの知ってる人では、昨日会ったセシリーだけかな。星仙術の扱いが上手いのは。セシリーも冒頭の十人入りしてるからね。それでいて武術も使うから私よりも扱いは上手だと思うよ。」

八幡「雪ノ下さんは星仙術を使わないんですか？」

陽乃「私？私は合気道との組み合わせで使ってるよ。あれは応用効くからね。その分、安定性には少し欠けるけどね。これは星仙術の特徴だね。」

八幡「俺も星仙術はある程度は習いましたが、あんまり上手くいつてはいなかったんですよね。それってやっぱ鍛錬あるのみって感じなんですか？」

陽乃「星仙術には色んな使い方あるからね。例えば私ののはシンプルで、攻撃する時にその部分に包み込む感じかな。私の戦闘スタイルが近接格闘型だからね。」

八幡「はあ、そうなんですか。」

星仙術も武術と同じで戦い方や戦術次第では色々な形になりそうだな。俺も雪ノ下さんのやり方を参考にしてみるか。あつ、そういう木派と水派は仲が悪いって言ってたな……それってどういう意味なんだ？仲が悪くなりそうな理由が全く無さそうなんだが。

八幡「そういえば雪ノ下さん、木派と水派の仲が悪いって聞いたんですけど、それってどういう事なんですか？」

陽乃「あゝやつぱり気になるよね。実はそれね？所謂どっちもどっちって感じなんだよね。」

八幡「……………つまり、どういう事ですか？」

陽乃「単純だよ。星仙術は魔術師や魔女ダンテ ストレガの才能が必要だからね。木派にはその才能を持つてる人が極端に少ないんだ。だから自分は武術でしか強くなれないと思ってる。水派も理由は全く同じ。自分には武術や格闘術の才能を持っていないから水派の星仙術を使う道士になるっていうので、両方に境目が出来ちゃったんだよ。」

八幡「……なんか、意外と子供っぽい理由ですね。そんな理由だとは思わなかったです。」

陽乃「多分、お互いに嫉妬してるんだと思うよ。羨ましいけど悔しい……自分には持つてなくて彼等は持つてるから羨ましい、みたいな

感じかな。きつとそういう感情はお互いが感じてる筈なんだけどね。納得できないからこんな状況になってるんだよね。」

ここにもそういうのあるんだな。そういう意識の差みたいなの無いと思つてたけど、才能とかでも生まれたりするんだな。

八幡「そうなんですか……色々あるんですね。俺にはどっちが良いかなんて決めらんないですけどね。得手不得手や長所短所があるんですから。」

陽乃「別にどっちかに入れて決まりはないよ。私なんて今でも両方に行つてるよ。それでも誰かに何かを言われたりしないしね。比企谷くんもそうしたら？最初はやつかみ受けるかもだけど、その内なくなるよ。」

八幡「それは雪ノ下さんだからだと思ふんですけど……そうっすね。まあ、最初の内はそうします。それに俺は星仙術の鍛錬を積んだ方が良さそうですので、水派に寄るのが多くなりそうですね。」

まあ、星仙術も修行したいしな。それにどっちにも行けるならそれに越した事はない。俺も雪ノ下さんみたいに両方行く事にしよう。

陽乃「うん、そうしなよ。さて、学院の案内はこれで大体終わりかな。よしっ！じゃあ次は都市に行こうかっ！」

……え？都市に？今からか？

八幡「……え？あの、俺そんなの聞いてないんですけど。」

陽乃「そりや今言つたからね！それに案内するんだったら、どの道早い方が良いと思わない？」

八幡「いや、それはそうですけ「はい決まりー！それじゃ早速、外に行こー！」ち、ちよつと！腕引つ張らないでくださいー！」

こうして、俺は学院だけではなく、学戦都市の案内にも逝く事になった。え、字が違う？気にすんなよそんな事。それから雪ノ下さん、そういうのは先に言ってくれませんか？

案内？ 前編

八幡 side

雪ノ下さんに連れ出されて数十分後……俺達は界龍の校門前まで来て、いつの間にか学院外の案内もする事になって、出掛ける事になっていた。外まで来たのはいいんだけどよ、これからどうするつもりなんだこの人？

陽乃「よし！それじゃ、何処から行こっか？比企谷くん何処か行きたい場所ってある？お姉さんが案内してあげよう！」

八幡「あの、俺来たばっかなんで、右も左も分らないんですけど……」

陽乃「そうだよ？だから案内するんじゃない。」

八幡「そんな事言われても昨日の今日ですし、この場所に何があつて何が無いのなんて俺には分かりませんよ。」

陽乃「うーん、それもそっか。じゃあ適当に歩きながら話してくねー。」テクテク

八幡「何か一気に不安になって来た……」

ノープランだったのかよ。いやまあ雪ノ下さんは歩きながら話してくれるそうだが、それで上手く説明できるのだろうか？いや、この人の事だから説明するのは上手いとは思うが……

陽乃「じゃあ最初に六学園について教えておくね？比企谷くんの事だから何にも知らないで此処に来ちゃったんでしょ？」

八幡「ぐっ……事実だから何も言い返せねえ。来るって決めたのは2週間前だったんで概要も何も知らんです。」

陽乃「やつぱりねーそんな事だろうと思った……コホンッ、この水上学戦都市六花、アスタリスクを漢字で書いたら六つの花と書いて

六花っていうんだよ。それで分かるように六角形になっていて、その一角ずつに学校があるの。私達が所属している界龍、その他にアルカント、レヴォルフ、クインヴェール、星導館、そしてガラードワースの5つ。この6つが合わさったのが六学園って呼ばれてるんだよ。」

ストンツと雪ノ下さんが設置されていたベンチに座ったのを做って、俺も横に座った。それから雪ノ下さんは図面を出しながら丁寧に話を進める。

八幡「界龍の他にもまだ学校があったんですね。」

陽乃「船に乗ってる時は他の場所は分かりづらいからね。まあ取り敢えずは界龍の他にも同じような学校が後5つあるって事！界龍は説明を受けてるだろうしもう分かっているとは思うけど、この六学園の中で1番大きい学院ね。才能さえあれば学年や年齢問わず誰でも入学が出来る学院で、官僚主義と放任主義が混ざり合って結構混沌としてるけどね。」

八幡「まあ、要するに学院といよりは組織みたいなモンですね。」

陽乃「まあね。次、アルルカント・アカデミーにいくよ。アルルカントは開発・研究が主流の学校だよ。新型煌式武装や自律式擬形体（パペット）の開発をしてるんだ。アルルカントにも界龍の水派や木派と同じ派閥みたいなのがあってね、細かい説明は省くけど、全部で5つあるんだ。獅子派（フェロヴィアス）・彫刻派（ビッグマリオンズ）・黒夫人派（ソネット）・思想派（メセトラ）・超人派（テノリリオ）の5つに分けられてるんだよ。比企谷くん、テストには出ないけど覚えといてね♪」

八幡「覚えきれませんよ……っていうか雪ノ下さんはよくそんなのを覚えようとしたね。俺はそんな気にはなれません。」

陽乃「まあ界龍に入学する前に勉強してたからね。それからこれは一般常識レベルだから覚えておいた方が良くからね？比企谷くん、勉強は大事なんだぞ？」

八幡「……………分かってますよ。」

陽乃「どうだかあー？まあいいや！次はレヴォルフね、正式名称レ

ヴオルフ黒学院。ぶっちゃけ言うとか駄校だね！六花一の不良校！」

八幡「…………清々するくらいドストレートに言うんですね。そんなに悪いんですか？そのレヴォルフって学校は。」

陽乃「うん。校則は無いに等しくて、路上の決闘や乱闘デュエルは当たり前な拳句、素行も悪くて一般人にも当たる事もあるんだよね。けどあそここの冒頭ペーヅの十二人の実力は相当高いんだ。その辺りは他校の私達でも認めてるところかなあ。その証拠に個人戦の星武祭では断トツに勝率が高いからね。」

八幡「そうなんですか……………なんかすげえ以外です、このアスタリスクにもそういう学校ってあるんスね。」

陽乃「完全にほぼ悪目立ちしてるような感じだけどね。」

俺がレヴォルフに行ったら即リンチに遭ってボコボコにされそうだな。出会った人が小苑さんで転校したのが界龍でマジで良かった!!

陽乃「んー！ずっと座りながら説明するのも疲れちゃうし、少し移動しようよ。そろそろお昼時でお腹も空いてきたしね。比企谷くんもそう思わない？」

八幡「そうですね、少し空いてました……………じゃあ雪ノ下さんのオスメの店とかってあるんスか？」

陽乃「うん、続きはそこに行ってから話そうよ。そのお店に着くまでは、学園の話じゃなくて街の中央区について話すからね。今ちやうどその街に居る事だしね。」

八幡「1度にそんなに覚えられるかね、俺……………」

そうして俺達は再び歩き出し、雪ノ下さんが言うオスメの店へと向かった。

案内？ 後編

八幡 side

陽乃「おっ！着いた着いた。ここが私のお気に入り！はやく入ろっ。」

ここに来るまでは、六学園の事と六^{アスタリスク}花の都市中央区にある【行政エリア】【商業エリア】【外縁居住区】【ステージ】【新開発エリア】について教えてもらっていた。

簡単に説明すると、

行政エリア：六^{ここ}花の統治。

商業エリア：色々な飲食店、雑貨屋がある。商店街と言ってもいい。

外縁居住区：大雑把に言うとか、近郊^{きんこう}だな。

ステージ：メインステージでは毎年星武祭^{フエスタ}が行われていて、大規模ステージが3つ、中規模ステージが7つ、小規模はいくつもあるらしい。

新開発エリア：不良生徒が根城にしている暗黒街とも呼ばれている。

まあ大体こんなもんだ。後は過ごしていくうちに覚えていくから大丈夫だろう。確信は無いけど。

陽乃「何してるの？ほーらっ！」グイグイツ！

八幡「じ、自分で歩けますって。」

まあ、こんな説明を受けながらも、無事に目的地に着いた。見た所イタリア料理店だった。

皆さんなら意味分かりますよね？『力』から始まって『ザ』で終わ

るところですよ。

中に入り席まで案内してもらおう。なかなか雰囲気良いし、落ち着けるな。うん、この店なら俺1人でも入れそうだ。

そう思っているうちに席に着いたようで、座席に座ってメニューを受け取ると、店員は行った。

陽乃「比企谷くん、ここのオススメはガーリックトーストだよ。上ののっている野菜とマッチしていて凄く美味しいんだよ。」

八幡「は、はあ……」

陽乃「さーて、何食べよっかなあ？」

さて、俺も何食うか選ぶか……

数分後、お互いメニューが決まったので呼び鈴を鳴らして店員を呼び注文を済ませると、雪ノ下さんが少し驚いた様子だった。

陽乃「驚きだなあ。比企谷くんが私の言ったオススメを注文するなんて……」

八幡「以前なら疑ってましたが、もうそんな事しないでしょ？これでもちよつとは信用してるんで。」

陽乃「……うん、ありがとう。さて！それじゃあ続きするね。3つ学園残ってたね。次は、なんとクインヴェールだよ！」

八幡「なんか名前からして女子校だと思うんですけど。」

陽乃「おっ！鋭いね。クインヴェール女学園はその名の通り、女子校だよ！でえくもおく、だだの女子校じゃないんだな。」

八幡「……どういう事です？」

陽乃「この女学園はね……アイドルが多いんだよ！どう？そそる？興味ある？お近づきになりたい？」

八幡「いや全然全くこれっぽっちも。」

陽乃「えー！そんなの嘘だよ。1人くらいいるでしょ？興味あるアイドルの1人くらい。」

いや、嘘ではない。本当にアイドルには興味ない。だって想像してみろよ。ペンライト持って半被着はっぴながら叫んでる俺。気持ち悪過ぎんだろ……自分で言ってる悲しくなってくるな。

陽乃「まあ比企谷くんだしね。」

八幡「ちよつと？そういう意味？」

陽乃「別に。それじゃ次ね。次は星導館学園だよ。此処は他と比べてズバ抜けている所はあんまりないかなあ。魔術師と魔女が比較的多いくらいかな。」

八幡「まあ言っちゃあ悪いですけど、学校名にもそれといった特徴的なものがなんもなかったですよ。」

陽乃「でも、初めの頃は凄かったみたいだよ。三冠制覇グランドスラムを制した事もあるみたいだし。それに、この学園は純星煌式武装オーガルクスの保有量が六学園中一番みたい。」

八幡「純星煌式武装？」

陽乃「知らない？普通のは煌式武装ルークスって言って、マナダイトを使うんだけど、純星煌式武装はそれよりも純度の高い鉱物、ウルムⅡマナダイトを使ってるんだよ。」

八幡「そうなんすか……」

まだ知らねー事だらけだな。こっち来てからどれだけ勉強すりやいいんだ俺？

陽乃「じゃあ最後ね。聖ガロードワース学園っていつて今一番強い学園かな。総合優勝の数もトップで、規律と忠誠が規則で凄く厳しいみたい。決闘デュエルも原則禁止だからレヴォルフとは相性が合っていないの。」

八幡「学校名もなんか正反対ですからね、聖と黒ですもんね。」

陽乃「ちなみついだけど、ガロードワースの冒頭ページの十二人は銀翼騎士団ライフロードスって呼ばれていて聖騎士って言うみたいだよ。」

八幡「……………なんか厨二くさいですね。」

陽乃「言わないであげてよ。多分あつちは本気だから。」

でもなー……………こっちから見たらちよつと痛いぞ。材木座程じゃないが、西洋の文化入れすぎだろ。

店員「お待たせしました。」

陽乃「おつ、ちょうど来たね。タイミング良い！」

店員「以上で宜しかつたでしょうか？」

陽乃「はい、ありがとうございます。さー食べよつか比企谷く……………どうかした？」

八幡「いや、あの…この店のオススメってこのガーリックトーストなんですよね？」

陽乃「?……………そうだよ?どうして?」

八幡「俺……………実を言うとトマト駄目なんですよ。」

陽乃「……………え?」

しばらく沈黙が続いた……………

八幡 s i d e o u t

陽乃 s i d e

陽乃「はい、ありがとうございます。さー食べよつか比企谷く……………どうかした?」

なんか顔青いけど、どうしたんだろう?具合悪いのかな?

八幡「いや、あの…この店のオススメってこのガーリックトーストなんですよね?」

陽乃「?……………そうだよ?どうして?」

八幡「俺……………実を言うとトマト駄目なんですよ。」

陽乃「……………え?」

え!?比企谷くん、トマトが嫌いなもの!?どうしよう?オススメした料理がまさか嫌いな食べ物があったなんて……

陽乃「えつと……ごめんね。まさか嫌いな食べ物があるなんて思わなかったからさ。私が食べるよ。」

八幡「いえ、いい機会です。」

陽乃「え?」

八幡「ちよつと好き嫌い多いって思ってたんすよ。これ食べてみようと思います。」

陽乃「ム、ムリしなくていいよ?好きじゃないんでしょトマト?」

八幡「嫌いですけど、克服したい気もあつたんすよ。これならちようどいいです。ダメだったらお願いしてもいいっすか?」

……………本当にいいのかな?

陽乃「別にいいけど……本当に大丈夫?」

八幡「…出来れば、骨は拾って頂けると嬉しいです。」

陽乃「良い事言ってるだろうけど、あんまりカツコよくないからね?トマトじゃ死なないよ?」

八幡「……じゃあ、逝きます。」

うん……なんか『行く』の字が違ったような気がするけど、私はツツコまないからね。

八幡「……………」ガプツ!

あつ……食べちゃった……………

八幡「……………」

八幡「……………」
八幡「……………」

八幡「……………」美味い。」ボソッ

陽乃「…え？なに？」

八幡「美味しいです！こんな美味しいトマト初めてです。これなら食べられます！」

陽乃「そ、そう……良かったね。」

こうして比企谷くんはトマト嫌いを克服した。けど、この食べっぷりは本当にトマトが嫌いだったのか疑いたくなるな！。

乱闘からの出会い

陽乃 side

んー美味しかったー！でも比企谷くんの食べっぷりには驚いちやったなあ。あんなに食べるなんて、男の子だなあ。

陽乃「さてと、^{アスタリスク}六花の案内は一通りやったけど、なんか分からないところあった？」

八幡「いえ、大体分かりました。後は休日に適当に散歩しながら覚えますよ。」

陽乃「そつか……ねえ、この後どうする？私は鍛錬に行くけど、比企谷くんも来る？」

八幡「……いえ、もうちょつと見て回ります。なんかあるかもしれないんで。」

ふーん……やっぱり変わったなあ。前よりも積極的だし、何より意志を感じる。強くハッキリとした意志が。

陽乃「分かった、それじゃ私は行くね。じゃあまた、学院でね。ばいばーいっ！」

よし！今日も頑張ろーっと！

陽乃 side out

八幡 side

さて、俺も街の散策と行くか。それにしてもさつき結構食ったはずなのに、あんま食った気しないんだよな。なんでだ？まあ、普通に商業エリアでもうろつくか。

――商業エリア――

八幡「やっぱ千葉と違って色んなもんがあるんだな、見慣れた建物でも初めてに感じるな。どこの店も目移りしちまうな。やっぱ初めて来た時はこういう感じなのか？」

……あつ、洗面具とか買っておかねえと。昨日風呂に入っただいけど、ボディソープが全然なかったからな。ボトルの中身すらかんに等しかった。前この部屋使ってた奴どんだけ体臭気にしてたんだよ。

……ここが雪ノ下さんがよく行ってる洗面用具店だよな。早速入ろ

ナンパ1「いいじゃねえかよ、ちよつとくらい。お茶するだけだつて。」

ナンパ2「そーそ。時間なんてとらせねえって。すぐ終わるって。」
女の子「もうーさつきから断ってるでしょ。なんでそうしつこいかなー。」

……うとしたが、なんか聞こえた。なにやらナンパされてるらしい。ナンパ師も相当しつこく絡んでるらしく女の子も迷惑そうにしてる。

めんどくさいが、ああいう輩は見ていて腹が立つし、助けるか。それに少しは自分の力にも慣れておかないといけないしな。

女の子「だ・か・ら！嫌だって言ってるでしょ！」

ナンパ1「ちよつとだけだって！いいじゃねえか。」

ナンパ2「頼むよー、いい加減「おい、あんたら。」……あ？なんだテメエ？」

八幡「その辺でやめたらどうなんだ？その女の子迷惑してんじやねえか。付き纏うのやめてやれよ。」

ナンパ1「はあ？お前には関係ねーだろうが！さっさとどっか行けよ!!」

八幡「お前らがどっか行くなら俺も目的の場所に行つてやるよ。そのまま放置しても、目障りなだけだからな。」

ナンパ2「アツタマ来た！コイツツ!!お前からミンチにしてやるよっ!!」

そう言つて短剣型の武器を持つて突進して来た。そんなの当たるわけねえだろうが。

俺は短剣を持つてる方の腕を左手で掴み、後ろに引き寄せてからそのまま右肘で顔を打つ。いわゆる肘鉄だ。

ナンパ2「ぐあああああつ!!は、鼻があああ!!痛えよおお!!」

ナンパ1「こ、この野郎っ!」

次の相手は斧型武装を持っていたが、これも別に問題はない。

相手が振りかざして来た腕の二の腕の部分で自分の二の腕で抑え、相手の脚を蹴つて上体を崩してから顔に一撃を食らわせた。

ナンパ1「いつてえええ!!コノヤロー!やりやがったな!!」

八幡「まだやんのか？次は目玉いくぞ?」

ナンパ1「ひ、ひい!!」

八幡「懲りたならさっさとそいつ連れてどっか行けよ、目障りだ。これに懲りたらこんな事は2度とするなよ?」

ナンパ1「ご、ごめんなさーい!!」

ナンパ2「……………」ズルズル

……………はあ、やっと思つたか。まあこんなんでいいだろ。さてと、

俺はボディースープ買いに「あつ、ねえねえ！」行けなかった。さっきの女の子がやって来た。

女の子「助けてくれてありがとう。それでさ、何かお礼がしたいんだけど……」

よく見るとスゲー美人だった。腰くらいまで伸ばした栗色の髪に整った顔。深く被った帽子が好奇心をくすぐる感じだった。スタイルもかなり良く、思わず見惚れてしまうくらいだった。

……つと、これじゃ俺もあいつらと同じだ。

八幡「いや、別にいいいで。俺も見てて気分が悪かったから追い払っただけですし……じゃ。」

女の子「ねえ待つてよー。それじゃ私の気が収まらないよ。何かさせてよ。ね？お願い？」

んな事言われてもなあ……まっ、適当に言ってあしらうか。

八幡「そんじゃ、甘い食い物がある店って知ってますか？そこ教えてください。」

女の子「え？うーん。じゃあここ知ってる？私のさつき行った場所なんだけど。」

……あつ、知らねー店だ、ラッキー。これで撒ける。

八幡「ほう、こんな店があつたのか。知らなかったです。どうもつス。」

女の子「敬語はいいよ。それと甘いもの好きなの？そうには見えな いけどなー。」

八幡「……そうか、そう見えるか。まあ別に構わねーけどな。そん じゃ。」

八幡「……」テクテク

女の子「……」テクテク

………何でついてくるんだよ？じゃあなって言ったよね？

八幡「……なあ？何でついてくんの？」

女の子「お礼するって言ったでしょ？」

八幡「さつき店教えてくれただろ。紹介してくれただけでいい。」

女の子「私が良くないの！だからほら、はやく行こう！」

八幡「いや、だから「行ーくーのー!!」わ、分かった。分かったから。」

………彼女は頬を膨らませながら、そう言う俺はあっさり了承してしまい、いつの間にか嬉しそうに俺の手を引っ張りながらスイーツ店に向かっていった。

お礼のつもりが……

八幡 side

言われるがままについて来ちゃったが、なんてゆーか、あんま男が入れそうにない店だなここは。

……それでも入るしかないのか。

女の子「ここだよ！さっ！入ろ！」グイッ！

八幡「お、おい……」

カランカランッ

店員「いらつしやいませ！2名様で宜しいでしょうか？」

女の子「はい。」

店員「お席へ案内致します。こちらになります。」

あく予想通り女子とか女性ばつかな。ていうか女しかおらん。

店員「こちらになります。メニューはそちらの方になりますので、決まりましたらお呼び下さい。ごゆっくりどうぞ。」

そう言ってから店員は言ってしまった。良かった。席は奥の方だからあんまいいねえ。店員さんGJ！

女の子「改めて、さっきはありがとう。助かったよ。」

八幡「気にすんな、俺も見てて気分が悪かったから追い払っただけだ。」

女の子「それでもだよ。本当にありがとう。えーと……名前なんて

いうの?」

八幡「比企谷だ。」

女の子「下は?」

八幡「は?」

女の子「だから名前だよ! 苗字だけじゃ分からないでしょ。」

八幡「……………比企谷八幡だ。」

女の子「へえ、八幡くんかあ……………よろしくね八幡くんっ!」

この子いきなり名前呼びだよ。抵抗ないのか? 俺みたいな男にそんな事したら勘違いされんぞ。俺はしないけど。

女の子「でも、ゴメンね。教えて貰つといてアレだけど、私の名前あんまり他の人には言いたくないんだ。」

八幡「いや、言いたくないなら別にいい。興味ないから。」

女の子「ムッ……………やつぱり言っつていいかな? 言いたくなっちゃうた。」ムスッ

八幡「いや、言いたくないんじゃないのか? 別に無理しなくていいーや! 絶対言うからね! でもあんまり知られたくないから耳貸して!」……………そこまでする程なのか? 逆に聞きたくないんだが。」

女の子「……………ねえ、八幡くん。」

八幡「……………なんだ?」

女の子「……………嫌なの?」ウルウル

八幡「……………は?」

女の子「……私の名前、そんなに聞きたくないの？」シユン：

八幡「むう……………」

これは正直キツイ。俺としてはこの人の名前なんてどうでもいい。だつてこの場限りだと思うし。もう一生会わないだろうし……いや、一生は言い過ぎか。まあとにかく興味はない。だが、こんな顔されるとなあ……………こつちが居たたまれなくなる。はあ、しょうがねえか。

八幡「はあ、分かったよ。聞くからその顔やめろ。気まずい。」

女の子「……それがものを頼む態度？」ムー

八幡「聞いてやらねえぞ。」

女の子「それならそれでいいよーだ。」プイッ

八幡「そうか、なら帰る。じゃあな。」ガタッ

女の子「あー！待って！言う！言うから待って！お願い待ってよー！」ギョッ！

こいつスゲエめんどくせえ……………それと手を掴むな。

八幡「……分かったから手を放せ。」

女の子「うん……………じゃあ耳貸して。」

八幡「……………なあ、それって絶対やんなきゃならん事なのか？」
女の子「うん。今は知られたくない。」

八幡「はあ、分かったよ。だが、やるなら早くしてくれよ。」ヤレヤ
レ

俺、耳弱いんだから。

女の子「分かってる。じゃあ言うね？」

女の子「私の名前は……………シルヴィア・リユーネハイムっていうんだ。」ボソツ

八幡「……………そうか、分かった。」

シルヴィア「……………え？」

八幡「ん？どうした？」

シルヴィア「あの…私の名前。」

八幡「ああ、聞いたぞ。」

シルヴィア「聞いた事ない？」

八幡「変な事を聞く奴だな。今初めて聞いたに決まってるだろ。何を当たり前なことを聞いてんだよ。」

シルヴィア「え……ええー!!!」ガタツ!!

八幡「……………」

シルヴィア「あ……あうう／／／／」プシュー

大声を出し、立ち上がったリユーネハイムは、顔を真っ赤にしてすぐ席に座った。

シルヴィア「うう……………」ウルウル

おいおい大丈夫かよ、涙目になってんじやねえか……………でも、言っちゃ悪いが結構可愛いな。」

シルヴィア「／／／／／」プシュー

あれ？さらに赤くなった？しかも湯気っぽいのが出て来たぞ？マジで大丈夫か？蒸気機関の真似？

シルヴィア「…………八幡くんの意地悪。」キツ！

八幡「…………おい、俺が何したよ？」

シルヴィア「…………今の声に出てたもん。可愛いって声に出てたもん。言ってたんだから／／／」

…………うおおおお!!!やらかしたー!!何やってんだよ俺!?!んな事この状態で言われたら、そりや怒るわ!!ああー黒歴史が増えたあー

!!

八幡「……えと、その、悪かったな／／／」
シルヴィア「う、うん／／／大丈夫／／／」

……とても大丈夫そうには見えないんだが。

シルヴィア「………そ、それで本当に私の事知らないの？」

八幡「あ、ああ、知らん。聞いた事ない。この六花では有名なのか？」

シルヴィア「ううん、一応有名な方だと思ってたんだけどな………つて六花では？もしかしてここには来たばかり？」

八幡「おう、実は昨日来たばかりだ。」

シルヴィア「そ、そうだったんだ。うう／／／……八幡くん。もう注文決めて、早くこのお店から出よう／／。段々このお店に居るのが恥かしくなってきた／／／」ウルウル

八幡「お、おう、そうだな。」

シルヴィア「それと、名前に関しては誰にも喋らないでね!!絶対に言わないでよ!!」

八幡「お、おう、分かった。」

そう言う俺達は手早くメニューを決め、気まづいながらも会話をしながらデザートを食べた。そして食べ終わるとすぐさま伝票を持ち、会計を済ませるとそそくさと店を出た。その際、他の客から見られていたのは言うまでもないだろう。

シルヴィア「うう、あんなにストレートに可愛いなんて言われたの初めてだよ／＼それに、まだ顔が熱いよお／＼」

約束

シルヴィア side

はあ……さつきは恥ずかしい思いしちゃったな。店内であんな大声で叫んじゃったし、しかも彼には……かか、可愛いなんて言われちゃったし……言われ慣れてる筈なのに、どうしてだろう？

八幡「……大丈夫か？落ち着けたならいいんだが……」

でも、やっぱり根は優しいみたい。みんな彼のこの眼に騙されてるんだらうね。

八幡「その、悪かったな。お前は有名みたいだが、最近とかはテレビとかあんま見てなくてな。」

シルヴィア「ううん、気にしないで。」

八幡「良い店教えてくれてありがとな。じゃあ俺はまだ用事があるから、此処でお別れだ。」

シルヴィア「その用事って？」

八幡「洗面用具とボディソープ買おうと思ってな。あるにはあったが、もう空になりそうだったんだ。」

シルヴィア「へえ、そうだったんだ。なんかゴメンね？邪魔しちゃったみたいで。」

八幡「別にお前が謝る事じゃないだろ。それに、あれは俺が目障りだからやったまでだ。お前の為じゃねーよ。」

シルヴィア「素直じゃないな。別に恥ずかしがらなくてもいいのに。」

八幡「べ、別にそんなじゃねーよ。」

あ、噛んだっ！ふふっ、かあゝわいゝ♪なんか意外とからかい甲斐

があるなあ。

シルヴィア「じゃあ、その洗面用具の買い物も手伝ってあげるよ。」

八幡「は？普通にいやだけど。」

シルヴィア「即答なんてひどいなー。いいじゃない別にー。」

八幡「さっきのでもう十分だ。」

シルヴィア「むうく分かった。じゃあ、勝手について行くからね。」

八幡「ついて行くって、お前なあ……」

シルヴィア「後、そのお前って呼ぶのやめてよ。私の事はシルヴィって呼んで。」ジトオー

八幡「……なんであだ名？」

シルヴィア「親しい人にはそう呼ばれてるからね。いい？」

八幡「いや、別にリ्यूネハイムでも良くねえか？今日初めて会ったのにあだ名呼びとか……」

シルヴィア「親しくなるのに初対面も何もないでしょ？私も八幡くんって呼んでるんだから。これから私のことはシルヴィって呼んで！」ニコニコ

八幡「……まあそのう「シルヴィ。」ち………」

八幡「……リ्यूネハ「シルヴィ。」」

八幡（どうしても呼ばせるつもりか？コイ「シルヴィッティッテルヨネ？」……心の中まで読まないでほしい。それより今、メチャメチャ声低かった上に目が笑ってない……怖いんだけど。）

八幡「分かったよ……シ、シルヴィ。」

シルヴィア「よろしい！それじゃ、行こっか！八幡くんっ！」

よーし！仕返ししてやるぞー。今度は私のターンなんだから♪

――店内――

シルヴィア「八幡くんって普段はどういうの使うの？体質とか何かある？」

八幡「体質は特に何もねえな。それに特にこれというものもないし、家にあるのを使っただけだから分からんな。」

シルヴィア「うーん、それじゃ分からないな。じゃあせめて、こういう香りが良いとかない？」

八幡「そうだな……まあ、柑橘系だな。でも、あんまり高いのは無しだぞ。」

シルヴィア「はい……それじゃ、これはどうかな？私も前まで使ってたんだ。」

八幡「ここサンプルとかはないのか？」キョロキョロ

シルヴィア「あるけど、シャンプーとかが多いかな。ボディーソープはあんまり見た事ないかな。」

八幡「そうなのか。じゃあ、これにするわ。」

決めるの早いなあ……もつと何かないのかなあ？これじゃからかえないよ……

シルヴィア「口を挟んで悪いけど、そんなに簡単に決めちゃっていいの？」

八幡「今は金がねえからな。あんま贅沢できねえんだよ。」

シルヴィア「そうなんだ……あつ、じゃあさ、シャンプーは私が買ってもいいかな？ほら、今はあつてもそんなに量ないんでしょ？だったら、今買っておいてストックしておけばいいんじゃない？」

八幡「俺としてはありがたいが、いいのか？そんな事してもらって。」

シルヴィア「いいのいいの！私がしたいんだから！」

八幡「……ありがとな。」

シルヴィア「どういたしまして♪次はシャンプーを選ぶけど、何かリクエストある？」

八幡「同じ柑橘系でいい。」

シルヴィア「八幡くんって香りとか気にしないタイプなの？」
八幡「いや、そういう訳じゃないが、一々悩んでもしょうがねえかな。それなら同じ匂いで統一しても構わないと思ってな。」

あつ！閃いちやった！ よーし！これならいけるっ！

シルヴィア「じゃあさ、私の今使ってるのはどう？ちよっと嗅いでみてよ。」

八幡「……え？サンプルはないのか？」

シルヴィア「あるけど、使用者の直接嗅いだ方が信憑性が沸くんじゃないかな？」

まあ、嘘だけどね♪

八幡「そ、そういうもんなのか？でも、直接匂い嗅ぐのは結構抵抗あるんだが……」

シルヴィア「そんなのいいから！男は度胸だぞ！すぐやれば済むんだから！」

八幡「……わ、分かった。じゃあ、失礼して嗅がせてもらうぞ？」
シルヴィア「はい、どうぞー。」

ふふふっ。さーて、彼がどんな反応するのか楽しみだなあ。

……………スツ（肩に手をやる）

お、中々大胆だねー。

八幡「じゃ、じゃあいくぞ？」

シルヴィア「うん、いいよ。」グイッ

おっと、どうする気かな？

八幡「……………」スウ……

シルヴィア「！」ビクッ

八幡「お、おい、大丈夫か？」

シルヴィア「う、うん！大丈夫だよ!? つ、続けて！」

八幡「お、おう。」スウ……

ううう!! 八幡くん大胆すぎるよお。これじゃ抱き寄せてるよう
にしか見えないよお。／／／／／

も、もしかして分かっててやってるのかな? 何にしても、またやら
れちゃったよ。／／／／／

シルヴィア「うう……／／／／／八幡くん、まだ終わりそうにない
?」チラ……

八幡「あ、ああ悪い。ちよつと長引かせちまったな。顔赤いが大丈
夫か?」

シルヴィア「……………だいじょうぶらいひようぶ。」

八幡（いや大丈夫じゃねえだろ、呂律回ってねえぞ。でも、メツチャ
良い匂いだった。ずっと嗅いでいたくらいだった。）」

ななな、なんて事を平気な顔で言うのさ!!? そんな事言われたら顔な
んて見られないよお!!／／／／／

シルヴィア「……………そ、それじゃあ、この香りにするの?」

八幡「あ、ああ……………気に入った。」

シルヴィア「……………じゃあ、早く買って早く出よう。」

八幡「お、おう。そうだな。」

八幡（なんかスゲエ不機嫌になってないか? 顔も赤えし何よりこつ
ちを見てくれない。ま、まあ流石に嫌だよな、こんな奴に髪の毛の匂い嗅
がれるなんて……………あれ、さつきから目の前が滲んで見えるのは気の

せいかな？)

男店員「いらつしやい、お嬢さん。いつもありがとね。でも、店内でああいうのはちよつと控えてくれないかな？ 彼氏に勧めたいのは分かるけど、他のお客さんもいるから、ね？」

シルヴィア「く!!／＼／＼／＼」コクッ

男店員「彼氏くんも、そこはよろしくね？」

八幡「え、あ、はい。」

八幡(『はい。』じゃねえよ、彼氏でもねえよ。なんなら今日会ったばかりだよ！)

――店舗前――

八幡「そ、その、悪かった。ちよつと夢中になり過ぎた。」

シルヴィア「……………」コクッ

八幡(参ったな……………さつきから首を縦横に振るだけで、何も喋ってくれねえ。これはいいよどうすりゃいいか分からん。)

八幡「なあ、一回なんでも言う事聞いてやるから許してくれねえかな？」

シルヴィア「……………なんでも？」ピクッ

八幡「お、おう！なんでもだ！」

八幡(この際、もう玉砕覚悟だ！なんでも来やがれてんだ！)

シルヴィア「……………じゃあ、近いうちにまたデートして。それなら許してあげる。」

八幡「……………え？デート？」

シルヴィア「うん、デート。」

八幡「き、今日のも……デ、デートなのか？」

シルヴィア「うん。」

八幡「お、おう、そうか。じゃあ今度また出かけるか。」

シルヴィア「お出かけじゃないよ。『デート』なんだからね。」

八幡（やたらとデートを強調してくるな。）

八幡「わ、分かった。」

シルヴィア「そ、それじゃこれ、私のアドレス！いつでも連絡して
！」

シルヴィア「約束……だからね？／／／」ウワメヅカイ

八幡「！お、おう……／／／」

……

シルヴィア「そ、それじゃあまたね！私の名前の事は誰にも言わないでね〜！」

タツタツタツ

八幡「……………行っちゃったな。」

——クインヴェール女学園校門前——

シルヴィア「はあ……………はあ……………はあ〜疲れた。」

こんなに走ったのはいつ振りだろう。でも悪い感じではない。むしろ良い気分だった。

でもなんだか今までにない感情だった。心臓の鼓動が早い上に身体中熱い。走ったからかな？身体も自分の思う以上に動いてた気がする。

シルヴィア「……………」

彼がいたから？一緒に行動していたから？

……うん、そんな訳ない。だって彼とは今日初めてあつたんだから、そんな運命的なことなんてあるわけないよ。

でも、もしかしたら……………

シルヴィア「……………また、会いたいな。」

???「誰に会いたいのかしら？」

シルヴィア「っ!？」

???「貴方が周りに気を配らないなんて珍しいわね。何かあつた？」

シルヴィア「……………ペトラさん。」

ペトラ「キヴィレフト。クインヴェールの理事長であり、私やルサルカのプロデューサー。」

ペトラ「息抜きしてくるって行つたきり、4時間も連絡はないし、どうかしたの？」

シルヴィア「い、いえ、別になんでもありません。」

ペトラ「何でもない子が、そんな乙女な顔するわけないでしょ。」

シルヴィア「え!?!／／／」

ペトラ「はあ、良い男でも見つけたの？貴女がそんな風に緩んだ顔をするなんて驚いたわ……………それよりも、しっかりしなさい。もう《リンドブルス王竜星武祭》まで2ヶ月なのよ？今年もレヴォルフの【エレンシユギーガル孤毒の魔女】がいるんだから。」

シルヴィア「……………うん、分かつてる。」

八幡くん、今度はいつ会えるか分からないけど、電話くらいちょうだいね？私はいつでも待ってるからね。

クラスの顔合わせと嘆き

八幡 side

昨日はとても壮絶な日だった。雪ノ下さんによる案内が終わったと思えば、その後に出会った美少女について帰って調べたら、世界的な歌姫でありながら、クインヴェール女学園の生徒会長にして序列1位、二つ名に【戦律の魔女^{シングルドリーヴァ}】を持つ有名人、シルヴィア・リユーネハイムだった。

……小町がテレビ見ながらワーキヤー騒ぎながら言ってたな。まあどうでもいいが。

そんな現在の俺はというと……

虎峰「そうです。最初は下から履いた方が上手く着られます。」

虎峰に制服の着方を教わっていた。何故かというと、俺は生まれてから今日まで中華服を着たことがないからだ。それに俺の制服着るのむずいんだよ！色でさえ違うのに、制服の原型まで弄りやがってあのチビっ子……

片方普通の袖なのに、もう片方は直裾ってどう言う事？着にくいにも程があるだろ。

八幡「悪りいな虎峰、なんか付き合わしちまって。」

虎峰「いえ、気にしないでください。漢服を着た事がない人なら通る道ですから。」

八幡「それはここの制服と直裾が合わさったものであってもか？」

虎峰「……すみません、そう言われると何も言い返せないです。」

八幡「いや、別に責めてる訳じゃねーよ。多分あのチビっ子だろ？」

虎峰「間違ってはいないのですが、師父をチビっ子呼ばわりとは……」

……
いやいや、別にいいだろ。あれはどこからどう見たってチビっ子だ

八幡「とにかく、早く着付けて飯食って職員室行きてーからよろしく頼むわ。」

虎峰「はい、分かりました。」

そう言つて俺は着付けを済ませ、朝飯を済ませてから職員室に向かった。

なお、朝飯の時、多くの視線があつたのは気のせいだと思いたい。

――職員室――

担任「君が比企谷くんかな？」

八幡「は、はい。」

担任「なるほど君が……小苑殿が言つてた子だね。うんうん、人の本性を見抜けるいい眼をしてるね。」

虎峰「先生、僕は教室に戻ってます。」

担任「うん、ご苦労様。」

担任「さて比企谷くん、今日から君はウチのクラスでやっていくけど、2つ言わせてね？」

八幡「はあ……」

担任「黎兄妹には気をつけてね。あんまりクラスの子を悪くは言いたくないんだけど、あの子達は性格が捻くれてて、すぐ人を見下す傾向があるんだ。認めさせるには、やっぱり強さかな。ここは一応、実力主義の学院でもあるから。」

八幡「そんなに酷いんですか？」

担任「彼らの上にいる人達には行儀良いけどね。でも、普段はとても捻くれてるから警戒くらいはしといてね。」

同じクラスなのに警戒しないといけない程か。そんなにかよ……
もういい加減なんとかしろよ……

担任「2つ目は、木派と水派の仲だね。これは聞いてる？」

八幡「はい、虎峰から。」

担任「なら説明は省くけど、どっちに入るかは考えておいてね？ 勧誘とか物凄く激しいから。偶に乱闘まで起きちゃうから。」ウンウン

八幡「あの……どっちにも入らないって選択肢はないんですか？」

担任「別にそれでもいいけど、後が大変だよ？ 冒頭^{ペー}の十二人^ジとかになつたら尚更だよ？ それくらい凄^ワいんだから。」

八幡「まあ、決めた事なんで。」

担任「それなら止めないけど、頑張つてね。僕は担任だけど、何もしてあげられないから。」

そう言うとは何処か同情したかのような表情をしていた。え？ 何さ
れちゃうの俺？ 全員からリンチ受けたりしないよね？

担任「あ、それからもう1つ。今日の放課後に純星煌式^{オーガルクス}武装の選定・適合率検査をするようだから、問題なかったらこれにサインしてもら
えるかな？」

八幡「俺、別に普通の煌式武装でもいいんですけど……」

担任「それがね。ルーちゃんがしてくれって、聞かないんだよ。訳
は分からないけど、何かあるんじゃないかな？」

八幡「はあ、分かりました。じゃあサインします。」

担任「うん、ありがとね。朝からこんなにバタついててゴメンね。
ルーちゃんかなり自由な人だから。」

八幡「……因みに、ルーちゃんってあの会長（チビっ子）の事で
すか？」

担任「（今何か余計なのも混ざっていたような……）うん、そうだよ。
あ、これは僕がこう呼んでいるだけで他の皆は呼ばないからね。こん
な呼び方するのは、僕と小苑殿くらいだよ。」

担任「それじゃあ時間もいい頃だし、そろそろ教室に行こうか。皆も待ってるだろうからね。」

――教室前――

担任「さてと、着いたけど比企谷くん。覚悟はしておいてね？木派と水派の勧誘は本当に凄いから。」

八幡「まあ、それなりには覚悟してますけど、そんなに強烈なんですか？」

担任「うん。だから………チユーニイーハオユイン祝イ尔好運。」

八幡「……………え？」

担任「幸運を祈るって意味だよ。」

八幡「ここまで来てそんな事言わないで下さいよ。入りたくなくなってきました。」

担任「そこはまあ、頑張ろうよ。」

八幡「人をハメるのが上手いんですね。」

担任「じゃあ、僕が【入って来て】って言ったら教室に来てね？」

あ、行っちゃった。しかもスルーして。

担任「みんな、おはよう。HRを始める前に、知ってる子もいるだろうけど、このクラスに転入生が入ります。」

ザワザワツ

うわーめっちゃザワザワしてるよ。俺今からこの中に入んのかよ

……

担任「それじゃ、入って来て。」

さて、行きますか。

担任「紹介するね、今日からこのクラスメイトになった比企谷くんです。」

八幡「比企谷八幡です。日本の千葉から来ました。よ、よろしくお願いします。」

担任「それじゃ質問をしたい子はあるかな？」

ほぼ全員「はいっ!!」

殆ど全員じゃねえか。虎峰……お前もか。

八幡「じ、じゃあ、廊下側の一番手前の人で……」

生徒「木派と水派、どちらに入る予定ですか!? 因みに私は木派です！」

というよりお前ら、それしか聞く気ないだろ。こちら予想してんだよ。

八幡「えーと、それに関してだが、俺はどちらにも入る気はないから。」

よし！言っちゃったぞ！

……………ていうか、静か過ぎね？

ほぼ全員「「なんだってー（なんでー）（何故だー）（如何してですかー）!!!?」」

………こうして俺の初めての顔合わせは、とてつもなく大きな音響（声）によって始まった。

………鼓膜痛い。

何故こうなった……

八幡 side

ほぼ全員 「「なんだってー（なんでー）（何故だー）（如何してですかー）!!!?」
「!!!?」
八幡 「っ!!!」

俺は絶叫される事は想像していたが、ここまで大きな声でやられるとは思わなかった。さっき先生の言った意味がやっと分かった。

木派「何故だ!? 何処にも属さないとはどう言う事なのだ!? 考え直せ! 比企谷八幡!! 君は武術の才がある! 木派に入るべきだ!!」

水派「君! 冗談も大概にしたらどうだ!! 比企谷くんには拳よりも、星仙術を使った戦い方が似合っているのが分からないのか!」

木派「またしやしやり出て来たな! 水派の愚者共め! いつもいつも邪魔をするなど言っているだろ!!」

水派「それはこっちの台詞よ! 貴方達の方が邪魔をしてるんじゃない! いつもいいいつもいい加減にしないよ!」

ギャーギャーワーワー!!

……いつの間にか俺置いてかれてね? なんか勧誘されたと思ったら、勝手に口論し始めたぞ? これ俺転入してないとしても絶対毎日やってるだろ?

虎峰「何故ですか八幡!? 一昨日あれ語り合ったではありませんか!?!」

セシリー「確かにどっちにも入らないのは気になるねー。虎峰にはいいから、おねーさんに教えてみなよー比企谷。」ズイツ!

理由か。そんなのは特にないんだが……強いて言えばどっちも上手くなりたいたいから何だが、それでは駄目だろうか？

虎峰「何を言うのですかセシリー!? 僕もその理由は気になります！
教えて下さい八幡!!」クワツ！

「ふむ、確かに気になるね。」

「是非とも、教えてほしいものですわ、ねえ？ 趙師兄、セシリー
姉。」

ん？もしかしてこの2人が双子か？そっくりじゃねえか……

うつ、今まで気にしてなかったが、ここの女子の制服って結構胸元
開いてるよな。目のやり場に困る。

虎峰「沈雲に沈華……」

セシリー「なにになにー、あんたらも気になるのー？めずらしい
ねー。」

沈雲「はい。何故どちらにも入らないのかと、制服の色や種類がな
ぜ違うのかどうしても気になったもので是非とも教授願えないかと
思いました。」

沈華「それに眼だけではなく、根まで腐っているのかと思うと……」
「その理由まで腐っているのではと思うと、気になって仕方ないので
す！」

うわあ……こいつらマジで最悪じゃねえか。先生は性格捻くれて
るって言ってたが、こつちね。俺とは違う捻くれ方してんじゃねえ
か。

虎峰「お前達！出てくるなり失礼だぞ！」

セシリー「あんた達、今日も絶好調だねー。まあ、初対面の人に

きなりそれってのはアレだと思うけどね。」ギロツ

沈雲・沈華「……………」

おいおい、セシリーが間延びした喋り方を辞めて声が低くなったと思つたら、この双子黙っちゃったよ。もしかしてセシリーって強かったりする？

八幡「いや、気にしないでいい。目に関してはもう諦めてるからな。」

セシリー「比企谷、無理しないでいいよ。後でウチの部屋に来なよ。慰めてあげるからさ。」

ちよつと？何言い出しちゃってるの？女の子が簡単にそんな事言っちゃいけません。

虎峰「セ、セシリー!?いい、いきなりなな何を言つて!」

八幡「あーいや、マジで大丈夫だから気にすんな。目が腐ってるなんて言われ慣れてるからな、今更だ。」

虎峰「それはそれで慣れるのもどうかと思うのですが……」

八幡「しょうがねえだろ。ほぼ毎日こんな事言われてりや嫌でも慣れるわ。」シレー

虎峰「ほぼ毎日!」ギョツ!

セシリー「……………ねえ比企谷、やっぱりさっきのなしでもいい?」

八幡「おう、別にい「今日はあたしの部屋に泊まりに来なよ。」……………え?」

え?何言ってるのこの子は?

セシリー「よく頑張ったよ、比企谷は。今日は1日私が慰めてあげ

るからさ。」ナデナデ

八幡「はっ!? い、いや平気だつて! つか頭撫でるのやめろ! おい虎峰どうなってんだ!? なんかセシリーが急に性格変わったぞ!」

虎峰「えつと……セシリーは人が辛い目に遭ったのを聞くと、凄く同情して慰めようとするんですよ。ちょうど今がそんな感じですよ。セシリーは普段の性格が大雑把なのに、お姉さんぶる一面もあるので、理不尽な目に遭った人を放っておけないみたいなんですよ。」

沈雲「比企谷くん、君の事も知らずに済まなかったね。」メカクシ
沈華「罵声は少なくして、イタズラ程度にするから……」メカクシ
「許してくれると嬉しい(わ)」チラツ

八幡「罵声に関してはなくなってねえし、イタズラ増えてんぞ!? 分かった! 許す、許すからセシリー何とかしてくれ!」

虎峰「すみません、八幡。そうなってしまったセシリーを止められるのは誰もいないんです。諦めて下さい。」

八幡「そんな事言うなよ!? 頼む! じゃないと部屋に連れてかれちゃう!」

セシリー「部屋は嫌? じゃあ、ここでもいいよ。おねーさんに任せなよ。」ナデナデ

おい! なんでそうなる!? 誰もそんな事言つてないからね? クラスの奴らも静かになってこっち見てるよ? ほら、俺の事白い目で見てるから!

女子「…………グスッ。」

男子「…………」ホロリ…

おいー!!なんでそうなってるの皆さん!!大丈夫だよ?何ともないから大丈夫だよ?ハチマンウソツカナイ。

担任「比企谷くん、辛かったんだね…………うん、分かった。HRから1時間目は自習にします!」

ご心配なくっ!平気ですから!頼むから人の話聞いてお願い。

セシリー「比企谷、じつとしててね?」ナデナデ

この時間は放課後に至るまで続いた。流石に授業中はしてこなかったが、あれはただの辱めだ。

こうして俺の初めて過ごす学校の1日は、変な始まり方をしたのだった。

————おまけ————

————食堂————

陽乃「ひつきがーやくーん!一緒にお昼食べよう…………って、どうしたの?凄くゲツソリしてるけど?」

八幡「雪ノ下さん…お願いします。聞かないで下さい。」ゲツソリ…

陽乃「えーと…………何があったの?」

虎峰「実はセシリーのアレが…………」

陽乃「そういう事ね。私は聞いたただけだけど、そんなに凄いの?」
沈雲「流石の僕達も今の彼を見ると…………」

沈華「貶す気分にはなれませんか……」

陽乃「そ、そう……」

バーンツ!!

セシリー「比企谷ー、お昼食べさせてあげるよー。」

八幡「い、いやセシリー、俺はもう大丈夫だ。だから飯は1人で……」ゲツソリ……

セシリー「遠慮しないでいいよー。ほら、注文してくるから座って待ってなー。」

八幡「マジか……」ゲツソリ……

4人「……」

陽乃「なんと言うか……圧倒されるね。」

陽乃「あれってさ、甘やかしてるだけじゃない?」

虎峰「はい、あの状態のセシリーには何を言っても意味がないので。」

沈雲「いたたまれないとはこう言う事を言うんでしょうね……」

沈華「少し同情しますわ……」

陽乃「……さ、私達は私達でお昼を食べようか。比企谷くんには申し訳ないけど。」

3人「はい。」

セシリー「ほら比企谷ー、あーん。」ニコニコ!

八幡「勘弁してくれ……」ゲツソリ……

――――

今日から始まった学校生活の時間は八幡にとってこれ以上ない辱めになっていた。それは放課後になっても続こうとしていた。

セシリー「比企谷、ウチの部屋に行くから早く来なよ。」グイッ
八幡「…………いや、部屋には行かないんじゃないのか？それと、この後は用があるからどのみち行けん。」

セシリー「用？それってー？」

八幡「^{オルガ}純星煌式武装の選定と適合率検査をする。だからここまででいい。」

八幡（……正直、もう耐えられない。）

セシリー「ウチもついて行こうかー？」

八幡「いや大丈夫だ。お前にも鍛錬とかあるだろ？そっち優先にしろよ。」

八幡（むしろあの空気ですんなことやってみろ。あのチビっ子が黙ってない。余計にうるさくなりそうだ。）

沈雲「そうですよ姉姉。あまりやり過ぎるのはよくありません。」

沈華「今日はここまでにしては如何でしょう？セシリー姉姉。」

八幡がそう心で思っている時、^{リー・シエンユン}黎沈雲と^{リー・シエンファ}黎沈華が意外にも助け船を出して来た。

八幡（え？本当は良い奴等なんじゃね？）

セシリー「んー、まあ確かにねー。構い過ぎたら逆に嫌われるって言うしねー。」

2人「はいその通りでございます。」

セシリー「じゃあ比企谷ー、あたしは鍛錬に行くからー。また明日ねー。」

八幡「お、おう、じゃあな。」

そう言つてセシリーは去つていった。鍛錬場に行つたのだろう。

八幡「すまん、助かった。」

沈雲「いいや、気にしなくていいよ。せめてもの罪滅ぼしだと思つてほしい。」

八幡「罪滅ぼし？」

沈華「今朝はごめんなさい。師兄達の言つた通り、初対面でする言動ではなかつたわ。改めて謝罪をしに来たの。」

八幡「ああ、その事か。いいよ別に。なんならその罪滅ぼしに色々教えてくれ。お前らつて道士^{タオシー}か？」

沈雲「うん。僕ら兄妹はどちらも道士だけど……」

八幡「なら星仙術の使い方とか教えてくれ。俺は呪符とか使わねえからこれといった使い道がないんだわ。」

沈華「貴方、魔術師^{ダンテ}なのよね？何か能力はないの？」

八幡「強いて言うなら、影だな。後は……幻つていうのかあれは？まあ、そんなとこだ。」

2人「……地味。」ジトオー

八幡「おい、俺だつて気にしてんだから言うなよ。」

沈雲「まあそれはさておき、分かつたよ。星仙術の事なら任せてくれていいよ。」

沈華「一応私達、星仙術には詳しいの。」

八幡「おう、サンキューな。えーと……なんて呼べばいいんだ？」

沈雲「そういえば、ちゃんとした自己紹介はまだだったね。僕は

リー・シエンユン 黎沈雲。沈雲で構わないよ。界龍この序列10位だよ。」

リー・シエンファ 沈華「私は黎沈華。私も沈華でいいわ。序列11位よ。」
2人「以後、お見知り置きを。」

八幡（何ともまあ、息ピッタリ。）

八幡「比企谷八幡だ、まあ、よろしくな。悪いが、放課後は純星煌式武装の適合率検査があつて急いでるんだ。」

沈雲「そうなのかい？なら星仙術については明日からにしようか。」

沈華「イジリやイタズラも明日からにしましょう。」

八幡「なんか増えてんぞ？まあ、よろしく頼むわ。じゃあな。」

――――

八幡 side

ふう、確か黄辰殿に行けばいいんだったな。早いとこ済ませて休みたいもんだな。

陽乃「あれ？比企谷くんじゃん！どうしたの？この先は黄辰殿しかないよ？」

八幡「いや、その中にいる会長に用があるんですよ。」

陽乃「星露に？呼ばれてるの？」

八幡「純星煌式武装の適合率検査をやるから此处に來いって言われてたんですよ。」

陽乃「え？純星煌式武装？確か比企谷くんは特待転入生だったね。それでこんなに早く出来るんだ……」

え？特待生だとそんな事あんの？

陽乃「そうだ！私もついていい？」

八幡「……それって何の為に来るんすか？俺がやるだけであって、雪ノ下さんは出来ませんよ？」

陽乃「いいのいいの！だって面白そうじゃん！比企谷くんが使う純星煌式武装。」

八幡「まだ使うつて決まっていっスよ。それに適合するのかも分かんないのに。」

陽乃「まあ、それはやってからの楽しみだよ。ね？ついてついていよね？」

八幡「……まあ、別にいいですけど。」

陽乃「ありがと！じゃあ早速行こっか！」

——黄辰殿——

陽乃「星露ー、入るよー。」

星露「なんじゃお主か。どうした？何か用かえ？」

陽乃「ううん、私はずいど。」

八幡「……来たぞ、会長。」

星露「おお、ようやく来たかえ。それと妾の事は星露でよいと言うておろうに。」

八幡「……分かった。」

星露「では、行くとするかのう。わっはは、楽しみじゃわい！」

星露「ついでに聞くんが、お主どこか疲れてはおらぬか？」

陽乃（え？それを聞いちゃう!?）

八幡「実はセシリーに……」

俺は今日起こった事をそのまま伝えた。

すると星露は全てを悟ったような顔をしていた。

星露「……お主もアレをやられたか。妾も一度自分の事を話した

ら、一日中離してもらえんかったわい。」

八幡「お前もやられたのか……因みにどんな内容だ？」

星露「……妾のような小さい者が万有天羅ばんゆうてんらな訳がない事じや。まだ9つだしの。」

2人（ああ……予想してた通りだ。）

八幡「……………なんか済まん、チビとか言って。ちゃんと名前で呼ぶわ。」

星露「……分かればいいんじゃない。」

陽乃（いつの間にか仲良くなってる!?!）

そんなこんなありながら、星露一行は地下にある【純星煌式武装選定検査室】まで向かうのであった。

八幡 side

【純星煌式武装選定検査室】

八幡「なんか急にメカニツクな感じになったな。もうちよつと内装を拘ろうとかそういうの無かったのかよ……」

陽乃「まあ仕方ないんじゃない？ 純星煌式武装は普通の煌式武装と違つて意思のようなものがあるつて言うし。」

星露「出来ればそうしたいのじゃが、そうすると中の機械が不恰好に見えるじやろ？ だからこのままにしてあるのじゃ。」

八幡「なんかやけに説得力があるな。」

『あつ！ やつと来てくれたんだねつ！ ほら早く早くつ！』

八幡「ん？」

陽乃「ん？ どうかしたの比企谷くん？ 急に後ろなんか振り向いて？」

星露「此処には3人、専門家が検査室に数人居るだけじゃぞ？ 他に人はおらんぞ？」

八幡「いや、今誰かの声が聞こえたんだが……気のせいかな？」

陽乃「声？ 私は何も聞こえなかったけど？ もしかしてお化けとか？」

八幡「いやいや、こんなところに棲みつくお化けなんていないでしょ。どんなお化けですかそいつ……」

星露「……………」

星露（まさか本当に反応しておるのか？ だとしたら……界龍が創設されて以来初の適合者じゃぞ。）

八幡「……ンルー?…星露?おゝい星露?」

星露「ん?おお、なんじゃえ?」

陽乃「どうしたの?いきなり黙ったまんま突っ立っちゃってさ、星露にしては珍しいね。」

星露「なんでもないわい。此奴がどんなものに懷かれるか考えておっただけじゃ。特に他意はないぞい。」

八幡「そんな上手くいくかねえ……」

『いくに決まってるじゃないか!僕の声が聞こえてるんだからさ!』

まただ……さつき聞いた声と同じだ。こいつ本当に誰なんだ?ていうか今の会話的にこいつが純星煌式武装だって事は確定じゃね?

『もうゝ早くしてよゝ!いつまでも駄弁ってないで早く僕を取りに来てよゝ!』

あの時も今も変わらない飄々としたようなふざけたような喋り方だ。そもその疑問なんだが、この声って純星煌式武装なのか?

八幡「とりあえず、始めましょうよ。お化けの方も、喋ってないで早くしろって言っているようですし。」

星露「それもそうじゃのう。陽乃よ、妾達は離れていようぞ。」

陽乃「はいはい。ていうか比企谷くん、その口ぶり……ひよっとして今お化けと会話してたの?」

八幡「はい、ちよつとだけ。お化けかどうかは知りませんが。(本当は全部聞こえていたんだが、それは黙っておこう。余計な詮索されたくねえし。)」

『僕はお化けじゃなくい!○○○○だー!!』

……また聞こえた。君って本当に誰なの？

——数時間後——

適合率18%

八幡「……………はあ。」アキレ

陽乃「……………凄いな、全部の純星煌式武装試したのに20%超えないって。逆にレアケースじゃない？」

星露「むしろ清々しいくらいじゃの。」シレ——

俺……………もう泣いていいかな？いいよね？純星煌式武装ってこんなに融通効かないのかよ。1つたりとも20%いってねえぞ。

陽乃「もうやめたら？次で最後なんですよ？なんかもう見てられないんだけど。そもその話、魔術師や魔女は純星煌式武装から嫌われてるっていうくらいだし、残った1つも無理だと思うんだけど？」

星露「何を言う！最後じゃから面白いのではないか。もしとんでもない数値じゃったらどうするのじゃ？」

陽乃「それを言うなら最初からさっきのを試して全部20%超えない時点で、とつくに凄い数値だけだね。」

八幡「あの……………さり気なく俺の事デイスるのやめてくれませんか？俺だって出したくて出した数字じゃないんですから。」

ていうかもう最後かよ……………全然期待なんか出来ねえよ。まあいい、手短かにさっさと済ませるか。

とうかさ、あのおぼけ何処行った？急に声しなくなっただけど？何あいつ？不貞腐れて奥に引っ込んだじゃったとか？それならそれで……………おっ最後か。最後のは罅のない刀か……………ん？でもこの刀、刀身がある。今までののは起動しなければ、刃は現れなかった。なのに此奴

は刀身がついてる？ どういうこつた？

星露「その刀は、刀身にウルムⅡマナダイトを使っておる。歴とした純星煌式武装じゃ、安心せい。」

星露（ただまあ、使いこなした奴は今までおらんがのう。使おうとした者は、全員廃人になってしもうたからのう。一癖どころか難癖がいくつもあるような純星煌式武装じゃ。）

八幡「ま、早く終わらせるか……」

『んもおー！ 待ちくたびれたよー！ ほらほら早く早く！ 早く僕を握って！ カムヒヤー!!』

八幡「……まさかお前が？」 ボソツ

『さあ、僕を握って嫌な事全部忘れて気持ちよくなろう♪』

……急に変態みたいな事言いやがった。

チャリーン

八幡「っ！」

突然、鈴の音が聞こえて来たと思ったら、俺はいつの間にか真っ白な世界に立っていた。そしていつの間にか握っていた刀は手から消えていた。

??? 「やあ、初めまして！ やつと会えたね、嬉しいよ！」

そう言って前を向くと、肩まである黒髪に青の瞳、黒い着物を着た女の子が立っていた。

ていうか女だったんかい!! ボクッ娘だったのかよ!!

純星煌式武装

後編

八幡 side

???「はあああゝ！やああつと直接君と話せるよゝ！んゝ♪待った
甲斐があつたものだよ！」

これは…俺に話しかけてきた奴でいいのか？声や性格がそうだからそうとしか言えないが。

八幡「えーと、お前は2週間前と今、俺に話しかけた奴でいいのか？」

???「うん！そうだよ！いやゝ、あの時はビビッ！と来たね！あれだけの星辰力を出すんだもん！僕ビックリしたよ！」

八幡「あの時あそこにいたのか？」

???「ううん。凄い力を感じただけで、僕はずーと此処にいるよ。誰も僕に見合う人がいなくてさー。ちよつと力出ただけで、すぐ駄目になっちゃうんだもん！つまない！」

八幡「…それはお前が凄過ぎるだけなんじゃないか？」

???「ああ！そーいう解釈も出来るね！そつかあ♪僕が凄いだあー
♪」

…物凄い上機嫌だな。あれか？感情を隠せないタイプなのか？何にしても、こいつの口振りからしてさっきの純星煌式武装だって事には間違いなさそうだ。

八幡「俺は比企谷八幡だ。この前の修行のことは感謝する。それで
お前は何だ？」

???「そういえば自己紹介しなかったね！初めまして！僕は刀型の
純星煌式武装【ねねきりまる称々切丸】だよ！よろしくね！ハッチ！」

八幡「ハ、ハッチ？」

柊々切丸「八幡だからハッチ！」

八幡「そ、そうか……」

柊々切丸「それでさハッチ！正直僕の事どう思ってる？」

八幡「……え？」

柊々切丸「だから、僕の事どう思ってるのかって聞いているの。友達

？道具？武器？奴隷？それともただの喋る刀？」

八幡「いや、俺まだお前を持つて決まっていんだが……」

柊々切丸「そんなのはいいから！持った時の仮定でいいから答えて
！」

多分下手な事言ったら俺も廃人になっちゃうんだろうな。持った時の仮定の話だろ？普通の物だったら道具なんだが、意思を持ってるら別だ。

八幡「……………相棒……………だな。」

柊々切丸「相棒？」

八幡「ああ。普通なら道具って言うんだろうが、お前らは意思ってもんがあるんだろ？良いこともありや、嫌なこともある。人間と同じだ。」

八幡「俺だって良いことがありや、嬉しいし喜ぶ。嫌なことがありや、悲しいしイライラする。」

八幡「ならよ、お前にもそういうのあんだろ？道具とかそんな風に思わねえよ。それに武器は己の半身って言うだろ？だったら、俺の身体半分守ってんのはお前なんだからよ。」

八幡「だから、その……………相棒だよ。」

柊々切丸「……………」

あれ？なんか反応無いな。まさかやらかした？説教じみたこと言っちゃったからか？だとしたら俺廃人ルートまっしぐらだよ？

柊々切丸「相棒…相棒…相棒！」ズイツ！

八幡「うおっ!?ど、どうした？」

突然、柊々切丸は顔を近づけてさっき言った相棒を連呼していた。
何？どったの？

柰々切丸「いいよそれ！相棒：相棒かあ♪うん！凄くいい響きだね！僕はハッチの相棒かあ♪嬉しいなあ♪」パアア！

……どうやらお気に召したようだ。

柰々切丸「そう言う事なら、ハッチ！是非僕を使ってよ！ハッチになら僕、使われても良いよ！」

八幡「い、いいのか？俺みたいな奴に使われて……」

柰々切丸「ハッチだからだよ！それに、みたいなんてこと言わないの！ハッチは僕を認めさせた凄い人なんだから！ついでに言うけど、僕を手懐けた人なんていないんだからね！」

八幡「……おい待て、それじゃあ俺が初の適合者って事なのか？」

柰々切丸「そうだよ！これからよろしくねハッチ！僕のことねは柰々切丸でいいよ！」

柰々「あつ！そうだ！1つ言い忘れてたけど、純星煌式武装に【代償】がいるのは知ってるよね？」

八幡「あ、ああ知ってる。」

柰々「言っちゃあ何だけど、僕の代償は分かってないんだ。」

八幡「……は？分かってない？」

柰々「強いて言うなら、満足させる事かな？僕長い間此処に閉じ込められてたからね。だから満足させて欲しいの！」

八幡「それ絶対お前の願望だよな？要するに自分でも分からないから、まずは試してみろって言いたいわけか？」

柰々「ぶっちゃけるとね。まあ、使ったら分かってくるよ、多分。」

八幡「ま、それもそうか。」

柰々「じゃあ、そろそろ現実あつちに戻りなよ。長いこと私の空間こつちにいたんだから。」

八幡「そうだな。じゃあ、これからも頼む柰々。」

柰々「うん！じゃあねハッチ！」ブンブンッ！

チャリーン

八幡「っ！」

またあの鈴の音を聞くと、現実に戻っていた。手には、祢々切丸が握られてた。

陽乃「比企谷くん聞こえる!? 返事して! 比企谷くん!」
星露「小僧! 起きぬか!」

後ろを向くと雪ノ下さんと星露が俺を呼んでいた。

八幡「えと、どうかしました?」

陽乃「どうかしましたっじゃないよ！純星煌式武装持ったと思ったら、急に何も言わなくなるんだから！心配したんだよ！」

星露「そうじゃぞ！全く余計なしんぱ『会長！』なんじゃ！今それどころでー」

研究員『て、適合率100%です!!コンディションオールグリーン！
！こんなの、は、初めて見ました!』

陽乃「……………え？」

星露「……………嘘じゃ。」

2人「一体何があったの（じや）!!」

八幡「いや、ちょっと話してたら、なんか意気投合しちゃいまして。」

2人「納得出来ないわよ（わい）!!」

こうして俺は最後の最後で純星煌式武装に認められました。

柊々『よろしくね！ハッチ！』ニコッ！

ハシル劇場 デート編

彼から……

シルヴィア side

生徒「会長、なんだか動きが鈍くありませんか？私でも分かる単調な動きばかりですよ？」

シルヴィア「……………」

生徒「いくら手加減していても、何となく分かります。途中から捌けてないものもありましたよ？」

シルヴィア「……うん、ゴメンね？わざわざ付き合わせちゃってるのに。」

八幡くんと会ってから1週間が過ぎた。あの時から私の調子はどうも優れない。体調の方ではなくて、戦闘でのパフォーマンスが最近落ちているのだ。

生徒「少し休んではどうです？このまま模擬戦をしても意味はないでしょうし。」

シルヴィア「うん、そうだね。」

彼女にそう言われると、壁際の方まで歩きドリンクを飲みながら休んでいた。

生徒「ですが驚きです。会長のコンディションが上がってないなんて。」

シルヴィア「うん……自分でも初めてかな。こんなに調子が良くないのは。」

実際その通りだ。私がここまで調子が悪い事は今までに1度もなかった。理由は分からない。不安でもないし、焦ってもいない。でも、だからこそどうしていいか分からない。

シルヴィア「申し訳ないけど、模擬戦はここまででいいかな？」

生徒「はい、構いませんよ。あつ、そうだっ！息抜きに商業エリアにでも行ってきたらどうですか？」

シルヴィア「うん、ありがとう。」

――シルヴィア自室――

部屋に戻り、シャワーを浴びてから私服に着替える。だが、別に出掛けたい訳ではない。単に着替えたただけだった。

シルヴィア「…………八幡くん、今頃何してるかな？」

そう思った時、チャットが開かれる。ペトラさんからだった。

ペトラ『シルヴィア、少しいいかしら？』

シルヴィア「ペトラさん？分かりました、今開けます。」

そう言つて扉を開けると、いつもの澄ましたような顔だったが、どこか氣を使うような顔もしていた。

ペトラ「シルヴィア、貴女大丈夫なの？さっきの模擬戦見てたけど、最近調子が落ち過ぎてない？」

シルヴィア「……………」

ペトラ「はあ…………何があつたかは分からないけど、しっかりしてちょうだい。」

シルヴィア「…………はい。」

そう言われても、あまりやる気が出てこない。今やったとしても調子が上がるとは思えないから。

ペトラ「貴方、もう一度街に行つて来たら？何か変わるかもしれないわよ？そうね……貴女の気になっていた男の子とかと一緒に。」

シルヴィア「え!?!……は、八幡くんとですか!?!」

ペトラ「あの時は誤魔化したつもりでしょうけど、貴女本当に乙女な顔してるわよ？それかなりね……それと、八幡くんっていうのね。貴方が気にしている男の子の名前。」

シルヴィア「べ、別に気にしている訳じゃ……偶然会っただけですし。」プイ……

ペトラ「そうなの？それなら私がいに行こうかしら？彼に興味が湧いてきたわ。」

シルヴィア「ダ、ダメ!!」

嫌っ！八幡くんは何もしないで！取らないで！

ペトラ「やつと素直になつたわね。」

シルヴィア「え?」

ペトラ「貴方、また彼と会いたいんでしょう?」

シルヴィア「そ、そんなこ………はい、会いたいです／／／／／」

ペトラ「全く見せつけてくれちゃって、そんな顔されたら断れないじゃない………いいわよ、行つてらっしゃい。」

シルヴィア「………いいんですか?」

ペトラ「そう言ってるでしょ?楽しんで来なさい。じゃあね。」

そう言うと、ペトラさんは行つてしまった。でも、どうやって誘おう?前の事もあるし恥ずかしいよ／／／／

チャットを開いて、連絡先のページを見る。まだ彼からは一回も連絡がない。私の方からは電話出来ない。彼の連絡先を持っていないからだ。

はあ、結局待つしかないかあ。ペトラさんの言った事、無駄にしちやったなあ…………

♪♪

突然着信音が鳴った。新しい仕事のスケジュールかな？あれ？不明？出た方がいいのかな？

でも、誰からか分からないし…………うーん、悩むなあ。

よし！出してみよう！

そう思って私はCALLボタンを押した。

八幡『おう、やっと出たか。』

え!?は、八幡くん!?まさかこんなにも早くお願いが叶うなんて…………でも、どうしよう…………まだ心の準備とか出来てないのに／／

／／

八幡『…………なんか反応ねーけど大丈夫か？タイミング悪いなら出直すか？』

シルヴィア「う、ううん大丈夫！平気だよ！今じゃないとダメだよ！」

今以外受け付けません…………嘘だけど。

八幡『いや、別に無理しなくてもいいぞ？今日暇になったから誘おうと思ったただけだからな。』

へっ!?もしかしてデートの約束!?

シルヴィア「ホ、ホントに!?この前言ってたデートの約束!」

八幡『お、おう。まあ、そんなとこだ。』

やったあ!!八幡くんからの誘いだ!忘れられてるかと思ったのに……覚えててくれてたんだ。

シルヴィア「それって今から?」

八幡『ああ、予定があるなら「予定なんてないよ!むしろなさ過ぎるくらいで暇だったんだよ!」…そ、そうか。』

八幡『じゃあ、おま……シルヴィが紹介してくれた店で待ち合わせはどうだ?』

シルヴィア「うん!楽しみにしてるね!」

八幡『おう、また後でな。』

そして八幡くんと通信は終了した。

は、八幡くんとデート……………／／／／／

な、何で私緊張してるんだろう？デートなんてこの前もしたし、八幡くんとだからへい……………き……………八幡くんだから？そ、そういえばこの前、私の髪の毛の香りを嗅いで……………

シルヴィア「うう／／／／／」プシュー

ど、どうしよう……………デートに行っただとしても、私八幡くんの顔見られるかなあ／／／／／

シルヴィア side out

八幡 side

八幡「今日は鍛錬なしにしたからなく……………でも逆にやることなくなったのも事実だな。」

衾々切丸を使いこなすためにも、剣道とか剣術とかやっという方がいいか？だが、そうしてしまったら折角の休みが無駄になってしまう。どうしたものか……………

あつ、そういえば先週の今日、街を案内してもらってその後にシルヴィに偶々会って次も会う約束してたな。

ちやうど暇だし誘ってみるか。

おつ、シルヴィの連絡先これだな。

p r r r : p r r r : p r r r :

なかなか出ないな。忙しいのか？まあいい、切るか【っ！】……………
あつ、出た。

八幡「おう、やっと出たか。」

この前会った時とは違い、紫色の髪色をしている。今度は本物のシルヴィア・リニューネハイムだった。だが、反応がイマイチだった。今
仕事中か？

八幡「……………なんか反応ねーけど大丈夫か？タイミング悪いなら出
直すが？」

シルヴィア『う、ううん大丈夫！平気だよ！今じゃないとダメだよ
！』

……………やっぱタイミング悪いのか？

八幡「いや、別に無理しなくてもいいぞ？今日暇になったから誘お
うと思ったただだからな。」

シルヴィア『ホ、ホントに!?この前言ってたデートの約束!?!』

八幡「お、おう。まあ、そんなとこだ。」

そんなに驚くことか？先週お前が言ったことなんだが？

シルヴィア『それって今から？』

八幡「ああ、予定があるなら『予定なんてないよ！むしろなさ過ぎるくらいで暇だったんだよ！』…そ、そうか。」

OK……でいいのか？

八幡「じゃあ、おま……シルヴィが紹介してくれた店で待ち合わせはどうだ？」

シルヴィア『うんっ！楽しみにしてるね！』

八幡「おう、また後でな。」

シルヴィの奴、終始顔が赤かったが大丈夫か？まあ、体調が悪かつ

たら連絡くらい寄越すだろ。

さて、じゃあ取り敢えず俺も支度して行くか。

やつぱり……

シルヴィア side

シルヴィア「……………」ソワソワ

待ち合わせ場所に着いたのはいいけど、早く来過ぎたのか八幡くんの姿はまだない。今思ったけど、私楽しみにし過ぎかな？ 勿論、ちゃんと変装してるよ？

今からって言ってたけど、別にあんなに早く行くこともなかったよね。学校から此処まで駆け足で来るなんて。

八幡「……おう、早いな。」

シルヴィア「わあっ!!」

八幡「うわっ！ビックリした……」

突然後ろから声が聞こえたと思ったら、八幡くんがいた。

シルヴィア「急に声掛けないでよー。びっくりしたよお。」

八幡「……す、すまん。」

シルヴィア「まあいいや、それよりもどうしようか？」

八幡「まあ、適当にぶらついたらいんじゃないかねえか？ 俺なんてまだここに来て1週間で、街には1回しか来てないからな。」

シルヴィア「そっかあ……………あつ、じゃあさ！ゲームセンター行ってみない？」

八幡「六花にもゲーセンってあるのか？ そんな風には見えないんだが。」

シルヴィア「あるよー。と言っても、あんまり目立ってはいないけどね。なにせ六花には星武祭があるから。」

八幡「なるほどな、その理由ならあり得そうだ。じゃあ行くか。」

シルヴィア「……………ねえ、八幡くん。」

八幡「ん？どした？」

シルヴィア「手……………繋がない？／／／」ポツ

八幡「……………何故？」

シルヴィア「……………だって、もしはぐれたら大変だし……………ホントはつなぎたいからなんだけど。」

八幡「最後聞こえなかったんだけど。」

シルヴィア「ゝ！／／／とにかく、はぐれたら困るから手繋ぐの！

／／／

八幡「……………いや、でもな……………」

シルヴィア「……………」じー

八幡「……………はあ、分かったよ。」

シルヴィア「っ！うん♪」ダキッ！

八幡「……………あの、シルヴィアさん？それは【手を繋ぐ】ではなくて【腕に抱きつく】っていうんですか？」

シルヴィア「いいでしょこれくらい！そんなに変わらないよ。ほら、早く行こっ！」

八幡「いや変わるから。致命的だからね。繋ぐと抱くとでは意味全然違うからね？」

シルヴィア「やっぱり……………ダメ？」ウルウル

八幡「うっ……………わーったよ。」

シルヴィア「よろしい！ほら、行こー！」ニコッ

八幡「……………可愛いな、おい／／／」ボソッ

シルヴィア「ん？何か言った？」

八幡「別に何も。さっさと行こーぜ。」

シルヴィア「うんっ♪」

——道中——

んうゝ……………落ち着くなあ。八幡くんと一緒にいると緊張はするけど、何だか安心出来るし心地いい。それにこんなに本音を出して話す

ことが出来る相手ってペトラさんくらいだったからこの時間が凄く楽しいし安らぐ。それに、模擬戦の時とは違う感覚。今は凄く調子が良い。彼を見てると、悩んでいた自分が少しバカバカしく思える。ダメダメ！今はそんな事忘れて楽しまなきゃ！せつかく八幡くんがお誘いしてくれたんだからっ！

シルヴィア side out

八幡 side

むう……分かん。何故こいつはこんなにも嬉しそうなんだ？腕に抱きついてきた辺りから機嫌が良くなっている。それに待ち合わせの時は、何処か曇りのある顔だった。まあ、深くは追求しねえでいいか。人間誰しも触れられないもんはあるだろうし。まあ、俺も人の事言えねえけどな。

――― amusement arcade ―――

アミューズメント・アーケード、和製でゲームセンター。着いたな。シルヴィア「着いたね。さあ中へ入ろう！レッツゴー！」グイグイ八幡「グイグイ行きますね。」

ウィーン

ガヤガヤワイワイ

ガチャガチャピコピコ

……相変わらず騒がしいな。

シルヴィア「さて、それじゃあ何からやろうか？八幡くんは何がい？」

八幡「いや、俺ゲーセンはあんま来ねえから詳しくは分かん。」
シルヴィア「そうなの？じゃあ色々やりながら見て回ろうか。」

そう言いつつ俺達は色々なゲームをやってみた。その際も腕は放してはくれず、周りの視線が痛かった。リア充？知らないですねー。それは食べ物ですか？

八幡 side out

—————

シルヴィア「結構やったね、そろそろお腹空かない？」

八幡「ああ、少し小腹が減ったな。」

シルヴィア「じゃあお昼にしようか。何処かリクエストある？」クビカシゲ

八幡「なら、俺が知ってるイタリア料理店があるんだが……どうだ？」

シルヴィア「へえ……意外とオシャレなお店知ってるんだね！」

八幡「……何だ？悪いかよ。」

シルヴィア「ううん、そーいう意味じゃないから大丈夫。」

シルヴィア（もしかして私の為にチョイスしてくれたのかな？だとしたら、嬉しいな♪）

シルヴィア「よし！それじゃあそのイタリア料理店に向かってしゅっぱー………っ!!」ハッ!!

前の奥の方にプリクラ。

シルヴィア（プリクラツ!!ゲームに夢中ですっかり忘れてた!此処に来たらやろうって決めてたのに!でも、今からでも遅くないし、八幡くん誘って一緒に撮らなきゃ!!）

八幡「おい?どうし「八幡くんっ!!」うおっ!?ど、どうした?」

シルヴィア「私、此処まで来て肝心な事を忘れてたの。」

八幡「ん?もしかしてイタリア料理嫌いだったのか?」

シルヴィア「そうじゃなくて、このゲームセンターに来たら絶対にやろうと思ってたゲームの事をすっかり忘れてて。」

八幡「それを忘れるってスゲエな……」

シルヴィア「そんなのはいいから。それでね、そのゲーム1人でやるにはちよつと恥ずかしいんだ。」

八幡「それで俺に手伝って貰いたいと。」

シルヴィア「う、うん。いいかな?」

八幡「別にそんなくらい構わねえよ。」

シルヴィア（よしっ!言質とったからね!）

シルヴィア「そ、それじゃあ、こっちにあるからついて来て。」

八幡「ああ。」

——プリクラ前——

八幡「…………絶対やりたかったゲームってこれのことか?」

シルヴィア「う、うん／＼／」

八幡「プリクラの事かよ……俺、カメラ嫌いなんだが。」

シルヴィア「でもさつき、そのくらい構わないって言ったよね？」

八幡「うっ……」

シルヴィア「それとも、私とは……撮りたくない？」ウルウル

八幡「うぐっ……」

チクショウ……こんな時だけこんな目しやがって。俺はこういうのに弱いんだよ。

シルヴィア「ねえ？……嫌なの？」ウルウル

八幡「い、いや、むしろおま……シルヴィはいいのかよ？お前みたいな奴が、俺みたいな眼の腐った奴と撮りたいのか？」

シルヴィア「私みたいなって？」

八幡「だからお前みたいな可愛い奴が俺みたいな……あつ。」

シルヴィア「へえ!? わわ、私がかかか、可愛い!?／／／／／」

八幡「……………／／／／／」

シルヴィア「……………／／／／／」

2人(き、気まずい……)

シルヴィア「……あ、あのね八幡くん／／／」

八幡「お、おう。どうした？／／／」

シルヴィア「や、やっぱり今度でいいかな？なんかもうお腹空いちやって。」

八幡「お、おおそうだな。」
シルヴィア「…それじゃあ、いこつか。」

この後は、お互い意識してしまっていたので、話しかけるにも話しかけられない状態が続き、いつの間にかお店に着いていた。

それでも……

—————

———店内———

八幡「……………／／／」

シルヴィア「……………／／／」

目的地たどり着き店内に入ったまではいいが、その後もお互いに何も話せず……………

ピトツ（互いの手が触れ合う。）

2人「あつ……………／／／／／」

メニュー表を取ろうとすると、手が触れ合いまた気まづくなる。要するに、無言状態絶賛継続中だった。

そして5分後……………

2人「な、なあ。（ね、ねえ！）」

2人「あつ……………」

シルヴィア「は、八幡くんからいいよ！私のは大した事じゃないし！」

八幡「い、いや、俺のも大した事じゃない。お前から言えよ。」

シルヴィア「むうゝ、シルヴィって呼んでよ！お前って呼ばない！」

八幡「お、おう。すまん。」

2人「……………ぷっ。」

シルヴィア「あははは、ふふふ♪」

八幡「ははは……」

お互いに意識していたのが可笑しかったのか、2人同時に笑い出した。

シルヴィア「じゃあさ、同時に言ってみようよ。何となく分かった気がする。」

八幡「奇遇だな、俺もだ。恥ずいが、まあ、言ってやるよ……」

シルヴィア「うん！せーのと言ってね！」

八幡「おう。」

シルヴィア「せーのっ！」

2人「メニュー決めない？（決めないか？）」

シルヴィア「やっぱり！思った通り！」

八幡「以心伝心だな……」

そう言つてメニュー表を取り、メニューを決めて注文した後……

シルヴィア「あー、可笑しかった。」ノビー

シルヴィア「道とかこの席とか私達ホントに何も話さなかったよね？ホントおつかしーな。」クスクス

八幡「ホントにな。」

シルヴィア「食事の後どうしよつか？私少し歌いたくなつて来たなーって思つてさ、カラオケに行かない？」

八幡「それも良いがシルヴィ、1ついいか？」

シルヴィア「ん？何かな？」

八幡「なんか悩みでもあんのか？」

シルヴィア「え……」オドロキ

八幡「今日お前と会つた時なんだが、笑顔に曇りがあるように感じてな。」

シルヴィア「……分かるの？」

八幡「何となくだな。もしかしたらつて思つてな。正解みたいだな。」

シルヴィア「……長くなるけど、話してもいいかな？」

八幡「俺で楽になるならな。」

シルヴィア「うん、話すね。」

—————

シルヴィア side

シルヴィア「今年の冬に《^{リンドブルス}王竜星武祭》があるのは知ってるかな？」
八幡「ああ、優勝候補なんだってな。」

シルヴィア「うん、それはいいんだ。でも、もう1ヶ月半しかないのに調子が全く上がらないんだ。」

八幡「そんなの当たり前的事なんじゃないのか？」

シルヴィア「それがね、下がり続けてるんだよ。今までにないくらい。ライブの時でさえ、こんな事はなかったのに……」

八幡「そうなのか。」

シルヴィア「うん……だから今日ここに來れたのは、気分転換が大きいかな。」

八幡「そうか……」

シルヴィア「……あつーでも、気分転換だけじゃないからね！勿論、八幡くんとも遊べて嬉しいし、今もすごく楽しい！」

八幡「おう……」

シルヴィア「……八幡くん？」

八幡「……」

シルヴィア「……ねえ？八幡くん、聞こえてる？」

八幡「……」

……もしかして気分転換で來た事で怒ってるのかな？目も合わせてくれないし、声にも反応してない……ちよつと嫌な気分になせちやつたかな。それとも嫌われちやつたかな……

あれ？胸が苦しい……可笑しいな。何だかとても悲しくなってきた。私、八幡くんに嫌われたかな。

嫌われた？八幡くん？

……嫌だ。嫌われたくない……嫌いになって欲しくない。そんなつもりじゃなかったの！本当は八幡くんに会いたかったから！お願い！信じてっ!!

八幡「なあシルヴィ、少しかん……が……えて……」

シルヴィア「……グスツ……ヒグツ」ポロポロ

八幡「お、おい？どうした？そんなに泣く程辛いのか？」

シルヴィア「……なさい。」ポロポロ

八幡「……え？何？」

シルヴィア「ゴメン……なさい！君を不快に……ヒグツ……させるような

事言って！グスツ、お願い……だから……グスツ……嫌いにならないで……」ポロポロ

八幡「……え？不快？……嫌い？」

お願い許して！私にできる事なら何でもする！お願い……嫌いにならないで……

ナデナデ

シルヴィア「……へ？」ポロポロ

急に頭を撫でられた……いつの間にか八幡くんが隣にいた。

八幡「お、おい。大丈夫か？」

シルヴィア「……」グスツ

八幡「落ち着け、俺は別に不快な思いはしてないし、嫌いにもなっていない。だから気にすんな。分かったか？」

シルヴィア「……本当？本当に？本当に嫌ってない？もう会えなくなるなんて絶対に嫌だよ。私もっと八幡くんと一緒にいたい。本当……何だよね？」ポロポロ

八幡「……ああ、大丈夫だ。そもそも嫌いになる要素がどこにもねえよ。」ハンカチダス

シルヴィア「……よかった。本当によかった。もしそうだったらー」

八幡「それ以上言うな。分かればそれでいい。根に持つ奴はあまり好きじゃないからな。」ナミダフク

シルヴィア「……うん、もう言わないね。ありがとう。」

八幡「おう。」

……

……

.....

また静かになっちゃった。

八幡「なあ、今大丈夫か？」

何だろう？

シルヴィア「な、何かな？」

八幡「さっき言いかけた事なんだが。」
シルヴィア「う、うん。」

そういえば、さっき何か言いかけてたな。そのことかな？

シルヴィア side out

八幡 side

八幡「お前、星武祭もライブのようにするつもりか？成功させよう
とか思ってるのか？」

シルヴィア「う、うん。そうだけど……」

やはりか……

八幡「そいつは間違いだ。」

シルヴィア「……え？」

八幡「確かにライブで成功させようと思っているのは間違いじゃない。
い。」

八幡「だが、星武祭は成功させるモンじゃない、戦う場所なんだよ。
それくらい俺にだって分かる。」

八幡「お前はそこでも観客に見せる為の、ライブと同じような客に
見せるだけの戦い方をするのか？俺がお前だったら、そんなフザけた

真似はしない。」

シルヴィア「……………」

八幡「厳しい言い方をするが、そこまでして星武祭を成功させたいなら、フィールドで歌うだけ歌って勝手にやられてろ。その方が、今のお前には似合ってる。」

シルヴィア「……………」

……厳しいどころかかなり言いたい放題言っちゃったな。少し言い過ぎたか……………女の子だしな。謝っとくか。

八幡「すまん、少し言い過ぎた。」

シルヴィア「ううん、大丈夫……………なんかスッキリしたよ。そうだね。星武祭は戦う場所だもんね。1回出てるのに何で忘れちゃってたんだろ……………はあ、確かに前回の星武祭も見てくれればっかり気にしてたな。本当にありがとう八幡くん。大事なことを教えてくれて。」ニコッ

そう言ってシルヴィは俺に笑顔を見せたが、今までで一番輝いた笑顔だった。さっきあった曇りも全くない……………まるで明鏡止水のようだ。

シルヴィア「それでさ八幡くん、1つお願いがあるんだけど、いいかな？」

八幡「ん？何だ？」

シルヴィア「さっきの頭撫でたの……………もう一回やってくれないかな？ 凄く気持ちよかったから。」

八幡「……………おう、分かった。」

シルヴィア「じゃあ、お願い。」コトツ

八幡「肩に頭置く必要あんのか？」

シルヴィア「いいでしょ？別に♪」

八幡「はいはい別に構いませんよ、歌姫様。」ナデナデ

シルヴィア「んっ……………」

そのままシルヴィは大人しく頭を撫でられていた。ここに来る前の俺なら、まずあり得ない光景だな。

店員「あの……お客様、ご注文の品を持って参ったのですが、今宜しいでしょうか？」

2人「っ！／／／」バツ！

居たのか……なんてステルス能力。俺以上だな。あ、嘘です。

八幡「は、はいどうぞ／／／」

店員「宜しいですか？ではこちらご注文の品になります。ごゆっくりどうぞ。」

八幡「じゃあ、話も丁度区切りいいことだし、食おうぜ／／／」
シルヴィア「う、うん。そうだね／／／」

スゲー所を見られてしまった。俺の黒歴史が……………はあ、唸つてもしょうがねえ。今は飯を食おう。そして忘れよう。さて、席に戻「グイツ」…何だ？

シルヴィア「このままでもいい。今はこの状態でいいの。」

シルヴィア「ね？お願い。」

八幡「……………分かった。」

まあ、さつき泣かしちまったしな。

……………

シルヴィア「八幡くんのそれ美味しそうだね！食べてみてもいい？」

八幡「おいしいぞって何で口を開ける？」

シルヴィア「食べさせて♡」

八幡「……………」

シルヴィア「ねえ？いいでしょ？」ユサユサ

さつきと違ってえらい上機嫌だな。ホントさつきの雰囲気どこ行った？

八幡「……はあ、分かったよ。」

八幡「ほれ、口開けろ。」

シルヴィア「むう、あーんって言うて。」

八幡「…………あ、あーん。」

シルヴィア「あーん♡」パクツ

八幡「……どうだ？」

シルヴィア「うん♪美味しいね！」

その後もあーんが続き、のちに間接キスだと分かると俺たちはまたも同時に真っ赤になった。

私の……

シルヴィア side

昼食を食べ終わった私達は、今後の予定を話そうと思っているところだ。カラオケに行きたいとは言ったが、今は別に歌いたいとは思わない。

八幡「……なあ、これから予定はあんのか？ないんだったら帰るところになっちまうが……」

シルヴィア「私、思ったんだけどねー」

八幡「ん？」

シルヴィア「私達つてさ、お互いの事よく知らないよね？だからさ、自分の事を教え合わない？相手のことをもつとよく知るために。」

八幡「……お互いのことか……」

シルヴィア「八幡くんは嫌？嫌なら無理にとは言わないよ？」

それでも、私は八幡くんが知りたいな。

八幡「……ああ、分かった。」

シルヴィア「いいの？少し嫌そうな顔してたけど？ホントに？」

八幡「ああ、構わない。」

シルヴィア「……うん、分かった。それじゃあ人気のない場所で座りながら話そっか。」

—————

シルヴィア「それじゃあ私から！いきなり八幡くんにやらせても、混乱させちゃうだけだしね。」

八幡「お気遣いどーも。」

シルヴィア「ふふつ、私はシルヴィア・リユーネハイム。クインヴェール女学園高等部で生徒会長をやっているんだ。魔女で序列は1位。それでね、後は……………」

それから、私のことを八幡くんに教えた。なんでこんなことをしてるかって？

それは、八幡くんにもっと私のことを知って欲しいからだよ。当然、私も八幡くんのこと知りたいからね。

シルヴィア「…………つと、こんな感じかな。私の言えることは全部言ったよ。次は八幡くんね。言いたくないことは言わなくていいからね？」

八幡「ああ。俺は比企谷八幡だ。界龍第七学院高等部。魔術師で序列外。」

シルヴィア「へえ〜！八幡くん、生徒だったんだ！しかも界龍なんだね！イメージないな。すごく意外！」

八幡「まあな、それは自分でも思ってる。ここに來たのは丁度1週間前だ。それと一応言っておく。」

シルヴィア「ん？どうしたの？」

八幡「もし、ここから話す話に不快な感じがしたらすぐに言え。そうしたら止める。」

シルヴィア「無理に言わなくていいんだよ？別に無理強いは「俺が言いたいから言うんだ。勝手に言うだけだ。」…………分かった。」

八幡「よし、じゃあ続けるぞ。その前は千葉の高校にいて……………」

八幡くんの過去話は、悲痛でとても悲惨な内容だった。だからこんな目になってしまったんだ…………

でも、後悔はしてない。そんな事はどうでもいい。私は八幡^{あな}くんを見捨てないよ。

八幡「…………まあこんなモンだな。よく最後まで聞いてたな、酷え

内容だつてのに。」

シルヴィア「そんな事しないよ。今の話が本当なんだろうけど、私、今の話信じるよ……………」

……………信じたいの。」ギョツ

八幡「っ!!……………今の話が嘘かもしれないって思わないのか？俺がお前の同情を狙った嘘かもしれないんだぞ？」

シルヴィア「そんな事全く思わない。八幡くんの目を見れば分かるよ。君のことをよく知らない人から見れば、その目はあまりいい感じではないんだろうけど、私にはとても純粹で綺麗な目に見える。人の感情や顔色を上手に読み取ることが出来る素敵な目だと思う。それは君の人柄を見ても感じられる。君が今、私に話してくれたように、自分を犠牲にしながら人を救って来たんだよね？私には分かるよ、君の顔や瞳を見れば。」

八幡「……………」ツー

シルヴィア「でも、もうそんな事しないでね？そんな事しなくても、私^が守ってあげるから。」

八幡「……………次は俺^が泣かされるのか。」ツ

シルヴィア「ゴメンね、泣かせるつもりじゃなかったんだけど。」

八幡「大丈夫だ。これは嬉し涙だからな……………悪い、少しの間だけ肩借りるな。」ツ

シルヴィア「いいよ。私も君の肩、もう借りちゃってるから。お互い様だよ。」

私はそう言ってから彼の感触を肩に感じると同時に、すすり泣く声が聞こえた。

――数十分後――

八幡「……………すまない、もう大丈夫だ。」

シルヴィア「うん、分かった。」パッ

少し名残惜しいが、いつまでも身体を抱き締め合っているというのは、いくら人気のない場所であっても恥ずかしい。

そう言って身体を離し、彼の方を見ると……………

シルヴィア「……………八幡くん？」

八幡「ん？何だよ？」

シルヴィア「えっと、偽物なんかじゃないよね？」

八幡「何でそんな事聞くんだ？」

シルヴィア「だって……………目が。」

八幡「え、何？……………もっと腐ったの？」

シルヴィア「そうじゃなくて……………その……………」

凄く良くなってるの／／／／／

八幡「……………は？」

シルヴィア「ウ、ウソじゃないからね！／／／ほ、ほら、鏡！／／／／／」スツ

私がそう言った後に八幡くんは、私の出した鏡を覗き込んだ。

八幡「誰だこいつ？」

シルヴィア「さ、さつきまでとは信じられないよ。勿論前の目も良
いけど、今の目は瞳は大きいし黒く澄んでるし、すごく……………か……………か
……………かっこいい／／／／／」

八幡「っ！！／／／ク、クインヴェールどっちだ!？」

シルヴィア「うえ!?! あ、あっちだけど?／／／」

八幡「よしっ! い、行くぞ!」テ ギユツ

シルヴィア「えええ!?! ちよ、ちよっと!?! 八幡くうん!!?／／／／／」

手……………握られちゃった／／／／／彼からしてもらったのは初

めてだなあ／＼／＼／

——クインヴェール行き通路——

八幡「こ、ここまで来ればいいだろう！じ、じゃあなシルヴィー！
ダッ！

シルヴィア「ま、待って！」

八幡「っ!?」ビダッ

シルヴィア「ねえ……だ、抱き締めてもらっていいかな？」

八幡「ふあっ!?」

シルヴィア「い、1回だけ！ね？1回だけだから！」

八幡「いいいや、いくら何でもそれは………っ！」

シルヴィア「………／＼／＼／＼／／／／」

八幡「………わ、分かった。」

そうしてお互いに近づき……

……ダキッ

2人「／／／／／／／／／／」

シルヴィア「も、もういいよ！あ、ありがとう！／／／／／」
八幡「お、おう！じ、じゃあな！」

そうやって八幡くんは猛ダッシュして行ってしまった……
でも、これで確信した。

私は、八幡くんが大好き……きつと一目惚れだろう……
さつき抱き締めてもらった瞬間、全部分かった。今なら、何でも出
来る気がする。

よし！決めた！
冬の《リンドブルス王竜星武祭》で優勝したら……

八幡くんに告白しよう！

——おまけ——

虎峰「ふう、今日の鍛錬も有意義に出来ました。これも八幡が教えてくれたお陰ですね。」

ザワザワ

虎峰「ん？何やら騒がしいですね……一体何でしょうか？」

虎峰「騒がしいですが、何かあったんですか？」

女子「師兄！それが大変なんです！実は……」

八幡「おおっ！虎峰！お前なら分かってくれるよな！俺のこと！」
クワッ

女子「比企谷くんを名乗る偽物がいきなり現れたんです！」

虎峰「ええつと……八幡の……ですか？」

虎峰は考える仕草を少ししてから八幡を見た。

虎峰「あの……貴方は八幡なのですか？とても信じられないのです

が……」

八幡「……………そうかー、誰も信じてくれないのかー。うん、もうお部屋戻るー。」

虎峰「え？本当に八幡のですか!?す、すみません疑ったりして！信じますから戻って来てください！」

八幡「ははーいいんだよー？別にー。もう気にしてないからー。」
虎峰「喋り方がおかしいです！本当にすみません！僕が悪かったですからー！」

この騒ぎは夕飯時くらいまで続いたが、八幡は部屋に閉じこもったままで、セシリーと称々切丸のお陰で何とか正氣に戻ることが出来たとき。

――さらにおまけ――

翌日、クインヴェールの模擬戦場――

ドゴオオオオン!!

生徒「イイイイイヤアアアア!!」

シルヴィア「ほら、もつと本気で来てよ。そうじゃなきゃ相手にならないでしょ？」

生徒「か、会長!?昨日何があっただんですか!?昨日とまるで逆じゃないですか!?調子上がりまくりじゃないですかあ!」

シルヴィア「それは……………まあ……………ね？」

生徒「意味が分からない分怖いですよ!?!もう許してくださいー!?!」

決心がついてから、調子は最高潮だった。

3章

覇軍と月影

序列2位

覇軍星君

八幡 side

俺が祢々と出会ってから1ヶ月が過ぎ、この学院にも慣れてきた。虎峰とセシリーとの武術鍛錬、黎兄妹の星仙術の応用、雪ノ下さんとの繊細な星辰力の使い方を習慣的にやっていた。

俺個人では、祢々切丸を使って刀剣術の型や舞を中心にやっている。こいつの代償だが、どうやら俺の星辰力を吸い取るにより、力を増すみたいだ。要は星辰力の吸収。吸血鬼みたいだな。

勿論、休みもとっている。俺の場合、どっちの派閥にも入っていないから相変わらず引つ張りだこ状態なのは変わらない。

そして現在、学校のある朝なのだが、

八幡「……………」

セシリー「あつははは！比企谷面白い。また沈華にやられたのー？」

虎峰「沈華、もうやめたらどうです？」

沈華「仕方ないではありませんか、趙師兄。どうしてもやりたくなってしまうのです。私も抑えようとはしているのですが……………」

沈雲「いやー、いつも妹がすまないね。比企谷くん。」

八幡「お前絶対思っていないだろ。」ジト―

虎峰「それはそうと、八幡は周囲に溶け込むのが早いのですね。1ヶ月は経ってますが、最初から此処にいたような感じになってしまします。」

八幡「そうか？いつも通りだと思いが、なにか違うか？」

沈雲「趙師兄の言う通り、比企谷くんは自分の思っている以上に自分を見せていると思うよ。」

セシリー「あたしも最初会った頃に比べると、意外と話しやすいか

な。それに、あの時は本当にすごかったしね。」ウンウン

八幡「うつ……やめてくれ。そんな時は忘れたい。きっと俺はどうかしてたんだ。」

セシリー「もう一回やってくれないかな？比企谷が私の事をお姉「だからやめてくれ！」えー？いいじゃん、可愛かったのに。」

八幡「マジでやめてくれ。他の奴等に見られなかっただけ良かった。」

虎峰「ま、まあよかったではないですか。誰にも見られなくて。」

八幡「俺があんなあられもない風になったのは誰のせいだと思ってるんだ？」

虎峰「それは……」プイッ

沈華「まあ落ち着きなさいよ。私だって信じないわよ。腐った目が突然治ったなんて言われても、見せつけられても。」

虎峰「そ、そうですよ！あつ、そろそろ先生が来ますよ。席に戻りましょう！」

八幡「逃げたな。」

セシリー「逃げたね。」

沈雲「逃げましたね。」

沈華「逃げましたわね。」

虎峰「に、逃げてません！」

こんな日々が毎日続いている。総武ではなかったことだ。総武ではあり得ないことが、界龍こうちでは出来てる。

俺は、今までにないくらい充実している。

??? 「……………あれが、比企谷八幡か。」

——昼休み——

虎峰「さあ八幡！武術のことを教えて下さい！昼の楽しみなのです！」

沈雲「お言葉ですが趙師兄、今回は僕達に譲っては頂けないでしょうか？」

沈華「彼には星仙術について色々と教えておきたいことがあります故。」

虎峰「きよ、今日ですか!?お2人は僕の楽しみを邪魔しないと気が済まないのですか!？」

八幡「はあ……………今日もか。」

セシリ「まーた始まったねー。」

昼休みの時間は決まってこの5人で食堂で飯を食べる。たまに鍛錬の話になるのだが、いつも武術と星仙術どちらの話になるかで分かれるのだ。

セシリー「まー、どーせすぐに終わるし、問題ないかー。あつ、食べさせてあげよっか?」

八幡「……頼むから俺をからかわないでくれ。お前といた時間があんまないのに異常に濃過ぎるんだよ。」

すると閉まっていた食堂の扉が開いた。

??? 「すみません。比企谷八幡さんは此方にはいらっしゃいますか?」

2人の男女がいた。

女の方は、言葉遣いが丁寧な人だった。見た目と雰囲気的に界龍には似合わないような人だ。

男の方は、未だに口を開かないが、纏っている雰囲気がケタ違いだ。ここにいる誰よりも圧倒的に強い。そんな感じをビリビリ感じさせる程の威圧感だった。

虎峰「だ、大師兄っ!!」

虎峰がそう言うのと礼の作法をとっていた。辺りを見回すと、全員やっていた。

あれ? やってないの俺だけ? しかも大師兄って……まさか星露とこの1番弟子か?

??? 「それで、此方にはいらっしゃいますか?」

八幡「あ、はい。」ガタッ

??? 「貴方が比企谷さんですね。申し遅れました。私、当校高等部2年の梅小路冬香と申します。当校の序列4位です。以後お見知り置きを。」

序列4位ってめちゃくちゃ強えーじゃねえか。その人が俺に何の用だ？

冬香 「私はただの付き添いですので、後ろに控えますね。」

え？
??? 「……………武^{ウー！}暁^{シャ}彗^{オフエイ}だ。」

八幡「……はあ、比企谷八幡です。」

暁彗「……」

八幡「……」

暁彗「……」

八幡「……あの、何か？」

暁彗「……」

え？何この沈黙は？この人何にも喋ってくれないんだけど？真顔でこっち見てるまんまなんですけど？銀○の斎藤○さん以上に何も喋らないよ。Zすら言わないよ。

暁彗「……^{デュエル}決闘。」

八幡「……え？」

暁彗「……今月中旬に行う公式序列戦………相手はいるか？」

八幡「い、いえ……いませんが……」

暁彗「……ならば私とやらぬか？」

全員（八幡、冬香以外）「っ!!!」

皆驚いてるが何故だ？この人梅小路先輩より強いのか？

虎峰「お、お言葉ですが、それは本気でしょうか？大師兄。」

暁彗「………無論だ。」

セシリー「ですがー大師兄。しかも自ら挑むなんて、らしくないですよー？」

八幡「なあ？武先輩ってそんなにスゲー人なのか？確かに威圧感を感じるが……」

セシリー「比企谷ー、それマジー？」

八幡「ん？ああ。」

セシリー「まー、比企谷だしネームド・カルツ在名祭祀書に興味ないのは少し頷けるかなー。」

何だろう、軽く貶された感じがした。

虎峰「そんな呑気なことを言ってる場合ですか!? 八幡っ! よく聞いておいてください! このお方は武曉彗。【覇軍星君】の二つ名を持つこの学院の序列2位です! つまり師父を抜いて表すと、この学院最強のお方なんです!!」クワッ!!

曉彗「……………」

つまり俺は、この学校最強に決闘を挑まれたわけですね? すごい。

何の罰ゲーム？

怒りと頼み

――――

―――前回の回想―――

界龍この序列2位に公式序列戦での決闘を申し込まれました。

―――回想終了!!!―――

八幡「どういうこと? ねえどういうこと!? 俺何にも悪い事してないよね? なのに何で!? 此処にいる序列2位の方から決闘の申し込みがあるの!?! 俺死んじやうよ?」

八幡「…あの、理由を聞いてもいいですか? 何で俺なんですか?」
虎峰「そ、そうですよ! 大師兄が理由も無しにそんな事を言うとは思えません!」

セシリー「んー、あたしも気になりますねー。あの大師兄が決闘を申し込む程ですしねー。」

沈雲「確かに今までにはなかった事ですからね。」

沈華「気にならないと言えば嘘になりますわ。」

冬香「実は、私も聞いていないのです。お聞きしてもよろしいでしょうか? 曉慧?」

曉慧「……………ワン・シャオエン汪小苑、私の師だ。」

八幡「っ!!」

曉慧「……………師は面白いものにしか興がない。故に、卿の實力を知りたい。」

八幡「……………決闘じゃダメなんですか?」

曉慧「……………それでは卿が手を抜く可能性がある。やるならば、皆が納得する場での戦いを望む……………そこで、公式序列戦だ……………我が師、汪小苑が鍛えし者の實力、知りたくないと言えば嘘に

なる。この決闘、受けてはくれぬか？」

八幡（この人の目……本気だ。声に揺れを感じないし、俺から1度も目を離していない。だが、どうする？ 受けるか？ 俺はここに来てから自分を試すと決めた。何処まで俺の力が及ぶのか全力でやりたい。）

虎峰「大師兄！ 八幡に大師兄の相手は務まらないと思われます!! いえ、むしろ無理ですっ!!」

セシリー「そうですよー、大師兄も考え過ぎですよー。いくらあの汪小苑様に鍛えられたからとしても、比企谷では相手にもなりませんよー。」

八幡（無理？相手にもならない？）

八幡（誰がそんな事決めた？誰が此処にいる【覇軍星君】に勝てないって決めつけた？誰も戦わないからだろ？）

八幡「……分かりました。その決闘、受けます。」

全員（暁彗、冬香以外）「ええーっ！っ！！」

虎峰「しよしよ、正気ですか八幡!? 相手は師父の1番弟子ですよ!? 勝てるわけないじゃないですか!？」

セシリー「比企谷ー、今ならまだ間に合うよー。取り下げてもらったらー?」

沈雲「そうだよ比企谷くん。今でなくても、来年でもいいじゃないか。」

沈華「本当に強いなの？ 私達4人で掛かったとしても絶対に勝てないのよ？」

同級生「そうだ比企谷！ やめておけっ！ わざわざ恥を晒しに行くだけだぞ!？」

同級生「そうだよ！ ボロ雑巾みたいになるよ!？」

先輩「そうよ、やめておきなさい。貴方では無理よ。」

ガヤガヤワーワー

八幡「……………黙れ。」ゴオオオ!!

全員（暁彗、冬香以外）「っ!!」

冬香「へえ…………」

突然、部屋全体に充満する星辰力と殺気。その発生源は言うまでもないだろう……………

虎峰「は、八幡？」

八幡「そりや俺には無理だろうな。」

虎峰「だ、だったら「けどよ、勝てないって誰が決めたんだ？この中の1人でも武先輩と戦った事あんのか？」っ……………」

全員「……………」

八幡「予想通りだ。星露の1番弟子と序列2位っていう肩書き知ったからビビって戦わねえだけだろうが。そりや勝てるなんて夢見るバカいるわけねえよ。」

セシリー「分かてるなら「でもよ……………」なん……………え？」

八幡「絶対に勝てないなんて誰が決めたんだ？やった事もねえのに何で分かるんだ？」ギロツ

虎峰「そ、それは……………」

沈華「……………それでも私は無理だと思うわ。拳士においては趙師兄、道士においてはセシリー師姉を超える大師兄に勝つなんてぜった「黙れ、沈華」いに……………っ!!」ビクツ

八幡「武曉慧がこの学院最強だってんなら……………」

八幡「俺が学院最強を超えるまでだ!!」

……食堂内にしばらくの静寂。

八幡「……そういう訳ですのでその決闘、受けて立ちます。」

暁彗「……………卿は良い目をしている。卿との試合楽しみにしている。」

八幡「それと、さっきは呼び捨てにしてすいません。」

暁彗「……………気にしていない。」

そう言つて、武暁彗は去っていった。

冬香「では、私もこれで失礼します。それと、比企谷さん。」

八幡「……………はい?」

冬香「正直大人しい子だと思っただけですが、意外と男らしい所もあるんですね。先程の比企谷さんは素敵でしたよ。」

八幡「は、はあ……………」

冬香「よろしければ、私の事は冬香と呼び下さい。では、失礼しました。」

八幡（うめこ……………冬香さんって本当に界龍には似合わない人だな。）

八幡「はあー……なんか飯食う気分じゃなくなったな。」スタスタ
沈雲「ど、何処に行く気なんだい？比企谷くん。」

八幡「修行。当分授業には出ねえからそんな事は言つてくれ。星
露にでも言や何とかなんだろ。」スタスタ

ボタンツ

全員『…………』

――放課後・黄辰殿――

虎峰「という事があつたのですが……」

セシリ「どう思いますー？止めるべきだと思います？師父は？」

星露「何故止めるのじゃ？それは個人の自由であろう？それに、暁
慧自ら動くとはのう。面白くなってきたのう！それに、八幡の言う事
にも一理あるえ。暁慧が序列2位というのは定着しておるからのう。
妾からしてみれば、良い刺激になると思うがのう。」

沈雲「それと、彼が修行すると言ったきり、戻って来ないのです。暫
く戻らないとは言つてましたが…………」

沈華「何処に行つたのかも分からないのです。まるで、神隠しに
あつたかのように。」

星露「ほほう、それならもう此処にはおらなんだ。ならば公欠でも
取ればよからう。妾が許可しようぞ。」

4人「……………」

星露「おっほー、早くその決闘が始まらんかのう！楽しみでしかた
ないわい！」

――――

八幡 side

柊々『あてはあるのかい？』

八幡「ああ、ある。」

柊々『本当に?』

八幡「ああ、もう着く。」

ギイイイ

???「ん?おや、八幡ちゃん?」

八幡「はい、あの時の約束通り俺を鍛えてもらってもいいですか?」

???「ああ、勿論だよ。」

八幡「じゃあ、お願いします。」

アレマさん。」

衞々切丸

八幡 side

皆さんどうも、比企谷八幡です。俺は今、界龍の工作機関【龍生九子】の作員の一人、アレマさんに稽古をつけてもらっている。稽古をつけるって言っても、アレマさん曰く『肉体はもう出来上がっている。』との事だ。

ならば俺は星仙術の使い方や扱い方だと思っていたが、そうじゃないみたいだ。アレマさんが気にしていたのは、衞々切丸だった。星仙術も含まれているみたいだが、メインは衞々切丸だと断言した。

……え？何で知り合いかって？そりゃオメエ……何だ、色々あったんだよ。

ん？知りたい？何でそんな事ばかり気になるかなあ。まあ確かに画面の向こうの皆さんは知らない事だよな。出来るだけ簡潔な回想シーン入るからしつかり見とけよ。ほいじゃ、どーぞ。

――回想・黄辰殿――

遡る事二週間前……

それは、俺が武先輩から決闘を受ける前の事である。
グイイイ

アレマ【やあやあ星露ちゃん。元気にしてたかい？】

星露「お主か。まあ、ボチボチといったところかのう。」

アレマ【おやおやおや？そこにいる男の子は誰かな？】

星露「おお、主には言っておらんんだな。転入生の比企谷八幡じゃ。汪小苑の紹介で入ってきてのう。」

アレマ【おっ！汪さんが？珍しい事もあったモンだね。】

アレマ「初めましてだね、八幡ちゃん！あたいはアレマ・セイヤー
ン。界龍の元序列1位さ。まあ、よろしく頼むよ。」

八幡「は、はあ……比企谷です。よろしく願います。」

アレマ「うんうん、よろしく。じゃあ、というわけで、準備はいい
？」

八幡「……………はい？」

アレマ「ジャンケン……………ポンッ！」

アレマ グー

八幡 パー

星露「ほほー、主の負けじゃ。アレマ。」

アレマ「あれあれ、負けちったよ。あたいの負けだ。」

アレマ「君の勝ちだから、何でも言う事を聞くよ。あつ、情事はダ
メだぜ？」

八幡「……………あの、意味が分からないんですけど。」

アレマ「ん？これはあたいの流儀さ。」

アレマ「さ、どんな事を命じるんだい？何でもいいんだぜ？」

八幡「……………じゃあ次会った時、稽古してもらえませんか？」

アレマ「ん？予想外の答えだな。それまたどうしてだい？」

八幡「急に命令できるって言われても思いつかなかったんで。」

アレマ「へえ……………その約束は守るぜ。たまに此処に来るし、こっち
にも来なよ。歓迎するぜ。」

アレマ「それじゃ星露ちゃん、八幡ちゃん。また会おうな。」

—————回想終了—————

少し長過ぎたかな？こうして俺はその時の約束通り、アレマさんに
稽古つけてもらってるわけだ。

そして今は、その称々切丸と対話している。けどこれといって何も
ないし、してない。そんな感じだ。

柰々『んー、ホントに何もないんだけどなー。構ってくれるのは嬉しいけど、そもそも、こんな事して意味あるの?』

八幡『俺だって何か分かってたらこんな事してねえよ。分かんねえんだよな。今更お前と話する必要ある?夜になったら対話してるから問題ないと思うんだがな……』

八幡『なあ?ひよつとするとだけど、お前何か俺に隠してたりしてない?』

柰々『それって僕を信用してないって事だよね?』

八幡『そういうわけじゃないが、アレマさんの口ぶりからしてな。(喉元に呪符あるから喋れないけど)』

柰々『別に何も無いんだけどなー。』

八幡『……そうか。とりあえず、一旦現実^{あっち}戻るわ。』

柰々『うん!また来てねー!アデュー!』

チャリーン

八幡『……ん』パチツ

アレマ『うん?起きたのかい?』

八幡『ええ、話はしてきました。ですが、これといって何も。』

アレマ『まあじつくりいこうぜ。なんせ柰々切丸つてのは、意識を刀の方に持ってかなきゃいけねえらしいからな。そうでもしねえと話なんて出来ないからね。』

柰々『勘違いしてもらっちゃ困るなー。』

アレマ『Σ(。д。ー) ツ!!』

柰々『そんなにビックリする事ないじゃないか。八幡とはこのくらい日常茶飯事だよ。僕は八幡の【相棒】だからね!』

相棒の部分を強調しながら柰々は喋ってきた。納刀しながら。

八幡『お前、意外と趣味悪いぞ。分かってて黙ってやがったな。』

柰々『へへーん！僕たちはイタズラも好きなのさ！』

アレマ『その状態でも話せたとはね、驚きだよ。』

柰々『んにや、八幡だけだよ。初めての適合者だからね。ついでに僕の事を話しておこうと思ってね。』

八幡『お前の？』

柰々『うん。僕には2つの伝説があつてね。まずは、『柰々切丸』から話そうか。』

柰々『昔々、日光の鳴虫山に一匹の妖怪がいました。その妖怪は人々に悪さを働いていて、その人達を凄く悩ませていたんだ。でも妖怪だからね、退治しようなんて人はいなかったんだよ。その妖怪の名は何と……八幡!!』

八幡『おい。』

柰々『冗談だよー。妖怪の名は柰々虫。【ねーねー】って鳴くからなんだって。それでね、そんな晩の事、日光の二荒山神社に御神刀の一振りが、カタカタ…って勝手に動いたんだよ！』

アレマ『ほう、あんたかい？』

柰々『その通り！全長3.4m、刀身2.2m、重さ22.5kgの化け物刀だよ！人間じゃあ持てても、絶対扱えないよ。』

柰々『そして鞘から抜け出すと、一直線に柰々虫の方に飛んで追いかけたんだよ。そして退治。柰々虫を退治した刀だから【柰々切丸】って名前がついたのさ。まあ、妖怪を切った刀だからね。妖刀とも呼ばれているよ。』

八幡『もしかして……お前って刀の状態でウルムⅡマナダイトを使われたのか？』

柰々『まあね。核は刀身だからね！折れたらそこで試合終了!』

柰々『それじゃあ次、いってみよー！次の僕は名前が違うんだ。』

2人『?』

祢々『鵠切丸』っていうんだ。』

鵠切丸①

※完全に別作品。

衾々切丸side

――400年前・江戸――

その時、まだ僕は生まれてはいなかった。けど、当時の京の都では、妖あやかし、即ち妖怪が跋扈していた。自身の野望を果たさんがために。

そのとある公家屋敷の姫様は、とても妖怪に襲われやすかった。理由は、人にはないとても不思議で強力な治癒力があつたから。

そこで当時、陰陽師の13代目当主「花開院秀元」は、退魔の力を持った刀を作った。それが僕！衾々切丸です！

対魔刀故に、人には届いても致命傷にはならず、妖の類にしか意味をなさないとつても、とーつても優しい刀なんだよっ！

……話が逸れたね。その刀を持った姫様は、「なぜこのような事に。」っと毎日を嘆いておりました。

そこで現れたのが、金と黒の長髪に黒の模様、黒い羽織に青い着物を着ていて、目元に模様がついている、いかにも怪しそうな人物だった。

姫様はその男に襲われそうになったが、持っていた僕で男を攻撃した。勿論、普通の人間なら意味はない。だが………

男の切り口から血が噴出。妖だった。
姫様は慌てて力を使い、傷を治した。

治療したのち傷の治った妖はこう言った……「ぬらりひよん」つと。

ここからは関係ない物語になりそうだから至極簡潔にいくね！

※凄く大雑把です。

詳しくは、ぬらりひよんの孫千年魔京の4話、5話をご覧ください。

ぬらりひよんが夫婦になろうと言った。

（お熱いね〜ヒューヒュー〜）

←
屋敷に返す。そしてまた来る約束。

（夜遊びは真似しちゃダメだぞ〜？）

←
姫様が大阪城に攫われる。

（ま、まさか他の男にっ!?!）

←
ぬらりひよんが屋敷に来るがない。

（来るの遅いよ!!）

←
公家屋敷に落ちてあつた僕を拾う。

← (ここ重要!!テストに出るよ!)

ぬらりひょん、姫様を助けに行く。

← (盗人から取り返せー!)

大阪城で大戦争!

← (良い子は戦争なんて真似しちやダメだぞ!)

← 相手の大妖怪を僕で倒す!

← (ここも重要!!テストに出すよ!!)

戦争終了!ぬらりひょんと姫様結ばれる!

← (あらら〜やだわ〜!)

← 花開院本部でどんちゃん騒ぎ。

← (僕も混ざりたかったなあ〜……)

← ひ・で・も・とーーー!!!

← (う・る・さ・いーーー!!!)

ぬらりひょんと秀元の密談。

← (正直、退屈だったから寝てた。)

密談終わる頃。

はい!こっからスタートツ!!

アクシヨンツ!

ぬらりひょん「じゃあ、そろそろ行くぜ。」

秀元「ぬらちゃん。最後に一言:それ:【鶴切丸】って名付けたん

や……………鶴って知つとる?」

ぬらりひょん「鶴?お前の家の大敵じゃろうが……………んな大層なも

ん、女の護身刀にしちまったってーのかい？」

秀元「なんやろな？運命かもな。」

秀元「だってこうして、次代の主に渡つとんねやからな……………」

秀元「あんな、ぬらちゃん。その刀にはな……………」

ぬらりひよん「やめねえか。言わんでもわかつとる！こつぱずかしい話はんべんじゃ！ありがたくもらつとくぜ。返せって言っても、もう遅いぞい。」

秀元「別に…ええよ。いつか必ず……………」

輪廻の輪は回るから。」

ぬらりひよん「いくぜてめえら！！京はしめえだ。ワシの背中に並んで…………ついてこい！！」

オオオオオオオオ
!!!!

これが別の僕の物語の始まり。可笑しいよね？妖を斬る刀を妖が
持つてるんだから！それからまた時が経ち、400年後の物語がはじ
まるよ！

鵜切丸②

※完全に別作品。

柵々切丸 side

―――400年後・東京都浮世絵町―――

ぬらりひよんが僕を持ってから子をなし、その子がまた子をなしと孫が出来た頃、僕の運命が動く。

また簡単にいくよ？分からなかったら、前回同様ぬらりひよんの孫を全部見ることを勧めるね！

その孫は、とある理由から妖怪である事を嫌い、人間として生きていこうと決めていました。理由は、自分の敷地内にいる妖怪たちが悪さをしていたから。でも、当たり前だよな？妖怪だもん。妖怪は悪いものだよ。そしてその孫、極めつけがその一家の跡目なのだよ。いやゝすごいねー。(棒)

それからその孫は、幾多もの苦難に巻き込まれるも、全てを乗り越えてきた。

あつ！言い忘れてたけど、この孫の実家は妖怪の屋敷兼ヤクザの家でもあるんだよ？話逸れたけど、仲間の想いによりその孫は、ついに一家の若頭にして次期総大将候補となった。

それから、四国の化け狸を倒したり、遠野で修行したり、京都に親の仇討つ為に行ったり……つとここからだった、危ない危ない。

仇討ったと思ったら、またもや新しい敵が……それが八幡!!……じゃなくて鵜だったんだよ。伝説上に出でくる鵜とは違って、人の形をした妖怪なんだよ。鵜っていうのは得体の知れないっていう意味もあるからね。実を言うと、鵜の正体は安倍晴明、陰陽師なんだよ！その孫は、僕で鵜を斬ろうとしたんだけど、指先一つで止められて、あまつさえ僕を粉々にしたんだよ!?ンキーンッ!!今思い出しただけでもム力つくなーっ！あんなのただ人の形をしたただの妖怪なのにつ!!

まだ身体が出来ていないとか言っつて、地獄に逃げた鶴は推測でも1年くらいは出て来ないそうで、まずは一安心。

折れた？といよりも砕かれた僕は、当時の妖刀作りの天才陰陽師に託され、青森県の恐山で新調されましたー。

直った僕が孫の手に渡ると、祖父と十三代目秀元の会話が聞こえた。

※前作の最後あたりです。

そして……………

秀元「あんな、ぬらちちゃん。その刀にはな……………」

剣霊が宿つとるんよ。それも途轍もなく強い。もし、自分が認めない存在に渡ったら、そいつエライ事になるから気をつけてな。これでも僕、陰陽師だけど君は祓いたくないからね。一応、警告はしておく

よ。」

過去の会話を聞いた孫は、鵠と戦うために全国の妖怪を集め、鵠との全面戦争に挑むんだよ。

それからの道のりはこちら！

※これも大雑把です。

城に乗り込むために、結界破壊。

（僕の出番はまだ先だよー。）

←

鵠の子孫たちと戦闘。

（孫の仲間達がね？）

←

鵠の実子と戦闘。

（いやー手に汗握られた良い勝負だったよ。）

←

鵠と戦闘！もう1人おった。

（もう1人は一応味方です。）

孫は鵠と戦っていたけど、やっぱり圧倒的な力の差で仲間を庇い、自身の身体の半分を削られてしまうんだよ。

とても強い力に飲み込まれそうになると、先程の味方の妖怪が前に立った。補足で言うておくけど、鵠の母親だよ。名は羽衣狐。かつて、ぬらりひょんと戦った大妖怪。もう分かったと思うけど、伝説上で羽衣狐が産んだとされる子は、安倍晴明なんだよ！ココ、テストに出ます！

鵠「母よ、どけ……………」

羽衣狐「どかぬよ……………妾はこの子の母だから。」

鵠の技が炸裂！したと思っただけ……………

孫の傷は無くなり、さつきまでとは明らかに違う雰囲気を纏っていたの。

黒い着物に金模様、黒と白の長髪、首には狐を巻いていたんだ。トドメを刺されると思いきや、逆に技を切り裂き、鶴の身体を斬った。

孫「清明……………還ってもらうぞ。」

孫「鬼纏まとい襲色かさねいろ 黄金黒装鶴切丸おうごんこくそうぬえきりまるー!!」

孫「この世は、お前にふさわしくねえ。」

鶴「小妖怪が群れおって、鶴の歩みは止められぬ!!」

孫と鶴がぶつかり合う。

けど、僕はまた碎けそうになるんだ。

鶴「フツ…、何も変わっていないな……」

鶴「滅びよ、ぬらりひょん。」

孫（衾々切丸が……………だ…だめなのか……）

その時――

鶴「母上……………!?!」

孫（羽衣狐…?父さん…?みんな…?）

孫（そうだ…この刃は……………百鬼オレたち夜行の畏!!）

孫（ひるむな、壊れやしない、この刃で、すべての運命を断つ!!）

そして鶴の顔から身体までを一刀両断。鶴は消滅したんだ。

これがもう1人の僕、鶴切丸。

衾々切丸は、山金造波文蛭卷大太刀やまがねづくりはもんひるがねのおおだちという正式名を持った大太刀妖刀。

鶴切丸は、十三代目秀元が作り上げた中でも最高傑作の一振り。

僕は2人いて、どっちが本物でどっちが偽物かなんて分からない。でも、これだけは言える。

たとえば、どっちでもないとしても、僕の今はハツチとある。今の僕の持ち主であり、相棒。ハツチがそう言ってくれたから、僕は離れる気はないよ。

修行と一方……

八幡 side

柵々「とまあこの2つが僕の伝説。」

もう信じらんねえよ。そんなスゲエ刀だったのお前？俺、ちよつと引いちやったよ？

アレマ「俄かには信じられないねー。特に後者。あの鶴を切ったなんて、とても信じられないよ。」

あ、アレマさんも同じ事思ってたんだな。そりやそうだ。ていうか、鶴って何なんだ？

八幡「アレマさんは、鶴って知ってるんですか？」

アレマ「いんや。話を聞いてるうちに気になってきたから、調べただけだよ。」

アレマ「猿の頭、狸の体、蛇の尾、虎の手足を持ち、『得体の知れない』という意味を持った妖怪みたいだね。雷獣とも呼ばれているらしいね。」

そんな俺以上に気持ち悪い奴を切ったのかよ。ていうか……

八幡「それって妖怪じゃなくて化け物じゃねえか……よくそんなのを相手したモンだな。」

柵々『別にこれは伝説だから信じなくてもいいんだよ？』

あの語りっぷりを見て嘘だと思う程、バカじゃないつもりなんだが？

アレマ「あたいは、あんたの真剣に話してる感じを見て嘘だとは思えないね。」

あ、また同じ事思ってたんだ。なんかヤケに気が合うな。

八幡「柰々はその伝説、どう思ってたんだよ？自分のだから信じてんのか？」

柰々『分かんない。自分のこととはいえ、この鉱石を埋め込まれてから自分の記憶は曖昧なんだ。でも、この話は覚えてたんだよね。不思議っ！』

何が不思議っ！だ。

八幡「思い出そうとは思わないのか？自分の記憶だろ？」

柰々『別に。今はハッチがいるからそれでいいんだー！』

八幡「……ならいいが、なんかあつたら言えよ。俺達は『相棒』なんだからな。」

柰々『うんっ♪そうするね！僕達は『相棒』だからねー！それに、ハッチといると、毎日楽しいしねー。』

八幡「そ、そうか……」

アレマ「おや？八幡ちゃん照れてるねー。いいよその表情！」ニヤニヤ

八幡「……ほつといってください。」

柰々『え？なにになに!?どうしたの？』

八幡「アレマさんが俺をからかったただけだ。それだけだ。」

柰々『なんてなんて!?!』

八幡「言うと思うか？」

柰々『ぶー、どうせ照れてる顔見られたからでしょ？』

ちよつと？何で分かるの？貴方妖怪切るだけでなく、人の心まで読めるの？もう最強じゃない？

柵々『八幡は分かりやすいんだよ。顔の見れない僕だつて分かるくらいにねっ!』

アレマ【確かに八幡ちゃんは分かりやすいよねー。もう少しポーカーフェイスを鍛えたらどうだい?】

八幡「これで十分ッスよ。それよりもメニュー組み直しましょうよ。こいつとの対話はもう必要ないでしょ?」

アレマ【ふむ、確かにそうだね。柵々切丸との対話は必要なさそうだし、次からは組手、星仙術、剣術にしようか。剣術は教わってるかい?ないならあたい流のを教えるけど?】

八幡「一応小苑さんから二天一流と一刀流を教わってます。」

アレマ【一刀流はともかく、二天一流は何で?刀は柵々切丸一本でしょ?】

八幡「小苑さん曰く、『とつておいて損はなからう。』だそうです。2週間であのスパルタですからね、嫌でも染み付きますよ。」

柵々『八幡は頑張ったんだねー。えらいえらい!』

八幡「や、やめろよ。ほらっ、少しウォーミングアップするから準備しろ……ていうより、お前に準備なんていらんか。」

柵々『いつでもどうぞー。』

アレマ【じゃあ、見せてもらおうかな?君の剣術をね。】

そう言われてから、俺は柵々切丸を持って道場で型や舞、模擬戦をした。時間は限られている上に短い。出来るだけこの短期間で強くなんなきゃな。

八幡 s i d e o u t

冬香 s i d e

――界龍第七学院・食堂――

冬香「今日は何に致しましょうか。」

ガチャツ

4人「……はあ。」ズーン…

この溜息は、比企谷さんのクラスメイトの虎峰君、セシリーさん、沈雲君、沈華さんでした。

冬香「……皆様お揃いでお元気がないですが、どうかなさったのですか？」ニコリ

セシリー「あー、冬香さん。いや、なんてゆーかー、退屈だなーって。」

冬香「はい？」

セシリー「いつもは比企谷も入れて5人で食べてるんですけどー、比企谷がいなくてもこんなにつまんなくなるとは思ってなくてですー。」

冬香「それで近頃、活気がなかったのですね。いつの間にか比企谷さんが、話題の中心になっていたからではありませんか？そうでなければ、この4人で集まる事はそんなにない筈だと思いますよ？」

虎峰「確かに八幡が中心でしたね。」

沈雲「はい。比企谷くんの取り合い、武術の話、星仙術の話、日常などほとんど彼が関与していますね。」

沈華「それは納得はできますが、穴が空いた感じがするのは否めないですね。」

4人「何処に行ってしまったのですか？（行ったいのー？）（行ってしまったんだい？）（行っただけなのよ？）」

虎峰「早く武術の話をしたいです。」

セシリー「ナデナデしたいのにー。」

沈雲「星仙術を教えたり……。」

沈華「イタズラとかしたいのに。」

4人「……はあ。」

冬香「こ、これ程息ピッタリだとは思いませんでした。比企谷さんの影響力は凄いですね。」

ガチャツ

陽乃「はあ……ひゃっはろー……」ドヨーン…

この方達とは比べ物にならない程の負の感情を感じますね。

冬香「こんにちは、陽乃様。ご機嫌が優れないようですが、如何なさいましたか？」

陽乃「うん……比企谷くんに会えないから、少し寂しくて……」

冬香「陽乃様もなのですか？」

陽乃「もってことは、冬香ちゃんも？」

冬香「いえ、私ではなく彼方にいる比企谷さんのクラスメイトが似たような状態でしたので。」

4人「……」ズーン…

陽乃「……うん。確かに似てるね。」

陽乃「……でもさ、私の方が凄いでしょ？ 雰囲気的に。」ドヨーン…

冬香「……誠に申し上げにくいのですが、確かにその通りですね。」

5人「……はあ。」ドヨヨーン…

……増えましたわね。

冬香「……そんなに比企谷さんは良い人なのですか？」

5人「はい！（そうだよ！）」

即答とは……

虎峰「武術も分かりやすく教えて下さいますし、」
セシリ「時々甘えさせてくれたり、」

沈雲「教えたことは素直に聞いて下さいますし、」

沈華「イタズラしても、すぐ許してくれますし、」

陽乃「素直じゃないけど、偶に頭撫でてくれたり、」

5人「凄く良い人なのです！（何だよっ！）」

冬香「そ、そうなのですか……」

この4人はいつも一緒なので不思議には思いませんが、陽乃様が此処まで言うのは余りないですね。

冬香「……少し気になってきましたね。彼のことが。」

5人「？」

冬香「いつもいる4名の方々はともかくとしても、陽乃様が此処まで言うのは珍しいので、興味が湧いてきました。」

冬香「公式序列戦が終わりましたら、お誘いしても大丈夫でしょうか？……いえ、話を聞く限り比企谷さんはとても優しい方。少し急でも大丈夫ですよ。」

セシリ「あのー……冬香さん？」

冬香「っ！……申し訳ございません。少し考えに耽ってしまいました。」

セシリ「いや、大丈夫ですけどー。」

冬香「ところで、1つ皆様に御相談なのですが……宜しいでしょうか？」

5人「？」

冬香「公式序列戦が終了した翌日に、比企谷さんを1日お借りしたのですが宜しいでしょうか？」

虎峰「八幡は僕のものではないので、八幡次第ですかね。」

セシリ「まあ、冬香さんなら何もしないだろうし、大丈夫ですよー。」

沈雲「僕も構いませんが、沈華はどうだい？」

沈華「ええ、大丈夫よ。」

陽乃「……うん、いいよ。」

冬香「ありがとうございます、皆様。」

これで皆様の言っていた事を体験できます。特に頭を撫でられるなんて、私はしてもらった事がないので楽しみです。

早く帰ってきてくださいね？比企谷さん？

修行①

剣術

――――

部屋に響き渡る金属音。刀と刀のぶつかり合い。現在、比企谷八幡とアレマ・セイヤーンは真剣での稽古をしていた。竹刀や木刀ではなく、本物の剣である。

目で追うのも難しい程の剣戟を繰り返している両者。攻めては防ぐの繰り返し。

キンッ！

その音と共に、両者は互いに下がり間合いを取り直し、攻撃に備えている。

アレマ「いや～凄いな～八幡ちゃんは。あたいの剣撃をこうも完璧に受けて受け流したりするもんだから、少し自信をなくすよ。」

八幡「……どうも。」

アレマ「本当に汪さんに教わっただけなのかい？俄かには信じられない腕だね。少しは自分流にアレンジしてるんじゃないかい？」

八幡「正解です、少しはアレンジ加えてます。そうでないと、少し動きづらいですよ。」

アレマ「もしかしてだけど、武術とも組み合わせているかい？動きに余り大胆さがなかったからね。君の使う武術はそういうものだろうか？」

八幡「……流石っすね、正解です。」

アレマ「小細工なんてしても無駄だから、早くかかって来なよ。」

八幡（だったら、少し試してみるか。）

八幡「では、いきます…よっ！」ダッ！

アレマ「ん？正面からなんて、一体何を考えているのかな？」
八幡「焰撃……不知火っ！」

突っ込んだと思ったら、八幡の袂々切丸から紫の炎が出てきた。その刃をアレマは、間一髪で避けた。

アレマ「ふう、危なかった……！」

八幡「陽燄っ！布天火っ！火糸っ！照雷っ！罪炎っ！朱紅刃っ！」
八幡「翔煉刃っ!!」

カスツ

アレマ「っ！」

紫の炎を纏った刀で怒濤の8連撃。アレマは全て受けずに避けていた。だが最後の1撃でアレマの右肩に擦り傷をつける。

アレマ「……いやあ、八幡ちゃん凄い技もってんだねえ？酷いじゃないか、隠すなんて……それになんて出鱈目な威力してんだよ。小技とは言えないレベルだね。」

八幡「言ったらつまらないでしょ？多分ですけど、教えたら絶対当たらないと思うんで秘密にしたいんですよ。」

アレマ「女の身体に傷をつけるものじゃないけどねー。責任、取ってくれるんだよね？」

八幡「……それじゃ聞きますけど、その頬の傷は一体どうやってできた傷なんですかね？アレマさん。」

アレマ「……テヘペロ？」

八幡「……」

アレマ「それよりも、さっき言った事を訂正しなきゃね。小細工は無駄って言ったけど、どうも違うみたいだね。あたいに擦り傷とはいえ、傷をつけたんだからね。あたかもそれなりにやしないと、あられない姿にさせられちゃいそうだからね。」

八幡「そんな姿にするつもりはありませんが、そうしてくれるとありがたいです。」

アレマ「さて、もう少しやろうか。あたかもまだまだやりたいしね。」

八幡「望むところです。」

アレマ「良いねーその目。あたいを切るって感情が湧き出てるよ。」

八幡「切るつもりでいかなきゃ切らしてもらえませんからね。さっきも結構本気でしたし。」

アレマ「よしっ！その調子で後10分やろうかつ！八幡ちゃん！」

八幡「うっす。」

それから2人は、一進一退の攻防でお互いに傷をつける事も、つけられる事もなく終了した。

アレマ「いやあー楽しかった。やっぱり戦いは楽しくないやつまんないねっ！」

八幡「流石、星露にも劣らない戦闘狂ですね。今を楽しむなんて。俺にはその感情は理解できませんよ。」

アレマ「八幡ちゃんもあんま人の事言えた事じゃないと思うんだけどねー。それにしたって、八幡ちゃんが炎を使うとはね……驚いたよ。あれはどういう原理なんだい？」

八幡「ああ、あれ炎じゃないんですよ。」

アレマ「What?」

八幡「……何故英語に？まあそれはおいといて、あの技は俺の魔術師としての能力を炎の形に具現化しただけです。燃えはしませんが、切れ味は増してます。」

アレマ「ほほう？その能力とは何だい？あたいに教えておくれよ。ズバリッ!」

八幡「言うなれば影ですかね。影を具現化させてから炎の形にしたんですよ。」

アレマ「面白い使い方をするね、八幡ちゃんは。するとあたいは、八

幡ちゃんの能力にまんまと騙されたってワケか。」

八幡「俺の能力は影と幻ですからね。まあ、騙されたっていうならそうなんじゃないですかね？」

アレマ「かかかつ。普通に戦っていたただけだというのに、影で作られた技に嵌められるなんてね……とんだ策士だよ。」

八幡「初見ならしうがないと思いますがね？そう簡単には分からないっすよ。所見で分かれたら、俺の能力の意味が無くなっちゃいますし。休憩が終わったら次は星仙術ですよね？」

アレマ「ああ、そうだよ。」

八幡「俺あんまり星仙術は得意じゃないんで、よろしくお願いします。」

アレマ「分かつてるよ少年。手取り足取り教えてあげるから覚悟しておきなよー？」

八幡「よろしくお願いします。」

修行②

星辰力&星仙術

八幡 side

アレマ「ふむ、君の持つ星辰力は凄まじいね。こんな夥しい量をした星辰力は初めて見たよ。いやゝ感服感服。」

八幡「自分じゃ分かんないんですけど、そんなあるんスか？俺の星辰力って。」

柊々『八幡の場合、この六^{アスタリスク}花の中では、一番なんじゃないかな？』

アレマ「いんや、八幡ちゃん以上に保有してるのが1人いるんだなーそれが。」

八幡「1人？」

アレマ「ああ、でもいい勝負ってどこかね。1ℓのペットボトルがあったとしたら、八幡が700ってとこだね。」

アレマ「当然そいつは満タンだけだね。あたいでも勝てるかどうか分からない。それよりも負ける可能性が高いね。」

八幡「マジっすか……俺よりもある奴がいるみたいだぞ？柊々。」
柊々『へえゝそんな人がいるんだ。ねえねえ！誰なの？』

アレマ「この六花最強の魔女、レヴォルフ黒学院の序列1位、^{エレンシユキィガル}【孤毒の魔女】が2つ名の『オーフェリア・ランドルーフエン』って奴だよ。」

八幡「2つ名の感じからしてヤバそうな奴なのは確かですね。」

アレマ「ああ、確かにヤバイ奴だぜ。言つとくけど、会ってみたいとか間違っても思うじゃねーよ？八幡ちゃん。」

え？速攻でボコボコにされるとかですか？それとも話しかけたら死ぬレベルの攻撃されるとか？

アレマ「あいつは身体から毒の瘴気を出していてね、謂わば彼女自身^身が毒そのものと言っても過言じゃないね。」

アレマ「だから彼女に近づいただけで気分が悪くなったりする奴ら

が多いんだよ。」

アレマ【今年やる《^{リンドブルス}王竜星武祭》があるだろ？その前回優勝者さ。今年も優勝確実かねえ？】

八幡「……何でこつちを見て言うんですか？俺は星武祭に出る気は無いですよ。」

アレマ【出てみればいいじゃないか。同期の実力を知るのも勉強だぜ？】

………は？

八幡「………同期？」

アレマ【知らないかい？【孤独の魔女】は八幡ちゃんと同い年だよ？高1だからね。】

俺そんなのと同期なのかよ。まあ別に必ず関わるってワケじゃねえしな。

八幡「そんな奴に関わろうなんて思いませんよ。そもそも、今のを聞いて関わりうなんて思いませんよ。それに衾々もつまんな過ぎたのか、反応すらしてませんしね。」

アレマ【ははっ、そうかい。それじゃあ続きをやろうか。】

それからしばらく………

俺は、星仙術の細かい使い方を鍛錬していた。俺は大胆な攻撃は不得手だが、精密で細かい攻撃は得意な方。少し汚い手ではあるがこれも戦法、アレマさんを俺の幻影で翻弄しながら戦っていた。

アレマ「八幡ちゃん、星仙術苦手って言ってたよね？」

八幡「はい。そうですが？」

アレマ「君ね……あたいにこれだけ動かせておきながらも苦手と言うのかい？自分で言うけど、あたいたい元序列1位なんだけど？それに、星仙術の扱い完璧過ぎやしないかい？あたいから見ても欠点らしいところなんてなかったけどねー。」

八幡「そこは一応、沈雲と沈華に教えてもらいましたからね。細かい扱いなら得意なんですよ。」

まあ、細かいからこそ相手を惑わすことが出来るんだがな。

アレマ「それにしたって、何だいのあの技は？あんたを斬ったと思ったら黒い煙みたいなものが出てきて消えちゃうし、そこだと思っても姿が見えなくなってるし、どうなってるんだい？」

やっぱり気付くか。この人はやっぱスゲーな。こんな短時間戦っただけなのに、もう俺の技を見切ってる。

八幡「ああ、明鏡止水と鏡花水月の事じゃないですかね。」

アレマ「そんな技名なのかい？」

八幡「実は、祢々の話に出てきた妖怪の技を貰ったんですよ。なんか似てるような気がして。」

アレマ「どんな技なんだい？あたいはそこまで真剣に聞いてなかったからね。」

八幡「明鏡止水は、星仙術で自身の姿を見えなくする、認識をさせなくする技です。鏡花水月は、星仙術で相手に自分の認識をずらす技です。見えてはいてもそれは幻で、本物が何処にいるのか分からなくさせます。どちらも消えることによつて、逆に存在感を増加させる効果があります。どうです？逆に何処にでもいるような錯覚や感覚になりますでしたか？」

アレマ「君を鍛えてるつもりが、逆に鍛えられてる感じがするよ。まあ確かに君の言う通り、そんな感じになったね……何だか負けた気分だよ。」ヤレヤレ

八幡「そ、そんな事言わないでくださいよ。まともにやりあったら、絶対俺勝てないですから。」

これはマジだ。この人全然本気出してないもの！俺、ガチでやってるつもりだよ？

八幡「ま、まあ続けましょうよ。まだ伸び代があると思うんですよ。」

アレマ「そうかい？それじゃあ次は、ちよいと本気でいこうかね？だいぶ動いたから身体もあつたまつてきたしね。」

八幡「……………マジですか？」

アレマ「うん♪マジ♪」

そんな♪つけないでもらえますかね？見てるだけでもゾツとしてくるんで。

どうやら醒天大聖様は、少し本気を出すみたいです。今回の修行は、中々ハードになりそうだな。

そんな環境に慣れた俺も、少しおかしくなってるのは、気のせいだろう。多分。

――おまけ――

シルヴィア「どうしたの？5人で来てるのにもう終わり？張り合いないなあ。」

ミルシエ「はあ…はあ…う、嘘でしょ？」プルプル…

トウーリア「ゼエ…ゼエ…全然…歯が立たねえ。」プルプル…

パイヴィ「ま、まさか…こんなに仕上がってるなんて…」プルプル…

モニカ「はあ…ど、どうなってるのよ？本当にシルヴィア？」プルプル…

マフレナ「と、とても5対1なんて思えません…」プルプル…

クインヴェール女学園の模擬戦場では、チーム『ルサルカ』の5人と、シルヴィア・リユーネハイムが模擬戦をしていたのだが、結果はシルヴィアの余裕勝ち。

トウーリア「あんた本当にシルヴィア!?この前までのあんた何処行っただよ!」

ミルシエ「全っ然違う……こんなに強くなってるなんて……」

パイヴィ「はあ：強くなりすぎ。」

モニカ「私達の攻撃が全く当たらないわ……」

マフレナ「シ、シルヴィアさん?一ヶ月前からかなり調子が良いみたいですが、何か良いことでもあるのですか?」

シルヴィア「良いこと……そうだねえ……ふふふっ／／／／／」

5人「!?」

余りの圧倒的な差に気になったのか、マフレナが聞いてみると、考える素振りをしたと思ったら、右手を頬に添えて頬を赤に若干染めていた。

シルヴィア「うん、あつたよ。私にとって凄く良いことが。」

シルヴィア「でも、これはあんまり言いたくないかな。」

マフレナ「い、いえ!別にそこまでして聞きたいわけではないので!」

トウーリア「えー!?私は気になるな!教えてくれよ!」

ミルシエ「私も知りたいな。」

シルヴィア「そこまで言うなら教えてもいいけど……」

2人「え!?ホント!?」ズイツ!

シルヴィア「でも、《王竜星武祭》が始まるまでの期間の模擬戦は、2人に付き合ってもらうけどね?」

シルヴィア「勿論、強制だからね?」ニコツ

2人「」ダラダラ……

シルヴィア「どうする?聞きたい?今なら教えてあげるけど?」

2人「い、いえ!結構ですっ!」

シルヴィア「そう?なら良いけど。あっ!それからもう1つ。」

5人「?」

シルヴィア「もし、この事も私のスキャンダル狙いで探ろうとする

なら、タダジャオカナイカラネ？」ハイライトオフ

5人「……………」ダラダラ…

シルヴィア「分かった？」ニコッ

5人「は、はい！」

シルヴィア「うん、素直に聞いてくれて嬉しいよ。それじゃあここまでにしようか。今日はありがとうね、またお願いするよ。」

そう言つてシルヴィアは、模擬戦場から出て行つた。

マフレナ「……一応言いますが、私はしたくありませんよ？シルヴィアさんがあんな表情したのつて初めてですから。多分、今日以上に恐ろしい事になりますよ？」

トウーリア「そんな度胸ないよ!？」

ミルシェ「あの顔見たら出来るものも出来なくなるよ!」

パイヴィ「私はまだ死にたくない。」

モニカ「そうね。この事に関しては手を出さないでおきましょう。」

シルヴィアは、今日も絶好調であつた。

飲食店にて

八幡 side

鍛錬が終わったその日の夕方、俺は街に来ていた。理由は、まあ外食目当てだ。他には、食材とかの消耗品の買い出しだな。

今日やった組手は中々にハードだった。アレマさんの得意とする組手は俺の攻撃なんて一切通らず、むしろ俺は捌くか躲すか避けるしか出来なかった。

八幡「……ああ、今日もやったな。適当なところで済ませてから買い物するか。」

そうして俺は、近くにあった飲食店の中に入った。ふっ…俺はこの1ヶ月の間、1人でサイゼ以外の飲食店にも入れるようになったのだ。少し勇気はあるけど。

まあ、そんなことはどうでもいいか……さっさと飯食って、買い物して早く戻んなきゃな。

だが、俺はまだ思ってもなかった。
この店の中に知り合いがいるとは。

店員「いらつしやいませ！お一人様でよろしかったでしょうか？」
八幡「はい。」

店員「かしこまりました。それではお席へご案内致します。」

そのまま席へと案内されていく。1人で来れるようになるってなんか初めてのお使いみたいな感じだな。

店員「此方になります。お決まりになりましたら、そちらにあるボタンを押して下さい。失礼致しました。」

八幡「さて、なに食うか「比企谷さん？」……な？」

え？

冬香「やつぱり比企谷さんでしたか、お久し振りです。私の事覚えていらつしやいますか？」

八幡「えと……間違いでなければ、2年の梅小路冬香先輩ですよね？」

冬香「はい、正解です。それと私の事は冬香とお呼びくだされば幸いです。苗字はあまり好いてはいないもので。」

八幡「わ、分かりました。」

マ、マジかよ……こんな所に冬香さんがいるなんて。

冬香「ところで、比企谷さんはなにを？此方には食事にですか？」

八幡「はい、まあ……そうですけど。」

冬香「そうでしたか。でしたら一緒にしてもよろしいでしょうか？1人で心細いと思っていたのですよ。私も外食はあまりしない方なのですが、偶には中華以外の食事もしたくなるので………如何でしょうか？」

……この人、俺にわざと断れないようにしてないか？

冬香「それともう1つ。同席を許可して下さるのなら、比企谷さんと会った事は内密にしておきます。」

八幡「……完璧な交渉術ですね。これじゃ俺、断れないじゃないですか。」

冬香「それで、お答えは？」

八幡「はい、許可します。」

冬香「ありがとうございます。では、失礼致します。」

そう言つて冬香さんは、俺の向かいの席に優雅に座った。何度も言うが、本当に界龍に似合わない人だな。

冬香「比企谷さん、今の界龍がどうなってるか、知りたくはありませんか？」

冬香「比企谷さんのクラスメイトの事……特にあの4名の方々、気になりませんか？」

八幡「……まあ、そうですね。序列戦まであと5日。一応それだけを考えてましたが、クラスメイトの事はやはり気になりますかね。」

冬香「では、貴方が居なかった界龍の1週間の様子をお教えします。と言いたいところですが、それよりもまずはご注文を決めませんか？何もない状態で話していても喉が渇きます。」

八幡「それもそうですね。じゃあ、先に注文決めてからお願いします。」

注文&説明中……しばらくお待ち下さい。

冬香「といった現状です……私が言っても慰めにはなりません、比企谷さん。お戻りになられたら少々覚悟が必要かと……」

俺、界龍に帰ったら、二重の意味で戦わなくちゃいけないのか？序列戦で2位、終わったらあの4人と雪ノ下さん、冒頭の十二人のフル

コースじゃねえか……

八幡「本当に慰めにならない言葉ですね。それに俺が居ないだけで、普通そんな風になりますかね？」

冬香「私は分かる気がしますよ？ 話題の方がいなくなると、急に暗くなってしまうものですからね……実際に見たから言えることです。」

なんかすいません。俺のせいで苦勞をかけたみたいで。」

冬香「いえ、苦勞だなんてそんな……それによろしいですよ、可愛い後輩には構いたくなるものです。」

八幡「……あれ？ 声に出してました？」

冬香「？ はい。ずっと口から仰っていましたが、それが何か？」

八幡「い、いえ、なんでも……」

また声に出しちまったよ……この癖直したいが、抜けきれないんだよな。

冬香「……比企谷さんは素直な方ですね。少々意外です。」

八幡「もしかして、この性格の事を言っていたりします？」

冬香「いえ、雰囲気ですかね。何処か近付きがたい感じがしたものでしたので……ですが、比企谷さんはとても素敵な方ですね。陽乃様からよく伺っておいりました、とても面白い子だと。」

八幡「はあ……忘れていいですよ。あの人が俺の事を言う時なんて、暇つぶしとかですよ。」

今は違うんだろうが、他に思いつかん。

冬香「ふふふっ……失礼。」

店員「お待たせしました。」

冬香「ちょうど食事も来たようですね。学院の話はこれくらいにして
おいて、貴方の話を聞かせて下さいませんか？」

八幡「……いいですけど、そんな面白いのはありませんよ？」

冬香「よろしいですよ。お話を聞くだけでもいい時間は過ぎませ
す。」

八幡「……では、少し行儀は悪いですが、食べながらも話しま
よ。」

冬香「はい。お願い致します。」

そして俺達は色々と話しているうちに、意見が合う事も多々あり、
良い時間を過ごすことが出来た。

買い物……間に合うかな？

追われる少女と悲しき少女

八幡side

あのあと、冬香さんと別れてスーパーの前までやって来た。前回の話を読んでくれれば分かるぜっ！……メタいな。

……おっ！今日は肉が安いな。なくならねえ内に早く買わねえとな。

——スーパー内・肉エリア——

八幡「えーと、野菜、調味料、魚、米、パン、最後に肉だな。」

ん……？おっ！あれって今日のお買い得商品じゃねえか！俺ついてるな！。

うし、じゃあ早速……

「あっ……」

俺と同じくらいのタイミングで逆の方向から、手が伸びてきた。え？嘘？まさかここで、おばちゃんに取られちゃう？

「……………」

隣を見ると、おばちゃんではなく俺と同年くらいの女の子だった。茶色の瞳に明るい茶髪は腰まで伸ばして2つに分けて結んでいた。黒い服装だが一目で気付いた。

こいつはレヴォルフの学生だ。

面倒な事になる前に、こっからすぐに出るか。肉は惜しいが他のを買おう。

??? 「あの……貴方もこれを？」

八幡「ん？ああ、だがそれはもういい。お前が持つてけ。じゃな。」

よし！カンペー

??? 「ま、待つてください！」

ーキじゃなかった。

??? 「あの、本当によろしいんですか？貴方もこれを目当てに此処へ来たんじゃないですか？」

八幡「いや、別に。店の前にあつた看板のチラシを見てお買い得なのを思い出ただけだ。絶対欲しいわけではない。」

八幡「そいつはお前がとつとけ。」

??? 「なら、お言葉に甘えさせて頂きます。私、レヴォルフ黒学院所属のプリシラ・ウルサイスと申します。貴方はどんなお名前何ですか？」

八幡「比企谷八幡、界龍第七学院だ。」

プリシラ「比企谷さんって界龍なんですね。すごく意外です。」

うん、よく言われる。後君にも言われたくはない。

八幡「まあな。つっても一月前に転入したばかりだけだな。」

プリシラ「へえ、そうなんですね。」

男1「おいっ！居たぞ！」

プリシラ「っ！」

男2「やつと見つけたぜ！」

男3「大人しく来てもらおうか。」

あん？何だこいつら？

男4「ああ？何だその男は？」

男5「いや、男に用はない。あるのはそこにいる女だけだ。」

ウルサイスを狙ってるみたいだな。

八幡「おい。お前を狙ってるみたいだが、何やらかしたんだお前？」
プリシラ「……正確には、私ではなく姉だと思います。」

八幡「……姉？」

プリシラ「はい。姉はお金を稼ぐためにいつもカジノに行ってるんです。」

八幡「要はそのみかじめか……」

男1「おいっ！何コソコソしてんだよ！さっさとその女を渡せ！」

だが、こいつらもこの人数で追っかけてるってのは、少し気にいらんな。

八幡「悪いが、今こいつとショッピング中なんだ。他当たってくんねーか？」

男1「知るかなもんっ！テメエは関係ねーだろうが！」

男3「おい、あんまり騒ぐな。」

男2「へっ！構わねえよ。もうとつくに騒ぎになってる。」

男2「おい兄ちゃん。悪いことは言わねえ。大人しくその女渡してくれねえか？俺達そいつの姉から金を取り立てねえといけなくだよ。そこを頼むわ。」

八幡「直接取り立てりやいいじゃねえか。何故こいつを狙う？」

男2「その女がメチャクチャ強くてな。俺達じゃ手に負えねえから、こうしてその女を使うわけさ。」

男4「分かったらこっちに寄越せ。」

男5「そうしたら見逃してやる。」

男達がそう言うのと、ウルサイスは俺の後ろに隠れた。俺を巻き込む気満々ってヤツですかね？いやもういいんだけどさ。それに一々上から目線だな。腹が立つ。

八幡「断る。さつきも言ったが、俺は今こいつと買い物してるんだ。狙うなら今日じゃなくて別の日にするんだな。」

男1「はっ！だったらオメエここでボコボコにしてやる！鬱憤晴らしだっ!!」

遅い。それに単調な動きだ。こんなのわざわざ星辰力を使うまでもないな。

はい、捌いてからの鳩尾に正拳突き。

男1「グフツ……」

男はそのまま倒れた。まあ当然か、結構本気でやったから。

男3「っ！お前ら！一氣にいくぞ！こいつかなり強いぞ！」

4人「うおおおお!!」

一気に来るのかよ……メンドくせえな。仕方ねえ、チャツチャと終わらせるか。

八幡「困い影。」

よし、動物園の完成だ。

男5「お、おい！なんだこりや!？」

男2「くそっ！出れねえ!？」

八幡「お前らは一生そこで見世物にされてろ。おい、買いたいモンはそれだけか？」

プリシラ「え、あ、はい！全部です!」

八幡「なら、会計済ませてさっさと出るぞ。うるさくてしょうがねえ。」

男4「待てゴラツ!!」

男3「これ何とかしやがれ!」

八幡「チツ、うるせえな。騒ぐしか能がないのか?……迷牢^{めいろう}。」

薄く黒い雲が現れ、男達の近くに行つて止まったと思いきや、やがて雲は大きくなり、影ごと包み込むと影も男達も消えていた。

八幡「心配すんな。ただ迷路に連れてつただけだ。ゴールすれば此処に戻ってくる。ゴール出来ればの話だがな。」

プリシラ「そ、そうですか……」

それから別に会計を済ませてスーパーの出口まで出た。

プリシラ「先程は本当にありがとうございました！譲って頂いただけでなく、助けてもらうなんて。」

八幡「気にすんな、ただのお節介だ。」

プリシラ「いえ！そう言うわけにはいきません！よければお礼がしたいのですが、晩御飯食べていきませんか？」

八幡「いや、晩飯はもう食ったんだ。礼なら今度でいい。じゃな、氣いつけろよ。」

プリシラ「え？あ、はい！」

はあ……やつと帰れる。

その前に少しくつろぐか。疲れたし。

ちようどこの先の花畑にベンチがあつたはずだ。そこまで行つて一息だな。

八幡「ふう〜。」

にしても、夜でもいいモンだな、ここは。前までの俺なら、こんなリア充の来るところには近寄らなかつたが、休みの時にはよく来る場所になつたな。

コツ…コツ…

誰か来る？そりやそうか。別に俺だけの場所じゃねえしな。

………ん？左の花が少し枯れてる？きつきまで咲いていたと思つたが……当然かもな、もう冬も近いしな。

………いや、氣のせいじゃない。広がつてゐる。花がこつちまで枯れてる。

???「……………」

何だアイツ？髪白いな。しかもまたレヴォルフかよ………なんか今日は多いな。

………まさかこいつか？ここの花を枯らしているのは？

八幡「……おい、そこのお前。」
???「…………っ！」

こいつ髪だけじゃなくて肌も白いじゃねえか。こいつちゃんと食ってんのか？ いや、そんなことよりもだ。

八幡「ここの花を枯らしているのはお前か？ 何故かは知らんが、どうしてこんな事をする？ 良い気分が台無しだ。」
???「……………」

無視かよ。っーか何でこっち見たまんまなんだ？ 俺の顔になんかついてんのか？

八幡「おい？ 聞いてんのか？」
???「……………何故？」

……………は？

???「……………何故平気なの？」
八幡「は？ 何が？」
???「……………何故、私の近くにいて何ともないの？」

こいつ

新種の厨二病か？

八幡「言ってる意味が分からんが、とにかくやめてくれ。気分も悪くなるし花も泣いちゃう。」

???「……………無理よ。」

……………あ？今何だった？

???「……………私の毒がある以上、周りに影響を及ぼすわ。だから貴方のお願いは聞けないわ。」

……………こいつ。

バチンッ！

??? 「……………え？」

俺は無意識に少女の頬を叩いていた。同時に俺は少女に掴みかかっていた。

八幡「ふざけるなよ？ 何だよその分かりきった顔と声は？ 毒？ それがどうした？ んなもん、ださねえようにすりやいいだろ？」

??? 「……………それが出来たら苦労はしないわ。出来ないからしょうがないでしょ。」

八幡「それで辞めたつてとこだろ？ そんな目してるけどな、それはただの諦めから来たただけだ。下らねえ。」

??? 「……………好き勝手言わないで。貴方に私の何が分かるの？」

八幡「ああ分からねえよ！ お前こそ俺の何が分かる？ テメエの都合で枯らされたこいつらはどうだ？」

すると八幡は、さっきの枯れてしまった花を指差した。

八幡「何もしてねえこいつらにとっちゃあ、えらい迷惑な話だ。」

??? 「……………なら、貴方なら出来るつて言うの？ 私のこの力を抑えることが出来るとでも言うの？ この運命に逆らえるの？」

八幡「上等だ！ やつてやるよ。運命が何だ？ 俺がそんな幻想ぶち壊してやるよ。お前がなんて言おうと、俺は引き退がらねえぞ。」

……………ヤベ、家にあつたラノベの台詞パクっちまった。

??? 「……………やれるものならやつてみなさい、けれど絶対に無駄だから。」

八幡「お前こそ、首洗って待ってろ。絶対なかせてやるからな。」

俺はそう言い残し花畑から立ち去った。

??? 「…………出来るはずがないのに。私の運命はもう決まってるのに。」

??? 「…………でも、」

少女はふと、叩かれた方の頬に触れる。やめたと思ったら、今度は掴まれた肩を抑えた。

??? 「…………不思議な人、それに何故…………でも、もう誰にもこの運命は覆せないわ。」

「この【エレンシユキーガル孤毒の魔女】オーフェリア・ランドルーフェンの運命は。」

前日の仕上げ

八幡 side

思えばこの2週間、学ぶことや身についたことが多い。それだけ力を持て余しているということか。まだ未熟という事だな。俺は序列戦前日の今日、最後の稽古をつけてもらっていた。内容は、どんな手を使ってもいいから一撃をいれること。

だが一撃どころか攻撃が掠りもしない。終いに俺は、受けるか遊ばれてるばかり。

アレマ「どうしたんだい、八幡ちゃん？あんたの実力はこんなもんかい？あたいはもっと強かったと思ってたんだけどねー？」

八幡「……………」

アレマ「あたいの動きには付いてこれてるようだけど、それじゃ暁彗と同じレベルだよ？君はあいつを超えるんだろ？」

アレマ「2週間の稽古は無意味かい？これだけ時間が経っても、あたいに一撃すら入れられないなんて、冗談にも程があるよ。」

八幡「……はあ、いろんな意味で凄過ぎですよ、アレマさんは。今の俺では、貴方に一撃を入れるのは難しそうだ。」

アレマ「じゃあ諦めるかい？言っておくけどね、今の君じゃあ暁彗には勝てないよ。精々接戦つてとこだよ。」

八幡「……今の俺ってそんなに弱いんですか？結構傷つきますね。」

アレマ「ああ、今までで一番。そんなんであたいに攻撃が入ると思ってるのかい？だったら、剣術の時に使った影と剣の合体技を出してみなよ。」

……………まあ、そりやそうか。稽古中の俺だったら、必ず一回は攻撃が入っていた。

だが、今日は一度も入れてない。

八幡「じゃあ、今から本番っていうのはどうですか？少しこの場で
も試したい事があるんですよ。」

アレマ「良い度胸じゃないか。まるで手加減していたかのような言
い草だね？それとも本当に手加減をしていたのかな？もしそうだっ
て言うんなら、あたしも手加減なんてモンはしねえぜ？」

八幡「そっちの方がやり甲斐があるってもんですよ。さっきまでの
貴方は、まるで遊んでる感じしかなかった。だから俺も手を抜いて
いたわけですよ。」

アレマ「言うじゃないか。だったらあたしも本気でいこうか。精々
頑張って一撃当ててみることだねっ！」

……………望むところだ。

八幡 side out

暁彗 side

——青竜の間——

暁彗「……………師父、ご教授感謝致します。」

星露「うむ、またいつでも来るがいいぞ。暁彗よ、いよいよ明日じゃ
な。お主も存外、楽しみなのではないか？」

暁彗「……………違うと言えば嘘になります。興味も少し。」

星露「ほほう？お主が興味を持つ程か。」

暁彗「……………」

星露「にしても、明日が待ちきれんわい！早く明日になってはくれ
んかのう？」

陽乃「……………2人とも、凄かったね。私じゃあんな組手出来ないよ
……………」

星露「来ておったのか、陽乃。お主もいい加減それを直したらどう
じゃ？明日になれば姿を現わすというものを。」

陽乃「だってえく比企谷くんに会えないんだもんく！」

陽乃「2人に分かる？私のこの気持ち？会いたいのに会えないこの気持ち、何処にぶつけなければいいっていうのよ？」

星露「そんなものは知らんのじゃ。」

暁彗「……………」

陽乃「もおー！2人共冷たいよ。」

陽乃「いいもーん！序列戦が終わったら、比企谷くんをいっぱい構っちゃうんだから！2人がなんて言おうと絶対に譲ってあげないんだからねっ！」

星露「いらんわい。」

暁彗「……………」

此方はいつでもいいぞ、比企谷八幡。
卿の実力は明日、試させてもらうぞ。

—————

八幡 side

八幡「……………どうです？これなら文句ないでしょう？」

アレマ「……………君って奴は星辰力もさる事ながら、強さもとことん化け物じみてるね。あたいに膝をつかせるなんて。」

八幡「ああ言った以上、本気出さないわけにはいかないんで。」

アレマ「一応聞くけど、あれが切り札かい？にしては余裕そうに見えるけど？」

八幡「二番目の……………ですかね。奥の手はまだ見せてません。」

アレマ「食えない奴だな、君は。あたいを騙していたなんて、罪な男だな。」

八幡「それで……………どうです？これで認めてもらえますかね？アレマさん？」

アレマ「認めない訳ないだろ？あんだだけ見せつけられたら、認めざるを得ないよ。明日はあたいも見に行くからね。精々暴れてくるといいよ、八幡ちゃん。」

八幡「ありがとうございます。」

アレマ「さて、最終稽古も終わった事だし、ご飯でも食べようか。勿論、八幡ちゃんの手作りでね！」

八幡「あの……俺が最初に飯作って以来、貴方一回も作ってませんよね？そこそこどうなんですか？」

アレマ「いいじゃないか。稽古代と家賃代さ。そういえば安いものだろう？」

八幡「抜け目ないツスね……」

まあいいか。

いよいよ明日だな。

絶対あんたを倒すぜ。武曉彗。

決戦の時

八幡 side

いよいよ決戦の時だ。俺は今、界龍に向かっている。起きた時には、アレマさんはもう居らず、替わりに書き置きが置いてあり、

アレマ『先に界龍で待つてるぜ。目立つだろうが、君の控え室は朱雀の間の左側だからな。あんたの本気、界龍のガキ共に見せつけてやんな！』

つと、書かれていた。何ともまあお気楽な文章だが、あの人らしい。ん？そんな事やってる内にもう着いたか。

それにしても、お出迎えがやっぱりあいづらか。だが、今はそんな気分じゃねえ。

虎峰「八幡っ!!今まで何処に行っていたのですか!？」

セシリー「そうだよ比企谷ー!あたし達心配だったんだよー!？」

沈雲「さあ、洗いざらい説明してもらおうよ?今回ばかりはね。」

沈華「逃げようなんて考えないでよね?」

陽乃「そのところ覚悟してるよね?比企谷くん。おねーさんすつごく寂しかったんだからね?」

八幡「今はやめてくれねえか?」フォン……

虎峰「あ、あれ?八幡?」

陽乃「き、消えた……？」

沈雲「そんな……あり得ない。さつきまでそこに居たはず……」

沈華「……気配も全く感じないわ。」

セシリー「もしかして……もう通り過ぎたとかってあったりする？」

はい、正解です。もう控室まで来てます。うん、俺の名札がある。
ガチャツ

……よし、誰もいない。立ち入り不許可にして少し瞑想でもするか。試合まであと30分しかないからな。

八幡 side out

暁彗 side

暁彗「……………」

冬香「……………」

暁彗「……………比企谷八幡の方に行かなくてもいいのか？」

冬香「はい。彼はもう着いている頃でしょうが、私が行っては邪魔になるでしょうし。それに、おそらく比企谷さんも貴方と同じことをしていると思いますので。」

暁彗「……………そうか。」

冬香「ですが、私ももう行きますね。これ以上ここにいては、貴方も気が散るでしょうし。試合、頑張ってくださいね。」ニコツ

暁彗「……………フツ。」

……………楽しみだ。

暁彗 side out

星露 side

星露「どうじゃった？2週間あやつを鍛えておったのはお主なんじゃろ？アレマよ。」

アレマ「流石星露ちゃんだね。確かにあたいが鍛えてたよ。暁彗に比べたらまだまだ荒削りだけど、磨けばそこの宝石よりも輝くと思うぜ。やつぱり汪さんは見る目あるよねえ。」

小苑「ほほう？それは良いことを聞いたのう。儂の目に狂いはなかったか。」

星露「おお！来おったか！連絡は入れておったが、中々来んから、てつきり来んのかと思ったぞ？」

アレマ「汪さん？来てたんだね。やつぱり弟子が気になるのかい？」

小苑「儂の弟子2人が拳を交えるんじゃぞ？気にならん方が可笑しいわい！」

星露「にしても、お主らはどちらが勝つと思う？暁彗か比企谷か。」
小苑「儂は長い事、暁彗を見ておらんからの。どっちが勝つかなんて分からんわい。八幡がどこまでやれるのかってところじゃな。」

アレマ「あたいは八幡ちゃんに賭けようかな？やつぱ信じたくなるんだよねー。」

星露「ふむ、お主ら両方随分と比企谷を持つのか？妾にはよう分かるのう。」

アレマ「まあしやうがないと思うよ？だって星露はまだおこ」「それは、まだお主がお子様だからじゃろう？よしよし、無理をするな。お主にはまだ早いからの？ゆっくり見極めていけばよいのじゃ。」
あーあ、あたいが言おうと思ってたのに……」

星露「くー!!お主っ！妾を子供扱いするでない！何度言えば分かるのじゃ!!」

全く此奴はっ！いつも妾で遊びおって！……まあよい、もうすぐ試合じゃ。彼奴ら2人がどんな試合をするのか見物じゃな。

星露sideout

—————

『End Of Duel』

………終わったか。さて………準備はいいか？ 柰々？

柰々『僕はいつでもいいよー！ハッチ、頑張ろーね！』

八幡「ああ。」

そして俺は、フィールドに向かう。

実況『皆さん！お待たせいたしました！本日のメインバトルの始まりです！！なんと今回はあの会長の1番弟子がフィールドに出てきまーす！』

ウオオオオオオ!!!

実況『会場の皆様のボルテージはマックス!!選手を紹介をする前に、当学院生徒会長の茫星露様よりあいさつです!』

星露「皆の者、本日の最終試合は妾も楽しみにしておる。主らも気分を害するような事はせぬようにな?」

実況『ありがとうございます!さて、それでは選手をご紹介致します!学院入学から今日まで全戦無敗!!絶対的な力と圧倒的なパフォーマンス!難攻不落にして不動の序列2位!『万有天羅』の1番弟子で【覇軍星君^{はぐんせいくん}】の二つ名を持つ当学院最強の男!武曉曄^{ぶせつ}!!!』

再び大きな歓声、それと共に武曉曄もフィールドに出てくる。

無表情は変わらないが、その威圧感はかなりのものである。

実況『対するは、この学院に転入してから1ヶ月!実力も能力も全て謎!序列2位に挑まれ、堂々と宣戦布告をした命知らず!!本日はどんな戦いを見せてくれるのか!?その度胸は勇氣かはたまた蛮勇か!比企谷八幡^{ひきぐや}!!!』

booo!!!

思いつきり野次飛んでんなー。俺들だけ嫌われてんだよ。

生徒1「おーい!お前が大師兄とやったってボコボコにされるだけなんだから、さっさと殴られて終わっちまえよ!」

生徒2「お前なんかが大師兄と戦ったら、大師兄に泥がつくだけなんだよ!」

生徒3「お前なんて瞬殺だよ瞬殺!大師兄に勝てるわけねえんだよ!」

うわあ……言いたい放題だな。ブーイングもやたら多いし。まあ

当然か。

実況『み、皆様！落ち着いて下さい！』

それでも、ブーイングの嵐は止まない。此処までするか？俺そんな酷い事したか？

虎峰「くっ！八幡の事も知らないで勝手なことをっ！」

陽乃「……でも当然といえば当然だよ。暁彗に喧嘩を売ったんだからね。」

冬香「比企谷さんも、予想くらいは出来ていたのではないでしようか？」

すると突然、強く濃密な殺気が会場を包んだ。

星露「ほう？お主ら、いい度胸じゃの？妾は最初に言っただけじゃぞ？害することはするなと。」

小苑「今のは儂も腹が立ったのじゃ。どれ？此奴らの前に儂等とお主らとで遊んでもよいのじゃぞ？」

アレマ「それに、八幡ちゃんはお前が鍛えたんだよねー。いくら素性が知れないとはいえ、それは如何なもんかね？心の広いお前でも、流石にキレルぜ？」

星露「それとその3人、ちょうど3対3じゃ。うぬらと妾たちとで決闘してもよいのじゃぞ？」

小苑「おお、それは良い考えじゃな。」

アレマ「良い稽古になるね。」

生徒3人「……………」ガタガタ

ヤベエ……………顔は笑ってるのに目が全然笑ってねえ。あの3人震え上がっちゃってるよ。仕方ねえ、止めるか。

八幡「あの……そういうのいいんで、早く始めてもらってもいいですか？」

アレマ「八幡ちゃんはこのまま始めろって言いたいのかな？」

八幡「そうですけど？」

小苑「八幡よ、いくら農でも聞けんぞ。弟子をバカにされて怒らぬ師などおらぬ。」

星露「妾の忠告を無視したのじゃからな、それ相応の対価をもらわねばな。」

八幡「ですからそれを後にして下さい。あつたまった身体が冷えちゃいますよ。それとも何ですか？この試合中止にして3対3の決闘、始めちゃいます？」

3人「……………」

……………どうだ？

アレマ「…………ま、今回は八幡ちゃんの優しさに免じて見逃してあげるよ。」

小苑「命拾いしたの。次はないぞ？」

星露「また忠告を無視しおったら、覚悟せいよ？小僧共。」

はあ……収まってくれたか。

八幡「すいません、俺のせいで。」

暁慧「……………いや、これは私の責でもある。私も謝罪しよう。すまない。」

八幡「いえ……気にしてないんで。」

実況「そ、それでは気を取り直して、本日のメインバトル、武暁慧VS比企谷八幡の決闘……スタートです!!」

『Bバaトtルtルlルe Sスtタaイrトt!!』

ドクンッ……

ドクンッ……

ドクンッ……

『Sスtタaイrトt Oオf Tザhザe Dデuユeエlル』

覇軍VSボツチ

①

――――

『Battle Start』

開始の合図が鳴った刹那、暁彗が消えた。星仙術か身体能力かは分からないが、フィールドから姿が見えなくなった。

ゴオオオオオツ!!

生徒1「うおあつ!!何だ!!」

生徒2「え!?!何この風!?!」

突然の突風、観客席の生徒達には何が起きているのか分からない状態だった。そんな中で暁彗が姿を現した。正拳突き of 構えで固まっていた。

沈雲「まさか……これ程とは。」

沈華「今までの大師兄がいに手加減していたか嫌でも分かるわ

ね。」

虎峰「こんなの……八幡が対応出来るわけがありません。僕でも目で追えないのに……」

冬香「それはどうでしょうか？」

セシリー「?どういうこと?冬香さん?」

冬香「フィールドを見れば分かりますよ?彼が今どうなっているのか。」

虎峰「そんなの、完膚なく壁に激突したに決まって……!!?」

全生徒「!!?」

フィールドを見ると、八幡が暁彗の拳を受け止めていたのだ。それも片手で。

セシリー「……嘘、信じられない……」

虎峰「あの大師兄の拳を片手で……」

陽乃「比企谷くんも相当化け物だね。」

八幡「……………」

暁彗「……………」

暁彗「……………」小手調べにと思ったが、どうやらその必要はなさそうだ。」

八幡「あの時先輩言ったじゃないですか。俺の実力が知りたいって。だったら、そんな回りくどい事しなくてもいいんじゃないですか？」

暁彗「どうやらそのようだ。ここからは本気でいかせてもらう。卿との戦い、存分に楽しもう。」

八幡「じゃあ、改めて……」

今度は互いの拳と拳がぶつかり合う。しかも互角の力量。

八幡「流石っスね。」

暁彗「……………」卿もなかなかやる。だがここからは一切話など無用。」

八幡「拳で語るってことですか？」

暁彗「……………」話が早くて助かる。」

そして2人は組手を始める。殴る、蹴る、突く、躲す、受け流す、受け止めるなど様々な型をとっていた。

攻めては防ぐの繰り返し。地上、空中、壁際など足場の悪い場所でも組手を続けていた。

セシリー「あ、あたし、こんな戦い初めて見たよ。比企谷ってこんなに強かったの？信じられない……」

冬香「小苑様とアレマ様に鍛えられていたというのは耳にしていますが、まさか……あの暁彗と張り合うなんて……」

陽乃「ホント出鱈目もいいとこだよ。ねえ、虎峰くん。君にはあの

組手、出来る自信ある？私はまるでないよ。」

虎峰「正直、僕も付いていける気がまるでしません。目では追えるでしょうが、対応出来ないと思います。」

しかし、どちらもまだ決定打は決められていない。焦りの様子はないが、どちらも攻めきれていない様子だった。

暁彗「……………破ア！」

八幡「っ！…………ムンッ！」

暁彗「……………」ブツブツ

八幡「ハアッ！」

暁彗「急急如律令」
きゅうきゅうによりつりよう

八幡「っ！」

突如、八幡のいた場所から爆発。八幡は自身の星仙術、鏡花水月で回避する。

暁彗「……………私の拳をここまで凌いだのは、師父と師を除いて卿が初めてだ。師の目に狂いはなかったようだ。」

暁彗「……………次は星仙術の勝負という。私の術についてくれるか？」

八幡「ついていけなかったら、俺はそこまでの男ですよ。」

そして互いに星辰力を身体に纏わせ、臨戦態勢に入ってしまった。

星露「おおー！愉快じゃ愉快じゃ!!まさかこれほどの試合が見れるとは！」

アレマ「あたいも驚きだよ。暁彗ったら、前よりも速くなっちゃってるよ。それについていってる八幡ちゃんも凄いいけどね。」

小苑「じゃが、まだ続きそうじゃな。今度は術比べでもする気みたいじゃな。」

星露「じゃが、妾には思うところがあるのじゃ。それもかなりのう。」

アレマ「お？星露ちゃんも？実はあたいも何だよねー。」

小苑「予想はついておるが、一応言ってみい。儂が聞いてやる。」

2人「今すぐ彼ら（彼奴ら）と戦いたい（のじゃ）！」

小苑「はあ：お主らは我慢という言葉を知らんのか？その狂いに狂った戦闘狂を少しは治さぬか。」

全く、試合中だというのにこのバカ共は。このチビに至っては先が思いやられる。

まあよい、それよりも続きじゃ。

覇軍VSボツチ

②

――――

暁彗「……………」ブツブツ

八幡「……………」

両者互いに距離を取りながら、星辰力を纏いつつも睨み合っている。武術は五分五分、何方も見事と言える程の打ち合い。『攻め過ぎず守り過ぎず』でありながらも、『攻めながら守り、守りながら攻める。』の攻防だった。

八幡（武先輩がどんくらい星辰力持つてるか分かんねえから乱用は避けたいな。せめて鏡花水月か明鏡止水で抑えたいな。あの技はここではまだやりたくない。）

暁彗（……………比企谷八幡の星辰力は未知数。おそらく私では半分にも及ばないだろう。ここは早々に決着をつけたいところだが、それは容易ではないだろう。慎重にいかねばな。）

暁彗「急急如律令。」

暁彗がそう唱えると、フィールドのあちこちに雷の柱が現れた。その瞬間、6つの方向から雷鳴が走り、八幡に襲いかかる。が、八幡はその場に固まったかのように動かない。

八幡「とうほう東方 あかだ阿迦陀、せいほう西方 しゆたこう須多光、なんほう南方 さつていろ刹帝魯、ほつぼう北方 そだまに蘇陀摩」

八幡がそう素早く唱えた瞬間、雷は八幡を避けるように通り過ぎ、柱にぶつかり柱共々に消え失せた。

暁彗「……………（まさか、雷除けの詠唱を身に付けていたとは。）なかなかやる。この速度の呪法を瞬時に見切るとは。」

八幡「まだまだ未熟ですよ……………光を閉ざせ、夜よ、闇よ。暗黒の帳とばりを下ろせつ。急急如律令。」

お返しとばかりに八幡が唱えると、辺りが黒くなり、視界がゼロになった。

暁彗（……………この呪法は？闇？）

暁彗「……………っ！」

暁彗の第六感が働いたのか、身体が右に逸れた。そこには、人影らしきものがあつた。おそらく八幡であろう。が、またも消えた。

暁彗「……………幻術の類か……………發っ！」

すると暗黒は消え、前には八幡が袂々切丸を持って構えていた。

八幡「…………あれが当たらないなんて、やっぱり凄いですね。どうやったんですか？見えないはずなのに。」

暁彗「……………いや、あれは勘が働いたに過ぎない。私は反応出来なかった。私も修行が足りないな。」

すると次は呪符を取り出して…………

暁彗「輝剣よ、天より降りて、霊樹に宿れ？急如律令。」

その瞬間、辺りから木が生え始めた。だが、暁彗はまた呪符を取り出し、再び詠唱を始めた。

暁彗「宝具よ。鬼の木気を破魔の火気に変えたまえ——五行相生、木生火。」

生えていた木は急に燃え始め、巨大な炎の球に変わった。

小苑「ほう、木と火の合わせ術か。まあ、暁彗なら当然じゃの。」
アレマ「んー、八幡ちゃんはどう動くかなー？楽しみだねー。」

暁彗は詠唱を言い終えると、八幡に向かって炎の球を投げつけた。
た。

八幡（あれを止めるのは骨が折れるな……仕方ねえ、やるか。）

八幡は、衾々切丸を中段に構え、詠唱を始める。

八幡「ノウマク・サラバタタギヤテイビヤク・サラバボツケイビヤク・サラバタタラタ・センダマカロシヤダ・ケンギヤキギヤキ・サラバビギナン・ウンタラタ・カンマン！」

すると炎の球は、祢々切丸に吸い込まれていくように刀に纏わりついた。

暁彗「……………っ！」

暁彗（……………火の制御!?こんな高等詠唱をどこで？）

沈雲「火気の制御!?一体どこでこんな詠唱を!？」

沈華「私たちでも出来ない高等詠唱なのに!?一体どんな鍛錬してたっていうのよ……」

虎峰「彼は……本当に八幡なのでしょうか?とてもそうは思えません。」

すると、八幡の祢々切丸に纏っている炎が紫色に変わり、暁彗に向かっていった。

八幡「焰撃……不知火っ！」

暁彗「……………っ！」

アレマ【おつ、あたいにやった技だね。しかもあの炎を制御したからか、あの時よりも数段威力が増してるね。】

八幡「陽燄っ!布天火っ!火糸っ!照雷っ!罪炎っ!朱紅刃っ!翔煉刃っ!」

暁彗「……………ムウ。」

八幡の技は、僅かにだが当たっていた。そして八幡は、後ろに下がり地面に手をついた。

八幡「飲み込めっ！影龍！」

突然、八幡の影から10mくらいある黒い龍が現れた。そして八幡はその龍の頭に乗る、再び暁彗に突進していった。

暁彗「……………奔流よ、破れっ 急急如律令。」

両者共に、正面から突っ込んでいった。

暁彗「水双拳っ！」

八幡「龍天火っ！」

拳と刀がぶつかり合い、大きな爆発と共に、両壁際に衝突音が聞こえた。

覇軍VSボツチ

③

――――

――VIPルーム――

星露「疼くのお……妾も彼奴らとやり合いたくて仕方のうなつてきたわ。」

小苑「やめい、お前が暴れたら試合どころじゃなくなるわい。大人しく青椒肉絲でも食つとれ。」

アレマ「でもさー、その気持ちは分かるかなー。あんだけすげえの見せられたら、やりたくなるってモンだよ。」

星露「おお、分かるかえお主？やはりお前とは気が合うのう。」

アレマ「ははは、やっぱ星露ちゃんとは合うねえ。」

小苑「……はあ、頼むから暴れんでくれよ。幾ら儂でもお主ら2人は無理じゃ。」

――――

観客席・冒頭の十二人 side

冬香「な、なんて試合でしょう……武術も星仙術も互角どころかそれ以上に渡り合っています。」

セシリー「もう会場ボロボロだよ……大師兄もそうだけど、比企谷のあれは何？」

沈華「完全に私達を超えていますわね。大師兄とあれだけ戦えるんですもの。」

陽乃「どっちも規格外過ぎて言葉も出ないよ……私もう比企谷くんに勝てる気しないよ。」

沈雲「同感です、雪ノ下姉姉。」

虎峰「あつ！2人が出てきました！」

観客席・冒頭の十二人 side out

2人が同時に衝突した壁から出てきた。校章の右側には傷痕があった。

（分かりやすく言うと、胸の中央。）

八幡には拳で殴られた跡がくつきりと残っていた。暁彗も同様に服が部分的に焼け落ち、切り傷が出来ていた。

八幡「痛ツ！刀に拳で来るなんてって思いましたけど、そんな心配いらなかったつスね。逆に攻撃食らうなんて。」

暁彗「……………私もだ。抑えられると思い過信していた……グツ！卿の技がここまで強力とは思わなかった。」

見合ってからまだ一步も動かない両者。仕掛ける様子も術を唱える様子も現時点ではない。

暁彗「……………残りの星辰力も少ない。全ての星辰力を身体に使うか、星仙術に使うか、両方均等に使うか……おそらく比企谷八幡はまだあり余ってるだろう。」

八幡（長引くとバテちまう。どうする？武先輩を出し抜くにはどうすればいい？あの人に普通の技や術は効かない。無防備で行ったら返り討ちに会うのが目に見える。）

八幡（やっぱ、あの技を使うしかねえか。）

八幡「……多分ですけど、これが最後っスよね？お互いの体力的に。」

暁彗「……………であるな。次で決めるとしよう。いや、決めさせてもらう。」

八幡「まあ、ただではやられないですよ。精々足掻きます。」

暁彗「九天応元雷声普化天尊。」

八幡（あれつて雷法最高峰の呪法っ!?まだ隠していたのか!?俺の雷除けじゃ、あれは防げねえ!!）

柊々『だったら僕を使いなよ。』

八幡『…………柊々?お前を?』

柊々『僕は一応、雷獣・鵜を切った刀だよ?もしかしたらっと思うじゃん?』

八幡『その為に、俺に真正面からあのバカデカイ雷を受けろってか?』

柊々『そっ!』

八幡『…………はあ、とんだ食わせモンだな。俺の相棒はよ。』

柊々『じゃあやめとく?』

八幡『だったらその気休め程度の言葉、信じるぜ?…………スゲー怖いけど。』

柊々『あっははっ!そう来なくっちゃ!』

頼むぜ?鵜切丸。

チャリーン

暁彗「……………私は卿に最高の敬意を払う。今の私では、この呪法が精一杯。この雷鳴と共に散るがいい。」

八幡「耐えてやりますよ。ここでやんなきゃ貴方に啖呵切った意味が無くなっちゃいますしね。」

暁彗「……………やはり卿は面白い。」

そして、暁彗が手を下ろした。
次の瞬間、稲光が八幡に目掛けて落ちていく。八幡はそれを祢々切丸で受ける。

八幡「ぐっ！ぐおおおお!!洒落に……何ねえなあ……こんな……重いの……かよ。しかも……身体中が……痺れる……熱いつ……ぐっ！ぐああああ!!!」

ドゴオオオオオン
!!!!!!

虎峰「は、八幡っ!!」

セシリー「嘘……あんなの直撃したら……一溜まりもないのに……」

冬香「これでは、流石の比企谷さんでも無事ではないでしょう……」
陽乃「い、一応……ジェネステラ星脈世代だから……死なないだろうけど……」
沈雲「勝ち目はもうないとか……」

沈華「むしろ、黒焦げになってないか心配ですわ……セシリー師姉が禁忌としてる呪法を使ったのですから。」

アレマ「うわあ……暁彗つてば容赦ないねー。雷最強の呪法を使うなんてさ。」

星露「勝敗は決まったようじゃの。」

小苑「……………」

雷が落ちた場所には、煙が立っていてよく見えない状態になってい

た。

暁彗「……………」

暁彗はその場で見つめていたが、暫くしてその場で抱拳礼ほうけんれいをした。

暁彗「……………」卿との戦い、楽しかった。またやろう。」

そう言うのと踵を返し、会場を立ち去

「待て……………」まだ……………終わっ……………て……………ねえぞ……………」

暁彗「っ!!?」

ろうとしたが、後ろから声が聞こえた。掠れていて、今にも消えそうな声だったが、耳には届く声だった。

八幡「はあ……………はあ……………はあ……………」

なんと！八幡が立っていたのだ。服は所々破れており、大火傷の痕があり、血も流していた。

ビリビリビリッ

制服は破けて上半身が殆ど裸になった。だが校章はギリギリ無事だった。そして八幡の背中には雷を受けた事により、雷紋の痕があった。

――VIPルーム――

星露「おお、おお!!立っておる……立っておるぞ!!」

アレマ「……マジかい？あたいでも目を疑うよ。ありや本物かい？」

小苑「……ふっ、馬鹿弟子め……」

――ステージ――

八幡『何が雷獣を切っただ。雷は受けられてねえじゃねえか。』
祢々『ごめんごめん！僕も半信半疑だったんだよ！』

八幡『んな確信のないもん、俺にやらせたのかよ……鬼だな。』

暁彗「……卿という男は……本当に面白い。そして信じられん。」

八幡「はあ……そりゃ……どうもっ。」

八幡「……じゃあ……そろそろ終わりに……しましうか……」

そう言うのと片方の手で呪符を取り出す。

暁彗「……無理をするな。その身体で何が出来る？」

八幡「……ははっ、そうっ……すね……でも……負けたくないんでっ！」

八幡「うおおおおお!!!眩め 封 閉させ 急急如律令!!!」

八幡は大声でそう唱えた。

暁彗「っ！これは……拘束の呪法。」

暁彗はその場で何かに縛られたように固まり、動けなくなっていた。

八幡「光を閉させ、夜よ、闇よ。暗黒の帳を下ろせつ。急急如律令!!」

暁彗（……先の幻惑っ！くっ！星辰力が少ないせいかな、解けん。）

暁彗「……………發っ！……………何？」

2つの呪法を解いたが、周りは真っ暗だった。そう、闇に覆われていた。

八幡「堕ちし光のなき地は、闇夜の空の月光にて、地を照らす。」

八幡「影切・月下無双。」

チャリーン

鈴の音が消えたと共に、覆っていた闇も消えた。静寂に包まれる
……

スパッ！……チャリッ

『武曉彗 バッジブローケン 校章破壊』
『END エント Of オブ Duel デュエル』

実況『し、し、し、試合終了ー！！！！この激戦に激戦を重ねた戦いに
勝利し、序列2位の座についたのは、なんと！比企谷八幡ーっ！！』

観客席から歓声がどつと沸いた。

生徒1「ス、スゲーー！！本当にやりやがった！！大師兄を倒したぞ！！」

生徒2「マジかよっ!?--とんでもなく強えじゃねえかアイツッ！」

生徒3「凄い凄いっ！！勝ったよあの子！！あの大師兄につ！」

生徒4「うん！すごくカッコよかった！！」

未だ歓声は止まず、ただその場に立ち尽くす八幡が、それを無意識

に聞いているだけである。

八幡「はあ……はあ……」

暁彗「……大丈夫か？」

八幡「はあ……いい、いえ……身体……あちこちが痛いです……」

暁彗「……そうか。」

八幡「……」

暁彗「……」

互いに無言が続き、そして……

暁彗「……私の完敗だ。」

八幡「……え？」

暁彗「……今回は私の完敗だ。また、挑んでもいいだろうか？」

八幡「……はい、受けて立ちますよ。」

暁彗「……すまない。それと、私のことは暁彗と呼び捨てで構わない。皆は呼ばんが、卿は別だ。それに、そちらの方が好ましい。敬語も使わなくてよい。」

八幡「……分かった……暁彗。」

暁彗「……コクッ」

……
そう言ってから、暁彗はその場を立ち去った。まだ動けんのかよ……

虎峰「勝った……勝ちましたよ!! 八幡が大師兄に勝ちました!!」

沈雲「僕は……夢でも見ているのだろうか？ 比企谷くんがあの大師兄に？」

沈華「嘘でしょ？ 今日には本当に信じられないことだらけだわ……」

セシリー「八幡……スゴかった。」

陽乃「うんっ！ いやー比企谷くんカッコよかったなー。」グスッ

冬香「ええ、本当に……素敵でした。」

星露「おおおお!!勝ちおったえ!!八幡の奴、曉彗に勝ちおったわい!!」

アレマ「……いや、良い勝負が本当に久々に見れたよ。あたかも大満足だよ!汪さんはどうだい?」

小苑「……何方もまだまだじゃな。じゃが、馬鹿弟子ながらも気持ちの良い試合が見れたわい。儂も満足じゃ。」

星露「決めたぞいつ!八幡を妾の弟子にするえっ!良いじやろ?小苑?」

小苑「主の好きにせい。言っておくが、決めるのは八幡じゃからな。」

八幡「……………」

鳴り止まない歓声に打たれている八幡。

八幡「……………俺、やったんだな。」

八幡（ヤバイ……こんな嬉しいのは初めてだ。こんなにも清々しいんだな。）

そして八幡は、遠い彼方へと意識を持っていかれた。満足気な笑顔を浮かべて。

霊獣・八咫鳥

八幡 side

八幡「……………んっ……………ここは？」

起き上がった八幡。だがそこは、界龍とは思えない程に殺風景で何もない空間だった。下も上も真つ白な空間だった。

八幡「……………ここ何処だ？、どうやって出りやいいんだ？」
???「カーカー。」

背後からカラスの鳴き声が聞こえたから振り向いて見ると、そこには普通のサイズより、ふた回りくらい大きいカラスがいた。

???『貴殿が、新しい主人か。』

八幡「……………え？誰だ？どっから？」

???『目の前にいるのが分からのか？それともふざけているのか？』

どうやら目の前にいる大きいカラスが声の正体みたいだ。テレパシーかよ。

八幡「……………お前？」

???『いかにも。拙僧、八咫鳥やたがらすと申す。貴殿の心意気に興味を持ったのでな。貴殿に憑くことにしたのだ。』

八咫鳥？日本神話の？あつ、確かに3本足に3つ目だ。

ていうか……………え？憑く？どゆこと？

八咫鳥『貴殿の戦、拝見させてもらった。拙僧は貴殿が気に入った。それ故に、拙僧は貴殿に憑く。』

八幡「いやいや、訳が分かんねえよ。そもそも、お前いつから試合見てたんだよ。」

八咫鳥『最初からだ。もつと言え、貴殿が力に目覚めた時から中に憑いていた。』

八幡「……………なら何でもつと早く話しかけなかったんだ？出来ただろ？」

八咫鳥『それは拙僧が憑くに値するか見極めが重要だったのだ。貴殿が拙僧の力を振るうに相応しいか見極めていたのだ。拙僧のこの目は、天・地・人の全てを見通す目なのだ。黒く輝きを放つその眼と、強者に立ち向かう強き魂。体内の奥に眠る冥闇^{めいあん}の力。拙僧は貴殿の人格・力量・器に惚れたのだ。拙僧の力、存分に使ってくれ。』

八幡「んなこと言われてもな……………俺、お前の力なんて分かんねえし……………」

使うってどうやって？飛ぶの？

八咫鳥『貴殿は気づいていないだろうが、先の戦で受けた雷光で無事だったのは、拙僧の力を貴殿が強制的に引き出したからだ。』

八咫鳥『拙僧の地の力を使い、地より力を借りたのだ。故に貴殿は、

拙僧の力をすでに使えるのだ。意識して使用すれば役に立とう。でなければあれほどの雷光、無事では済むまい。』

え？もしかしてお前のおかげなの？あのインチキ妖刀じゃなくて？え？そうなの？

八咫鳥『《不幸中の幸い》つというやつだな。貴殿ならば、拙僧を自由に使いこなすことが出来よう。』

八幡「……………分かった。まあ、よろしくな。八咫鳥。」

八咫鳥『うむ。拙僧の力は、必ず貴殿の力添えになるだろう。』

八咫鳥『さて、拙僧の話は終わった。現世に戻りたいであろう。すぐに送ろう。』

八幡「おお、助かる。」

八咫鳥『拙僧はいつでも此処におる。現世の方では会話が出来るのでな、いつでも会いに来るがいい。さらばだ。』

そう最後に言い終わると、八咫鳥が銀色に輝き始め、俺は目を瞑った。

八幡「……………ん？」

知らない天井だ……だが作りは中華風だ。多分ここは医療室だな。薬臭い。

もう夜だった。時計を見ると日付が変わっていて、夜中の3時を回ろうとしていた。

……マジかよ。3日も大爆睡？そんなに寝てたの俺？嘘だろ？

まああんな戦って疲れたのって今までになかったからな。ていうか初めてだしな。そんなの当たり前か。

それにしても……ここの真夜中って星が見えるのか……意外だな。都会って光多いから見えないかと思っただが、俺の元住んだた場所も見れないけど。

八幡「……俺、勝ったんだよな。」

ああ、少しのんびりしたいな。でも学校あるしな。サボった分メツチャ勉強しねーと追いつけねーよな。

ま、寝てからでも考えるか。

そうして、また布団を身体に被って眠りについた。けど……

八幡「今起きたばっかだから、全然眠くねえ。それ以前に……」

ぐうううう……

八幡「メツチャ腹減った……………」

こうして八幡は、こんな時間に起きたことを空腹の音と共に後悔していた。

八幡「早く…………朝になんねえかな。」

なんてことに……

虎峰 side

皆さんどうもおはようございます。趙虎峰です。いきなりですが今日は平日の休みで、クラスメイトや雪ノ下姉妹、冬香さんと共に八幡のいる医療室に足を運んでいます。

セシリー「今日は八幡起きてるかなー。」

虎峰「さあ…如何でしょうかね？」

沈華「いい加減、起きて欲しいものですわね。あの寝坊助さんは。」
陽乃「仕方ないんじゃない？ 暁彗が相手だったんだし、勝つても負けても八幡くんがこうなることくらいは予想出来るよ。」

沈雲「しかし、本当に目を覚まして欲しいです。もう3日間ですから、そろそろ起きていてもいいころですが。」

冬香「あまり急かすのはよろしくないですが、確かに起きて欲しいですね。八幡さんのお話も聞きたいですし。」

見事にセシリーと雪ノ下姉妹、冬香さんは八幡を名前呼びする程になっっています。

虎峰 side out

—————

ガラガラ

虎峰「八幡？ 失礼しますよ？」

セシリー「どうー？ 起きてるー？ 寝てるー？ それとも不在ー？」

沈雲「流石に不在はないのでは……」

八幡「……………よ……………よお……………」ゲツソリ

陽乃「八幡くんっ！起きたんだね！良かったよ、目が覚めてくれて！」

冬香「ええ、本当に。ご気分はいかがですか？八幡さん？」

八幡「……………と、とりあえず……………何でもいいから食べ物が…欲しい……………です。」

沈華「そんなこと言われても、ここは医療室なんだから食べ物なんて食堂以外ないわよ。それに、持ち歩いてる人なんてー」

セシリー「あたし栄養補助食品なら持ってきててるよー。」

沈雲「……………持ってきていたんですね。」

八幡「おお……………セシリー頼む……………それを俺にくれ……………真夜中の3時に起きてから眠れなくてずつと空腹と戦ってたんだ。」

冬香「そ、それは…なんと言いますか……………いたたまれないですね。私、食堂から何か持ってきてきますので、それまではセシリーさんのそれで我慢してて下さい。」

虎峰「あつ、僕も手伝います！」

そう言ってから2人はまた出ていった。

セシリー「それでー八幡？これがそんなに欲しいのかなー？」

八幡「お……………おう。」

セシリー「それならさー、私が食べさせてあげよっかー？その方が楽でしょー？」

八幡「い、いや……………そこまでしなくても大丈夫だ……………手は動くから。」

セシリー「えーいいでしょー！あたしが食べさせたいんだからー！」

沈華「姉姉。もう手渡した方がよろしいのでは？比企谷少しゲツソリしてますし。」

陽乃「そ、そうだねー。食べさせるのは今度にして渡してあげたら？」

セシリー「あたしは今、食べさせてあげたいんですー！こんな状態の比企谷に1人で食べさせろって言うんですか！陽姐！」

沈雲「全然聞く耳を持ちませんね。」

この状況で全く引かないセシリー。それが返って逆効果になっていた。

八幡「寄越せえええ!!!」

セシリー「えっ?きやつ!?」ドサツ

八幡がセシリーに飛び掛かり、覆い被さってる状態だった。

3人「なっ!?!」

セシリー「えええ!?!ちよ、ちよつと八幡!?!な、何してんのっ!?!／／／

／

八幡「いいから寄越せっ!でないと勝手に食っちゃもうぞ!」

セシリー「わ、分かった!分かったから落ち着いてよ八幡!／／／

顔近いつてー!／／／

沈華「……本能で動いてますわね。」

陽乃「なんて羨ま……羨ましいっ!!」

沈雲「言い直せてませんよ。」

外野はそんな会話をしていたが、とうの本人たちは作業を進めていた。こんな状況にも関わらず、セシリーは食べ物を渡そうとはせず、袋から開けて八幡に差し出していた。

意外と頑固だったりして。

沈雲「えーと……比企谷くん?そこから退けてあげたらどうだい?」

沈華「そ、そうよ。見てるこっちが恥ずかしくなってくるわ。」

八幡「……………」

陽乃「……全然聞いてない。それどころか食べ物の方しか見てない。」

セシリー「は…はい、あーん。」

八幡「あーん。んぐっ…んぐっ…」パクッ

八幡「ん、美味しい。もう1つくれ。」

セシリー「……これはこれで……いいかも。」

陽乃「ねえセシリー？この状況楽しんでるように見えるのは私の気のせい？」

セシリー「やだなー陽姐ー。そんなわけないじゃーん。えへへ♪」ニコニコ

黎兄妹「楽しんでますね（わね）。」

陽乃「ずーるーいっ！私も八幡くんに食べさせてあげたいっ！」セシリー「食べ物来たらやればいいでしょー？私の待ちに待った楽しみを取らないでよ陽姐ー。はい、あーん♪」

八幡「あーん。むぐっ…むぐっ…」

陽乃「むうゝ!!」

沈雲「……早く戻って来てください、冬香殿、趙師兄。こっちはもう限界です。」

沈華「早くしないと、セシリー姉姉と陽乃姉姉がいけない方で壊れてしまいますわ。比企谷はもう壊れてますけど。」

一方、食堂から食べ物を持って医療室に戻る途中の冬香と虎峰はというと……

冬香「これだけあれば足りるでしょう。八幡さんはそれほど大食いというわけではないのですよね？」

虎峰「はい。一応、普段の食事を見ての判断ですので、少し多めでいいと思います。」

冬香「それにしても、残った4人は大丈夫でしょうか？少し心配ですね。もしかすると、八幡さんが誰かを襲っていたりして。」

いえ、八幡さんに限ってそんな事はないでしょうが、あまりの空腹に誰かを……

虎峰「怖い事を言わないでくださいよ。それに僕には八幡がそんな事をするとは、とても思えません。」

冬香「そ、そうですね。八幡さんに限ってそんなことはないですよね。」

虎峰「あつ、もう着いたみたいですよ。きっと待ちわびてるでしょうね。」

冬香「ええ。早く持って……ガラガラ

八幡がセシリーを押し倒している光景。

沈雲「ああ……お戻りになれましたか。」

沈華「やつと……来ましたわね。」

虎峰「ここに、これは一体どういうことですか!？」

陽乃「……セシリーが八幡くんを食べ物食べさせたいって言うて、私達が止めてたら八幡くんが押し倒したの。」グスンッ

虎峰「……何故、雪ノ下姉姉は涙目になっているのですか?」

陽乃「だって、私も八幡くんに食べさせてあげたかったんだもん!それなのにセシリーだけずるいよ!!」

冬香「そうだったんですね？陽乃様。そうでしたか。私達がいらない間にそんな事があったのですね？」ニツコリ

陽乃「え？冬香ちゃん？」

冬香「申し訳ないのですが、あの2人に事情を聞きたいので、少しの間廊下で待つてもらえますか？勿論、食べさせるのはなしですよ？」ニツコリ

陽乃「そんなあっ!？」

冬香「ナニカイイマシタカ？」ニツコリ

陽乃「……いえ、何でもありません。」

冬香「物分かりの良い先輩を持てて私は幸せ者です。では、失礼します。」

陽乃「こ、怖かった……」ガタガタ

虎峰「あの2人、大丈夫ですかね？」

沈雲「死にはしないでしようが、」

沈華「生き地獄を見ますわね。」

3人「合掌」チーン

冬香「少し宜しいでしょうか？お二人共？お聞きしたいのですが。」ニツコリ

セシリー「えー何？どうかし…ヒツ!？」

八幡「……………」

冬香「これは一体どういう状態なのか、分かりやすく教えて頂けると嬉しいのですが、よろしいでしょうか？」ニツコリ

セシリー「あ、あの、え、えーと、」

冬香「答えられないのですか？困りましたね。それでは正座して頂かなくてはならないのですが、それでもよろしいでしょうか？」ニツコリ

八幡「……食べ物はあるんですか？」

冬香「はい、お持ちしましたよ。ですがその前にこれを説明して頂きたいのですが？」ニツコリ

八幡「……セシリーから食べ物をもらっていただけです。それだけです。」

冬香「それでしたら、わざわざそんな体勢でいる必要はないと思うのですが？それとも八幡さんは、そうでもしなければ食べられないのですか？」ニツコリ

セシリー「あ、あのー…私が食べさせたいって言ったからこうなったので、八幡は許してあげてください！……なんて。」

冬香「……へえ、それでそんな態勢に？面白いですね。……ウラヤマシイ」ボソツ

セシリー「……冬香さん？」

冬香「っ！何でもありません。とにかくそういうことはいけません。それに「冬香さん。」な、何ですか八幡さん？」

八幡「俺に食べさせてもらえます？」

冬香「は、はいっ!？」

八幡「いえ、手で身体支えていたら痛くなってきたので食べさせてもらえたらなーって、ダメですか？」

冬香「そ、そんなこと言って私の説教から逃げる気ですね？」

八幡「じゃあダメなんですね。残念です。冬香さんからもらったかったな……」ウツムキ

冬香「あ………」

八幡「仕方ありません。セシリーにまたお願いします。」

冬香「い、いえ！私がやります！私にやらせてください！」

八幡「……ありがとうございます。」

冬香「お次、いきますよ？あーん♪」

八幡「あーん。」

陽乃「それで？これは何？」ピキピキ

セシリーが起きた事を説明すると、今度は陽乃が激怒して2人を説教していた。

ついでに言うと、この時の八幡は半分欲望に忠実な感じなので、普段の意識は全くありません。

夢幻月影

爆誕!!

八幡 side

陽乃「2人共、分かった!？」

八幡「……………はい。」ズーン

冬香「ですが、陽乃様も途中からやっていたではありませんか。」ボソッ

陽乃「なんか言ったかな？」

冬香「…………正直に聞きます、どうでした？」

陽乃「ぶっちゃけ、かなりそそられた。あの八幡くんは超激レアだよ。此処に来る前はこんな事あり得なかったし。」ウンウン

冬香「写真か動画でも撮っておいた方が良かったですね。見た時はきつと微笑ましいって思うでしょうし。」ニコニコ

陽乃「あつ！それだよ！今度からはそうしょつか！うん！決定！」

虎峰「…………説教をしていたのでは？…………それに八幡なんて、未だにこの世の終わりみたいな顔をしていますよ。」ズーン

八幡「…………ああ、穴があったら埋まって土に還りたい。潜りたい。」

沈華「無理ありませんわ。普段の比企谷であれば、あり得ない光景でしたから。」

沈雲「それにセシリー姉は、さつきまで夢と現実の境目にいましたからね。」

セシリー「そんなわけないでしょー。あたしはいたって普通だよ普通ー。」

虎峰「…………はあ、まあいいです。それよりも八幡。3日間眠っていたわけですが、あれから色々ありました。」

虎峰「八幡さえよければ、知りたくはありませんか？無理にとはい言いませんが。」

八幡「いや、聞いておく。あの試合の後だ、何もないわけがない。まあ、大体予想はつくがな。」

むしろならない方がおかしいもんだ。

虎峰「では説明しますね。まずはあの後の事です。」

そこからは、虎峰が簡潔に教えてくれた。まあこんな感じだな。

暁彗が負けるはずない。ズルでもしたんだろ！俺と決闘、ヒヤツ
ハ―！

星露、アレマ、小苑に止められる。

派閥勧誘の過激or緩和化。

序列の昇格。外部にはまだ拡散しないらしい。何故かって？分
かってたらそんなの苦勞しません！ハチマンウソツカナイ。

二つ名の命名。

（まだ決まっていらないらしい。）

新派閥!?

非公式ファンクラブ!!?

虎峰「以上がこの3日間で起きたことの全てで……八幡？」

八幡「……………んだよ。」

虎峰「え？」

八幡「何なんだよ!?それは!?後の2つなんだ!?新派閥?フアンクラブ?八幡そんなの知りませんよ!」

沈雲「当たり前じゃないか。君は今まで寝ていたのだから。」

八幡「新派閥は置いておこう。何だファンって!?俺にファンなんて世界がひっくり返ってもあり得んぞ!!」

セシリー「そこまで言わなくてもいいんじゃないー。悪い事じゃないし。」

八幡「いや、そんなのがいたら俺の平穏な学院生活が送れなくなる!」

冬香「曉彗と試合をしている時点で、平穏はないと思いますが……」

八幡「ああ……やだよ。何だよフアンクラブって。ただの人の寄せ集めじゃねえか。誰だそんなもん作ったのは。」

冬香「酷いことを言いますね。八幡さんの実力を認めたからではないですか。そんな言い方をしてはいけませんよ。」

八幡「好きでやったわけじゃないですよ……なんていうか、勝てないって言われてカチーンってきただけであって、他意なんてありませんよ。」

陽乃「私はその場に居なかったから分かんないけど、凄かったんだって?八幡くんの星辰力とか迫力とか。」

虎峰「ええ、殺されそうでした。」

ちよつと?殺されそうってどういうこと?俺ってそんなにヤバイ雰囲気だったの?

冬香「確かにそんな雰囲気はありましたね。全員に殺気立っていました。」

セシリー「あの場には、『ホントー』に『ものすごく』居づらかったなー。」

沈華「ええ、全くですわね。」

俺ってそんなことしたの？

八幡「わ、悪かったよ……俺もそこまでやったなんて覚えてねえんだよ。そ、それで、新派閥ってのは何なんだ？よく分からのだが。」
虎峰「話を逸らしましたね。僕には面を向かってあんなこと言ったのに。」

八幡「だから悪かったって。今度鍛錬一緒にやってやるから。」

虎峰「……分かりました。派閥の事です、これはまだ噂段階ですね。」

八幡「何だよ……脅かすなよ。」

セシリー「虎峰も人が悪いねー。」

p i p p i : : p i p p i :

虎峰「ん？師父から？はい、師父。どうかなされましたか？師父が通信なんて珍しい。」

星露『うむ。お主だけにでも伝えておこうと思うてな。八幡の事でじゃ。』

虎峰「八幡の？何かあったのですか？」

星露『なに、八幡の二つ名が決まったのでな。お主だけにでもと思うてな。』

虎峰「二つ名が決まったのですか？」

星露『うむ！良い名になったぞ！』

八幡以外「気になります！」

星露『うおっ!?!お主らいたのかえ?』

陽乃「そんなのはいいから早く教えてよく！私気になる〜！」

冬香「気にならないと言えば嘘になりますね。是非お教え下さい、師父。」

星露『うむ！では言おう！ズバリ!』

八幡以外「ズバリ……?」

星露『むげんげつえい【夢幻月影】じゃ!』

星露『彼奴の技は、幻術・陰陽術に長けておる。そして極め付けは最後の技じゃ!あれには妾も驚いたぞ!そこから取ったのじゃ!どうじゃ?ぴつたりだと思うかの?』

陽乃「良い……………良いよ！星露——むしろ八幡くんにしか似合わないくらい似合い過ぎてるよ——」

虎峰「はい！僕も賛成です！八幡の二つ名はそれが良いと思います！——」

沈華「私達も依存ありませんわ。そうでしょう？沈雲？」

沈雲「うん。僕も賛成だよ。」

セシリー「流石師父ですよー。何ていうか、語呂が合ってますよねー。」

冬香「そうですね、八幡さんに良くお似合いです。私も賛成いたします。」

はあ、どうせ言っても拒否権なんてないだろうし別にいいか。それに……

なんか……………いいモンだな。こんな風に認められるってのも。

なんか眠くなつて来たな……………飯もいっぱい食ったしな……………もう一眠りするか……………

虎峰「八幡はどう思い……………って、寝てますね。こんな短時間に。」

冬香「仕方ないのでは？夜中起きた他にも、まだ回復し切ってないのでしょうか。ここは安静にさせてあげましょう。」

星露『何じゃ？八幡が起きておったのか？残念じゃのう。話したかったのじゃが。』

虎峰「申し訳ありませんが師父、それはまた別の機会に……………」

星露『分かっておる。これを伝えるだけじゃったからの。話などいつでも出来る。』

虎峰「はい、では。」

星露『うむ。主らも八幡に負けず、精進することじゃな。』

そうして通信が切れた。

陽乃「さてと、八幡くんも大丈夫みたいだしそろそろ行こうか。」
冬香「そうですね。もうお暇するのでしょうか。鍛錬もしたいですし。」

セシリー「名残惜しいけど、学校でも会えるしねー。」

沈雲「それでは、行くとしましようか。」

全員が出口に向かって歩き、退室した。

虎峰「早く良くなってくださいね八幡。また一緒に鍛錬したいですから。」

セシリー「虎峰ー、置いてくよー。」

虎峰「はい！今行きます。」

八幡「俺も幸せ者になったもんだな。」ツー

こうして新たな界龍第七学院の新序列2位、【夢幻月影】の比企谷八幡が誕生した。

閑話

お得と勝手な約束

八幡 side

怪我や傷は俺が眠っていた3日間で治り、疲労もすっかり取れた俺は久々に休みを堪能していた。中々に極楽なものだ。

そしてここだけの話、序列の事だが暫くは曉彗のままにしておくそうで、何でも小苑さんが気を利かせてくれたみたいだ。

その理由が気になったから聞いてみると……………

小苑『お主の情報を漏らさぬ為じゃ。何が原因で元いた高校に気づかれるかも分からんし、そうなったらお主も嫌じやろう。一応の予防線じゃ。』

との事だった。小苑さんマジ良い人過ぎる。確かに俺の居場所が知られるのは御免だしな。

※八幡はノートに書いてあった事を全く覚えていません。9話の『後日談』参照。

コンコンッ

八幡「ん？はい。」

冬香『梅小路です。お邪魔してもよろしいでしょうか？八幡さん。』
八幡「ああ、ちよつと待ってください。」

先輩に動かせちや悪いからな。
ガチャッ

八幡「どうしたんですか？こんな端の寮部屋まで突然……」

冬香「ええ、突然で申し訳ありません。本日は皆様忙しい故、急遽私をご報告することになったのです。あしからず。」

八幡「いえ、そんな……ん？報告？」

この前ので全部じゃないのか？まだ他に何かあるのか？

冬香「疑問は尤もだと思われませんが、八幡さんの体調が完全回復してからと師父が仰っていたものですので、それまでお待ちしてました。」

八幡「それなら中に入って聞かせて下さい。それと、勝手に心を読まないで下さい。」

冬香「ふふふ、すみません。」ニコツ

そして俺は部屋へ入れ、椅子を用意してから話を聞くことにした。

八幡「それで、話とは何ですか？」

冬香「話と言っても、その内容はお1つだけなのですよ。お手間やお時間はお掛けしませんので……」《個人的な用事もありますが、それは後でもいいでしょうし。》

ん？冬香さん最後に何か言わなかったか？

冬香「んんつ、今回の試合で、冒頭ペーシワッの十二人になりましたので八幡さんには冒頭の十二人専用の部屋を用意することが出来ますが、如何なさいますか？専用の部屋になさると、ルームシェアはなくなります。が、部屋の面積は今よりもずっと広がります。勿論断る事もできます。」

え？冒頭の十二人になったら、そんなお得なことがあるの？

冬香「それと言い忘れていましたが、冒頭の十二人になると特別報奨金が出ますので、生活方面では八幡さんの思う以上には安定すると思いますよ。」

うそーん!? そんなのがでるの!? 冒頭の十二人良い事だらけじゃないかってよかったあ。

冬香「それで如何ですか? 部屋を移動しますか? 移動する際の手続きは不要ですのでご安心下さい。」

八幡「それじゃあお願いします。もともと1人でいることや静かな方が好きなので。」

冬香「分かりました。師父にはそう伝えておきますね。」

これで少しは六花を満喫出来るな。街に出たのは数回程度だからな。

冬香「あの……八幡さん。」

八幡「はい?」

冬香「もし……八幡さんさえ良ければよろしいのですが……」

冬香「今日1日、私と過ごしてはもらえないでしょうか?」

八幡「……え?」

え? どうして?

冬香「実は、試合が終わった後に八幡さんとの時間を過ごしてみたと思います、他の5人の方々にお願いしていたのです、『後日時間をくださらないか。』と。」

八幡「……どうして俺なんです?」

冬香「八幡さんにとっては、誠に勝手な事とは承知しています。セシリーさん達や陽乃様がいつも八幡さんの事を気にかけておいでしたので、八幡さんと過ごす日々について、少し気になっていたので

す。それで、どうでしょうか？今日お時間は空いておられますか？」

今の口振りからすると、今日が無理なら明日でもって言うタイプだな。おそらく何日も仕掛けてくるだろう。ここは早く終わらせた方が賢明だな。

八幡「はい。特に用事も無いので、空いてますよ。」

冬香「まあ！そうでしたか！それでは早速、もうそろそろお昼ですので昼食などはどうでしょうか？」

八幡「そうですね。」

こうして俺は今日1日は冬香さんに付き合ったが、その日はかなりの精神を削られた。セシリーや雪ノ下さんと同じことするんだもん！

途中で抱きついてきたり、飯食ってる時にあーんしてきたり、頭を撫でてきたりと色んな事をされた。

願わくば、あの2人のようにならない事を祈ろう。いやマジで。

お主が欲しいっ！

八幡 side

すっかり体調も良くなり、今日から学校へ行くことになる。それはいいのだが心配事といえば、クラスの反応だ。

俺が入ってきた時どんな反応をするか分からない。試合の後、俺に対するブーイングがあつたらしいからな。それに、あわよくばと勧誘もして来ないだろうか。

八幡「はあ……不安だ。」

沈雲「そんな事を言われてもね……」

虎峰「そうですよ。いい加減腹を括って下さい。もつと威厳を出して下さい。」

八幡「別に好きで序列入りしたわけでも、2位になったわけでもないんだが……」

沈華「仕方ないじゃない。大師兄に勝つていうのは、それこそ私達から見たら非常識な事なんだから。」

沈雲「少なくとも、決闘を受けた比企谷くんにも責任はあると思うよ。」

八幡「ぐっ、何も言い返せねえ……」

セシリー「まあ大丈夫でしょー。そんな時はそんな時で考えればさー。」

セシリー「それにさー、いつその事八幡が本当に新派閥の教主になるとかどうー？そしたらあたしは、八幡の方に鞍替えするよー。ね？

八幡師父ー♪」ダキッ

八幡「やめてくれ……俺は人の上に立つなんて柄じゃねえよ。あと離れろ。」

セシリー「もー、照れ屋なんだからー。」ツンツン

はあ……憂鬱だ。どんな塩対応されるかわかったモンじゃない。一斉に殴り飛ばされるか、呪符の攻撃フルコースか……これはもう2

つに2つだな。

虎峰「あつ、落ち込みと共に頭の上にあるアホ毛も萎えましたね。」

沈雲「そこまで考えていたとはね……」

セシリー「八幡、あたしが連れて行ってあげるよー？ 八幡なら大歓迎だからねー。」

八幡「……………大丈夫だから遠慮しとく。」

あの状態で教室入るとか、入る前から拷問を受けてるのと同じです。

その後、教室の前に来て扉を開けると、一斉にこっちを見た。後ろを見たらあいづらがいねえのっ！これ逃げ場無いのと同じじゃん！殴り掛かって来ると思ったら、満場一致の大歓声で俺を受け入れてくれた。ヤベエ、疑ってた俺を即シバきてえ。

勿論、勧誘もあった。それはそれは丁重にお断りさせてもらった。八幡何度も言ってるよね？そういうの入らないって。

そしてそのままHR、1時限目と進み、今は中休み。

八幡「…………俺、今感動してるよ。」

虎峰「急に何を言い出すんですか？」

八幡「俺はこのクラス程素晴らしい環境に恵まれたことはない。こ
こはマジで素晴らしいよ。最強だよ。」ツクエフセ

虎峰「僕達のクラスを褒めてくれるのは嬉しいですが、泣く必要は
「それ以上は言うな虎峰。俺はまだ悶え死にしたくないっ！」……あ
の、意味が分からないのですが……」

ガラガラッ

星露「八幡はおるかえ？」

虎峰「師父!?何故ここに？」

星露「ちよいと八幡に用事じゃ。おお、そこにおったか!八幡!」

そこにはチビ……じゃなくて星露が来ていた。何だ?俺に用事
か?

星露「今、失礼な事を考えてはおらんかったか?八幡よ?」

八幡「やだなあゝ気のせいに決まってるじゃないですかあゝ。」

星露「何故かは知らんがその喋り方はやめい。地味に腹が立つ。」

八幡「すまん。今初めてやってみたが、俺もそう思った。」

虎峰「じゃあ何故やったのですか？」

八幡「何でだろうな?俺にも分からん。それよりも用事って何だ
?」

星露「おお、そうじゃったのう。八幡よ、妾の5番目の弟子になら
んか?」

星露「お主の力を妾の手で育ててみたとうなった。どうじゃ?弟子に
ならんか?」

虎峰「八幡!師父自らのお誘いなんて絶対にない事ですよ!ここは
受けておくべきですよ!」

八幡「なあ虎峰、前から思ってたんだが、お前そんなに俺を門弟に
したいわけ?」

虎峰「えっ!? い、いえ! 別にそういうわけではありませんっ!」メソラシ

うん、思ってたんだな。

セシリー「師父ーダメですよー。八幡は今日からあたしと一緒に新派閥を作るんですからー。邪魔しないで下さーい。」

セシリー以外「何だってー!? (何ですってー!?)」

虎峰「そ、そんな八幡!? 聞いてないですよ!? 作らないと言っていたではないですか!? あれは嘘だったのですか!?!」

星露「そ、そうなのかえ八幡!? お主セシリーと共に……」

八幡「ちつがーうっ!! そんなの作る気なんてこれっぽちの欠片もねえよ! おいセシリー、そんな嘘言うなよ。俺までビビったじゃねえか。」

セシリー「えー、あたしは割と本気なんだけどなー八幡と新派閥。」
八幡「本気にするな。それに弟子の件なら、最初からもう決まっている。」

星露「おお! そうか! ならば「断るに決まってるだろ。」シレッ

全員「え?」

八幡「ん? 何だよ?」

虎峰「あの…聞き間違えたかもしれないのもう一度言ってもらえますか?」

八幡「だから断るって。」

全員「えええええ!!?」

虎峰「ど、どうして!」

セシリー「まあ、そうだよねー。」

星露「な、何故じゃ八幡!? 妾の弟子じゃ不足とでもいうのか!」

八幡「いや、そういうわけじゃないが、俺はそういうの好きじゃねーんだよ。」

虎峰「好き嫌いの問題じゃありません！師父の弟子はこの学院の誰もが羨む立場なのですよ!? 断る必要がどこにあるのですか!? さっぱり分かりません！」

いや、別に俺そんな立場なんて羨ましくねーし、そもそも欲しくもねーし。

八幡「だってよ、弟子入りしたら俺はあんま自由じゃなくなんじゃねえのか？」

虎峰「え？ まあ、ちよつとは……ですがそれくらいは問題では……」

星露「お主はまだ伸びるのじゃぞー！ なのに何故じゃ八幡!? 妾の弟子の何が不満だというのじゃ!?」

八幡「窮屈だからだ。」

全員「ええー!? スゲー嫌そう!？」

セシリー「あっはは、八幡らしー。」

星露「むうー!! 妾は諦めんからなく八幡！ 絶対お主を弟子にしてやるぞー！」

そう言って行ってしまった。

八幡「おー頑張れー。(棒)」

セシリー「やっぱり八幡だねー。そう言うと思ってたよー。」

虎峰「そう言えば、セシリーは何故分かったのですか？八幡が断ると。」

セシリー「えー虎峰それ本気で言ってるー？八幡を毎日見てたら分かるよーそんな事くらい。」

虎峰「そ、そうなのですか？」

セシリー「むしろ此処に来て一番最初に会ったのって虎峰でしょー？それなのに何で分からないのかねー？」

八幡「そんな事より、もうそろそろ授業はじまんぞー。席ついとけー。」

その後も中休み、昼食、鍛錬と俺のいる時は全て勧誘だった。あいっつてあんなに頑固だったのかよ。

はあ……疲れた。ああ、やっと着いた俺のオアシス。マイルーム。

ガチャッ

星露「八幡！今度こそ入ってもらおうぞ！」

八幡「もう何なんだよお前!!いい加減諦めろよ!!何でそんなにしつこいんだよ!!お兄ちゃんそんな子に育てた覚えはありません！」

星露「何じやお兄ちゃんとは!!意味分からん事言いおって!妾の弟子になれば丸く収まるのじゃ！」

八幡「それと不法侵入!お前普通に不法侵入!もう何でもありか!?!」

星露「それは妾が【万有天羅】だからじゃ！」

はあ……もういいや。こいつの相手もう疲れた。さっさと支度

しよ。

星露「む？何をやっておるのじゃ八幡？」

八幡「何って飯作るに決まってるだろ。報奨金貰ったから、買い物して来たんだよ。中華以外なんてここ来てからあんまり食べてないしな。」

それに、料理は昔からもそうだが、小苑さんといった頃は毎日作ってたからな。それなりの料理なら作れる。

星露「ふむ、なら妾も食べていこうかの。お主の料理も見たいしの。」

八幡「お前はさっさと回れ右して帰れ。」

星露「嫌じゃ嫌じゃー！妾も食べたいのじゃー！食わせーい！」

八幡「あーもう鬱陶しい！分かったよ！分かったから大人しく待ってろ！」

――3分後――

星露「八幡まだかえー？」

八幡「お前は10分も待てないのかよ？食堂じゃねーんだからそんな早く作れねえよ。もったかかるわ。」

――30分後――

八幡「出来たぞ……随分静かだと思ったらバテてやがったか。」

星露「うう……早う食べたいのじゃ。」

八幡「はいはい、分かったからさっさと席つけ。食うからベッドで俯くな。」

星露「う……む!?何じゃこの美味そうな匂いは!?おお!!」キラキラ

うわあ……飯が出来てからのこの反応、コイツすげえ現金な奴だな。

星露「八幡！何じゃこれは!？」

八幡「ラザニアって料理だ。チーズとパスタを使ったイタリア料理だ。今日は仕込んでおいたから早く出来たが、そうでなければ1〜2時間かかる。」

星露「……いい匂いじゃ！のうのう、早う食べようぞ。」

八幡「ああ、分かってるよ。んじゃ、」

2人「いただきます。（のじゃ!）」

八幡「ああ、熱いから気をつけろよ。」

星露「うむ、フーフウ……ハムツ!」

八幡「どうだ?」

星露「………うつ」

八幡「う?」

星露「美味ーいっ!!美味しいのじゃ!何じゃこの味は?それに食感は?初めての感覚じゃ〜♪」

頬つぺたが落ちるとはこの事だな。だるんだるんに落ちてやがる。

完食後……

星露「ご馳走様なのじゃ〜♪」

八幡「お粗末様でした……（こいつすげえ。半分以上食ってやがった。）満足したか？」

星露「うむ！また食べたいのじゃ！」

八幡「流石に毎日あれはないがな。」

星露「八幡よ！また来るのじゃ！その時もよろしく頼むぞ！」

そう言うとき星露は部屋から出て行った。

八幡「……………あいつ何しに来たんだ？タダ飯食いに来ただけじゃねえか。」

それから、週5のペースで俺の部屋に来ては、『今日こそ弟子になってもらうぞ！』と言っては俺の夕飯を食っていく。

飯が食いたいならそう言えよ、あのチビは……………まあ、美味そうに食ってくれるのはありがてえしな、今度は青椒肉絲でも作るか。

お節介という名のお礼

八幡 side

あー今日も疲れたなあ。学校・勧誘・鍛錬・そして星露の弟子入り、最後の1つ以外は見事に元に戻ったな。さて、今日もあいつが来るかもしれないからな。今日は何にすっかなー。

プリシラ「あつ！比企谷さんっ！」

八幡「ん？」

プリシラ「覚えていませんか？この前助けて頂いたプリシラ・ウルサイズです！」

……そういや、この前追われてた奴だったな。ああ、あの時の子か。

八幡「よお、あの後からは大丈夫か？」

プリシラ「はい。あの日から今日まで追っ手は来てません。本当になんとお礼を言ったらいいか……」

参ったなあ……俺こういう奴は少し苦手だ。よく分からんが、得意じゃない。ここは早く立ち去った方がいいかもな。

八幡「無事ならいい。俺のやった事が無駄じゃなかったってことだな。」

プリシラ「はい！おかげさまで！」

八幡「それじゃ、お互い買い物があることだし、この辺で失礼する。」

よし、これで……

プリシラ「あつ！待ってください！」

……ねえ？何でなの？貴女ってどうしてそんなに構ってちゃんなの？

プリシラ「あの……よろしければ家に上がって行きませんか？この前のお礼もしたいですし。姉も会いたがっているの。」

八幡「姉っていうと、ギャンブルにどハマリしてるお前とは正反対の不良学生か？俺が行ったらとても無事に帰れるとは思えないんだが？」

正直、もう帰りたいです。はい。

プリシラ「た、確かにお姉……い、いえ、姉はちよつと乱暴で気が短い所がありますが、根はすつごく優しい人なんです！私が助けてつて連絡した時は、すぐ駆けつけてくれるんです！比企谷さんも姉の事を誤解しないで下さいね！」

うん分かった。分かったからまずはその天井に向かって跳ね上がっているお下げ髪を何とか元に戻しなさい。凄い跳ね方してるぞ。

八幡「分かった、本当は優しい奴なんだな。なら、そう記憶しておこう。」

プリシラ「ありがとうございます！それで、お食事の件ですが……」

……忘れてなかったのね。仕方ない、諦めて腹括るか。ここはご馳走になろう。

八幡「分かった、お言葉に甘えさせてもらう。すまないな。」

プリシラ「いえ、此方から頼んでいることなので滅相も無いです！」

それから暫くして、

――六花外縁居住区――

プリシラ「着きましたよ！比企谷さん！」

八幡「ほう、住み心地の良さそうな場所だな。良いところだ。」

プリシラ「ありがとうございます！どうぞ中へ！早速準備しますの
で。」

八幡「お、お邪魔します。」

プリシラ「そんなに固くならなくていいですよ。自分の家だと思っ
てください。」

いや、それ大体の人が無理だから。

プリシラ「ただいまーお姉ちゃん。お客さんだよ。」

???「はあ？客？誰だよ、ウチに客なんて。」

八幡「こ、こんばんは。お邪魔します。」

すると突然、目の色が変わった。まるで敵意を剥き出しにしてるよ
うな感じだ。

???「おい。あんた誰だよ？プリシラの何だってんだ？」

八幡「買い物仲間ってところです。」

???「買い物仲間だあ？ふざけるなよ。正直に答えやがれっ！」

え？ダメだった？いや結構マジに考えてマジで答えたつもりなん
だが。ハートキャッチ出来なかった？

プリシラ「お姉ちゃん！この人だよ！この前話した比企谷さんだよ
！」

???「何だと!？」

すると威圧的な雰囲気は消え、急にしおらしくなった。

???「プリシラ！先に言えよな！恥かいちまったじゃねえか。」

プリシラ「お姉ちゃんが早とちりし過ぎるんですっ！」

???「つたく、妹が世話になったな。それとさつきは悪かったな。あたしはイレーネ・ウルサイズってんだ。よろしくな。」

八幡「比企谷八幡だ。お前もレヴォルフなのか？柄的に。」

イレーネ「初対面なのに結構ズケズケくんじゃねーか。まあ間違っちゃいねーか。その通り、あたしもレヴォルフさ。」

八幡「そうか。」

プリシラ「じゃあ私、準備してきますね！お姉ちゃんの話し相手になつてあげてください。失礼します！」

八幡「あいつつてさ、結構ズバッと言うよな、無意識なんだろうが。」

イレーネ「分かんのか？意外だな。」

八幡「俺も妹いるからな。何でこう妹には逆らえないかねえ。」

イレーネ「ああ、分かるぜ。反論したくても出来ない時ってあるよな。」

八幡「あーよくあるな。これってあるか？妹に何かを勝手にされることって。」

イレーネ「比企谷もか!?あたしもしよつちゆうやらされてるぜ！謝る時なんて頭下げさせられるんだぜ？つたくよ、こつちの話も聞いてくれてんだ。」

スゲエ……分かる、分かるぞ。こいつの気持ちが。こんな所にも俺と同じで妹に苦労してる奴がいたんだな。まあ俺にはもう関係ない話だけどよ。

八幡「なんかお前とは、いい関係になれそうだな。なんかもう苦労人的な？」

イレーネ「奇遇だな。あたしもそう思っていたところだ。」

ガシッ!!

こうして2人は、妹の苦労人という極めて不思議な絆で結ばれた。

イレーネ「まさかこの苦労を共感できる奴がいたなんてな。何が起きるか分かんねーモンだな！なあ比企谷っ！」

八幡「確かにな。この苦労分かってくれる奴誰もいねえからな。」

すると奥から料理の入った皿を持って来たプリシラがきた。

プリシラ「お待たせしました！ヒヨコ豆とトマトのサラダです！前菜にどうぞっ！」

八幡「おおっ、美味そうだな。」

イレーネ「そうだろう！プリシラの料理はとにかく絶品なんだぜ！ついて！何すんだよ。プリシラ。」

プリシラ「行儀悪いよお姉ちゃん！」

八幡「いや、気にしなくていい。むしろそうしてくれないと余所余所しい感じがして食いづらくなる。」

イレーネ「へへっ！なかなか分かってるじゃねえか！比企谷。」パクツ

プリシラ「もう……じゃあ私戻りますね！姉の相手をお願いします。」

そうしてまた、キッチンへ戻っていった。

八幡「（パクツ）……ん、確かに美味しいな。」

イレーネ「だろ？」

八幡「ああ、レシピでも教えてもらおうか。試してみてえ。」

イレーネ「ん？お前も料理すんのか？」

八幡「夕飯だけな。朝と昼は食堂で済ましてる。俺の学園は聞いてんだろ？」

イレーネ「ああ。しかしこうして生で見るとホントに信じらんねえ

な。お前が界龍なんてよ。目を疑うぜ。」

八幡「ほつとけ。」

それからも絶品と言っていていくらいの手料理と、妹がいることに対しての共感で、有意義に過ごすことが出来た。

やっぱさ、妹と姉がいる家庭って最強なんだよ。真ん中って絶対やるせない感じになっから。多分だけどな。

……まあ、こんな事を思う事はもう二度とないだろうけどな。

枯れない花

八幡 side

……………ヤバイ、マジでヤバイぞ。俺はとんでもない奴に喧嘩吹っ掛けちゃった。よりにもよってあいつなのかよ。

※これは前回の未公開シーンである。

イレーネ「どうよ比企谷？プリシラの料理は美味えだろ!？」

八幡「ああ、俺も思わず手を伸ばしちゃう程の美味さだった。また食いてえな。」

プリシラ「でしたらいつでも来て下さい！姉共々歓迎しますー!」

イレーネ「ああ！お前ならいつでも歓迎するぜ！なんせ気が合うしなっ!」

八幡「おう、じゃあそろそろ……………つとそうだ。1つ聞いてもいいか？イレーネは知ってると思うんだが……………」

イレーネ「あん？何だ?」

八幡「お前んとこの学生で白い長髪に赤い目した女子生徒っているよな？誰なのか知ってたら教えて欲しいんだが……………って、どうした？そんな血相変えて?」

プリシラ「……………ええつと、比企谷さん。それって実際に会ったんですか?」

八幡「ん？ああ、まあな。」

イレーネ「お前、まさか何かしたんじゃないだろうな?」

八幡「いや、特に何も……………あつ、そういや、花を枯らされてイラッとしたから叩いちまったな。悪い事したな。」

2人「叩いたあ!!」ズイツ!!

八幡「うおっ!?!何だよ?」

プリシラ「比企谷さん！誰に手を出したのか分かってるんですか

!？」

八幡「いや……分かんないから今こうして聞いてるんだが？」

イレーネ「だから近頃のあいつ様子が可笑しかったのかよ……比企谷、お前殺されるぜ？ 確実にな。」

八幡「いや、そんなんじゃないや分かんねえよ。誰なんだよ？」

イレーネ「お前が手を出したそいつは、ウチらの学院の序列1位、エレンシユキーガル【孤毒の魔女】オーフェリア・ランドルーフェンだよ。」

八幡「……………what, s？」

ん？ちよつと待てよ、その2つ名つてどつかで聞いたな。確か【孤毒の魔女】だろ？

アレマ『この六花最強の魔女、レヴオルフ黒学院の序列1位、【孤毒の魔女】が2つ名の『オーフェリア・ランドルーフェン』って奴だよ。』

八幡『2つ名の感じからしてヤバそうな奴なのは確かですね。』

アレマ『ああ、確かにヤバい奴だぜ。言っとくけど、会ってみたいとか間違っても思うじゃねーよ？ 八幡ちゃん。』

会ってたああああ!!! 注意受けてから5日後に会ってたあ!!!?

イレーネ「それに偶々見かけたんだがよ、あいつが花畑の近くに
いるのをな。それも結構な頻度でな。」

八幡「……………俺、死んだな。」シロメ

イレーネ「まさか…………お前か?」

八幡「……………俺、もう帰るな。」シロメ

プリシラ「は、はい。」

八幡「……………飯美味しかった、じゃ。」シロメ

2人「……………」

――回想終了――

だって誰もあいつが【孤毒の魔女】だなんて思わねえよっ!! 何こ
れっ!!? ねえ何これっ!!? 神様の悪戯!!?

いや、もう完成してるよ? あいつの毒かき消すためのモンならもう
作ったよ? けどさ、怖すぎるよ!!? 読者の皆様なら出来るか? 知らん奴
に喧嘩吹っかけたらとんでもない奴で、知ってもなお平気に挨拶って
?

俺だったら死ぬわっ! しかも結構な頻度と来た! これあれだね!!?
俺死ぬね?

そんな後悔だらけにまみれてる状態の俺に出来ることはたかが知
れてるがもう足ガクガクです。子鹿のように震えています。

だってもう…………

その現地に着いちやってんだもんっ!!座った状態でも足ガクガクだよ!?こんなんでまともに喋れると思う?否っ!!楽しい雰囲気なんて出せんわ!!

八幡「……………ああ、これでやっと死んだ曾爺ちゃんに会えるよ……………」シロメ

オーフェリア「……………貴方は1人で何を言ってるの?」

ああ、この声……………ついに来てしまったのか。

八幡「いや、川の向こう側で曾爺ちゃんが俺を呼んでた気がすんだよ。」

オーフェリア「……………意味が全然理解出来ないわ。」

そうですね。分かるはずないよね?俺今スゲー死にたい気分なんだから。

だが落ち着け。こんな所で恥を晒すわけにはいかん。冷静にだ。

あつちもいきなり攻撃はしてこないだろう。

オーフェリア「……………貴方が此処に居るということは、前に言つた私を泣かせるっていうのとの関係あるの？」

八幡「……………ああ。」

オーフェリア「……………そう。なら、見せてもらってもいいかしら？」

八幡「その前に1ついいか？」

オーフェリア「……………何？」

八幡「あん時は、いきなり叩いて悪かった。腹が立ったとはいえ、女に手を出したのは間違いだった。すまない。」

一応頭も下げる。そうしなきゃ何されるか分からん。下手したらヤバイ。

オーフェリア「……………貴方は本当に不思議な人ね。」

八幡「……………は？」

オーフェリア「……………私をそんな扱いした人なんて誰もいないのに。」

八幡「いや、どっからどう見ても女だろお前。間違えねえよ。」

オーフェリア「……………私には毒があるのよ？そのせいでそんな扱いを受けたことなんて一度もないわ。」

八幡「俺にその毒つてのは効かないみたいだけどな。何でだ？」

オーフェリア「……………分からないわ。でも、少し興味を持ったわ。」

八幡「あつそ。俺はこれが終わったらお前と関わる気なんて無いがな。」

オーフェリア「……………終わったらの話よね？終わらなかつたら？」

八幡「仮定の話は好きじゃないが、それならなんぼでも付き合つてやるよ。」

オーフェリア「……………そう。」

……………やっぱこいつの目は嫌いだ。前までの俺を見てるみたいだ。

悲しみと諦めに満ちた目だ。俺みたいに腐ってはいないが。

オーフェリア「……………それで、貴方の私を泣かせるほどのものを早く見せてほしいんだけど？それともないの？」

八幡「一々言うな、わーってるよ。」スッ

こいつって結構待てないタイプなのか？

オーフェリア「……………何かしら？私の学院の校章じゃない。これが何？」

八幡「それは作りモンだ。そいつは俺の能力を込めた校章だ。つけて触れてみる。お前の身体を俺の能力で覆う。」

オーフェリア「……………覆う？」

八幡「安心しろ、見た目は変わらん。透明になるだけで、通気も問題ない。」

オーフェリア「(ピトツ)……………っ！」

そう言ってから左胸に校章をつけ、触れた。すると、影がオーフェリアの全身を包むと思ったら、見えなくなってしまった。

オーフェリア「……………これは？」

八幡「まあ、それじゃあ分かんねーだろうからこれを用意してきた。ホイッ。」ポイツ

オーフェリア「……………何……………っ！」

そう。俺が投げたのは花……………花束だ。だが、投げられた花束は枯れる様子がない。

オーフェリア「……………何故？」

八幡「どうやら成功のようだな。俺の能力は影を操ることだが、太陽（八咫鳥）の力もあってな。そのおかげでお前の毒は俺には効かな

い。その力をその校章にも織り交ぜておいた。それを身につけている限り、お前は毒を撒き散らすことはない。」

オーフェリア「……………」

八幡「どうせお前の事だ、触りたくても触れなかったんだろ？そのせいで。」

オーフェリア「……………ええ。」

八幡「ならそれをつけてろ、それなら花だろうが虫だろうが触れる。よしっ、これで終了だな。」

オーフェリア「……………っ」

ああ〜良かったあ〜……………これで解放されるう〜。天にも昇る気分だ。

オーフェリア「……………待つて。」

八幡「んあ？」

え？まだなんかあんの？勘弁してよ。俺はあんたのお守りじゃないんだよ？

オーフェリア「……………貴方の名前は？」

八幡「……………比企谷八幡だが？」

オーフェリア「……………八幡、私の事も名前で呼んで。さっき貴方は関わる事は無いと言ったわよね？」

八幡「いきなり名前呼びかよ……………ああ、確かに言ったが？」

オーフェリア「……………その言葉を撤回してもらってもいいかしら？」

八幡「はあ？なんで？」

オーフェリア「……………貴方に興味を持ったからよ。それと話は変わるけど、貴方はアネモネの花言葉は知ってるかしら？」

八幡「……………いや、知らんけど。」

オーフェリア「……………そう。アネモネの花言葉は『見捨てられる』

『見放される』」

八幡「おい。まだそんなこと」「それともう1つ」あ?」

オーフェリア「『期待』よ。」

そう言うランド……オーフェリアの口角は少し上がっていた。
ふーん、意外といい笑顔すんだな。

ハシル劇場 ライブ編 無茶なお願い

シルヴィア side

シルヴィア「お願いっ！八幡くん！」

八幡『無理だ。』

皆さんお久しぶり！シルヴィア・リユースハイムです。いきなりだけど、私はとある頼み事を八幡くんに依頼したんだけど、ことごとく断られてるんだ。

シルヴィア「お願いだよ八幡くんっ！もう八幡くんしかいないんだよ。」

八幡『んなモンはそこらへんの奴捕まえてやりやいいだろ。何で俺なんだ？』

シルヴィア「だって男の子の友達なんて八幡くん以外にいないし……」

八幡『それならガードワースの生徒会長にでも頼めばいいだろ？俺には出来ん。』

シルヴィア「ううゝでもおゝ……」

八幡『大体な、お前俺にぶっつけて出来ると本気で思ってたのか？』

人前で歌なんて俺は死んでもやらんぞ。』

そう。私が八幡くんに依頼したのは歌のデュエット。私と歌うはずだった人が急遽出られなくなって人を探していたんだけど見つからなくて…………

そこで八幡くんの事を思い出して依頼したんだけど、即拒否。

シルヴィア「…………どうしてもダメかな？」

八幡『あのなあ、お前はいいんだろうが、こちとら芸能界すら知らねえ一般人だぞ？それにやった事もねえ曲をそれも1日で覚えろなんてどうやっても無理だ。それに俺自身気が進まん。お前の事は確かに応援してる。だが、それとこれとは別だ。素人を呼ぶなんてどうかしてるぞ？』

シルヴィア「……………」

八幡『お前には悪いが他を当た「もう全部当たったよー！」っ！』

シルヴィア「でも、どこも受けてくれないの。私と一緒に歌うのは自分じゃ恐れ多いって。頼めるところは全部回った。でもダメなの……………スタッフもマネージャーも最後の手段でこの手に出たの。私がかこんな事頼めるのは八幡くんだけだし、身勝手なのも分かってるけ

ど、ファンの皆を落胆と失望で帰らせたくないのっ！」

八幡『…………』

これでダメだったら八幡くんはもう諦めるしかない。でも、望みがあるなら！

八幡『……………今から時間はあるか？』

シルヴィア「……………え？」

八幡『受けるから今そっちの時間はあるかと聞いてるんだ。そっちの事務所は空いてんのか？空いてねえのか？』

シルヴィア「事務所に来るの？」

八幡『お前はカラオケで採点した歌を歌えと言うのか？付け焼き刃でもプロに教わる方が何倍も良いに決まってる。』

シルヴィア「そ、それじゃあ！」

八幡『シルヴィの熱にやられたただけだ。あんだけ言われりや受けるしかねえだろ。』

よかった……………本当によかった……………

シルヴィア「ありがとう……………ありがとう八幡くん！」

八幡『礼は後だ。事務所の場所を教えてくれ、今からそっち向かうから。』

シルヴィア「うんっ！……………今送ったよ！」

八幡『ん……………じゃあ今から向かう。それと変装して行くからな、見た目俺じゃねえから気をつけろよ。んじゃ。』

シルヴィア「え!?ちよつと待って！変装って何？」

八幡『お前がいつもやってるようなやつだよ。能力の無駄遣いだがこれくらいならいいだろう。もういいか？』

シルヴィア「も、もう1つ！見た目は？」

八幡『……………分からん。自分が想像したやつで行くから。もういいか？時間が惜しい。もう切るからな？じゃ。』ピッ

シルヴィア「え？あつ、ちよつと！……切れちゃった……」

あつ！そうだ！マネージャーに早く連絡しなきゃ！

シルヴィア「ペトラさーんっ！代理やつてくれる人がいました！」

ペトラ「あら、そう……ところでシルヴィア、1ついいかしら？」
シルヴィア「え？なんですか？」

ペトラ「そのOKしてくれた子って、まさか貴方のお付き合いしてる子？」

お、おお付き合い!!?／／／／／

シルヴィア「ち、違いますよ！八幡くんとはまだそんな関係じゃ……／／／／」プシュー

ペトラ「まだ、ねえ……それと貴方、分かりやす過ぎるわよ？私
が分からないとでも思ったの？」

ペトラ「確か……八幡くんだったかしら？貴方が気に入ってる男

の子の名前。」

シルヴィア「／／／／／」コクッ

ペトラ「気に入ってるも否定しないのね……はあ、一体どんな子かしら？シルヴィアをこんな超乙女にさせるなんて。」

シルヴィア「ち、超乙女って……／／／／／」

ペトラ「悪かったからその緩んだ顔をなんとかしなさい。だらしないわよ？」クスクスッ

シルヴィア「もう……／／／／／」

ペトラ「それで？その子は？」

シルヴィア「すぐここに来てくれるって。カラオケ採点で歌ったのを歌わせる気かって逆に怒られちゃった。」

ペトラ「あら、意外と意識は高いのね。」

シルヴィア「変装してくるって言ってたから、私もどんな姿で来るのか分からないんだ。そこがちょっとね。」

ペトラ「貴方と同じ能力を使えるの？」

シルヴィア「詳しくは聞いてないけど、そんな事が出来るみたい。」

ホント、どんな格好で来るのかな？八幡くんの変装かあ。全然想像つかないな！。

でもカツコいいんだろうなあ……／／／／／

ペトラ「彼氏にそんな顔見せるワケ？貴方は？また緩んでるわよ。」

シルヴィア「はっ！／／／／／」

ううゝ会うだけなのに緊張する。もうこんな気持ちにさせた八幡くんが悪いんだからね？全然悪い気はしないけど。

そのせいでこんなに八幡くんのことを好きになっちゃったんだから／／／／／

ハイスペック八幡くん

――――

シルヴィア「……………」

……

……………

……………

ペトラ「……はあ、シルヴィア？ 貴方幾ら何でもソワソワし過ぎよ？」

シルヴィア「え!？」

ペトラ「さつきから立ったり座ったり、うろうろしたりと少し落ち着けないのかしら？」

シルヴィア（だつて、八幡くんが来るんだよ!?! しかもどんな姿かもわからない状態で！ これじゃあまるで、
Jack in the box だよー!）

ペトラ「もつとシャキツとしなさい。彼氏にそんな姿見せられないでしょ?」

シルヴィア「だ、だからまだ、かかか彼氏じゃないですよー！／／／」

ペトラ（この子これで隠してるつもり？『まだ』って言ってる時点で暴露してるようなものだって気づかないのかしら？）

スタッフ「シルヴィアちゃん！マネージャー！例の男の子来ましたー！」

ペトラ「ええ、今行くわ。」

シルヴィア「ひやいっ！／／／／／」

ペトラ「……貴方本当に大丈夫？ここで待っててもいいのよ？」

シルヴィア「だ、大丈夫っ！」

ペドラ（……とてもそうには見えないわ。）

ペトラはそんな事を思いつつも、2人は休憩室から出て八幡に会いに行った。

シルヴィア side

ううゝ緊張するゝ。今更だけど八幡くんが来るなんて予想もしてなかったし……

それも一緒に歌うなんて……幸せ／／／／／

……はっ！じゃなくて夢気分／／／／／って違う違う！それでもないよ！

もうまともに考える事も出来ないよ。

ペトラ「着いたわ、彼のいる控え室。シルヴィア、一応聞くけど準備はいいかしら？」

シルヴィア「／／／／／」ブツブツ

ペトラ「……もういいわ。」

コンコンツ ガチャツ

ペトラ「失礼するわ。初めまして、比企谷八幡くん。私はシルヴィアのマネージャーをやっているペトラ・キヴィレフトよ。よろしく。」
八幡「あ、はい。ご丁寧にどうも。比企谷八幡です。よろしくお願ひします。」

ペトラ「ほらシルヴィア、貴方も挨拶なさい？顔見知りとはいえ失礼よ？」

シルヴィア「ま、待つて。今は顔も合わせられない……／／／／／」

ペトラ「さつきまで普通に通信していたのでしょうか？平気じゃない？」

ペトラ「顔も整ってるし身長から比較してのスタイルも良い。それに良いセンスしてるじゃない。中々ないわよ？銀髪碧眼なんて。」

え？銀髪碧眼？

私の知ってる八幡くんは黒髪黒眼だったけど……何言ってるのかな？

※この時既に変装のことは頭の中にインプットされていない状態です。

ちよつと怖いけど見てみようかな。

私は恐る恐る八幡くんの方へ顔を上げた。

八幡「よお。」

そこには黒主体のチェーンが付いたズボンに、緑のインナー、襟の長い黒のロングシャツ。極めつけは黒の強い上に跳ねた銀髪に透き通るような碧い瞳。

嘘……八幡くんじゃないよ。でも、顔は八幡くんだし声も八幡くんだったし。

でも……でも……

シルヴィア「／／／／／／／／／／」ボシュッ!!

2人「え?」

シルヴィア「き、きゆうく……／／／／／／／／／／」ドサツ

ペトラ「えっ!? ちよ、ちよっとシルヴィア!? しっかりしなさい!」

八幡「お、おい! 大丈夫か!」

ペトラ「誰か!? シルヴィアを運んで!」

八幡「お、俺が運びます!」

――休憩室――

シルヴィア「……ん?」

ペトラ「起きたみたいね。」

シルヴィア「……ペトラさん?」

ペトラ「ビックリしたわよ。頭から蒸気が出たと思ったら、そのま

ま気絶しちゃうんだもの。本当に驚かせてくれるわね。」

シルヴィア「ご、ごめんなさい。」

ペトラ「八幡くんも謝ってたわ。理由は分からないけど少しやり過ぎたって。」

シルヴィア「八幡くん……」

そういえば今日の八幡くんの格好って確か……

音声担当『いえ……………絶妙な歌声です。』

2人「え？」

音声担当『シルヴィアちゃん程ではないですが、僕こんな歌声はシルヴィアちゃん以来です！2人にやらせたら、絶対良い歌になりますよ！』

ペトラ「そ、そう……………じゃあ私も聴きたいから、そっちに行っても大丈夫かしら？」

音声担当『どうぞいらして下さい！是非聴かせてあげたいです！』
ペトラ「分かったわ。シルヴィアも連れて行くから待っててちょうだい。」ピツ

そう言ってからペトラさんは通信を切った。それも楽しそうな顔で。

ペトラ「そういう訳だけど、いけるわよね？シルヴィア？」

シルヴィア「はい、問題ないです。」

ペトラ「そう。今度は気絶しないでね？」

シルヴィア「が、頑張ります……………」

音声担当の人が褒めるなんて……………あの人が褒めることあんまりしない人なのに。

凄いなだらうなあ〜八幡くんの歌声。

歌えない理由と歌詞の意味

—————

シルヴィア（音が聞こえる。これって今回歌う予定の……八幡くんが歌ってるのかな？それにしてもどんな風に歌うのかな？この前はカラオケ行きそびれちゃったし、歌声も気になるなあー。）

ガチャツ

音声担当「あつ！2人共来てくれたんですね！丁度始まる頃ですよ！」

ペトラ「この曲……」

音声担当「ええ、今回シルヴィアちゃんが歌う予定の曲を歌ってもらおうと思って歌詞を渡したんですけど、知ってるみたいでして。なのでそのまま歌わせてるんです。」

ペトラ「なら、聴かせてもらおうじゃない。貴方の歌声を。」

八幡『♪♪♪』

サビの少し前までくると……

ペトラ「確かに良い声ね……感情も籠ってるし、音程も完璧。これならいけるわね。」

音声担当「でしょう？いやーシルヴィアちゃんも良い子連れてくるねー！」

シルヴィア「……………／／」ポーツ

ペトラ「彼の歌声に夢中のようなね……でも分かるわ、私もまだ聴いていたいもの。それにそろそろサビだものね。」

八幡『♪♪♪♪♪』

音声担当「一応ワンパートだけにしたんですが、どうですか？」
シルヴィア「……………」

ペトラ（この子が聴き惚れるなんて……実際にそうだけど凄い歌唱力ね。高音も低音も難なくこなせてる。変幻自在ってワケね。それに彼の手と目、本当にそう思ってるかのように伝わってくるわ。場合に応じて愛しさや哀しさを漂わせる瞳に、歌詞の通り、自分の気持ちを曝け出してるかのように伝わる。）

パチパチパチパチッ！

八幡『？』

ペトラ「お見事な歌声ね八幡くん。貴方の歌声、是非使わせて頂戴。」

八幡『はあ………こんなので良ければ。』

ガチャッ

音声担当「いやあ、素人には思えない歌声だったよ！そう思いませんか？マナージャーもシルヴィアちゃんも？」

ペトラ「そうね、このままにしておくのがもったいないくらいね。」
シルヴィア「……………うん、すごい歌だった。今の私よりも上手いよ。」

八幡「おいおい、それはないだろ。お前はプロだぞ？俺なんかに負けるかよ。」

ペトラ「そういえば八幡くんには言ってなかったわね。実はこの曲だけに關しては、シルヴィアが上手く歌えてないのよ。」

八幡「この曲だけ？」

音声担当「ええ、他の曲は全部出来てるんです。なのにこの曲だけ完成度がイマイチ伸びないんですよ。」

シルヴィア「……………」

ペトラ「観客は分からないだろうけど、私達からの目線では今の歌じゃお世辞にも良い出来とはいえないわ。」

八幡「そうですか。」

八幡（伸びないのか……………だが俺はその曲を一度も聴いてない。聴かずに否定は出来ないよな。なら本人に歌ってもらうか。）

八幡「シルヴィ、俺にもその歌聴かせてくれないか？」

シルヴィア「え？」

八幡「ここにいるのは全員この世界のベテランだ。それ故に素人目線から見られる人はそうそういないだろう。そこでだ。丁度いい素人がここに居るんだ。俺の目線で何か分かればと思ってな。」

音声担当「成る程、視点を一度だけ僕達から君に変えろ。確かに僕達じゃ分からない事も出てきそうだね。マネージャーはどうですか？」

ペトラ「そうね、面白そうだと思うわ。シルヴィア、ワンパート歌つてきなさい。」

シルヴィア「分かりました。」

そうしてシルヴィアはレコーディングルームに入っていった。

ペトラ「八幡くん、これにどんな意図が？申し訳ないけど、一度聴いただけで分かるものではないと思うけど……………」

八幡「俺の予想が正しければ、恐らくシルヴィはそれが理由で歌えてないだけです。そこを直せば多分ですけど、歌は格段に良くなるでしょう。」

♪♪♪

———歌唱終了———

八幡（…………やはりな、こりや俺の責任でもあるな。この前言い過ぎたせいかな。）

シルヴィア『どうだった皆？』

ペトラ「ごめんなさい、私には分からなかったわ。」

音声担当「僕もです。音声担当がお恥ずかしい。比企谷くんはどうです？」

八幡「…………分かりました。」

3人「え!？」

八幡「少し俺も入りますね。」

そう言つて、八幡もレコーディングルームに入つていった。

ペトラ「何をする気かしら？」

音声担当「さ、さあ？」

シルヴィア「ええーつと八幡くん？何で私の正面に立つの？恥ずかしいよ／＼／」

八幡「シルヴィ。」

シルヴィア「は、はい！」

八幡「今から俺だけを見て歌え。周りは気にするな、機材も人も気にするな。俺だけを見ろ。」

シルヴィア（ええええええ!!?／／／）

シルヴィア「そ、そんな!?無理だよ!?今の八幡くんなんてまともに見られないよ!?／／／」

八幡「だったら尚更だ、顔を抑えつけてでもこっちを見させる。」

シルヴィア「ななな何で〜!?」

八幡「それで歌が変わるからだ。」

シルヴィア「うう／／／それって真っ直ぐ目を見て歌えって事なの?」

八幡「ああ、そうだ。俺以外を見るな、気にするな、関心を持つな。」

シルヴィア（や、止めてよ〜!／／／／言い方変えたらそれもうプロポーズだよ〜!／／／／／）

ペトラ「……………大胆ね。」

音声担当「……………仲睦まじいですね。」

シルヴィア「うう／／／わかった。頑張ってみる／／／」

八幡「分かっていると思うが、頭の中も俺だけにしろ。じやないと意味が無い。」

シルヴィア「わ、分かっているよ!／／／」

八幡「準備が出来たら言ってくれ。」

シルヴィア（……………よしっ!）

シルヴィア「うん、もういける。」

八幡「分かった。曲、お願いします。」
音声担当「はい。」

♪

音声担当「これで何か変わるんでしょうかね？あの場に立つただけですよ？」

ペトラ「ええ、私も何かが変わるとは思えないわ。」

よし！歌うぞ、八幡くんの誘惑になんか負けないんだから！

八幡「最後にヒントをやるよ。」

シルヴィア（え？ヒント？）

八幡「曲の内容を俺とお前だけで表現してみろ。それでだいぶ変わるだろう。」

しるづ（え？それだけ？それじゃ分かんないよ。私と八幡くんだよね？まあやってみるけど。）

シルヴィア「♪♪♪」

シルヴィア（あれ？さつきと全然違う。なんか……歌いやすい、良い気分。）

シルヴィア「♪♪♪」

シルヴィア（私と八幡くんで表現しろって言ってたけど、八幡くんと手を繋いで街を歩く……すごく幸せ……）

音声担当「マ、マネージャー……さつきと全然違いますね……生き
生きしてる。」

ペトラ「え、ええ。何だかとても愛おしさを感じるわ。」

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

シルヴィア（ホント、さつきまでと全然違う。こんなに違うものな
んだ。）

そして最後まで歌い、曲が終了。

シルヴィア「ふう……どうかな八幡くん？私は凄く上手く歌えたと思
うんだけど。」

八幡「ああ、凄え良くなってる。」

シルヴィア「本当!？」

音声担当「いや……本当に凄かったよ。比企谷くんが入っただけで
ここまで違うなんて。」

ペトラ「見違えたわ……歌に愛がこもってる。声の色も表情もさつ
きとはまるで違う。とても生き生きした歌声だったわ。」

ペトラ「でも、何故分かったのかしら？教えてもらえるかしら八幡
くん？」

シルヴィア「私も教えて欲しい!どうして私、こんな急に上手く歌
えたの？」

八幡「簡単だ。この曲の内容どう思う？良い詩だがそれだけではな
い。」

シルヴィア「え？恋愛……じゃない。願望？かな？……したいって感
じの詩がたくさんあるよね。」

八幡「そうだ。この詩は相手とこんな事がしてみたいという願望が
込められた詩だ。」

八幡「詩の内容からみて分かると思うが、相手は異性だ。俺はそう
思ってる。シルヴィ、想像してみろ。お前の好きな奴とその歌詞の通
りのことが出来ていたらと。」

シルヴィア（好きな人……って事は八幡くんと？んゝ………目を
合わせたり、手を繋いだり、寄り添ったりするって事だよね？恥ずか
しいけど………悪い気なんて全くしない。むしろこれが長く続けば
良いとも思う。）

シルヴィア「凄く幸せな気分だよ……もしあんな事本当に出来るな
らって思うと、今までで一番幸せかも。」

ペトラ「つまり、これは複数ではなく、単数の人に聞いてもらう方
が上手く歌えるってことかしら？」

八幡「まあそんな感じです。」

ペトラ（すごい……一度聴いただけで分かるなんて。それに、歌詞
の意味を理解してないと、とても分からない内容ね。）

八幡「もし、シルヴィが1人で歌う自信がないなら、この曲もデュ
エットになっちゃいますけど………」

シルヴィア「……ううん、頑張ってみるよ。デュエットの曲はもう
決まってるし。」

八幡「そうか、分かった。」

八幡（じゃあ、残るはデュエットの歌合わせか。）

ペトラ「なら、余り時間もないし、歌合わせをしましょう。」

その後も八幡とシルヴィは完璧にこなしたが、シルヴィがあまり自
信がないからこの曲もデュエットして欲しいと言ってきた。

結果、『azurite』と『wishing』この2つをデュエッ
トする事になった。

波乱ライブの始まり

――

翌日の9時半、現場は慌ただしくてんやわんやだった。突然の代役……それも芸能界にも入っていない普通の市民。その事を知らされていなかったファンは会場に入った際に知った事実で大騒ぎだった。

ファン1「おい！どうなってんだよ!?男の歌手が替わったって!?しかも一般人だと!?ふざけんなよ!」

ファン2「シルヴィアちゃんとの共演だから観に来たのに何だよこれ!」

ファン3「どうしてくれるのよ!?これじゃシルヴィアちゃんが居ても、男の人が居なきや意味無いじゃないっ!」

ファン4「共演楽しみにしてたのに!」

スタッフ「み、皆さん!落ち着いてください!只今説明致しますのでっ!」

スタッフの呼びかけにも応じない程、ファンの心は乱れていた。当然であろう。来るはずだった人が居ないのだ。

八幡「……まあ、こうなるわな。無理もないだろう。キャンセルが昨日なんだ。知らせられるわけがない。そうになったらご破算だからな。」

シルヴィア「うん……でも、当然だよな。私だけのファンじゃないし。」

八幡「ああ、しかしこんな人が集まるもの何だな。正直コンサートやライブなんて行ったことなかったからな。」

シルヴィア「今日は少ない方だよ。会場がちよっと小さいからね。」
八幡「だがやる事は変わらん。俺達は歌うだけだ。たとえ罵られよ

うとな。まあ、罵られるのは俺だけだな。」

シルヴィア「なら私が守るからね。八幡くんを傷つけさせはしないから。」

八幡「言っておくが、俺に何があっても手は出すなよ。たとえ物を投げつけられたとしてもな。当然の事だからな。」

シルヴィア「えっ、どうして!？」

八幡「考えてもみる。一般人の俺がここに立つて事は、他の奴らにも可能性があったからだ。それも世界の歌姫との共演だ、怒らない方が逆に不自然だ。」

八幡「だから最初の曲を俺にしてもらったんだ。そうでなきゃブーイングが続いてライブどころじゃなくなる。」

八幡（正直に言うと、こいつのライブを失敗にはさせたくねえからな。）

シルヴィア「……………で、でも。」

八幡「いいな？」

シルヴィア「……………うん、分かった。でも、側には寄らせてね？それくらいならいいでしょ？」

八幡「むしろ逆効果だと思うんだが……………まあいい、好きにしろ。」

スタッフ「比企谷くん、シルヴィアちゃん！そろそろリハーサルだよーっ！」

シルヴィア「あ、はーいっ！じゃあ行こっか、八幡くん。」

八幡「ああ。」

————ミートイングルーム————

ペトラ「……………以上だけど、何か質問はあるかしら？無ければ次に移るけど？」

シルヴィア（沈黙……………多分皆は八幡くんの事を気にしてるんだと思

う。質問なんて今更必要ないからね。いつも完璧だから無いし。」

ペトラ「なら次ね。八幡くんの事よ。」

ここで一気に雰囲気为重くなった。

ペトラ「八幡くん、会場に入ったら間違いなくブーイングが起きるわ。貴方はどう対処するつもり？」

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

スタッフ一同「……………」

シルヴィア（嫌な感じ……こんな雰囲気は初めて。）

八幡「……………俺は歌うだけです。もし何か飛んできても、何もありません。ただ俺の歌を聴いてもらって、そこからファン任せですよ。」

ペトラ「何もしない？飛んでくるものをわざわざ受けるっていうの？」

八幡「はい。」

スタッフ1「け、けど比企谷くん。別に受ける必要はないんじゃない？」

八幡「いいんです。俺がこのステージに立つ時点で、ブーイングや野次は必然。俺が観客でもそうします。」

……………沈黙。

ペトラ「……分かったわ。」

スタッフ一同「!!」

ペトラ「貴方は受けるのね？」

八幡「ええ。他のファンの可能性を踏みにじったと思えば、軽いモンですよ。」

ペトラ「聞いたわね？彼はこう言ったのだからやらせてあげなさい！」

スタッフ一同「……………」

ペトラ「会議は終了よ。2人は控え室で待ってなさい。じきに始まるわ。」

八幡（ペトラさんがそう締めると、スタッフ一同は部屋を出て行く前に、俺に応援を送り立ち去った。そして俺も控え室に向かった。）

——控え室——

ガヤガヤワーワー

シルヴィア「こんなライブ初めてだよ。いつもはこんな雰囲気じゃない。」

八幡「……………」

シルヴィア「あつ！別に八幡さんのせいだって言いたいわけじゃないからね!？」

八幡「分かってる。お前がそんな奴じゃないって事ぐらい知ってる。」

シルヴィア「う、うん。」

シルヴィア（嬉しいけど、こんな雰囲気じゃ素直に喜べない。でも、八幡くんは平気そうな顔してる。やっぱり六花に来る前の事があったから平気なのかな……………あつ！ダメダメ！そんな事思っちゃつ！八幡くんは凄い優しい人だからだよ！うん！）

ガチャツ

スタッフ2「2人共、そろそろ準備お願いします……………それと比企谷くん。」

八幡「はい？」

スタッフ2「その……会議室では上手く言えませんでした、頑張ってください！」

シルヴィア（八幡くんは少し驚いたような顔をしていた。多分だけ、正面から応援を受けたことないからだよね。）

八幡「……………ありがとうございます。」

そして……………

『皆様！大変長らくお待たせ致しました！本日は急遽の歌手代役の件、誠に申し訳ありませんでした！』

『それでは、2人の登場です！歌姫、『シルヴィア・リユーネハイム』さん、そして『八代^{やしろかいと}界人』さんです！』

—————

八幡 side

それと同時のブーイング。そんなにカッコしないでくれよ。いや無理か。

冷静にいかないとな。

シルヴィア「八幡くん、頑張ろうね！」

スタスタツ

おわっ…………マジか…………こんなにいるのか。

さらに上がるブーイングの嵐。観客の怒りは既に頂点なのだろう。

八幡「…………ご来場の皆様、今回のライブを行う予定だった男性歌

手、――様の代役になりました、八代界人です。この度は、皆様の期待に添えることが出来ず、誠に申し訳ありませんでした。」ペコリッ

一応、45度腰を曲げての謝罪。

ワーワー

だが、それでも会場の騒ぎは止むことはなかった。

ファン１「お前の謝罪なんかどうでもいいんだよ！さっさと出てけっ！」

ファン２「そーだそーだ！お前なんか代役が務まるかってんだよっ！」

この掛け声を筆頭に様々な野次やゴミが俺の方へ飛んでくる。

八幡「ッ！」ガッ！

飛んできたのは空き瓶。俺の左側の額に当たり、出血している。

ファン１「オラッ!!」ブンッ!!

八幡「ッ！」バシャーン!!

次に来たのは飲みかけであろう、飲み物の入った紙コップだった。身体中びしょ濡れになり、会場からはどつと笑いが起きた。

ファン１「いよっしゃ！命中！」

ガヤガヤッ！

軽蔑の笑い声が会場を包み、八幡に向かって帰るように全体がブーイングしていた。

シルヴィア「八幡くんっ！」

直ぐにシルヴィアが駆け寄ってきた。

シルヴィア「大丈夫!?直ぐ替えの服を用意して「いや、いい。」……え?」

ファン1「シルヴィアちゃん!そこ早く退けてよー。第2弾いくよー!」

シルヴィア「もうやめ「いいからやめろ。」…っ!」

八幡「大丈夫だから元の場所に戻れ。このままやるぞ。いいな?」

シルヴィア「え!?で、でも……」

八幡「いいからやるぞ。」キッ

シルヴィア「っ!……う、うん。」

……ちよつと強く言い過ぎだな、後で謝るか。けどまずはこつちを終わらせねえと。

八幡「皆様のお怒りもご尤もです。そこで、どうか一曲私の歌を皆様に聞いて欲しいのです。その後の判断で私はこの会場を去ります。お付き合い願えないでしょうか?」

さらにブーイング。最早誰も言う事を聞かないな。せめて一曲歌わねえとな。

ファン2「早くいなくなれよ!いねえならシルヴィアちゃんだけで十分なんだよ!テメエなんざさっさと帰れっ!」ブンッ!!

また空き瓶か？それとも中身入りか？どっちでもいい、もう覚悟は決めてる。

パシッ！

俺の目の前で空き瓶をキャッチした客がいた。それは俺も知ってる人物だった。

虎峰だった。

ファン１「おいつ！何すんだよ!？」

虎峰「何故そこまで責める必要があるのですか!？彼は自分の責任でもないにも関わらず、謝罪をしたのですよ!こんなことする必要はもうないじゃないですか!!僕はこれ以上、彼やシルヴィアさんのライブを穢したくはありません!」

虎峰「先程彼は、一曲歌ってから会場の雰囲気で立ち去ると言っていました!納得出来ないのならそれでいいではありませんか!」

静まり返る会場……虎峰の気迫に圧されたのだろうか、誰も物を投

げたり、野次を飛ばそうとはしなかった。

シルヴィア「虎峰くん……」

八幡「虎峰……」

すると虎峰は、俺の方へ向いた。

虎峰「八代さん。僕は貴方の歌を聴いてみたいです。聴かせてくれませんか？その代わり、貴方が歌っている最中は僕が守ります！ですので、お願いします。」

……前々から思っていたが、こいつって本当に良い奴だよな。
マジで最高の友人だな。

八幡「ありがとうございます。しかし、これは私のケジメのようなもの。お守りして頂かなくても結構です。ですので、席に戻って頂いて結構です。それと、再度お礼申し上げます。ありがとうございます。」

虎峰「いえ、とんでもないです。貴方と似たお方が学院にいるもので。そういう人を見ると、無性に応援したくなるのです。」

虎峰はそう言うってから観客のいる方へと戻っていった。
サンキューな。それと騙してごめんな。

八幡「僭越ながら歌わせて頂きます。ご視聴ください。『Where
ever you are』」

だが、やっと始められる！

技量と大きな器

—————

曲のBGMが流れ出す。だが、ペンライトを振る人は誰もいない。光っているところもあるが、それだけである。

八幡「♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪」

やっぱりこの歌詞は良いなあ。俺は激しくても穏やかでも、相手に自分の気持ちを伝えるような歌は好きだ。

八幡「♪♪♪♪♪」

今は観客の事なんて気にするな。ただ歌うだけだ。反応なんてその後でもいい。

観客 女1「ねえ、なんか良い感じじゃない？なんか結構良いな。」

観客 女2「うん、私も思った……聴いててなんか歌いたくなってきた私。」

観客 女3「取り敢えずさ、ペンだけでも振らない？私それくらいなら、やってもいいと思うなあ。」

観客 男1「おい、どう思う？」

観客 男2「結構上手いよな。」

観客 男3「おいおい、お前らもしかして振るつもりか？俺はゴメンだぞ？」

観客 男1「別にそんな事言っただろ。一応の評価だよ。」

八幡「♪♪♪」

揺れる銀髪、全身ずぶ濡れだがお構いなしにに歌い続けている。まるで最初から何もなかったかのように。

八幡「♪♪♪」

シルヴィア（八幡くん、頑張って……私1人になったとしても私は絶対に応援は止めないから。

私は君を見捨てないから。）

八幡「♪♪♪」

サビに入ってからのは会場の雰囲気が変わっていた。ペンライトを振っているのは約7割、八幡の歌は、最初の0から今に至る約7割の人間を動かしていた。

それ程までに八幡の歌には感情がこもっており、シルヴィアには、

表現出来ない程、喜びの感情が膨れ上がっていた。

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪」

シルヴィア(すごい………最初はあんなに酷かったのに、今はこんなに盛り上がってる。)

八幡「♪♪♪♪」

観客 女1「すごい！あの人かっこいいっ！私ファンになっちゃったっ！」

観客 女2「私もっ！凄い歌声！好きになっちゃった。あの人の歌ってるとこー！」

観客 女3「惚れ惚れしちゃうね！もっと歌ってほしいなー。」

観客 男1「ヤベエ……聴き惚れてた。あいつの歌スゲー鳥肌立つ。」

観客 男2「俺も鳥肌たってるわ。俺これなら歌ってても問題ねーわ。」

観客 男3「……まあ、上手い方だな。俺もいてもいいと思う。まあ、別にどうしてもって訳じゃねーけどな。」

観客 男2「お前がツンデレとか誰も得しねーよ。それよりも聴こーぜ！もうそろ終わりだけだよ。」

観客 男3「ツ、ツンデレじゃねーよっ！」

スタッフ1「マネージャー！」

ペトラ「……ええ、驚きだわ。あの状態でここまで盛り上げるなんて。」

スタッフ2「良かった……本当に良かったです！」ゴウキユウ
ペトラ「ち、ちよつと？まだライブは始まったばかりなのよ？泣く
のはライブが終わってからにしない？」
スタッフ2「はい！」

シルヴィア（……いつの間にか、会場の全体が盛り上がってる。
もしかして全員？ここにいる観客の人たち全員を？だとしたら
………凄いよ八幡くん。）

八幡「♪♪♪」
八幡「u h h」

歌が終了し、曲のBGMが消えた。

♪♪♪
!!!!

会場からは、割れんばかりの大歓声。これはもう認めざるを得ない
だろう。八幡の歌はこの会場の観客に認められたと。

観客 女1「キャー！すごい！」

観客 男1「うおおお!!最高だったぞー！もう一回頼むっ！」

「凄かったぞー！」「聴き惚れました！」

「次も歌ってくれー！」「もう一回お願いしまーす！」「こっち向いてー
！」

シルヴィア「……………」「パアアっ！」

シルヴィア（私も思わず声を出したくなる。けど、まだその時では
ない。次が私の番だからそれまで待たなくちゃ！）

八幡「ありがとうござい」「ぎけんじゃねえっ!!」「ブンッ!!」
八幡「ぐっ!」バリンッ!

シルヴィア「八幡くんっ!!あっ!破片が刺さってるっ!」
最初にブーイングを起こしたファンが再び瓶を投げてきたのだ。
だが、割れた破片が八幡の左額に刺さっていた。

ファン1「俺達は騙されねえぞ!んな曲聴いたってなちつとも響かねえんだよっ!!なあ?お前ら?」

だが、後ろにいた2人は軽蔑するような目で見ていた。勿論周りの観客でもある。

ファン1「な、何だよ!」

ファン2「いや、俺も確かにやり過ぎたけど、正直あの歌聴いて納得出来ない程、俺は腐ってねえぞ?」

ファン3「俺もだ。あいつの歌……俺は良いと思った。お前あの歌聴いても納得出来ねえのか?だとしたらお前の耳腐ってんじやねえのか?」

ファン1「はあっ!?何だよ!俺が悪いってのかよ!」

ファン3「俺、今の状態でお前に味方する程バカじゃないつもりだぞ?」

ファン3「それと分かってんのか?反発してんのってこの会場の中でお前だけだぞ?」

男が辺りを見回すと、全員が敵意を持った目で見ていた。シルヴィアや虎峰でさえも怒りを露わにしていた。

警備員1「取り押さえろっ!」

ファン1「おい何しやがる!放せよ!おいっ放せっ!!」

警備員2「大人しくしろっ!」

警備員は手錠を取り出し、男を抑えつけながら手錠を掛けた。

警備員1「暴行罪、並びに名誉毀損罪で君を逮捕する!!」

観客からは歓声が湧沸く。

八幡「お静かにっ!」

八幡がそう言うと、会場は一気に静まり、警備員の足も止まった。

八幡「その男性は確かに私に向かって暴力行為を働きました。逮捕されるというならば当然でしょう。」

八幡「ですが、私はこの場を犯罪のあった会場にはしたくありません!世界の歌姫、シルヴィア・リユーネハイムの歌ったライブを事件にはしたくありません!」

八幡「私はこんな事で犯罪者を出したくはありません。私のこの傷は、皆様の期待に応えられなかった分の傷です。ですので、その男性

の逮捕は免除してくださいませんか？お願い申し上げます。」

そして八幡は頭を下げた。暫くの静寂が続く。そして……………

警備員1「また貴方に向かって何かするかもしれませんよ？よろしいのですか？」

八幡「その時はその時です。私自身で対処致します。」

警備員1「……………分かりました。おい、手錠を外してやれ。」

警備員2「え!?で、でも……………はい。」

警備員の後輩と思われる男は手錠を外し、男を解放する。

ファン1「……………」

そして会場からはまたもや割れんばかりの歓声と拍手が送られていた。

八幡「ありがとうございます！これで犯罪者を出さずに済みました。そして、勇気ある行動とご決断をなさった警備員の方達にも拍手をお願いします。」

八幡がそう言った後に2人の警備員に向かって拍手が送られていた。2人は恥ずかしがりながらもビシッと敬礼をしていた。

八幡「それでは次の歌まで少し時間が空きますので、皆さんご休憩をなさってください。それでは、失礼します。」

そう言ってから八幡は垂れ幕の奥へと姿を消し、シルヴィアも中に入って行った。

観客 女1「……………ねえ、凄くない？あんな怪我したのにあの人を許しちゃうんだよ?」

観客 女2 「うん、それもあるけど……私、界人さんに惚れちゃったかもっ！」

観客 女3 「ああ、それ分かる！歌にも人柄にも惚れちゃったなー。」

観客の殆どは、八幡を賞賛、賛称していた。敵だけだった会場を僅か10分で全員を味方につけたのだ。

観客 女4 「いや、どうなるかと思ったよ。あの子も凄いなー。」

観客 女5 「……うん。でもあの子、なんか少し似てたなあ……」

観客 女4 「え、なんか言った？」

観客 女5 「ううん、なんでもないよ。」

観客 女4 「もう、あんたそんな雰囲気なんだから周りに気をつけなさいよ？」

観客 女5 「むう、分かってるよ。」

観客 女4 「ホントに気をつけてね？」

めぐり？」

着替えとお嬢様の我が儘

八幡 side

垂れ幕の方に戻った俺は、すぐさま控え室に連れていかれて治療を受けていた。まあ、破片が刺さってるみたいだしな、慌てもするか。勿論、治療をしているのはシルヴィだった。

鏡を見ると、顔の半分は流血で染まっっていて、治療は自分でしょうと思っていたが、シルヴィが梃子でも動かないようだったので、やらせることにしました。

シルヴィア「……八幡くん大丈夫？包帯で締めてるけど、痛くない？」

八幡「ん、平気だ。サンキューな。」

シルヴィア「……………ゴメンね。八幡くんに責任はないのに……………」
八幡「気にすんな。それと、服も着替えないとな。このままやるとなるとちよつとな。だが替えなんてないしな。」

シルヴィア「それなら、今日は絶対何かあるってペトラさんやスタッフの皆が言ってるね、服は2、3着あるから大丈夫だよ。」

おお、そりや助かる。んじゃ、早速見てみるか。どんなのがあるのかねえ？

ガチャツ

ペトラ「八幡くんは居るかしら？」

シルヴィア「……………ペトラさん？」

八幡「ん？」

ペトラ「ずっとここにいたのね？」

八幡「まあ、そうですね。シルヴィが手当てするって聞かなかったもので。」

シルヴィア「……………もしかして余計な事だったかな？」シュン
八幡「んなわけねえだろ。逆にありがとうだよ、余計なわけねえだ
ろ。」

この子ちよつと卑屈になり過ぎてやせんかね？別に落ち込む事は
ねえよ。

八幡「それで、どうかしたんですか？俺に用があるみたいですけど
？」

ペトラ「っ！そうだったわ。八幡くん、1人のお客様が八幡くん
につて。これは私の推測だけど、これを着てほしいと思ってるんじゃない
かしら？」

広げると、黒い服なのは分かっていたが、ただの服ではなかった。
燕尾服だった。

ご丁寧にネクタイと手袋もポケットの中に入っていた。え？着
ろつて？

八幡「…………あの、俺は歌を歌うのであって、観客に奉仕をする気は
全くないんですけど？それに、俺はただの代役、しかもこれはシル
ヴィのライブです。俺が目立つわけにはいかないでしょう。シル
ヴィもそうおも……………おい、何だその物欲しそうな目は？」

シルヴィア「八幡くん、着てみない？きつと似合うよ！その燕尾服
！」キラキラ

八幡「あのなあ…………」

シルヴィア「それにね！観客の期待に答えるのも必要だと思うの
！」キラキラ
ペトラ「そうね……………そう言われると確かにその通りね。八幡く
ん、着てみなさい？」

八幡「……………ペトラさん、ちゃっかり着させるのに便乗してません
か？」

ペトラ「そんなわけないじゃない。私は至って普通よ？正論だと思っただけよ。」

とか言いながら、燕尾服に目がいつてるんだが？全然隠しきれてませんよ？

まあいい。客に受けるか受けないかは別として、仕方ねえからこれ着てやるしかないか。さうと、着替えるか。

備え付けの試着室で着替えること3分。

八幡「…………一応着替えましたが、どうです？似合っていないと思いますが。」

シルヴィア「あ、おわっ…………た…………の？」

ペトラ「どんな感じになったかしら？」

八幡「こんな感じですけど、どうです？会場に出ても文句言われませんかね？」

ペトラ「ええ、大丈夫よ。よく似合ってるわ。本物の執事みたいね。」

八幡「シルヴィが全く反応しないんですけど、起こした方がいいですか？」

ペトラ「はあ、この子は…………」

シルヴィア「…………八幡くん。」

八幡「あ、起きた。で？何だ？」

シルヴィア「私のこと、今だけお嬢様って呼んでくれないかな？」

2人「…………え？」

シルヴィア「ね？いいでしょ？一度くらい呼んだってバチは当たらないよ？」

シルヴィが壊れてしまった。それに目が本気だ。

八幡「…………そろそろ時間だ。」

シルヴィア「お嬢様って呼んでくれるまで動かないから。」

八幡「おい、このポンコツ。いい加減目を覚ましやがれください。
お嬢様。」

シルヴィア「それじゃダメ、もっと気持ちを込めて。」

こ、こいつ……………よし、ならやってやるよ。羞恥心とかそんなモン
は捨ててやってやるよ！

八幡「…………シルヴィアお嬢様。」テ ギュツ

シルヴィア「!?／／／／／」

八幡「(チュツ)…………そろそろお時間でございます。あまりお客様を
待たせるのはよろしくありません。次はお嬢様の『愛の詩』word
s of love』でございます。さ、会場へ向かいましょう。」
シルヴィア「ひや、ひやい／／／／／」

シルヴィア（八幡くんが私の手を握って……………しかも、キキキキキ、
キスしてくれた／／／／／）ひゅう……………」

八幡「お嬢様、気絶なさらないで下さい。でないと……………何をするか
分かりませんよ?」ミミウチ

シルヴィア「っ!?ら、らいひょうぶだよ?／／／／／」

八幡「なら結構です。さ、参りましょう。お嬢様、お手をどうぞ。」
スツ

ペトラさん……………ニヤニヤしながらこつちを見ないで下さい。これ
でも恥ずかしいんです。羞恥心無くすなんて無理ですから。
俺だって男である前に人間ですから。

シルヴィア「う、うん／／／／／」カオマツカ

顔を真っ赤にしながら俺の手に手を置く。

八幡「会場入口前までエスコートします。足元にお気をつけくださいね？お嬢様。」

シルヴィア「う、うん……キャッ！」ボフッ

八幡「大丈夫ですか？お嬢様？」

シルヴィア「うん、へい……!!?／／／／／」

足がもつれて転びそうになったところを運良く俺が目の前にいたので、受け止めることが出来たのだが、見上げた視線の先に俺が居たから驚いてんだろう。

だがこうやって間近で見ると、本当に端正な顔立ちだな……綺麗だ。」

シルヴィア「う、うう／／／／／／／／／／／」ナミダメ

ペトラ「八幡くん……貴方大胆ね。」

八幡「え？何がです？」

ペトラ「まさか無意識なんて……貴方今、声が出てたわよ？綺麗だって。」

……マジかよ。やっぱこの癖は治んねえな。いつの間にか出ちゃう。

八幡「お、おーいシルヴィ？」

シルヴィア「／／／／／」

ペトラ「気絶はしてないけど、明らかに放心してるわね。八幡くんもやるじゃない。この子を手玉にとるなんて。」

八幡「とってません。」

ペトラ「分かってるわよ。悪いけど、入り口まで連れて行ってあげて。この子、目を覚ましそうにないから。お願いできるかしら？」

八幡「まあ、自分にも責任あるんでそれくらいは。シルヴィ、行くぞ。」

シルヴィア「……………／／／／／」コクッ

入り口前まで来た俺は、何とかして目を覚まさせようとしたが全く目が覚めないで、奥の手として1つ言うことを聞いてやると言ったら、3つと言われた。

理由を聞いたら、顔を赤くしてそそくさとステージに行ってしまった。まあ、俺はこっから見てるだけだからな。

けど俺、どんな拷問受けんだろうな。

この歌は君のために……

—————

八幡・シルヴィア「♪♪♪」

ん♪やっぱり違うなあ。八幡くんの歌って凄く合わせやすいし、聴きやすい。それに、何だか引つ張つてもらつてゐるような力強さがあるな。

人前で歌うのなんて初めてなのに、凄いなあ。そしてやっぱり………

八幡くんの燕尾服………凄くカッコいい／／／／／

私が歌った『愛の詩 words of love』が終わって八幡くんが入場したら、会場が一気に盛り上がった。八幡くん、もうファンを作っちゃったよ。一応このライブって今は私が主役何だけどなあ………なんかちよつと複雑。

そして、BGMの曲が流れ終わった。

~~~~つ  
!!!!

すげえな……シルヴィはこれ以上の人を相手にしながら歌ってんのか。俺には絶対に無理だな、何より人と話す事自体が得意じゃねえからな。此処に来ていくらかマシにはなったけどよ。

よし、次で最後の曲だな。

シルヴィア「皆々！聴いてくれてありがとう！最初はどうなるかと思っただけ、こんなに盛り上がってくれて私も嬉しいよっ！でもこの曲で最後、今日のライブもあと一曲で終わりです。」

すると、周りからは、それに呼応するように残念そうな声が聞こえる。

八幡「本日最後の曲も、デュエットで締めくりたいと思います。皆様、是非ともご静聴の方、よろしくお願い致します。」

シルヴィア「この曲は、私も練習中によく聴いていた曲です。皆さんもきつと氣にいます。それでは、お聞き下さい！」

2人「w i s h i n g !」

言った5秒後に曲が流れた。

シルヴィア「♪♪♪」

八幡「♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

八幡くんとこんな未来を歩けたらいいな。昨日も思ったことだけど、これが現実になったらどれだけ幸せだろう……

朝起きて目が合ったと思ったら話をして、午後になったら手を繋い

で街を散歩……

ふふっ、凄く良い笑顔になってそうだな。

観客 女1「……………なんか、ジーンってくる曲だね。この歌、結構好きかも。」

観客 女2「私も……静かな曲ってあんまり好きじゃないけど、なんかこの曲なら好きになれそう。」

観客 女3「良い歌詞だよね。」

八幡「♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪」

観客 男1「…………俺さ、この曲聴いて思ったんだけどよ、言っていとか？」

観客 男2「何だよ改まって……」

観客 男1「明日の放課後……俺告白するわ。なんかスゲー勇氣出てきた。」

観客 男3「え!?!マジ?」

観客 男2「お前ホントに言ってるのか?」

観客 男1「ああ、なんかさこの曲聴いてると、素直になれって言われてる気がしてよ。」

八幡「♪♪♪♪♪」

何でだろうな……何故かこの曲を歌っていると、シルヴィと一緒に居るのを思い浮かべちゃう。別に他意なんてないのによ。

夜の星空が見える場所で、俺とシルヴィが眠るまで寄り添い合う。俺がシルヴィとだなんて絶対にありえない光景だな。だが、全く悪い気はしない。むしろそうなっても良いと思う自分がいる。

良い顔してんだろうな、そんな俺は。

観客 女4 「……この2人が歌うから良い歌に感じるのかな？ 私、なんかちよつと泣けてきた。」

めぐり 「……うん、確かに凄く良い曲だね。でも、泣く程ではないと思うけど？」

観客 女4 「いいじゃない別につ！あの2人が歌ってるから余計に泣けてきちゃうのよ！こんな良い曲で感動して何が悪いのよ？」グ  
スツ

めぐり 「あはは……ゴメンね。」

めぐり（でも、あの男の人……何だか比企谷くんに似てる気がする……比企谷くん……かあ……もう1度また会えるなら、ちゃんと謝りたいな。まさか比企谷くんがあんなに辛い目に遭ってたなんて知らなかったし。）

めぐり 「……私の方が、君よりも不真面目で最低だよな。」ポロポロ

観客 女4 「あゝっ！めぐりの方が泣いてるじゃない！私のこと言えないじゃんか！全くもうっ！」

めぐり 「……うん、そうだね。」ポロポロ

シルヴィア 「♪♪♪♪」

八幡 「♪♪♪♪」

八幡 「♪♪」

シルヴィア「♪」

2人「♪♪」

うん、確かに八幡くんが私の側にいるだけで明るくなるしなあ。恥ずかしい時もあるけど、全然悪い気はしない。私が悩んでた時も、助けてくれた。

俺は優しくされた事なんて、此処に来るまで全くなかったからな。シルヴィのおかげで立ち直れた時、本当に救われたしな。

シルヴィ（八幡くん）のおかげだな（だね）

2人「♪♪♪♪」

2人「♪」

BGMもゆつくりと消えて、最後の曲が終了した。すると…………

~~~~~っ  
!!!!!!

今日最後で一番の盛り上がりだった。こんなすげえ叫び声聞いたのは初めてだな。

シルヴィア「皆！聴いてくれてありがとう！忘れ物はしないように帰ってね！今日は来てくれて本当にありがとう！」

八幡くんはお辞儀だけしていた。何か一言言ってあげたら良いのに…………けど、これが八幡くんらしいよね。

そして私達は、垂れ幕へと戻っていった。今日のライブ、最初はどうなるかと思ってたけど、大成功で締めくくれたね！

ありがとう！八幡くんっ！！

緊急握手会と涙

八幡 side

ああ〜終わったあ〜……一時はどうなるかと思っただが、成功だな。しかしシルヴィの歌、昨日とは全然違ったな。俺ももらい泣きしそうになっちゃった。

シルヴィア「お疲れ八幡くんっ！」ダキッ!!

八幡「お、おいっ!？」

控え室に入ったと同時にシルヴィが抱き着いてきた。しかも相当な力で抱き締められてる。首に腕が回っているわけじゃないから苦しくはないが、頭を俺の胸に擦りつけるような仕草をしていた。

気持ちとは分かるがやめてくれ。誰も居ないとはいえ、少し恥ずかしい。

シルヴィア「ん〜♪」スリスリ

八幡「……はあ、ちよつとだけだぞ。」

シルヴィア「うん♪」

――10分後――

シルヴィア「ん〜もういいよ♪ありがとう八幡くん!すごくリラックサ出来たよ。」

八幡「そうか。まあ、満足したならそれでいい。この後は何もないよな?」

シルヴィア「うん。私は握手会とかあるけど、八幡くんは特に何かあるってわけじゃないから、帰っても大丈夫だと思うよ。」

これでやっと終わったな。あつ、そうだった。

八幡「俺さ、帰りの服どうすればいいんだ？ 替えの服って持ってねえんだよ。」

シルヴィア「替えの服ならあるよ。それ着て帰りなよ。私からも言っておくから。まあ、怒られないとは思うよ。最初があんな感じだったからね。」

そうだな。あの状態からよく立ち直れたよな。あー絶対1ヶ月前の俺だったらあり得ねえな。此処に居ること自体まず無い。

コンコンツ

シルヴィア「ん？ どうぞ。」

ガチャツ

スタッフ「失礼しますっ！ ああよかった、比企谷くんまだ居てくれたんだね！」

八幡「え？ もう何も残ってないから、俺帰る予定だったんですけど……」

スタッフ「それがね、観客のほぼ全員からの要望でね。シルヴィアちゃんだけでなく、君の握手会もやってほしいって。」

はい？何で俺も？

シルヴィア「まあ大体予想はしてたけど、ほぼ全員なんですか？」
スタッフ「うん。今日はドームが小さいからそんなには多くないけど、比企谷くんには多いかもね。1000人くらいいるかな。」

せ、1000人!!?

スタッフ「お客様の中には握手とかじゃなくて、ただ単に謝りた
いて人もいるみたいでね、出来ればやってあげてほしいんだけど、
どうかな？」

八幡「……分かりました。気が遠くなりそうですが、頑張ります。」
スタッフ「おお、ありがとう！代わりとっては何だけど、今日の
打ち上げには君も参加するといいよ。今日の1番の功労者は君だか
らね。」

八幡「いや、別にいいですよ。握手するだけなんで……何だ？シル
ヴィ。」

シルヴィア「八幡くんも打ち上げ参加してよ。八幡くんが居なかつ
たら、このライブどうなったか分からないんだよ？」

八幡「俺が居たからこんな風になったとも言えるがな。とにかく、
早く済ませようぜ。でないと待たせちゃうからな。」

シルヴィア「あつ、待つてよ。」

スタッフ「……仲睦まじいね。」

——メインホール——

スタッフ「皆様！これより握手会を開きます！当然のことですが、

押さないようにゆっくり歩いてきてくださいね！1人1人順番に入って下さい！」

スゲエ、マジで先が見えねえ。

シルヴィア「八幡くん、コツはあんまり握り締めないことだよ。やり過ぎると後半握力がなくなってくるから。」コソコソ

八幡「おう、サンキューな。」

そして、握手会が開かれた。

観客 女1「シルヴィアさん！界人さん！今日のライブ最高でした！！」

シルヴィア「あはは♪ありがとうございます♪」

八幡「ありがとうございます！」

観客 女1「あつ！界人さん、それまだ着ていたんですね！嬉しいですー！」

八幡「ということは貴方が？」

観客 女1「はいっ！職種と趣味で作ってるんです！凄く似合ってます！」

八幡「ありがとうございます。」

観客 女1「これから頑張ってください！」

俺は芸能人でも歌手でもないんだがな。歌うのはこれっきりだと思うぞ？

それと今更だが疑問に思った、何でこの服持ってきてたんだ？

虎峰「シルヴィアさん！いつもテレビで見えますが、今日のライブも良かったです！八代さんも凄く良い歌声でした！」

シルヴィア「ううん、こちらこそありがとうございます！いつも応援してくれ

て！」

八幡「私からお礼を言わせて下さい。あの時、庇ってくれて助かりました。何かお礼をしたいところですが、生憎私は一般人。出来ることは限られています。」

虎峰「い、いえそんな!? 気にしないでください! 会場の時にも言いましたが、僕の学院にも八代さんに似たような人がいるんです。八代さんとは正反対ですけど、何処と無く雰囲気似てるといいますか……」
八幡「……そうですか。私も会ってみたいです。私に似ているというその方に。」

虎峰「あ、でも彼はめんどくさがり屋でして、会うのを拒むかもしれませんね。」

……すいません、その本人が目の前にいます。めんどくさがり屋ですいません。

虎峰「とにかく、今日のライブは素晴らしかったです! また機会があったら、2人で歌ってほしいです! ではっ!」

そう言つて虎峰は会場から出て行った。

シルヴィア「……前から思ってたけど、良い人だよね。」

八幡「それは本人が居る時に言ってくれ。あいつステッパしながら帰るぞ絶対。」

八幡「っ!!」

めぐり「こんにちは〜! 初めて来たんですけど、凄く良いライブでした〜! わく、間近で見るとすごく綺麗ですね〜!」ポワポワ

シルヴィア「ありがとうございます!」

八幡「あ、ありがとうございます。」

めぐり「これからも頑張つて下さい!」ギョッ

八幡「わ、私は代役なので、出られるか分かりませんが、ありがとうございます。」

めぐり「はいっ!」

八幡「……………」

めぐり「……………」

な、何だろう?スゲエこっち見てる。

…………とても悲しそうな目で。

八幡「あの……何かご不満でもありましたか?目がとても悲しそうですか?」

めぐり「……あの、すごく失礼な事なんですけど、聞いてもいいですか?」

八幡「?私にお答えできる範囲でなら。」

めぐり「…………私、千葉の総武高校の城廻めぐりっていうんですけど、貴方は比企谷八幡さんですか?」

シルヴィア「っ!」

八幡「……………」

八幡「…………何故そうだと?」

めぐり「喋り方とか雰囲気とか彼にそっくりで……」

八幡「その八幡さんは、今も総武高校にいるのでは?何故私がそうだと?」

めぐり「…………1ヶ月前、急に転校しちゃったんです。1つ下の後輩だったんですけど、色々助けてもらってたのに何も言えないまま何処かに行っちゃって……」

めぐり「私の顔を見ても、きつとすごく嫌な顔をすると思います。でも、それでも会って言いたいです。ごめんなさいって。」

八幡「何か悪いことでもしたのですか?」

めぐり「…………彼の気持ちを分かってあげられなくて、比企谷くん

は学校で凄く虐められてて、私は生徒会長なんですけど、分かってあげるところか理解すらしてなかったんだって気付かされたんです。転校したのを知ったすぐ後に。」ポロポロ

めぐり「全部の事情を知った時には、あの時言った言葉をすぐ後悔しました。私……彼のこと……グスツ……凄く……酷いこと言つて……それつきり……グスツ……何もないまま……何処かに行っちゃって。」ポロポロ

2人「……………」

めぐり「八代さんの……歌を聴いて……今の雰囲気とか……喋り方と見て、もしかしたら……比企谷くんなんじゃないのかって！」ポロポロ

シルヴィア「……………」チラッ

八幡「……………」

八幡「……………」期待を裏切るように申しわけありませんが、私は比企谷八幡さんではありません。ショックを受けるでしょうが、私はその名前をこの六^{アスタリスク}花では聞いた事ありません。学園に入っているならば情報があるはずなのですが聞いたことがないので、この六花にいる可能性は低いと思われます。」

まあ、暫くは俺の身を隠すために情報を出していないだけなんだから。

めぐり「……………」そうですか。ありがとうございます。シルヴィアさん、これからも頑張つて下さいね。それでは。」

おぼつかない足で行ってしまった。

シルヴィア「いいの?」

八幡「ああ、今ここにいるのは比企谷八幡じゃなくて、八代界人だからな。総武高校側^{あつち}の奴らとは、会う気なんてない。今みたいに謝りたい奴が居たとしてもな。」

八幡「今はもう関係ない。昔高校が同じだったってだけのただの他人だ。」

シルヴィア「……………そっか。」

その後は何事もなく、握手会は無事に終わった。城廻先輩が居たことには驚いたが、それだけだ。今の俺には関係ない。

たとえば、あいつら奉仕部でもな。

打ち上げ……そして

—————

握手会が終わり、会場の片付けや精算などの集計をしていると、あつという間に夕方になっていた。夕日が綺麗な時間だから、茜色の太陽が街を染めている。

私は今、収録室で片付けが終わるのを待っている。八幡くんは……

シルヴィア「えへへっ♪」ギュー

八幡「……………」

打ち上げに参加しようとしていなかったから、八幡くんが帰らないように私が腕に抱き付いています♪

八幡「……なあシルヴィア。帰らないから腕を解放「ダーメツ♪」……さいで。」

ねえ、この子何なの？こんな良い笑顔しちやってさ。可愛いからやめてくれる？

シルヴィア「八幡くんが片付け終わるまでならって、言ってたじゃない。それとも私に嘘をついてたの？」

八幡「ついてないついてない。分かったから大人しく腕にしがみついてろ。」

シルヴィア「むう……なんか嫌な言い方だね。」

八幡「不満なら別にいいぞ。」

シルヴィア「不満なんてないもん！ギューっ！」

この子は全くもう……なんて可愛い事を口にするんだ。あれ、よく考えたらこれってあり得なくね？世界の歌姫が俺に抱きついて

るってヤバくね？

なんか話題考えよう！俺、この雰囲気を保てる自信なんてない！

八幡「……そ、そういえば打ち上げって何処でやるんだ？俺、そういうの参加した事ねえから全く分からなくてよ。」

シルヴィア「結構色んなところ行くよ。居酒屋もあれば普通の飲食店もあるし、偶に甘味処とかでもするよ。」

八幡「甘味処って……スイーツ店とは言わないのか？そっちの方がお前の文化に馴染み深いだろ？」

シルヴィア「何でだろうね？ナデナデして？」

八幡「何だよそれ……」ナデナデ

シルヴィア「うにゅゅ……」トローン

え？今のは何だ？何かの鳴き声？

八幡「なあシルヴィ？今何か聞こえな……シルヴィ？どうした？」

シルヴィが頬を膨らませていた。え？何？俺なんかしたか？覚えがないんだが……

シルヴィア「八幡くん、頭撫でるのやめないでよ。気持ち良かったのに。」ムスー

八幡「え？頭？撫でる？」

え？俺頭撫でてたのか？全っ然無意識だった。

シルヴィア「うん。」ムスー

八幡「あ、ああ、悪い。」ナデナデ

シルヴィア「にゅゅ……」トローン

……君だったのね、あの声。

それにしてもなんて声出すんだよ。お兄ちゃんそんな子に育てた覚えはありません！

八幡「撫でるのはいいが、寝るなよ？」

シルヴィア「んううう寝ちやいそう。寝ちやつたら起こして、おにーちゃん。」

……お兄ちゃん、か。久しぶりに聞いたな。まああの事件の後から話もしてなかったから今更か。俺はそんなところよりも、もつと良い場所と良い友人たちを見つけた。

俺にとつての本物がな。

八幡「しょうがねえな、なら寝てろ。撫で続けてやるから今は休んどけ。」

シルヴィア「んう♪ありひやとう……」

八幡「呂律回ってなかったぞ、おい。しかももう寝てんのかよ……早いな。」

総武にいた時の俺に見せてやりてえな。六花にいる俺はこんなにも充実してて、本物も既に手に入れてるって事を。

ペトラ「シルヴィア、八幡く……寝てるのね。余程疲れたのかしら。」

八幡「まあ今日のライブは、こいつにしたら十分過ぎるくらい何時もとは違いますからね。一番の理由は俺でしようけど。」

ペトラ「貴方の事、随分心配していたのよ？昨日の夜なんて、貴方にもしもの事があつたらどうしようとか言ってたんだから。」

八幡「そうですか……片付けは終わつたんですか？まだでしたら手伝いますけど。」

ペトラ「もう終わってるわ。丁度あなた達を呼ぼうと思っていたら、こんなにも微笑ましい光景が目映つたものだから。」

ペトラさんって意外と子供っぽいところあるんだな。普段はこんな感じなのか？

ペトラ「さ、打ち上げに行きましょう？悪いけど、シルヴィアは運んで来てもらえるかしら？その方が居心地良さそうだし。」

八幡「はあ、言うと思ってましたよ。」

俺はシルヴィアをお姫様抱っこすると、外で待っている車に乗り、打ち上げの場所までペトラさんと話をしていた。

ペトラ「じゃあ、今日もお疲れ様。シルヴィアと八幡くん乾杯。」
スタツフ「かんぱーいっ!!」

八幡「か、乾杯。」

シルヴィア「Zzz……」

来たのは居酒屋、因みにシルヴィを起こさなかったのは、ペトラさんがその方が面白くなりそうだと、何とも意味の分からない事を言い出したからだ。

ついでに言うと、シルヴィは俺の腕にしがみついています。おかげで冷やかしの目がとまりません。早く起きて下さいお願いします。

m () m

――30分後――

シルヴィア「……ん、んんう。」

八幡「おつ、起きたか？」

シルヴィア「……八幡くん？え!!」

八幡「悪いな、打ち上げ始めちまつてる。ペトラさんが起こすなつて言うからそのままにしたいんだが、ダメだったか？」

シルヴィア「も、もしかして……来る途中も八幡くんに抱きついてた？」

八幡「ん？ああ。」

シルヴィア「え、ええええ!!／／／／／」

スタッフ「おつ！皆、シルヴィアちゃん起きたぞ！王子様の腕の中でスヤスヤ眠ってたのに、キスで起こされたか？」

ガヤガヤッ！

シルヴィア「キキキキス!!八幡くん!?本当にキス………したの?／

／／／／

八幡「しねえよ。あの人がからかったただけだ。まあ、悪かったな。気は進まんだろうが、食って忘れとけ。」

シルヴィア「………／／／／／」コクッ

それからシルヴィアは、顔を赤くしながらも俺の側を離れず、食べ物食べていた。チビチビ食べてたから可愛かったとは言わないでおく。恥ずいから。

―――時間後―――

ペトラ「それじゃ皆、次の仕事も頑張っていきましょう。それじゃ、お疲れ様。」

スタッフ一同「お疲れ様でしたっ！」

そう言うてから、解散したが、俺とシルヴィとペトラさんだけが残っていた。

八幡「あの……帰らないんですか？」

ペトラ「ええ、帰るわよ。シルヴィア、頑張りなさい？絶対大丈夫よ。」

シルヴィア「わ、分かりましたから。」

ペトラ「ふふつ、それじゃ八幡くん。今回はありがとう。またお願いするわね。」

いや、プロに頼め。

八幡「それで？俺に何か話があるみたいだが、どうしたんだ？」
シルヴィア「え、ええくと……」

い、言わなきや。恥ずかしいけど言わなきや！折角ペトラさんにも協力してもらったんだし。

シルヴィア「あ、あのね、私今日はホテルで一泊する予定なんだ／
／／／／」

八幡「ああ、それで？」

シルヴィア「そ、それでね？もし八幡くんさえよかったら……よかったですよ！」

八幡「お、おう。」

何だ？道分かんないから送ってほしいってか？地図用意して行けばいいんじゃない

シルヴィア「八幡くんも一緒に……と、と、泊まっていけないかなって
／／／／／」

ないかうえええ!?

シルヴィア「ダ、ダメ……かな？」ウルウル

2人きりの秋夜

八幡 side

…………困った。俺は今人生で一番困っている状況に瀕しているかもしれない。

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

話す話題も思い浮かばない、シルヴィはチェックインしてから何も話さない。

確かこうなった理由は…………

————回想・10分前————

シルヴィア「八幡くんも一緒に…………と、と、泊まっていけないかなって／＼／＼／」

シルヴィア「ダ、ダメ…………かな？」ウルウル

八幡「そ、その……な、何でだ？」

自分の寮に帰ればいいものを、何でわざわざホテルなんて？

シルヴィア「な、なんか八幡くんとは、あんまり過ごせてないな〜って思って。」

八幡「ほ、本当にそれだけか？」

シルヴィア「……………」

シルヴィア「ほ、本当はね、も、もつと八幡くんと一緒に……居たいから／／／／」フィツ

！
本当の理由がそれか!!?断りにくいじゃねえか！いや断れねえよっ

八幡「……わ、分かった。いいぞ。」

シルヴィア「ほ、ホントに？べ、別に強制はしてないんだから無理はしなくてもいいんだよ？」

八幡「あんな言い方されたら、断るモンも断れねえよ／／／」
シルヴィア「っ！／／／そ、そっか／／／／」

……

……

……

あーくそっ！じれったいな！

八幡「シ、シルヴィ、ホテルはもう決まってる？早く行こう。俺もうこの雰囲気は限界だ。少しゆっくりもしたい。」

シルヴィア「う、うん、そうだね！じ、じゃあ行こっか。こっちだ

よ八幡くん。」

——ホテル・受付——

シルヴィア「2名で予約したシルヴィア・リユーネハイムと八代界人です。」

ペトラさんは本名で予約したみたいだ。隠す必要もないと思ったんだろう。俺は何故か偽名だけど。シルヴィに言われて俺は変装している。このためにか。

受付「リユーネハイム様に八代様ですね？お待ちしておりました。それと、先程予約を頂いた方からリユーネハイム様宛に言伝を預かっているのですが、ご拝読なされますか？すぐに用意致しますか？」

……嫌な予感しかない。

シルヴィア「はい、お願いします。」

受付「ではこちらが預かっていた言伝です。見た後は処分して構わないそうです。」

ペトラ『ガンガン押さないと、八幡くんは動かないから頑張りなさい。急がないと、こんな超優良物件すぐに売り切れちゃうわよ。押し倒すくらいしてみなさい。』

シルヴィア「っっ!!／／／／／」カアアア

あつ、これはダメなやつだ。

受付「お客様？」

八幡「鍵は私が。何号室でしょうか？」

受付「最上階のスイートルームでございます。ご予約はお休み下さい。」ペコリッ

サインを求めない辺り流石だな。それに客も少ないから騒ぎにもならないな。

八幡「ありがとうございます。おいシルヴィ、いつまでブーツしてる？行くぞ。」

シルヴィア「……………／／／／／」コクッ

——回想終了——

それからずっとお互いだんまりだ。話そうにも今のシルヴィはこんな感じだが雰囲気さがさきまでと違う。

少し不安な……………悲しそうな感じだ。チラッと表情を見たが、触れると今にも壊れてしまいそうな程悲しみに満ちた顔である。

何があったかは知らないが、話しかけてみない限りは、何も分からない。答えてくれるかは別として少し聞いてみるか。

八幡「……………なあ、大丈夫か？さつきから何か辛そうじゃないか？

やっぱ俺と居ると落ち着かねえか？なら俺は帰るが……………」

シルヴィア「……………」フンフンッ

何も言わないまま、ただ横に首を振るだけだった。これじゃ俺もお手上げなんだが。

八幡「……………なら、俺は少しロビーで時間を潰してる。何かは知らないが、なんかあったんだろ？良くなったら連絡してくれ。」

シルヴィア「っ！」

八幡「それじゃ、ちよつくらあああ!？」

立ち上がろうとした瞬間、突然押し倒されてしまった。いや、違う。

八幡「お、おい!? どうした!？」

シルヴィア「……………」フルフル

抱きつかれていた。しかもさつき抱きつかれていた時よりも、腕の力が倍くらい強く。そして小刻みに震えていた。

シルヴィア「…………怖かった。」フルフル

八幡「…………え？」

シルヴィア「私、八幡くんに嫌われちゃったんじゃないかって思ったら、凄く怖くて…………それで…………」フルフル

八幡「な、何でお前を嫌わなくちやいけねんだよ? 意味が分からんぞ。」

シルヴィア「ライブの時…………八幡くんすごい目で私を見たから。」フルフル

あつ、そういや謝るの忘れてた!! いっけね! すっかり忘れてた!

八幡「あー、そんな時は悪かったな。別に悪気があつてやったわけじゃないんだ。」

シルヴィア「うん…………でもそれだけじゃないんだ。最初あの会場はブーイングしかなかったでしょ?」

八幡「ああ。」

シルヴィア「八幡くんはその時に酷い事沢山されて…………怪我とか…………軽蔑とか…………凄くバカに…………されて…………」ポロポロ

八幡「お、おい…………」

シルヴィア「それで…………ヒグッ…………八幡くん…………嫌われるんじゃないかって…………グスッ…………もう会いたくないって…………うつ…………言われるんじゃないかって…………ずっと思ってた…………私…………私…………すごく不安になって…………怖くなって…………グスッ…………仕方なくて」ポロ

ポロ

……俺があんな事になつてゐる時にそんな事考えてたのか。

シルヴィア「それで……それで……」ポロポロ

八幡「もういい、よく分かった。」ギョッ

シルヴィア「っ！」ポロポロ

どうなるかは分かんが、今はシルヴィを慰めるしかない。それに、今俺にはこれしか思いつかん。

八幡「先に言っておくが、俺はあんな事でお前を嫌いになつてたりしない。あんなのは奴らの事情にしか過ぎない。シルヴィがやったわけじゃないだろ。」

八幡「それによ、付き合いはまだ短いから分からないだろうが、俺はそう簡単に友人を嫌いになつてなつたりしねえよ。友達あんまいねえからよく分かんねえけどよ。」

むしろ六花に来て初めて友達なんて出来たからな。その前なんて居なかったしな。

八幡「話逸れるけどよ、俺ってそんなに安っぽい男に見えちまうか？ だったら俺はそれでも別にいいんだけどよ。」

シルヴィア「そんな事ないっ!! 八幡くんはとても優しい人だよ!!」

八幡「ありがとな。それに、お前あの時言ってくれたじゃねえか。信じたいって。」

シルヴィア「っ!!」

八幡「俺、そんな事言われたの初めてでよ、すげえ嬉しかったんだよ。お前なら、信じていいと思えた。そんな良い奴を俺は嫌いになんてなれねえよ。俺もお前を信じたいからよ。」ナデナデ

シルヴィア「うつ……うつ……」ポロポロ

八幡「だから、嫌われたなんてもう言うなよ……これで2度目だぞ？これ以上は勘弁だからな？」

そう言って八幡は、シルヴィアを抱き締めながら優しく頭を撫でた。シルヴィアは涙腺が無くなったかのように、大声と共に大粒の涙を流し始めた。

シルヴィア「うわあああんっ!!八幡ぐううーん!!」

シルヴィも呼応するかのように、俺の身体をさらに強く抱き締めた。かなり不安だったんだろうな。

その後も八幡は、泣き続けるシルヴィアを無言で撫で続け、抱き締めていた。

――30分後――

シルヴィア「……………ありがとう八幡くん。すごく落ち着いたよ。」

八幡「おう、スッキリした顔になってるぞ。やっぱお前は笑顔が良いな。」

シルヴィア「う、うん……／／／」

何故かシルヴィが顔を赤く染めた。よく分かんが、もう8時半だし、風呂にするか。

八幡「シルヴィ、風呂に入ってきたらどうだ？もう9時に近いからな。疲れたし、早めに寝たい。別にシャワーでもいいが。」

シルヴィア「なら、ゆっくりしたいしお風呂にしようかな。お湯入れてくるね。」

入れてくるといっても、設定をすれば後は自動的に機械がやってく

れるからな。戻ってくるか、そのまま入ってくだろうな。

お湯の入れる音が聞こえてくると、シルヴィアも戻ってきた。

八幡「そのまま行かなかったのか？」

シルヴィア「今は少しでも長く八幡くんの近くに居たいから。ねえ八幡くん。またやってくれないかな？ さっきの抱き締めながら頭撫でるの。凄く気持ちよかったし、落ち着くから。いいかな？」

八幡「わ、分かった。」

ううむ、さっきは全然意識してなかったが、女の子の身体ってのは、凄く柔らかいな。それにこの前の柑橘系の香りがする。

シルヴィも目瞑ってるな。

シルヴィア「ん……」

八幡「また寝るなよ？」

シルヴィア「寝られないよ。この感じをもっと長く感じていたいから。」

八幡「……………そうか。」

不思議と今は恥ずかしさがない。まあ今更かもな、さっきもやってたし。

風呂が沸くと、シルヴィは名残惜しそうにしながらも風呂の方へ行き、風呂から上がったシルヴィがこっちに来た頃合いで、俺も風呂へと入りった。

言うまでもないが、風呂から上がった後のシルヴィは蒸気で頬を染めていた上に、すげえ色っぽかった。

あれって反則じゃない？ 上がった後にも抱きつかれたし、あの子ちよつと節操なくなってきたよ。

だが俺たちにはまだ問題があった。寝る場所だった。普通のダブルベッドではなく、キングサイズのベッドだった。最初は部屋変えてもらおうと思ったが、あの雰囲気だったからな。すっかり忘れてた。

八幡「シルヴィ、一応言っただけかい？」

シルヴィア「ダメだよ八幡くん、床で寝るなんて言わないでね？」

流石シルヴィアさん、俺のことを大変よく分かっていらっしやる。

八幡「け、けどなあ……」

シルヴィア「わ、私は別に八幡くんとなら……エ、エッチな事してもいいけど、ここじゃダメだからね？普通のホテルなんだから／／／／／」

八幡「お、おい！／／／そんなこと言うなよ。余計寝にくくなるじゃねえか。」

シルヴィア「と、とにかく！床では寝ちゃダメッ！ベッドしか認めないからね！」

八幡「わ、分かったよ。」

多分譲らないだろうからな。こうなったら絶対動かないタイプみたいだしな。

八幡「一応聞くが、寝る時も撫でて欲しいのか？俺にはそう言う風に見えるが。」

シルヴィア「う、うん／／／／／」ポツ

八幡「……………分かった。」

呆れながらも俺とシルヴィは、ベッドに寝転がって布団を掛けた。勿論、シルヴィはその直後に抱きついてきた。

八幡「お前……………凄い素直になったよな。」

シルヴィア「……きつと今だけだよ。明日になったら、恥ずかしくなつて出来ないと思うから、今の内に目一杯やっておく。」

八幡「さいですか。」ナデナデ

シルヴィア「んっ………やっぱり落ち着く。これならすぐに眠れそうだよ。」

八幡「俺は眠れそうにないな。女の子にこうしてる時点でそれは決定だ。」

シルヴィア「そう？意外にもすぐ寝ちやうものかもよ？」

八幡「安心しろ、絶対お前より先には眠らない自信はある。」

シルヴィア「私だつてこんな良い時間ときに早く寝るなんて無粋なマネはしないよ？長く起きていたいな。」

八幡「ほう、じゃあ勝負だな。」

シルヴィア「望むところだよ。」

………

………

………

八幡「……ぷっ。」

シルヴィア「……ふっ。」

2人「はははは………」

俺とシルヴィは同時に笑った。やっぱ可笑しかったんだな。

シルヴィア「ふう……こんなことしても意味ないし、早く寝よつか、八幡くん。」

八幡「ああ、そうだな。」

シルヴィア「お休み、八幡くん。」
八幡「お休み、シルヴィ。」

そう言って2人は、すぐ眠ってしまった。お互いに抱き合いながら
幸せそうな笑顔で。

事件

八幡 side

八幡「……………」

さて、昨日までは平気だった俺も、今では心臓が破裂しそうなくらいヤバイ状態だ。

目の前には、昨日から今まで抱きついたままの状態で寝ているシルヴィがいる。俺が引き剥がそうとすると、すぐに抱きしめ返してくる。シルヴィの手を動かしても、これまたすぐに元の位置に戻す。

だがこれはすぐに止めて、このままの状態を維持している。何故かというと昨日俺たちは、風呂に入ってからその後の服装はバスローブだったからだ。

皆さん、もう分かりますよね？

そう。バスローブがはだけて胸が見えちゃいそうなのだ。いや、もう半分は見えているが、貴重な部分は見えていないからセーフだろう。男の俺としては見たい欲求があるが、そんな事をしては気まずくなる。

故にこの状態から脱することが俺には絶対に出来ないので、シルヴィが起きるのを待つてるわけだ。

え？起こせばいいだらうてか？あのね？こんな良い寝顔した子を夢の国から覚まさせろって言いたいのかな？ぶっちゃけ俺には無理です。

シルヴィア「んん……八幡くん……」

起きたか？……いや、寝言か。しかし、どんな夢見てんだ？俺がいるようだが。

シルヴィア「……んっ／／／……あぁっ……良いよぉ……八幡
くん……／／／」

……え？

シルヴィア「はぁはぁ……んんっ！……あぁ／／／……気持ち良
いよぉ／／／」モジモジ

こいつ……いったいどんな夢見て……!?お、おいやめろっ!?それ以
上動くな!?

なんと、シルヴィのバスローブがギリギリ寸前なのだ。もしこれ以
上先にいってしまったら、俺は間違いなく逝ってしまう!!

シルヴィア「はぁ……はぁ……も、もつとお……強くしてえ……ん
んっ！／／／」モジモジ

や、やめてくれええ!!これ以上はだけちまったら、俺もう耐えら
れない!見ないようにしようとすると、逆に見ちまう!!あーやべえも

う限界かもしれん！

シルヴィア「……………」

……お？止んだ？

シルヴィア「そんな八幡くん?!?お預けなんて酷いよっ!!」

スルツ

2人「……………え？」

俺は今、とんでもないものを見てしまっている。おそらく世界初だろう。

シルヴィの上半身裸を見てしまっている。しかもそのまま、固まった状態でどっぴり30秒くらいは見つめていたと思う。

それは……………もう……………女神としか例えようがなかった。スラツとした身体のラインに脂肪なんて余計なもの無く、健康そうな肌

色、くびれのあるお腹、そして……形の整った膨やかな胸。

シルヴィア「あ……ああ……／＼／＼／」シュウゝゝ

シルヴィも自分の状態に気づいたのか顔が赤くなり、蒸気まで出てきた。だが……多分、いや確実に俺の方がまずい状況だ。

もう………限界。

八幡「ブツ………!!!

シルヴィア「え!!?／／／／／／／／／／」シュウゝゝ

俺はおそらく、鼻から血の火山が噴出したのだろう。もう……意識も曖昧だ。

シルヴィア「は、八幡くん!!?／／／」

俺はその声を最後に気を失った。

.....

八幡「ん……んん？」

シルヴィア「あっ！八幡くん大丈夫!?何処か具合悪くない？」

八幡「……シルヴィ?ん?何だこれ？」

鼻にティッシュ詰めてある。なんで……あつ。

俺は、さっき見てしまったシルヴィの裸を思い出してしまった
……女の裸なんて初めて見た……っ!!ダメだダメだっ!

八幡「あっ／＼／＼……え、えと……／＼／」

シルヴィア「……／＼／＼／＼／＼／／」

シルヴィも察したのか、顔を真っ赤にさせて伏せていた。ここは、
誠心誠意謝るしかないな。

八幡「……その、すまない。いや……すみませんでした。」

ベッドの上だが一応土下座をした。そりゃ裸を見ちまったんだか
らな。当然だ。

シルヴィア「……ど、どうだった?／＼／＼／」

八幡「……へ？」

シルヴィア「だ、だから!わ、私の裸……その……どうだったのっ
て……／＼／＼／」

八幡「そ、そんなの眼福に決まって……ってお前なに言わせんだ
よっ！」

シルヴィア「そ、その……色々とお粗末様でした／＼／／／」

ダメだこいつ、気が動転してるな。

八幡「お、俺が悪かったからもうやめてくれ。やめて下さいお願いします。」

シルヴィア「……………うん／＼／＼／」

そしてまた静寂が訪れる。俺たちこの部屋に来てからこの状態多いな。

シルヴィア「ね、ねえ八幡くん／＼／」

八幡「な、なんだ？」

シルヴィア「その……………私は大丈夫だから、八幡くんも気にしないで。ね？」

八幡「バカ、んなの気にしない方がおかしいだろ。女の身体見たんだぞ？お前それでいいのかよ？」

シルヴィア「……………八幡くんなら……………別に……………い、いいかなって、私は。」

八幡「それじゃ気が収まらん。お前何かないのか？して欲しいこととか。」

何もない方が良いが、この場合は逆に何もない方が問題だ。

シルヴィア「……………じゃあこの前みたいに、またデートしてくれるなら、いいよ。」

八幡「……………それでいいのか？」

シルヴィア「うん、それで充分。だから八幡くんもあんまり気負い過ぎないで。」

八幡「……………分かった、ありがとな。」

シルヴィア「どういたしまして。じゃあ時間も丁度いいし、朝食食べに行こつ。」

八幡「そんな時間か……じゃあ行くか。」
シルヴィア「あつ、待って。」

え？何？もしかしてきつきの無しとか言う気か？別にいいが、ちよつとガツカリ。

シルヴィア「途中まで手繋いで行こ。」
八幡「お、おう。」

ギョッ

シルヴィの手を握り合った瞬間、何故か心が落ち着いた。

シルヴィア「じゃあ行こっ？」
八幡「……ああ。」

その後食堂に着くまで手を繋いだままだった。その後はやらなかったが、ホテルの客にシルヴィアのファンがいて大騒ぎになったのは、また別の話にしておこう。

そして何故か俺のサインも欲しがっていた。俺って何もしてなくてね。

夢と恥じらいとこの気持ち

シルヴィア side

食事とついでに握手やサイン会も終わり、やっと部屋に戻ってこれた。

シルヴィア「ふう、まさかこのホテルにも私たちを見に来てくれた人たちがいたなんてね、盲点だったなあ。」

八幡「ああ、しかし未だに謎なんだが、なんで俺までサインを書かされたんだ？」

シルヴィア「そんなの八幡くんのファンになったからに決まってるよ。あの歌を聴いたら誰だってそうだと思うけどなー。」

あれで不満っていうなら、何がいいんだろうね？ 私には分からないかも。

八幡「なあシルヴィ、聞いてもいいか？」

シルヴィア「ん？なあに？」

八幡「その……お前今朝どんな夢見てたんだ？俺と一緒にいたようだが……」

え!? な、なんで!? なんで私が夢を見てたって八幡くんが知ってるの!?

シルヴィア「えーと、私何か言ってた？」

八幡「…………俺の名前を言ってた。」

シルヴィア「…………それだけ？」

八幡「………………おう。」

ちよつと!? 何!? 何今の凄い間は!?

シルヴィア「……………言ってたんだね？ねえ、私何を言ってたの？」
八幡「い、いや……………これはあんまり言わない方がいいと思うんだが……………」

八幡「そ、それよりも夢の内容を先に言った方が傷が浅い程度で済むと思うんだが……………どうする？」

ええ!？は、八幡くんに教える!？む、無理だよあんな恥ずかしい夢つ!!

シルヴィア「そ、そんなの無理だよっ!／＼もういいから八幡くん教えてよー!」

八幡「いいんだな？」

シルヴィア「は、はい。」

八幡「……………わ、分かった。じゃあい、言うぞ、お前が出していた声は……………」

喘ぎ声だ／＼／

え？喘ぎ声？

え、ええええええええ
!!!?

う、嘘でしょ?! 私八幡くんにそんなの聞かれちゃったの!? まさかあの声が、寝言で言っていたなんて……

シルヴィア「うう………／／／／／」

八幡「お、おい？大丈夫か？」

大丈夫じゃないよ、もう泣きそうだよお！好きな人に、裸を見られただけでなく、恥ずかしい声まで聞かれるなんて／／／／／今日になってから恥ずかしい事だらけだよお！／／／／／

シルヴィア「うう………これなら先に夢の方を言っとくんだったよ………」

八幡「あー、夢の事は無理して言わなくてもいいからな？別に気になってないから。無理だと思うが、気にすんな。」

をしていた。

受付「チェックアウトですね。かしこまりました。それと……大変申し上げにくいのですが、よろしいでしょうか？」

ん？握手かサインかな？八幡くんの方を向いて言ってるけど……

受付「昨夜は、随分とお楽しみになられたご様子ですが、他のお客様も居られますので、当ホテルではそういったご使用はお控え頂けないでしょうか？」

八幡「？お楽しみ？」

シルヴィア「そういったご使用？」

2人「っ!？」

もしかして、昨日私が泣いていたのを何かと勘違いされてる!?!しかもいけない方向に!?!最後の最後でこの仕打ちなんて、しかもホテルの受付の人に止めさされちゃったよ／＼／＼

八幡「いや……あの……俺たちはそういう行為をしていたわけではなくて……その……」

受付「あつ！そうでしたか！これは申し訳ございません。とんだ早とちりを。」ペコリツ

謝ってくれるのはいいんだけど、私はもう恥ずかしさが止まんないよー／＼／＼

シルヴィア「い、いえ……私たちも勘違いされる事をしてしまったので……」

八幡「ま、また来ます。」

受付「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております。お氣をつけて行ってらっしゃいませ。」

それ以降は特に何も無く平穩に過ごす事が出来たが、朝から激しい事があり過ぎたので、2人は少し気まずい状態が続いていた。それでもしつかりと手は繋いでいた。

ーークインヴェール校門前ーー

シルヴィア「ありがとう八幡くん。ここまで送ってくれて。」

八幡「気にすんな、当たり前のことをしたただけだ。」

シルヴィア「そっか……次は……いつ会えるかな？」

なんか別れたくないな……

八幡「都合のいい時は連絡してこい、暇だったら俺も行つてやるから。」

シルヴィア「……絶対だよ？」

八幡「分かってるよ、そろそろ行かせてくれ。いつまでも俺がここ

に居たら目立つちまう。勿論お前もな。」

シルヴィア「……………うん。」スッ

そう言われて私は、八幡くんの手を離れた。すると八幡くんはそれを察知したのか、急に何かをやり始めた。

やり終わると手には何かがあった。腕輪？……………違う。赤・青・緑・金・紫の五色の玉があるブレスレットだった。それ以外は透明な玉だった。こんな事出来るんだ八幡くんって。

八幡「一応、お守りだと思っとけ。こんなモンしか作れねえけどな。」

……………綺麗。太陽にかざしたら透き通って見える。

シルヴィア「……………ありがとう……………八幡くん。すごく嬉しい。」ニコッ

八幡「つ……………お、おう／＼／＼じゃあな。」

シルヴィア「うん♪またねっ！」

これならまた頑張れそう。八幡くんが近くにいる気がする。見守ってくれてる気がする。なんかそれだけで力が湧いてくる。

よしっ！星武祭に向けて頑張らなきゃね！もう1回ルサルカに頼もうかなー？

シルヴィア side out

八幡 side

八幡「……………なんか1日居なかっただけでこうも懐かしく感じるモンなんだな。」

暫く廊下を歩いていると……………

虎峰「あつ！八幡!!」

八幡「ん？おお、虎峰か。」

虎峰「昨日は何処に行つてたんですか？外出後に八幡と一緒に稽古しようと思つてたのですが、何処にもいなくて探してたんですよ？」

……ホント、こいつには救われたな。気づいてないみたいだが、あん時お前に助けられたんだぜ俺。

俺にとつての本物つてここなんだな。

虎峰「……八幡？聞いてますか？」

八幡「いつもありがとな。」ボソツ

虎峰「え？なんです？」

八幡「いや、何でもねえよ。そんじややるか。何から始めんだ？」

虎峰「め、珍しいですね。八幡が最初からやる気だなんて。」

八幡「ああ、メチャクチャ良い事があつてな。それだからかもしれんな。教える気は無いからな。」

虎峰「気になりますが、無理には聞きません。それより、早く行きましょう！」

八幡「ああ。」

此処に来て、やっぱ正解だった。

4章 竜覇凱旋 変化

八幡side

俺が此処に来てから早2ヶ月、この生活にもだいたい慣れた。前のとに比べるとかなり居心地が良い。

俺の日常はというと、まず1番の悩みの種は勧誘である。あの試合の後から絶えず続いている。いい加減諦めてほしいものだ、特にあのちっちゃいのは。後は普通だ。

朝起きたら支度をして、飯食ってクラスメイトと他愛ない話して、授業やって昼飯食って学校が終わったら、木派か水派どちらかの派閥で稽古またはそのまま帰って休むか。

因みに報奨金をもらってからは、毎日晚飯を作っている。その度に、あのチビが来るのだ。偶に他の奴も来るが、別に迷惑ではない。むしろ、今ではこの状況も楽しく思える。我ながら変わったものだ。

部屋も専用の部屋にしてもらったから広くなり、充実している。前の部屋とは違って内装は中華だが、そこはこの学校の特色ということにしておこう。

そして今俺は何をしているのか、それは……

虎峰「すみません八幡、任せきりにしてしまつて。」

セシリー「はちまーん！あたしそろそろガレてきたよー！」

陽乃「八幡くん早く。」

星露「はよう食べたいのじゃ！」

計5人分の晩飯を作っている。

八幡「お前らなあ………食うんだつたら少しくらい手伝うとかなんか無いのか？座つて待つてるだけってなんだよ。」

陽乃「ひっどーい！鍛錬で疲れた私に労働させるっていうのー！それはないよー！」

セシリー「あたしたちは疲れてるんだー！八幡はあたしたちのために頑張れー。」

八幡「ねえ、今日は俺も稽古したんだけど？それなのにこの仕打ちって何？」

虎峰「す、すみません八幡。今日はちよつとハードにやつてしまつたので、お手伝いできそうにないです。」

八幡「いや、お前は前もつて聞いてるからいい。その3人はなんだ？人の部屋勝手に入っただけじゃ飽き足らず、タダ飯食うために来るとは。」

星露「良いではないか！妾と八幡の仲ではないか！そんな事を言うでないわっ！」

セシリー「そうだぞー。あたしだつて八幡のご飯食べてからもう忘れられないんだからー。八幡のせいだぞー。」

陽乃「男ならそれくらいの甲斐性がないとやっていけないぞー？」

八幡「……………なら、これからは食堂で飯を食うか。俺別に中華嫌いじゃねーし。」

3人「ダメー!!（ダメじゃー!!）（ダメだよー!!）」

こいつら……もうダメだな。

セシリー「なんてこと言うのさ八幡っ!? あたしにもう食べるなって言いたいのか!? あんなに美味しいご飯をもう食べるなって言いたいのか!?」

褒めてくれるのは嬉しいが、手伝いもしない奴には食わせたくはない。

星露「そんなのあんまりじゃ!! 妾の楽しみがなくなってしまうのではないか! それはやめて欲しいのじゃー!!」

そんな楽しみ消えてしまえ。

陽乃「そんな事言わないでよ八幡くん! 私手伝うから! これからは手伝うからもうそんな事言わないでよー!」

あんたは俺よりも美味しいの作れんだろうがっ! 自分で作れっ! ったく、星露は毎日来るし、セシリーも週に4日は来るし、他の奴らも来るから結構金使うんだよ。

八幡「……作る日数減らすか。」

虎峰「あはは……」

毎日はやめよう。絶対に来るから。

いや、逆にやめちまったら毎日来るようになるのか? 詰みじゃねえか。

……夕食が終わってから1時間後……

八幡「この術式ならどうだ？」

沈雲「……うん、明日試してみるよ。比企谷くん、沈華、付き合ってくれるかい？」

八幡「ああ、いいぞ。」

沈華「ええ。それと比企谷、私にも使えそうな術はあるかしら？」

沈雲と沈華の星仙術の特訓はなくなり、逆に前まで教わる立場だったが、今では教える方になっていた。

八幡「そうだな……なら、《鋼炎術》（こうえんじゆつ）とかはどうだ？お前の透明になる術を使っても炎は見えないからな。」

沈華「そんな術があるのね。」

八幡「《連結同調》（れんけつどうちよう）が必要だが、お前なら簡単に出来ると思うぞ？」

沈華「そう……他に何かあるかしら？」

八幡「ん……《稲妻蛟》（いなずまみずち）くらいだな。今んとこお前が使えそうなのは、さっきのを含めて2つだ。」

沈華「じゃあ明日、私も見てもらってもいいかしら？」

八幡「ああ、分かった。」

沈雲「それじゃあ妹共々、明日はよろしく頼むよ。比企谷くん。」

八幡「おう、まかしとけ。」

沈華「それじゃあお邪魔したわ。」

八幡「ああ。」

明日試してまた俺の部屋に来たりしてな。まあ何日かは試しで使えうだろうからそれは無いか。

八幡「教わるならセシリーでもいい気がするがな。なんで俺なんだ？」

八幡が鈍感なのは日常です。

――さらに1時間後――

八幡「それで、あそこには……………」

冬香「まあ、そうなのですね。」

今度は冬香さんが来ている。俺たちはたまに日本の話をしている。同じ出身国だからか、気が合うのだ。

冬香「…………ふう、やはり八幡さんと話していると時間が短く感じます。この時間には出ようとは思っていたのですが、まだ話し足りない感じです。」

八幡「別にいいですよ、俺も退屈じゃないんで。日本の話が出来て嬉しいですから。冬香さんはこっちの方が長いんですか？」

冬香「ええ、八幡さんが入学してくる遥か前ですよ。」

八幡「その言い方だと、何年も此処にいるって聞こえますね。」

冬香「ふふふつ、やはり八幡さんといえると楽しいです。またお相手してくれますか？」

八幡「はい、俺でよければいつでも。」

冬香「ありがとうございます。それでは、失礼致しますね。楽しかったです。」

八幡「はい、また。」

あの人になら飯も菓子も作ってあげられるんだけどなあ……………あの3人も見習って欲しいものだ。既に手遅れだろうけど。

――2時間後――

俺も変わったな……………

称々『そんなに前のハッチは酷かったのかい？そうには思えないけ

ど？』

八幡「まあこつちに来てから色々あったからな。今日とか。」

柊々『嫌なのかい？』

八幡「いや……悪くない。」

柊々『素直じゃないな〜も〜。』

八幡「ふっ……そうだな。」

今日も俺は平常運転だ。

そしてさようなら。今日の俺。また明日頼むぞ。きつとうるせえ
1日になるからよ。

一一一

聖ガラーダース学園

界龍第七學院

生徒会長
茫・星露生徒会長
左近さこん
州馬しゅうま

レヴォルフ黒学院

クインヴェール女学園

生徒会長 シルヴィア・リユーネハイム

星導館学園

生徒会長 クローディア・エンフィールド

アーネスト「さて、全員集まっている事だしそろそろ会議を始めようか。こんな風に全員揃うのはそうそうない事だからね。」

シルヴィア「それって私のせいって言いたいのかなアーネスト？
まあ実際にそんなだけどき。」

アーネスト「いやいや、仕事忙しいのは此方も承知していること

だからね、気にしてはいないよ。いつも委任状はもらってるから問題はないよ。」

クロードディア「確かに忙しいですものね。生徒会長にアイドル稼業、両立は大変でしょう。大変でいらっしやいますね。」

デイルク「けっ！オメエなんて居ても居なくても変わんねえよ。」

シルヴィア「ちよつとー、そんな言い方ないでしょー！私だって好きで居ないわけじゃないんだから！」

デイルク「はっ！どうだか……」

シルヴィア「もう、流石は【悪辣の王】^{タイラント}だね。そんなんじゃあ社会に出たら大変だよ？もっと社交性上げないと。」

デイルク「余計なお世話だ。」ギロツ

シルヴィア「おー怖い怖い。」

シルヴィアはこの会議に参加出来ない事が多い。仕方のないことだが、これに文句をつける人物がデイルクだった。

星露「全く、久し振りに全員揃ったというのに、相も変わらず仲が良いのう。そうは思わんか？のう？左近よ。」

州馬「い、いえ……僕はそうには……」

シルヴィア「冗談やめてよ星露！こんな子豚さんより、ブーイングをするお客の方がまだ可愛いよ。」

デイルク「テメエ……」

アーネスト「んんっ！まあ、そのくらいにしてもう始めたいんだけど、いいかい？」

シルヴィア「うん！いいよー。」

デイルク「さっさと始めやがれ。」

アーネスト「じゃあ、今回の議題は……」

アーネストが詳細目録を出しながら説明をする。他のは聴くか質問をするか、ハッキリ言うと、質問する者はいない。

アーネスト「つと、こんなところかな。さて、次で最後の議題だけど、今回の六学園入学、または転入希望の事でここに居る全員に相談があるんだが、いいかい？」

星露「ほう？お主が相談とは珍しいのう。重要な事なのかえ？」

アーネスト「まあそう言ってもいいかな。今回皆に相談したいのは、六花転校または入学希望者を此処に連れてくる日を《リンドブルス王竜星武祭》の決勝戦3日前にしたいと思うんだけど、皆はどう思う？」

シルヴィア「ん？どうして3日前？学園を案内するなら、第一希望に合わせてやった方が早く終わると思うけど？」

クロードディア「そうですね。期間は決まってはいいませんが、何故ですか？1日で済ませた方が早いと思いますが？」

アーネスト「うん、それは今説明するよ。」

アーネストの日程ではこうだ。

1日目は学園案内。これは例年通りである。

2日目は自由行動。これは少しでも六花を知ってもらうために、アーネストが考案したものだった。

そして3日目に決勝戦の観戦。高い戦闘力を見せることによって、向上心を高めようという算段だった。

星露「ほう、考えたのう。それなら希望者も増えよう。良き考えだと思うぞ。賛成じゃ。」

デイルク「ただ面倒ごとが増えるだけじゃねえか、チッ！」

クロードディア「私も賛成です。希望者は多い方がいいですからね。」
シルヴィア「私は案内の日にいられないかもしれないけど、それでもいいのかな？」

アーネスト「それなら代理を立てておくといいよ。その方が出場者の君にとっても気が楽になるだろう？」

シルヴィア「それなら私も賛成かな。」

州馬「僕も賛成です。」

1人反対？が居るが、5対1でこの案が使われることになった。

アーネスト「それじゃあ、日程は2泊3日で、予定やその他は僕がやっておくよ。」

クロードディア「苦勞をかけますね。」

アーネスト「いやいや、このくらい大したことはないよ。そういえば今年は、面白い子がこの六花に来るみたいだよ。」

星露「ほう？というと？」

アーネスト「星露、君がよく知ってる人物の妹さんだよ。」

星露「ん？……誰じゃ？」

クロードディア「おそらく、界龍の序列3位、【魔将天閣】の2つ名を持つ雪ノ下陽乃さんの妹さんでは？」

アーネスト「流石だね、よく調べているよ。君にとっては充分気になる存在なんじゃないかい？ミス星露。」

星露「彼奴の妹じゃからといって強いとも限らんであろう。妾は強い奴にしか興味はないからのう。」

シルヴィア「ブレないねー。」

こうして、今回も平和？に六花園会議が終了した。

そして、各会長それぞれの学園に戻ろうとするが、1人の生徒会長が……

シルヴィア「星露、ちよつといいかな？」

星露「ん？誰かと思えば歌姫殿ではないか？なんじゃ？妾に用か？」

シルヴィア「うん、ちよつと聞きたい事があつてね。時間ある？」

星露「よいぞ。帰っても暇なだけじゃしな、付き合おう。」

シルヴィア side

星露「むう……あまり美味しくないのう。」
シルヴィア「ちよつと、そんな事言っちゃダメだよ！作ってくれてるんだから！」

私たちは今、普通の飲食店に来ていた。注文をしてメニューが来て先に食べてから話をする事にしたが、食べて早々に星露が罵倒。どれだけ美味しいの食べてるのさ……

星露「料理の腕の良い生徒が入ったのう。妾もそれ以来通っておるのじゃ！」

星露が凄く目を輝かせてる。へえゝそんなに腕が良いんだ……：私も食べて見たいかも。

星露「その者は料理の腕も一流じやが、戦鬪の腕も一流でのう！あの曉彗を打ち負かす程じやからな！」

え？

シルヴィア「ちょ、ちよつと待つて？あの【覇軍星君】を倒した？」
星露「ん？……はっ!？」

……これは何か隠してるね。しかもあの会議でバラさない程だしね。

星露「な、何でもないのじゃ!」

シルヴィア「今更言い逃れは出来ないよ？素直に白状しなよ。」

星露「……いや、口止めされておるんでの。話す事は出来んのだ、いずれ知れ渡るから安心せい。」

シルヴィア「納得出来ないよ。しかも【覇軍星君】は君の1番弟子なんでしょ？それを倒すなんて只者じゃないよ？誰にも言わないから話してよー。」

星露「………本当じゃな？二言は無いぞ？もし破ったら、いかに世界の歌姫でも妾は容赦せんぞ？」

………すごい威圧、本気なんだ。

シルヴィア「……うん、約束する。」

星露「……分かった、なら話すのじゃ。ここから先を聴いた後に言い逃れなんぞ出来んからな？誰かに言おうものなら、妾が全力で潰すからの？」

シルヴィア「分かてるよ、だから抑えて。ここはお店の中だよ。」
星露「関係ない………と言いたいが、確かにそうじゃの。では話すぞ。一度しか言わんからの。」

そして私は話してる途中一切質問をしないと約束をして話を聞いた。

聞く限り、私には大いに心当たりのある人物だった。星露はエイトって呼んでいたけど、もう正体は分かっている。名前でも分かつ

ちやつたし。

星露「とまあこんなところじゃ。何か質問はあるかの？無いとは思
うが。」

シルヴィア「……それってさ、八幡くんの事だよね？星露？」

星露「っ!?なぜ知っておる!？」

シルヴィア「面識があるからだよ。最初に会ったのは2ヶ月前か
な。」

星露「最初からではないか!？」

シルヴィア「それよりも……本当なの？八幡くんが界龍の序列2
位って。」

星露「……うむ、もう隠す必要も無いのう。それ程前から面識があ
るなら、当然八幡の事情も知っておるのだろう?」

シルヴィア「……うん、聞いてて凄く辛かったよ。あんな目に
遭っていたと思うと、今回の見学は、八幡くんの事も考慮しないよね。
もし遭遇なんてしたら………」

星露「そうじゃの。」

その後私と星露は、見学の事について打ち合わせをしていた。星露
も八幡くんの事が大切なんだろう。

そして打ち合わせも終わる頃………

星露「さて、そろそろ行こうかの。」

シルヴィア「その前に星露、八幡君の料理が一流って言ってたけど、
本当なの?」

星露「そうなのじゃ!あやつを作る料理はまさに絶品じゃ!1度
作ってくれた青椒肉絲があるのじゃが、あれは断トツに美味かったの
じゃ!お主にも食べさせてやりたいのう。今日来るかえ?」

シルヴィア「そんなの八幡くんに悪いよ。確かに食べてみたいけ
ど、迷惑になるような事はしたくないよ。」

星露「心配するでない。あやつは時々とんでもない事を言うが、そ

れでも尽くしてくれる奴じゃぞ?」

シルヴィア「んー、それじゃあお願いしようかな。いい?」

星露「うむ!では、今晚来るといい。八幡に連絡しておくか。」

そう言うとき星露は通信端末を開いて連絡し始めた。八幡くんの手料理かあ……

八幡『何だ星露?もう会議は終わったのか?にしてもお前から寄越すなんて初めてだな。今晚の献立が気になんのか?』

星露「うむ、それなんじゃが……ちよいと待つとれ、すぐに済むからの。」

八幡『?』

星露「歌姫や、お主は今日何が食べたいのじゃ?言ってみよ。」
シルヴィア「そ、そんなのいいよ。八幡くんに任せるよ。」

星露「よいのじゃよいのじゃ。遠慮せんで言ってみよ、八幡が作ってくれるえ。」

シルヴィア「……ビーフシチューかな?」

割と簡単だしね。

星露「分かったのじゃ。八幡よ!」

八幡『終わったのか?それで?』

星露「妾はビーフシチューが食べたいのじゃ!会議でお主の事を聞かれそうになったのを何とか防いでやったのじゃ!それくらいはいじやる?」

多分私のことだね。会議では聞いてないけど、この場所で聞いたのは私だしね。

八幡『随分と恩着せがましい言い方だが、それについては感謝する。分かった、今日はビーフシチューにしよう。』

星露「うむ！では頼んだぞ！」

そして通信を切った。

星露「では歌姫や、八幡はいつも6時くらいに作るでな。5時半くらいに来るとよい。」

シルヴィア「私の事伝えなくてよかったの？その方が良かったんじゃない……」

星露「気にするでない。帰ったら多めに作るよう言っておく。」

んーなんか心配だなあ。八幡くんの分残ってなかったらどうしよう。

星露「しかし驚きじゃな。お主が八幡と知り合っていたとはのう。」
シルヴィア「ホントに偶然だけだね。」

星露「とにかく、忘れるでないぞ？今晚は界龍内の八幡の部屋で食事じゃ。その時に見学の事も少し話そうぞ。3人だけのの。」

シルヴィア「……うん、そうだね。八幡くんのいた高校から来るとなると、絶対八幡くん狙いなのは明確だからね。人数も10人くらい居るしね。」

星露「それにじゃ、比企谷の姓が中学の欄にあったからのう。きっと彼奴の妹じゃ。策に策を重ねた策が必要になる。その事も彼奴と話しておかねばのう。」

八幡くんに会わせはしない。八幡くんはもう会う気は無いって言ってたから。

彼の辛い顔なんて、もう見たくない。

私が守らなきゃ……

シルヴィア side out

八幡 side

八幡「なんで急にきたんだ？まあ、ビーフシチューくらい簡単だから良いけどよ……それにしても、あいつよくビーフシチューなんて知ってたな。中華以外知らないと思ってたのに。」

八幡は無駄なところで敏感である。

お夕飯と会議

星露 side

こうして話すのは初めてではないかえ？妾は茫星露じゃ。【万有天羅】の名を持つ者じゃ。よろしく頼むぞ。

さて、主らも分かっていると思うが、今日は妾と八幡と歌姫殿の3人で夕飯じゃ。珍しき顔合わせじゃがいいじやろ。今日は貸切にすると前々から彼奴らにも言っているからもう、好きに食べられるのじゃ！

それに多めに作ることも言ってくれたしのおう！早く食事がしたいのう！

まあ、もうすぐ6時なんじやがな。歌姫殿はまだ着かんのかのう。妾1人で食ってしまうぞ？（実際やりかねない。）

シルヴィア「ゴメンね。待ったかな？」

おお、やはり化けておったか。民衆の前では目立つからのう。歌姫殿なら当たり前じゃな。

星露「やつと来たかえ、中に入るがよい。妾の部屋で少し話でもしようぞ。」

シルヴィア「八幡くんの所に行かないの？もしかして知らせてない？」

星露「うむ。そっちの方が驚くであろう？それに、主もどつきり？というものは、好きじやろう？」

シルヴィア「嫌いじやないけど、何を言われても私知らないからね？」

星露「ほっほー、八幡は優しいからのう、大丈夫じゃて。」

シルヴィア「その自信は何処から来るのさ。まあ、いいけどさ。」

星露 side out
シルヴィア side

――黄辰殿――

シルヴィア「それで八幡くんが……」

星露「ほほう？そうじゃったか。」

ガールズトークをしている最中、通信が入ってきた。多分八幡くんだね。

星露「八幡かえ？」

八幡『ああ、出来たぞ。ていうかお前が外で待つなんて、今までにない事だな。』

星露「なに、内で待つのと外で待つのでは違うと思ってやってみただけじゃ。」

八幡『で？どうだ？』

星露「あんまり変わらんのう。」

八幡『じゃあさっさと来い。さもねえと俺が全部食うからな。』

星露「何!?待っておれ!まだ食うでないぞ!今そつちに向かうからのっ!!」

そして直ぐに通信を切った。なんか必死過ぎない星露？

星露「歌姫殿やつ!早く八幡の部屋へ行くぞいつ!さもなくば今晚の食事が抜きになってしまうぞい!!」

シルヴィア「……流石にないと思うけど、まあ早いに越した事はないしって早っ!?ちよつと待ってよ星露ー!!」

星露「つ、着いたのじゃ。」

シルヴィア「は、速いよ星露………こんなに速く来る必要があるの？さっきいたところから此処まで30秒しか経ってないよ？」

星露「何を言うか!?あの八幡が全部食べるといったのじゃぞ!!一大事じゃ!何としても止めねばならんじゃろ!!」

戦鬨狂の星露を此処まで夢中にさせるなんて………八幡くん、一体どんな料理を食べさせたのさ?

星露「八幡っ!!もう食べてはいないじゃろうな!そうであつたら、妾は許さんぞっ!」

八幡「食ってねえよ。」

シルヴィア「え、えーっと、お邪魔します。今晚は八幡くん。」

八幡「あ?………シルヴィ?」

うん、驚くよね。

星露「今日は歌姫殿を呼んだのじゃ!お主の料理を食ってみたと言つてのう。お主、顔馴染みらしいのお。呼んでも構わなかったじゃろ八幡?」

シルヴィア「えっと………迷惑かな?」

八幡「そんな事はないが、なんで言ってくれなかったんだよ。そし

たらもつと美味しいシチュー作ってたのによ……」

星露「なんじゃと!？」

シルヴィア「ううん、作ってくれただけでもありがたいよ。」

それと星露……君はさつきから叫び過ぎだよ。

八幡「だからビーフシチューだったり、他の奴らが来ないんだな。なんせこんな所に【戦律の魔女^{シグルドリーヴァ}】がいるんだもん。他の奴らが来ないのは、お前の仕業だろ星露？なんでこんな事を？」

星露「ちいと話したい事があつてのう。お主の事を知っておるこの3人だけでじゃ。」

八幡「言ったら他の奴も協力してくれそうだがな？ダメなのか？」

星露「細かい事情まで知っておるのはそういないじやろ？あくまでもこの3人じゃ。」

シルヴィア「それで私も来たんだ。今日の六花園会議の事を八幡くんにも、知ってもらう必要があるそうだし。」

八幡「……分かった、おいそれとは話せないものらしいな。飯を食い終わった後にでも話そう。それでいいな？」

星露「そうしてほしーのじゃ……妾、早く食べたいのじゃ……」

シルヴィア「……こんな感じなの？」

八幡「ああ、来たらまず、座りながらこうやっていつも嘆いてる。」

シルヴィア「そ、そっか。」

八幡「まあ、シルヴィも座つとけ。今鍋持ってきて盛りつけすつからよ。」

シルヴィア「うん、ありがとう。」

………こうやって見ると、八幡くんって何でも出来るイメージがあるな。手際が凄く良い……旦那さんみたいだな………っ!?だ、旦那さん!?も、もしそうだったら私が、お、お嫁さん………なのかな？

シルヴィア「………／／／／／」 シュウゝ

星露「早く食べたいの、のう？歌姫殿もそう……ってどうしたのじゃ？」

シルヴィア「な、なんでもない／＼／＼」

八幡「鍋持つてくから氣いつけるよ。」

そして八幡くんが盛りつけをやり終わると、いただきますと言った。何でも日本の食事前の挨拶みたい。私も挨拶してから一口。味はとっても美味しかった。星露が毎日通ってるって言ってたけど、これは私も毎日来たいかな。その時は私も何か作って来ようかな？

シルヴィア side out

八幡 side

シルヴィア「ご馳走様でした。」

星露「馳走になったのじゃ。」

八幡「お粗末様でした。」

シルヴィア「すごく美味しかったよ。うん、確かにこれは毎日来たくなるのも分かる気がするよ。私も仕事の後、ここに来ようかな。来ちゃうかも♪」

星露「そう思うじやろ？なのに八幡は作る日を制限してもうてな、何故じゃ？」

八幡「お前らが毎日来るせいで食費がヤバいんだよ。お陰でスーパ－の常連になっちまった。割引してくれるからいいけどよ、それでも洒落にならないんだよ。」

実際、遊びに行く金も残らねえからな。最初から決めとくんだったな。

シルヴィア「それなら私も払おうか？」

八幡「いや、お前の綺麗なお金は受け取れない。取るなら汚れ切った此奴らから搾り取るか、もう作らないまである。」

星露「頼むからそれはやめて欲しいのじゃー！報奨金の額を増やすからやめて欲しいのじゃー！冗談でも言うでない！」

いや、割と本気なんだけどな。それに増えりやいいって問題でもねえけどな。

八幡「まあそれはいいとして……星露、会議でなんかあったのか？その事で話があるって言ってただろ？」

星露「……うむ、今後もし晩御飯は作ってくれるのじゃろうな？」

八幡「分かったから話せ。」

星露「では話すぞ。今回の議題の中で六学園入学・転入希望者の見学があつたのじゃが、その名簿の中にお主の元高校の生徒たちが載っているのう。その対策じゃ。」

八幡「……」

シルヴィア「私と星露は、八幡くんの事情を知ってるから彼らには会わせたくないんだ。八幡くんも会いたくないでしょ？」

八幡「……ああ。」

星露「妾が見つけたのは、材木座義輝、戸塚彩加、戸部翔、葉山隼人、海老名姫菜、川崎沙希、由比ヶ浜結衣、雪ノ下雪乃じゃ。それと、中学欄に比企谷小町という者がおつたわ。この中の材木座、戸部、海老名、比企谷が非星脈世代じゃったわ。」

まさかこんなにいるとはな……それに小町もか。そういやあいつの名字って川崎だったつけ？まあいいや。

シルヴィア「どう？八幡くん？」

八幡「全員知ってる。その中のある4人には、絶対会いたくないな。」

シルヴィア「……もしかして、妹さんも入ってるの？」

八幡「ああ……妹とはいえ、あの時から絶縁したと言っても過言じゃないからな。懐かしくは感じるがそれだけだ。」

シルヴィア「……………そっか。」

星露「それで八幡よ、残りの3人は誰じゃ？妾の見立てでは、この金髪が怪しいが……」

八幡「ああ、そいつもその1人だ。残りの2人は、由比ヶ浜と雪ノ下だ。」

星露「そうか……此奴らと分かれば対策も取りやすいの。何気に目立つしの。」

それから俺たちは、当日どういう風にやり過ごすかを話し合っていた。

その結果がこうだ。

1日目…ドームの中で試合観戦。こっちの方が安全だからだ。案内してるだろうし。

2日目…学院の中にいる。一応学園の中は立ち入り規制があるからな。

3日目…シルヴィの控え室で観戦。だって俺も決勝くらい見たいもん！

シルヴィア「うん、大体こんな感じかな？どう？いい感じじゃない？」

星露「うむ、確かにこれならやり過ごせるのう。八幡はどうじゃ？」

八幡「ああ、文句ない。ていうか文句出来るような立場じゃないかな。それに、いざとなれば変装出来るしな。それでなんとかやり過ごす。」

星露「ほう？そんな能力もあつたのか、お主らしく多彩じゃのう。」
シルヴィア「それじゃあ、当日はこれでいこうか！八幡くん、何かあつたら連絡してね？私も出来る限り何かするから。」

八幡「お前は選手だろ？あまり負担はかけられない。星露にでも言っとく。」

星露「それがよいじゃろ。気負い過ぎては勝てる試合も負けてしまふぞ？歌姫や。主は主の最善を尽くすのじゃ。」

シルヴィア「……………うん。」

さて、これで対策は決まったな。

八幡「さて、そろそろ帰った方がいいだろ。シルヴィ、学園まで送る。」

シルヴィア「え？大丈夫だよ。」

八幡「夜中は危ない、女の子1人で返すわけにはいかねえだろ。」

シルヴィア「じゃ、じゃあ。」

八幡「星露、そういうわけだからちよつと行ってくるな。」

星露「うむ。」

八幡「よし、行くぞ。」

シルヴィア「えつと、ここ窓だよ？」

八幡「微睡め、伽耶梟^{かやふくろう}。」

すると、窓の側に巨大な梟が現れた。

普通の10倍くらいはある大きさだった。

シルヴィア「お、大きい……………」

八幡「ほれ、早く乗れ。落ちても此奴が途中で捕まえるから安心して。」

シルヴィア「全然安心出来ないよ。」

そう言いつつも、フクロウに乗るシルヴィ。ふむ、大丈夫そうだな。

八幡「よつと、じゃあ頼むぞ伽耶梟。」

そう言うのと伽耶梟は羽ばたき、クインヴェールの方へと向かった。

一本の電話と優しさ

――とある人の部屋――

八幡がシルヴィアを送ってから1時間後の話。八幡は帰ってきてるが、手料理を食べ損ねたある人物が愚痴をこぼしていた。

陽乃「あゝもうっ！星露つてば八幡くんを独り占めしちゃってさ！私も八幡くんの手料理食べたかったのに！今日は折角、八幡くんと夫婦っぽく料理のお手伝いしようと思ってたのに！……あゝあ、良いなあ星露はあゝ。」

陽乃 s i d e

本当にもうっ！何さ大事な話があるから今日は八幡と2人にしてくれて！私だって力になれるかもしれないってのに。

♪♪♪

ん？携帯から？お母さんかな？けど普通なら端末で連絡が来るはずだけど……

着信中　雪乃ちゃん

……雪乃ちゃん？あの子が私に電話なんてどうしちゃったのかな？八幡くんが居なくなっただけで頭おかしくなったかな？
まっ、出るけどね。

私はそのまま応答の方をタップしてから、耳に端末をあてた。

陽乃「はいもしもし？雪乃ちゃん？」

雪乃『……姉さん、少しいかしら？』

相変わらずだなあ。でも、私はもう協力するつもりなんてないけどね。

まあ、話くらいは聞いてあげるか。

陽乃「なにになに？雪乃ちゃんから相談なんて珍しいからお姉ちゃん張り切っちゃうよ。それで、どうしたの？」

雪乃『私……だけではないのだけれど、○日から学校見学で六花に行く事になったの。』

陽乃「へえ、雪乃ちゃん六花に来るんだ？それで私に六花の案内を頼みたいのかな？」

雪乃『ええ、そうよ。お願いできるかしら？』

陽乃「勿論いいよっ！……って言いたい所なんだけど、私も《^{リンドブルス}王竜星武祭》が気になるのよね。どうしよっかな。」

雪乃『……嫌ならいいわ。それと1つ聞きたい事があるのだけれどいいかしら？』

陽乃「ん？何？」

雪乃『比企谷くんを六花で見なかったかしら？そこに行っただけと思うのだけれど？』

やっぱり八幡くん狙いか……そんな理由だと思ったよ。そうじゃなきゃ健気にこんな所来るはずがないからね。雪乃ちゃんはホントに変わらないな！。

ホント……つまんない。

陽乃「比企谷くん？なんで？」

雪乃『総武高校を転校したのよ。六花のメモがあったからそこに居るかと思っただけけれど、どうなのかしら？』

陽乃「その前に聞いていい？比企谷くんに会ってどうするの？多分だけど、雪乃ちゃん達に嫌気がさしたから転校したんじゃないの？まあ、どうでもいいけどね。」

雪乃『そんな訳ないじゃない。何故彼が私たちを嫌わなければいけないのかしら？理由がないわ。それよりも姉さん、質問に答えてちょうだい。比企谷くんは六花^{そっち}に居るの？居ないの？』

……見下げ果てたよ雪乃ちゃん。自分にも理由があるとは思わないのかな？聞いていて本当に憐れだよ。

陽乃「居たら私がほつとくわけないじゃん。それと比企谷くんは見えないけど？」

雪乃『……そう、まあいいわ。そっちに居ることは確実なのだし、知らなくても私たちで探すだけよ。』

陽乃「じゃあ見学に来るのは雪乃ちゃんだけじゃないの？他にもいるわけ？」

雪乃『ええ、うちの高校からは8人行くわ。中学から小町さんも。』

まさか全員八幡くん狙い？もしそうだとしたらマズいかな。こんなにいるんじや八幡くんが身動き取れない。何としても会わせるのを阻止させなきゃね。

陽乃「随分多いね？学校を見学するにしては多過ぎないかな？」

雪乃『全員六花に転校希望だもの、当たり前じゃない。』

陽乃「ふうん……話はそれだけ？もつと面白い話とかないの？」

雪乃『そんな話をしに電話をしたわけじゃないわ。からかわないで。』

陽乃「冗談も分からないなんて、雪乃ちゃんはホントに変わらないねー。だから比企谷くんは転校したんじゃない？」

雪乃『うるさいわね。ゴキブリ谷くんのメンタルが弱かっただけの事よ。私たちが理由なわけじゃないじゃない。姉さんこそ、そんな冗談はやめて欲しいわ。』

うん、雪乃ちゃん。もう黙ってくれないかな？私もかなり頭にきてるから。これ以上八幡くんをバカにしたら、どうにかなっちゃいそうだよ。

それに比企谷くんがゴキブリなら、雪乃ちゃんはそれ以下のウジ虫だよ。

雪乃『どうかしたのかしら？急に黙り込んで……用事でもあるのかしら？』

陽乃「……………ううん、別に何もないよ。案内の件だけどさ、考えさせて。今の私ちよつとまともに考えられそうにないから、じゃ。」

雪乃『ちよつ、ねえ』

.....

はあ、こんなに苛立ったのはいつ振りかなあ？雪乃ちゃん、一体何様のつもりなのかな？誰がここまで八幡くんを追い込んだと思ってるの？

これは星露に相談かな？勿論、八幡くんにもね。

――黄辰殿――

陽乃「……ねえ星露？今いいかな？」

星露「ん？なんじ……どうしたのじゃ？殺気立ちおって。妾が夕食を独り占めしたのを許せないのかのう？」

陽乃「それはもういいからさ、私から報告があるの。出来れば八幡くんも一緒に聞いてほしいって思ってるんだけど、いい？」

星露「……有無を言っておる場合じゃないようじゃの。分かった、今八幡を呼ぶ。」

そして、連絡を入れてから3分くらいで八幡くんは黄辰殿に入ってきた。

八幡「雪ノ下さん、急かすようですが話ってなんですか？」

陽乃「うん、早速話すね。」

私は妹と話した内容をそのまま全部2人に話した。すると星露は
.....

星露「……………何じゃ？その無礼な者は？本当にお主の妹か？陽乃よ？いつそ妾が潰してくれようか？」

陽乃「そうして欲しいよ。聞いてて私も腹が立ったよ、ホントに。六花に来たら歩けなくなるまで痛めつけてあげようかな？」

八幡「落ち着いて下さい。貴女にはそんな事してほしくない。」

陽乃「分かてるよ。星露も八幡くんとこの事を話してたんでしょ？」

そうでなきや2人でなんてありえないからね。一応星露は賑やかな方が好きだし。

星露「陽乃には隠す必要はないのう。実はクインヴェールの歌姫殿と協力体制になっておつてな。八幡を彼奴らに会わせんように、対策を練っておつたんじゃ。」

陽乃「【シングルドリーヴァ戦律の魔女】が？」

星露「うむ、面識があつたようでの。あつちから協力しようと言ってきたようなものじゃ。妾もそれには賛成じゃつたからありがたかつたがのう。」

陽乃「そつか……でも、それじゃあ直ぐにバレるよ。最低でもこの学院の生徒全員には言っておかないと、何処で情報が漏れるか分からないし、何せこの学院では八幡くんの事を知らない人なんていないんだから。」

星露「むっ！確かにそうじゃな、盲点じゃつた。自分たちの事だけじゃつたわい。確かに妾たちだけでやつても意味が無いのう。」

陽乃「ここは生徒にも呼びかけるべきだよ。見学に来てる生徒には一切情報を漏らさないように、っとか。」

これなら大丈夫かな。少なくとも、この計画の穴はこれくらいだったし。

星露「あの場にはお主も呼んでおいた方がよかったのう。妾たちの練った計画にこんな落とし穴があつたとは………思わぬところで台無しになるところじゃつたわい、すまぬな。」

八幡「俺からもありがとうございます。」

陽乃「気にしないで。でも、私もこれで確信したよ、雪乃ちゃんはまだ敵だってね。」

星露「お主も妹を敵視するか。八幡も妹と決別したばかりじゃというのに。」

陽乃「八幡くんも？」

八幡「ええ。俺はもう、あっち側の奴らとは関わる気なんてありませんよ。勿論そうでない奴もいますが、態度次第ですね。あつ、雪ノ下さんはノーカンですから。」

陽乃「八幡くん……」

星露「うむ、ならば善は急げじゃ。明日、教師陣にはそう伝えておこう。見学中の生徒には一切の情報漏洩を禁ずると。」

陽乃「うん、お願いね。」

八幡「頼むぞ。」

よしっ！良い感じにまとまったね！

星露「2人も戻るがよい。妾も今日は頭を使い過ぎた。もう寝るとしよう。」

星露はそう言うと、奥の方へと行ってしまった。多分自室かな？さて、私も行こうかな。

陽乃「八幡くん、途中まで一緒にどう？」

八幡「いいですよ。」

そして私たちは、並びながら歩いていた。なんかこうして2人でいるのは久し振りだな。2ヶ月前の案内以来かな？

八幡「本当にありがとうございます、雪ノ下さん。助かりました。」
陽乃「いいよ気にしないで。私も好きでやったことだしね。八幡く

んに対するせめてもの償いだよ。」

八幡「まだ気にしてたんですか？」

そりや気にするよ。もうする気はこれっぽっちも無いけど。

陽乃「まあね……今でも後悔してるよ。何であんなことしたんだろうって。」

すると、八幡くんが急に止まりだした。

八幡「……………後悔先に立たず、ですよ。」

陽乃「え？」

八幡「過去を後悔しても仕方ありません。今は前を向きましょう。それに、俺はあの時の事はもう後悔してませんよ。あの文化祭であの出来事があったから、此処にいるんですから。考え方を変えてみたら、案外良い方向に向かっていると捉えられるものですよ。」

陽乃「……………八幡くんは優しいね。こんな私にそんな事言うなんて。」

八幡「もうすっかりつまない男になっちゃいましたけどね。」

陽乃「うん、そうだね。でも……………私は今の八幡くんの方が好きだな。」

八幡「……………どうも。」

陽乃「うん。」

いつの間にか私の気持ちは晴れやかなものになっていた。八幡くんは本当に変わったね。すごくいい顔になってる。

八幡「……………じゃ、そろそろ行きましょうか。陽乃さん。」

陽乃「うん、そうだね……………って今、私の名前……………」

八幡「貴方がいつまで経っても、呼んでと言ってくれないものですから、俺が勝手に呼ぶことにしたんですよ。嫌ですか？」

陽乃「…………もう、君は本当にズルい男の子だなあ。嫌なわけないよ。」ニコッ

嫌なわけないじゃない。それだけでこんなにも嬉しいんだから。

彼らの感情

シルヴィア side

相手「う……………うあ……………」

『バッジブロックン
校章破壊』
『End Of Duel』
エント オブ デュエル

梁瀬『試合終了く!!勝者、シルヴィア・リユーネハイムウく!!これまた余裕の準々決勝突破!前回の《王竜星武祭》^{リンドブルス}同様、期待出来ますねく!』

チャム『予選の試合を見てても、明らかにレベルアップしてるツス。動きの柔軟さや技のキレも、3年前とは比べものにならないツスね。これは期待ツス。』

こんな所で負けてられないよつ!今年は何としても優勝しなくちやならないんだから!彼女にもリベンジしたいし、

八幡くんに告白する為にも、こんな所で躓いてなんていられないよ！

さて、早くしないと！一応、時間には間に合いそうだし余裕持つて行きたいしね。

――控え室――

シルヴィア「……………ふう、動いた後のシャワーってやっぱり気持ち良いなあ。つと、今はそんなに長居は出来ないから、ぱっぱと終わらせなきゃ。」

八幡くんは今日1日ドームに居るから問題無いとして、明日と明後日だね。総武高校？だったかな？その子達がどんな行動をとるか分からないから慎重にいかなきゃ。今日も出来るだけ観察しておきたいし。

どの道次の相手は前回と同じだから勝てるとして、決勝は側に居られないから今日がチャンスだしね。

シルヴィア「おっと！考え過ぎちゃった。もう行かなきゃっ！」

見学もあるから、今日はちよつと大忙しだねっ！

シルヴィア side out

――――

――六花行き船内――

この船は六花の進学・転入希望者を乗せた六花行きの飛行機であ

る。

戸塚「ここに八幡が居るのかあ。そういえば皆は、どこの学園にするか決めたの？」

結衣「私は星導館だよ。なんかヒッキーここに居そうだしね。」

雪乃「そうね、私も由比ヶ浜さんと同じよ。他のは比企谷くんに合っていないわ。」

戸塚「言われてみたらそうかも。川崎さんや材木座君は？」

材木座「うむ、我はレヴオルフに行こうと思ってる。意外と八幡はこういうところにもいそうだからな。」

結衣「えー!?ないよー!」

雪乃「余計に悪目立ちするだけじゃない。ただでさえ目が腐ってるのだから。」

材木座「……………」

戸塚「えつと……川崎さんは？」

沙希「あたしは界龍。一応空手やってたからそっちの方が合うしね。」

小町「あつ、小町は星導館です！やっぱ兄が行くといったらここくらいなので。」

戸塚「そつかあ、僕も星導館なんだ。それよりも、八幡……いるといいな。」

沙希「そうだね。」

材木座「そうであるな。」

結衣「ホントだよ！見つけたら何で転校したのか問い詰めてやるしっ!」

雪乃「そうね。私たちに黙って何処かへ行くなんて本当にどうかしてるわ。」

小町「こんな可愛い妹を放って行くなんて、超ポイント低いから!」
3人「……………」

沙希「ねえあんたら。多分同じ事思ってると思うけど、由比ヶ浜たち……明らかに目的が変わってる。」

戸塚「うん、僕も感じたよ。前まで謝る事に決めていたのに、いつの間にか変な方向に変わってるよね。雪ノ下さんたち。」

材木座「うむ、探すのも目的ではあるが、別に問い正そうとは我は思ってる。」

戸塚「やっぱりあれが原因かな？」

沙希「そうでもなきやこんな風にはならないと思う。でも、容易には聞けないし。」

材木座「少し様子を伺いながらって所が妥当かもしれんな。」

戸塚「そうだね。」

この3人は八幡に対し嫌悪感はなく、むしろその逆で謝罪したい気持ちだったのだ。

一方で奉仕部2人と小町は、罪悪感は一切無いに等しく、彼を問い詰めることしか頭になかった。何故こうなったかはまだ触れるべきではないだろう。

そして、此处にもう1人いた。

葉山「……………」

葉山（比企谷……君のせいで俺は学校で立場を無くして、親からも酷い目に合った。この痛みは倍にして返してやるから覚悟しておくんだな。）

葉山は怒りの念を抱いていた。それも逆恨みという形で。

戸部「結衣が言うにはここにヒキタニ君がいるらしいじゃん？会ったら謝ろうって、俺思ってたんだけどさ、海老名さんはどう思ってる？」
海老名「うん、私もそうしようと思ってる。私たちにも責任あるしね。」

この2人は修学旅行の事で、彼に罪悪感を抱いている。この2人からしてみればこれしか浮かばないのであろう。

だが、彼らはまだ知らない。

比企谷八幡はもう見向きもしていないという事を。

—————

八幡 side

……こうやって見てると、色んな戦術があって面白いな。俺のは影が幻、陰陽術が基本だからな。この戦い方ってのが普通なんだろうが、新鮮に感じるな。

シルヴィの試合も見たが、^{ストレガ}魔女だけあって良い戦い方すんだな。戦ってる時でも歌うのか。

確か歌を媒介にしてんだよな。いつでもどこでも歌姫様じゃねえかよ……

八幡「見る分にはいいが、何も朝から居なくてもいいと思うがな。」

なんか退屈だな、準決勝か決勝くらいになんねーと盛り上がんねーな。

始まり、六花見学会

星露 side

……はあ、やはりこの日は苦手じゃ。希望者は必ず妾を子供扱いする。星武祭の表彰式ではアレマが出ておるが、彼奴は口が効かんからう。仕方のない事じゃが、これは妾が出るしかないのじゃ。

今回は別の理由もあるしの。

クローディア「今年はどんな子たちが来るんでしょうか？楽しみですね。」

アーネスト「そうだね。去年はミス雪ノ下が来たけど、今年もミス雪ノ下がいるからね。素質は充分あると思うよ。」

クローディア「そうだといいですね。」

デイルク「……………」

州馬「機械好きな方はいるでしょうか？」

歌姫殿はまだこんのか？代理が居ぬということとはこっちには来るんじゃないが……

シルヴィア「ゴメンねー、遅くなっちゃったー。間に合ったかな？」
アーネスト「うん、まだ到着はしてないよ。それよりも、準決勝進出おめでとう。」

クローディア「流石ですね。まあ、当然と言えば当然ですが。」
シルヴィア「ありがとう。」

どうやら大丈夫そうじゃの。それよりも、彼奴とは少し話さねばのう。これを逃したら、最低でも夜しかチャンスはないからのう。

星露「歌姫殿、少しいいかえ？」
シルヴィア「うん、いいよ。」

星露「歌姫殿よ、もしお主のところに1人もいなかったらどうするのじゃ？返って何も出来ずに終わってしまうが。」

シルヴィア「それなら諦めるしかないかな。残念だけど、あの中にクインヴェールを希望してそうな子は居なさそうだしね。どの子も八幡くんがお目当てだろうから。」

星露「……うむ、そうじゃの。1人くらいは捕まればいいのじゃが、そう簡単にはいきそうにはないのう。」

むしろ界龍に向いてそんな奴など、実際に見ない限り分らんからのう。

アーネスト「2人共、何をしてるんだい？」

星露「【^{せい}聖騎士】殿、無粋な事をするでない。乙女の会話じゃぞ？」

アーネスト「それは失礼。けど、もう来てしまったからね。話してる時間はもうないよ？」

シルヴィア「そつか、ありがとう。じゃあ星露、夜に連絡するね。」
星露「うむ。」

時間か。さて、どんな者たちかよく観察せねばのう。

星露 side out

—————

空港から見学する生徒たちが一斉に出てきた。50人くらいだろうか。例年に比べると少し多い方だった。

アーネスト「ようこそ、^{アスタリスク}六花へ。歓迎するよ。まずはこちら側の自己紹介をさせてもらうよ。僕は聖ガロードワース学園の生徒会長を務めている、アーネスト・フェアクロフだよ。3日間よろしく頼むよ。」

星露「界龍第七学院生徒会長、茫星露じゃ。よろしく頼むぞお主

ら。」

州馬「アルルカント・アカデミー生徒会長、左近です。よろしくお願ひします。」

デイルク「…………レヴォルフ黒学院生徒会長、デイルク・エーベルヴァインだ。慣れ合う気はない。」

シルヴィア「クインヴェール女学園生徒会長のシルヴィア・リユーネハイムです。皆さん、よろしくお願ひします。」

クローディア「最後に私は星導館学園生徒会長、クローディア・エンフィールドと申します。この度は六花見学会に参加して頂き、誠にありがとうございます。」

見学者からは拍手が送られ、少ししてからアーネストが止めた。

アーネスト「さて、皆さんも知つてると思うけど、1日目が僕たち生徒会長との学校案内。2日目に自由行動。3日目に今年の《王竜星武祭》リンドブルスの決勝を観戦して終了だよ。今回の見学を有意義に使つてほしい。」

アーネスト「じゃあ早速見学に移ろうか。長い方が見学も楽しめるしね。それじゃあ皆それぞれ希望する学園に分かれていいよ。集まつたら各会長は出発して構わないよ。」

アーネストの計画的な動きにより、すぐに行動に移すことが出来た。

1番多いのはやはり名門、ガラードワースだった。男女問わず人気で順位も上位のため、六花内の人気もある。

1番少ないのはレヴォルフだった。不良学園だけあり、人気も底辺である。

星露「よく集まつてくれた。改めて茫星露じゃ。妾の学院を希望してくれたことに感謝するぞ。早速行くとするかえ。」

この時星露は見逃していなかった。見学者の中に青髪の生徒がいた事に。

シルヴィア（こっちは白かあ。星露の方は1人居たみたいだし、そこに賭けるしかないか。それにほとんどが星導館だったなあ。）

――――

星露 side

1人居るのう。それだけでもよしとするか。さて、まだ安心は出来ん。案内するといつても、その中で八幡の事を絶対言わない者が居るとも限らんしのう。

星露「着いたえ。此処が妾の学院、界龍第七学院じゃ。六花の中では一番の大ききじゃぞ。では中に入ろうぞ。」

生徒1「あの……1つ聞いていいですか？」

星露「大体予想はついておるが、一応聞いておこう。なんじゃ？」

生徒1「会長さんは……小学生なんですか？身長から見てそうしか……」

星露「……そうじゃ。これは毎年言われることなんじゃが、やはり今年もか。」

生徒1「あ……すいません。」

星露「気にするでない。もう慣れてしもうたからのう。」

すっかり気まずい雰囲気になってしまった。するとそこへ……

虎峰「師父、見学の方たちですか？」

偶然か、虎峰が通りかかった。

星露「おお、虎峰。ちょうど界龍こりゅうに入ったところじゃ。ほれ、お前

も挨拶せんか。」

虎峰「は、はいっ！申し遅れました。私、界龍第七学院高等部1年、趙虎峰と申します。当校の序列6位です。」

星露「うむ。ところでそっちの準備はもう終わっとるのか？」

虎峰「はい、いつでも大丈夫です。」

星露「そうか、では行こうぞ。」

そうしてまた、星露は歩き出した。

それぞれの反応

沙希 side

あたしは今、界龍の朱雀の間という道場にいる。周りには何人か此処の生徒が居て、真ん中に居る2人が組手をして戦っていた。多分この言い方でいう拳士チエンシーだね。

星露「主らもやってみんか？良い肩慣らしにはなと思うぞ？相手は主らの中から好きに選んでやってみるとよい。この生徒とやつても経験の差で相手にならんからのう。」

そうして皆相談し合って決めていたけど、私は別にやる気はない。ここに来たのは戦いのためじゃなくて、あくまでも見学と比企谷を探すためだしね。

星露「そうじゃのう、その青髪の女子おなごよ。どうじゃ？妾と一つ。」

沙希「え？あたし？」

星露「うむ、主からは何処か雰囲気を感じるぞ。上手くは言えんな。」

沙希「まあ……空手ならやってみましたけど……」

星露「そうか、なれば……」

虎峰「お、お待ち下さい師父！」

突然、オレンジの髪の女？が割って出てきた。あたしとしては助かったけど……

星露「なんじゃ虎峰？」

星露が気怠げに言う……

虎峰「わざわざ師父が相手をしなくても……此処には序列外の者も

おりますし。」

星露「直に交えんと分かん事もあるのじゃぞ？ 妾はそれが知りた
いだけじゃ。それとも妾に口答えするか？」

虎峰「……申し訳ございません。」

ダメだった……ていうかあの子ってそんなに強いのか？

星露「では手合わせ頼むぞ。」

沙希「は、はい……」

そして周りに防護障壁が張られ、
手合わせが始まった。

一応やってはみたが、攻撃なんて当たらなかった。会長さんは攻撃
すらしてこないし、かなり手加減されてた。

星露「ふむ……お主誰か人探しをしておらんか？ 拳からそのような
気を感じたぞい。どうじゃ？」

沙希「!?なんで……」

星露「その様子は当たりのようじゃの。(まあ事前調査をしておつたからなんじやが。)」

沙希「……比企谷八幡って聞いた事ないですか？その人の名前です。」

星露「ふむ……聞いた事がないのう。虎峰、お主はどうじゃ？」

虎峰「僕も聞いたことありませんね。失礼ですが、見つけてどうするのですか？」

沙希「……謝りたいんです。あたしの今いる学校である出来事があつたんですけど、その事に気づかずにご迷惑をしておりました。許してくれるとは思ってませんけど。」

星露「……そうか、辛い事を思い出させたの。ウチの虎峰が済まなかった。」

虎峰「ぼ、僕ですか!? い、いえ、聞いたのは僕ですしね。すみませんでした。」

沙希「い、いえ……気にしないで下さい。」

星露(この者、どうやら本気みたいじゃのう。此奴ならば問題あるまい。)

星露「さ、次は誰じゃ？ 続けい。」

会長さんがそう言うのと、次の組が出てきて組手を始めた。比企谷、此処に居てくれたらいいな。

沙希 side out

材木座 side

この会長殿、さつきから何も喋らんではないか。周りの者たちも雰囲気怖すぎ……はっ! いかんいかんっ!

デイルク「テメエらに案内する場所なんてねえ、好きに回りやがれ。」

怪我しても俺は責任なんて取らねえからな。」

な、なんと無責任な………そうだ！会長殿に聞きたい事を聞かねばな！他の者たちは居らぬ。今が一世一代のチャンスッ！！

材木座「会長殿！」

デイルク「あ？」

ひいっ！やっぱり怖い！

材木座「こ、ここに比企谷八幡という男子生徒は居ないだろうか！」
デイルク「あ？何だそのダセエ名前の男は？んな奴知らねえよ。」
材木座「そ、そうであるか……」

ここにはおらんんだか。どこに居るのだ八幡よ。我がこんなに探してるというのに。

デイルク「分かったらとつとと失せろ、目障りだ。好きに回ってこいってんだよ。」

……本当に此処は学校なのだろうか？

材木座 side out

戸塚 side

クローディア「ですのでこのー」

今、僕たちは星導館の純星煌式武装の選定室に来ている。クローディアさんの説明はすぐ分かりやすくて、純星煌式武装が如何に凄くて危険な物かが充分に伝わった。

クロードディア「説明は以上です。皆さん、何か質問はございませんか？」

生徒「えーと、会長は純星煌式武装持ってるんですか？」

クロードディア「ええ、持っていますよ。パンⅡドラという未来視の能力を持つ双剣です。ですが、この子の代償は悪夢…自身が死ぬ夢を見せられることです。私としてもこの子は性格ド最悪なので、私から奪い取ろうなんて考えない方がいいですよ？」

……想像以上の対価だよ。自分が死ぬ夢を見せられるなんて。よく耐えられるなあ。僕じゃ無理だよ。

クロードディア「さて、質問はありませんね？では、自由に回って結構ですよ。それから、純星煌式武装には絶対に触らないで下さいね。危ないですから。」

そして皆が散り散りになって見学を始めた。見学する前にクロードディアさんに聞いておかなきゃね。

戸塚「クロードディアさん、ちよつと質問があるんですけど、いいですか？」

クロードディア「はい、なんなりと。」

戸塚「この学園に比企谷八幡っていう名前の生徒はいませんか？ここに限らず、この六学園の中でも構わないので。」

クロードディア「……聞いた事がない名前ですね。入学であればその記録があるのですが、生憎この学校には来てませんので。他の学園にもそのような情報がないので、おそらくは居ないかと。」

戸塚「………そうですか。」

此処にはいないのか……じゃあハズレだね。材木座くんや川崎さんの結果を待つしかないか。此処だと思ったんだけどな。

雪乃「どうやら、この学園には居ないみたいね。何処にいったのかしら？あの行方不明くんは。」

結衣「ゆきのん、くろろんが隠してるとかは？あり得そうじゃない？」

雪乃「いえ、あの人にそんな感じはなかったわ。エンフィールドさんの言ってることは事実と受け取ってもいいわ。」

小町「じゃあこの学園以外ならいるかもですね！ホテルに行ったら、中二さんと沙希さんに聞かなきゃですね！」

結衣「うん！そうだね！」

戸部「うーん居ないっぽくね？どう思う海老名さん？」

海老名「此処には居ないかもだけど、他の学園で男同士と激しくまぐわってたりして……キマシタワー!!」ブシャーアア

戸部「え、海老名さーん!？」

戸塚「あ、あはは……」

戸塚 side out

葉山 side

アーネスト「だから此処での決闘は禁止されているんだ。序列を上げるには、公式序列戦しか上げる方法はないことになるね。質問はあるかな？」

うん、俺にピッタリの学園だね、ここは。それにこの学園の銀翼騎士団ライフロードスになったら、俺はまた前のように戻れるしね。

アーネスト「じゃあ好きに回つてくるといいよ。ただし、許可無く物には触れないようにね。」

此処で僕が銀翼騎士団になれば、雪乃ちゃんは俺に振り向いてくれるはず。比企谷にも、仕返しができる。はは、ここに来てからは良いことを教わってばかりだ。

アーネスト「君は葉山くんだったね？学園内は回らなくていいのかい？」

おっと、考え過ぎてたみたいだね。

葉山「すみません、あまりに良い校風だったので感動しました。決闘は禁止、平和で良いですね。」

アーネスト「うん、私的な決闘があつては落ち着かないからね。常に純粋で気高くあり、規律と忠誠を守るのがこのガールドワースだからね。」

聞けば聞くほど俺の事じゃないか、気に入ったよ。

葉山「では、僕も回ってきます。」

アーネスト「有意義に過ぐすといいよ。」

アーネスト「……レティシア、彼をどう見る？僕は少し危険な思想を持っていると思う。」

レティシア「私もですわアーネスト。彼の目を見ましたが、何かを企んでいるような目でしたわ。」

アーネスト「この学園の事に嘘はついていないみたいだけど、あまりこの学園には好ましくない人格だね。」

レティシア「ええ。」

待つてなよヒキタニ、直ぐにこの学園に入つて君をつぶしてあげるから。

秘密の話

星露 side

星露「本日の見学はこれで以上じゃ。皆ご苦労じゃったな。これにこの学院に入ってくれる事を祈っておるぞ。」

この学校には鍛錬以外で見せるものなど何もないからのう。これくらいで充分じゃ。

それにしても、あの川崎とかいう女子……八幡に対する気は本物じゃった。彼奴になら教えてもよいかもしれんのう。言いふらすような事は、彼奴ならするまい。静かな表情の中にも情熱があるものじゃからな。

星露「……虎峰、先の青髪の女子、妾はあの者なら八幡の事を話してもよいと見たがお主はどうじゃ？」

虎峰「僕も同意です。彼女の声からは迷いが無かったですからね。その辺は八幡からも教わりましたから。」

星露「ほう？何をじゃ？」

虎峰「人間、何かを隠す時には決まって何かの仕草をするそうです。簡単に言えば、身体を左右に動かしたりなど……」

星露「なるほどのう。八幡はそういうやり方か。妾は勘じゃからのう。八幡の方が余程凄いのう。良い師を持ったのではないか虎峰よ？」

虎峰「は、八幡が僕の師なんですか!?僕の師は師父以外に居りません！」

星露「冗談の通じぬ奴よのう。ほれ、早よ行くぞ。早くせんとあの青髪が帰ってしまうではないか。」

虎峰「は、はいっ！」

八幡には連絡しておくとするか。『川崎沙希は白じゃ。』これでいい

じやろ。

星露 side out

沙希 side

――界龍校門前――

沙希「此処には居なかったか……戸塚や材木座たちの方はどうかかな？」

もしかしたら本当にここには居ないとか？だとしたら本当に無駄足になる。でも、あのマークは六花のものだったし。

虎峰「お待ち頂けますか、川崎沙希様！」

ん？さつきの女の子？

虎峰「申し訳ございませんが、今一度戻っては貰えませんか？師父の方からお話があるようでして。」

……師父って会長の事？まあ行ってみれば分かるしいいか。

沙希「……分かりました。」

虎峰「では、案内致します。こちらです。」

――応接室――

虎峰「師父、連れて参りました。」

沙希「……失礼します。」

星露「おお、重ね重ね済まぬのう。ちよいとお主に話したいことがあつてのう。」

沙希「は、はあ……」

星露「じやが、その前に1つ聞きたい。お主は人探しと言っておつたが、お主の学校とやらから来た者は全員そうなのかえ？」

沙希「……全員ではないですけど、殆どがそうです。中学生の比企谷小町を合わせて9人、その中で6人がさつき言った人物を探しています。後の3人は分かりません。」

星露「苗字だけでも教えてはくれんかのう？嫌じゃったらいのじやが……」

この人……なんか凄く警戒してるような感じだけど、何で？でも、頼りになりそうだし知ってることは全部教えておくか。

沙希「この際ですから、こっちの現状を全部言います。どうですか？」

星露「おお！それは助かるえ！」

そしてあたしは六花に来てる総武高の事について出来るだけ細かく説明した。すると会長さんは満足したかのように頷いた。

星露「そうか……もうその3人はお主から見ても危険と見えるのじやな？」

沙希「はい。あたしと戸塚、材木座はあくまでも、比企谷との和解のために此処に来ました。少しの可能性に賭けて。」

星露「健気じやのう。うむ。お主の心情はよく分かった！それで妾が今から言うことじやが、この話は戸塚と材木座以外には絶対に話してはならぬぞ。話すにしても辺りを必ず警戒するのじや。よいな？」

沙希「っ！……は、はい。」

何これ？すごい威圧。

星露「お主の言う比企谷八幡じやが、確かにこの界龍第七学院に在

籍しておる。」

え？比企谷が……ここに居る？

星露「無論、正体を隠してじゃ。本名ではあるが、まだ正式な発表はしておらん。なぜか分かるかえ？」

沙希「…っ！情報を漏らさないため……ですか？」

星露「その通りじゃ。まあ結果は意味がなかったがのう。八幡はもう縁を切ったと言っておったが彼奴の事じゃ、誠意を見せれば許してくれると思うがのう？その3人以外ならばの話じゃが。」

沙希「……はい、此処に入学してからそうする事にします。」

星露「ほう？此処に入る事は決めてたのかえ？随分殊勝な事じゃのう。」

沙希「比企谷が此処に居ると分かったなら、もう此処に入る事は決定事項みたいなものです。教えてくれてありがとうございます。あたしの高校の奴らには上手く言っておきます。」

星露「うむ、くれぐれも用心するのじゃぞ？敵の目を欺くにはまず包囲を崩す事じゃ。見られているのは、目前の人間だけではないから

の？」

沙希「はい。」

この会長さん………凄く良い人だ。

星露「こうして見ると、何だか密偵のようで面白いのう！」

………そしてやっぱりまだ子供だ。

沙希「では、失礼しました。」

星露「付き合わせて悪かったのう。」

よしっ！戸塚や材木座には良い報告が出来る！ホテルに戻ったら慎重に行動しないとね！万が一聞かれたらマズイからね。

沙希 side out

星露 side

虎峰「……よかったのでしょうか？本当に話しても……」

星露「彼奴は信頼出来ると見た。妾の目を侮るでないぞ？」

八幡『静観してみりや、言いたい放題言ってくれたな。星露。』

応接室のソファの影から八幡がスーツと出てきた。これも影の能力の一部だろう。

虎峰「は、八幡!？」

星露「ほほう、そんな事も出来るのかえ？お主の能力は本当に多彩じやのう。心配するな。彼奴は信頼出来る、保証するぞ。」

八幡「だといいいがな。」

此奴……やはり心配のようじゃの。

虎峰「やはり心配ですか？八幡？」

星露「案ずるな。奴は一見口が堅そうにも見えた。大丈夫じゃ。」

八幡「随分肩を持つな？」

星露「話をしておればそれなりに相手の人となりは分かってくるものじゃ。それとも何か？柄にも無く見張りにでもつくつもりかの？」

八幡「……虎峰、今日は青椒肉絲1人前しか作れねえから食ってくれるか？」

虎峰「え？は、はい。構いませんが……」

な、何!?青椒肉絲じゃと!!?

星露「は、八幡!?妾には無いのか!？」

八幡「人をからかうような奴に作る飯なんてねえよ。食堂の飯でも食つとけ。」

星露「い、嫌じゃ〜!妾も青椒肉絲を食べたいのじゃ〜!八幡頼むのじゃ!もうお主をからかったりせんから妾にも作って欲しいのじゃ〜!」

それから10分も八幡の足にしがみつき、やつとの事で許してもらえた。門弟からして見れば、その光景は驚愕ものであった。

報告会

沙希 s i d e

晩御飯も食べ終わって、あたし達はホテルの部屋に戻っていた。3
人部屋だけど、あたしは海老名と一緒にだった。

海老名「いやゝ晩御飯美味しかったねーサキサキ?」

沙希「あのさ、この前から言ってるけど、そのあだ名やめてって言
てるでしょ?」

海老名「いいじゃん! 私とサキサキの仲でしょ? フレンドリーにな
ろうよ!」

またいいように誤魔化された。

海老名「サキサキの見学場所って確か界龍だったよね?」

沙希「……そうだけど?」

海老名「比企谷くんは居た?」

……やっぱり。此処に来るってことはそれも知ってたって事にな
るからね。

沙希「海老名はあいつの事、どう思ってるわけ? 会ってどうするの
?」

もうこのホテルに入った時から戸塚と材木座には言うことは決め
てるけど、それ以外はあたしの判断で決める。

雪ノ下と由比ヶ浜と小町には、教える気は無いしね。葉山も論外。
戸部は口が軽そうだからこれもダメ。

あたし独断で言えるとしたら、海老名くらいしかもう居ない。それ

でも、裏切るとも限らないからここも慎重にだけど。

海老名「比企谷くんに会ったら？……そりゃ謝るしかないよ。許してくれるなんて思っただけだね、もうそれだけの事をしでかしてるしね。」

沙希「あんたの本心でいいんだね？嘘だったらあたしでも許さないよ。」

海老名「此の期に及んで嘘なんてつかないよ。ううん、つけないよ。」

……あたしも会長さんに質問された時、こんな目してたのかな？

沙希「……分かった、じゃああんたもここに残んな。今、戸塚と材木座呼ぶから。」

海老名「雪ノ下さん達は？呼ばないの？」

沙希「あいつらは危険。何が引き金で何をするか分からないから。」

海老名「……そっか。」

とにかく、今日のうちに知らせておかないと。明日は自由行動だからあたし達だけでも目立った行動はしない方がいいしね。

川崎 side out

戸塚 side

材木座「というのがあったのだ！あの学院は放任主義にも程があるぞ！我もあの学校に居られる自信はないと思った！」

戸塚「そ、そうだったんだ……」

戸部「てゆうか、そこに行くって材木っちチョーヤバくね？何でそこに行こうと思ったん？」

僕たちは今、自分たちが行った学園について話し合っていた。僕た

ちは星導館だったから普通の説明だったけど、材木座くんが行った学園は不良学園だったから凄かったみたい。僕、そこに入学して普段通りに過ごせて言われても無理だと思うな。

材木座「それでなんだが、今日あの学校とは思えない生徒にあつて、その女子に世話になってな！それで……」

戸塚「待つて材木座くん、話は続けてもいいけど、僕少し喉が渴いてきたから何かジュースでも買いに行かない？」

戸部「確かに少し喉渴いたつしよー！俺なんか飲み物買ってくるわー。2人なんにする？」

戸塚「じゃあ僕『♪』ん？メール？」

川崎さんから？どうしたのかな？

川崎『話があるからあたし達の部屋に来て。部屋号は十―0号室だから。』

……今日の事だよね？一応相談しておかないといけないからね。

戸塚「ごめん戸部くん。今川崎さんに呼ばれたから、ジュースは帰りに買ってくるから自分の分だけ買つていいよ。材木座くんも呼ばれてたから。」

戸部「マジかー。分かったわ。じゃあ俺部屋で待つてることにするべ。」

戸塚「うん、ゴメンね。じゃあ材木座くん、行こっか。」
材木座「うむ！承知した！」

さて、収穫はあつたのかな？クローディアさんが言うには、入学にしか記録が無いって言つてたから、八幡の場合転校だからどの道分からない。

戸塚「多分今日の報告会だよね。」

材木座「戸塚殿、川崎氏はやはり……」

戸塚「うん、きつと八幡の事だと思うよ。僕たちの事も言っておきたいしね。」

――――0号室――――

僕たちは部屋の前に着くと、川崎さんが少し慌てた風に周りを見渡していた。別に誰もいなかったけど、どうしたのかな？

沙希「ゴメン。一応女子部屋だから警戒しておこうって思ってたね。特に材木座を。」

材木座「な、なぜ我だけ!？」

海老名「考えてみなよ。戸塚くんは見た目女の子だから大丈夫だけど、君はまんま男の子じゃん。」

材木座「そ、そういうことか……」

戸塚「まあまあ、それで川崎さん。呼ばれて来たけど、今日の報告だよな?」

沙希「ん。星導館はさっき聞いたから。材木座も聞いてる?」

材木座「うむ、戸部殿と共に聞いておった。八幡の事はこつそりのだがな。」

沙希「そつ、じゃあ材木座、あんたの行った学園の話聞かせてくれない?この面子でまだ知らないのって、あんたのレヴオルフとあたしの界龍だけだからね。」

材木座「うむ、では話そう。」

そう言うってから材木座くんはレヴオルフで起きたことを僕たちに説明してくれた。途中までは僕も聞いた内容だった。

材木座「それで案内をしてもらっていたのだが、結論的に八幡に繋がるような手掛かりはなかった。」

戸塚「そっか……でも、しょうがないよ。」

海老名「一筋縄ではいかないのは、最初から分かっていたことだしね。」

沙希「……やっぱ何もなかったんだね。」

材木座「むう……済まぬな。」

沙希「いいよ別に。比企谷の手掛かりなんてあのノートだけだしね。元々此処に居ないのかもしれないしね。」

確かにあのノートだけでここに来たからね。確信なんて何もないし、八幡が此処にいるって証拠も見つからない。

沙希「……じゃああたしだね。その前に1つ言っておく。今言うことは絶対にあたし達だけの秘密にする事。いいね？」

戸塚「何か分かったんだね？」

沙希「誰に聞かれてるかは分からないから、声は極力小さい声で出すから。」

材木座「それ程か……心得た。」

海老名「分かったよサキサキ。」

沙希「じゃあ言うからね？」

そして川崎さんは、界龍の見学の事を説明してくれた。そして今日一番の収穫だった。八幡が六花に居るという朗報だった。しかも川崎さんの行った学園にだった。

沙希「これが今日あたしが聞いてきた内容。聞いたときは正直驚いた。あんたら、声を出したいのは分かるけど、抑えな。」

海老名「分かっているけど、嬉し過ぎて笑いが止まんないよ。」

材木座「であるなっ。まさかそのような場所に居たとは驚きだ。」

戸塚「凄いよ川崎さん。本当に凄いよ。八幡の居場所まで聞きだせるなんて。」

よかった……本当によかった。

材木座「そうと決まれば、明日早速界龍に行こうではないか。」

戸塚「そうだよ。僕八幡に会いたいよ。」

沙希「あんたら、それはやめておいた方がいいよ。逆に比企谷が危険になる。」

戸塚「え？どういう事？」

海老名「……雪ノ下さんたちだね？」

沙希「そ、あたし達が同じ方向に行つたとしたら、間違いなく尾行してくるよ。そうなつたらあいつの居場所を教えるようなもの。この期間にあいつに会いに行くのはよした方がいい。」

そう言われると、確かにその通りだね。

材木座「うむ……確かにそうでなければ八幡が姿を消すなどするはずもないからな。我らが転校出来ると決定するまで、彼奴に会うのはやめておいた方がよいな。」

海老名「彼もバレたくないだろうしね。この事は本当に私たちだけの秘密だね。他の人になんて言えないよ。」

沙希「そういうこと。後は界龍がどんな対応をするかだけど、比企谷の場所がバレないようになればいいんだけど。」

海老名「それは祈るしかないよ。私たちに出来ることは何もないしね。」

歯がゆいなあ……何も出来ないなんて。

材木座「ならば八幡がいると分かっても、其処に受けるのは川崎氏だけにした方がよさそうだな。我ら全員が受けたら、それも余計に怪しまれる。」

戸塚「そうだね。転校するとしたら川崎さんしか居ないかもね。最初から決めていたんなら、一番怪しまれずに済むからね。」

同じ学校に居られないのはちよつと嫌だけど、会えるのなら別にいいかな。

沙希「……うん、自分で言うのもアレだけど、あたしもそれが最善だと思う。」

海老名「……よしっ！じゃあこの話はここまでにしようよ。今考えても仕方ないしね。後の事は界龍に任せようよ。きつと上手くやってくれるよ！」

戸塚「そうだね。明日何処に行くか決めない？此処にいる人たち全員で行くってわけじゃないけど、早く決めるのに越したことはないよ。」

材木座「そうであるな。」

海老名「うん、賛成！」

沙希「別にいいよ。」

八幡が居ることも分かったし、明日は楽しめるかもね！

理由と予防線と【〇〇〇】

雪乃 side

今日の見学会も終わり、夕飯を食べ終わった私たちは今日の話を話していた。

結衣「星導館にヒッキー居なかったね。」

雪乃「そうね。本当にどこに行ったのかしら？アレは？」

小町「星導館には居ませんでした、他の学園ならあり得るかもですよ。」

雪乃「それもあるかもしれないけれど、今日以外普通の学校には立ち入り規制があるはずよ。幾ら見学に来てるとはいえ、簡単に通してくれるとは思えないわ。」

ここで問題を起せば転校が難しくなるわ。明日は校外にいる生徒に聞き込みをするしかないわね。

小町「それにしてもあのゴミいちゃんはっ！雪乃さんと結衣さんを置いて行くななんて信じられないですよ！2人がこんな酷い目に遭ったっていうのに！」

結衣「あんな事になるんなら、ノート的事なんて公開するんじゃないやなかつたよ！ヒッキーマジ最低っ！」

雪乃「見つけたら天罰を下してやるわ。」

私たちが何故こんなにも怒っているのかというと、彼のノートが公開されてから一週間後のことだった。

彼の残したノートは、瞬く間に学校中の噂になった。文化祭、修学旅行、そのどちらの内容もきめ細かに記されてあったからだ。良くも悪くも強い影響があった。

葉山くと相模さんは、当然の事だけれど学校で居場所をなくしていたわ。

そしてそれは私たちもだった。

文化祭では、私自身が相模さんの依頼を受けたのにも関わらず、被害を受けたのは比企谷くんだという事だった。依頼は私の受けたものののに、何故彼がその尻拭いのような真似をさせられているんだと。先生たちやクラス、学校中の生徒が私を責めていたわ。何故私だけなの？彼にもあつたはずなのに、何故私だけが責められなければならないの？

修学旅行の告白の件、依頼そのものは由比ヶ浜さんが少し強引に近い形で奉仕部が受けたわ。やれるだけやった。でも、最後の最後で彼がぶち壊しにしたわ。此処までは私も知っているのだけれど、ノートの中には葉山くんがグループ維持の為に彼に依頼していた。

戸部くんの告白の成功、ノートにあった海老名さんの告白の阻止、葉山くんのグループの維持。この相反する依頼なんて成功するはずもない。葉山くんは学校で立場を無くした。

それで済めばよかったのだけど、私たちにも影響が出た。その訳は、私たちが彼に言った言葉がノートに書いてあったからだ。

雪ノ下『貴方のそのやり方、嫌いだわ。』

由比ヶ浜『人の気持ちをもつと考えてよ！』

こんな風に書いてあった。そのおかげで私たちはまた迫害を受けた。周りからはヒソヒソと噂され、嫌がらせも受けていた。

この時から彼に謝る気なんてもう無かったわ。彼は葉山くん達だけでなく、私たちからも学校での居場所を奪っていった。謝ってももう許す気なんてないわ。此処だとわかった以上絶対に見つけ出して、仕返しをしてやるわ。

小町「結衣さん達から事情は聞きましたけど、酷過ぎます！これは妹としてガツンと言ってやりたい気分ですっ！」

結衣「小町ちゃんが居れば、ヒッキーでもタジタジだね！」

雪乃「そうね。シスコン谷くんの事だから、絶対に言う事を聞くに決まってるわ。」

小町さんがいる以上、私たちの勝利は確実よ。ふふっ、土下座しながら許しをこう姿が目に見えかね。

雪乃 side out

八幡 side

俺は今日の出来事の後、界龍以外に知り合った知人に通信をしていた。まあ、3人くらいなんだが。俺の正体を隠すように言っているところだ。さっきまで2人終わらせたとこころだ。

そして今というところ……

八幡「じゃあそいつらがなんか言ってきたとしても俺の事は知らない風に

装ってくれ。」

オーフェリア『…………分かったわ。』

実を言うと番号交換してました。何かあった時のためにと、どちら
もあっち側からだ。俺はこの時程感謝した事はない。

オーフェリア『…………八幡。』

八幡「ん？どした？」

オーフェリア『…………あの校章は他にも作れるのかしら？』

八幡「ん？ああ出来るが？何故だ？」

1個で充分だと思うんだがな。まさか耐久値があつたとか？

八幡「もしかしてダメになったか？」

オーフェリア『…………そうじゃないわ。複数あつた方がストックに
役立つと思っただけよ。ダメかしら？』

八幡「聞いちゃ悪いと思うが、お前って制服以外で過ごした事あ
んのか？」

オーフェリア『…………寝る時はちゃんと着替えてるわ。』

八幡「…………ゴメン、いやほんとゴメン。」

オーフェリア『…………何も言っていないじゃない。急にどうしたの
？』

八幡「もう何も言わなくていい。分かった、作っておく。決勝後で
いいか？」

オーフェリア『…………ええ、お願い。』

八幡「それじゃ、頼むな。」

オーフェリア『…………八幡、もう1ついいかしら？ただの質問よ。』

八幡「おう？なんだ？」

オーフェリア『貴方はハナシヨウブの花言葉は知ってるかしら？』

この前もこんな事あったな。前は確かアネモネだったな。今度は

ハナシヨウブという花か。済まん、花名も初めて知った。

八幡「済まん、全然分からん。」

オーフェリア『……………勉強不足ね。』クスッ

オーフェリアの奴……………俺をからかってそんな楽しいか？口角上がってんぞ？

オーフェリア『……………ハナシヨウブの花言葉は、【伝言】【優雅】【心意気】よ。』

ん？割と普通。

オーフェリア『……………【優しい】【優しい心】、これは貴方に似合ってるわ。』

優しい……………か、こいつから言われるとなんか嬉しいな。少し花言葉勉強するか。

オーフェリア『……………【嬉しい知らせ】【あなたを信じる】、この言葉は私から貴方に送るわ。ありがとう八幡。』

八幡「お、おう……………／／／」

こいつ……………やっぱ良い笑顔するな。

オーフェリア『じゃあ待ってるわ。』

八幡「あ、ああ。任しとけ。」

そして通信を切った。

八幡「ふう…予想外の一撃食らった。」

たくっ、こいつには勝てる気がしねえよ。

行動会議とお願い

沙希 side

朝7時、あたし達はホテルのレストラン前の廊下に立っていた。バイキング形式のメニューだった。メンバーは戸塚と材木座と海老名とあたし。流石に怪しまれるかもしれないから、戸塚と材木座にはすぐに離れてもらうつもり。一応今日の予定を一通り話しておくつもりだった。

沙希「一応此处で話しておくよ。今日は目立つ行動はしないこと。界龍付近に近づかないこと。寄っていいとしても商店街の外れくらいまで。基本的に行動は2人か3人1組。いいね？」

戸塚「うん、分かったよ。」

材木座「承知！」

海老名「うん。じゃあ私はサキサキと行動した方がいいかもね、まだ完璧に信頼されてないかもだしね。」

沙希「あたしもあんと一緒にの方が行動しやすいからそれでいいよ。けど、あんたの好きなあっち方面の店には寄らないから、そこらへんはあんたも分かってるよね？」

海老名「うう……我慢するよ。」

戸塚「雪ノ下さん達は？」

材木座「うむ、彼奴らが何もしないとは思えん。見張ったほうが……」

沙希「あんたバカ？それこそ怪しまれるよ。こんな事言いたくないけど、あんたこの中で一番怪しい存在だから。」

それと、そのキャラいい加減やめてほしい。

材木座「わ、我が…一番怪しい……」

当たり前でしょ。今は冬だから格好はともかく、喋り方は断トツで怪しいから。

戸塚「でもそうだね。あまり関わらない方がいいかもね。でも、誘われたりしたら付いて行っても大丈夫？それなら自然にとけ込めると思うし。」

沙希「うん、それならいいよ。」

海老名「うん、じゃあ今の決まりを守りつつ、今日はなるべくこの六花の街を楽しむ事にしようか。」

戸塚「うんっ！」

材木座「承知っ！」

沙希「……」

海老名「もう！サキサキは元気ないな！」

あたしにそのノリは無理だから。

そして、あたし達は好きな食べ物を取ってから好きな席に着いたが、ここで戸塚と材木座と別れた。

沙希 s i d e o u t

結衣 s i d e

結衣「今日どうする？」

小町「小町は六花を見たいですけど、ゴミいちゃんも探さなきゃなので。」

雪乃「なら午前中は聞き込みをして、午後から六花を回ることになりました。影の薄い彼の事だから簡単には見つからないでしょうけど。」

ヒツキーだしね！存在感無いし、影薄いし、キモいし。

雪乃「私としては、商店街にいる生徒に声を掛けてみようと思うのだけど、どうかしら？何処があるかしら？」

小町「それなら星武祭のスタジアム内とかどうです？木を隠すには森の中って言いますし、ゴミいちゃんもいるかもですよ？」

ふえすた？

結衣「ねえゆきのん。ふえすたって何？」

雪乃「由比ヶ浜さん……貴方此処に来てそれを知らないの？」

小町「流石に小町も……」

結衣「え!?何で!?私なんかマズイこと言った？」

雪乃「由比ヶ浜さん、今ドームで開催されている催しは何か分かるかしら？」

結衣「んー、分かんない！」

雪乃「……はあ、由比ヶ浜さんにも調べ物をさせておくんだったわ。」

小町「なんか先が怖いです。結衣さん、流石に星武祭は知つときましようよ。テレビでもやってますよ？」

うえ!?嘘!?

雪乃「その様子だと本当に此処がどういう所なのか全く知らないよね。」

小町「移動しながら教えましょうか。」

うう、ごめんなさい。

結衣 side out

葉山 side

「それで葉山くんは今日どこに行くの？」

「私も気になるなあ。」

葉山「俺は星武祭を見た後は、商店街を見て回ろうと思ってるんだ。」

「そうなの？私もついていいかな？」

「私もっ！」

やっぱり僕の周りには直ぐ人が集まってくるね。確かこの子たちは俺と一緒にガールドワースの見学者をした子たちだったね。

葉山「じゃあ、一緒にいこうか。」

「はい！」

俺がガールドワースに入学したら、総武高以上に人が集まるだろうね。はは、楽しみが増えてきたなあ。

葉山 s i d e o u t

八幡 s i d e

八幡「んで今日は準決勝だったな。それなのになんで俺に電話寄越すんだ？」

シルヴィア『いいじゃない。声を聞きたくなったんだから♪』

八幡「まあ、いいけどよ。」

俺も今日は暇だし、朝飯でも作るか。まあ今日くらい食作っても大丈夫だろう。

シルヴィア『それよりさ八幡くん、ちよつとお願いがあるんだけど……いいかな？』

八幡「ん？どうした？」

なんか声小さくなってねえか？

顔も赤えし……大丈夫か？

シルヴィア『お、お願いっていうのは……その……えっと……／＼』

随分焦らすな……そんな言いづらいことなのか？飯でも作って欲しいとかか？

八幡「また飯でも食いたいのか？なら別に構わんが……」

シルヴィア『ち、違うのっ！そうじゃなくて……うう／＼／』

………一体何なんだ？

シルヴィア『……よしっ！覚悟は出来た！じゃあ言うね！八幡くんっ！』

八幡「あ、ああ。」

シルヴィア『きよ、今日の準決勝が終わってから界龍に行くんだけど

きよ、今日、は、八幡くんの部屋に、とと、泊めさせてください！

.....
はい？
』

お泊まりするだけなの？

八幡 s i d e

シルヴィの奴……今なんて言った？

八幡「済まんが聞き間違えたかもしれん。もう一回頼めるか？」
シルヴィア『だ、だから……今日泊めてほしいって……／／／／／』
ウワメツカイ

……聞き間違いじゃなかった。え？どゆこと？何が如何してどうやったらこんな結論に至るの？八幡サツパリだよ？

皆想像できるかい!?普通に通信してきたと思ったら、いきなり泊めてくれなんて頼む超有名アイドルちゃんのことを!?無理だよね？ねえ無理だよね!?無理だって言ってよ!!

八幡 どうしていいか分かんないよ。確かに泊めちゃいけないなんて決まりないけどさ……流石にマズイって。

いや、決勝前日にこんな事するなんて可笑しすぎる。きつと何かあったに……

シルヴィア『……くん？八幡くんってば!』

八幡「お、おう!」

シルヴィア『……返事は？もしかして……ダメ?』

がーう!そうじゃなくて!?

八幡「あ、いやそうじゃなくて……なんだってそんな急なんだ？今日勝つと考えるなら明日は決勝だ。普通なら自分とこで明日に備えるのが普通だと思うが?」

シルヴィア『……うん、ちよつと不安でさ。今日の準決勝なら勝てる。去年と同じだから。でも、明日は違う。これまでの戦いとは明らかに次元の違う戦いになるから、その……不安で……』

……確かオーフェリアだったな。【孤毒の魔女】エレンシユキィガルの2つ名を持つこの六花最強の魔女。3年前にやられてたんだったな。

シルヴィア『なんか怖くて……八幡くんと居たら少し元気になれると思うんだけど……ダメかな？勿論、夕飯代とか着替えとかも持つて行くよ!?八幡くんに迷惑はかけないから……ねえ、お願い。』

シルヴィア（で、出来れば八幡くんの服は着てみたいけど、エ、エツチな子だと思われるのは嫌だし。）

………別に着替えとかは問題じゃねえよ。夕飯代もいらねえよ。こつちに来たとしても、俺の周りが騒ぎになるとしか思えないんだが？それに迷惑をかけないのは当然だ。かけていたら何様のつもりだ。俺の周りに数名いるが。

シルヴィア『それに、八幡くん界龍の序列2位なんですよ？出来たら八幡くんにも練習相手になってほしくて……』

八幡『………今晚は何がいいんだ？あらかじめ聞いておく。物によつては仕込みがいるからな。好きなものを言え。』

シルヴィア『……え？いいの？』

八幡『その台詞はさつきも聞いた。で？今日は何がいいんだ？』

シルヴィア『そんなの悪いよ!?八幡くんの好きにしていいいから!』

八幡「あのな、お前は仮にも決勝に出るんだろ？だったらお前の英気を養うためにも、これくらいは当たり前のことだ。こんなので遠慮すんな。もうとつくにそれ以上の事頼んでんだろうが。」

シルヴィア『う、確かに………』

八幡「だから遠慮すんな。言ってみろよ。今日はお前のためだけに作つてやる。」

シルヴィア（わ、私のためだけに!?!………八幡くん、ここまでしてくれるなんて……やっぱ凄く優しいなあ／＼／＼）

シルヴィア『じゃ、じゃあ八幡くんコロッケつて作れる？中身は何でもいいから。』

八幡「なんでもいいのか？」

シルヴィア『うん、何で？』

八幡「いや、腕がなるなあゝって思ってた。色んな具を入れてやるよ。」

なんか楽しみになってきた。

シルヴィア『怪しい物はいれないでね？』

八幡「俺がそんな事するように見えるか？間違っても食い物を粗末にするような事はしねえよ。他にあるか？」

シルヴィア『出来たらパンを使った料理を食べてみたいかな。後は八幡くんに任せるよ。この前作ってくれたシチューも美味しかったから、信じられる。』

八幡「料理人冥利に尽きるな。分かった、後の料理は俺が決める。口に合えばいいんだが……好き嫌いとかあるか？」

シルヴィア『八幡くんが作ってくれた料理なら残さず食べるよ。』

八幡「嬉しい事を聞いたな。それなら作る側としても気合が入る。なら急いで具材を買いに行かないとな。」

さて、何にしようかな？コロッケだからなー。色んなのが使えるぞ。

シルヴィア『ダ、ダメだよ！約束したでしょ！今日は学園の中に入るって！』

八幡「変装して行くから大丈夫だ。」

シルヴィア『それってもしかしてこの前の？』

八幡「ああ、あの変装ならバレる事もないだろう。俺の面影なんてないしな。」

シルヴィア『この前正体見破られてたじゃん！握手会の時！それに、あの姿で行ったら逆に目立っちゃうよ！』

八幡「雰囲気と歌でだろ？雰囲気なら何とかなる。心配すんな。」

それに、あいつらが俺の事を見破れるとは思えないからな。

シルヴィア『……………分かった。でも私も行くから！一緒に行くからね！相手の子すぐに倒してそっちに向かうからねっ！』

八幡「…………お、おい、幾ら何でもそれはマズイだろ…………」

シルヴィア『1度クインヴェールに戻ってからそっちに荷物持って行って、その後に買い物！私も変装して行くから大丈夫！』

八幡「だが、そんな時の俺たちの関係はどうするんだ？」

シルヴィア『そう言うって事はいいんだね!?友達でいいよ！ネットで話題になったら大変だから！そういう事だからじゃあね！勝手に1人でお買い物行かないでよ！』

そして通信が切れる。

八幡「あ、おい！」

切っちゃまった。…………じゃあ俺はあいつが試合終わるまで暇なことかよ…………

…………昼飯くらいは作るか。

準決勝と師の教示（きょうじ）

シルヴィア side

……時間経つのは早いなあ。もう準決勝スタートかあ。それに、私あの人嫌いなんだよねえ。レヴォルフの【愚行士^{ベトウェルト}】。前シーズンの《王竜星武祭》で私の事彼女扱いしてくるから嫌なんだよね。

まあ早く終わらせればいい話だし、早く終わらせばそれだけ八幡くんと居られる時間も増えるしね。

シルヴィア「よし！急ぐから3分で終わらせてやるんだから！」

観ててね！八幡くんっ!!

―――ステージ―――

梁瀬『さあ皆さん！お待たせ致しました！本日のファイナルカード、準決勝2回戦が間も無く開始されます！注目なのは去年と対戦カードが全く同じということですよ！1回戦もレヴォルフ対クインヴェールの戦いでしたからね！』

チャム『これはすごい戦いになる事間違いないッスねー。』

梁瀬『では選手の紹介ですよ！レヴォルフ黒学院、エルバト・グレードル選手っ!!』

会場からはブーイングの嵐。それも仕方のない事かな。彼は卑怯な戦い方が得意だから。数え上げたらキリがない程に。

梁瀬『対するは、クインヴェール女学園、シルヴィア・リユーネハイム選手っ!!』

一気に歓声に変わった。

シルヴィア「……早く終わらせよつと。」

エルバト「おいおいシルヴィア、つれねえ事言うなよ。俺たちカレカノ同士だろ？もつと楽しんでいこうぜ？」

前回もこれのせいで私は要らない迷惑を被っていた。でも今回はそんな事にはならないだろう。3年前に分かつてる事だから。

シルヴィア「君の彼女になった覚えなんてないけど？そして悪いけど、私この後急いで行かなくちゃいけない場所があるから棄権してくれると助かるんだけどな。」

エルバト「まさか男か？おいおい冗談も口だけにしろよ。俺以上に良い男なんて居るわけねえだろ。ンな糞みてえな奴ほつといて俺と付き合えや。100倍楽しいぜ？」

ヘエ？ハチマンクンガクソ？キミハサンブンモイラナイネ、イチ
ビヨウデジュウブンダカラ……………

（ヘエ？八幡くんが糞？君は3分も要らないね、1秒で充分だから
……………）

ハヤクキエテ？

（早く消えて？）

梁瀬『それでは参りますっ！』《^{リンドブルス}王竜星武祭》準決勝第2回戦スター
トッ！！』

『スタート
Of The
デュエル』
『バトル
スタート』

『バッジブ
ロックン
校章破壊』

エルバト「……………は？」

『エンド
Of
デュエル』

包まれる静寂……………

梁瀬『……………はっ!!し、試合終了!!勝者、シルヴィア・リユー

ネハイムー!!これは凄い!全く実況する間もなく倒してしまいました!!』

チャム『動きが全く見えなかったっス……今までの動きとは明らかに違ったスね。まるで本気を出していないとアピールしたようにも見えるっス。』

梁瀬『それと、何故カリューネハイム選手からどす黒いオーラが見えるのは私の気のせいでしょうか?チャムさんはどう見えます?』
チャム『い、いや、見えてるっス。多分観客の皆様全員にも見えると思うっス。』

……………そっか、好きな人をバカにされるってこんなにも頭に血が上るんだね。知らなかった。

シルヴィア「ネエ?」ウツロメ

(ねえ?)

エルバト「ひ、ひい!!」

シルヴィア「モシ、マタワタシノコトカノジヨダナンテイツタラ、ツギハキミノシタダカラネ?ニドトヘラズグチタタケナイヨウニシテアゲルカラ。ワカツタ?」ウツロメ

(もしまた私の事彼女だなんて言ったら、次は君の舌だからね?2度と減らず口叩けないようにしてあげるから。分かった?)

エルバト「ひいつ!!は、はい!分かりました!」

シルヴィアはそれを聞くと、何もなかったかのように、控え室へと戻っていった。

――控え室――

インタビューも終わり、少しだけ休むことにした。でも、苛立ちが消えたわけではなかった。

シルヴィア「はあ………すっごい腹が立ったなあ。まさかあんなにも腹が立つなんて思わなかった。」

ホント、○してやろうと思ったくらい。

すると通信音が鳴った。誰……あつ、やった♪八幡くんからだっ！私はすぐにc a l lのボタンを押した。

八幡『よおシルヴィ、準決勝お疲れさん。瞬殺だったな。』

ああ……この声。落ち着くなあ。苛立ちもこの声を聞いたら何処かに行っちゃったよ。

八幡『ていうかどうしたんだ？お前どこか様子が変わったが……』

……やっぱり八幡くんには分かるんだ。嬉しいなあ、心配してくれて。

シルヴィア「彼、八幡くんの事バカにしてたから凄くムカついて………気付いてたら倒してた。」

八幡『そうか……まああれ聞いて腹が立たない奴なんていねえよな。それよか早く準備してこっちに來い、今のお前は少し疲れてそうに見えるからな。』

何でも分かっちゃうんだね。でも、そんな所も好きかなあ……えへへ／／／

シルヴィア「うん、分かった。後、買い物はまだ行っていないよね？」八幡『行つてねえよ。昼飯の用意くらいはしたが、夜を作るには材料が足りない。』

シルヴィア「よろしい。じゃあ待つててね！すぐに行くから！」

そう言ってから通信を切って私はクインヴェールに向かった。

シルヴィア side out

葉山 side

「うわー凄かったね葉山くん！あんなに強いなんて……」

「私全然見えなかった。」

葉山「……うん、俺も見えなかったよ。あんなに速いなんてね。」

シルヴィア・リニューネハイムか……確か世界的に有名な歌姫で、クインヴェールの序列1位でもある。

成る程、まさに文武両道、才色兼備ってわけか。僕に似てるね、彼女。

葉山「さて、今日の試合も終わったし商店街にでも行こうか。」

「はい。」

葉山 side out

雪乃 side

………圧倒ね、試合になってなかったわ。これが序列1位の實力なのね。

小町「ひょえー！見えました2人は!?小町は全然見えませんでした！」

結衣「私もっ！全く見えなかった！」

雪乃「悔しいけれど、私も見えなかったわ。それだけ差があるって事ね。」

でも、いずれは……

小町「それにしてもゴミいちゃん居ませんね。小町なら一目で分かるんですが、此処には居ないんでしょうか？」

雪乃「……此処にはいないとみていいわね。では、聞き込みを始めてみましょう。」

結衣「うん！そうだね！」

いつかは、あの【孤毒の魔女】も超えてみせるわ。

雪乃 side out

シルヴィア side

シルヴィア「……これでいいかな。よし！じゃあ早速しゅっぱー
「待ちなさいシルヴィア。」〜？」

も、こんな時に誰？

ペトラ「もしかして、今朝言ってた八幡くんの所に行くのかしら？」
シルヴィア「ペ、ペトラさん！……う、うん、そうだけど？どうして？」

ペトラ「……ふふつ、何でもないわ。ルサルカの事は任せなさい。
貴方を追おうとしたら問答無用で正座させるから。」

ペトラ「それと、ウチの芸能事務所に来ないかってスカウトもよろしくね？」

シルヴィア「もう〜ペトラさんは〜！……でも、一応誘ってみます／＼／」

だってそうなら凄いいもん。

ペトラ「お願いね。それともう一つ。あまり人とは関わらないようにね。これも八幡くんに言っておいて。貴女たちの事だから大丈夫

だと思っけど念のために言っておくわよ。」

シルヴィア「……はい。」

ペトラ「じゃあ行つてきなさい。それと、八幡くんを押し倒す勢いで行かないと、彼を取られちゃうわよ？絶対人気だから。」

もおゝ！／＼／＼最後の最後までえゝ！別にそんな理由で行くわけじゃありません！！／＼／

――界龍第七学院校門前――

シルヴィア「此処に来るのは初めてじゃないけど、変装してきてるからか変な緊張感あるなあ。受付に言ったら通してくれるかなあ？」

シルヴィア「すみませーん。」

学生1「はい？何でしょう？」

シルヴィア「此処に用があつて来たんですけど、通ることつて出来ます？」

学生1「何の御用があつて此処に？」

シルヴィア「えーと、八幡くんと呼ばれてなんですけど……」

学生1「……尊師のお客人でしたか。これは失礼いたしました。」

シルヴィア「え？尊師？八幡くんが？」

学生1「尊師から言伝を預かつておりましたので、『茶色の長髪で荷物を持った女性が来たら通すように。』と言われておりました。尊師の部屋に案内します、少しの間頼むぞ。」

学生2「はっ！」

へえゝ八幡くんつて弟子がいるのかあ。でも、普通なら師匠だよね？何で尊師って呼んでるんだろう？

シルヴィア「あの、貴方は八幡くんの弟子でいいんですか？」

学生1「いえ。尊師は弟子を作りたいがらない方なのですが、それな

のに皆平等に教示をしてくださる方なのです。師兄方や師父以外は皆尊師と呼んでいます。まあ、尊師はあまり気に入ってはいないようですが、我々なりの気持ちなのです。」

シルヴィア「へえ、師匠じゃないけど教わってるから敬意を示してって事ですか？多分その師兄って人たちも教わってるんですよ？」

学生1「お察しが良い、その通りです。今では大師兄の曉彗様に続き、殆どの者が尊師から教示を受けております。」

学生1「今ではもう、比企谷尊師は第2の師父と呼んでも過言ではないのです。師父とは違い、我々序列外の者たちにも教示して下さっているのです、日々の鍛錬がとても充実しているのです。」

八幡くんは無意識なんだろうけど、こんなにも慕われてるんだ。

学生1「ああ、それからこのデータを。我々界龍の生徒だけが持っている映像です。中身は大師兄と尊師の試合です。」

シルヴィア「い、いいんですか？」

学生1「はい。貴方は尊師の事を深く信頼しているようですので、貴方になら渡しても問題ないと判断しました。つと、話してる間に着きましたね。此処が尊師のお部屋です。」

此処が八幡くんの……な、なんか緊張してきた。大丈夫かな私。

そんな事を思ってる間、門番の学生さんが扉を叩いて八幡くんを呼んだ。

学生1「尊師！お客人を連れて参りました！お入り頂いてもよろしいでしょうか？」

八幡『おー、いいぞ。』

学生1「はっ！失礼致します！」

シルヴィア「し、失礼します……」

八幡「よお、来たか。それとよ、尊師って止めてくれよ。俺はそん

な大層な人間じゃねえよ。曉彗とかに使えよそれ。」

学生1「いえ！そういうわけには！これは尊師に対する敬意です！これ以外に呼び方など私には御座いませぬ！」

八幡「普通に苗字とかでいいじゃん。」

学生1「それこそ大層な真似は出来ませぬ！尊師は御自分の価値を見誤り過ぎております。もつと御自分を評価されても良いかと！」

八幡「自分を認めてしまったら、そこで成長は終わりだ。俺は驕りなんて一切しない。まだ強くなりたいからな。お前も強くなりたくて毎日鍛錬してるんだろ？それとも違うか？」

学生1「い、いえ！相違ありません！」

八幡「ならお前から見て虎峰たちはどう映る？お前よりもずっと強い奴らが、自分は強くなれたと満足そうにしてるような奴はいたか？」

学生1「……………」

八幡「そういうことだ。成長は認めてもいいが、満足はするな。それを乗り越えたからこそあの強さがある。お前たちはまだそこに立っていないだけで、その可能性は充分ある。追いつくのは難しいだろうが無理ではない。己の可能性を信じろ。だから俺はここまで来れた。」

八幡「お前から言う、界龍最強の男を倒したんだからな。お前だって、もしかしたら在名祭祀書ネームド・カルツに入れる可能性だってあるんだ。自分を信じろ。かく言う俺も少し前までは自分を信じてもしなかったから、説得力皆無だがな。」

……………八幡くん、

凄くカッコいい／／／／

学生1「……はいっ！御教授ありがとうございます！尊師！」ゴウキユウ

八幡「お、おう……」

学生1「自分、まずは在名祭祀書50位目指して頑張ります！失礼致しました！」

そう言つて彼は90度腰を曲げてから扉を閉めて行つてしまった。

八幡「……なんかいきなり悪いな。変なところ見せちまつて。」

シルヴィア「そんなことないよ。彼らに慕われてる理由がよく分かつたよ。今の八幡くん、凄くカッコよかった。」

あんな一面があるなんてね。それにしても尊師かあ。確かに今見た八幡くんなら、そう呼ばれても不思議ではないかなあ。

八幡「そ、そうか……／／じゃあ昼飯にするか。安心しろ、変な物を入れてねえし人避けもしておいた。変装も解いていいぞ。」

そして私は八幡くんと一緒に昼食を摂った。因みに今回食べた昼食もすごく美味しかったです。

本命！デー……買い物！！

シルヴィア side

昼ご飯を食べ終えた私と八幡くんは少しゆつくりしていた。食べた後急に動くとお腹が痛くなっちゃうからね。それにこうやってのんびりするのにも悪くないよね。

八幡「そういや、何時頃買い物行く？俺としては早い方が時間に困らないと思うんだが……どうする？」

シルヴィア「そうだね……じゃあもう行っちゃおうか？八幡くんの手合わせをする時間も欲しいし、何より今日作る料理が何なのか当ててみたいしね。」

八幡「コロツケとパン料理は決まってるとして、俺が作る料理を予想するってか？そりやまた難易度高そうなこと言うな。」

シルヴィア「その代わり1つでも当たったら、私が言うことを八幡くんにしてもらうからね。当たらなかつたらその逆だよ。」

八幡くんなら過激な事言わないだろうから安心かな。八幡くん優しいしね！あーんしてくれとか……

キヤー！／／／（≡△≡）

八幡「顔赤いが大丈夫か？それに何処か笑ってるようにも見えるが……」

シルヴィア「う、うん大丈夫！それと女の子の顔を勝手に覗かないの！」

八幡「わ、悪い……」

シルヴィア「ふふっ、別に八幡くんならいいよーっ！全然悪い気はしないし！」

八幡「そ、そうか……なんかむず痒いな。そんな事言われたこと

ねーから。」

そつかあゝじゃあ私が初めてなんだ。なんか良いなあ。

シルヴィア「じゃあ行こっか！時間は有限だよ！早くしないと今日という貴重な時間がなくなっちゃうから！」

八幡「……ああ。」

そして私たちはお出掛けする支度を済ませると、界龍を出て八幡くん行きつけのスーパーに行く事になったんだけど……

「八代界人さんですよね!?サインと、後握手して下さい!!」

「私にもお願いします!!」

「あーずるいつ！私もっ！」

案の定、ファンに見つかって握手やらサインやらを強請られていた。ま、まああれだけのステージだったから認めるけど、八幡くんも人当たり良過ぎるよ。

「ありがとうございますー！」

八幡「いえ、どういたしまして。」

「次のステージでも頑張ってください！」

「「キヤー!!」」

.....

シルヴィア「むう。ムスツ

八幡「そんな顔するなよ。しょうがねえだろ？こうなることくらいお前だって分かってたんだろ？」

シルヴィア「そうだけど……」

今は私だけの八幡くんなのに……

八幡「ほら、行くぞ。」テ ギュッ

シルヴィア「あ……／＼／＼」

八幡「あれくらいで拗ねるなよ。」

シルヴィア「う、うん／＼／＼」

うん、もう治ったから大丈夫。

シルヴィア「♪」ダキッ

八幡「お、おい……」

シルヴィア「別にいいでしょ？腕に抱きつくくらい♪」

八幡「……好きにしろ。」

シルヴィア「うん♪」

そのあとも八幡くんのファンに遭遇したけど、話しかけてくる人はいなかったから助かったなあ。

さて！目的地に着いたね！八幡くんの食材選びとか見ておこつと！

……スーパー内……

八幡「……お前随分上機嫌だな。」

シルヴィア「まあね♪」

当たり前だよ♪好きな人と一緒に、こんな近くに居られるんだもん

♪

それにしても、八幡くんが入れた商品って組み合わせられるのかな？
？これだけで作れるとは思えない。お肉がないから余計に分からないよ。

シルヴィア「ねえ八幡くん。ひよつとして買うものってこれだけ？」

八幡「ん？ああ、これだけだ。冷蔵庫の中も考えて今日のレシピを考えてたからな。ちなみに言うが、肉料理は出てこないぞ。肉は出てくるがちよつとだ。」

ええ!?!男の子なのにお肉料理を作らない!?!なんかますます分からなくなってきたよお。八幡くんってベジタリアン？

シルヴィア「もしかして八幡くんってベジタリアン？」

八幡「いや？ちゃんと肉も食うぞ？」

シルヴィア「でもお肉ないんだよね？」

八幡「まあ、一品だけにしか使わねえな。コロッケで油を使うからな。肉は無い方がいいい。」

そう言つて八幡くんと私はレジに並んでお会計を済ませようとしたが…………

店員「あら？アンタ比企谷ちゃんだろ？」

八幡「え？何のことで？」

店員「素っ惚けんじゃないよ。私にや誤魔化せないからね？私にはね、あんたのその目で分かるんだよ。」

八幡「……目で分かるとかおばちゃん凄すぎだな。星武祭優勝出来んじゃねえか？」

店員「バカ言つてんじゃないよ！アンタこそ、そんな可愛い嫁さん連れて冷やかしかい？全く。」

シルヴィア「よ、よよよ、嫁さん!?!///私か!?!」

八幡「おい、からかうなよ。それに俺はまだ学生だ。結婚しとらんわ。」

店員「アンタも目のつけ所が良いじゃないか。中々いないよ？こん

なに頼りになる男つてのは。逃さないように頑張んな！」

シルヴィア「……ひゃい／＼／＼／」

店員「よしっ！いつもお世話になってる比企谷ちゃんの彼女の為だしねっ！今日の会計は3割引しといてあげるよ！」

八幡「……彼女じゃねえよ。」

買い物も終わって学院に戻ろうとするんだけど、レジのやり取りが頭から離れない。よ、嫁さんだなんて／＼／

八幡「戻ったら試合すんのか？それなら料理の準備をさせてくれ。手の込んだ物はないが、早いに越したことはないからな。」

シルヴィア「勿論だよ。でも、全然思いつかないなあ。八幡くんが作る料理。」

八幡「まあごくありふれた料理ではないかもな。家庭ではまず作らない料理だな。」

ふええく分からないよおう。

1 「ちよつと皆さん、あれ。」

2 「あらあら初々しい奥さんねえく。」

3 「あんな顔しちやつて。」

2 「仲が良いのねえ、一緒にお買い物なんて。しかも手を繋ぎながら。」

1 「最近の新婚夫婦は大胆ですねえ。」

シルヴィア「／＼／＼／」

八幡「……少し急ぐか／＼／」

シルヴィア「／＼／＼／」コクッ

し、新婚……私と八幡くんが夫婦。うう／＼／＼／／まるで夢みたいだよ／＼／／／

……八幡くんはどう思ってるんだろう？

……っ！ダメダメ!!そんなのまともに聞けないよ!まだ心の準備が必要だし、まだ付き合ってもいないし!

今日だけで2回も夫婦扱いされちゃうなんて／＼／＼周りからはそういう風に見られてるのかな?でも私に夫婦はインパクト強過ぎる
よお／／／／／

彼との試合？

シルヴィア side

さつき夫婦と呼ばれた時から少し早歩きで戻った界龍の校門道路。此処からは私も変装を解いて行く。一応八幡くんの部屋に泊まるワケだから、前の姿だと疑われてしまう。手合わせをするのも目的だしね。

シルヴィア「門番さん驚くだろうなあ。」

八幡「だろうな。話しかけられたのがシルヴィイだとは気付いてないはずだ。まあ、今帰ってきた時に会ったとしても、別の人と考えるのが普通だな。」

シルヴィア「私だとは思わないだろうね、なんかイタズラするみたいで楽しくなってきたやつた〜！」

八幡「虎峰がお前と遭遇したら間違いないくサインと握手してくるだろうしな。そこんところも俺から言っておく。」

シルヴィア「うん、お願いね。」

つと、話してる間に校門前に着いちやった。ふふつ、どんな反応するのかなあ？

生徒1「あつ！尊師！お帰りなさ……………えっ!?えええ!!」

生徒2「どうかしま……………し……………えっ!?シルヴィア・リニューネハイム!!」

おお〜驚いてる〜！いい反応だね〜。

シルヴィア「こんにちは〜♪」

八幡「おいお前ら、呼び捨てにするな。一応客人だぞ、失礼だろ。」
生徒2「はっ！申し訳ございませんでしたっ！尊師っ！」

八幡「謝る相手が違うだろ……」

八幡くんって礼儀正しいんだな。いつもあんな口調だからちよつと意外だなあ。

生徒2「は、はいっ！申し訳ございませんでしたっ！リユーネハイム殿っ！」

シルヴィア「あつ、いいよ気にしないで。堅苦しいのは苦手だから。」

八幡「ん、お勤めご苦労さん。お前らも鍛錬場に集まっつけ。少ししたら俺とシルヴィとで試合すつから。視野を広げるってのは悪くない事だからな。」

生徒1「八天門場の事ですね！すぐに参ります！失礼しますっ！」
生徒2「失礼しますっ！」

そう言うのと門番の2人は中に入っていった。

八幡「……はあ。」

シルヴィア「ん？どうしたの？」

八幡「いやな？何であんな名前つけたのかねーって。星露の奴。」

シルヴィア「さっき言ってた八天門場の事？それがどうかしたの？」

八幡「お前よく覚えてたな……俺が序列下位や序列外の奴らをよくそこで鍛えている場所なんだが、いつの間にか俺の場所みたいになつててな。星露の奴が急に『この場は今から八幡の預かりにするのじや！』とか言つてな、名前なんてなかった場所だから口実としては丁度よかったのかもな。」

さ、流石星露だね……職権濫用だ。

八幡「だが後で理由を聞いたらあれは本気だったみたいでな、それ

が分かった途端に門下になりたいって奴が急に来出してな。弟子も門下も作らんが、教えるだけならという形であの場を開放してるだけだ。あれを俺1人では使いたくねえしな。」

シルヴィア「星露も思い切った事するね。学校の一部をあげちゃうなんて。」

八幡「まあ卒業したら所有権なんてなくなるだろうがな。部屋だけで俺は充分だ。4つの道場の中で1番広い場所を寄越すなんてあのチビバカだろ？」

随分ストレートに言うなあ。

八幡「まあいい、お前は先に鍛錬場行っとけ。俺は食材の下準備をしてから行く。人だかりが出来てるだろうからな、そこに行けば校門前の奴が居るだろうから大丈夫だろう。」

シルヴィア「うん。」

そして八幡くんは、自分の寮部屋に戻って行った。私も早く行かないきゃ！

――八天門場――

うわあ、凄い人。八幡くんに教わってる人ってこんなにいるんだ。それ以前に私の注目も凄い事になってるけど。

生徒1「ん？おおっ！リユ―ネハイム殿！ご到着なされましたか！」

シルヴィア「ん？君はさっきの。」

生徒1「ここに居ては渋滞に巻き込まれてしまいます。どうぞ此方へ。」

シルヴィア「う、うん。」

そう言われてから彼の後に着いていき、八天門場の中心に着いた。

生徒1「尊師よりお話は聞いております。尊師がご到着するまでは、此処でウォーミングアップをしていてほしいとの事です。外の方では私が皆を抑えておきます故、どうぞ貴方のご自由になさって下さい。」

シルヴィア「い、いいのかな？私だけが自由に使っても。」

生徒1「尊師がそう仰られていたのです。リユーネハイム殿はお気になさらず、ご自由になされて下さい。尊師が着き次第すぐに始めますので。」

シルヴィア「そうなんだ。じゃあお言葉に甘えさせてもらうよ。外の方は大変だと思うけど頑張ってるね。」

生徒1「ありがたきお言葉っ！ではっ！」

掌で手を包む事を包拳礼って言うんだよね？やっぱり此処ではやってるみたいだね。

シルヴィア「さて、私もそろそろ始めようかな。相手はこのナンバー2だしね！」

八幡くんと戦うなんて初めてだし、気合い入れていかないとね！

――数十分後――

ギイイイ

ん？来たかな？

界龍の生徒たちが入って来て、中心のタイル以外の場所に陣を取るように座っていた。最後に八幡くんが来たけど、私は目を疑った。

そこには、今までとは全く違う雰囲気を纏った八幡くんが居た。多分服は此処の制服だと思うけど、何よりも雰囲気が全然違った。目にも優しさがこもっておらず、彼の身体からは異質のオーラと威圧感を感ずる。

身体がピリピリしているし、今まで感じた事もないような途轍もない臨場感。

そっか、私は優しい彼しか知らなかったんだ。

八幡「済まん、待たせたな。」

シルヴィア「う、うん。凄いオーラだね。これが【覇軍星君】を倒した人のオーラかあ。圧倒されちゃうよ。」

八幡「そうか……まあ試合するにしても軽くにしないか？ 試合には手加減したくない主義なんだ。もし本気でやったら明日になる前にどうなるか分からんからな。」

シルヴィア「うん、それでいいよ。」

八幡「分かった、なら………」

急に八幡くんが右手で印みたいなのをして、何かを唱え始めた。

八幡「我が式よ、我が主命に従いて、指標を滅せよ！急急如律令。」
すると目の前が光り出して、1人の少年が現れた。120〜30cm
くらいの身長で青い髪に右腕は義手だろうか？

???「主人、何か用か？」

八幡「ああ、シオン。お前少しシルヴィと戦ってくれ。お前の技量
なら戦える筈だと思うが……どうだ？」

シオンくんっていうのかな？

シオン「分かった。それが主人の命なら受け入れる。俺はエリュシ
オン・C・タービン。八幡の式。よろしく頼む。」

シルヴィア「よ、よろしくね？私はシルヴィア・リユーネハイム。」
八幡「じゃあ時間も勿体ねえし、お互いのタイミングで始めてくれ。
シルヴィ、シオンは強いからな？」

ちよつとー!?さっき言ったことと矛盾してるじゃんか!!私八幡く
んに何も悪い事してないのに!!

シオン「行くぞ。」

後で一杯からかってやるんだから!!

模擬戦後の夕飯に？

シルヴィア side

シルヴィア「はあ……はあ……強いんだね。君がそんなに強いってことは、八幡くんはそれ以上なんだよね？」

シオン「当然だ。主人は俺よりも遥かに強い。俺など傷1つ付けられん。」

シオンくんもこんなに強いのに……傷1つ付けられない八幡くんの強さって……もし八幡くんが《王竜星武祭》に出てたら、私負けたかも……

八幡「……もう5時20分か。シオン、もう止めだ。剣を収めろ。」

シオン「御意。リユーネハイムさん、良い手合わせだった。またやりたい。」

シルヴィア「こっちの台詞だよ。凄く有意義だったよ。あと、私のことはシルヴィイでいいよ。八幡くんの家来？なら悪い人じゃないしね。」

シオン「……じゃあシルヴィ姉と。信頼を置ける人はそう呼ぶことにしている。」

へえー。こんなところも八幡くんに似てるんだねー。もしかして八幡くんの影響だったりして？

シオン「では失礼。八兄、じゃ。」

八幡「おう、ご苦労さん。」

そう言ってからシオンくんは消えてしまった。それにしても、あれ

だけ強いのに八幡くんはもつと上……凄いなあ。

八幡「お前ら、模擬戦は終了だ。各自散れ。好きに行動しろ。」

「はっ!!」

しっかりと返事も……八幡くんさ、思いっきり師匠みたくなってるよ？

八幡「シルヴィ、邪魔が入らない内に俺の部屋に行くぞ。お前も腹減ってるだろ？もう5時半だしな。」

シルヴィア「もうそんな時間なんだ？時間が経つのもって早いなあ。分かったよ、いざ！八幡くんの部屋へっ！」

八幡「何言ってるんだお前……」

いいでしょ！こういうの1回やってみたかったんだから！

——八幡ルーム——

八幡「すぐ作るから適当に寛いでてくれ。なんならCD聴いててもいいぞ。」

シルヴィア「何か手伝うよ。」

八幡「お前は今日の準決勝と模擬戦で疲れてるだろう？これくらい俺がやるから大丈夫だ。いいから寛いでろ、それがお前の仕事だ。」

シルヴィア「むう、分かったよ。ん？そういえば八幡くんって音楽聴くの？あんまり興味なさそうな感じだけど。」

八幡「割と聴くぞ。最近聴くのは『君が笑む夕暮れ』と『優しさの理由』だな。俺は静かな曲の方が割と好きだからな。」

シルヴィア「むう、八幡くんは私の曲好きじゃないの？」

八幡「別にそういうわけじゃない。聴いてると何故か無性にお前に会いたくなるから……あつ。」クルッ

シルヴィア「えっ!?!／／／」

八幡「あ、いや……忘れてくれ／＼」クルッ

八幡が振り返ってそう言ったと思ったら、訂正した後また元に戻った。

……今の聞き間違いなんかじゃないよね？八幡くんが私の曲を聴いたら会いたくなる!?も、もしかしてこの中に私のCDもあるのかな？

ちよつと探してみようかな。

あつ！あつた！しかも全曲揃ってる……私の事を知ったのは六花に来てからだから、2ヶ月の間に全部集めたんだ……

……嬉しいな。

シルヴィア「ねえ八幡くん。私の歌った曲で1番好きな曲って何か教えて？」

八幡「……『ミレナリオ』だな。さつきも言ったが俺は静かな曲が好きだからな。あと、想いを伝えようとする曲もな。」

八幡「歌だから別になんでもいいだろ？別に前のお出したCDじゃなくても。」

シルヴィア「うん、大丈夫。」

……：想い、か。私もそんな曲作ってみたいなあ。でも作らせてはくれないし、それ以前にどうやって作ったらいいか分からないし、結局行き止まりなんだよなあ。

八幡「うし、前菜が出来たぞ。」

シルヴィア「え？」

八幡「だから前菜が出来たんだ。CDいじりもいいが、これでも食って待ってろ。」

さてさて、どんな料理かな？

シルヴィア「わあ〜！美味しそうっ！」

八幡「生ハムオニオンのペッパーカーパツチョだ。そのままいいが、ついてるソースと一緒に食ったらもっと美味しいぞ。」

シルヴィア「凄いね。こんな見栄え良く出来るものなんだねー！」

八幡「別に食っていいぞ？」

シルヴィア「ううん、八幡くんと一緒に食べたいから待ってるよ。」

八幡「そ、そうか……………」

食べるなら一緒にタイミングが良いしね！

八幡「よし、じゃあ次はこれだ。」

シルヴィア「これって…………ポテト？それにこれは…パンにトマトが乗ってる？」

八幡「ハツケルバックポテトと一応リクエストのパン料理、トマトバゲットだ。ポテトはチーズとベーコンが乗ってるからそれと一緒に食ったら美味い。バゲットはソースで手がベタベタになるが、それ

を気にしなければ美味しいと思うぞ。」

シルヴィア「どっちも美味しそお〜！凄いいね八幡くんっ！」

八幡くんって色んなの作れるんだなあ。明日お弁当でも作ってもらおうかなあ？

八幡「そして最後にコロツケだ。一応自信作でもある……ある意味な。」ボソツ

最後の方よく聞こえなかったけど、コロツケも文句無しに美味しそう……

でも……

シルヴィア「ねえ八幡くん？どうしてこのコロツケ普通のより小さいの？」

八幡「食ってみてからの楽しみだ。」

シルヴィア「ええ〜!？」

八幡「大丈夫だ。変なものは入れてねえから。なんなら食わせてやろうか？」

……え？食わせてやろうか？

シルヴィア「ぜ、是非お願いします!!」

八幡「……え？」

シルヴィア「是非お願いします!!」

八幡「いや、ただの「是非お願いします!!」……わ、分かった。」

やったあ〜♪

シルヴィア side out

—————

八幡「……………なあ？なんで隣なんだ？正面にも席あるんだが？」

シルヴィア「こっちの方がいいの♪八幡くんもこの方が食べさせやすいでしょ？」

八幡「……………だが、」

シルヴィア「ねえ？……………いいでしょ？八幡くん？ダメ？」ナミダメ+ウワメツカイ

八幡「わ、分かった。分かったからその目をやめてくれ。」

「たく、んな目されたら断れねえよ。何でそんなに可愛いんだよ。」

シルヴィア「ふえ！／／／／／」

八幡「ん？どした？」

シルヴィア「い、今の本当？／／／／／」

八幡「な、何が？」

シルヴィア「私のこと可愛いって……………それ……………本当？／／／／／」
／「ナミダメ+ウワメツカイ

八幡「……………口にしてたか？」

シルヴィア「う、うん／／／／／」

うおおおお!!!またやつちまったああ!!!最近は良くなってきたと思ってたのに、全然良くなってねえじゃねえかああ!!!

シルヴィア「それで!?ど、どうなの？私が……………可愛いって本当？／／／／／」

またもシルヴィアが涙目+上目遣いで聞いてくる。

八幡「あ、ああ／／／／／」

シルヴィア「そ、そっか／／／／／」

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

2人は無言のまま見つめ合っていた。そして徐々に顔が近づいていく。まるでお互いの目に吸い寄せられて行くかのように。そんな2人の顔はすぐ目の前にあるようなものだった。

5 c m……………

3 c m……………

そして……………

p i p i p i …… p i p i p i ……

2人「っ!!!」ビグッ!!!

突然の着信音に身を一瞬宙に浮かせ、そして今度は背を向け合った。

着信音はシルヴィアの端末からだった。

通信ボタンのc a l lを押すと…………

ペトラ『やつと出たわ……………つてどうかしたの？シルヴィア？顔が真っ赤よ？』

シルヴィア「ううゝゝゝ!!／／／／」プシュゝ

ペトラ『あ、あら？もしかしてお邪魔だったかしら？ごめんなさいね？また後にするわね？それじゃまたかけるわ。』

シルヴィア「今でいいですっ!!!早く要件を済ませて下さいっ!!!」

シルヴィアは大声でそう言った。

ペトラ『わ、分かったわ。それじゃ伝えるわね。今日の……………』

それからペトラは要件を伝えていたが、今でなくてもいいような内容であった。

ペトラ『……………つて事よ、ごめんなさいね長々と。八幡くんにもよろしくね。』

そう言うってから通信は切れてしまった。

八幡「その……………悪かった、シルヴィ。」

シルヴィア「うう……………八幡くん。」

シルヴィアは八幡の方にすり寄っていった。今のこれは平気なのだろう。

まさかあんな事になるなんてゝ！ペトラさんタイミング悪すぎるよおゝ!!／／／／／

八幡「……こんな事しか言えねえけど、取り敢えず晩飯食おうぜ。
な？」

シルヴィア「……………うん／＼／＼／」

その時の晩ご飯は、味を感じない程に2人の感覚が麻痺していた。
シルヴィアは食べさせてもらう事も忘れて、ふたりはただ持ったものを
口に運ぶだけの作業を繰り返しているだけで夕飯は終わってしまった。

夜のティータイムとバスタイム

八幡 side

シルヴィア「そういえば、あのコロッケ凄かったね！色んな味があつて面白かったよ！」

八幡「まあ楽しみにしろつて言つたのは俺だからな。それなりに楽しめると思つてな。」

俺が作つたコロッケは中身が5種類あつた。ジャガイモ、サツマイモ、カボチャ、コーンクリーム、カレーのという、まあオーソドックスな味にした。

それに作つたのは晩飯だけじゃねえしな。

八幡「食後について思つてな、アップルタルトとダーズリン セカンドフラッシュだ。」

シルヴィア「わあゝ凄い！バラ型に出来るんだー！この紅茶も良いにおーいっ！」

八幡「切り分けるが、どのくらいがいい？一応8等分出来るが？」

シルヴィア「じゃあ一切れ貰おうかな？最初だからね、味を楽しみたい。」

八幡「分かった。」

シルヴィア「……あつ、美味しい。へえ、程よい甘さなんだ。」
ク
イツ

八幡「茶葉の中ではそれが一番好きでな。そのタルトとも良く合うぞ。」

ほんの1時間前まではすげえ気まづかったが、時間と共に消えていった。俺がタルトを切り終えて紅茶を一飲みした後……

シルヴィア「それでさ八幡くん。」

八幡「ん？どうした？」

振り向いたらシルヴィは、真剣な眼差しでこっちを見ていた。おそらく明日のことで聞きたい事があるんだろう。

シルヴィア「八幡くんは何かあるかな？【孤毒の魔女】の試合は観てたんだよね？そこで八幡くんなりの対策とかないかなあって思ってたんだけど。」

八幡「そうだな……俺ならあの毒を無効化してから攻撃をする。毒自体を消せばただの遠隔攻撃だからな。」

シルヴィア「そんな事出来るの？」

八幡「お前には言つてなかったな。俺の中には守護霊がいてな、そののおかげで毒は効かない。と言つてもまだ使い勝手が分かってねえから鍛錬中だな。出来なかったら空でも飛びながら攻撃だな。その効果を纏うくらいなら出来るからな。」

シルヴィア「じゃあ八幡くんは、【孤毒の魔女】の対策が万全って事じゃん！君が《リンドブルス王竜星武祭》に出てなくてよかったよ。もし参加したら、私八幡くんに絶対に勝てないよ。」

八幡「まあ、来年の鳳凰星武祭には出ようと思ってる。今回はあいつらが居たのと、この力を完璧にするために見送っただけだから。次の《王竜星武祭》には出る。」

シルヴィア「ええっ!? 出ないでいいよぉ〜! 八幡くんが出たら勝てないよぉ。」

八幡「じゃあもしもだが、他学園とコンビを組んでもいいって星武祭があつても俺は参加しなくてもいいんだな?」

シルヴィア「やっぱり出ていいよ! 私ね、八幡くんは星武祭に出るべきだと思うのっ! もしそんな星武祭があつたら絶対私と組んでねっ!! 絶対だからねっ!!」

変わり身早いな……それと必死過ぎんだろ。どんだけ出させたいんだよこいつは。

シルヴィア「まあそれはいいとして、私に出来る対策とかない?」
八幡「難しいな。こいつの力は分け与えることは出来ても完全じゃない。お前にやったブレスレットもその力は付与されてるが、絶対というわけではない。」

シルヴィア「そっかぁ……これってそんな効果もあつたんだね。」

八幡「お前付けてたのか?」

シルヴィア「うん、お風呂と寝る時以外では常に肌身離さず付けてるよ。何せ八幡くんがくれたお守りだから、効果は今聞いた通り抜群だしねっ!」

マジで付けてやがった。

そんな時、音がなった。

シルヴィア「ん? 何の音?」

八幡「風呂が沸いたんだろう。シルヴィ先入るか?」

シルヴィア「……………ううん、八幡くん先に入って。私まだ考えたい事があるから。」

八幡「……だが、こういう時は一番風呂に入った方が気持ち良いと思うがな？」

シルヴィア「八幡くんが入ってよ。今日は突然の事があり過ぎて疲れたでしょ？だから八幡くんが先に入るの。」

八幡「……なんか命令されてる気がするが、お前がそう言うなら先に入らせてもらう。先に失礼するな。タルトと紅茶はそのまま食ってていいからな。」

シルヴィア「うん、ありがとう。」

――洗面所・風呂場――

八幡「しかし、まあ確かに突然だよなあ。今日泊まるって聞いてから、買い物とか色々あったからな。」

食事では……いやいやダメだっ！考えるのは止めておこう。俺はまだ死にたくない。

八幡「相変わらず広いな。こんなに広くなくてもいいのによ、別に泳がねえのに。」

一応俺は序列2位だから、この学園から借りてる寮部屋は比較的豪華な方だった。だから浴槽も4人くらい横になってもまだスペースがあるくらいの広さだ。こんなに広くしてどうすんだよ。まず人なんて呼ばねえよ。既に1人呼んでるけど。

八幡「まあいい。あいつも疲れてるだろうしな、後で指圧でもしてやるか。」

ま、さっさと上がってシルヴィに代わるか。俺が長居しても意味ねえしな。少しゆつくりしてから身体洗って、5分くらいしてから上がるか。

――10分後――

八幡「はあ、次は身体だな。」

そういやこんな早く風呂に入ったのは初めてだな。いつもは9時くらいだったからな。シルヴィがいるからかもな。

シルヴィア「八幡くん、お湯の温度ってどのくらいなのかな？シャンプーは私の使ってる柑橘系の香りを使ってる？」

八幡「あ、ああ。湯は40度でシャンプーもお前の勧めてくれたのを使っている……それで、それがどうかしたのか？しかもそんな所で。」

……待てよ。前居た家にあつたラノベにあつた某ハーレムアニメに、男が居るのが分かってるのに入ってくる奴がいたな。

…………まさか。

襖の動く音がして、水を踏む音が聞こえてきた。そして後ろを振り返ると、バスタオル以外に何も身につけていなかった。
そう、完全に裸だった。

シルヴィア「お、お邪魔します／＼／＼／」

…………どうやら俺は、まだ今日という日を安全に生きられないようだ。

近くにいないとダメ

八幡 side

俺が入浴しているにも関わらず、シルヴィがバスタオル1枚を身体に巻いているだけの状態で風呂場に入ってきた。

シルヴィア「お、お邪魔します／＼／」

八幡「おおお前何考えてんだよ!?俺がまだ入ってんだぞ!?」

シルヴィア「……………うん／／／」

いやいや!「うん」じゃなくて!!俺は男!君は女!この意味分かる!?この状態で一緒に風呂に入る事を混浴っていうんだよ!?現時刻をもって俺たちはそれをやっちゃってるわけだよ!?

シルヴィアさん!!?一体何考えてるの!?俺も男だよ!?君みたいなパーフェクトボディを持った女性と一緒に風呂なんか居られないよ!?

即上がっちゃうからね!?でも上がれない!だってしっかりと襖の前に居るんだもん!!上がれねえよこれじゃあ!俺詰んじやってんじゃない!

シルヴィア「は、八幡くん……………／／／」

八幡「お、おう!?どした!?やっぱ上がってほしいよな!?待ってろ!すぐに「そ、そうじゃなくて!」から……………え?」

シルヴィア「お、お背中お流します／＼／」

八幡「……………因みに拒否権は？」

シルヴィア「……………嫌ならいいけど、お風呂からは上がらないからね？」

おい、逃げ場なくなね？この子ちよつと策士過ぎるよ。絶対断れないように言つてない？

八幡「……………わ、分かった。スポンジとボディソープはここに置いておく。なるべく早くしてくれ。頼むから。」

シルヴィア「……………八幡くんは、私に身体洗われるの……………嫌？」

八幡「なんで!？」

今の会話でどうしてそんな事になったの？俺なんか言つたっけ!?

シルヴィア「早くしてくれって言つたから……………嫌なのかなって……………」

八幡「い、いやそういうわけじゃ……………」

シルヴィア「じゃあ……………好きなようにしていいんだよね？」

八幡「……………ああ、もう折れた。シルヴィアの好きにしてくれ。やり方も任せる。」

シルヴィア「う、うん／＼／」

俺がそう言つてから、シルヴィアがこつちに歩いてくる音が聞こえた。まさかこんな展開になるなんて……………これなんてエロゲだよ？普

通はこんな事有り得ねえよ。

世界中で有名なアイドルが、こんな冴えない一市民の学生と混浴なんて。

俺……殺されたりしないよな？世界中から刺されたりしないよね？

そんな事を考えていると、後ろからスポンジと手の感触がした。

シルヴィア「……これくらいでどうかな？八幡くん、気持ち良い？

／／／「ゴシゴシ

八幡「ああ、ちょうど良い／／／」

ぶつちやけそれ以外の感想なんて言えん。言える状況じゃない？

シルヴィア「何処か痒いところがありますか？だ、旦那様／／／」

八幡「っ！いいいや！特にない！／／／」

あつぶねえ……なんて不意打ちしやがる。俺は別にお前の旦那じゃねえよ。亭主関白でもねえよ。

あれ？手が止まったって事はもう終わり？

フアサ……………

ん？なんか落ちた？

八幡「な、なあシルヴィ？もう終わったのか？だったら流すが？」
シルヴィア「ま、まだだよ！まだだから流さないでっ！」

八幡「お、おう。」

何だ？腕とかは自分でやるからいいぞ？

すると、突然シルヴィが抱きついて来た。しかもこの肌の感触からしてバスタオルは巻いていない。

えっ
!!!!?
嘘だろ!!?

八幡「お、おいシルヴィ!?!／／／」

シルヴィア「う、動かないで！／＼／＼動いたら………み、見えちゃうから／＼／＼／」

八幡「いやいや!?んなわけにはいかないだろ!!お前、今何も巻いてないだろ!?背中はいいい!頼むからバスタオル巻いてくれ!!」

シルヴィア「いやっ!まだ終わってないもん!八幡くんさつき好きにしていって言ったもん!流し終わるまで、終わるまで絶対離さないんだから!／＼／＼／」

こいつ梃子でも動かないつもりか!?

うわっ…ヤバイ／＼／＼背中にすげえ柔らかい感触が2つ………つてそうじゃない!／＼／

八幡「お、おいシル」や、やだっ!／＼／「まだ何も言ってねーよっ!／＼／」

シルヴィア「い、言う事聞いてくれないなら、ま、前もやつちゃうんだから!／＼／＼／」

八幡「ま、前!!?わ、分かった!分かったからそれ以上強く抱き締めるなっ!／＼／」

前は絶対ダメだ、それはマズイ!!……もう従うしかないだろ!それ以外に選択肢なんてあるはずがない!耐えろ!耐えるんだ理性の化け物っ!!

シルヴィア「……はあ……んっ……あっ……んんっ……んんっ／／」

や、ヤバい。耳にシルヴィの声が直に／／／／あれからシルヴィは俺の身体に自身の身体を上下に擦り付け、俺を逃がさないとばかりに自身の腕を俺の前の方に絡みつけてくる。

シルヴィア「んっ……どう？はち……まんくん……はあ……はあ……気持ち良い？／／／／」

八幡「あ、ああ、大丈夫だ／／／／ていうか、何でこんな事を？／／／／」

シルヴィア「おと……このこは……こういう……のが好きって……あつた、から……はあ……はあ……八幡くんも……すきな、のかなあ……ってえ／／／」

八幡「き、興味がないわけじゃないが、好きってわけじゃ……とにかく！お前も早く身体洗って風呂に入るぞっ！俺はもう限界だっ！これ以上は本当にもう無理だっ！／／／」

シルヴィア「う、うん／／／／」

よ、よかった……少し落ち着ける。

それから俺も、すぐに前の方を洗ってシルヴィに譲った。浴槽は広いからな、流石にくつついてはこないだろう。

――数分後――

シルヴィア「じ、じゃあ失礼します／／／」

八幡「おう／／／」

ピトツ

八幡「……………へ？」

シルヴィア「……………／／／／／」

これだけ広いのに、何故か俺の隣に座る。しかも肩をくつついて。

八幡「……………／／／」

シルヴィア「……………／／／」

八幡「な、なあ？何でこんな近くに来るんだ？それによ、別にこなくなつつくこともないんだぞ？／／／」

シルヴィア「……………／／／」

シルヴィア「……………側にいないと……………落ち着かないから／／／あと、一緒に居ないと不安になるから……………／／／」

八幡「じ、じゃあ何でくつつくんだ？それなら意味が分からんのだが……………」

シルヴィア「……………触れてないとダメな時もあるよ、現に私がそう。八幡くんが側に居ないと落ち着かないし、触れてないと不安になる。今日は……………近くに居て？」

八幡「……………だが風呂はやり過ぎだ／／／」

シルヴィア「……………うん／／／」

八幡「せめて水着くらいは着ろ。それでもギリギリだが裸よりはマシだ。でないと俺が持たない、いいな？／／／」

シルヴィア「……………うん／／／」

まあ、手繋ぐくらいならいいか。

八幡「だが……………これくらいなら風呂上がりでもやってやる。これならいいだろ？裸で抱きつくのは勘弁だからな？／／／」

シルヴィア「……………うん！／／／」

シルヴィは満足そうに答えた。

それから俺たちは何事もなく湯船に浸かり、上がる時は流石に別々だ。

勿論上がってからも、シルヴィとの手は繋いだままだった。

雑談と温もり

八幡 side

風呂の出来事から大分経った後、俺たちはまた紅茶とアップルタルトを食しており、いろんな雑談をしていた。シルヴィは明日決勝だからな。こういうメンタルケアも必要だ。本人は今笑っているが、安心出来ているかはまた別問題だ。

一応出来る限りのサポートはするが、俺にも限界がある。明日も決勝まで居られるのは、精々2〜3時間といったところだ。最初から最後まで俺と居てリラックスが出来るかなんて言われたら、絶対できないだろう。

シルヴィア「八幡くん？どうかしたの？」

八幡「……………え？あ、ああすまん。ちよつと考え事をしていた。」

シルヴィア「……………ひよつとして明日のこと？」

八幡「何で分かったんだ？」

シルヴィア「八幡くんの考えてる事がなんとなく分かるようになってきたんだ。それに今はこうして手を繋いでるからね。」

八幡「それもあるかもな。」

俺たちは今、手を繋ぎながらソファに座っている。ついでに言う
と、タルトを食べる時はお互い片方の手を使って食べている。

シルヴィが手を離したくないって聞かねえからこうしてるわけだ。
最初は食べさせ合いっこと言われたが、手を繋ぐだけでもういっぱいだ。

シルヴィア「大丈夫だよ八幡くん。今こうしてるだけでも充分過ぎるくらい余裕がある。決勝ステージに立ったら分からないけど、こうしてるだけでも大分違うよ。」

八幡「……ならいいんだが、無理すんなよ？なんかあったら俺に言えよ。出来る限りはしてやる。少しでもいいからな？」

シルヴィア「……じゃあさ八幡くん。」

八幡「ん？どうした？」

シルヴィア「……今日寝る時、一緒でもいい？お風呂場でも言ったけど、君が側に居ないと不安になっちゃうから。」

八幡「……そうか。いや、そうだな。誰だって側に居て欲しい時はあるよな。まあ、俺はないが。」

シルヴィア「ふふっ！なにそれ？」

八幡「今までそんな奴居なかったからな……いや、こんな時にする話じゃないな。」

シルヴィア「でも、これからは私が居るからね？いつだって頼ってね？」

八幡「……そうだな。」

シルヴィア「うんっ♪それと八幡くん、ペトラさんから言われたんだけど、私の事務所に入る気はないかって。しかも私のデュエット限定で。」

なんだそりゃ？シルヴィのデュエット限定？歌手なんてこの世界にいくらでもいるってのになんで俺？

シルヴィア「それがね？この前のライブで来る筈だった人から今度はこのいう事はないようにするからやらせてくれないかって依頼が来たんだけど、ペトラさんが即お断りしちゃって。それで、八幡くんに白羽の矢が立ったっていうか……どうかな？」

八幡「どうって言われてもな……俺は芸能界になんて興味ねえし、別段やりてえ訳でもねえしな。」

あん時は、ただシルヴィに頼まれたからやっただけだからな。俺の意思で決めていいなら、俺はやらんな、注目されんのも目立つのも嫌いだし。

シルヴィア「その顔はやっぱりダメかあ。まあ分かってはいたけどね。」

八幡「俺の性格分かってんだろ？」

シルヴィア「まあね、もしかして趣味が悪いって言いたいのかな？」

八幡「いや、小悪魔だなんて。」

シルヴィア「あつ、そういう事言うんだ！ならお前の片腕は私が貰ったぞ！ギュー♪」ダキツ！

こいつって偶に派手になるよな。まあ、そういうところもいいんだがな。まあ、少し付き合ってやるか。

八幡「じゃあ俺はお前の頭を貰うからな？抵抗するなよ？」ナデナデ

シルヴィア「うにやゝ……」トローン

出た、シルヴィのよく分らん声。

シルヴィア「これされちゃうと身体から力が抜けちゃうよお。八幡くんって頭撫でるの上手すぎるよお。なんか魔法使ってるのお？」トローン

なんか喋り方間伸びしてないか？

八幡「いや、何もしてないが……それよりもお前、喋り方間伸びしてないか？」

シルヴィア「そんなの八幡くんが頭撫でるからだよお。もつと撫でてえ。」トローン

俺のせいみたいになれたと思ったら、今度はさらに要求された。しかもちやつかりよしかって来てるし。

八幡「……もう寝るか？」ナデナデ

シルヴィア「んんう……まあ……ただよお……♪八幡くんは撫でるのお
う。」トローン

八幡「眠いんだろ？もう寝るぞ。」

シルヴィア「ナデナデしてくれる？」

八幡「……分かった。やってやるからベッドまで歩け、ほら。」

シルヴィア「むう……。八幡くんと離れたくないのおう！抱っこ！」

こいつ………なんか性格変わってねえか？スゲエ子供っぽくなっ
てんぞ？……俺もう知らねえぞ？明日になって恥ずかしくなっても
知らねえからな？

八幡「たくっ……ほらっ！」

シルヴィア「♪……ありがとお！」

そしてシルヴィアをベッドに寝転がせた。だが、どこか不満そう
だった。

シルヴィア「むう……八幡くんっ！一緒に寝てくれるでしょ！八幡
くんもベッドに入って！でなきや、めっ！だよ！」

何こいつ超可愛くね？こういうのをギャップっていうのか？

八幡「おお、悪いな。電気消すだけだから我慢してくれ。」

シルヴィア「………うん。」

俺は電気を消すと、少し戸惑いながらもシルヴィが寝ているベッド
の手前の方で寝転んだ。一応シルヴィの方を向いてだ。

シルヴィア「………ゴメンね八幡くん。さっきまでの演技なん

だ。」

八幡「……え？マジか？全然気付かなかった。だがなんでこんな事を？」

シルヴィア「八幡くんがどんな反応するのかなあつて。そしたら八幡くん、全部私に合わせてくれるからビックリしたよ。」

八幡「そりやな、明日は一番だからな。なんでも言えつて言ったのは俺だしな。」

シルヴィア「………近くに寄っていい？」

八幡「……ああ。」

俺が答えてすぐに、こつちへとゆつくり近寄って来た。顔も近いが風呂の時に比べりやどうって事ない。

シルヴィア「今日はありがとうね。私の我が儘につき合わせちゃつて。」

八幡「気にすんな。今日はもうゆつくり休んどけ。俺もお前も明日は早いからな。」

シルヴィア「………うん。」

………

八幡「やっぱり不安か？」

シルヴィア「………本当に凄いな。八幡くんは分かっちゃうんだね。」

八幡「その顔見たらな。流石に拭いきれないもんだと思うぞ。相手は六花最強の魔女だからな。ならない方がおかしい。」

俺に今出来るのは、不安を取り除くくらいだ。あまり変な事は出来ないからな。

シルヴィア「なんだろう………怖いのかな？私って八幡くんみたいに

心も身体も強くないから。せめて八幡くんの動じない精神力を分けてほしいよ。」

八幡「なら反対側を向いてろ。ちよつとしたリラックス法をしてやる。」

シルヴィア「?……うん。」

シルヴィは俺が言ったことを素直に従い、そのまま俺に背を向けている。

別にいいよな? 殴られる覚悟ならもう出来てる。

俺はそのままシルヴィを抱いた。

シルヴィア「え? 八幡くん?」

八幡「人は後ろから抱かれると、安心感、ストレスと不眠の解消という効果がある。お前が俺に後ろから抱かれて安心するかどうかなんて分からんが、少しはマシになるだろう。」

シルヴィア「……充分過ぎるよ。凄く安心してきた、眠くなってきた。ねえ八幡くん? 今日はこのまま寝ていいかな? 出来れば朝までずっと。」

八幡「ああ、もう休め。」
シルヴィア「うん……お休み。」

そう言ってから俺とシルヴィは夢の国へと旅立った。

八幡からの贈り物

シルヴィア side

シルヴィア「……ん、んんう……朝?……あれっ?えっ!?!ここは!?!」

目を覚ますと、私は真つ白な空間に居た。上下左右前後、全方位を見回したけど、色がある所はなかった。全部真つ白。

シルヴィア「此処は………何処?」

???『貴女が……八幡様の言っておられた御方ですね?』

シルヴィア「え?」

声が出た後ろの方を振り返って見たら、そこには馬のような体型をして、金色の鬣^{たてがみ}、翡翠色の身体、神々しくも雄々しい角、胸元に突起があり、四肢の関節あたりにも金色の体毛が生えていた。どう考えても、この世にいるような生物ではない事が分かる。

ん？八幡様？

シルヴィア「えーと、君は八幡くんの知り合い……なのかな？」

『……申し訳ございません。申し遅れました。私、四霊が一人、麒麟きりんの索冥さくめいと申します。この度八幡様の御意向により、貴女様の御力になるよう仰せつかった者です。以後、お見知り置きを。』

シルヴィア「は、はあ……私はシルヴィア・リユーネハイムです。」

しれい？よく分からないけど凄く存在感のある見た目だなあ。

シルヴィア「ええーと、索冥さん。」

索冥『呼び捨てで結構です。私は貴方様の支配下で御座います、何なりと。』

シルヴィア「じゃあ索冥って呼ぶね。迷惑って訳じゃないけど、君っていつまでいるのかな？多分期間とかあるんだよね？」

索冥『正確には貴女様や八幡様の住む世界、つまり現世にて行われている催し、《王竜星武祭》が終了した瞬間です。私はこの為に八幡様に命を受けた存在です。』

てことは星武祭のためだけに!?索冥にとったら凄い迷惑な話だね。

索冥『貴女様に力を貸すよう言われましたが、私の力は1度しか使えません。故にお力添え出来るのは1度までということです。これも八幡様からの命です。』

シルヴィア「そっか……まあ確かにそうだね。索冥の力に頼り過ぎてたら、自分で勝ったなんて言えないもんね。」

索冥『御理解頂き誠にありがとうございます。不器用では御座いますが、とても寛大な御方です。貴女様なら御理解頂けると思います。』

シルヴィア「うん、分かってるよ。そういう人だもの。そこが良いんだよね。」

索冥『幼少の頃より見てまいりましたが、八幡様は御自分の事を傷つけ過ぎる傾向が御座います。数こそ減りましたが、それは現在もです。私にお気付きになられた際にその事を申し上げたのですが、八幡様は『気にするな。』の一点張り。私もただの守護霊、主君には逆らえませぬ。』

シルヴィア「……………」

索冥『そこで、私の不甲斐なさを盾にするように申し訳ございませんが、貴女様に折り入ってお願いしたい事が御座います。どうか八幡様の事をお見捨てにならないで下さい。八幡様は貴女様の事を大変信頼されております。今までにない程の深く揺るぎない熱い念を、常に八幡様の身を通して感じておりました。』

索冥『私はこれ以上、八幡様の御心に傷がつく御姿を目の当たりにしたくはありません。どうか……お願い申し上げます。シルヴィア様。』

索冥は目を閉じて頭を下げてきた。八幡くんを子供の頃から見て来たって言ってたけど、こんな風にくるって事は、八幡くんが話してない事も索冥は知ってるって事だね。でも、それは聞くべきじゃないよね。答えも決まってるし。

シルヴィア「勿論だよ。私は見捨てたりなんてしないよ。世界中の人が八幡くんを軽蔑しようと、私だけは八幡くんの味方でありたい。」

シルヴィア「だって大好きだから。世界で1番愛してる人だから。」

索冥『っ！』

シルヴィア「……………どう……………かな？」

索冥『シルヴィア様は、あまてらすおおかみ天照大御神様のような御方なのです。』

シルヴィア「あまてらす……………何？日本の神様だよね？」

索冥の偶に言う単語って少し分かりづらいなあ。今のって神様の名前だった筈だよね？

索冥『その通りで御座います。より正確には天照大御神で御座います。天照様は太陽神として崇められ、太陽の他にも光、慈愛、真実、秩序を象徴とされる女神です。貴女様からは嘘偽りのない誠の愛を感じます。悪意のない純粋さを感じます。』

索冥『どうか我が主君八幡様の事を宜しくお願い申し上げます。』
シルヴィア「うん、任せてよ。索冥も《王竜星武祭》ではよろしくね。」

索冥『心得ております。私の力は攻撃によるものが御座いません。私が出来るのはせめて攻撃を強化するか、範囲を拡大するかです。本来私は争いを嫌う霊なので。』

シルヴィア「ううん、大丈夫だよ。君の力は絶対に必要になるから！」

索冥『…………シルヴィア様は八幡様ともよく似ておられます。私たち霊であっても決して見捨てないところ。八幡様は私が戦闘でなんの役にも立たないと知った時も、シルヴィア様が今仰られた事を仰ってくれたのです……………本当に八幡様は偉大な御方です。私たちにとても、本当に。』

シルヴィア「ん？他にもいるの？」

索冥『はい。守護霊は1人1体とは決められていないので、八幡様には私を含め7体憑いております。』

シルヴィア「凄いなあ八幡くんは。その中にシオンくんもいるんだよね？」

索冥『エリユシオン殿ですか？彼は八幡様の式神ですので含まれていませんよ？』

シルヴィア「えっ!? そうなの？」

索冥『貴女様の疑問は尤もで御座いますね。我々は所詮守護霊。式神と違い、長時間の戦闘は不可能です。一定の時間内でしか御力になれません。こんな時、エリユシオン殿が羨ましいです。』

守護霊と式神って違うんだ……じゃあ後の6体ってどんなのかなあ？やっぱり個性的なのかなあ？

それに、やっぱり気にしてたんだね。決められた時間でしか力にならないことを。

索冥『そろそろ現世は朝6時ですね。随分と長話をしてしまいました。』

シルヴィア「大丈夫だよ。索冥と話せて本当に良かったよ、八幡くんの事は任せて。」

索冥『……………はい。それでは現世へお送りします。では、また後ほど。』

そして索冥からは金色の光が出てきて、私は元の世界へと戻った。

おはようと小会議

シルヴィア side

シルヴィア「……ん……ん？あつ！元の世界に戻ってる。」

それに、朝の6時つていうのは本当みたい。でもまだ外も若干暗いし、八幡くんもまだ寝てるからもう少しだけ……

八幡「……ん……んう……おお早いな、もう起きてたのか。」

うん、やっぱり起きてよう！

シルヴィア「おはよう八幡くん。」

八幡「おう。それにしてもまだ6時だぞ？眠れなかつ……いや、愚問だったな。」

シルヴィア「え？なんで？」

八幡「索冥に会ったんだろ？彼奴はこういうところ気がきくからな。初めて会った時もちようどいい時間に起こしてくれたからな。目覚めも良くなる。」

へえ、そうなんだ。あつ、そういえば……

シルヴィア「ねえ八幡くん。どうして私に索冥を？私じゃ勝てないから？」

八幡「いやそうじゃない。強いて言うなら、放っておけないからだな。」

シルヴィア「……え？それだけ？」

八幡「ああ、それだけだ。」

.....

シルヴィア「……ぷっ！あっははは！何それ？可笑しいよ〜八幡くんっ！」

八幡「……悪かったな。」

シルヴィア「ううん！ありがとう、心配してくれて。」

こんな風にされて嬉しくない訳ないよ。こうやって抱き締められてるだけでも、こんなに幸せなんだから。

八幡「……7時になったら、俺は朝飯の準備をする。米とパン、どっちがいい？」

シルヴィア「普段はパンだけど、今日みたいに動く日は極力ご飯にしてるんだ。その方が身体が動くからね。」

八幡「なら日本食にするか。シルヴィは食ったことあるか？」

シルヴィア「食べた事はあんまりないけど、朝はご飯と味噌汁、卵焼きに焼き鮭なんだよね？それとも違った？」

八幡「……まあ間違っではないが……やけに詳しいな。」

シルヴィア「これでも世界中を飛び回ってますからっ！えっへん！」

八幡「なるほどな。それじゃそれまではゆっくりするか。」

シルヴィア「ならさ、その間このままでいてくれないかな？この方が落ち着くし、なんか居心地いいから。」

八幡「お、おお、分かった。」

ふふっ、八幡くんってば変なのっ！

それから1時間経ち、八幡くんは朝ご飯を作りキッチンへ行った。私も手伝おうと思ったんだけど、きつと八幡くんはゆっくりしてろって言うだろうから大人しく待つてる事にしました。

八幡「なあシルヴィ？聞いていいか？」

シルヴィア「ん？なに？」

八幡「なんで俺の料理作業をそんな食い入るように見てるんだ？特に参考になるようなモンはないと思うが……」

シルヴィア「うん、それでね私思ったんだ。なんで八幡くんってそんなに美味しく料理が作れるのかわからなくて。」

八幡「それでガン見してるってワケか。」

シルヴィア「気が散っちゃうかな？それならあつちで待ってるけど。」

八幡「いや、平気だ。気が済むまで見てればいい。大したモンはないがな。」

じゃあそうしようかな。

――数十分後――

八幡「さて、出来たぞ。」

シルヴィア「やっぱり八幡くんが作ると美味しそうだなあ。でも、少しプライドが傷つくなあ。こんなに料理が上手くて美味しいのが作れるって。」

八幡「まあ誰かに美味いって言われたいから作るってのもあるな。自己満足で作ってる訳じゃないからな。」

シルヴィア「その前向きな姿勢……1ヶ月前まではあり得なかったね。」

八幡「……………そうだな。」

言い方は悪いけど、あの時の八幡くんはまだ瞳が濁ってたからね。でも、あの時から変わっていったんだよね。

シルヴィア「じゃあ食べよつか。」

八幡「ん、そうだな。」

2人同時に手を合わせて

2人「いただきま『p i p i p i …… p i p i p i ……』……」

八幡「誰だ？こんな時に……」

八幡くんがウィンドウを開くと、

星露『おお、起きとったか八幡。今日のことについて話しに来たぞ。』

陽乃『おはよつ、八幡くんっ！入れてもらってもいいかな？』

星露と序列4位の【魔将天閣^{ましようてんかく}】だった。

八幡「あー……別に入ってもいいですけど、朝飯はないですからね

？昨日と今のもう食材切らしてるんで。」

え!？八幡くん!？今此処に私が居るんだけど!？

星露『なぬ!？そうなのか!？むうゝ残念じゃ。またの機会にしよう。』

陽乃『まあ今回はその為に来たわけじゃないから安心してよ。』

八幡「ならいいですけど……あと、部屋に入って来たとしても絶対に騒がないでくださいね？お願いしますよ?。」

……もしかして分かっててやってるのかな？八幡くんって偶にタチ悪い時あるよ？

星露『何じゃそれだけかえ?。』

陽乃『こんな朝からなんて私でもしないよ。いいから開けてよく。』

八幡「はいはい……じゃあどうぞ。」

すると八幡くんはドアのロックを解除して2人を入れた。

星露「なんなのじゃ八幡?入っても騒ぐな………とは………」

陽乃「私もう大学生だよ?幾ら何でもその歳になつてうるさく……

なん………て……」

シルヴィア「あ、あの……おはようございます。それと……お邪魔してます。」

とても奇妙な朝のご挨拶だった。

シルヴィア side out

八幡 side

陽乃「八幡くん?なんで【戦律の魔女】シングルドリーヴァが八幡くんの部屋にいるの?しかも2人分の朝ご飯も用意してあるね?。」

星露「そうじやのう？少し妾にも説明して欲しいのじやが？昨日来るとは聞いたが、歌姫殿は『泊まる』とは一言も言っておらんかったが？」

やつぱこうなつたか。まあこの2人の対処なんて簡単だがな。

八幡「別にいいじゃねえか。なんか悪いことでもあんのか？」

星露「ほう？妾に口答えするか？」

陽乃「ちよつと正座してもらおうかな？」

八幡「別にいいですけど、星露には青椒肉絲作ってやんねえが、いか？陽乃さんには週3の紅茶とクッキーもう用意しませんけど、いいですか？」

星露「妾はそんな些細な事は気にせんぞ！歌姫殿、ゆつくりしていいと良い。」

陽乃「八幡くんの部屋に誰かいるのは当然だよねえ！あつ！シルヴィアちゃん！ご飯はゆつくり食べていいよっ！」

シルヴィア「は、はい……（八幡くん……既に2人を餌づけしちゃってるんだ。）」

チヨロいな。

八幡「それはいいとして……星露、今日の事だよな？それならシルヴィの控え室に行つてそこで観戦する予定になつてるが？」

星露「うむ、その通りじや。八幡、お主は歌姫殿と共にドームに入つてもらうが、影の中に入っていくのじや。その方が一番安全じやろう。」

八幡「元からそのつもりだ。変装は無理があるし、そのままは論外だ。」

星露「分かつておるようで何よりじや。陽乃も界龍のVIPルームで彼奴らを監視させることにした。ちようど正面じやからのう。見張りやすくてよいじやろう？」

陽乃「何か怪しい動きがあつたらすぐに知らせるね。だから心配しなくていいよ。」

八幡「ありがとうございます。」

シルヴィア（対策が早いなあ。それにこの入念さ。余程八幡くんが大切なんだろうね……違う意味でも。）

八幡「シルヴィ、ちよつといいか？」

シルヴィア「ん？」

八幡「あの2人に昨日のタルトやつてもいいか？このまま帰すつてもあれだからな、お前さえよければなんだが……」コソコソ

この2人には特に迷惑掛けてるからな。こんくらいじゃ足りないが、せめて今はこれだけでもしてやれるといいんだが。

シルヴィア「いいよ。星露はともかく【魔将天閣】が協力してるなんて思ってたけどね。それくらい私はいいよ。」コソコソ

八幡「すまん。」

星露「お主ら、何を2人でコソコソしておるのじゃ？」

八幡「いや、別になんでもねえよ。」

八幡「それよりも、昨日作ったタルトがあるんだが、2人共食べるか？シルヴィから許可が出ているから、1切れならやるぞ。」

陽乃「じゃあ頂こうかな。」

星露「たると？聞かぬなあ。気になるぞ！妾も食べたいぞっ！」

……陽乃さんはともかく、星露はもうちよい落ち着け。食いもんは逃げねえよ。

だからチビって呼ばれんだぞ？

※始動

―――決勝まで残り3時間―――

シルヴィア「じゃあ星露、観客席での見張りお願いね。陽乃さんもよろしくお願いします。」

星露「うむ、任せておくのじゃ。」

陽乃「しっかりと見張っておくから、シルヴィアちゃんは打倒【孤毒の魔女】に集中してなさい。君の悲願でしょ？」

シルヴィア「はいっ！」

星露「八幡もよいな？ドームの控え室に着くまでは決して表に出てはならんぞ？」

八幡『分かってるよ、お前に心配されなくても中に入るまでは姿はださねえよ。』

陽乃「ならよしっ！じゃあシルヴィアちゃん、頑張ってね！」

シルヴィア「はい！ありがとうございます！では、お先に失礼します。」

雪乃「結局彼は見つからなかったわね。」

結衣「うん…………でも絶対ここにいるよ!」

小町「小町もそう思います!会長さんは隠してる風には見えなかったですけど、他の学園にいるんですよ!」

雪乃「そうね。今日は決勝戦が終わったら見学も終わって帰る事になるけれど、またここに戻ってくるのだから問題無いわね。」

結衣「そうだよっ!4月になったらみんなでまた捜そうよっ!」

小町「はい!結衣さん!雪乃さんも一緒に頑張りましょう!」

雪乃「ええ、そうね。あと1時間で集合ね。2人共忘れ物がないようにするのよ?」

小町「了解でありますっ!」

結衣「うんっ!」

沙希「一応ここに集まったけど、なんか話す事ってある?」

海老名「私はないかな。比企谷くんが見つからなければそれでいいかな。」

材木座「私も同様で無いのである。」

戸塚「……………」

海老名「…………?戸塚くんどうしたの?」

戸塚「川崎さんに1つだけ聞きたい事があるんだけど、いいかな？」
沙希「なに？」

戸塚「界龍の生徒会長さんって信用出来るの？疑ってる訳じゃないんだけど。」

沙希「うん、それについては保証する。あの人が嘘をつくような人には見えないからね。」

戸塚「そっか……うん、分かったよ。」

材木座「我は川崎氏の情報を信じるぞ。そもそもこの2ヶ月で川崎氏が嘘をつくような人柄ではない事が判明してる。」

海老名「この中で1番信頼をおけるのは、サキサキだからね。」

沙希「ちよっ！やめなっあんたら！褒めたって何も出ないよ！」

戸塚「あつはは！分かってるよ。」

沙希「……つたく。」

葉山「はあ、今日で見学も終わりか。まあ仕方ないか、今回は単なる見学だからな。比企谷を潰す機会なら、此処に転校出来た時点ですくだけでもあるようなものだから構わない。」

葉山「まあ彼は今も昔と変わらず、1人で哀しく虚しく過ごしてるんだろうね。再開が楽しみだ、その時は……はははっ！」

葉山「全く、才能の無いあいつが俺にボコボコにされて許しを請う

無様な姿が今にも目に浮かぶよ。はははっ、段々面白くなってきたよ。」

オーフェリア「……………何故ダメなの？ 貴方にそんな権限はないはずよ。」

デイルク『テメエは俺の所有物だ。俺に指図すんじゃないよ、お前が今関わっている男と縁を切れ。』

オーフェリア「……………絶対に嫌よ、それに何故貴方はそんなに彼の事を警戒するの？」

デイルク『テメエには関係ねえし話す義理もねえ。いいから縁を切れってんだよ。それにお前に拒否権はねえんだよ。』

オーフェリア「……………なら、私は代わりに貴方の命令を一切受け付けないわ。」

デイルク『……………何だと？』

オーフェリア「……………確かに私は貴方の物よ。けれど、貴方に絶対服従という項目はないわ。私にも譲れないものが出来たの。それを潰すのなら例え私の所有者である貴方でも容赦しないわ。それでもいいのならね？」

デイルク『テメエ……………毒しか出せねえ奴がいつからそんなに偉く

なった？』

オーフェリア「……………彼に会ってから、かしらね。それで、どうするの？」

デイルク『……………チツ、最低限の接触なら許してやる。それ以上は無しだ。』

オーフェリア「……………分かったわ、私も準備があるからもう切るわ。」

デイルク『とつとと行つてこい。』

オーフェリア「……………貴方と過ごす時間は私にとって貴重な時間よ、八幡。誰に潰させはしないわ。」

シルヴィア「ふう、いよいよ決勝かあ。去年と同じ舞台なのに変に緊張するなあ。」

八幡『大丈夫だ、自分を信じろ。今のお前はそう簡単にやられたりはしない。』

シルヴィア「……………どうして分かるの？」

八幡『前回の試合を見た。途中からお前の目に諦めが混じっていた。だが今回は違う、負けられない理由があるんだろ？』

シルヴィア「……………うん。」

八幡『なら勝ちにくいかないだろ？今回のお前は、3年前とは一味も二味も違うって所をアイツ見せつけてやりやいいんだよ。』

シルヴィア「……そうだね。うん、ありがとう八幡くん。もう負ける気がしないよ、むしろ勝てる気がしてきた。」

八幡『おう、その意気だ。最初からネガティブになるな。勝てると思えばそれが実現出来たりするもんだ。』

シルヴィア「うん！」

シルヴィア（見ててねっ！八幡くんっ！私、必ず勝って優勝するか
ら!!）

君の気持ちは？

八幡 side

現在俺たちは問題なくドームに入り、控え室の少し前まで来ているらしい。俺は此処に来るのは初めてだからな。道とか構造とかよく分からんからシルヴィが人の目を気にしながら教えてくれている。

ここが六花で一番でかい会場となると、やはり設備も良い。おそらくだが他のステージはこれ程大きくはないのだろう。小から大つてつくくらいだからな。

しかし周りの連中は何故こうも人の気持ちも考えずにサインやら握手やらを強請れるかね？ 今から決勝なんだぞ？ 気を利かせられねえのか？

シルヴィア「八幡くん、もう着くよ。」

八幡『おー、やつとか。』

正直下の方は真っ暗だから怖い。今にも落ちそうな感じだが、落ちない。東京タワーの強化ガラスの真上に立ってるのと同じ原理だ。下は見えないけど。

シルヴィア「ふう〜、なんとか着けた。八幡くん、もう出てきていいよ。」

そして俺はシルヴィの影から出た。やっぱり開放感あるなあ。下がある地面……うん、やつぱこっちの方が良いな。

八幡「やれやれ、隠れるつてのは疲れるな。まあこれも俺の蒔いた種だからな。シルヴィも巻き込んで悪かったな、本来なら俺1人が何とかしなきゃならないのによ。」

シルヴィア「気にしなくてもいいよ。八幡くんからあの話を聞いて

おいて、知っていながら放ってなんておけないよ。」

……ありがたい上に心強いな。本当に信頼出来る奴がいるってのは。

八幡「ありがとな……なあシルヴィ、1つ聞いていいか？」

シルヴィア「ん？何？」

八幡「なんでこんな早くに来たんだ？もつと時間を置いてからでもいいと俺は思うんだが……何かあるのか？」

そう、決勝が始まるのは今から2時間半後……まだ時間は充分にある。もう少し界龍でゆつくりしてもいいはずなのだが、シルヴィアは早く此処に行きたいと言ったのだ。

俺としては安全面を考慮してくれてかなりありがたいが、シルヴィの行動を制限してるようで気が引けてしまう。

シルヴィア「ああ、その事？実はね、八幡くんと改めて話があったからなんだ。私って八幡くんの優しいところしか知らないんだと思うんだ。昨日の模擬戦の時、八幡くんの目とかオーラが明らかに別人のように違ったから。実は八幡くんってかなり肉食系でしょ？いつもは冷静だけど、昨日の寝る時とか自分で来てたから。」

八幡「あ、あれはお前が安心して眠れるようにとだな、色々考えた結果あんなったんだよ。」

シルヴィア「うん、それは分かってる。でもさ、隠し切れてないよ。八幡くん表には出さないけど、凄く分かりやすいから。」

八幡「……」

シルヴィア「それとも女の子だったら誰でもいいって事かな、八幡くんは？」

八幡「バカ言うな、あんな事誰にでもする訳ねえだろ。お前だからこそやってんだよ。それに、今俺が1番信頼出来るのは……シルヴィだけだからな。」

シルヴィア「えっ？／＼／＼」

俺にもっと度胸があれば告白してるところだが、中学ん時のせいでまだ引け目があるのだろう。シルヴィを信じていないわけではないが、また同じ事になると思うと……やりたくない、それなら俺は今のままの関係で充分満足だ。

シルヴィア「んんっ！／＼／＼そっか、私が1番信頼出来るんだ……じゃあさ、もしも私が八幡くんの事を好きって言ったら……君は信じる？」

八幡「……分からない。昔とは随分変わったし、力も得た俺だが、中身は臆病なままだからな。まだ人を信じきれていないのかもな。心の目が耽つてやがる。多分、最初は疑う……と思う。」

シルヴィア「仕方ないよ。あんな事があつたんだよ？人を信じられなくもなるよ。」

八幡「好きって言われるのは嬉しいかもしれない。だがそれだけでは信じられないかもな。考え過ぎかもしれないが。」

シルヴィア（これは一筋縄ではいかないかもね。でも諦める気なんて毛頭ないしねっ。私も八幡くんと同じで君の事を信じてるしねっ！）

シルヴィア「そっか……ん、分かった。」

八幡「悪いな、答えになってなくて。」

シルヴィア「ううん、気にしてないよ。むしろ俄然やる気が出てきた。」

八幡「？何故だ？」

シルヴィア「内緒っ♪」ギュッ

訳の分からない事を言っただけと思ったら、今度は抱き着いてきた。

シルヴィア「八幡くん……いつか、私の事を完全に信じられるようになってね？私はいつまでも待つてるから。君のペースでいいから、ね？」

八幡「……………お、おう。」

シルヴィア「うん。じゃあこの話は終わり！それでさ、八幡くん……決勝が始まるまでこのままでいたんだけど、いいかな？」

八幡「……要求があるなら聞いてやる。」

シルヴィア「うん、ありがとう。」

そのままシルヴィは、俺の腕を抱きながら目を瞑った。そして手を繋いで俺の肩に頭も乗せてきた。

シルヴィア「♪♪♪」

鼻歌まで歌い始めたぞ？何でだ？どうしてこうなった？それに何だか落ち着かない……シルヴィに対する俺の本当の気持ちは何なんだ？この気持ちに妙に落ち着かん。

※ついに……………

星露 side

クローディア「やはり心配ですね。此処を集合地点にしてよかったのですか？我々が引率した方がよかったのでは？」

アーネスト「大丈夫だとは思うよ。まあ、余程の問題がない限りは、問題無く来れるだろうしね。」

アーネストはチラツとデイルクに目をやった。多分レヴォルフの生徒に絡まれていないかを懸念しているのだろう。

デイルク「フンツ、あいつらも普通の学生相手に煌式武装使う程頭は腐ってねえだろ。その頭がなかったらイカれてるぜ。」

アーネスト「……まあいい、星武祭中に騒ぎを起こす生徒はいないと信じたいね。」

デイルク「俺を見ながら言うんじゃねえよ。俺はボンクラ共と違え。」

星露「相も変わらず仲が良いのう。」

クローディア「あら？来たようですね。」

おお、やつと来おったか。しかし、随分と纏まりがないのう。まあこんなものか。

アーネスト「皆、苦勞だったね。さて、今日は観戦するだけだけど決勝戦だからね。君たちにとってもプラスになる事が必ずあると思うよ。今日の試合も自分のお土産と今後の目標として見ていくと僕らは嬉しく思う。」

クローディア「此処に立ち止まっただけでは邪魔になります。早速参りましょう。」

アーネスト「まずはこのドーム内を案内してから席に着くとしようか。」

——シリウスドーム内、観客席——

ふう、案内もやつと終わったえ。1日しかやってらんがのう。いつの間にか1時間半も経っておる。そんなに長く案内しとったのか。

アーネスト「さつ、好きな所へ掛けるといいよ。僕たちも好きに座るからね。」

さて、妾も適当に座るとするかえ。

沙希「あの、会長。」

星露「ん？おお、お主は一昨日の……川崎じやったな、覚えておるぞ。それで、お主の後ろにいる者たちは誰じゃ？」

沙希「私が比企谷の事を話した3人です。一応報告と近くにいた方がいいかと思つて。」

星露「おお！そうかそうか、お主も中々気が回るのう。立ち話もなんじゃし、座つてから話そうぞ。席があるのに座らんのもおかしな話じゃからのう。」

座るなら適当な場所でもよいが、川崎はあやつらの事も考慮して、あの女子たちおなごからなるべく離れた所に座る事にしたのじゃ。川崎は気が利くのう。

星露「一応自己紹介をしておくべきじゃな。妾は茫星露じゃ。界龍の生徒会長をしておる、まあよろしく頼むわい。」

戸塚「戸塚彩加です。総武高1年です。」

材木座「材木座義輝であ……りです。同じく総武高1年です。」

海老名「海老名姫菜です。私も総武高1年です。よろしくお願いし

ます。」

星露「離れているとはいえ、あまり八幡の事は声に出すでないぞ？
して川崎よ、なぜ妾と共に観る必要があるのじゃ？八幡の事を話さな
い限りは、もう自由にしてもよいのじゃぞ？」

沙希「一応の信頼を得る為です。離れた場所では何をするか分からない
状況なら、一緒に居て見張りをしていれば怪しい行動なんて取れな
いですから。」

星露「要は簡単な監視じゃな？」

沙希「はい、もし迷惑でなければ。」

星露「よいぞ。じゃが、この場で八幡の事を語るのは禁止じゃぞ？」
4人「はい。」

星露「それで川崎よ、この者たちには何処まで教えたのじゃ？」

沙希「一通り全部は。入学の方も界龍は私1人だけにしました。」

戸塚「下手に此処にいる全員界龍に志望したら怪しまれるので、川
崎さん1人にしました。」

星露「そうか、主らも済まぬな。」

海老名「いえ……」

材木座「当然である。友だからな。」

星露「……そうか。おつ、始まるみたいじゃぞ。主らも見ておくが
よい。」

星露 side out

—————

—————11:55—————

梁瀬『さあ——皆様あ!!お待たせしました!!今回行われた王竜星武
祭も残すはあと一戦!!最後の決勝戦ですっ!!そしてなんとと言っても、
この決勝戦は前回の《王竜星武祭》と同じ対戦カードです!』

チャム『いやゝ楽しみますねー。この2人が3年振りに同じ会場で
戦うとなると興奮してくるっす。』

梁瀬『はいっ！この2人なら会場を盛り上げてくれる事間違いないでしょう！それでは選手をご紹介致します！前回の《王竜星武祭》覇者にして六花最強の魔女と名高い、エレンシユキーガル【孤毒の魔女】の2つ名を持つレヴォルフ黒学院の序列1位っ！

オーフェリア・ランドルフエン!!!』

紹介と同時にオーフェリアが現れ、観客の方は大歓声だった。

梁瀬『いや、前回同様凄まじいオーラを放ってますねー!』

チャム『でも、かなりパワーアップしてるみたいすね。前回出た時は、万応素が漏れ出てましたからね。今回は出ていないところを見ると、コントロールしているみたいすね。』

梁瀬『成る程！今年もランドルフエン選手で決まりか?!いや！待ったをかけるのがこの選手っ!!前回準優勝者にして世界の歌姫!!この会場に今度は挑戦者として帰ってきました!!【戦律の魔女^{シングルドリーヴァ}】にしてクインヴェール女学園のこちらも序列1位っ！シルヴィア・リユーネハイム!!!』

これまた大歓声。

梁瀬『準決勝では目にも留まらぬ速さで相手を瞬殺にしましたが、今回の相手はそれが通じる相手ではありません！さて！リユーネハイム選手はどのような作戦を使ってくるんでしょうか!?!』

チャム『本人もそれは分かっているでしょうから何かしらの対策を練ってきてるのは当然だと思っすよ。去年と同じようにならないように慎重になると思っす。』

—————

シルヴィア「3年ぶりだね【孤毒の魔女】。今度は勝たせてもらっ
よ。」

オーフェリア「……………貴女では無理よ、貴女の力では私の力に抗えない。」

シルヴィア「確かにそうかもね。でも、私だって何の対策もなしにこの3年間を過ごしてきた訳じゃないからね?」

オーフェリア「……………いいわ、前回と同じようにしてあげる。」

シルヴィア「悪いけど、今度は私が勝つんだから。君の思う通りにはならないよ?」

梁瀬『では、お届けしましょう!!《王竜星武祭》ファイナル決勝戦つ
!!スタートですっ!!』

『Start of the Duel』

『Battle start』

覇竜決戦 ①

――――

即座にオーフェリアが魔法で毒を出した。オーフェリアはその毒を腕状にして無数の腕が地面から生えるように出ていた。

本人も既に煌式武装を展開していて、万全の状態だった。だが、さらに注意しなくてはならないのが、無味無臭、無色透明の毒である。空気中にも漂わせる事が出来るため、回避すればいいというわけではないのだ。

オーフェリア「……………さて、貴女はどう来るのかしら？【戦律の魔女】」

シルヴィア「決まってるよ。最初から全力で行かせてもらうよ！」

シルヴィア「トゥル―セラ真実の守護曲！♪♪♪」

シルヴィアが歌い終わった直後、シルヴィアの周りに淡い緑色の球体が現れ、すぐに見えなくなった。

シルヴィア（これで少しは毒が効かなくなるといいんだけど。）

距離を取りつつ、シルヴィアは銃型煌式武装をオーフェリアに向けて連射。

しかし、やはり毒の手により防がれてしまう。

シルヴィア「くっ！やっぱ強い！」

塵と化せオーフェリア「……………次は私の番のようね、行くわよ。クル・ヌ・ギア。」

すると無数の腕が絡み合い、1つの巨大な腕になった。そしてその

腕はシルヴィアめがけて突進していった。

シルヴィア「ティール・アース賢者の試奏曲！」

シルヴィアも流星闘技でオーフェリアの技を受け止める。オーフェリアの技が弾け飛び、シルヴィアの技はそのままオーフェリアに向かったが、オーフェリアは星辰力を纏った片手だけで防いだ。

シルヴィア（信じられないよ……あれ本気で撃つたのに。しかもそれを星辰力を纏った片手だけで防ぐなんて……普通に出来る芸当じゃないよ。）

オーフェリア（……さっきの技、3年前よりも威力が格段に上がってたわ。少しとはいえ私が押されていた。どうやら、一瞬の油断が命取りになそうね。私も少し本気を出すべきかしら……）

お互い睨み合いをやめないまま、膠着状態が続いていた。

シルヴィア（一か八か、斬撃を飛ばしてみようかな。何度か飛ばしていればもしかしたら届くかもしれない。）

シルヴィア「クリスタル・ゴスペリア結晶の福音曲！」

シルヴィアは剣に星辰力を纏わせ、動きながらオーフェリアに斬撃を飛ばし続けた。

シルヴィア「はあああ!!」

飛ばし続けてはいるものの、オーフェリアが出している毒の手によって全て阻まれており、効果は無いに等しい。ただ星辰力を無駄使いしているように見えるだけだった。

シルヴィア「はあっ！」

オーフェリア「無駄よ、そんな事しても私のこれは打ち消せないわ。」

オーフェリアがそう言った瞬間……

毒の手が斬撃の部分だけ消え去ったのだ。

オーフェリア「っ！」

あと僅か、数cmというところで間一髪、煌式武装で防がれてしまった。それも校章の部分であった。

オーフェリア（………今のは一体何？私の毒が吸収された？………いえ、かき消された？どちらにしても私の毒が消された。そんな事出来るはずが………いえ、1人だけいるわ。私の毒を無効化できる人が。）

オーフェリアの脳内には1人の男が浮かび上がった。髪の毛のてっぺんにアホ毛があり、初めてビンタをされて、能力を抑え込むバツジをくれた男だった。

オーフェリア（まさか……八幡が？彼女と接触していたの？けど何故？まさか決勝の為に？いいえ、八幡はそんな不平等な事はしない人……それじゃあただ交流があるだけ？）

そんな事を考えながらも決してシルヴィアから目を離さないオーフェリア。シルヴィアもその間に今の出来事を考えているようだ。

シルヴィア（もしかして今の斬撃、八幡くんの力が乗った状態で飛んだ？でも、20発くらい出して1回かあ。厳しいな。他に手はあるし技も有り余ってるけど、この力が完全じゃないっていうのは本当みたい。しかもいつ出るかも分からないなんて。これじゃあ相手に防御を固めて下さいつて言ってるようなものだよ……）

シルヴィアも次の手を考えているが、八幡にも若干の呆れを心の中で送っていた。

シルヴィア（でも、勝機が出てきたかもね。これなら少しは攻められる。）

オーフェリア「……………【戦律の魔女】。」

シルヴィア「っ……………何かな？」

オーフェリア「……………貴女が3年前とは実力が上がっている事がよく分かったわ。此処からは私も本気で行かせてもらうわ。」

シルヴィア「うわあ……………本気じゃなかったんだ。出来れば出して欲しくないなあ。」

オーフェリア「……………さっきの斬撃には驚かされたわ。でも、此処からはそうはいかないわ。貴女はもう私に手出しする事も出来ない

わ。」

シルヴィア「……君が言うと言得力あるなあ。もう軽口なんて叩けそうにないよ。」

オーフェリア「……ここからが本当の戦いよ、私もこの技を出すのは初めてだから。」

シルヴィア「その技を使ってくれるのはとても光栄だけど、それ抜きで本気を出して欲しかったよ。勝てる見込みが出来たのに、それが削がれた気分だよ。」

オーフェリア「……行くわよ。」

オーフェリア「……死の国^{ヘルヘイム}。」

覇竜決戦 ②

――――

オーフェリア「……………^{ヘル・ヘイム}死の国。」

するとオーフェリアの立っているところを中心となり、徐々にフィールドの床を毒で埋め尽くしていった。シルヴィアの周りには事前にバリアを張ってあったため、床には侵入していなかった。それ以外では最早毒の沼と言ってもいいくらい紫しか見えなかった。

シルヴィア（これってまさか……）

シルヴィアが踏み込もうとするが、床の毒は消え去ってはくれなかった。

シルヴィア（……………これ、一度この足場から離れたら最後、2度と地面にはつけないかもね。星辰力を使えば何とかなるけど……）

オーフェリア「……………行くわよ。」

シルヴィア「っ！」

シルヴィア（考える暇もくれないなんて……）

オーフェリアは、全方位から毒の手を地面から出して、シルヴィアに向け発進させた。

オーフェリア「さあ、貴女ならどうするかしら、《戦律の魔女》。」
シルヴィア「くっ！^{ルーチェ・シンフォニー}光の交響曲！」

歌った後にシルヴィアの周りからは、複数の光の剣が浮いていた。

シルヴィア「行っけえ！」

シルヴィアがそう言うのと光の剣は、毒の手にめがけて回転しながら飛んでいった。シルヴィアも剣と銃で応戦していた。消滅したものもあれば残っているのもあった。だが、この戦い方ではいずれバテが来るだけであった。

幾らシルヴィアでも、地の利を活かすオーフェリアが相手では圧倒的不利な状況だった。

シルヴィア（これじゃキリがないっ！いくらあの手を攻撃しても、【孤毒の魔女】をなんとかしない限り、無駄に体力を使うだけになる！一か八か彼女に攻撃を仕掛けるか、隙を見つけてまた斬撃を飛ばすか……どっちにしてもこれじゃ長く持たない！）

凄いですが、そろそろ限界だった。そしてシルヴィアは攻撃をやめ、星辰力を背中に纏う。

シルヴィア「っ！天羽^{フィエロ}！」

背中から翼が生えた。いや、星辰力で作られた翼だった。そのままシルヴィアは……

オーフェリアに接近していった。そして銃をオーフェリア周辺にある毒の手にめがけて乱射していた。

シルヴィア「ここで決めるっ！光の交響曲！結晶の福音歌！」

3本の光の剣は出現と同時にオーフェリアに飛んでいき、シルヴィ

アもそのままオーフェリアに接近していく。

オーフェリア「……………」

オーフェリアは無言で光の剣を片手で受け止めていた。

シルヴィア「はああああ!!」

突っ込んできたシルヴィアには、もう片方の手に持っている煌式武装で受け止めた。

シルヴィア「くうっ!」

オーフェリア「……………残念だったわね。これで貴女は何も出来ないわ。」

シルヴィア「……………そうだね!それは君も同じなんじゃないかな?」

ガチャツ!

シルヴィアは、もう片方の手に持っていた銃型煌式武装をオーフェリアに向けた。

オーフェリア「っ!」

シルヴィア「私も何の考えも無しに突っ込んできた訳じゃないからね! ルベル・オラトリオ聖者の聖譚曲オオオ!!」

銃口から白い光線が放たれ、壁に衝突した。おそろくだが、オーフェリアも壁に激突しただろう。シルヴィアも確かな手応えを感じていたみたいだった。

シルヴィア（よし!壁までは吹っ飛ばせたみたい!でも、まだ倒せ

てない。床の毒は消えてないし、この程度で彼女が戦闘不能になるとは思えない。）

オーフェリア「……………今日で2回も貴女に驚かされたわ、【戦律の魔女】。」

シルヴィア「っ!？」

煙の中からは、平然と立っているオーフェリアが現れた。少しの外傷はあったが、まるで効いていないようだった。

シルヴィア（あれでこれしか効かないの!?!……………一応切り札だったのに。）

オーフェリア「……………今度は私の番よ。」

オーフェリア「……………サマ・エル毒蛇。」

……………

オーフェリアはそう唱えたが、何も起こらなかった。

だが…………

『シャーーーー!!』

シルヴィア「っ! うっ!!」

なんと、シルヴィアの真下から蛇が現れ、一気に締め上げていた。それも毒の身体を持った蛇である。

シルヴィア「あああああああああああ
!!!!」

触れただけでも激痛が走るものを、全身に締め上げるように浴びれば、一溜まりもないだろう。

オーフェリア「……………塵クル・ヌ・とギア。化」

蛇が巨大な腕に変化すると、シルヴィアをそのまま掴み、壁の方まで投げ飛ばした。

衝突音と共に壁が崩れ、シルヴィアはそのまま壁に埋もれていた。

シルヴィア「……うつ……ああ……」
オーフェリア「………」

シルヴィアの全身には紫色の毒がまわりついており、シルヴィア本人もかなりのダメージを負っており、毒で継続的にダメージを負わされている。

シルヴィア「はあ……はあ……はあ……ま、まだ……うつ……」
オーフェリア「………無駄よ。貴女はもう碌に立つことも出来ないわ。それどころか意識すらも曖昧な筈よ。」
オーフェリア「………これ以上続けても、ただの悪あがきにしかないわ。」

実際、オーフェリアの言っていることは正論である。今のシルヴィアでは立つこともままならない。立てたとしてもオーフェリアの相手は務まらないだろう。

シルヴィア「はあ……はあ……それでも……やらな、きや……今年……何が何でも……勝ちたい……理由が……あるからっ!!」
オーフェリア「………その状態で何が出来るの？まともに立てない立てるよっ!」

シルヴィア「っ!っ!」

声にならない声をあげながら、震える足に活を入れ、立ち上がった。

シルヴィア「3年前の私と、1番……違うのは………諦めの悪さと……しぶとさだからね。詰めが甘いんじゃない、かな？」

オーフェリア「……あまりこうしたくはなかったのだけど……いいわ、それなら私も容赦しないわ。」

シルヴィア「望む……ところだよ………」

シルヴィア（力を………貸してね………八幡くん。）

覇竜決戦 ③

――――

シルヴィアは立ち上がったが足はガクガクに震えていて、銃型煌式武装を杖にして身体を支えている状態だった。剣型煌式武装は何処かへ飛ばされてしまい、手元には無い。

しかも身体は毒に侵されており、地面もまだ毒でいっぱいだった。既に息も上がっており、視界もボヤけていた。

シルヴィア「はぁ……はぁ……」

シルヴィア（どうしよう……もう何分も持たない。一気に決めなきゃやられちゃう。でも、私には一撃必殺の攻撃なんて持ってないし……どの道八方塞がりなのは変わらない。考える事は出来ても身体が追いつけないし……）

どうすれば……）

――――

八幡 side

八幡「……………」

柊々『ハッチ…………大丈夫？凄く辛そうな念を感じるよ？』

八幡「……………」

…………どうすればいい？今すぐシルヴィを助けたくて仕方ない。
この映像を見てるだけの俺が無力に感じて仕方ない。

ドガツ!!

八幡「？」

いつの間にか、無意識にテーブルを殴って壊してしまった。俺は今
…………それ程感情が昂ぶってるのか？だが、俺には何も出来ない。

柊々『ハッチ、応援してあげたら？』

八幡「……………何？」

柊々『だってさつきから食いつくように見てるだけで、声掛けなん
て1回もしてないんだもん。君の声なら通じると僕は思うんだけど
なあ。』

八幡「……………またこの前の雷みたく、なんとなく言ってるじゃ
ねえだろうか？」

柊々『ううん、確信だよ。これは100%そう言えるね。もし間
違っているっていうなら僕の事を壊してくれた方がいい。』

八幡「……………」

正直分かん。言ってる事は嘘に感じられないが、本当にそれだけ
でシルヴィが強くなれるとは思えない。

シルヴィア（力を……………貸してね……………八幡くん。）

八幡「っ!!」

……なんだ？今のは？幻聴か？……いや違う。シルヴィだ……絶対にシルヴィだ。

柊々『今何か感じたんだね？』

八幡「……………ああ。シルヴィの……………シルヴィの声が聞こえた。力を貸してくれって。」

柊々『貸してあげなよ。ハッチ（大好きな人）からの声援はどんな障害にも勝る強さに繋がるんだから！言ってあげなよ！頑張れって！』

八幡「俺はそんなストレートには言えないが、あいつの声を聞いたからには、インチキ妖刀の声にも傾けねえとな。」

八幡（シルヴィ、辛いとは思う。だが、俺の声だけでよければいくらでも貸してやる。だから……………頑張ってくれ！）

八幡side out

シルヴィアside

シルヴィア「っ!!」

……………今、八幡くんの声が……………

何でだろう。こんな状況下なのに勝てる気がしてきた。なんか身体も急に軽くなった気がする。

……………うん、やろう。

まだ試作段階の技だけど、今なら出来る気がする。八幡くんの声も乗ってるから！

シルヴィアside out

シルヴィア 「愛の聖歌。^{セロ・ホーリックス}」

銃口を下向きにすると、何処からともなく曲が流れ出して、シルヴィアの周りを五線譜が包んでいた。

そして、毒が消え失せていつてるのだ。身体や床の毒がみるみる溶けるようになっていた。毒が残っているとすれば、オーフェリアの周りだけだった。

オーフェリア（私の死の国が……消されている？ どういう事？）

シルヴィア「貴方と出会った日 何かを感じた 今までにはない
胸のときめき♪♪」

シルヴィア「君に触れた手は 今もまだ熱い 叶うのであれば
ずっと握っていたい♪」

シルヴィアは歌っているだけで何もしていないが、オーフェリアは手出しをしていなかった。いや、出来ないのだ。

今も毒の手で攻撃はしているが、いくつもの五線譜がシルヴィアを守っているかのように攻撃を受け止めて、毒を浄化していた。

オーフェリア「っ！」

オーフェリア（………【戦律の魔女】まで攻撃が届かない。さつきまでは私が有利だったはず………なのにあの五線譜は何？）

オーフェリアにも焦りの顔が出てきた。今までにない表情だった。

シルヴィア「What should I do now? 貴方はいつも澄ました顔で 私がこんなに悩んでいるのに♪♪♪」

五線譜が広がり、シルヴィアの元を離れて今だとばかりに攻撃を仕掛けだが、またも新しい五線譜が出てきて攻撃を防ぐ。

オーフェリア「くっ……」

シルヴィア（索冥！お願いっ！この歌の攻撃範囲を最大まで伸ばしてっ！）

索冥（承りました。シルヴィア様。）

すると、五線譜がまた拡大した。さつきまでとは比べ物にならない量と範囲で。空間全域をシルヴィアの星辰力と五線譜で包み込んでいた。こうなってしまうては、オーフェリアも毒が出せなかった。

オーフェリア「っ！………毒がっ！」

シルヴィア「I love youって伝えたいのに 声が出ないの♪♪♪♪」

シルヴィア「この思いだけが 空回りしているの 君のせいだからね♪♪♪♪」

サビが始まった瞬間に五線譜が攻撃を開始した。五線譜は攻撃の手を緩めなかった。まるで攻撃の隙さえ与えないかのように連続で攻めていた。

オーフェリアは魔法は使えなくなり、煌式武装で対応していたが、攻撃は消滅せずに逸れていくだけで数が増えていく一方だった。オーフェリアが不利となっていて、完全に形成逆転だった。

オーフェリア（……魔法を使おうにも星辰力が練れない。連続攻撃がここまで厄介だなんて。しかも数が増える。）

シルヴィア「今君に伝えたいよ♪♪♪」

シルヴィア「I love you forever♪♪」

シルヴィアが歌い終わった瞬間、五線譜がオーフェリア目掛けて全方位から一気に襲う。オーフェリアも防御姿勢に入っていたが、全てを防げるわけでもなく攻撃を食らうかと思ったら、五線譜が身体を貫通しただけで痛みは無かった。

だが…………

『校章破壊』

オーフェリア「っ!!」

『End of duel』

校章が6当分に切れていた。

梁瀬『…………』

チャム『…………』

会場全体が静寂に包まれていた。おそらく誰も予想していなかったのだろう。史上最強の魔女、オーフェリア・ランドルフエンが負けるとは。

梁瀬『し、し、し、試合終了……!!! ついに決着!!! この激闘の中戦いを制したのは、大大大逆転した、クインヴェール女学園シルヴィア・リユーネハイム選手……!!!』

紙吹雪と共に観客からは大歓声が響き渡った。とてつもない激音だった。

シルヴィア「……………」

シルヴィア（勝ったんだ……私……勝てたんだ……）

オーフェリア「……………」【戦律の魔女】。

シルヴィア「あつ……………」【孤毒の魔女】。

オーフェリア「……………」私の負けよ。最後の技、お見事だったわ。」

シルヴィア「あ、ありがとう。（彼女に褒められるってなんか変な気分だなあ。）」

オーフェリア「……………」でも、次は負けないわ。今度は私が貴女を倒すわ。」

オーフェリアがそう言うのと、ステージから去っていった。

シルヴィア「……………」勝ったんだ。私……………」本当に勝ったんだ。」

索冥（ええ、八幡様も大変お喜びでしょう。本当におめでとうございます。）

シルヴィア（索冥もありがとう。）

梁瀬『この10日間に渡る熾烈な戦いを制したのはクインヴェール女学園のシルヴィア・リユースハイム選手ですっ!!』

シルヴィア（早く八幡くんに会いに行かないと！もう嬉しさが爆発だよっ!!）

—————

八幡 side

八幡「……………」ツ

柊々『……ハツチ。』

八幡「……………ああ、そうだったんだな。」

柊々『え？何が？どうしたの？』

俺のモヤモヤはこれだったのか。

八幡「いや、心のつかえが取れたただけだ。今はすげえスッキリしてる。」

柊々『……………そっか。』

こういう事なんだな。

相手に恋をする、好きになるってのは。
早くシルヴィに会いてえなあ。

反応と表彰とプチ修羅場

シルヴィア side

私は今走っていた。あんなにも激しい戦いの後だったのに、なんでこんなに速く走れるのか自分でも分からなかった。でも、今にも弾けそうなくらい凄く強い想いを彼に伝えたいって事は分かる。優勝したって、彼に一番乗りに伝えたい。

シルヴィア（八幡くんっ！）

息切れしているが、どうでもいい。一刻も早く彼に会いたい。ただそれだけだった。

そして私の控え室の前まで来た。小さな緊張と大きな喜び。彼は私を受け入れてくれるかな？多分大丈夫だと思うけど。

シルヴィア「すうー……………はあー……………」

深呼吸をした後に扉を開けて……………

シルヴィア「八幡くんっ!!」

八幡「っ!!」

彼の名前を叫んだ。

八幡「シルヴィ……………」

シルヴィア「八幡くん……………私、勝ったよ。私、優勝したよ!!」うるうる

そうやってシルヴィアは八幡に抱き着いた。

彼の事だからきつと困惑してる。でも、私は今凄く嬉しい。今日1日で願いが1つ叶って、もう1つも叶うかもしれないから。

八幡「……ああ、観てた。」ギョツ

シルヴィア「あ……………」うるうる

八幡「ずっと観てた……………お前の戦い振り。おかげで俺も自分の事が1つ分かった気がする。俺も今は最高の気分だ。ありがとな、そしておめでとう。」

シルヴィア「八幡くん……………」ポロポロ

嬉しい……………八幡くんからこんな事言ってもらえるなんて。

八幡「俺は口下手だからな。あんま似合わねえかもしれないが、一応言わせてくれ。」

シルヴィア「……………うん、ありがとう！八幡くんっ！私も今、最高だよっ!!」ギョツ

そしてシルヴィアは抱き締める力を強めた。今までで一番嬉しいと思えた。

シルヴィア side out

雪乃 side

あの局面で逆転するなんて……

結衣「凄かったねーゆきのん!」

雪乃「そうね。」

出るとしたら、私も《王竜星武祭》かしら?それなら私でも勝てる自信はあるわ。

たとえば【戦律の魔女】や【孤毒の魔女】でも必ず勝機はあるわ。

小町「いやー、シルヴィアさん凄かったですね！逆転しちゃうなんて。」

結衣「うん！カッコよかったなあ。」

雪乃「あの状況でよく歌う事が出来ると言いたいのところだけど、あれも彼女の技であり能力だから何も言えないわね。」

小町「でも、やっぱりゴミいちゃんは居ないですね……………」

結衣「うん……………」

雪乃「今回はこれで終わりだけど、3人揃ってまた此処に来ましよう。次は六花の生徒として。そして彼に土下座させるのよ。」

結衣「うん！そうだねゆきのん！」

小町「了解であります！」

雪乃 side out

葉山 side

「シルヴィアが勝ったー！」

「葉山くん！凄かったね！」

葉山「ああ、流石決勝だね。」

凄いな……………彼女は、あんなに強いのか。出来れば1度手合わせしてみたいな。

戦ってみてもいいけど、僕は《獅鷲星武祭》に絞ってるからね。星武祭ではまずないだろうね。

でも、もしも他学園との共闘がアリなら彼女と組んでみたいかね。

葉山「まあそれはないと思うけど、早く此処に来たいものだね。」

早く無様な比企谷を見てみたいからね。

葉山 side out

戸塚 side

沙希「あんなに強いんだね序列1位って……て事は、会長さんも強いんですね？」

星露「お主も中々良い目をしておるのう。妾も序列1位じゃ。尤も、星武祭には出られんがのう。」

戸塚「でも凄いよ。僕じゃあの状況で逆転するのは無理だよ。」

材木座「流石であるな！」

海老名「歌ってる所も惚れ惚れしちやったしね。カッコよかったね。」

戸塚「うん！」

……そういえば八幡はどのくらい強いんだろう？いつも目立ちたくないって口癖みたいに言ってたから、冒頭ベイジの十二人にも在名ネームド祭ド・カルツ祀書にも入ってはいないだろうけど。

戸塚「あの、会長。」

星露「ん？なんじゃ？」

戸塚「八幡ってどのくらい強いんですか？僕の予想ではそんなに強くないと思うんですけど……実際はどうなのかなって。」

材木座「おお、それは気になるであるな！」

星露「気になるのか？まあ、これでお別れじゃしのう。土産ついでに教えてやろう。騒ぐでないぞ？彼奴の強さは妾の強さに次ぐものじゃ。意味は分かるであろう？」

沙希「……………え？」

海老名「て事は…………まさか…………」

材木座「次ぐということは…………2番？」

戸塚「……………序列2位？」

嘘……………だよな？

星露「その通りじゃ。八幡は我が学院の序列2位にして、この六花最強の魔術師じゃ。」

八幡「ってそんなに強かったの？ 凄いや……序列2位だなんて……僕には出来ないよ。」

星露「お主らも此処に来るからには、八幡を目指すがよい。彼奴はたった2ヶ月で我が学院の序列2位になったんじゃからな。」

……もしかしたら、僕たちじゃもう手の届かないところにいるのかもね、八幡。

戸塚 side out

—————

—————19:00—————

梁瀬『10日間に渡って行われた《王竜星武祭》、今回も数々の激戦が繰り広げられました。』

チャム『今回もやはり、決勝戦のリユースハイム選手とランドルフエン選手が群を抜いて盛り上がったツス。』

梁瀬『今その祝辞が、大会委員長ダニロ・ベルトーニよりリユースハイム選手に送られています。』

ダニロ「シルヴィア・リユースハイム。今星武祭の貴女の素晴らしい功績を讃えここに賞する。次の星武祭でも頑張つて欲しい。優勝おめでとう。」

シルヴィア「ありがとうございます。」

シルヴィアはトロフィーを受け取る。

梁瀬『皆様、リユーネハイム選手に今1度大きな拍手をつ!!』

大歓声が起こり、シルヴィアもトロフィーを上に掲げた。

シルヴィア（八幡くん…見てくれてるかな?）

梁瀬『それでは皆様!お次は《鳳凰^{フェニクス}武祭》でお会いしましょう!
実況は私、梁瀬ミコと………』

チャム『ファム・ティ・チャムでお送りしたつす。』

——表彰式終了後——

シルヴィア「♪八幡くん!観てくれてた!?!私の表彰式?」

八幡「観ないわけないだろ?いつも以上に輝いてたぞ。俺も立って
みてえな。」ナデナデ

シルヴィア「八幡くんなら出来るよ。」

八幡「だいいいな。」

シルヴィア「うんっ!」ギョッ

八幡はシルヴィアの頭を撫で、シルヴィアは八幡の腕に抱き着く、
まるで当たり前のように自然体でいた。2人共特に恥ずかしがる様
子もなかった。

シルヴィア「じゃあそろそろ「やっぱり貴方もいたのね、八幡。」っ
!」

そこに居たのは、準優勝者のオーフェリア・ランドルーフエンだっ
た。

八幡「よお、オーフェリア。あつ、頼まれてたもんは出来てるぞ。」
オーフェリア「……………そう、では早速貰ってもいいかしら?」

八幡「ああ、3つで足りるか？」

オーフェリア「……………ええ、ありがとう。それと八幡、まだ話は終わっていないわ。」

八幡「……………ですよね。」

オーフェリア「……………決勝戦で【シングルドリーヴァ戦律の魔女】の斬撃が私の毒を打ち消したわ。これは貴方の仕業じゃないのかしら？八幡？」

当然とばかりに言い当ててくるオーフェリアに八幡は複雑そうな顔をしていた。

シルヴィア「あゝ、多分これだよ。」

シルヴィアはそう言うってからブレスレットを見せびらかすように出した。

シルヴィア「これのおかげで君の毒が消えたんだと思う。この力が斬撃に乗ったから、毒が一部消失したんだと思うよ？」

オーフェリア「……………じゃあ、貴女が最後に出したあの技に、私の技が聞かなかったのも、このブレスレットの効果という事かしら？」
シルヴィア「それは分からないけど、毒が無効化されたのは、これのおかげかな。」

シルヴィアはジーツと見つめていた。

オーフェリア「……………ずるいわ。」

2人「え？」

オーフェリア「……………私は校章なのに、彼女にはアクセサリーなんてずるいわ。八幡、なぜ私にはアクセサリーではないの？」

八幡（え？なんで？オーフェリアさん？なんかキャラが……………もしかしてそういう拘りあったりするん？）

八幡「いや、特に理由はないんだが……お前もこういうのがよかったのか？」

オーフェリア「……………選べるのなら私は迷わず、アクセサリーを選ぶわ。」

シルヴィア「そ、そうなんだ……」

オーフェリアの顔を見ていると、少し拗ねているようにも見える。

オーフェリア「……………それとそこで見ていたのだけど、八幡。今彼女の頭を撫でていたように見えたのだけど？」

八幡「あ、ああ撫でていたが……それがどうかしたのか？」

オーフェリア「……………【戦律の魔女】。それは気持ち良いのかしら？」

シルヴィア「え？う、うん。」

オーフェリア「……………」ジーツ

八幡「ん？な、なんだ？」

シルヴィア「八幡くん、もしかしたら撫でて欲しいんじゃない？」

オーフェリア「……………」コクツ

オーフェリアは気恥ずかしそうに頷いた。随分としおらしい感じである。

八幡「……………撫でてもいいのか？」

オーフェリア「……………貴方がいいなら。」

八幡「じゃあ撫でるからな。」ナデナデ

オーフェリア「んっ……………既にやってるじゃない。」

……………

オーフェリア「……………もういいわ。」

八幡「おう。」

シルヴィア「ど、どうだった?」

オーフェリア「……………とても至高とだけ言っておくわ。」

八幡（ねえ? 今の間だけ長くなかった? 長かったよね?）

オーフェリア「……………八幡、今日の私は彼女に負けてとても傷ついているわ。今夜は私の寮に来て慰めてくれないかしら?」

八幡「はあ!」

シルヴィア「ちよ、ちよつと!?!聞き捨てならないよ!?!それを言うなら、私も彼女に勝ったから!?!褒美が欲しいな!」

八幡「え?」

八幡（え? 何この状況? さっきまで何もなかったのに、どうしていきなりこんな慌ただしくなっちゃったの?）

2人「……………八幡。（八幡くんっ!）」

八幡「どうしてこうなった?」

※願いと誘い

八幡 side

オーフェリア「……………気持ち良いわ。」

シルヴィア「むう……………」プク

八幡「……………」ナデナデ

皆さんこんにちは、比企谷八幡です。さて、なんで俺がこの2人に挟まれているのかというと、前話を見てくれればわかると思う。この2人は何故か喧嘩？を始めて、拳句の果てには俺の方にとぼちりが来た。一応俺にも責任が……………あるのか？よく分かんが、解決するために俺がとった行動は……

八幡『シルヴィ、今は我慢してくれ。多分オーフェリアは撫でられた事が1度もないんだろう。控室^{此処}だけにするから、な？』

そう言つて渋々承諾してくれた。というものの、頬を膨らませながら、ジト目でこつちをジーツと見続けている。

オーフェリア「……………八幡の手は暖かいのね。とても安心するわ。」

八幡「そうか？」

オーフェリア「……………ええ、他の人だったら私に触れる事はおろか、近づこうともしないわ。こうするのは……………八幡、貴方だけよ。」

八幡「……………そうか。」

シルヴィア「ねえねえ？私もいるんだけどなあ？もしかして忘れちゃってるのかなあ？…」

忘れてる訳じゃないが、オーフェリアの奴すげえリラックスしてるように見えるから、止めるに止められねえんだよ。

オーフェリア「…………もう大丈夫よ、とても良かったわ。ありがとう八幡。」

八幡「お、おう。」

シルヴィア「終わったみたいだね？それで？オーフェリアさんは八幡くんを『自分の寮』にお誘いするのかな？もしそうだったら『私』も是非一緒にいたいんだけど？」

シルヴィアがジト目のまま、わざとらしく言葉を強調してオーフェリアにさっきの事を聞いていた。

オーフェリア「……………いいえ、あれは冗談よ。頭を撫でもらうだけで私は充分よ。」

シルヴィア「そ、そうなんだ……………ほっ。」

オーフェリア「……………何故貴女が安心したのは分からないけど、いいわ。八幡、今度またしてくれるかしら？」

八幡「え？あ、ああ。俺でいいならな。」

オーフェリア「……………そう。それと、私の瘴気の打ち消す校章の事だけ……………」

八幡「心配すんな。まずはどんなアクセサリーにするか考える、それからだ。」

オーフェリア「……………そう、お願い。」

オーフェリアはそう言うと、控え室から出た。おそらく自分の寮に帰ったのだろう。

シルヴィア「……………八幡くん、ちよつとオーフェリアさんにベタベタし過ぎじゃないかな？」

八幡「悪かったよ。けどよ、少しくらいいいだろ？あいつも撫でられるのは初めてなんだしな。」

シルヴィア「それはそうだけ……………」

まさかヤキモチか？

八幡「まったく、お前も大概だぞ？」ナデナデ
シルヴィア「あつ…………えへへ／／／」

今度はシルヴィの頭を撫でると、安心したのか分からないが、うれしそうに俺の方に身体を預けてそのまま目を閉じていた。

八幡「おい、寝るなよ？」
シルヴィア「うん、ちよつとだけ。」

現金な奴ってこういう事か？まあいいか。あつ、そういや…………

八幡「なあシルヴィ。」
シルヴィア「ん？なあに？」

八幡「お前って優勝したけど、願い事の事は聞いた事なかったよな。どんな願いか聞いてもいいか？」

シルヴィア「あつ！そういうえば八幡くんには私のお願い言ってなかったね。うん、いいよ。別に秘密じゃないしね。」

シルヴィア「実はね、私ついこの間まではお願いなんてなかったんだよね。一応学生の中で出来ることはやっておこうと思ったから出ただけで、お願いは特に無かったんだよね。」

八幡「そうか…………無欲なんだな。」

シルヴィア「この前まではね。今はちゃんと欲しい物があるよ。」

八幡「…………聞いてもいいのか？」

シルヴィア「うん、私が欲しいのは…………家なんだ。」

八幡「…………は？家？」

シルヴィア「うん、家。」

八幡「…………なんでまた？」

シルヴィア「私って学生とか仕事柄の関係上、プライベートな空

間ってあんまりないんだよね。だから自分の空間が欲しかったんだ。だから家。」

八幡「……………そうだったのか。」

シルヴィア「変かな？」

八幡「いや……………意外ではあったが、別に変だとは思わんぞ。」

シルヴィア「そっか、ありがとう。家の事はもう話してるし、後は場所次第かな。」

八幡「……………やっぱクインヴェールに近いところなんだよな？」

シルヴィア「そうだね。でなきや意味無いし。他に泊まる場所があるとするば、八幡くんの寮くらいしかないし。」

八幡「俺の部屋は宿泊施設じゃねえよ。」

シルヴィア「だって居心地良いんだもん。八幡くんの部屋って。1回泊まっただけなのに私気に入っちゃったし。八幡くんと一緒にいるっていうのもあると思うけどね。」

……………

八幡「だったら今日も来るか？」

シルヴィア「……………え？」

八幡「お前がいいなら来てもいい。俺も別に断る理由がないからな。」

シルヴィア「……………いいの？」

八幡「……………ああ。」

シルヴィア「え、えーと、じゃあ……………お言葉に甘えて、今日も泊まらせて頂きます／＼」

八幡「ああ。」

君と共に……

シルヴィア side

八幡くんに誘われて、今日も八幡くんの部屋に泊まることになった。私としても断る理由もないからいいんだけどね。

食事も終わって今私はお風呂に浸かっている。なんか今日はいつも以上に八幡くんが優しい気がする。

シルヴィア「ふう、いいお湯だなあ。疲れた身体に染みるよう。」

それにしても、なんで八幡くん急に泊まってもいいなんて言ったんだろう？ 普段ならあんな事絶対自分から言わないのに。

シルヴィア「ん、分からないなあ。でも、何かを隠してるような素振りも無かったし、本当に私の疲れを癒したいだけなのかもね。それくらいなら素直に言うと思うけど、どうなんだろう？」

……………

シルヴィア「んー考えてもダメだなあ。それよりも、今日はチャンスだよ！ 八幡くんに好きだって言わなきゃ！」

そして私は覚悟を決めてお風呂から上がった。よしっ！ 頑張れ私っ!!

シルヴィア「八幡くん、お風呂空いたよ。お次どうぞ。」
八幡「ん？ああ、ありがとな。」

もしかしてずっと椅子に座りながら考え事してたのかな？だとしたら、30分もジツと動かないままでいたって事？

八幡「じゃ、入ってくるわ。シルヴィはゆっくりしてていいぞ。」
シルヴィア「う、うん。」

な、なんか緊張するなあ。

ダメダメ！こんな事じゃ告白なんて出来ないよ！気をしっかり持たなきゃ！優勝したら告白するって決めてたんだから！1回しかない初告白は成功させなきゃ！！

シルヴィア side out
八幡 side

八幡「……………」

やっぱり顔が見れないな。意識すると、こうも感情を制御出来ないものなんだな。

八幡「けど、これが本気で『好きになる。』って事なんだな。中学の時とはまるで違う。マジで心臓の鼓動がデカくなってる。」

いつから惚れていたんだろうな？やっぱり信じたたって言われた時か？あの時から俺の目や人生が変わったって言っても過言じゃないからな。あの時からかもな。

2ヶ月って短い期間だが、彼奴は俺の事を裏切ろうなんて言動や態度、行動なんて全くしなかった。むしろ俺を助けてくれた。

……シルヴィなら、俺は信じられる。シルヴィなら、全てを預けられる。

俺はそんな気がする。

八幡「……どう思う、索冥？俺はシルヴィと釣り合うと思うか？」

索冥『釣り合いなど問題ではありません、八幡様。問題はその者と、共に生きていけるかです。中途半端な気持ちや覚悟などでは相手も自身も幸せになどなれません。相手を信じ、共に愛し合う事で結ばれるのです。』

八幡「……そうか。」

索冥『八幡様なら大丈夫です。シルヴィア様ならきつと受け止めて下さいます。』

八幡「別に受け止めてくれなくてもいいさ。俺の気持ちを知ってくればそれでいい。シルヴィにも、好きな奴がいるかもしれないしな。」

気持ちを伝える分にはいいよな。

そして俺は、風呂から上がった。

――2時間後、リビング――

俺とシルヴィはココアを飲みながら、何も話さずに過ごしていた。

この後告白するのに、ムードを上げたくないからな。
こいつを飲み干したら、告白だ。

――5分後――

俺は飲み終わったが、シルヴィはどうだ？

八幡「シルヴィ、あんま美味しくなかったか？なら無理して飲まなくてもいいぞ？」

シルヴィア「う、ううん平気！美味しいよ！すつごく！」

八幡「……ならいいんだが。」

シルヴィア「……ふう、あつたまつた。ありがとう八幡くん。」

八幡「気にするな。さて、そろそろ寝「八幡くんっ！」……なんだ？」

シルヴィア「……ちよつと話があるんだ。寝る前に聞いてくれないかな？」

八幡「……分かった。寝室に行くか？その方が落ち着いて話せると思うが……」

シルヴィア「うん………お願い。」

――寝室――

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

……………

シルヴィア「……私、八幡くんが好き。」

八幡「……………え？」

シルヴィア「一目惚れだったのかな。私ね、八幡くんと最初に会った日からずっと、八幡くんの事を考えなかった日が1日も無いくら

い。確信したのは、1ヶ月前のデートの時に最後にお互いの事を話し合って、学園で別れた時に気付いたの。それから段々気持ちが大きくなって、ずっと八幡くんの側にいれたらって思うようにもなった。八幡くんから話しかけられた時も、心配された時も、頭を撫でられた時も、抱き締められた時も、全部嬉しかったし、幸せだった。だから………比企谷八幡くん

私と………付き合ってください。」

シルヴィ………そうだったのか。俺はなんて大バカ野郎だ。2ヶ月前から気持ちに気付かずに過ごしてきたのか。

八幡「ありがとな、シルヴィ。今度は俺の気持ちを聞いてくれないか？」

シルヴィア「え?。」

八幡 s i d e o u t

シルヴィア side

八幡「お前も知ってるとは思うが、俺は今までの人生碌な事が無かった。それこそ、本当にこの先幸せなんてモンがある訳ないなんて考えるようになるまでな。中学では告白の暴露、高校では文化祭での罪被り、修学旅行の嘘告白、俺はもう幸せなんて信じてなかった。」

八幡「でも、此処に来て変わった。界龍が新しい居場所になってくれた。俺に今まで出来なかった友達も六花に来てから大勢出来た。この16年間で嘘みたいになんかになった。俺は初めて手放したくないと思えた。今は治ったが、前の俺の目を見ても顔色1つ変えずに付き合ってくれる仲間も出来たし、俺の事を慕ってくれる人達も出来て、何よりも、俺なんかと一緒に笑ってくれる奴らが一緒に居る。」

シルヴィア「……………」

八幡「俺、此^{六花}処に来る前は、此処に比べたら本当にウンザリするくらい嫌な生活だった。自殺も考えそうになった。けど、六花に来てからは、視界が全部変わった。前までは行きたくなかった学校も楽しみになった。出掛けるのも面倒だった街にも、楽しんで行くようになった。ボツチだった俺を、変えてくれた凄え良い仲間たちが出来た。俺は此処に来て本当に良かったって心からそう思えた。」

八幡「でも、俺の心を一番激しく動かしてくれた存在は……………シルヴィだった。」

シルヴィア「っ!」

八幡「最初の印象はただの可愛い女の子ってだけだった。そっからは別に何も変わらなかったが、確か2回目のデートだったか?最後に言ってくれた一言を、俺は今でも鮮明に覚えてる。信じたい……………お前はそう言ってくれた。」

八幡「俺にとつてあの言葉は凄え心に響いた。俺の中にある何かを壊してくれた。だから俺の目は治ったんだと思う。俺はお前のおかげで此処に居たいって思えるようになった。」

シルヴィア「……………」うるうる

八幡「けど、そんな時の俺はまだ、ライブやホテル、昨日の泊まりだっ

て俺にはなんでこんな事に頼るのかって思うくらいだった。正直俺よりも適任者がいるだろうって思っていた。俺はまだシルヴィの事がよく分かってなかった。」

八幡「でも、今日の《王竜星武祭》で気付いた。お前が傷ついている時、俺無性に自分に腹が立ったんだ。何も出来ない自分に腹が立って仕方なかった。1対1だから仕方ないとは理解していたが、それでも自分が情けなかった。そして、お前の声を聞いた時や歌を聴いた時にやっと気付いた。」

俺はお前が好きだ。」

シルヴィア「っ!!」

八幡「この気持ちは嘘でもなければ、お前の阿呆面を楽しむために考えた言葉でも無い。俺の本心だ。何度も自分に問いかけてみた、けど答えは変わらなかった。俺はシルヴィが好きだ。大好きだ。」

シルヴィア「……………」ポロポロ

八幡「俺はシルヴィの為なら何でも出来る。何でもしてやる。この気持ちに嘘偽りなんて無い！神にだって誓ってやる！だから言わせてくれ……………」

八幡「俺は……シルヴィア・リユーネハイムを愛する事を誓う。だから……俺と付き合ってくれ。」

……ずるい。

シルヴィア「ずるいよ……大好きな人からそんな事言われたら、断れる訳ないよ。」ポロポロ

八幡「……じゃあ!」

シルヴィア「不束者ですが、よろしくお願いします!」ポロポロ
八幡「……シルヴィ。」ギョツ!

今日は凄い日だよ。1日に3つもお願いが叶っちゃったんだから。

オーフェリアさんに勝って《王竜星武祭》に優勝する事。

八幡くんに告白する事。

八幡くんと恋仲になる事。

シルヴィア「今日は本当に良い日だよ。私、今までで一番幸せな日

だよ。」

八幡「俺もだ。最高な日だ。」

シルヴィア「やつと……叶ったよ。八幡さんと恋人同士になるって夢が。」

八幡「長い間待たせちまって悪かったな。これからどんどん甘えてくれ。」

シルヴィア「……じゃあ、早速欲しいものがあるんだけど、いい？」

八幡「ああ、言ってみろ。」

シルヴィア「……キスがしたいの。」

八幡「……奇遇だな、俺もしたかったところだ。俺からも頼む。」
シルヴィア「……うん。」

ああ……八幡さんの顔が段々近づいて……やつと出来るんだ。好きな人とのキスが。

そして……

チュッ

シルヴィア「んっ……………」

八幡の唇がシルヴィアの唇に重なり、夜に浮かぶ2人の影が1つになった瞬間だった。

八幡「……………はあっ。」

シルヴィア「……………んっ。」

八幡「大好きだ、シルヴィ。」

シルヴィア「私も大好きだよ、八幡くん。」

そして2人は恋人になった。

竜覇凱旋編 完

技 設定

《八幡》

明鏡止水：星辰力を身体に纏い、自分を見えなくする。使い勝手が良く、簡単な相手ならこれでやり過ぎす事も出来る。

鏡花水月：星辰力に身体に纏い、自分を相手の認識から逸らさせる。八幡は影で自分の分身を作れるため、本体を狙うのはほぼ不可能なので、目くらましにも使える。

※本体を狙えるとしたら、天霧辰明流の『識の境地』、パーシヴァルの目くらいである。

焰撃^{えんげき}：一撃ずつに名前はあるが、それを一纏めにしたのをこう呼ぶ。計8連撃で炎の形をした影が剣に纏っている状態。1撃の威力は某海賊王の三刀流の1080煩○砲くらい。

囲い影：所々の影から影を伸ばし、牢のように相手を閉じ込める技。

迷牢：薄黒い雲が相手を包み視界を奪ってから、相手を迷路へと迷い込ませる。脱出しない限りは出てこれないので、ゴールに辿り着くか、技を打ち破るしか抜ける手はない。

影龍：八幡によって作られた10mくらいの影の龍。その気になれば何体でも作れる。全身黒光りだが、目は黄色く光っている。

呼ぶ際の台詞もある。

『飲み込め、影龍』

【合わせ技】

龍天火：八幡が龍に乗り、龍の遠心力を使って相手に突進してから切る技。

影切・月下無双…全方位を闇に包んでから相手に一撃を与える技。使用までの隙が多いため、相手を嵌めなければ使えない。居合故に一撃はとても重いために手加減は必須で、切る前に八幡は必ず台詞を言う。

『堕ちし光のなき地は、闇夜の空の月光にて、地を照らす。』

伽耶梟…八幡がシルヴィアを送る際に作ったフクロウ。（見た目はアカスズメフクロウ。）これも呼ぶ時の台詞がある。

『微睡め、伽耶梟。』

《シルヴィア》

真実の守護曲…歌った後に自身の周りに不可視のバリアを張る。実弾や簡単な煌式武装の攻撃なら防げる。

賢者の詩奏曲…歌った後にビームを出す技。これはアプリ【煌めきのステラ】でのシルヴィアの流星闘技。

結晶の福音曲…星辰力を纏った剣で斬撃を飛ばす技なので、連続で飛ばせる。

光の交響曲…歌った後に周りから光の剣を生み出す。1度に10本までが限界。複数出せるので、陽動にも使える。

天羽…背中から白い翼を出す技。攻撃用ではないが、遠距離や対空攻撃には大きな効果を発揮する。

聖者の聖譚曲…賢者の詩奏曲の強化版。オーフェリアを吹っ飛ばせる程の威力。

愛の聖歌…開発中の技だったが、八幡の呼び声により完成した技。

攻防一体の技で、いかなる攻撃も弾き、いかなる防御も無効化している。範囲も広く、五線譜が主体で動いているため逃げ場はないに等しい。

《オーフェリア》

死の国^{ヘル・ヘイム}…床一面を自身の毒で埋め尽くす技。1度這ったら、使い手の指示がない限りは消えない。

毒蛇^{サーマ・エル}…毒で作られた蛇。普通ならオーフェリア自身が作り出すのだが、今回は死の国があつたのでそこから創造された。名の通り毒なので触れた者は毒に侵される。

閑話 ②

ガールズトーク？

シルヴィア side

八幡《♪♪♪♪♪》

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

《王竜星武祭》も終わって、私は数少ない休みを満喫しているところだ。今は録画しておいたこの前のライブ映像をヘッドフォンを着けて聴いているところ。

これは私の仕事終わりの楽しみでもある。八幡くんの声を聴くと、落ち着くし安心する。それに……恋人同士になったしね／＼

特に八幡くんの歌っている『Wishing』。この曲の歌詞内容を私と八幡くんで想像すると、本当に幸せな気分になる。

でも、これには弱点がある。これに集中し過ぎて周りが聴こえなくなるのだ。だって良い曲なんでもん。私が最初に聴いている時は、外に2時間も待っていた子が居た程だった。本当にごめんなさい！

今では1曲歌い終わる度に1度状況を見てから再生するようにしているから、待たせるような事はしていない。

でも……やっぱり凄く良い歌声だなあ／＼／＼今からでも私と同じ事務所に入ってくれないかな？八幡ちゃんとデュエットなら、私大歓迎なのに。

……あゝあ、もう終わりかあ。もう1回再生しようかな？

p i p i p i …… p i p i p i ……

ペトラ『シルヴィア、少し話したい事があるから開けてくれるかしら?』

シルヴィア「はい、いいですよ。」

話って何だろう?

シルヴィア「いらつしやいペトラさん、今紅茶出しますね。」

ペトラ「いえ、いいのよ。すぐに済む話だから。シルヴィアもそこに座りなさい。」

シルヴィア「は、はあ……」

もしかして、前の会議であつた欧州ツアーの事かな?でもあれは後半年くらい先の話だし、まだ問題にしくてもいいと思うんだけどなあ……

シルヴィア「それで、お話って何ですか?重要な事なんですか?」

ペトラ「……ええ。今聞いておかないと、私はきつと後悔するわ。」

シルヴィア「っ!」

……本気みたい。ペトラさんって凄く真面目な人だから、こういう事は隠さないで話すタイプだから真剣に聞かないと。

シルヴィア「……分かりました。私も覚悟した方がいいんですよ?」

ペトラ「ええ、貴方には刺激の強いものかもしれないから。」

シルヴィア「大丈夫です。もう出来てますから。お願いします。」

ペトラ「そう……じゃあ聞くわよ。」

八幡くんとは付き合ったのかしら?」

……………え?

シルヴィア「え…………えーと、ペトラさん?もう一度お願いします。」
ペトラ「だから八幡くんとはもう付き合っているのかって聞いたのよ。」

ええええええ!!／／／／／

シルヴィア「ちょ、ちょつと!?なんでそんな事を聞くんですか!?」
／／／／／

ペトラ「だって気になるじゃない。星武祭が終わっても帰ってこなかったんだから。八幡くんの所だって確信はしてたけど、もしかしたらって思うとねえ。それで?どうなのかしら?」

シルヴィア「……………／／／／／」コクッ

ペトラ「……………まさか、そうなの?」

シルヴィア「うん／／／／／彼からプロポーズされちゃった／／／

愛してるって／＼／＼／

ペトラ「……………そう。叶ったのね？」

ペトラ（彼も大胆ね。　愛してるだなんて。）

シルヴィア「うん、あの日は本当に幸せだった。1日に3つも願い事が叶ったから。」

ペトラ「星武祭に優勝と、八幡くんの恋人になる事は分かっているけど、もう1つが分からないわね。何かしら？」

シルヴィア「……………八幡くんから告白してもらおう事です／＼／」

ペトラ「……………あらあら。」クスッ

ペトラ（本当に好きなのね。こんなに緩みきった顔しちゃって。）

ペトラ「……………それで、優勝した時のお願い事も家だったのね？彼との共同スペースが欲しかったから。」

シルヴィア「……………プライベートスペースが欲しいのが理由なんですけど……………それも少しは／＼／」

ペトラ「ふふつ、24日までには来て欲しいって思ってるんじゃないの？」

なんで私の考えてる事分かったの!?

ペトラ「凶星ね。一緒にクリスマスを過ごしたいって考えてるくらい誰でも分かるわよ。そんな顔じゃあね。」

シルヴィア「からかわないで下さいよ！」

ペトラ「ごめんなさいね。でも、手放すんじゃないわよ？これは本気で言うわ。彼程、人柄や器、実力のある人なんて、中々いないんだから。離れたら2度と手に入らないのかもしれないのだから、大切にね？彼もそう思ってるはずよ。」

シルヴィア「……………」

……手放すわけないよ。私にとっても八幡くんは大切な人なんだから。

ペトラ「それに、早く子供の顔も見てみたいわね。」

シルヴィア「なんでそんな事を言うんですか!?最後の最後で雰囲気台無しです!」

ペトラ「ふふつ、話はそれだけよ。伝統イベントのある日は休みを入れるようにするから、その日は彼を誘いなさい?その方が貴方も有意義に過ごせるでしょ?」

シルヴィア「……はい／／」

ペトラ「ふふつ、また来るわ。今度はちゃんと仕事の話を持つてくるから。」

ペトラさん……やっと思つてくれたよ。はあ、凄く恥ずかしかったよ／／

でも、そうだね。彼は絶対に誰にも渡さないし、一生私のにするんだから!勿論、私も八幡くんのだけど!

早く連絡来ないかな?もう10日くらいしか無いのに。早くしないとクリスマス過ぎちゃうよ!

※カキツバタと鈴蘭水仙

八幡 side

《王竜星武祭》から早1週間、俺は今自室に籠って、自身の持つ陽の力を3つのアクセサリーに送り込んでいた。依頼主からの要請だからな。『選べるのなら校章じゃなく、装飾類がいい。』っと。

八幡「……………こんな感じだな。」

うし。完成した事だし、メールでもいいか。あいつにも予定あるだろうしな。

八幡「『完成したぞ。俺はいつでもいいから、暇な日連絡くれ。』これでいいだろ。」

pipipi…

ん？だれから……

FROM：オフエリア

早っ!?送信してから30秒も経ってないぞ!?見るのも文字打つのも早くね!?

FROM：オフエリア

『今がいいわ。場所は私たちが最初に出会ったお花畑よ。待ってるわ。』

oh………しかも奴さん、受け取る気満々やないの。場所まで指定するなんて。

まあ俺としても断る理由が無いから別にいいけどな。

八幡

『了解。すぐ向かう。』

さて、早く貰いたくてウズウズしてるお姫様のところまで行ってきましたか。

――商業エリア・花畑――

ゆつくり来たはいいが、オフエリアは着いてるかもな。商業エリアは俺の学院からじゃ真逆の方向だし、レヴォルフからは2番目に近い場所にあるからな。

………やっぱ人が居ないな。オフエリアが居るだけでこんなになるかねえ?

オフエリア「………」

………居た。オフエリアは花を優しく触りながら微笑んでいた。

これは俺の見たまんまの感想だが、すげえ楽しそうだな。

邪魔したくはないな。それに、あんな顔は初めてだ。微笑んでるのは見た事あるが、あんなに嬉しそうに、楽しそうに微笑んでるのは初めて見る。

オーフェリア「……………っ！八幡。」

八幡「あっ……………」

……………見つかった。

オーフェリア「……………少し趣味が悪いわ。覗き見だなんて。」

八幡「いや……………悪い。すげえ楽しそうにしてたからよ、邪魔したくなかったんだよ。」

オーフェリア「……………そう。」

あー、やっぱこうなったか。

八幡「そ、それよりも、一応完成したから持って来たぞ。これよかったか？」

そう言つて八幡が出したのは、白い桜が着いたチョーカー、髪留め、ブレスレットだった。白い桜だけなのは、おそらく考えるのが面倒だったからだろう。

オーフェリア「……………桜？今時桜は咲かないわ。何故……………」

八幡「創造の力を使って作った。自慢になるが、物を作るのは自信があるんでな。」

オーフェリア「……………多彩なのね。」

八幡「そりやどうも。」

オーフェリアはそう言うと、俺の渡したアクセサリーを着けてい

た。

オーフェリア「……………似合うかしら？」

八幡「……………少し意外だな、お前がそんな事を聞いてくるなんて。まあ似合ってるけどよ。」

オーフェリア「……………前までは自分の見た目なんて興味は微塵も無かったけど、これだけでも気持ちが変わるものなのね。」

目立ちはしないが、やっぱり良いな。

オーフェリア「……………何かしら？」

八幡「いや、やっぱりお前つて白とか黒の色が似合いそうだなって思ってたただけだ。」

オーフェリア「……………私を着せ替え人形にする気なのかしら？」

八幡「俺にそんな趣味はねえ。」

オーフェリアは軽い冗談に引かかったのが可笑しかったのか、少し笑った。

……………

オーフェリア「……………？」

八幡「……………」ナデナデ

オーフェリア「……………八幡？」

八幡「ん？……………うおっ……………わ、悪い。」

オーフェリア「……………どうかしたの？急に頭を撫でるなんて……………」

八幡「いや……………なんていうか、お前を見ると無性に撫でたくなるんだよ。俺にも分からのだが、とにかく撫でたくなる。」

いや、本当に分からのだよ。

オーフェリア「……………そう。私でよければいいわ、私も八幡に撫でもらうのは嫌いではないから。むしろ好きよ。」

八幡「……………オーフェリアってよ、どっちが本物なんだ？」

オーフェリア「……………どういう意味？」

八幡「なんかお前見てるとよ、偶に分かんなくなるんだよ。冷静な方となんか甘えてるような感じのが混ざり合ってるっていうか、なんというか。」

オーフェリア「……………私にも分らないわ。1つ言えるのであれば、貴方の側はとても安心するということよ。」

八幡「……………そうか。なあオーフェリア。お前ってカキツバタって知ってるか？」

オーフェリア「……………ええ、名前は知ってるわ。勿論、花言葉も。」

八幡「そうか。なら言わなくても分かるよな？俺はそう思ってる。」

オーフェリア「……………ありがとう。じゃあ私からはスノーフレークよ。」

八幡「マジか……………そんな名前の花もあるのか。少し勉強したつもりだったんだが…」

オーフェリア「……………なら教えてあげるわ。スノーフレークは別名『鈴蘭水仙』すずらんすいせんとも呼ばれているわ。花言葉は

【純潔】【純粹】【汚れなき心】【皆をひきつける魅力】よ。」

八幡「……………俺に合ってるか？」

オーフェリア「……………ええ、合ってるわ。貴方の心は汚れていないし、何処にも邪なんて感じないわ。【皆をひきつける魅力】は分らないけど。」

オーフェリア「でも、私は惹きつけられたわ。魅力かどうかは分からないけど。」ニコツ

八幡「……………そうか／＼／」

……笑った。今、完璧に笑った。すぐに元の顔に戻ったが、明らかに今笑った。

……やっぱ良いな、こいつの笑顔。

八幡の居ない話し合い

――

現在、この食堂には男3人に女5人が集まっていた。それもこの学院を代表する冒頭の十二人のうちの8人である。

セシリー「師父ー、なんかこの面子で会うのって久し振りですけどー、なんで八幡が居ないんですかー？」

虎峰「そうですね。確かになんか違和感を覚えますね。」

星露「そうじゃのう。今や妾たちの中心は八幡と言っても過言ではないからのう。」

沈雲「しかし珍しいですね。大師兄が此方にいらっしやるなんて。」
曉慧「……………比企谷八幡に、人付き合いも大切だと教えられた。」

沈華「比企谷がそんな事を言うなんて、少し前までならあり得ませんわね。」

冬香「ふふふ、八幡さんは益々男らしさに磨きがかかっておりますわね。」

陽乃「さっすが八幡くんだねえ！大勢の生徒たちに慕われてるだけあるよ！」

何故か今回、八幡が居ない状態でこの8人が揃っていた。

星露「しかし、八幡が来てからもうすぐ3ヶ月が経とうとしておるが、此処界龍もすっかり変わったのう。」

陽乃「確かにねー。この前まで水派と木派のいがみ合いだったのに、八幡の教えを勝手に受けてからいつの間にかみーんな仲良くなっちゃってるものね。」

沈雲「ええ。僕や沈華も今では、趙師兄や木派の門弟たちにも気軽

に話せますからね。これも彼のおかげでしょう。」

冬香「今では、派閥の違う者同士でも互いに教えあっているとか。武術に疎い水派には比較的簡単な武法を、魔法に恵まれない木派には初級レベルの陰陽術を、今では虎峰さんも教わっているとか？」

虎峰「はい。僕も術のようなものが出来るのなら、習得しておいても損はないと思ったので。今はセシリーに習っています。」

冬香「まあ、そうなのですか？」

セシリー「はい。しかも八幡の使う術って安全かつ強力な術式もあるので、教え甲斐ややり甲斐があるんですよ。」

冬香「……私も習ってみようかしら？」

沈華「その際は、私が教えてあげますわ。比企谷から少しは教わっていますので。」

暁彗「……………しかし、比企谷八幡の影響は強い。よもやこの学院の派閥対立まで解消するとは思わなかった。」

虎峰「たった2ヶ月しか在学していないのに、彼の影響力には度肝を抜かれましたね。転校初日の派閥勧誘の拒否から始まって、未適合純星煌式武装の初適合者、大師兄との決闘に勝利、そして派閥を無視する大人数の教示に苦手技の克服など、彼のしてきた事には本当に驚かされますね。」

星露「彼奴、妾よりも師に向いておるのではないか？妾も流石に自信を無くすぞ。」

セシリー「八幡も無意識にやってるんでしようけど、尊師って呼ばれるのも分かる気はしますよねー。」

星露「お主もそう思うか？……………いや愚問じゃな。この学院の全員が思っておるじやろう。妾の立場がないではないか。」

改めて八幡の凄さを話し合っている8人。いつでも出来るような内容ではあるが、今回は八幡がいない事もあるのか、遠慮無く話せるのだろう。

陽乃「そういえばさ、此处にいる皆は八幡くんの料理って食べたこ

とある？まあ、一緒に食べてた子もいるんだけどね。」

陽乃が八幡の作る料理の話題を切り出すと…………

星露「勿論じゃ！妾が1番に食べたのじゃからのう！」

セシリー「あたしもありますー。」

虎峰「僕もあります。絶品でした。」

沈雲・沈華「僕（私）もあります（わ）。」

暁彗「……………私はない。」

冬香「私もありませんが、何故です？」

8人中2人が食べていなかった。

セシリー「ええー!?大師兄は兎も角、冬香さんは食べてないんですかー？」

冬香「は、はい……………あの、何か？」

星露「意外じゃのう。」

陽乃「うん、てつきり食べてるかと思ったのに…………」

冬香「お部屋にはよくお邪魔しますが、特に何かを頂くわけでお話をするために伺っているだけです。」

陽乃「勿体ないよー！今度夕方に行ってみなよー、私も付き添うからさ！」

星露「なっ!?ずるいぞ陽乃！それは妾に任せるのじゃー！」

セシリー「師父と師姉の手を煩わせる訳にはいきません！あたしに任せてください！いえ、あたしがいきますー！」

沈雲「師父方、必死過ぎますよ…………」

沈華「まるで国取り合戦ですわね。」

暁彗「……………それ程美味なのか？」

虎峰「ですが冬香さん、本当に何もありませんか？八幡が何も出さずに相手をするとは思えないのですが…………」

冬香「そうは言われなくても……………っ！では、あれもそうなので

しょうか？」

3人「!!？」

沈華「つと、言いますと？」

冬香「八幡さんがいつも出してくれるスポンジケーキがあるのですが、それがとても美味しいのです。程良い甘さの中に混ざる抹茶の味があるので、よく頂いております。共に出てくる紅茶も本当にケーキと会うので、もしかすると思ったのですが……」

陽乃「……………もしかして、冬香ちゃんがお邪魔してる時って……」
冬香「はい、必ず用意してくださっているのです、いつも頂いております。そうなのですか、あれは八幡さんの手作りなのですね。感服致しました。」

陽乃「ス、スポンジケーキと……………紅茶？」

星露「それを部屋に入ったら、必ず用意してくれる……………じゃと？」
セシリ「そんな……………」

曉彗「……………師父が惚れ込む程の美味なのか？一度食してみたいものだ。」

沈雲「大師兄はまだいいですが……………」

沈華「あの御三方は、食べられるかどうかも怪しい立ち位置にいるから……………」

虎峰「落として落とすというのは、また新しいですね。狙っていたのでしょうか？」

落ち込む3人、普段通りの5人と分かれているが、八幡の料理が食べたい、食べてみたいという気持ちは一緒だった。

その頃八幡は……………

八幡「今日別に来るなって言っていないのに、誰も来ないなんてな……………一応多めに作ったんだがな。なんかあったのか？」

今日に限って晩御飯を多く作っていた。

非常勤調理師 比企谷八幡くん

八幡 side

なんか中華も久し振りな気がする。最近はずいぶん忙しい日々が続いてきたからな。《王竜星武祭》がやってる中、見学しにきたり、シルヴィが泊まりに来たりと中々暇になれなかったからな。少し経った今でもその余韻はある。それは飯を自分で作っていたからだ。あれから1週間も無意識に作っていた。

これでは報奨金が底をつく。今日から週に5日は食堂だな。でないと、生活していけないかもしれん。

八幡「今日から中華でもいいか。しかし本当に久し振りな感じがするな。」

何にすつかなあ。唐揚げ定食や麻婆豆腐もいいが、炒飯とラーメンも食いたい。小籠包と青椒肉絲も食いてえな。餃子としゅうまいも外し難いし、いつそ小分けにしたメニュー出してくんねえかな？

八幡「すいませー……あれ？」

まだ準備中？変だな。この時間帯ならやっててもおかしくないはずだが。

職員1「ありや、来ちゃったよ！」

職員2「ん？ああ！八幡坊ちゃん！あんただったのかい！」

八幡「え？あ、はい。どうかしたんすか？これから混むって時に。」

今から準備してないとなると、後がつつかえて料理場が機能しなくなる。新しい料理が注文された際には、それこそ大問題だ。

職員1「それがねえ、此処のスタッフがもう2人来るはずだったんだけど、熱が出たって今連絡が入ってきたもんだからさー。」

職員2「前以て連絡してくれればあたしらも対応出来ただけど、こんな時間に連絡入れられてもしょうがないだけなのに。それでメニューどうしたらいいか考えてるってわけさ。ごめんねえ。」

成る程、だからか。確かにスタッフ2人じゃあ限界がある。この場を切り盛りするのはどう考えても無理だな。

職員1「はあ……仕方ないけど、今日はメニューを減らすしかないね。あんだけの生徒数に幾つものメニュー渡されたんじゃ、あたしらが追いつけないよ。」

八幡「それなら手伝いましょうか？」
「え？」

料理なら自信あるしな。

職員2「でも、坊ちゃんは飯を食べに来たんだろ？手伝いなんかしてもいいのかい？余計に腹が減るだけだと思うけど……」

八幡「そんなに空腹って訳じゃないんで大丈夫です。飯代持つてくれるんなら手伝いますよ？それでも自信ありますから。」

おばちゃん2人は考え込む仕草をしたが、すぐに答えは出た。

職員2「よつしや！あたしや坊ちゃんに賭ける！あんたの腕を信じるよ！」

職員1「よろしくねえ！じゃあ早速だけど、中に入ってくれ。色々と器具の場所とか説明するからさ。」

そんなこんなで10分、説明が終わって調理服を着てから、調理の準備を開始する。

いつどんな注文が来てもおかしくはないからな。他のメニューも作っておくか。出来たのは保温機に入れときやいいからな。

――30分後――

男子1「……おい、この小籠包何時もより美味くないか？」

男子2「お前もそう思う？俺もだ。」

女子1「何この麻婆豆腐……何時もより少し辛いけどすごく美味しい！」

女子2「こっちの唐揚げも凄く美味しい！レシピ変えたのかな!？」

男3「んっ!?!こっちの炒飯すげえ!!いい塩加減だ！」

女3「嘘!?!一口ちようだい！」

たちまちに此処の食堂は人で溢れ、廊下にも並んで最後尾が見えない程だった。幸いにも人気料理はまだストックがあるからまだ平気だ。

にしても……楽しくなってきた。

男子4「唐揚げ定食!唐揚げ1つ追加でお願いします!」

男子5「炒飯大盛!」

女子4「野菜炒め定食お願いします!」

星露「青椒肉絲を頼むのじゃ!」

すげえ勢いで来るなあ。1人なんか聞き覚えのある声だったが、まあいい。どんどん来い!だって今4品の内3品は出来てるからな!1品はもう少しお待ちください。

職人2「……坊ちゃん、あたしらもう調理してないのに……1人で間に合わせるなんて……あんた何者だい?」

職人1「長年やってきてるけど、恐ろしいねえ。でたらめにも程があるよ。」

すると食堂の食卓の方ではこんな声が……

星露「んんっ!!この味……もしや其処に八幡が居るのではないのかえ!!」

ん?今誰かに呼ばれたか?

八幡「ん?誰か呼んだか?」ヒョコツ

ガタツ!!!

星露以外の全員が一斉に立ち上がった。

八幡「……………え?何?」

男子3「し、し、失礼を承知でお聞きしたいのですが、この料理は……尊師が?」

八幡「ああ。途中からおばちゃん達は配膳に廻ってたからな。」
全員（星露以外）「っ!!!」

……………すると、立ってそのまま固まってしまった。

男子1 「まさか……まさか尊師が……我らのために食事まで……」ゴウキュウ

男子2 「なんてお方だ……」ゴウキュウ

八幡 「……え？ど、どうしたんだ？」

女子2 「私たち……此処まで愛されていたなんて……」ホロリ

女子4 「器から違うわ……」ナミダ

八幡 「いやいや、たかが飯くらいで大袈裟すぎるだろお前ら。こんなのに楽しんでやりやあいだけだ。」

全員（星露以外） 「たかが飯くらい!!？」

………今度はどした？

男子5 「なんと……尊師そこまで……」

男子3 「我々の成長のためなら、苦など気にしないと言われるなんて……」

いや、そこまで言っていないからな？俺だって苦しいのは嫌いだからね？

女子1 「私………尊師にもっと憧れちゃったわ。」

男子3 「ああ、すげえ人だ。」

あんまり褒めるの止めてね？俺褒められ慣れてないから。

全員 「尊師っ!!」

八幡 「は、はい!？」

ヤベツ、声裏返った。

男子3「今回はご馳走様でした。この食事に込められた尊師の想い、決して無駄にはしません！これからもより一層の努力をすると誓います！」

八幡「……えーと、無理すんなよ？大怪我でもしたら元も子もないんだからよ。」

全員「ありがたきお言葉っ!!」

此処軍隊じゃないからそんな声揃えなくてもいいよ？

男子生徒がそう言い終わると、食べ終わった者は再度お礼を述べてから退室して、残っている者は、料理を噛み締めるように食べていた。俺ただ飯作っただけだよ？

――1時間半後――

……ようやく終わった。俺だって分かった瞬間の奴等の顔面白かったな。鳩が豆鉄砲受けたような顔してたな。

八幡「あぁ、腹減った。俺も食うか。」

職員2「坊ちゃん助かったよ。しかしあんた本当に慕われてるんだね。正直疑ってたけど、さっきのアレ見てすっ飛んだよ。」

八幡「勝手にやってるだけですけどね。俺は教えてるだけですけど、奴らにとっては抛り所みたいなものなんですよ。」

職員2「まあいい事じゃないか。約束通り食っていきな！まあ全部あんたが作ったもんだから貰う気なんて無いけどね。」

八幡「ええ、じゃあ遠慮無く。」

程良い感じで余ったので、最初思ってた全品というわけではないが、ほとんどの料理が食べられた。

飯を食い終わって、身体を動かそうと思って道場に向かって着いてみると…………

全員「尊師っ!!お疲れ様です!!」

全員が並んで深いお辞儀をした。

いや、ホントにいいからね？

八シル劇場 恒例イベント編 2人の聖夜

八幡 side

八幡「……………前から思ってたが、こっちの……………六花の冬つてのは結構暖かいんだな。」

シルヴィア「そう？ 私はずっとここに居たから、あんまり分かんないかな。」

シルヴィア「そういえば八幡くん、今日作る食材は買ってきたの？」

八幡「ああ、もう買ってきてあるが、それがどうかしたのか？」

シルヴィア「ううん、またお買い物デート出来たらなくって思っただけ。」

八幡「……………そうだったな。俺たちは会える機会が限られていたな。俺は学校だけだが、お前はアイドルもやってたな。盲点だった、すまない。」

シルヴィア「いいよ、気にしないで。こうやって側にいてくれるだけでも、充分過ぎるくらい幸せだから／＼／」

こうして普通に会話をしているが、今俺たちは六花の外縁居住区にある1軒家にいる。そう、この家はシルヴィアの願いで居住可能になった結構良い感じの2階建て1軒家である。シルヴィはともかく、俺も当たり前のように居るが、シルヴィが許可したからである。

プライベートスペースが欲しいと言っていた気がするが、俺としてもシルヴィと一緒にいられるのは嬉しいから気にしてない。

因みに俺とシルヴィは、手を繋ぎながらソファに座っている。前まで恥ずかしかった事が、今では普通に出来る。

シルヴィア「けど、今日はずっと一緒にいてね？ 折角一緒に居られ

るんだから。」

八幡「分かってるよ。」

クリスマス……別にこれといって思い出なんてない。

これまでこのイベントがあつて良かったなんて思った事もない。ケーキと豪華な料理を食べる、それだけだ。

けど、今年のクリスマスは今までで1番幸せで楽しいクリスマスになると思う。

――18:00――

シルヴィア「……そういえば一緒に料理したのって初めてだね。」

八幡「そうだな……シルヴィは手際良いからマジで助かった。経験者がいるだけで違うもんだな。また一緒に作るか。」

シルヴィア「うんっ！出来るなら近い方がいいなあ。」

八幡「ならよ、年末に蕎麦でも打たないか？こっちの文化では年越し蕎麦つてのがあつてな、1月1日になったら食う習慣があるんだよ。どうだ？」

シルヴィア「うん、そうだね！年末年始は休みつて事務所でも決まってるから丁度いいよ！じゃあ12月31日もこの家に来てね！合鍵渡してあるから入れるでしょ？」

八幡「確かに入れるが、人の家に勝手に入るつてのは気が引けるな。」

シルヴィア「いいのっ！私は八幡くんだから合鍵渡してるんだよ？」

それはいいんだが、なんかなあ。

シルヴィア「いいから！八幡くんは気にしないの！」

八幡「……分かったよ。」

シルヴィア「よろしい！じゃ、乾杯しようよ！料理が冷めちゃう。」

八幡「……………フツ、そうだな。」

シルヴィア「じゃあ……………」

「乾杯っ!!」

—————20:00—————

シルヴィア「それじゃあお待ちかねのプレゼントこうかくん！」

八幡「おー。(棒読み)」

シルヴィア「八幡くんもつと盛り上がりようよ！クリスマスだよ!？」

これでも良い方なんだが……………

八幡「逆に聞くが、俺が今のテンションだったらどう思う？」

シルヴィア「……………ゴメンね？」

八幡「おい、謝るなよ。俺が悪い事言っただけじゃないか。」

シルヴィア「ふふふっ♪冗談だよー。」

八幡「つたく……」

シルヴィア「じゃあ私から渡すね！八幡くんには凄く期待してるんだから！」

八幡「無駄にハードル上げんなよ。」

実際、大したもんじゃないしな。

シルヴィア「私からはこれ！」

シルヴィが渡してきたのは、青のマフラーだった。しかも結構長めの。

八幡「おお、マフラーか。そういや俺、防寒具とかって上着くらいしかなかったからな。それに暖かそうだ。ありがとな。」

シルヴィア「どういたしまして。それから……八幡くんなら分かっているんだよね？マフラーが長い意味。」

八幡「……今、巻くか？一緒に。」

シルヴィア「っ！うんっ♪」

そう言うシルヴィアは、嬉しそうにこっちに近づいてきて、俺の顔のすぐ側まで顔を近づけていた。

シルヴィア「……顔近いね／／／／／」

八幡「……そうだな／／／」

……

シルヴィア「そ、それで、八幡くんのプレゼントは何かな？／／／／／」

八幡「……それなんだが……悪いシルヴィア！プレゼントは用意出

来なかった。」

シルヴィア「……………え？」

八幡「……………本当に悪い。俺こういうの分かんなくて……………相談なんて出来ねえし、自分で考えようにも全く分かんなくてよ……………」

八幡「だから……………なんも用意出来なかった……………本当に悪い。」

そして八幡は土下座をした。

八幡「虫のいい話かもしれんが、今日が俺からのプレゼントじゃダメか？」

シルヴィア「……………そつか、分かったよ。でも、何か貰いたかったな。」

八幡「なら！」ガシッ！

シルヴィア「っ！」

八幡「キスでいいか？いや、キスなら……………どうだ？」

シルヴィア「え!?!／／い、いいよ！そこまで気にしなくても!?!／／／」

八幡「なら言い方を変える。これが俺のプレゼントだ。受け取ってくれないか？」

シルヴィア「う……………うん／／／／／」

……………本当に悪い、シルヴィ。

八幡「じゃあ……………いくぞ。」

シルヴィア「え!?!い、いきなり!?!／／／」

八幡「ああ。」

シルヴィア「……………うん／／／／」

徐々に顔が近づき、そして……………

シルヴィア「んっ／／／……………」

顔を真っ赤にしながら、シルヴィは俺からのキスを受け入れた。

シルヴィア「……はぁ／＼／＼／」

八幡「………本当にすまない。」

シルヴィア「本当だよ／＼／こんな幸せなプレゼントくれるなんて………もっと欲しくなっちゃうよ／＼／／」

八幡「今日ならいいぞ。シルヴィへのプレゼントだからな。好きなだけ、したいだけしたらいい。」

シルヴィア「………そう言うなら遠慮しないよ？私もつとしたいよ………／＼／」

八幡「………あぁ。聖夜が終わるまでなら、何度でもしていいし、何度でもしてやる。男に二言はない。」

シルヴィア「………じゃあー」

それから俺たちは、気の済むまで口づけをしていた。日付が変わったのは気づいていたが、それでもお互いに止まらなかった。

2人で過ごす1年の終わり

シルヴィア side

今日は今年最後の日のである大晦日。冷え込むのが分かっているも外出する人は多い。それに何と言っても1番多いのが、年越し蕎麦の準備で、今八幡くんとスーパーにいるんだけど……

ガヤガヤ

シルヴィア「人……多いね。」

八幡「……ああ。まあ幸い予約はしてあるから、俺たちは他に食べたいものとかを買っていけばそれでいいからな。シルヴィは蕎麦打ちって初めてか？」

シルヴィア「うん。いつもルサルカやペトラさんたちと一緒に食べててね、ペトラさんがいつも出前で頼んでくれてたから蕎麦は作った事なくて、だから凄く楽しい！」

八幡「そうか。なら手取り足取り教えてやるから覚悟しろよ？」

シルヴィア「お願いします！先生っ！」

こんな普通のやり取りも、八幡くんと一緒だと凄く楽しい。やっぱり良いなあ〜こういうのっ♪

それにしてもさっきからなんか視線を感じるけど……何でだろう？八幡くんは変装してないし、私も変装してるからバレてないはず。何でかな？

シルヴィア「ねえ八幡くん、さっきから私たち注目されてないかな？」

八幡「ああ、俺も思った。なんかチラチラと視線を感じるな。」
シルヴィア「やっぱり感じてたんだね。あんまり気分の良いもの

じゃないね。」

八幡「そりやコソコソと見られてりやな。だが、この中にいる間は我慢するしかないようだな。嫌なら外で待っててもいいぞ?」

シルヴィア「……私が行くと思う?」

八幡「だろうな。」

私たちはそのまま蕎麦に乗せる食材とお雑煮用のお餅を籠に入れてレジに並んだ。するとレジ係がこの前のおばさんだった。

店員「おっ!来たね?新婚夫婦さん!」

八幡「おい、まだ結婚してねえよ。」

店員「まだって言う辺りはそういう事だったのかい?」

八幡「若いモンにンなこと聞くなよ。ていうかなんだよ?新婚夫婦って。」

店員「アンタ達が凄く仲睦まじくしてるもんだから、こっちまで噂が来たんだよ。アンタ達の甘さにやられたのかねえ?」

シルヴィア「そんなつもりは全くなかったんですけど……」

店員「無自覚って奴かい。あたしのレジだけじゃなく他のレジにも無糖コーヒー買ってるお客が居てね、店としちゃ嬉しいけど、個人としては少し哀れだったね。」

そんなにいたのかな?

店員「そんで1人で来た男客なんて『リア充爆ぜろ』なんて言うザマさ。」

八幡「……少し前の俺だな。」

シルヴィア「あはは……」

店員「にしてもあんたら、ホントにラブラブだね。こっちも胸焼けしてくるよ。」

シルヴィア「……………／／／／／」

八幡「んな事いいから、注文した蕎麦用意してくれ！」

店員「はいよ、ベテランラヴァーズ。」

八幡「っ！つたく……」

シルヴィア「あはは……／＼／＼」

店員「ほい！蕎麦粉2人分！お嫁さん、幸せにしてもらうんだよ！」

シルヴィア「え!?／＼／＼」

八幡「余計な事言うんじゃねえよ。行くぞシルヴィ、またからかわれる。」

シルヴィア「う、うん／＼／＼」

店員「また来なよ！比企谷ちゃん！」

――外縁居住区・シルヴィア宅――

シルヴィア「ただいまあゝ！」

八幡「お邪魔します。」

シルヴィア「もう！普通にただいまでいいって言ってるのに！」

八幡「慣れねえんだから仕方ねえだろ。少しは大目に見てくれ。」

シルヴィア「もう、しょうがないなあゝ。じゃあ後でいっぱい甘えさせてね？」

八幡「分かったよ、お姫様。」

シルヴィア「わあゝいい♪」

やったあ♪八幡くんに甘えられる♪

八幡「少し休憩してから打つか。疲れたままやってもアレだしな。」

シルヴィア「はーい♪」ダキッ！

八幡「おいおい、いきなりかよ。」

シルヴィア「んー♪」

八幡「まあ、いいけどな。」

だって此処は私だけの特等席だもんっ！

――30分後――

八幡「よし、じゃあ蕎麦打ちやるか。」

シルヴィア「お願いします！先生！」

八幡「なあ、ちよつと思っただけだよ……なんで先生？」

シルヴィア「え？尊師の方が良かった？」

八幡「いやそういう事じゃなくて！あれ？なんでその呼び方知ってるの？」

シルヴィア「門番さん言ってたでしょ？八幡くんの事そんな風に。」

八幡「門番さん……あー、あの時か。よく覚えていたな。」

シルヴィア「記憶力良いでしょ！」

八幡「無駄な事に使うんじゃない。」

シルヴィア「ぶーぶー！」（？・☒・3・☒）

八幡「そんな顔するな、可愛いから。」

シルヴィア「もうっ！八幡先生ってばお上手なんだから！」

八幡「何処のオカンだお前は。まあいい、それじゃ始めていくぞー。」

シルヴィア「お願いします！八幡先生！」

八幡「……もうそれでいい。」

楽しいなあ……やっぱり八幡くんの存在って大きいな。

それから私は八幡くんに蕎麦打ちを教えてもらい、何とか仕上げる事が出来た。後は23時半くらいになるのを待つだけかな。

まあ、甘えちゃうけどね！

――23：15――

あれから色々な事をして今に至る。いやあ久し振りにシオンくんに会えたから嬉しかったなあ。背が130cmだからちよつと勘違いしそうになっちゃう。

でも今は少し眠い。もう23時だからだ。後少しで今年も終わってしまう。

八幡くんは、キッチンでエビ天ぷらを作っている。何でも蕎麦に乗せるみたい。

もし私がアイドル続けるなら、八幡くんはこうやっていつも私のために食事を作ってくれるのかな？……イクメンさんだね。

八幡「シルヴィ、起きてるかー？寝ちまってないよな？」

シルヴィア「起きてるよぉ。少し眠いけど大丈夫。」

時々こういう風に声を掛けてくれる。これも彼の優しい一面だね。

………良い年だったなあ。

八幡「ほい、出来たぞ。」

シルヴィア「ひゃっ!？」

八幡「ど、どうした？変な声上げて。」

シルヴィア「う、ううん気にしないで！ただ思い出を振り返ってただけだから！」

八幡「……………思い出……………か。」

シルヴィア「ん？どうしたの？」

八幡「此処に来る前の俺なら、そんな事もしてないだろうな。」

あつ！……………そうだった。八幡くんにとっては此処に来る前は……………

シルヴィア「……………ごめん。」

八幡「いや、いいんだ。此処に来てから変わった。いや、変えられた。」

八幡「思えば、ここに来てからはずっと良い思い出しかないな。今までの俺に見せてやりてえよ、未来の俺はこんなに幸せだって。自慢しながら。」

シルヴィア「……………八幡くん。」

八幡「今年の初めは普通だったが、中間は最悪だった。自分が思う中でも1番。終わりの方は……………最高だな。中間の方を足しても大量のお釣りが出るくらいなの……………だからこそ何度も思うんだ、俺はここに来て本当に良かったってな。」

シルヴィア「……………ねえ八幡くん。」

八幡「ん？」

シルヴィア「この蕎麦食べ終わったら、外に出て思いっきり跳ぼうよ。」

八幡「急だな。どうした？」

シルヴィア「ある国ではこうするらしいの。私の持論なんだけど、今年の嫌な事は全部忘れて良い事は全部残すの。どう八幡くん？一緒に跳ばない？」

八幡「……………良いなそれ、やるか。」

シルヴィア「うんっ！」

よーし！時間は余裕だけど、善は急げって言うしね！早いに越したことはないよね！

――23：58――

八幡「ふうくやつぱ外は冷えるな。」

シルヴィア「うん、けど私は気持ち良いかな。少し涼しい。」

あったかい蕎麦を食べたからね。

シルヴィア「後1分……今年も1分かあ。」

八幡「そうだな。」

シルヴィア「……………」

八幡「……………」

後……30秒。

シルヴィア「なんか緊張するな。ただ跳ぶだけなのに。」

八幡「奇遇だな、俺もだ。」

シルヴィア「手、繋ぐよね？」

八幡「……ああ、そうだな。」

手を繋いで跳ぶ準備。

後10秒。

シルヴィア「……………」

八幡「……………」

5…4…3…2…1…0。

八幡「ふっ！」

シルヴィア「とりやあつ!!」

八幡「うおっ!」

シルヴィアと八幡は同時に跳んだが、シルヴィアは八幡に飛びかかるような形だった。

そして2人はドサツと芝生に転び落ちた。

八幡「……おいおい、マジか。」

シルヴィア「あっははは!! あー面白い! あっはははは!!!」

八幡（別に今くらいいいか……）

シルヴィア「あはははは! ふふふ!!」

八幡「ははは! はっははは!!」

こうして2人は笑いながら新年を迎えた。

そして八幡は今までにないくらいの大声で笑っていた。

2人の初詣

シルヴィア side

朝に目が覚めたら八幡くんが横に居て、普段の姿からは想像できないくらいに可愛い寝顔を見せてくれた。ご馳走様です。

起きてからは改めて新年の挨拶をして、お雑煮とおせち料理を食べ、少しのんびりして今に至る。

私は今着物の着付けを八幡くんにもらっている。着た事はあるけど、着付けはいつもスタッフさんとかがやってくれてたから自分では分らない。だから八幡くんにもらっているんだ。

でも、何故か手慣れている。もしかして誰かにしていたのかな？もしかして妹さん？今は私にしてくれてるからいいけど。

八幡「キツくないか？帯はこれで大丈夫か？」

シルヴィア「うん、大丈夫。」

八幡「それとシルヴィ、願い事終わったらなんか買ってくか？」

シルヴィア「うん！私は八幡くんに必勝祈願のお守り買うね！星武祭優勝しますようにって祈りを込めて。」

八幡「俺は何にすっかな……やっぱ健康祈願のお守りかな。」

シルヴィア「……もしかして、それを私に？」

そうだったら嬉しいな。

八幡「シルヴィ以外の他に誰かいると思うか？」

シルヴィア「同じ学院の友達とかには？」

八幡「奴らには必要ないだろう。いっつも体鍛えてんだからよ。いっただって健康体そのものだろうに。それに、俺が本気で心配すんのはお前だけだ。」

シルヴィア「えへへ♪」

八幡「……………うしつ、着付け完了！」
シルヴィア「おーありがとうございます！」

うんうん、よく出来てるね。

八幡「んじゃ、神社行こうぜ。」
シルヴィア「うん！」

そう言つて私は下駄を八幡くんは靴を履いて、手を繋ぎながら神社のある方向へと足を進めた。もうお願いは決まってるしね！

——六花神社——

シルヴィア「やっぱり多いね。」

八幡「そうだな。はぐれないようにしつかり手繋いでおくか。シルヴィ、手を出せよ。」スツ

シルヴィア「……………えへへ♪なんか新鮮！」

八幡「……………何がだ？」

シルヴィア「ちよつと前の八幡くんなら、きっと恥ずかしがつてそんな事絶対言わなかっただろうし。」

八幡「他人事だな。これはお前のせいでもあるんだぞ？」

シルヴィア「ふふふっ♪ありがとうございます！」

八幡「ふっ……………どういたしましてだな。」

少し歩いて賽銭箱前まで来た。予想以上に並んでいたけど、八幡くんと居るから全然退屈ではなかった。

シルヴィア「次だね。」。八幡くんは何お願いするか決まってるの？」

八幡「当たり前だろ？そういうお前はどんなんだ？大体の予想はついているが。」

シルヴィア「勿論決まってるよ！私女の子だから何にしようか迷ってたんだから！」

八幡「そうか……ならさぞかし良い願い事なんだろうな。」

シルヴィア「気になる？今なら特別に教えてあげるよ？」

八幡「……ちよつと気になるがやめておこう。いや、あえて聞かない事にしよう。」

シルヴィア「おつ、分かってるね！女の子にはあんまり探りを入れない事だよ！これ結構大切だからねっ！」

まあ、私にはやってもいいけどね♪

八幡「まあその辺は理解してるつもりだ。おつ、前空いたぞ。」

シルヴィア「八幡くんと一緒にお参りしたいから、八幡くんの前が空くまで行かない！」

八幡「……サンキューな。」

シルヴィア「いえいえ！」

話終わった直後、ちようど空いたから揃って前に進んだ。

私は財布から5円玉を出したが、八幡くんは5円玉4枚と1円玉1枚を取り出していた。何でだろう？あれって意味があるのかな？

シルヴィア「八幡くん、何でそんなに？」

八幡「ん？まあ、個人的にこうした方が縁起が良いと思ってな。」

でも、私は5円玉4枚も無いしなあ………

八幡「まあ俺がこうしたいだけだから、シルヴィーはあんま気にしなくてもいいぞ。」

シルヴィア「気になるなあ………ねえねえ！後でその理由、聞いてもいいよね？」

!

君とのバレンタイン

シルヴィア side

シルヴィア「ふんふんふーん♪」

明日は私たち女の子にとってはすつごく大事な日、バレンタインデー！

チョコをあげるにしても色んな言い方があって、友、義理、本命が特に聞きやすい。チョコに限らず、他のお菓子にも意味があるみたい。

私は大本命のチョコともう一つ、お店で買った物だけど彼に渡すつもりでいる。厳密に言うとかチョコではないけど、チョコ味だからいいよね？喜んでくれるといいなあ。

でも、八幡くんもきつと界龍の方でたくさん貰うだろうな。教えている女の子達から。

まあその子達も八幡くんにお世話になってるワケだし、バレンタインだから深くは言わないけど、八幡くんは私のなんだから！

学校が終わって家に着いたら覚悟しておいてね八幡くん！明日はとびつきり美味しいのをプレゼントしてあげるんだから!!

シルヴィア side out

八幡 side

「あの、尊師！よろしければ……受け取ってください！」

「私からも！」

八幡「あ、ああ………ありがとう。食った後に感想とか言った方がいいか？」

「い、いえ！お構いなく！」

「私たちが尊師にあげたかっただけです！日頃ご教授させて頂いているお礼です！し、失礼しました！」

行っちゃったよ……

虎峰「八幡、朝からモテモテですね。」

八幡「虎峰、俺は別にそうなりたいわけではないんだが？」

沈雲「端から見ればそう見えるものだよ。いやあ、羨ましいねえ。」

暁彗「……………」

今日は珍しく男性陣だけで食事をしている。まあ俺が深く関わっている男といえ、この3人くらいしかないんだがな。

八幡「バレンタインつっても俺は今まで一度も貰った事ないから実感ねえなあ。お前らは貰ったことくらいあんだろ？」

虎峰「あるにはありますが……」

沈雲「僕もありますが、君ほど貰ってはないよ。」

暁彗「……………1つは貰う。」

八幡「虎峰はいいとして、暁彗はなんか含みのある言い方だな。沈雲はその性格で貰えてたのか……………」

暁彗「……………毎年、梅小路冬香に。」

沈雲「毎年沈華と、ある一部の人からね。よく分からないけど、前の僕がいつも言っていた言葉責めが良いと。」

八幡「暁彗は分かるが、沈雲にあげた奴は完璧にヤバい奴だ。」

まあ冬香さんなら、クラス全員にあげてそうだな。沈雲に渡した奴は完全に趣味がいけない方向にいつてる奴らだな。

沈雲「……よく分からないものだね。」

八幡「まあ、貰えてんらいんじゃないかね？それよか沈華はどうした？何時もなら一緒にいると思うが？」

沈雲「こういう日は必ず1人にさせるようにしてるんだよ。その方が集中出来るだろうしね。沈華も僕も、人に見られるのはあまり好きじゃないからね。」

良い兄貴だね。

虎峰「そろそろ教室に向かいませんか？でなければ遅れてしまいますよ？」

沈雲「そうですね、流石に遅刻はしたくありませんからね。」

暁彗「……………同意。」

八幡「じゃ、さっさと飯食って行くか。」

――放課後――

…………昼休みに部屋に戻っておいてよかった。でないと両手に沢

山のチョコを持つ羽目になった。こりや食べるの結構かかるな。頑張っても1日5個は食わないとダメっぽいけど、今日は部屋に置いていくか。シルヴィの食いたいし。

セシリー「おーいたいた！冬香さーん！陽姐ー！沈華ー！八幡いたー！」

ん？セシリー？

陽乃「おー八幡くん！やつと会えたよー！ずいぶん捜し回ったんだから！」

沈華「ようやく見つけたわ。皆の尊師は自由奔放なのね。」

冬香「ふふふつ、既に沢山お持ちのようですね。流石八幡さんですね。」

八幡「どうしたんです皆さんお揃いで？」

なんか手隠してるっぽいけど……チョコかな？それともビックリ箱？

陽乃「はいこれ！お姉さんからバレンタインのチョコだぞー！」

セシリー「あたしも陽姐と一緒に作ったんだよー！しっかり味わってねー！」

冬香「私はクッキーを焼いてみました。受け取ってくださいますか？」

沈華「いつもお世話になってるものね。ついでにと思って作ったわ。」

全員それだったか……まあ今まで貰ってない事を考えると、素直に嬉しいな。

八幡「ありがとうございます。しっかり味わって食べますね。」

これで高血圧になる事間違いなしだな。

冬香「ふふっ♪皆さん渡せましたね。ところで八幡さんはどちらへ？」

八幡「このチョコを部屋の冷蔵庫に置いた後、街に行くんですよ。」

セシリー「最近八幡って外出増えたよねー。何処行ってるの？」

八幡「商業エリアだが？何故？」

セシリー「んー……なんとなく。今度私とも行こうよー。」

八幡「別に構わないが、面白い事は何もないと思うぞ？」

セシリー「それでもいいよー。」

八幡「……まあいいが。」

陽乃「じゃあさ！私とも行こうよ八幡くん！お姉さんも八幡くんにエスコートしてもらいたいなあ。」

冬香「ふふっ、楽しそうですね。では、いつか私も連れて行ってくださいね？」

沈華「モテモテね？尊師？」

八幡「相変わらずの皮肉っぷりだな。まあそれがお前らしきなんだけだな。」

それからしばらくして俺たちは別れて、部屋の冷蔵庫にチョコを整理しながら入れてから、シルヴィの家へと向かった。

八幡 side out

シルヴィア side

八幡くんまだかなあ？早く会いたいなあ。

ガチャツ

あ！帰ったかな？

八幡「よおシルヴィ、遅くなった。」
シルヴィア「お帰り！八幡くん！」ダキッ！

ふわあ……八幡くんの良い匂いだあ。

シルヴィアは八幡に抱きつくとき、そのまま胸に顔を埋めて匂いを嗅いでいた。これも2人でいる時は当たり前の事だった。

八幡「……………ただいま。」

シルヴィア「えへへ♪少し慣れてきたんじゃない？ただいまって言うの。」

八幡「まあ少しはな。」

シルヴィア「ねえ？チョコは食べた？」

八幡「いや、1番はお前のがいい。」

シルヴィア「嬉しいなあ……準備出来てるから行く？荷物持つよ、旦那様。」

八幡「旦那じゃねえよ、奥さん？」

シルヴィア「ふふふっ♪」

2人は冗談？をかましながら客間へと向かい、こんな短いやり取りでも、甘い雰囲気が2人を包み込んでいた。

——客間——

八幡くんは食卓で待ってもらってる。頑張って作ったから喜んでもらえる嬉しいなあ。八幡くんの腕には負けるけど、私も少しは自信あるし……よし！

シルヴィア「お待たせー！」

八幡「おお、待って……皿？」

シルヴィア「うん、食べるにはお皿が必要なお菓子なんだ。」

八幡「ケーキか？」

シルヴィア「ぶっぶー♪ハズレ。」

八幡「タルト？」

シルヴィア「ぶー♪またもやハズレ。」

八幡「んー……チョコだよな？」

シルヴィア「うん、チョコ味。」

八幡（チョコ味……）

八幡「……分からん、降参だ。」

シルヴィア「はーい私の勝ち♪負けた八幡くんには罰ゲームとして、私からのあーんをプレゼントです！」

八幡「罰ゲームじゃなくてご褒美だな。」

シルヴィア「正解はブラウニーでした！」

八幡「おお……形も整ってるし、ナッツも乗ってて美味そうだ。」

シルヴィア「じゃあ早速、食べさせてあげるね！」

シルヴィアはそう言ってから、フォークで一口サイズの大きさに切り取ってから、そのまま八幡の方へと手を動かした。

シルヴィア「はい八幡くん、あーん♪」

八幡「……あ、あーん。」パクツ

八幡くんはそのまま口を動かしていた。

シルヴィア「ど、どう？美味しい？」

八幡「んぐっ……ああ、美味い。最高に美味い。もう1ついいか？」

シルヴィア「うん！勿論♪」

八幡くんは8切れあるうちの3切れを食べてくれた。それだけ美味しかったのかな？食べ終わった後も『残りは明日や明後日にとっておく。』って言ってたし。

八幡「ふう〜マジで美味かった。ホワイトデーは気合い入れて作らないと、シルヴィに失礼だな。期待しておいてくれ。」

シルヴィア「気が早いよ〜。でも嬉しい。来月楽しみにしてるからね！」

ホワイトデーは何を貰えるのかな？楽しみだなあ。ワクワクしちゃうよ。

それに、来年もこんな風に楽しいバレンタインになったらいいな♪

※俺が渡すものは

八幡 side

「…………よし、これで明日まで待てばいいだけだな。」

よお皆、比企谷八幡だ。俺は今明日に向けてのお菓子作りをしているところだ。何かあったかって？メタい話、1ヶ月くらい飛んで今日はホワイトデーの前日だ。

要するに、大量の菓子を作っていたわけだ。クッキー何個焼いたんだ？ざっと200つとところか？チョコも大量に作ったからこれも200くらいだろうな。まあ夢中になってりや時も忘れて作りまくっちゃうだろうがな。

クッキーは袋詰めしてあるし、チョコの方も問題ない。シルヴィには良いバレンタインを貰ったからな、俺もそれ以上のバレンタインをやらねえとな。

明日が楽しみになってきた。

――翌日・教室――

八幡「まあ、教室にいる奴らには今渡しても問題ねえよな。」

そして八幡は教室の扉を開ける。

虎峰「あつ、八幡おはようござい…………ってなんですその袋は？」
沈雲「趙師兄、それは愚問というものです。バレンタインのお返しでしょう。」

すると教室の女子たちは一斉に身体をビクツと跳ねさせた。

八幡「まあな。このクラスの女子は俺にチョコくれたしな。好きな方選んでくれ。チョコかクッキーか、2つに1つ。」

女子たちは一斉に寄ってきてお菓子をガン見しながら唸っていた。迷ってたんだな。

女子1「どうすればいいの!?比企谷くんのお菓子なんて絶対美味しに決まってる!どっちを選んだらいいか分からないわ!」

女子2「どっちも選んじやダメかな?」

女子3「ちよつと!皆そうしたいんだから我慢しなさい!」

おーおーすげーなー。教卓の前に女子がすげえ集ってる。

八幡「つと、そうだ。セシリー、沈華、これお前らに。」

沈華「……これはチョコとクッキー両方入ってるわね。」

八幡「ああ、お前らには日頃からよくしてもらってるからな。2つあるくらいでちょうどいいと思ってな。」

セシリー「いやったー!ありがとーはちまーん!嬉しいよー!」

沈華「ありがとうと言っておくわ。」

八幡「おう、それなら何よりだ。」

ふう、クラスの奴には行き届いたな。残ったのは合わせて稽古の終わりにやるからいいか。にしても本当に皆1つしか取ってないみたいだな。凄えな。

――放課後・八天門場――

俺は今、この道場で稽古、或いは教えをしている。勿論それは俺も例外じゃない。まあ教える方が多いんだがな。

体術を叩き込んでいる奴らには……

八幡「この攻撃が来るならこう防ぐか、こう避ける。または捌くかな。」

術を習っている奴らには……

八幡「お前ならこの術式が合ってると思うぞ。試しにやってみろ。」

模擬戦をしている奴らには……

八幡「もつと力とスピードを意識しろ。それじゃ叩いてるのと同じだ！」

術を行使している奴らには……

八幡「術を自身に使った時の手足を別物に考えるな。自分がそれになつたと思え。」

得物を扱う奴らには……

八幡「武器は振るうものだ。振られるようでは扱っているとは言えん。もつと軽いものから始めてみろ。」

とまあこんな感じだ。

ま、それもそろそろ終わりだな。

八幡「よし、稽古終わり！各自解散。それと、俺にバレンタインのチョコをくれた女子はチョコかクッキーか選んでくれ。くれてない奴は来るなよ？特に男共はな？」

道場から笑いが溢れた。まあ貫おうとしてる奴がいたら、バカだけだな。俺は女子と言ったからな。

陽乃「八幡くんおつかれー！今日も良かったよー！凄く有意義だった！」

冬香「お疲れ様です八幡さん。素晴らしいご指導でした。」

八幡「御二人もお疲れ様です。ああそれから、これはお2人に。バレンタインのお返しです。よければ食べてください。」

冬香「まあ……ありがとうございます。」

陽乃「わおっ！八幡くんがバレンタインのお返しを!?こりや明日は雪かな?」

八幡「別に嫌ならいいんですよ?」

陽乃「いやいやいや!全然嫌じゃない!むしろご褒美だよ!ありがとう八幡くん!」

この人は本当に……

冬香「大事に食べますね。」

八幡「ええ。」

さて、これで全員に渡したな。え、星露?知りませんねー?だって貰ってませんから。

後はシルヴィに渡すだけだ。

ここから先は俺の喧嘩（ターン）だ!!

――六花・外縁居住区――

八幡「ただいまあゝ。」

タツタツタツ

シルヴィア「お帰り！八幡くん！」

八幡「1ヶ月振りだな。どうだ？疲れてはいないか？」

シルヴィア「八幡くんの声と顔見たら飛んじやった！」

八幡「…そうか。そりや何よりだ。」ナデナデ

シルヴィア「にゅ…:…:…」トロオーン

撫でられると、ホント変な声出すよな。スゲー可愛いからいいんだが。

八幡「客間行かね？俺も稽古後で疲れててよ。それに腹減った。」

シルヴィア「ご飯の用意はさっき終わったから直ぐに食べられるよ。行こつか！」

ホワイトデーの事を聞かない辺り凄いな。俺としてもその方が気が紛れるしな。

――食後――

八幡「はあゝ美味かった。」

シルヴィア「ふふっ、ありがとう♪」

いや、実際これだけがホントに美味しい。それこそ店を出してもおかしくないくらいだ。この子凄いよね。

八幡「よし、晩飯も終わったし、そろそろ食後のデザートにするか。」
シルヴィア「おお！待ってました！」

……やっぱ期待してたんだな。

八幡「この前のバレンタインはありがとな。俺からのお返しはバームクーヘンだ。」

八幡「因みにチョコをかけてある。」

八幡はそう言いながら、紙パックの中にあるバームクーヘンを取り出した。

シルヴィア「わあ〜！ありがとう！」

八幡「因みに豆知識だが、ホワイトデーにあげる時のバームクーヘンの意味は、

『貴方と関係が続くように』だ。バームは『木』、クーヘンは『お菓子』を意味していて、『この幸せがずっと続きますように』という意味も含まれている。」

シルヴィア「そつかあ……うん、凄く良い事を聞いたよ。ありがとう♪」

八幡「ああ、遠慮なく食べてくれ。」

シルヴィア「八幡くんも食べるよね？」

八幡「ああ、そうしないとシルヴィがいたたまれなくなるんだろう？」

シルヴィア「そういう意味じゃ……」

八幡「ふつ、冗談だ。」

シルヴィア「もお〜！」

面白おかしい話をしながら、俺たちはお菓子を食べていた。シルヴィと一緒にいるのは、やはり誰よりも落ち着くな。

シルヴィア「……美味しかったよ、八幡くん。私に尻尾と耳が生えていたら、ぴよこぴよこ動いてるかもね。」

八幡「それは何よりだが、まだあげてないお菓子があるんだが、いるか？」

シルヴィア「え？ そうなの？ だったら欲しいかな。」

八幡が取り出したのは、ただの棒付きキャンディだった。一応手作りのようだが、隠すようなお菓子でもないシルヴィアは思った。

シルヴィア「キャンディ？」

八幡「ああ、一応ゲームでもしようと思ってな。だが、このゲームはホワイトデー限定にしたいと思ってる。」

シルヴィア「え？」

八幡「……聞きたいか？」

シルヴィア「そんな意味ありげに言われたら気になるよ。教えて！」

覚悟ありか。なら上等！

八幡「そのゲーム内容は……」

この棒付きキャンディをいかに相手の舌に触れずに舐められるかというものだ。」

八幡
side out

シルヴィア side

え？今八幡くんなんて？

お互いの舌に触れずに？も、もしかして……

シルヴィア「それって私たちがキャンディを同時に舐めるって事？」

八幡 「ああ、そうだ。」

ええええ!!? そ、そんな凄いゲームやるの!?!
そ、それに舌が当たったら……うう／／／／

八幡（シルヴィの奴、赤くなつてんな。まあ無理もないか、言つてた俺も恥ずいし。）

シルヴィア「ね、ねえ八幡くん？それって絶対やんなくちやいけな
いの……かな？／＼／＼／＼／」

八幡「いや、強制はしない。」

強制はしないみたいだけど、どうしよう。個人的には凄くやりた
い。でも八幡くんにいやらしい子だっと思われたくないし。

シルヴィア「因みに断つちやったら？」

八幡「ん？普通に手に持って舐めるだけだが……それが？」

……それも嫌だな。なんか負けを認めたみたいで……よし！

シルヴィア「八幡くん！私受ける！」

八幡「……いいのか？」

シルヴィア「恥ずかしいけど、戦わないまま、負けるのは嫌だから
／／／／／」

八幡「……分かった。」

八幡くんはそう言うと、飴が包まれた紙を外して、私たちの前に飴
を持ってきた。

シルヴィア「……／／／／／」

八幡「……／／／」

にしても、八幡くんがこんな事してくるなんて全く想像もしてな
かったよお／／／

八幡「じゅ、準備はいいか？／／／」

シルヴィア「は、はい！いつでも！／／／」

八幡「……そうか。なら……スタートだ。」

お互いの顔が近くなるにつれ、だんだん顔が赤くなっていった。舌
を出して飴に向かう。そして……

八幡「……／／／／／」ペロペロ

シルヴィア「……／／／／／」ペロペロ

うう／近い、近いよお／／／／／しかもこんな近くに八幡くんの
舌が……考えないようにするなんて無理だよお／／／／／

ずっと八幡の方に向けていた。

シルヴィア「あはあ……んんう……ちゅぱっ……ちゅるる……ん
ふうう……／／／／／」

飴がなくなっても、シルヴィアは止まらなかった。八幡は碌に抵抗もせず、なすがままだったが、シルヴィアの頭を撫でたり、手を握ったりしていた。

そして飴がなくなった事に気付いたのか、はたまたそうでないのかは分からないが、急に舌を動かすのをやめた。

シルヴィア「んんっ……ぷはあ……はあ……はあ……／／／／／」
八幡「ちゅるっ……ちゅぱっ……はあ……はあ……／／／／／」

シルヴィアはやつと唇を放し、八幡を解放した。飴のなくなった棒と、唾液で出来た銀色の糸が2人の口から垂れていた。

八幡「はあ……はあ……お前やり過ぎだ……すげえ吸い付きだったぞ／／／／／」

シルヴィア「はあ……はあ……だって、八幡くんが凄く誘惑してくるから／／／／／」

八幡「……してねえよ／／／／／」

2人にとっては、もう誘惑とかどうでもいい事だった。それにシルヴィアはまだ物足りなそうにしていた。

シルヴィア「ねえ八幡くん。ゲームのルール、少し変えない？」

八幡「……は？」

シルヴィア『いかに相手の舌に触れずに』じゃなくて、『いかに相手の舌に触れながら』にしようよ。」

つと、とんでもない事を口にしていた。おそらくさっきの激しいキスで思考が停止しているのだろう。

八幡「おまつ……いいのかよ、んな事やつても？」

シルヴィア「うん……してるとね、頭がふわふわするんだ。それで、もったしいって思えてくるの。だから……ね？」

シルヴィアの方はやる気満々だった。既に飴を自分で持つてスタンバイしていた。

八幡「……分かった、後悔するなよ？」

シルヴィア「するわけないよ。大好きな人とするんだから。」

その後も合計3つあった飴を全て使ってゲームをしていた。終わった後のシルヴィアは疲れたのかそのまま眠ってしまった。

因みに八幡が作った飴は、ブドウ、レモン、リンゴの3種類、それぞれ意味がある。

ブドウが酔いしれる恋。

レモンが真実の愛。

そしてリンゴが運命の相手である。

原作前のちよい話
年始の六花園会議

――――

アーネスト「本当に驚いたよ。まさか君が来てくれるなんてね。僕は君と話がしたかったんだよ。」

クローディア「私も同じです。」

デイルク「オメエなんぞには興味ねえが、俺もお前には話がある。」
シルヴィア「ねえ左近くん、席替わってくれないかな？」

州馬「え？構いませんが……」

八幡「………はあ。」

何故こんな事になったのかというと、事の発端は2時間前に遡る。

星露「ふう、もう食えんのじゃ。」
セシリー「あたしも。」

沈雲「やはり君の作る料理は逸品だね。」

沈華「どうやったらあんなに美味しく作れるのかしら？」

陽乃「八幡くん、ご馳走様〜。」

八幡「…………お前らなあ、食うのはいいが、片付けくらいはしてくれ。少しはこの3人を見習ったらどうだ？」

虎峰「そ、そんな八幡！僕を見習えだなんて…………」

冬香「これくらい当然の事ですよ。」

曉彗「……………気にするな。私がしたいだけだ。」

その3人はよく椅子に座ってられるね？君たちの師兄がお皿洗ってるよ？そして丁寧に並べてくれてるよ？

セシリー「だって八幡の料理食べたら、すぐにこうなっちゃうんだもん。師父だってもう寝ちゃってるしー。」

星露「zzzz……………」

八幡「はあ…………何でこの冒頭の十二人はこんなに自由な奴らが多いんだ？」

虎峰「あれ？そういえば師父はこの後、六花園会議があつたはず……………」

なにそれ？寝てる場合じゃないじゃん。

セシリー「でもさー、こうなつた師父つて3時間は起きないよー。」

沈華「代わりに誰かが行くしかないと思いますけど……」

すると、全員が八幡の方を向いた。

八幡「…………おい、なんで俺を見る？」

虎峰「いえ、この場合普通は誰かが行くのですが、師父はそういうのを欠席した事がないので、そこで次に強い序列2位の八幡が1番適任だと思うのですが……」

陽乃「まあそうだね。此処は生徒会長はいても、生徒会は殆ど機能してないし。」

八幡「それで俺に行けと？」

沈雲「他学園の長を知っておくくらいには、ちょうどいい機会だと思ふよ？」

沈華「そうね。貴方は今とても注目されてるのよ？」

冬香「本人を目の前にして言う事ではありませんが、師父の1番弟子である暁彗を倒したのですから。」

八幡「はあ……分かったよ。行けばいいんだろ？行けば。」

八幡「ただし、俺が帰ってきた時に作る晩飯は虎峰と冬香さんと暁彗にしか食わせないからそこんところろしくな。」

セシリー「えっ!?待ってはちま」

まあこれくらいでいいとして、八幡が会議場に着いた時にも少しだけ騒ぎがあつた。

アーネスト「…………少し遅いね。」

シルヴィア「んー、星露なら来ててもおかしくないのにね。」

クローディア「何かあつたのでしょうか？心配ですね。」

デイルク「……………」

州馬「……………」

既に五学園の長は到着しており、残るは界龍のチビっ子万有天羅が来るのを待っただけなのだが、意外な人物が来た。

八幡「すみません。ウチのバカ会長は昼寝で忙しいので、代理で俺が来ました。」

全員呆けた顔をしていた。

そして……………

アーネスト「…………まさか、今話題の【夢幻月影】がきてくれるなんて驚きだよ。」

デイルク「テメエは……………」

クロードディア「あらあら、噂の御本人が此処に来てくださるなんて。」

州馬「珍しい事もあるものですね。」

シルヴィア「八幡くんっ!!」

そして八幡は席について、冒頭に戻る。

—————

八幡 side

八幡「…………おいシルヴィ。」

シルヴィア「んふふ♪」

アーネスト「随分と仲が良いんだね?」

クロードディア「あらあら、仲睦まじいですね。いつから交友を?」

交友じゃなくて交際なんだけどな。まあ言わねーけど。

シルヴィア「実は4ヶ月前からなんだ！」

八幡「俺が転校してきたのは、去年の10月だからな。」

クロードディア「……お聞きしたいのですが、そちらの【覇軍星君】を倒したのが11月だとするなら、貴方はたったひと月……いえ、もつと短い期間で倒したというのですか？」

八幡「師匠の教えが良かったただけだ。」

アーネスト「……これは驚いた。まさかそれだけの期間で彼を倒してしまうなんてね。君は未恐ろしいよ。ミスリユーネハイムも君にご執心のようだしね。」

八幡「こればかりは俺も予想外です。」

シルヴィア「えへへ♪」

デイルク「さつさと終わらせようぜ。俺は此奴に聞きてえ事があるだよ。」

アーネスト「ふむ、それもそうだね。なら手短かに終わらせるとしようか。話があるのは僕も同じだしね。」

会議自体の内容はそんなに多くはなかったので、10分程度で終わってしまった。

アーネスト「会議はこれで終了だよ。」

八幡「はあ………」

デイルク「おい、【夢幻月影】。」

八幡「ん？」

そこにはオーフェアと同じ色の制服を着ていて、非星脈世代でありながら【悪辣の王】の2つ名（異名？）を持つレヴォルフ黒学院の生徒会長、デイルク・エーベルヴァインが居た。

デイルク「テメエに1つ聞けど。オーフェアに何を吹き込みやがった？」

八幡「オーフェアに？なんだ？あいつがどうかしたのか？」

なんかあったのか？だとしたら少し心配だな。後でメールでもするか。

デイルク「惚けてんじやねえよ。テメエが奴に何か言ったせいであいつの行動がおかしくなってるんだよ。」

八幡「…………お前こそ、惚けずに正直に言ったらどうだ？俺のせいでまともに言う事も聞いてくれないってよ。」

デイルク「…………テメエ、何処まで知ってやがる。」

八幡「さあな？オーフェリアにでも聞いたらどうだ？まあ、聞けるならな。」

デイルク「…………チツ！氣にくわねえ野郎だ。」

悪辣の王はそう言うのと、不機嫌な顔をさらに不機嫌そうにして出て行った。

アーネスト「終わったみたいだから、今度は此方からいいかな？」

クロード「突然申し訳ありません。」

今度はガラードワースと星導館か。

それとシルヴィ、もうそろそろ離れてくれ。それでも結構恥ずかしいんだ。

アーネスト「それとこれは、僕と比企谷くん、そしてミスエンフィードの3人で話したい事だから、ミスリユーネハイムは席を外してくれないかな？」

シルヴィア「ええ〜!？」

シルヴィの奴、本気で嫌そうだな。

……………ん？待てよ？ガラードワースと星導館が俺に話があるなんて普通はないだろう。となると残りの可能性は……………

八幡「もしかして、俺のいた高校の奴らについてですか？」

2人は驚いたようにこつちを見ていた。どうやら正解のようだな。

アーネスト「どうして分かったんだい？」

八幡「やっぱりそうなんですネ。予想はついてましたけど。大方、そいつらが俺の名前を出してきたから気になった……てどこですか？」

クローディア「お見事な推理です。」

八幡「それならシルヴィも大丈夫です。こいつも協力者ですから。ついでに言うなら、界龍の星露と雪ノ下陽乃、レヴオルフのオーフェリアとウルサイス姉妹が協力関係にあります。」

アーネスト「ほう、既に2校の序列1位を掌握しているとはね、1人は見ていれば分かるけど、もう1人はあの【孤毒の魔女】という事実に驚いているよ。」

八幡「まあ、色々あったんで。」

最初会った時は引つ叩いたなんて言えねえよな。大抵の奴は顔色を茄子みたいな色にするだろうな。

シルヴィア「だとしたら、此処で話すのは少し落ち着かないね。何処がいいかな？」

アーネスト「だったら僕たちガロードワースの生徒会室はどうだろう？安全や警備は勿論保証しよう。」

クローディア「確かにそこなら誰かに聞かれる可能性は少ないですね。」

八幡「……分かりました。ならそこにしましょう。そのお礼とってはなんですが、紅茶くらいは出しますよ。少しかじった程度ですけど、自信はあるので。」

シルヴィア「味は私が保証するよ！」

クローディア「あら、それは楽しみです。では早速参りましょうか。」

シルヴィア「ねねっ！此処にいる皆って、アーネスト以外はガラードワース初めてじゃないかな？」

八幡「俺は行った事ねえぞ。まず俺が行けるようなところじゃないしな。」

まず俺がガラードワースっていう感じじゃないしな。スゲーお堅そう。

シルヴィア「そうかな？」

八幡「そうだ。それよりもそろそろ離れてくれ。」

シルヴィア「やーだっ♪」

クローディア「本当に仲がよろしいのです。交際しているのですか？」

シルヴィア「……だったら？」

アーネスト「特に何もしないよ。僕たちだけの秘密にするさ。」

シルヴィア「……まあ普通にノーコメントだけだね。」

八幡「六学園の生徒会長って、なんか親しみやすいのか？」

こうして八幡たち生徒会長一行は、聖ガラードワース学園の生徒会室を目指して北東へとむかった。

失礼な奴ら

八幡 side

——聖ガラードワース学園——

シルヴィア「へえー近くで見たらやっぱり貴族って感じの校風だね。」

クローディア「ええ、他の学園とは違う素晴らしい高潔さを感じますね。」

八幡「絶対に俺には似合わねえな。」

アーネスト「ははは、比企谷くんが考えている程厳しい学校というわけではないけどね。でも、そうみられるのも仕方ないのかもね。」

アーネスト「此処から入れるよ。一応此処にいる全員のパスポートを作っておくよ。いつでも来られるようにね。」

八幡「自分の学校ほっぽってガラードワースに来るお人好しはこの中には居ないと思いますけど?」

アーネスト「そうかもね。でも万が一もあるからね。」

そう言っただけクロフさんは、俺たち全員のパスポートを作っていた。こういう事自分でやるんだ。

アーネスト「出来たよ。さっ、行こうか。」

校門をくぐりガラードワースに入った。やはり界龍とは全く違うな。

それにさっきから目線も感じる。大方シルヴィと俺だろうな。

男子「か、会長! 何故この学園に【千見^{バルカ・モルタ}の盟主】と【戦律^{シグルドリーヴァ}の魔女】、そして【夢幻^{むげんげつえい}月影】がいるのですか!?!」

アーネスト「彼らとは大切な話があつてね、僕たちの生徒会室に招待したのさ。気にすることはないよ。」

男子「しかし、『千見の盟主』と『戦律の魔女』はいいです！ですが、彼は謎が多い上に情報が全くありません！危険です！」

情報が少ないのは確かだが、流石にそこまで言われる筋合いはないぞ？

八幡「初対面なのに随分なぐ挨拶だな。そんなに俺を入れたくないってか？」

男子「貴様は黙っている！此処は聖ガラードワース学園だぞ！貴様のような「やめたまえ。」っ!?……会長。」

アーネスト「それ以上はやめるんだ。」

男子「しかし！」

アーネスト「2度は言わないよ。納得が出来ないのなら今回だけの決闘を君と比企谷くん始めるけど、どうだい？『覇軍星君』を倒した程の実力者を君は倒せるのかい？」

男子「……………」

……なんか声色変わったな。この人……なんか陽乃さんと少し似たような感じがするな。それも顔だけじゃなく全身から。

男子「……すみませんでした。」

アーネスト「分かればいいけど、謝る相手は僕じゃないよ。」

八幡「いや、いいですよ。別にそんな怒ってるわけでもないんで。疑うのも当然ですよ。こんな冴えない奴が序列2位なんて疑うのが普通ですからね。」

シルヴィア「むー！八幡くんは冴えない奴なんかじゃないよ！」

クローディア「そうですね。一般の目線から見れば、良い方だと思いますが？」

お世辞をどうも。

アーネスト「少し時間を浪費してしまったけど、予定通り行こうか。」

……やっぱこの人なんかあるな。

——生徒会室——

ガチャッ

アーネスト「今帰ったよ。」

レティシア「あら、アーネスト。お帰りなさい。予定より遅かったですわね？」

アーネスト「ああ、お客人が来てるからだよ。遠慮せずに入っていよ。」

シルヴィア「じゃあ失礼するね。」

クロードイア「失礼致します。」

八幡「お邪魔します。」

レティシア「なっ!？」

ケヴィン「マジかよ！今噂の【夢幻月影】じゃねーか！」

ライオネル「何故こんなところに？」

パーシヴァル「……………」

マジかよ……此処にいるのって、ガラードワースの1位から5位の奴らじゃねえか。

序 2 位 【^{グロリア}光翼の魔女】

レティシア・ブランシャール

序列3位【王^{ロングミアント}槍】

ライオネル・カーシュ

序列4位【黒^{ガレス}盾】

ケヴィン・ホルスト

序列5位【優^{アグレスティア}騎士】

パーシヴァル・ガードナー

うへえ、ここの生徒会って冒頭の十二人で構成されてんのかよ。

レティシア「どういう事ですのアーネスト!? どうして此処に【夢幻月影】が居ますの!? 此方の2人はともかく、なぜ彼を!？」

つくづく人をムカつかせるところだな。そんなに俺が邪魔か？

クローディア「あらレティシア? その発言は比企谷さんに失礼ですよ? まるで、此処に居てはいけないように聞こえますが?」

ケヴィン「そうだぜレティ。俺も流石にそこまでは言わないぜ?」

レティシア「私は納得出来ませんわ!」

八幡「……………なあ？ここの連中つてのはそんなに俺が気に入らないのか？流石に俺も腹が立つてくるんだが？」

ほんの少し殺気を出す。流石にムカついてるからな。2度もこんな事言われたんじや気分が悪くならないわけがない。

シルヴィア「八幡くん、落ち着い「そうならそうって言えよ。そうなら俺も今すぐ此処から出てってやるよ。こんな所で、それも敵意丸出しの連中なんかと一緒に話なんかしたくねえからな。」は、八幡くん……………」

生徒会室にいる全員が黙ってしまった。だが……………

パーシヴァル「……………重ね重ねの無礼、誠に申し訳ございませんでした。」ペコッ

意外にも先に動いたのは、【優騎士】パーシヴァル・ガードナーだった。それも謝罪をして頭も下げていた。

八幡「確か【優騎士】だったな。別に謝ってほしいなんて言っただけが？」

パーシヴァル「……………こちら側の一方的な言い分で貴方の気分を害してしまったのは事実。どうかここは私の顔を立ててはもらえないでしょうか？」

八幡「初対面の奴相手に随分と肩を持つんだな？まあ俺は別にいいけどよ。」

パーシヴァル「ありがとうございます。貴方は心が広いお方なのですね。」

八幡「そんなんじやねえよ。」

アーネスト「僕からも謝罪をさせてもらうよ、すまなかつたね。後

で言い聞かせておくよ。」

八幡「別にいいですよ。もうここに来る事は絶対ないでしょうから。」

フエアクロフさんは苦笑いしていた。

八幡「……………なんだ？」

レティシア「先程は……………申し訳ありませんでした。騎士としてあるまじき発言をしてしまいました。」

八幡「もういい。礼なら【優騎士】に言うんだな。それよりもフエアクロフさん、早くしません？もう紅茶を出す時間も使いたくないので。」

アーネスト「……………そうだね。これ以上君に失礼をさせるわけにはいかないしね。パーシヴァル、4人分の紅茶を用意してほしい。」

パーシヴァル「かしこまりました。」

アーネスト「後の者はこの生徒会室から退室するように。僕たちが出て来るまで一切の出入りを禁ずる……………いいね？」

レティシア「……………分かりましたわ。」

ケヴィン「あいよっ。」

ライオネル「了解した。」

フエアクロフさんがそう言うと、ガードナー以外の奴らは全員出て行った。1名なんか落ち込んだがどうでもいい。

シルヴィア「八幡くん、大丈夫？」

八幡「ああ、気にするな。まあ、あれが普通の反応なんだろうな。」
クロードディア「彼女は少しプライドが高いところがあるので。ですが悪い人ではないので大目に見てあげてください。」

八幡「今更もう気にしてない。」

アーネスト「さて、じゃあ気を取り直して本題に入ろうか。君のいた学校の生徒たちや、彼らについて。」

会議終了と新しい先生？

八幡 side

俺たちが会談を始めてから暫く経ち、俺はさつきまで総武高で今回見学に来た奴ら（小町も含む）の特徴を3人に話したところだ。

3人は一言も逃さないよう、俺を見ながら説明を聞いていた。そしてようやく全員の説明が終わったところだった。

アーネスト「……………なるほど。聞いている限りじゃあ、ミス雪ノ下にミス由比ヶ浜、葉山くんは警戒した方がいいだろうね。ミス比企谷はまだリサーチが必要だけど、六花^{こころ}に来れば全てハッキリするだろうね。」

クロロディア「そうですね。他の5名は比企谷さんの説明を聞く限りは大丈夫そうですね。しかし、問題はこの4人ですね。」

既に俺たち4人は雪ノ下、由比ヶ浜、葉山、小町に目をつけていた。

シルヴィア「狙いは全員八幡くんなのは確かだけど、小町ちゃんだけは動機が分からないから逆に怖いね。」

アーネスト「うん、葉山くんは明らかにオーラを隠せていなかったからね。忍ばせていたパーシヴァルからも彼からは危険な思惑を感じると報告を受けているからね。」

パーシヴァル「……………」ペコッ

少なくとも、俺に敵意がある事は事実だろうな。そうでなくや健気にこんな所まで追って来る筈もない。

八幡「葉山はガードワース一択でしょう。そこでまずは牽制出来ます。此処は基本的に決闘禁止を重視していますから。」

アーネスト「つまり、出くわしても決闘になる可能性は低いと？」
八幡「あいつが相当バカでなければの話ですけどね。次にこの3人ですが、こいつらも星導館でしょう。それ以外に行くとは思えません。」

八幡「アルルカントとレヴォルフは論外、界龍は此奴らのレベルじゃ無理、クインヴェールは可能性はありますが、決定打には欠けます。ガラードワースは雪ノ下なら行けるでしょうけど、他2人の頭が圧倒的に足りません。こうして考えるなら、高いのは星導館、クインヴェールはもしかしたらつてところですね。」

クロードディア「比企谷さんは頭の回転が速いのですね。これだけの計算を此処まで精密に表すなんて……」

八幡「そんな事ねえよ。それにこの2つに絞るのは簡単だ。星導館は制度が緩い上に校風も自由だからな。クインヴェールは、シルヴィアが聞いたら気分悪いだろうが、ぶつちやけると顔さえ良ければ誰でも入れるようなものだ。そう考えるとそんなに難しい事じゃない。」

シルヴィア「まあ確かに聞いていて良い気分ではないけど、八幡くんの説明は理に適ってるね。」

ごめんシルヴィ、お前は最高に可愛いから許して。後で撫でてやるから。

アーネスト「ふむ、ではこの4人を嚴重警戒することにしようか。」
シルヴィア「それはいいけど八幡くん、何もなくていいの？」
八幡「大丈夫だ。警戒していても、いつかは必ず見つかるしな。それに見つかったとしても、奴らじゃ俺には勝てねえよ。」

つか序列見て勝てると思ってんなら、どうかしてるな。

アーネスト「ははは、頼もしいね。」

クロードディア「ええ。」

シルヴィア「流石八幡くんだね！」

八幡「やめてくれ。」

可能性はないだろうが、一応他校の接触もあるかもしれないからな。オーフェリアやウルサイス姉妹、アレマさんと小苑さんにも伝えておくか。」

アーネスト「君には本当に驚かさっぱなしだよ。」

八幡「え？何がです？」

シルヴィア「八幡くん、今声に出てたよ？先代【万有天羅】に【醒天大聖】まで知り合いだったなんて知らなかったよ。」

出た……俺の悪い癖。

クローディア「界龍の新しい序列2位さんはとんでもない方ですね。」

ニコニコ顔で言わないで欲しい。

アーネスト「じゃあこれくらいで終わろうか。密約をしてしまうとステラ・カルタ星武憲章に違反してしまうからね。パーシヴァル、紅茶を頼めるかな？」

パーシヴァル「かしこまりました。」

んー、こいつならいいか。

八幡「フェアクロフさん、もしよかったら紅茶淹れましょうか？このメンバーなら俺は構いませんけど、どうです？」

アーネスト「いいのかい？だったらお願いするよ。折角だからパーシヴァルも飲んでみないかい？」

パーシヴァル「……では、お言葉に甘えて試飲させて頂きます。茶葉はデインブラのBOPFを使用しています。」

……結構良いの使ってるんだな。

――5分後――

八幡「お待たせしました。」

クローディア「先程から良い香りがしていましたよ。」

アーネスト「うん、紅茶の淹れ方も見ていて気品を感じたよ。」

シルヴィア「八幡くんって凄いね。ちよつと羨ましいなあ。」

パーシヴァル「香りだけでも楽しめますね。飲むのが楽しみです。」

飲む前から高評価もらっているのか？

そう思っていると、全員カップを手に取りそのまま口に向けてカップを傾けた。

……

アーネスト「……うん、実に美味しいね。同じ茶葉の紅茶をさつきまで飲んでいたとは思えないね。」

クローディア「此処まで変わるなんて……何か秘密でもあるのでしょうか？」

シルヴィア「凄いねえ、こんなに変わるものなんだね。」

パーシヴァル「……とても美味しいです、恐れ入りました。」

ふう……口に合ったようだな。

八幡「知つてるとは思いますけど、ミルクティーにしても美味しいですから、やってみてもいいですよ。まだありますので。」

全員楽しみながら紅茶を飲んでいて、普通にもう一杯飲んでいた。

今度はミルクを入れて。それも好評だった。

アーネスト「言うだけあるね、凄く美味しかったよ。また飲みたいものだね。」

クロードディア「ええ、あの味なら毎日飲んでいても飽きないかもしれないですね。」

シルヴィア「そうだね……私もステージ前には飲みたいかなあ。」

気に入ってもらえて何よりだ。けど、これを作るのはこれつきりだと思うぞ？

パーシヴァル「……比企谷さん。」

八幡「ん？なんだガードナー。」

パーシヴァル「よろしければ私に紅茶の淹れ方を教えては頂けないでしょうか？」

八幡「は？」

パーシヴァル「貴方の淹れた紅茶、誠に感服致しました。そこで、貴方に紅茶の淹れ方を学びたいのです。」

八幡「いや、お前の淹れた紅茶も普通に美味かったぞ？」

パーシヴァル「いえ、比企谷さんには遠く及びません。そこで貴方に紅茶の淹れ方を教えて頂きたいのです。是非お願いします。」
ギユツ

八幡「え？」

シルヴィア「ああっ!？」

パーシヴァル「是非、お願いします。」

こいつ……西洋版虎峰だ。

目メツチャキラキラさせてる。何？そんなに習いたいわけ？何も
ないよ？ただティーバッグをお湯に浸けて放置しただけだよ？

でもなあ……こういう奴のお願い断るのってなんか罪悪感あるん

だよなあ。

まあ教えるだけだしいいか。

八幡「分かったよ。俺のやり方でいいなら今日動画付きのメールで送つといてやるから、それ見とけ。あれくらいならお前も普通に出来んだろ。」

パーシヴァル「っ！感謝します！」

うん、なら手を放してくんない？後ろでとんでもないオーラ纏った子がいるから。俺死んじゃうから。

その後、普通に学園を出たが、出たと同時にシルヴィが腕に抱きついてきて、嫉妬と殺気の視線に晒されたが、家に着いてからもずっと離してもらえなかった。

大丈夫だって、浮気しないから。

5章 再び動く歯車

キャラ設定 ②

・雪ノ下雪乃

総武高校1年↓星導館学園2年

序列外

二つ名：ユキペディア（八幡名称）

八幡との再会を願い、総武高校から星導館学園に転入する。魔女としての素質が高いが、体力がない影響で短時間しか使えない。八幡を心配していたが、とある出来事により八幡を恨んでいる。

・由比ヶ浜結衣

総武高校1年↓星導館学園2年

序列外

二つ名：アホの子（八幡名称）

星辰力はそここの量だが、八幡を追い、雪乃と共に星導館学園に転入する。雪乃同様に八幡を恨んでいるが、逆に八幡の事を好いている。

・戸塚彩加

総武高校1年↓星導館学園2年

序列外

二つ名：トツカエル（八幡名称）

リジエネレイトイフ
魔術師の素質が高く星脈世代では非常に稀な回復系の魔術師。再生能力者ではないので、取引される事はなかった。八幡のことを心配して六花に來た。

・材木座義輝

総武高校1年↓レヴォルフ黒学院高等部2年

序列外

二つ名：剣豪將軍義輝（自称）

とても激しい厨二病の持ち主。そしてメンタルもそれ並みに弱い。だが、考えた技のおかげでレヴォルフではそれなりにやっていける。八幡のことを心配していた人物。

・川崎沙希

総武高校1年↓界龍第七学院高等部2年

序列外

二つ名：無し

八幡のクラスメイト。星辰力は中の上で空手を習っていたので、界龍第七学院に転入。入学式に八幡と再会。移り住む際には京華を連れてくる。八幡を心配していた人物。

・比企谷小町

総武中学2年↓星導館学園中等部3年

序列外

二つ名：アホな妹（八幡名称）

八幡の妹。八幡がアスタリスクに引越してから自身も行く決めていた。父親には反対されていたがゴリ押しして了承させた。雪乃と結衣から事情を聞いたのにも関わらず、2人の方につく。

・葉山隼人

総武高校1年↓聖ガラードワース学園高等部2年

序列外

二つ名：無し

相変わらずの「みんなで」のスタイル。ガラードワースでも持ち前の顔でモテている。総武高校では、もう自分の居場所が無いと判断しての転入。修学旅行の事をバラした八幡を逆恨みしている。

・戸部翔

総武高校1年↓星導館学園2年

序列外

二つ名：無し

原作と同じくやかましいしゃべり方をする。原作の修学旅行の告白の真相を知り、非星脈世代ながらもアスタリスクに行く事を決意。八幡の謝罪も理由に含まれている。

・海老名姫菜

総武高校1年↓星導館学園2年

序列外

二つ名：無し

星導館学園でも腐女子として過ごしている。非星脈世代だが星導館でも腐女子布教をしている。八幡に謝罪する気持ちで六花に來た。

入学

戸塚 side

戸部「いやー入れて良かったっしょー！」

海老名「そうだね。」

戸塚「うん！」

皆さんこんにちは！戸塚彩加です。僕たち3人は星導館学園の校門前に居ます。今日から僕たちも六花の生徒です！転校手続きは此処に来てすぐにやったからもう終わっているから、教室に行って挨拶を済ませればいいだけなんだ。

戸部「にしても、俺と海老名さんって星脈世代じゃないのによく入れたとか思わね？これもう奇跡でしょー、っべー！」

戸塚「そんな事ないよ。運も実力の内っていうでしょ？勝負でも受験でも言い方は悪いけど、勝った者勝ちだよ！」

戸部「そつかあ！なんか自信出てきたわー！戸塚っちサンキューな！」

海老名「ぐ腐腐腐………」

なんか不吉な笑い声が聞こえた気がするけど、気のせいだよな？

ん？なんか騒がしいような……

戸部「なんか騒がしくね？」

戸塚「うん、僕もそう思った。」

海老名「向こうの方で何かやってるみたいだよ？行ってみない？」

戸塚「うん、行ってみようか。」

???? 「咲き誇れ、ロンギッローラム 鋭槍の白炎花！」
「っ！」

その場に駆けつけると、ピンク髪の少女と深い紫色をした髪の少年が戦っていた。

戸塚「うわあ、あれが決闘デュエルかあ。」

海老名「それにあの女の子凄いね。」

雪乃「彼女は星導館学園の序列5位、グリユーエンローゼ

【華焰の魔女】の2つ名を持つ魔女、ユリス・アレクシア・フォン・リースフェルトさんよ、海老名さん。」

後ろから話しかけてきたのは雪ノ下さん。そしてその横には由比ヶ浜さんと小町ちゃんもいた。

戸塚「おはよう雪ノ下さん、それに由比ヶ浜さんと小町ちゃんも。それで雪ノ下さん、ということはこの学園で5番目に強いって事だよね？」

雪乃「ええ、そういう事になるわ。」

という事は、八幡は界龍の中でも2番目、単純計算でこの六花の中でも7〜12番目に強いって事かな？

小町「凄いですね。小町もあんな風に戦ってみたいですけど、星脈世代じゃないから無理なんですよね。」

海老名「戦う気は無いけど、私もそうだから少しねえー。」

戸部「なんか疎外感あるわあ。」

やっぱり気にしてたんだ。

戸塚「それで男の子の方は知ってる？」

雪乃「彼も転入生よ、私たちの後輩だけど。一体何をしたら入学初日に冒頭の十二人と決闘なんて出来るのかしら？」

由比ヶ浜「怒らせちゃったとか？」

由比ヶ浜さん、それしかないと思うよ？

小町「わおっ！凄いですよあれ！あの人ユリスさん押し倒してますよ！」

雪乃「…………破廉恥ね。」

由比ヶ浜「あはは…………」

海老名「男同士だったらよかったのに。」

戸部「海老名さん、そりやないって。」

戸塚「本当に怒っちゃったかもね…………あっ！会長さんだ。」

クローディアが出てきたところで、決闘は中止になり、ギャラリ―も散り散りになっていった。

雪乃「私たちも行きましょう。」

由比ヶ浜「そうだね。」

小町「了解であります！」

3人も行ってしまった。

戸部「俺たちも行かね？」

海老名「そうだね、行こっか。」

戸塚「うん、楽しみだなあ。」

よーし、今日から新しい生活のスタートだね！待っててね！八幡！！

戸塚 s i d e o u t

材木座 side

材木座「……………」

我は今、この学校に来て早々に挫折そうである。まさかここまで不良の蔓延る寺子屋だったとは。それに目の前にいる女子、露出がキツ過ぎるであろう！

イレーネ「あ？何見てんだよ？」

材木座「い、いえ！なんでもないのでございます！」
イレーネ「だったらジロジロ見てんじゃねーよ。」

それはお主の服装が派手過ぎるからで、我のせいではない！
それに何故か辺りには生徒なんていないし、我とこの女子だけである。

早く誰か来るのだ！それが早く終わってほしいのである！我もう限界！！

材木座 side out

葉山 side

アーネスト「この学園の生徒として、規則、そして規律正しく行動をしてほしい。入学、おめでとう。」

なるほど、壇上にいるのが冒頭の十二人にして《銀翼騎士団^{ライフロードス}》で、講堂の横に並んでいるのが72位から13位の《正騎士》か……………

まずは正騎士を目指すべきだろうね。その後がいい序列まで食い込んだら、《銀翼騎士団》だね。まあそう簡単ではないだろうけど、比企谷くらは倒せるだろうね。

問題は原則的に禁止の決闘をどうやって受けるかだ。会長に言っ

でも無駄なのは目に見えているからな。

どうしたものかな…………

パーシヴアル「……………」

アーネスト「どうだいパーシヴアル？彼の様子は。」

パーシヴアル「以前同様に何か黒い思惑を感じます。比企谷さんの言う通り、警戒しておくべき人物ですね。」

アーネスト「分かったよ。じゃあ彼の動きに注意してほしい。何かあつてからでは、比企谷くんに会わせる顔がないからね。」

パーシヴアル「かしこまりました。」

どうやって仕返ししようか、なあ比企谷？

葉山 side out

沙希 side

結局、けーちゃんも連れて来ちゃったな。はあ、あたしだけで来るつもりだったのに。もう過ぎた事は仕方ないけど。

でも、なんかこの前と雰囲気違うような……………なんか少し柔らかくなってるような？…………でも今は集中しなきゃね。

星露「そして、妾からお主らに激励じゃ。頂上で待っておるぞ、万有天羅を超えてみよ。そして、共に切磋琢磨しようぞ。」

そして会場からは拍手。まあ会長だからね。当然か。

虎峰「最後に当学院の生徒代表挨拶。生徒代表、当校高等部2年、比企谷八幡。」

っ!?!比企谷!?!

「なあ、あの人だよな？ たった1ヶ月で序列2位になったっていう噂の」

「ああ、確か【夢幻月影】だったな。」

「凄い……迫力あるなあ。」

「私もお願いしたら、あの人に教えてもらえるのかな？」

前に出てきたのが本当に比企谷かと疑った。目もそうだが、纏っているオーラが総武にいた時とはまるで別人だった。

八幡「まずは入学祝いの賛辞を送る。俺からも言う事は一つだが、少し長くなる。『自身の成長に喜びを感じても満足はするな。満足しては成長はそこで終わりだ。強くなりたいと強き願いがあるなら、それに向かって前進あるのみである。』俺の国では、『日々精進』という言葉がある。日々の積み重ねが一番の強くなれる道であり、一番の近道だ。俺はお前たちの成長を楽しみにしている。以上で終わる。生徒代表、比企谷八幡。」

そして比企谷は包拳礼をして降壇した。

道場はさつきよりも大きい拍手に包まれていた。比企谷の奴、あんなに凄くなったんだ。HRが終わり次第、あいつに会わないとね！

再会……なのだが

沙希 side

HRも終わったし、早く戻んなきゃ。今日は保育園休みでけーちゃん
は寮の部屋で一人きりだから。

女子「転入生の川崎さんだよね？私も転入生なんだけど、川崎さん
も比企谷さんの稽古見に行くの？」

沙希「え？……稽古？」

なにそれ？そんなのあったの？

女子「あれ？知らない？もう学校中の噂なんだけど、放課後になっ
たらこの殆どの生徒が比企谷さんに稽古をしてもらってるらしい
んだ。それでその様子を見に行こうって話になっててさ、川崎さんも
行くのかな？って。」

比企谷が……人に教える？ちよつと興味ある。けーちゃんには悪
いけど、もう少し待ってもらおうかな。

沙希「……うん、あたしもちよつと気になるかな。」

女子「じゃあ一緒に行こうよ。あつ、私椎橋柚珠奈しいばしゆすなっていうんだ。
よろしくね。」

沙希「あたしは川崎沙希。よろしく。」

――八天門場――

柚珠奈「うわあ、もう凄い人だね。中も外もいっぱいだよ。」

沙希「これじゃあ見れるものも見れないね。どうすんの？」

柚珠奈「ふっふっふ、愚問だよ川崎さん。ここは強引突破だよ！」

椎橋はそう言った途端、あたしの手を掴んで前に進んだ。てかアンタ、さつきまでとキャラが違うんだけど？

沙希「ちよっあんた、強引過ぎだつて。」

柚珠奈「ふひいゝ、うん、見れるところまできた……つて、ええ!」

沙希「今度は何？」

柚珠奈「何つて!?!今戦ってるのは、この学院の冒頭の十二人の3人で、序列7位【天苛武葬】の趙師兄に6位【雷戟千花】のセシリー姉、そして序列2位【夢幻月影】の比企谷八幡尊師だよ!」

特に強い12人が居るのは知ってるけど、比企谷もその1人なんだ。

凄いい戦い……てか、あんたそんなに強かったの比企谷？

沙希 side out

八幡 side

虎峰「はあっ！」

八幡「ふっ！」

セシリー「やあー！」

八幡「っ！」

確かに2人で掛かってきていいとは言ったが、流石は前回《鳳凰星武祭》の準優勝ペアなだけはあるな。連携が上手い。

セシリー「もおー、あたしらがこんなに連携出来てるのに、八幡は全く焦らないねー。それにこっちが攻撃を受けてる上にペースまで八幡だし。」

虎峰「大師兄を倒しただけありますね。2人がかりでも、実力に差

があり過ぎます。紙一重で避ける辺りは本当に流石と言うしかないですね。」

……この後だと、セシリーが雷撃籠めた蹴りを仕掛けてきて、その後に虎峰が拳で勝負つてところかな。

2人は一斉に左右に散り、八幡に攻撃を仕掛けようとしていた。

セシリー「行くよおー八幡！」

予想通り、セシリーは脚に雷撃を蓄え、俺に向かって蹴りを放ってきた。

八幡「とうほう東方 あかだ阿迦陀、せいほう西方 須多光、なんほう南方 刹帝魯、ほっぽう北方 蘇陀摩」

セシリー「ええっ!? それやるのー!?」

セシリーの雷は消えて、いとも簡単に足を掴まれてから床に叩きつけられた。

だが、真後ろから虎峰が正拳突き of 構えで迫り、八幡を射程圏に捉えていた。

虎峰「ふんっ!!」

八幡「バレバレだ。それに、足の出し過ぎで普通に体勢が崩れるぞ。」

虎峰「うわっ!」

虎峰は八幡の簡単な足払いと体当たりで倒れてしまった。

八幡「連携は良いが、お前らは分かりやすすぎる。初見の俺でも分かったぞ。」

セシリー「いやー、中々癖が消えないものですなー。」

虎峰「はあ……また負けました。これで30回目です。八幡にはいつ攻撃が届くんでしょうか？」

八幡「そう簡単にはやられねえよ。」

そして鍛錬の時間がきたが、見学者は大勢いた。それも殆どが新入生。

八幡「お前らに言っておくが、これは見世物じゃないからな？今回はあえて扉を開けておいたが、戦いは見せるものじゃない。己の心技体を磨くものだ。それを忘れるな。見学したい奴や鍛錬していきたい奴は好きにやっていけ。」

全員「はいっ!!」

そしてある者たちは技や肉体の強化、術の調整、さらには実戦形式で鍛錬をしている。人数は明らかに増えている。

柚珠奈「川崎さん、私たちもやってく？」

沙希「あ、ごめん。妹を待たせて「着きましたよ。此処にその『さーちゃん』がいるかもしれませんよ？」いる………ん？」

???「ありがとお！ふゆちゃん！」

沙希「……………え？」

そこに居たのは、川崎沙希の妹で寮部屋にいるはずの川崎京華だった。

沙希「け、京華!？」

柚珠奈「え？どうしたの？」

沙希は気付いたが、京華の方は気付いていなかった。

冬香「どうです？いましたか？」

京華「うーん人が多過ぎて分かんない。」

八幡「珍しいですね冬香さん。こんなところに……どうかしたんですか？」

冬香「こんにちは八幡さん。この子が人を捜してい「あーっ!!」て……?」

京華は突然叫びだした。

京華「はーちゃんだっ!!」

誰かのあだ名を呼んだかと思っていると、京華は八幡の足に向かってトテトテと走ると、そのまま抱きついた。

全員「は、はー……ちやああああああん!!!?」

全員驚愕だったのは当然だろう。誰もが憧れの的である比企谷八幡があだ名で呼ばれているのだから。

八幡「おう、久し振りだなけーちゃん。そんで？どうして此処にいるんだ？」

京華「ぎーちゃんについてきたの！」

八幡（川崎に？ここにいんのか？）

京華「ねーねーはーちゃん！はーちゃんは此処で先生やってるって本当？」

八幡「え？先生？……冬香さん、一体何を教えたんです？」

冬香「他に言葉が見つからなかったのです。こんな幼い子供が尊師なんて言葉、知ってるとは思えませんし。」

確かに冬香の言っている事は当然の事である。ただの幼稚園児が尊師なんて言葉を知っているわけがないのだ。

八幡「………確かに。まあ、そうだな。一応先生をやっているぞ。確かけーちゃんの姉ちゃんが空手やってたんだろ？それと似たようなものをな。」

京華「けーかもやる！」

沙希「こら！けーちゃん！」

するとそこに、沙希が現れて2人は再会したのだが、違う驚きがあったので挨拶を交わしている余裕がなかった。

沙希「ごめん比企谷。」

八幡「いや、いいが……来てたんだな。」

沙希「……まあね。」

やはり黙ってしまおうだろう。総武とは完全に縁を切った八幡だが、沙希は別に恨みもなければ憎しみもないからである。

セシリー「は、は、八幡？まさか……その子って、八幡の……子供なの？」

八幡「はあ？何言ってるんだお前？」

虎峰「いえ、確かにそう見えます。」

冬香「八幡さん？少しご説明願います。」

八幡は周りを見渡すと、全員が見ていた。嫌でも説明をしないと納得しないだろう。

八幡「はあ……此奴は俺が此処に来る前にいた高校のクラスメイトだ。そしてその妹だ。疚しい関係なんてない。」

道場にいる生徒は、反応はそれぞれだが納得はしてくれたようだった。

冬香「そうだったのですか。」

虎峰「すみませんでした。」

セシリー「もー、脅かさないでよー。」

八幡「最初に騒ぎを起こしたのは何処の誰だ？このアンポンタン。セシリー「てへっ♪」

つたく……

京華「はーちゃん！けーちゃんも空手ごっこしたいー！」

沙希「あ！ちよつとけーちゃん！」

八幡「あー、いいぞ。」

沙希「え!?!比企谷!？」

八幡「まあ軽いもんだろ。お前の空手姿見てんだったら、それなり

の動きは真似出来るだろうしな。」

そう言うってから、少し距離を空けた。

京華「うん！えーと……」

京華 「んんん！あつ！出た！」

全員「……………え？」

すると、京華は八幡目掛けてダッシュして拳を八幡にぶつけた。

ドゴオツ!!

全員『ええええええええええ!!!?』

撃。そして1番の驚きは……………

八幡「嘘……………だろ……………強過ぎだろ。」

京華「どうだ！参ったかあ！」

八幡「ま、参った……………」

京華自身が全く痛がっていないのだ。

八幡「虎峰……………今日から序列2位はけーちゃんだから、後……………頼んだ。」

虎峰「は、八幡!？」

当然八幡の言ったことは嘘なのだが、八幡は少しの間気絶していた。こうして川崎京華は幼稚園ではなく、この界龍第七学院を最年少で入学する事が決まったのである。

半年振りの会話

八幡 side

けーちゃんからの一撃から2時間後、俺は応接室で川崎と2人でいる。尤も、呼んだのは俺ではなく川崎だが。おそらくあの後の事で話があるんだろうな。

ん？けーちゃん？今日知り合った奴に面倒見てもらってるらしい。

八幡「そんで？話って何だ？」

沙希「……………うん。あの後色々あったから、その……………言いたい事もあるし。」

八幡「……………そうか。」

川崎は話にくそうにしているが、別にどうでもよかった。説明を受けている時、葉山や奉仕部の連中の非難もあったが、これもどうでもいい。いい気味とは思ったが。

沙希「今言ったのが、あんたが居なくなつてからの総武高だよ。その時は本当に酷いものだったよ。雰囲気は最悪で、葉山たちの悪口も絶えなかったからね。」

八幡「……………それで？その状況を作った俺に仕返しでもしに来たのか？生憎だが俺は間違った事をしたつもりは微塵もないぞ。むしろこれまで黙っていた事を不思議に思つて欲しいくらいだ。」

沙希「分かつてる。だからあたしは、あんたに謝りに来たんだよ。此処に来たのはそれが目的だからね。」

八幡「そんな事の為にわざわざ此処まで来るとはな、人生を棒に振るようなもんだ。戸塚や材木座もな。」

沙希「……………確かにね。でもあたしを含めた戸塚と材木座と海老名は、それが目的と言つてもいいだから……………あんたの気持ちに気付い

てあげられなくて……ごめん。葉山とか雪ノ下もバカだけど、あたし
たちもバカだった……ごめん。」

……

……

……

なんか……アホくさくなってきたな。

八幡「……はあ、止めだ。」

沙希「え？」

八幡「無関係の奴らを責めても後味が悪いだけだ。それに俺は、
元々お前らを恨んでも憎んでもいいえよ。気にすんな。」

沙希「じゃあ……許してくれるの？」

八幡「話聞いてた？別に恨んでねえんだから、許すも何もないだろ。
お前の態度を見てりや分かるし、全てに誠意を感じるしな。」

それにこいつが嘘つくような奴には見えないしな。嘘なんてつい

てたら子供の相手なんて出来ねえからな。

沙希「……ありがとう、比企谷。」

八幡「気にすんな。」

――数十分後――

八幡「……そうか、お前らの方でもバレないようにしてくれていたのか。俺の為にすまない。ありがとう。」

沙希「礼ならあいつらにも言っておけな。特に戸塚なんてあんたが居なくなっただけからの落ち込み様が普通じゃなかったからね。それだけあんたを心配してたんだよ。」

戸塚がなあ……嬉しいが前みたいな感情は無いな。俺にはシルヴィがいるからな。

八幡「なら、今からあいつと通信する。番号は知ってるか？」

沙希「……あのさ、ずっと思ってたけど、あんたって本当に比企谷？あんたと全然違うからね？男っぽくなって……なんか良い感じになってる。」

八幡「そうか？こっちに来てから目は変わったと思うが、それ以外でなんか変わった所とかあったか？」

あんま卑屈になってないとかか？

沙希「変わってるよ。どもんなくなってるし、猫背じゃないし、なんか雰囲気にかよさを感じるっていうか……」

八幡「そんなに変わってんのか？お前よく見てんだな。監視カメラでもつけてたの？」

沙希「なっ!?そ、そんだけ分かりやすいって事っ！はいこれ戸塚の番号っ！」

八幡「おう、悪いな。さっきのは冗談だったんだけどな。」
沙希「いいから早くかけなっ！」

別に今でなくてもいいが、早いに越したことはないからな。じゃあ早速かけるとするか。

p i p i p i … p i つ！

戸塚『はい、どちら……八幡!!?』

うん、懐かしい声だな。ていうか俺だって分かるんだな、総武の時みたいに目が腐ってないのに。

八幡「よお、半年振りだな戸塚。元気か？」

戸塚『ほ、本当に……八幡なの?』

八幡「ああ。川崎から番号教えてもらったから、今お前にかけてる。だから話せてるんだけどな。」

戸塚『じゃあ……僕たちの事、許してくれるの?』

八幡「川崎にも言ったが、別にお前らを恨んでねえよ。あいつから全部聞いた。なんか心配掛けたようだな。すまない。」

戸塚『……もう、本当だよ!』グスッ

八幡「……まあ、ありがとな。」

――数分後――

戸塚『ごめん……嬉しくて、つい。』

八幡「ああ。話したいこともあるだろうが、そろそろ切るな。」

戸塚『……あのさ、いつ会えるかな?』

さあ、いつだろうな? 生憎俺は他学園との交流を深める気はない。けどまあ……

八幡「そのうち会えんだろ。」

戸塚「……ふふつ、そうだね！じゃあ今度はちゃんと会おうねっ！
八幡っ!!」

八幡「おう。」

そして俺は通信を切った。

沙希「聞いてたから分かるけど、一応聞くよ。どう思った？」

八幡「柄にもなく泣いちまいそうだな。まあ泣かねえけどよ。」

まだいたんだな……こんな奴らが。

その日の夜は、いつもより身体が軽い気がした。この2人なら大丈夫そうだな。

材木座？いつでもいいだろ。それに俺、奴の番号知らねえから連絡する手段とかねえし。

鳳凰星武祭に向けて

八幡 side

新入生入学から1週間が過ぎた。あれから何事もなく授業と稽古の毎日で、俺も《鳳凰星武祭》に出場するために鍛錬を重ねていて、パートナーは陽乃さんである。

理由としては、陽乃さんのスタイルは合気道を中心とした接近戦であり、その中に俺の武術を取り入れている。陽乃さんは接近戦で、俺はそのアシストというスタイルでいくから、陽乃さんがちょうどいいのだ。

陽乃さんも快諾してくれて、毎日の鍛錬がタツグなので、中々新鮮だ。

1度互いの実力を測るために模擬戦を試してみたが、陽乃さんの合気道では俺の武術にはついていけなかったみたいだったが、あれくらいの腕なら本選は普通だろうな。

陽乃「それでどう？ 私としてはさ、身体強化の呪符や属性付与の呪符も取り入れたら良いと思ってるんだけど。」

八幡「そうですね、陽乃さんならそれくらい簡単に扱えますしね。『稲妻蛟』や『炎獅子』、『鋭羽鷲』とかなら、即使えると思いますよ。後、相手と距離取る用に『海原鯨』とかも役に立つと思います。」

陽乃「へえ、まだ色んなのがあるねえ。八幡くん、もしかして私たちの知らない呪法とか知ってるんじゃないの？」

八幡「知ってはいますけど、そんなの教える気はありません。危険ですからね。」

陽乃「冒頭の十二人でも？」

八幡「ええ、星仙術に長けている沈雲や沈華でも危険ですね。そういう俺も使っていないですけどね。」

例えるなら、曉慧が使った雷呪法最高峰の技とかな。威力もデケエ上に星辰力もかなり持ってかれる。アレは使いたくない技だよな、奥の手に取っておくんだったらアリだけど。

陽乃「じゃあ今はこれくらいがちようどいいかもね。八幡くん、私でも使えそうな呪法があったら教えてね！」

八幡「はい。」

陽乃「よおし！セシリー！もう一回頼める？」

セシリー「はい、いいですよー！今度こそ勝ってやるんですからねー！」

陽乃「私も負けないぞ？」

……あの2人ってなんか似てるよな。

さて、他のペアは……ん？あいつらが一緒なんて珍しいな。

沈雲「じゃあ相手から離れる時はこの動きが良いというわけですか？」

宋「ああ。その動きなら、武術の苦手な水派でも上手く躲せるはずだ。」

沈雲「成る程、参考になりました。」

羅「この術なら、俺でも可能だ？」

沈華「はい。羅師兄なら、この術を唱えて棍につけるだけで属性が付与されると思いますよ。」

羅「そうか……すまない、時間を取らせてしまったな。おかしい話ではあるが、《鳳凰星武祭》では健闘を祈る。」

沈華「そうですね。ですがそこはお互いに健闘を、の方がしつくりきますわよ。」

他の木派と水派もそうだが、あいつらの仲が一番悪かったからな。そのあいつらが相談し合っている光景を見ると、なんか違和感があるな。

八幡「お前らがそんな風にしてると、なんか違和感あるな。なんかあったのか？」

宋「おお、尊師！」

羅「ええ、《鳳凰星武祭》に向けて自分たちの戦術確認をしていたのですが、黎兄妹に回避動作を教える代わりに我らでも扱えるくらいの呪法を教えてもらっていたのです。」

沈雲「宋師兄たちなら、僕たちでもすぐに使えそうな技を知ってさうだからね。趙師兄に習ってもよかったのですが、彼ではきつと説明から何から何まで長くなるからね。」

沈華「それで宋師兄たちに教え、習っていたというわけよ。」

八幡「そうか……こりや俺たちもうかうかしてられないな。お前ら2人も序列上がってるし、本選出場は楽勝だろうしな。」

そう。宋^{ソン・ラン}然と羅^{ルオ・クンザン}坤展は以前の序列が20位と23位だったが、前の序列戦で15位と19位になった。そしてその戦い振りも気に入ったのか、正式に星露の弟子になったのだ。

八幡「まあ俺とお前たちのブロックは全く違うからな。本選でお前たちと当たるのが今から楽しみになってくるな。」

羅「俺たちも、尊師の服に傷でも付けられるように頑張りますよ。」

沈華「決勝で戦うのが楽しみね。」

宋「聞き捨てならないな。我らが尊師と決勝で戦うのだよ。君たちは私たちの土台になってくれたまえ。」

沈雲「ほう、良い度胸だね。比企谷くんと雪ノ下師姉の前に君たちで小手調べをしておくのも悪くなさそうだね。」

4人「……………」バチバチ

仲が悪かったのは知っていたが、今では少し改善はされてるみたいだな。

しかし、決まったわけではないが、界龍の奴らと戦うのが楽しみなってきたな。

ドオーンツ!!

セシリー「いやーやっぱり陽姐強いですねー! また負けちゃったー!」

陽乃「いやいや、セシリーも中々だったぞ? またお願いね!」

八幡「終わったみたいです。術の方はどうでした?」

陽乃「うん、私にピッタリだね!」

八幡「それは何よりです。それじゃ俺は先に戻りますね。鍛錬はこの時間までって決めてるんで。」

陽乃「そう? じゃあまたね!」

後で気になるペアでもチェックするか。

※彼女（彼氏）との連絡

八幡 side

部屋に戻って夕食を摂った後、俺は《鳳凰星武祭》に出場するペアを見ている。

八幡「ふむ、今現在のところ有力なペアは……レヴォルフのウルサイズ姉妹ペア、同じレヴォルフの序列12位【螺旋の魔術師】のペア、ガロードワースの12位【輝剣】と11位【鎧装の魔術師】の銀翼騎士団ペア、星導館では5位の【華焰の魔女】と序列外の奴だが、純星煌式武装の使い手だから手は抜けないな。クインヴェールからは目立った奴はいないからいいとして、アルルカントは《彫刻派》と《獅子派》の筆頭が出て来るから油断は出来ない。何せ昨年シーズンの《鳳凰星武祭》はアルルカントが優勝してるしな。そして最後に俺たち界龍が、黎兄妹と宋と羅のペアだな。今年はかなり多いな……いや、例年がどうか知らねえけど。」

しかし俺と陽乃さんのペアが最有力候補とはな……まだ候補はたくさんいるだろうに。ウチにもそれなりの奴はまだまだ居るんだぞ？

それに……有力ではないが、雪ノ下と由比ヶ浜ペア。来るとは思っていたが、まさか入学早々に星武祭に出場するとはな。余程の自信があるのか、それともただのバカなのか、それはこの星武祭で分かるだろう。

pipipi…pipipi…

ん？この時間に電話って事はシルヴィだな。

シルヴィア『こんにちはは八幡くんっ!』

八幡「こっちは現時刻で、こんばんはの時間だ。お疲れさん、今は休憩中か?」

シルヴィア『うん、今ロンドンにいるんだ。後1ヶ月半でそっちに帰れるよ!早く八幡くんに会いたいよ!』

もう帰りの話をするなんてな……早過ぎる気もしなくもないが、まあそう言う俺も早く会いたいんだがな。

八幡「その時は俺も星武祭の真っ只中だな。」

シルヴィア『出場するんだったね、陽乃さん良いなあ。八幡くんと一緒にペアで戦えるんだからなあ。私も八幡くんとペア組みたいなあ。そしたら最強なのに。』

八幡「贅沢だな、仕方ないだろ?他学園同士で協力しての星武祭なんてねえからな。」

シルヴィア『分かてるけど、八幡くんの隣は私だけの特等席なのに。八幡くん、今回は星武祭のルール上仕方ないけど、本当はダメなんだからねっ!本来ならあの場所は私の場所なんだからねっ!』

意外な独占欲だな。まあ俺の隣もシルヴィ以外なんて考えられないけどな。

シルヴィア『はあ、もう時間になっちゃったよ……けどこの時間以外は八幡くんと噛み合わないからしょうがないよね。』

八幡「そんな顔するなよ。また明日があるんだ、それまでの我慢だ。」

シルヴィア『うん……でも寂しいよ。』

まったく……寂しがり屋だな。

八幡「なら仕事を楽しまなきゃな、そして早く終わらせてこい。俺

もお前と会えるのを待ってるからよ。帰ってきたら目一杯甘やかしてやるから。」

シルヴィア『……………例えばどんな事して?』

八幡「そうだなあ……………膝枕しながら頭を撫でたり、普通に抱き着くとか、一緒に作ったご飯を食べさせる、とかか?」

シルヴィア『……………追加注文ってアリ? 腕に抱き着きたいとか、しなくなったら注文するのはダメ?』

さっきの事は撤回だな、どうやらシルヴィは寂しがり屋で甘えん坊なようです。

八幡「逆にナシだと思うか? 付き合ってるのにそれすらダメとか窮屈すぎるだろ。全然大丈夫だ、シルヴィのやりたいと思った事を言ってくればいいし、やって欲しい事も言ってくればやってやるよ。」

シルヴィア『……………うん、分かった。じゃあ頑張ってくるね。』

八幡「ああ、俺は待ってるから頑張ってこいよ……………シルヴィ、

愛してる。」

シルヴィア「……………うん、私も愛してるよ。八幡くん／＼／＼／」

そして俺は通信を切った。少し柄にもない事を言ったな。

八幡 side out

シルヴィア side

……………いい、言われちゃった／＼／／

告白以来言ってもらってなかったけど、やっぱり凄く幸せな気分になれるなあ……………『愛してる。』かあ……………わああああ!! えへ、えへへへ／＼／＼／

スタッフ「シルヴィアちゃん! そろそろスタンバ……………ひよつとして彼、ですか?」

シルヴィア「え?」

スタッフ「凄く幸せそうな顔してますよ。それになんか柔らかい雰囲気も出ていて良い感じになってると思います。」

シルヴィア「そ、そうですね?」

スタッフ「ええ、やっぱり比企谷くんと出会って正解でしたね。マネージャーから交際も認めてもらいましたしね。」

シルヴィア「……………はい／＼／

スタッフ「はははっ、僕的には非常に良い顔をしているとは思いますが、お客様の前ではやめて下さいね? まだ彼氏がいる事、世間では知られてないんですから。」

シルヴィア「はっ! す、すみません!」

スタッフ「いいんですよ、じゃあそろそろ本番ですからスタンバイをお願いしますね?」

シルヴィア「はい!」

待っててね八幡くんっ! すぐに終わらせて六花に帰ったら、すぐに

甘えるから♪

発覚と容赦の無い警告

雪乃 side

雪乃「……………」グググ

由比ヶ浜「ゆきのん頑張って！」

小町「後もう少して3分です！」

ブーッ!!

雪乃「っ！はあ……はあ……」

小町「凄いですよ雪乃さん！星辰力で氷の維持、3分クリアです！」

雪乃「はあ……なんとか出来たわね。」

……………けれど、本当になんとかね。

由比ヶ浜「凄いよ！これなら本選に出られるかもね！」

由比ヶ浜「私もやつと剣に慣れてきたし、これならいけるよ！」

私たちは今、《鳳凰星武祭》に向けての練習をしているところ。小町さんはウチの序列1位「疾風迅雷」の刀藤綺凜さんを誘っていたのだけど、断られてしまったので今回は不参加の形になったから、私たちのサポートに回る事になったわ。

小町「雪乃さん、次の序列戦で、40位辺りとかとやってみたらどうです？」

雪乃「……少し低いわね。25位辺りとやろうと思っているわ。」

由比ヶ浜「そんなに上げて大丈夫？」

雪乃「ええ、大丈夫よ。」

こんなところで躓いてなんていられないのだから。それに早く逃げ腰谷くんの腐った顔を地面に擦り付けたいし。

小町「結衣さんはどうします?」

由比ヶ浜「私?!?うーんどうしよつかな?ゆきのんくらいの力は無
いから、私は60位くらいの人と戦ってみるよ。」

由比ヶ浜さん、公式序列戦は別に全員強制じゃないのだから出たく
なければ出なくてもいいのよ?

彼女がそう言うならいいのだけど。

小町「あつ!そいえばお2人に見せたい特集があつたんですよ!小
町もまだ見てなくて、これなんですけど」

ネットのページは《鳳凰星武祭》についてだった。今年の優勝候補
はどのペアかという予想のコーナーね。

小町「この記事なんですけど、界龍の【夢幻月影】って人が凄いら
しいですよ!そいえば陽乃さんのペアがその人でしたよ。どうで
す?見てみませんか?」

由比ヶ浜「見てみようゆきのん!」

雪乃「そうね、敵を知るのは当然の事だし、小町さん、いいかしら
?」

小町「了解です!」

そう言うてから、私たちは記事の内容が載っているページを隈なく
見ていた。すると最後のページに…………

今年の大本命は界龍か!?彗星の如く現れた超新星!!

界龍第七学院序列2位

【夢幻月影】 比企谷八幡

序列は譲つても威厳は負けない！界龍一の超絶美人も参戦！
界龍第七学院序列4位

【魔将天閣】雪ノ下陽乃

え？どういうこと？

雪乃「比企谷くんが……………序列2位？」

由比ヶ浜「……………ヒツキー？」

小町「おにい……………ちゃん？」

考えが纏まらなかった。彼が序列2位？嘘よ。何かの間違いに決まってるわ。あんな目の腐って生きているのかも分からない人が序列2位なワケないわ！何か卑怯な手でも使ったのよ！

3人全員が放心しているなかで、雪乃は姉の陽乃に通信をしようとしていた。

そして繋がった。

陽乃『ひゃっはろー！どうしたの雪乃ちゃん？そんな怖い顔して？』

雪乃「惚けないでちょうだい。姉さん、一体どういう事なの？」

陽乃『んん？何が？』

雪乃「惚けないでって言ってるでしょ！！彼が、比企谷くんが姉さんと同じ学院に居るじゃない！！どういう事なの!？」

怒鳴っているが、そんな事はどうでもよかった。姉さんは私に嘘をついていた。それも私の今一番会いたくも、憎んでいる相手を匿うような真似をして。

陽乃『ああ、八幡くんの事？気付くの遅くない？此処に来てから1週間も経ってるのに気付かないなんて。』

雪乃「そんな事どうでもいいのよ。いいから答えなさい！何故比企谷くんが貴方の通っている学院にいるのよ!？」

陽乃『そんなの彼が界龍に転校してきたからに決まってるじゃない。』

雪乃「姉さん、ふざけているのかしら？」

陽乃『あのさ、そろそろその姉さんってやめてくれない？正直気持ち悪いから。』

姉さんの声が一瞬にして冷たくなった。それもゴミを見るような目で私を見ていた。

雪乃「ねえ………さん？」

陽乃『聞こえなかったの？姉さんって呼ぶのやめてって言っただけだな。それともこれくらいのも事も理解出来ない程、頭おかしくなっちゃったのかな？まあ別にいいや。で？八幡くんが何で界龍にいる

のを黙っていたか？それが聞きたかったんだよね？」

雪乃「え、ええ………そうよ。」

陽乃『正直に言うけど、貴方達に八幡くんを会わせなくなかったからだよ。見学の時の電話でよく分かったよ。君たちは八幡くんを恨んでるってね。そんな相手に、私がわざわざ教えると思う？雪乃ちゃんも、そろそろ敵味方の区別をつけた方がいいと思うよ？』

雪乃「敵？味方？何を言ってるの？」

陽乃『雪乃ちゃんは本当になーんにも変わんないんだね。すつごくつままない。』

姉さんの声は酷く冷たくて、私も聞いた事がなかった。

陽乃『それで？八幡くんは界龍にいるけど？用件はそれだけ？じゃあ切るよ？』

雪乃「っ！待ちなさい！もう一つ聞いておくわ！姉さんは知ってるの？」

陽乃『彼の事？知らないわけじゃないじゃない。もう私自身うんざりするくらい知ってるよ。八幡くんには凄く悪い事をしたと思ってる。でも彼はそんな私を許してくれたよ。彼って本当に優しいよね。』

雪乃「姉さん、貴方は比企谷くんに騙されているのよ。比企谷くんが優しい？そんなわけじゃないじゃない。人を簡単に陥れるような最低な人よ。だから『あのさあ雪乃ちゃん。』………何かしら？」

陽乃『私が騙されているっていうなら、私は騙されたままでいいと思ってるよ。私はあんたに着いていくのなんて死んでもゴメンよ。そこにいる2人や隼人も八幡くんを潰そうとしているんだらうけど、それなら相当の覚悟をしないとね？私もたとえば妹だろうと容赦無しで潰すから。』

そう言われて通信が切れた。

正直生きた心地がしない。生きているのが不思議な気分だった。最後の一言、全く冗談に聞こえなかった。

由比ヶ浜「ゆ、ゆきのん……」

雪乃「……………」

まあ姉さんの事だわ。私には手を出しはしないでしよう。それに、本当に節操がないのね、比企谷くんは。本当にどうしてくれようかしら？

変わらない思いと変わった思い

小町 side

何が何だか分からなかった。突然兄の名前がこのページから出てきた時から、私の思考は止まったままだった。

雪乃さんは陽乃さんと何か話していたようだけど、その内容も耳や頭にも入ってこない。ただ1つ言えるのは、このページにお兄ちゃんが載っている事が未だに信じられない事だった。

雪乃「由比ヶ浜さん、小町さん。」

由比ヶ浜「……………ゆきのん？」

小町「……………どういう事なんですかこれ？お兄ちゃんが序列2位って……………」

雪乃「落ち着きなさい。きつと彼の事だから何か卑怯で卑劣な手段を使ったに違いないわ。それに姉さんもあんな男を選ぶなんて……………これはもう土下座程度じゃ済まされないわ。」

由比ヶ浜「そ、そうだよ！ヒッキーが序列2位なんてあり得ないよね！絶対ズルしたんだよ！ヒッキーマジ最低！」

小町「ですよ！本当にゴミイちゃんなんだから！小町的に超々ポイント低い！」

そうだよ！雪乃さんの言う通りだよ！ゴミイちゃんが序列2位？界龍の2番目？捻くれたな性格くらいしか取り柄のないゴミイちゃんがそんなに強いわけないよ！

由比ヶ浜「でもさゆきのん、私たちって界龍の事何も知らないからどうしようもないよ。界龍に知り合っている？」

雪乃「残念だけど姉さんはダメね、洗脳谷くんによられてるわ。残っているのは……………川崎さんだったかしら？」

小町「ああ！沙希さんなら何か知ってそうですね！番号分かります？小町知らないんですけど。」

由比ヶ浜「わ、私も知らない。」

雪乃「……どうやら生徒の方に直接聞いてみるしかないようね。」

雪乃「明日はちょうど休みなのだし、街に出て界龍の生徒がいたら聞き込みをしてみましょう。何かあるはずよ。」

2人「さんせーいっ!!」

小町 side out

陽乃 side

雪乃ちゃんとの通信は終わったけど、本当に腹が立つ。まさかあんなにも歪んだ子になってるなんてね。

八幡「大丈夫ですか？」

陽乃「うん……ごめんね。君にとっては1番会いたくない人の1人の顔を見せちゃったからね、お姉さん反省。」

八幡「いいですよ、むしろありがとうって言いたいですよ。俺の代わりに怒ってくれたんですから。俺にはあんな事出来ませんし。」

やっぱり彼は優しい。界龍に来てから1年、そして彼と一緒に此処で過ごした期間は半年、八幡くんをちゃんと見たら色が全く違った。前の色は灰色で、何色にも染まらないような感じだった。

けど、仮面を捨てた今の私が見える色は、極彩色だった。それも綺麗に彩られた状態でいながらも激しさを感じるが、その中にも静けさと穏やかさを感じる色だった。

これだけでは表せない程の色の数と感情の表現が含まれている。

陽乃「八幡くんって本当に優しいよね。」

八幡「どうしたんです？突然そんなこと言うなんて。らしくないですよ？」

陽乃「あつはは！そうだね。でも本当にそう思うんだ……」

八幡「……初めて会った日のことでも思い出してるんですか？」

陽乃「流石だね。勘のいい子は嫌いって言ってるところだけど、君は別かな。君なら全部打ち明けられてもいい気がする。」

こんな気持ちになるなんてね。

八幡「そうなるのも仕方ないですよ。1番上ってのは、結構背負いたがる場所ありますからね。俺も人の前では、弱みなんて見せたくないの。」

陽乃「……やっぱり八幡くんと話していると気が楽になるよ。前ほど卑屈じゃないし、裏を探ろうとしないし。」

八幡「余計なのが混ざってますが、それも仕方のない事でしたからね。人を信じられなかった頃の俺ですからね。」

ある意味私たちは似ていたのかもね。

八幡「まあ、それも半年前で終わりましたけどね。陽乃さんは1年前ですけど。」

八幡「もう仮面をつける事や人の裏を探るような事せずに済みますからね。」 ナデナデ

急に八幡くんは頭を撫でてきた。きっと彼は無意識でやっているんだと思う。それでも、手を止めてほしくないと思った。その手が凄く暖かったから。

八幡「……ん？あつ、すみません。」

陽乃「八幡くん、続けてくれないかな？」

八幡「え？」

陽乃「私、今は妹でいたいな。」

八幡「こんなダメ兄貴でいいんですか？」

陽乃「うん、君がいい。」

それに今くらいしか出来ないと思うし。

暫く私は八幡くんに頭を撫でられていた。彼の撫で方は少し遠慮のような感じもあつたけど、暖かさは充分に伝わってきた。

陽乃「分からないとは思うけどさ、お兄ちゃんってこんな感じなのかな？」

陽乃「なんか分からないけど、凄く守られてる感じがする。」

八幡「どうでしょうね……俺は自然体なので分かりません。」

陽乃「そっか、ならそうなのかもね。」

陽乃「あーあ、私にもお兄ちゃんがいてくれたらなあ。そしたら雪乃ちゃんもあんな風にならずに済んだかもしれないのに。」

八幡「分かりませんよ？俺がいてもあんな風になった妹がいますからね。」

陽乃「ふふふつ、そうだね。でも、もし八幡くんが兄で私が妹だったら、きっと上手くいったと思うなあ。」

もしの話は好きじゃないけど、本当にそうなってくれたら私の人生は変わってたかもね。仮面もつけずに済んでたかもね。

八幡「お互いに苦勞する妹を持つてるって部分は共感出来ますからね。でも、その共感も近いうちに消えるかもですけどね。」

陽乃「……そうだね。なら目一杯、仮のお兄ちゃんに甘えておこうかな♪」

八幡「ふつ、やっぱりそっちの方が似合ってますよ、貴女には。」

陽乃「うん、私もそう思ったよ。」

本当に彼も私も変わっちゃったね。凄くつまらない人間になっちゃった。でも、凄く退屈のしない生活は送れているから良しとしますか！

それでも彼女たちは

雪乃 side

翌日の今日は休日、私たちは商業エリアに赴いていて、界龍の生徒を探しているところよ。でも今のところ会えていない。

小町「……………いないですね。」

由比ヶ浜「外出あんまりしないのかな？」

雪乃「または私服に着替えているかよね。それでは見分けなんてつかないわ。」

思わぬところで盲点だったわね。街まで来るのに制服なんて着るのは珍しいものね。

でもここで諦めるわけにはいかないわ。なんとしても見つけないといけないもの。

小町「あつ！あの人たち界龍ですよ！」

突然小町さんが声を上げた。

由比ヶ浜「えっ!? 本当に!？」

雪乃「見間違いじゃないのよね？」

小町「間違いないです！界龍の序列26位の呂永成ルー・ウィンシンと33位の徐銀梅スー・インメイです！今回の《鳳凰星武祭》出場ペアですよ！」

雪乃「上々ね小町さん、早速聞きに行きましょう。」

2人「おーっ！」

小町「あのゝすみません。」

永成「ん？何かな？」

銀梅「私たちに何か？」

小町「ちよつと聞きたい事があつてですね？比企谷八幡さんの事なんですけど。」

永成「尊師の？私たちで答えられる範囲でなら答えてあげるよ。徐はどう？」

銀梅「私も大丈夫だよ、それで何を聞きたいんですか？」

そこから私たちは彼女たちに質問をしては答えを聞いていたのだけど、この人たちも騙されているのが分かったわ。彼が人に教える？冗談もいいところよ。

そしてついには、雪乃が口に出してしまったせいで口論が起きてしまった。

それも3分〜5分と続いて今に至る。

永成「君たちさ、私たちだって我慢ならない事だつてあるんだよ！

あのお方のおかげで私や徐だつてここまで強くなれたんだ！それを騙されている？全部嘘？ふざけないでくれるかな！」

雪乃「彼程度の男にそんな事出来るはずがないのよ。薄汚れた性根に腐った目をした彼についていくのは間違っていると救済してあげてるのよ？」

由比ヶ浜「そうだよ！ヒッキーなんかに従つてたら、絶対碌な事ないんだから今すぐ離れた方がいいよ！」

銀梅「貴女たち、さつきから聞いていれば好き放題言ってくれるわね？尊師の事をそんなに悪く言ってるけど、あなた達は尊師の何だつていうの？」

雪乃「元同じ高校にいたのよ。本当に不愉快だけど部活も一緒にしていたわ。」

由比ヶ浜「私はヒッキーとクラスメイトだったの！」

小町「小町は妹です！」

永成「…………ふうん、そうなんだ。尊師も可哀想なお方だよ。こんな自己中心的で人の迷惑や気分も考えないような人たちに囲まれていたなんてね！」

雪乃「なんですって!？」

銀梅「反応するって事は身に覚えがあるって事なんじゃないの？」

小町「ち、違います！ゴミイちゃんにそんな事した記憶はないです！」

永成「君たちには無いだけで尊師にあつてもおかしくはないでしょ？」

銀梅「あなた達って本当に人の気持ちを考えられないのね。」

何故気付かないのかしら？私たちの方が気分が悪くなってきたわ。

睨み合いを続けている両者。お互いに引く様子が全く見られなかった。そして…………

???「……………お前たち、何をしている。」

そこに現れたのは、彼女たちと同じ界龍の制服を着た男性だった。しかも見た事のある男性だった。

2人「大師兄！」

界龍第七学院序列3位【覇軍星君】の武曉彗だった。

雪乃side out

—————

曉彗「……………何の騒ぎだ？」

永成「いえ、この者たちが尊師の批判をしていたので、つい……………」

曉彗は雪乃たちの方を見ると、すぐに2人の方へと視線を戻した。

曉彗「……………お前たちは《鳳凰星武祭》の準備があるだろう。も

う行くがいい。」

銀梅「え？しかし……」

暁彗「……………2度は言わない。」

永成「…………徐、此処はもう…………」

銀梅「……………そうね。大師兄、これで失礼致します。」

そう言ってから、2人は去って行った。

暁彗「……………今の話は本当か？比企谷八幡を批判したというのは。」

小町「ひ、批判はしてません！本当の事を言っただけです！」

暁彗「……………私は卿らのその話を聞いていない。故にその話を否定はしないが、私も彼女たちと同様に比企谷八幡には畏敬の念を抱いている。」

暁彗「……………何故卿らがそんな発言をしているかは存じないが、今の比企谷八幡を見ればその気持ちも変わらと思う。今と昔は違うもの、卿らの想像する比企谷八幡の姿とは異なっていると思う。私もこれで失礼する。」

そして暁彗もその場を去った。

小町「……………どう思います？」

雪乃「あり得ないわ、たった半年よ？それで彼が変われるとは思えないわ。私たちが彼と一緒にいた期間も半年なのよ？とても変わるとは思えないわ。」

由比ヶ浜「そうだよ！私たちでさえも変えられなかったのに、武術しか能のない学院なんかにかできるわけないよ！」

暁彗の助言も彼女たちには届かなかった。1度目は陽乃の、2度目は暁彗の忠告を無視した。最早、彼女たちには助言や忠告なんて届か

ないのかもしれない。

偶然とイジリ

八幡 side

はあ……鍛錬があつたわけでもねえつてのに今日はなんか疲れたな。永成と銀梅が奴らと遭遇した事に、暁彗が一応の歯止め。しかも俺をバカするだけでなく、狙っているときた。あいつらも暇なんだな。

しかもあの2人、メツチャやる気出してたな。ブロックが同じでしかも初戦の相手だからな。それにこっちは各ブロックごとに他学園の冒頭の十二人クラスのペアがいるからな。どいつにも可能性は充分にある。

まあ今はこんな堅苦しい話は抜きにして飯を食わねえとな。久しぶりの外食だしな。

自動ドアが開いた瞬間、肉の焼いている香ばしくも良い匂いが漂っていた。

「いらつしやいませ！2名様でよろしかったでしょうか？」

八幡「はい、そう……え？2名？」

俺が後ろを振り返って見ると、

オーフェリア「……………」

八幡「……………はい、2名です。」

「かしこまりました。ではお席へご案内します。こちらへどうぞ。」

正面に顔を戻してからそう答えてから、席に案内されておしぼりとお冷を出されて店員は行ってしまった。

オーフェリア「……………久し振りね、八幡。星武祭以来つてところかしら？」

八幡「そうだな。だが、なんでここに？」

オーフェリア「……………貴方が此処に入つていくのが見えたからついできたのよ。」

八幡「そんでついでに奢られよう？」

オーフェリア「……………私はそんな事思つてないわ。久し振りに話があったただけよ。」

八幡「冗談だよ。心配するな、俺が持つからよ。女に払わせるのは後味悪いからな。」

オーフェリア「……………貴方はやっぱり優しいのね。」

よせやい！君に言われるとなんかむず痒いんだ！そういうのは……………あれ？誰に言えばいいんだ？

八幡「……………まあいい。着けてくれてるみたいだな、そのチョーカー。」

オーフェリア「……………貴方があの時くれた物は全て着けているわ。ブレスレットも髪留めも。」

八幡「そうか……………それと聞きたいんだが、そっちでウルサイズ姉妹が《鳳凰星武祭》に出るだろ？何で分かるか？」

オーフェリア「……………動機はないと思うわ。きっと彼が命令したのよ。」

八幡「あー、あの突然変異した豚か。」

オーフェリア「っ！……………」

何故かオーフェリアは顔を隠していた。まあ笑いを堪えてんだろ。うな。人じゃなくて豚だからな。

オーフェリア「……………んんっ、そうね。彼の命令で間違い無いと思うわ。彼女たちも彼に借りがあるみたいだから。」

八幡「そうか……まあ知らないならいい、別に知りたいわけじゃないからな。」

オーフェリア「……………ならいいけど、八幡、1つ聞いてもいいかしら？」

八幡「ん？」

オーフェリア「……………何故、あれ以来連絡をくれなかったの？」

八幡「あれ以来っていうと……………《王竜星武祭》の時か？」

オーフェリア「……………」コクツ

んー別に理由なんて無いんだけどなー。

八幡「一応聞くが、何故だ？」

オーフェリア「……………貴方の中ではそうでもないかもしれないけど、私は貴方と過ごす時間はとても貴重だと思ってるの。高望みしているわけじゃないけど、偶には連絡が欲しかったわ。」シユン

マ、マジか……………項垂れちゃったよ。そんなに待ってたのか？ならそっちから連絡よこしてくれてもよかったのに。

八幡「その……………悪かった、そんな事思ってるとは知らなかった。」

オーフェリア「……………この前みたいに頭を撫でてくれるなら許してあげるわ。」

これはまたハードルが高いのをご所望で。

八幡「んじや撫で「それから」……………ん？」

オーフェリア「……………こっちに來て。その方が撫でやすいでしょ？」

……………そこでハードル上げるの？ねえ上げちゃうの？

そう思った俺だが、薄く期待の込もった目を無視する事なんて出来ず、オーフェリアの隣に座ってから頭を撫でた。

その間に注文した品が来たが、不思議と羞恥心は無かった。

そしてオーフェリアが肉を一口食べた瞬間、とてつもないスピードで食べていくのが今日一番の驚きだった。

しかもチマチマ食べるから余計可愛いんだこれが。愛嬌湧くぜ？

――数十分後――

オーフェリア「……………こんなに美味しいなんて思わなかったわ。」

八幡「お前途中からすげえスピードで食ってたからな？俺よりも量は少なかったが5分で平らげるってどう言う事だよ…………」

オーフェリア「……………美味しかったから仕方ないじゃない／＼／＼」

うん、そうだね。君は何にも悪くない。このお肉が美味しすぎたのが悪いんだよ。

p i p i p i …… p i p i p i ……

八幡「ん？」

オーフェリア「……………楽しい時間はあつという間ね。でも、延ばせる可能性も。」

オーフェリアが小声で何か呟いてたが聞こえず、オーフェリアはすぐにCALLボタンを押していた。相手はブt……………人間の姿を模した豚だった。

オーフェリア「……………こんばんは、（突然変異の豚さん）何の用かしら？」

デイルク『おい、どうでもいいが今何か変な事考えてなかったか？』

うん、それ俺も思った。初めて気が合ったね。

オーフェリア「……………何の事？」

デイルク『何でもねえ。それよりもテメエ何処をほつつき歩いてる？門限はとつくに過ぎてんだよ。さっさと戻れ。』

お前オカンか!?それだけの為に連絡してきたの!?

オーフェリア「……………嫌よ、今楽しい時間を過ごしているの。誰であらうと邪魔をされたくないわ。」

デイルク『テメエ……………俺の言う事が聞けねえってのか?』

オーフェリア「……………なら力で私を捻じ伏せてみなさい。それがレヴォルフのルールでもあるわ。」

無理だろうなー。星脈世代でもない此奴が出来るわけがねえ。

デイルク『……………おい、まさかそこに【夢幻月影】がいるってんじやねえだろうな?』

オーフェリア「……………だとしたら何?」

デイルク『替われ、そいつに話がある。』

オーフェリア「……………仕方ないわね。」

八幡『どうした?不機嫌な顔がさらに不機嫌そうになってるぞ?カルシウム摂ってるのか?栄養バランスしっかりな。』

デイルク『テメエと会うのも2度目だがつくづく気に入わねえ奴だな。』

八幡「それはどうもありがとう。んで?」

デイルク『単刀直入に言うぞ。オーフェリアと縁を切れ。』

八幡「え?嫌だけど?」

そんなの“はいそうですかー分かりましたー”って言うわけねえだろ。

オーフェリア「……………私も嫌よ。」

デイルク『テメエはすつこんでろ。』

オーフェリア「……………八幡、喋る豚がいてとても怖いわ。」ダキツ

八幡「そうだなー、世にも奇妙な生物がいたもんだなあ。」

デイルク『テメエら……………俺をおちよくってんのか?』

2人「え?そうだけど?」

おお、息ピッタリ……………てかオーフェリアも即答する程かよ。

八幡「まあまあ、我慢しろって。きつと治らないから。」

オーフェリア「……………早く私を手放してもらえないかしら?言う事を聞かないのが1人居ても仕方ないでしょ?」

デイルク『……………チッ!本当に氣にくわねえ奴だな。おい、【夢幻月影】テメエ覚悟しとくんだな。』

そう言ってから、通信を切ってしまった。

【悪辣^{タイラント}の王】をイジるって結構面白いな。

八幡「おい?いつまで抱き着いてんだ?」

オーフェリア「……………豚の怪物の顔が頭から離れないわ。怖いからもう少しこのままでもいいかしら?」ギョッ

オーフェリアの顔は全く怖がっているようには見えず、むしろ愉快そうに笑っていた。

八幡「しょうがねえな。俺もまだゆつくりしたいから好きにしろ。」

オーフェリア「……………ええ。」

最後にすげえ憂さ晴らし出来たな。そしてGJです、オーフェリアの笑顔。

不安な距離

八幡 side

シルヴィア『そっか、《鳳凰星武祭》に向けての準備は順調みたいだね。順調そうで良かったよ。』

八幡「ああ、俺も界龍の奴らも調子は上々だ。アイツらも結構良い線いと思うぞ。」

今俺はシルヴィと定期連絡をしている。今日のライブ……というよりは今日自体が休日みたいで、俺が部屋に帰って連絡してから2時間ぶっ通しで会話をしている。

シルヴィア『そうそう！やっぱりこっちでも広まってたよ、八代界人の事。』

八幡「今は確かローマだったな。ロンドンからベルギー、パリにバルセロナに続いてローマでもかよ。」

シルヴィア『あつはは！それだけ八幡くんの歌が世界中に響いたって事だよ。あくあ、八幡くんも今回のライブに来てくれればなあ。』

響くのはシルヴィだけでいい。俺は要らないって。アイドルでもなんでもない俺がライブに参加しても意味ないだろ。

シルヴィア『……あつ、そういえば星導館の彼女たちとガラードワースの彼はどう？何か進展とかあった？例えば接触して来たとか。』

八幡「ああ。葉山の方は特に何もないが、星導館の3人の動きはあった。ついこの前質問攻めされてた奴らがいてな、どうも俺の事を全否定してるみたいだ。どうでもいいがな。」

シルヴィア『ねえ八幡くん、私その子たちと決闘したくなってきた

よ。帰ったらしてもいいかな？いいよね？』

八幡「やめろ。お前の手を汚したくない。それにやるなら俺だ。奴らとの色んなモンを断ち切らねえといかねえからな。」

シルヴィア『……………そっか。』

八幡「だからお前は手を出さないでくれ。さつきも言ったが、お前の綺麗な手を汚したくない。あんな奴らの事で汚す必要はない。汚れるのは俺でいい。」

シルヴィア『八幡くんっ!!それは「そしたらお前が綺麗にしてくれるだろ?シルヴィは俺を助けてくれたからな。」……………』

八幡「俺の隣にはいつだってお前が居るし、お前の隣にはいつも俺が居る。だからそんな顔をするな。」

シルヴィア『八幡くん……………』

八幡「……………少し辛気臭くなったな。すまん。」

シルヴィア『ううん、そんな事ないよ。むしろ嬉しい。』

それならいいんだけどな。

シルヴィア『……………八幡くんはさ、私の事見捨てないよね?』

八幡「……………いきなりどうした?何だよ急に。」

シルヴィア『少しね……………考えちゃったんだ。もし八幡くんが私の他におんn「やめろ。」……………』

八幡「前も言ったが、俺はお前を愛している。この気持ちに嘘なんてない。俺はお前を絶対に裏切らないし、そう思った事なんて1度もない。」

俺がシルヴィを裏切る?それこそ天地がひっくり返ってもあり得ない。あの時、俺にあんな言葉を言ってくれた奴を何故に裏切る?

シルヴィア『ごめん、変なこと聞いて。電話だけだとやっぱり物足りない……………今すぐ感じたいよ、君の温もりを。体全身で君を感じたい。』

八幡「流石にこの距離じゃあ影は出せねえよ。俺だつて抱き締めた
い、だが我慢してくれ。残りのライブももう少しなんだからよ。」

シルヴィア『……うん。』

八幡「また辛気臭い顔になってるぞ？ そんな顔するなよ、後1ヶ月
なんだ。2ヶ月乗り切ったんだから、後の1ヶ月頑張つてやればあつ
という間に終わるから大丈夫だ。な？」

シルヴィア『……じゃあ帰ったらキスしてね？』

八幡「ああ、お安い御用だ。」

そのくらいの約束なら今からでもしてやるよ。キスなんて安いモ
ンだ。

シルヴィア『……家に帰ったら絶対にしようね？ 約束だよ？』

八幡「分かってるよ、絶対だ。」

シルヴィア『じゃあね八幡くん。私は少し寝るよ。また明日ね。』

そう言ってから通信が切れた。

八幡「……俺がお前を見捨てるわけねえだろうが。バカな事考え
やがって。」

帰ったら1番にそう言ってやるか。

第6章 鳳凰星武祭

鳳凰星武祭前日

八幡 side

あれから3ヶ月経ち、いよいよ明日から《フェニクス鳳凰星武祭》だ。

特にこつちでは変わった事は無かったが、強いて言えば星露が六花園会議で聞いた話で、アルルカントが人工知能を使ってくるかもしれないという事だ。しかもその筆頭ペアの奴らが勝てば俺たちの予選2回戦の対戦相手になる。

あとは星導館が新旧序列1位が出るという事だ。確か……天霧綾斗だったな、2つ名は【むらくも叢雲】で、ペアも序列5位の【華焰の魔女】だから今大会の本命になるだろうな。元序列1位の刀藤綺凜と情報のない奴がペアを組んでたな。沙々宮紗夜って名前だったが情報が無いのが怖いな。

まあ、俺が言えた事じゃないんだがな。俺の情報も出回ってないだろうし。

グループはどっちも別だから当たるとしたら本選のクジ引きか、勝ち上がってあたるかくらいだな。

まあ俺たちが最初に集中するべき相手は、まずアルルカントの筆頭ペアだな。奴らが何をしてくるかによって俺たちの戦法も変わるかな。ありえない事だが単純な相手であってほしいものだな。

八幡「とりあえずは本選に出るまでは力を温存しておきましょう。アルルカントがどんな手で来るか分かりませんからね。」

陽乃「そうだね。なら初戦の相手は私がしょうか？その方が八幡く

んの技や実力を極力見せずに済むし。」

八幡「動画は俺と曉彗の序列戦の動画だけですけど、どれだけ出回ってるかですね。」

陽乃「少なくとも今の時点で序列入りしか情報がないんだから細かい内容までは知られてないと思うよ?」

確かに報道されている記事の中には、俺が使う武器や技、戦闘スタイルや能力者かどうかも一切記載してはいなかった。

俺の周りであるとすれば、界龍の序列順位が大幅に変わった事くらいだからな。

八幡「まあ、俺が魔術師の力を使うとするなら、間違はなく本選、それも準々決勝か準決勝くらいなので、その辺は心配ないですよ。まあ、気持ちが高揚してやっちゃうかもしれないですけど。」

陽乃「まあそうなったならそうなんだよ。そ・れ・に・私・たち・には秘策があるからね〜!あれなら普通の防御でも防ぐのは無理だよね!星露も1回食らってから受けるのを嫌う程だからね!そこの生徒なら効果は抜群だと思うよ!」

八幡「まあ星露がああ反応を見せる限りは星武祭では充分使える技って事ですね。」

陽乃「でも使うのはここぞのタイミングがいいかもね!何回もバンバン使ったら攻略されるのがオチだもん。」

八幡「あの技がそう簡単に攻略されるとは思えませんがね、用心しておきましょうか。」

そりやそうだ。手の内をホイホイ見せるようじゃ、攻略して下さいと言っているようなモンだ。見せたのも星露だけだし、本選まで隠しておいても大丈夫だろう。

陽乃「じゃあそろそろお開きにしようよ。明日は開会式で私たちの1回戦もある事だし。出場する54人の皆も大事をとってもう寝て

ると思うしね。私達もそろそろ休も?」

八幡「……そうですね。じゃあ続きは明日の控え室とかにでもやりましようか。」

陽乃「分かったよ、じゃあまた明日ね八幡くん!」

八幡「ええ、また明日。」

そう言ってから陽乃さんは帰って行った。さて、俺もそろそろ寝るかな。

コンコンツ

ん? 陽乃さんか? けど忘れ物は無いと思うが……

八幡「はい、どうぞ。」

虎峰「失礼します、八幡。」

セシリー「八幡、来たよー!」

冬香「失礼しますね、八幡さん。」

暁彗「……失礼する。」

八幡「おお、どうしたお揃いで?」

俺もう寝るところなんだけど? 大事なお話でもあるのか?

冬香「いえ、八幡さんへ応援と一言をと思ひまして、こんな時間でご迷惑だとは思いますが。」

八幡「はあ……それはわざわざご丁寧にどうも。ん? 陽乃さんとはすれ違わなかったんですか? 俺の部屋から出た筈ですけど。」

虎峰「雪ノ下姉姉にもメッセージは送りましたよ。後は八幡だけです。」

セシリー「へっへーん、《鳳凰星武祭》の先駆者としてアドバイスをあげるよー。」

八幡「それはありがたいが、何かあるのか? セシリーから見て俺と

陽乃さんに欠点みたいなところって。」

セシリ「うんにやー、正直に言うとおたしと虎峰以上だよー。陽姐との連携も上手いし、あたしとしては文句無しだよー。寧ろ死角なんてあるのーって思えるくらい。」

暁彗「……………だが注意を散漫させぬ事だ、比企谷八幡。それが命取りにもなる。私もそれで卿に敗北した。比企谷八幡、健闘を祈る。」

虎峰「八幡っ、頑張って下さいね！」

セシリ「八幡なら優勝出来るから頑張ってねー！」

冬香「微力ではありますが、少しばかりの応援をさせて頂きますね。」

八幡「……………ありがとうございます。」

冬香「どういたしまして……………さて、八幡さんは明日試合がありますし、もうお暇しましょう。では八幡さん、明日から2週間頑張ってくださいね。」

何もしなくても応援してくれる奴らがいるってのは、どんな場合でも良いものなんだろうな。今みたいな感じで。

いよいよだな。

いよいよ明日が《鳳凰星武祭》だ！

開会式と尊師の鼓舞

――――

――開会式直前――

八幡「なあ？俺後ろの方がいいんだけどさ、やっぱダメか？」

全員『ダメですっ!!』

沈華「比企谷、いい加減諦めなさいよ。私も含めて全員がそんな意見聞かないわよ。」

陽乃「そうだよ、いいじゃん！序列2位の威厳を見せるには良い機会だよ！」

八幡「別に威厳なんて見せるものでもないでしょう……」

現在、ペアで並ぶ際の位置どりを決めているのだが、八幡以外満場一致で八幡&陽乃ペアが先頭ということになっているのだ。

「尊師！お願いします!!」

「今くらいしか、こんな事出来ないんですから！お願いします！」

界龍の待機場では尊師尊師の連呼。

八幡「……あー、もう分かった！分かったからその尊師を連呼するのやめろ！呼ぶのは許可したが小っ恥ずかしいんだよ！」

全員『ありがとうございます、尊師!』

八幡「人の話を聞けっ！」

陽乃「あつはは！これで決まりだね。それに皆の緊張も良い感じに解けたみたいだし、そろそろ配置についてねー。」

八幡「はあ……」

沈雲「気にする事なんてないさ比企谷くん、開会式くらいすぐに終

わるから問題ないよ。」

沈華「なんなら私が貴方の肩でも揉んであげるわよ？雷付与がついた手で。」

八幡「そうか？なら頼むわ。」

沈華「……………冗談なのだけど、真に受けるところが凄いわね。」

八幡（はあ、早く終わってくれよ?）

——開会式——

八幡（いてえ……………視線が超いてえ……………今更だが、俺だけ服の色違うんだった。野郎共は紫とピンクだが、俺は黒一色に白少しだったな。ホントあのチビやつてくれたな。）

八幡がそう思っている最中、最後の運営委員長の言葉が始まった。

マディアス「諸君、おはよう。星武祭運営委員会委員長のマディアス・メサだ。」

八幡（うん、どうでもいいから早く終わらせて? いい加減目線がウザいから。）

自己紹介からマディアス・メサ委員長の話は続き……………

マディアス「これから諸君に重要なレギュレーション変更を伝える。」

マディアス「従来煌式武装に制限を設けていなかったのだが、色々不都合が出てきた。具体的にいうと、自律機動する武器をどう扱うか。」

マディアス「武器の数に制限を設けるのは論外だ。自立起動兵器の使用を禁止すれば、この大会の衰退を招くことになるだろう。」

マディアス「そこで！今回に限っては代理出場という形を取ることにした。」

突然の事に辺りは騒然とする。当然八幡もこの言葉には耳を傾けざるを得なかった。

陽乃「ねえ八幡くん？これって……」

八幡「はい、星露が言っていたのと関係があるかもしれないですね。それに、持ちかけてきたのはアルルカントみたいですからね、証拠としては充分ですね。これは少し警戒した方がいいですね。」

陽乃「私たちの次の対戦相手がその自立式擬形体バベットになる可能性が高いからね。」

八幡（流石陽乃さんだ、説明しなくても要領は分かっているみたいだな。）

マディアス「賢明なる諸君には、これが特定の学園を有利にするものではなく、むしろ近い将来の平等性を確固するためだと分かってもらえると思う。」

マディアス「そして星武祭を愛し、応援してくださいる皆さんには、これがより進化した、新たな星武祭へ繋がるものであるとご期待願いたい。」

一斉に観客から歓声が湧き上がった。あれだけの大演説、歓声がおきない方がおかしく見えるだろう。

—————

八幡 side

—————控え室—————

八幡「よう、お前ら。」

永成「あつ、尊師！」

銀梅「いらしてくれたんですね！」

八幡「まあな、どうだ調子は？」

永成「万全です、これ以上ないくらい。」

銀梅「尊師、私たちやってきます！尊師をバカにしたあの2人を見事打ち倒してきますので、見ていてください！」

心意気は認めるが、これじゃあ……ダメだな。

八幡「お前ら、俺を中心に考えるな。お前らは俺の為にこの星武祭に出場したのか？」

銀梅「い、いえ……」

永成「違います……」

八幡「ならお前らのしたいようにやれ。今のお前らはこの1回戦を勝てばどうでもいいって顔してるぞ？」

2人「……………」

後はこれだな。

八幡「本選の準々決勝まで勝ち登ってこい、そこでお前たちの相手をしてやる。」

2人「……え？」

八幡「お前らの実力なら、これくらい出来るはずだ。それとも何か？お前らはそれも出来ないくらい弱っちかったか？俺の見込み違いか？」

銀梅「た、確かに尊師に比べたら微々たる実力ですが、私たちにだつて意地があります！言われっぱなしでは終われません！」

永成「その勝負受けて立ちます！必ず本選に残って尊師を驚かせてみせますからね！」

八幡「…………その意気だ。それを忘れるな。楽しみにしているから

な？」

2人「はいっ!!」

あいつらも吹っ切れたみたいだな。さて、俺も移動しないとな。

Hブロックの2回戦だから……カノープスドームだったな。やれやれ移動が辛い、まあ、た視線を気にしながら移動しなくちやならねえじゃねえか……影に潜ろっかなあ。

勝負にもならない

八幡 side

実況の星武祭の説明が終わったところで、今日のAブロック1回戦第1試合が行われるところだ。永成と銀梅の試合で相手は雪ノ下と由比ヶ浜だった。

奴らが私情だけで試合をしないか見ておくのも、俺がかけた言葉の責任でもある。

陽乃「知ってたけど、雪乃ちゃんも星武祭に出場するなんてね。あの子はやるだけ無駄なのに……なんでこんな事するのかな？」

八幡「さあ？それも考えられないくらい切羽詰まってるんじゃないですか？」

陽乃「そうかもね。はあ……全く、本当に何にも変わってないなあ。」

陽乃さんが冷たい言葉を言っていたが、別に擁護する気にはならなかった。

だってどうでもいいから。

それよりも、試合だ試合。

八幡 side

—————

梁瀬『さあいよいよ始まりました！《鳳凰星武祭》予選Aブロック第1試合!!気になる最初の対戦カードはこちらです！星導館の序列

外のペアと界龍の26位と33位のペアです。これは最初から楽しめる事間違いないですね！」

梁瀬「さあ選手の登場です！登場するのは……界龍第七学院の
ル・ウインシン スー・インメイ
呂永成&徐銀梅ツ!!」

チャム『この2人は1ヶ月前の序列戦で9つも順位を上げてますからね。今大会のダークホースと言っても過言じゃないッス。』

梁瀬『そしてこの2人には二つ名がつけられており、永成選手が
おにかぎ
【鬼鉤】、銀梅選手が【碎突^{さいとつ}】となっています。』

永成「うん、確かに私の使う武器は鉤爪だけど、鬼ってつくまで長くはないよ……」

銀梅「私も普通の物なら碎けるけど、それ程強い突きは出来ないわ……」

2人はそう言いながら、ステージへと降りていった。

雪乃「こんにちは、やっと来たのね。」

由比ヶ浜「やつはろー2人とも！」

永成「軽々しく挨拶をしないでくれるかな？私たちは君たちと馴れ合う気には到底なれなくてね。」

銀梅「むしろお近づきになんてとてもなりたくないの。」

雪乃「随分なご挨拶ね？言ってくれるじゃない、私たちが何かしたのかしら？」

銀梅「本気で言っているのかしら？だとしたら、とても頭が悪いのね。お似合いだわ。」

雪乃「なっ!？」

由比ヶ浜「ちよつと！ゆきのんに謝ってよ！今のは酷いと思うよ！」

永成「だったら尊師にも謝ってくれないかな？私たちの師に。」

由比ヶ浜「そんし？ヒツキーの事？何でヒツキーに謝んなきゃいけないのさ？」

銀梅「……………もういいわ、早く終わらせましょう。」

銀梅は携帯式旋棍トシファアを取り出し、永成は後ろに下げてあつた鉤爪かぎづめを手に取り付けた。

由比ヶ浜も腰の方から煌式武装を取り出して、中段に構えている。

梁瀬『さあつ！両者準備が整った様ですので開始したいと思います
！《鳳凰星武祭》予選Aブロック1回戦!!』

『Start of the duel』

梁瀬『バトル、スタートツ!!』

スタートと同時に由比ヶ浜が突つ込むが、2人はまだ動かない。それどころか構えを取ってさえもない。

由比ヶ浜「おりやああ!!」

由比ヶ浜は剣を大振りに振るが、いとも簡単に避けられてしまう。そして大振りがために、攻撃後は隙も多い状態だった。

その攻撃も暫く続いていたが、全く当たる気のしない攻撃の連発だった。

銀梅（何よコレ、ただ剣を振り回してるだけじゃない。こんなのに警戒してた自分がバカみたいだわ。）

永成（どうやらこのペアはすぐに倒せそうだね、この子は銀梅に任せて僕は向こうに行こうかな。）

由比ヶ浜「はあ……………はあ……………な、何で当たらないの?」

銀梅「そんな素人丸出しの動きで私たちを捉えられると思ってたの? 舐められたものね。そろそろ終わりにしましょう?」

永成「じゃあ此処は任せたからね、私はあの大人しい子をやつてくるよ。」

銀梅「了解！任せたわよ。」

永成は雪乃の方へと走り、銀梅は由比ヶ浜と対峙していた。

由比ヶ浜「やああああ!!」

銀梅「さつきも言つたよね？そんな素人丸出しの動きじゃ捉えられないわけないって。もう目障りだから大人しくしていてくれない……かなあ!!」

ドゴツ!!

由比ヶ浜「かはっ!？」

銀梅は旋棍の先端で由比ヶ浜の校章めがけて突きを放ち、見事命中。校章はそのまま砕け、由比ヶ浜は壁まで吹っ飛ばされて気絶してしまった。

『由比ヶ浜結衣 校章破壊』

雪乃「由比ヶ浜さん!？」

永成「よそ見している暇があるのかい？随分と余裕なんだね？なら一気に行かせてもらおうよ!」

雪乃「っ!？」

由比ヶ浜1人で出来ると思っていたのか、準備も全くしていなかった。咄嗟に星辰力を纏うが、そもそも戦闘態勢に入る事さえも遅過ぎた。

永成はそのまま鉤爪で校章を切り裂いた。

『雪ノ下雪乃 校章破壊』

『End of duel』

梁瀬『試合終了ー!!勝者、呂永成&徐銀梅!!余裕の勝利でしたね!』

チャム『こうして見ると、個人の實力は高いみたいっス。おそろくっスけど、冒頭の十二人もてこずるかもしれないっス。この戦いはすぐに決着がついたっスけど、敵が強くなるにつれ、彼女たちの強さも測れると思うっス。』

こうして永成と銀梅は1回戦を突破した。

反省なしと半年振り

八幡 side

Aブロック1回戦の戦いを見ていたが、あまりにも酷すぎる内容だった。まるで試合になってなかった。

陽乃「なにあれ？雪乃ちゃん何もしてないじゃん。無駄試合にも程があるよ。」

八幡「どのペアがあたってとしても勝てる試合でしょうね。正直言って永成たちが可哀想ですね。あんな奴らが初戦っていうのが。」

陽乃「八幡くんもそう思う？私もあれが妹だなんて信じられないし、界龍に入学してこなくて良かったよ。そしたら私とんだ赤っ恥をかいてるよ。」

まあ俺たちとしてはどうでもいいが、奴らはなんか言ってくるだろうしな。陽乃さんがこういうのも当然か。

八幡「まあ、奴らの事は忘れましょう。俺たちの相手ですが、2連続でアルルカントの可能性が高いですね。」

陽乃「初戦もアルルカントだからね。その次も多分だけど、代理出場の2人だろうしね。そうとしか考えられないしね。」

陽乃「それに、1回戦は私に任せておいてよ。余裕で倒してきちゃうから。憂さ晴らしもしたいしね。」

おそらくそれがメインになるな。

記者会見で色々聞かれそうだからな。

八幡「任せますが、あんまりやり過ぎないでくださいね？程々に。」

陽乃「分かってるよ、単純な裏拳程度にするから大丈夫。」

……ホントに頼みますよ？

八幡 side out

銀梅 side

勝利者インタビューも終わって今から尊師のところへ行くところ。

銀梅「それにしても永成？ 貴方なんであれだけで済ませちゃったの？」

永成「さあね、私にも分からないよ。私は倒せばそれでよかったからね。」

んー尊師とは違う方向だけど、永成も優しいんだよねー。私はそんなに優しく出来ないよ。あの2人はあろう事か尊師を侮辱したっていうのに。

永成「……文句でも言いに来たのかい？」

そこに居たのは、さつき試合で戦った雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣、そしてこの前いた自称尊師の妹だった。

結衣「……まだゆきのんに謝ってもらってないからそうしてもらおうと思つて。」

銀梅「何？ 私の方を見てるようだけど、私がかした？」

結衣「ゆきのんの事、頭が悪いって言ってたじゃん！ それを謝つてよ！」

銀梅「それなら私も言ったわよね？ 先ずは尊師に謝つて？」

結衣「はあ!? 何でそこでヒッキーが出て来るし!? 関係ないじゃん！」

小町「そうですよ！ 今の話にゴミイちゃんは関係ないです！」

この子たち……人の話を聞く気がないのかな？段々イライラしてきたわ。

永成「でも、先に尊師の話を持ちかけてきたのは君たちだよ？関係ないは全く違うと思うんだけど？」

雪乃「それとこれとは話は別よ。それに『pipipi…pipipi…』……」

突然永成に通信が入ってきた。

永成「少し失礼するよ。」

YESのボタンを押して通信に出てきたのは、尊師・比企谷八幡だった。

八幡『よつ、1回戦突破おめでとさん。』

永成「尊師っ!？」

えっ!?なんでこのタイミングで!？」

雪乃「尊師?まさか比企谷くんかしら?」

小町「えっ!?ゴミイちゃん!？」

由比ヶ浜「私たちにも話させてよ!」

本当にうるさいわね。通信中だっていうのに静かに出来ないのかしら?」

八幡『……なあ永成、少しタイミングを間違えたか?』

永成「いえ、そのままです。どうぞお話してください。外野は銀梅が抑えてくれますので大丈夫です。」

八幡『いや、一応突破おめでただけだったんだが、奴らと揉めるみたいだな。それも俺の件でか?』

永成「……………ええ、まあ。」

八幡『そうか、まあ用件も特に無いしな。お疲れさん、4日後の次も頑張れよ。』

雪乃「待ちなさい! 私たちには話が山ほどあるのよ!」

結衣「そうだよ、色々説明してもらうんだからこっちに来るし!!」

小町「ゴミイちゃん! 洗いざらい説明してもらおうからね!」

永成「ちよつ、君たち! 何するんだい!」

何なの貴方たち? 人の通信の邪魔をするだけじゃ飽き足らず、割り込むなんて信じられないわ。常識あるのかしら?

3人「……………誰?」

八幡『……………目が変わっただけでその反応か。相変わらずみたいだな。』

八幡『まあいい。お前らに話す事なんてねえし、説明する義理もねえ。ましてや、過去の事を未だに引きずってるような奴らなんてどうでもいいからな。』

結衣「はあ!?! 訳分かん「そろそろどきなさいよ!」わあっ!?!」

私はもう我慢ならず、3人を永成から半端強引に離した。

永成「失礼いたしました尊者。ご迷惑をおかけしました。」

八幡『気にするな、じゃあ今度は俺たちの試合やるから早く来いよ? じゃあな。』

そして尊者との通信は終了した。

永成「……………君たちには本当に呆れるよ。まさか人の通信にまで邪魔をしてくるなんてね。《鳳凰星武祭》が行われてなかったら間違いな

く潰していたのに、残念だよ。」

銀梅「私たちからしてみれば、貴方たちなんて準備運動にもならないわ。尊師なら目を隠しても瞬殺出来るわ。」

雪乃「彼が私たちを？面白い冗談ね。彼が私たちに勝てるわけないじゃない。」

永成「……………まあ今の内だよ、そう言っていられるのは……………銀梅、行こう。」

尊師、貴方がおっしやられていた

『人は道を踏み外した瞬間から、その全てが邪道なのだ。』

とは、彼女たちがそうなのですね？意味がよく分かりました。

雪ノ下師姉、あの人はとても貴方の妹とは思えない程、自分勝手な人なのですね。そのお友達も。

とてもまともには思えません。

血の滾り

八幡 side

まさかあいつらがいたとはな……銀梅たちには苦勞をかけたな。また後で謝っておくか。

陽乃「雪乃ちゃんたちの事考えてるの？」

八幡「ええ、俺に話があるだの何だの煩かったですけどね。」

陽乃「あつはは！まあ気にすることないよ。どうせ八幡くんの事を理解してるって思ってるつもりだけど、1%も理解してないんだからさ。君は変わった。私が全く予測出来ない早さで、しかも良い方向に。雪乃ちゃんたちが理解してなくても、私たち界龍は皆八幡くんの味方なんだから。」

……そうだった、俺はもう1人じゃなかったよな。頼れる仲間がいるよな。

八幡「陽乃さん、やっぱ俺も戦っていいですか？少し……血が滾ってきました。」

陽乃「ふふふ……良いねえ、八幡くん今凄い生き生きした顔してる。うん、いいよ！」

さて……行くか！

八幡 side out

—————

梁瀬『皆さん、お待たせしました!!今大会一の波乱が予想されるHブロックの1回戦です!いやー大歓声が止まりませんねー!』

チャム『このHブロックには界龍の序列2位、比企谷八幡選手とアルカントの代理出場ペアがいますからね。興奮しない方がおかしいっす。』

梁瀬『それでは!次のペアの紹介!界龍第七学院、比企谷八幡&雪ノ下陽乃!!!』

チャム『雪ノ下選手は界龍の序列4位で大学部所属。そして入学半年で序列3位を勝ち取った実力者ッス。一方の比企谷選手っスけど、僅か1ヶ月で序列2位にして六花最強とも名高い【覇軍星君】を倒した超新星ルーキーっス。今のところあまり情報はないっスけど、おそらく桁違いの動きを見せてくれる事間違いなしッス。』

梁瀬『なるほど、今大会の最有力候補というわけですね!これは期待が高まるっスね!』

八幡「候補なんてどうでもいい、ただ優勝を目指すだけだ。」

陽乃「流石尊師♪目だけじゃなくなつて、言う事もかっこいい♪」

八幡「からかわないでください………相手は銃型煌式武装か。なら、1対1だな。まあ出方にもよるがな。」

陽乃「八幡くん、始まったら左右に分かれよつか。その方が戦いやすいでしょ?」

八幡「そうですね、なら相手もそのまま正面にいる奴を相手するって事でいいですか?」

陽乃「オツケー!」

梁瀬『それでは参りましょう!《鳳凰星武祭》予選Hブロック1組バトルスタート!!』

八幡と陽乃は一斉に左右に分かれたが、相手は2人掛かりで来た。それも八幡の方に銃口を向けて。

梁瀬『おおーっと！イーデル選手とハンディ選手、いきなり比企谷選手を狙いにきました！雪ノ下選手は無視か!?』

チャム『比企谷選手の能力が分からない以上は2人で行った方が勝率は上がるっスからね、これは賢明な判断だと思うっスよ。』

八幡「はあ……2人共俺かよ。」

陽乃「八幡くーん！後よろしくねー!」

八幡（やつぱりか……まあいいけどよ。）

イーデル「食らえ!!」

ハンディ「これでもどうだ!!」

アルルカントの2人は一斉に銃から火を吹かした………のだが八幡は動かない。

そして、八幡に銃弾は直撃した………

のだが、当の八幡は黒い靄が身体から出だと思ったら、そのまま消えてしまった。

イーデル「っ!?ど、何処だ!？」

ハンディ「な、何だ今のは!？」

八幡「お前らよお、前だけ見過ぎだ。もつと周りにも気を巡らせろ。」

2人『っ!』

八幡「懐がガラ空きなんだよ。銃を持ってる時は近付かれたら終わりなんじゃねえのか？」

すると八幡はまた消えてしまった。

……いや、違う。今度は見えない速さで動いていた。肉眼ではとても追いつけない動きだった。

そして八幡が2人の正面に立っていたが、2人は銃を構えていなかった。正確には構えられないのだった。

八幡が2人の正面に立った時には、アルルカントの選手である2人の校章を指で挟んでいたからだ。

八幡「これで終わりだ。」

パキンッ！

『校章破壊』

『End of duel』

梁瀬『試合終了く!!勝者！比企谷八幡&雪ノ下陽乃!!これは凄い！動きが目で追えませんでした!!』

チャム『私も見えなかったっス。まさかここまで速いとは思ってなかったっス。最初消えたのは能力だと思うっスけど、後半の動きは身体能力によるものだと思うっス。あのスピードは驚異っスね。』

—————

陽乃「流石だね。それにしても出鱈目なスピードだね。」

八幡「別にいいじゃないですか。あれでも本気じゃないんですよ？」

陽乃「分かってるけどさ、なんか凄い差を感じるよ。暁彗と出た方がよかったんじゃない？私なんかよりも。」

八幡「暁彗は多分断ったと思いますよ？星武祭に興味なさそうですね。」

陽乃「……まあそういう事にしといてあげるよ。勝利者インタビューはどうする？」

八幡「適当でいいですよ。有る事無い事話しても問題ないですよ。」

陽乃「じゃあ八幡くんが最初、私だけに戦わせようとした事も話して大丈夫？」

八幡「……今度何か作りますから許してください。」

陽乃「楽しみにしてるね♪」

抜け目ないな、この人は。

また一本取られちゃったよ。

この瞬間……

八幡 side

1日目の星武祭も終わり、俺は今帰路についている。向かっているのは界龍の寮ではなくシルヴィの家の方だ。シルヴィも今日の開会式に参加していたが、俺と話す余裕が出来ずに1日を過ごしていたからな。

それに、帰ってきたら目一杯甘やかす約束もしてるしな。多分シルヴィも俺が帰って来る事予測して玄関にいそうだな。まあ、もう着いちまったけどな。

八幡「ただいま。」

すっかり言い慣れたこの言葉。もう『お邪魔します。』とは言えなくなっただな。

そんなことを思っていると、奥の方から床を強く蹴って走る音が聞こえてきた。

シルヴィア「おかえりっ、八幡くんっ!!!」ダキッ!!

八幡「おお、シルヴィ。ただい……いや、これは俺が言う言葉じゃないな。」

シルヴィア「ただいまっ、八幡くん!」

八幡「ああ……おかえり、シルヴィ。」

強く抱き着つくシルヴィだが、俺はそれを優しく抱き締めてシルヴィが満足するまでそのままの状態でいさせた。俺も少しだけ、シルヴィアを堪能したいという疾しい考えもあるが、別にいいよな? だって彼氏だし。恋人の特権だろ?

――居間――

シルヴィア「んっ／＼／＼……」

八幡「……んはあ、悪かったなシルヴィ。長い間寂しい思いさせちまって。」

シルヴィア「……うん、大丈夫。やっぱり通信だけじゃ限界があったね。次のツアーではもっと対策を練らないとね。」

八幡「ああ、そうだな。けど、どうするんだ？」

シルヴィア「やっぱり八幡くんが私たちのツアーについてくるしかないよ！そうしないと私が寂し過ぎて死んじゃうもん！」

家に帰ってきてから20分ちよい、シルヴィは既に甘え全開だった。俺の膝の上に座りながらキスをしてきた。まあ俺としても嬉しいからいいんだけどよ。

それとシルヴィ、3ヶ月会わないだけで人は死にません。

シルヴィア「……ねえ八幡くん、暫くは一緒にいられるね。私、嬉しいよ。」

八幡「……意外に長かったよな。あつという間だと思ってたが、待つつて結構長く感じるものなんだな。」

シルヴィア「そうだね、思い知ったよ。だからさ、今度は八幡くんが忙しいと思うけど、極力一緒に過ごしたいんだけど……いいかな？」

八幡「ダメな理由があると思うか？俺の方から土下座で頼もうと思ってたよ。嫌でも一緒に居てやるよ。」

シルヴィア「えへへ……嬉しい♪」ニコッ！

までも抱き着いてきた。こんな時に気の利けた事でも言えれば良いんだが、全く思い浮かばない上にシルヴィが可愛過ぎる。こんな人が俺の彼女なんだもんなあ……何があるか分からないもんだ。

八幡「陽乃さんに明日はオフにするって言つとこうかな？」

シルヴィア「陽乃さんに？どうして？」

八幡「そんなのお前と過ごす時間が欲しいからに決まってるだろ。それともシルヴィは欲しくないの」「八幡くん、何が何でも勝ち取ってね♡」か……愚問だったな。」

これはマジで愚問だったな。シルヴィがこんな甘い内容を欲しがらない訳がない。

八幡「まあなんとかしてみる。」

シルヴィア「うん♪それと1回戦見てたけど、凄いね、私八幡くんが全然見えなかったよ。」

八幡「あれについて来られるのは、精々曉彗と星露くらいだろうな。まあ界龍の中しか実力が分からんから界龍基準だけど。」

シルヴィア「多分だけど、他学園であの速さを追えるのはアーネストとオーフェリアさんくらいだと思うよ？まず私で無理だから。」

オーフェリアか……確かに強いが、あの速さに目が慣れているとはあまり思えないが。

シルヴィア「まあ現役の学生で八幡くんの速度に反応出来るのは、この4人くらいだろうね。」

八幡「虎峰やセシリーも何とかってレベルだから、まだ完璧じゃないしな。」

シルヴィア「よしっ！じゃあ堅苦しい話は終わりにして、八幡くんお腹減ってるでしょ？ご飯作つてあるから一緒に食べよう♪」

八幡「おう、そうだな。シルヴィの料理は美味いから楽しみだ。」

それから俺たちは一緒に夕食を済ませて、一緒に風呂にも入ってから、寝室にあるベッドで寄り添っている。

八幡「こうやって一緒に寝るのも久しぶりだな。こうして思うと、確かに1ヶ月は長かったな。」

シルヴィア「明日はちゃんと休みをもらってね？八幡くん。私凄く楽しみにしてるんだからね？八幡くんとのデート。」

八幡「……………参ったな、こりやどうやら後には引けないようだな。俺の彼女はどうかやら彼氏の勝利を疑ってないようで。」

シルヴィア「えへへ……………」

八幡「まあやるだけやってやるよ、だが、今日はお互いゆつくり休もう。なっ？」

シルヴィア「うん、そうだね。」

シルヴィア「じゃあさ、お休みのキスもしてくれるんだよね？／／

／ウワメツカイ

八幡「……………ああ、いいぞ。」

ちくしょう……………上目遣いは反則だぜそれは。

八幡「……………また明日な、シルヴィ。」

シルヴィア「また明日ね、八幡くん。」

2人「んっ……………」

2人はお互いの唇に優しく触れてから、お互いに抱き合いながら、深い眠りについた。

2人の休日 その①

シルヴィア side

まだ時差ボケが残っているのか、早く起きちゃった。早く起きたといっても、まだ朝の6時でちょうどいい時間でもある。

そして目の前に私の彼氏、八幡くんが寝ていた。

シルヴィア「ふふふっ♪昨日もそうだったけど、目の前に八幡くんがいるだけでこんなにも幸せになれるんだなあ。」

やっぱり3ヶ月会えなかった影響かな？

八幡「……ん？んん……」

あらら、もしかして起きちゃったかな？

八幡「……んあ？おお、早いなシルヴィ。おはよう。」

シルヴィア「うん、おはよう。いつもなら起きてるけど、今日はもうちよつとこのままでもいいよ、ね？」

八幡「同感だ、俺も今は動きたくない。というより、お前から離れたくない。」

シルヴィア「っ／＼……も、もう！そんな事を面と向かって言わないでよ……／＼／」

八幡「……悪かったよ、まだ寝ぼけてんのかもな。でも今言った事は嘘じゃないからな？」

シルヴィア「ふふっ♪分かってるよ。私も八幡くんから離れたくないもん♪」

私は無意識に八幡くんの方に近寄り、胸に顔をうずめた。ああ、コ

レ麻薬の一種かも。

――30分後――

私たちは一気に目が覚めてこの30分間の事を思い出していたけど、別に騒ぐことはなかった。これが半年前だったら、私きつと発狂してるかもね。

八幡くんは今朝食を作ってくれている。私？私は今……

シルヴィア「んんん♪」ギュー！

八幡「……………」

八幡くんの背中に抱きついていて。だって八幡くんから離れたくないんだもん！

八幡「…………そろそろ出来るが、席はどうする？向かい合わせか？それとも隣か？」

シルヴィア「もちろん八幡くんの隣でっ！」

八幡「分かったよ。食べさせるのは結構だが、スープ類は勘弁だぞ？」

シルヴィア「だ、大丈夫だよ…………く、口移しすればなんとかなるから／／／／／」

八幡「…………いや、本当にやめような？朝からそれはキツイって。」

……………そうだよね、私も思ったよ。

シルヴィア「はい、あーん♪」

八幡「あむっ……………うん、美味しいな。」

シルヴィア「八幡くんの料理、本当に美味しいから自信なくしちゃうんだよ？」

八幡「俺からしてみれば、シルヴィの料理の方が美味しいと思うんだがな。」

シルヴィア「私はオリジナルのスパイスを使ってるからね。」

八幡「ほう？差し支え無ければ教えてくれないか？そのスパイス。」

シルヴィア「勿論、愛に決まってるよ！」

むしろそれ以外に何があるのかって聞きたいくらいだよ。あつたら教えてね？

八幡「なるほど……………んじや聞きたいんだが、俺の料理に愛はこもってるか？」

シルヴィア「うん、凄く伝わってくるよ！今こうしてる時だって伝わってるよ。」

八幡「……………なら良かった。」

シルヴィア「うん♪」

——数十分後——

シルヴィア「食べ終わったのはいいけど、まだ出歩くには早すぎる時間だよね。観光客なら歩いて回ってそうだけど。」

八幡「そうだな……シルヴィ、俺に何かして欲しい事はないのか？」
シルヴィア「それはもういっぱいあるよ？でも、八幡くんが今してくれるかどうか……」

八幡「余程の事でなければいいぞ？」

シルヴィア「……じゃあ言うよ？昨日みたいに抱き締めながら撫でて欲しいんだけど……ダメかな？／／／」

八幡「なんだそんな事か、今のこれじゃ物足りないのか？」

八幡くんは繋いである自身の左手と、私の右腕を確認するように尋ねた。

シルヴィア「これも良いんだけど、あれが気に入っちゃってさ／／／」

八幡「そうか……じゃあ来いよ。」グイッ
シルヴィア「わあっ!？」

八幡くんは私の手を離してからそう言うと、私を持ち上げて自身の膝に乗せた。

シルヴィア「お、お邪魔します／／／／／」

八幡「おう、ゆっくりしてけ。」

そう言い終えると、片方の手を私の腰に、もう片方の手で私の頭を撫で始めた。

シルヴィア「なんか……また寝ちやいそうになるよ。それくらい安心する。」

八幡「寝てもいいぞ。ずっとやってやるからよ。」
シルヴィア「えへへ♪」

他愛ない話だけど、それすらも幸せに感じる。もしかしたら私、八幡くんと何をしてても幸せに感じるんじゃないかな？

シルヴィア「寝るのは勿体無いから、横になる程度にしておくよ。八幡くんも横になっちゃうけど、それでもいいかな？」

八幡「ああ、いいぞ。」

そして私たちは、1時間半前と同じ体勢になっていた。今度は八幡くんが私を抱き締める形になってる。

シルヴィア「やっぱり良いよこれ、八幡くんを全身で感じられる。」

八幡「それは俺も同じだ、きつとこれはこの先何度やっても飽きないだろうな。」

シルヴィア「……本当に眠くなってきちゃった。八幡くん、寝ていいかな？」

八幡「そうか、なら好きなだけ寝ればいい。まだツアーの疲れが取れてないんだろう。」

シルヴィア「うん……10時になったら起こしてね？八幡くんとデートしたいから……」ウトウト

八幡「ああ。」

八幡くんにそう言い残してから、私は心地いい感触を楽しみながら眠りについた。

2人の休日 その②

八幡 side

八幡「そういう訳ですので、今日は個人の技術見直し兼お休みにしようと思ってるんですが、どうでしょう？」

陽乃『いいよ、次は自律式擬形体^{パベツト}だからね。八幡くんも準備しておいてよね？あれだけ圧倒的な試合見せられたんじゃ、手なんて抜けないんだから！』

八幡「そんな事分かってますよ。まあ忠告として受け取っておきます。ありがとうございます。ではまた2日後に。」

陽乃『うん！事前練習頑張ろうね！』

そして通信が切れて、静寂が訪れる。

にしても、すげえ気持ち良さそうに寝てるな。流石に抱きつかれたまま通信なんて出来ねえから解いたが、それでも片方の手は繋いだままだ。

このままこうしてても良いんだが、そろそろ時間だしな。仕方ない。

八幡「おーい、シルヴィ。そろそろ時間だぞ。起きてくれ。」

シルヴィア「……すう……すう……」

八幡「……グッスリだな。さて、どうやって起こしてやろうか。」

別の女が出来たとかは絶対に駄目だ。俺はシルヴィを裏切らない。頬を叩くもなんかインパクトに欠ける。ん……

あつ！そうだつ！

ホワイトデーの時に飴の舐め合いをしてたな……試しにそれを

振ってみるか。

八幡「シルヴィ、今起きてくれたらホワイトデーにやった飴の舐め合いをしてやろうと思ってるんだが……」

シルヴィア「……………」

まあ、反応するわけねえか。

シルヴィア「……………本当？」

八幡「……………え？」

シルヴィア「うん、起きたよ？またやってくれるんだよね？」ムクリ

八幡「あ、あれ？寝てたんじゃ？」

シルヴィア「うん、寝てたよ。でも八幡くんが私に話しかけたような気がしたからすぐに起きたよ？それで、してくれるんでしょ？私起きたよ？」

こいつ……………絶対寝ぼけてんだろ。あまりにも大胆になり過ぎだろ。

シルヴィア「やってくれないとやだよ？私淒くしたいよ／／／／／」ダキツ

八幡「お、おい／／／」

シルヴィは俺に抱きついてきた。くそ、こんな事迂闊に言うんじゃない。なかった。

シルヴィア「……………八幡、男に二言はない……………だよな？」

八幡「うっ……………わ、分かったよ。だけど、1回だけだぞ？」

シルヴィア「じゃあ早速……………ね？」

俺はこの時思った。軽はずみな言動は慎むべきだと。最愛の恋人

の前でも。

——商業エリア——

八幡「やっぱり歩きで来ると、結構あるんだな。家から商業エリアって……なあ、もういいだろ？あの時はしょうがないだろ？寝ぼけてたんだからよ。」

シルヴィア「うう／＼／／／／／」

シルヴィアさんは現実に戻って絶賛羞恥中だった。あれだけ濃いのをやればな。

八幡「もう考えるのはやめろって。どうしようもないんだから。」

シルヴィア「だって、寝ぼけていたとはいえ、あんな……あんな……うう／＼／／／／」

こりやダメだ、全く立ち直れてない。しかもタチの悪いことに此処は商業エリア、人の目もある事だ。

八幡「……あー、分かった。じゃあこうしよう。将来のための予行練習だと思えばいい。それならまだいいんじゃないか？」

シルヴィア「………将来の？」

八幡「お、おう。」

シルヴィア「………」

どうだ？これで無理なら俺もう手の打ちようがないんだけど？このまま歩くしかなくなっちゃうんだけど？俺やだからね？

シルヴィア「……う、うん／／／それならまだ恥ずかしくないかも……むしろ嬉しい／／／」

あの……聞こえてるんですけど？

八幡「どうだ？落ち着いたか？」

シルヴィア「うん、もう大丈夫。」

八幡「なら良かった。それでどうする？俺は何も考えてなかったんだが、前行った時に出来なかった事をするとかか？」

シルヴィア「プリクラとカラオケかな？まずはその2つにしてみようか！」

八幡「決まったな、じゃあ行くか。」

——a m u s e m e n t a r c a d e——

シルヴィア「此処に来るのも半年振りだね。懐かしいなあ。」

八幡「この時の俺たちって、ぎこちなかったよな。ウブ過ぎたっていうか敏感だったっていうか……」

シルヴィア「ふふふっ♪そうだったね。手を繋ぐ時もドキドキしてたなあ。」

今となつては良い思い出だな。

八幡「今度は真っ直ぐプリクラに行くのか？それともまた回ってくのか？」

シルヴィア「折角だし回っていいこうよ。何かあるかもしれないしね。」

——数分後——

シルヴィア「八幡くんがこんなのに興味あるなんて知らなかったよ。」

八幡「俺も触るまでは興味なかったからな、結構良いもんだぜ？ス
○イーズ。」

シルヴィア「あはは、変な感触っ！」

低反発と高反発があるからな、俺は高反発の方が好きだな。

シルヴィア「さて、じゃあ本命のプリクラだね！行ってみようっ！」

八幡「おおう。」

——プリクラ前——

シルヴィア「前は此処で変な雰囲気になってやめたんだっけ？」

八幡「ああ、確か俺がシルヴィに可愛いつて言っただっけな。」

シルヴィア「それで私たち顔赤くしながら此処出たんだよね。今考えたら本当に面白いなあ、あの時の私たちって。」

面白いどころじゃないぞ？俺なら普通に腹抱えてるけどな。

シルヴィア「でも、こうやって写真撮るのって初めてじゃないかな？」

八幡「……そうだな、確かに2人で写真を撮った事なんて今まで無かったな。」

シルヴィア「八幡くんは写真あまり好きじゃないから仕方ないよ。でも今日は撮ってもいいよね？」

八幡「ん？勿論だ、シルヴィと一緒にだからな。」

シルヴィア「えへへ／／じゃあ中に入って早速撮ろっかっ！」

——10分後——

八幡「目すげえデカイな。」

シルヴィア「それがプリクラの特徴でもあるからね。」

八幡「俺がこんな事書くななんてシルヴィは予想してたか？」

シルヴィア「誰も予想出来ないよ！八幡くんが『相思相愛』なんて

書くのなんて！」

そんなに意外か？まあ元々の性格やこの顔もあるからな。

シルヴィア「でも嬉しいよ。こんな風に書いてくれるなんて。」

八幡「そんな表現しか出来ないけどな。『大好き』とかは、正直いつて無理だ。」

シルヴィア「八幡くんはこういうのが似合ってるよ。それにこっちの方が本気っていうのが伝わってくるしね。」

八幡「……写真は嫌いだが、これなら持つていられそうだ。」

シルヴィア「私も常に持つてることにするよ、記念品だからね。じゃあそろそろカラオケに行こうか！」

八幡「ああ、歌うのも半年振りだな。」

シルヴィア「また聴かせてね？八幡くんの歌声！」

※プリクラに写っているシルヴィアは変装してない方のシルヴィアです。

——カラオケ——

八幡「♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪」

……………

八幡「はあ、まあこんなもんか。」

エイトさん『W i s h i n g』

得点 96点

シルヴィア「流石だね。私も負けていられないな。」

.....

H・Sさん『私のクリスタル』

得点 94点

シルヴィア「むう、あとちよつとだったのにい。」

八幡「だが、やっぱりお前の歌は良いな。聴いていて気持ちが良い。」

シルヴィア「ありがとう！八幡くんさ、私の聴いた事なさそうな曲歌ってみてよ！」

八幡「ん、そうだな……これか？」

『Outgrow』

シルヴィア「へえ、聴いた事ないなあ！なんか楽しみ！」

八幡「ヒカリ♪♪」

.....

エイトさん『Outgrow』

得点 92点

シルヴィア「なんか鳥肌が立ったよ。八幡くんってこういうのも歌えるんだね。」

八幡「少しだけけどな、嫌いではないな。」

シルヴィア「よおし！次は八幡くんの記録抜いてやるぞ！」

.....

H・Sさん『Authentic symphony』

得点 94点

シルヴィア「ああ〜！いけたと思ったのにい〜！悔しい〜！」

八幡「ははは……後もうちよいだったな。次頑張れ。」

シルヴィア「でも残り時間もそんなにないから、最後はデュエットで締めない？」

八幡「曲はやっぱ『azurite』か？」

シルヴィア「うん！じゃあいつてみよう！ミュージック、スタート!!」

…………ノリがすげえ良くなったな。

……………

エイトさん&H・Sさん『azurite』

得点 98点

八幡「凄えな……こんな取れるもんか？」

シルヴィア「私たちの相性が抜群な証拠だね！うん！やっぱり良いよ！」

まあ確かに抜群ではあるよな。

シルヴィア「此处出たらどうしよつか？私のオススメのお店があるんだけど、そこでランチにする？」

八幡「ああ、いいぞ。シルヴィと外食も半年ぶりだよな。」

シルヴィア「今日は半年前にやった事が多いね！偶然にしては出来すぎてるって思えるくらいだよ！」

確かにな。けど、そうだったとしても楽しむだけだよな。

2人の休日 その③

—————

2人はカラオケを出た後、シルヴィアのオススメ料理店に向かった。それ程知れ渡っているわけではないらしく、謂わば隠れた名店という所である。

そんな2人だが、相変わらずのバカツプルぶりに周りの人々は2人に嫉妬や羨望の眼差しを向けていた。

彼女の方は彼氏の腕に抱きついて幸せそうな雰囲気在全開にしており、

彼氏の方は彼女のしている事には無反応だが、時折微笑みかけている。

この場にいる人々にとっては、この彼氏彼女のやり取りは理想そのものである。

だが、人々は知らない。ここにいるのが、

世界の歌姫にして六花最強の魔女とも呼び声高い、シルヴィア・リユーネハイムなのだという事を。

八幡「んで？その店つてのはこの辺りなのか？」

シルヴィア「うん、もう着くよ。」

八幡「そうか。」

何気ない会話だが、そこにも雰囲気があった。シルヴィアの方にも目を惹かれる人もいるが、八幡の素っ気ない返答にも羨ましく思う人もいた。

八幡「因みにそこには何があるんだ？お前のオススメって言うんなら、良い店なんだろうけどな。」

シルヴィア「一言で言うならチーズフォンデュのお店だよ。具材も豊富だから、初めて行った時に気に入っちゃったんだ。」

八幡「ほう、チーズフォンデュか……美味そうだな。少し楽しみになってきた。」

シルヴィア「あははっ♪私が食べさせてあげよっか？」

八幡「もしかしたら頼むかもな。」ナデナデ

シルヴィア「ふふっ♪」

最早バカップルでは生温いくらいのイチャラブ激甘な2人である。それを見た周りの人々は、自動販売機に行って無糖のコーヒーを購入する程であった。

—————

八幡 side

——Fromage Complete——

シルヴィア「着いたよ！此処が私のオススメ、チーズフォンデュ専門店だよ！因みにあの店名を和訳すると、『チーズいっぱい』って言うんだって！」

うん、凄く伝わったよ。看板も匂いもチーズでいっぱいだ。この店主どんだけチーズ好きなの？

八幡「それはいいが、この店のフォンデュって選べるのか？俺ってワイン入ったのって食えない事はないんだが、あんまり好きじゃないんだが……」

シルヴィア「大丈夫だよ、それは事前に店員さんから聞かれるから。」

よし、なら安心だ。

シルヴィア「よし！早速店内へGO！」

――店内――

店内へと入ってから席まで案内され、お冷やをもらって今に至る。

八幡「いや……チーズだなあ。」

シルヴィア「うん……チーズだねえ。」

チーズに溢れてんなあ。なんていうか、匂いすらもチーズ。

シルヴィア「凄いチーズの匂いでしょ？」

八幡「匂いだけで満腹になるってこういう事なんだな……」

シルヴィア「まあまあ、そんな事言わないで早く注文しよう？」

それからはシルヴィアが一度来た事があるからか、スムーズに進み、俺が予測していた時間よりも早く料理がきた。

まあ、食事の時は決まってる事がある。それは……

シルヴィア「はい八幡くん、あーん♡」

これだ。シルヴィは食事となると、何処でも構わずこうする癖がついてしまったのだ。家で何度もやってるからか、あまり視線も気にしなくなっているのだろう。

八幡「あーん。」

かく言う俺も今更恥ずかしいなんて感情は一切無いんだがな。だから店でも普通にこうして口を開けられる。

シルヴィア「どう？美味しい？」

八幡「ああ、美味しい。」

シルヴィア「そっかあゝそれは良かった！ここのチーズフォンデュ、本当に美味しいですよ！」

八幡「お前がオススメっていう理由が分かった気がする。チーズなのにしつこくないし、味が残ってるから食べやすいな。」

シルヴィア「気に入ってもらえたのなら何よりだよ。」

それからシルヴィアとは何度か食べさせあいつこをしてからこの店を出た。

シルヴィア「さあてゝお腹も膨れたし、今度は何しよつか？」

八幡「これといってする事もなくなつたな。今やってる《鳳凰星武祭》の試合を見るつていつたらリフレツシユやデートとは違つてくるからな。他のにしないとな。」

シルヴィア「えへへ、嬉しいなあ。八幡くんからデートって言つてくれるなんて。」

八幡「ん？　そうか？」

シルヴィア「うん、だって八幡くんってあんまり自分からそういうの言わないでしょ？」

確かにそういう単語は好んでは使わないな。

シルヴィア「八幡くんなら『お出かけ』とか『くに行く』とかそういう言葉を使いそうだからさ。」

八幡「まあ、確かにそうだな。」

シルヴィア「でも本当にどうしよつか？」

確かになあ……他になんかあつたつけなあ？　そう言われると、本当に無いなあ。今は星武祭で何処もかしこも大賑わいだからなあ……

「……………比企谷くん？」

「……………マジ？」

「……………八幡？」

「なんと!? 八幡だとっ!？」

振り向いた時にそこにいたのは、総武高での同級生で星導館の制服を着ている海老名、戸部、戸塚と、レヴォルフの制服を着てる材木座がいた。何でこいつらが？

再会と真実と〇〇

八幡 side

八幡「……………」

戸塚「八幡っ!! やつと会えたよっ!!」

海老名「比企谷くんっ!」

戸部「マジで比企谷くんだべっ! うわーカッコよくなり過ぎっしょっ!」

材木座「久しいな八幡っ!!」

元同級生共は俺の方へと近寄って、顔をマジマジと見ていた。確かに目は変わったが、それ程変わったところなんてないと俺は思うんだがな。

八幡「……………確かに久しぶりではあるが、俺は今連れがいてな。お前らとは話している余裕がない。」

戸部「連れって……………まさか隣にいる茶髪の美人さん!？」

八幡「他に誰がいる?」

海老名「へえ、比企谷くんにも彼女が出来たんだね。」

材木座「なぬ!? 見損なつたぞ八幡っ!! 貴様我を置いていくつもりか!？」

知らねえよ、お前と一緒にすんな。

戸塚「えっ!? そうなの八幡!? その人って八幡の彼女なの!？」

……………返答に困るな。

するとシルヴィが……

シルヴィア「八幡くん、この人たちに約束できるかどうか聞いてみてよ、秘密は絶対に言わないかって。」コソコソ

八幡「お前……言うつもりか？」コソコソ

シルヴィア「八幡くんだって困ってたでしょ？どう言おうか。」コソコソ

八幡「……………ああ。」コソコソ

シルヴィア「なら、彼らに聞いてみて。」コソコソ

八幡「……………分かった。」コソコソ

いっちょ博打でもやるか。

八幡「なあお前ら、秘密にしろって言われたらそれを死守する事って出来るか？」

4人「え？」

八幡「こいつは俺たちの関係を喋ってもいいって言ってる。それを誰にも言わないと約束出来るかと聞いたんだ。」

八幡「絶対だぞ？」

4人「っ!!?」

まあこれくらいの威圧ならいいだろう。

戸塚「僕と八幡は友達でしょ?それくらいならいくらでも守ってあげるよ!!それに、また遠くに行かれたら嫌だから。」

戸部「……うん、比企谷くんがマジな声してたべ。男としてこれ聞いた以上は、絶対に喋らないべ。」

海老名「……約束するよ。絶対に誰にも言わない。」

材木座「八幡よ、我にそんな奴がいると思ってるのか?」

……まあ、いいだろう。

八幡「なら俺の家に来い、そこで話してやるからよ。」

海老名「比企谷くん家なんて持ってたんだ……凄いね。」

八幡「……まあな。」

後でシルヴィに謝ろつと。

——シルヴィア宅——

戸塚「立派な家だね。」

戸部「デ、デカイベ……」

海老名「もう別荘だね。」

材木座「此処で小説の原稿を「書かせると思ってたのか?」……すいませんでした。」

シルヴィア「あはは……」

八幡「まあいい、入るぞ。」

戸部「外も凄ければ中も凄えべ。」

八幡「まあ座つてろ。今お茶でも出してやるから。」

材木座「うむ、頼んだぞ。」

八幡「1人はお茶はお茶でもお茶漬けだな？」

材木座「……すいません。」

折れんの早えよ。

流石にこの夏に紅茶はどうかと思ったから、冷茶にした。

シルヴィア「……それじゃ再開しようか。私と八幡くんの関係の話だったね。」

シルヴィア「君たちの予想している通り、私と八幡くんは恋人同士だよ。」

材木座「やはりそうであつたか！おのれ八幡！裏切つたな！」

八幡「なあ？いい加減そのうざつてえのやめろ。俺は真剣なんだが？ふざけてんなら今すぐ帰れ。」

材木座「す、すみません。」

シルヴィア「……続けるよ。でも秘密にしたいのはここからなの。いい？此処から先を見たら、絶対誰にも言わないでね。」

戸塚「そんなに重要な？」

シルヴィア「公にはしたくないんだ。私個人としては凄く言いたいのだけどね。」

戸部「覚悟は出来てるべ。思いつきり来るっしょ！」

海老名「うん、私もいいよ。」

材木座「今度は何も言わん！」

八幡「……………」コクッ

シルヴィア「じゃあ……………いくよ。」

シルヴィアが自分の耳あたりに手を置いて変装を解除した。本当の姿をしたシルヴィア・リユーネハイムの登場だった。

シルヴィア「これが私の本当の姿なの。」

4人「……………」ポカーン

全員目を開いたまま固まっていた。当然か、目の前に世界の歌姫がいるんだからな。俺はこうならなかったけどな。

海老名「……………比企谷くん、本物？」

戸塚「流石に僕も信じられないよ。」

シルヴィア「ヒドイなあ。まあそんな反応するのもしようがないけどさ。」

戸部「……………本物の歌姫？マジ？」

こいつらどんだけ疑ってたんだよ。

4人「ええええええええ!!!?」

――数十分後――

八幡「お前らなあ……人の恋人に質問攻めして満足したか?」
シルヴィア「まあまあ八幡くん、仕方ないよ。いきなり過ぎたもの。」

海老名「ほ、本物だった。本物のシルヴィア・リユーネハイムさんだった。」

戸部「俺もう何が何だか分からねえべ。比企谷くんがシルヴィアさんの彼氏でシルヴィアさんが比企谷くんの彼女?」

戸塚「夢みたいだよ。こんなところで有名人に会えるなんて……」

材木座「……………」

材木座の奴、本当に喋らなくなったな。

まあそれはそれでいいんだがな。

戸塚「八幡って世界の歌姫と恋人だったんだね。凄すぎるよ。」

戸部「名前なんてもう間違えらんねえべ。さん付けした方が良くね?」

シルヴィア「何度も言うようだけど、絶対に秘密にしてね？じやないとマスコミも黙ってないし、八幡くんも大激怒するから。」

八幡「大激怒じゃ収まらんな。」

海老名「……約束だよ。それに私たちも比企谷くんに謝りたかったからね。」

戸部「俺たち、比企谷くんがあんな目に遭ってたなんて知らなかった。今更だけど謝りたかったんだわ。」

八幡「んな事もういい、あん時の事はもう忘れた。今が幸せ過ぎてな。」

海老名「……私たちって本当に君に助けられてたんだね。」

八幡「もうやめろ、あの時の事はあの時の目と一緒に別れた。気にしても変わるもんじゃねえよ。お前らももう気にすんな。」

戸部「……んじや俺も気にしないようにするけど、比企谷くんは俺たちの恩人だべ。このままじゃ収まらねえべ。」

戸塚「そこで、僕から八幡に言いたい事があるんだ。これは一応戸部くと海老名さんにだけ伝えてあるんだ。」

八幡「ん？」

戸塚「これは八幡やシルヴィアさんのためになると思うよ。クローディアさんも八幡には伝えていいって言われてるし。」

シルヴィア「私も？」

戸塚「うん！僕ね、クローディアさんの推薦で『影星』に入っただ！」

理由と修復

八幡 side

……戸塚の奴、今なんて言った？影星に入った？どういう事だ？

八幡「……おい、そりやどういう事だ？俺は戸塚の能力を知らんから強くは言えんが、エンフィールドの薦めで入ったって何だ？理由がさっぱりだ。」

シルヴィア「私としても、何でそれを此処で言ったのかも分からないよ。」

戸塚「2人の疑問も尤もだね。順を追って話すよ。」

八幡 side out

戸塚 side

僕が星導館学園の諜報工作機関『影星』に入る前のクロードイアさんの会話。

――星導館2年某組――

戸塚「落星工学って意外と難しいんだなあ。まだまだ復習が必要かもね。」

海老名「私が此処で生き残っていくには、絶対に学ばないといけない事だから頭が煮え躁りそうだよ。」

マナダイトは万応素が結晶化した物で、煌式武装を作るために必要な鉱物で、ウルムⅡマナダイトが純度が高くて純星煌式武装を作るのに必要な鉱物で、凄く少ないんだったね。

そして純星煌式武装は2つと同じものが存在しないんだったね。

あとは…………

クロードディア「失礼します。戸塚さんはいらつしやいますか？」

……………会長さん？

戸塚「どうかしたの？会長さん？」

クロードディア「クロードディアで構いませんよ。少しお話があるのですが、お時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

戸塚「うん、いいけど何を話すの？」

クロードディア「少し内密な話なのでここでは言えません。生徒会室まで来てはくだらないでしょうか？」

戸塚「うん、いいよ。」

クロードディア「ありがとうございます。では案内致します。」

——生徒会室——

クロードディア「こちらが生徒会室になります。どうぞかけてください。」

戸塚「う、うん。」

なんか変な緊張感あるなあ。

クロードディア「さて、戸塚さん。貴方を此処にお呼びしたのは、貴方にしてもらいたい事があるからです。」

クロードディア「比企谷さんの事に関係しているのですが、受けるか受けないかは戸塚さん次第です。」

戸塚「八幡が？」

クロードディア「はい。ですので貴方が適任だと思いました。私から推薦します、我が学園の諜報工作機関『影星』の密偵監察官になって

は頂けないでしょうか？」

僕が……影星に？

クローディア「そうですね。理由は戸塚さんたちが入学する前のお話になります。」

そしてクローディアさんは、僕が来る前に四学園で話し合った事を説明してくれた。

※107話「会議終了と新しい先生？」ですが、詳しい話はされてません。

クローディア「……以上が我が星導館、ガラードワース、クインヴェール、そして界龍の代表で話し合った内容です。」

……八幡も警戒していたんだ。星導館学園と聖ガラードワース学園は分かったけど、何でクインヴェール女学園が協力するんだろう？まあ今はいいや。

クローディア「疑問は多々あるとは思いますが、今は収めておいてください。そして私が貴方を指名した理由ですが……」

……

クローディア「1つは学年の違いです。これだけでも見張りや監視を行うにはかなりの限度があります。その点では戸塚さんだけでなくとも、海老名さんや戸部さんでも有効ですが、あと2つの理由で貴方を推薦しました。」

戸塚「……聞かせてくれるかな？」

クロードディア「はい。1つ目は雪ノ下さんたちとの距離の近さです。戸塚さんの長所ともいえる分け隔てない優しさは、私たち1年の間でも広く伝わっています。彼女たちに怪しまれずに近づいたりする事が出来るのは今のところ戸塚さんだけですから。」

よく考えてるんだなあ。こんなに理詰めで言われたのって初めてかも。

クロードディア「もう1つの理由は簡単です。比企谷さんを救いたいという思いです。それだけでも推薦するには十分な理由です。」

クロードディア「どうでしょう？引き受けては頂けないでしょうか？」

……八幡を救いたい思い……そうだったね。八幡には助けられてばかりだったから、今度は僕が助けなきゃ！

戸塚「クロードディアさん、密偵監察官の件、受けるよ。これで八幡の役に立つなら喜んで受けるよ！」

クロードディア「ありがとうございます。戸塚さんには影星に入って頂きましたが、『雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣、比企谷小町の学外での監視』の任務を義務付けていますので、他の任務は無視して頂いて結構ですので、ご安心ください。」

なんか1人だけサボってるようにしか見えない気もするんだけど？

戸塚「分かったよ。学園の外に出たら、見張りに行けばいいんだね？」

クロードディア「はい。苦労をお掛けして申し訳ありません。」

戸塚「そんな事ないよ。僕、一度スパイみたいな事やってみたかつ

「ただ！」

クロードディア「…………戸塚さんも中々、腹が見えないお方ですね。」

これが、僕とクロードディアさんとの話の内容で、影星に入った理由。

戸塚 side out

八幡 side

戸塚「これで全部だよ。」

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

海老名「私たちも戸塚くんに協力してるんだ。1人じゃ大変だからね。」

戸部「それに、比企谷くんに恩返しすんにはちょうどいいべ！」

八幡「……………なんかすまない、俺のためにそこまでやってくれて。」

星導館では、こいつらにこんな事をさせていたのか。だが、未だに驚きだ。戸塚が影星に入るなんて…………

戸塚「いいよ、テニスを手伝ってくれたお礼がまだだったからね！これで漸く返せるよ！」

戸部「俺たちも、あんな依頼した責任を取るにはこれくらい朝飯前だべ！」

海老名「何かあったらクロードディアさんが比企谷くんに連絡するようになってるから、その辺は心配しなくていいよ。」

……………こいつらってこんなに頼もしかったか？総武高の頃とはまるで別人だ。

戸塚「クインヴェールが何で協力しているのかさつき分かったよ。八幡とシルヴィアさんが恋仲だからでしょ？じやなきやあり得ない

からね。」

シルヴィア「事情も聞いてるからね。それに好きな人に危険が迫ってるなら、手助けしないわけにはいかないからね。」

八幡「……いつの間にか味方が増えてたんだな。俺はこんな性格だからこんな事しか言えないが……頼んだ。」

戸部「任してほしーっしょ！」

海老名「今度は比企谷くんからの依頼だね！勿論OKだよ！」

戸塚「雪ノ下さんたちの事は僕たちに任せてよ！」

こうして戸塚たちとの繋がりも修復し、海老名や戸部も俺の名字を間違わずに呼んでくれている。

八幡「……ていうか材木座は？」

戸塚「あー、材木座くんなら未だに気絶してるよ。」

戸部「幾ら何でも長すぎっしょ……」

海老名「思っただけどさ、材木座くんって何しにきたんだろうね？」

シルヴィア「あはは……容赦ないね。」

八幡「まあこれ見ると、助ける気にもならないけどな。」

3人「確かに。」

シルヴィア「あはは……私もかな。」

その後……

八幡 side

戸塚たちとも無事に邂逅する事ができ、俺も少し肩が軽くなった。まあ戸塚は俺のために『影星』に入ったから少しやらせてる感があるけどな。

あれから30分くらいが経ち、戸塚たちも帰った。材木座？叩き起こされてたが、何も問題ないだろう。

そして今は、シルヴィとソファでのんびりしている。出掛けるよりも、こっちの方がリフレッシュ出来てるのかもな。

シルヴィア「……良かったね、凄く協力的な友人がいて。」

八幡「……そうだな。友人と呼べるかは分からなかったが、これなら呼べるな。」

シルヴィア「八幡くんらしいね♪」

俺らしい……か。まだ残ってんのかもな。あの時の俺が。

シルヴィア「そういえばさ、『鳳凰星武祭』に出てる界龍の成績はどう？今日の見てないでしょ？見てみたら？」

八幡「クインヴェールはいいのか？」

シルヴィア「私が言うのもあれだけど、見る必要あると思う？」

八幡「……まあ、確かにな。」

クインヴェールの最下位は決まってるようなものだしな。シルヴィも今更って思ってるのか。

八幡「……現時点では15組中14組が1回戦を突破してるな。その1組の相手は星導館の旧序列1位の刀藤がいたからな、まあ無理もないだろう。」

シルヴィア「強いねえ。でも次の次で結構落ちるところも出てくるんじゃないかな？そこからは本選だし、なんといつてもクジ運もあるからね。」

それなんだよな、このまま勝ち残ったら同士討ちになる可能性が高くなるから気が引けてくるんだよな。

シルヴィア「でも！八幡くんもうかうかしてられないからね！次の相手ってアルカントの擬形体ペアでしょ？」

八幡「ああ、そうだな。でもありや楽勝だな。特にデカブツの方は。」

シルヴィア「え？どうして？あんなに堅いんだよ？普通の攻撃なら通らないと思うんだけど……」

八幡「普通なら……だろ？俺の影は人影からでも出せる。つまり、あのデカブツの身体から出すんだよ。」

シルヴィア「そんなこと出来るの？」

八幡「人間と違ってあれは物体だからな。校章辺りを狙えば一発だろ。」

シルヴィア「なんか相手が可哀想に思えてきたよ。本当にそれで行くの？」

八幡「別にそれでなくとも『八兄、その相手、俺にやらせてくれないか？』……シオンか？どうしたんだ急に？」

すると、俺の呪符ホルダーから式神召喚用の呪符が飛び出して、シオンが現れた。

シオン「俺はまだ生身で機械とは戦った事がない。それも意志を持ったものなら興味がある。八兄の言うデカブツを俺に任せてはくれないか？」

八幡「別にいいが、それだけか？」

シオン「……最近、八兄が呼んでくれないのもある。」

……………気にしてたのか。

八幡「……………分かった、まあお前なら肩慣らしにはなるだろう。」

シオン「ありがとう。」

シルヴィア「シオンちゃんと話すのも半年振りくらいかな？大晦日以來？」

シオン「シルヴィ姉も久しぶり。」

シルヴィア「うん！あの時は3人で夕飯食べたよね！楽しかったなあ。」

八幡「そうだな。シオンも別に自由に出てきていいんだぞ？」

シオン「……………ありがとう八兄。でも俺は式神だから札の中にいるじゃあ。」

そう言つて、札に戻つてしまった。

シルヴィア「用が済むとすぐに戻っちゃうよね、シオンくんって。なんか残念。」

八幡「元々ああいう奴だからな。苦労しないっちゃあしないが……………」

シルヴィア「もうちよつといて欲しい？」

八幡「どうだろうな？まあ俺は本人の意思を尊重するけどな。」

まあ当然だな。

シルヴィア「……………ふふっ♪」

八幡「？どうした急に？」

シルヴィア「なんか久しぶりだなあって。こうやって八幡くんとゆっくりするのも、ツアーの2日前くらいだったよね。」

八幡「……………そうだな。」

シルヴィア「今日のデートも楽しかったけど、やっぱりこうやって

八幡くんと寄り添いながらのんびりするのが1番かな。」

そうやってシルヴィアは、握っている手に少し力を加えた。

シルヴィア「この時間が凄く好き。」

八幡「俺もだ、何よりも安心する。」

シルヴィア「えへへ／＼／＼そつか……ねえ、星武祭のお願い事、決まった？」

八幡「……………土地でももらうか？」

シルヴィア「何するの？」

八幡「さあな？言ってみたただけだ。」

シルヴィア「あははっ！これは前代未聞だね。お願い事がないのに星武祭に出るなんて。」

八幡「俺は自分がどこまで通用するのか試したいだけだ。此処に来たのもその理由が大きいからな。」

シルヴィア「……偉いんだね。それに欲がないんだね。欲しいものとかないの？」

八幡「あつたら苦勞はしない。」

シルヴィア「……それもそうだね。」

願い事ねえ。分からんねえ。

シルヴィア「まあ優勝出来るかどうかはともかくとして、考えておきなよ？」

八幡「……そうだな。けどシルヴィはあるのか？家というプライベートルームはあるだろ？他には？」

シルヴィア「……………今は八幡くんの欲しいものを考えよう！まずはそこからだよっ！」

シルヴィの奴、逃げやがったな？ 何のがバレバレだぞ。とはいって
も、何にしようかねえ？

彼に対する感情

陽乃 side

今日で《鳳凰星武祭》4日目、今の時点で界龍が勝ち残ったペアは22組で、残っているのは3組で負けたのは2組。でも仕方ないよね、相手は冒頭の十二人だったから。それでも傷くらいは与えられてるんだから大したものだと言いたいかな。

今私たちは、明日に向けての鍛錬をしてるんだけど、八幡くんは何故か式神ちゃんと相手をしている。いつもなら星露と相手をしているのにどうしてだろう？

まあそれも聞いてみればいいだけだね。

八幡「……………まあいいだろう。よし、後は木人椿もくじんしゅうで拳闘をしてろ。拳闘をすれば攻守の動きが洗練されるからな。」

シオン「分かった。」

それにしても本当に強いよねえ、あの式神ちゃん。絶対に私より強いよ。

陽乃「八幡くん、どうして今日はあの式神ちゃん？ 星露とはやらないの？」

八幡「次の対戦相手をあいつがやりたいって言い出しましてね。だからですよ。」

陽乃「じゃあ次も八幡くんと一緒に戦えないの!？」

八幡「まあ、そうなりますかね。」

陽乃「ええっ!？」

完全に不覚だよお。

八幡「ま、まあ本選までのお楽しみでいいじゃないですかね？」
陽乃「八幡くんがそう言うならいいけどさ、それでもなんか残念。」
八幡「まああれはそこらの相手に出す技じゃないですからね。今回はちようどいいと思ったんですが、シオンに取られちゃいましたね。」

つまり、お預けって事だよね。

あーあ、本当に残念だなあ。

陽乃 side out

—————

星露「相変わらず良い動きをするのう、八幡は。虎峰、セシリーお主らはあれについてゆけるかえ？」

虎峰「ついていけるのは最初だけですよ、師父。僕が何度八幡と手合わせしていると思ってるんです？それでもまだ八幡は本気の数じゃないんですから。」

セシリー「あたしも無理ですねー。八幡ってホントに速いんですよー？あんなの師父や大師兄くらいじゃないとついていけないですよー。」

星露「そうかえ？まあそのうちじゃろうな。川崎はどうじゃ？」

沙希「それって皮肉ですか？あたしには何も見えませんよ。それに

……

何故、京華を自分の膝の上に座らせているんです？」

星露「ん？この娘のことかえ？何、この者がここに来たいと申したから座らせておるだけじゃ。それに愛嬌があつて可愛いではないか。」ナデナデ

京華「えへへ♪ルーおねーちゃん。」

星露「それに妾の事を姉と呼んでくれるのじゃ。今までに無い事じゃから実に良い気分じゃ！」

セシリー「確かに師父つて今までそんな関係持った人つていませんでしたからねー。さしずめ八幡が兄であたしが姉つてところですねー？」

星露「まあそうなるじやろうな。虎峰には悪いじやろうが、あまり兄という感じはしないからのう。」

虎峰「まあ自分の性格や身なりで分かりますよ。確かに兄と呼ぶには無理がありますからね。その点八幡や川崎さんは雰囲気がありますからね。」

川崎「あたしも比企谷も下がいるからね。扱い慣れてるつてのもあるかな。」

八幡たちの鍛錬を見ながら何を話しているかと思うところである。

虎峰「八幡つて下と上の関係はハッキリしてますけど、同年代はどう見てるんでしょうかね？」

星露「……………確かに気になるのう。」

セシリー「この鍛錬が終わったら聞いてみよっかー！」

沙希「その必要ある？」

セシリ「あれあれー？サキサキちゃんは気にならないのかなー？」

沙希「ならないよ、後サキサキ言うな。」

京華「ルーおねーちゃん！もつとナデナデしてー！」

星露「おお、よしよし。」ナデナデ

虎峰「……雰囲気ありますね。」

セシリ「サキサキちゃん、これは負けていられないよー？」

沙希「だからサキサキ言うな。」

――――

雪乃side

雪乃「忌々しい……何度見てもこの感情が出てくるわ。何なのよこれは。」

私が今見ている映像は、《鳳凰星武祭》で戦った彼の試合映像。

雪乃「こんなの嘘に決まってるわ。」

そうよ。何かしたに違いないわ。そうでもなければ彼がこんな風に相手を圧倒出来るはずがないもの。

雪乃「本当に……忌々しいわ。」

雪乃side out

由比ヶ浜side

小町「これは絶対何かやってますよ！でなきゃあのゴミイちゃんがこんな動きするなんてあり得ません！」

由比ヶ浜「そうだよね！絶対ヒツキー何かやったよ！」

ヒツキーマジ最低っ！ズルして勝つなんて！これは本当に説明し

てもらわなきゃ納得出来ないよ！

小町「小町も協力しますよ！雪乃さんと一緒にゴミイちゃんを問い詰めましょう！」

由比ヶ浜「うんっ！」

由比ヶ浜 side out

葉山 side

女子1「葉山くんっ！界龍の序列2位の試合は見た？凄かったよね！」

女子2「私全然見えなかったよ！どうやってるんだろうね？」

男子1「葉山くんはなんか見えた？」

葉山「……いや、俺も見えなかったよ。」

あれがあいつの実力なワケがない。隣には陽乃さんがいたし、力を借りてたんだろう。序列2位なんてのも嘘に決まってる。

男子2「にしても、今年の界龍は強いよな！今んところ勝ち残ってるのが27組中22組だしなく、きつとこの比企谷つてのが関係してるんじゃないか？」

女子2「あり得るかもね！その人凄いカリスマなんだろうなく。」

葉山「でも、界龍には『万有天羅』がいるからね。その比企谷が影響してるとは考えにくいんじゃないか？」

男子1「でもよ、だからってこんな急激に強くなるか？俺もその比企谷が好影響を促してるんじゃないかって思うぞ？」

比企谷にカリスマ性？あるわけじゃないじゃないか。奴が持つてるのはどうしようもないくらいの腐りきった性根と性格だけさ。

良いところなんてある方がおかしい。陽乃さんも彼に何かされて星武祭に出たんだろうね。いつか必ず恨みを返してやるから、今は

精々楽しんでるといいよ。

パ―シヴアル「……………会長に1つ報告する事が増えましたね。また新しい紅茶の淹れ方を比企谷さんから教えてもらえるかもしれませんし、楽しみです。」

放たれた魔将

陽乃 side

《鳳凰星武祭》5日目、もうすぐ私たちHブロックの2回戦1組が開始する番。

陽乃「……今回は八幡くんが楽できるね。式神ちゃんに任せてるんだしっ。」

八幡「楽って何ですか、俺からそう望んだわけでもないのに。」

陽乃「冗談冗談。でもさ、私全く予想してなかったんだ。君と一緒に戦うなんて。」

陽乃「今まで君とは対立していたでしょ？まあ私が一方的にだけどさ。」

陽乃「今では私たち仲間で戦ってるのが正直まだ慣れてないんだ。」

陽乃「それに私は本当の意味で自由ではないしね。前よりは出せるようになったけど、未だにしこりはあるからね。」

八幡「……やっぱり親の方ですか？」

……勘の良さは健在だなあ。

陽乃「……まあね。」

八幡「仕方ないですよ。貴方が六花に來た頃から伸び続けましたからね、雪ノ下建設。今では界龍のバックアップをするまでの実力になってるんですからね。」

陽乃「別に望んでなかったのにね。私が序列3位になった時からかな？異常に急成長し始めたのは。」

今では傘下団体が300はある大組織で、運営母体の【界龍】にも融合している。でもお母さんは、何故かそこから動こうとはしないている。

陽乃「なんかさ、界龍に來た私でも少し居づらい時があるんだ。偶に連絡はあるんだけど、ちょっとした手伝いの事だから。」

八幡「……しかもその中でも上役の方にいますからね。下手な事をすると幹部の座を降ろされるかも……そういう事ですネ?」

陽乃「うん。界龍には過激さで知られている工作機関があるけど、母体の方も負けてないからね。その点では私のお母さんも一緒。過激かどうかは分からないけど、必要とあらば何かを切り捨てることの出来る人だから。」

八幡「……まあそういう集まりですからね、統合企業財体は。」

p i p i p i : : p i p i p i :

陽乃「ごめんちよつとでる……っ!」

陽乃「……お母さん。」

八幡「マジか、タイミング悪すぎだろ。」

出ないわけにはいかない。今度は何を言われるのかな?

雪ノ下母『こんにちは陽乃。』

陽乃「こんにちはお母さん。ごめん、これから試合なんだ。後にしてくれるかな?」

雪ノ下母『そう……でも大丈夫よ、仕事ではありません。貴方の事よ。』

………私の?

雪ノ下母『陽乃、近頃の貴方を影ながら見ていたわ。そこで私は思ったの。貴方は私の会社を継ぐべき人ではないわ。』

陽乃「っ!」

……とうとう見放されちゃったのかな、私。それもそっか。仮面なんてつけてなかったし、やりたい放題だったからね。

雪ノ下母『……その様子だと、勘違いしているようね。』

陽乃「……え？」

雪ノ下母『今まで私のいないところでの貴方は、私の教えた通りの仮面をつけていたわ。仕事も完璧にこなしてくれたから助かったわ。でも、今の貴方を見ていて分かった事があるの。今の貴方は、本当に楽しんでいるように見えるわ。特にここ半年の期間は。あんなにも楽しそうな笑顔の貴方を見るのは初めての事です。』

陽乃「……」

雪ノ下母『だから私は決意しました。今の貴方を壊したくない。陽乃、貴方は雪ノ下家に縛られず自由に生きなさい。貴方の進みたい道に向かって。手伝いなら何度でもしてあげるわ。今まで尽くしてくれたお礼です。陽乃、本物の貴方をこれからも私に見せてはくれませんか？』

陽乃「……お母さん。」ポロポロ

雪ノ下母『貴方はよくやってくれたわ。もういいのです。貴方はこれからの人生を自分で決めていくのです。私ではなく、貴方自身で進んでいきなさい。でもそのかわり、私にも貴方の笑顔を見せてくれなにかしら？近頃の貴方のお話も聞きたいわ。』

陽乃「……グスツ……もう！お母さんってホントに分からないよ！でも……ありがとう！」ニコッ！

雪ノ下母『ふふっ、ペアの方はいらっしやいますか？』

陽乃「八幡くん、いいかな？」

八幡「……初めまして。界龍第七学院高等部2年の比企谷八幡です。」

雪ノ下母『貴方が……陽乃からよく聞かされていました。一目で陽乃を見破ったと聞きましたか？』

八幡「その解釈で合ってます。」

雪ノ下母『この星武祭に関わらず、これからも陽乃をお願いします。』

陽乃「は貴方の事をとてても気に入っていますので。」

八幡「その辺は大丈夫ですよ。界龍には俺だけでなく、陽乃さんを慕う人は沢山いますから。貴方が思っている以上に笑顔ですよ、娘さんは。」

雪ノ下母『……………序列2位【夢幻月影】の言う事であれば安心です。

それと陽乃、これからは人生を楽しみなさい。星武祭が終わったら一緒に食事でもしましょう?』

陽乃「……………うんっ!」

雪ノ下母『星武祭、頑張rinaさい。では、失礼。』

お母さんは最後まで笑顔は見せなかったけど、口元が上がっていた。それに目も優しい雰囲気が出ていた。

八幡「……………またお母さんにやられたんじゃないですか?」

陽乃「……………そうだね。でも……………凄くスッキリしてるかも。なんか身体が軽い。」

八幡「俺も分かりますよ。今の陽乃さん、いつも以上に綺麗な感じですよ。」

陽乃「それは告白かな?」

八幡「どうでしょうね?」

陽乃「ダメだよ、八幡くんにはシルヴィアちゃんがいるんだから。」

八幡「っ!!?」

陽乃「シルヴィアちゃんの目が完全に普通じゃなかったからね。もしやと思ったけど、そうなんだね?」

八幡「はい。でもこの事はできれば……………」

陽乃「分かてるよ、誰にも言わない。それに今は、星武祭に集中したいしね。」

八幡「……………かなり開放されてるんじゃないですか? 暴れたくて仕方ないって顔してますよ?」

陽乃「うんっ! 今日早く終わらせてお母さんとお話したいんだっ!」

八幡「……そうですか。」

もう元気が有り余ってるくらいなんだから！あー早くお母さんとお話したいなあ。

ついに始まるHブロック2回戦！

—————

梁瀬『さあーさあー皆様っ!! 今大会も盛り上がりを見せてきました！それもそのはず！予選の1回戦から波乱の戦いばかりで、私実況の梁瀬ミーコも驚いています!! チャムさん、今回の界龍は別格ですね。』

チャム『ええ。自分から見ても成長度合いが他の学園と比べて群を抜いてるっス。しかも1回戦では27組中24組、今日から行われている2回戦でも今のところ負けなしっスからね。界龍には注目っスね。』

梁瀬『そして現在、このシリウスステージでは、界龍の総大将的なペアである、比企谷八幡選手と雪ノ下陽乃選手が出てきますからね！対するはアルカントの擬形体が立ち塞がります！どんな戦いになるのか楽しみですね!!』

チャム『これまでの界龍の戦いを見るに、きっと斜め上を行く戦いぶりを見せてくれると思うっス！それにこの予選回では1ペアを除けば界龍のペアは順調に勝ち進んでいるから、界龍の戦いには今後とも期待が高まるっス!!』

梁瀬『さあ!! まずは西方ゲートからっ!! 1回戦では優勝候補相手に圧倒的なパフォーマンスを見せつけた両者！此処でも決めるのか!!？エルネスタ・キューネ&カミラ・パレートっ!!』

リムシイ「……………」

アルデイ「フハハハハッ!!」

梁瀬『いやゝ迫力ありますねえ。』

チャム『そうっスね。やつぱり1回戦でモーリッツ選手を破ったのが大きいっスね。存在感もあるっス。』

アルデイ「今回も相手には1分の時間を与え、マスターの優秀さを見せつけてやるのである!!……あつーいきなり何をするのだリムシイ。」

リムシイ「黙りなさい。1回戦だけでなく今回もそのような事をするつもりなのですか？やはり貴方は愚図愚鈍でどうしようもないくらいに愚作ですね。急いで今すぐにでもマスターに改修を要請し、その口煩さを治してもらいなさい。」

アルデイ「しかしだなリムシイ、これもマスターが作り上げた人格なのである。それを曲げてしまうのは抵抗があるのである。」

リムシイ「……その鈍い思考能力でもマスターの事を考えられたのはほんの少しだけ褒めてあげましょう。しかしながらその口煩さをもう少し何とかして下さい。」

アルデイ「ふむ、そうであるか。ならば改善していく事としよう。」

築瀬『出ました、今大会《鳳凰星武祭》1回戦で見たロボット漫才です!!アルデイ選手の自然な行動にリムシイ選手の冷たく鋭過ぎるツツコミ!!』

チャム『機械だから緊張とかはないと思うけど、これを見た相手選手からすると、自分達はナメられていると錯覚してしまいそうになるっスね。比企谷&雪ノ下ペアがこれにどう反応するかも戦況の鍵になると思うっス。』

『よお、1回戦で見飽きてるから後にくんねえか?』

アルディ／リムシィ「っ!!」

声が聞こえたが、周りには自分たち以外は誰も居なかった。こんな近場で普通に読み取れるような声など、観客席からでは不可能だ。

そして正面から影のような黒い靄のようなものが現れ、ついには人まで現れた。

そう、比企谷八幡と雪ノ下陽乃である。

梁瀬『おおーつとお!!?これはどう言う事だあ!!?いつの間にかステージには比企谷選手と雪ノ下選手がいる!?!』

チャム『おそらくっスけど比企谷選手の能力っスね、雪ノ下選手はそういった能力の情報はないので。しかし驚いたっス、まさか魔術師の能力も備わっているとは思わなかったっス。』

八幡「んで?そのつまらん漫才は終わったのか?いつまでも聞いてやる程、俺たちは暇じゃないぞ。」

陽乃「そのまま続けてもいいけど、校章は壊していつてくれない？」
アルデイ「むう……確かに騒がしすぎたようだな。こちらからも謝罪しておこう、申し訳ない。」

リムシイ「申し訳ございませんでした。」

八幡（……意外と物分かりは良いらしいな。）

アルデイ「だが、勝つのは我々である！貴殿らには此処で負けてもらうのである！」

陽乃「その言葉、そっくりそのまま返してあげるよ。勝つのは私たちだよ。」

梁瀬『両者盛り上がってきたところで試合開始といきましょう！
《鳳凰星武祭》 予選2回戦Hブロック1組、バトル、スタート!!!』

試合開始と界龍の掟

――――

八幡「……………急急如律令。」

八幡が呪文を唱えて呪符をかざすと、そこからはシオンが出てくるのだが、130cmくらいの身長ではなく、身長は180～190cm程にまで伸びて大人になっていた。

梁瀬『おお～つと比企谷選手！自分の手札から何か出したかと思いきや、人が現れましたね。』

チャム『おそらくあれは式神っス。普通なら規制がかかるっスけど、今回の大会では代理出場が認められてますからね。これもアリだと思っスよ。』

シオン「八兄、俺の相手はどっちだ？」

陽乃「ん～、じゃあさ！あつちの全身機械の方をやってくれないかな？私は緑髪の女の子の方をやるから。」

シオン「……………了解した。」

八幡「ぶちかましてこい、シオン。」

八幡からの激励を受け、アルデイの前まで歩いていき、立ち塞がるように堂々と立っていた。

アルデイ「我輩の相手は貴殿であるか。よろしい！貴殿らには1分の猶予を与える。その間に存分に腕を振るうがいい。」

シオン「……………ナメられたのもだ。ならば1分経つまで待ってやる。オモチャを滅多斬りにしても面白くない。」

アルデイ「ならばいいのだが、後悔しても知らんぞ？」

シオン「俺の全力を尽くすだけだ。」

――1分後――

アルデイ「1分、時間である。」

アルデイは武器であるハンマーを取り出し、シオンも座禅の瞑想から立ち上がり、双剣を構えた。

アルデイ「では、準備はいいであるか？」

シオン「意外と律儀だな。相手の準備を待つなんて。」

アルデイ「貴殿は先程、全力を尽くすと言った。ならば相手の全てを出す準備を待つのも当然の事である。」

シオン「……そうか、まあ準備なんて最初から出来ている。」

アルデイ「ふむ、ならば……勝負っ！」

アルデイはいきなりハンマーを振り上げ、シオンめがけて振り下ろそうとしていた。シオンはそれを躲すために空中に飛んだ。

シオン「……剣達、舞え！」

シオンがそう叫ぶと、アルデイの周りからは無数の剣が出てきて、一斉にアルデイの方へと飛んでいった。

だが、それはいとも簡単に光の障壁によって防がれてしまった。

アルデイ「ふはははっ！無駄である。」

シオン「どうやら一筋縄ではないようだな。厄介だ。」

アルデイ「簡単に攻撃は当たらせないのである！今度は我輩から行くのである！」

アルデイと八幡の式神であるシオンとの戦いが始まった。一方で

陽乃とリムシイはというと……

陽乃「あれは手こずりそうだねえ。」

リムシイ「理解出来ません。なぜこの1分間何もしてこなかったのです？」

陽乃「ん？そんなの私の勝手でしょ？それに無抵抗の相手倒しても満足なんて出来ないしね。それでも理解出来ない？」

リムシイ「……………」

陽乃「まあいいや。じゃあ早速始めようよ、でも気をつけてね？今の私はとんでもなく絶好調だから。」

リムシイ「…………成る程、ならば私も全力でお相手いたしましょう。」

陽乃「…………1つ教えてあげるよ。私たちの学院には掟があるんだ。その1つは相手と試合をする時には本気でやり合うこと。意味分かるかな？」

ヒュンツ！

リムシイ「っ!!」

陽乃が目の前から消えたと思ったら、目の前にまできていた。それもゼロ距離。

陽乃「本気、なんだよね。」

ドゴツ!!

陽乃がリムシイの腹部に空中後ろ回し蹴りを繰り出した。リムシイは躲す暇もなく、ステージの端まで飛んでいった。

梁瀬『すごーいっ!!雪ノ下選手の蹴りがリムシイ選手にクリーンヒットツ!!リムシイ選手は大丈夫か!?!』

陽乃「ただの押し付けになるけど、私たち界龍からしてみればさ、その全力つていうのはこういう場所で使うのは、とんでもなく失礼なんだよね。次からは本気を使うってよく覚えておいてね？」

煙が晴れてリムシイが出てくると思いきや、まだ倒れていた。それもそのはず。陽乃の蹴りはリムシイの腹部に風穴を空ける程の威力だった。

リムシイ「……………」

陽乃「まさかこれで終わりなんてないよね？それなら私、全然物足りないよ？不完全燃焼にも程があるよ。」

リムシイ「……………」

陽乃「はあ、期待はずれ過ぎるよ。」

梁瀬『リムシイ選手の戦闘不能により、カミラ・プレート、意識消失！！アンコンシヤスネスなんとという展開でしょう！！試合開始から1分半で、雪ノ下選手の強烈な回し蹴りでリムシイ選手が早くも戦闘不能！！』

チャム『それだけじゃないっす。雪ノ下選手は右足の方に星辰力を溜めていたっすから、通常の蹴りよりも威力が格段に上がっていたっす。しかもそれを上手く隠しながら溜めていたっすからね、これだけ星辰力の扱いに長けた人はそういないっす。』

陽乃「あゝあゝ、退屈。」

八幡「一撃で済んだのはいいですけど、1回戦の永成たちがやった時よりもえげつないですね。」

陽乃「あれ脆すぎない？八幡くんの方がよっぽど丈夫だと思うよ。私のアレを普通に受け止められるの八幡くんと暁彗と星露くらいなもの。」

八幡「でも結構痛いですからね？あんまやらないでください。」

シオンとアルデイが戦っているというのに、2人は世間話をしていた。

陽乃「そういえばさ、式神ちゃん苦戦しそうだけど、あのままでいいの？」

八幡「時間制限つけてるんで大丈夫ですよ。7分越えたら俺に強制交代って事にしてます。長引かせても俺が暇になるんで。」

陽乃「ちゃっかりしてるね。」

八幡「ま、時間がくるまではゆっくりしましょうよ。まだ5分ありますし。」

天翔ける狼の刃

――――

シオンとアルデイが戦闘を始めてから4分頃、攻めては防がれの連続で、戦況が完全に膠着していた。

一進一退である。

シオン「……………何処から攻撃しても無駄とはな、反則じみているな。その防御力は。」

アルデイ「貴殿の攻撃も中々であるが、我輩の防護障壁を破る程ではないようであるな。」

シオン「そんな事を言われて俺が素直に諦めると思うか？」

アルデイ「ならばまだ秘策があるというのだな？この戦況を覆すのであれば出し惜しみをしている場合ではないと思うであるが？」

シオン「悔しいがその通りだ。なら俺も遠慮は無しだっ！」

シオンはそう言うと、高く飛び上がり空中で槍をアルデイに射程を合わせて構えた。

シオン「この一撃は彗星の如く……………」

急降下を始めたと同時に、槍の切っ先からシオンの足までに青白い炎が出てきた。

シオン「仇なす者を貫くは…神火の槍！」

シオン「彗星神武槍っ!!」

梁瀬『おおくと!?シオン選手の槍から青白い炎が出て来ました!!』
チャム『あれだけ高密度な炎を20mくらいしかない高さから出す

のは、凄いつスね。彼も相当強いつス。』

※シオンの名前については、のんびりしている八幡によって情報が提供されました。

アルデイ「それが秘策であるかつ！」

アルデイも正面に障壁を出し応戦する。だがこの時、シオンが押し
ていた。

アルデイ「むむうゝ!!まだまだあ、なのである!!」

アルデイが障壁でシオンを弾き返そうとする。しかし、シオンは余裕の表情だった。

シオン「(掛かった!) アンカー射出!」
アルデイ「ムッ!」

シオンが弾き返されたと同時に、右の機械腕の掌からアンカーを発射させ、アルデイの足首に巻き付けた。

シオン「捕らえたっ！」

シオン(こいつは本来、敵を引きつけてから攻撃する技だが、相手が機械な上に重い。自分から攻めるしかないっ！)

アンカーから出ているワイヤーがどんどんシオンの右の機械腕に吸い込まれていき、ついには背中をとっていた。

梁瀬『此処でシオン選手!アルデイ選手の後ろを取った!!』

シオン「地獄に…堕ちろ！あくうだいれん 亜空大鎌っ！」

首元に取り出した携帯鎌を振った。

シオン（障壁は出せないだろう！これで終わりだ！）

アルデイ「そう簡単にはやられないのであるっ！」

アルデイは負けじと自身が持っていたハンマーでギリギリ鎌を止めた。

シオン「っ！」

チャム『今の攻撃を防ぐなんて……アルデイ選手もシオン選手に劣らずの反応速度っスね。これには驚いたっス。』

アルデイ「流石の我輩も焦ったのである。だがこれ以上は「これ…終わりだ！」な、何であるか!？」

シオンの機械部分から全ての武器を取り出し、数十cmという近さで射程を合わせている。そしてシオンも腕から大砲のような銃口をアルデイに向けている。

シオン「だいぶれん大武蓮っ!!」

またもアルデイに攻撃。今度こそは通っただろう。

アルデイ「お見事であるが、我輩の障壁を忘れてもらっては困る。」

全方位に障壁を張られ、シオンの大技は無意味となってしまった。

梁瀬『またもシオン選手の攻撃は通りませんでした！やっぱりアルデイ選手の防御は堅いですね〜！』

チャム『防御もそうっすけど、アルデイ選手の反応やシオン選手の技の多彩さには驚かされるばかりっす。』

シオン「……………くっ」

アルデイ「お主もここまでのようであるな。あれだけの大技、そう何度も出来るはずがないのである。」

シオン「……………俺もまだまだだな。」

八幡「シオン……時間だ。」

—————

八幡 side

シオン「……すまない、八兄。」

八幡「いや、気にするな。見た感じ奴の障壁はお前の火力じゃ無理っぽかったからな。あんどけやれりや文句なんてねえよ。ゆつくり休んどけ。それと、この試合見てくんなら別にいいぞ。」

シオン「八兄……」

さて、その障壁……破ってやるよ。

梁瀬『此处で比企谷選手が動いたああ!!シオン選手と交代してアルデイ選手の前に出たああ!!!』

チャム『どんな戦いを見せてくれるのか、楽しみっスね。』

アルデイ「今度は貴殿であるか。」

八幡「俺の式神が世話になったな。今から俺になるが、不調があるなら直せ。」

アルデイ「いや、そういった類の不調はない。安心してかかってくるのである。」

八幡「そうか、なら………」

八幡『行くぜ、衾々。』

衾々『あいよっ!ハッチ!!』

チャリーン

八幡「俺は祢々切丸を使わせてもらう。」

チャム『ま、まさか祢々切丸っ!!』

梁瀬『ど、どうしたんですかチャムさん？突然大声出して……』

チャム『……今、比企谷選手が持っている刀なんスけど、あれは界龍が所有している純星煌式武装の1つなんスよ。』

梁瀬『ええええ!!?』

チャム『自分がいた頃の界龍では使いこなせた人は1人もいなかったっス。それどころか使おうとした本人を全員廃人にしてしまう程のヤバイ純星煌式武装っス。』

チャム『しかも自分が来る前や在籍してた頃も、卒業して以降も使いこなせた生徒の情報なんて一切なかったっスから、もしかしたら比企谷選手は……』

梁瀬『その純星煌式武装の初適合者………という事ですか?』

チャム『……おそらく、いや、確実にそうだと断言出来るっス。』

祢々『聞いたく?流石ハツチだね!』

八幡『いいから集中してろ。今星辰力喰わしてやるから。』

八幡「今の聞いた上で聞くが、始めても大丈夫か?」

アルディ「構わんのである。」

八幡「んじゃ、やるか。1つ言っとく。正面に本気の障壁張つとけ。こいつは手加減なんて出来ん技だ。」

アルディ「我輩の防御を破れる者など誰もいないのであるっ!!」

八幡「………まあいい。」

八幡「スウーハアアア。」

八幡「天狼剣・絶技……………」

八幡は刀に星辰力を注ぎ込み、刀身を10cmくらい広げた。

そして宙返りをして、後ろに出した星辰力の足場でアルディめがけて飛んでいった。

アルディ「なんであるかそれは!?我輩を愚弄する気か!？」

だがアルディがそう言った瞬間、八幡は空中で回転した。それも超高速で。その速さは高音の音が鳴る程の速さだった。

アルディ「ムッ!？」

アルディも八幡の言葉を理解したのか、素早く正面に障壁を作った。

そして……………

衝突したと誰もが思っていたが、アルディの障壁は消えていて、八幡はアルディの後ろで跳きながら剣を鞘に仕舞おうとしている。

八幡「天狼拔刀牙」

チャリーン

鞘に納めたと同時に、何かの金属が落ちる音がした。

そう、アルデイの本体である。肩から腹部にかけて刀で斬られたような痕が残り無残にも、次々に落ちていく部品。

観客からは一切の歓声もなく、ただ息を呑んで見ているだけだった。

何せ、比企谷八幡の本気の一部を見てしまったからであろう。

梁瀬『……………はっ！アルデイ選手の戦闘不能により、エルネスタ・キューネ選手、戦意喪失!!勝者！比企谷八幡&雪ノ下陽乃!!』

チャム『なんて言ったらいいかわからないっす。これだけ圧倒的な試合を見せつけられるとは思いませんでしたっす。』

梁瀬『本当ですね。比企谷選手のあの一撃、まさか障壁を破っただけでなく、アルデイ選手の胴体までも切り裂いてしまうなんて…………いやあ、Hブロックの2回戦1組から異常な驚きが出てきましたね。』

陽乃「私たち、どっちも1発じゃん。」

八幡「しかも相手の擬形体滅茶苦茶にして。やり過ぎましたかね？」

陽乃「もし相手の人たちが来たらさ、謝ろうよ。なんかちよつと可哀想だよ。」

シオン「俺も八兄がしたのを見たら…………」

八幡「俺のやった事で相手に同情するなよ。俺が悪いみたいじゃねえか。」

こうして八幡たちは無事2回戦を突破した。

2人の筆頭とのご対面

八幡 side

勝利者インタビューも終わって今は控え室の方に向かっていった。中々しつこい連中だったが、これといって話す事はなかったから普通に切り上げてきた。

八幡「はあ……漸く終わった。インタビューなんて勝った気持ちと今後の試合の事と状況とかの確認だけでいいだろうに。聞かなくてもいい事まで聞きに來やがって……」

陽乃「それにしても八幡くん、最後のあの技は一体何？私には相手に突っ込んで一気に高速回転したようにしか見えなかったんだけどさ。」

八幡「天狼抜刀牙の事ですか？まあやり方は大体陽乃さんが今言った通りですよ。相手に突っ込むように前に飛んでから、飛んだ時の反動を使って回転するって感じです。でも連発は難しいですね、疲労も大きいし三半規管も強くなければまともに使えませんからね。俺でも4、5回が連続で出せる限界ですね。」

陽乃「その技って八幡くんの他に使える人っているの？」

八幡「いえ？俺が編み出しましたから。」

陽乃（まあ、そうだろうね。君以外にその技が使える子が居たら、その子も人間辞めてる領域に片足踏み入れてるだろうし。）

陽乃は1人、心の中でそう思っていた。

八幡「あの擬形体では、俺の攻撃には耐えられなかったんでしょうね。確かに良い防御力だとは思いますが、シオンの攻撃で押されているようじゃ俺の攻撃なんてまず防げないですよ。」

陽乃「それってさ、自分が凄いつて言ってるんだよね？そうなん

だよね?」ニマニマ

いやいや陽乃さん、貴女も大概ですよ?星辰力込めているとはいえ、普通蹴りで機械の身体に風穴なんて空かないですからね?

八幡「そんな事言う陽乃さんも蹴りで穴空けたじゃないですか、人の事言えませんよ。」

陽乃「仕方ないじゃん!お母さんのおかげで絶好調がうなぎ登りしちゃったんだから!文句ならお母さんに言つてよ!」

んな無茶な……………

???「君たち、少しいいかな?」

八幡「ん?」

陽乃「およ?君たちはアルルカントの。どうかしたの?」

そこには、アルルカントの《獅子派》フエロサイアスと

《思想派》メセトラの筆頭ペア、エルネスタ・キューネとカミラ・パレートがいた。

陽乃「なあに?私たちに何か用?先に言っておくけど弁償しろなんて言っても受け付けないからね?」

カミラ「いや、弁償を請求するつもりはない。ただ、エルネスタが君たちに言いたい事があるらしくてね。少し時間をもらえるかな?」

褐色肌に金髪の方がそう言うと、横ではさつきから頬を膨らませている茶髪がいる。まあ大体予想はついてるけどな。

八幡「……大体予想はついてるが、言いたい事ってなんだ?俺たち、同じ界龍の仲間の応援もしたいんだが?」

エルネスタ「……………じゃあ一言だけ!負けは認めるけど、何もあそ

こまでやる必要ないと思うんだけど!？」

八幡「あー……いや、それは俺たちも少しやり過ぎたって思ってた。機械相手とはいえ、ちよつと手加減忘れてた。すまん。」

陽乃「私も大人気なかったかなあ……あの後に女の子の方を見たんだけど、少し惨めな感じになったし。」

エルネスタ「ちよつとー! カミラもなんとか言ってあげてよー! 私たちの可愛い可愛いアルディとリムシイがメチャクチャな姿にされたんだよ!？」

カミラ「確かにメチャクチャな姿にされたのは否定しないが、私の担当はあくまでも煌式武装の方だから、別に何もないんだが……」

うん、本当にごめんなさい。けどゴメンな、弁償はできません。

エルネスタ「あーあ、予選で負けちゃうし、私の作った擬形体は修復不可能なまでに壊されちゃうし、散々だよ……」

いや、マジでごめんなさい。

カミラ「1つ聞きたいんだが、君の持っている煌式武装には何らかの特殊な効果でもあるのか？」

八幡「祢々切丸の事か? そんな能力も効果も無いぞ、まあ教える気なんてないがな。」

カミラ「用心深いんだな、君は。」

八幡「俺の性分でもあるからな。」

陽乃「それで、えつと……エルネスタちゃんだっけ? 結局言いたい事っていうのはそれだけなの?」

エルネスタ「……だつて、あまりにもあつさりやられちゃった上に、あんなにも簡単に壊されちゃったしさ。」

マジでへこんでるんだな……まあ製作者で自信あったならこうなるか。

カミラ「これ以上引き止めてもエルネスタが止まらないだろうし、私たちはこれで失礼する。君たちの健闘を祈る。」

八幡「あ、ああ。」

陽乃「うん……」

カミラ「ほら行くぞエルネスタ、いつまでもウジウジしていても仕方ないだろう。」

エルネスタ「うう……」

パレートは未だにへこんでいるキューネを連れて行ってしまった。

八幡「ていうか本当に何しに来たんだ？」

陽乃「まあ擬形体を壊しちゃったのは事実なんだからさ、彼女の言い分も受け入れてあげようよ。」

八幡「まあいいですけど、なんか普通に無駄な時間を過ごしたただけのような……」

陽乃「まあそう言わずに。ほら、他の子たちの応援もするんだから、控え室に行こうよ。」

※大技の使用にはご注意を

八幡 side

あの2人が立ち去った後、俺たちは控え室でゆっくりしていた。今日出ているペアの観戦をするためである。

陽乃「いやゝ強いねゝ。今のところ負けなしだよっ！余程八幡くんの鍛錬が効果的だったんだろうねゝ！」

八幡「まああいつらも真剣にやってみましたからね。1回戦で落ちた奴らも、相手が冒頭の十二人の場合が多かったですけど、渡り合えていましたからね。序列40位くらいで他学園の冒頭の十二人クラスと渡り合えるなら充分過ぎるくらいですよ。」

実際に今回出ている永成と銀梅、宋と羅が俺が六花に來た時の冒頭の十二人クラスに近かったからな。

陽乃「じゃあ私たち界龍の冒頭の十二人はどうなの？」

八幡「難しい質問ですね。俺と暁慧の敵はガレートワースの【聖騎士】とレヴォルフのオーフェリアくらいでしょうね。他は星導館の【叢雲】と良い勝負つてところですかね。」

陽乃「どうして？1回戦のあの試合はどう見ても圧倒的に感じたけど？」

八幡「まあそうなんですけど、わざわざあんな見せつけるようなやり方、俺ならしません。普通なら何か欠点があると思えないですから。特にあの鎖のパフォーマンスは天霧自身が魔術師でもないのにあんな物が出せる時点で不自然です。」

陽乃「…………確かに彼が魔術師なんて情報なかったね。」

八幡「もしあれが何か意味のある事なら、俺だったらまず時間を稼ぎますね。知らずに攻める程怖いものはないですからね。」

陽乃「凄いね八幡くん。そこまで可能性の事を考えられるなんて……」

まあ予想ですけどね。

p i p i p i : : p i p i p i :

ん？界龍から？ああ、多分大型端末の方から掛けてんな。

八幡「おう、どうし……マジでどうしたんだ？そんな目輝かせてよ。後ろの連中皆そうじゃねえか。」

虎峰『八幡八幡っ！先程八幡が刀を持って回転した技は一体何ですか？』キラキラ

セシリ『陽姐も八幡も今の試合凄かったよー！八幡もあの技教えてー！』

冬香『八幡さん、差し支え無ければ先程の技の原理を教えては頂けませんか？』

曉彗『………比企谷八幡、私にもご教授願いたい。』

星露『八幡よっ！先の試合で出した技は見事じゃったぞ！！妾にあの技を教えてはくれぬか？』

『尊師っ！ご教授お願いします!!』

………どんだけ知りたいんだよ。そんな凄かったのか？

八幡「そんなに気になるのか？ただ前に飛んで回転しただけなんだから？」

虎峰『それだけの筈がありません！あれだけの威力なのにそれだけで出せるなんて到底思えません!!』

セシリ『勿体ぶらずに教えてよー。』

うーん、んな事言われてもなー。他にないからなー。

暁彗『……………比企谷八幡、本当にそれだけでやっているのか?』

冬香『八幡さん、正直にお答えになつてくださいな?』

八幡「暁彗も冬香さんもそう言ってますけど、本当にこれだけですって。大体隠す意味もないですから。」

他にあるなら俺も教えて欲しいくらいだ。

星露『八幡よ、それは嘘ではないのじゃな?本当にそれだけなんじゃな?』

八幡「なんで俺が嘘つかなきゃいけねえんだよ。意味分からんぞ?」

星露『…………皆よ、八幡は嘘をついとらん。こやつと言っている事は本当のようじゃ。すまぬな八幡、疑つてもうて。』

八幡「いや、分かつてくれたならそれでいい。ついでだが、習得できる可能性があるとしたら暁彗か虎峰だな。この技は速さもなけりや無理だからな。習得出来るかどうかは別だがな。」

まあこれだけでもいいだろ。

暁彗『……………私は得物は棍以外はあまり使わないが、先の回転は役に立ちそうだ。』

虎峰『僕もやってみます!』

八幡「おう、頑張れよ。」

冬香『では、私たちはこれで失礼しますね。まだ戦いの最中の方々もいらつしやいますからね。微力ながら、その方たちの応援もしなければいけませんからね。』

八幡「じゃあお願いします。」

冬香『はい、では。』

ん、すげ〜知りたかったんだろうな。メチャメチャ聞かれたよ。

陽乃「まあ不思議にも思うよ。あれだけの威力の技をたった回転しただけで出来るなんて信じられないからね。」

八幡「威力のポイントは別に速さや回転数だけではないんですよ。実は衤々切丸……というよりも日本刀にもあるんですよ。」

陽乃「え？どういう事？」

八幡「日本刀というのは切る瞬間に引かないと切れないといわれているんですよ。俺が回転したのはそれが理由です。後は回転することによってその切断力を倍加したというのがあります。」

陽乃「へえ〜。」

陽乃さんは本当に感心したかのような声を出した。

陽乃「私じゃ使えないね。八幡くんみたいに速くないし、何より刀もないしね。」

八幡「俺のオリジナルなんでそう簡単にパクられても困るんですけどね。」

p i p p i i … p i p p i i …

2人「ん？」

今度は誰だ？…………アレマさんだ。

陽乃「……………なんて言うの？この人絶対ヤバイ顔してるよ？」

八幡「言わないでくださいよ。俺もそう思ってたところなんですから。」

あゝ、なんて言われんだろうな。

アレマ「やーやー！八幡ちゃん！いやゝさっきの試合は凄かったねー！実に興味深いものが見られたよ!!それで？あれは一体なんだい？」

やっぱこの下りをしなきゃいけないのか。

その後も小苑さん、控え室を出た後で1人になった時にオフエアとウルサイズ姉妹、帰った時にはシルヴィとかなりの人数に聞かれる羽目になった。

八幡「俺もう簡単には大技使わねえからな！」

本選前の休日

八幡 side

《鳳凰星武祭》8日目、ついに本選が始まるところまで来た。俺たち界龍も順調に勝ち進んだが、そのために仲間同士で試合をするところもあった。

それでも互いに敬意を払い、試合後には勝った方に健闘の念、負けた方に感謝の念を忘れずにとっていた。

それでも界龍は本選出場ペア16組のうち9組が勝ち上がり、半分が界龍同士で戦うことになっている。くじの結果次第では全試合界龍の奴らと戦うことになるだろうな。

その影響もあつてか…………

今日は鍛錬場が全部使われてた。今日はくじだけだから試合はないし、ゆつくり英気を養ってもいいはずだが、同じ学院のライバルには負けたくないんだろうな。

虎峰「皆さん張り切ってますね。僕たちが鍛錬する場所が八天門場しかなかったですからね。」

陽乃「ホント、今日だけでもすごい予約数だったよね。八幡くんの道場しか使えなかったしね。いや、良かった!」

八幡「別に此処を俺以外で使うなんて言っていないですけどね。」
冬香「それも八幡さんの威厳があつての事です。この学院で2番目に権力のある生徒なんですから。」

八幡「権力なんて別にいらんですけどね。星露が使えばいいだけですよ。」

虎峰「まあまあ、八幡にも立場がありますからね。師父以上に門下を持つているんですから。」

俺、師匠になったつもりないんだけど？

陽乃「でもさー、星露ロクでもないくじ引いてないかな？」

冬香「さあ？そこは運ですからね。師父を信じるしかありませんよ、陽乃様。」

八幡「……冬香さん、星露信じてなんか良い事ってありました？」

冬香「それを言わないでくださいよ、私もあまり思いたくないのですから。」

やっぱりな……………

虎峰「師父なら、大喜びで帰ってくるでしょうね。『戻ったぞい！良い組み合わせになったわいっ!!』とか言つて。」

八幡「やめろ縁起でもねえ。本当にそうだったらどうすんだ？未だに星導館の新旧序列1位のペア2組とガードワースの銀翼騎士団ペア、レヴオルフのウルサイス姉妹がいんだぞ？全試合そいつらに当たったらどうすんだよ？」

陽乃「まっ、私たちなら楽勝だけだねー。何せ六花最強の魔術師がいるんだから！」

冬香「ふふっ、そうですね。」

八幡「持ち上げないでくださいよ。」

虎峰「実際そうじゃないですか……………」

いや、他にもいるだろ？俺よりも才能溢れた魔術師なんて。

八幡「まあいい、今日も遅いし飯にするか。今日はどうすっかなあ。」

陽乃「今日は何作るの？」

八幡「特に決めてませんけど、陽乃さんにはお茶漬ですかね。」

陽乃「ちよつとー!?それ失礼極まりないからね!？」

人の部屋無断で上がった人が言う事じゃないですよ？

冬香「ふふっ♪八幡さんも悪い人ですね。確か意味は「冬香ちゃん！そういうのは言わなくてもいいの！」ふふっ、失礼致しました。」

虎峰「？何か意味があるのですか？」

八幡「あるっちゃあるが、調べておけばいい。この人がいる前ではするなよ？」

虎峰「はあ……分かりました。」

うん、物分りが良くてよろしい。

八幡「でも、何にすつかな。」

陽乃「ならさ！ラーメンってどうかな？界龍にもあるけど、八幡くんの作るラーメンって食べた事ないし。」

虎峰「確かに八幡の手料理は多く食べてきましたけど、麺類はまだないですね。」

冬香「どうします八幡さん？作るのですしたらお手伝いしますよ？」

八幡「んー、まいっか。じゃあ今日はラーメンとお茶漬けな。」

陽乃「だからそれやめてってばー!!」

あつ、ツツこんだ。

――八幡の部屋――

陽乃「八幡くんって、ラーメンも決まったレシピ使ってるの？」

八幡「まあ好みがありますからね。俺は塩ベースのあっさり系です。陽乃さんはいつもこれっていうのあるんですか？」

陽乃「私は特に決まったのはないかな。でも、八幡くんの作る味も気になるね。」

虎峰「そうですね。界龍にはラーメンの種類はあっても味の濃さは変えられませんかね。八幡のは変えられるんですか？」

八幡「まあ少しはな。」

虎峰「……流石八幡です。」

冬香「それと八幡さん、先程から思っていた事なのですが………何故鉢巻を？」

八幡「え？ラーメン作るならこれかなっと思ひまして。」

陽乃「確かにしてるお店ってあるけどさ、八幡くんってそんなにノリ良かった？」

八幡「まあこういう時もありますよ。」

虎峰「……八幡がそうしているところなんて初めてなんですが。」

え？マジ？

八幡「まあいいだろ、これも新しい八幡クオリティだし。」

陽乃「自分で言うんだね、それ。」

冬香「ふふっ♪こんな一面もあつたんですね、八幡さんは。」

――20分後――

八幡「出来ましたよー。俺特製のあつさり系塩ラーメンです。メンマともやしとチャーシューは入ってますけど、ネギは好みで。」

八幡「後、トッピングでノリと卵もありますから。」

3人「おぉー！」

うん、見た目と匂いは良いよな。

虎峰「とても美味しそうですね！」

冬香「ええ、食欲をそられます。」

陽乃「私もこんなに美味しそうなラーメンは初めてかな。」

八幡「嬉しい評価ありがとうございます。でも味は保証しませんからね？んじゃ、」

4人「頂きます。」

俺を含め全員が蓮華を持ち、最初にスープを一口啜った。
まあ俺は知ってる味だから何も言わんが、3人の反応は嬉々として
いた。

陽乃「んゝっ!!美味しい!」

虎峰「とても美味しいです!」

冬香「味の方もしつこくないにも関わらず、しっかりと残ってます
ね。」

どうやらお気に召したようだ。

その後も俺たち4人は、夕食を楽しみながら雑談をした。
鳳凰星武祭が終わったら、出場した奴らと飯をするのもいいかも
な。

◎今後の見通しとお願い事

陽乃 side

《鳳凰星武祭》9日目、星露の引いたくじは意外にもかなり良い感じになった。私たちの決勝までの強敵と言えば準々決勝に当たる可能性が高い星導館の沙々宮紗夜ちゃんと刀藤綺凜ちゃんかな。後のペアはあっち側に集中してる感じになったみたいだから私たちのペアにとってはかなり的好都合。

私たちがカードの上側だとすると、下側の方には私たち以外の冒頭の十二人が全員集結していることになるから、波乱が起きるだろうね。いや、今後期待の宋と羅はどこまでやれるかな？

宋と羅は勝ち進むにしても、次に戦うのが【叢雲】と【グリユーエンローゼ華焰の魔女】のペアか

【ラミレクシア吸血暴姫】とその妹ちゃんペアのどっちかになるね。私としては前者の方になるかもだけど。

沈雲と沈華の対戦予想は準々決勝で

【クラウ・ソラス輝剣】と【ブライトウエン鎧装の魔術師】と当たる可能性があるかな。それ以外のペアにあの子たちが負けるなんて思えないしねー。

陽乃「いや、なんか良い感じにまとまってる気がするのは気のせいかな？それでもかっつくくらい良い感じになったね！」

宋「確かにそうですね。予選の5回戦で相手が星導館かレヴォルフかで決まりますが、我々は手を抜くつもりなんて毛頭ないですからね。」

銀梅「師姉のところでは星導館の沙々宮紗夜と刀藤綺凜ペアの可能性が高いですね。それ以外はあまり考えられませんし。」

陽乃「そうだねえ、まあ私と八幡くんなら楽勝だよ。」

永成「確かに師姉と尊師なら、圧倒的な勝負になるでしょうね。予想では尊師と刀藤さん、師姉と沙々宮さんですかね。」

羅「それが妥当かもな。それよりも雪ノ下姉、尊師はどちらに？」
陽乃「ああ、八幡くんなら界龍で星露と鍛錬してるよ。何でも星露が退屈だーってうるさかったみたいだよ？」

銀梅「何故でしょう。私が見る師父のイメージが段々子供っぽくなってきたのですが……」

永成「奇遇だね、私も丁度そう思っていたところだよ。尊師が来てからというもの、この学園は本当に変わりましたね。特に師父が。」
宋「ああ、それは此処にいる全員が感じているだろう。」

羅「別に卑下するわけでは無いが、何故あぁなってしまうわれたのだろうか……」

うん、多分それ界龍全生徒がそう思ってるよ。

陽乃 side out

八幡 side

八幡「つたく、勘弁しろよ。こちとら4回戦が終わったばつかだつてのにすぐお前と戦うなんてよ……こっちの身にもなれってんだ。この戦鬨狂。」

星露「仕方ないじやろうが!!お主らがあんな戦いを見せるもんじやから疼いて仕方ないのじや!どうしろというのじや!」

自分でなんとかしろよ、こっちからしてみればいい迷惑だ。

八幡「まあいい。それと、もうすぐお前が目をつけていた奴が戦うぞ。まだ確定はしていないけどな。」

星露「星導館の天霧じゃな?」

八幡「ああ。それ以外にお前がこの星武祭で気にしてる奴なんていないだろ?」

星露「まあのう、妾も今の界龍は実に刺激を感じておつてのう、弟子たちも1年前とは比べ物にならない程強うなっておるしのう。こ

れもお主のおかげじゃな。」

八幡「なら俺と手合わせするのをやめろよ、ソイツ等と手合わせしろよ。けど、それはあいつらが勝手に学んでいただけだぞ？俺はその手伝いをしたただけだ。」

星露「お主は相変わらずじゃなく。まあ、彼奴らもそこに惹かれたんじやろうなあ……それでどうじゃ？陽乃から聞いておるが、願い事は決まったのかえ？」

八幡「いや、全く。何一つとして良いのが思い浮かばない。こりや持ち越しかねえ……」

星露「まあ、そんな事じやろうと思っただわ。」

何も考えてなかった。ていうか何にも思い浮かばなかった。

星露「簡単なものにしたらどうじゃ？例えばじゃが六花から離れた場所に行き、英気を養うとかのう。」

八幡「んじやそれにすつか。」

星露「お主なあ……いい加減にも程があるぞえ？そんな簡単に決めていいのかえ？」

八幡「仕方ねえだろ、何も浮かばねえんだからよ。それと今のは冗談だ。そんなの長期休暇になったら行けるだろうし。」

星露「因みに陽乃は『新開発エリアの一部割譲』にするらしいぞよ？」

マジで？あんなゴミ溜めを？何をする気なんだ？

星露「まあ何か考えがあるんじやろうな。お主にはそういうののかえ？」

八幡「あつたらこんなに苦労なんてしねえよ。そしたら今頃、こんな悩み持ってたねえよ。」

星露「……それもそうじゃな。いつその事妾にその権限を譲渡するのはどうじゃ？」

八幡「あつ、今日は青椒肉絲だったけど1人分しかないから俺1人で食べるか。他に食ってくれそうな奴誰も居ねえし。」

星露「後生じゃ!!後生じゃから妾にも青椒肉絲を食べさせてたもう!!妾の好物を前にしてそれは無いのじゃ!!!」

だつたらアホな発言をするな。自分の首を絞める事になるんだからよ。しかし本当に何も浮かばないな……………1度シルヴィに聞いてみるか？

対策と悪口雑言

八幡 side

星武祭の4回戦、【叢雲】と【華焰の魔女】対【吸血暴姫】の戦いが終わり見所のある試合は終わったと思ったら、【叢雲】から急に星辰力が激減して周りからは、パフォーマンス扱いされていた鎖が出てきた。これはもう言い逃れは出来ないな。奴は一定時間しかあれを解除出来ないみたいだ。

陽乃「八幡くんの言う通りだったね。【叢雲】くんのあれは冗談じゃなかったみたいだね。」

八幡「ええ、でもこれで宋と羅の勝機が大幅に増えましたね。あれが本当にパフォーマンスだったらギリギリでしたけど、あの力に限界があるのならやり様は幾らでもありますしね。」

宋「尊師、【華焰の魔女】は如何思われるのです?」

八幡「逆に聞くが、お前らあいつの戦闘スタイルを見てどう思う?俺からしてみれば、あれは典型的な遠距離狙撃型か固定型の技しか使えないと見る。近接技もあるだろうが、それは奥の手だろう。これだけ言えばお前らでも分かるだろう?」

宋「はい。我々のどちらかが【華焰の魔女】を足止めしておけば、取るに足らないという訳ですね?」

八幡「まあな。やるなら羅の方がいいかもな。お前に教えた八極拳は長拳の応用を使っても分が悪いからな。元々この拳法は近距離専用で【華焰の魔女】みたいな遠距離攻撃型とは圧倒的に相性が悪いからな。」

宋「確かにこの武術は肩や肘の攻撃が主体ですから、戦うのであれば【叢雲】でしょうね。羅、【華焰の魔女】は任せても大丈夫か?」

まあ宋の場合、元々やってた拳法の技も織り交ぜてあるから大丈夫だとは思うがな。

それにしても……本来に來やがったよ永成と銀梅。まさかここまでやるとはな。同じ界龍だが準々決勝は楽勝だろうな。

セシリー「はっちまーん！いやあ凄い活躍だねー！！」ダキッ
2人「ウオン姉姉っ！」

陽乃「おっ！セシリーじゃん！」

入ってくるのはいいが、ノックをしてくれ。それと抱き着くな。
部屋に入って来たのは、セシリーと以外にも川崎だった。

セシリー「いやーまさか界龍が9組も残るなんてねー。快拳だよー！」

八幡「そりや何よりだが、そろそろ離れてくれ。暑苦しい。」
セシリー「もう！素直じゃないなー！」

いや、割と本気だ。

沙希「それでどうなの？宋さんと羅さんは勝てそう？」

八幡「ああ、特に問題はないと思う。」

沙希「そ……ところでさ、永成と銀梅とは最近いないけど、なんかあったの？」

八幡「いや？あいつらが『直接戦うまでは尊師の前には姿を現しません！』って豪語してな。それ以来本当に会ってない。」

八幡「それに戦う前提だからな、奴らも相当入れ込んでるだろうな。」

俺も戦うのが楽しみになってきたからな。言っておくが、俺は星露みたいに戦闘狂じゃないからな？

八幡 side out

雪乃 side

嘘……嘘よっ!?彼ごときがあそこまで勝ち進むなんてデタラメに決まってるわ!

それに、2回戦で出したあの技は何なのよ? あんな高等技術を彼が出来るわけないわ! やっぱ彼、何かやっているに違いないわ!

雪乃「……全く信じられないわ。そうは思わないかしら? 由比ヶ浜さん、小町さん。」

由比ヶ浜「そうだよね! ヒツキーがあんなに強いわけないしねっ!」

小町「そうですよ! あのゴミイちゃんがあんなに強いわけないですよ!」

姉さんと彼の試合は全て見たけど、本当に虫酸が走るわ。今すぐにも打ちのめしたいところだけど、まだ時期ではないわ。

私たちにも切り札があるのだから。

雪乃 side out

葉山 side

———ガラードワース内・食堂———

『天狼剣・絶技……天狼拔刀牙』

男子1「何度見ても凄いな! この比企谷八幡って! あの擬形体をたったの一撃で倒してしまうんだからよ!」

女子1「私もその映像データ保存してあるんだ! かつこいいよね」

！」

女子2「今の時点でも界龍は9組いるからね、私もあの人に何か教えてもらおうかなあ？」

女子1「無理無理っ！貴方じゃ相手にもしてもらえないわよ！」

男子2「相手は界龍の序列2位だぜ？お前なんか相手にしてもらえないよ！勿論、俺たちもな！」

女子2「自分で言う辺り流石だね！」

ガヤガヤッ!!

葉山「……………」

何であんな奴の話題なんて出すんだ？あんな無能なんか人に教えるなんて無理に決まってる！あの實力だって嘘さ！

葉山「皆は明日はどうするんだ？俺は5回戦を見に行こうと思ってるんだけど。」

男子1「そうだな……ドロテオ先輩とエリオットが出るからな、でも【夢幻月影】の方も気になるんだよな。」

女子1「なら男たちはドロテオ先輩のところで、私たち女子は比企谷さんのところ見に行くわ。どう？」

男子2「それ、お前が見たいだけだろ？」

女子1「いいじゃない。」

女子2「出来たらサインも欲しいな！」

女子1「あっ！じゃあ貰いに行かない？」

女子2「いいね！」

女子2人「さんせーいっ！」

男子2「まあ【夢幻月影】は人気だからな。性格は分からないが、顔も良いし實力もある。ウチの女子たちも【夢幻月影】のファンいるかな。」

男子1「無理もねえか。」

葉山「……………」

…………チツ、向こうでは触れずに済んだのに、こつちに來てからは奴の話題ばかりだ！何故こんなにも注目を集めるんだ！

女子1「私、一度彼と話してみたいわ。どんな喋り方をするのか気になるし。」

男子2「どうやって？」

女子2「エンカウント率は低そう……」

男子1「普通に会うのは難しいかもな。」

女子1「願望くらい持つてもいいでしょ!?本音なんだから!」

今度は会うだど!?ふざけるな!君たちは俺と一緒にいればいいんだ!あんな奴と一緒にいたら目が腐る!

まあいいさ。いつかは君たちも彼の本当の姿を見て幻滅するだろう。そうなったら、もう彼になんて興味はなくなつて、むしろ憎しみが増えているだろうしね。

アーネスト「やあ、調子はどうだい？」

女子1「か、会長!」

アーネスト「いや、そのままでもいいよ。何を話していたんだい？」

女子2「【夢幻月影】についてです!会長は何か知ってますか!」

アーネスト「そうだね……彼はとても優れた人だというのが僕の感想かな。彼は本当に多彩な事が出来るみたいだしね。」

女子2「へえ〜!」

アーネスト「僕も、一度彼と手合わせをしてみたいものだよ。でも、当校は決闘禁止だからそれは出来ないけどね。」

アーネスト「じゃあ僕も行くよ。あまり長居しても失礼だからね。」

ふっ、いつかは俺が潰してやるよ。その偽物の強さと一緒にね。

◎ここからの星武祭

—————

梁瀬『さあさあやってまいりましたー!!《鳳凰星武祭第》5回戦最終試合!ベスト8最終枠を手にするのは果たして何方のペアなのか!?!』

チャム『今年はレベルが高いっすから、どのペアにも優勝の可能性があるっすよ!』

梁瀬『それでは、現在勝ち残っている注目ペアを紹介していきましようっ!』

梁瀬『まずは銀翼騎士団ライフロードスの誇りと名誉にかけて戦う!ガラードワースのドロテオ・レムスとエリオット・フォースターツ!!』

チャム『ドロテオ選手は星武祭3回目の出場となる歴戦の猛者っす!エリオット選手も中等部ながらも銀翼騎士団入りした若き天才剣士っす!』

梁瀬『続くは星導館!今年は優勝をもぎ取れるか!?刀藤綺凜&沙々宮紗夜っ!!』

チャム『接近戦に強い刀藤と、火力で押す沙々宮選手の連携がハマりまくってるっす!』

梁瀬『ですが星導館といえば、これから試合が行われる天霧、リースフェルトペアも要チェックですね!』

チャム『はいっ!レヴォルフ所有の純星煌式武装【グラヴィティ覇潰の血鎌】を有するイレーネ、プリシラペアに見事勝利したっす!!』

梁瀬『ですがその一方で、天霧選手には様々な憶測が乱れ飛んでいますが?』

チャム『報道されている内容が本当だとしたら、今から行われる試合では大きなハンデっすね。』

梁瀬『彼は能力解放によるダメージが回復しているのか!?そして本日はあのパフォーマンズが見られるのでしょうか!?!』

チャム『今後の試合に注目っスね!』

梁瀬『最後を飾るのはやはり界龍っ! 此処の注目選手はほぼ全員っ! ですが今回は冒頭ベイジワンの十二人の選手だけをご紹介しますっ! 気になる方は大会結果もしくは生徒一覧をご確認下さい!』

梁瀬『まずは界龍が誇る双子の悪魔っ!』

【幻影創起げんえいそうき】こと黎沈雲リー・シエンユンと【幻影霧散げんえいむさん】こと黎沈華リー・シエンファっ!!』

チャム『多彩なコンビネーションから繰り出される星仙術は極悪にタチが悪いっス! これまで全ての対戦相手を手玉に取って勝利してるっス!』

梁瀬『そして最後は今大会の大本命ペアッ!! 今大会でも異色の輝きを放っているのが、界龍第七学院の大將格であるこの2人!! 序列2位むげんげっえい【夢幻月影】の比企谷八幡と序列4位まじょうてんかく【魔将天閣】の雪ノ下陽乃っ!!』

チャム『2回戦では、今大会の中でも注目ペアだったアルルカントの擬形体相手に圧倒的な力の差を見せつけて、どの試合も危なげなく勝利してきたペアっス!!』

チャム『雪ノ下選手の近接格闘術は現界龍の中では5本の指に入る程の実力であり、比企谷選手の動きは今大会でも1番の盛り上がりど驚きを見せてくれているっス!!』

梁瀬『さて、今大会の注目選手の紹介を終えたところで次に移りましょう!! この後出てくる天霧&リースフェルトペアにも注目ですが、対戦相手である界龍所属の宋然選手ソン・ランと羅坤展選手ルオ・クンザンにも注目です!』

チャム『この2人もかなり強いっスからね。序列もそうっスけど、実力の方も冒頭の十二人に充分通用すると思うっスよ! そして宋選手には【破撃肘はげきちゆう】、羅選手には【盾壊棍じゆんかいこん】の2つ名がついてるっスよ! どちらも強そうな2つ名っスね!』

梁瀬『さーてっ! いろんな意味で注目なこの試合ですっ!! 星導館学園、天霧綾斗、ユリス・アレクシア・フォン・リースフェルトペア! そして界龍第七学院、宋然、羅坤展ペアの入場でーすっ!』

宋「天霧くんっ! 君に関する噂の真相がどうであれ、我ら全力で相手をさせてもらおう!」

羅「本音を言えば万全の君と1対1で拳を交えたかったのだが、これはタッグ戦ルールの《鳳凰星武祭》だ。悪く思わないでくれ！」

綾斗「ああ、いや、そんな……」

宋「戦う前にそれだけ言っておきたかった、良い戦いにしよう。」

そう言ってから、宋と羅はステージへと飛び降りた。

ユリス「まさに武人といった趣だな。」

綾斗「ああいう人たちもいるんだね。」

綾斗とユリスも後に続くように飛び降りた。

梁瀬『さあ両選手ステージに出揃いましたっ！』

ユリス「彼方はまずお前が本当に全力で戦えないかどうか試してくるだろう。そしてすぐに見抜く、それが真実だな。」

綾斗「だろうね……」

ユリス「よし、いいか綾斗。ここが目印だ、しっかり覚えておけ。」

綾斗「えっと、合図は花火でいいんだよね？」

ユリス「それまでに条件をクリアしておけよ？でないとこれは実行出来ない作戦なのだからな。」

綾斗「うん、了解。」

2人が正面に向き直ると、宋は八極拳の構えをとり、羅は仕込棍を取り出して、元のサイズにしてから構えをとっていた。

梁瀬『果たして、この最終試合を制してベスト8に行くのは何方のペアなのか!?それでは始まります、《鳳凰星武祭》5回戦最終試合！バトルウ、スタート!!』

大金星

――――

宋「参るっ!!」

試合開始の合図と同時に、宋が地を蹴り綾斗に向かって突進する。綾斗も煌式武装で対応するが、対応しきれない方向からの打撃や、肩や肘から放たれる激しく強力な攻撃が続き、全く反撃出来ずに押されていた。

宋「ふむ、やはりあの噂は本当だったようだな。だが、だからといって手加減するつもりはない。」

それから宋の激しい攻撃に綾斗は防御に徹するしかなかった。

一方、羅とユリスの方でも同じような戦況が続いていた。ユリスが魔法で隙を作ろうにも、羅の棍術が上達したこともあってか、付け入る隙が全くなかった。

そして最も困ったのは、羅がユリスから全く離れないことだった。これでは作戦を実行しようにも出来ないのだ。

羅「……その程度か？星導館の序列5位と聞いて呆れるぞ！」

ユリス「くっ！」

ユリス（これで本当に序列19位なのか!?この実力、綾斗にも匹敵するぞ!?界龍が桁違いに強くなってるのは分かっていたが、まさか此処までとは……!!）

梁瀬『これは最初から驚きの展開です!!なんと星導館のペアが界龍のペアに一方的に攻められています!!』

チャム『天霧選手は今までのパフォーマンスも無し、星辰力の練り込みもイマイチ、噂は本当だったみたいっすね。』

チャム『リースフェルト選手の方は、単に相性が悪いのかもしれないっすね。』

綾斗「ぐっ！……はあ……はあ……」

綾斗（速い……それになんて攻撃の重さだ。剣で受けていても分くらい衝撃が強い。アレを決められたら本当にヤバイ。）

宋「中々良い動きをする。しなやかで柔軟かつ私の攻撃を受け流している。君も武術を嗜んでいるんだろう。でなければ、この動きについてこれる道理がない。」

綾斗も攻撃を受けたり躲したりするだけでなく、カウンター覚悟で攻めたりしているが、宋にはまるで読まれているかのように攻撃が当たらなかった。

綾斗「そこまで分かるんですね。流石は界龍の生徒だけありますね。貴方の技は足の踏み込んだ後に肩や肘を使った攻撃をしてくるようですね。それもとて強い……」

宋「ふむ……君は良い目も持っているようだな。だがそれだけでは、私を倒す事は出来ないぞっ！」

ユリスと羅の戦いも一方通行になりつつあった。羅が攻め、ユリスが防ぐ。これが繰り返されていた。

羅「どうした!? 防ぐだけか!? それだけでは俺を倒せんぞ!」

ユリス（これでは作戦を実行したとしても意味がない！こいつらの実力が此処まで高いとは……流石万有天羅の弟子だ！）

ユリス「全く、素晴らしいとしか言えんな。よくもまあそれ程の技術を身につけたものだ。」

羅「これも全て尊師のおかげだな。そうでなければ、お前とこんな試合は出来なかっただろう。」

ユリス「尊師？『万有天羅』をそう呼んでいるのか？変わったものだな。」

羅「確かに俺と宋の師は同じだが、入門する前から世話になってい
るお方がいてな、そのお方のおかげで我らは此処にいる。」

ユリス「成る程、その尊師とやらののおかげで私たちは圧倒されてい
るわけか。」

羅「身も蓋もない言い方をすると、確かにその通りだな。」

羅「だが、そろそろ決着をつけさせてもらおうとする。」

ユリス（そう簡単にやられるつもりはないが、奴の攻撃を躲すのは
少々難しい。ここは剣で防ぐか受け流すかだな。）

ユリスは頭の中で考えていたが、羅は棍の突きをする方だけ収納し
ていた。

ユリス「どういうつもりだ？」

羅「何、勝負を決めるだけだ。」

羅はそう言うのと、体勢を低くして収納した棍を片手に構え、手を突
き出してユリスの方へと向けていた。

ユリス「リピングストーンデイズ【赤熱の灼斬花】！行けっ！」

ユリスは10個程出した炎のチャクラムを羅に狙いをつけて飛ば
した。

羅は動かなかった。まるで蛇に睨まれた蛙のように。

羅「ハアツ!!」

羅が動いたと思ったら、目の前から消えてユリスの1m弱のところまで来ていた。

ユリス（よしっ！なんとか躲せる！）

羅「終わりだ【グリユーエンローゼ華焰の魔女】！詰めが甘いぞっ!!」

羅が棍を突き出すと、収納していた部分が伸びてユリスの校章が碎けた。

梁瀬『ユリス・アレクシア・フォン・リースフェルト、校章破壊!!
なんと羅選手、星導館の冒頭の十二人を破りました!』

チャム『彼の棍は折りたたみ式だったっすから、リースフェルト選手もそこまで機転が回らなかったんだと思うっす。これは羅選手が一枚上手だったっすね。』

ユリス「くっ……」

羅とユリスの試合が終わり、一方で宋と綾斗の方では……

綾斗「はあ……はあ……」

宋「正直君には感服している。私の攻撃をそれ程受けていながらも立っていることに。だがギリギリだろう。ギブアップはしないのか？」

綾斗「正直貴方には勝てる気しません。それでも、此処まで来て諦めるわけにはいかないでしょう？」

宋「フツ、つまらん事を聞いた。すまない。だがこれ以上君を痛めつけるのは申し分ない。君に敬意を払って私が持つ最大の技で勝負をつけさせてもらう。」

宋は肘に星辰力を纏わせて再び構えた。

宋「この肘は強力過ぎる故、受ける事ではなく、躲す事を勧める。」

綾斗（どうする？あの人の攻撃を躲すのは難しい。かといって受けるわけにもいかない。しかも両肘に星辰力を纏ってる上に、こっちは全力も出せない……ひどい状況だね、全く。）

宋「行くぞ【叢雲】ッ!!」

綾斗「っ!!」

宋の動きは綾斗が予想していたよりも遙かに速かった。その為に反応が遅れ攻撃を浅くではあるが受けてしまった。

そしてとうとう膝をついてしまう。

綾斗（まともに受けたらマズい事くらい分かったのに、浅いとはいえこんなに効くなんて……）

綾斗（もう、足も動きそうにないよ。封印解除の影響もあったからかな……でも、悪足掻きくらいはしてもいいかな。）

綾斗は持っている煌式武装を宋の校章めがけて投げたが、あつざりと防がれてしまった。そして綾斗は武器も無くなり身体も動かない。何も出来ない状態だった。

綾斗「…………もうダメだ。身体が動かない。投了^{リザイン}するよ。」

梁瀬『試合終了〜!!勝者、宋然&羅坤展〜!!なんと星導館の冒頭の十二人を倒す大金星だあ〜!!!』

チャム『2人共かなり本気だったっスね。これまでの試合では力をセーブしていたのかな?でも星導館の序列1位を倒したのは本当に凄いつス!』

綾斗「はあゝ負けちゃったな。」

宋「良い試合だった。」

綾斗「ああ、準々決勝進出おめでとうございます。頑張ってください。」

宋「ああ、君たちの分まで頑張ろう。さて、控え室まで送ろう。【華焰の魔女】では無理だろうからな。」

綾斗「す、すみません。」

ユリス「やはり、作戦を実行出来なければこのザマか。」

羅「いや、確かにお前たちは上手いかなかっただろうが、我々もこの勢いで行けなければ勝負は分からなかった。」

羅「俺が【華焰の魔女】、宋が【叢雲】とやる事に決めていたからな。」
ユリス「最初からお前たちの術中にハマっていたというわけか。完敗だな。」

羅「俺はもう行くが、今宋が【叢雲】を控え室まで送っているから、ゆっくり歩いて行くといい。」

ユリス「そうさせてもらう。次も頑張ってくれ。」

こうして、《鳳凰星武祭》5 試合最後の試合は界龍の宋と羅の勝利に終わった。

影からの警告と食い意地

八幡 side

……あいつら、メツチャ強くなってんじゃねえか。1回も攻撃受けねえなんてな。次の6回戦でも良い戦いするだろうな。

虎峰「僕も鼻が高いですね！彼らが此処までやってくれると気分が良いです！」

冬香「虎峰さんは拳士ですからね、喜びもひとしおでしょう。」

セシリー「いやー、皆ホント強くなったよねー。八幡、あたしたちもうかうかしてらんないよー？」

八幡「その前にお前ら2人はよお……何で当然のように居座ってるんだ？」

俺が注意したのは、セシリーと星露の事だ。虎峰と冬香さんは勝手に人の部屋入るような人じゃない。

星露「良いではないか！此処は居心地が良いのじゃ！」

セシリー「あたしも気に入ってるのー！」

ならせめてお邪魔しますくらい言え。

八幡「全く……あつ冬香さん、その揚げ皿取ってくれませんか？」

冬香「はい……これですよね？」

八幡「ええ、ありがとうございます。」

今日は皆大好き唐揚げにした。元から作るつもりだったが、地獄耳の星露とセシリー、元から来るつもりだった虎峰と冬香さんとで計5人分の唐揚げを作っている。まあ大体30個くらいだ。多めに作っ

でも大丈夫だろうしな。

虎峰「……………師父、何か手伝ってはどのようなのです？セシリーもですが。」

師父「分かつたらんな虎峰よ、偉い者は大きく構えておくものじゃ！」

この部屋の中で一番偉いのって俺だよな？だってこの部屋一時的にはいえ俺の部屋だぞ？

セシリー「あたしは手伝おうとしたら、八幡がドン引きしてたからもうやめたー。」

うん、あん時はマジで驚いた。明日槍じゃなくて落星雨が降るんじゃないかと思った。そんなくらい驚いた。

冬香「ふふっ、八幡さんのお部屋もすっかり賑やかになりましたね。」

八幡「何処ぞのチビがうるさく弟子になれとうるさい頃からずっとですよ。今に始まった事じゃないです。まあ今もうるさいけどな。」

星露「お主っ!!今言つてはならん事を言ったな!？」

えーなんの事ー？八幡分かんない。

虎峰「でも、師父が戦い以外で楽しそうにしてるのは今までにないですから、僕としては少し嬉しいです。」

セシリー「確かにねー。前までは入門希望者で殺到だったのに、今では閑古鳥が鳴いてるからねー。偶に来るくらいになっちゃったしねー。八幡？今からでも新しい派閥作ろうよー♪」

八幡「作らん。」

まだ言うかこいつは……………

冬香「まあ、八幡さんが全て掻つ攫っていったというのも、あまり間違ってはいませんしね。」

星露「おかげで妾は退屈じゃ。」

八幡「だからって俺に八つ当たりすんなよな。お前の蹴り割と痛てーんだぞ?」

星露「妾の攻撃を全て余裕で弾いておる奴が言うわ!あれでも8割出しておるのじゃぞ!」

あらやだ物騒。

冬香「八幡さん、全て揚げ終わりました。このお皿に盛りつけていいのですよね?」

八幡「ああ、すみません。途中から放ったらかしにして。お願いします。」

盛り付けた後は、ご飯に味噌汁と付け合わせのサラダをテーブルの上に置き、晩飯が出来上がった。

星露「ほほ、今日も美味そうじゃな。」

セシリ「流石八幡だねー!今日も美味しそうー!」

この2人は……もういい、慣れた。

p i p i p i …… p i p i p i ……

ん?戸塚?

八幡「悪い、先食べててくれ。ちよつと連絡が来た。」

虎峰「宋たちからですか?」

八幡「いや、知り合いからだ。」

——プレイヤートルム——

八幡「此処ならいいな。」

そして俺は戸塚に通信を掛けた。

戸塚『こんばんは八幡!』

八幡「よう戸塚、元気そうだな。」

戸塚『うん、こつちでも楽しく過ごせてるよ!あんまり八幡と会えないのは残念だけどね。』

八幡「そのうち会うか。」

戸塚『うんっ!あつ、そうそう!準々決勝進出おめでとう!!凄いよ八幡っ!!』

八幡「ありがとな、まあこれくらいはやらなきゃな。それで今日は急にどうした?」

戸塚『あっ!そうだった!ごめんね脱線しちゃって!』

八幡「いや、大丈夫だ。」

戸塚『連絡したのは顔と声を聞きたかったのもあるけど、他にもあるんだ。』

それもあつたんだな……

戸塚『……雪ノ下さんたちが動いたよ。最近通信する回数が増えてきてるんだ。』

八幡「……………」

戸塚『何処に掛けてるかは分からないけど、八幡の名前は出してるよ。』

八幡「……お前、危ない事してないよな?戸部や海老名さんもだ。」
戸塚『大丈夫だよ。そこまでくっついてるわけじゃないから。』

八幡「……ならいいが、ほどほどにな？集中し過ぎると包囲されるからな。」

戸塚『……分かった。戸部くんたちにも伝えておくよ。』

………本当に大丈夫か？

戸塚『続けるけど、今のところ通信をしてるのは雪ノ下さんだけで、由比ヶ浜さんと小町さんは何もしてないかな。外出する時も3人で出掛けてて南西の方に行ってるのが多いかな。』

南西………レヴォルフか。

八幡「おおよその予想は今つけたが、露骨に動き過ぎてるなあいつら。この星武祭開催中に動き回れば目立つだろうに。」

戸塚『僕はレヴォルフが怪しいかなって思うんだ。方向も一致してるし。』

八幡「だが、まだ分からんな。こつちも対策を練っておこう。すまんな。」

戸塚『ううん、気にしないでよ。』

八幡「それと戸塚、『猫』には気をつけろ。特に『黒猫』にはな。」

戸塚『黒猫？何で？』

八幡「分かんねえか。今のうちに教えておく。レヴォルフには【黒猫機関^{グルマルキン}】っていう工作機関がある。お前らでいう【影星^{タイラント}】みたいな連中だ。奴らは情報の秘匿、収集が他学園に比べて突出している。何かあればすぐに【悪辣の王^{タイラント}】へと情報がいく。奴らを尾行するなら黒猫に気をつけろ。いいな？」

戸塚『……うん、分かった。取り敢えず僕の部屋の窓とか外とか見渡してみたけど、猫はいなかったかな。』

八幡「そうか………まあ、伝えてくれてありがとな。また今度な。」

戸塚『うん！八幡も星武祭頑張つてね！シルヴィアさんにもよろしくっ！』

そして通信が切れた。
相変わらず良い奴だな、お前は。

――八幡ルーム――

八幡「遅くな……一体何だこの状況？」

虎峰「八幡、戻りましたか！ 実は師父とセシリーが唐揚げを残さず食べようとしていたので止めていたところですよ！」

冬香「八幡さんだけおかず無しで食事をされては私たちが気まずくなってしまうので。ああセシリーさん、ダメですよ！」

八幡「なら一個ずつあげて下さい。それで最後です。」

冬香「よろしいのですか？」

八幡「ええ、もう慣れましたから。」

それから俺は、平和に晩飯を食べることができた。

八幡「そんなに美味いかねえ？」

君と歩みたいから

八幡 side

飯も食い終わるとのんびりしたくなる。 “飯を食い終わったら、横になる” という言葉がある。俺も今のんびりしているが横にはなっていない。いや、正確には横になれないでいた。

その理由は……

シルヴィア「♪」

隣にいる俺の恋人、シルヴィア・リユーネハイムが俺の手を握り、肩に頭を乗せながら鼻唄を歌っているからだ。

因みに余談だが、俺は界龍で飯を食った後に伽耶梟で空を散歩しながらシルヴィの家に向かっていた。

シルヴィア「♪………やっぱり八幡くんという時間は凄く幸せだな」。

八幡「それはお互い様だ。俺もシルヴィという時間は幸せだ。」

シルヴィア「ふふっ、八幡くんっ♪」ダキッ

シルヴィは嬉しい事があると、俺に抱きつく癖がついてしまった。

俺的には役得だからいいんだけどな。

シルヴィア「そういえば八幡くん、星武祭のお願い事決まったの？この前はまだ決まっていって言ってたけど……」

八幡「まあ一応な。今までにあつたかどうかは分かんが、まあ俺的には満足できると思う。」

シルヴィア「そっか。なら安心だよ。」

八幡「何でお前が安心するんだ？」

シルヴィア「だって、本当になかったらどうするのかなーって思ってたから。」

確かにどうしてたんだろうな。

シルヴィア「でも、今回の《鳳凰星武祭》は凄いね。準々決勝だけでもう界龍が殆どだし、冒頭の十二人でもないペアが残ってるからね。」

八幡「その点では星導館も同じだと思うが、一応元序列1位って感じだからな。注目は違ってくるか。」

シルヴィア「そうだよ。しかもそのペアの全員、そして界龍の生徒全員がとある男の子から指導を受けただけで急に強くなっちゃうんだからね。」

八幡「それ絶対俺に言っただろう？まあ半年くらいやってたら伸びるもんだと思うがな。元々界龍にいる奴らはかなり素質のある奴が多いからね。」

今いる中で1番冒頭の十二人に近いのは宋で、続くのが羅、序列では少し離れてるが永成と銀梅もそれに近いレベルだからな。

ていうか既に13位から30位はそれに近いレベルなんだけどな。他の学園に行ったら間違いなく序列入りするだろうな。

シルヴィア「でも凄く早いよ。半年って言うけど、本当にあつとい

う間だから。」

八幡「無意識に過ごしていると、いつの間にかそんな時期になっていたって感じなのかもな。俺にはよく分らんな。」

シルヴィア「あはは、八幡くんって教師に向いてるかもね。」

八幡「俺がか？ンなわけねえだろ？あつても外部コーチだ。俺が教師になつても教えられることなんて何もねえよ。」

シルヴィア「そう？八幡くんなら技術以外にも、礼儀とか教えてそうだけだなー。」

八幡「教えてはいるが、そこまで欠陥している奴もないからな。もしそんな奴がいたら本気で殴^{マジ}つてる。」

普段はあんま気にしてないが、礼儀を欠く奴って俺結構嫌いだから。

八幡「それに、教師もやって生徒の指導も面倒するとなると、シルヴィと過ごす時間が減るからお断りだ。」

シルヴィア「っ！……そ、そっか／＼なら仕方ないね！／＼」ダキツ

あからさまに誤魔化している。照れながら抱きついている時点でもうバレバレだ。

そして暫くしてから離してくれる。

八幡「しかし将来か……此処に来てから考えた事なかったな。シルヴィはあるのか？このままアイドルを続けるとか、なんか他にやりたいこととかって。」

シルヴィ「そうだなあ……私の希望としては来年の8月8日になったら婚姻届を書いてから20歳まで待つて、そして結婚かなあ。アイドルは高校卒業と同時に引退しようかなって思つてて、今ペトラさんと相談中。やりたい事が八幡くんのお嫁さんだし！」

八幡「8月8日って俺の誕生日じゃねえか。しかもこの3年の計画性がすげえな。」

シルヴィア「そんな事ないよ。本当なら18歳になったと同時に結婚したいんだから！でもそれだとあんまり計画性がないってペトラさんに怒られちゃった……」

うん、俺も少し反対だよ？君少し気が早すぎるからね？そんなに急がなくても俺は逃げないから。

八幡「卒業つつても学園には大学部として残るんだろ？」

シルヴィア「うん。アイドル引退したとしても就職出来ないわけじゃないから、何処かにバイトしようとは思ってるけどね。」

八幡「変装してか？」

シルヴィア「それは難しいかな。此処ってそういうの厳しいから。」

………そんなじゃ来年も出るか。

八幡「んじゃ、未来の嫁さんが此処まで言ってるんだ。俺も手助けしないとな。」

シルヴィア「い、いいよ！八幡くんにも悪いし大丈夫だよ！」

八幡「いや、シルヴィがそこまで本気なら俺も本気だ。今年はもう願い決まってるから変えないとしても来年ならまだ間に合うよな？」

シルヴィア「……まさか《獅鷲^{グリプス}星武祭》に出るなんて言わないよね？」

八幡「ん？願いを叶えるならそれしかないだろ？他に何があるんだ？」

シルヴィア「ダメだよ！八幡くん自身のためなら分かるけど、私のお願い事のためになるなんて！」

八幡「何でだ？」

シルヴィア「だって！そんなの八幡くんに悪いし、叶えるなら私があと1回の《王竜星武祭》で優勝すればいいし、それに――」

八幡「勝てなかったらどうするんだ？そのための俺だろ？」

シルヴィア「で、でも！」

八幡「シルヴィが俺との将来を考えてくれてるなら、俺も中途半端じゃいられねえんだよ。そんな時のために俺がいるだろう？」

八幡「それに、お願いは多ければ多いほどいいだろ？それを叶えてくれるんだからいいじゃねえか。」

八幡「困った時はお互い様だ。それでよ、どんな職場にする？」

シルヴィア「……どうして？私の事情なのにどうして……」

そんなの決まってるだろ。

八幡「お前を愛してるからに決まってるだろ。それ以外に何がある？それ以外に理由があるのか？」

八幡「まあ、俺としては他の男の近くに行って欲しくないってのもあるんだけどな。『お前は俺の側にいろ。』いいな？」ギュツ

シルヴィア「……じゃあ、お願いしてもいいの……かな？」

八幡「任せとけ。今のうちにでもいいからどんな店で働きたいか考えておけ。」

シルヴィア「………ねえ八幡くん。先に言っておくね、ゴメン！」

八幡「んむっ!？」

シルヴィは突然キスをしてきた。何もなただのキスだが、シルヴィからは凄い愛情が伝わって来た。

それを10分くらい刻み刻みでやっていたが、何時間もしていたように感じる。

シルヴィア「んっ……ゴメンね突然。でも凄く嬉しくて。我慢出来なかった。」

八幡「……構わねえよ。帰って以来してなかったからな。」

八幡「………なあ。こんな事このタイミングで言うのもアレだが、少し物足りない。もう少しいいか？」

シルヴィア「うん、私ももっと八幡くんとキスしたい。」

それから2人は口付けを続けた。最初は唇をついばむようなキスだったが、徐々にお互いの舌を交わり合うという情熱的な口付けを1時間も交わしていた。

◎忍び寄る悪意

――――

此処は六花南西に位置する六学園の1つ、レヴォルフ黒学院である。この学校は日頃から素行が悪いのが有名で、新開発エリアを根城にしている生徒たちも多い。

その学院の前に黒主体で緑のサブライトがついた車が停まっていた、エンジンがかかっているが、その場から動く気配は全くなかった。車内には1人の人物がいた。非星脈世代でありながらレヴォルフ黒学院生徒会長であり、【悪辣の王^{タイラント}】で有名なデイルク・エーベルヴァインだった。

そしてその車に近づく影が2つ。

1つは………

ころな「か、会長、到着しました!」

レヴォルフ黒学院の生徒会書記、檜丸ころなだった。もう1つは………

デイルク「………ふんつ、俺に話があるってのは聞いてたが、まさかテメエだとはな。どうだ、こつちに来て早々に打ち負かされた気分はよ?」

???「そんな事はどうでもいいでしょ?それよりも早く本題に入りたいのだけど、乗せてもらってもいいかしら?」

デイルク「ふんつ、まあいい。その本題とやらの付き合ってやるよ、雪ノ下雪乃。」

星導館学園の雪ノ下雪乃だった。

――車内――

車内では運転手とデイルク、雪乃の3人だけだが、運転手には2人の会話は聞こえない状態だった。

そんな2人は少しの間は沈黙が続いていたが、ようやく口を開いた。

デイルク「本来ならテメエごときの相手なんざしている暇なんてないが、学院の前をいつまでもウロウロされても目障りだからな。話だけでも聞いてやる。ありがたく思うんだな。」

雪乃「貴方のところの檜丸さんには感謝しなくてはいけないわね。せつかく貴方と話せる機会を作ってくれたのだし。」

デイルク「前置きはいいい、さっさと本題に入りやがれ。」

雪乃「……………そうね、単刀直入に言うわ。私たちの復讐の手伝いをしてもらいたい。正直に言うと、私たちだけではそれはかなり難しいわ。そこで貴方の力を貸してもらいたいよ。」

デイルク「あ？なんのメリットがあつてテメエの復讐の手伝いなんざやらなくちゃいけねえんだよ？俺がそんなに暇に見えるのか？だとしたらテメエの目は節穴だな。」

雪乃「比企谷八幡、貴方もこの名前くらいは知ってるでしょう？今《鳳凰星武祭》で注目されている生徒の名前よ。」

デイルク「……………」

雪乃「それに、オーフェリア・ランドルフエン……………彼女、訳は知らないけれど、彼にご執心のようなね？」

デイルク「……………テメエ、一体どこまで知ってやがる？」

雪乃「あら？カマをかけたつもりだったのだけど、案外簡単に引つかかってくれたわね。これで貴方にも、彼に対して何かしらの不満がある事は分かったわ。話を続けてもいいかしら？」

デイルク「チッ、食えねえ女だ……………」

デイルクも少し焦っていたのだろうか？雪乃の言葉に反応してしまった。普通ならこんな些細なミスはしないだろう。だが今の駆け引きでは雪乃の方が1枚上手だったようだ。

デイルク「テメエが俺たちの事情を知ったところで何になる？テメエには何の関係もねえ事だ。それに、他学園のテメエが俺に話があるってのも不自然過ぎる……まあ、今はもうどうでもいい。話を続けろ。」

雪乃「その比企谷くんが私たちの復讐したい相手よ。そこで貴方には、何処か良い場所を提供してもらいたいよ。出来れば使われなくなったビルとか、廃墟が好ましいわ。」

デイルク「………何だ、それだけか？」

雪乃「ええ、彼を誘う手札はこつちが既に用意してあるわ。後は場所が欲しいだけだもの。他はないわ。」

デイルク「………その手札ってのは？」

雪乃「彼の妹、比企谷小町さんよ。彼女は元々私たち側の人間だから協力してもらってるわ。」

デイルク「妹1人に奴が動くとは思えねえがな………おい、奴が動くっていうその根拠はあるのか？」

雪乃「ええ、彼はシスコンだもの。妹である小町さんに何かがあれば、絶対に反応があるはずよ。」

デイルク「お前の考えは理解したが、俺には何か得があるのか？こうして聞いてりゃ、ただ場所を提供しただけで終わりに聞こえるんだが？役割損だなんてゴメンだぜ？」

雪乃「勿論、タダではないわ。彼には私たちへの謝罪、《鳳凰星武祭》の決勝不戦敗、そしてオーフェリア・ランドルフエンさんとの絶縁を要求するのよ。貴方にとっては悪い話ではないと思うのだけど？貴方の名前は出さないし、レヴォルフの事も一切口外したりしないわ。」

デイルク「………テメエらがやってくれるってんなら良い話じゃねえか。いいぜ、協力してやるよ。だがくれぐれも俺の事は話さん

じゃねえぞ。いいな？」

雪乃「交渉成立ね。じゃあ場所なのだけれど……………」

そして2人は細かい内容を話し合い、計画を練り終えてから車は停まり、雪乃は車を降りた。そしてその車の方は用済みだと言わんばかりに挨拶も無く走り去って行った。

雪乃「…………ふふふつ、舞台も整ったわ。これでようやく貴方を跪かせる事が出来るわ。待ってなさい、比企谷くん。」

※抜ける緊張感

綺凜 side

——控え室——

私は今、かなり不安になっています。その理由は相手が強いからではなく、私の剣があの人に通用するのかなという事なのですが……おそらくは全く歯が立たないと思います。

比企谷八幡さん、あの人が使った剣術は古武剣術の1つの一刀流。その中でも北辰一刀流に近いものでしたが、歩法や剣捌きが明らかに滑らかかつ強力なものでした。

そして一番の疑問が、比企谷さんの使う一刀流には一刀流の祖、鐘捲流かねまきりゆうの動きが加わっていたのです。鐘捲流はほぼ死滅した剣術で現在は抜刀術しか残されていない程の極めて珍しい剣術。

つまり、比企谷さんは一刀流の免許皆伝にして北辰一刀流と鐘捲流の3つの動きを混合させた剣術を使うという事になります。しかもこの剣術は開祖が鐘捲流、2代目に一刀流、3代目に北辰一刀流と他流派はあれど、相性がとても良いのです。

しかもそれをあの人とはとても上手に使いこなせている上に、アレンジまで加えています。今の私の刀藤流が通じるかどうか……

紗夜「……綺凜？」

綺凜「わあっ!? え、ええっと、はい!? 何ですか?」

紗夜「もしかしくなくても緊張してる?」

綺凜「……は、はい。」

紗夜「私も。相手は界龍の序列2位と4位、あんなの見せられたら勝てるとは思えない。まさかあの擬形体を切るなんて……私が戦うはずだった相手だったのに、なんて事をしてくれる。」

綺凜「あ、あはは……」

紗夜さんは凄いなあ。私と違って平常心を保ってる。私なんてどうやって対応するかで頭がいっぱいなのに。

紗夜「あまり考え過ぎるな。相手は強いけど、いつも通りやれば何とかなる。」

綺凜「紗夜さん……」

紗夜「でもかなり不安。」

紗夜さん……台無しです……

綺凜 side out

陽乃 side

陽乃「それでえ〜？八幡くんどうするう〜？やっぱりロリ巨乳の銀髪剣士っ子？」

八幡「……あの、陽乃さん？刀藤に恨みでもあるんですか？」

陽乃「ん？なんでそう思うの？」

八幡「いやいや、今の台詞思い出してくださいよ。悪意が凄くこもってましたよね？」

陽乃「まあそれはいいとして、八幡くんはどっちとやる？」

八幡「いいんですか……俺はどっちでもいいですけど、じゃあ剣で打ち合いたいので刀藤の方で。」

陽乃「八幡くん……やっぱり小さい子が好きなの？」

八幡「おいポンコツはるちゃん先輩、何おバカな事言ってるんだよ。頭切り替えろ。」

ポ、ポンコツ!?はるちゃん!?

陽乃「ちよつと!?今の何!?ポンコツはるちゃんって何さ!？」

八幡「そのまんまですが？」

陽乃「私先輩だよね!？」

八幡「先輩ってつけたじゃないですか。」

それよりもなんでポンコツ!?

陽乃「なんでポンコツなのさ!？」

八幡「結構バカっぽい事言ってたので。」

陽乃「はるちゃんはいいいよ?可愛いから推奨。でもポンコツはないよ?」

八幡「じゃあ俺への変態発言とか取り消してくれませんか?俺はロリコンじゃないですから。」

ま、まあそれは確かに。

陽乃「確かにそうだね。ゴメンね八幡くん、八幡くんはノーマルだよね!」

八幡「当たり前ですよ。」

陽乃「じゃあさ!私はなんて呼ぶの?陽乃?それともはるちゃん?」

八幡「……これまで通りのさん付けダメなんですか?」

陽乃「別にいいけど、曉彗はさん無しでタメ口でしょ？私も別にそれでいいよって言ってるつもりなんだけど？」

八幡「かなり遠回しな言い方ですね。」

陽乃「いいでしょ別に！それで？どうするの!？」

八幡「陽乃さんはどうなんです？俺にそう呼ばれたいとかつてのはあるんですか？」

っ！……確かに考えた事はあるけど、呼ばれたいとは思った事なかったな。実際どっちなんだろう？

陽乃「分かんないからとりあえず呼び捨てとタメ口やってみてよ！」

八幡「……まあ少し気が引けるが、少しだけだぞ、陽乃。」

………え？なんか始まってる？もうやってるの？

陽乃「よ、よし！じゃあさ八幡くん、今回はどんな戦術で行こうか？」

八幡「そうだな……俺は刀藤と剣術勝負したいからな、沙々宮は陽乃に任せる事になるが、陽乃はどうしたい？」

陽乃「ま、まあ足止めくらいなら出来るよ？別にそのまま相手してもいいし。」

お、おお………な、なんか凄い違和感だね／＼／＼

八幡「じゃあ1対1でいいか？」

陽乃「い、いいんじゃない？あと八幡くん、もうストップで！」

八幡「……割と早かったですね。それでどうでした？タメ口で普通の名前呼びされた感想は？」

陽乃「うん、このままでいいよ。違和感凄いから慣れないよ。」

八幡「まあそれは俺も同じですよ。」

うん、やっぱりこっちの方がいい。八幡くんに敬語無し、さん付け無しで会話されたらなんか照れ臭い…………

八幡「それと陽乃？ 沙々宮の攻撃はちゃんと防いでくれよ？」

陽乃「だからもういいってばー!!」

八幡「…………あつ、はるちゃんの方？」

陽乃「そういう意味でもなあゝい!!」

もうっ!! 準々決勝だつてのに緊張感無いなあ、ホントにもうっ!!

準々決勝最終試合

――――

梁瀬『さあ皆さん、お待たせしました!!今日の最終試合、準々決勝最終試合が間も無く始まりまーすっ!!!』

チャム『今大会は凄いつス!!今の段階で準決勝に進んでいるペアは全て界龍っスから、今行われる最終試合で界龍が勝てば、史上初の1学園による準決勝独占っス!!これは期待せずにはいられないっス!!』

梁瀬『期待も集まるこの準々決勝の最終試合っ!!此処で最終試合の選手情報を振り返ってみましょう!!皆さん、中央のスクリーンにご注目ください!!まずは星導館学園の沙々宮紗夜選手!!序列外ではありませんが、総合的な強さを見ると間違いなく在名祭祀書ネームドカルツに入る実力者です!!彼女は遠距離射撃型の煌式武装を主な攻撃手段としており、高火力の武装を使っています!!』

チャム『中でも1回戦で使った煌式武装は接近戦でも耐えていたから、彼女自身の距離も対応出来る、ある意味万能型の選手なのかもしれないっスねー!』

梁瀬『続くは同じく星導館の刀藤綺凜選手!!星導館学園の元序列1位にして【疾風迅雷しつぷうじんらい】の2つ名を持っています!名門である刀藤流の使い手にして、繰り出される剣術は折り紙付き!!』

チャム『彼女の使う刀藤流の剣術はかなりのものっス!中でも刀藤流の代名詞である【連鶴】はとても強力で隙を与えない程の攻撃速度と正確さっス!!』

梁瀬『変わりましたして界龍第七学院の序列4位【魔将天閣ましようてんかく】の雪ノ下陽乃選手!!まるで踊っているかのような華麗な体術で相手を翻弄していました!!いやあくまさかあんなにも滑らかな動きをする体術があるとは思いませんでしたよー!!』

チャム『身軽でしなやか、そして柔軟で強力な体捌き、これほど完璧な動きを出来る選手は滅多にいないっスよ。間違いなく彼女の鍛

鍊の賜物っスね。それに今大会1、動きが美しい選手としてもピックアップされてるっスから、今から行われる試合も目が離せないっスよ!!』

梁瀬『そして最後はこの男、界龍第七学院の序列2位【むげんげっえい夢幻月影】の比企谷八幡選手!!この選手は剣の攻撃が速かったり重かったりするから、見た目とは裏腹にメチャクチャな一撃をする可能性が大です!!』

チャム『キレのある動きには要注意っスよ!とんでもなく素早い攻撃で全くついていけないっスから!それだけでなく、強く大胆な攻撃にも要注意っスよ!!それに【柊々切丸】の初適合者でもあるから、1つ1つの動きに目を凝らしてないと、痛い目に遭うかもしれないっスよ。』

梁瀬『これでかなりハイレベルな試合になることがお分かりになったと思います!』

チャム『そして星導館が残って下剋上か、はたまた界龍が準決勝独占なのかも気になるところっスねー。』

梁瀬『注目の集まる最終試合になりそうですねー!さあ、選手の登場ですっ!最初に出てきたのは、星導館学園、沙々宮紗夜&刀藤綺凜ペアー!!』

観客側からは大歓声が上がった。

梁瀬『最後に残された界龍以外の学園が今登場しましたっ!』

チャム『2人の戦術はタッグ戦ではオーソドックスだけど、距離に合った戦い方が出来ていて、かなりの力を発揮しているっスから、勝機は充分あると思うっス!』

梁瀬『そして反対の方から現れたのは、今大会の大本命ペア!界龍第七学院、比企谷八幡&雪ノ下陽乃ー!!』

これもドームが大歓声で響き渡っていた。いや、先程よりも大きな声の集合体がドームを包んでいた。

梁瀬『比企谷選手はこれまで剣術と拳法を圧倒的な俊敏さで駆使した戦い方を！雪ノ下選手は強力な体術で相手を圧倒したり力を利用したりでかなりの使い手です!!』

チャム『どちらも凄い腕前だったス！それに比企谷選手は剣術も使えるみたいだから、刀藤選手と戦うのでは？と思うと楽しみっス!!』

陽乃「それで？八幡くんはどんな戦い方をするの？剣^{けん}？それとも拳^{けん}？」

八幡「そんなややこしい言い方しないでくださいよ。確かに最初は刀藤と戦いたいと思ってましたけど、あいつらも隠し玉がないとも限らないので、少し様子見といきましょう。それからどっちがどっちをやるかを決めましょう。」

陽乃「君の好きなように決めていいよ、私は君を信じるからね。」

八幡「……………では俺が刀藤を相手します。陽乃さんは沙々宮をお願いします。」

陽乃「了解っ！君の判断に従うよ。」

綺凜「…………やはりこれまでの相手とは圧力が違いますね。どちらを相手にしたとしても一筋縄ではいけそうにないですね。」

紗夜「……ん。あの2人に懐に入り込まれたら終わりと思うべき。」

綺凜「それでは予定通り、私は比企谷さんのお相手をやります。紗夜さんは雪ノ下さんを！」

紗夜「了解した。」

梁瀬『さあ両選手出揃いました!!果たして準決勝の切符を手にするのはどちらのペアなのか!?それではお送りしましょう!!《鳳凰星武祭》準々決勝、6回戦最終試合バトル、スタートッ!!』

準々決勝 ①

――――

試合開始の合図が鳴り響き、同時に攻め上がると思ったが、何方のペアも動こうとはせずに互いの様子を伺っていた。

剣を構えている綺凜と34式波動重砲・アークヴァンデルス改を構えている紗夜。

自然体を解かない陽乃と納刀状態の柊々切丸の柄の部分だけを握っている八幡。

そして……

八幡「なあ、少し聞いていいか？」

紗夜「？……何？」

八幡「お前らは俺たちのどつちと戦いたいんだ？俺としては刀藤と戦ってみたいんだが、そっちはどうなんだ？」

紗夜「……何だ、手加減のつもりか？」

八幡「いや？ただ純粹に気になったただだけ。俺としても剣を扱って
る奴とは戦ってみたかったからな。」

紗夜「綺凜、どう思う？」

綺凜「……比企谷さんは嘘をついていないと思います。それに、私も比企谷さんと戦ってみたいです！」

紗夜「分かった。決まった、私が女の方で綺凜が男の方。」

八幡「おう、サンキューな。」

陽乃「名前覚えてないんだ……」

八幡「まあ分かりやすいつちや分かりやすいですけどね。一応邪魔されたくないんで、俺向こうの方に行きますね。」テクテク

陽乃「はーい！いってらっしゃーい！」

八幡は陽乃と20mくらい離れたところで立ち止まり、綺凜の方に

向き直った。
綺凜と紗夜も意図を察知したのか、正面に来るように移動していた。

――陽乃&紗夜 side――

陽乃「確か沙々宮ちゃんだったかな？準備はいいかな？」

紗夜「いつでもいい、かかってこい。」

陽乃「そう？じゃあ……………」

ドゴッ!!!

紗夜「っ!!」

陽乃「へえ…………よく防いだね。」

紗夜「……………」

陽乃「でも、次は当てるからね。」

紗夜（全く見えなかった。移動から攻撃の間の時間が短過ぎる。それに…………アークヴァンデルス改に罅を入れるなんて、信じられない…………この銃は私の持つてゐる煌式武装の中でも一番の硬さなのに

……)

陽乃「どうしたの？来ないのかな？」

紗夜「作戦を考えてるだけ。」

陽乃「ふうん……まあいつか。」

紗夜（出し惜しみをしてる暇はなさそう。一気にかたをつけるしかない。）

決意を決めた紗夜はアークヴァンデルス改を待機状態に戻し、新たに2つの煌式武装を取り出した。

紗夜「お前はかなり強い。だから私も本気でいかせてもらう。」

陽乃「……私もナメられたものだなあゝあはは………まあ、いいけど、ねっ!!」

今度は見える速さで陽乃は蹴りかかった。だが紗夜は地面を強く蹴った後に空中で煌式武装を展開していた。

紗夜「本来はあのアルカントに出す予定だったが、お前たちに倒されてしまった。だからお前たちに受けてもらう。41式甲型粒子双砲・バルデンホルト。」

紗夜「バースト。」

紗夜が展開してすぐに2つの砲口から粒子砲が発射された。

陽乃「っ！面白いねえ。【風流し】！」

陽乃は脚に星辰力を纏わせると、そのまま回転して1つの粒子砲を天井に誘導するかのように受け流し、もう1つを自身の掌の上に浮かび上げていた。

紗夜「っ!!」

陽「あはは♪凄いでしょ?この技はね、太極拳の型を応用に作った技なんだよ!特に君みたいな一撃の強い砲撃には効果抜群なんだよ!」

手に浮かばせている粒子砲を遊ぶように弄くり回しながら説明していたが、それは遠回しにこう言ってるようにも聞こえる。

『強くて強力な遠距離攻撃は私には全く通用しないよ♪』つと。

――八幡&綺凜side――

八幡「さてと、んじや俺たちも始めようか。それに剣客なんて久々だから少し楽しみにしてたんだ。」

綺凜「そうなんですか?」

八幡「ああ。ウチには剣を使う奴はいても、日本の剣術を使う奴はいないからな。校風的に中華が多いからな。だから勝手ではあるが、少し楽しみだったんだ。」

綺凜「私も、貴方の使う一刀流剣術をこの身を持って知る事が出来ると思うと楽しみです。」

八幡「一刀流知ってんのか……お前剣術バカだろ?」

綺凜「剣を知る者なら当然です。」

八幡（ごめん、俺そこまで知らんわ。）

綺凜「そろそろ始めませんか?時間も惜しいですし。」

八幡「ん、そうだな。」

綺凜「刀藤流、刀藤綺凜、参ります！」

八幡「一刀流、比企谷八幡……」

2人「勝負っ!!」

2人の剣が交差する剣戟は、速さは互角でも力量の方では圧倒的に八幡が押していた。そして綺凜の方は、未だに【連鶴】を出せずにいた。

綺凜（分かっていたけど強い！それに速い！こんなにも差があるなんて……それに、全く顔色を変えずに私と打ち合ってる。）

綺凜はキリのいいところで鰐迫り合いをしてから後ろへと退避した。

綺凜「お見事です。」

八幡「お前もな。中等部でよくそんなの軽々振るえるもんだな。」

綺凜「……鍛えましたので。そう簡単にやられるつもりはないです。」

八幡「まあ俺もやられるつもりなんて毛頭ねえけどよ。」

八幡（奴の攻撃自体は大した事ないな。力も速さもついていけないわけじゃない。ま、刀藤の奴がまだ技を見せてないってのもあるけどな。）

綺凜（打ち合いだけでもこの腕前、この人、私よりもっと強い。）

八幡「まあやり合わねえと分からねえ事もあるからな、続けますか。」

綺凜「ええ。」

こうして2人はまた激しい剣の打ち合いを黙々と続けていた。

◎準々決勝 八幡VS綺凜

—————

八幡と綺凜の斬り合いは、熾烈の如く激しい攻防一体を繰り返していた。どちらも一步も譲る事なくお互いの刀で打ち合っていた。

綺凜「ヤアツ!!」

八幡「っ!……フツ!」

剣を振る、防ぐ、避けるの繰り返しだったが、攻撃が当たらない事
の事実だけが残っていた。

両者一步も譲らない展開だった。

八幡「……予想以上にやるな、お前。」

綺凜「っ!」

綺凜（この状態で会話!?)

綺凜の驚きと同時に八幡は剣を打ち払い、後ろの方へと下がった。

八幡「まさか此処まですげえなんてな、正直驚いた。1回くらいは
当たるところでいたんだがなあ……」

綺凜「いえ。比企谷さんこそ、流石としか言えません。いつから剣
術を?」

八幡「半年と3ヶ月前くらいだ。俺は元々非星脈世代だったんだ
が、諸事情で星脈世代になれてな。俺の師匠から武術やら剣術やらを
学んだってわけだ。」

綺凜「そんな短期間でそれ程の腕前を……」

八幡「まあ師匠の教えが良かったからな。俺が必死だったってのも
あるけどな。」

綺凜（それだけな訳がない。その程度の思いであれ程の威圧や気迫、剣気は身につけられない。血の滲むような努力をしてきたに違いない。それこそ、常人では根を上げてしまうような凄まじい努力を。）

綺凜「……………いきますっ！」

八幡は少しの間剣を捌いていると、突然綺凜の剣筋が変わり、滑らかなものになっていったのだ。

八幡「っ！」

そう、刀藤流剣技の【連鶴】だった。

八幡「成る程……………それが【連鶴】か。確かに厄介だな、全てを見切るのは至難の技だな。」

綺凜「そう簡単に見切られては困ります。これでも自信はあるので。」

八幡「そうか？なんなら……………」

八幡は刀を鞘に収め、腰を低く落とした。

八幡「俺は居合いでいかせてもらう。一刀流抜刀術……………」

八幡は体勢を低くして完全に居合の体勢に入っていた。

綺凜「ならば私も、同じ土俵に立ちましょう。」

綺凜も同じく、愛刀【千羽切】を鞘に仕舞い、居合いの構えをとっていた。

綺凜「刀藤流抜刀術……」

綺凜「折り羽。」

八幡「っ！」

八幡は突然、目の前に自分が斬られる映像が流れ込み、それによって身体が硬直していた。

綺凜が八幡に切りかかるが、八幡は動かないままであった。

八幡「殺気を見せる幻影の居合か……その歳でよくまあそんな恐ろしい抜刀術を身につけているもんだ。だがな………」

ギンツ!!

綺凜「っ!!?」

八幡「剣の殺気はあっても、お前からは何も感じない。やるならお前も殺す気で来なきゃ俺には意味はないぞ。」

八幡はほぼ納刀状態、5cmくらい刃を出したところで、綺凜の抜刀術を防いでいた。

綺凜「……………どう……………して?」

八幡「お前自身に殺気がないって言ったんだよ。俺には偽の殺気なんて通じないぜ?」

八幡「それにだ……とびうち 鳶打。」

八幡がそう言ったと同時に、綺凜の左腿にめがけて刀の腹で打ち込んだ。所謂峰打ちをした。

綺凜「うあっ!!」

八幡「お前の足の筋肉、今の剣術でヤバイ事になってんぞ。相当キテいる。今俺が峰打ちしたが、かなりの痛さが一瞬で来ただろ?それが何よりの証拠だ。」

綺凜「な、何故……………」

八幡「分かったのかって?俺の眼は少し特殊でな、そういう事だ。」

八幡（八咫鳥のおかげでそういうところも見えるようになったなんて、個人情報だから言えねえけどな。）

八幡「一応左足だけにしたが、まだやるか？今のお前は翼を折られた鶴も同然だが、どうする？片翼だけの翼の攻撃ではたかが知れてるぞ？」

綺凇「……………これが界龍序列2位【夢幻月影】の実力なのですね。参りました、今の私では足元にも及びません。さあ、校章を。」

八幡「……………ああ、そうさせてもらう。」ブンツ！

梁瀬『刀藤綺凇、校章破壊!!これまたお見事な剣捌きで比企谷選手が刀藤選手を破りましたく!!!』

チャム『けど2人の刀の打ち合いもお見事だったつス!!私も目で追えないくらい激しい打ち合いだったつスから。』

綺凇「1つお聞きします。何故、峰打ちだったのです？」

八幡「俺は女を切る趣味はないからな、身体に傷でもついたら困るだろ？女の身体に傷なんてつけられないだろ。」

綺凇「……………優しいんですね。」

八幡「優しいかどうかは別として、そういう事だ。少し離れているから大丈夫だとは思いますが、念の為ステージの端まで連れてく。」

綺凇「だ、大丈夫です。歩けまっ！くう……………」

八幡「はあ……………さっき言っただろうが。自分の剣術でヤバい事になってるって。その足で歩こうとするな。今は左足を無闇に使わない方がいい、大人しくしてろ。」

綺凜「は、はい……………」

八幡は影で作った雲のようなものに綺凜を乗せると、そのままステージの端まで移動した。

八幡「あんまり左足動かすなよ？この試合が終わったら必ず治療院に行け。絶対にほったらかしになんてするなよ？」

綺凜「は、はい！わ、分かりました……………」

綺凜（……………兄がいるというのは、このような感覚なのでしょう？不思議な感覚です。）

● 準々決勝 陽乃VS紗夜 そして……

—————

八幡たちが剣戟をしている中、陽乃と紗夜は睨み合いをしており、お互いの動向を探っていた。

陽乃「あれ、撃ってこないの？」

紗夜「お前の受け流しを見て普通に撃つのはあまりにもバカバカしい。今作戦を考えている。」

陽乃「またあ？考えたつてしょうがないんだから早く撃ってきなよ。それ・に！君は私に向かってお前つて言うけど、私大学生だぞー！ちゃんと敬語を使いなさいー！」

紗夜（相手を誘発するのが上手い。でも、今は冷静に相手の行動を読まなければ私に勝機はない。だがどうする？あれだけの強力な一撃を持つ相手に私の煌式武装で通じるのか？アークヴァンデルス改に罅が入る程の威力を持つあの蹴りにどう対処する？）

陽乃の余裕綽々な言動とは逆に、紗夜はどうするかを頭で必死に考え込んでいた。だが紗夜の作戦を練っている時間があまりにも長過ぎたのか、とうとう痺れを切らした陽乃は溜息をついた。

陽乃「はあ……あのさ、君の今展開している煌式武装、私に壊されたいの？」

紗夜「っ！どういう意味だ？」

陽乃「だつてさ、ずっと一定の場所にしかないから誘ってるのになつて。私からしてみれば、早く壊して下さいとしか見えないよ？その行動。」

紗夜「…………お前にはこいつは壊せない。」

陽乃「へえー大きく出たねえ。じゃあさあ、気の済むまで攻撃して

いいのかな？私に壊せないんだったらさあ……」

紗夜「っ!!」

急に陽乃の雰囲気が一変し、紗夜は周りの気温が一気に下がったような錯覚に陥った。そして陽乃からは、冷たい声に加えて冷気を帯びた視線を紗夜に浴びせていた。

すると次に陽乃がとった行動は、右脚と右腕に星辰力を溜め込んでいた。

陽乃「邪符を焼き払えっ。急急如律令。」

陽乃は呪符を取り出してそう唱えた後、右手脚から炎が燃え上がっていた。

紗夜「っ！あれは厄介……絶対に近づけさせない！」

紗夜は移動しながら攻撃の機会を伺っていたが、突然陽乃がその場から消えていた。

紗夜「っ！一体どこへ行った？」

陽乃「真上だよっ！鳴神落とし・焰!!」

紗夜は回避しようとするも、距離や移動速度の比率もあつて間に合はずもなく、左腕に装着していた武装が一瞬にして使い物にならなくなってしまうた。その状態は煙が上がっており、陽乃が踵落としを決めた場所が大きく損傷を受けた後があり、砲身については曲がっている程だった。

紗夜「くっ……っ!!ま、まさか……本当に？」

陽乃「やっぱり君さ、私の事ナメてるよね？壊せないってさつき言ってたけど、いとも簡単に壊せちゃったけど？それでも私、界龍の

序列4位なんだけどなく。八幡くんはとても優しいから、この辺りでギブアップとか勧めるんだろうけど、私って彼みたく優しくは出来ないからさ。言うなら自分で言ってる？それまで私は続けるから。」

紗夜「……………」

紗夜は返事を返さなかった。返せなかったのだ。これだけ圧倒的な強者に対しての実力差の痛感、そして何より破壊される事が無いと思っていた自身の煌式武装を最も簡単に破壊された事により、完全に戦意を失っていた。

陽乃「……………はあ。一応、忠告はしたからね。後はどうなっても私は知らないよ？」

陽乃は冷たい視線を送ったまま燃え上がる脚を上げ、もう片方の武装に狙いを定め、勢いよく振り下ろした。

だが武装は壊れる事なく、逆に陽乃の右脚は仲間である相棒によって掴まれていた。

陽乃「…………八幡くん。」

八幡「陽乃さん、幾ら何でも大人気ないのでは？少し落ち着いてください。今の陽乃さんは陽乃さんらしくない。」

陽乃「私のとってる行動ってそんなにおかしい？」

八幡「少なくとも俺にはそう見えます。普段の貴女ならこんな無意味な追い込みは絶対にしない。俺が知ってる普段の陽乃さんなら、ですけどね。」

陽乃「……………」

八幡「……………」

陽乃「…………そうだね、今の私は少し変かも。今日は何か調子が出ないや。ゴメンね八幡くん、止めてくれてありがとう。それに沙々宮ちゃんもゴメンね。」

八幡「俺はいいですよ。沙々宮、この試合まだ続けるか？」

紗夜「…………いや、いい、私の負けだ。」

『沙々宮紗夜、^{リサイン}投了！』

試合終了のブザーが鳴り、実況の梁瀬も試合終了の実況を始めた。

梁瀬『試合終了〜!!勝者、比企谷八幡&雪ノ下陽乃〜!!これもまた見事な完勝劇でしたね!チャムさん!』

チャム『いや〜本当に凄かったっすね〜!特に比企谷選手と刀藤選手の剣戟が1番白熱したっす!!』

梁瀬『しかーし!!これでまた凄い事になりました!!比企谷、雪ノ下ペアの勝利により、次の対戦カード全てが界龍ペアによる激しい叩き合いという事になりましたー!!!』

チャム『次の試合も楽しみっすね!!』

陽乃「……………」

八幡「陽乃さん、大丈夫ですか？」

陽乃「…………ゴメン。ちよつと微妙、かな。体調はなんともないけ

ど、気分は最悪って感じ。」

こうして《鳳凰星武祭》の準々決勝最終試合は八幡と陽乃の圧勝という形で幕を閉じた。

激情の理由と覚悟の足りなさ

八幡 side

――控え室――

準々決勝も勝利で終わり、少し一息入りたいところだが、今回はそうもいかない。

理由は先程の試合の陽乃さんの事だ。

あの試合の陽乃さんは明らかに様子が変だった。言うなれば、不機嫌をそのまま体現しているような感じだった。

今は落ち着いているが、未だに負のオーラは隠せていなかった。

八幡「……………」

陽乃「……………」

話しかける話題も無ければ、その事を聞けるような状態でもない。この人がこんなにも感情的になるのは初めて見る。

陽乃「……………さつきさ、」

八幡「っ！」

……………まさか陽乃さんから話しかけてくるとは思わなかった。

陽乃「何で私の様子が変だって分かったの？」

八幡「……………雰囲気と言葉遣いですかね。貴女が意味もなくあんな事をする人じゃない事くらい、俺は分かってるつもりですからね。」

八幡「聞いちゃ悪いとは思いますが、何かあったんですか？」

陽乃「……………」

やっぱだんまりか……まあ、簡単に突っかかっていいようなものじゃないんだろうな。詮索が過ぎたかもな。

八幡「すみません、忘れ「何で私があんな事しちゃったのかっていうとね……実は誰のせいでもないの。」……？」

え？

陽乃「私の思い込みが激しかっただけなんだ。それであんな風になっちゃったんだ……相手が悪く言うつもりはないけど、沙々宮ちゃんいたじゃない？あの子の態度とかがちよつとね。」

沙々宮の？という事だ？

陽乃「あの子、少し雪乃ちゃんと似てたんだ。ぶっきらぼうな態度に少し上から物をいう言動、困った時に黙り込むとこなんて特に。全くの赤の他人なのにな。」

陽乃「それが無性に腹が立ったというか、分からないけどなんか凄く嫌悪感というか憎悪感みたいなものが溢れてきて……それで……」

八幡「……………」

陽乃「私、多分八幡くんが止めてくれなかったら、そのまま彼女を無意味に傷つけてた。それも無意識に、何をしているのかも分からないまま。」

八幡「……そうだったんですか。」

思わぬところであいつが出てきたんだな。だが陽乃さんはこの表情、沙々宮にした事を激しく後悔してんだろうな。

陽乃「ねえ八幡くん、今の私ってどんな風に見える？やっぱり醜いよね？」

八幡「え？」

陽乃「何もない初めて会った子に、自分の妹を重ねてあれだけ酷い事をした私が綺麗に見える？ 見えないでしょ？」

……………ここまで追い込まれてたのか。

八幡「別に醜くなんてないですよ。俺にはいつも通り綺麗に見えますけど？」

陽乃「……………え？」

八幡「それなら俺はどうです？ 奴らに対してまだ何にも思うところが無いんです。精々嫌な奴らだったって思う程度です。」

陽乃「それは……………八幡くんが優しいからじゃない。」

八幡「陽乃さんも充分優しいですよ。それに覚悟も出来てる。自分の妹を潰せる覚悟が。でも、俺にはまだ無い。」

八幡「力では負けないでしょう。けど、実の妹やあの2人の顔を見てぶん殴れるかって言われたら間違いなく迷います。俺は貴女より臆病だ。」

陽乃「でも……………それだって立派な優しさだよ。相手を傷つけたくないって思う気持ちだって立派な感情だよ？」

八幡「自分が憎んでる相手に対しても、ですか？ そう言えます？」

陽乃「……………」

八幡「言えないですよ。こんな感情を抱いている時点で俺は臆病風は全く治ってないんですよ。それに比べたら、貴女の醜さなんてほんの米粒みたいなものですよ。」

陽乃「八幡くん……………」

そう、俺は『嫌い』というのをハッキリさせただけで、陽乃さんみ

たいな『覚悟』は何も決まっていなかった。

その点で言うなら、俺なんてただの『嫌いだから関わらないビビリ』ってだけだ。

けど陽乃さんは覚悟を決めていた。本当は俺の問題なのに。陽乃さんを例えるなら、『嫌いだから徹底的に壊すか潰す』だ。

八幡「俺からして見れば、陽乃さんは俺よりも奴らと決別する覚悟が出来てるように見えますので、醜くなんてありません。」

陽乃「……………」

陽乃「……………」やっぱり優しいなあ、八幡君は。そんな風に考えられるなんて。私には無理だよ。」コトツ

陽乃さんは俺の肩に頭を乗せてきた。

陽乃「ありがとう、凄く気が楽になったよ。やっぱり八幡くんってお兄ちゃんみたいだよ。」

八幡「お礼は素直に受け取りますが、俺が兄みたいってまた言いましたね。」

陽乃「やっぱり包み込んでくれるような優しさがあるからかな？」

八幡「俺に聞かれても……………」

陽乃「そうだね♪八幡くん、後で沙々宮ちゃんに謝りに行きたいんだけどさ、ついてきてもらってもいいかな？」

八幡「そんなのお安い御用ですよ。」

陽乃「ありがと、八幡お兄ちゃん！」

八幡「……………」やめて下さい／＼／＼」

意外と良いなんて言えない。

陽乃「それじゃあもう行こっか？」

八幡「もう少し休憩してから行きませんか？早く行き過ぎても迷惑でしょうし。」

陽乃「それもそうだね。」

それに、次は準決勝。しかも銀梅と永成とだからな。あん時の言葉が実現しちゃったな。ここまでするなんてまったく予想してなかった。

あいつらと戦うのも楽しみだな。

偶然の対面と謝罪

――――

2人は少し休憩した後、対戦相手の紗夜と綺凜の控え室へと向かっていた。

陽乃「はあ……私怖がられてないかな？」

八幡「相手もそんな子供じゃないでしょうし、大丈夫だと思いますけどね。」

陽乃「それならいいんだけどさ、でもやっぱり不安だなあ……怖がられてたらどうしよう。」

やり過ぎた事を自覚しているだけあって、陽乃も不安を隠せていなかった。

彼女からすれば、あれだけの事をしたのは完全に予想外だったのだろう。

八幡「まあなんとかありますよ。」

陽乃「だといいんだけどなー。」

陽乃の不安を少しでも和らげようとする八幡。だがそうしているうちに、目的地へと着いてしまった。

陽乃「つ、着いちゃった……」

八幡（この人がここまで動揺するのも初めて見るな。）

陽乃は深呼吸を2回してから、ノックボタンを鳴らそうとしたが、後ろにいた2人のうちの1人が話しかけてきた。

??? 「私たちの仲間に関か用かな？」

【魔将天閣】に【夢幻月影】。」

そこにいたのは、【叢雲】天霧綾斗と【華焰の魔女】ユリス・アレクシア・フォン・リースフェルトだった。

八幡「ん？ああ、ちよつと野暮用でな、俺じゃなくこっちの方が。」
ユリス「何の目的だ？」

八幡「言わなきゃダメか？」

ユリス「関係ないのは承知しているが、みすみす行かせるわけがないだろ。」

綾斗「まあまあユリス、そんなに喧嘩腰にならないでよ。」

ユリス「綾斗！こいつらは追い討ちをかけてきたのかもしれないのだぞ!？」

陽乃「失礼だなー、そんな事しないよ。」

八幡「……………おい、【叢雲】。」

綾斗「はい？」

八幡「お前の相方、なんか妄想力が激しすぎないか？」

ユリス「なあっ!？」

綾斗「すみません。ユリスは疑り深い性格なので。」

陽乃「にしては少しアレだと思うけど？」

ユリス「失礼なっ!!私は妄想などしていない!!」

八幡「だったら何で追い討ちって結果に辿り着くんだよ？」

ユリス「…………敵のペアが来たのなら、そういう理由があってもおかしくあるまい。」

理由としてはおかしくはないだろうが、ユリスの考えは限定され過ぎていたので、全くの見当違いだった。

八幡「警戒するのは良い事だが、するタイミングを間違えるな。そ

れと、俺たちが来た理由は他にある。尤もお前らに教える気は無いがな。すまないが待っててもらっていいか？大した事じゃないから、すぐに終わる。」

ユリス「だから理由を「分かりました。僕たちは待ってますね。」つて、おい綾斗！何を言ってるんだ！」

綾斗「ユリス、この人たちは大丈夫だよ。紗夜たちには危害を加えない筈だよ。」

八幡「ほう……なぜ分かる？」

綾斗「勘……ですかね。」

八幡「……お前、良い勘持ってるな。陽乃さん、連絡しちやって下さい。」

陽乃「ううゝ、緊張する……」

それから陽乃は中にいる2人へ交渉、八幡は2人の方を向いたままだった。

八幡「なあ【華焰の魔女】、お前友達いないだろ？」

ユリス「な、なぜそんな事を聞く？」

八幡「刺々しいんだよ。もう少し柔らかくしたらどうだ？敵を作りたいなら構わんが、そうでないならもう少し素直になるのもいい手だぞ。」

ユリス「……一応アドバイスとして受け取っておこう。」

綾斗「ユリス、多分そういうところを言われてるんだと思うよ？」

八幡（こいつ、多分治らねえだろうな。）

陽乃「八幡くん、良いつて。」

八幡「分かりました。んじゃ少し待っててくれ。」

2人「はい。（……うむ。）」

控え室の中に入ると、普通に座って待っていた2人だが、綺凜の両足には包帯が巻かれていた。

綺凜「あの……お疲れ様……です。」

八幡「ああ、足の具合はどうだ？」

綺凜「い、今は何とも……こ、この後、治療院に行く予定です……」

八幡「そうか……」

八幡（戦ってる時とは正反対だな。隙しかねえじゃん。）

綺凜「そ、それで、お話があるとか……」

八幡「まあ俺じゃないんだが、一応ペアだからな。お前も聞いてくれないか？その足じや動きづらいだろ？」

綺凜「は、はい……」

八幡（……本当に真逆だな。）

陽乃「さっきの試合はごめんなさい。試合とはいえ、やり過ぎちゃったよ。」

紗夜「っ！……別にいい。もう気にしてないから大丈夫。」

陽乃「……謝っておいてアレだけど、そんな簡単でいいの？」

紗夜「悪気がないのが分かったからそれでいい。」

陽乃「……ありがとう、凄く気が楽になったよ。」

許しがもらえ、陽乃からは安心からくる溜息が聞こえた。

綺凜「そ、そういえば比企谷さん！」

八幡「何だ？」

綺凜「比企谷さんと雪ノ下さんには妹さんがいらっしやるのですよね？」

ここにきてまたヘビーな話題である。それもそのはず、2人は妹と絶縁すると決めていたからである。

八幡「どうしてだ？」

綺凜「私、最初は『鳳凰星武祭』に出る気は無かったんですけど、比企谷小町さんから誘われまして……断ったのですけど。あつ、雪ノ下さんの妹さんのお名前は雪ノ下雪乃さんですよね？」

陽乃「……………うん。」

綺凜「最初は知らなかったのですが、今回の星武祭でもしかしたらと思ひまして。ですよね紗夜さん？」

紗夜「そうなのか？」

綺凜「ええ!？」

八幡「そうか……まあ、なんだ、妹がすまないな。」

綺凜「い、いいいえ！こちらこそ仲良くさせてもらってます！」

こんな時は適当に対応するしかないのだろう。それ以外に出来る事は、本当の事を言うことだが、それは酷な話になってしまったため、この場では言わない。

陽乃「八幡くん、そろそろ……」

八幡「はい、それじゃ俺たちはもう行く。外には待たせている奴らもいるしな。」

紗夜「分かった、2人も準決勝頑張つて。」

陽乃「ありがと、沙々宮ちゃん！」

そして八幡と陽乃は扉を開け、廊下で待っていた2人に会った。

陽乃「ゴメンねくお待たせしちゃつて。」

綾斗「いえ、そんなに待ってないので大丈夫です。」

陽乃「そう？ならいいけど。」

八幡「邪魔をしたな。俺たちは失礼する。」

陽乃「ばいばい！」

そして2人は界龍へと帰るのであった。

※邪惡な囁き

雪乃 side

雪乃「それで、私がこの前に希望した場所は用意出来たのかしら？
【悪辣の王】さん？」

デイルク『テメエはいちいち気に障る言い方するんじゃないよ……まあいい、場所ならもう絞り込んである。このリストに載っているどれかにしろ。後はテメエとその仲間が好きにしゃがれ。』

雪乃「…………どうやら本物のようね。確かに受け取ったわ。ご協力に感謝するわ、ご苦労様。」

デイルク『そんな紙切れ程度に加えてテメエ相手に嘘なんざつく訳ねえだろ、疑り深え女だな…………まあそんな事はどうでもいい、確かに渡したからな。』

そして彼は通信を切った。今の通信は元々音声のみだったから、彼の顔は見えていないのだけど、こうしてリストと地図をくれただけでも満足ね。

雪乃「それではあの男を誘き寄せる為の会議を始めるわよ、始めてもいいかしら？ 由比ヶ浜さん、小町さん。」

2人「うんっ！（はいっ！）」

雪乃「まず小町さんには、このリストにある建物のどれかに監禁されるという事になるのだけれど、側には私も一緒にいるから安心してもらっても大丈夫よ。」

小町「はい、分かりました！」

雪乃「その次に由比ヶ浜さん、貴方は《鳳凰星武祭》決勝の30分前になったら、比企谷くんに連絡して頂戴。疑われても、戸塚くんに教えてもらったと言えば大丈夫よ。あの男なら、戸塚くん和小町さんの名前だけで反応すると思うから。」

由比ヶ浜「うん！さいちゃんから教わったって言えばヒツキーも絶対信じるよね！」

雪乃「彼がもし万が一起来ないような言動をとったら、架空の人物を使つてでもいいから、比企谷くんを絶対に連れて来いと脅すようにして。」

結衣「うん、分かった！任せてよ、ゆきのん！」

ふふふ、着々と計画が進んでいるわ。小町さんを盾にとられた時の顔が今から楽しみだわ。それに姉さんも彼の事を失望して見限るはずよ。

やっとあの時の、半年分の借りを返せるわ。早く決勝にならないかしら？

雪乃 side out

由比ヶ浜 side

やっとヒツキーに会える！嬉しいなー！でも、私たちにあそこまでしたからには、ヒツキーにも少しは痛い目に遭ってもらわなくちゃダメだよね！

由比ヶ浜「ねえゆきのん！ヒツキーに会ってからやる事って、決勝の辞退と私たちに謝る事とオフエーリアンさんの絶縁でよかったんだっけ？」

雪乃「ええそうよ、けれど出来るなら少しでも痛めつけたいわね。私たちにあれだけの事をしたのだからこれくらいの事は許される筈よ。それと由比ヶ浜さん、絶縁させる対象人物の名前はオフエーリアさんよ。」

あれ？名前間違えてた？まあいつか、どーせ私たちが関わる事なんてないしね。

雪乃「分かっていると思うけれど由比ヶ浜さん、くれぐれも気づかれないようにね？彼の性格上を踏まえれば、それは分かっている事だねれど慎重にお願い。」

由比ヶ浜「うん、分かってるよ！」

やっと会えるよ！ヒツキー♪

由比ヶ浜side out

小町side

雪乃さんと結衣さんを傷つけたゴミいちゃんは絶対に許さないんだから！私は星脈世代じゃないからする事や出来る事は限られてるけど、2人の力になれるならなんでもするよ！

そ・れ・に！お兄ちゃんは小町を攻撃出来ないもんね！星脈世代が非星脈世代に怪我させたり攻撃をしたりしただけでも重罪だしね。だから小町は遠慮なくゴミいちゃんを攻撃できるよね！

あつ！今の小町的に超ポイント高い！

由比ヶ浜「えへへ、なんか楽しみになってきたなー！」

雪乃「そうね。彼にあの時の仕返し出来ると思うと、気分が高揚するわね。」

小町「分かります！分かりますよ雪乃さん！来たら存分にやっちゃっていいですから！ゴミいちゃんは丈夫なので！小町が許可しますので！」

雪乃「ふふふ、ありがとう小町さん。けれどもとよりそのつもりよ、私の能力で彼を氷漬けにする予定だもの。」

流石は雪乃さん！頼りになるうー！それにしても、この前会ったあの2人も可哀想だったなー。ゴミいちゃんに騙されていたからね。あのゴミいちゃんに人心掌握が出来たなんて知らなかったけど、そんな事するなんて小町的に超超ポイント低いんだからね！ゴミいちゃ

ん!!

小町「じゃあ小町も、ゴミいちゃんの身体のどこをどうしようか考えておきますね♪」

小町 side out

—————

とある個室では、1人の少年が音声とその映っている映像に釘付けになっていた。その少年はつい最近になってこの六花に足を入れ、星導館学園の諜報工作機関【影星】の一員になった学生である。

戸塚「……………やっぱり雪ノ下さんたちは、八幡を傷つけるつもりなんだ。しかも人の居ない場所に連れ込んで……………」

それに今のだけじゃない。《鳳凰星武祭》の不戦敗、レヴオルフの序列1位のオーフェリア・ランドルフエンさんとの関係を切らせる計画まで立ててる……………これが成功したらマズい事になるよ！

戸塚「今日にでも八幡に知らせないと！八幡もきつと疲れてるだろうけど、こんなの待ってられる余裕なんてないしね！」

影と騎士からの報告

八幡 side

界龍に帰って来た俺たちを迎えたのは、界龍の生徒と教師による大歓声と拍手、そして初の準決勝独占の快挙に全員が大盛り上がりしていた。

星武祭は6学園の学生たちが覇を競う大会でもあるが、その大一番手前の段階で1学園のみが残るといのは今までに前例がない事だった。

優勝もしていないのにこれだけ盛り上がれるのは驚いたが、共に笑い、喜び合える仲間がいるのはそれだけで違うものだと思えて痛感した。

当然の事だが、準決勝に残ったメンバー8人はそれぞれ言う事言わされたが、特にどうという事もなく終わった。

飯もあのドンチャン騒ぎのおかげで作る手間も省け、食べ物と喜びで腹一杯だった。

八幡「ふうく……………全く違うな、あの頃とは。」

あの頃とは総武時代の事だ。あの頃は嬉しかった事はあれども、素直に喜ぶなんて事はしなかった。

あの環境で喜びを表現するのは、もう無理だな。というよりもしたくない。

考えた事なかったが、俺はあの場所に帰る事はあるのだろうか？個人的には帰りたくないなんて事はないが、今の居場所は此処だから帰りたいとは思わない。

……………どうなのだろう？

p i p i p i : : p i p i p i :

ん？ガードナーか？まあ葉山の事だろうな。断る理由もないから開くか。

そして俺はウィンドウのc a l l ボタンを押してガードナーと連絡を取った。

パーシヴアル『今晚は、比企谷さん。この度は準決勝進出おめでとうございます。』

八幡『恐悦至極にございます……とでも言えいいのか？』

パーシヴアル『いえ、私に向かってそのような言葉遣いは不要です。普段通りで構いません。』

八幡『まあその方が俺も助かる。』

やっぱりガードナーって大抵の事では表情崩さないんだな。

八幡『それで？今日はどうした？葉山が動いたのか？』

パーシヴアル『いえ、行動はとっていませんが、対象の葉山隼人さんは依然として普通ですが、貴方の話題が出てくると必然とも思えるくらいに心が乱れていました。』

八幡『どんな感じで？』

パーシヴアル『簡潔に述べると、比企谷さんの罵倒や見下しなどで。おそらく自身が上だと主張しているのでしょう。』

うげっ、雪ノ下たちとまんまだな。

パーシヴアル『この件は既に会長にも報告してあります。星導館学園とクインヴェール女学園へのご報告も致しましょうか？』

やっぱりこの前話した面子には報告するように言われてんだな。

八幡「それには及ばん。俺から「p i p i p i : p i p i p i :」ん？誰だ？」

戸塚「どうしたんだ？まあちょうどよかった。紹介がてら報告でもしてもらうか。」

八幡「よう戸塚。」

戸塚『八幡！今は挨拶どころじゃ……お話中だったかな？』

八幡「いや、ちょうどよかった。もう1人はガラードワースのパシヴァル・ガードナーだ。今、お前と似たような事をしている奴だ。』
パシヴァル『初めまして。聖ガラードワース学園所属のパシヴァル・ガードナーと申します。以後、お見知り置きを。』

戸塚『い、いえ、どうもご丁寧に。戸塚彩加です。それよりも八幡、似たような事って？』

八幡「ああ、ガードナーは葉山を監視してくれているんだ。ガラードワースでも違う意味で生徒会に目をつけられているみたいでな。」
戸塚『葉山くんもなんだ……じゃあ僕の話もガードナーさんに聞いてもらったほうがいいかな？』

エンフィールドは教えてないんだろうが、まあいいだろう。

八幡「そうだな……戸塚、お前は知らんだろうが、俺たちはこういう関係なんだ。」

俺は星導館、ガラードワース、界龍、クインヴェールの同盟について話した。

八幡「つとまあこういう事だ。」

戸塚『……そこまで警戒していたんだ。なんか雪ノ下さんたちも凄いいね。途中でガードナーさんの状況も聞いたし、僕からも報告する

よ。八幡、雪ノ下さんたちが動いた。裏はやっぱりレヴオルフだったよ。』

八幡「……………戸塚、俺は分かるがガードナーは初めてだから分かるように頼めるか？」

戸塚『そ、そうだね！じゃあ前の報告の件から話すね！』

そして戸塚は、雪ノ下たちが計画を立てている時から動き出した時の事まで丁寧に説明してくれた。

戸塚『っていう感じだったよ。』

パーシヴァル『……………成る程、つまりは餌で獲物を釣るといった感じですね。』

戸塚『うん、そんな感じだよ。』

八幡「つまらねえ事するな。【悪辣の王】もそんな奴らに手貸して何になるってんだ？俺がオーフェリアと絶縁なんてありえねえってのによ。」

パーシヴァル『ですが比企谷さん、お相手には妹もいるのですよ？よろしいのですか？』

八幡「此処に来て1ヶ月くらいで決めた事だが、俺は今の4人とは絶縁するって決めてたんだよ。血縁だろうと関係なくな。」

パーシヴァル『比企谷さん……………』

戸塚『許してあげようとは思わないの？』

八幡「奴ら側についている時点で、俺の敵だ。寝返ったとしても絶対に兄だなんて呼ばせねえよ……………話が逸れたな、とにかく決勝だな。それまでは考える猶予がある。」

パーシヴァル『私たちガードワースはどうします？』

八幡「いや、今回は何もするな。お前らは葉山の方を頼む。そいつが問題を起こしてくれた時に構わない。」

パーシヴァル『……………分かりました。』

八幡「だが星導館が問題扱いされんのも気が引けるな。俺自身どうでもいいが、星獵警備隊に見つかったらタダじゃ済まされねえから

な。」

戸塚『僕がクローディアさんに報告してその日になったら止めに行くってのもあるよ？それじゃダメなの？』

八幡「星武祭開催期間はどこもかしこも空気が重いし、決闘も禁止されてる。怪しまれるのは確実だ。それにだ、多分奴らは新開発エリアの方でやるだろうからな。あの辺なら警備隊が睨みをきかせていないわけがない。やるにしてもリスクが高過ぎる。」

戸塚『そっか……』

パーシヴァル『前から思っていました、やはり比企谷さんは頭の回転が速いですね。こんなにも物事を考えるスピードが速いとは……』

八幡「あまり考えたくはないけどな。」

無意味に頭痛くなるし。

戸塚『じゃあこの話はまた明日にしよっか？八幡も明日準決勝あるし。』

パーシヴァル『そうですね。比企谷さんはゆっくりと身体を休めるべきです。』

まだ話してても平気だが、ここは素直に聞いておこう。

パーシヴァル『ですが、その前に……』

ん？まだなんか報告でもあったか？

パーシヴァル『比企谷さん、紅茶の淹れ方の事なのですが……』

シリアスな雰囲気台無しだよ!?

君この状況でよくそんな事を聞けたね!?

新事実と気持ち

陽乃 side

今日の準々決勝も終わり、界龍に帰ってから壮行会みたいな事をやってから、私は部屋で寛いでいた。

八幡くんのご飯が食べられなかったのは残念だけど、他の皆から声援を貰うのはすごく嬉しかったから良しとします。

それにさつき、お母さんから連絡があって準決勝進出おめでとうとも言われちゃった！親からこんな事言われたの初めてだからもっと嬉しくなっちゃったよ！

陽乃「明日は準決勝……それも相手は銀梅ちゃんインメイと永成ちゃんウインシン、同じ学院だから手の内は知ってるし知られちゃってるけど、負けるつもりはないしね。」

あの2人もどれだけ成長してるかな。
すると、扉をノックする音が聞こえた。

陽乃「はいはい、どちら様？」

八幡「陽乃さん、比企谷です。少しお話があるのですが、今いいですか？」

話？準決勝の作戦会議かな？

陽乃「いいよ、入って入って！」

私がそう言うてから、八幡くんが扉を開けて入ってきて、私のいる居間まで来た。

陽乃「座って待ってて。今………コーヒーの方がいいかな？この雰囲気的に。」

八幡「やっぱり流石陽乃さんですね、俺の雰囲気で分かるなんて。」

陽乃「作戦会議しに来たって雰囲気じゃないからね。何かあったんだね？」

八幡「はい、出来れば貴方には聞いて欲しくて。俺と同じ身の上の人として。」

身の上？………ああ、そういう事。

陽乃「雪乃ちゃんたちが何かコソコソしているのかな？」

八幡「………本当に察しが良いですね、話が早くて助かります。」

陽乃「君の言葉にヒントがたくさん包まれてたからだよ。」

八幡「今日の1時間くらい前の事です。」

八幡くんは私にさっきあった出来事を話してくれた。私も予想はしていたけど、こんな手を使ってくるなんてね。

陽乃「………こんな事するなんて呆れちゃったよ。前よりもつとダメになってるよね、雪乃ちゃんたち。」

八幡「ええ………でも、何処で間違えたんでしょうね？あいつらも俺たちも。」

陽乃「………あんな風にするつもりじゃなかったんだけどな。今じゃ八幡くんを恨みまくってる感じになってるし。」

陽乃「八幡くんは平気？今のこの状況。」

八幡「まあ予想してましたから、別段辛くはないですよ。………一応俺からの、自分たちのした事を見つめ直してみろって意味だったんだが………分からなかったか。」ボソツ

陽乃「ん？何が？」

八幡「え？今の声に出してました？」

陽乃「うん。」

八幡「……………此处に来る前、奉仕部であつた事を一冊のノートに書き込んで机に入れといたんですよ。その中身は文化祭と修学旅行の事です。」

陽乃「……………話さなくていいからね？ノートの事だけでいいよ？」

八幡「助かります。中身は俺を含めた奉仕部のしてきた行動と放つた言葉等です。記憶力は良い方なのでスラスラ書けましたよ。俺からのメッセージのつもりでしたが、逆効果を生んだみたいで。川崎の話だとあのノートを教師に公開して自身たちも打撃を食らったとか。」

陽乃「そつか……………そうだったんだ。」

八幡「あのノートがなけりや、俺は今こんな風に恨まれる事もなかったんでしょね。」

……………君はやっぱり優しいよ。恨まれてるのにそんな顔が出来るなんて。

今の八幡くんの顔は、まるで雪乃ちゃんたちを哀れnderような顔をしていた。

陽乃「そんな事ないよ。雪乃ちゃんたちはあぁなつて当然の事をしたんだよ。確かに八幡くんも褒められたような行動はしてないけど、裏を返せば仕方なかったからだよ！それしかなかったからそれを取るしかなかったんだよ！それを棚に上げて自分たちの都合の良いように事を進めたからツケが回ったんだよ！私は断言するよ！君は何も悪くない！むしろ良くやった方だよ。」

八幡「……………」

そう、八幡くんは何も悪くない。だってこんなに優しい子があんな言葉を言うなんて到底思えない。

八幡「……………ありがとうございます。今度は俺が慰められちゃいましたね。」

陽乃「この位何でもないよ。八幡くんの心の傷に比べたら全く大した事ないよ。」

八幡「でも、雪ノ下をあんな風にしたのは半分俺のせいでもあるんですよ？何とも思わないんですか？」

陽乃「思っ^てないよ。雪乃ちゃんの自業自得でもあるんだから。」

八幡くんを責めるのはお門違いだよ。

八幡「本当に助かります。肩の荷が降りました。」

陽乃「気にしないでよ、私も悪いんだから。もういいよ、八幡くん。」

八幡「……はい。」

陽乃「話を戻すけど、八幡くんはどうしたいの？私はここまで来て不戦敗なんて嫌だよ？優勝したいもの。」

八幡「勿論、俺も辞退する気なんてないですよ。なのでこんなのはどうです？」

というわけで八幡くんの考えた策を聞いていたけど、らしくないというか、かなり強引さが出ていた。

でも……………なんか良いかも。

陽乃「ねえ八幡くん、それ私にも手伝えないかな？」

八幡「すみませんが、陽乃さんが来たら決勝には間に合いませんから無理ですね。でも、準備なら手伝って欲しいです。」

陽乃「準備？」

八幡「はい。」

八幡くんからの要求には驚いたけど、全く悪い気はしなかった。これで八幡くんの重荷が減るならどうでもいいとも思えたから。

◎準決勝の幕開け

――――

《鳳凰星武祭》13日目、今日も凄い人がシリウスドームに集まっていた。それもその筈、今日今から行われるのは《鳳凰星武祭》の準決勝というだけではなく、4ペアとも界龍だからである。これには六学園の統合企業財体の代表も集まる程の注目を寄せていた。

梁瀬『さあ皆様!!長らくお待たせ致しました!!これより《鳳凰星武祭》準決勝の開幕だあー!!!』

観客席からは瞬時に大歓声が響き渡り、地揺れする程だった。

チャム『凄い大歓声つスねー!皆さんそんなに楽しみだったんスねー!勿論自分も楽しみ過ぎて、昨日あまり寝付けなかったから興奮気味っスよー!!』

梁瀬『さて、今回の《鳳凰星武祭》はレベルが高いのは見ての通りお分かりになると思いますが、もしかしたら本当の戦いはここからなのかもしれません………なんと言ってもこの先の戦いは同学院同士での争いになるからです!デットヒートならぬオーバーヒートな戦いになる事、間違い無しでしょう!!』

チャム『予選から見ても分かる通りだけど、今回の界龍は本当に桁違いに強くなってるっス!!何せ他学園の冒頭の十二人を軽々と倒してしまう程の実力を持つペアも現れたっスからね!!』

梁瀬『はいっ、まさにその通りっ!!それでは少し選手のご紹介と行きますよう!まずは準決勝1組から!!双子での出場、界龍が誇る道士の実力を侮るな!!その星仙術に酔いしれろ!!黎沈雲&黎沈華ペア!!』

すると中央のスクリーンには沈雲と沈華が映し出されて、予選から

準々決勝までの戦いをダイジェスト形式で映し出していた。恐らくこの後呼ばれる3ペアも同じような紹介をされるのだろう。

チャム『5回戦までは安全内で戦って勝ち進んだ2人！準々決勝のガードワースペアで苦戦すると思っただつスけど、苦にせずの圧勝だったス！この2人だけでも今年の界龍の強さは異常だというのが充分伝わってくるっス!!』

梁瀬『続いてはこのコンビ！先に現れたのが道士なら、次に現るのは界龍が誇る生粋の拳士コンビ、勝っても負けても相手に敬意を忘れぬ武道魂に刮目せよ!!宋然&羅坤展ペア!!』

チャム『第5試合では星導館学園の序列5位と1位に勝利するという大金星を挙げた今大会大注目のペアっス！あの試合には本当に驚かされたっスね〜!』

梁瀬『続いては準決勝2組！こちらのペアも負けていません！序列では準決勝タッグ内で1番下でも、その実力は冒頭の十二人レベルと折り紙付き!!その意地を見せろ、徐銀梅&呂永成ペア!!』

チャム『このペアはこれまで、これといって目立ったペアとは戦ってないけど、戦い方も安定してるしコンビネーションも良いっスからね。油断は出来ないっスよ!』

梁瀬『そして最後はやはりこのペア！空前絶後、この2人に死角なし！今大会優勝最有力候補のコンビ!!ご紹介しましょう、比企谷八幡&雪ノ下陽乃ペア!!』

チャム『予選2回戦ではアルディ&リムシイ選手を軽々と倒し、準々決勝でも星導館学園の元序列1位が居るペアを相手に圧倒する程!!その後も無傷のまま完璧な試合運びでここまで来たっス!!個々の強さだけでなく連携も完璧っスから、1対1でも1対2でも問題なく対処していたから、息の良さも目立つっスね!!』

中央の画面から映像が消えて準決勝に出場する選手の紹介も終わった。少し一息入ってから喋り出した実況と解説もかなり興奮を抑えられない状態で会話をしていた。

梁瀬『いやゝ界龍が準決勝を独占したのは本当に驚きましたねゝ、何せ始まって以来初の快挙ですからねゝその辺如何ですかチャムさん!?』

チャム『はい！準決勝に勝ち残ったペアのこれまでの試合を見ると、どのペアが優勝してもおかしくない程のレベルだから、今から行われる試合が本当に楽しみっス!!』

梁瀬『さて!!会場も大分盛り上がってきました！この後には準決勝1組の黎沈雲&黎沈華ペアと宋然&羅坤展ペアの試合です！試合は10分後ですので、しばらくお待ちください！』

沈雲「これは負けられない戦いになりそうだね、そう思わないかい沈華？」

沈華「そうね沈雲、相手が比企谷と師姉だろうと全力で勝負するまよ。」

2人「星仙術の真髄を見せつける!!」

宋「生粋の拳士、か……どうせなら武人と言って欲しかったが、まあよしとしよう。」

羅「ついにここまで来れたんだ。我々の全力を尊師やアイツらに見せつけてやろうじゃないか、宋！」

宋「ああ、そうだな！」

銀梅「序列では1番下………けど私たちだつて負け戦をしに来たわけじゃない!!こんな序列でも、たとえ序列が低くても、ここまで来るんだつていうのを証明したんだから!!」

永成「そうだね。相手は強大、勝てるかどうか分からない………けど、当たらなければどうにもならない。全力でぶつかつていこうよ!!」

銀梅「ええ、永成!!」

八幡「今頃きつと、アイツら燃えてるんだろうな。」

陽乃「そういう八幡くんも、身体中から溢れ出るオーラを隠せてないよ?」

八幡「………まあ、ああいう紹介されると燃えてしまつてもんですよ、男だつたら。」

陽乃「ふふふつ、まあ私もかなり熱くなつてるんだけどね。」

約束の時

八幡 side

……結構長い試合になるとは思っていたが、まさか1時間もやりあうとはな。

しかも互いの行動を読みつつ、正確に次の攻撃に繋いでたな。あの4人もここまで強くなってたか……《鳳凰星武祭》が始まってからは様子を見ないようにしてたが、これは予想外だ。

しかも驚きなのは、奴ら互いを最後まで尊重しながら戦っていた。試合開始から終了まで全てだ。

試合が終わってそのまま去ると思ってもいたが、まさか包拳礼をするとは思わなかった。仲が少し改善されたのは知っていたが、改善され過ぎだありや。

陽乃「いやあく凄かったね、あの子たちの試合。」

八幡「ええ、俺たちも気を抜けませんね。この大会で1番の猪突猛進ぶりを見せている2人が相手なんですから。」

陽乃「何せ1番の精鋭だもんね。準決勝に来た時点で一気に株が上がったんじゃないかな？まさかまさかの序列20位以下が準決勝に残ってるんだから。」

八幡「興味は無いですけど、2人の株は確実に上がってるでしょうね。多分テレビとかのオフアールとか来るんじゃないですかね。」

上がってなけりや節穴過ぎんだろ……

陽乃「それで、作戦はどうする？どっちがどっちの相手する？」

八幡「ここに来るまで俺ばっかりの戦術ですけど、陽乃さんは何かないんですか？どっちを相手したいとかそういう要望とかは？」

陽乃「私？別に無いよ？でも強いて言うなら、徐ちゃんと戦いたい

な。旋棍だから刃物じゃないし。」

傷つきたくないって遠回しに言ってますよね？まあ顔とか身体に傷付くのは嫌だろうけどよ。

陽乃「それでも君に譲るよ、あの徐ちゃんの事だから君と戦いたいだろうしね。」

八幡「そうですか？じゃあ俺は銀梅とですね。あいつら、どこまで強くなってますかね？少し楽しみです。」

陽乃「そうだね。あれから11日間、昨日の宴？までは本当に会わなかったからね。」

八幡「はい、奴らの成長をこの身を持って体験するとしましようか。」

陽乃「うん！」

八幡 s i d e o u t

永成 s i d e

やっと………やっとこの時が来た。予選からこの舞台までずっと待ちに待ってた、尊師と師姉との試合。

永成「銀梅、やっぱり緊張してる？」

銀梅「緊張しないわけがないよ。永成もそうなんですよ？」

永成「うん………まあね。」

無理もないよね、本当にここまで来れたんだから。私たちも準決勝の舞台まで登れるとは思ってなかったけど、その相手が尊師と師姉というのも驚きだった。けど自分たちの力を見せるには丁度いい機会。

銀梅「永成、私尊師とやりたい。何処まであの人に通じるのか試したい。だって………尊師には「その先は言わなくても大丈夫だよ、分

かつてるから。」……永成。」

永成「君は尊師に心酔してるからね。私もその気持ちは分かるよ。うん、尊師は徐に任せるよ。師姉は私に任せて。徐は尊師に集中して戦うといいよ。それに尊師たちも勝負の最中に水を差すなんて真似はきつとしないよ。」

私も師姉と戦ってみたかったからね。今の自分がどれだけ師姉に通じるのかも、感じたいしね。

銀梅「ふうー！さつ、もうそろそろ時間だから私たちも会場の方に行こっか！」

永成「ふふつ、いつもの調子が戻ったね。そっちの方が徐らしいよ。」

永成 side out

—————

梁瀬『さあ皆様っ!!先程はとても熱い試合が行われました!試合時間は1時間以上の激戦激闘でした!!しかーし、お次の試合も盛り上がる事間違いない!それではお届けします、《鳳凰星武祭》準決勝2回戦の始まりだあ!!』

実況の梁瀬が叫んだ途端に、会場のボルテージは急上昇。

梁瀬『さあさあ!時間も惜しいところですし、早速参りましょう!!2回戦に戦うのは先程と同じ学院同士です!!界龍第七学院、比企谷八幡&雪ノ下陽乃!!そして反対からは同学院の呂永成&徐銀梅!!両ペア揃つての入場です!!』

チャム『いやゝこの2回戦の戦いも本当に白熱しそうっスねー!!』
梁瀬『はいっ!この2ペアがどんな戦いをするのか、非常に楽しみですねゝ!!』

2ペアは無言でステージに降りて、永成と銀梅は八幡と陽乃に向かって包拳礼をした。

銀梅「尊師、姉姉、11日ぶりです。ご無沙汰しております。」
永成「我々は全身全霊を持つてお相手させて頂きますので……」

頭を下げながら発した言葉を途中で区切らせ、八幡たちの方へ向き直ると……

2人「お相手、よろしくお願いします。」

再び2人に向かって勝負する相手への敬意を込めて挨拶をした。その目には侮り等は一切なく真剣そのものの表情であり、目には煮え滾るほどの熱い闘志が露わとなっていた。

八幡「……ああ、楽しみにしている。」

陽乃「お互いに良い戦いにしようね。」

2人「はい!!」

返事をした2人は背中に取り付けてあった鉤爪と、腰に納めてある旋棍を装備してから八幡と陽乃に向かって構えを取った。

梁瀬『さあ！両者出揃い準備も整ったようなのでお送り致します!!
《鳳凰星武祭》準決勝2組、バトルウー、スタートオォー!!』

※驚愕の成長

――――

2人「参りますっ!!」

八幡「っ!」

陽乃「ウソ!?速っ!」

永成と銀梅は始まりのブザーが鳴った瞬間に、それぞれの相手へと攻めていった。銀梅は八幡に、永成は陽乃へと向かっていった。しかも迫って来るその速さは八幡たちが予想していたものを遥かに上回る速度だった。

2人の予想外の速度に気圧されたのか、八幡と陽乃は咄嗟に左右に分かれた。その意味は1対1に持ち込む為の戦術でもあった。だがこの左右に分かれた動きは半分無意識の動きでもあった。

陽乃（これは笑ってられる余裕なんてないね……それに、あの速さだけでも分かる、明らかに強くなっちゃってるよね。あの子たち。遅くなり過ぎだよ。）

永成「流石は雪ノ下姉姉です。あれくらいは躲してくれなければ勝負になりませんからね、反応してくれてよかったです。」

陽乃「……全く、これじゃ手なんて抜けないね。じゃあ私も少し真剣に行かせてもらおうかな。」

永成「そうでなくては困りますっ!」

永成は鉤爪に対し陽乃は素手。これだけでもハンデは充分だが、永成と銀梅が格段にパワーアップしている事に陽乃も八幡もかなり驚いていた。その証拠に、予選で見せていた相手の動きを探るような余裕は一切ないに等しかった。

永成「ふっ！……………はあっ！」

陽乃「っ！」

相手が刃物を使っているため、攻め切れない陽乃。しかし、その目は今までに見せてこなかった真剣な眼差しとなっていた。

陽乃「……………」

永成「……………」

少々永成が有利な状態で睨み合っている。攻め切れないのも分かるが、陽乃が無傷とはいえ此処まで苦戦したのは誰も見た事がないであろう。観客の誰もが騒然としていた。それもその筈、序列20位以下の学生が冒頭の十二人の中でも上位の序列4位を今の時点で押しているからである。

陽乃（どうしようかな……………流石のお姉さんも想定外だよ。このスピードにパワー、技術も身についちやってる。この2人、絶対20〜10位以内に入れるよ。さて、本当にこれからどうしようか……………）

永成（取り敢えず私のペースには持ち込めた。けど姉姉の事だから、すぐにペースは持っていかれちゃうと思う。その前に少しでもいいから傷か致命傷を与えないと！）

一方で八幡と銀梅の方だが、こっちの方も膠着状態が続いていた。攻めては防ぐの繰り返しでお互いにまだ致命傷も与えていなかった。

銀梅「……………流石は尊師です、私の攻撃や技が全く通りません。鍛錬を重ねてきたので少しは自信があったのですが……………」

八幡「それはこっちの台詞だ。この短期間でえらい強くなりやがって。一体どんな鍛錬してきたんだよ……………俺にも教えてほしいくら

いだ。」

銀梅「お褒めに預かり光栄です。ですが、いつまでもこのままじゃ格好がつきませんので、思い切り攻めさせてもらいます！」

銀梅は攻め続けているが、八幡は防いでは一撃だけで決定打は未だに決めていなかった。八幡が主に使っている詠春拳は攻防一体の拳法で均整の取れた武術だが、攻めは一打ずつするのが基本の拳法。故に勝機が見えない状態では無闇に攻撃に転ずるのは自殺行為なのだ。

八幡（詠春拳でやるのはもう無理があるな。銀梅の攻撃を受けてもう分かりきっているが、銀梅にはもう拳法は通じねえな。なら俺も武器を使うか。）

銀梅「はあっ！」

チャリーン、ガキインっ!!

八幡はついに袈裟切丸を鞘から抜刀し、銀梅の一撃を受け止めた。そして八幡は後方に下がり、居合いの構えをとっていた。だが袈裟切丸は鞘に入れておらず、左手の指で輪を作ってその中に刀の腹をくつつけていた。

八幡「堕ちし光のなき地は、闇夜の空の月光にて、地を照らす。」

するとフィールドは闇で覆われ、視界がゼロの状態になった。そして次第に銀梅の視界も闇へ閉ざした。

銀梅（これが……大師兄を打ち破った技！凄い、周りが暗くて全く見えない。目に頼ると絶対に見破れない。今までの私だったら、絶対にこんな対処できない……）

けど、今の私なら!!
(

八幡「影切・月下無双」

チャリーン

銀梅「……そこっ!!」

ガギイイインツ!!!

八幡「っ!!?」

八幡は音だけで全てを悟った、視界ゼロの状態でこの技を防いだ。初めてだった、この技は目が見えなければ音も殆ど無い。つまりは氣配のみで相手の攻撃を予測する以外方法はないと言ってもいい。

銀梅「く、くうくうー!」

八幡「…………マジかよ。」ニヤツ

八幡の代名詞ともいえる技が、初めて誰かの手によって防がれた瞬間だった。銀梅は苦しい表情をしながらも、自身の持っている旋棍で確実に八幡の愛刀「衾々切丸」を受け止めていた。この事実により再び八幡が驚かされた瞬間だった。

今の状況、観客は愚か誰も予想だにしない展開になっている。下剋上のようなものだ、序列下位のタッグが序列上位のタッグに食らいついている状況だからだ。しかも一方は不利な戦況を迎えつつある。

だが、その時の八幡は何故か笑っていた。とても嬉しそうに。

激闘準決勝

――――

八幡の攻撃を受け止めた。それは八幡自身だけでなく観客もだったが、銀梅自身も驚いていた。

銀梅（やった、尊師の攻撃を受け止められた！嬉しい……でも油断なんて出来ない、片腕だけなのにこんなにも重い……！）

それは交戦中の陽乃と永成の動きを止める程にも至った。

だが、予想以上に一撃が重かったのか、呻き声をあげながら耐えている様子だった。

八幡「……まさか影切を防ぐなんてな。何故分かったんだ？」

銀梅「尊師の方向と刀の持っている手、最後は本当に勘です。」

八幡「そんだけ出来りや上々だろ、しかも俺の攻撃は勘で防がれたのかよ……何気に傷つくな。」

鏢迫り合い？から互いに距離を取り、八幡は呆れたように答えた。

八幡（いやいや参ったな……本当さつきから思ってはいるが、どんな稽古したんだよ。勘とはいえ俺の影切を防ぐ程だ、相当な奴に仕込まれたんだろうな。）

銀梅「今度は私から参りますっ！迅風よ、空を裂け！急急如律令！！」

呪符を取り出して呪詛を唱え旋棍に付着させると、旋棍から緑色の風が現れ、突起の方に刃らしき物に具現化した。

銀梅「風薙かぜなぎっ!!」

八幡「っ! うおっ!」

そのまま突き出してくるかと思いきや、下段から上段に持ち替えて斬りかかるように振り下ろしてきた。

銀梅の技や駆け引きは格段に上がって……いや、跳ね上がっていた。

銀梅「隼風しゅんふう! 驚刃しゅうば!」

銀梅は八幡に攻撃をする隙も与えず、連続で技を繰り出していた。思い通り、八幡は攻撃をせずに回避に専念していた。自身の元々の身体能力も高いお陰か、傷は一切負っていなかった。

八幡（こりや、手加減してたらやられるし、こいつにも失礼だな………まあ、こいつにならいいよな。）

陽乃「ふっ!!」

永成「っ! ヤアッ!!」

陽乃と永成もかなりのハイペースで攻防一体を繰り返していた。だが、一応気にする程でもないが、互いに攻撃を受けており、現在も変わらず互角の勝負だった。

陽乃「これ以上傷つくのは嫌だな。肌の問題もあるけど、乙女の

柔肌をこんな場所で晒したくないからねー。」

永成「そんな理由で攻撃を止めるわけにもいかないんですが……」

陽乃「じゃあその鉤爪外してよー！そのせいで私だけ服にいろいろな傷跡ついてるんだからね!？」

永成「そう言われましても……この武器は私の得意武装ですし、外すわけにはいきませんよ。わざわざ勝率を下げる事はしません。」

陽乃「はあ……だよねー。」

陽乃（余裕なんて全くないのに、私なんでこんな余裕そうにお喋りしてるんだろ？けどこうでもしないと相手に悟られちゃうかもしれないしねー。お喋りだけでもこうしておかないとね。）

永成（姉姉はまだあんな感じか……でもこれ以上の攻めは難しい。姉姉が何を隠してるか分からないからね、注意に越したことはないけど……）

お互い目を離さないままでいる。

そして、動いたのは……

陽乃（まあ、仕方ないよね……）

陽乃「金剛たる鉄身もって災厄を防がん。急急如律令」

陽乃は呪符を収納してあるポーチから4札の呪符を取り出して自身の手足に取り付け唱え終わると、貼った部分が鉛色に変化して鉄のような輝きを放っていた。

陽乃「さつてとぅ！続きいこつか！」

永成「いざ、勝負！」

ギインツ!!

永成「っ！」

陽乃「なんとなく予想はついてたでしょ？少しは戦いやすくなったかな〜って思ったけど、なんかパワー思考のやる事だよね？これって。」

永成「否定はしません。ですが次は私が少し戦いづらくなりました。」

陽乃「…………はつきり言うね？」

永成「嘘についても仕方ないので。」

陽乃「正直な子は嫌いじゃないよ。」

そして再び拳と爪を交えるが、1つ違う点といえばそこから火種が飛び散っていた事であった。

キインツ!!

八幡「……………」

銀梅「ふうーっ。」

銀梅の旋棍による連続攻撃もようやく終わり、八幡は少し息が上がついていると思っていたが、全く上がっていなかった。これも修行の成果なのだろう。

八幡「…………正直驚いた。ここまで強くなってるなんて思わなかった。きつと界龍の奴等、皆腰抜かしてるんじゃないか？」

銀梅「どうでしょう？ ですがまだ尊師に1度も攻撃が届いていません。未熟な証拠です。」

八幡「自分にはとことん厳しいな、お前は。だが、その厳しさのおかげで今のお前の強さがあるのも確かだな。」

銀梅「……………」

八幡「その強さに俺も敬意を示さないと失礼だな。」

すると八幡の周りからは星辰力とは違う、例えようなないオーラが漂っていた。緑色のような、例えようなない靄のようなものが八幡を中心に溢れ出ていた。

銀梅（っ！アレは…………一体何？）

銀梅も今の八幡からは何らかの違和感を感じた様子だった。

八幡
「憑^{ひょう}霊^{れい}」

相性は大事

――――

八幡「憑^{ひょうれい}霊」

八幡の周りからは、星辰力とは違う何か異質なオーラが漂っており、広がるわけでもなく、ただ八幡の周りに浮かんでいた。

八幡（出番だ、お前も中に居たままで退屈していただろ？力を貸してくれ。）

???（主からのお呼びか……久々の現世であるな。）

すると八幡の背中から鳥が出てきた。だがその鳥は普通よりも3倍くらい大きく足と目が1つずつ増えていて、3本の脚には緑色の宝

玉のような玉を持っていた。

八咫鳥である。

空中を飛び回り少ししてから八幡の場所に戻ったと思ったら、身体が消えた途端に黒い靄となって八幡の身体に纏わりついていたのだ。

八幡自身も驚いた様子は全くなかったが、八幡の格好がみるみる変わっていた。

銀梅（な、何!? 尊師の姿が変わって………!?）

漆黒の長い黒羽織、その背中には『八咫』という文字が刻まれており、首からは3つの緑色をした勾玉をぶら下げていた。刀も刀身が淡い青色ではなく緑色に変化していて、腰には鎖分銅を巻いていた。そして八幡の左の目も変わっていて、目は黒色、瞳は赤色に変わっていた。

八幡の周りに漂っていたオーラも消え、漸く落ち着いた雰囲気になったが、銀梅は今の八幡の姿に声も出なかった。

八幡「憑霊……よるうたげ夜宴・おおよみからず大闇鴉っ!!」

八幡がそう言った瞬間に、背中から黒い翼が出てきた。まるでカラスのような翼みたいであった。

いや、あれは正真正銘カラスの翼なのだろう。

銀梅「……………尊師、そのお姿は？」

八幡「まあ、簡単に言えば合体だな。見えていたと思うが、さつき

飛んでた鳥が俺に憑いてこの姿になった、とだけ言っておく。」

銀梅（……………まだこんな芸を持っていたなんて……………流石は尊師、全く追いつける気がしない。それに、あの姿がお飾りじゃない事くらい私にだって分かる。一気に重圧がのしかかったような気分になる。）

八幡「んじや、待たせるのも悪いし、そろそろやるか。」

銀梅「っ！」

永成「ぐっ！はあ……………はあ……………」

陽乃「どうしたの？少し手を加えただけで苦戦し過ぎじゃないかな？」

一方で陽乃と永成はさっきまでの陽乃が不利な戦いとは変わり、永成が不利な状態になって進んでいた。

永成（まさかこんなに変わるなんて……………あの術式、触れた箇所を鉄のようにする効果なのかな？だとしたら互角だった分、大きいデイスアドバンテージだね。）

情勢が一気に陽乃に傾いていた。それもその筈、今の陽乃の手足は永成の武器である鉤爪と同じ鉄と言ってもいいのだ。永成の使っている鉤爪も金属ならば防がれるのは普通の事である。

陽乃「ふっ！」

永成「っ！」

突っ込んできた陽乃に対処するも鉤爪はことごとく防がれてしまい、自分には陽乃の攻撃が通ってしまう。その事から永成には徐々に焦りの色が出てしまい、ついには両腕を弾かれてしまう。

永成（っ!!しまっ）

陽乃「発空^{はつくうけい}勁っ！」

ドオンッ!!!

永成「カハッ!!？」

陽乃の出した掌は永成の腹直筋辺りに僅かに当たっていたという感じだった。それなのに永成はまるで大砲を受けたかのように吹っ飛ばされてしまった。

永成「ぐっ……ゴホッ！ゴホッ！」

永成も肺から空気が全て抜け出てしまったからか咳が止まらず、手足に力も入らないので立ち上がる事も出来ないでいた。

陽乃「いやゝ決勝まではとっておきたかったんだけどねー、この技は。剛鉄符だけじゃ無理そうだから使っちゃったよー。ホント、成長っていうのは恐ろしいものだよ全く。1番敵にしたくないかもねー。」

永成「……し、姉姉、今の……技は？」

陽乃「発空勁の事？あれは発勁を空気砲にしたようなものかな。私のオリジナルの技だよ♪」

永成（……………私には、まだ姉姉の声を真剣にさせる程の強さはなかったようだね。また、修行し直した。）

永成は重い身体を持ち上げるように立ち上がると、陽乃に向かって包拳礼をした。

永成「参りました、流石は雪ノ下姉姉。私の完敗で御座います。まだまだと痛感しました。」

陽乃「そんな事ないよ、私も実際追い込まれていたしね。うんうん、良い勝負だったよ！」

陽乃は包拳礼を解いた永成の校章めがけて正拳突きを放ち、校章を砕いた。

梁瀬『呂永成、校章破壊!!拳と拳（つぽいからいいよね？）の激闘を制したのは雪ノ下選手く!!』

チャム『どちらもレベルの高い戦いだったスねー。こんな試合が見られるなんて本当に今年の界龍は凄いつス!!』

永成（さて……………銀梅、僕は姉姉に負けちゃったよ。良い状況には持ち込めたけど、それも一瞬だったよ。さて、君は尊師に……………）

八幡の憑霊の姿を見る。あまりの姿に永成は静かにこう思った。

永成（……………頑張つて、とだけ言っておくよ。）

そして同じく八幡の憑霊した姿を見た陽乃も……………

陽乃（比企谷くん……………嘘でしょ?）

かなり啞然としていた……………

決着と誇り

――――

陽乃と永成の勝負は終わり、残るは八幡と銀梅の試合だけとなったが、観客からも分かるように一方的な試合になっていた。

銀梅「くつ、風波^{ふうば}っ！」

銀梅も攻撃するが、いとも簡単に防がれてしまう。

一方的な試合になっている理由は、八幡が空を飛んでいるからだつた。それも素早く動いているため狙いが定まらないのだ。

さらに、八幡は遠距離からの攻撃を繰り返しているのにもあつた。沓切丸による風の力が宿った斬撃、翼の羽による嵐、鎖分銅による打撃などがある。

対して銀梅は、旋棍片手に1つ。あまりにも相性が悪いのだ。

銀梅（狙撃とかそういうのは対処出来るようにしておいたけど、あんなにも遠距離攻撃にバリエーションがあつたなんて、まるで考えてもなかった。流石尊師……武器の使い方も段違い。）

八幡（このまま飛び回つてのでもいいが、それじゃ銀梅が攻めてこないだろうしな……降るか。）

すると八幡は銀梅の正面に降りて、黒い翼を背中から消した。

八幡「こつからは真剣勝負だ。空中で戦つてたんじゃ面白くないかな。特にお前みたいな近接特化の奴ならな。」

銀梅「……………」

銀梅（やつと……戦える。本気の尊師と……ようやく戦える。）

銀梅は自身の感情に昂りを感じていた。憧れの相手と戦える喜びと嬉しさ。彼女にとつては願ったり叶ったりの展開だった。

銀梅は再び包拳礼をとり、一礼をした。

銀梅「尊師、お手合わせお願いします。」

八幡「……ああ。」

銀梅は呪符を取り出し、先程と同じ呪文を唱えて旋棍につけた。そして再び風の刃が現れ、いつでも踏み込めるように体勢を整えた。

銀梅「はあっ!!!」

仕掛けたのはやはり銀梅。八幡は動かずに刀を下段に構えながら待っていた。

銀梅の初手は突くか斬るかのだっぴかだった。旋棍をそのまま先端で突くか、銃のように持ち替えて振り下ろすかの2つだった。八幡もこれを警戒しているのだろう。

そして銀梅は予想通り、旋棍を持ち替えて銃を持つような持ち方に変えていた。

そのまま切りかかってきた

銀梅「斬風弾!!」
ざんふうだん

八幡（っ!? 撃ってきただと!?)

予想外な事に銀梅は旋棍に宿していた風の力を銃弾のように飛ばしてきたのだ。

八幡は咄嗟の事に反応が遅れ、刀で防ぐも距離が近く風も弾け飛んでいた事もあり、腕に無数の切り傷を負ってしまった。

八幡（まさかこの状態で傷を負うなんてな……俺もまだまだか。）

銀梅「はぁー!!」

その勢いに乗り、銀梅はすかさず攻撃を仕掛ける。八幡も銀梅に突っ込み、鏑迫り合いになった。

八幡「さっきの、中々の奇策だったな。俺も驚いちゃった。だが、俺もこのままじゃ終われねえからな。大人気ないが、ちよいとゴリ押しでいかせてもらう。」

八幡はそう言うと、銀梅を力で押し返して、腰に巻いてあつた鎖分銅で銀梅の腕と旋棍を巻きつけ、地面に叩きつけた。

銀梅「うっ!」

地面に叩きつけられた銀梅だが、それだけで諦めるような子ではな

い。再び八幡に攻めようとするも出来なかった。

八幡の姿が見えないからである。

銀梅（え？何処？一体尊師は何処に!?）

辺りを一周見渡すも八幡の姿は見当たらず、銀梅だけが残っていた。

八幡『明鏡止水。水面^{みなも}に写る水鏡は波紋をたてると消える。水面に波紋をたてたままの状態では、俺を捕らえる事は出来ないぞ。どうする？』

どこからともなく八幡の声が聞こえるが、全く分からない。しかも逆に姿が見えないせいか、何処にでもいるような錯覚に陥ってしまった。

銀梅（さつきとまるで違う！全く気配を感じない！）

銀梅も構えてはいるが、八幡のいる方向、音、風も感じないため何も出来ないでいた。これは八幡の魔術師としての能力でもあった。

幻……幻惑と言ってもいいだろう。それが八幡のもう1つの能力だった。

八幡（潮時だな……）

八幡『花咲く池に、浮かぶ水鳥は、波をあおげば、飛び消える。』

八幡『水刃^{すいじん}・花鳥風月。』

チャリーン

鈴の音と同時に八幡が現れた。それと、何かが落ちる音もしていた。

銀梅の校章だった。

梁瀬『徐銀梅、校章破壊!!勝者、比企谷八幡&雪ノ下陽乃!!』

開始した時よりも激しい大歓声が響き渡っていた。

八幡「ふう、やっぱ2つの技を併合して使うとなると結構疲れるな。」

銀梅「………尊師。」

八幡「ん?おお、お疲れさん。」

銀梅「お相手して頂きありがとうございました。私もまだまだでした。」

八幡「そう卑下するな。こんな言い方するのもアレだが、お前は俺に傷をつけたんだぞ?現役では2人目だ。暁彗に次いでな。見ろ、この切り傷。アレには驚かされた。」

銀梅「……………」

八幡「こんな時くらいは自分を誇れ。準決勝まで勝ち進んで、格上にも傷をつけさせるだけの善戦をした。良いじゃねえか。」

銀梅「……………」グスッ

八幡「またやろうぜ？今度は最初から手加減なしでな。」

銀梅「……はいっ!!」ポロポロ

そして準決勝は終わり、残すは決勝のみとなった。

試合終了後

銀梅 side

負けた……まだあれだけの差があつたなんて考えてもなかった。もう少しで手が届きそうだと思っていた自分が愚かしいとも思つたわ。

それなのに尊師は、自分を誇れだなんて言つて下さった。現役で傷をつけたのは2人目だと言い、準決勝まで来たことを誇りに思えと言つて下さった。

その時私の中にあつた自分に対する嫌悪がスツと消えた。確かにそうだわ。他にも可能性のあるペアがいたのに、こんな事を言つたら失礼よね。

永成「……銀梅は尊師との試合どうだった？ 私は姉姉にかすり傷をつけた程度で終わっちゃったよ。その後はずっと攻められっぱなしだったよ。まだまだ修行が足りないのを実感したよ。」

銀梅「私も尊師には傷はつけられたけど、あれはまぐれだと思う。尊師の裏をかいてやった事だから自分の力とはいえないわ。斬風弾がなかったら、尊師に傷すらつけられなかったわ。」

これは本心。あの^{尊師}の人に傷をつけられたのは本当にまぐれ。打つではなく撃つにしたから攻撃が通つただけ。

永成「君にしては随分低評価だね。少しは喜ぶと思つていたけど？」

銀梅「最初はそう思つたわよ。でも、あれじゃダメ……まぐれなんかで満足していいわけがない。永成もそうでしょ？」

永成「……あははっ、まさか君に言い負かされちゃうなんてね、確かに『まぐれ』や『たまたま』なんかで当たった攻撃なんて嬉しくない

いね。」

銀梅「ええ！そうと決まれば鳳凰星武祭が終わったら一緒に稽古しましょう！今度は師兄たちにも教わりたいから！」

永成「そうだね。」

くく！やっぱり私はこうでなくちゃ！！

p i p i p i ∴ p i p i p i ∴

陽乃『ひやつはろー！お疲れく！』

八幡『今大丈夫か？』

永成「尊師!?それに師姉も!?しよ、少々お待ちください！」

永成は慌てながらそう言うと、扉を開けて尊師たちを入れた。
因みに私もガチガチのガクガクです。

陽乃「いやゝ本当に良い試合だったね。 私たちもかなり驚いちゃったよ。」

銀梅「いえ、まだ尊師や師姉には遠く及びませんでした。」

永成「これから精進します。」

陽乃「うんうん、向上心があるのは良いことだぞ。 鳳凰星武祭が終わったら序列戦やってみたら？絶対どっちも20位以内には入れると思うし。」

銀梅「私はやろうと思ってましたので。」

永成「私もやろうと思ってましたので丁度よかったです。」

陽乃「そっかあ。 私には挑んでくれないのかあ。」

永成「まだそこまでは……」

陽乃「気にしてないからいいよ。 それよりも八幡くん、さつきから黙ってるけどさ、どうかしたの？」

そういえば尊師は一言も話してなかったわね。それに私たちの方をじっくり見てる。

八幡「…………お前ら、アレマさんに稽古つけてもらっただろ？」
2人「っ!!」

どうして分かったの!?!初日から昨日まで一切出会ってもいないのに!?

八幡「あの人は技術よりも基礎能力を重視する人だ。お前たちの強さは格段に上がっていた。技もそうだが、特に身体能力が異常に伸びていた。それに、普通なら俺と陽乃さんの攻撃を何回も受け切れねえ筈だからな。違うか？」

……………このお方は本当に……………何処まで視えているんだろう？

永成「尊師、正解です。実はアレマ様にお願いしていたんです。強くしてほしいと。最初は興味が無いようにしていたんですけど、銀梅が尊師を倒したいって言った途端に承諾してー」

銀梅「ちよつと永成!?!知らないことまで言わないでくれる!?!」

陽乃「へえ〜? 因みになんて？」

永成「『私は尊師を倒すのが目標です! その為に1日でも早く強くなりたいです! お願いします!!』と言いました。そうしたらアレマ様は『何でそれを早く言わないんだい? そういう事なら喜んで協力しようじゃないか♪』と物凄く嬉しそうに言っていました。驚きましたよ。」

陽乃「八幡くんを倒す事が目標ねえ……………どう思う? 八幡くん。」

八幡「……………」

銀梅「わ、笑ってくれても構いません／＼／＼ですが、私は本気です!」

陽乃「ふふふつ、笑うわけじゃないじゃない。何で笑うの?」

銀梅
「え？」

八幡「ああ、良い目標だと思うぞ。お前もそう思うだろ、永成？」

永成「はい、とつても。」

え？え？？どういう事？

陽乃「また定着してきたからね。八幡くん不動の序列2位って感じが。」

八幡「それに、冒頭の十二人に挑むのに抵抗持つてゐる奴らも多いですからね。そう思つたら、こういう存在がいてくれるのは嬉しいですよ。」

永成「私もまだあります。冒頭の十二人に挑むのにはまだ抵抗が……」

八幡「その中で俺に挑もうって奴がいてくれるのはありがたいって
もんだ。俺を超えようとしてくれてるんだからな。」

銀梅「あ、あの……」

陽乃「銀梅ちゃんは立派だよ！ 序列2位の強敵に挑もうとしてるんだからさ！ 私応援しちゃうよ！」

永成「私も応援してるよ。早く尊師に追いつけるといいね。」

銀梅 「いえ、ちよつとお話を……」

八幡「今すぐには無理だろうが、そのうち本当にヤバくなるかもな。俺も稽古の量増やすか。」

陽乃「いつその事さ、銀梅ちゃんとやりなよ！その方が良いって！」

銀梅ちゃんのプラスになるし！」

永成「モチベーションも上がるだろうですしね。」

銀梅 「もうやめてええええええ
!!!!」

これ以上は恥ずかし過ぎます!!
／／／

――10分後――

少し経って現在は鳳凰星武祭のドーム入り口前に来ていた。

銀梅「……………／＼／」

陽乃「ゴメンってば！ちょっと面白かったからつい、ね？」

永成「少しやり過ぎたって思ってるよ。でも、本当に良い目標だとは思ってるよ。」

銀梅「……………ふんだ／＼／」

もう……………永成と師姉なんて知らない！

八幡「まあ……………そうだな。俺も素直に嬉しい。ライバルが出来るんだからな。」

銀梅「ライバルだなんてそんな……………」

八幡「競い合える奴がいるだけでも大分違ってくるもんだぞ？俺には今そんな奴いないからな。」

銀梅「そうなのですか？」

八幡「ああ。」

……………競い合える人、か。

陽乃「あははっ♪銀梅ちゃんもそのうち良いライバルが見つかると思うよ？それじゃあ界龍に戻ろっか！」

永成「はい、そうですね。」

銀梅「……………はい。」

八幡「すみませんが、俺は用事がありますので一緒に帰れません。3人でガールズトークで盛り上がりながら帰って下さい。」

陽乃「そっかあ……………じゃあ仕方ないね。2人共、帰ろっ♪」

2人「はい！」

八幡「じゃあ陽乃さん、また明日。」

陽乃「はいはい！また明日ね。」

銀梅「尊師、明日のご武運をお祈りしています！」

永成「私も祈っております！」

八幡「おう、ありがとな。」

そして尊師は私たちと逆の方向へと向かっていった。私も早く尊師と競い合えるように頑張らないと！

前夜は彼女と ①

八幡 side

陽乃さん達と別れた後、俺はまっすぐシルヴィの家に向かっている最中だ。因みに言うなら、この鳳凰星武祭の期間はずっとシルヴィの家と一緒に過ごしている。

もう完全に第2の家って感じだな。俺にとっての第1の家は界龍の寮だな。

親父や母ちゃんとかこの家は、別にどうとも思っていない。この界龍と同じで放任主義だからな。混沌とはしてないが。

とまあ、関係ない話はここまでにしよう。

現在進行形でシルヴィの家に向かっているわけだが、やっぱり良いものだな。シルヴィが家で待ってくれてると思うと、なんか早く帰りたいって思えてくる。

いや、いない可能性も否定出来ないが、俺にとってシルヴィはもう必要不可欠な存在だ。もし連絡もなく居なくなったら自殺するかもしれない。

それくらい俺はシルヴィを想ってる。

つと、そんな事をボヤボヤ考えてる内に家に着いたな……シルヴィ、居るかな？

八幡「ただいま。」

いつもの挨拶を玄関で言う。これは此処に帰った時必ず言う言葉だ。散々シルヴィに叩きつけられたからな。

そして、聞こえてくる足音。最初は小さくも段々大きな音へと変わり、走ってきてから俺に飛び込んでくる。

そして俺はそれを受け止める。

シルヴィア「お帰り、八幡くん！」

八幡「ああ、ただいま。」

――居間――

シルヴィア「疲れたでしょ？お茶飲む？」

八幡「ああ、頼んでいいか？」

シルヴィア「勿論だよ♪」

こんな何気ない会話でも充実感を感じる。彼女と会ってからそれが当たり前になっていて、今ではそれに加えて愛おしいと思えてくる。

シルヴィア「はい、どうぞ。」

八幡「ああ、サンキュー。んぐつ、んぐつ……ふうー、仕事終わりってこんな感じ何だろうか？妙な達成感があるな。」

シルヴィア「あはは！それ分かるよ！清々しい感じするよね！」

八幡「ああ、まさにそんな感じだ。やっぱ今日の準決勝が理由かな。」

八幡は右腕の肘から前の方を見た。そう、銀梅に傷をつけられた場所だった。

シルヴィア「強かったよね、あの2人。見ていた私でも分かるよ。」
八幡「お前も戦ってみろ。とても序列26と33位には思えねえか

らよ。」

シルヴィア「うん！機会があつたら、また八幡くんの寮でお泊まり
經由で行くから！」

八幡「そしたら、またご馳走作らないとな。出入り禁止にしてな。」
シルヴィア「うふふふつ、星露が聞いたら絶叫するだろうね！」

確かにそうだろうな。絶対足にしがみついてくるだろうな、セシリーも一緒に。

シルヴィア「そういえば、凄かったよ八幡くん。あんな事も出来たんだね。確か名前は……憑霊って名前だったっけ？」

八幡「ああ。俺の中にいる八咫鳥を自分の身体に憑けたんだ。姿が変わったのも俺と八咫鳥の特性を合わせたからだろうな。」

今のところ出来るのは八咫鳥だけだからな。一番最初に出会った霊だからな。

シルヴィア「あの時の八幡くん……凄くカッコ良かったよ／＼／私、写真撮って印刷しちゃったから／＼／」

八幡「……何やってんだよ／＼／」

シルヴィア「だ、だって、カッコ良かったんだもん／＼／」

八幡「……あーもういい、好きにしろ。それより、シルヴィはもう飯食ったのか？」

シルヴィア「私が八幡くんを放って一人で食べると思う？」

八幡「いや、全く。」

シルヴィア「ふふつ、じゃあご飯にしようか♪もう作ってあるからね！」

相変わらずの嫁さんスキルですなあ。

八幡 side out
シルヴィア side

―――食卓―――

シルヴィア「はい、あーん♡」

八幡「あむつ、……うん、美味しい。」

シルヴィア「えへへ、ありがと！」

やった♪八幡くんに美味しいって言ってもらえちゃった！最近、私も仕事の合間に料理を勉強して少しでも美味しい料理を八幡くんに食べさせてあげられたらって思ってたから嬉しいな。

シルヴィア「♪♪やっぱ嬉しいっ！」

八幡「俺も美味いって言われた時はそんな感じだったな。」

シルヴィア「でもでも、好きな人から言われるのとじゃ全く違うよ。」

八幡「それもそうだな。」

そう言ったら、八幡くんは私の頭を撫でてくれた。優しく愛おしむように。

シルヴィア「んんん♪♪やっぱ八幡くんは頭撫でるの上手だね。」
八幡「今ではシルヴィかオーフェアくらいにしかやらないけどな。」

オーフェリアさんかあ……あの人ってなんか保護欲がそえられるんだよねー。
何でかな？

八幡「まあ、冷めちまったら勿体無いから、早く食べてのんびりするか。」

シルヴィア「うん、そうしょつか。」

――居間――

シルヴィア「やっぱり何処も鳳凰星武祭の事だけだね。」

八幡「まあ当たり前じゃないか？もう決勝だからな。」

シルヴィア「よく言うねえ？そのファイナリストがこんなところでゴロゴロしてるんだからね。」

テレビを見ようにも、今は鳳凰星武祭で賑わっているから、何処のチャンネルも似たようなものだった。

シルヴィア「どうする？」

八幡「シルヴィのライブでも見るか。」

シルヴィア「それなら八幡くんと一緒にやったライブが見たい！」

八幡「……俺、あんまり良い思い出じゃないんだけど？」

あつ……そうだった。

シルヴィア「ゴ、ゴメンね!?そんなつもりじゃ……」

八幡「分かってる。純粹に見たかったんだろ？なら見ようぜ。」

そして八幡くんは優しく微笑む。私は彼のこういうところを好きになったんだよね。

――1時間後――

シルヴィア「……………」

八幡「……………」

ああ……やっぱり八幡さんの『w i s h i n g』は良いなあ。何度でも聴きたくなるよ。

八幡「やっぱ流石って感じだな、シルヴィの歌声は。」

シルヴィア「そ、そうかな？」

八幡「そういや、今はどうなんだ？デュエットの依頼とかは来てるのか？」

シルヴィア「凄い来てるよ。一緒にやってくれって。でもその殆どがああの時のライブで断った人たちなんだよね。だからペトラさんも即断で断ってる。」

八幡「まあそうだろうな。シルヴィたちからしてみれば都合良すぎるからな。」

因みに私も、もう八幡くん以外と歌う気はないから、そのところ宜しくね！

シルヴィア「逆にファンからは、また八幡くんとやってほしいって来てるんだ。ねえ八幡くん、もう一度やってみない？」

八幡「そうだなあ……俺としても不本意ってわけでもないから、六花内か日本だったらいいぞ。」

シルヴィア「ホント!？」

八幡「ああ。外国もいいが、あんまり遠くには行きたくない方なんだ。それに言語も伝わらないところってのはあんまりな。」

シルヴィア「それじゃあ六花と日本だったらOKってペトラさんに伝えてもいい!？」

八幡「構わないが、明日にしておけ。今は俺がシルヴィを貸切に
てんだ。」

シルヴィア「っ！／／／も、もう／／／」ダキッ

むうゝ……本当に八幡くんは！

ギユッ！

シルヴィア「ふえっ!?／／／／／は、八幡くん!?どうしたの!?／／／／／」

八幡「ん？風呂が沸くまでこうしてようと思ってな。落ち着くし心地いい。ダメか？」

シルヴィア「……ううん、勿論OKだよ。私も抱き締めていい？」

八幡「ああ、そうしてくれ。」

シルヴィア「うん♪」ギユッ

そして2人はお風呂が沸くまでずっと抱きしめ合いながらお互いの温もりをずっと感じて合っていた。

前夜は彼女と ②

八幡 side

リビングでシルヴィと一緒に過ごす事20分、風呂が沸いた音がして半分落ちかけた意識が覚醒した。

シルヴィア「お風呂沸いたみたいだね。」

八幡「そうだな。……やっぱ今日もか？」

シルヴィア「う、うん／＼八幡くんのお背中も流したいし、少しでも長く八幡くんと一緒にいたいから／＼」

全くこいつは……

嬉しい事言ってくれるな／＼

八幡「わ、分かった／＼んじやいつも通り俺から入るな。後から来いよ？」

シルヴィア「うん／＼」

――洗面所――

一緒に風呂に入るのは何度かやってるが、こればかりは慣れそうにない。シルヴィの裸なんて慣れるという方が無理だ。

八幡「…………まあ、最初に裸を見た時よりはマシだよな。」

あの時は偶然とはいえ、凄いのを見ちまったからな／／…………いや、やめておこう。

八幡「…………早く入るか／／／」

八幡 s i d e o u t

—————

————数分後————

八幡「…………」

八幡（俺がいつも風呂で欠かさずやっている事、それは精神統一だ。夜にやつても意味はないと思う人もいると思うが、頭を落ち着かせたい時には効果がある。風呂でやる必要は別にないが、これはシルヴィを待つ時に俺がやった事だから習慣になっている。）

ガチャッ

扉の開く音がした。八幡は姿勢を変えずに目線だけ戸に移した。そこにはヘッドホンを外して、髪を下ろした状態でピンクのバスタオルを巻いているシルヴィがいた。

シルヴィア「お、お待たせ／／／」

八幡「あ、ああ…………／／／」

2人（やっぱり何度やつてもこれは慣れなそうにないな／／／

【よく／／／】）

何度か一緒に入っている2人だが、未だに慣れていないようだ。

八幡「風呂入るか？それとも先に身体洗うか？」

シルヴィア「じ、じゃあ先に身体を洗おうかな／＼背中、流してくれる？／＼／」

八幡「あ、ああ／＼洗って欲しい時は呼んでくれ。」

シルヴィア「うん／＼／」

話し終わると、シルヴィアはそのまま洗面台の方まで行き、シャンプーで髪を梳かすように洗っていた。

――――

シルヴィア「は、八幡くん……お願い／＼／」

八幡「お、おう。」

生返事のような感じで答えた八幡だが、心臓はいつもの倍くらい働いていた。

それもそうである。かの有名な歌姫の抜群なプロポーションを見ればそうならない男はいないだろう。

八幡「じゃあ、やるぞ？」

シルヴィア「お、お願いします／＼／」

ワシヤワシヤ

八幡（……やっぱ綺麗な肌してんな。）

八幡はそう思いつつ、手を動かす。強過ぎず弱過ぎずの感覚でシルヴィアの背中をハンドタオルで丁寧に擦っていた。

八幡「どうだ？痒い所はあるか？」

シルヴィア「う、ううん、ないよ／＼それに力加減もちょうど良いよ。」

八幡「そうか……じゃあ後はシルヴィが前をやったら流すからな。」

シルヴィア「……前もやる？／＼／＼／」

八幡「…………無理だ／＼／＼そんな事したら、俺また鼻血出しちまう。」

シルヴィア「そ、そうだよ／＼／＼／」

その後は何事も滞りもなく終わった。

徐々に慣れてきたのか、話も少しずつだが交わせるようになっていた。

シルヴィア「それじゃあ次は八幡くんの身体を洗う番だね。」

八幡「じゃあ頼む。」

シルヴィア「うん、任せて。旦那様。」

八幡「……つたくこの嫁さんは。」

シルヴィア「えへへ／＼／」

シルヴィアも同じように八幡の背中を擦っていたが、八幡は男のため少し力を入れている。だがシルヴィアは、それですら幸せに感じているのだろう。

シルヴィア「……うん、終わったよ。」

八幡「ありがとな。それじゃ「次は前……だよ？／＼／＼／」……は？」

八幡は混乱していたが、それはすぐになくなった。シルヴィアが抱きつくように腕を前に絡ませ、背中に抱きつく形になっていたのだ。

が、この時、明らかに違う感触が八幡の背中を襲っていた。

八幡「お、おいシルヴィ!?!?!?!」

[illegible]

バスタオルを取り、裸の状態に八幡にくっついていたのだ。そして柔らかい2つの感触が八幡の背中と脳を攻撃していた。

八幡「シ、シルヴィ／＼／＼／＼／」

シルヴィア「八幡くん疲れてるでしょ？だから前も私がやってあげる／＼／＼／＼上だけにするから安心して？／＼／＼／＼」

八幡（安心出来るか!?）

シルヴィアの手つきは正確で、八幡の上半身を隅々まで洗い続けていた。

余談だが、シルヴィアがこんな事したのは初めてである。

八幡

シルヴィア フォー

この状態ではお互い碌に話も出来ず、ただただ気まずい雰囲気と甘い雰囲気が始漂っていた。

数分後

八幡
「……………」

シルヴィア「……………」

漸く全ての部位を洗い終わり、2人は仲良く湯に浸かっていた。仲良くとはいっても会話などはせず、シルヴィアが八幡の肩に寄り添っ

ている形になっていた。

マナー違反ではあるが、シルヴィアも流石にバスタオルを取ること
は出来なかったのだろう。

だが、洗い終わった後のこの時間は、2人にとっても癒しの時間
であり、お互いに肌をくつつけながらお互いを認識する2人だけの方法
と言っても過言ではない行動だった。

八幡（やっぱ安心感が違うな。こうしていると、心も身体も凄え落
ち着く。）

シルヴィア（……八幡くんの手ってやっぱり大きいから安心する
なあ。私の肩に置いてるだけだけど、それでも安心する。）

八幡もシルヴィアも互いの安心感に包まれながらお風呂に浸かり、
数分後には風呂から上がって仲良く牛乳を飲んでいた。

―――寝室―――

2人はいつも寝る時間を決めており、必ず決まった時間には寝室以
外の電気を消し、寝室からは出ないようにしていた。

普段通りの寝間着に着替えているが、八幡は青と白の半袖半ズボン
の寝間着で、シルヴィアは紫のネグリジェだった。

シルヴィア「いよいよ明日だね、八幡くんの晴れ舞台。」

八幡「そうだな……明日は【本気】でいこうと思ってる。俺の實力
をこの六花に知らしめるためにもな。」

シルヴィア「……うん。」

八幡「シルヴィ、俺の試合、会場で見に来てくれるか？」

シルヴィア「当たり前だよ。私が八幡くんの晴れ舞台を無視すると
思う？」

八幡「……そうだな、シルヴィにとってはこんなの愚問だったな。」

見つめ合いながら明日の事を話している。それだけだが、それだけの事でも2人の心は満ち足りていた。

八幡「じゃあ電気消すぞ？」

シルヴィア「うん、いいよ。」

電気が完全に消え、見えるのはカーテンの隙間から覗く月光だけとなった。

シルヴィア「……………」

八幡「……………眠れないのか？」

シルヴィア「分かつちやうよね、やっぱり。流石私の彼氏だよ。」

八幡「最大の褒め言葉だな。どうしたんだ？何かあったのか？」

シルヴィア「……八幡くんさ、まだ今日の疲れ取れてないでしょ？」

八幡「……まあ取れてはいないが、寝て明日になれば万全になるだろう。」

八幡（完全に取れてなくても、シルヴィとの時間で補えるしな。）

明日も少しはシルヴィアといられる時間があるのを利用しようと思八幡は考えていた。

するとシルヴィアが突然提案を出した。

シルヴィア「八幡くん、今から一気に疲れが飛ぶ方法をやろうと思ってるんだけど……やる？」

八幡「そんなのがあるのか？それなら是非頼みたい。」

シルヴィア「じ、じゃあ目を閉じて口を少し開いて。今から甘いものが入るから。」

八幡「ああ、分かった。」

八幡（甘いもの？お菓子か？）

八幡は歯磨きも終わったのに何故？と思いながらもシルヴィアの言う事に従い、目を閉じ口を開けた。

すると、生温かいニユルツとした感触の物が口の中に入り込んで来た。

しかもそれは八幡の口の中の特に舌の部分をを味わうかのように這い回っていた。

口も塞がれていたので八幡はすぐに分かった。シルヴィアはキスをしているのだと。それも大人のキスでだ。

シルヴィア「んんっ……ちゅっ……ちゅるっ……むんんっ……くちゅ……ぷはあっ！……はあ……はあ……／／／／／」

一層濃い口づけを終えた後、シルヴィアは息を切らしていた。頬は赤く染まっていて目も涙目でうつとりしながら八幡の方を見つめていた。

シルヴィア「はあ……はあ……八幡くんどう？疲れは取れた？／／

／／／

八幡「……いや、取れてない。むしろ目が凄え冴えてきた。シルヴィ、その効果ってどのくらいやったら現れるんだ？」

シルヴィア「……人それぞれだと思う。多分八幡くんは凄く疲れているから、も、もつとしないと……ダメなんだと思う／／／／／」

シルヴィアは真っ赤になりながらそう言った。勿論そんな療法はないのだが、既に八幡は籠が外れた状態のようだ。

八幡「なら、もつとしていいよな？疲れもあるが、俺はもつとシルヴィを感じたい。ダメか？」

シルヴィア「イイよ／／／私もそう思ってたの。もつと八幡くんを感じたいから、いっぱいキスシよ？／／／／／」

八幡「ああ、シルヴィ！」

シルヴィア「八幡くん！」

そしてその後に聞こえたのは、水の絡め合う音と、少しばかり荒い2人の声だった。

朝もやつぱり……

—————

現在朝の5時、人が起きるにはまだ早過ぎる時間でもあるが、ご老人などはこのくらいの時間には大体起きているであろう。

（作者もこのくらいに起きてます。）

若者は絶対ではないが、好んで起きる時間帯ではないと言える。しかし、今ここにいる1人の少年は既に起きていた。

八幡「……………」

八幡 side

……………ヤバかった。昨夜はマジでヤバかった。いや、ヤバイというのも軽いつ感じるくらいヤバイ事をした。

昨日の夜、俺とシルヴィは激しい口づけを交わした。少しで止めるつもりが、その後も何度も続けてしまった。おかげで口の中にまだ感触が残っているくらいだ。

シルヴィも途中で気絶してから俺も止まったくらいで、30分以上も濃密な時間を過ごした事になる。

今ではシルヴィに罪悪感を抱いているが、あの行為を悪いとは全く感じなかった。

シルヴィア「……………んっ、んんゝ…」

何だかよく分からない事を考えていると、シルヴィから声が聞こえ、俺は目を開けた。因みに今の彼女はネグリジェの肩紐が片方肩から外れていて、口元には唾液の垂れた跡がある。

シルヴィア「んんゝ……」

シルヴィは伸びをした後、俺の方を見た。その直後、彼女の顔は恥ずかしそうにしつつも何処か満足そうな顔をしていた。

シルヴィア「……おはよう八幡くん。昨日は……激しかったね／＼／＼凄かったよ／＼／＼」

八幡「うん、まあ、その通りなんだが、その言い方はやめてくれ。日本じゃ完璧に勘違いされる。」

まるでシタ後のような言い方みたいで罪悪感がまた増してくる。

シルヴィア「ゴメンね？でも安心した。八幡くんあんまりそういうの積極的にやってくれなかったから。」

八幡「……キスくらいならいいが、俺もまさかあそこまで夢中になるとは思わなかった。アレはした事あるのにな。」

シルヴィア「無意識に抑えていたんじゃないかな？それが爆発したって感じになったんだと思うよ？」

八幡「そんなものか？」

シルヴィア「そうだよ。いつもは1ゝ2回で終わらせてるけど、昨日は本当に凄かったもん／＼／＼私も凄く幸せだったし／＼／＼」

そう思ってくれてたのか……いや、俺も幸せだったがもしもって思うとな。

八幡「けど悪いな、気絶するまでやつちまって。今さっき凄い罪悪感に見舞われていたところだ。」

シルヴィア「ふふふつ、それだけ八幡くんが私の事を大事に思ってくれてるって事だよ。気にしてないから八幡くんも気にしないでいいよ。」

八幡「……ああ、ありがとな。」
シルヴィア「うん♪」

そして俺たちは抱き合った。朝5時にして俺たちは幸せな空気に包まれ、互いに多幸福感を深め合いながら朝早いこの時間を時間を静かに有意義に使っていた。

――2時間後――

流石に起きないわけにもいかない時間になったから、身支度を済ませてシルヴィの作る朝食を待っている。これも日課になりつつあった。食事は主にシルヴィが作るのが主流になっているのだ。

俺も作るが、その時は俺が早く帰った時やシルヴィの仕事が終わった時にだ。

シルヴィア「♪♪♪」

鼻歌ですら魅了するな……あんなに楽しそうにしていると、俺も気分が良くなるな。

シルヴィア「♪くん？どうかした？」

八幡「あ、いや。随分楽しそうにしてるから、俺も気分が良くなっただけだ。」

シルヴィア「そう？私は八幡くんと一緒にいたらずっと楽しいし幸せだよ？」

八幡「……………そうか。俺もだ。」

シルヴィア「ふふふっ、朝から良い事聞いちゃった♪」

本当に楽しそうだな。自然と笑みが出てくるな。キモくないとい
いが。

八幡 side out
シルヴィア side

今日の朝食は日本の和食です！ご飯の方がエネルギーが出るって
いうしね！献立はご飯にお味噌汁、鮭焼きにだし巻き卵だよ！
因みにお味噌汁の具はほうれん草です！昨日は大根だったからね
。

シルヴィア「お待たせ〜！」

八幡「ん？出来たか……おお、今日も一段と映える和食だな。」

シルヴィア「今日は決勝だからね！いつもより腕によりをかけて
作ったよ！」

八幡「そりやいつもより気合が入りそうだ。早速食べるか。」

シルヴィア「うん！じゃあ音頭お願い！」

一緒に食事を摂る時はいつも八幡くんが音頭をとっている。その
方が何だかしつくりくるからかな？まあ何でもいいよね！

八幡「はむっ……んぐっ……んぐっ……んー、今日の卵焼き、いっ
もより砂糖多めに入れてるだろ？」

シルヴィア「流石先生！その通りです！お見それしました！」

八幡「誰が先生だ、誰が。」

だって私に和食教えてくれたの八幡くんだし、作り方を教えてくれ
たのも八幡くんだから先生って呼ぶのは普通じゃん！

八幡「まあそれはさておき、卵焼きはこれくらいが俺の好みだが、普
段通りの味でいい。なんか特別な日にでもこの甘さにしてくれ。そ
の方が良い。」

シルヴィア「つまり今日みたいな日にやってくれって言いたいんだ
よね？」

八幡「ああ、その方がやる気も出る。」

ふふっ♪喜んでやるよ、旦那様♡

——居間——

朝食も食べ終わって決勝の時間までは、まだ4時間くらい余裕があるから、私と八幡くんはいい具合の時間になるまで家でのおんびりすることにした。

試合前のリラックスも重要な事だからね。私も王竜星武祭の時、八幡くんに肩貸してもらってたからよく分かるよ。

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

無言だけど、これが心地良いと感じる時もある。その理由は八幡くんの考えてる事がなんとなく分かるから。

今だったら…………どんな風に私に甘えようかなとかだったり？
キヤツ／／／

シルヴィア「何時辺りに出るの？」

八幡「11時半くらいにはつける頃に出たいな。別に拘りはないが。」

シルヴィア「じゃあ3時間は一緒にいられるんだね？」

八幡「そうだな。」

シルヴィア「えへへ、八幡くん♪」

時間が来るまでは、私が八幡くんを独り占めだもんねー！

◎動き出す者たち

八幡 side

現在11時、ちょうどいい時間だな。
もう行くか。

だが、その前に…………

シルヴィア「んん♪」

俺の腕にしがみついている彼女を何とかしないとな。これじゃあ出たくても出れん。

八幡「シルヴィ、俺はもう行くから腕を離してくれないか？」

シルヴィア「ん？…………ああつ、もうこんな時間…………ゴメンね。」

八幡「いや、大丈夫だ。それよりも腕を「じゃあ行こっか！…………え？」

シルヴィア「だから、会場に行こうよ！私も八幡くんの決勝は生で見たいから！」

八幡「…………一緒に行くのか？」

シルヴィア「この話の流れでそれ以外にあると思うの？八幡くんは？因みに変装はしないで行くからね。この格好で行くから♪」

まあ確かにそれしかないと思うが、変装なしは流石にマズイだろ。マスコミ連中がかなりうるさくなるぞ？

シルヴィア「八幡くんの思ってる事は大体理解出来るけど、もうそろそろいいんじゃないかなって思うんだ。私たちの関係をハッキリさせるのも。」

……本気の目だな。こうなったら正当な理由でもない限りは聞かないからな。けど俺も元々止める気は無いがな。

八幡「……分かった。俺も覚悟を決めた。このまま行くか。」

シルヴィア「うん♪ありがとうね、八幡くん！我が儘を聞いてくれて。」

八幡「バカだな、そんな事気にするな。支え合ってこそその俺たちだろ？」

シルヴィア「……う、うん、そうだね／＼／」

――――

シルヴィア「お待たせ〜！」

八幡「おう、じゃあ行くか。」

そして俺たちは玄関のドアを開け、外へと出た。広がる青空に新鮮な空気が出迎え、左にはシルヴィが腕を抱きながら手を握ってくれている。

当然の事だが、少し歩けば人に出会って驚かれる。鳳凰星武祭のファイナリストと世界の歌姫が並んで……というよりも恋人のように（実際恋人だが）歩いているからだ。

この目線やヒソヒソ話は会場に着くまで永遠と続くだろう。

八幡 side out

雪乃 side

――30分前 とあるカフェテリア――

由比ヶ浜「ゆきのん、準備はどう？」

雪乃「完璧よ。これで彼に復讐出来るわ。待ち遠しいわね。」

小町「いよいよですねー！」

由比ヶ浜「マジサイテーだね！ページワンに乗っただけでもあり得ないのに、星武祭でもあんなズルするなんてね！ヒッキーがあんな強いわけ無いじゃん！」

全くその通りね。彼にあんな事が出来るはずないわ。取り柄がシスコンくらいしかない彼にあんな芸当……思い出しただけでも腹立たしいわね。

小町「それはそうと、小町はあの室内で捕まった状態で写真を撮られればいいんですね？」

雪乃「ええ。手に入れた番号で由比ヶ浜さんが比企谷くんに通信して写真と嘘の情報を伝える。彼はすぐに乗るはずよ。その後、写真は削除するから安心して頂戴。」

小町「はい！それにしても、雪乃さんのお姉さん、確か陽乃さんでしたっけ？ゴミイちゃんに騙されて可哀想ですね。」

由比ヶ浜「そうだねー。陽乃さんそういうところ鋭そうなのね。」

姉さんにしてはあり得ないミスをしたようね。でも、その洗脳を解くのも私の役目よ。比企谷くんの自由にはさせないわ！

雪乃「そろそろ行きましょう。時間は有意義に使った方がいいわ。」

由比ヶ浜「うん、分かった！」

小町「オツケーですっ！」

――商業エリア 新開発エリア付近――

小町「なんかワクワクしてきましたね！」

由比ヶ浜「そうだね！やっとヒッキーに仕返し出来ると思うと、楽しいみになってくるよ！」

雪乃「そうね。その為にも早く準備に取り掛かりましょう。」
2人「おおー!!」

待ってなさい比企谷くん?もうすぐ会えるわ。そしてすぐに別れの挨拶をしてあげるわ。覚悟しておくのね。

??? 「……………比企谷くん?それに今の3人は確か…………」

界龍 全員集合！

――――

――界龍第七学院・八天門場――

此処は界龍の中にある八幡の所有する八天門場という名の鍛錬場である。普段は鍛錬の場として使われているが、大型端末（テレビの巨大版みたいな）もあるため、試合も見ることが出来る。

今この鍛錬場には全生徒と言ってもいいくらいの大人数が集まっていた。壁の方には客席がズラーツと並んでいるため、全生徒が余裕で入れるのだ。

柚珠奈「いやゝ凄い人だね！やつぱり尊師や姉姉たちの試合は見逃せないってことだよね！大画面で見なきゃだよね！」

沙希「確かにね。入学してから4ヶ月経ったけど、こんなにいるなんて思わなかったよ。最大規模を誇っているだけあるね。」

柚珠奈「あれ？京華ちゃんは？」

沙希「京華なら信頼できる人に預けて来た。京華もその人のところが良いって。」

柚珠奈「ずいぶん好かれてるねその人、お姉ちゃんとしては複雑じゃない？」

沙希「……ちよつとだけ。」

柚珠奈「あはははっ！川崎さんも側にいたら？大丈夫だと思うけど？」

沙希「あんたを放つたらかして行かないよ。それでも私は約束は守る方だから。」

柚珠奈「友達想いの良い友人が出来て私は幸せ者ですよ、ヨヨヨ。」

沙希「まあ、此処に来てからの初めての友達だからね／／／」

銀梅「永成、良かったの？別にVIP席に行ってもよかったのよ。」
永成「いいんだよ、私がこうしたいんだから。それに、あそこに行つたとしても、あんまり仲の良い人はいないからね。君といった方が100倍マシだよ。」

銀梅「結構ズバツと言うのね。」

永成「隠し事はあまり好きじゃないからね。まあ今回は尊師方の試合を楽しもうよ。」

銀梅「ふふつ、そうね。」

八天門場は人で溢れており、席もちょうどという感じで満席だった。

虎峰「やつぱり凄い人ですね。八幡たちの試合を観戦するのにこれだけの人が集まるなんて……」

セシリー「当たり前なんじゃない？皆憧れの尊師と陽姐が出るんだからさー。こうならない方がおかしいと思うよー？」

冬香「ふふつ、八幡さんは大人気ですね。これだけの人に注目されるなんて。」

客席にはVIP席も存在していて、現に冒頭の十二人が席に座っていた。

VIP席は序列1位、12位、13位、30位に分かれている。勿論この区切りは冒頭の十二人を優先しての事だ。

まだ始まったもないが、八幡たちの戦ってきた試合を再度見ている生徒も多くいたため、ボルテージは既にマックスに近い状態だった。

セシリー「でもさー、本当によかったのかなー？」

虎峰「何がです？」

セシリー「師父の事だよ。だって……」

星露「京華は良い子じやのお。妾の上で大人しく座っておられるのは京華が初めてじゃぞ？」

京華「ほんと？ルーお姉ちゃん？」

星露「うむ！妾が言うんじや、間違いない事を保証するえ。」

セシリー「冒頭の十二人じゃないあの子を連れてきても良かったのかなーって。サキサキちゃん心配してるんじゃないのー？」

冬香「私も先程聞いたのですが、心配には及ばなかったようですよ？京華さん自ら行きたいと言ったようで、川崎さんも納得していたようですし。」

虎峰「その川崎さんは来ていないのですか？来ていてもいいと思うのですが……」

冬香「ご学友の椎橋さんと一緒に見るそうですよ。」

沙希も京華も星露を信用しているからか、全く口論せずに済んでしまった。京華に星武祭が理解出来るか分からないが、星露の方も居心地が良いのだろう。

暁彗「……………失礼する。」

虎峰「大師兄っ！」

セシリー「大師兄も来たんですねー。やっぱり八幡たちの試合が気になりますー？」

暁彗「……………そうでないと言えば嘘になる。」

京華「あー！ルーちゃんこんにちはー！」

曉彗「……………こんにちは、京華よ。菓子を持ってきた、好きに食べるといい。」

京華「わーありがとーウーちゃん！」

虎峰「て、手慣れてますね。」

冬香「……………私も初めて知りました。曉彗がここまで面倒見がいいなんて……………」

ここにいる誰もが意外に思った事だろう。彼はあまり話をしないため、子供が苦手だと思い込んでいたのだろう。

星露「しかし、彼奴らはやはり来なかったのう。下にも見当たらないわい。」

セシリー「当然じゃないですかー？接戦でしたけど負けちゃったんですからねー。」

虎峰「部屋で見ているのでは？ここに来るのは強制ではありませんから。」

沈雲「確かに負けたのは悔しい……………それは認めますよ。ですが……………」

沈華「いつまでも落ち込んではいられませんから。それに……………」

2人「近いうちに今度は僕たち（私たち）が勝ちますから！」

そこにいたのは準決勝で宋と羅に敗れた黎兄妹がいた。

星露「おお、双子共か。昨日の試合は見事じゃったぞ。これは昨日も言っとったな。」

沈雲「はい、寛大なるお言葉ありがとうございます。ですが、僕たちもまだ未熟だと師兄たちに学ばされました。」

沈華「私たちも次こそは師兄方に勝てるよう、より一層の鍛錬をむつもりです。」

星露「ほっほっほっほ。これも八幡の影響じゃのう。」

曉彗「……………実力を認め合い、高い意識を持つ……………今までの界龍にはなかったものだ。特に流派に分かれた者たちは。」

冬香「お互いに良きライバルになるでしょうね、沈雲さんと沈華さん、宋さんに羅さんの4方は。」

セシリー「いやー大分良くなったよねー。ゴタゴタだった派閥争いもなくなったし、今の界龍は居心地良いよねー。」

虎峰「そうですね。これも全て八幡のおかげでしょうね。」

VIP席にいる冒頭の十二人の殆どが八幡の力量を改めて実感した瞬間だった。

視線と因縁

シルヴィア side

「ねえーやっぱりシルヴィアだよね!」

「うんー間違いないよ! しかも隣にいる界龍の【夢幻月影】と腕組んでるよーもしかしてそういう関係?」

「ええー嘘っ!? でも【夢幻月影】って結構カッコいいよね。」

「うん、それ分かるー! 少しでいいから話してみたいよね!」

「行っちゃう? 邪魔しちゃう? 良い雰囲気ぶち壊しちゃう?」

「ちよ、やめてよ! 私そんなに無粋な子じゃありません!」

「おい、あれって……」

「ああ、間違いない。【戦律の魔女】と【夢幻月影】だ。しかもなんだよあの距離感、くつつき過ぎだろ。」

「付き合ってるじゃね? 普通に考えて。」

「はあ? ねえって。いくら比企谷八幡が強えーからってそれはねえだろ。一緒に決勝の会場に向かってるだけだろ。」

「だからってあんなくつつくか?」

「どうせ比企谷八幡がやらせてんだろ。ああいう奴って大抵ゲスなことを考えてそうだからな。」

……やっぱり予想通り。皆こっち見てる。私がこうやって八幡くんの腕に抱きついてるのも理由に入ってると思うけど、流石に少し居心地悪いなあ。

でも、覚悟の上だからね。別に今更どうこうしたって変わるわけじゃない。それなら堂々と見せつけてやればいい!

シルヴィア「八幡くん、私はVIPルームで見るよ。多分ネットの方でも凄いスピードで私たちの事が出回ってると思う。確信は無いけど、マスコミも来る可能性があるから、私はその相手をする。ペトラさんも協力するって言って来てくれてるから何とかなと思う。」

八幡「平気か？ペトラさんがいたとしても、マスコミとかはうるさいんだろ？」

シルヴィア「もう覚悟は出来てるよ。外に出た時点でもう決めてるんだから！八幡くんの彼女を甘く見ないでよ、これでも王竜星武祭の優勝者なんだから！」

八幡「……………そうだな。ならそっちの方は頼んだ。俺も本気を出してくる。」

シルヴィア「うん、任されました♪」

この時の2人のやりとりは聞こえてはいなかったものの、羨望、嫉妬、憧憬、その他様々な感情を含んだ視線が集中していた。

————シリウスドーム・VIPルーム————

とうとうここまで来た。中にはまだペトラさんくらいしかいないと思うけど、緊張が凄い。どうしても動悸が早くなっちゃう。

八幡「……………大丈夫か？」

シルヴィア「ゴメンね？やっぱり怖いみたい。覚悟を決めてたのにね。」

八幡「そんなもんだろ。普段しない事をする時は緊張するもんだ。特に今回のケースは特殊だからな。」

シルヴィア「……………ねえ八幡くん、抱き締めてもらっていい？」

八幡「……………ああ、お互いに準備が必要だろうからな。明鏡止水。」

そして八幡くんは私を抱き寄せて程よい力で私を抱き締めてくれ

た。横からは人が行き来するけど、八幡くんの能力で私たちは見えていない。つまり、キスをして今の状態では誰にも見えないということになる。

シルヴィア「……………もういいよ。ありがとう、力が湧いてきたよ。」

八幡「俺も気合がさらに上がった。この決勝、必ず勝つ。」

シルヴィア「うん、信じてるからね。私の彼氏がとんでもなく凄いところを皆に見せつけてあげて。」

八幡「ああ……………行ってくる。」

シルヴィア「うん、行つてらっしゃい。」

……………さてっ！私も頑張らなきゃ！まだ来るかどうか分からないけど、準備しておいて損はないよね！

シルヴィア side out

八幡 side

————選手控え室前————

……………決勝……………か。シルヴィア、俺もお前と同じ舞台にようやく立てた。後は優勝するだけだ。

意を決めて中に入ると、そこには既に陽乃さんが座って待っていた。

陽乃「おはよっ、八幡くん。それともこんにちはかな？」

八幡「おはようでいいですよ。調子はどうですか？」

陽乃「ん、バッチリ♪」

この人らしい答えだな。

陽乃「それと、一応連絡は入れておいたからね、八幡君のタイミン
グでやっていいって。やっぱりお母さんも雪乃ちゃんの事は大体予
想してたみたい。」

八幡「そうですか……自分の娘を陥れるのは気分としても最悪で
しょうね。」

陽乃「そうだね。私はもう割り切ってるけど、お母さんからしてみ
れば、お腹を痛めて産んだ子供だからね、気分が良くなるわけない
よ。」

俺のせいでこんな事になったんだよね……いつか会って謝らない
とな。それで済むとは思えないが。

陽乃「八幡くん、君が気にすることじゃないよ。そもそもこれは君
が受けた痛みが雪乃ちゃんに返ってきただけなんだから。」

八幡「……すみません。」

陽乃「謝らないでよ。これは雪乃ちゃんを正せてあげられなかった
私たち雪ノ下家の責任でもあるんだから。」

……この人は仮面を取ったら本当にあり得ないくらい優しいな。
あの時の貴女が嘘みたいです、陽乃さん。

それに……そろそろだな。

p i p i p i …… p i r i p i ……

噂をすれば……だな。

陽乃「八幡くん……」

八幡「ええ、分かってますよ。普段通りにやりますよ。」

2度と見たくねえ面だが、これも俺の因縁だ。さつさと終わらせるか。

作戦失敗&不発

八幡 side

さて、本当は無視したいところだが、強力な協力者もいる事だし、さっさと終わらせるか。さて、どいつが出て来るのやら……

八幡はそのまま call ボタンを押して通信を開始した。相手は由比ヶ浜だった。

由比ヶ浜『ヒッキー!! 良かった、繋がったよ!!』

八幡（知らないふりを装ってと……）

八幡「あ？ 由比ヶ浜？ お前なんで俺の番号知ってやる？」

由比ヶ浜『そんな事いいから！ ヒッキー大変だよ!! 小町ちゃんが攫われちゃったの!! 待ち合わせしてたんだけど、何分経っても来なくて……連絡入れても出ないし、メールが来たと思ったら、これが送られてきて……』

由比ヶ浜の顔の横に画像が追加された。見事に腕を鎖で吊るされていた。

八幡「……そいつらは何処だ？」

由比ヶ浜『新開発エリアの南東側にある『レイモンド』っていう廃ホテルに監禁してるって言った。ヒッキーお願い、小町ちゃんを助けて!!』

八幡「他に情報はないのか？」

由比ヶ浜『画像はこれだけ……他は何も無かったの……兎に角早く来てよ!!』

八幡「学園や警備隊には知らせたのか？俺は決勝がある。私情を挟んで決勝を放棄するなんて出来ん。」

由比ヶ浜『警備隊には知らせるなってもう言われてるよ！学園の方もクロロんに伝えてる。それに………実は、【比企谷八幡を連れて来い。さもなくばこの女を殺す。】って送られてきたの。私もう怖くて………』

……もういいだろう。これ以上は時間の無駄だしな。

八幡「分かった………すぐに向かう！お前らは危険だ、学園にいろ、絶対だぞ！」

由比ヶ浜『え!?!で、でも………』

八幡「いいから学園にいろ！いくら星脈世代でもお前らじゃあ足手纏いだ！いいか、絶対に学園から離れるな！絶対だぞ！」

由比ヶ浜『わ、分かった………』

八幡「よし、じゃあすぐに行く。決勝は『p i p i p i : : p i p i p i : :』誰だこんな時に!?!」

マジで誰だ？

FROM : オーフエリア・ランドルーフエン

は？オーフエリア？

八幡「ちよつといいか？通信が入った。」

由比ヶ浜『早くしてよ！ヒッキー！』

そしてオーフェリアの通信の方のc a l l ボタンを押して通信を開始した。

オーフェリア『……………こんにちは八幡。』

八幡「こんにちはじゃねえよ。こっちは今忙しいんだ。お前に構ってる余裕は『……………比企谷小町の監禁について……………違うかしら？』……………なんで知ってる？」

まさか……………こいつも加担してるのか？

オーフェリア『……………警戒しなくてもいいわ八幡。私は貴方の味方よ。そして、私がこの事を知ってる理由はすぐに分かるわ。だって……………私は今、その『レイモンド』にいるんだもの。』

由比ヶ浜『っ!!』

由比ヶ浜は明らかに焦っていた。そう、何故かは知らないが、あの【孤毒の魔女】がすぐ近くにいるからだろう。

オーフェリア『……………私は彼女たちの会話を聞いていたわ。貴方を嵌めようとしていたわ。それも妹をエサにして。』

由比ヶ浜『な、何を言ってるの!?!そんな事するわけないじゃん!』
オーフェリア『……………じゃあ私が聞いた『仕返しが出る、凄い楽しみになってきた。』というのは聞き間違いかしら?』

由比ヶ浜はやはり落ち着きを欠いていた。思わぬところで超強力な手札が来たな。

由比ヶ浜『そんなこと言っていないし！ヒツキー！絶対こいつが犯人だよ！！ヒツキーも早く向かってよ！！じゃあ！！』

そう言つて由比ヶ浜は通信を切った。

オーフェリア『……………信じて八幡。私は貴方に嘘はつかないわ。』

八幡「わーつてるよ。それに全部知ってた。奴らが俺を誘き寄せる事なんてとづくに知ってた。」

オーフェリア『……………そうだったの。なら私は不要かしら？』

八幡「いや、ちょうどいい。俺の代わりに奴らを懲らしめてくれな
いか？ちゃんと礼もする。頼めるか？」

オーフェリア『……………条件があるわ。』

八幡「条件？何だ？」

オーフェリア『……………暇な日でいいから私と1日付き合つて。【戦
律の魔女】にしたた事を私にもやって欲しいわ。』

八幡「頭ナデナデの事か？」

オーフェリア『……………／／』コクッ

八幡「それくらいならお安い御用だ。それと、奴らと会つて話をす
る時にはこのアドレスを隠しながら開いていてくれ。」

オーフェリア「……………分かったわ。』

準備した意味がなくなつちまったが、これもオーフェリアのおかげ
だな。

八幡「じゃあ頼むな。」

オーフェリア『ええ、任せて。八幡も決勝頑張つて。』

そして通信は切れた。

八幡「あゝ、オーフェリアのおかげで楽出来たあゝ！」

陽乃「八幡くん？……………【孤毒の魔女】と知り合いだったの？」

八幡「ん？ええまあ……去年の11月辺りから。偶に会ってますしね。最近だと……4月に会ったきりですかね。」

陽乃「凄いね？八幡くんって界龍を含めて3学園の序列1位と知り合いなんだ？」

八幡「いえ、ガラードワースのフェアクロフさんと星導館の天霧にも会ってますよ。アルルカントだけ会ってませんね。別にどうでもいいですけど。」

陽乃「す、凄いね。」

何が凄いんだ？偶々あつて偶然知り合い？になっただけだつてのに。

八幡 side out

オフエリア side

……彼女たちは地下に行ったのはもう知ってることだし、早く済ませましょう。

その前にこの番号は誰なのかしら？今から出しておいても損はないわよね？

オフエリアは番号に連絡を掛けると、そこからは和服を着て髪を後ろに結んでいる女性が映っていた。

雪ノ下姉妹の母親だった。

雪ノ下母『あら？比企谷さんではないのですか？それに貴方は

……』

オフエリア「……私は八幡の代役よ。それに、彼には返しきれない程の恩があるから。これじゃ不服かしら？」

雪ノ下母『……敢えて何も聞きませんが、貴方が協力してくださいるのですね？よろしく願いします。』

オーフエリア「……………ええ。」

こんな事早く終わらせて八幡の試合を見たいわ。早く終わらせれば試合には間に合うかもしれないし。

肅清

オーフェリア side

八幡との通信の後、私は【魔将天閣】の母親とコンタクトを取り、現在ホテルの最下層に向かっているところよ。

その途中、私はその母親に娘の愚痴を何度か聞いていたけど、特に何とも思わなかったわ。私にはよく分からなかったから。

でも1番下の階のB5に着く前くらいには話を止めて私の後ろで画面を小さくして隠れている。勿論余程の事がない限りはバレないわ。

オーフェリア「……………」

さつき由比ヶ浜結衣の通信していたところと酷似していた場所に着いたわ。ここがそうなのね。それに背後に気配がない…………正面に3人、私は甘く見られているのかしら？

オーフェリア「……………出てきたらどうかしら？ 【魔将天閣】と八幡の妹に由比ヶ浜結衣。私は話があって来たのだけど？」

雪乃「私たちの会話を盗み聞きするなんて、やはりレヴオルフは信用に値しない学校のようなね。勉強になったわ。」

そう言って出てきたのは雪ノ下雪乃だった。その後が続いて由比ヶ浜結衣、比企谷小町だった。これで全員ね。

オーフェリア「…………その口振りだと前は信用していたのかしら？」

雪乃「いいえ、ただ利用しただけよ。」

オーフェリア「…………そう。」

私にとってレヴオルフは何でもないけど、利用したと言われると少し腹が立つわね。

雪乃「それで話って何かしら？」

オーフェリア「…………八幡の事よ。貴女たちは如何してこんな事を？」

雪乃「貴女には関係ないわ。教える必要があるのかしら？」

由比ヶ浜「部外者はどつか行つててよ！私たちはヒツキーに用があるんだから！」

小町「そうですよ！いくら六花最強の

【孤毒の魔女】でもあのゴミイちゃんとはなんの関係もないはずですよ！」

オーフェリア「…………言い方が悪かったわ。何故こんな事をしたのか説明しなさい。貴女たちに拒否権なんてないのよ？」

3人「!!？」

すると、オーフェリアから凄まじい程の星辰力が漏れ出した。これは警告だろう。

雪乃「…………いいわ、教えてあげる。でもこれを聞いた貴女も、彼には絶対嫌悪感を抱くわ。絶対に。」

そして雪乃たちは総武高校であった出来事をオーフェリアに明か

した。

オーフェリア（……呆れたわ。まさかこんな事で逆恨みをするなんて。貴方たちは救われた側なのに……それを無下に、八幡の優しさを無下にしたのね。八幡、貴方もそうよ。他にやり方が……いえ、それくらい追い詰められていたのね。）

由比ヶ浜「どう！こんな酷い事したヒツキーを許せる!? 私たちは何にも酷い事してないのに、ヒツキーってマジサイテーだよ!!」

雪乃「オーフェリアさん、納得してもらえたかしら?これが彼の正体よ。何の罪もない私たちにそれを押し付けたのよ?それを許せると思えるかしら?」

小町「流石の小町もこれには庇護出来ません!私は妹としてあのゴミイちゃんを更生します!」

……八幡、貴方は今までとんでもない苦勞をしてきたのね。私もこんなに感情を抑えきれない感じになりそうなのは初めてだわ。彼女たちは貴方の事を理解していなかったわ。苦しみや怒りの籠った嘆きを。

オーフェリア「……理解出来ないわ。貴女たちは八幡を助けようとは思わなかったの?貴女たちは八幡に助けられたというのに。」
雪乃「助けられた?なんの冗談かしら?」

オーフェリア「……………普通に聞けば八幡が悪いようにも聞こえるわ。でも、視点を変えて見れば、八幡は貴女たちを助けるために動いているようにも見えるわ。貴女たちが罪を被らないように。」

オーフェリア「……………雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣、貴女たちが受けた依頼が終わった時、貴女たちの周りはどうだったかしら？」

由比ヶ浜「決まってるじゃん！ヒツキーの噂で持ちきりだったよ！」

雪乃「そうね。自業自得とも言えるわ。」

オーフェリア「……………そう、やはり貴女たちは八幡を理解出来ないわね。」

由比ヶ浜「はあっ!？」

雪乃「どういふことかしら？」

小町「意味分かんないです！」

オーフェリア「……………貴女たち2人の受けた依頼の責任を八幡が全て受けたからに決まってるわ。そうでなければ八幡があんな理不尽な責めを受ける事はなかったのよ？普通なら貴女たちが受けるべき責任なのよ？分かっているのかしら？」

私はいつになく饒舌になっていた。許せなかった。八幡がこんなに痛い思いをしているのに彼女たちは知らないふりをしていたのが何より許せなかった。

雪乃「今更そんな事言われても信じられないわね。あの男が私たちの代わりに？ならありがとうと言っておくべきかしらね？」

由比ヶ浜「やっぱりそういうところがヒツキーらしいんだよね！自分を犠牲にするところっていうのがさ！」

小町「まあそこは兄の数少ない評価出来るところですかね。」

オーフェリア「……………あまり聞きたくないけど、本気で言ってるの？」

3人「ええ。(うん！)(はい！)」

オーフェリア「殺すわ。」ゴオオオオオオオ!!

突然、オーフェリアから尋常じゃない量の星辰力が漏れ出し、通常の何倍もの大きさに膨れ上がっていた。そしてさつきまで無表情だった顔にも怒りが滲み出ていて、目つきも変わっていた。そして何といっても異常なのが、星辰力を軽く凌駕する程の濃密な殺気だった。

3人もオーフェリアが怒っている事には気付き、その濃密な殺気に腰を抜かしていた。だが、何故怒っているのかは理解出来ないでいた。

オーフェリア「貴女たちは八幡をなんだと思っているの？都合の良い人形じゃないのよ？彼は私に希望をくれた恩人よ。それを上から目線で……ふざけてるのかしら？」

オーフェリア「それで？何か言いたい事はあるのかしら？聞いてあげるわ。」

殆ど殺気を隠さずにそう言う。雪乃は冷静を保っているが、震えは止まっていなかった。由比ヶ浜と小町は完全に吞まれていた。言葉も出ない様子だった。

雪乃「お、恩人って……ど、ど、どういう事……なのかしら？」ガタガタ

オーフェリア「それを知っても貴女には何の得もないわ。散々八幡を使った挙句、見捨てた貴女に教える価値もないわ。」

答えは非常に冷たい声で拒否の答えだった。既にオーフェリアの逆鱗に触れている時点で、この質問は何の意味も成さなかったのだ。

オーフェリア「終わりかしら？じゃあ1人ずつ八幡の受けた痛みを倍以上に返しながら殺してあげるわ。懺悔なんてさせないわよ。余計に気分が悪くなるだけだから。」

この言葉に由比ヶ浜と小町は気絶してしまった。起きている雪乃もさつきまでの2人と同じ様子で震えていた。

オーフェリア「まずは貴女かしらね、雪ノ下雪乃。」

雪乃「っ!!?」ガタガタ

オーフェリア「何も言わないで頂戴。言葉を聞いただけでも虫唾が走るから。」

じゃあ……………

死んで」

オーフェリアが煌式武装を振り下ろした。
だが、それは途中で止まった。オーフェリアに連絡が入ったからだ。

FROM：八幡

オーフェリア「八幡？」

オーフェリアはすぐにc a l l ボタンを押した。

オーフェリア「どうかしたのかしら、八幡？ 決勝は？」

八幡『まだ始まってない。それよりもオーフェリア、お前今何しやうとしてるんだ？』

オーフェリア「何故そんな事を聞くの？」

八幡『お前からとんでもない量の星辰力が出てる事は分かってんだよ。お前の力抑え込んでる装飾品、作ったの誰だと思ってるんだよ。こういう時のために一定の星辰力超えた時には反応するようにしてあるんだよ。それで？ お前、今なにやってるんだ？』

そんなのもつけていたのね。でも今はどうでもいいわ。

オーフェリア「彼女たちを殺すのよ。私、こんなにも不愉快になったのは初めてよ。止めないで八幡。」

八幡『止めるに決まってるだろ。俺はお前に殺人をしろなんて言っただか？』

オーフェリア「私がしたいからやるのよ。彼女たちの勝手な言い分を聞いてて我慢が出来なくなっただの。たとえば八幡でもその言葉は聞けないわ。」

八幡『……………そうか。ならお前は自分から進んで牢屋に入りたいんだな？言っておくが警備隊の調査力は半端じゃないからな？すぐにお前だつて分かるぞ。』

八幡『それに、お前から提示してきた条件も呑めなくなるがそれでもいいんだな？構わんのならもう知らん。俺は殺人者を肩入れする程優しくはないつもりだ。』

八幡『無論、殺人を自ら進んでやるような奴とは関わりたくもないからな。』

……………え？嘘……………よね？

オーフェリア「八幡……………それって……………本気……………なの？」

八幡『ああ、本気だ。お前という時間は確かに好きだが、犯罪を平気でする奴と一緒にいたいとは思わん。殺したいのなら好きにしろ。その場合、俺はお前とはもう関わらん。』

……………嫌。八幡と一緒にいられないなんて、そんなの……………絶対に嫌っ！

するとオーフェリアから殺気が収まっていき、今にも泣きそうになつていた。

オーフェリア「……………ご、ごめんなさい八幡。悪い事はもうしないわ。だから、もう知らないなんて言わないで……………」

八幡『随分掌返しが早いな？そいつらを殺したかったんだろ？殺さないのか？』

オーフェリア「……………貴方に会えなくなる事や、構ってもらえなくなる方がもっと辛いわ。だからお願い、そんな事を言わないで……………貴

方を失いたくない……」

考えただけでも胸が張り裂けそうになる。八幡は私の恩人、その人と2度と話すことすら出来なくなるなんて嫌っ！

八幡『……まあいい、さっさと話を終わらせろ。犯罪を止めてくれたのはよかった。それだけ言っておく。』

そして八幡は通信を切った。八幡が気になるけど、今は問題を解決するのが先決ね。

オーフェリア「……雪ノ下雪乃。貴女と話したい人物を今から出すわ。」

オーフェリアは背を向け再び雪乃の方に向いた。オーフェリアは通信端末を雪乃の前に押し出した。そこにいたのは雪ノ下姉妹の母親だった。

雪乃「か、母さん……」

雪ノ下母『雪乃……貴方はとても歪んでしまったのね。陽乃の言っていた通りだわ、貴方はもう……いえ、いうべきじゃないわね。雪乃、貴女を六花から追い出しても問題はないですが、敢えて在学を許します。ですが、貴方が星導館を卒業したと同時に貴方の戸籍を雪ノ下家から除外するものとします。』

雪ノ下母『今回の一件、比企谷さんには多大なるご迷惑をお掛けしました。その謝罪は私と陽乃だけです。貴方は学業に励みなさい。星導館にいる間の学費は出します。その後の事は勝手になさい。言っておきますが、比企谷さんと関わろうなどとは思わない事です。もしするのであれば、雪ノ下の総力を挙げて貴女たちを止めますので、そのつもりで、では。』

雪乃は絶句していた。母親がここまで言うとは思っていなかった

のだろう。それも八幡の味方をする方向で。

オーフェリア「……………本当なら貴女を今すぐ殺したいところだけど、八幡と貴方の母親に免じて見逃すわ。」

そしてオーフェリアもその場から去った。

残ったのは哑然としながら座り込む雪乃と、未だ気絶したままの2人だけだった。

乙女の本気&暴走

—————

時は少し遡って11時20分、八幡と別れ、シルヴィアがVIPルームに入る直後の様子である。流石に緊張は解けていないようだ。

シルヴィア（行きたくないけど、行かないや始まらないもんね。これも八幡くんと一緒に居るため！頑張らなきゃ！）

そしてシルヴィアは意を決してVIPルームの中へと入っていた。

中にはやはり統合企業財体の幹部や週刊誌や取材班の偉い人たちがいた。シルヴィアが入ってきたのを確認すると、一部は力モがネギ背負ってきたと言わんばかりの顔と視線を彼女に浴びせた。

スキャンダル狙いではないのだろうか、シルヴィアに恋人がいる可能性が出てきたとなると、普通の反応だろう。

そしてシルヴィアとペトラが小声で話を進めていた。

ペトラ「来たわね、シルヴィア。」

シルヴィア「ペトラさん、もしかしてこの人たち……」

ペトラ「ええ、ずっと待ち伏せしてたわよ。本ッ当情報といい行動力といい、無駄に動くのが早いよね。まるでゴキブリじゃない。」

シルヴィア（ペトラさん……それは流石に言い過ぎなんじゃあ……）

シルヴィアは軽く此処にいる取材班の人たちに同情した。

シルヴィア「ねえ、ペトラさんは私と八幡くんの「賛成に決まってるじゃない。そうでなければ、とつくに別れさせてるわよ。」……………」

ペトラ「それとも別れたいの？」

シルヴィア「ううん、どんな事があっても絶対別れない。それに八幡くん以外の男の人なんて考えてないよ。」

ペトラ（ほら即答。この子もそうだけど、八幡くん……………貴方シルヴィアを惚れさせ過ぎよ。この子にここまで言わせるなんて。）

シルヴィア（当然だよ！私と八幡くんは、もう赤よりも赤い愛で結ばれてるんだから!!……………本心でも、こういう台詞って意外と恥ずかしいなあ／＼）

〇〇社「あのおくシルヴィアさん、少しお聞きしたい事があるので、宜しいでしょうか？」

さつきまで静かだった記者の1人が漸く私に話し掛けた。

シルヴィア「はい、私に答えられる範囲であればお答えします。」

〇〇社「では、こんな場所で無礼ではありますが失礼します。今朝方、今回の鳳凰星武祭のファイナリスト、比企谷八幡選手に腕を抱きながらの来場になりましたが、あれは事実ですか？」

シルヴィア「はい。皆様がどのような形で知ったかは分かりませんが、彼と一緒にこの会場に來たのは事実です。」

〇〇社「そうですか。続けても宜しいでしょうか？」
シルヴィア「はい、どうぞ。」

〇〇社「ネットの書き込みでは、『まるで恋人同士のように』だとありますが、彼と恋人関係だったりはしますか？非公式の場で非礼とは思

いますが、お聞きます。」

シルヴィア「はい、事実です。私シルヴィア・リューネハイムは去年の12月に行われた『王竜星武祭』が終了した夜に、界龍第七学院の比企谷八幡さんに交際を申し込まれ、恋人関係になりました。」

一斉に周りがざわつき始めた。あの書き込みは本当だったのかやら、あの世界の歌姫に恋人やらと記者やカメラマン、あの統合企業財体の幹部までもが耳を傾けて聞いていたのだ。

〇〇社「えっと、何故その事を発表しなかったのですか？大変喜ばしい事だと思いますが……」

シルヴィア「私的には公表してもよかったのですが、お相手の比企谷さんはそれを望んではいなかったので今日まで伏せていました。今回の件では彼も了承済みです。」

〇〇社「……最後に1つお聞きます。現状で貴女は幸せですか？」

シルヴィア「はい、勿論。」

シルヴィアは笑顔で即答した。この笑顔には納得せざるを得ないと思う人もいた。

〇〇社「……聞きたかった事は以上です。すみません、こんな場所です。」

シルヴィア「いえ、普通なら大騒ぎになっても不思議ではありませんので。」

礼儀の良い記者さんだなっと思しシルヴィアは思いながらリラックスを始めた。

△△社「いやいや〇〇社さん？その質問優し過ぎませんか？もっと聞きましょうよ。」

突然口を挟んできた別の記者、芸能界にも少し詳しいシルヴィアにはすぐ分かった。この2つの会社はライバル同士なのだ。

〇〇社「お言葉ですが△△社さん、この場は公式の場ではありません。その場であれこれお聞きするのはシルヴィアさんに些か失礼ではないですか？」

△△社「ジャーナリストに公式も非公式もないでしょう？じゃあ貴方はテレビで見かける押し掛けでの取材も否定なさると？それは全国のジャーナリストの方々に随分失礼だと思いますよ？」

〇〇社「……私はそこまで言ったつもりはありませんが、その事については謝罪します。ですがこういうものは、一度正式な形を取ったからの方が良いと私は思います。今シルヴィアさんが受けてくれたのだって彼女の善意によるものなんですから。」

△△社「じゃあ我々△△社もその善意に甘えさせてもらいましょうかね？何も疚しい事がないのなら、受け答えくらいできるでしょう。」

まるで小馬鹿にしたような口振りで〇〇社を挑発するように煽っていた。

〇〇社「それを決めるのはシルヴィアさんです。それに私は今聞いた内容の答えを公表する気はありません。今回の目的は星武祭ですから。」

△△社「相変わらず堅いですなあ。まあいいでしょう。それでシルヴィアちゃん？質問いいかな？」

シルヴィア「はい、どうぞ。」

シルヴィア（私はこういうタイプの人間は嫌いだ。人を馬鹿にしたり、自分を上で考えるような人が絶対に好きにならない。）

△△社「じゃあ質問いくよ？シルヴィアちゃんは【夢幻月影】と付

き合ってるんだよね？もしかして同棲もしてるのかな？」

シルヴィア（やつぱり聞いてきた……本当こういうタイプの人ってこういう話好きだよね。どうして気になるのかな？）

シルヴィアは心の中で心底呆れていたが、顔には出さずに真剣な顔で答えた。

シルヴィア「逆にお聞きしますが、それを聞いたとして何か得でも？」

△△社「ただの興味本位でだよ。やつぱり気になるからね。で？
どうなの？同棲してるの？」

シルヴィア「……はい、しています。私が六花にいる間の時は一緒に居られるようにしています。いない間は彼に掃除などを任せています。」

△△社「ほう、それはそれは。仲が良いようで何よりですなあ。」
シルヴィア「仲が良くなければ恋人になんてなれないと思いますか？」

シルヴィア（そうじゃない彼氏彼女っているのかな？絶対いないよね。）

△△社「それもそうだねえ。じゃあ次いくよ？さつき○○社が質問した時に【夢幻月影】が関係を公表するのを望んでないって言ってたけど、それは何でかな？」

……この人本気で聞いているのかな？

シルヴィア「失礼ですけど、その質問は本気の質問ですか？それとも悪ふざけですか？私には悪ふざけのようにしか聞こえなかったのですが。」

△△社「本気に決まってるよ。じやなきや質問する意味がないからね。」

シルヴィア「……ならその質問にはお答え出来ません。悪ふざけであつたのなら尚更です。」

△△社「おや？如何してかな？」

シルヴィア「むしろ私が何故と聞き返したい内容の質問です。その本人もいないこの場で私が答えるとお思いですか？もし聞きたいのであれば本人に……比企谷さんに許可を得て下さい。でないと私も答える気にはなりません。」

シルヴィア（この人って本当にやらしい記者だなあ。）

△△社「ははは、これは手厳しいねえ。じやあ最後の質問にしようかな。同棲してるのならもう男女の関係にはなったのかな？」

シルヴィア「………はい？」

△△社「だから行為をしたのかって聞いたんですよ。半同棲という形を取って、少しはそんな感じにもなるでしょう？そのところってどうなの？」

シルヴィア「………さき程の言葉を繰り返しますが、それも本気で聞いてます？」

△△社「ん？勿論だよ？」

シルヴィア「……………貴方バカですか？」

△△社「……………え？」

シルヴィア「そんな事言うと思います？本当になんでそんな質問したんですか？私が答えると思ったんですか？」

△△社「い、いや……………これも興味で……………」

シルヴィア「興味？じゃあ貴方は他人の性行為を興味で聞けるんですね？凄いですね、人が不愉快になれる事を平然と聞けるなんて。」

△△社「そ、それは……………」

シルヴィア「もし行為に及んでいたとしたらなんだというのです？あなた方に関係があるのですか？どうなんですか？」

△△社「い、いや……………特に何も……………」

シルヴィア「何も？何もないのにこんな事を聞けるんですか？貴方は人の嫌がる事をするのが好きなんですね。私が貴方の立場だったら、絶対にこんな質問しませんよ。」

シルヴィア「質問の回答としては、そんな個人的な質問に答えるわけないです。よくこんな質問が出来たものだと思います。他に質問はありますか？」

△△社「……………ありません。」

シルヴィア「分かりました。それから今の内容を捏造して記載しようなんて思わないで下さいね。そうしたら私や私の事務所も、貴方に卑猥な質問をされたと訴えますから。」

シルヴィアがそう言った後、△△社の記者は生気を失った顔で俯いていた。シルヴィアの言葉がかなり響いたようだ。

ペトラ「では質問の方は以上とさせて頂きます。後日に会見を取りたいと思っているので、詳しい話はそこできたいと思っています。シルヴィア、クインヴェールの席に行くわよ。」

シルヴィア「はい。」

そして2人はVIPルームを後にした。

シルヴィア「もう少し早く助けてくれてもよかったじゃないですかー！」

ペトラ「ふふっ、ごめんなさい。でも貴方の熱弁っぷりに押し負けちゃったのよ。」

シルヴィア「あんな事聞いてくるなんて本当にバカとしか思えないよ。」

ペトラ「でも、実際はどうなの？あつ、私はそういうつもりで聞いてないわよ？」

シルヴィア「分かってますよ………はあ、18歳になるまではしないって決めています。まあ、キスクらいはしますけど／＼／＼」

ペトラ「あらあら、良いわねー青春で。」

この後もクインヴェールの客席に着くまでからかわれ続けたけど、悪い気は全くしなかった。

※鳳凰最後の戦い

八幡 side

はあー、オーフェアには少しキツク言っちゃったが、普段の言い方したんじゃ、あいつは多分止まらなかっただろうからな。

止めてくれるとは思うが、あいつどうしてるか少し心配だな。星武祭が終わったら少し会ってみるか。

それに、今回の決勝は……

八幡「陽乃さん、少しお願いを聞いてもらってもいいですか？」

陽乃「ん？何かな？」

八幡「この決勝、俺は本気であの2人と戦います。だから、あの技……やってみませんか？」

あの技……俺と陽乃さんで編み出した技だ。俺と陽乃さんの2人だけの技といってもいい。星露もこれには参ってたからな。

陽乃「……八幡くん、今の君凄いよ？」

八幡「え？何がです？」

陽乃「目が……輝いてるよ。普段と変わらないのに、何故か光って見える。まるで夜空に輝く星みたいに……」

八幡「そ、そうなんですか？」

陽乃「うん……どうやら君は楽しみたい事が出来ると、目の輝きが変わるみたいだね。予選の試合も今程ではないけど良い目してたから。」

……自分では分かんが、他の人からして見ればそう映るのか？

陽乃「今の目、シルヴィアちゃんにも見せてあげたいよ。きっと見惚れちゃうよ。今の私がそうだから。」

八幡「やめてくださいよ？俺、1年前ほどではないにしろ、写真は今でも嫌いなんですから。」

陽乃「君の嫌がる事なんてしないよ。そしたらご飯作ってもらえなくなっちゃう！」

この人、どんだけ好きなんだよ……

陽乃「まあそれはさておき、あの技の事ならいいよ。君の思う存分に力を振るうといいよ。私も全力を出すから！」

八幡「ありがとうございます。じゃあ、行きますか。」

陽乃「おーっ!!」

やっと……お前と同じ舞台に立ったぞ、シルヴィ。後は優勝だけだ。

見ていてくれよ！

八幡 side out

—————

—————シリウストーム—————

梁瀬『さあ——皆様!!! ついに、ついにこの時がやって参りました——!!! いよいよ鳳凰の王が決まる時がやってきましたっ!! 《鳳凰星武祭》、決勝戦!!!』

実況の梁瀬ミコがそう叫んだ途端、会場は一気に沸き上がった。

梁瀬『今年の《鳳凰星武祭》は3年前とは比べ物にならない程、レベルが上がっている上に、界龍が上位独占という驚くべき快挙を成し

遂げています!!この決勝戦も盛り上がる事間違いないでしょう!!」

チャム『これで《鳳凰星武祭》が終わってしまうと思うと残念だけど、今はこの戦いを楽しみたいっス!!』

梁瀬『さあ!!それでは参りましょう!!先ずは西方から!星導館、そして同じ学院界龍の冒頭の十二人を倒し快進撃を進めてきた2人!!その拳は通用するのか!?界龍第七学院、宋然&羅坤展!!!』

チャム『2人の戦いぶりは本当に豪快だけど、その中に柔軟性もあるから、この2人こそ究極の武人と呼ぶに相応しい戦いを見せてくれたっス!この決勝戦でも大いに活躍してくれるっスよ!!』

梁瀬『しかーし!!この2人に立ちはだかるのは同じ界龍でも冒頭の十二人!!しかもその中でも上位に位置するペアだ!!ご紹介しましょう!!変幻自在!激剛静柔!全てにおいて万能な力を出してくるクル&ビューティ!!お前たちの相手は俺たち、私たちだ!!比企谷八幡&雪ノ下陽乃!!!』

だが、道からは八幡たちの姿はなかった。

梁瀬『あ、あれ?』

チャム『いない……っスね。』

八幡「おい、此処だ。」

観客、実況、その他大勢の人々は八幡の声に驚きの反応した。既に

ステージで待ち構えていたのだ。

梁瀬『ど、どういう事だー!!? ステージの橋が解放されてからまだ20秒も経っていないのに既にステージに立っているー!? こ、これは一体!?!』

チャム『……多分比企谷選手の能力っスね。ほら、予選の2回戦でも見せたあれっスよ。突然黒い霧と一緒に現れた……』

梁瀬『しかし、試合ごとに常識破りな事をしてきますね。普通の星脈世代でもあの場所に音も姿も現さずに辿り着けるのは彼らくらいでしょう。』

宋「流石は尊師だ。我々の想像を遥か上をいくな。」

羅「全くだ。実況の言う通り、本当に常識破りな人だな。」

宋「だが、だからといって諦めるわけにはいかない、我々の全力を持って相手をするだけ……そうだろう? 羅。」

羅「ああ。あのお方に少しでも傷をつけるぞ! 準決勝であの方たちと戦って苦戦をさせた徐銀梅と呂永成のように!!」

そうと羅は勢い良く飛び降り、八幡たちの前に立った。そして2人に包拳礼をする。

2人「尊師、姉姉。お手合わせをお願いします! 我ら全力で相手をさせて頂きますので、よろしくお願いします!」

陽乃「承ったよ。私たちも本気で行くからね!」

八幡「お前らの本気、見せてみる。俺たちも全身全霊を以って答えよう。」

梁瀬『さあ、出揃って準備が出来たところで、参りましょう!! 《鳳凰星武祭》ファイナル決勝戦、バトルー、スタート!!!!』

◎覇凰決戦①

――――

2人「参りますっ!!」

宋と羅は、待ってましたと言わんばかりの勢いで八幡たちに迫った。しかも、どちらも八幡の方に向かって攻めていた。

陽乃「あゝあ、やっぱり尊師は人気者だなあ。それじゃ、尊師が良いたイミングになったら呼んでよ。それまで私はのんびりしてるからさ。」

八幡「呑気ですね、相棒が2人同時に攻められているってのに……」

そんな愚痴をこぼしながらも、八幡は拳法の構えを取る。陽乃は既に壁際で壁に背をつけて静観していた。

宋「ムンツ!!」

八幡「フツ!」

宋が震脚（物凄い踏み込み）で八幡に迫り、肘を八幡の顔めがけて振り出した。八幡もそれに応じて肘を前に勢いよく突き出す。

ドゴオツ!

お互いに肘がぶつかり合った。普通に考えれば、この肘撃は宋の方が有利である。

理由としては、八極拳は近接型の拳法で蹴り膝蹴りなどの攻撃はあまりしない。主に拳に肘や肩などの腕による攻撃が主流の拳法である。そして近接型のため射程は短い、その分繰り出される攻撃力

は、破壊と言ってもいいくらい絶大である。

対して詠春拳は無駄のない動きで精密な動きが特徴だが、大振りな攻撃や一撃必殺のような技はこれといってない。それに八極拳に比べ攻撃力は無く怯ませるくらいで、そこから技を繋げていくのが詠春拳の基礎である。

2人の拳法の比較をしてみても、この時点で強弱は明らかだった

はずだった。

八幡は微動だにせず、そのまま肘を横に突き出したままだった。有利だったはずの宋はその場を離れ、脂汗を流しながら膝をついた。

宋「ぐっ！ああ……」

羅「おい宋！大丈夫か!？」

宋「ぐう…ああ、大丈夫だ。だが、もう右腕は使えそうにない。尊師との今の打ち合いで骨に罅が入ったかもしれない。」

羅「バカなっ!?! たった一撃だぞ!?! それだけでお前の肘の骨が!?!」

宋「ああ……だが、俺にこの拳を教えてくれたのはあの方だ。尊師の場合、俺の攻撃は見えていて当然。しかも、俺よりも硬く強靱で鋭い一撃を震脚すら使わずに出してきた。ふっ、今更ながら本当に未恐ろしい方だな。」

羅「なら前衛は俺に任せろ。お前は隙について尊師を攻撃しろ。タイミングは俺が2回目の攻撃をした時だ。」

羅は八幡に棍を構えると、八幡も剣を抜き、片手を剣の腹に添えて構えを取った。

羅（やはり……我々に隙を作らせない気か。それに尊師も人が悪い。今の貴方は……本当の本気ではないですか。）

そう思いながらも八幡に攻めていく2人。八幡もそれに反応して地を蹴った。

そしてそれからは剣、棍、拳による1対2の戦いだったが、八幡の方はなんの苦もなく対処していたが、宋と羅の方は押され始めていた。

その理由は八幡の攻撃の捌き方にもあった。八幡はわざと2人の攻撃を受け流したり、腕の筋肉を使わせるような捌きをしていた。そのため、連続で攻撃するにも体力が徐々に奪われ、少しずつ動きも鈍くなっていった。

八幡にも影響があると思われたが、八幡は自身の一刀流に詠春拳の歩法や動きを取り入れて、剣を持った状態でも動きを最小限に抑える事をしていた。だから疲労もそこまで溜まっただけではなかった。

宋（くっ……右腕のせいで上手く攻撃が出せない。攻撃をしようにも少しの痛みで動きが鈍る。ここまで厄介とは……）

羅（……どうする？ 宋の方も満足に動ける状態じゃない。俺の棍術も尊師を倒す程には到底及ばない。だがこのままじゃ持久戦になるだけだ……どうする!?)

八幡（もうそろそろいい頃だな。陽乃さんをあんまり待たせたら文句言われかねないからな。）

そして、ここから戦いは大きく動く事になるだろう。

—————

シルヴィア side

ペトラ「彼、あんなに強かったのね。私も界龍の事は調べていたけど、今年は特に強かったわ。特に序列40位から20位にかけては驚異的な伸びだったわ。この戦いもそうだけど、準決勝で八幡くんと闘った徐銀梅と呂永成が良い例ね。」

シルヴィア「……しかもあの攻防の中で八幡くん、1回も攻撃受けてなかった。その中で相手に攻撃を入れていた。あんなのどうやって……」

私には出来ないよ……1対多数の状態で攻撃を捌きながら攻撃を与えるなんて……

でも、戦ってる時の八幡くんってやっぱりカッコイイ／／／

ペトラ「もう、なんて顔してるのよ。」

シルヴィア「ふえ!?／／／」

ペトラ「ふふふつ、羨ましいわ貴方が。あんなにイケメンで強い彼氏がいて。少し私に貸してくれないかしら?」

シルヴィア「ダメです!八幡くんは私のものですし、私は八幡くんのもんですから!誰にもあげません!」

ペトラ「少しくらいいいじゃない。まあいいわ。それよりも彼の勇姿をしっかりと刻み付けておきなさい。」

シルヴィア「はい!」

覇凰決戦②

――――

宋と羅は八幡から距離を取り、どう攻めるかを考えていた。しかも、宋の右腕は思うように動かず、そのせいで動きも鈍い。

羅の方は大きい負傷は無いものの、宋のように一撃必殺のような技は持っていない。そして彼の使う棍術は、いとも容易く八幡に攻撃先を読まれてしまっていた。

宋（これでは俺が足手まといだな……だが、だからといって無策で攻めるわけにもいかん。片腕しか使えない自分が嫌になるな……まさか、ここで羅にカバーされる事になるとはな。）

羅（どうする？呪符で俺の棍に火を纏わせるか？それとも、宋との連携で押し込むか？どちらにせよ、俺1人では無理がある。難しいな……）

一方で八幡の方は、2人から目を離さないまま陽乃にこつちへ来るように手を背に隠して手話をしていた。

陽乃もその答えの意味をすぐに察知し、八幡の隣へと歩いて行った。

陽乃「やるのかな？」

八幡「はい。」

陽乃「いいよ、この技は君がいないと成り立たないんだから。」

八幡「それじゃ、やりますか。」

陽乃も構えを取り、2人の様子を伺っている。八幡も刀を鞘に納め、星辰力を練り込んでいた。

羅「っ！」

羅もその事に気付き、少し焦り始めていた。羅はまだこれといった策が思いついていないからだった。

羅（くそっ、どうする!?このままでは無様に負けるだけだ。せめて何か「おい、羅。」）

羅「っ!.....宋。」

宋「ここは2人で突っ込もう。何もしないで負けたのでは後味が最悪だ。ならば、やるだけやった方が清々しいだろう。どの道、今の俺ではお前のお荷物だ。なら俺は、お前の迷惑を被^{こわむ}らないようにする。ここからはお互いを気にせず、あの方たちと戦うというのはどうだ？」

羅「だが!」

宋「分かっている。負けを認めたような言い方だというのは自分がよく分かっている。だが、お前に前衛をやらせている自分が嫌で仕方なくてな。どうだ?俺の策に乗ってくれないか?」

羅（.....宋の奴、悟ったような事を.....だが、それもいいかもしれないな。）

羅「分かった。それで行こう。そうなれば俺はお前を援護出来んぞ?」

宋「お互い様だ。じっくり尊師と師姉に痛めつけられることだな。」

羅「お前もな、宋っ!」

曇りが消えたような笑顔を作り、互いに拳を合わせた後、真剣な眼差しに戻り、八幡たちの方へと顔を向けた。

八幡「いいのか?」

宋「はい。お待たせしました。」

羅「もう、いつでも来て頂いて構いません。我々は本気で迎え撃ちますっ！」

陽乃「覚悟あり、みたいだね。」

軽く会話をした後、4人は2人の敵に向かって一斉に走り出した。だが、2人が標的にした相手も同じく八幡だった。だが、この2人はまだ知らなかった。

この時点で、八幡と陽乃による術中にはまっていることを。

羅「はあっ!!」

宋「ふんっ！」

2人同時に八幡へと攻撃を仕掛けるが、その攻撃は躲され、受け流される。その繰り返しだったが――

羅「おおおお!!!」

ドゴオツ!!

ついに羅の棍が八幡の腹部に直撃した。しかも手応えありであった。

羅（よし！かなりの手応えだ！）

だが、目の前の八幡は黒い靄となって消えてしまった。

羅（な、何!?）

羅は何が起こったのか分かっていなかった。それもそうである。突然消えてしまったのだから。

そして――

陽乃「隙だらけだよ!」

羅「っ!!」

突然現れた陽乃の声に反応してすかさず棍を構えるが、陽乃の蹴りは構えている時点で既に羅の身体に届いていた。

躲す事も出来ずに、羅は蹴り飛ばされてしまった。それに追い打ちとばかりにかかってくる陽乃。

陽乃「韋駄天っ!」

陽乃の素早い蹴りが羅に襲い掛かるが、羅はその蹴りを棍で受け止め、陽乃に反撃をする。

反撃したものの、また黒い靄が出てきて陽乃が消えてしまった。そして今度は八幡が正面から刀で斬りかかってきた。

羅（どういう事だ!? 何故尊師と師姉が交互に!? 宋が片方を相手しているのではないのか!?）

一方、宋の方でも同じ現象に陥っていた。拳を打ち込み、蹴りをかまし、肘で突くも、度々に消えてしまう2人。

2人は体力を削られていた。反撃に成功したと思っていたが、それ

は幻影で、本来は傷すら与えられていない事がすぐに理解出来ていた。

宋（何故だ……何故こうも立て続けに攻めることが出来る？ 羅はやられたのか？ いや、だとしたら放送が流れるはずだ。だが、この連続攻撃はなんだ？）

羅「はあ……はあ……くっ！」

陽乃「どうしたの？ もう終わりかな？」

羅（おそらく、目の前にいる姉姉は偽物、次に出てくる尊師もそうだろう。一体どうなっているのだ!?)

八幡「まあ、この技は体力の多い奴には効果抜群だからな。それに、この技使った時の星露の顔を思い出すな。」

八幡「俺は術者である以上、あまり手は出せないが、陽乃さんも片方だけだからな。負担も半々ってところだ。」

八幡「幻影舞踊・鏡月げんえいぶよう きようげつ。俺の作った俺2人と陽乃さん1人に鏡花水月を織り交ぜた錯覚術。目の前に集中し過ぎる分、仲間との距離感も掴めなくなる。さて、どうする？」

覇凰決戦③

――――

八幡による錯覚術により、試合は一方的な展開になっていた。絶え間ない攻撃に、2人の体力も限界が見えてきた。

いくら武術を嗜んでいる2人でも、1人は合気道の達人レベル、もう1人は2人に術を教えた程の実力者、その2人の攻撃を耐え凌ぐのは無理であろう。

宋「はあ……はあ……はあ……」

宋（これだけの術、大量の星辰力を使うはず……なのに、全く途絶える様子がない。それどころか、ますます勢いを増しているようにも感じる。くっ、せめて位置さえ分かれば！）

羅「ゼエ……はあ……はあ……」

羅（俺はまだ大した傷はなかったから動けたものの、この2人が相手では意味など無かったか。……ふっ、天霧くんが宋にやった悪足掻きにしても、バチは当たるまい。）

八幡「……動きが止まったな、それも3人全員。2人はともかく、陽乃さんはどうしたんだ？」

そう思っていた矢先に、陽乃が八幡の元へと戻ってきた。

八幡「攻撃が止んだと思ったら、どうしたんですか？」

陽乃「八幡くん、もう2人は限界だと思うよ？あの2人があんなに分かりやすく息を切らしてるんだもの。これ以上は……」

八幡「……………そうですか、分かりました。じゃあこの術は解きますね。後、陽乃さんは宋をお願いします。俺は羅を。」

陽乃「うん、いいよ。」

そして八幡は展開した術を解き、羅の方へと向かった。

決着をつけるために。

陽乃の方は、既に宋の目の前に立っていた。満身創痕の宋に対して、陽乃服に傷の1つもなかった。

宋「はあ……はあ……」

陽乃「大丈夫かな？」

宋「はあ……は、はい……。さ、流石は師姉です。手も足も出ませんでした。」

陽乃「私はほとんど何もしてないけどね。君たちをこれだけ圧倒したのは、ほぼ八幡くんだからね。」

宋「はあ……はあ……そう言われると、ふう……何も言い返せませんが、はあ……師姉の体術も御見逸れました。」

陽乃「そう？ありがとっ♪」

言葉や顔では余裕を見せる陽乃だが、目は真剣そのものだった。普段のような陽気な目ではなかった。

陽乃「君たちも酷いよね。八幡くんばかりで、全く私を相手してくれないんだもん。おかげで八幡くんが術を仕掛けるまで暇でしょ

うがなかったよ。」

宋「ははは……申し訳ございません。尊師の事しか頭になかったもので。」

陽乃「皆の憧れなのは分かるけど、あそこまで私の事を見てくれな
いって思うと、少し傷つくよ。」

宋「……返す言葉も無いです。」

陽乃「だから、倍返しにして返してあげるよ。あつ、別にこれ以上
痛めつけようなんて考えてないからね？君の腕見たらそんな気なん
て起きないし。」

宋「……成る程、決着をつける……という事ですね？分かりまし
た。」

2人「参るっ!!（勝負っ!）」

一気に距離を詰める2人。お互いに武術を嗜んでいる同士、良い勝
負とも言えるが、宋は肘の負傷と体力的にも限界があったため、すぐ
にガタがきた。

そして、ついに陽乃の受け流しで地面に仰向けになりながら転がっ
てしまった。

陽乃「肘がそんな状態なのに、私が受け流すまでよく耐えられたよ
ね？もし万全だったら、私絶対ヤバくなってるよ。」

宋「はあ……はあ……貴方相手に、少しだけでも……善戦出来たの
で、はあ……良しとしましょう。それに……これ以上は無理です。師
姉、こんな無様な格好で失礼ですが、お見事です。」

陽乃「うん、君の諦めない姿勢、確かに見届けたよ。星露にもよく
言っておくよ。」

そして陽乃は宋の校章を打ち砕いた。

梁瀬『宋然、校章破壊!!拳の攻防を制したのは雪ノ下選手だー!!』

陽乃（さて……八幡くん、私の方は終わったよ。後は君だk……つて何あれ!!?）

羅「はあ……はあ……まさか、俺の相手を尊師がして下さるとは……はあ……はあ……光栄です。」

八幡「まあ、陽乃さんは武器持っていないからな。俺は衿々切丸があるけど。」

羅「……流石尊師だ、お優しい。」

八幡「……うっせ。そんな事よりも、息を整えろ。そんな状態の前と戦ってもつまらんからな。」

羅「では……お言葉に甘えて。」

――5分後――

羅「大分楽になりました。」

八幡「そうか……んじゃあやるか。」

羅「お願いします!猛き炎よ、我が棍に力を!急急如律令!」

羅は呪符を取り出し棍につけると、そこから炎が飛び出し、棍を纏っていた。

八幡「ほう……」

羅「いざ、尋常に勝負っ!!」

羅が構えて待っている中、八幡は忖々切丸を抜刀しようとする。

???『へえー、中々良い炎してるじゃねえか。』

八幡「っ!」

突然の声に、八幡は意識を集中させる。

八幡は、八咫鳥と会った時と同じ空間にいた。夢を見ていないのだ。

???『おっ!旦那が俺の主人かい?へへ、良いじゃねえか!旦那もかなり強えな。いや、かなりは不適切だな。最高に、だな。』

そこにいたのは、大きな鳥だった。だが、ただの鳥ではなかった。全身が赤色、いや、朱色で翼は炎で包まれていた。尾が10本もあつ

た。

八幡『……お前は、その姿からして鳳凰、朱雀か?』

???『おつ! 冴えてるなー旦那! その通り! 俺は朱雀ってんだ! 他にも鳳凰、不死鳥、鳳とも呼ばれてる、よろしくな!』

何ともフレンドリーな喋り方をする朱雀に八幡は少しだけ意外感を覚えていた。

朱雀『そんでよ旦那、憑いたばつかで唐突だけど、頼む! 俺を纏ってくれ!』

八幡『……ちよつと待て。何故そのことを知ってる?』

朱雀『何故って……『俺ら』はずつと旦那の中にいるんだぜ? 旦那は知らねえだろうけど、八咫さんや索冥の姉貴と俺を含めて、計7体いるんだぜ? 旦那の中には。』

八幡(おいおい、あの2人はそんな事言ってなかったぞ。まだいたのかよ……)

八幡は自身の中に眠る守護霊の存在に驚きつつも、朱雀の方に目を向けていた。

朱雀『まあ、それはおいおいという事で……旦那、頼む! 俺を纏ってくれ! あの炎を俺にぶつけさせてくれ!』

八幡(……多分こいつは動かないだろうな。仕方ない、やるか。)

八幡『分かった。お前を纏ってやるよ。だが、初めてだからそんな長く持たないと思うぞ? それでもいいか?』

朱雀『おうよ! 流石旦那だぜ!』

そして待ちきれなかったのか、すぐに現実に戻されてしまった八幡だった。

目を開けると、そこには燃え盛る棍を構えて待っている羅がいた。

八幡「……すまん、待たせた。俺も本気で行きたくなかった。」

羅「むしろ願ったり叶ったりです！」

八幡が刀を抜き、それと同時に朱雀を現世に召喚した。

朱雀は八幡の肩にとまっていた。そして一気に真上に飛んだ後、八幡の方へと消えていったが、準決勝同様に八幡の姿が変わっていた。

八幡の着ていた黒の中華服は面影も無くなり、全身赤を基調とした格好へと変わっていた。

赤のロングコート、赤の長い鉢巻、赤の長ブーツ、そしてその端には黄色で彩られた炎の柄があった。

そして八幡は祢々切丸ともう一本刀を持っていた。祢々切丸は紫の炎、片方は真紅の炎に包まれていた。

八幡「憑霊……火蓮^{かれん}・百火燎嵐^{ひやつかりようらん}っ!!」

羅「……………」

羅も言葉が出ないようだった。

八幡「……行くぞ。」

羅「っ!!」

八幡の短い言葉に羅も反応し、構える。お互いに炎と炎の戦いでもあった。

羅「はああああ!!」

八幡「ふっ!」

ガキイイイン!!

刀と棍が鏝迫り合いの状態になり、力比べになっていた時、異変が起きた。

羅の棍を纏っていた炎がみるみる八幡の刀に吸収されていた。

羅「っ!!こ、これは……」

八幡「勝負あったな。」

八幡は迫合いで勝った後、すかさず柄頭で羅の校章を砕いた。

梁瀬『羅坤展、校章破壊!!そして、試合終了!!!勝者、比企谷八幡&雪ノ下陽乃!!!』

梁瀬ミークが叫び終わった途端に、会場が沸き、紙吹雪が一斉に会場へと放たれた。

羅「……………完敗です。尊師に傷どころか、打ち込むことすら出来なかった。まだまだ修行が足りませんね。良い試合をありがとうございました!!」

八幡「ああ、俺も良い試合ができた。」

梁瀬『ついに、ついに優勝が決まりました!!幾多もの激闘を乗り越

え、優勝に輝いたのは界龍第七学院、比企谷&雪ノ下選手ですっ!!』

※もう一試合

八幡 side

陽乃「ううん！終わったあゝ♪優勝だね、八幡くん!!」

八幡「はい、良かったです。」

《鳳凰星武祭》決勝終了後、俺たちは普通に話をしながら控え室の方へと向かっている。だが、その途中、俺が今最も会いたくない連中がいるかもしれないという憂鬱にも少しだけ浸っていた。

八幡「……いますよね、絶対。」

陽乃「気持ちは分かるけど、これも君たちが選んだ道でしょ？ 乗り越えなきゃ!」

八幡「分かってますよ。」

嫌だなあ……あつ、やつぱいるな。てか多くね？ なんか準決勝の時の倍以上の数はいるぞ。どんだけ食いつくんだよ。

八幡 side out

—————

パシャパシャパシャツ!!!

一気になるシャッターの切る音。少し慣れた八幡ではあるが、相変わらず写真は嫌いなようだ。

〇〇社「えーでは、これより勝利ペア兼優勝ペア、界龍第七学院の比企谷八幡選手と雪ノ下陽乃選手のインタビュを執り行います。」

〇〇社「先ずは、この度の《鳳凰星武祭》優勝おめでとうございま

す。」

2人「ありがとうございます。」

○○社「今の気分、どんな感じでしょうか？」

陽乃「私は元々出場する気は無かったんですけど、比企谷くんに誘われて此処まで来ることが出来ました。比企谷くんに感謝の想いで一杯です。」

八幡「雪ノ下さんの感謝も今回の優勝も感無量です。」

名前呼びはマズイと思ったのか、陽乃が機転を利かせて苗字で呼んだ。

それに習い、八幡も陽乃を苗字呼びする。

○○社「決勝戦、素晴らしい動きで相手ペアを翻弄していましたが、作戦はあったのですか？」

八幡「特にありませんでしたが、途中でやった幻術は雪ノ下さんと打ち合わせをして、やるタイミングは決めてました。」

○○社「最後にお2人の今後の目標についてお話できますか？」

陽乃「私は来年が界龍に居られる最後の年なので、《獅鷲星武祭》に出ようと思ってます。出来れば、横に居る比企谷くんにも出てもらいたいと思ってます。」

○○社「なるほど……比企谷さんはどうでしょう？」

八幡「……此処で返事をするようになってしまいましたが、この《鳳凰星武祭》を優勝したからには、次の《獅鷲星武祭》とその次の《王竜星武祭》の優勝を目指し、三冠制覇を目指したいと思ってます。」

ザワザワ……

○○社「大きな目標ですね。私も成し遂げる事を祈っております。以上を持ちまして、《鳳凰星武祭》優勝ペア、比企谷選手と雪ノ下選手のインタビューを終了します。」

2人「ありがとうございます。」

漸く終わったかに見えたが、取材陣は一斉に八幡を取り囲んだ。
陽乃はすぐ側で待っていた。

八幡「あの……取材は終わったんじゃ？」

◇◇社「いやね、今話題になってる本人がいるから、この機会に……
ねえ？」

八幡「この機会もなにもねえだろ。絶対狙ってやってんだろうが。」

八幡「分かりました。答えられる範囲であれば返答します。」

◇◇社「では、今この六花で噂になっている事、何かご存知ですか？」

八幡「自分とシルヴィア・リユーネハイムの関係、ですか？」

◇◇社「はい。それについて教えられる範囲でいいので、お答えできますか？」

八幡「……私たちは去年の12月、王竜星武祭が終わったその夜に
交際を始めました。それだけです。」

◇◇社「……他には何かないのですか？」

八幡「ありません。それだけです。」

◇◇社「何かもつとありませんか？恋人らしく過ごした日々とか
……」

八幡「なら逆に聞きますが、人のプライバシーを漁るのはそんなに
楽しいですか？自分にはまるで理解出来ませんね。」

八幡は少し威圧を込めた強気な言い方をした。どうやら八幡の気
分は、あまり良くないようだった。

◇◇社「……そうですね、失言でした。他の質問、いいでしょうか？」

八幡「ええ、構いません。」

◇◇社「シルヴィアさんはどんな彼女ですか？これも答えられる範囲で構いません。勿論、お答えしたくない場合は、ノーコメントでも結構です。」

八幡「……………優しく気の利く最高の女性とだけ言っておきます。」

あの後、普通なら答えないであろう質問に八幡は答えた。恐らく、

◇◇社の心情を汲んでの事だろう。

◇◇社「ありがとうございます。我が社の取材はこれにて終わります。」

□□社「続いて……………」

一社事の質問は少ないものの、どの社もやはりプライベートな事は聞いてきた。これには流石に八幡もウンザリしていた。

○○社「すみません。お疲れとは思いますが、よろしいでしょうか？」

八幡「構いません。」

○○社「私、試合の始まる前、シルヴィアさんに取材したのですが、良い彼女さんですね。」

八幡「……………ありがとうございます。」

八幡は少し目を開いた。すぐに取材になると思いきや、取材をやった事をバラし、彼女の事を褒めていたからだ。

○○社「私の聞きたい事は2つです。何故、交際の事を発表しなかったのか、理由を聞いてもいいですか？」

八幡「……………いえ、中身がとても醜い内容故、お話することはできません。すみません。」

○○社「……………そうですか。では、最後に……………貴方は今、シルヴィアさんといられて幸せですか？」

八幡「勿論です。幸せじゃない理由を探したいくらい幸せです。まあ実際には探しませんけど。」

そう八幡が即答で答える。すると――

〇〇社「ぷつ、くくく……あつ、失礼。シルヴィアさんと全く同じ事をおっしゃるものですからつい……お二人はお似合いだと思いますよ。」

八幡「は、はあ……」

〇〇社「私からは以上です。ありがとうございました。」

八幡（同じ事を言ったのか……それはそれで恥ずかしいが、良い気分にもなるな。）

△△社「いやゝ待ってたよ比企谷くん。僕の所属してる△△社っていう会社もシルヴィアちゃんに取材したんだけど、あんまり上手いなくてね、君は答えてくれることを望むよ。」

八幡「……内容にもよります。前以て言っておきますが、くだらない事は聞かないで下さい。よろしく願います。」

一応の釘を刺した八幡。

△△社「じゃあ行くよ？君はシルヴィアちゃんと同棲しているのかな？」

八幡「……しています。」

△△社「……それだけかい？」

八幡「他に何も聞かれてないので。」

△△社「それもそうだね。じゃあ次の質問、さっき〇〇社さんが質問した発表の件だけど、本当に話してくれないのかい？この場だけ話してくれないかい？」

八幡「……さっきも言いましたが、答える気はありません。個人的

な事ですので。」

△△社「じゃあ君は、その個人的な理由で発表をしなかったんだね？シルヴィアちゃん言ってたよ？本当は発表したかったって。」

八幡「それは自分も一緒です。早い方が面倒は無くなりますから。ですが今回はそうせざるを得なかった理由があつたからとしか言えません。」

△△社「……まあ、そういうことにしておこうかな。じゃあ次ね、シルヴィアちゃんとはもう男女の関係になったのかな？」

八幡「……………あ？」

△△社「ひっ!？」

明らかに空気が変わった。それも酷く冷たい空気だった。

八幡「おい、何だそのふざけた質問は？まさかとは思うが、その質問シルヴィイにもしたんじゃないだろうな？」

△△社「た、確かに聞いたけど、こ、こ、答えてもらえなかったから……………」

八幡「……………それで俺か？テメエ、よくそんな屑まがいな事聞いたもんだな。」

△△社「ひい!？」

八幡「そんな質問答えるわけねえだろうが。言つたよな？くだらない質問はするなってよ？お前にとってこれはくだらないようだが、世間一般からしてみれば、そんな質問平然としてる時点でくだらねえんだよ。」

陽乃「八幡くん……………」

八幡「……………っ!？」

周りの様子に気づいたのか、すぐに殺気を収めた。

八幡「もういい。だが、この事はあんたの上の方に報告させてもらう。さっきの時点で会社名は知ってるからな。」

そして八幡と陽乃は控え室の方へと行ってしまった。

さらにこの数日後、八幡の報告によって△△社の記者長は減俸1年の罰則を下されたらしい。

※表彰と行く先

――――

梁瀬『2週間に渡る鳳凰星武祭もいよいよ終わりを迎えます。今回も様々な激闘が繰り広げられましたね。』

チャム『中でも、やっぱり今回の優勝ペアの比企谷&雪ノ下ペアには驚かされたっすね。』

梁瀬『さあ、その名誉を讃えて、大会委員長のマディアス・メサヨリトロフィーが贈られます！』

マディアス『比企谷八幡、雪ノ下陽乃、両名の輝かしい功績を讃え、これを賞する。君たちの戦いぶりには実に驚かされたよ。また次の星武祭も頑張ってくれたまえ、優勝おめでとう。』

2人「ありがとうございます。」

そして八幡、陽乃の順番で透明色の結晶に金文字が描かれたトロフィーを受け取った。

梁瀬『皆様、今一度両選手に拍手をつ！』

大歓声と拍手が一気に鳴り、2人を祝福していた。そして陽乃はそれに応えるように、トロフィーを掲げた。

陽乃「ほら！八幡くんも！」

八幡「……はあ、分かりました。」

八幡も両手でトロフィーを掲げた。そして八幡は視線を横にズラした。そこには最愛の恋人、シルヴィア・リユーネハイムがいたからだ。

シルヴィア（おめでとう、八幡くん。）

八幡（やったぞ、シルヴィ。）

通じ合っていないにも関わらず、会話が成立していた。

梁瀬『それでは、次は獅鷲星武祭でお会いしましょう！実況は私、梁瀬ミコと〜』

チャム『解説はファム・ティ・チャムでお送りしたっス！』

こうして鳳凰星武祭は八幡と陽乃の勝利で幕を閉じた。

――――

八幡 side

――選手控え室――

陽乃「あああ〜！終わったあ〜！これでやっとゆつくり出来るよ〜。」

八幡「そうですね。なんか少し長かったですよね。」

陽乃「うん、張り詰めていたからかな？でも、こうして優勝出来たからね、凄く良い気分だよ。」

それは俺も同じだな。

陽乃「それにしても、直で見るとやっぱり違うね〜。」

八幡「？何がです？」

陽乃「君とシルヴィアちゃんだよ。あんなに熱い視線をお互いに向けあってるんだもん。本当にラブラブだねえ〜。」ニヤニヤ

八幡「否定する気はありませんよ。事実ですからね。」

陽乃「そうくるかあ〜。これは参りましたね〜。」

……将棋みたいな答えだな。

陽乃「今日はシルヴィアちゃんのところに行くの？」

八幡「はい、界龍に戻ってから。その前に行くところが少しありますけどね。」

陽乃「え？何処？」

八幡「秘密ですよ。陽乃さんは先に帰っても大丈夫ですから。」

陽乃「……なんかし気になるけど、君の言う通りにしておくよ。じゃ、界龍で待ってるからね。」

ふう……陽乃さんも行ったか。

八幡「さて、俺も早く済ませて界龍に行かねえとな。あんまり時間使いたくもねえし。」

そして八幡も目的地へと足を運んでいった。

本当の肅清

八幡 side

陽乃さんと別れて数十分くらい経っただろうか、俺は今新開発エリア南東にある廃ホテル『レイモンド』に向かっているところだ。そう、俺の目的は因縁の奴らと会うことだ。

始末はオーフェアに任せたが、大元の原因の俺がケツ拭かないと後味悪いからな。オーフェアに渡したアクセサリーはそれなりの位置も分かる仕組みになってる。それ以前にホテルの名前も由比ヶ浜から聞いてたからな、場所はすぐに分かる。

――レイモンド――

八幡「此処だな。まだいるといいんだがな……決勝から今まで3時間経ってる。居てくれたら手間も省けて良いんだがな。」

まあ、贅沢は言つてらんねえな。

八幡「居なかったら居なかったでいいけどな、行きますか。」

――最下層・B5――

地下こんなにあつたのかよ……どんだけ人寄せるつもりだったんだここのオーナー？

まあいい。それよりもあいつらもういねえのかな？ならそれでいいんだけど……

八咫鳥『主よ、この先に誰がいるようだ。数は3人……女であるな。何故か分からぬが、2人は寝ているようだ……』

……………居たんだ。そして寝てるんじゃないやなくて気絶してるんだと思う。

八幡『そうか、ありがとな。』

八咫鳥『拙僧はこれくらいしか出来んからな。これでよければいつでも役に立とう。』

いや、めっちゃ役に立ちますぜ？

そして八幡は奥へと進み、目的の人物の正面で止まる。

八幡「よお、直で会うのは半年……いや、およそ1年ぶりか？雪ノ下。」

雪乃「……………比企……………谷……くん？」

八幡「随分生気の無い顔色してんな。オーフェリアのあれは仕方ないにしろ、母親から何を言われたんだ？」

雪乃「……………貴方の仕業だったのね……………全部仕組んでたのね？」

八幡「ああ、そうだ。」

雪乃「よくもやってくれたわね……………貴方のせいで私はっ!!」

八幡「俺はお前のやり方を模倣したまでだ。【目には目を、歯には歯を。】それがお前のやり方だろ？」

八幡「それにお前の母親、マジで良い人だな。普通なら許すはずもない事を見逃してるんだからよ。その事を感謝しとけよ？会うことはないだろうが。」

雪乃「貴方、私を弄んでそんなに楽しいのかしら？」

八幡「弄ぶ？俺は本心を言ったまでだ。分かってんのか？本来ならお前は牢獄行きなんだぞ？誰のおかげでここにいられると思ってる？」

雪乃「……………」

八幡「……………まあいい、話が逸れたな。それで？そこで寝てる2人は

ずっとそのままなのか？オーフェリアに気圧されてからずっとか？」

雪乃「……………ええ。」

八幡「そうかい、んじや……」

こんな奴らに能力は使いたくねえが、まあ仕方ないな。

八幡は自身の影から影を伸ばし、由比ヶ浜と小町に向かわせた。

雪乃「何をする気!？」

八幡「安心しろ、殺しはしない。少し耳を引っ張るだけだ。」

だって起こすにはこれがいいだろ。女の身体を踏む訳にはいかねえからな。

ギューーーーーー！

由比ヶ浜「いいいたいいたい！何!？」

小町「いたたたたっ!!ちよつ、誰こんな事する人は!？」

八幡「俺だ。」

2人「っ!!？」

2人揃ってすげえアホ面だな。

由比ヶ浜「ヒツキー!!？」

小町「ゴミイちゃん!!？」

小町、お前はもう兄とすら呼んでくれないようだな。ま、いいけどな。

八幡「よお、ざっと一年ぶりだな。随分な目に合ったようだが、同情はしないぞ？」

したところで意味も無いしな。

由比ヶ浜「ヒツキー!!何で来てくれなかったし!?おかげで私たち酷い目にあっただから!!」

小町「そうだよ!ゴミイちゃんが来てくれたら助かったのに!!」

八幡「ふーん、そっかー。(棒読み)」

由比ヶ浜「何他人事みたいに言ってるのさ!？」

いや、だってどうでもいいから。

雪乃「由比ヶ浜さん、小町さん無駄よ。この男は全て知っていたのよ。それも私たちを騙して陥れる算段までつけて。」

八幡「心外だな。陥れた覚えはないぞ。お前らが勝手に落ちていただだけだ。」

由比ヶ浜「こんな時まで嘘言わないでよ!私たちをこんな目にあわせておいて!」

小町「少しは雪乃さんたちの気持ちも考えなよ!このゴミイちゃん!!」

………つける薬が無いとはこの事だな。なら、俺の気持ちも考えてくれるよな？

八幡「……無駄話もここまでにして本題に入るか。お前ら、俺を恨んでるって事でいいんだよな？」

雪乃「ええ、そうね。今すぐ土下座して額を地面に擦り付けても許してあげるつもりはないわ。」

由比ヶ浜「当たり前だよ!」

八幡「小町は俺を恨む理由がないと思っていたんだが、お前もか?」
小町「どう考えてもゴミイちゃんが悪いよ!あれはやり過ぎ!あん

な事されたら聞いてた私も恨みなくなるよ！小町も同じ気持ちだよ！」

……満場一致か、これなら都合も良い。

八幡「なら、俺の気持ちも考えてくれないか？雪ノ下、由比ヶ浜。」

八幡「由比ヶ浜、お前去年の修学旅行の時、俺に言ったよな？もつと人の気持ちを考えろって。なら理解出来るよな？俺がどんな思いであんな事したのか？ノートを見たなら分かるはずだが？」

由比ヶ浜「はあ？分かるわけじゃないじゃん。」

八幡「……なら教えてやるよ。戸部と海老名との依頼だが、あんなの不可能だ。絶対にフラれない告白のしかた？告白の阻止？んなもん出来るか。絶対にフラれない告白なんて存在しねえし、告白の阻止も成功したとしてもいつかはするもんだ。まあ、海老名の依頼は俺がやったからお前に押し付けるつもりはねえよ。だがよ、修学旅行の時お前は何をした？何をしてやれたんだ？」

由比ヶ浜「そ、それは……」

八幡「結局のところ、お前は後先考えずに依頼を受け、挙げ句の果てには気持ちを考えろ？だったら俺の気持ちも理解出来るよな？あの時、3つの依頼を全部やった時の俺の気持ちも？」

由比ヶ浜「う、うう……」ポロポロ

八幡「都合が悪くなったら泣くのか？それで状況が良くなるとでも思ってるのか？」

由比ヶ浜「……ご、ごめん。」ポロポロ

八幡「……今更謝んなよ、気持ち悪い。俺が悪いみたいになっちゃうだろ。」

八幡「後1つだけ言っておくとだな、戸部と海老名は俺に謝りに来たぞ？しかもお前と違って俺を恨まずにだ。その意味が分かるか？まあ、分からんだろうがな。」

小町「ちよつとゴミイちゃん！幾ら何でも言い過「黙れ、お前と話しはしてねえんだよ。」っ!!」

前もあつた気がするな、俺が饒舌になつたの。だが、今はどうでもいい。

雪乃「貴方、少し言い過ぎではないのかしら？」

八幡「まだまだ言いたい事はあるんだが、それも言うか？」

雪乃「……………」

八幡「次はお前だ雪ノ下。お前も俺に任せるって言ってくれたよな？　なのになんで俺は、お前からやり方を否定されなきゃいけないんだ？」

雪乃「貴方があんなやり方をするとは思わなかったからよ。」

八幡「ならお前ならどうした？　俺と同じ立場だったら？」

雪乃「……………」

八幡「何も思いつかないだろうな。対極である2つの依頼、時間の無さ、そんな中でとれる普通の行動なんてねえよ。出来るとしたら、2つの依頼のどっちか捨てるくらいいしかな。」

八幡「やり方が嫌いだと言ったな？　あの状況でやり方を選ぶ余裕があつたと思うか？　出来たなら俺もやってる。端的に言うのだな、メモエの考えを俺に押し付けんじやねえよ。お前に何が出来た？」

雪乃「……………」

八幡「何もしねえんならこんな依頼なんぞ、友達の時勢いなんかで受けてんじやねえよ！」

雪乃「……………」

八幡「俺がいなくなった後の総武の事は聞いた。酷かったらしいな。だが、そんなのはもう経験済みなんだよ。お前らが受けてきた事なんて、俺が先に受けてんだよ。それが鸚鵡返しになっただけだ。」

八幡「俺もお前らの今回のやり方で言いたい事がある。『お前らのやり方、嫌いだ。』『もつと俺の気持ちを考えろ。』後もう1つ、俺はお前らが嫌いだ。反吐が出る。」

小苑さんといった時からずっと思っていた事をやつと言えた。この

2人、完全に放心してるな。まあどうでもいいが。

小町「ちよつと、幾ら何でもそれはダメだよ。2人に謝ってよ!!」
八幡「あ?」

小町「大嫌いつてないよ!そんなの好きな人から言われたらああなるよ!謝ってよ!嘘だつて言つてよ!」

八幡「あれが俺の本心だからな。訂正するつもりはない。それに、お前にも伝えたい事がある。」

小町「え?」

八幡「俺は今日この時間を以つて、お前と兄妹の縁を切る!」

小町「……………え?」

さて、そろそろ出るか。やつと終わったしな。

小町「ま、待ってよ!嘘だよな?嘘なんだよね!」

八幡「嘘言つてどうする?今までの話の流れ聞いて嘘だと思えるのか?おめでたい頭をしてるな。」

小町「待つてよお兄ちゃん!小町はただお兄ちゃんに2人に謝つて欲しかつただけだよ!お兄ちゃんを恨んでなんかないよ!」

八幡「そうか?俺にははつきりと『恨みたくなる、同じ気持ちだ』つて聞こえたがな?お前も知ってるだろ?俺が記憶力良いつて事を。」

小町「やだよ……………待つてよ!謝るから!小町が謝るからお兄ちゃん
でいてよ!」

八幡「お断りだ。身内よりも他人を取る奴を信用なんて出来るか。」
小町「そ……そん……な……」ポロポロ

八幡「お前らに言っておくが、2度と俺に関わろうなんて思うなよ？その時は俺も容赦しねえぞ？じゃあな。」

そして八幡は3人の前から去り、『レイモンド』から出た。

——レイモンド入り口前——

八幡「……言う事は言った。後は奴ら次第だ。」

p i …… p i …… p i

p i p i p i …… p i p i

オーフェリア『……ええ。場所は何処？』

八幡「……よお、今から会えるか？」

やっぱ元気ねえな。もしかしなくても俺が原因だよな。

オーフェリア『……ええ。場所は何処？』

八幡「花畑でいい。お前もその方が良いだろ？」

オーフェリア『……ええ。』

八幡「よし、じゃあ後でな。」

よし、じゃあ行きますか。

※必要不可欠な存在

八幡 side

オーフェリアに連絡を入れてから10分くらい経った。俺はもう指定場所に着いたが、オーフェリアはまだ居なかった。

あいつが今どこに居るのかは分からんが、俺が見た中では、オーフェリアがあんな顔をしたのは今までで初めてだ。不安そうなの、そして今にも崩れてしまいそうな程、辛そうな顔をしていた。

やり過ぎ……かもしれないが、俺は別に後悔はしていない。

オーフェリア「……………八幡。」

すると後ろから、遠慮気味に俺の名前を呼ぶ少女がいた。

オーフェリアだ。

八幡「よお。」

オーフェリア「……………」

八幡「大丈夫か？」

オーフェリア「……………ええ。」

いや、声的に大丈夫じゃないだろ。

オーフェリア「……………八幡、ごめんなさい！私、貴方に嫌われるような事をして。彼女たちの言葉を聞いて本当に腹が立って……………」

八幡「……………」

オーフェリア「……………後先考えないで、貴方の言葉も聞かないで犯罪をするところだった。」

八幡「……………そうだな。」

オーフェリア「こんな私、貴方は嫌だと思っわ。でも、私はもう貴方しかないわ！頼れて安心出来る存在はこの世で貴方しかない！だから……もう関わらないなんて言わないで……」

オーフェリアは俯きながら俺にそう言った。お願い、懇願しているようにも見える。いや、実際そうなのだろう。

八幡「…………俺が居なくなったら困るのか？」

オーフェリア「…………」コクッ

八幡「どうしてもか？」

オーフェリア「…………」コクッ

八幡「…………はあ、俺も甘いな。だが、俺の言う事も聞いてくれたしな、今回はよしとする。」

オーフェリア「…………許してくれるの？」

八幡「許しちゃいけなかったか？なら別にいいんだが？」

オーフェリア「嫌っ！」

普段よりも大きい声で言うオーフェリア。彼女なりには叫んでいるつもりなのだろう。

八幡「だったらこの話は終わりだ。頭は撫でなくていいか？一応、今日の礼だ。」

するとオーフェリアは一目散に八幡に駆け寄った。許してもらえたのと、頭を撫でてもらえるのが余程嬉しかったのか、八幡の身体に抱き着いて離さなかった。

そして八幡は直ぐそこにあつたベンチまでオーフェリアを連れて行き、オーフェリアを隣に座らせてから八幡も座った。

オーフェリア「……………本当に良かったわ。もし、許してくれなかったら……………想像出来ないくらい落ち込んだと思うわ。」

八幡「まあ、俺のためにやってくれたんだからな、それを責めるのはお門違いだろ。けど、本当に気をつけてくれよ。俺も殺人沙汰は御免だからな。」ナデナデ

オーフェリア「……………ええ、肝に命じておくわ。貴方に嫌われたくないもの。」

俺基準なんだな……………まあ、嬉しいけど。

八幡「……………そういや、お前の提示してきた条件の事だが、日はどうする？」ナデナデ

オーフェリア「……………え？」

八幡「え？」テ トメル

オーフェリアの予想外な反応に俺はつい手を止めてしまった。だって素っ頓狂な声出すんだぞ？

オーフェリア「……………行ってくれるの？私、てつきりもうダメだと諦めてたのに。」

八幡「このくらいで取り消したりしねえよ。反省してるみたいだしな。」

オーフェリア「……………嬉しいわ。」

オーフェリアの顔は、さっきまでの暗さが嘘のような顔をしていた。今の事を話した途端に凄く嬉しそうな顔をしていた。

オーフェリア「……………八幡、貴方はやっぱり優しい人ね。」

八幡「大袈裟だな。」

オーフェリア「……………そんな事ないわ。貴方は私が出会って来た人の誰よりも優しいわ。」

八幡「……………ありがとな。」

オーフェリア「……………感謝するのは私の方よ。八幡、本当にありがとう。」ニコツ

嬉しそうな顔から続く満面の笑顔。おそらく10人中10人が認めてもおかしくない程の華燐さだった。

八幡「あ、ああ／＼／」

やっぱオーフェリアの笑顔はまだ慣れねえな。それに今のも初めて見る顔だな。やっぱ笑うと可愛いな。」

オーフェリア「……………困るわ八幡／＼／」

八幡「え？何がだ？」

オーフェリア「……………可愛いなんて、お世辞でも止めて／＼／貴方には【戦律の魔女】がいるのだから／＼／」

ぬおおお!!またか俺は!?

これはもう永遠に治らんのか!?思った事を声に出しちゃうのは、もう治らんのか!?ていうかオーフェリア!お前シルヴィと俺の関係知ってたのかよ!?

オーフェリア「……………でも嬉しいわ。」

八幡「お、おう。それと、お前の笑顔が可愛いってのは、別にお世

辞なんかじゃねえから。本音だから。」

オーフェリア「っ！……………八幡の女たらし／＼／」

まあ、その反応が普通だよな。俺も何言ってるんだって今思った。

その後も八幡はオーフェリアの気が済むまで頭を撫で続け、約束の日を決めてからお互いの学校へと戻って行った。

帰還と八幡の本音

八幡 side

オフエリアとの対面から少し時間が経ち、今は界龍の門の前まで来ている。目の前には門番の2人が居るが、俺が明鏡止水を使っているから見えてはいない。

ここに来てからというものの、悪戯心が出来てしまったな。まあ、歩きながら解除していくか。

そして俺は近づくにつれて少しずつ星辰力の放出を止め、姿を現していく。

門番1「そ、尊師!!? いつの間に!」

門番2「い、いつからそこに!」

八幡「此処には3分くらいいた。姿を消していたし、気配も殺していたからな。星露か暁彗くらいしか気づかないだろうな。」

門番1「お、お見事です……」

門番2「流石は尊師……」

八幡「んじや、俺は行くな。お前らも早く来い。そう言われてんだろ?」

ずっと此処で門番されてたら可哀想だしな。俺の良心が痛む。

門番1「は、はい!では、ご一緒させて頂きます!」

門番2「こうして尊師の横に立てるなんて夢のようです!」

……そんなに嬉しいか?

――廊下――

門番2「そういえば尊師、今更ではありますが、《鳳凰星武祭》優勝おめでとうございます！ 私たちも観戦していましたが、実に素晴らしい試合でした！」

八幡「ああ、ありがとな。俺も決勝では本気を出すと決めていたからな、そうでなければ、決勝まで勝ち進んで来たあの2人にも失礼だからな。」

門番1「尊師がいつも仰られている『拳のぶつけ合いは気持ちのぶつけ合い』というものです？ 何だか分かる気がします。」

なんか俺って此処に来てからも厨二病っぽい発言ってあるよな。こういうの改めて聞くと恥ずかしい。

八幡「まあそうだな。お互いに勝ちたいって気持ちは一緒だからな。ていうか、よく覚えてんな？ 言ったの大分前じゃなかったか？」

門番1「覚えているも何も、私たち尊師に教示を受けている者は、皆全て覚えていますよ？」

……マジ？

八幡「俺、そんなに良い事言ってるか？ 思った事を言ってるだけなんだが……」

門番2「何を言われますか!? 尊師のお言葉は名言と呼ぶのも烏滸がましいくらい素晴らしいのですよ!？」

門番1「その通りです！ 尊師無くしてあの言葉は生まれていません!!」

それは流石にないだろ……

門番1「そうしている間に着きましたね！ 八天門場に。」

門番2「中には師父をはじめ、界龍全生徒がお待ちです。扉を開けるのが私たちの役目ですので、準備が出来ましたら、お願いします。」

八幡「準備なんていらねえよ。そんなのやっても時間がなくなるだけだからな。」

門番2「……今の録音しておいたか？」

門番1「はい！バッチリです!!」

おい……まさかとは思うが、お前らそんな方法で覚えてんじやねえだろうな？

門番1「気を取り直して……んっ！師父っ!!師兄方っ!!比企谷八幡尊師がご帰還なされました!!」

星露『うむっ！通すがよい!』

声出てんなあ……

門番1「はっ！では、比企谷八幡尊師、中へお入り下さい!」

そう言っ門番の2人は、無駄に大きい門を取っ手を掴んで開いた。

ワアアアアアア
!!!!!!

そしてその瞬間、中から凄まじい熱気と拍手が俺を襲った。
星武祭勝ただけでこんなにお祭り騒ぎになるのか？だったらヤ

バイじゃん。発狂し過ぎじゃん。

星露「八幡よ、前にある席まで来て座るがよい。」

俺は此処で口を開いたらムードが台無しだと思ったため、何も言わずに前に歩き、中央にある円卓の一番奥にある空いている席に座った。

中央に居たのは俺をはじめ、陽乃さん、宋、羅、銀梅、永成、沈雲、沈華がいた。

星露「揃ったようじゃの。皆、わかっているとは思うが、ここにいる8名は、我が界龍第七学院の強さを他の学園に知らしめ、史上初の一学園準決勝独占の快挙を成し遂げた立役者たちじゃ。皆もこの者たちを見習い、これからの精進を期待しておるぞ。」

パチパチパチパチッ!!

やつぱこういう時は会長らしいというか、普段らしい威厳を持つてるよな。

星露「そして、中央の2人、雪ノ下陽乃と比企谷八幡は今回の《鳳凰星武祭》で優勝した。この2人には今宵、最高の夜を送ってやるのじゃ!」

今度は大歓声……しかも今度はおラおラ系みたいな感じでした。まあ、俺は別にそれでもいいけど。

星露「皆の者! 杯を持てい! 行くぞ! 鳳凰星武祭優勝、そして界龍準決勝独占の快挙に乾杯じゃ!!」

全生徒『かんぱーいっ!!!』

こうして、界龍生徒による大胆な祝勝会が開かれた。

女生徒1 「尊師っ！《鳳凰星武祭優勝》おめでとうございます！」

女生徒2 「私、尊師の最後の技、感動致しました！」

女生徒3 「私たちもより一層の鍛錬に励みます！」

界龍は学園の規模が六花学園でも最大なだけあつて生徒数も最高の人数を誇っている。だから、結構同じ事を言われる。

陽乃「あゝあ、一応私も一緒に優勝したんだけどなあ。まあ尊師に比べたら見劣りはするだろうけどさゝ、もう少しは来てくれてもいいと思うんだけどな。」

八幡「来て欲しいんですか？俺はもう疲れましたよ。」

陽乃「幸せな疲れだね！この贅沢者め！」

陽乃さん、そんな楽しそうな顔で言わんでください。実際本当にしんどいっす。

陽乃「まあ仕方ないよねえ。皆の憧れなんだから！仕方ないよねえ。」ニヤニヤ

八幡「……今度からクッキーを煎餅、紅茶を緑茶にしておきますね。」

陽乃「やめて！私まだおばあちゃんじゃないからやめて!!」

別にいいだろ、合うんだし。

生徒による祝いの言葉や雑談もひと段落して食事をしながら落ち着いた頃だった。

星露「さて、皆の者。待ちに待ったこの時がやって来たぞい。」

ん？何だ？まだなんかあんのか？

星露「虎峰、頼んだぞ。」

虎峰「はい、師父。八幡、貴方に質問したい事が山程ありますが、先ずは簡単なこの質問から行きます。」

八幡「お、おう？」

虎峰「八幡……………」

シルヴィア・リュウ「ハイムさんとお付き合いしているのは本当のことなのですかあ？！正直に偽りなく答えて下さい！！！」

虎峰が豹変したと言ってもいいくらい大声で俺に質問してきた。それに続いて道場の中にいる殆どの生徒が発狂レベルで騒いでいた。まあ当然だよな、あれだけの事を朝にして、試合後にはカメラの前で実際に言ったからな。

八幡「ああ、事実だ。去年の《王竜星武祭》の夜に付き合った。」

今度は白ける会場。ていうか虎峰、お前に至っては固まってんじやねえか。そんなに意外だったのか？

虎峰「でで、出会いのきっかけは？」

八幡「それを言うつもりはない。これはシルヴィのプライバシーもある。俺がホイホイ言っていいたいような事じゃない。」

虎峰「……………」

おい……………本当に大丈夫か？

虎峰「八幡……………シルヴィアさんを不幸にしたら許しませんからね？」

八幡「んな当たり前な事言うな。今度は画面からじゃなく目の前で言ってるよ。俺はシルヴィを愛している。あいつに手を出そうもんなら、俺が全力で叩き潰す。たとえ同じ学院の奴でもだ。俺の女に手を出すんなら、相応の覚悟しとけよ？まあお前ならしなと思うが。」

……………

パチパチパチパチッ!!

女生徒2「尊師く！カッコいいです!!」

女生徒3「お幸せにく!!」

男生徒1「尊師なら納得です!!」

なんか段々後になるにつれて結婚しましたみたいな感じになるが、まだ結婚してないからな？

八幡「というより、俺は界龍やお前らも……その……好きだ。俺の居場所であり家族だからな。今の俺がいるのは、お前らのおかげでもある。だから……ありがとう／＼」ポリポリ

……やっぱ無理だ。こういうのは似合わない。俺じゃない。

ワアアアアア
!!!!!!

女生徒1「尊師く!!私も好きです!!」ゴウキュウ

女生徒2「感動しました!!本当に感動しました!!」ゴウキュウ

男生徒1「ありがとうございます!!ありがとうございます!!」ゴウ

キュウ

男生徒2「俺、尊師にもっと憧れました!!」ゴウキュウ

白けるかと思っただけは、超がついてもおかしくなくらい大歓声になっただけ。照れる奴、笑う奴、涙ぐむ奴、泣く奴と様々だったが、俺

をバカにするような奴は1人もいなかった。

星露「嬉しい事を言ってくれるのう。妾たちを家族か……八幡らしいのう。」

暁慧「……………家族……一度失ったが、卿が言うならそうかもしれないな。」

冬香「八幡さんは……………とんだ女泣かせですね。」ツ

陽乃「ホントだよ。八幡くんは本当にしようがない子だなあ。」ホ
リ

セシリー「もー最高だよ八幡ー！私も八幡好きだよー！！」

虎峰「これでは質問どころではないですね。やっぱり八幡には敵いません。」

沈雲「……………彼がこんな事を言うなんてね……………少し気恥ずかしいよ
／／／

沈華「……………そうね。私たちの事を家族だなんて……………物好きにも程
があるわよ／／／

ザワザワと騒ぎ立てる騒音も、今では気持ちよく聞こえる。

照れ臭いが、全く悪い気分じゃない。

八幡「……………途中で悪いが、俺は行くところがある。今の流れなら分かるだろ？邪魔はしないでくれよ？」

星露「今のお主の言葉を聞いてそんな事をする不粋な輩など此処には居らぬ!!行くがよい!!」

ありがとよ！今度特大青椒肉絲作ってやるよ!!

そして俺は道場を出て、校門前まで来て止まった。

すると横から声がした。

朱雀『旦那よお、俺も今まで旦那の中で視ては来たが、此処の奴らつて最高に良い奴らだな!!』

索冥『そうですね。八幡様に対する憧憬、尊敬、畏敬、様々なプラスのエネルギーを感じました。邪な念は一切感じませんでした。』

八咫鳥『拙僧の見た眼からも嘘偽りのない事を証言する。主人よ、この学院には主人を裏切るような者はおられません。私の眼、索冥殿の感受性、朱雀殿の勘全てで保証する。』

八幡「……………ああ、そうだな。俺もそう思っているところだ。

八幡はその後、伽耶梟を呼び出し、空を飛びながらシルヴィアの家へと向かっていた。その途中で空からは八幡の顔の辺りから飛び散った透明な水が月に照らされて輝いていた。

俺の思い、私の願い

シルヴィア side

♪八幡くん早く帰ってこないかな。もう会いたくてしょうがないよ♪

早くおめでとうって言ってあげたい！表彰式では目で伝える事しか出来なかった（充分伝わってました）けど、今度は口から直接言いたいしね。

ああ、待ち遠しいなあ♪

ガチャッ

八幡「ただいま。」

あっ!! 帰って来た!!

そう思いながら私は、小走りで玄関の方まで行った。そこには、私の最愛の彼氏、八幡くんが立っていた。

シルヴィア「八幡くん！おかえり♪」ダキッ！

八幡「ああ、ただいま。」キュッ

私が抱き着くと、八幡くんは軽く抱き締め返してくれる。この瞬間

が何よりの祝福。好きな人と一緒にいられる時っていうのは、本当に幸せな気分になれるからね。

八幡「悪い、飯は界龍で食って来ちまった。祝勝会があつたもんでな。」

シルヴィア「そうだろうと思って今日は私も学園の方で済ませてきたから大丈夫だよ。どうだった？」

八幡「そうだな……新鮮だった。俺はここまで慕われるような存在になれたんだなって実感出来た。」

シルヴィア「八幡くんは自分を過小評価し過ぎだよ。今の界龍があるのは、間違いなく八幡くんの影響だよ。そうでなきゃ尊師なんて呼び名は付けられないよ。」

これは私の本心。八幡くんはもっと自分を大きく見せるべきだと思う。だって強くて優しくてカッコいいんだもん／＼／

八幡「俺としては普通だと思うんだが……それでも低いのか？」

シルヴィア「前に比べたら卑屈は言わなくなってるけど、やっぱり八幡くん自身にはもっと自信を持って欲しいよ。」

八幡「……分かった、そうする。」

シルヴィア「うん♪……じゃありビングに行こっ！今日は凄くおめでたい日なんだから!!」

八幡くんが星武祭優勝だからね!!

——居間——

シルヴィア「改めて、八幡くん！《鳳凰星武祭》優勝、本当におめでとう!!」

八幡「ありがとな。優勝したって実感はあんま湧かねえけど、シルヴィと同じ台に立てたって事は分かる。」

シルヴィア「ふふっ、何で私基準？」

八幡「内容は違うとはいえ、星武祭優勝っていう意味では同じだろ？そこに彼女がいたら、俺としては意識しちまうんだよ。」

シルヴィア「もしかして、私に相応しい男になりたいか思ってた？」

八幡「……まあ、そうだな／＼」

シルヴィア「えへへ／＼嬉しいなあ♪」

こんな感じでこの先も過ごせていけたら良いな……嬉しい事があつたら笑い合ったりして、嫌な事があつたら慰め合ったりして、そんな普通の、極ありきたりでもいいから幸せに過ごせていけたら良いな。

八幡「……シルヴィ。」

シルヴィア「ん？なに？」

八幡「……やっぱ俺、お前以外には考えられないと思ってる。」

シルヴィア「え？何が？」

八幡「……結婚／＼／＼」

え？ええええええ
!!!??
／／／／／

シルヴィア「どどどどうしたの!?!急にそんな事!?!／／／／／」

八幡「…………改めて思ったんだよ。俺にはシルヴィが何よりも大切だつてな。去年の10月のデートの日のベンチでの事、俺はあの言葉がまだ焼き付いている。それにこれはシルヴィだけじゃないが、俺を初対面であんな風に話してくれる人はそういない。」

八幡「あの時の俺はまだ人を…………特に女なんて信じられなかった。分かるだろ?俺の過去を知ってるお前なら。」

忘れるわけない。あんなに辛そうに話してた八幡くんの顔を。内容も酷かった。

八幡「それなのにだ。俺はシルヴィのあの言葉を聞いた途端、本当に救われた気がした。いや、実際救われた。あの日からなのかもな、俺の…………生き方が始まったのは。まだその頃は分からなかったが、王竜星武祭の夜に付き合つて、これまで色んな事を2人でしてきた。何もかもが幸せだった。だから思ったんだよ。付き合ってからこんな風に過ごせたなら、もし結婚したらどれだけ幸せなんだろうな……て。」

そんな風に考えてたんだ。でも、私もさつき少しだけ似たようなの考えてたなあ。

シルヴィア「…………私もね、時々考えるの。もし、八幡くんと結婚したらどんな風に過ごすのかなあつて。そしたらね、なんか簡単に想像出来ちゃったんだ。八幡くんと私が楽しげで幸せそうに笑い合っているのが。」

シルヴィア「だから、八幡くんのプロポーズはもう全て受け入れるよ。嬉しい事も辛い事も全部。」

だって…………愛してるんだから。

八幡「……………そうか。それを聞いてスゲー安心したし、満足した。」
シルヴィア「うん♪……………あつ！そうだ八幡くん！」

八幡「ん？何だ？」

シルヴィア「八幡くんさ、《獅鷲星武祭》にも出るって言ってたでしょ？その時のお願ひ事って私が働いてみたいお店に合わせてくれるんだったよね？」

八幡「ああ、そのつもりだ。まあ、表面上は俺の願ひってことにしておくがな。それがどうした？」

シルヴィア「あのね！私飲食店をやってみたの！八幡くんが店長で、私が副店長！スタツフとかはその時でもいいから、私そんな感じのお店でやっていきたいなーって思ったんだ。どうかな？」

八幡「俺はいいぞ。というよりも、此処に来てから将来どうしようかとか考えてなかったからな。俺もそれでいい。」

シルヴィア「2人でお店を切り盛りしていくの！なんか鴛鴦夫婦みたいで良いよね！」

八幡「そうだな。」

シルヴィア「でもいいの？私のためにお願いを1つ無駄にするようなものだよ？」

八幡「安心しろ。お前の夢を叶えるのが、俺の夢でもある。」

ズキューン！

シルヴィア「そ、そっか／／……………うん、ありがとう八幡くん／／／／」

今の……………凄く心にときめいちゃった。【私の夢を叶えるのが、俺の夢でもある。】っか……………カッコいい／／／／／

八幡「けど、結婚はまだ先だ。今はこの時間を楽しもうぜ。」
シルヴィア「う、うん！そうだね。」

私も、今というこの時を幸せに過ごしたいよ。君と一緒にね！八幡くん！

技 設定2

《八幡》

天狼剣絶技・天狼抜刀牙…八幡が独自で編み出した超高速回転しながら相手に斬りかかる技。威力はまだ不明。だが、アルデイの胴体を易々と斬り裂く事が出来る。

※アニメ・漫画の【銀牙】より引用。

イメーτζとしてはアニメ【進撃の巨人】のリヴァイの回転技の一刀バージョン。

鳶打…八幡の擬似抜刀術。この技は斬る事を目的としていなく、峰打ちによる相手の運動神経にダメージを与える技。居合同様低い姿勢から出されるため、上半身よりも下半身の神経を狙うのに長けている。

水刃・花鳥風月…簡単に言えば影切の闇無しバージョンで、自身を明鏡止水で姿を見えなくしてから切る技。内容は影切と同じ。切る前に八幡は必ず台詞を言う。

『花咲く池に、浮かぶ水鳥は、波をあおげば、飛び消える。』

憑霊…自身の守護霊を身体に纏う技。

※アニメ【ぬらりひよんの孫】より引用。

夜宴・大闇鴉…八幡の守護霊、八咫鳥による憑霊。姿が変わるだけでなく、翼が自由自在に出すことが可能で空中戦が出来る。遠距離による鎖分銅での攻撃もあるため、近中遠全ての距離に対して万能な効果を発揮する。

火蓮・百火燎嵐…八幡の守護霊、朱雀による憑霊。これといって強化された部分はなく、鳥の守護霊ではあるものの、翼は出せず空も飛べない。だが、それを補って余りあるほどの炎による超広範囲攻撃や

防御が可能。

《陽乃》

風流し：陽乃が太極拳の応用で編み出した受け流し。本来は人相手の技だが、大きさによつては砲撃も受け流せる。今回紗夜が撃った粒子砲は、大きさ的にも許容範囲だったため、受け流す事が出来た。

鳴神落とし・焰：陽乃が編み出した技で、空中から放たれるかかと落とし。炎を纏う効果がある呪符を足につけてから、真上に飛び繰り出す。他にも纏えるが、今回は炎を纏った。

発空勁：普通の発勁だが、腕に星辰力を溜めて打ち込みと同時に空気圧として放つ事で、通常の発勁は外功だけだが、この技は内功にもダメージを与えることが出来る。

イメージは『武装少女マキャベリズム』の野村不動が使う『魔弾』の手を捻らないバージョン。

《銀梅》

風薙：突きと見せかけ、瞬時に持ち替えて上に上げてから下に振り下ろす技。騙し討ちなどにも使える。

隼風・鷲刃：連続攻撃の個別名称。

風波：風の力が宿った旋棍を薙ぎ払うようにして斬撃を飛ばす技。八幡にも使ったが、簡単に防がれてしまった。

斬空弾：今大会で唯一八幡に傷をつけた技。風薙同様に騙し討ちの技で、銃を構えるかのように斬りかかってくいように見せかけ、先端の方に風の力を溜めて撃つ技。

《その他》

剛鉄符…体の一部を硬化させる呪符。攻防問わず、両方に応用が利く。

『金剛たる鉄身もって災悪を防がん。急急如律令』

真風符…風の力を纏うことができる呪符。武器などに纏うのが主流だが、手脚にも纏う事が出来る。

『迅風よ、空を裂け！急急如律令』

幻影舞踊・鏡月…八幡と陽乃の合体技。八幡本人以外に鏡花水月の効果を付与させ、交代で攻撃を行う波状攻撃。最低3人だが、八幡の星辰力が続く限りは何人にでも使うことが出来る。この技は持久戦相手には非常に効果的で体力を落とすのに効果を発揮する。

生肉と黒猫星のコラボレーション 突然の来訪者

八幡 side

とある日の事、俺は目的もなく家でのんびりと静かに過ごしていた。偶にはこういう静かな時を過ごすのも悪くない。というか最近
は忙し過ぎたからのんびりする暇がなかったとも言える。

そして視線を下に向けると、俺の膝を枕にして寝ているシルヴィがいる。こんな事前までなら恥ずかしがったりして絶対にやらなかったが、今では当たり前のように出来る。六花に来てからここ1年、嫌な事ってあんまないんじゃない？

八幡「ふうー、紅茶でも淹れるか。」

俺はシルヴィを起こさないように膝をクッションにすり替えてからキッチンの方に向かった。

八幡「えーつと……あれ？どこいった？確か……おつ、あったあつた。」

八幡「やつと見つか……ってない!?マジか……無くなったらすぐに補充しに行くんだけどな……そーういや星武祭とかもあったから買いに行く暇なかったんだつた。」

仕方ない、買いに行くか。でも、シルヴィどうすっかなあ？気持ちよさそうに寝てるし、起こすのもなあ。かといってそのまま行ったら後でなんか行ってきたら……。

どうしよ……俺……

シルヴィア「ん……んんう……あれ？八幡くん何処か行くの？」

グッドタイミング!!

ナイスなタイミングだシルヴィ!!

八幡「ああ、紅茶の葉が切れててな。買いに行こうと思ってたんだが、シルヴィも行くか？」

シルヴィア「うん行くっ!!」ニコッ

すげえ嬉しそうに答えるな。

――商業エリア――

「ねえねえアレ!!シルヴィアと比企谷八幡だよ!!」

「嘘――あつ！ホントだく!!」

「付き合ってたってやっぱり本当だったんだ！凄いラブラブ!!」

商業エリアまで来た俺たちは、今ここにいる六花の住民たちに噂されている。それもそのはず、俺たちは今変装していない。そのままの姿で出歩いているからだ。

関係をバラした以上は、もう隠すことなんて何もない。思う存分見せつけるだけ……なんだが、シルヴィはやたらと俺にくっついてくるのだ。それは嬉しいのだが、あまりにもくっつき過ぎではないかと思うくらい抱き着いてくる時もある。

シルヴィア「えへへ、ラブラブだつて♪」

八幡「……まあ、事実だからな。」

シルヴィア「うんっ♪」ギョツ！

そしてまた抱き着く。そうしたら周りから黄色い声が聞こえてくる。慣れてるわけではないが、当然に起こる事だと考えたら、気にならなくなった。

こうして黄色い声に囲まれながら、いつも行く茶葉屋に出向くのだった。

――10分後――

店員「ありがとうございますー！」

いつも買う茶葉とたまに飲む茶葉の2つを買って外に出る。そしてたら大抵さつきいた一般人や学園の生徒たちが、俺たちを遠回しに見ていた。

そんなに暇なのかい？

八幡「俺たちを見てるだけで何がそんなに楽しいのかねえ？」

シルヴィア「まあ凄く話題になってるからね、私たち。仕方ないよ。」

八幡「それは分かってるが、こうも見られてると流石にな……」

分かってると思うが、俺は注目されるのはあまり好きではない。というより嫌いな方だ。今でこそ少しマシになってるが、それでも嫌いな方だ。

シルヴィア「じゃあ喫茶店にでも寄ってく？」

八幡「アホ（ティツ！）そんなの逆効果だ。」

そう言うってから俺はシルヴィを軽くチョップした。するとシルヴィは面白そうに舌を出しながら笑っていた。

シルヴィア「冗談だよ。八幡くんの事を一番よく知ってるのは私なんだから♪」

八幡「全く、嬉しい事言ってくれてありがとよ！」

シルヴィア「キヤー！」ナデナデ

シルヴィの頭を撫でると、今度は嬉しそうに声をあげながら、抵抗せずに俺に頭を撫でられていた。

そんな光景に周りの人たちは、羨ましそうに見ていたり、嫉妬深かそうに見ていたり、俺たちを見ているのには変わらなかった。

――外縁居住区――

この辺りになると、やっぱり静かになるな。うん、やっぱりこれが一番だ。

シルヴィア「じゃあ家に帰ったら、早速紅茶飲もつか！」

八幡「そうだな。」

シルヴィア「ん？ねえ、空に見えるあの細長い、何かな？」

八幡「ん？」

シルヴィアの言う通りに空を見上げると、確かに細長く少し目の形をした何かが浮かんでいた。

八幡「……ていうかアレ、形もそうだが、中も目みたいなの形したのがたくさんないか？」

シルヴィア「う、うん。なんか気持ち悪いよ。」

もうあんなの見るのはよそう。早く家に入るのが良いだろうな。

八幡「シルヴィ、早く家に入るぞ。」

シルヴィア「う、うん。そう「……………あああ」…………え?」

八幡「ん?どうした?」

シルヴィア「今、何処からか声が……」

八幡「声?どんな?」

シルヴィア「なんか八幡くんに似てた。それよりも、あの変なのかなんか降ってきてない?」

八幡「…………ああ、なんか降ってきて…………いや、人だ!人が降ってきたぞ!!」

シルヴィア「え!」

???『あああああ!!!』

人数は4〜5人か!

八幡「微睡め、伽耶梟!」

何時もより大きめに作った巨大な梟が、降ってきた人たち全員を背に乗せて、戻ってきた。

なんとかなった……………って嘘だろ?

???「あー死ぬかと思った。ゆか姉の奴、何処に飛ばすのかと思ったら、空とか聞いてねーぞ。」

???「仕方ないさ。ああいう人だからね。」

「そうだよ。気にしていたらキリがないよ。」
「ええ、今はそういうのは気にしないでおきましょう。それよりも此処が何処なのか聞き込みましょう。」
「そうだねー。そこにいる人たちにでも……って……え?」

八幡「俺?」

目の前には俺がいた。目は腐ってるけど。
後ろにいる奴らも見覚えのある顔だった。

葉山「比企谷が……2人!」

戸塚「どういう事!」

雪乃「……何故?」

陽乃「うそ?! 八幡くんが2人!」

どうやらこのままでは終わりそうにないみたいだな。

こつちとあつちの違い

八幡 side

八幡（六花）「……………」

シルヴィア「……………」

八幡（東方）「……………」

戸塚「……………」

葉山「……………」

雪乃「……………」

陽乃「……………」

一応、空から降ってきた5人は俺たちの家の中に入れたが、まだ状況が掴めずにいる。それもそうである。目の前にいる4人は分かるが、もう1人は俺自身だからな。

納得しろという方がおかしい。

陽乃「それで、君たちは誰なのかな？あつ、私は雪ノ下陽乃だよ。隣にいるのが妹の雪乃ちゃんね。」

雪乃「雪ノ下雪乃よ。」

戸塚「僕は戸塚彩加です。こう見えても男だから、間違えないでね。」

葉山「俺は葉山隼人です。」

八幡（東方）「……………比企谷八幡です。」

陽乃「取り敢えずこつちの自己紹介は済んだから、そつちの名前を教えてくださいませんか？」

八幡（六花）「……………分かりました。俺の名前は比企谷八幡。界龍第七学院高等部2年だ。」

シルヴィア「私はシルヴィア・リニューネハイムです。クインヴェー

ル女学園高等部2年です。」

自己紹介はしたが、あっちの方は俺たちの学園を知らないだろうから、不思議がつているだろうな。

俺も少し警戒を強めてるため、敬語は使ってない。陽乃さんには使ってるけど。

雪乃「色々聞きたい事はあるのだけれど、これはまず一番に聞きたい事ね。貴方、比企谷くんと言ったわよね？それは本当なのかしら？」

八幡（六花）「ああ、それに嘘偽りはねえよ。俺だって目の前に同じ顔をした奴が現れて驚いてんだ。目だけは違うが。」

八幡（東方）「……最後のは余計だ。」

陽乃「まあ目以外を除けば全部八幡くんだもんねー。なんで？」

八幡（六花）「俺の隣にいる奴が原因と言ってもいいですね。」

シルヴィア「ちよつとく、なんか悪い言い方に聞こえちゃうからやめてよ！」

八幡（六花）「悪い悪い。」

葉山「ひよつとして……付き合ってるのかい？」

八幡（六花）「ああ。」

戸塚「うわあ凄いな八幡!!こんな綺麗な人と付き合ってるなんて!!」

葉山「ああ、俺も驚いたよ。まさか比企谷にこんな彼女がいるなんてね。」

シルヴィア「ちよ、ちよつとやめてよ!恥ずかしいから／＼／＼」

まんざらでもなさそうな感じだな。それよりも、雪ノ下と葉山から全く悪意を感じない。やっぱりこっちの2人とは違うのか？

陽乃「ふーん……彼女ねえ。」

雪乃「……………」

八幡「……………」

後の3人は、何故か俺ともう1人の俺を交互に見始めた。1人は面白くなさそうな顔、1人は羨ましそうな顔、1人は複雑そうな顔をしていた。

八幡(東方)「…………そっちは幸せなのか？お前がその目になってるって事は…………」

八幡(六花)「…………ああ。今までの俺に自慢してやりたいくらい幸せだ。」

陽乃「へえゝ気になるなあ。聞いてもいい？」

八幡「俺はプライバシーに関して話すのは好きじゃないので、聞かなくても言いませんからね。」

陽乃「おお、こっちの八幡くんと違って強気な発言だね。」

葉山「そういえば、この世界には僕たちもいるのかい？良ければ教えて欲しい。」

雪乃「そうね。私も出来れば知りたいわね。この世界の私がどうなっているのか。」

戸塚「僕も気になるかな。」

……………やっぱ聞くよな。これ言っただとしたら、この2人の反応が少し怖いな。

シルヴィア「八幡くん、どうしよう？」

八幡(六花)「…………少し長くなるが、それでもいいか？後、雪ノ下と葉山、多分陽乃さんもだが、不快になるかもしれない。それでもいいか？」

雪乃「…………何かあったのね？」

葉山「もしかしくなくても、修学旅行とかかい？」

八幡(六花)「当たりだ。」

陽乃「どうするの2人とも？」

雪乃「…………聞くわ。こっちの私が何をしてきたのか知りたいもの。」

葉山「俺も同じだよ。」

八幡（六花）「…………分かった。」

そして俺は1時間くらい時間を使って総武時代から今に至るまでの経緯を話した。

八幡（六花）「…………これで全部だ。」

戸塚「なんていうか…………酷いね。」

八幡（東方）「…………ああ。」

陽乃「私も許せそうにないかな、これは流石に。」

やはり静かだった。何も言えないのだろう。特にこの2人は。一歩間違えばこの道に進んでいたかもしれないのだから。

葉山「…………そうか。こっちの俺はあんな愚かな事をしておいて反省もしてないのか。それに今も恨んでるってなると、本当に恐ろしいよ。俺もこんな風になってる可能性があったかもしれないからな。」

雪乃「…………ええ。私と由比ヶ浜さんなんて、本当に逆恨みじゃない。比企谷くんが私たちの代わりに痛みを受けてくれたのに、それを恨みで返そうとしていたなんて…………これを貴方から聞かれると、本当にしか思えないわね。…………いえ、実話なんですけど。」

八幡（六花）「すまないな、こんな話しちまって。それに、俺がもっと配慮してればこんな事にはならなかったのかもしれないに…………」

葉山「いや、いいんだ。こっちの俺には良い薬になったと思うよ。まだ懲りてはなさそうだけどね。」

雪乃「…………私は謝れるような感じにはなれそうにないわ。それだけの事をしたのだから。でも…………ごめんなさい。」

八幡（六花）「や、やめてくれ。これがこっちのあいっらだと思うと、

なんかこんがらがってくる。」

シルヴィア「私は会った事ないから分からないけど、そんなに差があるの?」

八幡（六花）「俺の知る限りでは、毒を吐かない雪ノ下は初めて見た。」

雪乃「……本当にごめんなさい。」ペコリッ

八幡「い、いや、そんなつもりじゃないから。そして頼むから頭下げるのは本当にやめてくれ。」

調子が狂うなんてものじゃない。

陽乃「でも、やっぱり過ごしてきた環境なのかな?こっちの八幡くんと違って、君は堂々と話すんだね?こっちの方も良い感じだけど、君ほどじゃないよ。」

八幡（東方）「余計な事言わないでくださいよ。」

八幡（六花）「まあ悪口とか言ってくる奴もいませんからね。口の悪い奴はいますけど。あんだけの人数に教えをしてるとなると、嫌でもこうなりますよ。」

4人「教え!!?」

八幡（六花）「うおっ!?!な、何ですか?」

急に立ち上がるな。ビククリした……。

葉山「き、君は先生もしているのかい?」

戸塚「何を教えてるの八幡!」

八幡（六花）「先生というよりも……これはなんていうんだ?部活の顧問的な感じか?」

シルヴィア「八幡くん、はぐらかさないでよ。八幡くんは、自分の学院で他の生徒たちに技の技術とかを教えてるんです。しかも渾名が【尊師】何ですよ。」

八幡（六花）「やめろよシルヴィ。その呼び名はあんま好きじゃねえんだ。」

シルヴィア「良いじゃん！カッコいいよ？八幡尊師♪」

陽乃「……こっちの八幡くんってなんか凄いね。目も良くなつてて頭も良くて強いんだ……」

八幡（東方）「俺、段々自分に自信がなくなってきた……」

シルヴィア「だ、大丈夫だよ！八幡くんだからきつと大丈夫だよ！」

陽乃「それ、どんな理屈なの？」

シルヴィ、フォローになってないぞ。

そんなこんなありながら、俺たちは自分たちの世界の事をお互いに共有し合った。

※平行の世界へ

八幡 side

暫くの間、俺たちは自分たちの世界について共有し合ったが、やはり別世界。全く聞きなれない単語が出てくる。俺たちが慣れ親しんでいる言葉もあつちでは無いみたいだ。

俺たちの使う【星脈世代】【星辰力】【魔術師】【魔女】【星武祭】など結構言ってみたが、何それ？って感じだった。

かく言う俺たち2人も、【幻想郷】【弹幕ごっこ】なんて全く知らないし、想像もつかないけどな。さっきの気持ち悪い【スキマ】つても。

葉山「なるほど……取り敢えずは、ここが異世界だというのは事実みたいだ。」

雪乃「そうね。これだけ知らない言葉があるんだもの。信じるしかないわね。」

シルヴィア「私たちも君たちが別世界の人たちっていうのは信じるよ。」

八幡（六花）「信じるしかないだろうな。【弹幕ごっこ】なんて知らんし、ゲーセンにもなさそうな名前だしな。」

酷いネーミングセンスだが、あつちでは普通なんだろうしな。

陽乃「私たちはまだ君たちの世界をよく見てないから分からないけど、結構な技術を持っているところなんじゃないの？この六花ってところは？」

シルヴィア「まあそうですね。恐らくですけど、そちらより大分進んではと思います。」

手をかざすだけで端末が表示されるなんて、普通ならあり得ないかな。

戸塚「チラツと見えたけど、高層ビルが沢山あったよ。此処は住宅街なのかな？」

八幡（六花）「概ねそんな感じだ。」

八幡（東方）「……取り敢えず簡単な街並みとか見せてもらってもいいか？」

八幡（六花）「ああ、いいぞ。中心部とかだとかこんな感じだな。」

俺は端末に六花の中心部や商業エリア、新開発エリア、スタジアムなどを見せた。

雪乃「ここまで技術が違つてくると、驚くよりも呆れてしまうわね。」

陽乃「それよりもここ本当に地球の中？って思えてきちゃうね。」

葉山「まあ、隕石の影響でこうなってしまったわけだからね、半分宇宙人……かもしれないね。」

八幡（六花）「おい、俺たちを含めた全星脈世代の皆様には謝れ。」

葉山「冗談だよ。でも、不思議だね。」

戸塚「うん。こっちの隕石って特殊能力でもあるのかな？」

……いや、それはないと思う。……俺が言っても全然説得力ないけど。

シルヴィア「ま、まあ隕石には特殊能力無いけど、隕石の中に含まれている未知の元素の影響で私たち【星脈世代】が生まれたって感じかな。」

戸塚「へえーそんなんだ。」

八幡（六花）「まあ俺は後天性だけどな。1年前になった。」

陽乃「そんな事もあるの？」

八幡（六花）「あまり聞きませんね。それに、俺の両親自体【星脈世代】かどうか分かりませんし。実験での後天性なら実例がありますけど。」

何せ、その正体がもう1人の六花最強の魔女であるオーフェリアだからな。

雪乃「人体実験って事？」

シルヴィア「簡単に言えばね。彼らからしてみれば普通の研究だろうけど、私はあんまり賛成出来ないかな。」

八幡（六花）「最近はそのような研究はされてないけどな。こっちには研究特化の学園があつて、派閥もある。その1つの派閥がこういう関係の研究に精通している。まあこれは学園の方針だから、あんま悪くは言わないでくれ。」

八幡（六花）「あくまでも方針だからな。その学園がそうしたわけじゃない。上の方がやった事だからな。」

こんな事していい筈がない。ただの人間を【星脈世代】それも【魔女】に変えるなんて事は。

シルヴィア「八幡くん大丈夫？顔が少し怖くなってきてるよ。」

八幡（六花）「っ！……すまない。」

オーフェリアの事を思うと、辛いところの話じゃないな。……いや、この話はもう止めだ。

八幡（六花）「他に何かあるか？」

葉山「……【魔術師】や【魔女】って言ってたけど、比企谷とシルヴィアさんはそうなのかい？」

八幡（六花）「ああ。影を操る力と幻を見せる力が、俺の【魔術師】としての能力だ。」

シルヴィア「私のは歌を媒介にして色んな事象に変える事が出来るんだ。回復とかはできないけど。」

戸塚「色んな能力があるんだね！」

八幡（東方）「その辺は俺たちと少し似てるな。」

雪乃「そうね。」

シルヴィア「そっちの方にも能力があるの？」

雪乃「ええ。貴女たちと違って1つに絞られてはいないけど、使い方によつては充分強力よ。」

陽乃「あつそうだ！ねえ雪乃ちゃん、八幡くん！この2人を幻想郷に連れてってみようよ！」

………は？

雪乃「……姉さん、そんなの無理に決まってるでしょう。私たちはスキマを使えないのだから。」

陽乃「あぁ………そうだった。」

八幡（東方）「……どうやら俺たちを送った人はこの事態を見越してたみたいだな。」

八幡（東方）以外「え？」

すると、リビングの入り口の方に、さつき空で見かけた気持ち悪い空間が広がっていた。

スキマである。

葉山「あの人は地獄耳だね。」

陽乃「さっすが紫だねー！2人とも行こうよ！」

八幡（東方）「陽乃さん落ち着いてください。……それで、どうする？」

シルヴィア「どうする八幡くん？私は八幡くんに従うよ？」

八幡（六花）「……………行ってみるか。なんか面白そうだし。」

雪乃「……………本当に同じ比企谷くんには思えないわね。こんな事を言うなんて。」

八幡（東方）「うっせ。」

にしても、こん中入るのか……………結構抵抗あるな。

陽乃「それじゃー幻想郷に行こー！」

そして俺たちが入り終わると、入り口は閉じてしまった。

幻想郷

シルヴィア side

今私と八幡くんは、彼らと一緒にあつちの世界で「スキマ」と呼ばれるところに入っているところです。でもやっぱり……………

シルヴィア「…………気持ち悪い。この風景ってどうにかならなかったの?」

これはあまりにも酷い光景だよ。辺りが全部『目』だらけなんだから。

八幡（東方）「さあな。俺も最初はそう思ったが、もう慣れた。」

雪乃「でも、気持ち悪いというのは同感ね。私は今でも慣れないわね。」

陽乃「八幡くんは平気だろうけど、私たちからしたらちよつとねー。」

……………やっぱりこんな評価なんだ。

???「そこまで言わなくてもいいじゃない!」

八幡（東方）「あつ、ゆか姉。」

陽乃「紫ひやつはろー!」

雪乃「事実じゃない。」

葉山・戸塚「あはは……………」

ゆか姉「ちよつと!?!誰かフォローしなさいよ!」

誰だろう?あのゆか姉?っていう金髪の人?

八幡（六花）「なあ、その人は？」

八幡（東方）「ああ、そうだった。この人は八雲紫^{やくもゆかり}。この【スキマ】を開いた張本人だ。」

紫「八雲紫よ。よろしく……って八幡が2人!? しかもイケメン!」

八幡くんって分かるの？

八幡（六花）「そんなに変わらんだろ……ただ目が普通になっただけだろ。」

葉山「いや、普通になったからイケメンになったんだろ……」

うん、私もそうだと思う。八幡くんって普通にしててもカッコいいけど、初めて今の目を見た時は凄いカッコいいって思えたし。

八幡（六花）「……悪いな、こっちの俺。」

八幡（東方）「……いや、大丈夫だ。そういやゆか姉、この行き先って何処なんだ？」

紫「太陽の花畑よ。」

八幡（東方）「……そうか。」

……気のせいかな？なんか嬉しそう？

シルヴィア「八幡くん、なんか向こうの八幡くん……」ヒソヒソ

八幡（六花）「ああ、俺も思った。なんか嬉しそうな顔してるな。」ヒソヒソ

名前からして良いところとか？

紫「もうそろそろ着くけど、八幡と紫髪の美人さん。お花畑は傷つけないでね？」

シルヴィア「え？どうしてですか？そんなつもり全くありませんけ

ど……」

八幡（東方）「幽姉は花が好きでな。前に傷つけた奴を捜して殺したことがあるんだよ。」

え!? 殺す程なの!?

八幡（東方）「だから気をつけてくれよ。」

八幡（六花）「わ、分かった。」

シルヴィア「う、うん。」

雪乃「私たちも気をつけましょう。」

陽乃「そうだね。」

葉山「まだ死にたくもないからね。」

戸塚「気をつけなきゃね。」

……これだけ口を揃えて言うなんて、どれだけ怖いのか？

紫「着いたわよ。」

目の前にはさつきと同じで、目の形をした出口があった。【スキマ】から出ると、そこには向日葵のお花畑が広がっていた。

六花にはない光景だった。

シルヴィア「……綺麗。」

八幡（六花）「ああ……すげえな。」

向日葵畑って実物で見た事はあるけど、こんなに綺麗なのは初めて見た……

八幡（東方）「良いところだろう？ そう言ってくれと、幽姉も喜ぶだろうな。」

紫「そうね。八幡からも言っただけなさいよ？ もっと喜ぶわよ？」

八幡（東方）「何度も言ったら逆に気を悪くするかもだろ？ 偶に言う方がいいだろ。」

シルヴィア「ねえ？ 八幡くんはさ、さっき言ってた幽姉と仲が良いの？」

八幡（東方）「あ、ああ。幽姉は俺と付き合ってる人の事だ。本名は風見幽香ってんだ。」

え!? 彼女!?

シルヴィア「道理で嬉しそうなわけだよ。」

八幡（東方）「……………顔にでてたか？」

八幡（六花）「俺が言うのもなんだが、結構分かりやすかったぞ？」

八幡（東方）「マジか……………」

恥ずかしいが事ないと思うけどな。私だって八幡くんに会えたら嬉しいしね♪

似た者同士

八幡（六花） side

しかし一面向日葵畑だな……こうも広がっていると、これしかないように見えちゃうな。でも、此処に來たつて事は、誰かはいらんだろうな。……もしかしてさつき言つてた風見幽香つて人か？

八咫鳥『主人よ、前方より氣配が。だがこの氣配……人ではない。
あやかし妖の類に似ている。』

妖……つまり妖怪か。

八幡（六花）「なあこつちの俺。前の方から妖怪が近づいてきてるみたいだが、退治しなくてもいいのか？」

シルヴィア「え？ よーかい？ 何それ？」

あー、シルヴィアは日本人じゃないから分からないか。

八幡（六花）「簡単に言うとお化けだ。西洋に例えると、吸血鬼とかデュラハンとかだな。その方が分かりやすいだろ？」

シルヴィア「うん、大体分かったよ。」

八幡（六花）「それで、どうなんだ？」

八幡（東方）「大丈夫だ。今來るのは、此処の主だから。」

すると、向日葵畑から1人の女性が出てきた。その女性は傘をさしていた。服装は赤のチェック柄スカートに白ブラウス、その上に同じ柄のベストを着ていた。

顔を覗かせると、緑色の肩にかからない程度の短髪で紅い瞳で少しミステリアスな雰囲気を感じていた。

??? 「八幡……帰ってきたの……八幡が2人？片方は目が……」

この下りも慣れたな。

八幡（東方）「ああ。あっちの方は異世界から来た俺だよ、幽姉。」
幽姉「……そう。自己紹介するわね。私は風見幽香。八幡の彼女よ。よろしく。」

八幡（六花）「勘違いされそうな言い方だな。まあいい。異世界から来た比企谷八幡だ。」

シルヴィア「同じくその世界から来ました、シルヴィア・リニューネハイムです。」

にしても、不思議なもんだな。この人がこの世界の俺の彼女とはな……

シルヴィア「なんか変な感じだね。本人同士の前に別の彼女がいるって。」

幽香「そうね。でも、私と貴方の八幡は違うわ。そうでしょ？」
シルヴィア「そうだね。外見も同じで中身が似ていても、何処か違うところがあるからね。」

なんだかんだで意気投合してるなあ の2人。

葉山「なんだか出遅れた気分だよ。此処にいる男では戸塚と俺が彼女いないわけだしね。」

戸塚「そうだね。でも4人を見てると、本当にお似合いに見えるよ。」

八幡（六花）「ありがとな。それに、俺はシルヴィを手放すつもりはないけどな、一生。というより永遠に。」

シルヴィア「えへへ／＼／＼私もだよ／＼／」

八幡（東方）「……まあ、俺もそのつもりだ。幽姉が嫌でなければだが。」

幽香「……嫌じゃないわよ／＼／」

改めて言うとは恥ずかしいな。こういう事は2人きりの時に言うか。

雪乃「私たちもいるのに、惚気はやめてほしいわね。」

陽乃「そうぞー。お姉さんなんか面白くなーい。つまんなーい。」

あ、すいません。

幽香「ところで、貴方たちの世界はどんなところなのかしら？ 気になるわ。」

八幡（六花）「そうだな……」

そして、俺とシルヴィは六花について大体の説明をした。俺たちの事（星脈世代の事）や、建造物の事など、色々と話をした。

陽乃「改めて聞くと、やっぱり文化の違いを感じるよねー。」

シルヴィア「まあ特別私たちの世界が伸びてるってわけじゃないけどね。あんな建造物があるのは六花だけだよ。」

葉山「それでも差は大きいね。」

八幡（東方）「ああ。色んな奴に見せてやりてえな。まあ無理だぞ。」

幽香「バトルエンターテイメント……そっちの八幡は強いのかしら？」

シルヴィア「すごく強いよ!!こっちの世界で現役学生の男子の中では最強なんだから!!」

八幡（六花）「おいシルヴィ。」

俺まだ最強じゃないからね？まだフェアクロフさんいるからね？

幽香「……気になるわね。」

幽香以外「え？」

幽香「そっちの八幡とこっちの八幡、どっちが強いのか気になるわ。」

え？嘘だろ？まさか戦って欲しいなんて言わないよな？

幽香「……………よければ戦ってもらえないかしら？」

ほら来たよ。戦えつつても、今の俺祢々切丸持ってないし！呪符も持っていないし！使えるのは詠春拳と魔術師の能力に憑霊だけなんだけど!?

シルヴィア「あつ、それ私も！」

シルヴィ、君だけは味方だと思っていたのに！

葉山「諦めた方がいいんじゃないか？多分どっちも聞かないと思うよ？」

八幡「……………そうだな。」

こうして俺たち（八幡2人）は、最愛の彼女により、勝負する事になってしまったのであった。

八幡VS八幡

八幡（六花） side

——博麗神社——

魔理沙「よし！ここなら問題無いんだぜ！」

幽香「魔理沙、貴女何処から出てきたのよ？」

魔理沙「細かい事は気にするな！妖怪の仕業って事にすればいいんだぜ！」

戸塚「そういう問題じゃないと思うんですけど……」

魔理沙「大丈夫だ！責任は霊夢がとる！」

八幡（六花）「……なあ、本当にいいのか？」

八幡（東方）「よくねえかもしれないが、まあいいんじゃないのか？」

八幡（六花）「俺、絶対に責任取らないからな。あの金髪に押し付けるからな？」

いきなりメイド服の女が現れて事態の説明をしたと思ったら、またもいきなりどつか神社に飛ばされてバトルスタンバイ………訳わからん。

幽香「審判は魔理沙、貴女がしなさい。ルールも任せるわ。」

魔理沙「がつてんだぜ！」

魔理沙「奴は幽香にそう言われると、俺たちのいるところまで歩いてきた。」

魔理沙「んじゃルール説明するからな。相手に攻撃を3回当てたらそいつの勝ち。技は何使ってもいいけど、即死するようなのは禁止な。責任とれねえし。」

八幡「当たり前だ。」

魔理沙「ダブル八幡からはなんか質問あるか？」

八幡（東方）（ダブル八幡って……センスの欠片もねえな。）

八幡（六花）「刀ってあるか？出来れば使いたいんだが。」

魔理沙「刀か……あつたつけなく。取り敢えず神社にあるか探してくる。」

八幡（いやいや、人の神社勝手に漁ったらダメだろ……）

雪乃「……随分気ままな人なのね。」

シルヴィア「あとが怖いね。」苦笑

魔理沙「あつたぞー！取り敢えずこれ使っとけ。」

八幡「おう。言っとくが、責任はとらないからな、俺。」

魔理沙「大丈夫だ！霊夢がとるから。」

魔理沙以外（霊夢（さん）、ごめんなさい。）

魔理沙「それじゃ始めていいぞ。」

八幡（（最初から最後まで本当にフリーダムな奴だな。））

八幡（東方）「再 現 リプロデューサー 【エリユシデータ】 【ダークリパルサー】」

あっちの俺は武器とか作れんのかよ……良いなあ。

八幡（東方）「ふっ！」

武器を手にしたと思ったら、すぐ俺に突進してきた。相手は二刀だからな。俺も対処を急がねえとな。

暫くは防御に専念するか。八咫鳥の目もあるからな。ある程度の攻撃なら対処出来る。

魔理沙「すげえ……八幡の攻撃を完全に凌ぎ切ってる。」

幽香「ええ……そっちの八幡、強いって言ってたけど、そのようね。」
シルヴィア「でしょう？そっちの八幡くんも今は剣だけでやっているけど、まだ何か隠してるみたいだね。でも、私の八幡くんは剣だけで勝てるほど甘くはないよ？」

結構受けたし、行動パターンも大体分かってきたな……。そろそろ攻めるか。

八幡（六花）「牙影^{がえい}」

八幡（東方）「っ!!」

あっちの俺は何とか凌げたようだが、一回食らったな。後2回だな。

八幡（東方）「そんな事出来るのかよ……なんか負けた感じた。」

八幡（六花）「いや、それは俺も思った。そっちの俺の能力も良いじゃねえか。」

八幡（東方）「そりや、ありがとよ！」

さつきよりも慎重にはなったものの、攻めの姿勢は変わらない。さつきの攻撃を警戒しているんだろうが、何度もホイホイやって引つかかるような奴じゃないからな。奴って言っても俺だけど。

八幡（東方）「再現せよリプロデューサー【月牙天衝】!!」

突然、大きくて赤黒い斬撃が俺の方に向かって来た。

八幡「ヤバっ!」

咄嗟に俺は地面に向けて斬撃を放ち、軌道をずらそうとした。だが、斬撃の勢いは止まらず、俺の方に直進してくる。

ギイイイン!!!

八幡（六花）「くっ! うおっ!」

鏑迫り合いの形にはなったが、あっちの威力が強い上に、俺も状態が不十分過ぎた。競り負けて一撃を食らってしまった。

八幡（六花）「……………鳶打っ!」

やられたらやり返す、何とか返しではないが、取り敢えずはやり返す。煙から出てくるわけだし、気づかれるだろうけどな。

八幡（東方）「っ!」

気づかれた上に、俺の刀を二刀で受け止めたか。でも、これはハツタリなんだな!。

八幡（六花）「燕落としっ！」

俺はすぐに相手の剣に俺の刀を滑らせるように動かし、上腕二頭筋辺りに一撃を喰らわせた。

八幡（東方）「ぐっ！」

鳶打が下半身なら、燕落としは上半身の機能を落とすだからな。
あつちは二刀だから効果はあるだろう。

それに、そろそろ終わらせるか。

俺は星辰力を練り、影をそこら一带に覆い、辺りを見えなくさせた。

葉山「これは一体!？」

戸塚「どういう事!? あっ！こっちからだ！と八幡たちが見えるんだ！」

陽乃「うわっ、真っ暗だね！なのに八幡くんたちは普通に見えるんだね。」

雪乃「こんな事も出来るなんて……凄いわね。」

幽香「……驚いたわ。それに八幡（東方）は見えているのかしら？」

シルヴィア「見えてないよ。私たちが見えてるのは八幡くんがそういう風にしてるからだよ。中の人には八幡くんの姿が見えてないよ。だから勘とかで受けるか避けるかするしかないね。」

魔理沙「き、規格外なんだぜ。」

八幡（六花）「堕ちし光のなき地は、闇夜の空の月光にて、地を照らす。」

八幡（東方）「っ！再現^{リプロ}ー」
八幡「遅い、影切・月下無双」

ズパツ！

八幡（東方）の身体の肩辺りから胸にかけて切り傷が出来ていた。
これで3回目、八幡（六花）の勝ちになった。

魔理沙「……………はっ！そ、そこまでなんだぜ！」

八幡（東方）「……………負けちまったのか。」

八幡（六花）「俺は勝っちまったな。だが、あの斬撃には驚いた。防
げなかったら間違いなく致命傷だな。」

これは嘘じゃない。それくらい強かったからな。

八幡（東方）「そうか……………少し気が楽になった。んじゃ、戻るか。」
八幡（六花）「そうだな。」

霊夢「ただいまって何これ!?神社が半壊してる!!?」

あつ……………神主帰ってきちゃった。

元いた世界へ

シルヴィア side

八幡くんたちの試合が終わって数分、霊夢さんっていう人が現れて
魔理沙さんに説教っぽいをしているところだった。

霊夢「それで魔理沙、何か弁明はあるのかしら？」

魔理沙「ただの仕返しだ。」

霊夢「私が何したっていうのよ!？」

魔理沙「お前、私のデザートにとっておいたプリン、食っただろ。」
霊夢「え？アレ？ちゃんと謝ったじゃない。許してくれたんじゃないの？」

魔理沙「その書き置きに『ごめん、食べちゃった♪テヘッ!』は何なんだ!?!あれで謝ってるつもりか!？」

霊夢「なんかもう……いっかなって。」

魔理沙「よくねえよ!もうちつと罪悪感つくれよ!なんでそんなに平常心保ててるんだよ!？」

霊夢「だって霊夢だし。」

魔理沙「そうか……じゃあ私も今からあんたのデザート食べて『食べちゃった♪ごめんなちー♪』って書き置き残してくるから待ってくれ。」

霊夢「待つて待つて!!さっき買ってきたばかりのあるんだからせめて今度にして!!」

魔理沙「良い情報が入りました。」ハイライトオフ

……嫉妬って怖いなあ。もしかして此処で八幡くんたちを戦わせた理由って、半壊させるのも理由に入ってるのかな？

魔理沙「行ってきます。」ハイライトオフ

霊夢「待つて待つて!!ごめん!謝るからあの子だけは!プリンだけは許してあげて下さい!!」

プリンに罪はないよ。それよりも、さつき買ってきたのってプリンなんだ……

魔理沙「なら、これでおあいこでいいな?」

霊夢「もう……それでいいです。(割に合っていないわよ)」

魔理沙「それでいい?何か不満でもあるのか?重くして欲しいのか?」

霊夢「いいえ!!このままをお願いします!!」

プリン1つで必死過ぎないかな?こっちではそんなに高価なものなのかな?

魔理沙「なら、これくらいで勘弁してやる。次は無いぞ?」

霊夢「はい……ありがとうございます。それと、そこにいるイケメン八幡と紫美人は誰?」

魔理沙「お前初対面の奴に失礼過ぎんだろ!?何だよ紫美人って!?せめて髪をつけろよ!」

八幡(六花)「…………アレだな。違う意味で息ピッタリだな。」

シルヴィア「私もそう思ったよ。」

テレビに出たら凄く売れそうな感じするよ。

そして、こっちの八幡くんと私の事を、魔理沙さんとあっちの八幡くんが説明してくれていた。

霊夢「なるほど…………うん、パラレルワールド的なアレのことね?」

八幡(東方)「お前、絶対半分以上理解してないだろ?」

さつきからずっとあーとかうーとか唸ってたからね。

葉山「それよりも、凄い戦いだったよ。それに、比企谷に勝ってしまうんだからね。二度ビックリだよ。」

八幡（六花）「俺も驚かされた。俺が食らった攻撃なんて、普通に放てるような威力の技じゃねえしな。」

戸塚「でも、本当に凄かったよ。僕には出来ないかな。」

雪乃「そうね。私もあそこまで出来る自信はないわ。改めて凄さを実感したわ。」

シルヴィア「そうだね。八幡くんとはまだ戦った事ないけど、八幡くんに一撃を入れられる自信はないかな。」

私から見ても八幡くんは、充分規格外な強さだしね。

陽乃「余韻に浸るのはいいんだけど、2人はいつ帰るの？もう大分時間経つてると思うけど？」

八幡（六花）「……………忘れてた。」

シルヴィア「わ、私も。」

紫「大丈夫よ。私が貴方たちを元にいた世界に返すから。今だと……………夕方辺りかしらね。」

ああ、なら大丈夫だね！

八幡（六花）「……………なら、もう帰った方がいいな。あまり遅くなってもアレだしな。」

シルヴィア「そうだね。少し名残惜しいけどそうしようか。」

陽乃「……………行っちゃうんだね。」

八幡（六花）「はい。」

戸塚「そっか……………あっちの僕とも仲良くしてあげてね！」

葉山「またいつか会えると良いな。比企谷もシルヴィアさんも。」

あつちの俺には夜露死苦殺っておいてくれ。」

八幡（六花）「……………なんかニユアンスが違くなかったか？」

雪乃「比企谷くん、リユースハイムさん。あつちの私にもあつちの葉山くんと同じくらい無迦夜苦してあげてちょうだい。」

……………本当になんかおかしくない？

八幡（六花）「……………一応了解した。」

シルヴィア「わ、分かったよ。」

魔理沙「八幡！今度はあたしと戦おうぜ！マジで勝負しなくなったから！！勿論シルヴィアともやってみたいぜ！」

霊夢「その時は此処以外でやってね？」

八幡（六花）「おう、いつかな。」

シルヴィア「その時はよろしくね！」

さて、そろそろかな。

幽香「八幡、シルヴィア。これ、持って行つて。」

幽香さんが持ってきたのは、綺麗に布に包まれた向日葵だった。

八幡（東方）「…………俺とゆう姉からだ。俺が育てた訳じゃねえけど。」

八幡（六花）「……………ありがとな、大事にする。俺もそうだが、そつちの俺も彼女泣かせるなよ。」

八幡（東方）「当たり前だ。絶対泣かせねえよ。」

幽香「シルヴィア、また会いましょう。その時はそつちの八幡の話
を聞かせて。」

シルヴィア「うん！じゃあそつちの八幡くんの話も聞かせてね？」
幽香「勿論よ。」

八幡・シルヴィア「じゃあな（ね〜!）」

そして私たちは、「スキマ」に入った。

八幡・シルヴィア「……やっぱり気持ち悪い。」

紫「最後の最後で雰囲気台無しにしないでよ!?!私が悪いみたいじゃない!?!」

八幡「そしてー」

八幡「俺たちは空から地上に落下していると。そういうわけですね、はい。」

シルヴィア「何もそういうわけじゃないよ八幡くん!?!早く何とかしてよ〜!」

八幡「あいよ。憑霊……夜宴・大闇鴉。」

そして八幡くんは私をお姫様抱っこしてくれた。そして目の前には夕焼けが私たちを照らしていた。

……そういえば、私八幡くんにお姫様抱っこされるのって初めて／／／／重くないかな？

シルヴィア「あ、ありがとう／／／／」

八幡「気にすんな。それよりなんで顔赤いんだ?」

シルヴィア「……私、重くない？」

八幡「全然。」

シルヴィア「そ、そっか……／＼／＼それとね、お姫様抱っこは初めてだったから、嬉しくて……えへへ／＼／」

八幡「そ、そうか／＼／」

空を飛んだまま動かずにいる私たち。楽しい時間は好きだけど、八幡くんと2人きりでいる時間はもっと好き。

八幡「……なあシルヴィ。これからも俺と一緒にいてくれるか？」

シルヴィア「どうしたの？急にそんな事言つて。」

八幡「いや、なんとなく。この夕日を見ていて思っちゃったんだ。」

……そんなの決まってるよ。

シルヴィア「貴方が私を信じ続ける限り、私は貴方を信じ続け、愛し続けます。」

シルヴィア「この言葉に嘘偽りなんてないよ。全部本心。私は君に冗談は言うけど、嘘なんてつかないから。」

八幡「……先にプロポーズされるなんてな。」

シルヴィア「八幡くんはあの夜にしてくれたでしょ？一生愛するつて。だから私も！君を一生……うん、永遠に愛し続けるよ！」

八幡「……キスしないか？シルヴィ。」

シルヴィア「……………うん。私もしたいって思ってた。」

そして2人は唇を合わせた。そして夕日も2人に合わせて沈んでいき、キスと同時に2人の口づけする姿は、夕日と共にシルエットとなって消えていった。

白髪赤眼の初デート

※約束の前日と頼み事

オフエリア side

……………こうして会うのは初めてね。オフエリア・ランドルーフエ
ンよ。今、私は自室にいるのだけど、明日の事で悩んでるわ。

……………実は私、部屋着や私服というものを持ってないの。パジャマ
なら持つてるのだけど、それ以外は制服が私服と言ってもいいくらい
無いわ。

……………だから明日、私服を着て行こうにも恥ずかしいから悩んでい
るわ。今から服を見に行くのもいいけど、私のセンスが良いのかどう
かも分からない。その状態で洋服を見に行っても、ただのおバカさん
にしか思われなと思うわ。

……………どうしたものかしら？

……………でも、これも八幡のおかげなのよね。私を……………自由にして
くれたのだから。

————時は遡り、3日前————

……………私は彼に呼ばれて生徒会室に向かっていた。私としても彼
に会うのが嫌なわけではないけど、八幡に会うなど言った人物の顔は
あまり見たくはない。

オフエリア「……………オフエリアよ。」コンコン
デイルク『入れ。』

相変わらず愛想の欠片もない低い声が聞こえた。

オーフェリア「……………それで、何かしら?」

デイルク「気に食わねえが、今日からお前は俺の物じゃなくなつた。」

……………え?どういう事?

オーフェリア「……………どういう事かしら?説明して頂戴。」

デイルク「テメエのお気に入り【夢幻月影】が鳳凰星武祭の願いにお前の解放を言いやがったんだよ。統合企業財体も関わってるとなるんじや、俺も手出しは出来ねえ。つくづく人をムカつかせるのが得意な野郎だ、あいつは。」

オーフェリア「……………じゃあ私は……………」

デイルク「あ?テメエは今日から【夢幻月影】のモンだよ。チツ! 奴の顔がチラついただけでもムカつくぜっ!」

……………私が……………八幡の物……………

————そして現代に戻る。————

……………あの日から私は、今日まで開放感溢れるような気持ちになっていた。【猫】の監視も消えて自分の好きな事が出来る。私はこんなに気持ちの良い感情は初めてだった。

……………それも束の間、今は明日の事で悩んでる。開放感が溢れ過ぎて明日の準備の事を忘れていたの。私、少し抜けてるのね。

オーフェリア「……………どうしようかしら?」

こんな時、頼れる人は……………八幡くらいだわ。【戦律の魔女】にはこんな事頼めないし、レヴオルフにはそんな人いない。いるけど、そん

なに親しくもない。

……八方塞がりじゃない。

……そうだわ。こんな時は彼から貰った花のアクセサリーでも鑑賞しようかしら。

……花？

……そうだわ、もう1人いたわ。私の頼れる人。でも、こんな事言つて引き受けて貰えるかしら？

でも、一か八かね。賭けてみるしかないわ。

p i p i p —

……早過ぎるわよ。

ユリス『オーフェアア!?!』

オーフェアア「………こんにちは、ユリス。1年ぶりかしら?」

ユリス『そんな事はいい!突然どうした!?!通信など入れて!?!』

オーフェアア「………私がこんな事言うのもおかしいのだけど、貴女にお願いしたいことがあるのだけど、ダメかしら?」

ユリス『な、何!?!す、少し待ってくれ!状況がよく分らん!説明してくれ!』

――説明中――

ユリス『成る程な、つまり明日その人物に会うとしても、私服がな
いから会うのが恥ずかしいという事だな？』

オーフェリア「……………ええ。」

改めて言われると、恥ずかしいわね。こんな理由で1年前に酷い事
をした人に頼み事をするなんて。

ユリス『だが、大丈夫なのか？私はいいが、お前の……………その…………』

ああ……………身体のことね。

オーフェリア「……………心配無いわ。その人のおかげで瘴気は漏れ出
ないし、花にだって触れられるの。だから平気よ。」

ユリス『つ!!……………そうか！それは良かった！ならば善は急げだ！早
速行くぞ！』

オーフェリア「……………いいの？私は貴女の事を『気にするな！お前
がそう思ってくれるだけでも嬉しいのだ！』……………」

ユリス『では早速見繕いに行くぞ！待ち合わせは何処にする？』

オーフェリア「……………商業エリア付近の広場の噴水でどうかしら？
あそこにはお花畑もあるから。」

ユリス『うむ！ではそうしよう！私はもう行く！早く来るのだぞ
！』

……………ユリスはそう言う通信を切ってしまった。でも、驚いた
わ。こんな私をあんなにもあつさりと許してしまうのだから。

オーフェリア「……………ありがとう、ユリス。」

そして私は、待ち合わせの場所に早歩きで向かった。

1年ぶりの再会とショッピング

オーフェリア side

……ユリスと連絡をしてから私も商業エリアの噴水近くまで来た。商業エリアは星導館寄りだから、きつともういるわね。

……っ！あの髪飾りがついたピンク色の髪、ユリスね。それに……やっぱりおシャレな服を着てるわね。あんな服を着こなせるなんて羨ましいわ。これ以上待たせるのも悪いから、早く行きましょうか。

オーフェリア「………お待たせユリス。それと、久しぶりね。」

ユリス「っ!!………オーフェリア。」

やっぱりこの反応よね。なんとなく予想は出来てたわ。

ユリス「……オーフェリア、本当に身体は平気なのか？辛くないのか？」

オーフェリア「………大丈夫よ。もう半年くらいはこの状態だから。問題なく過ごせてるし、寮に花も置いてるわ。」

ユリス「………そうか………良かった、本当に良かった。」

オーフェリア「………やめて頂戴。私は別に泣かせにきたわけじゃないのよ？」

ユリス「わ、分かっている！」

………やっぱりユリスは真面目なのね。私は一応冗談のつもりだったのだけど。

ユリス「んんっ！よしっ！行くぞオーフェリア！やるからには全力で取りかからねば！」

オーフェリア「………全力？服装選びはそんなに大変な事なのかし

ら？」

ユリス「女にとっては髪と同じくらい大事だと思うぞ？ 服装だけでもイメージは違ってくるからな。」

……初めて知ったわ。

オーフェリア「……………今の私の服装だと、絶対に良い風には見なれないわね。」

ユリス「まあレヴォルフの制服だからな。殆どの連中は良い顔をしないだろうな。」

オーフェリア「……………なら、ユリス。服装選び、手伝ってもらえるかしら？」

ユリス「このくらいお安い御用だ！」

——洋服店——

オーフェリア「……………因みに聞きたいのだけど、ユリスから見て私はどんな色の服が似合うと思うかしら？」

ユリス「ふむ、そうだな……………まずは白、黒は似合うだろうな。髪の色と見比べても相性は良さそうだからな。後は……………青系統も似合いそうだな。水色は少し違うかもしれないが、普通の青から濃い青は似合うと思うぞ。後はお前のイメージカラーの紫だな。」

……………色々あるのね。

ユリス「そうだな……………まずはこれとこれを着てみたらどうだ？ 無難な感じだと思うが。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

その後も色々試したのだけど、結局ユリスがアレンジしたのを試

着してみたのだけど、どうも印象とイメージが噛み合わず、1時間近く洋服とにらめっこをしている状態が続いているわ。

ユリス「むむうゝどうしたものか……」

オーフェリア「……………中々難しいのね、服装選びというのは。」

……………難しく考えるから上手くないのかしら？もう少し単純に考えて、手に取ったものでこれっというものを試してみようかしら？

――数分後――

ユリス「すまないオーフェリア、私の方にはめばしいものはなかった。そっちはどうだ？」

オーフェリア「……………取り敢えず良いと思えたのを見つけて来たわ。だからこれを着てみるわ。」

でもこんな格好、私に似合うかしら？
まあいいわ。まずは着てみましょう。

オーフェリア「……………お待たせユリス。こんな感じだけど、どうかしら？」

ユリス「……………」

……………ユリスは私から目を離さないまま、固まっているわ。そんなに変かしら？

……………私が選んできたのは、上下セットの服。上の方は黒主体のポロシャツに袖を通すところが白生地になっていて襟部分には赤主体の黒と緑のチェック柄、下はスカートでこれも襟部分と同じ色のチェック柄で、黒のニーソックスを履いた感じになっているわ。全体

的に黒ね。

ユリス「……………」

オーフェリア「……………ユリス、そろそろ感想を言ってもらえると嬉しいのだけど……………」

ユリス「……………オーフェリア、何故私に服装の相談をしたのだ？」

オーフェリア「……………え？」

ユリス「これでは私が来た意味がないではないか!?むしろ何故呼んだのだ!？」

オーフェリア「……………その……………つまり、どういう事かしら?似合っているのかしら?」

ユリス「私が着ている服よりも遥かに似合ってるではないか!」

……………比較がよく分からないのだけど、取り敢えずは合格点のようね。

ユリス「それにしろ!いや、それにするしかないと思え!」

オーフェリア「……………わ、分かったわ。」

……………キャラがブレているわ。

……………そして何故か分からないけど、服を脱ごうとした時に店員に止められて、そのまま写真を撮らされたわ。

……………何に使うのかしら?

——商業エリア・噴水付近——

オーフェリア「……………ユリス、今日は助かったわ。ありがとう。」

ユリス「気にするな。しかし、お前がここまでする程なのか?その恩人とやらは?」

オーフェリア「…………ええ。私にとって彼は必要不可欠な存在なの。この人生を歩んで行く上で。」

勿論【戦律の魔女】から奪うつもりは無いわ。八幡が彼女に絶対的な信頼を託しているのは、私でも分かるから。

ユリス「そうか……私も会ってみたいものだな。」

オーフェリア「…………案外会っていたかもしれないわよ？貴女が気づいていないだけで。」

ユリス「そうかもな。オーフェリア、服は揃えたが他は大丈夫か？バッグとかなら貸すが…………どうする？」

オーフェリア「…………大丈夫よ。そのくらいなら持つてるから。」

ユリス「そうか。じゃあ明日は楽しんでこい。では、またな！」

…………そう言ってユリスは行ってしまったけど、私の心は満足感で満ちていた。

——オーフェリアの寮室——

…………私は改めて今日買った服を寮で着てみた。改めて見ると、これまでの人生でこういう格好に無縁だったと心からそう思えるわね。

…………八幡、似合ってるって言ってくれるかしら？言ってくれたら嬉しいわ。

※説明は大事

八幡 side

八幡「シルヴィ、少し話があるんだが……今大丈夫か？」

シルヴィア「いいけど……どうしたの？何かあったの？」

八幡「まあ……そうとも言えるな。」

シルヴィア「……分かった。大丈夫だから話して。」

そして俺は、鳳凰星武祭で起きた3人の起こした事を話した。

シルヴィア「……そうだったんだ。裏でそんな事が……でも、何で私に言ってくれなかったの？」

八幡「言った方が良いつて最初は思った。言うつもりでもいた。だが、決勝当日に俺たちの関係を世間に見せるって言ったから、当然動く奴らは動く。その中にはマスコミも入ってるから、会場に入れば俺たちの事を聞かれるのは必定だろ？その圧つてのは結構なモンだろ？だから俺は余計なプレッシャーや、必要以上の負担をかけたくなかったから、言わなかった。」

シルヴィア「……」

これは紛れも無い本心だ。言わなかった事に後悔はない。

シルヴィア「……そこまで考えてくれてたのは嬉しいよ。でも、もっと早く言っただけよかったよ。こんなに先延ばしにする必要があったの？」

最もな疑問だな。

八幡「その事も説明する。」

そして俺は、オーフェリアが俺の頼みを聞いてくれるのに対しての条件の事を話した。

この事を話したら、流石のシルヴィも驚いていた。それもそうだな。人の彼氏を1日中独り占めするのだから。

八幡「……………っていうわけだ。俺もバカげてるって思ってる。だが、オーフェリアは俺の代わりにそこまでやってくれたんだ。俺に出来る事なら何でもやるって思ってたな、その時は。」

シルヴィア「……………その条件が、1日デートなんだね？」

八幡「それがそうなのは分かんが、オーフェリアはそう思ってるだろうな。」

シルヴィア「……………」

八幡「俺も彼女を持っていながら何やってんだって思ってる。お前の心を傷つけてるのも分かってる。」

八幡「だが俺はシルヴィだけだ！俺の中の1番はシルヴィだし、それはこの先ずっと変わらない。だから今回だけは、オーフェリアとの外出を認めてくれ……………頼む！」

シルヴィア「……………もう、そこまで真摯に頼まれたら断れないよ。」
八幡「っ！」

シルヴィア「うん、いいよ。オーフェリアさんならいいかな。」

八幡「……………ありがとう、シルヴィ。」

シルヴィア「いいよ。八幡くんが私の事1番って言ってくれたか

ら。それに、オーフェリアさんの気持ちもわかるよ。」

八幡「え？」

シルヴィア「もしそこに私が居たとしたら、殺すまではいいかないとしても、相当怒ってると思うし。」

シルヴィア「オーフェリアさんが私の代わりに怒ってくれたから、そのご褒美に八幡くんを1日貸してあげることにするよ。」

この時、俺は思った。

あの場所にいたのが、オーフェリアで本当に良かったと。

初のお出かけ（デート）

八幡 side

オーフェリアとの約束当日、俺は今待ち合わせ場所の花畑にいる。此処はオーフェリアと最初にあつた場所でもあり、俺たちの出会いの場と言つてもいいだろう。

因みに俺は30分前にいる。シルヴィ曰く『女の子を待たせたらダメだよっ!』らしい。なんだかんだ言つときながら、こういうところは乙女なんだろう。

今日の俺は変装している。変装といつても、八代界人の姿ではない。俺の面影は少しだけ残しておいて、髪を少しだけ伸ばし、縛っている。いわばそっくりさんのような感じにしている。オーフェリアにもその事は事前に話してあるし、写真も送つてある。写真はわざわざシルヴィが撮つてくれた。

八幡「…………そろそろ5分前か。にしても、人が多くなってきたな。」

此処は一応デートスポットでもあつた。花畑だからその辺は当然だろう。

だが、こんなに集まるか？

オーフェリア「…………ごめんなさい八幡、待ったかしら？」

後ろからオーフェリアの声が聞こえた。どうやらオーフェリアは時間丁度に来るタイプみたいだ。

八幡「いや、気にするな。俺も今来た……」

目の前にいたのはオーフェリアなのだが、格好が俺の想像を遥かに超えていた。

オーフェリアの半袖なんて初めて見るが、それ以前に見惚れている。いつも制服姿しか見ていないからだろうか、私服の彼女は新鮮だった。黒でコーディネートされている服装だが、何処か清純さを感じる。そしてオーフェリアは後ろで縛ってある髪を今日は下ろしていた。いつもつけている黒い角のようなものもつけておらず、代わりに前髪の方に紫の花の髪飾りをつけていた。

俺の知っているオーフェリアとは、全くの別人だった。

オーフェリア「……………そんなに見つめられたら恥ずかしいわ八幡／＼」

八幡「え？あつ……………すまない。いつものお前と違い過ぎて、つい……………な。」

オーフェリア「……………似合ってるかしら？私、昨日この服を買ってみたのだけど……………」

八幡「昨日買ったのか……………お前服のセンス良すぎだろ。俺なんてそういうファッションセンス皆無だからな。」

オーフェリア「……………私が見る限り、そうには見えないけれど？」

八幡「今はな。けど昔はそういうのどうでもよかったからな。」

なんせ今着てる服みたいにオシャレなんてした事なかったしな。

今俺が着ている服装は、グレーのズボンに黒のシャツ、その上に白の長袖ブラウス。首には一応自分で作った黒が真ん中に1つ白が左右に1つずつの玉が入った首飾りをしている。

これでも少しは良いと思ってる。

八幡「……………にしても、本当に印象が変わるな。ここまで雰囲気は違

うとは……」

オーフェリア「……………変えない方がよかったかしら?」

八幡「んなわけないだろ。こっちの方が良い。」

オーフェリア「……………それは今の私の方が……………その、可愛い、という事かしら?」

八幡「ま、まあな。そりやそうだろ。その服似合い過ぎてるしな。」

オーフェリア「……………そ、そう／＼／」

実際、似合い過ぎてるくらいじゃ収まらん。オーフェリアの為に作られたって感じもする。

……………はっ! いやいやダメだ! 俺にはシルヴィがいる! 確かに今日はオーフェリアと出かける事を許してはもらえたが、俺の心の中はシルヴィだけだ!

八幡「取り敢えず行くか。何処か行きたい場所はないのか?」

オーフェリア「……………一度行つてみたい場所があるの。そこに行つてもいいかしら?」

八幡「ああ、構わない。」

オーフェリア「……………手を繋いでもいいかしら?」

八幡「……………え?」

オーフェリア「……………手を繋いでは駄目かしら? 少しやってみたいわ。」

八幡「お、おお。大丈夫だ。」スツ

まあ手を差し伸べるくらいならいいよな。後はオーフェリアが繋

ぐだけだ。

キュツ

緊張していたのか、繋ぐのに10秒くらい時間を使ったが、問題なく手を繋げた。

オーフェリア「……………なんだか気恥ずかしいわね。でも、安心するわ。」

八幡「……………そうか。」

そして俺たちは話をしながら、オーフェリアの行きたかった場所へと赴くのだった。

——フラワーハウス——

八幡「此処か？……………花でアクセサリや衣類、バッグ、ヒールとかに飾り付けを専門にする店か。それに花の鑑賞も出来るのか。」

オーフェリア「……………少し街を歩いていたら気になったの。だから今日は此処に行こうって決めていたのよ。」

オーフェリアなら行きたいところだよな。花好きだし、その花を使った物が作れるんだからな。普通の人だと分からんだろうが、今のオーフェリア、メチャメチャ輝いてます。目だけではなく身体も。

オーフェリア「……………此処に入ってもいいかしら？（八幡、早く入りましょう？）」

八幡「来たかったんだろ？俺にも断る理由なんてないから早く入るぞ。」

それと、本音と建て前が物凄いですよ？聞いているのに心では確定になってるからね？

店員「いらつしやいませ。」

オーフェリア「……………」キラキラ

……………輝きが増した。

オーフェリア「……………」季節に合った花が沢山あるわ。それに、この密室の中で春夏秋冬の環境に合った育て方をしてる。」

え？そこまで分かるの？

オーフェリア「……………」花たちも喜んでるわ。ここの店員さんたちはとても良い仕事をしているのね。」

店員「ありがとうございます。当店では四季毎に咲く花を1つの環境に合わせる事で咲かせる事を可能にしています。例えば、春はこのエリアですが、春から夏にかけてはこのエリア。という風に季節やその移り変わりなどにも合わせています。我々スタッフ一同も水やりや光合成、花に合わせた肥料などを与えていますので、当店の花たちは寿命が来ない限りは枯れないようにするのを心掛けています。」

だからこの店は、今ここにいる時でも少し涼しいって感じるのか。上に行ったら寒いのかもな。だって冬の設定だしな。

オーフェリア「……………」凄いわ。どの花たちも喜んでる。私が見る限り、不満を持つて花はいなかったわ。それに環境の厳しい冬に咲く花も、あんなに力強く咲いてる。本当に良い仕事をしているわ。私に

は分かるもの。この仕事は根気だけでやっていけるようなところではないわ。こんなにも元気な花は初めて見たもの。」

店員「ふふふつ、彼女さんお花に夢中ですね。余程お花が好きなんですわね。」

八幡「ええ、無類の。」

でもこの人、オーフェリアの事知らないのか？平然と話してるが……

八幡「あの、聞いてもいいですか？」

店員「はい？」

八幡「こいつの事、どれくらい知ってます？なんか、あまり反応がなかったので、少し驚いて。」

店員「え？有名人でしたか？」

あつ、この人アレだ。星武祭見てない人だ。まあ仕事柄仕方ないのかもな。

八幡「いえ、ただ聞いてみただけですよ。他意はありません。」

店員「？分かりました。」

有名どころか、この六花では知らない人って貴方くらいですよ。多分……ではなく絶対。

手作り教室とお花の魅力

八幡 side

オーフェアアが花を見て回って、かれこれ30分くらい経っていた。俺としても眺めているのは飽きないが、何もせずにいると少しな

……

店員「あのく彼氏さん。」

八幡「……え、俺ですか？」

店員「はい。もし、彼女さんを待っているようでしたら、お花で装飾品を創作してプレゼントされては如何でしょう？」

創作？……そういやこの店はそういうサービスもあつたな。オーフェアアも花鑑賞に夢中になってるから、サプライズ的には良いかもな。

八幡「じゃあ、やってみてもいいですか？」

店員「はい是非！彼女さんも喜ぶと思います！では、彼女さんに見つからないうちにこちらへどうぞ！」

別に見つかっちゃいけないことはないだろう……まあ気持ちは分かるけど。

その頃、オーフェアアは……

オーフェアア「……素敵なところ。こんなにも花が輝かしく咲き誇っているのは初めて見たわ。夏の花たちも暑さに負けず、可憐に咲いてるわ。」

春の花に30分の鑑賞時間を使い、今度は夏に咲く花の方に夢中だった。まだまだ時間がかかりそうである。

――創作教室――

店員「では、これからお花を使って創作をしていききたいと思います。彼氏さん、何かこれという題材はありますか？」

八幡「……………髪留めか首飾りですかね。」

店員「なるほど……………彼女さん髪長いですからね。束ねる時も多々ありますよね。首飾りの方もいいチョイスですね。」

八幡「はあ……………」

店員「では、それに使うお花ですが……………失礼ながら、彼氏さんはお花の知識がありますか？」

八幡「あいつが花好きなので、それなりには知ってます。だから自分の誕生花を使いたいと思ってます。もう1つの方は、似合いそうなのを選びます。」

まさかオーフェアに花言葉の事でからかわれた知識がここで役立つとはな。

店員「流石彼氏さんですね！ならあまり心配は要りませんね！じゃあ、最初はどちらから作ります？私的には首飾りがオススメですよ。簡単な方なので。」

八幡「じゃあそれからお願いします。誕生日の花もそれに使う予定だったので。」

店員「分かりました！では、早速作っていきましょう！」

……………この人、ヤケにテンション高いな。

――30分後――

八幡「……出来ました。こんな感じになりましたけど、どうですか？」

店員「……………彼氏さんって、手先器用なんですね。」

八幡「はい？まあ……………割と細かい作業は得意な方なので。」

バトルでも同じだ。大技を使う時は、その中により細かい技術が必要になってくるからな。

店員「まさかこれ程完成度が高いとは……………何だか負けた気分です。」

いや、それはないから。プロには勝てないから。

店員「で、では気を取り直して……………お次は髪留めですね。お花の方ですが……………何か希望はありますか？」

それなんだよな……………どうするか……

店員「……………あつ！言い忘れてました！この創作教室ですけど、何もお花をそのまま使うだけでなく、お花の色素を使って結晶化する事も出来るんですよ！専用の機械がありまして、それにお花を入れると、形に合わせた結晶が出てくるんです！凄いですよね！」

八幡「……………それって最初の段階で言う奴ですよ？」

店員「……………さ、さくて！張り切って作っていきましょーか！」

あつ！逃げやがった！

その頃、オーフェアは……

オーフェア「……………この花、ヒスイカズラだわ。こんなに珍しい花まであるなんて……………この状態を維持するだけでも困難なのに……………このお花屋さん、本当に凄いわ。」

世界でも一部の地域にしか咲かない珍しい花を目の当たりにして、改めてこの店の凄さを知ったオーフェアだった。

——さらに30分後——

八幡「……………出来ました。思いの外スムーズに出来ました。どうですか?」

店員「……………彼氏さん、ウチで働きませんか?教室の先生になってくれませんか?私の完敗です、先生の席をお譲りします。」

……………いや、何言ってるの?

八幡「それはお断りします。それで、どうですか?出来の方は?自分的にはまあいいんじゃないかって思ってるんですけど。」

店員「これでまあいいなら、私の作った作品って何なんですか?」

八幡「いや、そんな事言われなくても……………」

店員「……………私はとんでもない才能の持ち主を見つけてしまったようですね。」

八幡「才能も何も、手先が器用なだけです。」

まあそれは置いといて、取り敢えずは出来たな。

んじや、戻るか。

店員「……………本当に先生としてどうです？」

八幡「いえ、結構です。」

先生っぽいのは、もう間に合ってるんで。

さて、戻って来たはいいが、オーフェリアは何処だ？まだ見てるのか？

それならもうかれこれ2時間は見てる事になるぞ？

オーフェリア「……………この花も冬の季節でも問題なさそうね。リーゼルタニアの孤児院にお土産として持って行っても大丈夫ね。」

……………故郷のお土産に花を選んでるのか。オーフェリアも郷帰りするのか？あんまりそんなイメージ無かったが……

八幡「オーフェリア、どうだ？楽しんでるか？」

オーフェリア「っ！八幡……………ごめんなさい、凄く夢中になって忘れてたわ。」

夢中になるくらい花が好きなんだな。俺としては別に構わないが、そろそろ昼だからな。

それと店員さん、そんなキラキラした目で俺を見ないで下さい。それと安心して下さい。此処では渡さないのです。

八幡「気にするな。後、そろそろ昼になる。キリの良いところで食にしないか？食べ終わったらまた来ればいい。」

オーフェリア「……………そうね。じゃあもう少し見ていいかしら？」
八幡「おう。」

そしてオーフェリアも区切りがついたのか、正面の方に戻って来て、店を出た。俺も割と気に入った店だから、また来てみようと思う。それと、店員さん。そんな露骨に残念そうな顔するのはやめて下さい。流石にあのムードでは渡しません、俺はもっと場所を選ぶ方です。

違い過ぎる私

オフエリア side

………本当にお昼近くなっていたのね。全く気がつかなかったわ。楽しい事に夢中になってると、時が経つのが早いわね。

………昼食を摂るにしても、私が知ってるお店は無いわね。外食なんてしないから。

オフエリア「………八幡、何処かオススメはあるの？」

八幡「俺は何処でも良いが、この前行ったステーキ屋にしようと思ってる。お前も好きだろ？」

………そうだったわ。確か私が偶々八幡を見つけて、一緒に夕食をしたお店があったわね。あんな事があったのに忘れていたなんて……

オフエリア「………ええ、そこにしましょう。」

八幡「よし、んじや行くか。」

—————

八幡「此処に来たのも半年くらい前になったんだな。早いもんだ。」

オフエリア「………何だか年寄りみたいだわ。」

八幡「うっせ、余計なお世話だ。それよりも中入るぞ。」

そして私は八幡の後ろについて行き、お店の中に入った。

店員「いらっしやいませ。2名様でよろしいでしょうか？」

八幡「はい。」

店員「喫煙席、禁煙席がございますが、どちらに致しますか？」

八幡「禁煙席で。」

店員「かしこまりました。ではお席へご案内します。」

……この店員、八幡がタバコを吸うとも思ってるのかしら？

店員「こちらになります。こちらがメニューになりますので、お決まりになりましたら申しつけ下さい。失礼致します。」

……何にしようかしら……この前はステーキだったけど、ハンバーグも美味しそうよね。基本この2つだけど、ソースの種類が多いのが楽しめるところね。

八幡「俺は……前と同じでステーキだな。今回は和風ソースでいくか。オーフエリアは決まったか？」

オーフエリア「……私もステーキよ。ソースはデミグラスにするわ。」

八幡「決まったな。呼び鈴押すが、他に何かあるか？」

オーフエリア「……大丈夫よ。」

八幡「分かった。」

……八幡が注文をしてくれたから、私は少しホッとしたわ。あまりこういうのは得意じゃないから。

……そういえば、私を解放してくれた事のお礼をまだ言っていなかったわ。ちよいどいいから今しておいたほうがいいわね。

オーフエリア「……八幡。」

八幡「ん？」

オーフエリア「……彼（豚）から聞いたわ。星武祭の願いで私を彼（豚）から解放してくれたって。貴方のおかげで私は自由になれたわ。本当にありがとう。」

八幡「ああ、それか。気にするな。元々願いがなかったからちやうど良かったんだ。あの野郎の不機嫌に不機嫌を重ね掛けした顔は傑作だった。」

……私も見えてみたかったわ。

八幡「それで、どうだ？思う存分『今』って時を満喫出来てるか？」
オーフェリア「……ええ、今日が良い例ね。まだ始まったばかりなのに、こんなに楽しいのは初めてだわ。」

八幡「そりやよかった。」

……私にとつての『日常』が『非日常』になつていく。それがとても嬉しい。

オーフェリア「……それと八幡。貴方の事を否定するわけではないけど、自分に対する願いはなかったの？」

八幡「全く思いつかなかったな。考えてはみたんだが、どれも何とかすりや叶いそうなもんばかったからな。」

オーフェリア「……貴方の持つている煌式武装を自分の所有物にするとかは？貴方の持つている刀は純星煌式武装なのでしょ？」

八幡「【祢々切丸】の事か？確かにあれは純星煌式武装だが、俺以外にも適合する奴はそのうち出てくんだろ。だが難しいだろうな。あいつ自体軽い奴だが、自分の力を振るう奴となると、容赦無くなる。今までもかなりいたらしいぞ、【祢々切丸】の力で廃人になった奴。」
八幡「俺は認めてもらえたから問題なく力を振るえるが、認めてもらえる奴はそうそう現れないだろうな。」

オーフェリア「……気難しいのかしら？」

八幡「いや。さつきも言ったが、基本的には軽い奴だ。」

……何だかよく分からない純星煌式武装ね。その分危険性も高いみたいだけど。未適合の場合、廃人になるのがいい例ね。

八幡「天霧の【黒^{セル}炉^{ベレス}の魔剣】やイレエネの【霸^{グラ}潰^{ヴィ}の血鎌^{シーズ}】に比べると極端なのは間違いないな。気に入らない奴だと壊す。かなりのパワー思考だが、間違ってもいけないからな。」

……でも、凄いわね。八幡は魔術師なのに純星煌式武装を使えるなんて。本来なら私たち能力者は純星煌式武装に嫌われるはずなのに。

八幡「まあ今日はそんな話は無しにしよう。楽しむために出掛けたのに、こんな重苦しい話なんて俺はしたくない。」

……そうね。今日は【戦律の魔女】から八幡を借りられたんだもの、今日という日を大事にしてくちやダメね。

店員「お待ちせ致しました。」

……ちょうど来たみたいだし、食事でもしながら楽しく会話しましょう。

八幡とオーフェリアは、食事をしながら花の話、料理の話などをして盛り上がっていた。お互いのステークを交換し合い、周りからは仲の良いカップルにしか見えていなかった。（その中にはオーフェリアだと知って震え上がっていた人もチラホラと。）

さらには、八幡の料理を食べてみたいと言ったオーフェリアに、料理を振るうと約束した八幡だった。

店員「ありがとうございました。」

—————

オーフェリア「……………前と同じで美味しかったわ。時間を気にせず食べられるって良いわね。それに八幡と話しながら食事出来たから、とても楽しかったわ。」

八幡「そうか、俺も楽しかったぞ。あんな風に話すオーフェリアは初めて見た。姿といい仕草といい、俺の知らんオーフェリアばっかだ。」

……………私もあんな風に話す事が出来たなんて思っても見なかったわ。

八幡「さて、じゃあどうする？さっきの花屋に戻るか？」

オーフェリア「……………いいのかしら？」

八幡「構わないぞ。今度は夢中になり過ぎて閉店になるまで見ていそうだけだな。」

オーフェリア「……………なるべく時間を忘れないように努力するわ。」

……………仕方ないじゃない。貴方のおかげで花には触れられても、あいうお店は入りづらかったんだもの。

今度は2人で

八幡 side

おつ、見えてきたな。ここからだ普通の店にしか見えないのに、中に入ったらスゲー花が咲いてんだから驚きだよな。

……そうだ。オーフェリアには作ったが、シルヴィにも何か作ってやらないとな。多分拗ねてるだろうし。

……にしても、

オーフェリア「……………」キラキラ

店に近くなってくると、輝きが半端ないな。特に目の輝きが凄すぎる。

……フラワーハウス……

店員「いらつしやいませ……っ！」

あっ……気づいたな。

八幡「オーフェリア、好きに見てこい。俺は少ししてからお前に合流するから。」

オーフェリア「……………何処かに行くの？」

八幡「いや？隣にある創作教室で何か作ろうと思ってな。」

オーフェリア「……………そういえばそういうサービスもあったのを忘れていたわ。八幡、私も行っていいかしら？」

八幡「ん？ああ、構わん。」

店員「では、ご案内致します。どうぞこちらへ。」

店員さんも気を遣ってくれたのか、俺がさつき創作に入った事を言わなかった。

――創作教室――

店員「それでは、これからフラワーアートを始めます。お二人様はお作りになる物はお決まりですか？」

八幡「俺は決まっています。オーフェリアは何にするんだ？」

オーフェリア「……………何にしようかしら？このバッグにでもつけようかしら。」

店員「では、題材とするお花を選んで下さい。」

八幡「俺は菊に決めてる。」

オーフェリア「……………八幡、随分と準備が良いのね。」

八幡「ある程度は予想してたからな。花くらいは事前に決めてた。」

まあ、さつきやってたから手順が分かっているだけなんだけどな。

オーフェリア「……………そう、私は何にしようかしら？」

八幡「そのバッグに映える色にしたらどうだ？例えばバッグは白だから、黒の花にするとか。」

オーフェリア「……………八幡。貴方は簡単に言うけれど、黒い花を作るのはとても難しいのよ？このお店を見て回ったけど、黒い花は無かったわ。」

お、覚えてんの？

八幡「……………全地域かつ季節毎に違うのに、黒い花が無い事も覚えてるのか？」

オーフェリア「……………それくらい普通よ。」

普通じゃねえよ。よつぽどの花好きじゃねえと無理だ。

オーフェリア「……………だから、黒い花を使うのは無理よ。このお店にないのだから。」

店員「いえ、ございますよ。」

2人「……………え？」

え？どゆこと？What？

店員「確かに黒い花は貴重なので、店先には置いたり、商品としては扱ってはおりませんが、こういった創作で使用するのであれば特別に許可を出してるんです。ただ、これに気づいた人は今までにあまりいないので、お2人はとても運が良いと思います。どうです？黒いお花、ご使用になりますか？」

オーフェリア「……………因みに何があるの？見ても良いのかしら？」
キラキラ

……………マジか、さつきよりも目輝いてんじゃん。

店員「見ても問題はありません。後、こちらで取り扱っているのは、バラ、シュワルツワルダー、黒百合、コスモス、オパール、チューリップ、クリスマスローズ、ネモフィラ、ペチュニア、ダイアンサスの10種の花でございます。」

……結構あるんだな。

オフエリア「……見て決めたのだけど、ダメかしら？」

店員「大丈夫ですよ。ではご案内しますね。彼氏さんは作業をしてても大丈夫ですよ。」パチツ

ウインクをするな。

まあいい、始めるか。

――20分後――

八幡「……まあこんなもんだな。後はここに――」

――40分後――

八幡「……はあ、終わった。やっぱり細かい作業ってのは神経使うな。すげえ疲れた……ていうか、遅くね？」

――1時間後――

八幡「……やっぱり夢中になってんだろうな。黒の花だからな。」

オフエリア「……お待たせ八幡、やっと決まったわ。」

八幡「……で、本当は？」

オフエリア「……本当に黒い花があったから、全部に見惚れてたわ／＼」

やっぱりじゃねえか。

心なしかあの店員さん、少しゲツソリしてない？

店員「まさか、あんなに夢中になるなんて……しかも凄く純粋な目で見てたから声なんてかけられなかった。なんて子なの！」

うん、それすごい分かる。この子ね、1度夢中になると本当に一心不乱なの。目の前の事しか頭になくなっちゃうの。

八幡「それで、何にしたんだ？」

オーフエリア「……クリスマスローズよ。花言葉は関係なしに選んだの。花自体が上品だし、毒抜きされているみたいだから。」

毒なんてあるのか、しかもそれが抜かれてるって事は、今のオーフエリアみたいなものか。

オーフエリア「……じゃあ始めるわね。」

――10分後――

オーフエリア「……なんとか出来たわ。良い感じね。」

店員「彼女さん、お上手ですね。」

八幡「器用なのは初めて知りました。」

店員（もう何なんですか!? 彼氏さんといい彼女さんといい、普通に上手過ぎるじゃないですか!? 器用? そんなレベルじゃないですよ!!）

八幡「よし。作り終わった事だし、会計済ませてから花を見に行こうぜ。」

オーフエリア「……そうね、そうしましょう。」

その後は午前とは違い、2人で花を見ながら回った。その時見た
オーフェアは、やはりいつもの雰囲気とはかけ離れていて、心から
楽しんでいるように見えた。

この日と貴方に感謝

八幡 side

あの花屋は正解だったな。世界中の色々な花があって、珍しい花もある。それに手作り教室もやってたからな。オーフェリアが行ってみたいと言っていた店はマジで当たりだったな。

俺たちは今、あの店から出て落ち着いた雰囲気のレストランでゆっくりしていた。花を見るといっても、立ちっぱなししていると疲れてくるのが普通だからな。

オーフェリア「……………そういえば八幡はあの創作教室で何を作ったのかしら？」

八幡「あー……………少し言えないな。」

オーフェリア「……………何故？」

八幡「画面の向こうの皆さんが目を皿にして見てるから。」

オーフェリア「……………？」

うん、君はそれでいいの。純粹なままがいいの。裏事情やメタいは気にしないでいいの。

八幡「とにかく言えないんだ、すまんな。」

オーフェリア「……………いえ、別に無理して聞こうだなんて思っていないわ。ただ気になったただけだから、気にしないで。」

ホントこの子良い子だわ。

八幡「そういうお前は花買ってたけど、さっき言ってた故郷にお土産か？」

オーフェリア「……………ええ。リーゼルトニアには帰る事はあるけ

ど、私が育った孤児院には行きたくても行けなかったの。」

八幡「どうし……いや、愚問だな。」

そうだな。オーフェリアは自分の身体から出る瘴気を抑える事が出来なかったんだっただな。

オーフェリア「……………そういう事よ。でも、今回は帰れそうなの。貴方のおかげで。」

八幡「それは……………良かったな。」

オーフェリア「……………ええ。貴方が私に力を抑え込む力の宿ったアクセサリーをくれて、彼から私を解放してくれた。感謝の言葉しか出てこないわ。」

八幡「や、やめてくれ。お礼ならさつき受け取った。」

オーフェリア「……………そうね。でも、このお礼は両方を合わせたお礼よ。」

くっ……………言葉では勝てそうにないな。

オーフェリア「……………それに、本来ならこうする事も出来ない立場にあったのよ。今までの私は。」

……………【悪辣の王】の所有物って事になってたからな。無理もない。

オーフェリア「……………でも、今はこうして自由になれたわ。貴方のおかげよ。それに、私が必要になったら、遠慮なく連絡して頂戴。自由になったと言っても、実質的には貴方の所有物なのだから。」

八幡「いや、まあそうなんだろうが……………俺は別にそんな気更々ないからな？お前の自由にしたらいい。束縛なんてしねえよ。」

オーフェリア「……………ありがとう。」

そしてケーキを一口……………おっ、美味しい。

――5時少し前――

そろそろ時間になるな。あれからお互いの服を見繕ったり、雑貨屋に行ったりして楽しんだ。シルヴィとデートする時もこんな感じだが、今回はオーフェリアだったから、違う視点で楽しめたな。

オーフェリア「……………八幡、今日は本当にありがとう。とても楽しかったわ。」

八幡「気にするな、俺も楽しかった。」

オーフェリア「……………そう言ってくれると嬉しいわ。それじゃあ、此処までいいわ。」

八幡「いいのか？まだもう少し先なんだろう？」

オーフェリア「……………ええ、1人で余韻を楽しみたいもの。」

八幡「そうか……………なら、最後に俺から贈り物だ。」

そして俺は、午前中に花屋で作った首飾りと髪留めを取り出した。

オーフェリア「……………それは？」

八幡「この2つは、お前が花を見てるのに夢中になってる時に偶々店員さんに声掛けられてな、その間に作ったんだ。アザレアで作った首飾りに紫チューリップを丸の形に結晶化した髪留めだ。2つとも、俺的には良い出来だと思ってるんだが、受け取ってくれるか？」

オーフェリア「……………」

一応手には持ってくれたが、まだ分からんな。

するとオーフェリアは、首飾りを首につけ、髪留めをいつも結んでいる位置で結んでいた。

オーフェリア「……………ど、どうかしら？」

八幡「……………ああ、よく似合ってる。」

嘘なんてついてない。赤色のアザレアは黒い服の上からでも分かるくらい鮮やかだし、正面からでは分からないが、横から髪を結んだところを見ると、紫色の丸い玉が白い髪の中で輝いて見えた。

八幡「それで、受け取ってくれるのか？オーフェリア。」

オーフェリア「……………勿論よ、八幡。すごく嬉しいわ。」

……………はあゝ良かった！

オーフェリア「……………でも、私からは何も用意してないわ。」

八幡「気にするなつて。俺がしたかったからしたんだ。お前の解放祝いだと思ってくれ。」

オーフェリア「……………ええ。」

よし、んじや帰りますか。家には姫が待つてるこ「……………八幡。」と……………ん？

八幡「どうした？オーフェ……………」チュッ

オーフェリアが呼んだから振り返ろうとしたら、俺の右頬に柔らかい物体が触れた。そして横を見ると、至近距離にオーフェリアの顔があった。

え？これってまさか…………

オーフェリア「…………私なりのお礼よ／／これくらいしか思いつかなかったから…………／／」

オーフェリア「…………唇じゃないから、まだセーフよね？」

……………キスだった。

しかもオーフェリア自身も頬を赤く染めながらしたもんだから、余計に可愛く見えた。

オーフェリア「…………ダメだった…………かしら？八幡。」シユン

八幡「え？いや、そんな事は、ない。」

オーフェリア「っ！良かったわ。」ペア！

落ち込んだと思ったら、俺が大丈夫だと言った途端、今度は分かりやすいくらい喜びの表情が出ていた。

オーフェリア「…………じゃあ、私はもう行くわね。八幡、今日は本当にありがとう。」

そしてオーフェリアは反対方向に向き、静かに歩き出した。

だが、少しして立ち止まった。

オーフェリア「…………八幡。」

八幡「お、おう、どうした？」

オーフェリア「…………私、また貴方と出掛けたいわ。【戦律の魔女】の関係は分かっているけど、それでも私は貴方とこんなひと時を過ごしたいわ。」

オーフェリア「…………機会が出来たら、またお出かけしましょう。」
ニコッ

八幡「っ!!」

オーフェリア「…………それじゃ、また今度会いましょう。」

そして今度は立ち止まる事も振り返る事もなく、行ってしまった。

俺はこの時思った。

さっき見たオーフェリアの笑顔ほど、今までで一番幸せそうな彼女は絶対にいないと。

恋の記者会見編

一時帰宅

八幡 side

俺は久し振りに界龍にある寮へと帰っていた。自身の部屋に帰って来たのは、3週間ぶりの事だからか、俺自身も少し懐かしみを感じていた。

八幡「この道も《鳳凰星武祭》から通ってなかったから、懐かしいな。……部屋に誰もいないよな？ いたら流石に嫌なんだが……まあ大丈夫だよな。」

流石に居座るバカはいないよな。

俺は扉に手をかけてノブを回しながら後ろに引いた。

八幡「ただいま。」

星露「おお！ 漸く帰ってきておったか！ さあ八幡！ 妾に青椒肉絲を作るのじゃ！」

セシリー「師父ずるゝい！八幡、あたしにも何か作ってー。」

……やっちまったよ、フラグ建ててたわ。よもやこの2人がいるとは。

しかも勝手に菓子食ってやがる。

八幡「お前らなあ……人の部屋に勝手に入り込んで無断で菓子食ってる挙句に、飯を作れだあ？」

星露「良いではないか！妾と八幡の仲ではないか！」

セシリー「そうだよー。八幡、細かい事は気にしない方がいいよー。」

こいつら……もうダメだな。

スパアーン！つとでも鳴ってもおかしくないような勢いで八幡は2人にハリセンをお見舞いした。

星露「い、痛いではないか八幡!!何をするのじゃ!!」

セシリー「暴力反対だぞー！こんな乙女を傷つけてー!!」

八幡「やかましい！お前らこれで何度目だ!?もう30は軽く超えるからな！毎回言ってるだろうが！勝手に入るなって！」

星露「仕方ないではないか！お主の部屋は居心地が良いんじゃ！」

八幡「そんな理由で勝手に入ってんじゃねえよ!!」

なんか俺、キャラおかしくね？

セシリー「何でさー！別に良いでしょー！エロ本でも隠してるわけじゃないんですよ？」

八幡「お前さ、もし俺でも俺じゃない男でもいいから、勝手に部屋

入られたらどうよ？君にこの気持ち分かるかい？」

セシリ「あたしは八幡だったら別に良いけどー？他はダメだけどねー。」

こいつの神経図太過ぎんだろ。俺だけに関してはオープン過ぎんだろ。

八幡「とにかく勝手に入るな。まさかとは思うが、他にいないだろうな？」

星露「妾たち以外はおらぬ。気配も感じぬしのう。」

八幡「冷蔵庫の中身は漁ってねーだろうな？だとしたら、お前らに3ヶ月は飯作ってやらねえからな。」

星露「幾ら妾でもそんな事はせん!!お主の飯が食えなくなるのは死活問題じゃー!」

セシリ「師父に誓っても漁ってないから大丈夫だよー!!」

食堂の飯があるから死活問題ではねえだろ。後、菓子食っておいて何が漁ってねえだ。

八幡「はあ……もういい。」

こいつら、ホント疲れる。

もう道場に行こ。

――八天門場――

八幡「……おお、やってんなー。」

扉を開けた奥には、鍛錬に励んでいる生徒たちがいた。っていうか多過ぎね？

男生徒1「あつ！尊師っ!!お久し振りでございます!!そして、お疲れ様です!!」

「『お疲れ様です!!』」

男子生徒がそう言うのと、全員我に返ったかのように、俺の方を向いて包拳礼をしていた。

八幡「お、おう……続けていいぞ。」

はあ……別に挨拶なんて要らないんだけどな。俺は別に師匠ってわけじゃないんだし。

虎峰「八幡っ!」

八幡「よお虎峰、それに沈雲と沈華もな。」

沈雲「やあ比企谷くん。【戦律の魔女】とのひと時は良く過ごせたかい?」

沈華「普段の貴方と違って、【戦律の魔女】に襲いかかっているんでしょうね。普段落ち着いている貴方だもの、盛っているんじゃないかしら?」

やめろよ、そんな事言ったら……

虎峰「八幡っ!!それはどういう事ですか!!?」

ほら見ろ。一番聞いちゃいけない奴が反応して目力もすげえんだよ。後ろの髪も逆立ってるし。

八幡「盛ってはいないが、楽しく過ごせたのは否定しない。まあここ最近はそうもいかなかったけどな。」

沈華「あら、夫婦ケンカかしら?」

八幡「ちげえよ、まだ結婚しとらんわ。お前らも知ってるだろ？明日は俺とシルヴィの関係について会見があるんだよ。その準備で忙しいんだよ。」

沈雲「……成る程ね。今話題のアイドル歌手と今年の星武祭優勝者だから、あつても不思議ではないね。」

虎峰「シルヴィアさんは大丈夫なのですか八幡？」

八幡「大丈夫だとは思うが、そうでない時は俺がフォローする。」

沈華「頼もしいわね。流石といったところかしらね。」

これでも彼氏だからな。頼りなかったら格好がつかない。

京華「あー！はーちゃんだー！」

沙希「こらけーちゃん！走ったら危ないよ！」

柚珠奈「相変わらずだねえ。」

今度はけーちゃんと川崎、そして川崎の友達の大橋が来た。

京華「えへへ、はーちゃん！」ダキッ！

八幡「おう、けーちゃん。」

沙希「帰ってたんだね。」

八幡「本来俺の居場所はここだぞ？」

柚珠奈「まあ尊師は彼女さんの家に泊まる期間が長かったですから。」

3週間ってそんなに長いかな？結構あつという間に感じたんだが。

虎峰「そういえば八幡は今日こちらに？」

八幡「ああ。シルヴィも今日はクインヴェールの寮に戻ってる。ペ

ト……あつちの理事長と打ち合わせでもしてんだろ。」

危ねえ危ねえ。うつかりペトラさんって言いそうになっちまった。
八代界人の事はまだ言っていないからな。

虎峰「では、今日は一緒に食事をしてもいいですか？」

沈雲「そういう事なら」

沈華「私たちも」

2人「ご一緒させて頂きます。」

八幡「ああ、別にいいぞ。お前らは？」

柚珠奈「尊師と師兄方と一緒に食事なんて、恐れ多くて出来ません
！」

沙希「……あたしはけーちゃんと椎橋と食べるからパス。」

京華「今日はさーちゃんとゆーちゃんとルーお姉ちゃんの3人で食
べるー！」

よし！けーちゃんその勢いであのチビを誘うんだ！

八幡「で、場所は食堂でいいのか？」

虎峰「出来ればでいいんですが、八幡の料理が食べたいです。」

うん、君たち好きだもんね。

八幡「わーったよ。んじや6時あたりな。いいか、星露とセシリー
は呼ぶなよ？多分あいつらはそれ無しでも来るだろうが。」

虎峰「……そうですね。あの師父とセシリーと雪ノ下師姉は、もは
や八幡の食通ですからね。」

料理を作るのは好きだが、あの3人は日常からして遠慮が無さすぎ
るからな。

まあ美味そうに食ってくれるから、そこんところはありがたいが。

大人数での食事と師

八幡 side

八幡「そんでよ、何でチビ以外全員集合しちゃってるわけ？」

こんばんは、比企谷八幡です。さて、俺は今同学年の3人に問い詰めているところです。何故かって？だって俺は飯食う約束をこの3人としかしていないのに、何故か俺の部屋にはプラス4名いるわけ。説明聞かずにいられると思う？

虎峰「い、いえ。僕にも分からないのですが……」

兄妹「趙師兄と同様だよ。（よ。）」

マジでか……こいつら知らないとなると、益々分からんぞ。直接聞くか。

八幡「あー、どうやって知ったんだ？」

セシリー「部屋にいるって聞いたから、久しぶりに八幡のご飯食べようって思ったのー！」

陽乃「私も似たような感じかなー。」

暁彗「……………寮にいと聞いたから、挨拶しに来た。」

冬香「私も陽乃様とセシリーさんと同じくで八幡さんの料理が食べたくなりまして……………ご迷惑でしたか？」

八幡「いえ、冬香さんと暁彗はいても良いです。呼ばれなかった2人は回れ右して帰れ。」

セシリー「呼ばれなかった2人ってー？あんたら兄妹？それとも虎峰と陽姐ー？」

陽乃「八幡くん誰の事？」

八幡「今すつとぼけてるお前らだ。」

頻度を考える頻度を。

陽乃「えー良いじゃん！久しぶりなんだから。パーっとやろうぜっ
！」

セシリー「そうだぞー八幡！」

お前らなあ……

八幡「……はあ。なあ虎峰、今日は回鍋肉ホイコーロでもいいか？」

虎峰「え？僕は構いませんが、大師兄はどうか……」

暁彗「……………私はもう立場だ。作ってくれた者に対して文句
など言わない。比企谷八幡の自由だ。」

そうですか。心が広くて助かります。

八幡「んじゃ、早速作るから適当に待っててくれ。」

冬香「手伝いますよ、八幡さん。何もせずにいるというのは、居心
地が悪いので。」

暁彗「……………私も食後に茶くらいは出そう。」

……………ホントよく出来た先輩っ！

虎峰「で、では僕はお皿などを！」

沈雲「ふむ、これ以上は邪魔になりそうだね。僕たちは待っていよ
うか、沈華。」

沈華「そうね沈雲。」

ホントよく出来た同期っ！

セシリー「私は手伝おうにも、八幡が止めてっていったから待つて
るねー！頑張って下さいーい、大師兄たちー！」

陽乃「頑張ってねー!」

八幡「お前らにはコップ一杯の水と一合の飯しかやらん。」

2人「作って!!お願いっ!!」

ホント面倒な同期と先輩だ。

――1時間後――

1時間もすれば回鍋肉くらい簡単に出来る。それに、こんな風景も1月以来だな。星露がないだけだ。

冬香「……そういえば八幡さん。今回の記者会見の事なのですが、よろしいですか?」

八幡「はい、いいですけど。」

冬香「実際のところ、会見を開いたとしても意味があるとは思えないのですが、八幡さんはどう考えてるんですか?」

八幡「俺も同じ意見です。例えば会見が終わったとしても、奴ら絶対に俺たちをマークし続けますよ。今はまだ分かってないですけど、シルヴィの家もバレるのは俺たちの行動や時間の問題でしょうね。」

虎峰「やらないわけにはいかないのですか?」

沈雲「趙師兄、その質問は酷というものです。比企谷くんも有名ですが、相手は世界的なアイドル歌手なのですよ。」

沈華「その状況で何も無しだなんて、虫が良すぎるどころかかえって不気味過ぎますわ。」

最もな返答だな。《鳳凰星武祭》の取材で『カレカノになりました。』って言うておいて、『はいそうですかー。』なんて納得する訳がない。

冬香「八幡さんも会見に参加なさるんですよね?やはり……」

八幡「ええ、俺も考えてますよ。普通の質問なら答えますが、そうでないものなら、逆にその取材班黙らせてやりますよ。」

この前の会社もそうしてやったし。

陽乃「まあ八幡くんなら楽勝だろうね。でも気をつけてね、思わぬところで揚げ足取られないようにね。」

八幡「分かってますよ。」

暁彗「……………時に比企谷八幡。今日は【戦律の魔女】と一緒に過ごさないのか？前日である今日なら、一緒にいた方が良さそうなのだが。」

八幡「シルヴィもクインヴェールに戻るって言ってたからな。理事長と打ち合わせでもしてんじゃないか？あいつもアイドルだからな、そういうのはやっておいた方が良さそうだな。」

セシリー「八幡には何も来てないのー？一応関係者でしょー？」

八幡「当日になりや嫌でも会うからな、その時でもいいって思ってるんじゃないのか？」

まあ、今日連絡が来ないとも限らないけどな。

ガチャッ

???「邪魔するぞえ、八幡。」

ん？この声……

小苑「ん？何じゃ大所帯じゃのう。おお、暁慧も数年振りじゃのう。」

虎峰「汪小苑様!!」

暁慧「……………師。」

セシリー「うひゃー！もしかしてあの2代目【万有天羅】!?こんなに近くで見たの初めてだよー！」

冬香「まさかこのようところで、またお会いできるなんて……」

小苑「お主らも大袈裟じゃのう。弟子の顔を見に来ただけじゃというのに。…………ふむ、お主らしい良い顔になっておるの、八幡。」

八幡「ありがとうございます。でも、見に来たのは顔だけですか？」

小苑「流石八幡じゃ、話が早くて助かるわい。久しぶりにお主の稽古をつけてやろうと思うてな。横浜で過ごすのも良いが、刺激が足りなくなってきたところでのう。」

八幡「刺激不足を弟子で発散しないで下さいよ。貴方の本気はまだまだ見えずにいるんですから。」

小苑「よく言うわい。星露が言うつつたぞ、妾の8割くらいの攻撃をいとも簡単に防いだり流してるとな。」

チツ！あのチビめ……

小苑「明日の会見が終わったら、儂と模擬戦でもしようではないか。」

八幡「はあ……断るなんて出来ないますから、受けるしかありませんね。」

小苑「やはりお主は聞き分けが良くて助かるのう。」

八幡「諦めてるだけですよ。」

小苑「それでも良い。」

陽乃「……なんかあれだね、親子みたいだね。」

冬香「ええ。性格は似ていなくとも、こうやって見ていると、そう
思えますね。」

八幡「………っていうか小苑さん、その為だけに来たんですか？」

小苑「ん？さあてのう？」

八幡「………」

何だろう、今のこの人は何をするのか全く分からない。

※師と弟子

八幡 side

夕飯も食べ終わってのんびりしたいところだが、現状はそうもいかない。洗い物を終えたら、明日の事について考えるのが、最近の日課になっていた。

小苑「八幡よ、明日の事でも考えておるのか？」

八幡「……………何で分かったんです？」

小苑「たわけ。殆ど会っていないとはいえ、お前は儂の弟子であり子じゃ。そんな事も分かって師など務まらんわ。」

流石「万有天羅」様、すげえ説得力。

小苑「お主らの交際の事じゃったのう。世間も物好きじやのう。人が恋し愛し合うなど自然の事じやろうに。何がそんなに知りたいのかのう？」

八幡「世界的な有名人ですから当たり前だと思っんですけど……………多分ですけど、小苑さんもそういう系のバレたら、報道とかされると思えますよ？」

小苑「儂がか？若い衆と比べたら、儂なんぞに食いつく者がおるのかのう？」

いやいや、歳いくつかわからないけど、貴女普通に若く見えますからね？20代くらいにしか見えない。

八幡「俺も歳は知りたんですけど、そんな無粋な事聞いたら殺されかねないですからね。」

小苑「歳？32じゃぞ？」

この人普通に言ったよ……ていうか32？納得は出来そうだが、全くそうには見えない。

八幡「……気にしないんですか？年齢とかそういうの。」

小苑「気にしていてもどうにかなるものでもないしのう。寧ろ隠していて何の得があるのじゃ？」

八幡「……まあ、確かに。」

小苑「話が逸れたが、お主はどうするのじゃ？」

八幡「普通の質問なら答えるつもりです。そうじゃないのなら黙らせます。」

小苑「まあそうじゃろうな。」

小苑さんもそう思っていたのか。絶対いるだろうしな、あっち方面の事聞いてくる奴。

八幡「まあ、何とかありますよ。」

小苑「……八幡、お主最近何時頃に寝ておる？」

八幡「……何です急に？」

小苑「いいから答えるのじゃ。」

八幡「9時ですけど。」

小苑「嘘をつくでない。それはお主らが共に寝ている時間であろう？もう一度聞くぞ？何時に寝ておる？」

八幡「……1時です。」

小苑「やほりのう、お主それでは明日持たぬぞ。」

八幡「……何故分かったんです？」

小苑「分からぬと思うか？儂を誰だと思う？お主の師であり親じゃ。子の事を分からずして親など語れぬわ。」

八幡「……」

小苑「お主は確かに出来た子じゃ。気が利き頭もキレる。冷静かつ的確な判断力も備わっておるし、人の感情にも敏感じゃ。だが、お主は自分の事を考えなさ過ぎる。それが欠点じゃ。」

小苑「幾ら強かろうと自分の管理が出来ぬ者は阿呆と同じじゃ。お主はもつと自分を大切にせんか！」

まさかここまで見抜かれるなんてな……ここまで言われたんじゃ、返す言葉もないな。

八幡「……すみません。」

小苑「はあ……暁彗もそうじゃが、お主も大概じゃな。八幡よ、考えるのはもう止めじゃ。こつちへ来るのじゃ。」

八幡「はあ……」

何だ？ベッドの上で説教か？

小苑「ほれ、横になって頭をここに置くのじゃ。」

ここつて……思いつきり膝何ですけど。

八幡「小苑さん、それは少し恥ずかしいのですが……」

小苑「何じゃ、膝枕ごときで恥ずかしいのか？そんなものやってるうちに無くなるものじゃ。早よせぬか。」

……逆らえないですよね、はい。

八幡「……失礼します。」コトツ

………思ったけど、膝枕って初めてされたな。シルヴィとは抱き合って寝た事は何度かあるけど、膝枕自体された事もした事も無かったな。

小苑「八幡、お主はもう1人ではないのじゃぞ？友をはじめ、今では恋人もおる。お主はその尊き存在に心配をかけるつもりかえ？」

小苑「儂はお主に友を心配させるなんて教えはした覚えがないぞ。先も言うたが、お主は自分をもっと大切にせい。」

小苑さんが俺の髪を撫でながら説教？をしている。この人には申し訳ないが、なんか眠くなってきた。

小苑「全く、困った弟子じゃ。少ししたら起こそうと思ってたが、もう寝そうではないか。」

小苑「まあよい。今日は何も考えんでいい、ゆっくり眠る事じゃ。」

八幡「……………」

八幡 s i d e o u t

小苑 s i d e

……久々に会ったが、まだこの癖は抜けんようじゃのう。マシになつてくれれば、儂としても楽なんじゃがのう。

小苑「…………まあ、それを含めて育て甲斐のある弟子じゃからのう。」

万有天羅などと呼ばれている儂も甘くなつたものじゃな。

まあ、それも悪くはなからう。

新たな仲間とご褒美？

八幡 side

……………ん？

此処は……何だ？《あいつら》のいる場所とは少し違う。水の地平線に青空と白い雲……まるで夢の中みたいだ。

小苑「おお、起きたようじゃな。」

八幡「……………小苑さん、此処は？」

小苑「そうじゃな……取り敢えずお主の夢の中と言っておくかう。」

夢の中……にしては景色が綺麗過ぎる。いつもは殺風景な真っ白な世界だというのに。

小苑「にしても、儂も驚いたわい。お主の中に霊が憑いておるんじゃないのう。それも7……いや、1つは違うのう……どの霊よりも霊格が違う……神霊かのう？」

八幡「……………よく分かりますね。」

小苑「何、今その1人と話しておつての。ちようどお主の力になってくれるそうでの。」

え？話して俺に協力してくれる？どんだけ良い奴なんだよ、その守護霊。

小苑「ほれ、出てこんか。お主の主人になる男じゃぞ？」

???『もおゝ急かさないでよおゝ。僕がのんびり気ままなのは、さつき分かった事でしょおゝ。』

……………すげえ間延びした声だな。声だけでものんびりな奴つての

は伝わるな。

……………ていうか亀？

小苑「八幡、お主が朱雀を従えているのなら知っておろう。この者は『玄武』じゃ。四象の神の1匹で北方を守護している。」

玄武『どうもおお、玄武だよ。よろしくねえ。ええととおく……………お名前なんていうのおく？』

……………のんびり過ぎんだろ。

八幡「……………比企谷八幡だ。玄武って事は、後ろの方に蛇もいるんだろ？そつちは出てこないのか？」

玄武『あゝくろちゃんはねえ、まだおねんねしてるんだあ。でも喋るのは僕だから気にしないでいいよ。』

……………しかし何でこんなに間延びなんだ？眠い訳じゃないよな？

八幡「それで、小苑さん、玄武がどうして力になるって思うんですか？」

小苑「どうじゃ？こやつ喋り方は？中々に個性的で良いと思わぬか？」

八幡「間延びし過ぎてて考えていた事が忘れてしまいそうなくらいです。」

玄武『おお、エンちゃんの言う通りになったあ。エンちゃんすごお。』

……………エンちゃん？

小苑「じやろう？八幡よ、この玄武に協力してもらったのは、その

考え過ぎな欠点を治すためでもあるのじゃ。」

小苑「昨日も言うたから覚えておるじやろうが、お主のそれは美德でもあるが、逆に欠点でもある。」

八幡「……そしたら玄武がいる時点で、俺は考え事が出来ないじゃないですか。」

玄武『安心していいよ。ちゃんとプライバシーは守るからさあ。マンちゃんが深く考えそうなところになにか突っ込まないから大丈夫だよ。』

それなら良いんだが……マンちゃんって何だよ。面倒だからか？面倒だからそんな風になったのか？

小苑「ゆうわけじゃ。今日からお主に憑くからの。よろしく頼むぞ、玄武よ。」

玄武『エンちゃんのお願いだから聞いてあげるよ。それにいゝ、面白そうだから退屈しなさそうだしねえ。』

俺を暇つぶしに使うな。

八幡「まあ、よろしく頼む。」

玄武『はいはあゝい。それじゃあゝ、向こうに戻すからねえ。』

八幡「なあ、向こうは今何時なんだ？」

玄武『うえ？5時だけど？』

……まあ、別にいいか。

八幡「分かった。」

小苑「何故そんな事を聞いたのじゃ？」

八幡「最初に憑かれた守護霊が望んでもない時間に目覚めさせたものでして。夜中の3時に起こされたものですから、腹が減って仕方なかったんですよ。」

小苑「何か食べばよかったじやろうに。」

八幡「……………暁彗との決闘の後で3日間も眠ってたんですから、動かないですよ。あの雷受けて3日で動けなんて無理ですよ。」

小苑「……………すまんかったのう。」

いや、気にしてないんで。

玄武『それじゃあ戻すねえ、ばいばあゝい。』

……………しかし、本当に間延びがすげえな。わざとじゃないんだよな、あれって？

八幡「……………ん、んんう。」

小苑「おお、やはり早いのう。」

……………何故だ？目覚めたはずなのに前が見えない。……………それよりも、なんか柔らかくて温かくて良い匂いがするな。

小苑「そうじやのう。お主はもつと人に甘える事も覚えた方が良いじやろうな。良い機会じや、今は存分に甘えると良い。」

声が上から聞こえる？それに俺の首、なんかに固定されてない？

八幡「あの、小苑さん。俺って今どんな……」

俺が上を向いた瞬間に全てを悟った。俺は今、小苑さんに抱き締められている。しかも優しく抱き締められている筈なのに、全く身体が動かない。

八幡「あの……これってどういう事です?」

小苑「頑張っておる弟子への褒美じゃな。《鳳凰星武祭》の優勝記念と取っても良いぞ。」

だとしたらすげえ贅沢なご褒美ですね。

小苑「どうじゃ? 儂も少しはある方なんじゃぞ? 着痩せするタイプみたいでの、無い方に見られがちじゃが、こうして密着すると分かるであろう?」

八幡「そ、そんな事聞かないで下さいよ／＼第一小苑さんの大きさ自体知らなかったですし……」

小苑「ほほう? それは機会があれば知りたかったというわけか?」

八幡「い、いえ、そういうわけでは……」

小苑「ほっほっほ! 可愛い弟子じゃな。お主はこれくらいが丁度良い。」

小苑「さて、いい時間が来るまでこのままにいるとするかのう。割とこの状態も悪くない感じじゃしのう。」

※神憑り

小苑 side

ほっほっほ、八幡も大分落ち着きを取り戻したようじゃのう。昨日のあやつは、儂から見ると違和感があったからのう。物思いに耽っておるような顔つきをしておったからのう。まあ実際にしておったのじゃが。

朝食も食べ終え、時間まで隣で瞑想をしておるが、玄武から何も言うてこんという事は大丈夫なんじゃろうな。しかし、大した成長じゃのう。暁慧でも、ここまでは伸びんかったというのに。

小苑「にしても、お主も見んうちに女まで誑し込んでおったとはのう。驚きじゃわい。六花に行く目的は、自分がどれだけ通用するのかやら、自分を試したいと言っておった奴が、良い男になったものじゃ。」

小苑「星露やアレマも言うておったぞ？自分の弟子にしたいとな。儂は別にお主が他の師を持つのが構わんが、お主のことじゃ、断つておるんじやろ？」

八幡「……………」

小苑「…………？八幡、寝てお…………っ！何じゃ…………この凄まじく強大な気は？」

八幡からとてつもない気を感じるわい。それも普通のではない。人間では出し得ないような強大過ぎる気じゃ。それも大きいだけではない。神々しさも感じるのう。

小苑「まさか……………神憑りかえ？」
かみがか

???『ほう、余の事をこの短時間で見破るか。中々鋭い目をしているようだな。』

小苑「まあもう……じゃがお主が誰なのかは分らん。ただ、八幡の中におったどの霊とも違うのう。儂が予想した神霊かのう?」

???『鋭いな、女よ。如何にもその通りだ。余はこの者が従えている守護霊とは違う。神が憑いておるのだ。当然であろう?』

成る程のう……道理で1つの魂だけ凄まじい気を放っているわけじゃ。しかし、神が宿っておるといつても、そう簡単に人の依り代に神が宿ると思えん。悪魔ならまだ納得は出来るが、神が宿っておるとはのう。

???『女よ。分かっているとは思うが、此奴に明かすではないぞ。余の力はまだこの者では使いこなせんからな。』

小苑「分かっているわい。じゃが、何故急に出てきたのじゃ?」

???『何、数百万年振りに表に出ようと思っただけだ。まあ、余の名前を言ったところでお前には分かるまい。日本神話の中でも表には出てこんくらいだからな。此奴が儂を目覚めさせたら、改めて名乗るとする。』

小苑「……………少なくとも、今は害を出さないという事でいいんじゃない?」

???『その辺りは保証しよう。余にとっても此奴は逸材だからな。我が目に狂いなど無いわ。』

日本神話に出てくる神……ううむ、分かん。

???『ではな。』

そして八幡の身体から出ていた凄まじい気は無くなり、八幡はそのまま横になってしまった。

八幡「……………ん……………あれ？俺寝ていたのか？」

小苑「もうすぐ時間だというのに呑気や奴じやな。まあ、それくらいが良いのかもしれないがの。」

八幡「返す言葉も無いっス。」

小苑「まあよいわ。流石にもう寝られんからな？もう2時間を切っておる。」

八幡「分かってますよ。顔洗ってきますね。」

小苑「うむ。」

そして八幡は洗面台の方へと行ってしもうたが、儂としても、胸の内にとまっておかねばのう。まさか神が宿っておるとは……………神霊と予想はしていたものの、本当におったとは……………

本当に驚いたわい。

いざっ！

八幡 side

八幡「じゃあ、行ってきます。」

小苑「うむ、敵に腹を見られぬように気をつけるんじやぞ。」

八幡「はい。」

時間になり、俺は自分の部屋を小苑さんに任せて界龍から商業エリアにあるTV局に行くのだ。

取材に應對するのは、俺とシルヴィアとペトラさんで、ペトラさんが言うには『答える必要性のないものは答えなくていい。』そうだ。これなら少しはやりやすい。

沙希「あつ……比企谷。」

八幡「おう、川崎か。」

沙希「もしかして、昨日言ってた会見に行くの?」

八幡「ああ。多分生中継とかされてるだろうな。これだけの騒ぎだ、なつてもおかしくはないからな。」

沙希「そつか……気をつけなよ。」

八幡「分かってるよ、ちょうど師匠にも言われたところだ。」

俺ってそんなに抜けてるように見えるのか?

沙希「じゃああたしも行くから。」

八幡「おう、じゃあな。」

……もしかすると、界龍の学院から出るまでこれ続くかもな。

そしてフラグを建ててしまった八幡は、自身の言通りになり、色んな人から話しかけられ、応援されたり励まされたりなど、嫌味や嫉妬、憎悪などの感情に晒される事は無かった。

――界龍校門前――

八幡「微睡め、伽耶梟。」

俺は空中散歩用に使う梟を影で作り、空から向かう事にした。気分を落ち着かせるためでもあるが、何も考えないようにするためでもある。

八幡「……索冥。今の俺はどうだ？ 会見を受けても大丈夫そうか？」

索冥『そうですね……私事になりますが、大丈夫だと思われます。心身共に落ち着きが感じられますし、肩にも力が入ってませんのでいつも通りに出来ると思います。』

そう言ってくれるなら、俺も安心出来る。にしても、空が青いねえ。

索冥『……八幡様。それは考え過ぎるのでは……』

だよなあ……。

——商業エリア——

いきなりど真ん中から行くわけにもいかないからな。商業エリア入ったら普通に入るか。

にしても視線が痛い。思ってたんだが、これって俺とかシルヴィを目的にしないよな？だとしたら此処にいる目的が俺たちに会うための奴らは暇過ぎんだろ。仕事しろよ。

まあいい。さっさと向かいますか。

また、道中でもあれこれと聞いてくる失礼な奴もいたが、普通に励ましてくれる人もいた。前者は減すべきだが、後者はもつと増えてくれ。

??? 「八幡くんっ！」

ん？後ろからか？

振り向くと、そこには車が停まっっていてシルヴィが顔を出して俺を呼んでいた。

シルヴィア「八幡くん昨日振りだね。さっ、早く乗って！あまり人目には見られたくないから。」

八幡「お、おう。」

俺は駆け足で車に駆け寄り、すぐに乗った。中にはペトラさんも同席していて運転手を含めて4人だけの空間だった。

八幡「すまんシルヴィ。ペトラさんもうございます。そ

してお久し振りです。」

ペトラ「そうね、八幡くん。あれからだいぶ経つわね。そうそう、シルヴィアから聞いたわよ。貴方、六花と日本内ならOKしてくれたつて。」

ああ、その事か。確かにあの時シルヴィにも言ったからな。

八幡「はい。そのくらいの範囲なら、俺も手伝えますから。あまりにも遠いと、日数足りなくなつて進級とかにも影響出そうですし。」

ペトラ「そうね……でもありがたいわ。本当に多いのよ？またあのコラボをやってくれてファンからのレターが。」

シルヴィア「他の歌手からの依頼とか来るんだけど、ペトラさんったら、八幡くんの歌声聴いてから誰も採用しようとしなんだよ。最後には『シルヴィアと一緒に歌を歌えるのは、この世界に1人しかいません。』なんて言う始末だしね。」

それは流石に言い過ぎじゃないか？一応相手はプロだぞ？俺みたいな素人はともかくとしても。

ペトラ「何だか物足りなく感じるのよね。八幡くんの歌を聴いた後に他の人のを聞くと、雑音みたいに聞こえるのよ。」

いやそれはマジで言い過ぎですよ!？雑音って何!？

シルヴィア「というわけでね、八幡くんがOK出してくれたから本当に助かったんだ。」

八幡「コラボとかの依頼受け付けてたんですか？」

ペトラ「いいえ。でも、先方がやりたいって依頼か本当に多いのよ。ちょうど貴方とシルヴィアが歌った日からね、多くなったのは。」

ペトラ「1年近く経つてのの一向に減らなくて困ってたのよ。でも、これで何とかかなりそうね。」

八幡「すみません。なんか俺が引き金みたいになっちゃったみたいで。」

シルヴィア「謝る事ないよ。寧ろ私たちは感謝してるんだから。あのライブで成功したからこそ、こんなに凄い影響が出てるんだから。」
ペトラ「シルヴィアの言う通りよ。シルヴィアと私を含めて、あの場にいたスタッフ全員が貴方に感謝してるんだから。」

……なんか嬉しいな。此処まで言われるってのは。界龍でも言われる事はあるが、違う感じだったからな。

八幡「それならシルヴィにもお礼を言つといて下さい。俺を導いたのはシルヴィなんですから。あの通信が無かったら、俺はあの場になかったんですからね。」

シルヴィア「ちよつとやめてよ八幡くん！確かに誘ったのは私だけど、皆必死だったんだからしょうがないでしょ！」

確かにそうだが、普通は一般人を誘おうなんて誰も思いつかないだろうからな。

ペトラ「思い出すわね……変装した八幡くんを見た瞬間、シルヴィアが顔を真っ赤にしながら頭から蒸気を出すんだもの。あれは本当に驚いたわ。」

シルヴィア「ううゝだつてえ／＼／＼／＼」

こんな会話をしながら、俺たちは自分たちの気分や空気を落ち着かせる事が出来た。

―――某TV局―――

TV局の目の前に停まって、入口の方から運転手がドアを開けてくれた。ペトラさん、シルヴィア、俺の順番で降りてからTV局の中に

入り、受付まで進んだ。

ペトラ「本日記者会見を予定していたクインヴェール女学園理事長兼シルヴィア・リユーネハイムのマネージャーのペトラ・キヴィレフトよ。そして横の順にクインヴェール女学園のシルヴィア・リユーネハイムと界龍第七学院の比企谷八幡よ。」

受付「お待ちしております。直ぐにご案内致します。こちらにお越し下さい。」

受付さんについて行き、エレベーターに乗ったが、階が50もある。そんなにいいのかTV局？

そのうち受付さんは35のボタンを押した。そのボタンの横には、『会議室／休憩所』などと書いてあった。

35階に着いて少し歩いたところ、1つの部屋に着いた。

受付「此方になります。」

中に入ると、普通に楽屋みたいな感じだった。

受付「此方で時間になるまでお待ち下さい。時間になりましたら、係の者が来ますので。」

そう言つて受付は一礼してから扉を閉めた。

ペトラ「貴方たち、本当は2人きりが良かったんじゃないの？」

シルヴィア「えっ!? ペ、ペトラさん何言ってるんですか!？」

ペトラ「普通に考えるじゃない。こんな密室だったら、恋人と2人きりが良いなんて考えるのは自然じゃない?」

シルヴィア「い、今この状況を考えるなら、そんな事思いません!」
ペトラ「あら、そう? 八幡くんは?」

八幡「俺ですか？……俺もこの状況では思えませんかね。」

もし俺とシルヴィで会見するってなったら、隠しカメラとか絶対用意してるだろうからな。

ペトラ「そうなの？八幡くんはともかく、シルヴィアなら一緒に居たって答えると思ってたのに。」

シルヴィア「私はちゃんと時と場所を考えます！」

ペトラ「そういう事しておくわね。」

ペトラさんって、人を和ませるのが得意なのか？気持ち落ち着くというか和むというか、不安を一切与えないっていうのか？

俺も会見の事を考えずに済んでるし、なんか楽しいからな。

会見までは、緊張とかしないで済みそうだな。

会见 ①

シルヴィア side

コンコンツ

ペトラ「はい？」

TV局関係者「失礼します。ペトラさん、シルヴィアさん、比企谷さん、お時間になりましたので、お願いします。」

「「はい（分かったわ）」」

ふう……時間か。

ペトラ「2人とも、行くわよ。シルヴィアは分かっていると思うけど、八幡くんは余計な事言わないようにね？」

八幡「大丈夫です。そこは自分でも分かってますし、今朝にも言われてきたので。」

……誰に言われてきたんだろう？

ペトラ「ならいいわ。じゃあ案内してちょうだい。」

TV局関係者「こちらになります。」

——第3会議室——

少し歩いてから何だか異様に他の扉よりも間隔の空いた扉に着いた。多分この部屋、他の部屋よりも広いね。

TV局関係者「取材はここで行います。準備が宜しければ、早速入って頂きます。」

八幡「少しいいですか？」

TV局関係者「何でしょうか？」

八幡「この中にいる取材班に評判の悪い記者さんはいますか？いたら教えて欲しいんですが。」

……あつ、そつか。この前の事があるからね、私としてもそれは知っておきたいかな。

TV局関係者「……私の一存からはお答えできません。」

八幡「……そうですか。ではもう1つ、盗撮や盗聴なんてしてませんよね？してないと言っても、俺の目は誤魔化せませんかね？」

？八幡くんには分かるのかな？

TV局関係者「……取材班の方は分かりませんが、私たち〇〇〇放送局は、一切その事をしていない事を約束します。」

八幡「……今、確かに聞きましたからね。もし、カメラやそれ以外の機材からその反応があったら、すぐに報告させてもらいます。それでもいいですね？」

TV局関係者「……はい。」

八幡くん……凄い用心深いなあ。それだけ大事だから盗撮とか盗聴をするのは、許さないって思ってるのかな？

確かにダメだけど。

ペトラ「八幡くん、まだあるかしら？」

八幡「いえ、一通りは聞いたので大丈夫です。」

ペトラ「じゃあ行くわよ2人共。」

ペトラさんが扉を開けて、ペトラさん、私、八幡くんの順に入り、八幡くんが入った辺りから無数のフラッシュが私たちを襲った。

私たちはお辞儀をしてから後ろにある椅子へと座った。

TV局関係者「ではこれより、比企谷八幡さんとシルヴィア・リユネハイムさんの交際についての会見を執り行います。」

TV局関係者「進行役は当放送局の▲▲が務めさせていただきます。質問などは御座いますか？」

八幡「では私から。」

えっ？八幡くん？

TV局関係者「どうぞ。」

八幡「どうも、比企谷八幡です。今回の会見では、先程進行役が言った通り【比企谷八幡とシルヴィア・リユネハイムの交際について】がテーマです。私はそのテーマに則った形で取材をするつもりです。なので、それ以外の質問や私たちの内面に関わる事は一切お答えしないつもりでしたので、此処でお先に言っておきたいと思い、お伝えしました。」

やっぱりざわついてる。予め用意していた質問が潰されたとしても思ってるのかな？それとも生意気だとか思ってるのかな？

〇〇社「私は大丈夫です。この前の事で彼と彼女の人となりは知っているつもりなので、反対するつもりはありません。」

あっ！鳳凰星武祭の時の〇〇社の人だ！あの人の質問なら安心して答えられそう！

◇◇社「うーん……それって何処までいいのかな？具体的に言うなら、付き合った過程とかは大丈夫ですか？」

八幡「その辺なら大丈夫ですが、私たちのプライベートに関わるも

のは、全てカットさせて頂きます。」

◇◇社「……成る程、分かりました。」

◇◇社（彼奴が言っていた通りだな。下手な質問をしたら逆効果か。ここは普通の質問だけにしておこう。）

△△社「それじゃ突っ込んだ質問が出来ないのですが……」

八幡「寧ろそれを止めてくれと言ったつもりなんですが？」

△△社「ですが、それだと視聴者様方の知りたい事が分からないという事になりますか？」

八幡「知りたい事？別にそれを全て答える義理はこちらにはありませんが？」

△△社「ですが、視聴者様方の希望には答えるべきだと思われませんか？」

八幡「私は別にそんなのどうでもいいですよ？世界が俺たちの関係を否定しようと、俺はシルヴィア・リユーネハイムさんと添い遂げるつもりです。」

は、八幡くん!?会見まだ始まってないのにそんな事言わないでよ!?

／／／／

八幡「それと、言い忘れてました。さっき言ったのは【お願い】ではありません。【命令】だと思って下さい。」

急に場の雰囲気がズシツと重くなった。有無を言わせない程の威圧が八幡くんから放たれていた。

八幡「理由としては、鳳凰星武祭で俺と彼女に向かつて質問としてあるまじき事を聞かれましたのでね、それを防止する為です。ですよね？△△社さん？」

△△社「っ!!？」

八幡「人が変わったただけで他は何も変わってないようですね？お願いですから、会見が始まって前みたいな事は聞かないで下さいね？恥かくのは貴方たちの方なんですから。」

△△社「……………」

うん、本当に良かったよ。これが会見前で。もしこれが生放送でカメラがオンだったら、あられもない姿を撮られてる場面だからね。

TV局関係者「では、他にいませんか？」

会場内は静寂に包まれていた。

TV局関係者「では会見の方を始めていききたいと思います。」

会見 ②

八幡 side

さて、いよいよだな。さっきまでと違ってカメラが回ってるから、下手な事言ったらこの前の星武祭と同じ目に遭うことになるからな。願わくば、何もない事を祈ろう。

TV局関係者「ではこれより、今回の話題となっている比企谷八幡さんとシルヴィア・リューネハイムさんの交際についての会見を始めます。」

TV局関係者「最初に第三者からの目線での意見を聞きたいと思います。ペトラ・キヴィレフトさん、よろしいですか？」
ペトラ「ええ、構わないです。」

流石慣れてるだけあるな。全く動じてない。

TV局関係者「結構です。では質疑応答を行います。尚、質問は一社1回とみなします。最後の方にまた機会を設けますので、この時点では1回という事です。では、どうぞ。」

□□社「では。ペトラさんはお2人の交際について賛成ですか？反対ですか？」

ペトラ「私は賛成です。彼のような一途で真面目な人はいないと思ってますので。」

□□社「探せばいると思うのですが？」

ペトラ「いたとしても、彼ほど実力を兼ね備えた人はこの六花に居ないと思います。シルヴィアを守るのは、シルヴィアと同等かそれ以上の実力を持った人、そして何よりも、本人同士が信頼し合っているかで私は決めます。なので、私は比企谷八幡が彼氏である事に反対はしません。寧ろ賛成の方に推挙します。」

□□社「ありがとうございました。」

◇◇社「この交際についてはどう思われていますか？」

ペトラ「私個人としては、半年前に交際していたので知っていましたが、強いて申し上げるなら、漸く公開してくれたか、と思っっています。」

◇◇社「それは……どういう意味でしょう？」

ペトラ「考えてみてください。まだ交際していない頃でさえ、本当に交際しているような雰囲気を出しているのですから。シルヴィアに関しては、彼の顔を見るだけで顔真っ赤でしたから。今になって漸く落ち着いたって感じですね。」

◇◇社「そ、そうでしたか……まあ、何よりです。」

シルヴィア「／／／／／」

／／
そんな感じだったのか……無意識だったとはいえ、恥ずかしいな／

△△社「シルヴィアちゃんが交際を公開しましたが、今後の活動についてはどうお考えですか？」

ペトラ「今までと変わりなくやっていくつもりです。交際して環境が変わったのは否定しませんが、我々のする事はこれまでと変わりません。」

△△社「ファンが減ると思われませんが、その事に関しては何？」

ペトラ「それならそれで結構です。刺々しい言い方をしますが、この事で辞めるのなら、その程度でしか彼女を見ていないという事でもあるので。」

△△社「……分かりました。ありがとうございます。」

……ペトラさんでは特に何も無いか。まあ本命じゃないからな。

○○社「……私からはもう質問する内容がありませんので、下がらせて頂きます。その前に、質問とは関係ない事をお聞きしてもよろしいですか？」

ペトラ「私に答えられる範囲でなら構いません。」

○○社「ペトラさん個人、比企谷さんはどうお思いですか？勿論、お答えして頂かなくても構いません。」

ペトラ「そうですね……比企谷さんはとても魅力的な人だと思います。異性としては見ていませんが、それでも彼は魅力的に見える男性です。」

○○社「不粋な質問に答えて頂き、ありがとうございます。」

TV局関係者「一通りの質疑は終了しましたが、他にお聞きしたい事などがありますか？無ければ、次に進みます。」

……次からだからな。質問したくて堪らないって顔してるな。

TV局関係者「続いて、シルヴィア・リユーネハイムさんにお伺いします。さっきと同じように左からお願いします。」

□□社「最初に交際を申し込んだのはどちらからですか？」

シルヴィア「私からです。正直に言うと、私は彼に一目惚れしてしまったので／＼」

□□社「そ、そうのですか……（少し返したいのに、何でかあの空気に入りづらい。）」

シルヴィア「……以上ですか？」

□□社「あつ、はい！ありがとうございます。」

□□社（……無理だった。）

◇◇社「シルヴィアさんは交際して今後のアイドル活動をどうお考えですか？」

◇◇社「……あつ、すみません。テーマから外れт「構いませんよ。」……じゃあ、お願いします。」

シルヴィの奴、あの記者を助けたな？気づいたから無しにしたって奴だろ？

シルヴィア「これまでと変わりなく活動するつもりです。聴いてくださる皆様の為にも歌い続けたいと思っています。」

◇◇社「答えて頂いてありがとうございます。」

△△社「シルヴィアちゃんは世間からの意見は気になりますか？」
シルヴィア「気にはなりますけど、そこまでは。」

△△社「本当ですか？」

シルヴィア「そうですが、何故です？」

△△社「いえ、ネット上に比企谷くんを誹謗してる人も少なくないので。」

シルヴィア「悔しいのなら男を磨いて下さいとだけ言っておきます。妬みや悔しさでこんな事する時間があるのなら、自分を磨いて下さい。」

お、おお……結構グサツと来るだろうな。

△△社「……ありがとうございます。」

○○社「比企谷くんが言った告白の言葉は覚えてますか？それについてどう思ってますか？」

シルヴィア「とても嬉しかったです。この人に惚れて、惚れられて本当に良かったと思いました。」

〇〇社「そこまで良かったのですか……少し気になりますが、これ以上は内心部分に触れてしまうので、質問は以上にします。ありがとうございます。」

やっぱあの人良い人だな。

シルヴィア「よろしければ、お教えしますよ？比企谷くんも〇〇社は信用していたので。きっと許してくれると思います。」

うん、許す。

でも、〇〇社さん以外はお門違いです。〇〇社さんだけです。

〇〇社「よろしいのですか？」

シルヴィア「はい。ですが、この事を記事にしない事が条件です。それと、これを聞くのは〇〇社さんだけです。」

あからさまにカメラの位置下げやがった。どんだけ聞きたかったんだよ。

そしてシルヴィアが〇〇社さんに近づき、耳打ちをした。

……俺の言った告白聞かれてんのか、少しいたたまれないな。

〇〇社「……えー、ありがとうございました。比企谷さん、大変素晴らしいお言葉だと思います／＼／」

頬を染めながら言うな！俺だって恥ずかしいんだから！

TV局関係者「他に質問などがありますか？」

□□社「シルヴィアさんは、この交際を機にアイドルの引退は考えていますか？」

シルヴィア「いいえ、考えてません。比企谷さんが応援してくれるので。」

□□社「そ、そうですか……ありがとうございます。（ダメだ……この人の幸せオーラが俺の腹を攻撃してくる!）」

TV局関係者「他にいませんか？」

「またも静かになった。」

TV局関係者「では最後に比企谷八幡さんの質疑を行います。」

俺か……さて、いつちやりますか。

八幡 s i d e o u t

—————

その頃、比企谷八幡を知る者達の反応は……

「あいつあんな所に!?!しかも世界の歌姫と交際!!?」

「……………一体あんたに何があつたの？」

「ど、どういう事だ!?比企谷が交際だど!?しかも相手は世界の歌姫!!?」

「……………やっぱり居たんだ。そこに……………六花にいたんだね、比企谷くん。」

「……………八幡って付き合ってたんだ。しかもシルヴィア・リユーネハイムさんと……………凄い。お願いしたらサイン貰えるかな?」

「あ、あり得ない……………彼なんかが、あの世界の歌姫と交際だなんて……………」

「嘘……………なんで?私の方が先に好きになったのに……………」

「……………え?お兄ちゃんが、シルヴィア・リユーネハイムと交際?」

「なっ!?比企谷がシルヴィアさんと交際だつて!?……………あり得ない、あんな奴が……………世界の歌姫と付き合ってるだなんて!!」

様々な感情はあれど、皆同じような反応を示していた。

会見 ③

八幡 side

はあ……俺の番か。どんな質問がくのかねえ？碌でもないのは勘弁してほしいが、△△社がいるからな。

それに、別の収穫もあつたしな。

□□社「比企谷さんはシルヴィアさんの事を何時頃好きだと気がつかれましたか？」

八幡「具体的には王竜星武祭の決勝終了と同時にです。シルヴィアさんの流星闘技【愛の聖歌】セロ・ホリックスで好きだと自分でも気づきました。」

□□社「何故それだけでお分りになったのですか？」

八幡「（……まあいいか。）シルヴィアさんが負けそうになっていた時、私の脳裏にシルヴィアさんの声が聞こえました。その言葉を言うつもりはありませんが、その言葉に返事を返した直後、シルヴィアさんが【愛の聖歌】を使い、優勝した事により、私は彼女に好意を抱いていると気がつきました。」

□□社「……長々とご説明して頂きありがとうございました。とても分かりやすかったです。質問は以上ですので、次の◇◇社さん、どうぞ。」

◇◇社「2人の出会いや仲良くなったきっかけなど教えて頂けますか？可能な限りで大丈夫です。」

これは少し誤魔化しがいるよな。シルヴィが変装してる事は、俺とペトラさんくらいしか知らないだろうし。

八幡「私たちの出会いは去年の10月中旬あたりで商業エリアにて出会いました。人目のつかないところでしたので、誰にも見られずに済みました。仲良くなったきっかけは沢山ありますが、後程説明致します。」

◇◇社「……成る程、駆け引きが上手い。この状況で2つのうち1つの質問を後回しにした。場慣れしてるのか?」……分かりました。では後程、お願いします。」

△△社「この前の鳳凰星武祭で君とシルヴィアちゃんは同棲してるって聞きましたけど、比企谷くんの私生活は今後どうする予定ですか?」

八幡「……交際とは関係ないと思われませんが?」

△△社「生活する上では気になってくるものです。お答え出来ませんか?」

八幡「私は最初に申し上げた筈です。私たちの交際に関係の無いものは全てお答えしないと。」

△△社「同棲しているんですから、関係なくはないと思いますがね?」

八幡「そうですね、なら私からも1つ貴方に質問をします。この会見が終わったら、その左ポケットに隠してる小型の機械、どうするつもりです?」

△△社「……何の事です?」

八幡「惚けても無駄です。貴方の左手とそのポケットの中からチラ見えてたんですよ。今は隠してますけど、何だかシルヴィアさんの方向に向けられていましたか?」

△△社は明らかに動揺し始めていた。他の記者やシルヴィ、ペトラさんも驚いていた。

△△社「き、君は何を言っているんだ！私は何もしていない！」

八幡「ではポケットの中身を見せる事も出来ますよね？」

△△社「何もしていないと言っているだろう！私はカメラで盗撮などしていない！カメラはこの一台だけだ！」

……よし、掛かった。

八幡「……………△△社さん、私は別に『カメラで盗撮していた』なんて一言も言ってませんが？私は小型の機械と言っただけで、それ以外は何も申してませんよ？」

△△社「な、なにい!!？」

此奴ついにあからさま過ぎる反応出したな。分かりやすすぎる。いつの間にか、他局のカメラも△△社の方に向けられてるし。

八幡「……………さて、ポケットの中身も分かった事ですし、その小型カメラ、渡してもらいますよ。」

△△社「……………」

八幡「早くしてください。これ以上お茶の間に惨めな姿は晒したくはないでしょう？」

△△社「くう……………」

……………早くしろよ、この野郎が。

仕方ねえな。

に出かけた事や、食事を一緒に作った事、ライブが大きいですね。」
八幡「少しの間失礼します。」

そして俺は自身を影で覆い、八代界人の姿を現した。

八幡「これが私の仮の姿です。名前を八代界人と言います。」

一気にシャッターを切る音が聞こえて、とんでもないフラッシュの量だった。

◇◇社「……………失礼ですが、八代界人の正体が比企谷さんだと？」
八幡「はい。この事は此処で発表しようと思っていたのでちょうど良かったです。」

取材班はまだ開いた口が閉まっていなかった。そんなに驚く事か？
そろそろ元に戻ろつと。

八幡「……………それで、他に質問は？」

□□社「……………はっ！で、では、今後は芸能界も兼任していくと？」

交際とは関係ないが、発表したのは俺の方だから仕方ないか。

八幡「いえ、それはありません。ですが、今後もしの頻度でお手伝いをしたいと思ってます。」

◇◇社「シルヴィアさんとは、今後もし一緒に過ごすつもりですか？」

八幡「出来る限りはそうするつもりです。」

◇◇社（ダメだこのカップル…………ラブラブ過ぎて胃が持たん。）

〇〇社「こんな事を聞いてすぐ失礼なのは承知ですが、2人にお伺いします。他の異性がいてそちらの方が綺麗またはカッコよかったらどうしますか？」

2人「彼／シルヴィア以外考えられません。」

この人の事だ、悪戯で聞いているんだろう。

〇〇社「では次は比企谷さんに質問です。結婚のご意志はありますか？」

シルヴィア「っ!?!／／／／／」

〇〇社「交際とは関係無いので、答えて頂かなくても結構です。」

八幡「勿論あります。」

八幡 s i d e o u t

――――

八幡は結婚の意思があると答えると、突然制服の裾に手を入れあるものを取り出した。

なんと指輪を入れるケースだった。

シルヴィア「っ!!」

八幡「結婚の発表などはしてませんが、俺は結婚を前提としたお付き合いをしているつもりです。安物ではありませんが……」

八幡がケースを開けると、赤い丸型の宝石に指に入れる金属は金を使っていた。

八幡「指輪も作りました。私のこの気持ちに嘘偽りは一切ありません。……これだけ伝えれば充分でしょうか？」

シルヴィア「八幡くん／＼／＼／＼」

〇〇社「……はい。充分過ぎるお答えでした。ありがとうございます。」

八幡「因みにこの指輪の宝石ですが、宝石ではありません。商業エリアにあるフラワーハウスという花屋で花の色素を結晶化して作ったものです。使用した花は赤い菊です。なぜこの花かは、調べれば分かります。」

八幡「他に質問はありますか？」

八幡の大胆すぎる告白に質問を出来る度胸のある人はいなかった。

TV局関係者「で、ではこれにて、今回の記者会見を終了致します。応答者の皆様は退室して下さい。」

八幡たちは立ち上がり、部屋から退室したが、シルヴィアの顔が真っ赤で涙目になっており、八幡の事をずっと見つめていた。

惚気と勧誘と脱出大作戦

八幡 side

会見が終了した後、俺たちはすぐ帰る予定だったのだが、その予定は変更せざるを得ない状況になってしまった。

その理由は、シルヴィが俺の身体に抱き着いて離してくれないからだ。しかもその顔は真っ赤になっていて、目も潤んでいた。

俺ってそんなに悪い事したか？

八幡「…………シルヴィ、そろそろ離してくれないか？」

シルヴィア「…………／／／／／／／／／／／／ウルウル

ペトラ「仕方ないわよ八幡くん。貴方があんな事を言うんだもの。シルヴィアがこうなるのも無理ないわ。」

八幡「そんなに悪い事言いました？」

ペトラ「逆よ逆、嬉し過ぎるのよ。私からしてみれば、今のシルヴィアが凄く可愛く見えるもの。」

ええ／＼そこまで？

八幡「…………ペトラさんの言ってる事って本当か？」

シルヴィア「…………／／／／／／／／／／／／コクッ

ペトラ「当たり前じゃない。交際の事だけじゃなく、結婚の事も話すんだから。私もシルヴィアから相談は受けていたけど、貴方もここまで本気だとは思わなかったわ。」

八幡「まあ、今までの経験上、真に信じられる人は1人もいませんでしたから。今ではシルヴィを1番に信じてます。」

シルヴィア「／／／っ！！／／／／／／／／／／／／ギューーッ！

するとシルヴィが抱き締める強さを強めた。

シルヴィア「……八幡くん、それ以上は止めて／／／／／」
八幡「ん？何をだ？」

シルヴィア「い、いいから止めて！私もう耐えられないよ！／／／／／」

？本当に何の事だ？

ペトラ「ふふふ、若いわねえ。」

――30分後――

シルヴィも大分落ち着いてきた。それでも腕にはしがみついているが。

ペトラ「シルヴィア、そろそろ出るわよ？」

シルヴィア「う、うん／／／」

八幡「もうこのまま行きます？下手に行動隠すのも意味無いですし。」

シルヴィア「そ、それはダメッ！恥ずかしいから……／／／／／」
ペトラ「なら早く八幡くんから離れなさい？貴方たちの家に帰ったら、幾らでも抱き着いたらいいじゃない。」

ペトラさん、それ逆効果です。

シルヴィア「うう……／／／／／」

ペトラ「はあ……本当に凄いわね。この子の貴方に対する惚れ込みようは。こんな風になる事なんて今まで一度も無かったのに。」

八幡「まあ、俺も人を、というより異性を好きになるって感情が出来たのは去年の王竜星武祭でしたから。」

ペトラ「好きになった時は違えど、愛は同じくらい深いってわけね。

「ご馳走様、もうお腹いっぱいよ。」

別にそんなつもりはないんですが……

――10分後――

シルヴィア「ご、ごめん八幡くん、もう大丈夫。だけど、さっきの事あんまりとか言わないでね？」

八幡「さっきの事？結婚の事とかか？」

シルヴィア「う、うん：／／／」

八幡「そんなおいそれと他人にぶちまけるような事しねえよ。」

シルヴィア「あ、ありがとう／／／」

ペトラ「シルヴィア、準備が出来たのはいいけど、その乙女な顔を早く何とかしなさい。その顔で出るつもり？」

シルヴィア「そういう事も言わないでください！したくてしてる訳じゃないんですから！／／／」

――TV局入口前――

ペトラ「……大勢いるわね。マスコミだけでなく一般人もいるわね。」

シルヴィア「ううゝごめんなさい……」

八幡「いや、シルヴィは悪くないだろう。悪いのは上手い餌に集る蠅みたいな奴らが悪い。」

ペトラ「八幡くん、随分容赦のない事言うのね。」

シルヴィア「でも、ペトラさんも鳳凰星武祭のVIPルームで、同じような事言っていましたよ？」

ペトラ「そうだったかしら？まあ言っていたとしても訂正はしないわ。本当の事だもの。」

うわあ、容赦ねえな。庇護するつもりはないけど。

???「どうも。先程の会見、お疲れ様でした。」

ペトラ「?……貴方は確か……〇〇社の人ね?」

〇〇社「はい。こうして会うのは2度目ですが、挨拶をしていなかったので改めて。」

ペトラ「そう。シルヴィアから聞いてるわ。その時私もいたけど、貴方は私情の込めた質問をしないのね?」

〇〇社「私はあくまでも中立的な立場でいたいので。それに、私情な質問は必ず返答してくると思えませんし。何よりも、質疑応答して下さっている方々に失礼ですので。前回、今回の△△社さんが良い例ですね。」

ペトラ「……成る程。確かに貴方はどの立場の人でも中立な事が出来そうな人ね。何よりも人柄にも好感が持てるわ。あの会見の場で結婚の事を聞くだけの度胸もある。」

〇〇社「恐縮です。」

シルヴィア「それに愛想も良いから、質問される私からしても悪い気分にはならないし、礼儀も凄く良い人なんだよ!」

ペトラ「そうみたいね。シルヴィアの言っていた事も本当みたいだし、そうしようかしら。」

〇〇社「……と、言いますと?」

ペトラ「この子と八幡くんから聞いて、少し考えていたのだけど、貴方、私の事務所の専属記者になる気はかしら?」

〇〇社「せ、専属ですか!」

ペトラ「ええ。〇〇社ではなくて、〇〇社の『貴方』を推薦してるわ。2度目の取材でも態度を変えなかった貴方には私でも好感を持てるわ。それに、シルヴィアからも強く推されているみたいだし。どうかしら?」

〇〇社「私個人としては喜んで受諾しますが、1人では決め兼ねますので、社の方で相談を受けてから後日改めてご連絡させて頂いてもよろしいでしょうか?」

ペトラ「ええ、それでいいわ。でも、覚えておいて。私はあくまで

も貴方に専属になって欲しいわけで、それ以外は望んでいないわ。そこをちゃんと説明して頂戴ね。」

〇〇社「はい！貴重なお話ありがとうございます！このお話、前向きに検討させて頂きます。本日はお疲れ様でした。」

そして〇〇社は出口とは反対側の方に走って行った。

八幡「どうでした？」

ペトラ「中々良い人材ね。貴方からも聞いておいて良かったわ。」

シルヴィア「あの人が専属なら、私も安心出来るかな。」

八幡「専属になれるといいな。さて、話を戻すが、正面から行きます？」

ペトラ「嫌だけどそれしかないわ。」

八幡「それなら俺に1つ方法があるのですが、どうします？」

シルヴィア「八幡くん、それって？」

八幡「簡単だ。それは――」

八幡「俺たちが見えなければいいんだ。」

2人「……………え？」

ペトラ「八幡くん？貴方何を言ってるの？」

シルヴィア「そうだよ。そんな事出来ないよ。」

八幡「ペトラさんは仕方ないとしても、俺はシルヴィにはやった事あるぞ？明鏡止水って技。」

シルヴィア「明鏡止水……………あっ!!もしかしてあれ!？」

八幡「ああ。」

ペトラ「……………何の事かしら？」

シルヴィア「鳳凰星武祭の時にVIPルームに入る直前、ちよつとだけ八幡くんを抱き締めてもらいまして……………／／」テレテレ

八幡「人前でするのもアレですから、俺が明鏡止水で姿を見えなくさせたんですよ。まあ、どっちみち人前ですけど。」

ペトラ「つまり貴方のその技を使えば、辺りの人は私たちが見えなくなるってことかしら？」

八幡「そんな感じです。」

シルヴィア「でもどうするの？私たちが見えなくなったとしても、自動ドアがいきなり開くのは不自然だよ。」

八幡「そこはこうすればいい。」

俺は影から自分の分身を作り出し、TV局内の1人に化けた。

2人「おお!」

八幡「これならバレずにいけるでしょう。んじや、車までの道はお前が先頭な。」

八幡（分身）「おう、任しとけ。」

八幡「口調口調。」

八幡（分身）「おっと、分かりました。」

そして俺たちは明鏡止水で姿を消して、分身についていった。

「まだか？シルヴィアと【夢幻月影】は？」

「もう1時間経つぞ？取材は終わったんじゃないのか？」

「もしかして、裏の出口から出て行ったのか？」

「馬鹿言うな。此処は2つしか出口が無いんだぞ？そうなたら間違
いなくあっち側から出て行ってる筈だ。」

……………すいません。もう目の前にいます。

そして俺たちは何事も無かったかのように車に乗り込み、TV局を
去った。

脱出成功!!

再び家（界龍）へ

八幡 side

シルヴィア「ふふふっ♪上手くいっただね！八幡くんの脱出作戦っ！」

八幡「そうだな。正直上手く行つてよかった。」

ペトラ「その能力、分けてもらいたいわね。面倒な取材からも逃げるために。」

八幡「それは無理ですよ。これは俺特有の能力なんですから。」

ペトラ「分かつてるわよ。」

しかし、見事に見つからずに通り抜けてったよな。あんな風到大勢の人の前で誰にも見つからずに通り抜けたのって初めてだ。

シルヴィア「そ、それでさ八幡くん。さっきの指輪って……／＼／＼八幡「ん？ああ、アレか。この前オーフェアと出かけた時に花屋で作ったんだよ。手ぶらで帰るのもアレだと思つてな。」

シルヴィア「ゆ、指のサイズとか計ったの？」

八幡「いや？だつて計つてたらバレルだろ。勘で作った。はめてみたいのか？」

シルヴィア「う、うん／＼／」

そう言つたシルヴィのために、俺は裾から指輪ケースを取り出して、中身を出した。

ペトラ「どうせなら八幡くんがはめてみたらどう？その方がシルヴィアも嬉しいでしょ？」

シルヴィア「ちよっ!? ペペペ、ペトラさん!?」

八幡「俺はいいですけど、シルヴィ次第ですね。」

シルヴィア「い、良いの？」

八幡「シルヴィが許してくれるのならな。」

シルヴィア「じ、じゃあお願いします／＼／」

俺は少し緊張しながらも、シルヴィの薬指に指輪をはめた。

サイズもピッタリだった。

まさかちょうどとは……

シルヴィア「……………」

八幡「ま、まさかちょうどだなんてな……」

ペトラ「そ、そうね。こんな偶然もあるのね。」

シルヴィア「……へ。」

ペトラ「……シルヴィア？」

シルヴィア「えへへ♪八幡くんからの指輪／＼婚約のために

……えへへ／＼」

シルヴィが……

シルヴィア「ねえ八幡くん。私今、凄く幸せな気分だよ。」

八幡「そうか……何よりだ。」

シルヴィア「この指輪……『結婚してくれ』って事で良いんだよね？」

八幡「俺としてはそのつもりだ。まあ、本番は本物を用意するけどな。」

シルヴィア「うん……今はこれで良いよ。八幡くんの愛が伝わってくるから。」ギュツ

なんていうか……良い意味で壊れたって言うべきなのか？腕にも抱き着いてきたし。

ペトラ「あらあら、シルヴィアったら。」

後、ペトラさんも生温かい目で見ないで下さい。

――界龍第七学院前――

八幡「着きましたね。じゃあ俺は「八幡くん、少しいいかしら?」……はい?」

ペトラ「シルヴィアから聞いているのだけど、貴方料理が出来るらしいわね。」

八幡「?ええ、人並みに。」

ペトラ「よければ作ってもらえないかしら? 勿論食費は私が払うから。」

八幡「普通のご飯でよろしければいいですよ。後、別に費用なんていりませんよ。ここで食べていきます?」

ペトラ「ええ。」

シルヴィア「私も! 八幡くんの料理食べたい!」

八幡「分かった。じゃあ車はここまででいいですね。降りて俺の部屋まで案内します。」

そして俺たちは車から降りて界龍の入り口まで行った。

門番「尊師、お疲れ様です!!」

八幡「ああ、この2人は俺の客人だ。気にしないでくれ。」

門番「お客人……尊師のご恋人では?」

八幡「まあ、そうなんだが……もう1人いるからな。」

門番「分かりました。」

八幡「じゃあ入校書作るの、少し待っててください。」

ペトラ「八幡くんって本当にそんな呼ばれ方してたのね。」

八幡「俺は師匠って柄じゃないんですけどね。この呼び方で妥協してもらってます。っと、出来た。それじゃ、行きますか。」

――界龍校内――

女子生徒 「「尊師、お疲れ様です！」」

男子生徒 「「お疲れ様です!!」」

ペトラ 「……凄いわね、貴方の慕われっぷりは。」

八幡 「ただ師匠として崇めていただけでしょう。俺がいなくなればこんなの無くなりますよ。」

シルヴィア 「そうかな？私は無くならないと思うけど？」

八幡 「まあなんでもいいけどな。」

冬香 「あら？八幡さん、帰っていたんですね。それに……後ろの方々はクインヴェール女学園の『戦律の魔女』シルヴィア・リユーネハイムさんに、理事長のペトラ・キヴィレフト様ですね？」

シルヴィア 「へえよく知ってるね！」

ペトラ 「私の事まで……貴方は？」

冬香 「あつ、自分の名も名乗らず申し訳ございません。私、当校の高等部3年所属の梅小路冬香と申します。」

シルヴィア 「もしかして序列5位の『神呪の魔女』？」

冬香 「はい、その通りでございます。この度の会見、お疲れ様でした。ところで、どうしてこちらに？」

八幡 「俺のご飯を食べてみたいとペトラさんからの要望があつたので。」

冬香 「そうでしたか。それはお邪魔をしてしまいましたね。八幡さんの作る御品はとても美味ですので、期待しても心配ありませんので、では。」

あの人、やっぱり界龍ってタイプじゃないよな。

ペトラ「随分と礼儀正しい子ね。」

八幡「まあ、この界龍冒頭ペリッワッの十二人の中でも数少ない常識人ですよ。」

ペトラ「どういう事？」

八幡「それは言わないでおきます。俺としては恥ずかしいので。」

シルヴィア（八幡くん……きつと星露の事を言ってるんだね。）

――八幡の部屋前――

八幡「……着きました。此処が俺の部屋です。」

八幡「中に1人いますけど、それでもいいですか？」

シルヴィア「誰がいるの？」

八幡「2代目【万有天羅】。」

2人「……え？」

八幡「ん？何ですか？」

ペトラ「この中にあの史上初の三冠制覇グラントスラムを成し遂げた汪小苑がいるの？」

八幡「ええ、そうですけど？」

シルヴィア「……八幡くん、浮気？」

八幡「な訳ねえだろ。偶々来てたんだよ。横浜に住んでんだけど、刺激が少ないんだと。」

八幡「んじや、入りますか。」

よしっ！久々に本気出せそうだ！

虎峰「あつ、八幡！お帰りなさい。すみません、お邪魔してます。」
セシリー「あー、八幡ー！やつと帰ってきたー！早くご飯作ってー
！」

陽乃「お帰り八幡くん！そんなにお姉さんが恋しかったのかなあ？
ご飯一緒に作って食べようー！」

星露「おお!!帰ってきたか！八幡よ！早速飯を作るのじゃ!!」

小苑「ズズーッ……ふう、済まぬな八幡よ。こやつらここに居たい
と聞かぬものでな。入れてしもうた。」

隠したくて仕方なかった事実が目の前で起きていた。

虎峰はまだ良いだろう。多分小苑さんに許可を取ってるはずだ。
食卓にもお茶しか置いてない。

だが問題はこの3人だ。こいつらまたか……さて、今度はどうして
くれようか。

飯騒動とドツキリ

八幡 side

おいおい勘弁してくれよ……何で本当にこんな時に限っているんだよ。タイミング悪過ぎだろ……………

シルヴィア「八幡くん？どうかしたの？」

八幡「いや、すまないがもう少し待っててくれるか？中にいるゴミを一掃するから。」

ペトラ「ゴミ？貴方は自分の部屋くらい片付けていそうな感じがするのだけど……」

八幡「すみません。ちよつと粗大ゴミが多くて。少し大声を出すかもしれませんけど、そこは許してください。」

ペトラ「？分かったわ。」

シルヴィア「うん……」

八幡「すみません。では少しの間、失礼します。」

そして俺は静かに扉を閉めてから部屋の方に向き直る。

さて……どうしたもんか。

八幡「それで？小苑さん以外の言い分を聞こうか。」

虎峰「僕は八幡の会見を見ると、小苑様から武術の事を聞きたかったので、入れてもらいました。」

セシリー「あたしは八幡の会見を見ると、ご飯を食べるためだよー。八幡帰って来るタイミングに合わせてこの部屋に入れてもらったんだー！」

陽乃「以下同文っ！」

星露「妾も同じじやが、お主の飯を食べに来たのが、1番じやな。」

……虎峰はいいだろう。だが、後の3人はメシ目当てだ？

そして俺はいつの間にか持っていたハリセンで3人の頭にめがけて思い切り振った。

スパパパアーンとメチャメチャ良い音が俺の部屋に響き渡った。

セシリー「いったあああい!!八幡何するのさー!?!」

陽乃「そうだぞ!乙女にこんな事するなんて罰当たりだぞ!!」

星露「昨日に続き今日も叩かれたぞ!?!妾が何をしたというのじゃ!?!」

八幡「やかましい!お前ら自分の胸に聞いてみる!それとセシリーと星露には言ったよな?勝手に菓子は食うなって!なのに何だそこに置いてある包みは!?!」

セシリー「仕方ないじゃーん!八幡の料理が暫くお預けだったんだからー!」

星露「妾もずっと食堂の青椒肉絲で我慢しておったのじゃぞ!?!」

陽乃「これの何がいけないのさー!」

こいつら……これでも自分が悪くないと言うか。なら俺にも考えがあるぞ。

八幡「そうか。あくまでもその意地を張るってんなら、今日から3ヶ月間はお前らには飯作らねえからな。何ならずつとでもいいぞ。」

3人「(「ごめんなさい!!私(あたし)(妾)が悪かったから許して!!(許してよー!!)(許して欲しいのじゃ!!)」」

八幡「お前らにはプライドが無いのか!?!たかが俺の飯ごときで本氣出し過ぎだろうが!?!」

いや冗談抜きで！こいつら本当にプライドあるのか!?俺の飯＞自分のプライドってどういう事だよ!?

セシリー「だって八幡のご飯が食べられなくなる方がつらいもーん!!」

飯よりも自分のプライドを優先しやがれ。

陽乃「私にとって三度の飯より好きな八幡くんのご飯が無くなるのは、非常に大問題なんだよ!?絶対にそんな事させないんだから!」

なら三度の飯より好きな俺の料理食いますか?白米と味噌汁だけですか?

星露「お主にも言っであろう!これは妾の楽しみの1つなんじゃ!!」

俺も心の中で言ったよ。そんな楽しみ消えてしまえってな。

八幡「そう思うんなら、こんな事やめてくれ。勝手に部屋に入られる人の気持ちも考えてくれ。」

セシリー「でも、1人いたし……」

八幡「あのなあ……はあ、まあいい。今日はもう出て行ってくれ。作る気分になれん。」

3人「二はい……」

不思議だな、落ち込んでるようなこえしてるのに、全く可哀想だと感じない。

虎峰「あの……僕も出て行った方が……」

八幡「いや、飯の理由がないだけまだマシだ。それに残っていてく

れた方がちょうどいいしな。」

虎峰「……どういう事です？」

まあ、それは……アレだよ。

八幡「まあそのうち分かる。」

虎峰「それよりも、僕は八幡に聞きたい事が山程あるのですが？」

八幡「答えてやるから少し待て。」

さて、そろそろ呼びにいくか。

俺は再び扉の方へと戻り、2人を出迎えることにした。

八幡「お待たせしました。どうぞ入ってください。」

シルヴィア「……八幡くんも苦労してるんだね。」

ペトラ「ごめんなさいね。さつき貴方に言った事を撤回するわ。恐ろしい残飯処理係がいるのね。」

八幡「いえ、残飯処理係じゃなくて食費泥棒ですね。」

ペトラ「尚更タチが悪くなってるわよ？」

いいんです、もうそれで良いんです。

ペトラ「じゃあ上がらせてもらうわね。」

シルヴィア「お邪魔しまーす。」

よし。虎峰よ、刮目せよっ!!

俺がやるのは少し違うな。

八幡「虎峰く、もしシルヴィのサインが貰えとしたり、何に書いて欲しい？」

虎峰「え？なんですか急に？それも何でそんな所から質問を？」

八幡「いや、興味本位だー。」

虎峰「そうですね……無難にCDですかね。新作のアルバムにサインをして欲しいですね。でも、本当にそれが何です?」

シルヴィア「はい! 虎峰くん、ご注文のお品をお届けに参りましたー!」

虎峰「……………え?」

シルヴィア「ほくら! これ私の新作アルバムにサインしてあるから、受け取ってよー。」

虎峰「……………」

虎峰「八幡、僕は今幻覚を見ているんでしょうか? それとも八幡の能力ですか? 目の前にシルヴィアさんがいるのですが……」

八幡「正真正銘本物の歌姫、シルヴィア・リユーネハイムだが?」

虎峰「……………」

虎峰「○☆*＜％〒×↓％\$
!!!?
」

すみません、日本語でおねがいします。

※嬉し恥ずかしの昼食

八幡 side

虎峰が訳の分からん言語を使って叫びだした。そしてシルヴィの方をガン見してる。

虎峰「……………」パクパク

喋ってるつもりなんだろうが、全く声に出てないぞ？

シルヴィア「えくと、アルバムは受け取ってくれるのかな？」

虎峰「っ!!ふぁい!ろろほんべっ!!」

虎峰、さつきよりはマシになったが、どうせなら言葉にしてくれ。

虎峰「は、は、八幡っ!!これは一体どういう事ですか!」

八幡「俺の飯を食いたいってペトラさんが言ってな。それでここに来てもらったんだ。」

小苑「なるほどのう。それにしても、お主が八幡の嫁になる者じゃない?」

シルヴィア「よ、嫁っ!」

小苑「違うのかえ?八幡は会見で豪語しておったが、お主はそう思っておらんのか?」

シルヴィア「い、いえ!私も本気です!本気で八幡くんが好きです!」

ペトラ「シルヴィアに嘘がない事は私が保証します。」

小苑「ほう……お主は会見に出ておったクインヴェールの理事長じやったのう。」

ペトラ「はい。初の三冠制覇を成し遂げた汪小苑さんにお会いでき

て光栄です。」

小苑「よさんか。そんなものもう過去の話じゃ。儂の威光なんぞ、もう無くなつとるわい。」

実際は凄いい人なんだよな。2代目の【万有天羅】で初めて3つの星武祭を制して三冠を成し遂げた伝説の人だからな。

小苑「それよりも八幡よ、いつまで客人を立たせておくつもりじゃ？早う座らせんか。そしてお主は食事の準備をせい。」

八幡「ああ、はい。すみませんペトラさん、放つたらかしにして。シルヴィアも。」

ペトラ「気にしないでいいわ。」

シルヴィア「私も大丈夫だよ。」

八幡「小苑さんと話でもしながら待っていてください。虎峰は……無理そうだな。」

未だに放心してるし。アルバム見ながら。

八幡「小苑さん、少しの間お願いしてもいいですか？」

小苑「構わんぞ。お主の飯を食うのは初めてじゃからのう。腕を振るうが良い。」

さてと、作りますか。

――30分後――

八幡「お待たせしました。取り敢えずこんなものでよろしければ食べていってください。」

俺が作ったのは炒飯だ。簡単ですぐに作れる美味しい中華料理って言ったら炒飯だからな。

小苑「ほう……美味そうじゃ。」

シルヴィア「そういえば八幡くんの作る料理は美味しいけど、中華は食べた事無かったな。なんか楽しみ！」

ペトラ「良い匂いがしてたから私も待ち遠しかったわ。」

八幡「味は塩こしようにしてます。そして虎峰、良い加減起きろ。」

そして俺は虎峰の頭をチョップする。

虎峰「っ!? あ、八幡。」

八幡「あ、じゃねえよ。お前いつまで安心してんだよ。30分も放心してる奴見るの初めてだ。」

虎峰「そ、そうですか……っ!! そうだ八幡、シルヴィアさんは!？」

八幡「お前の横にいるが？」

虎峰「……………え？」

シルヴィア「やつほく♪」

虎峰「!! シシシ、シルヴィアさん!!」

八幡「頼むからもう放心とか気絶とかするなよ? また起こすのとか面倒だから。」

虎峰「わ、分かってますよ!」

シルヴィア「その時は私が起こしてあげようか？」

虎峰「八幡、もう一度だけ気絶してもいいですか？」

八幡「やめろ。俺の嫁さんに手を出すな。」

シルヴィア「よ、嫁さん……／＼／＼」

小苑「八幡よ、良き関係を築けておるのは良いが、それを此处で見せつけるでない。」

別にそんなつもりはなかったんだが……

ペトラ「そうね。私も貴方たちの甘々は見てきたつもりだけど、違うものを感じるから余計甘いよね。」

ペトラ「まるで本当に夫婦みたいな雰囲気出すから余計に、ね。」
シルヴィア「ふ、夫婦って／＼／＼／＼やめてくださいよ／＼／＼」
ペトラ「はいはい悪かったわ。それじゃ食べましょう。」

その後、俺が作った炒飯は大絶賛だったのは、此処にいる5人だけの秘密である。

しつもん（尋問）と師からの感謝

シルヴィア side

昼食を食べ終わった後、ペトラさんは少し休憩してからクインヴェールに帰ったけど、私は八幡さんと家に帰る予定だからこのまま残っているんだ。でも、目の前の虎峰くんがちよつと怖い（それでも睨んでるようにしか見えない）顔をして私と八幡くんを見ている。雰囲気というと、なんか親に説教されてるみたいな感じかな？

虎峰「……………それで、八幡。あの会見で言っていた事は本当なのですか？」

八幡「言っていた事が多過ぎて分からん。どれの事だ？」

虎峰「貴方が八代界人さんだという事です！流石に僕も驚きましたよ!!」

八幡「その事か。ああ、本当だぞ。」

虎峰「サラツとそんな事平然といわないでください！こっちは真剣なんですよ!？」

でもそれってそれ虎峰くんの視点だよな？八幡くんは変装してただけだし。

あつ、八幡くんが界人くんの姿になった。

八幡「どうだ？」

虎峰「……………歌声はどうなのですか？」

シルヴィア「意外に厳しいんだね。」苦笑

虎峰「幾ら八幡であっても嘘の可能性もありますので。」

根が真面目なんだね。

八幡「んんっ！♪♪♪」

八幡くんが一曲歌って終わる頃には、既に納得したような顔をしていた。

虎峰「どうやら本物のようですね。」

八幡「さっきもそう言っただろ。」

シルヴィア「あはは……」

いちやもんではないんだろうけど、気になる事全部聞くつもりなんだろうね。

虎峰「次です。」

八幡「なんか此処でも会見させられてる感じだな。」

シルヴィア「特撮版的な？」

八幡「そんな特撮いらねえよ。」

取材の特撮かぁ………確かにやだなあ。

虎峰「私語は慎んでください！」

八幡「こいつめんどくせえ……」

シルヴィア「ま、まあまあ……」

——質問応答中——

虎峰「………最後です。」

八幡「や、やつと最後か……」

シルヴィア「け、結構あったね……」

聞いているだけの私でも、少し疲れちゃったよ。それにしても、会見から今の質問が始まるまで、この内容を考えていたなんて………凄過ぎ

るよ。

30個くらいあったのに……全部覚えてたのかな？

虎峰「八幡、貴方はシルヴィアさんの事を愛していますか？」

えっ!!?

シルヴィア「ち、ちよつと虎峰くん!？」

虎峰「八幡、どうなのですか？」

八幡「随分とナメた質問だな？俺がシルヴィで遊んでるように見えるのかお前は？だとしたら容赦しねえぞ？」

っ!!!この感じ……八幡くん相当怒ってるのかな？

虎峰「……そうではありません。ただ僕が聞きたかっただけです。他意はありません。」

八幡「そんな当たり前な事聞くんじゃねえよ。答えは、生涯を通して愛し続けてやるだ。」

虎峰「……僕は嘘が嫌いですよ？」

八幡「俺はそれ以上に大嫌いだ。嘘がつくものは全部嫌いだと思うくらいな。」

……気のせいかな？八幡くんの背中から虎が見えるような……

虎峰「……そうですか……そうですね。そうでなければ、あの会見の前であんな事言ったりしませんよね。」

八幡「当たり前だ。」

虎峰「すみません、こんな事聞いたりして。でも安心しました。」

段々八幡くんから怒気が薄れていた。ああ……良かったあ。

小苑「良い氣じゃったのう、八幡よ。」

八幡「小苑さん……戻ってたんですか？」

小苑「今戻ったのじゃ。するとどうじゃ、お主が今までにないくらい怒氣を晒しておったではないか。お主がここまで怒りを露わにするのは初めてではないか？」

八幡「そうですね。それは断言できます。」

それじゃあ誰も八幡くんの本気で怒ったところを見た事がないって事だよ。

八幡「俺が本気で怒る日なんて、来ない事を祈りますよ。」

小苑「ほっほ、そうじゃのう。」

私も来て欲しくないなあ。

小苑「それにしても、シルヴィアとやら。お主も愛されておるのう。八幡にこれ程言わせた女子はおらんぞ？」

シルヴィア「は、はうう……／＼／＼」

八幡「あの時は別ですよ。あの時の俺は人自体信じてませんでしたから。小苑さんは信じてましたけど。」

小苑「当然じゃ。儂の息子なんじゃからな。信用無くして何が師じゃ。」

シルヴィア「息子？八幡くんの母親ってまさか……」

八幡「真に受けるなよ。師と弟子の関係だ。まあ俺の代理母って事にもなってるがな。」

え!?それってどういう……うん、そうだったね。八幡くんの過去を辿れば自然に分かる事だよ。

小苑「分かってくれたようじゃのう、シルヴィアとやら。そうじゃ、八幡はあの時誰も信じてはおらんかった。それは肉親も例外ではな

い。」

小苑「あんな状態まで放っておいた親の顔を見てみたいものじゃ。儂も初めて見たわい。お主の顔がまるで死人のようになっておったんじゃないかな。」

八幡「そこまで酷かったんですか？」

小苑「うむ。じゃから儂はこの学院の者達、そして何よりもお主には大きく感謝しておるのじゃ、シルヴィアとやら。」

小苑「儂に出来たのは、精々武術や星仙術の使い方と、一緒に過ごす事だけじゃった。無論これだけでは此奴の闇など取り除ける訳なんぞ何処にもない。じゃが儂が此奴の公式序列戦で見た時、明らかに闇が大きく無くなっておったのじゃ。此奴の目と同じでな。」

小苑「八幡の最初を知っておる儂だからこそ言える事じゃが、今はその闇が殆ど無くなっておる。小さいのは、まだ残っておるかの。そうだとしても、界龍の皆、シルヴィアには多大に感謝しておる。」

小苑「じゃからシルヴィアよ、儂から言わせておくれ。息子を助けてくれて、本当に感謝する。これからも儂の八幡をよろしく頼むぞ。」

……………そんなに酷かったんだ、小苑さんが八幡くんと出会った時つて。

シルヴィア「……………勿論です。これからも任せてください！」

小苑「頼んだぞ、義娘よ。」

今、なんか字が違ったような……

小苑「八幡よ、お主の女がここまで言うてくれたのじゃ。お主も負けんようにするんじゃないぞ？」

八幡「……はい。」

小苑「うむ。さて、儂はもう行く事にする。またいつかの。」

八幡「……模擬戦の事は？」

小苑「そんな話もあったのう。じゃがそれは、お主がもつと強く

なつてからで良い。」

小苑「それと、その男おのこよ。」

虎峰「は、はいっ!」

小苑「八幡の事をこれからも頼むぞ。何せお主が八幡の最初の友であらう?」

虎峰「は、拜命致します!!」

小苑「うむ、ではの。」

そして小苑さんは部屋を出た。あの人から、八幡くんが凄く大切だつてオーラを凄く感じた。師匠は親、弟子は息子、かあ。

八幡「……全く、お節介焼きな義母ちゃんだな。」

そう言いながらも、嬉しそうだよ?

これから2人で

八幡 side

小苑さんが帰ってからは、部屋は俺とシルヴィの2人だけになってシルヴィとライブ映像を見たり談笑したりしていると、いつの間にか夕方になっていた。

俺たちは元々、それぞれの学校に戻ってから家に帰るつもりだったからいいんだが、街で話しかけられないか不安だ。

八幡「そんな事思ってたが、いざ街に来ると本当に視線が半端ないな。」

シルヴィア「そうだね……まあ、あれだけの会見の後だからね。無理もないよ。」

それに、界龍とクインヴェールは対になってるから嫌でも真ん中を通らないと、遠回りになっちまうからな。

シルヴィア「どうする?」

八幡「突っ切るしかないだろ。話し掛けられても、なるべく早く話を切ろうぜ。」

シルヴィア「そうだね。」

俺たちは少し早歩きをしながら家に帰った………つもりだったが――

シルヴィア「あつ! そういえば昨日のお夕飯で材料とか無いんだつた。八幡くんどうしよう………」

八幡「……スーパーに寄るか。確かにあまり人目にはつきたくないが、やむを得ないだろう。」

シルヴィア「……そうだね。」

願わくば、誰も話しかけてこない事を祈ろう、マジで。レジのおばちゃんは例外ね。

—————

スーパーの中に入っても、人の目は静かになるどころか、輝きを増していた。今日何作るか決めてさっさと帰ろう。

八幡「シルヴィ、今日は何にする?」

シルヴィア「そうだねえ……ハンバーグにしない?」

八幡「んじゃそうするか。後はもう少し先の事も考えて色んなモン買っとくか。」

そして俺たちはこれと決めた材料をカゴの中に入れていくのだが
……

「シルヴィアさん、比企谷さん!握手してください!」

「あつ!私も!」

「俺にはサインお願いします!」

「もしよろしければ彼女さんを1日僕に……」

……といったような客もいた。最後の奴は俺が少し殺気を出したくらいで「じよ、冗談ですっ!!失礼致しましたー!!」って言って逃げに行った。次は無えぞ。

店員「おっ!比企谷ちゃんじゃないか!休憩中にテレビ見たけど、アンタ歌姫と付き合ってたなんてね!驚いたよ!」

八幡「まあ、言ってなかったんで。」

店員「じゃあ、ずっと一緒にいた茶髪の女の子は変装した姿って事

かい？だとしたらいつも一緒に居るんだねえ。」

シルヴィア「極力一緒にいたいので。」

店員「あんたら本当に仲良いねえ。よっしゃ！あたしも決めたよ！今日は半額にしたげるから持ってきたラブラブ夫婦！」

シルヴィア「ラ、ラブラブ夫婦って……まだ結婚もしてませんし

……／／／／／

八幡「おぼちゃん、割引してくれんのはありがたいが、あんまシルヴィをイジメないでくれ。」

店員「純情なんだねえ、あんたの恋人は。まあ分かったよ！また来とくれ！」

次に会った時も絶対からかってくるなこれは。

—————

シルヴィア「なんか嬉しかったなあ。私の正体を知ってもいつも通り接してくれる人がいて。」

八幡「そういう人はやっぱ貴重か？」

シルヴィア「私の業界ではね。普通なら囲まれるのが当然だから。」

八幡「もし1人でいたら、大変な事になってるだろうな。それに

……」

シルヴィア「？どうしたの？」

八幡「悪い、ちよつと荷物頼む。」

シルヴィア「え？う、うん……」

後ろからチヨロチヨロついてくる奴らに少し挨拶してくるから。

「……あれ？男の方消えたぞ？」

「何処行ったんだ？」

「そんな事どうでもいいだろ。今のうちにシルヴィアちゃんの「俺の

女に何か用か?」……え?」

こいつらの真後ろに立てるくらい造作もなかったな。

「ひ、比企谷八幡っ!!」

「な、何で後ろに!?!さっきまであそこにはたはずなのに!?!」

八幡「それよりもお前ら、シルヴィアが何だって?」

「え? い、いや、別に何も……」

「は、はい! 何もありませんよ? なっ!」

「あ、ああ!」

八幡「そうか? ならいいが、もし俺たちの後をつけてたんならそれはやめてくれ。ハッキリ言って迷惑だ。」

「は、はい!」

「そんな事しません!」

「誓います!」

八幡「よし、今聞いたからな。ならもう行ってくれ。家の場所を知られるのも嫌なんだ。」

「「は、はい!!」」

やれやれ。本当にやめてくれるといいんだがな。さて、戻るか。

八幡「すまん、待たせたな。」

シルヴィア「ううん、大丈夫だよ。ストーカーだったの?」

八幡「どうだろうな。一応目は広げておくから大丈夫だとは思いますが、もし続けてたら、次は囲い影で家に着くまで閉じ込めておく。」

俺もシルヴィイの家が知られるのは本意じゃないからな。それはなるべく避けたい。

シルヴィア「そっか……少し騒がしくなっちゃったけど、これで日常に戻れたね。」

八幡「……そうだな。周りがうるさくなければいいんだがな。」
シルヴィア「それは祈るしかないね。近所は八幡くんが出入りして
る事、少なくとも知ってるだろうし。」

それもバラさない事を祈るしかないな。

シルヴィア「……でも逆に言えば、堂々と八幡くんと居られるって
事でもあるよね。」

八幡「そうだな。今までは隠してきた関係だからな。」

バレてた人もいるが、それでも少数だからまだマシだろう。

シルヴィア「ならさ、これからは堂々と八幡くんに抱きつけるんだ
よね？」

八幡「お前は元から堂々と抱きついてた気がするが……まあそう言
う事でもあるな。」

シルヴィア「えへへ♪じゃあ街中でもこんな事が堂々と出来るんだ
よね♪」ダキッ！

シルヴィは突然俺の腕に抱きついてきた。俺としても断る理由が
無いから特に振り解いたりはいしない。

シルヴィア「静かになるまでは時間がかかるだろうけど、一緒にい
てくれる？」

八幡「愚問だぞ。」

シルヴィア「うふふ♪ありがとう！」

静かになるまでどころか、一生一緒にいてやるから安心しろよ！

ハシル劇場 ライブ編2nd 依頼

八幡 side

9月の中旬、まだ俺たちの周りには自分たちの噂が絶えない中、俺は今2日ある休みの内の1日を界龍にある自分の部屋で楽しんでいる。シルヴィの家には行かないのかって？なんか次のライブの打ち合わせがあるらしい。

八幡「にしても、こうして冬香さんと話をするのも久々な感じがしますね。」

冬香「そうですね。《鳳凰星武祭》の期間もありましたし、そんなに暇がありませんでしたからね。」

八幡「確かに。俺としても唯一この学院で落ち着いて話の出来る人ですからね。それに日本の話も出来ますから、この時間は俺にとっても有意義と言えますからね。」

冬香「ふふふ、ありがとうございます。それにこんな茶菓子まで用意してもらって……」

八幡「いいんですよ。これくらい朝飯前ですから。」

俺が作ったのは、単なるクッキーだ。プレーンとチョコとミックスの3種類作ったから、結構楽しかった。

そして飲み物は紅茶だ。

冬香「朝飯前ですか。流石当校の食堂を一度任されただけはありませんね。」

八幡「楽しんでやればあつという間ですからね。朝暇だから作っておいて正解でしたね。」

冬香「ふふ、私は運が良いのかもしれませんが。八幡さんの手作りクッキーを食べられるなんて。彼女さんが嫉妬しませんか？」

八幡「シルヴィはそんな事で嫉妬なんてしませんよ。したとしても宥めますんで。」

冬香「なら安心ですね。では久々のお茶会、楽しみましょうか。」

そして俺たちは、久々に日本の話や界龍の冒頭の十二人の話や料理やお菓子作りの話などをして盛り上がった。

そしてそれから2時間後……

八幡「そして、最後はオーブンで焼き終わったのを逆さにして生地が冷えるのを待つだけです。」

冬香「成る程……ありがとうございます。勉強になりました。」

八幡「いえ、どういたしm「p i p i p i : : p i p i p i : :」あつ……」

ペトラさん？何で俺に？

冬香「出ても構いませんよ。」

八幡「すみません、失礼します。」

俺はc a l l ボタンを押して、ペトラさんと通信を開始した。

ペトラ『こんにちはは八幡くん。今少し時間をもらえるかしら？』

八幡「いいですけど、何です？」

ペトラ『ああ、ごめんなさいね。言い方が悪かったわね。貴方にお話があるから、今から事務所に来てもらえないかしら？』

八幡「今、ですか……」

どうする？今は冬香さんと一緒にいるからな。

冬香「八幡さん、行っても構いませんよ。」

八幡「冬香さん？」

冬香「私は特に貴方の邪魔をしようとは思っていませんので、都合が出来たのならそちらを優先してください。」

この人、ホント良い人だ。

星露やセシリー、陽乃さんに見せてやりたい！

八幡「ありがとうございます。すみませんペトラさん。お時間取らせて。事務所でいいんですね？」

ペトラ『ええ、いいかしら？』

八幡「分かりました。では後ほど、すぐに向かいます。」

そして俺は通信を切り、支度をした。

冬香「では、私もお暇しますね。今日も有意義な時間をありがとうございました。」

八幡「いえ、俺も楽しかったです。」

部屋を出た後、俺は少し急ぎ目にシルヴィの事務所を目指した。移動は伽耶梟を使ったから、そんなに時間はかかってないはずだ。

――事務所――

八幡「失礼します。」

スタッフ「ん？おお、比企谷くんっ！待ってたよ！マネージャーとシルヴィアちゃんはこっちだよ！」

着いた矢先に部屋まで案内される俺。その際にはスタッフの皆さんから久々の挨拶と交際してる事の祝福の言葉をもらった。

此処の人たちも良い人だ……

スタッフ「此处だよ。ちょっと待っててね。マネージャー、シルヴィアちゃん、比企谷くん到着しましたー!」

ペトラ『すぐに入れてちょうだい。』

シルヴィア『どうぞー!』

スタッフ「入っていいよ。じゃあね、比企谷くん!」

スタッフの人に後押しされたような感じになりながらも、俺はドアノブを回してから押して中に入った。

八幡「すみません。遅くなりました。」

ペトラ「いいのよ気にしないで。私が呼んだのだから。構わず座って。」

八幡「では失礼して……」

俺はシルヴィの隣にある席に座った。というか席がここしか無かったんだけどな。

シルヴィア「ふふ♪八幡くん2日ぶりだねえ。元気にしてた?」

八幡「ああ。シルヴィも元気そうで何よりだ。」

シルヴィア「不満があつたとすれば、君に会えなかった事くらいだから大丈夫だよ。」

いや、それは言ったらキリがないからね?

八幡「それでペトラさん。俺に話とは何ですか?所属しろなんて話だつたらお断りですからね?」

ペトラ「そんなのじゃないわ。私しつこくつきまとうのもつきまと

われるのも嫌いだもの。」

なら安心だ。

ペトラ「今日呼んだのは他でも無いわ。八幡くん、貴方日本と六花なら私たちのライブに協力してくれるのよね？」

八幡「休日重視になりますが、出来る限りはそうするつもりですよ。」

ペトラ「そう……じゃあ早速手伝って欲しいのだけど、いいかしら？」

八幡「また2人で出ろって事ですか？」

ペトラ「ええ。」

八幡「それなら別に構いませんよ。それでシルヴィ、場所は何処なんだ？」

シルヴィア「それは私も知らないんだ。」

八幡「そうか……ペトラさん、場所って何処なんです？日本……ですか？」

ペトラ「八幡くんは勘が良いのね。そうよ、10月の秋休みを利用して日本の千葉県、幕張メッセで開催する予定よ。」

……なん……だと？

シルヴィア「え？……千葉？そこって……」

そう。俺の生まれ故郷であり、俺にとって忌まわしき土地でもある場所だった。

謎の感情

八幡 side

千葉……俺の生まれ育った場所であり、1年前まではそこに住んでいた。窮屈ながらも居心地の良い街だとは思っていたが、1年前の出来事でそれは一変した。その場所は、特に学校なんかは歪んで見えた。

その学校へ行くわけではないが、まさかライブの目的で千葉にか……

ペトラ「……？八幡くんどうかしたの？なんか顔色が良くないわよ？」

八幡「いや……そのライブを行う場所なんですけど、俺の故郷です……」

ペトラ「故郷？じゃあ一足先に久しぶりの里帰りが出来るじゃない。」

今ふと思い出した。俺はペトラさんに自分の事を一切話してなかった事を。何も知らないペトラさんは嬉しそうに言うが、俺は全く正反対の気持ちだった。

シルヴィア「八幡くん……無理はしなくていいからね？これは受けない方がいいよ。あんなところには行かない方がいいよ。」

シルヴィアは悲しそうな顔で俺の手を握り締めた。俺に説得してくれたが、俺はそんな理由でライブを断りたくはない。

ペトラ「……何か訳あり見たいね。私に話してくれるかしら？勿論強制はしないわ。」

八幡「……………はい。」

俺は1年前に起きた出来事を包み隠さずペトラさんに打ち明けた。話し終えると、ペトラさんは目を瞑り何かに耐えているような顔をしていた。シルヴィアも同じ顔をしていた。

ペトラ「……………そうだったの。ごめんなさいね、貴方の事情も知らずに。」

八幡「い、いえ……………」

ペトラ「この件は無しにして頂戴。幾ら協力してくれるとは言われていても、嫌な所に無理矢理連れて行く程、私は愚かではないわ。」

八幡「ですが、その企画はもうそういう方向で進んでいるんじゃないですか?」

ペトラ「確かにそうだけど、今からでも何とかなるわ。八幡くん、無理はしないで頂戴。」

シルヴィア「そうだよ、私も反対。私も八幡くんと歌いたいけど、行きたくない所に連れて行ってまで歌おうなんて思わないよ。」

2人が俺に下がるように言う。だが何でだろう?俺はこの言葉を聞いた瞬間何か心から沸々と湧き上がっている気がする。

八幡「……………いえ、そのライブ受けます。」

シルヴィア「え?……………な、何で!？」

八幡「何でか分からんがこの感情、前にもあつたような感じがしてな。無謀、無茶だと分かっているもやってやりたい、って感じが。」

シルヴィア「で、でも……………」

ペトラ「……………八幡くん。私は無理強いはしてないのよ?貴方が不快に感じるのなら受けなくても良いのよ?」

八幡「別にそんな感情はありませんよ。ただ、あの場所に行くのに若干の抵抗があっただけです。でも、今はそんなのありません。」

今はむしろ、やってやるって感情の方がデカい。千葉に行くとはいつても、別に学校の奴らと会うとは限らねえからな。

ペトラ「……………いいのね？」

八幡「ええ、構いません。」

ペトラ「……………分かったわ。シルヴィアもいいわね？八幡くんはこのライブ出演を受理したわ。」

シルヴィア「で、でも……………私は心配です！」

ペトラ「シルヴィア、八幡くんを信じなさい。貴方の彼氏はそんな事で臆する程、弱虫で臆病な人ではない筈よ？」

シルヴィア「……………」

八幡「俺なら大丈夫だ。もし不安になったらお前の手でも握る。」

シルヴィア「……………八幡くん。」

八幡「支え合つての俺たちだろ？」

シルヴィア「っ！」

八幡「シルヴィ、俺からも頼む。」

シルヴィア「……………」

不安そうな表情を隠せていないが、それでもどうするか考えているのだらう。

シルヴィア「……………条件があるけど、いい？」

八幡「何だ？」

シルヴィア「1つ目は絶対に無理をしない事。この前のライブみたいな事にならないで。」

八幡「傷を受けるなって事か？」

シルヴィア「うん……………2つ目は辛くなったらすぐに私のところに来て。」

八幡「分かった。」

シルヴィア「3つ目は……………最後に1日空くから、その日にデートして／／／」

ガクツ……真剣だった室内が一気に残念な感じに。

八幡「……………分かった、条件はそれだけか？」

シルヴィア「うん。今のところはそれだけ。」

今のところって事は、後に増えるかもしれないって事か？まあそう
なったらそうなったで良いか。

八幡「了解だ。」

シルヴィア「……………それなら私もいいよ。」

ペトラ「じゃあ八幡くん、シルヴィア。歌の選曲は私たちがやるか
ら、貴方たちは決まり次第その曲の練習をして頂戴。シルヴィアも
……………完成したかしら？」

シルヴィア「はい、詩なら一応。」

ペトラ「分かったわ、じゃあ後で見せて頂戴。少しチェックとか入
れたいから。」

シルヴィア「分かりました。」

ペトラ「じゃあ2人ともお願いするわね。八幡くんもわざわざあり
がとう。」

そしてペトラさんは部屋から出て行った。

シルヴィア「……………お願いだから無茶はしないでね？君の辛そうな顔
なんて、私は見たくないんだから。」

八幡「分かってるよ。約束は守る。」

シルヴィア「絶対……………だからね。」ダキッ

そうやってシルヴィは俺に抱き着いて、自分を落ち着かせるかのよ
うに頭を俺の胸に擦りつけた。

シルヴィを不安にさせない為にも、少ししっかりしねえとな。

人の口に戸は立てられぬ

――――

此処は、比企谷八幡が元いた高校である総武高校である。この学校では、とある噂が学校中で広まっていた。

その噂とは…………

女子1「ねえ知ってる!?シルヴィア・リユーネハイムがこの千葉にライブするって!!」

女子2「知ってる知ってる!私もうチケットの予約したんだ!」

女子3「私もっ!」

女子2「それに、あの比企谷くんも来るみたいだよ!ホームページに載ってた!」

女子1「嘘く!!?私そこまでしつかり見てなかったー!」

女子3「でも凄いね!あの界龍の序列2位『夢幻月影』が来るんでしょ?恋人同士でライブっていい感じだよねく!」

女子2「チケット当たって欲しいなあ。予約制だけど、その場では分らないからドキドキだよねー。」

女子1「そうそう!そこでもドキドキだよねー!」

女子「当たって欲しいよねえく。」

八幡とシルヴィアのライブが千葉で行われる事が既に噂になっており、どの学年でも同じ話題になっていた。

だが、どの学年の誰もが嬉々の感情を出しているわけではなかった。その異端となるべく殆どの生徒が罪悪感を持っているクラスがあった。

そう、2―F組である。かつては1―F組で八幡の在籍していたクラスでもあった。そのクラスでは殆どの生徒が八幡に対して罪悪感を持っていたのだ。

ク男1「……なあ、知ってる……よな。今すげえ噂になってるし。」

ク女1「うん、比企谷くんの事でしょ？千葉に来るんだってね。」

ク男2「確かライブで来るんだったよな。」

ク男3「俺、テレビで《鳳凰星武祭》見てたけど……別人だよな。ここに居た頃はもうでもない存在だったのに。」

ク女2「うん……嘘みたいにかッコよくなってたし、強かったよね。」

ク男1「お前ら、チケット予約したのか？」

ク女2「……ううん、してない。なんか合わせる顔なんてないよ。」

ク男3「だよな……俺たち、あいつにすげえ嫌な事してきたもんな。」

ク女1「会うのも怖いよ。」

2―F組の生徒は殆どがこんな感じだった。八幡の活躍を正当に評価してはいるものの、彼に会うのを恐怖、戸惑いを持つ者も同じ数だけいた。

ク女3「ねえ、三浦さんはどうしたの？チケット予約した？」

三浦「……あーしは予約した。やっぱヒキオには一度会って謝っておくべきだと思うし。それに、ヒキオがあの手をバラさなかったら、あーしら皆葉山の操り人形だった。その事も全部含めて謝りたいと思ってるから。」

ク女3「そうなんだ……でも、私たちにはそんな勇氣ないよ。三浦さんみたいに静観してたわけじゃないから。比企谷くんにかくさん嫌がらせをしてきた。そんな事彼の前で言ったら、間違いなく殴られるよ。」

三浦「……ふーん、ならそれでいいんじゃない？あーしは何されてもいい覚悟はある。それだけの事を今まで黙って見てきたも同然だし。何言われても文句なんて言える立場じゃないのは分かってる。」

ク女3「三浦さん……」

彼女、三浦優美子だけは八幡と会う決意を固めており、殴られる覚悟も出来ていた。

ク男5「………っ!!お、俺もチケット予約する！三浦さんがあそこまで言って男の俺が何もしねえのは、ただの腰抜けだ！俺も比企谷に殴られてやる!!」

そう言ったのは、クラスの中でもあまり馴染めてない生徒だったが、その言葉がクラスメイトに火をつけた。

ク女1「……わ、私も予約する！」

ク男3「俺もだ！」

ク男4「手遅れかもしれないけど、やってやる！」

そしてクラスメイトの殆どが携帯を取り出してライブの予約を取り始めた。それも全員心に籠った想いは同じだった。

三浦「……あんた、結構度胸あんじゃん。影薄いくせに見直したし。」

ク男5「あ、ありがとう……」

こうして2―F組はクラスの殆ど一致団結し、チケットの予約をやり終えたのだった。

学年は変わり、今の八幡が総武高に所属していた事も知らない1年生はというと……

1年男子1「なあいろはちゃん知ってる？あのシルヴィアちゃんがライブ来るって！」

いろは「知ってるよぉー！私、超楽しみなんだよねえー！」

1年男子2「やっぱ知ってたか。やっぱ予約したんだよね？チケット。」

いろは「当たり前だよ。しないわけないじゃん！」

1年男子3「いろはちゃんはさ、ライブに来る比企谷さんってどう思う？」

いろは「ああーあの超強い人ですよー！会えるなら会ってみたいですよー！」

比企谷八幡を知らない1年生は八幡の事はあまり気にした様子はなく、シルヴィアのライブの事しか頭になかった。

そして学年は最後の3年生。今の時期になると、大学の入試やら就職の面接やらで忙しくなる時期だが、その辺りはどうなのだろう？

3年男子1「なあ、シルヴィのライブ見に行く？」

3年男子2「俺はアイドルとか興味無いから別にな。」

3年男子1「ま、お前はそうだよな。」

3年女子1「ねえ、シルヴィアのライブ行くの？」

3年女子2「行きたかったんだけどさー、親が煩いんだよねー。勉強しろって。」

興味や受験の事もあってか、行く者は半々といったところだった。

そして、学校から飛び、とある大学では……

3年女子「それでー？めぐめぐちゃんは今回も行くのかなあ？」
めぐり「ちよつとお！めぐめぐちゃんって何さー！」

3年女子「いやあの前は六花に行ってライブ観てきたんでしょ？だから今回も行くのかなあって。」

めぐり「もうっ！」

3年女子「それにさ、比企谷くんの事もあるからね。行きたいんでしょ？」

めぐり「……………」

3年女子「知らないわけないでしょ？私もあの時文実だったんだから。」

めぐり「……うん、そうだね。」

3年女子「それで？行くの？行かないの？」

めぐり「勿論行くよ！」

3年女子「そうこなくっちゃ！」

再び彼に会う為に、もう一度同じ手段を取る者もいた。

何も生徒だけが噂に夢中になっていたわけではなかった。その中には教師も含まれていた。

鶴見「平塚先生、もうご存知ですよね？」

平塚「ええ。ライブのことですよね？」

鶴見「はい。まさか比企谷くんが来るなんて思ってもみませんでした。」

平塚「私もです。星武祭で出ていたのは知ってしましたが、優勝する程だとは思いませんでした。それだけでなく、ライブもするなんて本当に予想外でした……。それに、彼女まで作っていたとは……チツ！」

鶴見「そうですね……此処に居た時とは大きく違いますね。」

平塚「今比企谷は充実の日々を送れているのでしょう。此処に居た

時とは本当に別人です。」

鶴見「よく見ていたわけではありませんが、彼の目も良くなっていましたからね。相当あちらの環境が良かったのででしょう。」

平塚「ええ、それは認めるしかありません。」

ライブの話でなくとも、元教え子の顔を見ただけで充実しているのが理解できた2人の教師だった。

想いは違えど、この学校にいる殆どの人がライブに行きたがっているのは、シルヴィア・リューネハイムの影響なのだろうが、少なからず比企谷八幡も影響しているのは、間違いないだろう。

遅過ぎた激しい後悔

――――

同じく千葉の住宅街に並ぶ1つの家、その姓は『比企谷』。現在六花で過ごしている比企谷八幡と比企谷小町の育った家である。

現在夜の9時、比企谷兄妹を育てた両親が珍しくも真剣な表情と声で話し合っていた。

比企谷母「……ねえあんた、もう知ってるわよね？」

比企谷父「ああ……八幡の事だろ？」

比企谷母「……………ホント、私たちは何をしてたんだろうね。あの子が1年前に居なくなっても、すぐ帰ってくると思ってたら、あんな遠くにいるんだから。しかも、私たちは小町にかかりつきりで八幡の事なんか碌に見もしなかった。私たち、あの子に何をしてやれたんだろうね……」

比企谷父「俺も……俺もそう思ってる。小町ばかりに構い過ぎて、思い出の中に八幡の顔が全く出てこない。あいつがどんな顔で笑ったりしていたのかさえも分からない。テレビであいつの顔を見た時、頭が全く働かなかった。」

比企谷母「そりやそうだよ。私たちが知ってる八幡はあんな事言わない。それどころか、あんなに力強い目もしない筈なんだから。今年の星武祭でもそう。今まで慕われている様子なんて1度もなかった。」

比企谷父「今の八幡は、俺たちが知っている八幡じゃないのかもしれないな。」

比企谷母「でも、私は思う事があるの。」

比企谷母「私たちの知ってる八幡ってどのくらい？」

比企谷母「六花に行く前は何をしてた？学校ではどんな過ごし方？部活は？休みの日は？趣味や得意な事や特技は？あんたどのくらい

知ってる？私なんて殆ど知らないよ。」

比企谷父「……………俺もだ、全く分からね。」

比企谷母「その筈よね。最後に会った日すら忘れてるんだから。八幡の1年前の顔なんて全くだよ。中学のアルバム見て思い出せるくらいなんだから。」

比企谷父「……………」

比企谷母「……………あんた、八幡がライブに来る事は知ってるんでしょ？チケットとか取らなかつたの？あんたも携帯でシルヴィア・リユ・ネハイムの歌聞いてたでしょ？生の声とか聴きたくないの？」

比企谷父「今更どの面下げてあいつに会えるんだよ。俺は八幡に親らしい事なんて何1つしてやれなかつた挙句に小町ばっか構うような半端な親だぞ？そんな奴に誰が会いたいと思う？八幡が本気で会いたいって思ってると思うか？」

比企谷母「……………あんたのいう通りだね。自分ほつといて妹ばっか可愛がる両親に会いたがる子なんているはずもないね。」

比企谷父「今更俺なんか八幡の父親だなんて恥ずかしくて言えねえよ。あんなすげえ奴の父親がこんな碌でなしなんだからな。」

比企谷母「……………」

両親の後悔の念は重かった。いや、重過ぎた。だが後悔はすれども、その感情は息子に届く筈もなかった。

比企谷父「……………最後に八幡の誕生日を祝つたのはいつだった？俺はもう忘れちゃった。もう10年も前だろうな。」

比企谷父「娘が可愛いからって息子放つたらかして、小町には毎年ケーキを、八幡には金をテーブルに置いとく、これだけは覚えてる。」

比企谷母「……………」

比企谷父「今ではもう自覚してる。最底辺な父親だって。俺が教えたことなんて、美人は美人局くらいだ。」

比企谷母「……………」

比企谷父「小町は幸せだったろうな。俺たちに可愛がられて育つた

んだからな。けど、八幡はどうだ？俺たちから何をされて育った？」
比企谷母「……………」

比企谷父「何もないだろうな。そりやそうだ。ここ最近で八幡と話した事なんて一度もねえんだからよ。『親父』なんて呼んでももらえたら奇跡だ。」

比企谷母「……………」

比企谷父「……………悪い、なんか説教みたいになっちまって。」

比企谷母「……………いや、いいよ。あんたの言ったまんまだよ。私たちはあの子に親と呼んでもらえる事なんて何1つしてない。同じ家に居るのに、捨てたのと同じだよ。」

2人は自分たちのやってきた行動にも激しく後悔していた。あまりにも違い過ぎる態度に、やってきた自分自身が嫌になる程だった。

比企谷父「……………なあ、もしも八幡がこの家に帰って来たら、お前はどする？」

比企谷母「どうするもこうするもないよ。私が今更やれる事なんて……………あの子を自由にさせてあげる事くらいだよ。もう八幡の前で親の顔なんて出来る自信がないから。」

比企谷父「……………なあ、少し八幡の部屋に行ってみないか？少しはあいつの写真くらいはあるだろう。」

比企谷母「私は何回も行ってるわ。その度に八幡の中学の顔を見る。あの子の顔を忘れない為に。私もあの子の写真を探したけど、1枚も見つからなかったわ。」

比企谷父「……………そうか、あいつが写真好きだとは思えないしな。」

比企谷母「……………ねえあんた。私たち、もう八幡に親とは呼んでもらえないのかしら？」

比企谷父「さあな。だが、そんな期待しない方がいいだろ。」

比企谷母「……………そうだね。」

後悔先に立たず。両親は八幡に何もしてやれなかった後悔が未だ

大きく残っているが、それはどうしようもない事である。八幡が来ない限りは解決しないのだから。

※ライブに向けて

八幡 side

八幡『♪♪♪』

音楽担当「いやゝ、やっぱり比企谷くんは良い声出しますよねゝ！私から見ても文句のつけようがありませんよ。」

ペトラ「そうね。彼ならすぐに有名になれるでしょうね。もう既に違う意味で有名だけど。」

音楽担当「ははは、まあいいではないですか。おかげでシルヴィアちゃんも嬉しそうですし、この曲を聴いてからというもの、彼女にも火がついてますからね。」

ペトラ「ええ、そうみたいね……新曲の方はどうかしら？」

音楽担当「今のところは6ゝ7割程度ですね。まだ練習が必要な段階です。でもよくやってる方です。ライブから今までの期間は短過ぎますからね。」

八幡『♪』

ペトラ「終わったみたいね。私は何の問題もないけど、貴方は？」

音楽担当「逆にあると思います？」

ペトラ「……そうね、愚問だったわね。」

いやゝ歌った。さて、どのくらい出来てるか聞いてみるか。

八幡「どうでした？」

音楽担当「素晴らしいとしか言えないよ。シルヴィアちゃんには、こんな逸材を連れて来てくれて感謝だよ。」

八幡「あの、普通にバツサリ言っていいんですよ？俺は素人なんで

すから。」

音楽担当「いや、これが本音なんだよ。私が手をつけずとも素晴らしい出来なんだよ。」

そう言われてもなあ……

ペトラ「八幡くん、これは事実よ。貴方元々の歌唱力が高過ぎるのよ。だから私たちが教えてあげられるものが何1つないの。」

八幡「ですが、俺は歌うといつても1人カラオケとか、風呂場で静かに歌うくらいしかしてませんよ?」

ペトラ「何でかしらね?」

疑問を疑問で返すとは……

音楽担当「まあどちらにしても、君はそのままの方が良いよ。」

八幡「はあ……分かりました。」

なんか釈然としないが、まあいいか。

八幡 side out

シルヴィア side

うーん、これでもないなあ……やっぱり自分で曲を作るってすごく難しいなあ。

シルヴィア「はあ……難しいなあ。」

……少し八幡くんの曲でも聞こうかな。

――5分後――

♪♪♪……うん、何となく良い感じになったかな。この高さをここにに入れてみたら良い感じになるかも！

シルヴィア「よし！もう一回！」

シルヴィア「♪♪♪」

――5分後――

シルヴィア「……うん！これなら良い感じ！ここの音程はこれくらいかな。」

スタッフ『今日の練習はここまでです！』

シルヴィア「はいっ！」

ちようど良い感じで終われて良かった♪

シルヴィア side out

――――

今日のレッスンを終えた八幡とシルヴィアは2人仲良く家へと向かっていった。

八幡「シルヴィ、俺とは別々にレッスンをしてたようだが、一緒にやなくてもよかったのか？」

シルヴィア「うん。この曲は本番までは八幡くんに聞かれたくないんだ。」

八幡「そうか……なら、野暮な事はしない事にする。頑張れよ。」

シルヴィア「うん、八幡くんもね。」

八幡「ああ。」

こうして今日のレッスンも過ぎ、2人は帰路につく。そして他者から見た2人の姿は、夫婦に限りなく近いものだったと言われていた。

移動、千葉へ！

シルヴィア side

皆さんこんにちは！シルヴィア・リユネハイムです！私……というよりも私たちチームシルヴィアスタッフ一同は今船の上にいます！ライブの為に9月末に予約を取って10月の1日にやる予定です！

しかも！その10月1日、私の誕生日でもあるんだ！良いライブになる事を願ってるんだ！新曲も完成したし、今の私はすこぶる上機嫌！♪

シルヴィア「ん〜潮風が気持ち良いなあ〜。」

八幡「ここにいたのか、シルヴィ。」

シルヴィア「あつ、八幡くん！」

この船、人は元より機材とか積んであるから結構大型なんだ。だから人を探すのも一苦労かもね。

シルヴィア「どうかしたの？」

八幡「いや、見当たらなかったから探していただけだ。」

シルヴィア「此処で潮風に当たってたんだ。八幡くんは調子どう？船酔いは？」

八幡「普段から弟子の鍛錬とか星露の暇潰しに付き合ってたりしてたから、船酔いなんて起こしても心配ねえよ。」

シルヴィア「……星露と何やってるの？」

八幡「ただの拳闘だが？」

シルヴィア「八幡くん……仮にも相手は『万有天羅』だよ？大丈夫なの？」

八幡「別に何ともないぞ？俺もあいつもちょうど良い感じで加減し

てるから。」

シルヴィア「私の彼氏って凄く強いって改めて認識したよ。」

八幡「そりやどーも。」ナデナデ

シルヴィア「えへへっ♪」

えへへ♪やっぱり八幡くんの撫で方って好きだなあ。安心感を与える。

八幡「良いライブになるといいな。」

シルヴィア「八幡くんもそう思う?」

八幡「当たり前だ。」

シルヴィア「そつか……ねえ、今のところどう?気分が悪くなったりしてない?勿論船酔いの事じゃないよ。」

八幡くんにとっては、気持ちの良い場所じゃないからね。

八幡「大丈夫だ。まだそんな感じは無いから心配するな。」

シルヴィア「……うん。」

……ちよつとゴメンね、八幡くん。

私は八幡くんの肩に頭を乗せた。

八幡「……どうした?」

シルヴィア「ゴメンね。少しこうしてもいいかな?」

八幡「ダメなわけないだろ。ベンチがあるからそこだな。」

シルヴィア「うん。」

シルヴィア side out

ペトラ side

あらおら、あの2人つたらついに寄り添っちゃったわね。しかもシルヴィアったら、あんなに安心しきった顔しちゃって。

ペトラ「どう？ついてきて正解だったでしょ？」

スタッフ1「いやゝ本当に仲が良いですね。」

スタッフ2「まさにベストカップルって感じがしますね！」

音楽担当「こうして見てると、恋人ではなく夫婦に見えちゃいますね。」

そうね。しかも八幡くんは、それを会見の場で堂々と言っちゃうんですもの。会見では顔に変化は出さなかったけど、心の中では『あら！そこまで言っちゃうの!?!』って感じだったもの。

スタッフ2「僕もここに入ってから7年経ちますけど、シルヴィアちゃんのあんな顔は見た事ないですよ。全てを預けた状態で安心しきったような感じがします。」

ペトラ「あの子はこの業界でも学園でも完璧な存在だから。八幡くんの前では普通の女の子でいたいものよ。」

音楽担当「そうですね……あつ、比企谷くんが肩を寄せました！」
スタッフ1「おおゝ流石比企谷くんだ。」

ペトラ「ふふふ、目的地に着くまでの良い暇潰しになるわね。」

八幡くんは、この船旅で何をしてくれるのかしらね？

ペトラ side out

八幡 side

寝ちまったな……少し気を張り詰め過ぎなんだよ。そんなすぐに気持ち悪くなったりはしねえよ。

でも、そこまで俺を心配してくれてんだよな。

八幡「いつも済まないな。」ナデナデ
シルヴィア「ん、んんゝ♪」

シルヴィは気持ちよさそうに声を出しながら、俺の肩に頭を乗せていた。

まあ少なくとも、この後にも本番前のリハーサルを少しやる筈だ。
身体を休ませておくのも手だな。

朱雀『旦那、ちよつといいかい?』

朱雀?

八幡『急に何だ?』

朱雀『いや、こんな事言っても信じらんねえかもしれないけど、今向かってる方向からとんでもねえ神気を感じんだよ。しかも俺たち四神クラスの。』

八幡『お前らと同じ?』

朱雀『ああ。場所分かんねえけど、今向かってる方向にあるのは確かだ。こんなオーラ出せんのは俺の知る限り、少なくとも玄ちゃんや俺、蒼兄そうにいに白兄はくにいくらいだぜ。』

八幡『用心しといた方がいいか?』

朱雀『そいつも今の段階じゃ分からねえ。近くまで行ってみねえ限りはな。』

八幡『玄武、お前は何も感じないのか?』

玄武『僕はこんな性格だからねえゝ、そういうの疎いんだよねえゝ。くろちやんなら分かるかもしれないんだけどおゝ、寝てるんだあゝ。』

……聞いた俺がバカだった。ていうかそのくろちゃんっていつも寝てんじやねえのか？この前も寝てたよな？

八幡『取り敢えず分かった。少し気をつけてみよう。』

朱雀『おう、頼むぜ旦那っ！』

玄武『ばあゝいばあゝい。』

朱雀と玄武と同じ四神クラスのオーラ、しかも神気とか言ってたな。他にもそんなすげえ奴らがいるのか……
だが、今はライブの事に集中するべきだな。

上陸！

八幡 side

『もうすぐ本土に着きまーす！』

……やっとか。到着する場所は東京だったな。にしてもシルヴィ起きないな。

八幡「おいシルヴィ、もう着くぞ。」

シルヴィア「んんゝ♪」

八幡「おいおい……頼むからもうそろそろ起きてくれ。」

移動は車だが、俺はお前をおぶってる所をあんまり人には見られたくないんだが？

ペトラ「八幡くん、そろそろこっちに来て。」

八幡「さっきまでそこに居ましたよね？」

ペトラ「私は居ないわよ？3人くらいそこに張り付いていたのは見たけど。」

八幡「……そういう事にしておきます。それよりもシルヴィ何とかしてもらえませんか？握った手離さない上に腕にも絡みついて身動きが取れないんです。」

ペトラ「抱き上げればいいじゃない。シルヴィアも喜ぶわよ？」

八幡「俺はなるべくライブをするまで目立ちたくはないんですが？」

ペトラ「それはもう無理ね。貴方はもう有名人だもの。」

はあ……やっぱそうだな。

ペトラ「それよりも早くしなさい。シルヴィアは途中で起こしてもいいから。」

八幡「俺は今起こしたいです。」

ペトラ「ならそうしてもいいわよ。なるべく幸せな起こし方でね。」

何ですか幸せな起こし方って？

ペトラ「例えば……耳元で『起きろ。』とかね。」

八幡「もうそれで良いです……ですから先に行つててください。」

ペトラ「分かったわ。」

そう言い残してペトラさんは行つた。

さて……誰も居ないうちにやるか。こんな恥ずかしい所、誰にも見られたくないしな。

八幡「シルヴィ……起きろ。」ゴゴエ

八幡「起きてくれるのなら……特別にキスしてやる。」

この前はこれで起きたが、今回はどうだ？

シルヴィア「………本当？」ムクツ

八幡「………ああ。」

シルヴィア「起きたよ……してくれるんだよね？キス。」

寝てる時でもこれはちゃんと聞いてるんだよなあ。地獄耳なんだよなあ。

まあ、約束は守らねえとな。

そしてそれから時間ギリギリになるまで、俺たちはキスを堪能していた。5分程度だが、それでも濃い時間だった。

ペトラ「やつと来たようね……けど、どうしてシルヴィアが艶々
していて八幡くんが少しやつれているように見えるのかは聞かない
でおくわ。」

それ、今の俺にとっては凄く助かります。

ペトラ「車は手配してあるから乗って頂戴。八幡くんとシルヴィア
はスタッフと3人で乗りなさい。安心しなさい、後ろは聞こえないよ
うに防音にしてあるから。」

安心って何？何に安心すればいいんですかね？

シルヴィア「えへへ♪ありがとうございます、ペトラさん♪」

八幡「分かりました。」

ペトラ「それと、八幡くん。口元よく拭いておいた方がいいわよ。
誰かの舐めた跡があるわよ？」

八幡「さつき聞かないって言ったのは嘘だったんですか？でもあり
がとうございます。」

ペトラ「うふふ、ごめんなさいね。」

ペトラさん、楽しんでるなあ。

――車内――

シルヴィア「東京も来た事はあるけど、そんなにじっくりは観光した事ないんだよね。ライブ終わったら時間あるかな？」

八幡「秋休みの最中だからな。時間は取れるんじゃないか？」

シルヴィア「それなら八幡くんとデートしたいなあ。六花ではもう殆ど行ったしね。」

八幡「商業エリアはともかくとして、他はデートするような場所じゃないからな。行けても外縁居住区だからな。」

シルヴィア「うん……だから八幡くんと日本デートしたい♪」

八幡「まあペトラさんもすぐ帰るって言う程、鬼でもないだろう。聞いてみたらどうだ？」

シルヴィア「そうする!!」ニコッ！

そしてシルヴィは、また俺の肩に頭を乗せた。

八幡「おい、また寝るなよ？」

シルヴィア「うーん寝ちやうかも。八幡くんの匂い凄く安心するんだもん。」

八幡「また寝たら、今度はくすぐるからな。」

シルヴィア「ええく酷いよぉー！私が寝ちやうのは八幡くんのせいなのに！」

八幡「なら離れようか？」

シルヴィア「えへへ、だくめっ♪」

そう言うと思ってましたよ、お嬢様。

八幡「じゃあ、幕張メッセに着くまで我慢しろよ？それに寝られたら困る。多分だが、ファンとかいるだろうから。」

シルヴィア「あぁーそれはありそう。じゃあ八幡くんにくっついてれば大丈夫だよね！」

八幡「……別に構わんが、お前は恥ずかしくないのか？」

シルヴィア「見せつけてやるんだ！私はもう八幡くんの物です！つて。そして八幡くんは私の物だってね！」

八幡「その場合、俺はどうすりゃいいんだ？」

シルヴィア「そうだねえ……お姫様抱っこかな？」

八幡「それはくつつき過ぎだ。」ティツ

シルヴィア「あうっ！うう！でも良いじゃん！お姫様抱っこ！その時がダメならライブでやろうよ！」

八幡「お前なあ……俺が進んでそれをやると思うか？」

それに、なんか壊れてないか？

シルヴィア「そうだよ。八幡くんが私をお姫様抱っこしながら歌う。……何で思いつかなかったんだろう？これ、結構良いかも／＼」
／＼ブツブツ

終いには独り言になっちゃった。

幕張メッセに着くまでは、癩癩を起こさない事を祈るか。

千葉到着とりハーサル

シルヴィア side

車の中で過ごす事1時間と少し、もう少しで千葉に着くみたい。まだ船橋っていうところみたい。

そういえば千葉って何があるのかな？

シルヴィア「ねえ八幡くん、千葉にはどんな名物とか有名な観光地ってあるの？」

八幡「食い物なら、落花生が有名だ。地味だけどな。後はラーメンとかも結構色んな種類があって名所にもなってる。」

八幡「名地は、そうだな……デイスティニーランドは有名だな。有名ではないが、ラフポとかも面白い物には良いかもな。成田山公園も今時期なら紅葉が良い感じになって観光には良いかもしれん。千葉神社も千葉の中では結構豪華な神社だからお参りしたいなら、そこがオススメだな。」

シルヴィア「へえ、流石千葉県民だね。時間が出来たら、八幡くんと一緒に行ってみたいなあ。」

八幡「時間があつたらな。後でペトラさんに聞くんדר？」

シルヴィア「勿論！」

だって八幡くんとデートしたいもん！♪

八幡「それじゃ、ライブは頑張らないとな。もしあんまり上手いかなかったんじゃあ、デート出来ないかもしれないからな。」

シルヴィア「そ、そうだね。が頑張らないと……」プルプル

此処に来て八幡くんとデート出来ずに帰還なんて絶対やだ！何と

しても成功させなきゃ！

――千葉・幕張メッセ――

ようやく千葉に到着！そして車の目の前には八幡くんに教えてもらった幕張メッセが見えていた。す、凄く大きい。私たち、此处でライブするんだね。

八幡「俺思ったんだが、グッズとか販売するスタッフとかいるだろう？間に合うのか？メッセってかなり広いぞ。」

シルヴィア「うん、私も迷子にならないか不安になりそう。私、ここに居る時は八幡くんから離れないようにするね。」

八幡「流石にお手洗いの時は離れるよ？」

シルヴィア「そこまで一緒にいる気はないよ！」

八幡「だが、俺も入った事ないからな。迷子になりそうなのはお互い様だな。」

シルヴィア「ええ!?!じゃあどうするの!?!」

八幡「まあ俺には霊鳥がいる。そいつから来た道を教えてもらうから多分大丈夫だ。」

シルヴィア「分かった！私八幡くんから離れない！」

これはもう決定だね！

そしてそんな雑談をしている中、到着したのだろう。車が停車してエンジンの音が止まった。

スタッフ『比企谷くん、シルヴィアちゃん！着いたよ。』

シルヴィア「はい！」

私はそう言うと、車から降りて自分の足で千葉の地に立った。と言っても、此处は幕張メッセの中だから街の風景なんて分からない

いけどね。

八幡「あーやつと着いたか。運転ありがとうございました。」
スタッフ「いいよ、気にしないで。」

八幡「さて、機材やら何やら運ばないとな。」

シルヴィア「八幡くん、私たちは歌のリハだってさ。今ペトラさんから連絡入ってステージに来てだって。」

八幡「そうか……なら行くか。機材、少しだけ運んで行きましようか？」

スタッフ「い、いや、大丈夫だよ。」

八幡くん、何か拘りがあるの？そんなに機材を運びたいのかな？

―――ステージ―――

シルヴィア「へえ……凄いね。今までやって来たライブ会場でも、トップクラスの広さだよ。それに観客席も多い。」

ペトラ「私も同感よ。さつ、じゃあ早速、明日に向けて一回だけ歌うわよ。何を歌うのかしら？」

八幡「あんま喉に負担かけたくないの、『no more time machine』で。」

シルヴィア「私は『LOOP THE LOOP』にします。」
ペトラ「分かったわ。じゃあ八幡くんからやるわよ。」

そして私たちは観客席に移動して、八幡くんだけがステージに残った。

こうして見ると、八幡くんがすごく目立って見えてしまう。本番もこんな感じになるのかな？

八幡くんの歌は相変わらず綺麗だった。私もあんな安定感のある歌声が欲しくなっちゃう。そして私の番になって歌を歌い終わると、

今のところ何処も大丈夫だと言われたから安心した。

ペトラ「うん、2人共調子は良いみたいね。今は大丈夫だけど、明日風邪なんて引かないように気をつけてね。」

八幡「寒くなってきましたからね。お互いに気をつけましょう。」

シルヴィア「そうだね。こんな日に風邪なんて引いたら、ライブ出来なくなっちゃうもんね。気をつけなきゃ。」

ペトラ「時間も良い感じだし、そろそろホテルに行きましょう。それからシルヴィア。夜の街を見たいのなら八幡くんを連れて行きなさい。分かったわね？」

もうっ！私そんなに方向音痴じゃないよ！

あっ！そうだ！

シルヴィア「ペトラさん！ライブが終わった後って時間ありますか！？」

ペトラ「貴女ならそう聞いてくると思ってたわ。2日間取ってあるわ。まだ休みは残ってるけど、学校の方の仕事もあるから、それが限界よ。」

シルヴィア「っ！充分です！やった♪八幡くんとデート出来るっ！」

ペトラ「あらあら、やっぱりそうだったのね。」

八幡「車の中でもボヤいてたので。」

ライブもそうだけど、終わった後の八幡くんとデートも楽しみなってきたなあ！

ホテルで火照る？

八幡 side

——ホテル・緑タワー幕張——

すっげ、こんな所に泊まるのかよ。緊張して眠れないかもな。食事とかもマナー良くして食わないとダメな奴もあつたりすんのか？

八幡「幕張から随分と近いところを取ったんですね。」

ペトラ「その方が楽なもの。それに近くにはコンビニっていう便利屋さんがあるのでしょ？」

ああ、六花にはそういう店舗って無いからな。大型の店で買うしかないからな。コンビニを知らないのも無理ないが、世界中行つてコンビニ知らないものか？

八幡「まあ、ありますけど……」

ペトラ「もう予約はしてあるから、早く済ませてしましましょう。少しゆつくりもしたいし。」

シルヴィア「ライブの行った時には、どんなホテルに泊まるのか楽しみなんだよね〜！」

……結構マイペースなのね、お二人さん。

受付「いらっしやいませ。当ホテルへようこそ。」

ペトラ「〇〇事務所53名よ。」

受付「お待ちしております。ツインルームが25部屋にシングルルームが1部屋にダブルルームが1部屋でお間違いないでしょうか

？」

ペトラ「ええ、合ってるわ。」

受付「ありがとうございます。それでは予約して下さったお部屋のカードキーをお渡しします。ツインのお客様方は201号室から226号室、シングルのお客様方は325号室、ダブルのお客様方は730号室になります。」

ダブルめっちゃ離れてね？

というか何だろう？シルヴィ以外のペトラさんやスタッフさんの目が生温かく感じる。

ペトラ「私はいつも通りシングルで泊まるわ。他はどうするの？」

スタッフ1「僕はもうこいつとツインって決めてたので。」

スタッフ2「あつ、僕は結構先輩と同じになるので今回もその予定です。」

スタッフ3「私も遠征で同じ子と泊まるつもりです。」

……わざとっぽく感じるのは俺だけか？

ペトラ「じゃあシルヴィア、八幡くん。貴女たちはダブルの部屋で泊まって頂戴。ごめんなさいね。」

笑顔で言ってますよね？全く悪いなんて思っていないですよね？でも何でそんなに楽しそうなんだ？

ペトラ「カードは持ったわね？じゃあ18時に1階のビュッフェレストランに集合にする事にするわ。それまで各自、自由にしてもらって構わないわ。」

シルヴィア「ペトラさん。どうしてわざわざこんな部屋割を？私たちもツインでよかったんですけど……」

ペトラ「何言ってるの？ダブルもツインも変わらないわよ？」

シルヴィア「え？そうなんですか？」

ペトラ「ええ。」

シルヴィア「分かりました。」

でもなあ……なんか嫌な予感するんだよな。

シルヴィア「じゃあ八幡くん、行こっか！」

八幡「ああ。」

そして俺たちはエレベーターまで行き、乗れる限り乗ったスタッフさんは2階に、ペトラさんは3階に、そして残った俺たちは7階へと降りた。

シルヴィア「7階かあ……高いねえ。」

八幡「ああ。俺もこんな高層に來た事は無いな。えーと、723……725……727……おつ、あつた……つて一番奥じゃねえか。」

シルヴィア「ねえ、早速入ってみようよ！私なんか楽しみになつてきたよ！」

八幡「ま、それもそうだな。」

俺は持つてるカードキーをドアノブの上にある差込口に入れた。すると、ロックが外れる音がしてドアノブを引くと、扉が開いた。

シルヴィア「おっ先〜！」

八幡「あつ、おい………フツ、相変わらずだな。」

あの楽しい顔、あれ見てるだけで俺も楽しくなってくる。

シルヴィア「……………」

八幡「ん？おいどうした？」

楽しげに中に入った割には静かになったな。お気に召さなかったのか？

シルヴィア「八幡くん……ダブルの意味ってこういう事だったんだ。ベッドが2つじゃなくて……ダブルベッドっていみだったみたい／＼／＼／＼」

八幡「は、はあっ!？」

俺も思わず走って確認した。部屋の内装は腰掛け用のソファや椅子にコート掛けにハンガー、テレビも備え付けられていて、その右下にはお茶などの器具。バスルームはトイレに洗面台、シャワールームに風呂の設備がかなりの広さで備え付けられている。

ここまでは良い。流石と言っておこう。問題はベッドだ。完全にダブルだ。家の時では、いつも一緒に寝てる俺たちだが、こういう場所ではかなり恥ずかしい。

シルヴィア「／＼／＼／＼」

八幡「……ま、まあ、ゆっくりするか／＼／」

シルヴィア「う、うん／＼／＼／」

だめだ。調子が全く出ない。

ペトラさん！スタッフさん！あんたらグルだったんだな！ダメされた！

おかげでもう気まずいですよ！

シルヴィア「………／＼／＼／」

八幡「………／＼／＼／」

ソファに腰掛けたはいいが、それ以上は恥ずかしさで何も出来なかった。

ピトツ

2人「っ！／／／／／」

偶然にも俺の右手とシルヴィの左手が重なってしまった。しかもそれによって俺たちは見つめ合ってしまった。

八幡「あ……いや、悪い／／／／／」

シルヴィア「う、ううん……こちらこそゴメン／／／／／」

八幡「……／／／／／」

シルヴィア「……／／／／／」

慣れている筈の2人の空間でも、場所が変わるだけでこうも緊張や恥ずかしさがこみ上げるなんて……

しかも、目を外せばいいだけなのにシルヴィから目を離せない。

2人「……／／／／／」

徐々に近づいているのか分からないが、シルヴィの顔が段々近づいているような感じがした。いつも思っている事だが、すげえ整った顔してる。世界中が見惚れるのも分かる気がする。

というよりも、間違いなく近付いてる。顔がさつきよりも明らかに近い。鼻息も当たってきた。目も潤んでいた。

シルヴィア「八幡くん……／／／／／」

八幡「シルヴィ……／／／／／」

お互いの名前を呼び合ってから、俺たちは唇を合わせてしまった。唇にするのは今日千葉行きの船旅でシルヴィを起こす時にしたのが最後だが、そんな事気にしてられない。今はとにかくシルヴィとキス

がしたい。そんな衝動に駆られていた。

八幡「んっ……んゝ……／／／／／」

シルヴィア「んむっ……んんっ……んんゝ／／／／／」

ヤベエ、シルヴィの唇やつぱ柔けえ……

八幡「んっ……／／／／／」

シルヴィア「はぁ……はぁ……／／／／／」

さつきよりも明らかに目が潤んでいて、頬も赤くなっている。

シルヴィア「八幡くん、もつとシよ？／／／／／」

そしてキスの要求……こんなの断れるわけがない。俺もキスしたくて堪らない状態だからだ。

八幡「……ああ、じゃあいくぞ／／／／／」

シルヴィア「……うん／／／／／」

それから俺たちはキスをし続けた。勿論、船に乗っている時にもやった舌と舌を合わせるキスもだ。そして我に返ったのは、19時半で1時間半もキスに没頭していた。

食事と理想的

—————

ペトラ「全く貴方たちは……」

八幡「……………／／／」

シルヴィア「……………／／／／／」プシュー

現時刻19時と45分。この時刻は予定していた夕食の時間よりも、1時間半延長した時間である。

何故こんな時刻になったのかは、1時間半に遡るが、今回は割愛しよう。

そんな遅れた原因となった2人は夕食のテーブルで顔を赤く染めながら（シルヴィアは真っ赤）俯いていた。

ペトラ「疲れていたから寝てたならまだ分かるわ。でも、雰囲気呑まれて1時間半もキスしてたなんて……………驚きを通り越して呆れたわ。」

そして事情も把握済み。

シルヴィア「うう……………すみません／／／／／」

八幡「以後気をつけます。」

ペトラ「そうして頂戴。それでシルヴィア、どうだったかしら？」

シルヴィア「凄く幸せな気分……………って言わせないでください！／

／／／／／

この一言には、スタッフも苦笑いや引きつった笑顔、照れを我慢している顔などが殆どだった。

スタッフ「ま、まあマネージャー、その辺りに。この後も小会議がありますし。」

ペトラ「……そうね。まずは食事を済ませましょう。その時は流石に遅れないようにしなさいよ?というよりも、時間をしっかり見なさい。いいわね?」

八幡「……はい。」

シルヴィア「ごめんなさい／＼／」

ペトラ「じゃあこの話はおしまい。遅くなったけど、夕食にするわ。バイキングだから好きに食べて頂戴。それと、他のお客様もいるからマナーも守るように。」

そしてスタッフたちは一気にではないが、かなりの速さで列を作っていた。余程お腹が減っていたのだろう。

八幡「俺たちはもう少し列が少なくなってからにするか。」

シルヴィア「う、うん……そうだね／＼／」

八幡「今はスープ類が食いたいな。コーンスープとかコンソメとかオニオンも良いな。」

シルヴィア「私も汁系が良いかな／＼／」

八幡「……シルヴィ、いい加減俯いたままにいるのやめろよ。」

シルヴィア「し、仕方ないでしょ!まだ恥ずかしいんだもん／＼／」

シルヴィアの方はまだ恥ずかしさが抜けていないようだ。八幡の横で未だに顔を赤くしながら座っていた。

八幡「はあ……シルヴィは変なところでこうなるよな。ほい。」スツシルヴィア「え?」

八幡「手でも繫げば落ち着くんじゃないのか?」

シルヴィア「じゃあ、失礼して……」

シルヴィアは八幡から差し出してきた手を両手で握った。

八幡「……どうだ？」

シルヴィア「……うん、急に落ち着いてきた。それに安心感も出てきたよ。」

八幡「俺もだ。お前の手を繋いだら、さつき以上に心が落ち着いた。」

シルヴィア「えへへ♪私たちの手って繋ぎ合くと落ち着くみたいだね。魔法の手みたい。」

八幡「俺たちだけにしかない能力の1つだったりしてな。魔術師と魔女の。」

シルヴィア「あははっ！それで私たち2人が繋がないと効果が無いって感じかな？」

八幡「そんな感じだ。」

シルヴィア「そんな能力もあるかもね！本当に私たちだけの能力だね！」

シルヴィアも恥ずかしさが抜けて笑えるようになっていた。これも八幡の機転があつてのことだろう。

お客1「あ、あのおくシルヴィアさんと比企谷八幡さんですよね！」

シルヴィア「え？うん、そうだけど？」

八幡「何か用ですか？」

お客1「握手してもらってもいいですか!？」

お客2「よろしければ私にもお願いします！」

八幡「……まあ握手くらい。」スッ

八幡とシルヴィアが手を差し出すと、瞬きする暇もないくらいの早さで手を握ってきた。

お客1「か、感激です！あの《鳳凰星武祭》優勝者に《王竜星武祭》

優勝者に会えるなんて！明日、ライブですよね!!」

シルヴィア「うん、もしかしてチケットの応募で当たった人かな？」

お客2「実はそうなんです！比企谷さんが八代さんを名乗っていた時は当たらなかったんですけど、今回は当たりました！」

八幡「そうですか。それは何よりです。俺たちもお楽しみ頂ける様、精一杯歌いますので、応援宜しくお願いします。」

お客1「勿論です！明日は腕が振れなくなるくらいペンライトを振ります！」

シルヴィア「ありがとう、嬉しいよ。」

お客1「それにしても……やっぱり絵になりますね。」

シルヴィア「ん？どういう事？」

お客1「付き合ってるんですね？普通は見せつけるような感じなのに、お2人はあんまりその様子がなかったの。」

八幡「好んで見せつけるような真似はしませんよ。今は手を繋いでますけど。」

そう、八幡たちは手を繋いでない方の手で握手をしたのだ。シルヴィアは八幡の手を両手で握っていたが、片方を外して握手をした。

お客2「やっぱり理想だよねー。こんな風に認め合いながら出来るのって。」

お客1「そうだよねえ。」

シルヴィア「今のところ、八幡くんにされて嫌だと思ったのは無いか。八幡くんそういうところしっかりしてるし。」

八幡「されて嫌がる事を続けてするわけないだろ。」

八幡のこの言葉は本心だろう。だがこんな事を言う彼氏が珍しいのだろうか、ファンの2人は少し驚いたような顔をしていた。

お客1「比企谷さんって凄いですね。男の人ってそういう事したがる人多いんですけど、比企谷さんはそんな事しないんですね。」

お客2「私もそう思いました。比企谷さんって嫌がる事をしない人なんですね。」

八幡「俺も悪ふぎけの時はやりますよ。でも、彼女には嫌われたくはないですからね。やり過ぎはしませんよ。」

お客2「やっぱり理想的ですね。2人が羨ましいです。」

シルヴィア「自慢の彼氏だよ、本当に。」

八幡「俺も自慢の彼女だ。」

お客1「こんな彼氏彼女がいたら、自慢したくなりますよね……あつ、すみません。お食事中ですよね！」

お客2「あつ！長々とすみません！明日のライブ、楽しみにしてます！頑張ってください！」

そう言い残してから、ファンの2人はレストランから出て行った。

シルヴィア「えへへ、嬉しいね。理想的だって♪」

八幡「ああ、そうだな。」

思わぬタイミングでファンに会い、『理想的』と言われた事に上機嫌になったシルヴィアと八幡だった。

影と歌

シルヴィア side

食事も済ませ、その後の小会議にも遅れずに済んで、今は部屋でのんびりしているところ。この空気にも慣れて今は落ち着いている。最初この部屋に来た時は本当にビックリしたよ……。

私は今、歌詞の見直しをしながら鼻歌で曲を歌っています。え？八幡くん？八幡くんならお風呂に入ってるよ。ちなみに私はお先に頂きました。

シルヴィア「♪♪……うん、○○○○もこんな感じかな。」

八幡くんもまだ出てないから誰にも聞かれてないよね？

八幡「シルヴィ、上がったぞー。」

シルヴィア「あつ、うん！」

……やっぱり濡れてる時の八幡くんの髪って弄りたくなるんだよね。

シルヴィア「ねねっ！またやってもいいかな？」

八幡「何が楽しいんだ？この前もそうだが、俺の髪なんか弄って需要あるか？」

シルヴィア「私が楽しいからやるの！そして八幡くんに触れられるのが嬉しいからやるの！」

八幡「……まあ別に嫌でもないからな。いいぞ。」

わぁーい！

シルヴィア「ん〜と、これをこうして……出来た！」

八幡「手鏡プリーズ。」

シルヴィア「お持ちしましたよ〜。」

八幡「サンキューっておいおい……オールバックじゃねえか。」

シルヴィア「八幡くんやつぱりオールバック似合うよ！どうしてしないの？」

八幡「髪型に執着があるわけじゃないが、特別そんなに変えたいわけでもないからな。」

シルヴィア「そうなんだ〜。じゃあ次は……こんな感じかなあ〜。」

八幡「……なんだこりや？髪のを中央に寄せてるだけじゃねえか。」

シルヴィア「ふふふ、なんかトサカみたいになってる！」

八幡「自分からやつといて随分な言い草だな。」

シルヴィア「ごめんごめん。じゃあ次だよ！」

八幡「まだやるのか？よく飽きないな？」

シルヴィア「いいでしょこのくらい！」

八幡「まあ後でお前の頭を撫でまくるだけなんだけどな。」

シルヴィア「わーい！八幡くんからのナデナデだあ〜♪」

いろんな撫で方があるけど、どれも気持ち良いんだよね〜♪

シルヴィア「じゃあ今度はこれかな。」

八幡「ほう……シルヴィってヘアデザイナーの才能もあるんじゃないのか？」

シルヴィア「そうかな？これは何となくでやってみただけど。」

八幡（バカなアニメに出てくる保健体育最強のムツツリみたいだな。）

シルヴィア「次で最後にするね。少し気合い入れるね。」

八幡「おう。」

よぉーし！八幡くんに明日の髪型で行くって言わせる程のカッコいいのにしょーと！

――10分後――

シルヴィア「出来た！」

八幡「おっ、今度のは良い感じだな。」

八幡（フルダイブゲームの主人公みたいな髪型になってるな。）

シルヴィア「えへへ、いつもはおふぎけでやってるけど、今日は少しでも気合入れてみたよ。どう？」

八幡「ああ、俺も良いと思う。明日はこれでライブ出るか。」

やった♪

シルヴィア「それなら良かったよ。それでさ八幡くん。明日のライブのことで相談んだけど、いいかな？」

八幡「いいぞ。」

シルヴィア「私ね、折角2人でライブするんだから、少し工夫をしたいんだ。歌じゃなくてパフォーマンズで。」

八幡「パフォーマンスか……例えば、俺の影を使ってシルヴィーを持ち上げるとかか？」

シルヴィア「え？そんな事も出来るの？」

八幡「ああ、一応俺の作った影は物理的に触れるぞ。俺の影龍って技があるんだが、その技は影の龍が実体化して実際に俺が乗ってるからな。」

シルヴィア「へえーそうなんだ！」

八幡「後はお前も見ただ事あるだろ？伽耶梟も影で作ってるからな。」
シルヴィア「ああ！そういえばそうだったね！」

私ってばすっかり忘れてたよ！

シルヴィア「ねねっ、他には？どんなパフォーマンスがあるかな？」
八幡「んー他かぁ……シルヴィ、歌う時は星辰力を出してるか？」
シルヴィア「出してるよ。私の能力は歌を媒介にするからね。声を拡声してるのも、私の能力だよ。」

八幡「ならその星辰力に俺の影で作った五線譜を重ねるのはどうだ？」

シルヴィア「でも、どうやってやるの？」

八幡「さぁ？」

シルヴィア「ガクッ……もう、それじゃあ意味がないよ。」

八幡「仕方ないだろ、ただ思いついたのを言ってみただけなんだからよ。」

でも、その想像力や発想力の豊かさは羨ましいよ。

八幡「ただ重ねるのは簡単だろうが、動きに合わせるのは難しいだろうな。」

シルヴィア「一回私と八幡くんの星辰力合わせてみる？そしたら出来るか出来ないかくらいはわかると思うよ。」

もしかしたらの可能性もあるしね。

八幡「じゃあ遊びがてらやってみるか。手を繋いだら出来んじやねえか？」

シルヴィア「そうだね、それでやってみようか。」

ふふふ♪ちやっかり八幡ちゃんと手を繋げてラツキー☆

八幡「んじややるぞ。準備はいいか？」

シルヴィア「いつでもどうぞ。」

八幡「じゃあやるぞ。せーの！」

八幡くんの掛け声で私たちは星辰力を出した。うーん、あんまり変わりないかな。

だが、みるみるうちに2人から放出される星辰力が絡め合うような動きをしていた。

シルヴィアの色がピンクだとしたら、八幡の色は紫に近い黒だった。

シルヴィア「えつと……私たちと想像していたのよりかなり違うね。」

八幡「ああ。シルヴィアの星辰力に俺の星辰力が絡んでる感じか？多分これを魔法として使ったら少し違くなるんじゃないか？」

シルヴィア「そっか。今のはただの星辰力だからね。魔法として使えば……」

八幡「そういう事だ。今度は魔法として出してみるぞ。」

なんか実験みたいで楽しいな！

八幡「じゃあいくぞ。せーの！」

今度は出す方法が違うから私は歌っている。八幡くんは腕を少し広げて両手を開いていた。

すると今度は黒い線が私の歌から出ている星辰力に乗るように動いていた。その線は1本のもあれば2本3本と色々あったけど、最大でも5本だった。五線譜と同じだった。

シルヴィア「……成功でいいのかな？」

八幡「まあそうだな。だが、手を繋がなきや無理だから、これは無理だな。」

シルヴィア「そつかあ……残念。」

でも楽しかったし、いっか♪

八幡「だが、意外と面白かったな。星辰力が合わさるなんて。相性が良かったのか？」

シルヴィア「そんなの当たり前だよ！だって私と八幡くんだよ！相性が悪いわけないよ！むしろ拔群でなくちゃ困るんだから!!」

最悪だったらこんな事も起きないよ！

八幡「……そうだな。いや、そうとしか考えられないよな。」

シルヴィア「うん♪」

八幡「まあ今のは使えないとしても、さっき言った俺の影でシルヴィを持つことくらいなら可能だから任せておけ。」

シルヴィア「うん、任せました！」

八幡「んじやそろそろ寝るか。明日も早い。休める時は休んでおこう。」

シルヴィア「うん、そうだね。」

そして私たちはベッドの方へと向かい、向かい合った。

シルヴィア「えへへ♪いつもこうしてるのに、なんか恥ずかしいね

／／／

八幡「シルヴィもか。実は俺もだ。」

シルヴィア「でもすぐに眠れるよ。今までがそうだったからね。」

八幡「ああ、そうだな。」

その言葉は命中して私たちはすぐに眠ることが出来た。

けど、この時の私たちは眠っているから知らなかった。

私と八幡くんが放出していた星辰力。さつきまでは別々に放出されていたのに、寝ている時には私たち2人から同時に放出されて、お互いの身体を包み込んでいた事を。

※霊たちの会話

――――

玄武『良いな良いなあ。僕もそんな風にされたいなあ。』

朱雀『おい玄ちゃん、今そんな事を言ったら起きちまうぜ？静かにしてやれよ。』

玄武『ごめんねえ。でもマンちゃんが気持ちよさそうだったからついねえ。』

八幡たちが寝ている最中、守護霊たちは動きが少しだけ活発になる。その理由としては、悪霊や荒魂の類などに取り憑かれないように主を守るためである。

索冥『ですが、玄武の言う通りでもありますね。シルヴィア様の家同様に、お互いとても気持ち良さそうに寝ておられますね。』

玄武『あゝメイちゃんだあ。おはよう。』

朱雀『おはようには早いが、取り敢えずはグッドモーニングだな、索冥の姉貴っ！』

夜中でもしっかりと挨拶を交わしていた。だがそれも当たり前の事。索冥は四神の中央を守護しているともいわれている麒麟でもあるのだ。

四神の長ともいわれている。

索冥『それよりも、どうですか？』

朱雀『ああ。船から降りた時はかなり近かったんだが、段々離れていった。多分東京のどこかかな。』

索冥『東京……昔でいう江戸ですね。心当たりや手掛かりは何かありますか？』

朱雀『あつたら苦勞はしねえよ。大体手掛かりは俺たちクラスの神気だけなんだからよ。まあ索冥の姉貴程の靈気は無かったけどよ。』
玄武『そうだねえ。僕もそれなりに探ってはみたけどお、メイちゃん程の靈力ではなかったと思うよお。』

索冥『私未満貴方たち四神と同格レベルですか……考えて普通に浮かぶとすれば、青龍と白虎ですが、同格の存在はまだ他にもいます。靈亀、れいき獅多、かいち九尾の狐、少なくともこの3体が貴方たち四神と同格の存在です。この流れでいくならば四神であつて欲しいものです。』
玄武『そうだよねえ。僕もホウ兄こうにがいるならトラ兄こうにとリュウ兄こうにが良いなあ。』

四神の神獸2匹とその長が話を進めているが、船で感じた神氣の手掛かりは掴めないでいた。

八咫鳥『……どうしたのだ？主人の前で騒がしいぞ。』

朱雀『ああ八咫さん。起こして悪かったな、実はよ……』

朱雀と索冥が事の事情を説明した。尚、玄武には説明をさせなかった。理由は分かりますよね？

八咫鳥『……成る程、主らと同格の神氣、靈力か。ならばそれを辿ればよからう？』

索冥『無理を言わないで下さい、八咫鳥様。私たちにはそのような能力はございません。精々感じ取れるのがやっとなのでございます。』

八咫鳥『ふむ……ならば拙僧が探せば問題は無いのだな？』

朱雀『いやいや、幾ら八咫さんでもそりや無理だろ。』

八咫鳥『拙僧やの三つ目は、人、天、地の全てを見通す目だ。その神氣や靈力を辿るくらい造作もない事だ。』

自信に溢れた声でそう答える八咫鳥。

索冥『っ！その事を忘れていました。八咫鳥様、靈気の搜索をお願いしてもよろしいでしょうか？』

八咫鳥『承知した。』

朱雀『ふうー、なんか疲れたな。こうして話すのも初めてだからか？』

索冥『気にする事はありません。もうじき朝です。八幡様やシルヴィア様が起きる時間帯にもなります。私たちはこの時間帯でしか上手く動けませんから。』

玄武『それもそうだねえ。』

八咫鳥『神気と靈力の方は拙僧に任せろ。良い報告をするよう精進する。』

そして守護霊たちは朝5時を迎えると会話しなくなった。

変わらない朝

八幡 side

現在午前6時、早朝と言っているのだろうか？まあ俺は大体この時間に起きる。部屋以外は特に変わりもなく、いつも通りに起きる事が出来た。

そう、いつも通り。

俺のいつも通りは、普通に起きて身体を伸ばしてからちよつとしたニュースなどを見たりしてから朝食を作り、それから1日がスタートする。

だが、今回はそのケースから離れているのだ。

そう、シルヴィがいるからだ。

シルヴィと2人の朝の場合はこうだ。朝に目を覚ましたら、シルヴィに抱き着かれているから、伸びるも何も出来ない状態だ。だがその代わりに、シルヴィの寝顔を拝見出来る。

そして何より、シルヴィ自体すげえ良い匂いがする。同じシャンプーやボディーソープを使っている筈なのに、それよりも良い香りに

感じるのだ。俺は別に匂いを嗅ぎたくて嗅いでるわけじゃないからな？ ついつい嗅いじまうんだよ。

そんな訳で俺は今、シルヴィの寝顔と香りを絶賛堪能中なのだ。こういう時はこう言うんだろ？

「Give and take」ってよ。いや、俺は誰にGiveしてるの？寝顔と香りは貰ってるけどよ。

シルヴィア「んん〜……むにやむにや……」

そしてシルヴィアの幸せそうな顔。こんな顔を一緒にいる時に見られる奴は幸せモンだよな。

俺はこの時、頭を撫でるか軽く身体を抱き寄せたりする。そうするとシルヴィは必ず笑みを浮かべるのだ。俺だって分かっているのか、はたまたこうされるのが良いのかどっちかだな。（絶対に前者だよバカヤロー）

八幡「ホント、シルヴィ^こアに惚れてマジで良かった。」ナデナデ
シルヴィア「んん〜……♪〜」

——30分後——

シルヴィア「ん…………んんう……………」

しかし、今日はよく寝てるな。昨日なんか疲れる事したか？歌歌ったくらいだが……後はキス騒動だが……やめておこう。

♪〜♪〜♪〜

ん？アラームか？

シルヴィア「ん？うゝん……ふあゝ……」

大きな欠伸ですねえ？可愛いからいいけど。

シルヴィア「ふうゝ……ん？八幡くん？起きてたの？」

八幡「ああ、30分前にな。おはよう。」

シルヴィア「おはよお……」

八幡「まだ寝ぼけてんな。顔でも洗ってきたらどうだ？それには先ず、俺を解放しなきゃならんがな。」

シルヴィア「じゃあこのままが良い。」

そう来ましたかお嬢さん。なかなかやりますね。

八幡「そんな事してたら二度寝しちゃうぞ？ほれ、俺も付き添ってやるから洗面台に行くぞ。」

シルヴィア「むうゝん。」

むうゝんって……何処の言語だよ。

――10分後――

シルヴィア「お待たせゝ。んーさっぱり♪」

八幡「目が覚めたみたいだな。これで俺も安心出来る。」

シルヴィア「ゴメンね。ちよつと迷惑かけてたみたいだね。」

八幡「気にするなよ。あんなの迷惑の内に入らねえよ。シルヴィと一緒に居らんだから役得だよ。」

シルヴィア「えへへゝ♪」

目に見えて喜んでるな。

八幡「そーいやシルヴィはどんな衣装でライブ出るんだ？」

シルヴィア「私はいつも制服だよ。衣装変えるのもお金がいるからね。デザイナーとかコーディネーターとかも雇わなくちゃいけないし。」

八幡「成る程な……そういう意味では予算削減にもなるな。そう考えたら、俺は何着ればいいんだろうな？」

シルヴィア「この前のライブで着てた燕尾服は？ 凄く似合ってたから良いと思うな。」

八幡「アレかぁ……まだあんの？」

シルヴィア「……どうだろうね？ 私も分からない。」

ライブやる前から詰んでない？

シルヴィア「……ま、まあ何とかなるよ！ ペトラさん以外と準備良いから！」

八幡「もし無かったら俺は私服でライブに出ろって事なんだよな？」

シルヴィア「……うん、否定出来ないからそうなるかな。」

朝食の時にでも聞こつと。

八幡「ああ、そうだシルヴィ。今の内に髪セットしてくれないか？ 会場に行ったら絶対そんな暇無いだろうからな。今やっておいた方が良いだろう。」

シルヴィア「それもそうだね。どんな髪型にする？ オールバック？ トサカヘア？ それとも均等ヘア？」

八幡「それ分かってて聞いているだろ？ 一番最後にセットした髪だ。前髪をV字みたいな感じに残した奴だよ。」

シルヴィア「分かっているよ、じゃあジェルとかワックスとか用意

するから少し待っててね。」

今更ながら思ったが、髪って大事なんだな。芸能界入ったわけじゃないが、シルヴィの立場を思うと、何となく理解出来ちゃうな。

――20分後――

シルヴィア「かんせい！どう？」

八幡「……ああ、昨日と同じだ。シルヴィ将来はこんなのも良いんじゃないか？」

シルヴィア「やだよ。私はもう八幡くんとお料理屋さんするって決めてるんだから！」

八幡「……そういやそうだったな。料理屋なら俺の場合、ガスとか水道とか使わずに料理出来るから楽かもな。」

シルヴィア「え？どうして？」

八幡「一応俺は陰陽術使えるからな。それ使って火を起こしたり、水を出したり出来る。風と土と金は必要になるか分からんけど。」

シルヴィア「おおうそれなら無駄にガスも使わなくて済むね！これはもう将来の夢は確定かな？」

八幡「ふっ、そうかもな。」

料理屋かぁ……深くは考えてなかったが、シルヴィアと一緒に居られるのなら、それもいいな。

ライブの準備

八幡 side

『照明はバッチリだ！後は曲に合わせるだけだ！』

『こっちも花吹雪の準備はOKです！』

『要望にあった左側ステージに少し空きを作っておきました！』

『こっちもステージに影を作るセッティングは終わりました！』

……前も見ただけ、やっぱり慌ただしいな。

シルヴィア「八幡くん、そんなに外ばかり気にしてたら歌う時になつたら声出なくなっちゃうよ？」

八幡「別に気にしてはいないが、どうも落ち着かなくてな。俺もなんかしたくなるんだよ。」

シルヴィア「八幡くんって変なところでお節介だよね。」

なんでだよ……手伝いたいって思いがあるだけいいだろ。

コンコンツ

シルヴィア「はい。」

スタッフ「失礼します。比企谷くん、衣装持って来たよ。ライブの時はこれを着てくれればいいから。それじゃ。」

忙しいんだろな、入ったと思ったらすぐに行っちゃった……お礼を言う暇も無かったな。

見た目は普通な感じだな。ていうか靴もあるのか……いや、ブーツか。

来た衣装は、黒の襟付きジャケットに薄い水色のシャツ、青いジーンズに赤紫のブーツといった感じだった。そしてアクセサリーには、腰につけるタイプのチェーンに十字の首飾りがある。

これ、俺が着て似合うか？

流石に似合わないと思うんだが。

シルヴィア「八幡くん、着替えたら？今の内に着替えておいた方がゆっくり出来るよ。」キラキラ

八幡「じゃあその目は何だ？」

シルヴィア「目？何の事？」キラキラ

前のライブと一緒に『早く着替えて私に見せて！』とでも言っているような顔をしている。

八幡「分かったよ。んじゃ着替えるから試着室行ってくるわ。」

シルヴィア「うん！待ってるね♪」ニコッ

無駄に良い笑顔だな……可愛いから許すけど。

――10分後――

八幡「戻ったぞー。」

シルヴィア「はいーい！おおーやっぱり似合うようー！」

八幡「そうか？俺には少しチャライ感じにしか思えないんだが……」

シルヴィア「ライブやるんだからそんな感じでも大丈夫だよ！」

八幡「ならいいんだけどな。」

『シルヴィアちゃん、比企谷くーん！本番前の会議やるから集まっ

て下さーい!』

シルヴィア「はーい!じゃあ行こつ、八幡くん!」

八幡「ああ。」

―――会議室―――

ペトラ「じゃあ早速、本番前の打ち合わせをするわ。」

ペトラ「歌う順は八幡くん、シルヴィア、そしてデュエットの順で把握してるわね?」

八幡「はい、大丈夫です。」

シルヴィア「何を歌うのかもバッチリ覚えてます。」

ペトラ「上々ね。それと八幡くん、左側のステージに空きは作っておいたけど、何に使うの?」

八幡「それは本番になってからのお楽しみです。先に言ったらつまらないでしょう?」

ペトラ「それもそうね。じゃあ楽しみにしてるわ。後、照明や遮断装置の方は?」

スタッフ「設置して3回動作確認しましたが、大丈夫でした。」

ペトラ「よろしい。他に何かあるかしら?」

「「……………」」

ペトラ「分かったわ。じゃあ最後に私から八幡くんに。会場に入ったら気をつけなさいね。もしかしたら貴方の事を妬んでる人もいるかもしれないから。」

八幡「分かってますよ。その時は仕返しますので。」

ペトラ「この前みたいに受けないの?別に受けるとは言わないけど。」

八幡「あれは俺が出てすみませんという意味もあって受けたただけですよ。でも今回は公式での公開ですからね。文句をつける奴がいるのなら、俺の手で退場させてやりますよ。歌を聴かせる暇もなく。」

ペトラ「暴力はダメよ。」

八幡「するわけないじゃないですか。俺の影でライブ中は大人しくしてもらいだけです。ライブが終わったら解放します。」

ペトラ「分かったわ、じゃあもう1つ。ドッキリをするって聞いたけど、何をするの？」

八幡「俺の能力を知っている人なら、簡単に分かりますよ。」

ペトラ「……じゃあモニターで確認するわね。私からは以上よ。皆、今日も成功させるわよ。」

「はいっ!!」

ペトラ「じゃあ所定位置につきなさい！本番10分前よ！」

――舞台裏――

シルヴィア「ふう、この前はたった1000人くらいだったけど、今回は四捨五入したら10000人だから少し緊張するなあ。」

八幡「メッセは最大で9000人入れるからな、もう観客席は人一杯だろうな。」

シルヴィア「それと八幡くん、ドッキリのターゲットはどうするの？まさかとは思うけど、元の高校の人にはやらないよね？」

八幡「やるわけないだろ。んな事やってみろ、俺も調子でなくなるわ。ていうか、何でそんな事聞くんだ？」

シルヴィア「さつきモニターで入口の方を見てたらいいたの、城廻さんが。」

……あの人、また当たったのか。すげえ運良いな。普段の行いが良いからだろうか？そしてほんわか空気隠さずにマイナスイオン出しまくりだからか？

八幡「安心しろ、城廻先輩とは会わない。握手会に来ない限りはな。」

シルヴィア「……………そうだね。」

スタッフ「もうすぐ本番だよ、2人共っ！準備はいいかな？」

シルヴィア「あつ、はい！いつでも出られます！」

八幡「じゃあ俺は行きますね。少しターゲットを絞りたいので。」

さて、ライブ前にいっちょやりますか。

ライブ!! ①

八幡 side

うわあ……すげえ人だな。今からこの人数の前で歌うのか。1年前も歌ったとはいえ、規模が違い過ぎるな。

さて、俺はドツキリのターゲットを探さないとな……「もう何やってんのさ。」ん？

「だ、だって、生の比企谷さんを見られると思ったら……」

「だからって今からガチガチになってどうすんのよ。ほら、深呼吸。」
「む、無理だよお姉ちゃん。そんな事しても緊張なんて取れないよ。」

姉「はあ……そんな調子だったら、握手会なんて行けるわけないじゃない。」

妹「うう……」

はい決定。あの保護欲を掻き立てられる姉妹の妹の方に決定。何あれ？可愛過ぎない？シルヴィには劣るけど可愛過ぎない？

よし、分からないようにステージに降りてつと。あつ、後ろ失礼しますよー。

よし、着いた。後はシルヴィの合図を待つだけだな。時間は……12:59:50 良い時間だな。

そして、13:00になった。

ステージの右側から、シルヴィが小走りしながら真ん中までやって来た。

シルヴィの姿が見えた瞬間、観客のボルテージがMAXになった。う、うるせえ。

観客側になると、こんなにも耳に響くんだな。

観客 男1 「すげえー!!本物のシルヴィア・リユーネハイムだ!!」

観客 男2 「写メ撮りてえー!!でも撮影禁止なのが痛ええ!!」

観客 男3 「今の時代に生まれてて良かったあ!!」

観客 女1 「きゃあああ!!シルヴィだあ!!」

観客 女2 「可愛いー!!」

観客 女3 「握手会になったら一緒に写真撮ってくれないかなあ!?!」

流石世界の歌姫……凄え人気だ。

妹 「……比企谷さんは?」

姉 「そういえば居ないね。」

妹 「出番じゃないから、まだ裏にいるのかな?」

姉 「そんなわけないでしょ?最初に歌うの比企谷くんよ?」

妹 「早く出てきて欲しいなあ……」

ゴメンね、君の真後ろにいるんだ。ステージじゃなくて真後ろでゴ

メンね。

シルヴィア「皆々!!今日の為に来てくれてありがとう!!!」

ワアアアアアア!!!

シルヴィア「さて、じゃあ早速ライブを始めていききたいんだけど、ここで私からの問題だよ。プログラムでは最初に歌う筈だったもう1人がステージ裏には居ませんでした。さて、何処にいるでしょうか?」

「もう1人つて、比企谷八幡だよな?」

「え?会場には来てるんだよな?」

「え?比企谷様が居ないの?」

「嘘、何処かなあ?」

ワイワイガヤガヤ

すげえ探してるなあ。ステージを凝視している奴もいれば、天井を見てる奴もいる。さて、そろそろいいか。

八幡「あの、比企谷さん見つかりましたか?」

妹「いえ、全然。何処にいるのかも……」

姉「何処にいるんでしょうかね?」

前向いたまんまだな。

八幡「まあそうですね。そう簡単には見つかり……ん?後ろのあれ何だ?」

妹「え!?!何処で……す……か……」

姉「?どうし……た……の……」

八幡「どうも。」

姉妹「ええええええええ
!!!」

おお、良い反応ですねえ。

観客 男1 「な、何だ!? うおっ!? ひ、比企谷八幡!!?」

観客 男2 「え!?!こんな近くに!?!」

観客 男3 「さつきまでいなかったのに……何でだ!？」

そりや自分の能力を使っていますからね。見えないのは当然だ。

シルヴィア「というわけで正解は、観客の後ろに紛れ込んでいた、でしたっ!!」

てつてれんっ
!!!

妹「にや、にやんでこきよにいりゆんでしゆか!!!?」

姉「ビ、ビツクリしたあ……」

八幡「脅ろかせてしまつてすみませんね。実は俺からのドッキリでして。さっき私の事を話していたみたいだったので。」

姉「あ、は、はい。妹が《鳳凰星武祭》を見てから比企谷さんの大ファンで。」

八幡「そうでしたか。それならドツキリ大成功ですね。ところで妹さんは……」

妹
「
パク
パク

緊張のあまり、喋っているつもりでも声が出ていなかった。

八幡「あの、大丈夫ですか？」
妹「りや、りやいりようりゆりえりゆ!! うう……／／／／／」

うん、大丈夫じゃないね。

八幡「ドッキリしてすみませんでした。ライブ、楽しんでくださいね。」ポンポン

妹「あっ……」

頭ポンポンくらいならシルヴィも怒らないだろ。

さて、早くステージに行かないとな。

俺はそそくさと観客席から階段に出て、そこからステージへと戻った。

シルヴィア「いや〜大成功だったね!」

八幡「皆良い反応してくれて良かった。その声をライブでも出せるように頼む。」

シルヴィア「あははっ、私からもお願いね。それじゃ早速、一曲目からスタートするね! まずは八幡くんから!」

八幡「この曲は、1年前、界龍に來たばかりの俺と、現在界龍で過ごしている俺を表現したような感じがしたので選曲しました。」

『No More Time Machine』

俺が曲名を言うと、会場からBGMが流れた。

八幡「♪♪♪」

八幡「♪♪♪」

観客 女2「うわあ……生で聴くと凄いなあ。」

観客 女3「ヤバイね……超上手い!」

観客 女1「ユーニードアタイムマシーン!!」

観客 女3「この子は既に別世界だね。」

観客女2「あつ、次サビだよ!」

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪♪」

ワアアアアアア!!!

すげえ歓声だ……

八幡「♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪」

妹「歌はライブで聴いたことあったけど、凄い……迫力あるなあ。」

姉「本当だね。強くてカッコよくて歌も歌える。完璧だね。しかも彼女のシルヴィアさんもカッコいいを可愛いにすれば同じだし。」

妹「比企谷さん……今度いつライブするのかなあ?」

姉（いや、それは幾ら何でも気が早すぎるでしょ……）

八幡「♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪」

シルヴィア（やつぱり凄い。八幡くんの歌で皆盛り上がってる。でも、私も負けないぞ!）

八幡「♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪」

八幡「♪♪」

BGMが流れ終わると…………

ワアアアアア!!!

女性ファン 「比企谷様く!!!」

観客 男1 「完成度高過ぎだろ!!スゲェ!」

観客 男2 「前のライブ見といて良かったあ〜!てなきやここに
ねえしな。」

観客 男3 「流石【夢幻月影】…………でいいのか?」

……………良い感じに盛り上がってるな。

八幡「聴いてくれてありがとな。俺はあんま大きい声で話すのは得意じゃないが、歌では大きく行くからそこんとこ宜しくな。んじゃ、バトンタッチで次はシルヴィだ。」

シルヴィア「はーい!私が歌うのはこの曲だよ!いつでも何処でも
テンションUP!聴いてるだけでも踊りたくなりそうなのこの曲です
!」

『LOOP THE LOOP』!!」

そして今度はシルヴィが歌いだす。

※ライブ!! ②

—————

シルヴィア「♪♪♪」

シルヴィアが『LOOP THE LOOP』を歌い終わり、BGMも停止すると、観客からは大歓声が上がった。

シルヴィア「皆、ありがとう！私も凄く気持ち良く歌えた気がするよ！八幡くん、私の歌声どうだった？」

八幡「俺も少しだけ小躍りしてしまった。シルヴィが歌う前に言っていた事が現実になったな。良い歌だった。」

シルヴィア「うふふ、ありがとう！さて、じゃあ次の曲に行ってみよう！次は私と八幡くんのデュエットソングだよ！」

八幡「この曲はマジでテンポが早いから、覚えるのも苦労したもんだよなあ……」

シルヴィア「それじゃあいくよ！目の前の敵とは本気で戦え！後ろを振り向かず全力で戦え！全身全霊全力投球！

『The Asterisk War』！」

そしてまた曲のBGMが流れる。流れている曲は少し機械的な感じだったが、立体感のあるBGMだった。

シルヴィア「♪♪♪」

2人「♪♪♪」

シルヴィア「響いて♪♪」

シルヴィアが歌い終わると、次の歌い始めには八幡も加わっていた。照明も点いたり消えたりとの繰り返しが続く、そして曲のサビに

入った瞬間、激しさが一気に増した。

シルヴィア 「♪♪♪♪♪」

シルヴィア 「♪♪♪♪♪」

2人 「♪♪」

1パートが終わると歓声が起きて、ペンライトの光も変わっていった。

観客 男1 「うわあーやっぱシルヴィアは歌上手えなあ！」

観客 男2 「いや、比企谷八幡も負けてねえよ！どっちもすげえよ。」

観客 男3 「流石恋人同士だ……息ピッタリだ。」

八幡 「♪♪♪♪」

2人 「♪♪♪♪」

シルヴィア（流石だよ八幡くん。この曲テンポ速いから合わせるの大変なのに。私に合わせてるのかな？それとも……愛の成せる技かな？／＼／＼）

八幡 「叫んで♪♪」

八幡 「♪♪♪♪♪」

八幡 「♪♪♪♪♪」

2人 「♪♪」

しばらく間奏が続く場面になる。それでも観客の方は興奮が収まらず、ずっとペンライトを振り続けていた。

2人 「響いて♪♪」

2人 「♪♪♪♪♪」

2人「♪♪♪♪♪」

2人「♪」

BGMも流れ終わり、少しの間静寂……そこからの大歓声だった。

観客 女1「2人のデュエットは動画で見たけど、生だとこんな凄
いんだ!!ヤバかった!」

観客 女2「もうヤバイよ……」

観客 女3「とにかく凄い!もうこれしか出てこないよ!」

シルヴィア「ああ、歌えて良かったよー!少し心配だったんだよね
!」

八幡「ああ。この歌はテンポが速いだけじゃなくて、デュエットだ
と合わせるのも難しいからな。」

シルヴィア「練習の時もずっと悩まされたよね。本当に上手く
歌えて良かったよ!それじゃあ次の曲は、10分後からスタートする
から、それまで皆は水分補給したり、トイレを済ませたりして休ん
でね!」

憩いのひと時

八幡side

シルヴィア「ああ〜良かったあ〜。成功して本当に良かったよ!」

八幡「そうだな。結構練習したからな。」

水分を摂りながらさっきまでの歌の出来を話す俺たち。『The Asterisk War』1人で歌うなら楽だが、2人で歌うとなると結構難しかった。元々1人用なだけだな。

シルヴィア「八幡くんも凄かったよ。界龍最初の頃は私も分からないけど、何とかやっていければ良いって感じだったんでしょ?」

八幡「まあな。界龍……いや、六花に来た時はそんな感じだった。自分がこの世界でどこまでやれるのかが知りたかったただけからな。けど、界龍に来て数週間で変わっちまったよ。俺の目を気にせず、こんな俺にも優しくしてくれる連中が居るって分かったら、変わらずにはいられねえよ。」

確かにうるさい奴（セシリーとかチビツ子とか陽乃さんとか）もいるが、それも引つくるめて全てが俺の日常になってる。いつからだったな……こんな風に変わったのは。

シルヴィア「私に会ったのも六花に来た次の日だったんだよね。」

八幡「ああ。あの時は確か……ナンパされていたのを俺が助けたんだっただよな。」

シルヴィア「うん。あの時からもう運命だったのかもね。あの日から八幡くんの事が気になって仕方なかったもの。」

俺は別にそうでもなかったが、気になり始めたのは《王竜星武祭》の頃だったな。そして決勝に自覚したんだよな……初めて知った感情だった。異性を本気で好きになる感情ってのが。

シルヴィア「あははっ！休憩時間なのに昔話になっちゃったね！」
八幡「そうだな。だが思い出してくるのも事実だからな。」

でなければこんな話にはならないからな。

八幡「そういや最後の俺の歌が歌い終わった後のプログラムに???があったが、あれは何なんだ？」

シルヴィア「うーん……秘密かな。」

八幡「歌なのか？」

シルヴィア「それも秘密かな。」

八幡「おいおい、気になるな。教えてはくれないのか？」

シルヴィア「本番までのお楽しみにしてるからね。ダメでくすつ！」

手でもぼつ印を作って俺にアピールする。本番までのお楽しみつて事か。

八幡 side out

めぐり side

………違った。私の知っている比企谷くんとは全くの別人だった。力強い目に堂々とした佇まい、意志の強さも感じる。昔の彼から感じた皮肉さはどこにも感じなかった。

何で気づいてあげられなかったんだろう。比企谷くんだってあんな事好んでする筈がないのに……。

だからこそ分かる。比企谷くん、君って本当は凄く強い人間だったんだね。文化祭や告白のために自分が犠牲になるんだもの、余程の覚

悟がないとあんな事出来るはずがないよね。

そんな君に私は甘えていたんだね。それなのに、いざやり方が悪かったらあんな事を言って……本当、前のライブでも思ったよ。

めぐり「本当に不真面目で最低なのは私の方だよね。」

比企谷くんの事を分かってあげようとしてもなかった。何か理由があつてやつたつて事は私でも分かったけど、それ以上踏み込もうとはしなかった。その時点で私は君よりも不真面目だよね。

そして理由が分かったあの日、君が転校していなくなった日だね。あの日からずっと私なりに君を探してたよ。君に謝りたい一心で。理由が分かった時に動く私って最低だよ。

でも……そんな私でも、君にまた直接会って言いたい。『ごめんなさい。そしてありがとう。』って。

めぐり side out

比企谷母 side

この日、私はたまたま有給を取っていたから休みを取れていた。だから幕張メッセまでは来ていた。でもチケットを予約していたわけじゃないから、外にあるモニターで映像を見ていた。

取材の時と同じで強い眼差しだった。1年前とは全く違うよ。

でも、私は充分だよ。あんたが日の光を浴びながら生きていつてただけでもう充分。あんたに会わせる顔なんてもう無い。というよりも、会うことがないわよね。

もうテレビ越しでしかあんたを見るしかないけど、私はもうそれでいい。

八幡、あんたが幸せでいてくれれば私はもう何も言わないよ。……違った、言えないわね。もう会う事もないから。

比企谷母 side out

小町 side

お兄ちゃんがシルヴィアさんとライブに出てる。そういえば付き合ってるんだったね。でも、嬉しいなんて感情も湧いてこない。それよりも大きい言葉が小町の心を支配しているの。

八幡『俺は今日この時間を以ってお前と兄妹の縁を切る！』

小町の頭と心にはこの言葉が焼き付いて離れない。シスコンのお兄ちゃんがここまでいうとは思ってなかった。小町は初めて思い知った。現実はこのなにも残酷なんだって。お兄ちゃんがいたから小町は幸せだったんだ。

ただお兄ちゃんが雪乃さんと結衣さんに謝って欲しいだけだった。でも、それがそもそもの間違いだった。

一番近い関係だったのに、今では凄く遠い人に感じる。でもそうだよ。縁を切るって言うってたから。

もう、戻れないのかな？

小町 side out

葉山 side

男子1「ホントすげえな！実力もあって歌も歌えるって……男版シルヴィアじゃん。」

女子1「本当に凄いよね〜！しかもあの2人って付き合ってるんですよ？会見してる時も思ったけど、凄くお似合いのカップルだよね〜！」

女子2「私もそれ思った！なんかさ、シルヴィアさんの比企谷さんを見る目がもう熱いんだよねー！」

女子「「キャー！！」」

男子2「女子は盛り上がりつつあるなあ。まあでも、そう思わない方がおかしいな、そう思わないか、隼人くん？」

葉山「……………まあ、比企谷って人も思い切った事をしたとは思うよ。」

まあ、比企谷に騙されているだろうけどね。でなければ陽乃さんやシルヴィアさんが彼に靡く筈がない。

比企谷、一体どんな方法で彼女に迫ったんだい？どうせ碌な方法じゃないんだろ？シルヴィアさんも本心では嫌々なはずだ。

《鳳凰星武祭》も準々決勝までいい。けど、準決勝からは仕組んでやった事に違いない。そうでなければお前が勝てる道理なんて1つもないからな。

！
今度の《獅鷲星武祭》では、俺がお前を完膚なきまでに倒してやる

葉山 s i d e o u t

シルヴィア s i d e

もうそろそろ休憩も終わりだね。

シルヴィア「八幡くん、そろそろ休憩終わりだから幕裏まで行こっ？」

八幡「ああ、そうだな。」

ギョツ！

八幡「…………エスコートが必要なのか？お姫様？」

シルヴィア「ステージ裏までお願いします。」

八幡「了解しました。」
シルヴィア「えへへ♪」

ああ……やっぱり安心するなあ、八幡くんの側にいると。
ずっとこの日々が続いてくれたら良いと思えてくるなあ。

八幡「緩み切った顔だな。そんな顔してステージに出るのか？」
シルヴィア「そんな訳ないよ。君の前だけだよ。」

八幡「なら、しつかり拝んでおかないとな。」

シルヴィア「何の得も無いよ？」

八幡「俺にはあるんだよ。」

シルヴィア「どんな？」

八幡「絶不調でも絶好調にしてくれる太陽のような顔だ。」

シルヴィア「もう！調子に乗らないの！」

八幡「いや、割と本気なんだが……」

太陽かあ……嬉しい表現だなあ。

シルヴィア「よしっ！じゃあもつとご利益あるように抱き着いてあげよっか？」

八幡「いや、そうしたらライブに集中出来なくなるから、今は遠慮しておく。終わったらな。」

シルヴィア「じゃあライブの後に抱き締めるね！うん、決まり！」

その為にも頑張ろっと！

八幡「うし、じゃあ時間も良いから行くか。」

シルヴィア「歌い出しは任せたよ、相棒！」

八幡「シメのデュエットも任せるが、しくじるなよ、相棒。」

勿論！

ライブ!! ③

—————

八幡とシルヴィアがステージに登場すると、会場からは待ってましたと言わんばかりの歓声が響いていた。

シルヴィア「皆々！水分とか補給したかな？熱気とか人当たりつて結構辛いから水分補給はこまめにね！」

八幡「後、これはライブの終わりにも言うが、食べ終わった、飲み終わった後のゴミは必ず持ち帰ってくれな。」

シルヴィア「さあ！私たちの準備は整ってるけど、皆はどうかかなあゝ！」

ワアアアアア!!!

シルヴィア「あははっ！聞くまでもなかったようだね。それじゃあ八幡くん、お願いしますー！」

八幡「おう、任された。俺が次に歌う曲は、自分自身に勇気を出させてくれるような曲だ。あまり表立って勇気を出せない人には分かるかもしれないな。『プライド革命』」

ギターの音色が会場を包み、すぐに歌い出した。

八幡「♪♪♪」

八幡「♪♪♪」

八幡（この曲の歌詞って昔の俺に似てんだよね……まあこの歌詞に出てくる“君”なんて居なかったけどな。）

八幡「♪♪♪」

八幡「♪♪♪」

観客 女1「ねえ、何で比企谷さんって人の気持ち分かるのかな？この曲、すごい私に当てはまるんだけど。」

観客 女2「剣道部だもんね。しかもその部に好きな先輩いるもんね。」

観客 女3「ね。」

観客 女1「う、うるさいなあ！」

観客 女3「でも分かるよー。恋愛だけじゃなくて、なんかどんどん押してけて感じがする。」

観客 女2「あゝ私もそんな感じしたな。」

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪♪」

1パートのサビが終わったが、間奏があまりない曲なので、すぐに歌が始まる。

八幡「♪♪♪」

八幡「♪♪♪」

シルヴィア（八幡くん、きつと自分と似てるとか思ってるんだろうな。でも、君の1年前の事を聞くとそう思うよ。私は否定なんてしないけど。）

八幡「♪♪♪」

八幡「♪♪♪」

妹「……………握手会の時、サインもお願いしようかな。」

姉「あれ？握手会でサインってダメなの？」

妹「後列の事とかで禁止になってるんだ。特にシルヴィアさんのラ

イブでは。でも、ちよつと頼んでみようかな。」

姉「この曲に勇気付けられたね〜？良いんじゃないの？やってみな！当たって砕けろも良い経験になるよ！」

妹「出来れば砕けたくはないな……」

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪」

男なのに高音の歌を難なくこなす八幡に、観客は歌に酔いしれていた。男で高音を歌える人はいるが、ここまで完成度の高いのは初めて聴いたのだろう。

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪♪」

歌を歌い終わると、少ししてからギターのBGMが消えていった。そして会場からは大歓声。それこそ地響きがするくらいの規模だった。

シルヴィア「ん〜凄かったよ八幡くん！聴いてるこっちも鳥肌立ちやったよ！」

八幡「歌ってる俺は分かんがな。」

シルヴィア「いやいや、凄かったよ！ねえ皆！八幡くんの曲で鳥肌立った人ってどのくらいいる？」

すると、会場にいる7〜8割の観客が手を挙げていた。

八幡「マジか……こんなにいるのか。」

シルヴィア「それだけ八幡くんの曲が凄かったっていうのもあるけ

ど、共感した人も多いんじゃないかな？」

八幡「そうだと良いな。勇気を出してやってみる事も大切だから。皆、頑張ってくれよ。じゃあ次はシルヴィだな。」

シルヴィア「はいはい！じゃあ私の2曲目だよ！この気持ちを早く伝えたいけど、うまく伝えられない！純粋な気持ちが邪魔して想いを告げられない！恋する乙女たち、素直になれ！」

『純情エモーショナル』！」

BGMが始まった。明るい感じの曲調だった。

シルヴィア「♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪」

シルヴィア「K i s s m e ♪♪」

この曲には、会場にきている女性客の心を鷲掴みにしていた。おそらく好きな人、気になる人がいる人中心だろう。

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪」

シルヴィア（この曲を聴くと、1年前の私を思い出すなあ。もう八幡くんのことになると顔真っ赤にしてたんだよねえ。それだけ好きだって事なんだけどね♪）

シルヴィア「♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪」

シルヴィア「M i s s y o u ♪♪」

観客 女1「ああもう！比企谷さんといいシルヴィアさんといい、
何で私の心を乱すのがこんなにも上手なの!？」

観客 女3「いや、それは貴女がそれに当てはまっているからで
しょうが。」

観客 女1「いや分かつてるよ？分かつてるんだよ!?!でもさ、もう
シルヴィアさんが歌うこの曲に比企谷さんに向けての好き好きオー
ラがとてつもないんだけど!？」

観客 女2「でも確かにシルヴィアさん、比企谷さんの方をチラチ
ラ見てるよね。」

観客 女1「あの2人ラブラブ過ぎるよお〜！」

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪」

シルヴィア（八幡くん気づいてるかなあ？私、少しチラ見とかして
るんだけどなあ。）

シルヴィアのチラ見は10秒に1回ペースでした。

シルヴィア「♪♪♪♪」

八幡（なんかシルヴィイからの視線がさつきから続いてんだよなー。）

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪」

シルヴィア「大好きだよ♪♪」

間奏が長く続いたが、BGMが鳴り止むと終了の合図がすぐに伝
わった。これまた歓声が上がった。特に女性から。

シルヴィア「いやゝ歌い切ったよゝ！女性客の皆はどうだったかな？共感できる部分があったかな？これ、昔の私でもあるんだ！好きな人の前だと中々素直になれないってあるよね。」チラツ

八幡「演奏中もそうだが、チラ見をするのやめてくれ。すげえ背中から感じてたから。」

シルヴィア「見てくれても良かったのにゝ！」

八幡「勘弁してくれ。」

シルヴィア「それじゃあ許してあげよう！さっ、じゃあ次の曲だよ！今日最後のデュエットだよ！」

八幡「この曲は前回のライブ、1年前でもやったデュエットだ。思った以上に好評だったからこのライブでもやる事が決定した曲だよ！」

シルヴィア「君と共にあの大きくて青い空へ！羽ばたいていこう！」

2人「『a z u r i t e』！」

ライブ!! ④

八幡 side

「♪♪♪♪♪」

azuriteの最後の曲が終わり、BGMだけになった。その時から観客方面から大歓声が上がっていて、紙吹雪も舞った。

八幡「ああ、やっぱ一度歌ってるから、他の曲に比べると比較的歌いやすかったな。」

シルヴィア「そうだね。別々に歌う部分と一緒に歌う部分も把握してるから、ごちゃ混ぜにならずに済んだね!」

八幡「この曲やっぱ人気なのか? 歌手が2人だからデュエットしやすいってのもありそうだが、どうなんだろうな?」

シルヴィア「どうだろうね? でも、確かに歌いやすくはあるよね!」

歌の合間に入れる雑談は、少しでも喉を休めるためでもある。連続で歌ってたら、声潰れるからな。

シルヴィア「皆々! 後2曲でこのライブも終わりなんだけど、最後まで付き合ってくれるかな?」

ワアアアアアア!!!

シルヴィア「ありがとおく!! それじゃあ八幡くん、君が歌う最後の歌をお願いします!」

八幡「任せろ。俺が最後に歌うのは、六花に来る前の高校で過ごしていた俺の心の叫びを表したものと、これから俺が描いていく六花での心の想いを表したものが合わさった曲だ。」

『INNOCENCE』

ピアノの音色が響き、徐々にテンポが上がっていった。3、2、1
…GO！

八幡「♪♪♪」

隠してた感情。俺が1番表現出来やすい感情は悲嘆と叫びだな。
あの時の俺は言いたい事があっても言えないような奴だったからな。

八幡「♪♪♪」

八幡「♪♪♪」

奇跡……俺でいう『本物』だな。それを求めて今まであの闇の中を
彷徨ってたんだよな。未来が無いってのもあながち間違いじゃない
な。あのまま居たら、ホントにどうなってたか分からんしな。

八幡「♪♪♪」

言葉が出せない、か。その通りだな。そのせいで俺はマイナス感情
を溜め込み過ぎて、いつも心の中で叫んでたよな、『何で俺が……』み
たいな感じだったよな。

よし、この辺りだな。

俺はステージ左に空けてもらったスペースに向かって走り、そのま
まジャンプした。

観客「「ッ!!?」」

シルヴィア「八幡くん!？」

誰もが落ちると思っていたのだろう。だが、俺は自身の能力を使つて浮いていた。いや、影の上に立っていると云った方がいいだろう。そのまま俺は観客の頭上を陰の上を歩きながら歌っていた。

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪♪」

俺が叫びにしたのは展望台だったよな。そこから六花に行く事を決めて、2週間修行して少し強くなれた。

そこから俺の六花の生活が始まったんだったな。懐かしと思うが、好んで思い出したくはないな。

めぐり「……………」

めぐり（比企谷くん……………歌詞の通りだね。君の言っていた心の叫びの意味が何となくだけど伝わって来たよ。）

めぐり「……………もつと早く君の気持ちに気付いてあげられてたらなあ……………遅過ぎだね。」ポロポロ

八幡「♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪」

素直な声……………俺にそんな言葉をかけてくれた初めての人は虎峰だったな。『良い友人になれそう。』って言ってくれたっけな。マジで嬉しかったなああれは。

地図があつたわけじゃないが、夢の在処つてのは間違いない界龍だな。今の俺にとっての家であり、家族がいる場所だ。

八幡「♪♪♪♪」

雲間は俺の心に残ってた闇で、光は文字通りだな。界龍に来てからはその闇はもう無くなったからな。いや、界龍もそうだが、俺の闇を祓ってくれたのは、他にいたな。

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪♪」

俺にとっての澄み渡る世界、まあ言うまでもなく六花だな。眩しい、というよりも輝いているだな。

俺の出せる全ての力を出して暁彗と戦ったな。それがあある意味、俺が飛んだ瞬間だな。あの戦いが無けりや、今の俺もいないしな。

比企谷母「……………分かっちゃうものなんだね。あんたが受けた痛みつてのが伝わってくるよ。腐っても親子だって思うよ。」

比企谷母（八幡……あんたこの曲に想いを乗せてるつもりだろうけど、私にはそれが直に伝わってくるよ。こんなに痛いんだね、あんたの受けた痛みは。）

観客側を一周して俺はステージに戻った。もう影を使う事はないな。

八幡「♪♪♪♪」

俺には新しいものしかなかったからな。そういう意味では無くすものは無いかもな。

無垢な笑顔……シルヴィだ。俺の闇を祓ってくれた人だ。

八幡「♪♪♪♪」

俺とシルヴィの物語は始まったばかりだ。まだまだ作っていく方だ。幼き日、出会ったばかりの頃だな。そこから思い出を繋ぎ合わせたら色んな事があったのが分かる。

俺たちで描いた軌跡か……どんな感じなんだろうな。

八幡「♪♪♪♪♪」

八幡「♪♪♪♪♪」

ここで隠してた感情。それはシルヴィへの想いだな。まだ気づいてはいなかったが、気になってはいたからな。そこから《王竜星武祭》で気づいた。あの感情は俺にとって確かなものだった。

ほんの少しどころか、何処までも強くなってやるよ。

雲が何十層あろうと、青空が見えるまで何処までも飛んでやる。

シルヴィと俺の未来の為に。

俺が歌を歌い終わり、BGMだけになる。だが、観客からは静けさが続いていた。

そして、完全にBGMの音が消えた。

ワアアアアアア
!!!!

観客からは今までの歓声が可愛く思える程の大歓声が俺を襲った。

ただ良い曲だったからか、はたまた感化されたのかは不明だが、それでも今までで一番の大歓声だった。

ライブ!! ⑤

シルヴィア side

八幡くんの歌で皆が大歓声を上げてる……すごく嬉しい。

八幡くんの過去をモチーフに選んだ曲だから少し複雑だけど、嬉しいことには変わらない。

シルヴィア「……凄かったよ、八幡くん。最後を飾るに相応しい曲だね。」

八幡「俺の曲ではだろ？ 本当の最後はシルヴィなんだからな？」

シルヴィア「分かてるよー！ じゃあ、八幡くんがとても良い曲を歌って聴かせてくれたから、私もそれと同じくらいの歌を披露しなきゃね！」

シルヴィア「それでは、今ライブ最後の曲です！ 私の隣は貴方^{貴方}だけ。そして貴方を絶対に離さない。裏切らない。これからもずっと好きでい続けて……愛し続けます。

『私の幸せ』

ギターの静かなBGMが流れ、会場を静寂が包んでいる。BGMが流れているから、観客もペンライトを振っているけど、動きがまだバラバラだった。

でもそんな事は関係ない。私が作った曲、私が八幡^{貴方}くんの為だけに作った曲を初披露します！

シルヴィア「朝に目覚めたら、君を見ていたの♪♪♪」

シルヴィア「ずっと目を合わせてたね♪♪♪」

シルヴィア「君が抱き締めた瞬間、満たされた♪♪♪」

シルヴィア「君といれるだけで私は幸せよ、Thank You♪

♪♪」

観客 男1 「なあ、この曲ってやつぱり……」

観客 男2 「ああ、絶対比企谷八幡の為に歌ってるよな。」

観客 男3 「1パートだけですげえな。もう愛が伝わってくる。」

観客 男2 「重たいなんて感じないし、かと言って粘りがあるわけでもない。何だろうな、深くて濃密っていうのか?」

観客 男3 「ああ、そんな感じだな。」

観客 男1 「愛が深くて濃密か……それでいて純粹だから……最高だな。」

観客の殆どが八幡くんの為に作った曲だって気付いてるよね。悪い気はするけど、私はどうしてもこの曲を八幡くんに贈りたかった。どうしても。

シルヴィア 「君とならいいける、たとえ過酷でも♪♪♪♪」

シルヴィア 「君と一緒になら、きっと大丈夫だから♪♪♪♪」

シルヴィア 「君だけが良いの、君以外は嫌なの♪♪♪♪」

シルヴィア 「私が選ぶのは、君しかないから♪♪♪♪」

八幡くんを見たら、目を瞑りながら聴いていた。音を身体で感じるのかな? だとしたら嬉しいな。

シルヴィア 「昼に出かけたら、手を繋いだよね♪♪♪」

シルヴィア 「当たり前だけど、嬉しい♪♪♪」

シルヴィア 「君がくれた温もりまだ残っているよ♪♪♪」

シルヴィア 「この手の温もりは、私だけの秘密だから♪♪♪」

観客の皆はペンライトの色をピンクにしていた。自意識過剰かもしれないけど、私の気持ちを汲んでくれたのかな?

ペトラ「へえ……自分でも修正していたのね。しかも前よりかなり良いじゃない。」

音楽担当「マ、マネージャー!?この曲私知らないんですけど!」

ペトラ「当たり前じゃない。あの子が個人で作った曲なんだもの。」
音楽担当「こ、個人ですか!」

ペトラ「かなりの出来だと思うわよ。私がそう感じているんだもの。」

シルヴィア「夜に寄り添ったら、肩合わせてたね♪♪♪♪」

シルヴィア「眠る時間には、抱き締め合っていたよね♪♪♪♪」

シルヴィア「そして朝になり、君の横顔を見る♪♪♪♪」

シルヴィア「この繰り返しだが、堪らなく好きなの♪♪♪♪」

家での過ごし方を、一部とはいえ公開してしまったのに、特に恥ずかしいなんて思いはなかった。

それは八幡くんも同じだった。目を閉じているだけで何もしていなかった。

シルヴィア「君とならいいける、負けそうになってたら♪♪♪♪」

シルヴィア「声が聞こえたよ、『頑張ってくれ』と♪♪♪♪」

シルヴィア「たとえ苦しくても、痛さで辛くても♪♪♪♪」

シルヴィア「君からの声で、何度でも立ち上がる♪♪♪♪」

シルヴィア「そしてその夜、夢が実りました♪♪♪♪」

シルヴィア「私の願いが、叶った瞬間です♪♪♪♪」

シルヴィア「目を閉じて待てば、唇の感触♪♪♪♪」

シルヴィア「そのひと時が、私の幸せ♪♪♪♪」

シルヴィア「君と一緒になら、何処へでも行くよ♪♪♪♪」

ギターのBGMがなくなって曲が終了した。観客からは歓声ではなく拍手だった。

『シルヴィー!!』

『凄く良い歌をありがとう!!』

『幸せになってね!!』

『幸せにしろよ比企谷!!』

沢山の人からエールを貰った。しかも八幡くんの事とかも言ってきた。でも、悪い気は全くしなかった。

八幡「……………すげえ良い曲だった。シルヴィの愛が直に伝わってきた。」

シルヴィア「うん、ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいよ。」
八幡「こんなに想われているのかって思うと、俺もシルヴィをしっかりと幸せにしてやらねえとって思っちゃまうな。」

シルヴィア「や、やめてよライブの最中に〜!」

もう!嬉しいから許すけど!

シルヴィア「はい、それじゃあ本日のライブはこれにて終了です!皆、本当にありがとう!!飲み物とかはお持ち帰りで処分してね!握手会に参加する人は、5分後に入り口付近のスタッフさんの所に並んでね!グッズの販売もまだしてる筈だから、よかったら記念に何か買って行ってね!じゃあ改めて、今日のライブ、来てくれて本当にありがとう!!」

ワアアアアア!!!

こうして私たちの2回目のライブも大成功で終わることが出来た。

握手会と再会

八幡 side

ライブは大成功を収め、裏の方に戻ると、スタッフは拍手で出迎えてくれた。2回目のライブだが、少し歌い過ぎたため、少しだけ声がかれている。まあこのくらいなら水分を摂ればすぐに治るだろう。

シルヴィア「えへへ♪やったね八幡くん！」ギョツ！

八幡「そうだな。最初から最後まで良いライブに出来たな。」

シルヴィア「うんっ♪」

シルヴィアはそのまま俺の腕に抱き着き、嬉しそうに微笑みかけてきた。……やっぱ可愛い。いや、綺麗か？どっちもだな。

八幡「さて、少し休憩……って感じでもないな。握手会5分後だしな。」

シルヴィア「あはは……少し窮屈すぎるスケジュールになっちゃったね。」

ペトラ「それはごめんなさいね。こんな時間になっちゃって。」

愚痴ってたわけではないが、いつの間にかペトラさんが来ていた。

八幡「ああいえ、別に嫌で言ったわけではないので。」

ペトラ「それでもよ。貴方たちに相談もしないで決めてしまったからこちらの落ち度よ。」

シルヴィア「でも仕方ないですよ。9000人もいるんですから。早めにしてあげないと観客たちが可哀想です。握手会ではそれ以上の人数が来るかもしれないですから。」

ペトラ「そう言ってくれると救われるわ。疲れが溜まっているで

しようけど、後数時間頑張って頂戴。」

2人「はい。(はいー!)」

後、その前に水分補給をさせて下さい。

――5分後――

スタッフ「それではこれより、握手会を行います!尚、今回の握手会についてはサイン等は出来ませんのでご了承下さい。では、前の方からどうぞ。複数人の場合は3名までとします。」

観客 男1「うおおー!本物のシルヴィアと比企谷八幡だ!しかもこんなに間近にっ!!」

観客 男2「いつもライブ見てました!今日は生で聴けて本当に良かったっす!」

シルヴィア「あはは!私も直接聴いてもらえて良かったよ。」

観客 男3「俺、この前の《鳳凰星武祭》見てからずっとファンでした!」

八幡「見ててくれたのか、ありがとな。」

観客 男2「今日のライブ最高でした!またこの近くでやってくれたら絶対見に行くっす!」

シルヴィア「うん!その時は絶対予約してねー!」

八幡「その時いるかどうかはまだ分からんが、いたらよろしくな。」

観客 女1「あぁーまさか本物とこんな近くに……………私どうしよう……………」

観客 女2「握手するしかないでしょうが……………あんたバカ?」

観客 女3「いやいや、発狂するのも分かるよ。あの2人がこんな近くにいるんだもの。」

シルヴィア「そ、そんなに驚く事なのかな?」

観客 女1「何を言うんですか！それは驚きますよ！家の中に自分の1番好きな有名人がお邪魔しているくらい驚きますよ！」

………それ、よく分からのだが。普通に考えて不法侵入じゃね？

観客女3「シルヴィアさん引かせてどうすんのさ。すみません。」

シルヴィア「ううん、気にしてないよ。緊張してるみたいだけど、大丈夫だよ？」

八幡「手を差し出して握るだけだから簡単だぞ？」

まあ、目の前にいるのがシルヴィだからな。こうもなるか。

八幡ファン1「キャアー比企谷様!!やつと会えました！シルヴィアさんも会えて嬉しいですよ！」

八幡「ひ、比企谷様？」

シルヴィア「今日は来てくれてありがとう！」

八幡ファン1「比企谷様！よろしければこれにサインしてくれませんか!?ああ、勿論シルヴィアさんも出来れば！」

シルヴィア「サインはダメなんだけど……まあ、いいか。」

八幡「……というか何で様付けなんです？」

八幡ファン「1年前のライブから始まって、《鳳凰星武祭》そして今日のライブでも堂々とした風格に心打たれまして！後、ファンクラブの皆は必ず様付けしてるんです！」

八幡「は、はあ……ファンクラブってあるんですね？」

八幡ファン1「はい！全世界にリンクしてまして、今では総計500000人います！」

シルヴィア「500000人!?そんなに!？」

八幡ファン「比企谷様の歌や戦闘に魅入られた人は必ず入っている会なんです！今日のライブ、最高でした！シルヴィアさん、比企谷様！また宜しくお願いしまーす！」

シルヴィア「……八幡くん、全世界に君のファンが500000人だつて。」

八幡「いつの間にそんな会作つてたんだ？」

その後も色々な客が来て、サインやら写真やらを要求された。サインなら良いが、俺は写真はあまり好きじゃないから、写真は断った。まあサインも極力は断ったけどな。本来はダメだし。そして……

姉「ほら、勇気出して言ってみなよ。」

妹「あうう……／＼／＼」

出た！あの小動物を思わせるような可愛い妹ちゃん！

シルヴィア「ああ、八幡くんにドッキリを仕掛けられた子だったね。ゴメンね、驚かせちゃつて。」

姉「ああいえとんでもないです。この子、比企谷さんの大ファンで。」

妹「あ、あの……」

八幡「はい？」

妹「サ、サイン、お願い、出来ませんか？」

この子にはドッキリしたしな。別に良いよな。

八幡「良いですよ。どちらにすればいいですか？」

妹「じ、じゃあこの色紙をお願いします。」

八幡「分かりました。」スラスラ

シルヴィア「妹さん、いつからファンなの？」

姉「《鳳凰星武祭》を中継で見てから大ファンになってしまいました。いつも端末で比企谷さんの戦闘シーンとか見てるんですよ。」

妹「お、お姉ちゃん！恥ずかしいからやめてよ！」

姉「ゴメンゴメン！」

妹「あ、ありがとうございました!!」

姉「これから頑張ってください！」

握手をした後に、あの姉妹は去って行った。仲の良い姉妹だったな。

それから握手を求める人たちがたくさん来ていた。ライブ見れたのは9000人だけど、握手しに来た人、絶対10000人は確実に超えてるな。

お客の皆さんと握手戦闘をしてから2時間くらい経った。そしてようやくだ。

スタッフ『次で最後のお客様です！』

シルヴィア「ふう、やっと最後だねー。」

八幡「ああ、ようやく終われるな。」

そして最後に幕を上げて来たのは……

めぐり「……………1年ぶりだね、比企谷くん。」

城廻先輩だった。

八幡「……………お久しぶりです。」

めぐり「うん……………久しぶりだね。この前会った時は正体を隠してたんだね?」

八幡「悪いとは思いましたよ。ですが、そうせざるを得ない状況にあつたので。」

めぐり「ううん、いいよ。気にしてないから。」

八幡「……………シルヴィ、スタッフさんに言つといてくれ。最後のお客さんはサービスしたいから少し長引くって。」

シルヴィア「……………うん、分かった。それと八幡くん、私も聞くからね。」

八幡「……………分かった。」

そう言ってからシルヴィは外にいるスタッフさんにその事を言いに行った。

めぐり「……………君とこうして話すのも1年ぶりなのかな。あの時は奉仕部の2人もいたよね。」

八幡「すみませんが、その事は思い出したくないので話さないでください。俺にとって奉仕部あの場所に居たこと自体が自分の最大のミスですの。

めぐり「……………聞いちゃいけないと思ってるけど、あの2人、六花に行つたみたいなんだけど、もう会えた?」

八幡「ええ、会いましたよ。醜い姿になってましたね。」

めぐり「……………そっか。」

シルヴィア「八幡くん、伝えておいたよ。」

八幡「すまないな。それで、城廻先輩。何を話したい、または何を聞きたいんです?」

城廻先輩は黙ったまんまだった。悲しげな表情を隠す事をせずに俯いていた。

めぐり「まずはこの言葉からいいかな。あの時、君を救えなくてごめんなさい。」

城廻先輩は頭を深く下げた。

めぐり「私、君を助けてあげられなかった。普通に考えれば、あんな事好きでするはずがないのに……勝手に君を悪者にして、そのままにして……ごめんなさい。」

八幡「……別に気にしてませんよ。むしろ、今となつてはそれに感謝ですね。」

めぐり「え？」

八幡「その最悪な出来事がなければ、俺は六花にも行けてませんし、シルヴィとも出会う事はありませんでしたから。」

めぐり「……許してくれるの？」

八幡「俺は別に恨んでなんかいませんよ。逆恨みはされてるみたいですけど。」

まあ、今はそんな事どうでもいいか。

八幡「まあ、今のはどうでもいいですね。続きをどうぞ。」

めぐり「後は……文化祭を成功させてくれてありがとう。多分、君があの時あんな事をしなかったら、文化祭は最低な形になってたと思う。」

八幡「そもそも無理があり過ぎたんですよ。経験も何もない、学校に来てまだ半年の1年が実行委員長をするなんて。」

めぐり「うん、そうだね。本来なら私たち2年生がしなきゃいけない役割だったのに、1年生に押し付けちゃったんだよね。しかも、そ

の責任まで。」

城廻先輩は本当に申し訳なきような顔をしながら俺の方を見ながらそう答えた。

シルヴィア「……止めようとは、思わなかったんですか？」

めぐり「……順調に進んでたから問題無いと思ってたんだ。でも、その慢心がいけなかったんだろうね。」

八幡「まあそれも過ぎた事なんでもいいですよ。今年は上手くいったんですか？」

めぐり「うん、おかげさまでね。去年の事を思うと、皆凄く張り切ってたよ。今の1年生は知らないけどね。」

当然だ、知ってたら好き好んで文実なんてする奴いねえわな。

めぐり「私から言いたい事はこれくらい。多過ぎても時間取らせちゃうだけだから。質問、してもいいのかな？」

八幡「ええ、貴女がしたいのなら。」

めぐり「じゃあ……君は今、幸せ？」

八幡「はい。これを幸せと呼べないのなら、どれを幸せと言っていいのか分からないくらいです。」

めぐり「……そっちは楽しい？」

八幡「総武と比べるのも烏滸がましいくらいですね。全く退屈しませんよ。」

めぐり「……友達はある？」

八幡「沢山出来ましたよ。」

めぐり「……そっか、良かったよ。君が充実してくれていて。」

めぐり「最後の質問、いいかな？」

八幡「いいですよ。」

めぐり「……わたしのこと、嫌いかな？」

……質問の意味が分からんな。

八幡「どういう意味です？」

めぐり「そのままの意味だよ。」

八幡「……嫌いじゃないですけど。」

嫌いなら、此処でこんな事させてないからな。

めぐり「……うん、ありがとう。もうそれだけ聞ければ充分だよ。」

めぐり「話を聞けて良かったよ。今日のライブも凄く良かったよ。じゃあ比企谷くん、さようなら。シルヴィアさんも。」

シルヴィア「は、はい……」

八幡「城廻先輩。」

めぐり「つ……なにかな？」

八幡「確かに俺は総武高は嫌いですが、貴方を嫌ってはいませんか
らね。」

めぐり「え？」

八幡「人にもよりますけど、俺は貴女からあの時以降から1度もその類の言葉を言われた事はありません。」

八幡「それだけならまだ信用は出来ませんが、貴女はこうして俺に謝ってくれた。これは貴女の意味なんですよね？」

めぐり「……うん。」

八幡「……なら俺は貴女を信じる事にします。これで貴女の心の鬱憤が消えてくれたら幸いです。」

めぐり「……私を、信じてくれるの？あんな酷い事をした私を？」

八幡「ええ。」

めぐり「会う事もないかもしれないのに？」

八幡「そんな問題じゃないですよ。」

俺が信じるか信じないかで決めるだけだからな。

めぐり「……グスツ……ありがとう……ありがとう、比企谷くんっ
!!」ポロポロ

城廻先輩は泣いてしまったが、俺から言えるのはこの言葉だけだった。

八幡「はい、どういたしまして。」

※解放と微睡みの世界へ

八幡 side

めぐり「ゴメンね、つい嬉しくて。」

シルヴィア「いえ、気にしてないので。」

八幡「お気になさらず。」

めぐり「でも本当に嬉しいよ。比企谷くんが私の事を信じてくれるって言った瞬間が。なんか君から信頼されるのは一味も二味も違うなあ。」

別に普通だと思っただがな。

めぐり「ねえシルヴィアさん、よければ教えてくれないかな？六花の比企谷くんってどんな感じなの？」

シルヴィア「……普段は優しくてカッコよくて、料理上手で気遣いも凄く上手な人で、私の一番愛している人です。」

シルヴィ「……城廻先輩はそこまで愛を語れなんて質問はしてないぞ？」

めぐり「……そっか、貴女はちゃんと比企谷くんを見ててくれたんだね。流石比企谷くんの彼女だね。」

シルヴィア「私、彼の過去を聞いた時は凄く辛かったです。こんな優しい人が何でこんな目に遭わなくちゃいけないんだって思いました。その時からですかね、本格的に恋をしたのは。」

めぐり「そうなんだ……シルヴィアさん。」

シルヴィア「はい？」

めぐり「私がこんな事言うのはおかしいけど、比企谷くんの事、ちゃんと見ててね。彼、人の見てないところで一生懸命する子だから。」

シルヴィア「大丈夫です。私たちの家では隠し事なんてなしにしますから。」

めぐり「家!?もしかして同棲してるの!？」

シルヴィア「は、はい／＼／」

と、取りつく島がねえ。ガールズトークに首突っ込む程、俺は勇気無いからな。終わるまで待ってるか。

――10分後――

めぐり「あつ、もうこんな時間だったんだ。ゴメンね、2人とも。」
八幡「大丈夫です。」

俺は特に何も話してはいなかったけど。

シルヴィア「大丈夫ですよ。話してて楽しかったです。」

めぐり「そう言ってくれると嬉しいよ。じゃあ比企谷くん、シルヴィアさん。今日のライブ、お疲れ様。すごく良かったよ。」

シルヴィア「また機会がありましたら、見にきてくださいね。」

八幡「今日はありがとうございました。」

めぐり「ううん、それはこちらの台詞だよ。本当にありがとう。」

そして城廻先輩は行ってしまった。

シルヴィア「…………あの人、凄く軽やかな足取りだったね。態度ではあんな感じだったけど、余程嬉しかったんだと思うよ。」

八幡「……そんなに気にしてたって事なのかもな。」

シルヴィア「でも、やっぱり八幡くんも優しいね。普通なら総武高校……だったかな?その学校の生徒には会いたくならないでしょ?」

八幡「まあ好んで会いたくはないな。総武高校にいた頃の知り合いで会っても大丈夫っていったら、一握りしかないしな。」

城廻先輩に戸塚、川崎、海老名さん、戸部、材木座に平塚先生くらいだな。

シルヴィア「八幡くんは凄いのよ。自分からトラウマに立ち向かってるんだから。」

八幡「俺一人じゃ無理かもしれないけどな。お前が隣に居てくれるのも、理由に入ってる。」

シルヴィア「うふふ♪嬉しいな。」

シルヴィアが隣に居てくれるから平気っていうのは嘘じゃない。何度も救われた。

シルヴィア「ねねっ、そろそろ戻る？多分ペトラさんからは片付けが終わるまで休んでて良いって言われるだろうし。」

八幡「ああ、そうだな。」

シルヴィアの言う通り、ペトラさんからは休んで良いと言われたので、俺たちは控え室で少しの間、微睡みの世界へと旅立った。

手を繋ぎながら。

微睡みの中で

八幡 side

八幡「……………またここか。それじゃあ奴らもいるんだよね？」

玄武『呼ばれて飛び出たよお。こんにちはあくマンちゃん。』

八幡「…………お前の声聞いていると、夢の中でも眠れそうな気がする。」

玄武『ちよっとお。それって僕の喋り方がトロいって言いたいのお？』

八幡「それ以外にあると思うか？お前の声聞いていると、本当に眠くなるんだよ。」

朱雀『まあそう言うなよ旦那。これが玄ちゃんの持ち味でもあるんだからよ。』

八幡「朱雀…………」

何？今度は一体ずつじやないのか？

朱雀『玄ちゃんはこの喋り方だからこそ良いんじゃないか！』

玄武『おおく流石ホウ兄^{にい}だねえ。分かってるねえ。』

やっぱアダ名あったんだな……………そして予想通りのネーミングセンスだな。

索冥『お久しぶりで御座います、八幡様。本日のライブ、お疲れ様でした。とても素晴らしい歌声でした。』

八幡「あ、ああ。」

玄武『うんうん、確かに良いライブだったよねえ。マンちゃん良い声してたよお。』

朱雀『さすが旦那って感じだな！俺たちを背負ってるだけはあるぜ！』

八幡「やめろ。というか、俺をここに呼んだのは誰なんだ？」

用もないのに呼ぶ奴がいるとも思えないからな。俺の守護霊たちはそんな奴らだ。

朱雀『ああ、昨日話した霊力の事でだ。俺たちでも探してみたんだが、中々見つかんなくてよ。』

八幡「別にそれならそれでいいんだが……」

朱雀『だから今日の深夜に八咫さんが探してくれるって言ってたからよ、今それ待ちなんだわ。この時間帰ってくるって言ってたんだよ。』

八幡「それで俺を呼んだのか。」

索冥『突然の呼び出し申し訳御座いません。ですが私も感じたこの霊力、ただものでは御座いません故、このような手段になってしまった。四神と同じ神気ともなれば無視は出来なかったのです。』

八幡「まあ俺は別に構わんが。」

だが、俺も少し気になってきたな。四神のこいつらと同じレベルだからな。

八咫鳥『……只今参上つかまつった。』

朱雀『おっ！噂をすればだせ！』

玄武『おかえりい。』

索冥『八咫鳥様、お疲れ様です。』

八幡「よお、八咫鳥。」

八咫鳥『主人っ！来ておられたのか。失礼した。』

最初会った時にも思ったが、やっぱり八咫鳥って律儀なんだよな。

八幡「気にするな。事情はこいつらから今聞いたところだ。それでどうだった？」

八咫鳥『うむ……拙僧がこの地区一帯の鳥共の目を借りて調べさせたところ、東京都港区に感じた。それもそこら一帯が守護されているように感じた。』

八幡「東京都港区だな。後で調べてみる。」

八咫鳥『それからもう1つ。鳥共の中で感じたのだが、あのオーラは限りなくお主ら四神のオーラと酷似している。間違いなくお主らと同じ霊だと言える。』

索冥『流石は天地人の全てを見透かす目と呼ばれているだけはありませんね。御見逸れしました。』

八幡「……なあ朱雀。お前この前、俺の中に7体いるって言ってたが、それとは別物なのか？」

朱雀『いや、同一のモンだと思う。ハッキリ言えば残りの3体も俺にはよく分からない状態だったからな。』

そんなんでよく俺に言えたな。俺の中に合計で7体の霊がいるなんて。

索冥『ですが八幡様。朱雀の言っている事は事実です。私も四神の長、此処にいる朱雀と玄武は勿論の事、薄々ではありますが、残りの2人の霊力も感じております。八咫鳥様の霊力も出会って覚えましたが、未だ1つの霊体だけは分からないままなのです。』

1つだけ？

八幡「八咫鳥、それはお前でも分からないのか？」

八咫鳥『拙僧の目は人と天地を見通す目。霊体までは見れぬ。今回のは、その地域全体が大きな霊力で護られていたから分かっただけに過ぎぬ。だが拙僧、そんな霊力は感じ取った事は無かったぞ。索冥殿、それは誠か？』

索冥『事実です。ですが、あまりにも強大な力だったので探る事は不可能でした。油断していたわけではありませんが、私が気圧される

とは思つてもみませんでした。』

朱雀『おいおい嘘だろ？姉貴が圧された？そんな奴がいるのかよ……』

玄武『ほええ〜メイちゃんが圧されたのお？その子って凄いねえ。僕たちよりも強いメイちゃんに押し勝つなんて。』

……四神の長である麒麟の索冥でも圧される程の奴か。そんな奴使役出来んのか？

まあでも、それはまだ先の話だろうな。

八幡「今はまだいい。八咫鳥、今日はすまなかつたな。ゆっくり休んでくれ。」

八咫鳥『拙僧の目が必要になつたらいつでも言つてくれ。』

八幡「んじゃ、そろそろ帰るわ。索冥、頼んでもいいか？」

索冥『お任せ下さい。後、八幡さんは今、ホテルのお部屋にいるようです。どうやら話しすぎてしまったようですね。』

まじか……スタッフの皆さんごめんなさい。

索冥『お隣にシルヴィア様もぐつすり眠つておられます。では八幡様、またいつか。』

朱雀『また直接話そうな！』

玄武『ばあいばあ〜い！』

八咫鳥『主人もゆつくり休むと良い。』

そして俺は元の世界に戻って行った。

寝顔と本当の睡眠

八幡 s i d e

八幡「……………」

皆さんこんばんは、比企谷八幡です。いきなりだが誰に向かって言ってるのかって？そんなの、画面の向こうの人に決まってるだろう？まあ、メタい話はこのくらいにして。

俺はついさっきまで、自身の中にいる守護霊たちと話をしていた、八咫鳥の言っていた東京都の港区について調べようとしていたところだった。

そう、だった。今はそれが出来ない状態なのだ。理由は分かるだろう？

シルヴィア「♪……………」

そう、このお姫様が気持ち良さそうに眠っているからだ。俺の腕にしがみつきながら。

幾ら俺でもこんなに気持ち良さそうに寝ている彼女を起こす真似は出来ない。だって見ていたって気持ちもあるから。

シルヴィア「♪八幡くん……………」

俺もいるのか…………どんな夢見てんのやら…………この声からして良い夢なのは確かだろうな。

まあ、シルヴィが起きるまで、この寝顔を満喫するか。

——30分後——

シルヴィア「すう……すう……」

八幡「……………」ナデナデ

これ、逆効果か？撫でてたかもっと夢の中に行っちゃおうか？携帯取りに行こうにも、机の上にあるから取れねえんだよな。調べ物とシルヴィの寝顔を撮る事が出来ねえ。

シルヴィア「んんうゝ……」

……………ねえ嘘でしょ？もっと絡みついてきたぞ。腕だけが今度は足もかよ。嫌ではないけど、今俺したい事があるんだけど……

シルヴィア「♪ゝ」

人の気も知らずにこんな顔しやがって……可愛いから許すけど。

八幡「おーいシルヴィ、今どんな感じだ？嬉しいか？」

シルヴィア「……………んゝ♪ゝ」

はい、幸せ頂きましたー。

――さらに30分後――

シルヴィア「♪ゝ」

八幡「そんなに疲れたのか？疲れたから夢の中では嬉しそうなのか？」

もう全く起きないから、起きないシルヴィの寝言で会話してる俺。めちやくちや変な奴だな。

八幡「シルヴィ、頼むからもうそろそろ起きてくれないかー？もう7時だぞー？」

シルヴィア「……………」

八幡「……………もう少し寝てても良いぞ。」

シルヴィア「♪」

マジですか……………この子凄くね？寝てる上に夢も見てるのに、現実世界の俺の言葉を理解してる。

シルヴィア「えへへえ……………八幡くん。」

……………調べんの明日にしようかな。

八幡 side out

————2時間後————

シルヴィア side

シルヴィア「……………んゝ、ん？んんうゝ……………あれ？」

あれ？今何時かな？外も暗いし、寝過ごしたのかな？

八幡「ZZZ……………」

シルヴィア「あれ？寝てる？今時間……………あつ。」

私は今気づいた。八幡くんの腕と足に私の両手足を絡ませているという事を。

シルヴィア「……………明日まで寝よつかな。」

シルヴィア「でも……………八幡くんの寝顔見るの久しぶりだなあ。」

いつも私より早く起きるんだもん。だから新鮮だなあ。

それに…………

シルヴィア「えへへ♪ギュツて抱き締めてくれるし、これなら明日までさつきよりも良い夢が見られそうだなあ。」

でも今起きたばかりだから、あまり眠くはないかなあ。というよりも冴えてる方。

シルヴィア「うーん、どうしよう……」

八幡「……………んっ」

シルヴィア「？」

八幡「んん………おっ、シルヴィ。起きてたのか。」

シルヴィア「起きてたのかって、私の方が先に起きたんだよ。」

八幡「俺はその前から起きてた。気持ち良さそうな寝顔だったぞ。」

ふ、ふん！そんなこと言っても信じないんだから！

シルヴィア「じゃあ、私がどんなことしたのかな？」

八幡「俺が起きた時には、腕に抱きついてたな。それから30分くらい寝顔見てて、ちよつとしたら足を絡ませてきたな。」

シルヴィア「ほ、本当にそんな事したの？」

八幡「したぞ？時間も7時頃だったな。そういや、今って何時だ？」
シルヴィア「えーと……………9時みたい。」

八幡「あれから2時間も寝てたのか……………それで、どうする？腹が減ってるならコンビニで何か買ってくるが……………俺は特に減ってないから平気だが。」

シルヴィア「私も平気。何でかな？」

お昼もそんなに食べてないから減ってるのが普通なのに、どうして何だろうね？不思議。

八幡「んじゃあ風呂……余計に目が冴えるな。この状態では入りたくないな。」

シルヴィア「私もかな。」

八幡「んじゃ、眠れるまでこのまま……っっていう事になるが、いいか？」

シルヴィア「私は大歓迎だよ♪」

八幡くんといられるのは、本当に幸せだからね。

それから私たちは眠るまで他愛の無い話や目を瞑ったりしてみたんだけど、正直に言うと、眠れる気配がない。

シルヴィア「なんか、全然眠れる気配がないね。」

八幡「起きたばかりというのもあるかもしれないが、1番は寝たらもったいないってのが理由かもな。」

シルヴィア「八幡くんもそう思った？私も。普通では中々無いからね。私たちいつも決まった時間に寝てるし。」

八幡「そうだな。」

規則正しい生活をするのは、私たち2人の意見からなつた事だからそれに関しては全く異論はない。こんな時間に起きているから、少しテンションが上がってるのかな？

八幡「……なあ、もしかしたら何だが、もっと近くで抱き合ったら眠れるとかないか？」

シルヴィア「そ、それってお互いの体温とか心音を直に感じながらって事？」

八幡「まあ、そんな感じだ。」

よ、予想外の提案だなあ／＼でも、可能性はある……かも？

シルヴィア「じ、じゃあやってみる？本当に抱き合うんだもんね？」
八幡「あ、ああ。」

シルヴィア「そ、そうだね。じゃあ、お邪魔します／＼」

そして私は八幡くんの方に近寄って、八幡くんの腕に包まれた。

すると、不思議な事に突然睡魔が襲って来た。それは八幡くんもなのだろうか、少しだけ眠そうだった。

シルヴィア「八幡くん……何でだろうね？……突然……」

八幡「あ、ああ。でもすげえ安心するな。朝までこうしてたいな。」

シルヴィア「じゃあこうしてよっか……お休みだね、八幡くん。」

八幡「ああ……お休み。」

そして私は、また夢の世界へと旅立った。

デートに向けて！

シルヴィア side

昨日の夜、八幡くんと抱き合って寝たおかげで、今の私はすこぶる寝起きが良いです！そして気分も最高潮！その理由はね、今日から明日まで八幡くんとデート出来るからだよっ♪

ペトラさんは2日取つてあるって言ってたから、八幡くんと色んなところを見て回れるよね！

そして今、私は何をやっているのかっていうと……

シルヴィア「♪♪♪」

自分に気合いを入れるために、シャワーに入った後にドライヤーで髪を乾かしている所だよ。昨日はそのまま寝ちゃったからね。

それに、少しでも八幡くんに褒められたいからね！服の方も私服の中で一番と二番に気に入ってるのを持ってきたしね♪

シャンプーやボディソープも家にあるのと同じ物をこっそり持ってきたんだ。

我ながら用意周到だと思った瞬間だよ。

そして現時刻はさつき確認したけど、6時なんだよ。八幡くんがこの時間まで起きないのは珍しいから今のうちに済ませておくんだ！私が上がる頃には起きてると思うけどね。

――30分後――

シルヴィア「……よし！朝ごはんも食べるからまだ化粧はしなくてもいいとして、こんな感じかな。うん、中々良いね。」

よし！それじゃそろそろ八幡くんにお披露目しよつと！

私は気分を高揚させながら、洗面所の扉を開けてベッドの方へと向かった。予想通り、八幡くんは起きていた。さて、八幡くんにお披露目タイムだねっ！

シルヴィア「おはよっ♪八幡くん！」

八幡「ああ、おはよ……………どうしたその格好？」

シルヴィア「どうかなこの服？今日と明日はデートだから気合入れてみたんだけど……………」

八幡「あ、ああ……………よく似合ってる。綺麗だ。」

シルヴィア「っ！／／／……………えへへ、ありがとう！／／／」

やった！朝から褒められちゃった！

私が着ている服装は、白いワンピースにピンクのカーディガンだよ。右の手首には八幡くんからもらったブレスレットをつけて、左手の薬指には、同様に八幡くんからもらった指輪をはめてます。これでは八幡くんのものだって分かるよね。

いつもつけてるヘッドホンは外してる代わりに、左の髪に赤のリボンをつけてるんだ。

八幡「朝から気合入ってるな。そんなに今日が楽しみだったのか？」

シルヴィア「当たり前だよ！やつと八幡ちゃんとデート出来るんだもん！」

八幡「フツ……………そうか。」

八幡くんは軽く笑ったけど、バカにしたような感じではなくて、嬉しそうな感じだった。

シルヴィア「八幡くんはどんな服装なの？少し気になるなあ。」

八幡「俺のは特に良いなんて言えないぞ？服自体あまり持っていないからな。」

シルヴィア「そうなんだ。じゃあさ、今日は私が八幡くんの服見繕ってあげるよ！八幡くんにピッタリの服を見つけて、しっかりコーデイナートしてあげるっ！」

八幡「ほう、それは楽しみだ。それにシルヴィのセンスなら、服が俺を着る事は無いだろうな。」

そんな事にはなりません！八幡くんはカッコいいんだから！

シルヴィア「それでさ、どんな服持ってきたの？」

八幡「1週間前に商業エリアで出かけた時の事覚えてるか？あの時の服だ。」

シルヴィア「ああ！八幡くんが変装で着てた服だよね！」

八幡「流石良い記憶力だな。その通りだ。」

忘れられるわけないよ。最初はあれだけ衝撃的だったんだから！あの変装はもう2度として欲しくないよ……

シルヴィア「それとも良い服装だと思うけどな。でも、八幡くんの他の私服ってそんなに見た事ないなあ。」

八幡「自分でも自覚あるからな。分かつてはいても買う機会がそんなにないからな。それに実際は制服で過ごす時間の方が多いからな。」

シルヴィア「まあ確かにね。八幡くんって休みの日も界龍に行ってる時あるからね。行ける暇も無かったよね。」

八幡「別に俺が居なくてもいいと思うんだが、何故か俺に来て欲しいって言うもんだから、いつの間にか習慣になっちまってな。今はシルヴィとの時間もあるから減らしたけどな。」

シルヴィア「私との時間かあ……うふふ♪分かっていても嬉しいなあ。」

私との時間が大切って言ってくれてるんだよね？私も君と過ごすごこの時間は大切だからね。

朝食と心の声

八幡 side

あれから2時間が経ち、俺とシルヴィは1階のビュッフェレストランに向かっている。現在8時、朝食をするのにはちょうどいい時間だった。

シルヴィア「今日は何があるかなあ？」

八幡「ビュッフェだから色んなのがあるだろうな。俺は少し食べようと思ってる。昨日の夜は食ってなかったからな。」

シルヴィア「そうだね。私も少し多めに食べようかなあ。」

今はエレベーターにいるのだが、そんな時でもシルヴィは俺の腕に抱きついてる。だがそれが恥ずかしいとは思わない。もう慣れてるからだ。

慣れって恐ろしいよね。

シルヴィア「ねえ！八幡くんは今日の朝何が食べたい？」

八幡「……そうだな、洋風のものが良いな。例えばパンとかベーコンとか。飲み物はりんごジュースって気分だな。」

シルヴィア「朝からステーキなんて出るわけないしね。出たら出たで凄いいけど。」

そしたら朝のサービス凄過ぎだろ。

シルヴィア「私は和洋混合かな。焼き魚も食べたいし、パンも食べたいから。」

八幡「んじやあ、パンにご飯乗つけて食べたらどうだ？」

シルヴィア「炭水化物に炭水化物じゃん！それにご飯とパンって合う気がしないよ！」

八幡「おお、いいツツコミだ。」

シルヴィア「むうゝ、は・ち・ま・ん・くうーん？」プクゝ

おっ、膨れてるシルヴィも久々に見るな。ってそんな場合じゃないか。

八幡「悪かったよ。ついからかってみたくなっただけだ。」

シルヴィア「どうだかあゝ……」

八幡「ホントだホント。」

シルヴィア「……………ふふつ、分かってるよ。ジャパニーズジョークだよね？」

八幡「これをそう呼ぶかは分かんが、まあ冗談ではあるな。」

シルヴィア「うん、八幡くんらしい答えだね！」

八幡「どういうこっちゃ？」

俺がそう答えた時、ちょうど目的地の階層に着いた。

レストランの入り口まで来たが、中の様子はそれ程混んではいなかった。朝食を食べてる人、コーヒー片手に新聞読んでる人、デザート食べながら友達と話してる人、色んな人がいた。

シルヴィア「八幡くん、どこ座ろつか？」

八幡「じゃあちようど2人席のあそこでいいんじゃないか？他はどう見ても2人以上だからな。」

シルヴィア「流石八幡くんだね！よく見てるなあ。よし、じゃあそこにしよう！」

シルヴィが来た事により、宿泊の客は一気にこつちを見ていた。普段のシルヴィア・リユーネハイムとは違い、今日は完全オフの私服姿

での登場だから、余計に目を惹くのだろう。

そしてこの笑顔だ。人の目を惹くには充分すぎる程の華燐さと美貌だ。

シルヴィア「どうする？1人残って行った方がいいかな？」

八幡「その方が良いだろ。取られたら他に移るしかないからな。先に取ってきていいぞ。」

シルヴィア「じゃあお言葉に甘えて、お留守番よろしく♪」

シルヴィはトコトコと歩きながら、食べる物を取りに行った。

お客1「比企谷さん、おはようございます！」

お客2「おはようございます。」

八幡「ん？ああ、一昨日の人たちですね。おはようございます。」

お客1「これからお食事ですか？もし宜しければ、ご一緒しても……」

お客2「何言ってるのよ。先客がいるに決まってるでしょ？シルヴィアさんの事を比企谷さんが放って置くわけないでしょ？」

お客1「あつ、そうだった！すみません、今のは取り消しで！」

八幡「え、ええ。お2人も食事ですか？」

今は普通に話せるが、コミュニケーションはまだまだと言っていいからな。今のうちに伸ばしておくのもアリだろう。

お客1「はい。私たちも今来たところなんです。」

お客2「明後日には帰らないといけないのが憂鬱なんですけどね。」

八幡「俺たちは明日帰るんですよ。俺やシルヴィは問題ないんですが、残りの方々は仕事がありますからね。」

お客2「そうなんですか。」

お客1「じゃあ明日には日本から出て行かれるんですね？」

八幡「ええ、まあ。それよりも、ライブの方はどうでした？上手く

いったと思うんですが……」

お客1「私はもう大満足ですよ！生でシルヴィアさんや比企谷さんの声を聞けただけで満足です！」

お客2「私もチケットを買った甲斐がありました。凄く盛り上がりましたし、正直まだ余韻が残ってます。」

八幡「そうですか。それは何よりです。」

お客1「はいっ！……あつ、シルヴィアさんも戻ってきたので、私たちは行きますね。では！」

お客2「あつ、ちよつと！し、失礼します！」

シルヴィアが来るのが分かったら、足早に去って行った。俺たちの事を考えてか？

シルヴィア「お待たせ八幡くん。さっきの人たちは？」

八幡「一昨日会った人たちだ。ライブの感想とか色々言ってくれた。」

シルヴィア「そうだったんだ。まあ話は食べながらゆっくり聞くといいよ。八幡くん行ってきていいよ。今度は私が守っておくから！」

八幡「じゃ、頼んだぞ。」

俺が食べ物を取りに行ってる間、さっきまで静かにしていた連中が一気にシルヴィに押し寄せていった。

何だよ、全員シルヴィ狙いかよ。

はあ？明日時間ありませんかあ？残念、明日どころかこの先ずっと俺が先約ですうー！残念でしたあー！

これ、声に出して言ったら、すげえ腹立つだろうな。

そして俺が戻って来たのを察知したら、これまた足早に席へと戻る人、食堂から出る人などと2パターン綺麗に別れた。

八幡「…………邪魔したか？」

シルヴィア「そんな事ないよ。皆、八幡くんが怖いんじゃない？」

八幡「俺は番犬じゃないんだが？」

シルヴィア「八幡くんには2人しか来なかったもんね。」

八幡「ほはお前狙いの奴だつてのは普通に分かってたけどな。」

シルヴィア「そうなの？」

八幡「俺の目はそういうところも読めるからな。安心しろ、シルヴィのは読んだりしない。」

シルヴィア「じゃあ私が今何を思っているのか、心の中を読んでみてよ！今だけ許してあげるから！」

八幡「人の話聞いてた？」

シルヴィア「いいから！ね？今だけだから！」

八幡「はあ…………今だけだぞ。」

シルヴィア『世界で一番、貴方の事を愛しています。』

八幡「…………あの、これ口に出してもいいか？」

シルヴィア「そ、それはダメだよ！も、もしかして本当に読めてるの？」

八幡「ああ。」

シルヴィは耳打ちでなら言つていいと言ったので、俺はシルヴィに耳打ちで教えた。

そしたらシルヴィは顔を真っ赤にして『もう心の中は読ませないんだからね／／』と言つて少しだけ拗ねたような顔をしていた。

だがこの顔は、すごく嬉しいのを顔に出さないようにしているだけなのだ。

本当は凄く嬉しかったりする。

／
／
／
／
（
シルヴィア（八幡くんに愛してるって言ってもらえたくー！キヤー／

行き先

八幡 side

シルヴィア「おおー！ここがららばーとかあ！大きいねえ！」

午前10時半、俺たちは10時頃にホテルを出て、早速デート（シルヴィがそう言わないというさいから。）へと向かった。

大体行くところは決めてあるから、そんなに右往左往する事はないだろう。

八幡「六花には大型店舗じやなく専門店が多いからな。シルヴィにとってこういうのは新鮮か？」

シルヴィア「うん。私世界中でライブとかするけど、楽しむ時間ってそんなになかったから、街とかってあんまり回ってなかったんだよね。」

八幡「なら今回のライブ後でこんな事するのは珍しい方なのか？」
シルヴィア「というより滅多にないんだ。ツアーとかもあるからそんなにのんびりとか出来ないから。」

うん、要するに大変って事だ。

シルヴィア「それにしても、こんな朝からなのに人が多いね。何かあるの？」

八幡「何でだろうな？学生は秋休み入ってるからいるのは問題ないが、こんなに人が多いのは何でだ？」

シルヴィア「八幡くんでも分からない？」

八幡「知るわけないだろ？」

しかもそれに伴って、やたらと視線が集まる。そして立ち止まる人

も多い。そしてポケットやカバンから携帯取り出して写真を撮ろうとする。分かっている？それ盗撮だからね？許可取って。

シルヴィア「じゃあ行こっか！まずは服屋さんから行こ〜♪」

八幡「コーデイナー트는任せた。」

シルヴィア「お任せあれっ！」

――洋服店――

店員「いらっしやいま……へっ!!？」

ん？噛んだ？

シルヴィア「じゃあメンズコーナーに行って君を着せ替え人形にしなからコーデイナー트していくからね。」

八幡「……マネキンの気持ちがよく分かった瞬間だ。」

シルヴィア「八幡くんは今から私のマネキンだよっ！」

八幡「じゃあズボンとかもシルヴィが履かせてくれるのか？」

シルヴィア「あう／＼／………マネキンは取り消します／＼／」

冗談で言っただけが間に受けちゃったようだな。

八幡「冗談だから服選んで来い。俺に渡してくれれば着るから、その時に感想頼む。」

シルヴィア「う、うん／＼／」

さて、シルヴィはどんな服を持ってくるのかな？気長に待ちますか。

――10分後――

シルヴィア「お待たせ〜！まずはこれ着てみて！」
八幡「ああ。」

……俺にこの色って似合うか？

八幡「シルヴィ、一応着てみたがどうだ？」

シルヴィア「着替え終わった？おおく流石八幡くん、着こなしてるね〜！」

八幡「ホントかよ……」

俺が今着てるのは、ベージュのパーカーに少し濃い赤の長袖シャツに黒のズボン。首には十字のネックレスをつけてる。

シルヴィア「うんうん、八幡くんいつも黒っぽいのか着てないから良いよ！」

八幡「まあ黒は割と好きだからな。」

今着てるのも黒だし。

シルヴィア「じゃあこの服買おつか！八幡くんにも似合ってるし！でも、まだまだ探すからね〜？」

八幡「好きなだけ付き合ってやるよ。シルヴィのセンスに任せる。」

そして俺はシルヴィにお任せで洋服を選んでもらった。だが結局、買ったのは最初の一式だけだった。

シルヴィア「此処って本当に色んなものがあるね。見るのが楽しく

なってくるよ。」

八幡「そう言ってもらえると、来た甲斐があるな。シルヴィ、ららぽの他にはどこか行きたい場所はあるのか？」

シルヴィア「……………うん、あるんだけど……………きつと八幡くんは嫌だと思う。」

八幡「総武高校か？」

シルヴィア「やっぱり分かるんだね。ううん、嫌って言った時点で当然だね。」

八幡「俺は別に構わないぞ？」

シルヴィア「え？で、でも……」

八幡「俺はな、あの学校自体は憎んではない。生徒の奴らは憎んでこそいるが、感謝もしている。」

シルヴィア「……………え？どういう事？」

まあそうなるよな。当然だ。

八幡「シルヴィ、お前パラレルワールドって知ってるか？」

シルヴィア「聞いたことくらいは……」

八幡「簡単にいうと俺たちが今いる世界とは異なる世界だ。だが、日付や時間は同じだ。やってきた行動で変わったりする。迫られた選択によって世界は変わるからな。」

シルヴィア「……………要は違う世界って事だよな？」

八幡「そうだ。」

シルヴィア「でも、それが何？どうやってたら感謝なんて出来るの？」

八幡「俺は文化祭、修学旅行で散々な目に遭った。それはその後の学校生活でも同じだ。それは理解してるよな？」

シルヴィア「うん、実際に聞いたから。」

八幡「けど、俺がもしあの状態で星脈世代の力を暴走させていなかったら？もし展望台に行つてなかったら？どうなつてたと思う？」

シルヴィア「……………六花には来てない？」

八幡「まあ確実にその時期には行つてないだろうな。六花に行つて

ないって選択肢はないとは言切れないが、あの時の俺がそのまま学校に居られるはずがないからな。そのくらいの状態だ。」

八幡「まあただの自己満足かもしれないが、学校の俺を散々罵ってくれた奴には、俺を追い込んでくれてありがとうって感じた。そうでなきゃ俺は、界龍でこんな生活はできてねえし、シルヴィとも出会えてなかった。そう思うと、俺は奴らにも感謝出来るんだよ。」

皮肉にも聞こえるけどな。

シルヴィア「……………八幡くんはそんな考え方もできるんだね。凄いや。」

シルヴィア「普通の人だったら無理だよ。そんな考え方なんて出来ないよ。私も含めて。」

八幡「まあ、そうだろうな。自分をバカにした連中の事を許せる奴は稀だ。そんな奴、滅多にいない。」

シルヴィア「八幡くん、自分の事珍しい人間だって思ってるの?」

八幡「ん?……………ああいや、そういう事じゃなくて……………いや、自分から言っちゃってたもんな。」

シルヴィア「あつはは!八幡くんってば可笑しっ!自分の事を珍しいだなんて!」

ぐっ……………してやられた。

シルヴィア「でも、その通りかもね。自分を中傷した人を許せる人なんてそうそういないよね。」

八幡「考え方も人それぞれだからな。俺がこんな考え方をしているだけだ。」

シルヴィア「でも立派だよ。やっぱり八幡くんは優しいね。」

ううむ……………優しいって言葉は未だに慣れないな。何度も言われているはずなのに。

八幡「それで、どうすんだ？総武高行くのか？」

シルヴィア「うん、八幡くんがよければ。」

八幡「んじや行こうぜ。1年ぶりだな。」

そこまで楽しみって程でもないけどな。

1年ぶりの登校

シルヴィア side

八幡くんが通っていた学校……普通の学校ってどんな感じなんだろう？私はずっとクインヴェールだったからクインヴェールが普通だからなあ。

八幡「この道も懐かしいな……」

シルヴィア「え？八幡くんこの道が通学路だったの？」

八幡「ああ。もう通る事はないと思っていたが、また通れるとはな。」

シルヴィア「八幡くん……」

八幡「別に嫌で言ったわけじゃないからな？道や景色だけは俺にとつての癒しみみたいなモンだったからな。後マッ缶も。」

シルヴィア「マッ缶？」

八幡「総武高に行ったら飲ませてやるよ。まだあるといいんだがな……」

心なしか、八幡くんが懐かしんでいるように見える。多分、まだ八幡くんが星脈世代に目覚めてない時だよね。

シルヴィア「抵抗無いの？八幡くんが……その……」

八幡「今更だ。多分掌返しで接してくんだろ、そんな連中だよ。誰だって自分が大事だからな。」

八幡「けど、そうだったとしてもあまり責めるなよ。どっちにしても、俺がやった事に変わりはないからな。」

シルヴィア「……うん。」

もう……本当に君は……そんな優しい君はもっと好きになっ

ちやうよ／／／

婆「おやおや、新婚さんかい？」

シルヴィア「え？」

婆「この辺りじゃ見かけない顔だからねえ。随分仲が良いんだねえ。新婚さんだからだねえ？」

シルヴィア「あ、いえ……私たちは……／／／」

婆「ほほほ、旦那さんに幸せにしてもらいなさいね。」

／／
そう言ってから、お婆さんは行ってしまった。し、新婚さんって／

八幡「……今の俺たちってそう見えるのか？／／／」

シルヴィア「そ、そういう事なのかな？／／／／／」

2人「……／／／」

ど、どうしよう……気不味くなっちゃった。で、でも嬉しい／／／

シルヴィア「は、八幡くん、学校行こ？」

八幡「あ、ああ……そうだな。」

そして私たちは、八幡くんの通学路を楽しむ事も忘れて、総武高へと向かった。

――総武高校――

八幡「……此处だ。」

シルヴィア「……此处が、八幡くんの六花に来る前にいた学校なんだ……」

へえ〜こんな感じなんだ。日本の学校ってこんな感じなのかな？

八幡「とりあえず入ってもいいか許可取ろう。俺はもうこの学校の生徒じゃないから、申請しないとな。」

シルヴィア「そうだね。それよりも八幡くん、何処から回ろっか？」

八幡「シルヴィの行ってみたいところでいいぞ。」

シルヴィア「じゃあ案内宜しくね！」

八幡「おう。」

そして八幡くんは職員用入り口のインターホンを鳴らした。

職員『はい、どちら様でしょうか？』

八幡「すみません。校内を見学させてもらいたんですが、今って大丈夫でしょうか？」

職員『見学……ですか？申し訳ありませんが、只今授業日数の関係でこの秋休みも授業中でした、見学の方はちよつと……』

八幡「え？授業中なんですか？……どうする？」

シルヴィア「うーん、残念だけど諦めるしかないね。」

八幡「ありがとうございます。ご迷惑をお掛けしました。」

ちよつと残念だけど、授業中なら仕方ないよね。

職員『いえ、こちらこそ申し訳ございません。あの、宜しければお名前をお伺いしてもよろしいですか？次に来て頂く時には優先して校内見学を許可しますのです。』

八幡「はい。俺……あ、いえ、自分は比企谷八幡です。そしてもう一人がシルヴィア・リユーネハイムです。」

『ガタガタッ!!』

……………え？

職員『もももも、申し訳ありませんが、少々お待ちください!!』

.....

シルヴィア「どういう事?」

八幡「さあ?」

そして1分くらいしたら、通路から女の教師が急いでこっちへ向かって来た。

職員「ど、どうぞ!お入りください!」

八幡「は、はあ……」

シルヴィア「お邪魔します……」

私たちもそうだけど、目の前にいる先生の方はそれ以上にガチガチになっちやつてる。

職員「校長先生、只今お連れしました。」

校長『入れてください。』

職員「はい。」

そう答えると、先生が校長室前のドアを開けて私たちに入るよう促してくれた。

2人「失礼します。」

校長「ようこそおいで下さいました。総武高校校長の茅ヶ崎と申します。」

優しそうな初老のお爺さんだった。

シルヴィア「初めまして。水上都市六花クインヴェール女学園高等

部2年、シルヴィア・リユーネハイムです。」

八幡「界龍第七学院高等部2年、比企谷八幡です。」

茅ヶ崎「ゆつくり見学したいところでしようが、まずはこの老いぼれとお話をさせては下さいませんか？特に……君とね。」

校長先生は八幡くんの方を見つめた。きっと1年前の事だよね。

八幡「はい、俺は構いません。シルヴィもいいか？」

シルヴィア「うん、大丈夫。」

茅ヶ崎「お疲れでしょうし、まずはお掛けください。」

校長先生は座るように私たちを誘導して、自らがお茶を淹れていった。

淹れ終わると私たちの前にお茶を出して、同じくお茶を正面に置くと私たちの前に座った。

茅ヶ崎「界龍第七学院……でしたかな？そちらでは上手くやれているのですか？」

八幡「ええ、問題なく過ごしています。」

茅ヶ崎「そうですね……安心しました。」

八幡「僕が言うのも何ですが、学校の方は落ち着きましたか？こっちに転学した奴らに聞きました。相当酷かったと。」

茅ヶ崎「ええ……今は平穏な日々を送れています。あの日々が嘘だったかのように。忘れてはいないんでしょうが、学生にとっては1年も前のことです。記憶になっていくのでしょうか。」

八幡「それが自然ですよ。今の僕にとっても、その事はもう記憶として保存してますからね。」

茅ヶ崎「……本当に、何故君みたいな優秀な生徒があんな目に遭わなくてはいけなかったのか。そしてそれに気づけなかった私たち教師陣は何をしていたのやら……」

校長先生は授業とか出られないから仕方ないけど、すごく辛そうな顔してる。

茅ヶ崎「比企谷くん。改めて、総武高校を代表して貴殿に謝罪申し上げます。この度の……いえ、1年前の騒動、私たち教師一同が何も対策をしなかった事、並びに誹謗中傷を止められなかった事を謝罪致します。本当に申し訳ございませんでした。」

八幡「ちよっ……」

校長先生はソファから立ち上がると、正座になって額を床につけた。所謂土下座だった。

八幡「……やめて下さい、貴方がそんな事する必要はありません。むしろ分からなくて当然ですよ。隠れてやっていたんですから。」

茅ヶ崎「本当に君は優しいんですね……私がこの事を知ったのは君が転校してからすぐの職員会議でした。私には何が起きていたのかさっぱりでした。何せ突然だったもので。」

八幡「それもそうでしょう、俺も突然でしたから。自分の力が目覚めたのは。」

茅ヶ崎「平塚先生から君のノートを受け取った時、私は酷く激怒したものです。あんなに怒ったのは、私がまだ一教師の時以来でしょう。『こんな状態になるまで生徒を放っておいたのか!?!』と言いましたが、平塚先生の表情を見てすぐに分かりました。この人が1番責任を感じているのだと。」

茅ヶ崎「平塚先生は暫く授業が身に入っていませんでしたよ。余程の事だと自分でも理解していたんでしょうね。授業や指導においても熱心な彼女が、あれ程分かりやすく授業効率が下がっていたのですから。」

シルヴィア「その、八幡くんと平塚先生はどんな関係なんですか?」
茅ヶ崎「……私からは教師と生徒としか言えません。」

まあ……そうだよね。

茅ヶ崎「比企谷くん、今日は是非平塚先生に会ってもらいたい。きつと彼女も喜ぶでしょう。」

八幡「そのつもりです。半年とはいえ、俺にとっては1人しかいない恩師ですから。」

茅ヶ崎「それを聞いたらもつと喜ぶでしょう。貴女は比企谷くんと恋人の関係でしたね？」

シルヴィア「はい。私も八幡くんと交際して、もうすぐ1年になります。」

茅ヶ崎「そうですか……貴女と比企谷くんはとても仲が良いように見えます。それこそ、本当に心から繋がっているように。」

シルヴィア「……………」

茅ヶ崎「年寄の勘というものです。リユースハイムさん。私が言うのも変ですが、この学校では不幸だった比企谷くんを幸せに出来るのは、比企谷くんの学院の生徒や他にもいると思います。1番は貴女です。どうか、私たちが与えられなかった分の万倍もの幸せを彼に注いであげて下さい。無責任ではありますが、お願いしてもよろしいでしょうか？」

そんな事、もう決まってるよ。

シルヴィア「……………」私はもう心に決めています。彼を生涯の夫にす

ると。私の幸せは彼の幸せであり、彼の幸せは私の幸せでもありません。私の一生をかけて彼を幸せにしてみせます。」

茅ヶ崎「……………そうですか。比企谷くん、良い子を彼女に持ちましたね。」

八幡「……………はい。」

授業終わりかな？鐘が鳴り始めた。

茅ヶ崎「ちようどいいタイミングで鳴りましたね。比企谷さん、リユースハイムさん、老いぼれの話に付き合ってくださいありがとうございます。ございます。学校見学の事ですが、好きに回ってください。私から教師陣に伝えておきます。」

2人「ありがとうございます。」

茅ヶ崎「話が出来て本当に良かったです。何だか心のつかえが取れた気がします。」

その時の校長先生は、本当に憑き物が取れたかのような顔をしていました。

見学とドツキリ？

八幡 side

八幡「お、おいシルヴィ……………」

シルヴィア「うう……………／／／／／」

校長室から退室して、どこから回ろうかシルヴィと相談しようと思っただけ、突然シルヴィが抱きついてきた。

何だ？何かあったのか？

八幡「おい、どうした？」

シルヴィア「わ、私、八幡さんと校長先生の目の前で……………は、八幡さんの事、みみ、み、未来の夫って……………／／／／／」

八幡「……………ああ、それか／／／」

確かに俺も内心すげえビックリしたからな。校長の質問をあんな風に返すとは、本当に予想外だ。

八幡「だが、俺は嬉しかった。お前がそれを考えてくれていたのが、嬉しい。会見の時では俺が言ったが、返事みたいなのはもらってなかったからな。」

シルヴィア「返事なんて『OK』以外あり得ないよ！他には『はい』と『YES』!!八幡さんの隣は私だけだもん!!」

八幡「お、おう……………」

シルヴィ、それ言うのは別に構わんが、後でとんでもない羞恥心とが出さないでくれよ？

シルヴィア「じゃあ八幡くん！早く案内して！ね？」

八幡「……分かったよ。んじゃあ何処行く？」

シルヴィア「先ずは生徒が今いなさそうなところにしようよ。購買とか、空き教室とか見てみたい！」

八幡「よし、分かった。」

――購買――

シルヴィア「へえ、やっぱりクインヴェールとは違うなあ。食券とか無いんだね。」

八幡「千葉市が営んでるからな。どうしても予算の問題が出てくるんだろう。」

シルヴィア「そういえば私たち、ご飯持ってきてなかったね。でも今空いてないし……どうする？」

八幡「後になったら来ればいい。その時は人が多いだろうがな。」

――元ベストプレイス――

シルヴィア「此処は？」

八幡「俺がよく1人で飯食ってた場所だ。この時期になったら流石に無理だったけどな。」

シルヴィア「友達とは食べなかったの？戸塚くんとか戸部くんとか海老名さんがいたでしょ？」

八幡「戸塚はそうだが、その時の俺が仲良かった奴はその戸塚くらいだったからな。戸塚はテニス部で昼練もあったから、そんな暇無くてな。」

シルヴィア「そうだったんだ。でも今は学院にいる時、1人じゃないよね？」

八幡「シルヴィも知ってるだろ？あの食いモンにうるさい3馬鹿トリオ。あいつらのせいでいつも賑やかだよ。」

全員分作ったとしても、6割が奴らの胃袋に収まってくからな。

シルヴィア「あはは……うん、何となく想像ついたよ。」

八幡「だろうな。次は何処行く？」

シルヴィア「そうだなあ……じゃあ教室回ろうよ。今の私の格好じゃあ運動なんて出来ないし。」

八幡「それもそうだな。じゃあ何処からにする？3年はこの時期受験だから、あまり邪魔はしない方がいいから、1年か2年に絞った方がいい。」

シルヴィア「じゃあ1年生から回ろつか。ふふふ、なんか楽しみ♪」

………ドツキリを仕掛けにいくわけじゃないんだからね？

———3階———

八幡「俺って今思えば半年くらいしかいなかったんだよな。あまり現実感が無いな。この学校にいたって感じがしない。」

シルヴィア「界龍の居心地が良過ぎるからじゃないかな？此処で過ごしてた時は、楽しいなんて感情、滅多になかったんでしょ？」

八幡「………まっ、それもそうだな。」

それに、総武の思い出が無いってのもありそうだしな。

シルヴィア「ねえ、悪戯しない？」

八幡「悪戯？」

シルヴィア「うん！扉が開いてるクラスに八幡くん的能力を使って静かに入るの！入り終わって先生が黒板の方を向いたら能力を解除して、振り向いたらドツキリ大成功的なの！」

この子、こんなに悪い子だったわけ？

まあ………

八幡「面白そうだな。やるか。」

俺も大概人のことは言えない。

そして俺たちは明鏡止水で姿を隠し、1年生の扉を開いているクラスを探した。

八幡『だが、行くのは何クラスだ?』

シルヴィア『1クラスだけにするよ。行き過ぎても迷惑になっちゃうからね。』

いや、絶対迷惑じゃないだろうな。

シルヴィア『あつ、1年C組が開いてるよ。じゃあ突撃だね♪』

八幡『じゃあ入るか。』

――1年C組内――

教師「であるからして」

シルヴィア『あらら、真剣に授業に取り組まないとダメだぞー。』
ゴエ

八幡『進学校とはいっても、中身は普通の学校と変わらんか。』
ゴエ

シルヴィア『あつ!先生が黒板の方向いた!』
ゴエ
八幡『はいはい、解除つと。』
ゴエ

そして俺たちの姿が露わになる。
さて、いつ気付くかねえ?

教師「じゃあ読んでもらうぞ。37ページの最初を………ん?」

先生が気づいた。ヤバッ、これ面白えな。
とりあえず会釈。

教師「ん、んん？」

生徒1「先生、どうしたんですか？」

教師「……………いや、何でもない。」

シルヴィア「あ、あれ？八幡くん解除してるよね？」コゴエ

八幡「あの教師が目を擦った時点でそれ分かってんだろ？……………ん
？」コゴエ

さつきからあの教師、指差したりしてるが……………何やってんだ？左
？教科書？

……………っ！成る程な。

八幡「ちよつと教科書借りますよ。シルヴィ、これ持て。」コゴエ
シルヴィア「え？何で……………ああ、そういう事♪」コゴエ

俺は前で寝ている生徒の教科書を借りてシルヴィに渡した。
すると教師は目論見が成功したかのような顔をして、指で3と7を
出した。

シルヴィア「37ページと……………よし！」コゴエ

そして俺は教師にOKサインを出した。

教師「お前ら、いい加減起きろ。今から音読始めるぞ。」

生徒たちは気怠げながらも、身体を起こした。

教師「早速読んでもらうからな。じゃあ……シルヴィア・リユーネハイムさん、お願いします。」

生徒「「「え?」」」

生徒たちは多分、何言ってるんだ? って顔してんだろうな。

シルヴィア「はい♪」

寝ている奴以外は声がしたこっち側を瞬時に振り向いた。

! ! ? ? ? ? ?
└
└
└
└

「アさん、続きを。」

全員が開いた口を閉じないまま、シルヴィと俺の方を見ていた。

シルヴィア「……しました。」

教師「ありがとうございました。お前から聞いてたか？」

生徒「『……』」

シルヴィア「皆、授業はしっかりと受けないとダメだからね。」

八幡「んじや、ドツキリも成功したし、行くか。」

シルヴィア「うん、それじゃあお邪魔しました。皆、勉強頑張つてね♪」

そして俺たちは教室を後にしたが、2階にいく際にまたとんでもない程の大声が校内に響いた。

クラスと先輩

八幡 side

1年生への悪戯に成功した俺たちは、2階にやってきた。次は2年生を見学するつもりだ。

シルヴィア「うーん、今度は普通に見学しよつか？毎回やつても申し訳ないし。」

八幡「なら、2―F組を覗かないか？」

シルヴィア「……でもそのクラスって……」

そう、俺が1年前にいたクラスだ。多分中身変わってるだろうけどな。

八幡「そのままって可能性は捨て切れないが、1年から2年に進級する時は大抵クラスメイト変わるから、変わってんだろ。」

シルヴィア「……そうかな。」

八幡「それに変わってなかったとしても、別に問題ねえよ。」

校長室でも言ったように、もう過去として保存してるから。

シルヴィア「……八幡くんがそう言うならいいよ。でも、無理はしないでね！」

八幡「分かってるよ。」

シルヴィア「それと！明鏡止水は絶対使うからね！絶対だからね！」

八幡「わ、分かった。」

――2―F組――

シルヴィア『なんか静かだね？寝てる……のはなさそうだけど、テスト中？』

八幡『さあな。だが、戸が開いてるって事は違うだろ。』

そして俺たちはチラツと中の様子を見てみた。

皆さん真剣に何かを書いたり考えたりしていた。よく見ると作文だった。教師は……平塚先生だった。

八幡『……平塚先生。』コゴエ

シルヴィア『……あの人が八幡くんの恩師？』コゴエ

八幡『ああ、唯一俺の事を真剣に考えてくれた人だ。』コゴエ

目の腐つてた俺なんかの事を真剣に考えてくれた教師なんて、彼女以外にはいないだろう。

シルヴィア『八幡くん、作文のテーマが八幡くんの事になってるよ。』コゴエ

八幡『は？』コゴエ

シルヴィが黒板の方を指差していたので、俺もつられて見ると、本当に俺がテーマになっていた。

てか、俺をテーマにするな。

シルヴィア『八幡くん、クラスの人変わってる？』コゴエ

八幡『いや、さっきから見渡してるが、変わってないな。』コゴエ

シルヴィア『じゃあクラス替えはしてないんだね。八幡くんの席は何処だったの？1年生の頃の。』コゴエ

八幡『今日は誰か休みなんだろうな、あの席だ。』コゴエ

俺は廊下側の端列にある空席を指差した。

シルヴィア『あの場所が八幡くんの……』コゴエ

するとシルヴィは握っている手をさらに強く握ってきた。

八幡『……なあ、ここに居る奴らと話してみたいか?』コゴエ
シルヴィア『え?』コゴエ

八幡『気になるんだろう?』コゴエ

シルヴィア『確かに気になるけど……大丈夫だよ。』コゴエ

なら、俺の部活動場所でも行かせておくか。

八幡『そうか?じゃあ俺1人で話してくる。シルヴィは特別棟の3階にあるシールが貼ってあるプレートの教室で待っていてくれ。』コゴエ

シルヴィア『え?待っているとしても、私その場所知らないよ。』コゴエ
エ

八幡『心配すんな。』コゴエ

俺はバレないように自分の影分身を作った。

八幡『俺の代わりに俺の分身が案内する。』コゴエ

シルヴィア『……分かった。でも、無理はしないでね?約束だよ?』コゴエ

八幡『分かってるよ。それに俺は昔程弱くない。何があっても平気だ。お前がいてくれるからな。』コゴエ

シルヴィア『……うん／＼』コゴエ

そして俺たちは一旦廊下に出た。シルヴィを見送るためでもある。すぐに会うけど。

シルヴィア『じゃあ後でね。すぐに来てね?』

八幡『分かってるよ。』

八幡(分身)『じゃあシルヴィ、俺が部活動をやってた場所に案内する。』

シルヴィア『うん。』

そしてシルヴィと俺の分身は特別棟の方へと向かっていった。

……さて、久しぶりの再会だ。ざっと1年ぶりか?全然楽しみじゃねえ。

ま、いいか。

そして俺は閉まっている教壇側の方の戸をノックした。

平塚「?はい?」

さて、行くか。

八幡 side out

シルヴィア side

……八幡くん大丈夫かな?

八幡(分身)『シルヴィ、俺の本体が心配なのは分かる。けど心配ねえよ。前の俺とは違う。何があっても別に傷つく事はねえよ。』

シルヴィア『そうだとしても不安なの。八幡くんの分身なら分かってるでしょ?八幡くんは了承したけど、ここに来てたって言ったのは私なんだよ。何かあったら……申し訳がないよ。』

八幡(分身)『……』

八幡くん……終わったらすぐに来てね？

八幡（分身）『……まで来たらもう解除しても良さそうだな。』

八幡（分身）「……シルヴィ、着いたぞ。あそこが俺が1年前に部活動で活動していた場所だ。」

シルヴィア「……ネームプレートにシール、確かに八幡くんの言っていた通りの場所みたいだね。」

八幡（分身）「ああ。」

シルヴィア「……でもどうやって中に入るの？」

八幡（分身）「校長からマスターキー貰ってるから中に……ん？開いてる？」

え？

シルヴィア「誰かいるの？」

八幡（分身）「分らん。いない可能性もあるけどな。」

私たちは恐る恐る中を覗いてみた。

するとそこには、何かのノートを優しげな表情で見ているめぐりさんがいた。

2—F組

八幡 side

八幡「失礼します。今日この学校に見学に来ました、比企谷八幡です。」

このくらい言っとけばいいだろう。見学つてのも間違いじゃないしな。俺もうこの学校の生徒じゃないし。

平塚「……………比企谷……………なのか？」

八幡「それ以外誰がいるんです？目は変わってますけど、中身は真正銘、比企谷八幡です。」

いや、この人たちからすれば、中身も変わってるよな。こんなハッキリ喋ってんだし。

平塚「何故……………此処に？」

八幡「いや、校長から聞いてないんですか？今日俺たちが来たつて。」

平塚「そんな事は聞いていない！聞いたのは今日この学校に見学者が来ている、それだけだ！」

校長先生、貴方もお茶目ですね。俺たちの事言わないなんて。

八幡「にしても1学年違う教室なのに、なんか懐かしい感じがするな。ここの席は誰なんだ？」

男子「え!?あ、その……………比企谷くんが転校した後、事情を知ったんだけど、せめて机と椅子は残しておこうって決めたんだ。」

八幡「じゃあこの席は、俺の席って事でいいのか？」

男子「あ、ああ。」

八幡「そうか……」

そして俺はその机に手を置いた。

八幡「実感ねえな。1年前までここに居たなんて……でも事実なんだよな。」

次に椅子を引いてそこに座ってみた。

1年前だというのに、全く思い出せない。

八幡「もう忘れちまってるとはな……ここからの目線ってこんな感じだったのか……初めてでもないのにな。」

平塚「比企谷、少しいいか？」

八幡「はい？」

平塚「お前、此処へ何しに来たんだ？」

八幡「いや、さつきも言いましたけど、見学ですよ？それ以外にあると思います？」

平塚「……私がいうのもアレだが、報復しようとは思わないのか？」

八幡「は？誰が誰にです？」

平塚「お前がこのクラス全員にだ！お前は復讐してやろうとは思わないのか!？」

八幡「何で俺がそんな意味もない事をしなきゃならないんですか？第一、それで俺の気が収まってるのなら、とつくの昔にやってますよ。」

平塚「いや、それはそうだが……」

何？もしかして俺がそんな目的で来たと思ってるのか？だとしたら信用無さすぎだろ。

八幡「なら言わせてもらいますけど、俺はこの学年もといこのクラスのことには恨んじやいませんよ？むしろ感謝してる方なんですから。」

クラス的面々はあり得ないという顔をしていた。まあ当然だ。あれだけの事をやったのに感謝されているんだからな。

八幡「理由を言うなら、あの時あそこまで俺を追い詰めてくれなきゃ、俺はこの力を目覚めさせてないし、六花に行く事も出来なかった。あの罵声罵倒、誹謗中傷があつたからこそ今の俺がいる。だから俺は、お前らの事を恨んでない。俺に六花へ行くきっかけをくれた奴らを恨めると思うか？」

捻くれてる。そう捉えられてもおかしくはない。だがこれは俺の本心だ。諺で『禍福は糾^{かふく}える縄^{あざな}の如し』というものがある。不幸もあれば幸せもあるという意味だ。不幸に転じれば幸に転じ、転々とする事をいう。今の俺は幸せ真っ只中だけだな。

八幡「だからもう気にすんな……つつても無理だろうな。こんな簡単に割り切れるんだつたら、ここまで引きずらないよな。」

三浦「当たり前だし。あーしらはヒキオが戻って来るのをずっと待ってたし。ライブの時に覚悟決めて行こうと思ったのに、チケットは取れなかったから諦めてたら、突然来てもう気にするなって言われても納得出来ないし。」

八幡「……でも意外ではあつたな。言っちゃ悪いが、俺の事もう忘れてんのかと思ってたのに。」

平塚「何を言ってるんだ。お前がやった善行はこの学校の2年と3年の全員が知っているんだぞ。忘れるわけがないだろう。」

八幡「偽告白が善行だとは思えませんか？」

平塚「その事はもう知ってるし、理解もしてる。冗談でもそんな事を言うな。」

ホントこの先生カッコ良すぎるだろ。何で彼氏出来ないの？ホント不思議。

八幡「分かりました。俺はもうどうとも思っていないが、お前らはどうしたら気が済むんだ？言っとくが殴るなんて言うなよ？ステラ・カルタ星武憲章に違反して牢獄行きになっちまうから。」

そんな理由でシルヴィと別れたくないしな。

三浦「ヒキオはなんか無いん？」

八幡「あつたらこんな事は聞いてない。」

三浦「……………」

八幡「だって俺明日にはもう帰るんだぞ。それなのに何をしてもらえってんだよ。」

三浦「……………確かに言ってるし。」

実際やってもらいたい事なんて何もない。だってそんなの期待してないし。むしろ期待しても無駄だって分かってたし。

平塚「比企谷もこう言ってる事だから、もういいんじゃないか？お前らが納得出来ないのも分かるが、これでは平行線だ。ここは両者妥協案で行こうじゃないか。」

俺は別にそれで良いんですけどね。

平塚「それで比企谷、今年そっちへ向かった奴らはどうだ？」

八幡「由比ヶ浜は言えませんが、全員元気でやってると思いますよ。2ヶ月前に戸塚と戸部と海老名に会いましたけど、変わりなかったですからね。」

平塚「そうか……………それは何よりだ。」

三浦辺りが黙ってなさそうだ…………

三浦「ヒキオ、葉山は？」

八幡「……まだ会ってない。ガードワースにいるのは知ってるが、それだけだ。」

三浦「ヒキオはどう思ってるの？葉山が何かするとか、企んでるか。」

八幡「……まあ、確実に何かはあるだろうな。そうでもなきや六花にこないだろ。まあ、この学校に居場所が無くなったからってのもありそうだけどな。」

まああいつの事は、フェアクロフさんとガードナーが何とかしてくれんだろ。

三浦「……結衣は？」

やっぱりか……

八幡「……さつきも言ったがそれは言えない。三浦と平塚先生だけならいいが、他の奴らに話すには重すぎる。ここではというより、この面子では話せない。」

教室の空気が重くなった。何かあったというのは感じたのだろう。

平塚「……比企谷、この授業が終わったら聞いてもいいか？それは恐らく、由比ヶ浜と雪ノ下だろう？」

八幡「まあ、平塚先生ならそういうと思ってましたよ。それに、雪ノ下も関係してるのは事実です。」

平塚「……………そうか、なら聞かせてくれ。場所は部室でいいか？」

八幡「ええ、それでいいです。」

三浦「ヒキオ、あーしも聞きたい。結衣が何をしたのか。」

八幡「……………いいんだな？後悔するかもしれないぞ？」

三浦「……………うん。」

八幡「分かった、この話はこの2人にしか話せない。悪いがお前らは身を引いてくれ。」

クラスの生徒は頷くことしか出来なかった。

八幡「じゃあ俺はもう行く。あまりこのクラスに居過ぎても邪魔になるからな。じゃあ平塚先生、三浦、部室で待ってます。」

そして俺は2―F組を後にした。

彼のいない所で

シルヴィア side

八幡が教室に入った5分後……

シルヴィア「な、なんでめぐりさんがここに？」

八幡（分身）「いや、俺が知るわけないだろ。とりあえず案内はしたから俺はもう消えるな。」スー……

シルヴィア「え？あ、ちよつ……消えちゃった。」

うーんどうしよう。邪魔するのも悪いし出直そうかなあ。かといって学校を1人で見学してたら迷子になるかもしれないし……

ホントにどうしよう……

めぐり「ん？誰かいるの？」

き、気づかれた!?

めぐり「入ってきていいよお。取って食べたりしないから。」

何言ってるんですか!?!そんな冗談通じる人いませんよ！

でもこのままいてもジリ貧だし、中に入ろつと。

シルヴィア「すみません、覗き見するつもりはなかったんですけど……」

めぐり「あえっ!?!シルヴィアさん!?!どうして此処に!?!」

シルヴィア「実は八幡くんと一緒に校内見学をしに来たんです。此処が八幡くんが部活をしていた教室だと聞いたんですけど……」

めぐり「うん、そうだよ！【奉仕部】っていつてね、生徒のお願い……かな？それを手助けする部だったんだよ。ほら、ここ座つていいよ！」

シルヴィア「じゃあ失礼します。八幡くんがそんな部活をしてたんですね。」

めぐり「比企谷くんは凄い子だったよ。私じゃ解決できない事をやってくれたからね。本当に頼りになる後輩だったよ。」

めぐりさんは懐かしそうに1年前の八幡くんの事を話してくれた。今と違って目は少し変だとか、考え方が捻くれているとか、頭のとっぺんにあるアホ毛が面白そうだったとか、色々な事を話してくれた。

めぐり「あはは♪……あれ？シルヴィアさん、その比企谷くんは何処なの？」

シルヴィア「今2―F組の方に行ってます。」

めぐり「……大丈夫なの？比企谷くんはあのクラスや学年に……」
シルヴィア「それこそ私の無用な心配でした。」

私はめぐりさんに今八幡くんがこの学校に向けてる感情を話した。誰もが呆れかえると思う。でもめぐりさんはどこか納得したような顔をしていた。

めぐり「……そつかあ、感謝かあ。同じ事を思ってるんだね。あのクラスにも。」

シルヴィア「私たちが思ってるよりも、八幡くんはずっと強いです。力も精神も。」

めぐり「……そうみたいだね。うん、なんか安心したよ。」

………そういえば、どうして授業中なのにめぐりさんはここにいるんだろう？

シルヴィア「めぐりさんはどうして此処に？今授業中の筈じゃあ……」

めぐり「私受験生なんだけど、私はもう内定もらってるから自由登校なんだ。だから思い出ついでに此処に来たの♪」

へえめぐりさんって受験生なんだ……あんまり雰囲気ないなあ。

シルヴィア「それで過去のノートを見てたんですか？」

めぐり「え？……ああ、これ？これは授業で書いたノートじゃないよ。」

シルヴィア「え？違うんですか？」

めぐり「うん、はずれ！これはね、比企谷くんが文化祭と修学旅行で起きた出来事の本当の事を記したノートなんだよ。思えば彼が中心にいたからね、良くも悪くも。」

八幡くんが………そういえば依頼があつたんだったね。文化祭では『サポートをしてほしい』修学旅行では『告白を成功させたい』と『告白を阻止してほしい』だったかな？

シルヴィア「……めぐりさん、そのノート見せてもらってもいいですか？」

めぐり「うん、君には知る権利があるからね。どうぞ。」

私はめぐりさんからノートをもらって、食い入るようにノートの文字を見た。

めぐり「……どうかな？1年前の比企谷くんは？」

シルヴィア「………凄く辛い目に遭ってきたんでしょね。こんな事今言っても仕方ないですけど。」

めぐり「そうだね。私も彼が何も悪くないって気づいたのは、この

ノートを見せてもらったその時なんだ。比企谷くんには本当に悪い事をしたと思ってる。今だから言えるけど、比企谷くんが進んであんな事する人だとは思えなかったから。」

シルヴィア「…………私が最初に彼に会ったのは、私をナンパから助けてくれたのがきっかけです。あつたその日から、一目惚れだったんだと思います。別れてからずっと八幡くんの事が頭から離れなかったんです。」

シルヴィア「そして、彼と出かける約束をした日の最後に彼自身の事と、このノートの内容を全て聞きました。嘘がないって事は、彼の目と声を聞いて分かりました。嘘ならあんな事を言えるはずが無いですから。」

シルヴィア「それで私は、初めて誰か個人を守りたいって思えたんです。それに私が所属するクインヴェールは女学園なので、男の子の出会いには学園外にしかありませんから、異性の対象なら尚更でした。今では私は八幡くんを守って、八幡くんが私を守ってくれています。八幡くんがいつも言ってくれる言葉があるんです。『支え合つての俺たち』だと。」

その日からだね、私が八幡くんに本気の恋を抱いたのは。色んな事があつたなあ。

めぐり「…………それじゃあ、八幡くんが今あんな風に強くなったのは、シルヴィアさんのおかげなんだね。」

シルヴィア「私だけではありません。八幡くんが今通ってる界龍では多くの友人もいて、彼が師と呼ばれる程慕われています。」

めぐり「うん。比企谷くんが凄く強いのは知ってるよ。今年の星武祭は見たからね。あんなに強いんだね比企谷くんって。」

シルヴィア「はい、六学園には序列制度があつてその学園内の強さに応じて序列があるんです。因みに私はクインヴェール女学園序列1位です。」

めぐり「おおく流石去年の星武祭の優勝者だね！比企谷くんは確

か、序列2位だったよね？」

シルヴィア「はい、界龍の中では2番目に強い人になります。」

なんか嬉しいなあ。八幡くんの凄さを分かってももらえるって。

めぐり「ふふふ、シルヴィアさん嬉しそう。」

シルヴィア「え？」

めぐり「比企谷くんが凄いつて思えてもらえるのが嬉しいのかな？」

シルヴィア「は、はい。私の彼氏でもあるので／／／」

めぐり「そうだよねえ。うんうん、私は2人の事応援するからね！」

シルヴィア「あ、ありがとうございます／／／」

さっきまでの重い雰囲気から何でこんな話になったんだろう？

まあいいよね。

そしてその後も、八幡くんが六花ではどんな風なのかとか、休みはどんな事をしているのかとか笑顔で聞かれた。

この人……意外と押しが強い？

久々の校内昼食

八幡 side

やっぱ自分の分身がいるって便利だな。購買前に待たせているから（変装しながら）すぐには買えるだろうな。

そしてもう1人分身を作った。それは教室に行かせた。理由は平塚先生と三浦に伝言させるためだ。昼休みじゃあ時間が無さ過ぎるから放課後にしてもらおう事にしたからだ。あの2人なら分かってくれるだろう……多分。

そして俺が今向かってるのは、特別棟3階にある端の教室だった。

元奉仕部の部室である。

八幡「待たせたな、シルヴ」

めぐり「それでそれで!!比企谷くんはなんて言ったの!!やっぱ素直じゃない事を言って誤魔化したの!」キラキラ

シルヴィア「え、ええと……恋愛継続と夫婦円満って言ってくれたんです//////割り切れない数字は縁起が良いって言ってたのでキュンと来ちゃいました……//////」

めぐり「わ、わゝ凄いな///確かにそれはキュンと来ちゃうよ///」

……なんだこれ？

めぐり「それでそれで？他には？まだあるんだよね？ね？1番言われて嬉しかった事は？やつぱり告白？」キラキラ

シルヴィア「……ある意味正解です／＼／＼1番嬉しかったのは、八幡くんが会場で私との交際を結婚前提でしているつもりだって言うてくれた事と……指輪を……はめてくれた事です／＼／＼／」

めぐり「わ、わあ……／＼／＼／＼比企谷くん凄いよ、シルヴィアさん誑しだよ。もうシルヴィアさんの心を驚掴みしちゃってるよ／＼／＼」

この人たちはどんな話をしてんだよ。
盗み聞きも悪いから、そろそろ行くか。

八幡「待たせたな。」

2人「八幡くんっ!?!?／／／／／（比企谷くんっ!?!）」

うん、その反応予想しました。

八幡「……………どうしたシルヴィ？顔赤いぞ。城廻先輩も慌ててましたけど？」

めぐり「だ、大丈夫だよ！何もないから！比企谷くんの話をしてもらってたただだから！ね！シルヴィアさん！」

シルヴィア「そ、そうなんだ！六花の八幡くんが知りたいって言うから説明してたの！」

八幡「……………そっか。てつきり恥ずかしいエピソードでも聞かれて

たのかと思ってたわ。」

2人（もう殆ど正解だよぉ〜！）

2人の心情とは知らずに、八幡はさつきまでのやりとりを見ていたため、内容は筒抜けだった。

――20分後――

授業の終わりを示すチャイムが鳴り、昼休みの時間になった。当然俺は動かない。だって使いを出してるから。

シルヴィア「八幡くん、購買で何か買わないの？」

八幡「俺が此処に来る前に分身に頼んでおいた。変装できるとはいえ、俺たちは目立つからな。俺の分身なら目立っても能力で姿を消すくらいはできるから問題ない。」

めぐり「凄いなあ比企谷くん。姿を消せるんだぁ〜！」

八幡「まあ俺の能力なので。」

うん、俺の能力ってホント便利だよね。自分でもそう思う。

八幡（分身1）「ふう……オリジナル、平塚先生と三浦に伝えてきたぞ。OKしてくれた。」

めぐり「わぁ〜本当に比企谷くんだ！うん、そのまんまだね！」

そりやなんの工夫もしてない俺の分身ですの。

八幡「ん、ご苦労さん。」

八幡（分身1）「おう。」スー……

役目を終わると、俺の分身は消えていった。

めぐり「ほえゝ羨ましいなあ。」

八幡「まあその気持ちは分かりますよ。俺も非星脈世代ジエネステラの時は、魔法に憧れを持ってましたから。」

シルヴィア「それが今では六花最強の魔術師だもんね♪彼女として鼻が高いよ。」

八幡「俺の彼女も六花で1ゝ2を争う程の魔女だからな。俺も鼻が高い。」

どっちも能力者で1番かもしれない域にいるって事なのか……これでも必然か？

めぐり「こうやって見ると、お似合いのカップルだねえゝ。あつ！私お弁当持ってくるんだけど、一緒に食べてもいいかな？」

シルヴィア「はい！勿論です！」

君たちずいぶん仲良くなったもんね。

八幡「俺も構いませんよ。」

めぐり「わあゝい、ありがとお！じゃあ急いで持ってくるからねゝ！」

そしてめぐりさんは弁当を取りに一時退室した。

シルヴィア「んゝはあつ！めぐりさんって面白い人だね。」

八幡「雰囲気があんな感じだから和むってのもあるよな。」

シルヴィア「うんっ！」

そして……

八幡（分身2）「俺ゝ、シルヴィ、昼飯買ってきたぞー。」

八幡「悪いな、何買ってきたんだ？」

八幡（分身2）「パン類くらいしか買っていないな。おにぎりもあつたが、あつたかくないと美味くないからな。」

いつもシルヴィが作ってくれる飯は、あつたからだからな。冷めてても美味しいが、やっぱあつたかいのが良いからな。

八幡「分かった、サンキューな。」

八幡（分身2）「あいよー。」スー……

そしてさっきの分身同様に徐々に薄くなって完全に消えた。

シルヴィア「ふうーん、此処の購買っていろんなパンがあるんだね。」

八幡「まあこれくらいが普通だ。それよりも、六花に帰ったら家で飯一緒に作らないか？なんかそんな気分になってきた。」

シルヴィア「良いね！やろうっ！」ニコッ

シルヴィは嬉しそう笑いながら、俺の手を握ってきた。

シルヴィア「それと八幡くん。この黄色と黒色の缶は何？」

八幡「ああ、これがマッ缶だ。俺は前好んで飲んだが、今はどうだろうな……甘いのは今でも好きだが……」

シルヴィア「なんかパッケージの色からして危険を漂わせるような感じがするね。」

八幡「……シルヴィには甘すぎるかもな。」

俺は密かにそう思いながら、マッ缶を眺めていた。

めぐり「お待たせ……あれ？」

城廻先輩が来たかと思ったら、突然固まってしまった。

シルヴィア「めぐりさん？どうしたんですか？突然固まって。」
めぐり「……っ！い、いやあ……あまりにも2人が自然に手を繋いでいるものだから、恋人よりも夫婦に見えちゃって……見惚れてたんだ。」

シルヴィア「ふ、夫婦……／＼／＼」

八幡「まあ、そう言われると嬉しいですね／＼」

めぐり「……いやあ比企谷くん本当に変わったね！今のところ、きつと昔なら『いや、そう見えるのは俺たちがこうしているからであって、しなければそうには見えませんよ。』って言っているとこだよ！」

八幡「何でそんなに限定的なんです？」

シルヴィア「あはは……」

そして俺たち3人は楽しく会話しながら昼食を摂り、昼休みのひと時を充実に過ごすことが出来た。

明かされる真実

八幡 side

最後の授業の終わりを知らせるチャイムが鳴り、何故か俺も伸びを
してしまう。長年の癖？が染みついているのだろう。昼休みが終
わった後は、教室内に見学はせずに廊下側から眺めていた。勿論、明
鏡止水を使って。

隠れる意味は当然無いが、あまり騒がれても教師たちに迷惑だから
な。もう2回ほど迷惑かけてるけど。

空いた時間は元部室に戻ってシルヴィと城廻先輩と話をしながら
暇をつぶしていた。

そして今、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。もうすぐ時間
という事だ。

八幡「…………シルヴィ。俺はさつき教室にいた1人の生徒と教師を
此処に呼んだ。お前なら分かるよな？」

シルヴィア「…………彼女たちの現状を話すためだね？」

八幡「ああ。平塚先生は部の元顧問。1人の生徒は俺を恨んでる奴
らの一部と元友達（笑）だったからな。知りたいのは当然だ。」

めぐり「雪ノ下さんや由比ヶ浜さんたちの今？」

八幡「はい、それをあの2人にお話します。別に先輩は聞く必要あ
りませんからね。」

めぐり「…………うん、私も聞く。もうすぐ終わっちゃうけど、私は
生徒会長でその時の文実だったから、関係ないとは言えないから。」

八幡「…………分かりました。一応言っておきますが、話していて気
分の良くなる話ではありませんよ？」

めぐり「という事は悪い方向に行っちゃったんだね。それでもいい
よ。」

覚悟あり、か。

シルヴィア「じゃあその平塚先生と1人の生徒さんを待っただけなんだね？」

八幡「ああ。」

シルヴィア「これを聞いたらショックだろうね。自分の友達だった人がこんな事をしたって聞いたら。」

八幡「だろうな。」

――20分後――

コンコンツ

八幡「どうぞ。」

三浦「失礼しま……す……」

平塚「どうかした……のか……」

2人はシルヴィイの方をガン見していた。

シルヴィア「こんにちは、授業お疲れ様です。」

平塚「比企谷、どういう事だ？何故ここにシルヴィア・リユーネハ

イムがいる？」

八幡「いや、俺の彼女なんですから当たり前でしょう。それに、ここに来たいって言ったのはシルヴィの方ですから。」

平塚「ほ、本当の事だったのか!？」

会見見てないのかこの人？いや、見てないはずないよな？朝のニュースとかでも1週間くらい続いたし。

三浦「……本物？」

八幡「お前、俺の前でよくそんな事言えるよな？偽物だったら、俺が真っ先に気づいてるよ。」

三浦「その自信どっから出てくんの？」

八幡「俺がシルヴィの恋人だからだ。」

三浦「……なんか説得力あるし。」

そりや本当の事だからな。

平塚「それよりも、何故城廻が此処にいる？」

八幡「先生たち同様に話が聞きたいそうなので、此処に残ってもらいました。さて、じゃあ早速話しませんか？」

平塚「ああ、頼む。」

シルヴィア「その前に椅子を用意しなきゃね。」

めぐり「ああ、手伝うよ。」

シルヴィア「ありがとうございます。」

……ホント君たち仲良くなったよね。まだ会ってから合計で数時間しか経ってないのに。

椅子を並べ2人が座った終わった後、ようやく本題に入った。話の内容としては、転校した奴らの心情、俺への感情、俺が此処に来るまでの間に奴らとの接触、くらいだ。後は俺の推測で話すくらいだった。

八幡「……今言った全てが、俺と奴らの間にあった内容です。平塚先生や三浦は特に辛いでしようが、これが奴らの現状です。」

三浦「……葉山は……ガラードワースにいんだよね？大丈夫なの？」

八幡「今のところ俺には何もしてきてない。ただ、ガラードワースであいつを監視している奴からは、危険な思惑を持っているって報告が来ている。その思惑が上がる条件が、周りの生徒こ俺への憧れ、尊敬が引き金になってるみたいだ。」

なんか俺自身が俺凄いつて言ってるみたいでやだなこれ。

八幡「会っていないからまだ分からんが、多分直接会ったら碌な事言わないだろうな。総武でああなったのは俺のせいだとか言つてきそうだ。」

平塚「……雪ノ下と由比ヶ浜はいいが、妹の小町くんとも絶縁したと言っていたが、良かったのか？」

八幡「……前までは可愛い妹のつもりでしたけどね。今ではただの他人です。奴が何言おうと、俺は耳を傾けるつもりはありません。」
三浦「容赦ないね。自分の妹に向かって。」

八幡「そうかもしれないな。だが俺はもうあいつの事は妹だとは思っていないぞ？考えてもみろ。血の繋がった兄よりも、仲の良い他人

を取る奴を信用なんか出来るか？」

八幡「俺が甘かったのもある。いや、過保護過ぎた。今まで甘やかされてきた分、これくらいの現実見せてもいいだろ。それが俺の最後の兄心だ。」

俺の厳しい言い方に、シルヴィも黙っていた。確かに兄妹なら多少の事は許してあげるべきだろう。だが、俺はそうしなかった。納得していない部分もあるのだろう。

めぐり「復縁したりはしないの？」

八幡「あいつの気持ち次第ですね。まあ復縁したとしても、今までのようにはいきませんよ。人の気持ちは壊すのは簡単でも、直すのには莫大な時間と労力があるものですから。物では計れないものです。」

納得はしていないが、理に適っているのは認めているのだろう。でなければ黙るはずがない。

平塚「雪ノ下や由比ヶ浜はあれから何もしてきてないのか？」

八幡「ええ、音沙汰なしです。何かあれば戸塚が知らせてくれるので。」

平塚「……そうか。」

.....

平塚「……うむ、私はもう充分だよ。君の口からそれだけ聞ければ。」

めぐり「そうですね、比企谷くんは真面目ですから嘘なんて言いませんよ。今回の場合は特に。」

三浦「……あーしも。葉山が何もしてきてないなら、これ以上聞いても無駄だし。」

どうやら形は違えど納得はしてもらえたようだな。

平塚「では諸君、もう帰った方がいいだろう。外は雨だ、傘は持ってきているな？」

三浦「折りたたみ持ってきてます。」

めぐり「私も持ってきてます。」

平塚「君たち2人はどうだね？」

八幡「……………俺たちは無いですね。」

シルヴィア「持っていないです。」

平塚「……………なら比企谷、1度両親と話をしてくるといい。今のお前なら大丈夫だろう？」

……………親父と母ちゃんか。

平塚「何、心配しなくてもいい。家には私が送る。私の車は4人乗りだからな。」

シルヴィア「……………どうする？」

八幡「……………平塚先生、家までお願いします。」

平塚「……………分かった。今日は済まなかったな。」

八幡「いえ、こつちも突然きたので。」

めぐり「私も驚いたよう。いきなりシルヴィアさんがいるんだもんね！」

シルヴィア「そうですね。何が起こるか分からないものですね。」

三浦「ヒキオ、シルヴィアと城廻先輩って仲良かったん？」
八幡「いや、俺もよく分かったのだが、良いみたいだな。」

ホント最後の最後まで君たち仲良いよね？

※車内で

八幡 side

八幡「……………」

シルヴィア「むう……………」プク

八幡「……………はあ。シルヴィ、数分の辛抱なんだから我慢しろよ。」

シルヴィア「だって……………」

平塚「何が不満だというのだね？」

八幡「席ですよ。俺も後ろに乗って欲しかったんでしょ。でもそんな事したら、平塚先生の運転が荒くなるので。」

平塚「失礼な事を言うな。私はそこまで子供ではない。」

八幡「じゃあ今から後ろ移ってシルヴィと一緒にいてもいいですか？」

平塚「……………このリア充がっ!!」

……………ほらな？やっぱりこうなった。

八幡「シルヴィ、そういうわけだから家に着くまで我慢してくれ。」
シルヴィア「むうく分かったよ。」

やれやれ……………俺の彼女さんは出来る限り俺と接触していないと気が済まないみたいだな。

平塚「比企谷。お前たちの現状は分かったが、クラスの現状は知りたくないか？」

八幡「いや全然全くこれっぽっちも。」

平塚「躊躇せずに答えるところは流石だな。だが、君が残したノートの影響は大きい。今でも残っているのだよ、その爪痕が。」

1年前の事を引き摺ってる奴がまだいるのか？どんだけ成長してねえんだよ。

平塚「君はクラスに来たから分かっているとは思うが、空席がもう1つあつたはずだ。誰のか分かるか？」

八幡「知りませんよ、クラスの奴らなんてもう殆ど覚えてもいませんし。」

平塚「今の学校でもそうなのか？」

八幡「総武と界龍を一緒にしないでもらえますか。人を見た目で判断するようなボンクラ高校とは雲泥の差なので。」

平塚「そ、そうか……すまない。」

八幡「それで誰です？その文化祭か修学旅行の事を引き摺ってる奴って。」

マジで誰？

平塚「君は本当に忘れてしまったのだね……相模だよ。去年の文化祭実行委員長を務めた女子だ。」

……ああ、あの仕事ほっぽって屋上で自分可哀想な子なんですよアピールしてたあいつか。そんな奴もいたなあ。顔も思い出せねえけど。

平塚「今年の7月までは来ていたんだが、夏休みを過ぎてからは来なくなってしまうてね。もう3ヶ月も学校に来ていないのだよ。」

シルヴィア「3ヶ月……長いですね。」

平塚「そうなのだよ。さて、どうする比企谷？」

八幡「何で俺が何かする前提なんですか？」

平塚「冗談だよ。家庭訪問にも行ってみたんだが、相模自身は無返答でね、私も困っているのだよ。」

八幡「……それを俺に言っただうするんです？言っておきますけ

ど、会ってくれないか、なんて言わないでくださいよ？でっちあげの噂話を広めていたのもあいつなんですから。」

平塚「君に何かしてもらおうなんて思っていないから安心したまえ。それに、君は総武高の生徒ではない。それに他校の生徒の手を煩わせる程、私は鬼ではない。」

まあ、そうだろうな。

八幡「それならいいんです。俺もそんな奴のいる所なんて真っ平御免ですからね。」

平塚「君の感情からすればそうだろうな。だが、あれでも私の教え子だ。そのまま放っておく事は出来んからな。」

この人やつぱカッコ良すぎるだろ。何で結婚出来ないの？何で彼氏出来ないの？誰かもらってやれって！

平塚「比企谷、何か失礼な事を考えてないか？」

八幡「気のせいだと思いますよ？考えるところしたら、後ろにいる俺の彼女をどうやって宥めようって事くらいですね。」

シルヴィア「むう………」プク

八幡「意外と大変なんですからね？あんなったシルヴィのご機嫌取りをするのって。」

平塚「まあ、頑張りたまえ。」

この人、自分から席分けといて丸投げしやがった……

1年間の空白とただいま

八幡 side

そして車が走る事数分、ようやく着いた比企谷家の前で車が停まった。

平塚「さて、着いたぞ比企谷、リユースハイムさんも。比企谷は懐かしいんじゃないか？」

八幡「んー……特に思い出したりとかしてなかったので、それ程でも無いですね。平塚先生は何回か来てるのでは？」

平塚「ああ、今年は8月に来たな。君の《鳳凰星武祭》の時にな。私もその時驚いたぞ。君があんなところにいるなんて思ってもなかったからな。」

八幡「……そうですか。」

平塚「まあ早く会ってやるといい。両親もさぞ心配しているだろう。」

そうには思えないけどな。小町過保護主義者と俺放任主義者のあの両親に俺を心配する気遣いがあるとは思えない。

八幡「送ってくれてありがとうございます。行くぞシルヴィ。」
シルヴィア「うん。」

車から降りて玄関の前に立った。此処も1年ぶりだというのに、懐かしいとは感じない。

平塚「ではな比企谷、ご両親にもよろしく言っておいてくれ。」

そして平塚先生は再び車を走らせて、そのまま見えなくなっ

まった。

シルヴィア「……………此処が八幡くんの家なんだ。」

八幡「……………まあな。変わりない普通の一軒家だ。」

今家の庭の方の窓を見て気付いたが、居間に明かりが点いている。誰か居るのは確実だな。

シルヴィア「どうしたの？入らないの？」

八幡「ん？ああ、すまない。じゃあ行くか。」

そして俺は自分の家なのにも関わらず、家のインターホンを鳴らした。

比企谷母『はい、どちら様ですかー？』

そして顔を合わせるのは1年と半年ぶりの俺の母親の姿が出てきた。

八幡「久しぶりだな、母ちゃん。」

比企谷母「……………はち……………まん？」

八幡「ああ、1年前の今頃に姿を消したあんたの不良息子、比企谷八幡だ。ただいま。」

母ちゃんは何か言いたげだった。だが、何故かそれを言葉にする事なく、無理矢理抑え込んだかのように喋り出した。

比企谷母「……………」

八幡「……………家に入れてもらってもいいか？今はこの雨だから、止むまでの間でいいから世話になりたい。」

比企谷母「っ！え、ええ……………勿論いいわよ。あんたの家でもあるん

だから遠慮なんてしなくていいよ。」

詰まった喋り方だった。何？そんなに帰って来て欲しくなかったのか？それならそれでハッキリ言えばいいものを。

――比企谷家内――

八幡「シルヴィ、まあ大体予想してる事は分かるが、俺の母親だ。」
シルヴィア「初めまして、息子さんの八幡くんとお付き合いをさせて頂いております、シルヴィア・リユーネハイムです。よろしく願います。」

比企谷母「ご、ご丁寧にありがとうございます。八幡の……は、母です。息子がいつもお世話になっていきます。」

シルヴィア「いえそんな！最高の恋人です！」

比企谷母「そ、そうですか……」

……何で『母』つて言う部分を洩ったんだ？そんなに嫌だったのか？

八幡「シルヴィ、暫く俺の部屋で待っててくれないか？2階に上がったら札があるからすぐに分かる。手洗いは階段の左を真っ直ぐ行って左側の扉だ。（母ちゃんと話したい。少し待っててくれないか？）」

シルヴィア「うん、分かった！その間八幡くんの部屋を見てるね！（いいよ。大事な事だから構わないよ。）」

八幡「あんまり覗き見とかするなよ？（すまん。待たせる事になる。）」

シルヴィア「そんな事しないよ。じゃあ待ってるね♪（大丈夫！頑張ってるね♪）」

シルヴィと会話をし終わったら、今から出て2階 へ上がる音が聞

こえた。

もう大丈夫だな。

八幡「……………少し話さないか？真面目な話も含めて。」

比企谷母「……………今更私に何を話すの？」

八幡「向こうの小町の事と、今後の俺の事だ。」

比企谷母「……………分かったわ。」

母ちゃんの了解を得て、俺たちは居間にある食卓へと座った。

八幡「んじゃあ、俺の事から話そうか。小町の方はヘビーだからな。最初に話すには重過ぎるからな。」

比企谷母「小町が何かしたのかい？」

八幡「簡単に言うとな、だがそれは後だ。俺の事から話したい。」

比企谷母「……………話していいよ。」

八幡「そんじゃあ先ずは、1年間居なくなつて済まなかった。」

比企谷母「……………え？」

なんか驚くところあつたか？

八幡「まあ母ちゃんや親父からすればどうでもよかったかもしれんが、一応な。」

比企谷母「……………何で？」

八幡「？」

比企谷母「何で……………あんたが謝るの？」

八幡「いや、突然家出みたいなのしちまつたからな。そりや謝るだら。」

比企谷母「……………」

八幡「続けるぞ？知つてるとは思うが、俺は今六花の界龍第七学院って所に在学して寮住まいだ。向こうでは問題なく過ごせているから、暮らしには困つてない。友だちも出来たし、さっき紹介した恋

人も出来た。心配……なんてするわけないか。」

八幡「近況報告？みたいなもんだ。」

実際、俺から母ちゃんに言う事なんて何も無いからな。心配かけ
たつつつても、あつちは何も思つてねえだろうし。

比企谷母「……………それだけ？」

八幡「え？」

比企谷母「それだけなの？他には何も無いの？」

八幡「そう言われても……何もないが？」

比企谷母「嘘に決まつてるわ!!」バンツ!!

八幡「……………」

おいおい、突然何だよ？つていうか何で嘘だつて思うんだ？

八幡「……………何で母ちゃんはそう思うんだ？」

比企谷母「何で……何でそんな平気な顔で私のことを母親だなんて
呼べるのよ!?何で平気な顔でこの家に帰つて来たのよ!?あんたに
とつて私たち家族なんてどうでもいい存在でしょ!?何で!？」

八幡「……………1つ目のだが、俺の母親はあんたじゃないからだか
？他に誰がいるんだ？2つ目は、此処が俺の家だからだ。3つ目に関
しては意味が分からんのだが？何故俺が家族をどうでもいいって思
えるんだ？」

比企谷母「そんなの上っ面でしょ？1年間あんたが居なくなつて私
も旦那もよく考えたわ。何で居なくなつたのかつて……………答えはす
ぐに出たわ。この家、家族に愛想尽かしたんだつて！そんな理由でも
なきや、あんたがこの家から出て行くはずないじゃない!!」

八幡「……………」

比企谷母「すぐに帰つてくると思ったわよ。あんたの事だから、す
ぐに帰つてくると思つてた。でも、何日、何週、何ヶ月経つても帰つ
てこなかった……………これだけの間行方が分からず、学校側からも転校

したなんて聞いても納得できないわよ!!」

比企谷母「あんたが居なくなってから段々喪失感が湧いてきたわ。いつも帰ってきたら寝てるか本読んでるあんたの姿もなければ、休みの日には帰って来た時の『ただいま』の返事もないし、偶に作る料理だつてあんたがいない事を忘れて一人分多く作っちゃう。分かっているのよ、自分勝手だつて!」ポロポロ

比企谷母「ずっとほったらかしだった息子に対して急に寂しさを持つのよ? あんたからしてみれば気持ち悪いと思う筈よ。でも……でも……例え嫌われていても、1年間も訳の分からないまま会えなかったら辛いよ!!……うつ……うつ……」ポロポロ

……俺は、人生で初めて母ちゃんの本音を聞いた気がする。そりや俺が母ちゃんと会話する事なんて、まず滅多に無かったからだ。もつと言え、今までの俺があんな感じだから、家族にも避けられていたのかもしれないが。

八幡「……そうだな、少し整理するか。俺がこの家から居なくなつたのは、別に家族が嫌いだからとかそんな理由じゃない。学校側から俺がいじめを受けていた事は聞いてるか?」

比企谷母「……グスツ……ええ。」

八幡「その原因もあつて俺は後天的に星脈世代になつた。そしてそれから、横浜でとある人と2週間生活して、六花に行った。」

八幡「母ちゃんの言う愛想を尽かしたんじゃない。それに、俺の家族は俺に愛想を振りまく程暇な奴らじゃないしな。」

八幡「俺も悪かった。親父や母ちゃんは、俺の事なんて気にしない、すぐに忘れると思っていた。けど、母ちゃんはそんな風に思ってたんだな。」

比企谷母「……当たり前よ。あんたの事を放っておいたのは認めるけど、こんなに長い間居なくなったら、私でも辛いわよ。」

まあ、その気持ちは分からなくもないな。シルヴィと離れ離れに

なつてた期間は確かにキツかった。帰ってきた時、その反動もデカかったしな。

比企谷母「……………じゃああんたは、私の事を……………まだ母親だと呼べるの？」

八幡「当たり前だろ？俺は別に両親を恨んでいるわけじゃないからな。」

小町はどうでもいいけどな。けど、それは後でだ。

比企谷母「…………グスツ…うつ…………うつ…………」ポロポロ

八幡「俺、まだ言われてなかったな。帰ってきたんだ、言ってもらってもいいよな？」

八幡「ただいま、母ちゃん。」

比企谷母「…………お帰り、八幡！」ギユツ！

俺は、赤ん坊の頃以来に母ちゃんから抱き締められた。

親子のケジメと我慢

八幡 side

八幡「落ち着いたか？」

比企谷母「……ええ、ありがとう。」

今まで母ちゃんと話すことなんて無かったから、少しギスギスするかと思ったが、そうでもなかったな。

比企谷母「それで八幡、聞かせてくれる？小町がそっちで何をしたのか。」

八幡「俺はいいが、母ちゃんからしてみれば辛い話でしかないぞ？いいのか？」

比企谷母「ええ、もう後悔なんてしたくないもの。その為にも聞かせて。」

この話を聞いたら後悔しかないと思うんだが……覚悟があるなら、いいか。

八幡「……分かった、だが予め言っておく。この話を聞いたら後悔しか残らないと思う。もし辛かったら言ってくれ、すぐにやめる。」

比企谷母「……うん、分かった。」

八幡「よし、じゃあ話すぞ。」

そして俺は小町が六花でした事を包み隠さず母ちゃんに話した。勿論兄妹の縁を切った事もだ。最初こそ辛そうに聞いていたが、後になるにつれて納得したような顔に変わっていた。

八幡「……これが小町の今だ。俺が関わったのはこの日が最後だか

ら、今どう思っているのかは分からない。」

比企谷母「……そう、あの子が何で急に六花に行きたいなんて言い出したのかようやく分かったわ。そういう事だったのね。」

八幡「何も言わないのか？ 息子が娘に対して縁を切るなんて言ったんだぞ。」

比企谷母「私に言える事なんて何も無いわよ。八幡、あんた私から何か教わった事ある？ 道徳的なものでよ。」

八幡「……………」

比企谷母「でしよう？ 私もそんな記憶ないもの。だからあんたに今更教え直すなんて事出来ないわよ。」

母ちゃんが俺と小町を対等に見るのはこれが初めてだろうな。

比企谷母「私から言う事は何もないわ。八幡、あんたはあるんじゃないの？ 例えば小町が此処に帰ってきたらどうして欲しいとか。」

……やっぱ母親って事か、俺の考えてる事は分かるみたいだな。同じDNAが入ってるだけあるな。

八幡「ああ。もし冬の長期帰省で小町が来たら、小町の態度次第でいい。出来るだけ優しくしてくれないか？ 俺も小町に対して過保護だったのは否定出来ないからな。だが、兄妹の縁を切った傷はたった半年じゃ消えないだろう。少しでもケアをしてくれないか？」

比企谷母「……絶縁したとしても妹は大切なの？」

八幡「そんなのじゃない。態度次第でいいんだ、何ともないようだったら何もなくていい。もし訳ありみたいだったら、ケアして欲しい。」

比企谷母「……………いや、私はそんな事しない。」

八幡「どうしてだ？」

比企谷母「こういうのはズルいけど、あんたは何年も前からこれを味わってるんでしょ？ なら、少しは小町にも人生の厳しさを教えてあ

げなきやね。」

八幡「……手厳しいな。」

比企谷母「私たちはあの子を自由にさせ過ぎたからね。あんたと同じ血が流れてるんだからこれくらい耐えられるでしょう？」

八幡「……そうか、まあ母ちゃんがそう決めたならそれでいい。所詮は頼みだからな、命令じゃない。」

まあこれで少しは俺の道を辿ることが出来るだろう。言っておくが小町、こんな苦しみ俺からしてみれば序の口だからな？

比企谷母「話は終わり？」

八幡「ん？ああ。」

比企谷母「分かった。じゃあお父さんには私から言っておく。あんたは待たせてるあの子のところに行ってあげな。」

八幡「そうだったな。早く行かねえと段々要求する事が過激になってくるからな。」

そして俺は居間を出て2階の俺の部屋へと向かった。

——八幡の部屋——

八幡「シルヴィ、入るぞ。」

久しぶりの我が部屋だな。しかし改めて眺めると何もないな。本とパソコンと机とベッドくらいしかないな。後は服を収納する棚くらいか。

そして……

八幡「………何やってんだ？」

シルヴィア「うう／＼／／／／／」

俺の布団に入って丸まっている俺の彼女。

八幡「いや、ホント純粹に何やってんの？睡魔が襲ってきたの？それとも我慢出来なかったのか？」

シルヴィア「……我慢出来なかったです／＼／」

八幡「正直でよろしい。それで？」

シルヴィア「……部屋に入ってからは何ともなかったんだけど、時間が経つにつれて段々寂しくなって、そしたら八幡くんのベッドがあつたから、それにくるまったらずいぶん少しは紛れるんじゃないかなって思ってた入ったら、思った以上に効果抜群で少しこうしてようと思ったら……八幡くんが来ました／＼／／／」

そうでしたか……そうだったんですね。いや、これは待たせた俺も悪いな。

八幡「待たせて悪かったな。何かして欲しい事はあるか？」

シルヴィア「……じゃあ頭ナデナデして？」

シルヴィアは目から下を布団に隠してそう言った。ぶっちゃけ保護欲を掻き立てられる。

八幡「はいよ、了解しました。お姫様。」ナデナデ

シルヴィア「ん……えへへ♪」

相変わらず隠したままだが、嬉しそうに目を細めていた。

シルヴィア「八幡くんって本好きなの？」

八幡「前まではよく読んでたな、だが今はそんなに読む機会が無い。前はラノベもよく読んでたな。」

シルヴィア「随分いっぱいあるけど、殆どラノベだったね。」

八幡「まあ好きだったからな。俺は後天性の星脈世代だからなる前

までは憧れてたんだよ。」

俺もそうなってみたいとも思っていたが、まさか本当になっちまうとは思ってなかったな。

シルヴィア「ねねっ！さつき廊下で猫ちゃんを見たんだけど、飼ってるの？」

八幡「ああ、名前はカマクラっていつてな。血統書付きのサバトラって種の猫でオスだ。」

シルヴィア「カマクラくんかあ。ねえ、触っても大丈夫かな？」

八幡「大丈夫だと思うぞ。」

シルヴィア「じゃあ触らせて！カマクラちゃんと触れ合いたい！」

八幡「んじや行くか。」

カマクラよ、久しぶりに会うがお前をモフリに行く奴がいるから気をつけろよ。（既に手遅れ）

お手伝いと夕食

シルヴィア side

シルヴィア「あぁ〜楽しかった♪」

八幡「流石……って言った方がいいのか？カマクラが痙攣してるんだが……」

カマクラ「ニヤア……」ピクピク

カマクラくん甘えてくるからつついっつい撫でちゃうんだよね。カマクラくんは人懐っこいって覚えておこうかな。

八幡「……そろそろ腹減らないか？」

シルヴィア「そういえばお昼がパンだったからね。確かに減ってるかも。」

八幡「母ちゃんがまだ作ってなけりや俺がなんか作る。」

シルヴィア「じゃあその時は私も手伝うからね！」

八幡「ゆつくりしててもいいんだぞ？一応客なんだから。」

シルヴィア「ううん、私がしたいからするの！八幡くんと一緒に何かするの好きだしね！」

それに、義母さんに良いところも見せられるかもだしね！

八幡「フツ……分かったよ、んじゃあ下に降りるか。カマクラ、平気になったら下に降りて来いよ。」

カマクラ「ニヤ〜……」ピクピク

私たちはカマクラくんを部屋に残して下の居間へと向かった。カマクラくんどうしたのかな？

――居間――

八幡「……母ちゃん、飯って作ってるか？ないなら俺が作るけど。」
比企谷母「ん？もう作ってるからゆっくりしてていいよ。シルヴィアさんも。」

シルヴィア「はい……」

うう……折角の八幡くんと共同作業出来ると思ってたのにい……残念。

八幡「……なんか母ちゃんの料理姿見んの久しぶりだな。ざっと3～4年ぶりか？」

シルヴィア「え!? 3～4年!?!」

八幡「ああ。俺部屋で本読んでるかゲームしてる事が多かったから、家族が料理してる姿ってあんま見てねえんだ。」

比企谷母「此処にいてもあんたは見なかったでしょ？寝転んでゴロゴロしてたんだから。少しは手伝えって思ったよ。」

八幡「なら手伝おうか？」

比企谷母「……じゃあ食器とご飯盛り付けてくれる？他に出来ることがあったらやつといていいから。」

八幡「分かった……そんで今何を作ってるんだ？」

比企谷母「？カツだけど。」

八幡「よし分かった。すぐ終わらせてそっちを手伝いに行く。だからカツはまだ入れないでくれ。」

……八幡くん、私だけでなくお母さんの自信も削いだらダメだよ。

比企谷母「……こう言ったらアレだけど、あんた本当に八幡？目と耳を本当に疑うよ。」

八幡「失礼だな。俺が自発的に手伝いをする事がそんなに変か？……いや、以前の俺しか知らない母ちゃんにとっては充分変か。」

八幡「でも手伝うくらいいいだろ？それとも邪魔か？」

比企谷母「……………あんた、不味くしたら最初から作ってもらうからね？」

八幡「逆に上等だ。」

……………八幡くん、挑発もダメだよ。

シルヴィア side out

比企谷母 side

我が息子ながら手伝ってくれるのは良いけど、こんなにも成長してたなんてね。背丈はそんなに変わってないけど、八幡自身から伝わる頼もしさや安心感は以前と比べても全くの別人。

というか、カツを揚げるのやめろって言われたら私のやる事がないんだけど。

八幡「カツってもうパン粉付けたか？」

比企谷母「つけたけど？」

八幡「なら粉チーズあるか？あるなら少し足してもつかい混ぜ直してくれ。」

……………カツにチーズ？

比企谷母「それなら後にスライスでも乗せたらいいんじゃないの？」

八幡「味をつけるのと乗せるのでは意味が全く違うんだぜ？」

意味深い言い方ね。まあ粉チーズならあるけど、本当にこれで美味しくなるのかしら？

八幡「終わったらそのまま揚げていいぞ。時間はいつもと同じでい

い。」

……いつの間にか料理教室みたいになってるわね。

……でも。

八幡「さて、俺は千切りでもするか。」

比企谷母「あんた包丁なんて使えるの？」

八幡「ああ、あっちではよく使ってるからな。料理する時に。」

比企谷母「……自炊してるんだ。」

八幡「逆に今では控えたいところだが、それをさせてくれない厄介な存在が3人くらいいる。」

比企谷母「ふふつ、何よそれ。」

……何だか良いわね、息子とこんな事をするのも。

――10分後――

八幡「シルヴィ、出来たぞ。」

シルヴィア「出来たんだね？匂いでも分かってたけど、トンカツだね。美味しそう♪」

八幡「カマクラはいるのか？」

シルヴィア「ううん、まだ上で寝てるんじゃないかな？」

八幡「そうか、じゃあ好きな場所に座ってくれ。」

シルヴィア「八幡くんの隣が良いです♪」

……付き合ってるのはさつき聞いたけど、こんなに仲良しなのね。

シルヴィア「あつ、八幡くんご飯持ってきて来るね。」

八幡「おお頼む。後みず「お水も持ってきてから。」おつ、サンキュー。」

…………息ピッタリ過ぎじゃない。

シルヴィア「よしっ！全員分のご飯とお水も持ってきたし、八幡くんもカツとソース持ってきてくれたから、OKだよ。」

八幡「よし。それじゃ、いただきます。」

シルヴィア「いただきます♪」

比企谷母「あんたが音頭をとるんだ。」…いただきます。」

早速私は、八幡のレシピ通りに作ったカツを食べてみた。外はサクサク、中は肉厚の良さが出ていたけど、もう1つ。チーズの風味が程良くついていた。

比企谷母「……美味しい。」

シルヴィア「美味しいっ♪八幡くん、チーズを入れたの？」

八幡「いや、パン粉と一緒に粉チーズを混ぜたんだ。隠し味はソースに集中しがちだが、ちゃんとカツの方にも使えるからな。結構広く知れてはいるが、今回は粉チーズを使ったカツを作ってみた。」

あんたは将来何になりたいのよ？

八幡「…………うん、美味しいな。これは界龍では作れないな。シルヴィと一緒にのしただけにしておこう。」

シルヴィア「八幡くん、私にも作り方教えてね！私も覚えたいから！」

八幡「おう、その時は一緒に作るか。」

シルヴィア「うん♪」

…………八幡、あんたは良い友達、良い彼女に巡り会えたようね。

雑談とフラグ

八幡 side

夕食も食べ終わって食器洗いをして、お茶でも飲みながら、俺は学校での過ごし方や趣味、放課後、友達、休日の日、シルヴィと何をしているのか等を母ちゃんから色々聞かれた。

俺としても別に答えられない理由が無いから話したけど、その度に母ちゃんは優しくそんな笑みや嬉しそうな笑みを浮かべた。

どう思っているのか分からないが、多分嬉しいんだと思う。

ついでに言うと、カマクラも食器洗いの時に降りてきて餌を食べ、食べ終わるとシルヴィの膝に乗りかかり丸まっていた。

撫でられている時は嬉しように喉を鳴らしたりもしていた。

比企谷母「にしても驚くばかりだわ。あんたが六花でそんな風に過ごしてるなんて。休みの日にも外に出てるんでしょ？」

八幡「ああ。でもその度にサインやら握手を求められるのも少しの頻度だがあるから……隣にシルヴィがいたらマジでヤバイ。」

シルヴィア「未だにいるよね〜ファンからの握手とかサイン。でもそれよりも厄介なのがいるんですよ。」

比企谷母「？それって？」

シルヴィア「ストーリーカーとか私と八幡くんが付き合ってるのをよく思っていない人たちからの八幡くんに対する罵声です。多いわけじゃないんですけど、偶にいますよ。」

八幡「俺は別にいいけどな。要は早く別れろよって言いたいんだろ。俺が付き合えたんだから、俺もって奴がいるんだろ。」

シルヴィア「そんな人私お断りだよ！絶対嫌だよ！もし八幡くんと別れて他の人と付き合うくらいなら、もう一回八幡くんに告白するもん！」

いや、俺も全く同じ意見。ていうか別れたその瞬間に告白するまである。他の奴らに告白させる暇なんて絶対やらねえ。つていうか別れるとか絶対にないな。

比企谷母「というか別れる気あるの？」

2人「全くない（ありません。）」

おお、見事にハモった。

シルヴィア「私が八幡くんと別れるなんて天地がひっくり返ってもあり得ません!!それに……まさかとは思いますが、別れるなんて言いませんよね？」

比企谷母「言うわけないじゃない。こんな可愛い義娘が出来るかも知れないのに。」

シルヴィア「出来るかも知ありません!絶対なってみせます!!」

比企谷母「言い切るのね……流石、と言っていいのかしら？」

八幡「母ちゃんも知ってんだろ?俺が結婚を前提に付き合ってるって言ったの。」

比企谷母「知ってるけど、ホントにあれは驚いたわ。息子があんな発言するんだから。」

まあ、確かに衝撃発言だったろうな。でも自然と恥ずかしさは無かったんだよな。

シルヴィア「私も驚きました///まさかあの場所であんな事言うとは思ってませんでしたから///」

比企谷母「そうよね……結婚を前提のお付き合いをしているつもりって言った挙句に指輪まで出すんだからたまったものじゃないわよ。女にとって最高の殺し文句じゃない。」

八幡「まあ本当の事だしな、今更否定する気もない。」

比企谷母（この子はまた…………シルヴィアちゃんがもつと惚れ込んじゃうじゃないの。まあ好都合なんでしょうけど。）

比企谷母「……………そういえば八幡。星武祭見たけど、何であんなに強いわけ？うちではあんなにだらけてたあんたが、急にあそこまで強くなれるなんて想像出来ないわ。」

八幡「ああ、その事か。さっきも言ったが、1年前の俺がいなくなっただけの日から2週間、俺は横浜である人と一緒にいた。その人は俺の通ってる学院のOGでな、武術と星仙術の達人でもある人だ。俺はその人の弟子になって2週間世話になってた。その人から武術を教わって自分なりにアレンジした結果が今年の星武祭ってわけだ。」

シルヴィア「私も体術は嗜んでるけど、八幡くん程じゃないかな。あんな動き出来ないよ。滑らかだよね！」

八幡「俺の拳法は最小限で精密な動きが特徴だからな。俺にとっても使い勝手が良い。」

比企谷母「あんた、本当にとんでもないことしてたのね。武術を教わっていたなんて…………」

あの頃は自分を強くするために必死だったからな。

比企谷母「ホント、お父さんが見たら別人だと思われるわよ。あんたがこんなイケメンになって世界の歌姫を彼女にして帰ってきたんだから。帰ってきた時の反応が楽しみだわ。」

八幡「おい、それ絶対今帰って来るパターンになるから止めろよ。本当に今帰ってきたらどうすんだよ。」

ガチャッ！

勢い良く玄関の扉が開く音がした。

八幡「……………母ちゃん、早速フラグ建てるなよ。まさかの秒で建て

ちやいますか？」

比企谷母「……ごめん、私もこうなるとは全く予想してなかったわ。あいつも空気読めるのか読めないのか分からない人わね。」

シルヴィア「もしかして………お義父様？」

八幡「ああ、十中八九親父だろうな。」

比企谷父「おい!!八幡が帰ってるってどうい………う事………なんだ………」

八幡「こういう事だ、ただいま。」

シルヴィア「お邪魔してます。」ペコッ

比企谷父「………なあ、本当にどういう事？」

まあ、そうなりますよね。

迷いと子への愛情

シルヴィア side

八幡くんのお義父様が帰ってきてから、何ともいえない雰囲気になったけど、今は落ち着いている。

八幡くんとお義母様は八幡くんと妹さんの今を説明してお義父様の様子を伺っている。勿論、私の関係も話した。

そして今のお義父様は……

比企谷父「……………」

言葉を発していなかった。というよりも気絶？していた。私と八幡くんの関係を最後に話してからかな？何も言わなくなっちゃったのは。

比企谷母「……あんた、そろそろ再起動してくれない？知ってんでしょ？八幡とシルヴィアちゃんが付き合ってるのは。」

比企谷父「し、知ってはいたが、まさか本当だったとは……」

八幡「おい、俺が冗談でシルヴィと付き合ってるなんてほざくと思っていたのか？」

比企谷父「い、いやそんなつもりはないが……事実を再確認して驚いちまった。」

八幡「ならいいけどよ。」

比企谷母「それで、あんたはどうなの？小町の事はどうするの？」

比企谷父「…………正直まだ混乱してる。すぐには出せない。八幡、しつこいようだが、それは本当なのか？」

八幡「ああ、本当だ。証人もいるしな。」

比企谷父「……そうか、そうなのか……………」

やっぱりショックなんだよね。自分の娘があんな事したって教えられたらこうなっちゃうよね。

比企谷母「さつきも言ったけど、私は小町に優しくする気なんてもう無いよ。八幡はこの辛さを数年も耐えてきたんだから、小町にだって出来ると思ってるよ。」

比企谷父「……よく割り切ってるな。俺はすぐに決断できそうになる。」

比企谷母「八幡からあんなに聞けばそうなるわよ。小町のやった事を聞いて何も思わなかったの？」

比企谷父「そういうわけじゃないが……」

比企谷母「私もショックだったわよ。自分の子があんな事するなんて思ってもなかったわよ。でも、私たちはそれを受け入れなきゃいけないでしょ？」

比企谷母「2人は私たちの子供でも、世間ではもう大人扱いされる歳になるのよ。いつまでも甘い扱いなんて出来ないわ。だから私はもう小町を甘やかさないって決めたの。」

比企谷父「……………」

……………なんか、ちよつと居辛くなってきたな。

八幡「親父、母ちゃん。長くなりそうなら俺たちは部屋に戻ってるが、どうする？」

比企谷母「……そうだね。じゃあ八幡、お風呂を沸かしてシルヴィアちゃんを先に入れてあげてくれる？ 私とお父さんはまだ時間が掛かりそうだからさ。」

八幡「分かった。じゃあシルヴィ、ついてきてくれ。」
シルヴィア「う、うん……失礼しました。」

——八幡の部屋——

八幡「今風呂を沸かしてきたから20分くらいでできると思う。」
シルヴィア「うん、どうもありがとう。」

八幡「しかし、予想どおりの展開になったな。やっぱり親父は迷ったか。小町には甘ちゃんだったからな。」

シルヴィア「でも、流星にああなるよ。自分たちが育てた子供なんだから。」

八幡「小町にはそうなるだろうな、俺は両親と過ごした記憶があまり無いから、強くは言えないがな。」

シルヴィア「八幡くん……………」

八幡「いや、悪い。忘れてくれ。」

シルヴィア「でも、その代わり八幡くんは、自分の子供に対して深い愛情を注げるんじゃないかな？だってそうでしょ？親からの愛情が薄かったらその分、子供への愛情が深くなるんじゃない？」

八幡「……………」

シルヴィア「お義母様と再会して八幡くんも分かてるはずでしょ？ちゃんと愛情はあったんだって。」

八幡「……………そうかもな。甘くはしたくないが、愛情は深く注ぎたいよな。」

シルヴィア「うん、全世界の夫婦がそう思ってるはずだよ。」

.....!!?
あれ!? 私たち今とんでもない話しちやってる!!

八幡 「?どうしたシルヴィア?」

シルヴィア 「うえ!?!う、ううん! 別になんでもないよ!!?」

八幡「……………ならいいが。」

ままま、まさか私たちの、こここ子供の話をしちゃうなんてえ／＼

もう!!早くお風呂沸いてえ〜!／／／／／

調べ物と妄想

八幡 side

あれから少しして無事に風呂も沸いたから先にシルヴィを行かせたが、何故かそそくさで行ってしまった。それも顔をかなり赤くしながら。

俺たち、顔を赤くするような話してたか？

つと、それよりも……

八幡「東京都……港区……んーこれだけじゃあ何にも繋がらんな。精々なんかあれば良いんだが、八咫鳥、何かないのか？」

八咫鳥『使役して搜索してもらった鳥たちによれば金刀比羅宮が怪しいそう。何でもそこから神聖なものを感じるらしい。』

八幡「金刀比羅宮ねえ……それだけでも充分だ。明日そこへ行こうと思う。」

八咫鳥『そうか……だが主人よ、気をつけるのだぞ。相手は朱雀殿と玄武殿と同格の存在。油断は禁物だ。』

分かっているよそのくらい。

八幡「にしても、この部屋も久しぶりだが何もないな。ラノベとベッドしかねえな。こんなに物少なかったっけか？」

今じゃ見なくなったな。自分が超人的になっちまったからか。でも、あんまそんな感じはしないんだよな。自分が星脈世代になったのにまるで実感がない。

八幡「少し前まで普通の人間だったのにな……何で星脈世代にな

れたんだろうか……まあいいか。」

なれたからなれた。それでいい。考えで分からない事をいくら考えても無駄だしな。

八幡「……しかし、1人になると暇になるな。俺1人の時っていつも何してたっけ？」

……久しぶりにラノベでも読むか。何があったっけ？おつ、SA
○あるじゃん。懐かしいからこれ読もつと。

八幡 side out
シルヴィア side

ブクブクブクブク……

シルヴィア「うう……もうどうしたらいいの!? 顔が凄く熱いよおー! もう30分くらい経ってるのに、この熱さは何!?」

私はさつきまで八幡くんと会話していた内容の事で顔の熱さが全く引かなかった。それどころか、今入っているお風呂の温度よりも高い自信がある。

シルヴィア「何で気づかなかったんだろう。私たちの……こ、子供の話をするなんて……最初は無意識だったけど、意識すると凄く恥ずかしいよお／＼／＼／＼」

シルヴィア「でも……私と八幡くんの子供かぁ……男の子だったらきつと八幡くんに似るんだろうなあ。んゝでも女の子だったら私かな? それとも……」

この時私は何故か八幡くんと私の子供像で妄想していた。男の子

だったら八幡くん似、女の子だったら私似という、スタンダードだけど何だか嬉しくなってしまう。

シルヴィア「性格は……やっぱり優しい感じが良いかな。それこそ八幡くんのような優しさを持つて欲しいよねえ。名前も音楽っぽい名前とか良いかもっ♪」

それから私は羞恥心を一切忘れて、私と八幡くんの子供像を一生懸命描いていた。

シルヴィア「でも、もし双子だったらどっちがお兄ちゃんお姉ちゃんになるのかな？男の子2人の可能性もあるし、女の子の可能性もあるけど、私は男の子と女の子両方欲しいなあ。良いバランス取れそうだしね。」

そんなこんなで、私たちの子供像と未来図を妄想しながらお風呂の時間を過ごしていたけど、実際にお風呂に浸かっていた時間は20分くらいだからそんなに時間は経ってなかった。

明日の予定と誕生日

八幡 side

シルヴィも上がってから俺も入り、客人を待たせないように俺も早め上がった。親父たちはまだ話してるだろうから俺の部屋で暇を潰すのが一番だろう。

今俺とシルヴィは、寝る時用のジャージを着ている。(シルヴィは俺の総武高の緑のジャージ)

何でシルヴィが俺のジャージを着てるのかというと、他にパジャマがわりになるものが無かったからだ。何故かシルヴィは嬉しそうだった。

八幡「なあシルヴィ、俺は明日東京の港区にある金刀比羅宮に行くうと思ってるが、シルヴィは他に何処あるか？」

シルヴィア「それは東京でって事？」

八幡「いや、千葉でも東京でもどっちでもいいぞ。やりたい事があるだけだからな。」

シルヴィア「うーん……来た事はあってもそこまで回れたわけじゃないからそこまでよく知らないんだ。だから八幡くんにお任せかな。」

八幡「東京だとしたら……やっぱ渋谷、浅草、秋葉……は違うな。お台場、スカイツリー、色んな所があるな。」

シルヴィア「ああ、浅草と渋谷とスカイツリーは行ってみたいな。スカイツリーは出来れば登ってみたい！浅草はお店とか風景とかを楽しむたいなあ。渋谷は色んなお店があるんだっけ？」

八幡「まあどれも概ね合ってるが、何処も人がかなり集まる所だぞ？いいのか？」

シルヴィア「うん♪だって八幡くんが守ってくれるでしょ？」

それは当然だな。他の男がシルヴィに寄り付かないためにも。

八幡「渋谷にはイヤホンとヘッドホンの専門店もあるから、寄って見るか？」

シルヴィア「おつ、良い事聞いちゃった♪それじゃあ明日、八幡くんの用事が終わったら行ってみよっか！」

八幡「なら俺の選んでくれるか？」

シルヴィア「勿論だよ♪」ニコッ

シルヴィは嬉しそうに笑った。俺もそうだが、一緒にいたり、出かけられるのは嬉しいからな。

八幡「回る順番はどうする？」

シルヴィア「じゃあ……八幡くんの寄りたい金刀比羅宮は最初として、多分ヘッドホンを選ぶの長くなっちゃうと思うから先に渋谷でその後に浅草かな。」

八幡「分かった。時間が余ったらどっかに寄るか。確か出発は午後4時だったか？」

シルヴィア「うん。だから時間はあると思うよ。」

八幡「俺が行きたいのは神社だから、実際に家を出るのは8時半くらいになるが……大丈夫か？」

シルヴィア「平気だよ。電車では1時間くらいかかるの？」

八幡「まあな。だから時間は有効に使いたい。」

シルヴィア「私は早く行く事に問題は無いけど、そんなに早く行って神社は開いてるの？」

八幡「あー……俺が行くのは参拝目的じゃないんだ。」

俺はシルヴィに金刀比羅宮へ行く理由を説明した。もしかしたら強大な力の持ち主がいるかもしれないから行ってみたいと。

シルヴィア「そうだったんだ。索冥と同じ存在がいるかもしれない

んだね?」

八幡「まあそういうわけだ。けど別に無理してついてこなくてもいいからな?」

シルヴィア「ついていくもん♪八幡くんと一緒にいたいし、多分だけれど、その守護霊?と会話する時は八幡くん冷たい地面に倒れていることになっちゃうから、その時は私が守ってあげるよ。」

なんて優しい彼女だ。やっぱり俺、シルヴィと付き合えて本当に良かったわ。

だからこそ、これは必要だよな。

八幡「シルヴィ、ちよつといいか?」

シルヴィア「ん?なに?」

八幡「1日遅れだが、誕生日おめでとう。昨日は10月1日だろ。」

シルヴィア「え……覚えててくれたの?」

八幡「当たり前だろう?忘れるわけないだろ。昨日はちよつとそんな雰囲気じゃなかったからな。今日にした。」

そして俺は細長の包みを出した。

八幡「これも『フラワーハウス』で作った物だから安物だが、受け取ってくれるか？」

シルヴィア「勿論だよ。開けていい？」

八幡「ああ。」

シルヴィアが中を開けると、中からは紫メインのピンクが混ざった結晶が埋め込まれたネックレスが入っていた。

八幡「花はナデシコとブーゲンビリアの2つを使ってる。花言葉だが、ナデシコが【長く続く愛情】【純愛】【純粋な愛】【いつも愛して】【女性の美】。ブーゲンビリアが【貴方は魅力に満ちている】っていう風になっている。」

選ぶ時、あの店員がキラキラした目で見ながらついてきてたなあ……作る時もマジでじーっと見つめるもんだから、やり辛かったな。

シルヴィア「綺麗……」

八幡「気に入ってくれたか？」

シルヴィア「勿論だよ。今付けたいけど、明日まで我慢する。」

八幡「そうか……」

まあ、ジャージ姿で付けてもいいが、そこまで映えないか。

シルヴィア「ねえ八幡くん。私今日は何処で寝たらいいかな？」

八幡「んー普通に考えて小町の部屋になるが、俺はあまりそうしたくはない。」

シルヴィア「ならさ、私は八幡くんと一緒に寝たい。このベッドじゃあ狭いと思うけど、いつも通り一緒に。」

……まあ、いつも通りだからな。

八幡「いいぞ。眠いのか？」

シルヴィア「ちよつとだけ。でも1番は君を感じていたいから。」

八幡「……そうか。なら一緒に寝るか。」

シルヴィア「……うん。」

俺たちはそのままベッドに入って、向かい合って少し明日の話をし
て、話を終えたら、シルヴィは俺に寄り添ってきたから、俺はシルヴィ
の背に手を回して寝た。

決心つかず

比企谷母 side

比企谷母「……………それで、決心はついた？自分はどうするのか。」

比企谷父「……………いや、まだだ。」

こいつつたら、もう4時間は経ってるわよ？八幡とシルヴィアちゃんはまだもう2階で寝てるでしょうし、カマクラもない。誰も邪魔をする存在が居ないのにまだなの!?

比企谷母「あんたは一体何に悩んでるわけ？そんなに悩む必要があるの？」

比企谷父「あるに決まってるだろ！お前は八幡が言った事を嘘だと思わないのか!？」

比企谷母「思うわけじゃないじゃない。あの子の目を見て話を聞けば分かるわよ。嘘なんて生半可で軽い気持ちで言ってる事じゃないってことくらい。」

私だって最初は驚いたわよ。でも八幡の喋りや声、特に目を見たり聞いたりしたらすぐに分かった。それに、昔の八幡なら疑ってかもしれないけど、今の八幡がそんな意味のない事をするような人間性があるとは思えない。

比企谷母「私だって簡単に決めたわけじゃないわよ。小町のした事を考えれば当然よ。私は……………うん、私たちはあの子に過保護過ぎたんだもの。八幡もそうだけど、小町ももう甘えられるような年でもないわ。ならこの際に親として1人立ちさせてあげるべきじゃないの？」

比企谷父「それはそうだが……………」

比企谷母「それに、八幡が絶縁って言う程なのよ？あんたも知ってるでしょ？八幡も小町を甘やかしてたことくらい。あんたも訳を聞いたんだから、気持ちが分からないわけじゃないでしょ？」

比企谷母「それとも何？小町はやっぱり特別なの？」

比企谷父「そう思ってるわけじゃない。今では八幡と小町は平等に見てる。」

比企谷母「だったら簡単でしょ？小町が八幡に何をしようとしたのか。血を分けた兄妹のする事じゃないわよ。自分を使つて星武祭の妨害、ただ八幡の同級生に謝罪して欲しいがためだけにこんな事をしたのよ。悪い事をしたのは一目瞭然じゃない。」

比企谷父「……………信じられなくてな。まさか小町がこんな事するなんてって思ってたな。」

比企谷母「うん、その点に関しては私も全く同じ。」

あんなに可愛がってたんだもの。間違いを犯すなんて考えないわよね。

比企谷父「今でもそう思ってる。何かの間違いなんじゃないかって。でも、それもないんだよな？」

比企谷母「あるわけないでしょ？」

比企谷父「……………まあ、そうだよな。」

……ハッキリしないわね。

比企谷父「なあ、何でそんな簡単に割り切れたんだ？」

比企谷母「さつきも言っただけど、簡単じゃなかったわよ。でも、何でだろうね。私にも分かんないわよ。でも、八幡のあの言葉を聞いたら、なんか認められなくて。小町だけ優遇されているような気がして嫌だったのよ。」

比企谷父「なんて言っただ？」

比企谷母「八幡は、もし長期帰省があつたら態度次第でいいから優

しくしてくれって。優しいわよね、八幡は。あの子の素顔はこんな風なんだって思ったわ。」

比企谷母「考えられる？絶縁した子の事を考えて、わざわざケアさせるような事を言い出すのよ。私が八幡だったら絶対あんな事言わないわよ。むしろ追い出すように言ってるかもしれないわ。」

嫌いな子を助けるようなものだしね。

比企谷母「……まあいいわ。頭を冷やしてじっくり考えな。」

比企谷父「……ああ、そうする。」

そして私は居間を出て自室へと向かい、寝る準備をして少ししてから寝ようと思ったんだけど、すぐに寝てしまった。

朝の夫婦風景

八幡 side

今日の日付は10月3日。時間は午前の6時半。起きるタイミングとしては絶好と言ってもいいだろう。俺の寝起きも充分良いし、早く俺の腕の中で眠ってるこの子と出掛けたいという衝動が存在していた。

だがここで無闇に起こすのも勿体無い気がするから、妥協して寝顔を楽しむという選択を取った。

いや、だって想像してみ？彼女が自分の方に寄り添って気持ちよさそうに眠ってるところ。起こすの勿体無いと思うだろ？

まあでも、俺もシルヴィも体内時計は7時までには起きるような感じになってるからな。そろそろ起きるだろう。

八幡「しかし、本当に気持ちよさそうに寝てるな。いい夢でも見てるのかねえ？」

シルヴィア「案外、八幡くんと一緒にデートしてる夢かもよ？」

…………え？

シルヴィア「うふふ♪おはよつ、八幡くん。」

八幡「もしかして、俺よりも先に起きてたか？」

シルヴィア「ううん、起きたのは今。ちよつと驚かそうと思ったんだ。どお？ビックリした？」

八幡「こんな驚き方は久々だな。小さく驚かされたのは。」

シルヴィア「ドツキリ大成功♪」

シルヴィは楽しそうにしながら、俺の胸に顔を埋めた。髪からは久々に感じるこの家のシャンプーの香りがする。

八幡「寝起きはどうだ？」

シルヴィア「八幡くんと寝た日はいつも絶好調だよ♪八幡くんもでしょ？」

八幡「そりやそうだ。」

普通や不調、絶不調なんて考えられん。好調は……3割あるかもしれないが、後の7割は全部絶好調だ。

八幡「もう少しこうしてるか。7時までこうしてても余裕はあるしな。」

シルヴィア「八幡くんはそんなに私を抱き枕にしたいんだね？しよ
うがないなあ。私も嫌じゃないからそうしてあげるよ。というよ
りして下さい♪」

八幡「全く、ありがとよ。」ワシャワシャ

シルヴィア「キヤー！」(≡▽≡)

こんな風に頭を撫でる時もあるが、シルヴィは決まって楽しそうに
する。本心は分らんが、少なくとも嫌ではないと思う。

——7時——

八幡「……………」ナデナデ

シルヴィア「♪」

抱き締めながら頭を撫でる。これは男女性別問わず、やらされたら
嬉しいだろうな。やってる方も同じだろう。

シルヴィア「♪……………」八幡くん、そろそろ7時だよ。」

八幡「ん？そうか。じゃあ顔でも洗ってから飯の支度でもするか。
シルヴィは髪とかもあるから、ゆつくり準備してていいからな。」

シルヴィア「じゃあ朝ご飯は任せてもいいかな？」

八幡「リクエストはあるか？」

シルヴィア「シェフのお任せコースで頼むっ！」

……昨日のラノベの影響だな。某VRMMOゲームの主人公とそのヒロインの。

八幡「じゃあシチューか？」

シルヴィア「あははは！それも良いけど、簡単なのでいいよ。時間が惜しいからね。」

八幡「そう言ってもらえると助かる。」

――洗面所――

八幡「…………」カオアライチュウ

シルヴィア「フンフンフーン♪」カミセイリチュウ

八幡「…………」ネグセナオシチュウ

シルヴィア「…………」カオアライチュウ

シルヴィア「八幡くん後ろやって〜。」

八幡「あいよく。」

――居間――

シルヴィア「結局同じになっちゃったね。」

八幡「そうだな。でも、その方が一緒に居られる時間も増えるってものだ。」

シルヴィア「そうだね♪」

八幡「じゃあ俺は目玉焼きとかベーコンとか焼くから、シルヴィはパンとか用意してくれ。因みに俺のはトースターで焼いてくれ。」

シルヴィア「はい！あつ、じゃあさお義母様とお義父様の分も作ろうよ。」

八幡「……そうだな。シルヴィ、卵2つとベーコン4切れ頼む。」
シルヴィア「はい！シエフ♪」

――15分後――

比企谷母「……………」

八幡「シルヴィ、その「はい、塩胡椒。」おつ、サンキュー。」
シルヴィア「八幡くん、八幡くんのパンはどうする？何か付ける？」

八幡「じゃあバターで頼む。こっちももう終わる。」
シルヴィア「はい。」

やっぱりシルヴィがいると違うな。スゲー捗る。

比企谷母（あんたたちもう何なのよ？息ピッタリ過ぎるわよ。手を動かしながら会話して注文も受け付けるなんて……私から見ても、普通に夫婦にしか見えないわよ。）

シルヴィア「♪……あつ、お義母様、おはようございます。もうすぐ出来ますので座って待っていてください。」バターヌリヌリ

比企谷母「え、ええ。」

八幡「母ちゃん、飲み物は？」

比企谷母「じゃあ牛乳を。」

八幡「牛乳ね。俺もそれにするか。」

シルヴィア「承りました。」

するとシルヴィがコップを4つお盆に乗せてそれぞれ牛乳を入れ始めた。

比企谷母「……………」

比企谷母（この子たち、本当にまだ高校生なの？もう何処からどう見ても夫婦にしか見えないんだけど。もしかして最近の若者って皆こうなの？）

……………さつきからじつと俺たちの方を見てるが、どうしたんだ？

八幡「うし、出来た。」

シルヴィア「サラダとパンも出来てるよ。あつ、お義母様はパン焼きますか？」

比企谷母「ううん、大丈夫よ。」

八幡「親父は今日休みか？」

比企谷母「ええ。昨日頭を働かせ過ぎたから寝かせておきましよう。」

まああれだけの事をいっぺんに聞かせたからな。無理もないか。

シルヴィア「じゃあ八幡くん、音頭お願いします！」

八幡「おう、じゃ、いただきます。」

2人「いただきます。」

彼との出会いと親公認？

シルヴィア side

シルヴィア「ふふふんふん♪」

あれから食事を終えて食器を洗ったりした後、私は自分の身支度をしています。流石にお化粧道具はホテルの方に置いてきていたから、お義母様の道具を借りているの。

そういえば八幡くんがどんなのが好みなのか聞いた事なかったな。この際だから後で聞いてみよつと。

シルヴィア「♪うん、これでよしっ！」

メイク終了！よし、八幡くんの所に行こつと！

比企谷母「シルヴィアちゃん、少しいかしら？」

シルヴィア「あつ、お義母様。はい、大丈夫ですけど？」

比企谷母「少し貴女と2人でお話したいんだけど、いいかしら？」

シルヴィア「……ちよつとくらいなら良いよね。」

シルヴィア「はい、大丈夫です。」

比企谷母「じゃあ居間に来てちようだい。」

でも、何の話だろう？

——居間——

比企谷母「貴女も予想はついてると思うけど、八幡の事よ。」

シルヴィア「八幡くんが何か？」

比企谷母「……貴女と八幡の出会いを教えて欲しいの。問題無いのは見てて分かるけど、八幡があんな風になるなんて予想もしてなかったから。」

……そういえば、1年前の八幡くんはめんどくさがり屋だったっけなあ。今の八幡くんは全くそんな感じしない。

シルヴィア「……私と八幡くんが最初に出会ったのは、商業エリアという、簡単に言えば商店街みたいな所です。そこで私がナンパされていたところを助けてくれたんです。」

比企谷母「アイドル普通に出歩いてて大丈夫だったの？聞く限りはそうじゃなかったんだと思うけど。」

シルヴィア「変装して偶に気分転換に街を出歩く事が趣味だったんですよ。助けられてからお礼をしたいって言ったんですけど、『見て気分が悪かったから。』なんて言うって行こうとしたんです。でも私、恩をそのままにしておくのは嫌いな方なので、粘ったら、次は『甘い食べ物があるお店を教えてください。』って言ったんです。」

比企谷母「……確かにあの子は甘いものは好きだったわね。」

シルヴィア「今も好きですけど、あの凄く甘いコーヒーはもう飲めないみたいです。それで私は自分の知ってるお店を教えて奢ろうと思ってついでに行ったら、『なんでついて来るんだ？』って言われちゃって。お礼なのに場所だけなんて無欲だっと思ったんですけど、あの時の八幡くんからすれば、人と関わる事自体嫌だったんでしょうね。」

比企谷母「……そう、なのよね。私もその事は充分過ぎるくらい理解したわ。」

そうだよね。あんな事が起きない限り、人を信じられなくなるなんて、普通になるはずないもんね。

シルヴィア「お店に入ってもう一回お礼を言った後、自己紹介をし

てもらったんです。八幡くんは『比企谷』だけ答えたんですよ。その時の私はまだ八幡君の事を何1つ知らない状態なので、下の方も言うように言ったら今度はフルネームで答えてくれました。」

比企谷母「……………」

シルヴィア「その後なんですよ。私は有名人ですので、おおっぴらに自分の名前を出せないなので、彼に名前を出したくないって言ったら、なんて言ったと思います?」

比企谷母「うーん……興味ない、かしら?」

シルヴィア「そうなんですよ!興味ないって少しムカツとしました!自慢じゃないですけど変装とはいえ、少し顔には自信がある方だったので。なんかムキになっちゃったんです。それで言いたくなっちゃったといいますか。そしたら八幡くんに『逆に聞きたくなくなる。』って言われちゃって……少しかショックでした……………」

比企谷母「そ、そうなの……………」

今ならその理由もわかるけど、やっぱり聞かれたくないって言われたのはショックだったよ。

シルヴィア「それから少しやり取りをして、なんとか聞いてもらえるところまでこじつけられたんです。やっぱり周りには聞かれないので、耳を貸してもらいました。名前を言ったら別に気にすることもなく、ただ平然としてました。知らないのか聞いてみたら、『初めて聞いた。』って言われて思わず叫んじゃったんです、店内で。あれははずかしかったです／＼」

比企谷母「あの子、世界の歌姫を知らなかったなんて……………」

本当ですよ……おかげですごく恥ずかしかったです!

シルヴィア「それから八幡くんには無意識に『可愛い。』って言われてもっと恥ずかしくなって、お店にいるのも恥ずかしくなってきたので、早く注文して早く食べて出ようって言ったんです。私初めてだっ

たんです。あんなストレートに可愛いなんて言われたの。ライブだとかでもらう可愛いとかとは違って、凄く心にキュンと来ちゃったんです。」

比企谷母「それで惚れちゃったのね？」

シルヴィア「いえ、これはまだきっかけです。好きになったのは、まだ先です。」

比企谷母（え？これで？）

シルヴィア「その後彼はボディーソープとシャンプーを買いに來たって言っていたので、私もそれについて行きました。彼も少し呆れた感じでしたけど、諦めてましたね。お店に着いたらすぐに洗剤選びをしてたんですけど、私ちよつと仕返ししたくなっちゃったんです。さつきは私が恥ずかしい思いをしたから、今度は私が八幡くんに恥ずかしい思いをさせてやろうって思ったんです。」

シルヴィア「ボディーソープを選び終わって、次はシャンプーだったんですけど、『同じ香りのでいい。』って言い出したので、『香りとか気にしないの？』って聞いたたら、『悩んでもしょうがないから、同じ香りがするので構わない。』って言ったその時に、私閃いちゃったんです。」

比企谷母（……最初から夫婦みたいに見えるのは私だけかしら？）

シルヴィア「私も柑橘系の同じボトルを使っていたので、私の髪の毛を嗅いでみたらどう？って言ったんです。『サンプルはないのか？』って質問されましたけど、使用者のを直接嗅いだ方が良いんじゃないかとか、その方が信憑性が出て来るとかって嘘ついたんです。まんなと信じちゃって髪の毛の匂いを嗅ぎに来るとこまでは平気だったんです。」

シルヴィア「香りを嗅ぐ時に、鼻を後頭部に直接つけてきたんですよ！しかも肩に手をかけていたので抱き着かれたような状態ですよ

!?もうやられちゃいましたよ／＼／＼その後も私が声を掛けるまでずっとそのままで、離れた時には『ずっと嗅いでいたくらいだ。』なんて言われちゃった挙句に、店員さんにも彼氏彼女と間違われちゃって……………今となっては嬉しい誤算ですけど。」

比企谷母（この子達の出会いのエピソードってこの頃から甘かったのね。）

シルヴィア「それから連絡先を渡して、また会う約束をしてから、私が一方的に走って行っちゃったんです。これが私たちの出会いです。それから1ヶ月後には一緒にライブをやって、そのまた1ヶ月後に王竜星武祭で八幡くんの部屋でお泊まりしてその次の日に優勝しました。その夜に、私から告白をしたんですけど、八幡くんからも告白を受けました。『一生愛する事を誓う。』って言ってくれました。それから今日まで、ずっと幸せな日々を過ごしてきました。」

比企谷母「……………そうだったの。貴女と八幡はそんな出会い方だったのね。」

比企谷母（甘過ぎるお話をどうもありがとう。コーヒーが飲みたくなってきたわ。でも、八幡もそれくらいシルヴィアちゃんの事を思っているのね。）

比企谷母「シルヴィアさん、これから息子をよろしくお願いします。」

シルヴィア「こちらこそ不束者ですが、八幡くんの良き妻となれるよう、精進します。」

出会い、見送り、そして……

八幡 side

シルヴィア「八幡くん、ゴメン。遅くなっちゃった。」

八幡「いや、そんなに待ってないから気にしないでいい。何かあったのか？」

シルヴィア「少しお義母様とお話ししてたんだ。私たちの出会いに興味を持ってたみたいだったから。」

八幡「俺たちの出会いか……あの頃の俺たちは、まだそんなに意識した関係じゃなかったな。」

シルヴィア「そうだね。ナンパから救ってくれた男の子が、今じゃ界龍の序列2位で六花最強の魔術師、そして私の最高の彼氏だもんね。分らないものだね。」

八幡「そうだな。」

本当、何が起こるか分からないもんだな。当時の序列2位に勝負ふっかけられたり、突然のライブだったり、シルヴィアからのお泊まりだったり、いろんな事があつたな。まだ数え切れないほどあるが、まあ最初はこれくらいだな。

シルヴィア「でも私ね、これは運命だと思うんだ。あの時あの場所あの時間は、きっと神様が私たちに出会いのきつかけをくれた時間だと思うんだ。」

八幡「出会いのきつかけか。俺がもしシャンプーやボディソープを買おうとしていなかったら………」

シルヴィア「あの時もし私がナンパを受けていなかったら、もしくは別の道を通っていたら………」

………出会っていないだろうな。後には出会ってるだろうが、付

き合ってるかどうかは分からんな。

シルヴィア「だからさ、私たちがあの時会ったのは運命なんだよ！」
八幡「シルヴィがそう言ってからよく考えると、俺もそう思えてきた。運命、か……そうだな。」

シルヴィア「うん♪」

じゃあ俺とシルヴィが付き合えたのも運命ってわけだ。

シルヴィア「えへへ♪運命かあ。なんか嬉しくなっちゃう！」

八幡「俺もシルヴィとの出会いは運命だと思う。そんな気がしてきた。」

シルヴィア「うん！きつとそうだよ！じゃあ八幡くん、早く行こっ！」

八幡「ああ。」

――玄関――

現在8時ちよつと過ぎ。丁度いい時間だった。この時間なら半には駅に着くな。

八幡「準備はいいか？」

シルヴィア「もっちろん！」

八幡「じゃあ行くか。」

シルヴィア「あっ！待って八幡くん！」

ん？

八幡「何だ？忘れもんか？」

シルヴィア「違うよ。お義母様に挨拶しなくていいの？」

八幡「いや、俺が小学の時からもうしてないからいいだろ。」

シルヴィア「そんなのダメ！お義母様も今日はしたいって思ってる筈だよ！」

八幡「……まあ俺は別に構わんが、母ちゃんの気持ち次第だ。」

シルヴィア「じゃあやり直し！よく考えたら、お義母様にお別れの挨拶もしてないし！」

……そうだね、君ならそう言うと思ってたよ。

八幡「母ちゃん。俺たちそろそろ出るから。」

シルヴィア「昨日はお世話になりました。」

比企谷母「もう行くの？」

八幡「ああ。今日の午後4時の船で六花に帰るんだよ。それまでシルヴィと東京観光だ。」

比企谷母「……そうなの。折角帰ってきたからゆつくり話せると思ってたけど、それなら仕方ないわね。」

苦笑いを浮かべ残念そうにする母ちゃん。冬の長期帰省に小町が登録してなかったら俺がして帰るから。

え？どうやって調べるのかって？そりや戸塚から教えてもらうんだよ。それがエンフィールドから。

比企谷母「分かったわ。シルヴィアちゃん、息子がバカしないようにしっかりと見ててね。」

シルヴィア「お任せください！」

八幡「俺はもうそこまでバカじゃない。じゃあ母ちゃん、今度はいっ帰れるか分かんが、またな。」

シルヴィア（もう八幡くんってば！素っ気無さ過ぎるよ！）

比企谷母「行つてらっしゃい、八幡。」
八幡「っ！」

……10年ぶりにされた気がする。母ちゃんから見送りなんて。

八幡「……ああ、行つてきます。」ニッ
比企谷母「うん。」

そして俺たちは玄関の扉を開けて外へと出た。その時、眩しい日光と共に少し冷たい空気が俺たちを襲ったが、全く悪い感じはしなかった。

シルヴィア「憑き物が取れたような顔になってるよ、八幡くん。」
八幡「ん？そうか？」
シルヴィア「うん。すっきりした顔になってる。」

なら、帰ってきて良かったのかもな。また帰って来るからな、母ちゃん、親父。

八幡 s i d e o u t

比企谷母 side

……行っちゃったか。でも忘れていたわ。子を見送るのがこんな感じだって。

しかも、あの子の背中がとても大きくなった。成長って意味でもあるけど、頼もしさとか男らしさに磨きがかかっていた。

比企谷母「……最後に見送ったのは確か……小学1年の夏頃だったかしらね。」

小町の事で忙しかったから半年も出来ずに終わっちゃったんだっけね。

そして最後のあの笑顔……八幡のあの顔は久しぶりに見たわ。

そういえば、八幡の写真を撮っておけば良かったわね。今度来た時にでも撮ろうかしら。

比企谷母「ん？」

靴箱の上にあるのは何かしら？手紙？しかも私宛だわ。

『貴方の息子と義娘より』

そこには笑顔のシルヴィアちゃんと、シルヴィアちゃんの肩に手を置き、自分に寄せて笑っている八幡の写真があった。

比企谷母「……ふふつ、ありがと。」

貴女が義娘なら、私も安心だわ。

※金刀比羅宮へ

八幡 side

冷たい空気に暖かい日光。この2つが絶妙なバランスで並行を保っている為、寒さはあまり感じない。それどころか少し冷たいこの空気が今は心地良い。

秋休みも昨日で終わったからか、住宅街の道を出て大きい道路の方へ出ると、様々な制服を着た生徒が歩いていていた。

そうだった。今は8時ちょっと過ぎだから高校生ならギリギリ間に合う時間帯なんだったな。俺もこの時間に登校してた時あったな。

そんな事を思っているが、生徒や一般の人たちからの視線は増えていく一方だった。それもそうだ、かの有名な歌姫がいるんだからな。そして、会見であの発言をした男もいるから当然か。

シルヴィア「こんな時間に登校してて大丈夫なのかな？」

八幡「俺もこの時間に登校してた時期あったから大丈夫だろ。遅れたら自己責任だ。」

シルヴィア「八幡くんは遅刻した事あった？」

八幡「何回かな。」

シルヴィア「わあ、不良生徒だあ。いけないんだ。」

界龍ではした事ないんだからいいだろ別に。

――千葉駅――

シルヴィア「八幡くん、行き方とか調べたの？」

八幡「ああ、シルヴィイが風呂入ってる時と今日の化粧してる間に少な。この駅の総武線大船行に乗って新日本橋まで行く。新日本橋

に着いたら地下鉄の銀座線三越前に乗り換えて虎ノ門駅まで乗った
ら着くはずだ。何もなければ1時間くらいで着くな。」

シルヴィア「新日本橋、三越前、虎ノ門だね。うん、覚えた！」

八幡「お前ホント記憶力良いよな。」

シルヴィア「羨ましいでしょ？」

八幡「少し分けて欲しいもんだ。」

――千葉駅総武本線ホーム――

シルヴィア「やっぱり東京行きだからかな？人多いね。」

八幡「この時間帯に出勤する人もいるんだろ。しかも……………」

俺たちの並んでる列だけ異常に長い。もしかしくてもシルヴィ
狙いだな。それ以外何もないまである。

シルヴィア「しかも……………何？」

八幡「…………いや、この車両が混みそうだから乗ったら別の車両に移
ろうと思ってたところだ。」

シルヴィア「確かに後ろの列凄いいもんね。でも不思議だね、何でこ
こだけこんなに長いのかな？この車両に何かあったりするのかな？」

リーマンの皆さん、目を逸らさないてくださいね？俺もう分かつて
るから。

俺の予想通り、その後も続々と後列が出来ていたため、俺たちは電
車へ乗ったと同時に別の車両へと移った。そこでも注目はされたが、
周りから詰め寄られる事はなかった。

――東京メトロ銀座線――

八幡「ここまで来たな。座るところもあつたからそんなに疲れはし

なかったけど。」

シルヴィア「人が凄かったよね。流石東京だよ。」

いや、それ以外にも理由はあるんだがな。

シルヴィア「それでどう？ 霊気の方は感じるの？ 私はなんかあったかい感じがする。」

八幡「俺も何となくは感じる。索冥に少し聞いてみる。」

八幡『索冥、お前は何か感じるか？』

索冥『はい、八幡様。新橋に着いてから此処まで力は強まっています。恐らく近いかと。』

八幡「索冥も感じているみたいだ。虎ノ門駅に出たらすぐに分かるだろうな。」

シルヴィア「そうだね。」

出来れば戦いにはならないで欲しいもんだ。

――虎ノ門――

シルヴィア「此処が虎ノ門かあ。なんか想像してたのより現代的だなあ。」

八幡「どんなのを予想してたんだ？」

シルヴィア「なんか……もつと和風的な印象の名前だったから古風な感じの街並みだと思ってたんだ。」

確かに虎ノ門って古風だよな。けど実際はめちゃくちゃ高層ビルが建ってる大都会だな。

八幡「さて、金刀比羅宮は……」

シルヴィア「……あつ、ねえ八幡くん、あれって鳥居かな？」

八幡「ん？」

よく見たらビルの下に鳥居らしきものが見えた。いや、明らかに鳥居だった。鳥居の真上にビル建てたらダメじゃね？

八幡「近づいて見るか。」

『虎ノ門 金刀比羅宮』

シルヴィア「……………あつたね。」

八幡「ああ、あつたな。」

こんなビルの真下に鳥居作るなよ。それとも逆か？ん？奥には神社が見える。

シルヴィア「此処で間違いなさそうだね。」

八幡「ああ。分かっているとは思うが、手は出すなよ？」

シルヴィア「うん、見守ってるから。頑張ってるね。」

さて、いっちよご対面といきますか。謎の強い霊気を持つ霊とやらに。

ついて……きていいよ。

八幡 side

索冥『八幡様、今更ではありますが、靈気がとてつもない強さです。』
八咫鳥『この感じ……拙僧が感じたものと同じ物だぞ、主人よ。』
朱雀『懐かしい感じの靈力だ……そう思わねえか？玄ちゃん。』
玄武『そうなんだけど、あんまり会いたくないなあ。』

……後の2人は置いとくとして、確かに何かのオーラはビンビンに感じる。何かは分かんが、とにかく感じる。

シルヴィア「……八幡くん、私たち警戒されてるのかな？」

八幡「……分かん。俺もこんなに抵抗受けんのは初めてだからな。」

今までの神社ではそんな事は無かったんだけどな。

神主「おや？こんな時間にお参りですか？珍しい方たちだ。」

八幡「ん？あぁ……まあそんなところです。」

シルヴィア「あつ、八幡くん。あそこにも鳥居があるよ！でも、なんか動物みたいなのが彫られてあるよ。」

動物？……っ!?

八幡「あの……あの鳥居の周りにある動物って四神ですよ？」

神主「ほほう、若いのによくご存知ですねえ。その通り、あの鳥居を覗くようにして模られているのは、司る方向を守護しているとも言われている四神です。」

やっぱりか……八咫鳥、当たりだったな。

シルヴィア「へえ、四神っていうんですか。あつ、それならさ、八幡くんの中にいる索冥もその1人なのかな？でも、馬の形をした動物はいないね。」

まあそうだな……索冥は麒麟って神獣で四神の長だからな。だが確かに馬のような形の像は見当たらないな。

神主「……今、なんと？」

シルヴィア「え？馬の形をした動物はいないですか？」

神主「その前です！名前を言いませんでしたか!？」

シルヴィア「？はい。索冥って言いましたけど……どうかしたんですか？お爺さん？」

まあ四神を知ってるんなら、当然麒麟の名前なんて当然知ってるよな。

神主「き、麒麟の索冥の事ですか!？あ、貴方の中におられるというのは、本当なのですか!？」

八幡「は、はい。」

神主「……信じられない。まさか麒麟が特定の人物を守護するのだ、私の知る限りでは初めてです。」

そうなのか？でも、子供の頃から俺の中にいた……なんて言えねえよな、この空気で。まあ俺も存在を知ったのは去年の冬だけだ。

シルヴィア「ねえ八幡くん。索冥ってそんなに凄いの？」

八幡「まあな。俺の中にいる霊の中では今のところ1番強い。けどあいつの性質は基本優しく穏やかで、虫でさえも殺しを嫌う程温厚な性格だ。だがその分怒った時はかなり凄いらしい。」

シルヴィア「見た事あるの？」

八幡「俺がそんな命知らずに見えるか？」

シルヴィア「ううん。」

まあ、ですよね。ていうか誰だつて好んで怒られたいなんて奴はいないだろう。

八幡「そういうわけで、俺はこの神社から発せられている霊気を逆探知してここまで来たんです。いるんですよね？此処に。」

神主「…………麒麟程の神獣を宿しておられる方に嘘は罰当たりですな。ええ、おりますとも。貴方がさつき仰られていた四神の一柱が。」

……………

八幡「…………少し話してくるわ。シルヴィ、俺の身体頼んでもいいか？」

シルヴィア「うん、いいよ。」

八幡「索冥、お前もシルヴィと一緒に俺を守ってくれるか？」

索冥『勿論で御座います、八幡様。』

俺の背中から透き通るような綺麗な声がしたと思ったら、翡翠色の身体に金色の角を生やした鹿のような生き物がいた。

そう、索冥が半実体化して出てきたのである。当然触れないが見る事だけは可能。カメラで撮ろうとしても映る事はない。

神主「つ!!こ、これが麒麟の……………索冥つ!!な、なんと神々しい……………」

シルヴィア「久しぶりだね、索冥。」

索冥『お久しぶりです。ご無沙汰しております、シルヴィア様。』

うし、準備は整ったな。んじや呼ぶか。

はい、やってきました。よく見るこの風景、何もない真つ白な世界ですね。

???『……ほう、俺を呼び寄せるとはな、良い霊力を持っている事だけは褒めてやろう。』

白い毛に黒模様、青く光る鋭い眼と眩く光る牙と爪。霊力もそうだが、迫力と存在感は桁違いだった。

???『一応自己紹介をしておこう。俺の名は白虎、白帝びやくていとも呼ばれている。お前の名を聞いておこう。』

八幡「比企谷八幡だ。」

白虎『ほう、八幡というのか。現代の人間と比べたら珍しい名だな。』

何で現代と照らし合わせる事出来るんだよ。霊の中でも情報化社会ですか？

白虎『それで？何故俺を呼んだ？つまらん理由だったらタダでは帰

さんぞ。』

八幡「単刀直入に言うのだ、俺について来てくれないか？」

白虎『この俺がお前ごときについて行けと？人間ごときのお前に？』

八幡「そうだ。」

白虎『ふっ、何を言うかと思えば……粹がるなよ若造。』

突然さつきまでとは比べ物にならない程の靈力を出してきた。

白虎『貴様……この白虎に何を言うかと思えば、ついて来いだと？お前のような奴など朱雀や玄武でも、ついて行かんわ。』

朱雀『それは言い過ぎだぜ白兄。』

突然、俺の後ろから朱雀が出てきた。

朱雀『俺は自分の意思で旦那に憑いたぜ？あまり旦那を過小評価してると痛い目見るぜ？』

白虎「ほう……朱雀よ、お前その人間に憑いているのか。だとしたら節穴だな。』

玄武『ふうくん、じゃあさあ僕が目も節穴だって言いたいんだよねえ〜？』

玄武も出てきたか。

白虎『げ、玄武!?お前までこの人間に憑いているのか!?!』

玄武『そうだよおう。ちなみに言うと、メイちゃんもマンちゃんに憑いてるから〜。』

白虎『なっ!?!さ、索冥がか?』

玄武『うん。』

……何であんな圧されてるんだ?

朱雀『あー旦那は知らないよな。実を言うと白兄は年下と女が苦手なんだよ。男の年下ならまだいいんだけどな、玄武みたいなまったり系なのはタイプでダメで、姉貴は女だからストライクでアウトなんだよ。』

ここにきてまさかの弱点モロ暴露？しかも女と年下に弱いってなんだよ。威厳無すぎだろ!?さっきの迫力どこ行った!?

玄武『別にいいからねえ。トラ兄がマンちゃんの事見下すだけ見下してたってチクってやるんだから。言っておくけど取り消して、なんて言っても絶対やだからね。僕聞いちゃったからメイちゃんに正直に言うもんねえ。』

白虎『い、いや……それはやめてくれ。』

玄武『じゃあどうするのぉ?人間ごときに憑くの?それだと自分の言ってた事否定する事になるよねえ。僕は別にどうでもいいけどぉ。』

白虎『ぐっ……………』

八幡「……なあ朱雀、もしかしてなんだが、お前ら四神の中で一番立場低いのって……………」

朱雀『ああ。言い負かされた時の白兄なんだよな。しかも玄ちやんって口喧嘩メツチャ強いんだぜ?』

俺もビツクリだよ。だって虎が亀に負けてるところなんて想像出来ねえだろ。俺ホント何見せられてんの?白虎が不憫に思えてくるんだが……

俺が見てる風景教えてやろうか?虎が亀に向かって頭下げてる風にしか見えないから。

八幡「な、なあ玄武。俺別に気にしてないからもうそのくらいでいいぞ?」

玄武『……そぉくお?じゃあやめてあげるね。トラ兄もあんまりマンちゃんを見下したりしないでね。ボクユルサナイカラネ?』

……今、声のトーンめっちゃ低くなかった?気のせい?気のせいだよね?

八幡「あー……じゃあ俺たちは行くから。まあ……元気出せ。」
白虎『……………』

なんか初めて虎がしよぶくれてるところを見た気がする。いや、でもなんか……………納得出来る。だって怖かったもんな!

俺も今日の朝っぱらからビックリだよ。威厳のない虎なんて初めて会ったし。いやそもそも絶対会えないだろうし。

うん、もうやめたげよう。

八幡「あー良かったらついて……………くるか?」

白虎『っ!ほ、本当か!比企谷八幡よ!』

八幡「お、おう。」

白虎『ならば、お前に失礼をした事は詫びよう!それでは足りぬ事も理解している!だから俺がお前に憑依する事で許してもらいたい!』

……………

八幡「ああ、大歓迎だ。」

白虎『っ!感謝する!』

だって断れねえよ！可哀想なんだもん！

白虎『これからよろしく頼むぞ、八幡よ！』
八幡「ああ、うんよろしく。」

うん、本当によろしくね。

徳の高い人

八幡 side

……なんていうか、俺はこの朝から凄く意味不明な時間を過ごした。いや、マジで冗談抜きでだ。

たった……何分だ？ ホントそれくらいの時間で起きた事なのに、内容が濃過ぎる。

俺の方が理解出来てねえもん。こっち側から頼んだのに、最終的にはこっち側が『しょうがないから入れてやるよ。』みたいな感じになっちゃったんだよ？

これ理解できる奴いるか？ 多分いないだろ。

……まあいい、シルヴィと索冥をこれ以上待たせるわけにもいかなからな。早く現世に戻るか。

八幡「ん……ん……」

シルヴィア「あつ、起きた？ おはよっ♪」

八幡「……おお、おはよ。」

索冥『それで、どうでしたか八幡様？ 白虎の方は。』

八幡「……なんか、俺が行った意味あったのかなって感じた。」

2人「え？」

八幡「いや実はな……」

俺はあっちの世界で玄武がはっちゃけたのと白虎が精神脆弱だった事を話した。索冥は納得したような感じだったが、シルヴィはポカンとしていた。

シルヴィア「えつと……つまり、玄武が白虎に口喧嘩で勝ったんだよね？でも、そのどこに意外な要素があるの？」

……………ああ、シルヴィは索冥以外の面子を知らなかったんだった。なら名前だけ知っていても動物が分からないんじゃないやあ、今の反応も当たり前か。

八幡「まあ説明不足だったからな。シルヴィ、玄武が亀で白虎が虎なんだよ。これで少しは意味分かってくれるか？」

シルヴィア「……………うん、理解出来たよ。なんか……………あり得ない光景だね。普通に考えると。」

索冥『白虎はまだ苦手なのですね。少しは八幡様を見習ってほしいものです。それに、主君である八幡様に威圧的な態度をとったのは、四神の長として見逃すわけにはいきません。少し教育が必要なようですね。』

八幡「あー程々にな？玄武に言い負かされたばっかだから。」

索冥『承知しております。現世の時間で4時間程教えるだけで御座います。』

お、鬼だ……もしこれが人間だったら、すごく優しい美人教師だけど、怒らせたら1日の授業を使って道德の授業とかしそう。

索冥『では八幡様、シルヴィア様、失礼致します。』

八幡「ああ、ありがとな。」

シルヴィア「またね〜！」

そして索冥は段々と薄くなり、やがては光となって消えた。

八幡「ていうか此処は？」

シルヴィア「神社の中。神主さんが『こんなに徳の高い人を人が通る床に寝かせてはなりません！神社の中へどうぞ！』って言うてから何処かに行っちゃった。」

八幡「俺は別に徳があるわけじゃないけどな。」

シルヴィア「気持ちの問題とか？」

八幡「多分索冥効果だろうな。でなけりやこんな事してもらえないからな。」

シルヴィア「ふふっ、そうだね。」

しかし、シルヴィの膝あつたけえな。このままも良いが、俺たちには予定があるからな。

八幡「じゃ、そろそろ行くか。いつまでもこうしてたら時間が勿体無いからな。」

シルヴィア「もう大丈夫？」

八幡「別に疲れてたわけじゃないから平気だぞ。シルヴィも足は痺れてないか？」

シルヴィア「うん、大丈夫。」

よし、じゃあ行くか。

俺は靴を履いて神社の襖を開けた。すると外には神主が何かを持って待っていた。

神主「おお、お目覚めになりましたか！ご気分は如何ですか？」
八幡「特に何もありませんけど。」

神主「ふむ……見た目は何もお変わりはない様子ですが、貴方の目や心臓から陽の力を感じます。これも麒麟のお力なのでしょう。」

八幡「麒麟だけじゃないですよ。隣にいるシルヴィもそうですか……」

俺は心の中で全員を現世へと呼んだ。

八幡「俺は常にこいつらと一緒に居ますから。陽の力というより、こいつらが陽で俺が陰なんですよ。良いバランスとれてるでしょう？」

シルヴィア「八幡くん……君の後ろにいるのって……」

八幡「ああ、俺の中にいる守護霊たちだ。全部で5体いる。」

神主「な、なんと強大で神聖なオーラ。!? 3つの目に足!? その鳥はもしや!？」

八幡「はい、八咫鳥です。」

神主「それに北の守護を司る玄武、南の守護を司る朱雀、西の守護を司る白虎。貴方は一体……」

八幡「俺はただの星脈世代ですよ。そしてこいつらは俺に憑いてきた奴らで、頼もしい仲間です。」

実際に憑霊をしたのは八咫鳥と朱雀だけだが、後の奴らと違って憑霊はするからな。

八幡「じゃあ俺たちはそろそろ……」

神主「お、おお! これは長い間お邪魔をさせて申し訳ない。」

索冥『八幡様、此方の神主様は八幡様を神社の中へと入れてくださったのです。通常寺や神社は一般の方は入れません。そのお礼をするというのは如何ですか?』

八幡『んーそんな事急に言われてもな。俺渡せるような物なんて何も持っていないぞ?』

索冥『では、私の角という事で如何でしょう?』

八幡『いや、ダメとは言わないけど、いいのか?』

索冥『鹿は1年近くで生え治りますが、私の角はすぐに生え治りますので。』

八幡『……じゃあお願いします。索冥お姉様の一角の御角を頂いてもよろしいでしょうか?』

索冥『お、お止め下さい! 八幡様が私にそのようなお言葉など!』

いや、だって親しき仲にも礼儀ありつて言うし。

八幡「すみません、少し待ってもらえますか?」

神主「はい?」

八幡「よろしければこれ、神社の中に入れてもらったお礼です。」

神主「これは……鹿……いやトナカイ?、鹿もトナカイもこんなにも艶や透き通る程の色、突起の数は多くない。この角は?」

八幡「それは索冥の角です。今回のお礼にと索冥と俺からです。」

神主「き、麒麟の!?!」

八幡「はい。足りませんか?」

神主「い、いえ! 充分過ぎる程で御座います!」

八幡「良かったです。では、これで。」

シルヴィア「あの神主さん、嬉し過ぎて死んじゃわないかな?」
八幡「そうなったとしても、後悔は無いだろうな。」

シルヴィア「だと良いね……よし！じゃあここからデートだよね
!？」

八幡「ああ、そうだな。」

さて、デートを楽しみますか！

ヘッドホン選び

シルヴィア side

ようやく始まったね！八幡くんと一緒にデート♪今日が日本にいられる最後の日だからね、思う存分楽しまなきゃね！

シルヴィア「八幡くん、昨日言つてた通り渋谷から行く？私はそれでも良いよ？」

八幡「実は俺も東京にはあまり来た事なくてな。そこまで知ってるわけじゃないんだ。だから渋谷からでもいいか？」

シルヴィア「八幡くんと一緒なら何処でも良いよ♪」

八幡「ありがとな。」

私は八幡くんの感謝する時に浮かべる優しい笑顔が凄く好き。この顔、私だけにしてくれたら良いのになあ。

――地下鉄――

ザワザワ…………

シルヴィア「この時間ってやっぱり人が多いんだね。地下鉄も凄い人だよ。」

八幡「東京の朝ってこんなに凄いんだな……………所謂出勤ラッシュって奴か…………朝から苦労様って言いたくなる。」

『まもなく電車が到着します。黄色い線の後ろまで下がってお待ち下さい。』

シルヴィア「六花にも電車はあるけど、こんなには多くないよね。」

八幡「殆どは歩きでも行ける距離だからな。目的地が現在地の反対側の時くらいしか使わないだろうな。」

私も乗ったのは数回程度だっけなあ。お金は大事に使わないといけないからね。あつ、電車来た。

八幡「電車に乗るのは、実際久しぶりなんだよな。そんなに乗る機会もなかったから別にいいけどな。」

シルヴィア「そうなの？」

八幡「あの頃はそんなに遠出なんてしなかったからな。」

そんな会話をしながら私たちは電車に乗り、席へと座った。因みに席は私が端の方に座って八幡くんがその隣に座ったから、私の隣は八幡くんだけということになってるよ。

周りの人たちは私たちの方を見てヒソヒソしたりする人たちが大勢いた。携帯片手にすごい速さで文字打ってるけど、メールでも打ってるのかな？

――渋谷――

シルヴィア「此処が渋谷かあ。なんか六花に似てるね。」

八幡「建造物が多いって点ではそうだな。商業エリアに近い方だな。」

シルヴィア「でも此処は電車の中とは比べ物にならないくらいの人数だね。」

八幡「そうだな。しかも、遠くから俺たちの写真を撮ってる不届き者までいやがる。」

シルヴィア「すごいね八幡くん。そんな事まで分かるんだ。」

八幡「まあ携帯のカメラこっちに向けられてたからな。まあ別にお忍びで来てるわけじゃないから構わんが、こんな撮り方されるのは腹が立つ。」

八幡くんってやっぱり写真を撮られるのって嫌なんだな。

シルヴィア「まあまあ八幡くん、折角のデートなんだからそんな顔してちや勿体無いよ。楽しもうよ、ねっ！」

八幡「……そうだな。」

シルヴィア「そうこなくっちゃ！じゃあ八幡くんが言ってた専門店に行こっか！」

————☆イ○ホ————

シルヴィア「このお店、事前によく調べておかないと絶対見つからないよ。」

八幡「そうだな。俺もこの中にあるとは思ってなかった。調べておいてよかったと本当に思った。」

此処の階……私の曲が流れてる。CDのシングルとかアルバムも売ってるのかな？

シルヴィア「八幡くん、此処ってCDとかも売ってるの？」

八幡「売ってるみたいだぞ。此処の反対側にCDショップがあった。見に行くか？」

シルヴィア「ううん、今は八幡くんとイヤホンかヘッドホン選びするんだもん♪」

八幡「どうもありがとう。」

シルヴィア「どういたしまして♪」

私たちがあれこれと質疑をしながら選んだ結果、八幡くんはJ○C k e○w o o dの【H○—M○10】っていうヘッドホンを選んだ。

八幡「良い買い物が出来た。ありがとな、シルヴィ。」

シルヴィア「このくらい何でもないよ。渋谷で買い物も済ませたけど、どうしよつか？」

八幡「別に見て回ってもいいが、見て面白そうなところって渋谷には無さそうだな。」

シルヴィア「じゃあ浅草に行こっか！着物も少しだけ着てみたいし、昔の日本人が嗜んだ技術の結晶も見たいし！」

八幡「分かった。そんじゃあ浅草に行くか。」

シルヴィア「おう!!」

浅草の旅

八幡 side

渋谷で買いたい物し終わった後、浅草へと行くために俺たちはまた地下鉄へと戻り、電車に乗った。やはり好奇の視線が突き刺さる。

シルヴィア「なんか嬉しいな。」

八幡「ん？何がだ？」

シルヴィア「だって八幡くん、ヘッドホン首にかけてるとはいえ、お揃いみたいで嬉しいんだ♪」

八幡「そうか……音楽を聴くのも良いが、シルヴィの声が聞こえなかったから意味無いからな。」

シルヴィア「えへへ♪」ギョッ

俺がこう言うと、シルヴィが嬉しそうに笑いながら抱きついて来る。俺も前まではこういう事されたら、人目を気にしてたが、もう慣れちゃったな。

シルヴィア「八幡くんは浅草行ったことあるの？」

八幡「いや、無いな。雷門っていう観光スポットがあるのと、並んでる店が全部老舗みたいな感じらしい。」

シルヴィア「へえーそうなんだ。八幡くんならまずどうする？」

八幡「そうだな……取り敢えずシルヴィと一緒に雷門の前で写真でも撮るとかだな。写真を撮られるのは好きじゃないが、シルヴィとなら別だからな。」

シルヴィア「っ！えへへ嬉しいなあもう／＼」ギョッ

腕を絡ませてる中、今度は手も絡ませてきた。腕に抱きついていて中、手を繋いでいる状態だ。

俺はそんなシルヴィの頭を優しく撫でる。そうしたら安心するよ
うに頭を俺の肩に預けて来る。

渋谷から浅草は少し距離あるからな。のんびりしてても大丈夫だ
ろう。

――浅草――

シルヴィア「着いたのはいいけど、なんか古風って感じの風景じゃ
ないね。」

八幡「取り敢えず奥の方に行ってみるか。雷門あれば、店並びも変
わってくるだろうしな。」

道を歩くとすぐに大きな道に出て、雷門が見えた。まだ朝だとい
うのに遊びに来た人や観光客が大勢いた。

シルヴィア「あったね雷門！あんなに大きいんだ〜！」

八幡「ああ、迫力あるな。」

シルヴィア「でも、あの中で写真を撮るのは難しそうだね。撮った
拍子に誰か変な事するかもしれないし。」

ホントいるんだよね。この場合では少し違うが、カメラ向けられ
たら傷跡残そうとする奴。あれと一緒にだ。

八幡「取り敢えず行かないか？」

シルヴィア「うん！」

――雷門前――

シルヴィア「どうやって撮ろうか？」

八幡「自撮り棒とかあったら便利そうだが、無いから俺の分身にで

も頼むか。幸い俺たちが来たら、なんか知らんが周りの人たちが退いてくれたし。」

シルヴィア「別に撮影してるわけじゃないからいいのにね。」

俺たちは周りの人たちのためにも、そそくさと写真を撮り終えて、奥に進んだ。

シルヴィア「おお、此处が有名な浅草の商店街かあ。色んなお店があるねえ！」

八幡「菓子に雑貨、着物や刀剣と色んな物があるな。」

シルヴィア「あつ、八幡くん！人形焼きっていうの食べてみようよ！」

八幡「お、おい。」

シルヴィイがはしゃぐ時は大抵こんな時だ。お祭りとか自分の好きな物があると、こうして楽しそうにする。

シルヴィア「お姉さん！人形焼き一つください！」

店員「はい、分かりまし……っ!?」

多分シルヴィアを見て驚いたんだろう。世界の歌姫が自分の目の前にいるんだから当然か。

シルヴィア「……どうかしましたか？」

店員「っ!!し、失礼しました！お1つ300円です！」

八幡「割り勘にするか？」

シルヴィア「いいの？」

八幡「シルヴィイの手元に150円があればの話だな。」

シルヴィア「ちよつと待ってね……あ、あつたあつた！」

俺たちはそれぞれ150円ずつ出した。店員さんもこの行為に驚

いていたが、俺たちが付き合ってる事を知ってるみたいだから、すぐに納得したような表情に戻った。

店員「ありがとうございました！」

シルヴィア「あゝむっ！……んんゝ美味しい♪」

八幡「来て早々楽しんでるな。」

シルヴィア「うん♪」

八幡「んじや俺も食べてみるか。」

シルヴィア「あゝん♡」

八幡「…………いや、別にいいんだが、それシルヴィの食べかけだよな？」

シルヴィア「…………いや？」

八幡「いや、全然。」

シルヴィア「ならいいよね？あゝん。」

八幡「…………あむ。」

シルヴィア「やった♪」

……………周りの皆さん、何見てんの!?俺だって恥ずいよ！

八幡「………美味しいな。」

シルヴィア「だよねゝ♪ねね、八幡くん！私にも食べさせてよ！」

八幡「御構い無しになってるな。ほれ、あーん。」

シルヴィア「あゝん♪……んん、さつきより100倍美味しく感じよ／＼／」

お、おおう……上目遣いでこの言葉はヤバイな。かなりグツとくる。

なんか周りの人も鼻押さえたりしてる人や急にコーヒーを飲んでいる人、すごい人では鼻血を出しながら、GJサインを出す人もいた。

シルヴィア「ん？この細長い棒みたいなのは何？なんか先の方は上の方に曲がってるけど……」

八幡「それはキセルだな。今でいうタバコの役割をしてた物だ。先の丸い筒の部分に今でいうニコチンの成分を含んだ草を燃やして吸って吐く。金属タバコみたいなもんだ。」

シルヴィア「へえ、じゃあこれは？」

八幡「小物入れだ。昔は小さくても棚が多かったらしいぞ。」

シルヴィア「これは……貯金箱かな？」

八幡「そうだな……賽銭箱風にした貯金箱だろうな。」

シルヴィア「これは知ってるよ！手裏剣だよ？忍者っていう頭巾を被って黒い服を着てる人たちが使ってる武器だよ？」

八幡「正解だ。だが、こんなに種類があったのは俺も初めて知った。」

シルヴィア「あつ！これは日本人の代名詞ともいえるよね！刀！お侍さんが腰につけているよね！」

代名詞なのか？まあ確かに六花では使ってる奴いるけど……俺と刀藤と界龍の仕込んでる奴らくらいしか分からなかったわ。

シルヴィア「こうして見ると、日本の物って面白いね！昔の日本人はこんなを作ってたんだね。」

八幡「今では模造刀、もしくは六花で戦うための武器として使われているからな。刀を初めて打った人には感謝だな。」

シルヴィア「八幡くんも刀使ってるもんね！」

シルヴィア「あつ！着物屋さんだ！」

八幡「そういや着物着てみたいって言ってたな。正月に着たのはレンタルの物だったからな。この際買って帰るか？」

シルヴィア「良いね！うん、早速入ろっ！」

店員「いらつしやいませ。」

シルヴィア「うわあ……着物美人ってこういう人の事を言うんだね。」

八幡「お前は何入って早々に店員を口説いてんだよ。」

シルヴィア「そ、そんなつもりはないんだけど……なんか目の当たりにすると、ね。」

店員「ご購入ですか？それともレンタルですか？」

シルヴィア「ああ、この際買って帰ろうと思ってたんです。日本に來た記念として。」

店員「そうでしたか……彼女さんのイメージからすると、紫をメインカラーにして、柄を花にして色は白から薄紫にかけて……帯は黄色が良いですね。」

スゲエな……特徴だけでこんなに早く決められるのか。

シルヴィア「その柄が入った着物はあるんですか？」

店員「はい、ございますよ。よろしければご試着なさいますか？」

シルヴィア「はい、お願いします。」

店員「では、こちらへどうぞ。彼氏さんには申し訳ないのですが、お待ちして頂くことになるんですが、よろしいでしょうか？」

八幡「構いませんよ。俺も着物見て待ってます。」

店員「お手数をおかけします。では、少々お待ち下さい。」

……さて、俺もなかなか探してみるか。

ん？あの着物、なんかに似てるような……

――10分後――

シルヴィア「八幡くん！出来たからこっちに来てー！」

八幡「ああ、分かった。」

カーテンが開かれると、そこには紫色の着物を着たシルヴィイがいた。両腕からは背中からシヨールを通していた。

八幡「すげえ……よく似合ってる。綺麗だ。」

シルヴィア「あ、ありがとう／＼……八幡くんも着たの？」

八幡「ああ……なんか見た事のある着物だったからついな。」

俺が着てるのは、黒い着物と青い羽織とスタンダードな着物だが、一年前くらいに夢で出てきた妖怪の着物に似てたからこれを着てみた。

店員「お2人共、良くお似合いです。よろしければ写真など撮らせ

てはくありませんか？外に専用の椅子と番傘がごございますので。」

シルヴィア「八幡くん、してみない？」

八幡「折角だしな、お願いします。」

店員「ありがとうございます。では、こちらになります。」

外に出たら、周りからは驚きと感嘆の声が上がった。

その後、俺たちは店員さんにより写真を撮影されたが、周りの観光客もそれにつられて携帯で俺たちを撮っていた。

気付かれてるだろうが、まあいいか。

喫茶店へ

シルヴィア side

着物屋さんの要望で写真を撮った後、着替えて今着た着物を購入しようとしたら、『よろしければ、そのままご観光を楽しまれては如何ですか?』と言われだけど、流石に動きにくいからその提案は断った。それに何気なく過ごしていたけど、時間が過ぎるのはあまりにも早い。さっきまでまだ10時くらいだったのに、今は11時半なの。

楽しい時間があつという間ってなんか寂しいね。もつと長く楽しんでいたいになあ…………

シルヴィア「もう11時半かあ…………なんかあつという間だね。」

八幡「色んな事やってたが、確かに時間が短く感じたな。もうこんな時間か…………シルヴィは腹の空き具合とかはどうだ?」

シルヴィア「食べ歩きとかしたからね。そんなにお腹は空いてないけど、甘い物が食べたくなつたなあ。」

八幡「甘い物か…………おつ、この近くに洋菓子の喫茶店があるみたいだ。そこはどうだ?」

シルヴィア「良いねえ!じゃあそこに行こうか!」

—————アン〇エラス—————

八幡「此処みたいだ。」

シルヴィア「へえ〴〵オシャレな外観だね。私こういう雰囲気好きだなあ。」

八幡「中也オシャレだったら良いな。早速入るか。」
シルヴィア「うん!」

私の予想では、クラシカルな感じの内装かな。

八幡くんが扉を開けて中に入ると、横の方に洋菓子がケースの中に並ばれていて、そこから食べたい物を選んで、飲み物も頼む形式かな？

店員「……………」

でも店員さんは、口を開けてこっちを見たまんま動いていなかった。おい、もしもーし。聞こえてますかあー？返事をして下さい。うーん反応無いなあ。

まあ今はケースの中のスイーツと飲み物を選ぼつと！でも、飲み物の種類結構あるなあ。

八幡「品揃え結構豊富だな。どれにするか迷っちゃうな。」

シルヴィア「飲み物も色んなのがあるよ。コーヒーに紅茶、ジュースやココアにお酒まであるよ。」

八幡「そんなにあるのか…………まあ流石に朝から酒はないな。」

私もビックリだよ…………さて、どれにしようかな。

……………10分後……………

シルヴィア「八幡くん決まった？私は決まったけど……………」

八幡「ちようど良いタイミング良いな。俺もちようど決まった。」

わおっ！グッドタイミングだね！

八幡「じゃあ注文するか。すみません。」

店員「……………」

……まだ口開いてる。結構時間経ったのになあ。この人、息しているのかな？

八幡「……………すみません！」

店員「ふあっ!? あっ、は、はい! ご注文でしょうか!」

八幡「はい。えーと、ココアを1つ。それからシヨコラと苺ショートを1つずつで。」

店員「ココアとシヨコラと苺ショートですね。お次のお客様は？」
シルヴィア「レモンティーとアン〇エラスの白黒を1つずつお願いします。」

店員「レモンティーとアン〇エラスの黒白を1つずつですね。以上でよろしいでしょうか？」

2人「はい。」

店員「ありがとうございます。6点でお会計が2,830円になります。」

さて、お財布は……………

八幡「はい、これで。」

八幡くんが何の躊躇もせずにお財布から3000円と30円を出していた。

店員「3030円お預かりします。200円のお返しです。お飲み物はすぐに出来ますので、少々お待ちください。」

店員さんの言った通り、飲み物はすぐに出来た。私たちは好きな席を探して見つけた後、ようやく一息つけた。

シルヴィア「ありがとうございます八幡くん。お金返すからレシート見せて。」
八幡「このくらい俺にさせろ。別に金には困ってないからな。彼女

に代金をケチる程、俺の領分は小さくないからな。」

シルヴィア「で、でも……」

八幡「なら、ヘッドホン選びのお礼って事でどうだ？それならいい
だろ？」

……もう、八幡くんは本当に変なところで頑固なんだから。

甘いお菓子と甘い2人

八幡 side

席に着いてから俺たちは、談笑し合ったり互いのスイーツを交換したりして、その場で出来るコミュニケーションと親睦(と書いて愛情)を深め合っている。この際周りにいる他の客は気にしないことにしようと思っている。

20〜30〜40代の主婦やらの人たちからの視線は物凄く期待の籠った眼差しが俺たちに向けられていて、50〜60代のマダム方からは、さも微笑ましいものを見ているかのような視線だった。

どっちもどっちだが、それは店員さんでもある。あの店員、俺たちが席に座ってのんびりした頃、奥の方で事務作業をしていたのか分かんが、店長を連れてきやがった。今はまだ何も無いが、多分店出る頃には何か言われるだろうな。

シルヴィア「八幡くん?どうかした?」

八幡「ん?ああ、いや、何でも無い。シルヴィ、良かったらもう一回シヨコラ食べるか?」

シルヴィア「良いの!?やったあ♪もう一回食べたかったんだ〜!」

八幡「どの部分がいい?やっぱチョコクリームが多いところか?」

シルヴィア「そうだね。八幡くんがいいなら。」

八幡「分かった。」

この部分ならクリームも多く入ってるから大丈夫だな。俺も後でアンヂェラス一口貰うか。

シルヴィア「あ〜ん♪」

八幡「あーん。」

チヨンツ

俺はシルヴィの鼻先にクリームが付いてる部分を少しだけつけた。

シルヴィア「ああ〜！八幡くんイタズラした〜！」

八幡「すまん。なんかやりたくなつてつい、な。」

シルヴィア「むう〜！」プク〜

八幡「そう怒るなよ。次はちゃんと食べさせるから。」

シルヴィア「……………それだけ？」

ううむ……………どうやらこのお嬢様はもつと上のものをこそ望らしい。

八幡「…………許してくれるなら、俺からの頭ナデナデと抱き締める。

帰ってからの一緒に寝るのと、無期限で甘えていい権限を与えよう。」

シルヴィア「うむ！許す！良きに計らえ！」

八幡「ありがたき幸せ〜。」

シルヴィア「…………ぷっ」

八幡「…………ふっ」

2人「あはははっ！」

こんな何でもないやり取りでも愛おしく感じる。たったこれだけの事でも笑う事が出来る。こんな下らない事が幸せに思える。

シルヴィア「ふふふ…………ああ〜笑った。じゃあ八幡くん、今の条件で許してあげる。だから今はこのデートを楽しみましょう♪」

八幡「了解です、お嬢様。」

シルヴィは鼻についてるクリームを指で取った後に舐めて、俺の方を向いて改めて『あ〜ん』と言いながら口を開けた。

シルヴィア「……ねえ、隣に行ってもいい？」

八幡「別に構わんが、どうした？」

シルヴィア「寄り掛かりたくなっちゃった♪」

八幡「そんな事か……いつでもしてやるよ。ほら、来いよ。」
シルヴィア「うん。」

俺は廊下側に座っていたから隣の壁側にズレて、シルヴィを座らせた。シルヴィは座った後、すぐに俺の肩に頭を乗せて楽な態勢を取っていた。

シルヴィア「……やっぱり安心感が違うなあ。君が正面にいるのと隣にいるのではまるで違う。触れられる距離にいる隣の方が凄く安心できるよ。」

八幡「……そうだな、それは俺も一緒だ。シルヴィと一緒にいるだけで安心できる。こうしてくっついてると尚更な。」

シルヴィア「えへへ♪」

こうしてのんびりするのも良いがシルヴィ、まだスイーツ残ってるぞ。

八幡「シルヴィ、スイーツどうすんだ？」

シルヴィア「……あ〜ん♡」

八幡「可愛い声出しながら言いやがって……この嬢さんは全く。」

そう言いながらも俺は、シルヴィの座っていたところの前にあった菓子の乗ってる容器を俺の方までもってきて、ちょうどいい大きさに切り分けてからシルヴィの口へと持っていた。

八幡「ほい、あーん。」
シルヴィア「あゝん♪」

もう何なのこの可愛い生物。口モキュモキュさせて可愛過ぎんだろ。

八幡「シルヴィ、眠いのか？」
シルヴィア「そういうわけじゃないよ。ただこうしてたいの。ダメかな？」

八幡「ンなわけないだろ。好きなだけこうしてればいい。時間の許す限りはな。」

シルヴィア「……ありがとう、八幡くん。」

『良いわねえあの子も。彼氏くんの肩なんて貸してもらっちゃって。』
『そうねえ。しかも2人ともあんなに幸せそう。新婚さんかしら？』
『でもまだ学生じゃないかしら？』

「…………どうやらこの人たちは俺たちの事を知らないらしい。多分日頃から忙しいんだろう。」

『おやおや、お嬢ちゃんったらあんなに甘えちゃって可愛いねえ。』
『彼も紳士的だねえ。お嬢ちゃんの意見を通してあげるなんて。』
『最近の夫婦は進んでるのねえ。』

『そうねえ。』

……俺たちの行動ってそんなに夫婦っぽさが出てるのか？

――20分後――

時間を掛けてスイーツを食べて、シルヴィも充分にリラックス出来たところで、そろそろお暇する事にした。

シルヴィア「美味しかったね♪」

八幡「ああ、またこ^{日本}ちに來れたら、此処に來るか。」

シルヴィア「賛成♪」

よし、デートの続k「あの、少しお時間を取らせて頂いてもよろしいでしょうか？」……ん？

シルヴィア「何でしょう？」

店長「すみません、突然呼びしてしまって。私、当店の店長をしている者です。よろしければお願いがあるのですが、お話してもいいでしょうか？」

八幡「いいですよ。な？シルヴィ。」

シルヴィア「勿論。」

店長「ありがとうございます。簡単な事なのですが……こちらの色紙にお二人のサインをお願いしたいのです。後、よろしければ写真の方も撮らせて頂けたら幸いなのですが……どうでしょう？」

シルヴィア「私は構いませんよ。八幡くんは？」

八幡「俺も構わない。協力しましょう。」

店長「おお！ありがとうございます！では早速お願いしますー！」

その後、色紙にサインをした後に写真を何枚か撮って終わったと

思ったが、俺たちが六花の有名人だと知った途端にさつきまでお茶をしていた若い女性3人組もサインと握手をねだってきた。

のんびり静かな時間

八幡 side

喫茶店で軽く昼食(?)を済ませ、サインや握手などのサービスを
提供した後、俺たちは次の目的地を何処にするか悩んでいた。

実際俺たちが考えたプランは、行きたい所や買いたい物がある所に
しか絞っていない為、あまり突っ込んだ所までは考えていなかった。

シルヴィア「次はどうしよっか？」

八幡「そうだなあ……俺は思いつかん。和めそうな所ならあるが、
どうする？」

シルヴィア「そんな場所があるの？東京に？」

八幡「ああ。どうだ？」

シルヴィア「……そこってのんびり出来るのかな？」

八幡「あるかどうかは分らんが、多分あるんじゃないか？」

シルヴィア「……なら行きたいな。そこでものんびりしたい。」

八幡「なんかライブの時以外ののんびりし過ぎてないか？」

シルヴィア「だって先月とか忙しかったでしょ？会見とかの影響
で。八幡くんのところはどうか分からないけど、クインヴェールでは
TV局とかホントにうるさかったんだから。」

ああそれか。確かに界龍でもメチャメチャうるさかった。その
度に門番が追い返してたけど。それでも懲りない時は星露が出て
たっけな。怒りのオーラが出てたからよく覚えてる。

え？星露が自らそんな事する奴じゃないって？簡単だ。『動いてく
れないならもう飯は無しだ。』ってお願いしたら行ってくれた。お願
いってやっぱ大事だよな。

八幡「確かに俺のところもううるさかったな。俺もイライラしてたか

らよく覚えている。雑誌とかはどうだ？」

シルヴィア「根も葉もない事書かれてた。『真実語らず』とか『会見後はだんまりの彼と彼女』とかって好き放題。その度にペトラさんが会社の事調べて汚職とか不正の事を調べてその会社のトップに証拠を突きつけてた。」

……こ、怖え……ペトラさん本気出し過ぎじゃないですかね？容赦ねえ……

シルヴィア「あつ、これペトラさんに聞いたんだけど、これはペトラさん自身とかじゃなくて、クインヴェールの運営母体のWウオーレン & Wの総意とかでやったんだって。」

……ペトラさんもクインヴェール怖過ぎね？生徒1人の為に張り過ぎですよ？いや、2人か？俺は含まれてるのか？

八幡「……ヤバくね？シルヴィンとこの学園。俺絶対ペトラさん怒らせるのやめよ。」

シルヴィア「そうした方がいいよ。ペトラさんの説教って凄く長い上に精神凄く削って来るから。八幡くんの学校は？界龍って凄いでしょ？」

……うん、絶対敵にしない。俺の学院だったら絶対に動いてくれなさそうだな……いや、界龍だったらあり得るか？アレマさんいるからなく。でも、どっちも怖いな。

八幡「……確かに過激さで知られてはいるが、手を貸してくれるかって聞かれたら、分かんない。戦闘沙汰なら大歓迎されるだろうが。」

シルヴィア「そこは否定して欲しかったよ……」

八幡「出来ると思うか？界龍の情報工作機関の怖さ知ってて。」

シルヴィア「…………無理だね。」

うん、俺もそう思うから大丈夫。今に始まった事でもないから大丈夫だろう。

——六義園——

シルヴィア「わぁ〜！綺麗な所だね〜！」

八幡「昨日の夜、東京の名所って調べてたら、たまたまこの場所を見つけてな。咄嗟に思いついたんだ。」

シルヴィア「ねえ！早く見て回ろっ！ほら早く早く！」グイッ

八幡「お、おい、あんまり引っ張るなよ…………」

シルヴィア「この時間は有限なんだから楽しまないとっ！」

シルヴィは俺の手を引っ張って奥へと進んで行く。のんびりした
いって言ってた奴が何はしゃいでんだか……

シルヴィア「あつ、ベンチあった。八幡くん、ここに座ろっ！」
八幡「ああ。」

俺たちは大きい池が正面に見える腰掛け椅子を見つけてそこに座った。上を見ると、緑や黄色、橙に紅くなつたばかりの紅葉が沢山あった。

シルヴィア「……此処ならのんびり出来るね。」

八幡「満足してくれたか？」

シルヴィア「うん、勿論♪」

シルヴィは嬉しそうにそう言うと、俺の腕に抱き着き手を握ってき
た。

八幡「……それも良いが、今は俺からのサービスをしてやる。」

シルヴィア「え?……あつ／＼／」

俺は抱き着かれている左腕を外してシルヴィの肩の方まで伸ばし
てから、自身の方まで引き寄せた。

八幡「こっちはどうだ?」

シルヴィア「……うん、こっちの方が君を感じていられる。」

八幡「なら良かった。」

ゆっくり出来るのは今くらいだからな。これからはお互いに忙し
くなる。会えなくなるわけじゃないが、こういう時間は冬休みまでは
無いだろう。

シルヴィア「ねえ八幡くん、寝てもいいかな?」

八幡「……ああ、いいぞ。先月は俺がした会見で迷惑掛けたからな。」

これくらいはしないとな。」

シルヴィア「そんな事気にしないでいいのに。でもありがとう。少し寝るね……おやすみ。」

そしてシルヴィは俺の肩に頭を預けてすぐに寝てしまった。

八幡「3時になったら起こすか。それまでは寝かしといてやるか。」

俺はシルヴィの額に口づけをしてから、六義園の風景を静かに眺めていた。

我が家へ

八幡 side

シルヴィア「すう……すう……」

あれから暫く経った。時間を見るともう3時近い。もうそろそろ行かなければならないんだが……シルヴィがどうにも起きない。そして俺の身体から腕を離してくれない。さつき無理に引き剥がそうとしたら、泣きそうな顔になってしまった為、もうその手は使えない。だが、もう行かないと時間がヤバイ。だからといってこの寝顔を壊してしまうのも惜しい。(単に本人が起きないだけなんだが。)くそ……いつからこんな子になったんだ。

八幡「シルヴィ、もう時間だから起きてくれ。3時近くだ、行かないとヤバイ。」

シルヴィア「すう……すう……」

……ダメだ、全く効果がない。どうする？抱えて行くんじや人目につき過ぎるし、だからといって動かないわけにもいかない……マジでどうする？

せめて交通機関を無視できる方法がないか？……いや、あるわけ……ん？いや、あるぞ！

八幡「飛んで行けばいいのか！その手があった！八咫鳥、俺に憑け。」

八咫鳥『御意。』

八咫鳥が半実体化して八幡に纏わりつくつと、八幡の姿が変わった。

八幡「こんな格好、こんな平和な所でするもんじゃないな。」

俺はシルヴィから腕を解き、自身の能力を使ってシルヴィの体勢を横にした。所謂、お姫様抱っこの体勢だ。

八幡「さて、じゃあ行くか。」
シルヴィア「♪」

……心なしか、シルヴィもさつきより嬉しそうだ。

——東京都上空——

八幡「上からだとかこんな眺めなのか……スカイツリーも東京タワーも登った事なかったからな。絶景だな。」

まあ、周りはビルばかりだが……

八幡「おっ、ちょうど正面にスカイツリーがあるな。少し止まるか。」

俺はスカイツリーの1番上まで上昇して東京を眺めていた。

八幡「……なんか、街を滅ぼそうとしている悪役みたいな感じになってるな。」

なんか高い所から街を見下ろしている奴ってそんな感じじゃね？
大抵高い所にいるよな。

八幡「にしても、ビルとかこんな風に建物が並んできると、こんな風景なんだな。」

八幡「あつ、そーいや俺たちの荷物の事忘れてた。まだ千葉ホテルだよな。昨日帰ってなかったし。」

よし、豪速球で取ってきてもらおう。

八幡「じゃそーいう事で頼んだ。」

八幡（分身）「無理難題押し付けてくれたな。まあやるけどよ。」

八幡「今度マツ缶奢ってやるから。」

八幡（分身）「あれはもう要らん。」

そう言って俺の分身は姿が見えなくなった。本当に物凄い速さで千葉の方向に向かっていったからな。

シルヴィア「ん、んんう……」

八幡「ん？起きたか？」

シルヴィア「おはよお……ってあれ？何で私お姫様抱っこ……って此処どこ!？」

まあそうなるわな。

八幡「此処は東京スカイツリーの天辺だ。」

シルヴィア「そんな平然と説明されても納得出来ないよ！どうやってこんな所まで!？」

八幡「飛んで。」

シルヴィア「……改めて八幡くんが凄いつて実感が再確認出来たよ。」

八幡「中々起きないから大変だったんだぞ？抱えていこうと思ったが、人目につきすぎるのは嫌だから飛んだってわけだ。」

シルヴィア「……ごめんなさい。」

八幡「気にするなよ。だが船まではお前も飛んでくれよ？能力使えるだから。」

シルヴィア「分かってるよ。天羽^{フイエロ}を使えって言いたいんでしょ？」

八幡「まあな。」

その方が俺も楽だし。起きてるのにお姫様抱っこってのはなあ……いや、良いんだよ？でも時間あんま無いからこの状況ではな。

シルヴィア「今って何時なの？」

八幡「3時15分だな。そろそろ飛ぶぞ。」

シルヴィア「うん。あつ、なんかこれ空のデートみたいで良いね♪」

八幡「……新鮮だな、空のデートとか。」

俺の分身は……まあ追いつくだろう。追いつかなくても船までは来れるだろう。

八幡 side out

—————

—————船着場—————

ペトラ「……あの2人遅いわね。もう半よ？いつまで甘たれデートしてるのかしら？」

スタッフ「さ、流石にこの時間は忘れてないと思いますが……」

本当、何してるのかしら？

シルヴィア「ごめんなさ〜い！遅くなりました〜！」

ペトラ「遅いわよシルヴィア……あら？」

ペトラが後ろに振り返るが、そこにはスタッフがいるだけでシルヴィアの姿は無かった。

ペトラ「気のせいかしら？でも……あら？」

ペトラが空を見上げると、白い翼を広げながら降りて来るシルヴィアと、同じ動きを黒い翼にする八幡がいた。

ペトラ「貴方たちねえ………どんな方法で到着してるのよ……」

シルヴィア「えへへ……私が寝過ぎちゃったから、交通の手段を使うのは無理だって八幡くんが言ってたもので。」

八幡「人前でシルヴィをお姫様抱っこしながら此処まで連れてくるのは、流石に俺でも無理です。」

ペトラ「……理由は大体分かったわ。要はシルヴィアが貴方に甘えに甘え過ぎて、いつの間にか寝てしまった結果、時間がギリギリになったのね。」

八幡「大体そんな感じですよ。」

シルヴィア「ちょ、ちよつと八幡くん／＼／＼」

俺は別に間違った事は言っていないからな。甘えてきたのも本当の事だし。

八幡「おつ、来たな。」

空からは分身の俺が2つのケースを持って降りてきた。

シルヴィア「あっ！ 私たちの！」

八幡（分身）「間に合ったか……何分くらいだ？」

八幡「大体30分だから……片道15分つてところだな。スカイツリーで飛ばしたから。」

八幡（分身）「そうか、んじやなく。」スー……

マジで助かった……お疲れさん、俺。

シルヴィア「荷物の事すっかり忘れてたよ！ ありがとう！ 八幡くん！」

八幡「気にするな。俺も気付いたのはスカイツリーの辺りからだからな。」

ペトラ「その様子だと忘れ物も無いようね。それじゃあ船に乗るわよ。」

シルヴィア「終わっちゃったね。」

八幡「そうだな。でも、また来ればいい。」

シルヴィア「……そうだね、帰ろっか。」

八幡「ああ、俺たちの家に。」

閑話 ③

テスト

八幡 side

学生が真に嫌うもの、それはなんだと思う？授業？先生？ムカつく事？納得いかなかった事？自分の都合通りにいかなかった事？いや、どれも違う。

答えはテストだ。全世界共通でテストが好きだなんて学生はいないだろう。いたら『まあそうなんだな』という認識だが、まずいないと俺は思う。

そんな俺たち六花の学園にもテストはある。因みに日本では国語を現文だとか古典だとかで分けているが、六花では落星語学と呼ぶ。数学の事を落星式学、理科系統は色々あるなそれも一纏めだ。物理だとか化学だとか一式で落星理学。歴史の事を落星歴史学。そして落星工学と計5科目ある。

そして界龍では特別科目として武拳科ウーチエンクオと仙道科ピンインタオクオがある。これは木派が武拳科で水派が仙道科の科目であり、どちらかに所属している学生のみが受ける科目だ。俺はどちらにも入っていないから受ける必要はない。

12月の期末テスト。今年最後のテストで終わった瞬間は気持ちが良かったが、テストが返却される時は緊張が止まらないものだ。界龍にも一応平均点はあるが、そこまで気にする程でもない。60点くらいだ。え？式学と理学？問題無いぞ？

教師「ではテストを返却するぞー！」

教師「今回の最低点数は71点だ。まあ今回は難しめに作ったが、このクラスは成績が良いからあまり落ちなかったな。そして最高点数は100点だ。」

オオー！

虎峰「語学なら八幡ではないですか？」

八幡「得意科目ではあるが、決めつけられてもな。」

沈華「貴方ね、私たちにあんなに上手く教える事が出来るのに、100点はあり得ないって言いたいのかしら？」

八幡「そういうわけじゃないが……」

セシリー「まあ八幡なら90点は確実にいつてるよねー。でなきや八幡じゃないしー。」

八幡「お前の中の俺はどうなってんだよ。まあいいけどよ。」

沈雲「沈華、そろそろ僕たちだよ。」

沈華「分かったわ沈雲。」

さて、何点取れたのやら。

セシリー「テストももらったから、前みたいに出し合おうよー。」

虎峰「セシリーは本当に好きですね。僕は別に構いませんが。」

沈雲「僕も異存ありません。」

沈華「私もですわ。」

八幡「別にいいぞ。」

セシリー「じゃあ、せーの！」

落星語学

比企谷八幡 100点

趙虎峰 92点

セシリー・ウオン 85点

黎沈雲 88点

黎沈華 88点

虎峰「やっぱり八幡でしたか。僕は92点でした。」

兄妹「僕たち（私たち）は88点でした。（でしたわ。）」

セシリー「あんた達こんなところまで似なくてもいいのにねー。あたしは85点だったー。」

虎峰「まあ八幡の得意科目ですから、勝てるとは思ってなかったですけど。」

俺は満点だが、他の奴らも普通に高いな。

けど、次は理学なんだよな。俺の少し苦手な科目だ。でも今回は全科目かなり手応えはあった。良い点数である事を祈ろう。

落星理学

比企谷八幡 90点

趙虎峰 88点

セシリー・ウォン 87点

黎沈雲 86点

黎沈華 92点

虎峰「ま、まさか八幡が90点を超えるなんて……………」

八幡「今回は手応えあったからな。けど、流石は沈華の得意科目だけはあるな。」

沈華「この点数で言われても嬉しくないわよ。」

沈雲「でも、確かに伸びたのは事実だね。」

セシリー「八幡く。どんな勉強したのー?」

八幡「それは内緒だ。」

落星歴学

比企谷八幡 98点

趙虎峰 87点

セシリー・ウォン 78点

黎沈雲 95点

黎沈華 92点

八幡「うわあ……ここ違ったかあ。」

セシリー「いたいねえーその間違い。」

虎峰「ですが八幡は歴学も同意でしたね。やはり90点は超えてきましたか。沈雲と沈華も歴学は得意でしたからね。」

沈雲「はい。比企谷くんには負けませんが、それ以外には負けるつもりはありませんので。」

沈華「でも、今回は沈雲にも負けたわね。」

虎峰「でも次は式学ですから、僕でも八幡には勝てますね。」

八幡「元々お前の得意科目でもあるからな。何で木派にしながら式学得意なんだよ。訳わかんねえよ。」

落星式学

比企谷八幡 85点

趙虎峰 96点

セシリー・ウォン 85点

黎沈雲 89点

黎沈華 87点

虎峰「勝ったのはいいんですが、何ででしょう……八幡の点数の伸

びの方が気になってしまいます。」

八幡「普通に勉強しただけだ。」

セシリー「それでこんな点になるかなー？」

沈雲「前ははまだしも、前々回の点は酷かったですからね。」

沈華「そうね。見るに堪えない点だったわ。」

うるせえよ！

落星工学

比企谷八幡 95点

趙虎峰 84点

セシリー・ウォン 93点

黎沈雲 86点

黎沈華 85点

虎峰「まあこれも八幡が高いのは当たり前ですね。」

セシリー「だねー。」

八幡「まあ割と得意な方だからな。」

沈雲「皆さん合計点は何点でしたか？僕は444点でした。」

沈華「私も444点でしたわ。」

セシリー「まーた決着つかなかったねー。いつになったらつくのよー。」

沈雲「そう言われましても……」

セシリー「あたしは428点だったー。虎峰と八幡はー？」

虎峰「僕は448点でした。」

八幡「俺は468点だった。よし、前回より90点良くなってる。」

虎峰「凄い伸びでしたよね。」

八幡「ああ、シルヴィに教わったおかげで式学は90点超えだったしな。」

虎峰「な……ななな何ですそれは?!?!」

八幡「何が？」

虎峰「シルヴィアさんと勉強していたのですか?!」

八幡「ああ、理学と式学を教わる代わりに語学と歴学を教えてた。」

虎峰「僕も混ぜて下さーい!!」

だってお前が来たら絶対勉強どころじゃなくなるだろ。

こうして俺たち学生の嫌いなテストは、一時幕を閉じた。

あの時の約束

オーフェリア side

……私が自由の身になってから2ヶ月が経った。殺風景だった部屋も、今ではユリスのおかげで少し華やかになったわ。花主体の部屋なのだけど、そんなにたくさんあるわけではないわ。でも、私の夢でもあったわ。

1度、花に囲まれて暮らしてみたいと思った事があったわ。

……六花共通のテストが終わって少し羽を伸ばそうと思っていたのだけど、思えば私自身あまり趣味というものがない。花を触る事、見る事、お世話をする事なら毎日やっているけど、他にやる事なんて考えた事もなかったわ。

……何をしようかしら？またユリスと2人で出掛けようかしら？この前以来会っていないからそれもありね。

……会っていないといえば、八幡にもあの日以来会ってなかったわね。

オーフェリア「……あの日も楽しかったわ。また過ごしてみたいわ。」

………そういえばあの日の昼食の時、八幡がいつか料理を作つてやるのか言っていたわね。今日は可能かしら？

………連絡を入れてみましょう。

p i p i p i : : p i p i p i :

八幡『よう、オーフェリア。』

オーフェリア「……………こんにちは、八幡。」

八幡『どうしたんだ急に?』

オーフェリア「……………八幡、鳳凰星武祭の後の出かけた時の約束、覚えてるかしら?」

八幡『約束?……………ああ、確か料理を作るって話だったか?』

オーフェリア「……………ええ。今日は休日でやる事も無かったからちょうどいいと思ったから。八幡の都合は空いてるかしら?」

八幡『ああ、俺も暇を持て余していたところだ。俺も構わないぞ。何処がいい?お前の寮に行け……………ないか。女子寮だもんな。』

オーフェリア「……………私は別に構わないわ。」

八幡『俺が構うんだよ。じゃあ俺の寮の部屋に來い。その方が調味料もあるしな。どうだ?』

……………彼の部屋……………1度行っても損は無いわね。

オーフェリア「……………分かったわ。じゃあ今から貴方の学院に向かうから校門で待ってて。界龍で私と普通に話せるのは貴方だけなんだから。」

八幡『それもそうだな、分かった。俺も校門の前で待ってる。なんか食べたいものとかあるか?』

オーフェリア「……………丁度いいから中華でお願いするわ。中華料理って食べた事ないから氣になるわ。」

八幡『分かった。じゃあ待ってるな。』

……………そして八幡は通信を切った。……………何故かしらね。八幡と話していると、自然と笑みがこぼれるわ。

……………こうしてる暇はなかったわね。他学園に行くから、私も制服で行かないと行けないわね。

――界龍第七学院校門前――

オーフエリア「……………六花の中で最大規模の学園なのは知ってたけど、こんな風になってるのね。レヴォルフと違って面白いわね。」

……………さて、八幡は何処にいるのかしら？

門番1「尊師！一体誰をお待ちになられていますか？客人でしたら私たちがお通ししますので、尊師は部屋でお待ちを！」

八幡「いや、お前ら絶対疑うから。誰もあいつが此処に来るなんて思わないから。」

門番2「では、一体誰なのですか？」

オーフエリア「私よ。」

門番1「え？」

門番2「な、何故【孤毒の魔女】が此処に!？」

八幡「お前らさつき言っただろ。俺の客人だ。」

門番1「エ、【孤毒の魔女】がですか？」

八幡「他に誰がいるか？」

門番1「い、いえ……………」

八幡「んじや行くか。ああ、一応パスポート作っておくから。いつでも来られるように。」

オーフエリア「……………ありがとう。」

……………八幡の料理、楽しみだわ。

――八幡の部屋――

八幡「まあ普通の部屋だが、適当に掛けてくれ。」

オーフェリア「…………お邪魔するわ。そういえば今日は【戦律の魔女】とは一緒じゃないのね。」

八幡「別々の日くらいある。シルヴィは次のライブの打ち合わせだと。六花から離れるらしいからな。寂しくなる。」

…………そういうデメリットもあったわね。彼女は世界的なアイドルだものね。

八幡「まあ、年末には帰って来るって行ってたから、この前みたいな長期にはならないと思うが。」

オーフェリア「…………この前って？」

八幡「欧州ツアーの時だ。あの時は3ヶ月間居なかった。結構辛いもんなんだな。」

オーフェリア「…………そうなの？私にはよく分からないわ。」

八幡「誰かいらないのか？この人に少しでも会ってないと不安になるっていう人は。」

……………いたわ、目の前に。

オーフェリア「…………ごめんなさい、目の前にいたわ。貴方には会ってないと不安になるわ。」

八幡「それはそれで嬉しいが、なんか照れ臭いな。」

……………本音を口にする時って存外恥ずかしいものなのね。それに、いい匂いもしてきたわ。

オーフェリア「……………良い匂いね。」

八幡「もうすぐ出来るからな。炒飯と唐揚げとサラダを作った。」

……………1つの作業で3つの料理を作れるのね。

――5分後――

八幡「出来たぞオーフェリア。中華で俺の部屋にある具材で出来る料理はこれくらいだった。済まんな。」

オーフェリア「…………問題ないわ。私からお願ひしたのだから文句なんて言わないわよ。」

それにしても、美味しそうだわ。八幡はこんなに料理上手だったのね。

八幡「まあ見た目は問題無いようだな。味はどうだ？」

オーフェリア「…………じゃあ、頂くわ。」

…………私はスプーンで炒飯をすくい、自分の口の中へと運んだ。口の中には、程よい加減で味付けされたお米によく火を通された具材、この味は焼肉のたれかしら？

オーフェリア「…………美味しいわ。」

八幡「ふう、その一言で力が抜けた。」

何度でも手を伸ばしたくなるような味ね。とても美味しいわ。

――30分後――

オーフェリア「…………ご馳走様。とても美味しかったわ。」

八幡「それは良かった。」

オーフェリア「…………八幡があの日料理がしたくなったと言ったのも頷けるわ。こんなに料理が上手だったのね。」

八幡「俺の趣味でもあるからな。ただ、少し控えめにしようと思ってるんだ。」

オーフェリア「…………何故？こんなに美味しいのに。」

八幡「だからだ。この学院には食い意地張った奴が3人もいてな。そのせいで毎日この部屋が賑やかになっちまうんだよ。はあ……少しは自重して欲しいもんだ。」

オーフェリア「………今日は？」

八幡「………来ないことを祈る。」

オーフェリア「………今度は私が貴方に料理を作るわ。簡単なものしか作れないけど。」

八幡「いや、それでもありがたい。」

………結論からいうと、八幡の料理は美味しいから周りの人たちも魅了してしまうという事ね。

親子水入らずで

陽乃 side

陽乃「流石お母さんの会社に融合したお店だけはあるね。お洒落だし凄く雰囲気も落ち着く。」

雪ノ下母「そうね。貴方もこんな雰囲気の方が落ち着けると思ったから此処にしたの。」

陽乃「賑やか過ぎるのはお母さんに合わないしね。私もこういうの割と好きな方だから。」

雪ノ下母「そうですか、それなら良かったわ。」

私は今日の夜にお母さんと一緒にロートリート歓楽街で食事をしてるんだ。《鳳凰星武祭》で食事に行く約束をしてただけど、お母さんも忙しいから遅くなっちゃったんだ。

雪ノ下母「それで、学業や学院の生活はどうです？順調かしら？」
陽乃「うん、充実してる。早い話だけど、後1年もしたら界龍を卒業だと思いと寂しいかな。まだあの学院に居たいって気持ちがある。」

雪ノ下母「余程気に入ってるのね。」

陽乃「今の界龍の居心地が良過ぎるのかもね。あの環境で生活出来るのは滅多にないと思う。しかもその環境が人の手によって作られたんだもんなあ。」

雪ノ下母「比企谷さんの事ね。界龍の序列2位で貴方とパートナーを組んで《鳳凰星武祭》で優勝した……」

彼のおかげで今の界龍があると言っても過言ではない。それくらい今の界龍は良い方向に進んでる。

雪ノ下母「彼は一体何者なの？私も界龍の幹部だから一通りの事は調べてありますけど、彼の家柄、資格、家族構成をみても普通としか思えないわ。」

陽乃「……………まあ、書類とか資料ならそんなところだよ。でも、彼の過去や前の目を見ればそんなの吹き飛ぶよ。」

雪ノ下母「……………どういう意味です？」

陽乃「見たい？現在の彼と過去の彼の写真。」

雪ノ下母「……………ええ。」

私は携帯の中にある写真と彼のプロフィールを映している端末をお母さんに渡した。

雪ノ下母「……………」

お母さんは驚いた顔をしていたけど、すぐ元の顔に戻した。お母さんがあんな顔をするのは久しぶりに見た気がする。

雪ノ下母「……………陽乃、比企谷さんに一体何があったのです？人の目はこんな風にはならないはずです。」

陽乃「そうだね。うん、私もそう思ってる。お母さん、今から言う事は誰にも言わないでね？もし言ったら、いくらお母さんでも許さないから。」

雪ノ下母「……………分かったわ。」

そして私は、私の知る範囲で八幡くんの過去を話した。勿論、私が彼にしてしまった事も。彼がいない所で話すのは気が引けたけど、流石に言わないわけにはいかない雰囲気ではなかった。

陽乃「……………という訳なんだ。今の八幡くんが良い目をしてるのは、十中八九シルヴィアちゃんのおかげ。」

雪ノ下母「……………彼にそんな凄惨な過去があったのね。人を見た目

で判断してはいけないとはこの事ね。」

うん、全くその通りだね。

雪ノ下母「比企谷さんはとても優しい人ですね。貴方から聞く限りではその印象がとても強いです。今でこそ輝いていますが、1年前の界龍に来る前の彼は儚く感じます。」

陽乃「……私はそんな彼にちよっかいを出してたんだ。面白いからっていう理由でさ。」

陽乃「思えばあれが引き金になってたんだよね。私があんな事を言わなければ、八幡くんがあんな思いせずに済んだ。」

雪ノ下母「陽乃、それは言っても仕方のない事よ。それに、それを言ったら今の比企谷さんを否定する事になるわ。あの事件があつたからこそ、今の比企谷さんがいるのだから。」

陽乃「……そうだね。」

雪ノ下母「貴女が気に病むのは分かります。自分の犯した事を気にするのは当然の事です。それだけの思いがあるのなら、彼も許してくれた筈。」

陽乃「……うん、許してくれた。」

雪ノ下母「なら、貴女が気にする事はもう無いのよ。忘れるとは言わないけど、胸の内にしまっておきなさい。」

……こんな空気になっちゃったけど、やっぱりお母さんは良い事言うなあ。

雪ノ下母「少し辛気臭くなっちゃったけど、陽乃。貴女がいつも学院で楽しみにしている事はないの？貴女の学院生活を聞かせて頂戴。」

お母さん、気を遣ってくれたのかな？少し表情が柔らかい。
よぉーし！なら私も！

陽乃「そうだなあ……あつ、そうそう！」

この日の夜は、親子久しぶりに打ち解けあった。今年の冬休みはお母さんの所に帰ろつかな。

※名誉ある傷

シルヴィア side

あゝあ……憂鬱だなあ。もうすぐアジアツアーが始まっちゃう。嫌なわけじゃないけど、八幡くんとまた会えなくなっちゃうのがもの凄く憂鬱。

だからここ最近は家に帰ってなるべく一緒に居られるようにしてるから充実感は得られてる。でもこの感情は仕方ないのかなあ。

八幡「もうすぐアジアツアーが始まっちゃうな。今度のはそう長くはならないんだろ？」

シルヴィア「うん、3週間。前に比べたら物凄く短い。でも……」

八幡「シルヴィイからしてみれば長いと。」

シルヴィア「うん……」

だって八幡くんと会えないんだもん。数日なら耐えられるけど、週ってなると話は別だよ。流石に辛いよ。

八幡「まあ俺は学院とか修行とかがあるからまだ大丈夫だが、シルヴィイはライブだけだからな。余計に考えちまうか。」

シルヴィア「これが終わったら次は後々っていう風に考えちゃうんだ。私って八幡くんの事好き過ぎるのかな／＼」

八幡「……まあそう思ってくれてるのは嬉しい／＼」

そ、そうだよ／＼恋人同士が好きだって思い合う気持ち嬉しい／＼／＼／＼／＼／＼

シルヴィア「ね、ねえ八幡くん／＼／＼今日はさ、一緒にお風呂入らない？なんか久し振りにお背中流したくなっちゃって……ダメかな

？／／／

八幡「……………ま、まあ、別に断る理由は無いからな。いいぞ／／／」
シルヴィア「じ、じゃあ八幡くん先に入っててね！私は心の準備と
があるから！」

八幡「お、おう。」

急だったけど受けてくれて良かった〜！最近一緒に入ってなかつ
たっていうのもあるけど、背中を流したいっていうのも本当だしね。

本当は一緒に入りたいのが本音なんだけど／／／

——風呂場——

シルヴィア「お、お邪魔します…………／／／」

八幡「ああ…………」

やっぱりこれはまだ慣れないなあ／／／お互いの裸を見合うのは。
私はバスタオルを巻いたまま湯船に浸かり、八幡くんの近くまで
寄って行った。

シルヴィア「…………やっぱり八幡くんの筋肉って凄いね。凄く鍛えら
れてる。」

八幡「まあ鍛えてるからな。武術を学ぶ者としてはこれくらいは当
たり前だ。」

でも、こんなに凄い筋肉の中に柔らかさもある。私を抱き締めてく
れる時、凄く柔らかい感じがするから分かる。

それに…………

シルヴィア「この傷も見慣れちゃったけど、痛々しいとは思った事

ないんだよね。」

八幡「ああ、背中はこの痕か……この傷は治療しても治らなかったらしくてな。まあ、暁彗の大技を真正面から食らったから無理もないか。」

八幡君の背中には【覇軍星君】から受けた大きな雷の痕がある。映像の記録を持ってたから分かったけど、物凄い雷の技だった。火傷とか血が凄かったけど、最後には勝ったから凄く嬉しかった。

あの時はもつと傷があつたけど、治療したから殆ど消えてるんだよね。傷が大きかったこの部分は仕方ないよね。

シルヴィア「でも、私はこの傷好きだな。八幡くんに合ってる気がする。」ダキッ

八幡「まあ、名誉ある傷だからな。俺が序列2位を勝ち取った証でもあるからな。」

シルヴィア「うん……」

私は暫く八幡くんの事を抱き締めていたけど、その事に気づいたのは目の前の八幡くんの身体を見た時だった。

第7章 学園祭 驚きの会議

シルヴィア side

ツアーが終わって2日間だけ八幡くんと一緒に過ごした後、すぐに月一度の六花園会議が行われていた。そこまではまだいいの。でも1つだけ変わったところがあるの。

それは生徒会長の変更だった。余程の事がない限りは変わる事なんてあり得ない。自ら生徒会長を進んでやろうなんて人はいないだろうし。そんな新生徒会長になった人物は……

アーネスト「……まさか君が新しい生徒会長とはね。」

シルヴィア「どういいうつもりなんだろうね?」

左近「私にも意図が読めませんね。」

星露「まあ妾にはどうでもよい事じゃが、驚きには違いないのう。」
クロードディア「ええ。彼が会長を降りるなんて考えられませんから。」

オーフェリア「……………」

そう。新しい生徒会長という人物は、レヴオルフ黒学院の序列1位【孤毒の魔女】として知られているオーフェリア・ランドルフエンさんだった。

アーネスト「それで、何故彼が会長から降板したのか説明してはくれないかな？ ミスランドルフエン。」

オーフェリア「……………レヴオルフの会長選任は序列1位の指名によるものなの。だから私が彼を選ばなかっただけ。」

シルヴィア「だからオーフェリアさんなんだね。指名しなかったら自分になるの？」

オーフェリア「……………ええ。」

まあ此処にいる全員彼に好印象なんて持ってないからね。いや、持てるはずが無いんだけど。

オーフェリア「……………それよりも【万有天羅】。」

星露「ん？ なんじゃ？」

オーフェリア「……………何故貴方が生徒会長なの？」

星露「なんじゃその言い方は!?! まるで妾が会長である事が変みたいに聞こえるじゃろうが!」

オーフェリア「……………」

星露「何故黙るのじゃ？」

オーフェリア「……………何故八幡じゃないの？」

星露「スルーしおった……………こやつ人の話も聞かずスルーしおったぞい。」

オーフェリア「……………そんな事より、どうして八幡がいないの？」

星露「八幡が生徒会長じゃないからに決まっておろうに。他に何があるのじゃ？」

確かにそれ以外理由なんて無いしね。此処は例年通り、生徒会長しか集まらない事になってるし。

去年の今は違っただけ。

オーフェリア「……………今すぐ八幡をここに呼んで。」

星露「何故じゃ?」

オーフェリア「……………彼といた方が落ち着くもの。」

え!?それだけ!?ま、まあ私も呼べるのなら呼びたいけど……

星露「無理じゃ。そんな理由であやつを呼ぶなどバカげておるわ。」
オーフェリア「……………そう。じゃあ仕方ないわね。」

オーフェリアさんは急に端末を開き、通信を取り始めた。

アーネスト「ミスランドルフエン?」

オーフェリア「……………」

八幡『おう、オーフェリア。』

オーフェリア「こんにちは、八幡。」

え!?八幡くんに通信!?

八幡『どうした?休日の昼に?』

オーフェリア「……………それは……………」

するとオーフェリアさんは、急に星露の方を見てから八幡の方へと向き直った。

オーフェリア「……………貴方のところの生徒会長が居眠りをしたせいで会議が進められないから代わりに来てくれないかしら?」

星露「うおい!?何を言ってもががっ!!」

これは八幡くんをここに呼べるチャンス♪

八幡『叩き起こせばいいじゃねえか。』

オーフェリア「……………何度もやったわ。でも起きないの。」

八幡『……………分かった。今行くから待って……………っていうか何でお前がそこにいるんだ?』

オーフェリア「……………私がレヴオルフの新しい生徒会長だから。」

八幡『そうなのか。あの豚と入れ替わったのか。これでレヴオルフも少しはマシになるな。』

八幡『じゃあ俺もすぐに行く。それまで待っててくれって他の会長たちにつたえてくれ。』

そして通信は切れた。やったあ♪これでまた八幡くんといられる時間が増える♪

星露「ふはあ!お主なんて事を言うのじゃ!?あの説明では妾が怒れるではないか!」

オーフェリア「……………」プイツ

星露「なんじゃそれは!?そんなに妾が嫌なのかえ!」

オーフェリア「ええ。」

星露「即答するでないわ!!傷つくではないか!妾も人間じゃぞ!」

なんか……………星露がオーフェリアさんのおもちゃになってるような……………

アーネスト「あはは……………少し賑やかになりそうだね。」

クローディア「前任よりは良いと思いますが、今回だけにしてほしいですね。」

左近「ま、まあ……………これが続く事はそんなにないと信じたいですね。」

シルヴィア「あつ、左近くん！八幡くんが来たらまた席変わってもらってもいいかな!？」

左近「え、ええ。」

シルヴィア「ありがとう♪」

アーネスト「……ミスリユーネハイムも大喜びだね。」

――5分後――

八幡「……すみません、遅れました。」

シルヴィア「やつほゝ八幡くん！待ってたよ♪」

オーフェリア「………こんにちは、八幡。」

星露「八幡！これは誤解じゃからな！妾は一睡もしておらん！」

クロードディア「こんにちは、比企谷さん。」

アーネスト「突然の呼び出し、済まなかったね。」

左近「どうも。」

八幡（………あゝ、なんとなく分かったわ。）

八幡「つまり、オーフェリアが俺じゃなかったのが不満だったから俺を呼んだと。」

アーネスト「………君は凄いね。今のやり取りだけで殆ど正解を出すなんて。」

八幡「まあ星露は大事な会議とか話では寝ない奴だって事は知ってますからね。」

シルヴィア「じゃあなんで来たの？あつ、別に来て欲しくないってわけじゃないよ？むしろ来て欲しい♪」

八幡「ここではやめい。此処に来たのは、俺が来なきや会議進まないだろ？だからだよ。」

おおうさすが八幡くん！

八幡「来たのはいいが、椅子6脚しか無いじゃん。」

シルヴィア「八幡くん！私のところに座って！そして私を抱えてくれればいいから！」

オーフェリア「……………出来れば私にして欲しいわ／＼／」

八幡「……………しないからな。」

八幡くんはそう言うのと、能力でリクライニングシートを作った。1人だけ贅沢だなあ。

八幡「1人増えましたけど、会議始めましょうよ。新会長もこういうのはこれつきりな？」

オーフェリア「……………分かったわ。」ギユ！

あっ!? ああゝ!!?

八幡「おい、なんで俺の腕に抱き着く？」

オーフェリア「……………私がしたいから。」

八幡（この子素直になり過ぎてない？）

シルヴィア「むうゝ!!」プクゝ

シルヴィア「えいっ!!」ギユッ

八幡「シルヴィ……………」

シルヴィア「八幡くんは私の彼氏だもん！こうするのは当然でしょ！」

八幡（だからって張り合う必要は無いと思うんだが…………）

アーネスト「……………これはもう少しかかりそうだね。」

クローディア「彼は人気者ですね。」

左近「ええ、私の学園でも彼の話は度々耳にしますので。」

星露「妾が言うのもあれじゃが、いい加減話を進めたいのう。」

2人の助っ人

八幡 side

場もようやく落ち着いてきたところで、俺たちは今回の会議へと話を進めていた。内容は勿論、今年の学園祭の事でだ。

去年はクインヴェールが凄かったが、今年もクインヴェールとウチの学院の界龍が凄い事になるだろう。理由としては、界龍が鳳凰星武祭で準決勝を独占した事と、俺とシルヴィの関係でだ。

あんなに騒ぎになったんだ。星武祭を除けば1番六花外から客が来るイベントだ。こんな機会を逃す奴はいないだろう。

アーネスト「さて、個々の学園が希望している出店の仕方だけど、何かあるかな？ 僕たちガラードワースは例年通りに、サンドイツやトーストに洋菓子と紅茶を合わせた経営を中心に、学園内で剣術披露をしたいと思っている。」

クロードディア「私の学園も例年通り、出店をする予定です。こういう時くらいは戦う事を忘れて楽しんで欲しいので。」

左近「僕のところは、派閥に分かれて研究の発表などをしたいたいと思っています。後は、一般人でも簡単に製作出来て、安全な煌式武装の作成教室をしようと考えています。」

星露「ほほう、画期的じゃなあ。」

アーネスト「確かにアルルカント・アカデミーの強みは煌式武装についての知識の豊富さだからね。興味を持ってくれる人々は多いだろう。他の3人はどうかな？」

シルヴィア「私も去年と同じかな。これといって変える理由もないしね。」

オーフェリア「……………私も変えるつもりはないわ。強いて言うなら、言う事を聞かない生徒を学院の方で謹慎させるくらいね。」

星露「妾も特にないのう。」

八幡「店をやるうとは思わないのか？」

星露「考えたのじやが、ノると思えんしのう。それに、界龍で料理上手といったら、お主か陽乃、虎峰くらいしか思いつかんからう。」

もつというと思うけどな。お前が知らないだけで。

アーネスト「折角此処にいるんだ。比企谷くんは何かないのかい？」

八幡「…………俺ならコロシウムだけじゃなくて、武術の簡単講習とかですかね。界龍にはそれくらいしか見せる部分がないですからね。」

八幡「後は界龍が使っている武装の展示または体験の使用ですね。純星煌式武装は危な過ぎますから無理ですけど。」

星露「なるほどのう。コロシウム以外にもやり方は様々じやのう。」

八幡「むしろ俺は何でこんな事思いつかなかったのか、疑問に思うがな。それよかオーフェリア、レヴォルフは本当にカジノしかやらんのか？」

オーフェリア「…………ええ、そのつもりだけど、どういう意味かしら？」

八幡「いや、お前らのところで料理出来るやつ集めて軽食でもやればいいんじゃないかと思つてな。結構いるだろ？料理出来る奴。」

オーフェリア「…………私は八幡とユリスとしか関わりがないから他者のプライバシーは分からないわ。そもそも、料理の出来る人がレヴォルフにいるとは思えないのだけど。」

八幡「あー、出来ればこれはオフレコで頼むな。実はこの前、歓楽街に行って飯食った時があるんだが、偶々入ったその店、お前んこの序列12位が経営してた店だったぞ。」

「「「「え？」」」」

全員呆けた顔をしたまま、俺の方を見ていた。

オーフェリア「……………それは本当なの？」

八幡「ああ。確か【螺旋^{セブテントリオ}の魔術師】だったか？そいつとその舎弟の奴らがやってたぞ。味も中々だった。顔は少しアレだが、レヴォルフだから大丈夫だろうし、敬語で話す奴だから接待向きだろうからな。」
「「「「……………」」」」

いや、俺も初めはそんなリアクションだったから。

オーフェリア「……………分かったわ。少し考えてみるわね。」

八幡「ああ。後はウルサイス姉妹の妹の方も料理上手だぞ。お前んところには生徒会に入ってるあの緑髪の奴と序列5位の【反鏡^{パトホル}の魔女】がいるだろ？そいつらにも声掛けてみたらどうだ？」

オーフェリア「……………わかったわ。」

ふう…………長々と説明すると少し疲れるな。

八幡「ていうか何見てんだよ？」

シルヴィア「八幡くんってさ、レヴォルフを更生させる気なの？」

八幡「は？何で？」

シルヴィア「だって今の会話を聞くとそうにしか聞こえないよ！」

そ、そうなの？全くそんなつもりなかったんだけどな。偶々思いついたから言ってみただけなんだけど…………

アーネスト「ま、まあこれで各学園の希望は聞けたから良しとするよ。今日の会議は以上だよ。それと、学園祭の期間は羽目を外す生徒が多いからね。くれぐれも問題を起こさないように注意をしておいてほしい。」

そして今月の六花園会議が終了した。

シルヴィア「やつと終わったあ〜！ねっ、八幡くん！これから何処かに出掛けない？デートしようよ♪」

八幡「生徒会長の仕事はどうした？」

シルヴィア「するよ？デートの後に！」

仕事よりも俺とのデート優先なのね。

オーフェリア「……………」【戦律の魔女】。

シルヴィア「ん？何？オーフェリアさん。あつ、言っておくけど、一緒に行くのはダメだからね！」

オーフェリア「……………」そうじゃないわ。貴女にこれを渡そうと思っただけよ。」

シルヴィア「？」

オーフェリアがシルヴィに渡したのは2枚のチケットだった。
なにになに？○○○カフェ主催ッ！！

カップル限定！恋人と一緒にこれに挑め！特大サイズのパフェ！
成功すれば記念品プレゼント！失敗しても写真撮影があります！

シルヴィア「……………」キラキラ

オーフェリア「……………」欲しいかしら？」

シルヴィア「うん！欲しい！」キラキラ

オーフェリア「……………」なら貴女にあげるわ。私にはそんな相手いな
いもの。八幡と行っても良かったのだけど、ニュースに取り上げられ
るのは嫌だから。」

シルヴィア「ありがとうオーフェリアさん♪」テ ブンブン
オーフェリア「……………」どういたしまして／＼／

シルヴィ、オーフェリアと握手するのは良いけど、手を振り過ぎだ。

シルヴィア「…………」ワクワク キラキラ

なんとも期待のこもった目をしている。

八幡「……分かった。どうせこの後は何もないしな。行くか。」
シルヴィア「うん!!」

倒すは特大パフェ！ 前編

シルヴィア side

シルヴィア「♪♪♪」

八幡「お、おいシルヴィ。嬉しいのは分かるが、そんなに急ぐなよ。まだ余裕あるだろう？」

シルヴィア「あるけどさ、やっぱり早くやりたいよ！恋人と一緒にパフェ食べるのっ！思ったんだけどさ、私たち食事は何度もしてるのに、パフェを頼んで食べさせ合いっこした事なかったよね。何で気づかなかったんだろう？」

八幡「…………何でだろうな。」

シルヴィア「まあ、いつか♪早く行こつ、八幡くん♪」

八幡「そんなに慌てるなよ。パフェは逃げねえって。」

♪
楽しみだなあ…………八幡くんと食べさせ合いっこが出来たりして

—————パフェ—————

シルヴィア「着いた〜！」

八幡「シルヴィが急ぐだけあつて早く着いたな。」

シルヴィ「早く中に入ろうよ！」

店員「いらっしやいま…………え、ええ!?」

私に反応してるのかな？それとも八幡くんかな？八幡くんも有名なからなあ。

八幡「……2名です。」

店員「あつ！は、はい！2名様ですね！ご案内いたします！」

さすが八幡くんっ！気がきくなあ。それにしても、周りからの視線も結構あるなあ。

『ねえねえ、あの人たち！』

『あつ！本物だろ。』

『凄い！こんな所で会えるなんて！』

まあ当然だよな。私たち外食とかあまりしないからなあ。

店員「こ、こちらにお座りください！只今メニューをお持ちいたします！」

シルヴィア「あつ、すみません。私たち、これをしに来たんですけど、出来ますか？」

店員「お、お預かりします……カップル限定の特大パフェに挑戦ですネ？」

シルヴィア「はい。」

店員「で、では準備致しますので、少々お待ちください！」

店員さんはそう言うと、厨房の方へと向かって走って行った。

シルヴィア「ねえ八幡くん。どんなパフェかな？」

八幡「そうだな……まあオーソドックスなパフェが特大になったものじゃないか？普通に考えて。チョコとかは考えにくいからな。」

シルヴィア「まあそうだよな。挑戦とかって割と普通なのが多いって聞くから。」

八幡「シルヴィはパフェとかよく食べるのか？」

シルヴィア「うーん……頻繁には食べないかなあ。人気のスイーツ

店だったら食べるけど、私はケーキとかしか頼まないかなあ。」

八幡「俺もシルヴィがパフェ頼むところを見たのは今日が初めてだからな。」

確かに私、八幡君の前ではパフェとかアイスクリームとかって頼んだ事なかったなあ。今更だけど何でだろう？

八幡「甘い物は好きだが、あんまり甘過ぎるのはキツイな。マッ缶並の甘さだったら、俺多分すぐにギブアップするぞ。」

シルヴィア「そんなこと言わないでよぉー！本当にそうだったらどうするのさぁ。」

私信じてるからね！そうならないよね!?

――10分後――

店長「お待たせしました。私、タイムを測らせて頂きますこの店の店長です。本日は特大パフェの挑戦、ありがとうございます。」

店長「ルールの説明を致します。制限時間30分以内に特大パフェを完食出来ればクリアとなります。その際には記念品と写真撮影をいたします。クリア出来なかった場合でも写真撮影があります。クリアを目指して頑張ってください。」

店員「で、ではこちらがカップル限定の特大パフェとなります！」

目の前に置かれたのは、本当に大きなパフェだった。人の顔が余裕で隠れるくらい大きさだった。

アイスクリームがたくさん入れられていて、ストロベリートッポが3本、プチシュークリームが3つ、カットされたオレンジと白玉も3つずつで細切りにされたキウイが2切れ。見た感じこのソースはストロベリーとオレンジだろうね。その上からはトッピング用のチョコ。そして容器の1番下にはストロベリーソースがたくさん溜まっ

ていた。

八幡「かなりデカイな……」

シルヴィア「おおく食べ応えがありそうだねえ。」

店長「では……準備はよろしいでしょうか？」

私と八幡くんは同時にスプーンを持って、ジッとパフエを見つめた。

店長「では、カップル限定特大パフエチャレンジ。よーい、スタート！」

倒すは特大パフエ！ 後編

—————

店長が開始の合図を出すと、2人は同時にパフエの頂上の部分からアイスをすくい口に入れた。

シルヴィア「んんゝ美味しいゝ♪」

八幡「ああ、美味しいな。」

シルヴィア「あつ、八幡くん、みかんとかどうしようか？」

八幡「半々でいいんじゃないか？シルヴィが食べたいものは2つ食べろ。それ以外は俺が2つ食うから。」

シルヴィア「分かった。」

時々会話を入れながらの食事、時間を無駄に消費しているようにも見えるが、これも戦術なのだろう。

そして5分を切る頃には、パフエの2割を食べ終わっていた。

シルヴィア「思った以上に減らないものなんだね。大食いの人たちがどれだけ凄いのか、なんとなく分かったよ。」

八幡「これと大食いはあまり関係ない気がするんだが……まあいいか。」

シルヴィア「もう少しペースを上げたほうがいいかな？」

八幡「いや、このままでいいだろう。無理に上げたら後が辛いからな。」

シルヴィア「そうだね。じゃあ楽しみながら急いで食べよう！」

八幡「どっちみち急ぐんじゃねえか。」

八幡とシルヴィアは手を止めてはいなかったが、パフエも中々減らない。サイドメニューにも手を伸ばし、パフエと一緒に食べていた。

店長「10分経過です。残り20分でございます。」

八幡「こういう時の時間って割とあつという間だよな。」

シルヴィア「そうだね。時間の大切さが分かるよね。」

制限時間の3割を切ったのに、2人はまだまだ余裕だった。お腹もそうだが、まだ精神的にも余裕なのだろう。

八幡「ん、こっちは漸く容器が見えたぞ。そっちはどうだ？」

シルヴィア「私はまだ。八幡くんやっぱり早いね。」

八幡「特別大食いつてわけでもないが、コツは咀嚼を減らす事だな。噛み過ぎると口が疲れてくるからな。」

シルヴィア「なるほど……うん、ありがとう♪」

パフエの方は4割くらい完食していた。気になる残り時間は17分でまだ余裕はあった。

八幡「シルヴィ、容器を反転させるか。俺がシルヴィの方を食べるから、シルヴィは俺の方を食べてくれ。」

シルヴィア「それはいいけど、八幡くんお腹大丈夫？」

八幡「安心しろ、まだ平気だ。」

シルヴィア「……大丈夫ならいいけど、無理はしないでね？そう言ったのは八幡君なんだから。」

八幡「分かってる。」

2人は容器を逆転させてお互いの食べている場所を交換した。

八幡「そんなに遅れてるってわけでもないな。シルヴィも食べるの早いな。」

シルヴィア（あともうちよつとで容器が見えてたんだね。でも、八幡くんが頑張ってくれてるから、私も頑張らなきゃ！）

――10分経過――

残り時間は5分。2人もバテている頃合いだと思うであろう。だが実際は…………

シルヴィア「はい八幡くん、あ〜ん♡」

八幡「あむっ…………うん、美味しい。シルヴィアもするか？」

シルヴィア「うん！喜んで♪」

八幡「じゃあ、あ〜ん。」

シルヴィア「あ〜ん♡…………んん〜美味しい♪」

パフェを9・7割完食して残りのアイスの部分で食べさせ合いっこしていた。

しかも2人揃って余裕そうな顔を崩していなかった。

シルヴィア「あつ、もう終わりだね。」

八幡「そうだな。だが案外楽しかったな。」

シルヴィア「そうだね。またやりたいね。」

八幡「最後どうする？俺がやろうか？」

シルヴィア「お願いしていいかな？」

八幡「任せろ…………んっ…よし、完食だ。」

最後は八幡が容器を自分の口に傾けて溶けたアイスを口に流し込んで完食した。

店長「そこまでです。完食タイムは…………25分12秒でした。おめでとうございますー！」

シルヴィア「やったあ♪」

八幡「なんとか出来たな。」

店長「では、写真撮影を致しますので、こちらへ。」

八幡とシルヴィアは店長に着いて行つた。場所に着いたが、そこにはハートマークがたくさんついたアーチがあつた。

八幡「……凄えな。」

シルヴィア「うん……凄いね。」

店長「では写真を撮りますので、そのアーチの後ろに立つてください。」

アーチはちょうど2人が身体を出せる大きさだった為、ちょうど良かった。シルヴィアは八幡の方へ嬉しそうに抱き寄っていた。八幡もそれに応えるようにシルヴィアの肩を自分の方へと抱き寄せた。

店長「仲がよろしいようで何よりです。では、撮ります。そのまま動かないでください。」

パシヤツとフラッシュと共に数回音がして、写真撮影は終了した。

店長「今日はカップル限定の特大パフェへの挑戦、並びにチャレンジ達成おめでとうございます。こちらがチャレンジ達成した記念品と写真でございます。」

2人が受け取ったのは、先程撮られた写真が額縁に入れられていたのだが、その額縁が『パフェよりも甘い絆で結ばれます♡』という風に書かれていた。

記念品はペアルックのマグカップだった。それぞれ自分の名前が彫られていた。

シルヴィア「ありがとうございます！また来ますね！楽しかったです！」

八幡「俺も楽しかったです。」

そして八幡とシルヴィアはお店から出た。

店長「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております。」

シルヴィア「ふうふう食べたなあ。これは少し身体を動かした方が良いかもね。」

八幡「なら界龍^{ウチ}に来るか？身体なら動かせるぞ。」

シルヴィア「あははっ！じゃあそうしようかなあ。」

冗談を言い合いながら、2人の待つ家へと帰って行ったのであった。

尊師からのお願い

八幡 side

八幡「つー訳だから、木派の奴等を説得して武術講習会とか開いてくんねーかな？」

虎峰「いや、何がつー訳なんですか？確かに僕としては好ましい提案ですけど、皆が納得するとは思えません。」

ものの見事に拒否？られました。何で？難しくないでしょ？

虎峰「それなら八幡が1人でやれば良いじゃないですか。僕たち木派よりも武術に長けていて、剣術、双剣術、棍術にも優れているんですから。」

八幡「それって俺に学園祭を満喫させないつもりだよな？シルヴィ置いて1人モルモットになれって言ってるんだよな？」

虎峰「そこまでは言ってますけど……」

八幡「だったら良いだろ？俺の他にも武術に優れた奴ならいるぞ？棍術なら羅、武術ならお前と暁彗と宋、旋棍なら銀梅、鉤爪を使った技なら永成、たくさんいるだろ。」

虎峰「僕は別に構いませんが、八幡もやって下さいよ。序列2位の演武なら誰でも見たいと思いますよ？」

八幡「それよりも俺は、シルヴィと学園祭デートするっていう重要任務がある。」

虎峰「何ですか!!その羨ましい予定は!!僕と代わってくださいよ!!」

八幡「誰が代わるか!」

こいつ何言ってるの!?!代わるわけないじゃん!

虎峰「…………まあ兎に角、条件としては八幡にもやってもらう事です。それは外せません。」

八幡「分かったよ。学園祭の最後の日ならいいぞ。メインディツシユは最後にとるもんだからな。」

虎峰「シルヴィアさんのお出かけを楽しみたいだけじゃないですか？」

八幡「……それ以外にあると思うか？」

虎峰「その無駄に良い笑顔、今だけ無性に腹が立ちます。」

……何だよ、別に良いじゃねえか。

暁彗「……………学園祭で演武？」

八幡「ああ、やってくれないか？」

暁彗「……………ふむ、鍛錬をする予定だったが、いいだろう。微力ながら手伝わせてもらう。」

八幡「悪いな。今度飯でも食いに来てくれ。」

暁彗「……………かたじけない。」

八幡「いや、礼を言うのはこっちの方なんだが…………まあいいか。」

宋「私の八極拳を学園祭で？」

八幡「ああ。俺が知ってる武術を極めてる奴といたら、暁彗と虎峰とお前だからな。是非力を貸してもらいたい。勿論、学園祭を楽しむ時間も作るように考慮する。」

宋「尊師のお願いでしたら断る理由なんてありません。喜んで協力させて頂きます。」

八幡「いや、別に強要してるわけじゃないから断ってもいいんだぞ？」

宋「特にやる事も無いのでちょうどよかったですよ。」

八幡「ああ……………そう。」

銀梅「私たちの武術を……ですか？」

八幡「ああ。空いている日でいいんだが、頼めるか？」

永成「私は構いませんよ。学園祭を回るといっても、特別仲が良いのは銀梅だけです。」

銀梅「私も永成と回る約束しかしていないので、大丈夫です！日にも尊師が調整した日に従います！」

八幡「お、おう……」

羅「俺の棍術を学園祭で？」

八幡「どうだ？出来そうか？」

羅「最終日にグラン・コロッセオを見るくらいしか予定がなかったのぢょうど良かったです。喜んでやらせて頂きますよ、尊師。」

八幡「なら良かった、じゃあ頼んだ。」

……この学校の奴等って予定無さすぎじゃないか？全員OKつて……

柊々『まあ、それだけハッチに頼まれ事されるのが嬉しいんじゃないの？』

八幡「俺にか？冗談だろ？」

柊々『冗談じゃないよ。ハッチはカリスマ性高いんだから当然だよ！』

でもまあ、これで広告も出せるな。星露に言って出してもらうか。

――黄辰殿――

八幡「星露、ちよつといいー」

……俺が部屋に入ったら、事は起きていた。星露といつ来たのか分からないが、俺の師匠の小苑さんが戦っていた。理由は何となく予想つくけどな。

星露「お主っ!! 今日はずもう我慢ならん!! 一発殴らんと気が済まんぞ!!」

小苑「ほっほっほ、やってみい小童。主の技が儂に当たればじやがな。」

星露「キイイイイ!!」

小苑「ほれほれ、そんなもんで儂には届かんぞ? もつと本気を出さんか。そもそも、なんで怒っておるのじゃ?」

星露「お主が妾の事をチビと言うからではないか!! 自分の言った事を忘れるでないわ!! 妾はチビ扱いされるのが大嫌いなのじゃ!!」

……ほらな? やっぱそんなとこだと思ったよ。小苑さんホント好きだな、星露をイジるの。まあ確かに面白いけどよ。

八幡「あーもしもし? 今大丈夫か?」

小苑「ん? おお、我が弟子ではないか。どうした? 久々に稽古をつけようか?」

八幡「それも良いんですが、今回は星露の方に。星露、俺が言つた武術講習会の事だが……」

星露「後にせい!! 今はこの分からず屋に一発入れんと気が済まんのじゃ!!」

……どんだけ頭にきてんだよ。

小苑「はあ、困ったのう。止まってくれたら八幡が料理を作つてやると言つておつたんじゃがなあ……」

星露「っ!!」ビダッ

おい、そんなんで止まるなよ。

星露「八幡よ、あやつが言っておったのは本当の事かえ？」

八幡「はあ……本当だ。俺の話も聞いてくれないと困るからな。もう大丈夫か？」

星露「うむっ！八幡の話とやらも食べながら話そうぞ。」

すると星露は歩き出した。恐らく俺の部屋に行こうとしているのだろう。

小苑「助かったぞ八幡。」

八幡「そう思ってるのなら、俺の料理をエサにすると、星露で遊ぶのやめて下さいよ。」

小苑「すまんう。此処に來るとつい楽しみでやってしまうのじゃ。」

八幡「……………まあ今回はいいです。小苑さんも良かったら食べていきます?」

小苑「では頂こうかのう。八幡の作る飯はどれも絶品じゃからのう。」

ご飯と水派

八幡 side

八幡「それで小苑さん？今度は星露に何を言ったんです？」

小苑「ん？僕は単にこう言うただけじゃぞ？『まだお主の目は肥えておらんから背伸びするでないぞ、チビよ。』つとな。」

八幡「それ絶対最後の言葉ですよ。わざわざそんな事口にしないでくださいよ。」

小苑「先も言うたが、この学院に来てからはこれが楽しみになってしもうてのう。あやつの反応も良いからついのう。」

ついでやらないで欲しい。そのせいで今日俺の方にもとぼっちりが来たんだから。

小苑「まあ許してくれんかのう？また抱き締めてやつても良いから。」

八幡「いや、大丈夫です。」

――八幡の部屋――

八幡「…………絶対もういるんだよな。」

小苑「まあ、そうじゃろうな。」

開けたくねえ…………でもああ言っちゃったからには作らないとなあ。俺は嫌々ながらも自分の部屋の扉を開き、中へと入った。

星露「……………」チーン

…………予想通り部屋の中に居たが、もう早速ガレていた。いや、飯

の話したのついさつきだよな？早すぎね？

小苑「はあ……こういうところはまだまだ子供のままだよな。八幡よ、お主は料理を頼む。このチビは儂に任せるのじゃ。」

八幡「分かりました。何かリクエストあります？」

小苑「そうじゃのう……なら青椒肉絲を頂こうかのう。」

よりによって星露の一番好きなメニューじゃねえか。まあ本人が復活してくれんなら何でもいいけどよ。

――20分後――

八幡「小苑さん、出来ましたので星露起こしてください。それでも起きなかったら俺が全部食ってやるとも言っているですよ。」

小苑「分かったのじゃ。」

それを実行した時の星露の行動の速さは最早次元を超えていた。こんな事で本気のスピードを出さないで欲しい。

星露「して八幡よ、武術講習会じゃったな。上手くいったのかえ？」

八幡「ああ、全員に許可は貰えた。」

星露「なら良い。じゃが八幡よ、水派はどうするのじゃ？」

八幡「俺も考えたんだが、そもそも一般人に何を見せりやいいのかわからん。陰陽術ならなんとかなるかもしれないが……」

小苑「呪符の方は念を込めて筆を動かさんと意味が無いからのう。後に念を送るやり方もあるがのう。」

木派だけやらせて水派は何もしないってのはなあ……流石に水派から批判来るよなあ。

八幡「星露は何かないのか？水派が出来そうないイベント。」

星露「それを言うたら木派と同じ演武しかならう。何も思いつかんのじやったらそれでも良いのではないか？」

八幡「まあそうなるよなあ、それでいくか。」

星露「うむ、妾からもそう伝えておこう。それよりも八幡よ、早う食べようぞ！」

小苑「そうじゃな。八幡、音頭を頼むぞ。」

八幡「はい……いただきます。」

師になったからには……

八幡 side

よし、陽乃さんとセシリーを含めた水派の星仙術と陰陽術の扱いが長けた人材は全員OKしてくれた。

だが、陽乃さんが受けてくれたのは意外だったな。あの人だったら身体動かしたいって言うと思っただが……

八幡「まあいいか、さて少し休む「おお、此処におったか八幡。」……どうした星露？」

後ろから星露が、何やら包みを持ちながら此方へと歩いて来た。

星露「何、お主に饞別をやろうと思ってのう。折角の学園祭なんじゃ、格好もそれらしくせんとな。」

八幡「格好？何のことだ？」

星露「八幡よ、これを着てみるのじゃ。」

星露が俺に手渡してきたのは、何やら白い羽織みたいな物だった。黒のラインが入っていてその中には黄色のラインも入っていた。

よく見ると星露が身につけているものと似ていた。

八幡「星露、なんだこれは？」

星露「見て分らんか？お主も師と呼ばれるようになったのじゃ。それにこの機会じゃからちようど良かろう。それを贈ろうと思っていたのじゃ。」

八幡「別にいらん。それに俺の制服じゃこれは着れないだろう。左腕の方は直裾何だしよ。そうした奴は目の前にいるけど。」

星露「良いではないか。しかしお主の言う通りじゃのう。その袖で

はそれは着れなんだか。なら八幡よ、お主新しい制服でも「いや、要らないから。」釣れんのう、弟子たちに良い格好をしてやろうとは思わんのか？」

弟子じゃねえし。そしたら俺だけ門下生いるんだよ。この学院のほぼ全員じゃねえか。

星露「まあこんな機会なんじゃから、学園祭の間だけでも着てみんか？中の服の方は漢服であれば何でも許す。どうじゃ？」

八幡「…………お前からの好意は滅多に無いしな。これ以上断るのも良心が痛むな…………分かった、学園祭の期間はこれを着よう。」

星露「おお！分かってくれたかえ！妾は嬉しいぞ！」

八幡「ああ。だが、この学院に漢服はあるのか？出来るならそれを拝借したいんだが。」

星露「済まんが制服の余りは無いんじや。卒業した者でも制服を置いていくなんて者は居ないからのう。」

そりやそうか。自分がそこで過ごした証でもあるからな。置いていくなんて奴はいないか。

八幡「いや、ならいいんだ。後は俺が何とかする。」

星露「そうか、迷惑をかけるのう。その代わり、学園祭は楽しむといい、ではの。」

そして星露は来た道に戻って行った。

八幡「かしどうするか…………漢服が売ってる店は調べれば分かるだろうが、あんまり金は掛けたくないな。」

京華「あっ！はーちゃんだっ!!」

沙希「ん？比企谷？」

柚珠奈「あっ、尊師！」

京華「あのね！建物がいっっぱい並んでる所で人も沢山いて、看板とかが沢山ある場所〜！」

建物か……商業エリアか歓楽街、後は可能性低いが、新開発エリアだな。まあ新開発エリアはないだろう。星露がそんな所に連れて行くとは思えない。

京華「後ね〜！お店の前にお洋服が沢山あったの〜！色んな服があったよ〜！」

八幡「そうなのか。ありがとなけーちゃん。服の専門店みたいだな。その店は大きかったのか？」

京華「うんっ！エレベーターで一番高い所まで行ったよ〜！」

これでかなり候補が絞れたな。京華の情報がかなり役立ったな。

八幡「よし、何とかなるな。悪いな、休みの日に邪魔しちゃって。」

沙希「別に。京華もあんたと話せて嬉しそうだし。」

柚珠奈「私も嬉しいです！」

京華「はーちゃん！また空手ごっこしてね！」

……うん、それはまた今度ね。あれには本当に驚かされたし、もう受けたくない。本当に痛かったしな。

けーちゃんの言ってた店は……商業エリアの少し南にある「エベツクス」って店か。品揃えも良さそうだし、まずはここに行くか。

八幡「だが、こんなの着なくてもいいと思うんだけどな。」

服選び

八幡 side

……着いたは良いが、此処がけーちゃんの言ってた「エベックス」か。確かに店の前に服は並んでるけど、種類あり過ぎじゃね？執事服にメイド服、和服、制服と様々。ここまでは分かるが、何で鎧があるんだよ。誰が着るんだよ？もとい誰が装備するんだよ？漢服もあるから一安心だけど。

八幡「……取り敢えず入るか。中に入って案内板でも見れば場所は大体分かるだろうしな。」

――エベックス店内――

俺は店内に入って目の前にあった案内板を凝視していた。初めて来るところだからな、あとでパンフレットも持って帰るか。

八幡「1階から3階は私服になってるのか。漢服は……6階か。思ったんだが、絶対10階作る程服の種類ないだろ。」

しかも私服で3階も使ってるし。

――6階――

エレベーターが開き、6階に着いた。何となくは想像してしたが、色とりどりで様々な漢服があった。それだけに思った。

『やっぱり俺の制服は異常だ。』

そう思いつつも俺は目当ての漢服がある場所を探し回った。

八幡「しかし色んなのがあるんだな。こんなに種類があるとは知らなかったな。おっ、この辺だな。」

見た感じは俺たちの学院の制服に似ている。ズボンの方は少し違うがこれでも大丈夫だろう。だが、色んな色がある。別にどれでも良いんだけどな？

八幡「どうせなら界龍の制服に合わせるか。」

色は紫かピンクだったな。紫は見つかったが、ピンクは無いな。少し回って見るか。

冬香「あら、八幡さん？」

八幡「ん？ああ、冬香さん。」

冬香「奇遇ですね。どうしてこちらに？」

八幡「星露から白い羽織みたいなのを渡されたので、それを着る為の漢服選びです。」

冬香「そうだったのですか。ですが、こう言っては何ですが、八幡さんは好んでそういうものをする人だとは思えないのですが……」

八幡「まあ星露の好意もありましたしね。それに、学園祭だけの期間にしましたので。」

冬香「そうなのですか。ですが、それを言った瞬間に学院の皆さんは猛反対すると思いますよ。八幡さんはあれを着るべきだと皆さんそう言うはずです。」

俺としては着たくない訳ではないが、好んで着ようとは思わないんだけどな。

八幡「やっぱそうですかね。諦めるしかないのか？」

冬香「ふふふつ、そうですね。そうした方が受ける傷は小さく済み
ますよ?」

八幡「はあ……」

冬香「ところで、もう決まったのですか?」

八幡「一応界龍と似たデザインにしようと思ってたので。それっぽ
い服は見つけましたね。」

冬香「界龍と似たデザインというと2種類ありますが、こちらの服
は木派寄りですね。水派の制服では袖が通りませんしね。」

正論だ。あんなダボダボじゃ絶対通らん。

冬香「でしたらこの紫色の漢服を選ぶのですか?」

八幡「そうですね。まあこれ以外に見つからなかったっていうの
が、主な理由なんですけど。」

冬香「ふふふつ、そうでしたか。では行きましようか。」

八幡「……冬香さんはまだ買い物途中では?」

冬香「私は街歩きが趣味ですので。偶にこういう所も入ったりする
んですよ。」

まあ冬香さんなら不思議でもないな。むしろ当たり前前に思えてく
る。

――1階――

冬香「思わぬところで八幡さんと会えたので楽しかったです。」

八幡「そうですね。こんな偶然もあるものなんですね。」

冬香「そうですね。」

この人とは前にもこんな事あったしな。本当に界龍のイメージが
無いよな。

八幡「冬香さんはこの後どうするんです?」

冬香「八幡さんも居ますし、今日は帰ります。護衛をお願い出来ますか?」

八幡「先約が一生分あるんですが、今回は特別に許可しましょう。」

冬香「ふふふつ、八幡さんと居るとやはり面白いですね。」

1日試着

八幡side

漢服を購入した次の日。俺はその漢服と羽織（なんていう服か分からないから取り敢えず羽織）を1日だけ着てみる事にした。周囲からの反応はこの際除くとして、この服で過ごしても問題無いかどうかを試す為でもある。

そして星露にも一応顔を合わせておこうと思っている。意見も聞きたいからな。

八幡「しかし、思った以上に素材が良いんだな。軽いし動きの邪魔にもならない。こういうのは邪魔になるだけだと思ってたんだが、考えを改めないとな。」

俺自身が着た感想は、まあ羽織には着られてはいないということところだ。

廊下に出て普通に登校する。その際に朝飯は必要である。今日は服を汚したくないから（まあ常に汚したくはないんだが）唐揚げ定食にするか。

因みに俺は食べるスピードが少しだけ遅い為、皆より早く来る。

職人1「おつ、八幡坊ちゃん！なんだい今日はめかしつけちゃつて。」

八幡「星露に押し付けられたから、今日1日だけ着ようと思ってるんです。どうですかね？」

職人1「似合ってるよ！本当の師匠みたいじゃないか！あの子は身につけていても、そんなに威厳無いからね。」

まあ普段のあいつがアレだからな。仕方ないっちゃ仕方ないが、ほぼ自業自得だな。

八幡「まあそれについては否定出来ませんね。あつ、唐揚げ定食で。」

職人1「あいよつ！今日は師匠バージョンだからおまけしといてやるよ！」

八幡「どうも。」

男生徒1「そ、尊師っ!!?そのお姿はっ!!」

八幡「ああ、学園祭に向けて試着してるだけだ。今日はこれで過ごすと思うてる。お前から見てどうだ？変か？」

男生徒1「い、いえ滅相もございません!!とても良くお似合いですっ!!」

八幡「そうか。」

女生徒1「えっ!? 尊師!? その羽織は!!」

女生徒2「それは師父と同じ……」

八幡「ああ、学園祭に向けてな。お前から見てどうだ？」

女生徒2人「とても良くお似合いですっ!!」

八幡「そ、そうか……」

虎峰「は、八幡!? その羽織はどうしたのですか!!」

セシリー「わおー! 八幡カッコいいー!」

陽乃「ホントだー! 八幡くん良く似合ってるよー!」

八幡「ありがとうございます。」

こうも連発で似合つてると言われたら疑いたくなるが、陽乃さんから言われたらなんか安心するんだよな。

虎峰「それで、どうしたのですか？」

八幡「学園祭に向けて試着してんだ。簡単に言えば試運転だな。」

陽乃「学園祭に? 日常から着れば良いじゃん。似合ってるのに。」

八幡「俺の制服だと着れないんですよ。だから昨日買った漢服を着てこれを羽織ってるんです。」

陽乃「ああ! だから服が黒じゃないんだね!」

八幡「そういう事です。」

セシリー「でも勿体ないよー。普段からそれ着なよー! 絶対受け良から!」

八幡「俺はサービスをさせる為に着てるわけじゃないんだが?」

虎峰「良いではありませんか八幡。今日を機にそれで生活するのよ。」

八幡「お前までそんな事言うのか……」

俺の味方って誰も居ないの？

沈雲「おはようございます、師兄方。ん？比企谷くん、それをどうしたんだい？」

沈華「まるで羽織に羽織られている人じゃない。」

八幡「沈華は朝から絶好調だな。キレツキレじゃねえか。ていうかこれ答えるの何回目だ？」

冬香「おはようございます皆さん。あら八幡さん、良くお似合いですよ。」

暁彗「……………中々似合っているぞ、比企谷八幡。」

八幡「おはようございます冬香さん、暁彗も。」

陽乃「ねえ聞いてよ2人共！八幡くんってはこの羽織を学園祭でしか着ないって言うてるんだよ！と思う!!」

冬香「そうですね……………少々勿体無いかと。折角師父から頂いたのです、この際に着続けるのが良いかと。」

暁彗「……………梅小路冬香に同調だ。」

陽乃「やっぱり2人もそう思うよね！ほら八幡くん、やっぱりそれは日常で着るべきだよ！」

セシリ「陽姐にさんせー♪」

沈雲「よく似合ってるしね。僕も師姉に同意だよ。」

沈華「私もよ。」

虎峰「僕も賛成です。」

こいつら……………

八幡「もうちよつとは味方してくれてもいいじゃねえか。」

虎峰「まあまあ、いいじゃありませんか。」

セシリ「そうだぞ八幡ー。減るものじゃないんだからさー。」

八幡「俺の精神はすり減るんだが？」

この学院にはこの羽織よりも、俺の方を取ってくれる奴は居ないの

か？

それから八幡は、生徒に会う度に同じ内容の反応と質問を繰り返されていた。

――黄辰殿――

そして時間は過ぎ、現在放課後。

八幡「星露……」

星露「ん？八幡ではないか。なんで用かえ？」

八幡「いや、お前から見て俺の今の格好はどうだ？」

星露「何じゃそんな事か。普通に似合っておるぞ。此処に歌姫殿がいたら大喜びしそうなくらいにのう。」

八幡「……似合ってるのは事実だな？」

星露「うむ、妾は嘘はつかん。」

………ならいい。

八幡「今日は疲れた。1日だけ着るつもりが年中無休で着る羽目になった。」

星露「大体予想はつくわい。大方今日と学園祭しか着ないと言った

ら、全員に猛反対されたんじゃろ？」

八幡「……………正解だ。」

星露「まあ、そんなところじゃろうと思っつつたわ。それを着るのはそんなに嫌かえ？」

八幡「そう言うわけじゃない。」

星露「なら良いではないか。何を拒む必要があるのじゃ？」

八幡「……………確かにその通りだが、なんだかなあ。」

そして俺は、今日からあの羽織を着る事になってしまい、制服も新たに支給される事になった。

直での再会

陽乃 side

もうすぐ学園祭かあ……や一昨年とかはあんまりよく分からなかったから楽しめてなかったけど、今年は八幡くんが居るからねえ。楽しめる事間違いないだね！因みに去年も楽しかったよ！

やっぱり彼がいると違うね。前の彼も面白かったけど、今の彼はその倍くらい面白い。まあ私が仮面をつけてないこともあるんだけどね。

お母さんも八幡くんの事気に入ってるし、私も毎日充実してる。シルヴィアちゃんに八幡くんは取られちゃったけど、別に八幡くんを狙ってたわけじゃないから気にしてない。

にしても八幡くんったら、いつの間にあの世界の歌姫で超有名人のシルヴィアちゃんを堕としたんだろう？付き合ったのが去年の王竜星武祭だから最低でも1ヶ月前には合ってるよね。

でもしたら、あの2人ってそんな短い期間でお互いの事を好きになっちゃったのかな？シルヴィアちゃんに至っては八幡くんにもロメロだしね。

2人が一緒にいるところなんて王竜星武祭以来生では見てないけど、きつとラブラブなんだろうね。

まあ近くにいたら胸焼けしそうだし、これくらいの距離の方が良いのかもね。

……………ん？あれって……

雪乃「……………」

由比ヶ浜「……………」

小町「……………」

やっぱり！あの3人だ！こんな所で何してるのかな？よしっ！
行ってみよっと！

陽乃「ひゃっはろー！何してるの？こんな所で。」

雪乃「っ…………姉さん。」

【姉】って呼ばれたくはないんだけど…………まあいつか。

由比ヶ浜「や、やっはろーです……………」

小町「……………こんにちは。」

ありやりや、1番元気そうな子が1番落ち込んでるよ。どうしたのかな？

陽乃「学園祭の準備かな？」

雪乃「…………ええ。」

陽乃「そつかあ、3人は六花の学園祭初めてだっけ？なら楽しまないとね。」

由比ヶ浜「あの、界龍は何をするんですか？」

陽乃「界龍は拳士と道士によるパフォーマンス演武と簡単講習会。最終日にコロシウムだよ。参加する？」

雪乃「…………比企谷くんは出るのかしら？」

陽乃「…………それを私が素直に言うと思ってるの？私も鳳凰星武祭の事は知ってるんだよね。あんな事をしようとしてた子たちにそんな事教えると思ってるの？」

陽乃「それに、小町ちゃんは随分静かだね。元氣無いけどどうしたの？」

小町「……………何でもないです。」

陽乃「ふーん……………まあいいや。じゃあ私は行くね。くれぐれも八幡くんには近づかないでね。」

由比ヶ浜「ま、待つてください！もう一度ヒッキーに会う事は出来ませんか!？」

陽乃「……………君は何寝惚けた事言ってるのかな？雪乃ちゃんから聞いてないの？君たちは雪ノ下家に監視されてるって事を。それに、八幡くんがそんな事許すと思ってるの？」

由比ヶ浜「ヒッキーなら会ってくれるはずです!」

陽乃「ふーん……………じゃあ試してみよつか？」

由比ヶ浜「え？」

陽乃「今から八幡くんに通信して君たちと会話をするかしないかを聞いてあげる。勿論君たちは黙ってる事。一切喋らない事。どう？」

まあ八幡くんに限って会うような事はしないと思うけどね。

由比ヶ浜「お願いします!」

雪乃「……………お願いするわ。」

陽乃「うんうん、2人の意思是聞いたよ。で？小町ちゃんはどうするの？」

小町「……………お願いします。」

陽乃「オツケー!じゃあ通信するから一言も喋らないでね。」

八幡くんの事だから今は学院かな？皆の鍛錬とかしてそうだけど……

p i p p i …… p i p p i ……

八幡『どうも。どうかしましたか陽乃さん?』

陽乃「ゴメンねゝ急に。突然なんだけどさ、私今隠れながら雪乃ちゃんたちの後をつけてるんだよね。」

八幡『貴方は休日は何してるんですか……』

陽乃「暇潰しには良いでしょ！」

八幡『暇潰しがストーカーという事に驚きましたよ。』

陽乃「それでさ！八幡くんは彼女たちと会話出来るならする？しな
い？」

さあて、八幡くんはどう出るかな？

八幡『何言ってるんです？そんなのこっちからお断りですよ。という
かなんです？その質問は？』

陽乃「いや？ただ八幡くんの気は変わってないか試ただけだよ。」

八幡『縁を切った奴らと何を話せと言うんですか貴女は？』

陽乃「あつはは！それもそっか。」

うん、予想通りだね！

陽乃「ありがとね、八幡くん！ゴメンねゝ突然通信掛けちゃって。」

八幡『別に気にしてませんので。』

陽乃「うん、じゃねゝ！」

いやゝ予想通りになったね。まあ外れる事なんてあり得ないけど
ね。

陽乃「結果はご覧の通りだよ。君たちはもう少し自分のした事の重
さを考えるべきだね。八幡くんから言われてたと思ってたんだけど
なあ。」

3人「………」

なんかシラケちゃったなあ。もういいや。

陽乃「じゃあ、私は行くね。元々用なんて無かったし。」

もう関わりたくもないしね。

それにしても、あの頃から何にも変わってないんだね。まあ変われるわけないか。それが出来てるなら八幡くんに謝ってるもんね。

あっ！あそこにいるのはシルヴィアちゃんかな？良いねえ堂々と歩けて！これも八幡くんとお付き合いした効果かな？

声掛けよっかなあゝ……っ！……まさか今日1日でこんなにも会いたくない人にばったり会うなんてね。

葉山「やあ、陽乃さん。」

直での再会 2

陽乃 side

葉山「やあ、陽乃さん。」

今日で会いたくない人全員にエンカウントしちゃったよ。しかも目の前にいる男は、普通に笑顔で私に話しかけてるし。しかもその顔に中途半端で未完成かつ歪な形をしたまんまの醜い仮面をつけて。

陽乃「名前で呼ぶのはやめてくれないかな？あんたに名前で呼ばれたくないんだよね。」

葉山「傷つくじゃないか。昔からの仲じゃないか。」

陽乃「それは1年前の話でしょう？あんと私の家はもう関係切ってるんだから。誰かさんのせいでね。」

そう。1年前の出来事で雪ノ下家と葉山家の関係は崩れた。顧問弁護士としての関係も剥奪されて、葉山家の信頼は地に落ちたといつても過言ではなかった。息子がしでかした事は世間に大きく影響を与えていた。

葉山「ああ、ヒキタニくんが余計な事をバラしてくれたせいだね。」

陽乃「……それ本気で言ってるの？だとしたらそれはとんでもない勘違いだよ？」

葉山「本気だよ。あいつが余計な事を喋らなければ、俺はあんな思いをせずに済んだんだ。」

陽乃「自業自得じゃない。あんたがやった事なんだから。あんたが文化祭で委員長ちゃんを勧めたりしなければ、修学旅行で八幡くんにあんな依頼をしなかったら、こんな事にはなってないよ。」

葉山「……まるで僕が悪者みたいな言われ方をするね。」

陽乃「それがあんたの答え？だとしたらその耳、1年前の八幡くんの目以上に腐ってるね。」

葉山「俺とあいつを一緒にするなっ!!」

陽乃「はあ？あんたみたいな虫ケラと八幡くんを同等に見るわけないでしょ？未だに私を追いかけているようなお子様には、お似合いの姿だけどね。」

彼って自分が八幡くんより下だって考えてないんだろうね。

陽乃「それで？あんた此処で何やってんの？まさかとは思うけど、ガラードワースの生徒がストーカーなんてやってるわけないよね？」

葉山「僕がそんな事する訳ないじゃないか。ただシルヴィアさんが近くにいたから見ていただけだよ。」

うわあ、こいつがやると何で普通の人よりも気持ち悪いって思えるんだろう？

葉山「彼女、やっぱり綺麗だね。」

陽乃「まあ確かにね。」

葉山「だからこそ残念だよ。ヒキタニくんみたいな奴に騙されてるんだからね。陽乃さん、貴女もだよ。」

陽乃「……………」

葉山「あいつは自分が傷ついた事を主張して、偽物で手に入れた力で皆を騙しているんだ。あいつなんかがあんな不釣り合いな力を持てるはずが無いんだ！皆騙されているんだ！」

こいつ……………本当に口聞けないくらいいたぶってあげようかな？

葉山「陽乃さん！貴女なら分かるだろう？あいつがどんな人間か。だからこそ「あのさ」…………何だい？」

陽乃「それ以上八幡くんを侮辱するなら…………その顔二度と人の前

で見せられないようにしてあげるよ?」ギロツ

葉山「っ!!」

陽乃「八幡くんが私たちを騙してる?それで?あんたに何か困る事があんの?」

葉山「いや、俺はただ陽乃さんたちを助けようと……」

陽乃「誰がそんな事頼んだの?私はそんなのいらないし、必要ない。それに、これは誰かにも言ったけど、私が八幡くんに騙されているのなら、私は騙されたままで良いと思ってる。」

陽乃「それと、そんな事私に言うんじゃないくて、界龍のど真ん中で言ってみてよ。その方が効果あると思うよ。一気に大勢の人たちに言えるんだからさ。」

葉山「……」

陽乃「都合が悪くなったら黙り込む。うんうん、何も成長してない証だね。」

本当、何の根拠があつて騙されてるなんて言えたんだろう。前よりずっとバカになってない?

葉山「……重症だね。まさかこんなに酷いなんてね。」

陽乃「は?」

葉山「あいつもなんて奴だ。シルヴィアさんもこんな風に騙したのか?」

陽乃「あのさ、何言ってるの?」

葉山「陽乃さん。」

陽乃「名前で呼ぶなって言ったよね?今度は何?」

葉山「俺はシルヴィアさんの所に行くよ。」

陽乃「それ私に言う必要無いよね?勝手にすれば?」

はあ……なんか疲れた。

葉山「疲れてそうだけど大丈夫かい?休んだ方が……」

陽乃「誰のせいで疲れてると思ってるのよ。」

葉山「ヒキタニだろ？」

頭のネジ何個飛んでんのよこいつ……自分だって事分らないの？

陽乃「あんた以外私と話してる人いる？周り見なさいよ。」

葉山「マインドコントロールの現れだね。これは急がないとシルヴィアさんも危ないね。」

うん、あんたの方が危ないから。それに八幡くんは人を縛るような事絶対しない。それと人の話を聞きなさいよ。

陽乃「あんたさ、シルヴィアちゃんが八幡くんに本気で惚れてるとは思ってるの？」

葉山「……あつはははは！何を言ってるんだい陽乃さん！彼女程の人があんな奴に惚れるわけ無いじゃないか！」

陽乃「まさか自分以外に惚れる相手がいるわけ無い、なんて思ったりもしないわよね？」

葉山「よく分かってるじゃないか。その通りだよ。あんた目の腐った奴なんかより、俺の方が断然良いに決まってる！それ以外考えられないだろう？」

ぶん殴りたい……こいつを凄くぶん殴りたい。ガードワースが決闘禁止なのが凄く腹立たしく思えて来る。

陽乃「まあやってみなよ。シルヴィアちゃんはあるみたいにな上つ面の奴なんて相手にしないから。」

葉山「……陽乃さんも冗談が下手になったね。」

……性格まで気持ち悪くなってるの？

彼女の愛は

シルヴィア side

皆さんこんにちは！シルヴィア・リユーネハイムです。今私はお買い物に来てるんだ。別に学園祭関係じゃないよ？今日は普通にオフとして来てるんだ。周りは少し騒がしいけど、それは我慢。

界龍のイベント告知を見たけど、何でもコロシアムの他に簡単武術講習会をやるみたい。八幡くんは最終日の午前からだったから行くと思うてるんだ。どんな鍛錬してるのかも気になるしね！

八幡くんの教え方ってどんな感じ何だろうなあ？

葉山「少しいいかな？シルヴィアさん。」

シルヴィア「？」

突然後ろから声を掛けられたから振り向いて見ると、そこには見覚えのある男の人が立っていた。アーネストよりも少し薄めで短い金髪。少し青が混ざった灰色のような目をしていて身長は八幡くんくらいかな。

シルヴィア「えーと、どちら様かな？」

葉山「ああ、ゴメンよ。名乗ってなかったね。俺は葉山隼人っていうんだ。聖ガラードワース学園高等部2年で序列は57位だよ。」

葉山……ああ、確か八幡くんと同じ高校だった人だったね。ん？陽乃さんも居るけど、どうしたんだろう？

シルヴィア「……初めましてだね。私はシルヴィア・リユーネハイム。クインヴェール女学園高等部2年で序列は1位だよ。知ってる

かな？」

葉山「知らない人間はそうそういないと思うよ。君は有名人だからね。」

シルヴィア「まあ知らない人もいるよ。それで、何か用かな？」

葉山「……君と付き合っている彼氏の事なんだ。」

単刀直入で来たね。

葉山「シルヴィアさん。君はあいつに騙されているんだ。」

シルヴィア「……騙されているって言われても納得出来ないなあ。どの辺が騙されているのかな？」

葉山「全てさ。奴の実力はあそこまで高いはずもないし、実際には強くもない！俺は奴と同じ高校だったから分かるんだ。あいつがどれ程卑怯な奴かを！だから今すぐ縁を切るんだ！」

シルヴィア「……それで？」

か

葉山「え？」

シルヴィア「それだけなの？もっと他にはないのかな？それだけじゃ私は八幡くんと別れる気なんて毛頭ないよ。」

葉山「聞いてなかったのかい！？君は彼に騙されているんだ！あいつは泣いている子を平気で追い詰めたり、好きでもない女の子に嘘告白するような奴なんだ！そんな奴を好きになって良いはずがないだろう！」

シルヴィア「君はその時どうしたのかな？」

葉山「勿論止めたよ。でも無駄だったんだ。」

この人、自分を美化し過ぎてるよ。私が八幡くんから聞いた話と全く違うよ。

葉山「シルヴィアさん、奴とは縁を切るべきなんだ！人を平気で傷つけるような奴と付き合ってはいけない！」

シルヴィア「八幡くんは私を傷つけた事なんて一度もないよ？むしろ氣遣ってくれるくらい優しい人だけど？」

葉山「それは今の内だけだよ。君が必要なくなればすぐにお払い箱だよ。そんな男だよ、ヒキタニは。」

.....

シルヴィア「……葉山くん、だったかな？」

葉山「あ、ああ。」

シルヴィア「君の言ってるヒキタニくんって誰の事？」

葉山「え？」

シルヴィア「私が付き合ってるのは比企谷八幡っていう人だよ？君の言うヒキタニくんって人は知らないよ？」

葉山「あいつの苗字なんてどうでも良いじゃないか！そんな事よりも奴と別れ「あのね葉山くん。」………なんだい？」

シルヴィア「私が八幡くんと付き合ってた彼の過去を何も知らないと思う？」

葉山「……どういう事だい？」

シルヴィア「私はもう知ってるの。八幡くんがやった事も、君がどうという人間かも。」

葉山「俺は何もしてないけど？」

シルヴィア「そうなの？私の聞いた限りでは、君が告白の阻止を八幡くんにお願ひしたって聞いているよ。しかもその前に告白を成功させたいってお願いとその逆のお願いを八幡くんは聞いてたのも知ってるよ。これは嘘なのかな？」

葉山「嘘に決まってるじゃないか！僕はそんな事してない！」

シルヴィア「……1年前、八幡くんが六花に来る前に残したノート。」

葉山「っ!!？」

シルヴィア「中身を見たよ。八幡くんも辛かっただろうね。あんな目に遭ってまで依頼を遂行したんだもの。私は本当に凄いと思う。」

真似なんて出来ない。だからこそ彼は強いんだろうね。」

葉山「……………バカな！あのノートは千葉の総武高にあるはずだ！六花にいる君が見られる筈がない！」

シルヴィア「私去年の10月に千葉でライブやったんだけど、知らないのかな？」

葉山「っ!!まさか……………」

シルヴィア「そう。八幡くんに行きたいってお願いして案内してもらったの。そして君の元クラスメイトや教師にも話を聞いたりして、部室に行つてあのノートを見た。君の見た目は良いけど中身はとても汚い人なんだね。皆それに騙されていたんだろうね。それに、八幡くんとは正反対だね。君は八幡くんと比べるのも烏滸がましいよ。」

葉山「……………俺があんな腐つた目をした奴に劣るとでも言いたいかい？」

シルヴィア「その通りだよ。後、今の八幡くんは目普通だよ？君は八幡くんの事をどう思ってるのかは知らないけど、私は八幡くんの事を世界で一番愛してる。この言葉に嘘偽りなんて絶対にないよ。」

葉山「し、信じられない……………」

シルヴィア「別に信じなくていいよ。それで、他に何かあるかな？嘘までついて私に近づいて来たんだから、何かあるんでしょ？」

葉山「……………シルヴィアさん。」

シルヴィア「何かな？」

葉山「ヒキタニと別れて俺と付き合わないかい？」

……………え？

シルヴィア「私の言つてた事を聞いてなかったの？私は八幡くんの事を世界で一番愛してるって言つたんだよ？それを聞いてどうしてそんな馬鹿げた事が言えるのかな？」

葉山「いや、考えて欲しい。あいつ程度の器で君を幸せに出来るわけがないじゃないか。だからその役を僕が引き受けようと思つてね。どうだい？悪い話じゃないだろう？」

シルヴィア「……………そうだね。確かにこの答えは決まってるよ。」
葉山「まあ、賢明な判断だよ。」

シルヴィア「お断りだよ！君なんかじゃ八幡くんの代わりは務まらない！」

葉山「なっ!?何故だい!?奴程度では君を不幸にするだけだ！僕と付き合った方がずっと良いはずだ！」

シルヴィア「誰がそんな事決めたの？」

葉山「……………え？」

シルヴィア「誰が君といった方が幸せだって決めたの？そんなの君の偏見でしょ！そこに私の意思なんて無い！私は八幡くんとしか付き合わないし、別れる気もないの！もう知ってると思うけど、私だって本気で結婚を考えてる！」

葉山「け、結婚!？」

シルヴィア「八幡くんはそれを会見の前で言ってくれた。あんなに大勢の人の中で堂々と答えてくれた。そんな八幡くんが嘘をついてるなんてとても思えない。君のように影でコソコソして人をバカにするような人なんかより、八幡くんの方が何万倍もマシだよ！」

シルヴィア「君に出来るの？恋人が出来たとして、結婚の事を考えてるって堂々と記者や取材班の中で言えるの？」

葉山「……………」

この人の裏が知れて良かったよ。レヴォルフの【悪辣の王】よりも
タチが悪いよ。

シルヴィア「もう私に話しかけてこないで。八幡くんの事をバカに
するんだったら、八幡くんに勝ってからにして！」

シルヴィア side out

—————

陽乃「うひやあゝ！シルヴィアちゃんったら大胆！こんな場所であ
んなこと言うなんてやるねゝ！お熱いなあ、もう！」

パーシヴァル「…………葉山隼人の監視をしていましたが、何故で
しょう？今を見ていたら、とても胸がスツキリしました。」

「ねえ、シルヴィアさんの言葉聞いた？結婚だって！」

「うん聞いた聞いた！相手はやっぱり比企谷さんだよね！」

「ラブラブなんだねゝ！」

「ねゝ。」

シルヴィア（う、ううゝ／／／／／言っちゃったよおゝ！私なんて
熱くなるところも思ってた事を何でもかんでも言っちゃうのおゝ／／
／／／そりや私だって結婚は考えてるよ？するつもりだよ？でも、あ
んな所であんな大声で言わなくても良かったのにゝ／／／／／）

シルヴィアは歩いている中、心の中で1人叫んでいた。

彼氏（旦那）の元へ

陽乃 side

あつ、シルヴィアちゃんがこつちに来る！もう終わったんだね………ていうかシルヴィアちゃん顔真っ赤。

陽乃「ひやつはろーシルヴィアちゃん！凄いい熱弁だったね！」

シルヴィア「い、言わないでくださいよ／＼／＼／＼私今凄く恥ずかしいんです／＼／」

陽乃「良いじゃない。私はもう八幡くんのですって言ったよ。うなもののなんだからさ。」

シルヴィア「うう／＼／＼／＼／」

ありやりや、これは逆効果だね。それにしても、女の私から見ても惚れ惚れするくらい可愛いよねこの子。しかも今は、顔赤くしてるから余計に。

陽乃「ゴメンゴメン、ちよつと言い過ぎだよ。そうだ、シルヴィアちゃん。今から界龍にこない？皆歓迎すると思うよ？特に虎峰くんとかが。」

シルヴィア「でも、学園祭の準備とかで忙しいのでは？」

陽乃「そうでもないんだよね。コロシウムはただ設営が完了してればそれでいいし、講習会の方も武器とか鍛錬用の器具を用意すればそれでOKだからそんなにやる事はないんだ。」

まあ皆暇過ぎて八幡くんと鍛錬してると思うけどね。

シルヴィア「……じゃあ行きたいです。」

陽乃「じゃあ決まりだね！早く旦那さんと会いたいんだね？」

シルヴィア「も、もうやめて下さい！これ以上言うなら八幡くんに
言いつけますからね！」

陽乃「ほほう？それでどうするのかな？」

シルヴィア「もうご飯作らないようにお願いさせます。」

陽乃「シルヴィアちゃんごめんね！私やり過ぎちゃった！今度から
気をつけるから許して！」

この子、いつからこんなに小悪魔系になっちゃったの!?

――界龍第七学院――

シルヴィア「やっぱり大きいなあ。」

陽乃「そう？普通じゃない？」

シルヴィア「だってそうじゃないですか。クインヴェールは六花で
規模が1番小さくて、界龍が1番大きいんですよ？私から見れば大き
く感じますよ。」

成る程ねえ、そんなに違うんだ。

門番1、2「お疲れ様です！雪ノ下師姉、奥方様！」

奥方様!?!シルヴィアちゃんの事!?

シルヴィア「ま、まだ奥方じゃないよ！」

そして華麗なツツコミ！

陽乃「界龍ってこういうところ真面目でやってるのか、からかって
るのか分からないから面白いんだよねえ。」ケラケラ

シルヴィア「言われてる私の身にもなってくださいよ／＼／」

……やっぱり可愛いなあ。八幡くんいつもこんな顔見てるのかな？

シルヴィア「八幡くんは何処なんでしょう？」

陽乃「多分八天門場じゃないかな？いつもそこで鍛錬してるから。行こっか。」

シルヴィア「はい。」

——八天門場——

八幡「……」

道場には八幡くん1人だけだった。木人椿を使って詠春拳の鍛錬をしてる。それにしても動きが速いなあ。

しかも目を瞑りながらやってるなんて、本当に規格外だね。

シルヴィア「あれが八幡くんの鍛錬ですか？」

陽乃「今日は軽い方かな。学園祭もあるから型の見直しじゃないかな？」

シルヴィア「どんな拳法何ですか？八幡くんの使う拳法は？」

陽乃「八幡くんが使ってるのは詠春拳って名前の拳法で——」

それから私は勉強した限りで知ってる詠春拳の事をシルヴィアちゃんに教えた。

陽乃「——って感じかな。八幡くんがあれを選んだ理由までは分からないけどね。」

シルヴィア「そうなんですか……私も体術は出来ますけど、受け流すばかりですからね。」

陽乃「女の子はそっちの方が良いんじゃない？無駄に瘤とか作りたいくないでしょ？」

シルヴィア「確かにそうですね……あつ、八幡くんが長い棒を持ちましたよ！」

それから私たちは八幡くんの詠春拳の演武を見ながら雑談をして盛り上がりつつあった。

――20分後――

八幡「…………ふう。」

陽乃「お疲れ八幡くん。」

八幡「ん？陽乃さん…………とシルヴィ？」

シルヴィア「こんにちは八幡くん。見学してたんだ。凄い武術だったね。」

八幡「まああくまでも演武だからな。本当の真剣勝負だったらもつと良いのが見られるかもな。」

確かに演武だけだったらこんなものだよね。

陽乃「八幡くん、今時間空いてるかな？話があるの。」

八幡「…………何です？」

陽乃「大事な話だから此处じゃちよつと…………八幡くんの部屋で話せるかな？」

八幡「…………シルヴィも関わってるみたいですね。分かりました。」

陽乃「流石八幡くんだね。よく理解してる。」

シルヴィア「私も良いんですか？」

陽乃「何言ってるの!?早く八幡くん消毒しなきゃダメだよ！」

シルヴィア「しょ、消毒？」

あいつの睡なんかつけられたら鳥肌たつよ!!考えただけで悍ましい…………

八幡「……何があつたかは分かりませんが、取り敢えず部屋に向か
いましょう。」

陽乃「お願いね、八幡くん。」

後シルヴィアちゃんについた葉虫ウィルスの消毒もお願いっ!!!

耐え難い辛さ

八幡 side

学園祭に向けた演武と鍛錬を終えて、陽乃さんとシルヴィを俺の部屋に案内した。だが俺には、この2人が一緒にいるところを見たことがなかったから、今回何の話をするのかは想像もつかない。

何の話だ？

さつき陽乃さんからはあの3人の事を電話で聞いたが、その事か？

八幡「一応お茶は用意しますね。そこに座っててください。」

シルヴィア「ありがとう、八幡くん。」

陽乃「お願いねー。」

――3分後――

八幡「お待たせしました。」

陽乃「おっ、もしかしてこの羊羹も八幡くんの手作り？」

八幡「な訳ないじゃないですか。それは客人用のですよ。俺のなんて出すわけないじゃないですか。」

陽乃「それはそれで勿体無いような気もするけど、まあいいか。」

八幡「それでどうしたんです？こんな組み合わせで話なんて初めてですけど、2人はそれ程面識がないと思ってたんですか？」

陽乃「うん、これはちよつと八幡くんに報告した方が良くなくって思ってたね。だからシルヴィアちゃんも連れて来たんだ。」

八幡「それってシルヴィも関係あるのか？」

シルヴィア「ううん、私は八幡くんの所に来る？って聞かれたから来たんだけど、話があるまでは聞いてないかな。」

八幡「陽乃さん……」

陽乃「ゴメンゴメン。でもそれくらい重要な事なの。シルヴィアちゃんに訳を説明してる時間も惜しいくらい。」

そんなにか？

陽乃「八幡くん。あの3人をつけてたっていうのは本当は嘘なの。実はその時から接触してたんだ。」

八幡「……つまり奴らから頼まれたと？貴女がそう簡単に応じるとは思っていないのですが……」

陽乃「そりや私だってたタダでやったわけじゃないよ。条件付きで八幡くんが応じるか応じないかで話を取り持つてあげるっていうのが条件。今回はハズレだったけどね。」

当たり前なんてやりたくもねえよ。

シルヴィア「3人つて言うのは、陽乃さんの妹の雪ノ下雪乃さんと八幡くんの妹の比企谷小町さんと由比ヶ浜結衣さんですか？」

陽乃「よく知ってるね。八幡くんから聞いたの？」

シルヴィア「……はい。注意しておいた方が良いつて言われてたので。」

まあ界龍とクインヴェールとガラードワースと星導館で交わした事を話すわけにもいかないからな。

陽乃「そこまでは問題無いんだ。次なの。あの男がやつと動いたよ八幡くん。」

八幡「……葉山ですね？」

陽乃「うん。しかも君の事を相当にメチャクチャ言ってたよ。それに私がマインドコントロールに掛かっているとか訳の分からない事も言い出してたし、最後にはやつぱり君を貶してたよ。」

シルヴィア「もしかして、陽乃さんが様子を伺ってたのは……」

陽乃「そつ、あいつが変な事をしないように監視もしてたんだ。もしシルヴィアちゃんがあいつの誘いに乗ろうとしてたら、私は絶対阻止してたね。」

シルヴィア「そんな事絶対あり得ません！八幡くんをあんな風に言う人になんかついていきません！」

陽乃「分かてるから安心して。でさ、あいつが言つてた言葉なんだけどね、私やシルヴィアちゃんが八幡くんに洗脳、または騙されている。偽物の力で皆を騙している。八幡くんがあんな不釣り合いな力を持てるはずがない。シルヴィアちゃんが八幡くんに惚れてる筈がない。俺の方がヒキタニよりも断然良いに決まってる。これくらいかな。」

酷え言われ様だな。シルヴィ、頼むから此处で暴れるなよ？気持ち分かるが。

シルヴィア「何ですかそれ!?まるで八幡くんがズルして強くなったりしたような感じにして、自分の事を過大評価してるだけじゃないですか!」

陽乃「そう。まああいつは、八幡くんは卑怯で最低最悪な奴で、自分の方が奴の何倍も良いって言いたいんだろうね。私は全くそうは思わないけど。」

シルヴィア「当たり前です！八幡くんの方が何万倍もマシです！」

……そう言ってくれるのは嬉しいが、もう少し声を抑えてくれ。

陽乃「そしてシルヴィアちゃんをここに呼んだのは、シルヴィアちゃんがあいつに言われた事を話して欲しいからなの。どう？お願い出来る？」

シルヴィア「断る理由もありませんからね。勿論お話しします。」

シルヴィにも接触してたのかあいつ……どんな事話したんだ？

シルヴィア「葉山くんから最初に言われたのは、八幡くんに騙されている……だったかな。理由を聞いてみたら、全部だって。実際には実力がなくて、強くもないって言ってた。同じ高校にいたからどれ程卑怯なのかも分かるとか言ってたね。だから縁を切れって。」

陽乃「それ、絶対最後じゃないでしょ？」

シルヴィア「はい。私が何度か疑問をぶつけて帰ってきた答えが、泣いている子を平気で追い詰めたり、好きでもない女の子に嘘告白をする男、彼はそれを止めようとしたとも言ってたよ。そしてまた縁を切れって言うてから人を平気で傷つけるような人とは付き合うべきではないって言うて、私が優しい人だって言ったら、それは今の内で必要無くなったらお払い箱だって。」

.....

陽乃「八幡くん、落ち着いてね？」

八幡「大丈夫です。俺は大丈夫です。シルヴィ、無理に話さなくても良いからな。これを話してて一番辛いのはお前だろ？」

陽乃「あっ………」

そうだ。俺は別にこれくらいの事どうって事ない。むしろ慣れる方だ。だがシルヴィは違う。好きな人をこれだけ悪く言われて平気でいられる訳がない。

陽乃さんも気付いたのか、やってしまったという顔をしていた。

シルヴィア「……私も大丈夫。だから最後まで話すね。」

そうは言ってるが、シルヴィの声は震えていた。それに手をきつく握り締めてもいた。必死に抑えているのだろう。

そしてその後も、シルヴィの聞いた話を俺と陽乃さんは静かに聞いていた。

シルヴィア「ーって言って私はそこから居なくなつて陽乃さんと一緒に此処に来たの。」

八幡「……そうだったのか。まあなんにせよ、何もなくて良かった。」

陽乃「そうだね。八幡くん、私はこの後用事があるからもう行くね。シルヴィアちゃんの事、任せても良いかな？」

八幡「ええ、問題ありません。」

陽乃「ありがと。それとシルヴィアちゃん、ゴメンね。私八幡くんが言うまで全く気付かなかったよ。辛い事言わせてゴメンね。」

シルヴィア「いえ、これも必要な事です。で大丈夫です。」

陽乃「……うん、じゃあね2人共。」

そう言ってから陽乃さんは本当に申し訳なさそうな顔をして出て行った。気を遣ったのか、本当に用事があるのかは分からないが、ここはそれを有効に使わせてもらおう。

シルヴィア「八幡くん、大丈夫？無理してない？」

八幡「それはこっちの台詞だ。大丈夫か？」

シルヴィア「何言ってるのさ。私なんて全然「声、震えてる。それにその握り締めた手を見れば分かる。」……」

八幡「俺はこんなの言われ慣れてる。だがお前はそうじゃないだろ？辛い筈だ。今は2人しかないんだ。本音を出しても構わない。」

シルヴィア「……」ポロポロ

次第にシルヴィの目から涙が出てきて、段々と量も多くなっていた。

シルヴィア「うう……うっ……」ポロポロ

八幡「シルヴィ……」ギョッ

シルヴィア「グスツ……うっ、うう……」ギョッ

俺はただ抱き締めて、慰めの言葉を言うことくらいしか出来ない。

八幡「陽乃さんも悪気がなかったとはいえ、嫌な事をさせちゃったな。」

シルヴィア「ゴメンね……ゴメンね、八幡くん。」

シルヴィの顔は俺の肩に隠れて見えないが、泣きながら俺に謝ってきた。辛いのはシルヴィの筈なのにだ。立ち直るのには時間が掛かりそうだし、シルヴィが落ち着くまで側に居てやるべきだな。

気持ちと頼み

八幡 side

シルヴィがこんな風に泣くのは初めて見た。俺自体が、こんな涙は初めてだった。

今は泣き疲れて寝ている。相当辛かったのか、俺の身体を抱き締めたまま離さないでいた。

八幡「……………索冥、俺が今どんな感じが分かるか？自分でもこんだけ抑えきれなくらい怒りが爆発しているくらいがやつとだ。」

索冥『私にもそのように見えます。私もあの不屈き者には怒りを覚えしました。僅かな時間ではありますが、【炎駒^{えんく}】になりました。」

今索冥が言った【炎駒】というのは、麒麟の別称でもあり、種類の名前である。炎駒とは名前の通りで、炎のような赤い色をした麒麟のことである。麒麟という動物は殺生を極端に嫌う動物だ。だが一度怒ると、その怒りは例えようなない程過激なものだと言い伝えられている。

他にも種類はあるが、1番なりやすいといったら、この炎駒なのだろう。

八幡「……………そうか、お前もか。」

索冥『はい。』

マジでどうしようか、この怒り。シルヴィをこんな目に遭わせたんだ、それ相応の覚悟はあるだろう。今すぐにも裁きたいところだ。

索冥『八幡様、落ち着いてくださいね？今はシルヴィア様も居ますので。』

八幡「ああ……」

八幡 side out

陽乃 side

シルヴィアちゃんには悪い事したな……多分泣いてるよね。

それよりも、葉山^{あいつ}どうしようかな。八幡くんはどうなってるか分からないけど、多分怒ってるよね。

葉山家とはもう縁を切ってるから雪ノ下家の力を借りるわけにはいかない。だったら？何か出来る事はないかな？

陽乃「……………ダメ、何も浮かばない。」

せめてあいつが次どうするか分ければ、次を考えられるんだけどな。

セシリー「ん？陽姐ー、どしたの？珍しく悩んだ顔してるけどー？」

陽乃「ああセシリー。ちよつとね。相手がつぎどんな手を打って来るのが分からなくてね。」

セシリー「それってゲーム？」

陽乃「……………まあ、そんなところかな。リアル人生ゲームみたいなものかな。」

会社とかすぐに手に入らないけどね。

セシリー「んーなんか陽姐らしくないよー。いつもならドーンと前に突っ走って行くのにねー。」

突っ走る……………かあ。

陽乃「……………ねえ、今までの私ってそんな感じだった？」

セシリー「そうだねー……まあ一言で言えばねー。何をやるにしても、他の人を巻き込まずにはいられなくて、全員巻き込んだじゃえって感じかなー。」

陽乃「……………そっかあ。」

今までの私ってそんな感じかあ……だったらもう良いよね？

この学院の生徒全員を巻き込んでも♪

陽乃「セシリー？ちよこーつと八幡くんとシルヴィアちゃんのために頼まれてくれないかな？」

セシリー「いつもの陽姐に戻ったねー。あたしの大好きな陽姐に♪良いよー。八幡は分かるけど、何でクインヴェールの【戦律の魔女】まで？彼女を驚かせたいから？」

陽乃「ううん、ちよつと訳ありだね。聞いてくれるかな？」

セシリー「？」

そして私は今日あった経緯をセシリーに話した。セシリーも普段の雰囲気と違い、真剣に聞いていた。

セシリー「ふうーん……そいつってさ、バカ？」

陽乃「ううん、大バカ。頭の中が空っぽで味噌まで腐ってるバカ。」

セシリー「そいつさ、雷最大出力で纏った足で蹴って良いかな？本気で。」

陽乃「私も星辰力を最大まで溜め込んだ足で蹴ってやりたいよ。」

2人であいつの顔面クロス蹴りしてやろっか？

セシリー「それって何ー？あたしたち界龍が八幡を慕ってたり、敬ってるのが間違いだって言ってるんだよね？」

陽乃「うん。間違いなくそれは言ってるね。」

セシリー「それでさー、あたしに頼みたいことってー？それもあの最高バカッフルに関してでしょー？」

陽乃「そそっ。頼みっていうのはね……………」

セシリー「それってあたし怒られないー？怖いんだけど……………」

陽乃「大丈夫だよっ！そこは保証するから！」

セシリー「あたし、すっごい不安……………」

これなら八幡くんも許してくれるよね？

正直な想い

八幡 side

シルヴィが泣き疲れて眠ってから30分。俺はシルヴィをベッドまで連れて行き、そのまま寝かせようとしたが、シルヴィが身体から腕を話してくれない為に、俺も一緒に横になった。

端正な顔には涙の跡が残っていて、目の下は赤くなっていて、華奢な腕ではとても強い力で俺を抱き締めている。

俺が守ってやらないといけないのに……全く守ってやれなかった。それどころかこんな目にまで遭わせちゃった。情けなさ過ぎる。

八幡「……シルヴィ、すまなかった。」ギョツ

シルヴィア「……痛いよ、八幡くん。」

八幡「っ！シルヴィ！起きてたのか？」

シルヴィア「うん、たった今。」

俺は少し驚き、抱き締めていた腕を即座に離れた。

シルヴィア「ゴメンね八幡くん。泣いた後寝ちゃったみたいだね。」

八幡「気にするな。泣き疲れたんだろ？少しスッキリした顔になってる。」

シルヴィア「うん……んっ……」チュツ

八幡「っ!!」

シルヴィが突然キスしてきた。何かを再確認するようなキスだった。5秒くらいすると、シルヴィの方から唇を離れた。

シルヴィア「……八幡くんはさ、私の事捨てたりしないよね？」

八幡「当たり前だ。俺は絶対にそんな事しない。約束する。」

シルヴィア「そうだよね。」

八幡「葉山に言われたからか？」

シルヴィア「…………不安になっちゃったのかな。直接聞かないと、ちよつとね。」

八幡「何度でも言う。俺はお前を愛している。もうシルヴィ以外の女には興味はない。」

シルヴィア「界龍にいる美人さんとかは？陽乃さんとか【神呪の魔女】とか【雷戟千花】とかは？後はオーフェリアさんとか…………」

八幡「あの人たちは本当に仲間であつて家族みたいな存在だ。今はな。オーフェリアは…………よく遊ぶ相手が正確だな。確かに偶に見せる笑顔は良いが、恋愛対象としては見てない。俺が見てるのは、シルヴィだけだ。」

シルヴィア「…………私の1番良いところは？」

八幡「笑顔だ。微笑みから満面の笑みまで全ての笑顔が好きだ。俺は何度もシルヴィの笑顔に救われてきた。」

シルヴィア「じゃあ、悪いところ。」

八幡「悪いところ…………考えてみたが浮かばないな。あつてもその部分も好きになつてると思う。」

シルヴィア「…………八幡くんにとっての私は？」

八幡「この先に行く人生において必要不可欠な存在だ。俺はシルヴィ無しでは生きて行けない気がする。」

シルヴィア「…………100点満点中60点。まだ足りないのがあるよ。」

八幡「それは俺も分かつてる。」

シルヴィア「じゃあ、それは何？」

八幡「これの事だろ？んっ…………」

シルヴィア「んっ…………」

俺はシルヴィの唇に俺の唇を重ねた。シルヴィは待っていたかの

ようにキスをした瞬間、目を閉じた。そして身体を委ねるかのように俺の方へと寄ってきた。シルヴィの方から抱きついて来ているのにも関わらずにだ。

シルヴィア「んっ……これなら100点満点中120点かな。充分過ぎる答えだよ。」

八幡「なら良かった。」

シルヴィア「ねえ八幡くん。今日はここに泊まっていいい？」

八幡「俺も聞こうと思っていたんだ。シルヴィが泊まりたいなら泊まっていけばいい。」

シルヴィア「じゃあ今日はよろしくね。」

八幡「ああ。」

八幡 side out

星露 side

星露「して陽乃。お主がいつておった事に間違いは無いのじゃない？」

陽乃「私がこの目で見て聞いた事なんだから、嘘言うわけないでしょ。それに、この事に関して嘘なんて言うわけないじゃん。」

星露「確かにそうじゃが念には念をじゃ。まあお主がそんな奴でない事は分かっておる。実妹の縁まで切る程じゃからのう。」

陽乃「それはそうだけど、それなら八幡くんにも言つてよ。」

そうじゃったのう。しかし歌姫殿に接触するとはのう。聖騎士殿は何をしておるのやら。

星露「陽乃。確かお主の家と繋がりがあつたじやろう？ 応援は頼めるのかえ？」

陽乃「そりや考えたよ。でももうあの家とは縁を切ってるから、今更そいつらの息子を監視させるつてのもなんかね。お母さんに悪

いよ。」

星露「……そうか。今その葉山なる者を視ておるのはガラードワースだけという事かのう。」

陽乃「何？それってあいつが監視されてるって事？」

星露「言っておらんだったか。まあお主になら良いじやろう。実は1年前――」

妾は1年前に我が学院界龍とクインヴェール、星導館、ガラードワースの4学園とある約束を作った事を話した。

陽乃「ふうーん、要は1年前からずっとマークしてたんだね？」

星露「まああのう。」

とはいってもこのザマじゃがな……

星露「どうじゃ陽乃。お主もこれに参加する気は無いかえ？」

陽乃「私はいいかな。自由気ままにしたいし。何よりも何かに縛られなくて済むしね。」

星露「お主らしいのう。まあ良いわ。どうしてもというわけではないからのう。」

まあその葉山とやら、次に八幡を侮辱した際には容赦せんがのう。

騎士の「ほうれんそう」

アーネスト side

パーシヴァル「……以上が本日起きた事の顛末です。その後は界龍の大学部所属の「魔将天閣」と共に界龍方面に向かいました。その後の事は追跡してないので不明です。」

パーシヴァル「次に葉山隼人の事です、やはり彼からは危険で黒い感情が見えます。やはり比企谷さんに対して軽視、侮蔑の言葉が多く含まれていました。」

アーネスト「分かったよ、ありがとう。それにしても、急に動き出したね。さらに言うなら、ここ最近は自分から動いている節があったからね。不自然に感じていたんだけど……パーシヴァルはどう思うかな？」

パーシヴァル「学園祭の準備ならクラスメイトと一緒に行くはずで。彼はクラスの中では中心人物でもありますから。ですがそのクラスメイトを連れていなかったとすると、完全にプライベートで偶然あの2人に出会った……というのが私の憶測です。」

それが妥当なところだろうね。何せ僕たちはまだ彼の事を充分によく知らない。剣が少しだけ上手いというだけで、他は成績が良くないからね。もう少し情報の幅を拡げるべきかな……

パーシヴァル「……会長？」

アーネスト「ああ、ゴメンよ。何だい？」

パーシヴァル「私はあの場で比企谷さんと呼んだ方が良かったのでしょうか？自分でも分からないのですが……」

アーネスト「僕はその場に居合わせていなかったから分からないけど、君がそう判断したならそれが正しいんじゃないかい？あまり考え過ぎても良案は出てこないよ。」

パーシヴァル「……分かりました。」

学園祭も近いからね。まあいくら彼でも学園祭で騒ぎを起こすとは考えにくいけど……念の為に学園内での監視だけはするようにしようか。

アーネスト「パーシヴァル、学園祭の期間内だけ葉山隼人の監視を学園内限定とする。また、これは生徒会全員に言える事でもあるんだけど、決闘や乱闘が始まりそうになったら、直ちにその場を鎮めると。いいね？」

パーシヴァル「それは承知してありますが会長。葉山隼人の監視を学内だけにしてよろしいのでしょうか？比企谷さんの方に行く可能性も高いです。警戒しておかなければ……」

アーネスト「一応彼のアドレスは持つてるから、それで許可を取ろうと思っててね。パーシヴァル、通信するから少しの間静かにね。」

パーシヴァル「かしこまりました。」

さて、早速比企谷くんに連絡しないとね。許可が取ればやる事も決まってくるからね。

pipipi…pipipi…

八幡『フェアクロフさん？』

アーネスト「やあ比企谷くん。元気かな？」

八幡『元気と言われれば元気ですけど、気分は最悪です。』

アーネスト「ほう、それはどうしてかな？」

八幡『これは別にフェアクロフさんのせいってわけじゃないですけど、今日葉山とシルヴィが接触した事は知ってますか？』

アーネスト「ああ、知ってるよ。それと界龍の序列4位【魔将天閣】にもだね？」

八幡『そこまで知ってますか……なら話は早いです。実を言う

と、葉山がシルヴィに接触した事んですが……』

そこで比企谷くんはその時に起こった事を、まるで見ていたかのよう
うに丁寧に説明してくれた。

八幡『……と言う事がありました。別に謝罪して欲しくて言ったん
じゃないですからね。』

アーネスト「そうだったのかい……いや、それはこちらの不手際で
もあつたね。」

八幡『多分ですけどガードナーもいるんですよね？気にするなどだ
け言っておいてください。未来予知なんて「千見の盟主」しか出来な
いんですから。』

……こんな冗談も言えるとはね。

アーネスト「分かったよ。じゃあ僕からも一言。ミスリユーネハイ
ムもおそらくそちらにいるだろうけど、済まなかったと伝えておいて
くれないかな？」

八幡『居ないかもしれませんよ？』

アーネスト「うん、居たらで構わないからね。伝えておいてくれる
かな？」

八幡『分かりました。伝えておきます。』

よし、これで本題に入れるね。

アーネスト「それから比企谷くん。学園祭の事で許可が欲しいんだ
けど、今少しいいかい？」

八幡『構いませんよ。』

アーネスト「実は学園祭の期間だけ葉山くんの監視を学園内だけに
したくてね。僕たち生徒会も学外まで監視する程余裕はなくてね。
それで許可を取ろうと思っていたんだよ。」

八幡『まあ楽しみたいのは皆同じですからね。分かりました。学外に出たら、可能な限りでいいのですぐに知らせてください。』

アーネスト「分かったよ。ありがとうね。」

八幡『それで、お話はもう終わりですか?』

アーネスト「うん、一応用は今の1つだけだったんだ。済まないね。」

八幡『いえ、そんなに忙しかったわけでもないので大丈夫です。』

アーネスト「それなら良かったよ。じゃあ比企谷くん、学園祭を楽しむといいよ。ミスリユーネハイムを連れてね。」

八幡『そのつもりですよ。というよりそれしか考えてないです。』
アーネスト「あはは、そうかい。なら我が学園の軽食店にも来てくれる事を楽しみにしててもいいのかな?」

八幡『ガードワースも考えてるので、そこはYESと答えておきましょう。』

アーネスト「じゃあご来店を待ってるよ。それじゃあね。」
八幡『わざわざ連絡、ありがとうございます。』

そして通信を切って、僕がしたかった話も同時に終わらせる事ができた。

楽しみとは裏腹に

八幡 side

フェアクロフさんとの通信を終えて腰掛け椅子に座った。当然横にはシルヴィがいる。

シルヴィア「アーネストは何だつて？」

八幡「葉山の事についての謝罪と学園祭の事でだ。何でも学園祭の期間は監視を学内だけにしたいらしくてな。まあ無理もないけどな。」

シルヴィア「仕方ないよ。どの学園もそういうのは徹底しないといけないからね。」

八幡「クインヴェールは特に、だろ？唯一の女学園でアイドルやら美人やらでいっぱいだからな。」

シルヴィア「まさかとは思うけど、目移りとかしないよね？」

八幡「する訳ねえだろ。何で俺がシルヴィ以外の奴を好きになるんだよ？1番はシルヴィだけに決まってるんだろ。」

シルヴィア「……………／／／／／」ダキッ

シルヴィア「学園祭の期間だけは一般公開されるからね。熱烈的ファンとか追っかけとか来られると困るのは確かだね。」

一番大変な学園だな、多分。

八幡「それに比べたら界龍はまだ良い方なんだろうな。注目度はそんなに高くねえし、来るといっても中国人が多いからね。日本人も少なくはないが、そんなにいないしな。」

シルヴィア「でも今年の学園祭では一番忙しいかもよ？だって君がいるんだから。ね？尊師♪」

八幡「それを言うなら俺たちだろ？こんだけ世間を賑わせておいて

他国から誰も来ないなんてある訳がない。もしかしたら、シルヴィアとデュエットしたいって歌手も来るかもしれないしな。」

シルヴィア「やめてよー。私もう八幡くん以外とは歌いたくないよ。10月のライブからだいぶ経つけど、まだあるんだからね？デュエットの依頼。」

八幡「それって同じ奴らなのか？だとしたら物分かり悪過ぎるだろ。」

シルヴィア「まあ、結構同じ人たちが多いかな。多分だけど、歌手でもない八幡くんと一緒に歌ってるのが気に入らないだろうね。」

八幡「せめてそこは一緒に歌いたいからって言ってやろうな？そんなにダークな奴は居ないだろう。そう信じたい。」

だってそうだろ？もしかしたら違うかもしれないじゃないか。

シルヴィア「でもそうだね。私の学園も今年の学園祭は賑わいそうだなあ。公私を考えるなら嬉しいけど、私的としては嫌かな。」

八幡「やっぱ俺たちの関係を聞いてくる奴らの事か？」

シルヴィア「うん。六花ではやっと落ち着いてきたのに、次は他国のって思うと嫌になるよ。」

八幡「それは俺のどこに来る可能性もあるんだよな。ああ、そう考えると嫌になるな。」

この業界ってホント美味しいエサにうるさいよね。何でなの？

シルヴィア「だからこの学園祭の期間だけは八幡くんの寮に失踪しようかなあって考えてるんだ。それなら見つかる可能性も低くなるよ。」

八幡「俺はいいが、虎峰の奴が黙ってないぞ？絶対毎晩来るからな？お前に会いに。」

シルヴィア「あはは……本当にありそうな事言わないでよ。」

本当になりそうだからこそ怖いんだよなあ。あいつならやりかねないしな。

シルヴィア「そうだ八幡くん。学園祭はどこ回るの？」

八幡「そうだなあ……最終日は界龍に居るしかないとしても、クインヴェールは行けたらで良いとして、星導館とレヴォルフとガラードワースは行きたいな。アルルカントは……どうなんだろうな？会議で一応何をするかは聞いたが、どうにも俺には向いてない感じがする。」

シルヴィア「あははっ！確かに八幡くんはメカニックって感じはしないね。もうイメージが武人って感じだからかなあ？」

八幡「俺のイメージが武人って本当か？」

シルヴィア「本当だよ！だって八幡くん礼儀正しいし、挨拶もするし、刀や道具の手入れもこまめだし、一人一人の指導やアドバイスも的確だから武人だよっ！」

……褒めてくれるのは嬉しいが、一体何処で見てたんだ？そんなに見られてたのか俺？

八幡「なあシルヴィ、それっていつ見てたんだ？」

シルヴィア「ん？何が？」

八幡「いや、俺の鍛錬とか。そんなに見せてないよな？何でそんな事知ってるんだ？」

シルヴィア「……えへっ♪」

八幡「誤魔化すのか？」

シルヴィア「私の口は堅いんだもん♪」

八幡「なら言いたくなるまでいじくりまわしてやるよ。」ナデナデシルヴィア「キャー！」(≡▽≡)

――2分後――

シルヴィア「えへへえゝそんなに知りたいのかあゝ。しょうがないなあゝ。教えてあげるよおゝ。」ニコニコ

……スゲエ良い笑顔してる。それと口調が玄武みたいになってやる。シルヴィがやってるから余計に可愛いな。

シルヴィア「実はね、陽乃さんが写真や動画を送ってくれるんだ。それで知ったんだ！『八幡尊師の手入れの行き届きが凄い！』だとか『今日も忘れずに包拳礼！』とかちゃんと文章も使ってるね。」

あの人、ストーキングだけじゃなくて盗撮もしてたのか？しかもその対象が俺かよ。

八幡「はあ……もう料理作のをやめた方がいいのかもしれないな。」

シルヴィア「あはは……」

だが、シルヴィも大分落ち着いてきたな。これなら大丈夫そうだな。

八幡 side out

—————

その頃……

陽乃「くしゅんっ！な、なんか今恐ろしい宣告をされたような……」

無駄に良い勘が働く陽乃さんだった。

不可解な理由

――

此処は聖ガロードワース学園。六花の中にある六学園の中でも名門校の学園で、近年の星武祭の成績は常にトップに君臨している学園である。

校風は西洋文化を取り入れており、規律と忠誠に重視されている厳格な校風であり、決闘も禁止デュエルされている。まさに騎士道を体現したかのような学園だった。

そんな学園でも楽しみみな催しには弱いのだろう。学園祭の準備に皆はいつも以上の精を出していた。

生徒「こっちに紅茶の茶葉を頼む！」

生徒「分かった！あつ、それならこっちには食パンとサンドイッチの具材を持って来てくれ！」

生徒「飾りつけはこの辺でいいかしら？」

生徒「もう少し右ですわね。」

このような状況になっていた。だがこれもガロードワースの良いところなのかもしれない。学園行事にも全力を出す。これだけの事でも手を抜かずにやるのは、素晴らしい事であろう。

そして、やはり人間なのであろう。こんな事も話のタネになったりもするのだ。

生徒1「ねえねえ！この前シルヴィアさんと比企谷さんが一緒に買い物しているところ見ちゃったんだ〜！」

生徒2「えっ、うそ〜!?記録とかはないの!？」

生徒1「その時の甘さにやられてしまつてシャッターチャンスが……」

生徒2「ああゝ勿体無い！それでどうだった!？」

生徒1「さつきも言ったけど、もう甘いよ。シルヴィアさんは八幡くんの腕に抱き着きながら歩いてるし、比企谷さんは優しいような目でシルヴィアさんを見てるし、もう甘かったよ。」

生徒2「2回言ったね……そんなになんだ。あーあ、私も会いたくないな。」

生徒1「もしかしたら、この学園祭でデートするかもだから探してみない？」

生徒2「良いねえ！」

……つと、このような恋バナ？というよりも最近の若者に1番話題になっているのは、比企谷八幡とシルヴィア・リユーネハイムの交際の事だった。

女子1「ねえねえ！皆は何処に行くか決めたの？」

女子2「私は勿論界龍！比企谷さんに武術教えてもらうんだ！」

男子1「やつぱりかゝ。俺たちも界龍なんだよ。しかも目的も同じだしな。」

男子2「ああ、俺たちも比企谷八幡の武術講習会に行く予定だ。」

女子2「やつぱりかゝ。鳳凰星武祭の剣術とか武術とか凄かったもんね！」

男子1「俺もあんな風に剣を扱えるようになりてえな……」

女子2「そうだよねえ。葉山くんはどう思う？」

葉山 side

くそつ……そこでもそうだったが、この学園は比企谷の話題が多過ぎる。俺のグループでもそれは絶えない。むしろ増えている。あんな目の腐った奴のどこが良いって言うんだ。

葉山「そうだな……俺はやめておこうと思ってるよ。今の剣の形を

忘れたら困るからね。」

男子1「流石優等生。言う事が違うねえ。」

女子2「んーでもさ葉山くん。そんなに教えてもらうわけじゃないんだから、参加したら？だって簡単な武術講習会って記載されてあったよ？」

俺は比企谷に会う事自体が嫌なんだよ。何で俺がわざわざ嫌いな奴の所に行かなきゃならないんだよ。僕はガードワースの序列57位で正騎士だよ？それが何で卑怯な手を使っただけで序列2位になった奴の指導を受けなきゃならないんだ？

全く反吐が出るね。

葉山「それでも遠慮しておくよ。」葉山くーん、ちよつと来てー。……ゴメン、ちよつと行つて来るよ。」

比企谷に指導なんて出来るわけじゃないじゃないか。俺の方がよっぽど向いてるね。

葉山 s i d e o u t

—————

男子1「……………なあ、最近の隼人くんってさ付き合い悪いよな。」

男子2「ああ。それになんか比企谷さんの名前出したら、何となく嫌な顔もするし。」

女子1「私もそれ思った。理由は分からないけど、何であんな顔するんだろうね？」

女子2「分かんないけど、確かに最近付き合い悪いし、よく比企谷さんの名前を出すと嫌な表情は作るよね。」

男子2「嫌いだとか？」

女子1「でも葉山くんと比企谷くんに接点ってあったっけ？」

男子2 「何もないよな？」

女子2 「会ってたら私たちにも話してるよきつと。」

葉山グループの面子は葉山隼人が最近付き合いが悪いのと、比企谷八幡の名前が出ると不機嫌になる理由を考えていたが、浮かんできさうにもなかった。

※学園祭 準備

八幡 side

いよいよ学園祭が始まる。界龍では例年コロシムを開催して、他には何もしていなかった。だが今年は俺の提案で、武術の簡単講習会を開く事になっている。木派では拳法を含めた武器術。水派では星仙術と陰陽術。一応1人2時間を目安にしていって、休憩も挟む。だから1日に3人くらいだな。朝に1人、昼に2人でちょうど良い感じに時間が組めた。

そんな講習会が開かれる場所だが、俺の道場と青竜の間にしている。青竜の間は他の道場に比べても面積が広いから問題ないと判断した。今は会場の設営中なんだが、少しだけ問題が起きていた。

その問題はというと……

八幡「俺も講習会に出るんだから手伝わしてくれよ。俺だけ高みの見物だとなんか威張ってるみたいで嫌じゃねえか。」

生徒「何を言われますか尊師っ！我々から言わせてみれば、尊師はもう少し師匠らしい言動をして欲しいところなのです！それに、今でこそ素晴らしいお姿になっておられますが、本音を言えばもつと早くそのお姿になって欲しかったです！」

八幡「んな事言われてもな……」

そう。俺が何かを持ったり運んだりしようとする、すぐに奪われてしまうのだ。『尊師はお休みになられて下さい！』とか『これは我々の仕事です！』とか何だの理由をつけられて、俺に何もさせてくれないのだ。これじゃ俺ダメ人間になっちゃうよ。

八幡「せめて何かさせてくれよ。居る意味ないだろ、1人だけ此処で寛いでも。せめて棍とか双剣とか運ばせてくれよ。」

全員「ダメですっ!!」

……俺にも仕事をさせてくれよ。

前までは専業主婦に生きるとか下らない事目指してたけど、今はもうそんなの目指してないんだから。仕事させてくれよ。いや、別に仕事がしたくてたまらないって訳じゃないけどよ。

八幡「……………んじゃ俺はなんか飲み物でも持って来る。何人居るんだ？」

生徒1「いえ！それは私が！」

生徒2「いや、俺が行く！」

生徒「我々にお任せをっ！」

八幡「俺にも何かやらせろっ!!」

——八幡の部屋——

……結局部屋に戻って来ちゃった。

シルヴィア「あつははは!!そうだったんだ！それで戻って来たんだ？」

八幡「ああ。確かに師匠っぽい事はしてるが、何もそんなところで徹底しなくても良いだろうって思った。俺だって皆と同じ学生だぞ？平等にやらせてくれよ。」

シルヴィア「よっぽど八幡くんが無駄な汗を流して欲しくないんだねっ。」

身体からはかいてないが、目からは出そうになったぞ。俺にも平等な権利をつ！

シルヴィア「それにしても……昨日は見てなかったけど、八幡くん星露と同じ服着たんだ。」

八幡「ああ、この白い羽織の事か？なんか星露に渡されてな、本当は学園祭の期間だけ着る事してたんだが、全員から毎日着るようにせがまれて今に至る。シルヴィアはから見てどうだ？」

シルヴィア「カッコいいよ／＼／＼星露は最初から着ていたから違和感無かったけど、八幡くんが着ていると、なんか……こう、存在感が増してる感じがするな／＼／＼威圧感っていうか、迫力があるっていうか……とにかくカッコいいです／＼／＼／＼」メ ソラシ

ちよつと？敬語になったのはこの際見逃してあげるから、そんな目を逸らしながら照れるのやめて？可愛いだけなんだから。

八幡「この格好で外に出ても大丈夫だよな？」

シルヴィア「そこは心配しなくても良いよ。全然カッコいいから／＼／＼」

八幡「なら良いんだが、シルヴィは学園に戻らなくてもいいのか？別に戻って欲しいって訳じゃないが。」

シルヴィア「もうペトラさんに報告してあるから大丈夫だよ。2日だけ学園でライブするけど、それだけ。だから今日と最終日は八幡くんといっぱい遊べるね！」

八幡「そうだな。今日から3日間は目一杯楽しむか。」

シルヴィア「うんっ♪」

今日から学園祭だ。

注目の的

八幡 side

午前10時。ついに学園祭がスタートした。入口にいたわけではないが、足音や喋り声でもう分かった。去年と違い、今年は最初からかなりの人数がこの学院に来ている。武術の講習会もあるだろうが、他の目的もあるだろうな。

『すみません！【夢幻月影】の比企谷八幡さんは何処にいますか？』
『私たち、あの人のファンなんです！是非お会いしてみたいです！』

『あの……この学院の序列2位の比企谷八幡さんは何処にいますか？お話ししてみたいなあって思ってたんですけど……』

……影の中にいて正解だ。此処にいる奴ら殆どが俺目当てじゃねえか。武術講習会に行ってる人もいるが、どうやら校門前や少し行ったところで生徒に話しかけている奴らは全員俺を目当てにしているようだな。

八咫鳥『ふっ、主人も人気者だな。』

八幡「茶化さないでくれるか？」

八咫鳥『それだけ有名になったという事だ。甘んじて受け入れるべきだ。』

分かってますよ、受け入れたくないけど。

兎に角、一度部屋に戻るか。シルヴィと出掛けなきゃならんしな。

――八幡の部屋――

八幡「……ふう。」

シルヴィア「あつ、お帰り♪どうだった？」

八幡「すげえ数。殆どが校門前でたむろしてる。歩いて行ったら間違いなく捕まるな。」

シルヴィア「じゃあどうする？八幡くんの能力で隠れて行く？それとも空を飛んで？」

自分で言うのも何だが、俺もシルヴィも万能だよな。シルヴィは能力で、俺は守護霊と自分の能力。多彩過ぎねえ？

八幡「いや、此処は敢えて正面から行くか。」

シルヴィア「え？でも大丈夫？」

八幡「俺とシルヴィが一緒に出てくれば、幾らかマシになるだろう。わざわざデートを邪魔する無粋な真似をする奴は居ないと思うぞ？」
シルヴィア「そうかなあ……もしかしたらいるかもよ？私たちの交際反対派。」

八幡「もし手を出してきたら、星猫警備隊に突き出してやればいい。それだけだ。」

シルヴィア「……分かったよ。八幡くんに着いて行くね。」

八幡「おう。」

——界龍・校門方面の廊下——

生徒「っ!!尊師っ!!それに奥方様も!!おはようございますっ!!」

生徒の1人が包拳礼をして頭を下げてきた。ていうか奥方様って何？

シルヴィア「だからまだ奥方じゃないよ!うううこれ昨日も言ったのくくくく」

どうやら昨日も同じやり取りがあつたらしい。シルヴィが来た時か？

そんな事を思っていると、奥の方から多くの視線が飛んで来た。俺たちをジッと見ている。

シルヴィア「もう……呼ぶなら結婚してからにしてよ／／／」ブツ
ブツ

八幡「さつきから何を一人でブツブツ言ってるんだ？」

シルヴィア「え!? う、ううん何でもないよ! 大丈夫だから!」

八幡「……ならいいが。」

そして俺たち2人は学院の中に入ってきた客の中へと入って行った。勿論手を繋いで。

客の人たちは何も言わずに道を開けるばかりで、話しかけて来る人は居なかった。生徒の方は包拳礼で頭を下げながら尊師と奥方様と言うばかりだった。

そしてそれを聞いているシルヴィが、顔を赤くしながら少し俺の方へと寄って来る。

後ろから多くの視線を感じるが、取り敢えずはスルーしておこう。早く抜きたいし。

門番1、2「尊師、奥方様!! お気をつけて行ってらっしゃいませ!!」
シルヴィア「ううゝ…………／／／／」プシュー

あいつら絶対わざとだろ。シルヴィで遊ぶなよ。

――中央区――

何とかここまで歩いてきた俺たちだったが、来る途中に物凄い数のファンに押し寄せられた。サインだの握手だの写真だのとメチャメチャだった。朝から少し疲れてしまった。

八幡「ああ……少し人酔いした。」

シルヴィア「ふふふ、八幡くんはまだ慣れてないもんね。仕方ないよ。少し休む？」

八幡「いや、そんなに酷くないから大丈夫だ。シルヴィ、最初は何処行く？」

シルヴィア「クインヴェールは明日でも行けるから……星導館はどうかな？ ガラードワースは……その次でいい？」

八幡「ああ。むしろその方が良さそう。無理するなよ？」

シルヴィア「うん。」

――星導館学園校門――

八幡「星導館はこんな風なのか……まあ普通っちゃ普通だな。これといって変な所もないしな。」

シルヴィア「八幡くん、それって何も特徴が無いって捉え方もできるよ？」

あつ……確かに。

八幡「ま、まあ純星煌式武装の数は他に比べて多いし、昔は強かったからな。何もないって訳ではないか。」

シルヴィア「ふふふっ♪」

綾斗「あれ？ 比企谷さんに……うえ!!? シルヴィア・リユーネハイムさん!？」

ユリス「何!? どうして【夢幻月影】と

【戦律の魔女】が此処に!？」

八幡「いきなりご挨拶だな【華焰の魔女】。学園祭だから周りに来たに決まってるだろ。それと、久しぶりだな。」

綾斗「お久しぶりです、比企谷さん。まさかリユースハイムさんと来るとは思いませんでしたよ。」

シルヴィア「君が天霧綾斗くんかあ……初めまして、私はシルヴィア・リユースハイムです。クインヴェール女学園の生徒会長でもあるんだ。よろしくね。」

綾斗「天霧綾斗です。こちらこそよろしくお願いします。」

初見同士が挨拶を済ませたところで漸く話を聞き出せた。

八幡「ところで【叢雲】。お前らもデートか？なら退散するが？」

ユリス「なあっ!!？」

綾斗「いえ、僕たちは違います。僕たちの開いているお店の当番があるんですけど、僕たちは午前からの担当なので、一緒にぶらついているんです。」

シルヴィア「そうなんだ。あつ、オススメってあるかな？」

綾斗「俺たちのクラスが出しているたこ焼きとかですね。後は綺麗ちゃんのクラスが出している喫茶店とかですね。」

シルヴィア「助かったよ。何処を回ろうか頭を悩ませていたところだったんだけど、おかげで手間が省けたよ。」

ユリス「用が済んだのなら早く行け。」

八幡「お前も相変わらずだな……まあいい。行くか、シルヴィ。」

シルヴィア「うん♪じゃあね。」

そして俺たちは【叢雲】たちと別れて校舎の方へと向かっていた。

シルヴィア「……八幡くん、綺麗ちゃんの時って……」

八幡「ああ、もう調べてある。そこは小町のクラスでもある。折角の情報だが、そのクラスには行かない方が良さな。」

シルヴィア「うん、分かった。」

八幡「その代わり、戸塚たちのクラスに行かないか？あいつらの所なら安心出来る。」

シルヴィア「あつ、それ良いね！じゃあそうしょつか！じゃあしゅぱっつっ！」

学園祭 星導館編①

シルヴィア side

2人と別れて高等部校舎に向かっている途中。勿論他の人からの視線のオマケ付き。でも八幡くんと一緒に居るからそんなのは気にしない気にしない！

今から戸塚くんたちのクラスに行く予定でその後は目についた所による予定です！星導館は特徴的な部分が無いから、色んな視点から物を見られるって私は思ってるから、色んなお店があるんだろうなあ。

シルヴィア「ねえ八幡くん、戸塚くんたちのクラスは何してるんだろうね？」

八幡「そうだな。そもそもあいつら3人が同じクラスとも限らないから、クラス回るかもな。戸塚に連絡とおけば良かったかもな。」
シルヴィア「しょうがないよ。もう来ちゃったんだから。その分はこの学園内を楽しまなくちゃ！」

八幡「前向きで大変助かります。」ナデナデ

やった！八幡くんに撫でられちゃった♪

八幡「シルヴィ。もしもだが、俺の元妹やあの2人に会っても癩癪を起こすなよ。分かってるな？」

シルヴィア「……うん、分かっている。でも彼女たちが突っかかって来るようだったら、私も遠慮はしないからね？私だって八幡くんと2人きりの時間は潰されたくないもの。」

八幡「ああ、分かった。」

——2年某組——

『学園喫茶ソーラー』

八幡「やっぱ王道なんだろうな、喫茶店つて。此処まで通つて来たが、4〜5店くらいあったよな。」

シルヴィア「うん。一番先に思い浮かぶんじゃないかな？割と決めやすいしね。早速入ろうよ。」

でも、皆居るかな？

女生徒1「いらっしやいますうえええ!!？」

………凄く声が上ずつてるよ。

八幡「……2人です。」

女生徒1「はっ！失礼しました！こちらへどうぞ！」

流石八幡くん、こういうところは本当に気が利くんだよねえ。

女生徒1「ご注文が決まりましたら、お知らせください！そ、それでは！」

シルヴィア「うーん、なんか店員さんが戸惑う姿も慣れたね。」

八幡「そうだな。なんかいつも見てる感じがするよな。」

確かに私と八幡くんがデートしたり、お出かけしたりするときになンチとかディナーを外食でする時、殆どの確率で驚かれるんだよねえ。

戸塚「八幡、シルヴィアさん！来てくれたんだ！嬉しいよ！」

八幡「よお戸塚、鳳凰星武祭以来だな。」

シルヴィア「久し振りだね戸塚くん。」

本当に久し振りだなあ。

戸塚「来てくれて嬉しいよ。あつ、これお冷だよ。」

八幡「ありがとな。」

シルヴィア「ありがとう。戸部さんと海老名さんは？」

戸塚「戸部くんは違うクラスなんだ。海老名さんは厨房の方なんだ。」

八幡「そうか……じゃあ後で戸部の所に行くか？」

シルヴィア「そうだね！うん、行こうか！」

学園祭 星導館編②

シルヴィア side

戸塚「お待たせしました。サクトロチーズトーストと目覚ましコーヒ―は八幡だよね？」

八幡「ああ、ありがとな。」

戸塚「じゃあこっちのモーニングポテトとあつたかココアはシルヴィアさんだね。」

シルヴィア「ありがとう！おおー美味しそう！」

八幡「そうだな。朝は食べてきたが、そんなに食べてはなかったかな。」

戸塚「学園祭があるからでしょう？」

シルヴィア「せいかーい！色んな所回るから朝は軽くにしておいたんだ。それにしても戸塚くん、その執事服似合ってるよ。」

戸塚「そうかな？僕あんまり男っぽくないからこういうの似合わないと思ってたんだけど……」

八幡「いや、普通に似合ってるぞ。お前が着てると美男子って感じだ。」

戸塚「や、やめてよ八幡！でもありがとう。それじゃ2人共、ゆっくりしていつてね！」

メニューの名前だけでも美味しそうなのに、実際の物を見たら、もっと美味しそうだよ。食欲をそそるねえ。

シルヴィア「八幡くんのトーストだけど、チーズって中にあるのかな？」

八幡「外に塗ってないからな。考えられるとしたらそうだろうな。だが、サクトロってフレーズ聞くと、結構熱いんじゃない？」

シルヴィア「思い切ってガブツていつちやう？そうした方が男らし

いよ？」

八幡「そんな事で男見せなくてもいいだろ。チーズ相手に男を見せるって……」

ただのおかしい人だねそれは！でも面白い人でもあるかな！

八幡「……んんゝやっぱ目覚まして付くだけあって苦いな。俺にはまだ砂糖が必要だ。」

シルヴィア「私たちの年でブラックのまま飲める人っているかな？クインヴェールにはいないと思う。」

八幡「そもそもウチの学院にはコーヒーの文化がない。お茶と水くらいだ。やっとジュースが自販機で売るようになったくらいだからな。」

シルヴィア「それはちよつと遅れ過ぎてない？」

八幡「だから俺がジュースくらいは置いたほうがいいって言ったんだ。そしたらどうだ、1日で水とお茶以外全部売り切れた。界龍少箱入り過ぎだろ。」

シルヴィア「ぷっ！あっははは、何それ？面白い……ふふっ！」

面白過ぎるよ！1日で水とお茶以外売り切れ？もう笑うしかないよ！

こんな面白おかしい雑談をしながら、私たちはランチを楽しんでいた。

——30分後——

戸塚「楽しんでたみたいで何よりだよ。」

八幡「ああ、つい時間を忘れてしまった。」

シルヴィア「そうだね。料理も美味しかったし、楽しい時間を過ごせたよ。」

戸塚「それなら良かったよ。あっお会計だったね。1600円になります。」

八幡「おっ。」

シルヴィア「あっ!」

2人「ちようどあった……え?」

戸塚「ぶっふふ。2人共息ピッタリだね。流石六花一のカップルだよ。」

シルヴィア「もうやめてよ／＼／＼ん?六花一って?」

戸塚「あれ?知らなかった?〇〇社が作ってる雑誌なんだけど、2人の事をよく書いてるんだよ。それも良い意味で。だからこの会社が作ってる雑誌とかは今凄く人気なんだよ。でもシルヴィアさんが知らなかったのは意外だなあ。」

〇〇社って私たちの専属を受けてくれた人の会社だよな?ちゃんとやってくれてるんだ!

八幡「だが、それがどんな方向に行ったら六花一になるんだ?」

戸塚「色々あるみたい。今僕が把握してるところは、2人を目撃した事のある一般人及び学生の意見の欄で、『2人の自然な笑顔が良い!』『人目も憚らずに幸せオーラが満開なところ。』『恋人じゃなくて夫婦みたい。』『理想の恋人同士。』『いつも幸せそうで羨ましい!』『相性抜群過ぎる!』『家ではいつも手を繋いでそう。』……もつとあった気はするけど、僕が覚えてるのはこれくらいかな。」

シルヴィア「そ、そんなに見られてたんだ／＼でもなんか嬉しいなあ。私たちの関係が認められてるみたいで。」

八幡「そうだな。シルヴィ、今のところで俺以上の男は見つかったか?」

シルヴィア「全く。というよりも、八幡くん以上の男がいるとも考えられないからね。」

だつてもう八幡くんしか見てないもん♪

戸塚「ご馳走様。2人は本当に仲が良いね。羨ましいよ。」

シルヴィア「そりやそうだよ。私の彼氏だもん♪」

八幡「俺の彼女だからな。」

戸塚「あつはは、確かにそうだね。」

シルヴィア「じゃあ戸塚くん。ありがとうね！美味しかったよ。」

八幡「美味かった。それと戸塚、此処には戸部はいないのか？」

戸塚「戸部くんは隣のクラスだよ。」

戸塚「後、雪ノ下さんたちは隣の隣だから注意してね。来ないとは限らないから。」ボソボソ

八幡「そうか、サンキューな。」

戸塚「ありがとうございました〜！」

余談だけど、戸塚くんによるとこの後に来たお客さんたちは、殆どがチーズトーストとモーニングポテトを頼んでみたい。男女1人ずつのお客は皆頼んでみたい。

――2年某組――

『ガンアウト！』

八幡「教室壊れないよな？まさかとは思うが、煌式武装なんて使わないよな？」

シルヴィア「流石にそんな事をする危ない遊びだとは思えないけど、どうだろうね？」

私も不安だなあ。

戸部「いらっしやーい！おつ、比企谷くんシルヴィアさんっ

しよー！皆！超大物来たつしよー！」

クラス「おお！！」

八幡「騒がしい奴に騒がしいクラスだ。」

シルヴィア「あはは……」

戸部「2人共来てくれて嬉しいわー！此処に来たって事はガンアウトをやってくつて事でいいんだべか？」

八幡「済まんが銃はからつきしでな、俺はやらない。シルヴィならやれるんじゃないか？」

シルヴィア「出来なくはないけど、私の使ってる煌式武装も形が特殊だから上手いとは限らないよ？」

戸部「それでもいいっしよ！楽しむ事に意味があるっしよ！」

おお、最もだね！

シルヴィア「じゃあやろうかな。戸部くん、幾らかな？」

戸部「ああ、先ずはルール説明からするべ。このガンアウトは後払い制なんだべ。あの10個の的に当てた数に応じて料金が変わってくるべ。1人10発までで1発1000円計算してるべ。だからもし10発全部外したら10000円払ってもらうべ。ただし、10発全部当てたら料金はタダだべ！そしてこのゲームの特徴はもう1つあって、当たった的の数に応じて景品も豪華になっていくんだべさ！当てた数が多ければ豪華になって少なければそれなりのものしか貰えないべ。一獲千金と一獲失金しっきんを合わせたゲームなんだべ！」

なんか予想以上に面白そうなゲームだなあ。でも10000円を払うくらいの楽しみはありそうだね！

シルヴィア「うん、大体分かったよ。よくし、全部当てるぞー！」
戸部「じゃあこの中の煌式武装から1つ選んでほしいっしよ！あとこれは安全に作られてあるから人に当てても静電気くらいの痛さしか伝わらないから安心していいっしよ！」

人には向けないからね？

戸部「じゃあガンアウト、スタートつしよ！」

八幡くんに良いところ見せよつと！

バアンツ！

学園祭 星導館編③

八幡 side

バアンツ！……バキツ！

シルヴィア「よしっ♪後ひとつ！」

戸部「……べー。シルヴィアさん上手すぎっしょー……9発中9発は凄すぎっしょ。パーフェクトきてるわー。」

マジで凄いな。最初から5つ目なら俺でも当てられそうな大きさの的だが、6つ目からは上級者じゃなきゃ無理だぞ。最後の1つなんて指で丸を作るくらいの大きさじゃないか？

シルヴィア「これで当てれば料金無料で豪華賞品ゲットだね！」

八幡「もう充分過ぎるくらい豪華な景品は貰えそうだけだな。」

シルヴィア「手は抜きたくないからね。最後まで全力を出すよ。」

そう言ってから再び銃を構えるシルヴィ。中々様になってんだよなあ。まあシルヴィの戦闘スタイルは銃剣だからな。そう見えてもおかしくはないか。

シルヴィア「………」

シルヴィも流石に真剣だな……ていうか他の奴らまで見ちゃってるよ。いやいいんだけどさ、お客さん来てるからね？気づいてあげて。

バアンツ！……バキツ！

シルヴィア「やったあ！当たった〜！当たったよ八幡くん！」ダ
キツ！

八幡「お、おお……すごいな。」

生徒1「マジかよ……あの大きさって煌式武装の撃たれる弾の大き
さと同じくらいなのに……」

生徒2「信じられねえ……」

戸部「パーフェクト決めちゃったわー。ベーわー。」

ホント驚きしかないよな。シルヴィアちゃんや、君天才じゃない？

シルヴィア「ああ、嬉しいなあ！おっと、持ったままじゃ危ないよ
ね。戸部くん、がつついてる訳じゃないけど、景品は何かな？」

戸部「っ！ビックリし過ぎて意識飛んでたわー。シルヴィアさんは
料金タダとこの中から1枚くじを選んで欲しいっしょ！」

戸部が出してきたのは、金紙に包まれた正方形の箱だった。中は見
えないように手を入れるところの内側に黒紙を張っていた。

シルヴィア「うーん、どれにしようかなあ。」ガサゴソ……

……

……

.....

シルヴィア「これかなあ。うーんと、『ホテル・エルナトの1週間宿泊券(空中庭園入場許可済)』だって！これって凄くレアじゃないかな！エルナトまでは分かるけど、空中庭園の入場許可まで了承済みだなんてどうやったの!？」

戸部「いやーシルヴィアさんついてるわー！その券俺たちのクラスが悪ふざけでお願いしてみたんだけど、『宿泊なら5枚で庭園許可が付いたものなら1枚の条件なら良い。』って許可してくれたんだべよ。頼んでみるもんだべ！」

いや、頼んで貰えるようなもんじゃないだろ。そしたらこん中にはこれの他にも後5枚あるんだよな？だとしたらすげえ確率じゃん。

戸部「ちなみに後の5枚もこん中にあるから6枚中1番レアな景品を当てた事になるっしょ！シルヴィアさんマジ神引きだわー！」

シルヴィア「でも、これって1人用？」

戸部「ん？何でだべ？」

シルヴィア「だって私1人で泊まっても意味なんて無いよ。八幡くんと一緒にゃなきやこんなの要らない。私だけ楽しむなんてやだよ。」

八幡「シルヴィ……」

戸部「そこは安心して欲しいっしょ！その1枚はホテル最高級のスイートルームで、宿泊人数は3人までだから比企谷くんが入っても大丈夫だべさー！」

シルヴィア「それなら大丈夫だね！八幡くん！春休みになったら泊まりに行こっ♪」

八幡「そうだな、そのくらいしか行く日程は無さそうだしな。」

シルヴィア「うんっ！」

券が当たって嬉しいのか、俺と行けるのが嬉しいのか分からない

が、嬉しそうだから良しとしよう。

戸部「じゃあこれ、ホテルエルナトのチケットだから失くさないように気をつけるべ。」

シルヴィア「ありがとう！」

八幡「ありがとな、戸部。」

戸部「良いって事っしょ！バイバイっしょ、比企谷くん、シルヴィアさん！」

そして俺たちは戸部のクラスを後にした。

シルヴィア「♪♪♪」

八幡「嬉しそうだな。」

シルヴィア「そりやそうだよ！また八幡くんと一緒に過ごせるから。」

八幡「いつも過ごしてるだろ？」

シルヴィア「場所が変わると雰囲気も変わるでしょ？そういう事だよ！」

まあ、雰囲気は大事だよな。前のライブでのホテルでは……いや、やめておこう。

思い出したら恥ずかしくなる。

シルヴィア「その証拠に前のホテルでは……あっ／／／」

八幡「……思い出さないようにしてたのに、なんで言っちゃうんだよ／／／」

シルヴィア「ご、ごめん……つい／／／」

2人「……／／／／／」

なんか黙っちゃったけど、シルヴィ微妙に嬉しそうな顔してんだよなあ。いや、俺も嬉しかったけどさ、1時間もキスはヤバイからね？

シルヴィア「は、八幡くんっ！次何処行こうか!？」

八幡「お、おう！レヴオルフで少しだけカジノはどうだ？ほんの少しだけだ！シルヴィは変装してだ！」

シルヴィア「う、うん！少しだけギャンブルってしてみたかったんだ！じゃ、行こっか！」

そうしてシルヴィは自分だけ早歩きで行ってしまった。

八幡「あっ！おいそんなに急ぐなよ、危ないぞ。」

ドンツ！

シルヴィア「わっ！」

???「っ！」

ほら、言わんこっちゃない。

シルヴィア「す、すみません！ちよつと浮ついてたもので……」

???「いえ、お気になさらず……っ！シルヴィア・リユ―ネハイムさん?」

???「わぁゝ本物のシルヴィア・リユ―ネハイムだー！」

???「シルヴィアさん！」

……この声……まさかぶつかったのがこいつらとはな。
まあいい、気にせず行くか。

八幡「シルヴィ、だから言つたろ。危ないって。」

シルヴィア「ゴメンゴメン。」

雪乃「……比企谷くん。」

由比ヶ浜「ヒッキー……」

小町「……お兄……ちゃん。」

八幡「……よお、半年振りだな。」

八幡 side out

シルヴィア side

……今の八幡くんの挨拶、なんかいつもより凄く冷たい。それに声が低かった。今も彼女たちを睨みつけるように見つめてる。

八幡「行くぞシルヴィ。」

シルヴィア「え？あ、うん。」

由比ヶ浜「ま、待ってよヒッキー！」

八幡「……何だ？俺は一刻も早く此処から居なくなりたいんだが？」

由比ヶ浜「私たちに何か言う事あるでしょ！」

八幡「はあ？何の事だ？」

雪乃「惚けないでもらえるかしら？貴方、私たちに何をしたのか分かっているでしょう？」

八幡「分からんな。俺が何をしたのか一から十までまで教えてくれないか？」

雪乃「一から十まで言わないと分からないのかしら？目が治ったと思ったら、今度は頭が腐ってるのね、腐敗谷くん。」

……この人、今なんて言ったの？腐敗って言ったの？

八幡「俺の頭が腐ってるんなら、お前らの頭は猿の頭だろうな。やる事が分かり易すぎるぞ。単細胞生物なのか？なら猿に失礼だったな。」

雪乃「っ!! 貴方ねえ!!」

八幡「お前らが言いたい事なんて分かってるよ。どうせ文化祭や修学旅行、そして鳳凰星武祭でやった事を謝罪しろって言いたいんだろ？」

雪乃「ええ、そうよ。分かってるのなら早くしなさい。」

由比ヶ浜「早くやれし、ヒッキー!」

八幡「何故やる必要がある？俺が何か悪い事をしたか？お前らの自業自得だろ？」

由比ヶ浜「だからってあんなにしくてもいいじゃん！私たち大変だったんだから!」

雪乃「貴方には分からないでしょうね。私たちがどれだけ惨めな思いになったか……」

八幡「その惨めな思いになったのは俺も一緒だがな。お前らよりも早く経験してんだよ。まあ、見て見ぬ振りをしてたお前らにはちょうど良いお灸だと思うぞ。」

八幡「言つとくけどな、あまりナメた事言ってんじゃねえぞ。謝れだあ？俺のやった事の何処に謝る要素がある？何だったら今すぐ鳳凰星武祭の事をバラしてやってもいいんだぞ？そうしたらお前らは終わriだけどな。」

雪乃「……相変わらず卑怯な手を使うのね。セコ谷くん。」

由比ヶ浜「ヒッキー女の子にそんな事するなんてマジサイテー!」
八幡「六花の世界は実力主義だ。そこに男も女も関係ねえよ。テメエらが俺より弱えただけだろ。お前らのおつむじや理解出来ないだろうがな。」

2人「……」

八幡くんがドスの効いた声でそう言った。彼女たちは黙り込んでしまった。でも、もう一人の子は何も喋ってない。

八幡「……今回関わった事は見逃してやる。だが次は無いぞ。」
シルヴィア「あつ……」

八幡くんは私の肩を抱いて歩き出した。私はそれについて行くしかなかったけど、後ろからまた声がした。

小町「お兄ちゃん！」

八幡「……………」

小町「お兄ちゃん……私たちって、もう……やり直せないの？」
八幡「んな当たり前な事聞くな。無理に決まってるだろ。言っただけだ。家族よりも他人をとる奴なんかはお断りだとな。」

小町「……………」

八幡「シルヴィ、行くぞ。」

シルヴィア「う、うん。」

その時の八幡くんは、全く感情が読み取れなかった。

学園祭 レヴォルフ編①

八幡 side

奴らと会ってから10分くらいして、漸くレヴォルフの校門まで辿り着いた。シルヴィは俺に気を遣ったのか、途中まで何も話さなかったが、痺れを切らしたのか我慢が出来なくなっただのか分からないが、俺を励ましてきた。

俺はついさっきまで学園祭だという事をすっかり忘れていた。一緒に楽しまないと意味無いよな。

シルヴィア「ううん、やっぱり他の学園と違って暗いよねえ。まあ黒学院って黒が付くくらいだから何となく分かるけど。」

八幡「俺もそう思う。実際に見た学園はアルカントを除けば全部だが、これは学園というよりも刑務所に近い感じがするな。」

シルヴィア「言わないでよ八幡くん。本当にそう見えてきちゃったよ。」

嘘を言っても仕方ないからな。言わなきゃ良かったのか。

俺たちはレヴォルフの中に入ってカジノの場所を探していた。レヴォルフの中は確かに学校だったが、掲示板とか学校的な物は何もないから本当に刑務所みたいだ。

シルヴィア「……………本当に刑務所みたいだね。中には檻もあったりして？」

八幡「……………それ、オーフェアとかに聞いてみるか？あつたらフラグ建てちまつてるからな？」

シルヴィア「聞いてみよっか。さっ、早く行こっ！」

シルヴィは茶髪を揺らしながら歩き出した。今のシルヴィは魔法で変装をしている。俺も出来なくはないが、今の格好は思い切り界龍の制服だから意味はない。シルヴィも制服だが、容姿はクインヴェールでも通用するから問題はない。

――カジノ――

カジノに着くと、中にはカードゲームやルーレットなどのボードゲームもあれば、ダーツやビリヤードといった庶民でも出来るようなゲームもあった。

シルヴィア「此処がカジノなんだあ……なんか予想よりも明るいね。」

八幡「明るくないと出来ないだろ。うしつ、チップと交換するか。幾らくらいにする？」

シルヴィア「どのくらいもらえるのかにもよるかな。1万円なら1000枚とかだったら普通だけど。」

八幡「なら聞いてみるか。」

俺は近くにいる受付の男に近寄って話してみた。

八幡「なあ、1万円だったらチップは何枚貰えるんだ？」

男「1100枚だ。」

シルヴィア「あれ、100枚多いんだね。」

男「学園祭ではカモが多いからな。多くやって稼ぐつてのも手の内だ。」

八幡「そんな事俺たちに言ってもいいのか？俺たちが稼いだら？」

男「その時はその時だ。」

八幡「成る程な。じゃあ1万円と1100枚を交換してくれ。」

シルヴィア「あつ、私もう。」

男「分かった……精々稼げよ。」

レヴォルフにしては普通だったな。口は少し悪いが、別にイラツと来ないな。

シルヴィア「じゃあ八幡くん、どれからやろうか？」

八幡「よく見たら日本でも親しまれてるのものもあるな。麻雀とか花札、壺と茶碗があるから……あれは丁半とチンチロリンだな。」

でもそれってチップで出来るのか？普通なら木札だが……

八幡「最初は簡単なルーレットからにしないか？」

シルヴィア「良いよ！じゃあ行こう！」

男「ルーレットへようこそ……ん？お前、比企谷八幡か？」

八幡「ん？ああ、確かにそうだが？」

男「ほう、こりや驚いたな。まさか界龍の序列2位が来るなんてな。おっと、自己紹介がまだだったな。俺は荒屋敷兵吾あらかしきひょうごつてんだ。此処の元序列1位だ。まっ、宜しくな。」

シルヴィア「へえ、まさかあの【無頼漢】がディーラーをするなんてね。」

荒屋敷「おつ、嬢ちゃんは俺の事知ってんのか？意外だな、俺は別に星武祭にも出てねえから無名なんだがな。」

シルヴィア「元序列1位って肩書きだけでも恐ろしいものだよ？それに、君はある意味有名だからね。」

荒屋敷「俺がか？」

シルヴィア「うん。絶対無敵と言われていた男が何故かオフエリアさんの決闘を断ったって聞いてるよ。どうして？」

荒屋敷「ちよつと違うな。俺は確かに序列1位だったが、別にそんなもんは興味なんて微塵もねえ。強い奴と戦いたかっただけでよ。あん頃の序列1位と戦ったんだけどよ、一発で倒しちまってな。そし

て俺が1位になったんだが、誰も挑戦者が来なくてよ。3日で1位を蹴っただけだ。その後にあの嬢ちゃんが来たってわけだ。」

マジか……レヴォルフの冒頭の十二人は実力者揃いの奴等ばかりだ。その学院の序列1位を一発って……どんなパワーだよ。

荒屋敷「まあ俺の過去話なんざどうでもいい。それよかオメエさんたちはルーレットやんのかい？」

八幡「ああ、そうだったな。やらせてもらう。」

シルヴィア「私もっ！」

荒屋敷「んじやあ賭ける場所を選んでくれ。始まってから途中で変えるのはナシだぜ？」

八幡「……俺は試しに黒全部からだな。」

シルヴィア「じやあ私は赤の奇数！」

荒屋敷「んじやベッドを終了する。球を回すからな。」

――15分後――

八幡「な、何故だ……」

シルヴィア「やったあ！また当たったあ♪」

荒屋敷「嬢ちゃんすげえな。比企谷よお、お前センスねえな。」

俺たちはルーレットを10回やったが、俺は10回中3回、シルヴィは10回中8回も当たっていた。持ちチップは俺が

1550枚で、シルヴィが5470枚と大体3倍くらいの差をつけられていた。

八幡「な、何でも当たらないんだ？ 荒屋敷はイカサマをするような奴じゃないし……俺が単にツイテないだけ？」

シルヴィア「あつはは！ 八幡くんってば中間辺りは当たってたけど、最初と最後が酷かったよね。」

荒屋敷「ああ、ありや傑作だったぜ。いやあ、初日から随分楽しんだぜ。おつ、そうだ。」

突然荒屋敷が通信を始めた。しかも一方通行式の通信でだ。

荒屋敷「あつ、プリンちゃん？ ちよつと酒以外でいいから飲み物持ってきてくれ。3人分よろしくな。」

……そのまま切りやがった。

シルヴィア「ねえ【無頼漢】？ プリンちゃんって？」

荒屋敷「ん？ 今に分かる。」

――5分後――

??? 「荒屋敷さん！ ちゃんと名前でご呼んでくださいってお願いしたじゃないですか!!」

荒屋敷「いや悪い悪い。もうプリンで定着しててよ。あつ、これ代金な。」

??? 「はあーって、比企谷さん!？」

八幡「よおプリシラ。」

そう。プリンと呼ばれていたのは、此処の元序列3位【吸血暴姫】の妹、プリシラ・ウルサイスだった。

プリシラ「お久しぶりです！1年ぶりでしょうか？」

八幡「そうだな。鳳凰星武祭では会う機会無かったからな。」

シルヴィア「知り合いなの？」

八幡「ああ、ちよつとしたきっかけだな。」

荒屋敷「何だよ比企谷。お前女を侍らすのが趣味なのか？」

八幡「んな訳ねえだろ。そうだったら今頃こいつの姉に殺されてる。」

荒屋敷「はははっ！ちげえねえな。」

シルヴィイがイジケたらどうすんだよ。

プリシラ「じゃあ比企谷さん、そちらの女性も楽しんでくださいね！」

そう言つて、プリシラは戻つて行つた。

荒屋敷「こいつは楽しませてくれた礼だ。毒なんて入れてねえよ。つーかあの娘が入れるわきやねえからな。」

八幡「確かにな。」

念の為【八咫の眼】で視ておくか………うん、大丈夫だな。

八幡「シルヴィイ、どれが良い？」

シルヴィア「じゃあこれかな。」

八幡「俺はコレに決めてた。」

荒屋敷「んじやあ俺はこれだな。金は払わなくて良いぜ。こいつは俺の奢りだ。……さっきも言つたな。」

八幡「んじや奢られてやるか。」

荒屋敷「お前からはもらつても良いんだぜ？あつ、嬢ちゃんは払わなくて良いからな。」

シルヴィア「ありがとうね。」

荒屋敷「んじや、嬢ちゃんの当たりの良さと比企谷のハズレの良さに乾杯！」

シルヴィア「かんぱーいっ！」

八幡「……………乾杯。」

くそ…………あの野郎、最後までバカにしやがって。次のゲームでは俺が稼いでやる！

学園祭 レヴォルフ編②

八幡 side

それから俺たちはレヴォルフ内のカジノをぐるぐつと一周してやってみたいゲームをやりながらゲームを楽しんだ。

最終的に残ったチップは、俺が7000枚くらいだが、シルヴィはその倍の数違うだろう。シルヴィ、カードゲームとかのやり方教えてくれ。

そして今はひと段落してから此処を出てガラードワースに行く予定だった。

思ってたんだが、材木座は何処で何してんだ？

シルヴィア「結構遊んだね。カジノってやった事なかったら分からなかったけど、やると面白いね。ライブとか星武祭以外であんなに熱くなつたのは初めてかも！」

八幡「俺もだ。給料入ったらパチンコ行く奴の気持ちが無くなった気がする。荒稼ぎが狙いだってのは分かってたが、これはハマるな。」

シルヴィア「そうだね。あつ、八幡くん。もうやらないんだったらさ、チップ計算してお金に交換してもらおうよ。」

八幡「それもそうだな。俺は……7420枚だった。シルヴィはどうだ？」

シルヴィア「私は12580枚だよ。やったね！八幡くんの倍くらい取れたよ！」

八幡「むう……シルヴィは何気に強いよな。それとも俺に運が無いのか？」

シルヴィア「でも八幡くんだって元は取ってるでしょ？だったら運はいい方だと思うよ？」

八幡「そいつはありがとよ。それと今頭ん中で計算したんだが、俺とシルヴィのチップを足したらちようど20000枚になったぞ。」

シルヴィア「ホントに？ 凄い偶然だね。じゃあそれを合わせて換金したら山分けにしようか！」

八幡「……良いのか？」

シルヴィア「単純計算したら、八幡くんが74200円で私が125800円でしょ？ こんなに貰っても使い道無いから分けようよ。」

この子……やっぱええ子や。きっと女神に違いない。

八幡「シルヴィがいいなら俺も構わない。ありがとな、ガラードワースでは奢る。」

シルヴィア「えへへ、ありがとう♪」

さて、換金所は入り口にいたチップ交換所の反対側の所だったな。

——換金所——

八幡「お前がこんな事するなんて意外だ。」

イレーネ「うるせえな。ディルクの野郎に命令なんざされてないや、私だってこんな事してねえよ。」

換金所に居たのは、まさかの奴だった。レヴォルフ黒学院の元序列3位【吸血暴姫】の名で通っていた女性、イレーネ・ウルサイスだった。今は純星煌式武装を失って序列18位になってるが、それでも強いのだろう。

イレーネ「んでどうしたんだよ比企谷。チップの方ならあっちだぜ。」

八幡「いや、もう遊んで来たから交換しに来た。」

イレーネ「はーん。一体どれだけ稼いだんだ？最初のチップは？」

八幡「俺とこいつとで1100枚ずつだ。」

シルヴィア「どうも。」

イレーネ「クインヴェールの『戦律の魔女』と付き合っているながら他の女というのか？こりや雑誌の方が賑わうなっ！」

八幡「やめてくれ。そんで話の続きは？」

イレーネ「そうだったな。最終金額はどんくらいになったんだ？」
八幡「俺が7420枚だ。」

シルヴィア「私が12580枚だよ。」

イレーネ「何だとお!?!お前らどんな風にやったらそんなに稼げるんだよ!?!」

八幡「あーそいやお前つてカジノで借金してたんだっけか？お前絶対熱くなるからやめといった方が良いぞ？」

イレーネ「余計なお世話だ！それよりもどうやって稼ぎやがったんだよ！」

シルヴィア「いろんな所で遊んだからね。ああでも、高レートの上では私と八幡くんは1回も外さなかったよ。引き時じゃないかな？」

イレーネには無理だろうな。こいつ絶対千から万になるまでやめないタイプだしな。

イレーネ「憎たらしいぜ。じゃあ換金でいいのか？だったら比企谷は74200円でその女が125800円だな。合計で20万円だ。チツ、羨ましいぜ。」

聞こえてるからな？

イレーネは悪態をつきながらも、万札を器用に数え、終わると俺たちそれぞれ札と小銭を渡して来た。

イレーネ「ほらよ、比企谷のが70000と4200円で、あんたが120000と5800円だな。受け取んな。」

シルヴィア「どうもありがとう♪」

八幡「サンキュー。」

イレーネ「今度は私の分もやってくれ。」

多分やるとしても学園祭くらいだから無理だな。やる機会無さそうだし。

シルヴィア「いやゝ遊んだね！それにこんなに稼げるなんてね、少し予想外だったよ。」

八幡「そうだな。俺は元の数字の7倍取れたからな。シルヴィは12倍だけだな。」

シルヴィア「初めてでこれは凄いのかな？」

八幡「間違いなく凄いだろ。これで凄くなかったら、この世界どんなにシビアなんだよ。」

まあ競争はないんだろうが。

八幡「さて、そろそろ行くか。ちょうど小腹も空いてきたしな。」

シルヴィア「そうだね、行こっか！」

行きたくはないが、ガラードワースに行きますか。

??? 「……………八幡？」
八幡「ん？」

今の声……………もしかしくなくてもあいつだよな。

オーフェリア「……………こんにちは八幡、それと貴女は？」

当学院の序列1位で生徒会長のオーフェリア・ランドルーフェン
だった。

八幡「あ……………俺の知人だ。」

オーフェリア「貴方にクインヴェールの知人がいるなんて思えない
のだけど？ 【戦律の魔女】はどうしたのかしら？」

マズイな……………このままじゃバレル。なんか良い方法はねえか？

シルヴィア「はあ……………ねえ、【孤毒の魔女】だったかな？」

オーフェリア「……………何かしら？」

シルヴィア「人目の付かない場所ってあるかな？」

おい……………正体をバラすのか？

オーフェリア「……………生徒会室に行きましょう。今なら誰もいない
わ。」

シルヴィア「分かったよ。じゃあ案内してもらってもいいかな？」

オーフェリア「……………分かったわ。こっちよ。」テ ヒツパリ

オーフェリアは案内をするつもりなんだろうが、何故か俺の手を
引っ張りながら進んで行く。

シルヴィア「……………ねえ？ 何で彼の手を引きながら歩いてるの？」

オーフェリア「……………八幡はとても暖かい人だから。それに一緒に居てとても安心するの。私に触ってくれるごく僅かな人間の1人だから。」

オーフェリア「……………それに、私はもう八幡の物だから。」

……………ねえ、此处でそれ言っちゃうの？後ろからとんでもないオーラを纏ってる子（彼女のシルヴィ）がいるんだけど？頼むからそういう誤解を招きそうな言い方やめて。

いや、もう招いてんだけどさ。

——生徒会室——

内装は暗いが、花があるおかげで少しだけ明るさはある。

オーフェリア「……………着いたわ。それでこんな所に案内させてまでどうするというの？」

シルヴィア「私の正体を見せてあげるの。」

シルヴィは耳元に手を当てて魔法を解除した。すると、ヘッドホンが現れて茶髪だった髪の毛も美しく艶のある紫色に変化した。

シルヴィア「これが私の正体だよ。どうかな、オーフェリアさん？」
オーフェリア「……………驚きもしたけど、納得もしたわ。貴女能力は万能だったわね。これくらいの事造作も無いわけね。」

シルヴィア「まあね。ところでさ、説明して欲しいんだけど、君が言っていた『私は八幡の物』ってどういう事かな？」

オーフェリア「……………文字通りよ。私は八幡の所有物なの。」
シルヴィア「……………八幡くん？」

八幡「結局俺が説明するのか……………説明するとだな、鳳凰星武祭の願いが何も浮かばなかったから、オーフェリアの解放を頼んだんだよ。オフレコで頼むが、オーフェリアは莫大な金で豚（デイルク）に

買われててな。そっからは想像つくだろ？」

シルヴィア「彼の言いなりって事だね？」

八幡「ああ。それで俺はオーフェリアの解放を依頼したんだが、どうにもその所有権が俺に譲渡しちまったみたいでな。どうでもいいが、俺がオーフェリアの所有者みたいな立場になってんだよ。」

オーフェリア「……………パパと呼んだ方が良いかしら？」

八幡「悪ノリしなくて良いから！お前が言うとか冗談に聞こえないんだよ。」

しかもパパって……………なんか分からんけどグツと来るよ!？」

シルヴィア「そうだったんだ……………私も変な誤解をしてたみたいだね。ごめんねオーフェリアさん。」

オーフェリア「……………気にしてないわ。私の言い方も悪かったものの。」

ふう……………一件落着だな。

八幡「よし、んじゃあガラードワースに飯食いに行くか。」

シルヴィア「そうだね。なんか本当にお腹空いてきたしね。今度こそガラードワースに直行だねっ！」

ピラッ

オーフェリア「?……………何かしら?」

シルヴィア「ん?どうしたの?」

オーフェリア「……………【戦律の魔女】。このチケットは?」

シルヴィア「え?ああそれね。星導館で的当てをやった景品で貰ったんだ。八幡くんに行く予定だから返してくれないかな?」

オーフェリア「……………」じー

シルヴィア「……………オーフェリアさん?」

オーフェリア「……………私も行きたいわ。」

……………え？

シルヴィア「え!?もしかしてエルナトの1週間宿泊に!」

オーフェリア「……………」コクコクツ

シルヴィア「い、幾らオーフェリアさんでもそれはダメですっ!この前は確かに良いものを貰ったけど、これも八幡くんと過ごしたいの!」

オーフェリア「……………」どうしてもダメかしら?」

シルヴィア「ダメッ!」

シルヴィイもはつきり言ったな。そんなに俺と2人が良いのか?

オーフェリア「……………」じー

シルヴィア「……………」

オーフェリア「……………」じー

シルヴィア「うう……………」

オーフェリア「……………」じー

シルヴィア「う、うう……………」

オーフェリア「……………」うるうる

シルヴィア「ううう分かったよ!分かったからそんな捨てられた子犬みたいな悲しそうな顔しないでよ!」

オーフェリア「……………」とても嬉しいわ、ありがとう。」パアア!

花が咲いたように笑顔になったな。

オーフェリア「……………」ガラードワースのお昼ご飯なのだけど、私も行ってはダメかしら?」

シルヴィア「……………」よっぽど八幡くんの側に居たいんだね。【孤毒の魔女】って恐れられている彼女とはとても思えないよ。」

……俺って後半空じゃない？

その後シルヴィはオーフェアアの同行を許可して、3人でガラード
ワースへと目指した。

学園祭 ガラードワース編①

八幡 side

レヴォルフから出た後はシルヴィも変装の方を解いて、ありのまま
で出歩いている。そして俺は数多くの視線の釘付けになっていた。

その理由は俺の左右にいる2人の存在だろう。片や世界の歌姫で
王竜星武祭の優勝者で、片や歴代最強の魔女とも名高く前回の王竜星
武祭の優勝者が俺を挟みながら腕に抱き着いているからだろう。

全くではないが、人の視線には気にしなくなったものの、これは俺
じゃなくても少し居心地悪いよな。いや、俺は別に侍らしている訳
じゃないからな？片方はそうだけど。（シルヴィの方だからな。）

八幡「……なあ、そろそろ離れてくれないか？周りの視線が洒落に
ならんのだが？」

シルヴィア「だってきオーフェリアさん！八幡くんの腕を放してあ
げなよ！」

オーフェリア「……嫌よ、八幡の手は暖かいもの。私は冷え症
（嘘）だから八幡の手に触れていると、とても暖かいの。貴女こそ離れ
たらどうかしら、【戦律の魔女】？」

シルヴィア「何で？私は八幡くんの彼女だもん。離れる理由がある
？君は八幡くんの友達でしょ？なら彼女を優先すべきじゃないかな
？」

オーフェリア「……私は八幡の所有物よ。友達のように見えてい
るのは仕方ないけれど。それにレヴォルフは少し寒かったから八幡
を温める必要があるでしょ？」

シルヴィア「それも私に任せてくれれば大丈夫だよ。」

オーフェリア「……当校の会長として、責任は果たさないといけ
ないとは思わないかしら？」

2人「……」 バチバチ

……ねえ、凄く居辛いんだけど。俺を板挟みにしながら口論するのやめて！しかも笑顔だから可愛いと怖いが混じってるから！

オーフェリア「……このままじゃ埒があかないわ。間を取ってこのままにしましょう。その方が何方の不満も解消されるわ。」

シルヴィア「そうだね。八幡君には悪いけど、ガラードワースに着くまではこのままにしておつか。良いかな？」

八幡「……分かった。もうそれで良い。」

もうどうでも良いから早くガラードワースに行きたい。絶対視線は無くならないと思うが、此処よりかはマシになるだろう。

——聖ガラードワース学園——

オーフェリア「……やっぱりレヴォルフとは真逆ね。」

八幡「そりや学園名に現れているからな。ガラードワースは『聖』で、レヴォルフは『黒』だからな。」

シルヴィア「でも、どっちも近づき難いイメージあるよね。レヴォルフは不良だし、ガラードワースは厳しそうだし。」

八幡「んじゃ昼食食べられそうなの探すか。」

やはり名門といったところか、他学園の生徒や観光客も多くいる。その中でも多いのが、ヨーロッパ地方の人だろうか。六花でも見ない顔ぶれだった。

にしても平和なもんだな。決闘禁制にしているだけあって争いの種になりそうな予感すらない。フェアクロフさんの技量でもあるんだろうな。

――某クラス前――

八幡「はあ……腕は解放してもらっても視線は消えなかったな。」
シルヴィア「そりゃ八幡くんは有名人だもん。まあ私たちもだけど。」

八幡「自覚あったんならあいうのやめてくれよ。俺マジで居心地悪かったんだからな？」

シルヴィア「えー、だって八幡くんあったかいんだもん♪ねっ、オーフェリアさん？」

オーフェリア「……………そうね。八幡が暖かいからいけないのよ。」

八幡「俺のせいにするなよ。そしたら何か？俺が冷たくなればいいのか？」

シルヴィア「そうだったとしても私は八幡くんに抱き着いて暖めてあげる♪」

オーフェリア「……………私もそうするわ。」

俺に逃げ場ねえじゃねえか。この子たちってばいつからこんなに積極的になっちゃったの？八幡分らない。

八幡「取り敢えず入らないか？」

シルヴィア「そうだね。いつまでも此処にいたら邪魔になっちゃうしね。」

オーフェリア「……………」

扉の前に立つと自動で扉が開き、中に入る事が出来た。便利ねえ。

生徒1「いらっしやいまー……えっ!!？」

もうこのやり取りも慣れっこです。だが、いい加減飽きてくる。

八幡「……………はあ、3人だ。」

生徒「っ！し、失礼しました！どうぞこちらへ！」

生徒1「メニューが決まりましたらお呼び下さい！」

シルヴィア「何処に行っても同じ反応だね。」

オーフェリア「……………毎回こうなのかしら？貴方たちがお店に入ると。」

シルヴィア「うん。1度行った所に2度行った事はまだないけど、同じ反応されると思うなく。」

八幡「最初は面白いと思ってたが、最近は当たり前になってきたからな、なんか飽きた。」

オーフェリア「……………私はそんな対応された事は無いわね。というよりも、違う意味で驚かれた対応なら何度もあるわ。」

八幡「言わなくていいからな？大体予想つくから。」

恐怖、怯え、その他マイナスの感情だろうな。世間ではまだ恐ろしい魔女っていうのが普通だからな。オーフェリアの素を知っているのは、俺とシルヴィくらいだからな。

そんな事を思いながらも注文を済ませて食べ物来るまで雑談をしながら待っている。

八幡「なあ、ガラードワースには剣術披露もやってるらしいから、昼食食べ終わったら見に行かないか？」

オーフェリア「……………そういえば【聖騎士】がそんな事を会議で言っていたわね。」

シルヴィア「面白そうだし行ってみようよ！ついでに八幡くんもやってみれば？」

八幡「俺は最終日の講習会で充分だ。」

オーフェリア「……………私は八幡の強さをよく知らないのだけど、序

列2位なのだから強いのでしょうね。八幡の学院で前の序列2位は【覇軍星君】だったのでしょうか？」

八幡「ああ、オーフェリアも流石に他学園の冒頭の十二人くらいは知ってるか。」

オーフェリア「……………そこまで無知ではないわ。でも八幡がどれくらい強いのかも興味があるわね。」

八幡「まさかとは思うが、お前と戦えなんて言われても俺はお断りだからな？」

オーフェリア「……………そんな事言わないわ。貴方の学院の序列1位と戦ってくればいいわ。」

八幡「なあ？それって俺に死ねって言いたいんだよな？俺でもあのチビは相手にしたくないんだが？」

オーフェリア「……………冗談よ。」

君の冗談は全く冗談に聞こえないの。

シルヴィア「でも、確かに興味はあるよね。八幡くんがどのくらい強いのかも。ねえ、お試しで星露と戦ってみてよ。」

八幡「お前までそんな事言うのか？」

唯一の味方まで敵に回っちゃったの？お願いだからこっち側にいてくれよ。

生徒1「お、お待たせしました！」

3人分の料理が同時に運ばれて来た。にしても種類が違うのにいっぺんに持つてこれるって凄いな。

ちなみに頼んだ料理は全員サンドイッチだ。俺がハムレタスサンド、シルヴィがタマゴサンド、オーフェリアがカツサンドだった。ちなみにサンドイッチは3つあるから全員で3つの味を楽しめるって

わけだ。

シルヴィア「わおっ！美味しそう♪」

オーフェリア「……………そうね。」

八幡「んじやあ早速……………ん？」

このサンドイッチ……………変だぞ？

学園祭 ガラードワース編②

八幡 side

このサンドイッチ……変だ。見た目は普通だが、何処かおかしい。正確には俺のではなく、シルヴィとオーフェリアのサンドイッチにだ。俺のには何も感じない。

シルヴィア「じゃあいただきますーす！美味しs「待てっ！」うわっ!?ちよつと八幡くん、驚かさないでよ……八幡くん？」

オーフェリア「……八幡？」

八幡「お前ら、このサンドイッチ絶対に食べるな。いいな？」

シルヴィア「え？う、うん。」

オーフェリア「……分かったわ。」

……肉眼では分かんが俺の第六感が危険だと言ってる。【八咫の眼】で視るか。

八幡『やっぱりな……2人のサンドイッチ、何か変なのが混じってやがる。』

八咫鳥『気付いたか主人よ。拙僧も先程気付いたのだが、これには精神を狂わせ、欲を昂らせる効果があるようだ。香の類であろう。』

八幡『……成る程、要するに媚薬って事か。』

八咫鳥『現代ではそう呼ばれておるのだな。しかもこの香、かなり限定的な人物に特定されている。』

八幡『誰か分かるか？』

八咫鳥『そこまでは分からぬ。』

いや、これだけ分かれば充分だ。やろうとする奴なんて1人に絞れてるからな。

シルヴィア「……まんくん？八幡くん！」

八幡「……ああ、すまん。」

シルヴィア「すまんじゃないよ！突然どうしたの？」

八幡「2人に言っておく。俺以外のサンドイッチに薬が入ってる。」
シルヴィア「えっ!？」

オーフェリア「……それは本当なの？」

八幡「ああ、今調べたところだ。今からこれを作った料理人を呼ぶから知らないふりをしていてくれ。」

オーフェリア「……分かったわ。」

シルヴィア「う、うん。」

もしあいつが出てこなかったら、恐らくはあの手だろうな。

八幡「すまない。」

生徒1「は、はい！」

八幡「これを作った料理人は誰か分かるか？出来れば此処へ連れて来て欲しいんだが……」

生徒1「わ、分かりました！」

そう言ってから、ウェイトレスの生徒は裏の方へと急いで行った。

――30秒後――

葉山「……やあ、ヒキタニくん。来てあげたよ。」

生徒1「で、では私はこれで……」

八幡「ああ……ありがとう。」

久しぶりの再会だが、前よりも醜くなってないか？こいつの顔。

葉山「それで、俺に何か用かい？すぐに厨房に戻りたいんだけど。」

八幡「まずは場所変えないか？此処じゃ話辛い。」

葉山「聞こえなかったのかい？俺はこの後も厨房の仕事があるんだけど？」

八幡「なら此处で話すか？一応お前のために言ってるんだが？」

葉山「……分かった。」

八幡 side out

—————

————人気のない場所————

葉山が3人を先導して人気のない場所まで連れてってもらった。

葉山「それで何か用かな？」

八幡「……おい、演技するんならもつと上手くやれ。お前の顔やら身体やらから黒いのが丸見えなんだよ。」

葉山「……君が何を言っているのか、俺には全く理解出来ないんだけど？」

八幡「あくまでそれをやめないつもりなんだな？ならそれでいい。単刀直入に言う。この2人のサンドイッチに媚薬混ぜたな？」

葉山「つ……何で俺がそんな事する必要があるんだい？俺にはそんな事する動機がないじゃないか。」

八幡「ほう……なら何でシルヴィに告ったりしたんだ？」

葉山「……」

八幡「俺が知らないと思ってたのか？シルヴィは俺の女だ。知らない方がおかしいだろ……で？どうなんだよ。」

葉山「……元に戻してあげようと思ったんだよ。」

八幡「あ？」

葉山「お前みたいな虫にも劣るような奴に彼女だなんて……しかも

よりもよってシルヴィアさんじゃないか。彼女程文武共に優れている人がお前なんかには好き好んで付き合うはずがないだろ。」

葉山「それにだ。陽乃さんだけでなく、そこにいる【孤毒の魔女】まで騙っていたなんてね。一体どんな手品を使ったんだい？」

八幡「……お前頭大丈夫か？俺は誰も騙してなんかいないぞ？」

葉山「嘘をつくやつ!!だつたら何故お前のような奴がシルヴィアさんと付き合ってる!!?俺の方が相応しいに決まっている!!」

こいつ本当に頭大丈夫か？

八幡「ならお前は、俺がシルヴィと付き合うのが間違っていると言いたいのか？」

葉山「物分かりがいいじゃないか。その通りだよ。君なんかとシルヴィアさんは釣り合わない!俺といえるべきなんだ!」

八幡「だそうだシルヴィ。どうする？」

シルヴィア「もちろん答えは『NO』だよ。私が八幡くん以外と付き合う訳ないよ。」

葉山「な、何故だ!?君はそいつに騙されているんだ!この前も言っただじやないか!」

シルヴィア「……私がどんな風に騙されているかなんて分からないけど、君と付き合うより八幡くんといった方が何万倍もマシだよ。それに、それなら私は騙されている方を選ぶよ。だって八幡くんは私を絶

対に裏切らないし、私も絶対彼を裏切らないから。」

……………

葉山「目を覚ますんだ!!こんな奴なんか騙されていいと思つてー」

チャリーン

葉山「っ!!?」

八幡「……………」

八幡はいつの間にか祢々切丸を抜刀して葉山の首元に突きつけていた。

八幡「それ以上俺の女に近づくんじゃねえよ…………その面2度と表に出せねえようにするぞ。」

八幡は殺気を出していた。しかもガラードワースどころか六花全体を包み込んでしまう程、巨大な殺気だった。恐ろしく巨大で濃密で深いものだった。

まるで界龍で出した星辰力がオモチヤのように小さく見える程だった。

オーフェリア(……………なんて力なの。足の震えが止まらないわ。八幡、貴方……………一体どれだけの力を……………)

シルヴィア(……………本気だ、本気の殺意を出してる。しかもこの殺意、星露と似てる……………でも少し違う。もしかして八幡くんの師匠、小苑さんの?)

八幡「……………いいな?俺の女に触るな。」

葉山「……………」ガタガタガタガタ

八幡「話を戻すが、サンドイッチの中身に薬を混ぜたのはお前か？正直に言え。もしくは首を縦に振るか横に振れ。」

葉山「……………」あ、ああ。」ガタガタガタガタ

八幡「……………」次だ。何故オーフェリアのサンドイッチにも混ぜた？まさかついでじゃないだろうな？」

葉山「ふ、ふふ2人解放出来るなら、と思って…」ガタガタガタガタ

八幡「……………」そうか。聞きたい事は以上だ。」

ザクツ!!

葉山「ヒイツ!!」

八幡「次俺の女にちよつかい出してみろ。お前の自慢の金髪を綺麗に散らしてやるからよ覚悟しとけよ。」

そして八幡は壁に刺さった刀を抜き鞘にしまうと、シルヴィとオーフェリアの肩を抱きながらその場を離れた。

学園祭 ガラードワース編③

オーフエリア side

……あの葉山という男と別れて、私たちは今ガラードワースの中庭付近に来ていた。ガラードワースの生徒や他学園の生徒、観光客は辺りをキョロキョロしているわ。それもそうよね。八幡があれだけの気を発するんだもの、気づかない方がおかしいわ。

……でも安心して。八幡はもう殺気を出してないし、雰囲気も普通に戻ってるわ。でもあの男と一緒に居た時は、星導館の3人と同じくらいかそれ以上に腹が立ったわ。私を救ってくれた人をバカにするだけでも許せないのに、八幡の事を偽善者呼びするのは本当に我慢出来なかったのだけど、八幡があれだけの殺気を出してくれたから許してあげたわ。

……あの時の八幡はカッコよかったわ。それに、あんな後があつて嫌な気分になると思っていたのだけど、全くそうならなかった。その理由は……

八幡「……………」

シルヴィア「えへへ、やったね♪」ボソボソ

オーフエリア「……………／／」コクッ

無意識とはいえ、八幡が私と【戦律の魔女】の肩を抱いてくれるからなの。それはこの中庭に来ても続けている。八幡は多分気づいていないんでしょうね。これは言わない方が長けたの……………堪能出来るから、このまま黙っている事にしましょう。

八幡「……………さっきは悪かったな。突然【虎威^{こい}】出しちゃって。」

シルヴィア「虎威？」

八幡「簡単に言えば威嚇、威圧だ。大抵の奴はこれで怯む。葉山が

あれだけ腰抜かしてたって事はそんだけの奴だって事だ。」

オーフェリア「……………私たちも動けなかったのだけど?」

八幡「虎威は別に前だけに発するものじゃないからな。全方向に出来る。」

……………八幡って本当に凄いのね。色んな事が出来て羨ましいわ。

アーネスト「比企谷くん!」

……………前の方からは、【聖騎士】を先頭にガラードワースの冒頭の十二人の序列上位4人を引き連れて私たちのところまでやって来た。

アーネスト「……………先程の気迫は……………君がやったのかい?」

八幡「ええ。シルヴィに触れようとしていたものですから。」

アーネスト「それにしても大き過ぎる気迫だと思っただけど?」

八幡「一応の警告ですよ。これ以上の接触はするなという意味も込めてね。」

パーシヴァル「では、葉山隼人は?」

八幡「あっちの方で腰抜かしてるんじゃないか?本気で殺気に向けてたからな。」

パーシヴァル「……………そうですか。」

ケヴィン「それよりもよ【夢幻月影】。」

八幡「何だ【黒盾】。ニヤニヤして気持ち悪いぞ。」

ケヴィン「いやだってよ、いつまでその2人の肩を抱いてんだ?まさかとは思うけどよ、葉山隼人と別れてからずっとじゃねえのかい?」ニヤニヤ

……………余計な事を言ってくれたわね。折角八幡からやってくれたのに。

八幡「ん?あつ、悪いな。」パッ

シルヴィア「もおゝ何で言っちゃうのさ！折角八幡くんからしてくれたのに〜！」

ケヴィン「マジでか!? いやあそりゃ悪かったな。」

オーフェリア「……………本当よ。少しあっちの方に行って決闘でもどうかしら?」

ケヴィン「い、いや……………勘弁してくれ。」

アーネスト「その辺に。それで比企谷くん、何があったのか説明してくれるかい?この場所では話せないから、生徒会室で話そう。勿論ミスリユーネハイムとミスランドルフエンも一緒にね。」

八幡「……………分かりました。でもその前に葉山の確保をお願いします。」

アーネスト「それはレティシアとケヴィン、ライオネルに任せるよ。いいね?」

レティシア「でもアーネスト、葉山隼人は私たちよりも序列が下なのよ?3人もいるかしら?」

アーネスト「これは僕と比企谷くんとミスリユーネハイム、そしてパーシヴァルと交わしている約束でもあるんだ。あまり聞かれたくない事だから……………いいね?」

ケヴィン「まあアーニーがそう言うなら仕方ねえよな。」

ライオネル「承知した。」

レティシア「分かりましたわ。」

アーネスト「理解してくれて嬉しいよ。2人もいいかな?」

シルヴィア「まあ、そうなるよね。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

——生徒会室——

アーネスト「好きなどころに掛けていいよ。」

八幡「じゃあ俺は端に「八幡くんは勿論真ん中だからね♪」……………はい。」

……流石【戦律の魔女】ね。分かっているわ。

座り方は入り口側に私で八幡、最後に【戦律の魔女】で私の正面に
いるのは【優騎士】で、八幡の前に【聖騎士】という並びになっ
てい
るわ。

アーネスト「それじゃ早速だけど、聞かせてくれるかい？」

八幡「はい。」

そして八幡はあの葉山という男と何をしていたのをすべて話した。
私も隣で聞いていたけど、間違いは何処にもなかったわ。

アーネスト「……まさか彼がそこまでするなんてね。そのサ
ンド
イツチはどうしたんだい？」

八幡「残ってれば良いんですけどね。そのまま置いたままです。」
シルヴィア「残ってたら唯一の証拠品になるからね。そこには賭け
る
しかないね。」

オーフェリア「……でもそのサンドイツチに薬が含まれているの
を知っているのは八幡だけなのよ。調べるに越したことはないけれ
ど、それだけだと証言にならないと思わない？」

八幡「確かに俺だけが証人だとしても無理があるよな。せめてもう
1人
いたらな。」

シルヴィア「私の学園にはそんな人居ないかな。」

オーフェリア「……私の学院にもそんな人居ないわね。」

アーネスト「僕の学院にも居ないね……パーシヴァル、君はどうだ
い
？」

パーシヴァル「私でもそこまでは……」

アーネスト「ふむ……出来るなら検査依頼を出したいところだけ
ど、事態を大事にするのも僕は望まない。何かないかな……」

……フラウエンロープ系列の病院なら解析出来ると思うけど、私

はもう長い事行っていないから受けてくれるかもわからないわ。

アーネスト「……………こうなったら埒がないね。比企谷くん、そして2人共。この件はこれで終わりでいいかい？このまま議論していても解決にはならないからね。」

シルヴィア「まあ出来る事は無さそうだしね。私はそれでもいいよ。」

オーフェリア「……………私も構わないわ。」

八幡「……………俺もそれでいいです。」

アーネスト「ありがとう。時間を取らせてしまったね。3人は学園祭を満喫していったいいよ。といっても、もう1時間くらいで1日目は終了してしまうけどね。」

……………外を見ると夕日が沈みかけていたわ。あれから大分時間が経っていたのね。

八幡「じゃあ俺たちも帰るか。」

オーフェリア「……………そうね。」

シルヴィア「うん、そうしよう。」

そして私たちはガラードワースを後にして街を少しだけぶらつきながら、学園祭の1日目終了の合図と共に別れた。

1日目の終了

八幡 side

アーネスト『本当にすまない、比企谷くん。』

八幡「いや、別にいいですよ。」

開始早々にこの会話は理解出来ないだろう。それは数分前くらいに遡る。

――5分前――

シルヴィア「……………色々あったけど楽しかったね！ガードワースの剣術は見れなかったけど。」

八幡「そうだな……………まあ明日は幸い、クインヴェールでシルヴィのライブを観る以外予定は無いから終わったら行ってもいいぞ。けど、行きたいか？」

シルヴィア「正直嫌かな。」

八幡「じゃあやめるか。やめて俺と2人で武術の稽古でもするか？」

シルヴィア「え？ホント!?じゃあライブが終わったらすぐに界龍に戻ろう！手取り足取り教えてくださいね、八幡尊師♪」

尊師は余計だ。

p i p i p i p i p i p i :

八幡「ん？アーネストさんから？」

シルヴィア「何だろうね？事後報告かな？」

八幡「まあ何にせよ、開いてみないと分からないよな。」

俺はそう思った後、ウィンドウのc a l l ボタンを押して応答した。

アーネスト『やあ比企谷くん。さつき別れたばかりだけど、もう一度挨拶をしておくよ。』

八幡「どうも。」

アーネスト『早速本題から行くよ。あまり君たちの時間を取りたくないしね。』

……お気遣いをどうも。

アーネスト『葉山くんはもう確保済みだけでも、時間が掛かるところ。何せ精神が不安定だからね。君のオーラが余程効いたんだろうね。』

なんか悪い事したな……

八幡「………なんか時間のかかる事を起こしてしまつてすみません。そんなつもりはなかったんですけど……」

アーネスト『いや、謝る事はないよ。元々彼のした事は許せない事だからね。そう思ったら君のした事を咎める事はしないよ。』

アーネスト『次に葉山くんが薬を持ったというサンドイッチの事だけど、残念ながらホールの子が片付けて捨ててしまったんだよ。彼女たちはちゃんと理由があつてそうしたと言つてたよ。』

八幡「その理由は何ですか？」

アーネスト『一番の理由はお客の多さだね。他にはサンドイッチの鮮度が落ちてしまうから、君たちがそのまま戻つてこなかったから……ぐらいだね。』

八幡「それに関しては俺たちの所為でしょう。何も言わずに出てった挙句に戻らなかつたんですから。』

アーネスト『彼女たちを責めなかっただけでもありがたいよ。』

そして冒頭に戻る。

――――

アーネスト『じゃあ報告は終わりだよ。通信越しではあるけど、前回や今回の件も含めて謝罪するよ。当学園の生徒が本当に申し訳ない。』

八幡「もういいですよ。」

アーネスト『……………じゃあ僕もそろそろ葉山くんの所に行くから通信は終わるよ。それじゃあ。』

そして通信のやり取りはここで終わった。残念ながら証拠は消えてしまったようだ。俺の証言以外は。だがそれだけでは何ともならない。纏められたとなると、どれがどれなんて区別出来るはずもない。

シルヴィア「……………残念だったね。」

八幡「菌痒いな。目の前の犯罪者を無視して行くようなものだ。」

シルヴィア「……………でもいつかはボロが出るよ。きつとね。八幡くんに与えた傷はあれだけの威圧でも足りないんだから。」

八幡「割と怖いこと言うな……………まあいいけどよ。」

―――界龍第七学院―――

門番1、2「尊師、奥方様っ！お帰りなさいませ！」

シルヴィア「……………ねえ、その呼び方何とかならないの？」

門番1「奥様！」

シルヴィア「変わってないじゃん！」

門番2「では何と呼べと？」

シルヴィア「普通に呼べない？シルヴィアでもシルヴィでもいいからさ。」

門番2「尊師の奥方様を呼び捨てになど出来ません！」

シルヴィア「もおゝ！／／／／」

ホントお前ら好きだよな……このネタでシルヴィいじるの。

八幡「行くぞシルヴィ……どうせ近い未来そうなるんだからいいだろ。」

シルヴィア「ちよつと／／／／／」

――界龍廊下――

校内に客はもう居なかった。朝あれだけいたのが嘘のようだった。さて、今日の集計冬香さんに聞きに行こ。

八幡「冬香さん。」

冬香「あら、八幡さん。それにシルヴィアさんも。本日は如何でしたか？」

八幡「楽しめましたよ。明日も楽しめますけど。」

冬香「ふふふ、そうですね。それで、私に何か？」

八幡「ええ、今日の結果を聞きに来まして。一応言い出しつぺは、俺なので。」

冬香「ああ、その事ですか。ご安心ください。本日だけでも予想の3倍を上回る数字でした。鳳凰星武祭のセミファイナリストとファイナリストが直々に教えを受けられるのが、余程上手くいったんでしょうね。予定金額が50000円で、今回の収入は176000円でした。小さいお子様は無料で出来るというサービスも効いていたみたいなので親子連れも多々見られましたね。」

八幡「マジですか……これもう出し物する必要ないんじゃないで

すか？」

シルヴィア「何言ってるのさ！最終日は八幡くんの講習会でしょ！自分の番をサボっちゃダメだよ！私も楽しみにしてるんだから！」

冬香「ふふふ、そうですね。八幡さんがやる講習会では、おそらく本で行った講習会よりも倍くらいの収入になると思いますよ？」

冬香さんが言うのと嘘に聞こえないんだよなあ……っていうか、本当になりそう。

冬香「そうそう八幡さん。師父から言伝を頂いてますよ。黄辰殿で待っているそうです。」

……まあ、そうだろうな。

冬香「八幡さん。こう申し上げては何ですが、私も感じていましたからね？あなたの発した気を。何処で発したかは分かりませんが、私や当学院の生徒を含め、お客様方も突然の事に動揺していました。その中で師父だけは喜んでおいででしたが。」

……なんか予想通り過ぎるな。

八幡「分かりました。行ってきます。シルヴィは俺の部屋で待ってるか？」

シルヴィア「ううん、私も行くよ。一応関係者だからね。」

――黄辰殿――

八幡「星露、入るぞ。」

陽乃『良いよー入って来て。』

ん？陽乃さん？

シルヴィア「陽乃さんもいるんだね。」

八幡「そうみたいだな。」

星露「おお、待っておったぞ八幡。それに歌姫殿も一緒とは……お主らは相変わらずじゃのう。」ニヤニヤ

八幡「そんな話をする為に呼んだのか？俺も分かってんだよ。」

星露「おお、そうじゃそうじゃ！お主実に良い殺気を出してはおらなんだか？」

八幡「ああ、俺だ。」

星露「やはりお主であつたか！妾も感じておったぞ！お主の殺気は六花を包む程あつたぞい！大したものじゃ！流石は小苑に育てられただけはあるのう！」

八幡「褒められてる気はしないが、まあいい。それで？」

星露「そうじゃったな……何故あんな気を出したのじゃ？」

まあ、そうなるよな。

俺はガラードワースであつた事を話した。

陽乃「成る程ねえ……あいつ行動してきたんだ。でも八幡くんには敵わなかったようだね。」

星露「当然じやろう。我が校序列2位じゃぞ？そこの奴にやられては示しがつかんじやろ。」

シルヴィア「それに八幡くんがそう簡単にやられるはずないもんね。」

またも嬉しいんだか嬉しくないんだか分からん言い方されてるな。

八幡「もう行つていいか？」

星露「おお、そうじやの。良いぞ。」

八幡「おー。」

俺も少し疲れたのか、シルヴィの手を意識することもなく掴んで、自分の部屋まで連れて行つた。その際、途中でシルヴィが腕を抱き締めたのは言うまでもないだろう。

今日のスケジュール

八幡 side

学園祭2日目。今日はシルヴィのライブを観る予定だ。シルヴィが気を利かせたのか分かんが、1人だけしか入れないVIP席をペトラさんに頼んで用意してもらったとの事だ。なぜ一生徒の俺に許可が下りたのか全く分かん。

シルヴィがライブをするまでには、ガールズロックバンド『ルサールカ』が演奏をするそうだ。これに関しては興味無いから別に見ようとは思ってない。考えてみ？俺がロックバンドに興味持つと思う？今日はそんな大切な日だというのに、当の本人はというと……

シルヴィア「♡」

ご覧の通り、爆睡中です。しかも俺の腕をガッチリと掴みながら。いや、別に困ってる訳じゃないからいいんだよ？いいんだけどさ、今日は君のライブなのよ？自分で起きようよ。今7時だよ？

シルヴィア「んん♪」

八幡「……………起きる気配が全くしない。」

このまま放置してたら何時に起きんだろう？真面目に計測したいな。

でも、今日はライブがあるから起こさなきゃな。俺も少し動きの見直したいし。

八幡「シルヴィ、起きろ。もう7時だぞ。」

シルヴィア「八幡くんあったか……………幸せ♪」

八幡「何言つとんじやお前は。」

歌のリハとか色々あるから、こうなったらアレで起こすか。

シルヴィア「あはははは！ははは！や、やめて八幡くん！く、くすぐりたい！あははは！」

八幡「起きてくれたかー？」

その方法は即ち、くすぐりである。俺の場合、脇腹をただつついてるだけだけどな。

シルヴィア「はあーはあー……ふう、やっと落ち着いた。酷いよ八幡くん！急にくすぐるなんて！」

八幡「今の時間見てもそう言えるのか？」

シルヴィア「え？」

シルヴィーが時計を見て固まった10秒後に俺の方を再び見て、

シルヴィア「ありがとう、八幡くん♪」

とても良い笑顔でそう言ってくれた。多分これ以上寝てたらマズかったんだろうな。

八幡「よし。起きたところで朝食にするぞ。簡単なものにするけど、良いか？」

シルヴィア「お手伝いします！」

八幡「それじゃ頼む。」

シルヴィア「お任せあれっ♪」

――30分後――

数十分で作ったのは、コンソメスープとホットサンド（中身はベーコンとチーズ）とサラダの3つだ。因みにドレッシングは俺のオリジナルを使っている。作り方？秘密です。

にしても、最近は星露たちが来なくなったから平和に食事が出る。俺がシルヴィの家に帰ってるっていうのもあるけどな。

だが、星露と陽乃さんは俺がいるの知ってるはずなのに朝になっても来ない。シルヴィの事気遣ってるのか？だったらありがたいが……

シルヴィア「はい、あーん♪」

八幡「あむっ……うん、美味しい。」

シルヴィア「ふふふ♪ねえ、今日はどうしよつか？ライブが始まる前と終わった後！」

八幡「前なんだよな……何していいか分からん。アルルカント行くか？行っても何も無いと思うが、どうする？」

シルヴィア「何かあるかな……あつ、そうだ！シオンくんを見て貰えば良いんじゃない!?シオンくんって身体の大部分が機械でしょ？それを見てもらったら？」

八幡「……成る程な。確かにそれは良いな。シオンも喜ぶだろう。どうだシオン、行ってみるか？」

そして八幡のホルダーから1枚の呪符が出て来て煙が出てくると、

そこからは130cmじょうたいのシオンが出て来た。

シオン「俺の為に時間を割いてもいいのか？それよりも2人楽しんで方が良いんじゃない……」

シルヴィア「いいのいいの！午前はやる事ないんだから！それにさ、回れるなら全学園回ってみたいから丁度いいよ！ね？」

八幡「そうだな。シオンはもう自我を持つてゐるから、武器関連だな。《思想派》^{メセトラ}筆頭の所に行くか。他に行く所なんて無いしな。」

シオン「ありがとう八兄、シルヴィア姉も。アルルカント、楽しみにしてる。」

そしてシオンはまた呪符に戻って、俺のホルダーへと戻っていった。

シルヴィア「よしっ！午前決まり！午後はどうしよう？」

八幡「そのままクインヴェールでブラつかないか？普段は男子禁制にされてるから、少し中の校風とか気になってたんだよ。」

シルヴィア「……………八幡くん？まさかとは思うけど、他の女の子に目移りとかしないよね？」

八幡「はあ？する訳ないだろ。何でシルヴィが居るのに他の女を見なくちゃいけないんだ？」

シルヴィア「だ、だって……………私の他にも可愛い子は沢山いるから……………」

八幡「俺はシルヴィしか見てねえし、これからもそのつもりだ。他の奴なんて恋愛対象に入ってねえよ。そもそも、もう入らん。」

八幡「お前だけで充分過ぎる。お釣りが大量に貰えるくらいにな。」
シルヴィア「……………うん／／／／／」

第一俺の事を上っ面だけしか知らん奴にどうやって惚れろってんだ？可愛いは無理がある。しかもそういたらシルヴィの方が絶対可愛いだろ。

八幡「そーいやシルヴィは学園の方になくてもいいのか？」

シルヴィア「それがね、副会長が気を遣ってくれて『学園祭は【夢幻月影】さんと過ごして下さい。仕事は私がやっておきますので。』って言ってくれたんだよね。嬉しかったな〜！」

八幡「サボりじゃなくて安心した。そしたら俺も手伝ってるところだった。」

シルヴィア「仕事をサボるような事はしないよ！私はこう見えても真面目なんだから！」

八幡「うん、知ってる。ライブでいつも見てたから。」

シルヴィア「もう♪さすが八幡くん！」

なんかされると思ったら喜ばれるとはな……予想外だったが、良しとするか。

※学園祭 アルルカント編①

八幡 side

ガゴンツ！ガツ！ガンツ！

シルヴィア「おお。」

八幡「……………」

朝食を摂った後、俺はシルヴィに演武の予習をしたいと頼み、自身の道場で明日やる予定の動きを見直している。今は木人椿での動きを見ている最中だ。

そろそろ時間も良い頃合いだから、ここで終了する予定だ。

八幡「…………ふう。」

シルヴィア「凄かったよ八幡くん！」

八幡「そうか？俺が言うのも変だが、地味だとは思わないのか？」
シルヴィア「確かに動きは少ないけど、それがこの拳法の特徴なんでしょ？それに、身体の軸が全くブレてなかったしね。」

八幡「そこまで見ていたのか…………良い目をしているな。」

シルヴィア「私も体術は嗜んでるからね。ねえ、私もそれやってみてもいい？」

八幡「…………構わないが、慣れてない奴がやると痛いぞ？」

シルヴィア「そうなの？」

八幡「やってみそ。」

身を以て経験するのが一番だ。

シルヴィア「えーと…………確か八幡くんが最初にやっていた動きは……………」

ガッ！

シルヴィア「いったゝ！八幡くんこれ痛いね！よく平気な顔して続けられるね!？」

八幡「1年前からずっと続けてるからな。俺も最初は痛かった。でも今は全然だな。慣れないと普通に痛いだけだからな。」

小苑さんの所で修行していた頃が懐かしいな。あの頃まだ途切れ途切れにしか出来てなかったからなー。

八幡「いい時間だし、そろそろ行かないか？」

シルヴィア「うん！」

――界龍・廊下――

「行つてらっしゃいませ！尊師！そして比企谷夫人！」

シルヴィア「もお／＼／＼まだ結婚してないから比企谷じゃないよ！」

八幡「毎回相手にしても無駄だって。絶対楽しんでるだけだから。」
シルヴィア「だって身体が反応しちゃうんだもん！」

八幡「そうか。さて、アルルカントに向かうか。といつても隣だからすぐに着くけどな。」

シオンも楽しみにしてるだろうから早く行くか。

――外縁移住区――

ここは通り道だからな、それに街並みも少しばかり中華入ってるから分かるが、なんか安心する。

「っ！ねえ、あの2人！」

「あら！本物だわ！」

「あれは本当だったのね。」

「本物だぜ！こんな所で！」

「しかも腕組んでる！テレビの事は本当だったんだな！」

そしてもなく外野からの熱い視線と、コソコソ話している声が少しだけ聞こえてくる。まあ別に気にならないけどね。

シルヴィア「それにしても人の目が多いねえ。それに此処って外縁移住区だよ？なのに何で観光客が多いのかな？」

八幡「さあな……此処に住みたいって奴らも少なくないと思うぞ。何せ六花だからな。」

シルヴィア「私たちの当たり前が、外の世界では当たり前じゃないかもしれないしね。」

そりやそうだ。その証拠に六花外は星脈世代が少ないからな。まあいいわけではないが、珍しい方だ。俺の両親は非星脈世代なのに俺は何故か星脈世代になれた。ホント不思議。

——アルルカント——

シルヴィア「へえ、此処がアルルカントなんだ。思ってたのより普通だなあ。」

八幡「ちなみに聞くが、どんなのを予想してたんだ？」

シルヴィア「なんかもうメカメカしいのかなあって。」

八幡「流石にそれは無理あるだろ。昔のガラクタで作った訳じゃあるまいに。」

シルヴィア「じゃあ八幡くんはどんなのを想像してたの？」

八幡「いや、別に想像した事なんて無いんだが………」

シルヴィア「本当にい？」

八幡「俺はシルヴィに嘘はつかねえよ。本当だ。」

シルヴィア「さすが八幡くん！嬉しい事聞いちゃったよ！」

八幡「シルヴィもそうだと嬉しいんだがな。」

シルヴィア「勿論そうだよ！私も八幡くんには嘘つかないから！」

なんか急に抱き締めたくなってきたな。でもこんな人目のつくところではしたくない。ここは我慢だな。

学園祭 アルルカント編②

八幡 side

校内も割と普通な感じだった。少し暗い感じはするが、それを除けば勧誘などの紙が貼ってある掲示板や過去に賞を取った展示物、アルルカントらしい一面だった。

しかし分かつてはいたが、此処でも派閥争いみたいなのがあるんだな。《獅子派》^{フェロウィアス}が一番多いみたいだが、他の派閥も食いさがってるかな。賞やトロフィーの多さを見れば、最近は《彫刻派》^{ビクマリオン}か。

州馬「おや？比企谷さん、それにリユースハイムさんも。アルルカント・アカデミー最大派閥の《獅子派》へようこそ。」

八幡「左近か……お前って《獅子派》だったんだな。てつきり俺は《思想派》^{メトセラ}か《超人派》^{テノリリオ}だと思った。」

州馬「あはは……一応僕の姉は《思想派》所属の代表でした。」

マジで？ていうかマジでって言ったけど、よく分かんないんだよな、ここの派閥が何してんのか。《獅子派》は煌式武装の開発、《彫刻派》は自律式擬形体^{パベツト}の開発、それくらいしか分かん。興味もそんなになかったし。

州馬「それでどうしましたか？こういうっては失礼ですが、比企谷さんとリユースハイムさんがアルルカントに興味を持たれるとは思えないのですが……」

シルヴィア「まあ確かに私たちはメカニックではないからね。」

八幡「少し見てもらいたい奴がいてな。俺の式なんだが、構わないか？」

州馬「ええどうぞ。中にはパレートさんもいらっしやいますので。」

――《獅子派》研究所――

中に入ると、煌式武装が沢山あった。試作中の物や作成中の物、完成した物など様々だったが、流星は最大派閥というだけあって人の数も多い。

州馬「パレートさん。少しお相手をしてはもらえないでしょうか？
界龍からの人でして。」

カミラ「界龍の？……ああ、君か。久しぶりだね。」

八幡「久しぶりだな。あの時は……悪かったな。」

カミラ「武装は無事だったから私からは別に何も無いよ。」

シルヴィア「どういう事？」

八幡「《鳳凰星武祭》で俺と陽乃さんが予選2回戦で自律式擬形体を一撃で倒したのは知ってるな？」

シルヴィア「うん。あの時の八幡くんも陽乃さん、結構エゲツなかつたよ。」

八幡「ハッキリ言うな……それでだ。その時に作られた自律式擬形体を修復不可能にまでやっちまってな。パレートの作った武装は何もなかったけど。」

カミラ「私もアルデイの防御がいとも簡単に破ってしまうとは思わなかったよ。」

シルヴィア「そっかあ……それで。」

八幡「ああ。」

カミラ「それで、私に何か用だったかな？」

八幡「ああ。実はこいつの武装なんだが、見てくれないか？急急如律令。」

俺は呪符を取り出して式を出した。アルデイと接戦したからか、周りの《獅子派》の奴らはシオンを囲み、あつという間にもみくちやにされていた。

「おお!!この子は《鳳凰星武祭》のっ!」

「でも小さくない?なんか可愛い!」

「背が高いとカッコ良かったけど、低いと可愛いわね!」

「むむ?この右腕の義手からいろんな武器が格納されているのか?」

ワーワーキヤーキヤー

……シオンが見えない。身長が低い分動けないんだろうな。

カミラ「はあ……申し訳ない、ご覧の通り皆彼の戦い方を見てから、彼の武装に興味津々でね。いつ来るかいつ来るかと待ち望んでいた者もいるくらいだったんだ。」

八幡「いや、俺は別に構わないんだが……」

シオン「八兄……助けて……」

八幡「……そろそろどこかしてやってくんない?あいつじゃあこの人数を振り切るの無理だから。」

カミラ「………了解した。」

パレートの一言でシオンを囲んでいた連中は引っ込んだが、未だにシオンを見ていた。多分だけど、《彫刻派》も興味持ちそうだな。シオン右腕機械だし。

カミラ「さて、君の武装を見てくれとのことだったが……《鳳凰星武祭》で出した技が全てでないのは分かっている。その上で何を見て欲しいんだ?」

シオン「出来れば銃を煌式武装に変えたいと思っていた。俺は実銃しか扱ったことがないから興味があつた。」

カミラ「それは分かったが、君の銃は?」

そう言われるとシオンは、義手を口径15cmの大砲型に変形したり、口径5mmのガトリング型に変形したりした。この程度では《獅

子派』には技術の進歩にすらならないと思うがな。

「す、すげえ!!」

「義手が銃に!?どんなカラクリなんだ!」

「弾はどうやって!?それにあれだけの複雑な構造なのにどうやったらあんなにスムーズな切り替えが……」

ええ……まさかの想像してなかった?結構ありそうだったけど?義手の方に武器をつけるとかって。

カミラ「…………成る程、君の腕の仕組みはよく分からないが、2種類の銃が使えるんだね?」

シオン「ああ。出来そうか?」

カミラ「努力はしてみる。けど、他の武装の事を考えると時間がかかりすぎるかもしれないが、それでも構わないかい?」

シオン「構わない、頼む。」

カミラ「分かった、では余程の事がない限りは君の義手製作に取り組む事にするよ。」

シオン「それとこれは俺の義手の設計図だ。活用してくれ。」

カミラ「設計図があつたのか!それは助かる!」

ゾロゾロ……

設計図があるのが分かった途端、連中が食い入るようにマジマジと見ていた。そんなに珍しいかね?

学園祭 クインヴェール編①

シルヴィア side

《獅子派》が、シオンくんの新しい（まだ壊れてないけどね。）右腕の義手の製作を認めてくれた後、私たちは特にアルカントでする事もなかったから、クインヴェールへと向かう事にした。

でもライブまで時間はまだある。学園に向かってもいいけど、きつと八幡くんは好奇の視線を向けられるだろうなあ。

シルヴィア「八幡くん、クインヴェールに向かうのはいいけど、する事あるの？」

八幡「する事かあ……シルヴィンとこの学園は何してるんだ？」
シルヴィア「色々だよ。お祭り風に出店をやっている子もいれば、個人やグループで活動しているアイドルとかは自分たちのグッズを作ったりして販売してるの。クインヴェールは少し特殊だからね。」

八幡「成る程な。シルヴィは何か売ったりしてるのか？」

シルヴィア「私はしてないよ。八幡くんと一緒にいたいし。」

これ本当！10割本当で0割嘘です！純度100%のほ・ん・と・う・です♪

八幡「そうなのか。でも学校内には居ないのか？シルヴィの何かを作って売ったりする奴は。」

シルヴィア「いるよ。私のクラスはいつもそうするんだ。別に頼んでる訳じゃないのにね。そうして集まったお金は、打ち上げか皆で分け合うとかしてる。」

八幡「まあ妥当だな。」

シルヴィア「今年はどうだろう？」

八幡「ん？シルヴィは知らないのか？」

シルヴィア「皆内緒で作って来てるから、当日のお楽しみなんだよね。」

八幡「ほお……なら俺もシルヴィのグッズ買うか。」

シルヴィア「八幡くんには本物がいるでしょ！」

八幡「冗談だよ。俺はシルヴィがいるだけで充分だ。」

——クインヴェール女学園——

シルヴィア「そういえば私は何度か界龍や八幡くんの部屋に行ってるけど、その逆は無かったね。」

八幡「まあクインヴェールは男子禁制だからな。普通は入れねえよ。」

シルヴィア「でもペトラさんだったら、すぐに認めてくれそうだけどなあ。今度相談してみよっか？」

八幡「やめてくれ。そしたら俺はクインヴェールの生徒から白い目で見られそうだな。」

八幡くんの場合だと、逆だと思うんだよなあ。だって八幡くんカッコいいし／／／

八幡「だが、既に凄い数の視線を感じるんだよなあ。これ全員から見られてないか？」

シルヴィア「そ、そうだね。一般の人はしょうがないけど、八幡くんは有名人だから。」

八幡くんは《鳳凰星武祭》の優勝者で界龍の序列2位、歌も上手くて容姿も良い。そして……私の彼氏だから／／／／

「あつ、会長帰って来た！しかも比企谷さんだよ！恋人さん連れて来てる！」

近くで見ると凄いカッコいいね！ああ、会長が羨ましいなあ。」

「きゃー比企谷様っ！本物の比企谷様よー!!」

「そういえばファン登録してたよね……様付けするって噂は本当だったんだ。」

「比企谷様ー!!」

「わあ……やっぱり2人一緒だと絵になりますね。」

「そうね。それに、あんな風に甘える会長なんて初めて見たわ。」

なんて言ってるかはまでは分からないけど、皆私たちの方を見ながら何かを呟いているのは確かだね。

約1名はなんか『く様!』って言っていたような気がするけど、多分気のせいだよね。

シルヴィア「さて……どうしょつか？」

八幡「このままグルッと回ってもいいが、それだとライブが終わった後にやる事なくなっちゃうからな……どうしたもんか……」

そうだよね。学園を回るのはライブの後って決めてるから、この時間は本当に何してよっか……

あつ、そうだ！

シルヴィア「八幡くん、良かったら私の部屋に来る？」

八幡「……………いいのか？自分の部屋を見られても。」

シルヴィア「私、八幡くんなら別に見られてもいいよ。別に見られて困る物はないしね。」

下着はダメだけど／／／

八幡「……………じゃあお邪魔してもいいか？」

シルヴィア「はい、私の部屋へ1名様、ご案内♪」

ライブまでのひと時をお楽しみにね♪

学園祭 クインヴェール編②

八幡 side

ヒソヒソ……ヒソヒソ……

八幡「……なあシルヴィ、物凄く落ち着かないんだが……」

シルヴィア「しょうがないよ。此処は女学園でしかもその女の子の住んでる寮のと真ん中に八幡くんがいるわけなんだから。」

八幡「いや、確かにそうだが……これなら行くなんて言わなかった方が良かったか？」

シルヴィア「それでも私は連れて来ると思うよ。」

八幡「何でだ？」

シルヴィア「八幡くんと2人きりで過ごしたいからね。言い方少し悪いけど、今は八幡くん以外とはいたくないから。」

ハッキリ言うね。まあ俺も一緒なんだけどね。

シルヴィア「あつ、そうそう！八幡くんのファンクラブのサイトさつき見てみたんだよね。」

八幡「……ああ、確か10月のライブ時のファンの人が世界に50000人いるって言ってたな。だが、そのサイトがどうした？」

シルヴィア「八幡くんのファン、かなり増えてたよ。」

八幡「………は？」

え？どゆこと？俺別に何もしてないよ？10月から今日まで何もしてないよ？鍛錬くらいだよ？

シルヴィア「鳳凰星武祭とライブの件もそうなんだけど、もう1つあったんだって。」

八幡「……………それは？」

シルヴィア「記者会見での……告白／＼／＼／」

……………納得出来るような出来ないような複雑でよく分からん理由だな。

シルヴィア「ファンの数は全世界合わせると800000人だった。掲示板を見てみたら『大胆な告白にキュンと来た。』『こんな告白されてみたい！テレビでは嫌だけど。』『堂々と愛を語れる所が凄い！』だって。」

八幡「……………俺を認めてくれてるのは嬉しいが、ファンクラブなんて作る意味あるのか？」

シルヴィア「心掛けの問題じゃないかな？最初は何となくで作った結果、今は全世界からもファンを集める程だからね。一番のファンって誰なんだろうね？」

ちようどうでもいい。

——シルヴィアの部屋前——

シルヴィア「着いたよ。此处が私の寮部屋。序列1位だから個人部屋なんだ。」

八幡「その辺は俺と同じだな。」

シルヴィア「じゃあ中に入ろつか。」

八幡「なあ、今から入る前に言うのも何だが、男の俺を入れても大丈夫なのか？」

シルヴィア「何で？八幡くんだから入れるんだよ？他の男の人なんて絶対に入れないよ。」

……………愚問だったか。

八幡「……分かった、もう何も言わない。」

シルヴィア「うん。じゃあ中に入ってライブが始まるまでゆっくりしてよっか。」

よくよく思えば、俺って女子の部屋って入った事ないんだよな。シルヴィの家？あれはなんか俺の第2の家って感じだからそんな感じはしないな。それに、あの家に帰った時はいつも一緒に寝てるからな。

そんな事を思っていると、シルヴィアが扉のロックを解除して扉を開けた。

中は女子特有の良い香りが漂っていた。

内装は落ち着いた感じで整っていて、音楽に関する本が沢山入った本棚があり、序列上位者特有の大きいベッド。クインヴェールではカーテンが付いているようだ。

3人は座れるくらいのソファがあって、その前にはスピーカーのついたテレビ。その下には映像などを見る為の装置も常備されていて、その近くにはヘッドホンも綺麗に置かれている。テーブルの上には端末があり、あれで操作出来るのだろう。

デスクの方には小さいラジカセがあって、そこにもヘッドホン。音楽は好きでも個人で聴くのが好きなタイプなのかな？シルヴィアさんは？

うん、やっぱ界龍とは違うな。

八幡「綺麗な部屋だな。やはり界龍とは違うな。気品を感じる。」
シルヴィア「やめてよく、普通だよ。」

八幡「俺たち界龍の部屋はこういう近未来的な物が無いからな。テレビはあるけどな。」

シルヴィア「何せ自動販売機が無いくらいだもんね。あれは面白かったよ。」

八幡「俺からしてみれば笑い事じゃないんだが？」

シルヴィア「ゴメンゴメン！でも本当に面白かったんだよ！1日でお茶とお水以外売り切れたって本当に面白くて……ふふふ。」

俺たちはそんな話をしながらソファに掛けた。

シルヴィア「………思ってたけど、私たちがあの家以外で2人きりになる機会ってそんなになかったね。」

八幡「言われてみればそうだな。界龍の俺の寮っていつでも人はかなり出入りしてたから、2人きりとは言い難いな。」

シルヴィア「でも、なんかこの雰囲気思いつくなあ……／＼／」

ああ、そういう事か。10月のライブが始まる前のホテルでの出来事か。

八幡「………流石に今はダメだからな？」

シルヴィア「分かってるよ！でもさ、少しならいいよね？／＼／」

八幡「あのなあ、10月の時少しと思っていたら何時間経ってた？」

シルヴィア「……1時間半です／＼／／」

八幡「そうだ。俺もしたくない訳じゃないが、大事なライブ前なんだ。遅れたら大変だろ？」

シルヴィア「うう、確かに……／＼／」

八幡「だから終わったらする。それでどうだ？」

シルヴィア「う、うん／／／」

………

………

.....

何だろう、凄くシルヴィに見詰められてる。目を潤して頬も赤く染め、少しだけ息遣いも荒かった。

八幡「…………シルヴィ、嘘だよな？」

シルヴィア「ごめん八幡くん。キス…………したくなって来ちゃった／／／／」うるうる

おいー!? 今言っただけだよな!? キスはライブが終わってからにするって!

シルヴィア「ねえ八幡くん、今じゃダメかな? 私、今がいいよ／／／／」うるうる

八幡「い、いや…………だが…………」

シルヴィア「すぐに終わるから! 絶対! 満足したらすぐに終わるから!」うるうる

…………ライブまでは2時間…………微妙だ。この前は1時間半だったからな。

シルヴィア「…………」うるうる

…………もう、これしか無いよな。

八幡「…………シルヴィ、今から俺はお前にキスする。けど1つ言うぞ。俺は自己満足で終わるが、それでもいいか?」

シルヴィア「八幡くんからしてくれるの? 本当に?」うるうる

八幡「…………ああ。」

シルヴィア「…………勿論だよ。君からしてくれるなんて、これなに嬉しい事はないよ／／／」

……ヤバイ、俺もマジでキスしたくなってきた。本気でやるか。

八幡「じゃあやるからな？一応タイマーもセットしてあるから大丈夫だとは思うが。」

シルヴィア「うん……目一杯キスしていいからね／＼／＼／」

その後は獣と例えられてもいらいお互いにキスを求め合った。唇を交わした後に、次は舌を合わせ、離すと銀色の糸が出来ていた。

これは俺がまだ意識していた時なんだが、シルヴィと濃厚キスをしている際に、シルヴィの喉辺りがコクコク鳴っていたのは気のせいだと思いたい。

学園祭 クインヴェール編③

八幡 side

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピッ!!

ようやく鳴ったタイマー。俺が今待ちに待ち望んでいたものだ。1時間半前、俺とシルヴィは場の雰囲気とお互いの雰囲気もあつてか、キスをする事になった。啄ばむようなキスから普通のキス、この先は皆の想像に任せる事にしよう。

そして今だ。キスは終わったかに思えたが……

八幡「んん……くちゅ、んん……ちゅる／／／」

シルヴィア「んん……ちゅううう……コクツ、コクツ……ちゅつ／／／／／」レロレロ

どんどんエスカレートしていつてる気がする。しかも皆さん聞いた?『コクツ』って言ったよ?シルヴィの口から。主に喉からだけど。多分じゃないけど、確実に飲んでるよな。何がとは言わないからな?

八幡「……はあ……シルヴィ、そろそろライブの時間だ。タイ

マーも鳴ったぞ／／／」

シルヴィア「んん……ぷはあ……はあ……はあ……後でまたキスしてくれる?／／／／／」

八幡「……今みたいなキスでなければいいぞ。」

シルヴィア「分かった。じゃあ準備するね。」

……制限はつけたものの、どうしよう。嫌な訳じゃないが、またキスするのか。

――5分後――

シルヴィア「よしっ！これで完了！」

八幡「まあ準備するといつても、髪整えるのとメイクくらいだったから早かったな。」

シルヴィア「特にする事は無かったからね。簡単なメイクとか髪型を整えるくらいなら出来るよ。」

八幡「そういや、何歌うのかは決めてるのか？」

シルヴィア「『Break Beat Bark!』って曲だよ。知ってる？」

八幡「いや知らないな。シルヴィが歌う曲だ。良い曲なんだろう？」

シルヴィア「うん。八幡くんも気に入ると思うよ！」

なら今度調べて聴いてみるか。

シルヴィア「じゃあ八幡くん、そろそろ移動しよっか！あつ、八幡くんも舞台裏に入れるようにペトラさんに言っているから大丈夫だからね！」

八幡「俺だけ超優遇過ぎない？」

シルヴィア「だってクインヴェール最大のゲストだもん！」

“君の”じゃなくて？

――ステージ舞台裏――

生徒1「あつ、会長！待ってました………え!?【夢幻月影】!？」

シルヴィア「うん。聞いてるでしょ？彼が来たら通してもいいって。」

生徒1「た、確かに聞いてましたけど、まさか本当に来るなんて……」

八幡「ん？迷惑だったか？」

生徒1「い、いいいいえとんでもありません！むしろ大歓迎です！
転校してきても構いません！」

八幡「それは無理だ。ステラ・カルタ星武憲章に違反する上に、俺は男だ。」

生徒1「あっ!!そ、そうですよね。」

シルヴィア「八幡くん。一応言っておくけど、クインヴェールにも
八幡くんのファンって居るからね。それも半分以上。」

半分以上!?

シルヴィア「流石に様付けする人は限られてるけど、私のクラスで
もいるんだよ？八幡くんを様付けする人。」

八幡「マ、マジか……」

シルヴィア「しかも、会いたい会いたいって毎日言ってくるんだか
ら！本当なら会わせたくないんだけど、今日は特別だからね！」

……俺に八つ当たりしてないよな？

シルヴィア「それで、今はどうな状況？」

生徒1「は、はい！今ちようどルサルカが終わったところです！
20分後に会長の予定です。」

シルヴィア「ありがとう。じゃあ八幡くん、行こっか！」

八幡「ああ。」

生徒1「会長、頑張って下さーい！」

――控え室――

シルヴィア「ライブが終わった後に楽しみがあるのは良いんだけど、
クラスやファンの皆に合わせるのはちよつと気乗りしないなあ。」
八幡「そのファンってあれに登録してるのか？」

シルヴィア「してる子もいれば純粋なファンって子もいるよ。殆ど

の場合は戦いの方でファンが出来るものだけど、八幡くんの場合、会
見とライブでファンを作っちゃったんだよね。大胆だけど堂々とし
た告白、歌唱力はプロ顔負けの声、実力だって界龍の序列2位を獲得
する程の腕、顔だって凄くカッコいい。こんな女の子にとって理想的
ともいえる人を放って置く訳ないよ。」

八幡「言われて悪い気はしないが、俺って今までかなりやらかして
来たんだな。」

シルヴィア「むしろ自分から目立ちに行ってるよね。八幡くん半年
以上前はなんて言ってたっけ？確か平穩に過ごしたい……だっけ？」

八幡「……もう無理だな、出来るわけがない。」

シルヴィア「あっはは、そうだね♪」

そんな事もあったな……確かにシルヴィの言う通りだな。自分か
ら目立ちにいつてるな。

ガチャッ！

トゥーリア「おっすシルヴィア！応援に来たぜっ！」

ミルシェ「来たよー！」

マフレナ「お2人共、ノックを忘れてますぅ……」

パイヴィ「言っても無駄だと思う。」

モニカ「そうね。」

……なんかうるさそうなのが2人と大人しそうなのが1人、少し
だけ暗そうなのが1人と年齢に不釣り合いなのが1人、計5人が入っ
て来た。

シルヴィア「ライブご苦労様。見てなかったけど、歓声が聞こえて
たから良かったんだね。」

八幡「シルヴィ、この5人は？」

シルヴィア「ああ、紹介してなかったね。彼女たちはガールズロッ

クバンドチームの『ルサルカ』だよ。ついでに言うなら、今年の《獅鷲星武祭》の出場チームでもあるんだよ。」

ほう……

トウーリア「ちよつとあんた!!」

八幡「あ?俺?」

トウーリア「他に誰がいんのよ!!此処はクインヴェール女学園の控え室よ!何で男のあんたがいるのよ!」

八幡「……ペトラさんから話は通ってるんじゃないのか?」

シルヴィア「えーつとね?つまり彼女たちの大半は頭が少し弱いんだ。」

八幡「成る程、つまり脳筋が多いと?それとも純粹にバカ?」

トウーリア「あんた好き放題言ってくれるじゃない!?私の何処がバカだっていうのよ!」

いや、そういうところだと思うよ?

マフレナ「み、皆さん落ち着いてください!ペトラ理事長から今朝お話があつたでしょう!?!もし界龍の序列2位【夢幻月影】の比企谷八幡さんがいらしたら、通すようにと。」

モニカ「そんな話もしてたわね。という事は彼が【夢幻月影】なの?」

八幡「それ以外此処にはいられないと思うが?それ以前にシルヴィーと同室に居られるわけもないだろう。」

ミルシェ「そうだねー!君がああ【夢幻月影】かあ……よろしく!私はミルシェ!クインヴェールの序列3位で、担当はボーカルとギターだよ!」

モニカ「私はモニカ。序列13位でベースを担当してるわ。」

パイヴィ「パイヴィ……序列は9位でドラム担当。」

マフレナ「私はマフレナと言います!序列入りはしてません。キー

ボードを担当しています。よろしくお願いします。」

トゥーリア「……トゥーリア。序列20位でギター担当。」

何ともまあバラバラな性格だな。

八幡「俺は比企谷八幡だ。序列2位でシルヴィとのデュエットボーカル担当だ。」

モニカ「何よそれ？」

八幡「シルヴィアと歌えるのは、後にも先にも俺しかいないって事だよ。」

だってそうだろう？ペトラさんが誰もOKしないんだから。

シルヴィア「まあ、口が乱暴な子もいるけど、良い子たちだから仲良くしてあげてね。」

八幡「その機会があればな。それに今のところ仲良く出来そうなのはマフレナとパイヴィくらいだな。」

マフレナ「え？私……がですか？」

パイヴィ「どうして？」

八幡「マフレナはいつも苦労してんだろうなーって思ったら、なかなか。パイヴィは性格に親近感が持てる。」

シルヴィア「意外と単純な理由だね。」

別にいいだろ？遠くの人程身近な関係だったりするんだから。

今までになかった目線

八幡 side

ルサルカの紹介も終わり、時間もちょうど良くシルヴィの歌う10分前になった。クインヴェールは面積あんまり広くないから入れる人数は限られているだろうが、それでも2000人くらいは入れる。

シルヴィア「そろそろ時間だね。じゃあ行ってくるよ！あつそうそう、八幡くん。VIP席は1番奥の扉だから。中にペトラさんがいるからすぐに分かるよー！」

シルヴィはそれだけ俺に伝えるとピューっ之行ってしまった。

マフレナ「ですが驚きました。学園長からは聞いていましたが、本当に来るなんて思ってもなかったです。」

八幡「恋人のライブなんだ。見たいって思うのが自然じゃないのか？」

マフレナ「確かにそうですが、比企谷さんは界龍の方ですのでそういうのには興味ないと思ってたので。」

八幡「もしそうだったら、俺は去年11月のライブや今年10月のライブにも出てないぞ。」

マフレナ「……………そう、ですね。」

ミルシェ「でもさ、失礼だけどシルヴィアが何で君に惚れたのかよく分からないだよね。見た目は確かにカッコいいし歌のセンスも抜群、実力だって六花でトップクラス。この点ならガールドワースの【聖騎士】も同じくらいだと思うのに。」

モニカ「そうねえ。言っでは悪いけど、貴方からはオーラというものをあまり感じないわ。」

八幡「何だ？それは暗に俺が弱いと言いたいのか？」

モニカ「強いというオーラを感じないのよ。」

八幡「ンなの出すもんでもないだろ。」

自分から『自分、強いです！』みたいにアピールする奴なんてバカみたいだろ。

パイヴィ「でも、凄みを感じないのは確か。」

トゥーリア「本当は大した事ないんじゃないか？」

マフレナ「皆さん、失礼ですよう。確かに今は何も感じませんが、鳳凰星武祭は皆さんご覧になりましたでしょう？あれだけの動きが出来るんですから強いのは事実です！」

トゥーリア「でもさ……」

八幡「はあ……」

あんまりやりたくはないんだが仕方ない、納得させる為にはやるしかないか。

破ッ！

5人「ッ!!!？」

おーおー驚いてる。

ミルシェ「これって……君が？」

八幡「ああ。納得してくれねえみたいだったから見せた方が早いと思っただけ。」

パイヴィ「……凄い、シルヴィア以上。」

モニカ「何なのよこれ……」

トゥーリア「……さつきと全然違うじゃん。」

マフレナ「だから言ったじゃないですか！比企谷さんは強いんで

すっ！」

……さっきから信じてくれるのはマフレナだけだな。

八幡「分かってくれたなら構わない。別に出す意味なんてなかったけどな。」

そして俺は気を収めた。

モニカ「驚いたわね……流石、といったところかしら。」

ミルシェ「そうだねー！いやービックリしたよ！」

パイヴィ「凄かった。」

トウーリア「……ふん、まあ実力は実力は認めてあげるわ。」

約1名上から目線なのがいるが、まあいいか。

八幡「じゃあ俺はVIP席に行くから。じゃあな、ライブお疲れさん。」

――舞台裏・廊下――

そうだな。此処は女子校で照明とか天幕とかも生徒や教師が連携してやってるから、スタッフが居ないのは当たり前だよな。

それにしても、あたり一面女子しかないな。早くVIP席に行かなきゃな。

「すみません！界龍の比企谷八幡さんですよね!?握手して下さい！」

「あっ！私にもお願いします！」

「私にはサインを！」

「私にもお願いします！」

「明日の講習会、私行きますのでよろしくお願いします！」

「私も行く予定なので、よろしくお願いします！」

……あつという間に囲まれちゃった。しかもクインヴェールって皆揃って顔の偏差値高いんだよな。シルヴィはズバ抜けてるけど。

八幡「ああ、ありがとう。今少し急いであるから握手はいいがサインは無理だ。済まない。」

すると聞き分けが良いのか、色紙はすぐにしまつて『握手だけでも！』と切り替えてくれた。

なんだかんだ色々あつたが、ようやくVIP専用の部屋に着いた。中ではペトラさんがいるんだったか？

p i p i p i : : p i p i p i :

ペトラ『あら八幡くん、漸く来たのね。少し遅かったんじゃないかしら？』

八幡「此処のファンに少し。中に入っても大丈夫ですか？」

ペトラ『ええ、構わないわ。』

通信を終わらせて扉が開くと中にはいつも通りスーツとバイザー型のサングラスを着けた長身の女性がいた。

ペトラ「待っていたわ、八幡くん。もうすぐ始まるところよ。」

八幡「シルヴィは？」

ペトラ「まだ舞台裏よ。」

さて、シルヴィのライブをこうやって客としてみるのは初めてだからな。いつもはステージ側だったが、この目線を楽しむか。

学園ライブ！

シルヴィア side

学園でやるライブだから人数はあまり集まらないけど、それでも全力でやるのが私流。皆を満足させてあげたいからね。それに今日は……八幡くんが初めて私のライブを観てくれる日。そんな大切な日に失敗なんて出来ない。

生徒「シルヴィアさん、気合入ってますね！」

シルヴィア「え？そ、そう？」

生徒「私でも分かりますよ。いつもより顔が強張ってましたから。」

本当に!?それはちよつと予想外だったなあ。緊張してたのかな？

生徒「彼氏さんが観てるから、ですよね？界龍の序列2位でしたよね？」

シルヴィア「うん。」

生徒「私が言っても説得力ないかもしれませんが、その彼氏さんなら『良い曲だった。』って言ってくれると思いますよ。だって学生の中では間違いなくあの人がシルヴィアさんの曲を直に聞いているんですから。」

それもそうだ。私自身クインヴェールで歌う事はあっても、他の子たちの前とかではあまり歌わない。ううん、歌った事ないかな。

じゃあ私がライブとか関係無しで普通に歌うのを見てもらった人って八幡くん？

シルヴィア「……………そうだね。うん、ありがとう。なんか良い感じに緊張もほぐれたよ。」

生徒「それは良かったです！それにもうすぐ本番だったのでちょうど良かったです！」

よしっ！舞台裏まで行こつと！

――舞台裏――

シルヴィア「おお、満席だねえ。」

生徒「そんな事を呑気に言わないでくださいよ。まあシルヴィアさんからしてみれば当たり前なことかもしれませんが、私からしてみれば異常な光景なんですから。」

シルヴィア「あはは！それもそうだね。此処が埋まる事なんてペトラさんのお話以外ではあまり無いからね。」

生徒「やっぱり余裕ですね。こんな事なら私の言葉はいらなかったですかね？」

シルヴィア「ううん、そんな事ないよ。あれだけでも緊張は取れたし、リラックスも出来てる。正直助かったよ。」

そうでなかったら今頃は、ガチガチではないけど、緊張しながら歌ってただろうしね。

シルヴィア「さて、じゃあ行ってくるよ。皆が帰っちゃわない内にね。」

生徒「多分誰も帰らないと思いますよ？」

まあ1人は残ってるよね、確実に♪

シルヴィア side out

八幡 side

ペトラ「出て来たわね。」

八幡「ですね。」

シルヴィの登場により、会場は一気に盛り上がった。そんなシルヴィはゆつくりと歩きながら、真ん中の方へと向かっていた。

シルヴィア「皆々！今日は来てくれてありがとう！ライブの方は楽しんでもらえたかな？」

ワアアアア
!!!!

シルヴィア「ありがとう！そして僭越ながら、このライブの最後を担当させてもらう事になりました、シルヴィア・リユーネハイムです！」

シルヴィア「それでは早速歌います！君と私の純粋な理想！叫ぶのは願いと祈り！聴いてください！『Break Beat Bar k』！」

音楽が流れ出し、シルヴィも足を左右にテンポ良く揺らしていた。

シルヴィア「♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪」

八幡「この曲はペトラさんが選曲したんですか？」

ペトラ「いいえ、シルヴィアよ。どうして？」

八幡「いえ、特に意味はありません。」

ペトラ「貴方にしては深みのない質問をするのね。」

八幡「俺だって単純で中身の無い質問くらいはしますよ。」

むしろその方が多い。

シルヴィア「♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

歌詞からしてゲームなのか？色々ゲームっぽいワードが出てくるな。

八幡「面白い歌詞ですね。」

ペトラ「そうね。シルヴィアがこういうのが好きだとは思えないけど、チヨイスは悪くないわね。最近はアップな曲を歌ってなかったからかしら、シルヴィアのテンションが高く見えるわ。」

八幡「実際高いんでしょう。でなきや『Heart Beat』なんて歌詞がつく曲を選ぶはずがないですからね。」

俺も音楽関係を少しだけ勉強したから分かった事なんだが、『Heart Beat』の意味は心臓の鼓動を意味する。意味はもう1つあるが、それは難し過ぎて分からん。アルルカントなら分かるだろう。

シルヴィア「♪♪♪♪」

シルヴィア「♪♪♪♪」

ペトラ「……良い感じね。」

八幡「ええ、ノってますね。なんか歌の感じもシルヴィに合ってるような気がしますし。」

—————1分後—————

シルヴィア「♪♪♪♪」

シルヴィは無事に歌い切り、曲のBGMが終わるまでステップを刻んでいた。

ワアアアア
!!!!

シルヴィア「ふう〜歌い切ったあ〜！皆どうだったかな？楽しんでもらえたかな？だとしたら最高に良いライブになったと思います！クインヴェールのライブはこれで終わりだけど、学園祭は最終日の明日までちゃんとやるから、是非出店の方も回ってね！今日は本当にありがとう！」

パチパチパチパチツ！！

ペトラ「……成功みたいね。観客の皆も満足そうな顔をしているわ。」

八幡「流石は元トップアイドルですね。良い目をしていますね。」

ペトラ「これくらい出来なきやプロなんて出来ないもの。」

八幡「違いありませんね。俺はなるつもりないので、このままでも大丈夫ですよ？」

ペトラ「本来なら身につけて欲しいところだけど……そうね、貴方は私たちにお手伝いしているようなものだからこれ以上求めるのは酷ね。」

八幡「そういう意味で言った訳じゃないので大丈夫ですよ。」

ペトラ「そう？じゃあ安心だね。」

さて、俺もシルヴィのところに行かなくちやな。

学園祭 クインヴェール編④

シルヴィア side

あゝ終わった！本日のライブ終了！クインヴェールのメインイベント終了！お疲れ様でした！でも、売店とかは明日もやってるからね！

今更だけど、1人で何を心の中でブツブツ言ってるんだろうね？

コンコンツ

シルヴィア 「ん？はい！」

八幡 「よう、シルヴィ。」

シルヴィア 「八幡くん！」

真っ先に来てくれたのは八幡くんだった。嬉しいなあ。

シルヴィア 「どうだった？私のライブ。」

八幡 「歌う側と見る側がこんなに違うとは思わなかった。今まで歌う方だったから、シルヴィが輝いてみえた。」

シルヴィア 「そんな大袈裟だよ／＼でもありがとう♪」ニコツ

八幡くんはずっと穏やかな顔をしながら私の方を見ている。

シルヴィア 「えいつ！」ダキッ！

八幡 「おおっ……どうしたんだよ急に？ビックリしただろ？」

シルヴィア 「えへへ、急にしたくなっちゃって。ダメかな？」

八幡 「構わねえよ。ただ、クインヴェールの店も回りたいから早めに頼むな。」

シルヴィア 「はい♪」

――10分後――

シルヴィア「もういいよ、ありがとう。」

八幡「結構長い事やってたな。」

シルヴィア「それだけ八幡くんの抱き締め方が上手という事だよ。」

八幡「抱き締めるのに上手いも下手もないだろ。」

シルヴィア「いいじゃん別に！八幡くんはそういうスキルが高いんだから！」

八幡「いらんスキルだな。」

シルヴィア「ほくら！早くしないと時間になっちゃうよ！」

八幡「これ絶対俺が言う台詞だよな？何で俺が言われてるんだ？」

だって頭ナデナデしてくれなかったんだもん！

――クインヴェール・中庭――

八幡くんと会ってから20分、私たちはクインヴェールの中庭に来ている。クインヴェールは教室内でお店をやることもあるけど、中庭でやるのが主流になってきてるんだ。

私が外でやっても良いんじゃないかって話したら、他の子たちも真似し始めて今に至る。そしてクラス以外でも、個人やグループで活動している子たちは自分たちを売り出す為にグッズを作って売っているたりもする。

私が人気じゃない頃もあんな事してたなあ。ただ、教室内だったから売れ行きは全然だったけどね。それでも序列を上げていって、ライブでも良い結果を残せたからこそ、今の立場や人気があるんだよね。うん、改めて周りの人たちには感謝だね。

シルヴィア「さて、どうしようか？」

八幡「出店を見てみたいとは思っていたが、本当に女ばかりだな。」

男なんて少ししかいねえな。」

シルヴィア「そりやあね。さつきはライブがあつたから集まつただけで、他は特に何もって感じだからね。」

八幡「薄情というかシビアだな。どの業界でも大抵そうなんだけだよ。」

シルヴィア「仕方ないよ。何処の社会も実力は伴ってくるからね。」

食うか食われるか、アイドルや歌手はそんな世界でもあるからね。今の私は上の存在がいらないから食われる方だけど、まだ私に噛み付いてくる子はいない。私が引退するまでに出てくるかな？

八幡「まあ、気になったものがあつたら見ていくつて事にするか。」

シルヴィア「うん、分かった。」

「あつ！シルヴィアさん！」

「あら、本当ですね。」

前の方から、私の後輩の子たちがやって来た。

シルヴィア「ああ、美奈兎ちゃんに柚陽ちゃん。こんにちは。」

柚陽「こんにちはシルヴィアさん。そちらの男性は何方ですか？」

美奈兎「見かけない顔ですね？」

シルヴィア「あれ？知らないかな？結構有名だよ？私たちの業界でも。まあ2人はアイドルじゃないから分からないか。」

シルヴィア「紹介するね。此方は界龍第七学院の比企谷八幡くんだよ。」

八幡「比企谷八幡だ。まあ宜しくな。」

柚陽「つ!!……これは驚きました。まさかあの『夢幻月影』が来校していただなんて……そういえばシルヴィアさんの恋人でもありましたね。私は今年の春にこの学園に入る事になりました、連城寺柚陽^{れんじょうじゆうずひ}

と申します。界龍の序列2位にお会い出来て光栄です。」
美奈兎「これは凄い人が来てるね!! あつ、私は若宮^{わかみや}美奈兎^{みなと}つています! クインヴェール女学園高等部1年です!」

うんうん、自己紹介も出来たみたいだね。

八幡「若宮の方は分かるが、何でシルヴィは連城寺の方も知ってるんだ? まだ入学前だろ?」

シルヴィア「私も生徒会長だからペトラさんから新入生の書類を貰ったりするんだ。そしたら驚いちゃったよ。柚陽ちゃん綾斗くんの使ってる剣術と同じ流派で弓術の使い手なんだって。」

八幡「確か《天霧辰明流》だったか?」

柚陽「はい。私は天霧辰明流の分家道場で弓術の手ほどきを受けて、弓術の奥伝を修得しました。次は極意を習得する為に六花へ来ました。」

八幡「ほう……奥伝を修得してるのか。なら弓の腕前は相当なんだろうな。それに【叢雲】の分家筋なんだ、武術の方も心得があるんだろう?」

柚陽「いえ、私は体術などはからつきしで。元々体力があまり無いので。」

私も驚いちゃった。弓があれだけ出来るのに、まさかの運動音痴と
はね。

柚陽「明日の講習会には参加する予定ですので、その時はよろしく
お願いします。」

八幡「俺の武術でよければな。【叢雲】の道場の体術は分らんが、
役に立つとは思うぞ。」

その後、私たちは話しながら学園の中庭を見て回った。その際に八幡くんはクインヴェールの生徒たちから物凄い視線を感じてたみた

い。理由は此処が男子禁制なのもあるけど、あれだけの事をしたら、女としては無視なんてできないよね／／／

2日目の終了

八幡 side

クインヴェールの中の出店を見て回り、学園を出たところでちょうど2日目終了の放送が六花中に響き渡った。

俺とシルヴィはそのまま界龍の方に帰っている途中だ。またあいつらがシルヴィで遊ばなきやいいんだがな。

シルヴィア「今日も楽しかったね♪」

八幡「そうだな。アルルカントは俺たちが行ってもする事ないと思ってたが、内装だけでも楽しめたな。」

シルヴィア「クインヴェールは？」

八幡「色んな出店があつて面白かったぞ。流石は女子だ、発想力や想像力は豊かだな。」

シルヴィア「男の子の方が豊かそうに思えるけど？」

八幡「男が豊かなのは妄想力と厨二力だ。」

シルヴィア「あはは♪もう、そんな事言っちゃダメだよ？」

冗談だと分かってきているから大丈夫だな。まあ男が全員こんな奴な訳ないからな。

――界龍――

門番1、2「お帰りなさいませっ！尊師！奥方様！」

ついにネタ切れか。

八幡「おう。」

シルヴィア「なんかもう吹っ切れちゃったよ。」

八幡「その方が楽でいいだろ。」

いつまでもツツコミ入れてたんじゃあ疲れるしな。

八幡「シルヴィ、昨日と同じ風にまた今日の結果を聞きにいつてもいいか？」

シルヴィア「うん、いいよ。」

八幡「シルヴィアは自分の学園の収入とかはいいのか？」

シルヴィア「私の仕事は八幡くんと一緒にいる事だもん♪」

……………さいで。

八幡「冬香さん、お疲れ様です。」

冬香「あら、八幡さん、お疲れ様です。今日の結果ですか？」

八幡「はい。済んでいれば知りたいので。」

冬香「本日も大盛況でした。暁彗や陽乃様が講師をする事になったので、昨日よりもお客様は増えていましたね。当初の見込みは60000円でしたが、2日目の結果は213500円でした。お客様も昨日より70人程増えておりました。」

八幡「冬香さん、明日の講習会なんですけど、俺無しでいいですか？良いですよね？」

冬・シル「ダメです。(ダメだよ。)」

……………やっぱそうだよな。俺がサボれたら、皆サボれるもんな。

冬香「明日は1番人が来るといっても過言ではない日なのですよ？そんな日にメインの方が何処かへ消えました、なんて事になったらおごですよ。」

シルヴィア「そうだよ！八幡くんは界龍の顔なんだからそんなこと言っちゃダメ！明日がメインなんだから！それに私も参加するんだから居なくなっちゃ困るよ！」

分かってたよ、こういう風に返される事くらい。冗談で言ってるって事は分かってるよね？

八幡「分かつてるよ。ていうか明日は武術も星仙術も俺が仕切る日だからな。居なくなったらヤバイ事になる。」

冬香「ふふふ、流石八幡さんです。」

シルヴィア「八幡尊師は色んな事を考えているんだね！」

だから尊師は余計だ。

八幡「さて、俺も明日の準備するか。何人来るか分からんから木人椿は俺の分だけにするか。今日の人数聞いただけでも数が足りないのはもう分かったしな。」

木人椿の数はこの学院の至る所に置いてあるのを集めても1000個だ。足りるわけがない。

明日の講習会……俺しか木人椿の演武出来ねえじゃん。いや、演武なんて簡単に出来るものじゃないけどさ。

「「尊師！我々にお任せをっ！」」

八幡「少しは俺にも仕事させろお!!」

明日の事で

八幡 side

手伝いも何もできないまま、俺はシルヴィを連れて自分の寮部屋へと戻った。だってよ、皆して俺の運んでる物取ろうとするんだぞ？最初は楽で良いかもしれんが、時が経つと自分でも何かしたいって思えてくるもんだ。

シルヴィア「元気だしなよ。皆八幡くんに無理をさせたくないんだよ。」

八幡「なんかよ……俺がやると時間がかかり過ぎるから、俺たち私たちに任せろ的な風に思えてきた。」

シルヴィア「考え過ぎだよ。八幡くんはこの学院の顔であって代表なんだから。威厳を持ってって事なんじゃない？」

八幡「なら聞くが、シルヴィは自分の学園の生徒たちからあんな風にされた事あるか？」

シルヴィア「……わ、私はさ、ほら！アイドルとはいっても1人だけだし、手伝われるっていつでも生徒会だから……」

八幡「ねえんじやねえかよ！多分というか絶対だと思うが、六学園合わせて序列高位者でこんな扱い受けてるの俺だけだぞ!」

シルヴィア「ま、まあまあ。皆善かれと思ってやってるんだからさ。」

俺は命令してる訳じゃない。むしろ自分で率先して準備をやるうと思ってる。でも、仕事を奪われるこの気持ちは何!?

八幡「……はあ、考えても仕方ねえや。シルヴィ、晩飯にするか。」
シルヴィア「はい♪今日は何？」

八幡「ハンバーガーなんてどうだ？丁度良いパンがある。」

シルヴィア「具は？」

八幡「普通にレタスと肉とカットした玉ねぎ入れてケチャップが入ってるのと、チーズや照り焼きも出来るが？」

シルヴィア「大きさは？」

八幡「ハンバーガーシヨップに売ってあるのと同じくらいだ。」

シルヴィア「じゃあチーズと照り焼きで！」

バァン!!

星露「妾も歌姫殿と同じものが良いぞ、八幡！」

セシリー「あつたしも！」

陽乃「八幡くん、私も手伝うから作ってくれないかな？」

こいつら……いつからそこにいたんだ？

八幡「……まあ最近作ってなかったし部屋に不法侵入する事も無かったから作ってあげますよ。それと陽乃さん、手伝いはシルヴィがいるので大丈夫です。」

陽乃「もうっ！そうやって仲の良い夫婦を見せつける気なんですよ！」

八幡「別にそれでもいいですけど？」

陽乃「わあ……もう照れる事すらしないんだね。お姉さんちよつと悲しい。」

この人ホント何言ってるんだ？シルヴィとこれだけ長くいたら嫌でも（実際には全く嫌じゃないが）耐性はつく。

八幡「それで？陽乃さんは何がいいんですか？」

陽乃「うーん……じゃあ皆と同じのでもいいよ。違うのを頼んでもね。」

八幡「んじゃあ全員チーズと照り焼きだな。合わせて5人分か……

シルヴィ、レタスを洗ってからこのパンに合うくらいに千切つてくれ。後、冷蔵庫の中にスライスチーズと玉ねぎ刻んだやつがあるから出しておいてくれ。」

シルヴィア「はい！」

セシリー「八幡って準備良過ぎない？」

星露「そうじゃのう。妾は料理せんが、あれは仕込んでおいたとしか言えないのう。」

八幡「普通じゃないか？」

陽乃「私も料理はするけど、八幡くんは凄いよ。事前に玉ねぎ刻んでおくなんて。もしかして考えてたの？」

八幡「そんな訳ないじゃないですか。色々考えてましたよ。ハンバーグとかピーマンの肉詰めとかオニオンスープとかって色々あるでしょう？」

シルヴィア「うん、八幡くんがハイスペックだって事がよく分かったよ！」

………褒められてるのか？これは？

———30分後———

八幡「出来たぞー。おお、星露がバテてなかった。」

星露「失礼じゃのう。」

八幡「この部屋に来て大半待ちきれなくてテーブルでダウンしてた奴は？」

星露「……………妾じゃ。」

よし、正直者にはこのハンバーガーを差し上げよう。

セシリー「でもすごいよねー。八幡が作る料理って端末で見たのよりも美味しそうになってるんだからさー。」

シルヴィア「あつ、それは私も分かるな。作り方は同じなのに何でこんなにも差があるのかなあって思う時もあるんだよね。」

セシリー「八幡、何かあるのー？」

八幡「何もないぞ？普通に作ってるだけだ。それ以外に何かがある？」

陽乃「まあ、八幡くんの答えはこうだって分かってたけどねぇ。」

それ以外本当に何かあるんです？愛ですか？シルヴィには愛込めてるけどさ。

――再び30分後――

陽乃「ふうーご馳走様八幡くん、美味しかったよ。」

星露「馳走になったのじゃ。」

セシリー「相変わらずの美味しさだったよー！」

シルヴィア「流石だね八幡くん。」

八幡「これくらいの料理ならいつでも作ってやるよ。シルヴィ限定で。」

星露「妾たちには作ってくれんのか!？」

八幡「アホ。偶にならいいが恋人の時間潰してまで作ろうとは思わん。」

これ絶対に万国共通だよな。

八幡「それよか、何しに来たんだ？まさかとは思うがタダ飯食いに来ただけじゃないだろうな？」

陽乃「まさか。ちゃんと話もあるよ。明日について聞きたかったんだ。」

八幡「明日？武術と星仙術の講習やって終わりですよ。」

星露「そうじゃろうな。これは妾と統合企業財体で決めた事じやが、コロシウムは中止する事にしたのじや。理由は人が集まらんと

講習会の方に客が回ってしまったからじゃ。」

八幡「……そうだったのか。それについては計算外だった。すまない。」

星露「よい。むしろそれ以上の成果を出してくれたから感謝している方じゃ。じゃがその事によってお主の危険が増したという事じゃ。」

八幡「……どういう事だ？」

陽乃「つまり、コロシウムがなくなったから君と戦いたい人が闇討ちをかけてくるかもって事。居ないとも言切れないでしょ？」

確かに……狙われる要素は今のところ5つある。3つ纏めて言う
と星導館の雪ノ下と由比ヶ浜と比企谷。1つはガラードワースの葉
山。最後に俺とシルヴィの交際反対派の奴ら。最後のは星脈世代
だったら決闘だな。

八幡「大体の奴らは想像つきますけど、そんなに恐ろしいですかね
？まあ警戒はしておきますけど。」

陽乃「君なら分かってるはずだよ？人の悪いところに敏感な君なら
……」

……まあ、そう考えている奴がいたらすぐに分かるけどな。

星露「それと八幡。お主が講習会を開いてる時じゃが、界龍の生徒
は中に入る事が出来ん。お主の講習会じゃ、一番人が集まるじゃろ
う。じゃからお主の身はお主自身で守るのじゃ。」

八幡「そのくらい分かってる。」

シルヴィア「八幡くんなら大丈夫だよ星露。それに私もいるから。
八幡くんの目の前で講習会を受けるしね。」

セシリー「おおー！最強のボディガードじゃんー！」

八幡「……まあそれはいい。それなら俺に提案がある。暁彗と虎峰
はなるべく俺の近くに配置出来るか？どうせ警備をするつもりなん

だろ？」

陽乃「よく分かったね、流石！でもどうして？」

八幡「あの2人はスピードに目が慣れてる。だから何処から攻撃したかあの2人に対極の位置になってもらって監視してもらうんだよ。」

八幡「出来れば星露も加わって欲しいが、大人しくしていただけるか不安だからやめた。」

星露「何じやと!?お主そんな理由で妾を除け者にしたのかえ!？」

八幡「じゃあ出来るのか？俺が講習会をやっている間、大人しく監視する事って。お前も知ってるだろ？朝9時〜11時までと、昼14時〜16時の時間にやるの。この2時間ずっと監視してられるのか？」

星露「うつ……無理じゃ。」

八幡「素直でよろしい。という訳だ。監視にはこの2人と木派のスピード特化の序列入りしているのを使ってくれ。1人は……宋が良いい。」

星露「分かったのじゃ。」

陽乃「……なんか逆に会議の打ち合わせをされに來たような感じになったね。」

セシリー「うん。八幡が私たちに指示しているような感じだったよねー。」

八幡「不安な部分を指摘しただけだ。それだけだろ？」

シルヴィア「八幡くん、だからだと思うよ。八幡くんって考えるスピード早過ぎるからさ。」

俺はあんまり自覚ないんだが、そんなに早いかね？

その後も会議は続いたが、特に気にするところもなかったから3人は帰り、俺たちも風呂に入って、上がった後に牛乳を飲んで、髪などを乾かしてからベットへと入って眠りについた。

準備

八幡 side

.....

.....

.....

うん、どうしよう。

シルヴィア「んん♪」

現在朝の6時半。起きたのは6時だが、起きられないのは俺の正面で未だ睡眠中の超絶美少女が理由だった。気持ち良さそうな寝息を立てていて、俺の身体に抱き着いている。昨日寝た時は離れていたはずなのに、どうやったらこんな器用に背中にもで手を回せるんだ？

そして、一向に起きる気配がない。

八幡「……そういや前はくすぐって起こしたっけな。その前は……いや、朝から精神を削るのはやめておこう。」

だってこれ言ったら必ず起きるんだもん！さっきまで寝ていたとは思えない程目を爛々と輝かせながら近づいてくるもんだから、正直少しだけ参っている。おはようの○○にしては激し過ぎるから却下。

八幡「だが、どうしたもんかなあ……」

シルヴィア「♪」

撫でたら撫でたで眠りが深くなるから無理。離れようにも離してくれない。大声を上げたら、他の奴らが来るかもしれない。引つpeg そうにもまたくつついてくる。これどうにもならないんじゃない？

大人しく待つてみるか……

――AM7:00――

シルヴィア「んんう……」

……起きないなあ。普段はこんなに寝ないって言ってたのに何でこんなに寝てるんだ？

※君と一緒に寝てたからです。

だがそろそろ起きてくれないとな。仕方がない、少し強引だが起こすか。

八幡「シルヴィ、もう7時だ。起きてくれ。」ユサユサ

シルヴィア「ん？んん？」

八幡「もう朝だ。おはよ。」

シルヴィア「ふあゝおふあよ……んん……んはあつ！」

まだ半分寝惚けてるっぽいな。冷水でもかければ目覚めるかもな。やらないけど。

八幡「起きたなら俺を解放してくれないか？着替えや朝飯の用意と出来ないから。」

シルヴィア「はあゝい。」

八幡「それと、シルヴィは先ず顔を洗ってくるように。」

シルヴィア「はぁい。」

本当に分かってるのか？

――20分後――

シルヴィも大分日本の食の味に慣れてきたから色んなものが出せるな。今日はスタンダードに白米、味噌汁、ほうれん草のお浸し、鮭の塩焼き、最後に卵焼きだ。

シルヴィア「お待たせゝ八幡くん。ゴメンね迷惑かけちゃったみたいで。」

八幡「いや、別に気にしてない。シルヴィの寝顔も堪能出来たからな。」

シルヴィア「私の寝顔は堪能する為にあるんじゃないんだからね！」

八幡「悪かったよ。けどいいだろう？」

シルヴィア「八幡くんだから許す！」

八幡「ありがたき幸せー。」

シルヴィア「ぷっ！ふふふ……」

俺たちが食卓のテーブルで座りながら漫才？をやり、俺が悪ふざけで乗ってみたらシルヴィが笑った。よし、勝った。

八幡「そんなに面白かったか？」

シルヴィア「うん！」

八幡「それは何よりだ。んじゃあ食べるか。」

シルヴィア「そうだね。じゃあ八幡くん、お願いします！」

八幡「おう、せーの……」

2人「いただきます。」

――30分後――

2人「ご馳走様でした。」

シルヴィア「今日も美味しかったよ。でも本当にどうやったらそんなに美味しく作れるの？あつ、次のお皿ちょうだい。」

八幡「ほい。俺は別にこれといって何かしている訳じゃないんだが、強いて言うなら『美味い』って言うてくれるような料理を作るようにしてるな。その皿は右の真ん中な。」

シルヴィア「意識高いねー。そんな考え方してる人あんまりいないんじゃないかな？私もそんな考え方はしてないから。お茶碗は？」

八幡「下の引き出し。まあこんな考え方する奴は居ないだろうな。でも良い考え方だろ？よし、ラストだ。」

シルヴィア「そうだね。でもそういう考え方が出来るから美味しくなるのかもね……よし、私の方も終わったよ！」

おお、同時か……何とも息ピッタリな。

八幡「どうする？時間までまだ1時間くらいあるが……」

シルヴィア「あつ！じゃあさ八幡くんの着てた漢服着てもいいかな？」

八幡「別に構わないが……シルヴィが着たらブカブカにならないかな？」

シルヴィア「別にいいもーん！」

八幡「まあ止めはしないからいいが。んーと……ああ、あつた。これのことだろ？」

俺はシルヴィに此処に入学した頃に着てた黒の漢服を見せた。こうして見ると本当に変な制服だな。片方普通の裾で片方直裾って本当に変だ。

シルヴィア「そうそれ！中華服って着た事なかったから着てみた

かつたんだ〜！」

八幡「まあ着てみればいい。因みにアドバイスだ。着るときは下の方から履いた方が着やすいからな。」

シルヴィア「はい♪」

――10分後――

シルヴィア「じゃーん！どう？」

八幡「おお着れたのか。だがやっぱり少し大きいか。」

シルヴィア「そこは仕方ないよ。それで、どう？」

八幡「色合いが合っていないからか微妙だな。明るい色だったら似合ってると思う。」

シルヴィア「じゃあ今日は界龍の制服借りちやおうかな？どう思う？」

八幡「借りれる借りれないは別として、どっちの方を着るつもりだ？」

シルヴィア「やっぱりドレスの方かな。」

八幡「男の目線は確実にシルヴィに向くだろうな。容易にそうなりそうだ。」

陽乃さんはドレスじゃなくて服の方だからまだ良かった。陽乃さんがドレスなんて着てみる、俺や曉彗以外の男はアウトだろうな。

借りれない事は分かっているが、シルヴィにはチャイナドレスを着せない事を心の中で1人そう誓った。

※講習会直前

八幡 side

学園祭最終日開催まであと30分。まだ30分ある。それなのに、此処からでも分かるくらい外は騒がしかった。俺の居る場所？八天門場だ。今日俺が講習をやる場所にいる。

因みにシルヴィは最前席にいる。もう予約済みだ。(予約制じゃないけど。)

シルヴィア「外凄いな。」

八幡「ああ、いったい何人いるんだ？昨日来たのが武術が242人で星仙術が185人。1日目の武術が194人で星仙術が158人。1日が352人で2日目が472人。初等部の奴らからは取ってないにしても、800から900人は来てるんだな。」

シルヴィア「500人はきつと超えるよ。この会場だけじゃ足りないよ、絶対。」

八幡「そうだな……まあ俺が分身を作れば各道場で教える事も出来るからその辺りは問題ない。ただ、全員を教えられるかどうかんだよな。」

幾ら界龍が六学園で一番の規模を持っていたても、限度がある。500人なら何とかなるが、900人から1000人は無理だ。道場の数が足りない。

シルヴィア「道場以外は使えないの？例えば教室とか、お庭とか……」

八幡「星露にも聞いた。使えるだけ使っていいそうだ。持っていないのは俺の星辰力だけだな。」

シルヴィア「分身ってそんなに使うの？」

八幡「そうでもないが、2時間ぶつ通しで維持するとすると、流石に疲れる。」

シルヴィア「そっかあ……」

八幡「だから一箇所になるべく多くの客を集めたい。分身を分散させたら俺が先にバテるからな。」

シルヴィア「そうだよ。1人に使う星辰力だつてバカにならないもんね。八幡くんは星辰力多いけど、それでも2時間も使うとなるとどのくらいならいけそう？」

八幡「5〜6人だな。それ以上はキツイ。」

真ん中に俺本体、東西南北に4人、後は庭にある模擬戦場に1人、娯楽施設の武芸館に1人、これで6人だな。

八幡「まあやる順番はもう頭の中に入ってるから問題はない。数えなくてもキリないから考えるのはもうヤメだ。シルヴィは此処にするのか？」

シルヴィア「八幡くんと同じ所♪本人に教わった方が良いじゃない！」

八幡「まあ、そうだな。」

八幡「……少し様子見に行かないか？受付のところからでもいいから。」

シルヴィア「そうだね。どのくらいいるのかも確認したい。」

八幡「シルヴィが確認する意味あるのか？」

シルヴィア「じゃあ八幡くんは講習会の時に、私の隣にむき苦しい人が来ても良いんだ？」

八幡「……前列は女性または背の低い奴に限定する。」

シルヴィア「ふふふ♪」

良い笑顔しやがって……

――界龍校内・受付――

八幡「冬香さん。」

冬香「あら八幡さん、おはようございます。どうかしました？」

八幡「少し様子を見に来ました。どうですか？カメラで見た様子では？」

冬香「昨日の比ではありませんね。行列が此処まで伸びているのは初めてです。各学園の序列上位者も参列していました。」

八幡「数的にはどうですか？」

冬香「恐らく700人は居るか。」

シルヴィア「うわあ……凄いね。」

もう凄いねのレベルじゃない。

冬香「どうしますか？八幡さんさえよければ数の方を減らしてもいいですよ？武術を受けたい方は今、その代わり星仙術は受けられない形にすればバランスは取れると思いますよ？逆もありですが。」

八幡「そうですね。その方向で行きますか。俺もこのモニター越しで見えますけど、この数を分身ありでも教えられる自信はありません。」

冬香「では、定員は500名までとしますね。お子様は入れなくても大丈夫ですか？」

八幡「はい、2日間と同じで大丈夫です。」

冬香「分かりました。では尊師、準備の方をお願いします。」

八幡「そんな真剣な顔で言わないでください。」

冬香「ふふっ、失礼。」

さて、ついに俺の番か。

いっちょ張り切りますか！

開門！

冬香 side

学園祭開始の合図が六花中に響き渡り、お客様方が少しざわつき始めましたね。今開けても問題はありますが、昨日はそれで巻き込みがありましたからね。それに今日は八幡さんの講習会ですので、昨日よりも激しくなるでしょう。

冬香「皆さん、受付は6人で回します。もう開催する場所の項目は公開してあるので、その付近で受付に回ってください。青竜、白虎、朱雀、玄武の入り口に4人、外の模擬戦場に1人、娯楽施設の入り口に1人お願いします。私はこのまま八天門場の受付をします。くれぐれも記入ミスのないようにお願いします。そして、四神の間の定員が各60、模擬戦場が80、娯楽施設が60、そして私の受け持つ八天門場は120とします。定員になりましたら知らせて下さい。」

「「「はっ！」「」」」

冬香「頼みましたよ。では配置につき次第、門を開きます。では……散っ！」

流石は木派の方々ですね。言った瞬間から各持ち場に向かって飛んで行きました。

『赤は着きました！』

『白も同じく！』

『青も着きました！』

『黒も到着しました！』

『外も今着きました！』

『最後、娯も着きました！』

冬香『分かりました。それでは皆さん、よろしくお願いします。』

冬香「開門、お願いします!」

門番「はい!」

さて、ここから大変ですね。八幡さん、暇がありましたら、またケーキを作ってくださいね?

門番「では、門を開きます!昨日は後列のお客様による巻き込み事故がありました。前の方もそうですが、後ろの方も押さないようにお願いします!」

冬香 side out

—————

界龍はあつという間に人で溢れていた。界龍の序列2位による講習会が行われるのだ、当然だろう。

「ねえ、比企谷先輩何処にいるかな!」

「6つもあるからね!何処だろう?」

「ああ、やつと来たよこの日が!」

「何処の道場行く?」

「やっぱ青竜だろ!」

「マジ?俺は白虎!」

「なら俺は朱雀だな!」

「おい、じゃあ俺は玄武じゃねえかよ!まあ別いいけどよ!」

4人「wwww」

案内人「比企谷尊師の講習会を受ける方はこちらへどうぞ!また、非星脈世代の方は模擬戦場と娯楽施設で受付をしていますので、非星脈世代の方は間違えて他の道場に受付しないように気をつけてくだ

さい！」

――1時間後――

『報告します！青、赤、黒、白の4つ全て定員になりました！』

『外も同じく満員です！』

『娯はまだ定員にはなっていませんが、間も無く定員になる勢いの人です！』

『了解！青、赤、黒、白、外は人を入れても良し！間取りを考えて並ばせるように！娯は定員になり次第、門を開けて並ばせるように！』

『『『『はっ！』『『『』』』』』

（冬香殿にご報告をしたところだが、まだ列が出来ている。報告は八天門場の受付が終わったらいいな。）

冬香「お次の方どう……おや、これは意外お方が来ましたね。」

「エ、【孤毒の魔女】！？貴様何をしに「お待ち下さい。」ふ、冬香殿？」
オーフェリア「……………八幡の講習会を受けたいのだけど、いいかしら？」

冬香「不用意に毒の瘴気を撒き散らさないのであれば構いません。」

参加料として500円程頂きますが、よろしいですか？」

オーフェリア「……………八幡のやる講習会でそんな事しないわ。どうぞ。」

冬香「（なぜ名前呼びなのでしょう？八幡さんとお知り合いなのでしょう？）では、前の方にお進み下さい。前列は押さないようにお願いします。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

オーフェリアは受付を済ませると、八天門場の方へと歩いて行った。

「……………驚きましたね。まさかレヴオルフの【孤毒の魔女】までもが尊師の講習会に参加するなんて。」

冬香「ええ。一応警戒対象に入れておいてください。」

「はっ！」

冬香「すみません、大変お待たせ致しました。お次の方、どうぞ。」

—————10分後—————

冬香『報告します。八の方も定員になりました。娯の方はどうですか？』

『こちら娯。すでに定員になっていましたので、お客様を並ばせていました。』

冬香『分かりました。それではこちらもお客様を並ばせにかかります。準備が出来ましたらまた連絡します。』

『承知しました。』

冬香「後列の皆様。大変申し訳ございませんが、比企谷八幡尊師の武術講習会は定員になりましたので、ここで締め切らせてもらいます！尚、今講習会に参加出来なかった方は午後にある星仙術の方に参加

出来ますので、そちらの方をよろしく願います！」

参加しようと思っていた人々は落胆の声を上げていたが、冬香のフォローによりまた元気を取り戻した。

冬香「では、武術講習会に参加する皆様。只今から開門致します。先程も申し上げましたが、後列の方は前列の方を押さないよう、お願い申し上げます。開門！」

「はっ!!」

そして冬香は思っていた。

（何故【孤毒の魔女】が先頭になっていたのか気になりますが、恐らく彼女に恐れをなして道を開けたのでしょうか。）

そして門が開かれ、オーフェリアから順番に前の方へと詰めて行った。

そして入った人たちは驚いていた。それもそのはず、中にはシルヴィア・リユーネハイムが最前列の真ん中に位置していたのだから。

シルヴィア（ふふふつ、驚いてる驚いてる。まさかオーフェリアさんも来るなんてね。ビックリだけど納得は出来るね。）

オーフェリア（……………【戦律の魔女】は当然ね。それよりも八幡は何処かしら？まだ此処にはいないのかしら？早く会いたいわ。）

柚陽（シルヴィアさんは当たり前ですよ。それにしても比企谷さんの講習会、楽しみです。体力の余らない私でも使えるといいのですが…………）

綾斗（比企谷さんの武術は鳳凰星武祭でも見てるけど、本当に洗練された動きをしている。もしかしたら天霧辰明流に取り入れられるかもしれないね。）

綺凜（綾斗先輩について来て良かったです。刀藤流に格闘術はあり

ませんが、比企谷さんは武術の歩法を剣術に併合している様でしたし、参加しても無駄にはなりませんよね。）

――青竜の間――

アーネスト（コロッセオが中止になってしまったのは残念だけど、折角の機会だから界龍の強さの根源を知るのも良いと思ってたけど、予想以上の人だね。）

美奈兔（凄い人だね〜！これが最近噂されている夢幻月影の人気かあ……流石シルヴィアさんの恋人だけはあるね〜！）

――朱雀の間――

イレ―ネ（武術には興味ねえけど、^{グラヴィシ―ズ}覇潰の血鎌がなくなった以上、それ以外でプリシラを守んなきゃならねえからな。利用させてもらうぜ。）

プリシラ（お姉ちゃんに守ってばかりじゃダメだから、自分で自分を守るくらいには成長しなきゃ！）

――白虎の間――

戸塚（楽しみだなあ。八幡は普段どんな練習をしているんだろう？でも、一番は体験する事だよね！）

――模擬戦場――

戸部（星脈世代でなくても講習出来るってマジパネーわー！流石比企谷くんっしょー！）

海老名（愚腐腐、いやあ素晴らしいねえ。女の人たちは兎も角、男同士が肌と肌を重ね合いながら教え合う……キマシタワー!!）

――玄武の間――

雪ノ下（何とか潜り込めたわね。まさか最後だとは思わなかったけれど、これで比企谷くんの秘密を暴けるわね。）

由比ヶ浜（ズルは良くないんだからねヒッキー？だから私とゆきのんでお仕置きしてあげる。そしたらまた戻ってくるよね？）

葉山（詰めが甘かったな比企谷。お前があ席をキープしていれば証拠が残っていたのに。けどそれも終わった事だ。君は《獅鷲星武祭》で徹底的に潰してやるよ。）

パーシヴァル（尾行して正解でした。まさかあれだけの殺気を浴びていながら此処へ来るなんて。命知らずなんですか？それとも余程の考えなしなのでしょう？）

――娯楽施設――

小町（…………お兄ちゃん。）

――八天門場――

冬香「八幡さん、お客様の案内全て終了しました。いつでも行けます。」

八幡「ありがとうございます。では、行ってきます。」

学園祭 界龍編①

八幡 side

今から講習会を始めるんだが、虎峰や暁彗もこの道通ったんだよね……俺、通りたくないな。

冬香「……どうしましたか？」

八幡「いや、見えなくて通るってのはダメですか？」

冬香「ダメです。八幡さんは界龍の序列2位にして今回の講習会のメインなんですよ。もつと自信を持ってください！」

八幡「はあ……ですね。それじゃ、行ってきます。」

冬香「はい、尊師♪」

良い声で見送ってくれましたね……

——八天門場——

俺は目の前の門を開けて、参加している人たちの間を通るように真ん中へと移動していった。

予想していた通り、辺りからは眩きが聞こえる。

「本物だよ！本物の【夢幻月影】だよ！」

「かっこいいね！」

「この日を待ってたんだよな！」

「これで俺も少しは強くなれるだろうな。」

色んな声が聞こえて来たが、そんなのは気にしない。早く講習会やらんといけなからな。

真ん中の少し突起した円状の台の上に立つ。さて、挨拶兼説明だ。

八幡 side out

—————

八幡「今回は私の講習会に参加して頂きありがとうございます。講師を務めさせて頂きます、比企谷八幡です。」

八幡「今日は皆様に私の会得している武術、詠春拳を披露、教授したいと思っています。まずは説明から致します。」

八幡はスクリーンを起動させて詠春拳の事についての説明を開始した。

八幡「詠春拳とは、中国の広東省の発祥で女性が創始者の拳法です。中国武術には北派と南派があり、この図のように詠春拳は中国の南部の方に位置しているので南派武術に分類されます。」

八幡「次にこの武術の特徴ですが、皆様の思っている武術とはかけ離れていて、動きに派手さの無く、大振りな動きがないので、現代の言葉で言えば地味な拳法です。しかし表現を変えれば、無駄な動きを一切取り除き、より精密な動きをする事が出来る武術でもあり、攻撃と防御を同時に出来る攻防一体の武術でもあります。短橋狭馬、簡単に言うと腕を短く使って歩幅も狭く使う、コンパクトな拳法です。詠春拳は手だけではなく、膝で押し出したり、接近戦ならではの肘での攻撃、私はあまりやりませんが腕を縦にチェーンソーのように回しながら打つ連続攻撃や倒れた相手に対する奇襲攻撃、頭部を固定して連続攻撃などが主に使われる技です。」

八幡「武器術にも優れていて、この図にある八斬刀や刀を使って戦う刀術、竹や棒などの棍術、他にも様々ありますが、今回は省きます。」

八幡「そして詠春拳の訓練には、私の隣にある人に見立てた道具《木人椿》を使われる事でも有名です。木だと思って甘く見ていたらそれは間違いです。本気で打ち込む為、かなり痛いのです。私もこの武術を

始めた頃は痛かったです。」

八幡は一呼吸置いてから、動き出した。

八幡「さて、では少しだけ詠春拳の演武と木人椿を使用した訓練を披露します。先程も言いましたが派手さは無いので、見る人によってはつまらないものだと思います。それでもよろしければご覧下さい。」

八幡は足を少し横に開いてから右手を突き出して顔の辺りまで右手を上げて、同時に左手を右腕の肘の辺りに沿うような形にした。

その場動きを真似する人もいれば、動画に収める人、目に焼き付ける人とそれぞれだったが、その中で退屈そうにしている人は誰一人としていなかった。

「へえ、あんな風に動くんだ！身体がブレないんだね。」

「足も上げてたから足技もあるのかな？」

「足技もあつたら強そうだね。」

綾斗「……比企谷さんの剣術に無駄がない訳だよ。あんな歩法でしかも、あんなに重心がブレない動きをするんだから。綺凜ちゃんはどう見える？」

綺凜「……流石としか言えません。剣術は摺足で動くのが基本ですが、比企谷さんの使っている武術の演武の足元を見ましたが、摺足でした。刀術にも優れている理由が分かります。」

皆思う事はそれぞれだが、序列が上位で剣や刀を使う者は八幡の動きを見て、レベルの高さを痛感していた。

そして中には、こんな人も……

オーフェリア「…………構えはこんな感じかしら?」

シルヴィア「うん、そんな感じ。後もう少し狭めてみて。顔の右半分くらいかな。」

オーフェリア「…………分かったわ。」

先頭の方で最強魔女2人が詠春拳の構えを見直しているという貴重な場面だった。

――30分後――

八幡「…………如何でしたか? 実は今の演武、簡単そうに見えますが難しいです。私の師匠、汪小苑は『このくらい普通に出来なくては詠春拳会得など出来ん。』と言っていました。今では厳しく教えて頂いた事に感謝しています。次に木人椿を使った訓練です。こちらはゆっくりやりますので目が疲れる事はないでしょう。」

八幡は木人椿の正面に立ち、また詠春拳の構えを取った。そこから木に自分の腕や足を打ち込む音が響いていた。

柚陽（天霧辰明流と違って重心を動かさず、更に言えば気品のある武術ですね。この武術に私の弓術を取り入れれば、早撃ちが出来るかもしれませんね。）

八幡のこの動きは他の施設でやっている参加者にも好影響を与えていた。

戸塚（八幡はゆっくりやるって言ってたから痛くないんだろぅけど、もしスピードを上げてやったら早いし痛いんだろぅなあ。）

戸部「海老名さん、これならレヴォルフの奴らが来ても少しは身を守れんじゃね？」

海老名「むしろ私はそのまま倒れ込んで……いやっはー!!」

戸部「それはねーべよ……」

――20分後――

八幡「……以上で木人椿を使った鍛錬を終わります。私はいつも目隠しをした状態でこれよりも早く打ち込んです。日によつて鍛錬法は変えてますが、この2つは欠かさないようにしています。では今度は皆さんに実践してもらおうと思います。」

八幡「皆さんにやってもらうのは、チーサオ 螭手という詠春拳の対練です。片方の腕は外側、もう片方は内側になるようにして、相手の手首にくっつけるようにして下さい。そして腕を回すように動かして下さい。慣れて来たら1人は手を内側に持ったりしてみてください。少し手本を見せますね……少しいいですか？」

「は、はい!!」

八幡はシルヴィアではなく、他校の知らない生徒を指名した。

八幡「手に力はこめなくても大丈夫です。俺の手首に片方は外、片方は内にくっつけてください……そうです。そして回すように動かして下さい……ありがとうございます。そして慣れてきたら自分の手首を外から内へ、内から外へと変えてみても大丈夫です。ありがとうございました。」

「は、はい!!」

女子はそそくさと自分のいた所に帰っていった。凄くニコニコしながら。

八幡「私も見て回りますので、皆さん思うようにやって見てください。」

学園祭 界龍編②

—————

八幡の講習会は順調に進んでおり、参加している殆どが藪手をマスターしていた。藪手は対練の中では基礎の方だが、内から外、外から内への手の入れ替えが難しいのだ。

出来なかった者は仕方ないが、殆どの2人一組がマスターしているので問題はないだろう。

八幡「皆さんが大体出来るようになったところで次のステップです。次は過手グオサオという対練です。今やった藪手を基にして攻撃をして見てください。攻撃とはいっても本気ではやらないでくださいね。そして攻撃する場所は胸元の間限定します。少し手本を見せますね。つぎは……そちらの男性の方、宜しいですか？」

「はい。」

分かってはいるだろうが敢えて説明しよう。八幡は女性を選ばなかったのではなく、選べなかったのだ。攻撃する場所が胸中に限定したからである。

八幡「まずは先程やつてもらった藪手をゆっくりでも早くでもいいのでやります。その次にどちらの腕は外に向いているはずです。そちらの腕で胸に向かって攻撃をします。その際される方は内にある手でガードをして片方の腕は外側に向いているので、そちらの腕で攻撃をします。これを連続で繰り返してみてください。出来るところまでで構いません。何度失敗しても大丈夫です。ありがとうございます。」

八幡「それと、もし男女混合のペアがいた場合は、男性の方は攻撃する場所を少し上へずらしてください。」

この言葉には男の参加者も安心の溜息をついた。当てるわけではないが、もし当たってしまった事を考えると恐ろしいものだ。

――八天門場・上階――

虎峰『……大師兄、僕の方からは誰も八幡を狙っている人は見受けられません。大師兄の方はどうですか？』

暁彗『……私の方もそれらしい人物はいない。』

宋『師兄方、私の方角からもそれらしい人はいません。』

銀梅『師兄方、私からいけません。』

虎峰『どの方角からもなしですか……』

暁彗『……それは良い事だ。何もなく終われるのが一番だ。』

銀梅『そうですね。引き続き監視を続行します。』

『『了解。』』

――――

陽乃 side

――玄武の間――

あんたたちも懲りないね？どうしてあれだけやられたのに突つかろうとするのかな？余りにも無神経過ぎるよ。

陽乃「会場を回ってて良かったよ。まさか本当にいるなんてね。それに葉山……あんた組める人いたんだ。」

八幡くんから理由は聞いたけど、どうやら事実には流されちゃったみたいだね。まあ証拠がないんじゃないか、あ、どんなに喚いても有罪にはならないからね。

セシリ「ねー、陽姐が言ってた葉山ってのはどいつー？」

陽乃「んー？あそこのガールドワースの制服着た金髪の無駄に顔が良い奴。」

セシリ「……あ、見つけた。あいつかあ……八幡の方がイケメンじゃなーい？」

陽乃「あつ、セシリもそう思う？だよねー！八幡くんの方が絶対良い顔してるよねー！」

これ本当！

セシリ「今調べただけどきー、あいつ序列57位なんだねー。それでよく八幡に文句とか言えたもんだよね？顔面整形してあげよつか？蹴りで。今なら無料サービスだよ？」

陽乃「ダメだぞー。そんな楽しそうなの私だってやりたいんだから。でも八幡くんに怒られるからダメ。」

セシリ「ざんねーん。でもさ、八幡って『獅鷲星武祭』に出る予定なんでしょー？」

陽乃「まあ『鳳凰星武祭』で三冠制覇を豪語するくらいだからね。」
セシリ「未だにチームとか作ってないけど大丈夫なのかなー？」

んー確かにね。もうチームを作ってもおかしくない時期だし、チームワークを深めるって意味でも大事な時期でもあるから、もう組んでおいても良いと思うんだけどね。

陽乃「まあ、そこは八幡くんにも考えがあるんじゃない？」

セシリ「そうだよねー。何せ巷では『次期万有天羅』なんて噂も立ってるしねー。」

陽乃「それ八幡くんには言わないようにね？シルヴィアちゃんも気を遣って言っていないみたいだから。」

ホント、凄い噂が立っちゃったよね！。

陽乃 side out

—————

————八天門場————

八幡「さて、いい時間になりました。残念ですが、講習会の時間もそろそろ終わりになってきました。夢中になると終わりも早くなりますね。では最後に私が皆さんに披露するのは、木人椿で本気の速さで打ち込みと、私と界龍生徒10人による組手を行います。まずは打ち込みからいきます。」

八幡は再び木人椿の前で構えると、先程やった打ち込みとは比べ物にならないくらい速度で拳や腕などで打ち込みを始めた。

「え……あんなに速いの？」

「一個も打ちもらしてないよね？」

「うん、全部正確に当ててる。」

「マジかよ……あんなに速く出来るのかよ。」

「信じらんねえ……さっきの打ち込みもう遊びじゃん。」

打ち込みが早いだけにすぐに終わってしまったが、参加者にとっては一番のメインが見られるから、打ち込みは早く終わって良かったのかもしれない。

八幡「では次に私と当学院生徒による組手です。ぶつかる可能性がありますので、皆さん出来るだけ離れてください。」

八幡が手を上げた瞬間、上の方から10人の生徒が降って来た。見るからに全員木派である。

生徒「尊師、お願いします！」

生徒が全員包拳礼をしてからそれぞれ構え始めた。八幡はそのままゆっくりと手を上げて胸の真ん中に持って来て同じ包拳礼をした。

その途端に生徒が全員ではないが、殆どが八幡に向かって攻めて行った。

まず1人が飛び蹴りを放ったがあっさりと躲されて、床に打ちつけられた。

2人目が水平蹴り。だが簡単に掴まれてしまい3人目が襲い掛かってくるも蹴りで牽制してから2人目の掴んだ足に向かって振り下ろされて戦闘不能。

3人目は攻撃する前に八幡から拳を鳩尾に受けてしまい、ダウン。

4人目は攻撃は出来たが八幡に受け流されて、その腕を八幡に固定され顔に3発の拳でダウン。

5人目、八幡に転ばされて起き上がろうとするが、掌連槌（連打の事）で気絶。

早くも半分が戦闘不能になり、八幡はこれを機に構え直す。だが生徒たちも戦闘の意思は消えておらず、むしろ燃え上がっていた。

6人目が攻め込んでくるが、八幡に肘で首筋を打たれてから膝蹴り、そして腕で体を回されてから首を掴まれて投げ飛ばされた。

7人目、八幡に蹴りを入れようとするも足を掴まれ、地面についている足を払われて転倒。そこから片方の足を固定されて背中を連打された後に肘で打たれた。

8人目が攻撃しようとするが、八幡に受け止められて頭の側面を打

たれた。当たり所が悪かったのか、そのままダウン。

9人目は攻撃をするもガードされ、そのまま八幡に掌連槌を受けて戦闘不能。

最後の10人目は八幡の体に向かって蹴りを放つもガードされ、続いて水平チョップを繰り返すも躲されてしまい、掌連槌をされてから足払いをされ顎に肘を受けて気絶。

八幡は無傷で10人倒してしまった。

八幡「ふう……詠春拳を会得して鍛錬に励めば、このように10人を相手にしても冷静に対処する事も出来ます。1対多数に向いているわけではありませんが、戦い方によっては10人にも勝る武術になります。」

八幡「では、本日の武術講習会を終了します。皆様、今回は参加して頂き、ありがとうございます。」

会場からは割れんばかりの拍手と歓声が上がった。ライブと同じくらいの音の大きさだった。

こうして、午前の武術講習会は大成功を収めた。

休憩

八幡 side

八幡「悪かったな。本気ではなかったとはいえ痛かったろ？」

「とんでもありません。このくらい星脈世代なら大丈夫ですよ。」

「そうですよ。尊師は参加者の方へと行ってきてください。」

組手をやった奴らの看病に来たつもりだったのだが、どうやら平気そうだ。まあ『痛いと思ったらそのまま転がっていい』って釘打つといたからな。

八幡「そんじゃ今日はありがとな。」

「二」お疲れ様でした！「二」

——界龍・校門前——

八幡「……………なんだこれ？」

「お願いします！もう一度だけ、もう一度だけ比企谷様に会わせてください!!」

「私たちその為に界龍に来て、講習会に参加したりしたんです！」

「少しでも良いから会わせてくれよ！」

「生の【夢幻月影】と話したりしてえんだよ！」

門番「そ、そう言われましても……尊師は多忙な方ですので……」

冬香「……流石は八幡さんですね。これ程多くの人に求められるとは。」

八幡「その八幡さんが来ましたよ。」

冬香「っ！お、驚かさないでください。後、講習会の方お疲れ様でした。」

八幡「ありがとうございます。それで、これはどういう状況ですか？」

冬香「はい。門前まで出てくれたのはいいのですが、その後に八幡さんに会いたいと仰る方が多数いたので……」

成る程、つまりは俺に会いたい連中が山程いるというわけか。

八幡「……あまり行きたくはありませんが、このままじゃ門番^{あいつら}たちが可哀想です。少し出てきます。」

冬香「ええ、お願いします。」

「少しでもいいから会わせてもらえませんか!?ほんの少しでもいいんです！」

門番「ですから尊師は「何の騒ぎだ?」っ!!?そ、尊師!」

なんか冷や水を打たれたかのように静かになったな。

八幡「それで?どうしたんだ?」

門番「その……尊師に一目会いたいと希望している方が多数おられましたので……」

八幡「……………そうか。まあ客人を牽制してくれたのはありがたいが、何故俺に何もないんだ？」

門番「今日の尊師はご多忙の身であります。この後にも講習会がございますので、あまり無理をなされてはと思ひまして……」

八幡「……………まあ事情は分かった。だがせめて一言言ってくれ。後ろにも冬香さんがいるんだ。言い方は悪いが伝令くらいは出来ただろ？」

門番「それは……………そうですが……」

八幡「お前の気持ちは嬉しいが、今日は学園祭最終日で帰る奴だっているかもしれない。出来るだけ客人の意思は叶えてやるものだ。まあ、俺の都合もあるときはあるけどな。」

門番「……………すみません尊師。私の配慮不足でした。」

八幡「気にするな……………さて、俺に会いたいと言っていた者がいるようだが、何方かな？」

その瞬間に人が雪崩のように押し寄せて来た。待つて待つて！これじゃ俺が昨日の巻き込み事故みたいに事故っちゃう！

……………1時間後……………

八幡「……………ふう、やっと終わったか。次は星仙術だったな。それまで休むか。」

門番「尊師、多くの方たちへの対応、お疲れ様でした。」

八幡「おう、お前もご苦労さん。」

冬香「流石ライブを2度も経験していれば、他者との距離感を取るのも上手いですね。」

八幡「分かります？地味に俺が多方向に目を向けてるの。」

冬香「私も体術を嗜んでいるので。八幡さんの動きは大体分かりましたよ。」

よく見てたんだな……流石だ。俺が来る前は序列4位だったからな。よく見てんだろうな。

冬香「さ、八幡さん。後3時間すれば次の講習会です。それまでゆっくり体を休めておいてください。」

八幡「ええ、そうします。午後もお願いますね。」

冬香「任せてください、尊師。」

……いつも通りで呼んでくれませんかね？

――八幡の部屋――

八幡「ただいま。」

シルヴィア「あつ八幡くん、お帰りなさい。お邪魔してるよ。」

オーフェリア「……上がらせてもらっているわ。」

八幡「オーフェリアも来てたのか……まあそれはいいが、小苑さんはどうして？嫌というわけではありませんが。」

小苑「何じゃ？儂がいたらおかしいかえ？」

八幡「おかしくはありませんけど、てつきり星露の所にいると思ってたので。」

小苑「何、子と義娘の顔を見ようと思っただけじゃ。まあ、思わぬ顔も拝見出来たがのう。」

オーフェリアの事だろうな。面識はなかったからな。

オーフェリア「……八幡、貴方ってこの人に弟子入りしてるの？」

八幡「……そーういや改めて聞かれると分からんな。どうなんでしょ

う？」

小苑「弟子入りはしとらんが、弟子でもあながち間違つてはおらんのう。じゃが子のように思つておるのも間違ひではないぞ。」

オーフエリア「……………複雑なのね？」

八幡「俺が氣を失つた時に世話になつたからな。2週間とはいえ、親のように思つてたのは嘘じゃないからな。」

小苑「ほう、嬉しい事を言つてくれるのう。」

シルヴィア「お話で盛り上がつているところすみませんが、小苑さん、質問してもいいでしょうか？」

小苑「良いぞ、何じゃ？」

シルヴィア「小苑さんは、一昨日の午後で六花に起きた事はご存知ですか？」

小苑「午後？……………ああ、八幡が殺氣を出したことかえ？」

シルヴィア「やっぱりご存知だったのですね。」

この人に限つてあんな分かりやすい殺氣、感じ逃すはずねえもんな。

小苑「初めてではないが、八幡が感情的になつた瞬間じゃな。それもとてつもない程の怒りで。」

八幡「……………」

シルヴィア「それで、私の勘違いかもしれないんですけど、八幡くんが出した殺氣が小苑さんに似てる氣がして……………」

小苑「む？儂にか？そんな殺氣儂はかれこれ出しておらんぞ？出したといつても、去年の八幡と暁彗くらいの小粒程度のじゃ。」

あれで小粒なのかよ…………

小苑「じゃがお主の言う通り、八幡の氣は儂に近かつたのも事実じゃのう。八幡、お主着々と『万有天羅』に近づいておるのう。」

八幡「別に目指してるつもりはないんですが？」

小苑「そのまま4代目を名乗ればいいものを。あのチビが名乗ったところで星武祭にも出れなければ意味無かろうに。」

オーフェリア「……………確かに彼女が『万有天羅』なんて大層な2つ名、今飾られていたとしてもお飾りにならないわね。」

シルヴィア「……………凄くキツイこと言いますね？オーフェリアさんも。」

八幡「だが事実なだけに否定出来ないな。星武祭は13歳以上じゃないと出場出来ないからな。」

まあ2つ名はもらう気ないけどな。

子の成長

小苑 side

八幡「……とまあ、俺が殺気を出した理由はそういう訳なんですよ。」

今しがた八幡から一昨日の真実を聞いたが、その葉山という男は余程死にたいようじゃのう。まさか儂が1から育てた自慢の弟子を愚弄するとはのう……どうしてくれようかのう？

八幡「言っておきますけど、手は出さないでくださいね？これは俺たちの問題であって小苑さんが口を出すような事じゃないんですから。」

小苑「八幡よ、これは1年前の暁彗との決闘でも言うた事じゃが、弟子をバカにされて怒らぬ師などおらぬぞ。お主は儂に弟子を愚弄されたままでおれと言うのか？」

八幡「俺だってそんなに甘くないですよ。時が来てないだけです。幾ら貴方でも六花の掟を無視すれば、六花から永久追放もあり得るんですからね？」

それくらい分かっておるわ。

小苑「ならばどうするのじゃ？言っておくが儂は気が長い方ではないぞ？チビやアレマを牽制したりはしておるが、儂の中にも戦いたいという意思がある時はあるのじゃ。」

八幡「……一番近くて《獅鷲星武祭》^{グリップス}遠くて《王竜星武祭》^{リンドブルス}ですね。それまで待つてください。ガラードワースは決闘禁止なので。」

小苑「……まあ良かろう。お主の殺気で腰を抜かすんじゃ、大した男ではないのであろう？」

シルヴィア「はい！ガードワース序列57位を得意げに言ってしまったから！八幡くんが虎威を出した時、私とオーフェリアさんは足が震えてたんですけど、葉山くんは足どころか全体震えてて、声だって全く聞こえなかったんですから！」

オーフェリア「……………【戦律の魔女】の言っている事は本当の事よ。」

八幡「それに小苑さん、これくらいの問題は貴女の力を借りるまでもありません。俺自身で解決しますよ。」

……………頼もしくなったものじやのう。

小苑「ならお主に任せるぞい。言っておくがその時になったら手加減するでないぞ。」

八幡「する訳ないじゃないですか。あんな奴10秒で充分ですよ。」

小苑「うむ……………よし、ならば飯を食べようではないか。八幡よ、器具と具材を借りるぞ？」

八幡「え？小苑さんが作るんですか？」

小苑「他に誰かおるのじゃ？お主らは講習会で疲れておるじやろう。休めるときに休んでおくのじゃ。」

シルヴィア「でも私は武術の方に出たので、午後の講習会は無いから手伝えます。」

オーフェリア「……………私もよ。」

小苑「よいわ、ゆつくりしておれ。それに、久しぶりに儂の料理の味が恋しくなってきたのではないか？」

八幡「……………まあかれこれ2年食べてませんからね。」

小苑「そういう事じゃ。娘たちよ、無粋な真似はせん事じゃ。」

……………30分後……………

小苑「出来たぞい。」

八幡「流石中華は上手いですね。」

小苑「得意じゃからのう。」

シルヴィア「美味しそうですね！」

オーフェリア「……………食欲をそそるわ。」

小苑「構わず食すが良い。」

シルヴィア「じゃあ八幡くん、お願いします！」

八幡「分かってるよ。せーの……」

「いただきます。」

礼儀が正しいんじゃない。

シルヴィア「ん〜！美味しい！」

オーフェリア「……………何処か懐かしい味がするわ。」

小苑「ほっほっほ、それなら好きだけ食べるがよい。まだ作ってあるからのう。して八幡はどうじゃ？」

八幡「……………美味いです。」

小苑「……………そうか。」

……………思い出すのう、儂と八幡が初めて会った日の事を。

あの時は弱々しく、内気で影のような陰湿な感じじゃった。

じゃが今は違う。性格こそあまり変わってはおらぬが、弱々しい所など一切見えんし、影を己の陰とし、霊を己の陽としておる。身体からは陰と陽の力が溢れておる。

感慨深いものじゃのう。

子の成長がここまで嬉しく感じるとは。

午後の小会話

八幡 side

小苑さんの中華を食べて、のんびりする事2時間。小苑さんは身体を動かしてくると言って1時間前くらいにこの部屋を出て行ったが、俺のサイドにいる2人は梃子でも動きそうにない。別にこの状態が嫌なわけではないが……俺にくつついてて楽しいか？

シルヴィア「♪♪♪」

シルヴィ、君は俺のアホ毛をイジるんじゃないやありません。これは飾りじゃないんだから。こうなっちゃうものなんだから！

オーフェリア「……………」

オーフェリア、君も大概そうだからね？ 搦んでいる俺の手を操って自分の頭ナデナデするのはやめなさい。それくらいならやってあげるから。

八幡「……………なあ、退屈じゃないのか？ こんな座ってるだけなのに。」

シルヴィア「え？ なんで？」 キョトン

オーフェリア「……………」 キョトン

本当に退屈じゃないの？ 嘘つかなくてもいいんだよ？

八幡「いや、さつきからこの場を離れずにいるからな。俺の部屋に遊ぶ物とか暇潰しになる物が無いのは前から知ってるつもりだが……………」

シルヴィア「全然暇じゃないよ？」

オーフェリア「……………私も退屈だなんて思っていないわ。何故そう思ったの？」

いや、逆に俺が何で退屈していないのか聞きたいんだが？

八幡「……………なんとなくだ。」

オーフェリア「……………そう。でも大丈夫よ。私たちは退屈だなんて感じてないから。」

シルヴィア「うんうん！だって八幡くんがいるからね！」

オーフェリア「……………そうね。」

……………俺がいるだけで退屈凌ぎになるとはな。

八幡「ならいいんだが、1時間後に次の講習会の時間だから、俺も動かなきゃならん。離れてくれるか？」

シルヴィア「……………ちよつと名残惜しいけど、しょうがないよね。」
パツ

オーフェリア「……………残念だわ。」スツ

2人共素直に離れてくれた。それはありがたいんだが、そんな顔をして欲しくない。

——界龍・廊下——

シルヴィア「午後は確か星仙術だったよね？」

八幡「ああ。星仙術と陰陽術だ。この2つは他学園や一般の人が出来るようなもんじゃないから見せるだけになっちまうけどな。」

オーフェリア「……………それでも良いと思うわ。界龍はこの技術を取り入れたから今期の《鳳凰星武祭》で上位を独占出来たって納得せざるを得ないくらいのもを披露すればいいんじゃないかしら？」

八幡「危ないのはやらない。一般の人でも大丈夫なものにする。あくまでも簡単で見栄えの良い術式にするつもりだからな。」

オーフェリア「……………安全第一という事ね。なら八幡はどんな術を使うの?」

八幡「そうだな……………まあ普通に簡単に出来そうな奴だな。その方が安全だろ。」

シルヴィア「そうだね。別に大きい技を無理して見せる必要もないからね。」

まあ俺の場合、使ったら界龍此処の奴らがうるさいから使わないだけなんだけどな。

オーフェリア「……………でも八幡。貴方の事を信じていないわけではないのだけど、この2つについて説明は出来るの?」

八幡「一通りは出来る。出来なきゃ術者なんて名乗れんだろ。」

オーフェリア「……………なら、もし私の毒が陰陽術か星仙術だとしたら、貴方ならどう説明する?」

八幡「いきなりだな……………まあいい。そうだな……………呪符の中に毒霧の術式を織り交ぜたって所だな。他は工夫次第だ。」

オーフェリア「……………工夫?」

八幡「例えばお前の『流星闘技』メテオ・アーツだったら、もう1枚呪符を使って毒の中から腕が飛び出してくるようにするとかなだ。」

シルヴィア「ふうーん……………奥が深いんだね。」

八幡「今でも研究されてるからな。終わりが無い限り製作というのは無限の可能性を秘めてる。」

オーフェリア「……………カッコつけたのかしら?」

八幡「……………何で分かったんだよ。」

オーフェリア「……………八幡はそんな事を進んでいう人ではないから。」

俺の事をよく分かってんのな。恐ろしくよく見ておられるようで。

シルヴィア「確かに八幡くんは、今みたいな言葉を進んで言う人ではないよね。八幡くんってはどうしたの？」

八幡「……いいだろ偶には／＼」

2人「そうだね♪（……そうね。）」

そんな生ぬるい目で見るな……

しかし、昼からの俺は2人に言い負かされてばかりだな。何でだ？

動けない男

八幡 side

2人と雑談をしながらも、俺たちは再び八天門場へと向かっていった。だが界龍此処の奴らはシルヴィの事を知ってもオーフェリアの事は知らないからな。

奴らの反応はどうだ？

八幡「オーフェリア。言われる事はあるかもしれないが、あまり気にしないでくれよ？」

オーフェリア「……………大丈夫よ。貴方が説明してくれるのでしょ？」

八幡「ああ、そこは保証する。」

シルヴィア「まあ八幡くんは此処のリーダーみたいな人だからね。八幡くんが言ったら皆納得しそうだよね。」

リーダーではないが、納得してくれたら助かるのは違いないな。

……………八天門場……………

八幡「じゃあ俺は準備をしてくる。」

シルヴィア「私も手伝うよ。」

オーフェリア「……………私もやるわ。」

八幡「いや、そんなにやる事もないから大丈夫だ。ゆっくりしてろ。」

そして俺は門を開けた……………んだが。

「「お疲れ様です!! 尊師!!」」

……既に片付けや準備をしていた。

八幡「……なあ、俺の講習会なんだから別に準備はしなくてもいいんだぞ？それに次の講習会なんて準備なんてあんまないだろ？」

「確かにあまりありませんが、このくらいはさせて下さい！」

「その通りです！これくらいでしか我々は役に立てないのですから！」

八天門場は界龍の中では一番広い道場だが、10人で作業する程広くはないぞ。

オーフェリア「……随分慕われているのね、八幡。」

八幡「……少し抑えて欲しいけどな。」

これは本当の事だ。もう少しで良いから抑えて欲しい。

「……尊者、何故後ろに【孤毒の魔女】が？確かに出入りは自由ですが、此処は関係者以外はまだ入れませんか？」

八幡「こいつはシルヴィと同じで俺の客人だ。それともダメだったか？」

「い、いえ！尊者のお客様という事なら構いませんが……」

シルヴィア「おおく流石八幡くんだね！」

オーフェリア「……本当に納得したわね。」

こいつらが聞き分けないみたいに言うなよ。

八幡「そういう訳だ。オーフェリアの事は気にしなくてもいい。それよか何か手伝えることはあるか？」

「いえ！尊者は時間になるまでゆっくりお過ごしください！」

「その通りです！これから尊者は参加者の方々に尊者のお力を見せる

のですよ!?!お身体を万全にしておいてください!」

八幡「……………そんなに俺を動かしたくないのか?どして?」

「動ける時に動けなくなってしまうては大惨事です!ですので尊師には万全な体制で臨んで欲しいのです!」

なんとなくは分かるが、少し動いても負担にはならんだろうに。

シルヴィア「……………なんか間近で見ると、面白いけど可哀想にも感じるね。」

オーフェリア「……………八幡ってある意味不便な立場にあるのね。」

そこの2人!聞こえてるから。

午後もやつぱり……

――――

「ねえ、比企谷さんの講習会まだかなあ!？」

「落ち着きなよ！まだ門も開いてないんだから。」

「でも楽しみだよね！」

「ねー!」

「比企谷八幡って武術とか剣術とかすげえけど、星仙術って凄いのか？」

「さあ？まあこうやって開催してるって事は凄いんじゃないの？」

「お手並み拝見ってとこだな。」

「比企谷様の輝く場面、しっかりと目に焼き付けて帰りましょう!」

「はい！満遍なく目に焼き付けます!」

「その意気です！目指すは………なんでしょう?」

界龍の門前には、魔術師や魔女どころか星脈世代でもない人も並んでいた。

その数200人だった。

受付さえもまだな状況でこれだけの数が門の前で待っていた。

冬香「凄い数ですね……八幡さんの技をそれ程までに見たいという方が多いそうですね。」

星露「まあ当然といえば当然じゃがのう。あやつは人を魅入らせるような動きをする。それは僕も感じるからのう。」

陽乃「星露で分かるのなら他の人に分からないわけないよね。にしても本当、凄い数だね。」

虎峰「師姉、それだけ八幡が世間に認められているという事でしよう。大師兄との戦いに《鳳凰星武祭》優勝ですから、力を疑う人なんてまず居ないでしょう。」

陽乃「それもそっか！八幡くんだしねっ！」

暁彗「……………比企谷八幡の実力ならば、この観衆も納得は出来る。」

界龍を見渡せる場所では、全員ではないものの、界龍の冒頭の十二人が集まっていた。

冬香「ですが八幡さんがどんなやり方をするのかも気になりますね。」

陽乃「八幡くんって使えるのにあんまり戦いでは使わないからね。」
星露「八幡の事じゃ、何かしらの策はあるじやろう。そこは八幡の腕次第じゃな。」

——界龍・八天門場——

シルヴィア「椅子はこの位置でも大丈夫かな？」

「は、はい！大丈夫です！」

オーフェリア「……………テーブルは椅子の真ん中でいいかしら？」

「は、はい。大丈夫です…………」

八幡「じゃあ俺は「尊師はごゆつくり！」…………女2人に動かさせておいて俺が動かないとかないだろ。ダメだろそれは。」

八幡「なら俺は2人のを手伝いを手伝う。それならいいだろ？」

「……………まあ、それくらいなら。」

……………八幡は未だに動けずにいた。

八幡「シルヴィ、テーブル持ち手伝うぞ。」

シルヴィア「あつ、ありがとう！」

八幡「オーフェリア、まとめて持ったら危ないぞ。半分持つ。」

オーフェリア「……………助かるわ、八幡。」

……………

八幡 s i d e

……………なんかやっと動けたって気がする。俺というより他の男もそうだと思うが、女に仕事をさせておいて男の自分は何もしないっていうのは嫌だ。

八幡「ふう……………これで設置は終了だな。悪かったな、手伝わせちゃって。」

シルヴィア「いいよいいよ。私たちだって好きでやったんだし。」

オーフェリア「……………暇だったものね。」

暇だったってだけで手伝ってくれる人もそういないと思うが……………

八幡「まだ門は開かないからゆっくりしてくれ。今何か飲み物を持ってくる。何がいい？」

シルヴィア「じゃあオレンジジュースをお願い。」

オーフェリア「……………あつたらりんごジュースをお願いするわ。」

八幡「あいよ。」

八幡 side out

—————

シルヴィア「なんかこういう風に話すのも初めてかな？」

オーフェリア「……………そうね。話すといっても八幡を挟みながらだったわね。」

シルヴィア「八幡くん抜きで話す事かあ……………あんまり無いね。」

オーフェリア「……………そうね。」

2人の接点といえば星武祭と八幡絡みだけ。2人になるとそこまです話す事がないのだろう。

オーフェリア「……………じゃあ、八幡が来るまで八幡の話でもしてましよう。」

シルヴィア「おお、八幡くんの話なら弾むね！うん、そうしよう！」

この2人の会話は八幡が帰って来てからも続いていて、全く話の終わりが見えなかったらしい。

開門！②

八幡 side

今日最後の講習会だ。今のところ参加者の人数は充分過ぎるくらいいるらしい。参加者を500人に限定しているからか、午前にやった時よりも多く感じる。

「尊師、お身体の方は大丈夫ですか？」

八幡「お前よお、俺があのかくらい身体動かした程度でへこたれると思ってるのか？」

「そうではありませんが……」

八幡「なら分かってるだろ？大丈夫だ、心配無用だ。」

恩着せがましい言い方するが、日々お前らの鍛錬を誰が見てると思ってたんだ？

「尊師、あちらのお2人はどうするのですか？1度講習会に参加されているのですよね？」

八幡「それに関しても問題ない。2人には俺の部屋で待っててもらう事にしてある。講習会には影響ない。」

「それならばいいのですが……」

八幡「何だ？」

「いえ、何かあるわけではないので、お気になさらず。」

……まあいいか。

八幡 side out

—————

――界龍・校門前――

冬香「皆さん、間も無く午後の講習会の受付が始まります。内容は午前と同じですが、違う点は午前と違って椅子やテーブルがある事です。自由席になっていますが、足りない、もしくは余ったなどがあれば迅速に対処して下さい。」

「「「はっ！」「」」」

冬香「今回は合図を出しませんので、各自準備して下さい！」

内容が分かっているから時間を省きたかったのだろう。冬香自身も開門の時間を早めたかったのかもしれない。

冬香「……………少し連絡を入れますか。」

p i、 p i、 p i p i p i… p i p i p i…

冬香は誰かに通信を入れ始めた。

八幡『もしもし、冬香さん？』

相手は今回の講習会の講師、比企谷八幡だった。

冬香「八幡さん、突然のお電話申し訳ございません。もうすぐ開門しようと思っていたのですが、準備の程は如何でしょうか？」

八幡『もうですか？準備なら出来てますけど、少し早くないですか

？』

冬香「そうですが、お客様はこの寒い中外で待っていていらっしゃるのです。少しでも早く中に入れさせて講習を早めにさせてあげてはと思ひして。」

八幡『……成る程、そうでしたか。ええ、じゃあそうしてください。俺もその意見に賛成です。』

冬香「すみません、ありがとうございます。では開門の指示を出しますね。」

八幡『お願いします。』

冬香「後、この講習会が無事に終わりましたら、ケーキの1つ作って下さいませんか？」

八幡『構いませんよ。冬香さんにはこの講習会でお世話になってますからね。そのくらいならお安い御用ですよ。』

冬香（言質は取りましたからね♪）

冬香「ありがとうございます。では。」

冬香は八幡との通信を終えると門番の方へと向かって行った。

「冬香殿？まだ開門の時間ではございませんか？」

冬香「先程八幡さんに確認を取りました。外は寒いので講習は早めでもいいかと。承認を得たので門を開けてもらいに行くとこります。」

「そうでしたか。それは失礼いたしました。ですが、私に言ってくださいれば開門の指示くらい出しますのに。」

冬香「誰かに似たのでしょうか。自分で動きたいと思ってしまうのですよ。」

冬香が言ってる誰かとは、十中八九八幡だろう。冬香もそのくらい八幡を見ているという事でもある。

冬香「すみません。比企谷尊師が開門の時間を早めるよう指示がありましたので、もう開門して下さっても構いません。受付班も全て持ち場につきましたので。」

門番1「承りました。よし、門を開けるぞ！」

門番2「はい！」

門番1「では、門を開きます！前列の方を押さないように進んで下さい！」

――30分後――

程なくして全施設の入場人数が定員を占めていた。定員になっていないのは、やはり八天門場であった。此処が一番大きい道場もあつてか、人数も多い。その為時間も掛かるのだ。

冬香「ごゆっくりお楽しみ下さい……………こちら八、定員になりました。これから八へと入場させます。」

『『『『『了解。』』』』』

冬香「皆様、大変お待たせ致しました。これから中へとご案内致します。重ねて申し上げますが、前の方を押さないようにゆっくりとお進みください。」

八幡さん、後をお願いしますよ。

2人の密談

――――

シルヴィア「武術の方に出ちゃったから午後の方に出られないのは分かっていたけど、八幡くんが居ないと暇だね。」

オーフェリア「……………そうね。今やっている講習は中継されているのかしら？」

シルヴィア「八幡くん一言もそんな事言ってなかったからね。確認してみよっか。」

シルヴィアは界龍のホームを開いて今開催されている講習会についての詳細を見ていた。

シルヴィア「うーん……………なさそうだね。けど、参加者非参加者関係なしで学園祭で開催された講習会の動画は1週間無料配信するみたい。」

オーフェリア「……………良い考えね。」

シルヴィア「でもさ、どうせなら近くで見たいよね。部屋で待って欲しいって言われても1時間は退屈だよ。」

オーフェリア「……………近場で観れる所はないかしら？」

シルヴィア「星露に聞いてみよっか。もしかしたら許可がもらえるかもしれないしね。」

オーフェリア「……………お願いしてもいいかしら？私は連絡する人なんて今の所2人くらいしかなくて。」

シルヴィア「いいよ。あつ、じゃあさ、これを機に私たちも番号交換しようよ。オーフェリアさんという時間も少し増えてきたからね。」

オーフェリア「……………ありがとう。」

2人はお互い連絡先を交換して登録した。1年前まで《王竜星武祭》で激闘していたのが嘘のようだった。そしてシルヴィアは星露の方へと通信を始めた。

星露『どうしたのじゃ歌姫殿？八幡が居なくなつて寂しくなつたかえ？』

シルヴィア「それもあるけど今回は別件。星露、界龍の八天門場で八幡くんが見れる場所は何処かな？」

星露『そういえばお主の姿が見えんと思つとつたら、何処におるのじゃ？』

シルヴィア「八幡くんの部屋の中。あまり勝手な事はしたくないけど、1時間もこの状態だと暇だから。」

星露『ふむ……なら妾たちがおる冒頭の十二人の席に来るがよい。ここなら八幡も見れよう。』

シルヴィア「ありがとう。あつ、因みに私ともう1人いるんだけどいいかな？」

星露『席なら余つておる。連れて来ても構わんど。』
シルヴィア「うん、じゃあ早速向かうね。後でね。」

シルヴィアは星露との通信を終えてオーフェリアの方へと向いてから、許可が得た事を伝えた。

オーフェリア「……………そう。それなら良かったわ。これで八幡の姿を見られるわ。」

シルヴィア（オーフェリアさんつて本当に八幡くんが一番なんだね……………ちよつと複雑な感じになつちゃうよ。）

シルヴィア「じゃあ行こつか！」

オーフェリア「……………ええ。」

――界龍・廊下――

シルヴィア「そういえば、オーフェリアさんってどんな風に八幡くんと出会ったの？君が今瘴気が出ていないのは分かってるけど、昔は違ったでしょ？」

オーフェリア「…………私と八幡の出会いとは2年前の商業エリアの花畑だったわ。その頃の私はまだ身体から出てくる毒素を抑えられなかったから花に触ろうと思っててもその前に枯れてしまうの。」

オーフェリア「…………自分の好きな花を自分で枯らしていると思つたらとても悲しかったわ。でもそんな時に八幡と出会ったわ。その時の私は不思議に思ってたわ。どうしてこんなに近くににいるの？どうして私に触れているのに何ともないのかって。八幡からこう言われたわね。『何故こんな事をする？良い気分が台無しだ。』って。」

オーフェリア「…………枯らすのをやめてくれとも言われたけど、あの時の私にそんな事出来なかったから無理だと言っただけ、次には叩かれたわ。」

シルヴィア「た、叩かれた!？」

オーフェリア「…………ええ。それから少し口論になって『テメエの都合で枯らされた花たちはどうなる?』って花たちを指を差してそう言っただわ。私だってそんな方法があるのならって思ってたわ。私もそれでムキになったのね、私もやれるものならやってみてと言ったら、彼は…………口籠る事もしないで私に『首を洗って待ってろ。』って言ったわ。」

シルヴィア「…………」

オーフェリア「…………でも、本当になんとかしてくれるなんて思つても見なかったわ。そのおかげで私は好きな花も見られるし触れる。街にも出歩けるわ。今の私がいるのは、間違いなく八幡のおかげね。」

オーフェリアは自身の校章に触れて微笑みながらそう語っていた。

シルヴィア「…………そうだったんだ。じゃあ知り合っただのは八幡くん

がこっちに来てすぐだったんだね。」

オーフェリア「……………すぐ?」

シルヴィア「……………あれ、知らなかった? 八幡くん2年前のちょうど《獅鷲星武祭》が終わった時期くらいに界龍の特待生として転校して来たんだよ。あつ、《獅鷲星武祭》は例えだからね。その年は《王竜星武祭》だから。」

オーフェリア「……………初耳だったわ。じゃあ八幡はたった1ヶ月で序列2位になったの?」

シルヴィア「驚くよね。実際の期間は1ヶ月ないからもつとビックリだよ。」

オーフェリア「……………全く知らなかったわ。なんで教えてくれなかったのかしら?」

シルヴィア「その頃は色々と忙しかったから。ほら、この前のガラードワースで会った人。」

オーフェリア「……………ああ、あの人ね。思い出したわ。後は星導館にいる【魔将天閣】の妹の雪ノ下雪乃に由比ヶ浜結衣、後は比企谷小町ね。」

シルヴィア「あれ、よく知ってるね?」

オーフェリア「……………私にも警戒の通信は来てたの。後は……………制裁を加えたから。」

シルヴィア「それは八幡くんから聞いたよ。だからデートを要求したんだよね?」

オーフェリア「……………ええ、楽しかったわ。貴女もあんな気分だったのね?」

シルヴィア「そうだね。うん、オーフェリアさんの感じてる思いと同じだと思うよ。」

2人は同時に顔を合わせると少し微笑んだ。

シルヴィア「で・も！あんまり人の彼氏に手を出さないように！」
オーフェリア「……………少しくらいいいじゃない。」

シルヴィア「そうやってエルナトについて行きたいって言ったのは誰かな？」

オーフェリア「……………」プイツ

シルヴィア「あつ、こちら！顔を背けない！」

オーフェリア「……………早く行きましょう。八幡の講習会が始まっちゃうわ。」

シルヴィア「むう……………この話はまた後でありますからね！」

講習会直前

シルヴィア side

全くもう……オーフェリアさん、絶対八幡くんと会う時間減らす気無いよ！だって私に目を合わせてくれないんだもん。合わせようとしたら目を違う方に向けるし、また合わせようとしたら顔ごと逸らすしで……なんだかんだで少し楽しんだた私もいたけどさ！

でも、もう少し自重をお願いしたいところ。あくまでも八幡くんは私の彼氏なんだから！

つと、こんな事思ってる間に着いちやったね。確か此処が界龍の冒頭の十二人専用の部屋だよね。

ふふっ、八幡君の席に座ろーつと♪

シルヴィア「星露、着いたから開けて〜。」

星露『おお、来たかえ？今開けるでな、入るが良い。』

星露がそう言うのと、目の前の扉からカチャツて音がした。自動じゃなくて手動なんだ……まあ界龍らしいのかな？

シルヴィア「お邪魔しまーす。」

オーフェリア「……………失礼するわ。」

目の前には界龍の冒頭の十二人が半分くらいいた。でも虎峰くんが居なかった。彼真面目そうだから入ると思ってたんだけどな。

星露「歌姫殿は分かっとなが、もう1人はお主か……」

オーフェリア「……………何か不満でもあるのかしら？」

星露「そうではないが、六花園会議を思い出してる……」

オーフェリア「……………悪いとは思ってないわ。」

星露「お主、とんでもない悪じやのう。そこは嘘でも謝罪して欲しかったのじゃ。」

暁彗「……………師父、【戦律の魔女】は存じ上げていますが、【孤毒の魔女】を入れてもよろしいのですか？」

星露「お主も分かっているんじゃないろ？こやつがこれだけ近くにおつても毒の瘴気は出ておらん。八幡がなんとかしたのじやろう。ならば問題無いであろう？」

暁彗「……………失礼致しました。」

セシリー「でもさー意外。八幡つて意外と女誑しなんだねー。まさかレヴォルフの【孤毒の魔女】まで手懐けていたなんてねー。」

沈雲「セシリー姉姉、それは流石にないと思いますが……」

沈華「比企谷に女性を誑かす能力はあつたとしても、実行できる暇があつたとは思えません。」

冬香「ですが、意外なお客様ではありませんね。まさか【孤毒の魔女】とは。」

陽乃「まあ八幡くんはカッコいいしね。この六学園の冒頭の十二人の女の子に手を出していてもおかしくはないかもよ？」

シルヴィア「……………どうして私の方を見て言うんですか？」

陽乃「いやいや、シルヴィアちゃんもうかうかしてられないぞ？」

シルヴィア「……………八幡くんに陽乃さんの分のご飯は用意しないであげてって言うっておきます。」

陽乃「ちよつと待って!?冗談だったのにそんな本気な声でそんなこと言わないで!!冗談だからっ!!」

私には八幡くんっていう武器があるんだからあまりからかわないでくださいね！

星露「むう、これからは歌姫殿にも優しくせねばな……」

星露、私で八幡くんのご飯が決まるわけじゃないからね？

冬香「お2人共どうぞお掛け下さい。」

シルヴィア「あつ、すみません。」

オーフェリア「……………」

シルヴィア「あつ、そうだ陽乃さん、1つ聞きたいんですが、いいですか？」

オーフェリア「……………【万有天羅】、少し質問するわ。」

「八幡くん（八幡）の席は何処ですか？（何処かしら？）」

「……………え？」

あ、あれ？今なんかオーフェリアさんと同じ質問してたのかな？

陽乃「え、ええ〜とお……………2人で座るのかな？」

シルヴィア「い、いえ違いますよ！私が座るんです！」

オーフェリア「違うわ、私が座るの。」

オーフェリアさんが食いついた!?しかも即答で!?

星露「じゃが、八幡は殆ど此処には来んぞ？来る意味がないとも言っておったからのう。」

オーフェリア「それでもいいわ、教えて。」

シルヴィア「ちよつと!？」

なんか必死過ぎない!?どれだけ八幡くんの席がいいの!?

星露「妾の右の席じゃ。お主らの方からは1番奥の左の席じゃな。」

オーフェリア「……………」テクテク

ガシツ!!

シルヴィア「オーフェリアさん？」ニコニコ

オーフェリア「……………離して頂戴、【戦律の魔女】。私には行かない所があるの。」

シルヴィア「奇遇だね、私もなんだ。でもそこは私が先に行きたいから道譲ってくれないかな？」ニコニコ

オーフェリア「……………」テクテク

オーフェリア「……………」【戦律の魔女】、これじゃ前に進めないわ。」

シルヴィア「行かせないからね？私が先に行くんだから。」

オーフェリア「……………っ！」

シルヴィア「なくに？騙そうとしてもダメなんだからね？」

オーフェリア「……………」八幡？講習会の準備は済んだの？」

シルヴィア「え!?八幡くん!？」

シルヴィア「……………あつ。」

ま、まさか……………

私はゆつくりと後ろの八幡君の席のある方に目を向けた。そこには八幡くんの席に少しだけドヤ顔をしながら座っているオーフェリアさんがいた。

シルヴィア「だ、騙された……………」ガクッ
オーフェリア「……………」ムフー

星露「何をやっ取るんじや、お主らは……………」

ううう……………八幡くんの席い……………

――10分後――

オーフェリアさんに八幡くんの席を取られちゃったけど、界龍の序列4位【神呪の魔女】に席を譲ってもらったから私はオーフェリアさんの隣にいる。あつ、勿論【神呪の魔女】も座ってるからね？

星露「さて、そろそろ八幡の講習会が始まるが、どうじやお主らとしては？楽しみなのではないか？」

シルヴィア「楽しみではあるけど、近場では見れないからね。そこが残念かな。」

オーフェリア「……………私も出来るなら近くで見たかったわ。でも贅沢は言わないわ。」

星露「大人の意見じゃな。本音はどうなのじゃ？」

シルヴィア「欲を言うのなら、八幡くんの隣辺りで見たかった。」

オーフェリア「……………一緒に技を披露するのもアリね。」

セシリー「あー！ならあたしも八幡と一緒にやってみたいなー！八幡はなんでもアリだけど、あたしは雷ー！」

暁彗「……………比企谷八幡と共に披露すれば、学ぶものも多いだろう。」

冬香「実験体になるのもいいかもしれませんね。八幡さんなら加減を知っていると思うので、安心出来ますから。」

陽乃「私なら八幡くにちよつかいをかけるかな。その方が面白そうだし。」

色んな答えがあったなあ。でもやっぱり八幡くんのやる事は見ていたいなあ。

陽乃「あつ、そんなこんな言いながらも、そろそろ始まるみたいだよ。」

オーフェリア「……………楽しみだわ。」

シルヴィア「どんな技を披露するのかな？楽しみだなあ。」

八幡くん、色んな技を見せてね！

虎峰「すみません！遅くなりました！……………シルヴィアさああああん
!!!?
」

……………虎峰くん、どこ行ってたのかな？

学園祭 界龍編③

八幡 side

さて、やっと午後の講習会が始まるな。待っている最初の間は寛げるが、時間が経つにつれて早く時間になってくれと思っていたものだ。

今俺は影の中にいる。ん？何処の影かって？そりやお前……アレだよ……俺が影で忍べるようにと思つて影の出来る場所を作つてもらつたんだよ。要するにだ。この道場に天井はないが、木材を使つて日を遮つてるから影を作れたんだよ。我ながら上手いことを思いついたと思つている。

一応現時刻を教えておこう。講習会が始まる2分前だ。つまり3時58分だ。10分前から影の中にいるが、待つてる時の10分つて異様に長いんだよな。

まあそれはさておき、これが終われば界龍のイベントは全て終了になる。コロシアムの方は中止にして良かったと思う。多分だが、俺に挑戦してくるであろう輩が大勢いたと思うから。

『皆様、大変長らくお待たせいたしました。この度はは六花及び界龍第七学院の催しに参加して頂き、誠にありがとうございます。当学院の最終イベント『比企谷八幡尊師による陰陽、星仙術の真髄』です。どうぞ、お楽しみ下さい。』

おい、そのタイトル盛り過ぎだろ！真髄つつつても何も見せるもんなんてないからな！

まあ出るしかないんだけどよ。

俺はそう思いながらも、会場の真ん中から徐々に姿を顕にしていっ

た。八天門場にいる参加者からは拍手が起こった。

八幡 side out

—————

八幡「只今ご紹介に預かりました、当校の高等部2年の比企谷八幡です。これから陰陽術や星仙術の説明や技などを見せていくつもりです。皆様の中には理解出来ない方もいらっしゃると思いますが、初めての目線から見る楽しみもあります。なので、この講習会を楽しんでもらえると、私は嬉しいです。」

八幡「長話も退屈させてしまうので、早速説明からいききたいと思います。まずは陰陽術から説明していきましょうと思つてます。まず陰陽術とは簡単にいえば呪術、占術の類です。皆さんはご存知ないと思いますが、陰陽とは元々中国の思想であり、森羅万象、宇宙のあらゆる事物を多方向な観点から陰と陽の2つに分けた思想です。陰と陽は対立する存在であり、万物の生成消滅はこの2つによつて起こると言われています。今の説明に基づいた思想や学説を陰陽思想、陰陽論、陰陽説と言い、皆さんもご存知の五行思想や陰陽五行説が構成されています。」

八幡「恐らくですが勘違いしている方も多いと思います。陰陽の五行は木・火・土・金・水の5つで雷は構成されていません。五行は星型のそれぞれの角に分類されていて、上が木、右が火、右下が土、左下が金、最後の左が水となっております。あまり難しい説明をしてもアレなので、陰陽の説明はこれくらいにしましょう。」

八幡は腰のホルダーから1枚の呪符を取り出して皆に見せた。

八幡「これが私の使っている呪符です。普通の呪符は文字があるのですが、私のは1文字しかありません。理由は特にありませんが、私の場合はこの1文字だけ見れば何の呪符か分かるからです。例えばこれは《火》と書いてあります。これだったら、

邪符を焼き払え、？急如律令。」

すると、八幡の持っていた札から火が燃え盛り、八幡の掌で燃え続けていた。

八幡「このように呪文を唱えて最後に『？急如律令』と唱えれば術を使う事ができます。次にこの火を利用するには何の属性が必要だと思いませんか？」

八幡が会場に問い掛けた。

様々な答えが出て来たが、中には正解者もいた。

八幡「皆さん様々な答えをありがとうございます。正解は……全てなんです。」

参加者はザワザワと騒めき始めた。

八幡「皆さんの疑問は最もでしょう。確かに火を利用するには隣にある木が1番です。真逆の存在である水をやってしまうと火は消えてしまいます。ですが、火というのは水をかければ普通に消えてしまいますか？例えばですが、火事の火は何十分と水をかけ続けると消えません。他のもそうです。金の部分に木の芽を植えても育ちませんし、土に水を与えても育ちません。金に火をかけても意味はないですし、土に木を植えるだけでは木は育ちません。簡単にいえば連想ゲームみたいなものです。」

八幡「では火と相性の良い木で組み合わせて見ましょう。炎を導き、灰を地に帰せ！火生土！急如律令！」

八幡がもう1枚の呪符を出して呪文を唱え、放り投げるとそこから木が生まれ、手を持っていた火を投げると木は燃え盛り、大きな火へ

と生まれ変わっていた。

八幡「このように相性の良いもの同士だと、主体で使っている術の威力を倍に引き出す事も出来ます。中には相性の悪いもの同士で扱う術もありますが、私は基本やりません。」

八幡「皆様も時間がありましたら、是非陰陽術について学んでみてください！それでは次の星仙術についてご説明致します。」

学園祭 界龍編④

—————

八幡「皆様も時間がありましたら、是非陰陽術について学んでみてください！それでは次の星仙術についてご説明致します。」

八幡「星仙術とは、我々界龍が独自に開発して発展させた万応素コントロール技術の事です。この技術は【魔女】や【魔術師】と言った能力者の人にしか使えませんので、星仙術を使う者の事を道士タオシーと呼びます。」

八幡「【魔女】や【魔術師】の能力は個々の才能に依存されますが、この星仙術は技術としてある程度汎用化させる事が目的とされています。簡単に言えば、万応素の反応を体系的に分類して、系統的な技術として習得出来るようにしたものです。さらに砕いて言えば、1つの能力に依存する【魔女】や【魔術師】と違い、道士は鍛錬によつて複数の能力を習得する事が可能なのです。」

八幡が間を置きながら説明をするが、参加者は半分くらいが分かっていなさそうな顔をしていた。

八幡「皆様も私の能力はご存知だと思いますが、念の為教えておきます。私の能力は『影』と『幻』です。『影』は先程見た方もいると思います。影を操る能力です。影へと入ったり、実体化させて攻撃させたりと使い方は様々です。『幻』は分かりやすく言うならば、夢、幻術ですね。相手の精神、意識を別世界へと飛ばし、精神的疲労やダメージを与える能力です。」

八幡「今回の場合、皆さんに悪夢など見せるのは論外ですので、『影』の方で披露していきたいと思います。まずは……」

八幡が影の中に入つては出て来てを繰り返し、その次に自身の影か

ら影を伸ばして様々な形に変化させていた。
見ている参加者は八幡の能力に疑問を持つてはいなかった。

八幡「これで皆さんは私の能力の一端を見ることが出来たでしょう。続いては、この影に星仙術を加えます。」

八幡は立て掛けてあった棍を持つと、先の方に影を纏わせた。

八幡「これは星仙術の中でも初歩的なものです。私は武器に纏わせる事はあまりしませんが、武器に影と星仙術を纏わせる時は、武器全体に水を浸透させるように流します。」

すると棍の全体が影で覆われ、その直後に黒いメタリックカラーへと変化した。見た目は鉄の棒だった。

八幡「今のこの棒、正式には棍と言いますが、皆さんもお分かりの通り先程は明るい茶色で木の色をしていました。ですが今は黒く歪に光る鉄の棒のように見えているはずです。これも星仙術です。この棍を鉄のように固く強化しました。なので攻撃力は愚か、耐久性も上がっています。」

八幡「攻撃にならこんな事も出来ます。」

八幡は鉄の状態を解き、また黒い棒の状態に戻したが、棍の両先端に紫色の炎を纏わせた。

八幡「この両先端の炎は火ではなく影です。影を火の形に星仙術で変えたんです。他にも様々な組み合わせがありますので、それを披露します。」

その後八幡は、色々な星仙術の組み合わせを披露した。
先程の棒を使って今度は風を纏わせて斬撃を飛ばす。

分身だが中身は爆弾。

自身を透明化させて参加者を驚かせる。

自身の分身に自身を攻撃させるが、実は本体ではない事。

八幡の開発した星仙術はどれも自分の能力に相性の良いものを取り入れていた。

八幡「このような感じで星仙術は武器に纏わせたり、自身の能力に付与させたりする事ができます。最初にも言いましたが、星仙術は【魔女】【魔術師】でしか体得出来ません。ですが、先にやった陰陽術は【星脈世代】に関わらず一般の方でも活用できます。興味がありませんでしたら是非やってみて下さい。では、これで本日の講習を終了したいと思います。」

参加者からは拍手が巻き起こり、八幡の講習会は無事終了を遂げた。

シルヴィア「いやゝ凄かったねー!」

オーフェリア「……………そうね、流石八幡だわ。」

星露「そうじゃのう。」

虎峰「……………」ガチガチ

セシリー「虎峰もいい加減こつちに戻って来なよー。」

シルヴィア「さて、私も八幡くんの所に……………!!?」

オーフェリア「……………どうかしたの?」

シルヴィア「……………ウルスラ？」

歪な再会

シルヴィア side

シルヴィア「はっ……はっ……」タッタッタツ

さつき見たあの顔、見間違えるはずがない。あの顔は間違いなく私の歌の先生で体術の稽古もつけてくれた人。

やっと見つけた……長かったけど、この数年間探して来た甲斐があった！まだ八天門場に居るはず！急がなきゃ！

――八天門場・門前――

シルヴィア「……やっと着いた！」

私はあるたったけの星辰力を使って門を一気に開けた。

シルヴィア「ウルスラツ!!」

八幡「ん？どうしたシルヴィ？」

そこに居たのは八幡くんだけだった。

シルヴィア「そ、そんな……八幡くん！お客さんはもう皆出しちゃったの!?!」

八幡「ああ、留めておく理由もないからな。どうしてだ？」

そんな……やっと思つたのに……

八幡「……そういや、まだ居たわ。2名ほど。」

シルヴィア「……え？」

八幡「ほら、あそこ。」

八幡くんが指差している方を見ると、そこには舞踏会の仮面を被ったバージュ色の髪をした男の人と、ウルスラが居た。

シルヴィア「っ!!ウルスラッ!!」待て、シルヴィ。「っ!?どうして!」

八幡「男の方は正常な気の流れをしているが、女の方は全く気が流れていない。目を見ても分かる。ありや操られてる。」

え!?どういう事!?

???「ほう……そこまで彼女の……いや、彼の状態が分かるとはね。」

流石は次期万有天羅なだけはあるね。」

八幡「お前もその腰にぶら下げてるもん隠してないで出したらどうだ?そいつはレヴォルフが所有している純星煌式武装【オーガルクス赤霞の魔剣】ラクシャ・ナーダだろ?何で学生でもなさそうなんだがそれを持つてる?」

???「……バレてしまつては仕方ないね。なら早速本題に入ろうか。」

八幡「本題?」

???「比企谷八幡、オーフェリア・ランドルフエンを手放してもらおう。」

八幡「俺が何の理由も無しに、はいそうですかと言うとでも思ってるのか？豚の差し金か？」

???「いや。そもそも豚とは誰たい？」

八幡「……………まあいい。それよりも訳を言え。」

???「彼女の力が必要だからさ。そうでなければ健気にこんな場所へは来ない。そうだろう？」

……この人たち、オーフェリアさんを？

シルヴィア「……………オーフェリアさんを使って何をする気なの？」

ウルスラ「それを貴様らに言う理由はない。さあ、どうするんだ？」

八幡「んなもん断るに決まってるだろ。俺は訳を言えと言ったんだぞ？力が必要だからってのは当たり前だろうが。内容を言えっただよ。」

ウルスラ「図に乗るなよ？小僧。」

いつの間にかウルスラが目の前にいた。私に何かする気なのだろうか、私の方を狙っていた。

ウルスラ? 「ならば、貴様の1番大切なものを奪えば、話が早いだろう。」

シルヴィア (ま、間に合わない!!) グッ

私はおもむろに目を瞑った。何をされるかなんて全く分からない。けど、いつまで経っても何かをされる気配どころか、触られる様子もなかった。

目の前に掴みかかろうとしているウルスラがいるけど、何かに止められていた。ウルスラの足元を見たけど、影は伸びてなかった。

八幡「お前バカだろ? そんな事言われて俺が何もしないと思ったか?」

私は八幡くんの方を見たら姿が変わっていた。そんなに変わりはなかったけど、さつきまで無かった緑色の腕と足に着ける防具(籠手と脚絆)に薄黄色の胸当を着けていて、八幡くん自身から緑色の煙が出ていた。多分だけど憑霊だと思う。

よく見たら、私の目の前に八幡くんの呪符と同じマークが刻まれていた。確か……八卦だったかな?

八幡「憑霊……堅牢陣・大蛇丸。お前らにこの結界が破れるか? 破れるもんなら破ってみろ。」
ウルスラ? 「……くっ。」

ウルスラが苦い顔をしていた。きっと八幡くんの結界の方が強いって分かってるんだと思う。

??? 「……ヴァルダ、戻って来るんだ。」

ウルスラ? 「……………」

八幡「成る程な、それがお前の正体か。ヴァルダ・ヴァオス、何処の学園にも所有記録のない純星煌式武装でもう存在してないとも言われていたが、まさかその首飾りが正体だったとはな。」

ヴァルダ「……………いつ気付いた?」

八幡「気付いたのは今だ。だが首元から違和感があつたのは最初から気付いてた。つー事は、お前のその首飾りを取っちゃえばいいって事だよな?」

シルヴィア「じゃあ!」

八幡「ああ、お前の言っていたウルスラって人の意識が戻る。」
シルヴィア「っ!!……………分かった。」

なら早く目を覚まさせてあげなきや!

八幡「んでどうする? 俺としてはこのまま穏便に終わらせたいんだが?」

シルヴィア「!? 八幡くんどういう事!」

八幡「ハッキリ言うぞ。俺は今お前がウルスラを助ける事に反対だ。言い方を良くしても危険過ぎる。」

そんな!?

???「我々としては願ってもないことだけど、交渉は決裂って事かい?」

八幡「訳も聞いてねえのに承諾なんざ出来るか。言っておくが、オーフェリアをやる気なんてこれっぽっちもないからな。」

???「……困ったね。でも、今回のところは退散させてもらうよ。」

八幡「俺としてもその方が助かる。今の状態じゃお互いに人質を取られるようなものだからな。それともう一つ言っておくぞ。」

???「なんだい?」

八幡「正体を隠すならもつとちゃんとした仮面つけた方が良いぞ?

俺からしてみれば正体を言っているようなものだからな。」

??? 「……………」

八幡「まあ、今回は素直に引いてくれるみたいだから正体はバラさねえよ。」

??? 「……………」

八幡「俺、前の趣味が人間観察だったからよ。特徴とかそういうのを見るのが得意だったんだが、今では声とか髪でも誰だつてのが分かるんだよ。次会うときはもっとお洒落して来るんだな。」

??? 「……君にはこの姿も見られてるからもう無理だろうね。」

八幡「ふつ、違ういな。」

2人は軽口を叩き会っていたけど、互いに1回も目を離していなかった。

でも八幡くん……………

何で…………何で止めたのき!!

失いたくないから

—————

仮面の男とウルスラの身体を乗っ取って操っている純星煌式武装のヴァルダが去り、八天門場は八幡とシルヴィアの2人だけとなった。

だがシルヴィアは八幡の方を少しだけ恨めしそうに見ていた。

シルヴィア「……八幡くん、どうして止めたの？」

八幡「一応聞くが、何がだ？」

シルヴィア「ウルスラの事だよ！ やつと探していた人が見つかったのは良いけど、操られていたって知ったのは驚いたよ！ でも元に戻そうと思ったら八幡くんが止めた……何で!？」

八幡「止めて当然だろ。あの2人相当の実力だ。肌で感じるくらいにだ。もし止めていなくても無傷では済まされない戦いになった。」

シルヴィア「それくらい覚悟の上だよ！ ウルスラが戻って来てくれるのなら安い方だよ！」

八幡はシルヴィアを気遣ったの配慮だったが、シルヴィアは聞く耳を持たなかった。それだけウルスラという女性に恩があるのだろう。

八幡「……シルヴィ、聴いてても分かるんだが、あの人はお前の知り合いなのか？」

シルヴィア「……ウルスラは私に歌と体術を教えてくれた人。今私が歌でやっていけてたり、クインヴェールで序列1位になれてるのだってウルスラのおかげ。私にとって師匠みたいな存在の人だよ。」

シルヴィア「そんな大切な人を助けようと思ってたら、まさか止められるなんて思ってなかったよ！ 八幡くんなら分かってくれると

思ってた！」

八幡「……………」

八幡は何も言わなかった。いや、言えなかったのだろう。八幡自身、そんな存在は今までいなかったのだから。

シルヴィア「八幡くんに分かるの？いつの間にか大切な人が居なくなってるんだよ？それがどれだけ寂しくて辛いことか分かるの!？」

シルヴィア「私はもう5年くらい前からこれを経験してる。早くウルスラに戻って来て欲しいから必死に探してた。5年も探して来た私の辛さ、八幡くんは何が分かるの!？」

八幡「……………分からんな。俺にはそんな存在今までに居なかったし、そんな思いもしたくない。勿論、俺もシルヴィの意見は尊重してやりたいと思ってる。」

シルヴィア「だったら!」

八幡「だからこそ、お前にあんな無茶をしてほしくない。」

シルヴィア「……………え？」

八幡「俺にはお前のその辛さが分からない。大切な人なんてこの六花に来てから初めて出来たからそんなの分からないに決まってるだろう?」

そう、八幡の大切な存在……それはシルヴィアただ1人だけ。界龍も大切なのだろうが、その意味合いはまるで違う。

八幡「大切な人がいつの間にか居なくなってる。そりやすげえ辛いだろう。裏切られたり、散々言われ続けるくらいの辛さだったら俺には分かる。だがそんなのとは比較にならないんだろ？」

八幡「だから、その辛さを俺にも押し付けなくてくれ。俺が本当に大切な存在なのは……シルヴィイだけなんだ……頼む。俺の前で自分から危ない事はしないでくれ。」ギョッ！

シルヴィアは今更ながら気付いた。八幡は人生の9割を無駄にしたような生き方をして来た。そんな人に大切な存在なんて出来るわけがない。だが今は自分の恋人だ。そんな存在を大切じゃないと言える道理なんてあるはずが無い。

シルヴィア「……………」ポロポロ

八幡「止めたのは俺だって悪いとは思ってるが、後悔はしてない。

俺はシルヴィを失いたくない。シルヴィがああウルスラって人を失った時の辛さなんて体験したくない。ただのビビリだって思ってるかもしれないが、それくらい俺はお前にいなくなって欲しくない。」

シルヴィア「……………」ギョッ！

シルヴィアは八幡を抱きしめ返していた。涙を流しながら自分の行動の浅はかさを後悔していた。

シルヴィア（……………そうだ、私また大切な人を無くすところだったんだ。）

八幡「逆の立場だったらどうだ？俺が今のシルヴィみたいな感じになつてたらどうする？」

シルヴィア「……………きつと、止めてたよ……………私無神経だった。私も恋人がいるのにね……………ウルスラの事で頭がいっぱいで……………」ポロポロ

八幡「気にするな。誰だってそういう時はある。」

シルヴィア「ゴメンね……………気をつけるから、八幡くんも、私を……………1人にさせないでね？」

八幡「……………ああ。」

そして2人は八天門場の中で静かに立ちながらだきあっていた。

界龍のイベント終了

シルヴィア side

八幡くんに身体を預けてから数分。ようやく私も落ち着きを取り戻して来た。本当によく考えれば、私は凄く危ない橋を渡ろうとしていたんだよね。覚悟していたつもりだけど、自覚して視野を広げたら、とんでもないくらい危険な事をしようとしていたんだね。

改めて八幡くんには感謝しないとね。

シルヴィア「……八幡くん、その……ありがとう。」

八幡「……何に對しての礼だ？」

シルヴィア「私を助けてくれてありがとう。もしあの場で八幡くんがああ言ってくれなかったら、私絶対あの2人にやられてた。」

八幡「……やられたとしても、俺がお前を渡さないけどな。まあこれで互いの弱点をハッキリさせちまったんだけどな。」

互いの弱点？

八幡「まあその事は置いてだ。シルヴィ、さっきのやり取りは俺たちだけの秘密だ。話す相手はペトラさんか小苑さんくらいだ。いいな？」

シルヴィア「それはいいけど、どうしてそんな少数なの？協力は多い方が良いんじゃないかな？」

八幡「いや、少ない方が良い。知り過ぎてもいい事ばかりとは限らない。日本では『知らぬが仏』って諺がある。簡単に言うとならない方が良いという意味だ。」

八幡「自分が信頼出来る人間だとしても、この話は絶対にするな。話すとしたらさっきの2人か、俺たち以上か同等の実力を持った奴だな。」

……八幡くんは暗に『自分たちの問題をあまり広げるな。』って言うてるのかな？そりゃ私だって自分の事を他の人に言いふらしたりする趣味はないけど。

シルヴィア「……分かった。今はペトラさんだけにするね。それ以外には話さない。」

八幡「そうしてくれ。俺は小苑さんに話す。星露にはまだ伝えないでおく。大々的に動かれても困るからな。」

シルヴィア「そうだね。」

ある程度決めた後、八幡くんは深い溜息をついて私の方に向き直った。

八幡「よし、じゃあ今日の売り上げとか聞きに行くか。冬香さんも集計し終わってるだろうしな。あつ、そういやシルヴィはどうする？飯でも食べて行くか？それとも今日は俺の部屋に泊まってくか？シルヴィに任せるぞ。」

八幡くん「……きつと私に気を遣ってるんだよね。普段は自分からこんな事言わないし。でも、今はこの優しさが丁度いいなあ。」

シルヴィア「じゃあ今日は泊めてもらおうかな。冷蔵庫の中身とか大丈夫？」

八幡「後で確認してみる。今くらいの時間帯なら別に混んでるわけでもないしな。少し遅くても大丈夫だろう。」

シルヴィア「じゃあ、今日はよろしくお願いします。」

八幡「おう。」

八幡くん「……君はやっぱ優しいね。」

――八天門場・受付――

冬香「あら八幡さん、本日の講習会お疲れ様です。」

八幡「お疲れ様です、冬香さん。今日は如何でした？」

冬香「それを聞く必要があるんですか？文句無しですよ。午前午後合わせて満席。売り上げは講習会の人数は合計して1000人だったので50万円。さらに八幡さんの講習会を動画にしたものを作成して2000円の価格で販売している最中です。」

売り上げが500000円って……凄い金額だね。

冬香「恐らくですが、動画の売れ行きによつては90万円を超えるかもしれません。1日目が176000円、2日目が213500円、そして今日が50万円。合計すると88万9500円でしたので。」

八幡「この3日間でえらい稼ぎましたね？何に使うんです？絶対使道無いでしょう？」

冬香「はい。それに、生徒の方で何か購入していたわけではないので、マイナスどころかプラスしかない状態なので、打ち上げくらいにしか使い道がない状況でして……」

シルヴィア「でも、90万円で打ち上げっていつでも絶対余りますよね。」

冬香「はい……そこなんですが八幡さん、この売上金全額八幡さんが貰つてはくれませんか？」

八幡「何の根拠があつてそんな事言うんですか？」

冬香「八幡さんがこの講習会の立案者なら、このお金は八幡さんがお持ちになるべきです。それに、何もしていない学園側にこのお金を持つて行かれるのなんて、私は納得行きません。」

それは私も同感です！

八幡「そんな事言われなくても……俺の使い道なんてスーパーで食
材や日用品の補充くらいしかありませんよ？ 外食なんて余りしません
し。学校全員で山分けてのはどうです？」

冬香「では八幡さん、当学院の生徒の説得をお願いしますね。」

八幡（うわあ……そうだ。奴らなら絶対それは譲らないだろうな。）

八幡「すいません、無理です。」

冬香「ふふふつ。では八幡さん、そういう事ですのでよろしくお願
いします。」

八幡「……はい。」

八幡くん、今だけ凄いいお金持ちだね。でも………殆どが500円か
100円なんだよね。凄いジャラジャラ。

――八幡の部屋――

八幡「はあ……どうすつかなあこの金。」

シルヴィア「何かないの？」

八幡「一応講習会やってくれた奴には5万ずつ渡そうとは思って
る。一応やってくれたのは俺を含めて11人居るからな。」

シルヴィア「1人5万円だとしても後40万円は残るね。それはど
うするの？」

八幡「……未来ある子供達のために寄付するかなあ。」

シルヴィア「あつははは！ 八幡くんって本当に面白いね。そんな突
拍子も無いこと言って！」

八幡「だってよ、本当に使い道ないんだぞ？ こんな大金貰っても困
るわ。序列入した時の奨学金だって貰ってんのに、学園祭の金全部
貰ってどうすんだよ？」

本当だよ。 40万円残っても使い道なんてないよね。私も困っちゃう。

八幡「……………これも俺たちの将来のために貯金しとくか。その方が良いな。」

シルヴィア「八幡くんがそう決めたのなら、それで良いよ。」

こうして八幡くんは、それぞれの講師をした人にお金を渡した後に自分の口座に40万円を入れた。

八幡くんの貯金が一気に増えた。そして数字も1桁増えていた。

※一方的な約束

――――

ヴァルダ「……どう思う？あの比企谷八幡とかいう男。」

???「想像以上に厄介だね……隙が無い。【戦律の魔女】と一緒にだったというのに、彼女への守りは完璧だった。あの守り、私の【赤霞の魔剣】でも破れないと思う。」

ヴァルダ「随分と評価が高いな。」

???「それだけ彼が強いという事さ。それに、見たところ彼はまだ成長中のような。この先、多分だけど僕たち以上に強くなるかもね。早めに潰しておかないとね。」

???「ほう？誰を潰すのじゃ？」

2人「!!？」

気付けなかった……いや、気が付かなかったのだろう。これだけ距離が近いのに存在すら感知できなかったのだから。

???「そこに居るのは誰かな？」

???「冷たいのう。久々に会ったというのになんじや、その態度は？」

女性は建物の影から姿を現した。

その人物はというと……………

小苑「久しいのう、小童よ。元気にしておったか？」

???「……………汪小苑。」

六花史上初の【三冠制覇】グラントスラムを成し遂げ、界龍の2代目【万有天羅】の名を持つ女性、汪小苑だった。

ヴァルダ「……………元界龍の序列1位が何の用だ？」

小苑「何、少しこの辺をブラブラしておったらお主らと鉢合わせただけじゃ。」

???「……………とても偶然とは思えないね。」

小苑「そうかえ？まあその答えはお主らに任せるとして、お主らに言っておきたい事があつてのう。」

ヴァルダ「何だ？」

すると、周囲の空気が一気に変わった。気温は下がったかのような錯覚に陥り、動こうにも動けない状態だった。

小苑「お主らが手を出した界龍の序列2位は儂の弟子で、様子は見させて貰ったぞ。余計なちよっかいは出さぬ事じゃな、痛手を負

う程度では済まさんぞ。」

小苑が一気に気を高め、2人を威圧した。仮面の男の方は何も言わずにいたが、足が震えていた。

???（……昔と同じで全く衰えていない。それどころか圧が強くなっている。流石は「万有天羅」といったところか……）

ヴァルダ「……部外者は黙っててもらおう。これは我々とあの男の問題だ。」

小苑「ほう？そこに儂の義娘もおったのか？主の目は節穴かえ？」

ヴァルダ「っ！」

我慢出来なくなったのか、ヴァルダは小苑に向かって突進した。右腕を後ろに持っていた。恐らくパンチをする気なのだろう。

小苑「……その程度の攻撃が当たるの思っているのかえ？未熟者が。」

ドゴッ!!

ヴァルダ「グハッ！」

小苑はパンチが当たる寸前で姿を消した。だが消したと瞬間にヴァルダの横腹に蹴りを入れて壁に激突させると、そのまま首を掴んだ。

小苑「教育がなっていないのう。敵の挑発に乗るとはまだまだじやな。」

???「……彼女を離してもらえないかな？」

小苑「ならばお主ら交換条件といこうかのう。儂が此奴を放す代わりに、お主らは我が弟子と我が義娘には手を出さんと。」

???「……………」

小苑「まあ、儂はどちらでも良いがのう。その代わり、こやつは貰っていくがのう。」

???「……………分かった、その条件飲ませてもらうよ。だから放しても構えないかな。」

小苑「何じや、駆け引きもなしとはつまらんのう。まあ良いわ。」

???「あつちから手を出して来た場合はどうすればいいんだい?」

小苑「そんなものは自分で考えることじゃな。言っておくが、お主らは手を出すでないぞ?」

小苑はヴァルダの首を放して仮面の男の方に顔を向けた。ヴァルダもヨロヨロと仮面の男の方へと戻って行った。

???「やれやれ、それじゃあ私たちには黙って攻撃を受けろと?」

小苑「それでも良いぞ。儂は別にどうでも良いからのう。ともかく、約束はしたからのう。」

そして小苑はその場を静かに去った。

締まらぬ夕食

八幡 side

ふう………学園祭も終わっていいよ後片付けだ。といっても、界龍は何か飾ったり置いたりしたわけでもないからいつも通りだけだな。あつ、因みにだ。今年の界龍の最終売り上げは、100万7300円だ。100万超えちやったよ。これ以上いないんだけど。

動画の売れ行きが良かったみたいで、600人近くの人が購入したみたいで2000円×600円で12万円（正確には11万7800円）もプラスされた。まあ講習会の講師をやった奴らには5万ずつ渡してあるからいいとしても、俺の手元にはまだ50万ある。

おかげで俺の部屋には、小銭が沢山である。

八幡「………俺、今日ほど札束が恋しいと思った日はないと思う。」
シルヴィア「八幡くんなんだか海賊みたいだったよ。麻袋ではないけど、大きい袋を手で持って背中に預けながら運ぶから余計にそう見えちゃった。」

思えば影で運べば良かったんだよな。なんで俺あんな運び方したんだ？働きたかったからか？

シルヴィア「八幡くん、今って幾らあるの？」

八幡「50万は報酬として支払ってるから、ここにある額は50万7300円だ。どうしてだ？何か買いたいものでもあるのか？」

シルヴィア「もう、そんなんじゃないよ。単に気になっただけだよ。」

本当かねえ？

シルヴィア「本当です！」

……心の中まで覗かれちゃったよ。

八幡「さて、俺は今から夕飯の用意をしたい所なんだが、そろそろ聞きたい事がある。なんでお前らがここにいる？ああ、冬香さんは約束がありますので構いませんよ。」

そう、シルヴィの他に冬香、星露、セシリー、陽乃、虎峰、黎兄妹がいたのだ。

しかも虎峰に至っては固まってる。いい加減シルヴィがいる環境に慣れろよ。

星露「八幡飯を食べに来たのじゃー！」

セシリー「上に同じく！」

陽乃「八幡くん。今日は手伝うからさ、晩ご飯と一緒にしてもいい？」

八幡「……まあ、それならいいですけど。」

陽乃「やった♪」

沈雲「僕たちは久々にお食事と思ってね。」

沈華「ダメだったかしら？」

八幡「お前らが来るのは本当に偶にだからな。別にいいぞ。まあ今

日は学園祭の終わりだから良しとする。」

セシリー「さっすが八幡！話が分かるうー！」

星露「良い飯を作るのじゃー！」

……こいつら、もう末期だな。

――30分後――

料理が出来る人が増えただけでも大分変わるな。もう出来ちまつ

た。

陽乃「皆く、出来たよー！」

シルヴィア「お待たせー！」

八幡「欲張り過ぎるなよ。特にセシリーと星露。」

セシリー「失礼だなー。あたしはそこまで食いしん坊じゃないよー。」

星露「妾もそこまで欲はないぞえ。」

どの口が言うんだよ。

沈雲「しかし、比企谷くんの作る料理は本当に美味しそうだね。しかも今回は姉姉と彼女さんがいるから尚更美味しそうだね。」

沈華「そうね。毎日食べられる【戦律の魔女】が羨ましいわね。」

シルヴィア「毎日ってわけじゃないけど、そうに近いかな。」

八幡「んじゃ、飯も出来たことだし食べようぜ。」

八幡「虎峰を起こしてから。」

全員「虎峰……（趙師兄……）」

虎峰……お前のせいで締まらなかったわ……

変化

雪乃 side

雪乃「それで、由比ヶ浜さんはどうだったかしら？何か分かった？」
由比ヶ浜「うーん……ごめんゆきのん、全く分かんなかった。だってそんな風にしてる所なんて見当たらなかったから。」

雪乃「……そう。でも気にしないで、私も分からなかったから。ても、一体如何やって如何様をしたのかしら？何かをしているようにも見えなかったわ。普通に武術の演武をしているようにしか見えなかったわ。」

由比ヶ浜「もしかしたらさ、今回はズルをしなかったって事じゃない？だって学園祭でする意味なんてないし。」

雪乃「……言われてみればそうね。星武祭なら分かるけれど、学園祭で本気を出す意味なんて無いものね。盲点だったわ。」

由比ヶ浜「多分だけどさ、同じ所でまたやるんじゃないかな？ほら、次は《獅鷲^グ星武祭^{リブルス}》とかあり得るんじゃない？」

……由比ヶ浜さんが此処までの的確な事を言うなんて……明日は氷でも降るのかしら？

雪乃「でも私たちに《獅鷲^グ星武祭^{リブルス}》は難しいわね。今回は流しましょう。来年の《王竜^{リンドブルス}星武祭^ス》まで待ちましょう？」

由比ヶ浜「そうだね！あと2年くらいあるからそれまでの間沢山練習しようか！」

雪乃「……ええ、そうね。」

待ってなさい逃げ谷くん、2年間貴方を自由にするけれど、2年後に貴方の上に立ってるのは私たちよ。

雪乃 side out

小町 side

………本物のお兄ちゃんかどうかは分からなかったけど、本当に別人だった。《鳳凰星武祭》で会った時は本当に少しだったから分からなかったけど………今なら分かる。

前みたいな濁りまくって腐った目をしていたゴミイちゃんじゃなくて、黒く澄んだ目をしていた。

小町「……お兄ちゃん、カツコよくなってたなあ………でも、もう………」

関わり合う確率すら絶望的だし、そもそも会えるかどうかも分からない。

同部屋女子「……小町ちゃん、この半年本当に元気ないけどどうしたの？」

小町「……実はさ、私ってお兄ちゃんが居るんだけど、喧嘩っていうか絶縁されちゃって。」

同部屋女子「それって……半年前から？」

小町「うん……そのお兄ちゃんがさ、界龍の序列2位の比企谷八幡なんだ。大体予想はついてたでしょ？」

同部屋女子「……やつぱりそうだったんだ。兄妹だったんだね。でも何があって……ううん、聞くべきじゃないよね。それで、小町ちゃんはどうしたいの？」

小町「そりゃ謝りたいよ。仲を取り戻したい。でも私のやってきた事が重過ぎるからさ、許してもらえるかも厳しいというか……」

同部屋女子「……でもさ、悪いと思ってるんだったら素直に謝ってみたら？もしかしたらって可能性もあるんじゃない？」

小町「……でも私ね、【孤毒の魔女】も敵に回してるんだ。」

同部屋女子「………本当に真摯に謝るしかないよ。私にはそれ

くらいしか思いつかないよ。」

………謝る、かあ。

お兄ちゃん、許してくれるかな？

小町 side out

葉山 side

くそっ……比企谷のせいで初の学園祭が台無しだ。しかも生徒会からも尋問を受けてしまうし、散々だった。まあ幸い、本命の《獅鷲星武祭》の出場は取り消してはもらえなかったから良かった。

サンドイツチが捨てられていたのは幸運だった。もしアレが残っていたら俺はここには残っていられなかっただろうね。捨ててくれた人には感謝だな。

だが比企谷、この借りは倍以上にして返してやる。お前が俺を陥れたように、俺もお前を地獄に落としてやるから覚悟しておくんだな。

葉山「……だがまだ半年ある。その間に何か対策を立てておかないとな。あれだけのズルをするんだ、相当な策を練っておかないとな。」

だがどうする………それも半年以内に考えておかないとな。ふっ、《獅鷲星武祭》がたのしみだ。

気逸らし

八幡 side

ああ……やっとうるさい連中が居なくなった。あつ、うるさいつていうのは星露とセシリーであつて、虎峰と冬香さんと沈雲と沈華は違う。陽乃さんは今回は良しとする。

さて、これからどうするか……

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

……………マジでどうしよう？シルヴィにあの人（ウルスラ）の事を聞くわけにもいかねえし、かといって寝るには早い。風呂はいいかもしれないが、殆ど八方塞がりじゃないか。

……………よし、何気ない会話で繋げるか。

八幡「そーいやシルヴィ、クインヴェールの方はどうだったんだ？売り上げとかもう出てるんじゃないか？」

シルヴィア「さっき連絡入れたんだ。そしたら去年よりも伸びてたつて。やっぱり八幡くんの彼女になったのが大きいのかなあ？」

八幡「関係してるのなら、俺たち界龍もそうだろうな。」

シルヴィア「まあ界龍の場合、《鳳凰星武祭》に優勝したつていうのもあるけど、準決勝を独占したつてのも大きいんじゃないかな？そして極め付けは……………」

八幡「俺って言いたいんだろ？」

シルヴィア「正解！八幡くんなら分かるでしょ？」

分からない方が凄い。《鳳凰星武祭》優勝に加えてシルヴィの彼氏ってところだろうな。

八幡「まあ大体理由は分かっているから、自分の口からは言わないけどな。」

シルヴィア「ええ、言つてよく。」

八幡「そんな自分凄いんだぞー的な事言えるか。俺は自慢なんて事はしたくない。」

シルヴィア「私だけの前でも？」

八幡「……………まあな。」

シルヴィア「ぶーぶー。」（？☒・3・☒）

そんな顔してもダメです。

八幡「ほらほら、すぐ風呂沸かすから準備してろ。着替えは俺のを使つていいから。」

シルヴィア「はぁーい！」

少しはシルヴィの気を紛らす事は出来たと思うが、さてどうなるか。

八幡 side out

シルヴィア side

……………八幡くん、きつと私の気を逸らしたかったんだろうなあ。最初の方あからさまに考え込んでいるような顔してた。もう1年彼女やってるんだからそんな所も分かつてきちやうよ。

ウルスラの事はすごく気になる……………でも、八幡くんも失いたくない。凄く大切だから。

……………あんな風に言われたら、言う事を聞き入れるしかないよね。本

当に大切な存在は私だけ……かあ。

シルヴィア「……私も八幡くんが1番大切だよ。だって私が最初に好きになった異性で、私の彼氏なんだから。」

――10分後――

シルヴィア「八幡くん、着替え終わったよ。」

八幡「おう、風呂の方も後少ししたら沸くから、それまで待っててくれ。」

シルヴィア「イエッサー！」ギョツ！

待つ時は八幡くんに抱き着かなきゃね！

シルヴィア「八幡くん的にはさ、今回の講習会はどうだった？上手く出来た？」

八幡「そうだな……まあ説明を理解してくれたかどうかは置いておくとして、内容は悪くなかったと思う。シルヴィはどうだったんだ？分かりやすかったか？」

シルヴィア「私はすぐに分かったよ。大体の事は陽乃さんから聞いてたから。オーフェリアさんと一緒にやったけど、オーフェリアさんも直ぐに出来てたよ。説明の方は分かりやすかったと私は思うな。」

八幡「シルヴィが言うなら間違い無いな。」

シルヴィア「売り上げも凄かったからね。私も観客側から見てたけど、不満そうな人は居なかったよ。」

八幡「そうか……それは何よりだ。」

ピーピー

八幡「おつ、風呂沸いたな。じゃあシルヴィ、入ってこいよ。」

シルヴィア「うん、じゃあお先にお風呂入ってくるね。あつ、別に

途中で入って来てもいいから。
八幡「からかわないでくれ。」

協力と密談

シルヴィア side

ふう〜……気持ちいいなあ。それに、八幡くんの寮部屋のお風呂つて木のお風呂だからか、木のいい香りもするから落ち着くんだねえ。

それに、このお湯からも良い匂いがする。アロマの香りかな？なんか木の香りと良く合ってる気がする。

この香りが私の心と頭の中を落ち着かせてくれる。少し前までゴチャゴチャだったから丁度いい中和剤になってくれる。

シルヴィア「…………ウルスラ。」

まさか操られているなんて思ってもなかった。だってウルスラは、体術では私よりも強い。そりゃ、私が今のスタイルで戦ってみたら分らないけど、それでも私が体術だけで勝負したら確実に負ける。

それ程の人が操られてるなんて……あの時は目の前が信じられなかった。でも、八幡くんの冷静さとあの表情ですぐに分かった。それに、八幡くんは首飾りがウルスラの意識を支配している元凶って言っていたから、アレされ外せば…………

でも、ウルスラとあの仮面の人が何処を拠点にしているかなんて分からないから、再び現れるのを待つしかないんだよねあ。でも、もし会ったとして私の実力で対応出来る？ウルスラを傷付けずに首飾りを外せる？

八幡くんが危険過ぎるって言う程だから、私なんかじゃすぐにやられちゃう。

シルヴィア「……………どうすればいいんだろう。」

やっぱりあの時が1番のチャンスだったのかな？

八幡『…………シルヴィ、少しいいか？』

えっ!?八幡くん!?

シルヴィア「は、八幡くん!?ど、どうしたの!？」

八幡『ああいや、別に入らないから安心してくれ。風呂の入り口で話すだけだ。』

それはそれでホツとしたけど、すごく残念な気が。

八幡『サラツとしか聞かなかったが、お前にとってあの女性はそんなに大事なのか?』

シルヴィア「…………ウルスラの事?」

八幡『ああ。それと、別に無理して答えなくていいからな。そうまでして聞こうとは思ってない。』

シルヴィア「じゃあどうして?」

八幡『そうだな…………シルヴィを救いたいから、だな。』

……………私を?

シルヴィア「……………どういう意味?」

八幡『1年前、まだ俺たちが付き合う前の事だ。2回目に出会った日の事、覚えてるか?《王竜星武祭》の2ヶ月前の事だ。』

2ヶ月前…………確か八幡くんが連絡をくれた日だったね。私が思うような調子が出なかった時に、偶々八幡くんからお誘いがあつてデー

トをした日。

八幡『その日の最後、シルヴィは言ってくれたよな。俺を信じた
いて。』

シルヴィア「……………うん、言ったね。」

八幡『俺はその言葉にすげえ救われた。勿論それだけじゃない。自
信もついたし、今までに比べるとかなり素直になれたと思ってる。』

八幡『俺はお前に救われた。だから、今度は俺がお前を救いたい。』
シルヴィア「っ！」

八幡『だからシルヴィ、良かったら俺にも教えてくれないか？あま
り手掛かりはないのかもしれないが、それでも構わない。お前の知っ
てる事を話して欲しい。』

……………そうだ、そうだった。八幡^こくんはそういう人だった。私のた
めに身体を張って動いてくれる。自分にメリットが無いのに。《獅鷲
星武祭》に出るのも半分私に変な事を言ったせいでその気になった。
八幡くんは、好きな人のためなら体を張ってくれる、とても凄くて
優しい人だよね。なんで忘れてたんだろう……………こんなに近くに居た
のに。

シルヴィア「……………少し長くなってもいいかな？」

八幡『のぼせないように気をつけろよ？』

そして私は、ウルスラの事と居なくなった日からこれまでの事を話
した。探し続けた5年間、探した場所、限られた期間で探すのは困難
だった。証拠にこの5年間は全くと言っていい程進展がなかった。
あつたとすれば、ウルスラが《蝕武祭》^{エクリプス}に出場していたことくらいだっ
た。

八幡『……………そうか、5年もか……………長いな。』

シルヴィア「うん。だから見つけた時は本当に嬉しかった。やつと

会えたって思った。」

八幡『……………すまない。』

シルヴィア「ううん、気にしないで！八幡くんの理由も聞いたから責めてないよ。むしろそこまで私の事を考えてくれてたんだから、逆にありがとうだよ。」

シルヴィア「もしかしてなんだけど、八幡くんもウルスラを助けてくれるのに協力してくれるの？」

八幡『ああ。さっきも言ったが、俺はお前を救いたい。それと、そのことに関してだが、朗報だ。』

シルヴィア「えっ!?朗報!?何!？」

八幡『場所ではないが、あの2人の現場を小苑さんが見ていたらしくてな、その後に取引をしたらしい。【俺たちに手を出すな。】だそうだ。』

シルヴィア「……………それってどういう事？」

八幡『小苑さん、いとも簡単にウルスラを捕まえちゃったらしくてな。それで解放してほしいって言ったら、取引として手を出すなど言ったそうだ。しかも、約束の中には、俺たちと出会った際にも発動するらしくてな。攻撃は一切しない、俺たちが攻撃したとしても反撃はなし、出来るのは防御か逃げるくらい。簡単に言えば防戦一方の状態に近い。』

シルヴィア「それって……………」

八幡『ああ。相手は俺たちに何も出来ない。俺たちは相手に攻撃をしてもいい。つまり、ウルスラを元に戻せる可能性がかなり高くなっただって事だ。』

小苑さん……………

八幡『まあ、元に戻せるかどうかは俺たちの力量次第だが、根気よくやるしかないな。一応今の朗報なんだが、どうだ?』

シルヴィア「……………うん、すごく嬉しいよ!」

だって、ここまでしてくれるなんて……小苑さん、本当にありがとうございます！

八幡『それなら何よりだ。じゃあシルヴィ、のぼせないうちに上がれよ？』

シルヴィア「うん！」

シルヴィア side out

小苑 side

今頃八幡がシルヴィアに報告しておる頃じゃろうな。さて、儂もそろそろお暇するかのう。

???「もう行くのですか？小苑の弟子の事をもっと色々聞ききたかったのですが……」

小苑「そこまで気に入ったのかえ？八幡の事が？」

???「ええ、とても。何しろ小苑がそこまで言う程ですから。小苑が他人の事でここまでお喋りになるのは滅多にありませんから。」

小苑「そうかのう？」

???「もう少し彼の事について教えてくれませんか？」

小苑「八幡の事なら星露やアレマにでも聞けば良いじゃろう。師である儂よりも付き合いは長いからのう。」

???「あの2人ではあまり要領を得ません。それに、戦いの事ばかりです。」

小苑「そうじゃのう。にしても、お主もういい歳じゃろうに。何故そんなにも若々しいのじゃ？」

???「さあ……私にも分かりかねますが？」

小苑「……まあよい。また来る事にするが、良いかのう？」

???「歓迎しますよ。【九生龍子】は戦闘狂ばかりですから、小苑のよな話し相手は貴重です。」

小苑「よく言うわい、お主が作ったんじやろうが。それではの、初

目。??? 代。
「」

「ええ、
いつでもいらしてくださいね？お待ちしますよ、
2代

良い夢を

八幡 side

シルヴィが風呂から上がって、俺も風呂に入った。まあもう上がったんだけどな。え？何でそんなに早いんだってか？じゃあ聞くぞ？俺っていうよりも、男の入浴シーンなんて誰得だ？誰も得しないだろ。

まあそれはさておき、さっきまでのムードと変わって、今は普通の雰囲気に戻っている。ソファで座っているオレとシルヴィ。そしてシルヴィは俺の肩に頭を預けながら鼻歌を歌っている。

シルヴィア「……ねえ八幡くん、ウルスラが攻撃してきた時、八幡くんが守ってくれたんだよね？あれってどんな技なの？」

八幡「あれも憑霊の1つだ。《鳳凰星武祭》でも観てただろ？黒い羽織と赤い格好をした俺。」

シルヴィア「うん。でも今日見たのはあまり派手じゃなかったね？」

八幡「あー……憑霊の格好については俺もよく分からなくてな。攻撃タイプじゃないからかもしれないな。どちらかというと防御の方だな。」

シルヴィア「種類があるの？」

八幡「いや、ない。なんとなくだ。烏に鳳凰、そして今日使ったのが亀と蛇だ。玄武っていう北方の守護を司っている四神の1柱だ。」

シルヴィア「亀と蛇かあ……やっぱりメインは亀かな？」

八幡「守りに徹していたから亀だろうな。俺の格好は変わりなかったが、胸当てと籠手と脚絆だけは着いてたからな。それに、今日ので使の方は大体分かった。《獅鷲星武祭》でも使えるな。」

これで戦術の幅が広がる。守りながら攻撃するのも夢じゃないな。

シルヴィア「八幡くん、どんどん強くなっていつてるね。良いなあー。」

八幡「星脈世代になったのは1年前だからな。まだ星脈世代歴1年だから人一倍頑張らねえといけねえからな。」

シルヴィア「もう充分だよー！これ以上強くなったら、私《王竜星武祭》で勝てなくなっちゃうよ。」

俺の今の目標は三冠制覇だからな。今年も後半年くらいしたら《獅鷲星武祭》だ。一応陽乃さんは《鳳凰星武祭》で出るつもりだって言ってくれたから1人は埋まった。後3人、誰にすっかなあ。

シルヴィア「もう！八幡くんってば！」

八幡「お、おお、どうした？」

シルヴィア「もう、勝手に1人の世界に行かないでよ！私が暇になっちゃうじゃん！」

八幡「わ、悪い。」

シルヴィア「本当にそう思ってる？」

八幡「お、思ってるって。シルヴィに誓う。」

シルヴィア「ふふふ、じゃあ許してあげる。」

八幡「ホッ……」

許してくれてよかったあ……

シルヴィア「ふああ……今日は色々あり過ぎて少し疲れちゃったなあ。」

八幡「もう寝るか？」

シルヴィア「いいかな？」

八幡「それくらい構わねえよ。んじや寝るか。」

俺は居間の電気を消してから、寝室の方へと向かった。すると、シ

ルヴィがうつ伏せになってベッドを占領していた。

八幡「……何やってんだ？」

シルヴィア「んんーんんー」

八幡「うつ伏せで喋られても分からん。ベッドと口を離せ。」

シルヴィア「ぱあく！やっぱり八幡君の匂いは良い匂いだなあって。なんていうのかな？全身を包み込んでくれる感じがするんだよね。」

八幡「そんな良い匂いするか？」

シルヴィア「八幡くんはいつも寝ているから分からないだけだよ。もし八幡くんが私のベッドで寝てごらんよ！絶対すぐ眠れるよ！」

八幡「いや、一応寝てるが……」

シルヴィア「あの家じゃなくてクインヴェールの私の寮の部屋のベッド！」

八幡「……入れとか言わないよな？」

シルヴィア「入りたい？」

八幡「やめろ、まず入れないだろ。クインヴェールは男子禁制だからどうやっても無理だ！」

シルヴィア「ペトラさんをお願いしたら、入れてもらえと思うんだけどなー。」

それ、本当にやめてね？絶対冗談じゃ済まされないから。

八幡「それよりももう少し向こう側に転がってくれ。俺が入れないだろ。」

シルヴィア「ふっふっふ。このベッドに入りたければ私をなんとかしてみなさい！」

八幡「……そうかそうか、じゃあ遠慮なく。」

――30分後――

シルヴィア「……………もう／＼／＼／」

八幡「どうだ？」

シルヴィア「凄く気持ち良かったです。ありがとうございました／＼／＼／」

八幡「なんで敬語？」

シルヴィア「だって！最初の方はいいよ！頭ワシワシヤのはまだ良かったです！その後に膝枕して頭優しく撫でるのは反則だよ！効果抜群だよ！」

君ね、そういう言い方してるけど、すごく笑顔だよ？最高に笑顔だよ？

八幡「で？どうだ？よけてくれるのか？」

シルヴィア「うむ！お隣へどうぞ！」

此処、一応おれのベッドなんだが……

シルヴィア「今日は八幡君のおかげで良い夢が見られそう。」

八幡「俺のおかげ？」

シルヴィア「さっきいっぱい頭を撫でてくれたから！」

八幡「そんなんでも良い夢が見られるのなら、毎日やってやるけどな。」

シルヴィア「あははっ！じゃあ毎晩頼もうかなあ。私がライブとかで居ない日を除く日は毎日！」

八幡「それって六花内にいる日はずっと一緒って事になるが、いいのか？俺は全然問題ないが。」

シルヴィア「私も全然問題ありません！」

じゃあOKか。

シルヴィア「じゃあ八幡くん、また明日ね。」

八幡「ああ、また明日。」

チュッ

2人は口づけを交わした後、抱き合いながら眠りについた。

第8章 獅鷲星武祭

獅鷲星武祭と願い

—————

学園祭も終わって、新入生、転校生、特待生を迎えて、これという行事もなく半年が過ぎた。だが、この半年間は六花の生徒たちや全世界の企業にとつて待ちに待った期間でもあった。

その理由は、秋にあるチーム戦の《星武祭》^{フエスタ}である

《獅鷲星武祭》^{グザリブス}が開催されるのだ。3年を一区切りとする《星武祭》では、中間に位置する大会で、夏の《鳳凰星武祭》^{フェニクス}は双翼を意味するタツグ戦なら、秋の《獅鷲星武祭》は集合、合体を意味するチーム戦である。そして最後《王竜星武祭》^{リンドブルス}は最強、即ち1対1の個人戦。

この3つの大会を合計して《星武祭》と呼ばれ、世界的に絶大な人気を誇っている。

そんな今年の《獅鷲星武祭》の出場チームを見てみよう。

聖ガロードワース学園

チーム・ランスロット

チーム・トリスタン

チーム・ジャステイス

界龍第七学院

チーム・帝龍^{ティエロン}

アルルカント・アカデミー

不参加

レヴォルフ黒学院

不参加

クインヴェール女学園

チーム・ルサルカ

チーム・赫夜^{かくや}

チーム・メルヴェイユ

星導館学園

チーム・ヒュノステイエラ

チーム・エンフィールド

この9つが今回の出場チームである。

そして注目はなんといっても、聖ガラードワース学園のチームラン
スロットであろう。このチームは現生徒会長のアーネスト・フェアク
ロフが率いているチームであり、過去に2連覇を成し遂げている。例
年通り序列1位から5位の選手で固めていて、今年勝てば、晴れて史
上初の《獅鷲星武祭》三連覇の偉業を成し遂げられる事に期待が
かっている。

しかし、今年はチーム・ランスロットと並んでもう1チーム最有力
候補がいる。

それは界龍第七学院のチーム・帝龍。リーダーは界龍序列2位の比
企谷八幡。《獅鷲星武祭》出場経験のある者は居ないが、個人の能力は
高く、チーム・ランスロットにも引けを取らないだろう。《鳳凰星武

祭』に続いて、比企谷八幡がどれ程会場を盛り上げてくれるのかも、今大会の楽しみの1つだろう。

他にもクインヴェールのガールズロックバンドチームで前回ベスト8のチーム・ルサルカ、《鳳凰星武祭》での巻き返しを狙う星導館のチーム・エンフィールドの2チームが有力候補だろう。今年の《星武祭》も熱くなる事間違いないだろう。

陽乃「八幡くん、最有力候補だって！これはもう勝つしかないね！」
八幡「というより、出るからには優勝しか目指すものはないと思うんですが……」

セシリー「優勝目指すのは良いけどさー、あたしは別に叶えたい事とか無いんだよねー。」

八幡「だったら何で自分から出るなんて言っただよ？」

セシリー「だってさー、八幡と一緒に戦える機会なんてこれを逃せばもう2度とないのと同じじゃん！だから！」

八幡（お前、そんな理由？俺と一緒に戦いたいから出場するの？いや、まあありがたいけどよ。）

曉彗「……………私も特に叶えたいものはない。」

八幡「超高級茶葉とか要らんの？調べてみたんだが、中国の一部でしか咲かない葉を使ってるから、1年に10箱くらいしか入荷しないらしい。」

曉彗「……………出る理由が出来た。比企谷八幡、礼を言う。」

八幡（茶葉が目的で《星武祭》出る奴初めて見た。）

陽乃「私は《鳳凰星武祭》で分取った新開発エリアの改築かな。来年には卒業だから。」

八幡「改築してどうするんです？」

陽乃「私が社長の企業を作るんだ〜！」

八幡「それってお母さんと同じ建設系ですか？」

陽乃「違う違う。六花には《星武祭》以外にも楽しめるものがあるんだよーって知らせるために遊び場を作ろうと思っててね。簡単に言うとなーマパークだよ。」

八幡「……………その為に新開発エリアの割譲を？」

陽乃「そつ！お母さんとも相談してね、何年後くらいになるかは分からないけど、貰った土地だけでやってみる事にしたんだ。」

虎峰「凄いですね。僕たちよりもずっと先の事を考えておられるんですね、雪ノ下姉姉は。」

陽乃「でも、《獅鷲星武祭》で優勝出来なかったら、この計画大きく遅れちゃうし、そしてお金も凄く掛かっちゃうから、今回は何としても勝ちたいんだ〜！」

八幡「どんだけ土地あるか分からないですけど、それを1からやるとなると、凄い時間掛かりますよね。」

八幡（飄々と話してるが、目は本気だ。相当覚悟出来てるな。）

虎峰「僕もこれといってないですよ。」

セシリー「じゃあお願い保留にするのー?」

虎峰「今はそうですかね。僕があまり欲がないのは皆さん知ってますよね?」

セシリー「あたしは長いこと一緒にいるから分かってるよー。」

陽乃「まあ虎峰くんは、普段からあまり物を欲しがるような事は言わないからね。」

曉彗「……………今の生活に満足しているということであろう。」

八幡「つまんない奴だな。」

虎峰「ええ、ですから……って八幡!? 今のはどういうことですか!」

八幡「まあそれはさておいて、そろそろ戦略練ろうぜ。」

陽乃「ちよつとストゥップ。」

八幡「ん? 何ですか?」

セシリー「八幡、流石にあたしも見逃さないからねー?」

曉彗「……………願いを言っていないのは卿だけだ。」

八幡「気になるのか?」

虎峰「1人だけ言わないというのは無しです! 八幡は何かあるのですか?」

八幡「ああ。俺は近場なら何処でもいいから、料理屋を作ってもら事にしてる。」

4人「「料理屋?」」

八幡「ああ。ガスなし蛇口なし、料理器具あり食器ありの店を作ってもらう事にしてる。あつ、蛇口なしといってもちゃんと流しはあるからな? じゃないと食器洗えんし。」

虎峰「何ですその特殊な厨房は? 火や水はどうするのですか?」

八幡「陰陽術で無駄な金は削減だ。出す金は電気代と食料代と飲料代だけだ。」

陽乃「凄く削減してるじゃん。費用超削減してるからねそれ。」

八幡「まあアレだ……そろそろ自分で働きたいって思えてきたんだよ。」

セシリー「でー? 本音は?」カタ ポンツ

八幡「シルヴィと2人で仲良く飲食店経営をしたい。」

八幡（だってこれしかなくね？）

虎峰「なっ!!?ずるいです八幡!!僕もそのスタッフになります!」
八幡「残念でしたースタッフになりたい場合は以下の条件があり
まーす。ホールは女性のみ。厨房は男女問わないが、俺と同じくらい
の料理が出来る人ー。」

暁彗「……………手厳しいな。卿と同等以上の料理を作れる者など
いるのか?」

八幡「さあ?」

虎峰「もう少しランクを下げてください!!」

八幡「……………ごめん。」

虎峰「そんな悪気のないごめんなんて聞きたくなかったですー!!」
陽乃「八幡くん、私はどう?あつ、さっきの言葉を除いてだよ?従
業員にするとしたらどう?」

八幡「陽乃さんなら両方合格点ですね。ホールでも厨房でもどちら
でもいいけそうですし。」

セシリー「あたしはー?」

八幡「セシリーもホールなら合格だな。」

セシリー「ほんとにー?じゃああたし卒業したら八幡のお店で働こ
うかなー?」

虎峰「僕もそのお店で働かせて下さーい!!」

八幡「いつになったら話し合いできっかな?」

各チームの様子

八幡side

八幡「……とまあこんな所だ。グループ戦で戦うチームは星導館のチーム・エンフィールドとチーム・ヒュノステイエラだ。ヒュノステイエラの方は大丈夫だと思うが、エンフィールドの方は序列入しているのが、1人は元だが4人居る。苦戦になるかどうかは分からないが、取り敢えず1対1の戦法は変わらずに行くつもりだ。これで大丈夫か？」

陽乃「もし連携するときはどうする？合図とかいるかな？」

八幡「少し苦しいと感じたら、少しずつでいいから両サイドどちらでも良いからそっちの方に近づいてください。もう全員連携の攻撃は出来るわけだしな。特に虎峰とセシリーはやりやすいだろう？」

セシリー「まああたしたちは前回の《鳳凰星武祭》でタッグ組んでたしねー。虎峰とのコンビネーションには自信あるよー。」

八幡「俺と暁彗はぶつからないようにする。3人をカバーできるように位置しておく必要があるからな。」

陽乃「なら五角形が丁度いいね。」

虎峰「そうですね。それならすぐに駆けつける事も出来ますね。」

暁彗「……………緊急時以外は相手から目を離さぬようにすべきだ。注意の散漫は敗北に繋がるからな。」

よし、良い感じだな。もう少し戦略を練っても大丈夫そうだな。

八幡side out

クローディアside

綾斗「ええ!?グループ戦の中に帝龍が!？」

クローディア「はい。これは最初から厳しい戦いになりそうです。」

ユリス「むう……まさか界龍の【夢幻月影】と

【覇軍星君】と当たろうとはな……他にも実力者揃いの連中だぞ。」

綺凜「比企谷さんの実力は間違いなく六花最強クラスです。自分でも手合わせして分かりました。あの時の比企谷

さんは全く本気じゃなかったです。」

刀藤さんがここまで言っているという事は、ただ実力があるだけではないのでしょう。それは私も実際に会って分かっている事です。

紗夜「だが、相手にとって不足はない。こっちには綾斗がいる。」

綾斗「そう言ってもらえるのは嬉しいけど、比企谷さんを相手にするのはかなりの覚悟がいりそうだね。綺凜ちゃんもこう言ってるからね。」

クロードディア「安心してください、いざとなれば私が前に出ますので。」

ユリス「それでは相手の思うツボであろう！リーダーのお前が前に出てどうする！」

綾斗「まあまあ。でもユリスの言うことも正しいよ。リーダーのクロードディアはあまり前に出るべきじゃないよ。リーダーがやられたら終わりだからね。」

クロードディア「……そうですね。幸い初戦はネストルさん率いるヒュノステイエラですので、考える時間があります。それまでに戦略は練れるだけ練っておきましょう。」

クロードディア side out

シルヴィア side

トウーリア「……はあ……はあ……はあ……」

ミルシェ「はあ……はあ……」

シルヴィア「どうしたの？もう終わりかな？」

マフレナ「つ、強過ぎます。この前より強くなっただけなのに、ま

だシルヴィアさん1人に勝てないなんて……」

パイヴィ「腕を上げたつもりなのに……」

モニカ「強過ぎるわよ」。

5人がかりで来てるのにまだまだだなあ。私で負けてるようじゃ、八幡くんのチームに勝とうなんて夢のまた夢だよ。

トウーリア「シルヴィアも強くなってるよな、明らかに。」

シルヴィア「当たり前だよ。頑張ってる君たちを見てると、私も頑張らなきゃって感じてくるからね。」

シルヴィア「それに、次は《王竜星武祭》連覇が掛かってるから、気合い入れなくちゃね。」

マフレナ「は、早いですね。もう来年の《王竜星武祭》に向けて準備ですか？」

シルヴィア「八幡くんは必ず勝ち登って来るだろうからね。彼と互角に戦えるくらいの力を身につけないといけないからね。」

トウーリア「【夢幻月影】に？でもあいつってそんなに強いのか？」

………へえ。

シルヴィア「じゃあ私と1対1で模擬戦やろっか？あつ、10回やってみない？言っておくけど、八幡くんは私の数倍強いからね？君も知らないのかな？八幡くんが次期【万有天羅】って言われているの？あつ、そうだよな。知らないからそんな風に言えるんだよね？だからさ、八幡くんよりも数倍弱い私と勝負しようよ。貶している訳じゃないけど、5対1でも勝てなかった子が八幡くんに勝てると思っているのかな？あ、その前に八幡くんと戦ってもらおっか？その方が早いよね？どうする？」ニツコリ

トウーリア「え、え、遠慮しておきますー！」

シルヴィア「遠慮しなくてもいいんだよ？」

トウーリア「い、いや、本番前に戦ったら元も子もないから！」

シルヴィア「そう？ならいいけど……次八幡くんの事を弱いなんて言ったら……本当に模擬戦だからね？」

トウーリア「は、はい！」ビシッ！

本当に分かってくれたのなら良いんだけどな。

ミルシェ「……皆さん、もうシルヴィアさんの前で比企谷さんの事をバカにするのはやめましょう！笑顔は素敵でしたけど、目が全く笑ってませんでした！オーラもどす黒かったです！もうやめましょう！」

3人（トウーリア除く）「はい！」

なんか話し合ってるけど、いつか。

八幡くん、私はクインヴェールだけど君を1番に応援してるからね。優勝目指して頑張ってるね。

シルヴィア side out

アーネスト side

……今月の序列戦で《冒頭^{ペー}の十二^ワ人》入りとはね、彼に一体何があつたんだ？

レティシア「アーネスト、あまり考えすぎないようにしてくださいね？」

アーネスト「ああ、ありがとう。大丈夫だよ。」

ケヴィン「けど驚くよな。この3ヶ月でここまで上がってくるんだぜ？何があつたのか教えて欲しいくらいだぜ。」

ライオネル「確かに。3ヶ月前までは剣の腕も普通、動きも普通の星脈世代と比べても変わりはなかった。だが今は動きがまるで違う。」

アーネスト「うん。まるで相手の動きが分かっているかのような戦い方だったね。」

パーシヴアル「私の方でも調査を続けていますが、これといって何も……」

アーネスト「気にしなくてもいいよ。何も出てこないのはあの夏から変わってないからね。でも、調査の継続はお願いね。」

そして僕はもう一度、自分の学園の在名祭祀書ネームド・カルツを確認した。

聖ガロードワース学園序列10位

【義剣^{ぎけん}】葉山隼人

アーネストside out

葉山side

5人「かんぱーい!!」

男子1「隼人くん、ついに冒頭の十二人入りしたな！おめでとうー」

女子1「いやゝこの3ヶ月は凄かったよねゝ！」

葉山「はははっ、自分なりに頑張ったからな。でも冒頭の十二人に入れて良かったよ。」

男子2「また始まったよ。葉山くんの自分は太したことないアピール！つたく憎たらしいぞこのおゝ！」

やっとだ、やっとここまで来れた。《獅鷲星武祭》が始まるまでに何とかと思っていたけど……冒頭の十二人に入れたのは幸運だった。

これで俺も六花では注目されるようになった。少しはシルヴィアさんも振り向いてくれるだろうね。雪乃ちゃんもね。

女子2「でもさ、序列って言ったら界龍も凄いらしいよね。」

女子1「うん。去年《鳳凰星部祭》に出てた人たちでしょ？確か

【砕突】と【破撃肘】だっけ？」

男子1「俺も知ってるぞ！新しく冒頭の十二人入りしたんだよな。

【破撃肘】が11位で【砕突】が12位だったよな？」

男子2「卒業生が居なくなつて繰り上がった序列とはいえ、そこに食い込むなんてすげえよな。」

女子2「やつぱりさ、比企谷さんのおかげなんじゃないかな？」

っ！

女子2「だよー！私界龍の友だち出来ただけど、その子って序列だったんだ。でも、比企谷さんに教えてもらったおかげで今は序列44位にまで上がったんだって！」

男子1「マジかよ!?一回の序列戦でか!？」

女子2「ううん、3回目。1回目は60位で2回目が55位、3回目に私が思い切つてやってみなよって言ったら、勝っちゃったんだよねー。」

女子1「それ、負けてたらどうするつもりだったの？」

女子2「友達に謝罪と比企谷さんにお会いできた事の感謝を込めて界龍に向かう。」

女子1「ズルいぞー!」

全員（葉山以外）「wwwwww」

……くそ、こいつらはいつも比企谷だ。いつもいつもあいつの話ばかりしやがって。

だが、それは今回で終わりだ。新しく手に入れたこの力でお前の化けの皮を剥がしてやる!!

明日の事と未来の事

八幡 side

最後の戦略会議も終了して、俺は帰路についている。行き先？そりゃ勿論、俺たちの家に決まってるだろ。そこ以外に俺が寝食出来る場所といったら、自分の寮部屋、《九生龍子》のアレマさんの所くらいだ。

明日はシリウスドームで開会式やって終わりだからな。俺たちの初戦は星導館のヒュノステイエラだが、一番最初ではない。星導館が戦ってから俺たちが戦う事になっている。順番でいくところだ。

ヒュノステイエラVSエンフィールド

帝龍VSヒュノステイエラ

帝龍VSエンフィールド

こんな形になっている。まあ何もなければ1位通過は出来るだろう。だが、俺のグループよりも、気になるチームが1つだけある。そこは家に着いたらゆっくりと話すか。

――外縁移住区・とある家――

八幡「ただいま。」

俺が玄関を開けてそう言うと、奥の方からは小走りでこちらに向かってくる紫髪の美女がいた。

シルヴィア「お帰りなさい、八幡くん！」

八幡「ああ。」

これも見慣れた風景だ。前まではぎこちなかったが、今ではもう普通になった。

シルヴィア「今日はどうする?」

八幡「やつぱり飯だな。シルヴィアの作る料理は俺にも胃にも優しいからな。」

シルヴィア「もうそんな事言っても愛情しかあげられないんだからね♪」

愛情は既にいっぱい貰ってるんだが。まあいくらもらっても嬉しいもんだからいいけど。

――居間――

2人「いただきます。」

シルヴィアの料理も日々上達している。最近は海外のツアーがあまりないから六花に残っている時間の方が多い。そのためか、日本料理の味もしっかりと出ている。あつ、味噌汁美味い。

シルヴィア「《獅鷲星武祭》の会議はどう?もう明日からだけど大丈夫?」

八幡「いつも通り過ぎて逆に俺も落ち着いてる。まあその方が返って緊張しなくて良いのかもな。」

シルヴィア「そうかもね。私も前日はあまりそういうのは考えないようにしてるから。流石に決勝とかになると考えちゃうけどさ。」

八幡「今からアドレナリン分泌しても意味ないからな。俺たちの試合明後日だし。」

シルヴィア「あはは……試合が明後日からじゃ、今からアドレナリン出しても意味はないよね。」

――30分後――

夕飯も食べ終わり、食器を洗って立てかけておいた。その後に俺たちはソファに座ってのんびりする。これも2人である時は当たりの事になっている。

シルヴィア「……気になるんじゃないの？《獅鷲星武祭》出ている1つのチームが。」

八幡「やっぱり分かっちゃうか。」

シルヴィア「急激に伸びてたからね。私でも目を疑ったよ。」

そうしてシルヴィアは目の前に端末を開いてガラードワースの冒頭の十二人のページを開いた。

そして10位の生徒の情報端末を開いた。

葉山隼人

聖ガラードワース学園高等部3年

序列10位

二つ名：《義剣》ぎけん

所有煌式武装：片手剣型煌式武装

所有純星煌式武装：無し

出場星武祭

《獅鷲星武祭》チーム・ジャステイス（リーダー）

シルヴィア「……特に目立ったところはないね。」

八幡「これがこいつの本当の実力だったら良いんだが、何かに手を染めてるとしたら最低な行為だな。鍛錬を積んで序列入りの奴に失礼過ぎる。」

シルヴィア「きつとチームの皆も葉山くんの事を知らないんだと思うよ。八幡くんの悪口は言っていないと思うけど、その分、心には溜め込んでると思う。」

その心に溜め込んでたモンを吐き出したのが、学園祭のアレだからな。

シルヴィア「だから八幡くん、気を付けてね？多分だけど、今回の大会で1番気をつけなきゃいけないのは葉山くんだと思う。」

八幡「ああ、分かっている。」

まあ葉山のいるチームはフェアクロフさんと一緒の所だ。ランスロットは序列1位から5位で構成されたメンバーだ。負ける事なんてまず無いだろう。

シルヴィア「話は変わるけどさ、私たちやつと18歳になったよね。」

八幡「……ああ。」

シルヴィア「結婚は20歳になるまでは出来ないけど、やつと結婚できるって思ったら嬉しくて。」

八幡「俺が8月8日になった時点で結婚は出来るが、同い年の方が良いんだろ？」

シルヴィア「うん。だから結婚も私たちが20歳になったらって思ってるんだ。」

まあそれが妥当だろうな。

八幡「その話、ペトラさんにしてない……訳ないよな。」

シルヴィア「勿論♪」

八幡「なら、俺たちが《王竜星武祭》に出て、1年ゆつくりのんびり過ごしたら結婚、って訳か？」

シルヴィア「そうなるね。なんか嬉しいなあ。あと2年って考える。」

さっきまでの空気と打って変わって幸せムード満開だな。これが《星武祭》前日の過ごし方とは思えないが、全く悪いとは思ってない。

八幡「この話もおいおいだな。明日は開会式あるから早めに休養取るか。寝る時間はいつもと同じで問題ないし。」

シルヴィア「そうだね。じゃあお風呂沸かしてくるね！」

その後はお風呂に入ってからまたのんびりと過ごし、時間になったらベッドに入って夢の世界へと旅立った。

獅鷲星武祭 開幕

八幡 side

今日の六花、というよりも全世界がこの六花のシリウスドームに注目しているはずだ。何故なら、今日が《獅鷲星武祭》の開幕日だからだ。去年の《鳳凰星武祭》と同じで全世界が注目する大会の1つだ。さて、俺たち《星武祭》に出場する奴らは全員控え室にいるのだが、これから開会式があるため、今は各学園の校章のマークが施されている扉から入場して運営委員長のめんどくさい言葉を聞き流す必要がある。校長先生の話と同じだが、立ちながら聞かためめんどくささが増している。

八幡「でよ、並び順どうすんだ？」

虎峰「決まってますよ。序列順に決まってるじゃないですか。リィダーで序列が1番上の八幡が先頭なのは自然だと思います。」

セシリー「確かにねー。ここは八幡が先頭じゃなきゃ不自然だよねー。」

陽乃「私も八幡くんが先頭にさんせーい！だって威厳も風格もケタ違いだし！」

暁彗「……………私も比企谷八幡に賛成だ。強い者が頭を張る、通常の考え方だ。」

この答えてさ、皆先頭をやりたくないだけなんじゃないか？

八幡「まあ別に良いけどよ。去年もそう言われて先頭だったし。まあ制服の色の違いでメツチャ見られるけど。」

陽乃「そこはほら！八幡くんが特別だって意味だよ！」

八幡「そんな特別マジでいらねえ。」

——シリウスドム——

うへえ……メツチャ集まってるな。まあ去年見てるから知ってるけど、どうしてこうも集まるのかね？

にしても、選手の方はどれも見た顔だな。どいつもこいつも序列上位の奴らだ。まあ知らん奴もいるが、ほぼ知ってる連中だ。

にしても……睨んでやがるな、葉山の奴。けど全く怖くねえ。

セシリー「気持ち悪っ、あの金髪。もし当たったらあの顔面に蹴り入れてやるんだから。」ボソッ

陽乃「セシリー、その時は私も混ぜてね。」ボソッ

陽乃さんは分かるが、セシリーは葉山になんの恨みがあるんだ？

マディアス「諸君、おはよう。星武祭運営委員長のマディアス・メサだ。」

マディアス「さて、今年も漸くこの大会を迎える事が出来たと言えよう。去年の《鳳凰星武祭》に続き、今年も無事に《獅鷲星武祭》を始められた事に、先ずは心からの感謝を伝えたい。」

マディアス「今回の星武祭は去年の《鳳凰星武祭》のようなレギュレーション変更は無いものの、より過激でより白熱な試合展開になると私は思っている。今回採用したグループトーナメント戦は3グループに分かれて各チームとそれぞれ決闘し、1位だったチームが本戦へと進める権利を得る。」

マディアス「因みに2位だったチームにも本戦への出場権が得られる。それは2位を取った3チーム内の戦いで1位を取ること。そうすれば本戦の出場権を獲得することが出来る。」

マディアス「2位だからといってチャンスがなくなつたとは考えず、諦めないで戦って欲しい。」

マディアス「そして私は今回の星武祭でも、より素晴らしい戦いが
見られる事を期待している。」

運営委員長が手を広げてそう言い終わると、観客から盛大な拍手が
巻き起こった。

まあなんにせよ、漸く《獅鷲星武祭》だな。

挨拶とお話

八幡 side

ネストル「じゃあ、お互いに良い勝負をしよう。」

八幡「ええ。明日の試合、楽しみにしてます。」

開会式も終わって、俺たち界龍は今日することがないため学院に帰ろうと思っていたが、各学園のチームから挨拶が来ていた。最初に来たのはガードワースのチーム・トリスタン。リーダーは去年の《鳳凰星武祭》で準々決勝まで登り詰めた若き天才剣士、序列6位^{クラウ・ソラス}《輝 剣》のエリオット・フォースターだ。意外でもあったが、ガラートワースらしいやり方だと思った。

次がクインヴェールのチーム・メルヴェイユとチーム・赫夜が来た。赫夜の方は面識のある奴が居たから砕けた感じで話せたが、メルヴェイユは全員知らなかった。選手は調べたが、それだけだ。

そして今、挨拶に来たのが星導館のチーム・ヒュノステイエラ。

4チームからも挨拶が来て、少し気疲れしていた。

セシリー「流石八幡だねー！今回の優勝候補筆頭のリーダーだけはあるねー。」

八幡「嬉しくない注目だ。」

虎峰「仕方ありませんよ。《獅鷲星武祭》でチーム・ランスロットに並んで優勝の最有力候補のリーダーな上に最近では、次期《万有天羅》とも呼ばれていますからね。」

八幡「……それ度々聞くんだけどよ、誰がそんな事言ってんだ？」
セシリー「さあ？八幡の強さを見た人たちが勝手に騒いでるんじゃない？」

だとしたらやめて欲しい。望んでもいないのにそんな事を勝手に広げられては困る。

クロードディア「ここに居ましたか、比企谷さん。随分と探しましたよ。それと、チーム・帝龍の皆様も。」

綾斗「こんにちは。」

ユリス「やはり、手強いメンバーだな。」

綺凜「こ、ここ、こんにちは、です！」

紗夜「……………」

俺たちを探していたのは、グループが同じ所に入ってるチーム・エンフィールドだった。

陽乃「やつほー！綺凜ちゃん、紗夜ちゃん。元気してたー？」

綺凜「は、はい！お、お久しぶりです！」

紗夜「ん……私も超元気。そっちは？」

陽乃「声量からして元気かどうか疑うけど……私も元気だよ。」

本当に元気なのか？それともああいう性格なのか？

綾斗「比企谷さん、学園祭の歩法、剣術、凄かったです。色々と勉強になりました。」

八幡「ああ。勉強になったのなら良いが、あまりそれを戦いの中で出すなよ？俺には筒抜けだから。」

綾斗「あはは……気をつけないとですね。」

クロードディア「ところで比企谷さん、チームランスロットは見かけませんでしたか？先程から探しているのですが、見当たらないので。（葉山隼人さんについて、少しお聞きしたかったのですが。）」

八幡「いや、見てないな。あの人のチームだ、色んなチームからモテモテなんだろう。それに、俺も少し聞きたかった事があってな。」
クロードディア「あら、それは？」

八幡「チーム・ジャステイスのリーダーの事だ。誰かに師事してもらっていたのなら、あの序列は納得出来るが、もし違うのなら思っ
てな。」

クローディア「そうでしたか。」

しかし、本当に何処にいるんだ？もう帰ったとか？いや、あのチームは目立つからそれは無理だろう。

アーネスト「此処に居たんだね、比企谷くん、そしてチーム・帝龍とチーム・エンフィールドの諸君。」

後ろからは今大会の優勝最有力候補のチーム・ランスロットの面々が現れた。

八幡「どこに居たんですか？」

アーネスト「少し報道陣に質問攻めされててね。思いの外手間取ってしまったんだよ。」

クローディア「そうだったのですか。お手数ですがガードワース生徒会長殿、私と比企谷さん、貴方と3人でお話したいのですが、よろしいでしょうか？」

レティシア「クローディア！何をそんな勝手な事を！」

クローディア「勝手なのは重々承知です。ですがこの件は出来る限り早めに聞いておきたい内容なので。」

アーネスト「うん、分かったよ。」

レティシア「ア、アーネスト!？」

アーネスト「僕も2人に話があったんだ。ちょうど良かったよ。悪いけど、4人は学園に戻っててくれるかい？」

クローディア「すみませんが、控え室で待っていてください。試合前には戻りますので。」

八幡「一応内密な話でな、待ってるか、学園に戻るかにしてくれ。待つてるとしても、聞き耳立てるのは無しだからな。」

3チームのリーダー以外は納得した者もいれば、渋々という人（ユリスとレティシア）もいた。

アーネスト「さて、じゃあその応接室を使おうか。入室禁止にすれば外部からの声音、内側からの声音どちらも遮断出来るからね。」
クローディア「ええ、では話しましょうか。」

3人「葉山隼人（くん）（さん）について。」

深まる謎

――

この3人が関わりを持つようになって1年が過ぎた。月に1度の報告はあるものの、直接会うような事は指で数えるくらいしかなかった。(このSSでは2回。)

今日この場で集まったのは、葉山隼人の現在の実力についての事だが、実際はどうなのだろうか。

アーネスト「……さて、じっくり話し合いたい所だけど、ミスエンフィールドは今日から試合だからね。僕も葉山くんの試合が気になるから早めに終わらせる事にしようか。」

八幡「ええ、その方がいいですね。」

クロードディア「では単刀直入にお聞きします。貴方から見た葉山さんの動きはどうなのですか？」

アーネスト「……正直に言うと、変幻自在が1番分かりやすいね。彼が序列戦に出てきたのは去年の10月からだけど、異常に伸びたのはついこの前の3ヶ月前。それに、序列戦を始めた10月から毎月出るわけでもなかった。それに、模擬戦場の貸し出し記録も調べまでみたんだけど、彼の名前は《獅鷲星武祭》の練習か2週間に1回しか名前が残されていなかったんだよ。」

八幡「それ以外に鍛錬する場所ならいくらでもあるんじゃないですか？ 決闘が禁止でも鍛錬だけならアリだと思いますけど。」

アーネスト「確かに我が学園は決闘禁止を遵守している。そこに鍛錬は含まれていないから、場所さえ確保出来れば鍛錬は可能だろうけど、それだったら他の生徒もやっているはずだからね。正直、葉山くんがそんな事をしているとは考えにくいよ。そうだったらすぐに噂になってるはずだからね。」

アーネストの論は理に適っている。それは八幡とクロードディアも

理解しているだろう。

だが、だからこそ不思議であつて疑わしいのだろう。何もなく過ごして来た者が、突然強くななどなれるだろうか？

クローディア「だとしたら余計に分からなくなってきましたね。どうして彼がここまで強くなれたのか……純粹に練習に打ち込んで強くなったのか、何かをして偽りの力を手にしたのか、または……」

八幡「誰かに協力を仰いだ、か？」

クローディア「……ええ。ですが、これはあまり考えられないと思います。」

八幡「ああ、俺もそう思ってる。」

アーネスト「うん、僕も同意見だよ。」

3人が何故同一の意見かというと……

『葉山（葉山さん）（彼）がそんな人脈あるとは思えねえ。（思えません。）（思えないからね。）』

アーネスト「それじゃあ、今日は葉山さんの試合を観て、何かを得るしかないね。僕は葉山さんの試合を見るけど、比企谷くんはどうするんだい？」

八幡「俺もそうしますよ。生で見たいんでカノープスに向かいます。」

クローディア「私はこの後試合があるので見ることは出来ませんが、お2人の感想を聞かせて下さい。」

アーネスト「うん、話もまとまったようだし、そろそろ出ようか。」

2人「はい。」

3人の出した結論は、取り敢えず様子見という所であろう。

お手並み拝見

八幡 side

梁瀬『さあさあ皆さん!!今年もこの時がやって参りました!!待ちに待った《獅鷲星武祭》が始まりました!!実況は私、梁瀬ミーコとお!』

柊『どうも、《シャーナガ星獅警備隊》一等警備正で、今回の《獅鷲星武祭》解説の柊ひいらぎしずな静薙であります。』

梁瀬『いよいよ今年も《獅鷲星武祭》の季節がやって参りました!!これはさつきも言いましたね、失礼。去年の《星武祭》と違い、《獅鷲星武祭》はチーム戦!味方とのチームワークも戦術を広げる意味では重要になってきます!!さて、このカノープスドームで行われる最初の試合はあゝ…………クインヴェール、チーム・メルヴェイユVSガラードワース、チーム・ジャステイスウゝ!!』

八幡「相変わらず喧しい実況だな。その方が実況としてやりやすいんだろうが。」

アーネスト「あはは…………容赦のない一言だね。」

俺は今、ガラートワース専用の部屋で見ている。別々で見るとよりかは、2人で見た方が視点が広まるからという事だった。

梁瀬『さて柊さん、この2つのチームをどう見ますか?』

柊『そうでありますなあ…………チーム・メルヴェイユの方はチーム

リーダーである序列7位のセギユール選手を始めとし、セティ三姉妹、ワインバーグ選手と遠距離メインのチーム構成ですね。セギユール選手はクインヴェールの純星煌式武装《グレールネーフ》に選ばれた事により一気に序列7位にまで昇格。三姉妹であるパドマ、スバシニ、デイヴィカ選手たちは巧みな連携が取れるので要注意です。そして最後にワインバーグ選手ですが、この選手の使う《魔女》の能力は砲弾を操ることが出来ますので、破壊力ならこのグループの中で1番と言ってもいいと思います。」

梁瀬『成る程、遠距離に長けたチームというわけですね？では次に、チームジャステイスはどうでしょう？』

終『そうでありますねえ……このチームの情報はあまり無いんです。チームの4人が序列外で特に目立った煌式武装もなければ、《魔女》や《魔術師》という情報もないんです。ただ、チームリーダーの葉山選手はこの3ヶ月で序列を57位から10位にまで昇格した実力者です。おそらくですが、葉山選手が何処までチームを引っ張れるかが、勝利のカギを握ってくるかもしれませんね。』

梁瀬『では葉山選手の動きに注目、という事ですね？これは初戦から楽しみになってきましたね!!では、選手の入場ですっ!!』

俺たちの目線からすると、真横の方にチーム・ジャステイス向かいにチーム・メルヴェイユが登場した。

アーネスト「……姿に変わったものはなさそうだね。比企谷くんはどうだい？」

八幡「今のところは何もですね。まあ試合も始まってないですからね。」

アーネスト「それもそうだね。」

梁瀬『さあ、両チーム出揃いました!』

葉山『さあ皆!優勝目指して、頑張ろう!』

4人『おおおー!!』

さて、お前がどんな風につけたのか、お手並み拝見といこうか。

梁瀬『それでは参ります！《獅鷲星武祭》予選Bグループ1回戦！
バトルウ、スタートオオオ!!!』

予想に反して

――――

両チームの前衛が動き出して、早速ぶつかり合った。チーム・メルヴェイユのリーダー、サンドラ・セギユールは後ろの方で指揮を執っていた。葉山は剣を持っていながらも攻め込む様子は全くなかった。

まるで、チームメイトにやらせているかのような場面にも見える。

梁瀬『早速ぶつかり合いました〜!!しかし、チーム・ジャステイスのリーダー葉山選手、動く気配がありません。これはどういう事でしょう?』

終『今までにない事ですから分からないでありますなあ。何かを待っているかのようにも見えますなあ。』

ヴァイオレット「あの人は何様ですの!? チームメイトが戦っているというのに、彼だけあんな呑気に!」

サンドラ「落ち着きなよ。下手に攻撃するものじゃないよ。ここは1人1人確実に仕留めていった方が効率が良い。彼は最後にやればいいだけだよ。」

ヴァイオレット「……分かりましたわ。」

後方で待機している2人はそう言っているが、今の戦況はクインヴェールに傾いていた。徐々にチーム・ジャステイスが押されているのだ。それもそうである。4対3とはいえ、チーム・ジャステイスは序列外、チーム・メルヴェイユの3人は序列の中でも上位の位置にいて、3姉妹だけあって連携も抜群だった。

息の合った連続攻撃、連携攻撃にチーム・ジャステイスの面々は体力を奪われ続けていた。

チームメイト1「葉山くん！まだか!？」

葉山「すまない！あともう少しなんだ！もう少しだけ時間を稼いでくれ！」

チームメイト2「よしっ！それまで時間を稼ぐぞ！」

3人『おおっ!!』

サンドラ「……どうやら、彼はまだ実力を発揮出来ないようだね。ヴァイオレット、予定変更だよ。彼に向かつて砲弾を向けても構わない。その方が仲間の消費も少なくて済むからね。」

ヴァイオレット「了解ですわ！」

ヴァイオレットは自身の身体から星辰力を漲らせると、周りから砲弾を生成した。その砲弾全てを葉山の方へと向け、いつでも撃てるようにしていた。

梁瀬『おおっつとお！ここでワインバーグ選手が葉山選手に向けて砲弾を向けている!!チーム・ジャステイス、絶体絶命のピンチだあ!!』

終『仲間は全員前衛にいますからね。これをどうにか出来るのは葉山選手だけでありますね。』

チームメイト3「あつ！葉山くん！危ない！」

ヴァイオレット「もう遅いですわ！喰らいなさいなのですわ！」

ヴァイオレットはそう言った瞬間に、葉山へ向けて砲弾を撃った。葉山は避ける様子もなかった。

チームメイト1「葉山くん！逃げろお!!」

チームメイト2「葉山くん!!」

スバシニ「余所見してる暇はないよ！」
チームメイト「くっ！」

砲弾は葉山のすぐ側まで迫っていた。葉山は剣を抜いてはいるが、構えも取っていないかった。最早躲す気もないようだった。

4人『葉山く〜ん!!』

そして、爆発の轟音がドームに響き渡った。

サンドラ「……勝負あったようだね。あまりにも呆気なかったよ。」

???「どっちがかな？」

サンドラ「……………え？」

サンドラは声がした後ろを見た。そこには先程爆発でやられたはずの葉山が居たのだ。あの瞬間に音もなく自身の背後に回っていたのだ。

葉山「ああ、それとついでに君の校章も切ったからね。」
ヴァイオレット「なっ！い、いつの間に!？」

轟音で聞こえなかったのだろう、ヴァイオレットの校章は2つに切れて床に落ちていた。

葉山「仲間の体力も申し分ないからこれで終わりにさせてもらおうよ。」

葉山（まあ、こいつらは都合の良い駒だからね。適当に動かしておけばそれだけで役立つ。）

サンドラ「悪いけど、そう簡単にやられるつもりはないよ。」

サンドラは純星煌式武装を取り出すと、水を生成して自身の周りに泳がせた。葉山の動きもこれで牽制出来ると思ったのだろう。

葉山「……知ってるかい？水っていうのは横に動くものには抵抗が生まれるけど、直線のものにはあまり抵抗力が無いんだよ。」

サンドラ「それが何？」

葉山「つまり、こういう事だよ！」

葉山は一気にサンドラの懷に飛び込むと、剣を振った。しかもその振りは、水の流れに合わせて軌道に乗っていた。そしてその水の裏にあったものは……

クインヴェールの校章だった。

『サンドラ・セギユール、校章破壊』

梁瀬『試合終了く!!勝者、チーム・ジャスティス!!これは驚きです！見事な逆転勝利でした!!』

終『相手を油断させてから、自分のリズムに持ち込む戦術だったんでしょか？それにしても、見事な剣技でしたね。流石は今ノリに乗ってる生徒なだけありますなあ。』

葉山（まあ、当然の結果だね。1回戦で負けたら見世物になってしまふからね。これで俺の実力を知ってもらえたかな？比企谷。）

—————

八幡 side

アーネスト「……今回の試合では得られるものが無かったね。君はどうだい？」

八幡「俺もです。次はもっと奴を動かす必要がありますね。」

アーネスト「つまり、君は暗に僕たちに動けと言っているんだね？」

八幡「その方が次に試合するチームとしてはやりやすいでしょう？」

アーネスト「君って人は……読めないね。」

速報ニュースと2人の時間

葉山 side

くそつ、あの報道陣の奴ら……何も分かってない。

何が『4人を盾にしていたのではないか?』だ。この4人はその事を承知で動いてる。そうじゃなきゃ、こんな間抜けな役割、誰もやるはずがない。

チームメイト3「葉山くん、気にすることないよ。そう見えちゃうのは仕方のない事だつて。」

チームメイト1「そうだつて!言わせておけばいいんだよ。」

葉山「……ああ、ありがとう。」

君たちに言われなくても分かっているよ。一々気にしていたらキリがないからね。

葉山「次の相手は会長たちだから今日以上に苦戦すると思うけど、今日のようにやれば勝てる!明日も頼む!」

4人『おおく!!』

葉山 side out

八幡 side

葉山の試合が終わってから、フェアクロフさんと別れて帰路に着いている。帰る途中の視線とかはかなりあったが、仕方ない事だろう。

だが、先程出たニュースでは吹きそうになった。その内容はチーム・ジャスティスの事だった。いや、厳密に言うとりーダーの葉山の

事だが。

『ジャスティスの初戦勝利！だがリーダーの戦術は肉盾同然。』
『チーム・ジャスティスリーダー葉山、勝った方がいいが戦闘評価は☆
1。』

結構な批判を受けていた。まああんな戦術だからな、批判を受けない方がおかしいってものだ。チーム戦をやっている上であのプレイは中々に受け入れられ難いからな。1人目立ちしに行ってるようなもんだからな。

明日の試合はランスロットとメルヴェイユ、まあフェアクロフさんなら負ける事はないだろう。俺たちも明日はヒュノステイエラと試合だ。チーム・エンフィールドが初戦だったら少し厄介だが、上手い事運んでくれた。

幸い、打ち合わせは昨日の時点ではほぼ終わってるし、戦術も固まってる。明日が楽しみだ。

おっ、もう着いたな。

八幡「ただいま。」

シルヴィア「お帰り八幡くん。ご飯にする？それともお風呂？もしかして……わ、私？」

何でそんな事を聞く？しかも最後に至っては疑問形になってる。まあ答えは決まってるけどな。

八幡「……シルヴィで。」

シルヴィア「え、ええ！？は、八幡くん、今は昼間だよ／＼／＼／」

八幡「はあ……俺は別に真昼間から盛るつもりはねえよ。こういう事だ。」ギョッ

シルヴィア「あ……………／／／」

俺はシルヴィの方に寄り、そのまま抱き締めた。これくらいなら大丈夫だろう。

シルヴィア「えへへ……うん、確かにこれも私という選択肢だね。」
八幡「そういう事だ。」

シルヴィア「じゃあ早く居間に行こつ！この《獅鷲星武祭》では八幡くんと一緒に居られる時間が増えるからね♪」

——居間——

シルヴィア「♪♪♪」

いつものようにシルヴィは鼻歌を歌いながら俺の肩に頭を預けている。その間俺は何をしているかというと、シルヴィの頭を撫でているか、シルヴィの鼻歌を聴いているかだ。

ここにいる時くらいは《星武祭》の事を忘れて、のんびり過ごす事になっている。

シルヴィア「ねえ八幡くん、まだお昼の4時だけど何しよつか？夕飯作るには早いし……」

八幡「そうだなあ……普通なら《獅鷲星武祭》の事を考えるんだろうが、この家にいる間はそういうのは無しにしているからやる事あんまりないな……食材とかどうだ？まだあるのか？」

シルヴィア「うん、まだ残ってる。お買い物しても冷蔵庫の中の食材がかさばるだけだからやめておいた方が良くもね。」

《星武祭》の事をあまり考えないようにするっていう提案は良いと思ったが、いざ実行すると何もやる事がなくて困るな。

シルヴィア「……八幡くん、キスしよつか！」

八幡「……突然何言い出すんだよ?」

シルヴィア「やる事がないのなら何か意味のない事をすれば生まれるんじゃないかなあって!」

八幡「それってシルヴィがただ単にやりたいだけなんじゃないのか?俺もやりたくないって言ったら嘘になるが。」

シルヴィア「でしょでしょ?だからさ、試しにやってみない?」

シルヴィ「……俺もそうだが、キスすると止まらなくなる時あるよね?その状態にならない事を祈るよ?」

八幡「……分かった。最近あまりキスしてなかったからな。この状態だからやりやすいな。」

シルヴィア「そうだね。じゃあ八幡くん、どうぞ♪」

八幡「俺からするのか……まあ良いけど。」

そして俺たちはいつものように口づけを交わした。俺は一応目を瞑っているが、シルヴィがどうしているかは分からん。

薄目で見てみると、シルヴィも目を閉じていた。10秒くらいして互いの唇を離すと、シルヴィの目は潤いを増していて頬を赤く染めていた。少しボーツとしているが、ジッと俺の方を見つめていた。

あつ、これはスイッチ入ったパターンだ。

シルヴィア「ねえ八幡くん……次は大人のキスをしよう?／／／／／

／

八幡「雰囲気は飲まれの早くないか?」

シルヴィア「そんなのいいから。八幡くん、キスしようよ……私と八幡くんの舌がいっぱい絡み合う凄いキスしようよ……／／／／／

この状態になると普段では言わないような恥ずかしい言葉も使うからな。あつ、下ネタは使わないからね?シルヴィはそんな子じゃあ

りません。

八幡「……もしそれをやったとしたら、俺もしばらくは止まらないぞ？ いいのか？」

シルヴィア「うん……むしろその方が良い。私の事をギューって抱き締めながらキスして？」

八幡「……分かった。」

そして俺の記憶はここで途絶えた。ただ一言二言言うのであれば、時間が2時間経過していたのと、口の中が異様に甘かった事だ。

そして顔を真っ赤にしているシルヴィが可愛い。

多分だがシルヴィは酒で酔ってても、次の日にもその記憶が残ってるパターンの人だわ。

変わらない幸せな日常

八幡 side

や、ヤバイ……シルヴィとのキスに夢中になり過ぎて時間を見てなかった。もう2時間も経ってる。時間が過ぎるのって早い……いや、シルヴィとのキスが恐ろしいんだ。うん、そうだ。そうに違いない。そんな風に思ってる今も進行形でキスはしているんだけどな。だってマジで止めらんねえんだよ。でも、そろそろ止めて夕飯の準備しなくちゃいけない。シルヴィも正気に戻さないと。恥ずかしさで顔真っ赤にするだろうけど。

八幡「んん……」

シルヴィア「んむっ……ちゅっ……れろ、んんう……ぱあ……／／／／／」

キスも20秒に1回のペースで息を整えてからまた再開するといふハードな感じだった。肝心のシルヴィは全然キスに飽きていないようだった。

シルヴィア「八幡くん……もつとやろうよお／／／／／」

八幡「シルヴィ……時間を見てくれ。俺も出来ればしたいが、2時間もしてる。これ以上はマズい。」

シルヴィア「……2時間？」

そしてシルヴィは正気に戻り、俺の予想通り顔を真っ赤にしながらベットの毛布にくるまった。

これは……暫くそつとしておこう。

――1時間後――

八幡「シルヴィー、ご飯出来たぞー。そろそろそこから出て来いよ。飯食えないぞ？」

シルヴィア「……………」

八幡「……寝てないよな？」

シルヴィア「お、起きてます……」

声が竦つて聞き取りづらいが、なんとか聞けた。

八幡「そうか……ご飯できてるから出て来てくれないか？」

シルヴィア「うう……恥ずかしいよぉ／＼／＼／＼／」

八幡「大丈夫だ。別に何も言わないから。それとも布団引き剥がした方がいいか？」

シルヴィア「……………」

すると布団がモソモソと動き、シルヴィーが姿を現した。顔は真っ赤なままだが。

シルヴィア「……………／＼／＼／」

八幡「よし、出て来たな。」ナデナデ

シルヴィア「子供扱いしないでよ／＼／＼／」

八幡「じゃあ撫でるのやめるか？」

シルヴィア「……………やだ／＼／」

八幡「だろうな。ほれ、食卓に行くぞ。飯冷めちゃうから。」

シルヴィア「……………うん／＼／」

——食卓——

やっと出てきてくれた。料理作ってる時もいつ来るかって気になってたから少し遅くなった。俺たちが一緒の時は風呂はランダムだが、常に一緒に過ごす決めているから、勿論飯も一緒だ。

八幡「落ち着いたか？」

シルヴィア「うん、もう大丈夫。ゴメンね取り乱しちゃって。」

八幡「気にするな。そういう時あるからな。」

俺は最近あんまりないけど。

シルヴィア「今日も美味しそうだね。手伝ってあげらなかったのは本当にゴメンね。」

八幡「顔も出せないくらい恥ずかしかったんだろ？もういいって。お前が美味いつて食ってくれるならそれで良い。」

シルヴィア「……うん、分かった。じゃあ食べよつか！じゃあ八幡くん、音頭をお願いします！」

八幡「あいよ、いただきます。」

シルヴィア「いただきますーす！」

シルヴィ……メチャメチャ笑顔で食べてくれてるな。料理人にとってこれが一番の幸せって奴なのかね？

――30分後――

2人「ご馳走様でした。」

シルヴィア「ふう、今日も美味しかったよ。また腕を上げたんじゃない？」

八幡「毎日料理はしてるからな。でも最近は似たようなのばっかだから新しい料理も試さないとな。」

シルヴィア「新しい料理か……すぐに出てこないなあ。」

八幡「今ところは、シーフードカルパッチョだけなんだよな。まあ存在してる料理なんだが。」

シルヴィア「でも、作った事ないんですよ？」

八幡「ああ。」

シルヴィア「なら挑戦あるのみだよ！最初はナビでやりながら作って、後から自分流にアレンジしたら良いんだよ！」

八幡「そうだな。いざとなれば界龍に残飯処理係が2人いるからな。」

シルヴィア「2人？3人じゃなくて？」

八幡「学園祭の日から陽乃さんは勝手に上がるようなことはしなくなってきたな、むしろ手伝ってくれるから助かってるくらいだ。」

シルヴィア（私のあの言葉が効いてるのかな？だから手伝ってるのか？）

八幡「だからってわけじゃないが、クッキーとか紅茶とかも普通に作ってやれるな。まああの人と話するのは割と好きだからな。」

シルヴィア「じゃあ星露と『雷戟千花』は？」

八幡「ん？一切変わってない。」

シルヴィア（あの時、2人にもそういえば良かったかな……：どうなんだろう？）

八幡「あの2人に関してはもう諦めてるからいい。将来のためにも味見役を引き受けてもらう事にしてる。」

シルヴィア「将来？」

八幡「忘れたのか？お前料理屋したいって言ってただろ？そのためにも修行中だ。」

シルヴィア「……真面目に考えてくれてたんだ。」

八幡「当たり前だ。どう解釈すりや適当になれんだよ？彼女の願いを蔑ろに出来るわけないだろ。」

シルヴィア「……嬉しいなあ。じゃあ将来のためにも、八幡くんには『獅鷲星武祭』を頑張ってもらわないとね！」

八幡「おう、任しとけ。」

控室での一時

八幡 side

《獅鷲星武祭》2日目。

昨日の1回戦で勝ったチームは次の本戦に向けて幸先の良いスタートを切れたと言ってもいいだろう。その幸先の良いスタートを切れたのは、

チーム・エンフィールド

チーム・ルサルカ

チーム・ジャステイス

この3チームだった。同学園同士の対戦が2つ程あったが、そこは序列の差と実力、連携の差もあつたのだろう、序列が上の方が勝ち点を取った。

さて、今日の俺たちの予定だが、チーム・ヒュノステイエラと対戦する事になっている。相手がどんなチームかは調べてある。今のところは不足なところはない。

そして俺が率いるチーム、帝龍の様子なんだが……

陽乃「八幡くん、試合まであと何分？」

セシリー「待ちくたびれちゃったよー。」

暁彗「……………」

虎峰「雪ノ下姉、セシリー、お行儀が悪いですよ。」

いつも通りの様子です。全く緊張感のないベスト？なコンディションです。

八幡「後30分です。ていうか会場にはさつき来たばかりじゃない

ですか。《鳳凰星武祭》に比べて大分我慢弱くなりましたね？陽乃さん。」

陽乃「だってさー、《鳳凰星武祭》の時はタッグ沢山いたから退屈凌ぎになってたけど、今回の《獅鷲星武祭》に至っては9チームしか居ないじゃない。退屈だー。」

セシリー「鍛錬しようにもさー、師父が八幡の言うことを聞けつて聞かないからさー。まあチームリーダーの言う事は聞くけどねー。」

八幡「それを言うなら俺だって虎峰の鍛錬に付き合いたかつたんだからな。こいつを気に入った純星煌式武装がどんなのかも気になるしな。」

虎峰はつい最近、純星煌式武装の適正検査を受けて【通天足^{つうてんそく}】の適合率が80%以上で貸し出し許可が降りたから、ずつと試運転をしていたのだ。

虎峰「でもいまだに慣れませんね。この煌式武装の代償がスピードの軽減なので、代償が効いてきたところが勝負どころだと思ってます。」

八幡「元々スピードあるんだから充分いけるだろ。」

虎峰「僕以上のスピードを持っている八幡に言われても全く嬉しくないのですが……」

フォローしたつもりが、無意味だったか。

セシリー「でもさー、あたしたちにとっては羨ましいよねー。虎峰はあたしたち道士と違って完全な拳士だからねー。あたしたちは一応《魔術師》《魔女》の素養があるから星仙術があるから純星煌式武装に嫌われちゃってるからねー。」

俺…………一応魔術師なんだけど……

陽乃「私も使えちゃうから使えないんだよねー。少しでも魔法の類が使えちゃうと使えないんだから嫌になっちゃうよねー。」チラチラ

八幡「なんで俺をしきりに見ながら言うんですかね？」

虎峰「だって八幡は《魔術師》でありながら使えてるじゃないですか。」

八幡「いや、まあそうなんだけど……俺の場合は意気投合したつていうか、気に入られたつていうのが大きい。」

セシリー「大抵の純星煌式武装がそうだと思うけどー？」

あつ、そういやそうだわ。

暁彗「……………そろそろ戦いも近い。集中した方が良からう。既に試合開始まで10分を切っている。」

この場で落ち着いているのは暁彗だけだな。元々そうなのもあるが、この場でこうして落ち着いていられるのは見習いたいな。

さて、もうそろそろ選手入り口に行かないとな。

八幡「んじゃ、行くか。」

虎峰「はい！」

セシリー「おっけー。」

陽乃「あいあいっさー！」

暁彗「……………御意。」

俺たちの初戦だからな、びしつといくか。

界龍の初戦

――――

梁瀬『さあ皆様、お待たせ致しました!!こちらシリウスドームでお送りします、《獅鷲星武祭》Aグループの予選第2回戦がいよいよ始まります!注目は何と言っても、聖ガラードワース学園と並んで優勝候補筆頭の界龍第七学院のチーム・帝龍!!ティエロンそしてそれに挑むのが星導館のチーム・ヒュノスティエラ!!昨日の試合ではチーム・エンフィールドに敗れましたが、今回の試合で巻き返しなるかが注目です!さあそれでは両チームの登場です!!まずは西方から、チーム・ヒュノスティエラ!!』

終『昨日の試合ではチーム・エンフィールドに敗れましたが、全員が冒頭の十二人ですので個々の実力は低くない事は確かであります。ただ、例年とは違い、界龍の生徒の実力がどれだけ伸びているのかも気になりますであります。』

梁瀬『では、その界龍からの刺客を紹介致しましょう!聖ガラードワース学園と並んで優勝候補の一角、チーム・帝龍!!おおっとおゝ!!?比企谷選手のあの格好はまさか…………【万有天羅】でしょうか!』

八幡が身に付けていたのは、白い着物に黒と黄色のラインが入った羽織のようなもの。

終『他の選手にはそれらしい装飾が施された衣類がない所を見ると、チームリーダーである事を示しているような感じでしょうか?それにしても風格がありますね。まさに帝王でありますね。』

八幡「別に着る意味なんてないと思うんだがな。」
セリリー「気持ちの問題だつてー。それに師父の話だと今までにそれを着たのって歴代の【万有天羅】だけなんだつてー。」

八幡「そんなもの俺に着させるなよ。」

軽い言葉を叩きながらも八幡たちはステージへと降りていった。

陽乃「それでさ、本当に暁彗1人だけでいいの？まあ楽勝なんだろうけどさ。」

八幡「暁彗がやりたいって言ってるんだ。やらせてやるさ。一応このチームのサブだからな。」

相手が煌式武装を取り出した所で準備が出来た。

梁瀬『両チーム準備が出来たようです！それではお送りします！
《獅鷲星武祭》Aグループ第2回戦!!バトルウ……スタアートオー!!!』

合図と共に相手のリーダーである【氷屑の魔術師】^{フリームスルス}が仕掛けて来た。
先手必勝という言葉を体現したような攻撃の速さだった。

終『いきなりの素早い攻撃ですね。チーム・エンフィールドに敗北した分、此処では必ず負けられない戦いになりますから、攻撃できる時に攻撃すると言った感じでありますな。さて、チーム・帝龍は無事でしょうか？』

八幡「やれやれ……まさかいきなり憑霊を使う羽目になるとはな。」

憑霊……堅牢陣・大蛇丸

煙が晴れてくると、八幡たちの姿が見えてきた。しかも誰一人として一歩も動いた様子はなかった。

梁瀬『でたああああ!!比企谷選手お得意の姿を変えて様々な能力を顕現する技が出ました!!今回は防御用の技でしょうか!?』

柊『おそらくそうであります。比企谷選手を中心に横へと広がっているところを見ると、全員を守っていると見ていいでしょう。』

八幡「暁彗、後ろの方は大丈夫だ。お前は前にいる奴らに格の違いを見せつけてやれ。」

暁彗「……………御意。」

暁彗が歩き出し、徐々にチーム・ヒュノステイエラへと向かっていった。勿論、そのままにしておくつもりなど毛頭ないチーム・ヒュノステイエラだが、遠距離攻撃が全く当たらなかった。

東「くつ……はあああ!!」

劫燐「はああああ!!」

ここで動いたのが、序列6位【倒鬼】東薙茨と序列11位【羅刹月花】劫燐だった。2人同時に攻めれば、如何に界龍の序列3位でも分が悪かったのだろう。

だが、その考え自体が甘かった。

暁彗「フツ！」

東「ガハッ!!」

劫燐「ガッ!!」

攻めていった2人はことごとく暁彗の繰り出された強烈な拳と蹴りの一撃だけで戦闘不能にされてしまった。東の方はギリギリのところまでガードしたが、あまりにも凄まじい威力だったため、意味を成さなかった。

そして暁彗はすぐにチーム・ヒュノステイエラの方へと向き直り、歩き始めた。残されたチームは3人。だがこの状況で暁彗の相手をするには無謀な状況だった。近接タイプが1人と遠距離タイプが2人の状況ではすぐにやられてしまうと考えることも分かることであろう。

オニール「俺が突っ込むから援護を頼む！」

ネストル「おい、やめろ！」

セドリック「ダメだ！最良の手段はもうこれしかない！」

ネストル「くっ！」

オニール「俺は星導館学園の序列3位【輪蛇王】のファードルハ・オニール！いざに勝負!!」

ドゴオ!!

オニール「グハア!!」

暁彗「……………自らが名乗ったならば、相手が名乗るまで待つのが礼儀というものだ。」

暁彗はオニールが突っ込む前に鳩尾に一撃を入れた。吹っ飛びはしなかったものの、身体が一瞬間に浮くほどの威力。

暁彗「……………これ以上ゆっくりやっても時間の無駄だろう。素早く終わらせることにしよう。」

2人「っ!!」

暁彗がこう口にした瞬間、2人には戦慄が走った。あまりにも実力に差があり過ぎる。同じ冒頭の十二人でもここまで違うのかと思っていた。

最後はヤケであつても、2人同時に能力を使って暁彗に飛ばした。だが、そんなものは暁彗に意味を成すことはなく、2人は能力が切れた瞬間を狙われて戦闘不能になった。

『End of duel』

梁瀬「……………はっ!し、試合終了!!勝者、チーム・帝龍!!まさかの1対5の戦いで勝利してしまいました!!」

終「彼、武暁彗選手は現【万有天羅】の一番弟子でありますからね。チームリーダーの比企谷選手も彼なら一人で充分だと思つてやらせたんでしょう。』

こうして、界龍の初戦は完勝で終わった。

※勝利後の心情

陽乃 side

はぁー……暁彗がやりたいつて言ったから1人でやらせたけど、つまらない試合だったなー。

だって暁彗1人に手も足も出ないんだよ？最高序列が4位なのに瞬殺つて……呆れちゃったよ。

んー、でも八幡くんが来てからは界龍は強くなったのは間違いない事だし、そりや私だつて強くなつてると思う。あれ？これって私たちが悪いのかな？強くなり過ぎちゃったのがいけないのかな？

ともあれ1回戦は勝ったからいいか。この次はチーム・エンファイールだから、少しだけ楽しみ♪私と戦うのは誰かな？

陽乃 side out

虎峰 side

流石は大師兄です、相手を寄せ付けない圧倒的な強さでした。それにしても大師兄、すごく手を抜いてましたね。僕でも目で追えるくらいですから、全くスピードを出してなかったです。

それに相手を、攻撃する際の動き。あれが一番加減されていました。意識を刈り取ってはいたものの、壁に激突させる程の力は出さなかったようですね。まだ試合は残ってますからその温存でしょう。

次は同じ星導館でも、去年の《鳳凰星武祭》で本戦に残った程の実力者もいます。気は抜けませんね。明日は今日以上に気を引き締めなければいけませんね。

虎峰 side out

セシリ side

やっぱ大師兄強いなー。いつも八幡に稽古つけてもらってるだけはあるねー。大師兄の見せ場になったけどー、次は今日みたく簡単ではないよねー。

なんとなく色の濃いメンバーが集まってるんだよねー。1位の【叢雲】2位の【千見の盟主】5位の【華焰の魔女】元1位の【疾風迅雷】もう1人は序列外だけど、《鳳凰星武祭》で準々決勝まで来る程だから、実力はあるんだろうねー。

多分陽姐も同じこと思ってるんだろうなー。明日が楽しみー。

セシリ side out

暁彗 side

全力を出したわけではない。ある程度だすつもりだったが、まさか半分も出さずに終わるとは……これも鍛錬の成果だろうか。

日頃から比企谷八幡に稽古をつけてもらってるからだろうか、相手の動きが遅過ぎる上に単調過ぎる。

ふっ、比企谷八幡の非常識が私にも移ってしまったのかもしれないな。だが比企谷八幡の非常識さは私程優しいものではない。

比企谷八幡よ、卿自身が非常識で出来ているようなものだからな。

暁彗 side out

八幡 side

暁彗の奴……星辰力を込めて拳を打たなかったのは分かるが、星仙術も陰陽術も使わなかったのは手抜きが過ぎると思うんだがな……

いや、まあチームが勝ったから文句なんて無いんだけどな。暁彗でアレなら、他の奴に行かせても何ら問題は無かった気がするな。特に陽乃さんを出したら、すげえ楽しみながら相手を倒していくんだろう

な。

うん、考えるのはもうようそう。さて、明日はチーム・エンフィール
ドだな。注意するのは【叢雲】と【千見の盟主】の純星煌式武装だ。他
は【華焰の魔女】と沙々宮の遠距離攻撃、刀藤の剣術くらいだな。
これからいそがしくなるな。

他人からの目線

八幡 side

2日目の星武祭も終了した。思ったよりも早く終わっちまったな。まあ初戦の俺たちが2分、次に戦ってたチーム・ランスロットが5分だったから物凄いいあつという間だったな。

一応時間に沿って試合してたから良いんだが、Cグループのチーム・ルサルカはグループ予選で2戦2勝したから本戦出場確定となった。クインヴェールにとっては喜ばしい事だろうな。

んで、残りの本戦出場権があるチームは、俺たち帝龍、星導館のエンフィールド、ガラードワースのランスロットとジャスティスってところか……俺のグループでは負ける気はしないが、問題はBグループだ。葉山が何をしたのか未だに分からん。

何かをしたような仕草もなければ目を泳がせてもいなかった。《八咫の眼》を使っても分からなかった。まあ、明日の試合、フェアクロフさんが遅れをとることはないと思うが……

??? 「……………考え事かしら、八幡？」

八幡 「ん？」

正面の方には、レヴォルフ黒学院序列1位で生徒会長のオーフェリアがいた。

八幡 「ああ、まあな。明日の試合についてだ。」

オーフェリア 「……………八幡があんな風に考え込むなんて珍しいわね。もしかして、ガラードワースのチーム・ジャスティスの事かしら？」

……なんで分かるの？

八幡「……当たりだ。」

オーフェリア「……………やっぱりそうなのね。でも疑問に思うのも最もね。私の学院でもそんな生徒いないもの。」

八幡「なあオーフェリア。《獅鷲星武祭》1日目のBグループ予選第1回戦は見たか？」

オーフェリア「……………ええ、見たわ。」

八幡「お前の感想でいいから詳しく聞かせてくれないか？そこにベンチがあるから座りながら話してくれ。」

俺たちは右横にあった休憩エリアで一息入れつつ、話を進めた。

八幡「それで、お前から見て葉山はどう映った？」

オーフェリア「……………私もそこまでよく見ていたわけではないから分からないのだけど、これだけははつきりと分かったわ。」

オーフェリア「……………彼の動きは中途半端なのよ。」

八幡「中途半端？どういう事だ？」

オーフェリア「……………これは例えなのだけど、八幡の動きが速くても技術が3流以下って事よ。」

八幡「……………つまり、中身が無いってことか？」

オーフェリア「……………そうね。試合後の彼の動き、ガルグイユ「水龍」を倒した後の動きなのだけど、明らかに重心がズレていたわ。どの学園の冒頭の十二人も、着地だけで重心がズレることなんてまず無いわ。」

俺はオーフェリアの言っていた所、試合の終わった後の映像を見た。確かに葉山は綺麗に着地できていない。

八幡「……………確かに。」

オーフェリア「……………何だか全てのギアがチグハグな車みたいな感じね。まるで制御が出来ていないような、加減を知らない感じがする

わ。」

八幡「成る程な……」

大分違うものだな……こんなにも違うものか？ 見てる光景は一緒なのに、感じた事がこれだけ違うとはな……

オーフェリア「……………私が彼の試合を見て感じた事はコレくらいね。参考になったかしら？」

八幡「ああ。充分過ぎるくらいだ。俺なんて何も分からなかったからな。この情報は役立つ。」

オーフェリア「……………なら良かったわ。」

この情報、フェアクロフさんにも教えといった方がいいな。

オーフェリア「……………ん。」

八幡「ん？ 何だ？」

オーフェリア「……………頭を撫でて欲しいわ。」

……………まあ一応役立つ情報を提供してくれたわけだしな。このくらいは構わないか。

八幡「ほいほい。」 ナデナデ

オーフェリア「ん……………」

俺には普通の女の子にしか見えないが、世間一般の目線では恐ろしい《魔女》っていう認識なんだよな。感情をあまり表に出さないからか、冷たい奴だっと思って思われているんだろうが、俺にはこうして甘えてくる。

オーフェリアにも、いつかは良き理解者が出来てくれると良いな。

オーフェリア「……………ありがとう八幡、もういいわ。」

八幡「おう。じゃあ今日はありがとな。次会えるのはいつになるかわからんが、その日までな。」

オーフェリア「……………ええ。その日を楽しみにしているわ。でも、そんなに遠くないと思うわ。」

八幡「ん？どうしてだ？」

オーフェリア「……………私は八幡が《獅鷲星武祭》で優勝するって信じてるもの。その時は表彰の舞台上で【戦律の魔女】と一緒に貴方の雄姿を見ているわ。」

……………照れ臭いな／＼信じてくれてるのは素直に嬉しいが、オーフェリアにこういうのを言われるのはいまだに慣れないな。

八幡「ああ、ありがとな。」

オーフェリア「……………ええ、それじゃ。」

八幡「ああ。」

そして俺とオーフェリアは、各学院（俺はシルヴィアの家）に向かっていった。

八幡 s i d e o u t

オーフェリア s i d e

……………やっぱり八幡と居ると生活に幸せを感じるわ。彼といると、
“生きている”という実感が出てくるわ。前までそんな事どうでも
よかった私とは随分な違いね。

ころな「あつ！お帰りなさい会長！」

オーフェリア「……………ただいま戻ったわ、ころな。」

プリシラ「お帰りなさい、オーフェリアさん！」

今の生徒会は発足してあまり時間は経ってないけど、仲良くやれていると思うわ。この2人は自分から手伝いたいと言ってきてくれた

から。

オフエリア「……………【グラヴィシーズ覇潰の血鎌】はどうかしら？」

ころな「今のところ順調だそうです！この調子なら今年中には修復出来るそうです！」

オフエリア「……………そう、良かったわ。」

ころな「会長、何か良い事ありました？」

オフエリア「……………何故？」

プリシラ「なんと言いますか、入ってきた時から雰囲気は柔らかかったんですよ。それに、少し笑顔でしたし。」

……………笑顔。

オフエリア「……………そうね、私にとって良い事があったわ。でも、コレは内緒ね。」

ころな「き、気になります……………」

プリシラ「そうですね……………」

こんな風に過ごせるのもあなたのおかげよ、八幡。

ガラードワースの2チーム

アーネストside

今日の試合では無事に勝利を収められた。次の試合、葉山くんたちとだけど、油断は出来ない。いや、むしろ一番注意しなくてはいけないチームだろうね。さつき比企谷くんから貰った情報、とても役に立つ。この情報を基にして作戦を立てれば勝率も上がるだろう。

ケヴィン「アーニー。【夢幻月影】はなんて言ってたんだ？」

アーネスト「ん？ああ、葉山くんについてだよ。何でも彼の動きで分かった事があつたらしくてね。メールで送ってきてくれたんだよ。」

レティシア「彼は何を考えているんですの？敵である私たちに情報を与えるなんて。」

アーネスト「ここら、そんな事を言ってはいけないよ。葉山くんを不安材料に思っているのは、このチーム全員の総意じゃないか。敵とはいえ、彼は協力者だよ。此処に居ないとはいえ、失礼な事を言うてはダメだよ。」

ライオネル「しかし、ブランシャールの言う事にも一理ある。いずれ戦うかもしれない相手に情報を渡すなど……」

ケヴィン「まあ【夢幻月影】も考えがあるんだろうよ。【義剣】チームよりも【聖騎士】チームと戦いたいっ！とかよ。」

彼らしい考え方ではないね。でも、そうだとしたらこちら側としても嬉しい限りだね。

ライオネル「相変わらず口と態度の軽い奴だ。だが、その意見も捨て切れんな。」

パーシヴァル「比企谷さんは自分から相手を不利にするような事は

しない方です。彼と接すれば分かります。」

レティシア「随分彼と仲良くなつたようですね？」

パーシヴァル「連絡先の交換をしましたので。」

……もしかして、最近紅茶が美味しいのはそれと関係しているのかな？

ケヴィン「おっ！【夢幻月影】の奴、ついうちの【優騎士】をも墮とし『ドオンツ!!』に……」

パーシヴァル「次は眉間です。」

ケヴィン「殺すのを躊躇しない一言、全くありがたくねえよ。しかも嘘に聞こえないんだけど？」

ライオネル「お前がバカな事を言うからだ。」

レティシア「はあ……今度は横の方に穴が空きましたわ。もう少し引き金を重くしてもらえると助かりますのに……」

何時もの風景に戻ってしまったね……

アーネスト「んっ！皆その辺にして、会議を始めるよ。明日は本戦出場権がかかっている重要な戦い。チーム・ランスロットの誇りと名誉にかけて負けられない一戦になる。それは分かってるかな？」

レティシア「勿論ですわ！」

ケヴィン「おう！」

ライオネル「承知済みだ。」

パーシヴァル「はい。」

アーネスト「宜しい。では会議を始めよ。」

比企谷くん。君からもらった情報、決して無駄にはしないの事を誓うよ。

アーネスト side out

葉山 side

葉山「どうしたんだい皆？なんだかあまり元気ないよ？」

チームメイト1「いや、逆に葉山くんはどうしてそんなに余裕なんだ？」

葉山「え？」

チームメイト2「明日はこの学園のエース、チーム・ランスロットと戦うんだよ！俺たち連携とかの練習とか沢山したけど、勝てる気なんてしないよ！なのになんで葉山くんはそんなに余裕なんだよ！」

チームメイト3「そうだよ。私たちがこんなに不安なのに、葉山くんだけ……」

葉山「いや、別に俺も緊張感がないわけではないよ？あまりガチガチになったところを皆に見られたくないだけであって、他意なんて全くないよ。」

チームメイト4「でもそれって、葉山くんが序列10位だから言える事だよな？」

葉山「……どういう事だい？」

チームメイト4「だって葉山くんは冒頭の十二人で、私たちは序列外。そんな風にしていられるのだってそれなりの場数を踏んだからじゃないの？強くなった葉山くんに私たちの気持ち分かるの？」

チツ、めんどくさい奴らだ。所詮お前らは囷だ。そんなお前らがそんなこと気にしてどうするんだよ。

葉山「分かるって言ったら嘘になるね。でも、俺だって最初は序列外だった。それは俺だけじゃないよ。会長たちだって最初は序列外からスタートしてるに決まってるじゃないか！」

チームメイト2「そりやそうだけだよ……」

葉山「俺は序列外だから勝てないなんて決めつけてないし、なんなら優勝を目指してる！だからこのチームを組んだんじゃないか！皆は違うのかい？」

チームメイト1「確かに優勝は目指してるけど、相手はランスロットだぞ？」

葉山「それがどうだっていうんだい？戦うまで分からないじゃないか！」

チームメイト4「……葉山くんは勝てるって思ってるんだね？」

葉山「ああ、勿論。」

チームメイト4「……分かった、一先ず信じる。パターンはこの前と一緒にいいの？」

葉山「ああ、それで良いかな？」

チームメイト4「分かった。じゃあ皆そろそろ帰ろう。頭使い過ぎちゃったからお腹空いちやった。甘い物食べたいなあ。」

はあ……何が甘い物食べたいだ。余計な知恵を使わせるな。記事にもあったが、お前らは所詮囹であって肉盾だ。それ以外は何の役にも立たない

捨て駒だよ。

さて、明日の戦いも、頑張って体を張りながら僕を守ってくれよ？

待ち時間

八幡 side

はあ……何でよりもよって最終試合が全部同時なんだよ。Aグループの俺たち帝龍とチーム・エンフィールドがシリウスドーム、Bグループのガラードワースの2チームがカノープスドーム、そして最後のCグループのチーム・トリスタンとチーム・赫夜がレグルスドームという分け方だった。

これじゃあBグループの試合が見られねえじゃねえか。何で同時進行なんだよ、こんちくしょう！

虎峰「どうしたのですか、八幡？」

八幡「なんで急に同時刻に始めたのか疑問に思っただけ。今まで少し時間空けてから次の試合だったのに。」

陽乃「確かにそうだよ。今までの2試合みたいに時間帯ズラしてやった方が、お客も全部見れて嬉しいと思うのに。」

運営側の本戦に出る奴らの情報を漏らさないようにするためか？

セシリー「考えてもしようがないんじゃない？あたしたちは戦うだけでしょー？」

虎峰「それはそうですが……」

セシリー「だったら余計な事は考えない！考えたってしようがないんだからさー。」

……それもそうだな。

晓彗「……………して、比企谷八幡。今回の作戦は1対1が基本だ

が、苦戦になりそうな場合はどうするのだ？」

八幡「ああ、それなんだが、なるべく五角形の形を意識して戦って欲しいと思ってる。」

セシリー「五角形？」

八幡「ああ。それなら左右どちらかに呼ばれた方の支援にすぐ向かう事が出来る。あつ、それから俺と暁彗は対極の位置にする。どちらかというと俺たちは支援する方に回ると思うからな。」

暁彗「……………承知した。」

陽乃「へえ、面白い事考えるね。」

八幡「俺と暁彗はこの場所をやります。後は3人どの位置でやるか決めてください。」

陽乃「じゃあ私は此処かな。その方が虎峰ちゃんとセシリー的には良いでしょ？」

セシリー「じゃああたしは陽姐と大師兄の隣ー。虎峰が八幡と大師兄の隣に行きなよー。」

虎峰「分かりました。八幡、大師兄、もし苦戦になりそうな時はお願いします。」

八幡「ああ。」

暁彗「……………うむ。」

よし、これで作戦の方は大丈夫だな。

陽乃「それで、誰が誰を相手するの？」

八幡「そこは誰でも良いんだが、戦ってみたい相手とかいるか？」
セシリー「ならあたしさー、あの青髪の子と戦ってみたいんだよねー。雷とプラズマ、どっちが強いか試してみたいしねー。」

虎峰「僕は【疾風迅雷】と手合わせをしてみたいです。」

暁彗「……………【叢雲】を希望する。」

陽乃「おつ、皆決まってたんだねー。じゃあ私は【華焰の魔女】かな。八幡くんはリーダー同士の戦いをお願いねっ♪」

まあ相手は俺と同じ純星煌式武装使いだから、当然っちゃあ当然

か。

八幡「分かりました。じゃあ自分の相手は覚えておいてくれよ。忘れる奴はいないと思うが。」

虎峰「むしろいるんでしょうか？」

華麗なツツコミありがとう。

セシリー「でもさー、同時スタートっていうのも割と暇だねー。過去のデータはもう見ちゃったし、やる事が精神統一かニユースを見るくらいしかないよー。」

陽乃「本当だねー。退屈。」

虎峰「仕方ありませんよ。ここは試合の時間になるまで我慢ですね。」

八幡「散歩でもできたら良いんだが、もうそんな時間でもないからな。」

それ以外にやる事……チームメイトと話す、呪符の整理、祢々の手入れ（でも道具が無いから却下）、精神統一、これくらいだな。

暁彗「……………時間になるまで待つのが一番だろう。」

八幡「……………そうだな。」

陽乃「そうだね。」

セシリー「暇つぶしになるものないですしねー。それが一番ですよねー。」

虎峰「では、待ちましょうか……」

後
1
0
分。
」

予選最終試合

――――

梁瀬『さて皆様!!席の方はこちらのシリウスドームでよろしかったでしょうか!?もしよろしくないようでしたら、早急に他の会場へとお急ぎ下さい!!こちらで行われる試合は星導館学園のエースと界龍第七学院のエース、所謂トップチームの戦いです!!もし、観戦したい試合が違いましたら、聖ガラードワース学園のチーム同士が戦うカノープスドーム、クインヴェール女学園のチーム・赫夜と聖ガラードワース学園のチーム・トリスタンが戦うレグルスドームへとお急ぎ下さい!!』

梁瀬『まずはご紹介から!こちらのシリウスドームで実況をさせて頂きます、梁瀬ミーコとお!』

チャム『どうも、解説のファム・ティ・チャムです。』

梁瀬『さて、今回はこちらの方で解説という事ですが如何ですか?』
チャム『そうっスね。やっぱりなんといってもチーム・帝龍っスね。チームの総合力もそうだけど、予選2回戦で見せた界龍の序列3位【覇軍星君】の試合はまさに圧倒的だったから、この試合で他の選手がどんな動きをするのかも見所っスね。』

チャム『星導館のチーム・エンフィールドだけど、チームワークは抜群で良いチームだけど、チーム・帝龍にどこまでついていけるかどうかっスね。去年の《鳳凰星武祭》で格上だって事は分かっていると思うから、厳しい戦いになるんじゃないかな。』

梁瀬『成る程、それは見所満載で楽しみになってきましたね!!では両チームのご紹介といきましょう!!先ずはこのチームから!1回戦は順当な勝利を得ました!今日も勝つことが出来るか!?星導館学園のチーム・エンフィールド!!』

先頭にクローディア、左右の斜め後ろに綾斗とユリス、そしてその

後ろに紗夜と綺凜の五角形で現れた。

梁瀬『チームリーダーのクロード・ディア・エンフィールドをはじめ、序列1位【叢雲】、序列5位【華焰の魔女】、後ろの2人も《鳳凰星武祭》で準々決勝に残った実力者です！』

チャム『こうしてみると豪華なチームっすね。どの距離にも対応出来る良いチームっすね。』

梁瀬『では次に参ります！予選2回戦では1人が圧倒！その勢いそのままこの試合も勝ち越せるか!?チーム・帝龍!!』

同じ隊列で八幡が先頭、左右に暁彗と陽乃にと後方にセシリーと虎峰だった。

梁瀬『リーダーの比企谷選手は序列4位【魔将天閣】の雪ノ下選手と共に《鳳凰星武祭》を制した猛者であり、予選2回戦では、チームの参謀である武暁彗がチーム・ヒュノステイエラを圧倒！その他にも、序列6位【雷戦千花】、序列7位【天苛武葬】という、界龍の中でもトップクラスのメンバーが揃っています!!』

チャム『風格のあるチームっすね。流星は今波に乗っている界龍っすね。』

八幡「予選最後か……まあ、相手にとって不足はないな。」

クロード・ディア「厳しい戦いになるでしょう。気を引き締めていきましょう。」

梁瀬『さあ、両チーム出揃いました!!』

チーム・エンフィールドは前衛、中衛、後衛に分かれたスタンダードなスタイルだった。

チーム・帝龍は2回戦同様に全員横一線に並んでいた。

梁瀬『両チーム共に準備が出来たようです！それではお送りします
！
《獅鷲星武祭》予選Aグループ最終試合！バトルウ、スタートオ
!!!
』

八幡「影霧。」

突然ステージは黒い霧に包まれ、辺りが真っ暗になった。

そして暫くすると、1対1の五角形に分かれた陣形になっていた。

八幡「こうして戦うのは初めてだが、お手合わせ願うぞ。」

クロードディア「……まさか私のお相手が貴方なんて思いもしませんでしたよ。」

暁彗「……………【叢雲】、手合わせ願う。」

綾斗「は、はい……………」

陽乃「君と私の炎、どっちが強いかな？」

ユリス「炎の星仙術使いか、相手にとって不足はないな。」

虎峰「界龍第七学院高等部3年の趙虎峰と申します。」

綺凜「星導館学園中等部3年の刀藤綺凜です。よろしくお願ひします。」

セシリー「君の煌式武装と私の雷、どっちが強いかな勝負だねー。」
紗夜「っ……」

こうして、予選の最終試合が始まった。

予選最終試合②

八幡&クローディア side

八幡「それで、俺たちはどうする？戦ってもいいが、自分の校章が切られた時点でチームの負けになるが？」

クローディア「私としては戦いたくないのですが、チームを引つ張る者がそれでは誰もついてきませんからね。お相手させて頂きます。」

クローディアは自身の純星煌式武装《パンⅡドラ》を展開した。赤と緑の刃が現れ、中心のウルムⅡマナダイトが不気味に光っていた。

八幡「そうか。なら俺もリーダーとして、つまらん事は出来ないな。」

八幡も鞘から祢々切丸を抜刀した。

クローディア「では、参ります。」

八幡「ああ。」

八幡&クローディア side out

陽乃&ユリス side

陽乃「炎の星仙術使いかあ……私ってそんなイメージなの？」

ユリス「……私が見た中では、紗夜と戦ったあの場面が特に色濃く残っていてな。炎を操るイメージが強い。」

陽乃「そう？色々使えるけど君が希望するなら炎の戦いにしても良いんだよ？」

ユリス「ハンデを与えているつもりではないんだろうが、遠慮して

おく。それで勝ったとしても勝った気にはなれないからな。情けは無用だ。」

陽乃（へえ……まあ確かに今のは情けみたいな感じだったかな。）

陽乃「分かったよ。それじゃあやろつか。」

陽乃「金剛たる鉄身もって災悪を防がん。急急如律令」

4枚の呪符を持って唱えると、陽乃の手足が鉛色になった。

ユリス（あの能力、体の一部を硬化させるものだったな。《鳳凰星武祭》準決勝で見たが、厄介には違いないな。接近戦は無理か……）

ユリス「咲き誇れ！六弁の爆焰花！」^{アマリリス}

陽乃「5個かぁ……何個かはズラしちゃうけどいつか！風流し。」

陽乃は右脚と両手に星辰力を纏わせてその場で踊っているかのよう
に回転しながら、襲い掛かってきた火炎球をコントロールしていた。
陽乃は3つコントロール出来たが、残りの2つはというと……

陽乃「セシリー！そっちに炎の球飛んで行ったからー！」

ユリス（【魔将天閣】……それは押し付けにも過ぎるぞ。）

陽乃&ユリス side out

セシリー&紗夜 side

セシリー（うわー陽姐ってば私に押し付けてきたよー。しかも今戦いの真っ最中なのにー。）

紗夜（っ！好機！）

紗夜「バースト。」

セシリ「ええ!?今アー!?ちよつとーもうちよつと待つてよー!」
紗夜「待たない。これも勝負。」

セシリ「(だよねー。)」

左から炎の球、右からは波動砲と挟まれていた。

梁瀬『おおつとお、ウオン選手が火炎の球と波動砲に迫られています!!これはピンチです!!』

チャム『空中には逃げ場はないから、これを避けるのは難しいんじゃないかな。』

セシリ「(…………あたしの雷戟じゃ炎は防げても、あれは無理かなー。あーあー…………これはやられちゃったかなー。空中にはにげばないしねー。)」

セシリ「カツコ悪い負け方だなー……………」

ドガアアアアアン!!!

炎と波動砲のぶつかり合いにより、大きな爆発が起きた。

梁瀬『こ、これは凄まじい爆発です!ウオン選手、流石に戦闘不能か!?!』

すると、爆発の中から勢い良く黒い人影が現れた。よく見ると、人を抱き抱えているようにも見えた。

セシリー「は、八幡……」

セシリーは八幡に助けられていた。

しかも八幡の姿は変わっていて、八咫鳥の憑霊を纏わせていた。

梁瀬『おおっとお!! ウォン選手、比企谷選手に抱えられ、窮地を脱しました!! 比企谷選手、これは超ファインプレーです!!!』
チャム『あの中に飛び込んでいくのにも相当な勇気がいるのに、迷いがなかったっすね。』

セシリー「は、八幡! どうして!? 自分の相手は!?!」

八幡(分身)「それは俺の本体がやってる。俺は影で作られた分身、影分身だ。あっち見ろ。」

そこには八幡とクロードイアが戦っている光景が映っていた。

セシリー「で、でもあたし、助けてなんて言っていないのにどうやって……それに作戦じゃあ八幡とあたしは……」

八幡(分身)「同じ場所で仲間として戦ってんだから問題ないだろ。それに、仲間を助けるのに理由とか作戦とか必要なのか?」

八幡(分身)「俺が助けたかった、それだけだ。」

セシリー「っ! / / /」

八幡（分身）「取り敢えず、今は戦いに集中しろ。陽乃さんには後で叱つとけ。俺も手伝ってやるから。」

セシリー「う、うん／＼／」

八幡「それと、口調に伸びが無いぞ。余裕がない時のお前ってそんな感じなんだな。」

セシリー「か、からかうなー！」

八幡「よし、それなら大丈夫だ。頼んだぞ。」

そう言つて八幡は黒い靄になつて消えた。

セシリー（……助けたかった、かあー。虎峰の時と助けられた感覚が大分違うなー。）

セシリーはそう思いつつも自分の頬を叩き、再び紗夜の方へ向かつて歩いた。

セシリー「よおーし！さつき不意打ちされた分は高く値くんだからねー！」

予選最終試合③

セシリー&紗夜 side

セシリー「さーてー！八幡に助けられた分は、君を倒す事で償わせ
てもらおうよー！」

バチバチバチッ！

セシリーの右脚を中心に全身に雷を纏った。

紗夜「……なら、私も本気で行く。41式煌型粒子双砲ヴァルデン
ホルト。」

紗夜が煌式武装を展開すると、背中には複数の機翼に腕には大型の
粒子砲を装備して早々に、先端部分から粒子を極限にまで圧縮した粒
子砲をセシリーに向けて構えた。

紗夜「バースト。」

2つの粒子砲がセシリーに向けられた。

セシリー「……光雷、はあっ！」

セシリーの全身に纏わりついていた雷が脚へと集中して、脚が光つ
ているように錯覚する程の眩い光を放っていた。セシリーはその脚
を迫り来る粒子砲にめがけて蹴りを放った。

だが、もう一方の粒子砲は放って置かれたまま……そのままセシ
リーの元へと直撃する5Mの所まで来ていた。

セシリー（陽姐の技、借りるからねー！）

セシリー「風流し！」

セシリーはもう片方の脚に星辰力を溜めて、手を床につけて両脚を回転させた。すると、2つの粒子砲はセシリーの脚についていくかのよう誘導されていた。

紗夜「あの技……」

紗夜も思い出したようだった。去年の星武祭で陽乃に粒子砲を受け流された技だという事に。

セシリー「うおりやあー!!」

受け流して自身の武器としたセシリーは、粒子砲を紗夜に向けて蹴り上げた。しかも最初に蹴りを放った方の粒子砲は青色に黄色が混ざっていた。

紗夜「っ！これはマズい。」

紗夜は両腕で身体をガードするかのようにクロスさせた。

だが、紗夜は気付かなかった。1つの粒子砲はまだしも、もう1つの粒子砲は雷によって強化されているという事を。

しかもその2つが同時に直撃したため、紗夜は大きく壁の方へと勢い良く吹っ飛ばされてしまった。

セシリー「ふうー、陽姐にこの技を教わっておいてよかったよー。
これがなかったら間違いなくここでやられていたかもねー。」

少しすると、紗夜が壁から出てきたが、身体が雷で痺れているのか、
崩れるように仰向けになって倒れていた。

紗夜「う、うう……」

セシリー「動けない相手にトドメを刺すのは気が引けちゃうけど、
痺れが取れて動かれても困るからねー。」

綺凜「紗夜先輩っ!!」

虎峰「行かせません!」

綺凜「くっ!」

綾斗「紗夜っ!」

暁彗「……………卿の相手は私だ。」

綾斗「っ!」

近くにいた綾斗と綺凜が救助に行こうとするが、それぞれの相手を
している2人がそれを阻止する。

セシリー「こんな形でごめんねー。」

セシリーは踵で紗夜の校章を砕いた。

梁瀬『沙々宮紗夜、校章破壊!!チーム・エンフィールドこれで4人になってしまいましたー!!さあ、5対4でどのような戦いを繰り広げるのでしょうか!』

チャム『でも、帝龍は1対1の陣形にしてるから、セシリー選手がそのまま動かないって可能性もあるっス。』

セシリー(解説の言う通りだよー。私の役目はこれで終わり。1対1の戦いが終われば、後は待つだけだからねー。警戒しつつのんびりと待ちますかー。)

セシリー「……………身体大丈夫ー?」

紗夜「……………身体はまだビリビリ。」

セシリー「……………膝貸してあげよつかー?」

紗夜「……………頼む。」

セシリー(まあ、だよねー。)

セシリー&紗夜 side out

虎峰&綺凜 side

綺凜「紗夜先輩……………」

虎峰「仲間の心配をするのは構いませんが、僕の相手を忘れないでくださいね。」

綺凜「……………分かってます。ただ、1つだけ疑問に思った事があります。あの2人の試合が終わった時です。」

虎峰「……………奇遇ですね。僕もです。」

2人「何で膝枕して（されて）るんでしょうかね？」

予選最終試合④

虎峰&綺凜side

虎峰「…………同じ事を考えていたようですね。」

綺凜「あの光景を見れば誰しもそう思います。」

虎峰「そうですね。あちらの2人は大丈夫そうですね、そろそろよろしいですか？」

綺凜「はい。」

綺凜（この人のスピード、凄まじいものでした。足腰の強さが特に強くなければあのような爆発的な瞬発力は生まれません。私も速さには自信はありますが、正直あれを見せられては自分が止まって見えてしまいます。）

虎峰（八幡から剣術を使う方の対処は教えられましたが、その初めての相手が星導館の「疾風迅雷」とは厄介ですね。早々に決着をつけなくてはいいけませんね。でも……）

綺凜「参りますっ！やああああ!!」

虎峰「金剛たる鉄身もって災悪を防がん。急急如律令」

虎峰は剛鉄符を2枚取り出して唱えると、腕は鉛色と化して綺凜の剣戟を捌いたり受け流したりしていた。刀身が身体に触れていないという事は、虎峰は綺凜の動きが見えているのだろう。

虎峰もそのままやられているだけでなく反撃。受け止める刀が一本である為、受けながら攻撃が出来るのだが、綺凜も虎峰の攻撃を上手く躲していた。

この状態が続き、膠着状態になっていた。

暁彗&綾斗side

綾斗「天霧辰明流中伝・十とびあざみ昆薊！」

暁彗「……………フツ！」

綾斗「くっ！」

一方で綾斗と暁彗の戦いは、完全に綾斗が押されていた。負傷してはいないものの、暁彗の力になす術がない状態だった。

綾斗（くっ……………皆のおかげで姉さんの封印を1つ解除出来たのに、まだこんなに強い人がいたなんて……………比企谷さんといい、界龍はとんでもないよ。）

綾斗（識の境地でこの人の動きは分かるけど、次に来る攻撃が速すぎて躲すのがギリギリになる……………比企谷さんはこんな凄い人に勝ったんだね……………）

暁彗「……………試合中に考え事とは。」

綾斗「あ、いえ……………比企谷さんの事を考えてて。よく貴方に勝てたものだ……………」

暁彗「……………そうだな。比企谷八幡の事を軽視していたわけではなかった。だが、試合の終わる少し前、勝利を確信していた私の驕りだったのだろう。あの時から私は負けていた。」

暁彗「今も比企谷八幡に追いつくために鍛錬を積んでいるが、私よりも遥かに成長している。私も武器術を学んだ方が良いのだろうか？」

綾斗（……………貴方が武器を装備してしまったら、勝てる自信がもつと無くなります。）

暁彗「……………長くなってしまったな。始めるとしよう。」

綾斗「ええ。」

どちらも構えを取り直し、いつでも攻撃、防御に対応出来るようにしていた。

綾斗はいつでも踏み出せるような姿勢で構えていた……………のだが、

綾斗「フツ!!」

綾斗が後ろの方へと飛び出していった。

綾斗「綺凜ちゃん!!」

暁彗「……………」

暁彗（……………仲間を助けるために目の前の敵を放るか……………それなら私も追いかけぬ訳にはいかない。）

暁彗も綾斗と同じ方向へと駆けた。

虎峰「っ!【叢雲】っ!」

綾斗「天霧辰明流中伝・夜紋塵!!」
やもんじん

綾斗は走りながら体を捻らせ、剣を振るってきた。虎峰は間一髪のところまで受け流したが、まだ綺凜がいた。

綺凜「やあああ!!」

暁彗「眩め 封 閉させ 急急如律令」

綺凜「っ!? か、身体が……」

斬りかかろうとした綺凜だったが、暁彗の機転により虎峰は難を逃れた。

虎峰「……助かりました、大師兄。」

暁彗「……………いや、私も卿に押し付けてしまった。すまない。」

虎峰「い、いえそんな! 勿体無いお言葉です!」

綾斗「綺凜ちゃん、大丈夫かい?」

綺凜「は、はい。すみません。校章切れませんでした。」

綾斗「気にとることないよ。2対2にはなっただけど、キツイのには変わらないね。」

虎峰「仕掛けて来ないのですか? なら、先手必勝です!」

虎峰は持ち前のスピードで綾斗の方へと向かった。

綾斗「はっ! しまっぐあ!!」

虎峰の飛び蹴りを腹部へと直撃されてしまい、壁に激突した。虎峰はそのまま綺凜にも攻めていった。

綺凜「くっ!」

虎峰「まだ行きます!」

虎峰の奇襲攻撃が余程効いたのか、綺凜の動きが悪くなっていた。綾斗の方は暁彗が向かっていた。

綾斗「ぐっ！……まさか飛び蹴りがここまで痛いなんてね……」

暁彗「……………続けられるか？」

綾斗「続けなくちやいけないですからね。」

暁彗「……………そうであるな。」

今の綾斗は【黒^{セル}炉^{II}の魔剣^{ベレス}】を持っていない。虎峰の飛び蹴りにより何処かへ飛ばされてしまったのだ。故に体術だけで暁彗を凌がなければならなくなった。

綾斗「天霧辰名流組討術・^{みかづち}壬卦槌！」

暁彗「っ！…………ムンツ！」

綾斗は暁彗に星辰力を込めた拳を打ち込もうとしたが、その技を逆手に取られ、カウンターを受けてしまった。

綾斗「ぐっ…………うう……」

暁彗「……………あまり動けぬ相手に手を出したくはないが、これも戦い。すまないが決めさせてもらう。」

綾斗「くっ…………」

綾斗が暁彗によってトドメを刺されそうになっていた。チーム・エルフイルドの主戦力ともいえる綾斗がやられてしまえば、チームの士気は大きく下がるだろう。

暁彗「……………良い戦いだった、【叢雲】。」

綺凜「刀藤流剣術・はしば喰み!!」
暁彗「っ!？」

横の方から綺凜が投げた日本刀が暁彗を襲った。当然の事ながら、
暁彗はその刀を受け止めた。

だが、その刀は校章を2つに切って落としていた。

綺凜も綾斗を助けるために剣を投げ、隙を作ったため、虎峰によって校章を砕かれた。

梁瀬『刀藤綺凜、武暁彗、校章破壊!!この激しい戦いの中刀藤選手、
見事に【覇軍星君】を破りました!!』

チャム『自身も校章を破壊されたけど、この1人目は大きいっスね。
チームの士気が大幅に上がると思うっスよ。』

暁彗「……………ふつ、また同じ過ちを犯したか。私もまだ修行が足りないな。」

暁彗は持っていた刀を綺凜の元へと持っていた。

暁彗「……………其方の刀だ。先の一撃、見事だった。」

綺凜「は、はい!!」

暁彗「……………此処にいては他の者の邪魔になる。ステージの端に移動せぬか？」

綺凜「で、では仲間のいる所まで一緒にしても、よ、よろしいでしょうか？」

暁彗「……………構わない。」

この時、暁彗は思っていた。

このような女性は少し苦手だと。

予選最終試合⑤

綾斗 side

綺凜ちゃん、俺のために……綺凜ちゃんに助けてもらった分はちゃんと働かないとねっ！

綾斗「……いつまでも苦しんでいる場合じゃ、ないっね！」

虎峰「大師兄が倒されたのは誤算でしたが、我々の作戦に変わりはありません。次は僕が相手です、【叢雲】。」

綾斗「次は【天苛武葬】が相手か……俺ってくじ運がないのかな……」

綾斗&虎峰 side out

八幡&クローディア side

八幡「……不意打ちとはいえ、まさか曉慧がやられるとはな。刀藤もやるな。良いメンバーじゃねえか。」

クローディア「はあ……はあ……お褒めに預かり……はあ……光栄です。」

八幡とクローディアの戦いでは一見剣を受け合っているかのようにも見えたが、未来視の能力で八幡の動きは読めても、一撃の重さまでは読めなかった。その為、一度目や何度か受けただけでも全身に何十キロの重りを叩きつけられたかのような重量感に襲われていた。

一方の八幡は涼しい顔をしていた。クローディアの剣を刀で受け流したり、受けていたりしていたが、一回一回の攻撃の重さは軽かった。八幡が気をつける部分といえば、自分の反応が弱い所に付け入れられないかだけだった。

八幡「試合とはいえ、やはり女を切るのは気が引けるな。直接というわけではないが、女には刃を向けたくないのが正直なところだ。まあ、今まで攻撃しておいてなんだがな。」

クローディア「……………確かに、刀で攻撃していた方が言う言葉ではありませんね。」

八幡「正論だな。まあそんなわけだ、俺は今から刀は使わない。つまり拳だけで戦うってわけだ。」

クローディア「……………刀を抜きにしたとしても貴方は相当強いと思うのですが？」

八幡「剣だけで序列2位なんて務まらねえよ。行くぞ、【千見の盟主】。」

剣と刀の剣戟は終わり、今度は剣と拳のぶつかり合いが始まろうとしていた。

八幡 & クローディア side out
オーフェリア side

——レヴオルフ黒学院・VIPルーム——

ころな「ほえ〜！やっぱり凄いですね、【夢幻月影】の比企谷さんは！

オーフェリア「……………そうね。純星煌式武装所有者を相手に格闘だなんて考えられないわ。これは界龍だから出来る戦い方ね。」

ころな「でも、この前の戦いでもそうだったんですけど、会長はなんで界龍の戦いだけこちらに赴くのですか？」

オーフェリア「……………八幡を出来るだけ近くで見たいからよ。それがどうかした？」

ころな「い、いえ！会長は随分比企谷さんの事を気にしておられる様子だったので……………ただ気になっただけなんです。」

オーフェリア「……………そう。」

……八幡が負けるだなんて全く想像もしてない。というより出来ないわ。私も八幡に勝てるとは思えないもの。

オーフェリア「……ところでころな、貴方は八幡の動きどう見えているかしら？」

ころな「え？そ、そうですね……本気というよりも全力という感じ……でしょうか。なんというか、まだ力を出していない感じがします。」

オーフェリア「……よく見ているのね。」

ころな「？じゃあ……」

オーフェリア「……ええ、八幡は本気を出していないわ。でも全力は出しているわね。」

ころな「でも、どうしてなのでしょう？」

……貴方の本気を出す相手は、もう決まっているのよね、八幡。

私には分かるわ、貴方が今本気で相手をしたい人……それは彼なのでしょう？

オーフェリア side out

八幡 & クローディア side

クローディア「……サポートが入らないだけで、ここまで辛いとは……思いませんでした。」

八幡「俺たちとの勝負を見越してチームワークを上げていたんなら詰めが甘かったな。俺がやろうと思っていたのは、1対1の戦いだな。1対複数は想定してないんでな。まあ、1回戦は暁彗がやりたいてって言ったから、やらせたけどな。」

クローディア「……はあ……はあ……」

八幡「その状態だとすぐにトドメさせちゃいそうなんだが、構わな

いか？」

クロードディア「……悪足掻きでもしましょうか。簡単にはやられないので。」

八幡「……そうか。なら……躲せよ？」

八幡が詠春拳の構えから違う構えに変えた。腰を落として右脚を後ろ、左足を前において左腕の拳を自分の目線より少し下の辺りてボクシングの構えのような形にしていた。右腕は右の脇腹に添えるような形にしていた。

クロードディア「っ!!？」

ドゴオツ!!

クロードディアの純星煌式武装が未来を予測してからほんの1秒で八幡はクロードディアに攻撃を仕掛けていた。それ程までに八幡の速さが異常である事を示していた。

クロードディアはというと、八幡の攻撃を「パン!!ドラ」で受け止めたとはいえ、まともに受けてしまった。その威力は剣で受けていても、直接受けたかのような錯覚に陥る程だった。

そして校章の前で剣を交差したからか、剣で潰されたかは分からないが、クロードディアの校章が砕けていた。

梁瀬『試合終了!!勝者、チーム・帝龍!!これによってチーム・帝龍は本戦出場が決まりました!!』

シリウスドームからは歓声が響き渡った。

チャム『最後の比企谷選手とエンフィールド選手のやり取りだけ

ど、クローディア選手の防御は間に合ってたけど、比企谷選手の攻撃があまりに強かったから剣で受けるには少し無理があつたんだと思うっす。』

八幡「まずは予選通過だな。」

陽乃「さっすが八幡くん！シビれたよう！」

虎峰「お見事でした！」

セシリー「流石はリーダーだねー！」

暁彗「……………見事だった。」

こうしてチーム・帝龍は本戦出場の切符を手にした。

試合後

八幡 side

ああ、終わったあ………これで俺たちも本戦出場決定だ。本戦っていつても2回しか戦わんけど。これから本戦に向けて作戦会議と行きたいところだが、変に内容を詰め込み過ぎても頭がパンクするだけだから、今日はそんな無粋な事はしない。今俺がすべき事、それは………

八幡「それで？何か言いたい事は？」

陽乃「……………ごめんなさい。」

……………説教だ。

今現在、俺たちチーム・帝龍は控え室に集まっていた。戦いが終わった後の慰労を含めた反省会も終わった後がこれだ。陽乃さんは床に正座させている。

セシリー「は、八幡、あたしは八幡のおかげでこうして無事だったんだから許してあげてよー。」

八幡「あのなあ、いくら流れ弾が飛んで行ったから伝えたとはいえ、仲間が危険な目に遭ったんだぞ。それを咎めないでどうする？」

セシリー「で、でもさー……」

陽乃「……………」

セシリー「元気じゃない陽姐見てると、すんごい気持ち悪いんだよー！こんなの陽姐じゃない！」

八幡「落ち込んでるからだろ。」

セシリー「ううー八幡！今回は私に免じて陽姐を許してよー！陽姐だつてしたくてやった訳じゃないんだから大目に見てあげてよー！」

八幡「……………」

やはり仲が良いだけはある。セシリーにとつては姐が付くくらいだからな。こんな陽乃さんは本当に見たくないんだろうな。

八幡「……はあ、分かったよ。今回はこれでいい。でも陽乃さん、今度からは気をつけてくださいね。」

陽乃「……うん、気をつける。」

我ながら甘いのは抜けきれないようだ。

八幡「それにしても虎峰、お前よく【通天足】使わなかったな。刀藤はかなり速い動きをするから苦戦すると思っていたんだが……」

虎峰「なるべく情報は伏せておきたいので。それに、八幡のおかげであれくらいの動きでしたら肉眼でも追えるので。」

それってサラッと俺の事褒めてるのか？褒めたように聞こえなかったんだが？

晓彗「……………私は修行の足りなさを痛感した。相手を倒したと気を抜いていた。それがあの結果だ。あれでは2年前と同じだ。」

八幡「2年前っていうと、俺と戦った試合の事か？」

曉彗「……………卿との戦いで学んだつもりだったが、あれでは学んだとは言えない。再び鍛錬に励むとする。」

八幡「今は星武祭中だ。鍛錬は程々にな。」

無いと思うが、それで怪我したら元も子もないからな。軽めの運動くらいにして欲しい。

陽乃「それで明日は1日空くけど、どうするの？作戦練る？それともオフ？」

八幡「オフにします。詰め込み過ぎても良い事はないので。各自の自由にします。鍛錬をしたい人は軽く動かす程度だな。」

虎峰「それでは僕、何をしたらいいのか分からないのですが……」

八幡「頑張って見つけろ。」

虎峰「物凄い押し付けじゃないですか……」

だって俺がお前の趣味知ってるわけねえじゃん。

八幡「そういう訳だ、今日もお疲れさん。明日は1日オフ。星露がくじを引いて相手が分かり次第作戦を伝える。帰りも各自だな。」

奮い立つ騎士たち

八幡 side

解散したはいいが、星武祭終了の合図がまだならない。本来ならもうなつてもおかしくない時間帯だが、幾ら何でも5時になってまで星武祭が長引くのはおかしい。何かあったのか？

シリウスは問題なく終わったが、他の会場が終了の合図を出さない限りは1日の星武祭は終わらない。なのになだまってないって事は終わってねえって事だ。

中継の方を見ようにも試合はもう終わってる。記者会見とも考えたが、こんなに長引くとは思えない。△△社がいれば話は別だが。ニュースも俺たちとクインヴェールのチームが本戦出場決定した事しか報じてないって事はカノープスドームのガラードワース同士の試合で何かあったんだろう。

p i p i . p i p i .

八幡「ん？」

何だ？メール？……っ！フェアクロフさん。

To. アーネスト

From. 比企谷くん

ニコースではまだ報道されてないけど、僕たちはチーム・ジャステイスに敗北してしまった。君が折角提供してくれた情報を無駄にしまつて申し訳ない。君さえ良ければ今から話がしたい。

カノープスドームのチーム・ランスロットの控え室で待つてるよ。

……嘘だろ？ランスロットが負けた？

俺は信じられない思いを抱きながら、カノープスドームへと全速力で向かった。

……カノープスドーム・選手控え室前……

……来たは良いが、どうやって接すりやあいんだよ。俺は本戦出場決定であつちは2位のこれから1枠を掛けて戦うチーム。言葉が思い付かん。

考えても仕方ねえ。取り敢えずチーム・ランスロットと会うしかない。それからだ。

俺はインターホンを鳴らし、返答を待った。返答は帰つてこなかったが、扉が開いた。そこには明らかに暗い雰囲気包まれたチーム・

ランスロットがいた。

アーネスト「……やあ比企谷くん、待っていたよ。」

八幡「……………俺、ここにいない方が良いんじゃないんですかね？」
アーネスト「いや、いてくれないと少し困ってしまうよ。正直、今のままでは、次の復活戦で1勝も勝てなくなるかもしれないからね。」

……………確かに、今のランスロットを見ただけでも分かる。コンデিশョンが悪いなんてものじゃない。言葉では表せない程に最悪だ。

レティシア「……………【夢幻月影】、本戦出場おめでとうございます。」
ケヴィン「お前を待ってる間、そちの戦いを見せてもらってんだけど、あんなに強えんだな。勝てる気がしねえよ。」

ライオネル「……………見事な戦いだった。」
パーシヴァル「……………お疲れ様でした。」

こういうところは騎士といったところだな。

八幡「それで、どうして俺を此処に？さっき言った理由だけなわけありませんよね？」

フェアクロフさんが俺をただ単に呼ぶためだけにあんなメールを送ってくるはずがない。きっと何かあるんだと思う。

重苦しい空気の中、口を開いたのはパーシヴァルだった。

パーシヴァル「……………私たちはまだ負けたと思っているわけではありませんが、比企谷さんが私たちに情報を提供してくれたように、私たちも実際に戦って得た情報を貴方にお渡ししたいと思いましたので。」

八幡「……………それについては大いに助かるのだが、いいのか？敵に塩を送るような事をして。」

アーネスト「ああ、構わないよ。これは我がチームの総意でもあるからね。君さえ構わないのであれば、聞いてほしい。」

……フエアクロフさんの目がいつになく真剣だ。戦いの時もこういう目なのだろう。

八幡「……分かりました。その話、聞きます。」

俺はチーム・ランスロットのメンバーが今日の試合であった葉山の動きについての説明を聞いていた。聞けば聞く程謎は深まる一方だった。

？ 時間停止能力ではない。

？ ドーピングを使った形跡はない。（検査済）

？ 煌式武装にも目立った効果無し。

？ 制服にも仕込みは無し。

これなら普通に強くなったとみれる。だからこそ謎だった。コレだけの短期間でこんなに強くなれるとは思えない。俺が言えた口じゃないが。

だが、気になる点もあった。

？ 着地の重心がブレている。（確認済）

？ 動きが機械的。

？ 動きが単調で分かりやすい。

？ 動きが速く、鋭く重い攻撃。

？ 動きを読んでいるかのような反射神経の良さ。

チーム・ランスロットが得た情報は一人一人が思っていた事だったが、どれも葉山の動きに当てはまるものだった。

アーネスト「どうか？僕たちも彼の動きを見れるだけ見てから戦いに出たんだ。けど、それ以上に彼は複雑なようだ。」

八幡「途切れ途切れな情報ですが、ありがたいです。でも、まだ決定打に欠けますね。」

アーネスト「つまり？」

八幡「他にもまだ何かある……って事です。」

アーネスト「映像からでは何か分からないのかい？君の眼はかなり良いと聞いていたんだけど？」

八幡「この『眼』は映像では効果を発揮しません。生で見ないと意味が無いんですよ。だから、奴の正体を看破出来るとしたら……」
レティシア「本戦で最初に当たるか、決勝に当たるかのどちらかですわね。」

八幡「一応俺たちは葉山が何かをしている前提で話を進めているが、奴が何もしていないって可能性もある。それも理解しているか？」

ライオネル「……序列上位の我々の攻撃を捌ける程の腕前ならば納得はできるが……」

八幡「結局の所、葉山と実際に戦ってみないと分からないって事だ。」

ケヴィン「つー事は、葉山ともう一回戦えば良いんだよね？今度こそやってやろうじゃねえか。」

ライオネル「珍しく気が合ったな。私も同意見だ。」

パーシヴァル「……私も容赦はせずに彼に銃を向けます。」

レティシア「……アーネスト。」

アーネスト「ふむ……ならば僕もこうして落ち込んでなんていられないね。明日と明後日の試合に向けて早速打ち合わせにしよう。比企谷くん、今回はありがとう。おかげでチームは明日までに立ち直れそうだよ。」

八幡「それなら良かったです。」

チーム・ランスロットも大丈夫そうだ。2位のチーム・エンファイ
ルドとチーム・赫夜とは厳しい戦いになりそうだが、今の調子なら突
破するだろう。

4人の意志

――――

「チーム・ジャスティス本戦出場、おめでとう!!!」

ガライドワースの食堂で黄色い歓声とクラッカーの良い発砲音が響き渡った。そう、ガライドワースの食堂ではチーム・ジャスティスの祝勝会が開かれていた。

「いや、会長のチームが圧勝すると思ってたのに、まさか勝っちゃうなんてね！」

「うんうん、流石は今波に乗ってる葉山くんが引っ張ってるチームだね！」

葉山「はははっ、そんな事ないよ。」

「なあ葉山くん、今度俺の模擬戦付き合ってくれよ。どんな風に戦ってるのか参考にしたいんだ。」

「ああ、ズルい！私も私も！」

葉山が1人話題に入っている中、残りのチームメイト4人は、微妙な顔をしていた。それもそうである。予選の2回戦はどれも葉山が決めた勝利だからである。自分たちは2回戦も活躍するところを葉山に奪われたのだから。

今回の主役とはいえ、完全に葉山だけが祝福されている形になっていた。

「……葉山くん、皆ゴメン。私たち今日は会長たちの相手で疲れちゃったから、もう休んでも良いかな？」

「ああ、俺たちも少し疲れててさ。ほら、葉山くんに時間作る為に足止めするのも、結構体力使うから新明後日に向けて万全の状態にしとき

たいんだよ。」

葉山「そうかい？それなら僕は止めないよ。今日もありがとう。また新明後日の本戦もよろしく頼むよ。」

「「お疲れ様〜!!」」

そして葉山以外のチーム・ジャスティスは食堂を後にして校内の庭にある噴水に集まっていた。

ーガラードワース校内・中庭噴水ー

「……みなつ実夏、どう思う？」

実夏「どうもこうもないよエレン。あんなのが私たちの戦い方なの？もうやだよ。」

チームメイトの近ちか佐さ実夏とエレン・ミエストラはこの戦い方にウンザリしていた。

エレン「だって……この記事、私たちの事ではないとはいえ、内容が酷すぎるよ。」

「ああ、エレンの言う通りだ。これじゃあ俺たちが葉山くんの顔を立たせるために体を張っているようにしか思われない。ジョーもそう思うだろう？」

ジョー「ああ、記者は葉山くんの方に集中してるけど、近佐やミエストラ、グリーンや俺たちの立場がまるで無い。」

エンデル・グリーンとジョー・クリフトンも女子2人と同じ考えだったようだ。葉山の扱いの悪さに不満が抑えきれなかったのだろう。

記事の内容はこうだった。

『チーム・ジャスティス奇跡の勝利!!葉山隼人、奇跡を魅せたが、作戦に難あり。』

『ジャスティス勝利！だが戦術は変わらずの肉盾戦法。』
『勝利はしたが、ガラードワースらしくない戦法。』

エレン「……ねえ、私もうやめたいよ。」

ジョー「正直言つて俺もだ。これじゃ何のために戦つてるのか分からねえよ。毎回毎回同じ扱いなら、俺もチームを降りる。」

エンデル「2人もか？俺もそうだけど、1番にチームを抜けたいつて思つてるのは実夏だろうな。」

実夏「なんでそう思うの？」

エレン「昨日のやり取りを見てそう思わない方がおかしいよ。」

きのうのやりとり、チーム・ランスロットと戦う前の日の夜の事だった。

※詳しくは『ガラードワースの2チーム』後半にて

実夏「ああ、あれの事。だってそうじゃない。本来なら緊張しててもおかしくないのに、1人だけ平然としてるんだもの。つかかりたくもなるよ。」

エンデル「あれには俺も心がスカツとなった。でもどうするよ？俺はこの戦術を変えてもらいたい。もし変えられないのなら、俺はチームを抜ける。願いも別にいい。こんな方法で優勝しても嬉しくなかねえし。」

エレン「うん……私もかな。葉山くんに誘われたのがきっかけだし、そこまで叶えたい夢があるわけでもなかったから。」

実夏「じゃあ皆は、葉山くんが戦術を変えてくれない場合はチームを離れるって事？」

エンデル「ああ。」

エレン「うん。」

ジョー「まあ、そういう事になるな。そういうお前はどんなんだ？まあ、答えなんて分かりきつてるけどよ。」

4人中4人の意見が一致した。葉山が作戦を変えない限りはこのチームの解散を意味する事になる。《獅鷲星武祭》はチーム戦、人数が2人以上いなければチームとして成り立たないため、2人以下の場合には失格扱いになるのだ。

1人：個人

2人：タッグ

3人以上5人以下：チーム

というルールがある。

実夏「じゃあ明日にでも葉山くんに言ってみようか。もしダメだったらチームを抜けるって事で。」

「「おう！（うん！）（ああ！）」」

こうして葉山以外のチーム・ジャスティスは新たな意志を抱いていた。

明日の予定

八幡 side

チーム・ランスロットが負けた……今でも信じられない。フェアクロフさんが率いて過去に連覇を成し遂げた程の強豪チーム。今回の星武祭では間違い無く最強と言ってもいいチームだ。そんなチームが、今回初の星武祭出場チームに敗れるなんて誰が予想した？

誰も予想していないだろう。むしろ誰もがランスロットの勝利を確信していたに違いない。俺だってそうだ。

だがその確信は敗北という形で現れた。周りもそうだが、一番辛いのはこれまでチーム・ランスロットを率いて戦ってきたフェアクロフさん自身だろう。

あまりにも辛過ぎる……

八幡「……………ただいま。」

シルヴィア「……………お帰り八幡くん。」

笑顔で迎えてくれたシルヴィだが、俺の声量と声の低さで気付いたのか、少し笑顔が曇っていた。

シルヴィア「……………チーム・ランスロット、残念だったね。これまで無敗だったチームなのに。」

八幡「ああ……………けど、フェアクロフさんからしてみれば残念なんてもんじやないだろうな。1年目、2年目と制してきた《獅鷲星武祭》の無敗記録を、たかが初出場のチームに破られたんだからな。こんな屈辱的な事はないだろう。」

シルヴィア「……………うん。」

……ダメだなあ、シルヴィにこんな話をさせるなんて。けど、今くらいはいいか。

八幡「まあ今回の《獅鷲星武祭》は復活戦があるからな。そこで復活してくればチャンスはある。」

シルヴィア「……そうだね。アーネストには頑張ってもらわないかね。八幡くんが決勝で待ってるんだから。」

八幡「ああ、そうだな……うしつ、湿っぽい話はこれでもう終わらだな。」

シルヴィア「うん！八幡くん、本戦出場決定おめでどう！」

八幡「……ああ、ありがとな。」

シルヴィア「さあ入って入って！今日は腕によりをかけて作ったんだから♪」グイグイ

八幡「ふっ……分かったからそんなに引っ張るなよ。」

シルヴィイといふこの時間が、俺にとっての1番の幸せな時間だ。どんな時よりも幸福を感じられる。

——夕食後——

ふう……今日の晩飯も最高だった。シルヴィの奴日に日に料理の腕上げていくから追い抜かれないか心配だ。大丈夫だよな？俺の腕落ちてたりしないよな？

シルヴィア「八幡くん、何考えてるの？」

八幡「いやな、俺の料理の腕落ちてないか心配になつてな。最近作ってないから。作ってないっていうか作れないんだけどな。」

シルヴィア「八幡くん……もしかしくなくても私よりも料理下手になったとか思ってるやね？」

八幡「ん？思ってるが、どうしてだ？」

シルヴィア「もう！あれだけ美味しい料理が作れる人がどうしてそ

んな風に思えるのさ！私なんて八幡くんの足元にも及ばないよ！八幡くんの料理はプロでも舌を巻いてビックリするほどの腕前なんだから、自信をもつ！」

いや、プロが舌を巻いてビックリするほどの腕前なら、俺はどこぞの一流料理店でもう働いてるわ。

シルヴィア「そんなに心配なら、一度八幡くんが作った料理をネットにアップしなよ。それか八幡君の名前を出さずに路上販売するか。」

八幡「ネットは兎も角、路上販売なんてどこでするんだよ………」
シルヴィア「え？スーパーとかこの前行った○○カフェとか！これまで行ったお店と協力すれば何とかなるんじゃないの？」

八幡「………何となく出来てしまいそうな気がしてしまった俺がいる。」

シルヴィア「でしょう？暇な時やってみようよ！」

八幡「俺、あんまり自分が料理が出来るって事を広めたくないんだが？」

シルヴィア「？あれ？じゃあ何でこんな話になったんだっけ？」

八幡「………何でだ？」

よく考えたら本当に何でだ？

シルヴィア「………ふふっ♪まいっか！」コトッ

シルヴィアが俺の肩に頭を乗せてきた。

八幡「………そういやシルヴィ、次のライブとかはまだ決まらないのか？あれからだいぶ経ってると思うが。」

シルヴィア「それなんだけどね、ペトラさんがまた八幡くんと一緒について考えてるみたいなの。それから、他の歌手の人からのデュエット

ト要請もまだ絶えないんだ。」

八幡「……それで？」

シルヴィア「八幡くんと一緒にライブするにあたっての条件は八幡くんから出されてるからそれを守る範囲で場所を絞り込み中。他の歌手に至っては秒をかけずにお断り。『八幡くんがいるのにどうして他の人と歌う必要があるの?』だって。私もそう思う。八幡くん以外と歌うのなんてもう想像できないもん。」

俺もシルヴィ以外と歌うなんて想像出来ないな。俺自身、カラオケとかに行かないというのも理由のうちにあるが。

………今度、陽乃さんとか虎峰連れてカラオケでも行くか。

シルヴィア「明日と明後日はどうするの? 休みなら八幡くんと出かきたいなあ。」

八幡「俺もそのつもりだ。戦いに挑む2位たちには悪いが、折角の2日間だ、有効に使いたい。」

シルヴィア「やったあ♪じゃあさじゃあさ! さっき私が言った路上販売を「やらん。」(ティツ!) あうっ!」

俺は人々に奉仕する為にそんな事をするではありません。

2人の日常

シルヴィア side

八幡『♪♪♪♪♪』

シルヴィア「♪♪♪♪♪」

んーやっぱり八幡くんが去年の10月に千葉で歌ったこの曲『innocence』って良いなあ。八幡くんの心が本当にそう言っているように聞こえる。

自分の歌でも、見直しかで見ることや聴くことはよくあるけど、八幡くんの歌はそれ以上に色々と教えてくれる。こんな感情の出し方もあるんだなあとか、歌詞に自分の思いを重ねたりとか、色んなやり方があるんだと分かった。

え？八幡くんはどこかって？そんなの決まってるよ。

八幡「……………」

私の横で一緒に曲を聴いてるんだよ♪

お風呂沸くまでに少し時間あるから、音楽聴いて待つてようって私が提案したらOKしてくれたんだ！

それに八幡くんはヘッドホンで聴いてるんだ！私もヘッドホンで聴いてるからなんだか嬉しくなっちゃう！

———3分後———

はあ……良い曲だった。

私と八幡くんは同時にヘッドホンを外して首に掛けた。

八幡「俺ってこんな感じで歌ってんのな。しかも飛んだ辺りはマジでビックリするな。影が出なかったらどうかとか全く考えてなかったわ。」

シルヴィア「変な所で抜けてるよね、八幡くんって。」

八幡「いや、普通は考えるだろ。」

シルヴィア「普通の人なら、観客席の方に飛び込んだりなんてしません！」

八幡「…………言われてみりや、それもそうだな。」

反省したならそれで良しっ！

シルヴィア「八幡くんもよく考えたよね！どうして飛ぶっていう発想に辿り着いたの？」

八幡「確か最初はなんか面白い事出来ないかなって考えてたんだよ。思いついたのはライブの日の準備作業の時だ。だからぶっつけだな。」

シルヴィア「いきなり本番であんな事するなんて……八幡くんすごい度胸だね。私だったら無理だよ。」

普通、思いついてもやるのに戸惑っちゃうと思うんだよね。それが普通じゃないかな？

八幡「なんか、やるかつ！みたいな感じになったら簡単に出来た。会場も思った以上に盛り上がったしな。」

シルヴィア「そりやそうだよ。あんな風にサービス？してくれたらああいう風になるよ。逆にならない方がどうなんだろうね？あんな凄い事やつても『ふーん。』って思う人っているのかな？」

八幡「ああ……どうなんだろうな。まあいるんじゃないか？感情出すのが得意じゃない人とかはそれに当てはまるんじゃないか？」

シルヴィア「ああ、そっか！」

確かにそういう人ならあまり驚かなさそうだね。ペンライトを振っているのかも疑わしくなるレベルかな？でも、流石に降ってるよね？

八幡「まあこうして見てると分からんけどな……おつ、ちょうど風呂も沸いたな。」

後ろの方からピーピーって音が鳴ってたからお風呂が沸いたんだね。

八幡「んじやどうする？」

シルヴィア「……………一緒に入っても良いかな？／／／」

八幡「……………ああ、分かった。」

……………一緒にお風呂入るのって、1週間ぶりだけどやっぱり緊張なんて解けないなあ／／／

その後私たちは一緒にお風呂を入れてから少しのんびり寛いで、就寝に着いた。

当たり前だけど、寝る時も私たちはいっしょなのです。

君にも休みを

シルヴィア side

.....んゝ眠れない。

何でだろう？今日はなんだか寝付けない。何かが足りない気がする。でも、電気は消してるし布団にも入ってる。当然だけど、寝る前に歯磨きもしたしキスもした。今もこうして八幡くんと一緒に.....あれ？

あれ!?八幡くんがいない!?今は.....2時!?真夜中だよ!?八幡くんどうしたのかな？家の中にいてくれれば良いんだけど.....

居間にいるかなあ？

シルヴィア「.....八幡くうーん？」コソ

八幡「.....」

八幡くんはヘッドホンをつけながら何かの映像を見ていた。ま、まさか.....エ、エッチなビデオじゃないよね？

八幡「.....やつぱ分からねえ。何でフェアクロフさんのチームが負けたのかなんて見当もつかん。」

私が予想していた事とは違い、八幡くんは今日行われていた《獅鷲星武祭》のBグループ3回戦の映像を見ていた。画面の方に集中し切っているからか、私の声や扉の開く音に気付いていなかった。

八幡「オーフェアとフェアクロフさんから得た情報でも、映像だ

けで理解するには無理があるか……実際に戦うしかねえって事だな。」

シルヴィア「……………」

やっぱり八幡くんは真面目だなあ、こういう事も調べるなんて。でも、私を放っておいて一人でこんな事するのはちよつと頂けないな！それに約束破ってるし！この空間にいる間は、なるべく戦闘系のお話は避けるようにしてるのに！幾ら私が寝てたからってそれはいけません！

八幡くんが動画に夢中になっている間、私は八幡君のためにココアを作ることにした。本当に集中しているのか、私が通ったのも気付かないでいた。

——3分後——

あつ！八幡くんヘッドホン外した！今がチャンス♪

八幡「……………ふう、少し一息いれるか。なんか飲む物……」「はい、ココア。」ん？おお、サンキ……ユー？」

シルヴィア「気付かなかった？」

八幡「……いつからいたんだ？」

シルヴィア「ほんの数分前だよ。だってベッドに八幡くんが居ないんだもん！寝付けないわけだよ！」

八幡「そ、そうか……すまない。」

シルヴィア「全くだよ！八幡くんと居られる時間が出来たから許すけど、夜はちゃんと寝る！コレ大事だよ！」

美容にだってよくないんだから！

八幡「……分かった、悪かったな。」

シルヴィア「そう思っているのならもうやめる！明日はデートなんだから！寝坊したなんて事が起きても許してあげないんだから！」
八幡「それは怖いな……分かった、もうやめてベットに戻るな。」
シルヴィア「うん！よろしい！」

——寝室——

八幡「寝るのは良いんだが、こうもくつつかれると寝にくいと思わないか？」

シルヴィア「？」

八幡「いや、そんな可愛らしく首を傾げられても反応に困るんだが……」

シルヴィア「だってそういう風にしたんだもん♪」

八幡「あざといですよ。でも俺の彼女という事で許しましょう。」

シルヴィア「イエーイ♪」

♪くやつぱり八幡くんは良い匂いがするなあ……なんか凄く安心する。こうやって近くに居るのもそうだけど、なんか私って八幡君がいないと眠れなくなっちゃったのかな？だとしたら重症だね♪

八幡「……嬉しそうだな。どうした？」

シルヴィア「ん気になる？」

八幡「そりやあな。教えてくれるのか？」

シルヴィア「どうしよつかなあ。」ちらちら

八幡「……あんまり撫でると寝付けなと思うんだが？」

あつ……

シルヴィア「……………」シュン

八幡「そんな落ち込むなよ……寝付くまでなら撫でるから。な？」
シルヴィア「……うん。」

そう言われて私は八幡くんに頭を預けた。(元々預けてたけど。八幡くんの胸に埋めてた私の頭は、手慣れた手つきで私の頭を八幡くんが撫でてくれた。

現金な話だけど、これだけで私は夢の世界へと旅立てるのだ。

だって八幡くんが頭を優しく愛でてくれてるんだもん。眠れない方がおかしいよね。

八幡「なんか悪かったな、起こしちゃったみたいで。明日……じゃなくて今日はこういう事をしないようにする。」

シルヴィア「というより、コレからはあまりしないで欲しいよ。君も知ってると思うけど、この家でそういうのは言わない事にしてるでしょ?」

八幡「そうだったな。」

シルヴィア「じゃあ気を取り直して寝よつか。もうすぐ3時だしね。明日のデートは少し遅くなっても良いからさ。」

八幡「それは俺からしてみればありがたいな。少しだけでも良いから睡眠が欲しかった。」

シルヴィア「あつ……八幡くんは星武祭で疲れてるんだったね……うん、じゃあ明日は八幡くんの好きな時間にして良いよ。デートも任せる。」

八幡「おいおい、そんな事まで任せていいのか?」

シルヴィア「だって八幡くんに無理させたくないもん。私のせいで本調子になれなかったってなったら嫌だから。」

明後日からでもデートはできるから、明日は我慢しても大丈夫!

八幡「じゃあお言葉に甘えるが、いいのか?」

シルヴィア「うん、八幡くんはゆつくり休んで。」

八幡「……分かった。それじゃあ今度こそ寝るか。」

シルヴィア「……うん。」ニコッ

そして私たちはふたりそろって真夜中の二度寝をした。

※起きた後のデートプラン

八幡 side

今日の夜中はシルヴィに言われるまま、というよりも説得されて眠りについて5時間。現在は午前7時で、カーテンの間から朝日の光が漏れている。隣には正しい息遣いをしながら眠っているシルヴィ。流石に今日の二度寝は響いているようでぐっすりだ、そつとしておう。

俺だけでも身体を起こして何か準備をしておこうとも思ったが、そうもいかない。シルヴィが俺の腕にしっかりとしがみついているため、行動することが出来ないのだ。

……仕方ない、俺も少し寝るか。

八幡 side out

シルヴィア side

……皆さん、おはようございます。シルヴィア・リユーネハイムです。今は朝の8時。普通なら誰でも起きてる時間だね。起きていても身体を動かしていない人もいる時間帯だと思うの。今の私は後者の方かな。あつ、別に動きたくないからそうしてるわけじゃないからね？ちゃんとした理由はあるよ。

八幡「……………」ギュー

シルヴィア「……………」／／／／／

その理由はもう分かったよね？私が八幡くんの抱き枕にされているから。だって起きたらそうなってたんだよ？こんなの身体を起こすわけにはいかないよ。この時間をたんの……有効に使わなきゃ損だよ！

というわけで私は今、八幡くんに抱き枕された状態を満喫中なのです。抱き枕の気持ちってこんな感じなのかな？凄く窮屈だけど凄く安心する。それに、八幡くんが抱いてくれているから分からないけど、頭は冴えているはずなのに眠くなってくる。

シルヴィア「……………」もう少し寝ても良いよね？」

シルヴィア side out

—————

2人が寝てから1時間経ち、現在は9時。未だに2人は寝ているが、寝ている光景でさえも華があった。向き合いながら吐息を重ね合い、八幡の方は腕をシルヴィの腰に当て、自分の方へと寄せていて、シルヴィアの方は八幡の胸に手を当てていた。

これがもし雑誌などで取り上げられたとしよう。間違いなく一面トップを飾るだろう。

2人「……………」

そんな2人もそろそろ三度寝から起床する時間のようだ。

シルヴィア「んんう……あれ？八幡くんおはよう。起きてたの？」

八幡「そういうお前こそ……俺は今起きたばっかだぞ？三度寝だけだよ。」

シルヴィア「……八幡くんも？私も一度8時に起きてまた寝たんだ。」

八幡「そうだったのか……あつ。」

八幡はようやく自分の状況に気付いたのか、少しだけ頬を赤に染めた。

八幡「わ、悪いな……寝てる間に抱き締めちゃったみたいだ。」

シルヴィア「私は全然構わないよ。むしろやつて欲しかったから嬉しかったよ。抱き枕の気持ちもなんとなく理解出来たし。」

八幡「役得って奴か？」

シルヴィア「お釣りが出るくらいのね♪」

八幡「…………おはよう、シルヴィ。」

シルヴィア「…………おはよう、八幡くん。」

朝の挨拶を交わした後、2人は軽い唇を重ねた。

——30分後——

ベッドから出て、身支度、朝食などを済ませた後、2人はソファに座ってのんびりしていた。2人の格好は明らかに外出用の服装だったが、今の時間帯は何処も準備中である事を予想しているのだろう。

それに六花は今《獅鷲星武祭》の最中である為、様々な企業の幹部クラスの間が世界各地からこの六花へと集まっている。統合企業

財体に融合したいという企業も多いだろう。2人の事を考えるならば、行政エリアは近づきたくない場所であろう。

幸いな事に行政エリアは南東の方角にあり、2人のいる外縁移住区はクインヴェール寄りの位置にあるため、真逆方向に位置している。

八幡「今日はどうするんだ？今日言ってた通り、どこか出かけるか？」

シルヴィア「そうだねえ……八幡くんは？質問を質問で返すように悪いけど。」

八幡「俺は特に何処かへ行きたいというのはないな。シルヴィと過ごせばそれで良い。」

シルヴィア「それが一番困る返答なんだよなあ……じゃあ適当に商業エリアでも探索してみる？」

八幡「なんなら行ったことない店にでも行ってみないか？色々知れて面白いかもしれないからな。」

シルヴィア「じゃあそうしよう！じゃあ10時になったらしゅっぱーっ！！」

初秋デート①

八幡 side

10時になり、俺とシルヴィは早速街へと出かけた。あのままのんびりするのも良い考えだったのだが、それではシルヴィも退屈だと思っただけから街に出掛けることにしたのだ。

今は商業エリアの入り口の辺りにいる。シルヴィの家の近くは商業エリアのすぐ側だから、すぐに行く事ができる。

八幡「行つたことのない店っていても、六花にそういう所があるとしたら、まずは歓楽街だろうが、行きたくはないよな。危険だし。」
シルヴィア「それは当然だよ。朝からあんな所になんて行きたくもないよ。」

八幡「商業エリアで行つたことない所っていうと……東側の方だな。意外にも近くの方は見てなかったんだな。」

シルヴィア「へえ〜なんだか灯台下暗みたいだね。」

………いつの間にそんな言葉覚えたの？

シルヴィア「じゃあ最初は商業エリアの東側に行こつか！商業エリアには入ったばかりだからそんなに時間はかからないよね。」

八幡「んじゃ、行くか。」

——商業エリア・東——

シルヴィア「うーん……やっぱりレヴォルフに近いせいかな、あまりお店が立ち並んでないね。」

八幡「並んでてもあまり良い雰囲気のお店ではないな。そこら辺にレヴォルフの生徒もいるしな。」

俺たちが向かった東側の商業エリアは、歓楽街に似たような雰囲気
のそれだった。この辺りはレヴォルフの生徒の出入りが激しいため
か、経営している店舗は僅かだった。

シルヴィア「でも意外だね。レヴォルフの生徒なら私たちに攻撃し
てきてもおかしくないと思うんだけどな……………」

八幡「流石に冒頭の十二人に入ってる俺たちに勝てる動機はないつ
て分かってるんだろ。俺的にはありがたいけどな。」

にしてもここらいったいは何もないな……………場所を移した方がい
いか？

八幡「なあシルヴィ、場所移さないか？此処はあまり見るところが
無さそうだからな。次は北側に行かないか？」

シルヴィア「そうだね！うん、そうしよう！」

そして俺はシルヴィを連れて北の方角にある商業エリアに向けて
足を進めた。

——商業エリア・北——

シルヴィア「やっぱり此処は星導館があるからね。日用雑貨店とか
飲食店が多いね。さつきとはすごい違いだね。」

八幡「ああ、なんかビフォーアフターみたいだ。」

……一言言っておくが、別に俺は東側の商業エリアを悪く言いたい
わけじゃないぞ。

シルヴィア「あつ！八幡くん、あれは行ったことないんじゃないか
な？」

シルヴィアが指差した店舗は、確かに俺たちが行くことのなさそうな店だった。見た感じでは小柄で他の店に比べると存在感が無いが、逆に小さいからこそ目を引くところがあるのだろう。

シルヴィア「あのお店行ってみない？なんか気になってきちゃった！」

八幡「んじや行くか。」

シルヴィア「うん！」

――とある小さな店――

カランコロンツ♪

「いらっしやいませ……っ!？」

中に入るとアロマの香りがした。俺はこの手の知識に疎いが、人の心を落ち着かせる効果があるのは知ってるがそれだけだ。

シルヴィア「へえ、香水とはまた違った感じの香りだね。アロマだからこんな匂いを出せるのかもね。」

八幡「俺もこんな匂いは初めてだ。アロマってのは不思議な匂いにするな。」

シルヴィア「なんだか落ち着くね。」

ちょうど良い所にベンチがあった為、そこに移動して落ち着いていた。こんな雰囲気のお店は嫌いじゃない。

――10分後――

シルヴィア「……私たちさ、10分くらい座ったままだけど、何

かアクションしなきゃ可哀想だよね。」

八幡「……そうだな。そろそろ何かしないとな。」

それから俺たちは様々な香りのするアロマの香りを嗅いでみて、気に入った物をそれぞれ購入して店を後にした。因みに俺がオレンジでシルヴィが薔薇だった。

シルヴィア「良い買い物できたね。家に帰ったら早速使おうか。」
八幡「そうだな。シルヴィの方から使って良いぞ。薔薇の香りも良かったからな。」

シルヴィア「そう？じゃあ遠慮なく使わせてもらうね。ねえ八幡くん、お腹すいてない？もうお昼だからさ、ご飯にしない？」

八幡「おお、もうそんな時間か。よし、ちょうど良いし飯にするか。この辺りでは……喫茶店くらいしかないな。」

シルヴィア「八幡くんはガッツリ食べたいの？」

八幡「そういうわけじゃないが、どうしてだ？」

シルヴィア「だって君が『喫茶店くらいしかない』って言ってたからさ。多く食べたいのかなあって。」

八幡「そういう事か。大丈夫だ。別にガツガツ食べたいわけじゃないから。」

シルヴィア「それじゃあその辺りにあるお店にする？その方が手っ取り早いしね。」

八幡「そうだな。」

そして八幡たちが選んだ店はハンバーガーショップだった。

初秋デート②

シルヴィア side

ふう〜美味しかった。バーガーセットにしておいて正解だったね。それに、八幡ちゃんと食べさせあいっこも出来たし♪

……あつ、ハンバーガーをじゃないよ！セットで付いてきたポテトをだからね！ハンバーガーでも良いけど、公衆の面前で間接キスは恥ずかしいから／／／

それでね、今は街をぶらついてるんだけど、やっぱり周囲からの視線は物凄い。なんだかモルモットになったみたいであまり良い気分じゃないけど、八幡さんのそばに居るからまだ大丈夫。

でもそんな八幡くん、今は《獅鷲星武祭》に出場しているチーム・帝龍のリーダー、そんな彼を周りの人たちが無視するはずがなかった。サインや握手、写真などの依頼が多かった。しかもその中には世界のトップ企業までもが握手を求める程だった。流石は私の八幡くん♪

八幡「悪いなシルヴィ、サインとか握手の相手ばかりしちまってよ。もう少しだから待っててくれ。」

シルヴィア「ううん、大丈夫だよ。八幡くんのファンだもん、仕方ないよ。」

あつ、それとね！八幡くんのファンなんだけどね、ファンの子が来たから試しに公式サイトの方を開いてみたんだけど、世界中を合わせて300万人に増えてたんだよ！凄いよね！

ファン1「ありがとうございます!!次の試合、頑張って下さい!!」
八幡「ありがとうございます。」

ルンルンルン♪

八幡「すまない、待たせた。」

シルヴィア「いいいいいよ、気にしないで。自分のファンだもの、大切にしなきゃね。もう300万人もいるんだから。」

八幡「今はその一部が此処にいてもおかしくないからな。星武祭開催中だから、外国から観光に来ている人だって少なくないからな。」
シルヴィア「出来る限り、ファンの要望には応えてあげないとね。その気持ちはよく分かるよ。」

ファンが1人出来ただけでも心構えが違ってくるからね。もっと頑張りたいっ！って気持ちも出てくるからね。

八幡「んじゃあそろそろ行くか。次は何処行く？」

シルヴィア「そうだなあ……」「あれ？八幡くんはシルヴィアちゃん？……え？」

陽乃「あつ、やつぱり〜！六花最強バカップルの八幡くんとシルヴィアちゃんだ〜！」

私たちの事を小バカにしたような（おふざけだって分かってるからね？）言い方をしてこっちに来たのは、八幡くんのチームメイトで界龍の序列4位の陽乃さんだった。

シルヴィア「こんにちは、陽乃さん！」

八幡「……こんにちは。」

陽乃「うんうん、こんにちは。2人はデート？」

シルヴィア「はい！グループ戦で2位になったチームには悪いんですけど、この時間を有効に使いたいと思ってたので。」

陽乃「あつはは！成る程ね〜。まあそれが良いと思うよ。この2日が終わったら、予選よりも激しい戦いになるだろうからね。八幡くん

も、シルヴィアちゃんとしつかり遊んでおいてね。」

八幡「ええ……？それよりも、陽乃さんはどうして此処に？買い物ですか？」

陽乃「おっ、良い質問をしてくれたねー少年。これから船着場に行ってお迎えするんだ。」

………迎え？

八幡「……雪ノ下家の仕事ですか？」

陽乃「ううん、違うよ。私個人の。それと八幡くん、私が雪ノ下建設の後を継がないのは知ってるでしょ？去年の《鳳凰星武祭》！」

八幡「………あつ、そういうばそうでした。すみません。」

陽乃「よろしい。それでね、将来私の所で働いてくれそうな子をとっちに呼んでみたの。勿論経費は雪ノ下持ちでね。私まだ会社持っていないから、そこはまだお母さん頼みなんだ。」

シルヴィア「陽乃さんはもう将来を決めてるんですね。」

陽乃「そうだよ。しつかりしてるでしょ。もし仕事に困ったらうちにおいでよ。」

シルヴィア「その時になったらお願いしますね。」

そうなるとはあまり思えないけど、こういうのも大切だよね。将来のためにも。

陽乃「あ、そうだ！八幡くんたちも来る？きっとあっちの方も喜ぶと思うよ？」

八幡「何故疑問形なんです？俺たちが行って喜ぶって………何でですか？」

陽乃「それはついてからのお楽しみ♪」

………なんか少し怪しいなあ。ここは八幡くんに任せようかな。

シルヴィア「八幡くんにはどうする？私は八幡くんに従うよ。」

八幡「……………」

八幡「……質問なんです、その人って俺たちが知ってる人物なんですか？」

陽乃「八幡くんは知ってるけど、シルヴィアちゃんは知らないかな。あの子アイドルとかライブとか興味ないから。」

八幡（ならシルヴィの事は知ってる程度だろうな……よし、なら大丈夫か。）

八幡「わかりました。俺たちも同行します。」

陽乃「おお、ありがとう！じゃあ早速行こっか！」

——船着場——

八幡「陽乃さんの知り合いって言うからには、やっぱり千葉なんですよね？」

陽乃「うん、そうだよ。」

八幡「千葉でそれで俺が知ってる人……誰だ？」

シルヴィア「私、陽乃さんの高校時代の交友なんて分からないから見当もつかないよ。」

陽乃「シルヴィアちゃんはともかくとして、八幡くんは詰め甘いなあ。」

八幡「詰めが甘くてすみませんでしたね。」

でも、本当に誰だろう？

ブオー!!

陽乃「あつ、着いたみたいだね。」

さて、誰が来るのかな？

めぐり「こんにちはーはるさーくん!! ってあれ？比企谷くんにシルヴィアさん？」

意外な事に私たちの前に現れたのは、城廻めぐりさんだった。

シルヴィア「め、めぐりさん!?! 陽乃さんが言ってた人ってめぐりさんだったんですか!?!」

陽乃「あれ？知り合いなの？」

八幡「ええ、この前千葉でライブした時に握手会で会ったんですよ。」

それ以前にも1回会ってるけど、ここでは言わない方が良いよね。

めぐり「はるさんがお出迎えしてくれるって聞いたから嬉しくなっちゃったけど、比企谷くんとシルヴィアさんにも会えてもっと嬉しくなっちゃったよー!」ニコツ!

陽乃「おおーそれは良かった! めぐりはお腹空いてる?」

めぐり「いえ、船の中でも食事が出たので大丈夫です。」

陽乃「そっかそっか。じゃあ今日から5日間、六花の文化を満喫したまえよ、めぐり隊員! あっ、最初の2日間は私が案内するから心配しなくていいからね。」

めぐり「はーい！」

……案内の方は大丈夫みたいだね。

八幡「ていうか、城廻先輩は大学大丈夫なんですか？」

陽乃「それならもう話はつけてあるんだ。」

八幡「なら良いんですけど……」

シルヴィア「最初の2日間は良いとして、残りの3日間はどうするんですか？」

陽乃「『獅鷲星武祭』でも見てもらおうかなあって思ってるんだ。ほら、私と八幡くんの戦ってるかっこいい所を見てもらうためにさ。特に八幡くんの！」

八幡「なんで俺なんですか……」

めぐり「わあく比企谷くんの戦ってる所かあく！私も観てみたい！去年はテレビからだったから、生で観られると思うと楽しみだなあく！」

八幡「は、はあ……」

……こんな輝いた目で見られたら、断れるものも断れないよね。やっぱりめぐりさんってある意味恐ろしい人だよねえ。

初秋デート③

八幡 side

陽乃さんの言っていた人が城廻先輩だという事に少し驚いたが、納得もできた。俺がまだ総武高にいた頃、陽乃さんが親しげにしていたのは城廻先輩だけだったからな。他の後輩がいてもそこまで気にした様子はなかった。

つまりは、陽乃さんがまだ強化外骨格をつけていた頃に親しかつたといえ、城廻先輩だけという事になる。まあ俺もそこまでは知らんけど。

めぐり「わあ〜！やっぱり違うなあ。なんかもう文化の違いを感じるよ。こっちではスマホとかタブレットだからなく。手を動かしただけで端末が開くなんて凄いなあ〜。」

陽乃「めぐりも出来るようになるって。別にあれは星脈世代だけしか出来ないってわけじゃないから。まあ、六花の外で出来るかどうかは分からないけどね。」

シルヴィア「あつ、それなら出来ますよ。色んな国を回ってライブやってましたからそれは保証します。」

陽乃「だって。」

めぐり「ほえ〜！」

シルヴィア、俺、陽乃さん、城廻先輩と横並びで話しながら歩いているのだが、まあまあ視線が痛いなんのつて。そりゃね？この3人美人だから仕方ないよ？でもさ、俺の事も考えて！好きで囲まれてるわけじゃないからね？ホントですよ？

あつ、シルヴィアとは好きでいるけど。

陽乃「八幡くん、デートの途中なら別に私たちと一緒に行動しなくてもいいよ？2人の時間を楽しみなよ。」

シルヴィア「いえ、今日は一緒に行動しますよ。なんかそっちの方が楽しそうですし！」

八幡「俺もそう思っていました。まだ明日ありますので、今日は陽乃さんと城廻先輩に伴いますよ。」

陽乃「おつ、最強のボディガードだ！頼もしいね！そう思わない？めぐり。」

めぐり「はい！比企谷くんが守ってくれるなら安心です！勿論、シルヴィアさんにも守ってもらわなくちゃね！」

シルヴィア「お任せ下さい！」

八幡「護衛なら陽乃さんも出来そうですけどね。」

八幡 side out

—————

陽乃「それでさ、八幡くん——」

八幡「それって陽乃さんのせいじゃ……」

めぐり「……………」じー

シルヴィア「……………？どうかしたんですか？」

めぐり「なんかああいうの、良いなあゝって。」

シルヴィア「陽乃さんと八幡くんですか？」

めぐり「ああ、そういう事じゃなくてね。私って同年代の男の子から名前で呼ばれた事って一度も無いんだ。女の子からはあるんだけどね。」

めぐり「変なあだ名もつけられたことあるんだよ！『めぐりん』だとか『めぐめぐ』だとかさ。」

シルヴィア「……………何となく分かるかも。」

めぐり「でもね、男の子からは『会長』か城廻に会長か先輩を付けられるだけで、名前呼びされた事がないんだ……どうしてかな？」
シルヴィア「うーん……私はクインヴェール育ちなので分かりませんね。」

めぐり「そつかあ、それなら仕方ないよね……」

シルヴィア「それなら、八幡くんに名前で呼んでもらうように頼めば良いんじゃないですか？普通に考えて。」

めぐり「……………」

めぐり「それだよ！私ったらなんで今まで思いつかなかったんだろう！」

それも確かにそうなのだが、何故それを自分で思い浮かなかったのだろうか。

めぐり「ねえねえ比企谷くん！」

八幡「ん、何です？」

めぐり「比企谷くんはさ、いつからはるさんの事名前で呼んでるの？」

八幡「名前？……………そういえばいつからでしたっけ？」

陽乃「うーん……私もよく覚えてないな。」

めぐり「じゃあそれくらい前から名前で呼んでるって事だよね！」

八幡「まあ、そうなりますね。」

めぐり「じゃあ！じゃあ！比企谷くん、私の事も名前で呼んでみてよー！」キラキラ

八幡「……………え？」

八幡は少しだけ訳のわからないような顔になった。それは陽乃も一緒だった。

めぐり「私ね、男の子から名前で呼んでもらった事がないからさ、名前でもらいたいの。お願いっ！」

めぐりの説明で2人はようやく納得がいった様子になった。

八幡「まあ、俺は別に構いませんけど。」

めぐり「本当っ!?!じゃ早速めぐりって呼んでよ! あっ、先輩とかさん付けはしないで!」

八幡「……それはちよつと……」

めぐり「いいからっ! 呼び捨てっ!」

八幡「……………めぐり。」

めぐり「……………わ、わあ／＼／＼男の子から名前呼びされるってこんな感じなんだあ。しかも呼び捨てだからちよつと良いかも／＼」

八幡「は、はあ……」

めぐり「比企谷くん! これからは私の事『めぐり』って呼んで! なんとかつけなくて良いから!」

八幡「あ、あの……一応年上なんでさん付けはした方が良いと思うんですけど……」

めぐり「良いのー！お姉さんの言う事は聞くのー！」

端から見れば、兄にわがママを言っている妹にしか見えないというのは伏せておこう。

陽乃「じゃあ私の事も呼び捨てにしてもらおうかなあ。私も別に八幡くんになら構わないしね。」

八幡「いや、あの……」

めぐり／陽乃「比企谷くん！（八幡くん！）」

八幡「……………」

明らかに呼び捨てをするのに戸惑っている八幡。八幡もそういうところに拘りを持っている方なので、簡単に曲げることは出来ないだろう。

シルヴィア「八幡くん、呼んであげたら？」

八幡「でもなあ……」

シルヴィア「2人が良いって言ってるんだし、呼んじやいなよ。別に恥ずかしいわけじゃないんでしょ？」

八幡「それもそうだが……」チラッ

2人「……………」キラキラ

2人の期待の籠った目が八幡に突き刺さった。そしてようやく観念したのか、八幡が2人に向き直った。

八幡「……はあ、分かりましたよ。陽乃、めぐり、これで良いですか？」

2人「敬語もなし！」

八幡「え……敬語も？」

その後八幡は、2人に名前の呼び捨てと敬語を使わない事を約束したのだが、2人に敬語を使うのが当たり前になっているからか、話しかける度にさん付けと敬語を使ってしまう、2人に無視されるのが度々あったのは別の話である。

初秋デート④

八幡「それで陽乃さん、この後はどうする予定なんですか？」

陽乃「……………」

八幡「……あの、陽乃さん？」

シルヴィア「八幡くん、敬語敬語！それとさん付け！」

八幡「あ、ああ……どうも慣れん。陽乃、この後はどうするんだ？」

陽乃「この後はめぐりの荷物を置いてから六花の案内かな。その方が後の3日間は楽に過ごせるでしょ？私たちはその時《獅鷲星武祭》だからね、めぐりの面倒は見られないから。」

めぐり「むうゝはるさん！私の事子供扱いしないでください！」

八幡「でも、面倒を見られないのも確かだな……今日と明日は良いとしても、後の3日間は完全に1人の状態になる。誰かつつてもな……………」

戸塚とかにも頼もうと思ったんだが、そもそも面識が無い。それは川崎や材木座も同じだ。海老名と戸部も同じく。ふむ……………いない。

シルヴィア「じゃあ、私というのはどうですか？ほら、誰も知り合いが居ない六花なら心細いですし。私ならめぐりさんの事少しは知ってるので。」

陽乃「シルヴィアちゃんそれナイス！それ即採用だよ！いやゝ何で気付かなかったんだろう!?こんなにも良いカードがあったのに！」

八幡「ああ、シルヴィなら申し分ないな。シルヴィ、明後日からの3日間は城廻先輩の事頼んだぞ。城廻先輩もそれで良いですか？」

めぐり「っーん。」

八幡「……………ん？」

シルヴィア「八幡くん、敬語と先輩。」

八幡「……………これどうやって直せってんだよ。」

その後、めぐりの荷物を雪ノ下家の経営しているホテルに置いてから再び街へと繰り出した。

——商業エリア——

また戻って来てしまった。いや、別に嫌だってわけじゃないからな？

めぐり「わあゝ!!」キラキラ

……………めぐりの方は、これまた目をキラキラさせながら商業エリアの街並みを眺めていた。

陽乃「どう？これが六花の商業エリアだよ。簡単に言うと商店街だね。」

めぐり「凄いです!!こんなに建物がいっぱい!色んなお店がある!凄いなあゝ!」

まるで子供のようににはしゃぐめぐり。前に来たことがあったんじゃないかったか？

八幡「めぐりさ……………めぐりは前にも六花に来てただろ?六花の事は

大体分かってると思ってたんだが？」

陽乃「へ？前にも来てた？」

めぐり「ああ、はるさんには言ってなかったですね！実はですね、2年前のシルヴィアさんのライブで此処に来た事があるんですよ。」

陽乃「へえ、それは初耳だねえ。」

めぐり「でもその時はライブが第一目標だったので、街の方は見れなかったんです。なので、この商業エリアを見るのは今回が初めてなんですよ！」

めぐり「私はそこまで興味は無かったんですけど、友達が2枚分応募していたのが2枚当たってしまったのを私にくれたから来れたっただけなんです。」

なんて恐ろしい運の持ち主だよ……その友達。

めぐり「それよりもはるさん！私早くこの辺りを回って見たいですよ！いいですよ？」

陽乃「そうだね、このまま皆で回るのもアレだし、少し別れて行動しようか。1時間くらい自由行動をとるから好きな所を見て回って良いよ。」

めぐり「わーい、やったー！」

めぐりはそれを聞いた途端、一目散に走り出した。あの人、本当に大学生か？

シルヴィア「私たちはどうしよつか？」

八幡「コーヒーでも飲んで待ってるか？」

シルヴィア「マックスコーヒーじゃなくていいの？」

八幡「あれはもう甘過ぎる。」

シルヴィア「あっははは♪」

――1時間後――

陽乃「ごめんごめん、待たせちゃったかな？」

八幡「いえ、そんなには。」

陽乃「……………」

八幡「……今のくらい良いじゃないですか。判定厳し過ぎますよ。」
シルヴィア「それはそうと陽乃さん、めぐりさんとは一緒じゃなかったんですか？後を追いかけたように見えたんですけど。」

陽乃「ああ見えてめぐりって凄いですっこいんだ。すぐに見失っちゃったよ。」

八幡「まあ仕方ねえか。初めての商業エリアだ、時間を忘れて好きに回るくらいはいいだろ。」

めぐりがすばしっこい……全く想像できねえな。

陽乃「少し搜して「良いじゃねえかよ、ちよつとくらい。」……ん？」

めぐり「嫌だつて言ってるじゃないですか！」

1「ちよつとだけだつて！時間なんて取らせないからさ！」

めぐり「もう取ってるじゃないですか！」

陽乃「八幡くん、あれって……」

八幡「ああ、レヴォルフだ。しかもナンパとは随分暇な奴らだな。
今は星武祭中で警備も強化されてるつてのに、バカなのか？」

いや、レヴォルフの男共は大抵バカかクズの集まりだよな。良い奴もいるけど。

2「ちよつとだけだからよ。」ガシッ

めぐり「っ!!離してください!!」ドンッ!

2「つてーな!何しやる!」

1「こっちは優しく誘ってんのによ……」

めぐり「っ……………」ビクッ

2 「もう我慢ならねえ！無理矢理にでも連れて「誰の連れを連れてくつて？」ああ!!」

八幡「俺の連れになんか用か？」

1 「っ!!? む、【夢幻月影】……」

2 「マ、マジかよ……」

八幡「で？誰を何処に連れてくつて？」

1 「あ、い、いや……別に……」

2 「あつ！こ、こいつの家に行こうと思ってたんすよ！俺がこいつの家に連れてかれるって事っす！」

八幡「……ほう？」

1 「じゃ、じゃあそういう事なんで！」

2 「すんませんでしたー！」

意気地のねえ奴らだ。男なら正面から来いよ。2年前の奴らの方が余程度胸あるぞ。

めぐり「あ、ありがとう比企谷くん、助かったよ。」

八幡「いや、別にいい。人を助けるのは当然だ、気にするな。」

めぐり「えへへ、ありがとう。」

陽乃「もうめぐりつてばー！昔言つたじゃない、あんたはガードが甘いんだから気を付けなさいって。」

めぐり「そうでしたねー、ごめんなさい。」

シルヴィア「まあまあ、八幡くんが事なく収めてくれたから良いじゃないですか。」

陽乃「……そういう事にしとく。」

八幡「じゃ、六花案内を再開するか。言つとくが、めぐりを1人にしないようにな。どっかに行つてまたナンパされてたらたまつたもんじゃない。」

シルヴィア／陽乃「了解！」

めぐり「むうー！私そんなにおつちよこちよいじゃないもん！」

そう言つて自由行動になつた途端、商業エリアの方に走つて行つたのは何処のどいつだ？

素顔

陽乃 side

シルヴィア「一通り終わりましたねー。」

陽乃「そうだね。後は明日にでも案内すれば大丈夫かな。」

八幡「明日案内しきれなかったとしても、シルヴィが3日間の間で案内してくれば大丈夫だろ。」

めぐり「楽しかったなあ。はるさん、明日もこのメンバーで行くんですか？」

陽乃「明日は私とめぐりだけ。八幡くんとシルヴィアちゃんは偶々会って誘っただけだから、約束はしてないんだ。2人が良いって言うなら構わないけど、明日は2人きりにさせてあげないとね。今日のデートを潰しちゃってるわけだしね。」

明日こそ、2人には2人きりで楽しんでもらわないとね。

八幡「そんな事、別に気にしなくてもいいんだけど……」

シルヴィア「そうですよ。別に嫌々着いて行ってるわけじゃないので。」

もうっ！何でこうやって嬉しい事を言ってくれるかな！この2人は♪

めぐり「そつかあ……ちよつと残念。でも、そういう理由なら、2人には楽しんでもらわないとですね。じゃあ2人とも、今日はありがとうね！」

シルヴィア「いえいえ！六花にいる時はいつでも連絡下さい！3日目には一緒に行動するので！」

八幡「明日は会えるかどうか分かんが、《獅鷲星武祭》では応援お

願います……応援頼む。」

おつ、八幡くんも少しは慣れてきたかな？

陽乃「じゃあ今日はお開きにしようか。私はめぐりをホテルまで送ってから学院に戻るから、2人は2人の時間を過ごしてね。」

めぐり「じゃあねー2人ともー！」

シルヴィア「さようならー！」

八幡「……さようなら。」

――5分後――

八幡くんたちと別れて、今はめぐりと2人。さて、めぐりをホテルまで送る間どうしようかなあ。

めぐり「そういえばはるさんは、六花にテーマパークを作るのが夢なんでしたっけ？」

陽乃「うん、そうだよ。まだ将来的な話になるけど、その中の社員にめぐりを入れようと思ってるんだよね。私が一番信頼出来る後輩1号だからね。」

めぐり「えへへーそう言ってもらえると嬉しいです！」

ホントこの子は裏表のない子。この性格は社会に出てもすごく強力な武器になる。

陽乃「明日はどうしようか？よく人が集まる所には案内したし……」

めぐり「あつ、それなら本戦前の試合を見てみたいです！今って確か、2位の人たちで復活権をかけて勝負してるんですよ？私それが見たいです！」

陽乃「お、良いねえ。じゃあ明日は《獅鷲星武祭》の観戦だね。そ

れじゃあ集合は11時半くらいで良いね。私たち界龍の部屋使えば楽に見られるしね。」

めぐり「良いんですか？部外者がそんな部屋に入っても。」

陽乃「良いんじゃない？別に他校の人や学園街の生徒が入ってはいけないなんてルールは無いからね。」

別に決まりなんてなかったしね。

めぐり「じゃあまた明日、よろしくお願いします！」

陽乃「分かったよ。おつ、そう言ってるうちに着いたね。」

めぐり「ありがとうございます、はるさん！また明日ですね！お休みなさい！」

陽乃「うん、お休み。」

……ふう、めぐりの前では私ってこんな風に話せるんだね。八幡くんやシルヴィアちゃん、界龍の冒頭の十二人のメンバー、お母さんには普通の顔でいけるけど、めぐりも同じようにできたんだね。

……うん、なんか良かった。

デートの続き？

八幡 side

陽乃とめぐりさ……めぐりから別れた後、俺たちは自分たちの家へと向かっていた。予想外の1日になったが、それでも楽しかった。シルヴィに関して、めぐりと再会出来たからだろうか、いつも以上にハイテンションだった気がする。

にしても陽乃さ……陽乃も思い切った事をしたもんだ。めぐりを正社員に勧誘するとはな。まだまだ建造もしてない、なんの計画もない状態だが、この星武祭で優勝すれば計画は大きく進むとも言っていたしな。

シルヴィア「今日は凄かったね。デートはこれからだって思った矢先にあんな事が起きるんだもん。」

八幡「めぐりさんとの再会の事か？確かに予想外の事ではあったよな。」

シルヴィア「はい、1回目〜！」

八幡「ん？何がだ？」

シルヴィア「陽乃さんとめぐりさんから頼まれてたんだ。八幡くんが2人の事呼び捨てにしないかどうかを監視してっ！ってね♪」

八幡「……それ、回数によって何かあるのか？」

シルヴィア「特に何も無いけど、今日デート出来なかった分の時間戻しをしてもらおうかな。例えば、今1回だったでしょ？それだったらハグとか。」

要求するものが結構なものなようで……

八幡「それって呼び捨ての回数を増やして行ったら、最終的にはどうなるんだ？」

シルヴィア「…………お、大人のキスで／＼／＼／」

マジかあ……あれはシルヴィが正気じゃなくなるからなー、やればやるほど厄介になる。よし、呼び捨てに気をつけよう。

そんなやり取りをしていると、家の近くまで来ていた。楽しい時間はあつという間というのは本当の事のようにだ。

——家内——

家に着くと歩きっぱなしだったからか、俺はソファにドカツと座った。

それに続いてシルヴィも俺の横に座り、頭を俺の膝に置いた。要は膝枕だ。

八幡「疲れたのか？」

シルヴィア「ちよつとだけね。でも楽しいの方が勝ってるから、気持ちいい疲れかな。ライブやった時の疲れとおんなじ感じ。」

八幡「そうか……そういやライブで思ったんだが、デュエットの依頼とか1年経つが全然来ないのはどうしてだ？夏休みとか来ても良いと思っていたんだが……」

シルヴィア「そうだよねえ。ペトラさんも本当はやりたかったんだろうけど、八幡くんは《獅鷲星武祭》があつたからじゃないかな？だから遠慮したんじゃない？」

八幡「だが俺は知ってるぞ？《王竜星武祭》の1ヶ月前に緊急デュエットライブを依頼してきた奴。」

シルヴィア「も、もおゝやめてよ！あの時は本当に急いでたんだから！」

八幡「ふつ、悪い悪い。」

あの時はまだ付き合ってもいない時期だったな。今だから本当に

懐かしく思える。過去を振り返るのが楽しいと思えるのは、今この時が初めてかもな。今まで気にしてなかったが、過去を振り返るのが楽しいと思えたのはこれが初めてかもしれない。2年以上前はこんな事絶対になかったからな。

シルヴィア「でも、確かにペトラさんからはデュエットの事何も聞いてないな。もう1度やりたいとは言っていたけど、詳しい事は何もかな。」

八幡「そうか……」

シルヴィア「でもどうして？またライブやってみたくなかった？」

八幡「……違うって言ったら嘘になるな。ライブやってて楽しかったってのもあったからな。それに……」

シルヴィア「それに？」

八幡「もしかた俺たちがライブやったら、めぐりさん来そうだろう？めぐりんパワー使ってチケットゲットしそうだし。」

シルヴィア「あつははは！何そのめぐりんパワーって!？」

いやだってよ、なんだかんだいって俺も参加したライブでは今のところ百発百中でめぐりさんいるから。もしかしたらって思うだろ。

シルヴィア「そ・れ・と！八幡くん♪」ニコニコ

八幡「ん？何だ？」

シルヴィア「さっきの自分が言った言葉、よく振り返ってみようか。」ニコニコ

八幡「ん？別に変なところなんて……あつ。」

思いつきめぐりさんって言ってたな。

シルヴィア「気付いた？」ニコニコ

八幡「……思いつき呼んでたな。これもう無意識だからヤバイぞ。」

シルヴィア「はい、これで2回目。」ニコニコ

八幡「……寝転びながら良い笑顔しやがってからに。頭撫でまわしてやるぞ？」

シルヴィア「私を満足させてみたまえ！」

八幡「あいよ。」

シルヴィア「うわわっ！え、何？」

俺はシルヴィを影で起こし、その間にソファの上で胡座をかいてその上にシルヴィを座らせた。そして俺はシルヴィに後ろから抱き締めた。簡単に言うならあすなる抱きだ。

シルヴィア「ふわぁ……／＼／＼／＼／」

いつもならワシャワシャと頭を撫でてるが、今日は趣向を凝らして後ろから抱き締めてみることにした。こんな風にしたことがなかったからか分かんが、シルヴィがめちやめちや可愛い声を上げてたな。

八幡「……どうだ？何時もなら頭を撫でてるが、今日はこうしてみた。」

シルヴィア「……うん、凄く良い／＼／＼／」

八幡「なら良かった。」

シルヴィはそう答えると、前で組んであった俺の手を握って来た。ここからじゃシルヴィの顔は見えないが、多分安心した顔をしていると思う。

けどちよつとヤバイな、少し眠くなってきた。

シルヴィア「ねえ八幡くん、少しこのまま寝てもいいかな？ちよつと眠くなっちゃった。」

八幡「ん？シルヴィもか？実は俺もでな、なら、このまま寝てみる

か？」

シルヴィア「ふふ、面白そうだね、それ。じゃあこのまま寝てみよつか。じゃあ……」

シルヴィは立ち上がると、俺の方を向いて再び座った。向かい合って寝たいってわけね。

シルヴィア「よし！準備OK〜！」

八幡「あんま眠そうには見えないんだが？」

シルヴィア「ああ……急に眠気が……」

八幡「なんでわざとらしい……」

シルヴィア「だって演技だもん。」

八幡「だろうな。」

シルヴィア「じゃあ八幡くん、また後で会おうね。もし良かったら夢の中でも会おうね。」

八幡「会えたら良いな、お休み。」

座りながら寝たと思ったら、徐々にバランスが崩れていき、結果的にはソファの上に寝転びながら寝ていた。

霊たちからの依頼

八幡 side

……………また此処か。多分、あいつらも居るんだろうな。居てくれなきゃ困るんだけどよ。

朱雀『ちーっす！お疲れさん旦那！』

八幡「やつぱり最初はお前か。何と無く想像出来てた。1番はお前なんじゃないかってな。」

朱雀『おつ、そいつは嬉しいね！さすが旦那だぜ、俺の事分かってんなあ！』

一応お前とは1年の付き合いだからな。1年もすりゃあ大抵の事は分かるだろ。

八咫鳥『参上つかまつった。』

八幡「よお八咫鳥、久しぶりだな。」

八咫鳥『主人、久しいな。』

八幡「お前を最後に纏ったのは…………2ヶ月前の鍛錬の時だったか？」

八咫鳥『その時期であつたな。主人も無茶をする男だ、4対1で鍛錬をするなど…………』

八幡「結果勝ったからいいだろ。それに鎖分銅の使い方俺よく分かんかったからちようど良かったんだよ。」

朱雀『旦那よお、使い方が分からなくて4対1で使い方を習得するのは、俺も流石にどうかと思うぜ？』

何でだよ？チームワークも上がるから良いじゃねえか。

白虎『皆揃っていたら不安だったが、どうやら3番手だったようだな。』

朱雀『よう白兄！玄ちゃんと姉貴はまだ来てねえからリラックスしてて良いぜ。』

白虎『どこをどうリラックスしろというんだお前は。苦手な奴が来るというのにリラックスも何もない。』

うん、全くその通りだと思う。お前の場合、好き嫌い激しいから本当にヤバいんだよな……うん、あまり同情はしないけどドンマイだ。

白虎『して八幡よ、これはどういった事なのだ？』

八幡「いや、俺にも分からん。誰かが呼んだのか、俺がここに来たのかどつちかなんだが、後者は無い。俺、こつちにくる方法なんて知らんから。」

白虎『ふむ……そうか。』

索冥『すみません、遅れました。』

玄武『ふええ……メイちゃん速過ぎるよお。』

索冥『貴方が遅過ぎるのです。そう思うのでしたらもう少し早く行動するようにしてください。』

玄武『はぁーい。』

あんまし反省してるような感じがしないのは気のせいか？いや、喋り方の問題か。

八幡「んで？だれが俺をここに呼んだんだ？言っとくが、俺はここにくる方法なんてサッパリだからな？」

索冥『ご安心下さい、八幡様をこちらにお呼びしたのは私です。今

回お呼びしたのは、八幡様をお願いがあつたからなのです。八幡様が鍛錬や試合などに使われる憑霊、次の本戦では私か白虎を優先的に使って欲しいのです。』

八幡「……出番が無いからか？それとも今までに使役した事がないから試運転がてら試したいって事か？」

索冥『流石は八幡様、その通りです。』

八幡「優先的に使うといってもなあ……俺も出来るならそうしたいが、どんな憑霊になるのかも分からないからな。試せるのに越した事はないが、ぶっつけでやるのは危険だな。」

索冥『……そうですか。』

八幡「ああ勘違いするなよ？別に渋ってるわけじゃないからな？チーム戦をやる上では味方の配慮も必要だ。可能性は全くないが、俺がお前らを纏ってる間に全員やられてるなんて洒落にならんからな。」

八幡「1対1ならまだなんとかなるが、5対5は守られながらになっちまうからな。移動しながらの憑霊もやった事ないからそれも今後の課題だな。』

少し理詰めになっちまったが、《獅鷲星武祭》でやったことの無い憑霊をするのはそれくらい覚悟がいるって事だ。

朱雀『……流石旦那だな。こんだけの事をよく考えつくもんだな。』

八幡「因みに言つとくが、朱雀も今回の星武祭ではアウトだからな。範囲が広過ぎるからな。」

朱雀『まあその辺は俺も分かってたから大丈夫だよ。使えるとしたら今のところ八咫さんか玄ちゃんだけだな。』

今のところはそうだろうな。玄武の防御は強力だし、八咫鳥はなんといっても飛べる。そしてオールラウンドな攻撃が出来る。利点があるとすればコレだな。

白虎『むう……少し残念だ。』

索冥『確かにそのような理由があれば致し方ありませんね。』

八幡「いや、明日でよければ鍛錬するぞ？どんな憑霊かも見てみたいからな。』

索冥『いえ、そういうわけには参りません!!奥方、シルヴィア様と過ごされる時間は大切にすべきです!!』

まだ嫁さんじゃねえよ。

八幡「シルヴィが許可してくれたら憑霊の鍛錬をする。もしもらえなかったら……まあ、本戦の1回戦が終わってからでも良いだろ。」

玄武『マンちゃんがそうするって言うなら止めないけどお、大丈夫なのお？』

朱雀『そうだけ旦那。あんまり無茶するもんじゃねえぜ。』

八幡「別に無茶はしてないぞ？現に俺はまだ体力が有り余ってる状態だからな。予選ではエンフィールドと試合しただけで何も動いてないし。」

だって実際そうじゃね？俺がまともに動いたのって予選の2回戦だけだよな。

八幡「だから、憑霊の鍛錬をしたいってシルヴィに言ったらOKしてくれると思うけどな。」

索冥『……わかりました。ではシルヴィア様から許可を頂けましたら、鍛錬の方をよろしくお願い致します。』

白虎『八幡よ、俺からも言う。憑霊をする機会があったら、よろしく頼む。』

八幡「ああ、その時は頼む。」

しかし、この2人の憑霊ってどんなのだろう……あんま想像出来んな。

八幡「話は終わりか？なら俺は向こうに戻ろうと思ってるが、今つて何時だ？」

索冥『現在、10月25日土曜日の19時24分33秒でございます。』

いや、そこまで丁寧に教えてくれなくても良いからね？日付くらい俺でも分かるよ。時間だけで良かったよ？

八幡「ん、OKだ。じゃあ戻してくれ。」

索冥『畏まりました。シルヴィア様にもよろしくお願い致します。』

朱雀『じゃあな、旦那！』

玄武『ばあいばあゝい。』

八咫鳥『次に会う時まで、達者でな。』

白虎『また会おう、八幡よ！』

引き返せない条件

葉山 side

葉山「どうしてだい？今までの作戦で上手く行っているのに、急に変更したいなんて。」

ジョー「理由は葉山くんが1番理解できると俺は思ってるんだが？」

葉山「……いや、分からない。どうしてだい？」

実夏「……私たち、予選からずっと同じ行動パターンで戦ってるよね？最初はそれでも良いと思ってたけど、私はもう嫌。」

エレン「私もだよ葉山くん。幾ら何でもこんな作戦、もう精神的に限界だよ。」

何を言ってるんだこいつらは？君たちは別に記者から批判を受けているわけでも、叩かれているわけでもないのにどうしてそんなバカみたいなことが言えるんだい？

エンデル「俺たちにも前衛をやらせてくれよ！葉山くんみたいな強さはなくとも、全員で戦った勝ちが欲しいんだよ！」

エレン「葉山くんお願い！私たちにも戦わせて！」

葉山「……いや、ダメだ。それは出来ないよ。」

実夏「……どうして？」

葉山「今の戦術で上手く行ってるからだよ。無理に変える必要はないと思うんだ。」

エンデル「……それは、曲げるつもりはねえって事なのか？」

葉山「そのつもりだよ。皆、納得してくれないか？」

ジョー「……よし、分かった。じゃあお前ら！」

はあ、漸く理解した

ジョー「このチーム解散するぞ！」

か、この無の……何っ!!?

葉山「ちょ、ちょっと待ってくれ！どういう事だ!？」

実夏「私たち、昨日集まって考えてたんだ。こんな戦い方でいいのか、優勝して本当に満足できるのかって。私は全くそう思わない。」

実夏「だから皆で話し合ったの。もし貴方が考えを変えるつもりがなかったら、このチームを解散させるって。」

葉山「それじゃあ皆！願いはどうするんだ!?!ここまで、本戦まで来たんだぞ!?!諦めるのかい!?!」

エンデル「こんな形で優勝しても嬉しくねえよ。葉山くんは嬉しいのかよ、批判されまくってる状況で優勝して嬉しいのかよ？」

葉山「そんなの嬉しいわけじゃないじゃないか。だから皆で力を合わせて勝つんじゃないか！」

実夏「……皆で力を合わせる？それ本気なの？」

葉山「……何が言いたいんだい？」

実夏「なら聞くけど、あの戦い方で皆で戦ってるって本気で思っ

るの？」

葉山「当たり前じゃないか。あの戦い方は皆の総意でもあったじゃないか。」

むしろあれ以外の戦い方で、君たちの出る幕なんてないよ。あればそんなのとづくに使ってる。

実夏「確かに賛成したよ。でもずっとあんな作戦だとは思わなかったのよ！あんな戦い方を決勝までするのなら、私たちはチームを解散させる方を選ぶよ。」

エレン「そうだね。変える気が無いのなら、チームをやめるって話だったからね。私も別に反対しないよ。」

葉山「ま、待ってくれ！どうしてダメなんだい！？この作戦のどこがダメなんだい？」

ジョー「それはさつき説明した。それなのにどうしてダメだって分からねえんだよ。」

分かるわけじゃないじゃないか！作戦は完璧、一切の弱点もなかった。なのに何でそんなことを言うんだ！

エレン「分からないって顔してるね。当たり前だよ、だって葉山くん分かるうとしてないもの。葉山くんに分かる？私たちが会長たちと戦うのにどれだけ不安だったのか……分からないでしょ？」

葉山「……………」

エンデル「俺たちはあの戦い、絶対に勝てないって思ってた。でも勝った時はそれは嬉しかった。けど、勝った気はしなかった。葉山くんにはどうして分かるか？」

葉山「……………」

エンデル「実際に戦ってないからだよ。俺らは葉山くんを守ってるだけであって攻撃には一切参加してない。戦ってるって感じが一切しないんだよ。」

ジョー「もし、そこを変えてくれるんだったら俺たちも考えを改める。チームにも残るし、負けたとしても悔いは残らないと思う。いや、残るだろうけど、今までの試合よりは満足した終わり方ができると思う。」

チツ、こんなところでチームを解散させるわけにもいかない。ここはこいつらに従っておくか。

葉山「……分かったよ。本戦では皆前で戦おう。ただこれだけは言っておくよ、無茶はしないで欲しい。今までは俺だけだったから良いけど、この先の戦いは序列上位者がウヨウヨしてるからね。」

エンデル「っ!!良かった!ありがとう葉山くん!!」

ジョー「これで俺たちも一緒に戦える!」

エレン「早速どういう戦術でいこうか会議しよっ!」

……まあ、こいつらの実力ならすぐに負けるのは目に見えてる。好きに戦わせておいて無様に這いつくばらせておけば良いか。

実夏「……………」

昼寝？後の夕食

八幡 side

……ん？おお、現世に戻ってこれてる。いつもながら眩しい光に包まれての現世戻り。あれ慣れねえんだよな、乱視入ってねえのに。

……そーういやシルヴィ居ねえな、それに肉と野菜の焼ける良い匂いがする。

八幡「……………」チラッ

台所の方を見ると、シルヴィが料理を作っていた。しかし、あんな風に私服でいるととても学生とは思えない。しつかりとしたところで育った良い嫁さんに見える。

さて、俺もダラダラしてないで、シルヴィを手伝わないとな。

八幡「よう、シルヴィ。」ポンポン

シルヴィア「あつ、八幡くんおはよう！起きたんだ。」

八幡「ああ、ついさっきな。すまん、寝過ぎしちゃったみたいで。」

シルヴィア「そんな事ないよ。いつも君には甘えさせてもらってるからね。」

それをいうならこっちもだ。って言ったら『そんなに甘えてないくせに。』って言い返されそうだからやめておこう。

八幡「そんなこと気にするな。俺もお前には色々心配かけてるしな。お互い様だ。」

シルヴィア「ふふ、そうだね♪」

八幡「しかし、シルヴィの作る料理は本当に美味そうだな。今日は

ハイコーロー
回鍋肉か？」

シルヴィア「うん！冷蔵庫の中に良いお肉とキャベツがあつたからね。あつ、ソースは八幡くんが作ってくれたのを使ってるから。」

ああ……それでいつもと違う匂いがしたのか。

八幡「あと他に何かあるか？」

シルヴィア「うーん……ご飯もまだ余ってるし、お味噌汁も作った……盛り付けるくらいかな。」

八幡「おいおい……家事スキル高くね？」

シルヴィア「八幡くんに言われたくないよ、私より料理上手いくせに〜！」

八幡「はいはい、悪うござんした。」

シルヴィア「もおく……ふふふっ♪」

こんな日々がこの2年間続いてたんだよな……こんな幸せな日々が。

♪

シルヴィア「ん？メール来ちゃった……どうしよう。」

八幡「もう完成なんだろ？俺が盛り付けとくからシルヴィはメールのチェックしていいぞ。」

シルヴィア「ゴメンね、お願い。」

さてと、シルヴィが終わらせる前に盛り付けとくか。

――3分後――

シルヴィア「ゴメン八幡くんって盛り付けるの早いね……まだ3分くらいだよ？」

八幡「シルヴィアが来る前に終わらせておこうと思つてな。それで、誰からだつたんだ？」

シルヴィア「星露。最近八幡くんの料理を食べてないから学院に戻せっ！だって。」

八幡「戻せて……俺は界龍の生徒であつて所有物じゃないんだがな……」

あのチビ……

シルヴィア「まあ事実だからそんなには突っ込んだ事言わなかったけどね。《獅鷲星武祭》が終わるまでの辛抱だよって送つていたから。」

八幡「悪いな……ウチのチビが。」

シルヴィア「いいいいいよ、他学園の生徒会長で仲が良いって言つたら、星露と【千見の盟主】とオーフェアさんくらいだからね。後は普通かな。」

八幡「それ、いつも席変えてもらつてる左近が聞いたら泣くぞ。」

シルヴィア「ええくだって他に接点無いもん。」

いや、まあ確かにそうだとは思うが……

シルヴィア「それよりも八幡くん、早く食べよっ！お腹空いたよっ！」

八幡「……ふっ、そうだな。」

——お食事タイム——

シルヴィア「はい八幡くん、あーん♪」

八幡「あむっ……」モグモグ

八幡「んっ……さすがシルヴィが作った料理だ、美味い。」

シルヴィア「えっへん！」

シルヴィア「あつも、そういえば陽乃さんから聞いたんだけど、八幡くんって人参がトマトが嫌いだったんだっけ？」

八幡「ああ、昔はな。今は別に嫌いじゃないぞ。」

シルヴィア「なんで嫌いだったの？」

八幡「あー……なんていうか、あの青臭さが昔は嫌だったんだろうな。今はそれも良いって思えてきたから平気だけだな。それがどうかしたのか？」

シルヴィア「特に何もないんだ。ただ、嫌いだっていうのを聞いただけだから。」

……けど俺って昔嫌いだったものは好きになって、好きだったものは苦手になってるよな。トマトとマツ缶が良い例だ。

シルヴィア「じゃあお野菜にもトマトをじゃんじゃん入れても大丈夫って事だよね！」

八幡「あんまり入れすぎても飽きるだけだけだな。」

シルヴィア「そこは任せておいてよ！」

――40分後――

八幡「ご馳走様でした。」

シルヴィア「お粗末様でした♪」

八幡「ふう、今日も美味かった。片付けは任せてくれ。準備は一人でさせちゃったからな。」

シルヴィア「じゃあ食器を立てるくらいはさせてよ。盛り付けはさせちゃったんだし。」

……細かいところまでよく見てるのね。

………思った事だが、毎日こういう事してるが、普通の目線から見たらどう見えるんだ？………夫婦か？いや、それはないか。まだ結婚

もしてねえのに。

シルヴィア「八幡くんどうしたの？手が止まってるよ？」
八幡「ん？ああ、悪いな。」

まあ、そんな事よりも今を楽しむのが先決だな。

※出来るだけの事は！

シルヴィア side

食器洗いと片付けも終わって、テレビでも見ながら八幡くんのんびりしようと思ってただけど、実際にはそうもいかない。

今はどのチャネルも《獅鷲星武祭》でいっぱいだし、八幡くんもする事がないからか、精神統一をしている。うううなんか置いてかれてるよ。

はあ、早く明日になってくれないかなあ……そしたら八幡くんとのデート出来るのに。でも、本戦前日だから八幡くんも色々と準備したから明日はナシかな？うーん……………

今回の《獅鷲星武祭》はかなり異例だからなあ。何せ、くじ引きを当日に行うんだから。対策のしようがないって事だよ。引いたその瞬間から対策を練らないといけないわけだからかなりのハイピッチになるパターンだね。

八幡「……………シルヴィ。」

シルヴィア「っ！は、はい！何あなた？」

八幡「……………なぜそう呼ぶのかは敢えて聞かないが、明日の事について少し話してもいいか？」

シルヴィア「明日の事？」

八幡「実はな、俺の中の奴らが少し表に出たいって言ってきてな、そこで明日は1日憑霊の鍛錬をしたいんだ。」

シルヴィア「憑霊……………って、あの八幡くんの姿が急にカッコよくなるあれ？」

八幡「突っ込みたくなる返しをありがとよ。カッコよくなるとうちはあれだが、まあ姿が変わるアレな。その憑霊をしてない奴らの試運転をしたくてな。俺の中にまだ纏っていないのが2体いるんだ。そいつらの試運転をしたいんだが……明日はどうしたい？楽しみた

いのなら、俺は別に構わないが……」

八幡くんの中にいるのって……去年の東京で神社のところで見たアレかな？ 大きな烏と赤い鳥、甲羅の大きなウミガメみたいな亀に白い虎と索冥だったかな？

シルヴィア「ちょうど今、私も悩んでたんだ。明日のことどうしようかなあって。明日を過ぎれば本戦だから色々と準備が必要かなあって思ってたんだ。それなら明日は八幡くんの好きにして良いよ。」

八幡「悪いな、明日楽しみにしてただろ？」

シルヴィア「ううん、気にしないで。八幡くんの練習見てるのも退屈しないから。あつ、でもさ、明日練習するのは良いけど、場所ってあるの？」

八幡「あー……空いてつかなあ。川崎に聞かか。」

シルヴィア「川崎って序列61位の川崎沙希さん？」

八幡「ああ、よく知ってるな。」

これでも他校の在名祭祀書ネームド・カルツは序列戦後にチェックするようにしてるからね。

沙希『もしもし、比企谷？』

八幡「よう、川崎。それにけーちゃんもな。」

京華『こんばんは、はーちゃん！』

沙希『それでどうしたの？』

八幡「ああ、明日の道場の使用状況ってどうなってる？」

沙希『明日どころか毎日埋まってる。今は星武祭中だから今のうちに強くなっておこうって躍起になってるのが多いくらい。』

うわあ……なんか段々界龍が強くなっていったような……ようになじやなくてそうなんだよね。

八幡「そうか……分かった。ありがとな。」

沙希『別に。あんたも《獅鷲星武祭》頑張んなよ。』

八幡「おう、じゃあな。」

最後に軽い挨拶を済ませてから、八幡くんは端末を切った。

八幡「ふう……さて、どこで練習したもんかねえ。何処にも場所が nothing^{ナツシン}だ。」

シルヴィア「ん……あつ!!八幡くん、ウチに来る?」

八幡「ウチ?クインヴェールの事か?」

シルヴィア「うん!多分だけど、ルサルカは本番前だから練習しないと思うし、メルヴェイユはもう出場できないし、赫夜も今日の試合でもう敗退が決まっちゃったしね。私の学園で練習しなよ!」

それなら大丈夫♪

八幡「……話的にはありがたいが、条件をつけてもいいか?」

シルヴィア「ん?何?勿論ルサルカは入れないよ?」

八幡「それは絶対だ。その他になるべく模擬戦場の所に生徒を入れないようにして欲しいんだ。何処で情報が漏れるか分からないからな。」

シルヴィア「それもそうだね。うん、分かった。」

八幡「そんな所だな。空きはあるのか?」

シルヴィア「それなら大丈夫だよ。そういうの私のところにも回ってくるから使用状況分かるんだ。明日は朝の9時から13時まで空いてたから、そこに私名義で入れておいたよ。」

八幡「済まないな。」

シルヴィア「もう、謝らなくてもいいよ!八幡くんには私の我が儘も聞いてもらっちゃってるんだから、協力させて!」

八幡「……ああ、また何かあったらよろしくな。」
シルヴィア「うん、任せて！」

料理の大切さ

八幡 side

昨日は飯を食ってから今日の事を話して、クインヴェールで鍛錬をする事になってから、風呂に入って歯磨きをして寝た。

今は朝の7時なのだが、特に何もしていない。朝飯を作ってる以外は。だって模擬戦場の使用時間が9時から13時の4時間だから、なるべく早く準備をしておきたい……のだが、肝心のお姫様がまだ起きない。昨日は変則的なデート以外は特に何もしてないのにな……

八幡「……まあ俺もパス持ってるから、入ろうと思えば入れるしな。いざとなればペトラさんの名前出せば1発だろうし。」

……今こう言っただけ、シルヴィを置いて行くとは言っていないからな？ここ重要だぞ？

――10分後――

バアンツ!!

シルヴィア「八幡くんっ!？」

八幡「ん？おおシルヴィ、おはよう。」

シルヴィア「おはようじゃないよ！どうして起こしてくれなかったのさ!？」

八幡「いやだってよ、あんな気持ちよさそうに寝てる奴を起こすのは気が引けるだろ？」

シルヴィア「そんなのいいよ！私は夢よりも八幡くんを取るんだから!」

おお、言い切りやがった。まあ俺も夢の中のシルヴィよりも現実のシルヴィを取るけどよ。

八幡「それは悪かった。今度からは起こすようにする。例えどんなに気持ちよさそうに寝てたとしても。」

シルヴィア「……それはそれでなんかやだなあ。」

おい、さっきの発言はどこ行った？

八幡「まあいい、朝飯食べるか？」

シルヴィア「うん！」

まあ朝は2人で食べた方が美味しいよな。1人じゃ味気ねえし。

シルヴィ「相変わらず八幡くんの作った料理は美味しそうだなあ。いつからこんなに上手になったの？」

八幡「そんなこと言われてもなあ……自炊するようになった時からとしか言えない。一応、界龍に入った時から料理はしてるからな。」

シルヴィア「へえ……毎日？」

八幡「そんな頻繁には作れねえよ。今は序列2位の立場もあるから報奨金を受け取れてるが、前までは小苑さんが仕送りしてくれてた金でやりくりしてたからな。料理に関してかなり調べるようになったのは事実だな。」

シルヴィア「そうだったんだ。道理で料理が上手いわけだよ。なら此処に来てからほぼ毎日って事だよな？」

八幡「まあそんな感じだな。米とかも2キロ買っておけば、俺1人なら2ヶ月半くらいは持つからな。」

俺、そんなに大食いでもないからな。

シルヴィア「でも、序列2位になった時から変わったんだっけ？」
八幡「ああ。あの面倒なチビが余計な事を言わなければ、俺が食費を大幅に削らなくても済んだんだよなあ……」

あの頃は本当に賑やかだったなあ……今こそ俺がシルヴィの家で寝泊まりする回数が増えたからそんなに無いが、昔はほぼ毎日来てたからな。いや、俺が帰ったその日も必ず来るんだけどな？

シルヴィア「あつはは！じゃあ八幡くんってさ、六花に來た1ヶ月間ってどんな生活してたの？学食は？」

八幡「学食は最初の頃は食べてたな。けど、料理の事を考えてるうちに、朝と夜は行かなくなつたな。寮の部屋にも簡易的なキッチンがあつたからな。」

あの頃は本当に簡単なものしか作れなかつたよなあ……目玉焼きとか卵焼きとかカレーとか。小学生でも作れそうな料理ばかりだったな。

八幡「そんで本格的な料理を作れるようになったのは、大体1ヶ月くらいだな。その頃には大体のものは作れたな。料理ってハマると楽しいからな。」

シルヴィア「それ分かるよ！上手くいったらもっと上のものに挑戦してみたくなるんだよね！」

八幡「そうだな……俺もそんな意識があつたな。徐々に作りたくなってくるんだよ。」

シルヴィア「ならさ、今度私たちが共通で作ったことない料理を一緒に作ってみない？初めての料理を共同作業で作ろうよ！」

ほう……まだ料理してない料理を共同で作る、か……なんか面白そうだな。

八幡「そうだな、面白そうだ。それじゃあいつかそれをやってみよう。その時までで作ったことのない料理、ピックアップしとけよ？」
シルヴィア「分かりました！教官！」ビシッ！

教官じゃありません。

シルヴィア「まあ、この約束はまだ先の事だから一旦置いて、今はこの朝食を楽しんでからクインヴェールに行く準備をしようか。」
八幡「ああ、そうだな。まだ挨拶もしてなかったな。」

いつの間にか、食事の事を忘れて2人で料理の事で盛り上がったな。しかし、朝からこんな事で盛り上がるとはな……分からないものだ。

シルヴィア「じゃあ八幡くん、挨拶お願いね！」

八幡「おう。んじゃ、いただきます。」

シルヴィア「いただきますーす！」

モーニングブーク

シルヴィア side

ご飯も食べ終わって、少しだけ2人でゆっくりした後、私たちはクインヴェールに向かっている途中です。今の時間帯なら、出歩いている人は少ないから楽なんだよね。

朝のお散歩をしているお爺さんやお婆さん、朝の運動を日課にしている人がいるくらいで、他は特に誰もいない。まあ今は《獅鷲星武祭》だからどの学園も休校状態になってるしね。

婆「あら、おはようさん。若いのに朝から2人で散歩かい？」

犬「ワン。」

シルヴィア「はい、運動は大事ですから。可愛いワンちゃんですね♪」ナデナデ

婆「そうかい？ありがとねえ。この子もついこの間までこんなんちくりんだっただけだねえ、いつの間にかこんなに大きくなっちゃってねえ。」

なんていう犬種だろう？白い毛が生えてて、なんかモフモフな感じ。

八幡「もしかして、この犬はサモエドって犬種じゃないですか？」

婆「おやまあ、旦那さんの方は物知りなんだねえ。」

八幡「い、いえ……」

婆「私はこんな感じの犬が好きでねえ。それに飼っていると孫みたいに思えてくるからねえ。」

シルヴィア「そうなんですか……この子、大人しくて良い子ですね。ちゃんと座って待ってますし。」

婆「馴けたわけじゃないんだけどねえ……お客さんが来る時もこん

な感じで私の隣で座って、話を聞いているかのように耳を傾けるんだよ。」

へえ〜……そんな犬もいるんだなあ。でも、犬って賢い動物だっていうからなあ。

婆「私の自慢の孫だよ。さて、そろそろこのババアもお暇しなくちやね。いつまでも年寄りの退屈話に付き合わされちゃ、2人きりになれないからね。」

シルヴィア「そ、そんなとんでもないです！楽しかったですよ！」
八幡「俺もです。朝からこんな風に話せる機会はあまり無いので新鮮でした。」

婆「そうかい？なら良かったよ。」

なんだか朝から良い事がありそうかもねっ！

シルヴィア「それじゃさようならお婆ちゃん。行こっか、八幡くん。」

犬「ワンツ！」

シルヴィア「ん？どうしたのかな？」

婆「お嬢ちゃん、どうしてこの子の名前を知ってるんだい？」

シルヴィア「え？八幡くんの事ですか？」

婆「この子の名前を言った覚えはないんだけどねえ。」

八幡「……ああ、俺の名前も八幡っていうんですよ。それで反応したんじゃないですかね？」

婆「あら！そうだったのかい。驚いちゃったねえ、まさか同じ名前の人がいたなんて、ねえハチマン？」

ハチマン「ウウン。」ウナズキ

凄い……本当に言葉を理解出来てるみたい。座ってお話を聞いてるっていうのも嘘じゃないみたい。

八幡「不思議な偶然もあつたものですね。」

婆「そうだねえ。孫が2人に増えるなんてねえ。」

八幡「俺にはこんな風にモフモフした毛はありませんけどね。」

婆「ホッホッホ、それもそうだねえ。じゃあ今度こそバイバイだね、ほらハチマンも。」

ハチマン「ワンワンッ!」

……どうやったら躰もしないであんな風になるのかなあ? 絶対躰けてるよね?

2人「さようなら。」

シルヴィア「ちょっと驚いちゃったね。」

八幡「ああ、まさかハチマンって名前だったとはな。にしても可愛い犬だったな。」

シルヴィア「お利口さんだったよね。私が八幡くんって言うまでちゃんと座って待ってたしね。」

もしかして、私たちの会話もああやって座りながら聞いてたのかな？

——クインヴェール女学園——

シルヴィア「よしっ、着いた！」

八幡「一応パスは持つてるが、かぎしたほうがいいか？」

シルヴィア「ううん、大丈夫だよ。私と一緒にいればその必要はないから。」

八幡「流石生徒会長様だ。」

シルヴィア「崇めたまえっ！」

八幡「ははあーっ。」

シルヴィア「ぷっ！ふふふふっ♪」

八幡「にしても、やっぱり少し規模が小さいんだな。界龍ではいきなり門だからな。」

シルヴィア「クインヴェールは、見栄えや環境にも意識してるからね。普段からお洒落でいられるようになってね。」

八幡「まあ学校の選考基準に『容姿』を取り入れてるくらいだからな。アルカントとは全く別種だが、特殊なカテゴリーだよな。」

シルヴィア「そうだね。私はこれが普通になっちゃってるけど、他学園から見れば変わってるのかもね。」

八幡「もしもの話は好きじゃないが、もしクインヴェールが潰れるとしたら、シルヴィは何処の学園にするんだ？」

シルヴィア「勿論界龍!!」

八幡「……なんとなく理由は分かるが、なぜだ?」

シルヴィア「八幡くんがいるからに決まってるよ。他に理由があると思う?」

むしろ、ここが1番大事だよね!

シルヴィア「じゃあ八幡くんは?もし界龍が潰れたらどの学園に行くの?」

八幡「……俺ならレヴォルフだな。」

え!?よりにもよってレヴォルフ!?

シルヴィア「ど、どうして?」

八幡「星導館とガラードワースは奴らがいるから論外。アルルカントに関しては簡単だ。俺自身、研究に興味がないからだ。クインヴェールは性別で無理。まあこんな理由だな。」

シルヴィア「じゃあレヴォルフにした理由は?」

八幡「いや、今言ったと思うんだが……」

シルヴィア「だって今のは他学園の事でしょ?レヴォルフ自体の事は何も言っていないよ。」

八幡「……そうだなあ。」

どうか、どうか彼女だけは出てきませんように!

八幡「まあ最近大人しくなった手のも理由の1つだな。今の生徒会が機能しているからだろう。これはあまり理由になってないが、シルヴィと界龍の奴らを除けば、1番交友関係が深い奴がいるからだ。」

シルヴィア「……それって?」

八幡「オーフェリアだ。」

もおくやつぱり出てきたあー！

八幡「……どうした？フグみたいな頼して。」

シルヴィア「べっつにいー！」プクー

八幡「おいおい、オーフェリアに嫉妬するなよ。俺はオーフェリアに恋愛感情なんて抱いてないから安心しろ。」

シルヴィア「でも八幡くんって、オーフェリアさんには甘いよね？」

八幡「……どこがだ？」

シルヴィア「だってオーフェリアさんに抱き着かれても振り解こうとしないじゃん！」

八幡「それ1度やったんだよ。」

シルヴィア「……それで？」

八幡「涙目で上目遣いしながら、『……私の事、嫌いになったの？』って言われたから、ちよつとな……」

シルヴィア「それくらい我慢して！」

八幡「じゃあ学園祭の時のアレは何だったのかなあ？エルナトの宿泊チケットで押し負けたのは何処の誰だったかな？」

………

………

………

シルヴィア「や、やつぱりさ、オーフェリアさんのあれは反則って事だよな。」

八幡「おい。」

シルヴィア「だってなんか可哀想なんだもん！」

例えるならアレだよ？まだ毛が生えただけの子犬が段ボールと置き手紙で『拾って下さい。』みたいな感じの目で見ているようなものだよ!?

八幡「……まあ分からなくもないけどよ。いや、普通に分かるわ。」
シルヴィア「………模擬戦場、行こっか。」

八幡「ああ、そうだな。」

結論、オーフェリアさんのアレは私たちにとって致命的な弱点です。

憑霊試運転①

八幡 side

——クインヴェール・模擬戦場——

八幡「着いたな。そういや今って8時半だが、中に入れるのか？」
シルヴィア「時間になつてからじゃないと無理かなあ。ゆつくり来たつもりだったけど、まだ時間有り余ってるね。」

八幡「ああ、こんな所でアップをしようにもなあ。それに、8時半とはいえ誰もいないわけじゃないしな。」

チームルサルカが居ないとも限らないからな。それに、他の学生も見られたら困るわけではないが、動画とか撮られてアップされたら、とんでもないくらいに迷惑だ。

シルヴィア「うーん……どうしよつか？」

八幡「どうするって、待つしかないだろ？俺は影の中に潜ってやり過ごすつもりだが、シルヴィはどうする？」

シルヴィア「それだといつまでも此処にいる私がバカみたいだよ。影に潜るのなら私も入れてよ。」

八幡「分かってるよ。ほれ、手を繋げ。」

シルヴィア「はい♪」ダキッ！

……シルヴィアさんよ、それは手を握るというのではなく、腕に抱き着くというんですよ？この2つの違い、分かってます？

——10分後——

シルヴィア「それでね！教えてもいいけど、それまでの期間は君達2人を練習相手にさせるからって言ったら、震え上がってたんだよ。」

八幡「そんな事があったのか……」

シルヴィア「2人とも、必死に背筋を伸ばしてたなあ。」

シルヴィア「それとね、あの子達って私のスキャンダル狙いとかもしてるんだよね。だから私の事で何かを探ってたんだけど、これに関して何かしてきたら、タダじやおかないって言ったら、今度は5人全員が2人みたいになったんだよね。今思うと面白いなあ。」

その時の俺たちはまだ初々しい頃だったな。手が触れれば慌て、顔が合ったら赤く染め合う。今よりもバカップルしてるような感じだったな。

――更に10分後――

シルヴィア「そしたらペトラさんから、早く子供の顔が見たいって！あの人は本当に私のことからかうの好きなんだから！それに付き合ってまだ1週間くらいです話じゃないよ！」

八幡「……確かにそうだな。」

ペトラさん、流石にそれは早すぎですって。

シルヴィア「その時はそれだけで終わったけど、クインヴェールで部屋にいる時は、私たちの話を聞きに来ては、なんて惚気だって呆れた風に言うんだよ！聞きに來たのペトラさんの方からなのに！」

八幡「まああの人なりの冗談とかだろう。いや、本気で思ってることもかもしれないけどな。」

※本気です。

――もいっちょ10分後――

シルヴィア「あつ、9時になったよ！八幡くん中に入ろっ！」

八幡「ああ、そうだな。」

シルヴィはすぐに模擬戦場の使用許可の手続きをして扉を開けた。中はやはりといった感じで現代的な作りになっていた。

シルヴィア「さて、扉のロックは掛けたし、遮音もした。他は大丈夫かな。それで、何から始めるの?」

八幡「軽くアップでもするか。その後に行った事のある奴らで憑霊をする。」

シルヴィア「オッケー。」

八幡「…………その手に構えてるカメラ端末はなんだ?」

シルヴィア「八幡くんのカッコいい所を記録しておこうと思います。」

八幡「…………はあ、まあシルヴィにならいいか。」

シルヴィア（それはもしかして、私なら大丈夫って事だね!? なんか特別扱いされてるみたいで嬉しいなあ! まあ実際彼女だから特別だけだね♪）

八幡 s i d e o u t

—————

そしてクインヴェールの一室では…………

「あれえ〜!?! 模擬戦場の貸し出しが埋まってる!? 昨日まで午前中は空いてたのに〜!」

「しかも登録してるの会長だよ! これは見に行くチャンスだよ!」

さらに食堂でも…………

「ねえ、今会長が1人で練習してるみたい! 行ってみない?」

「えっ、本当!?行く行く!」

「会長の体技、どれか1つでも学べれば!!」

庭園でも…………

「先輩聞きました!?今シルヴィア会長が1人で模擬戦場を使って練習してるみたいです!」

「嘘っ!?こうしてはいられないわ!貴方は行くの?」

「勿論です!!」

さらにはこんな所にも…………

「○○先生、今シルヴィアさんが1人で鍛錬をしているそうですよ。少しだけ見に行ってみませんか?」

「あら、それは面白そうですね。今日は特に仕事が無かったから、見に行きましようか。」

「よくよく思えば、生徒の鍛錬を見た事はあまりありませんでしたからね。」

そして最後はやっぱり…………

ペトラ「シルヴィアったらどうしたのかしら?急に鍛錬なんて。この日なら昨日に続いて八幡くんとデートしてもおかしくないと思っただけど。」

ペトラ「…………ここからでも中の様子は見られるから見てみようかしらね。」

そしてペトラは模擬戦場のカメラ端末を開いた。そこで見たのは……八幡が体術の演舞で体を動かしているところをカメラ端末で記録しているシルヴィアの姿だった。

ペトラ「……………」

ペトラ「……………はあ、そういう事だったのね。まあいいわ、彼は別にこの学園に入っても問題は起こさないだろうし。」

ペトラ「扉のロックは……………してあるわね。それに遮音も。でもねシルヴィア、貴方肝心な事を忘れてるわよ?」

ペトラ「私がカメラ端末で映像を見られるって事は、全生徒がその中の様子を見られるって事なのよ?」

そして場所は変わって、模擬戦場前……………

ガヤガヤザワザワ……………

やはりといったところなのか、生徒で溢れていた。

「ねえ、中に入れないの!」

「ダメなのよ、ロックされてるわ。」

「会長の動きを見るチャンスだったのに……………」

落胆の声が混じってる中、帰る生徒もいた。

だが、のちの1人の生徒の行動によって全てが一変した。

「か八か、カメラ端末で中の様子を見えます！」

「貴方ねえ、シルヴィアさんが扉をロツクして遮音までやってるのに、カメラの遮断を忘れるわけ「つ、繋がりました!!……………え」っ!!? 嘘っ!!!?」

?

[illegible]

「うわっ！突然叫ばないでよ！！ビツクリするじゃない！どうしたのよ！？」

模擬戦場に集まっている生徒、教師は1人の生徒に注目していた。

「な、中にいるの……………会長と……………界龍第七学院の序列2位、比企谷八幡さんです!!!」

[illegible]

この叫びはクインヴェール中に響き渡ったのだが、中にいる八幡とシルヴィアには部屋を遮音していたため、聞こえていなかった。

憑靈試運転②

—————

クインヴェール中に大絶叫が響き渡った。面白い事に、中にいる八幡とシルヴィアは遮音設定をしてあるため、外部からの音は聞こえないようにしてあった。故に聞こえるのは内部の音だけだということになる。

当然、このカメラもそこまで万能ではない。模擬戦場に設置してあるカメラは合計4つだが、その生徒がモニタリング出来るのは1つだけなのだ。そのカメラは回転する事はないが、音声は拾ってくれる監視カメラだった。

だがそんな物よりも、模擬戦場の前にいるクインヴェールの生徒、教師はそれぞれの端末を開いてカメラ映像をガン見していた。

その理由は、言うまでもないだろう。

「わあ〜!! 本当だ! 本当にあの【夢幻月影】がいる!!」

「ほ、ほほほ本物だよね!? 偽物なんかじゃないよね!?」

「偽物だったらシルヴィアさんと来るわけないでしょ! 絶対本物よ!!」

「『比企谷様〜!!!』」

………最早模擬戦場前は、空港内で待つファンの行列のようになっていた。しかも警備のない。

「でも、どうしてクインヴェールで? 界龍でやらないのかな?」

「比企谷さんは自分の道場持ってたんだよね? そこで練習はしないのかな?」

「いや、多分だけどさ、他の生徒が使ってるだろうから遠慮したんじゃない? ほら、今の界龍つてとんでもなく強いじゃん?」

「確かに。《鳳凰星武祭》は凄かったもんね！最低序列54位が本戦に残ってたもんね！」

「やつぱりさ、今の界龍を作り出したのって比企谷さんだと思うんだよね。時期的にも納得出来るしね。」

全員「うんうん。」ウナズキ

こうして、クインヴェールの比企谷八幡に対する株は急激に上昇したのである。

—————

八幡 side

……よし、アップはこのくらいで大丈夫だろう。次は感覚を掴むために経験済みの奴らで憑霊だな。

八幡「シルヴィ、八咫鳥の憑霊をするからどんな感じがするか、見ていてくれ。」

シルヴィア「はい♪」

八咫鳥、憑霊だ。

八咫鳥『御意。』

すると、八幡の肩に大きな鳥が現れて飛び立った。くると八幡の頭上を3回程旋回すると、八幡の方へと急降下して八幡の身体へと戻って行った。

そして八幡の姿が《鳳凰星武祭》で見た時の黒い羽織に背中に赤文字で【八咫】と書かれて、腰には鎖分銅が巻かれた姿になった。

シルヴィア「……………」パシャパシャパシャ

八幡「……………シルヴィ。」

シルヴィ「あつ……………だつてカッコいいんだもん！」

俺まだ翼も出してないんだが？コレなら出さないほうがいいかもな。

八幡「……まあいい。俺的には問題無かったが、八咫鳥はどうだ？」

八咫鳥『拙僧の方も問題ない。いつも通りの感覚であった。』

八幡「そうか……あんまり聞く意味ないと思うが、シルヴィはどうだった？」

シルヴィア「もおうちちゃんと見てたよ！今回の発動がいつもやつている状態なら、もう少し発動速度を上げたほうがいいんじゃないかな？演出も大事だけど、八幡くん前に言っただでしょ？『星武祭は戦う場所だ。』って。」

八幡「それもそうだな。八咫鳥、次の機会があつたら旋回は1.5周くらいにしてみる。やり辛かったら2周でもいい。」

八咫鳥『承知。では憑霊を解こう。』

そして八幡は先程の姿へと戻った。

八幡「しかし、今のは羽織に羽織でバサバサするな。八咫鳥の憑霊をする時はこの羽織脱いだ方がいいな。」

シルヴィア「せっかく良い羽織なのにそんなこと言っちゃダメだよ。」

でも本当の事だしなあ……だってあれだよ？甚兵衛に着物とか、上着にロングコートとか着たようなものだぞ？

八幡「……まあその話は置いとくとして、次は朱雀とだな。シルヴィ、出来るだけ抑えるが炎が飛ぶから気を付けろよ。」

シルヴィア「うん、分かった。」

朱雀、憑^ま霊^とうぞ。

朱雀『おう、任せな!』

今度は八幡の真後ろに赤い大きな鳥が現れ、またも旋回しながら八幡に憑いた。

先程やった和装とは違い、今度は武士のような格好をしていた。赤い軽鎧けいがいには橙と黄の炎が装飾されていた。

朱雀『くぅー! やっぱ旦那との憑霊は最高だな! 俺は特に問題ないぜ。』

八幡「俺もだ。シルヴィは……………」

シルヴィア「……………」パシャパシャパシャ

八幡「……………」

シルヴィア「……………」あつ。」

八幡「よう、現実に戻ってきたか?」

シルヴィア「う、うん!」

八幡「それで? 何か分かったか?」

シルヴィア「え、ええ〜とお…………八幡くんの憑霊姿はどれもカッコいい?」

八幡「…………後で撫で回してやる。」

シルヴィア「むしろ褒美だよ!」

よし、髪型が乱れるまで撫で回してやる。朱雀、もういいぞ。

朱雀『あいよ、じゃあな旦那!』

朱雀の憑霊も解けて、また制服姿に戻った。

八幡「…………シルヴィ。」

シルヴィア「だ、だつて〜。」

八幡「…………はあ、まあ次の憑霊はこんな風にならんから安心しろ。」

玄武、起きてるか?

玄武『はぁ、い、今行くよぉ。』

今度は床に静止している亀がいた。そしてその場から八幡の方へと消えていき、八幡の姿が変わる。

と思ったら、変わった部分は腕と脚につける緑色の防具と胸当がついたくらいだった。

だがその防具には金色に輝く宝玉のようなものが付いていた。

※イメージとしてはHIGH SCHOOL D×Dの主人公、兵藤一誠の《赤龍帝の籠手》を緑にして宝玉を黄色にして、黄色の突起を黒にしたような感じ。

シルヴィア「……………」パシャパシャパシャ

八幡「結局撮ってんじゃねえか！」

シルヴィア「はっ！しまった！」

オメエなんでもアリか!?

玄武『僕も問題ないよぉ。マンちゃんは？』

八幡「俺も問題ない。もういいぞ。」

玄武『はぁ、い。』

そしてまた、制服姿に戻る。

八幡「……………」で？何か言いたい事は？」

シルヴィア「八幡くんがカッコ良過ぎて自分に与えられた事を全うすることが出来ませんでした。」

八幡「サラツと俺が悪いみたいな言い方してるよな？」

シルヴィア「ち、違うよ！いつもの八幡くんも良いけど、姿が変わるともつとカッコよくなるからダメなの！いやダメじゃないんだけ

どね！」

八幡「どのみち俺じゃねえか……もうやめとくか？」

シルヴィア「ううん、続けよう！途中で諦めるのなんてダメだよ！試合は明日からなんだから！」

八幡「そう言いながらも、やる気満々で構えてるそのカメラ端末は何だ？」

シルヴィア「……………テヘ。」

八幡「お前、写真撮りたいだけだろ。」

シルヴィア「それだけじゃないもん！ちゃんと八幡くんの映像も撮ってるもん！」

八幡「……………威張っていうことじゃないよな？」

次から新しい奴との憑霊なんだが、こんなペース上手いくのか？

憑靈試運転③

八幡 side

まったくシルヴィの奴、すっかり見てはいるみたいだが、それがカメラ端末の方で集中し過ぎてるから台無しになってるな。両方気をつけてくれれば俺も楽なんだがな。

現に今も……

シルヴィア「♪♪♪」キラキラ

目をキラキラさせて、鼻歌しながらカメラ構えてるし。そんなに見たいもんかねえ？

まあ、俺も初めてやるからどんな姿をするのかは気になるけどな。今までは意識しなくても普通に憑^ま霊^とう事は出来たが、意識したら出来るようなもんなのかも検証しねえとだしたな。

先ずは白虎から行くか。

八幡「んじややるからな。シルヴィ、カメラ撮るのは構わんが、撮り過ぎるなよ？」

シルヴィア「わ、分かってるよ！」

どうだかなあ……白虎、頼む。

白虎『分かった。行くぞ！』

八幡が心の中で白虎と会話し終わると、白虎が八幡の右隣から現れた。八幡の周りを一周した後に八幡の方へと消えて行った。

すると、八幡の格好がみるみる変化していき、白主体の和装に所々に少しばかりの黒模様。両腕には黒い包帯のようなものが巻かれて

いて、手には持ち手が黒、爪の方が銀に輝く鉤爪が装備されていた。それ以外にも八幡の目が青色に変化していて、瞳が細長くなっており、虎のような威圧感があった。

八幡「憑霊……もうが猛牙・はくそうじん白爪刃。」

これが白虎との憑霊か……爪が武器になるとはな。まさかここで鉤爪が出てくるとはな……俺鉤爪は扱ったことねえんだよな。仕方ねえ、永成に教えてもらうか。

シルヴィア「八幡くん！こっち向いて！私の方を睨むように！」
パ
シャパシャパシャ

八幡「……………」キツ

……………あつ、逆効果だった。

シルヴィア「良い！良いよその目！バツチリだよ！」

……………なんかこいつキャラ変わってねえか？女優でもねえのに役みたいなのにハマりすぎだろ。

シルヴィア「ふう………良いのが撮れた。」

八幡「おい。」

シルヴィア「ん？……………あつ。」

八幡「オメエはまたか……………」

シルヴィア「しょ、しょうがないじゃん！忘れてつい撮っちゃうんだもん！」

シルヴィア「もう私写真班でいいよね!?八幡くんの憑霊を撮る係でいいよね!？」

……………こいつ、少し思い知らせてやる必要があるようだな。

俺は足に少しだけ星辰力を溜めてシルヴィの方まで飛んだ……
よし、シルヴィの前まで来れた。

シルヴィア「うわっ！お、脅かさないでよ八幡くん……何？どうしたのそんなに見つめて？それよりも、その目であんまり見つめないで欲しいなあ、なんて／＼」

八幡「……シルヴィ。」

シルヴィア「ひゃうっ!？」

俺はシルヴィの前髪を軽く掴んで上にあげた後、シルヴィ額の方に俺の額をくっつけて目と目を合わせた。なんかアワアワ言ってるが、そんなのは知らん。

シルヴィア「え、えと……あの……／＼／＼」

八幡「俺は言っただろ？写真を撮るのは構わないが、憑霊はしっかり見ていてくれと。」

シルヴィア「う、う、うん／＼／＼／＼／＼／＼」

八幡「なのにさつきから写真を撮ってばかりだなあ？ちゃんと見てくれてるのか？」

シルヴィア「い、いえ……写真を撮ってるだけで見てませんでした／＼／＼／＼／＼／＼」

八幡「だろうな。じゃあ最後にチャンスをやろ。次で最後の憑霊だから、その時はしっかりと見ている事だ。カメラで撮っても構わんが、どうなるかはシルヴィ次第だからな。分かったか？」

シルヴィア「う、うん／＼／＼／＼／＼／＼」

八幡「よし、じゃあ始めるぞ。」

よし、これでもう良いだろう。

八幡はシルヴィアから額を離し、掴んでいた髪も元に戻した。そして歩いている途中で白虎との憑霊を解いた。

シルヴィア「／／／／／／／／／／／／／／／／」

シルヴィア「もっと睨まれたかったなあ／／／／／／／／／／／／／／／／」

さて、さっきの場所に戻って準備するか。次は索冥だったな。今俺
の中にいる霊の中で一番強い存在だ。
俺は準備いいぞ、索冥はどうだ？
索冥『私も万全でございます。』

八幡「よし……」

現世に索冥を呼び出すと、後ろ足で立ち前足を振るった後に俺の方へと向かって来た。

……………ん？変化がない？

シルヴィア「……………八幡くん？」

八幡「……………失敗か？」

索冥『その……………なんと言いますか、八幡様。今の八幡様では私を憑霊わせる事は出来ません。』

八幡「それは、俺の実力不足と踏まえていいのか？」

索冥『……………自らが仕えている主にこのような事を申し上げるのは、大変失礼だと重々承知しておりますが……………恐らくはその通りだと。』

実力不足……………俺がお前を憑霊うのはまだ先になりそうだな、すまない。

索冥『いえ、とんでもございません！私の方こそ、主に對し無礼な口をお許してください！』

構わねえよ、実力がないから憑霊が出来ないのは本当の事みたいだからな。

八幡「ふう……………シルヴィ、索冥との憑霊は無理だった。俺の実力不足みたいだな。」

シルヴィア「え!?今の八幡くんでも充分強いのに!？」

八幡「まあ、これからの課題ってところだな。」

さて、これからどうすつかな……………

八幡sideout

—————

時系列は遡り、10分前……

「「「きやあああああ!!!」」」

「ヤバイ!ヤバイって!!比企谷さんがシルヴィアさんに……とにかくヤバいつ!!」

「うわあゝ会長真つ赤!!比企谷さんもカッコいい……／／／／／」

「あんな目で見られ続けたら堕ちちゃうよ／／／／／」

「……と、年下も意外とアリなのかしら?」

「ああ……もう死ねる。」

「比企谷様……最高です。」

「だ、誰か、これを録画した者は……?」

「な、なんとか成功しました……」

「……よ、よくやりました、これで半年は持ちます。」

学生、教師共に2人の先程のやり取りを見て、悲鳴とともれるような黄色い絶叫を上げた。

最後の方のやり取りは不明だが……

—————

ペトラside

ペトラ「はあ……カメラの目もある事を忘れてあんな事をするなんて……八幡くんは目がいいのではなかったのかしら？」

ペトラ「とはいえ、関係は順調のようね。これなら問題はなさそうね。」

大会結果と大公開

八幡 side

さて、どうしたもんか………索冥以外は扱えるとしても、ここで思い切り練習するには狭過ぎる。かといって何もせずにいるっていうのも勿体ない気がする。せっかくシルヴィが手配してくれたんだ、有意義に使わないと申し訳ない。

シルヴィア「そういえば八幡くん、君の憑霊って2体同時には出来ないの？」

八幡「同時には出来ないな。半々で力を出し合ったとしたら、その能力は中途半端にしか発揮されないからな。使えなくもないが、2つの能力の力は半減された状態で使う事になるから、あまり良いとは言えないな。因みにこれはもう検証済みだ。」

シルヴィア「そうなんだ……因みに姿はどうなるの？やっぱり少しだけ融合した風になるの？」

八幡「………一応見た目は変わる。だが、この場ではやらないからな。」

シルヴィア「ええ〜!?ケチィ!!」

何がケチィ!!だ。お前はさつきからパシャパシャ撮りまくってただろうが。

八幡「んー……やっぱ祢々がいけないといつもようにはならないな。あいつがいた方が憑霊ってやりやすいんだよな。」

シルヴィア「祢々って?」

八幡「俺の純星煌式武装だ。正式名称は《祢々切丸》だ。細かな代償とかは言えないが、俺の試合を見てくれれば分かる通り、刀身がある刀型の煌式武装だ。何でも刀自体にウルムⅡマナダイトを使った

ら、鉱石が消えて刀身が青白くなって、自我も出来たみたいだ。」

ホント、あんなパツパツパーな性格した奴が今まで適合者0だったとは考えられないな。

八幡「しかし、索冥が纏えなかったとはな……当然っちゃあ当然かもな。まだ四神の1体が目覚めてねえのに、どうやってその長を纏えって話だよな。」

シルヴィア「確か、四神って4体いるんだよね？亀に虎に鳥と龍だっけ？」

八幡「ああ、その内まだ龍が目覚めてない。気難しい奴なのかは分からないが、唯一架空の動物だからな。どんな感じなのか分からん。」

亀、虎、鳥はこの地球上に存在する動物だが、龍は想像上の生き物だ。どんな性格をしているのかも分からない。凶暴なのか温厚なのか、それすらも分からない。まあ、分かるはずもないんだが。

八幡「とはいえ、やる事がなくなっちゃったな。呪符の整頓なんて明日でも出来るし、祢々の手入れも必要なし。他にする事なんて……ないな。」

シルヴィア「じゃあ休憩にしなよ。それにもう復活戦の最終試合が始まってから30分くらい経ってるし、終わってるかどうか、見てみようよ。」

八幡「……そうだな。」

俺はシルヴィの方へと向かって用意してあったドリンクを飲みながら、シルヴィの端末を見た。復活戦はもう終わっていた。

シルヴィア「あれ、終わってる。じゃあもう決まったみたいだね。あつ、新着来たから出すね。」

く本戦復活チームのおしらせく

以下のチームを本戦出場へ参加するものとする。また、不正・星武祭期間に不祥事を起こした場合、その権利を剥奪するものとし、その権利を2位のチームへと譲渡するものとする。

聖ガラードワース学園

チーム・ランスロット

上記のチームを本戦出場を認めるものとする。

尚、以下の内容が敗者復活戦の結果である。

1位 チーム・ランスロット

2位 チームエンフィールド

3位 チーム・赫夜

く運営委員会よりく

……やったみたいだな、フェアクロフさんたち。

シルヴィア「前回、前々回の王者のプライドって奴かな。見事に復活してくれたね。」

八幡「ああ、しかも当日に戦う相手を決めるのはあの人自身だからな。フェアクロフさんとしては葉山たちと戦う事を望んでると思う。」

シルヴィア「……そうだね。負けた相手にはリベンジしたいって思

えるもんね。」

どのチームと戦うかはまだ分からないが、俺……いや、俺たちも負けるつもりは毛頭ない。

コトツ

八幡「ん？」

シルヴィア「……………」

八幡「どうした？急に頭乗つけて。」

シルヴィア「今更になって心配になってきたんだ。八幡くんの身に何かあったらどうしようって。」

八幡「……………」

シルヴィア「そりや星武祭は安全面は保証できるけど、君に何かあったら私嫌だよ……………何だか嫌な予感がするの。」

八幡「……大丈夫だ。俺は絶対お前の所に帰ってくる。無傷かどうかは分からないが、帰って来ることは約束する。」

シルヴィア「……………約束だよ？」

八幡「ああ。」

チュツ

2人は互いの唇を合わせた後、5秒くらいしてから離れた。

八幡「今のは、絶対に帰ってくるって約束で構わないか？」

シルヴィア「うん。」

シルヴィアをこれ以上心配させるわけにはいかないな。もう時間もないし、今日はデートにでも連れてくか。

八幡「よし。シルヴィ、今日はもう時間ないから街でもぶらついてから家に帰らないか？」

シルヴィア「……うん、じゃあそうしよつか。」

八幡「じゃ、行るか。」

シルヴィア「うん！」

そして俺は模擬戦場から出ようと扉を開けた。するとそこから

……

「「「うわああああ!!!」」」

クインヴェールの生徒と教師が雪崩のように転がり込んできた。

八幡「……………は？」

シルヴィア「え？えええ!!？」

な、何だ!?何でこんなにクインヴェールの生徒と教師がいるんだ!?俺たちがここにいたる事は誰も知らないはずだ!?

「も、もう限界！比企谷さんとシルヴィアさんの甘々はもう無理だよ!!」

「さ、流石は六花一のカップル……ガクッ。」

「髪上げ、デコとん……もう満足です……」

「そして何と言っても、1番なのは……」

「キスツ!!!」

はあ!? 何でこいつら……おい、ちよつと待てよ!

八幡「シルヴィ、さつきいじつてた模擬戦場の設定のところでカメラの方を見てくれ！」

シルヴィア「う、うん！」

シルヴィが急いで部屋設定のところを見に行った。するとシルヴィは、顔を赤くしていた。

シルヴィア「は、八幡くん……カメラの設定だけ、ONにしたままだった／／／／」

NOOOOOO!!!だからあああ!!!

憑霊はいいとしても、まさかキスも見られるとは……………なんて公開処刑だ。

シルヴィア 「うう／＼／／／／／」

八幡「これは……なんか想像以上にヤバいな／＼／」

「比企谷さん！さっきの約束といい、キスといい、凄くカッコ良かったです！」

「凄く男らしかったです！物凄くキュンと来ました！是非、もう一度お願いします！」

「比企谷様、!!」

拭えない恥ずかしさ

八幡 side

はあ……はあ……な、何とかここまで来たな。しかし、こんなに思いつきり走ったのはいつぶりだ？我武者羅に走ったからめっちゃ疲れた……

にしても、まさか監視カメラの設定だけがONになっていたとはな……俺の鍛錬も筒抜けだったってわけだ。まあ知られたのがあれだけで良かった。他にもまだ見せてないのはあるからな。

さて、走ってきたは良いが、今の場所は……商業エリアのちようど入口くらいか……まあ、クインヴェールから離れられたからいいか。

八幡「はあ……はあ……ふう……んじゃシルヴィ、これからどうする？」

シルヴィア「……………／／／／／」

未だに顔を赤くしたままだった。いや、その気持ちは俺も分かる。だってあんな風に公開されたんだ、恥ずかしくないわけがないよなあ。

八幡「……もう帰るか？今の状態で外はキツイか？」

シルヴィア「……………／／／／／」コクッ

八幡「分かった、じゃあ今日はもう帰るか。」

この状態で出かけてもな……そう考えたら家で時間を過ごした方が楽だよな。

——シルヴィアの家——

シルヴィの状態だが、着いた方がいいが、中に入ってもさつきとあまり変わっていなかった。

……さっきのが余程衝撃的だったんだろうな。

八幡「気持ちは分かるが、もうそろそろ戻っても大丈夫だと思うぞ。」

シルヴィア「……八幡くん、凄く恥ずかしかったよ／＼／＼」

八幡「おお……よしよし……」

シルヴィが俺の方に頭を寄せてきた。無理もない、殆どの生徒に見られたんだろうからな。

シルヴィア「ゴメンね八幡くん。可能性はないと思うけど、もし動画がアップされてたら、その子の事厳しく言っておくから。」

八幡「ああ、分かった。もし今とか明日の試合が始まる前にアップしていたらな。」

シルヴィア「うん。」

シルヴィもようやく落ち着きを取り戻し、普段通りになって来た。この方が俺としては嬉しい。

八幡「にしても流石は女子校だな。俺たちが模擬戦場に入ってから、あんなに集まるとは思ってもみなかった。」

シルヴィア「君はもう有名なんだから、人が集まるのは当然だよ。八幡くんはもう少し自分の事を評価したほうがいいよ？」

これでもしてるつもりなんだが……まだ低いんだろうか？むう……俺としては普通の評価だと思ったんだが……

八幡「そーいやキスの事なんだが、あれって写真とか撮られてるって可能性あるか？」

シルヴィア「……無いとは言えないかな。だって普通に考えたら美味しいネタだからね。まあ私と八幡くんが付き合ってるっていうのは世間では知られてるけど、どんな風に過ごしてるかは発表してないからね。」

それもそうだな。それでキスの事を発表なんてしてみろ、一気に一面記事だな。

シルヴィア「……ごめん、思い出しちゃった／＼／＼／」
八幡「そ、そうか……」

シルヴィ、もう少し耐性つけようぜ？

早朝の目覚め

シルヴィア side

……ん、んん？あれ、なんで私ベッドにいるんだっけ？昨日は確か……八幡くんと家に帰って来て……んん？あれ、そこから記憶がない。クインヴェールで凄く恥ずかしかったのは覚えてるけど、そこから何にも覚えてないや。

でも、隣には八幡くんもいる。あつ、そういえば今の時間は……朝の4時半かあ……早起きってレベルじゃないね。外の方もやっと少し明るくなつたくらいでまだ殆ど陽はない。

シルヴィア「……しょうがないから起きようかな。今日は本戦のくじ引きもあるし、2度寝したら少し面倒だしね。」

アレ!?私ってどうやってパジャマになったの!?

――30分――

身支度は終わって後は11時までゆっくりするだけなんだけど、昨日何があったのか八幡くんに聞かなきゃ!だって気になるんだもん!どうやって着替えたのかとか、お風呂入ったのとか夕飯は食べたかどうかとか!

……でも、この時間って暇だなあ。早朝というよりも夜明け?に近い時間だし、朝ごはんを作るにも早い気がする。だってまだ5時だもん。

朝を散歩するにも何もないだろうし誰もいないだろうし、こんな時間にお店なんてやってるとは思えない。やってても非合法なお店くらいだよ。

シルヴィア「うーん……1人の時間って暇だなあ。今までは色々やってたけど、今は歌を作る気分じゃないし、歌を聴く気分でもない。何しよっかなあ。」

???「それなら儂の話し相手になってはくれんかのう?」
シルヴィア「!!」

え!?いつの間に!?っていかこの声って!

シルヴィア「小苑さん!」

小苑「おはようシルヴィアよ、お主は存外早起きのじゃな。」

シルヴィア「お、おはようございます、小苑さん。今日は偶々早く目が覚めちゃっただけなんです。いつもはこんな風に起きたりなんてしません。」

小苑「そうかそうか……まあ早過ぎる早起きというのも中々良いものじゃぞ。朝に余裕ができるからのう。まあ、後の方は眠くなるがの。」

それって本末転倒なんじゃ……

小苑「まあつまらん話はよいじやろう。今日から《獅鷲星武祭》の本戦じゃが、お主は何処を応援しておるのじゃ?まあ見当はついておるが。」

シルヴィア「勿論、チーム・帝龍です!それ以外にありませんよ!勿論ルサルカも応援してますけど、好きな人を応援するのは当たり前じゃないですか。」

小苑「ほっほっほ、まあ予想通りじゃな。八幡も幸せ者じやのう……これ程のいい女子おなごから愛されておるんじやなからな。」

シルヴィア「小苑さんはお付き合ひしようとは思わないんですか?」

小苑「全くないのう。儂自身そういう乙女らしい事に関しては興が

ないからのう。それに、一目惚れというのもよう分からんでな。」

確かに小苑さんが恋愛をするイメージはないなあ。男つ気がないってわけじゃないけど、小苑さんがそうしようと思っ
てないから余計にかな？

小苑「とはいえ、見ている分には退屈せんがの。お主らの見てると、これが『バカツプル』だとか『イチヤコラ』というものなんじやなつと思う時があるわい。」

シルヴィア「や、止めて下さいよ／＼私たちは至って普通のお付き合
いをしてるんですから！」

小苑「お主らの普通は最早恋人の域を超えていると思うがのう……料理を一緒にする夫婦など今はそんなに居らんじやろう。その点お主らはそこの夫婦よりかなり夫婦らしい事をしてい
ると思うがのう。」

ま、まだ結婚もしてないのに夫婦だなんて……で、でも小苑さんからはそう見えてるってことだね？ な、なんか嬉しいなあ……エヘヘ／＼／＼

小苑「嬉しそうな所済まぬが、1人の世界に入らんでくれるかのう？ 儂が此処に居辛くなるではないか。」

シルヴィア「あつ、す、すみません！」

小苑「よいよい。」

シルヴィア「そういえば、小苑さんはどうしてここに？ 八幡くんが入れたんですか？」

小苑「まあ。八幡もお主には悪いと思っ
ておるじやろう。仮にもこの家はお主のなんじやからな。勝手をした事には少なからず罪悪感
は抱いておるじやろう。」

シルヴィア「気にするなつて言つても無理ですね。八幡くんはそういう人
ですから。」

八幡くんって責任感も強いからね。
それから私たちは1時間程お話を続けて、暇を潰していた。こうして小苑さんと話していた。

――1時間後――

八幡「シルヴィおはよう、小苑さんもおはようございます。」

シルヴィア「八幡くんおはよう♪」

小苑「うむ、おはようなのじゃ。」

やった、八幡くんが起きてきた！

八幡「ああシルヴィ、小苑さん勝手に上げちまって済まない。一応話があつてな。」

シルヴィア「ううん、気にしないでいから大丈夫だよ。それとさ八幡くん、1つ聞きたいんだけど、いいかな？」

八幡「ん？なんだ？」

シルヴィア「昨日って私、この家に帰ってから何してたのか、教えてもらっていいかな？」

八幡「……………覚えてないのか？」

シルヴィア「うん、綺麗サッパリ。」

八幡「信じてもらえないかもしれないが、はっきり言うといつも通りだったぞ？ いや、まあ……………少し気が抜けてたところもあったが、あまり変わった様子はなかった。」

ええゝ本当に!? なんか信じられないよ。でも、八幡くんが言う事だから本当なんだろうなあ。

シルヴィア「なんか信じられないけど、信じるよ。ありがとう八幡くん。」

八幡「おう。」

小苑「八幡、ちょうど飯が炊けたぞい。茶碗によそってはくれんか？」

八幡「わかりました。」

シルヴィア「あつ、八幡くんは支度してきなよ！用意は私がやつくから！」

八幡「……………悪いな、頼む。」

シルヴィア「うん！」

そう言ってから八幡くんは洗面所の方へと向かった。私たちは普段あのスペースで着替えを行なっている。勿論、別々でだよ？一緒に着替えないからね!?

小苑「しかし、シルヴィアは優しいのう。あえて八幡にああ言ったが、迷わず自分を使うとはのう。」

シルヴィア「当たり前ですよ。今日から八幡くんは《獅鷲星武祭》の本戦なんですから。可能な限りのサポートするのは当然です。」

小苑「なるほどのう……………ならば、この年増は邪魔じゃったかのう？」

シルヴィア「い、いえそんな事は！」

小苑「ほっほっほ、冗談じゃよ。」

この人の冗談は冗談に聞こえないよう！

対戦相手決定！

八幡 side

朝食も食べ終わって俺は12時、シルヴィは11時になるのを待っていた。理由はというと、俺は《獅鷲星武祭》の本戦、シルヴィアはそのトーナメントを決めるためのくじ引きがあるからだ。

今回くじを引くのはガロードワースと、界龍、クインヴェールの3校だけだ。本戦がすぐな気もするがそれも仕方のない事だろう。なにせ、今回の《獅鷲星武祭》の参加チームが圧倒的に少ないからだ。だから本戦でもらえるポイントの量も少し増えるってことだ。だから今回も界龍は稼げたって事になるな。去年は本戦に残ったの9チームで優勝、準優勝、他にも良い線まで行ったタッグが居たからかなりの量になっているはずだ。

まあ、俺は別にポイントなんてどうでも良いけどな。俺のやりたいようにやるだけだからな。あつ、反則とかはしないぞ？

小苑「八幡よ、少しよいかな？」

八幡「はい、何です？」

小苑「お主から感じる靈気が上がっているように感じるのじゃが、昨日何かしたのかえ？」

八幡「まだ憑霊をしていない奴らの試運転を試してみたんです。だからじゃないですかね？」

小苑（……それだけとは考え辛いのう。お主には言っておらんが、お主の中には神すらも宿っておるのじゃからな。しかし、神というのは《靈氣》ではなく《神氣》を放つ存在じゃから、今のお主から出ているのとは全くの別物じゃな。）

八幡「でも、何故そんな事を？俺は特に何も感じませんけど。」

シルヴィア「私もです。小苑さんは何か感じるんですか？」

小苑「まあもう。そうじゃもう、これも言っておこうかのう。八幡、お主の周りに白い光のようなものが纏わり付いておる。まあお主には見えんだろうかのう。」

小苑さんの言う通りだ、俺には全く見えない。それどころか気配すら感じない。俺もまだまだって事か。

シルヴィア「……八幡くん、この話は胸の中にしまっておこうよ。今は星武祭に集中しなきゃ。」

八幡「……そうだな。」

――10時20分――

シルヴィア「さて、私はそろそろ行こうかな。くじ引きの会場であるシリウスドームは最低でも20分はかかるからね。」

八幡「なら俺も行くことにする。ここにいても良いが、小苑さんにも予定があるでしょう？」

小苑「そうじゃもう、俺も古い知己ちぎと共に《獅鷲星武祭》を見る予定での。いつまでもここにおっつては邪魔じやの。俺も知己の場所へと向かうとするかの。」

じゃあこの時間から全員出るって事になるから鍵掛けとかねえとな。

俺たちは準備……するものは特にないが、一応身支度を整えてから家を出た。俺とシルヴィはシリウスドームへ、小苑さんは古い知り合いの所へと向かった。

……でも、小苑さんの古い知り合いって誰だ？

八幡 side out

――11時――

梁瀬『さて皆様！復活戦も終わりを迎え、いよいよ本戦の開幕です！！ルールは概要と全く一緒ですが、今回に限っての本戦は初戦の相手はくじ引きによって決まる方法を取っています！故に対策を練られるのは、くじを引き終わってから1時間ということになります！』

梁瀬『くじ引きの順番は例年に従って前回大会の順位順でいきいたいと思ってます！なので、今回はガラードワースから始まり、界龍、クインヴェールの順になります！では、時間も時間なので、早速引いていきましょう！まずはガラードワースから！』

アーネストは台座まで歩き、その上にある4枚の紙から1つ目を選び、大会委員に渡した。

大会委員がその紙を開き、書かれている番号を発表した。

大会委員「ガラードワースのチーム・ジャステイス、Aの2番です！」

梁瀬『早速1チーム目が決まりました！チーム・ジャステイスはAグループの2番です！さて、お次は自身のチーム・ランスロットのくじ引き！一体どっちのグループになるのか!?!』

アーネストは再び台座から紙を一枚選び、運営委員に渡した。

運営委員「ガラードワースのチーム・ランスロット、Aの1番です！」

なんと、予選の最終試合と同じカードでの再戦になった。

梁瀬『おおつとお!!なんと再び刃を交えることになりましたがラードワースの両チーム!この本戦の場で雌雄を決する時が来ました!さて、残る紙は2枚ですが、これは界龍とクインヴェール同時に引きます。何故なら……もう戦う事は決まってるから、どっちのチームがどっちの方から出てくるかを決めたいから!だそうです!』

サラツと裏事情を話していたが、特に気にすることでもないだろう。台座の前に来たシルヴィアとアレマ(星露は来なかった。)が来てそれぞれくじを選んだ。結果はチーム・ルサルカがBの1番、チーム帝龍がBの2番だった。

梁瀬『さて、これで対戦形式が決まりました!皆様、見たい試合の方へと急いで下さい!!ガラードワースの両チームを見きたい方々はこのまま、シリウスドームへとお残り下さい!チーム・ルサルカとチーム・帝龍の試合が見たい方々はカノープスドームへとお急ぎ下さい!席が埋まるのも時間の問題ですよ!』

—————

八幡side

初戦はルサルカか……まあこれはこれで良かったのかもな。さて、俺もチームと合流して作戦練らないとな。

八幡 side out

—————

小苑「ほう……相手はクインヴェールになったようじゃのう。さて、儂らもカノープスを向かうぞい。」

???「少し待つて下さい。少しはお年寄りを労ってください。」

小苑「よう言うわい。お主は衰え知らずじやろうが。違つかえ？
チエンリラン春麗蘭……いや、初代よ。」

麗蘭「その呼び方はやめて下さい。今ではもう名だけの存在です。意味などありません。」

小苑「儂の攻撃を紙一重で躲しておきながらよく言うわい。それにお主は……盲目じやろうて。その状態で儂の攻撃を躲すなど、どれだけの聴覚を持つとるんじや、お主は。」

麗蘭「生涯盲目の私にとってはこれが普通です。見えるというのがどのような感覚なのか私には分かりません。聴く、嗅ぐ、感じる、この3つが私にとってこの空間を認識できる要素なのです。」

小苑「………なんか儂、2代目と名乗っておるのが小っ恥ずかしくなってきたわい。」

※チームの信頼

八幡side

俺たちはクインヴェールのチーム・ルサルカとか……まあこの組み合わせはありがたいな。本戦の初戦はチーム・ジャステイスかチーム・ルサルカであつて欲しかったからな。やっぱチーム・ランスロットとは最後、決勝で戦いたいからな。

だが、ルサルカか……あまり情報がないな。グループ戦での戦い方しか参考にならんからな。クインヴェールで公開した試合では差があり過ぎて参考にもならなかった。

だが、あの5人が持つてる純星煌式武装は中々に厄介だ。確かライアポロスだったな。1つだと危険過ぎるから5分割してそれぞれが所有している。

ええくと名前は……あつたあつた。

ライアポロス・カリオペア……ギターの音を出すと剣型の光波振動波を展開する能力。

ライアポロス・エラード……叩くと音の障壁を作る事が出来る能力。

ライアポロス・メルポーネ……集団に対して阻害弱体化する斧型の光波を展開する能力。

ライアポロス・ポリムニア……能力はカリオペアと同じだが、形がトライデント型（三本ヤリ）の形。

ライアポロス・タレイア……味方の能力を増加させる光弾を発射できる能力。強化されたら、瞳が青くなるらしい。

とまあ、簡単に調べたらこんなもんだな。厄介なのはメルポーネとタレイアだな。他のは戦っている中でもなんとかすれば問題ない。

最初にモニカとマフレナを潰しておきたいな。あの2人を最初に

倒しておけば残りの3人は自分だけの力でなんとかするしかないからな。それに、パイヴィは分かんが、トゥーリアとミルシエが計算して攻撃をしてくるような性格でもないからな。

まあ、戦略的にはもう仕上がってる。後は俺のチームに伝えるだけだな。

――界龍・控え室――

はあく疲れた。シリウスからこっちのカノープスに来るまでえらい数の人に話しかけられた。もう俺、今日はあまり人とは話したくない。

八幡「ああ、疲れ……って何だ、皆来てたのか。」

セシリー「リーダー1番遅い！重役出勤だー！」

陽乃「遅刻はいけないんだぞー。」

八幡「誰も遅刻してませんよ。」

虎峰「ま、まあまあ。2人共落ち着いて下さい。こうして予想よりも早く来てくれたんです。良いではありませんか。」

八幡「ちなみにその予想の時間ってのは？」

セシリー／陽乃「50分！」

八幡「……お前ら俺をなんだと思ってる。作戦の説明も無しに戦わせると思ってるのか？」

そんな事もせずに戦わせたなら、チームが崩壊する。そんな事は絶対にさせねえよ。

八幡「なあ参謀、俺がいない間のこの2人ってどんな感じだった？俺の飯が食えないとかボヤいてたか？」

暁彗「……………ウオンは2時間に1回は唱えていた。雪ノ下殿は特にない。」

……陽乃さんは最近そういうのなくなってきたからともかく、セシリーは重症だな。

ていうか2時間に1回ってどんだけハイペースで言ってるんだよ。

八幡「……まあいい、それよりも作戦を伝える……と言いたい所なんだが、この初戦は俺に任せてほしい。奴らとはすぐに力タをつける。長引かせればこちらが不利になる要素があり過ぎるからだ。だから最初から俺やらせてはくれないか？」

陽乃「それがリーダーの指示なら私は従うよ。君なら本当にやってくれそうな説得力があるからね。それに、私は君のこと信頼してるからね。この戦い、頼んだよ。」

虎峰「僕も八幡に支持します。存分に戦ってきてください。」

セシリー「もしやられちゃっても、あたしたちが八幡のかわりにやっつけてあげるからー!」

暁彗「……………卿の好きなようにやると良い。我らはそれに従うだけだ。」

……………やれやれ、つくづく最高のチームだな。

八幡「すまないな皆。もし俺がやられたら、後のことは頼む。」
4人「はい!!（うん!!）（……………御意。）」

本戦開始と応援

—————

チャム『さあ、間も無く始まるツスよ!!こちらカノープスドームでは本戦Bグループの試合が始まるうとしているツス!!西にクインヴェールのチーム・ルサルカ、東に界龍のチーム・帝龍が控えてるツスよ!今回もどんな戦いを見せてくれるのか楽しみツスね!そして今回、実況職の方が多忙だった為、緊急で私、ファム・ティ・チャムが代理実況を務めさせてもらうツス。そして解説にはアルルカントアカデミーOGの左近千歳さんが務めるツスよ。いやゝこんな組み合わせは初めてツスねー。』

千歳『せやねゝ。ウチら基本は実況がメインやから一緒に肩並べる事があまりあらへんからねゝ。これはある意味、試合よりもレアな場面だと思わゝ。』

チャム『いやゝまさその通りツスね。さて、今回は実況なんでドン・喋っていくツスよ!!先ずは選手の登場と紹介から!!前回の《獅鷲星武祭》ではベスト8だけど、今回はここまで上り詰めた!3年前との違いを見せつけてやるツスよ!!クインヴェール、チームルサルカ!!!』

西の登場口から5人の女子生徒が現れ、会場から歓声が響いた。

千歳『流石は今人気のガールズロックバンドチームやねゝ!予選のグループ戦を観ても分かんねんけど、前回と比べて大きく成長してるのが一目で分かるチームやね。それに個々の実力も上がっているだけでなく、チームコンビネーションも伸びとるから、優勝候補のチーム・帝龍でも苦戦はすると思うなあゝ。』

トウーリア「つしやあ!チーム・帝龍なんて一捻りだぜ!!」

ミルシェ「ドンとかかって来いやー!!」
マフレナ「その言い方は失礼過ぎますよ。」

チャム『さて、次のチーム行くツスよ!!今回初登場にも関わらず圧倒的実力差とパフォーマンスを見せつけてきたチームツス!いま限りなく優勝に近いチームはこのチームと言っても良いでしょう!!では、ご紹介します!界龍、チーム・帝龍!!』

東の登場口からも5人の男女混合の生徒が現れると、チーム・ルサルカよりも大きな歓声が響き渡った。

千歳『うわあ……えげつない歓声やねえ。これ絶対序列2位でチームリーダーの比企谷八幡選手に対してやろ。まあそれは置いて、予選の試合では危なげない所は1箇所だけあったけど、それを除けば安定した試合運びだったやんなあ。いまノリに乗ってる学院だけあつて強いんやなあ。』

虎峰「八幡に対する歓声と言われると、僕たちの立場って何なんでしょう?」

セシリー「そんな事言わないでよ。これから戦うの八幡なんだから嫌味に聞こえちゃうでしょー。」

八幡「聞こえてるからな。」

そして八幡たちチーム・帝龍も登場口から飛び降り、ステージへと着地した。

チャム『さあ両選手出揃いました!!』

—————

麗蘭 side

はあ……やはり慣れない場所を歩くのは大変です。会場内を歩いた事なんて殆ど無いので疲れました。

小苑「柄にも無く疲れておるようじゃのう。」

麗蘭「ええ、慣れない場所を歩くのは、それだけ神経を使うので。ところで小苑、1つ頼まれてはくれませんか？」

小苑「何じゃ？」

麗蘭「そちらに自動販売機があると思うのですが、お茶を購入してきてはくれませんか？」

小苑「？お主も変なことを言うのう。見えておるのじやろう？」

麗蘭「……形は分かってもパッケージや柄などは分からないのです。」

小苑「……お主も苦勞しておるんじやな。」

すみませんね、小苑。

麗蘭「龍生九子」にはお茶と水しか無いので良いのですが、外に出れば味の濃い飲み物などが置いてあるので、気をつけなければならぬのです。」

小苑「お主、ジュースに何の恨みがあるんじや？」

……ジュース？

麗蘭 side out

めぐり side

シルヴィア「此処がクインヴェール専用の部屋なのでこちらに入つて観戦しましょう！」

めぐり「はーい！」

皆さんこんにちは！城廻めぐりです！いやあく実はですね……私、

このカノープスドーム？に来たはいいんだけど、殆ど満席でして……座る場所がありませんでした。立ってみようかなあって思ってたんだけど、ちょうど良いタイミングでシルヴィアさんから通信が入って、一緒に見ないかって誘われたんだ〜！いや〜良かった！

そして今、クインヴェールの専用ルームに入った所なんだけど、うん、やっぱり観客席と違って見やすい！

あつ！ちょうど良いタイミングで選手登場だ！

――選手登場&紹介――

聞いた事あるなあ……ルサルカって確か今人気のロックバンドだよな？大学の友達が言ってたなあ。

それにしても、チーム・帝龍って女の子3人の男の子2人なんだなあ。しかも比企谷くんだけ格好が違うのはなんでだろう？リーダーだからかなあ？

シルヴィア「やっぱり八幡くんのあの格好はカッコいいなあ。凄い迫力に存在感が濃い……流石だなあ。」

めぐり「シルヴィアさんも存在感はあると思うけどなあ。」

シルヴィア「え？私声に出てました？」

めぐり「うん、バツチリと。」

シルヴィア「あ、あはは……私って八幡くんに比べると存在感って歌ってる時くらいでしか無いのかなあって思えて。」

めぐり「そんな事ないよ。この前の《王竜星武祭》ではシルヴィアさんが1番存在感あったよ。だってあんなに凄い歌技を披露してくれたんだもん。」

あれは凄かった上にニュースにもなったからなあ。

『戦律の魔女、念願の優勝!!だが、最後に披露した技はラブソングか!?!』みたいな感じでね。

めぐり「あの歌って比企谷くんに対して歌ったでしょ？」

シルヴィア「は、はい／＼／作るのには苦労しました、ラブソングの作曲なんて初めてでしたので。」

めぐり「溢れんばかりの愛を感じるなあ……」

シルヴィア「あゝ茶化さないでくださいよ!!」

めぐり「ごめんごめん。じゃあ今日も明日もこんな風に彼を応援しようよ。シルヴィアさんの応援は比企谷君にとって一番のエネルギーになるんだから。この会場で比企谷くんにとって一番の存在感、間違いなくシルヴィアさんだからさ。」

シルヴィア「……………そうですね！彼女として目一杯彼氏を応援しなきゃですね！」

めぐり「その意気だよ!!」

漫才戦闘？

—————

両チーム共ステージへと降り立ち、戦いに備えている。チーム・ルサルカはすでに陣形を組んでいて、前衛が2人、中衛が1人、後衛が2人だった。八幡の警戒している2人は後衛の方に位置していた。

八幡（やっぱあの2人は後ろか……さて、どうやって攻めたもんか。）

陽乃「八幡くん大丈夫？もし無理そうだったら私たちも戦うよ？」

八幡「いや、俺がやると言った以上は、俺にやらせてくれ。俺が倒された時に皆が仕掛けてくれ。」

暁彗「……………御意。武運を祈る。」

そして暁彗たち4人は後ろの壁まで下がって行った。

チャム『あれ？チーム・帝龍の比企谷選手を除くメンバーが壁際の方まで下がって行ったツス！まさかこれは比企谷選手1人でルサルカを相手にすることツスカね？』

千歳『いやいや、それは幾ら【夢幻月影】でも無茶やて。相手は前回デビューでベスト8まで残った強豪チームやで？1人で倒せるほど甘ないチームや。まあ見るからに1人で相手するようやけど、どんな風に攻めるのか楽しみやねえ。』

トウーリア「あいつふざけてんのか!?1人で相手しようっての!？」

パイヴィ「ナメすぎ。」

モニカ「ちよつと調子に乗り過ぎじゃないかしら？」

ミルシエ「まあ戦うには変わりないから、気にせず行こうよ！」

マフレナ「皆さん言い過ぎですよ！でも、情報強化は任せてください！」

八幡（……………無茶、か。確にな。だが、無謀ではない。策なら
幾らでもある。）

チャム『あー……………準備が出来たようなので開始するッス！《獅鷲星
武祭》本戦Bグループ第1試合、バトル、スタートッス!!』

マフレナ「皆さん！情報強化弾撃ち込みます！」

マフレナが開始早々に全員に向けて強化弾を撃ち込んだ。

トウーリア「よっしゃあ！あいつに撃って撃って撃ちまくってやる
！」

トウーリアとミルシェがそれぞれの楽器を弾こうとすると……………

八幡「フンツ！」ブンツ!!

八幡が振りかぶり、祢々切丸を真横に降った。すると剣から紫色の
斬撃が飛んできた。真っ直ぐ一直線にルサールカの方へと飛んで
行った。

パイヴィ「……………防御するよ。」

パイヴイが反応して音圧防壁を張った。更に言うと、この防壁はパイヴイ自身も強化弾を撃たれているため、防壁の方も強化されている。

ルサルカは油断しているわけではないが、肝心な事を忘れていたのだ。

相手が比企谷八幡、世間では『次期万有天羅』と呼ばれている事を。

斬撃が防壁にぶつかって競合いになるかと思いきや、防壁はすぐに破られ、前衛の2人は途端に回避の体制を取ったが、防壁が張られていたのが直前だった為、純星煌式武装に少し掠ってしまったが問題はなかった。

だが、中衛と後衛は防ぎきれなかったのか、回避の体制を取っていなかった。中衛の位置に居るモニカは目を瞑ってしまったが、何も起きていなかった。

その理由は、斬撃が途端に速度を落として停止したからである。そして形を変えて50cmくらいの円形に形を変えた。

マフレナ「え？な、何ですかこれ？」

モニカ「黒い大きなボール？」

八幡「影時雨。」

八幡がそう呟くと、黒い円形は途端に爆発したかのように小さい針になってルサルカに襲い掛かった。

トウーリア「あだだだだだ!!」

ミルシェ「な、何!?この爪楊枝で色んなところを刺されているような感覚!？」

パイヴィ「くく!!」

モニカ「た、助けてくく!!」

マフレナ「……………どうして私にだけ飛んでこないんでしょう?」

何故かマフレナにだけ黒い針は飛んでいなかった。その理由は何なのだろう？

八幡（だってあんな優しい奴、何もしてねえのにあんな可哀想な事出来ねえよ。）

物凄く自分勝手な理由だった。

八幡「まあそれはさておき、そろそろ決着だな。」

八幡は地面を蹴り、ルサルカに突進した。だが、

『モニカ、パイヴイ、校章破壊』

そのうち2人は影時雨によって校章を破壊されていた。

トウーリア「はあ……はあ……やつとなくな『ビュンツ！』……た？」

ミルシエ「ああ……痛かつ『ビュンツ！』……た？」

『トウーリア、ミルシエ、校章破壊。』

早くもチーム・ルサルカの4人が倒されてしまった。残るはマフレナただ1人だけだったのだが……

八幡「……………」

マフレナ「あ、あの……」

八幡「……切れん。」

マフレナ「え？」

八幡「やつぱ切れねえ。こんな良い奴切れるわけがねえよ。あそこにいるおバカ4はまだしも、お前切るのはすげえ罪悪感残るんだよ。」

マフレナ「は、はあ……ごめんなさい。」

八幡「というわけで……」

マフレナ「？」

バチッ！

マフレナ「ひゃうっ!？」

八幡は呪符を取り出して瞬時にマフレナの背後に回ると、首筋の方へと小さな雷撃を与えてショックを与えた。マフレナはそのまま気絶してしまった。

『マフレナ、意識消失。End Of Duel』

観客『……………』

チャム『…………し、試合終了ツス!!勝者、チーム・帝龍…………何だけど、何なんだろう?このものすごく漫才みたいな試合は。』

千歳『せ、せやね。なんかウチも拍子抜けしたわ。こんなが準決勝でええんか?』

八幡（良いんです良いんです。細かい事は気にしない。）

チャム「ま、まあ何はともあれ、これでチーム・帝龍は決勝進出です!!残すは決勝のみ!今後の激闘が期待されます!!」

試合後のまったり

八幡 side

ふう……良い仕事をした。

虎峰「……八幡、遊んでませんよね？」

八幡「あ？何でだ？」

虎峰「いえ、その……あまりにも八幡の戦闘スタイルとはかけ離れていたの。」

八幡「俺の戦闘スタイルは様々だぞ？剣もあれば武術もあるし、魔法もあれば陰陽術だってある。今の試合は殆ど魔法だったけどな。」

セシリー「でもさー、手は抜いてたよねー？」

八幡「抜いてねえよ。ただ、俺は女を切るのは嫌ってただけだ。」

陽乃「でもあの子たちの内2人には使ってたじゃない。」

八幡「だってさ、前衛の2人はあんま女って感じしないから。会った時よく分かったんだよ。あつ、こいつらなら平気だって。」

虎峰「……理由が私的過ぎると思いますが、まあ勝てたので良しとしましょう。」

……なんだ？なんか不満でもあったのか？

暁彗「……………しかし比企谷八幡、あの技はなんなの？球状の物体がいきなり爆発して針のようになったが……」

八幡「あれは『影時雨』って言うてな、簡単に言えばフェイント技だ。斬撃を飛ばして切ると思わせてから、相手の……まあ、真ん中あたりくらいだな。その位置まで減速、形を球状に変える。そして完全に停止したら、相手が油断しているところを狙って一気に爆発だ。」

暁彗「……………何故そんな技を開発したのだ？」

八幡「……だってほら、寝てる奴とかを簡単に起こせそうじゃん。」

星露とか星露とか星露とか。」

セシリー「師父しかないじゃないかー。」

それ以外に昼寝が得意な奴なんて知らんからな。

そして俺たちは控え室に到着して少しだけ休む事にした。

陽乃「八幡くん、しないとは思うけどシャワー浴びてきても良いんだよ？動いたの、君しかないんだからさ。」

八幡「シャワー浴びる程の汗はかいてないんだけどな。動いたのほんの少しだし。」

すると陽乃が近づいて耳打ちをしてきた。

陽乃「でもさ、この後どうせシルヴィアちゃんと会うんでしょ？だったら少しでも良いカツコしくちや！」ボソボソ

八幡「シャンプーも何もないただのシャワールームに求めるものなんてないんですが、まあいいでしょう。」ボソボソ

八幡「すまんがシャワーを借りてくる。学院に戻る奴は戻って良いからな。」

セシリー「お背中流そつかー？」

陽乃「あつ、手伝うよー？」

八幡「洗うもんがねえつてのにどうやって人の背中流すんだよ。」

セシリー「じゃあ覗きに……」

八幡「男の裸なんて誰得だよ……」

そして俺はシャワールームへと足を運んだ。

八幡 side out

—————

陽乃「いや、準決勝なのにこんな簡単に勝っちゃって良かったのかって思えちゃうね。」

虎峰「全くです。少し手こずるかと思っていたのですが、杞憂だったみたいですね。」

セシリー「そういえばさー、シリウスドームでやってるガラードワース対決どうなったか気になんなーい?」

陽乃「ああ、チーム・ランスロットとハリボテ山の対決だったよね。確かに気になるなー。」

セシリー「そうだよねー。チーム・ランスロットと金髪エセイケメンがどうなったのか気になるしねー。」

虎峰「……………大師兄、あの2人は誰の事を言っているのでしょうか?」
暁彗「……………皆目。」

そしてセシリーは端末の方をスクリーンの方に写し、シリウスドームで行われている試合中継を写した。

セシリー「ええ、なんか戦術変わってない?皆攻めてるじゃーん。」
虎峰「攻撃的になりましたね。でも序列差もあるようですし、全く相手になってませんね。」

陽乃「いい言い方をすればね。悪い言い方なら遊ばれてるよ。」
虎峰「本当に悪い言い方ですね。」

……………5分後……………

陽乃「……………4人全員やられたね。」

セシリー「清々しいねー。」

暁彗「……………チームリーダーも個々の性質を見極められていない。ただ戦わせているだけの試合だ。あれでは経験など得られない。」

p i p i p i …… p i p i p i ……

陽乃「ん？誰かな…おっ！シルヴィアちゃんにめぐり〜！来てくれたんだ〜。」

虎峰「シ、シルヴィアさん!!？」

めぐり『私が入っても良いのかどうか分からないんですけど、シルヴィアさんのノリに負けて来ちゃいました。』

シルヴィア『はい。決勝進出おめでとうございます。中に入ってもよろしいでしょうか？』

陽乃「良いよ良いよー上がって〜！」

陽乃はOPENのボタンを押して、2人を控え室へと入れた。

シルヴィア「へえ〜こうやってみると、鏗々たる顔ぶれだね。流石は八幡くんだね。」

めぐり「ほえ〜この人たちが比企谷くんと一緒に戦ってる人たちかあ……皆さん強そうだ！」

シルヴィアが来ている事に納得してはいるが、めぐりの事は誰も知らないで、ポカンとしていた。

陽乃「ああ、紹介するね。今回六花の見学に来た私の高校の頃の後

輩で城廻めぐりっていうんだ。」

めぐり「城廻めぐりです！よろしくお願いします！でも、今でも信じられないですよ。比企谷くんと貴方以外全員女の子だなんて！」

陽乃「えつと……めぐり、実はそこにいるオレンジ色の髪をした子は男の子なんだよね。」

めぐり「ええっ!?男の子!?本当ですか!?私よりも可愛いのに!?!」

めぐりさん、男の子にとってそれは褒め言葉ではありません。

陽乃「うん……残念ながら男の子です。」

虎峰「姉姉、残念とはどういう意味ですか？」

陽乃「べっつに〜?」

めぐり「ご、ごめんなさい！どう見ても女の子にしか見えなかったもので……」

虎峰「気にしないでください。よく間違われるので。」

セシリー「その人が陽姐のお気に入りの後輩？なんか分かるなー。癒し系というか、ポワポワ〜って感じの雰囲気が漂ってるよねー。」

陽乃「まさしくその通りなんだよね〜。この子ってばガードが緩いように固かったり、固いように緩かったりと気まぐれな子だからさー。」ポンポン

めぐり「むう〜子供扱いしないでくださいよ〜陽さん！私だつても

う大学生なんです！」

シルヴィア「あの……八幡くんは？」

虎峰「はははは八幡なら、シャワーを浴びている所です!!」

シルヴィア「そうなんだ、じゃあここで待たせてもらおうかなあ。」

シルヴィアがそう言った瞬間、シャワー室の扉が開いて上半身裸の八幡が出てきた。

八幡「あゝ何もしてなくてもシャワー浴びるのは良いもんだな。」

虎峰「は、八幡、幾ら何でもそんな格好で出てくるのはちよつと……」

八幡「別に良いだろ。そんなこと気にするような女は此処に……」

八幡はシルヴィアとめぐりがいることに漸く気付いた。

八幡「……いたな、1人。」

めぐり「わ、わあゝ！比企谷くんの身体ってそんな風になってるんだゝ。す、凄いね／＼」

八幡「まあ鍛えてるからな。これくらいは普通だな。」

めぐり「そ、そっか……………」

八幡も漸く慣れてきたのか、敬語を使わないようになっていた。

めぐり「……………ねね、少し触ってみても良いかな？」

八幡「……………別に構わないが、触って何かあるわけでもないぞ？」

セシリー「じゃああたしもー！」

陽乃「私も触りたいなあ！」

八幡「何でそんなに触りたがるんだよ……………俺は良いが、シルヴィにも許可取ってくれ。」

3人は瞬時にシルヴィアの方へと顔を向けた。

シルヴィア「まあ八幡くんが良いのなら私は別に構わないよ。」

そう言った途端3人は八幡の方へと直行し、八幡の身体をペタペタと触り始めた。特に腹直筋や胸板の辺りなどを中心に。

そして八幡が湯冷めしない内に制服を着てしまったので、あからさまに残念がる3人の姿があった。

散る

シルヴィア side

漸く八幡くんのペタペタタイムが終わって、残念がっている女の子3人。確かに八幡くんの肉体美に触りたくなる気持ちは分かるけど、少しは遠慮してほしかった。だって私の彼氏なんだよ！その人の身体をペタペタベタベタ触るのは少しだけ複雑な気分だったんだから！

八幡くんも八幡くんでは触られているにも関わらず、モニターで中継されている《獅鷲星武祭》の試合見てるしさ、湯冷めするから早く着てくれたのは良かったけど。

陽乃「あーあー、もつと触りたかったなあ。」

セシリー「すごい綺麗な筋肉だったよねー。」

めぐり「出来ればもうちょっと触りたかったかも。」

この3人もまだ触りたいなんて言ってるし……もう触らせないんだからね！

八幡「しかし、全員残ってたのか……どうしたんだ？シルヴィ達が出来たからか？ガラードワースの試合がやってるからか？」

虎峰「そういうわけではなかったのですが、答えは前者の客人が来たからです。八幡だけを残して行くわけにも行かなかったの。」

八幡「まあそうだな。どうする？試合見てから行くか？それとももう行くか？」

陽乃「折角だから見ていかない？相手がどっちになるのかまだ分からないけど、見ておいて損はないからね。」

暁彗「……………雪ノ下殿の意見にも一理ある。」

虎峰「そうですね。試合を見てから移動することにしましょうか。」

今のところ、チーム・ランスロットは全員生き残りで、チーム・ジャステイスが葉山くんだけになってるね。しかも会長との一騎打ち状態。私は100%八幡くんの応援しかないけど、今回は少しだけ応援するよ？アーネスト。

シルヴィア side out

—————

ギイン!!

鋭い剣戟が行われていて、金属音と共に火種が飛び散る。剣戟が終わると双方共に距離を取り構え直す。この繰り返しだった。

アーネスト「……………」

葉山「……………」

アーネストは葉山の体勢を崩しながらカウンターを狙い、攻撃しているのだが、その攻撃が読まれているかのようにことごとく防がれてしまっている。体勢を崩すまではクリア出来ているものの、攻撃が当たらないのだ。

かく言う葉山もまだ決定打になるものは与えておらず、片手に持っている剣をアーネスト目掛けて鋭く振るっている。

葉山（やっぱり一筋縄ではいかないか……………にしても、皆で戦うと言っていた割には早くやられたな、あいつら。まあ相手はチーム・ランスロット、そんな期待はしてなかったから別にいい。今は会長を倒す事に専念しないと。）

アーネスト（どんなに体勢を崩しても、必ず防がれてしまう、しかも体勢的に視認が不可能な状態でも、僕の剣を正確に防いでくる。カウンターを狙っても意味がないという事かな……………どちらにしてもこ

のままじゃ持久戦になるだけだから、少しだけ責めてみようかな。こんな時、魔術師が羨ましいよ。」

今度はアーネストから攻め、葉山の方へ上から【レイ・グラムス白瀧の魔剣】を振り下げた。

葉山「そんな攻撃じゃあ、俺は倒せませんよ会長！」

アーネスト「だろうね。だから工夫をしてみたよ。」

葉山「工夫？」

アーネスト「少し泥臭いけど……ねっ！」

葉山「ぐっ!!」

アーネストは剣を受け止められ罅迫り合いの中で、地面を蹴り、葉山に向かって空中回し蹴りを放った。突然の事で反応出来なかったのか、葉山は避けることもせずに食らってしまった。

アーネスト「どうだい？僕たちガードワースにしてみれば、泥臭いやり方だとは思わないかい？」

葉山「……そうですね。油断しましたが、もう食らいません！」

再び剣と剣が混じり合い、膠着状態になった。アーネストも小技を出してはいるが、葉山の宣言通りになって中々決まらなくなっていた。

葉山「さて、そろそろ決着をつけましょう。長引いても体力が消耗するだけなので。」

アーネスト「……………」

アーネスト（漸くだね……ここからが勝負だね。彼がどんな風に攻めてくるのか見極めながら攻撃をしないとね。）

今までの動きと違い、葉山の動きがより速くなった。そして剣の振る速度や威力もさつきまでと違い、重く鋭い一撃を放つようになっていた。

アーネスト（……まさかこれ程とはね。予選と戦った時よりも強いし速い。）

葉山「はあっ！」

アーネスト「フッ！」

葉山「どうしたんですか会長!? 攻撃が全く来てませんけど!」

アーネスト「……………」

アーネストは攻撃出来ないのではなく、攻撃をしていないだけの事である。今の葉山に自ら仕掛けて行くのは自殺行為に等しいからだ。

葉山「来ないのなら、こちらから行かせてもらいます!」

アーネスト「っ!」

ガギイン!!

何度目か分からない鏝迫り合いになり、互いに睨み合っていた。

アーネスト「くっ……」

葉山「さつきの泥臭い技、使わせてもらいますよ!」

葉山は左足でアーネストの剣を上の方へと蹴り上げた。アーネス

トも自分の技を真似されるとは思っていなかったのか、剣を振り上げられた状態のため、完全に無防備状態にされていた。

葉山「そこだ!!」

そして葉山の剣が、アーネストの校章を2つに切り裂いた。

梁瀬『試合終了!!勝者、チーム・ジャスティス!!!絶対王者相手に2回も大金星!!』

柊『どちらが勝ってもおかしくない良い勝負だったであります!これは決勝にも期待がかかるでありますな!!』

梁瀬『はい!次は明日の――』

ここで映像が消えた。

――――

八幡side

……陽乃だったのか、あの中継を大画面にしてたの。確かに、葉山が大画面で写ってる所なんて見たくないな。

虎峰「1度までならず2度も負けるなんて……」

セシリ「絶対はないからねー。でも、流石に驚くよねー。」

陽乃「……待ってなさいよ、明日になったらその顔ボコボコにしてやるんだから。」

陽乃「……めちやくちや燃えてるな。」

めぐり「葉山くんってあんなに強いんだね。比企谷くんとい勝負するんじゃないかな?」

八幡「……明日になれば分かりますよ。」

そう……明日になれば。

突然の邂逅

八幡 side

今日の《獅鷲星武祭》が終了して全員で帰っている所だが、やはり視線が痛い。まあ理由は決勝戦に残っているチームだからだろう。一応最新のニュースを見るとこんな感じになっていた。

『チーム・帝龍のリーダー、堂々の一人勝ち！仲間の体力を温存させる作戦か!？』

『チーム・帝龍余裕勝ち！次期【万有天羅】比企谷八幡は好調を維持！明日も楽しみ！』

『流石は夢幻!!明日の試合も瞬殺か!？』

などと、なんかこんな風に書かれてるけど、いつもチーム優先だからな？ていうかた本当に次期【万有天羅】なんて誰が言ったの？

陽乃「……ねえ、もし皆さえ良かったら今日は外食にしない？きつと今日話し合うのはこれでさいごかもしれないから。」

めぐり「私はホテルに帰るだけです。陽さんに着いていきます。」

セシリー「……そうだねー。あたしも今回は真面目に話し合いたいなー。」

暁彗「……………私も雪ノ下殿の意見を支持する。あの動き、興味がある。」

虎峰「僕も構いませんよ。対策を練りましょう。」

シルヴィア「私は八幡くんに任せるね。」

八幡「……………」

まあ確かに明日考えたい事も増えるだろうし、今日ある事は出来る

だけ話しておくか。

八幡「分かった、俺も付き合おう。どこで食べる？」

陽乃「出来れば個室が良いよね。話聞かれずに済むし、色々作戦会議も出来るからね。ただ、シルヴィアちゃんとめぐりは会議の事を外に喋らない事を約束してもらうけど。」

めぐり「喋りません！そもそも、いう相手が今いません！」

シルヴィア「私も守ります。どうしても彼氏のチームの事をバラすんです？」

………確かに。

――とある飲食店――

あの後、個室のある飲食店を探していたのだが、その殆どが居酒屋だった為に普通の近場にある飲食店にした。夕方に近い時間帯だからか、店内はそこそこ繁盛していた。

店員「いらっしやいませ、何名様でしょうか？」

陽乃「7人です。タバコは吸わないので禁煙席で。」

店員「かしこまりました。それではご案内いたします。」

気を遣ってくれているのか、この店員さん何も言っていない。しかも席も人の少ない奥の方にくれた。この店員さん、出来る人だ。

店員「こちらお冷とメニューになります。ご注文がお決まりでしたら、そちらの呼び鈴を押して下さい。ごゆっくりどうぞ。」

気の利く店員はそそくさと去ったが、失礼な態度はどこにもなかった。そして、俺たちの席順はこんな感じだ。

シハセ
テール虎
め陽暁

ちなみに席に座る順でモメたのは別の話だ。

虎峰「さて、何から話しましょうか？」

セシリー「虎峰アウトー！最初からそんな話しても意味無いじゃん！まずはご飯だー！」

陽乃「そうだぞー！」

……そんなに腹減るような事したか？

虎峰「し、失礼しました。」

めぐり「まあまあ、取り敢えず注文決めましょう！色んなのがあつて美味しそう♪」

ほお……単品だけでなく定食もあるのか。しかも結構種類豊富だな。

虎峰「僕は和風定食にしてみます。日本の味にも興味がありますので。」

セシリー「あたし焼肉定食ー！やっぱり美味しそうだからねー！」
めぐり「私は生パスタかな。でも、本当に色んなメニューがあるんだね。」

陽乃「私は肉焼きセットかな。ステーキ、ハンバーグ両方の味が楽しめてラッキーだね。」

暁彗「……………中華定食。」

シルヴィア「私はナポリタンかな。今日はそんな気分なんだ。」

八幡「俺は山賊焼定食だな。これが一番美味そうだ。」

陽乃「メニュー決まったみたいだね。じゃあ呼び鈴鳴らして。」

全員が注文を済ませ、待つてる間に明日の事についての作戦会議や対策などを練った。まあそんな短時間で決まるわけもなく、全員分の食事が来たから一時中断した。一括で来てくれるのは嬉しいな。

めぐり「おおく！どれも美味しそう♪」

セシリー「良かったら分け合わなーい？なんか他の味も気になってきたからさー。」

陽乃「おつ、それ良いねー！」

八幡「予想通りっちゃあ予想通りの展開だな。」

シルヴィア「あはは……確かにね。」

全員少しずつメインの食べ物を分けてから食事を開始した。そしてやっぱり……

シルヴィア「はい八幡くん、あーん♡」

八幡「あー……ん？何だよ？」

セシリー「い、いやーあたしたちの目を憚らずにするととは思わなくてさー。」

めぐり「2人共大胆だね／＼」

八幡「変な所あったか？付き合ってたんだからこれくらい普通だろ。」

陽乃「いや、まあ普通だけどき、大人数で食事する時にそれやる？」

八幡「まあ、俺はやらないが、シルヴィはやるんだろう。それよりも、陽乃とセシリーの間にいる奴をなんとかしてくれ。今にも血涙を流しそうなくらい睨んできてる。」

虎峰「……………」ギリギリ

怖えよ、そして俺を睨むなよ。睨むんなら、実行してるシルヴィを睨めよ。まあそんな事しないんだろうけどよ。

そんなこんなありながらも、俺たちは楽しい夕食を過ごした。

―――夕食後―――

八幡「んで？明日のことだが……どうしたい？」

陽乃／セシリー「金髪をぶっ潰したい。」

まさかの葉山ぶっ潰したい宣言ですか。いや、俺も同じなんだけどよ。

虎峰「相手は序列10位、しかもガードワースの序列1位を破った程の実力者ですよ？ぶっ潰す程度の覚悟では倒せませんよ。」

陽乃「へえ……虎峰くんも言ってくれるね。私じゃ役者不足だって言いたいのかな？」

セシリー「あんな奴、私と陽姐の2人で充分だよ。」

八幡「落ち着けお前ら。仲間割れみたいな事するな。2人の気持ちも分からんでもないが、虎峰の言う通りだ。潰す覚悟では足りないかもしれない。」

セシリー「……それって？」

八幡「……殺すつもりで、とかな。」

シルヴィア「……八幡くん？」

八幡「分かってる、これはもしもだ。殺人なんてしないしする気もない。だがそれは明日にならないと分からない。例えば、今人様の話を盗み聞きしてる奴とかな。」

全員（八幡除く）「っ!!？」

葉山「よく分かったな、比企谷。」

何がよく分かったな、だ。お前のチンケな殺気が教えてくれたよ。

八幡「ランスロットを倒して祝勝会か？天狗になるのはまだ早いんじゃないのか？」

葉山「君の方こそ、その薄汚れて穢れまくった顔を取ったらどうだい？まあ、皆を騙すにはもってこいの必需品だと思うけどね。」

こいつまだ俺が誰かを騙してるなんて思ってるのか。バカとか諦めが悪いというか……

八幡「その顔が俺の素顔なら、とんでもなく良い顔だな。人を操り放題なんだからよ。お前じゃあるまいしそんな事しねえよ。」

葉山「減らず口は昔に比べて随分と叩けるようになったようだね。昔の無口はどこに行ったんだい？」

陽乃「それ以上喋らないでくれる？あんたの声なんて聞きたくもないんだよ。早く自分の席におっちゃんこしてなよ。」

葉山「酷い事を言うなあ陽乃さん。俺はこんな奴と違って実力で強くなったんだ。僕の事を認めてくれても良いんじゃないか？もうついて歩くだけじゃないんだから。」

陽乃「はあ？間違えた道を歩んでる奴をどうやって認めろっていの？あんたバカ？」

セシリー「全くだね。陽姐から聞いてたけど、こんなにクズだとは思わなかったよ。いますぐその不細工な顔、もっと不細工にしてもいいんだよ？」

葉山「へえ……やれるものならやってみなよ。出来るのならね。」

一触即発じゃねえか。こんな所で騒ぎなんて起こすんじゃないよ。俺が原点みたいなもんだけどさ。

八幡「落ち着けお前ら、こんな所で問題を起こすな。虎峰も中腰をやめて普通に座れ。ここは戦う所じゃない。飯を食う場所だ。葉山、お前もチームのリーダーならチームメイトと話をするのが務めなんじゃないのか？いつまでも敵チームと話してるんじゃないよ。」

葉山「君が呼んだんじゃないか。何をバカな事を言ってるんだい？」

八幡「呼んでると思ってたのか？自意識過剰だな。俺は別にお前の事とは一言も言っていないけどな。自覚があつたとは驚きだ。」

葉山「っ！……ふんっ、まあいい。精々明日まで楽しむと良さ。」

そう言つて葉山は元の席へと戻つて行つた。

八幡「俺たちもそろそろ行くか。」

その後は全員無言でそれぞれの目的地の帰路へとついた。

共に戦う為に

シルヴィア side

飲食店を出て家に帰って来てから3時間、流石に3時間も経てばまずい雰囲気はなくなつて、話す事も普通に出来るようになった。彼、葉山くんの事で少し聞いてみたんだけど、八幡くんはあまり彼と関わった事がないから詳しい事は分からないみたい。聞いて分かった事は『自分のグループの問題を誰かになすりつけて問題を解決する無責任野郎。』くらいだね。

私はその場に居なかつたから分からないんだけど、私もあのノートを見たから大体の事は分かる。なんていうか……自分の行動に責任を持ってない人っていうのかな？それで『皆仲良く』をモットーにしているのなら、そんな関係長くは続かないよね。

八幡「まあ奴のことはどうでも良いが、《獅鷲星武祭》決勝ではあいつがいる。さつきは虎峰たちにあんな作戦を言ったが、実際には俺1人でやりたい。あいつの剣を誰にも受けて欲しくないってのが、俺の想いだからな。」

シルヴィア「でもそれ、陽乃さんや【雷戟千花】が受け入れてくれるかな？」

八幡「難しいだろうな。陽乃さんはあいつの事を知っているから良いとして、セシリーがあんな好戦的になったのは初めて見た。ああいうタイプが嫌いだとか？」

それか葉山くんの裏事情を知ったか、だよな。

ピーピー！

八幡「……風呂沸いたみたいだな。シルヴィ先に入るか？俺は後で

も構わないぞ。」

シルヴィア「…………じゃあ一緒に入ろっか？」

八幡「ま、まあ断る理由もないからそれでも構わない。」

シルヴィア「じゃあ、入ろっか。あつ…………八幡くん先に入ってね？」

八幡「分かつてるよ。いつも俺が先に入ってるからな。」

別に構わない事だけど、八幡くんが私の下着を手にとって凝視する可能性も捨てきれないからね！

シルヴィア side out

八幡 side

…………シルヴィと風呂に入るのも1週間ぶりだな。こうは言ってるが、そんなに頻繁に入ってるわけじゃないからな？月に4〜5回程度だ。週に1回って考えた方が楽だな。

ガチャツ

シルヴィア「お、お邪魔します…………／／／」

八幡「ああ…………」

シルヴィア「お隣、失礼するね。」

シルヴィがお湯を身体にかけてから浴槽の中に入ってきた。そこまでは問題ないのだが、浴槽に浸かってから俺の腕に抱き着いてきた。普段はいつもやっている事だがそこまで気にしないのだが、今は格好が格好だ。どうしても気にしてしまう。シルヴィが自分の胸の谷間に俺の腕を挟めるようにして抱き着いている。

八幡「お、おい…………／／／」

シルヴィア「／／／／／」

いや、まあ2年前とかもつと凄いのやってたけど、今もそれと同じくらいのことをやっている気がする。逃さないようにこうやって俺の何処かに腕を絡める。この子こんな方法何処で習ったの？ていうか、腕絡めてるのに顔も近づけるんじゃないやありません！

シルヴィア（はあ……八幡くん、なんだか男らしい匂いがする。なんていうんだろう……男性フェロモンを無意識に放出してるのかな？くつつきたくなくなっちゃう／／／／／）

ペロッ

八幡「っ!?!お、おいシルヴィ、いま何やった!?!」
シルヴィア「……え?」

八幡「いま、俺の首筋舐めらなかったか?」
シルヴィア「え!?!わ、私無意識にそんなことを!?!」

マジか……無意識でそんな事やったのかよ。それなら良いが、意識してやるんだったらマジでやめてくれ。嫌ってわけではないが、心臓に悪過ぎる。

シルヴィア「ううゝゴメンね?」

八幡「い、いや……大丈夫だ／＼」

その後もシルヴィが色々と仕掛けてきた。背中洗っている際にスポンジから自身の身体に切り替えたり、浴槽に入る時に対面で座ったりなど色々だ。

そんなこんなありながらも、俺は風呂に入っている時間はなんとか理性を保てた。

――1時間後――

風呂から出たは良いが、シルヴィはまだ顔が赤い。風呂でのことを思い出しているのか、すぐにでも布団の中に入っていきそうなくらい真っ赤だった。

八幡「……シルヴィ、まだ起きてるか？一応もう9時半だが……」
シルヴィア「……うん、大丈夫。そろそろ寝よつか。」

……なんだ？何かあるのか？

八幡「シルヴィ、何かあるのか？」
シルヴィア「ううん、特に何もないよ？」

シルヴィア（今は無心、寝ることだけを考えなきゃね！八幡くんに心の中を覗かれたら大変だもん！）

――寝室――

八幡「……それで、この体勢は一体なんなんだ？」

俺は最初仰向けになっていたのだが、その上にシルヴィが跨ってきた。なんか、いつにも増して大胆になっている気がする。

シルヴィア「うん、ちょっとした理由があつてね。スウーハァー……よし、八幡くん、明日は《獅鷲星武祭》の決勝。だから八幡くんは勝ちたいって気持ちは強いよね。だから、私も君にエールを送りたいの。」

八幡「エール？」

シルヴィア「比企谷八幡くん、私の純潔を貰ってください。そして、貴方のものだって証明して。」

八幡「…………それは必要な事なのか？」

シルヴィア「うん。明日の《獅鷲星武祭》は私も八幡くんと戦いたい。だから…………君と繋がりたい。」

八幡「……………」

シルヴィアがここまで言うてくるといふ事は本気なのだろう。それに顔こそ真っ赤だが、眼は一度も俺から背けずにいた。それに強い意志も感じる。

八幡「……分かった。」

シルヴィア「っ！……やっつと、やっつと君と1つになれるんだね。すごく嬉しい。」

八幡「ああ、俺もだ……」

シルヴィア「ん……」

俺とシルヴィは唇を重ねて抱き合った。最初は啄ばむような優しいキスだったが、徐々に嬉しさと欲求が高まり、唇から舌を出して互いの舌を舐め合うまでに至った。キスをひと段落、またひと段落と終えると、必ず銀の糸が口から垂れていた。

シルヴィア「んんっ……ちゅっ……んあ……レロ……ちゅゅゅ……んむう……ぷはあ……はあ……はあ……／／／／／」

八幡「はあ……はあ……じゃあ、行くぞ？」

シルヴィア「うん、君という存在を私の身体にたくさん味あわせて。」

そして俺たちは《獅鷲星武祭》の決勝前日の夜に初夜を迎えた。

喜びの朝

八幡 side

現在10月28日午前5時23分。俺は……いや、俺たちは遂にやってしまった。初めての営みをやってしまった。だが後悔はしていない。後悔っていうよりも満足感、多幸感でいっぱいだ。あつ、ちゃんと避妊はしてるからな。これはまだ必要だ。

しかもこの寒い季節に2人裸で寝たもんだから今は肌寒い……まあ、昨日はそんな事気にすることも無いくらい夢中だったからな。もしかしたらやり過ぎたかもしれない。

シルヴィア「ん、んんうゝ……」

八幡「……………」ツンツン

シルヴィア「……♪ゝ」

ふっ……もう少し寝かせておくか。俺はニュースでも「ン……………」……見ようと思ったが、どうやらこのお姫様が俺の腕を離してくれないようだ。

八幡「……………」しょうがない、起きるのを待つか。」

……………6時……………

シルヴィア「……………」ん、んん……………」

八幡「……………」

シルヴィア「ふふ♪おはよつ、八幡くん。」ニコツ

八幡「ああ、おはよう。」

チュツ

八幡「よく眠れたか？」

シルヴィア「勿論だよ。だって八幡くんがそばにいてくれてるんだもん。」

シルヴィア「それに……これで私は本当の意味で君のものになれたから。そして君は本当の意味で私のもの。あとは結婚するだけ……そうだよな？」

八幡「……………ああ、そうだな。」

シルヴィも特に後悔はしてなさそうだな。

八幡「シルヴィ、体は大丈夫か？怠いとか痛いとかないか？」

シルヴィア「怠くはないよ。ただ、お股の方は歩いてみないと分からないかな。昨日は凄く激しかったから／／／／／」

八幡「……………すまん。」

シルヴィア「いいよいいよ！別にそういう意味で言ったわけじゃないから！私だって八幡くんを求めたし、お互い様だよ！」

八幡「……そう言ってもらえるとありがたい。じゃあシルヴィ、少し歩か。大丈夫そうだったらこのままシリウズドームに向かうとして、歩けなさそうだったら俺が送る。」

シルヴィア「うん、分かった。」

結果的にいうと、シルヴィは歩けないわけではなかったが、やはり内股になって歩いてしまっていた。その為、クインヴェールの専用ルームに行くのはバレてしまう危険があるから、界龍の部屋にいてもらうことにした。

——6時半——

八幡「シルヴィ、先にシャワー浴びてこいよ。汗でベタついてるだろ？洗い流してこい。」

シルヴィア「いいの？八幡くんが先にシャワーしてもいいんだよ？」

八幡「大丈夫だ。俺も何かしてないと、この家でまた《獅鷲星武祭》の事考えちまいそうだからな。朝食作ってるから安心しろ。」

シルヴィア「……分かった。じゃあお言葉に甘えてシャワーお借りします。」

八幡「此処はお前の家なんだ。普通に入ってますでいいんだぞ？」

シルヴィア「私のじゃないよ！私たちの！家なんだからね！」

おっと、これは失敬。

八幡「悪かったよ、気をつける。早く浴びてこい。俺も朝食作って食った後に浴びるから。」

シルヴィア「はい！」

……ふっ、元気な声なのは良いが、ひよこひよこ歩きがまた面白いな。仕方ねえ事だけど。

八幡 side out

シルヴィア side

シルヴィア「……」

朝のシャワーって気分が良くなるんだよね。なんか朝から気合が入るといとか、寝ぼけてた自分に喝を入れるような感じがして。勿論それは洗顔をするときも同じなんだけど、あれは顔だけだからね。全身となると、体全部をコーディネートしているような感じになるから良いんだよねえ。

それに昨日と今日は特別……

シルヴィア「……………／／／／／」

また……夢が叶ったんだよね、昨日の夜に。あの時の八幡くん、いつものように優しくかったし、私の事を気にかけてくれた。途中からは激しかったけど、それが嫌というわけではなかった。むしろそれが嬉しかった。私にそこまで夢中になってくれてるって実感が出来たから。

……………また出来るかな？／／／／／

はっ!?わ、私ってば何を考えてるの!?そりやできたら嬉しいけど、昨日したばかりで幾ら何でも早過ぎるよ!エッチな子だって思われたくないから、これは封印!

早く身体洗って上がろつと!!

……7時……

シルヴィア「八幡くん、今上がったよ。」

八幡「おー、こつちも今ちょうどできたところだ。」

シルヴィア「あつ、今日は日本の定番料理だね！」

八幡「まあ、定番つちやあ定番だな。白飯に味噌汁、鮭焼きにだし巻き卵。それにひじきの煮物とかを合わせればまた良いんだけだな。」

シルヴィア「でもさ八幡くん、これをたつたの30分で作っちゃったの？」

八幡「全部同時進行でやったからな。これくらいは普通だろ。後は水かお茶だが……シルヴィはどっちが良い？和食だから牛乳とオレンジジュースは合わないからな？」

シルヴィア「もうく分かてるよく。じゃあお茶でお願い！」

八幡「あつたかいのと冷たいのと生温いのとどれがいい？」

……え？何それ？生温いお茶って存在するの？

シルヴィア「な、生温いのって何？」

八幡「熱いお茶に水を足したやつだ。ただし、お茶の味が薄まるからオススメはしないし、これは冗談で言った。」

そりやそうだろうね。そんなお茶飲みたくないもの。

シルヴィア「じゃあ冷たいのかな。」

八幡「あいよ。」

八幡くんは冷蔵庫からパック入りのお茶が入った容器を取り出してコップ2つに注いでこつちに持って来た。

勿論私もボーツとしていただけではありません。ちゃんと盛り付けというお手伝いをしてから2人揃って席に座りました。

八幡「ありがとな、手伝ってもらって。」

シルヴィア「気にしないの！いつもやってることなんだから！」

八幡「なんか言っちゃもうんだよな。まあいいか、それじゃあ食べるか。」

シルヴィア「うん♪」

2人「いただきます!」

八幡と索冥の過去

シルヴィア side

八幡「……………」

シルヴィア「……………」ジー

これを見れば、何もしていない風に見られがちだと思うんだけど、実はそうじゃないんだ。私は今、八幡くんの中にいる守護霊の力を安定させる為に精神統一を行なっているのを霊視で視てるんだ。一時的に索冥を憑けさせてもらって八幡くんの周りが安定しているかどうかをね♪

八幡くん曰く、霊視の能力はあっても、自身がどんな風になっているのかは自身では分からないんだって。だから他者の目を介してではないと見られないから、私が視てあげてるってわけなんだ。

……それにしてもすごい。八幡くんの周りに赤、緑、水色、紫、白のオーラが混ざり合ってる……………綺麗。でも何だろう？八幡くんの心臓の辺りから光ってる…………黄色？黄金かな？その色だけが八幡くんから出てきてない。もしかしたら、まだ八幡くんの中に眠ってる霊なのかもしれない。

索冥『シルヴィア様、八幡様の様子は如何ですか？』

シルヴィア（安定してるよ。5つのオーラがあるんだけど、全部混ざり合って綺麗な色になってる。1つだけ心臓の辺りから黄金に光ってるのがあるんだけど、それだけ出てこないんだ。多分だけど、八幡くんの中に眠ってる霊だと思うんだけど…………どう？）

索冥『間違いではありませんね。八幡様の中には、私を含め7体もの霊が憑いておりますので。』

シルヴィア（改めて聞くと凄いよね、7体も身体に憑いてるって。

確か索冥は最初からいたんだよね？)

索冥『はい、八幡様が幼き頃から今日までずっとです。あの頃の八幡様は本当に純粋な方でした。今もそうなのですが、昔に比べるとやや劣りますね。ですが、それすらも見劣りするくらいに私や四神は八幡様に憑く事を決心した出来事がありました。』

シルヴィア(最初からいたわけじゃないの?)

索冥『我々動物霊、中でも存在しないといわれている霊は基本的には憑依しません。あの頃の八幡様に惹かれて、私たちは八幡様に憑依したのです。』

シルヴィア(……ねえねえ聞かせてよ!そのお話!すごく興味が出てきたよ!)

索冥『……わかりました。では、お話ししましょう。あれはまだ、八幡様が小学校に上がる前の事でした。』

シルヴィア side out

索冥 side

当時の私たちは、守護している地域によって分かれていました。北方、南方、西方、東方と分かれていてそれぞれの方角を厄災から守護していました。私は四神の長であるため中央、いわばこの日本の中心である東京を守護していました。

そんな私でも息抜きはしたくなります。当時の私の楽しみは、未来ある子供たちの遊ぶ姿を見る事です。そこは施設だった為、見るのは柵越しからでしたが、それでも私にとっては心休まる光景でした。少しだけ遠出を試みようと思って千葉の方へと赴き、1つの小さな公園で一休みすることにしたのですが、1人の子供が1人で遊んでいたのです。暗いという時間ではありませんでしたが、あの年齢で1人で遊ぶというのは珍しいものでした。実際、私も初めて見ました。するとその子供は何かを見つけたのか、私の方へと走ってきました。当然私は霊体なので子供に見える事なんてありません。私が身を逸らすと子供はそれに合わせて方角を変えてきました。

???「…………」

その少年は私の前で止まりました。私の後ろに何かあるのかとも思いましたが、後ろは壁です。何もありません。そんな時、子供から発した声がこれでした。

???「ぼく、ひきがやはちまん！きれいなシカさんだね！本でシカさんはみたことあるけど、キミみたいなシカさんはじめて見た!!」

そう、その少年こそが八幡様で私と八幡様の出会いでした。

索冥『……私が見えるのですか？』

八幡「え？みえるよ？」

索冥『……どんな姿をしていますか？』

八幡「うーん……むずかしいなあ。なんか普通のシカさんとちがってきれいな緑色の毛で、ツノがカツコよくて、髪が金色みたいになってる!!」

私の姿を正確に当ててきました。この子は明らかに私の事が見えている。でも、私が疑問に思った事を聞いてみました。

索冥『では八幡くん、どうして貴方は一人で遊んでいるのですか？お友達はいないのですか？お母さんはどちらに？』

八幡「いるけど、もうみんな家に帰っちゃったし、お母さんは妹のお世話でいそがしいんだ。本当はあそんでほしいけど、お兄ちゃんになるからがまんするんだ。」

八幡様の優しさはこの頃から芽生えていました。本当はもっとお母様と一緒に遊びたいお年頃なのを、妹がいるから我慢と仰ったのです。まだ小学生にも満たない子供がです。こんなにも人思いな子は

見たことはありませんでした。

索冥『……では、私と遊んでみますか？』

八幡「え？いいの!？」

索冥『ええ、八幡くんさえ良ければですが。』

八幡「うん！全然いいよ!!」

その後は、八幡様と色々な事をしました。遊具があるにも関わらず、そちらの方には一切目もくれずに私と遊んで下さいました。おそらくこの時も、八幡様は私に気を使ってくれていたのだと思います。遊具で遊ぶと私と遊んでる意味がなくなってしまうと。

八幡「あつ、もうこんな時間だ！もう帰らないと！」

索冥『……そうですか。』

八幡「そんなに落ち込まないでよ。また明日あそべばいいんだから！」

索冥『っ！わ、私は落ち込んで……明日も、此处に来ててもよろしいのですか？』

八幡「うん！だって楽しいもん！じゃあ、ぼくもう帰るね！あそんでくれてありがとう！バイバイ!!」

そう言って八幡様は帰って行きました。子供と遊んだのなんて初めてでした。明日も来ていいと仰っていましたので、4人も連れてこようと、この時思っていました。

——翌日の同じ時間——

次の日の同じ時間帯になって公園に行くと、八幡様はもう到着していました。

索冥『こんにちは、八幡くん。』

八幡「あつ！来てくれたんだ！」

索冥『今日は私のお友達を連れてきたのですが、一緒に遊んでくれますか？』

八幡「おともだち？うん、いいよ！」

索冥『ありがとうございます。皆さん、出てきても構いませんよ。』

玄武『おお、メイちゃんが言っていた少年は君かなあ？本当に僕たちが見えているのかなあ？』

朱雀『見えていたら、白兄が見えている時点で大騒ぎだろうぜ。なんせ虎がいるんだもん！』

白虎『ふんつ、俺で騒ぐのなら青龍はどうだ？思い切り龍だぞ？叫ぶ方がどちらかなんて決まっている。』

青龍『龍はこの世に存在しない生き物だ。我を見て驚くのも無理はないが、本当に見えているかどうかだ。』

八幡「わあ！！色んな動物がいる！！カメさんにトリさんにトラさんに龍だー！！」

青龍『…………驚いた、本当に見えているとは。』

玄武『ほええ〜これは凄いね〜!』

朱雀『あつはつはつは!!こいつはスゲー!この歳で俺たちが見えるのかよ!ビックリだぜ!』

白虎『ほう、中々見所のある小僧だな。』

紹介も済んだ所で、早速皆で遊びました。駆けっこをしたり、かくれんぼをしたり、けんけんパー?というものもやりました。あれは難しかったですね。

ですが、八幡様が青龍や白虎を見て怖がる様子は何処にもありませんでした。龍や虎、燃える鳥がいるというのに。

八幡様が休んでいる時に、それを聞いてみることにしました。

索冥『八幡くん、聞いてもいいですか?』

八幡「ん?なーに?」

索冥『こちらの龍や虎は本当なら怖い存在です。それがいるのにどうして怖がらないのですか?』

八幡「え?そんなの簡単だよ。」

簡単?と私は思いました。普通なら怖い存在であるこの2人を怖がらない理由は私の予想を遥かに超える理由でした。

八幡「だってこの2人、叫ばないじゃん。見た目は怖くても優しい

動物だっているよ。逆もそうだけどね。」

叫ばないから怖くない。この答えに私たちは大笑いしました。初見にも関わらず、私たちに臆さず、それどころか心を開いて接してくれる八幡様にいつしか惹かれていました。

そしてお別れの日、私たちも自分たちの仕事があります。それを放っておくわけにはいきませんので、八幡様にお別れを言いにきました。駄々をこねる、そう思っていました。でも、私は八幡様がとても優しい子だということを忘れていました。

八幡「そつか……皆お仕事があるのなら仕方ないよね。分かった！じゃあお仕事が終わったらまたあそぼうね！」

そう言って八幡様はまた帰って行きました。でも、私たちはそれぞれの方角へと帰ることはありませんでしたし、八幡様の前に現れる事はありませんでした。その理由は新しい仕事ができたからです。

八幡様
主人を守護するという役目が。

――現代――

これが私たちと八幡様の出会いです。4人は守護のこともあつてか、数年すると憑依から抜けていきましたが、私だけは八幡様のお側にいると決めてました。

シルヴィア（……八幡くん、昔から優しかったんだね。）

索冥『はい、このお方の力になりたいというのは私の願いでもあり、宿命とも思っています。シルヴィア様もどうか、八幡様をお願いします。』

シルヴィア（勿論だよ、お互いに八幡くんを守っていいこうね。）

索冥『はい。』

舞台へ

八幡 side

……何故だろう、今さっきの瞑想よりも心地いい感じがする。自分の身体のどこか分からない場所からも力が集まってくるような感じだ。何処か懐かしい感じもするが、それは分からない。だが、懐かしい感じがするというのは嘘ではない。

シルヴィア（八幡くん、そろそろ11時だよー！）

……もうそんな時間か。にしても、精神の中なのにシルヴィの声が聞こえるって事は、そんな深くに潜り込めてないって事か？ いや、潜りすぎてもダメなんだけど。

ま、それはさておき、現世に戻るか。

八幡「……すまないな、身体見てもらって。」

シルヴィア「ううん、気にしないで。索冥のおかげで八幡くんの身体のおーラが視れたからおあいこだよ。」

八幡「どうだった？」

シルヴィア「すごく安定してたと思うよ。どれも特に濃いつているのも無かったからね。」

なら全部均等って事か……今のところは大丈夫そうだな。後の方

に支障が出なければ良いが。

八幡「よし、じゃあ行くか。」

シルヴィア「うんっ！」

――六花・外縁移住区――

「八幡くん、頑張んなよ。」

「しつかりやってきてね。」

「ビシツとね！」

「おう坊主！相手なんか叩つ斬つてやれよ！」

「嫁さんも応援しつかりな！」

「頑張るんじゃよ。」

八幡「ありがとうございます。」

シルヴィア「ま、まだお嫁ではありませんよ／＼／＼」

シルヴィと交際しているのが世間に知られてから、俺たちを取り巻く環境は一変した。俺がこの辺りを通ることは知っていたようだが、シルヴィは変装していたため、知られていなかったのだ。

そして報道されてからは堂々と出歩くようになったため、近所やこの辺りの住人からは、よく挨拶されたり、世間話をしたりする。昔の俺なら人付き合いなんて絶対にしないだろうが、今なら普通に出来る。どうだったかは忘れたが、今は特に人嫌いというわけではないかな。

――商業エリア――

俺たちの住んでいる一軒家の場所はクインヴェールの近くにあるため、メインステージのシリウズドームに向かうには必ず人気の多い

場所を通らなければならない。その為、俺とシルヴィは多くの人の目に晒される。

もう慣れたことだが、今日のはまた一段と違う。期待、応援のこもった視線が多かった。

「八幡くん、シルヴィアちゃん！ちよつと！」

俺たちを呼びかけたのは、いつも野菜や果物を買う時にお世話になってる店のおばさんだった。

「今日旦那さんの決勝なんだろう？！しっかり応援すんだよ！後、八幡くんにはチームの皆に差し入れだよ！頑張ってきな！」

八幡「すみませんわざわざ。チームにもよろしく伝えておきます。」

シルヴィア「まだ嫁じゃないのにく／＼／／」

シルヴィ、それはもう諦めろ。

その後も応援してくれる人がたくさんいた。いつも行くスーパーの店員や色んな喫茶店のマスターとホールの店員、雑貨屋の店員など多くの人が応援しに来てくれた。

特に俺から何をしてくれと頼んだことはないのだが、これだけの人に応援してくれる、そう思うと自然と負けられないという気持ちが高まってくる。

――シリウストーム――

八幡「流石決勝、1年前にも見てるがホントすげえ人だ。こんだけの人数がよくこの中に入れるよな。」

シルヴィア「シリウストームは1番大きいからね。それだけ導入数も多いし、メインでやる時の規模も大きいんだ。私がまだ新米の時にちよつと大きなライブをやった時もここだったかな。」

シルヴィの最初の頃か……気になるな。

でも今は決勝の方に集中しないと。気を乱したらダメだよな。

八幡「うし、じゃあ控室まで行くか。」

シルヴィア「その前に八幡くん、これを持って行ってもらってもいいかな？」

シルヴィは腰に巻くタイプのホルスターとハンドガンタイプの銃型煌式武装を俺に差し出した。

八幡「……銃型の煌式武装？」

シルヴィア「もしピンチになったらコレを使って。ないとは思うけど、万が一になったらね。」

……不安にさせちゃったのかもな。けど、シルヴィなりの想いがこもってるんだしな。受け取らないわけにはいかないな。

八幡「分かった。危なくなったら使う事にする。ありがとな。」

シルヴィア「ううん、私のお節介だから。じゃあ控室に行こっか！皆待ってるかもだしね。」

八幡「ああ。」

——シリウスドーム・控室——

八幡「……いるかー？」

シルヴィア「おはようございまーす♪」

陽乃「あー!! やつと来たー! 八幡くんまた重役出勤だぞー!」
セシリー「そうだそうだー!」

虎峰「またシルヴィアさんと2人きりで……………許せません!!」
めぐり「おはよく比企谷くん、シルヴィアさん!」

暁彗「……………」

八幡「そうは言われてもな……………折角、お世話になってる人から果物頂いたんだが、この様子だと暁彗にしかあげられないな。」

陽乃／セシリー「ごめんなさい!!」

陽乃さんは最近治ってきたと思ったんだがな……………セシリーはホントにプライド無いな。

虎峰「昨晚はどういったお過ごしでしたか!？」

虎峰、お前はまず言葉を修正しろ。答える気は無いけどよ。

八幡「まあいい……………それよりも作戦会議するぞ。チーム・ジャステイスだが、予選と違って攻撃的な戦術をとってる。もしかしたら予選と同じ戦術になるかもしれないが、そこは個人で臨機応変に頼む。まあ葉山以外は序列外だし、戦いを見た限りでもそれ程突出したような奴はいなかったから、大丈夫だとは思う。」

セシリー「八幡、葉山って金髪似非イケメンはあたしと陽姐がやつても良いー? 陽姐と約束してるんだ。あの顔面二度と人前に出せないようにしてやるって。」

八幡「……………状況次第だな。それ以外なんとも言えない。」

陽乃「じゃああいつが大人しくしてたら、真っ向から潰しに行ってもいいよね?」

八幡「動く気配がなかったらな。ただし、警戒はしろよ。正面から向かって行って即やられましたーなんてカッコ悪すぎるからな。」

陽乃「分かってるよ。」

八幡「よし……じゃあ「ちよつといいかな？」ん？」

話に入ってきたのは意外な人物、城廻めぐりだった。

八幡「……何だ？」

めぐり「えつとね、葉山くんの動きを見て思ったんだけど、なんかね、ロボットみたいだな～って。」

虎峰「ロ、ロボット？」

めぐり「うん。なんか去年の星武祭で比企谷くんと陽さんが戦った自立式擬形体だったかな？なんかそれにちよつと似てたんだ。」

擬形体に？

めぐり「そんなに深い理由はないんだけど、なんていうのかな～……動きは滑らかなんだけど、何処か変な感じがするような感じ？機械的っていうのかな？」

八幡「……成る程、いまめぐりが言っていた事も頭の片隅に入れておいてくれ。もしかしたら何か分かるかもしれないからな。そんじやあ各自準備！」

ついに始まる戦い

—————

梁瀬『皆様!!長らくお待たせ致しました!!いよいよ今年の《獅鷲星武祭》も大詰め!決勝戦の舞台が整いました———!!!』

~~~~~  
!!!!

梁瀬『今回の《獅鷲星武祭》は例年に比べて参加チームが極端に少ないにも関わらず、内容の濃い星武祭になっています!!中でも快進撃を続けるのが、今大会を過去2連覇したチーム・ランスロットを撃破した新生チーム!!チーム・戦術での評価はあまり高くはないものの、ガラードワース序列10位【義剣】の異名を持つ葉山選手の動きは今大会の中でもかなりのトップクラスに入っています!!』

終『彼は剣術もさる事ながら、恐ろしいのは驚異的な反射神経であります。チーム・ランスロットのリーダー、フェアクロフ選手の剣戟を見切つて捌くほどでありますから、決勝でも見せてくれるであります!』

梁瀬『だがしかあゝし!!それに待ったをかけるチームがいるのもお忘れなく!そのチームこそ、現在進行系で進化中の界龍第七学院から送られた5人の刺客、チーム・帝龍も同様に優勝を狙います!』

終『このチームは近、中、遠、全ての攻撃に対応出来るバランスの整ったチームでもあります。中でも、チームリーダーの比企谷選手は恐ろしい程の実力を持ち合わせているだけでなく、予選で見せた機転の良さ、防御、そして多彩な攻撃、変幻自在ともいえる動きが目立ちました!この決勝でも、葉山選手同様に見せてくれること間違いないであります!』

梁瀬『聞けば聞くほど決勝が楽しみになって来ましたね〜!さあ、それでは選手の紹介から参りましょう!!最初はこちらのチームの紹

介から！先輩チームを倒した勢いそのままに優勝を狙う！！輝く光輪は我ら騎士を照らしている！！聖ガロードワース学園、チーム・ジャステイス〜！！』

歓声はあつたものの、決勝の舞台には似合わなさすぎるくらい小さかった。あえて言うなら、普段叫ばない人が無理をして叫んだような、いわば本意ではないような歓声だった。

梁瀬『予選では前衛が4人で葉山選手を守りながら攻めるという戦術でしたが、本戦では打って変わり全員が攻撃に入る戦術に変えてきました。果たして、その戦術はこの決勝の舞台でも輝けるんでしょうか!?!』

終『今大会では1番序列外の多いチームですが、葉山選手の手際の良さでここまで上がってこれました！この決勝でもその強さを発揮出来るのか、注目でありますね!』

梁瀬『はい!!では、次のチームです!!圧倒的なパフォーマンスで他チームに圧勝！チームのパワーバランスは超抜群!!この決勝でも相手チームを圧倒するか!?!界龍第七学院、チーム・帝龍〜!!!』

先程とは打って変わって、耳がなんともないのかと疑う程の大歓声。

梁瀬『予選では序列3位の【覇軍星君】の武曉慧が、本戦では【夢幻月影】の比企谷八幡が相手チームを寄せ付けない程の実力差を見せつけ、唯一チームとして戦った予選最終試合でも、連携の良さが目立ちました！今回もどのような戦術でいくのか楽しみですね!』

終『注目はなんといつても比企谷選手でありますな！この選手だけは注目しておきたいですね!でも、1番活躍しそうなのは序列6位【雷戦千花】のセシリー・ウォン選手だと自分は思うであります！比企谷選手もそうですが、遠距離を主体とした攻撃のレパトリーが多いのは彼女だからであります。彼女にも注目をしても良いと思うであ

ります!!』

そして、両チーム共にステージへと降り立った。

八幡「よし……んじや作戦は葉山によって変わるからな。奴が留まっていたら4人で攻めろ。もし猪突猛進できたら、俺が対処する。その時は他の4人の相手を頼む。」

陽乃「……………あんまり進まないけど、八幡くんが言うから聞いてあげる。」

セシリー「あの顔面に百連脚・雷撃纏ぶちかましたかったのになー。」

虎峰「ではその手筈で。」

暁彗「……………抜かりはない。」

八幡「ならいい。あと2人はチャンスがなくなったわけじゃないからそんな顔するな。あいつが攻めてこなかったらの話だ。」

実夏「葉山くん、作戦は今日伝えた通りでいいよね？」

葉山「……………ああ、構わないよ。」

エンデル「つしやあ!!俺たちもやってやろうぜ!」

3人「おおー!!」

葉山（君たちじゃあボロ雑巾のようにやられるのがオチさ。まあ、優勝するのは変わりないから良いけどね。待ってろよ比企谷、今すぐお前に制裁を与えてやる。偽物の力で強くなった事を後悔させてやる!!）

実夏「……………」

実夏（多分だけど葉山くん、作戦通りに行くつもりはなさそう。こ  
うなったら……………）

梁瀬『さて、両チーム準備が出来たようです!それではお送りしま  
す!!《獅鷲星武祭》ファイナル、決勝戦!!』

《Start Of The Duel》

梁瀬 『バトルウ、スタアーーーーートオオ!!!』

衝突と……

—————

梁瀬『バトルウ、スタア————トオオ!!!』

開戦の合図と共に実況も声に出した。両チーム共に攻めの態勢に入っていたが、ただ1人だけチームから飛び出してある人物へと剣を振るった。

ガギイインツ!!

葉山「やあ比企谷、やつとお前を這い蹲らせることができると思うと、心が踊るよ。」

八幡「目の前で喋るな、汚ねえ唾が飛ぶんだよ。」

鏑迫り合いの状態だったが、葉山はすぐに離れて体勢を直した。葉山はこれまでにないくらい余裕の表情をしていた。

八幡「おいお前ら、作戦通り葉山以外の4人は任せたぞ……つてもう行ってるのか。」

どれだけ早く葉山を潰したいんだよ。もういつその事、リンチかけちまうか? いや、そしたら俺たちが悪者だよな。

葉山「さて比企谷、俺らも始めようか。」

八幡「……来いよ、先手は譲ってやる。まあ、もう誰かさんが先手を打ってるけどな。」

葉山「本当に減らない減らず口だな。すぐに開けないようにしてやる!」

陽乃「発空勁っ！」

エレン「かはっ!!」

開始してから葉山と八幡が衝突してから、陽乃はすぐさま相手チームへと突っ込んでいた。そして1人の女子に的を絞るとすぐに戦闘。槍が武器のエレンにとっては素手の陽乃はやりやすい相手だったが、懐に入り込まれた所に陽乃の得意技を決められ、呼吸困難な状態に陥っていた。

エレン「ゲホッ…ゲホッ!!」

陽乃「苦しい所悪いんだけど、私すぐにでもあの憎たらしい金髪を潰したいんだ。恨みはないけど、ゴメンね。」

エンデル「はあ!!」

虎峰「甘いです！」

エンデル「うあっ!？」

虎峰はエンデル・グリーンと対峙し、剣を装備している相手にも落ちて着いた対処を取り、現に振りかぶってきた剣を虎峰は、手を交差させ

てその間で止めた後に足払いをして転ばせた。

エンデル「くう！うおお!!」

虎峰「絡迎<sup>らくげい</sup>！」

エンデルが再び攻めてきたが、その前に虎峰が掌底を繰り出したので、攻撃は決まらなかった。

虎峰「これでトドメです！」

セシリー「あんたには悪いんだけどさー、あたし早くここを片付けてあの金髪の相手したいんだよねー。だからさ、大人しく負けてもらうよー。」バチバチ

セシリーの脚から雷がほど走り、ジョーの方へと駆けて行った。

ジョー「はあっ!!ぐっ……ぐああっ!!」

ジョーは剣で受けたものの、セシリーから放たれている雷撃はガードする事が出来ず、身体に電撃を浴びて、そのまま後ろへと倒れてしまった。

セシリー「あんたが知ってるかどうかは知らないけど、鉄は雷を通しやすいんだよねー。だから感電するのは当たり前だよー？」

ジョー「ぐっ……ううぐ……」グググ……

セシリー「じゃあ……「待つてくださいー！」んー？」



セシリーの攻撃を中断させたのは、チーム・ジャステイスのメンバー、近佐実夏だった。暁彗と相手をしていたのだが、急に声を上げた。

セシリー「……なんか用？今からやることがあるんだけどー。それともあんたから？」

実夏「いえ、実はチーム・帝龍の皆さんにお話があつて……少しでも良いんです！私の話を聞いてくれませんか!？」

陽乃「解せないねえ、今は戦闘中だよ。戦いの真っ只中で何を話すっていうの？」

実夏「チーム・ジャステイスのリーダー、葉山隼人についてです。」

陽乃「……ふうくん、興味あるなあ。皆、一旦攻撃やめてその子の話を聞いてみない？私は聞くけど？」

セシリー「良いよー。陽姐が聞くならあたしも聞くよー。奴のことは知っておきたいしねー。」

虎峰「……僕はそれ程興味はありませんので、そちらにいる方以外の3人を見張ってます。」

暁彗「……………私は聞こう。」

星武祭初であろう、敵チーム同士が話し合うという前代未聞の出来

事が起きた。

一方、葉山と八幡はというと……

八幡「……………」

葉山「フツ！ハアツ!!」

八幡「……………」

葉山「ぐっ!!」

どちらも決定的な一撃は与えられてはいないが、明らかに八幡が押していた。八幡は葉山に何度か攻撃を当てていた。葉山は八幡にまだ一撃を与えられずにいた。

八幡（……フエアクロフさんの助言通り、カウンターを狙えば攻撃は通るみたいだな。このままいけば何とかなるが、勝つには一手足りないな。）

葉山（くそっ!!何故だ!?何故当たらない!?俺は奴の動きを先読みしているはず!能力も上の筈だ!なのに何故当たらない!?)

葉山は苛立ちながらも攻撃の手を緩めずに八幡を攻め続けた。だが、未だに当たる気配はしないでした。

## 変化と祈り

――――

葉山（くそっ！俺の攻撃は当たらないのに、なぜ奴の攻撃は俺に届くんだ!?比企谷の分際で!!）

葉山「中々やるじゃないか。でも、それじゃあ俺は倒せないよ。」

八幡「だろうな。ていうか、一撃も俺に入れてないお前がそれを言うとし哀れだな。少し抑えてやろうか？」

葉山「ふざけるなよ……その思い上がりも今の内だ。すぐに終わらせてやる。」

八幡「……ならやってみろ、来いよ。」

葉山「言われるまでもないさっ！」

葉山がまた八幡の方へ剣を振り、その剣を八幡が刀で受ける。単純な事だが、葉山はこの時点で気付いていなかった。既に今の戦いの中で、八幡のペースにある事を。

葉山と八幡が戦闘を繰り返している中、他の8人は闘いをやめていた。その中でガロードワースの近佐実夏、界龍の雪ノ下陽乃、セシリ・ウオン、武曉彗が輪になって話をしていた。

実夏「……という事があつたんです。そしてこの戦いでも真つ先に比企谷さんに勝負を仕掛けました。私たちが組んだ作戦を無視してです。」

陽乃「……葉山つてもう私の知ってる葉山じゃなくなってるね。前よりも人間性がダメになってるよ。マジでヤバい人だよ。そんな奴が八幡くんをバカにするなんてね……本当にぶつ潰されたいみたいだね。」

セシリー「あの金髪のクズさ加減を今理解したよー。あんたらよく我慢できたねー。あたしなら奴の顔に蹴り入れてたよー。」

暁彗「………………リーダーのする事ではないな。常にメンバーの事を考えて作戦を練るのがリーダーの務めだ。今のは『チーム』ではなく『個人』だ。」

実夏「……………やっぱり葉山くんと違う。ちゃんと話を聞いてくれるし、本心で言ってくれる。葉山くんの時は話は聞いても、受け入れてる様子はなかったからよく分かる。」

実夏「後、私は一切の攻撃はしません。仲間がどうするかは分かりませんが、私はこの戦いに勝っても嬉しくはないので。」

セシリー「へえーなんか良いねー。あんたってこのチームの中で一番騎士らしいねー。1番ガラードワースっぽい事言ってるよー。」

陽乃「うんうん、私も気分がいくらかマシになったかな。もし攻撃してきても、体にダメージが出ないようにしてあげるよ。」

実夏「ありがとうございます!」

実夏（比企谷さん、葉山くんの相手は大変でしょうけど、頑張つて下さい!私はもう葉山くんの応援はしないので。）

八幡「……………」

葉山「チイツ！ハアツ!!」

八幡「……………」

葉山「フツ!!」

剣戟は続いて葉山も慣れて来たのか、八幡の攻撃を受けないようになつていた。

葉山「どうしたんだい比企谷？君の攻撃が届かなくなってきたよ？」

八幡「……………」

葉山「来ないのなら、俺から行かせてもらう！」

ガギイインツ!!

八幡（動きが変わった!? さつきとまるで違う……速い動きに重く鋭い剣、急激に力が増しやがった。星辰力練っただけでこうなるか?）

八幡「……………」

葉山「ホラホラどうしたんだい！受けるだけで精一杯じゃないか？さつきまでの動きはどこに行ったんだい？」

八幡（くっ……悔しいが奴の言う通り、受けるので精一杯だ。陰陽術や影を使う暇がねえ。）

形勢は一気に逆転して葉山が八幡を攻めていた。八幡は顔には出さずにいたが、心では少しマズい空気を出していた。

葉山「やつぱり君の実力なんてたかが知れているのさ！この俺に勝てるわけなんてない！さっきのはまぐれに決まっている!!」

八幡（こいつ……性格まで変わってないか？言葉で表すなら唯我独尊そのまんまじゃねえか。しかもかなり腹立つな。）

小苑「……八幡の奴、攻めないのではなく攻められないのじやろうな。あの金髪の攻撃が格段に上がったばかりでなく、速度も上がっているようじゃしな。」

麗蘭「それだけではありませんね。」

小苑「ん？まだなにかあるのかえ？」

麗蘭「ガードワースの男子の方ですが、大気中にある万<sup>マ</sup>応<sup>ナ</sup>素を何らかの方法で体内に取り入れて、自身を強化しているようにも見えます。因みにですが、万応素を取り入れている箇所は首のうなじ、腕の前腕、足のふくらはぎですね。万応素は不可視なので人は見られないので、小苑は見えないでしょう。」

小苑「うむ、心の眼を使えば見えるじやろうが、儂は出来んからのう。どのくらい取り入れておるのじや？」

麗蘭「……………万応素は大気にあるので、無限にあると言ってもいいでしょう。今の所このドームで表すならば、ステージの半分くらいでしょうかね。」

小苑「……………恐ろしいのう。」

星露「良いのう良いのう！妾も早くあの場に立って戦うてみたいのじゃ！」

冬香「八幡さん、攻められてばかりですが大丈夫でしょうか？心配です。」

星露「いらぬ心配じゃろ。八幡が力だけの輩に負けるとは思えんしのう。」

沈華「ですが師父、万が一の可能性もあります。比企谷を信用していないわけではありませんが、もし比企谷が負けてしまったら……」

沈雲「滅多なことを言うものではないよ沈華。比企谷くんは界龍の……いや、この六花最強の男だからね。負けるなんて可能性はないよ。比企谷くんの強さは2年前に僕たち界龍全員がよく知ってるはずだよ。」

沈華「……………そうね、ごめんなさい沈雲。師父も申し訳ありませんでした。出すぎたことを申し上げました。」

星露「良い良い、八幡がああも防戦一方なのじゃ。そう思うのも仕方なからう。じゃが、これは八幡にとってもチャンスかもしれないのう。」

3人「チャンス？」

星露「八幡がもつと強くなるチャンスじゃよ。」

シルヴィア「八幡くん……」

めぐり「大丈夫だよシルヴィアさん！比企谷くんは強いんだから！」

シルヴィア「……そうですね。」

めぐり（うーん……やつぱり不安そう。何かないかなあ……あつ！  
そうだ♪）

めぐり「ねえシルヴィアさん、見てるだけじゃかえって苦しいから、  
お祈りしながら応援してみたら？」

シルヴィア「……お祈り？」

めぐり「うん！手を合わせるだけでもいいからさ、身体を前のめり  
にして見てるだけじゃやつぱり苦しいよ。ならいつそ祈りながら応  
援しようよ！比企谷くんが近くにいてるって感じながらね！」

シルヴィア（祈る……八幡くんを感じながら……そうだよね、見て  
るだけじゃ応援にはならないからね。それに、八幡くんならもう近く  
にいる。八幡くん、これくらいしか出来ないけど、頑張って!!）



## 届いた弾丸

――――

葉山「ハハハッ!!何だよ比企谷、その様は?やられっぱなしじゃないか!」

八幡「……お前が言っているような状態ではないんだがな。こういうのは防戦一方っていう使い方が正しいと思うぞ。俺、まだ食らっていないからな。」

八幡と葉山が剣を合わせてから20分。幸先が良かったのは八幡だが、後から攻めにかかったのは葉山だった。確かに八幡の言う通り、防戦一方の状態が続いているが、八幡は葉山の攻撃が見えていないわけではなかった。その証拠に傷を受けてはいなかった。

葉山「本当に減らない口数だね。君はそんなにおしゃべりじゃなかったはずだけどね?」

八幡「そんな昔の俺と比べてんじゃねえよ。お前も昔と比べて随分と黒くなっちまってんな。あの時の『皆で仲良く葉山くん』はどこ行っただよ?」

葉山「……下手な挑発は終わるか?」

八幡「あ?今の本心なんだが?それとも文化祭やら修学旅行やらの事を言った方が……ってブねえな、いきなり攻撃してくんなよ。」

葉山「君がその口を閉じないからだよ。」

八幡「つー事は、聞かれたらマズイってことだな?これは良いことを知れたな。」

葉山「比企谷ア……いい気になるなよ……うおおおおお!!」

葉山はまた星辰力を練り込んでいた。メテオ・アーツ流星闘技でも使ってくるの  
かと思っていた八幡だが、予想は外れて直接攻撃だった。

八幡（くっ、せめて反撃くらいは……だがどうやって……っ！）

葉山「考え事なんて余裕だな、比企谷ア!!」

バアンツ!!

突然の銃声……会場は静寂に包まれた。撃ったのは間違い無く八幡だが、銃声を聞くからに実弾そのものの音だった。

葉山「……? な、なんだ? 何ともない?」

八幡「安心しろ、音こそ実弾そのものだが、中身はちゃんとした煌式武装だ。驚くとは思っていたが、観客までノってくれるとは……作戦成功だな。」

八幡（もらっておいて正解だった。ありがとな、シルヴィ……役に立った。）

八幡がシルヴィアに対して心の中で礼を言うと、心なしか銃身が光ったように見えた。

葉山「……………それ程でもなかったね。銃の音には驚いたけど、それだけさ。君の不利は変わらないさ。」

八幡（確かにな……………さて、どうするか……………ん？あいつに撃った所の袖、なんか紫色に光ってるな。ガラードワースにしては似合わねえインナーだな。けど、インナーってあんな部分光るか？）

葉山「行くぞ比企谷アア!!」

八幡「一々叫ばないと気がすまねえのかよっ!」

陽乃「それで？君たちは攻撃しないのかな？実夏ちゃんが攻撃しないのは聞いたけど、君たちは別だよ？」

ジョー「正直、俺たちも実夏と同じ意見なんです。こんな進み方で優勝しても嬉しくなんてないって。だから俺たちも攻撃しません。」

セシリー「別にいいんだよ？個人の意見を尊重してもー。」

エレン「これは私たち4人の意思でもあります。ですので、気にしないでください。」

陽乃「殊勝な心掛けとは言えないけど、あいつの操り人形にならなかったのは正解だね。」

エンデル「操り人形？」

虎峰「……………どういう事です？雪ノ下姉姉。」

陽乃「……あの金髪が八幡くんに集中している隙に皆に教えちゃうね。葉山隼人がどんな人物かを……昔の、だけどね。今はどんなのかなんてガラードワースでしか分からないから。」

八幡（くそっ……今度は止まってもくれないのかよ。どんだけ俺を倒したいんだよ……けど、攻撃を受けるのも段々辛くなってきたな。）

葉山「界龍で序列2位って呼ばれているのは口だけかい!? 大したことないな!!」

八幡「……ガラードワースの序列10位もこんなものか? 1位倒してんのに。これじゃあフェアクロフさんを超えてるとは言えねえな。」

葉山「っ!! お前よりは上だ!!」

ガギイイインツ!!

葉山「っ!?!」

八幡「そんな剣の腕じゃあ、俺は切れねえよ。（確か、この位置だったな。） フツ!!」

剣で刺突をした八幡だが、葉山には簡単に躲されてしまった。だが、その隙について片方の腕に隠し持っていた銃で葉山の左腕を狙った。

八幡（……やっぱり同じか。まあでもあの怪しい光を消せばなんか変わるか？）

葉山「ふっ……その銃、今攻撃がヒットしたっていうのに全く効いていないよ？その銃の製作者、よっぽど才能がないんだろぅねえ？」

八幡「そうか？俺は最高の銃だと思うけどな。」

葉山「まあ、お前のような奴にはピッタリな武器だね。」

八幡「おっ、そうか？まあシルヴィが作ってくれた銃だからな。ピッタリで当然だな。」

葉山「………何だって？その銃の製作者がシルヴィアさんだというのは本当か!？」

八幡「ああ、今日の会場入る直前にもらった。」

八幡（いやあ……こいつには本当に助けられたな。シルヴィには改めて感謝しないとな。）

葉山「お前……まだシルヴィアさんを誑かしているのか!!？」

八幡「………はあ？」

葉山「許さない!!もう手加減なんてしない!!お前を倒して皆の目を覚まさせる!!」

八幡（マジかよ……勝手にキレやがった。しかもあの妄想、まだ続いてたのかよ。）

## 夢幻の怒り

――――

葉山「うおおおおお!!」

八幡「ちい!こいつどんだけパワーアップしてんだよ!さっきまでとパワーもスピードも桁違い過ぎんぞ!」

八幡(なんなんだこいつ!?急にキレたと思ったら攻撃の勢いどころか力まで上がってやがる……本当に人間かよこの力と速さ!)

葉山「はあっ!せいっ!!フンッ!!」

八幡「くっ……チイツ!」

葉山の動きは格段に向上し、八幡も動きについて行けなくなっていた。あまりにも素早く、あまりにも鋭く重い剣を振ってくるため受け流してもすぐに剣を振るってくるのだ。

その為、八幡の制服は少しずつ切られた跡が残り、制服が切られた場所からは、切られた後から血が流れていた。

葉山「所詮、お前みたいな奴がこの六花であれだけの注目を浴びている事や、人気があること自体が間違っているんだ!!本来お前のいる位置は俺が相応しいに決まっている!界龍にどうやって取り入ったかは知らないが、序列2位になったのだって何かしたんだろう!そうでなければ、お前が世間からの人気や評判が良かったり、陽乃さんが認めてたり、シルヴィアさんと付き合えるはずがないんだ!!」

八幡「だから俺を倒して、お前が俺の代わりになるってか?」

葉山「ああ、そうだ!!」

葉山が圧倒的な動きで八幡を押していた。八幡は葉山に攻撃する隙がないのか、受けてり受け流したり連続だが、受けきれないもの

もあり、ダメージを蓄積していった。

葉山「ガードワースに来てお前の名前を探した時に目を疑ったよ！ 序列2位にいたんだからな！ 俺は即座に思ったさ！ 絶対に何か卑怯な手を使ったに違いないってな！ そうでもなければ、お前が界龍で序列2位、しかもシルヴィアさんとまで付き合えるわけがない!!」

八幡「好き勝手言いやがって!!」

葉山「遅いなあ比企谷!!」

八幡「うぐっ!」

八幡が攻撃を仕掛けたが、葉山が難なく八幡の手首を掴み、そのまま八幡を壁に叩きつけた。そのまま八幡に斬りかかったが、八幡もそれを受け止めた。

葉山「そろそろ負けを認めたらどうだい？ ヒキタニくん？ これ以上無様を晒すつもりかい？」

八幡「うるせえ!」

葉山「ぬあっ!?!」

背中を壁につけたまま鏢迫り合いの状態になっていた八幡だったが、葉山の足を払い転ばせた。

その隙に体勢を立て直し、剣を構え直した。

八幡「……見えた。奴のうなじに腕と同じような模様で紫に光ってる物体が!」

葉山「はっはは……やってくれるじゃないか! けど、君の負けは確定だ! 今のが最後の攻撃だと思って浮かれてれば良いさ!」

八幡（せめて奴の動きを止められれば!）

セシリー「八幡……」

虎峰「苦戦してますね……相手も中々の使い手、手強いですね。」

実夏（違う、会長と戦った時はあんな動きしてなかった。力任せに剣を振ってるだけだよあんなの。葉山くんの持つてる剣も泣いてる……）

エレン「実夏……葉山くんのアレ、私たち全員……」

実夏「うん、絶対見たことないよ。雪ノ下さんから教えてもらったからわかる。今の葉山くん、比企谷さんに復讐するただけにここにいる。私たちのことなんてどうでも良いんだよ、きつと。」

ジョー「……ああ。比企谷さん以外のメンバーには目もくれてねえしな。比企谷さんしか見てねえ。」

エンデル「チクシヨウ!!俺らはあんな奴に手を貸してたのかよ!!」

実夏「エンデル落ち着いて……」

実夏（……無理だよ。自分たちはあいつに利用されたんだから……）



陽乃「私の言つてた事を嘘だとは思わないのかな？その可能性も否定できないでしょ？」

実夏「…………あれを見せられて否定なんてできません。あいつの比企谷さんに対する執着心を見れば分かります。」

虎峰「確かに、雪ノ下姉姊から聞いた話と今の彼を重ねてみれば、あなるのも頷けますね。」

陽乃「…………そう、信じてくれてありがとう。」

陽乃は安堵していた。もし自分の話を信じてもらえなかったら、このチームもあの葉山みたいになっていたかもしれないからだ。

エンデル「でも、俺は収まんねえよ！なんか出来ねえのかよ！」

ジョー「落ち着けエンデル、それはチーム全員が思ってる事だ。奴に仕返ししてやりたいのはお前だけじゃない。」

エンデル「でもよ！」

陽乃「…………それなら君たち4人共、私に協力する気はない？」  
4人「？」

陽乃「ちよーつと前にセシリーと計画してた事があるんだ。」

セシリー「ええ、陽姐ーあたしあんまり乗り気じゃないんだけどー。八幡が許してくれるとは思えないんだけどー？」

陽乃「そこはほら！女は度胸的なアレでさ！ね？お願いっ！」

セシリー「…………まあやるってお願いされて断らなかったのは私だけ

どさー……ああもおーやるよーやれば良いんでしょー!!」

陽乃「そこなくっちゃー!!君たちは?」

エンデル「あいつに一泡吹かせられるのなら、喜んで協力します!」

エレン「私も協力します!」

ジョー「俺もやります。」

実夏「……私もやります。あいつにギャフンって言わせてやります

!」

陽乃「よし♪じゃあ作戦を教えよう!」

陽乃は葉山を潰すためにセシリーとチーム・ジャステイスに作戦を伝えた。

シルヴィア「八幡くん………」  
めぐり「……比企谷くん、頑張つて。」

シルヴィア（今度は私が君を応援する番だね………八幡くん、勝つて。）

葉山「お前さえ……お前さえいなければ、俺の人生はこんな事には  
ならなかったんだ!!だから俺はお前をここで倒して全てを取り戻す  
!!」

そしてまた鏢迫り合いの状態になった。若干八幡が押され気味だが、持ち堪えていた。

八幡「俺を倒してその後はどうする?そんな一時の瞬間なんてすぐに終わるぞ。何も変わらん。」

葉山「変わるっ!!少なくとも俺はなっ!!お前を倒した後、俺はお前をこの六花から追放してやるのさ!!」

八幡（こいつ、ここまで……）

葉山「ああ……その後、お前に騙されていた奴を正気に戻して、シルヴィアさんを俺の恋人にするのさ。」

八幡（こいつ……今なんて言った？）

葉山「お前よりも俺の方が相応しいに決まってる。お前みたいな何かしらの手を使って強くなったお前よりも俺の方が良いに決まってる！」

八幡「……さっきの言葉、もう一度言ってくれ。なんて言った？」

葉山「耳まで腐ったのかい？何度でも言ってやる！シルヴィアさんを俺の恋人にしてやるって言っただよ！」

八幡（聞き間違いじゃなかったか………なら、もう終いにしてやる。）

八幡「葉山、今の言葉忘れるなよ？俺を本気で怒らせたんだ。後で撤回なんて言ったらその無駄に映える金髪全部剃り落としてやるからな。」

葉山「やれるものならやってみなよ。かかって来なよ、ヒキタニくん？」

八幡「………そうか、なら遠慮なく行かせてもらう。」

八幡が最後にそう言った途端、八幡の周りからとてつもない量の星辰力が溢れていた。青色に光るはずの星辰力が透明色だった。

八幡（索冥、憑霊だ。）

索冥『は、八幡様!? 私との憑霊は力不足により不可能だと先日仰いました! どうか、他の者で（足りないものが分かったんだよ。）……え?』

八幡（俺がお前を纏えなかった理由……それは『怒り』だ。麒麟とは本来、殺傷を嫌う動物。お前はその中でも人への誹謗中傷、軽蔑、罵りを最も嫌う。そんなお前があいつの言葉を聞いて何も思わないわけがない。今この時だけでも良い、俺を信じてくれ。）

索冥『主人を信じないとは、私も守護する身として失格ですね。全ては主君である貴方様の望むままに致します。』

八幡（……悪いな。）

索冥が八幡の意思に従うと、八幡の隣に索冥が半透明になって現れた。

葉山「な、何だあれは?」

索冥が嘶いきを轟かせると、八幡の方へと消えていった。そして八幡の姿がみるみると変わっていった。

白色の帽子に装飾が施されていて、右目には何故か眼帯をしていた。

上半身は首元に装飾付きマフラーを巻いていて、服装は前（胸元や腹筋が丸見え状態）が開いた白のロングコートになっていて、裏地は黒だった。

下半身も白のズボンを履いていて黒の装飾が施されていた。

八幡が持っていた衾々切丸は手元から消え、代わりに長い白銀の槍を持っていた。

八幡「憑霊……鹿神・翠天角っ!!」

葉山「な、なんだその姿は!？」

八幡「お前に教える義理はない。言っておくが逃げるなよ。あれだけの啖呵を切ったんだ、逃げやがったら髪だけじゃすまさねえぞ。」

八幡『それじゃあ行くぞ、索冥。』

索冥『はい！八幡様!!』

## 雷の槍と過去暴露

――――

そこからの戦いも一言で表すのなら、圧倒的だった。葉山の動きも圧倒的だったが、八幡の動きはそれをも上回るほどの力、速度、技術身のこなしの軽さが組み込まれていた。

八幡自身、槍は戦いでは使わない。だが詠春拳で棍術も教わっていた為、槍も難なく扱えていた。構えは流石に下段にするが、それでも充分過ぎる動きだった。

刃で攻撃もすれば、持ち手、柄など変幻自在な攻撃を葉山に当てていた。これには葉山も成す術がなかった。

葉山（くそっ!! どういう事だ!? 俺が押されている!? さっきまで俺が有利だったっていうのに!!）

八幡「…………その程度か? さっきの勢いはどうした? もっと本気で来い。」

葉山「っ!! 黙れええええ!!」

葉山は八幡に向かって攻めて行った。何度も何度も切り掛かったが、八幡はそれをいとも簡単に槍で受けていた。

葉山「うおおおお!!」

八幡「フッ!」

葉山「あがっ!!」

剣を振り上げた葉山だったが、八幡に槍の柄で葉山の脇を一直線に突いた。その後怯んだ葉山にすかさず槍で足払いをして転ばせた。

葉山「ぐっ…………はあ…………はあ…………」

八幡「それで右腕は上手く触れないだろう。もつと細かったら、右腕を使えないように出来たんだが、まあ仕方ねえか。」

葉山「このお……!!」

八幡「まだやるのか? こんだけ見せつけてもまだやろうつてのか?」

葉山「やってやるさ!! お前がそんなに強くなったのも、卑怯な手を使ったからに決まっている!!」

八幡(こいつどこまで認めたくないんだよ……そんなに俺を自分よりも下として見たいのかねえ?)

葉山「行くぞ……比企谷アアア!!」

八幡「急急如律令。」

八幡が陰陽中の札を取り出し呪文を唱えると、風の刃が葉山に襲い掛かった。だが葉山もこの程度の攻撃は見えるようで全て剣で防いだ。

葉山「ふざけるな!! こんな攻撃で——」

八幡「……東洋の創造・再生・破壊を司る神よ。我が槍に三叉の力を授け給え!! 翔利修羅!!」

八幡が槍を横に持ち詠唱を唱えていると、槍の形が変わっていき、詠唱が終わると矛が3つに増えていて、色も黄金に変わっていた。

八幡「雷鳴と共に散れっ!!」

八幡は槍を葉山の方へと一直線に投げた。槍はスピードを落とすことなく真っ直ぐと葉山に向かって行った。

葉山「そんな槍、剣で軌道をずらせばなんてことはない……!!?」



そう思っていた葉山だったが、槍は次第に風を纏い雷もほど走っていた。表すなら、横向きの小さな竜巻だった。

葉山「く、くそおおお!!!」

無謀にもその槍を受け止める選択をしてしまった。

葉山「ぐううううっ!!う、うわあああああ!!!」

ステージの真ん中から半分の方は地面がなくなり、岩場と化していた。

肝心の葉山は煙も出ていたためか、場所もわからず出てくる気配もない。その為、試合終了の合図もできないでいた。

梁瀬『な、なんて破壊力でしょう……私かれこれこの実況してきてますけど、こんなのは初めて見ましたね。』

終『わ、私もであります。と、とんでもないですね。』

実況がこんな風に行っている間に、煙が晴れて槍も八幡の手元に戻ってきたところで、八幡は憑霊を解除した。姿は元に戻り、衾々切丸も腰に戻っていた。そして八幡は真っ直ぐ岩場の方へと歩いて行った。先に足場は無かったが、影を使って歩いていた。

そして壁に激突している葉山を見つけた。どうやら意識はあるようだが、朦朧としているようだった。

八幡は衾々切丸を取り出した。そのまま校章を切るのだろう。そして葉山に切りかかった。

だが、校章は切っていないかった。切ったのは制服だった。制服の裏からは首の後ろ、腕の前腕、脚のふくらはぎに紫色に光る機械を装着していた。そしてこの5つの機械は無数のコードで繋がっていた。

八幡「運営委員！今すぐこいつが装着している機械を調べろ！ノウハウが分からねえのなら、アルルカントの奴でも構わん！早くしろっ！！」

観客から見ても明らかにおかしいものだった。それはガラードワースの生徒が一番よく分かっていることだった。あんなものは日常で装着していないからだ。

運営委員とアルルカントの煌式武装に詳しい生徒が駆けつけ、葉山の装備しているものを徹底的に調べていた。

ピーピー！

大会委員「っ!!検査結果出ました!この装置の能力は対人攻撃予測プログラム、万応素吸引による身体強化、そして対人星辰力の吸引です!!これは明らかなレギュレーション違反です!!」

葉山は3つもの違反を犯していた。

1つ目、人の攻撃を予測するプログラムが埋め込まれた機械。

2つ目、大気中の万応素を自身の身体に吸収することによって自身の能力を向上・強化させる機械。

3つ目、相手が練り上げた星辰力を自身に吸収させ、己の力とする機械。

最初のものでしても違反は明らかだった。

スパパパパっ!!

八幡は葉山に装着されていた装置のコードの部分を切り、使えないようにした。

梁瀬『な、なんという事でしょう!!様々な快進撃を続けていた葉山選手、まさかの違反行為!!これは前代未聞の事件が起きました!!』

柊『これは許せないでありますね。星武祭は全学園が優勝を競う催し。それをこんな形で優勝しようだなんて……自分は許せないであります。』

葉山「うう……んんう……なんだこの騒ぎは?」

葉山も漸く意識を取り戻した。その光景の意味は分かっていたが、ブーイングだというのはすぐに理解していた。

葉山「な、何だこの状況は？」

八幡「ブーイングだよ。見て分かんねえのか？」

葉山「っ!?!比企谷!!」

八幡「それよりもお前、もうネタバレしてるからな。自分の格好と足元、よく見ろ。」

葉山「何を言って……っ!?!?」

葉山は自分の格好に気が付き、足元に散らばっている自身がつけた装備にも気付いた。

八幡「ここ3ヶ月の伸びはおかしいと思っていたが、まさかこういう絡繰りだったとはな……」

葉山「比企谷イ……お前ええ……」

八幡「俺は何もしてないぞ?やったのはお前だけだ。恨むんなら自分のしたことを恨むんだな。」

葉山「このお!!」

八幡「うるせえ。」

葉山「ぐわっ!」

いとも簡単に蹴られ、その場に蹲る葉山。誰から見てもその光景は無様なものだった。

陽乃「これで分かった?あんたがどれだけ愚かな事をしようとしたのか。」

葉山「は、陽乃……さん。」

陽乃「いやゝホントあんたって何も変わってないよねー。総武高で

の文化祭から修学旅行であれだけやったのに、今回もこんな事するなんてさー。」

陽乃はわざとらしく演説のように声を響かせていた。葉山は蹲りながらも顔を青くしていた。

葉山「や、やめろ……言わないでくれ！」

葉山に構わず、陽乃は文化祭、修学旅行でやった事を全て大公開した。

生徒を推薦したにも関わらず、責任を取らなかったこと。

親友の告白の手伝いをしたにも関わらず、裏では全く逆の事をしていたこと。

そして極め付けは……六花で八幡、シルヴィアに言った事と、八幡を追放してシルヴィアを自分の恋人にしようとしたことだった。

葉山「や、やめてくれ……」

これには会場も黙って聞く事なんて出来なかったのか、怒りの声を露わにしていた。

セシリー「ほんつとうに酷いよねー!! あんなにもラブライチャイチャな六花一の夫婦よりも夫婦しているバカツプルの仲を引き裂こうとするんだよー!？」

セシリー「しかもだよー! 毎日起きる時から寝る時までいつも一緒にいる2人、おはようのキス行つてらっしゃいのキスただいまのキスおやすみのキス!! 夜は当然抱き合つて寝る2人!! そんなラブラブな2人を引き裂こうとするなんてマジであり得ないよー!!」

セシリー（ヤバいー!!! あたし絶対後で八幡と【戦律の魔女】に殺されるー!! 捏造して言ったの絶対に後でガミガミ言われるよー!!）

※セシリー、全部合ってるから大丈夫。

エンデル「俺たち……そんな奴に協力してたのかよ……信じられねえ。」

エレン「そんな人だとは思わなかった……葉山くん、最低だね。」

ジョー「そんな事してたのかよ……葉山、無責任な上に他人任せだよ、最低だなお前。」

実夏「貴方の本性が知れて良かった。陽乃さんと話して正解だったわ。君は本当に……最低な人だね。」

葉山「あ………ああ………」

八幡「どうだ？自分のしてきた事がしつぺ返しされた気分は？だが勘違いするなよ？これは俺のやったことじゃない。お前がやってきた事が返ってきただけだ。忘れてるかもしれないが、このまま無事に学園生活送れるなんて思うなよ？星武祭終わった後、ガラードワースの上層部からお前に対しての命令があるはずだ。これだけの違反をしたんだ、生温い罰じや済まされないからな。」

葉山「ぐううう！比企谷アアア!!」

八幡「そうやって喚いてろ、この試合も終わりだ。後はお前の校章を切れば済むことだ。「その必要はないよ、比企谷くん。」……え？」

後ろからはガイドワースの生徒会長、アーネスト・フェアクロフ  
とガイドワースの運営母体

エリオット・パウンド

【E P】の幹部であろう人間と、八幡の師である汪小苑、最後に

……初代【万有天羅】の姿があった。

## 処罰と挨拶

八幡 side

フェアクロフさんと小苑さんは分かるが、後の2人は誰だ？フェアクロフさんの後ろにいる人は、グレーのスーツに白いYシャツと青ネクタイをしていて、伸ばした黒髪を後ろで縛っていた。

もう片方、小苑さんと並んでいる巫女装束の女性は、背丈が小苑さんとあまり変わらない白髪のセミロングで、目は閉じていた。糸目なのか？

アーネスト「比企谷くん、君がトドメを刺す必要はもうないよ。この試合はチーム・ジャステイスのチームリーダー、葉山隼人による反則負けがもう決定しているからね。君が剣を振る必要はないよ。」

八幡「……もう勝負は決まったと？」

アーネスト「勝手だとは思っているだろうけど、我々ガライドワースからしてみれば、これ以上の失態を世間に晒すわけにはいかない考えでね。どうか、剣を収めてはくれないだろうか。」

八幡「っ！ちよっ……」

そう言ってフェアクロフさんは剣を床に置き、頭を下げてきた。まさか頭まで下げるとは思ってたかった。

???「比企谷八幡くんだね？私はガライドワースの運営母体【EP】の幹部兼諜報工作機関【至聖公会議<sup>シンドミナス</sup>】の統括をしているコール・メスメルという者だ。」

工作機関の統括者!?そんな大物がなんで!?

コール「今回の葉山隼人の一件、誠に申し訳ない。ついては、その



後の処罰は我々に任せてはもらえないだろうか？君の気持ちも理解しているつもりだ。愛する人を奪おうとした者を許すつもりなどない事を。我々【EP】もそれに見合った処罰をする事を約束する。伏してお願ひ申し上げる。」

八幡「っ!!」

【至聖公会議】のトップまでもが頭を下げてきた。いや待って、俺別にこいつをどうしようって気はないから！やりたいならそっちに任せるから！

八幡「あ、頭をあげて下さい！俺は別にこいつをどうしようとは思ってないので……そりゃ、シルヴィを俺の物にするって言った辺りから、ボコボコにしてやろうって気にはなりましたけど……ガラードワースの方で処分を決めてくれるのなら、俺はそれに同意しますよ。」

コール「………ありがとう。彼の件については【EP】幹部全員を集めてしっかりと会議する事を約束する。思っていたような処罰にならなくても、そこは理解して欲しい。」

アーネスト「比企谷くん、改めてありがとう。葉山隼人の強さの秘密、そしてガラードワースの汚点を見つけてくれたことにお礼を言うよ。」

八幡「い、いえ……」

……まあガラードワースだから、処罰が甘いなんて事はまずないだろう。

コール「さて……君には聞きたい事が山ほどある。言っておくが逃げようだなんて考えない事だ。アーネストくん、彼を拘束して連行してくれ。そして彼を24時間体制で監視するよう手筈を整えておいてくれ。これから会議の準備も進めなければならない。出来る限り

早めに済ませたい。」

アーネスト「分かりました。葉山くん、今から手錠をかけるけど大人しくしてのように。抵抗すればそれだけ罰が重くなるだけだからね。」

葉山「ま、待つてください!!俺はそれが身体強化の道具だったなんて知らなかったんです!!」

アーネスト「ほう?比企谷くん、彼はこう言ってるけど、君はどう思う?」

八幡「あり得ませんね。俺がこいつに服装や機械の事を言ったら、明らかに狼狽えてましたから。」

葉山「そ、それを言うなら比企谷、お前のあの姿はどうなんだ!!力も明らかに倍増していた!!あれも不正なんじゃないのか!」

道連れにする気か?往生際悪過ぎるだろ。お前と違ってこちらら自分の実力で勝負してんだよ。

八幡「別に力が倍増し不正ってわけでもないだろ。なんで俺がそんなことしなくちゃならねんだよ。それなら去年の時点で俺は不正しまくりだぞ。」

葉山「黙れ!!そこまで言うのなら検査もやってくれるんだろうな?」

八幡「ああ、いいぞ。」

その後、大会委員会とアルカントの生徒で俺の憑霊した時のデータを取った。だが数値は正常、言うならば霊的な反応が異常に強いくらいの数値で、俺の能力自身は上がってなかった。

八幡「で？他に何かあるか？」

葉山「ぐっ……ううう……」

コール「無いようだね。時間を取らせてしまつて悪かったね。比企谷くん、今回は本当に済まなかった。そしてありがとう。最後に、優勝おめでとう。」

そう言つてメスメルさんは両手を後ろに組んで歩き出し、フェアクロフさんも葉山を押さえながらそれに続いた。その時、フェアクロフさんは俺の方を見て目礼をした。多分、優勝おめでとうという意味だろう。

小苑「見事じゃつたぞ八幡よ。流石は我が弟子じゃ。これで母子二代三冠制覇も夢ではなくなってきたのう。」

八幡「ありがとうございます、小苑さん。それで……その方は？小苑さんの友達……ですか？」

麗蘭「おや、まさか小苑の友人扱いとは。私はそこまで若く見えませんかね？」

……え？違うの？

小苑「騙されるでないぞ八幡よ、この者は儂よりも年上じゃ。それも25ものう。」

麗蘭「そこまで細かく言う必要はあったのでしょうか？別に構いませんが。」

25も年上!?嘘だろ!?見た目小苑さんと同じ30代どころか20

代だぞ!? ホントに!? この見た目で50歳超えてるの!?

麗蘭「改めて名乗りましょう。初めまして、比企谷八幡さん。私は春 麗蘭と申します。こう見えても50の後半で、界龍の諜報工作機関【龍生九子】のトップでもあります。以後、お見知り置きを。」

またトップかよ……

小苑「お主、1つ忘れておるぞ。八幡、こやつは儂と同じ二つ名を持っておる。そして儂よりも年上じゃ。頭の良いお前なら分かるじやろう?」

同じ二つ名? 小苑さんは2代目の……!!? ……嘘だろ……

八幡「初代の……【万有天羅】?」

麗蘭「正解です。でもそれはもう昔の話です。今はただの一工作機関のトップだけです。今回は貴方の実力を拝見しに来ました。思った通り逸材ですね……こんな才能の塊をよく見つけましたね、小苑。」

小苑「まあもう。偶然に近かったが、まだ光るであろう?」

麗蘭「ええ、これからの成長が楽しみです。私も彼を鍛えてみたいと思う程に。」

………

麗蘭「それではそろそろお暇しましょうか。では八幡さん、またいつか会いましょう。優勝おめでとうございます。」

小苑「八幡よ、また一つ成長した事、儂は嬉しく思うぞ。優勝、おめでとうなのじゃ。」

とんでもねえ人と会ったな……まさか初代の【万有天羅】が来るなんてな。

梁瀬『……え、えーよく分からない空気になってしまいましたが、試合終了です!!勝者、チーム・ジャステイスの不正により、チーム帝龍です!!』

実況がこうは言ったものの、会場はそんなに盛り上がっていなかった。

## 試合後の時間潰し

八幡 side

俺たちチーム・帝龍にとって一番長い戦いが終わった。一番長かったにしては、一番最悪な結末になったけどな。多分史上初じゃないか？ ガラードワースの生徒が不正行為で失格になったのって。絶対ないだろ、ガラードワースにそんな事するバカ……今回居たけど。けど、今回の星武祭でガラードワースはかなりの痛手を受けただろうな。葉山なんかのせいで学園のモットーが台無しになったんだから、暫くは名誉回復のために動くだろうな。

にしても許せない事だ。俺らは勝ったからいいが、チームジャステイスに負けた他のチームは優勝を目指して出場したわけだ。それを不正なんかで……もし、機会が設けられるのなら、負けたチームとも試合をしたい。

さて、俺の心情はさておきとして、いま俺たちは控室に向かっていく。試合も終わって記者会見にと思っていたのだが、あの不正の事もあってか誰もいなかった。まあ別にいないならいいないで良いんだけどよ。

だから控室にはすんなりで行けそうだ。

虎峰「しかし、八幡と彼の間にそんな経緯があったなんて初めて知りました。どうして教えてくれなかったんですか？」

八幡「あのよお、そんな嫌な思い出を好き好んで話そうって普通思わねえだろ。シルヴィには教えちまったけどよ。」

暁彗「……………私もこの星武祭で始めて聞いた。比企谷八幡よ、中々凄絶な過去を持っているのだな。」

八幡「もうどうでもいいけどな。」

過去をいまだに引き摺ってる奴っているんだろうか？いや、星導館にいるけどさ。それ以外でいるんだろうか？いたらヤバくね？

セシリー「でもさー、なんか残念だったなー。あの金髪の顔面蹴れなくてさー。」

陽乃「ホントだよねー！私もあのム力つく顔に一発蹴り入れたかったよー！」

八幡「……俺も奴の髪を刈れなくて残念だ。」

虎峰「変な所で残念がらないでくださいよ。みつともないではありませんか。」

八幡「はあ？お前よくそんなこと言えるな？じゃあお前はシルヴィが葉山のものになっても良かったって言いたいのか？」

虎峰「前言撤回します。葉山隼人はやはりあれだけでは生温いですね。髪を引き千切ってから、顔面を感覚がなくなるまで殴って蹴りまくりましょう。必要ならば、手足の爪も割っちゃいましょう。もし、許可が下りるのなら、去勢するのも手ですね。」ハイライトオフ

怖っ!!?何こいつ!?何平然とヤバいこと言ってるの!?前半部分は出来るから良いとしても、爪割るのは結構アレだぞ？けど最後に至ってはニューワールドの扉に手掛けてんじやん!!やったら最後、これまでの自分否定しなくちゃいけないるじやん！絶対嫌だわそんなの!!

虎峰「八幡はどう思いますか？葉山隼人に去勢という処罰は？これなら問題ないと思いますよ？」ハイライトオフ

八幡「え？あ、ああ……そうだな。」

ヤベエ……今の虎峰とは喋りたくねえ。

セシリー「虎峰……流石に怖すぎるってー。」

陽乃「壊れるとああなるんだね、虎峰くんって。」

曉彗「……………」

なんか話題変えね？俺このままこの空気で控室行くのやなんだけど？

セシリー「あー八幡？」

八幡「ん？なんだ？」

セシリー「えーつとさー、葉山の不正が分かった時に八幡と【戦律の魔女】のイチヤイチャの事なんだけどさー……ホントごめん！陽姐がやれって言うからー!!」

陽乃「まあ、言い出しっぺは私だしね。あんまりセシリーを怒らないであげて。」

八幡「ん？ああ……アレのことか。別に良いぞ、だって全部あつてるし。」

セシリー「そ、そうだよね……やっぱりご飯抜き……って、許してくれるの!？」

八幡「ああ。付き合ってたんなら、他の人でもそれくらいの想像出来んだろ。今ご飯抜きって聞こえたんだが……そのほうが良かったか？」

セシリー「いえ、滅相もございません!!」

陽乃「出来るならそれは勘弁してほしいな。」

まあ、そう答えると思ってたわ。

―――控室―――

さて、着いたな。中にいるのはシルヴィとめぐりだけだから心配はないな。んじゃ、開けてもらうか。

♪♪♪っ！



シルヴィア『……八幡くん。』

八幡「よお、勝ってきた……って言っていないもんかは分かんが、取り敢えず勝ち取ったぞ。」

シルヴィア『……うん、今開けるね。』

通信を閉じると、すぐに扉が開いた。それと同時にシルヴィが俺に飛び込んで来た。

シルヴィア「……良かった、無事で。」

八幡「……ああ。」ギョツ

また心配かけさせちゃったな………けど、これで夢に一步前進だな。

陽乃「あくあく……私たちの前でラブラブしちゃってさ。」

セシリー「だよねー、ホント見せつけてくれるよねー。流石は六花一のバカカップルだよねー。」

虎峰「………」ダアーーー

暁彗「………」ちり紙はいるか?」

虎峰「グズツ………いただきます!!」

虎峰……頼むからその鼻と目と口から出てる赤い液体をこっちに撒き散らすなよ?

めぐり「皆さん、優勝おめでとうございますー!! 殆ど比企谷くんだったけど、凄かったよー!!」

………この場に癒しをありがとう。

……数分後……

シルヴィも落ち着いて俺から離れたのだが、次は俺の腕に抱き着いてきた。虎峰も赤い液体は止まったが、今にも呪い殺しそうな目で見えていた。何？絶対シルヴィはやらないからね？

セシリー「そういえばさー、2位はどうなるんだろうねー？3位すら決まってるじゃないでしょー？チーム・ランスロットかチーム・ルサルカのどっちかだけどさー、実際どっちなんだろうねー？」

陽乃「それならもう報告済み見たい。さっきガラードワースのニュース見たけど、責任持って今回の星武祭出場した全ガラードワースチームは失格扱いにするんだって。」

めぐり「それって、成績を残したとしても、無効になるってことですか？」

陽乃「そうみたい。チーム・ランスロットもベスト4に入ってるけど、無しになるみたいだね。だからルサルカが2位になるみたいだね。」

八幡「出場回数はどうなるんですか？それだとあまりにも他の選手にとっては酷な話ですよ。」

陽乃「ここには書かれてないな。というよりも、それは個人情報でもあるから隠しておきたいんじゃないかな？」

虎峰「でも、チーム・ランスロットにとっては残酷な話ですね。3連覇どころか、試合が無かったことにされるんですから。」

八幡「……………そうだな。」

p i p i p i : : p i p i p i :

ん？誰だ？

オーフェリア『……………八幡、私よ。開けてもらってもいいかしら？』  
八幡「オーフェリア？ああ、別にいいぞ。」

なんでここにオーフェリアが来るんだ？表彰式はまだ先だぞ？

オーフェリア「……………八幡、優勝おめでとう。」

八幡「おう、サンキューな。けどよオーフェリア、まだ表彰式の間じゃねえのに何でここにいるんだ？」

オーフェリア「……………貴方の試合は生で見たいから。あなたの試合がある日だけは会場に来るようにしていたの。」

八幡「そ、そうか……………で？何でここに？」

ある意味一番の疑問だ。試合が終わったからここに居る意味は表彰くらいだが、それは18時からだ。今は13時だからまだ5時間はある。正直、ここで待つのは無理だ。

オーフェリア「……………貴方と一緒に居たいから。私は別にあなたと一緒になら5時間ここにいても平気よ。一緒にいてはダメかしら？」

八幡「……………いや、構わない。けど、5時間もここにいるのはやめてくれ。お前は良くても俺が耐えられん。流石に飽きる。」

オーフェリア「……………何処かへ出かけるの？」

八幡「少し腹減ったから何か食いにいこうとは思ってた。だから……」

シルヴィア「八幡くん、私も一緒に行く♪」

セシリー「勿論私もー!」

陽乃「私も行くからね、八幡くん!」

虎峰「シ、シルヴィアさんが行くのなら、僕も行きます!!」

めぐり「皆息ピッタリだねー。じゃあ私も便乗しちゃおっかなー。」

暁彗「……………同行しよう。」

八幡「……………っていうわけで、全員で食べることになっている。」

皆、行動力凄過ぎない？

オーフェリア「……………分かったわ。じゃあ私も一緒に行くわ。」

うん、そう言うと思ってたよ。

それにこの面子なら、オーフェリアの事を警戒しないだろうしな。

その後、飯を食いに行ったり、ショッピングをしたりしたのだが、事ある毎にオーフェリアが俺に抱き着いてくるため、シルヴィアも抱き着いてくるといいう、永遠ループが発生したのは、またべつのはなしである。

## 表彰式と閉会

八幡 side

時間は経ち午後の6時。俺たちは再び会場に戻って表彰式を行う予定だ。だが今回の表彰式、ガラードワースは欠席するみたいだ。まあ予想はできたことだが、1校抜けただけでも、少し寂しい感じはする。

陽乃「表彰の受け取り順どうしょっか？」

セシリー「最後の人が一番大きいのもらうから、一番最後は八幡でいいんじゃない？むしろ推奨ー！」

シルヴィア「私もー！」

シルヴィ、君は早く会場に行きなさい。

陽乃「じゃあ序列順で行く？」

虎峰「それが妥当ですね。僕、セシリー、雪ノ下姉姉、大師兄、八幡の順で行きましょうか。」

八幡「……まあ別にどうでも良いけどな。じゃあ登壇と降壇の順はどうする？」

セシリー「まあ先頭は八幡だよー！」

シルヴィア「当たり前だよー♪」

シルヴィ、会場に向かいなさい。会長たち待ってるかもしれないんだから！

虎峰「これも序列順で行きますか？」

セシリー「でもそのあとどうするのー？」

虎峰「簡単です。中央に八幡ですから、八幡の右に大師兄、左に雪

ノ下姉姉と並んで行くんです。そしてセシリーが大師兄の隣で僕が雪ノ下姉姉の隣です。」

陽乃「おおっ！なんか見栄え良いね！入場とかもカッコいいものになりそうだね！ミスらなければ。」

確かに見栄えは良さそうだな、ミスらなければ。

陽乃「じゃあこれで行こつか。あれこれ考えても混乱するだけだしね。」

八幡「この流れからすると、俺って一番楽だよな。」

セシリー「うわー八幡ってば嫌に良い顔ー。」

八幡「じゃあ先頭変わるか？」

セシリー「いえ、結構です。」

敬語やめい、そして口調。

――表彰式――

梁瀬『今回は出場チームが少なかったこともあってか、星武祭の期間が短かったですが、見所は満載でしたね!!特に優勝したチーム・帝龍は見事なものでした!!』

終『そうですね!!聖ガロードワース学園の事は大変残念ですが、今回のような事を2度と起こさないようにしてくれることを期待しましょう!』

梁瀬『そう願いましょう!!では、表彰に移ります!!星武祭運営委員長、マディアス・メサよりチーム・帝龍にトロフィーが授与されます!!』

マディアス『趙虎峰、セシリー・ウオン、雪ノ下陽乃、武曉彗、そして比企谷八幡。この5名の輝かしい功績を讃えここに賞する。』

梁瀬『ではお一人ずつお名前をお呼びします！』

そこからは順番に呼ばれ、トロフィーを受け取ってまた定位置に戻るといふ動きだけだった。

梁瀬『最後にチームリーダー、比企谷八幡。』

八幡「はい。」

マディアス『比企谷八幡。貴殿はチーム・帝龍の代表としてチームを指揮し優勝に導いた事を讃え、ここに賞する。君にはつくづく驚かされるよ。去年より一層オーラが増しているように見える。来年の冬にある星武祭《王竜星武祭》を制覇すれば、晴れて君も『三冠制覇』グラントスラムという偉業を達成する事が出来る。来年の星武祭では出場してくれることをして期待しているよ。優勝、おめでとう。」

八幡「ありがとうございます。」

そして八幡は、マディアスから一番大きなトロフィーを渡され、チームメイトの真ん中へと戻った。

梁瀬『皆様、優勝したチーム・帝龍に今一度大きな拍手を!!』

観客席からは歓声が上がった。それに呼応するように、セシリーと陽乃さんはトロフィーを掲げていた。虎峰は照れ臭そうにしている、暁彗は常は無表情だった。俺は暁彗と同じでそのままだった。いや、少しは笑み作ったりはするよ？

……………ん？

シルヴィア「……………」パチツ

八幡「……………」コクツ

シルヴィがウインクしてきた為、俺も頷き返した。  
……はあ、これでようやく終わりか。

梁瀬『以上で今年度の《獅鷲星武祭》のすべてのプログラムを終了します!! 実況は私、梁瀬ミコでお送りいたしました!! そして解説は』

柊『柊静薙でお送りしましたであります!!』

―――控室―――

セシリー「んああー、終わった終わったー!」グター

陽乃「やっと終わったね。」グデーン

虎峰「お二人共、行儀悪いですよ?」

八幡「なんつーか姉妹みたいだよな。やる事とか結構似てるから。」

セシリー「おつ、嬉しいこと言うねー。陽姐、私たち姉妹だってー!」

陽乃「分かってるじゃん八幡くん! その通り、セシリーは私の妹なのだ!」

八幡「意味分かんねえよ。」

星武祭終わったからぶっ飛んでんなあ。

めぐり「皆お疲れ様! 輝いてたよ!」

陽乃「おおめぐり! 見ててくれたかなあ? 私たちの表彰♪」

めぐり「はい! 皆さんカツコ良かったです!」

陽乃「特に?」

めぐり「比企谷くんが!! ……あつ!」

陽乃「ほほう?」

めぐり「ち、違いますよ!! 一番頑張ってたのは比企谷くんだし、チームリーダーとか、トロフィーの大きさとか、何もかもが輝いていたので!!」



なんか、褒められてるのかよく分からんな。

シルヴィア「皆、改めて優勝おめでとう〜！」

オーフェリア「…………おめでとう。」

おっ、2人も来たな。

陽乃「じゃあ私たちも帰ろっか！めぐりは明日だよね？」

めぐり「はい！明日の10時に帰ります！」

陽乃「オッケー♪」

虎峰「僕たちも界龍に戻りますか。」

セシリー「そうだねー。」

暁彗「……………」

八幡「じゃあ俺たちも帰ろうか。」

シルヴィア「うん、そうだね。」

オーフェリア「…………じゃあ私も帰るわね。本当はもう少し一緒に  
いたいんだけど、我慢するわ。」

こうして《獅鷲星武祭》は閉会し、日常へと戻った。

## ※祝福と2人の願い

シルヴィア side

《獅鷲星武祭》も終了して、今は私たちの家に帰っている所です。帰る途中には、朝に商業エリアで応援してくれたお店の人たちからも祝福を受けて、優勝祝いだとお肉や野菜、果物、お菓子の詰め合わせやお花など、色んな物を頂いちゃった。八幡くんはトロフィー持つてるから私が持とうと思ったんだけど、八幡くんが私にトロフィーを渡して、自分から貰い物を持ちに行った。

まさか帰りにこんな大荷物になるとは思わなかったけど、これも八幡くんが六花の人たちに認められているって事だから、私も嬉しくなっちゃう♪

外縁居住区辺りまで来たら、此处にも八幡くんを祝福してくれる人が大勢いた。サインや握手を要求してくる人はいなくて、純粋に八幡くんをお祝いしようとしている人なんだなって感じた。

そしてこれは商業エリアと外縁居住区共通であつたことなんだけど、私たちはまだ夫婦じゃありません！／／／

ーーーーマイホームーーーー

やっと帰ってきた、私たちの家に。なんだかいつも以上にこの家の存在が暖かく感じるのはいけいかな？……………ううん、気のせいじゃないかもね。この家が出来て、八幡くんと一緒に住むようになってからは、この家があつて当たり前みたいになつてたからね。いつも出迎えてくれてありがとう♪

シルヴィア「帰ってきたね。」

八幡「ああ、漸く終わったな。」

シルヴィア「なんだか今回の星武祭は出場チームが少なかつたからあつという間だったね。来年はどうなるかな？」

八幡「《王竜星武祭》だからな、1番多いんじゃないか？けど、オーフェリアは多分出場しないと思うぞ。いままで命令されてやってきただけだからな。」

そういえば今の所有者は八幡くんって事になってるんだよね。じゃあオーフェリアさんが試合に出たい時は、八幡くんの許可を得ないと出られないってことだね。

八幡「来年は今年みたいにならないといいけどな。多分減多なことじゃあ起きないだろうが。」

シルヴィア「うん、今回が初めての事例だから。きっともう起こらないと思うよ。検査とか絶対に強化されると思うしね。」

八幡「そうだな、そうであって欲しい。」

シルヴィア「うん、こうならなかったためにもね……はい！じゃあこの話はお終い！早く中に入って休もっ♪そしてお願い事のおさらいね！」

——居間——

シルヴィア「……つまり、火と水は八幡くんの陰陽術でやりくりして、なくなったら朱雀と玄武でフォロー。これなら費用は大体削減出来るけど、八幡くん大丈夫？」

八幡「そこらへんは問題ない。朱雀と玄武の力が込められた宝玉を作ったから。これで呪符がなくなった時でも料理や食器洗いも出来る。まあ呪符も多めに作っておくなら問題はないと思うけどな。」

シルヴィア「じゃああとかかるものは……電気代、食費、飲料代……って所かな？」

八幡「今のところはな。本当は電気もどうにかしたかったんだが、雷は陰陽術に含まれてないんだ。あれは合わせ技だからな。出来なくもないが、術式が複雑だから難しいんだ。すまない。」

シルヴィア「いいよいいよ、気にしないで。でも初めてだろうね、蛇

口のない流し、ガス栓の無いコンロ。こんなキッチン是世界で初めてだよね。」

八幡「これ、絶対世界でバカウケするよな。」

シルヴィア「きつと世界で陰陽術か魔法が使える人にとっては思いもよらないところで役立つスキルだよな！」

だって普通思わないもんね。戦闘系スキルを家事の方で役立たせるなんて。

八幡「だな。【華焰の魔女】なんて、あの炎制御出来れば、焼肉とか炒め物も出来るしな。」

シルヴィア「確かにそうだ！じゃあ私は？」

八幡「シルヴィアは……料理に役立つような能力ではないな。代わりにお店のBGMの曲は作れそうだ。」

シルヴィア「おお、確かにそういう使い方もあるね！八幡くん柔軟性あるなあ。じゃあ八幡くんの能力は？何に役立つ？」

八幡「……影と幻ってなんか役立つっけ？」

シルヴィア「……よく分からない能力だね。」

八幡「俺なら影の中に潜れる事だが、幻が分からん。幻影を見せるくらいか？」

八幡くんの能力を戦闘以外で約立たせるのは難しそうだなあ。

その後も私たちはお料理屋さんの設計を打ち合わせして、終わったと同時に貰ったお肉と野菜で晩御飯を作ってから、一緒にお風呂に入った。

―――寝室―――

シルヴィア「……昨日は、ここで一番の幸せを迎えたんだよね。」

八幡「……今日も……するの？」

シルヴィア「ううん、流石にしないよ。疲れた状態の君を追い込むようなことはしたくないから。」

八幡「……そうか。」

シルヴィア「明日は星武祭運営本部に行くんだよね？お願い事、よろしくね。」

八幡「ああ、任せとけ。」

そして私たちは、いつものように抱き合って眠りについた。この時私は、いつもより幸福感を多く感じる事ができた。

## 《獅鷲星武祭》後の報告

八幡 side

《獅鷲星武祭》が終了して早1週間が過ぎた。あれだけの事があった星武祭の騒ぎが嘘のように静かになっている。まあ毎年の星武祭の盛り上がりを考えれば、熱気が冷めるのが早いのも何となくは想像出来る。

俺の学院で星武祭に出たメンバーも、優勝した事が無かったかのよういつもの鍛錬に励んでいる。まあ界龍では優勝なんて二の次なんだろうけどな。

優勝した俺たちチーム・界龍は、星武祭が終了した翌日に自身の願いを統合企業財体に叶えてもらうために運営本部に赴いた。

結果から言うと、全員問題なかった。

虎峰は保留との事だった。始まる前も言っていたが、本当に欲がない奴だ。

セシリーも保留との事だった。よく考えてみれば、あいつも今回の星武祭に出た動機は俺が出るから、だったな。

陽乃は《鳳凰星武祭》で分取った新開発エリアの改築だった。設計図は殆ど完成してあった。流星は母親が建設系の取締役なだけはある。

暁彗は珍しい茶葉の要求だった。前言ったのとは打って変わって珍しい茶葉の種類を全てだそうだ。意外と欲がある方なんだと思った。

八幡もとい俺は料理店の新築だ。場所は商業エリアの隅の方であり目立たないような場所にした。内装も問題はなかったが、キッチンの面ではやはり驚いていた。そりやそうだ、ガス栓不要、蛇口、水道不要の流しなんて聞いたことないからな。まあOKだったけど。

その後は工事の方に取り組んでいた。俺も陽乃さんも設計図の方は提出してあるから、その辺は問題ないと思う。抜けてる所以外は。

因みにだが、俺の設計図も雪ノ下の母親に手伝ってもらった。あの人、少し厳しそうに見えて割と丁寧な教え方するから分かりやすかった。

こうして俺たちの星武祭はこれで全て片付いたと言える。

さて、次に話すのはあいつの事だ。

《獅鷲星武祭》の決勝でレギュレーション違反をした葉山だが、処罰が決まった。

六花の永久追放に決まった。様々な案件が広がったようだが、今回はそれで収まったらしい。ニュースでも見たが、いま日本の千葉にいる葉山の両親宅はかなりのマスコミが押し寄せていた。中にいるのかどうかは不明だが、両親が出てくる気配は無かった。

この時、俺はつくづく思った。雪ノ下建設が葉山との弁護士関係を切っておいて良かったと。

これによって葉山自身と葉山家は手痛いとは言えない程の打撃を受けていた。俺が言ったら残酷かもしれないが、葉山は社会復帰はできないレベルになっていると思う。今回の星武祭の事で顔も名前も世間にバレてる。そんな男が社会に出て良い顔をできるかと言われるら、出来るはずがない。

葉山の両親も可哀想だ。息子がしでかしただけでこんなにも辛い思いをしなくてはいけないんだからな。元々実力もあり、人望のある葉山の父親の信頼も大きく失われるだろう。だが、これで葉山は六花に来ることはできないし、会うこともないだろう。俺が千葉に戻らない限りは。

葉山が使っていたレギュレーション違反の道具だが、あれは葉山が偶々産業廃棄物の不良品の中にあつたものから取り出した物だった。その中の物は煌式武装が殆どで葉山が使っていたのもそれだった。

籠手型煌式武装だったらしく、手の部分を取り外してから他に拾った脚絆型煌式武装とチョーカーをコードで繋ぎ合わせてみたら、身体が軽くなったように感じたらしい。

次に攻撃の先読みだが、あれはチョーカーに脳内伝達式の隠しカメラが設置されていて、攻撃してきた相手の動きを曲線状に描きながら本人へと支援するものだった。

最後に相手の星辰力を奪う能力だが、まだ解明していないらしい。実際に葉山が使っていたかどうかとも分らない。俺は今回の決勝では星辰力使っていないから奪われなかった可能性もある。これに関しては、まだ解析中との事だった。

葉山が使っていた廃棄した煌式武装の製作者は、アルルカント・アカデミーの《獅子派》副会長のナルシス・ペロワだった。本来なら責められる立場にあるが、本人も身に覚えのない状況で、見た目が変わっていたのだから、分からないのも無理はないだろう。

あの廃棄物はアルルカントが自ら指定管理を行っていた場所だった為、今回はお咎め無しとのことだった。

ガラードワースの上層部もこれは認めないわけにもいかず、緊急の謝罪会見を開いてカメラの前、視聴者の前で頭を下げた。

ガラードワース自身も、今年度における星武祭のポイントを全て破棄し、《獅鷲星武祭》に出た生徒の戦績は無効になった。流石に《鳳凰星武祭》の結果は消去するわけにはいかないから、それはそのままらしい。そしてこれが一番残酷なもので、出場権の回数は元には戻さないらしい。規律に厳しいのは知っていたが、出場権くらいは元に戻してもいい気がする。



そして今回の騒動の責任として、ガラードワースは《獅鷲星武祭》の支出負担を全て負担する事を発表して俺がステージを半分地面丸出しにしたのもガラードワース持ちになるということになった。なんかごめんなさい。

一波乱あった《獅鷲星武祭》騒動もこれで一段落ついた所だろう。まだ後処理が残っているかもしれないが、それも追い追いだろう。

後は……「八幡くん！早く早く!!」……おっと、少し話し過ぎていたようだな。因みに今はシルヴィと週に一度のデートだな。この話はこれで終いだ。

八幡「わるいわるい、今行く。」

## 技 設定3

### 《八幡》

影霧：八幡の影と幻惑の能力を合わせて作った霧。この霧の中に入ると、強制的に違う場所へと移動させられてしまう。尚、移動先が分かるのは八幡のみである。

影時雨：影のボールが突然弾けて小さな針のようなもので広範囲攻撃をする技。元々の形は斬撃で、そこから徐々にボールの形に変化していきながら失速して、最後には停止して弾ける。

※チーム・ルサルカのミルシエの体験談によると、たくさんの爪楊枝で色んなところを刺されているような感覚だという。

### 《憑霊》

堅牢陣・大蛇丸：八幡の守護霊、玄武による憑霊。攻撃能力は無いものの、防御能力は他の憑霊と比べても群を抜いている。防御能力が高くなる一方で、一度防御の方に力を注ぐと、その場から動けなくなるという欠点もある。なので、チーム戦では大きな効果を発揮する。

猛牙・白爪刃：八幡の守護霊、白虎による憑霊。戦闘での発動はしていない為、データ不明。

鹿神・翠天角：八幡の守護霊、索冥による憑霊。特にこれといった欠点のない、八幡が今まで使った憑霊の中では1番汎用性の高い憑霊。剣から槍に装備が変わるが、棍術も扱う八幡には問題なかった。

### 【合わせ技】

トリシューラ  
翔利修羅：とある神話から引き出した技。雷を纏った槍を相手に目

掛けて投げる技。持ちながら攻撃もできるが雷を纏っているため、そこまで接近出来ない。発動する時には必ず台詞を言う。

『東洋の創造・再生・破壊を司る神よ。我が槍に三叉の力を授け給え!!  
翔利修羅トリシユーラ。』

『雷鳴と共に散れ。』

### 《セシリー》

光雷：身体の何処かに光と雷を纏わせる星仙術。セシリーは足に纏わせた。光雷の特徴は、纏っている部分が光っていると錯覚するほどの眩い光とそこへ雷を集中させる事で蹴りの威力を高める技。

### 《虎峰》

絡迎：相手に対して胸の位置に両手で発勁をする技。工夫もしないなければ、なんの強化もない普通の武術だが、ガムシヤラに向かってくる相手には対応しやすい。

原作の《獅鷲星武祭》では【通天足】登場してたのに、僕の奴出し忘れてました。出す予定あったのに、最後まで出せなかったという………バカですよ。

此処からは単なる時稼ぎですので、スライドしなくても結構です。

八幡「やっぱ俺思っただけだし、今のおまけシリーズって基本俺とシルヴィアとオーフェリアだよな。」

オーフェリア「そうだね。」

シルヴィア「そこに他の人がちよくちよく入るくらいだもんね。作者は最初そんなつもりじゃなかったみたいだけど、オーフェリアちゃんのおまけが意外と大好評だったから続けちゃったみたい。

オーフェリア「大好評？」

八幡「オーフェリアはあんま興味ないだろうから知らないと思うが、半年前とかのおまけだったら、それこそ『可愛いっ！』や『癒される……』とか『妹オーフェリア最高っ！』って評価がかなりあったからな。」

オーフェリア「ほえ……全く知らなかった。」

シルヴィア「後、あれも凄かったよね。《鳳凰星武祭》のおまけの時のアレ。」

八幡「ああ……300回も取り直したから苦労したもんだ。」

オーフェリア「だ、だって演技とはいえお兄さんからあんな風に本気の声で言われたら、本気になっちゃうんだもん!!」

シルヴィア「そりゃあ……棒読みであんな事言われたとしても迫力なんて伝わらないしね。」

オーフェリア「ねえお兄さん！私の事捨てないよね？関わらないなんて言わないよね？」

八幡「逆にどうやってお前を見放せていうんだよ。10年も一緒にいるんだぞ俺たち。見限る方法があるのなら教えて欲しいくらいだ。まあする気は毛頭ねえけどよ。」

シルヴィア「確かにそうだね。あの時のオーフェリアちゃんは本当に八幡くんにはベツタリだったよね。まあ今もあんまり変わんない

けど。」

オーフェリア「わ、忘れてください……あの時の私は人見知りだったんです……」

八幡「誰かに話しかけられたら、すぐに俺のところに逃げてきてたしな。」

オーフェリア「むう……この話はもうお終い！文字稼ぎなら出来たんだからいいでしょ！お兄さんとシルヴィアさんは人の黒歴史を漁らないでよ全くもう!!」

八幡「急にメタいことを言うな。」

## ハシル劇場（＋α） ホテル・エルナト編 始まった宿泊旅行？

### 八幡side

シルヴィア「もおー！今回だけ特別なんだからね！オーフェリアさん！こんな事絶対に無いんだから！」

オーフェリア「……………分かっているわ。でも、もし機会があればまた「ダメツ！」……………どうして八幡を独占するの？」

シルヴィア「当たり前でしょ!?私の彼氏なんだから！普通の考えだよ!?!」

オーフェリア「……………いいじゃない、別に貴女から取るわけでもないのに。」

シルヴィア「それでも嫌なの!!」

皆さんこんにちは、比企谷八幡です。さて、いまどういう状況かというと、2人の美少女に挟まれながら目的地へと向かっている途中です。その目的地は、ホテル・エルナトである。その理由は、学園祭の時にシルヴィアが的当てゲームで10発中10発を奇跡的（実力だな。）に当てて手に入れたチケットを使う時が来たからである。

実際にはちょうど良い時期だろう。今は春休み真っ只中だ。遠出ではないが、少し違う雰囲気のところで行くのも一興だ。

本当なら2人で行く予定だったんだが、急遽？オーフェリアも行く事になった。子犬みたいな目で見られていたシルヴィが渋々OKしたんだけどな。

それで今、ホテル・エルナトへと移動中な訳なんだが、まあ2人の口論がうるさい。だって俺、板挟みになりながら聞いているんだぞ？

ちよつとは静かにして。周りの目もムチャクチャ痛いから。

八幡「2人共よお、もういいだろ。どうせ3人で行くことは決まってるんだから。」

シルヴィア「だって本来は八幡くんと私で行く予定だったんだよ!!」

八幡「それはそうだが……オーフェリアの気持ちも汲んでやれ。これまでこんな体験したことないんだろう。そういうのもしてみたかったんじゃないのか?」

オーフェリア「……………」コクコクッ

シルヴィア「……………」そうなんだ、それなら仕方ないよね……………」それで、本音は?」

オーフェリア「八幡と一緒にいたいからよ……………」っ!」

シルヴィア「ほらあ!! やっぱり八幡くん狙いじゃん!! バレバレだよ!! しかも即答で答えたよ!」

オーフェリア「……………」酷いわ【戦律の魔女】。こんな方法で騙すなんて。」

シルヴィア「別に私騙したわけじゃないからね? オーフェリアさんが勝手に騙されただけだよ?」

オーフェリア「……………」プイッ

あつ、顔と目を逸らした。

シルヴィア「もう! 都合が悪くなったら顔を逸らすのやめなさい!」

オーフェリア「……………」八幡、【戦律の魔女】が怖いわ。助けてちょうだい。」ギュッ!

シルヴィア「あつ! 八幡くんに抱きつくなんてずるい! 私もっ!!」  
八幡「お前ら両方いい加減にせい。」

チヨップ テイツ×!! 2

シルヴィア「ううゝ痛いよ八幡くん！」

オーフェリア「……………私たちが何をしたというの、八幡？」

八幡「君たち流石にうるさいの。両サイドから大きな声で口喧嘩するわ、抱き着いてくるわで騒がしい。もう少し自重しなさい。」

シルヴィア「うう……………でも元はと言えば……………」

オーフェリア「……………私も行きたかったのよ。」

八幡「なら2人で行けば良いじゃねえか。あんま仲悪いようだと、俺帰るぞ？」

シルヴィア「オーフェリアさん！私一度八幡くんと貴女の3人で1週間くらいのプチ旅行してみたかったんだ!!これは良い機会だと思わない!？」

オーフェリア「……………そうね。これを逃したらいつできるかどうか分からないから、今しかないわね。この日に感謝ね。」

シルヴィア「うん！此処は3人一緒に仲良く旅行を楽しもうっ!!」

……………無理やり出した感があるが、まあ良しとしよう。この2人の仲が悪いわけじゃないっていうのは、知ってるしな。

——ホテル・エルナト——

……………俺、此処に来たの1ゝ2回位だったが、やっぱり内装とんでもねえな。高級ホテルが安物に思えるくらいのゴージャス感だな。この空中庭園でいつも会議してる会長たちってホント贅沢だな。

シルヴィア「ホラ八幡くんっ、早くチェックインしようよっ！」

八幡「分かってるからそんなに急かすなよ。」

受付「いらっしやいませ。ホテル・エルナトへようこそ。本日はどのようなご用件でしょうか？」



シルヴィア「えつと……このチケットを3人で使いたいんですけど……」

受付「お預かり致します。少々お待ちください……こちらのチケット、3月上旬に星導館学園で行われた学園祭での商品の方で間違いなかったでしょうか？」

シルヴィア「はい。」

受付「ありがとうございます。期間は1週間ございますが、何日ご宿泊されますか？」

シルヴィア「1週間をお願いします。」

受付「かしこまりました。最後に、お客様方は男性が1人、女性が2人となっているようですが、お部屋の方はお分けいたしますか？」

シルヴィア「いえ、一緒に大丈夫です。」

受付「かしこまりました。次にこちらの用紙にお客様全員のお名前、ご年齢、在籍学園の記入をお願いします。」

まあ、俺たちを見て学生だつて気づかないほうがおかしいよな。シルヴィとオーフェリアなんて有名人だし。

※君もそうだ！

シルヴィア「出来ました。」

受付「ありがとうございます。最後にお手数なのですが、こちらの静脈認証の方に中指を差し込んで下さい。」

そして全員指を差し込んで、手続きは完了した。

受付「ご協力ありがとうございました。これで手続きは終了となります。以降のホテルへの出入りは今の静脈認証を行った事によって

自動的にスキャンされるので、受付の方へと申し出る必要はありません。カギの方も今の指で解錠・施錠が可能です。それでは、お部屋の方へのご案内します。こちらへどうぞ。」

――第1塔最上階――

エルナトは合計で100階くらいはある超高層ビルだ。その中でも俺たちが今いる場所は、空中庭園に一番近い最上階にいる。一番近いと言っても、厳密には途中から3つの塔に分けられていて、俺たちはその第1塔にいる。マジでどうやって作ったんだろうな。よく作ったもんだ。

受付「ではこちらがお客様方のお部屋になります。当ホテル自慢のお部屋となっております。」

受付の人が太鼓判を押して鍵を開けて扉を開けると、中はホテルなんてものじゃなかった。もう部屋だ。そう言った方が納得できる。

シルヴィア「おおゝ凄いいねゝ!!私こんなホテルは初めてだよゝ!」  
オーフェリア「…………エルナトの最上級ルームはこうなってるのね。驚きだわ。」

……確かに驚きだ。これ、夜になったら雰囲気あるんだろうな。

受付「お気に召したようで何よりです。それでは、1週間のご宿泊、ゆつくりと堪能して下さい。失礼いたします。」

こうして、俺たちの春休みが本格的に始まった。

## この一週間で

オーフエリア side

……此処、本当にホテルの中なのよね？あまりにも豪華過ぎると思うわ。統合企業財体でもこんなに豪華な部屋や家は持っていないというのに、何処からこんな凄い内装を整えるお金が出てきたのかしら？

……ソファもフカフカだわ。思い切りドカツと座ったら後ろに倒れちゃいそうね。

シルヴィア「八幡くんもおいでよく！このソファ凄い座り心地だよ！」

オーフエリア「……まるでソファがクッションみたいなの。」

八幡「それは言い過ぎ……うおっ!？」

そう言っつて八幡は座ろうとするとバランスを崩して、後ろの背もたれに身体と頭をぶつけたわ。

シルヴィア「……」プルプル

オーフエリア「……」ワナワナ

八幡「……言いたい事があるなら言えよ／＼」

シルヴィア「八幡くん、ふふっ……ちよつと今のは……ぷぷっ……ドジ過ぎるよ。」

オーフエリア「……ええ、面白かったわ。」

八幡「まさかソファにやられてバカにされるとは予想外だった。」

……私も予想外だったわ。あんな転げ方をするなんて、普段の八幡と比べるとあり得ないもの。

シルヴィア「ねねっ！この部屋の中、少し見てみない？分からないままじゃあ何かと不便だろうし、少し見ておいた方が迷わずに済むと思うんだ。」

八幡「それもそうだな。荷物とかもそろそろ出して整理もしたいしな。」

オーフェリア「……………そうね。」

シルヴィア「きくまり！じゃあ探検にしゅっぱーっ！」

オーフェリア「……………おー。」

シルヴィア「おっ、オーフェリアさんノリ良いね！ほら八幡くんもっ！」

八幡「……………おー。」

……………いま部屋の中を見て回っているのだけど、やっぱり此処はホテルじゃないわ。超がつくお金持ちの家だと思う事にするわ。窓側の方は一面ガラス張りなのは、外から見れば分かる。中身は2階もあるのに驚いたわ。どうやら2階はバスルームと寝室になってるみたい。

八幡「ベッドは一つみたいだな。なら「勿論、3人で寝るんだからね？ここまできて誰かが別の所で寝ろなんて薄情な事したり、言ったりしないよね？」……………ああ、しねえよ？」

シルヴィア「そして寝るときはもちろん八幡くんが真ん中だからね！これは自然の摂理なんだから！」

オーフェリア「……………そうね。これは世界が決めた法則ね。」

八幡「無駄な法則だな。」

……1階には横長の白いソファが90度型に置かれていて、1人用のグレーと赤のソファも2つ。そして真ん中に黒いテーブルがある。後、テレビ端末の大きさもかなりのものだわ。

……他にも椅子やテーブルが沢山あって所々に座れるように親切心が出ていたわね。流石は一番の部屋ね。

八幡「一通り見て回ったな。」

シルヴィア「そうだね……この後どうしよつか？ここでのんびりするの也不错けど、やっぱり何処か行きたいよね。」

オーフェリア「……空中庭園に行くのもありなのだけど、私と【戦律の魔女】は月に一度はここに来るものね。八幡も偶に呼ぶから、あまり行く意味はないわね。」

八幡「ちよつと？俺を呼ぶってどういうことだ？星露がいるだろう？」

オーフェリア「……あんなのがいても意味ないわ。今すぐ八幡に生徒会長と【万有天羅】の称号を譲渡すれば良いのよ。」

八幡「……流石に言い過ぎじゃね？」

……そんな事ないわ。

シルヴィア「話を戻すけど、本当にどうする？」

八幡「それだよなあ……特にすることないんだよなあ。昼には早過ぎるし、かといって此処には遊ぶ所もないからな。」

シルヴィア「主に世界各地の大企業をもてなすために作られたホテルでもあるからね。統合企業財体の他にも資金のある企業はまだあるから。」

それでも統合企業財体に融合していないということは、人間性が出て来ているということね。統合企業財体の幹部は人間性のない人たち

ばかりだものね。

シルヴィア「でも、オーフェリアさんなら庭園に行っても退屈しないんじゃないかな？ほら、四季折々色んな花や植物が咲いてるからさ。月に一度しか入れないんだし、折角だからじっくり見てきたら？」

……盲点だったわ。確かにあの庭園には色んな花があつたのを忘れていたわ。会議だけに使う所だったから全く気づかなかったわ。

オーフェリア「……………確かにそれもそうね。八幡、【戦律の魔女】、悪いのだけど、私は庭園に行ってくるわ。もしかしたら時間を忘れてしまいかもしれないから、2人はお出かけしていても良いわよ。」

八幡「おう、分かった。ゆっくり見て来い。」

シルヴィア「行つてらっしゃい。後、オーフェリアさん。私のことはシルヴィでいいよ。いつまでもその呼び方じゃあぎこちないからさ。」

オーフェリア「……………分かったわ。ならシルヴィアと呼ばせてもらうわ。」

シルヴィア「うん、それでも良いよ。」

オーフェリア「……………じゃあ行ってくるわ。」

……………綺麗な花も沢山あると思うから、写真も撮ろうかしらね。

オーフェリア side out

—————

シルヴィア「なんか嬉しそうだったね。」

八幡「それはお前もじゃないのか？仕組んでたんじゃないのか？」  
シルヴィア「人聞きの悪いこと言わないでよ。確かに八幡くんとは2人きりできたかったけど、私そこまでする程人間捨ててないもん

！」

八幡「分かってるよ。純粹に言っただけだろ？」

シルヴィア「勿論。こういう時くらいでしか、オーフェアさん素顔出さなそうだから。」

八幡「……確かに。今のところオーフェアの素顔を知っているのは、俺とシルヴィアくらいだからな。」

シルヴィア「……私たちもどこに出掛ける？」

八幡「目的もなくぶらつくのはいつもの事だから慣れてるが、どこ行くんだ？」

シルヴィア「それを探す旅っていうのは？」

八幡「ほう……面白そうだな。じゃあ行くか。」

そして俺たちはオーフェアに書き置きを残して、俺たちがこの1週間で楽しめそうなところを探す旅に出た。

## 明日と明後日の予定

シルヴィア side

八幡くんと街に出てから2時間くらいかな。もうお昼を過ぎた辺りで食べ物屋さんに入が大勢いる時間だね。もしくは、お店の中で買ったものを外で食べている人もいる。人それぞれだね。私たちもそろそろ何か食べなきゃね。

そういえば、オーフェリアさんは大丈夫かな？お花の見過ぎで時間忘れてないかな？

シルヴィア「ねえ八幡くん、そろそろお昼にしない？時間もいい頃合いだし。」

八幡「そうだな。なら何処にする？」

シルヴィア「ならあそこにあるハンバーガーショップで良いんじゃないかな？特にこれというものがなければけど。」

八幡「特にないからそこで大丈夫だ。じゃあこの看板にあるメニューである程度決めておくか。」

シルヴィア「うん！」

その後は問題なく注文も済み、天気も良いから外の空いている席で食べる事にした。

でも、やっぱり中に入ると驚くんだよねあ店員さん。まあ今はもう変装しないからそのままの自分で出歩いているからしょうがないんだけどさ。

シルヴィア「いただきま〜す！はむっ……………うん、美味しいっ♪」  
八幡「ハンバーガーなんていつ振りだろうな。六花に来る前でも、そんなに食ってなかったからな。」



シルヴィア「千葉にはハンバーガーショップってないの？」

八幡「いや、あるんだが行くことがないってだけだ。別に外食が好きってわけでもなかったからな。」

シルヴィア「ふうーん……あくむっ。」

まあ昔の八幡くんの人物像を考えてみたら分かるよね。めんどくさがり屋だったから。

シルヴィア「でもさ、六花でも初めてだよな？」

八幡「ああ。ずっと中華か近場の店、最近は家で作ってるからな、行く理由がない。」

シルヴィア「たまには外食にしてみよっか？」

八幡「その方がいいのか？息抜きってやつ？」

シルヴィア「今日は料理お休みにして食べに行こうっ！的な感じでかな？」

八幡「それも良いのかもしれないな。月に2〜3回はそうするか。」  
シルヴィア「じゃあそうしよう！」

でももしそうになったら、お店の店員絶対驚くよね。固まった顔を見るのって昔は面白かったけど、もう慣れちゃったんだよね。

――シリウストーム付近――

シルヴィア「今年は《獅鷲星武祭》だねー。八幡くんはチーム決まってるの？」

八幡「ああ。俺を含めて虎峰とセシリー、陽乃さんに暁彗の5人だ。」

シルヴィア「………凄いチームだね。」

八幡「チーム組むってんなら、やっぱり上位陣を加えるってのは自然の流れじゃないのか？あまり序列外を入れるって奴はいないだろう。」

八幡「現にガラードワースのチーム・ランスロットは序列1位から5位で編成されてるチームだからな。」

シルヴィア「まあ確かにこれが普通だね。八幡くんにとっても一番の強敵はやっぱりアーネストのチーム？」

八幡「それしかないだろ。他に気になるって言ったら、やっぱり星導館のチーム・エルフィールドだな。序列外でも粒揃いだからな。まあこれは、星導館だけに言えたことじゃないけどな。」

確かに序列外でも強い人はいるからね。

シルヴィア「私たちの夢のためにも次の星武祭、頑張ってね、八幡くん。」

八幡「ああ、任せておけ。必ず優勝する。」

――アクアランド前――

シルヴィア「あつ！ここなんてどうかな？皆で来たら楽しいと思うよ！」

八幡「プールか……だが俺たち水着は持って来てないぞ？借りられるなら良いが……」

シルヴィア「その為に1週間があるんだよ！明日は水着を買いに行こうよ！そして買った後に即プールヘレッツゴーだよ！」

八幡「即決だな……まあ確かに此処なら楽しめそうだな。帰ったらオーフェリアに報告だな。」

――フラワーハウス――

八幡「おつ、此処もこの前来て以来だな。」

シルヴィア「フラワーハウス？お花屋さん？」

八幡「ああ、花を購入する店でもあるが、花を使って色んなアクセサリーも作れる店でもある。会場で俺がお前に渡した指輪もここで

作ったものだ。」

シルヴィア「ええ!?あの指輪ってお花で作られてたの!?どこからどう見ても宝石にしか見えなかったのに……………」

八幡「花の色素を使って結晶化する機械があつてな、それを使ったら宝石みたいになるんだ。だがこの店のポイントはこれだけじゃない。」

シルヴィア「というと?」

八幡「この店は四季折々の花が咲いてる。春夏秋冬全ての花が場所ごとに分かれて環境を維持しながら咲いてるんだ。」

シルヴィア「へえゝ凄いいね!じゃあ珍しい花もあるのかな?」

八幡「俺はよく分からないが、オーフェリアは目を輝かせてたな。多分それもあるんだと思うぞ。」

シルヴィア「ああ……………じゃああつたんだね。きっとそうだよね。」

だって表情の起伏がよく分からないオーフェリアさんが目を輝かせるって…………

シルヴィア「お花屋さんは明後日かな?きっと明日はプールで疲れちゃうだろうしね。」

八幡「泳ぐつもりでいるのか?ていうか、オーフェリアにも聞かないのにもう決定?」

シルヴィア「大丈夫!オーフェリアさんなら絶対に許可するから!」

八幡「どこから出てくるんだ?その自信。」

その後も街の方を探索してみたけど、良さげな所は見つからなかった。帰ってオーフェリアさんに報告して、プールの事を言ったら、『行くわ、絶対に。』って即答だった。

多分だけどオーフェリアさん、私と同じ目的だよな。

## ※エルナトのデイナー

八幡 side

……前回のあらすじを少しだけするとだな、俺とシルヴィで街を探索してこの1週間で楽しめそうな所を探してきた。オーフェリアは空中庭園の植物を見に行つてたつてところだ。

そして帰ってきた頃、俺とシルヴィは既に部屋でゆっくりしていたオーフェリアに行こうと思つてゐる場所の候補を伝えると……

オーフェリア『行くわ、絶対に。』

つと、即答でした。

なんかに対して必死みたいな感じが取れたが、その何かが分からない。フラワーハウスなら分かるが、アクアランドに関してはオーフェリアが進んで行こうとはあまり思えないんだが……

まあ、こんな事もさつきあつたつて事だ。

んで、俺たちが今何をしているかつていうとだ。エルナトの75階にあるレストランへと来ていた。因みにレストランは15、30、45、60、75の5つに統制されていて、ランク別に分かれている。俺たちがいる75階は5つ星のレストランだ。まあ1番上の階だから当然か。

因みにだ、この5つ星レストランは75階以上の階に宿泊している人でないと食事ができないことになっている。それだけに人がそんなにいない状態だった。

シルヴィア「静かな雰囲気は今流れてるクラシックがよく似合つてゐるね。流石はエルナトの最高級レストランだけはあるね。」

八幡「ああ。こういうのは初めてだが、あまり悪い気はしないな。落ち着く。」

オーフェリア「……………そうね、気に入ったわ。」

いや、気に入ったとしても、今後入れるかどうか分からない所だからな？

ボーイ「お待たせ致しました。こちら前菜の『ブルスケッタ』で御座います。焼いたフランスパンの上をトマトとモツツアレラチーズを乗せて最後にバジルを添えた一品となっております。」

おつ、この料理……思い出すなあ。俺がトマトを克服した思い出の品でもある。まあチーズは載ってなかったけどよ。

※案内？ 後編を参照

シルヴィア「前菜にしては中々ボリユーミーな感じなのが出てきたね。」

オーフェリア「……………でも美味しそうだわ。私の生まれ故郷にはない料理だけど、見た事はあるわ。」

八幡「この料理はイタリアンだからな。リーゼルトニアには無いだろうが国が近い分、見た事はあるのは不思議じゃないと思うぞ。」

シルヴィア「確かにリーゼルトニアとイタリアでは作られている料理とか文化とかも全く違うからね。そんなに詳しいわけじゃないけど、食の名物も全く違うしね。」

確かにな。イタリアはよく分かるが、リーゼルトニアの名物ってなんなのか分からん。まあ名物ってよりかは、有名人ならいるけどな。

八幡「まあ色々あるんだろ。それよりも、早く食べようぜ。」

2人「うんっ♪（……………ええ。）」

――10分後――

ボーイ「失礼致します。こちら『サルティン・ボツカ』で御座います。牛肉の中でも最高品質・最高級のものを選んでおります。こちら味付け用に塩胡椒、レモンです。次に付け合わせとしてエビとイカのカルパッチョで御座います。海鮮系によく合うトレッシングを使い、様々な具材を楽しめる味となっております。失礼致します。」

シルヴィア「八幡くんの読み通り、イタリアンみたいだね！」  
オーフェリア「……………そうね。サルティン・ボツカは私でも知ってるわ。イタリアを代表するお肉料理だもの。」

八幡「しっかし凄い凝った料理だな。俺こんなに細かく出来ねえぞ。目を片方瞑って近づけながら、バジルとか置いてそう。」

シルヴィア「もしそれが本当なら、面白い光景だね。1つの葉っぱにすごい集中してるってことになるんだから。」

それだけに集中してるシェフってどんだけだよ……

――30分後――

ボーイ「失礼致します。お食事の方は如何でしたか？」

シルヴィア「とても美味しかったです。」

オーフェリア「……………同じくよ。」

八幡「流石、5つ星を名乗る程だけはあるって思いました。」

ボーイ「ありがとうございます。では最後にこちら、デザートの『トルタサケー』で御座います。チョコレートをふんだんに使った一品となっております。以上、本日のイタリアンコースでした。失礼致します。」

シルヴィア「おお、美味しそう♪」

オーフェリア「……食べるのがもったいなく感じるわね。」

八幡「それ、分かる気がする。なんとなくそういう時つてあるよな。」

そして俺たちはデザートも食べ終わり、満足してからレストランを出て部屋の方へと戻った。

## 嫁の許可を得るために

八幡 side

イタリア料理のフルコースを食べ終えて部屋に戻ったら、そこには俺も初めて見る、六花の夜景が見えた。例えるなら、空の星をそのまんまコピーしたような感じだ。そしてこのエルナトが摩天楼といった所だろう。

中々に絶景だ。こんな景色は……まあ拝める機会は空を飛べばあるだろうが、そんなにはないだろう。

シルヴィア「綺麗だね……クインヴェールには高い所はあっても、ここまでは見れないからすごく綺麗に見えるよ。」

八幡「そうだな。此処が六花の中にあるからっていう意味もあるが、こういう景色はそうそう体験はできないな。」

オーフェリア「……こんな景色、リーゼルタニアでも拝めないわね。」

おそらく千葉でも無理だろう。まず千葉にはこんなデカイ高層ビルは無いからな。高いのはあってもそこはホテルかどうか分からないからな。

シルヴィア「こんな景色をお風呂に入りながら眺められたら最高だろうね。」

八幡「ならすればいいんじゃないか？ここの風呂にも窓はあったから眺めながら入浴を満喫することもできるだろ。」

シルヴィア「おお、それ良いね！じゃあ1週間の楽しみが1つ増えたね♪」



どうやら俺の提案はOKみたいだ。

シルヴィア「じゃあ八幡くん、お先にお風呂どうぞ♪八幡くんが言ってくれたんだから、お先は八幡くんが景色を楽しんで来て。」

八幡「いいのか？先はシルヴィが入りたかったんじゃないのか？」

シルヴィア「確かにそうだけど、明日の水着についてオーフェリアさんと相談しておきたいんだ。」

オーフェリア「……………水着なんて着る機会が無かったから。シルヴィアと話し合ってイメージしておこうって決めてたの。」

八幡「そうだったのか……………じゃあお先に風呂入ってくる。なるべく早く上がるようにするわ。」

シルヴィア「気にしなくていいから、ゆっくり浸かって大丈夫だよ。」

オーフェリア「……………シルヴィアの言う通りよ。時間がないわけではないのだから、のんびりしていると良いわ。」

……………なんか気を遣わせたか？まあいい、俺も少しのんびりしたって思ってたから、少しだけ湯に入る時間を長くするか。

八幡 side out

シルヴィア&オーフェリア side

シルヴィア「行っただね。」

オーフェリア「……………行っただね。」

シルヴィア「じゃあ、水着の事を話そうか……………には、ならないからね？」

オーフェリア「……………」

シルヴィア「オーフェリアさんさ、八幡くんが入ってる間にお風呂入りに行くつもりでしょう？」

オーフェリア「……………その通りよ。」

シルヴィア「あのね、その如何にも何を当たり前なことを聞いている

の？つみたいな顔をしないでよ。当たり前じゃないからね？」

オーフェリア「……………じゃあシルヴィアはどうするの？」

シルヴィア「わ、私？私なら許可を取って、八幡くんが良いって言ったら入るけど……………」

オーフェリア「……………律儀なのね。」

シルヴィア「オーフェリアさんが八幡くんに対してオープン過ぎるだけです！」

シルヴィア（この子は本当に……………八幡くんとオーフェリアさんのなれそめは知ってるけど、どうやったらこんなにも懐くの？オーフェリアさんの経緯が知りたいものだよ。）

オーフェリア（……………やっぱりシルヴィアは手強いわ。彼女を納得させるのは中々の試練ね。でも、この1週間しかない期間、唯一八幡と居られる時間。なるべく一緒に居たいもの、使える物は全て使うわ。）

オーフェリア「……………シルヴィア。」

シルヴィア「ん？なに？」

オーフェリア「……………この1週間、お願いよ。八幡と一緒に居られる時間を少しでも長くしたいの。この1週間だけは大目に見てくれないかしら？」

シルヴィア「だからってお風呂まで一緒はどうかと思うけどね。」

オーフェリア「……………長くいたいっていうのは本当よ。だから、物で釣るような感じになってしまうのだけ……………」

すると、オーフェリアさんはポケットから1枚の折りたたみ紙である用紙を渡して来た。

中身を見ると……………

春休みのプール祭り!!

お一人様コース

プールで体験!短めトライアスロン!!

泳ぐ!漕ぐ!走るをプール内で実施!!頑張つて最速を目指そう!

お二人様コース

協力してゴールしろ!

水中歩きと水上歩き!!

水中歩きは必ず潜つて歩くこと!顔が出ている時は歩いちゃダメだ!

水上は浮島の上で歩くこと!落ちたらすぐに戻つて歩こう!

カップルコース

どれだけ長い間潜つていられるか!我慢比べ対決!!

登録してくれた全カップルがスタートと同時に水の中に入って出て来るまでの時間を競います。片方が出ても、もう片方が出てなければ続行です!

コースで1位を取った方は、入場料と参加料を返金!!やってみませんか!?

参加費:1,000円

(お二人、カップルの場合は1人500円とします。)

春休みの思い出に、応募しよう!!

シルヴィア「……………オーフェリアさん、これはどっちに参加しろって言いたいのか？」

オーフェリア「……………カップルしかないと思うのだけど。」

シルヴィア「……………オーフェリアさんは私たちに何をさせる気かな？」

オーフェリア「……………？」

ま、まさかの天然？もしかして純粋な意味で？

シルヴィア「ふ、ふうくん……………そ、そっかあ……………」

オーフェリア「……………困みにだけど、貴女は何をさせられると思っ  
ていたのか？」

シルヴィア「うえ!?べ、別に何も思っ  
てないよ!?ただ、どっちをや  
らせるのかなあって思っただけ！」

オーフェリア「……………そう。」

あ、危ない……………気付かれてなかった。

シルヴィア「……………ま、まあこれの詳細は分かりました。ではオー  
フェリアさん、判決を致します。」

オーフェリア「……………」

シルヴィア「明日から一日置きなら良いよ。毎日はダメ。私も流石にそれは許可できない。」

オーフェリア「……………ありがとう、シルヴィア。」

シルヴィア「もう、仕方ないからだよ。」

八幡「はあゝスッキリしたゝ。次に入る奴いいぞー。色んなオプションがあつて思つてた以上にリラックス出来た。」

その後私がお風呂に入りに行ったら、普通、ジャグジー、電気の3種類があつて予想以上だった。

うん、これはリラックス出来るね。

## 最高級の朝

八幡 side

2日目の朝。今はカーテンをしてるから朝の日差しはそんなにな  
いが、隙間からは日光がチラリと出ていた。おそらく今日は晴れだろ  
う。俺の起きた時間は6時半、まあこれくらいならちようど良い時間  
だろう。

ここまででは良い、だがここからだ。俺の両サイドにいる2人が問題  
だ。シルヴィの方は俺の腕に抱き着いて足も絡ませている。オー  
フェリアも同様だが、違う点は首に手を絡ませている。いつもは楽々  
抜け出せるんだが、今回はそうもいかないようだ。

八幡「……………これどうすんだよ。両腕使えない状態でどうしろつて  
んだよ……………」

動きたいのに動けない。動けるのに動けない。この辛さ、多分運動  
をやっている奴なら分かるだろう。そこまで酷い怪我じゃないのに  
酷使扱いされて当分の運動はなしとか……………でもこれはそんなんじや  
ねえ！

たんに寝てるだけだと思ってるんだろ？それだけじゃねえんだつ  
て！2人共すげえ気持ちよさそうに寝てんの！いや、最高級ホテルだ  
から寝心地良いんだろうけどね、俺にも気を遣って！出られないの！

八幡「……………どっちでも良いから起きてくんねえかな。これじゃあ  
動けねえよ。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

八幡「え？」

隣から物静かな声が聞こえた。白い長髪を揺らしながら身体を起

こしたのは、オーフェリアだった。

オーフェリア「…………おはよう八幡。」

八幡「起きてたのならそう言ってくれよ。」

オーフェリア「…………私、枕が違くと寝付けないタイプなの。」

八幡「…………ああ、なるほど。」

オーフェリア「…………でも今回は八幡が居るから、いつもより長く寝付けることが出来たわ。過去最高記録よ。」

八幡「…………俺がいたからかどうなのかは置いとくが、眠りが浅い方なのか？」

オーフェリア「…………大体5〜6時間くらいね。でも今回は寝たのが9時で起きたのは6時だったから、9時間も寝れたって事ね。これは絶対八幡のおかげね。」

こいつ、何が何でも俺のおかげにしないと気が済まないのか？悪い気はしないが、睡眠時間でお礼言われてもな…………

八幡「因みに目覚めはどうだったんだ？」

オーフェリア「…………八幡のおかげで最高だったわ。途中で起きる事も無かったのだから。」

八幡「(また俺か…………)…………そうか、それは何よりだ。それでよオーフェリア、俺着替えたいから手を放してもらっていいか？」

オーフェリア「……………………分かったわ。」

ねえ、今の間は何？いつもより長くなかった？

まあ何はともあれ、俺は無事に抜け出す事が出来たってわけだ。え？シルヴィはどうしたって？放す気配がなかったから俺の分身を使ってますが何か？

―――1階広間―――

着替えも終わって朝飯と行きたい所だが、まだ朝の7時。この朝食は8時からと決まっている。後の1時間はシルヴィの目覚めを待つ時間と、オーフェリアの相手をする時間である。何この耐久レースみたいな奴。

ていうかオーフェリア、君は何故俺の膝に頭を乗せて膝枕状態になっっているんだ？しかも落ち着いてるし。まあ俺もニュース見てるだけだから別に構わないが……

八幡「……………」

オーフェリア「……………」

テレビ『続いてのニュースです。』

なんも話すことがない。それどころか、オーフェリア相手だとこの空気も悪くないって思えてくるから余計に話せない。なんか話題ねーかなあ……………

オーフェリア「……………八幡。」

八幡「ん、何だ？」

オーフェリア「……………八幡は次の《獅鷲星武祭》に出場するの？」

八幡「ああ。もうチームも組んでるからな。そして来年の《王竜星武祭》も出るつもりだ。」

オーフェリア「……………《王竜星武祭》、私はどうするべきかしら？」

八幡「ん？どういう事だ？」

オーフェリア「……………私は今まで命令されてたから出場していただけなのだけど、もうそれもないからどうしたら良いのかと思って……………」

ああ……………なるほどな。



オーフェリア「……………それに、私の新しい所有者は八幡だから、貴方の命令には従うわ。勿論、貴方の命令に従わないつもりはないわ。むしろ今まで以上に従順で行くつもりよ。」

八幡「頼むからそういうノリはやめてくれ。俺はそういう命令とかは嫌いなんだ。オーフェリアの好きにすれば良い。出たいのなら出れば良いし、他の何かに興味があるのなら、それに費やせば良い。」

オーフェリア「……………八幡の写真集めでも良いの？」

八幡「……………そんなの売ってんの？」

オーフェリア「……………冗談で言ったのだけど、もしあったら？」

八幡「処分する。俺そういうの許可してないし。なんなら販売なんてバカげてる。ライブとかならまだ納得出来るが、普通の販売は納得しかねる。」

オーフェリア「……………安心して。販売もしてないし、買ってもないから。私は実物で充分よ。」

うん、それ聞いて俺安心。

八幡「だが、俺はオーフェリアの趣味なんて花関係くらいしか知らないからな。他に何かあるのか？」

オーフェリア「……………これといってないわね。最近やっている事や熱中している事なんて何もないから。」

八幡「まあいつかでいいから、俺の学院にでも来るか？そうしたら何かあるかもしれんぞ。まあ、中国系統ばっかしだけどよ。」

オーフェリア「……………でも泊まりはどうするの？」

八幡「あー……………俺の部屋でもいいか？」

オーフェリア「その時になったら必ず行くわ。日が良くなったらすぐに教えて頂戴。」

……………何でそんなに早口？なんかしたっけか？まあ趣味を見つけると理由なら、学院に呼んでも良いだろ。

その後シルヴィもようやく起きて来て、着替えを済ませてから朝食へと向かった。因みに朝食はバイキングだったんだが、バイキングでも1つ1つの料理がすげえ美味かった。

## ※水着選び

シルヴィア side

朝食が終わって、刻々と時間が過ぎてから現在の時間は11時。大抵のお店は開店している頃の時間帯だね。私たちは今商業エリアの中心部にいます。

なぜかというところ……水着を買うからです！昨日八幡くんと街に出掛けて行こうって事になったから。それにしても楽しみだなあ！

シルヴィア「あつ、着いた着いた！此処だよ2人共。此処なら色々な水着があるからじっくり選べるよ。」

八幡「流石はアイドルだな。こういうのには詳しいんだな。」

シルヴィア「まあね。でも私は水着の撮影なんてそんなに無いんだ。水着で何のメーカーが有名かまでは知らないけどね。」

まあ、この際メーカーなんてなんでもいいよね。大事なのは自分に合う水着があるかだね！

——水着売り場——

店員「いらつしやいま……っ!!？」

シルヴィア「さて、じゃあ二手に別れよっか。八幡くんは、男性用の方から出ないようにね。私たちも女性用から出ないようにするから。」

八幡「意味が分からん。どうしてそこまでする必要がある？」

シルヴィア「だってプールに行くまでは選んだ水着を見られたくないんだもん♪ねっ！オーフェリアさん。」

オーフェリア「……………ええ。」

八幡「……まあそういうことなら構わないが、多分俺はすぐに決ま  
ると思うから先に会計済ませて大丈夫か？」

シルヴィア「そうだね。会計も分かれてるみたいだからOKだよ。  
それじゃあ水着を選ぼうか、オーフェリアさん♪」

オーフェリア「……………私はこういうのよく分からないから、お願い  
するわ。」

シルヴィア side out

八幡 side

水着つつつてもなあ、男なんてこれだっていうのがあればそれで決  
まりだからな。流石に全身タイツでプール行く男はいないだろう。

下は水着でいいとして、上には何か羽織るものでもあれば充分だ  
な。

八幡「さて、俺はどんなのにするか……………」

八幡 side out

オーフェリア side

……………本当に色んな水着があるのね。私に合う水着があれば良い  
のだけど…………

シルヴィア「さつてとく！じゃあ選んでいこっか！」

オーフェリア「……………私に合う水着があれば良いのだけど、そもそ  
も私に水着が合うかどうか……………」

シルヴィア「もおゝ卑屈になりすぎだよ！大丈夫だよ。オーフェリ  
アさんスタイル良いんだから！それに髪型次第でも水着の映え方っ  
て変わるんだからね！」

……………ユリスにも同じような事を言われた気がするわ。

シルヴィア「よろし！オーフェリアさんに一番似合う水着を選ぶからねー！あつ、オーフェリアさんも自分で良いと思うものがあつたら試着しても良いからねー！」

……シルヴィア、貴女このお店に入ってからやけにハイテンションね。

――10分後――

シルヴィア「オーフェリアさん、この中？」

オーフェリア『……シルヴィア？』

シルヴィア「ああ、試着中だったんだ。どんな感じの水着？見せてよ。」

オーフェリア『……恥ずかしいのだけど、こんな感じのにしてみたわ。』

私はカーテンを開けてシルヴィアに今自分の試着している水着姿を見せてみた。

シルヴィア「……………八幡くんから聞いてはいたけど、オーフェリアさんって服とかもそうだけど、水着を選ぶセンスも抜群なんだね。」

オーフェリア「……………合格なのかしら？」

シルヴィア「これで合格じゃなかったら、何が合格なのか疑いたくなるよ。それにするべきだね♪」

……………ただ私が良いと思ったものを着てみただけなのだけど、私にはセンスがあるのかしら？だとしたら、ちよつと嬉しいわ。

オーフェリア side out

シルヴィア side

お会計を済ませてお店を出ると、すぐそのベンチで八幡くんが端末でニュースを見て待っていた。どうやら約束は守ってくれていたみたい。

シルヴィア「はっちまーんくん♪」

八幡「ん？おお、意外と早かったな。良いのは見つかったのか？」

シルヴィア「うん、バツチリ♪」

オーフェリア「……………私も大丈夫だと思うわ。」

シルヴィア「それとね八幡くんりオーフェリアさんだけど、八幡君の言った通りだった。私が持ってきた水着を着させるのがバカバカしかったよ。」

八幡「マジでか？そりや楽しみだな。」

オーフェリア「……………やめてちょうだい。シルヴィアに比べたら私の水着は普通よ。」

……………なんか今、私の水着が普通じゃないみたいな言い方をされたような気もするなあ。

八幡「んじやあ水着も買ったことだし、プールの方に向かうか。」

シルヴィア「おおー！」  
オーフェリア「……………おー／／／」

プール！水着！プチ嫉妬！

八幡 side

水着も買って目的地であるアクアランドに着くと、そこには学生や一般の人が少し並んでいた。恐らくだが、今回のイベント目的だろう。昨日この話を聞いて俺とシルヴィも参加する予定だが、一番の目的は楽しむ事だ。イベントを盛り上げるためではない。

しかし、結構来てるのか？今の列はそんなにないが、これが減ったものだと思えるとかかなりの人数になってるんじゃないか？別に混んでるからといって目的地変えるわけじゃねえけどよ。

シルヴィア「混んでるねえ。やっぱりイベント目的だね。こういうのはあんまり女性の人やらなさそうな感じだったけど、結構いるんだね。」

オーフェリア「……………普通に楽しんできている人もいるかもしれないけど、もしかしたらカップルコースじゃないかしら？隣に男の人もちらほらと見えたから。」

八幡「成る程な、要するにもっとラブラブになりたいってわけか……………」

シルヴィア「私たちもそうでしょ？」

八幡「まあ、彼女の頼みだからな。他のチームが潰させてもらうさ。」

シルヴィア「頼もしいね。」

八幡「ただ、体は鍛えていても肺活量を鍛えてはいないからそこだけは心配だ。」

シルヴィア「……………ここですんなこと言わないでよ。せっかくカツコ良かったのに。」

だつてしょうがねえだろ。普段は鍛錬とかやってるけど、内部分は



あまり鍛えないんだよ！特に俺の使ってる詠春拳は内功とか一切取り除いてるから呼吸法とかは自由なの！ごめんなさいね！

オーフェリア「…………でもいいじゃない。目的は楽しむことなのだから。」

シルヴィア「ふふつ、そうだね。」

八幡「プールなんていつ振りだろうな。2人はどうなんだ？」

オーフェリア「…………私は初めてよ。リーゼルタニアにはそんな施設なかったから。」

シルヴィア「私もプールには行ったことないかなあ。基本私は歌のアイドルだから。プールに入るのは今回が初めてかも。」

八幡「そうなのか…………ないとは思うが、泳げないなんてないよな？」

オーフェリア「…………その辺は大丈夫よ。」

シルヴィア「私もだよ。」

まあ当然だよな。星脈世代でありながらカナヅチの奴っているのか？あんまり考えられないな。

受付「次の方どうぞー！」

八幡「おつ、行くか。」

2人「うん。（…………ええ。）」

受付「……………」

ああ、このパターンか。まあ後ろにいた客も固まってた奴ら多かったからな。けど、もう世間には公開したんだから慣れて欲しいものだ。

八幡「……………すみません、再起動して下さい。」

受付「はっ!!す、すみません!!3人の学生ですね！チケットの確認

を致します！」

オフエリアはさつき券売機で買ったチケットを受付に見せると、すぐに返してもらった。え？俺とシルヴィ？イベントに参加するのにチケットとイベント代払ったら無駄だろうに。

受付「はい、大丈夫ですね。お2人は今回のイベントには参加されるご予定ですか？」

八幡「はい。俺とシルヴィがカップルコースに参加する予定です。」  
受付「カップルコースですね。ではこちらの欄に必要事項等を記入した後に代金としてお一人様500円頂きます。」

俺とシルヴィは必要事項に記入して、それぞれ500円ずつ出した。

受付「ありがとうございます。ではこちらカップルコース用のバンドとなっております。時間になりましたら光りますので、光るまでは自由時間となります。それまではごゆっくりお過ごしください。」

八幡「じゃあまた後でな。」

シルヴィア「はい。また後でね！」

オフエリア「……………」コクコクッ

——男子更衣室——

八幡「さて、さっさと着替えて2人を待つか。女性は準備に入

れるからな。気長に待つのが一番だ。」

男性客「「おお………」」

八幡「ん？」

なんかいつのまにか注目されてる……俺なんもやってないよな？  
上を脱いだけなんだが……

男性客「し、失礼ですが、その身体はどうやって鍛えたんですか？」

八幡「いや、普通に鍛錬ですけど……」

男性客「鍛錬……どんな鍛錬ですか？僕も一応星脈世代なんですけど、貴方のような綺麗な肉体初めて見ました！」

八幡「は、はあ……」

男性客「是非教えてください！」

八幡「まあ別に秘密というわけではないので。俺がやっている鍛錬は……」

その後も俺が普段多めにやっている鍛錬法を男性の方に教えた。  
男性は熱心に聞いていた。ていうか、ボイスレコーダーに記録していた。

男性客「勉強になりました！ありがとうございます！」

八幡「い、いえ……」

予想外な事が起きたが、まあ別に悪い気分になったわけではない。  
早く着替えてプールサイドで待つか。

八幡 side out

シルヴィア&オーフェア side

シルヴィア「やっぱりオーフェアさんの肌って白いよね。雪み

たい。」

オーフェリア「……………私自身は白過ぎると思うのだけど。」

シルヴィア「ううん、そのくらいの方が羨ましいと思うよ。」

オーフェリア「……………でも私はシルヴィアのスタイルの方が羨ましく思うわ。」

シルヴィア「私の？」

オーフェリア「……………だって余分なものもついてないし、くびれがあつて胸も大きいもの。」

シルヴィア「や、やめてよ／＼／＼そんな事此処で言わないで！」

オーフェリア「……………やっぱ羨ましいわ。触つてわかったのだけど、肌もスベスベ……………流石アイドルね。」

シルヴィア「あんまり関係ないと思うけどなあ。」

この2人のやりとりを周りの女性客も見ていたのだが、シルヴィアとオーフェリアのスタイルを見て軽く自信を失っていたのは気のせいだろう。

シルヴィア「うん！やっぱ似合ってるよその水着！八幡くんも固まるんじゃない？」

オーフェリア「……………そういう貴女もよく似合っているわ。やっぱり映える人が着ると違うのね。」

シルヴィア「そんな事ないよ。オーフェリアさんだって綺麗に見えるよ。」

オーフェリア「……………ありがとう。」

シルヴィア「どういたしまして！じゃあ行こっ！」

——プールサイド——

シルヴィア「……………」

オーフェリア「……………」

2人がプールサイドに着くと、ある場所には多くの人だかりが出来ていた。しかも女性ばかりの。

シルヴィア「……………ねえオーフェリアさん。あの人だかりつてもし  
かしなくても……………」

オーフェリア「……………ええ、八幡だと思うわ。」

シルヴィア「もうちよつと近くに行ってみる?」

オーフェリア「……………そうね。」

近くに行くと自然と会話も聞こえてくる。

「比企谷さん!!握手してください!!」

「私にもお願いします!!」

「この前の講習会、凄く有意義でした!」

「今日はお一人なんですか?よければ私と……………」

「ああずるい!私も一緒に過ごしたいです!!」

「因みにお身体に触っても?」

聞き捨てならないねえ……………前の方はまだ納得出来るけど、一緒に?  
身体に触る?そんな事を私が許すとても?

八幡「すみません、今日は2人程連れがいるんです。迎えに行かな  
きゃならないので、失礼。」

八幡くんはそう言った途端に私たちの方へと向かって来た。八幡くんの姿は紺色のトランクスタイル水着にグレーのフード付きパーカーを着ていた。

八幡「……少し気分を悪くしちゃったか？」

シルヴィア「……………別に。八幡くんが有名人なのはもう知ってる事だから。」

オーフェリア「……………そうね。貴方の性格上、人を突っぱねるようなことはしないとは分かっているから。」

八幡「……………拗ねてるのか？」

シルヴィア「なっ!?べ、別に拗ねてなんかないよ!」

オーフェリア「……………私はちよつとだけ。」

八幡「そっか、それは悪かったな。」ナデナデ

そう言うと八幡くんは、オーフェリアさんの頭を軽く撫でた。

オーフェリア「……………ありがとう／＼／＼」

八幡「おう。それで、シルヴィは?」

シルヴィア「……………拗ねてました。だって私の彼氏なのにあんな風にベツタリしてき……………」

八幡「……………そうか、まあそれは俺のミスでもあるな。そんなつもりじゃなかったんだが、人を集め過ぎた。悪かったな。」ナデナデ

シルヴィア「……………うん。」

八幡「それと2人の水着、よく似合ってる。なんていうか……………綺麗だ。」

オーフェリアの着ている水着はフリル付きの青い水着だった。普段黒の制服を着ているオーフェリアだが、白い肌に青の水着がマッチしていた。

シルヴィアの水着が紫色のパレオだった。シルヴィアのイメージ

カラーだけあつてか、髪の色と同じ事もあり、可愛いというよりも綺麗、美しいという表現が合っている。

シルヴィア「……あ、ありがとう／＼／＼／＼」

オーフェリア「……嬉しいわ／＼／」

八幡「……さ、さて、オーフェリアはイベントに参加してないから自由だが、俺とシルヴィは何してようか？プールでゆっくり歩くか？」

シルヴィア「そうだね。ゆっくり歩こつか。オーフェリアさんも歩く？」

オーフェリア「……そうね、私も歩きたいわ。」

イベントの時間が来るまではゆっくりと歩くか泳ぐ事にしたようだ。因みに、周りの人たちは3人の方に釘付けだった。

主な理由はというと……

八幡……鍛え上げられた肉体と背中の雷紋。

シルヴィアとオーフェリア……圧倒的に抜群なスタイル。

という理由だった。

## 偶然の出会い

八幡 side

シルヴィア「はあ〜……気持ちいいね〜♪」

オーフェリア「…………お風呂とはこんなに違うのね。不思議な感じだわ。」

八幡「お風呂とプールを比べる奴を俺は初めて見た気がする。」

プールに来て騒ぎも少しだけあったがそれも収まり、早速プールに入ってみた。うん、やっぱあったけえな。小学の頃のプールはただの水と言って良いほどの冷たさだったからな。まあ、学校の設備にあつためる機械とかつけるわけにもいかねえからな。年中プール入るわけじゃねえし。

八幡「プールサイドに入って思った事だが、かなり広いんだな。正直迷わないか心配になる。」

シルヴィア「そうだね。迷ったときのために集合場所とか決めておく？私と八幡くんは途中でイベントに参加するし。」

八幡「そうだな。んじゃあ何処にすっかな…………」

オーフェリア「…………手軽にシヨップ前はどうかしら？彼処ならイベント場所からも近いし、合流しやすいと思うわ。」

シルヴィア「いいね！じゃあそこにしようか！」

オーフェリア「…………席の方はとっておくわ。混み合うのは予想出来るから。」

八幡「ああ、頼む。オーフェリアならすぐに分かるしな。心配いらないな。」

これで迷う心配もなくなったな……………多分。



「……………のおう……………けて……………いいい……………」

オーフェリア「……………誰か叫ばなかったかしら？」

シルヴィア「え？何も聞こえなかったよ？」

八幡「……………客多いし、気のせいじゃないか？」

「……………す、す…ませ……………」

八幡「いや、確かに今聞こえたな。」

シルヴィア「私も！でもこの声って後ろから？」

俺たちは一斉に後ろへ振り返ると……………

綺凜「すすす、すみませんー!!避けてくださああい!!」

……………ビート板を持ちながら泳いでいる星導館の刀藤綺凜がいた。  
ていうか、なんで俺たちの方に来てるんだ？足止めろよ。

綺凜「よ、避けてくださああい!!」

避けてって……………まさか止まり方知らないとかか？はあ、仕方ねえ

か。

八幡「そのままビード板持つてろよく。少し離れててくれ。」

シルヴィア「うん、分かった。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

止まり方なんてただ足を止めりゃいい話だろうに。なんだって動かしたままなんだ？

そして八幡は綺凜の持っているビート板を掴み、その場で1回転して停止させた。

綺凜「あ、ありがとうございます……………」

八幡「気にするな。まさか【疾風迅雷】が泳げないなんて思わなかった。」

綺凜「ふえ……………ひ、比企谷さん!？」

八幡「よう、奇遇だな。お前1人か？」

綺凜「い、いえ、その今回は皆さんと一緒に来ました……………です。」

……………皆さん？

紗夜「綺凜、大丈夫か？」

綾斗「止まらずに行くからビックリしちゃったよ……………あれ、比企谷さん!？それにリユースハイムさんも!それに……………もしかして……………」

ユリス「オ、オーフェリア!!どうして此処に!？」

クロード「あらあら、どうやらお邪魔だったみたいです。」

……………成る程。刀藤の言う皆さんっていうのは、チーム・エンフィールドの事か。

シルヴィア「おおく今噂のチーム・エンフィールドが勢揃いしてる

ねえ〜！もしかして親睦を深めるためにかな？」

クローディア「ええ、それで合っていますよ。今年の《獅鷲星武祭》に向けてチームの関係を深めておこうと思いましたが。」

八幡「それでコレかよ……刀藤から目を離すなよ。」

紗夜「すまない。まさか止まり方も知らないとは思わなかった。」

綺凜「あ、あうう……」

それ以上言ってやるな。涙目だぞ。

クローディア「それにしても、そちらも随分と変わった組み合わせですね。」

シルヴィア「そうでしょう？今3人でエルナトに宿泊中でね、ホテルにばかりいてもつまらないから、こうして遊びにきたんだ。」

ユリス「エルナトに宿泊とはどういう事だ？泊まる意味が分からないのだが……」

八幡「ああ、それはな……」

俺とシルヴィで学園祭での事を話した。まさか自分たちの学園が一枚噛んでいるとは思わなかっただろうな。まあエンフィールドは知ってるだろうが。

ユリス「ま、まさかそれ程の射撃能力と強運の持ち主だったとは……」

クローディア「当てる人なんてまずいないと思っていたのですが、愛の力で当てたという奴でしょうか？」

シルヴィア「そうだよ♪私と八幡くんの想いが繋がったって事だよ♪」

ユリス「まあそこまでは理解できる。問題はオーフェアだ。」

……まあ、ですよね。

オーフェリア「……………私が頼んだのよ。一緒に連れて行つて欲しいって。」

綾斗「あの……………それで2人が了承してくれるとは思えないんですけど……………」

シルヴィア「オーフェリアさんつてば、子犬みたいな目で見てくるからさ、断るに断れなくなっちゃって……………」

八幡「まあそういうわけだ。【華焰の魔女】安心しろ、俺はオーフェリアに一切手は出してないから。」

ユリス「何故私にそれを言うのだ。」

八幡「なんとなくだ。」

まあ、これくらい説明すれば納得するだろう。

紗夜「……………1つ聞いても良いだろうか？比企谷八幡。」

八幡「ん？何だ？」

綾斗「ちよつと紗夜、相手は一応1つ上だから敬語を使わないと……………」

八幡「いや、別にいいぞ。そういうのは自分の学園だけに縛っておけ。俺は他学園の年下からタメで呼ばれても別に気にしない。礼儀知らずはブチのめすが。で、何だ？」

最初から上から目線で話す奴には、質問されても返す義理なんてないからな。

紗夜「比企谷八幡は3人で宿泊していると聞いた。では、2人はいつイチャイチャする？」

……………は？

ユリス「ななな、なんだその質問は!？」

紗夜「気になったから聞いてみた。」

綺凜「気になったから聞いていい事ではないですよ！」

綾斗「そうだよ紗夜！」

紗夜「そうか、それはすまなかった……それで、いつイチャイチャするのか聞いてもいいか？」

「「聞かなくていい!!」」

こいつら仲良いな……まるでコントじゃねえか。エンフィールドはニコニコしながら静視しているだけだが。

シルヴィア「うーんイチャイチャと言われてもなあ……どう思う？」

八幡「俺たちの中でどれがイチャイチャなのか分からんから、どう答えて良いか分からないな。すまないが、ノーコメントで頼む。」

綾斗「比企谷さんも答えちゃうんですね。答えではありませんけど。」

オーフェリア「……っ！八幡、バンドが光ってるわ。始まるみたいよ。」

八幡「ん？おつ、本当だ。じゃあオーフェリア、席の確保頼むな。」

シルヴィア「1人にしちゃうけど、ゴメンね。」

オーフェリア「……ええ、行つてらっしゃい。」

さて、早く会場に行くか！

八幡 side out

オーフェリア side

……2人共行ったわね。私もショップ前の席を取っておかないと。

ユリス「オーフェリア、あの2人は今回のイベントに参加している

のか？」

オーフェリア「……………ええ。カップルコースに出ているわ。それがどうかしたの？」

ユリス「いや、どうというわけではないが……………一緒にいてもいいだろうか？お前と過ごす時間はやはり楽しくてな。」

オーフェリア「……………私は構わないけど、他の皆の意見を聞いたらどうかしら？」

綾斗「俺は大丈夫だよ。」

綺凜「わ、私もです！」

紗夜「問題ない。」

クロード「私も問題ありませんよ。」

……………大丈夫みたいね。

オーフェリア「……………分かったわ。じゃあ席を取りに行きましょう。混むからなるべく早く行きましょう。」

ユリス「ああ、分かっている！」

イベントスタート！

シルヴィア side

『イベントに参加される方はこちらの方へと集まってください！看板にコースが乗っているんで、間違えないように並んでください！』

こうやって見ると、1人と2人のコースはそこそこ居るけど、カッブルのコースはそんなに居ない。まあ自分から『私たち、カップルです！』なんて言う人は居ないだろうしね。

八幡「こっちだな。シルヴィ、俺たちはこっちの方だ。」

シルヴィア「はい♪」

私のパートナーは、もちろん八幡くんです♪彼以外に私の隣を任せられる人はいません！未来永劫八幡くんが先約してます！因みに取り消す事は出来ません！

まあこの話は置いて、私たちはイベントの登録をする為にまた並んでいます。一回でいいと思うんだけどなあ……何かあるのかなあ？

スタッフ『皆様、今回はこちらのプールイベントに参加して頂きありがとうございます!!これからルール説明をいたします！出来るだけお静かにお願いします！』

それからスタッフさんは1人コースと2人コースの説明をしていった。そして最後、私たちの参加するカップルコースについて説明するところまで来た。

スタッフ『では最後に、カップルコースの我慢比べ対決の説明をしてオリエンテーションを終了します！指定の位置で男女のペアがスタートの合図と共にプールへと潜り、潜水時間を競う対決です。カップル両方がプールから出るまでタイムは動きますので、相方の方に安心して任せてください！尚、水中から出てしまった場合は、それ以降の挑戦は出来ませんので、その場で待機していてください。さあ男性の方は女性にかっこいい所を！女性は男性に必死な所をアピールするチャンスです！』

スタッフ『ではこれで、イベントの説明を終わります。移動の際は各イベント担当のスタッフが誘導してくれますので、それに従うようにしてください。』

よおーし！八幡くんに頑張ってアピールしなきゃだね！

シルヴィア「八幡くん！頑張って優勝しようねっ！」

八幡「ああ、そうだな。」

シルヴィア「それでさ、何か作戦はある？」

八幡「あまり深く潜り過ぎないことだな。水圧とかで息とか苦しくなるからな。」

シルヴィア「ああー確かに深い所に潜ったら、息ってあまり持たないもんね。なるべく浅い位置で我慢した方が良さそうだね。」

八幡「俺からはそれくらいだな。シルヴィは何かあるか？」

シルヴィア「うーん……私も特にないかなあ。空気を溜めておけるなら良いんだけど、そんな方法ないからね。」

八幡「まあ1番の理想だろうな。空気を溜めて置ける場所って言うたら、手で窪みを作るか、口くらいだからな。」



シルヴィア「こればかりは頑張ろつか。」

スタッフ「カップルコースに参加されるお客様！移動しますので私の後ろについて来てください！」

あっ！準備が出来たみたい！

——競泳プール——

八幡「25mプールでやるのか……確かにこれなら全体を見渡せるから違反のしようがないな。」

シルヴィア「正々堂々戦えるってわけだね。」

誘導係「では順番にプールの中に入って赤いチェッカーの場所に立って下さい！指示があるまではその場で待機していてください！」

八幡「……なんか星武祭とは違う緊張感だな。」

シルヴィア「そ、そうだね。なんか私も少し緊張してきたよ。」

スタッフ『それではこれより、カップルコースの《我慢比べ対決》を行います!!ルールは先ほど説明した通りです!ちよつとした注意事項を申し上げますと、皆様の近くにあるチェッカーですが、それが定位置となりますので、あまり離れないようにしながら潜水してください。それでは皆さん、優勝目指して頑張ってください!』

審判『それでは行きます!よい……』

ピーツ!!

そして私たちを含めた全員のカップルが水の中へと旅立った。

シルヴィア side out

オーフェリア side

……席も確保出来たから一安心ね。八幡とシルヴィアの方も滞りなくスタートできたみたいね。

ユリス「そういえばオーフェリア、お前が生徒会長になったという噂は本当なのか？」

オーフェリア「……ええ、事実よ。私がレヴォルフの生徒会長よ。」

ユリス「……まさか本当だったとは。ではお前はこの先どうするつもりなのか、教えてもらってもいいか？」

オーフェリア「……特にこれという目的はないわ。1つ言うのであれば、八幡に危害を加える輩には容赦しないということかしら。」

綾斗「……比企谷さんを、ですか？」

オーフェリア「……ええ。それ以外でいうのであれば、学院内の警戒人物の監視・肅清が主かしら。私が会長になったからかどうか分からないのだけど、学院内が大分落ち着いたように感じるわ。前はもつと殺伐としていたから。」

紗夜「間違いなく【孤毒の魔女】の影響。逆らったら処罰される。目に見えているようなものだ。」

クロードディア「確かにレヴォルフは他の学園に比べて実力主義の強い校風ですからね。強者には逆らえない、そのモットーが強いのでしょう。実力の上に権力も手にした今の貴女は、レヴォルフ内では無敵なのではないでしょうか？」

オーフェリア「……今のところ逆らってくるような人は居ないわね。」

ユリス「では、先程の比企谷八幡に危害を加える輩には容赦しないとはどういう事だ？」

オーフェリア「……………簡単な話よ。私の人生の恩人に対して何かしようとする者がいたら、容赦しない。言葉通りよ。」

綾斗「……………随分比企谷さんを高く評価しているんですね。何か理由でもあるんですか？」

オーフェリア「……………話すと長くなるわ。でも強いて言うのであれば、彼がこれからの私の人生において、必要不可欠な存在だから、と答えておくわ。」

## 水の中で

――――

カップルコースのイベントが開始され、全員がプールに潜った。水上にいるお客目線で見ると、苦しそうにしているようなカップルはならず、全員が横一線という状態だった。

一応水中でも撮影出来るように、小型衛星カメラがプールの中に5機程潜らせていて、カップルの様子を撮影していた。当然このカメラは、モニターや端末でも見ることが出来る。

少しだけカップルの様子をのぞいて見ると、手を繋いでいるカップルが殆どで、繋いでいないのが極端に少なかった。八幡とシルヴィアも繋いでいる方だった。

10秒くらい経過しているが、まだ上がってきそうなペアはいなかった。

「皆まだ余裕そうだね！」

「そうね、まだ10秒だもの。」

「それよりも、私は比企谷さんとシルヴィアさんが気になるなあ。カメラに映ってくれないかなあ。」

「貴女、比企谷さんとシルヴィアさんのファンだね。気にならないほうがいいか。」

「きつと数が減って来たら映るよ。」

――30秒経過――

スタッフ『おおうっと！ここで17番と8番のペアが男女共に上がってきました!!結果は30秒！お疲れ様でした!!残りのペアは12組となりました!』

「ええ、まだ潜ってるペアいるの?！」

「すげえ肺活量だな……………」

「結構頑張ったつもりだったんだけどね……………」

「でも楽しかったね♪普段出来ないことが出来たから。」

「そうだね。」

カップルコースの出場ペアは20組いてその内8組は既に脱落してプールから上がっていた。

オーフェリア side

クローディア「比企谷さんたちは順調そうですね。カメラにはあまり映っていないようですが、何故でしょう?」

綾斗「確かに映らないね。どうしてだろう?」

オーフェリア「……………今のところ、最初に映ったあれだけね。早く映らないかしら。」

……………そうでなきや意味がないのに。八幡のかっこいい所が見られないわ。

紗夜「ないとは思うが、透明になっているとか?」

綾斗「まさか。比企谷さんの能力は影を操ることだよ?影で透明にはなれないよ。それに、紙の札も持ってなかったしね。」

……………確かに、八幡は影以外の能力を使えていたかしら?私は影の能力と武術、陰陽術しか知らないわ。

ユリス「そう言っているうちに脱落者が増えてるぞ。残りは5組か……………やはり1分を超えられそうなカップルはいないか?」

オフエリア side out

――――

スタッフ『さあ、40秒が経過して残りペアも少なくなってきました！現在5組！果たしてどのペアが優勝するのか!? ああつとお！此処で2番の女性が浮上してきました！しかし男性はまだ潜水中ですので続行です！』

4分の1がまだ潜水中で必死に耐えていた。その中で片方が上がっているペアが4組でいずれも女性だった。だが、男女共にまだ水中のペアがいた。最後にエントリーした八幡とシルヴィアだった。

カメラも5機なので、それぞれのペアを映すことが出来ていた。八幡とシルヴィアは特に何という様子はなかった。40秒も潜っているのに、苦しそうな仕草も出していなかった。

――50秒経過――

スタッフ『さあ、まもなく1分です！現在残っているのは3組！だが2組の男性は苦しそうだ！いまだに潜っている20番の男女ペアは強いぞ！苦しそうな様子もない！これはとんでもないカップルだ!!』

20番のペア、それは八幡とシルヴィアの番号である。男は兎も角、女がここまで耐えられるのは少し信じ難いだろう。そこで、次は2人の様子を見てみることにしよう。

八幡&シルヴィア side

八幡（何組残ってるんだ？出来ればシルヴィを上げさせたい。もう

限界だろうに。このやり方じゃあバテがくるぞ。いや、水中の時点でバテは存在するんだけどな。」

シルヴィア（……ま、まだいける。八幡君と一緒に優勝したいもん！）

シルヴィア「……っ！」

八幡「……んーん？」

シルヴィア「んん！」

八幡（まだやるのか……）

八幡とシルヴィアはお互いに少しだけ近づき、突然キスをし出した。おそらく互いに息を送り合っているのだろう。この方法は30秒くらいから思いついたもので、10秒おきにシルヴィアが八幡にHELPを出していた。

シルヴィア（……よし！まだいけそう！）

八幡（シルヴィ……上がって休憩していたほうがいいと思うんだが……）

八幡&シルヴィア side out

—————

「はあっ!!……はあ……はあ……ど、どうだ？」

スタッフ『4番の男性がついに限界!!惜しくも優勝を逃しました!!』

「マ、マジかよ……まだ潜ってるペアいるのか……」

スタッフ『さて、此処からは耐久戦です!!今残っているペアがどこまで我慢できるかの勝負です!因みに今のタイムは1分と5秒です!!』

――1分半経過――

……ブクブクブク

スタッフ『おつと?泡が見えてまいりました!もしや限界か?』

そして……

八幡&シルヴィア「ぷはあっ!!」

八幡「はあ……はあ……結構潜ってた気はするが、どのくらい経ってるんだ?」

シルヴィア「はあ……あつ、時計あるよ!1分33秒だつて。」

八幡「随分潜ってたな。」

スタッフ『終了〜!!只今最終組が上がってまいりました!!今回のカップルコースの優勝ペアは……20番、比企谷八幡&シルヴィア・リユ―ネハイムペアです!!』

見ていたお客からは拍手と歓声が上がった。

スタッフ『それでは優勝した20番のペアには、後程参加料を返金致します!これにて、カップルコースのイベントを終了致します!引き続き、当プールをお楽しみ下さい!』



## お昼とナンパ

八幡 side

まさか1分半も潜っていたとはな……まあ息を送り合ってたから少しは持ったと思っていたが、だいぶ持ったな。まあ優勝できたからいいか。

シルヴィア「あつ、オーフェリアさん居たよ！星導館の皆もいるみたいだね。」

八幡「そうみたいだな。席も2つ空いてるみたいだし、大丈夫そうだな。」

さて、俺たちもゆつくりするか。潜りっぱなしで少し疲れた。

オーフェリア「……お帰りなさい、八幡、シルヴィア。優勝おめでとう。」

八幡「おう。なんかそのフレーズ言われると、星武祭勝ったみたいになるな。他に言われる時がないからよ。」

綾斗「界龍では何かやらないんですか？」

八幡「界龍がそんな俗っぽいことをする学院だと思うか？毎日鍛錬だらけだよ。」

紗夜「面白いことはないのか？」

八幡「そうだなあ……最近だと、自販機を設置したんだが、ジュースだけが即売り切れになることだ。仕入れた日になっても売り切れになってる。残っているのは水とお茶だけだ。」

ユリス「お前の学院は飲み物に飢えているのか？」

いや、そうじゃないんだって。味のついた飲み物はお茶しか飲んだことがないんだって。ジュースは知ってるけど、飲めない環境にあっ

たんだって。

綺凜「…………で、でも、面白いと思います！ちよつとした話題には良いと思いますよ！」

クローディア「そうですね。他には何かないのですか？自販機の他に何か置いてあるとかは？」

八幡「そこまで予算かけられねえよ。今のは俺の一提案だったから通っただけで他のが通るとは思えない。」

シルヴィア「その他って？」

八幡「プロテイン。」

……………なんだよ、この静寂は。

八幡「まあ何となくわかってたよ、そんな反応するだろうってな。ユリス「ああ…………流石に誰も買わないと思うぞ。」

紗夜「うん、買わないと思う。綾斗だってプロテイン使ってない。」綾斗「まあ特に使おうとは思ってなかったからね。」

ボロクソ言われてんな…………プロテインをそんな批評するなよ。いや、俺も飲んだことねえから分からないんだけどよ。

シルヴィア「それよりも八幡くん、お腹空いてない？もうお昼も過ぎてるし、何か食べない？」

八幡「……そういや水着を買った時間は11時くらいだったからな。なんかあつという間に感じるな。じゃあそろそろ昼にするか。此処にある奴でいいか？」

シルヴィア「私は良いよ。」

オーフェリア「……私も構わないわ。」

八幡「ちなみにメニューは？俺が買ってくる。」

シルヴィア「じゃあ無難に焼きそばかなあ。」

オーフェリア「……私はこういうのよく分からないから、八幡と同じのでいいわ。」

うし、じゃあ買ってくるか。

――海の家的なお店の前――

八幡「……そういや飲み物聞いてなかったな……適当に買えばいいか。」

「あのおうちよつといいですか？」

八幡「ん？何です？」

そこには3人組の女子がいた。しかも校章の方を見ると、以外にもガラードワースの生徒だった。

「界龍第七学院序列2位【夢幻月影】の比企谷八幡さんですよね!？」

八幡「……はい、そうですけど。」

するとキャーキャーと小さく騒いでいた。え、何？俺何かしたか？

「私、去年の《鳳凰星武祭》やライブを見てからずっとファンなんです！握手してもらってもいいですか!？」

八幡「別に構いませんが。」

俺は女子たちの方に手を差し伸べると、またもキャーキャー騒いで俺の手を握った。

「次の星武祭も頑張ってください!」

「応援してます!」

いや、そこは自分の学園のチーム応援しようぜ。

そして俺は食べ物と適当に飲み物を買ってから、シルヴィたちのいる席まで戻った。

八幡「……………なんだこの状況。」

「ちよつとだけだからさゝ、ネ？その八幡くんと綾斗くん？がくるま  
でで良いからさゝ。」

「そうそう！八幡くんと綾斗くんがくるまでの間だけちよつと遊ぼう  
ぜ!」

「少しだけだからよ、な？」

シルヴィア「お断りします。私は今、八幡くんとオーフェリアさんと一緒に遊んでるんです！」

オーフェリア「……………その通りよ。貴方達と遊ぶ気は無いわ。」

クロードイア「というわけですので、どうかお引き取りください。」

「おおくキツツイ言葉も良いねえ〜！」

……………こんな奴ら、プールにもいるんだな。夏でもねえのにナンパかよ。

八幡「待たせたな……………ん？なんだそいつら？」

ユリス「ああ、比企谷。ようやく帰ってきたか。」

八幡「ようやくつて……………どういう事だ？」

「あつ、君が八幡くん？実はさく俺この子たちと遊びたいからさく、少しだけ時間くれない？」ポンツ

気安く肩なんて触りやがって……

八幡「テメエらに貸す女なんて此処にはいねえよ。今時そんなナンパなんて流行らねえんだよ。そのトサカ頭から出直してこい。」

「んだとお!？」

「テメエ、下手に出てりや良い気になりやがって!」

「ぶっ飛ばすぞコラア!!」

……………外の人間か？俺を見ても何ら反応がないってことは。

八幡「……………ならぶっ飛ばしてみろよ。」

「なら遠慮なくやってやるよ!!オラア!!」

ドッ！

ナンパ1は俺の腹に目掛けてパンチを入れてきた……え？何？この程度？痛くも痒くも無いんだけど？

八幡「……………終わりか？」

ナンパ1「なっ!？」

八幡「じゃ、俺も一発。」

ドゴオツ!!!

ナンパ1「グボアッ!!!」

あつ、言つとくけど星辰力は込めてないから。普通のパンチを腹に目掛けてやったただけだから。

「ええ!？」

「マ、マジかよ!？」

八幡「お前ら六花外の人間だろ？これに懲りたらナンパとかやめろよな。それともう1つ、冒頭の十二人の顔と名前くらいは把握しとけ。」

「……………え?」

そして残っている2人は端末を取り出して各学園の冒頭の十二人を調べていた。

「ッ!!!!?」

「む、むむむむ【夢幻月影】!!!!?」

「界龍第七学院序列2位で去年の星武祭の優勝者!!?」  
「す、すんませんでした〜!!!」

なんとも綺麗な土下座だ……俺はこんなことしたくねえけど。

八幡「もういい、どっか行け。」

「は、はいいいい!!」

いやいや、殴られた奴の運び方よ……もうちつと気遣えよ。この床で引きずるのは痛すぎるだろ。

シルヴィア「ありがとう八幡くん、助かったよ。」

オーフェリア「……………ちやうど困っていたのよ、しつこかったから。」

八幡「だろうな。ていうか天霧何処だよ?」

クロードディア「比企谷さんと同じです。お昼を買ってきてもらつてます。」

八幡「あー……納得したわ。けど、女を残しておくべきではないだろう。ナンパは確実だろうに。」

いや、俺も俺なだけどき。

その後は皆で昼飯を食べた後、刀藤の泳ぎの練習や25mを競争（刀藤は審判）、最後にゆつくりジャグジーの風呂に入ってからプールを後にした。

## 夕飯の支度

シルヴィア side

はあく遊んだ遊んだっ！楽しかったなあ♪星導館の皆が居たのは意外だったけど、一緒に遊べて良かったかも。でもやっぱりプールでも居たなあ、握手を求めてくる人。嫌ってわけではないけど、完全オフ状態だから少し気遣って欲しかったかなあ。

でもそこはアイドルだから仕方ないよね。うん、これも仕事のうちだからね。1番困ったのはやっぱりあのナンパだね。だって見計らったかのように来るんだもん。八幡くんが私たち2人分だったから早く帰って来たけど、もし全員分だったら私たちで対処してたんだよね。

改めて八幡くんに感謝だね。

八幡「さてっ、晩飯どうする？エルナトで食べるか、どっかで食べるか、はたまた食材買って作るか、3択中1択な。」

オーフェリア「…………皆で料理を作るって事？」

八幡「それでもアリだぞ、部屋の中にキッチンあったからな。」

シルヴィア「あっ！ならさ、皆の得意料理を作るっていうのはどうかな？1人ずつキッチンに入って作る。作り終わったら、次の人にバトンタッチ！作った料理は保温器に入れておけば良いしね。」

シルヴィア「それだと食費は別々になっちゃうけど……………どうかな？」

うん！我ながら良い案だと思う！

オーフェリア「……………良いと思うわ。私は八幡の料理を一度食べただけで、シルヴィアの料理は食べたことがないから。楽しみだわ。」



八幡「そうだな、俺も賛成だ。じゃあ行きつけのスーパー行って食材の調達をするか。食材選びの時は互いに干渉するのは無しにするか。」

シルヴィア「その方がいいね。それじゃあスーパーに向けて出航！」

八幡「船じゃねえよ。」

八幡「なんかいつにも増して多い気がするな。今日ってなんかあつたっけか？」

シルヴィア「この時間だからかな？でも、大体はもうご飯作ってる時間だよ。」

なんで混んでるんだろう？

オーフェリア「……………取り敢えず食材を選びましょう。此处にいても邪魔になってしまうわ。」

八幡「それもそうだな。よし、じゃあ別れて食材選びだ。集合は……………外出たところでいいか。くれぐれも外に出た時の単独行動は慎重ように。」

シルヴィア「了解です！」ビシッ！

オーフェリア「……………ラジャー。」《敬礼》

オーフェリアさん……………なんかノリ良いね？

……………30分後……………

八幡「さてと〜？もう居るか？」

オーフェリア「…………お帰りなさい。」

八幡「まだホテルの中じゃないが、ただいま。シルヴィはまだか？」

オーフェリア「…………ええ。」

シルヴィア「ごめ〜ん！レジが混んで遅くなっちゃった〜！」

オーフェリア「…………大丈夫よ、皆今来た所だもの。私が最初で八幡が2番。そんなに差はなかったけど。」

シルヴィア「じゃあそんなに待ってない？」

八幡「ああ、俺は全く待ってないな。」

よ、良かったあ〜…………

八幡「安心してゐる所悪いが、そろそろエルナトに戻ろうぜ。俺、今結構腹減ってるんだ。」

オーフェリア「…………そうね。じゃあ帰りましょう。八幡が限界にならないうちに早く帰って、ご飯を作りましょう。」

——ホテル・エルナト——

受付「おかえりなさいませ。」

八幡「そーいや鍵は俺たちの指だからもらわなくても良かったんだっけか？」

シルヴィア「うん、ドアの横にある黒い板に中指を押し込めば開くはずだよ。」

——部屋の扉前——

八幡「うし、じゃあ押してみるか。」

八幡くんが中指を押し込むと緑色の光が上から下に流れてカチャツという音がした。

八幡／シルヴィア「おおー！」

オーフェリア「……………お利口さんね。」

シルヴィア「ただいま♪」

ああ〜ソファがふかふか♪

八幡「そのまま寝るなよ？」

シルヴィア「分かっているよ〜ちよつとだけ〜。」

オーフェリア「……………私も。」バフツ

八幡「オーフェリアもか……………」

シルヴィア「八幡くんも来たら？中々良い感じだよ。」

八幡「いや、俺はそのソファに苦い思い出があるからやめておこう。」

昨日のアレかな？もしかしてトラウマになっちゃったとかかな？

八幡「俺は2人の様子を見ておこう……………ビデオで撮りながら。」

シルヴィア「えっ!?嘘っ!？」

オーフェリア「……………本当に？」

八幡「冗談に決まってるだろう。俺はそんな趣味の悪いことはしねえって。第1俺はこういうの好きじゃないしな。」

だ、だよねー……………ふう、よかった。

八幡「というわけで、2人の気が済むまで頭を撫でてみようと思っていたわけだが……………」

シルヴィア「えっ!?本当に!？」

オーフェリア「……………本当に？」

八幡「2人が寝てしまうかもしれないからやめておく。」

ええ〜……………やっても良いのにい〜……………

八幡「まあ、少し休憩しておけ。俺は先に料理始めるから。順番決めておいてくれ。」

八幡くん、相当お腹減ってるみたい。これは作り甲斐がありそうだね。

シルヴィア「順番どうしよっか？」

オーフェリア「……………じゃあ私が二番目に作るわ。最後をお願いしても良いかしら？」

シルヴィア「分かった！じゃあそれまではこのソファのふかふかを堪能してよっか♪」

オーフェリア「……………そうね。」

ああ〜このソファは人をダメにする奴だねえ〜……………

## 暖かい気持ち

オーフェリア side

……こんばんは、オーフェリア・ランドルーフェンよ。今私が何をしているのかというと……

八幡「……………」

オーフェリア「……………」

……八幡が膝を提供してくれたから、膝枕をしてのんびりしていると。これは至高だわ……何だかこういうのを毎日やってもらってそんなシルヴィアが羨ましいわ。

……そのシルヴィアは、今料理を作っているところよ。私はさっき作り終わったからこうして八幡を借りているというわけよ。

……でもこれは危険ね。八幡が側いると安心する、これは分かったことなのだけど、こんな風にリラックスしながら一緒にいると、もつと安心するわ。何だか守られているような感じがするわ。もつと一緒に居たいって気持ちになってしまうわ。

八幡「なあオーフェリア、俺の膝使って大丈夫か？ソファにあるクッション使った方がよくないか？」

オーフェリア「……………そんな事ないわ。貴方だからこそ良いのよ。私が数少ない心を許せる人だからこそ、こんな風にしていられるのだから。」

八幡「……………そうか、ならいい。」

もちろん、この行為は誰にでもするわけではないわ。八幡だからこそする行為でもあるわ。ユリスに膝枕を求めても良いのだけど、彼女

はおそらくやらせてはもらえないと思うわ。

シルヴィア『2人共出来たよ〜!』

八幡「おつ、どうやらシルヴィも出来たみたいだな。俺たちも行って準備するか。」

オーフェリア「……………そうね。」

八幡「まずは俺からだな。俺のは肉じゃがだ。中にはところてんとアスパラを入れてる。シンプルな料理だが、『simple is the best.』っていうからな。」

オーフェリア「……………私はクリームシチューを作ったわ。特にこれといって凝った所は無いけれど、不味い出来にはなっていないと思うわ。」

シルヴィア「最後は私だね。私はグラタンを作りました。ジャガイモを細長にして、生パスタとエビをふんだんに使った料理だよ♪」

……………なんだか少しだけバランスが取れているような感じがするわ。

八幡「上手い具合に主食とおかずっぽいのに分かれたよな。主食グラタン、おかず肉じゃがとクリームシチュー。」

シルヴィア「ホントだね!シチューの入れ物が丁度いい大きさだか

ら、お腹にピッタリ合いそうだね。」

オーフェリア「……………それを言うなら、量を遠慮した分ちょうどいい感じのバランスになったんだと思うわ。」

八幡の肉じゃがはそんなに器を大きくする必要はない。私のクリームシチューも器は何でもいいわ。今回使った器は簡単に言うと、味噌汁を入れるくらいの器を使ったわ。グラタンは器が決まっていたから仕方ないのだけど、これくらいの大ききなら、皆大丈夫ね。

八幡「それじゃあ食うか、並べたら席についてくれ。」

——5分後——

シルヴィア「終わったよ、八幡くん。じゃあお願いするね。」

八幡「ああ。じゃあ、いただきます。」

シルヴィア「いただきますーす！」

……………そういうことだったのね。

オーフェリア「……………いただきます。」

……………っ！

シルヴィア「おいしいっ！流石は八幡くんだね！」

オーフェリア「……………ええ、すごく美味しいわ。」

八幡「そう言ってくれて何よりだ。オーフェリアの作ったシチューも美味しい。レシピ教えてもらってもいいか？」

オーフェリア「……………ええ。簡単だけど、私のでもいいのなら。」

八幡「ああ、頼むな。」

……………こんな風に食事するのって久しぶりな感じがするわ。暖か

くて穏やかで雰囲気が柔らかくなるような感じ……

なんだか懐かしいわ。リーゼルトニアのあの頃に戻ったみたい。



## お酒と痕の意味

八幡 side

ああ美味かったあ。2人の作ったシチューもグラタンもマジで美味かった。欲を言うなら、この1週間は2人の手作り料理が食べてえな。勿論俺も作るぞ？1人だけサボりみたいになるのは嫌だからな。

にしても……………

シルヴィア「むふう……………」

オーフェリア「……………」

こいつらホントこのソファ気に入ってるよな。2人して寝転びやがって。確かに食べた後は眠くなるけどよ……………いや、この2人の場合は違うか。

八幡「……………お前らホント好きだよな。1日中いても問題ないんじゃないの?」

シルヴィア「何言ってるのさ!?いくらソファが気に入ったといっても、八幡君がいなきや意味無いよ!!」

オーフェリア「……………その通りよ。これでもし頭を撫でてくれたら、この上なく幸せな時間を過ごす事が出来るのよ。だから、頭を撫でてくれないかしら?」

流れるように誘導しちゃってるよ。

八幡「悪いがそれは断る。寝ちまったら起こすのがめんどい。にしても、部屋がこんなに広いと使い勝手が分らなくなるな。俺たち未

成年だから酒飲まないしな。」

シルヴィア「夜に楽しめそうな事が出来ないからね。興味はあるけど、法則を破ってまで飲もうとは思わないよね。」

オーフェリア「……………私は一度だけあるわ。」

シルヴィア「え？お酒飲んだの？」

オーフェリア「……………」コクッ

意外だな……………あんまりそういうのを嗜むようには見えないんだがな……………

オーフェリア「……………ジュースと間違えてアルコールを飲んでしまった時があったの。何故あの場所にアルコールがあったのかしら？」

……………どうやら予想外という結果で飲んでしまったらしいな。

シルヴィア「それで、どうだった？」

オーフェリア「……………私は平気だったわ。グラス1杯くらいなら大丈夫みたいね。その時は高等部の1年だったかしら？」

八幡「2年くらい前に飲んだってことか？なら俺が六花に来る前だな。」

オーフェリア「……………そうね。でも不味くはなかったわ。果実酒だったから飲みやすかったわ。」

シルヴィア「へえ。私たちはどうなんだろうね？お酒強いのかな？」

八幡「分かる方法としては、アルコールを皮膚に付けて伸ばしたら分かるらしいぞ。変化がなかったら強い、赤くなったら弱い、みたいな感じらしい。」

シルヴィア「20歳超えたら飲み比べしてみよっか！もし酔い潰れたら、八幡くん介抱してね？」

オーフェリア「……………その時は私も付き合うわ。何かと愚痴も言っ

たりすると思うから。」

シルヴィア「あつはは！確かにそれは良いかもね。うん、皆20歳超えたら、お酒デビューしよっか！」

八幡「まあ断る理由もないからな。別にいいぞ。それと介抱はしないからな。」

ベッドに寝かせるだけで充分だろ。

八幡「さて、じゃあ俺はシャワー浴びてくるわ。」

シルヴィア「え？お風呂にしないの？」

八幡「それも考えたんだが、今日は遊び疲れたから手っ取り早く済ませようと思ってな。風呂が良いなら、俺が終わった後にでも沸かししておくが、どうする？」

シルヴィア「うーん……どうしよっか？」

オーフェリア「……私はシャワーでいいわ。八幡の言う通り、少し疲れたから。お風呂で寝てしまったら大変なものね。」

シルヴィア「じゃあ私もシャワーにしよっと。八幡くん、気にせず入って来ていいよ。」

八幡「了解。んじゃ、先に頂くわ。」

――バスルーム――

八幡「昨日も入ったが、ホント風呂のサイズがデカイ。しかもシャワーは別だからな。なんていうか、よく分からね。」

けど、結構いい感じではあるな。悪くない。

八幡 side out

シルヴィア side

くう……まさかシャワーを言うとは、八幡くんも中々やるなあ。あ

「あ、お背中でも流そうと思ってたのになあ……」

オーフェリア「……………今日は諦めるしかなさそうね。」

シルヴィア「許可したとはいえ、そんな風に言わないでよ。突入するのが当たり前みたいな言い方になってるよ。」

そんな風に思ってた私も人のことは言えないんだけどさ。

オーフェリア「……………今日、八幡の身体を見て思ったのだけど、あの背中模様はなんなの？」

シルヴィア「あの模様は雷に打たれた痕だよ。1年半前の界龍の序列戦、オーフェリアさんは見た？八幡くんと【覇軍星君】の戦いなんだけど。」

オーフェリア「……………見てないわ。そのデータはあるのかしら？」  
シルヴィア「見る？私持つてるから。」

オーフェリア「……………ええ。」

データを開いてオーフェリアさんと一緒に当時の序列戦を観戦した。オーフェリアさんの顔はいつもより真剣な表情をしていた。

そして、八幡くんが勝利して映像が終了した。

オーフェリア「……………八幡のアレはこの戦いから得たものだったのね。不思議ね、全く痛々しいとは思えないわ。寧ろ触れていたいと思える。」

シルヴィア「分かるよ。この痕つてさ、八幡くんの強さを表しているような感じがするんだ。知ってる？八幡くんつてね、まだ1度も倒れたことがないんだよ？言葉通りの意味でね？」

シルヴィア「この雷を受けた時も八幡くんは立ってたの。今シーズンの《鳳凰星武祭》でも八幡くんは倒れてなかったでしょ？」

オーフェリア「……………そういえば倒れてなかったわね。」

シルヴィア「だから八幡くんつてさ、どんなに強い相手でも体を倒

してはいけないって思ってるんじゃないかなって思うんだ。相手に失礼だからって理由で。どう思う？」

オーフェリア「……………八幡なら考えてそうな事ね。彼とは少なくとも接点を持つてるから分かるわ。」

やっぱりそうなんだよね。普通の人が見れば、変な痕とか気持ち悪いとか思うだろうけど、私はそう思っていない。オーフェリアさんも同じで良かった。

## 2日目 終了

八幡 side

朝起きてから朝食を食べて、水着を買ってからプールに行って、遊び終わったらスーパーで買い物して、それぞれ夕飯を作ってから全員で食べて、シャワーを浴び終わって今に至る。

もう全員シャワーを浴び終わっているため、のんびりしている。しかし、オーフェリアの髪を下ろした姿って久しぶりに見たな。《鳳凰星武祭》後のデート以来か……やっぱ髪型だけでも雰囲気違うもんだな。

シルヴィはいつも見てるから慣れてる。最初は少しドキツとしてたが、見ていくうちに慣れた。

オーフェリア「……………どうかしたの八幡？さつきから私の方ばかり見てるけど。」

八幡「ああ、悪い。オーフェリアの髪を下ろした姿を見るの、久しぶりに見るな〜って思ってただけだ。やっぱ良いな。」

オーフェリア「……………ありがとう。」

シルヴィア「髪型かあ……………私はいつもそのままだから変わらないね。八幡くんは見慣れてるよね〜。」

八幡「ああ。今ふと思ったんだが、シルヴィが髪縛る時ってどんな時なんだ？」

シルヴィの髪縛った姿ってよくよく考えたら、変装のときくらいしか見てない気がする。

シルヴィア「髪を縛るかあ……………そういえば最近は縛ってないなあ。変装して出かけることもなくなったし、髪を縛る程の事もやってないから、するといえは料理の時とかお風呂の時くらいかな。」

そんなもんか……それじゃメツキリ減ったって感じか。

シルヴィア「オーフェリアさんは？髪長いからやつぱり縛る時って多いんじゃない？」

オーフェリア「……私もシルヴィアと同じくらいね。特に何をするといいわけでもないから。私もシルヴィアと同じで料理とお風呂くらいね。」

八幡「オーフェリアが髪を下ろした時の雰囲気は何となく分かったが、シルヴィがイメージつかないな。変装だったからか？」

シルヴィア「そうかもね。試しに私がオーフェリアさんの髪型をやってみようか？」

八幡「……気になるな。頼んでもいいか？」

シルヴィア「オッケー！ちょっと待っててね。」

――3分後――

シルヴィア「お待たせ！こんな感じになったよ。」

八幡「ほう……なんか大人っぽいな。仕事が出来て部下に優しい美人OLって感じだな。」

オーフェリア「……言い得て妙ね。」

シルヴィア「もうやめてよ恥ずかしいな！でも、ポニーテールにしただけだよ？」

八幡「それを言うならオーフェリアも髪を下ろしたただけだ。やつぱ髪型だけでもイメージって変わるもんだな。」

オーフェリア「……八幡も伸ばしてみたらどうかしら？」

八幡「俺がか？俺が伸ばしてもあんまり変わらないと思うぞ？」

シルヴィア「そこはほら！伸ばしてみなきゃ分からないよ！八幡くん伸ばしてみない？」

八幡「そう言われてもな……」

伸ばしたくないわけではないが、髪の手入れとか大変そうだよ、そこまで長くはならないんだろうけどよ。

シルヴィア「まあ伸ばしたくなったら伸ばしなよ。それよりも、そろそろ寝ない？ 私眠くなってきたよ。」

オーフェリア「……………そうね、私も眠たくなってきたわ。八幡も寝ましょう？」

八幡「そうだな。じゃあ寝室に行くか。」

———寝室———

八幡「……………なあ、やつぱりさ「ダメだからね？ 八幡くんは真ん中で寝るべきなの。そうしないとダメなんだからね。」……………」

八幡「いや、でもよ「八幡が真ん中で寝てくれないと、私たちは眠れないわ。いえ、寝るという行為そのものが出来ないわ。」……………」

この子たち何なの？ どうして俺を真ん中にさせたいの？ しかも逃げないように両サイドの腕をしっかりと掴んでんだよ。ニコニコ笑顔で。

昨日もそうだったが、どうして俺が真ん中？ 2人のどちらかでも良くてね？

八幡「聞いていいか？」

2人「？」

八幡「どうして俺が真ん中？」

シルヴィア「八幡くんが真ん中じゃないといけないからだよ？ だって男1人に女2人だよ？ 男がどっちかに行ったらバランス悪くなっちゃうよ。」

オーフェリア「だから八幡、貴方は真ん中で寝なくてはならないという義務があるの。」キリッ



うん、カッコよく言ってるけど、全然決まってるからね？上目遣い状態だからちつともカッコ良くねえんだわ。

八幡「はあ……つまりは、どうしても俺が真ん中でないといけな  
いってわけね？」

シルヴィア「うんっ!!」

オーフェリア「……………ええ。」

この2人は梃子でも動かないだろう。昨日も多少の抵抗はしたが、これはもう聞かないだろう。仕方ないから、この1週間はこれで過ごすか。

八幡「分かったよ、俺が真ん中な。一応言っておくが、どちらかを抱き枕にしたとしても怒るなよ？」

シルヴィア「むしろ大歓迎ですっ!!」

オーフェリア「……………c o m e h e r e .」

この2人、マジだな。

## 変わらない朝

八幡 side

……はあ、やっぱり今日もこうなったか。

どうも、比企谷八幡です。さて、エルナト宿泊3日目に突入したところだが、昨日同様の始まり方だ。両腕には紫髪の美女と白髪の美女が寝ている。オーフェリアは昨日この時間に起きていたが、遊び疲れているのか、まだ寝ている。

そのお隣の紫髪の美女、シルヴィは昨日同様に気持ちよさそうに眠っている。ていうかどちらも気持ちよさそうに眠っている。というわけで皆さんなら、俺の状況分かりますよね？

動けません。この一言です。

それ以外にある？ 時間は6時半で目覚め良し、気分良し、体調良し、そして、身体が動かん。理由？ 両サイドにいる彼女たちに聞いてください。

八幡「……さて、どう過ごすかなあ。」

シルヴィア「んんうゝ……んんゝ……」

オーフェリア「……すう……すう……すう……」

……これ、起きるまで続くんじゃないの？

——30分後——

八幡「腕動かせねえから端末も見れねえ。今日のニュースも見られねえ……」

八幡「早く起きてくれないかねえ。どっちでもいいからはよ起きて。」

これ、切実な願いね。

――さらに30分――

シルヴィア「んん、んんうゝ……んんう？ああ八幡くん、おはよゝ……」

八幡「おう、おはよう。まだ寝惚てんじやねえのか？冷たいシャワーでも浴びてきたらどうだ？」

シルヴィア「あつたかいシャワーの方が良い。」

八幡「いや、冗談なんだが……」

それくらい寝惚けてるってことか？背中に冷水でもかければ目がさめるか？やらねえけど。

シルヴィア「……もう少ししてちやあダメ？」

八幡「やつと空いた腕をまた塞げと？それは勘弁だ。俺だつて朝のニュースとか見たいの。」

シルヴィア「じゃあ私は顔洗ってくるねえ。」

八幡「おう、いってら。」

さて、シルヴィは起きた。後はこの眠り姫がいつになったら起きるかだな。

――15分後――

オーフェリア「………んんっ。」

おっ、起きたか？

オーフェリア「……………八幡？」

八幡「ようオーフェリア、おはよう。」

オーフェリア「……………おはよう。私が見ていたのは夢だったのね。」

八幡「夢？どんなだ？」

オーフェリア「……………覚えてないわ。良い夢でも、目覚めたら記憶にない事ってないかしら？」

八幡「夢自体をあまり見ないからな、よく分からん。だが、良い夢がそんな風になっちゃうと、少し寂しいな。」

そう、俺自身夢をあまり見ないのだ。夢ってのがどんな感覚なのか、俺的に夢ってのは奴ら<sup>守護霊たちの世界</sup>という世界だからな。

八幡「それよりも顔を洗ってこい。俺もお前が終わったらするから。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

やれやれ、やっと自由になれた……………思った事だが、俺が夢を見られないのはこうやって腕を抱き締められてるから？だってほら、シルヴィも家では抱き着いてるのが普通だしさ。

1回検証してみようか。俺がシルヴィの家で寝るのと、学院で寝るのとで分ければいい話だからな。

## まったりとレヴオルフの近況

オーフェリア side

……朝食を食べ終えて部屋に戻ってきた私たちは、特に何をするというわけでもなかったから、身体を横にしていた。八幡は1人用のソファで腰掛けているだけだけど。私とシルヴィアは、ソファで寝転がっているわ。やっぱりこのソファは八幡の次に至高ね。

……でも、今日は何をするのかしら？

オーフェリア「……八幡、シルヴィア、今日は何をするのか決めているの？」

八幡「今日はフラワーハウスにでも行こうと思っている。よくよく考えてみれば、シルヴィをそこに連れて行つたことがなかったからな。」

シルヴィア「お花を見るのもそうだけど、私も八幡くんとオーフェリアさんがやった手作り教室だったかな？それをやってみたいんだ。」

……私も久しぶりに何か作ろうかしら？半年くらいはあのお店に行っていないのよね。

近頃は行こうと思っても、生徒会の仕事か思っていた以上に忙しかったからそんな暇がなかったから。

八幡「どうだオーフェリア？もしオーフェリアが別の場所に行きたいっていうのなら、もう少し考えるが……」

オーフェリア「……いえ、大丈夫よ。その予定で行きましょう。私はあまり街を知らないから2人に任せるわ。」

シルヴィア「そう？もし気になるお店とかあったら、遠慮なく言っているんだからね？お花屋さん以外にも、洋服屋さんとか、食べ物屋

さんとかたくさんあるから。」

……この2人はやっぱり優しいわね。親子は似るっていうけれど、カップルもそうなのかしら？

八幡「まあ今はまだ早い。どの店もやってないからのんびりしようぜ。紅茶を淹れるが、飲むか？」

シルヴィア「うん、頂こうかな。」

オーフェリア「……頂戴するわ。」

……その時八幡が淹れてくれた紅茶はとても美味しかったわ。レヴォルフでは、ころなかプリシラが淹れてくれるのだけど、それとは比べ物にならないくらい美味しかったわ。

オーフェリア side out

八幡 side

クッキーでも買ってくれば良かったな。紅茶だけじゃ少し味気ないな。帰りにでも買うか。まあ紅茶を飲むかどうかは分からんけど。紅茶があるのなら、空中庭園で過ごすのもアリだな。あそこなら紅茶とクッキー類の洋菓子でお茶するにも雰囲気合いそうだからな。この中じゃ少し場違いな感じがする。

シルヴィア「んんゝ八幡くんの淹れる紅茶はやっぱり美味しいなあ。私にも教えてよ！」

八幡「……これは【優騎士】にも言ってることなんだが、特に何も手なんて加えてないからな？湯の温度とか茶葉の浸し時間とかそれくらいだからな？」

シルヴィア「それでもいいの！今度教えて！」

オーフェリア「……私にも教えてほしいわ。こんなに美味しい紅

茶は初めて飲んだもの。」

八幡「オーフェリアもか……断る理由もないから別に構わないが、本当に何も無いからな？」

オーフェリア「……………ええ。お願いするわ、先生。」

八幡「その先生はやめろ。紅茶の淹れ方教えるのに先生も何もねえだろ。」

オーフェリア「……………師匠？」

八幡「師匠もやめろ！」

頼むからもう先生とか師匠とかそういうのはやめてくれ。ただでさえ学院では尊師尊師って恥ずかしい呼び方されてんだから。もう慣れたけどよ。

八幡「……………そういや思ったんだがオーフェリア。あれからあの赤毛豚は何もしてこないのか？俺からしてみれば何もなさ過ぎて不気味なんだが……………」

オーフェリア「……………それなら大丈夫よ。彼なら牢獄に入れてあるから。1番奥の1番頑丈な檻に。」

シルヴィア「前生徒会長にする事がエゲツないね。」

オーフェリア「……………いいのよ。レヴォルフでは力が全てだもの。今の彼はお金があっても権力がないもの。使えるのはそこらにいるチンピラくらいよ。」

だよなあ……金で釣れるのなんて、そこらのアホくらいだからな。特にレヴォルフの。まあ乗った時点で牢獄の中は確定だろうが。

オーフェリア「……………だから良いダイエットにはなと思うわ。少しはスリムにならないと行けないから。」

八幡「あいつがスリムになったところで意味ねえだろ。【悪辣の王】なんて呼ばれてる時点でもう手遅れだよ。」

シルヴィア「そうだね。絶対嫁に来るどころか誰ももらってくれない

いよ。」

【悪辣の王】 哀れなり。

心当たりがなくもないが、お前じゃ無理だな。サンドバッグにされておしまいだな。

八幡「今の生徒会はどうなんだ？メンツが分からないんだが……」  
オーフェリア「……………副会長にプリシラ、会計にころな、庶務兼雑務兼用心棒にイレ―ネを入れたわ。」

シルヴィア「……………【吸血暴姫】が仕事をするとは思えないんだけど？」

オーフェリア「……………暴れた生徒を肅清するのに、彼女ほど適任な存在はいないわ。」

シルヴィア「ああ……………成る程。」

俺も納得出来たわ。

八幡「他にはいないのか？」

オーフェリア「……………今はこのメンバーね。スカウトしようと思っ  
ているのは、荒屋敷兵吾よ。彼は強いから。」

あいつは女に手を出さないが、男なら容赦無いってことだよな？  
だとしたら、男の多いレヴォルフからしてみれば脅威だろうな。

シルヴィア「まあ【無頼漢】次第だけど、受けてくれるといいね。」  
オーフェリア「……………ええ、そうね。」

八幡「まあ一番は問題が起きないことだが、レヴォルフにそれは無理だろうな。」

なんせ問題児が多い学院だからな。



## 師のいない学院

星露「うがああああああ!!!」

セシリー「はあー、また始まったよー……」

セシリーside

皆おはよー、セシリー・ウォンだよー。今師父がとんでもないことになってると思うけど、大体予想つくよねー。あたしも理由としては当てはまるんだけど、師父ほどじゃないからねー。

星露「何故こうも1日が長く感じるのじゃー!!八幡が界龍を1週間離れるとは聞いたが、長過ぎるであろう!!しかもなんじゃ!?歌姫殿と泊まりがけでデートとは!?弛んでおるわ!!」

セシリー「でもさー、そう言って大師兄に刺客として模擬戦やらせてたけど、相手にもなつてなかったじゃーん。八幡つてば確実に強くなってるし、まだ成長段階だよー。」

星露「ぐぬぬ……弟子にも入ってはくれんし、飯を作る機会も大幅に減ったのじゃ。妾は早うあの青椒肉絲が食べたいのじゃ……」

……師父つてホント八幡の料理の事になると、威厳がなくなるんだよねー。この前なんて飯抜きだーって八幡に言われたら、足にしがみついてたしねー。しかも学院内の廊下で。門下も目を開けてたなー。

陽乃「でも仕方ないんじゃないのー?あの2人は今や六花1のカツプルなんだから。『実力と愛を兼ね備えた最強カップル』なんて雑誌にも乗るくらいなんだから。」

セシリー「あつ、陽姐ー!でもあたしも八幡の料理食べてないからさー、ちよつと恋しくなってきたんだよねー。1週間のうちまだ3日しか経ってないけど、陽姐は平気なのー?」

陽乃「なんてゆーかねー、あんまり期待しないことかな。ほら私たちつてさ、結構八幡くんの料理ねだつてたじゃない?それをなくして手伝いとかしたら、割と食べさせてくれるんだよ。」

でもなー……あたしが台所に立とうとしたら、八幡つてば座つてていいって言うからなー。

冬香「あら?師父、皆様もおはようございます。こんな朝はやくからどうされたのですか?」

星露「うむう……八幡の料理が食べどうなつてのう。」

セシリー「それで絶賛落ち込み中なんですよねー。」

冬香「そうだったんですか。確かに八幡さんの作る料理はどれも素晴らしいお味でしたからね。食べたくなるのも分かります。」

星露「余裕じゃのう……」

冬香「私はそこまで執着があるわけではないので。勿論、許可をいただけるのなら、ご一緒させてはもらいますが。」

セシリー「冬香さんの場合、紅茶とケーキのセットだからねー。ホント羨ましー。」

冬香「おーっ差し上げようと八幡さんのお部屋に入る前に思っているのですが、どうも忘れてしまみたいで。八幡さんの作るケーキの美味しさとお話に夢中になってしまっせいでしょかね。」

陽乃「確かにそれはあるかもね。八幡くんってばお菓子作りも上手いからねー。私も作る時あるけど、あの手際の良さ見たら自信なくすよ。」

八幡「って一体何を目指してるんだろう？ 武術は達人並で料理も出来るし、歌も歌える。将来は何になる気なんだろうねー？」

星露「はあ………最近の八幡は付き合いが悪過ぎるのじゃ。」

陽乃「そりゃあシルヴィアちゃんがいるからね。」

うーん、確かに彼女が出来たらそっちの方に意識行くよねー。それが【戦律の魔女】だったら尚更ほっとけないよねー。

星露「決めたのじゃー！ 八幡が帰ってきたら、模擬戦するのじゃー！ 稽古ではなくのう!!」

冬香「八幡さん受けるでしょうか？ 私は受けないと思うのですが………」

星露「受けざるを得ない状況を作るのじゃ!!」

小苑「呆れたのう。それで八幡が釣れるわけないじゃろうて。」

セシリー「あっー！2代目様じゃーん。おはようございまーす！」

陽乃「小苑さん、おはようございます。」

小苑「うむ、おはようじゃ。」

冬香「おはようございます、小苑様。お茶をお持ち致します。」

小苑「よいよい、気を使うでない。」

セシリー「それよりも2代目様ー？釣れるわけないってどういう事ですか？」

小苑「簡単な事じゃ。それを言っしまえば、飯抜きと言われるのが確実じゃろうからな。将棋でいう、王手に詰みという所じゃな。」

ああー、確かに八幡ならそれ言いそうかもー。だとしたら師父って八幡に勝てくない？

星露「ならば妾はどうしたら良いのじゃ？」

小苑「おとなしく待つことじゃな。待つのも修行の1つじゃ。」

冬香「中々奥深いんですね。」

陽乃「……あつ、そういえば小苑さんの使ってる武術は何なんですか？」

小苑「儂のか？儂の使っている武術は形意拳と呼ばれる中国武術に伝わる内家拳の代表格の武術じゃ。」

小苑「まあ儂が若い頃に使っていた武術はコレじゃが、今は大体の武術は嗜んでおる。八幡に詠春拳を教えたのも、彼奴の根本的な動きが大胆なものではないと分かったからじゃ。今は違うがのう。」

冬香「では八幡さんに詠春拳を教えたのは、小苑様なりに彼を見ての判断だということですか？」

小苑「まああの。まあこれに限らず、彼奴も他の武術に手をつけているようじゃがのう。ここの生徒を見れば分かるわい。着々とチビの門下以外の生徒が序列に上がってきておるからのう。今では3割超えておるのではないか？」

………確かに今の在名祭祀書の中に元序列外の子は結構いるよねー。最高で26位の呂ちゃんだからねー。それにしても………

星露「また言いおったなお主はー!!」

小苑「ほっほっほ、やっぱりお主をイジるのは楽しいのう。」

まーたやってるよ。師父も2代目様も飽きないよねー。

## 再来店と花の名前

八幡 side

はあ……視線が痛い。これは昨日、一昨日もそうだったが、周りからの視線が痛いのだ。理由？そんなもの決まってるだろ……2人のせいですよ。

何度も言って聞き飽きているとは思うが、必要以上に腕に抱き着いてるもんだから、周りからはマイナスな視線が向けられている。2人はそんなことも知らずに歩いている。もう少し俺にも気を遣ってくれませんか？

シルヴィア「それで八幡くん、そのフラワーハウスっていうのはどの辺りにあるの？」

八幡「商業エリアの北西の方だ。だからクインヴェールが近い所にあるんだが、知らないか？」

シルヴィア「ううん、聞いたことないなあ。クインヴェールの子たちがお花に興味がないっていう理由なら領けるけど、アクセサリーも作れるならそこそこ評判になると思うんだけどな。」

八幡「しかもこの前の記者会見の時に、俺が指輸出しただろ？アレもあの店で作った物だから、少しは人気になってると思ったんだがな。」

もしかしたら会見の方に意識が行き過ぎて、こういうどうでもいい事は聞き流していたのかもな。

オーフェリア「……行ってみれば分かるわ。あのお店がいかに凄いつていうのが。」

シルヴィア「……なんか説得力あるね。」

八幡「花好きのオーフェリアが言うんだ、この説得力は当然だろ。」

俺はオーフェリアと前に来たことがあるから分かるが、店の前に到着しただけでも、身体から輝きという瘴気が溢れていたからな。中に入ったらそれがさらに増す。

ローフラワーハウスー

オーフェリア「……………」キラキラ

シルヴィア「……………」こんなオーフェリアさん初めて見たよ。目どころか、身体まで輝いてない？」

八幡「この感動を身体で表現しているって事だろ。マジで凄い輝きだな。」

でもこの上があるんだよなあ……………入れば分かるけどよ。

店員「いらつしやいま……………っ！」

おい、その店員。そのいかにも『また来てくれたんですね！』みたいな顔をするのはやめろ。

オーフェリア「……………」ギラギラ

俺の右隣、スゲエ眩しいんだけど。

シルヴィア「なんか今のこの状況ってさ、お花よりもオーフェリアさんの方が目立ってるよね。明らかにオーフェリアさんから放たれてる輝きの方が凄いもん。」

八幡「ああ……………ていうかこの前来た時よりも輝き増してるような……………オーフェリア、なんかあったのか？」

オーフェリア「……………」新しいお花が増えてるわ。」

この距離で分かるの!? 君の花に対する視力ってどうなってるの!?

オーフェリア「……………見た限りでは10種類は増えているわ。それも最近開発されている新種の配合で生まれた花たちだわ。凄いわ。」

シルヴィア「……………こう言ってますけど、実際はどうなんですか? 増えてますか? 私はここに來たの初めてなので分からないんですが。」

店員「はい、増えています。約14種の新種の開発に成功しました。季節別での配合はまだ実験していませんが、同季節での花同士の配合の開発は約3割成功致しました。」

店員「例えばこちらの薄紫色のお花なんですが、紫のカーネーションとジンチョウゲを配合したもので、私たちはこの子の名前を《エルシエーロ》と名付けました。花言葉はまだありません。」

八幡「シルヴィの髪の色と似てるというか、そのまんまだな。んなら《リユーネハイム》でも良かったんじゃないか?」

シルヴィア「や、やめてよく! それだと私だっすぐにバレちゃうじゃん!」

店員「……………良いですね、その案。確かに彼女さんの髪の色と同じですし、どこことなく雰囲気も落ち着いていて気品のあるような感じ……………少し店長とお話ししてきますね!! このお花の名前は決まったわけではないので、もしかしたら通るかもしれません!!」

シルヴィア「だ、大丈夫ですよ! 結構ですから!!」

店員さんはシルヴィの言う事も無視して行ってしまった。ていうか速いな。星脈世代顔負けのスピードだ。

シルヴィア「もおゝ八幡くんがあんなこと言うからだよく! あの人絶対本気だよ!!」

八幡「い、いや、俺も冗談だったんだが……………まさか本気にするとはな……………ていうかオーフェリアは?」



シルヴィア「え？あれ？そういえば……あつ、あんな所にいる！」

シルヴィの指差した場所は夏の花が咲いているエリアだった。もしかしくても新種の観察だろうな。

店長「お待たせ致しました。当店の店長をしている者です。」

……マジで連れて来やがった。

店長「《エルシエーロ》の名前の事なのですが、まだ決定ではないので……」

シルヴィア「い、いえ！こちらが悪ふざけで言っただけなので、気にしないでください！」

店長「来月に新種の花の名前を決める会がありまして、その会議の方で正式に決まりますので、是非リューネハイムさんの家名を使わせては頂けないでしょうか？」

本気だった!?まさかの使う気満々!?さっきまでの雰囲気だったらダメ丸出しだったのに、思いつきり使う気でいるよこの人!!

シルヴィア「え、ええっと……本当に私のでいいんですか？」

店長「はい、是非使わせてください。」

シルヴィア「……分かりました。そこまで言われたら断れませんから。」

店員「っ!!ありがとうございます!次の会議では必ずこの子に《リューネハイム》という名前をつけてみせます!」

シルヴィア「は、はあ……」

その後、4月のニュースを見てみたら、『新種の花の開発成功!!名前はあの《リューネハイム》!』と記事になる程で、フラワーハウスにあった《リューネハイム》は瞬く間に完売した。

## 未来の予定と創作開始！

### シルヴィア side

はあ……あの店員といい店長といい、ゴリ押しという名の熱血さでOKしちゃったけど、本当に私の家名なんかでいいのかな？もつとマシな名前とかありそうなんだけどなあ。

あつ！なら次に黒の新種が出てきたら、名前をハチマンにしてもらおつと♪白ならランドルーフェンっていう名前をつけてもらおう♪よおし、なんかやる気になってきたぞー！

……私が作るわけじゃないのにね。

八幡「どうだシルヴィ、中々良い所だと思わないか？俺もオーフェリアに紹介されるまでは知らなかったから、初めて入った時は驚かされたもんだ。」

シルヴィア「うん、私も気に入っちゃったよ。お花畑って感じではないけど、お花の王国って感じがする。」

なんかこんな感じのお花屋さんって初めてだなあ。いつもCMとかで見るのは、季節に合わせた花の宣伝ばかりだから、こういう四季折々の花を眺められるなんて中々ないよね。オーフェリアさんが勧めるわけだよ。

シルヴィア「でも、本当にいろんな花があるんだね。ここの季節は春だけど、春だけでもこれだけの種類があるんだね。全く知らなかったよ。」

八幡「俺も全く同じことを思っている。世界中にある花を合計したら何種類あるんだろうな？まあすぐに出てくるんだろうが、こんな花があるんだと思うだろうな。」

シルヴィア「うん、きつとそうだね。」

こんな風に、ちよつと違う場所でのんびりするのも良いかもね。いつもは家の中でだけど、森林浴とかそんな場所でのんびりしてみたいなあ。家の近くにならそういうところありそうだから探してみよつと。

八幡「……………今度ピクニックでも行くか。家の近くになら、少しは緑の多い場所あるだろうしな。」

シルヴィア「え？八幡くんも同じ事考えてたの？」

八幡「ん？その口振りはシルヴィもか？」

シルヴィア「うん。森林浴でもしながらのんびり出来たらなくつて。ピクニックかあ……………良いね！今度落ち着いた時期になったら行こうよ！」

八幡「おう、そうだな。」

よしっ♪

シルヴィア「それにしてもオーフェアさん、花に夢中だね。あんなに好きなんだ……………」

八幡「ああ。俺がアクセサリー作り終わって帰ってきた時でも、まだ観察してたからな。まああの時は初めて入ったからしょうがないかもしれないが、今日もよく見てるなあ。」

そ、そんなに？まあ私たちから見れば本当によく観察しているって感じしか分からないけど、あれで分かるのかな？

八幡「オーフェアが花に夢中になつてる間に、俺たちは創作教室に行つて何か作るか？」

シルヴィア「あつ、そういえばこのお店はそういうのも出来るんだったね！うん、やってみたい！」

八幡「じゃ、いくか。」

——創作教室——

八幡「すみません。アクセサリを作りたいんですけど……」

店員「はい、分かりましたー♪ちよつと待っててくださいねー。」

……随分とのんびりした店員さんだなあ。

店員「お待たせしました。創作の方ですね？何をお創りになられますか？」

八幡「あー……そういやあんま考えてなかったな。シルヴィは決めるのか？」

シルヴィア「私は指輪！八幡くんとお揃いのを作りたいなあうつて。」

八幡「ああ、その事か。なら俺は髪飾りでも作るか。シルヴィの髪色からしてみれば、黄色か青色とか似合いそうだな。」

私の事よく見てくれているんだなあ♪ふふっ、なんだか嬉しいっ♪

店員「お決まりになりましたね？では次に……」

その後もちよつとしたやりとりがあつて、創作に移った。指輪ってかなり難しいんだね。八幡くんがいかにか器用かっていうのが分かったよ。でも歪な形にはなつてないと思う。

八幡くんは経験しているだけあつて上手に道具を使っていた。ううくん、最初は普通の白い玉が花の色素を使って黄色になつてから黒のペイントを塗るだけであんなにオシャレになるなんて……しかも模様が楽譜になつてる。これ私に合わせたって事だね？

嬉しいなあ……よし、私も八幡くんに負けないように頑張って作らないと！

あの時から今まで

八幡 side

……………良い感じに出来上がったな。後はこれを乾かしておけば完成だ。シルヴィは……………おお、完成度高いな。シルヴィも細かい作業は得意みたいだな。しかし考えたな、シルヴィがつけている指輪が金のリングに赤い結晶なら、俺に作っているのは銀のリングに青い結晶か。センスが良いな。

店員「……………違ったら失礼ですけど、もしかしてお二人さんって夫婦ですか？」

……………この集中しているときに何を聞いちやってくれてるんですかね。シルヴィは集中しているみたいだから聞こえてないみたいだから良かったが、聞いていたらヤバイことになってた。

八幡「いえ、違います。ただの恋人ですよ。」

店員「知ってますっ！今話題の界龍序列2位の【夢幻月影】さんとクインヴェール序列1位の

【戦律の魔女】さんですよ？世界中誰もが知ってる有名人ですからねっ！」

知ってて聞くとはこの人も性格悪いな。

店員「いやあくやっぱ仲がよろしいんですねえ。こうやって見ても分かります。何もしていないのに2人の雰囲気とか、【夢幻月影】さんの【戦律の魔女】に対して送る目が優しいんですね。」

八幡「……………そんな目してました？」

店員「してましたよ。そりやもう!!」

そんなに分かりやすかったのか……今度からは自重することでしょう。もしかしたら無意識で他の場所でもやっていたかもしれないからな。

店員「細かい作業っていうのは、何も器用なだけじゃ出来るものではないんですよ。簡単に言う料理と同じです。相手の事を思いながら作ると、自然と満足いく形になるものなんです。まあ初めてやった方はそうならないでしょうけど、手作りほど人の気持ちが込められたものはありませんからね。」

八幡「それは分かります。俺も料理はするので。最初は作る相手はいなかったので特に気にせず作っていましたが、徐々に食べてくれる人が出来て、今ではシルヴィが食べてくれますから。最近では新しい料理も試してみようと思いはじめてきましたからね。」

店員「そうなんですか……彼女さんは幸せ者ですね。彼氏さんにここまでされているんですから。」

八幡「その分俺も、シルヴィアから色々ともらっているからおあいこですよ。」

シルヴィ「からもらっているもの、色んなのがある。中でも一番嬉しかったものは……『信じたい』って言葉だったな。多分……いや、あの言葉が無かったら、きっと今も俺は人を信用してはいないだろう。シルヴィが……あの言葉を言ってくれたからこそ、今の俺がいるんだよな。」

シルヴィア「……はあ、こんな感じかなあ。出来ました!」

店員「おお!彼女さんも素晴らしい出来ですね!」

シルヴィア「いえそんな／＼八幡くんに比べたら大したことありませんよ。」

店員「では、微調整の方は私がしますので、お2人は店内を回っていても大丈夫ですので、デートを楽しんで下さい。」

シルヴィア「は、はい／＼／」

八幡 side out

—————

—————創作教室・出入口—————

シルヴィア「出来上がり楽しみだねー！やっぱり最初から指輪って難易度高かったかな？もっと簡単なのにすればよかったかな？」

八幡「……………」

ギョツ

シルヴィア「えっ!?ちよ、八幡くん!?／＼／」

八幡「……………」

八幡はなんの前触れもなく、急にシルヴィアを後ろから抱き締めた。これにはシルヴィアも動揺しているようだ。

シルヴィア「ど、どうしたの？きゅ、急にこんな……………抱き締めた  
りして／＼／／／」

八幡「……………さっき、俺たちが最初にデートした時の自己紹介のことを少し思い出してな。その後のシルヴィの言葉も思い出してた。」

シルヴィア「最初のデート、私の言葉……………ああ、あの時の言葉だね。」

シルヴィアも懐かしむように少しだけ微笑んだ。

シルヴィア「あれからもう1年半、もうすぐ2年経つんだね。なんかあんまり遠い昔の話って感じがしない。一緒にいることが多いからかな？」



八幡「それもあるかもな。けど、やっぱり1番は俺たちがこういう関係になったからじゃないか？そうじゃなかったら、こんな風に出れないからな。」

シルヴィア「……………そうだね。」

八幡「あの言葉がなかったら、俺は今も人を信じられてないと思っている。だから改めて言いたい。あの時、俺を信じたって言うてくれて、ありがとう。」

シルヴィア「……………」

八幡がシルヴィアに感謝の言葉を告げると、シルヴィアは八幡の前に組んである両手を優しく握んだ。

シルヴィア「あの時の言葉は今でも忘れてないよ。それに、その気持ちは今でも同じ。ずっと君を信じていたい。ううん、信じているからね。」

八幡「……………ああ。俺もシルヴィを信じているし、愛している。」

シルヴィア「っ!!……………私も、八幡くんを信じているし、愛してます。」

2人は目を瞑りながらその場で立っていた。偶々それを見ていた店員と常連客は後にこう述べていた。

『2人の立っているあの場所だけ、花がいつも以上に咲き誇っていた。』と。

## 彼女の行方とお昼の場所

シルヴィア side

突然だったけど嬉しかったなあ……信じてるし、愛してる、かあ……／／／あんまりこういうやり取りしないから、なんか照れちゃうなあ。でも、この手の温もりは本物だよな。

私は今、八幡くんと手を繋ぎながら花を見ていた。私が左手で八幡くんが右手で繋いでいる。こんな小さな事でも幸せを感じられる。

シルヴィア「そういえば八幡くん、千葉への帰省って考えてるの？」

八幡「いや、今年は考えてない。比企谷次第って事にはしておいたが、今年は行かないことにしている。冬の長期休暇の間は自分を鍛え直したくてな。小苑さんに鍛錬を見てもらおうと思ってる。」

シルヴィア「そつか。じゃあ冬の間も八幡くんと一緒に居られるんだね♪」

八幡「そうだな。まあ界龍に戻る可能性もあるが、冬の長期休暇が終わったらいつも通りの流れにするつもりだから心配するな。」

でもなあ……それだと八幡くんと一緒に過ごせるのは、年末年始くらいになっちゃうってことなんだよね。それはちよつと寂しいなあ。

八幡「まあ、あくまでも予定だから決まったわけじゃない。今から気にすることじゃねえよ。」

シルヴィア「……そうだね、ちよつと考え過ぎちゃった。」

八幡「気にし過ぎるなよ。そういやオーフェアはどこだ？冬のエリアにでもいるのか？」

シルヴィア「だとしたら上の方だね？行ってみよっか？」

八幡「でもなあ……寒いんだよね。冬で生きてる花だけあって根

強いんだよ。まあそこがいい所なんだけだよ。」

シルヴィア「行ってみようよ！私どんところが見てないんだから！」

八幡「……あまり気は進まないが、お前がそこまで言うのなら付き合おう。」

――2階・秋冬エリア――

シルヴィア「やっぱり少し肌寒いね。冷たい風もちよつと感じるよ。」

八幡「さて、オーフェリアは………」

辺りを見渡したけど、オーフェリアさんの姿は見当たらなかった。私たちが創作教室に入る前までは、春夏エリアにいたんだけどなくどこか別の場所に行ったのかな？

八幡「少し連絡してみるわ。流石に心配になってきたから。」

シルヴィア「うん、お願いね。」

八幡くんは通信端末を表示してオーフェリアさんに連絡を取った。するとすぐにc a l l の表示が出てオーフェリアさんが映った。

何故かフード姿で。

オーフェリア『………八幡？』

八幡「おう、お前今どこにいるんだ？」

オーフェリア『………フラワーハウスの冬エリアの中よ。雪があるから。』

八幡「とりあえず居場所は分かったが、その帽子？はなんなんだ？なんか耳みたいなの着いてないか？」

オーフェリア『………貸出用の防寒具よ。』

うん。似合ってるからいいんだけどさ、1番聞きたいことってやっぱりその帽子付きフードだよね。

八幡「取り敢えず昼飯にしないか？気付いてないかもしれないが、今昼の12時半だからな？」

オーフェリア「……………本当ね、全く気付かなかったわ。」

ホント、どれだけお花に夢中になってたのさ……………お花が好きだとは聞いていたけど、まさか時間を忘れるほどだったなんて……………

オーフェリア『……………ごめんなさい、すぐそちに向かうわ。何を食べるかは決めておいて構わないわ。』

そう言つてオーフェリアさんは通信を切った。大丈夫かな？途中で他のお花に夢中になつたりしないかな？

……………5分後……………

オーフェリア「……………ごめんなさい、お待たせしてしまったわね。」

八幡「いや、気にするな。」

シルヴィア「貴女がお花好きだっていうのは、八幡くんから聞いていたからね。」

オーフェリア「……………それで、どこに行くかはもう決まったのかしら？」

八幡「ああ。ラーメンにしようと思つてる。オーフェリアはラーメンつて食べたことないか？」

オーフェリア「……………ええ、ないわ。」

八幡「よし決まりだな。じゃあ昼飯はラーメンに決定だ。一応六花にあるラーメン屋でこの近くにある店は調べてあるからそこに行くか。」

ラーメンかあ……私もあまり食べてないなあ。ちよつと楽しみ  
かも♪

## ラーメンと冗談

オーフエリア side

……八幡がラーメンを食べに行こうと言ってから少し歩いたわ。今私たちがいるのは、六花の商業エリアの北に來ているわ。やっぱりレヴォルフ付近の商業エリアに比べると凄く賑やかなね。

……私はあまり外食を好んでするタイプではないから分からないけど、ラーメンって美味しいのかしら？レヴォルフでも食べてる生徒は見るけれど、特に美味しそうな表情をする人は見かけなかった気がするわ。

……それとも無愛想なだけかしら？

シルヴィア「それで八幡くん、どこのラーメン屋さんに行くの？私あまりそういうのに詳しくないから。」

八幡「心配するな、味は俺が保証する。何せ俺が六花に來て間もない時に最初に食べたラーメン屋だからな。調べたら一番に出てくる店だ。」

オーフエリア「……なら混むと思うのだけど。」

シルヴィア「うん、私もそう思う。」

八幡「ところがその店、見つけにくいことで有名な店なんだよ。店舗画像で見ても場所が分かりにくくて諦める人も多いんだよ。ある意味違う意味でも人気ではある。」

シルヴィア「でも商業エリアの、しかも一番賑やかな場所ではないなんてあるのかな？分かりそうな感じがするけどなあ。」

オーフエリア「……そもそも、そのお店は隠れているのかしら？普通のお店ではないの？」

八幡「普通の店だぞ。なんの偏見もない普通のラーメン屋だぞ。」

……八幡がこんなにも勿体ぶるところは初めて見た気がするわ。  
一体どんなお店なのかしら？

――5分後――

シルヴィア「八幡くんまだあ？」

オーフェリア「……ずっと歩いているのだけど、本当にこっちな  
の？」

八幡「もうすぐだ、あと少し頑張ってくれ。」

……もうすぐという言葉を使つてすぐに着いた人はあまりいな  
いわ。それに、こんな入り組んだ所にラーメン屋があるとは思えない  
わ。

八幡「ほれ、着いた。」

□□糸麵曾華□□

……なんて読むのかしら？

オーフェリア「……八幡、あれはなんて読むの？」

八幡「《しめんそか》だ。日本の四字熟語に《四面楚歌》っていうの  
があるんだ……この漢字の事な。この漢字を変換したものだ。」

シルヴィア「あれでそう読むんだ。でも何でかな、後の漢字の適当  
さがここまで伝わってくるこつてあんまり無いよね。」

……一生懸命考えた末、こうなってしまったのでしょね。

シルヴィア「思ったこと聞いてもいいかな？」

八幡「大体予想はつくが、あえて聞く。何だ？」

シルヴィア「糸麵ってあるけどさ、本当？」

…………私も気になったわ。

八幡「…………さ、入るか。」

シルヴィア「あつ！逃げるな！質問に答えなさい！オーフェリアさんの真似しない！」

私の真似？私の真似をしたのかしら？

八幡「これ以上この店のメンタル削るなよ！決ってやるなよ！俺なんかだんだん可哀想になってたぞ！糸麺って書いてあるからって糸の麺じゃなきゃいけないって理由にはならないだろ！もうちつと気を遣えよ！後、オーフェリアの真似って何ぞ？」

…………違ったのね。特に気にしていたってわけではないけど。

シルヴィア「ちよつと気になったから質問しただけなのにこの言葉様…………私何か気に障るようなこと言ったかな？」

オーフェリア「…………このお店に関する事くらいかしら？」

…………それ以外に思いつかないわ。

八幡「…………いや、まあその通りなんだけどよ、あんまりそういうのは触れるなよ？」

シルヴィア「う、うん。」

オーフェリア「…………分かったわ。」

八幡「よし、じゃあ入るぞ。」

シルヴィア「はぁーい♪」

オーフェリア「……………」



八幡「ところでオーフェリアのマネってあんな感じで良かったのか？それとも顔を背けた方が良かったか？」

オーフェリア「っ！ええ、顔を背けた方が私に似ていたと思うわ。」

八幡「そうか……なら次はそうしてみるか。」

オーフェリア「ええ、オススメするわ。」

シルヴィア「変なこと勧めないの！八幡くんも変な事はしないようにね！」

ガララッ

店長「らっしやい！おつ、坊主か！ん？何だよ今日は女連れか？いつから誑し込んでたんだ？」

八幡「1人はそうだが、1人はそうじゃねえよ。昼飯に困ってたからここに連れてきたんだよ。」

店長「真面目そうに見えて盛ってんじゃねえか！で、どっちが坊主の女だよ？」

八幡「こっちだ。ていうか分かってんだろ？」

店長「まあな！」

………気さくな人なのね。嫌いではないけど、少し苦手ね。

シルヴィア「初めまして、クインヴェール女学園のシルヴィア・

リユーネハイムです。八幡くんの彼女です。よろしくお願いします。」

店長「おう！俺はこの店主だ！まあ坊主のおかげで此処はもう分かっただろう。今後ともご贔屓にな！それで、そっちの白髪の姉ちゃんは？」

……少し冗談でも言ってみようかしら。

オーフェリア「…………レヴォルフ黒学院のオーフェリア・ランドルフエンよ。八幡の…………愛人よ。」

八幡「…………は？」

シルヴィア「なあっ!!」

店長「…………坊主よお、オメエいつから2人も粹に入れてたんだよ。まさか冷やかしか？女っ気のない俺への当てつけか？」

八幡「チゲエに決まってるだろ。大体あんたに冷やかしたって自慢にもならねえよ。それよりもオーフェリア、お前は俺の愛人じゃないだろ。」

オーフェリア「…………違うの？」

八幡「俺がいつ愛人にした？言った覚えもねえよ。」

…………からかっただけなのに、本気にし過ぎよ。

シルヴィア「…………オーフェリアさん？少くし外に出てお話でもない？」

オーフェリア「…………少しやってみたかったのよ、こんな冗談。」

シルヴィア「度が過ぎてると思うけど？」

オーフェリア「…………ドッキリ大成功？」

シルヴィア「ふうくん…………外に行こっか。」ニコニコ

っ！捕まっちゃうわ。だって顔は笑っているのに、目が笑ってなかったわ。

オーフェリア「……………八幡、助けてちょうだい。シルヴィアの目が笑ってないわ。ラーメンの前に私を食べる気だわ。」

八幡「……………シルヴィ、差し上げます。」

シルヴィア「ありがと、八幡くん♪」

オーフェリア「……………八幡の薄情者。」ナミダメ

……………そして私はシルヴィアと一緒にお店の外へと向かうのであった。

オーフェリア side out

八幡 side

店長「……………坊主よお。」

八幡「……………なんだ？」

店長「……………女つてのは怖えな。」

八幡「……………ああ、そうだな。」

冗談だつてのは分かつてたが、まさかシルヴィが真に受けちゃうとはな……………

八幡「……………何もないことを祈るか。」

店長「……………ああ、そうだな。」

5分後に戻って来たが、そこまで変化はなかった。強いて言えば、シルヴィが少しだけ疲れたような感じになっていた。オーフェリアは行った時と変わってなかった。シルヴィ、なんでお前が疲れてんだ？

その後はラーメンを注文してお店を後にした。

因みに頼んだラーメンは、俺が赤味噌、シルヴィが塩、オーフェリアが白味噌を頼み、全員大絶賛の満足いく結果になった。

ゲームセンターで遊ぼう！

—————

シルヴィア「ああ、美味しかったー！八幡くんが勧めるだけあるね。メニューやトッピングの種類が豊富だし、味の濃さも選べるんだね。変装してたまに来ようかなあ。」

八幡「変装しても意味ないと思うぞ。会見の時にネタバレしちまってるだろ？」

シルヴィア「別の顔でやれば大丈夫だよ。何も変装があれだけつてわけじゃないからね。何気なく考えれば思いつくよ。八幡くんの変装もそうでしょ？」

八幡「いや、確かにそうだけどよ……………」

オーフェリア「……………何がそんなに心配だというの？シルヴィアは序列1位なのよ。大抵の人にはやられないわ。」

八幡「そこは心配していない。」

オーフェリア「……………じゃあ何が心配だというの？シルヴィアを1人にしておけないとか？」

八幡「……………俺以外の男にシルヴィの身体に触れられるかもしれないから。」

2人「……………」

八幡の意外過ぎる理由に2人は言葉を失い、固まってしまった。それもそうである。普段八幡はこんな風に誰かを独占しようとする発言はしないからだ。

オーフェリア「……………要は自分以外の男の人にシルヴィアを触ってほしくないってことかしら？」

八幡「……………そういう事だ。」

シルヴィア「大丈夫だよ八幡くん。私は八幡くん以外の男の人には

靡かないから。触らせるのも八幡くんだけだよ。」

八幡「むう……ならいいんだが……」

まだ心配な様子を隠せていない八幡であった。

シルヴィア「ほーら！今はお出掛け中なんだから暗い話はなし！今を楽しまなくちゃ！」テ　グイグイ

オーフェリア「……そうね。八幡、今は楽しみましょう。」テク  
イクイ

八幡「お、おう……そうだな。」

――――

八幡 side

考え過ぎていたようだ。確かにそうだな、今からそんなこと考えてもどうにもならん。未来の事でまだ未確定な事を考えるのはよそう。

《獅鷲星武祭》くらいの事ならともかく、シルヴィがいつ行こうとしているのかも分からないラーメン屋の事を今考えても仕方ないな。

うし、次だ次！次に行く場所は何処だ？

シルヴィア「あつ、八幡くん！ここに寄らない？1年振りにさ！」

八幡「ん？……ああ、ゲームセンターか。確かに去年の《鳳凰星武祭》の休み以来来てなかったな。よし、入るか。オーフェリアもいいか？」

オーフェリア「……構わないわ。ゲームセンターがどんな所なのか、少し興味もあるわ。」

どうやらOKみたいだ。よし、1年ぶりのゲームセンターだ。機械の配置とか変わってるんだろうな。

俺たち3人はゲームセンターの中に入った。中はやはりゲームセンター特有の騒がしさがあつた。

オーフェリア「……………此処がゲームセンター。外からはあまり音が聞こえていなかったけど、中に入るとこうも騒がしいのね。」

シルヴィア「それがゲームセンターとも言えるからね。でも楽しいよ。オーフェリアさんは何かないの？お花以外に興味があるもの。例えば……………ぬいぐるみとか！」

オーフェリア「……………あまり無いわね。」

八幡「まあオーフェリアの好きなものといえば、俺なら花と外食くらいしか思いつかないな。」

シルヴィア「外食が好きなの？」

八幡「ステーキ屋でステーキを初めて食べた時、俺より一回り小さいステーキだが、5分で平らげた。しかも小さい口でモキュモキュしながら高速で食べてた。」

シルヴィア「……………なんか私もそれ見てみたいな。」

オーフェリア「……………あんなに美味しいもの、初めて食べたんだもの。仕方ないじゃない／＼／」

いや、にしては早すぎると思う。あの肉の回収スピードは異常やで？

シルヴィア「じゃあ次はステーキかな？」

オーフェリア「……………悪くないわ。」

八幡「否定しないのな。」

オーフェリア「……………っ！ねえ八幡、この大きな白と黒の四角いのは何かしら？」

八幡「ん？ああ、モノクロキューブだな。普通の大きさの倍以上はあるが、ぬいぐるみ式にしたからだろうな……………欲しいのか？」

オーフェリア「……………やってみるわ。」

八幡「頑張れよ、それ確率機だからかなり難しいけど。」

チャリンッ

テレテレッテレーン

オーフェリア「……………このレバーを動かせばいいのかしら？」

シルヴィア「うん。欲しい景品に合わせるんだけど、制限時間があるから気を付けてね。位置が決まったらボタンを押してね。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

……………真剣なのか？いつも表情を変えないから分からないが、いつもより真剣味が増しているような……

オーフェリア「……………決まったわ。これでボタンを押せばいいのよね？」

八幡「ああ。それとボタンは2回押せてな、1回は掴む機械を降ろす時、2回目は掴む機械を止めて景品を掴む時だ。それはオーフェリアに任せる。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

ポチッ

ピロピロピロピロピロ……

ポチッ

ピュルルルウーン

ここまではOKだな。後はこのアームが持ちこたえるかどうかだな。

ピロピロピロピロピロピロピロピロ

ピュルルルウーン

ポトッ

え……………1発？

オーフェリア「……………獲ったわ。」

シルヴィア「う、嘘……………1回で取れちゃった。オ、オーフェリアさんってUFOキャッチャー初めてだよね？」

オーフェリア「……………ええ。」

八幡「……………ま、まあいい確率が出たんだろう。普通なら落ちちまうからな。」

オーフェリア「……………確率機ってというのはそういうものの？」

八幡「ああ。何回かやって取る人もいれば、1発で取れる人もいる。それは様々だが、初めてやって1発は聞いた事ねえな。」

オーフェリア「……………他のも試してみたいわね。何かあるかしら？」

その後オーフェリアは様々な景品（といってもいいのがなかったみたいだからお菓子類だが）を全て1〜3回で取ってしまった。おかげで俺の片腕は景品の山です。

シルヴィア「ほ、本当に凄いね、オーフェリアさん。とても初めて



とは思えない腕前だよ。私なら絶対もつと使ってるよ……」

オーフェリア「……………楽しい場所なのね、ゲームセンターっていうのは……………あれは何かしら？」

オーフェリアの目を追うと、プリクラの機械があった。さて、シルヴィはどうする？

シルヴィア「あれはプリクラっていつてね、簡単にいうと写真を撮る機械だよ。こんな感じの写真を撮ることができるんだよ。」

オーフェリア「……………」

シルヴィはオーフェリアに俺たちがこの前撮った写真を見せた。

オーフェリア「……………何だか面白そうね。」

シルヴィア「面白いより。やってみる？」

オーフェリア「……………ええ、3人で撮りたいのだけど、いいかしら？」

自ら言ってくるとはな……………これは流石に断れないな。

八幡「俺はいいぞ。シルヴィは？」

シルヴィア「勿論OKだよ！3人で撮ろっ♪」

ハイチドウスル？

モチロン、ハチマンクンガマンナカネ！

……………イギナシヨ。

やっぱ俺が真ん中か……別に嫌じゃねえけどよ。

## ※お決まりのパターン

シルヴィア side

オーフェリア「…………ゲームセンター、楽しかったわ。あんな場所があるなんて知らなかったわ。暇な日が出来たらまた来てみようかしら。」

八幡「……良いんじゃないか？オーフェリアなら結構いい線まで行くと思うぞ。マジで。」

うん、八幡くんは嘘ついてないね。だってオーフェリアさん、本当にポンポン取っちゃうんだもん。あれで初めてなんて…………

オーフェリア「…………八幡、別に景品は私が持つからいいのよ？自分で取ったものだもの。」

八幡「いや、女に軽いとはいえ物を持たせておいて、男の俺が持たずにいられるかよ。ホテルに着くまでは俺が持つ。オーフェリアは気にするな。」

オーフェリア「…………さすが八幡、優しいわね。」

シルヴィア「だよね。さすが八幡くんだよね。」

八幡「やめろ。その生温い目を送るのは。」

だって本当の事だもんね♪

——エルナト・宿泊ルーム——

シルヴィア「じゃあ今日は私が押すね。」

黒い指紋認証に中指を当てると、緑色の光がスキャンして扉のロック音が聞こえた。ドアノブを回して前に押した。やった、解除成功！

シルヴィア「たっだいま〜！」バフツ！

ああ〜お出迎えのソファがなんともいえませんね〜。八幡くんの次に至福だよー。

オーフェリア「……………ただいま。」ストツ コテツ

八幡「お前らホント好きなのな。オーフェリアも今日はやらないと思っていたら、座って次には横に倒れたし。」

シルヴィア「だって気持ちいいんだもん♪八幡くんもおいでよ、今なら私が抱き締めながら一緒に寝てあげるからさ〜。」

オーフェリア「っ！……………八幡、私の所でもいいわよ。」

八幡「いや行かないから。それとオーフェリア、お前が取った景品、こっちのテーブルに置いておくからな。」

オーフェリア「……………ありがとう。ごめんなさい、任せっぱなしにして。」

八幡「気にするな。それと、ほい。」

八幡くんは50センチくらいある四角形のモノクロキューブをオーフェリアさんに投げた。あっ！分かつてとは思うけど、クツシヨンだからね！

オーフェリア「……………」

八幡「触ってみて分かったんだが、それ低反発だからかなり沈むぞ。枕にいいんじゃないか？すげえ高いけど。」

オーフェリア「……………確かに低反発ね。ちよつと寝てみるわ。」

オーフェリアさん、流石に高過ぎるよ……………首痛くするよ？

オーフェリア「……………ダメだわ。枕の位置が高過ぎて首が痛くなりそうだわ。」

八幡「まあそうだろうな。クッションの役割くらいにしか使えなさそうだな。後は部屋の置物くらいか？」

シルヴィア「見た目も良いから、どっちにでも使えるね。ソファがあるのならクッションでいいし、殺風景な部屋なら置物に使っても大丈夫だね。」

色んな使い方があるね♪後はオーフェリアさん次第だから大事に使うように！

八幡「晩飯がどうする？今日は……一応日本料理みたいだが、2人に任せるぞ。」

シルヴィア「私は構わないよ。日本料理は勉強中だからね。食べておいても損はないし、5つ星の評価がつくくらいの腕前を知りたいしね。」

オーフェリア「……私も構わないわ。」

八幡「んじや、今日はエルナトのレストランでディナーだな。物は試しだが、俺が厨房に入って料理して、同じメニューを出したらどっちが俺が作ったのかって分かるか？」

シルヴィア「私なら分かると思う。だって八幡くんの料理には絶対に愛があるもん♪」ニコッ！

オーフェリア「……私も分かると思うわ。理由はシルヴィアと同じよ。」

八幡「……そんな理由で言うなよ、気まずいだろ。というより、さっきのは冗談だからな？」

大丈夫大丈夫、それくらい分かってるから！八幡くんが料理作ったら、レストランの人たちの顔が立たなくなっちゃうから！

まあそれはともかく、八幡くんの料理は美味しいからなあ。食べたに残せないくらいに美味しいからね。星露だったら全部食べれるくらい勢いだったからなあ。あの体のどこに入って行くんだろう？

シルヴィア「ちよつと早い話だけど、明日はどうしよつか？八幡くんにかある？」

八幡「2人さえよければだが、運動しないか？場所は界龍になつちまうが……」

シルヴィア「もしかして詠春拳を私たちに手取り足取り教えてくれるとか!？」

オーフェリア「……行きましょう。明日は界龍で決定だわ。」

八幡「俺はまだ何も言っていないんだが……まあ2人がいいならいいか。」

明日は界龍かあ……あつ、そしたら久々に八幡くんの部屋にも行けるってことだね！懐かしいなあ……またあの部屋でお泊まりしたいな。

休みの日には私が界龍に行つて泊まるのもアリだね。何も八幡くんがいつもいつも家に戻ってくることも必要ないからね。うん、そうしよう！

## 匂いと本物

八幡 side

シルヴィア「日本の料理、美味しかったなあ。特にマグロのお刺身が本当につくあゝまた食べたいなあ。」

オーフェリア「……………まだ鼻がツーンとして痛いわ。目にも涙が溜まつてるまま……………あの緑色の塊、次はタダじゃおかないわ。」うるうる

八幡「わさびを丸ごと食った奴が何言ってるんだよ。まあ知らなかったから仕方ねえけどよ。」

今日の五つ星レストランのメニュー、懐かし日本定食を堪能した。シルヴィアは普段から俺と一緒に食べてるし、日本料理も勉強しているから大丈夫だったが、オーフェリアは、わさびの事を知らなかったせいもあつてか、丸ごと食って（と言ってもパチンコ玉くらいな）酷い目に遭っている。

八幡「部屋に戻ったら茶でも淹れてやるから、それまでの辛抱だ。」  
オーフェリア「……………あの緑の塊を入れたりしないわよね？」うるうる

八幡「そんな事しねえよ。俺は悪戯はしない方だ。偶にはするが、弱ってる奴に追い打ちをかける程愚かじゃねえよ。」

シルヴィア「大丈夫だよオーフェリアさん。八幡くんが悪戯するつて言っても凄く優しい悪戯だから。それに、悪戯じゃなくてイタズラみたいな可愛い感じだから。」

オーフェリア「……………例えば？」うるうる

シルヴィア「例えば……………私の体験談から言うと、ケーキを食べさせてくれると思ったら、私の鼻にチョンツてつけたりとかね。その後、はちゃんと食べさせてくれたから、オーフェリアさんが想像している

ような事は絶対にしないよ。」

八幡「さすがシルヴィア様、俺の事を大変よく分かっていらつしやる。」

シルヴィア「彼女ですから！」エッヘン！

成る程そう来ましたか、まあ確かにその通りだな。俺の事を一番よく知っているのはシルヴィだからな。次に陽乃さんだな。俺の昔を知ってる人だからな。そして次に界龍の奴らとオーフェリアってところだな。

シルヴィア「さっ、着いたよオーフェリアさん！今鍵開けるから、少し待っててね！それからソファにダイブだよ！」

オーフェリア「……………分かったわ。」うるうる

分かつちやうのかよ…………オメエ今どんな状態だよ？わさびにやられて涙溜まつてる上に鼻もツーンとしてるんじゃないのかよ。

シルヴィア「開いた開いた〜♪」

オーフェリア「……………少し休みたいわ。」うるうる

わさび食ったの最後だからな……………まだ涙が引かないんだろう。

八幡「じゃあお茶淹れてくるから待ってろよ。シルヴィもいるか？」

シルヴィア「ううん、私は大丈夫〜！」

さて、普通に水でもいいが、最近淹れてなかったからな。ちょうどいいからって理由だが淹れるか。

八幡 s i d e o u t

シルヴィア s i d e



ああ、極楽だなぁ、至福だなぁ。これに八幡くんがいれば最高なんだけど、寝転がってくれないからなく。膝枕でも良いんだけど、ちよつとタイミングが合わないんだよねー。

オーフェリア「……………」

……………オーフェリアさんは何に蹲ってるんだろう？でもなんか見たことあるような……………

シルヴィア「オーフェリアさん、その青い布みたいなのは何？」

オーフェリア「……………八幡の上に着ていた服。」

なっ!!!?

何だってー!!?

シルヴィア「い、いつからそれを!？」

オーフェリア「……………八幡がこれを脱いでキッチンに行く時に。」

――回想――

八幡『じゃあお茶淹れてくるから待ってろよ。シルヴィもいるか？』バサッ

オーフェリア『……………っ!』

シルヴィア『ううん、私は大丈夫ー!』

この時、シルヴィアは八幡の方を見ておらず、うつ伏せで喋っていた。

オーフェリア『……………』ウワギトル ソシテウズクマル

シルヴィア『オーフェリアさん、その青い布みたいなのは何?』

――回想終了――

シルヴィア「ま、まさか……私がソファを堪能している隙に、もつと上ランクの方法で堪能していたなんて……」

オーフェリア「……これはまさに至高だわ。」

でも何でだろう。心なしか涙がなくなっているような……気のせいかな？

オーフェリア「……良かったら一緒にどう？」

シルヴィア「え？良いの!？」

オーフェリア「……私は構わないわ。」

シルヴィア「……じ、じゃあ遠慮なく。」

私はオーフェリアさんの所まで近寄り、ソファを体育座りをしてから、八幡くんの上着を半分くらい貰ってから顔に当てた。

シルヴィア「んんんうう……♪」

オーフェリア「……♪」

これ、麻薬だよ。すつごく良い匂いがする……

シルヴィア「……ふう。オーフェリアさん、これ凄いね。離れられないよ。」

オーフェリア「……同じ感想よ。この匂い、八幡の匂いがするか逆に離れたくないわ。」

――3分後――

八幡「……………何やってんのお前ら？」

2人「っ!!？」

し、しまった!!時と我を忘れて八幡くんの服を堪能し過ぎた!!

八幡「で？何やってんだ？嘘偽りなく答えなさい。」

オーフェリア「……………八幡の上着の匂いを堪能していたわ。とてもいい匂いで離れたくない程に。」

シルヴィア「……………以下同文です。」

八幡「よろしい。んじゃ、そんなお前らに1つ聞く。俺はあんまりこういうことを聞くタイプじゃないが、俺じゃなくて上着でいいのか？お前らの目の前には本物がいるぞ。」

っ!!!

ビュンツ!!!ダキツ!!

八幡「……………いや、何もそこまで本気にしなくてもいいだろうに。」  
シルヴィア「だって本物には勝てないよ。八幡くんの上着の匂いは嗅げても、本物の方が匂いの他にも色々感じるから。」

オーフェリア「……………シルヴィアと同じ意見になってしまいうけど言うわ。上着の匂いも大事だけれど、本物の八幡には敵わないわ。だって匂いだけじゃなく、温もり、優しさ、包容力、他にも色々あるけれ

ど、八幡からはそれが全て伝わってくるわ。」

八幡「……つたく、折角お茶淹れてきたのに、涙も消えてんじゃねえか。まあオーフェア用にだけだよ。」

私たちはそのままソファに座ってのんびりする事にした。もしかしたら、こうやってのんびりする事が、1番の至高かもしれないね。

界龍に行こう！

八幡 side

皆様おはようございます、比企谷八幡です。さて、俺は………というより俺たちは今、界龍に向かっている所だ。昨日の夕方あたりに界龍に行って運動でもしようという提案を2人が受けてくれたから、久々に帰る。

久々と言っても2週間ちよいだが。

旅行4日目にして学院に行くことになるとは思わなかったが、2人にとっては一種の観光みたいなものだろう。この前の講習会以来だから退屈はしないだろう。八天門場が空いていれば良いんだが、そうならないだろうな。道場の中で一番広いの俺の道場だし。

シルヴィア「ねえ八幡くん。運動するって言ってたけど、どんな運動するの？」

八幡「そこまでは考えてなかったな。ただ単に体を動かせばいいって感じで言っただけだから、特にこれっていうものはないんだ。」  
オーフェリア「………八幡もあまり考えていない時ってあるのね。」  
八幡「俺だつてそういう時くらいある。むしろ考え過ぎていたらパシクしちゃうからな。それに、この1週間は出来るだけ他のことは考えないようにしている。楽しめなくなっちゃうからな。」

オーフェリア「………それもそうね。それなら次はシルヴィアの学園かしら？クインヴェール女学園がどんな所なのか、少し興味あるわ。」

シルヴィア「おつ、良いねえ。じゃあ明日はクインヴェールに行こっか！」

八幡「………そしたら俺お留守番か？」

シルヴィア「え？なんで？」キョトン

オーフェリア「…………何を言っているの？」キョトン

2人「一緒に決まってるよ。(じゃない。)」キツパリ

八幡「いや、クインヴェールって男子禁制だろ。俺が入っていいわけないだろ。」

シルヴィア「それなんだけどね八幡くん、ペトラさんに聞いたら……『八幡くんなら別に入れても問題ないわよ。女の子のプライベートを侵害するような変態ではなさそうだから。』って言ってたから、事前にいうよりも興味本位で聞いてみたら、結果入れても大丈夫みたいな返事を貰ってるから。」

おい、クインヴェール理事長！そんなんでいいのかよ！そんな理由で男子禁制破っちゃっていいのかよ!!もうちつと考えようよ！

オーフェリア「…………私の学院には見せ所なんてないから無しかしらね。」

八幡「まあ、この前行った時はカジノがあつたが、あれは出し物っただけでいつもあるわけじゃないんだろ？」

オーフェリア「…………ええ。」

…………ならあまり見るもんはねえか。けどそれはそれでなあ……ちよつと除け者にしてるようで気が引けるんだよなあ。

あつ、そうだ。

八幡「ならよ、前生徒会長に会うつてのはどうだ？実は俺、《鳳凰星武祭》以来会ってなくてな、奴の顔を少し拝んでおきたい。」

オーフェリア「…………彼に？それだけの為にレヴォルフに来るって言うの？」

八幡「勿論それだけじゃねえよ。レヴォルフの生徒会とも連携を取っておきたい。まあ今のメンバーの殆どは面識あるけどな、ちよつとだけ。」

うん、本当にちよつとだけ。

シルヴィア「なら私もレヴオルフに行きたいなあ。最近は大入しいから、オーフェリアさんがどんな教育をしているのかも気になるし。」  
オーフェリア「…………人聞きの悪い事を言わないで頂戴。教育じゃなくて躾よ。」

そっちの方が悪いわ！躾って何!?レヴオルフの全生徒犬かよ!?言うこと聞かない犬は毒に侵されるって奴か？マジで怖すぎるんだけど…………

シルヴィア「…………それって本気で言ってる?」

オーフェリア「…………冗談に決まってるわ。私自身、他所の人たちに迷惑をかけるのは本意じゃないから。教訓…………と言ったところかしら。」

八幡「…………まあそれくらいなら納得出来るな。流石に俺も躾って聞いた時はビビったぞ。特にオーフェリアが言うのと冗談に聞こえねえからな。」

オーフェリア「…………どうしてかしら?」

八幡「声のトーンもそのままだし、顔だって変えないからだよ。それがオーフェリアらしさでもあるんだけどよ。」

変化がないってある意味恐ろしいんだな。

シルヴィア「と、取り敢えず界龍に向かおうよ。このお話はこれでおしまいっていうことでさ!」

オーフェリア「…………そうね、じゃあ行きましょう。時は有限だものね。」

——界龍第七学院・校門前——

門番1「……………ん？あれは……………尊師っ!!」

門番2「尊師っ!?確か1週間学院を離れると師父から伺っていましたが……………」

門番1「見た所、奥方様ともう1人客人をお連れになっているようだな……………普段通りでいくぞ。」

門番2「はっ!」

八幡「よおお前ら、少し早いが一旦帰ってきたぞ。」

門番「お帰りなさいませ!尊師、奥方様!!」

シルヴィア「……………いつも思うんだけど、わざとじゃないんだよね?」

門番1「はい!」

シルヴィア「……………叱るに叱れないってこういう事なんだね。ちよつと大人の苦勞が分かったかも。」

門番2「尊師、お隣にいるのはレヴォルフの序列1位

《孤毒の魔女》で相違ありませんか?」

八幡「ああ。なんか問題あったか?」

門番2「いえ、特に何も。ただの再確認です。」

八幡「そうか……………取り敢えず中に入るか。2人共パスポートは作つてあるから問題無いな?」

シルヴィア「うん!大丈夫だよ♪」

オーフェリア「……………問題ないわ。」

八幡「んじゃあー行くか。あつ、それと1つ聞いていいか?」

門番1「はい、如何されましたか?」

八幡「今つて八天門場つてどうなってる?やっぱり皆使つてる感じか?」



門番1「とんでもありません!!尊師が不在の中であの道場を勝手に使うなど以ての外です!!尊師が扉を開けない限りは使用を禁じます!」

そんな裏ルールがあつたのね……八幡知らなかった。

八幡「分かったわ、ありがとな。」

門番1「いえいえ!では尊師、奥方様、お客人。行つてらっしゃいませ。」

シルヴィア「やっぱりあの門番さん狙つて言つてるよね?そうにしか思えないよ。」

八幡「もうスルーしちゃえよ……」

## ぐ指導

八幡 side

門番たちの話によると、八天門場を使ったのは俺が最後に使った日らしい。理由も聞いたが、『主がいない状況で勝手に使うなど以ての外!!』だそうだ。俺は別に気にしないんだがな……あるもんは全部使った方が身の為にもなるだろうに。その間他の連中は、他の道場や屋外でやっていらしい。

これは誰でもできる事だが、連絡くらいくれればいいのによ。そしてたら許可なんて幾らでも出してやるのに。まあ用具くらいは元に戻してもらおうけどよ。

シルヴィア「八幡くん八幡くん！折角身体を動かすのならさ、私八幡くんの剣術が見たいな！」

八幡「剣術？俺が刀を使ってる時の動きか？」

シルヴィア「うん。この前は詠春拳だったでしょ？だから今回は私たちだけに剣術を見せてよ！」

八幡「それは構わないが、面白くないと思うぞ？知ってる奴からしてみれば多少は興味を持つだろうが、お前たち2人からしてみれば、あまり面白いものとは思えないんだが……」

シルヴィア「分かってないなあ八幡くんは。キチンとした形を見たいんじゃないかって、八幡くんがやっているところを見たいのっ！剣術よりも八幡くんを見たいの！少しは分かってくれた？」

オーフェリア「……………」コクコクッ

八幡「お前たちが剣ではなく俺が目当てで剣術披露をしてくれと言ったのがよく分かった。俺のが終わったら、2人にも得意なスタイルを披露してもらうか。」

この方が割りに合ってるんだろ。

シルヴィア「ええ〜!? 私八幡くんと違って〜流なんて持っていないよ〜!」

オーフェリア「…………私もよ八幡。よってそのお願いは無効だわ。」  
八幡「流派なんて関係ねえよ。自分の持つてる戦闘スタイルを見せなければいい話だろ? 何をそんなに難しいことを考える必要があるんだ?」

シルヴィア「だって八幡くんは元の動きがあるから分かりやすいけど、私たちがやっても動きがグダグダになって終わっちゃうからだよ!」

オーフェリア「…………」コクコクツ

八幡「はあ…………分かったよ。じゃあ剣術披露もスタイル披露もボツだ。じゃあ何がいい? 動くつつつて残ってるのなんてないぞ? 俺の中では武術くらいだ。」

シルヴィア「うーん…………私たちでも使えそうな技ってないかな? 体術方面で。」

オーフェリア「…………八幡の詠春拳なら、少しでも役立ちそうな技があるんじゃないかしら?」

八幡「そう言ってくれるのは嬉しいが、使うのは人それぞれだ。どんな使い手でも得手不得手がある。仮に俺が教えたとしても、それが100%使えるとは限らないし、無理にスタイルを変えてまで習得する必要はないと思うぞ。我流でやってきた体術なら尚更だ。」

その色に染まっちゃったら最後、抜け出せなくなっちゃうからな。俺は小苑さんみたいに他の武術を詠春拳の動きに合わせた歩法や動きで取り入れている。あくまでもベースは絶対に崩してはならない。俺はそういうやり方だ。

シルヴィア「そっかあ…………ならやっぱり模擬戦かな? 1番分かりやすいし、手っ取り早いし。」

オーフェリア「…………魔法は使わないほうがいいわよね? 私の魔法

は周囲に影響を及ぼしてしまうから。」

八幡「それには賛成だが、オーフェリアって体術出来るのか？」

オーフェリア「……………八幡、これから毎日夜に詠春拳のレッスンをお願いしてもいいかしら？」

出来ないんだな……………まあ予想通りだけどよ。ていうか毎日レッスンとか流石にイヤだ。

八幡「女に武術はオススメしない。界龍ではしてる奴もいるが、瘤とか出来るからやらない方がいい。」

オーフェリア「……………そう。」

八幡「オーフェリアには武器の扱い方を教えてやるよ。今使ってる武器ってナムタルでいいんだよな？」

オーフェリア「……………ええ。でも近々新しい純星煌式武装が届くからその子の予行も兼ねてお願いするわ。」

八幡「けど適合するかも分からないのに、先にそんなことしていいのか？」

シルヴィア「そうだよ。純星煌式武装は意思があるから、オーフェリアさんを所有者として認めるのは、その新しい子だと思うけど……………」

純星煌式武装には意思のようなものがある。俺の【衾々切丸】もちゃんとした意思があった。あれは少し特殊な方だと思うがな。

オーフェリア「……………今回は私が依頼して作ってくれたものなの。だからその辺りも調整してくれるそうなの。名前は【フロイズ・ザハナス猛雪の氷剣】で短剣型の純星煌式武装よ。代償はまだ分からないけれど、能力は切った箇所凍傷、凍結よ。」

八幡「ほう……………切られた箇所は凍傷になるのか。それは厄介だな。」

オーフェリア「……………でも安心して。貴方やシルヴィアには決して

刃は向けないから。」

オーフェリア「……………話を戻すのだけど、短剣の使い方は教えてくれるのかしら？」

八幡「ああ、いいぞ。」

——2時間後——

八幡「……………だから、シルヴィが相手の攻撃を捌いたとしても、すぐに次が来てしまうってわけだ。」

シルヴィア「そっかあ……………確かにすぐに攻撃されてたなあ。」

八幡「対処法としては、相手の動きを止めることだが、それはかなり難しい。止めるって事は自分から何かをしなければならぬからだ。それも相手が攻撃している最中でだ。俺だったら、手の場合は掴む。足だったらその足を蹴るとかな。」

シルヴィア「なるほどお……………」

八幡「短剣つてのはリーチが少ないから威力が無いって思われがち

だが、逆にリーチが無いから隠し芸もできる。例えばだが、服の袖とかに仕舞っておくとかな。」

オーフェリア「……………使い勝手のいい武器なのね。少し学んだわ。」  
八幡「使い方も色々ある。切る、突く、殴る、叩く、投げる。短剣つてだけでもこれだけ使える。オーフェリアの場合は純星煌式武装だから、投げて相手に傷を負わせたり、投げて相手が掴んだりしたら、それはそれで勝機がある。」

オーフェリア「……………純星煌式武装を前提条件を利用するのね？そんな方法は思いつかなかったわ。」

八幡「使えるのは一回だけけどな。」

オーフェリア「……………これだけでも参考になったわ。ありがとう、八幡。」

これで一通りは終わった感じだな。

八幡「そろそろ飯にするか。俺の部屋に何かあると思うから、なんか作る。」

シルヴィア「おっ！久しぶりの八幡くんの部屋だね！なんかワクワクしてきちゃった♪」

オーフェリア「……………楽しみだわ。」

願わくば、あの2人がいませんように。

## 昼ご飯と故郷への想い

### オフエリア side

……八幡の料理、久々だわ。《鳳凰星武祭》後以来かしら。あの日は確か……そうだわ。あの3人の肅清のお礼としてデートをした日に料理をするって聞いたから、私が食べたいと言ったら約束してくれたのよね。

……そしてそれを思い出した日に連絡を入れてOKを貰って界龍に行ったんだったわね。あの時の炒飯と唐揚げとサラダは本当に美味しかったわ。

シルヴィア「それにしても、八幡くんの部屋に行くのは随分久しぶりな感じがするなあ。前に来たのはいつだっけ？」

八幡「いやいや、お前さんよ。学園祭を回る時泊まりに来ただろう。もう忘れましたか？」

シルヴィア「あつ、そうだった♪」

八幡「そうだったじゃねえよ……日はそんなに経ってねえぞ？なんで忘れちまうかねえ？」

シルヴィア「いやあく八幡くんと過ごす学園祭デートの時間が濃密過ぎてつい……」

……シルヴィア、それだと学園祭のやっている間だけしか楽しんでないことになるわよ。晩ご飯や就寝の時は楽しくなかったのかしら？

八幡「まあ兎に角、部屋に入ったら食材の確認してから作るから時間少しかかるが、いいか？」

オフエリア「……作ってもらう側の私たちが文句を言う訳ないわ。」

シルヴィア「オーフェリアさんの言う通りだよ。八幡シェフ、美味しいのを期待してます♪」

八幡「よし、任しとけ。」

――八幡の部屋――

八幡「数週間ぶりにただいまだな、俺の部屋よ。今から数週間ぶりに掃除してやるからな。」

シルヴィア「ふふふつ、八幡くんなんか張り切ってるね。お昼ご飯よりもそっちがメインだったりして？」

八幡「流石にそれはないが、綺麗にしておいて損はないだろう？」

オーフェリア「……………確かにそうね。ものが整っていた方が居心地も良くなると思うから。」

「……………まん」

八幡「……………ん？」

シルヴィア「どうかしたの？」

八幡「いや、今誰か叫ばなかったか？」

オーフェリア「……………何も「八幡く〜!!」……………聞き間違えじゃなかったよね。」

……………貴女がここに来るとは思わなかったわ。

星露「は、八幡よ……………お主何故ここに？」

八幡「いや、今日は偶々界龍に行こうって話になったから来ただけだ。別に他意はないぞ？」

星露「部屋に来たということは……………昼飯を用意するということじゃな!？」クワツ!!

八幡「……………はあ、ああそうだよ。それで？それがどうした？なんとなくというか、予想はもうついてるけど一応聞いておこう。」

星露「妾にも食べさせてほしいのじゃ!!」



……こんな【万有天羅】は初めて見たわ。会議の時とはまた違う感じね。

八幡「わーったよ。だからこれ以上騒ぐな。」

星露「やったのじゃー!! 久々に八幡の飯が食えるのじゃー!!」

八幡「……こんな感じになっちゃったけど、いいか? ダメなら摘まみ出すが……」

シルヴィア「いいいいよ、気にしないから。それにもう見慣れるしね。」

オーフェリア「……ポンコツ生徒会長ね。私も別に気にしてないから八幡の好きにして。」

……自立して生活していけるのかしら? あの子は。親というわけではないけれど、とても心配だわ。

――30分後――

星露「♪♪楽しみなのじゃー♪」

セシリー「いやー今日はラッキーデーだねー!」

虎峰「シ、シルヴィアさんがこんなに近くに……」

陽乃「気絶しないでよ虎峰くん? あつ、八幡くん。盛り付け終わったら私に頂戴ねー、持ってくるから。」

……いつの間にか、私たち3人から7人に増えていったわ。賑やかになったわね。

八幡「すみません陽乃さん、助かります。あつ、シルヴィ、そのレタスちぎっておいてくれ。」

シルヴィア「分かったよ。じゃあトマトとチーズも切っておくね。ハムもカットしたの入れておく?」

八幡「頼む。オーフェリア、そっちはどうだ？」

オーフェリア「……………問題ないわ。後は具材に火がよく通ったのを確認するだけよ……………味の確認をお願いしてもいいかしら？」

八幡「おう……………んん、いい感じだ。このスープ美味しいな。レシピ教えてくれよ。」

オーフェリア「……………ええ、分かったわ。」

……………悪くないわね。こうやって肩を並べて料理を作るのも。

……………10分後……………

八幡「よしっ、出来た！んじや食べるか。」

星露「やつと食えるのじゃー!!」

セシリー「あぁ〜久しぶりだなあー!!」

虎峰「シルヴィアさんの料理……………シルヴィアさんの料理……………」  
陽乃「虎峰くん、怖いからやめてよ。でも本当に美味しそうだね。」

オーフェリア「……………食欲をそそるわね。八幡、お願いするわ。」

シルヴィア「音頭をお願いします、八幡くん。」

八幡「あいよ。じゃ、いただきます。」

「……………いただきます!」

……………こんな風に大勢で食べるのも久しぶりね。リーゼルトニアの修道院を思い出すわ。

……………この前行った時は元気そうだったけど、今も元気かしら？

いいえ、きつと元気にしているはず。私もユリスと同じように仕送りをしているからだいぶ楽になっていると思うわ。

……………今度の長期休暇も行ってみようかしら。

八幡「……………オーフェリア、早く食わねえと冷めちまうぞ？後、急がねえと星露に全部食われちまうから気をつけろよ。」

オーフェリア「……………ええ、分かったわ。」

次に行った時は、手料理をご馳走してあげたいわね。あの子達も喜びそうな料理を勉強しなくてはね。

## 星武祭に向けてと練習再開

星露 side

星露「ふうく食ったのじゃく！久々に満足いく食事が出来たわい！」

セシリー「ですねー師父ー！やっぱり八幡の料理は最強ですねー！」

八幡「お調子者め……勝手に来た挙句に半分以上も食いやがって。どれだけ飢えてたんだよ……」

陽乃「八幡くんの料理を最後に食べてから1週間後からだと思うよ。私の記憶が確かなら、その日からずっと叫んでたから。」

八幡「最後に此处で飯食ったのって学園祭の2日目でしたっけ？確かハンバーガーを食べた記憶があるんですが。」

陽乃「うん、確かにハンバーガーを食べたね。流石の一言だよ、あの美味しさは。」

全くもってその通りじゃな！八幡の作る料理はどれも絶品じゃ！特に、あの時食べた青椒肉絲は忘れられん……また食べたいのじゃ。

虎峰「それよりも八幡、これは文句を言うわけではありませんが、そろそろチームとしての連携を取った方がいいと思うんですが……」

八幡「《獅鷲星武祭》に向けてか？確かに連携は重要だが、今は別に急ぐ必要はない。」

虎峰「何故です？」

八幡「今合わせたとしても、今後は個人で強くなる。その強さに合わせていけるのなら兎も角、合わせられなかったら個人で戦うことになるからな。だから連携のパターンを取るのもう少し後だ。」

八幡「連携を早い時期に取るのは悪い事ではないが、行動パターン

が限定される可能性もあるから、なるべくなら後の方がいい。」

ふむ、チーム全体のことをよく把握しておるのう。妾も今は個人の能力を高める事に賛成じゃな。それから連携を取っても遅くはないからのう。

星露「八幡よ、お主はいつから連携を始めようと思っておるのじゃ？」

八幡「星武祭の3ヶ月前、最低でも2ヶ月前からは始めたい。それまでは個人能力を鍛えるべきだと思っている。」

陽乃「うん、その方が良いね。動きが良くなってから連携が取れなくなっただって事例も聞くしね。」

セシリー「じゃあ今は鍛錬だけでいいってことー？」

八幡「そういう事だ。今は個人の力を高めてくれ。」

セシリー「りょーかい！」

陽乃「うん、分かった。暁彗にも伝えとくね。」

虎峰「分かりました。」

どうやら、問題は解決したようじゃのう。しかし、この前の《鳳凰星武祭》が終わったと思うたら、もう次の星武祭とはのう。

星露 side out

八幡 side

昼飯も食ったし、そろそろ道場の方にでも戻るか。

八幡「済まないな2人共、放ったらかしにしちまって。」

シルヴィア「ううん。次の《獅鷲星武祭》に向けての相談だから私たちが口出しすることじゃないからね。これくらい当然だよ。」

オーフェリア「…………他学園の作戦に口を出すわけにはいかないものね。」

八幡「んじや道場に戻ってさっきの続きやるか。攻撃の対処法とナイフの使い方だったな。んじや、行くか。」

――八天門場――

八幡「じゃあ続きを始めるぞ。やり方はさっきと同じ、俺と分身が2人を見る。」

シルヴィア「はい！お願いします！八幡尊師っ♪」

オーフェリア「……………お願いするわ、八幡尊師。」

だから尊師は余計だったのに……………なんで俺の知人はこうも尊師をつけたがるんだ？

星露「……………のう、お主らよ。」

陽乃「ん？何？」

セシリー「どうかしましたかー？」

虎峰「如何されましたか、師父？」

星露「八幡は自覚はしておらんから分からんじやろうが、師匠らしき丸出しではないかのう？」

虎峰「……………はい、僕もそう思いました。日に日に何故師を名乗らないのかが不思議に思えるくらいに。」

セシリー「ホントですねー。」  
陽乃「あれくらいの教え方は当然ってことかな？八幡くんはハイス  
ペックだからね。」

なんか知らないところで噂させているような気がするが、今は2人  
の稽古だ。こっちに集中しなきゃな。

指導終了！

シルヴィア side

ふう……八幡くんの指導を直に受けてみると、強くなっているのは本当なんだなあって実感が湧いてくるよ。多分だけど、私の体術の欠点らしい所を矯正してくれてる。さつきよりも素早く動けてるような感じがあるし、何よりも歩法や身体の使い方までここまで違ってくるなんて……

体術を怠っていたわけではないけど、何箇所も指摘を受けると自信無くなっちゃうなあ。でも八幡くん曰く『注意や指摘があるって事は、それだけ改良・改善の余地があるという事だ。』っていう事みたい。確かにそういう考えはなかったなあ。うん、そういう風に覚えておう！

八幡「……大体良くなってきたな。どうだ？最初の頃に比べると動きやすくなっているとは思うんだが……違和感とかある部分はあるか？」

シルヴィア「ううん、全くないよ。それどころか、さつきよりも動きやすいよ。まるで水を得た魚みたいだよ。」

八幡「そうか……なら良かった。」

これはお世辞じゃない。本当にそれくらい自分でも良くなっていると思うてる。尊師って呼ばれてる所以がよく分かるよ。

シルヴィア「そういえば、オーフェリアさんの方はどうかな？確かにナイフの使い方だったよね？」

八幡「ああ。俺の分身が教えてるが、どこまで吸収できているかだな。体術や武器術……っていうよりも、こういう実践的なものは見て学ぶってよりも、動いて学ぶ方が断然覚えは早いからな。」



シルヴィア「でも八幡くんが教えてるんだから、絶対に良くなつて  
ると思うけどなあ。」

八幡「幾ら一流の動きを見て理解できていたとしても、動きが出来  
ていなければ三流以下の動きになるだけだ。最初は基礎から始めて  
導入をしてから、応用を組み込んで実践に移る。これを全てこなして  
初めて完成といえる。俺だから良くなるとは限らねえよ。」

……久しぶりに八幡くんの奥深い話を聞いた気がする。確かに最  
初から本流の動きをしても、それはただの見様見真似だから意味なん  
て無いよね。

八幡「もう日も落ちるから、そろそろ帰らないとな。シルヴィはま  
だやりたいか？」

シルヴィア「ううん、暗くなると危ないからそろそろホテルに戻ら  
ないかね。私はここまででいいよ。」

八幡「分かった。おい、そろそろ帰るぞー。」

シルヴィア side out  
オーフェリア side out

八幡「ん？どうやらかなりやり込んでいたみたいだな。オーフェリ  
ア、一応俺の中では10のうち4くらいは教えてみたが、最初と比べ  
てどうだ？」

オーフェリア「……ナイフって思った以上に素早い動きが必要なの  
ね。」

八幡「まあ軽いからな。その分使う奴もスピードに特化した奴が使  
う傾向が多い。必ずしもそういう組み合わせで事にはならないけ  
どな。」

……難しいのね。でもナイフの使い方や動き方はなんとなく分  
かったわ。使う機会がなければそれに越したことはないのだけど、使

い方を覚えておいて損はないものね。

オーフェリア「……………八幡もナイフを使うの?」

八幡「二通りの武器術は嗜んでるが、ナイフ……………短剣は使わないな。リーチが無い上にはぼ相手に近づかなきゃ当たらないしな。苦手ってわけではないが、好んで使いはしないな。」

オーフェリア「……………八幡は刀以外に何を使うの?」

八幡「そうだな……………俺なら棍を使う。分かりやすく言うなら長い棒だ。後は二刀流とかだな。試合では出した事ねえけど。今のスタイルが崩れないような武器を使ってる。」

……………今のスタイルを崩さないように……………成る程、なんとなく分かる気がするわ。

オーフェリア「……………参考になったわ、答えてくれてありがとう。」

八幡「おう、んじや俺は消えるからオリジナルとシルヴィのところに行つて来い。もう帰るんだと思うぞ。」

オーフェリア「……………ええ、分かったわ。」

……………そして八幡の分身は黒い靄になつて消えていったわ。早く八幡のところに行きましょう。

オーフェリア side out

八幡 side

オーフェリア「……………お待たせしてごめんなさい。」

八幡「いや、俺たちも今終わつたから問題ねえよ。それよりも、どうだ?少しは身についたか?」

オーフェリア「……………八幡が教えてくれたのだから、身につけないわけにはいかないわ。」

八幡「……………必死にやつたわけじゃないよな?」

シルヴィア「一生懸命に、そして真剣にやっただと思うよ。だって私もおんなじ気持ちだったしね。だって八幡くんが教えてくれるんだから！」

俺だからいつもより真剣にやっただと？それだと普段はあまり真剣にやっけてないってことになるぞ？

シルヴィア「まあそんな事はいからさ！八幡くん、もうそろそろ日が落ちそうだから帰ろうよ。」

八幡「おお、そうだったな。んじゃ行くか。」

シルヴィア「うんっ♪」ダキッ！

オーフェリア「……………ええ。」《ギユツ》

八幡「……………あの、お2人さん？帰るのに腕に抱きつくのと、手握る必要性はないと思うんですよ。そこのところどうお考えですか？」

シルヴィア「彼女だから問題ありません♪」

オーフェリア「……………八幡の手は暖かいから。」

八幡「……………はいはい、分かりましたよ。」

しょうがねえな、自由にさせてやるか。

——界龍・校門——

門番1「っ！尊師っ！お出掛けですか？」

八幡「お出かけっつうよりも、今は外出中みたいなもんだからな。今いる家に帰るだけだ。」

門番1「そうですか。では次にお会いできるのは……………3日後ということになりますかね？」

八幡「ん……………まあそうだろうな。俺も星武祭に向けて鍛錬しねえとだからな。この旅行が終わったら帰ってくるわ。」

門番2「界龍の皆は大喜びするでしょう！尊師、残りの旅行を楽し

んできてください！奥方様とランドルフエン殿も。」

シルヴィア「もうそれは諦めたよ……」

オーフェリア「……ありがとう。」

八幡「んじや、行ってくるわ。」

門番1、2「お氣をつけて!!」

## お風呂と作戦

オーフエリア side

……八幡の教え方は本当に上手だわ。ナイフの扱いが素人の私でもすぐに使い方が分かったわ。それに、親身になって教えてくれるから、動きづらいモーションも別の方法で合わせるようにしてくれる。

……私の場合、煌式武装はナムタルしか使った事がないから分らないのだけど、ナイフは大振りな攻撃をしても直ぐに攻撃に繋がられるから便利ね。これで言うことを聞かないレヴォルフの生徒たちをしつ……間違えたわ、教育出来るわね。

……それと私たちは今、夕食を食べ終えてから部屋に戻ってのんびりしているわ。ちなみに今日はスペイン料理だったわ。大皿に盛り付けられたパエリアはとても美味しかったわ。後、スープも出てきたのだけど、名前が出てこないわ、ごめんなさい。特徴は赤色だったわ。

八幡「……のんびりしている所悪いが、明日はどっちに行くんだ？レヴォルフかクインヴェールか、どっちか選んでくれ。」

シルヴィア「私もどっちからでもいいよ。私は別に【悪辣の王】の顔が見たいわけでもないからね。レヴォルフからでも大丈夫だよ。」  
グデー

オーフエリア「……私もどちらからでも構わないわ。レヴォルフに來たとしても紹介する所なんて無いに等しいからすぐに帰ってしまいかもしれないけど、それでもいいの？」

シルヴィア「私は八幡くんさえいれば問題ないよ。」

八幡「言い出しつぺは俺だからな。俺がどうこう言う筋合いはねえよ。プランとしては【悪辣の王】の顔を拝んだら、レヴォルフの生徒

会と交流して退散、っていう風に考えてる。」

……彼の顔を見るのは決定なのね。私も長い間彼を見ていないから少し気になるわね。

オーフェリア「……………なら明日はレヴォルフになるのかしら？この話の流れでは？」

八幡「大丈夫か、オーフェリア？無理なら別に何も言わないが。」  
オーフェリア「……………そんな事ないわ。この六花の皆知ってることだと思うのだけど、レヴォルフには校則がないから。誰が出入りしようとか関係ないもの。」

シルヴィア「ああ……………確かにレヴォルフに好き好んで行こうって思う人はいないだろうね。」

八幡「ああ、俺も行こうと思ったことはないな。思ったのは学園祭くらいだ。」

……………そのくらいのレベルよね。世間ではレヴォルフは不良学院として見られているから当然ね。

八幡「んじや明日はレヴォルフで決まりだな。よし、じゃあバスタイムにしようぜ。今日は汗掻いたから風呂にするか。先入るか？疲れただろ？」

……………いいえ、そうもいかないわ。だって今日はあの日だもの。

シルヴィア「ううん、八幡くんの方が疲れてるでしょ？指導に分身、料理も作ってくれたから先に入っていよいよ。私たちは後で大丈夫だから。」

オーフェリア「……………そうね、一番疲れているのは八幡だものね。八幡から入って頂戴。」

八幡「……………良いのか？一番風呂とか一番搾りが格別とかって言う

だろ？一番に入らなくていいのか？」

…………何故お酒の名言が出てくるのかしら？

シルヴィア「大丈夫だよ。だから八幡くんはゆつくりしてきて。普通でも電気でもジャグジーでも何でもいいから、ね？」

八幡「…………オーフェリアはどうなんだ？」

オーフェリア「…………先に入ってきて。私たちは後で大丈夫だから。疲れを癒してきて頂戴、旦那様。」

シルヴィア「ちよつ!?もう、旦那様は私の台詞っ！旦那様っ、ゆつくり浸かってきてください。」

八幡「お、おう…………」

…………シルヴィアの押しに負けたのか分からないけど、八幡はそのままバスルームに行ってしまったわ。

シルヴィア「…………もう、なんのつもり？」

オーフェリア「…………妻が2人いるってこんな感じなのかしら？」

シルヴィア「うん、2人じゃないからそういうこというのやめようね？」

オーフェリア「…………それよりも、今日ね。」

シルヴィア「仕切られているのがなんか少しだけアレだけど…………今日だね。」

オーフェリア「…………八幡と、」

シルヴィア「…………八幡くんと、」

「お風呂に入れる日っ!」

……この前はシャワーで入れなかったけど、今回はお風呂だから行けるわ。

シルヴィア「あっ! 言い忘れていたけど、流石に水着で入ろうよ。八幡くんの水着も持って行ってさ。3人全員裸はなんか恥ずかしい感じするからさ。」

オーフェリア「……………そうね、その方がいいわよね。ええ、そうしましょう。」

シルヴィア「う、うん! きっと八幡くんは何も考えずにお風呂に浸かってるだろうから、ゆっくり入ろう! 足音立てずに、ねっ!」

オーフェリア「……………そうね。リラックスしている人を緊張させてはいけないものね。なら、ゆっくり行くのではなくて、着替えを持ってきた体で行くのはどうかしら? その方が自然だと思うわ。」

シルヴィア「そ、そうだね! その方が自然だね! じゃあ私たちの着替えも一緒に持って行こうか! 流石に3人では着替えられないけど。」

オーフェリア「……………ええ、この作戦でいきましょう。うまく行く気がするわ。」

シルヴィア「うん! では、お着替えと水着を準備したまえ! オーフェリア隊員!」

オーフェリア「……………了解、シルヴィア隊長。」



シルヴィア「……………ぷっ！」  
オーフェリア「……………ふふっ。」

……………その後、私とシルヴィアは2人だけで声を上げて笑ったわ。  
何年振りかしら、あんな風に笑ったのは。

シルヴィア「あははははっ！ああ笑った♪可笑しすぎる、今のやり取り！」

オーフェリア「……………そうね。私もこんな風に笑ったのは久しぶりだわ。」

シルヴィア「またやってみよっか？なんか八幡くん抜きでこういう事すると、良い感じに楽しい感じになってくるから。」

オーフェリア「……………ええ、賛成よ。シルヴィアともっと仲良くなりたいわ。」

シルヴィア「うん！ならまずは、八幡くんのお風呂に突入だね！」  
オーフェリア「……………ええ。先頭はお願いするわ、隊長。」

シルヴィア「後ろは任せたよ、オーフェリア隊員っ！」

……………何をやっているのかしら。とも思ってたけども、このやり取りは八幡と一緒にいる時と同じくらい幸福や楽しい時間を感じるわ。

## 突入大作戦!!

八幡 side

あゝ……いい湯だゝ。体の疲れが取れるうゝ………じじいクセエな。本当の事だけど、こうもリラックスした状態で言うとな、本当に爺さんみたいだ。しかし、今日の稽古は俺としてもやりやすかったな。2人の飲み込みの早さと順応力が高いから次に進むスピードがメチャメチャ早かった。

俺は自分の中で難易度を初・中・上・特・功・錬の6つに分けて、それぞれ10の段階に区別してある。その内2人は確実に中を超えている。シルヴィは元々体術を嗜んでる事もあって、特の2段階まで辿り着けた。オーフェリアは上の5段階くらいまでだろう。

因みに簡単に表すと、

初………始めた段階。実戦投入は無理。

中………ある程度の熟練。組手ならOK。

上………実戦投入レベル。序列40位まで。

特………ある程度の相手と戦える。序列20位まで。

功………使い手。序列1位も相手に出来る。

錬………極み手。その部類では敵無し。

といった所だ。オーフェリアも動きは悪くないから、序列30位くらいはナイフで相手出来るだろう。シルヴィもこの学院では分らないが、他学園の体術使いの序列20位くらいとなら渡り合えるだろう。

まあ2人の成長の話はまた今度にして、今はこの風呂の時間を堪能しよう。風呂にゆっくり浸かりながら六花の街を眺める……高級感ハンパないな。

シルヴィア『八幡くゝん、お着替え忘れてたみたいだから持って来

たよ。」

八幡「あれ、俺着替え忘れてたか？」

シルヴィア『うん。荷物の上に置いてあったからすぐに分かったよ。』

八幡「そうか、サンキューな。」

シルヴィア『いいいいいよ、気にしないで〜！』

流石はシルヴィだな、細かい所も気が利く。やっぱ将来は良い嫁さんになるな。

けど、俺確か着替え持ってきたよな？そこの記憶ちよつとイマイチだが、衣服を持ってきた記憶はあるようなないような……うーん。

シルヴィア「お、お邪魔します／＼」  
オーフェリア「……………失礼するわ／＼」  
八幡「……………え？」

……………え？何で入って来てるの？

ああでも良かった。水着は着ててくれてる。うん、一安心……  
じゃねえよ!!

八幡「お、お前ら何で入ってきてるんだよ!？」

シルヴィア「だ、だって今日は私たちのために稽古つけてくれたから、お礼にお背中を流そうと思って……はい、これ八幡くんの水着／＼」

八幡「いやそうじゃねえよ!水着もらってどうしろってんだよ!?!いや履くけどさ!」

オーフェリア「……私も同じだけど、私は頭を洗おうと思ってるわ／＼」

八幡「いや大丈夫だから!お礼とか考えなくて大丈夫だ!いつも界龍で稽古つけてる奴らと同じ感覚でやってたから別に何もしなくていい!」

オーフェリア「……でも私たちは界龍じゃないから、気にするなと言われてもそんなこと出来ないわ。今日だけでも貴方に色々なことを学んだわ。なら、お礼をするのが筋ってものだわ。」

シルヴィア「そ、そうだよ!八幡君にとっては普通のことでも、私たちにとっては凄くありがたいことだったんだから!お礼をさせて!」

マズい……全然引いてくれそうにない。なんならこの風呂場から動く気配もない。恐らくだが、俺が上がるって言ったら『入ったばかりなんだからまだ居る!』とか言いそうだ。

……仕方ない、ここは妥協だ。

八幡「……分かった、シルヴィが背中であーフェリアが頭だな。洗って良いから早く入れ。」

シルヴィア「……八幡くんが いいのなら、前も洗ってもいいよ？  
／／／／／」

八幡「いや！それはやめてくれ！幾ら何でもそれはやり過ぎだ！」  
あーフェリア「……私も背中を流していいかしら？シルヴィアにも頭を洗わせてあげるから。」

シルヴィア「え？う、うん、いいけど……」

あーフェリア「……ありがとう。風邪を引いてしまうから早く入  
りましょう。」

八幡「そうしろ。じゃあ俺は「体を洗う？頭から洗う？」……良  
い湯だからもう少し浸かろっか（棒）」

チャポンツ

あーフェリア「……／／／ギュー

八幡「……／／／」

シルヴィア「……／／／ギュー

せ、狭い……ていうか2人が近い。何で？ねえ何で？サイドまだ余  
裕あるよね？なのに何で俺の方に寄ってくるわけ？俺も意識しない  
ようにするの大変なんだよ！君たち女性特有の良い香りと膨よかで  
柔らかいのが俺の腕を包んでるわけ！少しは俺に余裕をください！！

八幡「な、なあ2人共？ちよつとくつつき過ぎじゃないか？言っ  
ちやいけないと思うが、あえて言わせてもらうぞ？2人の胸が当たっ  
てるんだが……」

シルヴィア「つ／／／だ、だって今日はちよつと寒かったから  
……風邪引かないようにあっためようと思ったの／／／／」

あーフェリア「……3月は春の訪れとも呼ばれているけど、まだ

冬の季節なのよ。1つの油断が命取りになるわ。身体を洗う時に冷えてしまうけど、今暖めておいても損な事なんて1つも無いわ／＼

シルヴィア「そ、それに……」

オーフェリア「……それから、」

2人「当ててるんだよ（のよ）／＼／＼／」カアア

……やめてくれ、上目遣いでそんな事を言うな／＼／

――3分後――

八幡「……そろそろ頭と身体洗う。」

2人「っ！」

八幡「……やるって言っただろ？」

シルヴィア「どっちする？／＼／」

八幡「……頭から頼む／＼／」

オーフェリア「……分かったわ。」

八幡 side out

オーフェリア side

……やって見る前はそんなに緊張はなかったけれど、いざやると本当に恥ずかしいわ。一昨日のプールで八幡の裸は見慣れている筈なのに、どうしても意識してしまうわ。

シルヴィア「……八幡くんの髪って柔らかいんだね。サラサラってわけでもないけど、ゴワゴワしてる感じもないから、どんなのかなあって思ってたんだ。」

八幡「髪の柔らかさの感想はいいから早く済ませてくれ。これでも鏡を見るのがかなり辛いんだ。」

「……何故かしら？」

八幡「……………2人の水着姿が見えるからだ／＼それ以外理由ないだろうが／＼」

シルヴィア「え、えつと私は、八幡くんになら見られても構わないよ。勿論、エ、エツちな目で見てもいいからね?／／／／／／」

オーフェリア「……………わ、私も構わないわ／／／／／」

八幡「っ！も、もういいから早くしてくれ！」

——シャンプ——中——

オーフエリア「……………痒いところはないかしら？」

八幡「ああ、大丈夫だ。」

シルヴィア「痛くない？ちよつと強めにやってるけど。」

八幡 「それくらいで丁度いい。」

…………八幡も目を瞑っているからか、少し余裕を取り戻したみたい  
ね。

シルヴィア「オーフェリアさん、お湯流すよ。」  
オーフェリア「……………分かったわ。」

……シルヴィアはシャワーで八幡の髪に付いている泡を丁寧に洗い流しているわ。なら私は八幡の顔を拭く係ね。

シルヴィアが流し終わったら取り掛かりましょう。

シルヴィア「うん、流し終わった。オーフェリアさん、八幡くんの顔拭いてあげて。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

フキフキツ

………なんだかお金持ちの息子のお世話係みたいね。でも八幡のお世話係なら喜んで引き受けるわね。

オーフェリア「……………終わったわ。」

八幡「ああ、ありがとうな……………何故正面にいる？」

オーフェリア「……………おかしな事を聞くのね。顔を吹いていたからに決まっているじゃない。」

八幡「横からでもできるだろ？」

オーフェリア「それだと雑になってしまうわ。」

シルヴィア「そうだよ！これはお礼なんだから丁寧にしなきゃ意味なくなっちゃうよ！」

………頭は終わったわ、次は背中ね。力加減が分からないから不安だけど、シルヴィアのを見様見真似でやってみましょう。

オーフェリア side out

シルヴィア side



八幡「じゃあ、次は背中を頼む。」

シルヴィア「うん、任せました／＼／」

オーフェリア「……………頑張るわ／＼／」

背中ついても、やっぱり腕もやるよね。本当なら全身くまなくやりたいけど、私にはまだそこまでの勇氣はありません。心中察してください。

シルヴィア「じゃあ始めるね。痛かったり、痒い箇所があつたら言つてね。」

八幡「おう。」

——体洗中——

シルヴィア「……………痒いところない？」

八幡「ああ、大丈夫だ。」

オーフェリア「……………本当に前はやらなくていいの？遠慮しなくてもいいのよ？」

八幡「遠慮なんてしてねえし、やらんでいい。自分でやるから。」

うん。私も流石に前の方はやらないかな。一回だけやったけど、その方法が身体を密着させてだから相当恥ずかしかった。だからあれは2人きりの時だけにする!!

オーフェリア「……………そういえば、こんな風に八幡の背中の痕を見るのは初めてね。なんだか綺麗だわ。」

八幡「ああ、この雷紋の事か。懐かしいな……………俺がまだ六花に來たばかりの頃だったな。曉彗に決闘挑まれて、中盤辺りで雷の技食らつて、この痕ができた。俺もこの傷は氣に入ってる。刺青みたいでなんかカッコいいから。」

シルヴィア「ふふふつ、考え方が男の子だね。でもカッコいいのは確かだね。」

この傷を見たのって確か、私が《王竜星武祭》で八幡くんの寮に泊まりに行ってた時だったっけな。あの時は頭がいつぱいいいっぱいだったから触れなかったけど、インパクトはあったなあ。

それから何事もなく身体を洗ってから泡をシャワーで流した。八幡くんには先に湯船で待ってもらって、私とオーフェリアさんは急いで髪と身体を洗った。

あつ、勿論八幡くんは目を瞑ってたよ。だって見えちゃうもんね／＼その辺八幡くんは紳士だから。

――5分後――

シルヴィア「いい湯だねえ。」

オーフェリア「……………そうね。」

八幡「ああ、そうだな。」

最初お風呂に入ったような形になっている。八幡くんも慣れたのか、反応しなくなった。

八幡「なんか…………アレだな、こんな風に風呂入るのも悪くないな。毎日って言われると少し気が引けるが。」

シルヴィア「王様気分を味わえたから？」

八幡「ハーレムな王様だな。俺はそんな王は御免だな。」

オーフェリア「……………言うと思ってたわ。貴方は人を束縛したりするのが嫌いそうな人だもの。」

八幡「分かってるな。その通りだ。」

……………そうだね。だから八幡くんは私たちの事を気に掛けてくれる

し、自由にもしてくれる。

八幡「なあシルヴィ、急に聞いて悪いとは思ってるが、俺は負担になってないか？」

シルヴィア「全くだよ。寧ろ私が負担になってるんじゃないかって思えるくらいだよ。君と一緒にいると、安心するし安らげるし、暖かい気持ちにもなれる。いつも助かってるよ。」

オーフエリア「…………私もよ八幡。あなたと一緒にいると心が温まるわ。私が此処<sup>六花</sup>に来てからは、今まで出来たことが出来なくなつたことが多くあつたわ。でも貴方はそれを解決してくれた。そのおかげで私は大好きな花を育てる事も出来たし、信頼出来る人も出来たわ。あなたのおかげよ、八幡。」

八幡「…………なんかいつの間にか俺を褒める会みたくなつちまつたな。でも、ありがとうな。素直に嬉しい。」

私の方こそ、いつも気遣ってくれてありがとう。これからよろしくね。

## ※2人のお寝坊さん

八幡 side

……昨日の風呂場では、あまりにも目のやり場に困る場面が多かったが、2人の素直な気持ちを聞いて良かった。俺は本当に幸せものだと感じた。頼んでもいないのに俺のことを信じてくれている2人には頭が上がりないと思った。

俺自身、2人には大したことはしていないと思っていたが、2人にとっては大き過ぎる事を無意識にしていたんだと思う。

もし俺があの時、シルヴィをナンパから助けていなかったら？

もし俺があの時、オーフェリアに話しかけていなかったら？

そう思うと、こんな風にはなっていないんだよな。シルヴィと交際する事も、こうしてオーフェリアと一緒にいる事もないんだよな。

まあ2人との出会いの事はさておいて、問題は今である。現在朝の6時。旅行4日目の朝である。昨日もいつも通りベッドに入って眠りについたので、朝になると当たり前かのように俺の腕には2人の美女がいる。しかも綺麗に俺の腕に自身の腕を絡めて女性特有の柔らかい胸に大事そうに挟めている。

八幡「……慣れたつちやあ慣れたが、起きる時は少しな……自重してもらいたいが、眠ってる相手に何を言っても聞こえないからな。」

……仕方ない、起きるまで待ちますか。朝食は9時半までだからまだ余裕はある。起きなかったら流石に揺すって起こすけど。

――30分後――

八幡「……………この天井見るのも飽きていたな。ていうか旅行に来てから毎日この時間は天井見てるんだけどよ。」

流石に6時は早すぎたか。《早起きは三文の徳》っていうが、6時半は流石にお年寄りくらいしか起きてない時間帯か……

シルヴィは6時とかでも起きれるんだが、昨日は界龍で体術の鍛錬をしていたからな、起きれないのは予想していたから問題ない。

オーフェリアも以下同文だ。

————更に30分————

シルヴィア「じゃあお顔洗ってくるね。」

八幡「おう、行つてこい。」

7時直前にシルヴィが起きて、顔を洗いに向かわせたところだ。1度起きたが、『後5分。』つて言うから、揺すつて起こした。まあシルヴィも冗談だったみたいだったから、それ以上の事はしなかった。

オーフェリアはまだ夢の中だ。俺の左腕を離さず抱き締めたまま眠っている。昨日寝たのが9時だと考えると、今で10時間寝てるって事になるな。この子、また記録更新しちゃったよ。

オーフェリア「……………八幡。」

八幡「ん？起きたか？」

オーフェリア「……………お味噌汁の……………おかわりを……………お願いするわ……………」

どんな夢見てんだよ。しかも飯食ってんのかよ。

——20分後——

……………そろそろ起こしてやらねえとな。朝飯が8時からで9時半までだからな。早めに起こしてやらねえと。え、何でかって？そりや女は準備とか色々あるだろ？その為だよ。

八幡「おいオーフェリアくそろそろ起きろく。朝飯なくなるぞく。」ユサユサ

オーフェリア「……………八幡が……………朝ご飯。」

八幡「俺は朝飯じゃねえ。そしたらオメエゾンビになっちまうぞ。ほれ、起きろ。飯食えなくなるぞ。お腹へリンスキーの状態でレヴオルフに行くことになるぞー。」

オーフェリア「……………八幡が作る朝ご飯。」

あ……………俺が作る朝ご飯が良かったのね？俺が朝ご飯じゃなくて、俺が作る朝ご飯をご所望でしたか。

八幡「俺は朝飯作らねえよ。それよりも起きろ。でないとおいでくぞ？」

オーフェリア「……………○・♪% €：\$☆」ブツブツ

ごめんなさい。ちゃんとした言葉でお願いします。てないと俺聞き取れません。

しかし起きねえな……………こうなったら……

八幡「なあオーフェリア、萎れた薔薇ってどうすれば治るんだ？」

オーフェリア「……………それは何処？私に見せてちょうだい。」ガバツ

八幡「起きたか？」

オーフェリア「……………八幡、そんな事よりも萎れた薔薇は何処かしら？」

八幡「それは嘘。いつまでも起きねえから花の話題を出したってだけだ。薔薇は萎れてねえし此処にもねえよ。」

オーフェリア「……………ヒドイわ八幡。私の眠りを妨げるなんて。」

八幡「じゃあ寝かしといった方が良かったか？それだとオーフェリアの朝飯が抜きになっちまうが？」

オーフェリア「……………起こしてくれてありがとう八幡。今日も良い日になりそうね。」

……………まあいいか。

八幡「取り敢えずお前も顔洗って支度してこい。俺は着替えてから顔洗うから。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

さつてと、今日も張り切っていけますか。

## 朝食、移動、現状

シルヴィア side

皆さん、おはようございます！シルヴィア・リユーネハイムです♪此の所、極力八幡くんと居ないと寝付けなくなってしまうのが悩みです。どうにかしないとって思ってるんだけど、八幡くんと一緒にいる時間が多いからか、この悩みが解決する気配が一向にありません。どうすればいいかな？

まあそれは置いて、今私たちは75階にあるレストランに向かってる最中なんだ。朝のメニューはバイキング形式だけど、作られているのは全て豪華で、各国の有名料理とかも並べられてあるんだ。

あんまりないとは思うけど、朝にビーフシチューってなんか豪華に感じるよね。私はそう思うな。

あつ、勿論日によって変わってるからね！昨日はビーフシチューだったけど、今日はミネストローネなんだよ！他には日本料理ならご飯と鮭と納豆、アメリカならパンケーキやサンドイッチとベーコン、これ以上紹介してもキリがないからこれくらいにするけど、各国の色々な料理が出されているんだよ！

シルヴィア「お腹減ったね。何食べる？」

八幡「俺は……少し沢山食べておくか。なんかそうしたほうがいい気がする。」

シルヴィア「どうして？」

八幡「なんとなく。」

オーフェリア「……なんとなくで決めるのね。」

八幡「直感って大事だぞ。」

その直感をよく分からないけど、間違いではないのかもしれない



ね。本当に分からないけど。

オーフェリア「……………私は何にしようかしら？カレーとミネストローネで迷ってるわ。」

八幡「なら俺がカレーを持ってくるから、オーフェリアはミネストローネ持ってくればいい。そしたら両方楽しめんだろ。」

オーフェリア「……………いいの？」

八幡「ああ。ちなみに聞くが、本格派のカレーか？それとも庶民派のカレーか？」

オーフェリア「……………庶民派のカレーよ。インドのは2日目に食べたのだけど、あまり口に合わなかったわ。」

八幡「そうか……………じゃあインドカレーにするか。俺まだ食ったことねえから。」

オーフェリア「……………意地悪。」ジトー

八幡「冗談に決まってるだろ。」

オーフェリアさんって八幡君の前だと、あんなに表情豊かなんだなあ。他の人の前だと無表情なのに。

シルヴィア「じゃあ私はスペイン風オムレツにしようかなあ。2人はどうするの？スープだけじゃお腹いっぱいにはならないでしょ？」

八幡「俺は一応、カレーに白飯とナン、サラダもつけて味変にチーズだな。量多くするから問題ない。」

オーフェリア「……………私もミネストローネとBLTサンドイッチにするわ。」

シルヴィア「私はボルシチにスペイン風オムレツかな。じゃあさ、恒例の分け合いっこしない？」

八幡「俺は別にいいぞ。減るもんじゃないしな。」

オーフェリア「……………私も構わないわ。」

よしっ！これでまた色んな料理が食べられるね♪

――レストラン――

八幡「利用者が少ないだけあってガランとしてるな。」

シルヴィア「仕方ないよ。此処を利用できるのは、私たちみたいに今75階から上の階に宿泊している人だけだもん。この時期でいうなら、統合企業財体の幹部や大手の企業会社の社長くらいだよ。」

八幡「なんとなくは分かるんだが、ここ使ってるイメージって星導館かガラードワースしか無いんだよな。後の4学園でここ使ってるようなイメージあるか？」

オーフェリア「…………クインヴェールとアルカントもそれなりにあるのではないかしら？」

八幡「クインヴェールはペトラさんを見る限りそう思えないんだよな。あの人、割と庶民的な暮らし好きそうなタイプだし。アルカントは…………アレだな、ベッドじゃなくて椅子で寝てるイメージしかない。」

…………ペトラさんは兎も角、アルカントのイメージが簡単に想像できちゃうんだよねえ。

シルヴィア「取り敢えず決めたメニューを盛り付けて席に座ろうよ。席は最初に準備が済んで座った人の席でどうかな？」

八幡「俺はそれでいいぞ。」

オーフェリア「…………シルヴィア、それは構わないのだけど、迷子にならない？」

シルヴィア「私を幾つだと思ってるの!? オーフェリアさんと八幡くんと同じ17歳です!」

失礼しちゃうなっ、もうっ!

シルヴィア side out

八幡 side

――1時間後――

朝食も食い終わって部屋に戻ったが、もう少ししたら出発するつもりだ。場所はこの六花の南西にある六学園の1つ、レヴォルフ黒学院だ。

八幡「俺は大丈夫だが……もう少し休憩するか？」

シルヴィア「ううん大丈夫！別にお腹が苦しいってわけじゃないから。」

オーフェリア「……私も大丈夫よ、行きましょう。」

八幡「分かった、じゃあ行くか。」

――六花・ロトリヒト歓楽街――

シルヴィア「やっぱりこの辺りは朝と夜とで雰囲気は全く違うね。昼ってこんなにも活気がないんだね。」

オーフェリア「……歓楽街が聞いて呆れるわ。夜は賑やかなのは知ってるけれど、昼にも活気は出してほしいわ。」

八幡「流石に今は早すぎるからな。まだおネムの時間なんだろうよ。俺はどうでもいいが、この歓楽街良くなるんだろうかねえ？」

シルヴィア「そればかりは此処の人たち次第だろうね。でも、レヴォルフにもここを根城にしている人がいるって聞いたけど、どうなの？」

オーフェリア「……小さな規模を数えるとキリがないのだけど、大きな規模でなら1人いるわ。レヴォルフの序列2位【バサドネ砕星の魔術師】の2つ名を持つ男、ロドルフォ・ゾッポよ。」

シルヴィア「序列2位かぁ……また厄介なのがいるんだね。でも、オーフェリアさんの事だから何か対策は取ってあるんでしょ？」

オーフェリア「……いえ、彼には協力を持ち掛けているの。彼の

束ねる《オモ・ネロ》というマフィアの組織はレヴォルフの中にも構成員がいるの。だから情報収集に使えると思ってるの。」

八幡「それを俺たちに言っ正しいのか？」

オーフェリア「…………構わないわ。だって八幡とシルヴィアは信用できるもの。それに彼はデイルク・エーベルヴァインが生徒会長をしている時は距離を取っていたみたいだけど、私が新任になった途端に、動くようになったの。それも私に役立ちそうな情報を優先的に渡すようになったわ。」

シルヴィア「良くも悪くも実力主義ってわけかな？【碎星の魔術師】もオーフェリアさんに勝てないって悟ったのかな？」

オーフェリア「…………まだ分からないわ。彼が情報をくれているだけであって、本当の目的が分からないもの。だから警戒しながらって感じね。もし彼が私の要請に応えてくれたのなら、改めて彼と話そうと思ってるの。」

八幡「…………だが気をつけろよ。幾らお前がレヴォルフの序列1位でも、そいつはどんな能力か分からねえんだ。最新の注意は払っけよ。」

オーフェリア「…………分かってるわ。それに、そろそろレヴォルフに着くわね。何もない所だけど、退屈凌ぎにはなると思うわ。」

それ、退屈凌ぎって言わなくね？

## 元生徒会長

八幡 side

――レヴォルフ黒学院・校門前――

着いたな。此処に来るのは3週間ぶりだが、その時は特に悪い印象はなかったんだよな。まあ学園祭の真っ最中だったからっていうのもあるかもしれないけどな。

最近レヴォルフの生徒がどうこうって噂も聞かないしな。オーフェリアが素行の悪い生徒を懲らしめてる、とかやってそうだ。

八幡「しかし、こうやってみると本当に学院なのか疑っちゃうな。刑務所なんじゃねえの？」

シルヴィア「もう八幡くんってば、幾ら何でも失礼だよ。牢屋があるならまだしもさ……あつ、そういうはあるんだっけ？」

オーフェリア「……ええ。素行や表に出さない方がいい生徒は牢獄に閉じ込めてるの。前生徒会長は懲罰教室って呼んでいたわね。」

八幡「懲罰教室ねえ……その一番奥に入れられてるのが前生徒会長なんだろう？どんな気分なんだろうねえ？」

オーフェリア「……あの中にいる限り、外部との連絡方法は一切無いわ。私が枷を解かない限りはそこから出られる手段もないから。」

シルヴィア「本当に牢獄みたいだね。でもさ、なんで“教室”が付くの？“部屋”とか“牢屋”とかの方がまだ納得できるんだけどなあ。」

オーフェリア「……そこはそういう名前にした人に聞いて頂戴。それじゃあ行きましょう。レヴォルフは校則というものはないに等しいからパスポートも作る必要がないの。だから好きな時に遊びにきてもらって構わないわ。」

八幡「いや、レヴオルフに遊びに来るってレベル高過ぎるだろ。そんな奴いねえって。」

シルヴィア「私もそう思う。」

――懲罰教室――

……あたり壁だが、どこに牢屋があるんだ？何処にも鉄格子みたいなものは見えないが……

バアアアンツ!!

っ!?な、何だ!?

シルヴィア「うわっ!?え？今のって何!？」

オーフェリア「……此処に閉じ込められている生徒の仕業よ。でも安心して、彼らは壁を殴るくらいしか出来ないから。武器も取り上げてるし、さっき言った枷も付けているから。」

何だろう、あまり安心できない。

オーフェリア「……彼のいる場所は此処の更に奥よ。行きましょう。」

――3分後――

オーフェリア「……着いたわ、此処よ。」

八幡「見た目は他とあんま変わらねえのな。壁の中に人がいるって、中々想像出来たものじゃねえな。」

シルヴィア「うん、あまりにも奇想天外過ぎて言葉も出ないよ。」

俺とシルヴィイで話をしていると、横でオーフェリアがロックの解除

をしていた。解除すると、前には鉄格子が張られていて、星脈世代でも力を封じられた状態では抜け出すのは無理だろう。そしてその中に奴がいた。

デイルク「……………今更俺に何の用だ？」

オーフェリア「……………用なんてないわ。ただ、あなたの顔を見たいて人が居たから連れて来ただけよ。」

デイルク「その俺の顔が見たいつてのは、そこにいるクインヴェールの放浪女と界龍の泥棒男か？」

シルヴィア「あゝそれヒドい！放浪女って何さ！いっつも悪い事考えてる君には言われたくないなあ！赤毛豚さん！」

それ、昨日オーフェリアが言っていたあだ名だろ？いや、結構当たってるけどよ。

八幡「おいおい泥棒はねえだろうかよ。俺は正式な形で願いを言っただけだぞ？『レヴォルフ黒学院のオーフェリア・ランドルーフェンを解放してくれ。』って。俺は解放だけで良かったんだが、所有権とやらがあるのは知らなくてな。流れで俺が新しい所有者になっちゃったってわけだ。理解出来たか？」

デイルク「はっ！ テメエに言われなくてもそれくらい理解できる。おかげで俺はこの学院で何も出来やしねえ。なぜか分かるか？」

八幡「此処に閉じ込められている上に、オーフェリアと同じで買い取ったウルサイス姉妹を使えないから、だろ？」

デイルク「………… テメエ、誰から聞いた？」

八幡「本人たちと隣にいるレヴオルフの生徒会長からだ。それ以外に知ってそうな奴なんて俺は知らん。」

デイルク「……………」

八幡「まあそんな事はいい。まあ俺がここに来た理由はお前の顔を見るのもあるが、まだ理由があつてな。教える気はねえけど。」

デイルク「だったらさつさと失せやがれ。俺はテメエの顔見ただけでイライラしてくるんだよ。」

八幡「俺は特に何かした覚えはないんだが…… オーフェリア、俺ってなんかやったっけ？」

オーフェリア「何もやってないわ。そこにいる赤毛豚が勝手に恨みを持つているだけじゃないかしら？」

それはそれで嫌だなあ。しかもこいつから恨まれたとなると、口くさなことが起きないかしれん。

八幡「んじやそろそろ行こうか。じゃあな、多分もう会うことはないと思うけど。」

そしてオーフェリアは再び壁を作り、ロックを掛けた。さて、次は生徒会室だな。



## レヴォルフ生徒会事変

八幡 side

八幡「……………どうしてこうなった？」

プリシラ「比企谷さん！今度は非、料理と武術を教えてください！」  
イレーネ「比企谷、ギャンブルのコツをあたしに教えてくれ！」

ころな「前会長からは何も言われなかったのに、現会長からは占いの結果が的外れ過ぎるって毎回言われます……………どうすればいいですか？」

オーフェリア「……………皆ダメよ。八幡は私のなんだから。用がある子は私の後にしてちょうだい。」

シルヴィア「何言ってるのオーフェリアさん!? 八幡くんは私の彼氏です！決してオーフェリアさんのじゃないんだからね！」

八幡「ホント、どうしてこうなった？」

荒屋敷「比企谷、お前モテモテだなあ。」

皆さんこんにちは、比企谷八幡です。さて、俺は今非常に困惑している。それはレヴォルフの生徒会に来て数分後の事だった。本当にどうしてこうなったのか……

——時は遡って10分前——

俺たちは懲罰教室を後にして、今はレヴォルフの生徒会室に向かつ

ている。現生徒会の交流を深めるためだ。特に何かをするってわけでもないんだが、仲良くしておいても損はないからな。

けど、今の生徒会って女だけだったよな。オーフェリアにウルサイ姉妹、あともう1人……誰だったか忘れたが、デイルクが生徒会長やってた時にもいた奴だ。

これ、単に思いつきなんだけどよ、あともう1人女子を生徒会に入れてその面子で《獅鷲星武祭》出てみりやいいのに。いや、まあオーフェリアの能力で敵も味方も毒でアカン事になりそうだけど。

シルヴィア「それにしても、『悪辣の王』は特に何も変わってなかったね。ちよつとは更生されたかなうって思ってたけど。」

オーフェリア「……彼みたいな人はあまり反省するタイプじゃないから。ただ出られる時を待っているだけだから。それに、此処に入れている人たちは、反省とか、更生とかを目的としていないもの。」

八幡「だが、ただ単に閉じ込めておくだけではないんだろ？何かあるんじゃないのか？」

オーフェリア「……流石八幡ね。その通りなけど、これはレヴォルフのやり方でもあるから、教えるわけにはいかないわ。」

八幡「いや、そんなに知りたいってわけじゃないから大丈夫だ。流石に他学園の事情に突っ込んだりしねえよ。」

そもそも、他学園の奴で他の学園に向かって『こうこうこうした方が良い。』とか言う奴。俺だったら考えられねえけどな。

シルヴィア「でも意外な事もあるんだよね。あの『吸血暴姫』が生徒会に入るとは思ってたよ。オーフェリアさん、何か入れ知恵でも入れたの？」

オーフェリア「……いいえ、何もしてないわ。プリシラを生徒会に欲しいって言ったら、『あたしがプリシラを守る！』って言ったから、役職は庶務と雑務だけれど、主に用心棒として生徒会に入ってる

わ。」

シルヴィア「その話この前もしたけど、やっぱり似合ってるんだよね。」

俺も同感だ。適材適所があるけど、こうも適任な役割を持っている奴は初めてだ。

オーフェリア「……………着いたわ。今開けるから少し待っててちょうだい。」

オーフェリアは生徒会の扉の前で端末を開き、手をかざした。ロックが解除された音が聞こえてきた。

八幡「中に誰もいないのか？仕事とかは？」

オーフェリア「……………いたとしても私は毎日こうよ。邪魔をしたくないもの。」

いや、これくらいどうってことなくね？ただOPENのボタン押せばいい話だからね？

オーフェリア「……………じゃあ、入りましょう。」

そして扉を開けると……………

プリシラ「もうお姉ちゃん！サボっちゃダメってあれ程………って  
会長!?それに比企谷さんとシルヴィア・リユーネハイムさん!!」

オーフェリア「……………ただいま。」

ころな「あれ?確か1週間はお出掛けでもどってこれないんじゃない?  
………」

オーフェリア「……………今日は2人がレヴオルフに来てみたいって  
言ってたから案内していたのよ。それと、1週間も留守にしてごめん  
なさいね。」

プリシラ「気にしないでください。特に忙しいというわけではない  
ので。」

ころな「学園祭で得た収入を計算するくらいしかやることがないの  
で、むしろ暇なくらいなんです。」

そんなにする事がないのか?ガードワースなんてメチャメチャ  
仕事してるぞ?界龍の生徒会はあるようなもんだからどうで  
もいいけど。

イレーネ「戻ったぞープリシラ、ころな。今日は逮捕者1名だった  
ぞ。」

プリシラ「あつ、お姉ちゃん!!もうサボっちゃダメだって言ってる  
のに!!」

イレーネ「サボってねーよ!パトロールに……………ってオーフェリア!  
それに比企谷と【戦律の魔女】じゃねえか。」

八幡「よおイレーネ、相変わらずだな。」

シルヴィア「こんにちは。それよりも、逮捕者って言ってたけど、  
放っておいて大丈夫なの?」

イレーネ「あん?こいつは逃げねーから大丈夫だよ。」

荒屋敷「そうそう、逃げねーから大丈夫だって。」

……逮捕されたのお前かよ。

八幡「何やったんだよお前は……」

荒屋敷「いや、前から生徒会からオファアもらってたから返事に行こうと思ってよ。そしたら丁度こいつが通ってたから捕まった。」

シルヴィア「捕まったの使い方間違えてるよ……」

イレエネ「にしてもオーフェリア、1週間は戻らないんじゃないか？  
たのか？」

オーフェリア「……2人に学院を案内していたのよ。今日は帰ってきたわけじゃないわ。それで、返事を聞かせてもらってもいいかしら？」

荒屋敷「ああ。答えは……NOだ。俺はどっかに属するなんて束縛はゴメンだからな。」

オーフェリア「……そう。」

荒屋敷「悪いな。あつ、でもなんか奢ってくれるんなら手伝いくらいはするぜ。主に男をボコるの専門でな。」

オーフェリア「……もしイレエネでも手が追えない相手の時はそうするわ。」

……まあなんとなくは予想出来てたから驚きはしなかったな。  
なんとなくそんな男だとも思ってたからな。

それから俺たちは少しだけ話をしながら交流を深めた。何度も櫛丸があたふたする場面があったが、問題ないのでスルーした。

そして帰る時に……

シルヴィア「オーフェリアさん、八幡くん。そろそろお暇しない？  
お昼だからお腹も空いてきたし。」

オーフェリア「……そうね。なら、また八幡の料理が食べたいわ。」

八幡「おい、自分は樂する道まつしぐらじゃねえか。ちよつとは手伝え。」

プリシラ「そういえば比企谷さんもお料理するんでしたね。」

八幡「ああ。一般レベルだけだな。」

シルヴィア「八幡くん、お願いだからあのレベルを一般的って評価するのはやめて。そしたら私の料理なんて犬の餌だよ？」

八幡「いや、それはそれでどうなんだ？」

ころな「そんなに美味しいんですか？」

シルヴィア「美味しいなんてレベルじゃないよ。もう一流レベルなんだから。一度食べさせてあげたいよ。」

オーフェリア「……………そうね、頬が落ちるとはよく言ったものね。」

八幡「やめろよ。そんな大したことじゃねえよ。」

シルヴィア「それに聞き上手だから愚痴とかも言いやすいんだよね。料理が出来て、聞き上手で、武術の達人で、歌が上手！多彩だよね。」

つたく、言いたい放題だな。いや、別にいいんだけどよ。悪口言われてるわけじゃないから。

プリシラ「比企谷さん！今度は非、料理と武術を教えて下さい！」

イレネ「ならあたしには、ギャンブルのコツを教えてください！」

ころな「前会長からは何も言われなかったのに、現会長からは占いの結果が的外れ過ぎるって毎回言われます……………どうすればいいですか？」

オーフェリア「……………皆ダメよ。八幡は私のなんだから。用がある子は私の後にしてちょうだい。」

シルヴィア「何言ってるのオーフェリアさん!? 八幡くんは私の彼氏です！決してオーフェリアさんのじゃないんだからね！」

荒屋敷「比企谷、お前モテモテじゃねえか。」

ここで冒頭に戻る。いや、なんとなく自分でも流れは分かるんだ

が、どうしてこうなった？

そして結論を言おう。

ウルサイス妹は時間と余裕がある時に出来る。

イレ―ネは引き時を覚えなさい。

檉丸、それはしや―ない。だって占いだもん。絶対じゃないから。

## ヘルシーな昼食

シルヴィア side

全くもう！皆して八幡くんを取り合うんだから！八幡君は私の彼氏なんだから優先権は私にありますっ！

過ぎたことはもう置いておこうか。私を含めた3人はレヴオルフを出て商業エリアに来ています。理由は昼食を食べるため。この旅行中は色んなのを食べたけど、他に食べてないのってなんだろう？

シルヴィア「ねえ八幡くん、今まで行ってきたお店以外でどこか無い？」

八幡「あるにはある。だが俺はオススメしないな。」

シルヴィア「え？どうして？」

八幡「俺たちが作る時はバランスが取れていたからいいが、外食だとメインしか食べないからどうしても野菜が足りなくなる。今までのを振り返ったら、少しヘルシー系なのを食べてみてもいいと思う。」

オーフェリア「……確かにそうね。私は最初の日の昼食は食べてないけれど、それ以降はカロリーの高そうな食べ物ばかりだったわね。」

成る程……それは確かに盲点だったなあ。うん、八幡くんに賛成。だって八幡くんに太った所なんて見られたくないから！

オーフェリア「……でも都合よくあるかしら？野菜メインのお店だなんて。」

八幡「別に野菜にこだわる必要はないと思うぞ。カロリーの低い食材は肉にもあるからな。例えば馬肉とか鹿肉は牛や鳥に比べてないと言っていくらい低カロリーだからな。」



シルヴィア「さすが八幡くん、いろんなことを調べてるんだね。」

八幡「料理は俺の数少ない趣味の1つだからな。それに……ん？  
なあ、あの店はどうだ？」

2人「？」

——リピルカー——

八幡「看板見れば分かると思うが、野菜メインの品を出してくれる  
みたいだ。」

シルヴィア「良いねえ！賛成！」

オーフェリア「……………私も賛成よ。」

ちようどいいタイミングで良いお店があつてラッキー♪

店員「いらつしやいませー！あつ……………3名様でよろしかったです  
か？」

？今の『あつ』って何だろう？

八幡「はい。」

店員「ではお席へ案内します。」

私たちが案内されたテーブル席は窓際から離れていて一通りが少  
し少なそうな場所だった。これはこれでありがたい。だって、周りか  
ら注目されていたまんまだったら食べ辛いからね。

店員「ではこちらメニューになります。お決まりになりましたらそ  
ちらのボタンを押して下さい。ごゆっくりどうぞ。」

八幡「さて、何にするか……」

シルヴィア「へえ、意外と種類があるんだね。」

オーフェリア「……………どれも美味しそうだわ。」

――5分後――

ピンポーン

店員「お待ちせいたしました。ご注文をお伺いします。」

八幡「ひとくちキツシユのジャガイモとカボチャとキノコを1つずつ。ロールキャベツのスープを1つ。野菜スープを1つ。いも餅を1つずつ。以上です。」

店員「かしこまりました。それではお作りいたしますので、少々お待ちください。」

そして店員さんはまた厨房の方へと戻って行った。

このお店は当たりかもね。内装も外装も綺麗だし、メニューも少しおふざけな感じが含まれてあったから好感が持てる。

八幡「しかし、明日以降はどうする？明日はクインヴェールに行くからいいとして、その次だ。なんも予定がないぞ。」

オーフェリア「…………エルナトで過ごすのは無理があるわね。1日中においても退屈になるだけだわ。」

シルヴィア「そう言われると、確かに行くところがなくなっちゃったね。他に何処かあったかなあ？」

八幡「他学園に押し掛けるか？」

シルヴィア「やめなよ、絶対ビツクリするから。それに、そんな事したらオーフェリアさんが可哀想だよ。生徒会長になったとしても、周りからは【孤毒の魔女】って印象が強過ぎるんだから。」

八幡「いや、冗談だよ？俺がそんなことするわけねえだろ。」

オーフェリア「……………私は周りのことなんて気にしないわ。私が信頼している人を信じるだけだもの。私の中で信頼している人は3人だけ……………言わなくても分かるわよね?」

八幡「俺は分かんから教えてくれ。教えてくれたら食材の一口食べさせてやる。」

オーフェリア「……………口移しで?」

八幡「おい、流石にそれは冗談キツイって。一つやるって意味だよ。俺の頼んだキツシュを。」

オーフェリア「……………遠慮しなくてもいいのよ?」

八幡「誰がいつ遠慮したよ?彼女がいる前で他の女に口移しで食べさせるバカいるか?シルヴィも黙って俺をガン見しないでくれ。大丈夫!やらないから!」

……………ふう、しょうがないなあ。まあ冗談だっていうのは分かっていたからいいけど、もし本当にやっていたら……………八幡くんの唾液が全部なくなる所だったよ?勿論、私の口の中にね?

……………10分後……………

店員「失礼いたします。こちら一口キツシュ、カボチャです。」

シルヴィア「はい♪」

店員「キツシュのジャガイモです。」

オーフェリア「……………私よ。」

店員「キツシュのキノコです。」

八幡「はい。」

店員「続いてロールキャベツのスープです。」

オーフェリア「……………私よ。」

店員「続いて野菜スープです。」

シルヴィア「はい。」

店員「最後にいも餅です。以上でご注文はお揃いでしょうか?」  
八幡「はい。」

店員「ありがとうございます。ではごゆっくりお寛ぎください。」

八幡「美味そうだな。野菜だけでもこんなに違うんだな。作り方なんだな……」

オーフエリア「……そうね。私も料理の勉強を試みようかしら？」

シルヴィア「私もそう思っちゃった。でも今は食べようよ！八幡くん、お願い！」

八幡「俺じゃなくてもいい気がするんだが？」

シルヴィア「雰囲気の問題だよ！ほら早く！」

八幡「分かった分かった。それじゃ……いただきます。」

2人「いただきます！」

## 街歩きと騒動

シルヴィア side

昼食を食べ終わって、私たちは六花の街を歩いています。なぜ今更街を歩いているのかというと、オーフェリアさんが、『……………あまり街を歩いた事がないから、街を歩いてみたいのだけど、いいかしら？』って言うてたから今は商業エリアの真ん中辺りを歩いてます。

でもオーフェリアさんが街を歩いてみたいっていうなんて意外だなあ。インドア派だと思ってたけど、こんな事も言うんだね。

オーフェリア「……………何度かは街に歩いた事はあるけれど、やっぱり飽きないわね。」

八幡「町歩きしている方だと思っていたんだが、そうでもないのか？」

オーフェリア「……………確かに歩くのだけど、あまり学院から遠くには行かないの。私はこの六花からはあまり良い風には見られていないから。」

シルヴィア「それは……………確かにそうだけど、オーフェリアさんが自分を見せれば皆納得すると思うんだけどな。」

実際にオーフェリアさんは、お花を大切にする優しい人だから。それに、八幡くんに対する思いにも嘘なんて感じない。度が過ぎてるって感じる時もあるけど、それだけ八幡くんを気にかけてるってことだからね。

え？よく見てるんだって？そりや八幡くんにあれだけの事をする程なもの。嘘をついてるなんて思えないよ。

オーフェリア「……………自分を見せる……………でも私は、私の認めた人に

しか自分の素顔を見せたくないわ。八幡やシルヴィアのように、私が本音を出してもいつも通りに接してくれる人じゃないと嫌。」

八幡「……まあこればかりは俺たちがどうこう言っていいたいような問題じゃないな。オーフェリア、お前自身で決めることだ。いいと思った奴には自分を曝け出せばいい。それでもしダメだったら、そいつはそれまでの奴だつてことだ。」

オーフェリア「……………ええ、ありがとう八幡。」

やっぱり八幡くんは優しいなあ。だから好きになつたんだよね。ほとんど一目惚れだったけどね。

オーフェリア「……………八幡はどうかしら？自分をさらけ出している相手はいるの？」

八幡「そんなのシルヴィに決まつてるだろ。俺の本性を見せられるのはシルヴィだけだ。」

シルヴィア「でも普通の目線から見たら、あんまり変わらないけどなあ。何処かわわつてる？」

八幡「シルヴィはわかつてないと思うが、俺はいつもシルヴィアの斜め前にいるようにしてるんだ。今もそうだろ？」

シルヴィア「あつ！確かに斜め前くらいにいる……………でもこれになんの意味があるの？」

八幡「それは「比企谷八幡っ!!」……………ん？」

シルヴィア「え？」

オーフェリア「……………？」

声のした方向に向くと、グッズで売られていたクインヴェールの制服を半被にしたようなのを着た男の人3人組がいた。

八幡「えーつと……………何か？」

男1「『何か？』だど!?貴様我々の憧れであるシルヴィア・リユーネハイムに気安く近づくな!!」

男2「シルヴィアさんはお前のような何処の馬の骨とも知らぬ下賤な奴が近づいて良いようなお方ではないのだ!!分かったらさっさと離れろ!!」

男3「それから、半年前に交際しているという発表があったが、あれも撤回してもらおう!!今すぐシルヴィアさんと交際している事を嘘だと言え!!」

………最近いなくなつたと思つたのに、やっぱりまだいたんだなあ、反対派の人たち。それにしても言いたい放題言ってくれてるなあ。

八幡「……つまり、シルヴィから離れて交際している事も嘘だと言えばいいのか?」

男1「物分かりが良いじゃないか!!その通りだ!!」

八幡「誰がそんなことするかよ。」

男2「な、何イイイ!!?」

八幡「お前らがなんて言おうと、シルヴィは俺の女だ。これは俺だけでなくシルヴィも選んだ道だ。お前らの意見なんて聞く義理はない。」

男1「貴様!!我々の言うことが聞けないというのか!」

八幡「そう言つてんだろうが。それとも何か?今ここで決闘でもするか?」

男3「ふんっ!その手は想定済みだ!我々は非星脈世代なのだよ!もしお前が我々を攻撃したら、お前はこの六花からはいられなくなる!」

この手口は珍しくない。気に食わない人がいれば、自分が星脈世代じゃない事を利用して攻撃をさせる手口。基本的には星脈世代は非星脈世代の人を傷つけてはいけないことになっている。もしそんな事をしたら、本当に六花から追放されてしまうから。

八幡「……成る程、要は自分たちじゃこんなチンケな手でしか俺を脅す事が出来ないから、徒党を組んでこんな事をしたって訳か。なんとも下らねえな。いかにも陰険そうな奴よしそんなことだ。」

男1「な、何だと!？」

八幡「違うのか？俺が星脈世代で、お前らが非星脈世代だからこうしたんじゃないのか？俺にはそうとしか思えないがな？」

男3「ち、違うに決まっているだろ!」

八幡「違ったか……なら分かるように教えてくれ。俺の考え以外でどんな風にしようとしたんだ？」

男1「そ、それは………」

男2、3「………」

凶星、みたいだね。本当の事を言われちゃったから何も言えないんだろうね。

八幡「………どうやら、俺の言っていたことで合っているみたいだな。本当に下らん事するなあ。それに、もし俺がお前らだったら、もっと上手く立ち回るぞ?」

男2「だ、黙れ!偽善者め!!お前のような奴にシルヴィアさん「その貴方たち。」ん?何だ?その白髪よ。」



オーフェリア「いい加減にそのうるさい口を閉じてもらえないかしら？ 私の大切な人をこれ以上侮辱しないで。」ゴオオオオ!!

男たち「!!？」

オーフェリアさんが急に喋り出したかと思ったら、すぐく怒ったような顔（普通の人から見れば無表情）をしながら、男の人たちを睨みつけていた。

オーフェリア「八幡は私の恩人よ。その人を誹謗中傷する人は何人であろうと許さないわ。貴方たちがどれだけ偉いのかは知らないけれど、そこまで言われて我慢できる程、私は我慢強くないわ。」ゴオオオオ!!

うわっ！オーフェリアさん本気だ！これ止めないと！

八幡「オーフェリア止せ。」

オーフェリア「八幡、でも……………」

八幡「でももへったくれもねえよ。こいつらにそんな価値はねえよ。いいからその星辰力を抑えろ。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

……………オーフェリアさんの星辰力が段々と無くなっていった。

男2「ふ、ふう……………助かった。分かって「勘違いするなよ？」……………え？」

ゾクッ!!

これってもしかして……………葉山くんにも使った威圧かな？ たしか

……虎威だったかな？

八幡「今のはお前らの為にやめさせたわけじゃねえ。オーフェリアのためにやめさせたんだ。本当なら俺がお前らをやらなきやいけないところを代弁してやってくれたわけだが、流石にあればアウトだからな。」

八幡「言っておくが、もう何も言うなよ？これ以上、不快な思いをしたくないんでな。分かった奴から失せろ、これは命令だ。」

そう言つて八幡くんは威圧を弱めた。すると、男3人組は一目散に逃げて行つた。

八幡「……なんか悪いな。」

シルヴィア「どうして八幡くんが謝るのさ!?悪いのはあの人たちなんだから気にしないで!」

オーフェリア「……その通りよ。あなたが気にすることではないわ。」

八幡「……ありがとな。」

その後は何事もなく、六花の街を歩くことが出来た。それにしてもオーフェリアさんって、八幡くんの事になると、あんな風になるんだなあ……すごい迫力だったよ。

## 星武祭に向けて

オーフェリア side

……あの3人、八幡が居たから助かったものの、次に八幡を侮辱するような言動をしたら、私の学院の非星脈世代を集めて血まつる……ボコボコにしましょう。八幡をバカにするなんて万死に値するわ。

……八幡の良い所は沢山あるわ。優しい、暖かい、世話上手、教え上手、聞き上手、話し上手、気が利く、頭が良い、強くてカッコいい、武術の腕が達人並、武器術も達人並、魔法の使い方が多彩、歌も一流、料理の腕も一流、他にも色々あるのだけど、言ったらキリがなくなってしまうからこれくらいにしておくわ。

……そんな私たちは、あの3人組の一件が終わってから、再び街歩きを再開した。屋台で売っている食べ物を買って食べたり、気になったお店に寄ってみたりと面白い事が体験出来たわ。

……今は夜の7時。夕食を食べ終えて部屋でのんびりする時間ね。私？私は今、シルヴィアと一緒にソファで寝転んでるわ。八幡が来てくれないのは残念なのだけど、それは初日から諦めてるわ。

シルヴィア「八幡くん……こっちに來て私たちと一緒に寝転がろうよ。」

オーフェリア「……八幡、こっちにいらっしやい。」

八幡「……お前ら少し不気味だぞ？それにそのソファには近寄らん。そいつは俺の敵だ。」

シルヴィア「大丈夫だよ、何もしてこないから。あの時は八幡くんがバランスを崩しただけで、ソファは何もないから！」

……そうよね、ソファに仕掛けなんてあるはずがないわ。まして

や、ホテル・エルナトの最上級スイートルームの部屋に仕掛けをしよ  
うなんて罰当たりにも程があるもの。

八幡「兎に角、俺はそのソファには寝転がらないし、座らない。少  
し惜しい気もするが、これは決定事項だ。」

シルヴィア「ちえー八幡くんつてば変なところで頑固なんだから。」  
オーフェリア「……………仕方ないわね。」

……………今日のところは見逃してあげるわ。

シルヴィア「そういえば八幡くん、こんなこと聞くのもアレだけど、  
《獅鷲星武祭》に向けての調子はどう？」

八幡「本当にアレだな……………そうだな、界龍は他の学園から見ても  
明らかに強さに磨きがかかってるから、個人戦では問題ない。チーム  
戦でどれだけ補い合えるかだな。」

オーフェリア「……………聞く限りは問題なさそうね。でも今回もガ  
ラードワースからチーム・ランスロットが出場するし、クインヴェー  
ルからチーム・ルサルカが出てくるわ。対策は？」

八幡「それは今考えても仕方のないことだな。確実に強くなってい  
ると思う。だからその時になってからだな。相手の戦術や動き方、3  
年前とは違ってくるだろうから、その時に考える。」

……………意外に余裕というか、割と考えているのね。

八幡「一応過去の星武祭の動画も見るが、そこまで参考にはならな  
いと思ってる。1番参考になるのは、当日の戦いだからな。」

シルヴィア「……………つまり、その日に戦っている動き程、参考になる  
ものはないってことかな？」

八幡「大雑把に言うとな。まあ過去の動きも見ておくことに越した  
ことはないけどな。」

オーフェリア「……………でも八幡、この大会ではあの男も出てくるわ

よ。」

八幡「ああ……葉山の事か、まああいつのことだから俺狙いだろう。けど、奴の序列なら警戒することもないな。それ以外の選手も全員序列外だったからな。心配ないだろう。」

シルヴィア「でも油断しないでね？彼が何かするとは思えないけど、もしもって可能性があるから気を抜かないでね。」

八幡「ああ、分かってる。」

オーフェリア「……八幡、貴方は優しいけど、この男にはその優しさを捨てて。」

八幡「……ああ、そうする。学園祭でお前らにやったことを考えたら当然だ。」

……今から半年も先だけれど、注意するに越したことはないものね。あの男も何をするか分からないのだから。

※逆もアリなの？

八幡 side

旅行5日目の朝の6時。起きた時には予想通りの展開、両腕には2人の美女が腕に抱き着いて快眠という名の睡眠を取っていた。俺がこんな思いをするのって俺が起きる時間が早すぎるからなのか？毎朝6時くらい、遅くても7時には起きる。6時って早いかな？

そんなわけで、旅行開始日から今日まで毎日2人の腕が俺の腕に絡みついているわけです。いや、迷惑ってわけじゃないよ？たださ、俺も男なわけよ。毎日こんな風に美少女が隣にいとドキドキしまうんだよ。引き剥がそうにも、この2人すぐに引っ付いてくるんだよ。

どうしろって言うんだよ……バレずに2人から逃れる手があるのなら教えてほしいものだよ。

シルヴィア「んんう……八幡くん……」

オーフェリア「……八幡……」

八幡「……起こせねえよなあ。」

どうやってこの2人を起こせてんだよ。いや、今の時間に起こすわけではないが、もし起こす時間になったらどういう風に起こそう？昨日みたく身体揺するくらいしかなくね？

シルヴィア「……八幡くん、抱っこ。」

……今それは出来ません。両手が塞がってます。

……1時間後……

八幡「んじや顔洗って着替えて待ってろ。もう1人が起き次第、すぐに同じ事させるから。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

はい、というわけで昨日とは違う展開になりました。今日はオーフェリアが先に起きて、シルヴィアが寝ています。何？2人でスケジュールでも立ててるの？

八幡「シルヴィ……………オーフェリアはもう起きたぞ。シルヴィは起きないのか？」

シルヴィア「すう……………すう……………」

……………寝てますね、はい。

……………30分後……………

八幡「……………」

オーフェリア「……………起きる気配がないわね。」

八幡「昨日のオーフェリアもこんな感じだったぞ。しかも変な寝言言ってた。」

オーフェリア「……………寝言？」

八幡「お前、飯の夢を見てなかったか？」

オーフェリア「……………ええ。見ていたけど、そこまでよく覚えていないわ。」

八幡「寝言で『味噌汁おかわり』だの『八幡の作る晩ご飯』だの、俺も何言ってたって思っちゃったよ。」

意味の分からないものほど面白いのはないな。オーフェリア自身は面白くないだろうが、聞く方に回れば気持ち分かるだろう。

シルヴィア「んん……………八幡くん……………」

八幡「おー。此処にいるから早く起きてくれ。朝飯無くなるぞー。」

シルヴィア「……………」

八幡「はあ……………やっぱダメか。」

オーフェリア「……………他に起こす方法はないの？昨日私にやったやり方とかは？」

八幡「あるにはあるが、過激になりすぎるからダメだ。あの起こし方はもうゴメンだ。」

オーフェリア「……………どんな起こし方なの？」

ええ……………それ聞いちゃう？だってお前、アレだよ？濃厚な接吻だよ？デープなヤツだよ？俺自身も嫌ってわけではないが、できれば封印したままでいたい。

八幡「……………俺がキスするって言ったら、デープなキスをシルヴィが気の済むまでやり続けるってやつだ。俺は1回だと思ってたんだが、その後もやり続けてな……………色んな意味でヤバいんだよ。」

オーフェリア「……………気になるけれど、貴方の顔を見てやらないほうがいいって思ったからやめておくわ。」



八幡「ああ、頼むからやれなんて言わないでくれ。」

アレは俺だけじゃなく、シルヴィのメンタルも傷付ける。割と深く  
抉るような感じで。

シルヴィア「ん、んんう……ああ八幡くん、オーフェリアさん、お  
はよう……」

八幡「ようシルヴィ。まだ眠いか？」

シルヴィア「ううん、割と目覚めはいい方だから。寝ぼけてる時も  
多いけど。」

八幡「確かに。だが、その様子なら大丈夫そうだな。顔洗いと着替  
え済ませてこい。今日はシルヴィんとこの学園に行くんだからな。」

シルヴィア「あつ、そうだった！ゴメンね、すぐに用意するね！」

シルヴィはそう言うのと、直ぐに部屋を出て行った。恐らく着替えを  
取りに行つてから洗面台に行つたのだろう。

さて、じゃあ俺も着替えるか……

オーフェリア「……………ご主人様、お着替えのお手伝いをいたしま  
す。」

八幡「お前はいつから給仕になった？そんなのはいいからこの部屋  
から出てけ。」

オーフェリア「……………私の事は置物と考えてもらつていいわ。だか  
ら「どう考えても無理だ。視線が気になり過ぎる。」……………分かつた  
わ。」

八幡「……………後、もう一つ言っておく。扉の隙間から覗くのも無しだ  
からな。」

オーフェリア「……………流石にそんな変態じみたことはしないわ。」

さつきまで堂々と見ようとしていた変態は何処のどいつだ。誤魔

化せてねえよ。

八幡「まあいい、取り敢えず下で待ってろ。俺も着替えたらすぐに行くから。」

オーフェリア「……………分かったわ。」

ボタンツ

……………やつと行ったか。さて、俺も早く着替えねえとな。一番早く起きたのに一番遅いのが俺だったら、シャレにならないかな。

入校許可？

八幡 side

八幡「しかし、いつ連絡したんだ？」

シルヴィア「昨日の夜。だって3日間も歩きで学園を回るのは少しツイと思って。」

八幡「俺は大した事ないが、辛いのは確かだな。連日の疲れも足に残ってるから、この移動手段はありがたい。」

オーフェリア「……………そうね、快適だわ。」

シルヴィア「それなら頼んでおいた甲斐があつたよ！よかった♪」

はい、今は朝の10時です。俺たちは朝食を食べた後にクインヴェールに向かうためにホテルを出たのだが、目の前にはリムジンが止まっていた。それだけなら良かったのだが、運転手がいきなり後部座席の扉を開けてきて、俺たちの苗字を言ってきたのだ。当然俺たちは訳が分からなかったが、シルヴィがクインヴェールまで送るように頼んでいたみたいだった。

流石はシルヴィだ、機転が良い。

八幡「俺もこれくらい気を回していたら良かったのにな……………周りが見えていなかった証拠だな。」

オーフェリア「……………そんな風に自分を卑下しないでちょうだい。それを言うなら私だってこんなこと思いつかなかつたのだから。」

八幡「じゃあ、シルヴィアが凄いつてことだな。俺たちの事を考えてくれたシルヴィにお礼でもしないと。」

シルヴィア「ちよつとやめてよ！私は別にお礼目当てでした事じゃないんだから！

八幡「分かつてるよ、ちよつとした冗談だから。じゃあシルヴィ、お礼は何がいい？」

シルヴィア「ねえ、ちつとも分かってないよね？」

八幡「頭ナデナデか？膝枕か？抱き締めか？お姫様抱っこか？それ以外でもいいぞ。クインヴェールに着いたら即やってやるから。」

シルヴィア「八幡くん冗談だよ！？すぐく魅力的な提案だけど、流石に恥ずかし過ぎるよ!!せめて2人きりの時にして!!」

オーフェリア「…………付き合っているのに、何故そんなに恥ずかしがるの？」

シルヴィア「そりや恥ずかしいよ！オーフェリアさんだって想像してみなよ！公衆の面前で八幡くんにお姫様抱っこされてたらどう思う？」

（オーフェリア・妄想中）

オーフェリア「…………とても恥ずかしいわね／＼／やってもらいたいけれど、確かにこれは2人きりの時にして欲しいわね。」

シルヴィア「そうでしょ！だから八幡くん！そのお礼は私の部屋でしてね♪」

八幡「いや、冗談なんだけ「え？何言ってるの？」…………いや、だから冗談「ん？」…………シルヴィの部屋に着いたらやらせて頂きます。」

本当に冗談のつもりだったのに…………マジでやるのか。いや、別にいいんだけどね。

クインヴェール女学園――

運転手「到着致しました、皆様。リユーネハイム様、本当にお帰りは来なくてもよろしいのですか？」

シルヴィア「はい、大丈夫です。ありがとうございました。」  
運転手「かしこまりました。」

俺たちが全員降りると、運転手はドアを閉めて運転席へと戻り、そのまま中央区へと戻って行った。

八幡「……今更だけどよ、本当に俺がこの学園入ってもいいのかな？男だよ？校則破りだよ？」

シルヴィア「もう……八幡くん、ここまで来たなら腹を括つてよ。いつもの八幡くんなら堂々としてるでしょう？そんな八幡くんになつてよ。」

八幡「あのさ、逆のこと考えてみ？男しかない学園に女のお前が行くつてなったら行きたいって思えるのか？絶対嫌だろ。」

シルヴィア「確かに嫌だけど、男の子の場合は別でしょ？八幡くん頭の整理できてないから分かってないと思うけど、女の子しかないって事はハーレムってことなんだよ？」

八幡「いや、興味ないから。俺もうシルヴィっていう彼女いるから他の女なんて興味ない。」

シルヴィア「っ！………そ、そっか／／／／／」

何故このタイミングで顔を赤らめるんだよ。

オーフェリア「………2人共、そろそろ行きましょう。シルヴィアも、八幡が入ってもいいかどうか、此処の偉い人に聞いたほうがいいわ。」

シルヴィア「そ、そうだね！じゃあ行こっか！」

——クインヴェール・校門前——

シルヴィア「じゃあ八幡くんも入っていいかどうか聞いてくるから、ちよつと待ってて！」

そう言つてシルヴィは門の前にいる女性警備員に話しかけた。普通なら門前払いを食らつてそうな俺だが、シルヴィがいるのが効いてるんだろな。

オーフェリア「…………クインヴェールはやっぱり明るいね。学校が綺麗だわ。」

八幡「色とりどりで鮮やかだよな。界龍は中華一色だし、レヴォルフは……言い方悪いが、刑務所みたいな見た目だからな。」

オーフェリア「…………言い得て妙ね。なんだか納得できるイメージだわ。」

だってそんなイメージしかないだろ、レヴォルフの見た目つて。他に何がある？

シルヴィア「おまたせ。八幡くんの許可降りたよ。」

オーフェリア「…………随分早かったわね。」

シルヴィア「うん、ペトラさんと話してから。『遊びに来たんだけど、許可してもらえないかな？』ってお願いしたら、簡単にOKもらえたよ。」

八幡「…………ちよつと簡単すぎるのが気になるが、まあいいだろう。」  
シルヴィア「そうそう！気にしない気にしない！ほら、早く行こうよつ！クインヴェール女学園はすぐ目の前なんだから！」

## クインヴェール巡り

シルヴィア side

でも意外だったなあ……ペトラさんなら断ると思ってたのに、まさか入れちゃうなんて。それだけ八幡くんの事を認めてるってことなのかな？まあ私としてはありがたいからいいんだけどね。

でも、やっぱり視線は免れないね。オーフェリアさんと、特に八幡くんに対する好奇の目は一向に止まない。クインヴェール自体、訪問する人が少ないって理由もあるけど、やっぱり男子禁制の学園に男の子がいるっていうのがよっぽど気になるみたいだね。

八幡「中もやっぱ綺麗だな。入るのは2度目だが、自然が豊かだ。界龍にはこんな場所ないからな。」

シルヴィア「クインヴェールでは、売り出し中の子や駆け出しの子は皆この学園の何処かにある写真スポットでプロフィールに使う写真を撮ってるんだよ。私もそうしてたしね。」

八幡「じゃあシルヴィイの場合は自撮りか？ルサルカの面子なら撮り合うこと事ができるが、シルヴィイはソロだろ。撮ってもらったとか？」

シルヴィア「ううん、私は自撮り。最初は苦労したなあ……皆最初は1からスタートだから何も知らない状態からスタートするの。そこからグループやチームを作ったりする子もいれば、1人で活動する子もいるからね。私の場合は1人だね。でもその分、やる事も一人でこなさなきゃいけないから、相当な覚悟がいるね。だから1人でやる子は誰よりも強い心と根気が必要なの。」

シルヴィア「私の歌い始めはクインヴェールの中でのコンサートだったけど、ヒドかったなあ。音程もリズムもバラバラ、声だっとうまく出せなかったんだから。」

八幡「下積み時代があるってのは知ってたが、シルヴィイのそういう

のはあまり想像出来ないな。」

オーフェリア「……………そうね、貴女はどちらかというとなんでも出来てしまいそうなイメージが強いわ。」

シルヴィア「や、やめてよ2人共、恥ずかしいなあ／＼まあ私も色々やってきたんだ。路上ライブ、握手会、イベント、ゼロ観衆ライブ、もう数え切れないかな。でも、1番私が有名になれたのは、星武祭があつたからだと思う。」

初めての星武祭、《王竜星武祭》で準優勝した事だね。あれで私の株は一気に上がった。そのおかげでペトラさんからのスカウトが来て、歌だけじゃなく戦闘面でも技術向上に磨きをかけた。そんな日々を送っていたら、いつの間にか世界公演にまで手が届くようになって、《世界の歌姫》なんて呼ばれるようになっていた。

八幡「……………成る程な。そんなアイドル人生だったのか。だが、ゼロ観衆ライブって何だ？」

シルヴィア「ああ、それは何にも予告されていない状態、つまりお客さんは誰もいない状態でライブをするっていう事。」

オーフェリア「……………想像以上に辛い事をしてきたのね。」

シルヴィア「だから今の私がいるんだけどね。ほら、私の昔話はいから、クインヴェールを色々回ろう♪」

——クインヴェール・校舎内——

八幡「なあシルヴィ「だゝめっ♪」……………せめて最後まで言わせてくれよ、頼むから。」

シルヴィア「分かっているからね、視線が気になるから離れてくれているって言うんでしょう？」

八幡「ああ。それはもう片方の奴にも言えるけどな。お陰で女子の目は俺に刺さってるよ。」

オーフェリア「……………これくらい良いじゃない。減るものではない



でしょう？」

八幡「俺のメンタルが減っていくんですけどねえ？ただでさえ注目されてるんだぞ？なのに何でそれ以上に注目されるようなことするんですかね、君たちは？」

私は八幡くんの彼女だから大丈夫だもんね♪

シルヴィア「もう、そんな事はいいから！ほら行こっ♪」グイグイ八幡「分かったから手をはな「うん、ダメ♪」……オーフェリアは？」

オーフェリア「……八幡の腕、暖かいわ。」

八幡「遠回しにNOって言ってるんだよな？もう分かった、このままでいい。」

この時、クインヴェールの女子生徒はこう思っていた……

「「……意外に苦勞しているんだなあ。」」

——コンサート広場——

シルヴィア「此処はクインヴェールだけしかない設備で、歌を歌いたいときに使う所だよ。此処の面白いところは設定によって評価の基準が変わってくる所なんだよ。」

オーフェリア「……どういうこと？」

シルヴィア「例えば、観客500人くらいのスタジアムでライブをしたい時はそれを入力してライブをするの。そしてその時に歌った声の音量や響きなんかを評価してくれるの。」

八幡「つまりは、観客がいる前提で模擬ライブをして、どれだけ声を出せているかってのを見てくれるってわけか。」

シルヴィア「そつ。だから結構色んな子が使ってるんだ。私もライブの前々日くらいにこれを使ってるんだ。八幡くんも使ってみる？」

八幡「もしまたライブの依頼があつたらな。俺がどのくらい出せているのかも知りたいしな。」

シルヴィア「今やってみればいいよ！この前の千葉でやった時の観客人数を入力して歌ってみれば？」

まあ、私が久しぶりに八幡くんの歌声を聴きたいって理由もあるんだけどね。

八幡「そうだなあ……自分の声の大きさを知るにも良い機会だしな。じゃあ歌ってみるか。シルヴィ、設定のやり方教えてくれ。」

シルヴィア「OK♪」

主な設定内容はこちら♪

歌名、観客人数、これだけです！たったこれだけで評価してくれるんだから凄いいよね！

八幡「じゃあ《innocence》で9000人だな。」

八幡くんは入力し終わるとOKボタンを押して、1分間の準備時間に突入した。

八幡「すぐには歌わせてくれないんだな。」

シルヴィア「本物を想定するためにも、歌う前って何かしら言うでしょ？それも含めた練習なんだ。」

オーフェリア「……この機械、凄く本格的なのね。本番と同じじゃない。」

うん、それは私も思うよ。でもでも、久しぶりに八幡くんの歌が聴けるからいいじゃん♪

——クインヴェール・各所——

「ん？通知？………え！？比企谷さんの声量ライブ!?」

「嘘っ!?ライブするの!?さっき見かけたけど、今から声量ライブ!?」

「こうしちゃいられないよ！早く会場に行こっ!!」

「うんっ!!」

「ちよつと大変だよ!!」

「はあ………はあ………何？今模擬戦中だよ。」

「それどころじゃないよ!!今から比企谷様の声量ライブをやるって通知が来たの!!」

「えっ!!?比企谷様の!?」

「ドアホウ!!それを最初に言わんかい!!こんなチンケな戦いしている場合じゃないわ！早く会場に行きましょう!!」

ダダダダダッ!!

クインヴェールの各所で八幡のライブが行われるという通知が届き、会場は一気に生徒で溢れていた。この会場はクインヴェールの生徒全員が入れるくらいには広い。

八幡「………シルヴィ、聞いてないんだが？」

シルヴィア「………ゴメンね。通知設定OFFにするの忘れてた。テヘツ♪」

八幡「………まあいい、これで本格的なライブになったな。」

八幡くん………なんかやる気になってる。ライブするときの顔になってるよ。

オーフェリア「………八幡ってライブする時あんな風に笑うの？」  
シルヴィア「うん。私も1回しか見たことないけどね。でも、なんか惹き寄せられるでしょ?」

オーフエリア「…………ええ。さつきの八幡になら攫われても問題ないって感じがしてきたわ。」

シルヴィア「それはそれでどうかと思うけど、でも間違いじゃないかもね。私もそう思えてきちゃった。」

私たち、2人揃って重症かもね。

ハチライブ！

八幡 side

キャーキャー!!

……俺、この中で歌うの？さっきまでやるって言っただけど、もうやめたいんだけど。いやだって、俺は自分が如何に声を出せているのか知りたいのであって、別にクインヴェールの女子生徒に歌を披露するわけじゃない。それなのにこの会場の盛り上がりは何なんだよ……もうすでにライブじゃねえか。

まあ少しはやりやすくなったけどよ……

八幡「あ……皆、盛り上がってるか？」

「「キャー……!!」」

八幡「盛り上がってんなあ……特に知らせていたわけでもないんだが、きてくれてありがとな。この機械の事をシルヴィに聞いて、やってみようって思ってた入力したら、インターバルだけじゃなく生徒まで入ってきちゃってよ……君たちの生徒会長と俺の彼女って割と抜けているっていうか、ポンコツなのな。」

WWWWっ!!

八幡「……まあ冗談はさておき、俺が設定したのは去年の10月に千葉の幕張メッセで開催したライブで歌った曲《innocence》を9000人の人数でどれだけ音量が出ているのか、歌ってみたと思う。下手くそでも文句言うなよ?」

さて、そろそろ歌い出しだな。おつ、BGM流れてきた。

八幡 side out

オーフェリア side

………凄い歌声。私はモニター越しでしか八幡の歌を聞いたことがなかったけれど、実物を聞くとこんなにも違うのね。

オーフェリア「………テレビで観るのと生で観るのではこんなにも違うのね。凄く迫力があるわ。」

シルヴィア「ああ、そういえばオーフェリアさんは八幡くんのライブを生で見たことがないんだっけ？」

オーフェリア「………ええ。だからちよつとだけ鳥肌が立つてるわ。」

………普段の八幡とも少し違って見えるわ。堂々としている感じがするわ。例えるなら星武祭かしらね。1人だけ放っているオーラが違うというか、圧倒的な何かを出している。

シルヴィア「でもさ、八幡くんって本当に良い声出すよね。『世界の歌姫』なんて呼ばれてる私だけど、初めて彼の歌を聞いた時は魅入っちゃったから。」

オーフェリア「………貴女でもあるのね。誰かの何かに惹かれる経験が。」

シルヴィア「そりやあるよ。でも、歌に関してだと八幡くんだけかな。男の子なのにあんな高低音をちゃんと使い分ける人ってそうそういないから。」

オーフェリア「………思ったのだけれど、八幡に出来ないことってあるのかしら？私が思いつく限りでは無いのだけれど。」

シルヴィア「うーん………私も分からないなあ。八幡くんって何が出来ないんだろう？普段から家庭的な所が凄くあるから出来ないこと

のイメージがつかないなあ。」

……八幡、貴方の弱点は何？

シルヴィア「あつ！そろそろ終わりみたい！曲の時間も後30秒だから流しを入れて後15秒は歌うね。」

八幡『この先にある未来 超えて行くから♪』

……その後はBGMが続いていただけだったから、終わったというのはすぐに分かったわ。後は八幡の結果ね。どれだけ出せていたのかしら？

オフエリア side out

八幡 side

歌い終わってBGMが流れ終わると、クインヴェールの生徒たちから歓声が上がった。男が居ないからキヤーキヤーばかりだが、久しく忘れていたな。ライブのこの感覚、結構スツキリするんだよな。

八幡「……皆、聞いてくれてありがとうな。今集計してるから興味のある奴は残っていても構わないし、やることのある奴は退室してもらって構わない。」

八幡「……集計結果が出た。比企谷八幡、歌は《innocence》≧入力人数9000人。そして結果が……総合声量、8500人。残りの500人には歌が聞こえていない状態ってことか……」

……少し足りなかったみたいだな。もしこれが10000人とかだったら、もっと声を出す必要があるな。今度カラオケにでも行くか。

パチパチパチパチッ!!

八幡「ああ……聴いてくれてありがとな。今日俺が来たのはクインヴェールの学園観光が目的だ。男子禁制だから無理とされている人もいるだろうが、ここの理事長のペトラ・キヴィレフトさんから許可は貰っている。だから、何か用がある人は気兼ねなく話しかけてくれると嬉しい。この時くらいしか、クインヴェールの生徒と話せる機会なんてないと思うからな。最後に改めて、聴いてくれてありがとな。」

パチパチパチパチッ!!

八幡「ふう……悪いな、待たせちゃって。」

シルヴィア「ううん、やってみればって言ったのは私だからね。でもやっぱり良い歌声だったよ。ねえ八幡くん、ウチに来ない?」

八幡「だから入らねえよ。入ったとしてもすぐに引退するに決まってる。」

シルヴィア「釣れないなあもう。」

オーフェリア「…………お疲れ様、八幡。」

八幡「ん、ああ、ありがとう。」

オーフェリアがドリンクとタオルを持ってきてくれた。そこまで汗はかいてないからタオルは必要ないんだがな……………っていうか、何で椅子にまで座らせる?

八幡「…………オーフェリア、何がしたいんだ?」

オーフェリア「…………肩もみよ。」

…………え?なぜに肩もみ?

オーフェリア「……………疲れた時にはこうするのが良いって文献に書かれていたから。」



八幡「あ、ああ……そうか。」

オーフェリアの行動原理ってたまに分からないんだよなあ。肩もみはありがたいけどよ。

――5分後――

オーフェリア「……………どうかしら、八幡？」

八幡「ああ、楽になった。ありがとな、オーフェリア。」

オーフェリア「……………気にしないでちょうだい、私がやりたくてやっただけだから。」

シルヴィア「八幡くんなんか軍人さんみたいだっだよ。」

八幡「何故に軍人？」

シルヴィア「なんか座ってる時も姿勢良かったから、なんとなくかな。」

姿勢良いだけで軍人に見えるなら、ガラードワースのほとんどは軍人だと思うぞ。後界龍も。

八幡「とりあえず学園回らないか？と言ってみたが、少し腹減っちゃった。」

シルヴィア「ふふふ♪歌った後ってお腹減るもんね。じゃあ食堂に行って何か食べようか。ちよつと早いお昼ご飯にしよつか。」

## 口は災いの元

オフエリア side

……八幡のソロライブが終わって学園の案内に戻るのだけど、八幡からの提案で先に昼食を取る事になったわ。校風や廊下を見るだけでも分かるのだけど、女子って感じの学園ね。掲示板にはライブの予告やイベント申し込みの用紙などがたくさん張られているわ。流石はクインヴェールね、アイドルや歌手の育成の方針も順調みたいね。

……もし私が2人の前でアイドルになりたいって言ったらどんな反応をするのかしら？2人の事だから呆然と立ち尽くしそうね。でも私にアイドルなんて出来ないわ。無愛想なもの。

シルヴィア「つと、着いたよ。此処がクインヴェールの食堂だよ。他の学園と違ってクインヴェールは小さいから食堂は1つだけなの。でもメニユーの多さは学園1だと自信持って言えるよ。」

八幡「そうなのか……試しにメニユーを見てみていいか？」

シルヴィア「うん、いいよ。あつ、今は何が食べたいの？野菜？お肉？魚？パン？定食？」

八幡「そ、そんなにあるのか……じゃあ定食で。」

シルヴィア「はいこれ、定食用のメニユーね！」

八幡「メニユー分けられてあるんだな。しかも定食だけでこの厚さかよ。レストランのメニユー表と同じくらいあるだろコレ。」

シルヴィア「凄いでしょ。オフエリアさんは？」

オフエリア「……パンにしようかしら。」

シルヴィア「パンね……はい。」

……パンだけでもこんなにあるのね。八幡の持っているメニユーを見ても思ったのだけど、本当に色々あるのね。確かにメ

ニューの多さは学園1ね。

八幡「じゃあ俺は《鶏の衣焼き定食》にする。なんか一番美味そう  
だ。」

オーフェリア「……………私は《照り焼きパンセット》にするわ。」

シルヴィア「分かった。じゃあ注文してくるから、2人はどの席で  
もいいから待ってていいよ。」

……………シルヴィアはそそくさと券売機の所に行ってしまったわ。  
それにしても本当に多いわね。

八幡「俺たちも何処かに座るか。立ちっぱなしじゃあ迷惑になる。  
適当にその辺でいいだろ。」

オーフェリア「……………ええ。」

……………私たちは比較的周りに生徒の数が少ない席を選んだのだけ  
ど、学食は此处1つしかないわけだから、自然と集まってくるわね。

トウーリア「あぁー!!お前はあの時の……………誰だっけ?」

マフレナ「失礼ですよトウーリアさん!!比企谷さんですよ!界龍第  
七学院の序列2位の!」

モニカ「あらぁこの学園は男は入れないんじゃないのかしら  
?性転換でもしたの?」

八幡「んなわけあるか気持ち悪い。」

パイヴィ「でもなんているの?此处は男子禁制。」

ミルシエ「普通に考えるなら、理事長の許可を得たからじゃない?」

オーフェリア「……………私の事は何も言わないのね。」

「『孤毒の魔女』!!?」

マフレナ「気づくの遅いですよ!」

………本当に遅いわ。

トゥーリア「お前も何しにここに来たんだよ!」

八幡「俺が説明する。今日来たのは簡単に言うと、学園巡りをしていてな。学園祭では一通り回ったが、じっくり見たわけではないからな。改めて今いる面子の学園だけでも見ておこうって話になっただけだ。」

マフレナ「そうだったんですか。じゃあ今日はクインヴェールというわけですね。」

八幡「ああ、初日に界龍、次にレヴォルフ、最後にクインヴェールだ。」

モニカ「ハーレム気分を最後に味わいたかったからかしら?」

八幡「ンなもん興味ねえよ……俺は一途なんだよ。記者会見やったんだから分かるだろ。」

………八幡のおかげで收拾がついたわ。流石八幡ね。

トゥーリア「……なあ、さっきじっくり見てなかったから改めて見に来たって言ったよな?」

八幡「ん? ああ、確かに言ったが?」

トウーリア「じゃあもしかして、私たちの寮部屋も入る気か!」

八幡「……………はあ?」

トウーリア「そして終いにはタンスの中を漁って下着を盗むつもりなんだろう!」

八幡「なんだそりゃ? お前頭の中大丈夫? 誰が寮部屋を覗くって言ったよ? そんな事してみろ、ただの犯罪者だろ。」

トウーリア「する気なんだろう! 一人一人の下着を盗むつもりなんだろう!」

……………凄い妄想力だね。どんな計算をしたらこんな答えに辿り着くのかしら?

八幡「あのさ……………俺は別に此処の女子の下着になんて興味ないし、部屋に入ろうとも思わん。彼女がいるのに何でそっち行こうと思うんだよ。モテない男ならやりそうだな。」

八幡「それよかお前、後ろ後ろ。」

トウーリア「そんな手には騙されねえよ!!」

八幡「……………なら別にいいが、後悔しても知らんからな。」

トウーリア「誰かいるって言うの? そんなのルサー……………っ!!!??」

……………私も八幡と同じ目線だったからすぐに気付いたのだけど、シルヴィアが戻って来ていたの。誰もが見惚れそうな素敵な笑顔なのだけど、目が笑ってない上に光を帯びていないわ。

シルヴィア「面白い話してるね? 八幡くんが女子寮の部屋に入って下着を盗むって? 八幡くん、本当にするの?」

八幡「なんで俺がそんな得のねえ事をしなくちゃならねえんだよ。する訳ねえだろ、惚れてもいねえ女の下着になんて興味すら湧かん。」

シルヴィア「じゃあわたしの下着は興味ある?」

八幡「此処でそんな質問するなよ。一応回答するが、耳を貸してくれ、流石に人前では言えん。」

シルヴィア「うん、いいよ。」

八幡「お前の下着ではなく、下着姿になら興味はある。まだ見たこと無いからな。」

シルヴィア「そ、そつかあ……うん、分かった／＼／＼／＼」

((((一体何を言った!!?)))

八幡「他言無用で頼む。」

シルヴィア「こんな事言えないよ！でも、嬉しいよ。ありがとう八幡くん。」

八幡「おう。」

……八幡、貴方はシルヴィアに何を言ったの？さっきまでの笑つてない笑顔が嘘のように吹き飛んでるわ。代わりにピンク色のオーラが凄く滲み出ているわ。

シルヴィア「それでさ八幡くん、今からこのおバカな妄想発言をした子にお仕置きをしたいから待っててもらっていいかな？ご飯は食べてもいいから。」

トウーリア「嘘だろ!?シルヴィアごめん、許して!!いや、許して下さい!!お願いします!!」

シルヴィア「うん、ヤダ♪10回くらい模擬戦やろっか♪」

トウーリア「た、頼む許してくれ!!あつ、比企谷助けてくれ!」

八幡「シルヴィ、妄想発言で模擬戦10回はないだろう。」

トウーリア「おお……比企谷……」

八幡「10回じゃ生温いから、30分耐久コースにしてやれよ。その方が思いつきり模擬戦っぽくなるだろう?」

シルヴィア「ああそうだね!ゴメンねトウーリア、優しいお仕置きにしちゃって。30分間の模擬戦やろうね♪」

トウーリア「こんの鬼夫婦!!!」

2人「褒め言葉だね(だな)。」

## フアンの大切さ

八幡 side

ふうく食った。クインヴェールは女子校だから比較的量が少なかったから、もう一品頼んじまった。少しキツかったが、食べれなくもなかった。にしても戻ってきた時のシルヴィのスッキリした顔と、トウーリアの死んだ顔はマジで傑作だったな。しかもトウーリアの奴、戻ってきた瞬間俺に謝ってきたしな。いや、俺は別に気にしてないからいいんだが、シルヴィ、お前一体何を言っただ？

その後はルサルカの面子と一緒に昼を過ごし、雑談を交わしながら飯を食べた。見てれば分かると思うのだが、昼食時の雑談を過ごしている時も、まともなのはマフレナだけだった。ルサルカの清涼剤だよな。

そして昼食を食べ終えた俺たちは、ルサルカと別れて学園の案内をすることになったのだが、シルヴィが自分の部屋を案内すると言い出した。なぜかは分からないが、シルヴィがそうしたいのなら俺は別に構わない。断る理由もないからな。

シルヴィア「この最上階が私の借りてる寮なんだけど、返上しようと思ってるんだよね。家をもらってからはあんまりここには帰ってきてないしね。」

八幡「それをいうなら俺も似たような感じだぞ？シルヴィの家に帰るようになってからは、週に1〜2回寮にいるかどうかになったからな。」

シルヴィア「八幡くんも？私もそれくらいなの。後はなんだろう？ライブがある時は八幡くんと一緒に過ごしてるし、というよりいつも一緒だよな？」

八幡「今の週に1〜2回しか寮に帰ってないって聞く限りはな。」  
オーフェリア「…………でも、だからと言って手放す必要もないと思



うわ。週に1〜2回しか使っていないと言っても、使っているのは事実だもの。なら最大限それを有効活用するべきだわ。」

……まあ俺としては別に構わないけどな。そうだったら毎日シルヴィの家に帰ればいい話だ。どっちみちスペアキーは貰ってるしな。実際にシルヴィが欧州ツアーに行ってた時は俺が掃除とかしてたしな。

——クインヴェール寮・最上階——

シルヴィア「着いたよ。じゃあ今開けるからね。」

シルヴィが施錠を解除すると、アンロックの音がした。扉を開くと、近代的な部屋になっていた。思えば、女子の部屋に入ったのは初めてだな。ウルサイス姉妹の所はリビングだけだったからな。

歌手だけあってヘッドホンや何も書かれてない楽譜、歌や音楽に関する本や文献、モニター付近にはCDが並んでいる。窓付近にあるのは自身のグッズだと思われる物になんかの箱、ファンレターとかか？

オーフェリア「……とても良い部屋ね。あなたの真面目な性格が出ている気がするわ。」

シルヴィア「そ、そうかな？」

八幡「ああ、片付いてるし、物をきつちりと分けてある。その方が後で探さなくて済むからな。バラバラにしておくとは面倒だからな。」

俺も物はあった場所とか、指定した場所に置いておく主義だ。皆だっけそうだろ？本をテーブルの上に置くより、本棚にしまった方が見栄え良いだろ？え？当たり前過ぎる？まあ当たり前のことだからな。

オーフェリア「……シルヴィア、このお手紙は何かしら？何だか

大事そうに飾られてあるのだけど。」

シルヴィア「ああそれ？それは私のファン1号からのファンレターなんだ。嬉しかったなあ、あの時は『やっとファンが出来たー！』なんて言って大はしゃぎしちゃって怒られちゃったっけなあ。でも、それくらい嬉しかったのは今でも覚えてる。」

八幡「自分の事をちゃんと見てくれている人が居るだけでも、意識の持ちようは違ってくるからな。俺もなんとなくは分かる気がする。」

オーフェリア「……………私にはファンが居ないから分からないわね。」

八幡「居ないのか？手紙をもらったりしたこととかは？」

オーフェリア「……………あるにはあるのだけど、果たし状だったり訳の分からない変態からの手紙ばかりだったわ。」

2人「変態？」

オーフェリア「……………ええ、『貴女の毒で私にいたみを!!』とか『貴女の毒で僕の身体を蹂躪してえ〜!!』……………みたいな変態からの手紙が偶に来るわ。」

シルヴィア「……………行っていないよね？」

オーフェリア「……………行くわけないわ。大体何故私がそんなことをしなくてはならないの、とまで思ったわ。当時の私は興味も持たなかったわ。読んですぐ捨てたもの。」

うん、それが正解だ。間違っていないよオーフェリア。間違いなくそれが一番相手にダメージ与えてるから！

シルヴィア「八幡くんは？ファンレターとかくるじゃないの？」

八幡「いや、俺には来てないな。挑戦状とかは来るけど。」

シルヴィア「……………予想出来るから言わなくていいからね？」

まあだろうな。その挑戦状、殆どがシルヴィアファンの連中だし。でもそいつら、無視したら無視したでうるさいんだよな。『夢幻が逃げた!』とか『口だけの男!』とかってネットで書き込んでるから面

倒なんだよ。俺の立場考えてもの言って欲しいわ。一々相手してらんねえんだよ。人の気持ちを考えないって恐ろしいねえ。まるでアホケ浜みたいだ。

シルヴィア「ねえ八幡くん、そのネットに書き込んでる人って誰？今すぐ教えて。」

オーフェリア「……………私にも教えてちようだい八幡。今すぐ毒漬けにしてくるわ。」

八幡「え？俺声に出てたか？」

2人「心で分かった。」

マジか……………ついに心まで読めるようになったの？シルヴィは分かるが、オーフェリアもか。

八幡「いや、それなんだがな。次の日になったらそれが消えてるんだよ。多分だけど、《鳳凰星武祭》とライフで出来た俺のファンの人たちがやったことだと思うんだけどな。」

シルヴィア「そつかあ……………流星は世界中にファンを抱えている人は違うね♪」

八幡「それ皮肉か？オメエの方がファン多いだろうがよ。」ワシヤワシヤ

シルヴィア「キャー！」(≡▽≡)

こいつホントこれするとこの反応だよな。

オーフェリア「……………ちゃんと応援してくれているファンは2人の事を助けてくれているのね。何だか羨ましいわ。」

シルヴィア「ならオーフェリアさんもアイドルやってみる？私がプロデュースしてあげるよー？」

オーフェリア「……………私には向かない職種だから遠慮しておくわ。自分の認めた人以外に素顔を晒すのは嫌なもの。」

シルヴィア「ああ、オーフェリアさんはそういう系かあ。確かにアイドルには向かないタイプだね。じゃあ八幡くんのプロデュースを担当してみる？」

オーフェリア「詳しく聞かせてちょうだい。」

八幡「おい、即答で返事するのやめろ。お前はノウハウもねえだろうが。」

オーフェリア「……………大丈夫よ、熱意と努力とやる気と根性があれば何とかなるわ。」

八幡「…………お前が言うのと全然説得力ないぞ？」

シルヴィア「あはは……………」

オーフェリアさんって結構天然っぽいのかな？それとも狙ってやってる？

性格的には天然っぽいけど、八幡くんだと反応が違うから狙ってるのかな？うーん……………まだよくわからないなあ。

## 次のライブ対策

シルヴィア side

クインヴェールの案内も大体終わったかな。後行ってない場所は……理事長室くらいかな。流石に女子寮には入れません！私の部屋に入れたけどね。

あつ、そういえば次のライブの事って何か決まったかな？ペトラさんに確認を取ろうと思ってたんだ。この際2人には悪いけど、少しだけ時間を貰おうかな。

シルヴィア「ねえ2人共。案内中に悪いんだけどさ、少し理事長室に寄ってもいいかな？次のライブについて聞きたい事があるんだ。」

八幡「俺は構わないぞ。しばらく家を留守にするんだったら、聞いて置いたほうがよさそうだしな。オーフェリアはどうだ？」

オーフェリア「……私も構わないわ。」

シルヴィア「ありがとうー！じゃあ理事長室まで案内するね。学園の一番奥にあるから少し時間かかるけどね。」

――理事長室――

シルヴィア「はーい到着♪此処がクインヴェール女学園の理事長室だよ。」

八幡「……アニメに出てくると同じだな。立派な扉なもんで。」

オーフェリア「……ここまでこだわる必要ってあったのかしら？」

うーん……それを言われたらなんとも言えないけど、多分威厳を見せるためじゃないかな？ほら、大きい扉とか人って話しかけにくいからさ。

シルヴィア「とりあえずいるかどうか確認するね。」

居ると思うけどなあ……W&Wの幹部だけど、今の時間帯なら会議の時間でもないしね。

p i p i p i …… p i p i p i ……

ペトラ『どちら様？あらシルヴィアじゃない。どうしたの？今は八幡くんとお泊りデート旅行じゃなかったかしら？』

シルヴィア「はい。そうなんですけど、ライブの事を聞きに来ようと思ひまして。勿論此処に来ることは了承してますので、入ってもいいですか？」

ペトラ『ええ、構わないわよ。入りなさい。』

OPENボタンを押したのか、カチャツて音がした。

シルヴィア「じゃあ入ろっか。」

2人「おう（ええ）。」

3人「……………」

トウーリア「うう……………」

ええつとお……………なんでトウーリアが？しかも後の4人は何処！？正座してるのトウーリアだけってなんか初めて見たなあ……………本当に何があつたの？

ペトラ「2人は初めてだったわね。久しぶりね八幡くん。10月の千葉ライブ以来かしら？それに、貴女は初めましてかしら？【孤毒の魔女】さん？」

八幡「お久しぶりですペトラさん。元気そうで何よりです。」

オーフェリア「……………はじめまして、レヴォルフ黒学院生徒会長のオーフェリア・ランドルーフエンです。当学院の序列1位でもあります。」

……………オーフェリアさんって敬語使えたんだ。なんか意外……………

ペトラ「よろしく。それでライブの事だったわね。そうね、どこから話そうかしら？」

シルヴィア「その前に、1つ聞いてもいいですか？」

ペトラ「何かしら？」

シルヴィア「何でトウーリアが正座させられているんですか？」

これ最もな疑問だね？確かに私はさっきお仕置き（30分模擬戦コース）したけど、その後は一緒にお昼を食べて別れたよね？

ペトラ「ああ……………それはね、八幡くんに対する暴言を言っていたからよ。『男のクセにこの学園に来てんじやねえよ。』とか『歌が上手いからって』とか他にもあるのだけど、兎に角八幡くんの暴言を言っていたから正座させているわけよ。幾ら何でも他学園の生徒の暴言を、しかも交流のある人への暴言を無視なんて私には出来ないもの。まあ八幡くんとは、交流の一言では済まないくらいお世話になってい

るけれどね。」

シルヴィア「そうだったんですか……どうせなら、暴言の数だけ石畳お膝の上に置かせましょうよ。」

トウーリア「待って!!?それはシャレにならないから!!?さっきの模擬戦でもヤバかったのにこれ以上は死んじやうって!!」

八幡「俺は別に気にしてないんで、そこまでしなくていいですよ。後で言った数だけ模擬戦すればいい話ですし。」

……八幡くん、それ今私が提案したのよりずっと怖いよ。

八幡「まあ冗談はさておき、ライブの話を進めて下さい。俺たちは待つてますので。」

ペトラ「あら、貴方にも関係のある話だとは思わないの?」

八幡「それならシルヴィが予めに相談に来てると思うので、それが無いってことは俺はお呼びでないってことなんでしょう?」

ペトラ「……ふふつ、随分とお互いのことが分かってるのね。ええ、今回は貴方への依頼はないわ。場所は六花外の海外だもの。貴方の出した条件を達成してないから無理って事よ。」

ペトラ「じゃあシルヴィア、話を進めましょう。」

それから30分くらいは私とペトラさんのライブの話だった。その間の他の皆は雑談をしていたんだけど、トウーリアだけは正座していた。流石にもう許してあげたらどうですか?ペトラさん。

ペトラ「……まあ次のライブはこんな感じね。ツアーじゃないから帰りは早いけど、あまり部屋で八幡くん八幡くんって言わないでよ?」

シルヴィア「い、言いませんよ!大体そんなに言ってた覚えはありません!」

ペトラ「自覚がないって怖いわね……貴女そうは言ってるけど、《鳳凰星武祭》が始まる前までは本当に念仏のように唱えてたのよ?」



シルヴィア「えっ!？」

う、嘘っ!?!私そんなに八幡くんって連呼してたの!?!ううゝ恥ずかしいよぉ／＼／＼

八幡「そうだったのか……だが俺も一緒に行くわけにもいかないから……」

シルヴィア「だ、大丈夫だよ!今度はそういう風にならないようにするから!」

ペトラ「具体的には?私が思う限り、その方法って八幡くんが一緒にいることだと思うのだけど?」

シルヴィア「……………思いつきませんでした。」

ペトラ「はあ……まあ頑張りなさい。期待はしてないけど、応援はするわ。」

……………はい、頑張ります。

後日談。そのライブを行っている期間、ずっと八幡の事を連呼していたと、シルヴィアと仲の良いスタッフは証言していた。

## 突然の依頼

オーフェリア side

……クインヴェールの案内もする所はほとんどなくなったところで、学園を後にした私たちはエルナトの帰路についていた。でも、ただの帰っているだけではない。帰りは空を飛びながら帰路についているの。八幡の能力で生み出された大きな梟の背中に乗って六花の風景を楽しんでいる。

……今時期まだ日が出ている時間が短いから後もう少しで日没って所よ。だから六花の街には街灯が所々に灯っているわ。空からの景色なんて今まで体験したことが無かったわ……とても綺麗。

八幡「これが夜だったら最高の景色だろうな。何せ摩天楼よりも上で眺めてるんだからな。飯とかを用意できないのが残念だが。」  
シルヴィア「充分だよ。でもそうだね、夜になったらもっと綺麗なんでしょうね。」

オーフェリア「……………そうね。」

……もう少し眺めていたいわ。夕陽に染まる街が幻想的に見えるわ。出来れば日没までこのまま見ていたいわね。

八幡「…………ふつ、どうする？もう少し見てくか？六花を一周でもしてみるか？」

シルヴィア「あつ、良いね！なんか楽しそう♪オーフェリアさんはどう？」

オーフェリア「…………ええ、私も賛成よ。」

八幡「うし、じゃあ六花を一周したらエルナトに戻るか。」

2人「うん（…………ええ）。」

……八幡、もしかして私の心でも読んだのかしら？

……その後、梟はゆつくりと六花を回りながら飛んでいたわ。夕陽が直射して眩しい時もあったけれど、すごく綺麗だったわ。

――10分後――

シルヴィア「それでさ、八幡くん？」

八幡「ん？どした？」

オーフェリア「……これは普通の疑問なのだけど、聞かなくても分かるわよね？」

八幡「ん？なんとなくは分かるが、取り敢えず口にして言ってみてくれ。」

シルヴィア「そう？じゃあオーフェリアさん、言ってあげて!!」

オーフェリア「……分かったわ。」

何故エルナトの屋上？で降りたの？普通なら入口付近なのに。」

……そう。八幡は梟を陸に誘導せず、エルナトの屋上みたいな所に止めた。

八幡「ん？なんか問題あったか？」

シルヴィア「大アリだよ！何でここなのさ!？」

八幡「いやあく最後に1番上から下の入り口まで紐なしバンジージャンプはどうかなくって思っただけだ。」

オーフェリア「……………八幡1人でやってちょうだい。私たちは普通に降りるから。」

八幡「普通だったってどうやって？」

オーフェリア「……………星辰力を使って階段を作るのよ。もしくは、所々に足場を作って下に降りて行くか。流石にこの高さから飛び降りて陸上に着いたとしても、絶対に足を痛めるわ。」

八幡「なら仕方ないな、俺も普通に降りるか。」

……………そう言うのなら、入口の所に下ろして欲しかったわ。

オーフェリア side out

八幡 side

受付「おかえりなさいませ。」

ああ……………これで5日目の外出も終わっちまったな。残すは明日と明後日だけだが、何したもんかねえ……………なんの予定もない。

???「すみません、比企谷様、リユースハイム様、ランドルーフェン様。私、当ホテルの支配人をやっている者です。少々お時間を取らせて頂いてもよろしいでしょうか？」

シルヴィア「……………私は構いませんけど。」

オーフェリア「……………私も大丈夫よ。」

八幡「特に用があるわけじゃ無いので、大丈夫です。」

支配人「ありがとうございます。立ち話は何ですので、こちらにお越し下さい。」

話ってなんだ？サインとかか？

——会議室——

支配人「ご足労お掛けしてすみません。」

八幡「いえ……それで、お話というのは？」

支配人「ええ。その事なのですが、実は明日の夜に各国の大企業や統合企業財体の幹部が集まるパーティがあるのです。そこで折り入ってお願いがあるのです。もし、明日の夜にご予定がなければ、明日に開催されるパーティに参加して欲しいのです。」

シルヴィア「……でも、パーティに参加するだけでしたら、何も断りを入れる必要はないと思うんですけど、何かあるんですか？」

支配人「ええ、問題はそこなのです。実は当ホテルに来る予定だった演奏団が急に来れなくなってしまったのです。我々スタッフも出来る限りで探したのですが、1日で六花へ来れるような団体はおらず、六花にはそのような団体やチーム名は聞いたことがないので、諦めていたんです。」

支配人「そこで少し強引ではありますが、私は考えました。演奏ではなく歌にしたらどうだと。この際どう転がっても演奏できるクラブなどは居ないのでから、頼れる人に歌を歌ってもらおうと。調べた所、ちょうど良いタイミングに当ホテルに宿泊している3名のうち2人は世界中に注目される程の実力者。お客様にこのようなお願いをするのは気が引けますが、お願いできないでしょうか？」

支配人はそう言い終わると、頭を下げて来た。

八幡「……どうする？俺としては明日の予定が無いから好都合だが……」

シルヴィア「うん、良いと思うよ！やろうよ！」

オーフェリア「……私はどうしてたらいいかしら？呼ばれている

のは貴方たち2人だけだから。」

支配人「いえ、とんでもございません！ランドルーフエン様も一緒に！」

オーフェリア「…………でも私は2人のように上手に歌えないわ。」

シルヴィア「なら私が教えてあげる！オーフェリアさんにピッタリな曲を選んでバシバシ鍛え上げるから！」

八幡「いつの間にかオーフェリアも歌う方向に行ってる……………」

支配人「それで、如何でしょう？お引き受けになってくれますか？」

シルヴィア「はい！受けます！」

八幡「俺も大丈夫です。」

オーフェリア「…………私も大丈夫よ。私の歌でよければ。」

支配人「つ!!ありがとうございます！では、度々お手数ですがこちらにお越しく下さい。皆様が着ていただく衣装ですが、我々が出来る限りで集めましたので、その中から1着選んで下さい。そこから採寸して丈を合わせますので。」

とんでもねえ依頼を受けちゃったなあ。まあでも、暇だったからちょうど良かったな。じゃあ明日はカラオケか？

## 新たな才能

八幡 side

はい、6日目の朝……ではなく、カラオケ店に俺たちは来ています。時刻は朝の10時キツカリ。ドリンクバーでフリータイムのコースにして俺たちはカラオケルームの中へと入って今に至る。

シルヴィア「さて、じゃあ歌っていこうか！八幡くんは歌う曲は決めているよね？オーフェリアさんのは私が決めたから大丈夫だとして……」

八幡「ああ、決めてあるから大丈夫だ。」

シルヴィア「なら良し！じゃあ先ずは私から歌おうかな。昨日は何にしようか悩んだけど、この曲にするって決めた途端、もう他の曲は考えられなくなっちゃった。」

オーフェリア「……どんな曲なのかしら？」

シルヴィア「『自主規制』って曲だよ。八幡くんも聞いたことあるでしょ？」

八幡「ああ、確かにいい選曲だな。依頼内容の曲調は『なるべく大人しめ』の曲だったからな。これくらいなら大丈夫だろう。」

ライブなら思いっきり激しい曲に出来たんだが、今回はパーティだ。下手にデカイ機材なんて使わなくても歌は聞こえるだろうし、使ったら使ったで煩そうだしな。

シルヴィア「八幡くんは？なんの曲にしたの？」

八幡「俺は『自主規制』にした。この曲もある意味俺の今と過去を振り返っているような曲だな。シルヴィはどう思う？」

シルヴィア「私は問題ないよ。八幡くんって狙ってやってるわけじゃないよね？」

八幡「そんなわけないだろ。何度か再生してよかった曲を選んだだけだ。」

それ以外に何をどう狙うってんだ？

八幡「それでシルヴィ、オーフェリアの歌う曲は？変なのにしてないよな？」

シルヴィア「まさか！だってオーフェリアさんと一緒に選んだんだから！それに、オーフェリアさんが最近聞ける曲なんだから変なのでは無いよ！《自主規制》って曲！八幡くん知ってる？」

八幡「……………良いチョイスなのは確かだが、なんか俺が選んだ理由と被ってたりしてないか？そんな気がするんだが？」

シルヴィア「もしかしたらそうかもね。でも、その時はそんな事知らないからね？オーフェリアさんに合ってるなあって思ってた選んだだけであって他意は無いからね！」

いや、そこは別に疑ってないから。

シルヴィア「じゃあ私から歌うから2人共聞いててね！」

—————5分半—————

シルヴィア・リユーネハイム

曲：《自主規制》

得点：93・457点

感想：曲に合った歌声で歌えてますね！これならプロ顔負けの腕前でもおかしくありませんね！後は声量や高低音の微調整をすればもっと良くなりますよ！

オーフェリア「……………流石と言うべきの腕前ね。90点超えなんて



凄いわ。」

八幡「ああ……流石はプロだな。とても真似できん。」

シルヴィア「もう、八幡くん！そんな事言って八幡くんだってプロ顔負けの歌唱力持ってるクセに！次八幡くんが歌ってよ！」

八幡「……次オーフェリアじゃなかったのか？」

シルヴィア「八幡くんが変な事を言うからです！罰として先に歌うように！」

八幡「分かったよ……演奏中止にして、このままだな。もう入れちまってるしな。んじゃ、歌いますか。」

――4分40秒――

比企谷八幡

曲：《自主規制》

得点：92・933点

感想：曲に合った歌声で歌えてますね！これならプロ顔負けの腕前でもおかしくありませんね！後は声量や高低音の微調整をすればもっと良くなりますよ！

シルヴィア「ほらあ！八幡くんだってプロ顔負けの腕前だってコンピューターが言ってるよ！」

オーフェリア「……八幡の裏切り者。」

八幡「いや、そんなこと言われても……第一オーフェリアが歌っていない限り、裏切りかどうかなんて分からんだろ。」

シルヴィア「それじゃあ最後はオーフェリアさんだね！今日の1発目はどんな数字が出てくるのかなあ？」

八幡「……言い方やらしいぞ？」

オーフェリア「……期待はしないでちょうだい。」

――4分50秒――

オーフェリア・ランドローフエン

曲：《自主規制》

得点：96・259点

感想・貴女の感情が直に伝わる綺麗な歌声でした！声量、高低音、リズム、どれも抜群でした！残すはロングトーンを極めればもっと良くなるでしょう！

シルヴィア「……………オーフェリアさんの裏切り者！」

八幡「マジか……………初めてで96点も出すのかよ。」

オーフェリア「……………自分なりに歌ってみたのだけど、どうかしら？」

シルヴィア「ねえオーフェリアさん、世界で歌ってみる気はない？今の歌声なら充分通じるからさ。」

オーフェリア「……………やめてちょうだい、アイドルなんて私には向いてないわ。」

シルヴィア「そんな事言わないでさ、ちよつとだけ！ちよつとだけだから！」

八幡「やめんか。」ティツ！

シルヴィア「あうっ!?何するのさ〜！」

八幡「なくにがちよつとだけだ。思いつきりやらせる気満々じゃねえか。」

シルヴィア「い、いやあ……………テヘツ。」

全くこいつは……………

八幡「だが凄いの事実だな。これなら心配は要らないな。あと何回か歌ったらもう出るか。」

2人「うん(……………ええ)。」

その後も俺たちは90点以下を取ることなく歌えた。  
因みに個人の最高成績はというと……

俺が94・719点、シルヴィが95・358点そしてオーフェリ  
アが97・506点のプロ相手に2点以上も差をつけての勝利だっ  
た。

## パーティーの始まり

――――

――エルナト90階――

ガヤガヤッ

「ほう、イギリスからいらしたのですね。それは遠いところからわざわざ……」

「いえ、今や六花は世界の中心と言っている場所ですから。」

「今回は何故こちらのパーティーに？貴方が来るなんて珍しい。」

「何、私もたまには息抜きがしたくてな。息子に少し無理を言っているってきたのだよ。」

「はっはっは！〇〇様も年齢に厭わず、行動的でお若いすなあ。」

「初めまして、私アメリカのマンハッタンの〇〇社で取締役を務めています、〇〇と申します。」

「まあ！〇〇社といえばアメリカでも有数の大手企業……これはこれは、ありがとうございます。私はオーストラリアのシドニーにある□□社で取締役を任されています、〇〇と申します。」

「□□社でしたか！存じ上げております！昔私の祖父がそちらの企業にお世話になったと聞いた事がありました……」

世界中の大手企業や六花内の企業、そして統合企業財体の幹部が集まっているこの場所は、1年に何回も開けるようなパーティーではない。

大手企業といえどもそう簡単に統合企業財体には融合できない。何故かというと、統合企業財体に入っている上の人、つまり幹部の人

間は非人間的な……つまり、人間のような一面を捨てている人が多い為、利益にならない事は廃止、脱退に追い込むまでである。その為、幹部になりたいという人間的欲望を持った一要員は幹部になることは難しい。仮になれたとしても、その後は統合企業財体の精神調整プログラムを受けるため、どの道幹部になった者は非人間的な人ばかりなのである。

中にはそうでも無い人もいるが、それは限られた極一部の人間だけである。

――――

シルヴィア side

シルヴィア「うーん……変じゃないよね？」

オーフェリア「……何故そんな事を聞くの？とても似合っているわよ。」

皆さんこんばんは、シルヴィア・リユーネハイムです。私が選んだドレスが変じやないかどうか、あつ！間違えた！ドレスを着た私が変じやないかどうかをオーフェリアさんに聞いたところ、変ではなかったみたい。

オーフェリア「……それを言うのは私の台詞だと思っていたのだけど。」

シルヴィア「オーフェリアさんは問題ないよ。むしろ似合い過ぎてるし。」

オーフェリア「……ありがとう。なら、八幡が来るまでは本当の評価は得られそうにないわね。」

うう……やっぱりそうなるのかあ。でも八幡くんどんな姿になってるんだろう？変装はしていないと思うけど、どんな服にしたのか、

すごく気になる。

ガチャッ

八幡「スーツなんて最初のライブ以来な上に、ネクタイなんて総武高でもあんま結んでなかったからな……やっぱ動き辛いな。ん？  
おお……」

八幡くんは黒のスーツに灰色のシャツ、黒のネクタイという黒系統のコーディネートだった。普通のスーツとは違って見えるけど、八幡くんが着るとカツコよく見えちゃう／＼／

シルヴィア「ど、どうかな？」

オーフェリア「……似合うかしら？」

私が着ているのは青いドレスに黒のベルト、首回りには青い花が裝飾されていて、左前髪にも青い花の髪飾りを着けている。

オーフェリアさんのはかなり凝っていた。紫色のドレスに星の裝飾が施されていた。髪飾りにも星の髪飾りを着けていた。

オーフェリアさんの話だと、コーデイナーとしてくれた人が『貴女はもっと派手でもいいです！』って言ってたみたい。

八幡「2人共よく似合ってるが、オーフェリアがそういうのを着るなんて意外だな。」

オーフェリア「……私の丈合わせを担当してくれた人がもっと派手でもいいって言った結果、これになったの。」

八幡「でもその衣装の方が逆に良かったかもしれないな。だって……歌詞とピッタリじゃねえか。」

……あつ！言われてみれば確かにそうだ！このドレス、オーフェリアさんが歌う歌にピッタリだよ！凄い偶然だよ!!

シルヴィア「なんか、逆に結果オーライだね！」  
オーフェリア「…………良かった…………のかしら？」  
八幡「ああ、逆にそっちの方がいいと思う。」

コンコンツ

シルヴィア「どうぞ。」

支配人「失礼致します。おお、皆様良くお似合いです。では、改めて説明をさせて頂きます。時間になりましたら、会場の案内役が事情を説明、謝罪をしてから皆様を代役として呼びします。そこからは皆様にお任せいたします。」

八幡「その時の事なんです、出来れば俺たちの名前は伏せておいてください。ちよつとでも驚かせたいので。」

八幡くん…………ちよつとだけ悪い顔してる。

支配人「かしこまりました。案内役に伝えておきます。他に何かございませんか？」

シルヴィア「私は特に無いので大丈夫です。」

オーフェリア「…………私もよ。」

支配人「かしこまりました。それでは、時間になりましたら呼びします、それまでは会場裏にてお待ち下さい。失礼致しました。」

そして支配人さんは出て行った。多分八幡くんが言っていたことを伝えに行っただと思う。

シルヴィア「そういえば歌う順番どうしよつか？」

八幡「点数順にしようぜ。俺、シルヴィ、オーフェリアの順で。」

オーフェリア「…………私よりもシルヴィアが最後の方がいいと思うのだけど？」

シルヴィア「いや、今回はオーフェリアさんがトリの方が良いかもしれないなあ。なんとなくだけどね、そんな予感がするの。やってくれないかな？」

オーフェリア「……………どうなっても知らないわよ。」

八幡「安心しろ、何かあったら俺が対処する。」

案内役『えー皆様にご案内いたします。』

八幡「おつ、そろそろみたいだな。」

シルヴィア「じゃあ、行きましょうか！」

オーフェリア「……………ええ。」



## 驚きサプライズと八幡ソング

—————

案内役『えー皆様ご案内致します。世界各地から世界有数の大手企業の代表並びにお越し下さった方々、統合企業財体の幹部の皆様、この度はこのようなパーティーに参加していただき、ありがとうございます。本日はお楽しみいただけするように、我々も最大限にサポートに回る所存です。そして皆様には1つ、訂正点がありました事を説明、謝罪したいと思います。』

ザワザワ…………

案内役『本日この場に来るはずだった、日本から〇〇団の予定が合わなくなり、急遽キャンセルということになりました。すぐに代わりの団体を探しましたが、1日で来れる団体は六花外にはおらず、また六花内にもそのような団体がいませんでした。準備不足になってしまったことを深くお詫び申し上げます。』

「ふむ……そのキャンセルは一体何時頃来たのだね？今の説明を聞く限りでは、昨日突然のように聞こえるが？」

案内役『はい。詳しい内容はプライバシーに関わりますので黙秘させて頂きますが、昨日の午後14時に連絡が入りました。』

「成る程……確かにその1日では来れるところも来れぬだろう。仮にこれたとしても演奏の練習も必要になる。とてもではないが、出せる状況にはなれないのは明確になる。野暮な質問をしてすまなかったね。」

案内役『いえ、とんでもございません。つきましては、六花内からプロの歌手1名と歌手が指名した2名、計3名が代役としてこのステージで歌を披露します。突然の事なので、ここからは我々の支配人に変わりたいと思います。』

案内役はすぐ後ろの垂れ幕に下がり、すぐに同じ場所から支配人が出てきた。

案内役『今回はこのような形になってしまい、改めて謝罪致します。本当に申し訳ございませんでした……………早速なのですが、3名の代役にご登壇してもらおうと思います。では、お願いします。』

—————

八幡 side

八幡「行く順番も歌う順番でいいよな？」

シルヴィア「うん、お願い。転ばないでね？」

八幡「転ばねえよ。」

あんまり注目されるのは好きじゃ無いが、もうシルヴィイという毎日で慣れたからな。9000人の観客に比べたら可愛い方だ。

俺が幕から出た瞬間、驚いたような声があった。そしてシルヴィイが出たら、それがさらに大きくなった。オーフェアが出てくると、それが一気に冷めてしまった。多分、【孤毒の魔女】っていうフレーズだろうな。

（比企谷八幡とシルヴィア・リユーネハイムは分かるが、最後の彼女は誰だ？）

（綺麗な子ですね。もしかしてクインヴェール女学園の新しい子かしら？）

（あんな子、六花にいましたかねえ？）

（いや、見たことはありませんね。どの学園の子なんでしょうか？可愛いからやっぱりクインヴェールでしょうか？）

（初めてお会いした時はモニター越しでしたが、髪型だけでも印象が変わるのですね……正直、目を疑いました。）

支配人『では、代役3名の紹介に移ります。奥から順に紹介させて頂きます。今シーズン最初の星武祭《鳳凰星武祭》の優勝者、界龍第七学院序列2位【夢幻月影】の比企谷八幡さんです。』

八幡「……………」ペコリッ

会場からは拍手が起こった。まあライブの事もあの会見で知ってるだろうからな。

支配人『次は皆様よくご存知のこの方。前年度の《王竜星武祭》の優勝者にして世界の歌姫、クインヴェール女学園序列1位【戦律の魔



が、そこはご了承下さい。なお、歌う順番ですが、今入場してきた順番となっております。』

ザワザワ…………

支配人『此処からはマイクを比企谷さんに託したいと思います。それでは、よろしくお願いします。』

支配人は俺に向かってきて、台に乗ってあつたマイクを俺に渡してきた。しかもこれ、ちゃんとしカラオケマイクじゃん。

八幡「…………えー恐縮ですが、1番手を歌わせてもらうことになりました、比企谷八幡です。歌う順は、俺↓シルヴィア↓オーフェリアの順番で行きます。疑問に思う方も多いかもしれませんが、この順番にした理由はオーフェリアが歌った時に分かると思います。」

八幡「では早速歌っていきたいと思います。今の想いはあの時にはなかったもの、この世界は綺麗で残酷で美しい…………『ユメセカイ』。」

曲が流れ、テンポに合わせて歌い始める。

八幡「♪♪♪」

あの時はそんなちっぽけな光でも、大切な物だった。あの空間が居心地良かった。

八幡「♪♪♪」

特に何かを考えていたわけでもなかった。けど、あの時の俺はあいっつらとなら一緒にいてもいいって思ってた。

八幡「♪♪♪」

だが、現実残酷だった。そんな思いを容赦なく踏みにじった。だが俺は、1つの新しい答えを見つけた。

八幡「♪♪♪♪」

その答えは今までよりも綺麗なものだった。妄想ゆめでもいいと思っ  
た時もあった。

あいつらとなら、この先も楽しくやっていける。迷ったとしても、  
きつと助けてくれる奴らだ。

八幡「♪♪♪」

あの場所にいた頃の鎖を解いてからは本当に理想の日々だった。  
充実した毎日だった。

八幡「♪♪♪」

あの時と違って、俺にはもうそんな想いはない。誰も傷つかない世  
界なんて存在しない。それに……だからこそ、守りたいものも出来ち  
まったからな。

八幡「♪♪♪♪」

あの時は灰色だった世界も、今では色取り取りだ。色んな奴に出  
会って色んな事があった。これからもあるだろう。

八幡「♪♪♪」

あの時の俺はこんなものにばかり囚われていたな。だが今でも思

うのは、この世界は俺と似ている。それだけは昔と変わってない。

八幡「♪♪♪」

あの日流した涙で俺は初めて変わった。あの言葉のおかげで全部が変わった。

八幡「♪♪♪♪」

まだ描いて行く世界。これからの世界は、今俺の隣にいる奴と描いていきたい。だがここから先は妄想では終わらせない。

八幡「そつと……そつと……光ってる……」

## シルヴィアの追憶&願望ソング

—————

パチパチパチパチッ！

八幡「ありがとうございます。この曲には俺の過去と今の生き方を歌詞に込めて歌いました。俺の過去を話す気はありませんが、結果から言うといいものではありませんでした。むしろ悪い方だと断言出来ます。ですが、この六花に来てからは友に恵まれ、好敵手に囲まれ、たくさん仲間、そして恋人が出来ました。その意も込めて、今日はこの『ユメセカイ』を歌いました。」

「そんな気がしたんだよね……歌詞もそうだが、なんだか切ない感じの歌声だったような気がする。」

「ですね。でも後半では声量が増してたのが私でも分かりました。恐らく、六花に来て良かったことを声量でも表していたんでしょう。」

八幡「では、俺の演奏は終了します。次はシルヴィに変わります。じゃあ、任せたぞ。」

シルヴィア「はい、任せました♪」

八幡は垂れ幕から出てきたシルヴィアにマイクを渡すと、垂れ幕の方へと姿を消した。

—————

八幡 side

八幡「ふう……何とか歌い切った。」

オーフエリア「…………お疲れ様、八幡。」



目の前にはドリンクとタオルを持って待っていたのであろう、オーフェリアがいた。

八幡「ああ、ありがとな。」

オーフェリア「……………人前で歌うなんて初めてだから緊張するわ。

八幡「何かないかしら？」

八幡「いや、カラオケで俺たちの前で歌ってただろ？」

オーフェリア「……………八幡とシルヴィアはその辺にいる有象無象とは違うわ。ちゃんと私を見てくれるもの。」

有象無象って……………今のスゲエ口悪いぞ。せめてもう少しオブラートに包んでくれよ。

八幡「あんまり考え過ぎるな。色々考えてたらロクなことにならないぞ。リラックスしろ。」

オーフェリア「……………リラックス。」

八幡「おう、簡単な話だ。この前プールで泳いだろ？その時、全身に力を入れて泳いだか？」

オーフェリア「……………いいえ。」

八幡「だろ？全身に力を入れて泳いでたら、重くなって前に進まなくなる。歌も同じだ。だからリラックスしろ。肩の力を抜け。ただ自分が思っている通りに歌えばいいんだ。」

オーフェリア「……………中々奥深いよね。歌を歌うだけなのに。」

八幡「オーフェリアにとってはそうだろうな。要はそこまで考えるなって事だ。成功しようなんて考えるな。」

オーフェリア「……………じゃあ八幡。シルヴィアの歌が終わるまで頭を撫でてくれるかしら？心を落ち着かせたいわ。」

八幡「……………しょうがねえな。シルヴィアの歌が終わるまでだからな。」

八幡sideout

シルヴィアside

シルヴィア「改めましてこんばんは、シルヴィア・リユーネハイムです。次に演奏する2番手歌手であります！皆さんも何故私が最後ではないのかと疑問に思ってるかもしれないませんが、ちゃんとした理由があります。単純ですが、今日カラオケに行って、それぞれが歌う曲を採点で評価つけた結果、1番高かったのがオーフェリアさんだったからです。プロの歌手として少しお恥ずかしいです……」

本当に悔しかったんだから！だってオーフェリアさんって意外と歌上手いんだもん！！本当に今まで何もしてこなかったの！？って思うくらいに！

シルヴィア「そんなわけで今回、2番目に点数が高かった私が2番目を務めさせていただきます。では聴いてください！君と僕の日常はどこまでも。いつまでも一緒にいようね。

『君が笑む夕暮れ』

BGMが流れて会場に響き渡る。

シルヴィア「♪♪♪」

いつも季節の変わり目になると言ってたね……もう○○かーとか、でも、そんな君の何気ない一言も好きだよ。

シルヴィア「♪♪♪」

私はそれを捨てても意味はないと思う。だってそれを捨てちゃったら、今までの出会いや運命が無駄なことになっちゃうから。

シルヴィア「教えてよ♪」  
シルヴィア「♪♪♪♪♪」

君と交わしたわけでは無いけど、私自身で交わした約束はあったなあ。今思うと、すつごく難しい約束だったかも。凄くたくさん特訓して強くなろうって必死だったのを思い出すなあ。

でも、私の泣いた姿はあまり見て欲しくなかったかも……／／／

シルヴィア「♪♪♪」

君からそんなことを言われたことないけど、自己評価が低いのは今でも君の悪い癖だよ。後、イタズラするときもね！

シルヴィア「♪♪♪」

私の考えた歌詞は常に君のものだけだったなあ。ペトラさんにはよく『八幡くん以外を書きなさい！』って言われてたなあ……だってしょうがないじゃん！考えちゃうんだもん！

シルヴィア「今はまだ♪」  
シルヴィア「♪♪♪♪♪」

八幡くんともっと長くいたいって前まではすごく思ってた。今は半同棲（8割同棲）だけど、いずれは一緒に……って思ってるよ。八幡くんはまだ強くなれる……だってまだ成長期だもん。羨ましいくらいにね。

シルヴィア「今はまだ♪」  
シルヴィア「♪♪♪♪♪」

まだ行ったことのない道でいろんな出会いがあるかもね。八幡く

んと一緒に過ごす日々は、本当に愛おしい。八幡くんが学院に行っちゃう時はちよつと寂しいけど、笑って送れるようにしないとね。

シルヴィア「♪♪♪」

ちよつとだけ……というよりも、ちよつとした願いだったかな。少しだけでもいいから君の本当の笑顔が見たいって思ったのは。

シルヴィア「♪♪♪」

でも、1度だけあったよね。君が後ろを振り向いてから、私に向かって眩しいくらいの笑顔を見せてくれた時が。忘れないよ、あの時の笑顔。

## オーフェリアの絶望&希望ソング

シルヴィア side

パチパチパチパチッ！

シルヴィア「ご静聴ありがとうございました！今私が歌った『君が笑む夕暮れ』は八幡くんと描いてきた過去を歌に込めました。良いことも悪いことも、彼と一緒に幸せに感じられたことが多々ありました。そんな八幡くんと、この先の未来もこんな風に歩んでいけたら良いと思いますながら歌いました。」

「ふむ……流石は世界の歌姫と称されるだけのことはある。彼女の念が伝わって来たよ。」

「○○様もそうお思いで？私も同じ事を考えておりました。今の若者は直情的で良いですなあ。」

「私たちの時代とは打って変わったものだな。」

シルヴィア「では、私の演奏はこれにて終了です。最後に歌うのは、オーフェリアさんです。じゃあ、お願い〜！」

シルヴィア side

オーフェリア side

八幡「……………出番だぞ、行つてこい。」  
オーフェリア「……………ええ。」

……………八幡のおかげで大分緊張がほぐれたわ。後はあの人たちの前で歌うだけね。変な声にならなければいいのだけど……………大丈夫よね。

オーフェリア「…………じゃあ、行ってくるわ。」  
八幡「おう。」

シルヴィア「じゃあ最後は任せたよ……頑張ってね！リラックスしながら歌うと良いよ！」

オーフェリア「…………ありがとう、行ってくるわ。」

……ステージ……

オーフェリア「…………皆さん、こんばんは。オーフェリア・ランドルーフェンよ。私は自分が世界中であまり良い印象を持たれていないと思っているわ。星武祭での戦い方、口調、雰囲気、そして何よりも使っている魔法。近寄り難いというよりも、近寄りたくないというイメージが近いと思うわ。でも今日は出来ればそのイメージを抜きにして歌を聴いてほしいわ。」

オーフェリア「…………じゃあ歌うわ。あの日から私の夜空は真っ暗なまま。けれど、今の夜空は星の海で沢山。静かな星だけの夜空だとしても、そこには確かな意味がある。」

『s i l e n t   s t a r 』。

イントロが流れたと思ったら、直ぐに歌い出しだった。

オーフェリア「♪♪♪」

…………あの頃の夜空は星があつたとしても、私にとつては宇宙の果てのように真っ黒な夜空に感じた。何も聞こえない、見えない、嫌な夜だったわ。

光も闇も何も無い。あるのは、自分の好きなものさえも腐らせてしまう最悪の魔法。

オーフェリア「♪♪♪」

……この世界は……本当に残酷だと思ったわ。

オーフェリア「♪♪♪」

……星なんて夢を運んでくれなかった。星座なんて幸せを語ってくれなかった。光なんてなかった。私には微笑んでいなかった。

オーフェリア「♪♪♪」

……貴女は泣いてなかったけど、ずっと私の心配をしてくれていたのは覚えているわ。でも、もう私の心は毒で侵されていたから……

オーフェリア「♪♪♪」

……何も無い夜空、何も感じさせない星座、無慈悲な夜空だと思ったわ。でも、それにすら慣れていた。あの頃から私に自由なんてなかった。彼に買われていたのだから。

オーフェリア「♪♪♪」

……静かではあったけれど、輝いてなんていなかった。ただの……普通の夜空だったわ。

オーフェリア「♪♪♪」

……いつも通り過ごしていた夜、1つの紫色の星が出来たわ。その光はただ光っているだけなのだけど、私にはとても輝いて見えたわ。

オーフェリア「♪♪♪」

……とても淡い放っておいても消えてしまいそうな光の  
だけど、放っておけないような気がしたわ。

オーフェリア「♪♪♪」

……いつしか、その星は光よりも眩しく光っていた。  
それどころか、光すら飲み込むような影のような光だった。  
私にとってその光は欠かせないものになっていたわ。

オーフェリア「♪♪♪」

……貴方は私に微笑んでくれていたわね。その笑顔が私にとっ  
ては苦しかったわ……それも当然よね、それにつられて私も笑っ  
ていたのだから。

オーフェリア「♪♪♪」

……毒が出なくなった日、私が解放された日、その時の夜空は良  
く覚えているわ。今までにないくらいの大量の星の海が浮かんでい  
たわ。やっと、自分の思うことが出来る……やっと、色々な事が出来  
る……やっと、貴方といれる時間が増える。

……沢山の星がある中で1番輝いているのが、やっぱり紫色の星  
だったわ。貴方の星で貴方の色よ、八幡。

……貴方の星だけが、私だけが見える夜空で1番綺麗で1番輝い  
ているわ。

オーフェリア「♪♪♪」



……貴方は何だか言って私の事を見てくれる。それがとても嬉しい。だから私も貴方の役に立つ為にも、貴方についていくわ。

オーフェア「輝くsilent star♪」

……貴方の星が1番綺麗で輝いていたわ、八幡。

パーティー終了

オーフエリア side out

パチパチパチパチッ！

オーフエリア「……………聞いてくれてありがとう。私が歌った『silent star』は八幡と同じで、私の過去と今を歌詞に込めて歌ったわ。私が後天性の星脈世代の魔女になってからの絶望から、八幡に出会って自由を手に入れた希望、この2つをテーマにしたわ。他にはあまり無いのだけれど、言うのであれば、八幡だけは私のことを1人の人間としてみてくれた人……………私の恩人だということ。それも歌詞に込めたわ。」

「……………そうだったの、彼女が最後に歌った理由も領けますね。」

「ええ……………それだけ比企谷さんに感謝しているのですね。他の意も感じられますが……………」

「そうですね……………感謝とは少し違うような感じの……………少しシルヴィアさんに似たような感じがしましたね。」

案内役『ありがとうございます。それでは、比企谷八幡様、シルヴィア・リニューネハイム様は今一度、ステージへとご登壇下さい。』

……………案内役の人が出てくるよう促すと、八幡とシルヴィアは垂れ幕から出てきたわ。

案内役『えー皆様。今回は急な提案を受けて下さったこの3人に今一度拍手をお願い致します。』

パチパチパチパチッ！

案内役『それでは引き続き、パーティをおたの「少し宜しいでしょうか？」……は、はい？』

……突然声を挙げたのは、私の知っている人物でもあった。隣にいる女性にもよく見覚えのある顔だったわ。

界龍序列4位の雪ノ下陽乃とその母親だった。

雪ノ下母「本日、そちらの3名は我々のパーティのために歌を披露してくださいました。そこでどうでしょう？お礼というわけではありませんが、いつその事このパーティに参加させるというのは如何でしょう？」

……私たちをパーティに？

雪ノ下母「既に会場に入っているのであれば関係者も同然。ならば同席して楽しんでも、何の問題も無いと思われます。私の一存です。で、これ以上は言及出来ませんので、支配人さんの決定に委ねます。」  
支配人『只今変わりました、当ホテルの支配人でございます。雪ノ

下様からの意見ですが、私としても賛成でございます。皆様は如何でしょう？』

パチパチパチパチツ!!

……賛成、ということかしら？

支配人『後はご本人様たちの判断にお任せいたします。』

シルヴィア「うーん……どうする？」

八幡「せっかくのお誘いだ、受けておいても損はないだろう。」

シルヴィア「じゃあお言葉に甘えちやおつか……分かりました、お言葉に甘えて参加したいと思います。」

支配人『3名の承諾を得ました。ごゆっくりお楽しみください。』

……でも、パーティって何をすればいいのかしら？

オフエリア side out

八幡 side

雪ノ下母「お久しぶりですね、比企谷さん。その節はお世話に……いえ、多大なるご迷惑をおかけしました。」

八幡「もういいですよ。あの時もう謝罪はもらいましたから。陽乃さんも来てたんですね。」

陽乃「あはは。お母さんから自由はもらったけど、今後は自分の力での上がって行かなくちゃいけないからね。まあ、まだ雪ノ下建設の名義だけだね。」

シルヴィア「八幡くん、雪ノ下建設って言ってたけど……もしかして界龍の幹部の？」

八幡「ああ。運営母体《界龍》の幹部だ。建設業の仕事もあるから

兼業って事になるな。」

雪ノ下母「はじめまして、リユーネハイムさん。陽乃の母です。それと、お住いの居心地は如何ですか？」

シルヴィア「え？なんで家の事……あつ！」

雪ノ下母「はい、お察しの通りです。リユーネハイムさんの今のご自宅、僭越ながら雪ノ下建設がご依頼を受けました。それで、ご感想は如何ですか？改善点などはございますが？」

シルヴィア「と、とんでもないです！毎日快適に八幡くんと過ごさせてもらってます！」

……何故そこに俺を加えた？

陽乃「ぷつぷふ……シルヴィアちゃんってば、隠す気なしなんだね。まあ知ってるからいいけど。」

シルヴィア「え……あつ！あうう……／＼／＼」

雪ノ下母「気に入っていただけたのなら何よりです。何かありましたらいつでもご連絡下さい。比企谷さんも、今後とも娘をよろしくお願いします。」

八幡「ええ。陽乃さんにはまた力を貸して貰いますので、またお世話になります。」

雪ノ下母「まあ、いいですよ？」

八幡「今年の星武祭、《獅鷲星武祭》に出場する事はご存知ですか？」

雪ノ下母「……陽乃？」

陽乃「あはは……ごめんなさい、言うの忘れてた。八幡くんのチームで私も参加するんだ。」

八幡「なので、また陽乃さんの力を貸してもらう事になりました。」  
雪ノ下母「そうでしたか……比企谷さんに比べれば微力ですが、娘をよろしく願います。」

陽乃さんが微力なんて思ったことはないけど。

雪ノ下母「では私は挨拶がありますので、失礼致します。パーティを楽しんで下さいね。」

陽乃「じゃあね〜八幡くん、シルヴィアちゃん!」

そして2人はまだ挨拶の済んでいない人の所へと向かって行つた。

シルヴィア「なんか雰囲気と性格が噛み合っていないね。もう少しキツイ人だと思つただけだなあ。」

八幡「俺も初めて会つた時は……まあ、そんな感じだったな。」

シルヴィア「今の間はなんだったの?」

八幡「いや、直接会つたのは2度目なんだが、初めて会つたのは通信だったんだ。その前に陽乃さんと話してたから怖いとかそういう雰囲気じゃなくてな……」

だってよ……通信とはいえ、娘を自由にしてあげたんだよ?あれ聞いちゃうと怖いなんて印象無くなっちゃうよ。

シルヴィア「……まいつか!八幡くん、歌も歌って少し喉も渴いてるから何か飲まない?お酒はダメだよ?」

八幡「分かつてるよ、それくらい。」

八幡 side out

オーフエリア side

オーフェリア「……………」

「先程の歌、お見事でした。思わず聴き入ってしまった。」

「私もです。どうでしょう？今度、我が国でもその歌声を……………」

「抜け駆けはいけませんなあ。それは我々の国でも披露したいほどでありますぞ？」

「「w w w w w」」

……………困ったわ。どう抜け出せばいいものかしら？褒められてるのよね？

シルヴィア「オーフェリアさくん！一緒に飲み物飲まない？」

っ！これはチャンスだわ。

オーフェリア「……………ええ、今行くわ。すみません、シルヴィアが呼んでますので。」

……………少し悪気はしたのだけど、私はホツとしている。そして後ろからは気の良さそうな笑いを出しながら見送る人たちの笑い声が聞こえた。

オーフェリア「……………ありがとうシルヴィア。」

シルヴィア「やっぱり。困ってたんだ。」

八幡「オーフェリアは俺やシルヴィア、生徒会の人間以外とは、好んで話したがないからな。」

オーフェリア「……………元々話すのも苦手だから。」

すると突然、今流れている曲よりも大きい音量で曲が流れた。

案内役『皆様、本日のメインイベントのダンスに移りたいと思います。ペアは誰でも好きな方で構いませんので、踊りたい方はどうぞ、中央の広場にて存分にお踊りください。』

八幡「俺はダンスできないからな、パスだな。」

シルヴィア「私は出来なくも無いけど、そんなにできるってわけじゃ無いから、私もパスかな。」

オーフェリア「……………私もパスね。」

八幡「じゃあ夕食がてらに食い物でも食つてるとするか。」  
シルヴィア「あはは、出来ない人の特権かもね。」

その後、各国の企業の代表から話しかけられたりもしたが、そんなに長い話でもなかったので、苦勞することはなかった。

……………パーティー終了……………

案内役『皆様、誠に残念ですがお時間となりました。本日のパーティーはこれにて終了致します。本日はご多忙の中、このような催しに参加して下さい、誠にありがとうございます。お帰りになる際は、お忘れ物なさいませんよう、お氣をつけ下さい。』

「もう終わりか……………楽しい時間は経つのが早いですなあ。」

「うむ……………だが、今日の催しは随分と楽しませてもらった。良い手土産も手に入ったことだしな。」

「はて？その手土産とは？」

「ふふ……………娘がファンなのでな。」

「あ……………あつははは！○○様も隙のない人ですなあ！いつの間に？」

「何、彼らが食事をしている際に暇を貰っただけのことだよ。」



「終わってしまいましたね……では、今後とも、良い関係を。」  
「はい。そちらの企業とは少なからず縁がございますので……では、お元気で。」

支配人「皆様、今回は本当にありがとうございました！おかげでパーティーは無事成功に終わりました。」

シルヴィア「無事に終わったのなら良かったです。それに、私たちも楽しませてもらっちゃいましたのでおあいこですよ。」

八幡「思いもよらない事でしたけど、楽しめましたので。」

オーフェリア「……初めての事だらけで新鮮だったわ。」

支配人「そう言つて頂けると、私としても肩の荷がおります。そういえばお帰りはでしたね。いっお帰りになれるかは分かりませんが、今日と明日も当ホテルをこゆつくりと満喫して下さい。」

## ※最終日の朝

シルヴィア side

皆さん、おはようございます。シルヴィア・リユーネハイムです！  
こうして朝早くに挨拶するのは久しぶりかな？さて、今日は八幡くんやオーフェリアさんよりも早く起きることができたから、2人の寝顔を見ながら朝の余韻を楽しもうかな。

それにしても、こうやって八幡くんの寝顔を見てみたら、意外と可愛らしいんだよねえ……。普段は凄くカッコいいのに。オーフェリアさんも起きている時と印象が大分違う。起きている時は少し近寄りがたい雰囲気（私や八幡くんには出してないからね！）を出してるけど、寝ている時は小動物を思わせるように、丸まりながら眠っている。

こうやって見ると2人ってなんか親子みたいだなあ……。はっ！ダメダメ!!その設定だったらオーフェリアさんは私と八幡くんの娘ってことになっちゃうよ!?それはダメ！オーフェリアさんのポジションは……。八幡くんが大好き（兄的な存在として）な近所の学生！うんっ！そのポジションにしよう！

シルヴィア「それにしても……。1人って何だか暇だなあ。八幡くんって毎朝こんな感じに過ごしてたのかな？だとしたらなんか悪いことしちゃったかな。」

オーフェリア「……。ん……」

シルヴィア「あーあー、早く起きないかなあ。」

オーフェリア「……。おはよう、シルヴィア。」

シルヴィア「うわあっ!?ってオーフェリアさんか……。脅かさないでよ。」

オーフェリア「……。脅かすも何も今起きたのだけど。」

シルヴィア「え？そうなの？」

オーフェリア「……………それよりも、八幡はまだ寝ているようね。」  
シルヴィア「うん、そうみたい。逆に言うと私たちが早起きし過ぎたって事でもあるけどね。」

そう、今の時刻は朝の5時半。明らかに早い時間帯に起きてしまった。

シルヴィア「起きるのもなんか勿体無いから、ここは八幡くんを堪能してよつか。」

オーフェリア「……………そうね、その方がいいわ。」

……………オーフェリアさん、なんか嬉しそうだなあ。

—————30分後—————

八幡「ん————…んんうゝ…ああゝ……………おお？起きてたのか、おはよう。」

シルヴィア「おはよつ、八幡くん。」

オーフェリア「……………おはよう八幡。」

八幡「今日は俺が1番遅かったみたいだな。」

そういえば、今日は八幡くんが昨日がオーフェリアさん、その前が私の順だったつけ？

オーフェリア「……………今日で終わりなのね。何だか寂しくなってますわね。」

八幡「そうだな……………でも今生の別れてわけじゃないんだ。またこういう機会がないとも限らないだろ？」

オーフェリア「……………そうね。私も来年の学園祭は星導館の射撃をやろうかしら。そうしたら、また3人で来られるわ。」

シルヴィア「エルナトが許可を出してくれただけだね。でも、確

かにそうなってくれるといいね。今回の旅行は凄く楽しかったし。」

八幡「じゃあ今日という日を楽しみに行こうぜ。まだ6時だからどこも開いてないが、ホテルの中くらいなら構わないだろう。」

シルヴィア「……そうだね。じゃあ空中庭園に行かない？ 私と八幡くんはこの旅行で行ってないし丁度いいと思うよ。オーフェリアさんもいるからお花の解説も聞けるだろうしね。」

オーフェリア「………任せてちょうだい。」

こうして、私たちの旅行最終日が始まったのでした！

最終日には……

八幡 side

朝の空中庭園散歩を終えて朝食も済ませた俺たちは、商業エリアに足を運んだ。とは言ったものの、この1週間で回れるところは回ってしまったので、殆ど見慣れた風景と化してしまっていた。

八幡「今日はどうすつかなあ……もう目に止まるところは大体行つたし、腹も空いてないし、運動をしたいわけでもない。散歩？」

シルヴィア「それも良いけど朝に庭園でしちゃったからね。あの狭い中で散歩って言えるのかは分からないけど。」

オーフェリア「……………散歩よ。植物やお花に囲まれながら歩いていのだから散歩よ。」

シルヴィア「(でもそれって植物鑑賞なんじゃ…………)う、うん、そうだね。」

八幡「だが、他に何か楽しめそうな場所ってないもんかねえ。」

正直、他に何かあるのかも分からない。見落としているところもあるかもしれないが……

??? 「あれ？八幡？」

八幡「？」

??? 「やっぱり、八幡だ！それにシルヴィアさんも！」

シルヴィア「あつ、戸塚くん！」

戸塚「こうして会うのは久しぶりだね。元気にしてた？」

八幡「ああ。そっちも元気そうで何よりだ。」

戸塚「うん！ところでもう1人の女の人は誰かな？僕は戸塚彩加。星導館学園の高等部2年です。八幡と同じ総武高から来たんだ。」

オーフェリア「……………オーフェリア・ランドルフエンよ。レヴオルフ黒学院の生徒会長をしているわ。」

戸塚「へえ、八幡ってそんな凄い人と知り合いなんだ！」

八幡「一応俺の彼女もその凄い人に入ってるんだけどな。シルヴィもクインヴェールの生徒会長だぞ。」

シルヴィア「いいいいいよ、別に自慢出来るようなことじゃ無いしね。」

いや、まあ六花の生徒会があつてないようなものだけだよ……………威厳とかそう言うのはあるだろ。ウチに至ってはそんなの欠片もねえけどよ。

戸塚「3人は今何してるの？散歩？」

八幡「今のところはな。する事が中々見つからなくて困ってて……………とつか、この辺りで何かないか？」

戸塚「うーん……………僕も頻繁に街に出るわけじゃ無いから分からないかな。ゴメンね、力になれなくて。」

八幡「いや、いいんだ。戸塚はランニングか？」

戸塚「うん。千葉にいた時もこうして休みの日はランニングしてたから。こっちでも日課になっちゃったんだ。」

シルヴィア「へえ、向こうでもやっててこっちでも続けてるんだ。凄いな。」

戸塚「日課になったらそんなに苦労しないよ。それに楽しいからね。」

八幡「そっか……なら邪魔しないようにしないとな。」

戸塚「ううん、僕から話しかけたから。じゃあね八幡！シルヴィアさんとオーフェリアさんも！」

別れの挨拶と共に戸塚は軽快な足取りで星導館方面へと走って行った。

オーフェリア「……暇つぶしになれるようなのは聞けなかったわね。」

シルヴィア「彼も彼なりに忙しかったんだと思うよ。仕方ないよ。」

ああ、なんせ此処にきてすぐに【影星】に入ってあいつらの監視に当たってるんだからな。そのかわり、金とかは結構もらってるんだろ  
うが。

八幡「取り敢えず街をぶらつくしかなさそうだな。俺たちに共通する何かがあれば良いんだけどな。」

オーフェリア「……魔法。」

八幡「街中でそれをぶっ放すわけにはいかんでしょうよ……特にオーフェリアのは尚更だ。」

シルヴィア「歌とか？」

八幡「悪くはないが、昨日行っただけだからな。やっても良いとは思いますが、そこまで面白くはないと思うぞ。」

オーフェリア「……デート。」

八幡「答えに困るな……今って言ったらどうだ？」

シルヴィア「じゃあ……星武祭！」

3人だけでやる星武祭って寂しっ！いや、面子豪華だから盛り上がりそうだけどさ！

――1時間後――

あれから色んなところを回ったが、これといってめばしい場所はなかった。

八幡「……ねえもんだな。」

シルヴィア「そうだね……何かないかなあ……」

オーフェリア「……八幡、あれはどうかしら？」

2人「？」

――執事&メイド体験カフェ――

お世話になったあの人がご奉仕しちやおう！執事とメイドになってご主人様に癒しを！

体験料金：1,000円！！

詳しくは店内スタッフまで！

八幡「……執事になって欲しいのか？」

オーフェリア「……それもあるのだけど、私たちが八幡に奉仕をするのもアリだと思うわ。」

シルヴィア「じゃあ私とオーフェリアさんで八幡くんをご奉仕しちやおつか！」



オーフェリア「……………ええ、その後で八幡にやつてもらいましょう。」

あ、俺もやるのね。

八幡「俺はいいぞ。ならここでランチにでもするか。」

シルヴィア「じゃあ決まり！最初は私とオーフェリアさんが八幡くんに奉仕して、その後で八幡くんね！2人だけ頑張ってね！」

オーフェリア「……………ファイト、八幡。」

八幡「分かりましたよ、お嬢様方。」

わがままお嬢様の言う事を聞くのも、専属執事の仕事だからな。

## メイドカフェ　メイド編

オフエリア side

カランコロンッ

「お帰りなさいませ、奥様、旦那様！」

……いきなりなのね。どんな風に言ったらいいのか分からなくなってしまうわね。

八幡「えーと……ただいま？」

シルヴィア「八幡くん、別に答える意味はないと思うけど？」

八幡「いや、だつてよ……こういうの今まで1回しかされたことなかったし、なんならその時何も喋ってなかったからよ。」

「3名様でよろしかったですか、旦那様？」

八幡「ああ、はい。」

シルヴィア「あつ、私ともう1人とでメイド体験をしてみたいんですけど、大丈夫ですか？」

「はい、お相手は旦那様でよろしいですか？」

シルヴィア「はい。」

「かしこまりました。では旦那様はもう1人の給仕がご案内いたしますので、そのものについて行って下さいませ。奥様方はこちらへ。」

……どんなメイド服なのかしら？この人たちのような普通のが良いわね。

オフエリア side out

八幡 side

「こちらの席になります、旦那様。」

八幡「……どうも。」

「ただ今、専属のメイド2名が準備中ですので、申し訳ございませんが、しばらくお待ちください。」

八幡「はい。」

「それと、大変申し上げにくいのですが……」

八幡「はい？」

何だ？というよりもこのパターンってサインじゃね？

「界龍第七学院の比企谷八幡様ですよ？宜しければサインを頂けませんか？」

そうやって俺にメモ用紙とペンを差し出してきた。やっぱりサインか。だが、俺的には商売道具にサインするというのは気が引ける。だから……色紙くらいの大きさでいいか。

俺はペンだけ受け取って、能力で色紙くらいの大きさの用紙を作ってそれにサインを書いた。

八幡「どうぞ。流石に商売道具に書くのはアレだったので、色紙にしました。」

「わあ〜！あつ、ありがとうございます！失礼いたします、旦那様！」

……さて、俺はどう暇つぶしをしたものか。

??? 「むっ、そこにいるのは八幡ではないか!!」

……なんかこのパターンあった気がする。

??? 「お主1人か？たまにはこういうのも良いであるな！」

八幡「久しぶりにあったというのに、随分と馴れ馴れしい上に変わっていないな、材木座。」

こいつホント暑苦しいんだよな。今時期だからそのパーカーも普通に見えるが、レヴオルフでもそれを着ているとなると、ダサ過ぎる。

材木座「我は剣豪將軍！そう簡単に変わったりはしないのだ!!」

八幡「あーはいはい。」

材木座「ねえ八幡？前はもつと反応してくれたよね？此処に来てからずいぶん冷たくなってる？我ちよつと寂しい。」

八幡「いきなり素に戻るなよ気持ち悪いな。まあ此処に来てから変わったのは嘘じゃないからな。冷たくなったかどうかは別として。」

材木座「そうであるか……」

八幡「ていうか自分の席戻れよ。」

材木座「釣れない事言うでないよハチエモン。」

誰がハチエモンだ。

シルヴィア「ご主人様、準備出来ました。」

オーフェリア「………お待たせ致しました。」

材木座「ふんっ！準備にどれだけ掛かっている！遅いわお主グボアアア!!」

………勝手にあれこれ言ってから勝手に昇天しやがった。忙しい奴だな。

八幡「ああ、待ってた。2人共良く似合ってる。後、隣の奴は気にするな。3人だけになりたいから、席移動するか。」

俺たちは材木座がいた席に移動した。それにしてもあいつ、固まっ

たままだな。

オーフェリア「……………ご主人様。こちら、メニューでございます。」  
シルヴィア「こちらはお冷です!」

八幡「ああ、すまない。どれにするか……」

しかし……………どれも言いにくいのはつかだな。

八幡「じゃあ、メイド特製ハンバーグとラブコーラを頼む。」

シルヴィア「焼き物を作る際お時間を頂くのですが、よろしいでしょうか?」

八幡「ああ、構わない。」

シルヴィア「ありがとうございます。失礼致します。」  
オーフェリア「……………失礼致します。」

そして2人は厨房へと向かって行った。おそらくハンバーグを作りに行ったのだろう。

――10分後――

シルヴィア「失礼致します。大変お待たせ致しました。こちらメイド特製ハンバーグでございます。」

オーフェリア「……………こちらはラブコーラでございます。」

うん、普通のハンバーグだな。普通が一番って言うからな。コーラは……………ストローが3つ。これはアレだね、飲むときは3人でって事だよな。

2人「ごゆっくりお召し上がりください。」

八幡「ありがとう。」

そして2人は席へと座った。俺の両サイドの。まずはハンバーグを一口。

八幡「あむっ……………うん、美味しい。」

オーフェリア「……………コネから仕上げまで全て私たち2人でお作りしました。」

八幡「道理で美味しいわけだ。」

コーラは普通だよな？だがこのジョッキ、どう持つんだ？取っ手が2つある。

シルヴィア「ご主人様、私たちが」

オーフェリア「お持ち致します。」

ああ、そゆこと。

そしてコーラを3人で仲良く飲む……………割と恥ずかしいな。

その後も問題なく食事をする事が出来た。1つあげるのであれば、2人があーんをしてきた時に、スタッフメイドたちがキヤーカーと奇声をあげていた事だ。

そして2人は今着替えに行っていて、次は俺が2人に奉仕をする番だ。

しかし執事になるのは初めてだな。着るのは11月のライブで代えがなかったから着たが、そこまで気にしてなかったな。

シルヴィア「おまたせー！いやーなんか背筋がピンツてなるね！」  
オーフェリア「……………何だか気が引き締まる感じがしたわ。」

八幡「お疲れさん、主人になるのも少し疲れるな。俺には向いてないかもしれない。」

シルヴィア「八幡くんは普段からあまり命令とかしないもんね。」  
オーフェリア「……………じゃあ今度は八幡ね。」

八幡「ああ、俺だな。」

シルヴィア「厳しくいくからね！」

八幡「おいおいそりやねえよ……………」

## メイドカフェ 執事編

シルヴィア side

シルヴィア「ああ、楽しみだなあ……八幡くんの執事服。どんな姿なんだろう？」

オーフェリア「……更衣室はメイド服しかなかったからどんな格好で来るのか分からないわね。」

早く来てくれないかなあ。それに八幡くんの執事服ってこの前のライブの時からちよつと楽しみなんだよね♪

八幡「お待たせ致しました、お嬢様。」

シルヴィア「あつ、やつとき……た……」

オーフェリア「……」パチクリ

八幡くんが執事服で来た。それは分かってる、分かってるんだけど……想像以上に破壊力があり過ぎる。というより、八幡くん様になり過ぎてるよ／＼／＼／＼／



八幡「……………どうかなされましたか、お嬢様？」

シルヴィア「ふえ!? あ、ああの、な、なんでもないです／＼／」

オーフェリア「……………大丈夫です／＼／」

八幡「私めはお嬢様方の執事にございます。いつも通りで結構ですよ？」

む、無理ゝ!!……………あつ！よく見たら此処のスタッフの人たちの目も八幡くんに釘付けだし！

八幡「ではこちら、お冷とメニューでございます。お決まりになりましたら、お申し付けください。」

シルヴィア「う、うん……………／＼／」

私、執事八幡くんに耐えられるかなあ……………きっと無理だと思う。この八幡くんにあゝんなんてされたら、幸せ過ぎて倒れちやかもだし……………

――5分後――

シルヴィア「す、すみませえゝん……………」コゴエ

八幡「はい、お呼びでしょうか？」

シルヴィア「ちゅ、注文なんですけど、執事特製オムライスと執事の搾りたてオレンジジュースを2つずつお願いしましゅ／＼／」

八幡「執事の特製オムライスと執事の搾りたてオレンジジュースを2つずつですね。かしこまりました。」

オーフェリア「……………もう1ついいですか？」

八幡「はい、何でしょうか？」

オーフェリア「……………八幡をください。」

え!!? 何言ってるの!?! もしかして、オーフェリアさん壊れた!?!

八幡「申し訳ございません。当店では執事のお持ち帰りは取り扱っておりません。」

オーフェリア「……………そう。」

八幡「ですが……………」

八幡くんがオーフェリアさんの耳元で何かを囁いた。もちろん私には聞こえない。

オーフェリア「……………注文は以上です……………」

え!?何!?何を言われたの!?

八幡「かしこまりました。只今お作りいたしますので少々お待ちください。失礼致します。」

……………

……………

シルヴィア「オーフェリアさん!さっき八幡くんは何言われたの!?!  
今までで一番真っ赤になってるよ!?!」

オーフェリア「……………秘密……………」

シルヴィア「ええ〜なんでえ!?教えてよお〜!」

オーフェリア（言えないわよ、あんな言葉。）

八幡『当店にいる間、私はお嬢様方だけの執事でございますので。』

オーフェリア（きつとシルヴィアは耐えられないわ。）

――10分後――

シルヴィア「ねえ！教えててば！」

オーフェリア「……ダメ。」

シルヴィア「もういいじゃん！」

八幡「失礼致します。ご注文の品をお持ちしたのですが、お取り込み中でしたか？」

シルヴィア「いえ！そんな事ありません！」

オーフェリア「何ありません。」

オーフェリアさんまで即答してる……うん、執事八幡くんとの間の方が大切だもんね。

八幡「左様ですか？ではこちら、執事特製オムライスにございます。ただ今ケチャップをお付けいたします。」

八幡くんはオムライスの上にケチャップで文字を入れた。これって……シルヴィア？私の名前を筆記体で書いてる！あつ！オーフェリアさんのも！

八幡「そしてこちら、執事の搾りたてオレンジジュースで御座いま

す。以上でお揃いでしょうか？」

シルヴィア「はい、そりよつてます……っ／＼／＼」

八幡「ありがとうございます。では、ごゆっくりお召し上がりください。」

オムライスを食べている私だけど、味なんて全くしなかった。美味しいと思うんだけど、味が全くと言っていいほどしなかった。まだ八幡くんの執事服にやられてます。

オーフェリア「……………執事さん。」

八幡「はい、いかがなさいましたか？」

オーフェリア「……………あーん。」

え!?!ず、ずるいよオーフェリアさん!

八幡「え?しかし、それはお嬢様の……………」

オーフェリア「……………お嬢様命令。」

八幡「……………かしこまりました。」

オーフェリア「……………あーん。」

八幡「あむっ……………お嬢様のおかげで一層美味しく感じられます。」

オーフェリア「……………良かったわ。」

八幡「じゃあ次は、私からお返しをしませんといけませんね、失礼致します。」

オーフェリア「……………え?」

八幡くんはオーフェリアさんの持つてるスプーンを取り、オムライスをスプーンですくった。

オーフェリア「わ、私は大丈夫よ。」

八幡「いえいえ、お嬢様だけにお手を煩わせるわけには参りませんので。では、口をお開きになってください。」

オーフェリアさんは少しずつ後ろに下がっていった。でも、みるみるうちに逃げ場がなくなつて……壁についてしまった。

八幡「では、あーんして下さい？」

オーフェリア「……………あ、あーん／／／／／」

多分執事としては失格だろうけど、私たちにとっては100点満点どころかキャパシティがオーバーしてます。

八幡「お味はいかがですか？」

オーフェリア「……………美味しいわ／／／／／」

な〜んかすつごく真っ赤だけど嬉しそうな顔してる。

八幡「シルヴィアお嬢様も如何ですか？」

シルヴィア「え!? あ、いえ、私は大丈夫です！」

八幡「かしこまりました。」

その後は何事も無く食事を済ませて、八幡くんが食器を片付けると共に着替えに行つた。

シルヴィア「……………オーフェリアさん、此処に来るのもうやめない？ 私あの八幡くんは破壊力があり過ぎて普段通りになんて話せないよ。」

オーフェリア「……………ええ、私もそう思っていたわ。行く機会があるかは分からないけれど、同感だわ。」

八幡「済まない、待たせたか？」

シルヴィア「あつ、待ってませんから！」

八幡「もう敬語はいいって。執事じゃねえんだから。」

シルヴィア「だって抜けないんだもん！」

オーフェリア「……………八幡の執事姿の破壊力が凄過ぎるからいけないのよ。」

八幡「オーフェリア、今度執事服で好きなもの食わせてやるよ。勿論俺が食べさせるからな。」

オーフェリア「……………それは私ではなくシルヴィアにやってちょうだい。彼女は1回もされてないのだから。」

シルヴィア「ちよつと！押し付けないでよ！」

八幡「分かったよ。2人共そんなにやって欲しいんなら言えばいいのよ、もっかいやるか？」

2人「やらなくていいよ（わ）！」

こうして私たちの執事体験は終了した。もう2度と八幡くんに執事服は着せないことにします。

## 旅行の終わり

八幡 side

メイド喫茶で執事とメイドの体験をしながら、ブランチを済ませた後、俺たちはホテル・エルナトへと戻って帰る支度をしている。少し早い気もするがこの旅行を終えるということだ。まだ遊びたいという気持ちは2人の中にはあるかもしれない。俺の中にも確かにその感情はある。だが俺は今年の星武祭にも出場する為、そろそろ鍛錬を積まないといけない時期でもある。

チーム・ランスロットや他のチームに勝つためには、チームの連携や個人の力量を強化する必要がある。俺も早く1週間の遅れを取り戻さなくてはならない。

シルヴィア「オーフェリアさん、シャンプーとか洗顔とかは持った？」

オーフェリア「……………ええ、入れてあるわ。あと他に何があったかしら？」

シルヴィア「食材もあの日で全部使ったから無いし、服も入れた……………もう無いかな？」

コンコンツ

八幡『こっちは済ませたぞー。そっちはどうだ？』

シルヴィア「ごめーん、もうちょつと待っててー！」

……………まあ、女は準備に時間がかかるものだからな。気長に待ちましようか。

……………10分後……………

シルヴィア「ごめんごめん！遅くなっちゃった！」

オーフェリア「…………ごめんなさい。」

八幡「いや、大丈夫だ。ちょうど今後の鍛錬メニューを考え終えたところだったからな、時間もタイミングもバッチリだ。」

シルヴィア「それなら良かった♪」

オーフェリア「…………大変なのね、メニューを考えていたなんて。」

八幡「まあ1週間も界龍から離れて鍛錬を積んでないからな。日本には『一日の遅れは十日の遅れ』ってことわざがあつてな、意味はそのままで。1日無駄にした分は10日分も無駄にしているって事だ。今回はそのケースでは無いけどな。だって有意義な1週間だったし。」

オーフェリア「…………でも1週間ではないと思うわ。界龍に行った時に私たちに体術と小太刀術を教えてくれたじゃない。」

シルヴィア「そうだよ！あれだけでも自分が持つてる技の見直しにもなったんじゃないかな？」

八幡「あれを鍛錬と言つていいのか分らんが、教えはしたからな。それで良いのか？」

2人「いいの(わ)！」

八幡「は、はい……」

まあ2人がこう言ってるし、良しとするか。

——エルナト・受付前——

八幡「すみません、チェックアウトお願いします。」

受付「はい、かしこまりました。比企谷様とリユースハイム様とランドルーフェン様ですね。今回は当ホテルのご利用ありがとうございました。では玄関先までお送り致します。」

やっぱホテルの人って律儀だよなあ。そこまでしなくてもいいの



に……

受付「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております。」

シルヴィア「はあく終わっちゃったね。」

八幡「そうだな。楽しい時間があつという間なのはどの国でも同じなのかもな。」

オーフェリア「……………そうね。私もこんなに楽しい日々はあなたと過ごした日以来だわ。」

シルヴィア「八幡君はどうするの？一旦家に帰る？」

八幡「いや、このまま界龍に直行しようと思ってる。今日は夜のギリギリまで身体を動かしたい気分だな。」

シルヴィア「そっかあ……………じゃあ皆とはもう少ししたらお別れだね。」

オーフェリア「……………でもすぐにまた会えると思うわ。道でバツタリとか。」

八幡「オーフェリアだったら毎日スーパーの前で待ち伏せていたりしてな。」

オーフェリア「……………私はそこまで暇な立場ではないわ。」

八幡「分かってるよ、冗談だ……………さて、そろそろ分岐点だな。俺は

このまま界龍に戻る。だからシルヴィ、晩飯は用意しなくて大丈夫だ。明後日からは家に帰るから心配するな。」

シルヴィア「……うん、待ってるね。」

八幡「そんじゃ、1週間エルナトの旅、終了！解散！」

オーフェリア「……さようなら八幡、シルヴィア。また会いましょう。」

シルヴィア「ばいばいオーフェリアさん！」

オーフェリアは軽く口角を上げていた。その笑顔は夢げに見えたが、悲しみは感じなかった。

八幡「じゃあ俺も行く。気を付けろよ。」

シルヴィア「うん……八幡くん。」

八幡「ん？」

チュツ

シルヴィア「いってらっしゃい♪」

八幡「……ああ、いってきます。」

## 閑話 ④

### 界龍の入学式 ①

――――

セカンドシーズンの星武祭である《獅鷲星武祭》が終わってから半年、様々な出来事があった。冬の長期休暇、学園祭、イベント、そして卒業式。どの学園でも年に1度はある別れの式典。界龍では、序列4位の雪ノ下陽乃が卒業生代表を務め、素晴らしい答辞を在校生に贈り、卒業生と共に界龍を去った。

別れを惜しむ間も無く2週間を過ぎると、別れと共に新しい出会いがやってくる。そう、新しい仲間を迎える入学式である。

これは、界龍第七学院で起きた入学式の出来事を記したものである。

虎峰「いよいよ入学式ですね。八幡、何を喋るかは決まってるのですか？」

八幡「なんで俺が喋る前提なんだよ……星露は生徒会長だから仕方ないとしても、こういうのはこの学院の最上級生がやるべきだろ。」

沈雲「この学院ではそんなもの通らないよ。君が序列2位に君臨している限り、続くと思うよ。」

八幡「なら序列なんて返上するから誰が変わってくれ。」

沈華「でも、貴方が《尊師》って呼ばれている限りはこの状態は卒業まで続きそうね。」

八幡「どの道ダメじゃねえかよ……」

当学院の代表は生徒会長で序列1位ある茫星露なのだが、生徒代表の挨拶を務めるのは比企谷八幡なのである。これは彼が序列2位になって、《尊師》と呼ばれるようになった時から決まっている事であった。

補足をする、彼が序列2位と《尊師》と呼ばれるようになったのは入学して2、3ヶ月経った頃。つまり、その頃からこの挨拶が始まっていたという事になる。（その前までは最上級生がやっていた。）

冬香「八幡さん、諦めも肝心ですよ？去年の答辞も見事だったので、今年も新入生に響くような素晴らしいのを考えているのでしょうか？」

八幡「……冬香さん？さり気なく俺にプレッシャーかけるのやめてくれませんか？考えてますけど当たり前の事を言うだけですよ？」

セシリー「むしろそれがいいんじゃないの？難しい言葉よりも単純な方が分かりやすいしー。」

虎峰「それよりも早く師父の元へと向かいましょう。入学式の前に打ち合わせをするんですから。」

―――黄辰殿―――

八幡「星露、来たぞ。」

星露「おお、八幡か。なんで用かえ？」

八幡「打ち合わせって聞いたんだが……」

星露「例年通りで良いじやろう。工夫する必要もないしのう。」

虎峰「師父っ!」

八幡「まあ変に凝ったモンよりも普通の方が良いよな。分かった、去年と同じにする。挨拶の内容は変えるけどな。」

虎峰「は、八幡まで!それで良いのですか!」

八幡「今更変えたところで変になるだけだつて。」

星露「その通りじや。さっ、はよう準備を進めるぞ。」

――2時間後・入学式――

虎峰「只今より、〇〇年度、界龍第七学院の入学式を執り行います。先ずは――」

滞りなく式は進み、当学院の出席している母体・工作員の幹部の挨拶、新入生代表と生徒会長の挨拶、そして最後に……

虎峰「最後に当学院の生徒代表挨拶。

生徒代表、比企谷八幡。」

八幡が登壇し、新入生に向けて包拳礼をしてから、挨拶の言葉をかける。

八幡「まずは新入生に入学祝いの賛辞を送る。当学院への入学おめでとう。この学院では、君たちが学んできた事よりも学んでない事の方が山のようにある。まずは己の力量を知り、自分にどれくらいの実力、技術が身についているのかを再確認してから、自身にあつた鍛錬方や技の強化、さらには技の開発などに精を出して欲しい。俺も入学当時は技のキレも浅く荒いものだった。だがそれは鍛錬を重ねると同時に動きがより洗練され「あー止めだ止めだ!!」……?」

――――

八幡 side

なんだ？今の声は？

虎峰「只今、生徒代表の挨拶中です。お静かに願います。」

新生「挨拶？その挨拶って代表の自慢話を聞かされる事なんスか？だったら時間の無駄もいいところっスね。」

……話を妨害したのは新生か……どうやらかなりの自信家のようだな。

新生「ところで代表さん、代表さんは星武祭を2度も制してるんですよ？」

八幡「ああ、その通りだが……それがどうかしたのか？」

新生「いや別に？ただ、『鳳凰星武祭』の決勝を見てるとさー、代表さんの相手をしていた2人がわざと負けたようにしか見えなかつたんスよね。代表さんの顔を立てようとしてるような感じで。」

すると、周りにいた在校生の殆どが新生に怒声を上げた。つていうか、新生に容赦ねえな。

八幡「……静まれ。」

うわっ、一気に静かになった。手を上げて言っただけなのに。

「しかし尊師！」

八幡「……2度は言わない。」

「……………はい。」

新生「代表さんもボス気取りっスか？良い気分でしょうねー。」

八幡「……………いくつか尋ねたいんだが、いいか？」

新入生「何です?」

八幡「武術の経験は?」

新入生「勿論あります。お見せしましょうか?」

八幡「いや、結構だ。次だが、出身は中国か?」

新入生「はい。」

八幡「最後に、君は何番目の弟子だった?」

新入生「変な質問ツスね……まあいいです。今は5番目の弟子です。」

成る程な……

新入生「質問の意味を教えてくださいませんか?」

八幡「ああ、いいとも。まずなぜこの質問をしたのかというと、きみの性格を知るためだ。」

八幡「見て聞いたところ、君はかなりの自信家で武術家で5番弟子。この時点で確定していることは2つある。1つ目は、君が教えを受けていた中で1番強いということだ。でなければその自信はつけられないだろう。2つ目に中国の中では君は敵なしだった……違うか?」

新入生「……調べたんですか?」

八幡「いや。君の事は今日初めて見たし、初めて話をした。」

新入生「たったそれだけで分かるんスか?」

八幡「そして中国の武術大会みたいなものでは毎年優勝を飾っている。加えて、街中ではストリートファイトのような事をして自身の強さを知らしめている……これもどうか?」

新入生「……なぜ分かるんです?」

八幡「君のような人は自己顕示欲の強いタイプだ。そんな子が道場の中で収まっているわけがない。そして、君のような子には致命的な弱点がある。」

新入生「何です?その弱点って?」

八幡「それは……お前が『井の中の蛙』だって事だよ、小僧。」  
新入生「っ!!?」

……何だこの程度か。少し気を出したくらいで驚きやがって……  
こんなのウチの序列外でもビビらねえぞ。

八幡「お前は中国の中しか知らねえ。世界がどんな何処かつてのを  
全く理解してねえ。まさかとは思うが、自分はすぐに冒頭の十二人に  
入れる、何てこと思ってたねえだろうな？だとしたら相当のアホだ。」

新入生「……………」

八幡「あまり言いたくはないが、敢えて言わせてもらうぞ。今のお  
前は在名祭祀書に載ってる奴らどころか、ウチの序列外にも通じねえ  
よ。」

新入生「なっ!?何故そんな事が分かるんだ!？」

八幡「分からないか？さつきも言っただけだ。『井の中の蛙』だつて  
な。中国の諺なんだが、意味が分からないか？なら教えてやる。簡単  
に言うとも見識が狭いって事だ。お前が見てきたのは中国だけで世界  
は視野に入れてない。」

新入生「そうだとしても、俺は中国の中では1番強いんだ！大会  
にだって何度も優勝してる!!」

八幡「ほう？それで、その実力はどこまで通用する？欧州、米州、豪  
州、日本、全世界合わせて六花、お前の言う中国で1番強いはどこま  
で通じる？」

新入生「そ、それは……………」

八幡「……………答えられないだろう？それがお前の今の限界だ。」

新入生「……………だったら、俺と勝負しろ!!俺が勝ったらその言葉を撤  
回してもらおうぞ！比企谷八幡!!」

すると、再び怒声が上がった。しかもさつきより強い声で響き渡つ  
ていた。

「貴様！尊師に向かってなんて無礼な態度を!!」

「尊師が相手をするまでも無い！俺で十分だ!」



入学式どころではないな……はあ、今年の入学式は波乱だな。

八幡「……いいだろう。」

「「「「「!?」」」」」」

八幡「その勝負を受けよう。」

「そ、尊師!？」

新入生「恥を晒すことになりますよ? いいんスか?」

八幡「安心しろ、そうなるのはお前だ。」

新入生「何故そう言えるんです?」

八幡「お前が俺より弱いからだ。」

新入生「なっ……ふんっ、調子に乗っていられるのも今の内ですよ。」

はあ……面倒だ。すぐに終わらせよう。

## 界龍の入学式 ②

八幡 side

――八天門場――

式典の最中にイザコザがあつて今に至る。界龍全生徒が青龍の間から俺の道場へと移った。中央には俺と新入生、その周りに在名祭祀書、後は周りの階層ごとに生徒が並んで座り、一角の2階には冒頭の十二人が居る。新入生は在名祭祀書の所にいる。目の前で見させた方が勉強になると思つたからだ。

新入生「随分広いですね。」

八幡「界龍にある道場の中では一番広い。俺はこんなの欲しくなかつたんだかな。」

新入生「代表さんのだつたんスか？」

八幡「なあ、その代表さんつてのやめてくれないか？俺の名前は知ってるんだろ？」

新入生「比企谷八幡先輩つスよね？どっちで呼べばいいです？」

八幡「好きに呼べ。」

新入生「じゃあ比企谷先輩で。それで、早く戦いましょうよ。」

八幡「分かつてるよ、取り敢えず……誰か審判をしてくれる奴がいなにか？」

新入生「審判なんて要らないつスよ。ズルなんてしませんし。」

八幡「はあ……もう1つ教えておくぞ。『弱い犬ほど良く吠える。』弱い奴ほどうるさく喚き立て、威嚇するということ意味だ。うるさいとは思つていたが、まさか審判すら待てないとはな……」

新入生「……審判は必要ないつて言ってるだけです。」

八幡「つまりうるさいのは認めるんだな？」

新入生「っ！……まあいい。」

静かになりやがった……凶星かよ。

審判は虎峰がやる事になり、ようやく始められる。

虎峰「それでは、界龍第七学院大学部1年の比企谷八幡対界龍第七学院高等部1年の忠泰<sup>チョン・タイチン</sup>正による決闘を始めます！ルールは体術のみの武術勝負とし、捻挫や骨折などの怪我は与えないこと。過剰な攻撃は与えない事。戦闘続行不可能な場合は私が止めます。質問はありますか？」

八幡「無い。」

忠「俺もありません。」

虎峰「では、所定位置について下さい。」

忠（体術勝負……ふつ、俺に分があるな。ましてやあいつが武術をしているところなんて殆ど見た事がない。剣術の腕は相当だが、拳法は三流に違いない。）

虎峰「準備はよろしいですね？では……」

虎峰が手を挙げたのと同時に新入生が構えた。

虎峰「始めっ！」

開始の合図と共に新入生が地を蹴り、俺に向かって飛び蹴りを放ってきた。

忠「ふっ！はあっ！やつ！」

八幡「……………」

動きはかなりアクロバットなものだった。加えて拳よりも足技が多く、地面を転がったの戦法も豊富。成る程、この武術なら防御も難しい上に攻めて側としても、隙を与えずに済むな。

まあ、俺には通じないけどな。

忠「ふう……………さつきから何です？防いでばっかじゃないっすか。拍子抜けっすね。てかその構え……………比企谷先輩が使ってるのって詠春拳ですか？センスないっすね〜まさか女が作った武術使ってるなんて！」

八幡「よく喋るなお前。俺もお返しするな。お前が使ってるのは地身尚拳ちしやうけんまたの名を地功拳ちこうけんだ。飛び蹴りや地面を転がったからの蹴りや起き上がり技、何よりそのアクロバットな動きが証拠だ。」

忠「へえ……………知ってるんですか？」

八幡「そりやな。お前よりも動きの遥かに良い奴に少し教えてもらったからな。」

うん、コイツよりも普通に動けてる。

忠「俺よりも動けるんですか？」

八幡「ああ、よりアクロバットで綺麗な動きしてるぞ。」

忠「へえ……………そりや手合わせしてみたいもんですね！」

はあ……この程度か。

ドゴツ！

忠「ごはっ!!」

俺は新入生の鳩尾を蹴りで狙って見事命中！いや、そんな狙わなくても当てられるけどな。まああいつも這い蹲るのは嫌なのか、体制を起こして片膝をついている。立たねえのかよ……

忠「ど、どうやって動いてる身体の、しかも鳩尾なんか蹴りなんか……」

八幡「いや、そんなの普通に当てられんだろ。」

忠「そんな訳ない！俺の動きを見切るなんて、出来るわけがない！」

八幡「いい加減認めろよ……それとも何か？俺がお前よりも上って事実をそんなに認めたくないのか？」

忠「ぐう………」

八幡「はあ……仕方ねえな。紅、<sup>ホン</sup>ちよつと格の違いを見せつけてくれないか？」

紅「は、はい！」

上から声がして飛び降りてきた少女は、紅<sup>ホン・ティンチン</sup>天清。新入生と同じ地功拳使いだ。上から飛んで来たってことは分かるだろう？

そう、序列外だ。

八幡「今からこいつがお前の相手をする。こいつに勝ってみろ。あれだけの啖呵を切ったんだ、簡単だろ？」

忠「……ふんっ、やってやりますよ！」

紅「尊師、よろしいのですか？」

八幡「ああ、構わない。思い切りやれ。これ以上あいつの汚い足技

なんて見たくないだろ？」

紅「……ではお言葉に甘えて。」

忠「直ぐに叩きのめしてやる……うおおお!!」

結果から言うと……話にもならなかった。

忠「ガハッ!!」

紅「……ガツカリです。これが私と同門だと思うと恥ずかしく思います。本当に中国で1番なのですか？」

忠「何だ?!」

紅「貴方の攻撃を見てすぐに分かりました。ああ、全力を出すほどでもない。だからすぐに手加減しました。それでもこれとは……」

忠「このお……」

八幡「言つとくが、こいつは序列外でお前よりも2つ年下だ。」

忠「な、何だ?!?これで序列外だ?!」

八幡「お前箱入り娘にも程があるだろ。紅が弱いとは言わないが、紅より強い奴まだまだいるぞ。」

八幡「まあ紅がどつかの学園に入ったら、在名祭祀書なら確実に入れるだろうがな。」

これはお世辞では無い、本当の事だ。ウチの序列外は実力が無いわけじゃない。普通なら在名祭祀書に入っているもおかしくないレベルだ。その証拠が《鳳凰星武祭》だ。

八幡「これで分かったか？お前が世界に出て来たとしても所詮この程度だ。強くなりたいんだったら己の技術を磨き、経験を積む事だ。まあ勝って当たり前のお前には、その経験が活かせるかどうかとも怪しいがな。」

忠「……………」

忠「比企谷先輩!!」

八幡「ん？」

忠「生意気な口を聞いてすみませんでした!!俺、これから気を付けます!それでもっと強くなりたいです!都合良すぎますが、これからご指導、よろしくお願いできませんか？」

八幡「……………」

忠「お願いします!」

八幡「……………はあ、じゃあさっきの挨拶の続きな。鍛錬を重ねると

同時に動きがより洗練されて進化する。進化の過程はいつだって自分の中に眠ってる。それをどうやって引き出し、どうするかは己次第だ。名刀でも放っておけば錆びるのと同じだ。磨けば輝くが、放っておけばただの鈍だ。常に自分の技と動きに磨きをかけるように心掛ける。でないと、さつき調子に乗ってたアイツ見たくなるからな？」

八幡「だがこいつは今、この戦いの中で進歩した。世界を知る、それだけでも進化の過程、進歩に充分値する。新入生諸君、いち早く進歩したコイツに負けるなよ？最後に入学おめでとう。生徒代表、比企谷八幡。」

………はあ、やっぱこんな所でするもんじゃないな。さつきと青龍の間に戻るか。

八幡「ほれお前ら、まだ入学式の途中なんだから戻るぞ。」

すると生徒たちはそそくさと青龍の間へと急いだ。

八幡「それと新入生。」

忠「は、はい！」

八幡「まずは紅に教えを受けろ、それがお前の近道だ。武の道に近道はないが、人に教えてもらった方が強くなるには手っ取り早いだろう？」

忠「っ！………はい!!」

こうして、界龍の波乱な入学式は幕を閉じた。



## 懺悔 ①

シルヴィア side

新年度が始まって2週間が経った。八幡くんから聞いたんだけど、界龍の入学式は少し騒ぎになったんだって？詳しいことはあまり聞いてないけど、いつかは八幡くんから聞き出します！私の学園は至って普通の入学式を終えることが出来ました！まあ、新入生からの質問攻めはかなり多かったけど……八幡くん関係のことで。

今日は週に1度のデートDay♪こう見えて普段はあまりデートとかしないんだよ？週1が基本で多い時は2〜3回する時もある。今時期は少し忙しいから週1が限界かな。

シルヴィア 「視線が増えるよね〜この時期。」

八幡「ああ。どの学園にも新入生が入ってるからな。1週間前もそうだったが、こうも見られ続けるのはな……慣れたとはいえ、少し居心地が悪いな。」

シルヴィア 「やっぱり苦手なのは治らないんだね。」

八幡「そう簡単に克服できたら、俺は界龍に来てない。ずっと千葉にいただろうよ。」

シルヴィア 「……………そうだね。」

うん、確かにその通りだ。でも八幡くんが経験した事ってそう簡単に克服できるものじゃない。ゆっくり時間をかけないと治らないものばかり。

あの頃の八幡くんは心の傷が特に酷かった。人を信じられない、特に女の子。軽い人間不信にまで陥っていた。でも六花に来てからは界龍の皆や他学園の代表たちと関わるようになってから随分と変わった。

八幡「俺がこんな風になれたのも、シルヴィのおかげだ。あの時、あんな言葉を掛けてくれたから俺は立ち直れた。」

シルヴィア「やめてよ／＼／＼もう3年半前も前の話でしょー!」

八幡「ふっ……そうだな。」

シルヴィア「ホラッ!デートは始まったばかりなんだから早く行こっ!」

――昼頃――

シルヴィア「意外と面白かったね!」

八幡「興味なかったから触れずにいたが、いざ見てみると迫力あるもんだな。」

シルヴィア「本当にCGなのか疑いたくなるね!誰かの魔法だったりして?」

八幡「あり得るな。」

さて、時間もいい頃だし、そろそろお昼ご飯にしないとね。

シルヴィア「八幡くん何処かでお昼g「あ、あの!」……ん?」

突然声を掛けられた……見たところ星導館学園の制服を着ていた。休みなのに制服を着るなんて……新入生かな?

「突然すみません!比企谷八幡さんとシルヴィア・リユ―ネハイムさんですよね?」

八幡「ああ、そうだが?」

シルヴィア「私たちに何か用かな?」

「実は……お会いしてもらいたい人物がいるんです。お手数をお掛けしてしまうのですが、着いてきてはもらえませんか?」

うーん……こういう手合いかあ。今までも少なからずあったんだ

よね。今から病院までってパターンが。

シルヴィア「八幡くん、どうしよう?」

八幡「……場所は?」

「商業エリアの北側にある〇〇です。」

シルヴィア「商業エリア? 私たちが今いる所なのにどうしてわざわざ君が?」

「……本人は会うのに心の準備がいるそうなので。こうして私が代理で来ました。お願いです、会ってはもらえないでしょうか?」

八幡「分かった、案内してくれ。」

「っ! ありがとうございます! こちらです、着いてきてください!」

八幡くん、速攻で決めちゃったけど、どういうつもりなんだろう?

——商業エリア北側・〇〇——

「このお店です。このお店の個室にいますので、そこまでご案内します。」

へえ、来たことなかったなあこのお店。今度もう一回来てみよう

かなあ。何があるのかも知りたいし。

——とある個室——

「着きました、こちらにいます。私は席を外しますので、失礼致します。」

シルヴィア「あれ、一緒にお茶しないの?」

「はい……失礼します。」

???

八幡「まあいい……比企谷八幡という者ですが、入ってもよろしいでしょうか?」

『……どうぞ。』

八幡「っ!……どういうつもりだ。」

シルヴィア「え?」

八幡くんはさっきの口調が嘘に見えるくらい戸を乱暴に開けた。私も八幡くんが続いて入った。目の前にはあの子と同じ星導館の制服を着ている女の子がいた。でも、何処かで見たことあるような……

八幡「よう久しぶりだな……比企谷。」

小町「…………お久しぶりです。」

比企谷!!?じゃあもしかして……八幡くんの妹さん?

八幡「友人を使うとはな……お前らしいやり方だ。」

小町「……………」

……………なんか私、場違いじゃないかな?

シルヴィア「えつと……私いない方がいいかな?もし邪魔だったら家に帰ってるよ?」

小町「いえ、シルヴィアさんにも聞いて欲しいです。私とお兄……………比企谷さんの会話を。立会人も居ないので。」

八幡「立会人?将棋でもねえのにそんな奴いらねえだろ。」

シルヴィア「まあまあ八幡くん、落ち着いてよ。これじゃあ話なんてできないよ。」

八幡「そもそも俺は2年前に言ったよな?それを分かって俺たちを呼んだのか?」

小町「……………はい、どうか聞いてもらえないでしょうか?お願いします。」

シルヴィア「八幡くん、聞いてあげたら？」

八幡「……………」

シルヴィア「この子も勇気を出してここまで来たんだよ。話は聞いてあげようよ。」

八幡「俺の話を一切信じなかった奴の話を聞けって言うのか？虫が良すぎるだろ。」

シルヴィア「それでも、だよ。八幡くんが何を言ったのかは分からないけど、立ち直るのに時間がいるのは八幡くんが1番分かってるでしょ？」

八幡「……………」

小町「……………お願いします！」

彼女は頭を下げ続けている。

八幡「……………分かったよ、話を聞くだけだ。今後何をするかまではその時に決める。」

シルヴィア「うん、ありがとう。君もこれで良いかな？」

小町「はい、ありがとうございます。」

シルヴィア「じゃあ始めよっか。」

## 懺悔 ②

八幡 side

小町「お話しする前に比企谷さん、ほんの少しだけで良いんです。少しでもいいので、兄と妹としての話をさせてはくれませんか？」

八幡「……………気は進まんが、それがお前の立てた筋なら構わない。」

小町「ありがとうございます……………今年の冬休みに家に帰ったら、お母さんに怒鳴られちゃったよ……………あんな風に言われたの今までで初めて。」

八幡「そりやそうだ。あの家で怒鳴り声なんて聞いた事ないからな。」

小町「お兄ちゃんはその前に帰ってたの？」

八幡「ああ、2年前の《鳳凰星武祭》の後の10月にな。ライブがあつたからな。近況報告も兼ねてな。」

小町「そっか……………もう大丈夫です。」

敬語に戻ったって事は兄妹の会話は打ち切りって事だな。

八幡「で？話ってなんなんだ？」

小町「……………今回お2人をお呼びしたのは私の今の気持ちを知らうためです。許してもらおうなんて考えはありません。ただ、今の小町の気持ちをほんの少しでも聞いてもらいたくて、ここに呼びました。」

小町「まだ私たちが兄妹として過ごしていた頃、修学旅行の事を知らなかった小町は比企谷さんに冷たく当たりました。『なんで話してくれないの？』『どうして教えてくれないの？』って思いました。そして比企谷さんが転校した時は何が起きたのか分かりませんでした。」

……………

小町「私が雪乃さんや結衣さんたちに訳を聞きに行ったら、比企谷さんのやってきた事を説明してくれました。その頃の私も貴方に対して少なからず、話してくれなかった恨みもあったんだと思います。だからか、いつの間にか私も六花に行く決意をしました。比企谷さんに仕返しをするために。」

シルヴィア「そうだったんだ……じゃあ八幡くんが何も話してくれなかった時から始まってたんだね？」

小町「はい……その頃はまだ恨みとかそう言うのはありませんでしたけど。話を戻しますね。その年の最後にあった六花の見学会に参加して比企谷さんを探しましたが、何の手がかりも無いに等しかったので見つけれませんでした。」

八幡「俺も見つかからないようにしてたからな。ましてや星武祭の真っ最中だ、見つけるのはかなり難しいだろうよ。」

小町「勿論、見学会に参加しただけで諦めたりはしませんでした。その翌年に星導館学園に転校してすぐに比企谷さんの情報を集めました、なかなか見つからなくやつとの思いで見つけたのが《鳳凰星武祭》の本命タッグからでした。何が何だか分かりませんでした。『あの目の腐ってるゴミイちゃんが序列2位だなんてあり得ない！』なんて事も思いました。」

八幡「まあそうだろうな。他に思うところとなると、『何で私は非星脈世代なのに、あいつは星脈世代なんだ!』とかか？」

小町「あはは……はい、それも思いました。そして雪乃さんと結衣さんと私の3人である計画を立てました。比企谷さんはご存知ですよね？」

八幡「ああ。《鳳凰星武祭》を棄権させようとした事だろ？今だから言うが、これは戸塚に教えてもらった。あいつはお前らを監視する任務をエンフィールドから受けていたみたいでな。そしてオーフェリアも知っていたみたいだな。」

小町「やる前からバレてたんですよね。勿論計画は失敗して『孤毒の魔女』を本気で怒らせて、暫く気絶してました。その後……貴方に



起こされて私たち3人は貴方から正論を叩きつけられました。」

小町「最後に言われた貴方の言葉、今でも心と頭に染み付いて取れません。『俺は今日この時間を以って、お前と兄妹の縁を切る！』……頭が真っ白になりました。私の知ってるお兄ちゃんは絶対こんな事言わない。いつもなら苦笑いをしながら頭を撫でて許してくれる……でも、その後の言葉で本気なんだと思い知らされました。」

八幡「確か……身内よりも他人を取る奴は信用できない、だったか？」

小町「はい。それから何があつたかよく覚えてません。でも、今の言葉だけは鮮明に覚えてました。その夜から私は何度も泣きました。何でこんな事になったんだろう？何で小町がこんな目に遭わなければならいんだろう？って思っていました。」

小町「ずっと仲直りしたいって思っていました。でも、絶縁された相手にどうやって声を掛けたいのか分かりませんでした。記者会見を見て、『シルヴィアさんに取り入れば！』とも考えましたが、それじゃあ逆効果どころかますます悪化してしまうと思いました。」

八幡「ほう……それは正解だな。もしそんな事をやってたら、俺は此処に居ないだろうな。」

小町「私もそう思ってます。そして時間だけが流れて学園祭が終わった時にルームメイトから声を掛けられました。元気がないとか、ポイント低いんじゃない？とか言われて心配させてました。」

最後のはいらねえよ。

小町「私は彼女に全てを話しました。ここで離れられても別に良いと思ってました。だって、お兄ちゃんに離れられた時よりかはまだ全然マシだと思っていたからです。でも彼女は私の悩みを真摯に受け止めて、アドバイスまで来れました。そして、やっとの思いで決心して今日お呼びしました。」

小町「比企谷さん、許してほしいなんて言いません。昔みたいに接してほしいなんてことも言いません。ただ、今までのよりを戻しても

られないでしょうか？お願いします。」

そして比企谷は手をテーブルに置き、頭をテーブルにつけた。

シルヴィア「……………八幡くん。」

八幡「……………まず言っておくが、俺はお前と関係を修復しようとか、よ  
りを戻したいなんて微塵も思っていない。」

小町「……………」

八幡「……………まあ、俺も少しだけ兄妹の時間を設けてやるよ。」

小町「……………え？」

八幡 s i d e o u t

小町 s i d e

八幡「……………まず言っておくが、俺はお前と関係を修復しようとか、よ  
りを戻したいなんて微塵も思っていない。」

小町「……………」

……………やっぱりそうだね。よりを戻すなんてのも夢のまた夢だっ  
たんだよね。

八幡「……まあ、俺も少しだけ兄妹の時間を設けてやるよ。」

小町「……え？」

なんか小町が言ったような事をお兄ちゃんも言ったような気がした。頭を上げた途端、何かが頭に乗った。それがなんなのかはすぐに分かった。

八幡「学園祭から今日まで、1人で見たり聞いたり、考えたりする思考力や判断力はついたようだし、少しは成長したみたいだな。」

お兄ちゃんは少しだけ笑っていた。本当にほんの少しだけだけど、私に向かって笑っていた。しかも、成長したって……

小町「………」ポロポロ

そしてすぐに手を離してしまった……でも、すごく久しぶりな感じがした。

八幡「言っておくが、俺からは修復を考えていないってだけだからな？その意味、今のお前なら分かるだろう？意味が分かるのなら、全力でぶつかってみろ。そこに星脈世代や魔術師、魔女、非星脈世代も関係ない。」

そしてお兄ちゃんは立ち上がって扉を開けてから部屋を出ようとした……でも寸前で止まった。

八幡「それともう1つ言っておく。関係の修復の事だが……『If you can do it.』英語なら調べやすいだろう？行くぞシルヴィ。」

シルヴィア「うん、分かった……小町ちゃん、私は貴女たちの話

に口出しはできないけど、八幡くんの言った言葉の意味は理解出来るんだよね？」

小町「グスツ……ばいっ！」ポロポロ

シルヴィア「それなら良いんだ、じゃあね。後、さつき八幡くんの言った英語、ここに書いておいたから意味は調べておくといいよ。」

そしてシルヴィアさんも行ってしまった。

小町 side out

シルヴィア side

シルヴィア「八幡くんどういうつもり？縁を切ったんじゃないの？」

八幡「ああ、切ったぞ。」

シルヴィア「戻そうとしてない？」

八幡「そんなわけないだろ。俺はあいつと縁を戻そうなんてこれっぽっちも考えてないぞ？」

シルヴィア「でも、行動と言葉が矛盾してるよ？」

八幡「やっぱ気付かなかったか。じゃあヒントな、『俺は今日この時間を以って、お前と兄妹の縁を切る！』この言葉をよく考えろ。」

シルヴィア「ん〜？」

……

……

………っ！

シルヴィア「もしかして……」

八幡「答えは出たか？」

シルヴィア「もしそうだとしたら、八幡くんって優し過ぎるよ。」

八幡「じゃあ答え合わせだ。」

シルヴィア「兄妹の縁はもう作らないけど、他人としての縁だった  
ら作ってやる、かな？」

八幡「流石俺の彼女、正解だ。」

シルヴィア「もうゝ八幡くんって本当に優しいね！でも、この意  
味って……」

八幡「ああ、あいつは知らない。だが、英語の意味を知れば半分は  
分かるだろう。」

ホント、八幡くんは優しいね♪

――個室――

小町「If you can do it……できるものならやってみろ、かあ……絶対やってやるからね！お兄ちゃん！」ポロポロ

## 変わらぬ野望

雪乃 side

……最近、小町さんと会う機会が随分減った気がするわ。学園では見かけるのだけれど、それ以外ではほとんど見かけなくなっているわ。こつちに來てからもう3年が経つのね、早いものだわ。比企谷くんは復讐を決めたあの日からだいぶ経つけど、まだ彼に何もしていないどころか私たちの弱点を握らされてしまった。わたしの母親を使つて脅迫するなんて……益々許せないわ。

おかげで私たちは彼に何も出来ない日々が続いているわ。学園にも大学部までは残るつもりだったからいいものの、その後は雪ノ下家から除籍・追放だなんて……全て彼のせいとしか考えられないわ。最後に会ったのは1年前の学園祭かしら？あの頃から1度も彼の顔を見ていないわ。

……1年前といえば、《獅鷲星武祭》で葉山くんが違反をした事件があったわね。葉山くんのことはどうでもいいのだけど、まさか違反をするなんて思いもなかったわ。その時の比企谷くんにはほんの少しだけれど、賞賛を贈つてあげるわ。恨んでいるとはいえ、私の嫌いな人間を六花から追い出してくれたのだから、心の中でお礼を呟くらいなら損はないわよね。

話がそれってしまったわね。要するに私たちは、今年の冬に開催するシーズン最後の星武祭《王竜星武祭》に出場するのだけど、葉山くんのようにレギュレーション違反をするなんて卑劣な事はしないという事よ。最も、卑怯谷くんはまだズルを続けているようだけれど。

界龍でやった講習会だって、何処かの動画を見て覚えたのをやっただけに違いないわ。そうでなければ彼が強いだなんて考えられないもの。皆まだ騙されているまま……それはどうでもいいのだけど、彼に私たちの前で頭を下げさせるまでは諦めないわ。

それに、新入生が入ってきたのだけど、殆どが比企谷くんを目標とする人ばかりだわ。彼を目標にするのだったら界龍に行つて欲しいものね。そうなったとしても、彼の本性を知れば失望することになるでしょうけども。

新入生の皆はこう言っていたわ。

『比企谷八幡のように強くなりたい。』

『比企谷八幡のような剣術を身に付けたい。』

『比企谷八幡のような魔法使いになりたい。』

『比企谷八幡のような戦術を身に付けたい。』

『比企谷八幡のような誰にでも尊敬されるような人間になりたい。』

……比企谷くんのことばかりだったわ。好きで聞いたわけではないのだけど、こうも連続で彼の名前が出てくると虫唾が走るわ。

はあ………こんなのではダメね、魔法に集中しないと。この程度じゃあ彼を痛めつけることは出来ても、甚振る事なんて出来ないわ。

雪乃 side out

由比ヶ浜 side

やっと来た、やっとだよ……《王竜星武祭》漸くヒツキーと戦える。この前はあの2人にやられちゃったけど、今度はそうはいかないんだから！あの日からたくさん練習して、色んな人と模擬戦もして強くなったんだから！

「結衣ーそろそろ始めようー！」

「あつ、うんー！」



そう、今も私は友達と模擬戦中！《王竜星武祭》に向けて特訓中つてわけ！《王竜星武祭》は1対1だからゆきのんとも敵同士になっちゃやうから別々で練習してるんだ。私は友達で剣を使ってる人から教えを受けてるの！だから今は集中集中！

――10分後――

「うん、だいぶ良くなってきたと思うよ。後は自分なりに《流星闘技》や技を編み出してみたらどうか？」

由比ヶ浜「《流星闘技》かあ……よく分からないだよね。技もどうやったらいいか分かんないし。」

「そこは経験もあるからね。この学園でいうなら天霧くんや刀藤さん、リースフェルトさんが分かりやすいかな。流派の剣術を持ってるし、リースフェルトさんは魔法の技がいくつもあるからね。」

由比ヶ浜「私に出来るかなあ？」

「結衣の星辰力なら大丈夫だと思うから自信持ちなよ。何かないの？星辰力を剣に纏わせました、そこから？」

由比ヶ浜「うう……剣ばかりだったから全く考えてなかった。」

「ありやりや……まあそこはこれから考えていけばいいよ。私の場合、星辰力を纏わせたら、そのまま斬撃として相手に斬りつける『フラッシュブレイド』剣の衝撃波を作って相手に放つ『ラルムブレイク』これはマクフェイルくんのブラストネメアを自分の剣でアレンジした技なんだ。」

由比ヶ浜「ほえ、凄いね。」

「まあもつと参考にするとしたら、界龍の比企谷さんがオススメだよ。」

……

「あの人ののは別格だからね。剣術に魔法を織り交ぜたものや見たこともない《流星闘技》を使ってくるからね。やっぱり序列が冒頭の十

二人クラスにもなると、戦術も技の量も凄いいね。」

由比ヶ浜「……………うん、そうだね。」

「どうやったらあんな風になれるんだろう？ やっぱ毎日練習かな？  
どんな練習してるんだろうね？」

由比ヶ浜「……………そ、そうだね。そろそろ練習しよっ！ 休憩はもう終わり！」

「おっ、やる気出てるね〜！ いいよ、もう一回！」

……………別にやる気を出したわけじゃない。そんなの最初からある。  
ただヒツキーの話題を広げたくなかっただけ。クラスにいる時も、皆  
ヒツキーの話ばかりするからウンザリしてるの。

あの時とはもう違う、今度こそ勝ち上がってヒツキーに格の違いを  
見せつけてやるんだから！ 頭を洗って待ってるし！

## 崩壊

葉山 side

……何故だ？何故、俺がこんな思いをしなくちゃならない？俺は正しいはずだ。正しい事をしてきたはずだ！なのに、なんで誰も分らないんだ!? 奴は……比企谷は俺を六花から追放した極悪人だというのに、なんで誰もその事を咎めない!?

ニユースでも俺が悪者扱いだ。

『葉山隼人、ガラードワース始まって以来、最大の汚点!!』

『ガラードワースの葉山隼人、神聖な星武祭で違反行為!!』

『葉山隼人、違反行為・星武憲章の違反により、聖ガラードワース学園及び、六花から永久追放が決定!!』

くそっ!! どのいつもこいつも違反の事ばかり書きやがって! あいつこそ違反をしているようなものじゃないか!! わけの分からない服を身に纏ったと思ったら急に強くなる、あれのどこが違反じゃないっていうんだ!!

……まあいい、この借りは3倍返しにしてやるからな、比企谷!!! 待っているよ……必ずお前をどん底に引き摺り下ろしてやる!! お前は底辺の方がお似合いだ!!

ピンポーン

葉山「……どうせマスコミだろうし、ほつとこう。」

???『……葉山、誰か分かってる?』

葉山「っ!？」

……ははっ、まさか来てくれるなんてね。

俺は玄関に行って扉開けた。

葉山「久しぶりだね、優美子。」

三浦「久しぶりだし。」

葉山「まさか来てくれるなんて思わなかったよ。」

三浦「あーしも、なんか気になっただけ。」

葉山「それでも嬉しいよ。」

ふっ、どうだ比企谷。これがお前と俺の差だ。俺にはこうやってついてきてくれる奴がいる。お前にはいないだろう？

三浦「そんで、あんたこれからどーすんの？」

葉山「何とかして六花に戻るよ。」

三浦「永久追放されてんのに？」

葉山「あんなの奴らの妄言だ！確かに俺は違反をした。だが、永久追放だなんておかしいと思わないかい!? たかが星武祭の違反程度で六花追放なんて……全くバカげてる。」

ああ……そうだ、そのせいで俺の親は何処かへ消えた。この家も来た時は家具だけだった。貴重品の類は全て持って行った後みただった。

三浦「……あんさー、あーしかもーっ言うけど、あんた何も変わってないんだね。」

葉山「……は？」

三浦「ヒキオから結衣の事は聞いてた。結衣も成長してないって思ってたけど、あんたもまるで成長してないし。六花に戻ったとして、やる事はヒキオへの復讐ってどこっしょ？」

葉山「っ……………」

三浦「やつぱり。あんたじゃヒキオにはどうやっても勝てないし。」

葉山「っ!?なぜそんな事が言える!?!」

三浦「……ヒキオが2年前の10月に千葉の総武高に戻ってきた時、なんて言ったと思う？あんたには絶対に分らないと思う。」

三浦「恨んじやいない、むしろ感謝してるって。なんで分かる？」

葉山「分かるはずないじゃないか。あんな奴の考えることなんて。」

三浦「それが分からないんだったら、あんたはヒキオには絶対に勝てないし、相手にもならないし。あんた、自分がどんだけ偉いつて思ってるかは知らないけど、そんなじゃ生きていけない。」

三浦「あーしもヒキオから教わったし。仲良くする奴は選ぶべきだって。おかげであーしも今の大学は充実してる。あいつが尊師と呼ばれてるのも頷けるし。」

……何故だ、何故あいつを賞賛する!?比企谷は賞賛されるべきじゃない!むしろ陥れるべき存在だ!!

三浦「言つとくけど、もうあんたの周りに味方なんていないかね？六花に行くつもりなら自分の力でなんとかするし。最後にもう1つだけ……これは今まであーしたちを騙して来た罰だし。」

バチイイインツ!!

何が起きたか分からなかった。だが、優美子が思い切り俺の頬にピンタをして来た。それはされた後に理解した。

優美子「………そんじや。」

そして扉は閉められて、俺は暫く動けなかった。

葉山 side out

三浦 side

あの後、葉山の家は大変な事になってた。マスコミの人が家の前に

張り込んで、出て来たとしても外に出られないような状況だったし。でもその時はもう家の中に誰もいなかったみたいで、すでに離婚もしてたみたいだし。

そしてお互いの実家に帰って仕事を手伝ってるか、職探しをしてるって噂だし。あくまで噂だからどうでもいいけど。でも、願うのならまともな職についてくれる事を願うし。

葉山は未だに何かを企んでるみたい。まあ、企んでたとしても、それが世間に通じるとは思えないし。

まっ、あいつの事はどうでもいいし。今あーしは千葉の大学に進学して、1年生。環境にも慣れたし友達も出来た。前にヒキオが言ってた『上っ面の関係』なんてものにはなってないと思う。

総武高にいた時よりも充実感あるし。それに、ヒキオがあん時来てくれなかったら、引き摺ったまま卒業してたと思うし。

まあ今日は午前中の講義がなかったからあいつの家に行って、しっかり借りを返してやったし！最後床に倒れてんの、すごい傑作だったし！

さて、そろそろ大学行かないと間に合わないからこれで終わりだし！葉山をぶっ叩いた事、皆に自慢してやるし！

## 第9章 継承

### ※動く月影

八幡 side

……年が変わってもう半年、後半年もない内にシーズン最後の星武祭、《王竜星武祭》がある。今のところ、誰が出るかどうかのこうのはないが、俺としてはこのままでは終わりたいくない。何せ、あまりカツコがつかないからだ。俺自身、この六花に來た目的は、自分の力がどこまで通じるのか、って奴だった。

ならば、もうそろそろあの最強に挑んでもいいのではないか？《王竜星武祭》をやるからには、奴を倒してからにしたい。

シルヴィア「八幡くん、どうしたの？なんだか思い詰めてるようだけど？」

八幡「……なあシルヴィ、今の俺が《王竜星武祭》に出たらどう思う？」

シルヴィア「え？……うーん、私も出るから細かいことは言えないけど、やっぱり圧勝かなあ。決勝はどうなるか分からないけど。でもどうして？」

八幡「いや……そろそろ自分の殻を破りたいと思ってな。界龍でもこれが定着してきてる。」

シルヴィア「うーん……話が見えないなあ。」

八幡「3代目に……星露に挑もうと思ってる。」

シルヴィア「え……ええ!？」

まあこれが当然の反応だろう。星露が持っている2つ名は「万有天羅」だ。この称号を持った者は、例え統合企業財体だとしても自由を妨げてはならないとまで言われている程だ。そんな相手に挑むと言

うのだ、驚かすにはいられないだろう。

シルヴィア「ど、どうしたの急に？ 星露に挑むだなんて……なんて呼ばれてるかは分かってるでしょ？ それに実力だって……」

八幡「ああ、俺もあいつの愚痴やら暇潰しやらに付き合わされて稽古してるから分かってる。手加減してあれだけの威力の拳と蹴りを放ってくるんだ、本気だったら間違いなく吹っ飛ばされてる。だが、今の俺のままで《王竜星武祭》は出たくないと思ってな。」

シルヴィア「……もしかして、序列1位で出たいって事？」

八幡「……自己満足だけだな。だが、どうせ最後を飾るのなら、最後は1番でいたい。言っちゃあなんだが、いつまでもあんなチビの下に居たくないからな。それに、どこまでやれるか、まだ試してないからな。それが俺のここに來た目的でもある。」

そう、これは自己満足。俺が序列1位を獲りたいだけだ。相手が強大なものも分かっている。それを承知の上で挑みたいんだ。無謀、無茶、無理、そんなことは分かっている。だが、絶対ではない。例えば1%だとしても勝機はある。

シルヴィア「……そっか。うん、わかった。なら私も止めないよ。でも、いきなり挑むの？」

八幡「いや、最初はアレマさんに頼もうと思ってる。あの人も星露が来る前までは序列1位だった人だ、実力は充分にある。その後に小苑さんに少し手合わせをお願いする。それから星露と戦う予定だ。」

シルヴィア「それ大丈夫なの？ 八幡くん怪我した状態で星露に挑むつもりなの？」

八幡「いや、そこはちゃんとした奴に治療を頼む予定だ。ちょうどその知り合いがいるしな。」

シルヴィア「……私も治療出来たらなあ。そうしたら八幡くんの力になれるのに。」

八幡「シルヴィは疲れが吹っ飛ぶような晩飯でも作ってくれ。それ



だけで俺は充分だ。」

シルヴィア「うーん……じゃあ、マッサージするよ！後は風呂で背中流したり、疲れが早く取れる方法も調べてみるよ！」

八幡「……すまないな、俺のために。」

シルヴィア「それは言わないの！支え合つての私たち、でしょ？」

……そうだったな。

## 穴の空いた界龍

虎峰 side

―――食堂―――

ここ最近、八幡が学校に来ていません。担任の先生、というよりも学院側には公欠届を出しているみたいなのですが、何処に行ったかまでは分かりませんでした。師父なら何かご存知だと思って聞いてみたのですが、師父も知らないとのことでした。そのせいもあってか、いつも放課後に鍛錬している皆もあり精が出ていない様子です。一体、どこへ行つたのでしょうか……

セシリー「あぁーん……八幡いないからつまんないよー!」

冬香「仕方ありませんよ、セシリーさん。八幡さんが何処にいるのかも分からないのですから。」

沈華「ですが、本当に何処へ行つたのでしょうか?まるで大師兄と戦う直前のように、神隠しにでもあつたようですわ。」

虎峰「ええ……確かにあの後、八幡が何処に行つたかなんて検討もつきませんでしたからね。今も何処に行くかなんてよく分かってないのですが。」

曉彗「……………誰にも話していないのか?」

沈雲「それなのですが、比企谷くんがどこに行つたのか知ってる人が居ないので。【戦律の魔女】の元へ行く、なんてことではないと思います……………」

今の界龍の冒頭の十二人は八幡がいなくてこの調子です。それは師父にも言えた事でした。彼の行方が分からなくなってから2日もしないうちに、『八幡の飯が食えんのじゃー!』っと嘆いていました。

ですが、やはり寂しいです。いるはずの人間が居なくなってしまうと、こうも雰囲気が変わってしまうのだと改めて実感しました。この出来事、確か3年前にもありましたね。

ガチャツ

星露「ああ、暇じゃのう……八幡がいない日々は、全く歯ごたえが無いわい。早く戻って来んかのう。おお、お主らもおったのか……」

虎峰「ええ、ちょうど八幡の話をしていたところです。」

星露「やはりのう……本当に何処へ行ってしまったのかのう？ 妾は暇で暇で仕方ないぞい。」

セシリー「まあ今師父が手合わせをしているのは八幡ですからねー。見ても凄いつて思いますよアレはー。」

星露「妾もつい本気の一步手前まで力を出してしまう時があつてのう、そうしないようにしておるのじゃが、なかなか難しくてのう。」

……そう。師父の暇潰しに八幡が偶に付き合わされているのですが、その暇潰しがとんでもなくくらいに激しい打ち合いなのです。僕でも目で追えないくらいの拳戟で、師父も攻撃を受けて飛ばされる事もあります。

そして偶に思います。この2人は本当に我々と同じ星脈世代なのか？と。

冬香「本当にどこへ行ってしまったのでしょうか？ 八幡さんがただ居なくなっただけとは、とても思えません、意図が全く見えません。師父にも教えていないとなると余程のことだと思われるのですが……」

セシリー「それが分かれば苦労しませんよー。ああー八幡に会いたいー、八幡のご飯が食べたいー！」

虎峰「セシリーの場合は後者でしょう……ですが、確かに早く帰ってきてほしいですね。」

沈雲「ええ、今や彼はこの界龍の代表、その彼がいなくては教えを受けている人たちも、調子が出ませんからね。」

沈華「その通りね、早く戻ってきてほしいわ。」

曉彗「……………揶揄う訳ではないが、2人がそんな事を言うとは思わなかった。」

沈華「我々だって比企谷によって変えられましたから。」

沈雲「昔のように人を見下したりはしませんよ。最も、戦術はあまり変わってはいませんが。」

八幡、僕たち界龍の皆は貴方の帰り心待ちにしています。ですので、早く帰ってきてくださいね。

虎峰 side out

八幡 side

八幡「……………と言うわけなんだが、頼めないか？無理なら諦めるが……………」

???『ううん、久しぶりに八幡から頼ってきてくれたんだもん、協力するよ！』

八幡「……………ありがとな、戸塚。それで報酬なんだが……………これくらいでどうだ？」

戸塚『そんなの要らないよ。僕は八幡の役に立てるだけで満足だから。』

八幡「だがな……………俺は一応依頼者だ。それを請け負った人には報酬を出すのが当然の義務だろう？」

戸塚『確かにそうだけど、僕と八幡の仲なんだからそういうのは無しにしてほしいな。友達なんだから、困ったときはお互い様でしょう？』

ううむ……それだと俺の気が済まない。なんかねえか……あつ、  
そうだ。

八幡「なら今度、俺が料理を作つてやる。これでも料理は嗜んでる  
方でな、少し自信がある。それでどうだ？」

戸塚『分かった！じゃあ暇な日が分かったら連絡してね！流石にそ  
の日にさせる程、僕は鬼じゃないから。』

八幡「ああ、分かった。じゃあよろしく頼む。」

戸塚『うん、任せて！じゃあね！』

そして通信が切れた……さて、行きますか。

――龍生九子・とある部屋――

八幡「お邪魔しますよ、アレマさん。」

アレマ「……なんだい八幡ちゃん？そんなに闘気をむき出しにし  
てき。そんな闘気を見せつけられたら、アタイ興奮しちゃってその気  
になっちまうじゃないか。」

八幡「ええ……そのつもりです。よければ付き合ってくれませ  
んかね？」

アレマ「あああ……八幡ちゃんが珍しくその気になってるなん  
てね……アタイとしてはもう我慢出来ないよ！じゃあやろうじや  
ないか……アタイをしっかりとイかせてくれよ？」

八幡「言葉がやらしいのはほっときますね。まあ此処ではやりづら  
いので、人目のつかないところでお願いしますよ。」

アレマ「全く……アタイは楽しみで仕方ないよ。八幡ちゃん、期待  
を裏切らないでくれよ？」

……当たり前だ。貴方を倒せないようじゃあ、星露を倒すなんて  
夢のまた夢だ。

## 八幡の考え

――――

現在の時刻は午後の5時、今の季節では日没の時間が延長される為、夕焼けが眩しい辺りである。そんな中、とある模擬戦場では1人の男と1人の女が闘っていた……そう、闘っていたのだ。もう戦闘は終了している。

男は表情を崩さないまま刀を持って立っていた。一方女の方は、青龍刀を杖代わりにしながら膝をついた状態で、肩で息をしていた。見て分かるように、男の圧勝だった。

八幡「……もう終わりですか？」

八幡 side

アレマ「い、いつの間にこんなに強くなったんだい、八幡ちゃん？今の君、アタイ程度の奴じゃあ相手しきれないよ。《獅鷲星武祭》で強くなったのは知ってるけど、またこの半年間で何があっただんだい？」  
八幡「ちよつとした覚悟を決めただけです。別にそれ以外何もあ

りません。」

アレマ【覚悟？それだけで強くなるもんかい？是非ともその覚悟を教えてもらいたいものだね。】

八幡「……いいですけど、他言無用で頼みますよ？言ったら当分は貴方と模擬戦ですからね。」

アレマ【良いねえ……そう言われたらアタイ、また興奮してきちゃうじゃないか。でも、八幡ちゃんの頼みと負けたこともあるから、今回は聞いてあげるよ。】

八幡「まあそんな大した事じゃ無いですけどね。」

俺はアレマさんに星露と戦う事を説明した。しかも、俺が星露と戦うと言った瞬間から嬉しそうな顔をしていた。流石は戦闘狂だな。

アレマ【八幡ちゃん、そんなの星露ちゃんに言えるわけじゃないじゃないか。その話、アタイも協力させてもらうよ。しかもアタイと戦った後に汪さんとも戦おうとしてるなんてね、八幡ちゃんも段々と人間を捨ててきてるね。】

八幡「余計なお世話です。」

アレマ【まあとにかく、星露ちゃんと戦うまでの間はアタイも協力するよ。じゃあ八幡ちゃん、星露との戦い楽しみにしてるぜ。】

八幡「つー事があって、結局あの人を超絶楽しみにさせてしまったってわけだ。」

戸塚「あはは……そんなに戦い好きなんだね、その人。」

シルヴィア「うん、私の学園にもそんな人は居ないよ。」

八幡「戦い好きなんてもんじゃねえし、クインヴェールにアレマさんみたいな奴がいたらそれだけでも有名になる。それに、あそこまですなるともう病気だ。」

アレマさんとの戦いを終えた後の俺は、家へと戻り治療を受けている。勿論医者はシルヴィ……ではなく、戸塚だ。戸塚は魔術師で、しかも回復系の使い手だった。これはある意味すげえ。戦闘ばつかの能力しかなかった魔法使いが、ようやく回復系の魔法を使う奴が現れたのだ。

再生能力者以外で身体の傷を癒す能力を持った能力者なんて、今までに聞いた事ないしな。星導館ではかなり有名な上に保健委員もやっているみたいだ。ますますお似合いじゃん。

戸塚「でも良かったよ。八幡がこの程度の傷で帰ってきて。」

八幡「もつとひどいのを予想してたのか？」

戸塚「うん。僕は界龍の事はよく知らないけど、八幡がああやって言ってくるってことは、凄く強い人と戦うんだろうなあって事くらいは予想出来たから。」

八幡「まあ確かに今日戦った人も強いぞ。一応今の序列1位が来るまで1位だったんだからな。」

シルヴィア「ああそっか！アレマさんって【醒天大聖】の事だったんだね。最初誰だか分からなかったよ！まさか元序列1位と模擬戦していたなんてね……」

今日は問題なく終わった。だがこの後からは小苑さんに鍛えてもらう予定だが、あの人を受けてくれるかどうかだ。いる場所は大体見当がついてるが、受けてくれなかったらどうしよう？アレマさんしか



味方いなくなっちゃう。

八幡「まあ、後の予定日はなんとかするしかねえよな。戸塚、すまないがこの1週間は頼む。」

戸塚「うん、任せて。万全の状態にするからね!」

八幡「シルヴィもな。帰りが遅くなっちゃまうが、なるべく早く帰るようにする。」

シルヴィア「うん、わかった。八幡くんも頑張ってね。」

シルヴィにこうまで言われたんだ。星露に噛みつくくらいはしねえとな。

## 2 度目の本格修行

八幡 side

――とある一軒家――

居るといいんだかな……こればかりはあの人の行動次第だしなあ。まあ居なかったら居なかったで出直すだけなんだけどな。

俺は目の前にある呼び鈴を鳴らした……あつ通信入った。

小苑『むっ？誰かと思えば八幡ではないか。どうしたのじゃ、儂の所に来るとは？』

八幡「はい。実はちよつとしたお話があつてお伺いしました。お時間がありますか？」

小苑『可愛い弟子を放つたらかしにするほど、儂は冷酷な人間ではない。上がって来るがよい、中で話そうぞ。』

良かった……どうやら話は聞いてくれるようだ。まあまだ教えるを請うてくれるかどうかは分からないけどな。

――とある一軒家・居間――

八幡「失礼します。」

小苑「待っておつたぞ八幡よ、座るが良い。」

麗蘭「お久しぶりですね、八幡さん。およそ半年ぶりでしょうか？」

八幡「ええ、お久しぶりです。何故こちらに？」

麗蘭「この家は元々私の住まいでもあります。貴方ならお気づきになつていると思いますが、バリアフリー対策をしているでしょう？」

……成る程な、確かに廊下にも手摺があつた。それに居間にも手摺がある。

小苑「八幡よ、早う座れ。」

八幡「あつ、はい。」

忘れてた、麗蘭さんの挨拶に時間を取り過ぎたか。

小苑「それで？話とは何じや？」

八幡「単刀直入に言います。もう一度、俺を鍛えて下さい。」

麗蘭 side

……確かに単刀直入ですね。それに何故でしょう？彼はもう十分過ぎる實力を持っていると思いますが……

小苑「ふむ……何故じや？」

八幡「3代目【万有天羅】を倒すためです。」

麗蘭「……星露をですか？」

八幡「はい。今の俺では、星露に傷をつけることは出来ても倒すことは出来ません。」

どうやら自身の實力については把握しているようですね。いえ、そうでなければ此処へは来ていませんね。

小苑「お主、4代目【万有天羅】になるつもりかえ？」

八幡「肩書きなんて俺は興味ありません。最初の俺の目的を思い出ただけですよ。自分はこの六花でどこまで通用するのか、それを今からやってやろうってだけの話です。」

麗蘭「それを試すのにちょうど良いのが、星露だと？」

八幡「はい。小苑さん、お願いします！」

八幡さんはそう言って立ち上がると、頭を下げた。

小苑「…………お主の心意気は分かった。その覚悟も認めよう。他ならぬ愛弟子の頼みじや、断る理由なぞどこにも無いわい。」

八幡「っ！ありがとうございます！」

小苑「それで、チビと戦うのはいつなのじゃ？」

八幡「1週間後の公式序列戦を予定してます。俺が暁彗と戦ったのと同じ理由です。これなら手を抜けなくなりますからね。まあ、星露が手加減するとは思いませんけど。」

1週間後…………成る程、自分を追い詰めるには期間が短い方が良いというわけですか…………考えているようですね。頭も相当キレるようですね。

小苑「1週間もあれば充分じゃな。よし、ならばその期間の間、お主をみっちりシゴいてやる。覚悟しておく事じゃ。」

八幡「覚悟ならもう出来てます。よろしくお願いします、小苑さん。」

## 修行中でも

八幡 side

修行を始めてもう3日が経った。この3日間で俺はかなり目が強くなったと思っている。だって考えてみ？小苑さんと全力の模擬戦をしてあの人の動きや攻撃を全部見切るなんて3日じゃ出来ません！八幡嘘つかない。

まあそれでも、あの人の攻撃を7割くらいは防ぐか受け流すくらいは出来るようになった。俺も小苑さんに攻撃をしているが、通ったのは1回の模擬戦に4〜5回だけ。流石は俺の師匠で2代目を継承しただけはある……当たり前なんだけどな。

そんで今は、今日の鍛錬を終えて晩飯の準備をしている。え？シルヴィが作ってるれているんじゃないのかって？それな……小苑さんが『泊まり込みで鍛える。その方が身が締まるじやろう？』って言ったからだ。確かにその通りなんだが、鍛えてる人に料理作らせますかね？麗蘭さんは目が見えないから無理なんだろうけど……いや、あの人心眼使えるから出来るのか？どっちだ？

あつ、言い忘れていたが、模擬戦にはなんでか分からんが麗蘭さんも居る。模擬戦後には俺の動きの改善点や長所や短所、立ち回りなどのアドバイスをしてくれる。やっぱ心眼使えるんじゃない。

小苑「八幡よ、料理に凝っておるのは良いが、はようせい。」

八幡「……すみません、もうすぐです。」

……少しだけ弟子の扱いが荒くなってきているように感じているのは気のせいでしょうか？

――3分後――

八幡「お待たせしました。」

小苑「おお、待っておったぞ。相変わらず美味そうじゃのう。」

麗蘭「首を長くして待っていました。早速頂きましょう。」

俺が作ったのは至ってシンプルなオムライス。そしてサラダとじゃがいものコロツケだ。こんな簡単にできる料理で美味そうって言ってくれるんだから嬉しいよな。味の方が重要だけどな。

小苑「……………うむ、良い味じゃ。お主の性格が出ておるのう。」

八幡「俺の性格？」

小苑「優しいところじゃよ。心理的なものじゃがのう。まあ、そこが八幡の美点じゃからのう。」

麗蘭「……………成程、貴女の言う事が何となくですが分かった気がします。優しい、包み込むような味がしますね。これも、シルヴィア・リユーネハイムさんのおかげなのでしょうかね？」

八幡「……………ないといえば嘘になるかもしれませんがね。それに、色々と料理を模索し始めたのは、俺が序列2位になって少し経った頃だったから……………ほんの少しずつ、シルヴィと過ごす日が増えてきた頃ですね。」

小苑「そこからも模索するようになったのじやろう？」

八幡「まあシルヴィと同居してからは増えましたね。新しい料理を作るのを割と楽しく感じてましたからね。」

最近はやスペイン料理に凝ってたな……………いろんなの作っては改良してたなあ。そのせいで体重が増えたのか？

小苑「何にせよ、美味いから文句なぞ言わんがのう。これにケチをつける奴がいたらどうかしとるわい。」

麗蘭「そうですね。八幡さんの料理はとても美味しいものですし、見栄えも素晴らしいです。それに口を出す方は大変珍しい舌をお持ちだと思えます。」

麗蘭さん……それって暗にその人をデイスってますよね？誰かは知りませんけど。

小苑「まあよい。それよりも八幡よ、食べ終わったら風呂に入って身体を休めるのじゃぞ？3日間これだけ身体を酷使しておるが、後4日続くのじゃ。疲労は取れるだけ取っておくのじゃ。」

八幡「分かりました。ちようど食べ終わっているので、早速行ってきます。」

さて、今日の入浴剤はなんだろうな？一昨日は檜風呂だったし昨日は森林風呂、今日は何だ？

八幡 side

麗蘭 side

麗蘭「……小苑、率直に問います。貴女は八幡さんに《手加減しない》というより、《手加減が出来ない》という事でよろしいですか？」

小苑「……流石に分かるようじゃのう。その通りじゃ、儂はもう八幡相手に手加減は出来ぬ。八幡の力は既に儂を超えておる。もし八幡が《憑霊》という技を使ったら、儂は確実に負ける。現役の頃の儂じゃったら仙具があるじゃろうから分かんが、それでも負傷は免れぬ。」

麗蘭「八幡さんは未だ気付いていないようですが、彼自身の力、速度、反応、全てが限界の域を超えています。それでも彼が貴女の攻撃を受けてしまうのは、身体の何処かで制限をかけているからです。もしその制限が解かれてしまった場合は……」

小苑「分かっておる。儂らを超える、とでも言いたいのはやろ？じゃが、八幡が本気になる時は決まっておる。相手が全力で来た時じゃ。じゃがそれ以外にも、もう1つだけある。それはお主も分かっているじゃろう？」

麗蘭「…………シルヴィア・リユーネハイムさんですね？」

小苑「うむ…………もし何処ぞの命知らずがシルヴィアに手を出そうものなら、八幡は本気の全力で其奴を潰すであろうな。去年の《獅鷲星武祭》葉山隼人のようにのう。」

つまり八幡さんの本気を出すには、相手が全力で戦うと決めた時。そして、愛する人を手にかけられた時。こう考えると、八幡さんの本当の怒りはどれほどのものなのでしょう？

気にはなりますが、それだけは絶対にしないでおきましょう。



## 八幡のいない夕飯

シルヴィア side

ううゝ八幡くん成分が足りないよおゝ！もう3日も八幡くんに会ってないよおゝ！いくら修行だからって小苑さんは厳しすぎるよ！1週間の間、私との触れ合いの一切を禁止するって酷すぎるよっ！

ペトラ「それで私の所に来て、一緒に食事をしてるってわけ？私からしてみれば、イチヤイチヤ夫婦もどきが漸く2人きりの生活を一時的にはあるけど、中断してくれたって感じなのだけど？」

シルヴィア「ああゝ!?ペトラさん酷いなあ！そんなこと言うんだったら、ペトラさんの家に押しかけて見せつけてやるんだから！」

ペトラ「……本当にやりそうだから謝っておくわね、ごめんなさい。」

全くもう！

ペトラ「それにしても、貴女八幡くんが居ないと本当に暇人なのね。前まではあんなに作曲とかしてたのに。」

シルヴィア「今でもしてるよ。でも八幡くんという時間の方が大切だから時間がある時にしかやってないんだ。例えば……八幡くんが家に帰ってくるまでの間とかね。」

ペトラ「はあ……本当に通じあってるのね。流石は六花一のベストカップル兼ラブ新婚夫婦ね。」

シルヴィア「変な捏造してない？」

ペトラ「気のせいよ。それにそうだったとしても事実じゃない。何処に嘘があるの？」

シルヴィア「……それもそうだね。」

うん、間違ってるのは《新婚夫婦》ってところだけだね。

ペトラ「それにしても、昔はあんなに純情だった貴女が、もう照れ隠し1つすらしないなんて……時が流れるのは早いわねえ。」

シルヴィア「おばあちゃんみたいなこと言わないでよ。まだ3年だよ?」

ペトラ「その3年で貴女は真っ赤になる事を忘れているのよ。あの頃が懐かしいわ。あんなに可愛かった高等部1年の子が、今じゃ大学部1年の六花最強の婚約者持ちなんだものね。」

シルヴィア「なんか嫌味にしか聞こえないよ?」

ペトラ「シルヴィア、1日だけ八幡くんを貸してくれないかしら?」  
シルヴィア「ダメに決まってますー。八幡くんは私だけのものなんですし、私も八幡くんだけのものなんですから。」

ペトラ（その八幡くんが今、修行で取られているのによくそんなことが言えるものね。）

シルヴィア「あーあー……八幡くん今頃何してるのかなあ?修行終わってご飯食べてお風呂入ってる頃かなあ?うう……私が八幡くんの晩御飯作ったり、お背中流したかったのに……」

ペトラ「重症ね……本当にバカツプルじゃない。見ている私の方が恥ずかしくなってくるわ。」

シルヴィア「ペトラさんも大好きな人が出来たらこんな感じになりますよ。自分の出来る限りで好きな人の心労を癒す、きつとペトラさんにも分かりますよ。」

ペトラ「……私の場合、もし好きな人ができたとしても、私は貴女のようにはないと思うわ。」

心なしかバカにされたような気がする……

まあそんなこんなで八幡くんの事や私の事、ペトラさんの事で話を弾ませながら私たちの夕飯は続いた。

シルヴィア「でもさ、やつぱり会えないようにするのはどうかと思うんだ。修行に関係あるのかな？」

ペトラ「それだけ集中させたいって事でしよう？ 私も貴女にそういう風にさせたことあるから、小苑さんの言っている事は分かるわ。」

シルヴィア「うーん、私には分からないなあ。子供を持てば分かるかなあ？」

ペトラ「そうねえ……きつと分かると思うわよ。時には心を鬼にしないといけない時があるから。これなら貴女でも分かるでしょう？」  
シルヴィア「あぁ、それなら分かる。ペトラさん偶にすごく怒るときあるよね、私にじゃないけど。」

ペトラさんが怒る相手とは、ルサルカの面々である。マフレナちゃんは唯一の常識人だからそんな事はしないけど、前は私のスキャンダルとかを狙って動いていたのをペトラさんに押さえられて2時間正座させられながら説教されていたっけなあ。

今更だけど、あの時のルサルカって本当に怖いもの知らずだったよねえ。ペトラさんにあれだけ言われても続けるんだもの。今はしてこないけど、もし八幡くんをバカにしたら………フッフ。

## 風紀の改善と予言？

オーフェリア side

……近頃は生徒会の仕事や街で暴れている生徒、違反している生徒、悪巧みをしている組織、他にもあるけど、ウチの学院の生徒の動きが全く無いから仕事が全くないわ。いえ、良い事なのだけど、前はもっと忙しかったのにどうしたものかと思ってしまっうわ。これもゾッポのおかげかしらね。

……今年のイベントといえば《王竜星武祭》だけど、私は出場しない。もう出る意味がないもの。それに星武祭以外で何かあるといったら、特に何も思いつかない。学園祭も少し前に終わったばかり。今後は違反する生徒を懲罰房に入れる作業が増えるかと思ったのだけど、誰もいなかったわ。不自然なくらい誰も動かなかった。

オーフェリア「……生徒の動きがなさ過ぎて少し気持ち悪いわね。」

イレーネ「ンなこと言うなよ。良い事じゃねーか、こっちの仕事が無くなるんだからよ。」

プリシラ「確かにそうだけど……お姉ちゃん、パトロールサボってないよね？」

イレーネ「何でそこであたしがサボるって事になるんだよ!? つてゆーか、奴らが動きを見せねえ理由なんてもう分かりきってんだろ。」  
ころな「え？ 分かるんですか？」

イレーネ「いや、間近で見てるのに分からねーのかよ。オーフェリアの純星煌式武装に決まってんだろ。あれはあたしでもえげつねえって思ったぞ。」

オーフェリア「……そうかしら？」

イレーネ「当たり前だ！ 切った箇所を凍結する能力なのに、お前は何回も切りつけやがって！ そのせいであいつ、恐怖症になっちゃって

冷たいもんとか飲んだり食ったりするの怖くなっちゃってるんだぞ  
!？」

……それは少し悪い事をしたわね。この時期冷たいものを飲めないのは辛いわよね。でも、貴方も悪いのよ？

イレーネ「つたく、こうなるならあたしの【覇潰の血鎌】で潰した方がよっぽど良かったんじゃないか？」

ころな「で、でも確かにあれを見るとイレーネさんの方が優しく見えます。」

イレーネ「だろう！オーフェリア、そいつはもしもの時に使え。序列の奴らにやったら恐怖を植え付けちまうからな。」

オーフェリア「……分かったわ。」

予想以上に怖がられているみたいね。ヒドいわ、この子の性格は八幡のように凄く優しいのに。

オーフェリア「……そういえばイレーネ、貴方は今年の《王竜星武祭》には参加するの？」

イレーネ「《王竜星武祭》？いや、参加しねえぜ？だってよ、比企谷が出るんだろ？《鳳凰星武祭》《獅鷲星武祭》であんだけ見せつけられたら、勝てる気がしねえっつもの。つーか今年の星武祭出る奴いんのか？オーフェリアは出ねえって聞いているからな……クインヴェールの【戦律の魔女】くらいか？」

プリシラ「シルヴィアさんが？でも最後だからね、出るのかなあ？」

イレーネ「分かんねえけどよ、あのラブラブの2人の事だ、戦闘中にも関わらずキスとかするんじゃないか!?それもデীプな！」

プリシラ「お、お姉ちゃん！幾ら何でも2人がそんな公衆の面前で「……いえ、あり得るわ。」……オーフェリアさん？」

ころな「会長？」

オーフェリア「……あの2人ならやりかねないわ。試合中にはし

ないと思うけど、終わった後に見せつけるようにすると思うわ。」

イレーネ「……あんたが言うのと冗談に聞こえねえんだよなあ……もし本当になっちまったらどうすんだよ？」

オーフェリア「……その時はその時よ。」

イレーネ「こいつ、予見したはいいが、責任押し付けやがったぞ。」  
プリシラ／ころな「あはは……」

八幡とシルヴィア、元気になっているかしら？学園祭以来会っていないけれど、次はいつ会えるかしら？出来れば早いうちに会いたいわね。

## 修行の終わり

八幡 side

八幡「……………それで、小苑さんは何処へ行ったんですか？もう鍛錬の時間が始まるんですけど……………」

麗蘭「ええ。ですので、始めますよ。」

八幡「いや、だから……………ん？麗蘭さんが相手をするんですか？」

麗蘭「不服ですか？」

八幡「いえ、そういうわけでは……………でも急ですね、一体どうして？」

麗蘭「貴方の動き、技術、戦術、スタイル等を見て久しぶりに動きたくなった、と言えば納得してもらえるでしょうか？」

八幡「要は手合わせを試みたくなったでいいんですね？」

麗蘭「頭が良いですね。その通りです、ですので今日は私が相手をして差し上げます。言っておきますが、私の目が盲目だからといって手加減をする必要はありません。念の為ハッキリと申し上げますが、私は小苑と手合わせをして一度も膝をついたことはありません。これで理解はして頂けましたか？」

……………成る程な。つまり本気を出している小苑さんでも、麗蘭さんに膝をつかせるほどの傷や深手を負わせる事が出来なかったって事か。とことん化け物じみてるな、【万有天羅】ってのは……………だが、

八幡「俺はその【万有天羅】を倒すために此処に居ますからね。手合わせであっても手加減はしません。全力で行きます。」

麗蘭「それを聞いて安心しました。その覚悟、忘れないでくださいね？私も本気で貴方と相手をします。」

八幡「はい、お願いします。」

麗蘭「では……………参ります。」

2人の戦いは1週間の期間の中で、4日目から始めとし残りの日  
で続いた。

この2人の戦いは言葉では表せない程、激しいものだった。その戦  
いは六花中に何度も地震のようなものを与えるものだった。

そして最終日……………

麗蘭「……………」



八幡「はあ……はあ……はあ……」

麗蘭「……見事、と言ったところでしよう。」

八幡「はあ……はあ……」

麗蘭「それだけの傷を負いながら、それだけ疲労が溜まっている中で、ほんの少しとはいえ私に傷を負わせたのですから。貴方は充分自分を誇りに思っても良いと思います。私も貴方を称賛します。」

八幡「はあ……はあ……ははっ、初代程の人に、そう言われるなんて………光栄、ですね。」

麗蘭「……よく立っていられるものです。」

八幡「俺が、膝をついたり……倒れたりするときは、はあ……はあ……負けを認めた時………だけですので………はあ………はあ………なので、俺は………まだ貴方に、負けたつもりはありません………」

麗蘭（……そうですか、だから貴方は強いのですね。そして貴方が憑いた理由も分かりました。）

麗蘭「……まだ負けたつもりはありません、ですか。ふふっ、という事は、私を倒すつもりでいると？」

八幡「……ははっ、歴代最強を名乗るのも、悪くないと………思いましてね。」

麗蘭「……まだ20歳手前の若造に負けるわけにはいきませんね。でも………貴方と戦うのは楽しいですね。心踊ります。」

八幡「戦闘狂ってわけでもないのにそんな事を言うんですね。」

麗蘭「私もそういうときくらいありますよ。それに、事実を述べる事は悪いことはありませんからね。」

確かにその通りだが………素直になりすぎてないか？

八幡「そういえば、麗蘭さんが相手をしてから小苑さんが居なくなりましたけど………どうしてですか？」

麗蘭「ああ、彼女なら界龍に行きましたよ。何でも暇つぶしをしに

行くとか。」

あつ、絶対星露で遊んでるな。

麗蘭「八幡さんも、この1週間よく耐え切りました。公式序列戦まで後3日あります。今日明日は体を休めて、明後日に星露との決闘を申し込んでおくと良いですよ。彼女も大喜びするでしょう。」

八幡「直接言いに行った方が喜びますかね？」

麗蘭「ふふつ、そうですね、そちらの方が喜ぶでしょう。」

八幡「でしょうね……1週間ありがとうございました。次は会場でお会いしましょう。」

麗蘭「はい、期待していますよ。」

うし、早速シルヴィンとこだな。

八幡 side out

麗蘭 side

………

麗蘭「ふう……少しの傷、ですか。私も飛んだ嘘つきですね。」

麗蘭は巫女装束の袖を捲ると、腕にはには大きな切り傷があった。八幡の【衿々切丸】によってつけられたものだった。

麗蘭「強がつてはみたものの、私も歳という事でしょうか？ふふつ、若者が羨ましいですね……どうです？彼の成長は？」

すると、後ろの戸から小苑が出てきた。

小苑「……最早儂では相手にならぬな。」

麗蘭「若者の成長速度は異常ですね。それだけ私たちが老いたということでしょうか？」

小苑「やめんか、儂はお主ほど歳ではないわ。じゃが、3日後が楽しみじやのう。」

麗蘭「ええ、そうですね。」

## 限界を超えたら

八幡 side

……1週間ぶりだな、シルヴィに会うのも。この1週間、小苑さんから顔を合わせるの禁止されてたからな。シルヴィの奴が飛なびついて来なければいいんだが……多分来るだろうな。

家の前に着いたは良いが、こんなにも入るのに勇気がいる帰宅は初めてだ。明かりは……うん、ついてる。これは中に居ますね、バツチリ居ますね。

八幡「……よし、行くか。いつまでもここにいたら、不審者扱いされちまう。」

ガチャツ

八幡「ただいま。」

……すると奥から扉の開く音がしたと思ったら、こちらに向かって来ていることがすぐに分かった。しかも走って。磯野家じゃないけど、走るんだね。

見えてきた紫色の長髪に誰もが羨む程の整った顔立ち、クインヴェールの制服を身に纏い、俺の方へと目元に涙を浮かべながら飛びついてきた。

シルヴィア「八幡くんっ!!」ダキツ!!

八幡「……ただいま、だな。」

シルヴィア「……うん。」

シルヴィは顔を俺の身体に埋めたまま返事をした。今は離れたく

ないようだし、このまま居間に連れて行くか。

八幡「ほらシルヴィ、居間に行くから歩くぞ。」  
シルヴィア「……抱っこ。」

このお嬢様は……今は存分に甘えたいらしい。

八幡「ふっ、はいはい。」

……仕方ねえな。

――居間――

俺はソファに座ると同時にシルヴィを膝の上に座らせた。抱き上げる時に埋めていた顔が丸見えになっていた。涙は流してなかったが、目は潤いに満ちていて、頬は微かに赤い。

八幡「……シルヴィ、待たせて悪かったな。」

シルヴィア「……そう思うのなら、これから私がする事に一切文句を言わないでね?」

八幡「……痛いのは勘弁だぞ? 1週間1日もサボる事なく模擬戦だったから身体中ボロボロだよ。」

シルヴィア「……分かった。じゃあ少しだけ優しくするから。八幡くんは動かないでね。」

俺、今から何され……「んっ!!?」

シルヴィア「んむう……」

何をされるのかと考えていたら、シルヴィに唇を奪われた。

八幡 side out

—————

シルヴィア「んんっ♡……ちゅっ、んんっ……れろっ、くちゅっ  
……んんう♡……くちゅり、れろれろ……はちま、んんんっ、ちゅ  
うううう……こくっ……こくっ……」

シルヴィア（ああ……八幡くんの味がする♡口の中いっぱい八幡くんの唾液が……凄く美味しい♡身体つきも凄い……なんか前に比べてますます男らしくなってる気がする……ずっと抱きついていたい……ずっと抱き締めたいし、抱き締められたい♡）

シルヴィア（抱き締められながら、いっぱいキスしたい……唾液交換したい♡）

シルヴィア「んんうっ♡……れろれろ、くちゅ、んんう、ちゅっ……くちゅ、れろれろ……」

シルヴィアは止まらなかった。八幡を強く抱き締めながら何度も八幡の口の中へと舌を入れては舌を重ね、唾液の交換（一方的に）をしていた。シルヴィアの口の周りは八幡と自身の唾液で汚れていたが、御構い無しに続けていた。その勢いはまるで止まる気配がなく、永久に続くのではと思うくらいだ。

八幡（このままじゃ、俺が干からびちゃう……多少強引にでも引き剥がすしか……）

八幡は背中に回していた腕をシルヴィアの肩へと移し、引き剥がすように身体を押した。だが、シルヴィアは八幡の身体に抱きついていてため、そう簡単には剥がれなかった。

八幡（は、剥がれねえ……なら、あまりやりたくはないが、シルヴィの力が抜けるまで、俺が攻めるまでだ！）

シルヴィア「んむう!?……んんう♡……ちゅっ、にゆるにゆる……  
れろれろ♡……んんう♡」

シルヴィア（え……急にどうしたの？八幡くんから舌を入れてきて  
くれた♡すごいよぉ……♡）

八幡が特攻を仕掛けて時間が少し経過すると共に、シルヴィアは  
段々と抱き締める力が弱まり、最後には腕を八幡の手の上に乗せた。  
2人は見つめ合いながらキスをしていた。八幡はあまり変わった様  
子はなかったが、シルヴィアは明らかに違っていた。目も潤っていて  
トロロンと甘えるように八幡を真っ直ぐ見て、期待の込めた目をしてい  
た。

シルヴィア「んんっ……ぷはぁ……はぁ……はぁ……は、八幡くん、  
もっ……もっ……もっ……とキスしたいよ。もっ……と君の唾液が欲しいよ……」

八幡（完全にアレのテンションになってるな……コレはもう一戦す

るしかなさそうだ。」

八幡「シルヴィ、そこまでキスがしたいのなら、どうだ？夜にやってみるか？」

遠回しのお誘いだが、シルヴィアにはそれが何なのかすぐに理解したようで、力の抜けた状態の身体で精一杯八幡に抱き着いた。

シルヴィア「うん、やりたい！八幡くんと一緒になりたい！」

八幡「……分かった。じゃあ今は我慢してくれ。夜になって寝る時間になったら……いいな？」

シルヴィア「うん、私ちゃんと待つてるからね♡」

その夜、1つの家から若い女性の声が響いていたが、若い男性が防音対策をしていた為、周囲にさとられることはなかった。







私も気持ち良かったからよく覚えて……はっ!!わ、私は何考えてるの!?

八幡「だから……俺がずっとシルヴィで身体を重ねていたのは、そういう意味でもある。勿論それ以外でもあるぞ。俺はシルヴィ以外とはこんな事する気はないしな。」

シルヴィア「そ、そっか……／＼／＼／＼」

八幡「だから……ちよつと言いは悪いが、昨日の事は我慢が出来なかったからって理由とストレス発散させたかったって理由と俺たちの愛の育みの3つの理由が出来る。どうだ?これって合理的だろ?」

シルヴィア「う、うん!そうだね!それで大丈夫だよ!むしろそっちの理由がしつくりくるしね!」

シルヴィア「ぶっ、ふふふふ。」

八幡「なんか……アホらしいな。」

シルヴィア「そうだね。でも……八幡くんが今言ってくれた理由、それは納得出来たから。私も八幡くんに会えなかったせいで弾けちゃったからね。でも今日は……ずっと一緒に居られるんだよね?」

八幡「ああ……今日は一緒にいよう。明日に星露の所に行つて決闘を申し込むつもりだ。」

シルヴィア「そうなんだ……私も見に行きたいなあ。でも序列戦だから他学園が行く理由がないしなあ……あーあー」

八幡「シルヴィなら普通に通してくれそうだけだな。『奥方様でしたか！旦那様は会場におられます！どうぞ、お入りください!!』とか言つてな。」

シルヴィア「あはは♪それは確かにありそうだね。なら私、観に行こうかな？」

八幡「ああ、是非来てくれ。俺の一番の力の源だからな。全力で応援してくれ。」

シルヴィア「はあーい♪」

シュル……パスッ

2人「あっ……」

そうだった……私たち、起きたばかりで何も着てないんだった。

八幡「……と、取り敢えず服でも着るか／／／」

シルヴィア「う、うん／／／」

また恥ずかしい思いをしちゃったよお／／／

励まし

シルヴィア side

朝の恥ずかしいエピソードが終わって、今はお昼を過ぎて少し経ったくらいの時間。あの後私たちは着替えてから朝食を食べて、だらだらと過ごしていた。本当に明後日に星露と戦うの？って思えるくらいに。

八幡くんは今日、界龍に戻るみたい。あまり時間がないけど少しでも八幡くんと一緒に、少しでも近くに入られたらと思って今日は外出はしないで2人きりで過ごすことにした。

八幡「シルヴィ、本当にこれで良いのか？俺は別に外出しても良いんだぞ？」

シルヴィア「ううん、これが良いの。八幡くんを1番近くで感じられるのは、この家の空間だけだから。外に出たらさ、やっぱり1歩引いた距離になっちゃうから。今はこれが良いんだ。」

八幡「……そうか。」

そう、今はこれが良い。他人の目を気にすることなく八幡くんの側に居られる。

シルヴィア「……なんかあんまり実感が湧かないんだ。八幡くんが星露と戦うのに……あんまりにもいつも通りだから。」

八幡「まあ、1週間前に俺が突然言いだした事だからな。すぐには納得なんて出来ねえだろうし、理解も出来るわけねえよ。明後日から俺がする事は、今まで誰もしたことがない事なんだからな。自慢するつもりじゃないが、かなり勇気いる事だと思うぞ。」

シルヴィア「ふふふっ♪そうだね、確かに八幡くんは勇気があるね。勇者だね！それともただのおバカさんかな？」

八幡「バカで終わるか勇者で終わるか、それは明後日次第だな。だが……バカとはなんだ？バカとは？誰がバカだつて？」ワシヤワシヤ

シルヴィア「キヤー！」(≧▽≦)

キヤー！八幡くんに襲われちゃう！

八幡「……まあでも、バカでは終わりとくねえな。せめて負けるにしても、あいつに一撃くらいは入りたい。一矢報いるくらいはしたいとな。」

シルヴィア「八幡くんがバカで終わるわけがないよ。負けたとしても、ちゃんと皆祝福してくれるよ。バカにする人なんているはずがないよ。」

八幡「それは分かつてる。界龍の奴らの中にそんな奴はいない。ただ……怖くてな。」

シルヴィア「え？」

………怖い？あの八幡くんが？

八幡「相手は3代目【万有天羅】だ。俺の力がどこまで通じるのか、どれだけ渡り合えるのか……だが、俺の技が全て通じなかったら？と思うだけで怖くてな。」

八幡「情けない話だが、俺は今までの試合を勝って当たり前の試合だつてのを自分の中で思い込んでいたのかもしれないな。だが今回のはそうじゃない。油断したら負ける、そんな試合だ。」

八幡「だから……「八幡くん。」……な、何だ？」

シルヴィア「今から考え過ぎてもダメ。確かに星露は強いかもしれない。でも、だからといって今から気を張り詰めていても意味なんじゃないよ？」

八幡「………」

シルヴィア「八幡くんは今までの鍛錬があつたからこそ、序列2位

を勝ち取れたんだし、《鳳凰星武祭》《獅鷲星武祭》にも勝ってこれた。それに今では、界龍の皆に《尊師》って言われるくらいにまで慕われている。他学園にも、八幡くんを認めている人は大勢いる。」

シルヴィア「八幡くんはそれだけ強い。どの学園から見ても頭一つ抜けている存在。だから自信を持つて。そして星露に勝つて。それでも自信が持てないっていうのなら、私が決闘の前に界龍の皆の前で叫ぶからね。『私の彼氏は世界一強い。』つて。」

シルヴィア「だから八幡くん、そんなに弱気になったり、考え詰めないで。君には私がいる。ね？」

八幡「……………そうだな。俺には最強の味方、シルヴィが居たんだつたな。やる前からこんな弱気じゃあ、すぐに負けちまうな。」

シルヴィア「そうだよ！私が《王竜星武祭》の時に八幡くんの部屋に泊まりに行ったのだって、勝てるか不安だったから、怖かったからが理由だったんだから。だから八幡くんなら大丈夫！きつと勝てる！！」

八幡「ああ……………そうだな。ありがとうな、シルヴィ。」

シルヴィア「ううん、大一番の試合前だもん。誰だってこんな風になるよ。」

これで少しでも肩の荷が降りるのなら、私はなんだってしてあげよ。

そして時は過ぎ、夕日が眩しい時間になった。

八幡「じゃあ……行ってくる。明日は戻って来ないから寂しい思いをさせるが、明後日には界龍に入れるように番をしている奴らには言っておく。」

シルヴィア「うん………八幡くん。」

八幡「ん、何だ？」

チュツ



シルヴィア「……行つてらっしゃい。」  
八幡「……ああ、行つてくる。」

そして八幡くんは界龍に向かって歩いて行つた。

私から見た八幡くんの足取りはとても力強く、頼り甲斐のある勇ましいものだった。

## 宣戦布告

八幡 side

昨日はシルヴィの助言もあつたおかげか、身体が軽くなりすんなりと眠ることが出来た。特に何かをしようとかは考えなかった。だからかもしれないな。今日だって鍛錬をしようとは思ってない。締切ギリギリまで星露への決闘申請は待つつもりだ。

だが……

八幡「それまでの時間が暇なんだよなあ……鍛錬つっても、やっちゃったらやっちゃったで火が着いちまうしなあ。料理をするにも、食い意地はってる奴が今回の相手だからあまりそういうことはしたくない。」

はあ……暇だ。

沈雲「おや、比企谷くんじゃないか。帰って来ているという事は、もう彼女と過ごすひと時は終了したのかい？」

八幡「沈雲か……まあそうとも言えるかもな。1人か？珍しいな。」

沈雲「今日の鍛錬はお休みにしててね、いつもなら新しい術式の開発をするんだけど、よく考えてみたら休んでないって思ってたね。」

八幡「よくある事だな。自分では息抜きでやっている事でも、第三者から目線からでは肉体的ではなく、精神的に仕事してるように見えていたりするからな。」

沈雲「そういう事だよ。だから今日は何もしないで過ごそうと思っているんだけど、これがなかなか難しくてね……というより、界龍の生徒全員が苦勞していることかもしれないね。」

……それはあり得るかもな。趣味は？って聞かれたら全員、『鍛錬ですっ!!』って答えそうだからな。休みの日は何をしていますか？って質問でもそう答えそうだ。

冬香「あら？八幡さんに沈雲さん、お二人で何をなさっているのですか？」

沈雲「これはこれは冬香殿。いえ、ちょうど比企谷くんが彼女の元から帰って来たのと、僕の休日が偶々重なって偶然出会ったので、少しばかり話をしていたのですよ。」

八幡「本当に偶然の重なり合いだな。」

冬香「そうだったのですか。ですが八幡さん、夏季休暇はまだ充分にあります、何故界龍に？」

八幡「ちよつとした用事がありましたね、そのために戻ってきました。」

沈雲「用事？」

八幡「今は教えられないが、すぐに分かる。」

2人「??」

さて、今日の6時前が楽しみだ。

――5時半頃――

それから何もすることがなかった俺は、一先ず生徒の鍛錬を見ることにした。こうやって見ていると、やはり前とは違うと実感出来る。鍛錬……というよりも、1人1人の戦術の幅が日に日に増えている感じがする。

そして界龍の新しい特徴は、序列争いが激しい事だ。別に喧嘩をしているとかそういうのではない。単純に自分の今のレベルで何処まで通用するのかを知りたいのだろう。特に変動が激しいのは60位から40位の辺りだ。この辺りでも他学園の冒頭の十二人には足元

に少しかじれるくらいの実力はある。

勿論序列だけで全てが決まるわけではないが、どれだけ強いかったのは、序列で表した方が分かりやすいからな。

川崎もこの前の序列戦で31位になってたしな。あいつは序列とかそういうのには興味持っていないから、そこまで執着はしてない。まあ、指名されたら相手はしてるみたいだけどな。

一応川崎の序列の流れを教えようか。

序列外↓61位↓47位↓31位（現在）

けーちゃんの世話でも忙しいだろうに。よくここまで序列を上げたもんだ。しかも全部二桁上がりだし。

え？けーちゃん？けーちゃんは序列2位（仮）だよ？

……まあ冗談はこれくらいにして、要するに界龍ではこれだけ多くの生徒が序列戦や自分の強さに対するちよつとした顕示欲が強いって感じた。

一方で序列に興味のない奴らは、鍛錬はしていても序列外のままで。単純に目立ちたくないって理由の奴もいるしな。

八幡「それにこうやって鍛錬を見てみると、隠れた実力者ってのは居るもんだ。」

見ていると分かる、それくらい動きが良い。誰とは言わないが、此処で鍛錬をしている在名祭祀書に載っている奴を含めても、断トツで良い動きをしている。

八幡「さて、見物もこれくらいにしてそろそろ行きますか。」

―――黄辰殿前―――

……いよいよか。いや、今緊張するべきじゃないな。自然体で行こう。

だが、気を出すくらいは良いだろう。

八幡「星露はいるか？」

目の前には星露が居た。その他にアレマさんに小苑さんと麗蘭さんが居る。序列1位と【万有天羅】のオールスターだ。

星露「なんじゃなんじゃ八幡よ。そんな気を出しおつてからに……それに目も本気ではないか？もう飯は作つてやらんとでも言いに来たかえ？」

八幡「いや、それでも良いが別件だ。星露、お前が一番喜びそうな事だ。」

星露「む？」

八幡「我、比企谷八幡は、汝、茫星露に決闘を申し込む。日時は明日の公式序列戦の最終戦にしたい！」

星露「おお……おお……おお……おお!! ついに、ついに来たか!! 待っておったぞ! 漸く妾と戦う気になってくれたのじゃな!？」

八幡「ああ………そうだ。」

星露は座っていた玉座から立ち上がり、身体で表現するかのよう嬉しそうな表情と声だった。そして、訳のわからない踊り。

星露「ようやつとお主と本気で戦える……妾の全力を出すに相応しい相手と拳を合わせることが出来る……何と最高なのじゃ!!」

星露「嬉しゅうて堪らぬ! 身体の奥底から熱が込み上げてくるようじゃ……八幡よ、明日の最終試合じゃな?」

八幡「ああ。」

星露「あい分かった! 早速妾が申請してくるからのう! 明日が楽しみじゃえく!!!」

そして星露は走りながら去って行った。

アレマ「八幡ちゃん、明日楽しみにしてるぜ？アタイを負かしたんだから、星露ちゃんには勝つんだぜ？」

小苑「八幡よ、手加減など要らぬ。お主の全力をぶつけるのじゃ。」

麗蘭「八幡さん、1週間の……いえ、六花に来てから今日に至るまでの鍛錬や実戦を忘れずに挑む事です。」

八幡「……はい。」

## 前代未聞の知らせ

界龍side

『み、皆様!! 大変です!! たった今、臨時のお知らせを致します!! 本日の6時直前に我が界龍第七学院序列2位の比企谷八幡が、今代【万有天羅】の茫星露に決闘を申し込みました!!』

雪ノ下母「……それは確かなのですか?」

『は、はい!! 先程、公式序列戦の編成を行っていた者から連絡が入りました! しかも、その時の3代目の表情が今までにないくらい嬉々とした表情をしていたそうです。』

「……しかし嘘の可能性もあるのでは?」

「いくら序列2位でも、【万有天羅】に挑む程の度胸があるとは思えない。」

「その者の勘違いではないのか?」



麗蘭「八幡さんの事を何も知らない方達が、八幡さんの事をバカにしないで頂けますか？」

アレマ「そうだねー。聞いててイライラしてくるからさ、黙ってくれない？」

突如として現れたのは、初代の【万有天羅】と界龍の元序列1位だった。2人の放つ気迫だけで、幹部全員が口を閉じて黙ってしまった。

麗蘭「貴方達、知らないとは言わせませんよ？彼がどれほどの実力を持っているのかを。目にしているはずです、比企谷八幡のあの力は、【万有天羅】に匹敵するものです。それを蔑ろにして、剩え彼を侮辱するなど……恥を知るべきです。彼がこの界龍にどれ程の貢献をしたと思っているのですか？」

麗蘭「私は隠居した身ではありますが、まだ力は残っていますよ。その身体に教えて差し上げてもよろしいのですよ？」

「!!」  
「!!」  
「!!」

明らかに纏っているオーラが違った。本当にやりかねない、そんな殺気の籠ったオーラだった。

雪ノ下母「麗蘭様、今はそのような場合ではありません。どうか、抑えてください。」

麗蘭「……はあ、私のことを分かっているのは雪ノ下さんとその娘さんだけのようですね。」

陽乃「当然ですよ。八幡くんが意味もなく星露に挑んだりなんてしないってのは分かりますから。」

アレマ「でさー話を戻すけど、その2人が戦うからどうしたんだい？ただの報告かい？」

『は、はい!!一応、上層部にも伝えて置いた方が良いかと思いましたので……』

場の雰囲気はなんともいえないものだったが、この中で話を進められる度胸があるのは、4人だけだった。

麗蘭「そうですか、それはご苦勞様です。お時間を取らせてすみませんでした。もう休んでも結構ですよ。」

『は、はい！失礼致します!!』

雪ノ下母「お疲れ様です。」

陽乃「ご苦勞様です。」

アレマ「バイビー！」

そして音声端末は切れた。

雪ノ下母「如何致しますか、麗蘭様？六花には伝えましょうか？」

麗蘭「いえ、その必要はありません。いずれ知られる事です。ならばこのまま、いつも通りで行きましょう。」

陽乃「麗蘭様、明日の界龍の防壁は最大まで上げておいた方がよろしいかと。」

麗蘭「ええ、そのつもりです。陽乃さん、界龍に行つて最終戦の時は防壁出力を最大にするよう申請をお願いします。」

陽乃「かしこまりました。」

麗蘭「では以上をもちまして解散とします。私がリーダーというわけではないのに、仕切るような形を取ってしまい、申し訳ございません。」

雪ノ下母「いえ、素晴らしい進行でした。」

陽乃「でも、さすが八幡くんだね！卒業しても退屈しないよう！」  
アレマ「いやあく明日が楽しみ楽しみ♪」

4人は会議室を立ち去ったが、残りの幹部メンバーはその場から動けなかった。

—————

八幡 side

ドタドタドタドタ

八幡「ん？」

バアン!!

虎峰「八幡!!師父と決闘をするというのは本当なのですか!!？」

八幡「何だ虎峰か……確かにそうだが？」

セシリー「本当に決闘するの!？」

八幡「だからそうだって今言っただろ……」

沈雲「……用事っていうのは、まさかこの事だったのかい？」

八幡「まあな。驚いたか？」

沈雲「驚くどころか、どう反応していいか分からない状態だよ。」

沈華「沈雲と同じ状態よ。」

流石は兄妹だ。

冬香「ですが八幡さん、なぜこのタイミングなのですか？師父に挑まれるのでしたら、八幡さんが引退した時でも遅くはないと思うのですが……」

八幡「そこは個人的な理由なので教えられません。まあ言えるとしたら、初心に戻ったから、ですかね。」

俺の当初の目的。俺の力が何処まで通用するのか試したい、単純だが明確な理由だ。

暁彗「……………比企谷八幡、師父に勝つための策などはあるのか？」

八幡「いや、ない。」

虎峰「な、ない!？」

八幡「逆に聞けどよ、そんなのがあつたら序列2位の奴なんて幾らでも攻める機会あつただろ。俺の作戦なんて当たって砕けろだよ。」

銀梅「それでは尊師が負けてしまうことになってしまいますが……………」

まあ砕ける可能性の方が高いわな。相手は「万有天羅」だ。勝てる自信なんてどっからも湧いてこねえ。逆に自信ある奴を見てみたいよ。

八幡「やるだけやってやるさ。それに、ただで負けるわけにはいかねえからな。」

永成「尊師、1つ質問してもよろしいですか？」

八幡「ん？なんだ？」

永成「その…………大変失礼な質問ですが、今回の師父との決闘、奥方様も関係しているのではありませんか？」

八幡「…………なぜそう思う？」

永成「勘です。」

八幡「いや、シルヴィは関係してない。応援はしてくれてるけどな。明日には此処に来る。門番にもそう伝えてあるしな。」

八幡「…………さて、俺もそろそろ寝る。明日は大事な決闘だからな。ほれ、出てった出てった!」

……皆心配してくれているんだろうが、今の俺にとっては、言い方が悪いが邪魔でしかない。気が乱れる。少しでも、明日に備えて気力を高めておきたい。

八幡 side out

シルヴィア side

ペトラ「……………本当なの？八幡くんが『万有天羅』に挑むって？」  
シルヴィア「うん。だから私、明日は界龍に行くんだ。八幡くんも通すように伝えておくって。」

ペトラ「……………そう。彼も漸くその域に挑むのね。誰一人としてした事がない事をするつもりなのね。」

シルヴィア「……………勝ってほしいけど、無理だけはしないで欲しいよ。」

ペトラ「それは八幡くん次第よ。」

八幡くん、私も応援しに行くからね。頑張って欲しいけど、絶対無理だけはしないでね。

## 始まる戦い

八幡 side

翌日になって今現在、界龍の公式序列戦が始まっている。序列戦は昼から始まって夕方頃に終わる予定だ。今は後半戦の最後の方で、そろそろ俺の出番が近い。此処、鳳凰の間にも他の参加者がいる。いつもはウォーミングアップや気を高めるために叫んで演武をする奴が居るんだが、今回は誰一人としてそんな事をする奴がいない。

「いいかお前ら。もうすぐ俺たちの出番でもあるが、それよりも大切な師父と尊師の決闘がある！尊師のモチベーションが下がらないようにしろ！声なんて出すなよ！」コゴエ

「「はいっ！」」コゴエ

……あいつら固まって何話してるんだ？ずっとここに居たわけじゃないが、俺が鳳凰の間に入った途端、奴ら急に静かになりやがったんだよ。よく分かんが俺に気を遣ってるのか？

『試合終了!!勝者、○○○!!』

おっ、あいつ自分の序列守ったな。まああいつもかなりの使い手だからな。そう簡単にやられるわけないか。

「次は俺か……では師兄方、行ってきます。尊師、行つて参ります！」  
八幡「おう、頑張つてこい。」

そして自分の出番になると、なぜか俺に一声掛けてから行くんだよなあ……いや、俺あんまり序列戦参加してないから分からないんだ

が、こういうものなのか？

八幡「……まあいい、出番になるまで瞑想でもしてるか。あいつらもそうしたら挨拶はしないだろう。」

八幡 side out

星露 side

……この放送が鳴る度に身体が熱くなるわい。さつきから身体が疼いて仕方ないのじゃ……はよう……はよう妾と八幡との試合にならんかのう。

暁彗「……師父、残りは現在の戦いを含め4試合のみとなりました。」

星露「そうか……あと少しじやのう。」

暁彗「……師父、1つよろしいですか？」

星露「ん？何じや？」

暁彗「……何故師父は比企谷八幡との戦いがそれ程までに楽しみなのですか？」

星露「そんなのあやつが妾を倒してしまうかもしれないからじやろう！暁彗、お主八幡と戦った時はどんな感じじやつたか覚えておるか？」

暁彗「……いえ、あの戦いは考える暇もなかったの。」

星露「妾はのう……あやつが今まで出してくれなかった本気を出してくれるのが嬉しいのじやよ……稽古や小苑の鬱憤晴らしでも、あやつは本気を出しておらなんだ。」

妾が7／8割の力を出したとしても、八幡は本気を出しておらんかった。涼しい顔をして妾の拳や蹴りを受け止めたり、受け流しておったからのう。

暁彗「……………」

星露「妾に余裕すら与えてくれぬ戦い、それを八幡がしてくれると思うと、早う戦いたくなるのは当然じゃないかえ？」

この時、暁彗は心の中でこう呟いた。

暁彗（……………やはり師父は常人とは比べ物にならない程の戦闘狂だ。）

星露 side out

シルヴィア side bout

あつ、今47試合目始まった！じゃあ後2回試合が終われば八幡くんかあ……なんか私まで緊張して来たなあ。だ、大丈夫だよ！八幡くんは毎日鍛錬を欠かさずやってるし、【醒天大聖】と小苑さんに一週間鍛えてもらってたんだから！

うん、八幡くんなら絶対勝てる！私そう信じてるから！

シルヴィア「後もう少しで界龍に着く頃だね。よし、八幡くんを励ましにでも行こうかなあ。」

遊びに行くわけでもないのに、八幡くんに会えるのが楽しみ！

シルヴィア「ん？あれ何かな？鳥？もしかして八幡くんが作った梟かな？でも、あんなに小さかったっけ？」

シルヴィア side out

……………

門番1「……………ん？あれは……………っ！尊師に報告しなくては！」

門番2「此処は私が！」



門番1「任せるぞ！」

八幡「さて、もうすぐだ。」

星露「間も無く、じゃのう。」

八幡／星露「六花（学院）最強との戦いだ（じゃ）！！」

触れてしまった逆鱗

—————

『さて皆様!!大変長らくお待たせ致しました。今回のメインである最終試合の開幕です!!』

界龍最大の道場にして模擬戦場、八天門場が歓声によって揺れた瞬間だった。

『今回の試合、史上初となる「万有天羅」への挑戦となります!そこで、今回はゲストもお招きしています!まずは当学院を運営、管理している母体並びに諜報工作機関「龍生九子」の皆様、左から順にご紹介いたします!母体の幹部である雪ノ下様と我が界龍の卒業生にして元序列4位の雪ノ下陽乃様です!!』

生徒の殆どは雪ノ下の母親の方は知らないと思うが、雪ノ下陽乃の事は誰もが知っていた。それもそうであろう。容姿端麗、成績優秀、文武両道、この3つを兼ね備えた学院の実力者だからだ。そして見ない間に髪も少しだけ伸びているせいかな、大人の色気も増していた。

セシリー「おおー陽姐じゃーん!!綺麗になってるー!!」

冬香「ふふ、そうですね。笑顔が眩しいです。」

『次に、当学院の工作機関「龍生九子」の一派閥である《睚眦》の一員である、当学院の元序列1位アレマ・セイヤーン殿です!』

アレマ「やーやーどもども!!」

大きめの用紙に毛筆で書いてあった。この場には不釣り合いな気もするが、彼女なりの盛り上げ方なのだろう。

『そして最後はこの方々!!当学院の歴史の中でも最強最高のお2人です!ご紹介します!!先代【万有天羅】汪小苑様と初代【万有天羅】春麗蘭様です!!!』

小苑「解説はせぬが、よろしく頼むぞ。」

麗蘭「よろしく願います。」

会場からは再び歓声が上がった。それもそうである。歴代でも最強と言われている【万有天羅】が2人……いや、3人と勢揃いするからである。

『……さて、ゲストも紹介した所ですので、選手紹介をしたいと思います。』

一気に会場が静まり返った……それだけ緊張感が増しているのだろう。2人の最強がぶつかり合うほんの数分前なのだから。

『まずは西方!この界龍に來たのは僅か6歳!そして黄辰殿を開いた3人目の継承者!この2つ名を受け継いだ者にしか扱えない仙具を用いてこの決戦に挑みます!!界龍第七学院序列1位【万有天羅】茫星露ー!!!』

先程よりも大きな歓声が八天門場を包み込み、熱気にも溢れていた。

『師父がこの学院に来てから早6年近く経ちました。未だ星武祭に出場できる年齢ではありませんが、その実力は他学園の学園も認める程の実力!今回も用いている仙具と共に挑戦者へと立ちはだかります!!』

『そして、今回師父に戦いを挑んだのはこのお方!!』

『およそ4年前に当学院に転校して、僅か1ヶ月で序列2位を勝ち取った界龍の生きる伝説！そして今回もその伝説を新たに作る事が出来るのでしょうか!?界龍第七学院序列2位【夢幻月影】比企谷八幡ー!!!』

『現序列3位の武曉慧大師兄を倒してから序列2位、そして尊師と呼ばれ、界龍全生徒から信賴、敬愛される存在になりました！そして尊師は、歴代で誰1人として扱える者がいなかった純星煌式武装【祢々切丸】の初適合者！師父の仙具とも渡り合えるでしょう!!』

八幡「勝手に決めつけられても困るんだがなあ……」

星露「何じゃ？戦う前から随分と自信なさげじゃのう？妾は早く戦いたくてうずうずしておるといふのに！」

八幡「そりやオメエは戦闘狂だからだろうが。まあ俺もただでやられるわけにはいかねえからな、悪いが本気で行かせてもらうぞ。」

星露「ええのうええのう！お主のその目、堪らんのじゃあ！妾を本気で倒しにかかる目じゃ！存分にこの戦いを楽しもうぞ！」

『両者、準備が整いました！それでは皆様お待ちかねの戦いです！公式序列戦最終試合、スタートです!!』

『Start of the Duel』

『バトルウゝ、スタアアア「尊師ーー!!」アアア……あれ?』

決闘が始まると思いきや、1人の生徒が正門から出てきた。今は開放していないはずの扉からだった。

星露「……おい、お主何をしておる。これから大事な決闘じゃぞ! 邪魔をするとはどういう見じゃ!!」

八幡「その通りだ、勝負に水を差されては気が失せる。なぜ邪魔をした?」

門番1「はあ……はあ……そ、それどころではありません!! 尊師、今すぐこの決闘を中止してください!!」

門番からの突然の試合中止の宣言。当然周りからは大ブーイングだった。

八幡「……何故だ? 何故決闘を中止しなければならない? 決闘以外に大事なこともあるの言うのか?」

門番1「お願いします! 一大事です!!」

八幡「……理由を言え。」

門番1「奥方様が……何者かに襲撃を受けております!!」

八幡「……………シルヴィが?おい、どういう事だ!?説明しろ!!」

八幡が人目も憚らずに声を荒げていた。八幡のこんな姿は誰もが初めて見る姿である。

門番1「我々がいつも通り門の番をしていたところ、奥方様のお姿が見えたまではよろしかったのですが、突然空から黒い影が降りてきて、奥方様の前に立ちはだかったのです!今はもう1人が助勢に向かっていますが、どこまで持ちこたえられるか……………尊師、お願いです!決闘を中止して、直ぐに来てください!このままでは、奥方様が危ない!!」

八幡「星露、試合は次だ。俺はシルヴィの所に行く。」

八幡は既に八咫鳥と憑霊をしていた。背中から翼を生やして上空へと飛び、界龍から六花街に続く道路を飛んでいた。すると、八幡が

何かを見つけた。

全身血だらけで切り傷の酷い状態になって倒れているもう1人の  
門番だった。

八幡「おい！おい！！しっかりしろ！！」

門番2「……………うつ……………うあ……………そんな、し……………申し、訳……………ご  
ざいま……………せん……………はあ……………はあ……………奥方様を……………お守りする事が  
……………できま、せんでし……………た……………」

門番2「やは、り……………私ごときでは……………足手まといにしかない……………  
ませんでした……………ははっ、本当に……………お恥ずかしいかぎり、です……………」

八幡「そんな事はいい！！それよりもどんな奴らだった!?覚えてい  
限りでいい！特徴を言え!!」

門番2「……………黒い、マントを羽織って……………ました。顔は……………仮面を  
つけて……………いたので、分かりませ、ん。武器は……………赤い、剣を使っ  
て、ました。しかも……………剣が、割れ物のように分解されて……………はあ  
……………はあ……………私に、襲い掛かって……………来ました。方向は……………此処か  
ら……………西の、方角……………レヴォルフ黒学院の方向です!!……………ガフツ!!ゴ  
ホツ！」

八幡「……………分かった、良くやった。もういい、ゆっくり休め！」

門番2「……ははっ、尊師に……褒めて頂ける、なんて……光栄の、極み……です……」

八幡の腕で上体を起こされている門番は、安心したかのように気を失った。

八幡「……シルヴィだけでなく、界龍の生徒にまで手を出すとはな……その黒ずくめ、余程死にたいみたいだな。」



すると八幡から、紫と黒の星辰力が溢れた。そしてその星辰力の中に、僅かだが碧いオーラも混ざっていた。そして八幡が徐々に震え始めた。

八幡「覚悟は出来てんだろうなあ黒ずくめ!!俺を本気で怒らせた事を後悔させてやる!!」

## 本来の能力

???  
side

ヴァルダ「……………なぜあの子娘を攫ってきたんだ？あの程度の小娘1人攫ったとしても、それ程影響はないと思うが？」

???「確かにそう思うだろう。だがこの前の《鳳凰星武祭》や《獅鷲星武祭》といい、彼の力は非常に強力だ。それには彼女を利用以外、他に手はないだろう？」

ヴァルダ「成る程……………あの女を使えば比企谷八幡を仲間に引き込む事も造作もないと。」

???「そういう事だ。それに、もし彼が協力を拒んだときの考えも既に準備してある。最も、彼らがそれまで抑えていられるかは分からないけどね。」

ヴァルダ「……………何の事だ？」

ふつ……………我ながら残酷な事を考えたものだよ。

???「世界の歌姫……………それも世界の誰もが羨む程の容姿の持ち主である彼女を前にして、欲求不満で女性との付き合いが無縁で節操の無いレヴォルフ黒学院の彼らが黙ってみているだけだと思うかい？」

ヴァルダ「……………比企谷八幡に考えている時間、または戦っている時間はない、という事か。中々に猟奇的な事をするのだな。」

??? 「使えるものはなんでも使う。我々の目的のためにもね。」

その為にも、君には人質……いや、犠牲になってもらうよ、シルヴィア・リニューネハイム。

??? side out

シルヴィア side

……

……

………ん、んん？

あれ？私確か……っ!! そうだっ！界龍に向かう途中で黒いマントの人に襲われたんだ！しかもあのマントの人が持っていた武器、レヴォルフが所有している【ラクシヤ||ナーダ赤霞の魔剣】のはず……

しかもこの状況……私、捕まった上に拘束されてる。何が目的で？私を攫ったとしても得をする人間なんて……六花には2人くらいしか思いつかないけど、こんなに大々的にするとは思えない。

シルヴィア「……っ」

拘束がキツすぎて解けない上に力が出ない……それに、星辰力が練れない？

ガチャツ

………え？

1 「おつ、目が覚めたようだぜ。」

2 「やつと起きたか……待たせやがるぜ。」

レヴォルフの学生？何でこんな所に？

2 「でもよ、こんだけ楽な仕事なのにあんなに金もらってよかったのかよ？俺ら良い思いするだけじゃねえか。」

3 「良いんだよ。この部屋に入ったら俺たちも星脈世代としての力を使えねえけど、こんなすげえ上玉の女犯すくらい訳ねえだろ。」

4 「ははっ！ちげえねえぜ！」

っ!!!?  
!!今なんて言ったの!?!犯す!?

5 「おーおー良い顔になったじゃねえか。そう、お前には比企谷八幡が来るまで見張ってろって言われてたんだけどよ、見張りの仕方は任せるって言われてんだわ。だゝかゝらあゝ、奴が来るまでは殺さな

い限り何をしてても良いってわけだ。」

3 「マジで最高だせっ!!あの【戦律の魔女】とヤレんだからよ!金もたんまりもらってるし、早くやろうぜ!」

いやっ!!八幡くん以外の人となんて絶対に嫌だっ!!

シルヴィア「んっ!!んーんー!!!」

1 「おいおい、そんなに慌てんなよ。俺たちもやりたくてうずうずしてっからよ、すぐに気持ち良くしてやるからよ……楽しんでっぜえゝ?」

2 「もう俺たちのココも溜まってっからよ、お前の身体で発散させてくれよ。」

3 「俺……この日の為に2週間くらい我慢してっからよ……暫く我慢してて正解だったわ。」

4 「ヒヒヒッ!さあて、思う存分やらせてもらっぜ?」

5 「まあ、恨むんなら此処に来るのが遅過ぎた比企谷八幡を恨むんだなあゝ。」

レヴォルフの人たちは下卑た目線で私の身体を舐め回すように見ていた。嫌……嫌だっ!!触らないで……来ないでっ!!

助けて……………八幡くん!!

バアアアアンツ!!!

……………え？

八幡「よお？誰を恨めって？」  
シルヴィア「っ!!」うるうる

壊された扉の前で立っていたのは、私が助けを求めていた愛してやまない人、八幡くんがいた。

シルヴィア side out  
八幡 side

3 「む、【夢幻月影】!!? な、なんでこんなに早く此处にいる!？」

八幡「テメエらに教えてやる義理はないが、特別に教えてやる。シルヴィの星辰力を探知したんだよ。」

5 「はあ!!? 何言ってやがる!?! この部屋は星辰力を封じる部屋だぞ!!」

八幡「だからといって全く無いわけではない。微量ではあるが、その星辰力を追ったってわけだ。」

八幡「さて、お前ら……俺の女に手を出そうとしたんだ。覚悟は出来てんだろうな？」

「「「っ!!!」」」



こいつらが何をしようとしたかはもう分かつてる。話が途中から聞こえてたからな。それ相応の事はさせてもらおう。

八幡「お前らには特別に教えてやる。祢々切丸こいつの本当の能力をよ。俺はこいつの能力を刀身の拡大化だと思ってたんだが、それは能力の一部分に過ぎなかった。こいつの本当の能力を教える前にちよつとした話をしてやるよ。」

八幡「俺がこいつを握る前まで、多くの奴らがこいつを握って廃人になったらしいんだ。だが、廃人になっただけか？そう思って調べてみたら、その不適合者の奴らから星辰力が抜けていたんだ。つまり、こいつの本来の能力は……………」

星辰力を星脈世代から吸い取ってたただの人間に戻す。さらに、廃人にさせる能力だ。」

## 末路と捕縛者

八幡 side

3 「な、何だよその能力は!」

4 「星脈世代から普通の人間に? あり得ねえ、俺は信じねえぞ!!」  
八幡「別に理解してもらわなくて結構だ。お前らの頭じゃあその程度の理解だろうからな。それに、理解したところで仕方のない事だ。お前らは今から……星脈世代としての人生を終えて普通の人間になるんだからな。それも頭が猿以下の廃人にな。」

シルヴィア（八幡くん……本気だ。それに八幡くんから凄い殺気を感じる。身体中がビリビリしてる。もしこれが戦場だったら、間違いなく皆殺しにしてる。それくらい今の八幡くんは……すごく冷たくなってる。）

八幡「さて……誰から廃人になりたい? 俺は誰からでも良いぞ? 全員未来は同じだからな。」

1 「そんなこけ脅しが効くかってんだよ!! この部屋に入ればお前だってただの人間だ!! うおおお!!」

八幡「まずはお前か……祢々、食事の時間だ。思い切り喰え。そして喰らい尽くせ。」

祢々『八幡に比べたら不味そうだね。でも、久し振りだからね、頂きま〜す♪』

スパツ!

俺は祢々切丸で襲い掛かってきた奴を切りつけた。

1 「いつて! くっそ斬られた! けど、何にもなってねえ! お前ら、奴

の言ってる事は全部嘘だ!!全員でかかれ……ば……あ………あがつ  
!!?”

ふん、何が嘘だ。

1「あああ、あああああああ!!!やややめ、やべでででで  
!!!”

2「お、おい!!しっかりしろ!!”

3「な、なんだよありやあ!?”

1「……いひひいひひひひひやひやひやひや♪あっはははは  
はは♪”

これで奴らも分かっただろうな……

シルヴィア「……………」

八幡「さて、次はどいつだ?ああ、まとめてかかってきても良いぞ。  
その方が手っ取り早いしな。」

5「や、やめてくれ!!頼む!!もうあんたには逆らわない!!見逃して  
くれ!!”

八幡「……お前、何言ってるんだ?俺がお前らを許すとも思ってい  
るのか?此処に居る奴らの未来はもう決まってるんだよ。」

八幡「時間も勿体ねえし、新しい人生を送りやがれ。さようならだ  
………

永遠にな。」

スパパパッ！

そして3人も、最初に襲い掛かってきた奴と同じになった。残る1人には聞きたいことがあるからな、少しの間だけ時間を伸ばしてやった。

八幡「おい、お前に幾らか質問がある。言っておくが拒否権なんてないからな？」

5「ひ、ひいいい!!!」

八幡「お前に依頼した奴は誰だ？」

5「し、知らない!!本当に知らないんだ!!黒いマントに仮面つけてたから顔なんて見てねえんだ!!ホントだ!ホントに知らねえんだ!!」

八幡「人数は？」

5「2人だ!もう1人もマントをしてた!そいつは仮面してなかったけど、深く被ってたから顔は見えなかった!!」

八幡「武器は？」

5「お、俺が会った時は持つてなかった……他の奴らは知らねえけどよ。」

八幡「……最後の質問だ。お前、幾ら貰ってこの仕事受けた？」

5「……3000万。」

八幡「ほう……3000万でシルヴィの身体を犯そうとしたってわ

けど…………成る程なあ。」

ズパアツ!!

5 「ぎやああああああああ!!!!」

八幡「ふざけやがって…………俺のシルヴィは金でも身体でも買えねえんだよ。テメエは一生壊れたままでいろ。」

5 「い、嫌だ!!嫌だあああ!!!!なりたくねえ!!あんな奴らと同じになんてなりたく…………ああああ!!」

5 「ぎやああああああ!!」

…………気分の良いものではないが、俺がこいつらを許せなかったからこうしただけだ。

八幡「…………シルヴィ。」

シルヴィア「っ!」

八幡「…………口のテープだけ外す。何もしないから安心してくれ。」

俺はシルヴィの口に付けられたテープを剥がした。

シルヴィア「…………」

八幡「…………俺はお前に気持ち悪いものを見せてしまった。怒りと憎悪に身を任せた醜い姿を晒しちまった。だからシルヴィに聞く。今の俺でも、今までと変わらないまま接してくれるか?もし無理だというのなら、俺はお前を解放した後、クインヴェールまで伽耶梟で送る。2度と会う事もないと思う。」

シルヴィア「……………八幡くん、手足の縄も切ってくれるかな？」

八幡「……………ああ。」

微妙な空気の中、俺はシルヴィの手足の縄を刀で切った。すると、シルヴィは俺に抱き着いてきた。

シルヴィア「……………私は君がどんな姿になろうと、一生愛し続けるよ。だって……………私が八幡くんの事、見捨てられるわけないもん！それに……………八幡くんを裏切りたくないし、離れたくもない！！ずっと側にいたい！！」ポロポロ

八幡「……………シルヴィ。」ツー

シルヴィア「だから気にしないで！！私はいつでも八幡くんの味方だから！」

八幡「……………ああ、ありがとう！」ツー

――数分後――

シルヴィア「ねえ八幡くん、ここって何処なの？」

八幡「六花南西にある歓楽街のとある廃墟の地下だ。何も考えられなかったから、取り敢えずシルヴィだけの気配を探ってここまで来た。」

シルヴィア「それ以外には誰も居なかったの？」

八幡「ちゃんと居たぞ。倒してきた。」

シルヴィア「…………黒ずくめの人たちも？」

八幡「そいつらなら捕獲してある。あんま時間かけたくなかったから、廃人にするのは保留にして捕獲という形にして捕らえてる。」

シルヴィア「でも、相手は『赤霞の魔剣』を持ってるんだよ？捕らえたって言ってもどうやって……………」

??? 「…………やあ【夢幻月影】。お姫様は救えたのかな？」

ヴァルダ「くっ…………このクソガキ！」

八幡「鳥籠作ってそん中に閉じ込めてる。なお、武器とかも没収してるし、手足も拘束してるから手出し出来ません。もし手足が外せたとしても、鳥籠は玄武の防御陣で覆られているから、ただの星脈世代では抜け出せねえよ。」

シルヴィ「…………八幡くんが規格外だって事、忘れてたよ。」



もう1つの

八幡 side

八幡「よおマヌケ共……捕まえると啖呵切って掛かってきた割には、大した事なかったな。どんな気分だ？逆に捕まる気分ってのはよ？」

???「すごぶる悪いよ。まさかここまで強いなんてね……全く予想外だよ、2人掛かりでも勝てないどころか傷1つつけられないなんてね。」

八幡「もう老けたんだろうよ。それに、俺からしてみればオメエにはこんな代物勿体ねえよ。」

俺が片手に持っているのは、あの仮面を付けた黒ずくめが持っていた純星煌式武装【赤霞の魔剣】の待機状態だ。

ヴァルダ「くう……よもお前のようなガキに遅れをとるとは……」

八幡「安心しろ、お前はすぐに開放してやる。首にぶら下げたある気味の悪いウルムⅡマナダイトを粉々にした後でな。」

???「っ!?破壊するとか!?」

おいおい、何をそんなに驚いてるんだ？当たり前な事だろうがよ。

八幡「まあそれはもうちょい待ってやろうか。もうすぐ《シャールナガールム星獵警備隊》も来ることだしな。それまではゆっくりしてようじゃねえの。どうせテメエ等の人生は終わりなんだからな。」

シルヴィア「……ねえ八幡くん、ウルスラは良いんだけど、あっちの仮面の人の正体って誰なの？」

八幡「ん？ああ、気になるか？じゃあ仮面取るか。」

別につけてる意味ないしな。こいつの正体がバレたところで痛手を負うところはないしな。銀河以外。

八幡「こいつの正体は……………」

星武祭運営委員長にして星導館の運営母体《銀河》の幹部、マディアス・メサだ。」

シルヴィア「運営委員長が!!?」

シルヴィアも流石に予想していなかったようだな。それもそうか、誰もこいつが黒幕だなんて思わないだろうしな。

八幡《『獅鷲星武祭』ん時は気持ち悪かったもんだ。こんな奴から優勝トロフィー受け取らなくちゃいけないんだからよ……………」

マディアス「……………気付いていたのか?」

八幡「俺からしてみればなんで気づかないと思える?声も変えてない、髪型も一緒、顎髭も剃らない、隠してんの目元だけじゃねえか。こ

れだけ明確な要素があるのに、どんな思い込みしたら気付かれないって思えるんだよ？」

こいつアホなの？マジで？何が『気付いていたのか？』だ!?こちら界龍の学園祭の時から気付いてたわ！

八幡「まあゆっくり話でもして警備隊が来るのを待とうぜ。」

マディアス「ふっ……だが君も自分の心配をしたらどうだい？」

八幡「はっ？何で？」

マディアス「君は決闘宣言もしていない生徒を一方的に蹂躪したのだろう？その言い訳はどうするんだい？」

こいつ……マジでバカ？

八幡「あのさ……テロリストに手加減なんているのか？俺はいらないと思うんだけど？ましてやそれが生徒だったとしても、関係なくね？」

八幡「後俺、奴らを傷つけはしたけど、そんなに深い傷は負わせてねえぞ？1人は肩から腹にかけて斬っちゃったけど。」

マディアス「……………」

ダンマリするくらいなら、そんな誰にでも論破できるような簡単な事聞くなよ。こっちが憐れだわ。

——数十分後——

柊『《星獵警備隊》一等警備正の柊静薙であります!!比企谷八幡さんはどちらですか!』

八幡「あっ、はい、此処です。」

柊「……………これはどういう状況ですか？」

八幡「いえ、どうもこうも主犯を捕まえて逃げないように監視して

いるだけですけど。」

???「よけてくれ…………君が噂の【夢幻月影】か。私は《星獵警備隊》総隊長のヘルガ・リンドヴァルだ。早速だが状況の説明を頼む。」

八幡「はい、分かりました。」

そして俺とシルヴィは攫われたところから今に至るまでの状況や何をしたかまで全て説明した。隣にはボイスレコーダーで記録しながらメモをしている人もいるから証拠としても残るだろう。

ヘルガ「ふむ…………成る程、だが分からない事がある。何故君を連れ去ったのかだ。彼らが何故この行為に及んだのか…………全く見当がつかない。」

八幡「そこは俺にも分かりません。尋問とかはしてないので。」

ヘルガ「取り敢えず身柄はこちらで預かり、取り調べを行う事にしよう。それと、此処の地下にいたレヴォルフの学生たちの事だが、身分を確認した。君の言っていた通り人間になっているようだが、確かに元星脈世代のようだ。だから君の今回行ったことについては不問にしよう。君は星脈世代を斬ったのであって、人間は斬っていない。そうだろう?」

……………大人とは時に汚い手口を使うのだと、この時初めて知った。

ヘルガ「しかし驚きだよ。まさか星武祭運営委員長が私の追っていた黒幕だったとは…………貴様には聞きたいことが山ほどある。力ずくでも吐いてもらうぞ。」

マディアス「ふつ…………喋ると思っているのかい? 私は口が固い方だね、そう簡単に計画のことについては喋らないよ。」

ヘルガ「ならば自白剤、嘘発見器等を使うまでだ。」

マディアス「ふつ、そんなものは星脈世代に使っても無力だ。幾らでも使うといい。」

八幡「リンドヴァルさん、少しいいですか？」

ヘルガ「ん？何だね？」

八幡「星脈世代に薬とか機械による拷問が効きにくいっていうのは本当なんですか？」

ヘルガ「個人差によるがな。星辰力を多く所有している者程、持久力がある。逆はないと言える。それがどうかしたのか？」

八幡「簡単な話ですよ、そいつを人間にしちまえば良いんですよ。マディアス「っ!!」」

八幡「それなら、普通の拷問だって効くでしょう？」

ヘルガ「こちらとしてはありがたいが、出来るのか？君のその刀はすぐに人を狂わせてしまうのだろう？」

八幡「ええ……でも、切り口にずっと刀身を当てたままなら、星辰力を喰い取るだけで済むんですよ。喰い尽くすまで喰うんですから、その後は何も残りませんよ。人の身体以外は。」

ヘルガ「……ならば頼もう。」

よし……これでこいつは普通の人間になる。

マディアス「や、やめてくれ……!」

八幡「やめるわけねえだろ、総隊長殿の命令なんだからよ。それと安心しろ、別に痛くはねえからよ。痛い思いをすんのは、この後に待ってる尋問と拷問だけだ。まあ、それもお前次第だけだな。それじゃあ……さようなら、星脈世代のマディアス・メサ。」

プツツ

俺はマディアスの首筋に【袈々切丸】を当てて、星辰力を喰わせた。今までは刀身が青白い輝きを放っていたが、今は薄い紫色になっている。

――数分後――

袈々の喰事が終わって、マディアスはグッタリしていた。

八幡「おはよう、人間のマディアス・メサ。気分はどうだ?」  
マディアス「……最悪だよ。こんなにも重いんだね、人間というのは。」

八幡「すぐに慣れると思うぜ。まあそれまでは取り調べ頑張れや。」  
ヘルガ「ご苦労だった。しかし、君は多彩な能力を持っているとは知っていたが、これ程便利な能力も有しているとはな。どうだ? 将来は《星獵警備隊》に來ないか?」

八幡「すみませんが、将来の夢は決めてるので……お断りします。」  
ヘルガ「そうか……まあ己の人生だ、己で決めるのが良いだろう。長居させて済まなかった、彼女の事情聴取もちょうど終わったようだし、帰るといい。」

八幡「はい、ありがとうございました。」

そして俺とシルヴィは界龍の方向へと向かって、共に歩いた。

## 誠心誠意の感謝

――――

――六花・中央区付近――

八幡「……シルヴィ、大丈夫か？」

シルヴィア「うん、平気だよ。」

八幡「あの時は怒りで頭いっぱいだったから何も聞けなかったが、怪我はないか？あのレヴォルフの連中に何かされなかったか？」

シルヴィア「大丈夫だよ……君が、八幡くんが守ってくれたから。」

八幡「あのレヴォルフの連中は廃人にしたからいいが、マディアス・メサは去勢しても良かったかもな。」

シルヴィア「ふふふっ！」

冗談なのか本気なのかは分からないが、シルヴィアを安心させるためにした行為なのだろう。危機から抜け出したとはいえ、1番不安を抱えていたのはシルヴィアだと八幡は理解していたからだ。

分かってはいても、彼女の心配をせずにはいられないのだろう。

シルヴィア「それで、レヴォルフの人たちとマディアス・メサと……ウルスラはどうなるの？」

八幡「レヴォルフの連中は一端、学院に戻すそうだ。まあすぐに退学処分にするだろうな。そうしなかったら神経を疑う……マディアスは《星獵警備隊》の尋問官が取り調べを行うそうだ。奴は普通の人間になったから殴るとかは出来ないが、ペンチで爪を剥がすとか去勢するとかなら許されるだろう。」

シルヴィア「……八幡くん、なんか去勢に拘りすぎてない？」

八幡「俺のシルヴィに手を出そうとしたんだ。なら、それ相応の覚悟をしてもらわないとな……もうそれは出来ないが、もし俺が警備隊



にいたら間違いなく去勢させてるな。」

八幡「ウルスラ・スヴェント……だったか？シルヴィアの先生の名前？」

シルヴィア「うんそう！どうなるか聞ってる!？」

八幡「一応は警備隊の方で目を覚ますまで保護って形になってる。あの人の過去のことを聞いたんだが、『蝕武祭』に出場していたこともあるみたいでな、取り敢えずその事も聞きたいみたいだから、治療院には行かせないで身柄は押さえておくそうだ。」

シルヴィア「………そっか。」

余程ウルスラの事が心配だったのだろう。その一声は安心したようにも聞こえた。

シルヴィア「『ヴァルダ・ヴィオス』は？」

八幡「それが少し難しいらしい。相手は純星煌式武装、しかも身体に乗っ取るタイプだから、下手に攻撃したらその本人も傷つきかねない。外す事は簡単だが、そいつからは尋問するにしても難しいってよ。俺の予想では、厳重保管って所だと思う。あんな危険な物はこの世に出しちゃ行けないと思ってる。」

シルヴィア「……そうだね、私もその方が良い。もしくは破壊したほうが良いと思う。」

俺も最初はそう考えてた……でも今保管してるのは、リンドヴァルさんだから問題ないだろう。

シルヴィア「そういえば、決闘はどうなったの？真っ最中だった？」  
八幡「いや、始まる直前に門番の1人が来て、事情を説明を聞いて、すぐに外に向かったが手遅れだった。もう1人の門番は全身切り傷だらけの血まみれになっていた。」

シルヴィア「そういえば彼は無事なの!?私を庇ってあんなに沢山の剣の欠片の雨に………」

八幡「俺も分からん……俺が最後に見た時は、シルヴィアが連れ去られた方向を教えてもらった後に気を失ったからな、どうなったかまでは学院に行かないと分からん。」

シルヴィア「……………私のせいで……………あんなに傷ついて……………私のせいで……………」ポロポロ

八幡「おいやめろ……………自分を責めるな。」

シルヴィア「でも！」ポロポロ

八幡「いいからやめろっ！」ギュツ！

八幡は涙を零すシルヴィアを抱き締めた。

八幡「お前がそんな事言ったら、あいつのやった事は無駄になる。シルヴィがこうして無傷でいるのも、あの門番が身を呈してシルヴィを守ったからだ。間違っても自分のせいだなんて言うな。奴が報われないだろ。」

シルヴィア「……………」ポロポロ

八幡「界龍に着いたらあの門番2人に礼言おうぜ。今回、あの2人がいなければ俺はお前を見捨てたも同然の行為をしてたんだ。知らせてくれてありがとう、身体を張って守ってくれてありがとうって言ってやろうぜ。」

シルヴィア「……………うん。」ポロポロ

八幡「よし……………じゃあ界龍に行くぞ。少し時間短縮したいから伽耶梟で行くか。」

八幡「微睡め、伽耶梟。」

八幡は影で梟を呼び出し、その上に乗って界龍を目指した。

――界龍第七学院――

虎峰「八幡、まだでしょうか？」

陽乃「かなり時間経ってるよね……」

門番1「尊師……ご無事だと良いのですが……」

小苑「……っ！……どうやら帰ってきたようじゃ。皆よ、空を見上げよ。」

小苑の言葉に全員が空に目をやった。するとそこには、八幡の影で作られた伽耶梟がいた。徐々に高度を下げて地面に着地すると、そこからは八幡とシルヴィアが梟から地面に降り立っていた。そして界龍全生徒が歓喜の声を上げた。

虎峰「八幡、シルヴィアさん、無事でしたか！」

セシリー「良かったよ2人共ー!!」

冬香「御無事なようで安心いたしました。」

「尊師、奥方様！よくぞご無事で!!」

「お怪我はありませんか!？」

2人は界龍の生徒によって熱い歓迎を受けていた。

八幡「ああ、ありがとう……虎峰、今日の門番の1人はいるか？」

虎峰「はい、あちらに居ますよ。」

八幡「そうか……ありがとな。」

八幡はシルヴィアと共に門番のいる門の前まで歩いて行った。

門番1「そ、尊師！それに奥方様も！ご無事で何よりでした！！」

八幡「ああ……お前には礼を言わないとな。」

門番1「そんな！礼だなんてとんでもございません！！私は当然のこ  
とをただけでございます！！」

八幡「いえ、させてくれ。そうでないと気が済まない。」

門番1「わ、分かりました。」

八幡「今回のシルヴィアの件、お前が知らせに来てくれなかったら、  
俺は大切な人を見捨てるところだった。本当に……本当にありがとう。  
う。」

門番1「なっ!!？」

八幡は門番1の前で土下座をした。後ろにいる生徒や母体、諜報機  
関の幹部までもが驚愕していた。

門番1「そ、そんな尊師っ!!頭をお上げください!!私に土下座なん  
て!!」

八幡「いいや、俺が今している事に序列や肩書きなんて全く意味の  
ないものだ。あの会場の空気の中、報告するのに余程の勇氣が必要  
だっただろうに……そして当たり前のブーイングを受けてもなお、俺  
に報告をしてくれた。俺の為に……本当にありがとう。俺には言  
葉と行動での感謝はこれしか思いつかない。感謝するにし切れな  
い。」

門番1「……………」

シルヴィア「私からも。八幡くんに私が危険だって事を知らせてく  
れて、どうもありがとう。君のおかげで私は無事でした。本当に感謝  
します。」

そしてシルヴィアも頭を下げた。

門番1「わ、分かりました！感謝は受け取りますので、どうかおやめ下さい！私はお2人の無事なお姿を見られただけで満足でございます!!」

八幡「……ああ、本当によくやってくれた。もう1人は医務室か？」

門番1「はい。あまりにも傷が深かったので治療院に連れて行こうと話になったのですが、事が事ですのでどう説明していいか分からなかったところ、川崎殿が星導館学園に回復魔法に長けた友人がいると聞きましたので、只今医務室で治療を行っているところです。」

八幡「そうか……俺も医務室に向かう。何度も言うようだが、本当に感謝する。」

シルヴィア「本当にありがとうございました。」

門番1「いえ！これからお役にも立ってみせます!!」

## 終わった1日

八幡 side

シルヴィア「門番さんの言い方からして命に別条は無いみたいだから本当に良かったよ。私を庇って攻撃を受けた時、凄い出血だったから。」

八幡「ああ。俺が駆けつけた時も酷い状態だった。血が止まってる箇所も少なからずあったが、それでも出血多量のレベルだったからな。その中で生きてるんだ、かなりの精神力だ。」

しかもその中で俺に情報まで教えてくれたんだしな……頭に血が上っていたとはいえ、怪我人にさせる事じゃあなかったよな、無理やり口を開かせるような真似をして。

シルヴィア「でも本当に助かったんだよ。私はその時、煌式武装を持ち歩いてなかったから体術だけで対応するしかなかったから。」

八幡「あんまり聞いちやいけない気はするが、助っ人に来た時のあいつはどうだったんだ？」

シルヴィア「……正直に言うとなディアス・メサには手も足も出てなかった。一方的にやられてた……でも、負けるって分かっても私の前から退こうとはしなかったんだ。」

八幡「……」

シルヴィア「そして私も戦いに出向いたんだけど、マディアス・メサに攻撃を弾かれて隙が出来ちゃったんだ。もうダメだって思ったら、彼が私の前に出て剣の雨に……」

八幡「……そうか。」

シルヴィア「……その後は簡単。私は彼の傷に気を取られて、相手を見る事を忘れて気絶させられちゃったんだ。」

……負けるって分かってても足に食いついていったってわけか  
……無謀な事だが、根性あるな。まるで3年前の俺みたいだな。

シルヴィア「でも、その事もあって私はこうやって歩くことが出来るんだよね。」

八幡「ああ……俺がその門番だったとしても身代わりを選ぶ。女の肌に傷なんて付けたくねえからな。」

―――医務室―――

まだ治療中だとは思うが、様子を見るだけなら良いよな。俺たちも関係しているんだしな。

コンコンツ

沙希『……誰?』

八幡「比企谷だ、2人なんだが入ってもいいか?」

沙希『……うん、いいよ。』

八幡「分かった、じゃあ入るか。分かっているとは思うが、大声は出すなよ。」

シルヴィア「うん、分かっているよ。」

まあシルヴィイならそれくらいの常識持ち合わせているから心配しなくても良いか。

2人「失礼します。」

沙希「おかえり比企谷……それにリユースハイムさんも。無事に救えたんだ。」

八幡「ああ、今治療を受けている奴のおかげでな。戸塚も中か?」  
沙希「うん。たかが治療だけど、傷を見せながらやるのは不衛生だって。」

……もう将来は治療院の先生から看護師だろうな。

シルヴィア「怪我の具合とかはどうなのかな？」

沙希「あたしからは何とも言えないけど、戸塚が言うには傷が浅い部分もあれば深い部分もあるって。出血を拭き取ってて分かったけど、確かに戸塚の言った通りだったよ。」

八幡「そうか……今日中に目覚める事はなさそうだな。」

沙希「流石にあの怪我だから暫くは起きないと思うよ。」

まあそりやそうか。

八幡「今って様子見ることで出来るか？」

沙希「それは戸塚に聞いてみないとね、一応治療中だから。戸塚が『魔法で治療するとはいえ、集中してやりたいんだ。』って言ってたから。」

シルヴィア「じゃあ出直した方が良いかもね。八幡くん、目が覚めたって連絡があったら来ることにしようよ。」

八幡「ああ、そうだな。悪かったな川崎、戸塚にも礼を言つといてくれ。」

沙希「いいよ別に。あたしが戸塚を呼んだんだから。」

俺たちは川崎にそう伝えてから医務室を後にして、俺の寮部屋へと向かった。

――八幡の部屋――

シルヴィア「久し振りだなあ……」

八幡「まあ何処でも良いから座ってくれ。今お茶を淹れる。」

シルヴィア「手伝うよ？」

八幡「いや、大丈夫だ。ゆっくりしてろ。それともお湯の方がいい



か？」

シルヴィア「ぷふふっ♪何その冗談？」

八幡「いや、味の付いてないものが飲みたくなる時ってない？アレだよ。」

シルヴィア「でもこの時期お湯はないよ。だって夏だよ？」

……それもそうだな。それなら水の方がいいな。

八幡「なら冷茶のほうがいいか。」

シルヴィア「うん、それでお願い。」

——数分後——

八幡「ほい、冷茶とお茶請け。茶には合わないが、クツキーしかなくてな。」

シルヴィア「ううん、ありがとう。」

……ふう、ようやく一息だな。

シルヴィア「……八幡くん。」

八幡「ん？」

シルヴィア「助けてくれて、本当にありがとう。私すごく嬉しかった。」

八幡「当然だ、って言いたいところだが、今回はあの2人のおかげでシルヴィを救えたんだ。半分以上はあの門番2人のおかげだ。そうでなければ……俺はお前を裏切るところだった……」

シルヴィア「八幡くんこそ自分を責めすぎだよ。あの門番さん2人が頑張ってくれたから、私はこうして無傷だし、無事に助かったんだから。」

……ふっ、俺が言った事を鵜呑みされるなんてな。いや、確かに

その通りか。

――数十分後――

シルヴィア「……………」ウトウト

八幡「…………眠いか？」

シルヴィア「え？」

八幡「無理もない、ずっと気を張り詰めてたんだ。眠くもなる。俺のベッドを使っついていいから眠ってきていいぞ。」

シルヴィア「…………八幡くんも一緒に来て。」

八幡「…………そうだな。今のシルヴィを1人にはしておけないな。分かった。」

俺はお茶とお茶請けを片付けてから、シルヴィを連れて寝室へと向かった。

そしてすぐに横になったのだが、シルヴィは真っ先に俺の胸に顔を押し付け抱き着いてきた。

シルヴィア「ふわぁ…………あったかい…………」

八幡「ゆっくり休み。今日は色々ありすぎた。」

シルヴィア「うん……………」

そしてシルヴィはすぐに眠ってしまった。さて、これは俺も動けないな。ちょうど良いから俺も寝るか。

こうやってここで2人で寝るのも、3年ぶりだな。

陽乃「様子を見に来たと思ったら……」

冬香「お2人共、安心しきったお顔をしておいでですね。こちらも安らぎを感じます。」

2人は互いの身体に手を回して抱き合いながら寝ていた。少しだけ口角を上げているので、笑っているかのようにも見える。いや、おそらくは笑っているのだろう。

セシリー「そうですねー。虎峰、無粋なことはしないでよー？いくらあたしでも怒るからねー？」

虎峰「……………分かってますよ。僕だってそんな事するつもりは毛頭ありません。」

暁彗「……………此処は2人だけにしておくべきだ。」

沈雲／沈華「そうですね（わね）。」

小苑「成る程のう、曉彗が言っておったのはこういうことか……」  
麗蘭「これは……確かに起こすという方が無粋ですね。このまま  
そっとしておきましょう。」

アレマ「そうだねー。アタイも流石に今の2人には手なんて出せない  
ってー。」

星露「序列戦は日を改めることにするかのう。」

麗蘭「残念でしょうが、そうする他ないでしょう。お2人共疲れて  
いるのです、ゆっくり眠らせてあげましょう。」

## 八幡の影響

シルヴィア side

……ん、んん？あれ、もう朝かな？日が昇ってるっていうことは……そうなんだね。私が抱きついちゃったせいでカーテンを閉める事も出来なかったんだろうなあ……なんかごめんなさい。でも、私からしてみれば、八幡くんと2人で一緒に寝られたから結果オーライです。

でも気になる事がもうひとつだけ……

なんで索冥たちが半実体化してるの？

シルヴィア「索冥、何で半実体化してるの？」

索冥『っ!?!シルヴィア様!?!私たちの姿が見えるのですか!?!』

シルヴィア「え？当たり前なこと聞かないでよ。見えてるようにしてるんじゃないの？」

白虎『ふんつ、そんなはず無いだろう小娘。本当なら我等は八幡にしか見えぬ筈なのだ。それが何故、霊視も持たぬ只の星脈世代のお前

に見えることが出来る?』

そんなこと言われてもなあ……………本当に見えちゃってるし…………

朱雀『でも不思議だなあ……………突然見えるようになるなんてよ。今までにあったか?』

玄武『ううん……………僕は聞いた事も見たこともないかなあ。もしそれがあつたら印象に残るしねえ。』

八咫鳥『ふむ……………姫よ、何か思いつくことはござらぬのか?』

シルヴィア「思いつくことって言われても……………?ちよつと待つて、その姫って何?」

八咫鳥『む?主人の妻となる方を呼び捨てなど出来ぬ。ならば姫の方が呼びやすかろう?』

……………八咫鳥っていつの時代の霊なんだろう?姫って呼ばれるのは昔の人だけだと思うよ?欧州ではどうか分からないけど。

索冥『ですが不可解です。何故私たちの姿が見えるようになったのでしょうか?』

??? 『それは我から説明しよう。』

え？ 今後ろから声が……!!? 後ろに青い龍が!? いつの間に!?

白虎 『青龍よ、小娘が驚いているであろう。』

青龍 『お前たちが八幡殿の周りにいるから我のいる場所はこの女子おなごの後ろしかなかったのだ。女子よ、驚かせたことについては謝罪する。すまない。』

シルヴィア 「い、いえ……気にしてませんので。それよりも、貴方は？ 私はシルヴィア・リユーネハイムっています。」

青龍 『名乗られたからには答えねばな。我は青龍。日本の東側を守護する者だ。蒼帝とも呼ばれている。』

ああ……確か金刀比羅宮に動物の彫り物が彫ってある鳥居があった！そこには確か……亀と鳥と虎と龍だったから、もしかしてその龍かな？

シルヴィア 「じゃあこれからは八幡くんに憑いているって事で良いのかな？」

青龍 『その解釈で構わない。分霊という言葉があるのだが、似たようなものだろう。さて、何故其方に我らの姿が見えるようになったかであったな？』

シルヴィア 「あつ！そうだった。うん、青龍には分かるのかな？」

青龍 『うむ。其方の霊視は八幡殿の能力の一部が其方の身体に移り込んだだけの話だ。』

シルヴィア 「でもどうやって？」

青龍 『……あまり言いたくはないが、一昨日の夜中に其方と八幡殿は肌を重ねたであろう？』

シルヴィア 「……………／／／／／／／／／／／／カァァ

青龍 『その反応だけで充分だ。だがその晩は其方が半暴走していたこともあってか、避妊はしていなかったのだ。索冥によると、危険日

ではなかったようだから安心しろ。』

そんな事実知りたくなかったよ!!

青龍『話を戻すが、その時に八幡殿から出た精が其方の身体に広がった。が、子ではなく能力が移ったのだと考えられる。今の霊視がその証拠だ。』

な、成る程……何だろう？ ホツとしたような残念なような……この微妙な気分は………

索冥『ですが青龍、八幡様の能力が移ったとはいえ、その能力が八幡様と同等というわけではないのですよね？』

青龍『流石は我らが長、理解が早い。今聞いた通り、其方は八幡殿の力を継いでいるが、100%ではない。精々40%といったところだろう。其方の場合、霊視を続ければ疲労は溜まる。』

シルヴィア「でも、この前やった時は何ともなかったよ？」

青龍『それは八幡殿と長が力を貸していたからだ。この能力は持っている人間でないと扱うことのできないもの。其方と長の相性が良かったというのもあるが、本来他者に霊視などはやらせたりしないものなのだ。それだけ其方は八幡殿に信頼されているという事だ。』

………そうなんだ、私が八幡くんに信頼されてるんだ。

シルヴィア「えへへへ♪」

青龍『……まあ嬉しい反応を見せるのは予想出来てはいたが、こうも嬉しそうにするとはな。』

朱雀『仕方ねえよ蒼兄。旦那が一生懸けて愛するって誓うほどの女なんだぜ、良い女に決まってるさ。』

シルヴィア「………はっ！ という事は、私も憑霊って使えるのかな!?!」 ワクワク



私もあんな風にカッコいい姿になってみたいなあ！

索冥『否定は出来ませんが、あまり期待はしない方がよろしいかと……何しろシルヴィア様は40%しか八幡様のお力を受け継いでおりません。なので、もし仮に私たちを憑霊出来たとしても、その身が耐えられるかどうか……もしくはその力を受け継いでいるのかどうか……』

そっかあ……それもそうだね。分かっているのは霊視の能力だけだもんね。

青龍『そう悲観する事もあるまい。元はあるはずのない能力なのだ。この能力で悩まされた者だって過去には数え切れない程いる。この能力がいいと思っっているだろうが、それは間違いだ。この目は我々のような存在も視えるが、逆に悪しき存在も視えるのだ。』

シルヴィア「……悪いものも視えるんだね、普段は意識しないようにしないと。私の場合、常時発動ってわけではないんだよね？」

青龍『その点は心配ないだろう。さて、そろそろ我々も失礼しなければな。八幡殿が起きられる時間だ。ではな、また会おう。』

シルヴィア「うん、それじゃあね！」

??? 『ふふふつ、美しくて綺麗な心の持ち主ね……気に入ったわ。貴女に憑いて行く事にしたわ。』

## 見舞いと再戦予告

八幡 side

早速なんだが、朝からシルヴィが嬉しそうにしてる。今までの朝では笑顔で迎えていたんだが、今回に至っては笑顔な上に物凄い上機嫌だった。え、何？良い夢でも見たの？しかも腕にまで抱き着いてるし………本当にどうした？

聞き出したいところだが、今日はやる事がある。一応医務室に行つて玉緑の様子を見に行く。<sup>ユ－シエン</sup>あつ、玉緑は本名 <sup>シン・ユ－シエン</sup>杏玉緑と言ってシルヴィの身代わりになって攻撃を受けた門番の1人だ。因みに俺に報告をしに来てくれた門番の名前は <sup>ジン・ファンジー</sup>静帆季って名前だ。女みたいな名前だが、実際は男だ。

起きていればいいが、流石に1日で眼が覚めるような傷じゃあないし、見舞い程度に行くって感じた。

その次に星露ん所に行つて次の序列戦で戦うって事を伝えに行く。形式上では、俺の不戦敗って事になってるはずだからもう1度決闘申請すれば問題ないだろう。

後の問題は………隣にいるこの不思議なくらい上機嫌な子だけだ。なんでこんなにも上機嫌？

八幡「………なあシルヴィ、なんかあったのか？ずっと笑顔だし、嬉しそうだし、良い夢でも見たのか？」

シルヴィア「ええ？そんな事ないよ♪」

いやそんな事あるって。声もかなり機嫌良さそうな感じの高さだったぞ？

八幡「まあ女の秘密をどうこう探るものじゃないから、あまり詮索はしないが、気になるな……」

シルヴィア「えへへ〜こればかりは八幡くんにも教えられない事だからさ、ゴメンね？」

八幡「満面の笑みでゴメンねと言われてもな……どう返したら良いか分からねえよ。それと一応聞くが、本当についてくるのか？ついてきたとしても、面白い事なんて全くないぞ？」

シルヴィア「良いの！八幡くんと一緒にいることに意味があるんだから♪」

八幡「……………なら構わんが。」

———医務室———

さて、とりあえずは着いたが、まあ起きてはいないだろう。花でも花瓶に入れて退室するか。

コンコンッ

???『はい、どうぞ。』

ん？この声……………

八幡「やつぱり戸塚か……昨日帰ってなかったのか？」

戸塚「うん。やつぱり心配だったから会長さんに頼んで泊めてもらったんだ。八幡とシルヴィアさんはお見舞い？」

八幡「ああ。起きてなくても構わないから花だけでもって思っとな。花つつつても俺の能力で作ったものなんだけどな。」

シルヴィア「八幡くん、それただの能力の無駄遣いだよ。本物を買  
いに行こうよ……」

仕方ねえだろ、お見舞い行ってくつて決めたの今日なんだから！次は買  
いに行くんだよ！

戸塚「あはは……それで、杏さんの様子だけどね、落ち着いてるよ。  
息遣いも心電図も正常だから大丈夫そう。」

シルヴィア「そつかあ……良かった。戸塚くんも治療ありがとう。」  
八幡「ウチの生徒のために済まないな。」

戸塚「気にしないでいいよ。川崎さんから連絡があつて来て欲し  
いって言われた時は驚いたけど、杏さんを見たらすぐ納得出来たよ。  
それに、すぐ治療しないと危なかったから、驚く暇なんてなかったし  
ね。」

やっぱりかなり酷かったみたいだな……

戸塚「とりあえず僕はここに居るから安心して。目が覚めたら通信  
で呼ぶね。」

八幡「ああ、助かる。」

シルヴィア「不思議な感じだね。他学園の生徒が別の校舎で保健室  
の先生みたくなってるんだから。」

八幡「白衣着たらもつとそれっぽくなるかもしれないぞ？来てみた  
らどうだ？」

戸塚「あはは……今度制服の上から着てみようかな？」

冗談を交わした後、俺とシルヴィアは空いている花瓶に水を入れて  
から俺が作った花を入れて医務室を後にした。

――界龍・廊下――

シルヴィア「なんともないようで良かったよ。」

八幡「ああ……あとは起きるのを待つだけだ。」

シルヴィア「この後はどうするの?」

八幡「星露の所だ。決闘出来なかったから、来月にもう1度するよ  
うに頼む。」

シルヴィア「ああ、そういえば戦おうとした時に静さんが来たんだ  
っけ?」

八幡「ああ。」

シルヴィア「私たちが彼に謝罪した時の反応、面白かったなあ。」  
八幡「笑ってやるなよ、やつは真剣だったんだ。それは俺たちもだ  
けどよ……もし俺らがど偉い奴からいきなり謝罪されてもああなる  
と思うぞ。」

シルヴィア「私八幡くんのそういうところ、一回見たことあるよ。」

八幡「ん?俺がど偉い奴に謝罪されてあたふたしてるところか?」

シルヴィア「あたふたはしてないけど、驚いてるところ。」

……?あつたっけ?

シルヴィア「去年の《獅鷲星武祭》決勝の終わる頃、【EP】の幹部  
の人に頭下げられた時にすごく驚いてたよね?」

八幡「ああ、それか……確かに驚いてたな。いや、だってよ普通は  
あり得ないだろ。幹部の奴が頭下げるなんて……俺聞いたことも見  
たこともねえ。」

シルヴィア「うん、それは私も同じだよ。あれが初めてだもん。」

……それだけレアな瞬間だという事にしておこう。

——黄辰殿——

八幡「星露、いるか?」

麗蘭「おや、八幡さんですね?どうかされたのですか?このような

所にお嫁さんまで連れて。」

八幡「まだ娶ってませんよ。」

小苑「しかし残念じゃな八幡、此処にチビは居らなんだ。今しがた暁彗に聞いたのじゃが、分からないようだな。」

何処行きやがったんだ？俺の部屋、なんて事はねえよな？菓子はあるが、他はあんまりないぞ？だってあの部屋に帰るのって、今となつては時々だから食材なんてない。

八幡「そうですか……じゃあどうしたもんかねえ。」

麗蘭「八幡さんはどうされたのですか？」

八幡「いや、ただの再戦予告ですよ。」

麗蘭「……成る程、理解しました。」

小苑「それよりも八幡よ、ちいとばかりこの席に座ってみたらどうじゃ？少しは王の気分というものを味わうのも一興じゃぞ？」

八幡「俺は別に興味ありませんが……シルヴィがキラキラした目でこちらを見ているので、少しの間だけやることにします。」

シルヴィア「えっ？何の事？」キラキラ

どの口が言うか！どの口が！

まあ少しだけ座ってみるか……あんな座り心地は良くねえな。座布団とか敷いた方が良くぞこれ。

シルヴィア「おお！なんか王様っぽい!!」

小苑「ふむ……威厳が足りぬが、まあ及第点といったところじゃのう。」

俺、なんの点数つけられたんだ？

麗蘭「八幡さん、よくお似合いですよ。」

ただ座っているだけなのに、似合うも似合わないもあるのか？ ね？

その後に星露が帰ってきたのだが、特に何も言われたり、されたりする事もなく、要件を済ませてからその場を去った。

別にアレだよ？ 襲い掛かってきたから『もう二度と青椒肉絲作ってやらない。』って脅したわけじゃないからな？ ホントだからな？ ハチマンウソツカナイ。



## ※初代と2代目の密談

小苑 side

チビも成長せんなあ……少しくらい玉座に座っても良いじやろうに。にしても、あの程度のことでは八幡に攻撃するとはのう……まだまだ精神が未熟な証拠じゃな。そして情けないのが、青椒肉絲を作らないと言われた瞬間に攻撃を止めおつてからに。

麗蘭「八幡さんと共にいると退屈しませんね。同じ風に過ごしているつもりが、彼が出てくると人が集まり、必ず何かが起きます。」

小苑「その言い方じゃと八幡が来たら好い事も悪い事も起きるといつておるようなものじゃぞ？」

麗蘭「事実起きたではありませんか。ああ、先に言っておきますが、別に八幡さんを責めているわけではありませんからね。」

小苑「分かっておる、お主が八幡を気に入っている事はもう知っておる。ちいとばかし鼻屑しているようにも見えなくもないがのう。」

麗蘭「おや、私が八幡さんに鼻屑ですか？心外ですね。何故そう思ったのです？」

小苑「儂が知る限りでは、お主は1度も誰かと模擬戦や稽古などで戦ったことは無かったはずじゃ。そんなお主がこの前八幡と模擬戦をしたではないか。」

その場に儂もおったから、言い逃れは出来んぞい。

麗蘭「ああ……私も書類整理ばかりでは体が鈍ってしまうので、丁度良い逸材が私の家に来て貴女との稽古をしに来たので、お暇をもらっただけの話ですよ。」

小苑「……そういう事にしておこうかのう。して、もう1つ聞くのじゃ。お主から見て八幡とチビ、どちらが勝つと思う？」

麗蘭「その事ですか……ならば答えは決まっています。

八幡さんの圧勝ですね。」

小苑「やはりお主もその評価のようじゃのう。」

麗蘭「当たり前です。貴女が本気を出しても勝てないと言う程なのです。星露では敵うはずがありません。何せ星露は貴女よりも弱いのですから。」

随分とハッキリ言うのう……言い方というものがあるじやろうに。あつたとしてもそこまで変わらんじやろうがな。

小苑「じゃが、お主は万が一という可能性もあるとは思わんのか？」

麗蘭「思いませんね、因みに理由ならありますよ。」

小苑「何じゃ？」

麗蘭「彼が倒れないからですよ。貴女も聞いていたのでしょうか？彼が負けを認めた時は、膝をつくか倒れた時です。彼は戦いが終わるまで気を抜かない性格みたいですからね。」

成る程のう……よう見ておるわい。

麗蘭「貴女も八幡が勝つと信じているのですよね？理由はなんとなく察していますが、お聞きしてもよろしいですか？」

小苑「まあ分かり切った事じやが、八幡が儂の弟子だから、じやのう。儂が1から育てた愛弟子なのじや、そこらの者に負けたら許さんのじや。」

麗蘭「星露をそこらの相手と決めつけるのはどうかと思いますが、確かに貴女が最初から最後まで育てた弟子は八幡さんただ1人でしたね。暁彗さんは星露に教えを請いてますからね。」

それ以前に儂は弟子を作るような事はせんからのう。興味がないわけではないが、儂が目をつけた者しか育てたくはないからのう。

麗蘭「彼を見つけたのは本当に偶然なのですか？」

小苑「偶然は必然である。」これはお主が言っておった言葉でもある。八幡と会ったのは偶然かもしれんが、同時にそれは会うことが決められたことでもあるという論じや。そうであろう？」

麗蘭「……成る程、やはり貴女に口で勝つことは出来ませんね。私の言った言葉や見聞いた事、経験談、それを巧みに使ってきます。全く、性格の悪い後輩ですね。」

小苑「史上最強の実力を持つ先輩に言われとうないわい。今からでも《星獵警備隊》の小娘と戦ってきたらどうじや？良い勝負が出来ると思うぞ？」

麗蘭「ふふつ、冗談はやめてください。彼女では相手になりませんよ。最も、私に傷をつけられる存在は、この世に1人しかいませんから。」

……此奴、本当に八幡を鼻屑しておる。

八幡「ああ、腹減った……って、お2人共まだ界龍にいたんですか？ てつきりもう帰ったかと。」

小苑「すぐに帰るのも暇を持て余すだけだと思ってる……少しばかり話しをしていたのじゃよ。」

八幡「気にはなりますが、女性の話に首を突っ込むものではありませんね。」

麗蘭「流石は八幡さんですね。乙女心、女心を分かっていらっしやいます。」

八幡「そこら辺はシルヴィに叩き込まれましたので。まあ、元からの部分もありますけど。」

シルヴィア「ふふんっ！」 フンスッ！

義娘との仲も良好なようで何よりじゃ。

じゃが、シルヴィアから八幡と同じ気のオーラが漂っているのは何故じゃ？

## もう1人の功労者

八幡 side

玉緑の意識が目覚めないまま3日が過ぎた。苦しそうにしてる様子は無いが、まだかまだかと心待ちにしている奴も日に日に多くなっている。シルヴィも流石にずっと学院にいるわけにはいかないから、クインヴェールに戻った。そして今回の件をペトラさんにも報告するとの事。俺は今界龍から出ていないから分からないが、恐らく六花は大騒ぎだろう。

理由は、未遂とはいえインベルディア落星雨を再び引き起こそうとしたためである。世界を再び破滅にしかねないものを《銀河》の幹部でもあり、星武祭運営委員長が進んで計画をしていたからである。後にヴァルダ……じゃなくて、ウルスラさんの肉体も解放されて、今は治療院で寝ている状態になっている。

この計画の代表的な首謀者は、マディアス・メサ、ヴァルダ・ヴィオス、デイルク・エーベルヴァインの3人だった。尚、赤豚については途中から作戦事項を伝えていなかったとの事だった。だが逮捕された事には変わりはない。

なんでこんなに知ってるかって？そりや今世間で話題になってるからな。そしてあの事件の事は秘匿されてるが、被害者としてリンドヴァルさんから詳細が記されてる通信が来たからだ。今のところは報道陣が警備隊本部に突っ込むような真似はしていないが、時間の問題だろう。

八幡「ああゝ暇だ………する事が何もない。序列戦も玉緑が目覚めて出歩けるようになってからって言っちゃったしなあ。」

この前の序列戦は俺の不戦敗……にはならなくなって、中止という

形になった。今月の序列戦は終わったが、星露が俺の条件をのむ形で特例として後日に決闘することになった。

八幡「なあ、何かないのか？」

セシリー「あたしも暇ー。なんかないのー？」

虎峰「2人してそんなこと言わないでくださいよ。この前序列戦が終わったばかりではありませんか。」

八幡「俺は戦ってねえ。シルヴィが拐われたから助けに行ってたんだ。」

虎峰「いえ、確かにその通りなのですが……」

学校はあれど、俺たち大学部は必要な科目を受けて単位を取ればもう進級とか卒業は確定だからな。今日に限って講義はないし、鍛錬するような気分でもないし、虎峰を弄るのは暇つぶしにもならないし。

虎峰「……八幡、何か変なことを考えてませんでしたか？」

八幡「考えてるわけねえだろ。ていうか大学部ってこんなに暇だったっけ？俺の印象もっと忙しかったような気がするんだが？」

セシリー「それって八幡の自業自得じゃない？始めの頃に沢山科目受けてテスト受けて全部合格して単位あつという間に取っちゃったんだもん。する事ないのは当然じゃない？」

虎峰「それが悪い事というわけではありませんが、もう少し計画を練ってから受けた方がよろしかったのでは？」

八幡「ふーん、お前はシルヴィが言ったことにケチつけるんだな。そうかそうか。」

虎峰「実に素晴らしい計画だと思いますよ!!先にしておいた方が後が楽になりますからね!!この先もそうするべきです!!」

セシリー「はあ……【戦律の魔女】が絡むとすぐこれだよ。でも八幡、それホントー？」

八幡「ああ。先に済ませて後に楽しようって話になった。だから俺は残りに出てくる科目を済ませたらもう終わりだ。」

ぶつちやけ、誰かに何かを教えていた方が、今の俺には楽かもしれない。暇過ぎて眠くなってきた。

八幡「ふあゝ……やっぱ何もしてないと眠いな。」

虎峰「八幡が欠伸なんて珍しいですね。」

八幡「俺だって欠伸くらいはする。人間だからな。」

しょうがねえ、少し部屋で寝てくるか。

セシリー「八幡ー、私も寝ていい？」

八幡「俺の心を読むな。後、俺の隣はもう生涯契約されてるので無理です。何があるかと譲れません。もし寝ちやったら……ボコボコだよ？」

セシリー「あー……うん、納得したー。」

さて、一休み「p i p i p i …… p i p i p i …… ー …… ん？誰からだ？

FROM：静帆季

帆季『尊師、いかがお過ごしでしょうか？吉報です！玉緑が目覚めました！もしお時間のある時があれば、医務室にいらしてください。』

目を覚ましたか！これはすぐに行かねえとな！

ーーー医務室ーーー

コンコンツ

帆季『どうぞ。』

八幡「失礼する。」

帆季「っ！尊師っ！もういらしたのですか!？」

八幡「ああ、特にすることもないからな。それで、玉緑は？」

帆季「はっ、こちらに！」

目の前には包帯で全身を巻かれている玉緑がいた。だが、目は開いていた。

玉緑「尊師……」

八幡「起きようとするな、そのままがいい。」

玉緑「尊師……奥方様は？ご無事なのですか？」

八幡「ああ、お前が身を呈して守ってくれたおかげで傷1つない。」

玉緑「…………それは何よりです。」

緊張が抜けたかのように顔に安堵の色が出ていた。

帆季「では自分、少し水を貰ってきます。尊師、お手を煩わせるようですが、少しの間だけお願い致します。」



八幡「ああ、任された。」

帆季はそう告げると、扉の前で一礼してから医務室を出た。

八幡「さて、まずは礼を言わないとな。シルヴィの件では本当に助かった、ありがとう。」

玉緑「い、いえ……あの時尊師にも仰った通り、自分は足手纏いになりませんでした。ですが、奥方様が攻撃を弾かれた時、何とかでもあの攻撃を防がなくてはと思ったのです。」

八幡「結果、その思いのおかげでシルヴィは無傷だった。本当にありがとう。俺にはこれしか出来んが、せめてもの感謝の形だ。」

そして八幡は帆季にやった時と同じで、地べたに土下座をした。玉緑はまだ充分に開かない目をぎよろつと見開いた。

玉緑「そ、そんな！尊師、そのような真似はお止めください！私などにそのようなことなんて……」

八幡「……お前があの時あしなかったら、シルヴィは殺されていたか、全身一生消えない傷が沢山残っていたかもしれない。お前のおかげだ、本当にありがとう。」

そう、俺にはこれしか出来ない。だからこそ全力で土下座するしか思いつかない。シルヴィを助けてくれたことに関して、2人には土下座しても足りないくらいだ。

玉緑「ほ、本当におやめ下さい！奥方様に傷が1つも付いていないのなら、それで良かったのです！ですので、頭をお上げください！」  
八幡「……お前らは少し謙虚が過ぎると思うぞ。もう少し自分に大らかになれ。兎に角、ありがとうな。」

玉緑「い、いえ……」

八幡「さて、今戻ってきたみたいだから俺も行く。身体、大事にし

ろ。」

玉緑「は、はい！」

帆季「お話は済んだのですか？」

八幡「ああ、後は頼む。」

帆季「お任せをっ！」

八幡 side out

—————

玉緑「……………」

帆季「尊師は何をなされた？」

玉緑「…………頭を下げた。俺なんかのために。」

帆季「やはりそうか…………俺の時もそうだった。しかも、周りの生徒がいる中で恥じらいもせず、俺の前でだ。」

玉緑「なっ!?あの門の前でか!?しかも生徒がいる中で？」

帆季「ああ…………それに比べればお前のこの状況は余程優しいと思うぞ。まあ、俺たちにとっては一杯一杯の状況だな。」

玉緑「当たり前だ。尊師が俺たちに頭を下げるなんて…………師が弟子に頭を下げるなんて前代未聞だ。」

帆季「全く、あの人には本当に頭が上がらない。」

玉緑「ああ…………全くだ。」

## 一応の報告

八幡 side

八幡「……というわけで無事に目を覚ました。暇が出来たら2人もそのうち界龍に来てくれ。」

シルヴィア『うん、分かったよ。良かったあ……』

戸塚『僕もお役に立てたようで何よりだよ。もし何か必要だったらいつでも呼んでね。八幡の頼みなら些細な事でもすぐ駆けつけるから。』

八幡「ああ、その時は頼む。突然悪かったな、急に連絡入れたりして。取り敢えず報告だけでもしておこうと思ってな。」

シルヴィア『ううん、そんな事ないよ。私も気になってたから。』

戸塚『僕も少しね。あんなに怪我した人を見るのは初めてだったから。』

とりあえず俺は、さつき玉緑が目を覚ました事を2人に報告している。他学園の生徒とはいえ、ウチの生徒が世話になった人と、助けられた人がいるんだ。流石に言っておかないとな。

『あれ？戸塚くん誰と話してるの？』

戸塚「界龍の友達だよ、この前の。』

『ああ、あの青髪の美人さんね？戸塚くんの『コレ』でしょ？』

戸塚『そんなのじゃないよ。じゃあ僕はもう切るね。それじゃ！』

最後に気を遣ってくれたのだろう。もしもあの場で俺の名前を出してたら、絶対大騒ぎになってただろうからな。

八幡「戸塚にはまた礼を言わないとな。」

シルヴィア『ふふっ、じゃあ戸塚くんも序列戦に招待する？』

八幡「それも良いな、ちょうど席なら空いてるし。」

俺と星露の席が。つっても俺の席なんて全く使わないから、あつてないようなものだけだな。

シルヴィア『あつ、そういえば八幡くん。序列戦はいつになったの？』

八幡「一応は玉緑が歩けるようになってからって話になってる。門番だから見れないとはいえ、今回は別だ。怪我人に門番をやらせるわけには行かないからな。見やすい場所で観戦させようと思ってる。勿論帆季もな。」

シルヴィア『おお、VIP待遇だ。勿論私は八幡くんの席だけどね〜♪』

八幡「そう言うと思ってたよ。安心しろ、俺の席に座った奴なんて今までに1人しかいないから。」

シルヴィア『あの時はしてやられたよ〜！』

そう、オーフェアの事だ。1年前の学園祭の時にだ。俺も後から聞いたが、凄いやホらしかった。

シルヴィア『あ〜……なんかこうやって話してるとき、直接会いたくなってくるよ。八幡くん、いつ会える？』

八幡「俺はいつでもいいが、ペトラさんに言われてるんだろ？学園で謹慎してろつて。だったらそれまで我慢だ。」

シルヴィア『でもそれまで長いよ〜！1週間のうちまだ3日しか経ってないんだよ！早く残りの4日過ぎてよ〜！』

八幡「そんなこと言うなよ、俺だって会いたいんだ。」

俺は謹慎されているわけではないが、流石にあんなことがあったから学院にいた方が少しは安全だ。だから互いに家には帰らないようにしてる。

八幡「俺も我慢してるんだからシルヴィも我慢してくれ。待つので結構しんどいんだぞ？分かってると思うが。」

シルヴィア『それは身に染みて理解できてるけど……でもさ、やっぱり会いたいのに！』

ダメだこの子、駄々コネ子になってる。

八幡「シルヴィ、もし4日間我慢出来るのなら、俺たちの家で飯をあーん、一緒に風呂、一緒に寝るを進呈してやろう。」

シルヴィア『八幡くん、私頑張るね。』

現金な奴だ……いや、俺の周りはその様な連中ばかりだけどよ。

八幡「よし、なら大丈夫だな。じゃあそろそろ切るぞ、あまり長く話し過ぎたら、授業に遅れるからな。」

シルヴィア『うん、分かった。じゃあね八幡くん。』

八幡「おう。」

そして俺は通信を切った。そしてその夜、シルヴィから通信があつて話したくなったと言ってきたのは別の話である。

## 再開する戦い

――――

『皆様……遂に、遂にこの日が、待ち望んでいたこの日が帰ってきました……』

界龍第七学院公式序列戦最終試合の再開じゃー!!!盛り上がってる  
かお前らく!!!』

「「「うおおおおお!!!」」」

事件の日から2週間が経ち、中止になった八幡VS星露の公式序列戦が始まるうとしていた。それに伴って、実況と生徒のテンションがお祭り並みのハイテンション&ボルテージMAXなのである。

陽乃「あつははは！皆盛り上がってるね。」

雪ノ下母「ええ、余程楽しみだったのですね。」

『延期になっていた公式序列戦の最終試合、それを本日行います!!皆様は疑問に思われているかもしれませんが、何故こんなにも期間が空いたのか……それは!!尊師のお心遣いによるものです。先の序列戦開催日に門番をしていた2人、杏玉緑殿と静帆季殿にも観戦して欲しいとの言葉がありました。なので、玉緑殿の傷が回復して歩けるような状態になるまではこの最終試合は延期にして欲しいとお達しがありました!』

知っていた者もいれば今事情を知った者もいるが、この事情に皆は納得しているようだった。

『さらに!!今日は尊師の奥方様、シルヴィア・リューネハイム様にもお越し頂いております。見掛けた方は挨拶をお忘れなきようにして下さいね。』

シルヴィア「そう呼ばれるのももう慣れてきちゃったよ……慣れてっというのは恐ろしいなあ。」

冬香「八幡さんも最初は『尊師』という肩書きに抵抗を持っていたんですが、今は全く気にしていない様子ですね。いつの間にか慣れているのですから、確かに恐ろしいものではありませんね。」

『そして最後に、お暇を潰して来てくださいました、統合企業財体と重宝工作機関の幹部の皆様も観戦にいらっしやっています。』

『では皆様!これ以上待たせるのも焦らしているのかと思われかねないので、選手の登場に移りたいと思います!!前回に紹介を済ませておりますので、今回は2つ名と名前、序列を呼んで終わりたいと思います!!先ずは、当学院序列1位【万有天羅】の茫星露ー!!!』

『そして次に当学院序列2位【夢幻月影】の比企谷八幡ー!!!』

実況が2人の名前を言い終わると、両サイドから八幡と星露が歩いてきた。会場の熱気は最高状態だが、両雄の気迫を全員が感じ取ったのか、ビリビリした雰囲気になっていた。

星露「この時をどれ程待ちわびたか……：……ようやつとお主と戦えるわい。妾は早う戦いたくて仕方ないのじゃ！八幡、お主もなのじゃろう!？」

八幡「ああ……：これにはお前に同意だな。俺も早くお前と戦いたい。戦鬪狂でなくても、これには誰でも同意するだろうよ。」

星露「お主も男じやのう！じゃが八幡よ、無様にすぐ負けるではないぞ？妾の速度について来れん、なんて事も許さんからの？」

会場の雰囲気さがさらに重苦しいものになった。星露の身長からは、あり得ないほどの闘気が放たれていた。だが会場の全員はそれにも驚いていたが、その中で平然と立っている八幡にも驚いていた。

八幡「当たり前だろ、すぐに負けたとなっちゃあいい笑いもんだ。俺はただ目の前の敵を倒す、それだけだ。お前こそすぐに負けた、なんて冗談はやめろよ？」

八幡も競り合うかのように星露の闘気に自身の闘気をぶつけた。あまりに強烈な闘気のぶつかり合いに気絶する者もいた程だった。

星露「ええのうええのう！戦う前から妾をどれだけ楽しませれば気がすむのじゃお主は!!もうお喋りはやめて早う戦おうぞ!!」

八幡「ああ……：……ここからは、戦いで語る。最初から本気で行くぞ、手え抜きやがったら今後の飯は一切抜きだと思え！」

『えーそれでは、両者準備が出来たようなので、開始したいと思います  
!!界龍第七学院公式序列戦最終試合!!』



ドク  
ン  
ツ

ドク  
ン  
ツ

ドク  
ン  
ツ

『S  
t  
a  
r  
t  
  
o  
f  
  
t  
h  
e  
  
D  
u  
e  
l  
』

『バトルスターアアアトオオオ!!!』

## 天羅VS月影

――――

スタートの合図になると、星露は周りに3つの小さな物体を浮かせていた。恐らく、【万有天羅】にしか使用することが許されていない《仙具》というものだろう。

八幡も自身の純星煌式武装【衿々切丸】を抜刀して、中腰になって刀の腹に手を添えるように構えている。

星露「何処からでも掛かってきてよいぞ、八幡よ。先手は譲ることにしよう。」

八幡「…………後悔するなよ?」

八幡「光を閉ざせ、夜よ、闇よ。暗黒の帳を下ろせつ。急急如律令。」

八幡が呪符を取り出して唱えてから地面につけると、ジワジワと周りの空間が闇に包まれた。目の前は真っ暗な状態になっている。

星露「光を潰したところとて、妾は倒せんぞ?」

八幡「そんな事言われなくても分かっている。それで勝てるんだったら誰でもそうしてるよ。」

闇に覆われて行く中、八幡が答える。星露は今現在余裕の表情。八幡は無表情のまま世界は闇に覆われた。

八幡「堕ちし光のなき地は、闇夜の空の月光にて、地を照らす。」  
八幡「影切・月下無双。」

……………

星露「そこじゃっ!!」

ガギイイイインツ!!!

影が晴れると、八幡の刀を星露の仙具の1つが受け止めていた。

八幡「……………」

星露「人には誰も“気”というものが存在するのじゃ。その気配を察すればお主の攻撃など、取るに足らんものじゃ。」

八幡「……………まあこれくらいの攻撃を受けるわけねえよな。けどよ星露、詰めが甘いな。」

星露「……………何じゃと?」

八幡／八幡（分身）「俺が分身を使えるって事、忘れてないか？」

八幡（分身）「影切・月下無双……双刃<sup>ふたば</sup>っ！」  
星露「っ!？」

声がした方向を見るが、八幡は居なかった。そして星露は慌てて校章の部分を残りの2つの仙具で守った。するとそこから金属が粗く重なる音がした。

八幡（分身）「チッ……ダメか。」

星露「今のは危なかったのじゃ……お主、わざと気を隠さないでおったな？」

八幡「敵を騙すならまず味方から、って言うだろ？」

星露「趣味が悪いのう……」

八幡「この戦いに限っては手なんて抜いてらんねえだろ。違うか？」

星露「確かにそれもそうじゃ。」

八幡「フツ!!」

星露「ホレッツ!」

八幡と星露が同時に動き、刀と仙具の激しいぶつかり合いが始まった。星露が3つの仙具で何箇所も攻めるが、八幡はそれを刀一本で防いでいた。しかもその中で攻撃も入れながら行っていた。

八幡「……流石に厳しいな。これだけ攻撃の回転率が良いと反撃するにしても威力のある攻撃が出せない。しかも星露の奴、俺が反応しにくい場所を突いてきやがる。良い戦法だが、やらしい戦法でもあるな。」

星露「攻めきれん……久しく戦ってはおらんかったが、仙具を持っ  
てしてもこれ程攻め切れんのは初めてじゃ。八幡の左右真逆に攻撃  
をしておるというのに、いとも容易く防ぎよる。なんて男じゃ、ここ  
まで成長が早いとはのう……」

八幡「……これじゃあ戦いが動かねえ。仕方ねえ、此処は動く  
か。」

星露「独り言とは余裕じゃのう!」

八幡「そうでもねえよっ!!」

八幡「金剛たる鉄身もって災悪を防がん。急急如律令。」

八幡は両手に金剛符を持ち、唱えて腕を硬化させた。そのまま星露  
に突っ込んだ。誰もが接近戦だと思っていた。

星露「血迷うたか、八幡っ!!」

3つの仙具が飛んで来て八幡に襲い掛かった。

だが、八幡の狙いはここにあった。

八幡は慌てた様子もなく、飛んできた仙具を1つ取ったのだ。

星露「な、何じゃと!？」

そして2つ目の仙具ももう片方の手で掴み、最後の1つは持っている仙具の先で弾いた。

八幡「オラア!!お前の道具のお返しだっ!」

星露「グホオツ!!」

八幡は仙具を手にしたまま星露の左頬を殴りつけた。殴られた星露はそのまま吹っ飛び、壁に激突した。

八幡「ふう……一か八か、試して良かったぜ。これで少しは効いてくれると嬉しいんだがな。」

星露「……………くくく、くくくくくくつ!あーっはっはっはっはー!!いやー久方振りじゃあ……殴られるなんてのう。おかげで良い目覚ましになったわい。」

八幡「マジかよ……今ので目覚ましか。」

星露「いんや、確かに効いたわい。こんな風にされたのは小苑以来

じゃ。」

八幡（小苑さん……あんたのせい【※君が殴ったから】であいつなんか目覚めちゃってますよ？）

星露「さて、始めるとするかえ……戦いをつ！」

八幡「一撃入れたつてのに、さつきよりやる気出ちまってるよ……まあ、それは俺も同じだがよっ！」



## 天羅VS月影 ②

—————

星露「行くぞ八幡よ、ここからが本番じゃあ!!」

八幡「最初から本番で来やがれっ!」

再び金属の音が鳴り響いた。星露が仙具3つに対して八幡は刀一本に硬化した片方の腕と2つ。よく対処していた。

星露「…………ここまで凌ぐとはのう、流石と言うべきか規格外と言うべきかのう? じゃが、先の借りは返させてもらうぞい。」

星露「伸びよ。」

八幡「っ!!?」

星露がそう呟くと、星露の懐あたりから突然黒い棒状の物体が八幡の腹部目掛けて伸びてきた。だが八幡は咄嗟の判断で腹部に星辰力の壁を作り、直撃を防いだ。

星露「お主、どんな動体視力をしておるのじゃ? 今の攻撃はお主の目には見えておらんかったじゃろう?」

八幡「……ああ、確かに見えてなかった。所謂第六感って奴だな。てかそれなんだよ。孫悟空かよ、如意棒なのかよ。」

星露「ほほう……良い線を言っておるがちいと違うのう。今の武器は《如意金箍棒》という物でな、闘戦勝仏が所持していたといわれる武器じゃよ。伸び縮みが自在可能な武器でも有名じゃな。」

八幡（それ、如意棒と大して変わらんだろう。悟空に謝れよ。）

星露「お主が先言うた如意棒とは少し違くてのう、如意金箍棒は音

速で伸び縮みが可能なのじゃよ。」

八幡（…………ごめん、やつぱかなり違ったわ。音速って何だよ。反則だろ。）

星露「して、紹介し忘れつつたが、この3つが仙具の中でもバランスに長けた仙具《業煉杵》じゃ。様々な能力を有しておるのじゃが、お主には効いておらんようじゃのう。」

星露「じゃが、今の《如意金箍棒》を勘で防いだというのは良い事を聞いたのう。次からはその勘とやらをあてには出来んのう？」

八幡「そりやそうだ。何度もそれで防げるんなら、勘でも何でもねえよ。」

小苑「ふむう……庄勝かと思うたが、仙具の事を考慮しとらんかったわい。確かにあれがあれば、勝算だけでなく、戦闘力も大幅に上がるからのう。しかし厄介じゃのう。」

麗蘭「ええ。今の八幡さんには星露さんに致命傷を与えるだけの手数がありません。いえ、あるにはありますが、出せる状況にはありませんね。もしそれを発動しようとしても、《如意金箍棒》で防がれるのがオチですね。」

八幡「くっ！」

星露「ほれほれどうしたのじゃ！受けるだけで精一杯ではないかえ！妾に攻撃を当ててみい！！」

八幡は防戦一方の状態だった。未だ攻撃の糸口が見えずにいた。

八幡（くそ……どうする？憑霊をしようにもこの攻撃の嵐だ、止まれば一瞬で終わる。玄武を使おうにも憑霊をしないと出せねえ………八方塞がりだなこりや。）

???『ふんっ、余の主人ながら情けない。その程度では余を従わせるなど笑止千万な話だ。』

八幡（っ!?誰だお前!?）

???『お主の中における霊の1人とも言うっておこう。お主の無様な姿を見ていられなくなってな、こうして出てきてやったというだけの話だ。1分だ、1分間だけお主を手助けしてやる。神の気まぐれに感謝することだな。』

八幡（おいっ！勝手に……!?）

星露「伸びよっ！」

伸びた《如意金箍棒》が八幡へと襲い掛かっていった。そのまま八幡の校章に当た……

ガギイイイインツ!!!

ることはなかった。何と、剣の切っ先で《如意金箍棒》の一撃を止めていた。それも八幡は直立したまま片腕だけでだった。それも苦

しい表情をせず、興味なさげにしていた。

八幡『ふんっ、この程度か……』

八幡は刀で抑えるのを止め、そのまま棒を片手で掴んだ。

星露「？何を考えておるのじゃ八幡。それを掴んだとしても意味などないぞ？」

八幡『無意味かどうか、試すのが一番早からう。』

星露「なんかキャラが変わつとるような気もするが……まあ良いじやろう。それもそうじゃしな！」

星露は《如意金箍棒》を縮める動作に移した。そしてそれに伴って八幡も星露へと音速のスピードで接近していた。だが、そうはさせないと、3つの仙具《業煉杵》が襲い掛かった。

星露（音速の速度に《業煉杵》の3撃じゃ！これをどう防ぐ！）

八幡『……愚かな。』

八幡は棒を掴んだまま超高速回転をした。その回転により《業煉杵》は3つ全て弾かれていた。八幡はそのまま星露の元へと突っ込ん

で行った。

星露「っ！」

星露は《如意金箍棒》を手から放し、上へと飛んだ。すると八幡は  
……

八幡『ふん、態々空へ逃げてくれるとはな！追う手間が省けたぞ！』

完全に通常の長さに戻った《如意金箍棒》を地面に突き刺し、床に  
立つ事なく棒の真上へと乗った。

そして、あり得ないことが起きた。

八幡『伸びよ。』

【万有天羅】にしか扱えない仙具が八幡の言う事を聞いたのだ。音速  
の速度で伸びる《如意金箍棒》と、八幡の脚力を活かした跳躍力は次  
元を超えていた。

星露「っ!?何じゃと!!お主いつの間に!？」

八幡『態々空に逃げてくれるのだ、追わぬ手はなかるう?ムンツ!』  
星露「ぐはっ!!」

八幡はそのままスピードを維持したまま、星露に膝蹴りを放った。  
音速のスピードで放たれるのだ、とてつもないダメージだろう。

八幡『落ちろっ!!』

星露「があっ!!」

今度は踵落として星露を地面まで叩きつけた。八幡もすぐに地面に降りて、星露の落ちたところを見ていた。

八幡（なんだこの程度か?我が主人はこの程度のつまらん奴に遅れを取っていたのか?実に情けない奴だ。）

星露（な……なんじゃ今のは?身体全体に響いておる。今の一撃、明らかに手加減をしておらんかった。手加減抜きとは言うたが、ここまで容赦抜きにされるとは……）

小苑「…………八幡ではないのう。」

麗蘭「おや、貴女も見抜いていましたか。あれは八幡さんの中に眠っている神でしょう。おそらく神憑りを強制的に行使している状態でしょう。八幡さんはそんなことをするような人ではありませんからね。」

小苑「まさかここで出てくるとはのう……如何するのじゃ？止めた方が良いか？」

麗蘭「いえ、これも戦いです。止めるというのは無粋でしょう。」

小苑「ならば続行じゃな。」



## 天羅VS月影 ③

—————

星露（何じゃ彼奴のあの動きは!? さっきまでとはまるで別人じゃ!! とてもではないが、妾ではついて行けんくらいのスピードとパワーじゃ! しかもその中に高度な技術と計算された洗練されていて繊細かつ鋭い動き……こんな力を隠しておったのか!!）

八幡『考え事とはな………余裕ではないか。その考え事も出来ぬくらい追い詰めてやろう。』

星露「くっ!!」

八幡と星露の戦いはさつきと違い、八幡が星露を圧倒していた。それも八幡は全て体術で星露にダメージを与えていた。刀は握っているが、あくまでも周りにある仙具を弾くために使っているだけであって攻撃手段としては使っていないかった。

八幡（現代の人間とやらはこの程度なのか? つまらぬ、実につまらぬ! 百万年前の方がまだ楽しめたぞ! 余の前では退屈凌ぎにもならぬな。）

小苑「むう……見た目は八幡じやが、中身の違う人間がやっているとなると、あまり良い光景ではないのう。」

麗蘭「そうですね……八幡さんが早く目覚めてくれれば良いのですが………」

シルヴィア「……………違う。あんなの八幡くんじゃない！八幡くんは戦いであっても、あんな風に傷つけたりしない！」

八幡「ムンツ!!」

星露「うぐっ!!」

八幡の攻撃を受け続け、ついに限界が来たのか、その場で倒れたままになってしまった。仙具も所々に散らばっていた。

八幡『これでトドメだ。』

星露「……………の……………ようじゃ、のう。」

星露は目を瞑った……………だが、いつまで経っても八幡が振り上げた刀が当たることはなかった。だが、何かの呻き声が聞こえてきた。

八幡『うう、ううううう!!お、おのれええ!余の邪魔をするか!』  
八幡「うる、せえっ!!勝手に出てきた奴が……なにいつて、やがる  
!!」

端から見れば滑稽なものだったが、そんな事を言っているような場面ではなかった。頭を抱えて苦しそうにしているからである。この状況で一人芝居をやっているような風には到底見えなかった。

「な、なあ……尊師はどうされたんだ?」

「分かんねえ……ただ、物凄く苦しそうにされている。」

「ねえ、こんな時に演劇なんてする人じゃないよね、あの人は。あれって一体……」

「ああ……だからこそ分からない。何なんだ?」

麗蘭「……八幡さんがあの神と戦っているようですね。体に乗っ取る程の力を持った神と戦えば、精神力や体力を大幅に削ります。八幡さんは大丈夫でしょうか?」

小苑「……」

八幡「今……すぐ、引っ込みやがれ!!誰が出て来い、なん、て言いやがった!!」

八幡『貴様が……無様な戦いを、晒すからであろう!!余が相手を……してやると言っているのだ!!大人しく………している!!』

八幡「口の減らねえバカ神が………これじゃ青龍たちの方がよっぽど使えるな。」

八幡『貴様!!!神である余ではなく、たかが守護する霊の方が使えると申すか!!無礼者めっ!!』

八幡「だったら大人しく待つてる事だな……オメエの出番は今じゃねえんだよ!!」

八幡『ふんっ!貴様の命令を聞く義理などない!』  
八幡「聞き分けのねえ………バカ神がっ!!」

ザクツ!!!

「「「「「っ  
!!!!!!?」」」」」

八幡「ぐっ!!」

八幡は自身の持つてる刀「祢々切丸」を自分の左肩に突き刺していた。

八幡『き、貴様……なにをするっ!?!』

八幡「大人しく中に引っ込んでろ……それとも何か? 神ってのはそんなに傲慢な奴らばかりなのか? ならお笑いだな……」

八幡『貴様あ……神である余を愚弄するか!!』

八幡「だったら早く戻れよ……もう1分切ってんだろうがよ……俺の勝負に水差してんじゃねえよ。誰が替われつつったんだよ? 人の言葉も理解できねえのか?」

八幡『……』

八幡「早く戻れ……命令だ。」

八幡『ふんっ……言われなくても戻ってやる。1分ちようどで終わってやろうと思つて無視してただけだ。無様に負けを晒すが良い。』

そして八幡から放たれていた異様な雰囲気が消えた。それと同時に八幡も刀を肩から抜き、それを杖代わりにしていた。すでに息は絶え絶えだった。

八幡「はあ……はあ……すまない、星露。少し邪魔が入ってな……」

星露「……なるほどのう、お主の攻撃スタイルや口調が変わったのは、別の人格が乗り移ったからなんじゃな?」

八幡「そういう事だ……はあ……お前が決めてくれ。俺はこの状態

だ、やるとしても最後の力を振り絞っての一撃が限界だ。それか、中止にしてもらっても構わない。」

星露「……………続けるのじゃ。最後の一撃、それで決めようぞ。」

八幡「……………良いのか？」

星露「よく考えれば今の状態はちょうど良いのじゃ。お互い手負いじゃしのう……………決着をつけるにはちょうど良いのじゃ。」

八幡「恐らく俺はお前に勝ったとしても勝った気にはなれないだろうな。だが、お前がそう決めたのならそれに従おう。」

小苑「……………どうやら八幡はあの神に勝ったようじゃのう。」

麗蘭「そのようですね。ですが、八幡さんの中にいる神様も中々聞き分けのない強情な神のようですね。」

小苑「自身の肩に刀を突き刺す程じゃからのう……………全く恐ろしいわい。」

## 天羅VS月影 ④

――――

序列戦が始まってから10分程が経っていた。ほんの少しだけアキシデントこそあったが、今は落ち着いている。八幡の続行か中止かの答えについて、星露の返答は《続行》だった。

星露（八幡を見るからに、体力は限界のようじゃのう。それに精神力も。八幡ほどの男がああ状態になるのを見たのは久しぶりじゃ。暁彗以来かのう？ じゃがああ頃と同じじゃ……あの眼からは闘争心が一欠片も落ちておらぬ。最後まで戦い抜くつもりでおるようじゃのう。ふう……小苑よ、お主が羨ましいわい。これ程素晴らしい大器を持った輩は世界でもほんの一握りじゃ。その一握りをお主が弟子に取ったのじゃからのう。とはいえ、妾も本気を出さなくてはのう……やはりアレを出すしかないのう。）

―――序列1と2位の部屋

虎峰「師父はいつもの調子ですが、やはり手負いなのか重心がやや前のめりですね。それに表情に余裕がなさそうに見えます。」

セシリー「そうだねー。あたしもあんな顔した師父は見た事ないかなー。いつもはケラケラしながら適当にあしらってるのに、今はマジな顔になってるよねー。」

沈雲「ですが師兄方、比企谷くんも大分状況は悪いみたいです。見てお分かりになっていいると思いますが、ああ状態の彼を見るのは、3年前の大師兄との公式序列戦以来です。」

沈華「逆境に強い所はこの前の戦いでも見せては頂きましたが、今回の戦いでは厳しいかと。いくら強いとはいえど、相手は師父です。ただ逆境に強いだけで勝てる相手ではございません。」

虎峰「…………確かに貴方たちの言う通りです。今の八幡に勝てる要素なんて見当たりません。むしろ皆無です。でも、八幡ならと思える自分もいるのです。」

暁彗「……………私は比企谷八幡が勝つ事を信じる。」

「!!!」

冬香「突然どうしたのですか暁彗？突拍子もなく突然そのような事を口にするなんて……」

暁彗「……………比企谷八幡に負けたからこそ分かるのだ、この負ける男ではないと。性格的に似合わないと自負しているが、敢えて言わせてもらう。私はあの男に可能性を感じたのだ……………歴代【万有天羅】の力をも超越する力を持っていると。」

冬香（暁彗がここまで饒舌に…………しかも八幡さんをそこまで信頼し



ているんですね。ふふふつ、彼女でもないのに、少しだけ妬けてしま  
いますね。」

冬香「私は最初から八幡さんが勝つ事を信じています。あの人はた  
だ敵が強大だからといって諦めるような方ではありません。むしろ  
燃え上がるタイプのようですね。」

セシリー「確かにそうですねー。あたしも今回は八幡側かなー。師  
父には悪いけどー。」

虎峰「……八幡にとって最初の友人としての信頼です。今回は八幡  
の勝利を信じます。」

沈雲「成る程、師兄方はそうお考えなのですね。沈華はどうなんだ  
い？」

沈華「愚問よ沈雲。私も同じ考えよ。」

――VIPルーム――

雪ノ下母「これは……分からない展開になりましたね。陽乃、貴女  
はどう思いますか？」

陽乃「私？私は八幡くんしか応援してないから。星露を応援しても  
良かったけど、やっぱりさ……私の正体を一目で見抜いた彼を信じ  
ないわけにはいかないからね。」

雪ノ下母「……貴女なりの考えがあつての事でしょう。なら私も  
比企谷さんに賭けてみましょう。」

小苑「麗蘭よ、お主はどちらに賭けるつもりじゃ？当然儂は八幡一  
択じゃが。」

麗蘭「私も八幡さんですね。可能性が無限大にある若者に賭けるのは当然の事です。」

小苑「それを言うたらチビの方が八幡よりも若いぞい。10くらい離れておるんじゃないかな？」

麗蘭「……………彼女の言葉遣い、性格からして若者に思えますか？」

小苑「行動は年相応に見えるが、その2つに関してはそうは思えないのう。」

麗蘭「なので私は八幡さんが勝つ方を選びます。」

小苑（チビよ…………おそろくじやが、お主に賭けておる奴はこの会場の中には極一部の輩しか居らなさそうじゃ。）

シルヴィア「……………八幡くん、私は君が勝つて信じてるよ。だから……………思いつきり君の想いをぶつけて下さい。」

星露「覚悟は良いか？八幡よ。」

八幡「……………ああ。」

星露「そうか……………ならば、来るがよい!!」

そう言つて星露は身の丈の倍以上はある槍を手に使っていた。

星露「一騎打ちの一撃勝負なら、この武器以外にふさわしい武器などなからう。妾もこの武器に全身全霊をかけてお主との一発勝負を受けようぞ!」

八幡「……………そうか。なら俺も敬意を払って今出来る最大の技を使う。」

その瞬間、八幡から大量の星辰力が溢れて、青色の気も出ていた。

八幡「青龍……………憑霊だ。」

青龍『ぶつつけでやるとはな……………八幡殿は中々驚かせてくれる。』

青龍が半実体化して現世に顕現して、八幡の身体へと纏わりついた。

八幡「憑霊………颶風・天翔龍神!!」  
ぐふう あまかけるたつがみ

八幡の見た目は変化していなかったが、瞳がまるで宝石でも埋め込まれたような綺麗な瑠璃色になっていて、瞳孔は丸から縦長になっていて、龍の目のようになっていた。

八幡「怒りを力に変えよ、龍の逆鱗っ！」

八幡がそう唱えると、八幡の持っている【祢々切丸】が青白い光に包まれた。

星露「………なんて力じや。妾からも感じるぞい、その途轍もなく強大な力を。」

八幡「一発勝負なんだ、今俺が出来る最大にして最強の技だ。」

星露「ならば妾もそれに答えんとう!!」

星露も星辰力を爆発的に高めた。今の2人を例えるなら、龍と虎だろう。それくらいの迫力だった。

星露「行くぞ八幡っ!!」

八幡「望むところだ!!」

「はあああああああああつ!!!」

ステージが光に包まれた。勿論生徒や他の人も2人の状況は分からなかった。

光が徐々に無くなっていくと、互いに背を向けて攻撃をし終わった後の態勢を取っていた。

ズバツ!!

八幡「ゴフツ!!」

すると、八幡の胴体から大きな傷が出来ていた。肩から腹にかけて  
バツサリと斬られていた。

八幡「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

星露「……妾の……負け、か……」

ドサツ!!

八幡「はぁ……はぁ……竜の逆鱗は斬撃技じゃねえ。一時的に刀身を、腹側と同じ状態にさせて……極限にまで高められた……はぁ……星辰力で、相手の意識を刈り取る技だ。ようは……相手を意識消失にさせる逆刃刀ってヤツだ。」

『ファ……ファ……茫星露選手、意識消失!!!勝者、比企谷八幡——!!!』

界龍全体が揺れていた。それ程の大歓声が界龍に響き渡っていた。

八幡「はあ……はあ……ははっ、やった、ぜ。」

ドサツ!!

八幡はその場に倒れてしまった。無理もなかった、体力、精神共に底をついた状態であれだけの大技、そして最後に星露の攻撃を食らっているのだ。

八幡「また……このパターン、だな。もう……眠くて仕方ね……えや。」

そして八幡はそのまま眠るように気を失った。

## 同じ風景

八幡 s i d e

……見知った天井だ。確か、3年前もこんな風景だったっけ。しかも時間帯も同じ、真夜中と来たもんだ。何、呪いでもかかっているのか？何で俺が医務室で寝たら真夜中で起きちまうんだよ……俺何も出来ないじゃん！

八幡「……取り敢えず、身体起こすか……ん？」

シルヴィア「スウ……スウ……」

シルヴィ？まさかずっと俺の側にいたのか？ていうか今の日付と時間は……まんま3年前と同じじゃねえかよ。3日間眠りっぱなしの夜中の3時！これもう腹減ること間違いないのパターンだろ。あー……早く朝にならねえかなあ。

……そういや思ったんだが、身体思ったよりも動くな。今確認したが、最後に星露に斬られた傷や肩に突き刺した傷もなくなってる。戸塚でも来たのか？

シルヴィア「ん……ん……八幡くん？」



八幡「あつ……起こしちゃったか？」

シルヴィア「八幡くんっ!!目が覚めんたんだ………良かったあ………」

八幡「心配かけさせたみたいだな、すまない。」

シルヴィア「ううん、こうやって目を覚ましてくれただけで私は満足だよ。」

ホント良い彼女を持ったもんだ俺は。こんな風に微笑みかけてくれるんだもんな。

八幡「あの後どうなったんだ？」

シルヴィア「私も全部知ってるわけじゃないんだ。一応その場にはいたけど、私は界龍の生徒じゃないから。細かいことは教えられてないんだ。」

俺は簡単に事の顛末を教えてもらった。

俺が勝ったことにより、序列が入れ替わり。

←  
【万有天羅】継承。

←  
意識が回復するまで待ちましょう！（さっきまで此処）

←  
目が覚めたら報告（夜中に出来るか！）

まあこんな感じだ。

シルヴィア「私が知ってる限りはこんな感じかな。」

八幡「そうか……後、シルヴィはずっと此処に居たわけじゃないよな？学園に戻ったりはしてるんだよな？」

シルヴィア「流石に学校もあるから学園には戻るよ。でも、終わっ

たらすぐに此処に来たよ。1番最初に顔を合わせるのは私なんだから！」

うん。君の言った通り、最初に顔を合わせたのはシルヴィだったよ。

八幡「それよりもシルヴィ、お前あまり寝てないだろ？ちよつとだ  
が隈が出来てる。」

シルヴィア「あゝ……やつぱり分かっちゃうんだね。」

八幡「当たり前だ。酷くはなっていないが、少しだけ黒い。クイン  
ヴェールの生徒会長ともあろう人が美容に気をつけないでどうする  
？」

シルヴィア「美容なんかよりも八幡くんの方がずっと大事だもん  
！」

……いや、まあ……嬉しいんだが、流石に気にした方がいいとい  
う俺の気遣いも汲み取って？

八幡「まあそんなわけだ、ほれ、こっちに來い。」

シルヴィア「病人が寝てるベットになんて入れないよ。八幡くんが  
寝てて。」

八幡「俺、3年前はこの時間に起きて空腹と戦ってたんだ。だから、  
隣に物凄く安心出来て良い香りのする出来た彼女がいると、すごく安  
心するんだがなあ……」

シルヴィア「……ちよつと寝不足気味だからお邪魔しても良いかな  
？」

八幡「勿論だ。」

俺は布団を持ち上げてシルヴィを中に入れた。

シルヴィア「えへへ♪あったかい。」

八幡「こうしたらもつとあつたかいぞ。」

俺はシルヴィの身体に抱き着いて、身体を密着させた。シルヴィからはふんわりとした柑橘系の良い香りがしていた。

シルヴィア「なんかすぐに眠れちゃいそう……寝ても大丈夫かな？」

八幡「大丈夫に決まってるだろ。普通なら今は寝てる時間だ、コンビニ店員と24時間営業の店員以外は皆お眠の時間だ。」

シルヴィア「ふふふつ、そうだね。」

シルヴィア「八幡くん、おはようのキスとおやすみのキス、してくれないかな？」

八幡「……ああ、分かった。」

俺たちは顔を近づけて、2回程口づけを交わしてからその日も一度、眠りについた。

――朝 8：00――

麗蘭「おやおや、クインヴェールの生徒会長ともあろうお方が、こんな所でこんなにも安心してしまった顔で睡眠を……ふふ、なんだかこちらでも安心してしまいました。」

小苑「我が義息子に義娘は良い子じやろう？こんなにも仲が良いのじゃからのう。」

麗蘭「もう学園は始まっていますが、私から連絡を入れておいた方がよろしいですね。写真付きで。」

小苑「お主、意外とお茶目な所あるよのう。」

その後、俺たちは2時間後の10時に起きた。シルヴィは慌てて学園に戻ろうとしていたが、麗蘭さんの事情を聞いてホッとしたような顔をしていた。

## 条件と朝ごはん

シルヴィア side

皆さん、おはようございます。突然ですけど、現状報告をしたいと思っ  
ています。簡単に言うと……八幡くんにご飯を食べさせてい  
ます。

シルヴィア「はい八幡くん、あーん♡」

八幡「……あーん。」

シルヴィア「ふふふ♪美味しい?」

八幡「ああ。」

シルヴィア「よかった♪」

八幡(……味なんて分からない。此処にいるのがシルヴィだけだっ  
たら、まだ美味く感じたかもしれない。けどこんだけ人が多けりや  
なあ……)

セシリー「良いなあー、あたしも八幡に食べさせたいなー。」

冬香「3年前もこのような状況でしたね。こうして見ると、本当に  
お似合いの2人ですね。」

陽乃「あぁーん! 私も八幡くんにご飯食べさせたいよぉー! シル  
ヴィアちゃん変わってくれないかなあ?」

沈華「無駄ですわ、雪ノ下姉姉。恐らくですが、今の【戦律の魔女】  
には聞こえていませんわ。」

沈雲「見て分かるように、比企谷くんの看病に夢中のようにすから  
ね。下手に邪魔をすれば仕返しに来るか……」

陽乃「今更私にどんな仕返しをするっていうのさ?」

沈雲／沈華「姉姉に料理を作らせない、ですな(わね)。」

陽乃「ダメだよそれ?! 界龍を卒業した私でも、楽しみの1つなん

だから!!」

曉彗「……………」

宋「しかし、尊師のこんなお姿は初めて拝見するな。奥方様とはこんな風に過すごされてるのか……」

羅「いつもは節度ある、見ていて理想のお付き合いをしているお二人だと思っおもてはいたが、このようような……とても甘い雰囲気も出すのだな。」

銀梅「確かに今までの尊師と見比べてみれば、今日の前にいる尊師が別人に思えますね。」

永成「それだけ奥方様との関係が進んでおられるって事じゃないかな?」

八幡（言いたい放題言いやがって……聞こえてるんだっての。俺は1人でも食えたよ。右腕だって普通に動かせる。まだギコちないのは刀を肩に刺した左腕の方であって、右は何もしてないからね?それにさ……1名程ヤバい奴がいるんだよ。）

虎峰「つゝゝ!!!」ギリギリ

八幡（メチャメチャ齒ぎしりしながら俺を睨みつけてる。今にも人を殺しそうなくらいヤバイ目してる。そんなに睨むんだったらシルヴィに止めるように言ってくれ。やってるのはシルヴィなんだから。）

八幡「……んっ、そういや俺の立場はどうなってるんだ？ずっと寝たきりだったから分らないんだが。」

銀梅「それが、まだ正式な発表が無いんです。師父や先代様の皆様にお伺いしたのですが、尊師が目覚めてから、の一点張りで……」

八幡「……………【万有天羅】の条件は、今星露が座っている部屋、黄辰殿の扉を一人で開ける事だったな。その扉を閉めていたりはしていないか？」

陽乃「私は何も聞いてないなあー。私は元界龍だからね、現役ならまだしも、卒業した私に情報が回って来るとも思えないしね。」

八幡「陽乃は知らないか……………なら他はどうだ？」

八幡くんが皆に質問をするけど、答える人はいなかった。じゃあ秘密裏に行われてるって事かな？

シルヴィア「八幡くん、試しに星露に連絡を入れてみたら？そしたら何かわかるかもよ。」

八幡「そうだな、少し通信を入れるから静かにしてくれ。特に虎峰、お前の齒ぎしりが今の所一番うるさい。」

虎峰「ぐうう……………」

八幡（唸るのもやめろ。）

八幡くんは少しのだけ通信に入るから、食事が中断されちゃった。でも大丈夫♪八幡くんはまだ食べれるから！私がたくさん食べさせてあげるんだ！

八幡「おお星露、3日ぶりだな。」

星露『目が覚めたようじゃのう、八幡よ。』

あつ、繋がったみたい。

八幡「早速なんだが、俺ってどの立場なんだ？お前を倒したは良いが、『万有天羅』を倒した場合、何をどうするかなんて全く知らなくてな。」

星露『それは妾とて同じ事じゃ。というより前例がないのじゃから当然じやろうて、過去に『万有天羅』に挑んだ者は居らんのだからな。』

八幡「そんで、お前らはどうするんだ？」

星露『簡単な事にしたのじゃ。お主に黄辰殿を1人で開けられるかどうかを試してもらうのじゃ。』

なるほどね、それなら一番分かりやすいね。それに開けた瞬間から八幡くんが『万有天羅』な訳なんだし。よしっ、私もその瞬間に立ち会おうと！

八幡「……分かった。俺も飯が終わり次第、黄辰殿に向かう。其処には小苑さんと麗蘭さんも居るんだろ？全員の前で開けた方が信憑性も増すつもんだからな。」

星露『あい分かった。では待っておるからのう。』

そして八幡くんと星露の通信が終わった……うん、じゃあ今やることは決まったね！

シルヴィア「八幡くんは早く黄辰殿に行かなきゃだから、ご飯を早く済ませないかね。ちよつとだけペース上げなきゃね！八幡くん、あーんして♡」



八幡「いや、なら俺自身で食べた方が良い気がするんだが……」  
シルヴィア「八幡くんは怪我人なの！そんな人に無理はさせられま  
せん！ほら、あーん♡」

私からは逃げられないんだからねー！

## 継承と新称号

八幡 side

結局、今日の朝飯は全員の前で全てシルヴィに食べさせられるというちよつとした黒歴史になった朝飯だった。だがそれで終わらなかった。今は黄辰殿に向かっている。当然俺の後ろには医務室に居た連中もついてきているが、右隣にはシルヴィが両腕を俺の右腕に絡めて抱き着いていた。それも満面の笑みをしながら嬉しそうに。俺としては少し歩きにくいからやめてほしいんだが、おそらく聞かないだろう。

そして後ろから伝わる激しい……なんの感情だか分からないが、とにかくスゲー視線を感じる。誰がやってるかは簡単に想像つくけどな。俺を睨まないでくれよ………やってるのは俺じゃなくてシルヴィなんだから。俺を睨むのはお門違いだぜ。

………物は試しに言ってみるか。

八幡「……シルヴィ、少し歩きにくいのもあるが、後ろからのある人の視線が物凄いいから離してもらってもいいか？」

シルヴィア「ダ〜メツ♪今は八幡くんと一緒にいるんだも〜ん♪」

八幡「いや、一緒にいるだろ。」

シルヴィア「分かってないなあ。今のは、一緒に居るんだけど、こうやってくっついていないとダメツてことなんだよっ♪」

八幡「な、なるほど……うん、よく分かった。」

シルヴィア「うんっ♪」

虎峰「……すまん、無理だわ。」

一瞬だけ『ナイス八幡っ!!』的なオーラを感じたが、すぐに戻ったわ。やめてくれよ、その視線。後でシルヴィの新作アルバムを俺のサ

イン付きであげるから。

………そしたら間違いなく殺されちゃうな。

―――黄辰殿前―――

八幡「……ん？」

星露「おお、漸く来おったか。」

小苑「弟子よ、身体に不調はないか？」

八幡「はい、まだ違和感のあるところはありませんが、そんなにひどくはありません。」

小苑「うむ、ならば良い。」

麗蘭「懐かしいですね。私が学生だった頃もこうして仲間と集まり、門を開きに来たものです。」

門の前には既に3人の【万有天羅】が揃っていた。

アレマ「あたいを忘れてもらっちゃあ困るねー。歴史的な瞬間を目の当たりにすることができるんだ。立ち会わないと損だからねー。」

星露「何じゃ、お主も来たのかえ。」

麗蘭「仕事の方はどうされたのですか？」

アレマ「そんな事よりも八幡ちゃんの方が気になるに決まってるじゃないですかー、我が長。」

麗蘭「はあ………まあいいでしょう。」

仕事のサボりはいけませんよ、アレマさん。

雪ノ下母「私も今回は拝見させて頂きます。現【万有天羅】を倒した程の実力者がこの門を開けるのか、興味と期待もありますので。」

陽乃「お母さん、仕事はいいの？」

雪ノ下母「もしかしたらの可能性もありましたので、この日の仕事は全てオフにしていたのです。社員の皆様にもゆつくりとする時間は必要ですからね。」

物は言いようってこの事かな？

シルヴィア「ま、まあ誰だって気になるよね。新しい【万有天羅】が生まれるかもしれないんだからね。」

八幡「まあ興味はあるだろうな。」

オーフェリア「……………八幡。」

八幡「っ!? オーフェリア!？」

え!? 何でこいつがここにいる!？」

八幡「な、何でここに居るんだ?」

オーフェリア「……………学院が休みだから暇だったの。久しぶりに八幡に会おうと来てみたのだけど、門の前にいる2人が黄辰殿に居るって言ってたから此処に来たのよ。」

おい…………帆季に玉緑、こういう日は通したらダメなんじゃねえの? いや分かんけどよ。」

八幡「まいっか…………どうせ後から知れる事だし。」

オーフェリア「……………何かするの?」

八幡「ああ、今から【万有天羅】になれるかどうか試すんだよ。」

オーフェリア「っ! やつと、やつとあの小さいのから貴方が【万有天羅】になる日が来たのね。」

星露「聞こえておるからの!! 小さいのとはなんじゃ!! 小さいのとは!!」

オーフェリア「……………事実だもの。」

星露「キイイイ!!」

小苑「これやめい。みつともない。」

……………君たち仲良いね。

八幡「んじゃあ始め『尊師!!』…………ん?」

おいおい……マジかい。

『我々も拝見させて頂きます!!』

お前ら全員来たの？道がギュウギュウ詰めじゃん。後ろ絶対見えないだろ。

小苑「まさか全員来るほどとはのう……次代の器はそれだけ大きなものになりそうじゃな。」

麗蘭「同感です。」

星露「皆も知ってるとは思うが、今から比企谷八幡が次代の『万有天羅』に相応しいか、儀式を行うのじゃ。儀式はいたって簡単じゃ。目の前にある門を開くことが出来れば4代目の『万有天羅』を継承することとする！異存はあるかえ？」

誰1人として文句をつけるものはいなかった。それはそれで嬉しいな。

星露「ならば儀式に移るのじゃ。八幡よ、門の前に立ち扉を開けるがよい。」

八幡「……………」

この門って開くのかって思えるくらいデカかった。初めて来た時もそんな感じだったな。

八幡 side out

—————

皆が見守る中、八幡は門に手を置いて、軽く押した。

八幡（やっぱ押しただけじゃ開かないか。）

そして八幡は大量の星辰力を練り込んだ。これでもかと思うくらいの量を自身の身体に練り込ませていた。

八幡「スウ……………ハァ……………」

深呼吸を1回……………そして再び門に向けて手を置き、強く押した。

すると門はゆつくりとだが、確実に開いていた。

八幡（何だ？最初はあんなに重かった門が今じゃ軽い？星辰力を練ったせいかな？）

ギイイイイ……ガキンツ！

最後に金属音が聞こえ、扉が最後まで開き切った。

星露「八幡よ、奥へと行くのじゃ。」

そして八幡は奥へと向かい、次第に見えなくなった。

丨丨丨丨丨丨丨

八幡 side

奥に向かえって言っていたが、何かあるのか？来たは良いが、同じ風景、同じ玉座、そしてその前に黒い羽衣が浮いてるだけで何も……ん？黒い羽衣？

俺が羽衣に近づくと、その羽衣は俺に反応したかのように俺の腕に



絡みつぎ、最後には星露が身につけている羽衣と同じ状態になってしまった。

八幡「……………戻るか。」

——黄辰殿前——

八幡「……………中には入ったが、羽衣があって俺に絡みついただけで終わったんだが……………」

麗蘭「皆様、ここに宣言致します！この界龍第七学院の新たな統治者は4代目【万有天羅】比企谷八幡です！異議無き者はその場にて跪きなさい！」

俺の目の前にいる全員が片膝をついて頭を下げていた。大人も子供も関係なくだった。

麗蘭「では、比企谷八幡を4代目【万有天羅】を継承する者とし、初の男性【万有天羅】であることも考慮し【夢幻月影】を改め、新たに【神羅武双】の称号を与える！」

なんかスゲエ称号もらっちゃったけど、良いのか？

麗蘭「ではこれにて、儀式を終わります！八幡さん、4代目継承、おめでとうございます。」

その瞬間、この場にいる殆どの者が歓喜の声を上げた。

八幡「……………」

また……………この歓声に囲まれたな。

シルヴィア「八幡くんっ!!」ダキッ!!

八幡「おっ!シルヴィ……」

シルヴィア「……八幡くん。」ナミダメ

八幡「ふっ……あまり自覚はないが、俺もこれで序列1位だ。シルヴィと対等だな。」

シルヴィア「うんっ!!」

こうして俺は4代目【万有天羅】を継承して、初代【神羅武双】の2つ名も貰った。

そしていつの間にか学院の奴らからは【宗師】呼ばれるようになり、いつの間にか学院外にも広がっていた。

## 閑話⑤

### 出世した彼

八幡 side

俺が序列1位を勝ち取ってから1週間が過ぎた。界龍にはもう報道陣やら他学園の生徒で一杯だった。ファンジー ユーシエン帆季と玉緑には少し悪い事をしたな。今度なんか奢ろう。え？今か？今も続いてるぞ。俺は今界龍ではなく、シルヴィの家にいる。此処がまあ天国なんだわ。近所の人達も気遣ってくれているのか、はたまた知らないだけなのかもしれないが、家に押しかけるようなことは今の所ない。すんごく助かるね！

ありがたいのはそれだけじゃなかった。ある程度交流のある他学園の生徒からは、通信で『おめでとう。』の一言と雑談だけで済ませてくれるのだ。俺にとってはこれが何よりの気遣いだ。けど、これでも簡単に外には出られなくなっちゃったな。商業エリアなんかに行ってみる、絶対に囲まれるぞ。何かをしたい気分ではあるのだが、外出する気にはなれない。お外が怖いんだもん。

八幡「はあ……何処もかしこも【神羅武双】の事ばかりじゃねえかよ。いくら前代未聞のことだからって騒ぎすぎじゃねえのか？」

シルヴィア「それもあるけど、1番は八幡くんが姿を見せないからだよ。」

八幡「俺が？」

シルヴィア「うん。私ときだつて大変だったもん。《王竜星武祭》準優勝した時なんて、ファンが学校前に押し寄せてくるほどだったんだから。男子は入れないから境界線から先には入れなかったけどさ。」

八幡「俺が姿を現せば何か変わるかね？」

シルヴィア「きつと変わると思うよ。この前の会見みたいに隠し事  
をしているんじゃないかって言われるのも嫌でしょ？」

八幡「それもそうだな。△△社みたいな奴らに嘘書かれたらたまつ  
たもんじゃねえからな。」

さて、界龍にでも向かうか、影に潜って。

――界龍第七学院・校門前――

賑わってるなあ……お祭り騒ぎってわけじゃねえけど。ああー  
ファンシー ユーシエン  
やっぱり帆季と玉緑が頑張ってるな。ゴメンな、3回くらい飯に連  
れて行くから。あともうちよつと待って。

シルヴィア「何処から行くの？」

そしてちやつかり付いてきてるシルヴィアさん。いや、別に問題は  
ないんだけどね？

八幡「普通に中から出て行く。その方が良いだろ。」

シルヴィア「そうだね。外から登場したら、後ろに誰も来てない事  
に不思議がられちゃうもんね。」

八幡「そういう事だ。さすがシルヴィ、頭の回転が大変よろしい。」  
シルヴィア「いやあくそれ程でも。」テレテレ

まあ、おふぎはこれくらいにして、あの2人を助けに行かないと  
な。

玉緑ユージェン 「ですから！宗師はご多忙なのです！序列1位になってからの引き継ぎ事項などもありますので、今はそんな場合ではないのです！」

帆季ファンジー 「前回、前々回よりも前に仰っておりますが、我々から宗師にお伝え致しますので、それまでは界龍の敷居を跨がないようお願い申し上げます！」

◇◇社 「でも、それは少し横暴なんじゃないかな？少し話をするだけなんだから……」

□□社 「ほんの少しで良いんだよ、取り次いではもらえないかな？」

○○社 「……………」

○○班長（比企谷さんはこんな事を容認するような人じゃない。ここは大人しく帰った方がよさそうだな。）

八幡「何の騒ぎだ？」

八幡／シルヴィア以外「っ!!」

帆季「そ、宗師っ！それに奥方様も！」

2人は俺たちを見た途端、急いで包拳礼をした。

八幡「楽にしてい。それで、彼らは？」

玉緑「はっ。何やら宗師と取材をしたいとの事です。我々は宗師はご多忙故にお相手することが出来ないと言ったのですが……」

八幡「……成程、事情は分かった。嫌な役目を押し付けてすまなかったな。」

玉緑「と、とんでもございません!!これが我々に与えられた役目ですので！」

八幡「さて、皆様。改めて自己紹介を。界龍第七学院大学部1年、比企谷八幡です。今し方こちらの2人から申し上げられていると思いますが、現序列2位からの引き継ぎ事項がありますので、現時点でお相手することができません。私の時間が空き次第改めてお相手させて頂きますので、今回はお引き取り下さい。」

八幡「それと、今回私が取材を許可したのは○○社さんだけです。

○○社さんはこちらへどうぞ。」

○○社「っ!!」

八幡にそう告げられて素直に帰る取材班は○○社以外全員だった。それもそうである。此処にいる取材班は六花の中にあるTV局から派遣されている。故に、△△社の二の舞になる事は何としても避けたいのだろう。

○○班員（班長！一体どんな手品使ったんですか!?)

○○班長（いや、実はちよつとした繋がりがあったな。あの2人に

は仲良くさせてもらってるんだよ。」

八幡「さて、お久しぶりですね。」

〇〇班長「はい、お久しぶりです。ですが、なぜあのような嘘を？」  
八幡「実は俺、気に入った人には甘いんですよ。」

〇〇班長「……はははっ！そうですか。シルヴィアさんもお元気そうですね。」

シルヴィア「はい。私も貴方の雑誌良く読んでます。嘘が書かれてなくて良かったです。」

〇〇班長「いえ、当たり前のことです。お2人のご助力のおかげで課長補佐から課長に昇進出来たんです。お2人には感謝のお言葉しかありません。今回は班長としてこちらに赴きました。」

へえ……どんな仕組みかは分からないが、大出世………したのか？  
まあ出世はしたんだろうな。

八幡「取り敢えず取材には応じますよ。シルヴィアの専属なんです。俺も貴方を贔屓させて頂きますよ。」

〇〇班長「ではお言葉に甘えてそうさせて頂きます。ありがとうございます。」

その後は〇〇社との取材をして、満足して帰っていった。来月の雑誌には

『彼氏彼女から新婚夫婦に激変!? 六花最強の序列1位コンビ夫婦はまだ健在どころか成長中!!』

何て大見出しで書かれてあったのは赤面ものだった。

## 反応 聖ガロードワース学園

――――

六花北東部、六角形に象られた水上都市アスタリスク。その北東に位置する学園は《聖ガロードワース学園》である。

規律と忠誠に重きを置き、これまで何度も総合優勝をしてきた六花の中でも名門中の名門校である。しかしそれは去年までの事。去年の秋に開催された星武祭にて、元ガロードワース学園生の葉山隼人が不正を行ったため、今年の入学者数は過去最低を記録する程だった。

そんな彼等も名誉を回復するために必死だった。日頃から行なっている鍛錬、騎士としての嗜み、毎日欠かさずやっていると行ってもいいだろう。元生徒会長であるアーネスト・フェアクロフも例外ではなかった。フェアクロフ家次期当主でもありながら、生徒会長を兼任するほどの実力者。日々面倒ごとは絶えないであろうが、持ち前の騎士としての気高さ、高潔さを漂わせながら日々の業務に勤しんでいた。

そんなガロードワースに1つの速報が入って来た。



『界龍に新王者誕生!!比企谷八幡が現序列1位に勝利ッ!!4代目を継承!!新たな2つ名は【神羅武双】!!』

アーネスト「やれやれ、彼には本当に驚かされるね。まさかミス星露を倒してしまうとはね。」

ケヴィン「こいつ本当に人間かよ?【万有天羅】って異次元な存在とも言われてるんだろ?そいつに勝つてどういう事だよ……………」

ライオネル「奴も別種の存在だという事だろう。全くふざけた奴だ。」

レティシア「常識を超えてますわね。」

パーシヴァル「流石比企谷さんです。」

生徒会室では、現生徒会の5人が比企谷八幡の序列1位昇格に感想を述べていた。

アーネスト「いつか挑戦するとは思ってはいたけど、まさかこんなにも早く彼女に挑んで勝ってしまうなんてね……………以前から思っていたけど、やはり彼は恐ろしいね。常軌を逸しているよ。」

パーシヴァル「序列戦が行われたのは丁度2週間前ですね。ですが、何故か2人の戦いだけ別の日になっています。」

ケヴィン「生徒全員に見せてやろうっていう気遣いじゃねえか？ほら、戦って気を失った奴いるかもって考慮したんじゃないやねえの？」

パーシヴアル「比企谷さんの性格ならあり得ますね。あの人はお優しい方ですから。」

アーネスト「確かに比企谷くんは、僕から見ても気高い存在に見えるからね。優しい、というのも分かるね。」

3人からは高評価だった。

レティシア「でもアーネスト。相手はあの自由を妨げてはならないとまで言われている【万有天羅】ですわよ？幾ら【夢幻月影】が強いからといってそう簡単に勝てる相手ではないと思いますわ。」

ライオネル「失礼な言い方だが、とても勝てたとは思えない。」

2人からの評価は勝てるはずがない、だった。

アーネスト「2人共、1年前の学園祭の事を忘れたのかい？あの気迫、六花中に響き渡る程強大なものだった。そんな気迫を放つ程の人が、【万有天羅】に勝てるはずがないと決めつけるのは些か失礼だと思うよ。それに僕たちは彼の力の一部を見ている筈なんだ。それでも彼が勝てないと言い張るのかい？」

レティシア／ライオネル「……………」

アーネストの言葉に2人は沈黙してしまった。凶星だったのだ。比企谷八幡に対する評価が甘かったのもあるが、『獅鷲星武祭』を考慮していなかったのだ。

アーネスト「それに、僕たちは彼に文句を言えるような立場ではないよ。彼にはこの学園の汚物を取り除いてもらったんだからね。感謝はすれど、文句を言う筋合いはないよ。」

ライオネル「……その通りだ、前言を撤回する。」

レティシア「私もですわ。」

ケヴィン「まあアーニー、それくらいにしてやろうぜ。別に2人も悪気があって言ったわけじゃないんだしよ。それよか、エリオットちゃんへの引き継ぎと《王竜星武祭》の出場選手状況の確認だろ?」

アーネスト「そうだったね。エリオットにはもう仕事の内容は伝えであるよ。作業する事も一通り一緒にやっているから、大体のことは分かっていると思うよ。分からなさそうにしていたら、フォローをよろしく頼むよ。それからパーシヴァル、状況はどうだい?」

パーシヴァル「はい、《王竜星武祭》出場者は30名程いました。」

レティシア「充分な数ではないですの。」

アーネスト「……いや、そうじゃないよ。パーシヴァル、だった、なんだよね?」

パーシヴァル「はい。比企谷さんが序列1位になった事により、出場者は………」

0になりました。」

ライオネル「0?」

ケヴィン「おいマジかよ……」

アーネスト「やれやれ……これじゃあガラードワースは学園創設初の最下位になってしまっうね。でも仕方のない事だね、相手が強大過ぎる。」

レティシア「今年の星武祭に出場したいなんて人は………いる方が不思議ですわね。」

アーネスト「きつとミスリューネハイムは出場すると思うよ。彼と本気で戦える最後の舞台なんだからね。これを逃す手はないよ。」

ケヴィン「今年の《王竜星武祭》はカレカノの夫婦対決になりそうだな！なんか燃えて来たぜ！」

ライオネル「相変わらず軽い奴だ。」

ガラードワースでは、驚きつつも平常運転のようだった。

## ※反応 アルルカント・アカデミー

――――

六花南部、六角形に象られた水上都市アスタリスク。その南方に位置する学園は《アルルカント・アカデミー》である。

六花内の六学園の中でも落星工学の知識、研究が極めて突出している学園。当初はクインヴェールと並ぶ弱小校だったが、学生が研究の成果を上げるに連れて、星武祭の成績も上昇し始め、強豪校へとの上がった。この学園にはいくつかのグループが存在していた。

研究クラスと実践クラスの2つに分けられているが、徹底的な成果主義な校風の為、発言権は研究クラスが圧倒的に強い。その中でも獅子派、彫刻派、黒夫人派、思想派、超人派

この5つが代表的なグループであり、得意分野も異なっている。

中でも最大派閥であり、煌式武装作成においては右に出るものはないと言われている獅子派と自律式擬形体作成のスペシャリストである彫刻派の筆頭、カミラ・パレートとエルネスタ・キューネはとある記事を見ていた。

比企谷八幡の記事であった。

エルネスタ「うつひやあゝ!! 凄いね彼っ!! まさかあの【万有天羅】に勝つなんてねゝ!!」

カミラ「何だ、お前も知っていたのか？」

エルネスタ「そりや知ってるよゝ! 彼には興味があるからねゝ♪ それに、カミラも彼の式神? だったかな? その子の為の武器を作ってるんでしょ?」

カミラ「ああ。しかし未だに完成の目処が立っていなくてな。あの小さな腕の何処にあんなに大量の武器、そして高火力な武器が搭載してあるのか、不思議でならない。」

エルネスタ「カミラでさえもお手上げ状態なのかゝ! ねねっ! 私にもその設計図見せてよ! その子の自律式擬形体なら作れそうだから!」

カミラ「もらったのは腕の設計図だけだ。全体図はもらってない。それに、あんな人間的な自律式擬形体がいてたまるか。」

エルネスタ「なあゝんだ。腕だけなら興味ないや。」

2人は八幡に対しての興味は、少なからず多からずといったところだろう。それよりも研究の方が優先なのだろう。

エルネスタ「でさカミラゝ! どのくらい完成してるの? 一応聞けるけど、もう1年半経ってるよゝ?」

カミラ「分かっている。その事なんだが、皆シオンくんの義手の開発にのめり込み過ぎていてな……他の開発に手付かずなんだ。私がいつも聞こえてくる言葉といえば、『違う、こうじゃない。』とか『もつと威力をつ!』こんなのばかりだ。私はもつと実用的で汎用性のある武器を作りたいのだから。」

エルネスタ「付け替え可能にすればいいじゃん。」

カミラ「お前、それを実現させたらどれだけの量の義手を彼に持たせる気だ? あんな子供に大量の義手を持たせてやることは出来ん。」

エルネスタ「まっ、そうだよねゝ。」

カミラ「それよりも、今年はどうするのだ？ 気合いを入れて3体目の自律式擬形体を作っていたようだが？」

エルネスタ「やめるっ!! だって私の作った自律式擬形体が壊される所なんてもう見たくないもん!! 《鳳凰星武祭》のアレ見たでしょ!! リムシイには風穴、アルデイには肩から腹にかけての胴体部分が真つ二つだよ!! 私からしてみればトラウマものだよ!! そんな相手に私の可愛い自律式擬形体を送り出すなんて無理だよ!!」

カミラ「……まあ当然の反応だな。」

筆頭コンビも今回は辞退するようだった。《鳳凰星武祭》でアレを味わってしまったえば、出させる気もなくなるものであろう。

「カミラさん、来てください! 私の作成した義手なんですが………」

カミラ「分かった、すぐ見に行こう。少し待っていてくれ。」

「はいっ!」

そして研究していた物が完成した女子生徒は行ってしまった。

エルネスタ「カミラも苦勞してるね。」

カミラ「今に始まった事じゃないさ。少し行ってくる。」

エルネスタ「いつてらく!!」

## 反応 レヴオルフ黒学院

—————

六花南西部、六角形に象られた水上都市アスタリスク。その南西に位置する学園は《レヴオルフ黒学院》である。

六花内の学園の中では一番の不良校としても有名であり、普段から素行が悪く、道端で喧嘩や決闘は当たり前、さらには自ら組織を率いている生徒や、マフィアに所属している生徒が殆ど。中には何処にも所属しない変わり者（世間ではまとも）も存在している。極めて女子の数も少なく、在籍している女子生徒は指で数えられるほどしかない。

そんなレヴオルフ黒学院だが、最近では学園外で悪さをする生徒が激減している。その理由は、新しく生徒会長になった彼女のおかげである。

オーフェリア・ランドルーフエン。最強の魔女とも呼ばれていて、その能力は《毒》である事から【孤毒の魔女】の2つ名がついている。そんな彼女は六花の街に迷惑をかけている生徒の情報を耳にしたら、すぐに生徒会を向かわせて事態の收拾をし、悪さをした生徒を《懲罰教室》に入れるという行動をしている。彼女が生徒会になってからは暴れる生徒も減ったが、悪さをする生徒もいた。その生徒もこの行動に恐れをなして大人しくなってしまうのだ。

今、生徒会ではある1つのニュースにより、現会長がキラキラした目でそれを見続けていた。



ころな「あのおく会長く。そろそろ生徒会の仕事を始めて下さいよく。」

オーフェリア「……………」キラキラ

プリシラ「ダメですね、全く聞こえてないようです。こんな風に文字の羅列を読んでいる会長は初めて見ましたよ。」

イレーネ「あんなの読んで何が楽しいんだ？」

オーフェリア「……………」貴女たちは知らないでしょうけど、八幡が界龍の序列1位になったのよ。」

イレーネ「はあっ!!? 序列1位だあ!!? しかも比企谷がか!!? どういう事

だよ!？」

ころな「で、でも、そうだとしたら相手は……【万有天羅】って事ですよね？」

オーフェリア「……………ええ、そうよ。」

ころな「絶対に自由を妨げてはならない存在に勝負を挑んで勝てるとは思えないのですが……」

オーフェリア「……………何？八幡があんなチビに負けて当然だと言いたいのか？貴女は？」

オーフェリアからは少しだけ怒りのようなものが滲み出ていた。

ころな「い、いいいいえ!!そんな事はありません!!実際には勝ったんですもんね!!」

オーフェリア「……………ええ、そうよ。」

プリシラ「ころなさん！オーフェリアさんの前で比企谷さんをバカにするのは禁止だよ!!」コソコソ

ころな「あ、あんなに怒るとは思わなかったんですよぉく！」コソコソ

コンコンツ

ころな「？はいどうぞ。」

材木座「失礼するのであーる!!」

イレーネ「んだよ、メタボガネじゃねーかよ。」

プリシラ「お姉ちゃん、失礼でしょ！それで材木座さん。どうかされたんですか？生徒会室にまた来るなんて。」

材木座「うむ！今回来たのは会長殿に用があつて来たのだ。」

意外にも材木座は現生徒会とは良好な関係を持っていた。その理由は……………

オーフェリア「……………どう？街の雰囲気や八幡に関しては？」

材木座「特に変わりはないようである。何人か徒党を組んで街を歩く輩はいるが、悪さをするような仕草はないのである！八幡の情報についてはいくつか集めて来たのである!!まあ、実物を見た会長殿にはあまりめぼしい情報ではないと思うのだが。」

オーフェリア「……………それでも構わないわ。」

材木座「それから、例の物である。」

材木座はオーフェリアに紙袋を渡した。

材木座「出来映え次第の報酬で構わないとは向こうに伝えてある故、見合った額で構わないそうだ！」

オーフェリア「……………分かったわ、後で見してみるわね。」

材木座「うむっ！では、失礼するのである!!」

材木座はやかましいくらいの声を上げながら、生徒会室を去って行った。

イレーネ「つたく、あいつが来たら喧しくてたまんねえよ。」

プリシラ「私はもう慣れたけどね。」

ころな「会長、それは一体なんなんですか？」

オーフェリア「……………秘密よ。」

オーフェリアは紙袋を守るように自分の身体へと抱き寄せた。

ころな「い、いえ、別に取る気は無いので。」

プリシラ「そんなに大事な物なのですか？」

オーフェリア「……………ええ。実物の方が断然いいのだけど、写真で加工しただけでも思ったの。」

イレーネ「比企谷のだったりしてな！」

プリシラ「もうお姉ちゃん！会長の事だからこの部屋に似合うお花の写真だよ、きつと!!」

ころな「それ以外に考えられませんよね。会長がそれ以外に興味を持たれるといたら、比企谷さんくらいでしょうし。」

オーフェリア「……………」

レヴオルフの生徒会では、八幡の事は話題に出てもそれほど興味を示すような人は居なかった。否、1人は興味津々なのだが、話す相手がいないだけである。

その夜、

オーフェリア「……………」

オーフェリアは材木座に貰った紙袋の中を開封した。そこには八幡の戦っている姿を題材にして作られたタペストリーや写真などが入っていた。そして黒い石で作られた表札のようなものには「神羅武双」と書かれていた。

オーフェリア「……………良い出来だわ。」

その後日、オーフェリアが払った額はポケットマネーでは多過ぎるほどの額だった。

## 反応 クインヴェール女学園

—————

六花北西部、六角形に象られた水上都市アスタリスク。その北西に位置する学園は《クインヴェール女学園》である。

六学園唯一の女子校であり、入学する条件には戦闘能力、学力の他に《容姿》も含まれているため、クインヴェールに在籍している生徒の容姿レベルはトップクラスを誇っている。中でも生徒会長を務めているシルヴィア・リユーネハイムは「世界の歌姫」と呼ばれる程の絶世の美女であり、その誰もが容姿だけでなく歌声にも魅了されている。

学園総合成績は最下位と数だけ見れば最悪だが、前年度シーズンの《王竜星武祭》ではシルヴィア・リユーネハイムが優勝、今シーズンの《獅鷲星武祭》ではガールズロックバンドチームの《ルサルカ》が準優勝するなど、生徒の戦闘能力が低いわけではない。メディアへの露出も高く、アイドルや歌手などの一面もある。

最近では、シルヴィア・リユーネハイムと界龍第七学院の新序列1位の比企谷八幡の交際発表やアイドル続行についても騒ぎになっていた。クインヴェールでも2人の噂をしない者などおらず、今や名物となっていた。

そんなクインヴェールに1つのニュースによって、学園は大盛り上がりだった。

シルヴィア「えへへ♪これで漸くお揃いの序列1位かあ……………えへへ♪」

ペトラ「シルヴィア、お願いだからここでそんな甘い空気を出さないでもらえるかしら？ 記事を読むのに集中出来ないわ。」

シルヴィア「えええ？ だってすつごく嬉しいんです。八幡くんが漸く序列1位になってくれたんだなあって思うと……………えへへ♪」

ペトラ（ダメだわこの子、完全に頭の中がお花畑ね。それよりも何で理事長室に來たのよ？）

コンコンツ

ペトラ「誰かしら？」

ペトラは端末を開いて外にいる人間を調べた。その人物はチーム・ルサルカの5人組だった。

トウーリア『理事長！入ってもいいですかー？』

ペトラ「何をしに來たかは想像がつくわ。ええ、構わないわ。」

トウーリア『よっしゃ！1番乗りっ!!』

マフレナ『ダ、ダメですよトウーリアさんっ！』

すると扉が勢いよく開いた。トウーリアが開けたのだろう。そしていきなり愚痴をこぼし始めた。

トウーリア「聞いてくださいよ理事長！私もう今朝のニュースのせいで気分最悪ですよー！あの……名前なんだっけ？とりあえずあの界龍の男が序列1位になったせいでマジで最悪なんですよー！」

ペトラ「貴女……彼が嫌いなのか？」

トウーリア「嫌いつてわけじゃないですけど……なんてゆーか、好きになれないタイプなんです！クールぶってるし、無理してイケメンしてるし、いけ好かないし、男のくせに歌上手いしで……はあ……はあ……」

ペトラ「そう。貴女が言いたいことはよく分かったわ。でもね、後ろをよく見てみなさい。恐らくだけど、あなたが今一番見たくない人物がいるわよ。」

トウーリア「ま、まさかあの男が……!!? ああー……!!!!」

トウーリアがシルヴィアの存在に気付くと、その場で絶叫していた。それもそうである。目の前に六花最強の彼女（嫁？）がいるのだから。

シルヴィア「ふうーん、そっかそっかあ……私の彼氏（夫？）の八幡くんが好きになれないタイプでクールぶってて無理してイケメンをしていていけ好かなくて男のくせに歌が上手いから愚痴を言いに来たんだね？」

トウーリア「シ……シ……シル……ヴィア？」

シルヴィア「うん、君たち生徒の長である生徒会長のシルヴィア・リユーネハイムだよ♪さて、他学園の生徒を、しかも私の彼氏（夫？）をバカにするような子にはお仕置きが必要かな？この前の事があったのにまだ懲りてないみたいだね？うん、分かったよ。この前よりもさらにキツくしてあげるねっ♪」



シルヴィアはトゥーリアの腕をしつかりと掴むととんでもない腕力で握り締めた。

トゥーリア「や、やめてー!!謝るから!!謝るから許してー!!あつ、助けて!!助けて皆!!」

ミルシェ「ゴメン……流石に無理。」

モニカ「今のシルヴィアに手を出す程、身の程知らずではないわね。」

パイヴィ「自業自得。」

マフレナ「え、ええつと……頑張つて下さい!」

シルヴィア「じゃつ、行こっか♪」

トゥーリア「薄情者ゝ!!」

バタンツ

ペトラ「はあ……あの子も学習が下手ねえ……八幡くんをバカにする癖が抜けてくれれば楽になるのに。」

ミルシェ「でも理事長、シルヴィアの比企谷くんに対しての愛が深すぎたりしません?」

ペトラ「私も思っているのだけど、あの子はもう『八幡くん依存症』と『八幡くん深愛症候群』を2年前から発症してるからもう手遅れよ。」

4人(何その病気!?!しかも2年前!?)

――30分後――

ガチャツ

シルヴィア「ふう……良い仕事をして来たよ。」

ペトラ「やり過ぎてないわよね?」

シルヴィア「私そこまで意地悪じゃないじゃないですよ！今回も『模擬戦30分コース』にしてあげたんですから軽い方ですっ！」

5人（軽いほうなんだ………）

マフレナ「そ、それで……トウーリアさんは？」

シルヴィア「え？疲れてたからそのまま寝かせておいたよ。まだ続けても良かったんだけど、無理そうだったからさ、やめてあげたの。」

この時、ルサールカ全員はこう思った。

5人（シルヴィアの前では絶対に比企谷八幡の暴言や愚痴は言わないっ!!）っと。

## 反応 星導館学園

――――

六花北部、六角形に象られた水上都市アスタリスク。その北に位置する学園は《星導館学園》である。

他の学園に比べて突出した部分がない平凡な学園だが、伝統的に他学園と比べて比較的《魔女》と《魔術師》が多い。生徒の自主性に重視しているため、校則は緩やかである。他学園と比べて優れている面は《魔女》と《魔術師》の多さだけではなく、保有する《純星煌式武装》は六学園の中でも1番の多さである。

二人一組で行われる星武祭、《鳳凰星武祭》が得意であり、何度も上位へと食い込んでいる。過去はシーズン順位の上位常連校だったのだが、近年はその成績が芳しくない。生徒の実力が低いわけではないが、突出する能力を持っている生徒が少ないという理由もある。

尚、学園祭は日本の文化を星導館が踏襲して行っていた行事なのだが、他学園も利益になると踏んだのか、真似をするようになったとか。

そんな平和な日々を送っていた星導館に一面大見出しの特集記事が流れていた。

綾斗「あの人の事だからいつかは挑戦するとは思っていたけど、まさか初めて戦って勝っちゃうなんて……とても信じられないよ。」

ユリス「ああ……実際に戦ったことはないが、お前でも敵わないと思っただけなのだろう？」

綾斗「敵わないというか、敵うはずがないって思ったよ。あの人が、会うたびに強くなってる気がするんだ。それも徐々にじゃなくて大々的に。」

綺凜「綾斗先輩の言ってる事は当たってます。比企谷さんの剣術もそうですが、身のこなしが《鳳凰星武祭》と《獅鷲星武祭》と比べたら、格段に良くなってるんです。一体どうやってたらあんな風に……」紗夜「接近戦では間違いなく最強。綾斗でも勝てないって言うのなら、私では到底無理。」

クロードディア「ええ、私も勝てるなんて微塵も思えません。あれ程の実力差を見せつけられれば誰もがそう思いますよ。」

5人の八幡に対する評価は上々だった。実際に戦っているからこそその評価であろう。身を以て体験している3人からしてみれば、当然とも言えるべきなのであろう。

クロードディア「ですが、【万有天羅】を倒してしまう程とは……彼には驚かされてばかりです。」

綾斗「俺も《天霧辰明流》に比企谷さんの技術をアレンジしてみてるけど、なかなか難しいよ。」

綺凜「綾斗先輩、それは比企谷さんの歩法に原因があります。比企谷さんは剣術の歩法を拳法の歩法にしていると言っていました。確かに比企谷さんが使っている拳法は詠春拳って名前だったはずですよ。」

クロードディア「それなら調べてありますよ。詠春拳、女性が創設の武術で腕と短く歩幅を狭く使う事、短橋狭馬で有名な武術ですね。」

綺凜「その歩法を使っているので、綾斗先輩の使っている《天霧辰明流》は大胆な動きなので、混ぜて使うのは難しいと思います。」

綾斗「自分でも思っただけ、やっぱりそっかあ……でも、綺凜ちゃんの《刀藤流》は合うみたいだね。」

紗夜「私も近くで歩法の練習を見たけど、かなりスムーズに出来ていた。《連鶴<sup>れんづる</sup>》との組み合わせは抜群。」

ユリス「少なからず、我々も【夢幻月影】の影響を受けているというわけか……」

クロードディア「ユリス、比企谷さんの2つ名を間違っていますよ？

【神羅武双】ですからね？」

ユリス「私ならこんな2つ名、返上しているな。恥ずかし過ぎて名乗る気にもなれん。」

クロードディア「貴方らしいですね。そういえば皆さんは《王竜星武祭》はどうするおつもりなのですか？」

クロードディアから突然の言葉だったが、全員驚いた様子ではなかった。

ユリス「お前性格が悪いぞ。出場するつもりはないが、あいつがいる時点で辞退するに決まっている。私も少なからず調べているが、あいつが序列1位になった瞬間、《王竜星武祭》を辞退する奴らが次々と現れたのだぞ。今では【神羅武双】と【戦律の魔女】しか注目出来る奴はいない。」

紗夜「今いるのは？」

ユリス「……30人を満たしていない。もはやこの2人を除いての20人は勇者といってもいいな。六花最強の男と魔女に挑むのだからな。」

綾斗「でもまた辞退する人は増えそうだね。誰も比企谷さんとは戦いたくないだろうからね。」

綺凜「界龍でも出場する方はいらっしやらないみたいです。比企谷さんに《三冠制覇》を達成させるためでしょうか？」

クローディア「いえ、界龍はそんな律儀な方達ではありませんよ。単に実力差を悟っているからだと思います。タッグ戦、チーム戦ならまだチャンスはあったでしょう。ですが今回は完全な個人戦、界龍の中には1対1で比企谷さんに勝てると思い込んでいる人は誰1人としていないでしょう。」

星導館学園からの評価で比企谷八幡は、畏敬の念はされど、憧れの念をも抱かせる程だった。

## 反応 界龍第七学院

――――

六花南東部、六角形に象られた水上都市アスタリスク。その南東に位置する学園は《界龍第七学院》である。

六学園の中で最大の規模を誇る学院であり、初等部から大学部まであるが、年齢を度外視して才能ある者は受け入れるようにしている。官僚主義と放任主義が混ざり合った東洋的な雰囲気が高く、生徒も中国系を中心としたアジア系の出身が多い。学生の殆どが鍛錬を目的としているため、星武祭優勝は視野に入れていない。星武祭総合順位では創設以来唯一下位グループに転落したことのない安定した成績を残している。

また、学内では様々な武術、流派が存在しており、常に自身の技の研究やアレンジなどにも熱を入れている。最近では陰陽術も取り入れており、魔法の力を持たない《拳士》にとっては魔法のような力が使える唯一の手段である。数年前までは武術の木派と星仙術の水派の対立が激しかったのだが、近年では互いに術を教えあうなどの光景も珍しくはない。

そして界龍が一番変わった所。それは圧倒的な戦闘力だ。3年前に転校して来た日本人生徒、比企谷八幡により、この学院は大きく変わった。これまで3代目【万有天羅】の弟子が在名祭祀書を独占していたのだが、彼が序列2位になってからの指導を受けた者、手解きを受けた者の殆どが序列入りをしていた。今では4と5割が新たに序列入りをしている。

そんな比企谷八幡は最近、4代目【万有天羅】の名を継承し、新たに【神羅武双】の2つ名を貰った。だが、変わったのは序列や2つ名だけでなく、周囲の環境もだった。

――――

八幡 side

「宗師、おはようございます!!」

「「おはようございます!!」」

八幡「ああ……おはよう。」

皆さんおはようございます、比企谷八幡です。さて、今の状況を整理してみよう。まずは……呼び方が変わってる。うん、それは分かってるんだよ。俺だっていきなり変わってたのをこの前初めて聞いて驚いたんだ。けど、俺の周りが変わったのはそれだけじゃない。

それは……

冬香「如何なさいましたか、八幡様？」

俺が4代目になってからというもの、冬香さんが常に俺の側にいるようになってしまった。いや、俺が命令したわけじゃないからね!なんか着いてくるんだよ!俺も最初は断っていたんだが、したら『常にこの学院の統括者を守護するのは当然の役目です。』って言うて



聞かないんだよ。しかも呼び方だって八幡「様」だぞっ!?この前まで「さん」だったのに「様」になっちまったよ!これどうするよ!?

冬香「八幡様?」

八幡「ああ、いえ、なんでもないです。それよりも冬香さん、別に俺につきまとわなくてもいいんですよ?」

冬香「そういうわけには参りません。長たる者、側近は側に置くべきです。師父……いえ、星露さんは虎峰くんを常に従えていましたので、私も八幡様の側に居させてください。」

八幡「いや、俺は別に……」

冬香「それと、敬語とさん付けはお止めください。私の事は冬香と呼び捨てで結構です。言葉遣いも虎峰くんたちと同じような感じで構いません。」

……冬香さんってこんな人だったっけ?なんかアレだな、自分の主人にはとことん尽くすタイプの人だな……いやいやいや!俺主人じゃねーし!!

八幡「年上に敬語は使わないとダメでしょう。」

冬香「そう仰ると思っておりました。八幡様はご存知ないと思われますが、八幡様は大勢の弟子を抱えている身。その中には年上もおります。私が見たところではその人たちには敬語を使っていませんでしたが?」

ちゃんと見てやがる……

冬香「八幡様、私は特別扱いはされたくありません。どうか、私にも虎峰くんたちに接するような扱いを希望します。お願いできないでしょうか?」

陽乃みたいな感じにしろって言いたいのか?いや、確かに頼まれた

のは事実だが、貴女の場合は真面目に聞いてくるから余計に断りにくいんだよ……頼むからさ、普通に接するのはダメなのか？

ダメですね、はい。

八幡「……………分かった、まあ曉彗ともそんな感じだしな。まだ敬語は抜けないかもしれないが、そこは理解してくだ……理解してくれ。」  
冬香「とんでもございません！こちらからお願ひしているのです、八幡様がお気にすることなんて一切ございません！」

あとそれ！その崇めるような喋り方はやめようねっ！俺別に偉いわけじゃないから！

――その夜――

はあ……………疲れた。もう俺の癒しのパラダイスはここしか残っていない。頼むから俺を地獄に突き落とさないでくれよ？これ以上はイヤだからな？

八幡「ただいまあゝ。」

シルヴィア「おかえり八幡くん、随分疲れてるね？何かあったの？」

八幡「いや、ちよつとな。別にする必要もない事を要求されてしまったから疲れたただけだ。」

シルヴィア「それって？」

八幡「敬語とさん付けを止めろってさ。虎峰と会話するときのように接して欲しいって。しかもその人、授業が始まるまでの時間、終わった後の時間、休みの日は四六時中一緒にいるから心が休まらない。」

シルヴィア「それは大変だね……………八幡くんが望んだわけじゃあないんだよな？」

八幡「俺がそんなタイプに見えるか？逆に嫌だ。俺は人を従わせるのなんてゴメンだ。」

シルヴィア「うんうん♪八幡くんらしい答えだねっ♪」

ああ………やっぱシルヴィは違う。俺の望む答えを返してくれる  
というか、嫌な事を追求してこない。なんて良い彼女を持ったんだ。

シルヴィア「今日は早く寝よっか。八幡くん明日も疲れて帰ってく  
ると思うから、なるべく早くしないとね。負担を減らすようにしない  
とね。」

気遣いも出来る………本当によく出来た子だよ！

シルヴィア（何だろう、八幡くんが私に向ける眼差しが凄く熱いよ  
うな………よく見てくれているのは嬉しいけど、もう少しだけ抑えてほ  
しいかな。）

## 反応番外編 星導館学園

――――

星導館学園では、学内の殆どが比企谷八幡の新序列1位に関心を持っていた。中には彼を崇めるような、崇拜するような人もいる。特に多いのは女子生徒だった。世界共通のファンクラブは700万人を超えようとする勢いである。此処、星導館でもファンクラブ会員になっっている人も存在しており、そうでない人も彼に憧れを持つ人が多くいる。

だが、中にはそれを良しとしない人々も少なからずいる。それはクインヴェール女学園序列1位のシルヴィア・リューネハイムと交際している事。熱烈なファン程、彼女と交際するのを良しとしない人々もいる。中には勝負を挑む者もいる。余りにも酷い時はシルヴィアの目の前で比企谷八幡を誹謗中傷する輩もいた程だ。

また、これとは関係無しに、さらにタチの悪い人々もいる。彼の持っている力を全否定している者たちだ。これは僅かだが存在していた。その一部がこの星導館学園の大学部1年に在籍している2人だった。

――とある一室――

雪乃「……………」

由比ヶ浜「何……………これ？」

『界龍に新王者誕生!!比企谷八幡が現序列1位に勝利ッ!!4代目を継承!!新たな2つ名は【神羅武双】!!』

雪乃「何故彼がこんな扱いを……………私たちだって毎日頑張っているはずよ。なのに何故っ！」

由比ヶ浜「ゆきのん……………」

2人は放課後になると、模擬戦場の許可が取れた時に2人で鍛錬を重ねていた。だが取れる時は少ないので、いつもは寮部屋内でイメージトレーニングや技などの研究をしていた。だが2人の努力も虚しく、結果の芽が出る気配が一向になかった。

雪乃「何故よっ?!私たちだって努力はしているのに、何故彼だけ結果が出ているのよ!!」

由比ヶ浜「ゆきのん落ち着いてよ!きつとヒッキーがまた変な手を使っただけだよ!そうでなきゃヒッキーが序列1位になれるはずないんだから!!」

雪乃「……………そうね、その通りね。あの男が序列1位に勝てる根拠なんて無いわ。由比ヶ浜さんの言う通り、卑怯な手を使っただけだよ。どんな手かは分からないけれど、【万有天羅】をも騙すのだから極めて悪質な手に違いないわ。」

由比ヶ浜「そうだよ!シルヴィアさんだって嫌々付き合わされてるんだよ!!ヒッキーに付き合わされてるだけなんだよ!!」

雪乃「……………そのことについて思ったことがあるのだけれど、言ってもいいかしら?」

由比ヶ浜「へ?シルヴィアさんの事?」

雪乃「ええ。確かに彼女は比企谷くんと付き合っているけれど、

嫌々だったとしたらあんな風に笑うかしら？それに、私が街中で歩いている時見たのだけど、比企谷くんとリューネハイムさんが楽しそうにしながら腕を組んで歩いていたわ。私には彼女のあの顔が嘘をついているようにはとても見えなかったわ。もし嫌々付き合わされているのだとしたら、あの顔は何なの？」

由比ヶ浜「きつとヒツキーに洗脳されていたんだよ。でなきや楽しい顔なんて出来ないもん！」

雪乃（本当に？確かに比企谷くんは最低な男だわ。それはこの身で受けた私たちが一番よく知ってる。でも、私たちの知っている彼はそんな事をするような人じゃなかったし、するようにも思えない。それに、界龍の人間がそんな事をするようにはとても思えないわ。）

由比ヶ浜「ゆきのんだって知ってるでしょ！ヒツキーが私たちに何をしたのか！それを考えれば彼女が欲しいからって理由で相手を洗脳する事くらいなら、ヒツキーにだって思いつくよ！」

雪乃「だとしても、相手は『戦律の魔女』とまで呼ばれているクインヴェールの序列1位よ？そんな人を相手にそれができるかしら？」

由比ヶ浜「そ、それは……………」

雪乃「するにしてもリューネハイムさんと同等、またはそれ以上の實力を持った人でないと無理よ。比企谷くんがその實力を持っているとは考えていけないけれど、洗脳は暗示も無しに出来るような事ではないわ。」

由比ヶ浜「…………ゆきのん、まさかとは思うけど、ヒツキーの味方をしようとしてるの？」

雪乃「ち、違うわ由比ヶ浜さん！少し謎に思っただけよ！他意はないわ！」

由比ヶ浜「…………ならいいんだけど。じゃあもうこの話は終わりにしてさ、《王竜星武祭》に向けて技の研究しようよ！」

雪乃「え、ええ、そうね。そうしましょう。」

雪乃（別に彼を味方したいってわけではないのだけれど、よく考えると謎な部分が多過ぎるわ。本当に彼が卑怯な手を使つてあの地位までのし上がったのかも疑問に思えるわ。でも、私のすることに変わりはないわ。彼が私たちに謝ってもらうまでは。）

由比ヶ浜（なんかゆきのんが怪しい感じだったけど、頭の良いゆきのんだから警戒してただけだよ！それにしてもヒツキーマジサイテーだしっ！私の方が先にヒツキーを好きになったのに、何でシルヴィアさんと付き合つてんのさ!!《王竜星武祭》で優勝したら、私と付き合ってもらうんだから!!）

由比ヶ浜結衣は完全に八幡の事を敵視しているようだった。それも状況的にかなり複雑で、敵視していながらも恋心を持つという、常人では考えられないような思想を持っているようだ。

雪ノ下雪乃は考えこそまともだった。考察する能力も向上しているのか、比企谷八幡が本当に悪であるかどうかなどの考えもつけるようになっていたが、由比ヶ浜結衣を傷つけないようにするためかは分からないが、自身の考えは告げていなかった。

2人はそれぞれ違う考え方を持ちつつも、次に行われる星武祭に向けて準備を進めていた。

## 第10章 王竜星武祭 対戦カード

八幡 side

星露を倒してから半年程経ち、今の季節は冬。つまり、シーズン最後の星武祭が開催される時期になった。例年通りで行けば、参加者はかなりの人数になっているはずだ。特に出場者の中には六花最強の魔女2人の【戦律の魔女】や【孤毒の魔女】が参加してもおかしくない。

だが、シーズン最後の星武祭《王竜星武祭》<sup>リンドヴルス</sup>は過去に比べても異常と言っているくらいに出場者の数が少ない。《獅鷲星武祭》<sup>グリップス</sup>も例年に比べると少し少なかった程度だが、個人戦である《王竜星武祭》こんなに少ないとはな……

なんかあったのか？

シルヴィア「八幡くん、何考えてるか大体予想できるからハッキリ言うよ。八幡くんのせいです！」

八幡「え？俺のせい？なんでそうなる？」

シルヴィア「当たり前でしょ！《王竜星武祭》の始まる半年前くらいにいきなり序列1位を取って【万有天羅】まで継承するんだから！ただでさえ勝てる見込みがない相手である八幡くんなのに、もっと勝てなくなるような要素増やしちゃってどうするのさ!？」

八幡「い、いやだつて最後の星武祭だし……それに最後は序列1位で出た方がカッコつくだろう？」

シルヴィア「確かにそうだけども……私も個人的には嬉しいよ？相手が少ない方が決勝に上がれる確率も増えるし、何より八幡くんとお揃いの序列だから。でもあのタイミングで序列を上げるって……こ



れからって時に凄い事するよ、本当に。」

これは貶されてるんだろうな。多分だが、照れるような仕草したら『褒めてないっ!!』って言うんだろうな。やってみるか。

八幡「いやあくそれほどでも。」

シルヴィア「褒めてないっ!!」

やっぱりだ。

シルヴィア「でも本当に少な過ぎるよ。界龍に3、クインヴェールに2、星導館に2、合計7人だよ?こんな《王竜星武祭》聞いたことないよ! たった7人って!!」

八幡「ああ、ヤバイ数字だな。3桁どころか2桁も行っていないなんてな……赤字もいいところだ。運営は何やってんだか、ちゃんと広告したのかよ?」

シルヴィア「八幡くん、それ分かって言ってるでしょ?こんなに人が少ないのは9割が君のせいなんだからね!」

八幡「なんで俺だけ……」

シルヴィア「キ・ミ・が、強過ぎるからでしょ!!ただでさえ私だって君に勝てる自信ないんだから!!」

それだけの理由で参加しないのか?俺だったら強くなる鍵が眠ってるかもしれないから喜んで参加するけどな。まあ人それぞれの考え方だが。

八幡「参加する2人もそんな事言ってたな。できれば初戦には当たりたくないって。」

シルヴィア「今回の星武祭では誰もがそう思ってると思うよ。私だって八幡くんとは当たりたくないもん。決勝までは。」

ああ〜早くトーナメントの選手表出ないかなあ〜。なんか待ちくたびれたぞ。

シルヴィア「もう、八幡くんってば！なんで来シーズンに仕上がったのさ！そうしたら私が2連覇できたかもしれないのにつ！」

八幡「今更そんなこと言うか？」

シルヴィア「八幡くんだって少なからずそう思ってるでしょ？」

八幡「俺は別に思っていないが？確かに俺なら来シーズン出たとしても全部出られるけどよ……そこまで待つのもな。」

そしたら学院生活の半分以上を鍛錬と教えて費やさなきゃいけないとなっちゃうからな。すつげえつまんなくなるぞ。

p i p i p i … p i p i p i …

おっ！来たかつ！

――運営委員会より――

この度の《王竜星武祭》の出場選手の対戦表が決定致しました。人数も少なかった事、奇数だった事もあるので、このような形式にさせて頂きました。

第1ブロック

シルヴィア・リユ―ネハイムVS由比ヶ浜結衣

第2ブロック

梅小路冬香VS武曉彗

第3ブロック

比企谷八幡VS雪ノ下雪乃  
第4ブロック（シード権）  
ネイトネフェル

以上の通りになりました。

尚、第4ブロックに關しましては1回戦を飛ばして2回戦からスタートするものとします。出場者の皆様の御武運を祈ります。

シルヴィア「私勝ったとしても界龍のどっちかと戦うのかあ……しかも八幡くんに手ほどきを受けている2人と相手しなくちやいけいないなんて……」

八幡「そんなに教えてはいないけどな。あの2人は元から強い。暁彗は武術、星仙術共にトップクラス。冬香は式神使いだしな。もし1体の式神に手こずっていたら、その間に何体も作ってくる。かなり厄介だぞ。」

シルヴィア「それで？八幡くんは両方に負けたの？」

八幡「…………いや、模擬戦した事「負けたの？」…………勝ちました。」  
シルヴィア「ほら〜！やっぱり勝ってるんじゃない！【覇軍聖君】は知ってるけど、まさか【神呪の魔女】にも勝ってたなんて〜！八幡くんの裏切り者！チート！」

俺、なんでここまで言われなきやいけないんだ？

## ※心の落ち着かせ方？

八幡 side

昨日はシルヴィアに言われたい放題だったなあ……俺が【万有天羅】になっただけで参加者がこんなに減るか？たかが1人序列が上がったくらいで？【万有天羅】の威厳強すぎねえか？

でも最後の星武祭だから序列は1位でいきたいよな。最後までいいはカッコをつけたい。

虎峰「八幡……明日、ですね。」

八幡「そうだなあ……明日だねえ……」

虎峰「なのに何で貴方は呑気にお茶なんて飲んでるんですかつ!!？」

八幡「いやいや、ただお茶を飲んでるってわけじゃないぞ？心と精神を落ち着かせるためにだな……」

セシリー「とりあえず心を落ち着かせるためにやっている事でいいんだよねー？」

八幡「そういう事だ。別に鍛錬をしたくないとか、疲れたくないとかそんな理由じゃない。鍛錬した方が結果が良くなる方向に繋がるわけじゃないしな。」

虎峰「それはそうですが……」

冬香「八幡様、此方においでだったのですね。」

ああ……来てしまったよ。

八幡「冬香か……トーナメントでは暁彗とだったな。同じ学院同士だからと行って手加減するなよ？」

冬香「心得ております。それに、暁彗は手加減して勝てるような容易い相手ではございません。小苑様の弟子にして八幡様の兄弟弟子に当たりますから、油断も隙も与えないつもりです。」

……：「ういや俺と暁彗は元々は小苑さんに武術と星仙術学んだんだっただな。そっから暁彗は星露に鞍替えした。元はといえ兄弟弟子なんだな。」

八幡「分かっているならいい。」

冬香「所で八幡様は此方で何を？」

セシリー「精神統一中なんですってー。お茶飲んでるだけで心と精神を落ち着かせるなんて聞いたことないですけどねー。」

八幡「そういう事言うな。これでもかなり効果覲面なんだぞ。現に俺は落ち着いてるし、取り乱してもいないだろ？」

虎峰「八幡が取り乱した所なんて、僕はほとんど見たことがないのですか？」

セシリー「確かにねー。」

冬香「言われてみればそうですね……八幡様が錯乱した状態は見た事がございません。」

え、何？そんなに認めたくないの？

冬香「でもお茶を飲むと心が落ち着くというのは分かりますね。西洋風に言えばティータイムと言うべきでしょうね。こちらでは使わない言葉ですが。」

八幡「こつちでは確かに使わないな……：「ういや俺と暁彗は何処だ？」

冬香「師父の所で模擬戦をやっています。対戦相手の情報を知るためには現場に行って状況を確認するべきなのでしょうが、それではフェアではありませんので。」

真理だな。

虎峰「それで八幡、シ、シルヴィアさんの調子はどうなのですか？」

八幡「ん？シルヴィ？至って普通だが？」

虎峰「コンデイションです!!」

八幡「だから普通だって。俺にはそれしか答えらんねえよ。シルヴィの全部を知ってるわけじゃねえんだからよ。」

虎峰「そ、そうですか……」

八幡「気になるなら直接聞けばいいだろ。」

虎峰「れ、連絡先を知らなくて……」

八幡「え……嘘だろ。あんなに機会あったのに？連絡先もらってないの？お前何やってたんだよ？バカ、アホ、虎峰。」

虎峰「す、すみま……って、虎峰は悪口ではありません!!直接会うとそれどころではなくなってしまうのです！八幡にだって分かるでしょう!？」

八幡「いや、俺有名人のファンになったことないから分からん。」

うん、本当に分からん。

八幡「だってさ、想像してみろよ。俺がピンクの法被着て両手にペンライト、額には誰でもいいからその子の名前が入った鉢巻をしながら、掛け声をしてる俺。どう思う？」

3人「……」

虎峰「八幡……すみません、僕が悪かったです。」

セシリー「私も流石にそんな八幡とは関わり合いたくないかなー。」

冬香「私はあまり気に致しませんが、確かに少し気が引けますね。」

八幡「だろ？だから分からん。」

虎峰「ええ、僕は改めて思いました。今の八幡が一番良いと。」

セシリー「そうだねー。今の八幡が最高だねー!」

冬香「ええ、素敵な統括者ですね。」

うーん……嬉しくないわけじゃないが、何だろーなこの感じ。よく分からん。

今思ったんだが、こんなに普通に喋れてんだから、結果俺、心落ち着けてんじゃない。

## 王竜星武祭 開幕

八幡 side

八幡「……………やっぱさ、ねn「いけませんよ、八幡様？」……………最後まで言わせてくれよ。」

冬香「陽乃様から事前に言われていたのです。八幡様は開会式直前になると、後ろに控えようとする」と。

八幡「その何処に問題があるんだ？」

冬香「大アリでございます。学園の長たる者が、何故にして一番後ろにお下がりになりますか。」

暁彗「……………比企谷八幡。これが最後の星武祭なのだ。最後も堂々と先頭を歩くべきだ。」

八幡「そう言われると弱いな……………ていうか思ったんだが、何で今シーズンの星武祭は全部俺が先頭なんだ？」

冬香「推測するからには、『鳳凰星武祭』では単に序列が1番上だったからでしょう。後は参加した皆様の支持ではないでしょうか？『獅鷲星武祭』も単純にチームリーダーだからでしょう。最後に『王竜星武祭』ですが、これも簡単です。八幡様が『万有天羅』だからです。」

そんな理由で先頭になるのかよ。だったら今すぐこんな称号返上してやるよ。

冬香「因みにですが、もし『万有天羅』を返上したとしても、序列1位というのは残りますので、自動的に八幡様が先頭なのは変わりませんね。」

逃げ道なしかよっ!!

八幡「はあ……………分かったよ。どうせ逃げ道なんて最初から潰してい



たんだろ？自由を妨げる事を許されないって言われておきながら、俺メチャメチャ束縛されてんじやねえか。」

冬香「ふふふっ、もう少しの辛抱ですよ。」

暁慧「……………」

まあ、開会式なんてすぐ終わるからいいか。

八幡side out

シルヴィアside

いよいよかあ……負けるつもりはないけど、1回戦を勝った後は界龍の強敵が待ってる。集中力を乱さないようにしないと。

ネイトネフェル「シルヴィア、1ついいかしら？」

シルヴィア「ん？何？」

ネイトネフェル「比企谷八幡、彼の弱点を教えてほしいわ。私の初戦の相手なの……私も彼の試合は全て見たのだけど、弱点らしきものは見つからなかったわ。何かないかしら？」

シルヴィア「実を言うと私も知らないんだ。直接戦ったこともないから。八幡くんの一撃は強いし重い。1つの動きも洗練されていて無駄がなくて鋭くて速い。すごいところしか知らないよ。」

ネイトネフェル「貴女、星武祭が近かったのにも関わらず、彼の弱点を探ろうとしなかったの？」

シルヴィア「しないよ。確かにそれも戦略の内だけど、私はそんな事しない。仮にやって弱点を得たとしても、貴女には教えないよ。」

ネイトネフェル「……………何故かしら？」

シルヴィア「簡単だよ、勝てないから。」

ネイトネフェル「っ！言ってくれるわね。」

別にこれは貶しているわけじゃない。バカにしているわけでもない。私の心がそう言っている。

シルヴィア「貴女の力は確かに強いよ。体術なら私を超えてる。でも、八幡くんはその更に上をいつてるよ。一応言っておくけど、八幡くんはオールラウンダー。全ての距離適性を持つてるから、遠距離で戦ってもすぐに詰められたり、遠距離攻撃をしてくるからね。もし勝つつもりでいるのなら、戦い方に工夫を3倍くらい重ね掛けしないと彼に傷すらつけられないから。」

ネイトネフェル「……彼を鼻屑しすぎじゃないかしら？いくら自分の彼氏だからって。」

シルヴィア「そんな考えは持てないよ。今からこのステージは戦場になるんだよ。そんな場所にそんな感情はいらぬ。戦わないうちはいいかもしれないけど、戦場が変わったら、そんな感情は邪魔になるだけだよ。」

ネイトネフェル「……」

シルヴィア「私からも1つ聞くね。君はこの大会でも普段と同じように踊るのかな？」

ネイトネフェル「……そのつもりよ。それが何なの？」

シルヴィア「ううん、別に何でも。」

これで分かった、彼女は八幡くんには絶対に勝てない。戦場をステージと同一視しているようじゃ、優勝なんて夢のまた夢だよ？

シルヴィア side out

—————

————シリウスドーム————

シーズン最後を締めくくる星武祭だけあつて会場には多くの観客がいた。だが観客の数に反比例して、選手の数は7人と圧倒的に少ない。それでも参加しなくてはならない生徒会長というのは不憫だと思う。

しかも出場校が3学園だけともなると、注目されてくるのは限られてくる。

八幡「そういえば、星武祭の運営って誰が仕切ってるんだ？この前の騒動で元運営委員長は捕まっちゃったし。」

冬香「そういえば、まだ発表がなかったですね。」

コール「皆様、ご機嫌よう。今回、臨時として星武祭運営委員長を務めさせて頂いている、コール・メスメルです。」

八幡（あの人はガラードワースの母体幹部の……確か、今ガラードワースに所属している序列7位の父親だったな。）

コール「今回の星武祭は異例中の異例。その理由は出場選手が圧倒的に少ない事にあります。理由は皆様もご存知だと思われますので、ここは省きましょう。」

コール「それに伴い、今回は初戦からトーナメント方式で試合を進めていきたいと思っております。1回戦を除いた選手もおりますが、人数の関係上仕方がないと思っております。ご理解をよろしく願います。」

コール「今シーズン最後の星武祭なので、より白熱した戦いが見られる事を期待しております。選手の皆様は日々の研鑽を無駄にせず、

全てを出し切れるよう戦いに臨んでほしい。」

そしてコールは一礼をした。

観客席からは拍手と歓声上がり、星武祭の始まりを意味するかのようだった。

## 愚行を改めた賢者

シルヴィア side

ふう〜、堅苦しい開会式も終わったよう。さて、八幡くんは何処かなあ？

ネイトネフェル「貴女、早速彼氏探しかしら？」

シルヴィア「え？そうだけど？もしかして、何かマズい事でもあるの？」

ネイトネフェル「貴女、戦場ではその気持ちは邪魔になるって言っ  
てなかったかしら？」

シルヴィア「それは戦う時であって戦わないときは別だよ。そしたら  
私と八幡くん、いつになったら一緒になれるのさっ！」

もう、勘違いしないでほしいな！

ネイトネフェル「……なんだか混乱して来たわ。」

シルヴィア「八幡くんはど〜こっかなあ〜♪」

シルヴィア「……………」

ネイトネフェル「ちよつと？彼を見つけたのになんで黙ってるのよ？」

あの子……八幡くんと同じ高校にいた子だよね？しかもなんか陽乃さんに似てるような……………」

シルヴィア side out

八幡 side

八幡「……………」

暁彗「……………」

冬香「……………」

雪乃「……………」

何だこいつ？なんで俺の前にいやがる？また文句つけに来たのか？

雪乃「星導館学園大学部1年、雪ノ下雪乃です。今回はご挨拶に来ました。」

八幡「挨拶だと？」

雪乃「はい。それ以外どうしようとは考えてはおりません。単なる挨拶です。」

……………八咫の眼。

雪乃（今までは頭に血が上りすぎて考えが至らなかつたけれど、もつとよく考えてみましょう。彼が卑怯な手を使っているのか……それからでも遅くはないわ。）

こいつは何呑気なことを考えているんだ？ 関わるなど言つたはずなのによ。

まあいい、他人としてなら大目に見てやるか。

八幡「……界龍第七学院大学部1年、比企谷八幡だ。一応紹介しておく、三席の武曉彗と四席の梅小路冬香だ。」

2人は礼だけした。

八幡「それで、挨拶とは？」

雪乃「はい、初戦の相手が比企谷さんですので。単にそれだけなのです。」

八幡「……少し顔を貸せ、話したい事がある。2人は試合があるからそれぞれの場所に行っても構わない。」

曉彗「……………御意。」

冬香「承知致しました、八幡様。」

八幡「さて、普通に応接室にでも行くか。」

——応接室——

2人は応接室に入ると、対面するソファに腰を下ろした。

八幡「さて、何から話したものか……取り敢えずさっきの喋り方はやめていい。」

雪乃「ええ、分かったわ。」

八幡「そんで、どういうつもりだ？ 今更になってただ挨拶しに来ただと？」

雪乃「……………知っているとは思うけれど、今までの私は貴方に対する嫌悪感や憎悪で動いていたわ。でも貴方が序列1位になった時に

思ったのよ、【万有天羅】は卑怯な手を使って勝てる相手なのかって。」

八幡「……………」

雪乃「《鳳凰星武祭》や学園祭、《獅鷲星武祭》で貴方の動きを見れるところは全て見たわ。でも、卑怯な手を使ってそうなどころなんて見当たらなかった。」

八幡「そりやそうだ。俺は何もしてないからな。自分の実力で戦ってる。元ガロードワースにいた金髪の恥晒し野郎とは違う。」

雪乃「……………そうね。」

八幡「大体予想は出来るが、由比ヶ浜はどうした？」

雪乃「試合があるからそっちに行ったわ。私も最近気づいたのだけど、彼女はなんだか嫌な感じがするの。貴方の事を恨んでいるのに、心の中では全く逆のことを考えているような気がして。」

八幡「……………お前はどうしたいんだよ？それはお前らの問題だから、俺が首を突っ込むわけにはいかん。」

雪乃「……………出来れば救いたいわ。でも、なんだか無理そうな感じがするの。だから彼女が変わらないようであれば諦めるわ。それに、今の貴方を見て全て分かったわ。」

八幡「？何をだ？」

雪乃「……………間違っていたのは私たちの方だって。最近よく考えた



の。ランドルフエンさんや武さんに言われた言葉を。全くその通りだったわ。あの時から成長していなかったのは、私たちの方だったって。」

雪乃「比企谷くん、今まで本当にごめんなさい。私はずっと自分を正当化していた。周りが見えていなかった。でも漸く見えてくるようになって来た。だから……この場で謝ります。本当にごめんなさい。」

そう言って雪ノ下は深々と頭を下げた。この部屋に入ってからずっと八咫の眼で雪ノ下の心の中を覗いていたが、それ以外のことは考えていなかった。

八幡「……それで、どうします？俺は復縁させる気はありませんが、総武高校にいた雪ノ下雪乃ではなく、星導館学園の雪ノ下雪乃となら、やっていけそうな感じはしますが？」

雪乃「……え？」

陽乃『私はまだかなあ。だって頭を下げたくらいで許せるわけじゃないじゃん。』

雪ノ下母『陽乃に同感です。比企谷さん、優しいというのは美德ではありますが、使い方を間違っではいけません。』

雪乃「母さん……姉さん……」

陽乃『とりあえず自分の過ちに気付けたことは褒めてあげる。頭を下げたこともね。でもそれだけで許してもらええると思ってるの？比企谷くんが許しても私たちは許さないよ？』

雪乃「……承知しているわ。私のして来たことは簡単には償えないもの。許してもらおうだなんて甘い考えも持たないわ。母さんが言った通り、私は星導館を卒業したら雪ノ下から除籍します。彼にも金輪際関わらないこともお約束します。これ以上、皆様に迷惑はかけたくありませんので。」

雪ノ下母『雪乃、その言葉に嘘偽りはありませんね？』

雪乃「はい。」

雪ノ下母『雪ノ下を除籍するというのもですか？』

雪乃「はい。」

雪ノ下母『除籍をするにしても、新しい姓が必要です。貴女は考えているのですか？』

雪乃「今までの自分の愚行を評して『葉山』にしたいと思っています。私にはこれ以上ないくらい似合っていると思います。」

雪ノ下母『…………陽乃、貴女はどう思いますか?』

陽乃『うん、合格。雪乃ちゃんの覚悟が伝わって来た。文句無しかな。』

雪乃『…………え?』

雪ノ下母『雪乃、今日の夕方に1度雪ノ下建設に来なさい。直に会って話したいわ。』

陽乃『絶対だぞ?後私から。今の雪乃ちゃんになら、姉って呼ばれても嫌じゃないよ。じゃね!あつ、《王竜星武祭》頑張つてね♪』

そう言つて通信は切れた。

八幡『…………どうだ?久しぶりに聞いた家族からのあつたけえ言葉は?』

雪乃『この感じ、久しく忘れていたわ。心が洗われるような感じがするわ。』

八幡『奇遇だな、俺も2年前に実家に帰って同じ思いをした。』

雪乃『比企谷くん、今までの事は本当にごめんなさい。貴方を傷つけてばかりだったわ。それに「もういい、終わった事だ。」…………』

八幡『お互いに若かったつて事だろ。20にもなれば自分のやつてきた事の浅はかさも見えてくるつてもんだ。小町もその事に気付いたみたいでな、新年度早々に俺に頭下げに来たよ。』

雪乃『そう…………でも兄妹の関係ではないのでしょうか?』

八幡『流石だな。ああ、兄妹の縁は戻してない。他人としての縁なら取り持つてやった。』

雪乃『そういうところは貴方らしいわね。』

八幡『どうやら根は変わらないらしい。』

これで雪ノ下とは一段落ついたな。

雪乃『私と貴方の関係はどうしたらいいのかしら?』

八幡『普通に友人でいいだろ。知り合い以上仲良し未満つて所だ

な。」

雪乃「ふふつ、目だけでなく口も達者になったのね。貴方はそれでいいの?」

八幡「妥当だと思うが?」

雪乃「私が決められる立場ではないもの。貴方はそれでいいの?」

八幡「ならこれで行こうか。」

雪乃「ありがとう、比企谷くん。」

## 第1ブロックの空論と正論

シルヴィア side

シルヴィア「……じゃあ、その雪ノ下さんとはもう和解したの？」  
八幡『和解……と言っているのかは分かんが、まあ普通の関係にはなったな。』

シルヴィア「そつか。でも良かったよ、私が八幡くんを見つけた時、彼女と2人きりで個室に入るんだもん。」

八幡『俺のパートナーはこの世で1人だけだぞ？そいつをほったらかして他の女なんて作らねえよ。』

ほっ……良かった。

八幡『じゃあシルヴィ、俺は冬香と暁彗の試合を見ないといけないからそっちには行けない。終わったらメールでいいから連絡してくれ。』

シルヴィア「うん、また後でね。」

八幡『ああそれともう1つ。』

シルヴィア「？」

八幡『これはお願いというよりも注意なんだが、由比ヶ浜の言葉は無視しろ。恐らくだが俺の事を罵倒してくると思う。だからその言葉は無視し「悪いけど、もしそれが本当に来たら、私絶対にその子を許さない。……やっぱりか。』

シルヴィア「当たり前だよ。私の彼氏をバカにして黙っていられる程、私の了見はそんなに広くないよ。」

八幡『……そうか、ならいい。思い切りやれ。お前がそう決めたのなら、俺は何も言わない。』

シルヴィア「うん。」

八幡『じゃあまた後でな。』

シルヴィア「うん、頑張ってくるね。」

そして通信が切れた。時間は……あつ、ちょうどいい時間だ！そろそろステージに向かわないとねっ！

由比ヶ浜さん、だったかな？お願いだから私の前で八幡くんをバカにしないでね？

シルヴィア side out

由比ヶ浜 side

由比ヶ浜「初戦はシルヴィアさんとかあ……あんな有名人と戦えるなんて凄い事だよ！私も負けないように頑張らないとっ!!それに、早くシルヴィアさんをセンノウ？から解いてあげないとね！ヒッキーってばサイテーだよ!!3年も騙し続けてるんだもん!!勝って優勝したら、私がヒッキーの彼女になるんだから！シルヴィアさんも解放されるから、これで一件落着だよね！」

もしヒッキーが責められたとしても、彼女の私が庇ってあげれば

ヒツキー私の事もっと好きになるもんねっ!!

由比ヶ浜「あっ!もう時間だ!!よぉくしっ!」

シルヴィアさんを倒せば、騙されている事にも分かるはずだよね!

由比ヶ浜 side out

—————

クリステイ『さあさあ皆様っ!!ようやくこの時間がやって参りましたよ!!男共、目玉に目薬入れたか!?これから目にするのはどっちも粒揃いの美少女が戦う光景だから、しっかりと目ん玉見開いてろよ!!』

護藤『ボ、ボードワンさん……』

クリステイ『冗談だつて。じゃあ真面目モードね!こちらカノープスドームでは第1ブロックの試合が行われます!!皆さんご存知の通り、今回の星武祭出場者は限りなく少ないです。なので先程も言いましたが、目ん玉こじ開けて試合を見て下さいね!!』

護藤(最後、また戻っていたような……)

クリステイ『それでは選手紹介から参りましょう!!まずは西方から!!星導館学園、由比ヶ浜結衣選手!!』

護藤『前は《鳳凰星武祭》に出場して1回戦で敗退していますね……でもこれは転校して間もないので仕方ないと思います。この2年でどれくらい実力をあげたのか、期待が高まりますね。』

クリステイ『さつすが護藤さん!いい解説ですね!なら次も期待しちゃいますよ!お次は東方から!!クインヴェール女学園、シルヴィア・リユーネハイム選手!!』

シルヴィアが姿を現わすと、会場からは割れんばかりの歓声が溢れ

た。

クリスティ『こりやまた凄いね〜！流石は世界の歌姫、人気は絶頂ですね〜!!』

護藤『彼女はその人気だけでなく、実力も六花トップクラスです。その証拠に前シーズンの《王竜星武祭》ではレヴォルフ黒学院の序列1位【孤毒の魔女】を破って優勝しています。今大会でも注目度は高い選手ですね。』

クリスティ『そして2人共、美少女っ!!どうだ男共、これが六花だ〜!!』

護藤『ボ、ボードワンさん!』

観客「「「w w w w w」」」

シルヴィア「君とは確か……星導館の学園祭で1度会ったかな？」

由比ヶ浜「は、はいっ!!今回はよろしく願いします!」

シルヴィア「そんなに堅くならなくていいよ。」

由比ヶ浜「あの……聞いてもいいですか?ヒツキーの事で……」

シルヴィア「?ヒツキーって誰の事?」



由比ヶ浜「つ……比企谷八幡の事です。」

シルヴィア「ああ、そうなんだ。それで、八幡くんがどうしたの？」

由比ヶ浜「どう思ってます？」

シルヴィア「うーん、質問の意図がよく分からないけど、一言で言うなら『愛してる』かな。」

由比ヶ浜（やっぱり……センノウされてるし！私が解くしかない！）

シルヴィア「それで、聞きたいのはそれだけかな？」

由比ヶ浜「シルヴィアさん、ヒツキーに騙されてます！ヒツキーはシルヴィアさんみたいな人が構っていい人間じゃないんです!!」

由比ヶ浜「ヒツキーは暗くてボツチで猫背で目が腐っててキモくてサイテーです!!それに、私とゆきのんを一方的に悪者にした奴なんです!!」

シルヴィア「……それだけ？」

由比ヶ浜「え？」

シルヴィア「八幡くんの悪口はたったそれだけ？私なら今の数十倍八幡くんの褒め言葉を言えるよ？もう一度言うけど、八幡くんの悪口はたったそれだけ？」

シルヴィアは明らかにキレていた。トゥーリアが八幡の悪口を言った時に放ったオーラとは比べ物にならない程だった。

シルヴィア「君は今の八幡くンを知らないからそんなことが言えるんだよ。過去と今、そして未来を過ごして行く過程でその人がずっとそのままではいられるはずがないんだよ。必ず何処かで変化している。もしそのままだったとしたら、その人は成長していないって事。」

由比ヶ浜「そ、それが何ですか？」

シルヴィア「分からない？要するに私が言いたいのは、君が2年前から全くと言っていいほど成長していないって言いたい。身体は

大人になっても頭脳や精神は子供のままだって言ってるの。」

由比ヶ浜「なっ!!?なんでそうなるしっ!!」

シルヴィア「分からないのなら話はここまでだよ。此处は戦う場所、話し合いは終わってからでもできるでしょ?」

由比ヶ浜「やっぱリヒツキーにセンノウされてるし……勝って解放してやるんだから!!」

クリステイ『両者、準備が整ったようです!では参りましょう!!』《王竜星武祭》第1ブロック!!』

『Start of the duel』

クリステイ『バトル・スタートツ!!』

## 第1、第2ブロック終了

――――

試合開始の合図が鳴り響き、由比ヶ浜は片手剣型の煌式武装を展開して、シルヴィアの方へと走った。一方のシルヴィアは自身の持つている銃剣型煌式武装《フォール・クヴァング》を構えるどころか展開すらしておらず、更には構えもとらずただ立っているだけだった。

由比ヶ浜（動かない？だったもう私の勝ちだしっ！）

由比ヶ浜はシルヴィアの目の前まで接近して剣を真上に振り上げてから、シルヴィアの校章目掛けてそのまま振り下ろした。

シルヴィア（確か八幡くんの使っている武術は、攻撃を防いだから一撃を与える攻守一体がスタイルだったよね？後は手足をコンパクトに使うんだよね。じゃあ受け流しつつ、攻撃を試みようかな。）

シルヴィア「ふっ！」

由比ヶ浜「ぐふっ!？」

シルヴィアは両手の甲に星辰力を少量練り上げて由比ヶ浜が振ってきた剣を弾いた。そして空いているもう片方の手の甲で由比ヶ浜の頬に向けて裏拳を食らわせた。由比ヶ浜はそのまま床に倒れた。

由比ヶ浜「くくく!!」

シルヴィア「もう終わりかな? 私まだ何もしてないよ? ちょっと星辰力を練って手の甲で攻撃しただけだよ? ギブアップには早過ぎるんじゃないかな?」

由比ヶ浜「う、ううく!!」

シルヴィア(この子、一体どんな鍛錬してるんだろう? 星脈世代であれば打たれ弱くても、我慢して這い上がることもくらいは出来る。しかも今の一撃なんて3割も出してない。それでこんなに痛がるの? こういう所に自分の甘さ加減って出てくるよね。)

シルヴィア「はあ………それじゃあ八幡くんを倒すのなんて100年どころか100万年早いよ? 私よりも強いんだからね? 八幡くんは。」

由比ヶ浜「っ! くう………」

由比ヶ浜は痛がりながらも身体を起こした。八幡を倒せないという言葉が効いたのだろう。

シルヴィア「どうやらまだ出来そうだね。それじゃ、かかってくるといいよ。自分がいかに愚かな事を口走ったのかを思い知らせてあげる。」

八幡「……シルヴィの奴、キレてるつてのもあるが、完全に遊んでやがるな。由比ヶ浜を蹂躪する気満々じゃねえか。まあ全部由比ヶ浜の口が災いと呼んただけだから自業自得だけどな。さて、こつちもこつちでケリがつきそうだな。やはり相性の問題もあったからか、すぐに決着がつきそうだな。」

実況『試合終了〜!!勝者、武曉彗〜!!!』

八幡「冬香さんは《魔女》だから後方で式神を作る戦法、だから自身は攻撃参加が基本出来ない。出来なくもないが、あれだけの式神だ。使役するのにはかなりの精神力が必要だ。その中で曉彗の相手をしていたんだ、あいつの武術を10分凌いだけでも上々だろう。」  
八幡「さて、後はシルヴィの試合だな。ここにずっといてもアレだし、カノープスドームに向かうか。」

由比ヶ浜「かはっ!!……はあ……はあ……」

シルヴィア「……………」

由比ヶ浜「はあ……はあ……はあ……」

シルヴィア（なんか八幡くんに勝てないって言った途端から、急に火がついちやってるんだよね。なのに攻撃のパターンは一緒、おおきく振りかぶって来るだけ。これって普通に見ると私がいじめるように見えちやったりするのかな？だとしたらもう決着つけたほうがいいかな？）

シルヴィア「ねえ、1つ質問するよ？もし今此処にいるのが八幡くんだったら、君はもつとやる気になるのかな？」

由比ヶ浜「ヒ、ヒッキーがいたら？……………勿論ですよ……………はあ……はあ……1番に、切ってます！」

シルヴィア「……………そっか、じゃあ……………」

もういいかなあ。」メ ウツロ

シルヴィアは質問の返答が来ると1人そう呟いた。次の瞬間、由比ヶ浜は壁まで飛ばされていた。シルヴィアの方を見てみると……蹴りを放ったようだった。

由比ヶ浜は気絶していて、校章も砕かれていた。

クリステイ『由比ヶ浜結衣、意識消失!!勝者、シルヴィア・リユーネハイム!!!おそるべき強さを見せつけましたねー!!』

護藤『彼女は体術にも長けていますから、今回の相手は体術で充分だと判断したんでしょう。次の試合も楽しみですね。』

シルヴィア（はあ………つまらない戦いだっただなあ。やる必要性が全く感じられない、すつごく退屈な試合だったよ。）

## 無意味な嘘と脅嚇

シルヴィア side

全く歯ごたえのない試合が終わって数分後、インタビューも終わって控室に戻った私はシャワーを浴びている。最も、シャワーを浴びる意味なんて無いんだけど、サツパリはしたいからね。それに八幡くんと会う前だから、シャンプーは出来なくても、汗臭さはなくしたいからね。念には念を入れておかなきゃね！

さつき八幡くんに連絡を入れた時には、もう第2ブロックの試合は終わってたみたい。次の対戦相手は序列3位の【覇軍星君】。星露の一番弟子が相手みたい。私にとっては少しだけ有難い相手かな。冬香さんは今まで星武祭に出ていないから情報が全くない。でも【覇軍星君】は八幡くんと一緒に《獅鷲星武祭》出てるから、使ってくる技や星仙術も少しなら分かる。次の対策も練られるからね。

シルヴィア「さてっ！待ち合わせの場所はカノースドームの正面だったよね！早く支度して八幡くんに会いに行こっとな」

また八幡くんの部屋で、お茶でも飲みながら落ちっこっとな



シルヴィア「……………」

由比ヶ浜「……………」

あゝあ……………せっかくの良い気分が台無しだよ。

シルヴィア「負け惜しみを言いに来たのかな？」

由比ヶ浜「ち、違うしっ!!今回は油断してただけであって負けたわけじゃないし!!本調子じゃなかっただけ!」

シルヴィア「それ負け惜しみって言うんだよ?言葉の意味、ちゃんと理解してる?負け惜しみっていうのは、自分の失敗した事や負けた事を認めないで、理屈や言い訳をつけて、負けたわけではないとか失敗していい事を言い張る事だよ。今の君はまさにそれだよ?」

由比ヶ浜「い、意味分かんないし!それよりも、私はシルヴィアさんに伝えたいことがあって来たの!」

シルヴィア「正直君の言葉は聞きたくないんだけど、一応聞くね……………何かな?」

由比ヶ浜「ヒツキーを先に好きになったのは私なんだから!横取りしないでよ!!ヒツキーに騙されているからって、彼女気取りするなしっ!!」

……………この子何言ってるの?

シルヴィア「……………恋に早いも遅いも、先も後もないでしょ?それと、私は騙されてないから。私も君と同じで八幡くんの事が好きになったから告白して、彼からも告白を受けたから付き合う事になったの。別に彼女気取りしても良いでしょ?実際に彼女なんだから。」

由比ヶ浜「だからって何でヒツキーなのさ!もつと他にいるじゃん!!その男の人と付き合えばいいじゃん!!」

シルヴィア「私が今まで出会った異性の中で、八幡くん以外に私の心を動かしてくれた人なんて居ないんだ。八幡くんに最初出会ってから次のデートでもう理解した。これが初恋なんだってね。」

由比ヶ浜「うるさい……」

シルヴィア「それから八幡くんとは色んな事をして来たよ。ライブとかお泊りとかやって来た。用がない日でも会ったりとかして来た。私から誘った回数が多いけど、八幡くんから誘ってくれた日もあったよ。」

由比ヶ浜「うるさい！」

シルヴィア「そして前シーズンの《王竜星武祭》でお互いに告白して交際した。もうすぐ交際して3年目になる頃だね。色んな事があつたなあ……年間行事には必ず毎年参加してたっけ。初詣にバレンタインデー、ホワイトデー、ハロウィン、クリスマス、まだまだたくさんあるけど、それだけ八幡くんと過ごして来た「うるさい!!」日々は……」

[illegible]

シルヴィア「……………」

由比ヶ浜「自慢のつもり!? そうやってヒツキーと付き合えたからって私に自慢してるの!？」

シルヴィア「そうだよ。八幡くんと付き合つたおかげで、六花で過ごす毎日が楽しくなった。毎日彼に会いたいつて思うようになった。そして私は断言するよ、君なんかじゃあ八幡くんを幸せにする事なんて出来ないよ。」

これは断言出来る。自分の過去と見つめ合わないような、罪を認めようとしないうちに、八幡くんを幸せにできるわけがない。

由比ヶ浜「シルヴィアさんはヒツキーの本当の事を知らないからそんなことが言えるんだよ!! 本当のヒツキーは私とゆきのんを地獄に

追いやった最低な奴だし!!」

そこからは聞いているだけで最悪な気分になる事ばかりだった。彼女の言っている事は8割正解だけど、2割捏造を加えている。まるで自分を正当化しているように見せかけている。君は葉山くんと同じくらいに酷い人だよ。

シルヴィア「……由比ヶ浜さん、私が八幡くんの過去について何も知らないと思ってるの?」

由比ヶ浜「え?」

シルヴィア「八幡くんの事なんて君よりもよく知ってるよ。私の知っている事実とはかけ離れているところがあつたけど、それは嘘って事だよ。」

由比ヶ浜「じ、事実だしっ!!」

シルヴィア「……ここまで言い張れると逆に清々しいね。私が聞いたのは、文化祭で君はライブをしていたって聞いたけど、君はさつき屋上に向かったって言った。それは嘘なの? 本当なの? 修学旅行の告白の時、君は隠れながら様子を見ていたって聞いたけど、君は止めに入つたって言った。それは嘘? 本当?」

由比ヶ浜「全部本当だしっ!!」

シルヴィア「嘘をつくくなっ!!」

由比ヶ浜「ヒッ!!?」

シルヴィア「はあ……もう知ってるって言ったでしょ? 八幡くんや他の総武高から来た人たちや総武高に在籍してる人たちから聞いている。今の君は凄く見苦しいよ。まるで1年前の葉山くんを見ているみたい。」

由比ヶ浜「あ、あんな奴と一緒にすr「一緒ににはしてないよ、ただ似てるって言ってるの。」っ!……だからってやめろしっ!!」

由比ヶ浜「いいからさつきとヒツキーと別れるしっ!! そしたら私がヒツキーの彼女になるから!! それで勘弁してやるしっ!!」

冬香「へえ……それは、中々面白そうなお話ですね？私も混ぜては頂けませんか？」

え？

冬香「こんにちは、シルヴィア様。ブロック突破、おめでとうございます。」

シルヴィア「な、何で此処に冬香さんが？」

冬香「あまりにも遅いので様子を見に行くようにとご指示を頂いたので参りました。すると何やら興味深いお話をしておられるではありませんか。」

由比ヶ浜「え、えーと、貴方は？」

冬香「申し遅れました。私、界龍第七学院大学部2年に所属しております、梅小路冬香と申します。学院内では序列4位でございます。以後、お見知りおきを。」

な、何だろう？いつもの冬香さんと違うような……

冬香「さて……シルヴィア様。正面入り口にて八幡様がお待ちです。お話の続きは私めがお聞きになりますので、どうぞ、行つてらっしゃいませ。」

シルヴィア「う、うん……」

なんか少しだけ嫌な予感がしたから走つて行こうかな。それに、八幡くんにも会いたいしね！

シルヴィア side out

冬香 side

シルヴィア様のお帰りが遅いとは思っていましたが、まさかこのような下賤な者と会話をされておられたなんて。

さて、私もそろそろ限界ですね。

由比ヶ浜「はあっ!?勝手に行くなしっ!!まだ話は終わってな「あんた、ええ加減黙れや?」え……ヒイ!!」

なんやこの子、日本は妖怪さんがたくさんおるゆうのにこの怯えは?初めてかいな?

由比ヶ浜の周りにはいつの間にか、妖怪で囲まれていた上に身体にもしがみつかまれていた。

冬香「さつき聞こえたんやけど、オモロそうな話しとったなあ?八幡様の彼女なるう?あんたアホかいな?あんたみたいな身体しか取り柄のなさそうな女に八幡様の女が務まるわけないやろが。」

冬香「せやなあ……あんたの相手に相応しいんは、レヴオルフの男

共くらいやろな。いくらあんたがアホでもその身体で尻でも振ればモテモテやで？」

由比ヶ浜「……………」ガクガクガクガク

なんや、妖怪さん見たくらいで怖がつとんのかい？こんなまだ可愛ええ方やで？

冬香「分かつてると思うけどなあ？2度と八幡様と付き合うなんてアホなこと抜かすんじゃないぞ？そんな時は…………ウチの式神さんが相手やからな？」

由比ヶ浜「……………」コクコクツ

……………まつ、ええわ。

冬香「では、そういう事ですので。今後、今日のような事はしないで下さいね？貴女だって今みたいな思いはしたくはないでしょう？」

本当にやめて下さいね？私だって怒るときは怒るんですからね？

そして冬香は震える由比ヶ浜をそのまま放置して再び来た道へと戻って行った。

## ※再びまったりTime

八幡side

シルヴィア「それでさ、八幡くんのことをサイテーだとかキモいとかって!!もう凄くムカついたよっ!!」

冬香「シルヴィア様の仰る通りでございます。八幡様の事も碌に知らぬというのにあの言動、次にあったならば殺して差し上げましょうか?」

八幡「2人とも落ち着け。終わった事にそんなにカリカリしても意味ないだろう?ホレ、お茶と羊羹。摘みながら心を落ち着かせろ。あと冬香、絶対にそんな事するなよ?」

冬香「勿論致しませんわ。冗談ですもの。」

とてもそうには見えなかったが?むしろマジでやりそうな雰囲気出してたんだが?

八幡「にしても、言いたい放題言ってたみたいだな、由比ヶ浜の奴。2人がそこまで愚痴をこぼすなんてな。」

シルヴィア「本当にどうかしてるよっ!八幡くんが好きとか言ってたけど、本当に好きなのか疑いたくなるよ!私の方が先に好きになった?残念でしたー私が彼女になりましたー!」

八幡「……割と、っていうかかなりムカついてるんだな。」

冬香「当然でございましょう。八幡様をバカにされたのです。普通の状態でいられるわけがございません。私だってあの場で蹂躪したかったのをどれだけ我慢したことか!」

うん、それは本当に我慢してくれてよかった。多分由比ヶ浜にとってお前の式神とか妖怪はタブーそのものだから。いや、由比ヶ浜もよくやったと言えるな。あの場でよく罵倒しなかったものだ。もしし

ていたら……いや、この先は言わないでおこう。

八幡「忘れろ……なんて言っても無駄なんだろうが、今は茶でも飲んで落ち着く事にしようぜ？いつまでも引き摺ってちゃあキリがないからな。」

シルヴィア「むう……それもそうだけどさ、やっぱり彼氏を悪く言われたら許せないもののっ！」

冬香「私も同じ考えでございます！主君を誹謗中傷されて黙って見ていられる配下が何処におりましょうか!？」

2人とも、本気だからどうしていいか分からん……

八幡「ま、まあ一旦落ち着こう、な？今日の試合は終わりだし、明日は俺の試合だ。今は不粋な考えをせずになんびりしないか？ほら、昨日みたいな感じで。」

シルヴィア「……なんか言いくるめられてる気もしなくはないけど、八幡さんの言うことも正しいから言う通りにする。」

冬香「申し訳ございませんでした。八幡様の試合の事を配慮しておりますでした。」

八幡「いや、気にしなくていい。取り敢えず、お茶飲もうか。」

3人「ズズー………はあ………」

八幡「なんでか分からないけど、お茶飲んだら気分って落ち着くよな。なんかこう、あったかいっていうのもあるが、優しいっていうの？」

冬香「分かります。このほんのりとした苦味が口に広がったと思ったら、溶けるように消えてしまうところがまた良いですね。」

シルヴィア「日本のお茶はまだ分からないけど、ホッコリするよねえ。なんか思わず溜息が付きたくなる感じもあるな。」

八幡「ああ、それ分かる。思わずやりたくなるよな。」



3人「はあゝ……」

虎峰「つて、なんで昨日と同じようにこんなにも寛いでいられるんですか!!?」

八幡「良いじゃん別に。なんか悪いことでもあるのか?」

虎峰「緊張感を持ちましょうよ! 大師兄は今も鍛錬をしておられるのですよ!?! どうしてこんなにもものんびりしていられるのですか!?!」

八幡「いやだってさ……」

虎峰「だって何もありません! 早く鍛錬をするっ!」

八幡「じゃあ虎峰、付き合ってくれ。80回くらい模擬戦しようぜ。」

虎峰「な、何故僕まで!」

八幡「言い出しつぺなんだから鍛錬付き合えよ。鍛錬が終わったらシルヴィアのケアも待ってるんだし。(俺だけにだけだな。)」

虎峰「八幡、今すぐに始めましょう!!」

3人(チヨ口過ぎる………)

## 始動、比企谷八幡

八幡 side

星武祭2日目。今日は第3ブロックの試合とブロック別で敗退した選手のみで行う順位戦が行われる。今日の試合、俺と雪ノ下のどちらか負けた方は2回戦う事になるから不利な状況になると思う奴は多いと思うが、今回は回復をしても良いという特例が出ている。まあ勝ち進んだ方は回復できないけどな、そこは例年通りだ。

これは至上主義みたいであまり言いたくはないが、今日の試合で俺が負ける確率は限りなく低い。致命的かつポンコツ的なミスでもしなければ大丈夫だろう。そんなミス今までして来たことないけどな。

八幡「ふう……《獅鷲星武祭》でもそうだったが、選手数が少ないと出番が回ってくるのって早いな。」

シルヴィア「仕方ないよ、今回に至っては例年に比べて圧倒的に数が少ないんだから。それに今回は『万有天羅』がいるんだから当たり前だよ。」

八幡「それはそうだけだよ……なんだかなあ……」

シルヴィア「もう、やる気がないわけじゃないんだからそんな声出さない！勝利の女神が微笑んで待ってるんだから♪」

八幡「その勝利の女神が数日後になったら、俺の目の前で剣と銃を惜しみなく使ったかかって来そうだけだな。」

シルヴィア「……あはっ♪」

八幡「自覚なかったのかよ……」

決勝に来るつもりでいるんだったら、それくらい予想してたと思っていたんだがな。まさかの天然を発動したか。

シルヴィア「じゃあ決勝まで勝ち進んで来たら、『戦律の魔女』って

いう女神が君の校章を撃ち抜いてあげるよ。」

八幡「その時は【神羅武双】って神がお前の校章を真つ二つにしてやる。」

シルヴィア「おつと？私にケンカを売るのかな？」

八幡「それはこっちのセリフだ。」

バチバチバチツ！

多分初めてであろう、俺たちの目から火花が出て光線のようになりながらぶつかっているのは。それだけ勝利を譲りたくない相手だっということだ。

シルヴィア「…………ふふっ、ケンカを売るにはまだ早いかな。」

八幡「そうだな。お互いにケンカを売ったり買ったりする相手はただ他にいるからな。決勝までお預けにしておこうか。」

シルヴィア「うん、そうしよう。じゃあ今は勝利の女神として、君におまじないをあげましょう。」

シルヴィはおまじないをあげると言うと、俺に抱き着いて来た。

シルヴィア「勝ってきてね、八幡くん。」

チユツ

笑顔で告げると、俺の唇に自身の唇を合わせてきた。いやあ、これはおまじないっていうよりも……

八幡「…………こりやまじないじゃなくて、女神の加護って奴だな。決勝まで負けられなくなっちゃったな。」

シルヴィア「勝利を祈って待つてるからね。」

八幡「ああ、行ってくる。」

シルヴィア「うん、行つてらっしゃい。」

さて、女神からの口づけも頂いたことだし、勝ってくるか。

八幡 side out

—————

梁瀬『皆様、待ちに待った第3ブロックの試合がやっと始まります!! いやあ会場を一周見回すだけでも分かる、この人の多さっ!! それだけ注目度が高いということですね!』

チャム『そうでなきやおかしいツスよ。何せ史上初の男の【万有天羅】であつて歴史上初の【万有天羅】を倒した男だから、実物を見たいて人も多いつと思うツスからね。』

梁瀬『それもそうですね! では選手の紹介から参りましょう!! 界龍第七学院、比企谷八幡く!!!』

八幡が姿を現わすと、どっと歓声が上がった。

梁瀬『4代目【万有天羅】を継承し、【夢幻月影】から新たに【神羅武双】という2つ名になりました。えーつとですね、2代目【万有天羅】さんによると、『その強さはまだ成長段階にあり、いずれは初代か

ら3代目をも遥かに凌駕する程の実力になるだろう。』との事です！これは期待が高まる一方ですね!!』

チャム『それに彼は様々な戦いが出来るツスからね。その適性に応じて戦う事も出来るから、オールラウンダーではない選手にとってはかなり厄介な相手になるツス。』

八幡（小苑さん、何やってくれてるんですか……）

梁瀬『そんな比企谷選手に立ちはだかる相手はこの人、星導館学園、雪ノ下雪乃く!!』

梁瀬『2年前に星導館に転入して、早々に《鳳凰星武祭》に出場しましたが、初戦敗退。まあ初年度ですので仕方ないでしょう。今回は《三冠制覇》に王手をかけている絶対王者に勝負ですが、果たして奇策はあるのでしょうか!』

チャム『そして彼女は元界龍序列4位の【魔将天閣】雪ノ下陽乃の妹ですからね。魔女の素質やポテンシャルは充分高いと思うよ。』

雪乃（何処に行っても着いてくるレッテルね。でも、それも仕方のない事ね。あの人はそれだけの労力に見合った実績を出しているんだもの。）

雪乃は橋からジャンプしてステージに降り立った。

八幡「……言うことは何もない。あるとすれば、良い勝負にしよう。」

雪乃「ええ。貴方は私程度では相手にならないと思うけれど、今の全力をぶつけるわ。」

梁瀬『さあ、両者の準備が出来たところで参りましょう！《王竜星武祭》第3ブロック!!』

『S t a r t o f t h e d u e l』

梁瀬 『バトルウゝ……スタートッ!!』

## 遅咲きの成長

――――

雪乃「生成、氷槍！」

雪乃はまず最初に氷の槍を生成した。その後、自身の周りにいくつか先の尖った氷を生成して宙に浮かせていた。

雪乃「……行くわよ。」

八幡「来い。」

八幡も《祢々切丸》を抜刀して切っ先を雪乃の方へと向け、左脚を少しだけ前に出していつでも動けるようにしていた。

雪乃はそこから八幡の方へと向かって行った。

八幡（……戦術が2年前と明らかに違う。観れたわけではないが、あの時は完全な遠距離型だったからな。今回は中距離型の武器がある。普通なら槍で牽制しながら隙を伺いつつ、浮いている尖った氷で俺を攻撃するのがセオリー。さて、どう来る?）

雪乃（誰でも思いつくような戦い方では比企谷くんの思う壺だわ。ここは敢えて奇策で攻めるのみね。でも、それが通じるのは1度だけ。星辰力の消費は激しいけれど、一手一手を変えていくしかないわね。）

雪乃「ふっ!!」

八幡（っ!?!加速っ!?!）

八幡は予想していた戦術とはかけ離れていた事に驚き、咄嗟に槍を受け流した。槍は刺突・投槍を目的とする武器。相手との間合いを詰めさせない為に使われる武器でもある。その武器の長所を生かさず、自ら間合いを詰めての近接攻撃だった。

体力のない雪乃にとっては不利な戦いだ、槍で放つ攻撃の鋭さ、速度は八幡の予想する上を行っていた。

八幡（何だ、この攻撃は？ 槍のリーチを生かす気がない？ 雪ノ下もそこまでバカじゃないと思うが……何故だ？ なぜ間合いを取らない？）

八幡「……変わった戦術だな。槍の長所ではなく短所を生かすとはな。やりにくくないか？」

雪乃「勿論やりにくいわよ。リーチが長い分、振り回せないもの。でも、何も切っ先だけでしか攻撃できないわけではないわ。」

八幡「違う……なっ！」

雪乃「っ！」

八幡「遅いっ！」

八幡は雪乃に攻めかかり、氷の槍を弾いた。その隙について校章に切りかかった。



だが、校章には攻撃が当たらなかった。

八幡「…………成る程な、その浮いている氷はこのためにあったのか。」

雪乃「他にもあるのだけれど、方法としてはこれもあるわ。」

八幡の攻撃が雪乃の周りに浮いていた氷が身代わりになって防いだのだ。

雪乃「この周りの氷は私が指示したら動く氷で、カウンターや防御にも使えるわ。」

八幡「つまり俺が攻撃して防がれたとする。次に雪ノ下が攻撃して俺が躲したとしたらその氷が俺を攻めるってわけか。だがいいのか？おいそれと敵に情報を渡してよ？」

雪乃「ええ、心配ないわ。この手はもう使わないもの。次の手を使うから。」

八幡「何通りあるんだよ、その戦術。」

雪乃は槍を消失させ、短い刀（脇差）を生成した。およそ50〜60cmくらいだった。

雪乃「ここからは正攻法ね。」ボソッ

雪乃（この先は体力と星辰力との勝負。もし比企谷くんを倒す前に私の体力と星辰力が尽きたら、私の負け。その前にケリをつけるわ！）

雪乃は自身の身体全体に星辰力を練り上げて纏わせた。元々星辰

力の扱いは得意だった為、これくらいの事は最初の時点で会得していた。

八幡「準備は出来たか？」

雪乃「ええ、待たせてごめんなさいね。ここからは本気で行かせてもらうわ。行くわよ。」

ビュンツ!!

八幡「っ!?!速いつ!」

カギイイインツ!!

八幡（それでいて鋭くて重いっ!だが……）

八幡「隙が多い!」

ドゴツ!!

八幡は雪乃の刀を受け止めると、すかさず空いている左手で雪乃の腹部を殴打した。だが……

八幡「っ!（硬い!そうか、あの星辰力は自身の身体能力を大幅に上げるためか!）」

雪乃「はあっ!!」

スパツ!

八幡「……………」

雪乃「……………」

八幡「……………まさかだな。公式の場で俺に傷を付けたのはこれで4人目だ。よもやお前が俺に傷をつけるなんてな。」

八幡の左頬には鋭い刃物で切られたような擦り傷が出来ていた。

雪乃「それは光栄に思っているのかしら?」

八幡「考えてみる、たった4人だぞ?その中で序列外はお前だけだ。」

雪乃「ふふつ、なら私の名前は歴史に残るわね。初めて『万有天羅』に傷をつけた序列外の生徒って。」

八幡「違えねえ。なら、こっからは俺も本気でいかねえとな。でな

きや失礼だ。」

雪乃「そうしてもらえると嬉しいわ。」

そして八幡と雪乃は再びぶつかりあった。

――10分後――

雪乃「はあっ……はあ……はあ……」

八幡「ふう……どうやら時間との勝負でもあったようだな。」

雪乃「え、ええ……はあ……貴方も、知っているでしょう？……はあ……私が体力に……自信が、ない事に……はあ……」

八幡「つまりは体力と星辰力が枯渇する前に俺を倒さなきゃお前の負けってことか。大博打をしたもんだな。お前らしくないが、そういうのは嫌いじゃないな。」

雪乃「ふふっ……はあ……はあ……賭けには、負けたようね。早く校章を切りなさい。」

八幡「今日の試合、色々と学ばされた。礼を言う。」

八幡は刀を振って雪乃の校章を2つにした。

梁瀬『雪ノ下雪乃、校章破壊!!勝者、比企谷八幡く!!流石は「万有天羅」ともいえるべき戦いでしたね。』

チャム『最初は様子を伺いながらの戦いだったから、後半は物凄い

追い込みだったツス。これは次も期待できるツスね。』

八幡「しかし、よくここまで強くなったな。2年前とはえらい違いだ。」

雪乃「実はこの成長は半年前からなのよ。1年下の天霧くんから小太刀術と槍術を習ったのよ。今回はその2つだけだけど。」

八幡「だからか……なんか試合には勝ったが、勝負には負けた気分だ。」

## 2人の噂話

シルヴィア side

八幡くん、無事に勝てたみたいで良かったよ。君が決勝に来ないという意味がないからね。私もこの後に強敵が待ってるけど、それを乗り越えたら君と戦える。八幡くんならネイトネフェルに勝てるよ。彼女は踊りで相手を惑わせるスタイルだけど、それは八幡くんの十八番でもあるでしょ？

オーフェリア「……………八幡、無事に勝ってよかったわね。」  
シルヴィア「そうだね……………って、オーフェリアさん!?!? いつの間に!?!?」

本当にいつから此処にいたの!?

オーフェリア「……………私、八幡の試合は必ず生で見ることにしてるの。だからレヴォルフの席で見た後に、ここに來たってわけよ。」  
シルヴィア「じ、じゃあ……………入って來たタイミングって試合が終わるのと同じ?」

オーフェリア「……………そうね。試合の決着がつきそうになった時にはもう移動してたわ。」

ぜ、全然気が付かなかった……………それよりもオーフェリアさんってどうやって入って來たんだろう? 此処って許可が出ないと入れない仕組みになってるはずなのに。

まあいっか。

シルヴィア「それじゃあ、八幡くんがくるまで待ってようか。」  
オーフェリア「……………ええ、そうしましょう。」

早く帰ってこないかなあ〜♪

オーフェリア「…………シルヴィア、1つ聞きたいのだけど、いいかしら？」

シルヴィア「うん？」

オーフェリア「…………さっきの試合、八幡と対戦していた雪ノ下雪乃なのだけど、彼女からは悪意を感じなかったわ。それどころか試合の後は清々しい顔をしていたわ。あれはどういう事？」

シルヴィア「ああ、オーフェリアさんは知らないのか。実は…………（カクカクシカジカ説明中）…………という事なんだって。どうやらやつと分かったみたいだよ。」

オーフェリア「…………そうなの。私は八幡が許すと決めたのならそれでいいわ。でも私はなんだかやるせない気がするわ。」

シルヴィア「まあオーフェリアさんの気持ちも分からなくもないよ。八幡くんの事を罵倒してた人があんな風にしてるんだからね、複雑な気持ちにもなるよね。」

オーフェリアさんは星導館の3人と葉山くん、全員に目の前で八幡

くんを罵倒する言葉を聞いてるから、余計にだろうね。私は由比ヶ浜さんと葉山くんだけだけど、それでもかなり嫌な気分にはなったなあ。

シルヴィア「そういえばさ、私《鳳凰星武祭》の事を大雑把にしか聞いてないんだけど、どんな風だったのか教えてもらってもいいかな？もし嫌なら別にいいけど。」

オーフェリア「……………構わないわ、貴女には知る権利があるもの。」

今度はオーフェリアさんが《鳳凰星武祭》で起きた『八幡くん星武祭棄権作戦』（シルヴィア命名）の事について説明してくれた。やっぱり本人に聞くと内容が違うなあ。相当八幡くんの事を下に見てたんだね。今の雪ノ下さんと小町さん……………だったかな？その2人は自分の非を認めているから丸くなってるけど、由比ヶ浜さんはダメみたいだね。

オーフェリア「……………シルヴィア、その由比ヶ浜とかいう女の特徴を教えて頂戴。今から制裁しに行くから。」

シルヴィア「あ、あれ？私声に出してた？」

オーフェリア「……………私、八幡とシルヴィアの心の内なら少しだけ読み取れるようになったの。」

そんな能力会得しないでよ!?八幡くんは分かるけど、なんで私まで!?

シルヴィア「でもダメだからね。この後彼女は試合があるんだから。」

オーフェリア「……………残念だわ、いたぶりがいがありそうだったのに。」

シルヴィア「あはは……………でも安心してよ！相手は界龍の序列4位の冬香さんだから！きつと恐怖という恐怖を教えてくれるんじゃない



かな？」

オーフェリア「…………怖い人なの？」

シルヴィア「ううん、凄く良い人。礼儀正しいし、優しいし、面倒見も良いし、なんか本当によく出来たお姉さんみたいな人かな。多分だけど、私にあんな姉がいたら甘えそう。」

オーフェリア「……………なんとなく分かったわ。普段は優しいけれど、怒らせたりしたら凄く怖くなる、そんな感じの人ね？」

シルヴィア「怒った所を見たことがないから分からないけど、多分そうじゃないかな？」

オーフェリア「…………あれかしら？怒ったら床に正座とかさせられないかしら？」

シルヴィア「うーん…………分からない。でも、なんかやりそうな感じがあるなあ。笑顔で『正座してくださいね♪』とか言いそう。」

冬香「…………くしゅんっ！」

八幡「？風邪か？」

冬香「いえ…………そうではないのですが、何故でしょう？」

八幡「誰かがお前の話題で話してるんじゃないか？噂してるって奴だ。」

一方冬香は、試合前にシルヴィアたちに噂されていたため、くしや  
みをしていた。

## 順位戦 ①

冬香 s i d e

さて、昨日に続きまた試合ですが、今回の星武祭では人数が少ないために、順位も決めておきたいとの運営からの発表もありました。なので、試合に負け敗退した者でも1度か2度の試合が残っているということです。私は暁彗との対戦で敗北しましたが、同じくブロック戦で敗退した星導館の由比ヶ浜さんと雪ノ下さんと試合をすることになっております。

しかし、私は少し不安です。相手は由比ヶ浜結衣さん、もし怒りで我を忘れてしまい、彼女に過度の攻撃をしてしまわないか……八幡様からは自由にして良いとのお声を頂きましたが、やはり不安なものは不安です。

冬香「……やはり彼女を前にすると、怒りが湧き上がってくるかもしれません。」

八幡「俺はその場に居なかったからお前がどうしたのかは口上でしか聞いていないが、そこまでか？」

冬香「八幡様からしてみればその程度の事かもしれませんが、私にとつては許せない事なのです。もはや妻といっても過言ではないシルヴィア様に対して別れるなどと。しかも挙げ句の果てには代わりになるなど……自身の身も弁えない愚か者でしかありません。それに、八幡様の正妻に代えなどおりません。」

八幡「いや、確かにその通りだが、なぜお前がそこまで怒るんだ？怒るとしたら、俺かシルヴィだと思うのだが？」

冬香「常日頃からお世話になってる御方、その夫人に対して行動や言葉に慎みのない者に怒るのは当然です。本来であれば、あの時にトラウマなんて生易しいと思えるくらいの恐怖を刻み込みたかったのですから。」

八幡（トラウマよりも怖い恐怖か……それは誰も味わいたくないだろうな。）

八幡「ならこれはどうだ？ 見ただけで怒りが出て来そうなら、もう最強の式神を使って相手を倒すつてのはよ？ そしたらすぐに済むだろう？」

成る程……流石は八幡様です！

冬香「成る程、最恐の式神で、ですね？ それならばすぐに済ませて問題はありませんね。」

八幡（何だろう？ 今冬香が言った言葉のニュアンスが全く違ったよな気がしたんだが……特に最強の辺りに。）

ふふふ、八幡様のおかげで召喚する式神さんや妖怪さんが決まりました。これなら彼女も大いに臆し、戦う気すらも無くなるでしょう。

冬香 side out

由比ヶ浜 side

マジ最悪じゃん!! なんで私あんな不気味な人と戦わなくちやいないの!?! あの人、多分《魔女》だと思うけど、あの人が使った魔法ってあの気持ち悪い何かだよな? ううう相手にしたくないよお……ゆきのんもヒツキーに負けてから会ってないし、しかもなんか仲良さげだったような……いや、そんなのあり得ないし!

由比ヶ浜「大丈夫! あの色悪い何かを出す前に倒せばいい話だしっ!」

雪乃「……………由比ヶ浜さん、やっぱり不可能なのかしら？自分が悪いって自覚させるのは。」

由比ヶ浜 side out

—————

梁瀬『さて皆様、勝ち残った選手の試合は一先ずお休みにして、惜しくも初戦で敗れた選手から順位を決めていきます!!ルールは簡単です!1人2回それぞれ違う選手と戦うという至ってシンプルルールです!今回戦うのは星導館の由比ヶ浜結衣選手と界龍の梅小路冬香選手です!』

千歳『敗退した選手やっていうのに、なんか楽しみやわあ!やなっち、はよ始めようや!』

梁瀬『慌てずとも両者はステージに降り立っていますのですぐにも始められますよ!!』

冬香「……………1つ質問させてもらってもよろしいでしょうか?」

由比ヶ浜「な、何ですか?」

冬香「今でも八幡様に対するお気持ちは変わりないですか?それとも変わりましたか?」

由比ヶ浜「え？変えるわけないじゃないですか。あの、どういう意味です？」

冬香「……成る程、不躰な質問をいたしました。ですが、これ私も決心ができました。」

由比ヶ浜「は、はあ……」

冬香（これで心置きなくあんたを打ちのめせるわ。あんたも待つとれや、ウチの妖怪さんに喰われる瞬間をなあ。）

この時、冬香の瞳は完全に光を失っていた。

梁瀬『両者準備が出来たようですのでお送り致します!!《王竜星武祭》順位戦！バトル・スタート!!』

由比ヶ浜「行きますよ!!やああああ!!」

由比ヶ浜は武装を展開して冬香目掛けて突っ込んで行った。

冬香「感情的で直線的……なんだから相手にするのもバカらしくなってきました。急急如律令。」

冬香は呪符をいくつか取り出して一枚投げてから唱えた。その妖怪は鬼のような顔をしているにも関わらず、その身体は蜘蛛のような体をしていて8本の足は鋭い爪のようになっていた。その大きさは人間をはるかに超える大きさだった。

由比ヶ浜「な……な……」

冬香「ご紹介致します。こちらは牛鬼うしおに、またの名を牛鬼ぎゅうぎと言います。こちらは私の式として扱っておりますので私の命令しか聞きませんが、少しだけお教え致します。牛鬼はとても獰猛かつ残忍な性格です。なので毒を吐いて人間を食い殺す事を好みます。安心してください、私がそう命じない限りは致しませんので。」

由比ヶ浜「か、勝てるわけないし……ひ、一先ず体勢を、ヒイツ!!」

後ろを振り返った瞬間、由比ヶ浜は自分の目を疑った。目の前にいたのは女性だった……のだが、それは上半身だけだった。下半身から下は蜘蛛だったのだ。

冬香「由比ヶ浜さんの後ろにありますのは、絡新婦じょろうぐもです。牛鬼と違って人を食い殺すのを好む習性はございませんが、しないというわけではありません。捕らえた者の生き血を啜って相手を徐々に苦しませながら人肉を食べていきます。」

由比ヶ浜「……………」ガタガタガタガタ

由比ヶ浜（な、何あれ？妖怪？に、逃げないと……変なのかまた……………）

由比ヶ浜「つ!!!」

今度は右を向くと……今度は普通の男性だった。昔の服を着た普通の男性だった。

???「美味ソウナ人間ダアゝ!!喰ワセロゝ!!」  
由比ヶ浜「ああああああああ!!!」

突如その男性が叫び出した途端、口が大きくなってそのまま開いた。

冬香「そちらは鬼一口おにひとくちと言います。人間に化けた鬼で、その大きな口で人間を一口で食べてしまう妖怪です。特に欲深い人を好む習性がございます。」

もう由比ヶ浜は戦うどころか、逃げるという考えすらもなかった。ただ恐怖。これだけが唯一頭の中に残っていた。そして、冬香が何度も繰り返し言っている単語《食べる》。しかも人のである。それを聞いただけでも背筋がゾツとするというのに、目の前にその存在がいるとなると、思考が止まるに決まっていた。

由比ヶ浜「……………」ガタガタガタガタ

冬香「最早剣を取る余裕すらありませんか。ですが、意識を保っていられた敬意を評して、最後にこの式を出しましょう。急急如律令。」

冬香の正面に牛鬼、由比ヶ浜の後ろに絡新婦、その右に鬼一口、そして左に現れたのは、もはやなんと言っているかわからない妖怪だった。蛇のような外見だが、身体には毛のようなものが生えており、目や鼻といったようなものは存在せず、大きな口だけがあった。

冬香「最後にこの子、野槌のづちです。この妖怪の主食はウサギやリスなどですが、時に人を喰らう時もあります。これだけ大きな口であれば



人など容易いでしょう。さあ、貴女に選択肢を差し上げます。どの妖怪さんに食べられたいですか？」

由比ヶ浜「……………」ブクブクブクブク

由比ヶ浜は口から泡を出して気絶してしまった。最後の野槌で限界を超えたのだろう。

冬香「お答えを聞いていないのですが、いいでしょう。また後日聞く事に致します。」

冬香は式神を再び呪符へと封じた。

梁瀬『ゆ、由比ヶ浜結衣選手、意識消失……しよ、勝者、梅小路冬香……ここ、怖かったですね。』

千歳『ア、アレはあかんで……女の子やったら一発KO確実やわ。あんななん目の前で出されたら、ウチもう土下座するしかあらへん。』

会場も鳥肌を立たせている中、唯一平気な顔をしている冬香はとうと……

冬香（トラウマを与えられたかどうかは分かりませんが、充分恐怖を植えつけることは出来ましたかね？）

## ◇妖怪恐怖症？

八幡 side

皆さんこんにちは、比企谷八幡です。あらすじってわけではないが、状況を説明する。俺は冬香が試合に出て行った後、シルヴィアたちが待つている部屋に行って試合を観戦していた。そこまでは良い、良いんだが、俺と冬香の最強（恐）の意味がやっぱり違った。俺が言っていたのは最も強いって意味だったんだが、冬香は最も恐いっていう風に捉えていたみたいだ。漢字が違うだけでこんなにも意味って違ってくるもんなんだな。

内容としては由比ヶ浜の戦意消失って事になってるが、あれはかなり怖いな。妖怪には詳しくないが、ぱつと見の印象では怖い以外何も出てこなかった。冬香が言うには全部人食いだぞ？ヤバすぎるだろ。俺の両サイドにいる美女2人も震え上がってた……いや、震え上がってるし。

シルヴィア「は、八幡くん、妖怪……だったかな？それって本当に恐ろしいんだね。」

八幡「あー……俺もそんなに詳しいわけではないが、冬香が出していた妖怪は人に悪さをする妖怪だ。人に化けて人を騙し、最後には食らうんだからな。だがその逆もある。良い妖怪もいるんだぞ？聞いたこともあると思うが、座敷わらしとかな。」

シルヴィア「ほ、他には？」

八幡「他に？んー……山男とかだな。山中に1人でいないと姿を現さないが、遭難していたら助けてくれたり、狩を手伝ってくれたりする妖怪だ。」

オーフェリア「……八幡という妖怪はいないの？」

八幡「それはアレか？俺に妖怪になれと言いたいのか？だったらオーフェリアから一生離れない呪いをかけてやるぞ？」

オーフエリア「是非お願いするわ、八幡。」

え？断らないの？悪いことするかもしれないんだよ？呪いだよ？いいの？

シルヴィア「私も八幡くんに取り憑かれるんだったら全然構わないよ！」

八幡「やめろ、俺はまだ妖怪どころか死んでもいいねえよ。俺をなんだと思ってるんだ、全く。」

シルヴィア「でもさ、妖怪って悪い存在なんだよね？」

八幡「さっきも言ったが、良い妖怪もいれば悪い妖怪もいる。和みがあつて豊作などの吉事をもたらすのは《和魂》にぎたまと呼ばれていて、荒れていれば災害や疫病をもたらすのは《荒魂》あらたまと呼ばれている。だがまあ殆どの妖怪はその荒魂から生まれてるだけだな。だから良い妖怪ってのはそんなにいない。大雑把に言えば悪い存在なんだろうな。」

オーフエリア「……………難しいわね。」

八幡「悪って完全否定できないのが、妖怪ってところのややこしさなんだろうな。」

今度冬香に妖怪のことについて教えてもらうか。式神使つての講習なら分かりやすいだろうしな。

p i p i p i : : p i p i p i :

おつ、冬香だな？

冬香『ただいま戻りました。』

八幡「ああ、今開ける。」

さつき式神は呪符に封じ込めていたから大丈夫だよな？開けたら

妖怪、なんて事があつたら2人は大絶叫だぞ。

冬香「ありがとうございます、八幡様。」

八幡「いや、それはいいんだが……冬香、アレはかなり怖かったぞ。」

冬香「そうでございましたか？私としてはまだ物足りない方でした  
が……」

八幡「……因みにだが、由比ヶ浜があれでも気絶していなかった  
ら何を出す気でいたんだ？」

冬香「そうですね……一番迫力がありそうな野槌の口を彼女に近  
づかせてから思い切り叫ばせる、といったところでしょか。捕食さ  
せる気は毛頭ないので。」

八幡「いや当たり前だろ。」

本当に食っちゃったらどうすんの！

シルヴィア「で、でもさ、それでも怖いよ。冬香さんには悪いけど、  
あんな得体の知れない存在が目の前で叫んだりしたら、殆どの人が耐  
えられないよ。」

冬香「ふふ、確かにその通りですね。」

シルヴィア「そんな笑顔で言われても……」

オーフェリア「……もし妖怪が出たとしても、八幡のそばにいれ  
ば安心だわ。」

八幡「おい、それはどういう意味だ？」

オーフェリア「……八幡は『衤々切丸』を持ってるでしょう？そ  
れで妖怪を追い払って頂戴。私は八幡の後ろで隠れてるから。」

八幡「確かにこいつは妖怪を切るために作られた刀だが、その能力  
があるとは限らないぞ？」

シルヴィア「だ、大丈夫だよっ！八幡くんと『衤々切丸』なら出来  
るよっ！」

八幡「そう言いながら何故2人は俺にくつつく？冬香は無闇に妖怪  
を出すような事はしない。」

オーフェア「……………もしかしたらその辺に「いないからな？」  
……………いるかもしれないじゃない。」

霊感少女かよ……………妖怪みてから敏感になってないか？いや、別に靈感を持つてゐるわけではないと思うが。

冬香「ふふふ、やはり八幡様の周りは賑やかで退屈いたしません  
ね。」

## 姉妹の会話

雪乃 side

今日の試合、私は比企谷くんと戦って敗北したわ。その後に由比ヶ浜さんともう1試合行う予定だったのだけど、梅小路さん……だったかしら？その人との試合で気絶したままだったから、私の不戦勝ということになったわ。その後に私と梅小路さんと試合をしたのだけど、やはり土台から違うわね。比企谷くんととの試合でもそうだったけれど、天霧くんの教えてもらった動きだけでは限界があったわ。特に体力面は今後の大きな課題になるわね。

私は梅小路さんに負けた後、まっすぐ寮に戻った。そして反省すべき点を纏めて今後の為にどうするかを考えているところ。今一番良い近道であるのは、誰かに教えを受ける事。天霧くんやリースフェルトさんが言うには、私は接近戦でもそうだけれど、《魔女》としての素質も高いから、槍術と魔法を磨けば星武祭の本戦に残れる実力はつけられるみたい。

ではやっぱり、当面の目標は……

雪乃「体力作り、よね。」

陽乃『んもうー！アドバイスを貰いたいって言うからこうしてるのに、もう自分で纏めちやってるんじゃない！しかも弱点まで把握してるしー！お姉さんつまんなーい！』

雪乃「それ以外で何かあればと思ったのだけど……その様子だとなんて事かしら？」

陽乃『体術面のアドバイスならできるけど、魔法面は無理だよ？お姉さん《魔女》じゃないしー。』

雪乃「でも、魔法は使えるのよね？」

陽乃『うん。私は魔法を星仙術の方に使ってるからね。だから固有

の魔法は持っていないよ。その代わり色々な属性を持った魔法のような技術を身につけてるからね、普通の《魔術師》《魔女》に比べたら、その場の応用はかなり効くと思うよ。』

……やっぱりそれだけ違うのかしら？

陽乃『念のために言っておくけど、習いたいとかは言わないでね？確かに応用は聞くけど、手数が増えたらそれだけ回りくどくなるんだから。固有の魔法だって伸ばしたら凄い武器になるんだよ。』

雪乃「ええ、そのつもりはないから安心して。それよりも姉さんからのアドバイスを貰いたいんだけど。」

陽乃『ああうん、いいよ。評価としては30点かな。良い点としては、八幡くんに接近できた事や、最後の星辰力を全て使ってから総力戦、最後に魔法を生かしながらの戦闘ってところかな。』

……想像してはいたけれど、やはり低評価ね。それもそうだわ、姉さんは4年間も界龍で過ごして来たんだもの。

陽乃『八幡くんも驚いてたよ。まさかあんな風に星辰力を使って身体能力を上げるなんて思ってもみなかったって。今度やつてみるって。魔法を使つての接近戦も事例がないわけではないけど、そうする人は少ないからね。意外性がある点、応用を含めた点でも高評価だね。』

雪乃「……珍しいのかしら、魔法を使いながら接近戦に持ち込むというのは？」

陽乃『珍しいよ。だって魔法を安定させながら戦うんだもの、それなりの集中力とコントロールが必要になるからね。』

……でも確かに、自分の中にも氷の刃を溶かさないようにしないといけない、っていう意識はあったわね。



陽乃『次に悪い点ね。雪乃ちゃんも知ってるとは思うけど、体力の無さ、これは大前提ね。後は動きの粗さ、1度攻撃が終了してからの隙の多さ、応用が少し効かない、大きくあげるならこれかな。』

大きく……という事は細かい部分も多々あるという事ね。

その後私は姉さんから悪い点の説明を受けて、改善法や克服法などを教えてもらったわ。

陽乃『まあこんな感じかなあ。』

雪乃「ありがとう姉さん、勉強になったわ。」

陽乃『良いって良いって可愛いい妹のためだからね。これくらいならお姉さん、一肌脱いじやうから。』

雪乃「……私の事、もう妹だと呼んでくれるの?」

陽乃『呼ばない方が良かったかな? 私としてもあの頃の雪乃ちゃんを、妹とは呼びたくなかったし、思いたくもなかった。でも今なら平気かな。何でだと思う?』

雪乃「……昨日言った、覚悟が伝わったから……かしら?」

陽乃『そっ♪お母さんも私も昨日の雪乃ちゃんを見て、もう大丈夫って判断したからね。お母さんも雪ノ下からは除籍はしないって。まあ、好き放題はやらせないと思うけどね。』

雪乃「それでもいいわ。姉さんや母さんに会ってから、なんだか身体や心が軽くなったもの。」

陽乃「……そっか。雪乃ちゃんはさ、将来どうしたいとかつてある?」

雪乃「ないけれど、やっぱり母さんの会社で働くことかしらね。引き継ぎは無理でしょうから、平社員から始めるというのも良いかもしれないわね。」

陽乃「……ねえ、私が今計画してる会社に入るっていうのはどう? まだ社員とかは決めてなくてね。一応今候補の社員はめぐりとか界龍の卒業生辺りなんだけど、雪乃ちゃんは興味ある?」

雪乃「昨日姉さんからその話は聞いたけれど、私に合うかしら？」  
陽乃『頭の良い雪乃ちゃんなら建設業はやっていけると思うけど、最初は力仕事だからね？』

雪乃「……………少し考えてみるわね。」

陽乃『うん、そうするといいよ。最後にもう1つ。ガハマちゃんはどうか？改める気ある？』

雪乃「今のところはなんとも言えないけれど、姉さんもさっきの試合を見たら分かると思うけれど、おそらく無理だと思うわ。」

陽乃『やつぱりかあ……………まあそれも八幡くんから聞いてるんだけどね。』

雪乃「彼女は疑うという事を忘れているわ。だから比企谷くんが悪い、自分は悪くないっていう風に思い込んでいるのよ。リユースハイムさんとの試合でも何か言っていたようだし。」

彼女が今後どういう行動をとるか分からないけれど、もし比企谷くんに対する思いが変わらないようであれば、悲しいけれど決別するしかないわよね。

陽乃『なんか気になるなあ〜シルヴィアちゃんに何かを言ってた辺りが。ちよつと聞いてみるね〜。雪乃ちゃんもガハマちゃんに聞いたいて〜♪』

雪乃「ええ、分かったわ。時間を取らせてごめんなさい。じゃあ、また。」

陽乃『うん、ばいばい。暇があつたらお茶しようね〜♪』

そして通信が切れた……………家族との会話って尊いものなのね。改めて実感するわ。

## 一層の主従

雪乃side

それにしても由比ヶ浜さん遅いわね……まだ目が覚めていないのかしら？それとも夜襲に？いえ、それは考えられないわね。星武祭の間は普段よりも警備が強化されているのだし、もし何かしようものなら《シャーナガルド星獵警備隊》が黙っていないわ。だとしても遅いわね。何かあったのかしら？

……少し連絡を入れてみましょうか。

pipipi…pipipi…pipipi…pipipi…

……出ないわ。まだ起きていない、という事かしらね。その場合、治療院に運ばれることになるのだけれど……大丈夫なのかしら？

雪乃sideout

由比ヶ浜side

……今は何もしたくない。考えたくない。動きたくない。動いたとして戸が開いた瞬間あの化け物がいたら？もうやだよ!!なんで私がこんな思いしなくちゃならないし!!

由比ヶ浜「なんで私がこんな目に………」

冬香「その様子ですと、まだ物足りないようですかね？」

由比ヶ浜「っ!!？」

声の方向に体と顔を向けると、今私の1番会いたくない人物が目の前にいた。

冬香「貴女は、何故八幡様に敵意を向けるのですか？あれ程素晴らしいお方に敵意を向ける理由が分かりません。過去に元聖ガロードワース学園に葉山隼人という人物がいましたが、その方も八幡様に敵意を向けておられました。一体何故なのでしょう？」

由比ヶ浜「……………実は」

私は梅小路さんにこれまでの事を全て話した。流石に《鳳凰星武祭》の事は伏せたけど、それ以外の事は全て話した。

冬香「……………成る程、そういう事だったのですね。だからあの時の八幡様の目は薄暗かったのですか……………事情は理解しました。ですが修学旅行の件に関しては、貴女の身勝手が引き起こした事だと思われませんか？」

由比ヶ浜「な、なんでそうなるしっ!!」

冬香「お分かりになりませんか？では考えてみてください。あの時、進んで依頼を受けていなかったら？あの時、あの言葉をかけてなかったら？今どうなっていますか？このような悲劇にはなってはいないはずです。いいえ、これでもまだ優しい方です。」

由比ヶ浜「こんなの優しくないし！ヒツキーがした事なんてサイテーな事だし!!」

冬香「では、貴女は総武高校で起きた事実を公表しても良かったと？もしそうなっていれば、貴女は毎日白い目で見られることはほぼ確実ですよ？それでも、あのお方が優しくないと仰いますか？」

由比ヶ浜「全然優しくないしっ!!男なら女の子に優しくするもんじゃん!!」

それが当たり前じゃん！ヒツキーが優しいって何さ!?!前と比べたら全然優しくないし!!

冬香「……………そうですか、ならば私から言うことは何もございません。失礼致しました。」

由比ヶ浜「なんだしあの女！ヒツキーの事八幡様って！！ヒツキーは  
神様じゃないしっ！！バツカみたい！！」

なんか此処にいんのもバカらしくなってきたし、寮に戻ろつと。

由比ヶ浜 s i d e o u t

|||||||

冬香「……………はあ、彼女は成長しないようですね。あれだけのヒン

トを与えたのに自分が正しいと思っているようですし。八幡様が仰っていた内容と随分違いますね。」

八幡『そりゃ悪かったな。』

冬香「っ!!」

突然の声に周りを見回すが誰もいない……だが確実に聞こえた彼の声だった。

八幡『普段はこんな事しないが、俺の能力の1つは影を操る事だつて忘れたか?』

冬香「っ!」

冬香は自身の背後にある自分の人影を凝視した。するとそこから黒い物体が現れ、やがては人型になった。最後には比企谷八幡そのものになっていた。

八幡「よっ。」

冬香「は、八幡様っ!陰口とはいえとんだご無礼なお言葉をつ!!申し訳ございません!!」

八幡「いや、別にいい。俺もあいつとお前の会話を聞いていたからな。おあいこだ。」

冬香「し、しかし……」

八幡「ああー……本当に気にしなくていいぞ。俺も奴がこんなに捻じ曲がっているとは思ってなかったからな。まあ奴の言っていたことに嘘はないから安心しろ。」

冬香「そ、そうですか……しかし八幡様、私からもお1つよろしいでしょうか?」

八幡「何だ?」

冬香はかなり緊張していた。今から発する言葉は少なからず主人を否定するような言葉だからだ。

冬香「お、恐れながらも申し上げます！八幡様はもう少しお考えになるべきでした！なぜあのような方法を取られたのですか？」

八幡「……時間があればそうした。葉山の依頼が良い例だ。その日に言われてその日に解決しろなんて余程簡単なものでないと無理だ。だが……そうだな、あの時降りるべきだったのかもな。」

冬香「そうすべきだと私は考えております！聡明な八幡様であれば出来たはずです。」

八幡「その頃の俺は聡明とは思えないけどな。だがな冬香、それをもしきっていたら、俺にとって最悪のカードになっていた。何故分かるか？」

冬香「い、いえ……」

冬香には全く見当がついていなかった。自分の考えを肯定しながらも否定している八幡を見つめることしかできなかった。

八幡「それはな……此処にいるかどうか分からないからだ。」

冬香「……え？」

八幡「確かに受けないようにするのが最善だったのかもしれない。だが、もしそうしていたら、おそらく俺は六花に来てはいないだろう。それもアリだったかもしれないが、そうなったら俺は静かな学校生活を送っていたことになる。青春なんて感じることもなくな。」

八幡「だがあの選択をしたことによって、俺は此処に来られたし、大切な仲間や家族が出来た。血縁なんかよりも固い絆で結ばれた家族だ。そう考えれば、あの時の依頼を受けて良かったと俺は自信を持って言える。こうやって沢山の仲間や家族、そして最高の彼女にも巡り会えたんだからな。」

冬香「……………」

冬香（なんて……なんて心の広きお方、なんて器の大きなお方なのでしょう。私は八幡様の人生を否定してしまった。受けない方が良

かったなどと申ししてしまった。でも八幡様は受けて良かったと仰った。受けていなければ私たちには会えていない、そうお告げにもなられた。ああ……全くその通りでございます。）

冬香「八幡様。」

八幡「ん？」

冬香「八幡様の歩んでこられた道を否定するような言動を致しましたことを謝罪いたします。本当に申し訳ありませんでした。」

八幡「いいって。お前が俺のために言ってくれたのは分かってる。例えそうでなくても、俺としてはありがたい言葉だ。」

冬香（ああ……やはり貴方様はとてもお優しい。八幡様、私は八幡様により一層の主従を誓います。）

八幡（……なんかすげえ見られてるな。それと、《様》付けと、忠誠とかそういうのはやめて欲しいんだが……本人はマジだから止められないんだけど……）



## 準決勝の幕開け

シルヴィア side

今日は《王竜星武祭》3日目。早くも星武祭の準決勝だね。人数少ないから無理もないけど。

初戦は簡単すぎたけど、準決勝はそう簡単に勝たせてもらえる相手ではない。何しろ、あの星露の1番弟子の【覇軍星君】が相手だからね。油断は出来ない。八幡くんによると、彼は錬星術アルナジユミアつていう力を得ているみたい。その力の能力は星辰力を効果的に変質させて、攻撃や防御に応用する力みたい。

正直に言うと、今大会で1番侮れない相手。何故かというところ、ここで負けてしまったら決勝に……八幡くんの待つステージに行けないから。八幡くんなら余裕でネイトネフェルに勝つはず。だから私もこの準決勝は絶対に負けられない。

シルヴィア「ふう〜……」

ネイトネフェル「シルヴィア……貴女よくそんな風に落ち着いてられるわね。相手はあの【覇軍星君】よ？」

シルヴィア「そんなのじゃないよ。私だって不安だよ。星露が育てた、しかもその後八幡くんからも手解きを受けている彼に勝つ自信なんて湧いてこないよ。でも、それでも勝たなくちゃって思うんだ。だって決勝では必ず八幡くんが待ってるんだから。」

ネイトネフェル「貴女ねえ……仮にもこれからその八幡くんと戦う私に言う言葉かしら？私の負けがもう決まってるみたいじゃない。」

え？そうだけど？だって八幡くんが君に負けるはずがないじゃん。

ネイトネフェル「結局、貴女は弱点どころか、気をつけるところすら教えてくれないのね。」

シルヴィア「たった1週間やそこらで八幡くん対策をしようなんて無理な話だよ。君も知ってるでしょ？八幡くんが色々な技を使ってくるくらい。そんな相手に攻略法があつたら私だって知りたいよ。」

ネイトネフェル「……今ので分かったわ、貴女も彼の弱点を知らないのね。」

シルヴィア「1度も戦ってないしね。」

だけど、1度戦った人でも八幡くんの弱点は何処って聞いても意味はないだろうね。変えてくるんだもんね。武術だったり剣術だったり陰陽術だったり星仙術だったり……色んなスタイル持ってるんだもん！対応するこつちが疲れちゃうよ！

シルヴィア「さて、私はそろそろ行かないと。程よい緊張感を保つていかないとすぐにやられちゃいそうだから。」

そんな相手と今から戦うんだからね。

シルヴィア side out

暁彗 side

暁彗「……………宗師、本当にいいのか？」

八幡「何度もそう言ってるだろ？これは勝負なんだ。勝つ気で行かないでどうする？」

暁彗「……………しかし、相手は宗師の妃になる方だ。あまり傷つけたくはない。」

八幡「はあ………そんなの俺だって同じ気持ちだ。出来ればシルヴィの傷つくところなんて見たくない。だが星武祭に出場している以上は不可能な話だ。」

……………宗師は私よりも辛い気持ちなのだろう。であれば、こ

れ以上は野暮というものだな。

八幡「それと、その宗師っていうのやめてくれ。なんか暁彗から言われるとむず痒い。」

暁彗「……………それは今まで通りにしてほしい、という意味かな？」

八幡「ああ、そういう事だ。」

暁彗「……………了解した、比企谷八幡。」

八幡「やつぱそっちの方がいいわ。」

暁彗「……………比企谷八幡、戦ってみないと分からないが、【戦律の魔女】は強いだろうか？」

八幡「そこは分からないな。俺もシルヴィとは一度も戦ったことがないうえに、一昨日の戦いじゃあ参考にもならないからな。かといって3年前の《王竜星武祭》を調べたところで意味はあまりないだろうな。」

暁彗「……………やはりか。」

ならば警戒は解かずに攻めることにしよう。相手は梅小路冬香と同じ《魔女》だ。油断をすれば足元をすくわれる。

暁彗「……………では、行ってくる。」

八幡「おう、行つて来い。」

暁彗 side out

—————

クリステイ『皆様、お待たせ致しました!!まもなく《王竜星武祭》の準決勝です!!いや〜ようやくっていうか、あつという間に準決勝ってどうなんですかね〜?』

護藤『人数が少ないから当然でしょう。それでも悪いことばかりではありませんよ。今回の準決勝には序列4位以下がいらないですよ。』

さらにはいずれの選手も全て本戦出場経験済みで星武祭を優勝している選手が3人と、かなり豪華な選手が揃っているということになります。」

クリステイ『おお！確かに選手の出場歴を見てみれば全員本戦出場していますね！これは熱い戦いになりそうです!!では、準決勝第1試合の選手をご紹介します！界龍第七学院、武曉慧!!』

護藤『初戦は同じ学院の梅小路選手と戦い、見事勝利を収めました。新たな技術、鍊星術を身につけ成長しているので、その動きにも注目です。』

クリステイ『いやあ、無口な所がまた良いですなあ……ホラ、あの観客に見向きもしない所、シビれる!!』

護藤『ボードワンさん……』

クリステイ『冗談冗談!!分かってるってば!!じゃあ次の選手を紹介します!!男共、刮目せよ!!クインヴェール女学園、シルヴィア・リユーネハイム!!!』

護藤『（この人全然分かってない。）……ブロック戦では圧倒的な力の差を見せつけてくれましたね。そして今大会で最も美しい動きを見せている選手でもあります。リユーネハイム選手なら、武選手にも対抗出来るでしょう。』

シルヴィア「まあ、簡単には勝たせてくれる相手ではないからね。最初から全力で行くよっ!」

曉慧「……………」

クリステイ『さあ両選手、ステージへと降り立ちました。』

曉慧「……………比企谷八幡から手加減はしないようにと言われている。なので、全力で相手をさせてもらう。」

シルヴィア「その方がありがたいな。そうでもしないと八幡くんには勝てなさそうだからね。」

会話が終わると暁彗は槍を構え、シルヴィアは銃剣型煌式武装を展開した。

クリステイ『両者準備が出来たようなので、参りましょう!!』《王竜星武祭》準決勝第1試合!!』

『Start of the duel』

クリステイ『バトル・スタート!!』

## とっておきの模倣技

—————

シルヴィアと暁彗の戦いが始まって10分程経過している。現在では互角の勝負だった。暁彗の錬星術アルナジュミアで通常よりも高い攻撃力と防御力、そして体術と棍術を合わせた技でシルヴィアに隙を与えていなかった。

シルヴィアもそれに負けじと、新技などを披露しながら暁彗へと攻めている。それでも暁彗の防御力の高さに攻め切れずにいた。陽動をかけてみても、空中で移動したり棍で陽動に使った技を弾くなどをされている。

今のところはお互いに致命傷は負っていないかった。双方まだ決め手になる技を出していないというのもあるが、長引けば不利になっていくというのはどちらも同じ状況だった。どちらが早くこの状況を打開するかで勝負が見えてくるだろう。

シルヴィア（どうしよう……あの錬星術があんなに厄介な技術だったなんて思ってたよ。身体能力は元々高いのは知ってたけど、そこに攻防技術を高められたんじゃあ、ちよつと勝てる自信が無くなっちゃうよ。）

暁彗（……………今の所は優勢、か。妃殿が前回の《王竜星武祭》で使ったあの技を披露するのであれば全力で止めるが、まだ出す気配はない。ここは妃殿の出方を見るか。）

シルヴィア 「トゥルー・セリア 真実の守護曲！」  
シルヴィア 「クリスタル・ゴスペリア 結晶の福音曲！」  
シルヴィア 「ブラスカ・ロンド 疾風の輪舞曲！」  
シルヴィア 「インパクト・カノン 衝撃の追奏曲！」

シルヴィアは自身を強化する歌を歌い、陽動に使った斬撃を作り出す歌も再び歌った。少しでも暁彗に対抗するためであろう。

シルヴィア（少し星辰力が勿体無い気もするけど、出し惜しみをしたら私が先にやられちゃうからね。セロ・ホーリックス 愛の聖歌はまだ使いたくないしね。）

シルヴィア「まだ試作段階だけど、少し試してみようかな……まあ、模倣技だけど。」ボソツ

暁彗「……………もういいのか？」

シルヴィア「あ、はい。その声から察するに、やっぱり余裕なんだね。もう少し警戒してくれたら嬉しいんですけどね。」

暁彗「……………充分に警戒している。妃殿の技の中には恐ろしいものもあるからな。」

シルヴィア「そうですか……じゃあ、行きますっ!!」

この戦闘では暁彗が攻撃を仕掛けることが多かったが、今度はシルヴィアから攻めていった。身体能力を強化しているだけあつてか、かなりのスピードで暁彗に接近していた。

シルヴィアは完全に接近する前に、いくつか斬撃を放っていた。恐らく自身の注意を錯乱させるための方法だろう。そして銃も発泡しているの、斬撃と銃撃の両方が暁彗に襲い掛かっていた。

だが暁彗はそこから動こうとはしていなかった。

暁彗「<sup>はっ</sup>発っ！」

暁彗を中心に波動のようなものが広がり、斬撃と銃撃が両方かき消されてしまっていた。だがシルヴィアは足を止めず、そのまま暁彗に突っ込み剣を振った。

シルヴィア「はああああ！」

暁彗「フッ！」

ガキイイインツ!!

シルヴィア「……どっちも消しちゃうなんてすごいですね。どうやってるんですか？」

暁彗「………圧縮した星辰力を一気に外へと放出しているだけのことだ。」

シルヴィア「ちなみに八幡くんは出来るんですか？」

暁彗「………1日で会得した。」

シルヴィア（さすが八幡くん♪）

暁彗「………話をしているとはいえ、隙が多すぎる。急急如律令、爆。」

2人が鏖迫り合いをしている中、暁彗は瞬時に片手で呪符を取り出してシルヴィアに向けた。そこからは爆発が起きて2人を巻き込ん



だ。

暁彗は鍊星術のおかげか、そこまでダメージはなかった。肝心のシルヴィアは強化されているとはいえ、爆発を直撃で受けている。完全な致命傷だった。

だが、そこにシルヴィアの姿はなかった。

暁彗（……………姿が見えない？あの時確かに目の前にいたはず……………何故？）

暁彗が、観客が、実況が、解説が、誰もがシルヴィアの行方が分からなくなっていた。煙が晴れているにも関わらず、シルヴィアの姿が

何処にもないからだ。

バアンツ！

バギツ!!

暁彗「っ!!」

突然の銃声……そして何か割れた音。暁彗はすぐに分かった。自身の左胸に衝撃が起きたのを。そう、自分の校章が砕かれていたのだ。

シルヴィア『ふう〜ギリギリだったよう！罅迫り合いをしている隙にトドメを刺そうと思ってたけど、まさかあそこで爆発させるなんて思ってもなかったから急いで離れたけど、気づいてなくてよかった♪』

何処からともなく声がした。そして暁彗が立っている場所から少し離れた斜め左前に白い靄が現れて、そこからは美しい笑顔をしたシルヴィアが出てきた。

クリステイ『武暁彗、校章破壊!!勝者、シルヴィア・リユーネハイム!!!これは驚きました!!まさか透明化していたとは!!』

護藤『おそらくあの技は、界龍第七学院序列1位の比企谷八幡選手の技を模倣したものだと思います。』

クリステイ『ほう、模倣ですか?』

護藤『はい。彼の能力は影と幻を操る能力。その中の技の1つである《鏡花水月》を彼女なりにアレンジして改良させたものでしょう。』

シルヴィア（50点かなあ。八幡くんのあれは能力じゃなくて星仙術です。それと、別に改良はしてないから擬似・鏡花水月みたいなも

のだね。でも、名付けるとしたら……………《不可視の戯曲》かな。インビジブル・オペラ

暁彗「……………私の負けだ。まさか比企谷八幡と似たような形で倒されてしまうとはな。今回は剣ではなく銃か。」

シルヴィア「なんだか嬉しいです、そういう風に言われると。八幡くんとお揃いみたいです。」

暁彗「……………次の相手は恐らく比企谷八幡だろう。今回のような1手2手では通じない相手だ。心して準備に取り掛かるように進言する。」

シルヴィア「ありがとうございます。」

## 準決勝の幕開け ②

八幡 side

シルヴィは無事に勝ったか……にしても驚いたな。まさか俺の鏡花水月を模倣していたとはな……もしかしたら、他の技も模倣しているか、アレンジしているかもしれないな。こりゃ決勝は気が抜けないな。だが、シルヴィのことを気にする前に【舞神<sup>ハトリル</sup>】との試合だな。

彼女がどんな技を使うのかは知らないが、前々回の《王竜星武祭》でも見て分かるが、踊りを駆使して相手を惑わせる戦術みたいだな。相手のペースに持っていかれたらそこで終わりだな。見た所、【舞神】は接近戦しかないようだな。攻めるとしたら遠距離からの斬撃や広範囲の攻撃だな。俺の得意な武術や剣術を使えば相手の思う壺って訳だ。

八幡「しかし、遠距離からの攻撃か……陰陽術に憑霊、影との合わせ技、星仙術……まあまあ手数はあるな。あつ、そうだ。あれを出すのもいいな……もう随分と久々だしな。」

うし、戦いが始まったらやってみるか。

八幡 side out

ネイトネフェル side

……本当に勝つなんて。それもあの【神羅武双】の技を真似したって事は、彼の技も多少は使えるってことなのかしら？でも、これはありがたいわ。シルヴィアのおかげで【神羅武双】の戦い方の1つが分かったわ。もしかしたら自身の姿を消して戦うスタイルかもしれないわね。でも彼は色んな戦い方をしてくるから、どんな攻め方をするのかまだ分からない……厄介な相手だわ。

ネイトネフェル「戦術の幅が広い人の相手がこうも厄介だとは思わなかったわ。こんなふうに頭を使うことになるなんてね……」

シルヴィアは勝ったというのに控え室に戻ってこないし、色々聞きたかったのに……いえ、彼女は彼にご執心だものね、必ずしも聞けるとは限らないわね。むしろ聞けないことを前提に聞いたほうがいいのかもしれないわね。それももう遅いのだけど。

ネイトネフェル「もう時間なのね。できればもう少し欲しいのだけど、それは無駄みたいね。」

さて、会場に向かいましょう。

ネイトネフェル side out

—————

クリステイ『さて皆様!!先ほどに引き続きまして、《王竜星武祭》の準決勝第2回戦です!!この2回戦の出場者もかなりの実力者同士が互いの拳を交えながら決勝へと目指して熾烈な戦いを繰り広げようとしています!!』

護藤『どちらの選手も気合いは充分あると思いますので、先程と同様に見所満載の準決勝になると思います。今から楽しみです。』

クリステイ『では、選手のご紹介から行きましょう!!この六花にいる人間なら誰もが知っている人物!その実力、技術、パフォーマンス、教えの上手さ、歌の上手さ、男は憧れ、女も憧れる存在!!4代目【万有天羅】にして初の男の【万有天羅】!!界龍第七学院、比企谷八幡く!!!』

護藤『(もう突っ込むのも疲れたな。)ブロック戦では難なく勝利を収めた彼。ですが、ブロック戦の動きを見るからに、まだまだ何かを隠しているような感じがありますね。ここでそれを出してくれるの

か、期待が高まりますね。』

八幡「なんか途中関係ない事まで言ってたが……別に試合に影響する訳でもないからいいか。」

クリステイ『続きましてはこの選手!!その舞踊は誰もが魅了する程の腕前!今回は伏兵として星武祭の優勝を狙うぞっ!!そして何よりも……スタイル抜群!!褐色黒髪!!クインヴェール女学園、ネイトネフェルく!!』

八幡(これで確信した、あの実況絶対ふざけてんだろ。あれが素の状態だったら色々ヤバイ。)

護藤『前々回の《王竜星武祭》ではレヴォルフ黒学院の【孤毒の魔女】に敗北しましたが、今回はシード権で準決勝からスタートになりました。さて、これが吉と出るか凶と出るのかも楽しみです。』

そして八幡とネイトネフェルはステージへと飛び降りて、戦闘の準備をしていた。

ネイトヘフェル「貴方がシルヴィアの愛してやまない人物なのね。確かに良い顔をしているわね。」

八幡「そうか?俺は別に普通だと思うが?」

ネイトネフェル「一般から見ればレベルは高い方よ、あなたのルックスは。」

八幡「クインヴェールの生徒が言うんだ、あながち嘘でもないんだろうな。素直に受け取っておこう。」

クリステイ『さあでは、両者準備が完了したようなので早速参りましょう!!《王竜星武祭》準決勝第2試合!!』

『S t a r t o f t h e d u e l』

クリステイ 『バトル・スタート!!』

## 作戦勝ち

—————

ネイトネフェル「何処からでも来なさい。貴方のペース、崩してみせるわ。」

八幡「そうか？じゃあこいつのペースを狂わせることが出来たら、俺が相手になろう。急急如律令。」

八幡は式神召喚用の呪符を取り出して召喚した。煙からは八幡の式神ことシオンが大人バージョンで現れた。

シオン「もしかして、久々の実戦か？八兄？」

八幡「ああ。だが気をつけろよ、今度は人間だからな。それと、あいつは接近戦タイプで踊りを駆使しながら相手のペースを乱してくる。注意する点はそこだ。」

シオン「了解した。」

ネイトネフェル（あの子は確か……《鳳凰星武祭》のブロック2回戦で出て来た……式神、だったかしら？高火力な武器を使っていたけれど、そこまで警戒する必要は無いわね。）

シオン「大砲！<sup>ランチャー</sup>！」

シオンがそう叫ぶと、右腕の義手が勝手に構造変化を開始した。すると、たったの5秒で腕から大砲のような形に変形していた。

シオン「踊りで相手を惑わせるのなら、その踊りを見えなくさせたり、できなくすればいいだけの話だっ！せいっ!!」



シオンが左腕で投げたのは……何かが入った3つの袋だった。その中は薄く白かかっていた。

ネイトネフェル（……何よあれ？）

シオン「発射っ！」

バアン!!バアン!!バアン!!

3つの弾は袋に命中した。そこからは何故か、白い煙が大量に出てきた。

シオン「狙撃<sup>スナイプ</sup>！」

シオンは再び右腕を変形させた。今度はスナイパーライフルのような、銃身が長くスコープが付いていた。

シオン「さて、始めようか。」

ネイトネフェル「……何をしたかはよく分からないけれど、貴方を見つけて倒せばいいだけの話よ！」

ネイトネフェル（踊りで相手のペースを乱すことができなくなった以上、相手に急接近すればいいだけの話だわ。そこで彼を叩く！）

ネイトネフェルはシオンのいた方へと走って行く。だが、白い煙のようなものが霧のような状態になっているため、視界は最悪だった。気のせいかな、煙の濃さも増しているような感じもある。

ネイトネフェル「くっ！何処に行っただの!？」

バシユッ！

ネイトネフェル「うつ!？」

ネイトネフェルは突然の痛みに襲われた。右肩を撃たれてしまったのだ。

シオン『言っておくが、俺はお前の居場所がすぐに分かる。なんでと聞かれても答えてはやらんぞ。答えを教えてやる程、俺は優しくないからな。だから動くことを勧める。だからといって状況が良くなるかどうかは分からんがな。』

シオンはこの深い霧のような状況で位置が正確に分かる。これはとてつもないハンデだった。そして、今のネイトネフェルにはシオンの忠告が挑発に聞こえていた。

ネイトネフェル「……やってやろうじゃない!」

――10分後――

その後、ネイトネフェルは深い霧の中を走り続けながらシオンを探していたが、見つけるどころか霧は晴れず、銃撃される一方だった。そしてようやくあることに気づいた。だが気付いた時には遅かった。

ネイトネフェル（はあ……はあ……身体が動かなくなってきたわ……疲れたからかしら?……いえ違うわ、むしろ体力には自信があるもの。それよりもさつきと比べて気温が低くないかしら? 寒いわ………寒い?）

ネイトネフェル「貴方、まさかこのステージの気温を下げているの!？」

シオン『一応正解だな。だがこの霧は視界を悪くさせるためでもあ

るけどな。俺は最初から持久戦目的だったんだよ。お前には辛いだろうな。そんな格好なんだ、寒さには充分こたえてるだろうな。おまけに受けたばかりの傷は凍傷になっている状態だ。動かす度に痛いだろう?』

ネイトネフェル「くうつ!!」

明らかに作戦勝ちだった。こんな状態ではいくら標的を探そうにも、その前に自分がバテてしまう。

ネイトネフェル「…………私の、負けだわ。」

クリステイ『ネイトネフェル、投降!!<sup>リザイン</sup>勝者、比企谷八幡く!!! いやくお見事な作戦でしたね。しかし、あの霧はなんだったのでしょうか?』

護藤『自分にも分かりません。平温状態で気温を下げる気体なんて聞いた事がありませんし…………ん? 比企谷選手から今、何かが送られてきました。『今回シオンが使ったのはドライアイスと熱湯です。熱湯にドライアイスを接触させるとドライアイスは水蒸気になり、白い煙となった水蒸気を出します。ドライアイス自体温度が低いものなので気化しても低いままなので、それを大量に気化させたら気温も下がっていくという仕組みです。』との事でした。成る程、今回は相手の動きを見えなくさせるだけでなく、本当の意味での持久戦でもあったようです!!これはお見事な采配です!!』

クリステイ『あゝ…………な、成る程!それはお見事です!!さあ次の対戦カードはこれで決定致しました!!皆さんもご存知の通り、六花最強の夫婦対決です!!絶対見逃すなあ!!!』

八幡（まだ夫婦じゃねえよ。）

### 3つ目の願いは？

八幡 side

今日はシオンに任せっきりだったから俺はそんなに苦労はしなかった。ていうかシオンの奴、よくドライアイスなんて持ってたな。あの大砲から出てきたのも砲弾に包まれた熱湯だったとは……俺も驚いたぞ。そして何よりも、試合が見えないという理由での観客からのブーイング。いや、今回俺悪くないよね。大丈夫だよね!!

まあそれはともかく、これで決勝には進めた。最後の相手は……シルヴィか。あの試合にも驚かされたもんだ。いつの間について思ったし、何よりもかなり完成度高かったしな。なんか決勝が楽しみになってきた。

ガチャッ

幸い明日は3位決定戦だから、俺たちは1日休める。この休みは有効的に使わないとな。勿論、相手を研究するって意味ではないぞ？シルヴィと戦う前の日なんだ、楽しまないと損、だろ？

八幡「ただいま。」

シルヴィア「おかえり〜八幡くんっ!」ダキッ!

おかえりの挨拶と共に抱きついてくる俺の彼女。これも慣れた日常だ。

シルヴィア「そうそう! 決勝進出おめでとう!」

八幡「それはこっちのセリフでもある。決勝進出、おめでとさん。」  
シルヴィア「やっとなと君と戦えるよ……楽しみだなあ。」

八幡「俺もだ。ようやくシルヴィと戦える。最初で最後の戦いだか

らな、負けねえぞ?」

シルヴィア「私だって八幡くんに負ける気なんて毛頭ないよ!」

抱き合いながら互いの顔を見つめ合いながら、強気の言葉をぶつけ合っていた。

シルヴィア「……………ふふふ♪今こんな事言っても仕方ないよね。八幡くん、ご飯にしよう♪」

八幡「ああ、そうするか。」

2人は漸く玄関から動き出し、奥へと進んでいった。

——居間——

いつものように、帰りは俺が遅くなるからシルヴィが晩飯の用意をしてくれている。俺も手伝おうとは思ってるんだが、シルヴィが大分前に『だ、旦那様は座って待ってるのが、日本でよくあるみたいだから、座って待ってていいよ／＼』って言ってたから待ってることにしたわけだ。

その間俺はニュースを見て待ってたりするのだが、そのニュースが自分たちのものともなれば、あまり寛げない。

その見出しがどれもこんなだからだ。

決勝は六花最強の夫婦対決!!

最後の決戦は六花一の彼氏彼女!!

新婚夫婦になる前の最後の仕事か!?

学園トップの最強夫婦!!

最後の対決は夫婦初の仲良し喧嘩か!?!

何度も記者会見で言ってるが、俺たちはまだ夫婦じゃねえ!!何度言ったらわかるんだよ!!え、何?それとも分からない?冗談のつもり

ですか？その冗談が俺たちにとっては赤面ものだってなぜ分からない!!?

八幡「いや、もう慣れたけどさ……………」

シルヴィア「ん？何が？」

八幡「ああ…………最新の記事だ。世間では俺たち、もう夫婦になっているみたいだぞ。」

シルヴィア「ああゝそれ私も見た。皆ホントにせっかちだね。結婚式まで待てないのかな？」

待つ器量があるのなら、記事にこんなこと書いてないと思う。それとも暇なのかな？

シルヴィア「そういえばさ八幡くん、あの白い煙ってドライアイスとお湯で作ったんだよね？」

八幡「ん？ああ正解だ。」

シルヴィア「解説が言ってたけど、ドライアイス自体が温度が低いままだから、大量に気化させたら温度が下がっていくって言ってたけど、八幡くんは平気だったの？」

八幡「…………ほら、我慢って結構大事なことだと思わないか？鍛錬でもそうだし、欲しいものを待つ時とか。」

シルヴィア「…………八幡くんも寒かったんだ。」

だって仕方ねえじゃん！あの中で体温保つ方法なんて、俺には朱雀纏うくらいしかないし！でもそれやったら一発でバレるし！なら明鏡止水で姿見えなくして寒いのが堪えるしかないだろ！

シルヴィア「もおゝ八幡くんもおバカさんなんだから。今冬だよ？それなのにステージ内も寒くしてどうするのさ？」

八幡「ごめんなさい。でも言い訳をするとだ、あの作戦考えたの俺じゃなくてシオンだし。というか俺知らなかったし。」

シルヴィア「え？八幡くんが考えたわけじゃないの？」

八幡「違うぞ。」

シルヴィア「ゴ、ゴメンね？私てつきり八幡くんが考えた作戦かと思ってた……」

八幡「気にすんな。勘違いは誰にだってある。じゃあ罪滅ぼしとして、あったかい飯を用意してくれ。」

シルヴィア「はい、分かりましたよう♪」

その後にとってきてくれたシルヴィの料理はホツカホカのクリームシチューだった。これまた美味いんだよねえ。

――夕食後――

八幡「そういや今更だが、シルヴィは優勝したらどんな願いを要求するつもりなんだ？」

シルヴィア「それがね、考えても思いつかなくて。だって叶えた事なんてもう叶えちゃってるし、欲しいものもあまりないから。八幡くんは？」

八幡「実を言うと俺もでな……何も思いつかない。思いつかない理由はシルヴィと同じだけだな。」

シルヴィア「私たちが叶えちゃったから、だよな？」

八幡「いつそのこと、どっかに別荘でも作るか？」

シルヴィア「それいつ行くのさ？」

八幡「冗談だよ。俺は将来、シルヴィと一緒に経営する飲食店でのんびり暮らしていければそれで良い。そういえば設計図見たか？」

シルヴィア「見た見た！アレなら回せそうだね。場合によっては大変になりそうだけだね。」

八幡「その時は人手を増やせばいい。幸いにも、うちで働いてくれる奴が1人いるからな。」

シルヴィア「それってオーフェリアさんの事でしょう？」

八幡「まあな。あいつなら良いだろう？」

シルヴィア「うん、私も賛成。」

将来の夢が固まりつつあるが、3つ目の願いどうしよっか？



真実を告げるも…………

雪乃 side

雪乃「…………」

由比ヶ浜「でさ、その女なんて言ったと思う!? ヒツキーが優しいって言ったんだよ!? 何言ってるのかホントに分かんなかったよ!!」

雪乃「そ、そう…………」

昨日は彼女が帰ってくるのを待てずに寝てしまったせいか、今日の時間に由比ヶ浜さんの愚痴を聞かされている状況になっているわ。それにしても、さつきから聞いてみると、比企谷くんと梅小路さんの悪口しか言っていないわね、由比ヶ浜さんは。私も半年前はこんな感じだったのかしら? だとしたらとても醜いわ。意味合いは少し違うけれど、醜女しこめというのはこういう時に使う言葉なのかもしれないわ。

でも、もう正直に話した方がいいのかもしれないわ。彼女や私のためにも。

雪乃「……由比ヶ浜さん、私からもいいかしら?」

由比ヶ浜「え? 何?」

雪乃「由比ヶ浜さんは比企谷くんの事、どう思っているの? 私は貴女が比企谷くんに好意を抱いているものと踏んでいたのだけど?」

由比ヶ浜「うえ? 今も好きだよ? だからシルヴィアさんに恋人を代わるように言ったの。そしたら答える前に今話した女が出てきたんだ。」

雪乃「比企谷くんとリユースハイムさんは付き合ってるのよ? そう簡単に了承してくれるわけじゃないじゃない。いえ、するわけがないじゃない。」

由比ヶ浜「ううゝやっぱそっかあ……シルヴィアさんよりも私の方

が先にヒツキーの事好きになったのに、横取りとか本当にあり得ないよ。」

雪乃「因みにだけど、由比ヶ浜さんは比企谷くんを恋人にしたらどうしたいの？」

由比ヶ浜「そうだね、やっぱり他の女の人に目移りしないように何処かに監禁するかな。だってヒツキーって周りに女の子たくさんいるから。」

……由比ヶ浜さん、それはもう恋心ではないわ。貴女のそれはただの所有欲、支配欲だわ。

もうダメだわ……私はもう、貴女と友達でいられる自信がないわ。

雪乃「……んんっ！由比ヶ浜さん、貴女に言わなくちゃいけないことがあるの。」

由比ヶ浜「え？なにになに？」

雪乃「実は私……」

そこから私はこの《王竜星武祭》の始まる半年前くらい、つまりは比企谷くんが序列1位になった時の私の心情や感情を含めた内容を今に至るまで全て話した。勿論、この星武祭で比企谷くんと会ったことも洗いざらい話した。

由比ヶ浜「ゆ、ゆきのん？冗談だよな？だって……ゆきのんだってあんなにヒツキーの事を恨んでたじゃん。」

雪乃「……そうね、それは事実だわ。消えない、そして恥ずかしくて情けない頃の私。でも彼が序列1位の座を勝ち取った時のニュースを見て思ったの。変わっていかないのはどっち？あの頃から成長していかないのは？結論はすぐに出たわ。変わってないのも成長していかないのも、私たちだという事が。」

由比ヶ浜「な、何言って……」

雪乃「だってそうじゃない。私たちが彼を恨んで来た時間、あまり

にも長過ぎるわ。そして無駄で無様な日々だった。今まで過ごしてきた六花の時間で成長したと思えるような事はあったかしら？ 私はつい最近できたくらいよ。由比ヶ浜さんはあるかしら？」

由比ヶ浜「そ、それは……………」

やっぱりね、何も答えられない。それもそのはずよ。あえてこういう言い方をするけれど、何もしてないもの。

雪乃「私は比企谷くんに会ってこれまでの事を謝罪したわ。勿論、許してもらおうなんて思ってもなかったし、それならそれで別に良かったわ。ただ想いを伝えたかっただけだから。でも、彼はこんな私を許してくれたわ。彼が優しい、それは正解ね。」

由比ヶ浜「謝罪？何それ？ゆきのん謝ったの!？」

雪乃「ええ、そうよ。」

由比ヶ浜「何でゆきのんが謝るの!？謝るのはヒツキーの方じゃない!？」

雪乃「違うわ由比ヶ浜さん。間違っていたのは私たちの方よ。私たちは彼に頼り過ぎたのよ。文化祭といい修学旅行といい、私たちで成し遂げていないのよ。そしてそれを彼に押し付けてしまった。その結果、彼によつて真実が校内に広まって私たちは彼に逆恨みをしながら2年半も時間を無駄にしたのよ。由比ヶ浜さんはそれでも彼が、比企谷くんが悪いと言い切れるのかしら？」

由比ヶ浜「私はどう考えてもヒツキーが悪いと思うしっ!!男なら女の子に優しくするべきだし!!それにあのノートを書いてなければ、こんな事にはなつてなかったのに!!」

雪乃「そのノートを公表したのは私たちよ?彼の痛みをほんの少し受けただけなのよ?」

由比ヶ浜「あれの何処がほんの少しなの!?!学校で毎日悪口言われるし、嫌がらせもさせられてきた。その何処が少しなの!?!」

雪乃「比企谷くんはこれを一人で耐えてきたのよ。相談する相手なんて誰もいない、ずっと1人だった。それに比べれば少しだと思うわ。」

由比ヶ浜「全然少しじゃない!!ねえゆきのん、なんで今更ヒツキーに肩入れするの?」

雪乃「比企谷くんの言っている事が正論で、貴女の言っている事が極論だからよ。分からないかしら?」

由比ヶ浜「分かるわけないじゃん!!ヒツキーが正しいわけないしっ!!」

雪乃「……………そう。なら私から言うことは何もないわ。それじゃ、さようなら。」

由比ヶ浜「え？何処いくの？」

雪乃「新しい部屋に引っ越す事になったの。だから今日が最後という事になるわ。」

もう彼女の声は聞きたくないわ。なんだか惨めになってくるもの。

雪乃「じゃあ、さようなら。」

私は由比ヶ浜さんの言葉を聞く前に部屋を出た。

雪乃「はあ……………友人との縁は切りたくない、という事かしらね。彼女との関係を切れなかったわ。でも、もう彼女とは関わり合わない事にしましょう。」

……………でも、なんだか寂しくなるわね。

## ※夫婦の会話

シルヴィア side

準決勝が終わって、今日は《王竜星武祭》の4日目。今日の内容としては、3位決定戦。バトルとしてはこれくらいなんだけど、人数が少ないから選手の情報を優先的に流しながら時間を潰してるから暇を与えない作戦だと思うよ。

で・も♪今日の私たちは完全にオフ！だから明日の決勝の前祝いにデートをすることにしました！だって《鳳凰星武祭》や《獅鷲星武祭》でも必ずデートはしてたから、今回だけ無しにするっていうのは、やっぱりどうかなあ〜っと思っただけなんです。皆もそう思うよね！?

まあそんなわけで、私たちはまだベッドの中にいるんだけど、皆さんも知ってると思うけど、八幡くん早起きだから寝顔を見れるのは稀です。今はその寝顔を見ながら癒されています。普段は物凄くキリツとしててカッコいいのに、寝てる時はなんか可愛いんだよね〜。

シルヴィア「少しだけイタズラしたくなっちゃうんだよねあ。」

でもそんな事したら八幡くん起きちゃうからできないんだよねえ〜。意外と八幡くんって敏感だから。まるで猫みたいに。あつ、カマクラくんとはそういうところが似てるかもっ！

シルヴィア「でも、こうやって一緒に居るだけでも幸せだなあ。キミと一緒にいる時間はいつだって楽しくて、嬉しくて、幸せ……………結婚したらどうなんだろうね／＼／」

八幡「きつと今よりも幸せになるんじゃないか？」

シルヴィア「えっ!？」

八幡「おはようシルヴィ。」

シルヴィア「お、おはよう……い、いつから？」

八幡「たった今だ。聞いてたのは本当に今のだけだから安心しろ。」

シルヴィア「うう……どうせならその前に起きて欲しかったよお  
／＼／＼」

1 番恥ずかしいセリフを聞かされるなんてえ／＼／

八幡「でもそうだろ？結婚したら今よりも幸せになると俺は思う。結婚して、学院を卒業して、料理資格を取ってから店開いて、2人で店を切り盛りして、暫くしたら子供も出来て、普通の家族になる。それからジジババになるまで、いや、死ぬまで一緒にいるんだ。ちよつと先走り過ぎた話だが、結婚すればこれが普通になってくる。まあ一緒に暮らしている辺りは、もうクリアしてるけどな。」

シルヴィア「……………そうだね。」

うん、本当にその通りだよ。八幡くん、ずっと一緒にいようね。

――30分後――

八幡「なあ、デートするのはいいが、行く当てはあるのか？言っちゃあ悪いが、俺たちもう殆ど行き尽くしたろ？他にあるといえば歓楽街くらいだかま、今行く時間じゃないしな。」

シルヴィア「そうだなあ……確かに行くところはないねえ。私も何処に行つてないのかって思うくらいだよ。それくらいこの街を探索したって事だね。」

八幡「俺は別に朝からでも構わないが、昼食からスタートするってのも1つの手だと思うぞ。」

成る程、朝は2人でのんびり過ごしてお昼ご飯と一緒にデートをスタートするって事かあ。うん、今回はそれにしよう！

シルヴィア「じゃあお昼からスタートにしようか。あつ、ランチについては良いお店があるから期待しててね♪」

八幡「期待してるぞ。あつ、そろそろだからバター出しとくな。」  
シルヴィア「おねがうい。あつ、それからこっちにお醤油持ってきて。」

ちなみに今は、朝食を2人で作っている最中です。休日には2人で作るようにしてるんだ。これも長年……といってもまだ2年くらいだけど習慣になってるから、今みたいに言わなくても材料で調味料が分かる時もある。

まあ簡単に作ったものだからそんなに時間は掛かってない。作ったのはトーストで焼いたパンにバターを塗ったもの、目玉焼きとソーセージ、ミニサラダ、そして牛乳。ハシル朝特製メニューです♪

……何言ってるんだらう？

八幡「じゃ、食べるか。いただきます。」  
シルヴィア「いただきます♪」



## 六花街へ

八幡 side

午前中は家の中でゆつくりと過ごしていた俺たち。午後からは外に出かける予定と決めていたので、今現在は外に出る準備をしている。といっても準備する事なんて全く無いんだがな。さつき昼飯を済ませたばかりなので、少しだけゆつくりしても良いとは思ったのだが、シルヴィは早く行きたいみたいだったから食べたらずすぐ出ることにしたのだ。

シルヴィア「いつも思うんだけど、一緒にタイミングで外に出るってなんか良いと思わない？」

八幡「あまり意識してなかったから俺からはなんとも言えないな……何かあったのか？」

シルヴィア「特に何かがあるってわけじゃないんだけど、私も今思った事なんだ。なんか良いなあって。」

八幡「突拍子も無いとは思ったが、思いつきだったのか……だが、確かに悪くはないな。」

個人的には、『いつてらっしゃい』と『行ってきます』の挨拶を交わすやり取りも中々良いと思うけどな。

八幡「そんじゃ行くか。」

シルヴィア「うん♪」

俺たちは安全地帯である家から出て、危険地帯である六花の外へと足を踏み入れたのであった。

——外縁居住区——

さて、目的もなく街をぶらつく事になっている俺たちだが、出かけたら必ずする事、それは手を繋ぐことだ。偶にシルヴィが腕に抱き着く事もあるが、大抵は手を繋ぐ事だ。もうこれは俺たちの日常といっている時もある。買い物に行くときも学園に行く時も家でのんびりしている時も、まだまだあるがかなりあるので省略するが、それくらいの頻度で手を繋ぐことが多い。

まあその事もあつてか、今ではもうこの辺りに住んでる人には知られてるっばいけどな。

「あつ、比企谷さんにリユースハイムさん、こんにちは。お出掛けですか?」

シルヴィア「はい。決勝の前祝いみたいなもので。」

「そうなんですか……2人で決勝ですもんね。応援してます、どちらも頑張つて下さいね。」

八幡「ありがとうございます。」

「おやまあ、今話題の新婚さんかい?」

八幡「あはは……まだ結婚はしてないんですが……そうなるみたいです。」

「そうなのかい?今の記者さんは嘘つきだねえ。でも、2人の雰囲気はもう新婚さんみたいだよ?」

シルヴィア「あはは……／＼／＼やった♪」

「2人共、決勝戦頑張つてね。」

「ありがとうございます。」

この辺りの人たちは気軽に話し掛けて来てくれる上に、俺たちに必要以上に迫って来ないから凄く助かる。そうでない人はチラチラ見たり、後について来たり、最悪な場合だと家までついて来ようとした

人もいたくらいだ。(まあ俺が追い払ったがな。)

だからああいう人たちは俺たちにとってかなりいい人を感じる。気を遣わせているのかもしれないから言います。毎度ありがとうございます。

シルヴィア「?どうしたの八幡くん？」

八幡「いや、ちよつと感謝の言葉を心の中で呟いただけだ。特に何も無いから安心しろ。」

シルヴィア「う、うん、分かった。」

その後も何人かと軽い話をしたが、話はすぐに終わって最後に『決勝頑張つて。』と有難い言葉を頂いた。

――商業エリア――

ガヤガヤ……

八幡「やつぱ外からも来てる人が多いから賑わってるな。星武祭開催中は商業エリアの人たちも大忙しだな。」

シルヴィア「そうだね。特にお土産屋さんなんて毎年新しいお土産とか作ってるんじゃないかな?例えば八幡くんのコスプレとか。」

八幡「おい、なんで俺が出てくる?」

シルヴィア「だって今回の星武祭の主役は八幡くんじゃん。その人のグッズを出さないでどうするのさ。」

八幡「いや、確かに一理あるが、そんな簡単に……」

――限定品!ここしかない!!――

比企谷八幡&シルヴィア・リユ―ネハイムのコスプレ!!これで君も序列1位だ!!

お買い求めはお早めに!!それぞれ10着です!!

お値段25,000円!!

比企谷八幡 残り3着!!

シルヴィア・リユースハイム 残り1着!!

---

.....

シルヴィア「ホ、ホントに売ってたね……」

八幡「ああ……売ってあるな。」

シルヴィア「と、取り敢えず見て回ろうよ!買うまではいかなくても、見るだけでも楽しめるしね!」

八幡「よし……シルヴィのグッズ見つけまくって買い占めてやる。」

シルヴィア「それはやめて欲しいかな。」

八幡「安心しろ、冗談だ。俺は本物がいればそれで充分だから。」

シルヴィア「も、もお／＼／＼」ダキッ!

八幡「嫌だったか?」

シルヴィア「そんな訳ないよ。すっごく嬉しい。」

グッズがあるのは予想していたが、まさかコスプレまで用意していたとはな。しかし、ここにいると返って目立つただけだな。早く動か

八幡「じゃあ行くか。」

シルヴィア「うん♪」

お買い物？

シルヴィア side

ふう〜凄く……………今日は疲れたなあ……あっ!!そういう意味じゃないからね!?別に八幡くんというのが疲れたとか、デートを否定している意味じゃないからね!私が言ってる意味は、デートをしている最中に話しかけてくる六花の住人や観光客、六花外の企業の人たちその他大勢の人たちから声を掛けられたから。あれはもうデートどころじゃなかったよ……………

今は私たちが最近よく行く喫茶店でお茶をしながら休憩している。あれだけの人数に話しかけられたらこんな短い外出時間でも休憩したくなるよ。八幡くんもやっぱり気疲れしてるみたい。こうやって見ても分かるくらいだから。(君にしか分かりません。)

八幡「今日はデートどころじゃなかったな。どこかしこも観光客だらけでサインが欲しいやら握手をしてくれやら、写真を撮って欲しいやら、番組に出て欲しいやらでイベントやらされてる気分だった。」  
シルヴィア「確かに、私たち2人でいる時間が凄く少なかったよね。」

八幡「全くだ。シルヴィ、予定では買い物して帰る事になってるが、どうする?」

シルヴィア「私はスーパーの中なら安全だと思うよ。だって六花に来てまで料理をする人って流石にいないと思うしね。」

八幡「……それもそうか。なら普通に買い物して帰るか。スーパーの中でもサインを強請るような輩がいないことを願うか。」

……………八幡くん、そんなに疲れたんだね。私もそうだけど、2度3度だけじゃなれないからね、サインとか握手とかは。

――スーパー内――

シルヴィア「思った通り、観光客は少ないね。」

八幡「そうだな、これなら安心だ。」

シルヴィア「買うのどうしよつか？ 今家に足りないのは調味料とかその辺りだけど、食材では卵とお肉がちよつとなくなりそうだったよ。」

八幡「ならここで買うのは調味料と卵にするか。肉は帰りにおつちやんのところにも行けばいいだろ。スーパーに売ってる奴よりも多くて値段もお手頃だしな。」

シルヴィア「さすが八幡くん！ 2年半前から料理を続けてきているだけはあるね！ ちゃんと値段も見てるんだ。」

八幡「残飯処理係兼食費泥棒がウチには今3人居るからな。1人は卒業したけど。そのせいもあってか、スーパーのチラシやらを見る癖がついちまったんだよ。」

殆どその3人のせいなんだね……

「おつ、八幡ちゃんにシルヴィアちゃんじゃないの！ 今日も2人で共同作業かい？」

八幡「はい。別に1人で来る理由もないので。」

「前までは1人だったろうに。」

八幡「今は嫁さん（仮）がいるので。」

「はいはい」馳走様。式には呼んでおくれよ？」

八幡「気が早いです。」

シルヴィア「あはは……」

「今日は少ないんだね？ 家にまだ食材あるのかい？」

シルヴィア「はい。調味料が不足気味だったのでそれを買い足すと、卵とお肉も買っておこうと思って。お肉は帰りの道にもあるの。」

「そうなのかい？ じゃあ2人は明日決勝だからね。ここはおばさんの

奢りにしといてあげるよ!」

八幡「い、いや、悪いですよ。」

シルヴィア「そ、そうですよ!」

「いいんだよ。私がしたいんだから。その代わり、今後とも当店を最前ね。」

2人「……………ありがとうございます。」

ここのレジのおばさん、いつも何かと言っては割引してくれるけど、タダにしてくれるなんて……………少し悪い気もするけど、お言葉に甘えておこうかな。

——精肉店前——

八幡「…………どの肉にする?」

シルヴィア「ううん……………そこまでは考えてなかったな。卵を買ったから…………親子丼を作るイメージ?」

八幡「じゃあ鶏肉か?」

シルヴィア「かなあ?」

「坊主、嬢ちゃん、そういう時はこのスペシャル希少部位詰め合わせがオススメだぜ!」

私たちがお店の前にあるお肉の部位の看板でにらめっこをしてたら、店長さんが来てくれた。片方の手には既にビニールに入れられているお肉があった。買わせる気満々かな?

八幡「ども。でも俺たち、そこまで贅沢する気ないっすよ?」

「いいんだよ、こいつはタダだ。持ってけ。」

シルヴィア「ええ!?でもこれって希少なんですよね?そんなのタダってダメですよ!」

「そうか?弱ったなあ……………そうでないと、引取先がもういないんだがなあ。何処かにこいつを貰ってくれるラブラブな新婚夫婦はいな

いもんかねえ？」チラチラ

………凄くこつちをチラチラしてる。で、でも私たち新婚夫婦じゃないもん！まだ彼氏と彼女だもん！一応現時点では、八幡くんは婚約者だけど／／／

八幡「引き取り先がないんじゃないか、シルヴィア？」

シルヴィア「でも悪いよ………」

「ああー気にしないでいいんだって！こいつはもうさよならの予定だったんだよ。（本当は3日前来たばかりだ！）丁度いいタイミングに新婚夫婦が看板とにらめっこしてたから譲ってやろうと思っただけだよ。」

シルヴィア「……じゃあ、お言葉に甘えて。すみません、こんな高そうなの………」

「いいって事よ！今後ともヨロシクな！」

その後も八百屋さんの野菜と果物、パン屋さんから詰め合わせをこねまたタダで貰ってしまった。皆もうすぐ処分するって言ってたけど、絶対最近入荷したのとか、お昼に焼いたばかりのものだね。



## 最終日前夜

八幡 side

さて、ただ調味料と肉の買い物をするだけだったんだが、いつの間にか両手にはそれなりに量が入ったビニールが握られていた。買った……というよりも、貰った食材はというと……

・塩胡椒、砂糖、ケチャップなどの調味料

・希少部位のお肉詰め合わせ（おっちゃん曰く近々処分する予定だったもの……らしい。ちなみに牛。）

・おばちゃん曰く1週間後に処分する予定だった野菜と果物……らしい。

・パン。なんの偏見もないパン。でも昼焼いた焼きたてみたいだ。

かなりもらっちゃってるな……いや、ありがたい事なんだが、大丈夫か？特に肉屋のおっちゃん。

シルヴィア「よいしょつと。ふう……随分たくさんもらっちゃったね。」

八幡「ああ。これで作れる範囲は広がったが、何作ろうか迷うな。」  
シルヴィア「ここはやっぱりカツ丼かな？」

八幡「受験に勝つじやあるまいし、無難なのはやめとこうぜ。それに俺たち2人がカツ食ったとしたら、片方は大丈夫だが、片方はアウトだろ。」

シルヴィア「あつ、確かに。うん、やめておこつか。じゃあ何作ろう？」

それなんだよなあ……こんだけあると何作ろうかって悩むんだよなあ。しかも肉も肉で希少部位だからやすやすと手を付けられない

のが困るんだよ。いやあ……どうするか。

シルヴィア「ねえ、もう普通にしない？その方が手間もかからないし、考えなくても済むしね。どう？そうしない？」

八幡「普通ねえ……それが良いかもな。うし、じゃあやるか。シルヴィは何がよいと思う？俺はビーフシチューがいいと思うが……折角の牛肉と野菜なんだ、早速使わないか？」

シルヴィア「おお、いいね！そうしょっか！」

八幡「よし、んじや早速作ろうか。シルヴィはシチューを準備してくれ。俺は肉と野菜を切るから。」

シルヴィア「オツケー！」

――1時間後――

シルヴィア「うん、ジャガイモも良い感じに柔らかい。八幡くん出来たよー。」

八幡「おう。こっちもパン切りそろえておいたぞ。じゃあ盛り付けて食べようか。」

その後、早速食べようとしたんだが、シチューは出来立てだったわけだ。分かってくれるよな？熱々だったんだよ！俺もシルヴィも同時に掛け声かけて食べたが、同時に水飲んだからな。そして同時に飲み込んで同時に水を置いた。ここまで息が合うとは思わなかった。

そして時間は過ぎて……

ワシヤワシヤ

シルヴィア「何処か痒いところはない？」

八幡「ああ、大丈夫だ。気持ち良い。」

シルヴィア「そう？ありがとう♪」

八幡「終わったら次は俺がやる。シャワーで流したら言ってくれ。」  
シルヴィア「はい。」

突然のバスタイムです。

多分疑問に思ってる人もいると思うが、前と比べて慣れてるって思ってるだろ？そりゃ1週間に2〜3回一緒に入っていれば慣れるもんだ。流石に密着されたらヤバイけど。

シルヴィア「……………八幡くん。」

八幡「ん？」

シルヴィア「八幡くんはさ、次のライブとか出たいって思った事ない？」

八幡「どうしたんだ急に？」

シルヴィア「ううん。別になんでもないんだけど、もう2年くらい八幡くんとライブやってないんだなあって思うとき、一緒に歌いたいって気持ちが出てくるんだよね。カラオケじゃなくてライブで。」

八幡「ライブかあ……………確かにやってないな。やったといえばクインヴェールの疑似ライブ以来なんだよな。」

シルヴィア「それを含めたら八幡くんは3回ライブやってるんだよ

ね。最後に……というよりは、私のアイドル引退と同時に歌ってみる気はないかなあつて思つてさ。」

アイドル引退にかあ……なんか少し皮肉な気もするな。引退に俺も歌うつて。いや、最後つて意味ではいいのかも知らないが。俺もシルヴィ以外の奴とライブする気なんてないし。

八幡「気が乗ったら、つて言つたらどうする？」

シルヴィア「それならそれでいいよ。その代わり、特等席で見てもらうことになるけどね。」

八幡「なんとなく言うとは思つていた。でもそうだな……シルヴィが正式な発表をするまではいい曲を見つけておくとするか。」

シルヴィア「うん、判断はその時の八幡くんに任せるから。」

八幡「変な答えだけはするなつて未来の俺に言つてやりたいな。」

まあ、するとは思わないが。

シルヴィア「ふふふっ♪あつ、八幡くんシャワーかけるよ。」

八幡「おぉー頼む。」

その後は俺がシルヴィの背中を流してから湯に浸かった。当たり前のことだが隣り合わせになっている。2人くらいなら余裕で入れる浴槽だから、これくらいは普通だ。まあもう1人なんて事はないけどな。(過去に1度あつたけどな。まあ水着だからセーフだろう。)

――21時前――

八幡「……シルヴィ、今日は……」

シルヴィア「うん。私も君と同じだよ。」

俺はシルヴィと唇を重ねながらベッドへと倒れた。

シルヴィア「ん……………ん……………／／／」

八幡「……………ん……………／／／」

口を離せば、次はさらに濃厚な口付けを交わす。慣れた、というわけではないが、俺とシルヴィがこの状態でキスをする時は必ずこうなる。

シルヴィア「んんう……………ちゅっ……………ちゅう……………ん……………ちゅうう……………ぶはあ……………／／／／／」

八幡「はあ……………はあ……………シルヴィ／／／」

シルヴィア「八幡くん……………キて。今日もそのままでもいいから。君という存在を私にください。私はもういつでもいいから／／／／／」

夏では紫のネグリジエを着ていたシルヴィだが、冬になると青色の長袖パジャマを着ている。そのパジャマのボタンを上から外して、下のパジャマも脱いだ。

そして俺もパジャマを脱いで、お互いに生まれた時の姿になりなが

ら見つめ合っていた。

シルヴィア「……八幡くん、今夜は君をいっぱい感じさせてね？」

八幡「……………ああ、勿論だ。思い切り行くからな？」

シルヴィア「うん。」

その夜、若いカップルの男女、美しく可愛らしい女性と逞しく雄々しい男性がベッドの上で1つになった。

## 2つの霊

八幡 side

八幡「……どうだ？少しはお前に見合うだけの实力はついてると思うが？」

???「……及第点といったところだな。まだ余を掌握するには足らぬが、余を纏つても問題はないくらいにはなったようだな。」

八幡「でないとお前をただ閉じ込めておくだけになるからな。そういうことはあまりしたくないしな。」

???「ならばお主が力を全て開放すれば良いだけの話。だがそれでは意味がない。お主がどれだけの力を身につけられるか、待っていたのだ。これは前にも言ったな。」

八幡「ああ、言われたな。」

突然だが、俺は今俺の中に眠っているという神と対話している。姿はまだ見えない。おぼろげだが、恐らくは動物が神格化したものだと思う。

???「ところで、お前は現世のあの女とまた身体を交わせたようだな？」

八幡「……だから何だよ？」

???「お前と身体を合わせた事で霊力が高まっている。そうだな、今まであの女の霊力は滲み出る程度だったが、今日の2回目からは身体から溢れ出すくらいに強まっていた。あの女、化けなければいいが……」

八幡「化けても化けなくてもどっちでもいい。俺は全力の……いや、本気のシルヴィと戦うだけだからな。シルヴィが強くなってくれるのなら願ったりだ。」

???「……フン、とんだ依り代だな。」

シルヴィの霊力が高まつてゐつつつても、シルヴィって霊的な攻撃とか事象改変つて出来たっけ？

八幡 side out  
シルヴィア side

シルヴィア「……………」

??? 『ふふふ、緊張しているのかしら？ 安心しなさい、取って食べるわけじゃないのだから。』

えーっと、夢なのは分かつてるけど、困惑してます。何故かというと、目の前には物凄く綺麗な人がいるから。サラサラな金髪、それを引き立てるかのような金と黒の和服……なんだけどころなりはだけてて大きい胸が強調されている。私以上に整った端正な顔、そして大人のお姉さんの口調。うん、凄く理想的な人だと思う。でも凄く気になるところがある。



びよこんっ！

しゅるっ！

大人のお姉さんの頭から動物の耳と尻尾が生えているの。私先にそこが気になって仕方ないよ！

シルヴィア「え、ええっと、貴女は？私はシルヴィア・リユーネハイムっていうんですけど。」

???『あら、自己紹介をしていなかったわ、ごめんなさいね。私は八坂というの。世間一般では羽衣狐や九尾の狐が分かりやすいかしらね。』

ごめんなさい、全く分からないです。

八坂『それで、なんで貴女が私に会いに来たの？ということでもいいのかしら？』

シルヴィア「あっ、は、はい。』

八坂『そうね……短絡的に言ってしまったえば、貴女が気に入ったからかしらね。だってあの坊やの彼女だものね。可愛らしい子だとは思っていたのだけど、心も綺麗だったから貴女に憑いていくことにしたのよ。』

シルヴィア「八幡くんの事を知ってるんですか？」

八坂『知ってるわよ。彼のような膨大な量の霊力の持ち主はそういうもの。惹かれて憑いて来ちゃったのよ。でも私は女の依り代でしか効果を発揮出来ないから彼とは話が出来ないのよ。だから坊やの彼女である貴女に憑いたってわけなのよ。』

シルヴィア「そ、そうなんですか。」

八坂『それにしても、本当に良かったわねえ。』

シルヴィア「え、何がですか？」

八坂『私が見えるようになったからよ。前までは見えてなかったのよ?』

そういえば、八幡くんの中にいる霊たちも言ってた。八幡くんの能力の一部が乗り移ってるって。

八坂『私が見えるようになったって事は、あの坊やと夜の営みを盛大に楽しんだのね?』

シルヴィア「な、なななな!?!?!?!」

八坂『貴女だって聞いているのでしょう? 私たちが見えるようになった訳。だとしたらもう分かっているのでしょう? 私が見えるようになるための一定霊力が貴女の中にあるという事だもの。』

八坂『つまりは、あの坊やからたつぷりと「それ以上は言わないで下さい!!?!?!?!」あらあら、ふふふ♪』

こ、この人はな、なんなんて事を言うのさ!! た、確かに八幡くんとは……その……そのまましちゃったけど、た、たつぷりって表現はやめてよ! なんか凄くいやらしく聞こえちゃうよ!?!?!?!

八坂『でも間違ったことは言っていないわ。坊やの精液を体内に取り入れた事で、貴女の霊力が高まった。結果的には貴女も坊やと同じことができるかもしれないという可能性が出てきたわけよ。』

八幡くんの使っている憑霊の事かあ……

シルヴィア「……私も出来ますか？」

八坂『どうかしらね。そこは貴女次第だしやってみないと分からないいわね。でも、出来ないとは言わないわ。』

でも、決勝で私が八幡くんと同じ憑霊を使うことが出来れば勝率はかなり上がる。これはチャンスかも！

シルヴィア「八坂さん、私やりますね！貴女を纏えるかどうかは分かりませんがぶっつけ本番でなんとかしてみせます！」

八坂『良い目になってるわね。ええ、頑張りなさい。私も応援しているわ。』

シルヴィア「はい！」

よしっ！打倒八幡くん!!君に初の負けの字をつけてやるんだから！

八坂『現世に戻ったらまた営むのかしら？』  
シルヴィア「し、しませんよ!!／／／／／」

## ※対決前

八幡 side

寝ている最中に奇妙な夢を見ていた。まあ殆どは憑霊についての事やシルヴィの事についてなんだけどな。けど、シルヴィが今朝起きてから、なんか様子が変わなんだよなあ。起きて挨拶したら、秒で布団を被る。家を出て鍵を閉めようとして手が触れたら、鍵を落としそうになる。そんな事があった。道中も手を繋いでは来なかった。繋いだら少しヤバそうだったからだ。

そして今、控え室にいる……のだが、シルヴィが一向に顔を俯かせたままだった。これでは決勝どころではない。むしろ俺が戦いに集中出来ない。

八幡「シルヴィ、一体どうしたんだ？今朝からずっと変だぞ？」

シルヴィア「う、うう／＼／＼／＼／＼」

八幡「もし昨日の件なら仕方ないが、あれならもうやつちまつてるたろ？背に腹は変えられないんだから、もう気にするなよ。」

シルヴィア（い、言えないよー！八幡くんと……エ、エツチな事をして能力を得たのはいいいけど……もおゝ八坂があんな事言うから八幡くんの顔を直視出来ないよー!!）

……このように話し掛けても、顔を横にブンブン振ったり、自分の頬をパチパチと叩いたり、『うう／＼』と呻きながら顔を覆ったりする。

本当に何があったんだ？全く分からん。

八幡「はあ……シルヴィ、何があったのか話してくれないか？そんな状態のお前を見てると、とても本気を出しながら戦えそうにない。」

シルヴィア「な、何でもないの！何でも……／＼／＼／＼」

八幡「いや、だからその状態で言われても気になつて仕方がないんだよ。なあ、何があつたんだ？変な夢でも見たとか？」

シルヴィア「う、うう／＼／＼／＼」

……これなんだよなあ。これが続いているから一向に治る様子がない。

仕方ない。あまりやりたくはなかったが、強硬手段を取るしかないな。

八幡「シルヴィー！」

シルヴィア「は、は……んむっ!?」

八幡が取った強硬策。それは接吻だった。キス、口づけとも呼ぶ。イタリアではバーチョと言う。そんな事はどうでもいいのだが、八幡がシルヴィにしたキスは普通のものではなかった。舌が絡み合うような激しいキスだった。

――30秒後――

八幡「はあ……はあ……はあ……／＼／＼」  
シルヴィア「はあ……はあ……はあ……はあ……は、八幡くん、いきなり何を  
するの？」

八幡「……いつまで経っても変わらない様子だったからな。少し  
強引でも訳を聞こうと思ってな。」

シルヴィア「そ、それは……」

八幡「どうしても言えないのなら別にいいが、それで本気を出せな  
いのなら、俺にその理由を言ってくれ。」

シルヴィア「……うう／＼分かったよ！お話するからそんな風に見  
つめないで！恥ずかしいから！！／＼／＼／＼」

シルヴィは何があつたのかを俺に話してくれたのだが、俺の方もな  
んとも言えないような感じになってしまう。後さ、その上目遣いやめ  
て！今のお前凄いいんだよ！顔赤らめながら目を潤わせてこつち見る  
な！すごい可愛いんだから！！

これ絶対普通の男が見たら、一気に襲い掛かるぞ。まあこの顔を見  
れるのは俺だけだな。

八幡「ああ……まあ、なんだ……確かに顔合わせ辛いな、そんな  
事があつたんじゃあ。」

シルヴィア「う、うん……ゴメンね。」

八幡「いや、無理もない。しかし、俺の能力が……それは別に大  
丈夫だが、その方法がだな。」

シルヴィア「う、うん／＼／＼／＼」

……ああもう！これじゃ埒があかない！

シルヴィア「でも、なんか話したら楽になっちゃった。ああ／＼やつ  
ぱり自分の中で我慢するのって、結構辛いものなんだね。」

八幡「ん？あ、ああそうだな。俺は何度も経験してるからそういうのはよく分かる。」

シルヴィア「なんか恥ずかしがっていたのがバカらしくなってきたよ。聞いてくれてありがとう、八幡くん。」

八幡「いや、気にするな。」

調子が戻ったのなら何よりだしな。

八幡「じゃあそろそろ行かないか？」

シルヴィア「あつ、うん！そうだね！」

俺とシルヴィは扉の前で一度止まった。

シルヴィア「……この扉を開けて向こう側に行ったら、私たちは敵同士なんだよね。」

八幡「……ああ。」

シルヴィア「……八幡くん。」

八幡「？」

シルヴィア「私、八幡くんには負けないからね！君がとてつもなく強いのは知ってる。でも、私だって君が星武祭で活躍している間、何もしていなかったわけじゃないんだからね！」

八幡「……俺もだ。負ける気なんて毛頭ない。俺の全てをぶつけて……お前に勝つ！」

そして俺とシルヴィは同時に扉を開けて互いに違う方向へと歩いて行った。



最初で最後の……

—————

梁瀬『さあさあ皆様!!! 長らくお待たせ致しました!! 今回の星武祭の集大成、《王竜星武祭》の決勝戦が間も無く行われる時がついに来ました!!!』

~~~~~  
!!!!!!

梁瀬『いやあ、会場のボルテージは始まる前から最高潮で何よりです!! それもそのはず!! 今回の決勝で戦う2人は……何と言つても!! あの六花の最強にして最高のベストカップルですからね……いや、夫婦、でしたっけ?』

チャム『いやいや、2人はまだ籍を入れてないっすよ。まあ今の2人はもう20歳を越えているし、資金にも余裕があると思うから、結婚するのも時間の問題だと思うけどね。』

梁瀬『全くですね。報道陣はさぞかし2人の今後が見放せ無くなるでしょうね。しかも巷の噂では、今回の《王竜星武祭》が歴代で最高の戦いになるのではとされている程ですが、その辺についてはどう思いますか?』

チャム『比企谷選手は半年前に「万有天羅」を継承、リユースハイム選手はブロック戦、準決勝ではまだ全力を出していなかった様子でしたから良い勝負になることは間違い無いと思うっす!』

梁瀬『成る程! これはもう瞬きすら許されない戦いになりそうという事ですね!! 皆様も刮目してご覧になってください!!』

~~~~~  
!!!!!!

梁瀬『ありがとうございます!! さあ、それでは選手のご紹介から参りましょう!! 六花に来てから3年の月日経ちました!! 今では歴代

最強の【万有天羅】と言われる程の実力者!!見事、この《王竜星武祭》を制し、2代目《万有天羅》と同じ《三冠制覇》を成し遂げることが出来るか!?六花最強の男にして六花1旦那様にしたいランキングNo. 1!!界龍第七学院、比企谷八幡く!!!』

くくくくく  
!!!!!!

チャム『3年前に界龍へ転入してから今に至るまで、公式、非公式合わせての成績は事実上の無敗!!今まで数多くの強者と戦ってきた彼ですが、1度として膝をついたり、校章を破壊されていないっす!!そして実力もさる事ながら技の洗練さ、多彩さ等はまさに六花1と言つていいでしょう!!今回もそれが見られると思うと楽しみっす!!』

梁瀬『続いてはこの方!!前回の《王竜星武祭》ではギリギリでの勝利を収めました!!今回の相手は最恐の魔女ではなく、最愛の夫!!今や最強の男といっても過言ではない彼とぶつかります!!夫が最強なら妻も最強!!前回の《王竜星武祭》覇者にして六花1お嫁さんにしたいランキングNo. 1!!クインヴェール女学園、シルヴィア・リユーネハイムく!!!』

くくくくく  
!!!!!!

チャム『前回戦、界龍の【覇軍星君】との戦いでは序盤は接戦だったものの、終盤では比企谷選手の技を模倣した新技を披露して見事な作戦勝ちを見せました!!比企谷選手の専売特許であるこの技は通用しないとは思いますが、どのようなスタイルで戦うのか、楽しみっすね!!因みにっすけど、実況が言っていた旦那さん、お嫁さんにしたいランキングNo. 1つてのは本当の事っす!!』

WWWWWW  
!!!!!!

2人（知りたくなかった、その事実。）

2人はそう思いながらも入場してきた所からステージへと飛び降りて行った。

シルヴィア「八幡くん……漸く、だね。」

八幡「……ああ、漸く、だな。」

シルヴィア「最後の星武祭で君と戦えるなんて嬉しいよ。これも運命かな？」

八幡「だとしたら、俺とシルヴィは本当に赤い糸で結ばれているんだろうな。」

シルヴィア「ふふふ、そうだね！でも、勝つのは私だよ。君に勝ち譲らないんだから!!」

八幡「望むところだ。俺だって勝ちを譲るつもりはない。負けはプレゼントしてもいいけどな。」

シルヴィア「いらないもんね〜！八幡くんの愛情なら嫌っていうくらいもらっちゃうけど！」

八幡「俺もお前の愛なら大歓迎だ。」

梁瀬『え、ええつと、降りて早々に2人共ラブい会話を始めちゃいましたね。こ、これが六花最強にして最高の夫婦……いやあ、御見

逸れました。』

チャム『こういう時に“ご馳走様”つというべきなんでしょうと、自分、正直に思ったっス。』

シルヴィア「……………喋り過ぎちゃったね、あはは……………ちよつと恥ずかしい／＼／」

八幡「まあ丁度いい緊張ほぐしにはなったな。」  
シルヴィア「そうだね♪」

そして2人は戦いの準備を整えた。シルヴィアはフォールクヴァングを展開し、八幡は祢々切丸を抜刀した。

梁瀬『さあ両者戦いの準備が出来たようなので、早速お送りいたします!! 《王竜星武祭》最終試合、決勝戦!!!』

『Start of the duel』

八幡（俺は……………  
シルヴィア（私は……………

(シルヴィ(八幡くん)に………)

梁瀬『バトルウ・スタアクトオオオオ!!!』

絶対に勝つ!!!)

夫婦喧嘩 ①

――――

シルヴィア 「トゥル・セリア真実の守護曲！」  
シルヴィア 「ブラス・カ・ロンド疾風の輪舞曲！」  
シルヴィア 「インパクト・カノン衝撃の追奏曲！」  
シルヴィア 「リミット・コンチェルト限開の協奏曲！」

八幡（予選でも見た詠唱だな……自身の能力を向上させる歌か。歌を増やしているようだな。）

シルヴィア 「♪……さあ、準備は出来たよ。」

八幡 「そうか……じゃあ……」

ガギイイイインツ!!!

八幡 「始めるとするかっ！」  
シルヴィア 「望むところっ!!」

姿が見えなくなったと思えば、2人はステージの真ん中で剣を合わせながら睨み合っていた。

シルヴィア 「ルーチェ・シンフォニー光の交響曲！」

八幡 「っ！」

シルヴィア 「いっけええ！」

ズブッ!!

シルヴィアは罅迫り合いをしている内に、能力で作った光の剣を八幡目掛けて飛ばした。その剣は八幡に当たったのだが……………

八幡 「残念、ハズレだ……………」

八幡は黒い霧となって消えてしまった。

シルヴィア（八幡くんの明鏡止水…………ううん、これは鏡花水月！認識をズラしたんだ。でも次が出てこないってことは、今は明鏡止水も使ってる！）

八幡 『花咲く池に、浮かぶ水鳥は、波をあおげば、飛び消える。』

八幡 『水刃・花鳥風月。』

スパッ!!

姿の见えない状態である八幡は、透明化を利用した技を繰り出し、シルヴィアの校章を狙って刀で攻撃をした。攻撃はヒット！したのだが……………

シルヴィア 「残念！ハズレだよ〜♪」

今度はシルヴィアが白い靄となって消えてしまった。

八幡「…………まさか本当に俺の技を模倣していたなんてな…………しかも同じ条件だし。これはもう俺も似たような技パクらなきゃいけなくなっちゃったか？」

シルヴィア『別に真似しなくてもいいよ。八幡くん我真似されたら、その技絶対私のより強くなっちゃうよ。上位互換になっちゃうからやめて。』

八幡「同じ技で躲されるとは思ってたが、これで五分だな。」  
シルヴィア「そうだね。君の戦術がまだ分からないから思うように攻められないのが私の現状だけど、君はどうするのかな？」

八幡「取り敢えずは懷にでも飛び込むか。抱き着きたいしな。冗談だが。」

シルヴィア「んゝその冗談は出来れば試合が終わってから本気でして欲しいかな。私も抱き着きたいし、抱き締められたい♪」

…………2人は試合中にも関わらず、既にイチヤイチャ話を始めていた。戦いは真剣やつてはいるのだろうが、できればそういう話は後でして欲しいと切実に思った八幡とシルヴィア以外の観戦者達であった。

八幡「さて、そろそろ再開するか。」

シルヴィア「そうだね。君を倒すのには、なかなか骨がいるね！やっぱりっ!!」

ガギインツ!!ガギツ!!ギインツ!!

シルヴィア「光の交響曲！いっけえ！」

八幡「急急如律令。」

シルヴィア「やっぱり手数多いなあ…………これならいけると思ってたのが、まさかの陰陽術かあ…………その存在忘れてたよ。」



八幡「お前、俺を串刺しにでもしたいのか？試合が終わったら、俺血だらけだぞ？」

シルヴィア「大丈夫だよ！私がつきつきりで看病してあげるから！家で！」

八幡「そこは治療院って言ってくれよ………手当はしてくれないのかよ。」

シルヴィア「するに決まってるよ、何行ってるのさ！私が丁寧に治療してあげるから………ねっ♪」

八幡（お願いだからそういう時は治療院に連れて行ってくれない？そっちの方が早く治るから。）

シルヴィア「天羽<sup>フィエロ</sup>！」

シルヴィア「賢者<sup>ティール・アース</sup>の詩奏曲！」

八幡「憑霊……堅牢陣・大蛇丸。八卦防陣！」

シルヴィア（うわぁ……これもダメかぁ。八幡くんガード固いよ

。）

八幡「次はこちらからだ。ハアッ!!」

シルヴィアの流星闘技はヒットせず、次は八幡が攻めた。その場で防御に使っている壁のような物を複数作って、シルヴィアに向けて飛ばしていた。

シルヴィア「ハアアアアアア!!」

八幡「……………」

シルヴィア「ふう……………防御したまま攻撃なんて、ズルすぎるよその憑霊。」

八幡「こいつの持ち味でもあるからな。」

シルヴィア（はあ……………これじゃあ攻め切れない。かといって奥の手をこんなに早く出すわけにもいかないし……………それもこれも八幡さんのガードが固いのがいけないんだよ!）

八幡（思った以上に粘るな……………シルヴィの星辰力の量が今どれくらいあるのかは分からないが、まだ余裕はあるだろう。だが気になるのはシルヴィの奥の手だ。愛の聖歌……………あれが俺の憑霊で防げるのか防げないのか、影に隠れたら当たるとか当たらないのか、アレが来たら俺は間違いなく攻撃出来ない。）

八幡「憑霊……………夜宴・大闇鴉。」

シルヴィア「っ!」

八幡「今度は空中戦と行こうか。丁度お前も飛んでるしな。」

シルヴィア「ふうん……………いいよ!どうせなら踊ろっか?」

八幡「この決勝が終わったらな、その時はいくらでも付き合ってるよ。」

## 夫婦喧嘩 ②

――――

2人が空中戦に乗り移ってから10分。刀剣で攻めたり斬撃を飛ばしたり銃で撃つたりと、様々な戦い方をしていた。八幡は憑霊の状態で飛んでいるため、星辰力は消費しないが、シルヴィアは星辰力を使つて能力を使っているため、星辰力は微量ではあるが、消費を続けている。長引けば不利になるのは明らかだった。

シルヴィア（これじゃあ私が先にバテちゃう……もう空中戦はやめた方がいいね。かといって陸で戦ったとしても、技を連発させたら意味がないし……）

シルヴィアは八幡に攻撃を続けつつ、ステージへと戻って行った。地面に着くと銃型煌式武装で八幡を狙い撃ちしていた。

シルヴィア「……やっぱり八幡くんは銃は効かないかあ……もつと強力なのを使いたいけど、あまり無駄遣いはしたくないんだよなあ。」

八幡「そいつはお互い様だな。俺だって星辰力の無駄遣いはしたくないしな。」

シルヴィア「でも八幡くん憑霊で空飛べるじゃん。」

八幡「……生意気言つてすみませんでした。」

シルヴィア「じゃあ校章壊させて？」コテツ

八幡「そんな可愛らしく首傾げながら言われてもな……俺だって負けたくないからそれは無理だ。」

シルヴィア「それもそつか。ねえ八幡くん、降りて来てよう。これじゃあ私八幡くんを攻めたくても攻められないよう。」

八幡「敵の口車には乗りたくはないが、シルヴィアの頼みだ。聞き

入れないとな。後で拗ねられても困るしな。」

シルヴィア「私拗ねないもん！八幡くんに甘えるだけだもん！」

八幡「あー……そうだな、うん。」

((((お前らは会話する度にイチャイチャしないと気が済まないのか  
!!)))))

ここで観客の心が1つになった瞬間が今、実現した。近年では初めてのことだろう。

シルヴィア「じゃあ仕切り直して……」

八幡「やりますか。」

シルヴィア「あつ、ちよつと待つて！」

するとシルヴィアは自身の主装武器であるフォールクヴァングを戻した。そして新たに剣よりも細くレイピアよりは太い剣型煌式武装を展開させた。サーベルに近い剣だった。

シルヴィア「すうー……はあー……」

目を瞑ってから深呼吸をして構えに入ったシルヴィア。そして目を開いた途端、シルヴィアの纏っている空気が変わった。

シルヴィア「……………」

八幡「っ！……………」

ダダダダッ!!

ガギイイイインッ!!!

シルヴィア「はあああ!!」

八幡「っ!!」

剣での打ち合いが始まったが、八幡がこの3年間で初めて刀を弾かれた。今までは八幡の刀を受け止めるか、躲すしか手段のなかった相手しかないなかった。だが、シルヴィアはその重く鋭い刀の一撃を剣で

弾いたのだ。それに伴ってそこからは強い剣圧も現れていた。

そこからは互いに攻撃の手を緩ませず攻めのみを実行していた。その攻めが防御になっっていることも知らずに。攻撃は最大の防御というが、2人はそれを実行していると気付いていないだろう。

すると、八幡が一瞬の間で少量ではあるが、星辰力を刀に注ぎ込んだ。

八幡「うおおおお!!」

八幡はシルヴィアに向かって思い切り横向きに剣を振った。シルヴィアはその刀を当たり前のように受け止めた。背後にはさつきよりもより強い剣圧が出ていた。

シルヴィア「せえええいっ!!」

八幡がこうするのを分かっていたかのように、自身も剣に星辰力を注ぎ、八幡に突きを入れた。だが、八幡はその突きを刀の刀身で受け止めた。この後ろにも八幡と同じくらいの剣圧が出た。

八幡が刀を振ればシルヴィアも振り、シルヴィアが攻めれば八幡も攻める。互いに守りに入るというのは愚策だと思い込んでいるのか、はたまた忘れているのかは分からないが、防御に身を回してはいなかった。

その為、双方共に擦り傷程度の傷は負っていた。だがそれでも2人の剣戟は止まらず、激しさを増していった。

そして再び鏖迫り合いとなり、睨み合った。

ドゴツ!!

八幡「っ!？」

八幡は腹部に鈍痛を感じた。シルヴィアの左の拳が八幡の腹部を捉えていた。

シルヴィア（よしっ！先手は取った！陽乃さんから星辰力の扱い教わっておいて正解だった!!）

八幡は体勢を崩していた。これを好機と見たシルヴィアは一気に八幡へと攻めた。その剣は八幡に向かっていった。

シルヴィア「かはっ！」

だが八幡はその場で横回転をして剣を躲すと共に、シルヴィアの腹部に蹴りを入れた。

シルヴィアは少し後方へと吹き飛んだが、着地には成功した。だが正面から八幡がすぐ攻めて来ていた。

シルヴィア（流石は八幡くん。これくらいじゃあまだビクともしない。でも、まだこれからだよ!!）

八幡（シルヴィの奴、いつの間にこんだけの力を……この3年間、確

かにのんびり過ごしていたわけではなさそうだ。いや、シルヴィに限ってそれはないだろうがな。」

「はあああああああ  
!!!!!!」

八幡とシルヴィア、右手に持っている刀と剣、その二振りの切っ先が重なる事なく交差した……………

ズブツ!!

八幡の刀はシルヴィアの左肩に刺さっていた。だがシルヴィアの剣も八幡の左肩に突き刺さっていた。

八幡「……………」



シルヴィア「……………」

八幡（こりやヤバイな……………）

シルヴィア（あゝ……………少しマズいなあ……………）

（楽しくなってきた!!）

## 夫婦喧嘩 ③

――――

互いの左肩に刀と剣が刺さった状態で一步も引かずにその場から動かない2人。周りから見れば牽制し合っているか、睨み合っているという感構えしかつかないであろう。だが、2人の考えている事はどうと……

八幡（まさかここまでとはな……星辰力に余裕はあるが、憑霊の八咫鳥と玄武を使つて少しだるいな。抑えるつもりではいたが、シルヴィがここまで実力を伸ばしているとは思わなかった。完全にしてやられたな。さて、次はどの手で行くか……）

八幡は自身のシルヴィアに対する警戒心の無さと実力の計り違いを受け止めていた。そして、次の作戦を考えていた。

シルヴィア（やつぱり八幡くんは強い。攻撃力、防御力、素早さ、色んな能力を開始と同時に使つて能力を向上させたのに、それに着いてくるんだもん。ううん、それは出来て当然か……だって『万有天羅』だもんね♪八幡くんは六花で1番強いんだもんね♪）

シルヴィアは……樂觀しているわけではないのだろうが、自身の能力向上についてくる八幡を素直に褒め称えた後に、さらにそれが当然だと言わんばかりに八幡を持ち上げていた……心の中で。

だが2人の中でこれだけは同じ思いとなっていた。

楽しい、この言葉だけは2人の中で重なり合っていた。八幡もシルヴィアも決して戦闘狂というわけではないが、この戦いにおいては楽しさを感じずにはいられない程の強い高揚感を覚えていた。

肩の痛みを感じない程にであった。

八幡「……いくぞ、シルヴィ。」

シルヴィア「うん、八幡くん。」

身を引いた2人は再び戦闘体勢に入った。シルヴィアは星辰力を練り始め、八幡は翡翠の小さな竜巻に飲み込まれていた。

八幡「憑霊……颶風・天翔龍神。」  
あまかけるたつがみ

シルヴィア「憑霊……私も使えるけど、八幡くんにはまだ教えない。これは本当の切り札、出す時を見極めないと。」

八幡「龍神の加護！」

八幡がそう言うと、八幡の周りから赤色の……いや、紅色の闘気が溢れ出していた。瞳の色も瑠璃色から真紅の色になっていた。

八幡「さて……じゃあ、行くぞ。」

シルヴィア「……あれは凄くパワーアップしてるよね。まさか今までののは、私の実力を測るためにやってたってことかな？ だとしたら

……ちよつと、いや、かなりマズイなあ。」

八幡の明らかなパワーアップに冷や汗を流しながら戦闘体勢に入るシルヴィア。だが装備しているのはサーベル型の煌式武装。今の八幡を相手にするには、火力が圧倒的に足りなかった。

八幡（さてシルヴィ……こいつに着いてくれるか？）

ヒュンツ!!

シルヴィア「っ!!ふっ!!」

シルヴィア（嘘っ!速過ぎる!!）

八幡「ムンツ!」

ドガッ!!

八幡がシルヴィアの校章目掛けて繰り出した横薙ぎは躲されたが、続けて出した蹴りはシルヴィアも避けることが出来ないと判断したのか、腕をクロスさせてガードした。だが、その一撃は予想以上に重かったため、10m後方へと後退させるほどだった。それも地面に足をついたままである。

八幡「ほう……見えたのか？」

シルヴィア「そんなわけないよ……君の動きなんて全く見えなかったよ。それこそ、風が君の速度に追いついてなかったよ。なんだか……本当にヤバイよ。」

――――

星露 side

セシリ「……ねえ、八幡のアレってかなりヤバイんじゃないかなー？あたし映像からでもかなり感じるんだけど……」

虎峰「ええ……あの龍神の加護、と言いましたか？あれは身体能力を大幅に向上させる能力ですね。今の八幡がそれを使えば……」

星露「誰も八幡の動きについていけんじやろうな。というよりも、妾が無理じゃ。」

虎峰「師父がアレに追いつけない!？」

星露「うむ……1度あの状態で手合わせをしたのじゃが……あれが八幡の本気だとしたら、既に初代をも超えておる。あやつは一体、何処まで成長するのじやろうな……」

全く、恐ろしいかぎりじゃ。じゃが妾はあの技が無くとも八幡に負けておる。八幡が龍神の加護という技を会得してからは、妾も八幡の相手は出来んようになってしまったかのう。あやつの気持ちがよく分かったわい。

星露 side out

小苑 s i d e

……またさらに強くなっておるのう。我が義娘もそうじゃが、義息子もそうじゃ。もう強くならんくて良いわ。今の六花にお主らを超える生徒は存在せんわ。おったら見てみたいしのう。

麗蘭<sup>リーラン</sup>「あの2人、特にシルヴィアさんは素晴らしい成長ですね。まさか八幡さんと互角の勝負をするなんて……」

小苑「全くじゃ。2人揃って親を驚かせるような真似をしおって……はあ、シルヴィアは準決勝から思っておったが、技を真似てからの汎用性が高い。真似たのなら、何処かしらに弱点があるはずなのじゃが、シルヴィアにはそういった類のものが無い。八幡と同じ条件で技を出せておるからのう、大した義娘じゃ。」

麗蘭<sup>リーラン</sup>「そのようですね。ですが、八幡さんが紅い闘気を纏った瞬間、攻撃の重さや鋭さ、それに速さが格段に上がっています。あれは？」

小苑「龍神の加護。自身の能力を上げる技じゃ。見た所、上げられるのは攻撃力と素早さみたいじゃな。防御は分かんが、攻撃特化の技じゃろう。」

さて義娘よ、八幡がそれを正式な場で出したのはお主が初めてじゃ。それをどう振り切るかのう？

小苑 s i d e

—————

ドゴオツ!!

シルヴィア「くうっ!!」

八幡（よく凄いでるな。まさか5分も耐えるなんてな。俺の武術を見せたせいでもあるんだろうが、この速さについてこれるのは居な

かった。星露でも無理だったからな。シルヴィが初めてだ。」

八幡「そろそろ致命傷の1つでも与えないとな。長引けば不利になるし。」

シルヴィア「それ、私の台詞なんだけど？」

八幡（いや、俺が不利になる。今の所青龍の憑霊を使い続けてる状態だ。これを解いたら一気に倦怠感や疲労が襲ってくるだろう。憑霊は強力な技だが、なんの代償も無しに使えるわけではない。1種の純星煌式武装だな。）

シルヴィア「ふっ!!」

シルヴィア（攻めないのなら、私から攻めるよ八幡くん！そのスピードは脅威だけど、何もしなければ時間だけが過ぎていくからね。攻めさせてもらおうよ!!）

八幡「……………」

シルヴィア（……………避ける気配がない？じゃああれは鏡花水月？それとも……………考えても仕方ない、一先ずは標的を攻撃!!）

シルヴィア「やあああああ!!!」

ズバッ!!

シルヴィア「えっ!？」

シルヴィアは八幡を斬った。だが、その場に居たのは影で作られた分身でもなければ、自身を惑わしている幻術の類でもなかった。本物の八幡だった。

そしてシルヴィアは気付いた。自身の持つている武装が八幡に掴まれていた。

八幡「日本にはこういう諺がある。『肉を切らせて骨を断つ。』意味を簡単に言えば、自身も怪我を負うが、相手にそれ以上の怪我を負わせる事だ。」



シルヴィア「んっ！んんっ！くっ！」

シルヴィア（ダメツ！単純な力じゃ八幡くんに勝てない！一旦武器を放して……っ!?）

八幡「気付いたか？お前は今、俺から逃げられない。気付かれないように影でお前を拘束したからな。俺自身、あまり女に手は出したくないんだが、これ以上長引かせたら本当に何が起きるか分からんな。ここくらいで一撃あっても良いだろう。」

八幡「発空勁・龍！」

ドゴオオオオン!!!

シルヴィア「かはっ!!」

八幡はシルヴィアの腹部に手を当ててから星辰力を溜めて技を発動させた。すると、シルヴィアの背中からは突然衝撃が走り、息が出れない状態に陥っていた。

シルヴィア「かはっ！……はっ…はっ…はっ…」

八幡（苦しいだろうな。この技は陽乃さんに教わったが、内功にもダメージを与える技だ。しかも今のは原技の強化版だから、衝撃は普通よりもかなりある。さて、ここからどうする?）

夫婦喧嘩 ④

—————

八幡がシルヴィアに一撃を入れてからは、戦いの流れが一変した。今まで五分の戦いをしていたのが、シルヴィアの防戦一方の戦いに膠着していた。八幡は間髪を入れずに攻め続けている。

シルヴィアは表情が苦しそうだった。それもそのはずで、八幡が繰り出した技は内功にもダメージを与えるので、未だに呼吸が整えられていない状態なのだろう。いわば窒息状態にあつた。それに加えて八幡の猛攻、今のシルヴィアには攻めるといふ選択肢は愚策となっていた。

シルヴィア（どうしよう……全然呼吸が整えられない。八幡くんの攻撃が速過ぎるのもあるけど、八幡くんの戦術にハマってしまってる。なんとかしないと、このまま体力を奪われるだけになっちゃう！）

そう考えているシルヴィアだが、八幡の戦術はそう簡単には逃してはくれない。八幡が用意していた戦術、それは《鳳凰星武祭》で陽乃と決勝で使った技、幻影舞踊・鏡月げんえいぶよう きやうげつだった。

八幡はこの技を1人でも扱えるようになっており、戦術も頭の中で想像すれば分身にも入っていく。だがこの時の欠点は、八幡本人は術をかけている状態である為、行動が出来ない事にある。シルヴィアの突破口があるとすればそこだろう。

八幡（さて、どうするシルヴィー？）

シルヴィア「ふう……ふう……ふう……ふう」

シルヴィア（ちよつとだけど、漸く整ってきた。でも肝心の八幡くんは攻撃をの手を緩めてはくれない。それもかなりの攻撃頻度、まるで分身して攻めてきてるみたい。）

――数分後――

シルヴィアの呼吸は大分楽にはなったものの、肝心の八幡を捉えられずにいた。攻撃しても八幡は黒い靄となって消えてしまうからだ。シルヴィアはこの正体に気付いていなかった。

幻を相手にしているため、いくら攻撃しても八幡にはダメージを与えられないのだ。シルヴィアも今度は疲労による呼吸の乱れが出ていた。

シルヴィア「はあ……はあ……何で!? 向かってくるのは偽物の八幡くんばかり……はあ……本物は何処？」

八坂『こういう時のために、坊やの能力があるんじゃないかしら？ 霊視で辺りを覗いてみなさいな。』

シルヴィア「っ!!」

シルヴィア（そつか!!八幡くんの能力は影と幻!それにこの攻撃の頻度。どう考えても八幡くんの体力が落ちるはずなのにその気配がなかった。という事は八幡くん1人じゃあこの技は完全には使えない!!）

シルヴィアはすぐに辺りを霊視で確認した。すると、やはり分身体がシルヴィアを攻撃していて、八幡本体は透明化して術を掛けていた。

シルヴィア（いた!よし、あそこに目掛けて!）

シルヴィア「八幡くん、見つけたっ♪」

八幡『つ!!』

シルヴィア「やああっ!!」

ドゴッ!!

八幡「うぐっ!!」

シルヴィアは八幡に向けてお返しと言わんばかりに鳩尾目掛けて星辰力を含めた強烈な蹴りを放った。攻撃は見事命中して、八幡の術も解けた。

八幡「くう…………どうやって俺の位置を特定出来たんだ?俺の姿は見えなかったはずだが?」

シルヴィア「姿が見えないから、霊視の状態で見れば何か見えるんじゃないかなって思ったんだ。そしたらビンゴしたってわけだよ。」

シルヴィア（確かに八幡くんの存在は見えたけど、八坂の事は伏せておかないとね。まだ教えてない事だし。）

八幡（……まさか破られるとはな、しかもこんなに早くとは予想外

だ。あまり体力は削れてないみたいだな。逆に削られてるし、作戦は失敗だな。」

八幡「……………これ以上今みたいな事をやっても意味はなさそうだな。おそらくすぐに見破られるだろうしな。」

シルヴィア「うん、すぐに見破ってあげるよ。」

八幡「なら……………やることは1つだ。」

八幡「もう一度打ち合いといこうじゃねえか。」  
シルヴィア「今度こそ君の校章を2つにしてあげるよ！」

そして2人は走り出して、再び剣を交えた。

—————

雪乃 side

……これが、これが六花最強クラスの戦いのね。あんなの私ではすぐにやられてしまうわね。昔の私を殴りたくなるわ。あんな規格外な力を持った存在に向かって勝てるだの卑怯な手を使ってるだのと言っていたなんて。

雪乃「今だったら自分のしてた愚かさが身に染みて分かるわね。あんな存在に勝とうとしていたなんて。」

小町「ホントですね。小町も本当にバカなことしたなあって思ってます。」

皆は知らないと思うけれど、小町さんとは今年の春くらいから疎遠になっていたのだけれど、彼女から事情を聞いてから私も今回のことを説明したというわけよ。由比ヶ浜さんは説得してもダメそうだったから、今回は2人で観ているの。

小町「正直、まだ信じられませんよ。この大舞台にいるのがお兄

……比企谷さんだなんて。」

雪乃「ふふっ、小町さん。私の前では普通でいいのよ？そう呼びたいのでしょう？」

小町「……昔のお兄ちゃんなら、めんどくさがって出ないのに、今のお兄ちゃんは千葉にいた頃よりも生き生きしてる。楽しそうっていうか。」

雪乃「その気持ちは分かるわ。彼をこの六花で見かけた時、リユースハイムさんといただけど、とても楽しそうだったの。リユースハイムさんも楽しそうしていたのだけど、なによりも幸せそうな顔をしていたわ。」

小町「そうなんですネ。これはお兄ちゃんが千葉に戻ってくることはないですかねえ？2年前に1度帰ってきてたんですけどね。」

1年間、家族を行方不明で不安にさせたからかしら？

でも、小町さんも彼と和解していたのね。この半年間、私たちと疎遠になった理由が分かったわ。

雪乃 side out

—————

ガギイイイインツ!!!

八幡「ふっ！くううつ！」

シルヴィア「んんっ！んんっ!!」

ガギイン!!

八幡「フツ!!」

シルヴィア「ヤアア!!」

続く剣戟……弾いては圧が出て、攻撃を受け止めても圧が出る。  
最早この勝負はどちらが勝ってもおかしくない、どちらが勝つのか分  
からないレベルだった。



夫婦喧嘩 ⑤

――――

飛ぶ斬撃や銃撃、火炎、流水、土砂、金鉄、樹木、全てが激しく残された後があり、何よりも激しさを増しているのは……戦っている2人だった。

八幡「急急如律令！」

ボツ！ボツ！ボツ！ボツ！ボツ！

八幡が炎の球を出せば……

シルヴィア「ルベル・オラトリオ聖者の聖譚曲ッ！」

シルヴィアがそれを銃の光線でかき消す。  
そして……

シルヴィア「ルーチエ・シンフォニー光の交響曲ッ！」

シルヴィアが光の剣を出せば……

八幡「フンッ!!」

八幡がその剣を一振りで消し飛ばす。

一進一退、攻防一体。攻撃すれば防御され、防御すれば攻撃をする。その繰り返しだったが、2人が負傷する事はなかった。むしろ今まで受けた負傷のことは忘れてしまっているのだ。

しかし驚きなのが、八幡とシルヴィアが姿を消して攻撃しているのだが、これは相手にも姿が見えない状態。その状態で剣戟をしていたのだ。観客側も実況側も何が起こっているのか分からない状況だった。

※2人は霊視で相手を見ている。

2人の激しいぶつかり合いを示しているかのように、ステージはロボロで酷い状態だった。そんな事はお構いなしに戦いを続けている2人。

八幡「うおおおおおお!!」

シルヴィア「はああああああ!!」

ガギギギギギギツ!!!

鳴り止まない剣と刀がぶつかり合う音。

ガギイイイイインツ!!!

2人が漸く剣と刀を退き合い、2人も後方へと下がった。

八幡「はあ……はあ……はあ……（こんなに長くて厳しい戦いは初めてだ。星露と戦った時はこんなに辛くはなかった。俺は全力では戦ってない……本気で戦ってる。俺の全てを出してだ。それを凌ぐどころか互角に戦ってやがる。とんでもない奴だよ、お前は。）」

シルヴィア「はあ……はあ……はあ……（多分、私が今まで戦った相手の中で一番強いよ、君は。でも、そんな君と互角に戦ってるんだから、かなり疲れてるよ。でも気なんて抜けないし、油断も出来ない。だって今戦っているのは、六花最強なんだからね。そうでしょ、八幡くん?）」

八幡「……………なあシルヴィ。俺はもう残りの星辰力はそんなに残ってない。勿論のことだが、腕や足を動かす力もそんなにはない。お前はどうか？」

シルヴィア「私もだよ。星辰力も腕と足の力もあまりない。でも、だからといって手加減なんてしない。」

八幡「それは俺も同じだ。だから……………もうケリをつけないか？」  
シルヴィア「？」

八幡「何でもいいから、自分の本気をぶつける。今でいう星辰力を全て身体能力に使うとかな。」

シルヴィア（私はまだ霊力がある……………一か八か、八坂とやってみるかな……………うん、やろう!!）

シルヴィア「いいよ、その勝負乗ったよ。」

八幡「よし、なら今からだ。今から本気を出す時間を互いに取って、準備をしてくれ。」

シルヴィア「いいよ、じゃあ……………」

八幡／シルヴィア「始めっ!!」

そして2人は星辰力……ではなく、霊力を最大限に引き出して練り上げていた。八幡は黄金色のオーラを纏い、シルヴィアは紫色のオーラを纏っていた。観客には異様なオーラしか見えていないだろうが、2人には互いの隣にいる動物がはつきりと見えていた。

シルヴィア（あれが八幡くんの最後の守護霊……狼、かな？でも今までのより格が違う気がする。）

八幡（なんでシルヴィが憑霊を使える!?いつから……いや、それは後だ。今は戦いに集中しないとだな。）

八幡は神格の狼を纏った。その瞬間、とてつもなく強い闘気が会場を包んだ。そして八幡の姿が変わり、黒い和服に白帯と羽織、髪も若干伸びて銀髪になっていた。

シルヴィアも妖狐である八坂を纏った。シルヴィアも八幡同様に姿が変わり、髪の色も金髪になっていた。ドレスに近い和服に変わっていて、格好で言えば梅小路冬香に近いだろう。白と紫が主調の和服だった。

八幡「憑神……神喰狼っ!!」  
シルヴィア「憑霊……美妖・羽衣狐っ!!」

互いに姿が変わり、待っているオーラもさつきとは桁違いになっていた。だが、2人には共通しているものがあつた。それは2人から見ても明らかなものだった。

耳と尻尾だった。

髪の色そのままの耳と尻尾だったのだ。八幡は1つの銀色の尾を、シルヴィアは9つの金色の尾をなびかせていた。

互いが思っていたのとはかけ離れていたが、似たような事は思っていた。

八幡（か、可愛い……／＼／＼／＼）  
シルヴィア（か、かつこいい……／＼／＼／＼）

八幡（な、何だありや？シルヴィアが憑霊を使えるのには驚いたが、もうそれどころじゃない。何だよあの耳と尻尾は!?いや、シルヴィ自体もそうだが、何でそのものは変わってねえのに何で服と耳と尻尾と髪の色だけであんなにも可愛くなるんだよ!!?あんな可愛いのに攻撃出来ねえよ!!むしろ撫でたい!!）

シルヴィア（うう……今まではあんなの無かったのに。どうして今回の憑神……だったかな？それには耳や尻尾がついてるのさ!!今の八幡くんかつこよ過ぎて直視出来ないよ!!しかも髪の色まであの時と同じ色だし!!）

互いに真顔のままだが、心の中は相手の変わり様に叫びまくっていた。

シルヴィア「……ねえ八幡くん。きっと思ってることは同じだと思うからさ、この勝負は一撃で終わらせることにしない？私、君を直視してられない／＼／＼／＼」

八幡「あ、ああそうだな。俺も同じだ。ならもう一撃でケリをつけよう。その方が俺たちのためかもな……精神的な／＼／＼／＼」

八幡とシルヴィアはお互いの姿が直視出来ないという、戦いではあまり関係ない理由で解決法を変えた。2人にとっては戦うどころではなかったのだろう。2人は背を向けあつた……そして……

残っている霊力と星辰力を自身の身体に注ぎ込んだ。途端に会場は大きく揺れていた。そんな事は関係ないとばかりに力を注ぎ続ける2人。

八幡「行くぞ、シルヴィ。」  
シルヴィア「うん、八幡くん。」

「はあああああああああああ  
!!!!!!」

光が会場を包み、観客や実況が目を開いた時には2人の位置は逆転していた。違っていたのは、さっきと違って棒立ちではなく、何か攻撃をした後のような構えを取っていた。

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

スパッ!!



チャリチャリ……

校章が落ちた音がして試合が終了した。のだが……

『End of duel』『DRAW』

なんと表示板には『DRAW』引き分けの文字が映っていた。

梁瀬『……え、ええくと、こういう時はどうすればいいんでしょう？自分がやってきた星武祭では引き分けなんてなかったの………』

チャム『じ、自分も同じっス。』

八幡「答えは簡単だ。」

シルヴィア「うん、そうだね♪」

2人『？』

観客全員「「「「？」」」」

八幡「俺たちを同率優勝にすればいい！それだけの話だ!!」  
シルヴィア「そうすれば、何も問題ないでしょう？」

梁瀬『え、ええ？で、ですが……あ、あれ？ちよ、ちよつと!?』

コール『その提案、大会委員長である私、コール・メスメルが受諾する!!今回の《王竜星武祭》の優勝者は、比企谷八幡選手とシルヴィア・リユースハイム選手だっ!!異議のない者は拍手で応えよっ!!!』

パチパチパチパチ!!!

観客全員が拍手を2人に贈った。それは賛成、つまりは2人が優勝したという意味でもあった。

梁瀬『えく……コホン。試合終了く!!!勝者、比企谷八幡&シルヴィア・リユースハイムく!!!前代未聞の《王竜星武祭》同時優勝だく!!!』

紙吹雪が舞い2人は元の姿になって、徐々に距離を縮めていった。

八幡「意外も意外、2人で勝っちゃったな。」

シルヴィア「ふふっ、そうだね♪」

八幡「……………シルヴィ。」

シルヴィア「……………八幡くん。」

八幡はシルヴィアの腰に腕を回し、シルヴィアは八幡の首に腕を回した。そして……………

2人「んっ……………」

観客の前で堂々と口づけを交わした。勿論の事だが、観客側や実況席は地震が起きるくらいの大騒ぎだった。

梁瀬『ウオツホオオオオイッ!!!皆さんご覧下さい!!あの六花最強のバカップル夫婦が会場のど真ん中でアツアツなキスをしていますゝ!!!今回の星武祭優勝者は界龍第七学院の比企谷八幡選手とクインヴェール女学園のシルヴィア・リユースハイム選手です!!!いやあくありがとうございます!ご馳走様でした!!!』

チャム『キャラがおかしくなってることについてはツツコミ入れた方がいいっすかね?』

## 激闘の末に

シルヴィア side

公衆の面前とお茶の間の皆さんの前でキスをした私たちだけど、不思議といつものような恥ずかしさはなかった。インタビューの時に、戦いのこともそうだけどキスの事も聞かれた。でも、私も八幡くんも『したいからした。』くらいしかなかったからそう答えた。別に間違ったことは言っていないと私は思う。だって大好きな人とキスをしたいなんて当然の感情じゃない？

……とまあ色々とあつたけど、無事にインタビューも終わった私たちは控え室に戻ってソファに座って手を握りながらゆっくりしてします。戦いの時と違って普段の八幡くんは、とても優しいオーラを出してる。前までは分からなかったけど、霊視が使える今なら分かる。なんか霊気とは違う、暖かいのを私に流してくれている。だからかもしれないけど、凄く安心する。このままだと眠ってしまいそうだよ。

八幡「……そういえばシルヴィ。」

シルヴィア「うん？」

八幡「お前が憑霊を使った時は驚いたぞ。俺と戦うまで隠してたんだろ？」

シルヴィア「だって八幡くん以外の相手に出しても意味ないもん。出すのなら私が本気で戦える相手に出したいんだもん♪」

八幡「……そうか。あの着物や狐の耳や9つの尾からして大妖怪・羽衣狐だな？まあ技の名前にもあつたが。」

シルヴィア「正解。最初は八幡くんに憑いていたみたいなんだけど、この羽衣狐って憑代が女の人にしかならないみたいなんだ。そこで私がちょうど良かったみたい。」

八幡「成る程な……確かにその理由なら男の俺に憑いていても仕方ねえよな。」

シルヴィア「そういえば八幡くんは？あれって守護霊だよね？」

八幡「あー少し違う。あれは霊ucciやあ霊なんだが、神の霊、神霊なんだよ。」

シルヴィア「ええ!?!じゃあ八幡くんは神様を使役したっていうの!?!」

八幡「言う事を聞かせるのにかなり手間取ったけどな。それこそ認めてくれたのはつい先月だしな。」

せ、先月!?!じゃあもし八幡くんが先月に手懐けていなかったら、私が勝っていたかもかな？だとしたら……やだなあ。私は八幡くんと同率優勝の方が良い。

シルヴィア「名前は？狼の神様だよね？」

八幡「聞いても知らないだろう。俺も初めて知ったからな。ニホンオオカミが神格化した《真神<sup>まかみ</sup>》っていうんだ。正式には《大口真神<sup>おおくちのまかみ</sup>》っていうみたいだ。」

シルヴィア「へえ……」

八幡「そんな大層な奴が俺の中にいたらしいんだ。全くとんでもねえよ。」

シルヴィア「私はそんな神様を使役した八幡くんの方がとんでもないと思うなあ。」

p i p i p i : : p i p i p i :

シルヴィア「ん？誰だろう？」

八幡「俺はなんとなく予想ついた。」

私は端末を開いて確認すると、白い髪に白い肌、黒い制服が特徴の子、オーフェリアさんが居た。

八幡「やっぱりか……」

オーフェリア『……………八幡、シルヴィア。中に入れてもらってもいいかしら?』

折角の2人だけの時間だったけど、ここで追い払ってもね……………うん、しようがないから入れてあげよう!

シルヴィア「うん、ちよつと待っててね。」

私は端末の右下にあるOPENボタンを押して、オーフェリアさんの中に入れた。

オーフェリア「……………2人とも、優勝おめでとう。これで八幡は<sup>グランドスラム</sup>《三冠制覇》、シルヴィアは歴代最強の魔女と肩を並べたというわけね。」

シルヴィア「やめてよオーフェリアさん。そんなこと言われても嬉しくないよ。」

八幡「ああ、そうだな。でも、肩を並べたっていうのは事実かもな。俺も《三冠制覇》なんて言われたが、別に実感なんて湧かねえしな。そう言われるだけなんだろう。」

オーフェリア「……………そうだと思うわ。私だってあんな魔法を使えるっていうだけの理由で学院からは腫れ物扱いだもの。別に悩んだことはなかったからいいけど。」

シルヴィア「でも気をつけたほうがいいかもね。噂に尾ひれがつくのはよくあることだから。」

八幡「俺たちが何処をどう気をつければいいのか、全く分からないけどな。尾ひれつてのは周りの奴らが勝手につけていくもんだろ?」  
シルヴィア「それを1つ1つ否定してもね……………確かに気をつけようがないかも。」

オーフェリア「……………気にしないのが一番、なかしら?でも貴方たちは周りにはとても良い顔をするから影響が少くないものね。」  
シルヴィア「いつその事、またTVインタビューでもしようか?」

八幡「悪くないな。」

オーフェリア「……………またあの△△社を潰すの？」

八幡「またってなんだよ、またって？あっちが下らねえ事をしたり聞いたりするからだろ。俺は別に何も間違ったことはしてない。これは断言できる。」

シルヴィア「確かにそうだけど、八幡くんってかなりエゲツない事をするからね。お茶の間の皆さんも見てるあの場であんなことを言うんだもの。度胸があるというか、肝が座ってるというか……………」

オーフェリア「……………考えなしに突っ走ってる？」

八幡「よしオーフェリア、今からあのメイド喫茶いこうか。俺がまた執事体験でお前にフルコースで奉仕してやるからよ。」

オーフェリア「……………すごく魅力的な提案なのだけど、遠慮しておくわ。（まだ死にたくないもの。）」

うん、分かる……………分かるよオーフェリアさん。あんなの耐えられるわけないよね。八幡くんの執事姿なんて反則だもん。

八幡「まあ、時間になるまで待つとするか。」

2人「はい♪（……………ええ。）」

## 2人の最後の表彰式

――――

時は過ぎ、今は夜の19時を回っている。此処シリウスドームでは観客の他にも統合企業財体の幹部や、学園の理事長、諜報工作機関のトップなどの顔ぶれが集まっていた。透明な足場には六花園の全生徒会長とその代理、運営委員長が立っており、表彰式が執り行われていた。

梁瀬『今回の《王竜星武祭》は計4日間と例年に比べると非常に短い期間でしたが、その分実力の高いメンバーが揃い、苛烈で熾烈な戦いが見られましたね!』

チャム『はい。特に決勝戦の比企谷選手とリユーネハイム選手の戦いには驚かされるものばかりだったっす!でも、これが2人の最後の戦いだと思うと、なんだか寂しいっすね。』

梁瀬『そうですね。できればあともう一戦交えるのを見たいところですね。ですが、最後だからこそ、映えるというものでしょうか、今の表彰式が輝いて見えます。』

チャム『《三冠制覇》と《王竜星武祭》連覇という歴史的瞬間に立ち会えたんだから、今シーズンの《王竜星武祭》は忘れられないものになるっすね!』

梁瀬『はいっ!!それでは、最後に決勝に勝った2人の表彰式に移ります!界龍第七学院の比企谷八幡、クインヴェール女学園のシルヴィア・リユーネハイム、表彰台へと登壇して下さい!!』

そして2人が姿を現した。観客席からは誰もが予想していたかのような歓声が湧き上がった。八幡とシルヴィアは登壇する際に手を繋いでいた。



八幡「《王竜星武祭》で一緒にトロフィーを受け取る表彰式なんて、今までで初めてだろうな。本当に歴史的瞬間だな。」

シルヴィア「もしかしたら、教科書にも載っちゃうんじゃないかな？ほら、史上初のほにやうらゝみたいな感じでさー」

八幡「マジであり得そうなこと言うなよ……」

梁瀬『それでは、運営委員長よりトロフィーの授与が行われます!!』

コール「……君たちには、もつと相応しい人がトロフィーを授与してくれる。私はただの運営委員長、君たちにこれを渡すのはこの人の仕事だろう。」

2人「？」

コールがその場から離れて一番後ろへと下がると、横からは2人も見知った女性が出てきた。

2人「小苑さんっ!!」

小苑「お主らの試合、拝見させてもらったのじゃ。実に良い試合じゃった。流石は儂の義息子と義娘じゃ。期待以上の戦いぶりじゃった。」

小苑「シルヴィア・リユネハイム。其方の今星武祭における素晴らしい功績を讃えここに賞する。そして、《王竜星武祭》連覇という偉業を成し遂げた事も考慮し、こちらも授与するものとする。」

大会委員がトレイと共に持ってきたのは、大会優勝のトロフィー。そしてもう一つはトロフィーの中に竜が象られたエンブレムが2つ埋め込まれたトロフィーだった。恐らく、《王竜星武祭》を連覇したからであろう。

小苑「我が義息子をよくぞあそこまで追い詰めた。これからも義息子を頼むぞい。優勝、おめでとう。」

シルヴィア「ありがとうございます。」

シルヴィアは2つのトロフィーを受け取り、後ろへと1歩下がった。

小苑「比企谷八幡。其方の今星部祭における素晴らしき功績を讃えここに賞する。そして今シーズン全ての星武祭優勝という偉業を成し遂げた事も考慮し、こちらを授与するものとする。」

八幡も2つのトロフィーだったが、シルヴィアと少し違った。大会優勝のトロフィーは同じだが、もう1つは赤、青、そして緑のエンブレムが埋め込まれていた。よく見ると、赤は鳳凰、青は合成獣、緑は竜だった。

小苑「よくここまで成長した。儂はお主のような義息子を持てて誇りに思うぞ。よく《三冠制覇》を成し遂げてくれた。優勝、おめでとう。」

八幡「……………ありがとうございます。」

八幡も2つのトロフィーを受け取った。

梁瀬『では皆様、比企谷選手とリユーネハイム選手に今一度、大きな拍手をお願いします!!』

観客からは大歓声と拍手が巻き起こった。

八幡とシルヴィアは片方のトロフィーを八幡の能力で作った影の台に置いて、もう片方のトロフィーを高々と掲げた。八幡はシルヴィアの肩に手を、シルヴィアは八幡の腰に手を当てていた。

梁瀬『それでは皆様、今シーズンお疲れ様でした!!お次は《鳳凰星

武祭』でお会いしましょう!! 実況は私、梁瀬ミーコ!! 解説は………  
チャム『ファム・テイ・チャムでお送りしたっス!!』

こうして、シーズン最後の星武祭は終了した。

## 拒絶と決別

八幡 side

シルヴィア「ふう………終わったね。でも、これでもう星武祭に出られないのかあ………なんかちよつと寂しい感じがするなあ。」

八幡「じゃあ次の願いは星武祭の出場権か？」

シルヴィア「そんな事に使わないよ。回数が限られているからこそ、そのうちに全力を出したいって思えるものじゃない。それを超過しちゃうと、なんか違う気がするよ。」

八幡「確かに、そりや正論だな。」

それ程長くもない表彰式と閉会式を終えて、俺たちは控え室に戻っている。それ程急いで帰る必要もないから、少しだけのんびりしようと思っただけだ。それだけだから暫くしたら帰るけどな。

八幡「帰る途中でお店の人たちに捕まらなきやいいんだが………ハッキリ言うともまだ食材残ってるし。」

シルヴィア「ああ、そうだよ。お祝いという名目で何か渡してきそうな予感もするね。どうしょっか？」

八幡「もし来たら受け取るしかないと思うぞ。できる限り断るっていうのもアリだが、あちらさんにマイナスな印象を与えちゃう。素直に受け取るか？」

シルヴィア「その方が良いよ。せっかく用意してくれてるんだもの。」

八幡「そうだな……よし、んじやあ帰るか。」

シルヴィア「うん、帰ろう。」

2人「我が家に。」

そして俺たちは会場を出て我が家へと向かった

のだが…………

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

由比ヶ浜「……………」

何でお前が俺たちの目の前にいるんですかね？

シルヴィア「……………八幡くん、無視して行こつ。」

八幡「ああ。」

八幡「だがよ、あいつ絶対俺たちに用があるよな？だって俺たちしか見てないぞ？」ボソッ

シルヴィア「関係ないよ。用があるのならすぐに言えばいい話だけど、彼女の話は聞くだけ無駄だと思うし。ましてや八幡くんの事を恨んでいるのなら尚更聞きたくないよ。」ボソッ

八幡「そ、そうか。」ボソッ

なんかシルヴィが少しだけ怖い…………

そして俺たちはその場で立っている由比ヶ浜を素通りした…………

由比ヶ浜「ちよつと待てし!!何無視して帰ろうとしてんの!!」

シルヴィア「え？私たちに用？」

由比ヶ浜「他に誰がいるし!!」

シルヴィア「お友達と待ち合わせでもしているんじゃないかなあと思ってたから…………それで？私達に用って何？君は自分の立場分かっているの？八幡くんに関わるなって言われていると思うけど？」

うん、言ったね。2年前に間違いなく言ったね。まあそのうち2人とは和解したけど。

由比ヶ浜「シルヴィアさんじゃないんだ。用があるのはヒツキーの方。」

八幡「俺はお前の話を聞いてやる義理なんてないぞ。ましてや、総武にいた頃の話に嘘を混ぜ込んだ奴の話を信用するなんて出来ないんだが？」

由比ヶ浜「いいから聞けしつ！絶対ヒツキーの為になる事なんだから!!」

八幡「ほう？なら聞こうか。その俺のためになる事とやらをよ。」

予想出来ねえな…………こいつ何を言う気だ？

由比ヶ浜「ヒツキー、私と付き合ってよ。そもそもの話、私が先にヒツキーのことを好きになったんだし。シルヴィアさんが横取りしたんだから。だからさ、シルヴィアさんと別れて私と付き合ってよ。」

こいつ、何をいうかと思えば…………

ふざけてんのか？

八幡「1つ聞くが、それは真面目に言ってるのか？俺にはおふざけにしか聞こえないんだが？」

由比ヶ浜「本気に決まってるよ。なんでこんなところで嘘つくのさ。」

八幡「……………そうか、よく分かった。お前の頭のネジがぶっ飛んでるってことがよく分かった。よくもまあ、そんなバカで大それた事が言えたもんだ。お前の馬鹿さ加減には心底尊敬するよ……………悪い意味でな。」

由比ヶ浜「な、なんで急にそんな悪口言われなくちゃならないの!？」  
八幡「先に好きになったのは自分だから、彼女と別れて付き合えだ

？冗談も大概にしろよ。なんで俺がお前と付き合いなきやならない？」

由比ヶ浜「これ以上シルヴィアさんを洗脳するなって言ってるの!! 可哀想じゃん!! だから早く解放してやれしっ!!」

八幡「洗脳？お前葉山みたいな事言うな。ていうか俺、他人をマインドコントロールなんて出来ねえよ。むしろどうやってやるのか知りたいね。」

由比ヶ浜「いいから早く別れて私と付き合おうしっ!!」

八幡「すると思うか？絶対に嫌だ。断固拒否する。」

当たり前だ。誰が好きでこんな奴と付き合いなきやならない？信じらんねえよ。

由比ヶ浜「な、なんでだしっ!!」

八幡「お前さ、好きでもない奴と付き合いたいと思うか？俺は絶対に嫌だぞ？メリットもねえし、いてもつまらんし、何が良いんだよ？」

由比ヶ浜「……ねえヒツキー、今の話聞いて思ったんだけど、ヒツキーって私のこと好きじゃ……ないの？」

八幡「お前何言ってるんだ？今のお前の何処に魅力を感じろって言うんだよ？俺には今のお前の魅力が全く分からんし、感じないし、伝わらん。好きでも普通でもねえ。単に嫌いだ。」



由比ヶ浜「……あ……あ……あ……あ……」

八幡「もう一度、ハッキリ言ってやる。俺はお前が嫌いだ。理由は多々あるが、これだけにする。人の気持ちを考えない奴をお前は好きになれるか？」

今のお前には、これさえ言えば充分だ。

八幡「金輪際俺たちに関わるな……行こうか、シルヴィ。」  
シルヴィア「うん。」

俺たちはそのまま帰路についたが、帰りの途中は予想通りの展開となり、家に着く頃には両手に袋を持っていた。

※食材が多い時はこれだ！

八幡side

予想外の奴と帰り道に会っちゃったが、それはもうどうでもいい。問題はここからだ。俺たちは今から星武祭祝勝会兼お疲れ様会として、結構豪華な料理を作るつもりだ。それはいい。いいんだが、いかんせん食材の数が結構多い。昨日貰った分も合わせると、かなりの量だ。1日で食べるとは言わないが、冷蔵庫の中に全て入るかどうかと言われたら、到底無理だ。だって貰った食材教えてやろうか？

・肉屋のおっちゃん曰く処分予定のお肉詰め合わせ

（本日入荷品）

・おばちゃん曰く売れ残りの野菜&果物のダンボール詰め合わせ

（本日入荷品）

・魚屋のおっちゃん曰く売れ残りのエビやカニ

（新鮮度抜群）

・パン屋の店長曰く失敗作の詰め合わせ

（昼焼いたばかりで全て300円超え）

・ケーキ屋のお姉さん曰く凝り過ぎたショートケーキホール

（新年から発売予定）

・スーパーの店長から海外の洋菓子セット

（結構な高級品）

……多過ぎい!!こんなの冷蔵庫の中に入りきらんって!!いや、玄関に置くっていうのも1つの手だけだよ。昨日会ったおっちゃんおばちゃん店員店長さんはもう少し量を抑えようか。昨日の今日だよ?そんなに食べられません!

シルヴィア「今日はなんだか沢山あるよね……お店の近くに行ってもいないのに待ち伏せされてたから、もう受け取るしかなかったね。」

八幡「これもシルヴィア効果だな。世界的有名人がいると、鼻屑もしたくなるんじゃないか？」

シルヴィア「それをいうなら八幡くんだってもう世界的有名人だよ！《三冠制覇》を達成したんだから！今の八幡くんに敵なしなんだよ！」

八幡「シルヴィ以外ではな。一応俺、負けなしだが1引き分けなんです。」

シルヴィア「おお！という事は私が八幡くんの初めてを貰っちゃったのかな？」

八幡「……理解はしているんだろうが、女の子がそういう言い方をするものじゃありません。」

シルヴィア「ひどいっ！あんなに激しかったのに！」

八幡「そうだね、激しかったね。じゃあその分料理も多めに作らないといけないね？シルヴィアお腹空いてるだろうしね？」

シルヴィア「八幡くん、一緒に頑張ろうね？」

八幡「こんな時にだけ媚を売らないの。」ティツ

シルヴィア「あうっ!？」

全くこの子は……なんでいつもこんな綺麗な顔してるのに、こんなに可愛いんだろうか？神様この子反則過ぎん？

シルヴィア「八幡くん、冗談もこれくらいにして早く料理作っちゃおうよ。ケーキとお肉は玄関に置いておいても保存はできと思うから。」

八幡「そうだな。取り敢えずは昨日使った食材を優先して作るか。さあゝて、何作るか。」

そして俺とシルヴィは戦場（台所）へと向かった。

シルヴィア「冬といったらやっぱり鍋だよね。」  
八幡「そうだなあ。」

目の前には食材がギツシリと入った鍋、横にはお肉と野菜とカニやエビがある。いやあ、なんとも贅沢なものですねえ。これなら野菜も多く食べられるし、肉も一気に消費できる。

シルヴィア「じゃあ八幡くん、満腹になるまで食べよつか！」

八幡「ああ。それに、もらった食材だから感謝して食べないとな。」

シルヴィア「じゃあ八幡宗師、お願いしますっ！」

八幡「あいよ……この世の全ての食材に感謝を込めて………いただきます。」

シルヴィア「いただきます♪」

シルヴィア「八幡くん、これって『言わないでくれ、1回やってみ  
たかったんだよ。』……ふふつ、はーい♪」

まさかシルヴィアが知っていたとは……けど実家にはその本な  
かったし……何処で覚えた？

## 愛着と過去の自分たち

シルヴィア side

お鍋も食べ終わって、私たちはデザートのケーキを食べています。お姉さんが少しデコレーションをし過ぎたって言ってたけど、私は別にそんなことは無いと思う。至って普通の……ではないけど、ちゃんとしたケーキだと思う。それに、私と八幡くんの好きなショートケーキだしね♪

にしても、やっぱり余っちゃったな……明日も鍋かな？ ううん、きつと飽きちゃうよね。じゃあ明日は焼肉でもしようかな。うん、それも良いかもしれないね！

八幡「余った肉や野菜は明日にでも焼肉にして食べるか。焼肉でもかなりの量は減らせるだろう。」

シルヴィア「あつ！ 私も同じこと考えてたよ！ やっぱり私たちって考え方も似てるんだね♪」

八幡「そうだな。今日は鍋やったからすき焼きとかはあまり考えられなかった。だから無難に焼くっていう手段しか思いつかなかったな。」

確かに鍋を食べた次の日にも鍋っていうのは、ちよつとね……違う鍋だとしても気は進まないかもね。

八幡「後は……炒飯とかカレーとかだな。使う量はあまりないが、少しでも使うってだけでも違ってくるからな。食費は浮くが、早く食べないとダメになるからな。」

シルヴィア「スーパーの前で作った料理を100円で売ろうか？」

八幡「やめとけ。俺たちの苦労が半端じゃない。」

うん、そう言うと思ってたよ。私もそれはやろうと思ってないから安心してね、八幡くん。

――デザート後――

ケーキも取り敢えずは食べ終わって、ようやく訪れた何もない、平穏な時間。星武祭が始まる1〜2ヶ月はこの空気が凄かったから私の学園はネイトネフェルと2人だけだったけど、彼女もかなりピリピリしてたから。

でもやっぱり、この雰囲気が一番かなあ。

八幡「久しぶりな感じがするな。こんな風にゆつくりするのも。最近ではそんなことできなかったからな。出来ていたとしても、本当の意味ではリラックスなんてしてなかったしな。」

シルヴィア「うん。気を抜いたら完全に負けだっ！って思われかねないからね。特に今回の《王竜星武祭》では、ね。何せ八幡くんがいたんだもの。」

八幡「おいおい、やめてくれよ。俺は何もしてないぞ？何があるってんだよ？」

シルヴィア「《王竜星武祭》前にも言ったけど、よくそんなことが言えるよね。君のせいで何人の生徒が今回の星武祭出場を諦めたことか。何人もいるんじゃない？」

八幡「……最終的に何人いたんだろうな？やめるまでの最高人数。」  
シルヴィア「毎年必ず100人くらいはいるから……きつと今年もいたんじゃないかな？それを、誰かさんが序列1位になって4代目《万有天羅》になったりするから、2桁も行かない人数にまで減っちゃったんだよね。」

八幡「へーへーそれは悪うございました。」

シルヴィア「罰として私を抱き締めなさい！」

八幡「了解了解。」ギョッ

シルヴィア「んっ……やっぱり良いね、これ。」

八幡（なんの罰なんだ？）

八幡くんには罰って言っちゃったけど、本当は私が抱き締められただけなのだっ♪なんか星武祭が終わったからかな？ 凄く欲望に忠実になってる気がする。でも悪くはないなあ。

八幡「…………柑橘系の良い匂いだ。一緒に行っていないから分からないが、最初に出会った時に買ったシャンプー、まだ使ってるのか？」  
シルヴィア「八幡くんは知らないと思うけど、あれ私のお気に入り！あれよりも良いのが出るまではあのシャンプーとボディークリームを使い続けるって決めてるんだ。」

八幡「そうなのか……俺もあれからはこいつを使ってるが、変える気にはならないんだよな。やっぱ愛着があるからなんだろうな。」

シルヴィア「愛着といえば、八幡くんって何か普段から持っているものって何かないの？」

八幡「特にはないな。強いて言うなら【衾々切丸】くらいだな。一応俺の武器であり半身だからな。装飾品っていつても、俺自身そういうのはあまり興味ないからな。」

シルヴィア「そつかあ……私は八幡くんから貰ったブレスレットだよ！あれはお風呂と寝るとき以外は365日全てつけてるんだ！」

八幡「……そっかいや俺が作ったブレスレットだったな。確か、六花でライブした後にだっけか？」

シルヴィア「そうそう！あの時は八幡くんとまだ一緒に居たかったって思いが強かったから。そう思ったら八幡くんがこれを作ってくれたんだ。懐かしいなあ。あれからもう3年経つんだね。」

八幡「早いもんだな。あん時はお互い顔を真っ赤にすることが多かったよな。」

シルヴィア「そうそう！大したことだったり、なんでもない事なのにね！すぐに顔背けたり、俯いたり、見つめ合ったりしてたね。今じゃあ考えられないよ。こんなにも普通に出来てるからかな？」



八幡「慣れつてのもあるんだろう。俺はシルヴィとこうしてくつ  
いてられるぞ。シルヴィはどうだ？」

シルヴィア「うん、私も。これが前までは普通じゃなかったんだよ  
ね。抱き着いただけで顔真っ赤っ赤だったよね。」

ああ、懐かしいなあ……あんな時もあったんだよね。なんか  
八幡くんと付き合う前の私って凄く純情さんなんだね。今がそう  
じゃないと言わないけどね？

## 平穏な朝

八幡 side

《王竜星武祭》の翌日、俺たちは漸く訪れた平穏の中にいる。そして今はその朝だ。今は朝6時、ジジババなら起きているだろうが、大抵の学生諸君はまだお眠の時間だろう。俺はこの時間に起き慣れてるから、別に二度寝しようとかは考えていないが、季節が変わって寒くなると日が昇るのも遅くなってくるからな。外はまだ若干暗い。

こういう時ってどうするべきか……暇なんだよな。シルヴィの寝顔を見るっていう事もできるが、それも結構やってきてるからな……飽きたってわけではないが、ほぼ毎日見ると流石にな。この時間に通信をするのもおかしい話だしな。いや、どうしたものかねえ………

仕方ない、ニュースでも見るか。

とは言っても、今のニュースなんて《王竜星武祭》のことだけだとは思うがな。

……………ん？

『元聖ガライドワース学園生徒の葉山隼人、漸く姿を現わすも、反省の色は無し!!』

……………なんでこのタイミングなんだ？まあいい、もつとよく見てみるか。

『我々千葉〇〇TVの取材班一同は、1年前から継続している葉山隼人君の取材を試みていました。その目的は「何故神聖な場である星武祭で違反を犯したのか。」という目的で取材を聴きに行きましたが、取

り合ってもらえない毎日が続いていました。我々一同は1週間に1度のペースで葉山宅へと取材に行きました。そして漸くその時が来ました。1年と2ヶ月待ち、ようやく彼が姿を現しました。彼は取材に応じましたが、『獅鷲星武祭』で違反をしたことを認めてはならず、現界龍第七学院序列1位で今回の『王竜星武祭』優勝者の1人である比企谷八幡君を完全否定。

彼曰く

【違反をしているのはあいつの方だ!!俺は何も悪くない!!】

【奴は自分の力を増強する術を持っている!!違反をしているのは間違いない奴だ!!】

と主張していました。だがこの主張は無効となっている。理由は『獅鷲星武祭』の際に、比企谷八幡君が検査を行われていたからである。その結果、身体や体内にドーピングを投与したと思われる形跡や結果は出なかったからである。今後どうするのかと我々が聞くと彼は「勿論六花に戻るつもりです。」と答えた。尚、彼は社会には出ておらず、学業、就職もしていないそうだ。』

……………こいつまだ俺の事を追っかけてんのかよ。気持ち悪いからもうやめてくれよ。ていうか、本当によくこんなことが言えるな。俺がお前なら引きこもりを続けるけどな。まあいずれ限界は来るけど。

まあいいや。他は……………ねえな。試しに占いでも見てみるか。ええつと獅子座獅子座……………あつた。

【獅子座】 2位

『思い掛けない事で得をする日でしょう。日頃お出かけをしている方は今日は中へ、あまり外へ出ない方は外に出てみるといいでしょう。』  
ラッキーアイテム『紫色』

……………うん、確かに運勢は良かったが、1つ聞きたい。アイテムの内に人間は入りますか？

――1時間後――

ガチャッ

おっ、起きてきたな。

シルヴィア「おはよう八幡くん……」

八幡「おはよ。随分眠そうだな……ちゃんと寝れたのか？」

シルヴィア「んんん……」

八幡「ふっ……ほら、顔を洗って来い。飯ならもうすぐ出来るから。」

シルヴィア「うん……」

……本当に大丈夫か？

――5分後――

八幡「……………」

シルヴィア「……………」ポ

ありのままを説明しよう。調理が終わって出来た食事をテーブルに運ぼうとしたら、既にシルヴィがいた。それもかなりボーっとした状態で。

八幡「はあ……仕方ねえな。タオルタオル……」

八幡「はーいお客さーん、顔拭きますよー。」  
シルヴィア「わぷっ!？」

寝惚けた人にはふさわしい、キンキンに冷えた状態の水で濡らした水をかけて絞ったタオルだ。それをシルヴィの顔に当ててゴシゴシと拭いている。

シルヴィア「んーんー!!」

八幡「ほい。」

シルヴィア「ぷはあっ!!八幡くん!驚かさないでよ!ビツクリしちゃったよ!!」

八幡「おかげで目が覚めただろう?全く誰だ?顔を洗いに行けと言ったのにテーブルで座りながら眠っているおバカさんは?」

シルヴィア「……………えへへ。」

八幡「全く……じゃあ朝ごはんにするぞ。」  
シルヴィア「うん。」

.....

シルヴィア「そういえば八幡くんは今日どうするの？」

八幡「一度界龍に戻ろうと思ってる。必要ないとは思うが、報告はしておかないとって思うしな。」

シルヴィア「そつか……そうだね。じゃあ私も学園に一回顔を出そうかな。それか、八幡くんについていくか！」

八幡「俺は別にいいが……まあ今日は全て休校だからな。別にいいっちゃあいいが……」

シルヴィア「じゃあ八幡くんについていくね！」

八幡「即答する辺りは流石だな。」

シルヴィア「それじゃあ食事が終わったら、界龍第七学院に出発だね！」

八幡「ああ、そうだな。」

さて、目的地も決まったわけだし、早く飯食って制服に着替えて行くとするか。

お出迎え？

八幡 side

――界龍第七学院前――

ここまで明鏡止水で来て正解だな。外にはまだ観光客やら生徒やら企業のお偉いさんやらで溢れていた。絶対に俺らが出たら、握手、サイン、写真、勧誘なんか飛び交ってくるだろうな。にしても、今は朝の10時だぞ。幾ら殆どの店が開く時間だからと言って急過ぎないか？ いや、まあお土産とかをかうんだったら、売り切れない内に買っておいたほうがいいかもしれんが。それとも他の目的か？

……まあ、それはいい。いつ何時に外に出るかなんて人それぞれだからな。ただ、企業のお偉いさんはこの時間に歩くものじゃないけど。10時前に出歩いてもお店開いてないし、何より準備が出来てない。それにお話があつて来たのか、単に見に来たのか分からんから、私服でお店行った方が良いでしょう。

さて、視点を戻そう。俺たちは界龍の校門前にいる。門の右端に<sup>ユーション</sup>玉緑、左端に帆<sup>ファンジ</sup>季がいる。君たちも仕事熱心ねえ。脅かしてもいいが、これはこの前もやった気がするから、今回は普通に行くか。

八幡「じゃあシルヴィ、明鏡止水解くからな。」  
シルヴィア「うん。」

八幡「よう、お疲れさん。」

シルヴィア「おはよう、2人共。」

玉緑「おお!!宗師!!それに奥方様も!!よくぞいらつしやいました!!昨日はお待ちしていたのですが、お2人で過ごしているのだと2代目様からお聞きしていたので、今日お待ちしていたのですが、まさかこんなに早く来るとは……まだ準備も何もしていないというのに。」

八幡「そんな事をしていたのか?別にそんな事をしなくても迎えてくれるだけで充分なんだがな。」

シルヴィア「そうだよ。私なんて他学園の生徒なのにこんなに歓迎してくれるんだから充分すぎるくらいだよ。」

玉緑「何を仰いますか!!本来であれば《三冠制覇》と《王竜星武祭》連覇という偉業を成し遂げられたお2人には全生徒総出でのお出迎えこそが相応しいのです!!今朝帰ることを事前に聞かされていれば、皆は即座にそのようにいたしました!!」

いや、そんな風にされても困るんだが……

帆季「それに、あれ程の事を成し遂げられたのです。我々界龍の生徒全員がお2人の姿を拝見したいと強く願っております。殆どの者が現在鍛錬をしておりますが、すぐに八天門場へ招集をかけます。お2人はそのまま八天門場へとお進み下さい。」

八幡「別に招集しなくていいんだが……まあしたいようにすればいい。」

シルヴィア「八幡くん、流石の崇められっぷりだね。」

——界龍校内——

中に入った俺たちは寄り道をせず、まっすぐ道場へと向かった。

シルヴィア「皆も飽きないよね。八幡くん何かを成し遂げる度にこういう事が起きるんじゃないかな?」

八幡「じゃあ俺、もう界龍で大人しくしてた方がいいのかもな。星



武祭以外で目立ったことしたら、また厄介なことになるかもしれないしな。」

シルヴィア「じゃあ私と2人でライブをしようっ♪」

八幡「ちよいシルヴィさん？俺の話聞いてたの？目立ったことはない方がいいって言ったばかりだよな？その矢先にその発言は何？」

シルヴィア「いやあ、その方がいいかなあって。」

八幡「良くねえよ。確かに六花と日本だったらライブに協力するとは言ったけど、絶対じゃないからな？」

シルヴィア「ええ〜!!私八幡くんと一緒にやないとヤダよ!!それに私、八幡くんと一緒に眠らないと眠れない病にかかってるんだよ!」

何だよそのメチャクチャ意味不明な病気は？

八幡「じゃあもし、これから海外の遠征があつた時はどうするんだよ？その時は俺ついていけないぞ？」

シルヴィア「……………ついてきてください。」うるうる

八幡「だから行けないって言ってるんだろ。」

シルヴィア「八幡くんの分身を使えば良いんだけど、それだと八幡くんの星辰力が持たないし、抱き枕じゃあ代わりにもならないし……………もう、八幡くんが海外にも協力してくれたら解決する話なのにつ!」チラチラ

八幡「チラチラ見ながら言うな。俺だって辛いのを我慢してるんだ。シルヴィもだろ？」

シルヴィア「それはそうだけど……………」

八幡「その分、会えたら幸せを感じられるんだ。その辛さはその前払いだと思っておけばいい。俺もそのツケを払ってるんだからよ。」

シルヴィア「むう／＼分かった。八幡くんも我慢するなら、私も我慢する。」

八幡「ありがとな。」ナデナデ

シルヴィア「……………うん／＼／」

――八天門場――

着いたはいいが……うん、いつもと同じ風景だな。剣や刀、青龍刀に槍、棍もある。うん、何処も変わってない。

八幡「……何もないな。」

シルヴィア「うん、何もないね。」

いや、ここは何も起こらないが正解なんだろうか？そんな事どうでもいいか。

それよりもだ。この道場に入っても何も起こらないんだが……え？何？何もしてないの？いや別に何かを期待していたってわけじゃないが、何も無いの？

そんな事を思っていた時、大きな破裂音がした。

## ゲーム 前編

シルヴィア side

えっ!? 何っ!!? 今の音は何っ!!?

八幡「な、何だ? ていうかまだ音が続いて……………っておい、煙まで出て来たぞ!」

シルヴィア「け、煙っ!」

破裂音が複数回続いたと思ったら、今度は白い煙が辺り一帯を包んだ。勿論私と八幡くんは手を繋いでいる。離れ離れにならないようにするためである。

八幡「シルヴィ、俺から離れるなよ?」

シルヴィア「うん!」

八幡「しかし……………何だってんだこりゃ?」

シルヴィア「私にもさっぱりだよ。一体何なの?」

『これよりっ!!比企谷八幡宗師とその奥方、シルヴィア・リニューネハイム様の《王竜星武祭》優勝を祝しまして、祝勝会を開催致します!!』

2人「祝勝会?」

え?もしかしてさつき門番さんが言ってたお出迎えってこれの事!?これだけの為にこんな大掛かりな準備してたの!?君たち他にもつとやることあるよね!?

『まず最初に、宗師と奥方様は前へとお進み下さい。』

八幡「前に進む?それだけか?」

シルヴィア「でも、それだけなら進もうよ。」

八幡「……………まあいいか。」

でも、なんか不安なんだよなあ……

シルヴィア「あれ?何かあるよ。」

八幡「……………何だこれ?」

煙の中から1つの台を発見した。そこには3つの箱があった。それぞれの箱には訳の分からないアルファベットと数字が紙に書かれていて、【H×2】【SL】【J】と紙が貼られた箱がある。

『さて、お2人の前には訳の分からない3つの箱があるはずですよ!その箱を1人1つだけ持ち運んでください!』

……………じゃあ1つは置いて行かなきゃならないってことだね?でもこれって正解ってあるのかな?

八幡「なあ!これって正解ってあるのかー!」

あつ！同じこと思ってた♪

『正解は特に御座いません!!これは遊びみたいなものですので!』

……私たち、遊ばれてるの？

八幡「……じゃあ俺は「SL」だな。ちょうどシルヴィのイニシャルだな。」

シルヴィア「ああつ！確かにそう考えたらこの「H×2」も比企谷八幡の「ヒ」と「ハ」はどっちも「H」から始まるねっ!!じゃあ私はこの「H×2」にしよつと!」

『選び終わりましたか!?では次は左へとお進みください!!』

私たちは言われるがままに奥へと進んだ。

すると、また箱があつた。でも今度はさつきよりも数が多かった。

『さて、では先程と同じように箱を選んで頂くのですが、お次は1人2つお選び下さい!!』

八幡「今度は2つか。今度のは………」

次にあつた箱は、どれもアルファベットだけだった。そのアルファベットは「I」「L」「V」「N」「A」「H」「E」「G」の8つだった。

シルヴィア「うーん……今度は一文字だけかあ……余計に分からないよ。」

八幡「分からんな……何だってんだ?」

心理戦でもなさそうだし……でも、頭を使っても今のところは意味

はなさそう。

シルヴィア「当てずっぽうで選んだら、なんかとんでも無いことになりそうな予感がするよ……」

八幡「何となくわかるなそれ。取り敢えずは慎重に選ぶか。」

――3分後――

八幡「決まったぞ。俺は【I】と【L】だ。」

シルヴィア「私は【N】と【A】だよ。」

『決まりましたね？では次は後ろへとお進み下さい！』

え？まだあるの？

八幡「遊びとか言ってたが、訳も分からない状態でやるのって案外楽しいもんだな。」

シルヴィア「そうだね！なんだか楽しくなってきたかもね♪まだあるのって感じはするけど。」

次も同じ箱があった。でも次は紙が1つの箱もあれば、紙が2つに分けられて貼られている箱もあった。

『次も同じく2つの箱を取ってください!!』

私たちの目の前にあるのは、【I】【W】【C】【T&T】【F】【H×2】【T】【A】とさっきと同じ8つだった。

八幡「こりやまた難しくなったな。」

シルヴィア「なにこれ！?!あれ？【H×2】の箱がもう1つある。」

何でだろう？

八幡「思ったが、もう煙の意味なくないか？」

シルヴィア「うん、私もそれ思った。」

八幡「……まあいい。取り敢えず選ぶか。」

シルヴィア「ちよつと待って！ねえ！この【H×2】って交換してもいいの？」

『はい！同じ数字もしくは文字でしたら、交換は可能です！』

シルヴィア「よしっ！じゃあ交換しよっと！」

私は持っている【H×2】とその場においてある【H×2】を交換した。

シルヴィア「じゃあ選ばっか！」

――3分後――

シルヴィア「決まったよ！私は【I】と【T&T】にしたよ！」

八幡「俺は【W】と【C】にした。」

『お決まりですね？では次に左へとお進みください。』

八幡「また左か？いや、俺たちの方向からすれば左だが、俺たちが向きを変えれば、真ん中に戻るのか。」

シルヴィア「そうだね。じゃあこのまま左だね。」

そのまま進むと、また同じようなものがあつた。

『次も同じように選んで頂きますが、今度は相手に渡す箱を選んで下

さい。箱の個数は設けません。渡したい文字を選んで相手に渡してください。』

八幡「もうこれ心理戦じゃね？」

シルヴィア「あはは……でも八幡くんに渡したい文字かあ。」

ううーん……悩むなあ……



## ゲーム 後編

八幡 side

さて、シルヴィに渡す箱を選べって言われたわけだが……今度ある箱の数は18個とかなり多い。ないアルファベットは「C」「E」「J」「L」「Q」「S」「X」「Z」の8文字だった。抜けていたアルファベットは多いが、それでもこの中には18個もある。その中から選ぶのか……

八幡「……何を選べばいいか分からん。このゲームってこんなに難しいものなのか？」

シルヴィア「相手に渡すのを選ぶからこそ手を抜きたくないよね。なんかこのゲームを考えた人ってやらしい攻め方してくれるね。」

本当にそう思う。よし、後で虎峰に誰がこのゲームを作ったのかを聞きに行こう。

――5分後――

八幡「思いの外時間が掛かったが、シルヴィは決まったか？」

シルヴィア「うん、決まったよ。」

八幡「よし……俺が選んだのは「A」「T」「W」の3文字だ。理由はこれといってない。」

シルヴィア「私が選んだのは「F」「T」の2文字だよ。私も理由は特にないかな。」

『お決まりですね？では、床から発光している光に沿ってお進み下さい。』

俺たちは下を見ると、いつの間にか青い細長い光が地面で光っていた。俺とシルヴィはそれを頼りに前へと進んでいった。するとそこには……何も置かれていない台があった。

『こちらの台には先程選んで頂いた箱の中で、やはりこの箱はいらないというものを置いてください。特にないという場合は置かなくても結構でございます。』

自分で選んだ箱だつてのに、なんでそれを捨てるような前させるかね？ そんなのねえよ。ましてや、シルヴィが選んだ箱を捨てるわけにもいかねえしな。

八幡「俺はない。」

シルヴィア「私もないよ。」

『よろしいですか？ 今お2人が持っている箱で決定致しますが、本当に何も置かなくてよろしいですか？』

2人「はい。」

『分かりました。それでは……そのまま前へとお進みください。』

俺たちは前にある台を避けてそのまま突き進んだ。すると、さつきからあった煙がだんだんと薄れていき、次第に視界は回復していった。

そして目の前にあったのは、今までと同じような台だったが、置かれていたのは箱ではなく鍵だった。

『今お2人の前には鍵が1つあると思います。その鍵で全ての箱から中身を取り出してください。』

今までで一番簡単な作業だな。

八幡「開けるだけならさして時間もかからないな。すぐに終わらせるか。シルヴィ、箱を寄越してくれ。俺が開ける。」

シルヴィア「うん、お願いね。」

俺の箱と混ざんないようにしねえとな。取り敢えず俺のは端に置いておこう。

――3分後――

八幡「これで最後だな……よし、開いた。おーい、開け終わったぞー。」

中に入っていたのは、単語が書かれていた紙が入っていただけだった。これに何の意味があるのだろうか？

『ではその紙を後ろの人に渡してください。』

後ろには2人の生徒がいた。俺たちは目の前にいる奴に紙を渡した。すると、その生徒は左右に分かれて行ってしまった。

――10分後――

……俺たちだいぶ待たされてるんだが、まだ何かあるのか？

『宗師、奥方様！お待たせ致しました!!只今、お2人が選んで下さった箱の中身で1つの言葉を作っております。』

え？そんな作業やってたの？

『お2人共やはり素晴らしいと言ったところか、我々が手間を加えるところがなく、単語数も完璧でした！なので早速、繋ぎ合わせた言葉を紹介していききたいと思います。』

まずは宗師の選んだ箱から出てきた単語で繋ぎ合わせた言葉は、こちらです!!』

すると大画面から、繋ぎ合わせた英語が出てきた。

『I will continue to love forever  
r Sylvia . Lyynheym.』

…………英語だからすぐには分からんな。

『えゝこちらの意味を要約すると、こうなります!』

『私はシルヴィア・リユーネハイムを永遠に愛し続けます。』

お、おお…………かなりどストレートだな。でもこれって1つも手を加えてないんだよね？だとしたら俺あの箱の中でこれを引いたってことだよな？ある意味凄くね？

シルヴィア「……………あはは。分かつてはいるけど、なんかこういう形でやらされるとすつごく嬉しいけど、同じくらい恥ずかしいなあ／＼／＼／」

八幡「そ、そうだな。」

『続きましては奥方様の単語を繋ぎ合わせたものをご紹介致します！  
こちら一切手を加えておりません!!』

『I am all the way to near the  
Hachiman Hikigaya.』

うん、まあ分からんな。

八幡「シルヴィアはこれ見て意味分かるのか？」  
シルヴィア「流石にぱっと見じゃあ分からないよ。そこまで英語に精通しているってわけじゃないから。」

『こちらの英文を和訳したものがこちらです!!』

『私はずっと比企谷八幡のそばにいます。』

これもちかなり直球だな…………

シルヴィア「わ、私の集めた英単語でこんな言葉が出来たんだ／

／／／

八幡「なんか小っ恥ずかしいよな。」

『最後に奥方様にお知らせがあります。』

シルヴィア「え？な、何？」

『先程奥方様は【H×2】のカードを交換されましたよね？』

シルヴィア「う、うん。」

『あの選択は大正解でございます。誰がこれを書いたのかは分かりませんが、最初に奥方様が取った【H×2】の箱の中身のカードはこちらでした。』

『葉山隼人』

その瞬間、俺は背筋がゾツとした。

シルヴィア「……………え？」

『シルヴィア様があの場で箱を交換していなかったら、結果はとんで

もない事になっていました。』

ヤバい…………遊びとはいえ、こんなにも身の毛がよだつのは初めてだ。

八幡「っ!!」

シルヴィア「……………」プルプル

八幡「シルヴィ、こっちに来い。」

シルヴィア「…うん。」プルプル

そして俺はシルヴィを抱き寄せた。

震えてる…………今を見せられてよっぽど怖かったんだろう。もしあのまま交換していなかったら、あの英文は…………いや、言うべきではない。

八幡「…………大丈夫だシルヴィ。結果的に答えは俺になったんだから。」

シルヴィア「怖かった…………もしあの場で箱を変えてなかったら…………私、八幡くんを傷つけてた。」

八幡「…………そうかも…………いや、そうだな。だから箱を変えてくれたシルヴィに感謝だな。」

シルヴィア「……………八幡くん。」うるうる

八幡「……………少し、影の中に潜ろうか。」

八幡がそう言って影の中に潜った。そして影から出てきたのは3分後だったのだが、さっきまでの暗い雰囲気とは打って変わってピンク色の雰囲気が漂っていた。一体何があったのだろうか？

そして1人の生徒はこう話していた。2人の口元が少しだけ濡れていたと。



## ※一足早い打ち上げ

—————

八幡「それで、もうゲームは終わりか？俺としてはもう終わりであつて欲しいんだが？」

シルヴィア「私はあるならやつてもいいけど、あんな思いをするのはもうやだな……」

2人は先程のゲームのおかげですっかりやる気が萎えていた。それもそのはず。一歩間違えたら大変なことになっていたからだ。そんなことになればやる気を失うには充分過ぎる程であつた。

『ご安心下さい！そのようなゲームはもうありません!!お付き合いして頂いた代わりといつてはなんですが、第3「自助餐？」にお越し下さい。粗品ですが、お詫びの品を用意させて頂きました。』

八幡「最初からそのつもりだっだろう？ゲームやらせた時点で粗品あること確定じゃねえか。いや、別に責めるつもりはないけどよ。」  
シルヴィア「でも、今度も葉山くんが関係してたら私卒倒しちゃうよ……」

八幡「大丈夫だ。その時は俺が介抱してやる。」  
シルヴィア「……私、その瞬間を他人の目でもいいから立ち会いたいなあ。私が八幡くんに介抱される姿。」

そして2人は話をしながらも第3の食堂へと足を進めた。

【自助餐？】

八幡「……………着いてしまった。」  
シルヴィア「……………着いちやったね。」

この時、2人の頭の中では1つの思いがシンクロしていた。

2人（なんか凄く開けたくないんだが（だけど）……………）

八幡「じゃあもう2人でせーので開けるか？」

シルヴィア「あつ、いいね！そうしよう！」

八幡「よし、じゃあ俺は左開けるからシルヴィは右の扉を開けてくれ。」

2人は扉のノブに手を掛けていつでも開けるようにしていた。

八幡「じゃあ、いくぞ。」

シルヴィア「う、うん。」

2人「せーのっ！」

ガチャッ

パアンツ!!パアンツ!!パパパパアンツ!!

突然の音……これはクラッカーの発砲音だ。その証拠に紙吹雪や長い紙が飛び出ていた。

男子一同『宗師!!《三冠制覇》達成、おめでとうございます!!』

女子一同『奥方様!!《王竜星武祭》連覇、おめでとうございまゝす!!!』

パアンツ!!パアンツ!!パアンツ!!

パパパパアンツ!!

そして再びクラッカーの破裂音が食堂内に響き、奥にあつた金色のくす玉が割れると、そこからは

【祝!! 比企谷八幡 《三冠制覇》達成!!】

【祝!! シルヴィア・リューネハイム 《王竜星武祭》連覇達成!!】

と、2つの上質そうな紙でデカデカと書かれたものが垂れ下がっていた。

2人「……………」

八幡（まさか、これをやりたいがために準備をしていたのか？凝りすぎだろうに……）

「さきっ！宗師と奥方様は中央の席へどうぞっ！」

八幡「おい、まさか今から飯なんて事はないよな？俺たち腹なんて減ってないぞ？」

「勿論ですよ。我々もまだ空腹ではございません。今日は無礼講とい

う事で、菓子などを用意させていただきました！」

シルヴィア「あはは、それは界龍にとっては確かに無礼講だね。」

そして八幡とシルヴィアは真ん中の席へと移り、今入れたであろうジュースが入ったグラスを渡された。多分、乾杯の音頭を取れつてことなんだろう。

八幡「……一応聞くんが、これって夜にもあるんじゃないのか？ 昼にやって解散っ！なんて味気ない気がするからな。」

「流石は宗師！その通りでございます!!そしてこちらが今回のゲームのお詫びの粗品です。」

トレイの上に置かれていたのは、緑色を主とした色をした腕輪で、周りには金の装飾に青い玉が4つ埋め込まれていた。2つあるって事はペアルックだろうな。

八幡「……分かった。後で受け取るから今は下げておいてくれ。」  
「畏まりました。」

八幡「そんじやあ一足早いが、この面子だけで先に乾杯するぞっ！それじやあ……乾杯っ！」

全員『かんぱ〜いっ!!!』

## 祝勝会（本番）

シルヴィア side

お昼の祝勝会も終わって、今はもう夜の6時を回っている。久しぶりに八幡くんの部屋にいる私は、懐かしさと安心感を覚える。最初来た時もこんな感じだったのかなあゝなんて思っていたり。八幡くんの部屋っていつも綺麗だけど、掃除とかしてるのかな？

シルヴィア「ねえ八幡くん、八幡くんって寮の部屋掃除してるの？いつも私たちの家に帰ってきてるから、掃除してる暇あるのかなゝって。」

八幡「ああ、鍛錬しに学院に行く時にな。週に1回だからそこまでは汚れないが、やっぱ埃は溜まるからな。それに癖かどうかは分からないが、冷蔵庫の中に食材はないかとか確かめちゃうんだよ。」

シルヴィア「ふふふつ、八幡くんっていつも気を引き締めてるイメージがあるけど、抜けてる時もあるんだ。」

八幡「何言ってる。俺だって気を抜く時くらいある。そしたら俺、寝てる時でも気を張り詰めてなきゃいけないじゃねえか。」

それもそうだね。

八幡「それに、シルヴィと寝てる時やゆつくりする時だって気を抜いてるんだぞ？お前が側にいると、俺も安心出来るからな。」

シルヴィア「っ！……うん、私も♪」ギョッ

えへへ、八幡くんの腕に抱きついちゃった♪手を握るのも良いけど、八幡くんを感じるのなら、やっぱり腕に抱きついて手を握るまで行かないとねっ！

……あつ、そういうえ**ユン**玉緑くんが『私がお呼びするまで宗師と奥方はお部屋で待って頂きたいのです。命令するような形になってし

まいりましたが、何卒、お願い申し上げます。』なんて言ってたけど、何かあるのかな？

シルヴィア「八幡くん。今この学院で何をしようとしているのかって分かる？」

八幡「恐らくだが、昼間と同じことをするんじゃないか？今度はちゃんとした形式でな。それにあの時間には此処の冒頭の十二人がいなかったし、13〜30位の奴らもいなかった。何故かは分からないが。」

シルヴィア「じゃああの祝勝会には40人くらい居なかったの？」

八幡「ああ。だから今度は学院全体で祝勝会するんじゃないか？俺とシルヴィもそうだが、暁彗も2位扱いでクインヴェールハートの【舞神】が3位って事になってるからな。俺らが同時優勝したおかげで順位が1つ繰り上がったんだろう。暁彗の準優勝も兼ねてだと思うぞ。」

そういえばそうだった……私たち同時優勝したんだった。なんかそんな実感湧かないな。優勝したっていうのは分かるんだけど、八幡くんと一緒についているのが、まだ定着してないみたい。

もしかしたらだけど、界龍に他学園の代表格の生徒を呼んでいたりして……なんてね♪

シルヴィア「もしかしたらだけどき、界龍の居なかった40人で他学園の代表格に参加するようになって直談判しに行ったとか？」

八幡「やめろよそんなこと言うの。本当にそうだったらどうするんだよ。」

シルヴィア「冗談だよ。」

コンコンッ

玉緑『宗師、奥方様、玉緑です。お開けしてもよろしいでしょうか？』

八幡「ああ、構わない。」

玉緑『はっ！失礼致します！』

あつ、玉緑くんようやく来た。学院内も見てたからそんなには退屈しなかったけど、お昼から夜にかけてまで何をしてたんだろう？

玉緑「宗師、奥方様、お待たせ致しました！準備が整いましたので、八天門場へとご案内致します。」

八幡「ああ、頼む。」

シルヴィア「お願いします。」

玉緑「御意！」

あつ！今のやり取り、なんか王様とその奥さんみたいだった！そして近衛兵さん！

――八天門場――

八幡「着いたのはいいが、なんで門前じゃなくて3階に行くんだ？」  
玉緑「其方にお2人の席を用意してあるからです。今回の主役なので、大きく見せたいと師父……いえ、星露様の提案でございます。」

なんで今言い直したんだろう？八幡くんを師父って言いたいからかな？

シルヴィア「界龍だけでも人数結構いるからね。この道場だけで収まるの？」

玉緑「はい、それにつきましては問題ございません。」

八幡「星露に頼んで浮遊障壁を作ってもらったから、だろ？」

玉緑「はい。アレなら椅子やテーブルを乗せながらも食事ができますので。」

シルヴィア「おおう！そんな事までやってたんだね。でもそれっ

て、星辰力減っていかないの？」

八幡「俺の作ったバツジで星辰力をその場で押さえ込んでるから、自然消滅しないし、力が弱まったりもしない。」

さすが八幡くん！きつと一番の働きをしてるよ！

玉緑「着きました！此方が宗師と奥方様の席となっております。ささつ、前へどうぞ！」

八幡「前に出ても座んない方がいいよな？」

玉緑「そうですね。進行役もいますので、そちらの指示に従ってください。」

なんか楽しみだなあ♪

玉緑「皆様！大変長らくお待たせ致しました！比企谷八幡様とシルヴィア・リユ・ネハイム様のご登場です!!」

八幡／シルヴィア（お前（君）が進行役かよっ（だったの）!!?）

きつと私と八幡君の心は、今一つになったと思う。うん、絶対そうだと思う。



八幡「…………おいシルヴィ、君はさっきなんて言いましたか？」  
シルヴィア「え、ええ〜っと…………他学園の代表格の生徒を誘いに行った…………かな？」

八幡「うんそうだねその通りだねそう言ってたよね〜あははは〜。  
シルヴィア「あははは〜♪」

八幡「本当になっちゃったじゃねえかよ。」

シルヴィア「冗談で言ったつもりが、まさか本当だったなんて…………」

そう、他学園から来てましたっ！

星導館は《獅鷲星武祭》のチーム・エンフィールド。

ガラードワースは生徒会の5人とアーネスト。

アルルカントは不参加。

レヴォルフは生徒会メンバーの4人。

クインヴェールはルサルカとチーム・赫夜。

やっちゃった！てへぺろ♪

八幡「シルヴィ、後で執事奉仕な。」

シルヴィア「やめて〜！私悶え死んじやうから!!」

取り憑いてる？取り憑かれてる？

八幡 side

まさか他学園の奴らまで呼んでいたとはな……あいつら、一体何を口実に誘い出したんだ？特にガールドワース辺りはメリットとかないと動きそうに無い連中だ。

玉緑『他学園からお越し下さった皆様、ご多忙の中お越しくださりありがとうございます。本日は我が学院の界龍第七学院序列1位、比企谷八幡の《三冠制覇》、クインヴェール女学園序列1位、シルヴィア・リユーネハイム様の《王竜星武祭》連覇、そして今シーズンも無事に終わった事を祝して、界龍主催の祝賀会を開かせて頂きました。今日の夜だけでもよろしいので、本日は比企谷八幡とシルヴィア・リユーネハイム様への祝福をお願い申し上げます。』

アーネスト「祝わないわけがないね。《三冠達成》なんて誰でも成し遂げられることでは無いからね。喜んで彼を褒め称えよう。」

クロードディア「私も同じ気持ちです。機会は違えど刃を交えた相手ですから。その強さは充分知っていますので。」

オーフェリア「……………ここに来て八幡を祝福しない方がおかしいわ。」

トウーリア「……………まあ2人のした事はすげえ事だから、今日くらいは、な。」

玉緑『ありがとうございます。それでは皆様、グラスをお持ちください。それでは参ります。お2人の偉業、そして今シーズンもお疲れ様でした！……………乾杯っ!!』

「「「「乾杯っ!!」」」」

……俺たちがこの空気についていけないんだけど。何も聞いてないからどうすりやいいのか。

八幡「……俺たちはここから動いちやダメなのか？」

玉緑「まさか!!お2人は本日の主役です!!好きに食べて好きに飲んで楽しんで下さい!!」

シルヴィア「じゃあ下に行ってもいいのかな？」

玉緑「勿論でございます!!」

八幡「んじゃ、下に行くか。」

シルヴィア「うんっ!」

――八天門場・門前――

「宗師、奥方様!お飲み物はいかがですか？」

八幡「今日くらいはいいか……オレンジを。」

シルヴィア「じゃあ私も。」

「承りました。」

八幡「そういや星露たちが見えないが？」

「ああ、もう会場内にいらつしやいますよ。乾杯の合図と同時に中へと入られたので。」

八幡「そうか。」

「お待たせいたしました。オレンジ2つです。」

シルヴィア「ありがとう!」

「いえいえ、ごゆっくりお楽しみください。」

中に入ると、界龍の生徒と他学園の生徒が交流をしていた。実際、こういう機会は今までになかった。近い感じでいえば学園祭くらいだろう。

イレ―ネ「おお比企谷、それに【戦律の魔女】も一緒か。相変わら

ず見せつけてくれんな！」

八幡「イレ―ネか。お前もそういう相手見つけたらどうだ？」

イレ―ネ「私に見合う男なんてあたしより強い男だけだよ。レヴォルフじゃあそんなの限られてるけどな。」

シルヴィア「何もレヴォルフに拘る必要はないと思うよ？ 私たちだって他学園同士だし。」

イレ―ネ「あたしが他学園の奴と仲良くできると思うか？ 折り合いがつかねえよ。」

プリシラ「お姉ちゃん！ もう1人でプラプラと……つて比企谷さん、それにシルヴィアさんも！ 今日はおめでとうございます!!」ペコリッ

八幡「今日がめでたいってわけじゃないんだが。」

シルヴィア「まあまあ。」

八幡「なあプリシラ、聞いてもいいか？」

プリシラ「はい、何ですか？」

八幡「イレ―ネって男から言い寄られたりしないのか？ ああ、金巻き上げの奴らは除いてな。」

イレ―ネ「お、おいっ！ 何聞いてんだよ！」

プリシラ「すみません、そういう人はいないです。」

八幡「すみませんって……いや、別に謝る必要はないからな。興味本位ってだけだから。」

なんなら本人を傷つけてないか慰めてあげるまである。いや、イレ―ネの慰め方ってどうやるんだろう？

シルヴィア「でもなんか勿体無いよね。レヴォルフにいる女子って性格は粗暴な感じの人が多いけど、ルックスのレベルは高いからね。それにそういう人ほど案外純情だったりするから。」

イレ―ネ「あたしを見て言うな。それよりも比企谷、お前気づいてるか？ ウチの生徒会長がお前の隣にいるの。」

え？

八幡「え？……うおっ!？」

オーフェリア「……」

八幡「いつからだ!？」

イレエネ「あたしと会話した時にはもういたぜ？」

気配消すの上手過ぎね？

オーフェリア「……近くに八幡がいたら、その場所に行くのは当然の事よ。」

シルヴィア「当然の事なんだ……」

八幡「ところでもう1人いたよな？確か……樫丸だったか？」

オーフェリア「……他学園の挨拶回りに行ってるわ。自分から行き出したの。」

面倒事を自らって事？でも今でなくても良くね？

八幡「まあ、好きにやらせておけばいいだろう。じゃあ俺たちもそろそろ行くか。楽しんでくれ。」

シルヴィア「じゃあね。」

イレエネ「おう、またな！」

プリシラ「さようなら。」

八幡「で？お前はついてくるの？」

オーフェリア「……………私は八幡に取り憑かれているもの。そう簡単には離れられないわ。」

シルヴィア「オーフェリアさんが取り憑いているの間違いじゃなくて？八幡くんがオーフェリアさんに？」

オーフェリア「……………」コクコクッ

八幡「なんだそりゃ？」

ユリス「お、おい!!【夢幻月影】!!お、お前はな、なな何をしている!!」

ああ、ホラ出たよ。

八幡「いや、何をと聞かれても……………何が？」

ユリス「【戦律の魔女】とは交際しているから見逃そう。だが、なぜオーフェリアとも腕を組んでいる!!？」

八幡「いや、なんか俺がオーフェリアに取り憑いているらしい。オーフェリアに聞いてくれ。」

ユリス「……………オーフェリア？」

オーフェリア「……………本当よ、八幡が私に取り憑いているの。」

ユリス「お前……………言ってることがさっぱり分からんぞ。理解が出来るん。」

綾斗「こんばんは、比企谷さん、リュウネハイムさん。《王竜星武祭》ではおめでとうございます。」

八幡「天霧か……なあ、この純情お姫様をどうかしてくれ。俺たちのこの光景だけで興奮しているんだ。」

ユリス「こ、興奮などしていない!!」

クロードディア「あらあらユリス、催し物では騒ぐものではありませんよ。」

紗夜「うん、見てるこっちが恥ずかしい。」

綺凜「あの……言い過ぎでは？」

おつ、これで全員みたいだな。

クロードディア「にしても驚きました。まさかあの六花最強とも言われている魔女2人が比企谷さんのお気に入りだったとは。」

八幡「なんか棘のある言い方だな。オーフェリアは違うかな？レヴオルフでただの豚になった奴から奪い取っただけだ。」

クロードディア「成る程、それで彼女は貴方にベツタリな訳ですね？」

八幡「そうなっちゃうな。」

オーフェリア「………」ムフー

なんかドヤ顔しているようにも見えるんだが？

綺凜「あつ、比企谷さん！もしよろしければ、おひまがある日にも構いませんので、剣術の稽古をつけてはもらえませんか？」

綾斗「あつ！俺もお願いしたいと思ってました！」

八幡「剣術の？教えるのはいいが、俺の一刀流じゃお前らの刀藤流や天霧辰明流のアドバイスにはならないと思うぞ？俺のスタイルだって古流剣術の元々ある形から今風に変えてるからな。共通する点といったら限りなく少ないぞ？」

綺凜「それでもお願いします!!」

綾斗「お願いします。」

八幡「……まあそれでも言うなら構わない。極力お前らのスタイルは崩さないようにしながら教える事にしよう。」



2人「ありがとうございます！」

シルヴィア「八幡くん、彼女をほったらかしにしないでよ。」

オーフェリア「……………私に取り憑いているのに他の子に目移りかしら？」

シルヴィアはゴメンな？オーフェリアは何言ってるの？

八幡「悪かったな。それじゃあそろそろ行くか。頼んでくれ。あつ、お姫様も頑張れよ。何がとは言わないが、天霧関連で。」

ユリス「なっ!!?よ、余計なお世話だ!!」

八幡「で？お前はやっぱりついてくるのか？」

オーフェリア「……………だって私は八幡の所有物だもの。ちゃんと側にいるわ。」

シルヴィア「ねえオーフェリアさん、なんか八幡くんのペットみたいになってない？」

オーフェリア「……………ペット、じゃあ八幡の事はご主人様と？」

八幡「お嬢様は大変お疲れのようですね？あちらにテーブルと椅子がございますが、あちらで介抱しても？」

オーフェリア「……………ごめんなさい／＼／」

どんだけ弱いんだよ……………

## 学習は大事

八幡 side

さて、現在の俺の状態は両手に花状態。シルヴィアは分かるがオーフェリア、君は離れなさい。くつつかなくても歩けるでしょ！何？護衛のつもりなの？

八幡「なあ、頼むから2人共手を放してくれないか？歩き辛いんだ。」

シルヴィア「出来ればずっとこうしていたいんだけど……仕方ないね。人も多いから。」

オーフェリア「……分かったわ。」

八幡「すまないな。」

いやゝ本当に助かる。顔に出さないように頑張っていたが、やつぱり俺も男だから、腕に伝わる柔らかい感触とか良い匂いとか伝わってくるんだよ。いや、この距離感だからまだ良い匂いはするんだけどね？

アーネスト「おや、比企谷くんミス・リニューネハイム……やつぱり君も一緒なんだね、ミス・ランドルーフェン。」

八幡「フェアクロフさん。」

オーフェリア「……私がいたらダメかしら？」

アーネスト「いや、そんな事はないよ。代理で比企谷くんが来る時にくつついているのはよく目にするからね。それよりも、実に素晴らしい事を成し遂げたと僕は思っているよ。過去に数人しか成し遂げた事しかない《三冠制覇》に《王竜星武祭》の連覇、そう簡単に成し遂げられることじゃないからね。」

シルヴィア「それを言うなら君も《獅鷲星武祭》連覇を達成してるじゃん。」

アーネスト「確かにそうだけど、あれはチーム全員が1つになれたからこそ出来たことだよ。僕個人の力ではあんな事出来なかったよ。」

アーネスト「まだ早い話ではあると思うけど、2人はいつ結婚をするんだい？」

八幡「その話ですか……俺は学院卒業後を考えています。シルヴィアはどうか分からないですけどね。」

シルヴィア「私もそう思ってるよ。流石に20過ぎたら即結婚は早過ぎるしね。」

あの時は18歳で結婚したいって言ってた奴には思えないな。

アーネスト「ということは……22、23歳には結婚をするということだね？」

八幡「ええ、そのつもりです。」

アーネスト「それはいい事を聞いたよ。その時は是非招待されたいものだね。2人の結婚の瞬間を見られるんだからね。」

シルヴィア「じゃあアーネストの結婚式にも私たちを呼んでよ？それでおあいこっ！」

アーネスト「……ははは、これは一本取られたな。まあ六花で開けそうだったらそうさせてもらうよ。」

レティシア「アーネスト、ここに居ましたのね。あら、貴方たちも居ましたのね。」

俺たちがフェアクロフさんと話していると、後ろからガードワースの生徒会がやって来た。

アーネスト「少し世間話をね。」

ケヴィン「まあアーニーはもう会長じゃねえから少しは自由に行動してもバチは当たらないでしょ。」

レティシア「……そうですわね。」

エリオット「【夢幻月影】、それとも【神羅武双】とお呼びした方がよろしいですか？」

八幡「どちらでも構わない。苗字でもいいしな。」

エリオット「では【神羅武双】と。《獅鷲星武祭》以来ですね。」

八幡「そうだな。」

シルヴィア「君が【クラウ・ソラス輝劍】かあ……初めまして。知ってるとは思うけど、シルヴィア・リユーネハイムだよ。」

エリオット「……やはりお美しいです。」

八幡「おい、俺の彼女を口説くんじゃねえよ。口説くんならガラードワースの女にしろ。」

エリオット「そ、そんなつもりはありません！」

端から見ればそう見えるんだよ。

シルヴィア「大丈夫だよ八幡くん。私が八幡くん以外の男の人に惚れるなんて、まずあり得ないから。」

八幡「……そう言ってくれると俺も安心だ。さて、そろそろ退散しよう。また口説かれかねないからな。」

エリオット「だからしません！」

まあ冗談はこれくらいにして、さっさと行くか。にしても界龍の奴らはいるが、星露たちがいないな……何処だ？

シルヴィア「次に会ったしたらクインヴェールの子たちだけど、トウーリアが何か言ってきたら私が相手するから気にしないでいいからね。」

八幡「いや、むしろ相手をする前にシルヴィが相手をするから俺が相手をする暇なんてないけどな。」

オーフェリア「……シルヴィア、その子は八幡に何かを言うの？」  
シルヴィア「少し八幡くんの事が苦手みたいだね。何でも……」

そこからシルヴィアがトゥーリア？の言っていた事をオーフェリアに説明していた。にしてもクールぶっているか……そんなつもりはないんだがな。

※詳しくは『反応　クインヴェール女学園』へどうぞ。

オーフェリア「……………これは八幡への冒瀆ね。八幡にはいいところがたくさんある事を身体で教える必要があるわね。」

シルヴィア「そうでしょ？」

八幡「ここでドンパチ始めるなよ？」

シルヴィア「分かってるよ。」

不安しかないんだが……

マフレナ「シルヴィアさん！それに比企谷さん！この度は偉業達成おめでとうございます！」

パイヴィ「素直に祝福。」

モニカ「おめでとおく2人共。」

ミルシエ「いやゝ凄かったよ！決勝戦！」

トゥーリア「……まあ、おめでとうだけは言っておくよ。」

ソフィア「おめでとうございます。」

柚陽「とても凄い試合でした。おめでとうございます。」

ニーナ「おめでとう。」

美奈兎「凄かったよーあの試合！私には真似出来ないかなあ。」

クロエ「歴史上最高の試合になったと言われるのも納得ですね。」

おお……今度は全員できたか……にしてもこうやってみると、クインヴェールの容姿のレベルは本当に高いな。まあ俺はシルヴィにしか興味ないけど。

八幡「お前らは次の《獅鷲星武祭》に出るのか？」

ミルシェ「ルサルカはそのつもり！優勝候補がやつと消えたんだもの。これを逃さない機会はないよ！」

美奈兎「私たちはまだ未定。皆がいいっていうなら出るかな。」

シルヴィア「出るか出ないかは君たちで決めるといいよ。自分で決めないという意味がないからね。」

オーフェリア「……………因みに言うけれど、来シーズンの《獅鷲星武祭》は私たちレヴォルフも出るつもりよ。」

八幡「でも、出るのはお前じゃないんだろ？」

オーフェリア「……………私たちよ。正確には私たち生徒会のメンバーともう1人女子を選抜で選ぶつもりよ。」

ありやりや、もう1人の最強魔女が《獅鷲星武祭》に出ちやいますか……………

トウーリア「ええっ!?比企谷八幡の次はオーフェリア・ランドルフエンかよ!?!」

オーフェリア「……………何年ぶりの出場かしらね？優勝したのは1回だけだったものね。」

トウーリア「でなくてくれよ！頼むから！あんな思いするのはそこにいる男だけで充分だよ！」

八幡「え？もう1回やって欲しいって？」

トウーリア「誰がそんなこと言ったー!!」

コイツ面白いな…………

トウーリア「シルヴィア、お前こいつの何処に惚れたんだよ？私にはサッパリだ。」

シルヴィア「え？全部だよ。何をそんな当たり前なこと聞してるの？」キョトン

トウーリア「うわあ…………ガチだ。」

シルヴィア「それってどういう事？私が八幡くんの全てに惚れちゃ

ダメだつて言いたいの？」

トウーリア「いやいやいや!!違う!違いますから!決してそういう意味ではありません!!」

オーフェリア「……………少しオハナシが必要ね。」

トウーリア「なんでお前が出てくるんだよ!?!」

……………こりや時間が掛かりそうだな。仕方ないから飲み物でも飲みながら待ちますか。

## 開催の理由

八幡 side

オーフェアリアがトゥーリアを何処かに連れて行ったから楽にはなったが、何処連れてったんだ？なんかシルヴィに向かってアイコンタクトを飛ばしていたが、何のサインだったんだ？まあ大体予想はつくが、程々にしてくれると……いや、1度キツくやった方が良くも？

どの道、俺にはそんなに関係のないことだから深く考えなくてもいいか。それよりも、俺は今という時間をシルヴィと楽しまなきゃ損だよな。にしてもあいつら、本当に何処行つたんだ？この会場内にいるのか？

仕方ねえ……手間だけどやるか。

……八咫鳥の眼。

6……14……22……30……40っ！

全員いたな。



八幡「シルヴィ、ちよつといいか？」

シルヴィア「うん？」

八幡「お前ら、頼む。」

すると八幡の影から八幡が1人ずつ続々と出てきては何処かへと去ってしまった。まあ奴らを俺の所に連れてくるだけなんだけどな。

シルヴィア「八幡くん、今何やったの？」

八幡「このパーティを開いた奴ら呼びに行っただけだ。まあすぐに捕まると思うが……」

シルヴィア「じゃあ私たちも席に戻る？その方が集めやすいと思うけど……どう？」

八幡「……それもそうだな。よし、じゃあ席に戻りつつ状況を確認するか。もし星露の奴が最後まで来なかったら、もう一生飯作ってやらねえ。」

シルヴィア「幾ら何でもそれで来ないとは……うん、真っ先に来るかもね。」

八幡「チビにはそれを餌にする。セシリーもだけどな。虎峰には……シルヴィのメアドでいいだろう。大丈夫か？」

シルヴィア「私は問題ないよ。」

八幡「済まないな。後、あまりにしつこいようだったら削除してもいいから。」

シルヴィア「八幡くんってそういう事を結構サラツと言うよね。」

――3分後――

星露「ゼエ……ゼエ……は、八幡よ……来たぞい。」

八幡「こいつ、マジで1番に来やがった。何？お前にとって俺の飯が食えなくなることってそんなにマズイことなのか？」

星露「当たり前じゃ!!」

死活問題になる訳でもねえのに、よくもまあこんな馬鹿げた理由で息切らして来たもんだよ。

2人「八幡くくくつ  
!!!!」

はいはい、予想通りの展開ありがとう。

シルヴィア「八幡くんの物で釣るやり方ってこんなにも効果あるんだね……」

シルヴィ、これは物で釣ったんじゃない。脅迫してるんだよ。

セシリー「き、来たよ……八幡。」

八幡「おーご苦労さん。」

虎峰「は……八幡、約束通り、シ、シルヴィアさんのメール……アドレスを……」

八幡「おう、ちょうど目の前にいるから頼めばいいじゃねえか。俺に頼むんじゃないくて。」

シルヴィア（わあ……八幡くん鬼畜だねえ。）

虎峰「な、なあっ!!?」

八幡「それどころじゃなくなるって言ってたんだから、今こうして言っっちゃったんだ。シルヴィに直接頼んだ方が手っ取り早いだろ。」

虎峰「は……は、八幡。あ、貴方は……ぼ、僕を……だ、騙して?」

八幡「いんや俺は騙してないぞ?確かにメアドを餌にはしたが、俺の分身はシルヴィのメールアドレスをやると言ったか?」

虎峰「……」

八幡「沈黙は肯定なり。虎峰、お前はシルヴィの事になったら少し冷静になれ。」

虎峰「ぐううう!!!」

そんな目で見られても怖くありません♪ていうか、いつの間にか殆ど集まってるな。

八幡「お前らなんのつもりで隠れてたんだ？」

宋「星露様のご命令でして……」

羅「私たちは普通におもてなしをした方が、宗師は喜ぶと進言したのですが、聞く耳を持たず……」

星露「良いではないか!!他学園から見てもお主のした事はとんでもないことなのじゃぞ!!」

それを言われたらそうなんだと言うしかないが、俺自身まだそんな自覚や意識はねえんだよ。

冬香「八幡様、ここは星露様のお顔を立てては下さいますか？他学園の会長を含む生徒を入れての祝勝会は全て八幡様とシルヴィア様を思つてのことです。」

八幡「それは分かつてる。俺は別にどうしようなんて思つてない。して欲しいのなら別だが……」

まあそんなもの好きというか、Mな奴は居ないと思うけどな。俺もそんな奴に何かをしようとは思わないし、したくもない。

八幡「……けどよくこの中に4学園の生徒を入れることを許したな。あつ、『万有天羅』だから。』とかいうノリは要らないからな、星露。」

星露「妾はそんな事頼んでおらんわ。使つてもよいと言つたのは麗蘭<sup>リーラン</sup>じゃ。大胆なことをしたもののじゃのう。」

あの人は界龍の工作機関のトップだから、母体にも顔が効くんだら

うな。いや違うな……あの人は初代【万有天羅】だから命令みたいなことをしたんだろう。

その後は何故こんなパーティにしたのか、理由とかを聞いたりした。まあ全学園で盛り上げたいって理由だったんだけどな。

八幡「理由は分かった。楽しみを邪魔して済まなかった。各員残りの時間を楽しんでくれ。」

序列13〜40位『はっ!!』

………本当に楽しめよ？

それと虎峰、お前はさっさとシルヴィからメアドを貰えっ！いつまで口をパクパクさせとるんだっ!!

## 閉会

シルヴィア side

八幡くんが皆から事情を聞いた後、殆どの人たちが会場に戻ったんだけど、虎峰くんがまだ私の前で口をパクパクしていたから八幡くんはどうするか目で伝えただけで、『ほつといても大丈夫だ。』としか言われてないからどうする事も出来ないでいた。

そしたら痺れを切らした八幡くんが……

八幡『お前、本当にメアド欲しいのか？』

なんて言い出したと思ったら、虎峰くんはその言葉に反応して『そんな訳ありません!!』と答えた後に上半身を90度曲げて『お願いします!!』と言ってきた。何を願うのかを聞いてないんだけど、なんかこれ以上はイジメみたいになりそうだから彼にメアドを渡した。

でも彼って面白いよね。メアドを貰ってからはウキウキステップで戻って行ったんだもの。

八幡「漸くあいつらも他学園の生徒と交流してくれたか。まあ他学園同士が仲良くするのも良い機会だしな。」

シルヴィア「でも八幡くんは此处にいる殆どの生徒と交流あるでしょう？」

八幡「ああ。まああると言っても微妙な奴もいるけどな。特に親しいと言ったらオーフェリアくらいだな。まあ少し特殊ではあるが。」

うん、オーフェリアさんの八幡くんに対する依存性はもう中毒症状を起こしているよ。

――30分後――

玉緑『えー皆様、お時間となりましたので、この度の祝賀会を終了にしたいと思っています。本日はお忙しい中お越しくださり、誠にありがとうございます。お帰りの際にはつまらないものですが、我が学院が鍛錬や星武祭で使っている武具をお持ち帰りください。改めまして、本日はありがとうございました!!』

パチパチパチパチッ!!

パーティもようやく終わりかあ……なんかあつという間に感じたなあ。でも界龍の人たちは残って打ち上げみたいにするんだろうなあ。

シルヴィア「八幡くん、この後どうしよっか？」

八幡「どうするって言われてもな……残るか帰るしか無いと思うが……」

シルヴィア「じゃあさ、明鏡止水で居なくなったことにしようよ♪そしたらパニックになるんじゃない？」

八幡「シルヴィ……お前ってかなりイタズラ好きだったりするかな？」

シルヴィ「割と好きな方かな。だって面白いもん♪」

八幡「全く……仕方ねえな。」

八幡くんは私と手を繋いで明鏡止水を発動させた。これで私たちは周りには見えないはず。

銀梅「あれ？宗師と奥方様がいらっしやらないわ。何処に行つたのかしら？」

永成「あのお2人の事だから、きっと人目につかない静かな所にも行つたんじゃないかな？今日は色々とやらせ過ぎちやつたからね。」

銀梅「……そうね、今日1日中付き合わせちやつたものね。頭を冷やしたい時もあるわよね。」

ゴメンねゝ2人共。目の前にいるんだ。

羅「宗師と奥方様が居ないな……もうお帰りになつたのか？」

宋「その可能性もあるな。貴重な1日を潰してまで我々にお付き合ひしてくださつたのだ。疲れてお帰りになられたとしてもおかしくはない。」

羅「そうだな。残りの時間はお2人の時間にして差し上げるべきだ

な。」

君たちもゴメンねーこんな盗み聞きするようなことしちゃって。

虎峰「……八幡が見当たりませんね。」

セシリ「もう帰っちゃったとかー？」

沈雲「うーん、でもあり得なくはないね。」

沈華「お供には『戦律の魔女』も居たのですから、お帰りになって不思議ではありませんわ。」

虎峰「ぐぬぬぬ……!!」

セシリ「ちよつと虎峰ー、『戦律の魔女』はもう八幡のなんだから、いつまでもそんなみつともない嫉妬したらダメだぞー。」

虎峰「分かってます!!分かってはいるんですが、このとても近くて遠いような感じが凄くむず痒くて……」

沈雲「……僕たちには縁のなさそうな話だね。」

沈華「そうね沈雲。私たちには分からないわね。」

……皆、虎峰くんには辛辣なのかな？

冬香「……八幡様が見当たりませんね。」

暁彗「……帰ったか？」

冬香「それならそうと仰つてから帰ると思います。あのお方がそうするとは考えにくいですから。」

暁彗「……ならば寮の部屋にでも行くといい。もしかしたらだが、いるかもしれない。」



冬香「そうですね。ですが今は片付けが優先です。済ませてから向かうことにいたしましょう。」

お片づけ、ご苦労様です！≧人≡

――八幡の部屋――

シルヴィア「皆八幡くんと私の事探してたね。」

八幡「特に困ることなんてないと思うんだがな……」

シルヴィア「そう言わないの。皆八幡くんが大切なんだから。」

八幡「そういう事におこう。」

シルヴィア「もお。」

八幡「やつと……終わったな。何がって言われたら多すぎて分からないが、終わったな。」

シルヴィア「……そうだね。次の事は次の子達にに任せて私たちは残りの生活を満喫しようか。」

八幡「そうだな。だからといって俺は怠けたりしないからな？そしたらメタボになっちまう。」

シルヴィア「それはやめてほしいかなあ……私も太らないようにしないかね。」

八幡「シルヴィは大丈夫だろう。」

もう、なんの根拠があって言ってるんだか……

八幡「……さて、もうそろそろ休むか。」

シルヴィア「そうだね。今日はちよつと疲れちゃった。暫くは何もなく過ごせるね。」

八幡「そうだなあ……俺も料理の資格取らなきゃいけないから勉強しないとな。武術から料理に転職か……ジャンルが一気に変わるな。」

シルヴィア「私も頑張らないかね。未来の貴方を支えるためにも。」  
八幡「俺も未来の奥さんをしっかり見てないとな。」

そして私たちは寝巻きに着替えてベッドへと入った。あつ、私の着替えは八幡くんのを借りてます。うん、とても良い匂いです♪

シルヴィア「お休み、八幡くん。」  
八幡「ああ、お休みシルヴィ。」

2人（愛してる。）

## 閑話 ⑥

### 戦いの後の戦い

シルヴィア side

……皆さんこんにちは、というよりもおはようございます。シルヴィア・リユーネハイムです。突然ですが、助けて下さい。あつ、誰かに襲われそうになってるとか、攫われそうになってるとかそういうのじゃないんだ。そうだったら八幡くんが助けてくれるから。でも、この事情をどう説明すればいいのか全く分かりません。

心当たりがなくも無いんだけど、私からしてみれば『今更後遺症がでるのっ!』って感じなんだ。え？八幡くんに助けてもらえって？それはちよつと……何というか、凄く恥ずかしい姿になっちゃってるから見せたくないんだ。見せたら絶対に笑われちゃうもん……

そういえば今の時間とか言ってなかったね。今は朝の5時で偶々目が覚めたら違和感があったから、こうやって皆さんに助けを求めている次第です。八幡くんはまだ寝てるけど、あと1時間もすれば起きると思う。それまでになんとかしなくちゃ!!

――1時間後――

八幡「……………」

シルヴィア「……………」

八幡「なんか寒いと思ったら…………シルヴィ、布団全部持つてくなよ。それと布団の中に包まって何やってんだよ?」

シルヴィア「ゴ、ゴメンね…………でも今は八幡くんにも姿を見せられないくらいにあられもない姿になってるから今日はいない者として扱ってくれば嬉しいかなあって。」

八幡「そんな事言われて俺が『はいそうですか。』って言う男に見えるか? そんな状態だったら益々放つてなんかおけねえよ。シルヴィ、出てきてくれ。」

シルヴィア「や、やだよ! 今言ったでしょ! すごく恥ずかしい姿になってるからって!」

八幡「だが、その姿を見ない限りには解決も何もないだろう…………恥ずかしいと思うが、シルヴィの姿を見せてくれないか?」

シルヴィア「……………笑わない?」

八幡「ああ、絶対に笑わない。」

シルヴィア「……………本当に? 本当に笑わない?」

八幡「ああ、絶対だ。」

シルヴィア「……………本当に笑わないでね?」

八幡「ああ、本当に笑わない。だから今のお前の状態を見せてくれ。」

シルヴィア「……………分かった。じゃあ見せるね。」

そして私は八幡くんのお願いに応じて布団から出ることにした。

八幡「……………え？」

八幡くんの顔からは驚きと同様と戸惑いが現れていた。それもそうだよ。こんなのいきなり見られたら、誰だってそう思うよ。

だって今の私……………

ピヨコンッ

シユルンツ

狐の耳と尻尾が生えてるんだから……

シルヴィア「うう／＼／＼／＼」

八幡「……作り物じゃあないんだよな？ いや、だとしたらそんな反応はしないか。」

シルヴィア「……でもありがとう八幡くん、笑わないでくれて。」

八幡「当たり前だ。それに、その何処に笑う要素がある？ 俺なら抱き締めて愛でてやりたいくらいだが？」

すつごく魅力的な提案だよ／＼今からでもやって欲しい！ でも、この姿だと恥ずかしい／＼／＼／＼

八幡「その耳と尻尾って感覚はあるのか？」

シルヴィア「うん。自分の手足みたいに動くよ。動かそうと思えば動かせる。」

八幡「……狐かあ。そういえばお前の憑霊した時も狐だったな。それに関係しているんじゃないか？」

シルヴィア「あつ！ そうかもしれない！ ちょっと話してくるね！」

シルヴィア『ごめんくださいーい。』

八坂『あら？ どうしたのかしら？』

シルヴィア『実は……私の身体に耳と尻尾が生えちゃって……どうしたらいいのかなと思ってたら、八坂さんの所なら分かるかもって。』

八坂『ああ、その事ね。言い忘れていたのだけど、私との憑霊を出したら呪いとして耳と尻尾が生えるようになってるのよ。』

えっ!?!なにその呪い!?

八坂『星辰力に依存するのよ。貴方この前の試合で星辰力使い切つてたでしょう? だから貴方は丸1日はその状態よ。』

シルヴィア『ま、丸1日!?!そんなに!?!』

八坂『因みに消費量が少ない状態で憑霊をしたら、そんなに長い時間呪いには掛からないわ。貴方は殆ど使った状態で憑霊をしたから丸1日って事なのよ。』

…………まさかそんな代償があつたなんて。

シルヴィア『……ありがとうございます。』

八坂『説明してなくてごめんなさいね。その代わりにはならないけど、坊やに好きなだけ可愛がってもらいなさいな。』

シルヴィア『そ、そんな事言わないで下さい!』

シルヴィア『ただいまー……』

八幡『その様子だと、直す方法は見つかつてても今すぐってわけじゃあなさそうだな。』

シルヴィア『うん。実は……』

私早坂さんから聞いたことを八幡くんに説明した。

八幡『丸1日か……じゃあ明日にならないとそれは無くならないってことなんだな?』

シルヴィア『うん、そうみたい。』

八幡『そうか……じゃあ俺もここにすることにする。何かあつたら大変だからな。』



八幡（それに、シルヴィアを可愛がりたい。）

シルヴィア「八幡くん……ありがとう。」

ピヨコンピヨコン！

シュルンシュルン！

こうして、私の狐の耳と尻尾とのたたかいがはじまったのでした。

## ※シルヴィ、獣人化？

八幡 side

しかし丸1日か……普段なら普通の家に感じるだろうが、今のシルヴィにはこの家が檻みたいな感じだろうな。本当に可哀想に思えてくる。だってホラ、耳まで項垂れてるし。ナデナデしたら少しは元気になるか？

八幡「あーシルヴィ、いつまでもベッドにいるのも退屈だろ？こつちに来たらどうだ？家の中なら問題はないだろう。」

シルヴィア『……で、でも、八幡君の前に出るのも恥ずかしくて……憑霊した時は意識してなかったけど、意識するところも恥ずかしいなんて思ってもみなかったよお／＼／＼／＼』

確かにいきなり自分の身体に動物の一部が生えていたらそうなるよな……でも動物って寂しいと拗ねるような仕草をするって聞いた事あるからな……いや、シルヴィを動物視しているわけじゃないが、今は9割人間で1割狐な訳だから、もしかしたらの可能性もあるだろ？

八幡「いいからこつちに来いよ。ドアを開けて、な？開けられたらソファに座って頭を撫でてやるから。」

ガチャッ

……どうやら誘惑に負けてしまったとても可愛い狐ちゃんがドアを開けてくれたようだ。しかも顔だけ出して。

シルヴィア「……………本当に撫でてくれる？」

八幡「ああ。」

シルヴィア「……………じゃあ出る。」

自分の部屋から出てきてくれた狐シルヴィ。さっき言った通り、出てきてくれたからシルヴィの頭やら尻尾やらを撫でてやったんだが、人間版シルヴィだったら肩に頭を置くとかなんだが、狐版シルヴィは耳をペタンと頭にくっつけて尻尾を器用に振りながら俺にくっついてくる。ねえ皆分かる？これ意識してやってないからね？無意識でやってるから余計に可愛いんだわ。

シルヴィア「♪あゝむっ！」

………ありのままを説明しよう。今、俺の耳がシルヴィに食べられました。でも、安心して下さい。甘噛みです。なんか気持ちいい………じゃなくて！シルヴィの奴、思考まで動物化してないか？

八幡「あーシルヴィアさん？」

シルヴィア「ん？にやーに？」

八幡「貴方が今、口に含んでいるものは何だ？」

シルヴィア「………っ!!?ゴ、ゴゴゴメン八幡くん!!」

八幡「いや、痛くなかったから別にいいんだが、お前なんか思考まで動物化してないか？」

シルヴィア「うう／＼／＼／＼／まさかこんな事までしちゃうなんて／＼………／＼／＼／」

八幡「大丈夫だから気にするな。もし俺がお前だったとしても、耳を噛んでるかもしれないからな。」

シルヴィア「でも何でだろう？どうして意識もしてないことをやろうとするんだろう？やりたいなんて思っていないのに。」

八幡「少しだけ開放的になつてるとか？脳のリミッターが変なところで解除されてるとか。」

シルヴィア「そんな解除要らないよ／＼！／＼／＼／」

そして時間は過ぎて昼頃になったんだが、シルヴィは今寝てしまっている。しかも俺の膝を枕にしてソファの上で丸まりながら。やっぱあったかい所が好きなんだな。そしてそんなシルヴィを撫でている俺は全く悪く無いと思っている。

そろそろ昼飯にしたいんだが……今のシルヴィって普通にもの食べられるよな？味覚とか変化したらどうしよう？いや、そこまで獣人化したら本当にヤバいけどね。そしたらシルヴィは、昼食という名の餌になっちゃうから。

……仕方ないから起きるまで手櫛で髪とか尻尾を整えるか。いや、影で作ればいいか。

## 狐の部分がなくなっても

シルヴィア side

お昼から時間は経って、今は夜の8時頃。それまでの私は本当に私とは思えないくらいに仕草をしていた。ううん、人間がどうかとも怪しいくらいに動きや仕草を連発していました。もちろん八幡くんによ？私と八幡くんはずっと家の中にいたから。

え？何をしたのかって？ううう言いたくないけど、皆にだけは教えるよ？他の人には言わないでね？

・八幡くんを抱き着く。(日常茶飯事？)

・八幡くんの膝で寝る。(よく眠れたよ♪)

・八幡くんからあゝん。(美味しく頂きました。)

・八幡くんから頭ナデナデ。(気持ち良いんだ。)

・八幡くんから尻尾ナデナデ。(これもおう。)

・八幡くんの手を舐める。(わ、わあゝ／／／)

・八幡くんの指を舐める。(やつちやつた……／／／)

・八幡くんの耳を甘噛み。(あれからまた……／／／)

・八幡くんの頬を舐める。(ううう／／／／／)

みたいな感じ……最初の3つはなんかあんまり前と変わってないけど、2つはこの耳と尻尾があるからと考えてみれば納得はできる。でも最後の4つはやったこともなければ今日初めてしちゃったよ／／／／もう恥ずかしいよ!!

お昼や夕飯でも、八幡くんに食べさせてもらってたんだ。勿論自分でも食べてたけど、何だか八幡くんに食べさせてもらった方が美味しく感じたの。だから7割くらい八幡くんに食べさせてもらってた……／／／

そして今現在。私は八幡くんの膝を借りて寝ております。あつ、本気で寝てるわけじゃないからね？日本語では狸寝入りって言うんだよね？もつと碎けて言うのと寝たフリだよ。八幡くんには横になるって言うてるから、多分わかってくれてると思う。

シルヴィア「……………ねえ八幡くん。」

八幡「ん？」

シルヴィア「もし……………もしだよ？もし、私についてる耳と尻尾が取れなかったら、八幡君ならどうする？」

八幡「どうするって言われてもな……………俺ならそれならそれで受け入れるが？シルヴィの意思にもよるが。」

シルヴィア「……………よかった。そう言ってくれて安心したよ。」

八幡「何だそれ？俺がお前を見捨てるわけないだろ。ていうか別れるという選択肢なんて俺には無い。」

本気でそう思ってくれてるみたい。知ってはいたけど、改めて言うてくれると本当に嬉しくなっちゃう。

八幡「耳や尻尾が生えたくらいで何だ。俺はそんな見た目だけで判断はしない。そりゃ外見も少なからず含むが、俺はそれだけで人を決めつけるようなことはしない。まあ、シルヴィのその姿は逆に愛されそうだけだな。」

シルヴィア「か、からかわないでよー！」

八幡「俺は割と本気だぞ？その耳や尻尾だって本物だから触り心地も良いし、触ってるだけで癒されるんだよ。今回だけかもしれないんだからいいだろ？」

シルヴィア「ま、まあ八幡くんにしか見せない姿だからいいけど……………本当に今回だけだよ？」

八幡「ああ、分かってる。」

冗談を混ぜながら話す会話もやっぱり楽しい。ああ……………やっぱり

嬉しいと尻尾が動いちやうんだよねえ。

八幡「手櫛でもするか？」

シルヴィア「うん、お願い。」

八幡くん最初は影で作った櫛でやってくれてたんだけど、ちょっと痛かったから手でやってもらったんだ。そしたらその100倍くらい気持ち良かったから手櫛でやってもらってます！

シルヴィア「加減がちょうどいいから凄く気持ちいいんだよね。」  
八幡くん「ってやっぱり優しいんだよ。」

八幡「それは性格的な意味でか？それとも加減的な意味でか？」

シルヴィア「さあて？どっちでしょう？」

八幡「教えてくれない悪い狐には耳の穴を弄り回す必要があるのかな？」

シルヴィア「そ、それはずるいよー！」

耳の穴は弱いのっ！万人共通なんだから！！

シルヴィア「もう……両方に決まってるよ。最初から分かってるでしょ？」

八幡「可愛い狐には意地悪したくなるってもんだ。1日限りなんだ、楽しまなきゃな。」

シルヴィア「……まあ私もこの姿になってちよつと楽しいとは思えたけどさ、やっぱり恥ずかしさは消えないよ。」

その後は談笑をして、お風呂に入って（今日は別々）櫛で髪と尻尾を整えて歯磨きをしてから布団へと入った。

これは意識してなのか無意識なのか分からないけど、八幡くんの方へとくっついて行ってる気がする。やっぱり動物ってあったかい所が好きなのかな？猫とか犬も日向ぼっこかするし。



でも……落ち着く。やっぱり八幡くんと居ると安心して寝られる。寝ている間は頭を撫でてくれるだけで何もしいけど、それがいい。

シルヴィア「……お休み、八幡くん。」

八幡「……ああ、お休み。」

シルヴィア「八幡くん八幡くん！耳と尻尾が無くなってるよ!!」

八幡「……やつは嬉しいみたいだな。もう少し堪能したかったが、俺にはお前のその笑顔が1番だ。」ナデナデ

シルヴィア「えへへ♪」

耳や尻尾がなくても、八幡くんからナデナデされるのは嬉しいねっ

♪

八幡「んじや、今日は昨日の分も含めて出掛けるか。」

シルヴィア「さんせういつ!!」

目一杯楽しまなきやね!!

## これからの人生

雪乃 side

《王竜星武祭》が終わり、一年も過ぎて、新年の大騒ぎが漸く収まった頃、私は小町さんと一緒に商業エリアを探索しているわ。何か目的として歩いているわけではないのだけれど、こうして何も考えずに歩いているだけでも今は楽しめている。前まではこんな事全く思うことなんてなかった……六花に來た最初の2年間を早々に無駄にしているのね、私は。

でも今は充実した日々を送れている。彼への敵対心、嫌悪感、憎悪なんて感情は私の中にはもうない。今あるのは彼に対する申し訳なさ、和解してくれた事、今までと同じように接してくれる事の感謝ね。小町さんも他人との縁という形で彼と良好な関係を取れているみたい。いつかは兄妹の縁が戻れることを祈っているわ。

由比ヶ浜さんは……もう分からない。学園内で会う事は時々あるのだけれど、声を掛けられたりする事もなくなった。彼女はまだ彼に対して良くない感情を持っているみたい。どうにかしてあげたいのだけれど、これは彼女自身の問題だから手を貸してはあげられないわ。私も小町さんも自分で考えて今の結論に至っている。だから今のままにいるのも、変わるのも貴女次第という事よ。

小町「雪乃さん雪乃さん！この前、このお店に新しいパフエが出されたみたいですよ！ちよつと行ってみませんか!？」

雪乃「それは良いのだけど、小町さん全部食べられるの？大きさとカロリーは？」

小町「うっ……それは言わないでくださいよ。女の大敵『カロリー』を口にしたら食べるのを迷っちゃうじゃないですか。」

雪乃「ふふふ、ごめんなさいね。大丈夫よ、多かつたら私も食べてあげるから。」

小町「やったあ!!ありがとうございます!!」

……姉になるっていうのはこんな感じなのかしら?不思議と頼られている感じがするわね。彼もこんな風に感じているのかしら?界龍では沢山のお弟子さんを抱えているって噂は聞いたことあるのだけだ。

——喫茶店——

「いらっしやいませ〜2名様ですか?」

雪乃「はい。」

「お席へご案内します〜こちらへどうぞ。」

緊張感のない人ね……でも、なんだか憎めないような感じの喋り方ね。

小町「パツフェ〜♪早く食べたいなあ〜♪」

雪乃「ふふ、楽しそうね。私は何にしようか……し……」

小町「?雪乃さん……へ?」

シルヴィア「はい八幡くん、あ〜ん♡」

八幡「あむっ…んっ…んっ…うん、美味しい。」

シルヴィア「良かった♪じゃあ八幡くんも！」

八幡「分かってるよ。」

……目の前にはさつき言っていた彼、比企谷八幡くんが彼女であるシルヴィア・リユース・ハイムさんと食事をしていた。それも食べさせあいつこをしながら。

シルヴィア「ほらほら八幡くん早……あつ。」

八幡「ん？どうした？」

シルヴィア「八幡くん、雪ノ下さんと小町さんだよ。」

っ！

八幡「え？おお、奇遇だな。お前らも飯か？」

雪乃「え、ええ。貴方たちもそうみたいね。」

八幡「まあな。」

シルヴィア「折角だから相席しない？最近の星導館の事も知りたいしね。」

小町「小町は構いませんけど……」

小町さんは比企谷くんを意識していた。やっぱりまだ心の中ではわだかまりがあるみたいね。

八幡「俺も構わないぞ。シルヴィ、こっちに来い。2人はそっち側に座れ。」

シルヴィア「はい。」

雪乃「分かったわ。」

小町「は、はい。」

雪乃「2人はここによく来るのかしら？」

シルヴィア「ううん、普段は外食はあまりしないよ。デートする時に行くだけかな。殆どは家で料理したのを食べてる。一応将来も見通して練習中だからね。」

小町「将来？」

八幡「俺たちは将来、飲食店経営をしようと思っいてな。だから今のうちに料理とかの勉強をしてるんだよ。それで料理だ。」

……意外ね。比企谷くんなら教師や武術家にでもなるものだと思っいてただけど、料理人になりたいだなんて。リユースハイムさんも同じみたいね。

シルヴィア「お店に入れる人数は15〜20人にしてるから防火管理者をギリギリ取らないようにしてるんだ。流石に2人で経営していくのに、そんな手間はかけられないから。」

小町「こ、小町、初めて聞きましたよ。その防火管理者なんて言葉。」

シルヴィア「お店に1人は必要だからね。後は食品衛生管理者も必要だけど、それは八幡くんがもう取ってくれてるから問題ないんだ。だから事実上は、もう経営しても問題はないんだ。」

小町「あれ？調理師の資格はいらないんですか？」

シルヴィア「うん。調理師免許はあってもなくても問題は特にならない。まあ持つてゐるに越したことはないけど。八幡くんは持つてゐるの？」

八幡「いや、持つてない。無理に取る必要もないから。資格を取るわけではないが、一応どんな料理を作るか今からでも練っておきたいからな。」

昔の比企谷くんとは大違いね。こんなふうに将来を見据えてゐるなんて……あの時は働きたくないと言っていた彼とは本当に思えないわ。

シルヴィア「2人は将来どうするとか考えてるの？」

小町「小町はとりあえず大学進学ですわ……まだ働くなんて考えられないですわ。」

シルヴィア「まあそうだよ。じっくり考えるといいよ。雪ノ下さんは？」

雪乃「母親の事業に入ろうと思つてゐるわ。主に事務内で総務や経理に就きたいと思つてゐるわ。」

八幡「まあ、なんとなく想像できるな。お前つて身体よりも頭を動かすようなタイプだから。あつ、物理でじゃないから？脳内でつて意味だからな？」

雪乃「それくらい分かつてゐるわ。物理で動かしても仕事なんて出来ないじゃない。」

八幡「冗談だよ。さすがは雪ノ下だな、冗談を真に受ける真面目っぷりは健在か。」

雪乃「……つまりはからかったというわけね？」

八幡「ガチガチに緊張するよりかはマシだろ？」

雪乃「っ！……本当に変わったわね。気遣いも出来るようになってゐるなんて。」

八幡「此処に来てからは変わったさ……お互いに丸くなったもんだ

な。  
」

……そうね。私が丸くなったのは最近だけど、今思えばもつと早くからそうなっていればと心底思うわ。なんで私はこうも生き方が下手なのかしらね。

でもいいわ。これから良くしていけばいい話よね。

## 家族

――――

――千葉県・比企谷家――

比企谷家。今や誰もが知っている苗字である。だがこの家にはマスコミやテレビ関係者が集まってはいなかった。長男・比企谷八幡の《三冠制覇》という偉業を考えてみれば明らかに不自然だが、それにはちゃんとした理由があった。

それは彼が入学した時の入学届にある戸籍表には、母の名が汪小苑になっていたからであった。その理由もあってかこの家にはそういった関係者が集まる事はないのだ。

さて、そんな比企谷家に1つの電話が入ってきた。

――――

比企谷母 side

p r r r r r …… p r r r r r …… カチャツ

比企谷母「はい、比企谷です。」

八幡『母ちゃんか？俺だ、八幡だ。』

比企谷母「……八幡？久しぶりね、元気？」

八幡『ああ、元気だ。』

比企谷母「そう……あつ、そうだわ。確か……《三冠制覇》だったかしら？達成おめでとう。母親として鼻が高いわ。」

八幡『母ちゃんまでそんな事言うのか……まあいいけどよ。ありがとう。』

比企谷母「それで、どうしたのよ？あんたから電話してくるなんて



珍しいわね。」

八幡『ああそうだった。母ちゃん、小町から何か聞いてるか？』

比企谷母「小町から？何も聞いてないわよ？何かあったの？」

また面倒を見て欲しいってお願いかしら？

八幡『いや、そういうわけじゃない。一応半年くらい前に小町から話を持ちかけられてな。まあ持ちかけられてっていうより、ちよつとした罫つぽい所もあったが、そこはまあどうでもいい。』

八幡『簡単に言えば、今までごめんなさい的なヤツで謝罪して来たっただけだ。』

比企谷母「ふうん………それで？あんたはどうしたの？許したの？許してないの？」

八幡『完全には許してないから、兄妹の縁は切ったままにして他人としての縁を取り持った。あいつもそれでいいって言ったから。』

比企谷母「そうなの………それってこの前来た近況報告みたいなアレかしら？」

八幡『まあそんな感じだ。そっちはどんな感じだ？退屈はしてないか？』

比企谷母「退屈よ。子供2人が揃って六花に行ってるんだもの。世間話も出来ないし、お父さんとも話すタイミングないから仕事以外は暇みたいなもんよ。」

ホントに暇よ。会社の中でも《王竜星武祭》やあんたらの話でいっぱいなのよ。息子の恋愛話をされてる私の身にもなりなさいっての。会社には私の息子だって言ってるからいいけど。

八幡『そうなのか？じゃあちよつと相談なんだが、春休みになったら、ちよつとそっちで厄介になりたいんだが、春休みは大丈夫か？』

比企谷母「此処はあんたのもう1つの家なんだからいつでも帰って来なさい。私だってあんたの顔を偶には見たいんだから………野暮

な事聞くけど、シルヴィアちゃんも?」

八幡『当たり前だろ。何で俺だけで帰らなきゃいけないんだよ。』

比企谷母「そうよね。分かったわ、待ってるわね。お父さんには気が向いたら教えておくわ。」

八幡『教えておけよ。この前のアレも傑作だったが、流石に2回目は嫌だからな?』

比企谷母「ふふ、分かったわ。」

しょうがないから教えてあげる事にしましょう。

八幡『ん?……ああ、話すか?……分かった。母ちゃん、シルヴィも話したいって言うてるから変わるぞ。』

比企谷母「え?ええ。」

シルヴィアちゃんも?

シルヴィア『もしもし!お久しぶりです!お義母様!!お元気でしたか?』

比企谷母「ええ、元気よ。そっちは聞くまでもないようね。」

シルヴィア『はい!それと、春休みにお邪魔することになってしましますが、その時にも改めて挨拶しますので、よろしくお願いします。』

比企谷母「気にしなくてもいいのよ。八幡にも言ったけど、いつでも来てくれていいから。何か予定があって来るの?」

シルヴィア『いえ、特には。ただ、八幡くんが「偶には顔を合わせたくない」と親不孝だから。」って言ってました。』

あの子……何気に可愛いところもあるのね。

比企谷母「そう、分かったわ。」

シルヴィア『春休み、よろしくお願いします。』

比企谷母「そうそう、八幡に伝言をお願い。『親孝行ありがとう。』つて。それから、早く私たちにも孫を見せてね。楽しみにしてるんだから。」

シルヴィア『えっ!?ま、孫!?』

比企谷母「それじゃ、お願いね。」

そして私は電話を切った。

あの子たちがまた来てくれるなんてね………なんか嬉しいわ。いつ帰ってきてくれるのか分かってたら準備するのだけど、こればかりは仕方ないわね。

そうだわ。春休みは全部有給取ろうかしら?そしたら八幡とシルヴィアちゃんと一緒に居られる時間が増えるものね。でも、2人の時間を潰すのもちよつと気が引けるわ。

……まあいいわ。その時になったら考えましょう。

外見良し、性格良し、能力エゲツない

オフエリア side

……この学院も大人しくなったものね。ほんの2年前まではバカでアホで間抜けが多くて問題しか起こさない問題児しか居なかったのに、今ではその問題すら起こさなくなってるわ。私は別に規則を作ったわけではないのだけど、何故か私を攻撃しようとする人がいない。それどころか公式序列戦で私に挑む人も居なくなっただわ。

……不思議ね。どうしてかしら？

……まあいいわ。でも最近はまだ面白い事がないわね。問題があれば私たち生徒会が動くのだけど、さつきも言ったように問題が起きなくなっただから暇というわけよ。何も起きないというのは良いことなのだけど、レヴオルフは何もないところも暇なのね。

オフエリア「……ころな、他に済ませた方がいい書類とかないかしら？」

ころな「会長、それ昨日も聞きましたよ？」

オフエリア「……そう、ごめんなさい。」

プリシラ「ま、まあ最近では本当に何もなくてくらいにレヴオルフ関連の事件や事故がありませんからね。会長が自ら解決したせいなんですが……」

オフエリア「……最近何もないのは私のせいだと言いたいの？」

イレエネ「おいおい、気付いてねーのかよ。」

……なんで皆そんな反応なのかしら？私は何をしたというの？

イレエネ「その様子だと本当に知らねーみたいだな。お前の純星煌

式武装の【フロイズ・ザハナス猛雪の氷剣】のせいだよ。お前があれを使つて事件を鎮圧するから、見てるレヴオルフの連中もこうなりたくねえって思い始めたから、誰も問題を起こさねえだけだよ。確かにあれは受けた奴にはトラウマだろうよ。」

オーフェリア「……………そんなに？」

プリシラ「オーフェリアさんは何も感じていないでしょうけど、氷漬けにされた生徒が目を覚まして事の顛末を聞いた後の一言が、『もう2度と悪い事はしねえ!!だからもう勘弁してくれ!!』って言うんですよ。余程オーフェリアさんの純星煌式武装が強力なんでしょう。」

ころな「もしかしたらですけど、短剣の中に毒が混じり込んでいるとか……………ないですか？」

イレーネ「だとしたら誰だつてああなるよな……………」

……………毒?この子の中に私の毒が入り込んでいるということかしら?だとしたら、氷漬けにした人に聞く必要があるわね。

ころな「まああくまで予想ですけど、ちよつと可能性があるかもつて思っただけです。」

オーフェリア「……………少し気になるわね。この子の能力を使う時に毒が混じっているのかないのか……………少し試したいわね。」

イレーネ「おい、人体実験なんてやめろよ?被験者が可哀想になつてくる。」

オーフェリア「……………貴女でもそんな事を言うのね。なんか少し意外だわ。」

イレーネ「アホ。あんな風に言われたら誰だつてそう思うつつの。けどどうすんだよ?」

オーフェリア「……………あのみかんにやつてみようと思うわ。もし毒があるのなら腐るはずだもの。何もなければ冷凍みかんの完成よ。」

ころな「なるほど……………もし何もなければ美味しく頂けますね!もし毒が入ってたら……………いいえ、考えるのはやめましょう。」

……私はみかんを台の上に1つ置いて、少し離れた位置で武装を構えた。勿論、他の皆も離れているわ。

オーフェリア「……………じゃあやるわよ。」

……私は【フロイズ・ザハナス猛雪の氷剣】をみかんに向かって振った。するとみかんはたちまちに氷漬けになり、冷凍みかんならぬ氷みかんになった。

プリシラ「ここまではいいですね。」

イレーネ「ああ、みかんが凍ってるだけだ。」

……っ！みかんの色が変わってるわ。段々灰色になっているわ。

ころな「……………」

プリシラ「……………」

イレーネ「……………」

オーフェリア「……………」

そしてみかんは崩れて氷の中にあるのは、灰のような粉になったみかんだった。

オーフェリア「……………氷の中に毒も混じっていたようね。皆が問題を起こさなくなるわけだわ。」

プリシラ「いやいや、何普通に納得してるんですか!?!みかん腐りましたよ!?!腐るって事は毒入ってるんじゃないですか!?!」

オーフェリア「……………そうね。」

ころな「なんか普通って顔してますね……………もしかして実験して分かったとしても改善する気はない?」

オーフェリア「……………違反した人には丁度いい罰だと私は思うわ。良い薬になると思うわ。」

イレーネ「なあ、もしだぞ?もしそれが比企谷に当たっちゃったら

どうすんだ？きつとお前がトラウマになるかもしれないねえぞ？」

オーフェリア「さつき言葉は撤回するわ。今すぐに調整してもらう事にするわ。これが八幡に当たって私を避けるようになってしまったら大問題だわ。イレーネ、良い事を教えてくれてありがとう。」

イレーネ「お、おう。」

オーフェリア「こうしてはいられないわ。早く検査室に行って調整してもらおう事にするわ。皆、少し席を外すわ。」

早く調整してもらわないといけないわ。

オーフェリア side out

—————

イレーネ「……………あいつの中で比企谷の優先順位ってかなり上だな。」

プリシラ「そ、そうだね。もしかしたら1番強いんじゃない？」

ころな「……あり得ますね。もし比企谷さんに嫌われでもしたら、1ヶ月くらいは仕事しなさそうな感じがします。」

## ハシル劇場 引退ライブ編 最後の依頼

シルヴィア side

私と八幡くんが星武祭から完全に姿を消してもう3年が経った。その後の私たちは、デートをしたり後輩たちの面倒や指導をしたりと色々な事をしてきた。勿論アイドル稼業も続けて来たよ。3年の間でいろんなところに行ったっけなあゝ……おかげで私には八幡くんがいないとダメだっていうのが嫌という程分かりましたっ♪

さて、少しでも星武祭を振り返ってみようか。

まずは《鳳凰星武祭》。前々回は八幡くんと陽乃さんが優勝したけど、前回は……あつ、ちよつと分かりにくいと思うけど、今はもう新しいシーズンに入っちゃってるから、前回扱いなんだ。

話を戻すけど、前回は【覇軍星君】と冬香さんが優勝したよ。まあ大会の出場選手自体そんなにめばしい人たちがいなかったというのもあったけど、前々回と同じで準優勝や本戦出場ペアも殆ど界龍だった。

次に《獅鷲星武祭》。前々回優勝チームは同じく界龍のチーム・帝龍だね。前回はレヴォルフのチーム・黒薔薇くろばらが優勝。リーダーはオーフェリアさんで残りのメンバーが【吸血暴姫ラミレクシア】とその妹さんのプリシラさん、生徒会書記の檜丸ころなさん、そして序列5位の【反鏡バト・ホルの魔女】の女5人組で優勝。

最後に《王竜星武祭》。前々回は勿論、八幡くんと私！前回は……なんと雪ノ下雪乃さんだった。前々回から自分の動きを見直して3年間修行をしてみたい。苦手な接近戦も全く問題ないくらい動けて



た。体力もかなりついてたしね。最後の出場権で優勝できて良かったね！

あつ、それとね！雪ノ下さんの序列なんだけど、序列外から一気に3位に上がってたんだ！《王竜星武祭》に出る前に序列戦に参加してたんだけど、元々3位の人とやったら圧倒で勝っちゃったみたい。

んんっ！これが前回シーズンの結果だよ。うん、各学園頑張ったのがよく分かるね。さて、ここからが本題だよ。

私は今大学部の4年生です。という事は……もうすぐ卒業という事です。今の私はもう生徒会長じゃないし、卒業までにすることといえば答辞を考えるくらい。学園ではこんな感じかな。後残っているのはアイドル稼業、新しく始める料理店、そして八幡くんと……結婚式／／／／

今はじめに終わらせるのはアイドル稼業だよ。卒業と同時に終わらせるからその1ヶ月前にライブをするんだ。だからもう1ヶ月前です。やる場所は……横浜になりました！しかも日本で1番大きい横浜日産スタジアムでやる事になりました!!収容人数、なんと70000人!!屋外でやるのは久しぶりだなあ♪

このライブ、日本でやるから八幡くんにも声をかけたんだ！私の引退ライブだから、たくさんの人に聞いてもらいたいし、八幡くんには1番そばで聞いてほしい。

ペトラ「いい？今までは屋内だったから色んな仕掛けが出来たけど、今回は屋外だからそういう期待は一切捨てなさい。やるのなら自分の力でやってみせなさい。」

シルヴィア「はい、分かってます。」

ペトラ「それから……旦那さんは釣れたかしら？」

シルヴィア「声はかけました！」

ペトラ（旦那の部分には突っ込まないのね。）

ペトラ「そう……後は来るのを待つだけね。」

シルヴィア「八幡くんなら来てくれるよ！だって私の彼氏なんだから!!」

――10分後――

八幡「すみません、遅れました。」

シルヴィア「待ってたよ、八幡くん!!」ダキッ!!

ペトラ「ごめんなさいね、急に呼び出したりして。ちょっと相談があるのよ。いいえ、お願いとも取れるわね。」

八幡「まあ取り敢えずは話から始めましょう。シルヴィからはライブをやるから来て欲しいとしか聞いてないので。」

そこから私たちはライブをやるにあたって、細かな説明を八幡くんにした。

ペトラ「……という事よ。八幡くんにはもう1度シルヴィアと横に立って歌って欲しいのよ。どうかしら？お願い出来ないかしら？」

シルヴィア「お願い、八幡くんっ!」

八幡「まあ最初から断る理由なんてありませんからね。俺の歌でよければ力になりますよ。」

シルヴィア「もおくそうやってすぐに下手に出るんだから！八幡くんは普通のプロよりも上手いんだから!!」

ペトラ「そうね、貴方の歌唱力は普通の人より、いえ、プロに比べても数段上を行くわ。」

八幡「はあ、ありがとうございます。けど、そんな事言ったらオーフェリアなんてプロ追い越してんぞ。まあ褒めてくれるのは嬉しいが……」

ペトラ「オーフェリア？あの『孤毒の魔女』の事を言っているのかしら？」

八幡「はい。何年か前にエルナトに泊まりに行った時にカラオケで歌ったんですけど、90の後半を簡単に出してました。」

シルヴィア「確かに高得点だったけど、そんなには連れていけないよ。費用だって掛かるから。」

八幡「分かってる。ただ言ってみただけだからかな。別にあいつを連れて行きたいなんて思っていないから安心しろ。」

ホツ……よかった。

ペトラ「じゃあ八幡くん、用意だけはしておいて頂戴。歌はこちらで用意してあるからデータを渡しておくわ。」

八幡「ありがとうございます。」

よおし！私の現役最後のライブだから最高のライブにさせないとね！

## 涙の意味

八幡 side

ペトラさんとシルヴィからの依頼を受諾した俺は1度界龍に戻って色々と準備をしていた。ライブに行くのなんて何年振りだ？千葉に行った時以来だから………6年前くらいか？もうそんなに経つんだな。

コンコンツ

八幡「ん？どうぞ。」

冬香「失礼致します、八幡様。少しよろ………そのお荷物はどうされたのですか？」

八幡「ああ、1ヶ月後に出かける事になってな。理由はライブだが。」

冬香「成る程、シルヴィアさまの引退ライブに八幡様も歌ってほしいとオフアーが来たのですね？」

八幡「オフアーかどうかは分らんが、まあ主催側のマネージャーから歌って欲しいとは言われたからな。縁もあるし最後なんだから、歌っても文句は言われないうらう。」

まあどの道、歌うのはもう決定事項だしな。ここに来たのが虎峰じゃなくてよかった。

冬香「ではお邪魔でしたでしょうか？」

八幡「いや、大丈夫だ。俺の準備が早すぎるだけだからな。それで、どうした？」

冬香「実は………下の者たちが八幡様と模擬試合を希望していました。」

八幡「ああ……そういう事か。分かった、すぐに行くから待っていてくれ。」

冬香「畏まりました。」

そう言つて冬香は部屋を出た。多分皆も不思議に思うだろうが、冬香は1年前に界龍を卒業している。何故ここにいるのかというと……本家から通達があつて『一族の繁栄に努めよ。』という事だった。俺が何を言いたいのか分かるよな？

そう。あいつは俺との子を作るつもりなんだよ。

最初はドストレートに言われた。勿論本人も俺にはシルヴィアがいるのを知った上での発言だった。俺もシルヴィ以外とは交わりたいたと思つた事はない。だが冬香は本気みたいだった。中でも彼女が発言した中で印象に残っているのがこれだ。

冬香『確かに私は命令されて動いております。ですが、相手が誰でもいいというわけではありません。強い力、それも比類なき術を持った才のある人としかが交わりたくはありません。特に……八幡様、私は今まで見てきた中の男性で1番強く、1番気高く、1番優しいお方で

す。愛が無くとも構わないのです。軽蔑されても構いません。一族のためならば、この身体だつて使う所存です。』

……梅小路家の事は知っているが、まさかここまで言うとは思わなかった。この事はシルヴィにはまだ言つてない。いや、言えるわけがない。隠し事をしているのは申し訳がないが、これは俺自身で解決したい。ただの我が儘という奴だ。

とはいえ、卒業して放つておいたら必ずついてくるだろう。それまでは冬香を納得させるか、別の男にさせるか、または……いや、もうやめておこう。

確か模擬試合だったな、行つてやるか。

八幡 side out

冬香 side

界龍を卒業してもうすぐ2年が経とうとしております。今くらいでしょうか、本家からの通達でこの学院に滞在し、一族の繁栄に努めるようになったのは。

このような言い方は失礼ではありますが、私には八幡様以外に他の殿方が思い浮かびませんでした。この殿方とならと思える人物も八幡様しか考えられませんでした。八幡様のような方は、世界中何処を探してもいないでしょう。

なので私は八幡様に性行為をお願いしました。勿論断られました。が、私の覚悟をある言葉を聞いてからは何かを真剣に考えるようなお顔をなされて返事を保留にしました。八幡様のお悩みを増やしてしまった事は大変申し訳なく思っておりますが、それでも私は……

八幡「待たせた、すまない。」

冬香「っ！いい、いえ、とんでもございません！」

八幡「八天門場でよかったか？」

冬香「ご案内いたします。こちらです。」

いいいけません。今は八幡様が側にいるのです。気を引き締めなくてはっ！

八幡「……なあ冬香。」

冬香「はい、以下がなされましたか？」

八幡「正直に言う。俺はお前と身体を交える気はない。」

冬香「っ……………」

八幡「それに関して俺は罪悪感はない。当たり前前の感情だからな。お前のことは好きではあるが、それは異性としてではない。可笑しな事を言うが、異性として魅力的であるのは否定しない。」

冬香「……………」

八幡「直接身体を交わる事はしないが、それ以外の方法を考える。それならどうだ？俺はそれなら構わないと思っている。」

冬香「っ！」

は、八幡様はそこまで……………」

いいいけません八幡様。そのように優しくされては……………叶わぬ恋だと知っていても、貴方様の事がもっと好きになってしまいます。

冬香「そ、それでも充分過ぎるくらいでございます／＼お、お氣遣いして下さい、あ、ありがとうございます／＼」

八幡「ああ。」

やっぱり八幡様、貴方はお優しい……………こんな最低な事をお願いしている私にも、このような寛大な配慮をして下さるなんて。

冬香「…………八幡様、本当にありがとうございます、本当に。」ボソツ  
八幡「ん？何か言ったか？」

冬香「いえ、何も。さつ、参りましょう。」  
八幡「？ああ。」

この時、冬香の目から涙が出ていた。その涙は失恋から来るのか、嬉しさから来るのかは分からないが、とても綺麗な涙には違いなかった。



## チケツトの為に

シルヴィア side

今日の練習も疲れたなあ……歌は問題なく順調な感じだね。後はファンサービスだね。私だって走りながら歌うわけにもいかなしい、かといって観客席で歌うわけにもいかなしい、うーんどうしようか？

八幡くんだったら、きつと分身とか使うんだと思うけど、私そこまですりたくないからなあ。分身は作れるけど、その後だね。それか予めに分身を作っておいて観客席で透明化しながら待機……うーんダメかな、星辰力を使い過ぎちゃう。

シルヴィア「ううう難しいよお。」

八幡「ん？何に悩んでるんだ？」

シルヴィア「ファンサービス。会場も人の数も多いからどんな風にしたらいかなあ。ってずっと考えてるんだけど、あんまりいい方法が思いつかなくて。八幡くんは何か考えてる？」

八幡「俺は無しの方向で考えてる。会場がデカすぎるからな。歌も同時にとなると、俺だったら混乱しちゃう。流石に70000の数相手に全員にサービスするのは俺には無理だ。」

シルヴィア「八幡くんは無しかあ……やっぱりやめたほうがいいのかな？」

70000人相手にサービスするだけでもかなりの労力なのに、そこにファンサービスにもなると私たちの疲れも大きくなってくるもんね。

シルヴィア「……その方がいいね。うん、私も無しで行くことにするよ。」

八幡「そうか。」

シルヴィア「歌の調子はどう？」

八幡「初めて聞いた曲だったが、もう問題ない。カラオケに行って採点もつけてやってるが、一応は90点超えてるからな。まあいいんじゃないかってところだ。シルヴィはどうだ？」

シルヴィア「私も順調♪後は細かい部分を調整すればって感じ。今ファンサービスを考えてたけど、無しで行くから解決っ！」

よしっ！これで歌だけに集中できる！

八幡「あつ、シルヴィ。少し相談なんだが、何処でもいいからチケツトくれないか？2枚でいいんだが。」

シルヴィア「誰か連れて行くの？」

八幡「いや、折角だから両親にでもと思ってな。1回でいいから生のシルヴィが歌ってるところを見せてやりたいってだけだ。」

シルヴィア「要するに親孝行ってわけだね？」

八幡「そんな解釈でいい。」

シルヴィア「分かった！ペトラさんに頼んでみるね！頑張ってプレミアを取ってくるよ！」

八幡「いや、普通の席でいいからな？うちの親別にそういうのどうでもいいと思うし。」

シルヴィア「いい？八幡くん、私の引退ライブにお義母様とお義父様が来るんだから、それ相応のサプライズをしなきゃだよ！」

八幡「親父なら飛んで喜びそうだが、母ちゃんはそういうのはどうでもいいと思うぞ。見ればいいって感じだと思う。」

シルヴィア「気持ちが悪もっていれば良いの！八幡くんも私からの贈り物でも気持ちが悪もってないと思えよ？」

八幡「それは確かにそうだが、俺はシルヴィからの贈り物なら何でも嬉しい。」

シルヴィア「え……あ、う、うん、ありがとう／＼で、でもやっぱり、気持ち悪もっていた方が嬉しいの！だから私はプレミアをか

けて頑張ります！」

八幡「そこまでいうのなら止めないが、あまり気負い過ぎるなよう。」  
シルヴィア「大丈夫！このシルヴィア、お義母様とお義父様のために全力でとって参ります！」

八幡「……………本気なのか冗談なのか分からん。」

本気だよ♪

その翌日、シルヴィアはペトラさんに直談判しに行つて、見事にプレミアチケットを2枚手に入れた。

ペトラ「あの時のシルヴィアは何が何でも手に入れてやるって感じがあつて凄かったわ。だからもうすぐにあげることにしたわ。」

## 言えた秘密と言えない秘密

――某会社内――

後輩「先輩っ！シルヴィアちゃんと比企谷くんの引退ライブのチケット、買いました!？」

先輩「シルヴィアちゃんの引退ライブな。買ったに決まってるだろ。後は抽選で当たり待ちだな。」

後輩「ああ、今からでも緊張するんですよ。早く抽選しないかなあ……待ちきれない!」

先輩「おいおい、抽選の結果は来週だぞ。」

上司「なんの話だい?」

先輩「ああ課長。実はシルヴィアさんと比企谷くんのライブのチケットを買いました。それでこいつが待ちきれないって。」

後輩「何ですか、私がせっかちみたいな言い方!」

上司「はっはっは。実は私も買っていてね。」

2人「えっ!?!課長も!?!」

上司「そ、そんなに意外かい?私だってこういうのには偶に参加したいって思う時はあるんだよ。弾けたいとか暴れたいとか……年不相応だけど。」

先輩「い、意外です……」

上司「それに、娘にもサインくらいは持ち帰ってやりたいからね。一応家族分は買ってあるから、誰かが当たればそれで行けるからね。」

後輩「家族孝行ですね。」

上司「家族サービスは大事だからね。」

比企谷母（……………言えない。もう既にチケットを持ってるなんて言えない。しかもプレミア。）

比企谷母 s i d e

社内でも休憩の時に息子と義娘のライブの話で盛り上がっている人たちが大勢いた。もともと私の会社は彼女のファンが多い。それは新人古参関係なくいるわ。だからこの会社の人間関係はかなり良いと言ってもいい。今は休憩時間で社内ですぐに話をしているグループの近くで食べているのだけど、自分だけですごく気まずい感じになっているわ。もうその2人からチケットを貰っているから。

社内を持つてくるんじゃないか。いえ、持つてきたのは意図してって訳じゃないけど、家で保管するにはちよつとアレだったから持ち歩いていようと思ったあの時の私に喝と説教をしてあげたいわ。それにしても、何処からもライブの話がするわね。この会社のスタッフ、シルヴィアちゃんの事好きすぎないかしら？

主任「あ、部長！お疲れ様です！ご一緒してもいいですか？」

比企谷母「え、ええ、どうぞ。」

主任「どうも。いやあ、それにしても、どこもかしこもライブの話ばかりですね。まあ彼女の引退ライブですから当然かもしれません。」

比企谷母「その子たちが日本に来るんだもの。それも横浜でライブするんだから、興味がある子で応募しない子はないんじゃないかしら。」

主任「ですね。私も買いましたけど、そこまでは期待してませんか。テレビで見れるだけでも充分なので。」

なんて良い子なのかしら。欲がないと言ったらアレだけど、達観しているのかしら？

主任「それで、その……部長。ちょっと聞きにくいんですが、聞いてもいいですか？」

比企谷母「ん？何？」

主任「これ、部長には内緒にしてる噂なんですけど……部長と比企谷八幡くんって家族だったります？」

……どう答えればいいのかしら、この質問には。私自身あの子の事を息子だと思っているけど、あの子に親らしい事なんて1度もしてないし、教えてない。

でも、この前の……去年来た時は……

※この後の回想は閑話にはしてませんが、【閑話 ⑥『家族』】で帰省した時の会話です。

比企谷母「ねえ八幡、聞いてもいいかしら？」

八幡「ん？」

比企谷母「もしも私が何処でもいいから、あんたの母親だつて言つたらどう思う？」

八幡「なんだそりゃ？」

比企谷母「もしもよ。」

八幡「別に気にしないぞ。母ちゃんがそれを言つて後悔しないのならな。別に俺は母ちゃんに『この子は私の息子だ。』って言われても事実だから何とも思わないぞ。」

比企谷母「私のいる会社つてシルヴィアちゃんのファン多いわよ？」

八幡「つまりは俺のファンじゃねえんだろ？なら問題ねえだろ。」

比企谷母「ふふ、まあいいわ。問題ないっていう事でいいのね？」

八幡「母ちゃんの好きにしろよ。」

あの時、八幡はこう言ってくれたわ。だから私は堂々とあんたの母親だつて言えるわ。

比企谷母「…………ええ、そうよ。ウチの長男よ。」

主任「…………マジですか？」

比企谷母「ええ、マジ。」

主任「ええええええええええええ  
!!!!??」

彼は突然叫びだした。言っておくけど、ここ一応職場よ？しかもオ  
フィス内。静かにね。

主任「…………あつ！し、失礼しました！突然…………ぶ、部長！ほ、本  
当なんですか!?彼の母親だなんて！今までそんな事を思わせるよう  
な仕事なんて1つも…………」

比企谷母「ええ。だって誰にも聞かれないんだもの。それに、貴方  
たち噂してたんでしょ？なのに何でそんなに驚くのよ？」

主任「い、いえ…………まさか本当に母親だったとは思わなくて。っ！  
じ、じゃあ部長って…………星脈世代？」

比企谷母「ううん、私は普通の人間。あの子が後天性の星脈世代に  
なったのよ。だから私の家族ではあの子だけが星脈世代よ。」

主任「は、はあ…………」

比企谷母「この人事部の人だったら分かりそうなのにね。資料を  
見て家族扶養の一覧見たら一発で分かるのに。気になってみようとは  
思わないのかしら？」

主任「ぶ、部長は動じないんですね。」

比企谷母「別に秘密にしていたわけじゃないし、さっきも言ったけ  
ど聞かれなかったから。」

主任「そ、そうでしたか…………」

比企谷母「別に私が凄いつてわけじゃないんだからそんなに引かな  
くてもいいわよ。凄いののはあの子なんだから。それと、お弁当食べな  
いの？箸が全然動いてないわよ。」

主任「っ！あ、ああ…………驚きが強過ぎて、食べることも忘れてまし  
たよ。じゃあ今回のライブも息子さんからチケットをもらっていた



りするんですか？」

比企谷母「それとこれとは話が別だから貰ってないわ。それにこのライブはシルヴィアちゃんのもでしょう？あの子がそこまで口を出せるわけないじゃない。」

主任「で、ですよね。」

やっぱり言えないわ。もうチケットをもらってるなんて本当に言えないわ。だって申し訳ないもの！抽選決まる前からチケットを、しかもプレミアを貰っていたなんて！

主任「ち、因みに写真とかってありますか？」

比企谷母「ええ、見たいの？」

主任「ご、ご迷惑でなければ。」

私は5年前に玄関に置かれていた写真を見せた。

主任「おお………」

比企谷母「因みにこれ、あの子たちが高校2年生の時の写真よ。で、こっちが大学1年の時ね。去年家に来たの。」

主任「す、凄いです。まさかこんな身近に有名人がいたなんて……」

比企谷母「一応言っておくけど、あんまり言いふらさないでよ？あの子はいいかもしれないけど、私の家までマスコミとか来られたら本当に困るんだから。」

主任「は、はい！分かってます！」

## 近くライブ

八幡 side

あれから1ヶ月が経ち、もうライブは明日にまで迫っていた。それにしても、この船に乗るのも1年ぶりくらいだな。前は春休みの時に一時帰省したんだっけか？しかし、船を貸切にするって思い切った事するよな。前の千葉でライブした時は貸切じゃなかったからな。乗ってた人は少ないが、一般の人はいたからな。

シルヴィア「ん〜♪潮風が良いね〜。あんまり髪には良くないっていうらしいけど、気にならないくらい海の匂いと良い風が鼻を刺激してくれるね。」

八幡「……そうだな。」

隣にはシルヴィ。うん、お決まりのパターンだが全く悪くない。むしろ良いと言っていていいでしょう。

八幡「ウチの両親は元気にしてつかねえ……プレミアのチケットを渡して以来、連絡が来ないが……元気だったらいいんだが……」

シルヴィア「大丈夫だよ。お義父様もお義母様も元気に決まってるよ！だからそんな浮かない顔しないのっ！」

八幡「別に浮かない顔をしていたわけじゃないんだが……にしても、なんで今回は貸切なんだ？」

シルヴィア「今回は、使う機材とかが多いからなんだって。向こうも用意してくれるって言ってたんだけど、やっぱり時代的に進んでいる六花の機材を使うって方向性になったから、今回は貸切にしても良かったんだって。この前の千葉のライブは中でやってたけど、今回は中でも外でやるようなものだからね。しかも70000人の前だからかなり良い機材を使わなきゃいけないからね。」

八幡「そりや、ご苦労様って言いたくなるな。俺も何か手伝えることがあるといいんだがな。」

ペトラ「貴方たちは本番で実力を出し切ってくれればいいの。それが私たちの何よりの願いなんだから。」

八幡「ペトラさん。」

ペトラ「貴方が私たちの事を気遣ってくれるのはありがたい事よ。でもね、今回の主役はシルヴィアと貴方なんだから。自分の身体と喉を気遣いなさい。」

いや、主役シルヴィだよな？俺は別に頼まれてるだけだからどうでもいいよな？

――横浜・船着き場――

八幡「ほら、来い。」

シルヴィア「うん。」

飛んできたシルヴィを俺はそのまま抱き締めてキャッチした。潮風なんかよりもずっと良い匂いがするな。柑橘系の香りとシルヴィ独自の甘い匂いがする。

シルヴィア「やってきたねー横浜っ！」

八幡「ああ。」

ペトラ「はしやぎ過ぎないようにね？」

シルヴィア「分かってますよー♪」

全く、どの口が言ってるんだか。

シルヴィア「あっ！ねえペトラさん！今回の六花に帰る予定日はいつ？」

ペトラ「はあ……そう聞いてくると思ってもう組んであるわ。貴方

私たちはもう学園を卒業するのを待つのみだから、この2月中は学園が休みでしょう？だから自由にしていいいわよ。その為に2月の最初を開催日にしたんだから。」

シルヴィア「ペ、ペトラさん、それ本当？」

ペトラ「ええ本当よ。だから帰るタイミングは貴方たちの好きにしないさい。でも、2月ギリギリにはならないように。それが条件よ。」

シルヴィア「うんっ!!ありがとうペトラさんっ!!これで八幡くんといっぱいデート出来るよっ!!」ピョンピョン!

八幡「…………余程嬉しいみたいですね、ライブ後の行動を自由にしてくれた事。」

ペトラ「みたいね。こんな人目のつくような場所であんなに分かりやすく喜ぶなんて…………本当に嬉しいのね。」

確かにそうだ。俺もあんな風に感情を露わにしながら喜んでるのはそんなに見ない。

シルヴィア「八幡くん八幡くん!!こうなったら善は急げだよっ!!ライブが終わったら、すぐに八幡くんのお家に行ってお義母様とお義父様にご挨拶しに行かなきゃ!!」

八幡「ふっ…………落ち着け。それはライブが終わってからな。先ずはライブに集中だぞ。デートが出来るからって浮かれ過ぎるなよ?」

シルヴィア「えへへ…………はい。」

八幡「じゃあ行きましょうか。」

ペトラ「ええ、そうね。」

——横浜日産スタジアム——

シルヴィア「うわあ…………おつきいねえ。」

八幡「今までのとは比べ物にならないな。」

ペトラ「あそこがライブステージね。ステージの後ろが座れなくなってる代わりに前の芝生も観客が入れるようになってるわ。」

すげえな、後ろ以外は全部人で溢れるって事か。

八幡「これだけ広いんなら、飛んで歌っても平気そうだな。」

シルヴィア「え？八幡くん空を飛ぶの？」

八幡「いや、ただの例えだ。」

シルヴィア「ビックリしちゃったよ。フアンサービスはしないって言ってたのに、いきなり今みたいなこと言い出すからやるのかと思っただよ。」

ペトラ「でも、貴方たちなら飛びながら歌っても問題はないのでしょう？」

シルヴィア「うん、全く。」

八幡「全然です。」

ペトラ「頼もしいわね。」

そして俺たちは会場で少しだけ音声をチェックして、1回だけ歌ってからスタジアムを出た。

――ホテル――

ペトラ「じゃあ部屋割りを決めましょうか。」

八幡「じゃあ俺とシルヴィはダブルの部屋で。」

シルヴィア「うん、その方が良いよね。」

((迷わず一緒に部屋にした!!?))

ペトラ(はあ……この2人、益々甘々でベタベタドロドロな関係になってるわね。)

シルヴィア「それとも他に誰かダブルが良いっていう人います？なら変わりますけど……」

ペトラ「いいえ、そのままが良いわ。此処に貴方たちの仲に水を差

すような不粋な人はいないから。」

結果俺たちがダブルで泊まる事になり、他のスタッフはそれぞれツインでペトラさんがシングルという事になった。

## 昔の私たちと横浜の観光地

シルヴィア side

本当によく思っただけど、何でダブルとツインって階層が違うんだろう？しかも1階、2階じゃなくて4〜5階くらいも。別にラブホテルじゃないのに。まあ私は八幡くんと一緒なら別に何処の部屋でもいいけどね。え？シングルだったらどうするのって？もちろん八幡くんとだよ。名前だけはそこに置いて、荷物と私が八幡くんの部屋に行くかその逆というパターンだよ。うん、一緒にいるというのは大事な事だからねっ！

……まあ今回も同じ部屋だからそんな事にはなっていないけどね。

シルヴィア「八幡くんは寝る時は窓側廊下側どっちがいい？」

八幡「俺はどちらでもいいが、強いていうなら廊下側だな。別に理由はない。けど、なんでそんな質問を？」

シルヴィア「んーなんとなく？」

八幡「偶にシルヴィの思考がわからない時があるんだよねあゝ。まあ俺は本当にどっちでもいいけどよ。」

シルヴィア「なんか煮え切らない答えだなあゝ。私が八幡くんのお布団に忍び込んで欲しいの？」

八幡「俺は忍び込むではなく、最初からいて欲しいもんだな。その方が落ち着いて寝られると思うしな。」

シルヴィア「忍び込む方はどっちでもいいかもしれないけど、忍び込まれる方は起きてないと後が分からないからね。う考えたら最初からいた方が落ち着くね。」

寝ている状態でも分かるかもしれないけど、最初からいてくれた方が安心感って違うもんね。

八幡「それと、今回もダブルだから忍び込むも何もないぞ？」  
シルヴィア「それもそっか！」

―――部屋内―――

八幡「ほほう……良い部屋だな。外の景色も良いし、内装も豪華過ぎないし、シンプルなのが良いな。」

シルヴィア「そうだね。何だか落ち着く。」

この前みたいに雰囲気には呑まれることはなさそうだね。うん、私たちも成長したって事だね！

八幡「千葉でライブした時の部屋に入った時、シルヴィ固まってるな。そんで互いに気まづくなってそのまま1時間半もキスのフルコースだったよな。」

シルヴィア「ふふふつ、懐かしいなあ。あの頃の私たち、まだ付き合いたてで若かったからね。心がまだ純情だったって事だよ。」

八幡「その言い方だと今の俺たちが穢れてるみたいな感じになっちゃうぞ。」

シルヴィア「で、でも……そっちの意味でなら、少しは当たってるんじゃない？／／／

八幡「……ま、まあ……そうだな。／／／」

シルヴィア「……あつ、ダメだよこんな会話してたら！あの時よりもすごい事になっちゃう可能性大だよ！はい、この会話打ち切り！」

シルヴィア「というわけで、横浜には何があるんですか!?比企谷八幡くん、お答え下さい！」

八幡「また唐突だな……まあ誰もが知っているとえば、横浜中華街だろう。中国の街並みを再現していて中国の伝統料理や工芸品を取り扱った店舗が多くあって、観光客も多い。次は赤レンガ倉庫だ



な。雑貨、飲食、インテリア、アクセサリ、その他諸々多くの商品を取り扱っている。広い海の近くにあるから、楽しみながらショッピングできるだろう。後俺が知ってるのはラーメン博物館だな。日本にラーメンが伝わってから今に至るまで、日本国内でたくさんラーメンが開発されてきた。その日本全土のラーメンをこの新横浜にあるラーメン博物館に集結させているわけだ。だから、此処に行けば日本各地のラーメンの味を楽しめるというわけだ。そしてここにはもう1つ楽しめる場所があつて、地下に進むと日本の昔の風景を楽しむ事が出来る。色んな商品も売ってるみたいだから、行って損することはないだろう。」

なんかラーメンの説明が長かったなあ……八幡くんつて千葉にいた頃はよくラーメンを食べていたんだっけ？でも、今のを聞いて全部行きたくなっちゃったなあ〜！

シルヴィア「大変素晴らしい回答をありがとうございます！お答えしてくださった八幡くんには、シルヴィア・リユーネハイムをプレゼント致しますっ！とうっ！」

八幡「おわっ!？」

予想外の事をされて驚いたのか、八幡くんは私を抱き締めつつもそのまま離さないで後ろに倒れた。幸い倒れた先はベッドだったから痛くもなかった様子。

八幡「全く、とんでもない出題者さんだな。」

シルヴィア「どうですかあ〜？」

八幡「うむ、素晴らしいご褒美だな。」

シルヴィア「えへへ〜♪じゃあご飯の時間まではゆっくりしてよつか。」

八幡「ああ。」

八幡くんへのご褒美というのも含まれてるけど、自分へのご褒美も含まれているのだ！えっへん！

八幡「……これだけは一応言っておく。目覚ましはつけておいた方がよくないか？この前みたいなことにならないように。」

シルヴィア「……………うん、そうだね。私もつけておくことに賛成。」

色々な前準備

八幡  
side

p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
カ  
チ  
ツ  
！

八幡「んん……もう時間か。シルヴィ起きろ、晩飯の時間だ。」

シルヴィア「うむう……後1時間♪」

八幡「寝過ぎだ。いいから起きろ、でないと晩飯抜きになるぞ。いいのか？」

シルヴィア「……やあ。」

八幡「なら起きろ。それとも置いて行こうか？」

シルヴィア「八幡くんの鬼畜っ！」

はあ………やつと起きたか。にしても置いて行こうとしたら鬼畜呼ばわりかよ。酷い言われようだ。

八幡「置いて行かれないのなら早く行くぞ。ほれ、髪を梳かす身だしなみ整える！そしてレストランへと出発！」

シルヴィア「は、はいっ！」

――レストラン――

1  
1  
1  
1  
0  
分後  
1  
1  
1

ペトラ「……よかったわ。今回はちゃんと間に合ったみたいね。」

シルヴィア「八幡くんが目覚まし付けてくれたから、すぐに起きれましたよ！」

八幡「そんな事言つて後1時間も眠ろうとしていたのは何処のお嬢さんだろうか？」

シルヴィア「睡眠って大事なんだからねっ！」

八幡「はいはい、大事だね。でも寝すぎもダメだからな？オーケー？」

シルヴィア「OKです♪」

八幡「よろしい。てな訳でペトラさん、もう進めてもいいですよ。」  
ペトラ「ええ。まあそんなに話す事もないから手短にするわね。明日はいよいよシルヴィアの引退ライブが始まるわ。だから今日はしっかりと英気を養って明日に備えなさい。羽目を外すのは明日のライブが終わってからよ。それじゃあ食事にするわ。バイキングだから食べられるだけ食べなさい。」

スタッフの皆は一列に並び、順に食べたい食べ物を取り皿に運んでいた。飲み物はドリンクバーもあれば、お酒もあった。

八幡「俺たちは飲み物どうする？」

シルヴィア「今日はジュースにしておこうよ。お酒飲んで明日に響いても困るしね。」

八幡「それもそうだな。んじゃ俺たちも取りに行こうぜ。胃もたれする程食う気はないが、少し腹が減ってたからな。ちよつと多めに食べたい。」

シルヴィア「実は私もなんだ。今日はちよつと多めにしようかな。」

実のところ、夜にこんなたくさん食べてどうするんだと思うところだが、前の日に出来ることはやっておくって結構重要な事だと思う。星武祭も前日にはシルヴィには色々させてもらったし、してやってたからな。だから前夜って結構大事だったりするんだよな。

ペトラ「八幡くん、少しいかしら？」

八幡「？はい、何ですか？」

ペトラ「貴方たち、式とかはいつ挙げる予定なの？」

八幡「……取り敢えずは卒業してからって感じですね。日とかはま

だ未定です。取り敢えずは卒業までは待つって感じでして……」

ペトラ「そう……ならいいのだけど、式を挙げるにしても準備とか費用とか掛かるから、何かあれば言ってちょうだいね。色々協力するわ。」

八幡「……分かりました。ありがとうございます。でも、なんでそれを俺だけに言うんです?」

ペトラ「シルヴィアに言う顔に出そうなんだもの。だから貴方にしたってわけよ。」

八幡「なるほど……つまりはポーカーフエイスをうまく使えって事ですっね?」

ペトラ「そうなっちゃうわね。」

八幡「確かにシルヴィなら顔を真つ赤にして俺のところに戻ってきそうな内容ですね。取り敢えずは了解です。色々と進めておきます。」

ペトラ「ええ、そうして頂戴。」

式の準備ねえ……最近はずいぶの事ばかりでそんなこと考える暇がなかったな。けど、いざ結婚って言われてもなんかあまりイメージが湧かないな。いつも同じ空間で過ごしてるからかねえ?もうなんか別々に暮らしている日あまり想像出来なくなってるんだよねあ。

八幡「夫婦夫婦って世間からは呼ばれてっけど、もしかしたら本当にそう見えていたのか?だとしたら俺たちって鈍感にも程があるな。」

シルヴィア「ん?何の話?」

八幡「ん?ああ、ちよつとな。なあシルヴィ、俺たちの普段の過ごし方ってどう思う?やっぱ普通だよな?」

シルヴィアを私たちの?うーん……他を知らないからなあ……私は今の八幡くんとのお過ごし方が普通だと思うけど?」

※君たちの普段のお過ごし方は、私には甘過ぎます。本当にまだ未婚

なの？って思うレベルです。

八幡「やつぱそうか……でも確かに他を知らないというのはあるな。俺たちは俺たちの過ごし方があるから他人のは真似しようがないからな。」

シルヴィア「私たちは私たちのやり方で過ごしていけばいいんだよ。他なんて別に気にしなくてもいいよ。1番は幸せでいられる事なんだから。」

八幡「……そうだな。ああ、その通りだな。よし！なんか急に腹減ってきたな。今日は食うか！」

その日の夕食はこれまでの人生で1番食べたと言っても過言ではないくらい食べた。料理も美味しかったのも理由にあるが、箸が止まらなかった。

そして部屋に帰ったらすぐに横になってた。

八幡「た、食べ過ぎたみたいだな……ちよつと胃もたれだ。」

シルヴィア「もう……胃もたれするほど食べないって言ったのは何処の誰だったわけ？」

これじゃあシルヴィの事言えないな。

それぞれの……

—————

明日行われるシルヴィア・リューネハイムの引退ライブ。その発表がされた日、全世界から衝撃が放たれた。ある人はまだ早過ぎる、ある人はまだ現役でいて欲しい、ある人は自分の価値が分かってない、つと述べている。しかし、その言葉を聞いたところで彼女の心は揺らぐ事を知らず、前夜まで来た。

彼女の真意は彼女にしか分からない。故に今回は彼女とその彼、比企谷八幡の真意を探るのは次の機会にしよう。今回は2人の近くで遠いような存在の行動を探ることにしてみよう。

—————

小苑 side

……久しぶりに戻ってきた横浜じゃが、相も変わらんのう。じゃが、そうじゃな……明日の影響もあってか、観光客の数が異常じゃな。それに、中には星脈世代もおるようじゃ。シルヴィアのライブに応募して当選した童たちじゃろうな。

まあ、儂にとつてそんな事はどうでも良い。儂はただ明日のライブを楽しむだけじゃ。中には入れずとも、楽しむ事は出来るからのう。

小苑「しかし多いのう……これでは観光なんてままならんじやろうに。」

???「汪小苑様!!」

ん?

虎峰「やはり小苑様でしたか!! 私です、虎峰です!」

小苑「ほう……確か【天苛武葬】じゃったな。お主がここにおるという事は……目的は明日じゃな?」

虎峰「は、はい! 明日の引退ライブはこの目に焼き付けておこうと思ひまして!!」

小苑「ほほほ、若いのう。まあそれも若き故の行動じゃな。」

虎峰「小苑様はどうして此方に?」

小苑「ん? 儂はこつちに戻ってきたというだけの事じゃ。大体、ここは儂と八幡が共に過ごした地でもある。戻ってくるのは当然じゃろう?」

虎峰「そうでしたか……」

小苑「ところでお主、宿は決まっておるのか?」

虎峰「それが、どこも満席でして……」

小苑「何じゃ、お主は宿も取らずに此方に來たのかえ? 大胆な奴じやのう。」

虎峰「ち、違います! 予約しようと思ったのですが、見た時には何処も満席だったんです!」

成る程のう……

小苑「ならば儂の家に泊まるがよい。それなら困らんじやろう?」

虎峰「よ、よろしいのですか!」



小苑「構わん。後輩に優しくするのも先輩の務めじゃろうて。」  
虎峰「あ、ありがとうございます!!」

人助けをするのも、悪くはないのう。

小苑 side out

比企谷両親 side

比企谷母「あんた、いよいよ明日ね。」

比企谷父「そ、そうだな。」

比企谷母「八幡のライブなんて初めてだけど、目一杯楽しまないとね。」

比企谷父「そ、そうだな。」

比企谷母「ペンライトは買った？私は予備も買ってあるけど……なんか年柄もなく楽しみなのよね。」

比企谷父「そ、そうだな。」

比企谷母「……………」

比企谷父「そ、そうだな。」

比企谷母（はあ……………ただわ。何でこんな風になるのかしら？この前の春休みに2人が来た時もそうだったけど、ガチガチになり過ぎよ。）

比企谷母「ちよつと？今からそんなんじや当日持たないわよ？あんた本当に行けるの？」

比企谷父「し、失敬な！大丈夫に決まっているだろう!!何を心配しているんだ!？」

比企谷母「あんたのソレ以外何を心配すればいいのよ、私は。」

比企谷父「う、ううむ……………」

比企谷母「もつとシャキツとしなさい。明日は息子と義娘のライブなのよ?」

比企谷父「い、いや、確かにそうなんだが……」

比企谷母「じゃあ私の友達にそのチケット上げてこよつか？」

比企谷父「いや、これは俺が使うんだ!!」

比企谷母（全く、本当に手間のかかる旦那ね。今から緊張してどうすんだっての。）

比企谷両親 side out

オフエリア side

……シルヴィアから貰ったプレミアチケット。ライブなんて行った事がないからペンライト以外は飲み物を持って行くくらいしか分からないけれど、楽しめそうだわ。

……だって八幡の……違ったわ、八幡とシルヴィアの歌を間近で聞けるんだもの。エルナトでやった時とは違ってもっと激しい曲なのよね。今からペンライトを振つてもしよがないのだけど、どうしても振ってしまうわ。

オフエリア「……八幡のカッコいいところを見るの、楽しみだわ。」

……っ！ただわ、また八幡だけになってしまったわ。別にそんなつもりはないのよ？どうしても八幡の事ばかりを考えてしまうから抜けてしまうのよ。シルヴィアの事を考えていないわけじゃないのだけど、どうしても私の中での八幡の優先順位が圧倒的に上だから。

オフエリア「……こればかりはどうしようもないわね。」

オフエリア side out

めぐり side

めぐり「いやあくチケット取れて良かったですね！はるさん！」

陽乃「そうだねー。でも、明日でシルヴィアちゃんのアイドル人生が終わっちゃうのかあく。なんだか寂しいね。私はそこまで見てたってわけじゃないけどさ。」

めぐり「そうですね……あつ！でもでも、六花に居るんですから、もしかしたら何かの講演会とかで出てくれるかもですよ！」

陽乃「あはは、うん、そうかもね。」

めぐり「それに比企谷くんの歌声も聞けるなんて、本当にラッキーですよ！ああ……あの歌声を聴くのも5年ぶりなんだなあ……そして最後の声でもあるのが残念。」

陽乃「さつき六花にいらんだからまた聞けるかもしれないって言ったのは誰だっけ？」

めぐり「はっ!!」

陽乃（この子、早速天然ボケだよ。）

めぐり「えへへ……」

陽乃「全く……自分で言ったことを忘れるんじゃないの。しっかりしてね？あなたは私の秘書なんだから。」

めぐり「はぁーい♪」

それぞれの……②

――――

明日行われるシルヴィア・リユーネハイムの引退ライブ。その発表がされた日、全世界から衝撃が放たれた。ある人はまだ早過ぎる、ある人はまだ現役でいて欲しい、ある人は自分の価値が分かってない、つと述べている。しかし、その言葉を聞いたところで彼女の心は揺らぐ事を知らず、前夜まで来た。

彼女の真意は彼女にしか分からない。故に今回は彼女とその彼、比企谷八幡の真意を探るのは次の機会にしよう。今回は2人の近くて遠いような存在の行動を探ることにしてみよう。

――――

葉山 side

葉山「……」

俺は今、自分の持っているパソコンでとあるサイトを見ていた。そのサイト名は『アンチ比企谷八幡の会』だ。このサイトの連中は本当によく分かっている。奴は本当の力なんて何も持っていない。にも関わらず俺を罪人扱いして六花を永久追放にまで追い込んだ。しかも周りの記者共もうるさいばかりだ。近所迷惑だとは思わないのか？能無しの奴らめ。

まあいい、一先ずは明日だ。残念だけど俺はスタジアムの中には入れない。チケットは買っていたけど、当選しなかったからね。どうかして中に入れないものかな？シルヴィアさんの隣はあんな奴がいていい場所じゃない。俺の方が相応しいんだ。あんなイカサマ野郎よりも俺の方が相応しいはずなんだ。

葉山「全く、どういつもこいつも比企谷比企谷って……そんなに奴が偉いのか？しかもあんな奴の何処がいいんだ？界龍の奴らも気が知れないよ。あんな奴の後ろについて行くなんて、考えただけでも鳥肌ものだっていうのに。」

ピコンツ！

ん？新着か？

リーダー？『同志の皆よ！明日はスタジアムに押し掛けて忌まわしき宿敵、比企谷八幡と共に倒そうぞ!!参加してくれる者はおらんか!?!』

メンバー1 『俺は行くぜ!!』

メンバー2 『俺もだ！あのインチキ野郎をぶっ倒してやる!』

メンバー3 『わり、俺はチケットねえから無理だわ。』

メンバー4 『俺も無理だわ。』

……俺もチケットがないから無理だな。

葉山『すまない、俺も無理だ。』

リーダー? 『皆よ、安心するがいい。俺の知り合いにニンベン師がいて、偽造チケット30枚を用意してもらった。これがあれば中に入る事ができるだろう。』

メンバー4 『天才がいた!! なら俺も行く!!』

メンバー3 『勇者登場!! 俺も参加ねー!!』

へえ……中々いい仕事をするじゃないか。これは参加しないわけにはいかないね。

葉山『なら俺も参加するよ、比企谷八幡を潰しにいくのを手伝うよ。』

その後はチケットのある者となない者を含めて合計50人くらいが集まって集合場所や打ち合わせなどをした。

待ってろよ比企谷……今すぐそこから引き摺り下ろしてやるからな。

葉山 side out

由比ヶ浜 side

ああーもう!! 何処に言ってもシルヴィアさんとヒツキーの話ばかり出て来るからなんかすごい腹が立つし!! 何でヒツキーがあんなにチャホヤされるの!? 普通シルヴィアさんじゃん! 付き添ってるだけなのに、何でヒツキーにまで注目が集まるし!! 訳分かんない!!

なんかもう毎日ヒツキーの名前が出て来るからイライラが収まらない……街に出てもお店の中にはヒツキーのサイン入りの写真があったり、グ……グ……グラウンドスライム? なんかそんな感じの名前の凄いのを達成したからって周りはそれで凄いとか言うし……皆ヒツキーに騙されてるんだよ! でなきゃこんな事にはなっていないし!

由比ヶ浜「はあ……なんかもう疲れてきた。皆ヒツキーの事凄く凄  
いって言うてるけど、何処が凄いか私には分かんない。だって星武  
祭優勝したのだってチームメイトのおかげじゃん。《鳳凰星武祭》で  
は陽乃さん、《獅鷲星武祭》では他の人たち、《王竜星武祭》ではシル  
ヴィアさんが引き分けてくれた。もしくは皆ヒツキーに操られて負  
けるように指示されていたかしこ考えられないし！」

ライブ見に行きたかったけど、私はチケット取れなかったからなあ  
……六花にいるしかないや。

## 防犯対策

八幡 s i d e

.....

.....

.....

ん……んんう……ん？もう朝か？けどまだ外暗いな。今何時だ？………まだ4時じゃねえか。ああ、でもどうすっかなあ………すっかり起きちまったし、なんか眠れるような感じでもない。かといってこのままの体勢でずっと居られる程、暇というわけでもない。というより、少しだけ身体を動かしたいんだが、それすらも出来ない。なぜなら………

シルヴィア「すう………すう………」



俺のお姫さんが俺の腕に抱き着きながら眠っているからだ。いやね？別にこれが嫌だとは言わないよ？だって俺もたまにシルヴィに抱きついて寝てる時あるから。でもシルヴィは毎日のように俺に抱きついてる。安心できるって意味もあると思うが、俺が少しでも腕を離そうとするとすぐに……

シルヴィア「んんう……んんう……」ギョッ

すぐに抱き締め返してくる。なんて愛くるしい奴めっ！って思うんだが、流石に飲み物くらいは飲みに行かせてくれ。いつもやっているからもうそれ程大々的には言わないが、分身を身代わりにするのもなんかアホらしくなってくるんだよ。いや、自分の行動を制限されるのはアレだからそうするしかないんだけどさ。

八幡「……仕方ない、今日もやるしかないか。」

そして俺は自身の影からもう1人の俺を作り出して身代わりをしもらった。

八幡「いつも済まないねえ。」

分身「いいって。早く用事済ませて来いよ。」

シルヴィア「んんうゝ八幡くん……」

分身「はいはい、俺ならここにいるぞ。」

なんて男前な奴なんだっ！いや言ってるの俺（分身）なんだけどさ。

……アイドル・歌手のトップニュースは殆どがシルヴィアの引退ライブについてだな。それもそうだ、世界で最も美しく綺麗な歌声を持つてる人がこの若さで引退するんだからな。驚くなという方が無理だ。けど、シルヴィがアイドル始めてもう10年くらい経つのか？そう考えたら、まあよくやってきたと思うけどな。

八幡「あとめぼしいニュースは……ん？」

【シルヴィアの引退ライブに黒い影が迫る？】

……気になるな。読んでみるか。

いよいよ明日にまで迫ったシルヴィア・リニューネハイムさん（クインヴェール女学園大学部4年）の引退ライブ。チケットの販売も1週間を経たずして完売という驚異的な人気を誇っている。そんな彼女のライブだが、我々が独自に調査した結果、彼女の恋人関係である比企谷八幡氏を誹謗中傷する内容が含まれていた。さらに、偽造チケットを作成して、比企谷八幡氏に暴行を行う内容も含まれていた。参加メンバーは不明だが、今のところ推定30名がこの計画に賛同している模様。我々はライブが始まるまでは調査を続行する予定です。

……こんなグループもいるのか。まあシルヴィの熱狂的なファンから俺のアンチに移った奴らも少なくはない。まあ俺のアンチってだけでシルヴィアが嫌いになったわけではない。俺が気に食わないだけだろう。

八幡「にしても、暇な奴らがいたもんだな。これは対策が必要だな。だがなにがいいか……っ！」

いい事を思いついたぞ……これなら偽造だって分かるだろう。よし、今からやるか！ペトラさんには申し訳ないが、起きてもらうしかないか。

八幡「俺、悪いがやる事が出来たからシルヴィの相手を頼む。」  
分身「任せとけ。シルヴィを愛でてればいいんだろ？抱き締めてナデナデしてればいいか？」

八幡「よし、それをやり続ける。」  
分身「がつてん。」

古いわ。

八幡「さて、ペトラさんに連絡つと………」

p i p i p i…p i p iっ！

え？起きてるのか？

ペトラ『おはようでいいのかしら？それよりも、こんな時間にどうかしたの八幡くん？』

八幡「おはようございます、ペトラさん。実は少し協力して欲しい

事がありました。ペトラさん、当選した人のチケットのデータが入ったPCってあります?」

ペトラ『ええ、あるわよ。それがどうしたの?』

八幡「少しそれを使わせて頂ければと思います。悪用するわけではないですから安心して下さい。」

ペトラ『貴方がそんな事をする人じゃないっていうのは知ってるから。でも、何のために?』

八幡「単なる犯罪防止ですよ。」

ペトラ『?……まあいいわ、取り敢えず私の部屋に来なさい。重要なファイルだから外に持ち出して見させるわけにはいかないわ。』

八幡「ありがとうございます。では今からそちらに向かいます。」

そして俺は通信を切った。

よし、データを打ち込んでいるのなら話は早い。機材は俺が作った方が早いな。買いに行くとしてもどこに売ってるか分からんし、間に合わん。うん、俺が作るの決定。

——ペトラの部屋——

コンコンツ

ペトラ『入りなさい。』

八幡「失礼します。」

ペトラ「さつきぶりね。でもどうして急に犯罪防止なんてことをしようと思ったのかしら?」

八幡「それはこの記事です。」

俺はさつき見た記事をペトラさんに見せた。

ペトラ「……成る程ね。そういう事なら協力するわ。データの入っ

ているファイルはここよ。」

八幡「はい、お借りします。このファイルのデータをこいつに入れ  
てつと……後はPCと連動させて……よし、これでいいはずだ。」

ペトラ「何をしたの？」

八幡「見ていれば分かります。チケットつてあります？」

ペトラ「ええ、予備のなら。」

ペトラさんはチケットを持ってきた。そのチケットには7000  
1の番号が振られていた。

八幡「ペトラさんもご存知の通り、チケットには番号が振られてあ  
ります。今回は動員数が70000人なので70001という数字  
はありません。なのでこれを打ち込んでも……数式には反映され  
ません。」

俺はチケットをスキャナーで打ち込んだが、PCにはサイレン音が  
鳴り、データがありませんと表示されていた。

八幡「けど、もし番号がこのPCに反映されている場合は……この  
ように通ります。」

今度は数式に俺の名前を使って登録していたため、名前の横にペケ  
印が付いていた。

八幡「もし番号がまだ打っていないものだったとしても、数式に反  
映されていなければ、それは偽物のチケットという事です。記事には  
書かれていませんが、ニンベン師という奴が偽造カードを作っている  
みたいですからね。」

ペトラ「なるほど……データをを使って相手を見抜くのね。しかもチ  
ケットには刻印代わりとしてデータを入れてあるからすぐに分かる  
ものね。」

八幡「はい。これならすぐに正式なチケットか偽造チケットか分かりますので、対策にはいいと思うのですが……どうですか？」

ペトラ「これを不採用にすると思うかしら？是非使わせて頂戴。」

八幡「ありがとうございます。スタジアム導入の際に使う人数ってどれくらいですか？」

ペトラ「10～15人ね。」

八幡「ならその中で3人がPC役、後の12人がスキャナー役つて所ですね。3チームに分かれて打ち込んでいきましょう。」

ペトラ「ならそれぞれのチーム名として $\alpha$ チーム・ $\beta$ チーム・ $\gamma$ チームと命名するわ。打ち込み役はそれぞれ1～5までの数字で動いてもらうことにしましょう。」

八幡「PCにも誰が打ったか分かるようにしておきますね。」

こうして俺たちの防犯対策は作業と打ち合わせに試運転もやって、朝食の時間になるまで続いたのであった。

## 仕事終わりの膝枕

八幡 side

ふう……やつと終わった。これで  $\alpha 1 \sim 4$ 、 $\beta 1 \sim 4$ 、 $\gamma 1 \sim 4$  の 12 機に全部データ移し終えた。まあ機材にデータを移すだけだったから思ったよりも早く終わったな。後はこの事をスタッフの皆さんに言えば済むな。

八幡「終わりました。取り敢えずはミーティングの時に一通りやり方を教えてから全員に打たせるって感じですね。ぶっつけ本番じゃあアレなんです。」

ペトラ「それもそうね。こんな時間にご苦労様。」

八幡「いえ、こちらこそすいません。こんな早い時間に仕事みたいなのをさせちゃつて。」

ペトラ「いいのよ。この時間に起きる事は別に私にとっては珍しい事じゃないから。あの子とのライブで海外に行くでしょ？それで慣れたわ。」

やっぱり何度も思うが、慣れって恐ろしいよね。

ペトラ「八幡くんも少しだけ寝てきたらどう？今はまだ5時半だから2時間くらいなら余裕あるわよ。朝食は8時からだから。」

八幡「そうですね……じゃあ部屋に戻って仮眠してきます。ペトラさんも仮眠を取るんですか？」

ペトラ「私はライブの設営とかの見直しとかをするから、ライブ前にこの時間に起きるのは当たり前になってるのよ。だから安心して眠ってください。」

八幡「……分かりました。では、失礼します。」

ペトラ「ええ、お休みなさい。」

――八幡とシルヴィアの部屋――

八幡「仮眠つつつても、画面とにらめっこしてたから目が冴えちまつてるんだよな。椅子に座って目を瞑るだけでもいいか。」

ガチャツ

八幡「たでーま。」

分身「おう、戻ったか。どうだった？」

八幡「採用されたぜ。」

分身「おめでとさん。」

八幡「俺、少し仮眠取るから。あつ、別に消えてもいいからな？」

分身「ならこっちに来てくれよ。」

八幡「いや、そっち入ったら爆睡しそうで怖いから遠慮しておく。」

分身「どうせ目が冴えてるくせによ。」

流石は俺の分身。俺の事を熟知している。いや、俺自身だから当たり前か。

八幡「んじゃ、そういう事で頼んだ。」

分身「結局かよ……分かったよ。2時間後まで、御機嫌よう。」

さて、眠るとしますかね。

――1時間半後――

八幡「……ん、んんう……おお、7時か。」

シルヴィア「うん、7時だよ。」

八幡「そうか。じゃあ後30……あら？」

シルヴィア「おはよっ！八幡くんっ♪」



八幡「お、おう、おはようシルヴィ。」

シルヴィア「それにしても、八幡くんも中々ヒドイよね。私を分身に任せて1人椅子で仮眠なんて。」

八幡「……分身から聞いたのか？」

シルヴィア「うん。私のライブのためにありがとう。でも、出来ればベットで寝て欲しかったよ。その方が少しでも疲れが取れたでしょう？」

八幡「……済まない。けど仮眠程度だったから別にいいと思ったんだよ。そんなにグッスリ眠るわけじゃなかったから。」

シルヴィア「それを考える辺りは八幡くんらしいけど、終わったら私の側に来る事！分かりましたか？」

八幡「肝に銘じておきます。」

シルヴィア「よろしい。じゃあ、後の30分は私の膝枕で寝ようね♪1時間半も1人で寝てた罰なんだからね。」

八幡「なんとも優しい罰です事。とってもありがたいね。」

俺はシルヴィの言うことに従ってベッドに乗ってから横になり、シルヴィの膝に俺の頭を乗せた。

八幡「ああ、良い枕だ。今まで頭に置いたどの枕よりも寝心地が良い。流石は最高品質の膝枕だ。」

シルヴィア「そっかあ、♪他には？」

八幡「良い匂いがするし柔らかい。あつたかくてずっとこうしてたくなる気持ちになる。」

シルヴィア「もう、八幡くんってば褒め過ぎだよ。」

八幡「本心だが？」

シルヴィア「そうなの？でも嬉しいよ、私の膝枕なんかでそこまで言ってくれるなんて。」

八幡「何言ってるんだよ。俺はシルヴィの膝枕だからこそ言えるんだよ。他の人のだったらこんなに感想言えない。」

実際、今までにシルヴィ以外の奴に膝枕なんてされた事ないし、した事もない。シルヴィオンリーなのだ。

シルヴィア「そう言ってくれると嬉しいなあ。私も膝枕のやりごたえがあるってものだよ。」

八幡「膝枕のやりごたえって初めて聞いたな。まあ兎も角、30分よろしくな。」

シルヴィア「はい、任せました。30分間の仮眠、ゆっくり眠ってね。」

八幡「おう。」

それからは匂いやシルヴィが居る安心感もあるからか、すぐに眠ってしまった。さすがはシルヴィアマジックだ。俺を一瞬で眠らせるとは……

## 入場開始

シルヴィア side

現在11時。朝のあらすじを簡単にだけとおさらいしちゃうね。まずは八幡君が帰ってきて30分間仮眠を取らせました。そして30分経った後に八幡くんを起こしてから身支度を整えて、レストランに向かって朝食をスタッフの皆と一緒に摂りました。余談だけど、朝ごはんの時もしっかりと八幡くんと食べさせ合いつことをしました！なんか他の人からブツブツ言われてた気がしたけど、そんな事は気にしません！

※因みに周りのお客さんが言っていた言葉は……

『若いねえ。』『新婚さんかな？』『いや、まだその前じゃないかな？』の類です。

それからは軽くだけど、自室で八幡くんと一緒に声を小さくしながら歌を歌ったり、歌詞の確認をしたりしてたよ。そして出発の時間。移動は勿論ロケバスで隣は当然八幡くん♪そしてもう1人のお隣さんが私たち2人分のバッグさんでした。昨日見た会場だけど、やっぱりすごく大きい。もしかしたらだけど、ここにバリアを張れば星武祭も開けるんじゃないかと思ってたりしました。だってそれくらい大きく感じるんだもん！

で、今は会場にお客さんが入っているから私たちは裏の準備と衣装の準備……って言っても今回は八幡くんも学院の制服でやるって言ってたからそのままなんだ。八幡くんは特に必要ないと思うけど、私はスタッフの人に化粧をしてもらっている。私自身あまり好きじゃないんだけど、必要な事だからね。

八幡君はどうしてるかって？椅子に座りながら瞑想してる……のかな？もしかしたら【八咫の眼】を使ってスタジアムを警戒している

のかもね。八幡くん働き屋さんだからね。まあ何してるかは分からないけど、パツと見ただけでは椅子に座って目を閉じてるだけ。

「シルヴィアちゃん、終わったわよ。」

シルヴィア「ありがとうございま〜す！八幡くん、終わったよ！」

八幡「……そうか。」

シルヴィア「何してたの？」

八幡「スタジアムを真上から見た。」

シルヴィア「そんな事も出来るんだ……それで、どうだった？お客さんの様子とか。」

八幡「今のところは問題ないな。偽造チケットを使った奴らも今の所は少ないが見つかっている。そいつらは誘導して会場の中に入れてるみたいだな。」

……なんか複雑だなあ。最後のライブなのにこんな事をする人がいるなんて。

ポンポンッ

シルヴィア「え？」

八幡「お前にも見せたが、あんな記事が出ている以上、対策をしない方が愚かだ。気持ちとは分からなくもないが、堪えてくれ。」

シルヴィア「ううん、大丈夫だよ。八幡くんが私のためにしてくれた事だもん。それを責める気になんてならないよ。それに、その人たちが攻めているのは八幡くんだから。」

八幡「まあな。元々はお前の熱狂的っつーよりも狂信的なファンだった奴らが【アンチ比企谷八幡の会】になった奴らとかが立ち上げた会だからな。サイトを見たわけじゃないが、会員は500人くらいみたいだ。」

シルヴィア「500人……それに比べて八幡くんのファンは世界中合わせて1,300万人。なんというか……うん、何も言えないね。」

これだけ差があると。」

その会の人たち……八幡くんの良いところを探ろうとは思わないのかな？きつと良いところは少なくとも30個は出てくると思うよ。

八幡「まあ俺は何人から嫌われようと、シルヴィさえいてくれれば問題無いけどな。」

シルヴィア「えへへ……ありがとう♪」

シルヴィア s i d e o u t

—————

—————スタジアム受付場—————

スタッフα「チケットお預かり致します！」ピッ！

スタッフ「はい、ありがとうございます！こちら記念品になります！お楽しみ下さい！」

スタッフβ1「チケットお預かり致します！」《ピッ！》

スタッフβ2『偽造チケットです。その人も“例の場所”に誘導してください。』

スタッフβ1「了解……お客様！お客様の配置ですと、少し遠くになってしまいますので、あちらの入り口からお入りください！」  
「あつ、ども〜！」

スタッフβ（これでうちの班だけでも7人か。他の班は分からないけど、序盤でこれだけいるなんてね。比企谷くんの話だと、偽造チケットを使っているのは最低でも30人以上はいるとか………これは思った以上にやり甲斐のある仕事になりそうだね。）

スタッフβ1「次の方どうぞ。チケットお預かり致します！」

—————

オフエリア side

……こんな間近で八幡とシルヴィアを観る事が出来るのね。八幡が歌っているのを見るのは、ホテル・エルナト以来かしらね。とても楽しみだわ。それに来る途中に法被を着た女の人の集団を見たのだけど、その法被に『比・企・谷・様・命・!!?』と刺繍されたのを着ていたわね。凄く目立っていたわ。

オフエリア「……それにしても、プレミアの席はこんなにも席が空くもののかしら？それともまだ来ていないだけ？」

……プレミア席は全部で100席。これは最前列だけになって  
いるみたいね。私はその最前列のほぼ中央の場所にいるわ。

?????? 「……こんなに近い場所で見れるのね。」  
?????? 「は、迫力あるな。」

……運が良い人たちね。一番中央の席を取れるなんて。でも、このチケットをくれたシルヴィアには感謝しないといけないわね。

## 最後の打ち合わせ

八幡 side

現在11時半。客はかなり収容出来ているみたいだ。手が空いているスタッフも入り口付近で手伝いをしているため、順調に人を中に入れられているみたいだ。偽造チケットをした奴らは……今のところ19人か。まだ行列は続いているから偽造チケットを持つてる奴はまだいるだろうな。俺も行きたいところだが、それは出来ないからな。それにもうすぐ打ち合わせもある。俺が出ていくわけにはいかない。

……よく見たら、偽造チケットを持つてる奴らの中に葉山みたいな奴がいるな。もしかして本人か？俺の能力じゃあ特定までは出来ないから確認できないな。まあどの道こいつらの処遇は打ち合わせで決めるからな。決めるつつつても、最終的な判断はシルヴィカペトラさんに一任する予定だけどな。俺はただ違法した奴らをあぶり出しただけだ。その後どうするかは、このライブの主催者と主役に決めてもらうのが1番だろう。

シルヴィア「ふふふ、オーフェリアさん来てくれたみたいだね。」

八幡「ああ。うちの両親の隣にするなんて、お前も中々粹な事をするんだな。」

シルヴィア「ちよつとしたドッキリみたいなものだよ。別に驚かしてやろうってつもりはないけどね。」

八幡「……おい、陽乃とめぐりもいるぞ。」

シルヴィア「えっ？ホントに？めぐりさんって本当に運が良いんだね〜！私と八幡くんが参加したライブは全部で3回だけど、それに全部当たってるんだもん！」

八幡「大したもんだな。それかなり良い席取れてるし。結構な金額注ぎ込んだんじゃない？」



いや、考えるのやめておこう。こういう事は考えない事が1番だしな。

シルヴィア「でもこうやって見るとさ、六花の生徒も多少はいるんだね。ほんのちよつとだけど、いるのが分かるよ。」

八幡「そうだな。ウチにはお前の熱狂的なファンがいるからすぐに分かったけどな。」

シルヴィア「虎峰くんの事でしょ？彼も何気ない服装だけど、なんかすぐに気がつくんだよね。何でだろう？見慣れちゃってるからかなあ？髪の色とかで。」

八幡「それもそうかもしれないな。六花外にオレンジの髪色した奴なんて限られてくるしな。職業柄染めてるか、悪い方向に向かってしまったかのどちらかに。」

まあ虎峰は地毛だろうけどよ。あれで染めていたら、俺今後虎峰にどう接していいか分からなくなる。まあ今後はそんなに接点持たなくなると思うんだけどよ。

「シルヴィアちゃん！比企谷くん！そろそろ打ち合わせだよー！」

シルヴィア「あつ、はい！今行きまーす！八幡くん、行こっか！」  
八幡「ああ。」

―――会議室―――

ペトラ「皆揃っているね？じゃあ打ち合わせを始めるわよ。今回は今までやってきたライブの中でも、最高規模の人数を誇っているわ。その数は70000人よ。この数はシルヴィアを応援してくれているファンの事だけど、貴方たちスタッフがいてこそそのファンだと私は思っているわ。そして今日で、シルヴィアのライブは全てに終止符を

打つ事になるわ。全員、失敗は絶対に許さないわ。シルヴィア・リユーネハイム最後のライブはこれまでで1番最高のものにしない!!」

「「「はいっ!!」」」

それからの打ち合わせは順調に進み、問題なく終わろうとしていた。

ペトラ「じゃあ最後ね……八幡くん、貴方からは何かある？例えば……偽造チケットを使った人の件とか。」

八幡「それは俺ではなく、ペトラさんかシルヴィに任せたいと思ってます。いくら俺が考えた策とはいえ、このライブの主権者と主役を立てなければ意味はありません。最終的な判断は2人にお任せします。俺が口出ししていい立場ではないので。」

ペトラ「そう……シルヴィアはどうしたいの?」

一気に視線がシルヴィに集まった。

シルヴィア「……………私は八幡くんに助けられてばかりでした。いつも八幡くんが私の前に出て守ってくれていました。でも今回は、今回ばかりは私が八幡くんを守りたいです。なので、彼らは、偽造チケットを使って中に入ろうとした人たちには断罪を受けてもらいます。私は彼らを許すつもりはありませんし、その判断で私のファンをやめると言うのならそれでも構いません。私も八幡くんと同じで、たとえば世界中から嫌われようとも、八幡君さえいればそれで構いません。」  
「……………」

シルヴィの声だけでも分かる。本気だ……………シルヴィは本気で違法をした奴らを断罪するつもりだ。

ペトラ「……………決意は固いみたいね。分かったわ、違法者については貴女に一任するわ。」

シルヴィア「ありがとうございます、ペトラさん。彼らにはちゃんと罪を償ってもらいます。」

偽造した罪は、有価証券偽造罪という罪になる。この罪に問われたら3ヶ月以上10年以下の懲役になる。どのくらいの懲役になるかは分からないが、主犯、そして作った奴は少なくとも3年以上にはなるだろうな。

ペトラ「それじゃあ打ち合わせは終了よ。シルヴィア、最後のライブ、思いつきりやりなさい。八幡くんもサポートをよろしくね。」

シルヴィア「はい、思いつきりやってきます！」

八幡「任せてください。シルヴィの安全は俺が保証しますのです。」

こうして打ち合わせが終わり、観客も全員入り、いよいよライブが始まる。残り時間、10分をきっていた。

ライブ開始！の前に……

シルヴィア side

いよいよライブがスタート、しかもこれで最後の……私の公式最後のライブ。これが終わったら正式に引退。絶対に失敗なんて出来ない。

八幡「落ち着け。」

シルヴィア「っ！は、八幡くん。」

八幡「肩に力が入り過ぎだ。いつものお前らしくないぞ？力を抜け。リラックスだ、リラックス。出ないと歌えなくなっちゃうぞ？」

シルヴィア「そ、そうだね……」

八幡「絶対に失敗出来ないと考えていたんだろ？」

シルヴィア「やつぱり八幡くんには分かっちゃうんだね。流石は私の彼氏くんだね。」

八幡「当たり前だ。一応言っておくが、もう10年くらいの付き合いになるんだぞ？それくらい分からなくてどうする。」

シルヴィア「……そっか、もう10年になるんだね。」

八幡「だな。だから今日はいつものお前らしくやればいいんだよ。最高なんて目指すな。その舞台はペトラさんや他の皆が作ってくれる。勿論俺もサポートはする。お前は堂々と歌えればいい。シルヴィア・リユーネハイムの歌を見せてやればいい。」

嬉しいなあ……こうやって側にいるだけでも落ち着くの、私の事をちゃんと見てくれる。

シルヴィア「……八幡くん、君から勇気をもらいたんだけど、いいかな？」

八幡「ダメな理由があると思うか？」

シルヴィア「ううん、八幡くんなら許してくれると思うてる。」

八幡「なら……愚問だろ？」

シルヴィア「ふふっ……そうだね。」

私たちはその場で唇を交わした。唇から全身に八幡くんが流れ込んでくるかのように、幸福感と安心感が広がった。

シルヴィア「んっ……うん、行けそう。今なら十二分に力を発揮できそうだよ。」

八幡「俺も同じだ。シルヴィのおかげで調子がうなぎ上りになった。」

シルヴィア「じゃあ行こっか！」

八幡「ああ。」

そして私と八幡くんは、同時にステージへと向かった。そこには冬とは思えないくらい青空、目の前には壮大とも言える程の観客数だった。

シルヴィア side out

—————

シルヴィア「皆〜！今日は来てくれてありがとう〜！」

~~~~~  
!!!!!!

シルヴィア「うんっ！皆元気いっぱいだね！今日の為に合わせてきてくれたのかな？そうだとしたら、私はすごく嬉しいなっ！」

八幡「これだけの人数の前で歌うのも初めてだしな。いつもより気合が入るってもんだ。」

シルヴィア「さて、ここで皆さんに悪いニュースが2つ程あります。私、シルヴィア・リ्यूネハイムは今回このライブが終わりましたら、

正式に引退することを発表致します。前以て言うのは、その言葉を取り消さない為です。なので皆様、どうか私の最後のライブを思い切り楽しんでいってください!!」

~~~~~  
!!!!!!

シルヴィア「ありがとうございますっ!!そしてもう1つの悪いニュースは……これは私だけではなく、隣にいる八幡くんや関係者スタッフ、そして皆様にもご不快な気持ちにさせてしまうかもしれません。ですが、今日は包み隠さず全てを曝け出して終わりたいので、発表します。今日この会場に入れる人数は70000人です。それはネットや情報誌にもお伝えした通りです。」

シルヴィア「今回のライブでは徹底した対策を取りました。誠に残念ながらお知らせになってしまいますが、30名の偽造チケットを使用した方々がいました。」

シルヴィアの告白に会場がどよめいていた。それもそのはず。彼女のライブで偽造チケットを使ったのだ。ファンからしてみれば許せない事だろう。

八幡「今回はその30名を捕えました。皆様から向かってステージの右側をご覧ください。」パチンツ!

八幡が指を鳴らして。その瞬間、右側にあった黒い大きなボックスが消えて鉄格子があった。その中には、犯罪を犯したであろう30名の人がいた。

1 「な、なんだこれは!?!檻!?!」

2 「これって俺たち、閉じ込められてるんじゃない?」

3 「バカ言うなよ!受付に言われてこっちに来たんだぞ!間違えるわけねえだろ!」

4 「けど、さっきのシルヴィが偽造チケットを使用した人々って……」

今の状況を理解出来ないでいる30人は檻を叩くなど扉を開けようと必死だった。その中には葉山隼人もいた。

シルヴィア「お見えになっていいると思いますが、彼らはライブのチケットを偽造して使用した人たちです。私は自分のライブで犯罪者を出したくありませんでしたが、今回は最後のライブですので、潔く終わりたいです！なのでこの中にいる30名の方たちを偽造有価証券行使等罪で警察へと突き出します！」

檻内一同「「っ!!?」」

シルヴィア「警備員の皆様は檻の中にいる方たちの逮捕をお願いします。そして会場にいる皆様にはライブが遅れてしまった事と、今回の偽造チケットでご迷惑をおかけした事をお詫びします。申し訳ありませんでした。」

シルヴィアは頭を90度下げ、八幡もそれに続いて頭を下げた。

すると、観客側からは盛大な拍手と歓声が上がった。

ファン男1 「気にすんなよシルヴィアちゃん!!」

ファン男2 「俺たち気にしてねえから!!」

ファン男3 「逮捕されて当然だあんな奴ら!!」

ファン男1 「シルヴィアちゃんが謝る事ねえって!!悪いのはそいつらだく!!」

ファン女1 「卑怯者を捕まえてくれてありがとうく!」

ファン女2 「カッコ良いよく!!」

シルヴィア 「……………ありがとうございます!!凄く嬉しいです!!では、彼らがいなくなるまで少々お時間を「そうは行かない!!」……………え?」

檻から出てきた奴が1人暴れ出した。葉山隼人だった。警察官はあつという間に投げ飛ばされてしまった。それもそのはず。葉山は星脈世代で警察官は非星脈世代、身体能力には大きな差がある。

そして葉山はステージへと真っ直ぐ走っていった。



## 無謀で無駄な足掻き

八幡 side

はあ……あいつもアホな奴だな。あそこでおとなしく捕まっていればよかったものを。この時点でさっきの偽造有価証券行使等罪に加えて暴行罪に公務執行妨害、そしてあの警察官は非星脈世代、基本的に星脈世代が人間を傷つけたら厳罰に処される。あいつ、人生のほぼ半分を牢屋の中で過ごしたいのか？

葉山「久しぶりじゃないか、比企谷。あの時はよくもやってくれたな！」

八幡「……随分とみすぼらしくなったな、葉山。それに痩せたか？まあ、当然だとは思うが。」

葉山「お前え……お前のせいで俺がどれだけ辛い目に遭ったか!!」  
八幡「お前じゃねえだろ。お前の親御さんが辛い目に遭ったんじゃないか。お前のはただの自業自得だろう。なに自分のこと棚に上げてんだよ。」

葉山「黙れ!!お前みたいな偽善者が俺に説教なんてするな!!」

八幡「どの口が言うんだよ。さっきまで牢屋の中にいたのは誰だ？あと知ってるか？お前は今4つも罪を重ねてんだからな？どう足掻いてもムシヨん中は免れないからな。」

葉山「……俺をナメてるのか？」

八幡「は？」

葉山「俺はガライドワースの序列10位だぞ!!お前なんかに負けるか!!」

八幡「それ、元が付くだろ。ついでに言うと、俺は序列1位なんだがな……」

葉山「ふんっ！偽物の力で勝った奴が何を言っている！どうせ此処にいる70000人もお前が騙しているんだろう!!」

BOOOOOOO〽  
!!!!!!

葉山「どうだ見たか!?これが『ガンツ!』っ!?な、なんだ!？」

ファン女1「ふざけないで!!誰が誰に騙されてるのよ!!私はずっと比企谷様のファンよ!!」

ファン男1「そうだ!!ふざけんな!!犯罪者は今すぐ消えろ!!」

わお………すごいブーイング。葉山良かったね、お前にはこれだけの数に嫌われてるよ。

葉山「な、何故だ!!君たちは騙されているんだ!!こんな奴の言いなりになるな!!」

シルヴィア「葉山くん、君がいくらそんな事言っても彼らには届かないよ。彼らは純粋な八幡くんのファンだもの。君のように偽造チケットを使わないで来てくれた人たち。そんな彼らを騙されてるなんて言わないでくれるかな。聴いている私も不愉快になってくるんだ。」

葉山「シルヴィアさん、君まで………」

陽乃「ステージに出るのはルール違反だけど、今なら別に問題ないよね。」

葉山「は、陽乃さん!？」

陽乃「名前で呼ばないでって何度言ったら分かるのかな？そろそろ理解してくれる？いい加減不愉快だから。あと気持ち悪い。あんたも懲りないんだね、《獅鷲星武祭》であんな目に遭ったのに、まだ物足りないの？もしかしてDM？」

虎峰「僕も友人を誹謗中傷されて黙っていられる程、無情ではありません。」

オーフェリア「……………八幡は私の恩人。その人を傷つけようとする人は何人であっても許さないわ。」

おいおいおい……………なにこの絵面？葉山もう勝ち目ないじゃん。美男美女（端から見れば男1の女5）が美男擬きを責めてやがるよ。別に可哀想だとは思わないけどな。

ファン女1「ねえあれって……………【魔将天閣】じゃない？元界龍第七学院序列4位の超絶美人な人！」

ファン女2「うん、間違いないよ!!あのオレンジの髪の子は現序列4位の【天苛武葬】だよ!!」

ファン女3「それにあの白髪って……………レヴォルフの序列1位の【孤

毒の魔女」だよ!! 凄い!! 比企谷様ってレヴオルフの序列1位とも仲が  
良いんだ!!」

ブーイングがいつの間にか驚きに変わってる……何があったの？

葉山「は、陽乃さんだけでなく、【天苛武葬】と【孤毒の魔女】を用  
心棒にしていたなんて……卑怯な!」

こいつ、頭大丈夫? 何で雇われてる身の俺が用心棒を用意しなきゃ  
いけねえんだよ。用意するならシルヴィにだろうが。いや、シルヴィ  
専属は俺ただけどさ。

なんかこいつもうめんどくせえ!

葉山「比企谷、勝負をしないか?」

八幡「はあ?」

葉山「今から俺とお前で1対1の勝負をするんだ。負けた方は勝っ  
た方の言うことをなんでも聞く、というのはどうだい?」

八幡「それさ、お前にメリットあつても俺にはなんのメリットもな  
いじゃん。お前俺に差し出せるモンあんの?」

葉山「何を言うかと思えば……俺がお前に負けるはずがないじゃな  
いか。」

あゝあ……フラグ建てちゃったよ。いや、立つも立たないもこい  
つが俺に勝てる道理なんてないと思うんだけど……勝算あるの?

八幡「じゃあちよつと時間をくれ。」

葉山「なんだい? 逃げる準備かい?」

八幡「ンなわけねえだろ。寝言は寝て言え。」

葉山「じゃあなぜ待たなくちやいけないんだい?」

八幡「一々うつせーな。観客を待たせちまうからに決まってんだろ  
うが。そしたら何か? お前が事情を説明してくれんの? だったら任

せるが?」

葉山「…………早く済ませてくれ。」

命令形かよ…………マジで甚振ってやる。

八幡「えー…………お集まりの皆様、非常に申し訳ないのですが、皆様から向かって右側にいるガリガリの金髪似非イケメンが俺に勝負をふっかけてきました。本当に申し訳ないのですが、少々お時間を頂いてもよろしいでしょうか?」

~~~~~  
!!!!!!

「比企谷様~~~~!!やっつけて~~~~!!」

「そんな奴ぶっ倒しちまえ!!」

「頼んだぞー!!」

どうやらOKみたいだな。本当に申し訳ありません!!この金髪の頭の中に蛆湧いてるブサイクが本当にすみません!!

八幡「んじやあ予め言つとくわ。俺がお前に望むものは……………牢屋生活終身刑で。」

葉山「なっ!?なんだそれは!」

八幡「何でも、なんだろう?なら別にいいじゃねえか。それともアレか?自分の言った事を自分で破るのか?」

葉山「くつ…………ふんつ、まあいい。最初から勝負は見えているかな。俺は…………そうだな、シルヴィアさんと永遠に別れてもらおうか。」

八幡「…………二言はないからな?今の発言取り消すなよ?」

葉山「取り消すわけないだろう?」

八幡「よし。シルヴィ、どうだ?」

シルヴィア「バツチり録音しておいたよ!」

八幡「よし、じゃあもうすぐに始めるぞ。これ以上みなさんを待たせるわけにはいかないんだから。ああ、審判はステージにいる4人で。」

ああ……やる気出ねえな。ちやつちやと終わらせるか。

秒殺試合とライブスタート!!

シルヴィア side

なんだかよく分からないけど、ライブが始まる前に八幡くんと葉山くんの勝負が始まってしまった。八幡くんが皆に説明して納得してくれたから良かったけど、もしダメだったら葉山くんがボコボコにされていたよ。私としては別にそれでも構わなかったんだけどさ。

はあ……最後のライブが最初から躓くなんて思いもしなかったよ。

陽乃「それではこれより、比企谷八幡 対 葉山隼人による特別対決を行います！ルールは六花の決闘と同じですが、今回は校章が無いため、互いのどちらかが戦闘不能、戦意消失、そして投了するまで試合は続行致します。」

陽乃「では、時間が勿体無いのですぐに始めていきましょう！双方、準備はよろしいですか？」

葉山「出来れば剣が欲しいんだけど……」

陽乃「時間が勿体無いって言ったよね？何？今から剣を持って来いって言うの？何処にあるのさ？」

葉山「……………」

八幡「はあ……ほれ。」

八幡くんが投げたのは、影で作られた剣だった。それも葉山くんに合わせて刀ではなく西洋の剣を生成したみたいだね。

八幡「それでいいか？」

葉山「……………ああ。」

陽乃「じゃあ気を取り直して、準備はよろしいですか？」

葉山「とつくに出来るよ。」

八幡「剣が欲しいつつったの何処の誰だよ……俺も大丈夫だ。」

陽乃「それでは……試合開始!!」

ブーーーーー!!!

……ペトラさん、もしかして合わせてくれたのかな? だとしたら、ナイスタイミング過ぎるよ。

葉山「1分で終わらせてやる!」

葉山くんはそう言うと、自身の星辰力を練り上げ始めた。やり方は忘れてないみたいだね。

八幡「練り上げてる時間があったら……」

さっさとかかって来いよ、ノロマ。」

葉山「ツ!!? このお!!」

まだ練り上げの途中にも関わらず、八幡くんに思い切り剣を振つ

た。けど八幡くんはいとも簡単に葉山くんの右手と肘関節を持って葉山くんの攻撃を防いだ。

葉山「なっ!？」

八幡「用無しだな。そんな動きじゃあウチの学院の序列外にも勝てねえよ。」

八幡くんは手を離したと思ったら、葉山くんの顔に向かって肘を思い切り叩きつけた。あれって確か詠春拳じゃなくて他の拳法だったよね？

葉山「あがあああああ!!!」

八幡「おいおいそんなもんかい？さっきまでの威勢はどこ行っただよ。」

八幡（嘘だろ？今の一撃なんて半分も出してないぞ？それでこれとか…………弱過ぎる。）

葉山「ぐううう…………よく、も…………やってくれ、たな…………だが、ここからだ!!」

八幡「あ…………うん。」

葉山「行くぞ、比企谷アア!!!」

八幡「1人で盛り上がってるよ…………もう終わらせるか。面倒だし。」

八幡くんは普通に立っていた。何の構えもとらずに。葉山くんは叫び終わった後、八幡くんに突っ込んでいた。

葉山「はああああ!!」

八幡「フツ!」

ガキンッ!

八幡「ムンツ！」

八幡（あっ……ヤベエ。）

バギイツ!!

葉山「っ!!？」

八幡（力入れ過ぎちまった……）

……ええつとね、今の流れの説明をすると、

- ・葉山くんが剣を振り下ろしました。
- ・八幡くんがその剣を右脚の回し蹴りで弾きました。
- ・そのまま回転しながらジャンプ！
- ・左脚でそのまま回し蹴り!!
- ・葉山くんの顔面にクリーンヒット♪

みたいな感じだね！でも見た感じ、八幡くん手加減してなかったね。だって左脚を曲げてから葉山くんの顔に向かって思いっきり伸ばしてたんだもん。アレは絶対に痛いね。

……それよりも、葉山くんもう延びちやつてるしね。勝負アリだね。というよりも、葉山くんの鼻骨折れてない？

陽乃「そこまで！勝者、比企谷八幡！！」

くくくくつ
!!!!!!

一気に大歓声。これ、葉山くんからしてみれば完全にアウェイだね。起きてなくてよかったんだと思うよ。気絶させてくれた八幡くんに感謝だね！

八幡「じゃあ約束通り、牢屋の中で一生を過ごしてもらうかな。つつても起きてねえけどよ。」

警察官「それでは、彼の身柄を拘束します。ご協力、感謝します！」
八幡「いえいえ。ああ、それから……シルヴィ、ボイスレコーダーを警察官の人に渡してくれ。」

シルヴィア「はいい♪じゃあこれ、証拠と証言です。もし彼が裁判とかで嘘をつくようでしたら、これを流してください。」

警察官「ありがとうございます！」

警察官は俺たちに敬礼をすると、そそくさと葉山の所まで行って手錠をつけてから連行して行った。本当にご苦労様です。

陽乃「ふうくスッキリしたあく♪本音を言うんなら私も蹴りたかったけど、女の子が男の子を蹴っちゃうとご褒美になっちゃうからダメだね。」

八幡「それは一部の男だけだから大丈夫だ。」

オーフエリア「……私も彼を甚振りたかったわ。」

八幡「お前の甚振りは洒落にならん。」

虎峰「……去勢した方が良かったのでは？」ハイライトオフ

八幡「お前のはもっと洒落にならん!!」

いや、俺は別にやってもいいんだけどさ。

八幡「それよりも、もうあのバカは居なくなっただからお前らも場所に戻れ。もうライブ始めるんだから。30分も遅れちまったよ。」

陽乃「あつ、そうだった！じゃあ八幡くん、シルヴィアちゃん、ラ
イブ頑張ってね♪」

オーフェリア「……………楽しみにしてるわ。」

虎峰「八幡、頑張って下さい。シ、シシシシルヴィアさんもが、
頑張ってくらい!!」

……………噛みつ噛みじゃねえか。締まらない奴め。

八幡「えー……………大変長らくお待たせいたしましたして申し訳ございません。
そこで僕から少し質問です……………今、こんな空気ですけど……………

盛り上がっていけるかあゝ!!?

~~~~~  
!!!!!!

八幡「よし、問題ないな。んじやあ最初は俺が歌う。絶望も傷も全  
て飲み込め！希望と勇気は抱き続けろ！手の届く限り、仲間を守る！  
『Another colony！』」

## 引退ライブ ①

シルヴィア side

八幡「負けちゃいけない♪♪」

……うん、八幡くんの守りたいって思いが伝わってくる良い歌詞だね。それに、なんだか負けたくないって気持ちも流れ込んでくるよ。それに最初の歌詞からサビに入るまでは八幡くんの六花に来た時の事を指しているのかもね。そしてサビでは自分の大切な場所や人を守りたいって思いが強く伝わったなあ。

シルヴィア「……やっぱり八幡くんは自分の過去をテーマにした歌を歌うと、感情が表に出て凄く良い感じに歌えるみたいだね。」

八幡「そうなのか？俺は無意識なんだが、シルヴィアがいうって事はそうなのかもな。この曲は最近聴き始めたんだが、中々に良い歌詞に良い曲だから気に入ってたんだ。」

八幡くんのお気に入りかあ……よくし！こうなったら八幡くんに負けないくらいの歌を私も歌ってやるんだから！今に見てろよ♪

八幡「じゃあ次はシルヴィにボタンタッチだな。次の歌をよろしく頼む。」

シルヴィア「はーい♪自分の夢に向かって走り出せっ！夢を掴むのは自分自身！夢を掴むその方法は自分で見つけ出せっ!!」

『Find My Only Way』!」

ピアノの綺麗な音が流れて会場を包み込んだ。会場からはピンクのライトが輝いていた。

シルヴィア「♪♪♪」

あの時の気持ちは今でも忘れはしない。君に一目惚れをして好きになった日だったね。一度立ち止まって考え直しても、やっぱり君が好きなんだって。

シルヴィア「♪♪♪」

離れ離れだった時は寂しかったけど、時間が経つと会えるのが早くなるって感じてたから、なんだか元気が湧いてくるような気がしたんだ。

シルヴィア「♪♪♪♪」

自分を見つける方法って難しかったけど、君が見守ってくれたから漸く見つけられたよ。君のおかげで見つける事が出来たよ。

シルヴィア「♪♪♪♪」

私たちの未来はまだまだこれからだし、夢だってたくさんある。だから一緒に行こうね。

シルヴィア「♪♪♪」

最初は君が近くいるけど、飛び立った後は君側にいないから不安だったけど、不思議と怖くはなかったよ。

シルヴィア「♪♪♪」

手紙でやり取りするのはなかったけど、君からは『ずっと笑顔が1

番似合う』って言われた時があったね。

シルヴィア「♪♪♪」

私の帰る場所、それは私たちの家であり、君の隣だよ。私にとって君は光や太陽のような存在で、いなくちゃいけない存在。

シルヴィア「♪♪♪♪」

自分を見つける方法ってやっぱり難しかったけど、今度は君と一緒にしてくれたから見つけられたよ。また……また、君のおかげで見つける事が出来たよ。

シルヴィア「♪♪♪♪」

私もお礼として、一緒にいてあげるから。まだ夢は続けし終わらせないからね。

シルヴィア「約束の彼方に♪」

ピアノのような綺麗な音色と共に音楽は止まり、会場は静寂に包まれた。そして……

~~~~~  
!!!!!!

一気に歓声が沸き起こった。

シルヴィア「皆々ありがとう!! うん、上手く歌うことができたよ。」

八幡「ああ、シルヴィの想いがこもった良い曲だった。こういう曲は何度聴いても良いものだな。」

やった♪でも、1番最後には1番愛のこもった歌を披露するんだからね！

引退ライブ ②

八幡 side

八幡「しかし『find my only way』だったか？それを和訳するとどんな意味なんだ？」

シルヴィア「これをそのままに訳すと『私の唯一の方法を見つけます。』っていう意味だよ。暗に『私にしか出来ない方法で。』っていう感じのがなんか良い響きだなあって思ったから選曲したんだっ！」

八幡「成る程な……流石は世界の歌姫、選曲するセンスも歌唱力も絶妙かつ素晴らしいな。改めて凄い人を彼女にしてしまったものだ。」

シルヴィア「もうっ！そんな事言ったら八幡くんの方がとんでもないと思うんだけどなっ！ねっ、皆！」

会場からは同意とも見られる歓声とペンライトが振られていた。いや、何で？

シルヴィア「なんでっと思ってるかもしれないけど、4代目の『万有天羅』、歌が上手、家事は完璧、料理もプロ並、武術は超一流、頭も良い、カッコいい、凄く優しい、そんな人が凄くないわけがないよ!!」

なんか途中から凄さ関係無いのが入ってると思うんだが？

八幡「いや、まあ……そうなのか？」

すると観客からも、またシルヴィアに同意の声が挙がっていた。解せぬ………

よし、少しだけボケてみるか。

八幡「んんっ！……シズマレエ！」

wwwwww
~~~~~  
!!!!!!

八幡「さて、次は俺が歌う番だ。心の準備は出来ているか？」

~~~~~  
!!!!!!

八幡「返事は『わくっ!!』とか『うおくっ!!』ではない！『イエツサーッ!』だっ！さん、はいっ!!」

イエツサーッ
!!!!!!

八幡「よろしいっ！」

シルヴィア「八幡……くん?……何、してるの?」プルプル

八幡「少しだけ自分らしくない事をやってみようと思ったただけだ。面白かったか?」

シルヴィア「う、うん……面白かった。」プルプル

八幡「それは良かった。んじゃ気を取り直して、次は俺が歌う番だ。」

君がいればそれでいい。君が信じてくれるだけでいい。今の俺がいるのは、君がいるから。

『君がいる限り』！」

八幡「a h h ~ ~ ~ ♪ ~」

これ、歌い出しが俺からだから難しかったんだよなあ。結構練習したんだよ。

八幡「♪ ~ ♪ ~」

俺の目の色ってよりも、瞳の大きさだよな。他の奴よりも濁ってるってだけで他はなんも変わらんדר。

昔は奉仕部が居場所だと思ってたが、あの部が俺が六花に行く原因だったんだよな。

八幡「♪ ~ ♪ ~」

シルヴィに俺の奉仕部にいた頃の話をした時、分かってくれたよな。『信じたい。』って言うてくれた時は本当に嬉しかった。荒んだ俺の心を一気に洗い流してくれた。

いつ頃かは忘れたが、朝起きた夜明け頃にはいつもシルヴィの顔が浮かんでいたっけな。

八幡「♪ ~ ♪ ~ ♪ ~」

あの時流した涙は朝陽ではなく夕陽だったが、シルヴィが俺に強さをくれたのは事実だ。

八幡「♪ ~ ♪ ~ ♪ ~」

今の俺は人を信じられる。特にシルヴィは絶対に。俺自身も信じられるようになったからな。

八幡「♪♪♪」

本当に何かあるのか分からないな。六花にいと、いつも見える空が高く感じた。

あと少しで夢も実現出来そうだ。シルヴィに見せたいんじゃない、共に見ていく。

八幡「♪♪♪♪」

俺はシルヴィからあの言葉をもらった時からずっと飛んでいる……翼はシルヴィという時だけで構わない。そして、俺の未来は俺とシルヴィのものだからな。

八幡「♪♪♪♪」

この六花に来てからは、シルヴィとの思い出がたくさんだが、ちゃんと俺の道も進まないとな。けど、そこにはちゃんとシルヴィもいるけどな。

八幡「♪♪♪」

今なら少しはそんな風になれたと思う。少しだけならこんな自分も誇れると思う。

高く青い空も、何故かシルヴィに続いて見えていた。それくらいシルヴィが綺麗に見えていたのかもな。

八幡「♪♪♪♪」

交際を始めたその夜、シルヴィは涙を流していた。けどその涙は嬉し泣きで、夜の影響もあって輝いて見えた。

八幡「♪♪♪♪♪」

俺の心の中にはずっとシルヴィがいる。絶対に離れることはない。

八幡「♪♪♪♪♪」

今度は翼ありで飛んでみるのも悪くないかもな。シルヴィと一緒に空を飛びながら六花の景色を眺めるのも一興かもな。

八幡「♪♪♪♪♪」

俺の道を辿るとしても、俺の心の奥に刻まれたシルヴィの想いだけは絶対に消えない。いつまでもどこまでも……猛々しく燃える炎のようにずっと燃やし続ける。

BGMが流れ終わり、俺も地面を向いて俯いた。これで俺の2曲目は終了だ。

そして……

~~~~~  
!!!!!!

観客からは大歓声が沸き起こった。

## 引退ライブ ③

シルヴィア side

シルヴィア「いやゝ凄いねゝ！八幡くんってあんなに高い声も出せたんだっ！男の子なのに本当に凄いね！」

八幡「いや、この歌を歌っている人の音はもつと高い。男ならあの音を出すのは難しいというか、不可能に近いだろうな。俺でもカラオケとかで歌っても1か2段階前の音程が限界だった。」

シルヴィア「うへゝゝ……八幡くんよくそんな曲を選んだね？」

八幡「良いだろ別に。良い曲なんだから。それともネタバレしない方が良かった感じか？」

シルヴィア「そういうのはないけど……この曲を選んだ理由って？」

八幡「俺が選曲するにあたって必ず入れるのが今と過去の俺に合っている曲っていうのが条件なんだ。」

シルヴィア「へゝゝ初めて知ったよ！あっ！歌詞の中にあった『僕だけの瞳の色』って八幡くんの過去を表してるんでしょ!？」

八幡「そうだな、昔の俺はこんな目じゃなかったんだぞ？もつと気持ち悪かったんだぜ？」

ザワザワザワザワ……

八幡「気になるか？じゃあ俺が界龍に入った時にもらった学生証な。」

そこには今の八幡くんみたいな瞳ではなく、濁ったような、あまりよろしくないような感じの目をした八幡くんが映し出されていた。

八幡「まあこれが10年くらい前の俺だな。」

またも観客からは信じられないとでもいうような歓声が上がった。  
うん、私も最初はそんな反応でした。

八幡「まあだろうな。今じゃ別人だろ？でもこれ手術したわけじゃないからな？俺の隣にいる人が原因でこうなったんだ。勿論、良い意味でだぞ。」

シルヴィア「あのエピソードは皆には内緒だね。所謂私たち2人だけの秘密って奴だから詮索はなしだよ♪」

観客からは教えてゝみたいな感じの流れになってる。うん、教えません！次だ次！時間も押してるだから！30分くらい！

八幡「ほらほら！次はシルヴィアが歌う番なんだから静かにしててくださいよ？」

~~~~~っ  
!!!!!!

八幡「……………イエッサーって言わないの？」

wwwwwwっ
!!!!!!

八幡「まあいいや。それじゃあ次はシルヴィ、お願いします。」

シルヴィア「はいっ！この曲は8年前の秋に千葉のライブで私が作った曲です!!隣にいる八幡くんの為に作りました！聴いてくださ
い！

『私の幸せ』！」

8年前と同じでギター音から始まる曲。うん、テンポ良く始まるからいいね。

シルヴィア「朝に目覚めたら、君を見ていたの♪♪♪」
シルヴィア「ずっと目を合わせてたね♪♪♪」

朝起きたら八幡くんが見ているか、寝ていた。起きたら話しながら
ずっと目を合わせているよね。

シルヴィア「君が抱き締めた瞬間、満たされた♪♪♪」
シルヴィア「君といれるだけで私は幸せよ、Thank You♪
♪♪」

1日に1回は抱きしめ合う。お互いの体温と心臓の鼓動が聞こえるから近くにいてというのが分かる。分身には鼓動の音が無いからね。

だから近くに八幡くんがいるだけでも幸せに感じるんだ。

シルヴィア「君とならいいける、たとえ過酷でも♪♪♪♪♪」
シルヴィア「君と一緒になら、きっと大丈夫だから♪♪♪♪♪」

例えばどんなに過酷な未来が待っていても、八幡くんと一緒にならきつと乗り越えられる。

シルヴィア「君だけが良いの、君以外は嫌なの♪♪♪♪♪」
シルヴィア「私が選ぶのは、君しかないから♪♪♪♪♪」

私はもう八幡くん以外は選ばないし、選ぶ気もない。私が生涯で1番愛しているのは八幡くんだから。

シルヴィア「昼に出かけたら、手を繋いだよね♪♪♪」
シルヴィア「当たり前だけど、嬉しい♪♪♪」

お買い物とか、デート、散歩をする時は手を繋いでる。オーソドックス

クスだけど、それがなんだか嬉しい。

シルヴィア「君がくれた温もりまだ残っているよ♪♪♪」

シルヴィア「この手の温もりは、私だけの秘密だから♪♪♪」

家に帰ったら手を離しちゃうけど、八幡くんと手をつないだ温もりは残ってるから幸せだよ。勿論、この温もりの幸せは私だけの秘密だけれどね♪

シルヴィア「夜に寄り添ったら、肩合わせてたね♪♪♪♪♪」

シルヴィア「眠る時間には、抱き締め合っていたよね♪♪♪♪♪」

ソファで八幡くんと一緒に座る時は肩を合わせてるよね。そして私とその肩に頭を落とす。あれって落ち着くんだよ？

今では普通に一緒に寝て、八幡くんの手を抱き締めるか、お互いに抱き合って寝る。だってその方が幸せだから。

シルヴィア「そして朝になり、君の横顔を見る♪♪♪♪♪」

シルヴィア「この繰り返しだが、堪らなく好きなの♪♪♪♪♪」

そしてまた八幡くんの寝顔が起きてる顔を見る。当たり前だけど、このやり取りが凄く好き。

シルヴィア「君とならいいける、負けそうになつてたら♪♪♪♪♪」
シルヴィア「声が聞こえたよ、『頑張ってくれ』と♪♪♪♪♪」

9年前の《王竜星武祭》、私はオーフェリアさんに負けそうになった。でも、何処からか八幡くんの声がしたの。『頑張ってくれ。』って。

シルヴィア「たとえ苦しくても、痛さで辛くても♪♪♪♪♪」
シルヴィア「君からの声で、何度でも立ち上がる♪♪♪♪♪」

オーフェリアさんから受けた毒で身体中が痛かったけど、君の声援のおかげで勝つことが出来たんだよ。

シルヴィア「そしてその夜、夢が実りました♪♪♪♪♪」
シルヴィア「私の願いが、叶った瞬間です♪♪♪♪♪」

その日の夜、私と八幡くんはお互いに告白をして恋人同士になった。私の夢と願いが叶った瞬間だね。

シルヴィア「目を閉じて待てば、唇の感触♪♪♪♪♪」
シルヴィア「そのひと時が、私の幸せ♪♪♪♪♪」

初めて交わした口づけ……レモン味ではなかったけど、人生で一番幸せだったよ。すごく幸せな1日だった。

シルヴィア「君と一緒になら、何処へでも行くよ♪♪♪」

八幡くんと一緒に何処へだって行ける。何処までもついていくからね。

ギターのBGMがなくなって曲が終了した。観客からは大歓声と拍手、又はペンライト（ピンク）の振るうのがみえていた。

引退ライブ ④

—————

シルヴィア「うーんっ！5年振りに人前で歌ったけど、大丈夫だったよ！なんの問題もなかった！」

八幡「ああ、あの時と一緒に想いが伝わってくる。やっぱシルヴィは良い詩を作るよなあ……………」

シルヴィア「や、やめてよく！別に大した事じゃないって！ただ八幡くんを思いながら、思いついたフレーズとかを書いてテンポ良く鼻歌とか歌を歌いながらで作った曲なんだから！」

八幡「……………うん、俺を思いながら書いてくれたのは嬉しいんだけど、それをこの場でカミングアウトしなくてもよかったんじゃないかって俺は思うんだが？」

シルヴィア「そ、それもそうだね、えへへ／＼／＼」

F o o o o o ~
!!!!!!

シルヴィア「も、もおく皆まで茶化さないでよく！恥ずかしい思いをしてるの私なのにいー！」

「シルヴィアちゃん、可愛いー！」

「照れてるところ、可愛いー！」

「可愛いー!!」

シルヴィア「うう／＼／＼／＼」

八幡「あーこれ以上は俺の彼女をいじめてやらないでくれ。こう見えても受けに弱いんだ。」

シルヴィア「八幡くんっ!!」

八幡「悪い悪い。そんじや気を取り直して次の曲行くぞ。なっ、シ

ルヴィ。」

シルヴィア「……なんかはぐらかされた気もするけど、時間が押してるから今は許します。次の曲は私と八幡くんによるデュエットソングです！まあ曲のほとんどは八幡くんが歌うんだけどね。」

八幡「そんな事言わない。2人で歌うんだからちゃんとしたデュエットソングです！それでは聞いてください。」

『君がいるだけで』！」

ピアノの良い音色から始まり、徐々にリズムが上がり歌い出しに入った。

八幡「朝の光がさして 2人を写した♪♪♪」

八幡「瞳に映る世界は 極彩♪♪♪」

八幡「寄り添う身体と心 握り合った手♪♪♪」

八幡「繋がる僕と君の想いが重なる♪♪♪」

「今回のライブって比企谷さん、割と高音の曲で歌うの多いよね。」

「最後だから思い切り歌おうとか？」

「いやいや、比企谷さんが引退するわけじゃないし！いや、待つてよ？

シルヴィアさんが引退する」比企谷さんもライブに出なくなる!」

「っ!!君は天才だ!!」

「これはもう盛り下がってる場合じゃないよ!!一生懸命ライトを振るのだ!!」

「イエッサー!!!」

八幡「君の為に何が出来る？ 君の役に立ちたいんだ♪♪♪」

八幡「僕は君のそばにいるよ 寄り添っているから♪♪♪」

そして音は一気に会場を包み、サビの部分へと突入した。

八幡「曇りのない眼差しで 君の事を見守っているよ♪♪♪♪

」

八幡「近くにいますよ いつも 君にだけ届く声♪♪♪♪」

八幡「瞳を覗き込んだ 君の笑う顔が見たいよ ただ それだけでいい♪♪♪♪」

「うおおおお!!比企谷さんってやつばすげえ!!生だこんな興奮するんのか!!」

「そっか、お前初めてか!ならそれは当たり前だな。俺もはじめてはそんな感じだったし!!今は盛り上がりうぜ!」

「おうっ!!」

シルヴィア「あの日あの時あの場所 誓い合った夜♪♪♪」

シルヴィア「ずっと一緒にいると約束したよね♪♪♪」

シルヴィア「もっと君と一緒にいる 私には君しかない♪♪♪」

」

シルヴィア「ずっとこれからも “君の代わりはいない” と♪♪♪」

「うわあゝシルヴィアさんの歌った歌詞、凄い愛情込められてるよ。」

「これはもう結婚するしかないね!」

「大・賛・成!!」

シルヴィア「言葉にできなくても その瞳で伝わるから♪♪♪」

シルヴィア「1人じゃないよ だって 私が側にいるから♪♪♪」

♪」

シルヴィア「見つめ合わせた素顔 今 君の頬に手を伸ばすよ♪♪」

♪♪♪」

シルヴィア「この想い 伝えたい♪♪♪♪」

比企谷母「……凄いわね、あの子があんな風に歌うなんて。」

比企谷父「……ああ、昔では考えられないな。」

比企谷母「しかもあの世界の歌姫と交際中だなんて……あの子は変わり過ぎたくらいね。」

比企谷父「それに関しては同意する。本当に俺たちの子かよ………」

シルヴィア「輝きも穢れも まっすぐ映すから♪♪♪」

八幡「僕らはいつだって 1つになれる♪♪♪」

八幡／シルヴィア「曇りのない眼差しで 君の事を見守っているよ♪♪♪♪♪」

八幡／シルヴィア「近くにいろよ ずっと 君にだけ届く声♪♪♪♪♪」

八幡／シルヴィア「瞳を覗き込んだ 君の笑う顔が見たいよ ただそれだけでいい♪♪♪♪♪」

八幡／シルヴィア「君がいるだけでいい♪♪♪♪♪」

ピアノの音が止んで会場は静寂に包まれたが、すぐに歓声と拍手で包まれた。

引退ライブ ⑤

シルヴィア side

八幡「皆ありがとな。この曲は俺とシルヴィが1ヶ月前から一緒に作詞して考えた曲なんだ。お互いの事を思いやって作った良い曲になったと俺は思っている。」

シルヴィア「うん♪私と八幡くんはこうしているだけでも幸せを感じるんだもんね♪」ダキッ！

私は八幡くんの方に近づいて八幡くんの左腕に抱き着いた。

~~~~~っ  
!!!!!!

シルヴィア「えへへ♪やっぱりこうしていると落ち着くし、凄く幸福な気分になれるよ。」

八幡「おいおい、今はライブ中だからな？」

シルヴィア「分かっているよ。ちよつとだけ……ね？」

八幡「……分かったよ、本当にちよつとだけだぞ。」

シルヴィア「うん！八幡くん大好きっ♪」

陽乃「シルヴィアちゃん、ああもアツサリと八幡くん大好き宣言をしちゃったよ。」

めぐり「シルヴィアさん、もうスツカリ比企谷くんと彼氏彼女をしていますよね。」

陽乃（めぐり、あれを彼氏彼女で片付けたらダメだよ。あれはもう夫婦だよ。）

シルヴィア「うん、もういいよ。ありがとう八幡くん！八幡くん成



分を補給できました！」

八幡「なんだそりゃ？」

シルヴィア「八幡くんが主な成分で近くにいるか、触らないと補給できない成分なの！私にとっては必要不可欠なんだよ！」

八幡「それ、遠征ライブの時どうしてたんだよ？」

シルヴィア「ずっと枯渴状態だったから100%の力が出せなくて……」

八幡「おい、頼むから細かい数字とか言うなよ？もし言ったら、再度オファアが来て俺まで連れて行かれることになっちゃうかもしれない。」

シルヴィア「大丈夫だよっ！来たとしてもそこが六花か日本ではない限り行かないし！というよりも、その頃の私って確実に引退してるからオファアが来るのかも分からないけどね。」

うん、本当に分からない。来たとしても私自身は受けるつもりなんてないけどね。

シルヴィア「さて、それじゃあ本日最後の曲となりました!!この曲が終了すると共に私は引退を宣言します。皆、心の準備はいいかな?!!」

~~~~~  
!!!!!!

シルヴィア「ありがとお~!!それじゃあ本日最後の曲です!あの日あってから今日まで……この想いは決して変わりません。私は貴方を愛しています。

『恋心と愛』。」

曲の始まりはエアギターから始まった。そしてすぐに歌い出しだった。

シルヴィア「ポカポカな心の中 伝えたい♪♪♪」
シルヴィア「この気持ちは… これはきつと… a h h ♪♪♪」

歌い出しが終わってから曲のリズムが一気に上がり、ノリノリな曲へと変わっていた。

シルヴィア「隣にいと胸が高鳴っていくの 顔も真っ赤になっちゃう ボシユ♪♪♪」

「え……………なにあの仕草？メツチャ可愛いんですけど。」
「頬に手を当てて赤くしながら『ボシユ』って…………ヤバイ、可愛過ぎる。」

シルヴィア「ねえもつと君が知りたいんです だから色々教えて？
♪♪♪」
シルヴィア「私、漸く気づいたよ これは…この気持ちは これが恋だ♪♪♪」

シルヴィア「目が覚めてあなたが好き 雨が降っていてもあなたが好き♪♪♪♪♪」

シルヴィア「遠くにいてもあなたが好き　もしも不細工になつてもあなたが好き♪♪♪♪」

シルヴィア「You really make me happy
, I need you. You really make me happy , I love you.♪♪♪♪」

「ねえ、私もう胸焼けしそう……シルヴィアちゃんのこの曲愛情たっぷり過ぎるよ。」

「正直に言うとも私も。何この曲？完璧に比企谷様の為に作った曲よ。」
「で、でも聞き届けなくては！比企谷様への愛がたくさん詰まった歌なのだから!!」

シルヴィア「普通じゃ嫌だ恋人がいいの　私はあなたがいいの♪♪」

シルヴィア「そう！だから貴方は私だけを見て　私以外は見ないで！♪♪♪」

シルヴィア「こんな気持ち初めてなの　だから伝えたい　これは恋だ♪♪♪」

シルヴィア「捻くれたあなたが好き　優しくて気の利くあなたが好き♪♪♪♪」

シルヴィア「夢の中であなたが好き　離れ離れになつてもあなたが好き♪♪♪♪」

シルヴィア「You really make me happy , I need you. You really make me happy , I love you.♪♪♪♪」

シルヴィア「ずっとこれから　大好きだよ　初めての恋だよ♪♪」

「甘い……甘過ぎるよ……この曲は何だ？」

「甘過ぎ、る……愛が純粹だからこそ余計に甘く感じてしまうっ!!」

「やめて!!溶けちゃう!!^{よこしま}邪な心持った私溶けちゃうから!!」

シルヴィア「ずっと溜め込んでたこの気持ち 今日伝えるから
ちゃんと聞いて♪♪♪」

シルヴィア「世界一あなたが好き 例え名前が変わってもあなたが
好き 答えは? (YES!) ♪♪♪」

シルヴィア「手を繋いであなたが好き 抱き締め合ってあなたが好
き♪♪♪♪」

シルヴィア「キスをしてあなたが好き ずっとこれからも変わらず
あなたが好き♪♪♪♪」

シルヴィア「You really make me
, I need you. You really make
me happy, I love you. ♪♪♪♪」

シルヴィア「何回でも言うよ

I love you ♡♪♪」

シルヴィアの愛の言葉とギター音で曲は終了した。
観客からの歓声は上がって来なかった。

シルヴィア「聞いてくれてありがとう。今私が歌った『恋心と愛』は

八幡くんのためだけに作った私の最後の曲です。彼に私の全身全霊の愛を込めて歌いました。」

そして私は八幡くんの方へと向いた。

シルヴィア「私はずっとあなたを愛し続けます。歌詞にもありましたが、何回でも言います。あなたを愛しています。」

八幡「……………」

そしてまた観客側へと顔を向けた。

シルヴィア「以上を持ちまして、この度のシルヴィア・リユーネハイムの引退ライブを終了します。皆、本当に……本当に今まで、ありがとうございました!!」ナミダメ

~~~~~っ

!!!!!!!!!!!!

私が聞いた今までのライブの歓声の中で一番大きく聞こえた。それだけ私も凄く嬉しかった。こんなにも最高の締めくくりをすることが出来たんだから!!

## 握手会とお約束

シルヴィア side

んんんはあっ!! ああゝ終わったあ!! なんだか割とあっけなく終わっちゃったなあ。もう少し湿っぽくなると思ってたんだけど、そんな事はないんだね。ライブの終わり辺りは少しだけウルツときちやったけど、今は落ち着いてる。感情が表に出ちやつてたからかな？

さて、この後はライブ終了後恒例の握手会です！最後は70000人が相手だから覚悟しておかないとね。八幡くん、最後まで付き合ってもらおうからね？

っと、その前に…………

シルヴィア「水分補給と八幡くん成分を摂っておかないとね、これは大事だから！」

八幡「お前は控え室に入って早々に何を言ってるんだ？まあ成分はさつき聞いたから分かるけどよ。」

だって抱き着いた方が多く摂取出来るんだもん♪

シルヴィア「そうだ八幡くん、握手会頑張ろうね。前回は10000人だったけど、今回はその7倍の70000人だから。一緒に頑張ろっ！」

八幡「……いや、これ俺のライブじゃないから俺は控え室に「何惚けた事言ってるのさっ！八幡くんは横浜まで来てくれた70000人の想いを無下にするって言いたいのか!?万死に値するよっ!!握手会はライブの後の重大イベントなんだから私と一緒に共同作業するのっ!!」…………は、はい。」

八幡（シルヴィアさん……威圧感がパナいっす。）

シルヴィア「ほら、八幡くんも今のうちに水分補給とかしておきなよ。一応セッティングする場所にも飲み物は置いてあるけど、間髪入れずに来るって言ってたから飲めるのは今のうちかもよ。」

八幡「おおう……わ、分かった。」

――20分後――

スタッフ「それでは只今より、握手会を開始致します。前列の人を押さないようにお願い申し上げます。また、人数が大変多い為、複数でいらっしやっている方々は同時に入って頂いても構いません。」

さて、いよいよ始めるね！

八幡「あんまり力を入れないように握る、だったよな？」

シルヴィア「そつ。今回は特に多いから、力加減は間違えないようにね。」

とかいう私も70000人なんて初めてだから加減なんて分かりません。

スタッフ「それでは最初の方からお入り下さい。」

――早送り10倍速――

10000〜10001人目

「きゃあー!!本物だー!!」

「凄い!!テレビに映っていたのが目の前にいるよ!!凄い感激っ!!」

シルヴィア「はーい!本物のシルヴィア・リユーネハイムです!握手して下さい!!」

「よ、喜んでっ!!」

八幡「一応、本物の比企谷八幡です。」

「っ!!やっぱイケメンだ。」

「うん、星武祭では戦闘ばかりで顔ってあまり映らないからアレだったけど、うん、イケメンっ!!」

八幡「今までそういう風に言われたことがないので、むず痒いですね。どうです?俺とも握手してきます?今なら無料ですよ?」

「喜んでっ!!」

2人は純粋な私たちのファンみたいだね!

「あっ!よろしければ比企谷さんがシルヴィアさんを抱き寄せてはくれませんか!」

八幡「?こうか?」グイッ

すると八幡くんは私の肩を押さえて寄せた。私も少しそれっぽい雰囲気を出すために八幡くんを抱き締めるような形をとってみた。

「お、おおおお………」

「これ、絵じゃないよね?」

「ありがとうございました!!」90度お辞儀



「失礼致しましたっ!!」ビュー!!

2人はとんでもない速さで出て行ってしまった。

――早送り10倍そry――

20000人目

「わぁ〜本物のシルヴィアお姉ちゃんだ〜!こんにちは〜!!」

シルヴィア「はい、こんにちは!元気に挨拶が出来て偉いね。」

「すみません。娘がファンでして……」

シルヴィア「いえいえ、とんでもないです。」

「あっ!!こっちは八幡お兄ちゃんだ〜!!」

八幡「こんにちは。元気があって大変よろしい。100点満点花丸だ。」

「やったー!!」

「あの、不躰なお願いなのですが、サインとか頂けないでしょうか?」

シルヴィア「良いですよ。娘さんの為ですよね?」

「は、はい!ありがとうございます!」

スラスラ〜ツ

シルヴィア「はい、どうぞっ!」

「わぁ〜!ありがとう!お姉ちゃん!!」

シルヴィア「どういたしまして。」

「じゃあそろそろ順番だからね、いくよ。」

「うん!お姉ちゃん、お兄ちゃん、バイバーイ!!」

とても元気の良い子だね!

――早送り50倍速――

6999770000人目

スタッフ「ラストの3人入りまーす!!」

八幡「いやなんでだよ!？」

目の前には八幡くんの両親とオーフェリアさんがいた。うん、本当になんて？

比企谷母「実は私の隣がこの子だったのよ。ライブが始まる前、トラブルがあつたでしょ？その時に会場に行つてアンタの名前を出すものだからどんな関係か気になつて聞いたら……アンタ、愛人つてどういう事？」

八幡「……………オーフェリア、お前俺の両親に何を吹き込んだ？」

オーフェリア「……………」プイッ

八幡「そうかそうかよく分かった。オーフェリア、六花に帰つたらあのカフェで執事フルコースな。」

オーフェリア「……………シルヴィア、助けて。」

八シルヴィア「八幡くん、思い切りやってあげて！」

オーフェリア「…………シルヴィアの薄情者。」

オーフェリアさんが間違ったことを言うからですっ！

八幡「一応事実を言うのだ、そいつはオーフェリア・ランドルーフェン。レヴォルフ黒学院の序列1位だ。俺との関係は……ちよつと複雑でな。だが決して愛人ではない。」

比企谷母「そ、そう……」

比企谷父「だが八幡、お前本当に強かったんだな。」

八幡「一応はな。あれくらいは造作もない。」

シルヴィア「一応じゃないでしょ！六花で1番強い人が何を言ってるのさ！」

オーフェリア「……………そうね。八幡は自分が何を言っているのか分かってないわ。八幡は六花で1番強い。2番目がシルヴィア、3番目に……私かしら？」

八幡「それで合ってるんじゃないか？」

オーフェリア「……………だから私は八幡の第2ふ「オーフェリアさん？」……………何でもないわ。」

この子、解放されてから凄く茶目っ気が出てきてるんだけど…………しかも八幡くん関連で。

比企谷母「今回はどうするの？ウチに来るの？」

八幡「そのつもりだ。」

オーフェリア「お供するわ。」キラキラ

オーフェリアさん……………目が輝いてる。あのお花やさんの時みたいに輝いてる。

八幡「…………変なことするなよ？」

オーフェリア「……………」コクコクツ

八幡「取り敢えずは明日あたりにも横浜を観光して、終わったら向かうことにする。」

比企谷母「分かったわ、じゃあ明日待ってるわ。」

比企谷父「待ってるからな。」

うん、ようやく終わったね…………

オーフエリア「…………この後どうするの?」

八幡「お前はホテルに帰りなさい。」

シルヴィア「あはは……………」

ニユースになるの早くね？

八幡 side

スタジアムの片付けや機材の回収、スタジアム内のゴミ集め、その他色々な片付けが終わって、今はホテルへと帰還しているとところだ。あれだけ広い会場を片付けるもんだからかなりの時間が掛かった。それでも、達成感のあるライブに出来たから終始最高のライブになったと思う。葉山のアレがなければな。

けど、これでシルヴィのアイドルとしての人生が終わるのか……少し勿体無い気もする。こういうと変に思われるかもしれないが、まだ24だ。俺もただけどき。若いから続けてもいいとは思ってる。まあこれはシルヴィが決めた事だから俺が突っ込んでいい話ではない。そのシルヴィはというと……

シルヴィア「すう……すう……」

ライブで疲れたのか、寝ております。しかもお約束の俺の腕に抱き着いて肩に頭を乗せながらである。そしてこれ、面白いのが俺が少し窓側に寄ったらシルヴィもすかさずついてくるんだよ。くっついていたいんだろうね。寒いわけじゃあるまいし。だって乗った時はあったかかったぞ、今もだけど。

ペトラ「……不思議ね。」

八幡「？何がです？」

ペトラ「7年前まではそんなこと出来なかったでしょう？それこそ、手を繋ぐのにも顔を真っ赤にするくらいだったのが、今では身体をくっつけ合わないと眠れないレベルにまでなってる。昔とは本当に大違いね。」

八幡「俺たちの関係を最初から知っているのはペトラさんくらいで

すからね。俺も昔と今は違うとは思ってますが、そんなに違いますから？」

ペトラ「違うわよ。手を繋ぐのだって、今では普通に繋いでいるけど、昔のシルヴィアは純情超乙女な子だったから恥ずかしがって顔を赤くしているはずよ。」

八幡「……………確かに昔は可愛いとかあーんをただけで顔を赤くしてましたね。腕に抱き着いたりとか抱き締めたりした時なんて真っ赤ですよ。まあ俺もなんですけど。」

いやあ……………あの時は若かったねえ。何をするにしても初めてなもんだから余計に意識してたんだよね。

ペトラ「見ているこっちが胸焼けしそうな感じだったわ。本当にいつになったら付き合うの？とか常日頃思っていたわ。」

八幡「常日頃って…………」

ペトラ「八幡くん、この子をお願いね。シルヴィアの事なら、私も貴方の方がよく知っているはずだから。私が彼女を見てあげられるのは学園の生徒まで。卒業したらもう見てあげられないわ。でも、この子もそこまで子供じゃないから分かっていると思うから、今度は貴方がこの子を見ていてあげて。」

八幡「勿論ですよ。任せておいてください。」

ペトラ「頼もしいわね……………そう言っている間にもう着くわね。シルヴィアは起こすの？」

八幡「いえ、このまま連れて行きます。」

ペトラ「そう、お願いね。」

これからは俺が、か……………一緒にいて生活をすればなんとなく分かるものだ。もう同棲みたいなのは6年くらい続いているわけだからな。なんとかしてみますよ、ペトラさん。

——ホテル・部屋——

よし、シルヴィも部屋のベッドに寝かせたし、少しのんびり出来るな。と言ってもシルヴィが俺の羽織の裾を掴んで離さないから自由行動は出来ないけどな。まあそれでもニュースを見るくらいは出来る。

八幡「さて、ニュースは……早速ライブか。しかも葉山、お前良かったじゃねえか。一面トップを飾ってるぞ。内容はアレだがな。」

シルヴィア・リユーネハイムの引退ライブで偽造と暴挙!!

2月〇〇日、横浜日産スタジアムでシルヴィア・リユーネハイムの引退ライブが行われていました。ライブが始まる前までは順調に進んでいましたが、会場スタッフの対策により、およそ30名が偽造チケットを作成し使用していた為、偽造有価証券行使等罪で逮捕しました。

そしてこの中に、元ガラードワース学園の葉山隼人氏(22歳)がいたことも判明。その後警察官1人を投げ飛ばし、ライブの進行を遅らせるなどの行為をしていました。

警察の調べによりますと、およそ30名は懲役3〜5年、葉山氏は偽造有価証券行使等罪に加え、暴行罪、公務執行妨害、非星脈世代への暴行などからして『最低でも20年は確実だ。』と述べていますが、シルヴィア・リユーネハイムさんから受け取ったボイスレコーダーからは比企谷八幡氏が『決闘で負けたら終身刑。』と主張したのを認めていたので、警察はこれを基にして捜査を進めていくとの方針です。

……これで終身刑にならなくても20年は刑務所の中だから許してやるか。にしても他の奴らも偽造有価証券行使等罪で懲役3〜5年とはな。1つの間違いで刑務所行きとは……………

でもまあ、それはそいつらの自業自得だ。罪は受け入れてもらわなくちやな。



## お疲れ様でした会

シルヴィア side

私が起きた時には既にホテルの中に居た。八幡君が言うには3時間くらい寝ていたみたい。『寝坊助さん』ってからかわれちゃった……あはは。

起きたタイミングも良かったのか、後1時間後に夕食の時間になっていた。今日の夕食もバイキング形式だから好きなだけ食べられるね。当然私が座る席には八幡くんがいるけどね。その後の予定は特にないからペトラさん次第だね。

でも次の日からは自由にしてもいいってペトラさんが言ってたから、横浜を観光してから比企谷家に行く予定です。まだちゃんとした挨拶もしてないしね。け、結婚のご報告とか／／／／

八幡「……？シルヴィ、どうしたんだ？なんかニヤけてる上に顔が赤いぞ？」

シルヴィア「うえ!?う、ううん大丈夫!何でもないよ!大丈夫だから!」

八幡「……ならいいんだが、その顔俺やペトラさん以外の前ではするなよ?多分だが、人前では見せちゃいけないような顔になってたと思うから。」

シルヴィア「そ、そんなに酷かった?」

八幡「あゝ……………ちよつと。」

シルヴィア「ちよつと!?それよりも今の間は何!?なんか次の言葉が出てくるまでの時間が長かった気がするんだけど!」

八幡「気にするな、忘れてくれ。」

シルヴィア「忘れられないからね!八幡くんが喋らないと、人前でキスするんだから!!」

八幡「…………一応聞くが、出来るの?」

.....

.....

.....

シルヴィア「ごめんなさい、恥ずかしいです／＼／＼／」

八幡「うん、それならやめよう。因みにだが、今のニヤケ顔はこんな感じだ。」

※徒然チルドレン1話の皆川さんがニヤけた時の顔

シルヴィア「こ、こんな顔してたんだ……………」

八幡「ああ、気を付けろよ？まだ部屋の中だから良かったものを。」

シルヴィア「気をつけます、先生！」

八幡「誰が先生だ。」

――1時間後――

ペトラ「皆、今日まで本当にご苦労様。今日でシルヴィアは引退するから、チーム・シルヴィアも解散になるけど、いつかはまた、この場所にいるスタッフ全員が集まって飲みにも行きましょう。それじゃあチーム・シルヴィア、お疲れ様でした、乾杯っ！」  
スタッフ一同「「「乾杯っっ!!」」」

1時間経って今は夕食タイム。バイキングする場所でこんなに騒いじゃダメでしょって思うかもしれないけど、今日はこのバイキングレストランを貸し切りしております。だからいくら騒いでもOK!!散らかしたりするのはダメだけだね。

もう皆凄いよ……食べ物を大量に盛り付ける人、コップじゃなくてジョッキでお酒を飲む人、ジュースとジュースを混ぜてよく分からない飲み物を作っている人、皆凄く弾けちゃってるよ。大人の人にはやぐとこうなるんだね。

私たちも成人してるけど、あそこまではひどくない。だって私たちは……

シルヴィア「はい八幡くん、あーん♡」

八幡「あむっ………うん、美味しい。」

シルヴィア「やった！じゃあ次は八幡くんね！」

八幡「おう、何がいい？」

シルヴィア「じゃあね……」

今見てると分かると思うけど、2人で仲良く食べさせあいつことをしております。うん、やっぱり恋人はこうでなくちゃね！

ペトラ「相変わらずなのね、貴方たちは。」

シルヴィア「あつ、ペトラさん！」

ペトラ「相席してもいいかしら？」

八幡「俺は大丈夫ですよ、シルヴィはどうだ？」

シルヴィア「私も大丈夫！」

ペトラ「ありがとう……はあ、とうとうシルヴィアも引退なのね。シルヴィアが現役でいる頃に誰かが貴女のライバルになる子が現れてくれたらって思ってたのだけど、現れてこなかったわね。」

シルヴィア「どうしてそんな事を考えていたんですか？」

八幡「モチベーションを上げさせるためだろう。『こいつにだけは負けたくない。』とか『あの歌を超える歌を歌ってみせる。』とかそういう競争心を持たせたかったんじゃないか？」

ペトラ「八幡くんが今説明してくれたのが正解ね。流石に貴女のレベルが高過ぎたのね。良くてもウチのルサルカだもの。」

八幡「あのチームとシルヴィアを比べるのは少しアレですが、まあ他に世界的に有名な歌手とかバンドチームは聞きませんからね。」

シルヴィア「私はルサルカを充分にライバル視してたんだけどなく。」

八幡「そのライバル視してた奴らは、お前のスキャンダル狙いとか弱みとかを握ろうとしてた奴らだけだな。終いにはシルヴィに返り討ちに遭うバカもいるしな。」

シルヴィア「ああ……あのチームは基本的に頭の固い子が多いからね。マシなのはマフレナくらいかな。」

八幡「俺は正直に思う。あの子がリーダーで他の子と歌でもやったらウケるんじゃないか？」

ルサルカ解散の提案を持ち掛けないのっ！

ペトラ「……面白そうね。でも具体的にどんな子をチームにするの？数は？歌のテーマは？」

八幡「数は別に何人でも。多すぎるのはダメですけど、取り敢えずはルサルカと同じくらいがいいでしょう。タイプはマフレナと同じような感じの子ですね。後は清純な子ですかね。歌のテーマは………純情・純愛ものとかどうです？」

八幡くんが割と本気で考えていた!?

ペトラ「ふうん………なんだか興味あるわね。ちよつとやってみようかしら?」

ペトラさんもノリノリ!?

そんなこんなが有りながらで、私たちの夕食は続いていた。

眠気は強し

八幡 side

ああ美味かった。だが最後のケーキは少し食べ過ぎたかもな。帰ったら界龍で模擬戦がてら運動しないとな。星露……………いや、ここは可能性溢れる若者を育てておくべきか。あのチビと戦つても奴が楽しむ機会を与えちまうだけだからな。界龍の様子も気になるが、冬香がなんとかしてくれているだろう。

シルヴィア「ふう〜お腹いっぱい！」

八幡「俺、最後のケーキ食べ過ぎた。」

シルヴィア「あはは！八幡くん3つ食べてだもんね。甘いものは別腹って言うけど、別腹でもお腹にはきたみたいだね。」

八幡「ああ、少し休みたい。横にならないとな。」

シルヴィア「じゃあ八幡くん、ここに丁度いい枕があるから使ってみたら？」

そう言つてシルヴィの方を見たら、そこにはとても使い心地の良さそうな最高級で最高品質を誇る枕である【膝枕】が君臨していた。

八幡「使つてもいいのか？」

シルヴィア「勿論♪」

八幡「じゃあ遠慮なく使わせてもらうわ。」

そして俺は迷いなくベットに寝転がり、シルヴィの膝に頭を降ろした。

八幡「ああ……………やつぱ良いわ〜。」

シルヴィア「ふふっ？お客様、今なら耳搔きというサービスも付い

てきますが、耳搔きもされていけますか？」

八幡「ああー……いや、遠慮しておく。今は休みたいから後にしてくれ。」

シルヴィア「はぁーい。」

……にしても楽だなあ、この枕は。柔らかいし温かいし良い匂いがするしで最高だな。それに高さも俺が好む位置だ。うん、よく分かってるわ。

八幡「……シルヴィ、俺もう寝ちまいそうだわ。眠ったら枕やめてもいいからな。」

シルヴィ「うん、分かった。」

そして俺はそれから5分も経ってない内に眠ってしまった。

八幡 side

シルヴィア side

あつ、八幡くん寝ちやったみたい。本当にすぐ寝ちやったみたい。予想外の展開もあつたから少し疲れていたのかもね。ライブ前には色々と準備してくれていたから当然と言えば当然だね。

けどこうやって八幡くんの寝顔を見ると思う。普段は凄くカッコいいのに、どうして寝顔はこんなにも可愛らしいんだろう？別に何もしてないんだよ？何もしてないんだけど、なんか可愛いんだよね。

八坂『ほほほ、相も変わらずイチャイチャの毒素を周りに撒き散らしているようね。』

すると、目の前に半透明の状態（半透明って言っても出てくるときは半透明が普通なだけだね。）で八坂さんが出て来た。

シルヴィア『イチヤイチヤの毒素って何ですか、人聞きの悪い言い方ですね。』

八坂『そのままの意味よ。貴女たちは私たち守護霊から見てもこれでもかっていうくらい甘々なのよ。貴女と坊やが寝てから坊やの中にいる霊たちとも話しているのだけど、やっぱり甘すぎるのよ。』

シルヴィア『それをどうにかしろって言いたいなの？』

八坂『そんな理不尽な事は言わないわよ。言っただとしても貴女たちの場合、すぐに忘れてすぐにイチヤつくでしょう？だからそんな不粹な事は言わないわ。』

シルヴィア『ならいいけど、何かあったら言っただけで出来る限りでは聞くから。』

八坂『その時はお願いするわ。じゃあ、坊やの顔を見ながらこの時間を楽しみなさいな。』

そして八坂さんはからかったような言い方でそう言いながら消えていった。言われずともそのつもりでありますっ！

……………って言いたいところだけど、

シルヴィア「ふぁーあ………なんだか八幡くんを見てたら私も眠く



なつてきちやつた。私も寝よつかな。」

眠気には勝てないのか、私は八幡くんの頭をどけて枕にすり替えてパジャマに着替えた。

着替え終わってから電気を消して八幡くんが眠るベッドへと向かつて八幡くんと向かい合いながら横になった。

シルヴィア「ふふっ♪お休み、八幡くん。」

私は八幡くんの唇に口付けをしてから眠りに就いた。

## よくわからない朝の光景

八幡 side

……ん？んん……おお？なんかいつの間にか寝ていたみたいだな。しかも目の前にはシルヴィが目の前で眠っている。しかもシルヴィの膝を借りて寝たら寝起きがマジで良くなるな。今は……6時か。じゃあ俺10時間くらいも寝たってことかよ。

……シルヴィには少し悪い事をしちまったな。俺が何時くらいに寝たかは分かんが、俺の都合で膝を使わせちまったからな。まあ今は俺の横でスヤスヤと眠っているからいいんだが。

八幡「……済まないな、シルヴィ。後ありがとな。お前の膝、やっぱり最高だわ。」

シルヴィア「それはどうもありがとう♪」

八幡「っ！……起きてたのか？」

シルヴィア「たった今だけだね。でも！最高なのは私の膝だけかな？」

八幡「前言撤回だ。シルヴィが最高だ。」

シルヴィア「そんな今言われているのだから取ってつけたように言われてもなあ。」

八幡「そうか……なら行動で示せと？」

シルヴィア「自信あるのかな？」

八幡「ありまくりだ。」

シルヴィア「じゃあお願い。」

全く、朝から我が儘な姫様だな。けど、姫様の機嫌を直さないとな。

俺はその場から少し動いてシルヴィを抱き締めた。抱き締めて10秒くらいしてから、シルヴィにキスをした。キスも10秒くらいで

やめて唇を離した。

シルヴィア「……うん、最高だよ。」

八幡「信じてくれるか？」

シルヴィア「勿論♪というよりも、最初から信じていたから大丈夫だよ。」

何だ、最初から上機嫌じゃねえか。

八幡「悪かったな、膝。」

シルヴィア「ううん、気にしてないから謝らなくてもいいよ。それに可愛い寝顔も見られたからね。私の膝を提供して八幡くんの寝顔を貰う、give & take だよっ！」

無意識の内に俺はシルヴィに寝顔を提供していたのか……まあシルヴィだから構わないけどな。

話は変わるが、今日は横浜めぐりの日になるな。横浜なんて10年前に小苑さんと生活して以来だから懐かしい。久しぶりにあの店にも行きたいな。小苑さんとも行つた『銭氏詠春』にも久々に行きたいな。

シルヴィア「八幡くん、今日は横浜の旅かな？」

八幡「流石はシルヴィだ。俺の考えている事とピッタリ一致している。俺も横浜で何するか考えていたところだ。」

シルヴィア「じゃあ！じゃあ！昨日八幡くんが言っていた『横浜中華街』と『赤レンガ倉庫』に行ってみたいな！私も興味あるし！」

八幡「そうだな、そうするか。俺も7年ぶりの横浜だから色んなところを回ってみたい。行く順番はどうする？」

シルヴィア「私はなるべく本場の中華の味を知りたいからお昼は中華街で食べたいかなあ。」

八幡「じゃあ最初は『赤レンガ倉庫』で気ままに店でも回って、しに言ったものがあればショッピング。昼近くになったら中華街に向かつて飯を食べる。その後は中華街を見て回る。っていうのはどうだ？」

シルヴィア「流石は八幡くんっ!!」

八幡「いや、もう少し考えてもいいんだぞ？」

むしろ君、俺に丸投げしてない？

――2時間後――

時間も経って、俺たちは朝のバイキングコーナーで朝食を摂っている。けど8時じゃあまだどこも開いてないよな。暫くは部屋で待っていることにするか。

シルヴィア「八幡くん、あ〜ん♡」

八幡「あむっ……………うん、美味い。」

シルヴィア「えへへ〜良かった♪」

「ねえ、あの2人。普段からあんなに仲が良いんだね。」

「羨ましいなあ……………私もあんな彼氏が欲しい。」

「比企谷さんみたいな彼氏？ ないない、あんな男が居たら周りがほつとかないって。」

「それもそうだよね……………」

……………まあ、聞こえてはいるが、聞こえていないふりをしなくてはな。嬉しくないわけではないが、俺にはシルヴィがいるからな。

「失礼、そちらのお嬢さん、少し宜しいかな？」

シルヴィア「？わ、私ですか？」

「おお、何とも可憐な声。そして美しくも整った顔立ち、アメジストのような輝いた紫色の瞳と髪！貴方は……美しい、そしてとても綺麗だ。」

シルヴィア「は、はあ………」

「どうでしょう？私とお付き合いして頂けないかな？もし交際して頂けるのであれば、将来は不自由のない生活ができることを約束しよう。」

こいつどっから出て来た？

シルヴィア「す、すみません。私もうお付き合いしている方がいます………」

「……それはもしや君の隣にいる冴えない男の事かな？だとしたら実に勿体無い！君のような人は僕のような貴族と付き合うべきなのだ！今回は偶々日本に来て正解だった。このような未来の妻に相応しい女性を見つけられたのだから！」

八幡「……あの、勝手に話を「君は黙っていてもらおうか、愚民。私は今、彼女と話しているんだ。」……お前こそ、俺たちが楽しく朝食をしているのを邪魔するとはどういう了見だ？」

「はあ？これは何とも無礼な奴だ。私のような上級貴族と話せるだけでも光栄だというのに。頭でも下げたらどうなんだい？」

八幡「お前なんかよりもフェアクロフさんの方が余程立派だよ。」

「な、何っ!!?き、貴様!!今フェアクロフと言ったか!？」

八幡「ああ、言ったが？」

「貴様はもしかや、フェアクロフ家と何か関係があるとしてもいうのか？」

……こいつは何深読みしてるんだ？俺はただの一般市民です。

八幡「二応は知り合いだ。別にそれほど親しいというわけでもない。」

「…………貴様、名を名乗れ。」

八幡「…………比企谷八幡だ。これでいいか?」

「なっ!!?ま、まさかあの『三冠制覇』を成し遂げた伝説の男!?!」

八幡「もういいか?俺は今シルヴィと朝食を摂っているんだ。あまり邪魔はしないで欲しい。」

「う、ううむ!そうだな。平民の声にも耳を傾けるのが貴族の務めというものだ。良い朝食をとるのだぞ。」

そう言つて貴族風の男は去つていった。まあ欧州の貴族なんだろうが、フェアクロフさんとなんか関係があるみたいだな。どうでもいいけど。

シルヴィア「貴族つて皆あんな感じなのかな?ちよつと威張りくさつててイヤな感じだね。」

八幡「いや、あの人が特別そうだってだけだろ。実際フェアクロフさんは威張りくさつてもいねえしな。」

シルヴィア「…………貴族つてよく分からないね。」

八幡「そうだな…………取り敢えず、続き食べるか。」

シルヴィア「うん、そうだね。」

## デート日和

シルヴィア side

んんゝいい天気っ♪まさにお出かけ日和だね！あつ、因みに今は10時！あれから部屋でのんびりしていたんだけど、部屋の中じゃ暇だから横浜の景色とかを楽しみながら散歩をしました。横浜の景色ってなんだか少しだけ六花と似てるんだね。高層ビルが立ち並んでいるところとか、海に面しているところとか（六花は面しているというよりも、1つの島みたいなものだけど。）中華街がある所は界龍つてところだね。関係はないと思うけど。

シルヴィア「都会の中なのに、海の近くになると意外と緑が多いんだね。うん、此処なら落ち着いて気を休められるね。」

八幡「良いところだな。ベンチに座ったら前は海、後ろは緑、音は海のさざ波、天気は晴れ、これでもう少し暖かければ最高の散歩日和になってたな。」

シルヴィア「それは未来の旅行のためにとっておこうか。今は観光旅行として横浜を満喫しようっ！」

八幡「ああ、そうだな。」

――赤レンガ倉庫――

シルヴィア「へえゝ意外と外見は凝ってるんだね。こんな風になってるんだ。」

八幡「六花にはないから少し新鮮だな。俺も画像でしか見たことがないから、実物がどんなのかは気になっていたが、結構大きい上に2つあるんだな。」

シルヴィア「そうだね。でも、2つあるって事は売ってある物とかのジャンルが分けられてるって事なのかな？」

八幡くんは昨日、雑貨とかがあるって言ってたけど、この中に雑貨店しかないとは思えないけど……………

八幡「まあ取り敢えず、中に入ってみないか？どんな物があるのか、興味あるからな。」

シルヴィア「そうだね。考えるよりも行動するだね！目の前にあるんだからね！」

——赤レンガ倉庫・店？内——

シルヴィア「わあゝ凄いね！中がキラキラして見えるよっ！なんか目移りしちゃうよ！」

中は色々なお店があった。そして色々な売り物があった。それこそさっき言った雑貨もあるけど、アクセサリーやバッグ、服や靴、それこそ部屋にも飾れる小さい小物なんかもたくさん売ってある。こんなお店がこの中にあるなんて誰も予想出来ないよ！

八幡「すごいな……中はこんな風になってるのか。」

シルヴィア「八幡くんっ！早速ショッピングだよ！これはもうたくさん見て回るしかないよ！」グイグイッ

八幡「お、おお分かった分かった。分かったから引つ張るな走るな、危ないから。」

八幡（相当楽しんでるな。こんな風にはしゃぐのは久しぶりに見る。いや、違うな。一昨日に見てたわ。あれははしゃぐというよりも喜びだったけど。）

※詳しくは『近くライブ』を参照。



♪♪本当に色々な物が売ってあるなあ。奥に進めば進むほど新しい商品が出てくる。今私がいるところはお土産屋さん！と他には食器とかの類を売ってある所にいます。

お洒落な食器も良いけど、木製の食器も良いんだよねえ。最近なんか使ってみたくって思ってるんだ。でも八幡くんとお揃いが良いし、自分のだけ買いたくないから八幡くんと相談だね。

お土産を買っても渡す相手が居ないからなあ。ルサルカに渡してもいいけど、それなら学園の皆全員に渡さなきゃって使命感が出てきちゃう……うん。皆、今回はお土産我慢して下さい！別にいつも買ってきてるわけじゃないけどね！

八幡「なんか気に入ったのはないのか？」

シルヴィア「ううん……良いなあっていうのはあるんだけど、お金を出してまでって考えるとそこまで欲しいと思わないかなあ。」

八幡「そうか。まあじっくり見ながら回ろうぜ。もしかしたら掘り出し物があるかもしれないしな。」

シルヴィア「しかもまだ1階だしね。全部で3階ある上にまだ1つ目だからまだ半分以上も回れるよ。まだまだ楽しめるね！」

でも、やっぱりどこにでもあるこの視線……ううん、普通にショッピングしに来てるだけなんだけど、やっぱり目立つちゃうんだよねえ。かといって変装はもうバレちゃってるしする意味ないからなあ。まあ別に隠す必要もないんだけどさ。

シルヴィア「ねえ八幡くん、八幡くんは欲しいものはないの？」

八幡「そうだな……今は特にないな。生活も日々の過ごし方も充実しているからな。特別欲しい物はない。シルヴィはあるのか？」

シルヴィア「私は……八幡くんと過ごす時間かな。」

八幡「今過ごしてるだろ。」

シルヴィア「分かってないなあ。八幡くんと2人きりで過ごす時間だよ。その方が幸せを感じられるもんっ♪」

八幡「何でそう嬉しい事を言ってくれるんですかね？俺の奥さんは。」ワシャワシャ

シルヴィア「キヤー！」（≡▽≡）

やめてー♪髪が乱れちゃう♪でも気持ち良いから続けて欲しい♪

シルヴィア「さ、流石は八幡くんだね！私の頭を撫で慣れてるだけあつてすごく気持ち良かったよ！」

八幡「そいつはどうも。千葉の実家に帰ったらまたしてやるよ。」  
シルヴィア「楽しみにしてますっ♪」

そして私たちはショッピングの続きを楽しみながら、デートを満喫しています現在進行形♪

## 横浜中華街

八幡 side

赤レンガ倉庫の買い物を終えて、俺たちは横浜中華街へと向かっている。因みにだが、俺は倉庫でステンドグラスを使ったライトを買った。ちなみにこれ、ガラスの部分が回るから景色の色が変わるのだ。ちよつとしたリラックス効果もあるらしい。これでシルヴィの膝枕で寝たら安眠は確実だ。いや、シルヴィが隣にいてだけでも効果は絶大だろうな。

にしても、中華街に行くまでは完全にザ・都会なんだな。全く中華が出てこない。本当に中華街があるのかと思えるくらいに、周りには高層ビルが立ち並んでいる。うん、本当にあるのかも怪しくなってきた。もしかしたら違う地域にあつたりして？

シルヴィア「中華街に着いたら何を食べよっかなあ。八幡くんは何が食べたいの？」

八幡「んゝそうだなあ……界龍にいる時は朝は学食って決めてるからほぼ毎日中華を食べてるからな。かといって朝からヘビーなのは食べてないからな？」

シルヴィア「八幡くんは食事にも気を使ってそうだからそれはないと思ってる。」

八幡「けどそうだな、今食べたいのは……回鍋肉だな。ガッツリでもないからな。シルヴィは決めてるのか？」

シルヴィア「私は麻婆豆腐にしようと思ってる。でもさ、中華街の麻婆豆腐ってどんな感じなのかな？やっぱ辛いのかな？」

八幡「かもな。俺はあまり麻婆豆腐食べないから分からないが、日本と中国で差が無いとも考えにくいからな。」

実際に界龍で学食で食べる時にあつたのは、麻婆豆腐（甘口）と麻

婆豆腐（辛口）っていうのがあった。俺は甘口だった。いや、本当に甘いわけではないからね？ 本当だよ？ でも、多分中国では辛いのが普通なんだろうな。

シルヴィア「あつ！ 八幡くんアレじゃない!？」

八幡「え？ おお……出てくるのは急過ぎない？」

目の前にあったのは門だった。しかもすげえ目立ってる。何？ あれ入口？ いや分かるけどさ、派手過ぎん？ 所々日光のおかげで輝いてるよ？

なんで初めてでもないのにそんなに驚いているのかって？ いや俺な、7年前は確かに2週間くらい此処にいたけど、端から端まで行ったことはなかったんだよ。六花に行く時だって抜け道を使ったから入り口がこんな派手な門だっていうのは知らなかったんだよ。

シルヴィア「街みたいなのを想像してたんだけど、もういきなり想像の斜め上を行ったよ。まさかお出迎えが門だなんて思いもしなかったよ。」

八幡「驚かされたな……こつから日本ではないですよ、的なオーラが伝わってくる。」

日本の商品もあるんだろうが、9割は中国だろう。けど今は昼飯を食べられる場所を探さないとな。まあ知ってるんだけどさ。

――横浜中華街――

八幡「中は大きくて変わらないな。」

シルヴィア「変わってないの？」

八幡「ああ。変わった所もあるが、そんな大々的には変わってない。あつ、今こつちに小苑さんいるかな？」

シルヴィア「ああ、そういえば此処で武術を習ってから六花に来た

んだもんね。居たら会いたいな。」

八幡「じゃあ飯食い終わったら小苑さんの住まいにでも寄るか。場所を知ってるから安心しろ。」

シルヴィア「うん！」

——飯屋《大喰》——

シルヴィア「意味は分かるんだけどさ、使ってる漢字がちよつと……」

八幡「ま、まあアレだ……味は大丈夫だろ。少なくとも不味くはないだろう。これで不味かったら問題だけどさ。」

そして俺たちは店の中へと入った。中は割とお客さんがいた。

ファンイングウアンリン  
「？ 迎光？ ～！ 2名様入られましたー！」

「？ 迎光？ ～!!」

「只今ご案内いたします、こちらへどうぞ！」

……元氣良いな。

「こちらのお席になります！ただ今お冷をお持ち致します！メニューはこちらになります！」

そして店員は素早く去って行った。でも、慌ててたのか？メニューとお冷を言う順番逆じゃね？

シルヴィア「うん、やっぱり界龍と似てるね。窓が無いから外からの明かりはないけど、それが雰囲気を出してるね。」

八幡「こんな感じだったなあ……こういう所は前のまんまだな。」

シルヴィア「注文決めていたけどどうしょつか？他にも何か頼む？」

八幡「皿の大きさが分からないからな。無闇に頼むのは自滅行為だろう。一皿くらいならいけるかもだけだよ。」

シルヴィア「じゃあ私、この……しよりゅうほう？」

八幡「小籠包ショウロンボウな。」

シルヴィア「そうそう！これ食べてみたい！」

八幡「分かった。じゃあ麻婆豆腐と回鍋肉は……うん、メニューの中にもあるな。それと小籠包の3つだな。」

シルヴィア「うん。」

八幡「んじゃ頼むか。すいません、注文お願いします。」

その後、俺たちは注文を済ませてから料理が来て食事を開始した。小籠包が来た時に目をキラキラさせていたシルヴィだが、食べ方を知らなかった為、そのままかぶりついてしまった。そのせいで口の中が熱々の汁でヤバイ状態になってしまったのは、ここだけの秘密である。

あつ、ちなみに料理はおいしくいただきました。

## 師の転職？

シルヴィア side

八幡「おい、大丈夫か？」

シルヴィア「ううゝまだ舌がヒリヒリするよおゝ。」

八幡「まあ初めて食べる料理なら、普通はそのまま食べるよな。まさか中の汁を出してから食べるなんて思いもしないだろうしな。」

シルヴィア「八幡くん説明してよおゝ。」

八幡「説明する前にシルヴィが食べちまうからだろうが。俺も心の中では『これも経験だな。』って思ったから。」

シルヴィア「達観しながらそんな事思わないでよゝ！」

ううゝ美味しかったけど、小籠包には酷い目に遭ったよ。まさか食べ方があったなんて……しかも結構難しいんだよ、小籠包の食べ方。小籠包を食べたいと思っている人、私のようにならないように気を付けてね！

まずはレンゲと箸を使います。レンゲですくって箸で少し穴を開けてから肉汁を吸う！

吸い終わったら、小籠包を食べる！

大雑把だけど、これが簡単なルールみたい。

八幡「安心しろ、俺も小苑さんに教えてもらうまでは知らなかったんだ。別に恥ずかしいことじゃない。」

シルヴィア「じゃあ八幡くんも舌火傷したの？」

八幡「……………いや、俺は経験ない。」

シルヴィア「むうゝ！」プクゝ

八幡「な、何だよ……別にシルヴィをからかいたかったわけじゃない

いからな？本当に言おうとしたんだよ。」

シルヴィア「……………まあ八幡くんが嘘を言う人じゃない事くらい私が1番よく知ってるから許してあげるけど。」

八幡「ありがとうございます。シェイシェイ謝謝。」

Thank you very much. カムサハムニダ」90度オジ

ギ

シルヴィア「どうして4ヶ国語の感謝の言葉を!?しかも韓国語はどこから出てきたの!？」

本当にどこから!？」

—————

まあ八幡くんと私のショートコントはこれくらいにして、この街を満喫しないとね。それにしても色んなお店があるんだなあ。店舗もあれば出店もある。屋台みたいなものもあるね。

シルヴィア「本当に色んなお店があるんだね。八幡くんは何処かオススメなお店とかはないの？」

八幡「俺もそんなにこの街を行き来したわけじゃないからな。オススメと聞かれると答えに困るな。この町との思い出は半分以上が修行だったからな。」

シルヴィア「あつ、そういえばそうだった……………忘れてたよ。ゴメンね？」

八幡「いや、気にするな。それよりもオススメかあ。」



小苑「ならば儂の構えている店、なんてどうじゃ？」  
2人「「え？」」

後ろを振り返ると八幡くんの師匠、小苑さんが紙袋を持って立っていた。

2人「小苑さんっ！」

小苑「久しいのう。」

シルヴィア「小苑さんっ!!」ダキッ!

小苑「おおつ。これこれ、買い物をした荷が落ちてしまうではないか。」

シルヴィア「えへへっごめんなさ〜い!」

小苑「全く、しょうがない娘<sub>子</sub>じゃのう。」

ああ〜小苑さん良い匂い〜♪

小苑「八幡も息災じゃったか？」

八幡「はい、ご無沙汰しております。」

小苑「行き先に困っておるようじゃったが、儂の店に来んか?そこならゆつくり話も出来よう。」

シルヴィア「はい、行きます!」

八幡「シルヴィは即答か。じゃあお言葉に甘えて。」

小苑「うむ、ならばついて来るがよい。」

――鉄工店――

八幡「なんか前と変わってません？」

小苑「前は茶屋じやったが、今は鉄を細工する店にしておる。1人じゃとどうにも暇になってしまつてのう。興味を持った事に転職するというスタイルにしておるのじゃ。」

……それって職業変え放題ですね。

小苑「立ち話もアレじゃから中に入ろうぞ。」

私たちは小苑さんに言われるがままに中へと入った。中には銀色が沢山あった。まあ鉄だからね。銀以外の色もあるけど、そんなに多くはない。

八幡「鉄を細工するって言つてましたけど、具体的にはどんな物に細工してるんですか？」

小苑「簡単に言えば小物じやな。アクセサリーや部屋に飾るオブジェのような物を基本的な題材にしておる。店の上に飾っておる看板などは作らんようにしておる。」

シルヴィア「何故です？」

小苑「手入れが難しいからじゃ。儂は几帳面でのう。出来るだけ綺麗な状態に残しておく主義なのじゃ。じゃが看板は外の天気次第で変わってくるからのう。手入れのしようがない。だからかのう。」

割とアッサリした理由なんだ。でもなんか説得力のある理由だなあ。

小苑「言い忘れたが、鉄臭い所じゃ。すまんのう。」

八幡「いえ、そんなに気になりませんよ。」

シルヴィア「八幡くんの言う通りです！」

小苑「そうか。」

八幡「にしても鉄細工か……例えばですが、ブレスレットに模様を入れたりとかですか？」

小苑「まあそれもやるのう。儂はあまりやらんがのう。熱いうちに模様を作るか、模様が入っている判を金槌で押して作るかのどちらかじゃからのう。凝った物よりも簡単に手早く出来るものにしておる。」

小苑「おお、ちょうど良い例があそこにあるのう。」

小苑さんが指差した先には、なんかベルのような鐘のような形をしている物だった。

小苑「アレを戸の上に吊るすだけで良い音が生まれる。サビ避けも塗つてあるから簡単には錆びぬようにしてあるから長く使える。」

シルヴィア「へえ、オシャレで可愛いです！なんかシンプルなデザインなのに、そこが良いというか……」

小苑「ほほほつ、流石は我が義娘じゃ。普通という良さに気付くとはのう。」

それからも色々な鉄細工作品を見せてもらった。そしたらいつの間にか外は暗くなつていてお暇することにした。お土産として銀の鐘2つ貰っちゃいました！

襲来？

八幡 side

何時間小苑さんの店にいたんだろうな。入った時はまだ晴れてた空が出る時にはもう陽が落ちてた。時間なんてそんなに気にしてなかったからそのまま過ごしていたが、恐らくは3時間は軽く超えているだろう。

まあそれも当然かもしれない。小苑さんの話にはいつも惹かれてしまう。あの人は俺の知らない事をばかりを教えてくれるからだ。今回に至ってもそうだ。あの人がよく職を変えろというのも初めて知ったし、鉄細工をしているのも初めて知った。だがその金はどこから来ているのかは分からないままだが。

にしても、この鈴は良い音だ。金剛鈴というものらしい。音は普通の鈴と比べて低いんだが、そこに気品さがあるような音だ。2つもあるから六花の家に帰ったら玄関の扉にでもぶら下げるか。シルヴィも気に入ったみたいだからな。

八幡「にしても去年ぶりかあ……意外とすぐに来ちまうもんなんだな。」

シルヴィア「ほんの1年前の事なんだよね。カマクラくん元気にしてるかなあ。」

八幡「まあ行ってみれば分かるだろう。デブってなけりや良いが。母ちゃんも親父もライブには見に来てくれていただろうから元気なのは分かったし、この時間ならもう家にいるだろうしな。」

シルヴィア「そうだね！じゃあ行こっか！」

——電車・車内——

ヒソヒソ……ヒソヒソ……

八幡「移動手段が電車くらいしかないからな。タクシーなんて使ったらバカ高いから使えたもんじゃない。まあそれも千葉までの辛抱だけだな。」

シルヴィア「やっぱりあまり変わらないよね。六花の電車と。」

八幡「違うといったら地上を走ってるか、空を走ってるかの違いだな。」

シルヴィア「ふふっ♪もしくは、地上に張り付けられながら走っているか、空から吊るされて走っているか、だね！」

………急に電車が不憫に思えてきた。言葉の力って恐ろしいね。

シルヴィア「倉庫でも中華街でもお買い物はあまりしなかったね。見て回るので楽しんじゃったせいかな？充分楽しかったから良いんだけどさ！」

八幡「俺ら、買い物といえば食材みたいなものだからな。インテリアの買い物なんてした事ないしな。今はまだやってないが、店の内装やインテリアも落ち着いた風にしてみただけであって俺たちが決めたわけじゃないからな。今度は俺たちでやってみるか。」

シルヴィア「うんっ！じゃあそうなたら小苑さんの鉄細工の作品をテーブルの上に置くとかはどうか？あつ、でも窓の位置に置くのも良いなあ……」

様々な可能性を考えて始めているシルヴィであった。俺も考えてはいるからな？

——千葉駅——

シルヴィア「んん〜！ああ〜着いた！乗り換えがあったから座りっぱなしではなかったけど、やっと目的地に着いたね！長く住んでいたわけでもないのに懐かしく感じるよ。」

八幡「大袈裟だつて言いたいが、今は俺も懐かしく感じる。この前きたのは10月だったから……ちよつとは気温とか似てるんだな。」  
シルヴィア「少し冷えるくらいだね。」

……ううゝ寒っ！急に冷えた風が吹いて来やがった。早く家に行くか！

八幡「シルヴィ、行くか。」

シルヴィア「はい♪」

――比企谷家――

八幡「漸く着いたな。1時間半くらいか？」

シルヴィア「そのくらいだね。やっぱりこっちは寒いね。六花があったかいつていうのが分かるよ。手袋は必須アイテムだねっ！」

八幡「ああ、六花では手袋してなくてもいられるからな。こっちは無理だな。なくちや手がかじかむ。んじや、早速入るか。」

さて、ただいまの一言でも言つてやるか。

ガチャッ

オーフェリア「……………?」

八幡「……………え?」

ん?あれ?俺幻覚でも見てるのか?目の前に私服姿で雑巾みたいなものを持ちながら棚を吹いているオーフェリアがいるんだが……あつ!これは幻覚ですね!オーフェリアが家にいるわけがない。教えてもいいねえし。

ガチャツ

シルヴィア「あれ?八幡くん入らないの?」

八幡「いや、ちよつと幻覚見たただけだ。すぐ入るから待っててくれ。」

よし、はいもう1度。

オーフェリア「……………お帰りなさい、八幡。」

ガチャッ

うっそおおおん!!?なんで居るの!?!え!?!何で!?!何で家の場所知つてんの!!?

シルヴィア「は、八幡くん?」

八幡「……………シルヴィ、落ち着いて聞いて欲しい。」

シルヴィア「な、何?散らかつてるとかなら別に気にしないから平気だよ?」

八幡「いや、もっと悪い……………オーフェリアがいる。」

シルヴィア「……………え?」

八幡「信じられないかもしれないから、今度は同時に行くぞ。」  
シルヴィア「う、うん。」

よし、三度目の正直だ。

ガチャッ



オーフェリア「…………お帰りなさい、八幡、シルヴィア。ご飯かしら？お風呂かしら？それとも…………私かしら？」

八幡「そんなお出迎えを三つ指をつきながら言うなっ!!お前何でここにいるんだよ!!？」

オーフェリア「…………挨拶？」コテツ

よし分かった。オーフェリアには六花に帰ったら執事の刑確実執行だ。

シルヴィア「でも、どうしてここに？」

オーフェリア「…………握手会の後に八幡の両親に『家に来ないか？』って誘われたのよ。勿論私は即決でOKしたわ。」

シルヴィア「そ、即決なんだ。」

オーフェリア「…………そして昨日は八幡のベッドで寝たわ。熟睡できたわ。過去最高の10時間よ。」

八幡「お前サラッと不法侵入した事言いやがったな…………まあいいや。お前も羨ましがるなよ？」

シルヴィア「そ、そんな事思っていないもん！」

オーフェリア「…………1日住んでみて凄く感じたわ。家庭というのはこんなにも温かいものなのね。八幡は良い両親に恵まれたのね。」

……………そういえばオーフェリアには俺の過去の家庭事情を話していなかったな。まあ今更だから話さないけど。

オーフェリア「…………外は寒かったでしょう？早く居間に行きましょう。お茶を出すわ。」

八幡「分かっているとは思うが一応言っておくぞ？此処はお前の家じゃないからな？」

シルヴィア「あはは……………」

## 家族の食卓

八幡 side

まったく、どうなつてんだよ。家に着いて母ちゃんと親父と少し話しても思つたら、まさかのオーフェリアがいやがるし。しかも両親はテーブルの上で呑気にお茶飲んでやがったし。客人に廊下の掃除なんてさせるなよ。しかも何が『良い娘<sup>子</sup>だなあゝ。』だよ。

まあそれは置いといてだ。一旦オーフェリアの掃除を止めさせて、俺とシルヴィとオーフェリアのお茶を用意して椅子に座りながら話をする事にした。

八幡「母ちゃん、何でオーフェリアを家に泊めたんだ？ああ勘違いするなよ？別にダメとかそんな意味じゃないからな？」

比企谷母「ライブ会場であんたが金髪の人とモメたでしょう？その時にオーフェリアちゃんがステージに出て行つてあんたとの関係を知り合ったら、愛人だつて「それは違うからな。」分かつてるわよ。知り合いなのは確実だから家に呼んで色々話を聞こうと思つたのよ。」

オーフェリア「……………非常に有意義な時間だったわ。」

八幡「そうかい。だがよ、俺のベッドを使わなくてもよかったと俺は思うんだが？」

比企谷母「この子がどうしてもそこで寝たいっていうから寝かせたのよ。別に断る理由もないし、あんたも凄く偶にしか来ないからいいかなあつて思つただけよ。」

八幡「いや、そんな軽いノリで人の部屋に上げないで欲しいんだが……………まあいいか。」

オーフェリアがここに来る事はもう無いと思うしな。

比企谷父「そういえば八幡。お前もう結婚は決めたのか？式とかの

準備とかも進めてるのか？最近はその手のニュースが多いから少し気になっていたんだ。」

八幡「それに関しては俺の師匠が進めてくれたおかげで準備万端だ。後は俺たちが卒業して頃合いが良くなったら開くって感じだな。式には呼ぶから安心してくれ。」

比企谷父「そこは別に心配してはいなかったんだが……まあそれならいい。」

比企谷母「開く日が決まったら呼ぶのよ。」

八幡「分かてるよ、そのくらいの事。自分の両親を式に呼ばないなんて罰当たりな事はしねえよ。」

呼ぶ奴なんてもう殆ど決めてるしな。

比企谷母「さて、もうこんな時間だし晩ご飯にしましょう。何がいかしら？」

八幡「ああ、俺が作る。久々に息子の料理の腕を見てくれよ。」

シルヴィア「八幡くんがやるなら私もやるよっ！それが未来の妻の役目だもん！」

オーフェリア「……私も手伝うわ。此処に停めさせてもらっているのだから謝礼はしたいわ。」

3人も入るのか……キッチン大丈夫か？

——キッチン——

八幡「さて、何を作ろうか………」

シルヴィア「ねえ八幡くん、ここは普通の日本料理にしない？ほら、日本人がよく食べてるメニニューの！」

八幡「シルヴィアが言いたいのは白飯にシャケ焼き、卵焼きにほうれん草のおひたしとかの事を言ってるのか？」

シルヴィア「うん♪」

何というか……普通だな。ん？……いや、普通がいいのか。そう  
だ。拘る必要なんてない。普通の料理を作ってただ普通の家族みた  
いに食べればいいんだ。

八幡「……そうだな、そうするか。オーフェアは和食って出来る  
か？」

オーフェア「……魚を見るくらいしか出来そうにないわね。」

要するに出来ないってわけだ。

八幡「じゃあオーフェアは焼き魚を頼む。シヤケは大体3〜4分  
くらいを目処に中火で焼いてくれ。後、焼く時は中央じゃなくて端で  
焼いた方が旨味が残るから。」

オーフェア「……分かったわ。」

シルヴィア「じゃあ八幡くん、卵焼きは任せて。八幡くんはお味噌  
汁とおひたしをお願い♪」

八幡「了解だ。」

さあて、やるか。

八幡 side out

比企谷母 side

比企谷母「……どう？良い光景だと思わない？」

比企谷父「ああ、そうだな。初めて見るが、八幡もシルヴィアさん  
も本当に楽しそうにやっている。」

私は去年と7年前にも見てるけど、やっぱり良いものね。2人（＋  
オーフェア）で料理をしている姿を見るのは。

シルヴィア「八幡くんお砂糖ちょうだいっ！」

八幡「あいよ……ほいシルヴィ。あつ、下にある引き出しから昆布だし取ってくれ。」

シルヴィア「はぁい♪」

オーフェリア「……シヤケ？は任せてちょうだい。」

八幡「おう、頼んだ。」

……本当に楽しそうね。あんな風に笑って料理している姿を見るのが、ちよつとした楽しみになっているわね。それにしても、ついに八幡も結婚だなんてね……いつの間にか歳を取っていたって事なのかしらね。

比企谷母「……八幡、不味いご飯だったら承知しないわよ？」

八幡「安心しろ、そんな風には絶対にならねえからよ。楽しみに待っててくれ。」

シルヴィア「お義母様、心配しなくても大丈夫です!!私が責任を持って八幡くんを監視しますので！」

八幡「監視もいいが、ちゃんと料理はしてくれよ？」

シルヴィア「分かってるよ♪」

オーフェリア「……私も監視してるから大丈夫よ、シルヴィア。」

八幡「魚の監視を頼むな？」

……本当に慕われているのね。シルヴィアちゃんは恋人だから当たり前だけど、オーフェリアちゃんと八幡の関係は本当になんなのかしら？昨日も此処で聞いたら『……私は八幡の物、所有物よ。』って言ってたけど、今の会話でもの扱いしている風には思えなかったし、本当になんのかしら？

――20分後――

八幡「取り敢えずは完成だな。」

シルヴィア「イエーイツ♪」

オーフェリア「……………」

比企谷母「本当に美味しそうだね。」

比企谷父「ああ、美味そうだ。」

シルヴィア「じゃあ八幡くん、お願いします。」

八幡「親父がやった方がよくないか？」

比企谷父「何言ってるんだよ。作った本人が言わねえでどうする？ほら！」

八幡「わーったよ。じゃ、いただきます。」

「いただきます。」

……………やっぱり良いものね、家族で食べる食事って。

## 家族の痴話

八幡 side

パァン！

5人「「「ご馳走様でした！」「」」」

比企谷母「本当に美味しかったわ。あんたも料理の腕また上げたわね。シルヴィアちゃんもオーフェリアちゃんも。」

シルヴィア「ありがとうございます！お義母様っ！」

オーフェリア「……………私は魚を見ていただけです。」

比企谷父「にしても、八幡もやるなあ。世界の歌姫と言われている人と交際しているだけでなく、実力もあつておまけに料理も出来る人となんてなあ……………人生何が起きるか分からんもんだなあ。」

八幡「何しめじめしてんだよ……………まあでもそうだよな。俺と付き合ってる彼女が世界の歌姫だなんて、過去の俺が聞いたら腐った目をもっと腐らせてただろうな。」

比企谷父「そういうえば八幡、お前職は見つけたのか？これから結婚して子も出来るんだから、金とかも必要になってくる。その辺は大丈夫なのか？」

八幡「ああ、自営業だから問題ない。まあ今の時点でも俺の口座にはゼロ七桁あるからそんなに心配はない。シルヴィのを入れたらもっとあるけどな。」

比企谷父「……………そういやそうだった。」

まあ、そうなるよな。ここだけの話、星武祭が終わってからは暇が続いたから、試しにメディアとかにも出てみた。そしたらオフアーがとんでもねえ事に。さらに星武祭の解説とかにも呼ばれたもんだから金が増える一方だったわけだ。それに今では寮に帰る事なんて殆

ど無くなっちゃったから食費泥棒もない。しかもペトラさんから貰ったライブのバイト代？も安くはなかった。ファッション系にも呼ばれたことあったっけなあ。

まあ纏めるとだ。

- ・取材（色んな所から。）
- ・星武祭の解説
- ・ライブのバイト代
- ・ファッション系（これも色んな所から。）

色んな所から呼ばれたもんだから一時期はかなり忙しかったな。おかげで金はかなり溜まった。

オーフェリア「……………私もお金の使い道には困っているわ。だから八幡たちの結婚式の費用にでも当てようかしら？」

シルヴィア「ちよつとやめてよ。そんなことに使わないのっ！大事な時のためにとっておきなよ。」

オーフェリア「……………そんな日が来るかしら？」

シルヴィア「来るって信じなきゃ！オーフェリアさんにもこの人しかいないっ！って人が見つかるよ！」

オーフェリア「……………もう見つけてるのだけど。」

シルヴィア「っ!!八幡くんはダメだからね！」

いやいや、俺な訳ないだろ。

オーフェリア「……………少しくらい良いじゃない。独り占めは良くないと思うわ。」

……………俺だったんだ。

比企谷母「モテモテね、八幡。」



八幡「俺は一途だからシルヴィしか愛さないって決めてるんだがな……」

ていうか、オーフェリアの感情って恋心かどうなのかも分からないんだけどな。

比企谷父「……話を戻すが、自営業って言ってたが、何をするんだ？」

八幡「飲食店経営だ。メニューとかも考えてあるし、店も準備は出てる。いつでも始められる状態って言いたいけど、食材はまだだからすぐには始められない。隠れた名店みたいな感じにしたいからビラとかは配らないつもりだ。な？」

シルヴィア「うん♪」

比企谷父「それって大丈夫なのか？」

八幡「俺とシルヴィ2人で決めたんだ。問題があったとしたらその時にまた相談して実行するまでだ。」

シルヴィア「いざとなったら自分のいた学園の生徒を巻き込んだりやばい話ですから！」

サラツとんでもない事言いやがった。まあ俺もそのつもりなんだけどさ。

比企谷母「あんた、それ以上聞くのはもう野暮だよ。2人が決める事なんだから、それ以上は口出さないであげなよ。」

比企谷父「……そうだな。うるさくし過ぎても迷惑なだけだな。すまない、心配し過ぎたみたいだ。八幡もシルヴィアさんももう大人だからな、自分たちの事は自分たちでやらないとだな。」

八幡「気にしてねえよ。親のありがたい忠告とアドバイスだって思えば納得出来る。」

シルヴィア「そうですよ！迷惑だなんて思っていないですよ！」

比企谷父「そうか、それなら少し安心だ。」

将来の話も良いが、今の話もふっかけてみるか。

八幡「そういえば記者とか報道関係の奴らとかってこの家に押し掛けて来たりとかはしなかったのか？ 苗字が珍しいとはいえ、今じゃあ世界中が知ってるようなもんだ。そのあたりは大丈夫だったのか？

比企谷母「ええ。別に大騒ぎしたっていうのはなかったわね。あんたが界龍に転校した時に書いた親の欄とか住所をこの家や私たちにしていなかったんじゃないかしら？」

八幡「その辺りは全部小苑さんに……ああ、俺の師匠な。その人をお願いしてたからな。詳しい事は俺もよく分からないんだ。まあ裏とかで手回しはしたんだろうけど。」

比企谷父「……まさか裏口入学か？」

八幡「そんな汚いやり方、小苑さんは絶対にしない。生徒会長と母体の人とかに掛け合っただろう。」

まあ1番はあのチビが大きいんだろうがな。何せ、『万有天羅』の自由は妨げはならないというジンクスがあるからな。

比企谷母「ふうん……でも入学出来たから良かったわね。さつ、もうそろそろお風呂が沸くから入って来なさい。」

俺はもう少し後にす「八幡くん、一緒に入ろ？」……いやいや、ダメでしょうに。

## 久しぶりの

シルヴィア side

むう……八幡くんと一緒にお風呂に入ろうと思ってたのに。八幡くんったらお風呂の前のドアに結界張っちゃうんだもん！あれはズルイよ！ああいう風に結界張られたら一緒になんて入れないよ！八幡くんの意地悪っ！

しょうがないから私はオーフェリアさんに入った。これにも理由がある。私のいないところでオーフェリアさんが八幡くんに変な事をさせない為である。一緒に入れば監視も出来るし、お風呂だから色々な事が聞ける。今言った通り色々な事を聞いたけど、オーフェリアさんは本当に八幡くんが好きみたい。likeかloveかのどちらかまでは分からないけど、好きなのは確かだね。

オーフェリアさんってやっぱりその辺を隠すのか上手いというか素なのか分からないんだよなあとねえ。隠そうとすると、必死になったりとかするものだけど、オーフェリアさんそんな仕草もしないから。でも行動はすぐ取るんだ。今は真ん中に八幡くん、その隣に私とオーフェリアさんんだけど、八幡くんが座っているソファの横にすぐに座りに行ったんだから。

比企谷母「それにしても、オーフェリアちゃんは本当に八幡に懐いてるのね。私たちはその経緯を知らないから余計に気になるわ。」

八幡「んー俺が言っているもんか分からないからな。それはオーフェリアに聞いてくれ。話すかどうかは別として。」

オーフェリア「……私は別に構わないわ。お義母さんは聞きたいんですか？」

……何だろう？今『お母さん』の意味が違うように聞こえたような気がしたような……

比企谷母「そうね……オーフェリアちゃんが構わないのなら聞きたいわ。」

オーフェリア「……………分かりました。なら話します。八幡との出会いは7年前の事でした。」

そこから、オーフェリアさんと八幡くんの出会いや出来事などのエピソードが話された。でも最初は本当に驚いたよ。まさかあの「孤毒の魔女」を叩いたなんて。八幡くんって怖いもの知らずだなあって思ったよ。

にしても私の知らないエピソードもあったよ？という事かな八幡くん？

オーフェリア「……………これが私と八幡の全部よ。最初は不思議な人とは思っていなかったけど、今では私の人生でいなくてはならない人にまで大切な人になっているわ。恩人というのも忘れていないけれど、今は大切、必要不可欠な人、というのが大きいわね。」

比企谷父「そんな事があつたんだな。いやあ過去の事とはいえバカ息子がすみません。女の柔肌を叩くなんて教育はした覚えはないんですが……………」

オーフェリア「……………いえ、気にしていません。それも含めて八幡との思い出は良いものばかりですから。」

オーフェリアさん……………なんて良い子なんだろう。

オーフェリア「だからシルヴィア、少しだけ八幡を借りることは出来ないかしら？」

前言撤回！オーフェリアさんいけない子だよ！

シルヴィア「ダメですー！」

オーフェリア「…………ケチ。」

比企谷母「ふふふっ、2人はまるで姉妹みたいね。そんなにお兄ちゃんが好きなのかしら?」

2人「姉妹…………」

八幡「やめろよ、ンなこと言うな。オーフェリアが妹みたいなのは否定しないが、シルヴィは俺の彼女だぞ?」

オーフェリア「これからは八幡お兄ちゃんと呼んだ方がいいのかしら?」

八幡「こら、お前も悪ノリするんじゃないの。」

オーフェリア「…………にいに?」

八幡「……………すげえ良いと思った俺をぶん殴りたい。」

シルヴィア「うん、今私もキュンと来ちゃった。」

八幡「いや、俺は妹分は欲しくても妹はいらん。」

オーフェリア「…………じゃあお兄さんかしら?」

八幡「君はもう『兄』から離れなさい。」

そんな他愛もない雑談やコント?みたいなのをしていたら、いつの間にか時計の短い針が10時を指していた。

八幡「さて、そろそろ寝るか。俺はソファで「八幡くんもベッドで寝るんだからね?」…………いや、それはシルヴィとオーフェリア2人で「ベッドで寝るんだからね?」…………はい。」

オーフェリア「…………大丈夫よ。あのベッドなら3人寝ても耐えられるわ。」

ちやつかり自分も一緒に寝るアピールをするんだ。まあ予想出来てるから別にいいんだけどさ。

——八幡の部屋——

オーフェリア「……………神聖な場所だわ。八幡の匂いで包まれているもの。」

八幡「お前は俺の何かがあれば神聖だと思えるのか？」

オーフェリア「……………特に八幡本人は神の領域に入っているわ。これを超えられるものはないもの。」

……………オーフェリアさんの中での八幡くんの評価ってとんでもなく高いみたい。

シルヴィア「でも3人で寝るの久しぶりだね。早速寝よっか。」

八幡「んじや寝ますか。言われるだろうから最初から言うておく。俺は真ん中な。」

シルヴィア「さすが八幡くん！」

オーフェリア「……………分かっているわ。」

そして私たちは八幡くんのベッドに入った。

シルヴィア「……………狭いね。」

八幡「3人で寝れても寝返りは出来ねえな。」

シルヴィア「寝返りなんてする必要ないよ？私<sup>ず</sup>っと八幡くんに抱

き着いてるもん。」

オーフェリア「……………私もよ。」

八幡「はいはい、予想通りの言葉ありがとうございます。」

シルヴィア「それに、抱き着くことによつて狭さも感じさせなくなるという効果も出るんだから！」

八幡「それ、俺には効果ないよね？」

こんな会話も交わしながら、私たち3人は1日に終わりを告げて眠りについた。

## 家族の朝

オーフェリア side

……やっぱり至高だわ、八幡のベッドで八幡に抱き着きながら眠るというのは。いえ、至高という言葉が物足りなく思えるくらいの価値があるわ。夜が過ぎて今は朝の5時半を回っているわ。早く起き過ぎてしまったけど、私にとっては好都合だわ。だって八幡と一緒に寝られるという時間を堪能出来るんだもの。

オーフェリア「……」クンクン

……良い匂いだわ。花の匂いの次に好きな匂い。だから昨日は10時間も眠ることが出来たんだわ。八幡の匂いを嗅ぐと、やっぱり安心感が溢れるのよね。でも八幡、昨日眠ってからずっとこの状態だったのかしら？姿勢が良いままだわ。少しくらい寝返りしてもいいんじゃないかしら？

※君たちが抱き着いて眠ったせいです。

……このままもうちょっと眠っていたいけど、そうしたらこの時間が勿体無いわ。だから頑張って起きている事にしましょう。

――1時間後――

八幡「……ん？おお朝か。」

オーフェリア「……おはよう八幡。」

八幡「おお、起きてたのかオーフェリア。おはよう。いつから起きてたんだ？」

オーフェリア「1時間前からずっとよ。」



八幡「1時間前？二度寝すりやよかったのに……なんで起きてたんだ？」

オーフェリア「……………八幡の匂いに包まれているのに加えて八幡に抱き着いているのよ？そんな尊い時間を眠るのに使えないわ。1日の睡眠は省いて。」

八幡「ああ、そうっすか……あつ、思ったんだが、お前リーゼルタニアには帰国してるのか？」

オーフェリア「……………してるわ。年に1〜2回は帰って孤児院で子供たちと遊んだりしてるもの。」

八幡「そうか……孤児院の人たちなんか言ってなかったか？大分前に帰ってると思うが、お前の身体とかについて。特に毒についてはな。」

オーフェリア「……………聞かれたわ。でも六花最強の男の人のおかげで治ったって報告してあるわ。その瞬間皆私を抱いて泣いていたわ。」

八幡（そりやそうだ。実験とはいえ星脈世代の魔女になったが、無尽蔵な星辰力のせいで自身の毒すら制御出来なかったんだ。その上、周りには被害が出るし、大好きな花も枯らしてしまうしで最悪だっただろう。そんな最悪な人生にやつと花が咲いたんだ。そりや泣くわな。）

八幡「その孤児院の人、余程お前が心配だったんだろうよ。良かったじゃねえか、【華焰の魔女】以外にもそんな風にしてくれる人がいてよ。」

オーフェリア「……………ええ、これも全て八幡のおかげだわ。本当にありがとう。私がこうやっていられるのも全て貴方のおかげだもの。」

事実、本当に私はそう思っているわ。だってあの7年前の噴水のある花畑で八幡に出会っていなかったら、私はきつと今でも運命は覆せ

ないものだと言っていたと思うわ。それが、そんな想いが出会って1週間くらいで覆されてしまったわ。これを感謝しないでいられる人なんてどこにもいないわよ。

八幡「……まあ、何ともないんらしいんだ。俺としても作った甲斐がある。学院でも普通に過ごせてるみたいで何よりだ。」

オーフェリア「ええ、何ともないわ。残り少ない学院生活だけど、残りも満喫するつもりよ。」

八幡「そうか。」

シルヴィア「んゝ……んん？もう朝あ？」

八幡「どうやら寝坊助が起きたみたいだ。」

オーフェリア「つ……ふふっ！そうみたいね。」

八幡、やめて頂戴。

シルヴィア「おはよう八幡くん、オーフェリアさん。まだお眠になつててもいい？」

オーフェリア「………なら八幡は私が独り占めするけど、いいかしら？」

シルヴィア「それはダメだから今起きるね。うん、パツチリ目が覚めたよ。」

………少しくらいは時間を分けてくれてもいいと思うのだけど。

………その後は洗面台に行つて着替えたり髪を整えたりしてたわ。因みに今日の私も絶好調よ。八幡に包まれて眠ったおかげね。

……居間……

八幡「俺の学院だったら朝稽古している奴がいる時間だな。俺なんて朝飯作ってるくらいの時間なのに……朝稽古なんて俺、1度もした

事ねえよ。」

オーフェリア「……………何か違うのかしら?」

八幡「向上心とかだろうな。後は半分眠ってる身体を起こすとか。」  
シルヴィア「単純だけど、効果はありそうだね。」

……………私は体術はそんなに嗜まないから分らないけど、今ならナイフを使うから少しなら出来るのかしら?でもレヴォルフにはそんな場所、模擬戦をするステージくらいしかないわね。

八幡「まあいいか。さて、母ちゃんと親父が起きてくる前に朝飯作るか。」

シルヴィア「今度は洋風のアレにしようよ!」

オーフェリア「……………焼いたトーストにベーコン、目玉焼きかスクランブルエッグ、牛乳かオレンジジュースにサラダ、と言ったところかしら?」

シルヴィア「流石オーフェリアさん、分かってる!」

八幡「んじゃあ今回は2人に任せるか。俺は一切手出ししないから。」

オーフェリア「……………サボる気?」

八幡「ん?愛妻が作る朝飯を待つだけなんだが、ダメか?なら手伝うが?」

シルヴィア「任せて八幡くん!!愛妻が作る愛がたくさん詰まった朝ごはんを作るから!!」

オーフェリア「私も張り切って作るわ。夫のために作る朝ご飯は素敵だと思っわ。任せて頂戴。」

八幡「お、おう……………任せた。」

その後、シルヴィアとオーフェリアは抜群なコンビネーションで調理を始めて出来上がった頃には比企谷両親も居間にいた。全員揃って朝食を摂ることができたのであった。

因みに2人の料理はとても美味だったとのこと。

## 千葉観光へ

八幡 side

飯を食べ終えた俺たちはのんびり過ごすことにしている。ついでに言うなら母ちゃんと親父も家に居る。有給取ったその次の日は元々休日だったみたいだ。俺たちは一応2月の後半くらいまではこっち側、もつと碎いて言えば日本にいられるが、オーフェアはそうもいかない。今日の船で六花に帰らなければならないからだ。だからオーフェアは朝食が終わった後、部屋に戻って荷物をまとめていた。

なんか1人だけを見送るのは少し気が引けてしまうが、俺もシルヴィも2人で昨日みたいに、別の地域でデートを楽しみたい。千葉ではそういうのした事なかったからな。

シルヴィア「ねえ八幡くん、ペトラさんからは2月中までって言われてるけど、八幡くんの中では、どのくらいこっちにいる予定なの？」  
八幡「あんまり遅く帰り過ぎても気が休まらないから、1週間前くらいには帰りたいと思ってる。まあそこはシルヴィと一緒に相談つてところにしてる。俺1人で決めることじゃないからな。」

比企谷母「居れるのなら出来るだけ長く居なさい。その方が旅も満喫できるでしょう？八幡もシルヴィアちゃんに千葉の色んなところを見せてあげなさいよ。あんたの部屋もいいけど、何度か入ってるんでしょ？」

八幡「それを言われると弱いな……けど千葉で観光向きな場所といえば、ららぽとか水族館くらいしかないぞ？穴場でいったら何ヶ所かは知ってるが……」

比企谷母「そこに連れて行ってあげたらいいじゃない。別に行って困るものはないんでしょ？」

八幡「いや、まあそれはそうだが……」

シルヴィア「私は八幡くんとならどこでも大丈夫だよ。見て回るだけでも楽しいしね。欲を言うなら、八幡くんがよく行っていた場所に行ってみたいかな。」

俺がよく行っていた場所……うん、サイゼくらいしかねえ。

八幡「1つあるが、それだけだな。こっちの思い出があまりないかな。観光名所なら知ってるが、俺がよく行く場所となると、本当に絞られるな。」

シルヴィア「うーん……あつ、そうだ。八幡くん、もし良かったらなんだけど、八幡くんが星脈世代になった場所に行ってみたいかな。」  
八幡「ああ、浦安の展望台か……俺は別に構わないが、そんなところでいいのか？」

正直何もないところだぞ？あるのは敷地面積と遊具くらいだ。後階段と芝生の坂。

シルヴィア「うん、大丈夫。行ってみたい。」

八幡「まあ行きたいのならないが……他には何かあるか？」

シルヴィア「うーん……今はこれくらいかな。」

八幡「そうか……なら、夜にバーにでも行くか。」

シルヴィア「八幡くんそんなお店知ってるの？」

八幡「ああ。総武高にいた時にちよつとな。」

シルヴィア「わゝ不良学生だゝ！」

八幡「彼氏をダメ扱いする彼女はここにいるようだな？」ワシヤワシヤ

シルヴィア「キャー！」(≡△≡)

比企谷母「ふふふっ」

比企谷父「ふっ」

ガチャッ

オーフェリア「…………シルヴィア、なんだかとても嬉しそうな叫び声が……したのだけど？」

いつの間にかオーフェリアが下に降りてきていて今に通じるドアを開けていた。そして居間に入るなり固まってしまった。何だ？何かあったか？

オーフェリア「…………」 テクテク

オーフェリアはまっすぐ俺とシルヴィの方へ向かってくると、シルヴィの頭に置いてあった俺の手を取って自身の頭の上に乗せた。え、何？ひよつとしなくても撫でて欲しい？

オーフェリアはキラキラした目を俺に向けられていた。そんな風に見つめられても困るんだが……

八幡「…………」 ナデナデ

シルヴィア「ん…………さつきと比べて優しい撫で方になったね。うん、これも良いよ。」

オーフェリア「……………至高ね。」

八幡「頭撫でたくらいで現金過ぎないか？これくらいならいつでもしてやるぞ。」

シルヴィア「うん♪じゃあ毎日お願い！」

オーフェリア「…………私も所望するわ。」

八幡「…………それはちよつと欲張り過ぎだよ？」

中間を知らない子達だねえ。

シルヴィア「まあそれは置いといて、そろそろ準備しよっか。オーフェリアさんの船は何時から？」

オーフェリア「…………15時からよ。それまでに船に乗っていれば

セーフね。」

シルヴィア「オーフェリアさんも一緒に行ってみる？八幡くんが星脈世代になった場所。」

オーフェリア「……………八幡は後天性の星脈世代なの？」

八幡「ああ。まあなんでなれたのかは分からないままなんだがな。」

オーフェリア「……………私と一緒にね。」

なんか嬉しそうだな。

八幡「んじやあ準備始めて整ったら行きますか。」

2人「はい♪（……………ええ。）」



## 始まりの場所

八幡 side

………思えばあの日に色んな負の感情が爆発したから星脈世代になれたんだよな。けど、なれるもんなのか？血縁にも血統にも星脈世代がいない人間が、ただ負の感情が溜まりに溜まった状態を一気に解放したら星脈世代になれるのは？現実的には不可能だと思うんだが………まあ俺はそんなもんに興味ないからいいけど。

今俺たち3人一行は、俺が星脈世代になった場所を目指している。総武高に近い場所にあるからあまり遠くはない。それに、広場みたいになってるから散歩している人や、ジョギングしている人もいる。冬でも芝生の上で寝転がっている人も偶にいるしな。今はわからんが。

シルヴィア「ねえ八幡くん、八幡くんの星脈世代になった場所って何かあるの？」

八幡「いや、特別何かあるわけではないな。そこに隕石が降ったなんて情報も無いしな。」

シルヴィア「それって千葉の端っこにあるの？」

八幡「端ではないが、海が見えるな。それに海の逆側は街が見える。夜になったら明かりがついてるから、低い摩天楼みたいな感じだ。」

シルヴィア「へえ。」

………そういえばあの時は秋の丁度いい季節だったのにも関わらず、周りには誰も人がいなかったな。少し暗くなっているとはいえ、あの場所にあの時間帯で人が0になるとは思えない。

オーフェリア「………どうしたの？」

八幡「ん？ああいや、何でもない。ただ、思い返してみると、あの時は人が誰も居なかったなあって。誰もいなくて良かった。そした

「俺は今頃、モルモットになってるかもしれないわ。」

シルヴィア「それは大袈裟なんじゃ……………」

八幡「いやいや、そうも言い切れないって。オーフェリアには劣るとはいえ、星辰力はある方だからな。」

オーフェリア「……………あつたかもしれないわね。アルルカントの《超人派》が欲しがりそうだわ。」

やめて……………そんな事言わないで。

——展望台——

八幡「……………此処だ。此処が俺が星脈世代になった場所だ。特に何も感じない、普通のところだろう?」

シルヴィア「うん、確かに何も感じない。万応素だけかとおもったけど、それだけじゃない。マナダイトやウルムⅡマナダイトの力も一切感じない。本当に普通の場所。」

オーフェリア「……………ええ、私にも感じないわ。」

八幡「だろうな。俺はこの場所で確かに星脈世代になった。それは小苑さんにも聞いている。おかしな話だ。万応素も何も無いような場所で星脈世代になったんだからな。」

そんな事例や前例なんてないからな。あつたら不思議には思われないだろうが、ないからこそ逆に怖い。

八幡「……………あの日から、7年前の10月から変わっちまったんだよな。俺の日常の全てが。」

シルヴィア「……………戻りたいの？」

八幡「まさか。例え戻れる道があつたとしても、俺は戻る気なんてサラサラねえよ。力に目覚めたのに何でわざわざ戻りたいって思えるんだよ。」

オーフェリア「……………私だつたらこの力は今すぐにも投げ出したいわ。」

八幡「……………悪い、そんなつもりで言つたわけじゃなかったが、オーフェリアにとっては自身の《魔女》としての能力は最悪だよな。」

オーフェリア「……………ええ。でも貴方がなんとかしてくれたから、今はもう平気よ。」

……………失念していたな。オーフェリアは好きでなりたかつたわけでもない星脈世代にさせられたんだよな。オーフェリアからしてみれば気分のいい話ではなかったな。

シルヴィア「それにしても此処って遊具とかもたくさんあるんだね。遊びはみたいな感じかな？」

八幡「広場みたいな感じだからな。子供たちもよく遊ん出たりするぞ。今はどうか分からないが、遊んでるんじゃないか。今は居ないけどよ。」

シルヴィア「ねえ、ちよつと遊んでいかない？私こういうところで遊んだことってあまりないんだ。」

オーフェリア「……………私もないわ。ずっと孤児院で育ってきたから。出来れば私も遊んでみたいわ。」

八幡「俺も構わないぞ。俺もこういうところで遊んだことはあまりし、少し興味もある。」

シルヴィア「じゃあ皆で遊んじゃおつか♪色んな遊具があるから色んな遊びができるよ!」

その後、俺たちはその場所にある遊具を使って遊びまくった。登ったり滑ったり走ったり飛んだりして。勿論遊具だけで遊んでいたわけではない。遊具を使わない遊びもたくさんした。

シルヴィア「はあ……はあ……ああく疲れたっ!はあ……でも、こんなに楽しい疲れ方は初めてかも。」

オーフェリア「……そうね。」

八幡「俺もだ。こんなに遊んだのは初めてだ。」

最近はずぶなんて事はしてなかったからな。そんな暇がないというか、忙しいからな。

シルヴィア「……こうやって芝生の上に寝転がるのも初めてかも。」  
八幡「俺は何度かあるが、その時の記憶がないから初めてみたいなものだな。」

オーフェリア「……私の生まれ育った場所はそんな所なかったから、ベッドの次に居心地が良い感じがするわ。」

八幡「ベッドの次に居心地の良い床か……なんか、説得力があるな。そんな気がするしな。」

シルヴィア「天然のベッドって奴かな?お布団はないけどね。」

もし寝たら風邪引くのは確実だな。2月だし。

オーフェリア「……あまり雰囲気を壊したくないのだけど、今何時かしら?」

八幡「……11時半だな。オーフェリアはそろそろ横浜に戻らな

いといけない時間か？」

オーフェリア「……………そんなにマズイ時間ではないけど、余裕は持っておいたほうがいいわよね。」

八幡「なら3人で飯を食べてから横浜に行ったらどうだ？3人で飯食う時間くらいならあるだろう。」

シルヴィア「あつ、そうだね！そうしようよ！」

オーフェリア「……………ええ、私もそうしたいわ。」

八幡「じゃあ場所は……………」

シルヴィア／オーフェリア「サイゼで！（……………サイゼよ。）」

八幡「な、なんだよ急に？」

シルヴィア「八幡くんがよく行ってたんでしょ？ならそこに行きたい！」

オーフェリア「……………私も行きたいわ。」

八幡「まあ2人がいいのなら俺は構わないが……………いいのか？」

2人「うん！（……………ええ。）」

……………決まりだな。

八幡「んじゃサイゼに行くか。」

シルヴィア「道案内をよろしくね♪あ・な・た♡」

オーフェリア「……………お願いするわ、旦那様。」

……………君たち本当に仲良いね？

## シルヴィアの過去と2人の境遇

### シルヴィア side

あの後、私たちは千葉駅近くのサイゼリヤに寄って昼食を食べて、少しだけ話をしながら時間を潰した。あつ、ちなみに頼んだメニューは、八幡くんがミラノ風ドリア、オーフエリアさんがシーフードパエリア、私がエビとイカのドリアだよ。皆で分け合ったりして美味しく頂きました。

お店を出た後はオーフエリアさんを駅まで送ってからショッピングをした。ららぽーとは千葉ライブ以来に行ったけど、やっぱり凄く広いね！六花の商業エリアにあるお店にも引けを取ってないと思う。でも品揃えや数は六花のお店の方があったかなあ。まあ世界中から注目されているから当たり前なんだけどね。

結構回ったから外は少しだけ暗い。明かりをつける程ではないけど、一歩手前みたいなの？そんな感じの暗さかな。もうちよつとしたら街灯の明かりもつくかな？

シルヴィア「ああ〜回ったね〜！

八幡「ああ、俺もららぽを全部回ったのは初めてだ。女性専門店以外ではな。」

シルヴィア「良い物も買えたし、私は満足だよ！何より楽しかったからね！」

八幡「そりや何よりだ。んじやそろそろ帰るか。他に行きたいところとかはあるか？」

シルヴィア「……ねえ八幡くん、もう1回だけ星脈世代になった場所に行っちゃダメかな？」

八幡「それは良いが、今の時間はまだ星も見えないぞ？」

シルヴィア「そんなんじゃないよ。ただ、なんかまた行きたくなくなっちゃってさ。」

八幡「……よく分かんが、俺は構わない。それじゃあ家帰る前に行くか。」

シルヴィア「うん。」

――20分後――

目的地に着いて、私と八幡くんは一息ついていた。此处に来てどうしようなんて考えていない。ただ来たかっただけ。本当にそれだけの理由。

八幡「……そういえば今くらいの時間だったな。俺がこの場所に来たのも。季節は違うが、今くらいの時間で今くらいの寒さだったと思う。」

シルヴィア「……そうなんだ。」

嫌な事を思い出させちゃったかな。私はこの場所、ちよつと気に入っちゃったかな。

シルヴィア「……この場所、なんか昔の頃を思い出しちゃってさ。だからかな、懐かしいって思えるのは。」

八幡「……」

シルヴィア「八幡くんには話したよね？私の故郷では私に対してよく思っていない人が多いって事。」

八幡「……ああ、聞いた。」

そう、当時の私の故郷では私に対していい感情を持っていた人なんて誰1人としていない。その理由は至極簡単、星脈世代だから。これだけ聞いても分からないと思うけど、非星脈世代の両親から生まれたのが星脈世代だったから。本来ならあり得ない事だった。両親には含まれていないはずの因子を私は持つてしまったから。

シルヴィア「最初は他の子との違いなんて全く分からなかった。私が少しでも運動神経が良くらいだと思っていた。でもその違いはすぐに分かる瞬間が起きてしまった。小学校に入学して少し経った時の体育の授業で私は思い切り走ったんだけど、無意識に星辰力を使ってしまったの。それが理由で私は学校だけでなく、その街中の人たちから気味悪がられた。」

八幡「……………」

シルヴィア「家に帰ってから言う『ただいま』。この一言を言うのも怖くなって段々帰りづらくなってきた。街に行っても皆私の方を見ながらヒソヒソ話をするから怖くなった。だから家に帰っても部屋の中で閉じこもるようになった。」

シルヴィア「そんな時、いつも暗い私を励ましてくれたのは世界で有名なトップアイドルだったペトラさんの歌だった。いつも落ち込んでばかりの私を元氣付けてくれたペトラさんのライブを見てこの人みたいになりたいと思った。だから私は親に初めてお願いをした。六花に行きたいって。両親からしてみればこれ以上ないくらい嬉しかったと思うよ。悩みの種だった私が漸くいなくなるんだから。両親はクインヴェール女学園に願書を出した。そしたら、クインヴェールの人たちとペトラさん本人が来たの。」

あの時は本当にビックリした。まさか私の憧れの人本人が来るなんて思っても見なかったから。でもそれもそのはずだった。クインヴェール女学園、というよりも六学園には初等部の管理施設は界龍しかなかったから。その場所にまだ小学校に入りたての6歳の小学1年生が1人で別の地域で暮らすなど自殺行為にも等しかった。流石にこれは看過出来ない学園側は両親の元に来て説明をした。こういう理由で入学できないから、中学生になるまで待つてくれと。でも私はそれまで待てなかった。今すぐ行きたかった。中学生まで惨めな思いをして生活するくらいなら、分からない場所で1つ1つ重ねていった方が自分の身になると思ったから。



シルヴィア「断られるのは分かっていたけど、それでも行きたかったから必死になって頭を下げた。そしたらペトラさんが『どうしてそこまでして行きたいの?』って聞いてきた。私は『自分がどこまでやれるか試したい』『憧れの人に近づきたい』って答えた。1つ目の答えは八幡くんとまるつきり同じだね。そしたらペトラさんは『それくらい覚悟があるのなら、弱音は絶対に吐かないようにするのよ。』って言った。その日から私はクインヴェール女学園の生徒になった。」

入学した日からは大変だった。食事は学園側が用意してくれるものがあつたけど、教室や自室の掃除、洗濯、授業は勿論だけど、アイドルについての勉強もあつた。本当に大変だったけど、あの場所に戻るくらいならこれくらいの事何でもない。そう言い聞かせた。

シルヴィア「そんな忙しくて大変な日でも、当時の学園の先輩たちやペトラさんは私の事を気にかけてくれた。一緒にご飯を食べたり、お話をしたりした。7歳の誕生日には学園の人たち皆でお祝いをしてくれた。六花に来てから、私の人生は良いことだらけだったなあ。だから思うんだ。私と八幡くんって六花に来た理由とか境遇って似てるんだなあ。時期は違うけど、なんか似てると思わない?」

八幡「……………そうだな、確かに似てる……………シルヴィ、1つ聞いてもいいか?」

シルヴィア「うん?何?」

八幡「シルヴィは故郷に帰りたいって思ったりしないのか?」

シルヴィア「思わないかなあ。もし環境が変わって私を見ても気持ち悪い目で見えるようになってなくても、帰る気持ちにはならないかな。」

八幡「……………そうか。いや、そりやそうだよな。俺もライブがなければ千葉になんて帰ってなかった。悪いな、バカみたいな質問しちゃまって。」

シルヴィア「ううん、気にしてないよ。」

でもなんだろうなあ……………八幡くんとは人生の歩み方といい経験といい、運命を感じる。

シルヴィア「♪♪♪」

この曲は私がよく見ていたペトラさんの曲。

曲名は『Over The Testament』

シルヴィア／八幡「♪♪♪」

っ！八幡くんもこの曲知ってたんだ……………

―――4分後―――

シルヴィア／八幡「Over The Testament♪」

私たちが歌い終わると、もう外は暗かった。眺めながら歌っていたから分かるけどね。

シルヴィア「……………八幡くんもこの曲知ってたんだね。」

八幡「この曲は俺のお気に入りの曲でもあつてな。俺の過去と今を表しているような曲風で俺たち2人のことを表しているような感じがしたから、ライブで歌おうか迷っていた曲の1つだ。まあ、出さなかったけどな。」

シルヴィア「どうして？」

八幡「この曲はライブで歌うべきではない。そう思ったただけだ。」  
シルヴィア「……………そっか。」

八幡くんも同じ事を思ってたんだ。私もこの曲を出そうかどうか悩んだ。結果、私も出さなかった。理由は八幡くんと同じだけど、この曲はペトラ・キヴィレフトが歌うからこそ輝く曲だと思ったか

ら。

シルヴィア「……そろそろ帰ろつか、寒くなってきたしね。」

八幡「そうだな。荷物、片方持つ。」

シルヴィア「ありがとう。」

これまでと同じように、支え合っていこうね、はちまんくん。

## 記念写真と愛

八幡 side

千葉で生活して20日が過ぎ、およそ3週間の間で色々な事をし  
て、色々な所へ行った。もしかしたら今まで暮らしてきた千葉生活で  
1番充実した生活を送れただろう。出かけた時は勿論の事だが、家の  
中でも俺の両親が仕事でいない日が多いが、休みの日や仕事終わりの  
早い日は家族全員で食事をしたり、話をしたりする。

だが、楽しい時間というのはあつという間に過ぎてしまう。俺たち  
はもう六花へ帰らなければならない。俺たちの休みは2月の間まで  
だから、残りの下旬は六花で過ごす決めている。その事はシルヴィ  
とも相談して決めた事だし、両親にも言っている。偶然かどうか分か  
らなが、母ちゃんも親父も今日は休みだった。だから今日は出かける  
事はせず、1日家に居た。

そして午後の1時半。俺たちは4時の船で帰るため、そろそろ出発  
する時間になった。時間には余裕を持った方がいいから早めに行く  
事にしたのだ。

八幡「よし……荷造り済んだか？」

シルヴィア「昨日の時点で9割は終わらせてたから問題なし！洗面  
道具を入れるだけで終わったから大丈夫だよ。」

八幡「そうか、ならいつでも出発できるな。」

シルヴィア「うん。じゃあ挨拶に行こつか。」

——居間——

シルヴィア「この3週間、お世話になりました。」

比企谷父「もう行ってしまいか……3週間ってのは早いもんだな。」

まだ居られるんだったら引き留めるんだが、まだ学校があるからな。」  
比企谷母「そうね……確かに短く感じたわね。2人共、遊びにこれ  
ようになってたらいつでも来てね。私たちは歓迎するわ。」

八幡「ありがとな。」

シルヴィア「ありがとうございます。その時は是非、お邪魔させて  
頂きます。」

比企谷父「んじゃ、駅まで車で送ろう。俺たちが最後まで見送りたい  
だけだから、シルヴちゃんは気にしなくてもいい。」

シルヴィア「……ありがとうございます。」

……家の車に乗るのなんて随分久しぶりだ。四捨五入すれば20  
年は乗ってない事になるな。

――車内――

比企谷父「……なあ八幡、界龍の卒業式には俺が乗り込んでやろう  
か？」

八幡「おつかねえ事言うなよ。そうしてもらえたら嬉しいが、六花  
に行くまでの検疫は相当厳しいから時間かかる。今からだと難しい  
ぞ。」

比企谷父「そうかあ。息子の卒業式、1度でもいいから撮るべき  
だったなあ……今後悔しても遅いか。」

八幡「誰かに撮ってもらおうよ。それを2人に送るから。まあ生で見  
たかったんだろうが、我慢してくれ。」

比企谷母「こればかりは仕方ないわね……ねえ八幡、時間はまだ  
余裕あるのよね？」

八幡「ああ。それがなんだ？」

比企谷母「なら、写真撮らない？」

母ちゃんが車の中で指差した方向には写真屋があつた。それも家  
族写真や記念写真を撮るような専門店だった。

比企谷父「おお、それは良いな。どうだ？八幡にシルヴィアちゃん？」

シルヴィア「私は撮りたいです！八幡くん、良いよね？」

八幡「ああ、断る理由もないしな。」

シルヴィア「やった♪」

比企谷父「んじゃ、車停めて入るか。」

――写真屋・ワルクスフोटランド――

「いらつしゃい……えっ!!」

比企谷父「家族写真をお願いします。この4人で。」

「え!!え、ええと……家族写真ですか？」

比企谷父「はい。この女性は家族ではありませんが、近い将来はウチの息子と結婚する約束をしております……ダメですかね？」

「い、いえ!!カメラスタンバイしますので少々お待ち下さい！」

あの人、俺とシルヴィを見た途端にテンション変わりやがったな。そんなに珍しいか？

比企谷母「そんなに混んでないようで良かったわ。」

八幡「写真屋がそんなに混むとは思えないが……」

比企谷父「まあ予定よりは早く済みそうだ。後はあちら側の対応次第だろう。」

そして写真の準備が出来たみたいで、俺たちは別室に移動して写真を撮る準備に移った。

比企谷母「普通なら私たちが後ろで立って、私の前にシルヴィアちゃん、あんたの前に八幡よね。」

比企谷父「それが1番良いな。本来は逆だが、今はそれが1番だろ

う。八幡、シルヴィアちゃん、椅子に座って互いの手を握ってくれ。」

俺たちは言われるがままに従った。この手の作法なんて全く分かん。だから大人しくしておくのが1番だと思ったからだ。

そして俺たちが準備し終わって残りは写真を撮るだけになった。撮る時、俺の肩には親父の手が置かれていた。ただ置かれているだけ、そう思っていたが、様々なものが流れ込んでくるような感じがした。

「じゃ、撮りまーす!!」

カシャッ!

ザザー……ザザー……

シルヴィア「……終わっちゃったね。」

八幡「ああ、そうだな。」

俺たちは先程、横浜の港を出た。だから今は完全に海の上だった。この船は六花に向かっている。当然他の観光客や六花に帰省予定の学生もいる為、俺とシルヴィアは注目の的になっている。

八幡「……………」

——回想——

これは俺たちが両親と別れる前の話だ。

シルヴィア「八幡くん、先行ってるね〜!」

八幡「ああ!……………で、どうしたんだ?」

比企谷父「……八幡、俺は息子1人面倒を見きれないようなバカな父親だ。娘の可愛さあまりに息子をほったらかすような愚かな父親だ。けど、これだけは言える。俺はお前を愛してる。あまり説得力はないように思えるかもしれないが、お前の事は大切に思ってる。」

八幡「……………」

比企谷父「この先お前はシルヴィアちゃんとは家族になるんだ。先に言うぞ。俺みたいな父親にはなるなよ。先に男の子が生まれて、後に女の子が生まれようとも、平等に愛してやってくれ。分かってるかもしれないが、これが父親として、言える言葉だ。」

八幡「……………ああ、分かってる。シルヴィにも、この先の未来で生まれてくるであろう俺の子にも平等に愛を捧げるよ。」

比企谷母「私たちがあなたに与えてあげられなかった分まで、愛情を注いであげて。私たちにはそれくらいしか、伝えることが出来ないから。」



八幡「……ああ、分かった。いつか……孫の顔を見せにまた戻ってくる。」

――回想終了――

八幡「……安心してしろよ、母ちゃんと親父からの愛は、この20日間で十分に貰ったからよ。」ボソツ

シルヴィア「ん？何か言った？」

八幡「いや、何でもない。」

シルヴィア「……ちよつと寂しいなあ。」

八幡「また戻ってくればいい。その時は孫の顔でも見せに行こうぜ。」

シルヴィア「八幡くん気が早いよ！でも、そうだね。いつかは見せに行かないとね。」

八幡「ああ。」

そんな他愛もない話をしながら、俺たちは互いの唇を重ね合わせた。

八幡 s i d e o u t

比企谷父 s i d e

比企谷父「また寂しくなるな……」

比企谷母「そうね……次は何年後かしら？」

比企谷父「年単位か……まあだろう……ん？」

なんだこれ……手紙か？いや、写真？

比企谷母「何？どうしたの……まあ。」

比企谷父「こんな無駄な事に使いやがって……全くあいつは……」

そこに移ってあったのは、小学生くらいの身長の八幡、中学時代の制服を着た八幡、総武高校の制服を着た八幡、界龍第七学院の制服を着た八幡が写っていた。左から順に成長を表しているのだろう。

写真の裏にはこう書かれていた。

【小学から大学までの歩み】と。

## 最終章 卒業式編

### ※卒業式のイメージ

八幡 side

……ライブからおよそ1ヶ月が過ぎ、今は3月の中旬。そう、もうすぐ卒業&入学シーズンだ。俺たちがこの学院に居られる日も数えられるくらいになっていた。いつも通りつちやあいつも通りなんだが、なんだかピリピリした空間が漂っていて、それも日に日に増している。今も普段と変わらない放課後の稽古をしているんだが、どうにも集中し切れていない。

八幡「……なあ、ちよつといいか？」

「「はい、宗師っ!!」」

八幡「……あまり集中出来ないようだったら、無理して鍛錬する必要ないからな？卒業式も近いんだ、気負い過ぎると身が持たないぞ。」

「も、申し訳ございません、宗師。折角ご教授して頂いているのに、心配をかけてしまうなんて……」

八幡「いや、別にいいんだが、そんなに稽古に打ち込めない程の何かがあったのか？」

すると、道場にいた全員が押し黙るように俯いた。え？俺何かまずい事聞いたか？そんなにいけない事聞いちゃった？

「……その、もうすぐ宗師が卒業してしまうと思うと、なんか鍛錬どころではなくなっちゃって……集中しようとは思っているのですが、どうにも卒業式が頭によぎってしまい……」

八幡「そ、そうか……」

……成る程な。要は俺が居なくなると寂しいって思ってくれていいのか。そんな事今までになかったからどう言えればいいのか分からん……いや、金輪際界龍には来ないってわけじゃないから、今生の別れにはならないと思うが、なんだろう、この悪い事をしてしまったような感情は。

八幡「あー……大した慰めにはならないが、偶になら俺も界龍に来る。その時に稽古とか世間話くらいならしてやるよ。」

八幡「卒業だからってもう2度と会えないってわけじゃねえんだ。そんなに思い詰めるなよ。」

「何を言いますか!? 宗師にとってはそれくらいの事かもしれません、私にとつてはそれくらいで済まされる事ではないのです! 私は序列外の時から宗師のご指導を受けておりました。今では序列54位にまで上がる事が出来ました! これを宗師のおかげと言わずしてなんと言いますか!?!」

いや、お前の努力の賜物じゃないの?

その後もその場にいた殆どの生徒のエピソードを聞いて、お腹いっぱい状態で帰路についた。

――マイホーム――

シルヴィア「そんな事があつたんだ……私の学園なんていつも通りだよ?」

八幡「それが普通なんだろうけどな、俺の学院ではそうじゃないらしい。学院を卒業するお祝いだったのに、なんだか悪い事をしているような錯覚に陥っちゃった。」

シルヴィア「八幡くんが悪い事をしたから退学になっちゃった的な?」

八幡「よし、今から執事服に着替えてくるから待っていてくれ。」

シルヴィア「あく待って待って!!冗談だから!シルヴィアジョークだから!!」

……………そんなに執事の俺って嫌なのか?

シルヴィア「ふう……………でもさ、ある意味当たり前じゃないかな?だって長い人だと10年も八幡くんにお世話になってる人もいるんだよ。恩師みたいな人が居なくなるのはやっぱり辛いよ。」

八幡「そういうもんなのか……………俺にはそういうのよく分らん。今まで俺に親身になってくれた奴なんて居ないからな。出来たのがこの学院に来てからだったもんだから実感とか感覚がイマイチピンと来ない。」

シルヴィア「……………八幡くんはそうだね。高校1年生まではそれが当たり前みたいな学校生活だったもんね。」

俺の中での卒業式のイメージ……………入場して、卒業証書をもらって、校長の話を聞いて、在校生と卒業生の答辞、歌を歌って、退場して、そのまま帰る。みたいな感じだ。別にこれといって特別な事があるわけでもない。

シルヴィア「でも今年は八幡くんの思っているような事は持ち込まなくてもいいんじゃないかな?だってそういう風に言われるくらいなんだから、きっと良い卒業式になるよ。」

八幡「……………そうなるといいな。」

## 卒業式 ①

――――

3月の中旬の終わり頃。この日だけは六花全体の空気が重みのある空気を漂わせていた。その理由が……各学園の校門の前に出されてある看板を意味していた。

【卒業式】である。

六花ではどの学園も共通の日に卒業式が行われる。それは六花園会議で打ち合わせなどをして決める。どの学園も校風が全くの別物である為、卒業式のやり方は様々だが、最上級生が学園を別れるという共通点はどの学園も一緒である。

今回は界龍第七学院の卒業式を覗いてみよう。

――界龍第七学院――

リーラン  
麗蘭「○○○。」

「はいっ！」

界龍では証書授与を高↓大の順番で行う。現在は高等部の中ぐらいであろう。なぜ高等部からなのかというと、界龍の大学部に行かず、就職を選んだものがあるからだ。大学部に行く者が殆どで、就職に希望する生徒は高等部の中ではあまりいない。だから高等部の証書授与はすぐに終わるのだ。

そして界龍の証書授与は教室の名前順とか性別順ではなく、序列順で行われる。高等部なら高等部の最高序列保持者が1番最後なのである。

麗蘭「続いて、大学部卒業生。」

そして卒業していく者の名前が呼ばれ、徐々に序列が上がり、最後には冒頭の十二人になった。

麗蘭「序列6位、黎沈華。」

沈華「はい。」

麗蘭「序列5位、黎沈雲。」

沈雲「はい。」

麗蘭「序列4位、趙虎峰。」

虎峰「はい。」

麗蘭「序列3位、セシリー・ウォン。」

セシリー「はい。」

麗蘭「最後に序列1位、比企谷八幡。」

八幡「はい。」

麗蘭「卒業証書、比企谷八幡。貴方は当学院の全課程を卒業した事を証する。六花〇〇年△月◇日。界龍課報機関【龍生九子】代表、春<sup>チエン</sup>麗蘭<sup>リーラン</sup>。」

「以上を持ちまして、証書授与を終了致します。」

麗蘭は壇上から降壇して、自分の席へとついた。

「続きまして、在校生送辞。在校生代表、茫星露。」

星露「……卒業する者たちよ、心から祝福の言葉を送る。妾から伝える事は何もない。ただ、この学院を去って行く者たちの勇姿をこの目に焼き付け、その姿に恥じぬ戦いをする。改めてもう1度言おう。卒業する者たちよ、卒業おめでとう。在校生代表、茫星露。」

星露が礼をして壇上から降りた。会場からは拍手が沸き上がり、卒業生の中には涙ぐむ者も数名いた。

「続いて、卒業生答辞。卒業生代表、比企谷八幡。」

八幡が礼をしようとしたその瞬間――

星露「起立！」

星露の呼びかけで在校生は椅子から勢いよく立った。

星露「礼！着席！」

その後は揃った綺麗なお辞儀に着席。

八幡「学院に残る皆の者、このような盛大な式を挙げてくれたことを感謝する。俺から言う事は星露と同様で何もない。今から言う言葉はただの独り言だと思ってほしい。どう捉えるかは皆に任せる。俺がこの界龍第七学院に来るまでの人生は最悪と言っていいくらい悪いものだった。日本の高校1年の頃にはその最悪な事もあってか、自殺も考えた時期もあった。」



その一言で会場がざわついた。それもそうである。六花で1番強いであろう人が自殺を考えていたと言ったのだ。驚かない方が不思議だった。

八幡「ただの人間から星脈世代に目覚めて、この六花へと足を入れた。そして此处、界龍第七学院に転校した。そこからの人生は今までの不幸を覆すことが出来るくらい幸せなものだった。日本では出来なかった友人ができ、引きこもっていた休日には外に出かけるようになり、友と雑談をしたり、稽古を積んだり、色々な事をした。今の在校生の殆どは知らないと思うが、俺は過去にこう言った。界龍は俺の居場所であり、家族だと。今でも俺はそう思っている。血縁と同じ、またはそれ以上に固く結ばれた絆があった。そのおかげもあって、今では生涯愛し続けたいと思える大切な人も出来た。この学院からは色々なものを貰った。俺はこの学院に来て本当に良かった。最高の学院生活を送ることが出来た。それもこれも、目の前にいる在校生、後ろにいる卒業生、そして今はこの場にいない界龍を卒業していった者たち、界龍関係者すべてのおかげだと思っている。今日まで俺を慕い、敬い、親しく、愛してくれてありがとう。今日、我ら高等部、大学部、合わせて312名は界龍第七学院を卒業する！以上、卒業生代表、比企谷八幡。」

ここで礼をするのだが、八幡は礼をせずにまだ立っていた。

八幡「星露……皆を、家族を頼むぞ。」

星露「っ!!……………心得ましたぞ。」

そして八幡は礼をして壇から降りた。そして今度こそ大きな拍手が起きた。

「在校生起立！卒業生退場。」

そして卒業生はレッドカーペットの上を一步一步噛み締めて歩いてさっといつた。

## 卒業式 ②

八幡 side

これでこの学院ともお別れか……来るきつかけなんて本当に些細なものだったし、友達も作る気なんてなかったが、いつの間にか俺の周りには人が集まって賑やかになっていた。千葉にいた俺とは大違いだな。

……もう見ることもないかもしれないから、借りてた部屋とか見に行くか。

―――序列2位の部屋―――

まだ俺の名前だったんだな。この部屋の前は最上階の最端だったからな。この部屋になった時、どれだけ楽になったか。

この部屋になってからは来るやつも増えてなあ……術を教えて欲しい奴、武術について教えて欲しい奴、話をしに来る奴、タダ飯を食いに来る奴、色んな奴らが来たもんだ。

八幡「……今まで世話になったな。彼女が出来てからは殆ど使つてやれなかったが、居心地の良い部屋だった。7年間ありがとな。」

―――校門前―――

「宗師はまだいらつしやらないのか？」

「さあ……もう殆どの人が出て来たというのに宗師だけ出てこない。一体何をしておられるんだ？」

「過去を思い出しながらゆつくりこちらに向かっているんじゃない？」

「宗師にとつては家みたいな場所だもの。」

「それもありえるな。」

……俺が来るのを全員待つてるのか、これ？ いや、自意識過剰に思われたくないんだが、なんかそう思わざるを得ない。稽古始まる前とか、俺が来るまでは全員稽古しないで待ってたしな。

八幡「……………」

「っ!! 宗師がお見えになったぞ!!」

『ご卒業おめでとうございます!!』

八幡「おう、ありがとう。それと、ここにいる在校生に聞きたい。最後の稽古をつけると言ったらどうする？ やるかやらないか。」

まあ向上心の高いこいつらなら、答えなんて分かりきってるけどな。

『ご教授、お願いします!!』

在校生全員が包拳礼をした。まあそこまで凝ったことはしないんだけどな。

八幡「稽古つつつても簡単な内容だ。俺を捕まえてみる。それだけだ。所謂鬼ごっこだ。俺を捕まえた奴には、この羽織をやる。今後の俺が持っていてても仕方ない代物だからな。捕まえた奴に献上しよう。」

くくくくくつ  
!!!!!!

八幡「んじや俺を捕まえてみる！ スタートだ！」

在校生が一気に八幡の方へと向かって走り出した。

虎峰「……最後の最後に何をするかと思いきや、鬼ごっこだなんて

……」

セシリ「でもさーあれも八幡らしくていいじゃん。あたしはあ  
あいうの好きだけどなー。」

沈華「遊びを入れた稽古なんて、比企谷はよくやっていましたもの。  
今に始まったことではありせんわ。」

沈雲「そうだね。どちらかといえばよくしていた方だと言えるね。  
息抜きしながら稽古をする、なんて意味のわからないような言葉を言  
いながらやっていたのを思い出すよ。」

沙希「あいつらしいね。ホント、総武高とは大違いだよ。楽しそう  
にしてる。」

セシリ「おっ？サキサキも八幡に惚れた？惚れちゃった？」

沙希「サキサキ言うな。それと惚れてないから。けーちゃんもいる  
前でそういう話はやめて。」

柚珠奈「大丈夫だって。京華ちゃんはそういう話大好きかもしれない  
いし、興味ないかもしれないから！」

沙希「それ、全然大丈夫じゃないから。」

京華「さーちゃん、はーちゃんが好きだから全然大丈夫だよ。大好  
きなお友達って言ってたから。」

セシリ「外堀はもう埋められてたかー。これはもう弄れない  
ねー。」

沙希「弄られてきた私の身にもなりなよ……」

――20分後――

「はあ……はあ……くそつ、なんて素早さだ。流石は宗師だ。」

「捕まえたと思ったら、間をすり抜けて行く……羽織にさえ触れさせ  
てもらえないなんて。」

「本当に追いつける気がしないな、あの方には。」

……諦めてはいないようだが、もう潮時だな。

クイクイツ

八幡「ん？」

俺が後ろを見ると、川崎の妹のけーちゃんがいた。

京華「はーちゃん鬼ごっこ終わった？」

八幡「……………ああ、たった今捕まっちゃった。」

京華「？」

すると校門の方角からは次々と在校生たちが疲れた様子で帰ってきた。

八幡「お前ら情けないぞ。中から大の奴らが初等部に負けてどうする。終わりって言おうと思った矢先に捕まっちゃったよ。」

おお、全員驚いてるなあ。まあ信じられないだろうな。俺を捕まえたのが、序列2位（仮）の初等部なんだからな。大学部にとっては年

の半分も来ていない子に負けたんだしな。

八幡「んじや、約束だしな。俺を捕まえたんだからこの羽織はけーちゃんの物だ。」

俺は羽織を脱いでけーちゃんの肩にかけた。流石に今の年と背を考えると、着るなんて無理だから肩にかけただけで充分だろう。

八幡「じゃあお前ら、鍛錬に励めよ。」

………学院を去る前に礼はしてくか。

八幡は校門で包拳礼をしながら膝をついた。そこから深々と頭を下げて5秒くらいしてから元に戻り、再び立った。

八幡「んじや、行くか。」

虎峰「はい。」

セシリー「はーい！」

沈華「ええ。」

沈雲「うん。」

柚珠奈「はいっ！」

あつ、ちなみに川崎はけーちゃんの面倒とかもあるから学院に残るそうだ。星露に言ってそれは了承済みたいだ。

「宗師!! 師兄姉方!! 今までありがとうございました!!」

『ありがとうございました!!』

こうして俺たちは界龍第七学院を卒業して、界龍第七学院から去って行った。

――界龍入り口前――

八幡「…………早かったな。」

シルヴィア「そんな事ないよ。八幡くんの事だから、在校生と何かしてたんじゃないの？」

セシリー「当たり前ー！鬼ごっこしたんだよー！」

シルヴィア「お、鬼ごっこ？」

沈華「捕まえたら羽織をプレゼントするって。」

シルヴィア「ああくだから羽織がないんだ。八幡くんを捕まえるなんて凄いね。」

八幡「ああ、やられた。まさかあんな奇策で来るとは思わなかった。」

虎峰「何を言ってるんですか。単に羽織の裾を掴まれて呆気なく終わったじゃないですか。」

八幡「そういうのは言わないでとっておこうぜ……未来ある子供に託したんだからさ。」

虎峰「そういう事にしておきましょう。」

こいつ、いつからこんなに生意気になっちゃったの？

八幡「……まあいい。じゃあ帰るか、俺たちの家に。」  
シルヴィア「うん。」



## それぞれの卒業式

――――

界龍第七学院は無事に卒業式を終える事ができた。六花の歴史に新たな伝説を作った男、比企谷八幡の物語もこれで終止符を打った。しかし、他学園の卒業式を見ていないだろう。今回は他学園の卒業式後の様子を覗いてみることにしよう。

―――星導館学園―――

戸塚「これで僕たちも卒業かあ……なんだか此処に来てからは時間が経つのがあつという間に感じるよ。」

海老名「そうだね。まだ高等部2年だと思っていたのが、今じゃあもう大学部4年の卒業&就職シーズンになってたからね。」

戸塚「時間が経つのは早いよね。」

戸部「確かにそれは感じるっしょ。でもこれからはそんな事感じないくらい忙しくなるべ。戸塚くんは治療院、海老名さんは大手の編集企業、俺は商業エリアの煌式武装専門店、何するかは分かんねーけど、忙しくなるべ。」

戸塚「そうだね。」

雪乃「皆、卒業おめでとう。」

小町「ご卒業おめでとうございます！」

割って入ってきたのは雪ノ下雪乃と比企谷小町だった。

戸塚「雪ノ下さん、小町ちゃんも！雪ノ下さんも卒業おめでとう！」

海老名／戸部「おめでとう！」

雪乃「ありがとう、2人共。」

海老名「雪ノ下さんはどこに就職するんだっけ？」

雪乃「母が社長をしている会社よ。建設会社の事務局に決まったわ。雪ノ下建設っていうのだけど、知ってるかしら？」

戸部「知ってるも何も界龍に融合してる大企業っしょ！さすが雪ノ下さんだべ！」

雪乃「就職先が決まった以上は何処までも噛みつきに行くわ。《王竜星武祭》優勝は伊達ではないっていうのを見せてあげるつもりよ。」  
戸塚「カツコいいなあ……うん、僕もそのくらいの気持ちで行かないとね！小町ちゃんも後2年頑張ってるね。」

小町「はい！」

海老名「じゃあさ、休みの日が重なったら、皆で食事でも行こうよ。」

戸部「それはあるっしょ！」

雪乃「ええ、そうしましょう。」

戸塚「うん、そうしよう！」

その後も会話を続けて、キリが良くなったところで解散した。

因みに、由比ヶ浜結衣は卒業式には出たものの、卒業式後に4人の目に映ることはなかった。

――レヴォルフ黒学院――

材木座「卒業式のない学院なんて、世界で1つだけではないか？」  
プリシラ「……もしかしたら探せばあるかもしれませんよ？かもです。」

イレネ「いいじゃねえか別に。楽に終われんだ、それに越したことはねえだろ。」

材木座「ううむ、まあそうであるが……」

ころな「材木座さんはあった方が良かったんですか？」

材木座「日本はあるのが普通であつたからな。何も無い1日が卒業式というのはこの学院くらいであろう。校風を考えれば当たり前かも知れんが……」

オーフェリア「……卒業式を行なったとしても、生徒が参加するとは思えないもの。ならする必要もないわ。」

イレーネ「あんたがやるって言ったら全員大急ぎで集まりそうだけどな。」

プリシラ「……だね。」

ころな「そうですね。」

オーフェリア「……皆して私をイジメるのね。」

材木座「……何のことであるか？」

イレーネ「女の事情に首を突っ込むもんじゃねーぜ。男なら引っ込んでな。」

材木座「男よりも男らしい人に言われたくないのであるが……」

イレーネ「おい、聞こえてっからな？」

材木座「すみませんでした。殴るのだけはやめてください。」

イレーネ「殴らねえよ。そしたらあたしがムシヨ行きだろうが。」

オーフェリア「……私たちは卒業だけど、生徒会はプリシラところながちゃんとやってくれるって信じてるわ。お願いするわ。」

プリシラ／ころな「はい！」

レヴォルフの生徒会＋材木座の談話もひと段落ついたところで解散した。

この時、材木座は知らなかった。何気にハーレムだったことを。

――クインヴェール女学園――

「シルヴィアさん、卒業おめでとうございます！」

「私、シルヴィアさんみたいになれるように頑張ります！」

「お幸せになってください！」

「比企谷様と末永くお幸せに!!」

シルヴィア「ふふっ、皆ありがとう。」

ネイトネフェル「相変わらずね、貴女も。」

シルヴィア「そうかな？ネイトネフェルはアイドル続けるんでしょう？」

ネイトネフェル「ええ、貴女は引退したから楽になったものね。」

シルヴィア「ちよつとトゲのある言い方だね。まあその通りでもあるんだけどさ。そういえば知ってる？ルサルカもバンド続けるんだって。会社からオファーが来てその専属になるんだって。」

ネイトネフェル「ええ、知ってるわ。でも張り合いがないんじゃないかしら。最強のライバルがいなくなつたんだもの。」

シルヴィア「大丈夫だと思うけどね。」

皆気になっているとは思うが、ルサルカは現在クインヴェールにいない。海外でバンド活動をしている為、卒業式には参加出来なかったのだ。

ネイトネフェル「貴女はこの後彼氏のところでしよう？早く行つて来なさい。愛想つかされたらどうするの？」

シルヴィア「八幡くんは待たせただけで愛想を尽かすような薄情な人じゃないから大丈夫。じゃあねネイトネフェル、アイドル活動頑張つてね。」

ネイトネフェル「ええ、貴女も頑張renaさい。」

## エピローグ

### 永遠の愛

――

世間では「最強世代」が六花を卒業し、各学園にやっと平穏が訪れた。その「最強世代」は言わずとも分かるだろう。界龍第七学院序列1位、比企谷八幡。クインヴェール女学園序列1位、シルヴィア・リユーネハイムを含む今年の3月に各学園から去って行った大学部4年の卒業生の事である。

特に前々回シーズンは比企谷八幡の「三冠制覇」にシルヴィアリユーネハイムの「王竜星武祭2連覇」という偉業も成し遂げられており、最高や最巧とも呼ばれている。そんな彼らが去り、もう彼らの事で盛り上がることはないであろうと、世間では思われていた。

だが、その予想は大いに覆された。

その理由とは……………

案内人「奥へと詰めてお入り下さい。まだ空きはございます！ゆつくり前にお進みください！」

受付「ご祝儀の品、ありがとうございます。こちら粗品ですが、お受け取り下さい。」

「いやあ……なんか早いですね。」

ペトラ「そうねえ……あの子が学園を去ってからまだ半年くらいだけど、本当に早く感じるわね。」

「なんかあの頃を思い出します。でも……漸くですね。」

ペトラ「本当にやっと、って思うわ。漸くシルヴィアと八幡くんが結婚するのね。」

そう……今日は比企谷八幡とシルヴィア・リューネハイムの結婚式だった。

すでに会場内には、2人の関係者たちが集まっていて雑談や学生時代の話をしていた。現役の学生でも参加している人がいて、中には他学園の母体幹部の人までも来場していた。それだけ2人の影響力は大きかったということ物語っているとも言えるだろう。

そして時間は進み……………式に入った。

進行役「それでは、新郎新婦の登場です。拍手でお出迎え下さい。」

レッドカーペットが敷かれた扉からは美しい紫色の長髪をなびかせながら白いウエディングドレスを身に纏った世界の歌姫とも呼ばれた新婦のシルヴィア・リューネハイムと、長く伸ばした後頭部の髪

を縛って白いタキシードを着ている六花の生きる伝説、比企谷八幡が入場して来た。

2人は恥ずかしがる様子もなく自然と入ってきた。まるでそれが当たり前かのように。

2人が前に進み、神父……ではなく、小苑の前で立ち止まった。

小苑「これより、比企谷八幡とシルヴィア・リューネハイムの夫婦へなる為の契りを行う。尚、この儀式は新郎新婦の希望の為、手短に行うものとする。」

小苑がそう言い、一呼吸置くと……

小苑「汝、シルヴィア・リューネハイムは比企谷八幡を夫とし、喜びの時も、悲しみの時も、健やかなる時も、夫に永遠の愛を捧げる事を誓うか？」

シルヴィア「誓います。」

小苑「汝、比企谷八幡はシルヴィア・リューネハイムを妻とし、喜びの時も、悲しみの時も、健やかなる時も、妻に永遠の愛を捧げる事を誓うか？」

八幡「死んだとしても、永遠にその誓いを破らないことを誓う。」

小苑は満足したように頷くと……

小苑「であれば双方、指輪の交換を。」

隣からは麗蘭が指輪を乗せたトレイを持って来て、2人の側までやって来た。

最初はシルヴィアが、そして後に八幡が指輪をはめた。

小苑「……2人の人生に祝福を。」

参列していた人たち全員は順番に外へと出て行き、最後の1人が出たところで扉が閉まった。

小苑「これでお主らは正式に夫婦じゃ。よかったのう。」

八幡「ありがとうございます。俺も漸くって思いがあります。」

シルヴィア「私も、やつと八幡くんと家族になれたって思うとうれしく思います。」

小苑「……そうか、ならばその輝いた顔を輝いているうちに皆に見せてくるが良い。儂は一足先に見たから満足じゃ。それに、義息子と義娘の顔も見れたのじゃ。これ以上ない幸福じゃ。行くがよい。」

2人「はい。」

2人は偉大な義母に背を向けて扉を開けた。

――2人の我が家――

シルヴィア「やつと家族になれたね。」



八幡「ああ、これからはずっと一緒だ。」

シルヴィア「……よし、じゃあレストランの開業準備をしなきゃね。やろっか！」

八幡「ああ。」

こうして2人は結婚を迎え、夫婦となった。

それから10年後……2人には子ができ、飲食店を開業。まだ2人の物語は終わっていない。

10年後……

――

「専務、メシに行くって言っていましたけど、此処って外縁居住区ですよ？こんな所に食べるところなんてあるんですか？」

「あるんだよ。今から行く所は俺が10年前からお世話になってる人でな。お前も店主と副店主の名前くらいは知ってると思うぞ。何せ超がつくくらいの有名人だからな。」

「ホントですか？」

「ホントだ。ほれ、あの店だ。」

社会人2人の前には小洒落たお店があつた。黒がメインの外観で看板には「喫茶 ランベリ」と記されていた。

「ランベリ……聞いたことないですけど、人気なんですか？」

「人気はない。むしろ穴場スポットだ。知る人ぞ知る隠れ名店ってやつだ。入るぞ。」

カランツ

上司が扉を開けて中に入ると、中はクラシックをイメージとした内装で落ち着いたインテリアや雰囲気だった。そしてその雰囲気を台無しにするくらい美人がいた。

「いらつしやいませ。あら、また来てくれたんですか？」

「ええまあ、今日は後輩を連れて。」

「リピーターを増やしてくれるなんて嬉しいです。あつ、申し遅れました。私、副店主の比企谷シルヴィアと言います。よろしく願いますね。」

「……………」

「おい、いつまで黙ってるんだよ？」

シルヴィア「いいんですよ。初めて来た人はだいたいこんな反応ですからね。」

「……………っ!!せ、専務っ!!どういう事ですか!?専務が言ってたのって、シルヴィア・リユースハイムさんの事ですか!？」

「ああ。前にも言ったろ?10年前からずっとお世話になってるって。俺がまだ課長補佐の頃からずっとだ。今でもこの人や店主の比企谷八幡さんに美味しい料理を食わしてもらっているからお世話になってる。」

シルヴィア「昔は恥ずかしい思いをしながら記事を読みましたよ。今ではそんな思いをすることはなくなりましたが、あのランキングはなんとかならないんですか?」

「いえいえ、やめるわけにはいきませんよ。永遠の1位はお2人なんですから。」

シルヴィア「もう…………ふふっ、ご自由な席へどうぞ。」

2人は窓際の席へと座った。後輩はまだ落ち着かないみたいで辺りを見回していた。

因みにシルヴィアが言っていたランキングは《六花のベスト夫婦ランキング!》という名のテレビにも出ているくらいのランキングコー

ナーで10年前から不動の1位に居座り続けているのだ。

「こちらお冷です。」

「あつ、はい。ありがと……う……ごございます?」

「なんで疑問形なんだ?」

「専務……こんな美人、六花に居ましたっけ?」

「お世辞でも嬉しいです。」

「いやいや本当に!」

「お前は出会って早々に何を口説いているんだ。すみませんが、教えてやってください。」

「はい。元レヴオルフ黒学院序列1位、オーフェリア・ランドルーフェンです。」

「……………へえ?」

暫く固まって、ようやく再起動した。因みに注文は専務さんが決めてくれた。

「せ、専務! このお店どうなってるんですか!? 何で元序列1位が2人もいるんです!」ボソボソ

「学生時代から仲が良かったみたいだ。それともう1つ言っておくぞ。この店のスタッフは店主以外全員女性で全員が容姿、実力共に破格レベルだ。無闇に手を出すなよ? その時はお前の頭が飛んでるかもだからな。」

「き、肝に命じておきます……あつ、なんか凄い良い匂いが……」

「店主が作る料理は絶品だからな。腹が減ってる状態で食うとさらに美味しいんだ。」

——10分後——

「今日も来てくれてありがとうございます。」

「いえいえ、私が来たくてきてるんです! こんな美味しい料理が食べ

られるのなら、喜んで足を運びますよ。」

「それは嬉しいですね。後輩さんですか？」

「は、はい！」

八幡「なら自己紹介を。店主の比企谷八幡です。元界龍第七学院序列1位でした。よろしく願います。」

（序列1位のフルコースだ。）

――食後――

「いやあ……流石は比企谷さんの作る料理だ。今日もすごく美味しかったです。」

八幡「いつも来てくださいますからね。今日は少しだけ量を多くしました。」

「そうだったんですか！ありがとうございます。では5,000円で。お釣りはいらぬです。増量のお礼だと思ってください。」

八幡「それだともらい過ぎなくらいなんです……」

「良いんですよ！比企谷さんならこのくらい安いものですよ。」

八幡「……すみません。ありがたく頂戴します。」

「はい、また来ますね。」

「ご馳走様でした！」

3人「ありがとうございました。」

――――

八幡 side

この喫茶店、ランベリはそんなに人気のある店ではない。いや、人氣がないというよりはあまり人に知られていないというのが正解だ。開業したのが結婚して半年、秋だったので新年に入った春頃に開業した。2人の希望で『0から始めたい。』という理由だったので告知も何もせずにここまでやって来ている。お客の人数も全く悪くない。

むしろ良い数になっている。  
因みにランベリのスタッフはというと……

店主

比企谷八幡

副店主

比企谷シルヴィア

ホール

オーフェリア・ランドルフエン

梅小路冬香

プリシラ・Z・ウルサイス

連城寺柚陽

索冥（擬人化に成功）

パーシヴァル・ガードナー

オーフェリアは開業して1日目に雇って欲しいと言ってきた。何処から情報集めたって思ったが、断る理由もないから採用した。

冬香は俺についてくるためやむなしといったところだ。ここだけの話、彼女のお腹には子供がいる。勿論、俺との間の子だ。一応言っておくがしてないからな。

プリシラは料理が出来るし、接客にも向いてそうだから俺が勧誘した。そして意外にも材木座と結婚した。彼女が言うには『彼の弱くも優しい所に惹かれた。』らしい。

連城寺はお店の雰囲気が入って、こんな場所で働いてみたいという純粋な思いがあったから採用した。

ガードナーも連城寺と同じ理由だ。彼女も接客はできる方だから問題はない。銃さえぶつ放さなければ。

その1年後と3年後には2人の子が誕生。今では立派に成長して13歳と10歳になっている。男の子と女の子だ。女の子はクインヴェール女学園でシルヴィと同じ。母親を超える実力とアイドルを目指すそうだ。男の子で入学するのは父親と同じ界龍第七学院。今

では学問、武術、星仙術、陰陽術共に勉強中だ。

ここからは界龍の皆がどうしているかを記していこう。

星露はまだ界龍の大学部に所属している。3代目として弟子たちの教育も欠かしてはいないようだ。彼女は史上初の《王竜星武祭3連覇》を達成した。

暁彗は本国へと戻り、武館を開いて弟子たちに武術や星仙術を教えている。弟子が界龍に入学する際には必ず六花に来る。

陽乃は5年前に六花テーマパークを開業して六花や外からのお客の集約に励んでいる。シーズン中には沢山のお客が来るが、それ以外の季節にも来る為、結構大忙しだ。

セシリーと虎峰は界龍で一緒に教師をしている。虎峰は落星式学（数学）、セシリーは落星工学を担当している。俺の息子も分かりやすいと言っている。

沈雲と沈華は界龍専属の特別講師をしている。授業参加はできないが、放課後の稽古では生徒を指導している。特に水派派閥の教えに力を入れている。

川崎は保育園の先生になっている。うちの子も小さい時は世話になったんだ。まああいつは小さい子を相手するのが得意だからちやうどいい職業だと思う。

次は界龍以外の奴らを簡単に記そう。

## 星導館学園

戸塚：治療院の先生。

海老名：大手編集企業の主任。

戸部：煌式武装専門店の店員。

雪ノ下：雪ノ下建設の事務局。

小町：商業エリアの観光案内所のスタッフ。

レヴォルフ黒学院

材木座：煌式武装開発部門の主任。

イレ―ネ：カジノの受付。

ころな：レヴォルフの教師（必要あるか？）

アルルカントアカデミー

キューネ：煌式武装開発部門の責任者。

パレート：煌式武装設計部門の責任者。

クインヴェール女学園

ルサルルカ：現役続行中。

聖ガラードワース学園

フェアクロフさん：家の当主。

ブランシヤール：当主の代表代理。

とまあ、俺が知ってる現状はこんな感じた。葉山についてはシルヴィの引退ライブでの俺の宣言を認めた事で終身刑に決まったみたいだ。それも仮釈放無し。

由比ヶ浜は分らない。あれから一切関わりがないからだ。雪ノ下や小町に聞いても分らなかった。どこで何をしているのやら。

っと、それよりも今は夕方だ。そろそろ店が混むな。張り切ってるか。



――閉店時間――

八幡「じゃ、今日もお疲れさん。」

オーフェリア「お疲れ様。」

冬香「お疲れ様です。」

シルヴィは子供の世話があるから、早めに帰らせている。あの店の責任者は俺とシルヴィだけだから鍵は俺たちしかかけられない。故に俺は遅く帰ることが多いのだ。まあ偶に俺が早く帰る日もあるけどな。

ガチャツ

八幡「ただいまあー。」

シルヴィア「お帰りなさい、あなた。今日もお疲れ様。」

八幡「ああ、ただいま。」

「お帰り、父さん！」

八幡「おお奏斗<sup>かなと</sup>、ただいま。」

奏斗「父さん、今度はいつ学院に来てくれるの？学院の皆が父さんに稽古をつけてもらいたいって。」

八幡「はははっ、参ったな。俺は別に特別講師ってわけじゃないんだからな。まあお店が休みの日には出向いていくか。」

シルヴィア「あなた、無理はしないでね？」

八幡「ああ、分かってる。」

家族団欒で話をした後は奏斗が眠り、俺たちは少しだけ起きて話をする。これが今の楽しみだ。

シルヴィア「……ああ、幸せだなあ。」

八幡「それ何度目だよ。」

シルヴィア「だって本当の事なんだもん。良いじゃん♪何回言っ

たつて！」

八幡「……………そうだな。」

シルヴィは毎日のように幸せだと言う。実際俺もその通りだと思っっている。

シルヴィア「八幡くん。」

八幡「ん？どうした？」

シルヴィア「ううん、何でもない。そろそろ寝よつか。」

八幡「ああ、そうだな。」

———寝室———

シルヴィア「明日も良い日になるといいね。」

八幡「なるに決まってる。シルヴィがいて奏斗がいるんだ。それだけで俺は幸せだ。」

シルヴィア「……………うん、私も。お休み、八幡。」

八幡「ああ……………お休み、シルヴィア。」

明日の俺。今日よりも幸せな1日を送れるように頼むぞ。

く学戦都市の “元” ボツチく 『完』